QUEST

市尾弘那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＱＵＥＳＴ

【Ｎコード】
Ｎ８４４５Ｄ

【作者名】
市尾弘那

【あらすじ】
ついさっきまでは、普通の高校生だったはず。けれど気がつけば俺は、異世界で『王子サマの影武者』を押し付けられ、剣を片手に魔物から逃走…もとい、戦闘する羽目に！？ＲＰＧ路線、ちょっと戦記物風味の異世界迷込みＦＴ。※戦闘シーン多々含む為、暴力・流血・死の描写等含みます。ＰＣ本サイト（ｈｔｔｐ：／／ｈｉｒｏｎａ．ｋａｋｕｒｅｚａｔｏ．ｃｏｍ）にてＤＬ版、番外編、地図、年表アリ。

プロローグ

「風が凄いな……」

砂だらけの黄色い風景――『風の砂漠』。

ローレシア大陸の南に位置するヴァルス王国の、更に東部に位置する砂漠だ。険しい山脈に囲まれた、強い風が絶えることがない場所として知られている。

目を細めて片手で顔を庇いながら砂の舞う黄色い空を見上げる青年は、まだ若い。少年と青年の端境期、と言えるだろうか。

落ち着いた雰囲気と放つ気品が彼を大人っぽく見せてはいるが、成熟しきっているとは言えない顎のラインが、２０歳よりは前だろうと言う空気を醸し出している。

青年と共に砂漠を進む影は、５つ。軽装備に身を包んだ男たちは、青年も含め、全員腰に剣を帯びている。王都レオノーラ付近ならばともかく、魔物の徘徊するこの世を旅するならば、最低限の装備だ。

「元々風が強い場所ではありますがね……」

彼よりやや遅れて歩く男が、やはり腕で顔を砂から庇いながら答える声も、風に流されていく。

「これも、王位につく為のひとつの試練なのかな。話には聞いていたけれど、こんなに風が強いとは思わなかった」

『風の砂漠』に入ってから急にひどくなった風は、進むに連れて強さを増す一方だ。まるで、『王家の塔』へ向かう彼らを阻もうとするかのようだった。

青年の言葉に、先導するように前を歩いていた男が振り返って笑った。

「この儀式が済んでしまえば、あなたは神に認められた後継者です。もう、ロドリス王国も文句は言えないでしょう」

「そうだね……」

頷きながら、青年は婚約者の少女のことを思い浮かべた。

青年は、もうじきヴァルス王国の王位を継承することになっている。

とは言え彼は、今はまだヴァルス王家の人間ではなかった。

ヴァルス国王クレメンスの嫡子は王女――それが、彼の婚約者だ。

青年は、ヴァルス王女との婚姻によってヴァルス王位を継承することが定まっている。引いては、ヴァルス国王が皇帝として君臨する帝国アルトガーデンの帝位をも。

「『スキンティア・エスト・ポテンティア』……」

不意にぽつっと呟いた青年の言葉に、前に向き直りかけた男が再び振り返った。

「え？　何です？　それは」

「いや……。陛下からの、メッセージだよ」

曖昧に笑って口を閉ざすと、青年は再び胸の内に婚約者の笑顔を蘇らせた。

幼い頃より知っている彼女は、少し頑固ではあるけれど、十数年をかけて美しく優しい女性へと変貌を遂げている。自分が彼女の婚約者になれたことは、幸運だったと思う。

大切にしたい。

今更、男と女として結婚すると言うことにお互い戸惑いを覚えてはいるけれど、この先ずっと一緒に過ごすのだから、長い時間をかけて愛情を育んでいければ良いのだろう。

これは、その為の最初の試練だ。

『風の砂漠』を越えて『王家の塔』で神から王たる証を受け、そして彼女と共に国を支えていくのだ。

胸に決意を新たにして何気なく顔を上げた青年は、そのまま足を止めた。

黄色い砂の舞い飛ぶ風景の中、いつの間にか、黒い人影が姿を現していた。全身を黒いマントで覆った数人の男たちが近付いてくる。

（……？）

同じように砂漠を旅する人間がいないわけではない。それはわか

っているが、何か奇妙なものを感じた。
真っ直ぐこちらへ近付いてくる彼らは、青年たちの前に対峙するように足を止めた。
「何……」
青年を庇うように前に進んだ男は、誰何（すいか）の言葉を最後まで言えなかった。風を切って飛来したダガーが男の首筋に突き刺さり、異様な音を立てながら血を噴き出した体が砂地に崩れる。溢れる血は、砂漠の砂に次々と吸い込まれていく。
「ルイッ！！」
何が起こったのかわからぬまま、咄嗟に剣を抜き放ち怒鳴っていた。他の男たちも剣を抜きながら、青年の周囲を固めるように構える。黒マントの男たちも対峙するようにマントを払い、剣を構えた。
（盗賊か……！？）
金品狙いの盗賊団かもしれない。そう考えながら、剣を振り翳して躍りかかって来る男に、わけもわからず刃を叩き込む。血を迸らせて男が仰け反ると、別のひとりが青年に襲い掛かった。咄嗟に剣で剣を弾き返し、返す手で首筋を貫いた青年の視界で、一瞬何か黒い影が見えた。同時に、すぐ近くで戦っていた仲間の男の首が、突如吹き飛んだ。
（なッ……！？）
頭部を失って赤い噴水を噴き上げながら倒れる体。
その向こうに見えたのは、魔術師の姿だった。
（魔術師……！？）
ただの盗賊ではないのか！？
頭部を吹き飛ばしたのは彼の魔法だと青年が気づいた時、魔術師の口元が小さく動くのが見えた。――呪文だ。
「まずいッ……散れッ……！！」
仲間に向けて怒鳴る。魔法に対抗する術は、現状持ち合わせていない。
魔術師に真正面から挑むなど、愚の骨頂だ。

逃げ場などないことは承知の上だ。それでも怒鳴らずにいられない青年の前で、目深に被ったフードから覗く口元が、僅かに笑いの形に歪んだ。

魔法の、完成だ。

青年の心を嘲笑うように、魔術師がゆっくりと片手を挙げる。

（逃げられない……ッ……）

黒いロッドについた大きな石が、照りつける太陽を反射して、禍々しく光った。

第1部第1話　終わらない昼休み（1）

「和希ー。雄高くん来たわよー」
「んー」
階下からの母親の声に、パンを咥えたまま俺はくぐもった声で答えた。
ごそごそと鞄に教科書を詰め込んで掴むと、階段を駆け下りる。
6歳年下の弟、拓人（ひろと）は、もう小学校へ行ったらしく姿がない。台所から父親の「和希、うるさいぞー」と言う声が聞こえた。
「行ってきますッ」
それを黙殺して、外へ飛び出る。門の外では自転車に跨ったまま小学校からの友達、下屋雄高（しもやゆたか）が、ごつい顔に笑顔を浮かべていた。
「はよッ」
「何だぁ？寝坊か？」
「寝坊」
「珍しい」
パンを咥えたまま、雄高の自転車の後ろに飛び乗る。
柔道部らしく俺より遥かにゴツく背の高い雄高は筋骨隆々で、俺程度を後ろに乗っけても物ともしない筋肉の持ち主だ。
短く刈り込んだ硬い毛はまるで剣山のようなので……と言うのは言い過ぎだけど、まあ痛いのは確かなのでぶつからないよう距離を取って立ち乗り姿勢のまま、俺はトーストを口の中にしまいこんだ。
「寝たの遅かったのか？」
「うん」
「何してたんだよ」
「深夜映画見てた」
俺も雄高も、今年の春渋谷にある城西大学付属高校に入学したばかりだ。今はまだ7月なので、ピカピカの1年生と言っても許容範囲だと思う。人に漕がせている自転車の背中で風を切りながら俺は

目を細めた。
暑さを増していく季節の中、この時間から既に太陽は眩しい。
今日も暑くなるんだろうなぁ……。
ウチの学校は大学の方にはがっつり冷房かけるくせに、高校の方にはろくな冷房設備を用意してくれていない。「夏は学ぶのを諦めろ」と言う学校側の姿勢と俺は受け止めている。
「早く自転車、新しいの買ってくれよなー」
ぼーっと人任せに学校へ向かう俺に、前を向いたままで雄高がぼやいた。
「んー……夏休みにバイトでもしようかなぁ……」
俺の愛用チャリは、先週まんまと盗まれた。電車で通えば良いんだけど、俺の自宅のある代々木からはチャリで苦しみながらも通える距離なので、電車代をケチって雄高に送り迎えを強要している。自分で漕ぐより遥かに楽なので、俺は最近チャリを買う気が萎えてきている。
「俺、これで3年間通っても良いなー」
「……俺の意思はどうなる……」
「卒業してから考慮する」
落としてやるーッと、雄高がわざと荒っぽい運転をした。笑いながら、雄高の肩につかまって持ち堪える。
「わかったよ、帰り俺が漕ぐからッ」
「ちッ、しようがねえ、勘弁してやるか……」
キィコキィコと音を立てる自転車は、代々木公園を通過して下り坂に入った。この辺りからちらほらとウチの生徒の姿が見えてくる。
「野沢くん、おはよー」
「はよ」
「下屋、野沢、おはよー」
「おはよー」
学校へ到着して、自転車置場で俺は自転車を降りた。雄高が鍵をかけるのを待って、一緒に校舎へ向かって歩き出す。

「あ、野沢くん、おはよう」
華やかな声が聞こえて振り返ると、クラスメイトの秋名なつみがこっちに向かって歩いてくるところだった。
肩口くらいまでのさらさらの髪に、切れ長の瞳。かなりの美人で、入学するなり男子生徒の注目を一身に集めている。
俺も雄高も同じクラスなんだけど、何だか良く懐いてくれている。……ような気がする。一緒にクラス委員なんかやってるせいかもしれない。
「おはよ」
「なつみちゃん……俺もいるんだけどなー……」
「やだな、わかってるわよ。下屋くんもおはよ」
「俺はついで？」
「そんなことないってばー」
俺自身、なつみのことをいいなあと思ってないかと言えば……そりゃあ可愛いと思うさ。希望溢れる高校生活、俺だってそのうち彼女のひとりも欲しい。可愛いに越したことはないんだろうけど、まあ見た目はともかくとしても、なつみとは話も良く合うし、いつもにこにこしていて感じも良いし、きちんとしてるし……素直に印象は良いわけで。『高嶺の花』だろうって説はあるけど。
「なつみ、宿題やった？」
並んで下駄箱に向かう。雄高が尋ねるとなつみは上履きを取り出しながら首を傾げた。
「やったけど……やってないの？」
「やってない。写させて」
「えー。どうしよっかなー」
「あ、俺も見せて」
上履きに履き替えて、履いて来たスニーカーを下駄箱に押し込みながら言うと、なつみが目を丸くした。
「やだ、野沢くんもやってないの？」
「やったけど、わかんないとこあったから」

「しょうがないなあー」
やれやれ、と言うようになつみが肩を竦める。その肩をポンと誰かが叩いた。
「なっつみ！！はよッ」
同じクラスの永友美佐子だ。いつも高い位置で髪をまとめていて、体育会系のしゃきしゃきした女の子。なつみとは仲が良い。
「おはよー、美佐子」
構わず、俺と雄高は教室に向かって歩き出した。廊下には、登校したばかりの生徒がまだぞろぞろといる。階段を上りながら、雄高がぼやいた。
「なつみって和希しか目に入ってない気がする、俺」
「ま、まさか……」
思わず赤くなる。そんなことないと思うけどな、別に……。
男は顔で判断しちゃいかんよと雄高が言うのを聞きとがめて、俺は横目で睨んだ。
「それじゃあ俺、中身ないみたいじゃん」
「まあ俺様のこの濃い中身に比べたら、まだまだヒヨッコだな」
「濃いのは顔だろ」
何をうッと雄高が俺の頭を殴った。
「いて」
殴るなよ柔道部。
ようやく4階の、しかも1番奥の教室まで辿り着く。既に生徒の大半は来ていて、ＳＨＲ前のざわざわとした空気が流れていた。
「おはよー」
クラスメートと挨拶を交わしながら自分の席に鞄を置く。
窓際の1番後ろ。特等席だ。
初夏の、キラキラと光る太陽を浴びて背の高いブナの木の葉がさらさらと揺れた。
当たり前の毎日、どこにでもある日常。
それがまさか突然、壊されるなんて思いもしてなかった。

◆◇◆

昼休み、先日配られたアンケートの回収で職員室に行っていた俺は、ふと思いついてそのまま渡り廊下に向かった。

城西高校は大学付属で同じ敷地内に大学があるせいか、かなり広い。大学との共用施設なんかもあって、そっちに繋がる通路を挟んで公園のように中庭が広がっている。もちろん高校の方にもそれはそれで中庭があるけど。

なだらかな起伏の芝生に覆われた中庭には、円陣バレーをする女生徒だとかお弁当を広げるカップルだとかがいて、俺は目をこすりながらその間を縫うように続いているホールへの道を進んでいった。ホールの脇には、木陰になっているベンチが置いてある。

（眠ぃ～……）

あくびが零れた。

目尻の涙を拭いながら、真っ直ぐベンチを目指す。その辺りまで来るとあまり人気もなく、俺はころんとベンチの上に転がった。

外の空気は暑いけれど、この辺はアスファルトが少ないせいか、熱気が立ち込めてはいない。中庭にいくつもある手入れされた大きな木が木陰を作っていて、俺のいるベンチの辺りは建物の陰になる形で今の時間帯だと日は当たらないし、そのくせ風は結構通り抜けたりするので少し涼しい。

昨日、寝たの何時だったんだっけな……3時半……いや、4時過ぎか？　映画の終盤で萎えてきたのが3時半くらいだったから、その後か。眠い。眠すぎる。

片腕で目の辺りを覆ってうつらうつらし始めた頭で、そんなことを考える。午前中の授業はほとんど記憶がない。

今なんか昼メシ食って満たされているし、このままじゃ午後の授業も完全に記憶喪失になるに決まってる。少しくらい眠気を飛ばしておかないと……。

さわさわと風に揺れる葉の音が気持ち良く、俺はゆっくりと眠りの淵に沈もうとしていた。
変な声が聞こえたのは、その時だった。
「……これかな……これよね」
……。
……何か今、声がした。
それまで、自分の周囲に全く人の気配を感じてなかった俺は、急激に余りに顔の間近で声を聞いてぎょっとした。腕をどかして目を開けると同時に体を起こす。……あれ？
誰の姿も、ない。
（あれええ？）
確かに人の声を聞いたと思ったのに。
きょろきょろと辺りを見回してみてもやっぱり人の姿を見つけることが出来なくて、俺は腑に落ちないながらも再びベンチに転がった。目を閉じる。
「うん、これみたいね。確かにこりゃあ良く似てるわー。でもちょっと品がないかな……」
「！？」
ぜ、絶対した。今。俺に向かって言ったんだとしたら物凄く失礼なことを言ったような気がする。
がばっと再び起き上がると、俺は思わず自分の頭を疑った。
……変なイキモノがいる。
「なッ……！？」
ベンチの上で身を起こした俺の、すぐそば……伸ばした足の方にそのイキモノはいた。直径２０センチくらいの……ヒト。しかも飛んでいる。
その、ちっちゃい、ありえねーイキモノは、ぎょっとしたまま硬直している俺に向かってどこか嘘くさい笑顔を浮かべてにーっこりと挨拶をしてくれた。
「こんにちは」

……。

「……こ、こんにちは」

何挨拶返してんだよ、俺……。

透き通った蝶のような４枚羽根をパタパタと忙しく動かしながら、ふわふわと上下に揺れている。くるんと頬の辺りで巻き上がった淡い金色の髪をしていて、その瞳には白目がない。少し先の尖った耳をしていて……目を覚ませ。俺は今、幻覚を見ている。

「何よ？」

良く出来た幻覚だ。ちっちゃいイキモノは、不貞腐れたような顔をして腕を組んだ。白目がないくせして、睨まれているのは何故かよくわかる。

「……や、何でも……」

言葉が思い浮かばない。頭、おかしくなっちゃったんだろうか。それともまだ寝入り端かと思いきや、もう寝ちゃってたのか、俺？

「何よ、寝ぼけてんの？」

「……」

幻覚に言われるとは恐れ入る。

「ま、いいや。あのね、ちょっと悪いんだけど、付き合ってもらうわね」

「は？」

そもそも現状を認識出来ずにいる俺の唖然とした問い返しを全くシカトしておいて、そのイキモノは瞳を閉じた。胸の前で両手を合わせる。

「プルサーテ・エト・アペリエートゥル・ウォービース」

その瞬間。

「なッ……う、うわあああああああッ」

凄い勢いで俺は突然落下する羽目になった。

そんな馬鹿な。何で中庭のベンチに転がってて、これほどGを全身に受けるほど落ちられるんだよ!?　何が起きたんだ？　俺はどこからどこへ向かって落ちてるんだ!?

俺の視界に映っているのは、ただただ真っ暗な闇だった。どこまでも続く深くて細い穴の中を落ちているような感じ。ひたすら真っ直ぐに、落ちていく。

わけもわからず完全に恐慌状態に陥った俺は、救いを求めて視線を動かした。スピードが凄すぎて、顔を動かすことは出来ない。ただ、視覚が与える情報から考えれば、即出口ってわけじゃなさそうだ。だってどこにも光が見えない。

遊園地のフリーフォールのような胃がでんぐり返るみたいな気持ち悪さとかって言うのは、不思議となかった。さっきのイキモノも、わかる範囲ではどこにも姿がない。人をこんな事態に落とし込んでおいて、あんまり無責任だと思う。

（どこに出るんだ……！？）

考えてから、ふと思う。

どこに辿り着くんだとしても……このスピードで落ちてたら俺、間違いなく死んじゃうんじゃないの？

（……）

だよね。

「……嘘だろおおおおおおおお！？」

そんな当然の結末が予想出来てしまって、再び恐慌状態に陥る。そりゃそうだろ、何で学校の中庭で昼休みに寝てて墜落死しなきゃなんないんだよ！？

（ど、どうしよう……）

ったって、どうするもこうするもどうしようもない。だって俺の意志や意図なんか、この事態の中、どこにもないんだから。

とは言え、そう諦めるには俺はまだ余りに若すぎるでしょ！？

と、不意に足元……俺が落ちている方向から細い光が見えた。針ほどの大きさしかなかった光はみるみる大きくなっている。つまり俺は出口に近づいているらしい。……いやいやいやいや、だ、駄目だって。ついちゃったら死ぬって！！！！

「うわあああああああッ」

遂に視界の全てが光に覆われた時、思い切り目を瞑って俺は絶叫していた。全身に受けるだろう衝撃を覚悟する。

が。

（……え？）

「うーるさいわねえええ……」

耳元で聞き覚えのある声がしたかと思ったら、ふわっと何かに掬い上げられるように体にかかっていた重力が緩やかになった。ふわふわと、まるでタンポポの綿毛が舞うように急にゆっくりと俺の体が落ちていく。これまでのジェットコースターが嘘のようだ。

「……あれ？」

怖々と目を開けると、俺は森の中を落下しているみたいだった。鬱蒼とした木々の間を緩やかに落下していく。

地面ももう間近……と言うところまで来て、不意に俺を掬い上げていた力が消えた。どさっと落っこちる。腰からもろに衝撃を受けて、俺は呻いた。

「……ってぇ……」

「疲れるから、重力で落ちてもらったの。ごめんねぇ～」

悪びれない声で、さっきの声が言った。さっきのちっちゃいイキモノだ。つ、疲れるからってあのなああ。

「し、死ぬかと思ったぞ！？」

「いいじゃないの生きてんだから。ちゃんと最後はフォローしてあげたでしょ？」

当たり前だッ。

怒鳴りかけて俺は、きょろっと辺りを見回した。……どこなんだろう。ここ。どう譲歩してみても、学校の敷地内じゃないことは確かだ。

夢にしちゃやけにリアルだけど、でもこんなこと、あるわけがない。俺の中の常識が、現状起こっていることを拒否する。

「……君、誰」

誰と言うか何と言うか……。

ようやく口に出来た俺の問い掛けに、ちっちゃいイキモノは誇らしげに微笑んだ。
「あたしは、レイア。ピクシーよ」
「何？　名前はどっち」
「レイア」
「じゃあ、ぴくしーってのは……？」
地面に座り込んだままで俺が尋ねると、レイアはつんと唇を尖らせた。
「ピクシーはピクシーよ。知らないの？　それ以上説明のしようなんか、ないわよ」
どうやら、ピクシーと言う種類のイキモノらしい。……俺の日常の中にはこんなイキモノはいない……。
「んじゃあレイア……」
「あたし、あんたの名前聞いてないんだけど」
俺が何者かも知らずに誘拐してきたのかお前は？
「……和希」
「カズキ？　へーんな名前ねー」
余計なお世話なんですけど。
「ま、いいわ。レガード」
だから和希だってば！！
思わずそのすました顔をぴしっと人差し指で軽く弾くと、レイアは軽く吹っ飛んだ。あ、しまった。
「何すんのよッ！！」
近くの草むらまで吹っ飛んで行って、ばすっと埋もれたレイアが怒鳴る。いやいや、こんな小さなイキモノをデコピンしたことがなかったので力加減がわからずつい。
「俺の名前は和希だってば」
「ああもうホントにそうね、レガード様とは全然違うわね。レガードなんて呼んだらレガードが気を悪くするわッ」
レガードレガード言われても、それが何者なのか俺にはさーっぱ

りわかんないんですけどね……。
「あのさ……ええと、ともかくも、その……」
レイアは不貞腐れたように草むらの中に座り込んでいたが、やがてパタパタとその背中の羽根で舞い上がった。きらきらと細かい粉のようなものが舞う。
「何よ」
正直頭が混乱しきっていて、何を、何から、どう尋ねたら良いのか俺にも良くわからない。
いや、夢なら目が覚めればそれで済むはず。
そう思うものの、心のどこかで「これ、現実なんじゃ？」と言う俺の言葉が聞こえるのも否めない。
（そんなはずない、そんなはずッッッ）
と、とにかく、夢でも現実でも何でも、状況を整理しよう。
ええと、俺は何が知りたいんだ？　一言で言えば「何が起こったのか知りたい」んだろうが、それでこのイキモノが答えてくれるとは思いにくい。こ、細かく言うとどういうことなんだ？　いや、そもそもここは、どこなんだ？
「ま、まず」
浮かんだ考えに縋ることにして、ともかくも俺が今どこにいるのかを確認することにする。
「ここは、どこ」
「ヴァルス王国よ。ローレシア大陸の南。王都レオノーラに程近い、浄化の森」
……俺の知識の中にはそんな国家もなければ、大陸すらないんですけど。
「……それ、どこ」
「だからヴァルスだってば」
「だからそれはどこなんだよ！！」
呆然状態を抜けてまた恐慌状態に陥って怒鳴る俺に、レイアは無言で首を傾げた。あのさあ、無理矢理攫ってそういう態度は不親切

でしょ！？

「どこも何も説明のしようがないわ。ヴァルスはヴァルスなの。あんたのいた世界には存在しない国かもしれないけれど、ここにはあんたのいた国の方が存在しないのよ」

第1部第1話　終わらない昼休み（2）

「なッ……」
何だって……!?
「ふざけんな、帰せよッ」
「駄目よ。わたし、帰せないもん」
攫っておいて何て態度のでかさだ。
「どうして連れて来られて帰せないんだよッ。逆にすればいーんだろッ」
「それが駄目なの。連れて来たのだってわたしの力じゃないもんね。それにあんたに用があってわたしが迎えに行ってんのよ。別に浄化の森見学に連れてきたわけじゃないの。ここだけ見せてはいサヨナラってわけにはいかないでしょ」
「いくよッいいよッ俺はもう堪能したよッ。いいから帰してくれッ」
「だから出来ないんだってば」
聞き分けのないコねぇ……とでも言い出しそうな顔でやれやれと顔を横に振ったレイアは、その小さな腕を伸ばしてびしりと俺の前に人差し指を突きつけた。
「悪いんだけど、付き合ってもらうわよ。王女たっての願いなんだから」
「あのねえ、俺の都合は考えないの!?　俺の意思はどうなんのその場合!!」
「あんたの意思なんか二の次三の次よッ」
い、言い切ったな、このヨーカイ……。
「んじゃあわかったよッ。その王女ってのに会わせろッ。そいつがうんと言えば、俺を元の世界に戻せるんだろッ」
勢い込んで言うと、レイアは小さく何か唱えた。ばすっと俺の体が吹っ飛ぶ。……ふぇッ!?
「王女に対して失礼な口きいてんじゃないわよ。……会わせるには

会わせるけど、ユリア様にそんな口きいたら、このくらいじゃ済まさないからね」

何、されたんだ……？

威張るように言ったレイアをぽかんと見上げていると、レイアはきょろっと辺りを見回した。誰かに向かって叫ぶ。

「キグナス！！　いるんでしょ？　出て来なさいよ」

つられて辺りを見回すが、人の気配はない。

レイアの余りの態度のでかさに既に抵抗出来なくなりつつある俺は、またこんなちっちゃいのが出て来たらどうしよう、と内心思っていると、不意に頭上から声がした。見上げる。

「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」

え？

そしてすとん、と俺のすぐそばに誰かが降り立った。

白金……と言うんだろうか。全体としては白っぽく見えるのに、やっぱこれは金髪と言うんだろうって言うか……。艶のある髪の光が金色っぽく見えるせいかもしれない。長めの髪を結構豪快に逆立てて、その前髪の下勝ち気そうなオレンジ色の吊り目が……オレンジですけど。

にこっと笑った口元からは八重歯が覗き、まるで牙のように見えた。顎の下に小さくバッテンのような傷がある。顔だけ見るとまるで悪戯っ子のようなのに、襟の詰まったきっちりした服装にローブを羽織っているのが妙にミスマッチだ。まるで魔法使いみた……まさか。

「何よ、さっさと姿を現しなさいよね。カズキ、見習い魔術師のキグナスよ」

のぉ～～～～～～～～……ッ。

本当に『魔法使い』なんてもんが存在しちゃったりするのかよぉぉぉ……？

確かにここは、俺がついさっきまでいた世界じゃないみたいだ。み、認めたくない。物凄く。俺の理性が、今起こっている全てを拒

絶する。
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」
言葉も動きも全てを放棄してぼうっと眺める俺の前で、キグナスが俺とレイアを見比べて何かを言った。それを聞いて、俺は自分の血の気が引くのを感じた。
さっきも俺は、キグナスの言ったことがわからなかった。
……待て。今までレイアと普通に話せちゃってたもんだから気が付かなかったけど、ここって言葉通じるのか？　通じるわけないじゃん、日本じゃないじゃん、俺どうやってその『王女様』に俺のこの心情を訴えるんだよ？　訴えよーが、ねーじゃん!?
一気に混乱状態へ戻ってしまった俺をよそに、ふわりとレイアが何も気付かずにキグナスに言った。
「でしょ。あたしもびっくりしちゃったわ。ま、中身は到底比べ物になんないけどね……。さ、王城へ戻る準備しましょ。このまま連れて帰ったんじゃ目立ちすぎちゃって」
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」
「ん。あれ、出して」
「レイア……」
「何よ？」
キグナスが、ごそごそと肩に背負っていた荷袋のようなものから布を取り出す。そのそばをふわふわと上下していたレイアが、俺の声に振り返った。
「あのさ……あの……俺さ……」
「何よ？　はっきり言いなさいよ」
「……言葉、全然わかんないんですけど」
俺の言葉にレイアはきょとんとした視線を向けた。
が、その顔が見る見る凍りついていく。……凍りつかないでくれる？　俺の方がずっと困ってんだからさ。
「……わ～ぉ……」
しばしの氷結から解放されてレイアは呻くように言った。……『

わ〜ぉ』って。
「あの……魔法でぱーっと、何か、ないの？」
信じたわけじゃないけど言ってみると、レイアは渋面を崩さずに答えた。
「あるわけないでしょそんな便利なモン」
ないのかよ……。
俺がレイアとキグナスのやりとりがわからないのと同様、キグナスも俺とレイアのやりとりはわからないらしい。きょとんとした顔で俺とレイアを見比べて、汚いボロ切れを俺に手渡し……と言うよりは半ば押し付けながら、レイアに何か言った。
「言葉が、わからないんだって」
レイアの言葉に、キグナスが目を丸くして俺を見る。
わかるわけないだろ、だって……。同じあっちの世界だって国が違えば言葉も違うんだ。増して……こんなどこなんだかなんなんだかわかんないよーな場所で、俺が言葉を知るわけがない。
「……そうね。あたしの言葉はわかるみたい。……さあ？　ピクシーだからじゃないの？　一応これでも精神を司る精霊たちと無関係じゃないんだし」
ふうん。そうなんだ。
ともかく、とレイアは空を見上げた。
「早いトコ、戻った方が良いわね。ラウバルに相談してみましょう。シェインも何か良い案をくれるかもしれない。……カズキ。その布を頭から被って」
手渡されたままだったボロ布をレイアは指した。……って、えぇぇぇ〜……？　これぇ……？
「やだよ、こんな汚いの」
「贅沢言ってんじゃないわよ。さっさと被らないとこの森ん中に放置してくわよ」
俺に用事があってここに拉致したんじゃなかったのかよ？
キグナスがくすくすと笑う。仕方なく俺は、その汚らしいボロ布

を頭から被った。フードつきの上着みたいに、キグナスがきゅっと俺の首の辺りで緩くヒモを留める。

「とりあえずこんなとこいつまでもいたってしょうがないわ。行くわよ。いつまで馬鹿みたいに座り込んでんのよ。さっさと立ちなさいよ」

馬鹿みたいってことはないじゃんよ……。

仕方なく、立ち上がった。ここに置いていかれても、俺にはこの後の身の振り方がわからない。

「日暮れまでには、レオノーラにつきたいからね」

「……何かあんの」

もうどうにでもしてくれと言う投げやりな気分で適当に尋ねると、レイアはあっさりと、しかしひどく聞き捨てならないことを言った。

「魔物」

「……は」

「浄化の森に魔物は出ないけど、森を抜けてからレオノーラに着くまでの草原には日が暮れると出るからね」

「……はッ!?」

ま、魔物!?

レイアはすたすたと……いや、ふわふわと、俺に構わずに前に進んで行く。ちょ、ちょっと待て、落ち着け。いや、落ち着けるか!! 相当とんでもないことを言わなかったか、お前?

「何、魔物って」

「魔物って言ったら魔物でしょうよ」

だから待てって!!

(か、勘弁……)

レイアのような到底人間とは思えない生き物がいて、何やら魔法めいたものを使う以上、魔物もいるんだろうか、やっぱり。

……。

いやー、いるわけないでしょ。そんな。ねえ? まさかご冗談を。

……。

……魔物って……。
（はぁぁぁぁ……）
そんなの、ありか？
脳裏に、俺の世界でありがちなファンタジーの絵面が浮かぶ。
剣持って、パーティ組んで、旅をして。
……俺が、あれ、やるの？
（……）
いやいやいやいや……それはないでしょー……。
（……）
ははははは……は……。
レイアとキグナスについて鬱蒼とした森を抜けると、森を出てすぐは乾燥した土地が広がり、疎らに草が生えていた。それほど遠くなさそうな場所に街が見える。辺りは少しずつ日が傾き始めている感じだった。
今までとっ散らかっていて気が付かなかったけど、少し肌寒い。7月の東京の学校にいた俺は当然半袖の制服姿だ。対してここの気温は……多分秋口くらいだと思う。
ふわふわと揺れるレイアの背中とキグナスの後ろ姿を見ながら、俺は、盛大なため息を落とした。
……帰る。
俺は、帰る。断固として帰らせていただきます。
とにかく、レイアは元の世界に戻す方法を知っているんだろうし、レイアは『王女様』とか言う人の命令なら聞くらしい。と言うことは『王女様』に俺を戻すよう言うしかないと言うわけだ。
ファンタジーやりたければ別の人でお願いします。俺には到底向いていそうにない。ミスキャストだ。
『王女様』とやらが物分かりの良い人だと助かるんだけどなあ……。

◆◇◆

レイアの脅しは現実のものとなることはなく、幸い得体の知れない『魔物』なんぞに遭遇することはなかった。無事、街に辿り着く。

街は巨大な塀に覆われていて、強固な門が今は開かれていた。屈強な衛兵が、その門を固めている。

「夜になると門は閉じられるの」

レイアがそう説明してくれた。魔物対策とかそう言うんだろうか。でも空飛ぶやつとかそういうの、いないのかなあ。だとするとあまりに無意味なんじゃ？

「まあね。でも大型の魔物なんかは棲息する場所が大体決まっているし、小物が迷い込んだりしない分、あるだけましでしょ。この程度でも、魔物は人里には余り近寄ることがなくなるのよ」

ないよりましって発想なわけね……ああ、そう……。

「空から飛来する魔物は、詰め所の衛兵と魔術師が警戒しているわ。もっとも……」

レイアはそこで一度言葉を切って、僅かに沈んだ顔で続けた。

「今一番怖いのは、魔物なんかじゃないかもしれないけどね……」

門を抜けようとした時、鎧で身を固め、２メートルほどもありそうな巨大な槍を突き立てた衛兵が駆け寄って来た。

「待て！！　怪しげな奴め。見慣れない衣服を身に纏っているな。異国の者か？」

……と、言ったかもしれない。俺の妄想。

キグナスが、俺と衛兵の間に割って入った。身振り手振りで何か言っている。

何を言ってるのかは俺にはさーっぱりわかんないので、完全にお任せして俺は街の方に視線を向けていた。綺麗な街だな、何か。ノスタルジック。

キグナスと衛兵がほんの少し会話をしただけで、俺は難なく門を通過することが出来た。街の中に足を踏み入れる。

もしかするとキグナスって結構大物だったりするのかな……。で

も見習い魔術師って、到底偉い人間には思えないんだけど。だって見習いだろ？

街は石畳の通りで、煉瓦造りの建物が左右に並んでいた。

ここは大通りなんだろうか、たくさんの店があり、通りに花やフルーツを積んだ籠が所狭しと通りに沿って並んでいる。多くの人が行き交い、屋台のようなところから良い匂いが漂ってきた。

かなり活気があると言っても良いと思う。

街行く人は節操なくいろんな髪や目の色をしていて、肌は白っぽいけど西洋人ほどの彫り深さもない。東洋人と西洋人の中間って言うか、そんな感じ。服装はお洒落な感じだった。中世ヨーロッパの映画の世界に紛れ込んだ気分。

……が。

街中に溢れる人から発せられる言葉。会話。その全てが俺には全くわからない！！

キグナスについて街の中を歩きながら、不安が募っていく。

言葉が通じなければ王女様にも訴えることが出来ない。街中で放り出されても、まるで勝手のわからない世界にも関わらず、俺には道を尋ねることさえ出来ないわけだ。それって、生きていけない。

キグナスが時々、振り返る。身振り手振りで、俺にしきりと何かを話してくれた。多分、街の説明をしてくれているんだろう。

言ってる内容の１０分の１も理解出来たかは怪しいけど、その気遣いはありがたい。レイアはともかく、キグナスは良い奴そう。キグナスが日本語をしゃべってくれりゃあいーのになあ。譲歩して、英語でも良い。

街の中ほどまで進んでくると、建物の間から大きな城のようなものが見え始めていた。どうやらあそこを目指しているらしい。華やかな街の中、ひときわ目立つ巨大な建物……まるでディズニーランドのシンデレラ城みたいだ。

あ、そうか、なるほど。うんうん、許容範囲だ許容範囲。ディズニーランドにいるんだと思えば。

（思えねぇぇぇ……）

城への道は大通りから真っ直ぐと言うわけではなくて、かなり複雑に入り組んでいた。細かな道をいくつも通り、既に俺、街の外までひとりで出られるかさえ怪しい。

「凄ぇ……」

城までようやく到着して俺は一瞬、自分の立場も忘れて呆然と呟いた。あまりにも華麗で壮大だったので。日常の生活の中ではお目にかかれない。

白い外壁に澄んだ海のような、綺麗なブルーの三角の屋根。壁のところどころに緑色の蔦が這っているのが、妙におとぎ話ちっくだ。いくつもの細長い塔めいたものが突き出ているような造りで、上方ではそれを繋ぐように回廊が廻らされているように見える。高い塀の上を時々左右に移動するのは、回廊から守備する衛兵だろうか。

「ヴァルスのお城シャインカルク城は、ローレシアの中でも類を見ないほど美しいの。……さ、中に入って。キグナス。あたし、ラウバルとシェインに言ってくるわ。カズキを任せたわよ」

お、おいッ……。

俺と会話が成り立つのはお前だけなんだぞッ!?　……と思った時にはレイアは既に姿を消していた。……汚ぇ……。

キグナスに促されて、城に入る。

城の周囲には大きな濠が廻らされ、背の高い塀で覆われている。巨大な門があり、その両脇を衛兵がこれまた固めていた。けれどキグナスが軽く頭を下げて何かを言うと、衛兵も頭を下げた。その後ろを何だか所在無くついていく。

キグナスって何者なんだろ……。普通の見習い魔術師が、ほいほいお城に入れるとは思いにくいんだけどな……。

門を入ると広い庭だった。真っ直ぐ石畳の広い道が続いていて、その先にお城の入り口が見える。石畳の両脇は綺麗に手入れされた芝生が広がり、やはり手入れの行き届いた庭木が計算された間隔で植え込まれていた。

その真っ直ぐ続く道をそのまんま歩くのかと思ったら、ふいっとキグナスが道をそれたので慌てて俺もそれに従う。分岐する細い道に入った。

キグナスが笑いながら俺を振り返って、身振り手振りで話しかける。

……多分、この入り口はいわゆる……正門つーか。そういうんで、基本的に偉い人とかそういうのが使う入り口だから……ああなるほど。つまりスタッフ通用口に向かってるわけだ？　きっとそうだ。そうに違いない。それに決めた。違ったとしても、知らない。

先ほど正面に見えた城の豪奢な入り口とは違う、ちょっとしょぼい入り口から城の中に入る。もちろんそこにも衛兵はいたんだけど、こっちもキグナスは顔パスだった。

城の通路も石畳で出来ていて、そんなに幅は広くなかった。

壁には等間隔でカンテラが掲げられ、多分国旗みたいなのが同様に等間隔で飾られている。壁も石造りで、明り取りの為か窓のように四角い穴がいくつもあいていた。ガラスなんかは嵌められていない。屋外みたいな扱いなのかな、ここは。

しばらく通路を歩き、その突き当たったドアから中に入る。

これまでの通路とは違う、何か普通の床。リノリウム……なわけはないんだろうけど、そんな感じのつるっとした床だ。壁にはやっぱりいくつもカンテラと国旗が掲げられていて、廊下の真ん中に緑色の絨毯がずーっと敷かれている。

時々衛兵がいる以外は、あんまり人の姿はない。ってか、人のいないところを選んでいるのかもしれない。何でだろ。

きょときょとと周りを見回している俺に、キグナスが疑問を感じ取ったのか振り返って肩を竦めた。俺の顔を指差して、何か言う。

「……？」

俺の、顔？

どうやら俺の顔が目立つとか何かそういうことを言ってるっぽい。

……目立つ？　何で？　……かっこよすぎるのかなあ、て、照れる

なあ……。

……。

……そんなわけないんだが、俺の顔が目立たなきゃなんない理由がわからないんで仕方がない。妄想癖が育ってしまいそうだ。

ま、理由はともかく、俺の顔をあまり人に見せたくないらしい。

……それはそれで何となく失礼なような……。

エレベーターなんぞと言う便利な物はないらしく、階段をいくつか上ってようやく俺は部屋に通された。城の、多分結構奥まった場所にあるんだと思う。街から外に出るどころか、そもそも城から出られるかが俺にはわからない。

廊下は緑色の絨毯が敷かれているところと、赤い絨毯が敷かれているところとあった。何か意味があるのかもしれないが、現段階で俺にわかろうはずもない。

通された部屋は、質素だけれど上品な造りの部屋だった。調度を見ても高価なのがわかる。あまり広さはない。学校の教室よりちょっと小さいくらいだ。

大きな窓が幾つもあり、明るさは十分だった。薄いピンクっぽい重そうなカーテンが、今は全開に開けられて端で留められている。ダークブラウンの木製の棚の上には、何だか良くわからない美術品らしきものや花を生けた花瓶だとかが置かれていた。

部屋の中心に据えられたこれまた高そうなソファを勧められ、そこに腰を下ろす。目の前の木製のテーブルの上には、何かお菓子みたいなのが入っているガラス製の壺があった。

キグナスのジェスチャーに従って、ようやく俺はその小汚い布を外すことが出来た。キグナスがテーブルの上の菓子壺の蓋を開けて、中のものを口の中に放り込む。何か砂糖菓子みたいな感じ。

食べるか？と言う仕草に頷くと、キグナスは俺の方にそれを押しやった。自分はどかっと向かいのソファに腰を下ろし、ふんぞり返って足を組む。両腕を頭の後ろで組んで背もたれに沈み、窓の外へ目をやった。

菓子壺の丸っこいお菓子を1つ口に放り込むと、甘さが広がった。やっぱり砂糖菓子らしい。わけのわかんないことばっかりで疲れていたらしく、何か急にほっとした感じがした。

ふと、壁にかかった時計が目に入る。時計。……時間の流れって、どうなってんだろう……。

自分の腕時計と見比べて見る。……あれ？

（止まってる……）

おかしいな……高校入学した時に、入学祝でもらった物だからまだ新しいのに。どっかにぶつけたんだろうか。記憶を探っても思い当たる節がない。

だけど、混乱しきっている間に何かしたのかもしれないしなぁ……。壊れちゃったのかな。

顔を顰めて、俺は腕時計を外した。ポケットにしまう。

言葉が通じないので会話のしようもなく、俺とキグナスはしばらくぼーっとそこに座っていた。

キグナスは深くソファに崩れるように座り込んで、足をぱたぱたさせながら何か鼻歌みたいな歌を歌っている。

壁の時計の時間は4時半。一緒くたにしても良いのなら、俺が中庭にいたのが昼休みで1時前だったから、既に3時間以上……。

……心配、してるだろうか。

雄高が心配してるかもしれない。

そう思うといても立ってもいられないような気がしてきたけど、どうしようがあるわけでもなかった。帰れるなら、とっくに帰ってる。ここでじっとレイアが来るのを待つしかない。

やがて、廊下の方でざわざわと人の気配がした。キグナスも感じたらしく、鼻歌をやめて顔を上げる。

ドアがノックされるのと同時に立ち上がって、ドアを開けた。思わず、俺も立ち上がる。

入ってきたのは、2人の男性だった。

2人とも長身だ。

ひとりは何かダークグレイのきちんとした身なりをしていて、真っ直ぐな白っぽい長い髪をしていた。精悍な顔付きをしているけれど、その切れ長の瞳には理知的な光が宿っている。

もうひとりは赤い短髪の男で、ちょっと軽そうな感じの、整った顔立ちをしていた。高そうな、シンプルだけど凝ったデザインの黒いマントを身につけている。銀色の硬質な感じの巨大なロッドを持っているのが容姿にそぐってなさすぎておかしい。

――それが、宰相ラウバルと宮廷魔術師のシェインだった。

第1部第2話　旅立ち（1）

「でぇ……大抵どこの国にも＊＊＊＊＊ってのがいてぇ、ウチで言うシェインだな。あいつはあー見えて＊＊＊＊＊若手でぇ……俺の＊＊＊＊……」

「待って。ところどころわからない」

「どこ？」

「どこってゆーか……。レイア、キグナスの言ったこと繰り返して」

「『どこの城にも宮廷魔術師ってのがいて、ウチで言うシェイン。シェインはああ見えて重鎮の中で最も若手で、俺の叔父』」

「ああ、はいはい……。宮廷魔術師ね……キグナスもっかい発音して」

俺が突然拉致されてから、数週間。

俺の視界で、ようやく見慣れてきた赤い前髪がちらついている。

あの日、初めて宰相ラウバルと宮廷魔術師シェイン、そしてあの後に大神殿の大司祭とか言うガウナっておじーさんに会わされた俺は、そのままなぜか、髪を染められた。

全部じゃない。前髪の一部……右側の一房だけ。

それに何の意味があるかは、まだ、聞いていない。ってか、教えてくれない。

制服を奪われて与えられた衣服は、妙に肌触りの良い、そして俺的に「どこかファンタジー」な衣服。

そして、誘拐犯の本拠地から帰る術さえ見出せずに、俺が取り組まされているのは、何となればお勉強だった。

まずは、言葉の勉強。

幸いにして『それぞれの耳に勝手に理解出来る言葉として伝わるレイア』がいる。

キグナスが、いわゆるこの国の言葉――ヴァルス語って奴を俺に聞かせ、レイアがその意味することを俺に伝え、俺はその音と意味

を思い切りカタカナだの日本語だのでメモっては覚える。
　これをひたすら朝から晩まで繰り返し叩き込まれ、何となく俺が聞き取れるようになってくると、今度は言葉の勉強がてら、この世界のことを教わる羽目になっている。
　……自分の世界のことでさえ勉強中の身だと言うのに、何やってるんだろう、俺。
「んでぇ……この大陸は？」
「えぇと……四大大陸のひとつで……」
　テーブルに広げた地図の最北に描かれている大陸を、キグナスが指さす。
　それを受けて俺は、唸りながら先日教わった各地の名称を思い出した。
「フレザイル」
「正解。んじゃこれ」
「東が……トートコースト大陸。西が、ヴァルスのあるローレシア大陸。ついでに南がラグフォレスト」
　キグナスが拍手で正解を示した。
　今、俺がいるのは、ローレシア大陸の最南端にあるでかい国ヴァルス、更にその王都レオノーラにあるシャインカルク城だ。
　つまり、俺をさらった首謀者は、ヴァルスの王女様ってことになるんだろう。
　ちなみに、まだ会わせてもらえていない。俺の言語能力では失礼だと、レイアが立ちはだかっている。
　失礼たってしょーがなくないか!?　勝手に拉致っといて、何て勝手な……と憤ったところで、レイアが頷かなければ会わせてもらえず、脱走したところで帰り方がわかるわけじゃない。
　最初こそ抗議をして暴れる俺は部屋に閉じ込められてたわけだが、1日で抵抗する気が萎えた。
　暴れたって、ごく普通の高校生である俺に、言葉もわからない異国で『異世界の王城から脱出を図って自分の世界へ戻る』なんて真

似が、誰かの協力もなしに出来るものか。
で、仕方なしに、言われるままに勉強している。学校よりひどい。
「あーッ。もう無理。先生、休憩……したいって、何て言うんだっけ」
「はい、調べましょうかあ」
くっそぉ……。
俺が鼻の頭に皺を寄せてメモ帳をひっくり返していると、部屋のドアが開いた。
「何だ。勉強などしてるのか。勤勉だな」
軽い口調で言いながらノックもせずに入って来たのは、ヴァルス王国の宮廷魔術師シェインだった。……俺に勉強させてんのは、あんたと宰相のラウバルだろーが。
シェインは、暇なのか物好きなのか、こうしてちょくちょく俺たちの様子を見てはどこかへ連れて行ってくれる。本人、実に遊び好きらしく、元々ふらふらと街に遊びに行っているみたいだ。賭博場だとか遊技場だとか市場だとか……娼館だとか。
良いのか？　高級官僚。
「カズキを街の視察に連れてってやろう」
「……シェインて仕事してんの」
「馬鹿言え。視察は立派な仕事だ。……キグナス。先に行って馬を2頭、借りだしてくれ」
「馬？　どこ行く気だよ。街で騎乗は禁止だぞ」
「わかっている。たまには外に行ってみようと思ってな」
シェインの言葉にキグナスが肩を竦めて出て行くと、無意味に地図を指先で撫でながら、シェインがレイアを見た。
「どうだ？　調子は」
「んー。……ま、馬鹿ではないわね」
もっと言い方があるだろう？
悪いんだけど俺、学校での成績はかなり優秀だったんだからな、ちくしょ～……。

こんなところでその能力を発揮することになろうとは。
これを俺の世界でやっていれば、俺の将来は安泰だ。東大でもケンブリッジでも合格確実。
「そのようだな。これだけ話せるようになるとは立派なものだ。頑張ったな」
ストレートに褒められて、少し照れた。
「シェインさあ……」
「おう」
「いい加減、教えてよ」
俺も無意味に地図の……ヴァルスの上を指でなぞりながら言うと、シェインが無言で俺を見た。
「俺が……ここに、連れて来られたわけを」

ヴァルスの周囲には、いくつかの国がある。
ローレシア大陸そのものには、１２。
そして、その中でも特に８つの国が、ひとまとめに帝国アルトガーデンと称されている。
「アルトガーデンには、王国とされる大国が３つある。まずは、ヴァルスだ」
部屋を出て、キグナスの待つ外へ向かいながら、シェインが説明してくれた。
お勉強が休憩に入って、レイアはどこへともなく姿を消している。
「帝国ってからにはコウテイ……コウテイって何て言うの？　えぇと、帝国の王様」
こうして、わからない単語はわかる言葉を駆使して確認し、その都度覚える。ヴァルス語は、今の俺の印象では日本語より字数や単語、文法が少なく、英語よりはちょい多い。……気がしてる。
「皇帝は無論いる。それが我がヴァルスだ。元来は帝国内８ヶ国とヴァルス大神殿の大司祭、そして教皇領エルファーラが選挙権を持ち皇帝を選出するが、大司祭は無論のこと、エルファーラや、ヴァ

ルスの隣国ロンバルトもヴァルスを支持している。元々アルトガーデンの基礎を作ったのがヴァルス王国だからな。有利に出来ているのだ」

ここに来てからしばらくシャインカルク城の中で生活をしているけれど、俺は未だにこの内部さえ把握していなかった。

余りに広過ぎるのもあるけど、それほど自由に城の中を歩かせてもらえないってのもある。誰か知らない人に会ったら、とりあえず曖昧に微笑んどけとだけ、言われた。

その理由もまた俺は、聞かされていない。

「ふうん。汚いの」

「汚いのではない。創始者の特権と言ってもらおう。……いずれにしても、ヴァルス王家が、通常アルトガーデンをも統べる皇帝家として君臨している」

「うん。……で？」

「帝国内の各国については、キグナスから既に聞いたか？」

「……」

聞いた、けど。

「覚えてない」

「王国が3つ。これはヴァルスを筆頭に、ロドリス王国そしてリトリア王国だ。他は公国。バート公国、ナタリア公国、キルギス公国、モナ公国、ロンバルト公国。ついでだから帝国外の国も羅列してやろうか。マカロフ王国、ワインバーガ王国、そしてツェンカー独立自治領に教皇領エルファーラ」

「……そんなずらずら言われても覚えられない」

「聞き流しとけ。どうせいずれ、嫌でも覚える」

「嫌でも覚えるほど長い間いるつもりはないんですけど」

「当面、覚えておく必要があるのは、ロドリス王国とリトリア王国、そしてロンバルト公国だな」

俺の小さな抵抗は、シェインにあっさり受け流された。

王国と公国って名称が違うのにも意味はもちろんあるんだろうが、

今、そんなもんまで突っ込む気になれない。脳細胞が過労死する。
「何で？」
「ロドリスとリトリアは、ヴァルスに拮抗する強国だ。そしてロンバルトは、おぬしを召喚した理由に直接関わる」
すたすたと長い足で俺の前を歩いていたシェインは、そこでふと俺を振り返った。
直接関わる？　ロンバルトってトコが？
「何……」
「ロンバルトには、王子が2人いる。第1王子レドリック、そして第2王子レガード」
レガード……。
聞き覚えがある。こっちに拉致られた最初、浄化の森でレイアが俺に向かって言った名前だ。
……まさか。
「おぬしの容貌が、レガード王子と酷似している」
……。
おいいいいいいいいい。
シェインの言葉に、思わず俺は足を止めた。
ちょっっっっっっと、待て。
「……じゃ、何？」
「何だ？」
「俺は、ロンバルト王子にそっくりさんだってだけで、こうして攫われてきたと……そういうこと？」
「おお、良くわかったな」
わかったも何もわからいでか。
冗談じゃないッッ！！　……そう怒鳴る為に口を開きかけた俺は、俺の剣幕に笑いを浮かべたシェインの横顔に翳りを見つけて、言葉を飲み込んだ。
シェインが続ける。
「レガード王子の、行方が知れない」

「え？」
「レガード王子と、ヴァルス王女ユリアは、婚約者だ。……ヴァルスを、ひいてはアルトガーデンを後継するレガード王子が、王位継承の儀式の為に『風の砂漠』にある『王家の塔』へ向かった。そして、消息が途絶えた」
「……」
王位継承者が行方不明……。
シェインが、歩いていた通路を左手に逸れる。それに従って俺も階段を降りながら、言葉の続きを待った。
「そもそもが、レガード王子との婚約が、波乱含みでもあったわけだ。先ほど名前を出した王国を覚えているか」
「えぇと……ロドリスと、リトリア？」
「ヴァルスを含めた王国、三国は、拮抗した勢力と言える。無論、我らがヴァルスが最強ではあるが、ロドリス、リトリア、共に国力の豊かな強国だ。ゆえに、反目し合っている」
三国志の魏呉蜀みたいなもんだろうか。
要は、三竦みってやつか？
「現ヴァルス王クレメンス８世陛下が、レガード王子とユリア様の婚約を発表した際、ロドリスが抗議の声を上げている」
「何で？」
「ロンバルトは、ロドリスと国境を接しているからさ」
良くわからない。
「クレメンス陛下には、直系の子供がユリア様ひとりしかいない。女性が帝国を継承した前例はなく、ゆえにユリア様と婚約する人間が、必然的にヴァルスとアルトガーデンを統べる。ユリア様が誰と婚約するかによって、それが他国である場合、その国の国力が一気に跳ね上がる。それは、わかるな？」
「うん」
「ロンバルトの第２王子が継承することによって、ロドリスと国境を接するロンバルトがヴァルス領土に等しくなる、と言うのがロド

リスの意見だ」
「はあ」
「認めて欲しければ、ロドリスにロンバルトを併合させ、永久不可侵を誓え、と」
……。
んな横暴な。
「何で、第2王子なの？」
「一応のところは、第1王子にロンバルトの継承権があるからと言うことになっているな。だが、レガード王子はヴァルスと懇意にしていて、シャインカルクに数年間滞在していたこともある。ユリア様とも既知の中で、縁が深い。何より、利発で指導力に富んでいる。クレメンス陛下は、レガード王子の能力を高く評価している」
「第1王子は？」
「……ま、あらゆる才能を弟に譲ってしまったのだろうな」
ひど過ぎる。
つまり、無能な兄はいらんから有能な弟をくれと、そう聞こえる。
端的に失礼な第1王子レドリックへの感想に呆れていると、長い階段を終えてまた通路を進みながら、シェインが言葉を続けた。
「『王家の塔』は、大した難所ではない。どこぞのダンジョンのように魔物が出たりトラップが仕掛けてあったりするものではないのだ。当然だな。王族の人間が出向く場所なのだから」
「ふうん。何するの」
「世界を遍く（あまね）統べる女神ファーラから、王位を継承する許しを得るのさ」
「神から？」
「ああ。だから、『王家の塔』でどうかなったと言うのは考えにくい。そして、各国にレガード王子行方不明を知られるわけにはいかない。……余計なトラブルを招く」
「例えば？」
「誰かがレガード王子の身柄を見つけてみろ。本当に亡き者にされ

る。……レガード王子が事実いなくなれば、ユリア様の婚約は再び宙に浮く」

ああ、なるほど。

「だから、カズキを探し出したのだ」

「……は？」

これまでも何度かシェインたちに連れて来られた、馬場へ抜ける通路に出る。シェイン越しの向こう側には、外へ続く扉が見えていた。窓の向こうに、キグナスの白金髪がふわふわと揺れるのだけが見える。

「ヴァルスの、アルトガーデンの運命は、おぬしの肩に、かかっている」

「……あの」

「レガード王子の代わりに、『王家の塔』へ行ってくれ」

「……いや、その」

「おぬしが動けば、きっと事情も明るみに出るはずだ。その為に、どうしてもその容姿を持つ人間が必要だった」

「……だから、あの」

たじたじになる俺に、足を止めたシェインが真っ直ぐな視線を向けて、繰り返した。

「レガード王子として、『王家の塔』へ向かってくれ」

「……」

「……レガード王子の、そしてアルトガーデンの命運は、おぬしにかかっている」

――――――――――――そんなこと、出来るかよッッッッッ！！！！！！！！！

◆　◇　◆

レガードは、黒髪に黒い瞳の、１８歳の若者だそーだ。年齢は、俺より２つ上。ただし、髪には一房、赤髪が混じっている。

俺の髪が染められた理由は、そこにあったわけだ。顔は放っておいてもうりふたごらしいから、制服を奪い、レガードの服を押し付ければ、即席レガードの完成。非常に迷惑だ。

（王女様、か……）

俺がこの世界に連れて来られたわけを聞かされてから、また、数週間……。こっちに来てからは、１ヶ月と少しの時間が流れた。

言葉を叩き込まれ、この世界を学ばされ、冗談程度に剣の握り方だけを教え込まれて、今日。

……王女様と謁見させてもらえると聞いている。

（どんな人なんだろう）

街の上空を吹き抜けてきた風が、俺の前髪をふわりと持ち上げた。シャインカルク城のテラスからは、王都レオノーラの美しい街並みが遠くまで一望出来る。

遥か彼方の山々まで抜けるように景色が広がって気持ち良く、俺はこれまでも度々ここに足を運んで気分転換をしていた。

今日も、王女ユリアと会う前に、少し考えたくてこうして足を運んでいる。

……現国王クレメンスは、余命幾許もない、と聞いた。

そもそも婚約を発表した頃は健康であったはずのクレメンスだけど、ロドリスが抗議の声を上げて協議を始めてから間もなく、重い病に伏したのだそうだ。

魔力をもってしても、病気に関しては回復は不可能だと言う。

（王子様の、身代わり……）

俺にそんな真似が、出来るんだろうか？

だってここ、魔物が横行する世界だぞ？

幸いにして街に籠もりっ放しの俺は、未だかつて魔物を見たことはなく、正直なところ実感は今ひとつないわけなんだけど。

王女ユリアと会って、それが済んだらレオノーラを発ってくれと、シェインからは言われている。詳しいことは改めて話すとしか言われていなくて、その詳細はまだ知らない。

（……帰りたいな）

もう1度街を眺めた俺の髪を、風が攫った。心地良い風。

（雄高……元気かな）

いつの間にか俺の心に、迷いが生じている。

絶対帰りたいと思っていた。

絶対、帰させると思っていた。

だから、言葉を覚えた。元の世界に返してくれるよう直談判する為だ。

そうしたら、この世界の事情を知った。

王女と言う重い責任を負う少女を助けてあげたい、と言うそんなヒーローめいた気持ちもなかったわけじゃないと思う。女の子に頼られればそりゃあ嬉しいわけだし。……こんな『異世界』なんてとんでもない状況でさえなければ。

余命幾許もない父王、そして共に国を背負って立つはずの婚約者は行方不明、油断をすれば獲物を狙うハゲタカのように一挙に襲い掛かってくるかもしれない諸国。

これを放り出したら……男じゃないだろう、やっぱり。……とか。

この世界に、最初の時よりはほんの少しだけ慣れ始めてもいる。慣れてみれば……興味がわかないと言うのも多分嘘になるんだろう。

大体、今の俺には帰れる手段もわからない。

俺に出来ることなんて、きっとたかが知れてるんだろうけど……。

「そうやって黙ってれば、王子様の気品に近いものはないでもないんだけどねえ～」

ぼんやりと、まだ見ぬ王女の胸中に思いを馳せ、そして俺自身がどうすべきかを考えあぐねていると、そんなデリカシーのかけらもない声が聞こえた。

もちろん、レイアだ。

「何だよそれ」

振り返ると、レイアが青空を背景にふわふわと宙に浮いていた。

「だって口開くと、到底気品がないんだもの」

「うるさいな」
「だから一部の人間以外と口を利くのを禁じたのよ。レガード様の気品が疑われちゃう」
庶民の出なんだよ俺わ。
ホンモノの王子サマと比べるなよな。
無言でクレーム光線をびしびしと飛ばす俺を軽く流して、レイアがふわりと俺の顔の前に下りてきた。
そして、にっこりと微笑んだ。
「時間よ。ユリア様に、会いにいきましょう」

第1部第2話　旅立ち（2）

レイアに連れて行かれた謁見室では、とても王女様との対面を待っているとは思えない態度で、シェインがソファにぐでーっと沈み込んでいた。

俺の壮行会だなどと言う建前で昨夜、俺とキグナスを引き摺って街へ出たシェインは、要は単に二日酔い。

これまでは俺も度々、散々飲まされはしたけれど、昨日に限っては今日に影響を及ぼしても困るので、シェインも程々にしてくれた。……俺に勧めるのは。

そしてキグナスは、あどけない見た目のわりに酒を飲ませればザルで、結果としてシェインだけが二日酔いに陥っている。自業自得としか言いようがない。

「全く、同情の余地がないな」

冷淡にそう評したのは、宰相のラウバルだった。

彼は、俺が滞在中もシェインほど絡んでこなかったので、余り良く知らない。

だけど、ローレシアでは珍しい召喚魔法と言う……何つーの？妖獣だの魔物だのと契約をして使役下に置いたり、魔法陣で呼び出したり、何かそんな類の術を身につけている特殊な人だと聞いている。

召喚魔法ってのは、身につけるにも修行が大変で、身につけた後も使役するのが大変で、習得している人はほとんど存在していないらしい。

そして、彼は、異様なまでの長寿なのだと言っていた。

見た目は、２０代半ば過ぎくらいだ。だけど実年齢は半端じゃな

いらしく、既に何代もの王に宰相として仕えていると聞いている。真っ当に外見で表わしたら、干からびきった梅干だろう。……なんて言ったら、多分無言で抹殺されるだろうくらい、シャレと笑顔のない人。

「息抜きは大切ですが、ほどほどにして頂かねばなりませんねぇ」

一方で、そう穏やかに評したのは、ラウバルの隣に立つ矍鑠（かくしゃく）とした老人だった。

彼が、大司祭ガウナだ。

この人は別に大長寿ってわけじゃないらしく、ま、普通の人なんだろう。普通におじいさん。

だけど、絶やさずに浮かべている笑顔が、人徳者な雰囲気を醸し出している。

彼も、俺から言わせれば魔法使いに分類される。

司祭や神官なんか、神に仕える類の人は、神聖魔法と言うのを身につけているのだそうだ。

司祭や神官は、ヴァルスに隣接する教皇領エルファーラに最も多いらしい。教皇領エルファーラは、ローレシア全土で広く信仰されているファーラ教の聖地でもある。

神聖魔法は、主に回復とか防御とか補助魔法のようなものを得意とする種類の魔法で、神の元に修練を重ねた人間が仕えるんだそうだ。要は信仰心？

後は……アンデッド・モンスターなんかを一発で消し去るような魔法とかもあるとかって聞いたな。いや、そもそもアンデッド・モンスターが出る時点で、俺的にありえないんですけど。

そして、病床にあるクレメンスの病状を見ているのも彼なのだそうだ。

神聖魔法で病魔を撃退することは出来ないらしいけど、多少の緩和は不可能ではないらしい。

加えて言えば、大司祭は戴冠式などの重要な儀式を執り行ったり、王家の医者みたいな役割もするんだそうだ。普段は王城ではなく、

王城から続いて行ける郊外の大神殿にいるらしく、俺はこれで会うのはまだ2回目だった。
「宮廷魔術師でしょ。ぱぱっと魔法で治せば」
無理と知っていながら、意地悪くそう言ってやる。シェインが恨めしそうに俺を睨んだ。
「神に定められた病には人智の力は及ばぬ」
神に定められた二日酔いね～ぇ……。
「魔法で全ての病が治るのであれば、我が主君を真っ先に治している」
ま、そりゃそうでしょうが。
シェインや、そしてその甥で見習いでもあるキグナスが使う種類の魔法は、言霊魔法と言うんだそうだ。
これが、一番俺の想像する魔法に近そうだった。
呪文を唱えて、ロッドからゴォォォ～ッと炎を出したりするような奴。
だけど、魔術師と言うのも召喚師ほどではないけど多いものでもないらしく、特に、リトリア王国にあるエルレ・デルファルと言う魔術師学校の超エリートコースを出るような人間は滅多にいないらしい。
シェインもキグナスも、エルレ・デルファルの出身なのだと聞いたわけだが……わけだけど……。
……エリートねえ……。
一般的には、私塾であったり学校であったり、あとは魔術師に弟子入りしたりとかして学んだりもするらしい。で、見習いを卒業すると師からロッドが与えられる。それでようやく一人前。
キグナスは、シェインに師事して学んでいる最中ってわけだ。
叩き込まれたことを復習がてら、頭の中でつらつらとそんなことを考えてシェインの隣に座り込んでいると、突然、激しい物音と共にドアが開かれた。
ぎょっとして体を揺らすと、ドアの向こうから部屋にピンク色の

塊が飛び込んで来る。
「まあああッ。本当にそっくりですわッ」
――これが。
（王女様……？）
「ユリア様ッ」
唖然と目を見張る俺の前で、ラウバルが飛び込んできた美少女に向かって叱責するが、彼女はどこ吹く風で完全に受け流した。
「会わせて貰える日を、お待ちしておりました」
「……」
すっっっげぇぇぇ……。
（可愛い……）
王女様の、余りの愛くるしさに、咄嗟に言葉が出ない。
これこそまさに俺の世界でお目にかかることが出来ないほどの……美少女。
翡翠色のきらきら輝く瞳に、長く波打つ黄金色の髪。艶やかに宝石で飾られ、ふわふわのピンク色のドレスが色の白い彼女を引き立てている。
知らず、鼓動が速くなった。とんでもない美少女であるのに加えて、「王女様」と言う付加価値が彼女のレベルを押し上げて見える。
「会いたかったわ……」
あげくの果てに、間近に足を進めてそんなことを言われてみろ。しかもその瞳が潤んで、俺を見つめているとくれば、脈拍が平静な方がおかしい。
ついついどぎまぎしている俺に向かって、ユリアがどこかうっとりしたように口を開いた。
「本当に、レガード様のようですわ……」
「……」
……あの。
俺、レガードじゃなくてカズキなんですけど。
「俺は、レガードじゃない」

俺自身を素通りする彼女の発言に、思わず俺はむっとした。ユリアが驚いたように目をぱちくりさせる。ラウバルが憤慨したように言った。

「ユリア様に向かって……」

「いいの、ラウバル。確かにわたくしが悪かったわ。……ごめんなさい、気をお悪くなさらないでね」

言って、ユリアは微笑んだ。

むっとしたとしたって、やっぱり可愛いものは可愛いので、素直に謝られてついついどきりとする。

「あ、いや……」

ユリアは俺の前に立ったまま、目を伏せた。

「あまりにも似ているのです。わたくしの婚約者に……。我を忘れました」

「いえ……」

「カズキ、と申しましたね」

「はあ」

「事情は、もうご存知？」

「はあ」

いて。

間抜けな返事しかしない俺の足を、べこんとシェインが蹴飛ばした。

「良いのです、シェイン。カズキはこの世界のことを、まだ良く知らないのですから」

くすっと笑ってシェインに言うと、ユリアは俺に再び視線を向けた。

「お願いです。わたくしの婚約者レガードを見つけ、『王の証』を持ち帰って欲しいのです」

これ、拒否するのもありなんだろうか。

……。

「あの」

少し迷って、顔を上げる。ユリアの翡翠色の瞳に俺が映っていた。
「何でしょう」
「俺、元の世界に帰る方法って、わかるんですか」
「カズキ！？」
がたっとシェインが立ち上がる。それを黙殺して、俺はじっとユリアを見据えた。
ユリアはしばらく沈黙していたが、やがて頷く。
「はい。シェイン……出来るわね」
「それは……けれど……」
「今すぐと言う話じゃ、ないです」
「カズキ」
「……やることさえやれば、ちゃんと、元の世界に帰してもらえるんですよね」
ユリアの目が見開かれる。
「では……」
「やりますよ」
短く息を吐いて、言った。ユリアの顔に喜びが広がる。
「確認、しておきたかっただけです。……やります」

◆◇◆

「思わず『沈黙の魔法』をかけてくれようかと思った」
ユリアとの謁見を終えた俺を引き連れてシェインはぶつくさ言いながら俺の前を歩いていた。長身のシェインの頭は俺より高い位置にあり、動きにあわせてさらさらと揺れるその髪を見つめながらシェインに絡む。
「シェイン、俺のことといつでも帰せるんじゃんね」
「いつでもと言うわけにはいかぬがな。……ユリア様の為だ。堪えてくれ」
俺がこれからどうすれば良いのか、持ち物だとか行き先の説明だ

とかを今からシェインが教えてくれるってことなんだけど。
どこに行くのか、階段をひたすら降りてシェインは地下に向かった。
上とは違って、壁から床から全てが石造りで暗い。窓からの明かりがないせいか、カンテラの火もひどく頼りなく見える。
「みんな、ユリア……様に忠誠を誓ってるの？」
俺の問い掛けに、シェインは軽く顔を振り返って眉を上げた。
「当然だ。王家に仕える者として、王族に忠誠を尽くすのは当然のことだろう」
「シェインって破天荒にやってそうなのに」
その言葉に苦笑する。
「好きにやらせてもらっている方ではあると思うがな。自分が忠誠を尽くすべきと定めた主君には、命も賭けよう」
「ふうん？」
「俺は、己の主君をクレメンス８世陛下と定めた。クレメンス８世陛下の愛娘であるユリア様もまた同じだ」
意外に真面目な言葉に驚いた。そう言うものなのかな。騎士道精神みたいなもんだろうか。騎士じゃないけど。
「どこ、行くの」
「おぬしに餞別をくれてやろうと思ってな。ひとりでは心細かろう」
「……ひとり？」
何だって？
思わずぴたりと足を止める。
待ってくれ。誰も俺について来てくれないのか？　地理も何もわからない、言葉も覚えたてのこの国で？
「ああ、ちょっと言葉が悪かったな。レイアは一緒に行くから安心しろ。ああ見えても結構な精霊魔法の使い手だ。大船に乗ったつもりでいるが良い」
船、ちっちぇぇぇ～……。
構わず先に歩いて行くシェインの背中を、小走りに追いかける。

「シェインは来てくれないの？」
「行きたいのはやまやまだがな。俺には俺の仕事と言うものがある」
「遊びまわってる癖に……」
「何か言ったか？」
「別に……」
ぼそっと言ったところで、シェインが足を止めた。鉄の、古そうな扉。
シェインは鍵束から1本の鍵を選び出し、その鍵穴に差し込んだ。ガチャリと重たい音がして鍵が開く。
「ここは……？」
「俺の宝物庫だ」
俺のって……。
「魔力付与道具、と言うものが世の中にはある。古いものになると用途不明のものもあったりするし、危険な可能性もあるからな。俺が管理している」
「シェインが管理してて、お金に困って売っ払ったりしないの？」
ぼそっと言うとシェインはがくっと蹲いた。
「おぬしはどういう目で俺を見ている……」
「いやまあ……」
シェインに続いて中に入る。シェインが管理していると言う割には意外と綺麗に整理されていて、それなりの広さのある宝物庫にはたくさんの物が置かれていた。俺には用途がさっぱり想像もつかない物もある。
「待っていろ」
言われて、出入り口のところできょろきょろしながら待っていると、奥の方でガタガタと音をさせていたシェインが戻って来た。手には小さな箱を持っている。
「おぬしの身を守ってくれるだろう物だ」
「何？」
シェインが開けたその箱の中には、真っ赤な石に金色のプレート

がついているピアスだった。プレートには何か文字が刻まれている。
「俺、ピアスの穴なんかあいてないよ」
「あけてやろう」
やめて。
ひいーっと耳を押さえて壁際に後じさった俺に苦笑してシェインはそのピアスを両手に1つずつ持って俺に近づいた。
「こんなものは一瞬だ。命を落とすことに比べればましであろうが」
「え、本気？」
「本気も本気だ。俺が冗談など言ったことがあるか」
全てが冗談に聞こえるんですけど。
「街を出れば魔物が徘徊している。おぬしはまだろくに自分の身も守れぬだろう。……これは古代の魔術師が防御魔法を込めたものだ。必ずおぬしの役に立つ」
「……」
「……と良いと思うのは本心だ」
おいおいおいおい。
こらこらこら！！
言ってシェインは俺の両耳にそれぞれの手を翳した。小さな声で何かを呟く。次の瞬間には、俺の両耳には慣れない重みが感じられた。
「え？　もう？」
「だから一瞬だと言っただろう。行くぞ」
「あ、うん……」
促されて宝物庫を出る。元通りシェインが鍵をかけて、元来た道を戻り始めた。
「これ、どうやって使うの」
「知らぬ」
あのなあああああ。
突っ込みそうになった俺に、シェインはおどけたように両眉をひょこんと上げてみせた。

「あの宝物庫の品物は現在研究中でな。……ただ、それに関しては自動発動の防御魔法だと言うことがわかっている。まあ、お守りだと思っておけば良かろう」
「うーん……」
頼りないな……。
「ただ、それはあくまでそれ単体の話で……」
俺の前を長い足ですたすたと歩きながら、シェインは顔だけで振り返った。
「どうやら、対となるアイテムがあるらしい」
「対になるアイテム？」
「ああ。それが何だかは、まだわかっていない。せっかくだから対になるアイテムがわかったら俺に教えてくれ」
……。
俺の為、と言うより、むしろ俺、利用されてるような気がしますけど。
そんなアバウトな物くれないで、もっとわかりやすい物が欲しい。
長い通路を抜け、上へ戻る階段に差し掛かった時にシェインが言った。
「上の部屋で地図と一緒に説明をするが、レオノーラを出たら、とりあえずは南東へ向かえ。浄化の森を抜け、ノイマンの湖を越えるとヘイズと言う小さな町がある。ヘイズから更に南下し、海沿いの港街ギャヴァンに行くと良い。細かな道筋はレイアが知っている」
「うん……」
「ギャヴァンについたら、『再会の酒場』と言う店がある。ギャヴァンまでは順当に行って……ま、かかっても3日か4日だろう。その頃にその店にシサーと言う人物を待たせておく。彼に、会え」
「シサー……？」
「ああ。フリーランスの傭兵だ。腕が立つ。おぬしとレイアでは、ギャヴァンまで辿り着くので精一杯だろう。ギャヴァンまでなら、昼間を選んで移動をすれば魔物はそうそう出ない」

傭兵……。
高校生活で登場するはずのない職業を出されて、ちょっとだけどきどきした。ふうん、傭兵なんてのがいるんだ。
シェインが、ちらりと俺を振り返る。
「ラウバルを黙らせるのに苦労をしたぞ」
「え、どうして」
「ラウバルとシサーは反りが合わぬ」
「シェインとは？」
「絶妙だ」
……何か嫌だ。
「だが、腕は確かだ。俺が言うのだから間違いない。せっかくだからいろいろと、シサーから学ぶのだな」
どんな人なんだろうか。ごつい大男とかスパルタだったら嫌だな。
そんなふうに思いつつ、俺はシェインの言葉に答えて頷いた。
「うん……わかった」

◆◇◆

とりあえず、レイアだけをお供に連れて、俺はヘイズへ向かってシャインカルクを出発した。
レイアのような妖精族は、この世界で言うもうひとつの魔法――精霊魔法と言うのを生まれつき操ることが出来るんだと言う。
攻撃特性なんかは言霊魔法と似通っていて、当然レイアも精霊魔法を操ると聞いているから、何かあった時に力になってくれるのは間違いない……んだろう、きっと。
精霊魔法ってのは通常、人間には持ち得ない能力なんだそーだ。
ともかくも、彼女の魔法が俺の命の先行きに大きく貢献するだろうことは間違いない。
そしてもうひとつの命綱――渡された食料や水なんかの入った皮製の袋を肩にかけ、左腰には何と、剣がぶら下がっている。

ぶら下がっているだけだ。
使えない。
シャインカルクにいる間は言葉を叩き込まれるだけで精一杯で、はっきり言って剣の訓練まで受けている余裕はどこにもなかった。握り方と振り方だけざっくばらんに教えてもらっただけで、使えるようになるわけもない。
「シサーは、頼りになるわよ」
日はまだ高い。
俺は、最初にこの世界で俺が見た場所……浄化の森へ向けて歩いていた。
シェインの言う通り、この辺りは昼間は魔物が出たりはしないのか、のんびりと手押し車を押す農民や行商人らしき人の姿もちらほら見える。
城から出す人数を控えたのは、余り俺の出発が目立っても困ると言うのが理由らしい。本当かどうかは知らないけど。この辺りは王都に近いだけあって昼間は魔物がそれほど出るような場所でもないと聞いている。
「ギャヴァンって、行ったことある？」

第1部第2話　旅立ち（3）

肩に背負った荷物を背負いなおしながら、レイアに問う。レイアはふわふわと俺の顔の周りを飛びながら、頷いた。
「あるわよ」
「どんなところ？」
「元気な街よ。潮の匂いに溢れて、活気がある街だわ。レオノーラは上品な街だけど、ギャヴァンは下町って感じね。ギルドもあるし」
「ギルド？　って何？」
「盗賊ギルドよ」
盗賊？
それって危ない街とかそういうんじゃないの？
俺が嫌な顔をすると、レイアは眉を寄せた。
「盗賊と言ってもいろいろあるのよ。職業盗賊は、ギルドと言う組合に属してるわ。別に危険な存在じゃないわよ、普通にしてれば」
「そういうもん？」
「そういうもん」
なら良いんだけど。
「じゃあ、ヘイズって町は？」
草原を抜けて、浄化の森に入った。相変わらず鬱蒼と生い茂る木々の間を、細い道が続いている。
「ヘイズは特にコメントのしようのない町ね。小さな町よ」
「ふうん……」
鳥の鳴く軽やかな声が聞こえる。時折、草の間から野兎がぴょこんと顔を出した。ひどく平和な光景だ。
本当に魔物とかって、いるのかなあ。会わなくて済むんなら、そりゃあそれに越したことはないんだけどさ。
「レイア」
「何よ」

「何でこの森には魔物が出ないの？」
この世界に来た時にレイアが言っていたことを思い出して、尋ねてみた。ここには出ないときっぱり言っていたと思う。何か理由があるんだろうか。
「ああ……ここはね、エルフの国に通づる森なの」
「え？」
「妖精族のエルフ」
「ふうん……。何でエルフの国に通じると、魔物が出ないの」
「エルフの長が結界を張っているからよ。……いろいろな意味で魔法としての磁場が良いのよね。だからあんたも最初にここに出たわけ」
「ふうん……」
よくわからん。
ともかくこの森は、魔物たちには立ち入り禁止になっているらしい。
「この辺の木の実とかそういうのは、食えるの？」
「食べられるわよ。それはロートスの実と言ってね、食べるとこの世の苦しみを忘れて甘い夢だけが見られるの」
「……ほんと？」
それ、麻薬とかそういうんじゃなかろーか。
俺が手を伸ばした、少し高い位置にある赤っぽい洋梨のような形をした果物を指してレイアが言った。ので、思わず手を引っ込めかける。何かそんな危ないもん食いたくないし。
レイアがそんな俺を見て爆笑した。
「って言うくらいおいしいって話よ」
「……あ、そ」
んじゃあ食ってみよう。
1つもぎ取って、口に運んでみる。一瞬、甘酸っぱいような酸味のある味がして、次にふわーっと甘さが口全体に広がった。水分もかなり多くてジューシー。けど、かなり甘いので喉が渇く気がする。

「疲れた時に食べると、疲労回復になるわ。持ちも良いから幾つか持っていくと良いかもしれないわね」
「そう？」
その言葉に従って、いくつかロートスの実をもいで、荷袋に仕舞いこんだ。
「あ、カズキ。それも持っていた方が良いわ」
言われて足を止める。レイアが指したのはロートスの木の下、その根元の草むらに生えている、ちょっと特殊な形をした草だった。
「これ？　が何？」
「これはソーマ草。薬草になる。おいしくないけどね。疲労回復にもなるし、煎じて飲めば解熱剤にもなるし。湿布代わりに怪我も治せるわ」
「万能薬だ」
「そんなに強力に効くわけでもないけど……」
レイアに教えてもらってから、森の中を歩いていてソーマ草を目にするたびに俺は少しずつ摘んで荷袋のポケットにしまった。群生してないからまとめて採ることは出来ないけど、それでもちらほらとあちこちに生えているので、森を横断する勢いで歩いていると結構見付かる。
……何て意気揚々とそんなもんを集めてて、俺はふと我に返った。
（ゲームじゃないんだから……）
ゲームだったら『カズキは薬草を手に入れた』と言うメッセージが流れるところだ。あああもう……。
俺の人生どこでどう間違ったんだろうと思いながら、草を踏み分けて歩いて行く。
やがて森が途切れ、再び草原にぶち当たった。道は森を抜けたところからそれなりに整備され、まあまあの広さに変わる。
見渡す限り、割と単調な光景ではある。起伏に乏しく、遠くの方にまた森のようなものが見えた。
「あれが、ノイマンの湖？」

森から抜け出し、土の感触を靴の裏に感じながら尋ねる。レイアが首肯した。
「そ。……ノイマンの湖にはルサルカと言う湖の乙女がいて、彼女はエクスカリバーと言う魔剣を守護していると言われているわ」
「え、本当に？」
おお。ファンタジー。
「嘘」
がく。
「何だよ、それ……」
目を半開きにしてじとっとレイアを見てやると、レイアはそ知らぬ顔でふわふわと飛びながらなぜか威張るように言った。
「そういう伝説があるのは本当だけど、あたし、湖の乙女に会ったことないもんね」
「会ったことないからっていないとは限らないんじゃ？」
「あのね、あたしこれでも妖精族なの、悪いけど。そのあたしがいないって言ってんだから、いないわよ」
いつの間にか、日は随分と傾いていた。どれくらい歩いてきたんだろう。時計が止まってしまっているので、時間が良くわからない。夜が近いせいか、それとも元々なのか、周囲には人の姿も見当たらなかった。
ただただ広い大地にレイアを2人だけと言うのは……ひどく心細くさせる。
「ここは、魔物って出たりとか……？」
「するわね」
きっぱりと、レイアが言った。もう少しオブラートに包むとかさ……してよ。
「日が暮れると出るわよ。早めにどっかで野営を考えた方が良いかも」
「野営したって出るんじゃないの？」
「うろうろするより遥かに遭遇率が下がるのよ」

「……魔物って、どんなのがいるの？」
聞いても仕方がないとは思いつつ、聞いてみる。レイアは眉根を寄せて、俺を見た。
「……人間以外って意味で言ってんだったら、あたしだって魔物だと思うわ」
そりゃそうだけど。
「そうねぇ……この辺りに出る魔物って言ったら……ゴブリンとかウォーウルフ、ウガルルム……そんなところかなぁ」
そんだけ出りゃあ十分なんですけど。
「ゴブリン……ってのはキグナスに教えられたな。要は小鬼ってやつなんだろ」
つっても、そんなもの実物にお目にかかったら怖いに決まってるんだが。
「そう」
「ウガ……なんとかってのは？　どんなの？」
「ウガルルムは、巨大なライオンの姿をしているわ。特別な能力……魔法を使ったりとかそういうのはないけど、まあ、猛獣よね」
巨大じゃなくたってライオンなんか出てこられたら、それだけで勘弁して下さいと言う気分になってしまう。
「ウォーウルフって言うのは？」
「ウォーウルフは……」
レイアが口を開きかけたそのままで俺の方を向いて凍りついた。
「それ……」
「は」
それ？
レイアの視線を追って、振り向く。
途端、俺は全身を突き抜ける恐怖、と言うものを味わった。
薄く陽が翳り始めた道を逸れて、俺から５０メートルほどの距離にいる、黒い塊。
狼のように見える。

けれど、その大きさは狼なんかじゃなかった。ライオン……いや、それ以上にあるんじゃないか？

「あ、あれが、ウォーウルフ？」

「そう……大丈夫？」

ぐるるる……と言う低い唸り声が聞こえてくる。魔物……と言うよりは、普通にこういう動物いてもアリじゃん？的ではある。

あるんですけど。

……でも、遭遇するのはなしでしょうッッッ！！

「レレレレイア」

落ち着けと言う方が無理だ。俺は生まれてからの１６年間、道端で猛獣に遭遇した試しなんぞない。

恐怖の余り狼に目を釘付けにしたままで、レイアに震える声で問いかける。かたかたと全身が、痙攣しているように震えていた。

「どどどうすれば良いの」

「逃げるのは、無理なようね」

絶望的な未来をレイアが示唆した。知らず、腰に吊るした剣に手が伸びる。――使い方なんて、ろくにわからないくせに。

低い唸りを上げながら、ウォーウルフがこちらへ近付く足音が聞こえた。かさっかさっと草を踏み分ける音。

腰から剣を抜き取り、城で教えられた通りに両手で構える。震えが止まらない。止めようと力を入れれば、ひどくなる。

走って逃げ出したいけど、下手に動いたら相手を刺激しそうでそれ以上動くことが却って出来ない。更に言えば、こんなにがたがたの状態で走り出したところで普段以下の能力しか発揮できないだろうし、向こうの運動能力を超えた速度で逃亡出来るとは思えない。

「魔法、かけるわ」

レイアがふわりと俺のそばを離れ、ウォーウルフに少しだけ近付いた。

「安らぎの乙女ドライアード、優しき眠りをその荒れ狂う心に与えて。……ドルミータト！！」

俺の目には何も見えないが、ウォーウルフは何かの気配を感じたように辺りを仰いだ。低い唸りが途切れる。
眠りの魔法らしいということは、俺にもわかったんだけど。
（効いてないし！！）
ウォーウルフはぶんっと顔を振り払うような仕草をして、再び俺に視線を定めた。止まった歩みが、再開される。……近付く。
「あちゃー。だめだわ」
「駄目だわじゃねーって！！」
剣を構えたまま、動くことが出来ない。……出来る、わけがない。
大体剣を持つのなんか、こっちに来て初めてなんだからな。
元々格闘技だとかやってたわけでもないし、喧嘩とかするようなタチでもない。そりゃあ、普通に人と喧嘩するたってこんなトコで役に立つとも思いにくいけど。
ともかく、せいぜい体育の授業で剣道柔道やったのが精一杯なんだ、俺は！！
「どうすりゃいいんだよッ」
言った瞬間、ウォーウルフの足が地面を蹴った。飛び掛ってくる。
「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ！！　閉ざされた世界に光を与えん！！　アウローラ！！」
やられる、と思った瞬間、俺は顔を背けながら野球のバットの要領で剣を振った。閉じた瞳の裏側に強い光を感じる。
「ギャンッ」
蹴飛ばされた犬のような声が聞こえて、俺のすぐ顔の脇をタワシのような感触がすり抜ける。同時に肩に熱い痛みが走った。
どうやら俺の剣とレイアの魔法で、空中で体勢を崩したウォーウルフが、俺の肩にその鋭い爪を引っ掛けて顔の真横を通り過ぎたらしい。タワシのような感触は奴の、毛だ。
「グルルル……」
俺の剣で脇腹を傷つけられたらしいウォーウルフは、その獰猛な瞳を怒りと苦痛に燃やしていた。

ひぇぇぇぇぇぇ。……怖すぎる。

「レイアッ」

震える両手で剣の柄を握り締めたまま、俺は叫んだ。傷を負った肩からは血がどくどくと流れ出し、腕が痺れるような痛みを感じ始めた。目が、涙で霞んだ。

「軽やかに踊る風の精霊シルフよ、その身を障壁の渦と変えよ。フェレンティース!!」

レイアが呪文を唱えると、俺を取り巻く周囲の空気が不意に不自然に動くのを感じる。……何?

「防御魔法よ。相手の攻撃を軽減出来るはず」

ありがたいけど、それより倒してくれた方が一層嬉しい。

ウォーウルフが地面を蹴った。跳ね上げられた土が、その後方で舞い上がる。

「うわあああッ」

「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ!! その身を裁きの矛と変えよ。ポエブス!!」

レイアが叫ぶのを聞きながら、俺は思いっきり目を瞑って両手で剣を袈裟懸けに振り上げた。

「ガアアアアッ」

地獄から響くような聞くに堪えない雄叫びが上がる。

顔に生温かい息がかかったと感じた次の瞬間、全身に激しい衝動と肩に鋭い痛みを感じた。同時に剣を握り締めた両手に鈍い手応えを感じながら、地面に仰向けに叩き付けられる。抉られた肩が熱い。倒れこんだ体のその上に重みを感じ、顔のすぐ脇にごわごわした毛の感触を認めた俺は、もう駄目だと内心諦めていた。

お父さん、お母さん、先立つ不幸を……。

……。

……?

……あれ?

肩の辺りはずきんずきんと熱い痛みを覚えているが、続け様に襲

い掛かるはずの痛みはいつまで経っても訪れない。
剣の柄を握ったままの手がぬるりと滑る感じがして、俺は恐る恐る目を開いた。
途端、視界いっぱいにウォーウルフのドアップが広がり……ひぃいいえぇぇぇ……。ああ、もう俺は死んだ。
「危なかったわねー」
……あれ？　やっぱ生きてんの？
レイアの言葉に、再び目を開く。
良く見ればウォーウルフは動く気配はなく、俺の体の上で絶命しているのだった。剣は見事に、ウォーウルフの体を突き抜けている。
両手のぬるぬるは、そこから溢れだすおびただしい量の血で、それは今でもどくどくと俺の体の上に流れ出ていた。
濃い、血の臭気。
「うわあッ」
慌ててウォーウルフの力ない、その重い体を跳ね退ける。自分が青冷めるのを感じた。込み上げる吐き気。
その場を離れ、俺は堪え切れずに吐いた。
「やだ、ちょっと!!　どうしたのよッ」
レイアの声が聞こえる。構わずに吐けるだけ吐くと、今度は再び涙が込み上げた。全身ががくがくして、震えが止まらない。
（俺……）
手にこびりついた血を、草にこすり付けて落とそうと試みる。必死の形相で手をひたすら草にこすりつける俺は、どこか少し病的に映ったかもしれない。
レイアの、恐る恐ると言った声が聞こえる。
「……カズキ？」
構わずに手を草に……だけどそれじゃあ全然取れない。草の緑がところどころに入り混じった手を、今度は地面にこすりつける。まだ震えは収まる気配がなかった。
――生き物を、殺した。

（血の、臭いが……）
取れない……取れるわけがない……。
俺の全身が、ウォーウルフの血を吸って血みどろだ。
あの生き物の生命を絶ったのは、間違いなく俺が握っていたあの剣なんだ。
「カズキ？」
「……来るな」
僅く掠れた声は、レイアに届いただろうか。
……怖い。
この、世界が。
俺が、生き物を殺すなんて、ありえない。
だけどこれからは、これが、続くんだ。
俺はこれから続ける旅の中で、どれほど命を狙われ、どれほどの殺戮をしなければならないんだ？
……襲われるのは、怖い。
けれどそれ以上に、この手で生命を奪うのが……怖い。
「カズキ……」
「俺……殺しちゃった」
「何言ってるのよ。やらなきゃやられてたのよ？」
「わかってるそんなこと！！」
そんなことはわかってる！！　あのまま黙ってたら、あそこに転がってるのはウォーウルフじゃない、俺だ。
だけど、でも、だけど……わかんないよッ。
「俺、出来ないよッ」
「カズキ……」
「俺には出来ないッ。こんなこと、続けられないッ。殺されるのは嫌だッ。だけど殺すことも嫌だッ。助けてくれ、無理だよ、帰りたい」
「カズキ……」
「無理だ！！　無理だ！！　無理だ……ッ！！」

「ちょっと、落ち着い……」
「出来ないよッ。出来ないッ……」
……この世界では、当たり前のことなんだ。
生きる為に、敵を……魔物を倒す。俺のこんな気持ちは、安全な生活を送ってきた奴の綺麗事なのか？　自分の命を守る為に？
出来ない。出来るわけがない。無理だ。
――――――――出来るわけがないッ！！
「……」
「……カズキ？」
「ごめん……」
しばらく、そこで身動き出来ずにいた。レイアも、俺の混乱が収まるのを待つように黙っていた。
やがて、ようやく掠れた声を押し出す。今すぐここから安全などこかに飛び込みたい気持ちは変わらないけれど、ここで喚いてたって何が変わるわけでもない。
少し冷静になって来た頭で、地面についたままの手を握り締めながら、気持ちを静める努力をする。
レイアにあたっても、仕方がない。
「ううん。……どうする？」
「どうするって？」
「もう日が暮れるし……。ここで、野営する？」
その言葉に、背筋が震撼した。
野営？　こんなところに、いつまでも留まってなんかいられない。夜になれば、ワンダリングモンスターはもっと増えるだろう。
……無理だそんなの！！
「嫌だ」
「嫌だって……夜に旅を続けるのは、危険よ？」
「ヘイズに行く。こんなところにいるのは嫌だ」
「でも」
「ここからヘイズまでは、どのくらいかかるの」

「それほどかからないとは思うけど……」
「じゃあ、全力で。……こんなところに、いられない」
こんなところに、いられない。
（気が、狂う……）
――人の、いるところへ……。

第1部第3話　紫眼の少女（1）

今回に関して言えば、俺の決断は間違っていなかったと思う。
レイアはヒーリング系の魔法が扱えないと言うので、ソーマ草で傷の応急処置をしてから、1時間ほどでノイマンの湖に辿り着いた。
湖には目もくれずにひたすらヘイズの町を目指して歩き続けた甲斐あり、新しいワンダリングモンスターに遭遇することもなく、もうじき夜半に差し掛かろうかと言う頃ヘイズの町の明かりが間近に迫り、衛兵の姿が視認出来るようになると俺は安堵でその場にへたりこみそうになった。
「すみません、中に入れて欲しいんですけど」
俺の訴えに、衛兵が寄って来る。小さい町だと聞いていたのに、しっかりと塀や強固な門があって驚いた。
「こんな時間に何をしている？　怪しい奴」
後で聞いた話だけど、昼に比べて夜になると旅人の死亡率は10倍にも跳ね上がるらしい。
それを聞いて俺は、心底青冷めた。ぞっとした。
一応、野営などで火を焚いたりしていれば、火を目印にやってくる奴も中にはいるけど、ウォーウルフみたいな猛獣系モンスターは寄って来ないらしく、歩くよりは安全なのだそうだ。
レイアが、止めたわけがわかる。俺は安全を求めて、より危険な行動に出ていたわけだ。ワンダリングモンスターに遭遇しなかったのは、かなり僥倖（ぎょうこう）だったと言える。
そんなわけで、こんな時間に訪れる旅人はまずいないらしく、俺はかなり怪しまれた。
門番と押し問答しているうちに、慣れないことが続いたせいかウォーウルフにやられた傷のせいか、あるいはその両方か、俺は発熱してきたらしい。体が熱く火照り、頭がくらくらとしてきた。
……もう、いいから中に入れてくれよ……。

「その人、具合が悪いみたいだよ。入れてあげたら」
そんな声が聞こえたのは、その時だった。まだ幼い、女の子の声。
「誰だ？　……またお前か」
衛兵から、あきれたような声が上がる。
「何だ、こいつ」
俺のいる場所からは、女の子の姿は見えない。
「あれだよ、ほら……いつも来る行商人一団の……」
「ああ……こんな時間に何してんだぁ？」
「ああ、もう！！　あたしのことは良いだろッ。そこの病人なんとかしなよッ」
病気じゃなくて怪我だけどね……。
女の子の登場で気勢を削がれたのか、さっきより幾分砕けた口調で衛兵が俺に問い掛けた。
「具合が悪いのか。どうしたんだ」
だから魔物に襲われたんだってば。
仕方なく俺はまたイチから、レガードの身代わりと言うところは省略して、レオノーラからギャヴァンを目指して旅をしている途中で浄化の森を抜けたところで魔物に襲われたのだと言うところまで、説明する羽目になっていた。
ようやく中に入れてもらえた俺は、門から街に入ってすぐのところに立っている女の子に気がついた。
あっちの世界で言えば小学校中学年くらいの、ほんの子供。
サイドの髪がおかっぱくらいの長さで、後ろの髪はいやに長いと言う不思議な髪型をしている。紫色っぽい髪に、紫色の瞳。吊り上がり気味の大きな目が、俺を見ていた。多分、さっき口ぞえをしてくれた行商人の団体の女の子だろう。
「あの、ありがとう」
熱でくらくらする頭をこらえながら、礼を言う。にこっと笑うその彼女の頬に、笑窪がぴょこんと出来た。
「どういたしまして。……つらいの？　……ああ。魔物に襲われた

傷で発熱してるんだね」
「……うん。多分」
「おぼっちゃまなんだ？」
からかうように言う。
「何で？」
「怪我に慣れてない証拠でしょ。……こっちおいで」
「え？　あ、うん……」
言われるままについて行く。
「この時間じゃあ、もう宿はあいてない。あたしの泊まってるとこで良ければ、泊めてあげる」
あ……行商人の一団とか言う？
「でも……悪いよ」
「変な遠慮するんじゃないよ、病人のくせに」
くすっと笑って少女は、俺を先導するように歩いて行く。まるで、この町の住人のように迷いのない足取りだ。
「……名前、何て言うの」
「あたしはナタ。お兄さんは」
「俺は、カズキ」
「へーんな名前ッ」
また言われた……。
「そっちの、ピクシーは？」
「あたしはレイア」
「そう。よろしくね」
夜だから良くわからないけど、ヘイズの町はレオノーラのように華やかな町ではなさそうだった。
そうだな……住宅街って言うのかな。そんな感じ。
家はいっぱいあるけど、何かホント住んでるだけって感じだった。今は寝静まっているのか、明かりが灯っていない家が多い。
町の作りそのものも、レオノーラと比べると簡素だった。道も、石畳とかじゃなく普通の……土がむき出しのままだし。

「こっち」
ナタは多分、町の中心部の公園と思われる場所に入って行った。
良く手入れされていて、木々も綺麗に刈り込まれている。
広場を横切り、大きな池をぐるっと迂回するように歩くと、そこに大きなテントが張ってあった。
「お。ナタ、お帰り」
「ただいまー」
「面白いものは見付かったかい」
ナタがテントにぴょこっと顔を覗かせると、威勢の良い声がした。
大人の女性って感じの声だ。割と太くてしっかりしてる、でも奇妙に艶のある声。
「見付かったよ。拾い物してきたんだけど、良いかな」
「何だい」
「おいで」
テントから顔を出して、俺の方を振り返る。そのまま中へ入っていくナタに従って、俺は重い体を引き摺るように続いた。
テントの中は、かなり広かった。
外から見ると中はだだっ広い空間が広がっているのかと思ったけど、そう言うわけじゃないらしい。巨大な布と棒とかを使ってうまい具合にいくつもの仕切りを作っていて、ちょっとした部屋がいくつもあるような感じだった。強いて言えばここは、玄関からロビーにでもあたるんだろーか。
「おっと、色っぽいお坊ちゃんを連れてきて」
い、色っぽい……？
そのロビー的空間の床に直接座り込んで胡坐をかいていた女性が、俺を振り仰いで言った。
艶やかな濃紺の髪をてっぺんで1つに縛り、それでも尚且つ背中くらいまでの長さがある。インドのサリーみたいな布を巻きつけたような服を着ていて、褐色の肌を惜しげもなく曝していた。藍色の瞳が俺を見つめる。年の頃は正直言って不明、って感じだ。

整理でもしていたのか、彼女の前には色とりどりの布が山と積まれていた。
「カズキ、よ。門番にいじめられてたから助けてあげたの」
「何だい、いじめられてたのか？　やり返すくらいじゃないと駄目だよ、男の子は」
「魔物にやられて具合が悪いみたい。メディレスに言って治してあげてよ」
その言葉に、褐色肌の女性が俺を驚いたように見た。
「良く見りゃ、あんた血みどろじゃないさ。この時間に旅して来たのか」
「はあ」
曖昧に頷くとひゅうっと口笛を鳴らした。やるねぇ、と言って立ち上がる。
「意外にホネがあるんじゃないか」
ホネがあるんじゃなくて、この世界の状況を良く知らないだけ。
「あたしはシリー。待ってな。今ウチの名医を連れてくるからね。ついでに着替えも持ってきてやろう」
言ってシリーは、いくつも扉のようにぶら下がっている布の合間をすり抜けて、消えて行った。ナタが、床の上のゴザみたいなものを俺に勧めてくれる。
そこに腰を下ろし、レイアが俺の頭の上に座った。……あのね。椅子じゃないんだけど。
こうして座ってみると、体が本当に疲れていたことがわかる。何か……力が抜ける感じ。
「つらかったら、横になったら」
「……平気。ありがとう」
ナタが水瓶から器に水を汲んで、俺に渡してくれた。一口飲む。
「ここは？」
尋ねると、自分の分の水を汲んでいたナタが俺を振り返った。
「行商人パララーザ一団のキャンプだよ。団長はさっきのシリー。

良い女だろ」
「ああ……」
行商人パララーザ……。
品物を売りながら、あちこちを旅してるんだろうか。ナタも？
「あちこち旅とかしてて、怖くないの？」
こんなに小さいのに。
俺が問うと、ナタはけらけらと笑った。
「怖いなんて言ってたら、生きていけない」
その言葉に、俺は溜め息をついた。……強いんだ。
俺も、強くなれるんだろうか。
でもそれは、殺戮に慣れることと同意のような気がしてならない。
慣れなきゃならないのか？　慣れなきゃ……生き残れないのか？
それなら俺は……生き残れないかもしれない。
今更になって、自分の甘さを呪う。レオノーラの街中にいる時は、気がつかなかった。外の世界がこんなにも殺伐としていること。魔物の徘徊する世界で、旅をすることがどういうことなのか。
シェインが言ってたシサーと言う人に会えば、何とかなるような気が勝手にしていた。その人に任せておけばきっと、何とかなるんだろうって。
でも……。
「どうしたの」
ナタが首を傾げて、俺を覗き込んだ。紫色の瞳。
この世界に来て、いろんな髪の色や瞳の色を見たと思うけど、不思議と紫と言うのは初めてだった。
「魔物とかさ、たくさん、見た？」
ナタが笑う。
「いっぱい見たよ。そんなもの。旅をしていれば嫌でも襲われる。誰だって、その運命から逃れることなんか出来やしないんだから」
「……怖く、なかった？」
俺の問いにナタは目を見開いて、俺を見詰めた。

「カズキは、怖かった？」
「……」
「襲われたんでしょ」
強がっても仕方がない。俺は怖かった。いや、今でも怖い。ため息混じりに、頷く。
「怖かった」
「そう」
「……襲われたことも、怖かった。死ぬと思った。でも、それと同じくらい……」
言葉を切る。魔物との生存競争を日常のものとして強いられているこの世界の人々にとって、俺が感じたことと言うのはどのように映るんだろう。偽善のように映りはしないだろうか。
そう思えば……言葉が出なかった。
途切れさせたまま黙った俺を訝しげにナタが見詰めたまま言った。
「殺したことが、怖かった？」
俺は驚いて俯かせていた視線を上げた。心を見透かすような紫の瞳。
「……」
「顔に書いてある。……あたしは、そういう考え方は嫌いじゃないよ」
「……」
「ファーラの教えにもある。『汝、無益な殺生をしてはならぬ』」
こんな子供がきちんと信仰しているんだ……。そういうもんなのかな。
思ってから、この国がファーラ教を守護する国だとキグナスに教えられたことを思い出した。
教皇領エルファーラと懇意にしているヴァルスは、ファーラ教を守護する第一の国なのだと聞いている。
だとすれば……そういうもんなのかもしれないな。
考えてみれば、日本はともかくヨーロッパなんかではキリスト教

を保護していた時代があったわけだし、教会は生活の一部だったわけだし。
「でも、長生き出来ない」
「……」
「そういう考え方は、驕りがあるからだと覚えておいた方が良いね」
「驕り……？」
「そう。……人以外の生き物は……魔物も含め、そんなことを考えない。必死に生きているからだ。食わなければ死ぬ。襲わなければ死ぬ。襲った以上、相手が死に物狂いで反撃してくることも知っている。反撃をされ、負ければ死ぬのが自分だと知っている。……考えなくても、本能で、全身で、それを知っているんだ。それが摂理だからだ」
俺は相手が子供だと言うことも忘れて、ナタの言葉に聞き入った。
「ただ生きる為に、襲う方も襲われる方も、必死だ。それだけだ。だから無益な殺生もしない。その代わり自分を守る為に殺生することを躊躇わない」
「……」
「誰だって、魔物だって、生命を落とすのは嫌だ。生命は生命を繋ぐ為に明日に向かっている。だから抵抗する。けれど同時に運命を受け入れることを知っている。だから怨みもしないし呪いもしない。……襲わなければいられなかった自分を知り、反撃をせずにおれない相手を知っているからだ」
「……」
「人が人を呪うのは、そこに無益な殺生があることを知っているからだ」
ナタは、俺を説き伏せるとかそういう感じではなく、ただ淡々と語った。
「けれど、相手を慈しみ、哀れむ心は大切だよ。その心をなくさずにいれば、カズキは自然の摂理の一部となれる。……自分にも、相手に向けるのと同じだけ哀れみを向けるのを忘れないことだね」

「……」

「魔物が襲わずにいられないように、カズキには自分を守る権利があって義務がある」

「義務？」

第1部第3話　紫眼の少女（2）

「そう。……明日へ向かう生命と言うものを、守る義務。それが、生命を与えられた者全てに定められた義務なんだ」

生命を与えられた者に定められた、義務……。

ナタがそう言い切ったところで、ふさっと布の扉が開かれた。シリーが顔を覗かせる。

「お堅いお話は終わったかい」

言ってシリーは、俺に衣服を投げてよこした。咄嗟にそれを受け取って、視線を落とす。

……良いのかな。俺、レガードの代わりやんなきゃいけないから、レガードの服着てなきゃまずくないのかな……。

でも、確かにこんな血みどろの服を着ていたくない。ウォーウルフの爪で破れてるし。怪我をした方の腕は、じんじんと痺れてきて、上手く動かなくなって来ている。

「ありがとう」

礼を言って、傷の痛みを堪えながら身につけていたマントと裾の長い上着を脱いだ。中はタンクトップみたいな袖のない服を着ている。その上にシリーが持って来てくれたシャツを着た。

……でもな。俺、鎧をつけていない代わりに、シェインがこの上着に防御魔法を付与してくれたんだけどな……。

「やだな。待ってたの？」

「邪魔しちゃ悪そうだったからね。……メディレス」

シリーの声に応じて姿を現わしたのは、巨漢の男だった。禿げ上がった頭にでかい傷跡がある。落ち窪んだ悪そうな目つきをしていて、手に持ったロッドは俺の身長ほどもありそうなのにやけにちっちゃく見えた。

「……このコ？」

軽くビビった俺は、その口から発せられた弱々しい声に内心がく

りとなる。
「そう。魔物に襲われて怪我したらしいんだ。今そのせいで発熱してる。治してやってくんないかな、悪いんだけど」
「いいわよ」
……いいわよって言った？　今。
呆然としている俺に、大男はのそのそと近付いてきた。頬が微かに赤らんでいるのが……怖い。
「私はメディレス。パララーザのソーサラーなの」
「あ、えと、あの……カ、カズキです」
「カズキ。良い名前だわ」
おお。この世界に来てから初めて聞く言葉だ。
「すぐに治してあげる」
俺のそばに屈み込んだメディレスは、そう言うとにっこり笑ってこげ茶色の瞳を閉じた。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、クーラー・イプスム。『癒しの雲』」
メディレスが唱え始めた時から、俺の周囲の空気が微かな光を放ったように思えた。そしてその言葉を唱え終えた時、体に重く圧し掛かっていた疲労が解け、肩の痛みが消えていった。
「嘘ぉ……」
思わず呟く。だって……。……えー？　まじで？
肩の、ウォーウルフにすっぱりとやられた爪傷が、消えたのだ。しかも、完全に。
全然痛みなんかない。やっぱり傷のせいだったのか、頭を霧が覆っているようなぼんやりとした熱さも消えていた。ついでに疲労もなくなっている。今からだってギャヴァンに向かって出発出来そうだ。
「どう？」
呪文を唱えた時の朗々とした声はどこへやら、また元の弱々しい声に戻って、メディレスは微笑んだ。

「凄い！！　治ったみたいです。ありがとう」
「どうしたしまして。……カズキちゃんたら可愛いから、中級クラスの魔法をかけたわ。サービスしたわ」
……。
「ありがとう……」
カズキちゃんって……。
「こんくらいの傷だったら、『癒しの雫』で十分じゃんよ」
しらっとナタが言った。メディレスがもじもじとナタを見た。
「意地悪ね、ナタったら……」
けたけたと笑っていたシリーは、その笑いをまだ顔に残したままで俺に言った。
「さ。魔法で回復したとは言え、疲れてんだろ。今日はゆっくりここで休んで行くと良い。食事はとったのかい」
あ。
「まだでした」
言われるまで忘れていた。それどころじゃなかったんだ、精神状態が。
思い出してみれば、空腹を覚える。急にぐうーっとお腹が鳴った。
「おいおい。この時間まで飲まず食わずで来たのかい？」
シリーがさすがに、呆れたように俺を見た。そんなこと言ったって……。
「仕方のないボーヤだね。ちょっと待ってな。何か残っているか見てきてやるから」
「あ、大丈夫です。俺、パン持ってるし……」
慌てて横に放り出した荷袋を取り上げようとすると、シリーがびしりと制した。
「待ってろと言ってるんだよ。保存食は持っておいた方が良い。いつありつけなくなるかわかんないご時世なんだからね。提供してくれる人間がいる時は素直に受けときな」
言い捨てるようにして出て行く。その姿をぽかんと見送ってから、

俺ははっとレイアのことを思い出した。
しまった今まで忘れてたけど随分静かだけど、どうしたんだろう。
「レイア？」
頭の上にいるのはわかってんだけど。目だけ上げるが、その姿は見えない。メディレスがくすっと笑って指差した。
「寝ちゃってるわよ」
「え？」
人の頭の上で？　失礼な。
「疲れていたのでしょう。そのまま寝かせてあげたら良いわ」
「でも……レイアも俺と同じで食べてないし」
言いながら悪かったな、と反省する。レイア、俺が余りに切羽詰ってたから言い出せなかったんじゃないだろーかと思って。
「大丈夫よ。ピクシーでしょう。ピクシーはほんの少しの食事と妖精の水で3日は持つはずだわ」
へ？
「そうなの？」
「そうよ。……あなた、本当に何も知らないの？」
「はぁ……」
メディレスがそっと、俺の頭からレイアを起こさないよう取り上げながら問う。
どう言ったもんか迷った末に、俺は散々俺を助けてくれたこの人たちを信用することにした。……もちろん、アルトガーデンのお家騒動やレガードの話なんかは出来ないけど。
「あの、俺、実はこの世界の人間じゃなくて」
「は？」
ナタとメディレスが同時に、ぽかんとした顔で言う。そこへ、でかい木の器にスプーンを突っ込んだものを持ってシリーが戻って来た。湯気がふわふわと漂っている。おいしそうな匂いがした。
「まだシチューが残ってたよ。こんなもんで良ければ食うかい。……何変な顔をしてんだい、2人とも」

「いただきます」
ぺこんと頭を下げて、受け取る。
俺のいた世界と同じような、白っぽいとろっとした液体の中に煮込まれた野菜や肉がたっぷり入ったシチューだった。おいしそうな香りがする。
この世界の食べ物は、シャインカルク城で過ごした時間の中で見たことのない食べ物とか当然いっぱいあったけど、別に俺の舌に合わないものじゃないことは検証済みだ。ありがたくスプーンに手を伸ばす。
「この世界の人間じゃないって……」
メディレスが困惑したように、俺にかシリーにか呟いた。「は！？」とシリーが頓狂な声を上げる。……うまいな。何か、城で食ってた上品な食い物よりこういう庶民的なモノの方が俺には合ってるみたい、やっぱり。
「ほうれす」
はふはふと頬張りながら答えると、全員の視線が俺に集中したのがわかった。
「どういうこと？」
ナタが身を乗り出して尋ねる。
「や、俺にも良くわからないんだけど……。どうも、こっちの世界に紛れ込んじゃったみたいで」
「じゃあカズキはどっちの世界の人間なのさ」
「あっち」
「あっちってどっちだよ……」
これ以上説明の仕様がない。今なら、最初の浄化の森でレイアが説明に困った理由もわかる。
「それは、良くわかんないけど。俺のいた世界では魔物なんかいなかったし、魔法も魔術師も妖精も……全てがいなかったです」
「え、だってちゃんとヴァルス語しゃべってるし」
ナタが言った。人参に似た野菜に息を吹きかけて冷ましながら、

頷く。
「レイアが教えてくれたんだ。なぜか最初からレイアの言葉だけはわかったから」
「妖精族だからね、きっと」
以前レイアが言っていたのと同じようなことをメディレスが言った。
「うん。多分」
「何をしに、ギャヴァンへ？」
シリーは床にどっかりと腰を下ろして胡座をかくと腕を組みながら尋ねた。
「シサーって人に会いに。俺、元の世界に戻る為に、ちょっと人に頼まれたことがあって」
「頼まれたこと？」
「シサーに会うのかい！？」
メディレスとシリーの言葉が被った。ので、どっちに答えて良いのか困惑する。
……あれ？
「頼まれたことは、言えない。……シリー、シサーを知ってるの？」
シチューを空にして「ごちそうさま」と皿を床に置く。シリーはにやりと笑った。
「知ってるさ、もちろん。あたしの中ではピカイチの男だね」
へええ？
俺の中ではシェインと同類だと思っていたので、意外だった。……と言うと、シェインに殴られそうだけど。
「ふうん？　かっこいいんだ？」
「そりゃあもうあんた。剣の腕は一流だし、頼りになるし。あんたみたいなガキジャリとは一味違うよ」
悪かったね、ガキジャリで。
何だかシサーに心酔してるみたいだから、話半分に聞いとこう。
俺が顔を顰めると、メディレスがもそもそと俺をフォローするよ

うに言った。
「でも……カズキちゃんはこれで、良いと思うのよ。素直で可愛いし……」
だからその可愛いって何なのさ……。
「良かったね。メディレスはシサーよりあんたの方が良いってさ」
シリーはそこまで笑わんでもえーだろと言うくらい、爆笑をかましてくれた。……失礼な。
「シリーたちは、いろんなところを旅してるの？」
意味もなく頬を軽くつまみながら尋ねると、シリーはこくりと頷いた。
「そりゃあもういろんなところに行くよ。ローレシアだけじゃない。行ったことがないのは、フレザイルだけだ」
フレザイル……北の、氷の大陸。
「何でフレザイルには行かないの？」
俺の問いにシリーは、やれやれと言うように軽く顔を振った。……しょうがないだろ。わかんないんだから。
「フレザイルに行ったって、商売になんかなりゃしないからね。いるのは氷の魔物ばかりだ」
「そうなの？」
「そうさ。尤も……」
にやり、と含みのある笑みを浮かべる。
「お宝もあるって話だけどね」
「お宝？」
「魔剣『ラグナロク』だ」
何だかＲＰＧめいて来たぞ。
魔剣……エクスカリバーの伝説の話でもそんな言葉が出てきたな。
「何、魔剣って」
「魔法を帯びた剣さ。『ラグナロク』はその昔神が鍛えたと言われる炎の剣だ。魔力を持たない人間でも、ハンパな魔法より遥かに強力な火の魔法を使うことが出来るらしいな」

「へえ。そんなのがあるんだ」
便利そうだなぁ。俺のこれも、剣が勝手に魔物を倒してくれないだろうか。俺が逃げてる間に。
「さて。そろそろ休みなよ。あたしらも休もう。……カズキ」
「あ、え？」
胡座を解いて立ち上がりながら、シリーが手を出した。
「その上着、貸しな。そのまんまじゃ着るに着られないだろう。明日出発するまでに綺麗にしておいてやろう」
え、そんないろいろやってもらっちゃ、悪いよ……。
「気にするな。これも何かの縁ってやつさ。今度会った時に借りを返してくれれば良い」
借りを返すも何も、俺、何も出来ないんじゃないかなあ……。あ、それに。
洗濯とかして防御魔法って消えたりしないんだろうか。
……別に汚れだとか装飾品とかじゃないから……消えるのも変だけど。でも何かやっぱり、落ちちゃうような気がしちゃうじゃん。
「何だよ？」
「これ、防御魔法がかかってるらしいんだけど」
試しに言ってみると、シリーはまたも大爆笑をかましてくれた。
何だか笑われてばかりのような気がする。
「カズキ」
ナタががっくりと肩を落として、俺の肩にぽんと手を乗せた。
「……洗濯して落ちちゃう魔法はない」
「あ、そう？」
その言葉に安心して、俺はまだ笑い転げているシリーに上着を手渡した。
「お願いします」
「あんた面白いよ、ホントに」
「カズキちゃん、ゆっくり休んでね。ナタ、部屋に案内してあげて」
「はーい」

「じゃあな。おやすみ」
シリーとメディレスが出て行くと、俺もナタに案内されてその部屋を後にした。

第1部第4話　王女出奔！！（1）

「ふわ～ぁ……」

眠い。

翌朝、日が出てすぐの6時頃に叩き起こされ、俺は朝の町に出ていた。到着した時とは違って人がいる。どうやらヘイズの人の大半は農業で生計を立てているらしい。この町は背後に海を控えているので出入り口が1箇所しかない。高い塀に覆われてはいるが、少し小高いところに登れば塀の向こうに畑が広がっているのが見える。それほど多くはないけれど、それでも結構な人が農作業をしているのが見えた。

「今日中に何とかギャヴァンに到着したいのなら、さっさと出ないとね。急いで行ったって半日はかかるわ」

レイアの言葉通り、俺は何とか今日中にギャヴァンに到着するつもりでいた。乗合馬車とかそういうのも一応この世界にはあるらしいんだけど、魔物が徘徊しているせいか2日に1本と言うかなり少ない割合で。

そんなものを待っていたら俺が元の世界に帰るのはどんどん遅くなるし、シサーと言う人物もシリー曰く結構気紛れな感じなので、ふらっとどこかへ旅立ってしまうかもしれない。

それは、まずい。

今の俺には、その『超お強いお戦士様様を頼らせていただくしかない』のだ。何がなんでもつかまえなきゃならない。

なので、とりあえず町の商店を覗いて補充出来るものがあったらして、さっさとヘイズを旅立つことに決めていた。

「ソーマ草もまあまあ良いけど、一応ちゃんとした薬は買っておいた方が良いかもね。それと、うまくすれば魔法石なんかもあるかも。……こんな小さい町だとないかなあ……」

ふわふわとレイアが飛びながら言う。時折町行く人が奇異な視線

を投げ掛けた。
　レオノーラでは全然何でもなかったからわからなかったんだけど、ピクシーがふらふらとしかも人間と一緒にいるなんてことは、そう滅多にあることでもないんだそうだ。
　そもそも、妖精族と言うのは根本的にひどくシャイで、人前に出たりはしないらしい。
　つまり、人前に出ても平気でいられるレイアは相当の変わり者と言うか図太いと言うか……。
「何？」
　俺が思ったことがわかったわけでもないだろうに、レイアが不意にぎろりと俺を睨んだ。
「いや別に……」
「この町には魔法石は売ってないね」
　先ほどのレイアの言葉を受けて、俺の隣を歩くナタが返す。
　ちなみに、シリーに預けた俺の……と言うかレガードの服は、綺麗になって無事戻って来た。どういう手段で洗い、どういう手段で乾かしたのかは俺には良くわからないけど、とにかく綺麗になってたのでありがたく身につけている。破れていたのも、綺麗に繕ってくれてあった。
「そうなの？ってか、魔法石って何」
　名前からして魔法を帯びた石なんだろうけど。他に考えられないんだけど。
「魔法を帯びた石よ」
　俺でも想像がつくような答えをせんでくれ。
　しらっとした目で見てやると、ナタは唇を尖らせた。
「なーにさー。……魔法石は5種類あるんだよ。火石、水石、地石、風石、聖石の5つ。それぞれ、赤、青、オレンジ、紫、白の色をしているから、どれがどれだかすぐわかる」
「何に使うの」
「魔力のない人間でも、魔法攻撃が出来る」

「魔法攻撃？」
「そう。火石には火の魔法の効果、水石には水の魔法の効果……って言う風にそれぞれあってね。大きさは2種類。詳しく言うと、火石は小さいのがソーサラーの使う『火炎弾』、大きいのが『焔の柱』。水石は『氷矢』と『氷弾』。地石は『ノームの手』と言って、まあ敵の足止めなんだけど……それぞれ個人対象か複数対象か。風石は『風の刃』と『風の斧』。聖石はアンデッド系モンスターの『浄化の霧』、そして『浄化の炎』」
覚えきれるか、そんなに一気に。
「どのくらい効くもんなの」
「持ち手の魔力は関係なしで、どれだけ効くかは相手の魔物と運によるとしか言いようがないね」
うー……。
「どうやって使うの？」
「対象に向かって投げつければ良いんだよ。簡単だろ」
まあでも、魔法が使えず剣もろくすっぽ使えない俺からすれば、敵に近付かずに攻撃出来ると言うのは大変魅力的ではある。是非とも入手したいものだ。投げつけて逃げちゃえばいーじゃん。
……昨日、ナタに言われて、いろんなことを考えてみた。はっきり言って、眠れなかった。
生命を繋ぐ義務。
俺にもそれは、ある。襲われたら、やるしかない。身を守ってくれる人がいるわけじゃない。……怖いとか、言っている場合じゃ、ない。
それはわかってるんだ。わかってる……。だから、うだうだ言ってないで努力するしかないと……そう、思った。
思ったけど、何が出来るのかはわからない。何も出来ないかもしれない。何も変わらないかもしれない。
「どうやって手に入れるの」
俺たちはナタの案内で、町の外れにあると言う道具屋に向かって

いた。何か便利なもんがあるかもしれない。幸いお偉いさんに送り出された俺は、路銀だけはそれなりに持っている。

「険しい山なんか行くと、普通にごろごろ落ちてたりするんだけどね。ヘイズから北東に向かって真っ直ぐ伸びている道があるだろ」

「ああ……」

ノイマンの湖からずっと続いている道は、ヘイズの辺りで十字路のようになっている。南へ向かっている場合、右に折れればすぐヘイズ、左に折れれば何か山の方に続いていて、真っ直ぐ南下すればギャヴァンがあると言うわけだ。

「あの、山？」

「そう。例えばね」

「ふうん」

でも山なんか入ったら余計な魔物がうじゃうじゃ出そう。魔法石を手に入れる為に山に入って、手に入れる前に魔物に出会ってたら本末転倒だ。

何か楽に手に入らないのかなー。

「時々森やそこら辺の道なんかにも落ちてるけどね」

俺の不謹慎な考えには気づかず、歩を進めながらナタが続けた。

「そうなんだ？」

「うん。でも運が良くなきゃ発見するのは難しいかもね。……良いことを教えてあげようか」

良いことなら是非教えて欲しい。悪いことなら聞きたくないけど。

「ギャヴァンに向かう道を真っ直ぐ行って……そうだなあ……６時間くらい歩くと右手に小さな森が見えてくると思うんだ」

６時間ッ……。

ま、まあ……半日かけてギャヴァンに行くつもりで、半日ってのは１２時間なわけだから６時間とか歩くのはわかりきってるんだけど……。改めて言われると、何やらげっそりする。６時間かぁ……６時間ねぇ……。

……長いよなぁ……。

「そこへ寄ってみなよ」
え。やだよ。そんな余計な寄り道して日が暮れちゃったらどうすんのさ。変な魔物に遭遇するかもしれないし。
不満をありありと顔に書いて俺が黙ると、ナタは苦笑した。
「良いことだっつってんのに。大した森じゃないよ。……その小さな森の中に、小屋がある。そこにいるじーさんを訪ねな」
「じーさん？」
「そう。コボルトと一緒に武器職人をやってる。アギナルドってじーさんだよ。偏屈な奴だけど、ナタの紹介だって言えば取り計らってくれるだろうさ。多分、魔法石はそこで手に入る」
「え、ホントに」
「あんたみたいな平和ボケ兄ちゃんを騙して、あたしに何の得があんのさ」
平和ボケ兄ちゃんって何だよ。しょーがないだろ、平和だったんだから。
「うまくすれば、面白い武器とかくれるかもしれないしね。くれないかもしれないけどね。……ま、腕は良いから知っておくに越したことはないと思うよ」
「そうなんだ。……ありがとう」
お礼を言うと、ナタは照れたように鼻の下をこすって笑った。
……ナタって、何者なんだろう。
どう考えても、普通の子供じゃないと思う。昨日の話と言い、アギナルドとか言う隠れ職人を知っていることと言い……何やら謎がありそうだ。
「ナタって、いくつ？」
尋ねてみる。いつの間にかもう町の外れまで来ていて、続いていた家が途切れ始めていた。
「いくつに見える？」
合コンじゃねーんだからさー……。
「……１０歳くらい？」

これはシャインカルクにいた時に気がついたんだけど、ここは異次元ではあるけど地球……と言って良いんだと思う。少なくとも年のとり方が俺の認識と変わらないみたいだったし、と言うことは自転公転は同じなわけだ。

発想としてはパラレル・ワールドってやつか？……わかんないけど。

俺の答えに、ナタはへへっと笑った。笑窪が覗く。

「じゃあそれで」

「じゃあそれでって何だよ。実際は違うってことじゃないの？」

「さーてどうでしょう」

人を食ったような答え方をして、ナタは視線を前に向けた。海を背景に、小さな、農家の物置小屋のような小屋があったからだ。一応屋根のところに『ボルヌの道具屋』と言う看板がかけられてはいるが、傾いている。……おいおい。大丈夫なのか？このボルヌさんとやらは、食っていけてんの？

「ボルヌのおっさん」

今にも壊れそうなドアを勢い良く引き開けて、ナタが中に向かって怒鳴った。……あー、そんな乱暴にしちゃ壊れちゃうんじゃないのか？

「大丈夫かしらね……」

レイアが引きつったように俺に言う。王城暮らしのレイアは、あまり町の細かいことは知らないらしい。

「おっさん、客だよ客―ッ」

ナタが中に向かって怒鳴るのを聞きながら、俺も続いて中に入った。

小屋の中は一応店らしく、壁に沿って置かれた大きな棚にはいろいろな物があった。分類分けなのか札もついているけど、残念ながら俺の言語能力は会話までで、まだ読み書きにまでは及んでいない。

ボルヌさんが出てくるまで、俺は棚の品物を物色していた。正直言って、何に使うのかわからない物が多い。対外的に見て、安いの

か高いのかも良くわからない。
　ドシドシと奥の方から重たい足音がして、キャッシャーみたいなカウンターの奥から口ひげを生やした凡庸な感じのおっさんが顔を覗かせた。
「ナタ」
「客だよもう。商売する気、あんのか？」
「あるある。いらっしゃい。何をお探しで？」
　うーん。このセリフはかつて数回やったＲＰＧの中でお決まりの文句だったような気がする。思わず苦笑いをしながら俺は口を開いた。
「薬草、ありますか」
「はいはい、薬草ね。ありますよ。ソーマ草で良いかい？」
　一緒じゃん。
「他のって、何かないですか」
「他？他はねえ……ゲボの実があるよ」
「ゲボの実？」
　何かまずそう……。
「どんな効果があるんですか」
「飲むと楽しい気分になれる」
「……」
　いらない。
「他には？」
「他？ええとね、ウルズの木の皮は？」
「それは？」
「噛めば噛むほど牛の味がする」
「……結構です」
　まともなもん、ないの？
　俺が意気消沈していくのを感じたのか、ボルヌさんは急いで棚に走り寄ってその中を改め、大きな声を上げた。
「ああ、これはどうかな」

「……何ですか」
もう期待しない。
「エイフワズの煎じ薬だ」
「それは？」
ほとんど投げやりに形だけ尋ねると、ボルヌさんは意気込んでいった。
「解毒剤だ」
解毒剤ねえ……。
レイアを見る。レイアは肩を竦めて頷いた。
「買っておいたら？」
「そう？……じゃあ、それを幾つか下さい」
「１つしかない」
ああそう……。
「じゃあ１つ下さい」
それから俺は携帯食を幾つか購入してその店を出た。……寄らなかったよりはましなんだろう、多分。
パララーザのキャンプに戻る。置かせてもらっていた荷物を受け取り、俺はシリーに礼を言った。
「昨夜は本当にありがとう。おかげで助かりました」
「礼ならナタに言うんだな。あんたを拾ってきたのは、ナタだ」
「うん。……ナタ、ありがとう。本当に助かった」
「ま、何頼まれたか知らないけど、自分を大切にするんだな」
「うん。……それじゃあ。お世話になりました。メディレスにもよろしく」
どこに行ったのか、メディレスは姿がないのでそう頼んで、俺はテントを出た。門へ向かう。門は日の出と共に開けられているので、もう出入りは自由だ。昨夜とは違う門番が、暇そうにあくびをしていた。
いよいよギャヴァンに向けて出発だ。昼間なら、魔物との遭遇率は、ゼロじゃないけどそれに近い。気掛かりなのは、日が沈む前に

街にたどり着けるかどうかだ。頑張らなきゃ……。
「よし、行こう」
自分で自分に気合を入れて、門から外へ踏み出した。途端、俺は驚きの余りつんのめりそうになった。
「……えええええ？」

◆◇◆

翡翠色の瞳、透き通るような白い肌、黄金色の波打つ髪は、今は後ろの高い位置で1本に束ねられている。豪華な宝石飾りはない。若草色のシンプルなブレストアーマーを身につけ、その腰には細いレイピアとシンプルな短い真鍮のロッドが刺さっていた。……見間違えるもんか。王女サマだ。
「良かった、カズキ。まだいたのね」
俺を見て、顔がほころぶ。……そうじゃなくて。ええ？ねえ、何でこんなトコにいるの？良く似てる別人？
「ユリア！！」
ではないらしい。俺と同様度肝を抜かれたらしいレイアが叫んだ。
「何してるのよ、こんなところで！！」
「騒がないで。……ギャヴァンに向かうんでしょ。とりあえず、行きましょ」
行きましょって……あーた……。
ぼーっとしてても仕方がないので、促されるままに歩き出す。俺はユリアに追いついて言った。
「ユリア様、何で……」
「様、はいらないわ。バレちゃう。ユリアって呼んで」
「じゃあユリア……」
ばこっとレイアが俺の頭をそのちっちゃな手で殴った。……どうしろって言うんだよ俺に。
「レイア！！」

「はーい……」
「どうしてここに」
「カズキを待ってたの。ヘイズへの道中かヘイズの町で夜明かしをしたんだろうと思って」
それは正解なんだけど。そういうこと聞いてるんじゃなくて。
「そういう話じゃなくて……。すぐ、戻らなきゃ。送ります」
って何か凄い無駄足じゃん？
俺の言葉にユリアは肩を竦めた。
「一緒に行くの」
「何……」
「ユリア！！そんな無茶を……」
「レガードはわたしの婚約者よ」
レイアの言葉を遮って、ユリアはびしりと言った。強い意志を持つ、翡翠色の瞳が朝の光を受けてきらきらと輝く。
「無関係な他人を巻き込んで、わたしだけお城でのんびりなんかしてられないわ」
「つったって……。ラウバルたちが心配する……」
「わたしは今、コープトの館でレガードの無事を祈って篭っていることになってるの」
なってるって……。
「……シェインの許可は、得たわ」
シェーーイーーンーー……。あーたと言う人は本当に……。王女様が心配じゃないのか！？

第1部第4話　王女出奔！！（2）

「どうやってここまで……」
レイアの問いに、ユリアは軽く唇を尖らせて肩を竦めた。
「昨日、あの後すぐにお城から脱走しようと思ったらシェインに見つかっちゃって……カズキたちに途中で追いつくと思ったから、焦っちゃった」
「ええ？じゃあまさか浄化の森で泊まったの……？」
「まさか。ここまで、夜のうちにシェインが馬で運んでくれたの。ヘイズに泊まっているのなら必ずこの門から外へ出るし、まだ到着していないのならこの門から入ると思ったから、早起きして、待ってた」
……シェイン。なぜ俺のことはせめてここまでも送ってくれないかな……。
「シェインは……」
「宿で別れたわ。まさかシェインまでお城を脱走するわけにはいかないわ」
「……何て……」
何て破天荒な王女様と宮廷魔術師だ……。
「シェインたら何考えてッ……」
レイアが憤慨したように言うのを否定するようにユリアはゆっくりと顔を横に振った。
「シェインは、わたしがどれほどレガードを想っているか知っている」
「……ユリア」
「幼い頃からレガードと共に生きて来たわたしを知っているのは、シェインだけだわ」
そうなんだ……。
俺はぼんやりとシェインの軽薄そうな顔を思い浮かべた。

「もちろん、シェインに散々反対はされたのだけど。魔法を使ってでも止めてやるって脅されちゃった」
ユリアは肩を竦めた。束ねられた髪がふわりと風に舞う。
「でも、わかってくれたもの。城のことは自分が引き受けるから、思うようにやってきなさいって。でも、無茶なことは絶対してはいけないと言われたわ。シサーの言うことをよぉく聞くようにって」
「当たり前ですッ」
レイアが顔を顰める。
「1日に1度、必ず交信をするよう、『遠見の鏡』を渡されちゃったしね」
『遠見の鏡』？……交信するってんだからきっとテレビ電話みたいなもんなんだろーか。シェインは宮廷魔術師なんだし、変なモン持ってても驚かない。
「……大丈夫なの？」
「大丈夫よ。ギャヴァンに行けば、シサーにも会える。わたしだってこれでもプリーストの端くれなんだし」
……えぇ？
その言葉に驚いた。言葉を出さずに目を丸くすると、ユリアは恥ずかしそうに舌を出した。
「まだまだ下っ端だけれどね」
「……王女様が、プリーストの修行を？」
「我がヴァルス王国は、ファーラ教を守護する第一の国。……国を政治的に治めるのは男性の役目で、王族の女性は代々プリーストとしての勉強もさせられるわ。尤も、本当に司祭になれるほどではなくて……全然低レベルの、形だけのものではあるんだけど」
そうなんだ。王女様も楽じゃあないんだなあ……。
十字路へ向かう道を真っ直ぐ歩きながらユリアは続けた。
「でも、わたしは興味があったから。それに『やったフリ』って言うのは納得がいかないの。国民を騙しているみたいで。だから、教えられた期間は真面目に取り組んだし、それ以降もガウナ様に教え

を願って学ばせてもらった。おかげで、ほんの少しだけは神聖魔法も使えるわ」

「ホントに！？」

この問い返しは失礼だとは思うんだけど。嘘つくわきゃないんだし。でも咄嗟に俺はそう言っていた。

レイアは治癒系の魔法を使えない。神聖魔法つったら、確かそっちの方が専門だったと記憶している。ユリアがヒーリング系の魔法を使えるんだったら、俺、物凄くありがたいです。

きらきらと期待に満ちた眼差しを向ける俺に、ユリアが不安げな顔でこくりと頷く。

「あの……でも、本当に大したこと、ないのよ」

「でも治癒とか出来るでしょ」

「あ、あの……そんな凄い怪我とかじゃあなければ」

「やった♪」

ソーマ草は昨日試したけど、そんな劇的な効き目とかはなかったからなあ……。メディレスのように、とまではいかなくても、痛いのが治るとか疲れてたのが体が軽くなるとか、そのくらいは期待しても良いかもしれない。

現金な俺は、「お姫様のお守りしながら魔物と戦うなんて到底無理なんですけど」と思っていたのもどこへやら、すっかり気が軽くなった。ついでに足取りも軽くなる。そんな俺に、ユリアがくすりと笑った。

「シェインは、思ったよりカズキを信頼してるのよ」

「はぁ？」

スキップでもし出しそうな俺の背中にユリアが言う。……シェインが？馬鹿な。どう考えたって捨て駒的な杜撰な扱いこの上ないと思いますけど。

「けど俺……剣なんか全然使えないし……。昨日だって、レイアの魔法がなければとっくに死んでただろうし……」

「……魔物に遭遇したの？」

レイアが簡単にウォーウルフと遭遇したことを説明する。ユリアが見張った目を俺に向けた。
「そう……恐ろしかったでしょう」
そりゃもう。
シェインがくれたピアスだって何もしてくれなかったし。対になるアイテムっての見つけなきゃ使えないんじゃ、現段階の俺にとって何の役にも立たない。やっぱりもっとわかりやすいものが欲しかった。
「シェインはね、カズキは吸収が早いって言ってた」
「え？」
「教えたことはどんどん飲み込んでいくって。だから、きっとシサーに会えばシサーの教えることを吸収していけるんじゃないかって」
「……それは……わかんないけど……」
もそもそと答える俺に、ユリアが笑う。
「『思いがけない拾い物だったかもしれない』って言ってたもの」
拾い物って……。落ちてたんじゃなくって、無理矢理拉致してきたんでしょーが。
ユリアの視線に、俺はため息をついた。買い被り、と言う気がしないわけじゃない。
でも。
そこまで言われたら。
「……期待に沿えるよう、前向きに頑張ります」
ユリアを守りながら、レガードを見つけ出せるよう……俺の、最善を尽くさなきゃな。

◆◇◆

相手の返答を全く期待していないようなぞんざいなノックがされ、無遠慮に扉が開けられた。ラウバルを相手にこんなことが出来る人間にはひとりしか心当たりがない。

「全くお前には呆れ返るな」
書き物机に向かい、分厚い書類に目を落としたまま投げかけられた言葉に、侵入者は肩を竦めた。
「やはりバレていたか」
「私に隠そうなどと、１００年早い」
「ふむ……では俺も永き生命を手に入れる手段を講じなければならぬな……」
嘯きながらシェインはずかずかと部屋を横切り、窓際に置かれた長椅子にごろんと横たわった。
「つくづくお前は王女に甘過ぎるな」
シェインの行動を知りながら黙していたラウバルも同罪であるとは思うのだが、それを口には出さずにシェインは違うことを口にした。
「俺が一緒に行ければ良いのだがな」
「馬鹿を言うな。王が病に伏し、後継者は行方不明、王女が家出同然に旅に出てこの上宮廷魔術師までいなくなっては国の政はどうなる」
「そんなもの、おぬしがいれば十分であろうが」
シェインは無意味に自分の赤い前髪をつまみ、それを眺めた。欠伸をしながら言ったシェインに、ラウバルがふと顔だけで振り返る。
「……ぬかりがあるとは思わぬが……王女の安全は確かだな」
「当然だ。この俺が何の策も講じずに最愛のユリアを危険なところにやると思うのか」
「思わぬがな……。何をした」
「秘密だ」
「もったいぶるな」
シェインは苦笑をして上半身だけ長椅子から起こした。右足を床に下ろし、片手を長椅子について体を支えながら、ラウバルの方へ身を捩る。
「いくつか魔法をかけさせてもらった。ユリアに危険が迫れば発動

される」
「例えば？」
「例えば召喚だな。ユリアに切迫した危険が迫れば、自動召喚される種類のものだ」
「召喚？」
興味深そうにラウバルの片眉がぴくりと上がる。
「お前のレパートリーに召喚があったとは初耳だが」
「そんなの俺も初耳だ。宝物庫の中にあった、研究済みのオモチャだ」
「ああ……『遠見の鏡』か」
『遠見の鏡』は本来何かを召喚するような機能がある道具ではない。だが、かつて『遠見の鏡』の研究をしている最中に、召喚機能を持ち合わせている宝玉の魔力を掛け合わせるなどして弄り倒していた。恐らくはその延長だろう。
「……だが、召喚は……」
召喚の危険性を説こうとしたラウバルをシェインは片手を挙げて制す。
「見縊るな。これでも宮廷魔術師だ。召喚が危険な行為なことは重々承知だ」
「では……」
「安心しろ。細工を施してある。召喚されるのは安全この上ない生き物で、敵に対しては頼りになる上ユリアに対しては決して危害を加えることはあり得ない」
「そんな召喚獣が『遠見の鏡』にはいるのか？」
「召喚獣と呼ばれるのは非常に不本意だがな。彼女が召喚するのは大変な色男で性格も良い」
嫌な予感がした。
「……何を召喚する」
「俺だ」
ラウバルは思わず小さく吹き出した。

「……相変わらず突飛なことを考える」
「素晴らしいことと言って貰おうか」
すっかり体を起こし、長椅子にちゃんと座り直して足と腕を組んだシェインにラウバルは立ち上がった。
「何か飲むか」
「エール酒を」
「執務中だ。馬鹿も休み休み言え」
言いながらラウバルは部屋の隅に設置された棚に向かって歩いた。乗せられたティーポットを取り上げる。
「……そんな事態にならぬことを祈るがな」
「そうだな。……ではおちおち娼館にも行っておれぬな」
ラウバルの背中から投げつけられた言葉に、シェインは盛大に顔を顰めてさも重大そうに頷いた。
「全くだ。素っ裸で呼び出されてはたまらぬ」
ラウバルが声を立てて笑う。珍しいことだ。シェインはその揺れる背中を憮然と見遣った。
「では王女が旅から戻られたら、『遠見の鏡』を肌身離さず持っていただこう。その方がお前も品行方正になろう」
茶を注いだカップを2つ手に振り返ったラウバルに、シェインは唸り声を上げた。
「縁起でもないことを言うな。ユリアに言ったら乗り気になりそうだ。言うなよ」
それから組んだ自分の膝に頬杖をつき、ため息を落とす。ラウバルは無言のままカップを口に運んだ。
「シサーがいる。カズキはいささか頼りないが、シサーのそばにいれば成長も望めるだろう。あいつは頭が良いな。真面目だ」
「……正直なところ、どう思う」
「……」
その問いは、あまりに広義だ。返答に詰まって、ラウバルは片手を伸ばしながら、口調をやや改めた。

「そうか」
「『王家の塔』の攻略は、望んでいない。カズキが動き回ることで、レガードの消息だけを何とか掴みたい……」
「出来ると、思うか」
「やってもらわねば困る」
「……」
両手の中にカップを包み込んで言い聞かせるように言うシェインに、ふとラウバルは小さく笑った。
「お前は随分とカズキを気に入ってるみたいだな」
「そうか？」
「いやに構っていたようだ」
「ああ……」
ラウバルの言葉にシェインが笑った。
「あいつは面白いぞ。真面目なのか不真面目なのか、頭が良いのか悪いのか。変わってるな」
「……先ほど、『カズキは真面目で頭が良い』と言っていたのは私の幻聴か」
「言ったな」
くっくっと笑いながら、シェインは手近なサイドテーブルにカップを置いた。ソファにどすんと背を沈める。
「生きて帰ってきて欲しい……そう思うのは、本音さ」
剣を持ったことのない人間に魔物の徘徊するこの世界を旅させることが酷だとはわかっている。だが、これ以上彼らには打つ手がない。ヴァルスの財務大臣は『レガード』の旅に消極的だ。金銭的にも人材的にも、密かに行うには限られている。私的な交友関係であるシサーを頼るのが、精一杯だ。
ラウバルは窓際に歩を進めた。視線を外に向ける。
「……ところで、何か用があったのではないのか」
「そうだった。忘れるところだった」
言って、シェインはふいに真剣な顔をした。『平均よりかなり軽

い２０代男性』から『宮廷魔術師シェイン』の顔つきになる。
「……おぬしが危惧していたことが現実になりそうなのでな」
「何……」
視線を窓から外し、ラウバルはシェインを見据えた。
「では……」
「急くな。まだそうと決まったわけではない。ただ、ちょっとキナ臭い匂いがする」
「……」
沈黙で先を促したラウバルに、シェインはサイドテーブルのカップを指先で弾きながら続けた。
「『王家の塔』へ向かう奇妙な一団を、岬の街フォルムスからの旅商人が見ている」
「風の砂漠か」
「ああ。くそ暑い砂漠を旅するのに、ご丁寧に頭からすっぽりと厚い布を被っていたそうだ。日除けとは思えない装いだったそうだぞ。……正体を知られたくないのだろうな」
「……」
「国の紋章は見かけなかったそうだ」
「……そうか」
「ま、酒の肴で出た話だ。宰相殿に語るには時期尚早だが、おぬしと俺の仲だ。大目に見てくれ」
じっと何かを考えるようにしていたラウバルは、どんな仲だ……と苦笑する。
「早めに耳に入れた方が良いと思ってな」
「……感謝しよう」
ラウバルは素直に頷いた。シェインが立ち上がる。
「まあ、今はまだ静観する段階であろう。カズキの働きに期待するしかない。カズキが……『レガード』が動けば、必ず何かが食いついてくる」
言ってドアの方へ足を向けた。

「戻るのか」
「ああ。……娼館に赴くわけにはいかぬからな。たまには真面目に仕事にでも励むさ」

第1部第5話　南へ…（1）

アギナルドの小屋までは、嘘のように順調だった。天気も良いし、自然が豊かだと自負するだけあって心地良い風と木々の緑が快適だ。ひどくのどかで、昨日の出来事なんか嘘のようだ。

ユリアは王女様と言うことを思えば、驚くほど体力があった。いや、本当にあるのかどうかはわからないけど、弱音は一切吐かなかった。途中、それほど休憩を挟まない強行軍であるにも関わらず。

歩きながら、ユリアはぽつりぽつりとレガードのことを話した。身分のせいだろう、彼女の周囲には幼少の頃から同い年くらいの子供などはいなくて、当時エルレ・デルファルの学院を卒業したばかりだった、１０歳年上のシェインが精一杯だったと言う。

宮廷魔術師は特に世襲制と言うわけではないのだが、祖父も父も宮廷魔術師を務めたシェインは、言わばサラブレッドのような感じで、既に将来宮廷魔術師として目されていた為王城に出入りすることが許されていたのだそうだ。庭でひとりで遊んでいたユリアを王女とは思わずに気楽に遊んでくれたらしい。

レガードが出入りするようになったのもその頃だ。ユリアの父クレメンスと、レガードの祖父アルラロナン3世は、その昔ロドリスを中心とするバート、ナタリアの3カ国連盟の反乱に対し、共にアルトガーデンを平定する為に戦った戦友であり、クレメンスの命をアルラロナンが救ったと言う経緯から親しく交流をしていた。

第2王子であるレガードを、アルラロナン3世の息子……つまりレガードの父フェルナンド7世は割と自由にさせており、社会勉強としてシャインカルク城に3年ほど住まわせたこともあると言う。

つまり、ユリアにとって2つ年上のレガードは唯一の年の近い友人でたったひとりの異性だったと言うわけだ。

シェインはそんな2人を温かく見守る、兄のような存在だったとユリアは言った。娼館に入り浸り、俺を連れては酒を飲ますという

暴挙しか知らない俺は意外な一面を知ったような気がした。
　年が近いと言えば、キグナスもほぼ俺やユリアと同年代なのだが、彼が王城に出入りするようになったのはごく最近のことらしい。
「レガードとシェインは、わたしにとってかけがえのない存在なの。3人で、育ってきたんだもの」
　話を聞いているうちに、内心首を傾げる。ユリアのレガードに対する想いって言うのは……いわゆる『恋愛感情』なのだとばかり思っていた。立場が何せ、婚約者なわけだし。
　でも、話を聞いてるとレガードとシェインってのは、ユリアの中で同列1位って感じで……それって恋愛感情か？
「……もしもさ」
「ん」
「姿を消したのがレガードじゃなくてシェインだったら、どうする？」
　問われている意味がわからないように、ユリアは目を丸くしていたが、やがて決然と頷いた。
「もちろん、わたしが探しに行くわ。レガードもシェインも同じようにわたしには大切だわ」
「ふうん……？」
　それって、むしろ家族？
「なーんか暇になっちゃうわねー。ぱーっと魔物の1匹でも出ないかしらねー」
　手を抜いて俺の頭の上でごろごろしているレイアが猛烈にとんでもないことを言う。馬鹿言え。出られてたまるか。
「レイア。怪語れば怪至ると言ってだな……」
「だーってつまんないんだもの」
「つまるとかつまらないとか言う問題じゃないッ。この状態がつまらないなら、俺はぜひつまらない旅をお願いしたいッ」
　可愛い女の子とのんびり会話を楽しみながら旅をするなら、俺はその方がよっぽどつまってる。

噛み付くように言う俺の髪をレイアが引っ張る。……いーたーいっつーのッ。

「良いコンビね」

「そういう趣味はありません、俺」

俺とレイアのやりとりに、ユリアがくすくすと笑った。ちょっとその笑顔に、どきどきする。

いやいや、普通の感情でしょ？好きだの嫌いだのって言う深い感情があるわけじゃないけど、可愛い女の子の笑顔に心洗われるのは男なら誰でもそうなはず。

最初こそ『王女サマ！！！』と言う……何て言うのかな、別次元の人間って感じで勝手に壁を作っていたわけだけど、こうして2人でずっと肩を並べてひたすら歩き続けて話をしてみると、高貴なドレスを身に纏っていない彼女は一気に距離がぐっと縮まったような感じで……普通の、女の子で。

時々ぽや～っと蹴躓いたり、とんちんかんなことを口走ってたりするのが素直に可愛い。

「あ、カズキ……あれじゃない」

にこにこするユリアに、一緒になってでれでれ……じゃない、にこにこしていると、頭の上でレイアが言った。レイアの示す方向にはナタから聞いていた通り、小さな木々の塊が見える。そちらへ向かうべく、俺たちは右手の方へと道を逸れた。

さほど背の高い木があるわけじゃない。2、3メートルくらいの大きさがせいぜいで、枝は割りといっぱいに広がっている。足元には逆に背の高い細い草が生い茂っているから、あいている空間がちょうど俺の腰の辺りから頭のちょい上くらいまでしかないって感じ。だけど規模自体はそんなに大きくはなさそうだ。確かに森というよりは林と言った方が良いだろう。

俺たちが入ろうとしている場所が悪いのか、それともそもそも続く道がないのか、女の子にはちょっと可哀想な道だ。先に足を踏み入れながら振り返る。

「ユリア、大丈夫？」
「ありがとう。大丈夫」
「……レイアは少し、自力で何とかしろよ」
俺の頭でごろごろしたまんまユリアの口調を真似て言うレイアを、見えないけど睨み上げながら、ゆっくりと木々を掻き分け、草を踏み分けた。少しでも、続くユリアが楽の通れるように気遣いながら進んでいく。
「ユリアも疲れただろ。多分もう少しだから……アギナルドさんの小屋についたら、少しは休めると思うし……」
……と、これ、道か？道かな。進んでいる間に、良く良く見てみるとそれらしきものにぶつかった。とは言え、道というには余りにお粗末と言うか、どちらかと言えば獣道と言う感じの細い道だ。どちらにしても足場はかなりよろしくない。
小屋らしきものが見えたのは、林に分け入ってからほんの１０分程度のところだった。本当に小さい。
姿を現わした小屋は、レンガ造りの小さいながらもしっかりした造りなのが見て取れるもので、『隠れ武器職人の偏屈じじい』の小屋だと思って漠然と無愛想な木の小屋を想像していた俺は少しばかり意表を突かれた。
……さて。
ついてしまったがどうしよう。
小屋の前に佇んで、しばし思い悩む。問題は何と言って魔法石を略奪……もとい強奪……じゃない、お裾分けいただくかだ。ナタに言われるがままに来てしまったけど、まさかおもむろに「魔法石くれ」だの「何かいいもんくれ」だのは……言えないだろう、やっぱり。人として。
「カズキ？」
ユリアが立ち竦んでしまった俺を訝しげに覗き込む。えーと……どうしようかなあ……。

相手は、武器職人。だとすればやっぱり、攻める方向は、武器。
あ、でもそうか。ついでだから本当に、何か武器について話を聞いてみるのが良いかもしれない。俺みたいなド素人でも何とかこう扱えそうなものが存在するのかもしれないし。
そう思いついてポンと手を叩き、顔を上げたところで、不意にドアのほうが自動的にがちゃりと開いた。ので、驚く。うわぁ。
ぴょこんと顔を出したのは、何だか犬みたいな顔つきの毛もくじゃらだった。
（……魔物！？）
驚きの余り心臓が跳ね上がり、条件反射で仰け反った俺だけど、驚いたのは相手も同じだったようだ。いや、むしろ相手の方が驚いたと言っても良いかもしれない。小さな目をぱっと見開くと見てるこっちが可哀想になるくらい慌てふためいて中に飛び込んで行った。
……何だったんだ、一体。
「コボルトね」
ぼそりとレイアが頭の上から告げる。コボルト？
そう言えば、ナタが言ってたな、そんなこと。コボルトとどうとかこうとかって。……そうか、あれがコボルトなのか。シャインカルク城でキグナスが言ってたことには、コボルトはかなり大人しく内気な性質で、人を襲うことはまずないんだそうだ。手先が器用で、機械いじりみたいなそういうのが得意らしい。……危険はない、ってことだよな。
そう結論付けると思い切って、そのドアをノックしてみる。が、反応は静かなものだった。
「すみません」
もう一度ノックしてみると、恐る恐ると言う感じで再びさっきのコボルトが顔を出した。
「あの……アギナルドさんて方は……」
つられて俺も恐る恐る言うと、コボルトはぴょこんと耳を立てた。
それから「待て」と言うようなジェスチャーをして、ドアを開けた

ままで中に戻って行った。物音はしない。
「……いないのかしら」
ユリアが俺を見上げてそう言ったところで、ペタペタと軽い足音がした。こちらへ向かってくる。
「何じゃ、おぬしらは」
突然声がして驚いた。見れば、いつの間にか俺の正面に立っていたらしい。全然気がつかなかった。何となれば、頭の位置があまりに想定していたところと違うところにあったもので。
かなり背の低いじいさんだ。頭が俺の腹の位置くらいにある。茶色い、漫画日本昔話にでも出てきそうな頭巾を頭に被り、グレーのふさふさ眉毛の下の目は鋭い光を放っていた。口の周りにもディズニーの7人の小人みたいな髭がふさふさと生えている。
「あ、あの……」
「知らぬ顔だな。用がないなら帰れ」
いやいや。俺、まだ「あの」しか言ってないんですけど。
「どうやってここにたどり着いたかは知らんが、わしに用はない。帰れ」
だから俺、まだ何も言ってないんだってば。しゃべらせてくれ。
「ナタからの紹介でッ」
ドアを閉めかねない勢いだったので、俺は口を挟まれる前に慌てて早口で言った。背を向けかけた老人の動きが止まる。
「何？ナタ？」
やだな、これで「知らぬ」とか言われたら。
内心びくびくしていると、アギナルド老は低い目線から俺を見上げて、やがてドアを閉めるそぶりもなく背を向けた。
「入れ」
おお。態度が好転した。凄ぇ、ナタ。
思わずユリアと顔を見合わせていると、中から怒鳴り声が聞こえた。
「早く入れ！！」

「ははははい」
せっかちだなあ、もう……。
老人に続く形で中に入る。家の中は全てが小作りで、けれどきちんと手入れされているのがわかった。シンプルでセンスが良い。
「座れ。ロット。客人に茶の用意じゃ」
さっきのコボルトはロットと言う名前らしい。ロットは壁際でじっと俺たちの動向を窺っていたが、老人の言葉に部屋の奥のドアから姿を消した。
勧められるままに、温かい色合いの木で出来た椅子に腰を下ろす。老人は暖炉のすぐそばの、やっぱり木で出来た揺り椅子に腰を下ろした。
「それで、何の用だ」
あ、そうだった。何て言おう。
「あの、俺、野沢……じゃない、ええと、カズキと言います。初めまして」
とりあえず挨拶なんかしてみる。初対面だし。俺は座ったままで姿勢を正して名乗った。ぺこんっと頭を下げると、愛想のかけらもない声でじじぃが言った。
「ふん。挨拶くらいは出来るようだ」
……そりゃどうも。
「ナタから、凄腕の武器職人だとお話を伺いました。少し、話を聞いてもらって……良かったら相談に乗っていただけないかと思っています」
「人にどう評価されるかなど、わしの知ったことじゃない。やりたいようにやる。それだけじゃ」
くそぅ、本当に偏屈だぞ。
話を聞いてくれるつもりがあるんだかないんだか判断に迷っていると、アギナルド老は「それで」と話を促した。一応聞いてはくれるらしい。ちょっと安心。
「俺は、ある依頼を受けて旅をしている途中なんです。だけど俺は

訓練を積んだ戦士じゃない。武器の扱い方も、良く知りません。何か、力になってはもらえないでしょうか」

例えば、俺でも簡単に扱える武器とかそういうの、ないだろうか。俺は、当然ながら武器そのものの知識も浅い。

失礼にならないように言葉を選び選びお願いをする俺に、じじぃはふんと鼻を鳴らした。

「甘ったれとるな」

何だとぅ。

「この世界で訓練も積まずに旅に出て剣を振り回そうなど１００年早い。修行をしてから出直すのだな」

１００年も待ってられるか。明日にでも元の世界に帰りたいってのに。

けど、そんなことも言えず、まさか違う世界から来ましたとも言えない俺は勢い黙った。何かを口にすればそれが言い訳になりそうだ、いや言い訳って言うか事実なんだけど、アギナルド老にはそんなことは関係ないだろうから言い訳にしか見えないだろう。そう思えば言葉が見つからない。

ユリアが割って入ったのはその時だった。

「違うわ」

「何？」

「彼が悪いんじゃない。……わたしが、無理矢理この世界に引きずり込んだのよ」

「……」

訝しげなアギナルド老の視線にも構わずに、ユリアは続けた。……おい。そんなこと気軽に言って良いのか？そりゃあ俺もパララーザに言っちゃったけど。

「彼はこの世界の人間じゃない。彼じゃなきゃ駄目な理由が出来たわたしが、魔術師に頼んで無理矢理この世界に引っ張ってきてもらったの。彼の住む世界じゃ魔物もいなければ剣も必要がない。持ったことなんかないの、当然なのよ」

「どういうことだ」
訝しげな視線を向ける老人に、ユリアは負けじと視線を返しながら言った。
「言葉の通りよ……。異世界の人間を、この世界に引きずり込んだの。けれど修行を積むまで待っているわけにはいかない。人の……わたしの婚約者の生命がかかってる。のんびりしているほどの時間が、ないの」
「……」
「お願いです。何か、力になってはもらえないでしょうか」
老人はしばらく真偽を確かめるようにユリアをじっと見詰めたまま黙していた。それから俺に確認するように視線を向ける。それを受けて、俺も真っ直ぐ見返して頷いた。
「……情けないことをお願いしていることは、わかっています。だけど、進みながら慣れていくしかないんだと思ってます。……その前に、命を落とすわけにはいかない」
考えるように無言で俺の顔を見つめていたアギナルド老は、やがてふうっと息をついて立ち上がった。
「カズキ、と言ったな」
「あ、はい」
「ついて来い」
「はい」
ついて来いと言った割りには、俺がついて来るかどうか確かめもせずに老人はすたすたと奥の部屋へ向かって歩き出した。思わず、またユリアと顔を見合わせてから慌てて立ち上がる。その場にユリアとレイアを残して急いで老人の後を追った。入れ違いにコボルトのロットがお茶を持って現われる。
「どこへ……」
「黙ってついて来い」
はい……。
老人はすたすたと奥の廊下を進み、突き当たりの扉を開いた。中

に入ると更に床に扉があり、それを引き開ける。地下に通じる階段が姿を現わした。
「その剣を寄越せ」
「え？」
その剣？って、俺の？
言われるままに、俺は腰の剣を鞘ごと渡した。老人は何も言わずに受け取り、階段を下りていく。慌てて後をついて行くと、地下にあったそれは鍛冶場だった。
「良い剣だ」
剣をためつすがめつして、老人はしみじみと呟いた。さっきのむっつりした顔はどこへやら、生き生きとした表情をしている。……ふうん。本当に武器が好きなんだ、この人。
「これなら、どんなぼんくらでも多少は扱うことが出来よう？」
ぼ、ぼんくらってあのねえ……。……ぼんくらですけど。
「軽かろう」
「あ、はい」
問われて、俺は素直に頷いた。それは、まったくそうだったので。当然だが、剣は鉄の固まりだし、俺は通常高校生男子以上の筋肉はない。だからそれなりの重さを覚悟してはいたんだけれど。これが思いの外軽くてびっくりしたんだった。だからこそ、ウォーウルフと遭遇した時に滅茶苦茶に振り回すなんて芸当が出来たんだが。
剣って意外とそういうもんなんだ、と勝手に思ってたんだけど。そういうわけではないらしい。
「ただ、手入れが少々手緩いな。そのせいで本来の切れ味が生かせない。この剣は鉄で出来ているわけではない。知っているか？」
ふぇ？
「知りません」
あっさり答える俺に、アギナルド老はやれやれと顔を横に振った。
……しょおがねえじゃん、知らないんだから……。
「これはファントム・エメリーと言う特殊な鉱石で出来ている。時

折、魔剣などにも見かけるな」
「石！？」
「そのおかげで、普通の剣などのように何かを斬った後に、血錆や脂などで切れ味が格段に悪くなるようなことはまずない。錆も刃毀れもないからな。日頃の手入れさえ怠らなければ随分と持つはずだ」
「そんな特殊なもんだったんですか？」
ぎょっとして問い返す俺に、アギナルド老はちらりと俺を見た。
「高価な剣だ。一度鍛えてやれば、もっと手軽に扱えよう。尤も、魔法剣のように自動的に敵に襲い掛かったりなんかはしてくれぬがな。後は修行あるのみじゃ」
さすがお城に眠ってた剣。とりあえず安物ではないらしい。
「ナタの紹介とあっては無下に追い返せまい。剣はわしが鍛えてやる」
「あ、ありがとうございます！！」
その言葉に、俺は本心から礼を言った。頭を下げる。見ず知らずの俺の剣を鍛え直してくれるなんて……良い人なんじゃん。ってか、ナタって凄ぇ。
「鍛え直すにはそれほど時間はとらせん。そこらで適当に待っておれ」
アギナルド老の言葉通り、鍛え直すのには1時間もかからなかった。鍛え直されて、刀身も輝きを増した剣を受け取って頭を再び下げる。
「本当に、ありがとうございました。代金は……」
いきなり押し掛けて　こんなことさせといて、タダってわけにはいかんでしょう。俺が荷袋に手を突っ込みながら尋ねるとアギナルド老は少し考えるようにして頷いた。
「報酬は、受け取るとしよう。……ただし、金はいらん」
へ？んじゃ、労働？
「これから旅を続けるに当たって、装備出来る者のいない武器を手に入れることがあれば、それを持って来てもらおうか。代金は別途、

支払おう」

俺が剣を鍛えてもらって、そのお礼にそう言う武器を持って来るってんならともかくとして、それに代金もらっちゃったら変じゃん、それ、お礼じゃないじゃん。

そう思って返答に詰まっていると、アギナルド老は会ってから多分初めて、微かに微笑んだ。

「そう、約束をしてくれればそれで良い。わしが良いと言っておるのだから、それで良かろう」

そりゃあそーかもしれないけど……。悪いじゃん、何か。俺の気が済まないじゃん。

あくまで不服そうな俺に、アギナルド老は根負けしたのか苦笑を浮かべてロットを呼んだ。

「わかった。ならば少々労働をしてもらおう。ロットの鍛冶場の掃除を手伝ってやってくれ」

ようやく、老人の恩に報いる機会を手に入れ、俺が意気揚々とロットの掃除を手伝ってそれを終えた頃には、既にだいぶ日が傾いていた。……しまった。今からギャヴァンに向かっても、日没には間に合わない。

かくて俺は、家中の掃除と庭の掃除をも引き受ける代わりに、図々しくも老人に泊めてくれるよう要請し、ナタに『偏屈』と言わせしめた人物に「お前のような奴には会ったことがないわい」と呆れ果てたお言葉までちょうだいする羽目になったのだった。

第1部第5話　南へ…（2）

シャインカルク城を発って3日目の朝、アギナルド老はロットと並んで俺たちを見送ってくれた。

「本当に、ありがとうございました」

アギナルド老に鍛えてもらった剣は、切れ味を増したように思えるのに加え、一層軽くなったような気がする。

「お前は、良い瞳をしているな」

……は？

「真面目な瞳だ。色のついてない瞳をしている。だから、剣を鍛えてやろうと言う気になった。……ロット」

色のついてない瞳？黒ですけど。

言われてる意味がわからなくて目を瞬くけど、老人は答えてくれる気はないらしい。ロットを呼ぶと、ロットが手に持っていた布袋を俺に向かって差し出した。ので、素直につい受け取ってしまった。

「……これは？」

「手土産じゃ。大して入ってはいないがな。手ぶらで帰したとあってはナタに何を言われたものか、知れたものではない」

「ありがとうございます……あ……」

袋の中を覗き込んで、絶句した。色取り取りの、石。……魔法石……。

剣を鍛えてもらったので、諦めていた。さすがにそこまでは図々しくなれない。けれどまさか、もらえるとは……。

「……助かります」

本当に。

人間、心の底から感謝をすれば、本当に頭が下がるものだ。深々と礼を言ってアギナルド老の小屋を後にする。

少しだけ、心が軽くなった。俺って単純。剣に磨きがかかって、遠距離攻撃が可能になるだけで、きっと……随分違う。

「カズキのおかげで、助かったわね。ありがとう」
軽い足取りで弾むように俺の隣を歩きながら、ユリアが笑った。
「俺？何もしてないよ」
「カズキがアギナルドさんのところでたくさん働いたんだもの。だから、カズキのおかげだわ」
ありがとう、ともう一度微笑むユリアに、少し照れ臭くなった。
そりゃあ働かされましたけど。家中掃除しまくりましたけど。
でも、アギナルド老の親切と、ユリアの笑顔に報われる。
「いいえ……」
そう、だよな。
これからシサーと言う人に会って協力をしてもらうんであっても、少しは……。
少しは、俺が、ユリアを守ってあげたいじゃん。やっぱり。少なくとも「だっせぇ」とは……思われたくないじゃん？
（だったら……）
頑張って、強くならなきゃ。
剣とか、技量とかって以前としてまず……少なくとも、俺は、戦うことには、慣れなきゃならない。

そこからギャヴァンまではもう数時間だった。日が高いうちに出発したせいかワンダリングモンスターに遭遇するようなこともなく、昼過ぎくらいにはようやくギャヴァンの街に到着した。強くならなきゃとは言え、魔物になんぞ会いたくないと言う本音は変わらないわけで。
（ようやくついた……）
ここに到着してしまえば、とりあえず、俺だけで何とかしなきゃと言う気分は緩くなる。だってここには『お傭兵様』がいる！！……いいんだ別に。日本語がおかしくったって。
ローレシア大陸の南の方にあるヴァルスは総じて気候は穏やかで暖かい。今、俺流に言えば季節は冬で大体1月頃にあたるみたいな

んだけど、それでレオノーラ近郊は秋口の気候なわけで。
　ヘイズについた辺りから段々とあったかくなっていって、ローレシア最南端にあたるギャヴァン近辺になった頃にはマントをするには少々ツライ気温になっていた。歩き続けているせいもあるんだろう。ので、俺はマントと上着を脱いで、シリーにもらったシャツをタンクトップの上に羽織っている状態になっている。
　ギャヴァンは、レイアが言っていた通り大きく、賑やかな街だった。レオノーラとは違う雰囲気で活気がある。
　大通り沿いにはずらりと屋台が並び、客引きが引きもきらない。昼間からビール片手に広場で音楽を奏で、歌い踊る姿はレオノーラではちょっと見られない光景だ。下町風と言えば、確かに言える。
　あと、レオノーラと決定的に違うのは、街中に溢れる潮の香りだった。レオノーラは内陸なので、それほど潮の香りは流れて来ない。ヘイズなんかも海沿いなんだけど、風向きの関係かさほど「ああ、海だ」と言う印象がなかった。
　ここはまさに「ああ、港街に来たんだなあ」と思わせる。
「賑やかね」
　大通りを歩きながら辺りを見回してユリアがくすっと笑った。
「さて、どうしようか。その、『再会の酒場』とやらに行ってみる？」
　とりあえずはさっさとシサーを掴まえてひと安心したい。俺としてはゆっくりするのはその後で全然遅くない。だって、掴まえられなかったら洒落にならない。
　それとも酒場だからこんな時間じゃやってないだろーか。でもこの雰囲気だと、昼も夜も関係なさそうなんだけど。
「こんな日が高い時間に行ったって、どうせシサーはいないわ。宿、探しちゃいましょ、先に」
　ぐいぐいとレイアが俺の頭の上で髪を引っ張りながら提案する。すっかり俺の頭の上がレイアの定位置になってしまったようだ。
「じゃあ、そうしよう」

その提案に従って、とりあえず今日泊まる宿を探すことにする。
良く考えてみると、俺、こっち来てから宿に泊まるのって初めて。
最初は王城だったし、一昨日はキャンプ、昨日はアギナルド邸だ。
こっちの宿って、どんなんなんだろ。……別にあっちの世界と大差ないのかな。風呂とか、あるのかな。返り血を浴びてた関係で、パララーザでは朝水を貸してもらって軽く拭くだけは拭いたけど……やっぱり風呂に入りたい。
街の入り口から程近い『海南亭』と言う食堂を兼ねた宿に部屋を取り、日が暮れるまで自由行動と言うことにした。ユリアと隣り合った部屋を取り、そのひとつに入る。床に荷物を放り出して、粗末と言えば言えるベッドに俺は転がった。
うあー……やっぱ慣れないことしてるせいか、疲れるなあ……。
（眠いなぁ……）
昨夜は何せ、ろくに眠れなかったからな……。
アギナルド邸には客室がひとつしかなかった。
ひとつしかないと言うことはユリアと同室にされた。
そりゃあレイアだっているにはいたけど、そういう状況下、あんなにちっちゃなイキモノは俺の視界から削除されるに決まってるだろ。
……とくれば眠れるわけがない。動揺の余り鼻血のひとつも噴かなかったのが幸いだ。思春期にはちょっと酷。野営するのとはまたわけが違う。
結局部屋にいられずに抜け出して、居間のソファでうつらうつらしかしていない。
硬いベッドの薄い布団の上で伸びをすると、俺は窓から見える空を眺めた。眠いのは確かだけど、このまま寝ちゃうのはちょっともったいないような気もする。
（……散策、して来ようかな）
せっかくだし。次はいつ来られるかわかんないし。って、永遠に来られないかもしれないじゃん？

跳ね起きて荷袋の中から路銀の入った皮袋だけを抜き出すと、俺は部屋を出た。廊下には人の気配はない。ユリアに声をかけようか少し迷う。けど。

……旅慣れないのは彼女もそうだろうしな……何たって王女様だ。そう思って、結局ひとりで宿を出た。相変わらず外は賑やかだ。レオノーラと違って、何だろう……生きる活力に溢れているような、そんな活気。東京と大阪の違いみたいなもんか？

潮の匂いに誘われるように、大通りを南の方へ向かう。途中、まんまと客引きに捕まって屋台で串焼きなんか買いながら歩いて行くと、やがて宿屋や飲み屋、土産物屋が連立し始めて、波の音が聞こえてきた。……海だ。

街から海を隔てるように壁が聳えたち、開かれた門を抜けて小さな階段を降りるとそこはもう波止場で、何艘もの船が波に揺られていた。強い潮の香り。

天気は良く、空を無数の白い鳥が鳴きながら旋回している。俺から左手の奥の方では、船が着いたばかりなのか積荷を下ろしている様子が見え、風に自分の髪が靡くのを片手で押さえながら俺はふらふらとそちらを目指して歩き出した。

近付いてみると、積荷を下ろす男たちはみんな屈強で真っ黒に焼けているのがわかる。丸太のような太い腕、気合いの入った掛け声。凄いな、何か……。

「坊主、どうした」

ぽかんとその様子に見入っていると、積荷を下ろす指導をしていた男が俺に気付いて声をかけた。オレンジ色の長い髪を後ろで1本に束ねている。右目には眼帯をしていて、まるで映画の中の海賊みたいだ。白いTシャツの袖から覗く腕は太く、殴られたら俺なんか木っ端微塵になりそうだった。

「あ、いえ……凄いなと思って」

「初めてか」

「はい」

「見てても構いやしねぇが、邪魔んなるなよ」
「あ、はい」
俺はしばらくそこで荷物の積み下ろしを眺め、それからさっきの男性に頭を下げてその場を離れた。大通りに続く階段を目指して元来た道を歩き出す。
（……同じ世界に、見えるのにな……）
こうして海なんか見てると。俺のいた世界と何が違うのかよくわからない。でもこの海の底には、俺なんか想像もつかないような得体の知れない魔物とかもいるんだろう。変な感じだ。
ふと足を止めてしばらく海に見入った。
俺が高校の中庭からこっちに連れて来られてもう1ヶ月以上が経過している。何だか段々あっちの世界の方が夢なんじゃないかなんて……そんなふうにも思えてしまう時があって怖い。けど、この世界には俺の居場所があるわけじゃない。レガードが戻れば代役の俺なんか用済みなわけだし、何をする能力があるわけでもない。勝手も相変わらずわからない。
何より……家族に、友達に……会いたい。
（……夢だった……わけじゃ、ないよな……）
この世界に生きる俺が見た、異世界の幸せな夢。……まさか、な……。
ぶるぶると頭を振る。時々、夜中にふと目が覚めるとそんなつまらない考えに頭が支配されることがあった。『元の世界』なんか最初からなくて、俺の世界はここで全て俺の妄想で。……なんて。
……ま、考えても始まらない。今すべきことをするしかないんだし。
そんなふうに自分を強制的に納得させて、俺はまた街へ戻った。さっきとは違う道を北の方へ向かって下る。途中、こんな時間からひどく盛り上がっている巨大な酒場があった。屈強な海の男たちが大声で酒を飲み交わしている。そこから更に北へ向かうと、街の入り口の方とは違う広場があって、大道芸人が芸を披露していた。バ

ンドみたいな人たちが何人かで集まって音楽を奏でる。こういうのもストリートミュージシャンって言うんだろうか。上手いな。

しばらくそうしたストリートパフォーマンスに目を奪われ、土産物屋などを覗いたりしているとあっという間にもう日暮れだった。

『海南亭』に戻り、1階の食堂に足を踏み入れる。と、奥の方のテーブルにユリアの姿が見えた。何やら少し酔っ払っているらしい男がしきりとユリアに話しかけている。

（……）

何となく軽くむかつきながら、そっちに足を向ける。こっちの世界でもやっぱりナンパなんてのがあるらしい。そりゃあ娼館だってあるわけだし、そういうことなんだろうけどさ。

つかつかとユリアのテーブルに近付き、困惑した顔で男を見上げているユリアの向かいの椅子に腰を下ろす。黙ってその男をじろっと睨むと、「何だ男付きなのか」とぼやいて男は去って行った。

「カズキ。……ありがとう」

「どういたしまして」

ほっとしたようなユリアの顔に、俺も微笑みを返した。

「出掛けていたの？」

「珍しいから街を散策に。誘おうかとも思ったんだけど……疲れてるだろうから」

「そう。ありがとう」

「レイアは？」

ちっちゃいから見落としてるのかとも思ったけど、レイアはいないみたいだった。ので聞いてみる。

「まだ寝てるわ。……レイアを見慣れているレオノーラと違って他の街はピクシーは目立つし……このまま置いて行こうかとも思ってるの」

「……怒られないの？」

「さっき、レイアとそう言う話になったのよ」

「ふうん……あ、そうだ……」

頬杖をついてユリアの言葉を聞いていた俺は、ポケットから小さな包みを取り出した。ユリアの方に押し出す。

「え？……わたしに？」

「うん、まあ……」

照れ臭いので少しそっけない言い方になった。頬を人差し指で掻きながら目を逸らす。ユリアはきょとんと翡翠色の目を見開いて包みに手をかけた。中から、強化ガラスで作られた小さな花を模った髪飾りが出て来る。ここに戻ってくるまでの間に、土産物屋で見かけた物だ。

「……可愛い……」

こんなもの、王城に戻ればユリアはいくらでも持っているんだろうけど。むしろこんなニセモノの安物なんかじゃなくて……本当に宝石で出来てる、凄いの持ってるんだろうけど……。

「……たくさん持ってるだろうとは思ったんだけど……。今は、持ってないみたいだし。女の子だから、こういう……ちょっとした時に、少しでもお洒落したいんじゃないかな、とか……」

ぼそぼそと何だか言い訳がましく言っている俺に、ユリアが大きな瞳を見開いて視線を向ける。ので、少し、居心地が悪い。何がって……俺はこれを買う元手を1円も自分で稼いだわけじゃなくって王城からもらった路銀だって辺りが……何だかなあと言う気がしなくもないんだけど……。

ま、こういうのは気持ちだと……思うし。

「嬉しい……ありがとう」

「……いえ……」

「あの、つけてみて良い？」

「あ……それは、もちろん……」

本当に嬉しそうな顔でくしゃっと笑ったユリアに、安心する。こんな安物で……悪いんだけど。でも、喜んでくれて良かった。

縛っていた髪は、今は解かれてふわふわと肩や背中で揺れている。その髪を留めるように髪飾りをつけたユリアは、ぱっと顔を上げた。

「どう？変じゃない？似合う？」
物凄く真剣に問う姿が可愛らしく、思わず小さく吹き出す。もっと凄いの、いっぱい持ってるだろうに……本当に嬉しそうで、本当に……年相応の、普通の女の子みたいで……。
「うん……似合ってるよ」
女の子にそんなふうに褒めることはあんまりないから、口にするのが少し照れ臭かった。大体俺、女の子に物をあげるの自体が初めてだ。
「ホント？嬉しい、ありがとう」
ユリアって、素直だな。
ブレストアーマーも何もなく、シンプルなTシャツとフレアミニで、ガラスの髪飾りにはしゃぐ姿に、ふとそんなことを思った。
笑顔とか、言葉とか、そのどれもが気取ってたり、ひねくれてたり、プライドが高いって言うトコもなくて、何て言うんだろう……素朴に、可愛いと思う。
『嬉しい』と口にするその言葉通りの笑顔を顔全体に浮かべて、それを見ているだけで、俺も嬉しくなるような。
「じゃあカズキ、行きましょう♪」
スキップでもしそうに軽やかに立ち上がって、ユリアが笑顔を崩すことなく俺を促す。ぼんやりとユリアを見ていた俺は、その言葉で我に返って立ち上がった。見とれていたみたいで、恥ずかしい。
「うん、そうだね……。……ユリア、『再会の酒場』って場所知ってる？」
店と宿の共用の出口に足を向けながら尋ねる。俺は散々街を歩いた割にはわからない。何せ文字がわからないので、雰囲気で酒場だと言うことがわかる店はいくつもあったが、看板を見ても店の名前がわからないのだ。るんるんと俺の前を歩くユリアが、ふわっと振り返った。
「ううん。わかんない。わたし、ギャヴァンって来たの、初めてなの」

「……」

ああそう……？ま、王女様だもんな……。

「ちょっと、聞いてくるよ」

ユリアを出入り口で待たせて、カウンターに立ったまま気だるそうに寄り掛かっている店員に店の場所を尋ねる。面倒臭そうな視線を向けた店員だったけれど、意外と丁寧に俺に答えを与えてくれた。礼を言って、ユリアの元に戻る。

「わかったよ」

「大丈夫？」

「うん。さっきその店の前を通った」

答えながら俺は、『海南亭』を出て、今さっき通ってきた道の方へ足を向けた。店員の説明から察するに、海からこっちへ戻ってくる時に通った大きな酒場が『再会の酒場』なんだろうと思われる。違ったら違ったで、またその辺の人を掴まえて聞いてみるしかないだろう。

「『再会の酒場』ってね……」

夜が近付いても街の喧騒は途切れることがない。はぐれないようゆっくり並んで歩きながら、ユリアが口を開いた。

「うん」

「港に集った海の男たちがそこでお酒を飲み交わし、友好を交わして翌日にはそれぞれの国へと戻る為にまた船に乗り込む。次はまたいつ会えるかわからないけれど、何年後あるいは何十年後かに再び『再会の酒場』で再会して……お互いの無事を祝福してお酒を飲み交わす……そんな場所なんだって」

「へえ……」

俺はさっき通りから見えた店の様子を思い出した。海の男たちが楽しそうに酒を飲み交わしていた。

「そうなんだ」

俺の言葉に、ユリアは俺を見上げて微笑んだ。

「シェインの受け売り」

「シェイン、物知りなんだな」
「物知りって言う話なら、ラウバルに勝てる者はいないわ。でも、シェインと違ってラウバルはあまり、いろんなことを語ってくれる人じゃないから……」
ラウバルか……別に口数が少ないとかそう言うわけじゃないんだけどな。無駄口を叩かないって言うか。シェインなんかは無駄口ばっかりって感じだけど。
「シェインとラウバルって、仲良いの？」
聞いてみるとユリアはくすりと小さく笑った。
「なぜ？」
「何か真逆って感じするから」
「あはッ。そうね……。でも決して仲が悪くはないと思うわ。ああ見えてラウバルはシェインを信頼しているし。尤も宰相、宮廷魔術師、大司祭は政の柱だから、仲が悪くても困るのだけど」
「ラウバルって何年くらい生きてるんだろ」
「それはわたしにもわからない」
「召還師って言うのは、みんな長寿なの？」
先ほどの酒場が近付いてきた。海にも近付いているので、潮の香りがどんどん強くなる。
「ううん。ラウバルは、特別なの。……召還師としての能力が、彼の命を繋いでいるわけじゃないから。むしろ、逆で……」
え？違うんだ？
問うような俺の視線をユリアは曖昧にかわした。まあ……言いたくないなら別に良いんだけど。他人のことをそんなに詮索するものでもないし。
「シェインとシサーは、どういう知り合い？」
ユリアがそれきり黙ってしまったので話を変える。ユリアは視線を遠くへさ迷わせながら小首を傾げた。
「……昔、ギャヴァンの街がブラックドラゴンに襲われたことがあるの」

ぶらっっっくどらごんッッッ。
「……カズキ？」
「……何でもない。眩暈がしただけ」
この旅の中で、ドラゴンに遭遇するような事態にだけは決してならないで欲しい。いや、ならない。俺が今、そう決めた。
「その時、王城から派遣されたシェインやラウバルら禁軍と共にギャヴァンの街を守って戦ったのがギャヴァンの自警軍、そして傭兵部隊。その中にシサーもいたのだと聞いているわ」
「ラウバルも、戦ったの？」
また、ユリアの顔が微かに曇った。
「戦ったわ……」
「……」
何だろう、何がユリアの顔を曇らせているんだろう……。
「ふうん……。ユリアは、シサーとは知り合いなの？」
「ええ。その戦いが終わって、シサーはしばらくレオノーラにも滞在したの。シェインの勧めで一時禁軍にいたこともあるのだけど、城仕えは向かなかったみたい」
ユリアが言葉を途切らせるのとほぼ同時に俺は立ち止まった。
「……ここだよ」
『再会の酒場』だ。一応ドアと言うものはついているんだけど、あってもなくても同じみたいな状態になっている。オープンカフェ……と言うよりはビヤガーデンみたいな状態で、ガラス張りの全面窓が豪快に開け放たれているからだ。酔っ払った船乗りが道までは み出してきている。
「な、何か怖い……」
微かに引きつった笑顔をユリアは浮かべた。
「シサーって人は、いつもここにいるの？」
「そうみたい。今は長い旅から帰って来て、しばらくはギャヴァンでゆっくりするって聞いてるわ。……入りましょうか」
ユリアの声に促されて、俺は店の扉に手をかけた。騒々しい店内

を見回す。が、知らない人を探すと言うのは非常に困難なことだ。当然だ。どれがシサーなのやら全然わかりゃしない。良く考えれば俺は、レイアに任せっ放しのつもりでシサーの外見的特徴なんかを一切聞いていないんだった。

ユリアも俺の後ろについて入ってきょろきょろとしている。そこへ店員の怒鳴り声が飛んだ。

「2人かい！？」

「あ、はい」

「空いてるところに適当に座んなッ」

ジョッキを6つくらい両手で持った恰幅の良いおばちゃんに怒鳴られ、中に足を進めながら尋ねてみる。

「すみません、シサーって人、いるかわかりますか」

「あん？何だって？」

忙しそうなのにあまり足止めするのも悪い。俺は今度こそちゃんと聞こえるようにおばちゃんの耳元で怒鳴る。

「シサーって人、知りませんか！？」

「ああ、シサー？来てるよ。そっちの壁の向こう側、奥の窓際にいるはずだ」

「ありがとう！！」

ユリアを促して言われた通りにテーブルの間を縫って歩く。この店において俺とユリアはやや異質らしく、通り過ぎるテーブルから奇異の視線が投げ掛けられた。時折ユリアにちょっかいを出そうとする手が伸びるので、それを振り払いながら進んで行く。

「シサー！！」

不意にユリアが声を上げた。テーブルの間をするするとすり抜けて走って行く。勢い置いていかれる形になって、俺は慌てて後を追った。

「ユリア！！」

混み合った丸テーブルのひとつから驚いたようにユリアの名前を呼ぶ声が聞こえる。

立ち上がった長身の人影―フリーランスの傭兵シサー、その人だった。

第1部第6話　心強い味方

シサーは浅黒い肌、鋭いシルバーの瞳の下、左頬には大きな刀傷の跡があり、ラフに伸ばされた黒髪は長く、後ろで軽く1本に束ねられていた。ゴツい大男を何となく想像していたのだが、背こそ高そうなものの『マッチョ』と言う感じでは別にない。ただ、筋肉はやっぱし凄いみたいでがっしりしている。

シサーと隣り合うようにしてエール酒のジョッキを握っているのは綺麗な感じの女性だった。淡い金色の、左右の一部だけが長い真っ直ぐなさらさらの髪に蒼い瞳。顔立ちは上品に整っている。そして……耳が長い。

「驚いたよ。シェインからちらっと話は聞いたがな。まさかユリアが来るとはこっちは思っちゃいないからな」

「ふふ。ごめんなさい」

シリーが心酔してるみたいな『超絶良い男』なのかどうかは、男の俺には良く判断がつかない。いわゆる美形って感じじゃないし。大体まだ中身を良く知らないし。ただ……頼りになりそうなムードはある。親分肌とでも言うんだろうか。面倒見の良さそうな感じの。頼りにする気満々な俺の先入観だろーか。

「とりあえず、座んな。ほらそっちの少年も」

少年……。

「はい」

言われるままにテーブルにつく。

「可愛いじゃない」

シサーの隣の女性ががテーブルに肘をつき、その手の甲に顎を乗っけながらからかうように俺を見た。ちょっと色っぽい人……あ、人じゃないのかな。

「この少年が、シェインの言ってた……？」

シサーはエール酒のジョッキに手を伸ばしながら俺をまじまじ見

つめた。
「何と聞いているかは知らないのだけど。……その……」
「ああ、別にこんだけうるさきゃ周りに聞こえやしねぇよ。……レガードの……だろ」
こくん、とユリアが頷く。
「本当に似てるな。事前に聞いてなきゃ本人だと思っちまうところだった。名前は？」
「カズキです」
「変わった名前だな」
もう聞き飽きた。
「俺はシサー。こっちはエルフのニーナだ」
エルフ。
きょとんと俺はニーナを見つめた。エルフ。……へぇ～、これがエルフなんだ。
聞かれたら殴られそうな超絶失礼な感想を内心漏らす。
ふうーん……キグナスにちらっと話を聞いたは聞いたけど、そうごろごろいるわけじゃないって話を聞いてたし、実際今までのところはお目にかかったことがない。
へえ～……ふう～ん……。一見、本当に人に近いのに、人じゃないのかぁ……。ピクシーと同じように、そうごろごろいるもんでもないのかな。
「宜しくお願いします」
俺がぺこっと頭を下げると、ニーナがおかしそうにけらけらと笑う。
「かっわいいー。めちゃめちゃ可愛いわー、このコ。レガードは良い男って感じだったけど、カズキはボーヤって感じね」
……凄く俺、男として駄目な感じ。
「そう言うな、ニーナ。……何でも、よそから来たって話だが？」
シサーが苦笑してニーナを宥めると、俺の方に少し身を乗り出した。

「……はい」
「それにしちゃ、上手なヴァルス語だ。上出来だな。……で、具体的に何をしろって？」
「『王家の塔』に行きたいの」
ユリアが低く答える。追加で頼んだ俺とユリアの分のジョッキが運ばれて来て、テーブルの上に置かれた。
「喉、渇いてるだろ、とりあえず飲めや」
言ってシサーは自分が一口ジョッキに口をつけるとユリアの言葉を復唱した。
「『王家の塔』か……」
「……レガードが、行方不明なのは知ってるわね？」
「ああ。シェインに聞いた。……驚いたよ」
「……」
「……全く、手がかりなしか？」
こくりとユリアが頷く。
「ギャヴァンまで来たことはわかっているの。その後が、全くつかめないのよ」
「……その時に俺がこの街にいればな」
ユリアは黙って首を横に振った。
「過ぎたことを言っても仕方ないわ。とにかく、『レガード』を連れて『王家の塔』に行かなきゃ」
「……」
シサーの視線が俺を向く。
「……災難だな、ボーズも」
「……」
言って苦笑した。
「……俺は」
かぶりを振って口を開く。
「俺は、災難だなんて思ってません」
「ほぉ」

「……それは……最初は何があったのか全然わけがわからなくて。この世界のことなんか何も知らないし……帰りたいのは、今でも同じですけど。……でも」

言葉を切る。でも……。

人ひとりの命が、俺の肩にかかっているってことは、今の俺は理解している。

「……人の、命がかかってるから。俺で出来ることなら、ちゃんとやります」

シサーとニーナが黙ったまま俺を見つめた。その口元がふっと笑う。

「……言うな」

「本心です」

「良いだろう。『王家の塔』に行き、カズキに『王の証』を受けさせれば良いんだな」

「長い旅から帰ったばかりと聞いているのに、悪いのだけれど」

ユリアが頷いた。ニーナが肩を竦める。

「ご冗談。この人、3日も平和に過ごさせておけばもう次の旅のことを考えてるわよ。シェインに言われたからギャヴァンに落ち着いてあなたたちの到着を待ってたけどね。全く……落ち着きないんだから」

横目で睨むニーナに、シサーが肩を竦めた。俺に目配せする。

「女は怖ぇ」

「何よ？」

シサーとニーナって、恋人同士なんだろうか。やっぱり。

シサーはそれから、いろんな話を語ってくれた。ニーナと共に出た数々の冒険譚。それらは異世界にいて尚異世界の話だった。まさに、映画か本の英雄譚のようだ。それを目の前の戦士が淡々と、自分の経験として話してくれる。

それによると、シサーは元々ローレシアの人間ではなく、ラグフォレスト大陸の人間なのだそうだ。家を出奔して最初に訪れたのが

ここ、ギャヴァンで、今はギャヴァンを根城にしてふらっとあちこち行ったりしているらしい。
　シサーの話は、シェインやラウバルと共に戦ったと言う黒竜グロダールの話にも及んだ。
「この世界には伝説に残る竜が何匹かいる。グロダールはそのうちの１匹で、最も狡猾で頭が良い。人語も理解するし言霊魔法も使える。性格もひどく狂暴だしな。恐らく最強のドラゴンだろう」
　どこで覚えちゃったの？言霊魔法なんて。迷惑な。って言うか、そんな恐ろしいイキモノ、既に倒されてくれてて良かった。
「当然ギャヴァンの自衛軍だけで何とかなるような代物じゃないし、ギャヴァンはヴァルスにとっても重要な貿易都市だからな。王都から禁軍が派遣されてきた。その中にシェインもラウバルもいたんだ」
　宰相のラウバルが派遣されるくらいだから、どれほど王都が警戒していたかわかるような気がする。……あれ？でもそれっていつの話なんだろ？年齢不詳なラウバルはともかく、シェインは今２０いくつだろ？
　聞いてみると、シサーはもう何杯飲んでるかわからないにも関わらず、けろっとした顔で頷いた。
「１０年近く前の話だな。俺はまだ家を出て傭兵稼業を始めたばかりだったし、あいつはまだ見習い魔術師だった」
　見習い魔術師なのに、禁軍と一緒に派遣されちゃったわけ？
　俺の疑問には気が付かずシサーは続けた。
「さっきも言ったがグロダールはひどく狡猾だ。真っ当にやっていたんじゃ勝てやしねえ。そこで、遊軍が設けられた」
「遊軍？」
「本陣から切り離されて、その指示に囚われることなく状況判断して戦うことを許された別動隊だ。人数は少ないし、状況判断をしなけりゃならないから生半可な奴じゃあ壊滅になる。そこで本陣から精鋭１０名が遊軍に抜擢された。そして俺ら傭兵部隊が３０名。その１０名の中にシェインはいた」

「え!?禁軍って何人いるの?」
「5千だったかな」
シサーの言葉にユリアが頷く。
じゃあ……シェインて見習いにも関わらず5千名の中からたったの10名のうちに抜擢されちゃったのか?
「その通りだ。とは言え、本陣には要人がいる。本陣だって手薄にするわけにはいかないからな。5千名のうちの上から10名とかそう言う話じゃないが。まあ、精鋭と見なされていたことには違いない。……あいつは、特殊だからな」
「特殊?」
「あの時点で既にその父をも祖父をも凌駕すると言われた才能の持ち主だ」
しょえー……。
「じゃあ、その遊軍で、シェインと?」
「ああ。そうでもなきゃ5千もいる禁軍の、しかも代々宮廷魔術師を務めるお貴族様と一介の傭兵に過ぎない俺なんかが目通りが適うわけねえだろ」
そ、そう言われればそうかもしれないけど。お貴族様か……。
「遊軍はグロダールの攪乱に成功はした。だがこっちもかなりの痛手を負った。その時、俺と行動を共にしたのがたまたまシェインだったんだ」
「へえ……」
「あいつと共に死地を切り抜け、遊軍の働きの甲斐もあってグロダールは見事倒すことが出来たってわけだ」
凄いな……本当に命を賭けて戦い、それを切り抜けた人なんだ……。
俺が何となくしみじみとエール酒の泡が弾けるのを見つめていると、シサーが不意に語調を変えた。
「シェインの魔法を目の前で見たことがあるか」
黙って首を横に振る。否定の意を返す俺に、シサーはにやりと笑

った。
「そのうち見る機会もあるかもしれん。……楽しみにしているんだな」

◆◇◆

明日の朝からすぐに『王家の塔』へ向かうことが決まり、街の外れにあるという家に戻るシサーたちと別れて俺はいったんユリアと共に『海南亭』へ戻ると、残念ながら宿にはなかったものの近くに公衆浴場があると言うのでそこへ向かった。
3日間の汚れを落としてさっぱりした俺が部屋に戻って荷物をベッドの上で広げていると、ドアがノックされる。
「ユリアです」
他に訪問する人間に心当たりはない。
「今開けるよ」
荷物を散らばしたままでドアの鍵を開ける。ユリアも浴場へ行ったのか、まだ濡れている髪をくるんと束ねて俺を見上げていた。
「どうしたの？」
「今ね、シェインと交信してて。その……『遠見の鏡』で」
「ああ、うん」
「カズキを出せって言うものだから。……今、良い？」
「わかった」
ユリアは俺に鏡を手渡すと、「明日戻してもらえれば良いから」と隣の部屋へ消えて行った。……渡されても、俺には交信の仕方が良くわからないんだけど。
首を傾げながらドアを閉め、鏡に目をやるとそこにシェインが映りこんでいた。
「わ」
「何だ、その反応は」
「いるならいるって言ってよ」

「さっきからずっとおるわ」
俺は荷物を放りっ放しのベッドの上に鏡を立て掛け、自分は床に直接胡坐をかく。これで目線の高さが同じになった。
「何」
「……俺がいないのを良いことに、ユリア様に妙な真似をしておらぬだろうな」
……。
「色情狂のシェインと一緒にしないでくれる？」
がくりとシェインがうなだれた。
「馬鹿を言うな。俺は玄人専門だ」
稀代の天才魔術師は堂々と言い放った。……それもどうよ？
「ま、それはともかくとして。……シサーと無事合流出来たそうだな」
「うん」
「大過ないか」
最初にウォーウルフに襲われて以来、特にこれと言って災難は起こっていない。
「うん。大丈夫。ありがとう」
「そうか……」
シェインは少し考え深げな顔をした。真面目な顔付きで俺を見る。その瞳に、少し優しげな色が宿った。
「……ああ見えてもユリアは温室育ちだ」
シェインがユリアを呼ぶ時、「様」がつくのとつかないのと混在するのは幼い頃に共に遊んだと言う、その辺に理由があるんだろうか。つまり公的な場、公的な話では王女として……そして私的な話としては……友人として。
「さぞ、心細かろうと思う。心を砕いてやって欲しい」
「……うん」
「何かあれば俺は、ユリア様はもちろんのこと、おぬしの力にもなろう。こちらの状況としても、ちょっと俺はここをおいそれと離れ

るわけにはいかぬようなのでな。おぬしを頼るしかないのだ。……明日、『王家の塔』に向けて旅立つのだろう」

こちらの状況……何かあったんだろうか。政治的なことなのかな。

「そう」

シェインは視線を俺から逸らしてどこかを見つめた。顎に手をやり、少し深刻そうな顔になる。

「気をつけろ」

「え？うん……」

それは改めて言われなくてもそうするけど……。何か深い意味がありそうだ。

「何やら、妙なことが起こっていそうなのでな。何かあれば、すぐに俺に教えてくれ。俺もわかったことがあれば伝えよう」

「うん。わかった」

俺が頷いたのを見てシェインは微笑むと、また視線を外して考え深げな顔付きに戻った。

小さく、呟く。

「……何事も、起こらなければ良いのだが……」

◆◇◆

セラフィの視線がふと動いた。淡いブルーの短髪に襟足だけが少し長い。年の頃は２０代半ばだろうか。陽気な雰囲気だ。だが、あどけなささえ感じさせる髪と同じ色のくりっとした瞳の奥には酷薄な色合いが秘められている。すっきりとした頬に形の良い唇、整った顔立ちをしてはいるが、どこか作り物めいて見えた。

「人の部屋に入る時にはノックくらいするものだよ？」

いつ姿を現したのか、趣味良く整えられたその部屋の片隅に蹲るような黒い人影があった。

「……バルザック」

セラフィの呼び掛けに応じるように、バルザックと呼ばれた黒い

人影が顔を上げる。だが、深く被ったフードのせいでその顔までは良く見えない。
「まだ、行方は掴めないのかい？」
「……」
バルザックは無言だ。セラフィは、その陰気な沈黙に辟易したように肩を竦めた。
「その陰湿な雰囲気、何とかならないのかい。せめて僕に会う時くらいは明るい笑顔をして欲しいものだね」
バルザックはその言葉にも何の反応も示さなかった。セラフィは諦めたように読みかけていた書物をソファに置くと立ち上がった。ゆっくりと窓際に立ち腕を組む。
「……どこかで死んでいてくれれば、それはそれで好都合。けれど、他の誰かの手にその身柄が渡っているとすればそれはひどく僕にとって不都合だ。……わかっているな？」
外は既に闇に没している。窓に映ったセラフィの視線が、窓越しにバルザックに注がれた。
「……己の汚名は己で雪いでもらおう。不手際を後世まで伝えられたくなくば、確実にその息の根を止めてくるんだな」
先ほどまでの陽気な口調とは一転した、怜悧な声。バルザックが身動ぎした。
「組んだことを、後悔させないでもらおうか」
「……何やら、妙なことが起こっていそうだ」
「何？」
初めて口を開いたバルザックにセルフィが訝しげな問いを発した。低くしゃがれた声が続く。
「私は契約通り出来ることをしよう。……しかしそなたも、油断をせぬことだな」
「無礼なッ……」
セルフィが怒りに燃えた目をバルザックに向けるべく振り返った時には、バルザックは姿を消していた。軽く舌打ちをして、窓に寄

り掛かる。
「やれやれ……陰気なじーさんだな、もう」
ぶつぶつと呟き、それからふと考え深げな視線を宙に彷徨わせた。
「……妙なこと……？」

第1部第7話　守りたい人（1）

『王家の塔』のある風の砂漠へは、ギャヴァンから北東に向かう。ナタが、「魔法石がごろごろ落ちている」と教えてくれた、ヘイズの十字路を東に向かうと突き当たる険しい山キサド山脈を越えて向こう側に広がっているのだそうだ。

俺たちは道沿いにゆっくり北東へ向かって進んでいた。時折、行商人らしい大きな荷を背負った旅人とすれ違う。

レイアをつれたユリアとニーナは、くすくすと笑い合いながら少し前を行く。俺はシサーと肩を並べながらその後ろをのんびりと歩いていた。

今日も天気は良い。こっちに来てから、総じて天気には恵まれていると思う。

キサド山脈に続く道は左右が割と平坦な草原なだけあって、左手……北西の方角には遠くに浄化の森が見えていた。それが少しずつ移動していくのを視界の隅で見ながら、ピクニックにでも行くような気分で歩を進める。

歩きながら俺は遭遇し得る魔物について、シサーに講釈を受けていた。聞いたからって何が変わるわけでもないけど、聞かないよりはましと言うか……心の準備が出来ると言うか。

「王都近辺は俄然ワンダリングモンスターが減る」

「何で？」

「王都を守備する衛兵や騎士に駆逐されるからな。騎士団とばったり遭遇でもしてみろ。あっと言う間に討伐される」

それもそうか。

「それに、監視塔からは衛兵と魔術師が警戒していて、王都に魔物が近づけば即魔法が飛んで来る。神殿もあるし、浄化の森に魔物は入れない。まあ、住み良い環境とは言えないだろうな」

まあねえ……オチオチ食事にも出られないよなあ……。

「全く出ないってわけにはいかないけどな、もちろん。圧倒的に減るってだけで。……それが、ヘイズ辺りまで王都から離れて南下すると少しずつ魔物も増えてくる。この辺りで出るのは、レオノーラ近辺のウォーウルフ、ウガルルム、ゴブリンに加えてホブゴブリン、コカトリス、ワイバーンなんかだな」

言ってシサーはそれぞれの説明をしてくれた。

「……ドラゴンがさ、何匹かいるって言ってたじゃない？」

まだ海に程近いこの辺りは潮の香りがしていて、ところどころに名前のわからない花が咲いていた。ぽつりぽつりと見られる大きな木が太陽の光を和らげるよう、風に揺れている。北の、遠くの方に、何だか鬱蒼とした森が少しだけ見えていた。

ワイバーンと言う小型の飛竜の話を聞いて、昨日シサーが話してくれたことを思い出した俺が尋ねると、シサーは首肯した。

「ああ」

「遭遇することって言うのは、あるの？」

シサーは鋭い目にからかうような笑いを浮かべて俺を見返した。

「気になるか？」

「そりゃ……まあ……」

だってそんなもんに出て来られた日には、一挙にオダブツだ。いくらシサーが凄腕だつったって……。俺は役に立たないし。グロダールの時だって、禁軍5千名プラス傭兵部隊とギャヴァンの自衛軍がいたんだろ。

「ドラゴンは黒竜、青竜、緑竜、黄竜、白竜の5匹と言われている」

俺の質問に直接は答えずにシサーは言った。俺も黙って聞く。

「ドラゴンは活動期と休眠期を繰り返す。休眠期の方が圧倒的に長い。その眠りは数百年とも数千年とも言われていて、今はその全てのドラゴンが休眠期に入っている。遭遇することは、まずない」

良かったあ……。

「いつその眠りから覚めるかは誰にもわからんから何とも言えないが……仮に目覚めたとしても、ドラゴンはその住み処から大きく離

れて活動することはまずない。ヴァルスに住むドラゴンはいないし、大丈夫だろう」

「でもじゃあ、グロダールはどうして」

シサーは軽く肩を竦めた。

「さあな。ドラゴンの気持ちなんて俺にはわからんよ。……黒竜グロダールは元々ローレシアとラグフォレストの間を南下したところにある黒竜の島ヘルザードに住んでいた。活火山の島だ。眠りから覚めて、何を思ったかギャヴァンへ向けて北上して来やがったんだ」

「へえ……」

腹でも減ったんだろーか、やっぱり。

「他のドラゴンはどこに？」

「白竜トラファルガーは氷の大陸フレザイルに住んでいる。これは氷竜だ。青竜リヴァイアサンはトートコースト大陸の南東アグナガイル諸島の海底。こいつは水竜。黄竜サンドストーンは俺の故郷ラグフォレスト大陸の北、砂漠のダンジョンに住んでいる地竜だ。緑竜イナラシュはトートコースト大陸の森の中に住んでいる。こいつは風竜だな」

「じゃあ、グロダールって……」

「火竜だ。ドラゴンブレスと呼ばれる強力な炎を吐いて飛び回る、とんでもなく迷惑な奴だぜ」

迷惑とかそういう次元と何か話が違うと思う。

風の砂漠に辿り着く為に越えなければならないキサド山脈のふもとにはリノと言う小さな村があると言う。今俺たちはそこをとりあえず目指していて、ギャヴァンからは5日ほどの行程だと言うことだった。つまり、野営を余儀なくされると言うことだ。

ふわふわと風に揺れるユリアの髪を眺めながら、俺は再び口を開いた。

「風の砂漠ってさ」

こちらに来てから1ヵ月以上が経過したとは言えまだわからないことだらけの俺は、とにかくこちらのことを出来るだけ知ろうと思

っていた。努力をしなければ知識は身につかない。わからないことは聞くしかない。

「海沿いにあるんじゃないの？何で砂漠になっちゃったの？」

「海沿いにあるにはあるが、海と遮るようにキサド山脈がそっちまで広がってる」

う。何てでかいんだキサド山脈。

「キサド山脈は標高もかなりあるから、西や南の海上から来る湿気を含んだ風は、暖かい気候も手伝ってこちら側で雨に変わり、山脈上方の冷えた空気で今度は雪に変わる。東側から来る風も同様だ。海側を廻る山脈に阻まれる。北側から来る風は逆に海上で温められて雨となって海に消え、乾いた風が山脈にぶつかって昇り切ることが出来ず、東から来る乾いた風と対流を起こしてぐるぐる回る。風が回れば土が定着しないから、結果として砂漠が出来上がる」

シサーは旅慣れているせいか、いろんなことを良く知っていた。俺が問うことに対して言葉に詰まるということがあまりない。

「ふうん」

風の砂漠と言うネーミングはその辺りに理由があるのかななどと思っていると、不意に視界の隅で白っぽい光が見えた。……シサーの剣が、正確にはシサーの剣に刻まれたルーン文字が光を放っている。

「……おいでなすったようだぜ」

え？と思った時には、俺たちの上に陰が落ちていた。巨大な、飛行機のような形いや……爬虫類？そう思った時にはばさっと言う羽音が聞こえた。

「ワイバーンだッ」

言うなりシサーは俺を突き飛ばした。自分も反対側に飛び退り、それと同時に腰の剣を抜く。一瞬後、さっきまで俺がいた場所を鋭い鉤爪が襲った。地面を抉り、激しく土を跳ね上げる。

「カズキ！！」

「えッ！？」

咄嗟にどうすれば良いのか判断に困った俺に向かってシサーが怒鳴る。それに答えながら魔物の正体を見ようと顔を上げた俺は、思わず凍りついた。

ひ、ひぇぇぇぇぇ……。

「ユリアを守れ！！」

「軽やかに踊る風の精霊シルフよ、その身を障壁の渦と変えよ。フェレンティース！！」

シサーの声と、俺の背後からニーナの声が同時に飛ぶ。ふわり、と風が俺の周りを固めたのを感じた。防御魔法らしい。

恐竜をイメージさせる巨大なトカゲに羽がついたようなそのイキモノは、シサーの剣を避けてふわりと体を舞い上がらせた。緑色の瞳と土色の鱗で覆われた肌、全長は3メートルかそこらあるんじゃないか？顔面を裂いたみたいなでかい口には剣山のような鋭い牙が覗き、その巨躯からすれば申し訳程度についている手には見合わない巨大な鉤爪が光っている。

ひ、ひぃぃぃぃ……あんなもんが今し方俺に襲い掛かったのか？死んじゃうじゃん。

ニーナがレイピアを抜いて、シサーを援護する為に駆け寄った。それを視界の中で認めながらついつい呆然とする。

が、突き飛ばされたまま座り込んで、剣を翳すシサーとそのありえない恐ろしいイキモノに腰を抜かしかけていた俺は、はっと我に返った。

そうだ、ユリア……。

立ち上がって、後方で身を竦めるようにしているユリアに向かって走る。走りながらも膝が笑う。……怖すぎるって！！！！

「ユリア！！」

「カズキ……」

ユリアは顔色が蒼白だった。胸元に手を寄せ、震えている。レイアがユリアを守るようにその顔の前に立ち塞がっていた。

「軽やかに踊る風の精霊シルフよ、心猛りし者の動きを封じ込めて

！！ウィンクルム！！」

呪文を唱えるニーナの声が耳に届いた。ワイバーンの獰猛な唸り声と羽音が背後から間断なく聞こえる。振り返るとシサーが飛び上がってワイバーンを切り付けたところだった。ワイバーンが恐ろしい雄叫びを上げる。その雄叫びだけで、恐怖に泣きたくなる。

……しっかりしろよッ、俺ッ……。

俺には何も出来ない。何も出来ないんだからせめて、ユリアを安心させて……。

ワイバーンがこっちに向かって来たらどうにもなんないけど、せめて精一杯の意地でユリアを背後に庇いながらシサーたちを見つめた俺は、必死で思考を巡らせた。

本当に出来ることは何もないのか？何か、何か出来ること……。

かたかたと震える全身に力を込めるが、却って痙攣しているようになるだけだ。全身の震えを押さえ込みながら考えを巡らせた俺は、はっとアギナルド老にもらった皮袋を思い出した。

そう、俺は確か、魔法石を持ってる……！！

思い出して、慌てて荷袋を漁る。焦って震える手がうまく動かず、なかなか見つけられない。ワイバーンはシサーの剣を受けてずたずたになりながら、咆哮を上げて上空へ舞い上がった。シサーの舌打ちが聞こえる。

（――あったッ……）

魔法石の数は１０個。何でもいい、とりあえず袋に手を突っ込んで石を掴み出す。出て来たのは紫の大きい石、効果は確か……。

「『風の斧』！！」

シサーに注意を喚起すべく、叫んで石をワイバーンに向けて投げつける。ワイバーンに踊りかかろうとしたシサーが俺の言葉に身を引いた。魔法石が炸裂する。

「ギャアアッ」

巻き起こった風がワイバーンの巨大な翼を切り刻んだ。凄い効果だ。ワイバーンの巨体を持ち上げる巨大な羽は、鋭い斧となった風

に切り裂かれその役目を果たすことが出来なくなった。体を支え切れずに地面に墜落する。重い音が響き、地面が振動した。

シサーがすかさず剣を振り翳して飛び掛った。墜落したワイバーンが、それでも態勢を立て直して鋭い鉤爪をシサーに向けて奮う。それを剣で受け止めるが、シサーの体が横に吹っ飛んだ。

「軽やかに踊る風の精霊シルフよ、その姿を刃に変えよ！！ウォラト！！」

「軽やかに踊る風の精霊シルフよ、その姿を刃に変えよ！！ウォラト！！」

ニーナとレイアから同時に魔法が飛ぶ。ダブルでシルフの攻撃魔法を受けたワイバーンは全身にずたずたの傷跡を刻んでいた。再び、雄叫び。開いた口から鋭い牙が無数に並んでいるのが垣間見えた。シサーが踊りかかる。白く光を放つ剣が深々とワイバーンに突き刺さり、その巨体が盛大な地響きを上げて地面に叩きつけられた。

「っしゃあ、終了っと……」

「ちょっと手際が悪かったわね」

「うるせぇ」

ずしーんと言う音と、シサーがとんっと軽く地面に着地する音が重なる。思わず固まったままその一連を見つめていた俺は、痙攣しているみたいだった全身の震えが次第に収まっていくのを待った。

心臓は、未だばくばくだ。既に命尽きたワイバーンの死体が崩れ落ちている、それを目にするだけで背筋を恐怖が這い上がる。

こ、こ、怖すぎる……。

「……ユリア」

引きつった顔でそれを見遣り、それからはっと思い出して背後のユリアを振り返った。真っ青な顔で目に涙を浮かべたユリアは、先ほどの俺以上に激しく震えている。

「ご……ごめんなさ……」

「え、何で」

何を謝られておるのか俺は。

「わ、わたしだけ、何も……何も出来なくて」
俺だって別に大したことをしちゃいない。言っちゃナンだが石を投げただけだ。
「……は、初めてだから、ま、魔物……見たの……」
「え!?そうなの!?」
俺の問い返しに、ユリアはこくりと頷いた。まだその顔色は青褪めている。本当に深窓の令嬢なんだなあ。この世界の住人で魔物を見たことがないのって稀有なんじゃないだろーか。
細い肩を震わせるユリアの姿に、少しだけ、保護欲が刺激される。
……怖い思いを、させたくない。
「俺……」
「え?」
「……」
口から出そうになった言葉を、飲み込んだ。ユリアが言葉の続きを待って目を瞬く。
……強く、なりたい。
ユリアに、怖い思いをさせることがないよう。
俺が守ってあげるからなんて偉そうなこと、今はまだ、言えないけど。
「何……?」
儚い掠れた声が、俺の心をくすぐる。
「……何でもない」
まだ全然頼りないのはわかってる。シサーがいなかったらどうなったことだろう。でも、シサーがいないんじゃどうにもならないんじゃ……駄目だ。ユリアと一緒になって震えてるんじゃ、話にならない。俺自身がちゃんと、強く、ならなくちゃ。
思いながら、ワイバーンの死体を振り返った。背筋をぞっとするものが這い上がるのは否定出来ない。
でも、守りたい。
俺が、守ってあげたい……。

「ユリア、大丈夫？」
不甲斐ない自分にそっと唇を噛んでいると、シサーと共に後ろを歩いていたニーナが駆け寄ってきた。ユリアが小刻みに頷く。
「その顔色じゃ、大丈夫じゃないみたい。……安らぎの乙女ドライアード、怯える者に安らぎを与えよ。コンコルディアー」
ニーナが優しく呪文を唱えると、青褪めていたユリアの顔色が戻って来た。かたかたと小刻みに震えていた体も落ち着きを取り戻している。
「……あ」
「どう」
「もう、大丈夫。……ありがとう」
ユリアの言葉にニーナはにっこりと微笑んで応えた。
「何、したの？」
「ドライアードは森の乙女であると同時に安らぎの精霊。ユリアの心に安らぎをもたらすよう魔法をかけたの」
「そんなことが、出来るんだ……」
凄いな、魔法。便利だな。
シサーとニーナは頼りになる。それは、確かだ。
でも、じゃあ、俺は？
俺はこのまま、シサーとニーナの庇護に甘んじて、ユリアと一緒に守ってもらって、それで、いいのか？
（強くならなきゃ）
ひとりじゃない。少なくとも、シサーとニーナがいる。怖いと思う気持ちがあるから、動きが制限される。……恐怖を跳ね除けなきゃ、俺はいつまで経っても、ユリアを守ってやれることなんか出来やしない。
ぎゅっと目を瞑った。
ひとりで戦うわけじゃない。剣の使い方さえ覚えれば、俺は、運動神経だって悪くはない。
……怖がるな。

◆◇◆

魔物と戦闘した後は、その屍肉の臭いを嗅ぎ付けて他の魔物が寄って来ることがあると言う。
速やかにその場を離れることにして再び北東へ向けて道をゆっくり歩きながら、俺は隣を歩くシサーを見上げた。
「シサー、ありがとう」
「へ？」
俺の言葉にシサーは目を丸くした。
「助けてくれて」
「どうせやらなきゃ俺だってやられちまう」
くっくっと笑いながら言うシサーに、俺は首を横に振った。
「最初、突き飛ばしてくれなかったら俺、簾になっちゃうとこだったし」
「ああ、それか」
「うん。……シサーの剣、光ってたね。何か、あるんだ？」
頷いて目線をシサーの腰から下がった剣に注いだ。今は光も姿を消し、ひっそりと鞘に納まっている。
「ああ……魔剣なんだ、こいつは」
「え！？」
噂の？
「『グラムドリング』と言う魔剣さ。魔物が近付くと、刀身に刻んであるルーン文字が光って告げる。切れ味も一気に増す」
「へえ……」
「エルヴンソードの１つだ」
エルヴンソード？
俺が目をぱちくりさせてシサーを見つめると、シサーはグラムドリングを抜き放った。光を受けて反射するその刀身には、文字が刻まれている。

「その昔、仇敵ゴブリンを倒す為にエルフの鍛冶屋が鍛えた剣のことを総称してエルヴンソードと言う。人間界にあるのはほんのわずかだが、そのうちの1本をたまたま手に入れることが出来た」

「へえ……そうなんだ」

またひとつ賢くなってしまった。

ただただ草原が広がるこの辺りは、所々に小高い丘や岩場などの起伏もあるけれど総じて見晴らしは悪くない。左手の遥か遠くに見えていた浄化の森がかなり後方まで下がった頃にはすっかり日が落ちていた。

「……どうするの、今夜」

「もう少し行くと小高い丘がある。斜面にちょっとした窪みもあってぱっと見、姿が見えない。丘のてっぺんからは、ま、大した高さじゃないから言うほどじゃねえけど平地よりは見晴らせるしな。そこまで行って野営をしよう」

第1部第7話　守りたい人（2）

シサーの言う小高い丘はすぐに見付かった。そこを上りきると反対側の斜面に窪みがあり、右側に折れ曲がっているので外からはすぐには姿が見えない。奥がそれほど深いわけでもないから、何か魔物の巣穴とかそういうのを警戒する必要もなさそうだった。

「今日は食料になりそうな小動物とは遭遇出来なかったからなあ。携帯食で我慢するっきゃねーか」

窪みに荷物を下ろし、シサーが伸びをした。

「カズキ、枝を集めに行こう。一緒に来い」

「あ、うん」

「ニーナ、ユリアを頼むぞ」

「任せて」

シサーについて丘を来た方向とは反対側に下る。遠くに真っ暗な海が見えた。

こっちの世界は俺の世界と違って人が多分少ない。魔物と言う、生態系で人間を捕食する生き物がいるせいでどんどん増加することが出来ないのかもしれない。街も、土地の割りには多くなく、明かりもあるわけじゃないから街や村の間はひたすら暗く闇に支配されている。

丘を離れて少ししたところにある灌木の生い茂る茂みに入り込み、潅木に混ざって生えている背の高い木の間を縫って落ちている枝を探す。

「魔物に気をつけろよ」

「うん……」

気をつけるってこの場合どうすれば良いんだろう。

黙々と枝を拾いながら、ぼんやりとさっきのシサーの戦いを思い出していた。鍛えられた戦士ならでは、とても言うんだろうか。無駄のない動きをしていた。相手を見据える目線。反射的に体を動か

す神経。
　慣れ、ってのは、あるだろう。でもそれだけじゃあユリアを守れない。俺が克服しなきゃならないのは、まず、恐怖だ。
　見たことのない生き物に対する恐怖。命を脅かされる恐怖。その全てが、俺の動きを封じ、視野を制限する。
　このまま、シサーたちに甘んじてたって何とかなるんだろう、きっと。だけどそれじゃあ、嫌だ。じゃあ、どうすればいい？
「カズキ」
　そんなことを考え込んでいて、俺はシサーが俺のすぐそばにいることに気が付かなかった。魔物に気をつけるも何もあったもんじゃない。密やかな声で呼ばれてはっと顔を上げると、シサーが静かに、と言うように人差し指を自分の口に当てた。
「え？」
　つられて俺も小さな声で問い返す。シサーは体を屈めろと言うような仕草をして自分もその場に片膝をついてしゃがみ込んだ。
……？
　わけもわからず、拾い集めた枝を落とさないようそっとしゃがみ込む。見ると、シサーの視線は潅木の茂みの向こう、もう少し高い木々が生い茂った海際の絶壁の方へ注がれていた。俺もそちらに目を向ける。息を飲んだ。
　ともすれば木々に隠れてしまいそうな小さな体。暗がりで詳細は良くわからない。けれど、つるっとした感じの頭に大きな尖った耳、そして暗闇の中でぎらぎらと光る目だけが見えた。……何だ、あれ……。
　心臓が、どきどきした。ぞわーっと全身に鳥肌が立つ。考えているそばから、この恐怖だ。克服することなんか出来るんだろうか。
　シサーは冷静そのものの顔で魔物を見据えている。
「ゴブリンだ」
　ゴブリン……。
　数えてみると、６人……いや、６匹だ。何かごちゃごちゃと得体

の知れない言葉を吐き出しながら、がさがさと茂みの間を縫って行く。じっと息を殺して、その背中が遠ざかって行くのを見つめていた。手に汗が滲むのが、わかった。

「……もういいだろう」

やがてシサーがぽんと俺の肩を叩いて立ち上がった。笑顔を俺に向ける。

「あれが噂に名高いゴブリンだ」

「……強いの？」

「いんや？大したこたぁねぇけどな……集団になってることも多いから、見付かるとちっと面倒だ。耳も良ければ鼻も良い。目は大して良くねえが。ついでに言えば、しつこい。小賢しいから武器に毒を塗りつけてたりすることもある」

けろっとした顔で苦笑する。その余裕な姿を見て、俺ははあっとため息を落とした。俺は全身に鳥肌が立ったって言うのに……。

シサーと共に枝を抱えて丘に戻り、火を焚いて野営の準備をした。ギャヴァンから持ってきた干し肉とパンを火で炙っただけの簡単な食事だったけど、1日中歩いていたせいかひどく美味しく感じる。

やがてニーナとレイア、そしてユリアが窪みに潜り込んで眠ると、俺はシサーと2人で黙って焚き火の火を見つめていた。時折シサーが棒で火が消えないように調整しながら枝を足す。どこかで虫が鳴いていた。

「……お前も寝ていいぞ」

「でも……」

「明日も1日歩きだ。休んでおける時に休んでおかないとキツくなる」

「……うん」

膝を抱えてぼんやりと炎が揺れるのを眺めていた。レオノーラを発って初日のウォーウルフ、そしてさっきのワイバーン、ゴブリン。

「……シサー」

「あん？」

「俺に、剣の使い方を教えてくれないかな」
「……そりゃあ構わねえけど」
言って、また小さな枝を放り込む。パチパチと枝の爆ぜる音の間を縫って、時折遠くから波の音が聞こえてきた。潮の香りこそもうしないけれど、風が音だけを運んで来る。そのくらいの、距離。
黙って慣れるのを待っているんじゃあ、進まない。
ユリアを、守りたい。
特別な感情とかそういうんじゃなくて、そうじゃなくて、女の子のひとりくらい守れないんじゃあかっこ悪いだろう。
……そう、別にそれは、特別なことじゃない。
怖い思いを、させたくないだけだ……。
「……ユリアに、怖い思いをさせたくない」
「……」
ぽつっと小声で落とす俺に、シサーが無言で目を丸くした。
「ふ、深い意味があるわけじゃない。そういうのじゃ、ないけど……」
「……」
「……情けない」
同年代の男にだったら、言えなかったかもしれない、こんなこと。圧倒的に俺より頼りになり、優れていると思えるから、素直に負けを認められる。そうじゃなきゃ、こんなこと、言えるかよ……。
しばらく、シサーは答えずに黙っていた。時折、ぱきんと枝を追って火の中に放り込む。
「……ラグフォレスト大陸のな、シュートって小さい町があるんだよ。一応港町なんだけどな」
「……？うん」
やがて、シサーが口を開いた。唐突に話が始まったような気がして、とりあえず曖昧に頷く。顔を上げると、焚き火の炎がシサーの精悍な顔を照らして揺れた。深い陰影を落とすその顔には、何の表情も浮かんでいなかった。

「俺はそこで育った。小さな町だけれど、商人の多い町でな。俺の家も例外じゃなく商人の家だったんだ」
「へえ」
「それも結構裕福な家で……兄貴がいるんだよ、俺には」
「うん」
言われて、ふと自分の弟を思い出した。6歳も年下の拓人。えっらいブラコンな弟で、俺の後ばっかりついて来てはすぐに俺の真似をしたがる奴で。でも……可愛くて。
どうしてるだろう。俺がいなくなって、泣いたりしていないだろうか。
「これがまた優秀な兄貴なわけだ。裕福な商人……ま、商家って言うんだけどな、商家の人間の考え方では、身は自分で守るものじゃない。金で雇った人間に守らせるものなんだ」
つまり金持ちなわけだ。豪族とかそういう感じの考え方で良いんだろーか。
「俺には、合わなくてな。……何か飲むか」
微かに顔を俯けて苦笑したシサーの横顔が寂しげに見えたのは、俺の気のせいか……？語調を一転して水筒の水を小さな鍋に注いで火にかけシサーの顔は既にいつも通りだった。
「うん。ありがとう」
「それで家を飛び出したは良いが、こっちはそれまで学校に放り込まれてお勉強しかしちゃいねえ」
……学校で勉強ばかりしているシサーと言うのも想像がつかない。
「剣なんか一度だって触ったことなんかなかったんだ。……今のお前さんと、一緒だ」
……あ。
目を見開いて、動きを止める。
どうしてシサーが突然こんな話を始めたのかが、わかった。俺の気持ちを汲んでくれてるんだ。
「何をして良いのか、全然わからなかったな。……俺が強くなった

のは多分……」
　シサーはそこで一旦言葉を切った。視線を窪みの方へ向ける。
「ニーナと出会ってからだ」
「……」
　意味するところを掴みかねて、俺はシサーを見返した。窪みからこちらに視線を戻して口元に笑みを浮かべる。
「出会った頃、あいつは俺なんかより遥かに戦い慣れしててな。傭兵稼業を始めて半年したくらいか。まだまともな戦闘なんかろくに体験しちゃいなかったし、ニーナはエルフとしてはまだ若くてもこっちに比べりゃ何倍も生きている。生れついてのエレメンタラーって要素もある。経験値が全然違ったんだよな」
　コトコトと言う音が聞こえてきた。火にかけた鍋の中で、小さな泡が無数に生れては消えていく。
「けど、悔しいんだよ、これが」
「……うん」
　その気持ちは痛いほどわかるので、素直に頷いた。
「守りたいと思う人が出来た時、強くなれるんだと思うぜ」
「……」
「尤も、思うことが強くするわけじゃねえけどな。そんなことで強くなれるんだったら、誰だって苦労はしねえんだよ。そう思えば、強くなるよう努力する。それが人をあらゆる意味で強くする。綺麗ごとじゃ、ねぇと思うぜ、俺は」
　さっきよりも激しく大きな泡を幾つも生み出しては消えていく、鍋に沸いたお湯を取り上げて、食事の時に使って置かれたままのカップを手元に引き寄せた。カップにお湯を注ぐと鍋を地面に置き、荷袋の中から小さな布袋を取り出す。中には乾燥させた植物の実が入っていて、それをお湯に溶かすとコーヒーに近い味がすると言うことを、俺はギャヴァンで知った。コカの実、と言うらしいんだが。
「大切な人を守る為に、自分が強くなれ」
　カップのひとつを俺に手渡しながらシサーが続ける。受け取って

礼を言うと、コカの実の芳ばしい香りが鼻腔を刺激した。
大切かどうかは、今の俺にはわからないけど……だって俺にはまだ、ユリアのことも良くわかっていない。
ただ、突き動かされる。
泣かないで欲しい、怖い思いをさせたくない。
……ただ、それだけ……。
鍋を火から下ろしてしまったので、再び辺りには静寂が訪れていた。虫の密やかに鳴く声だけが、まるでＢＧＭのように闇を支配している。
不意に風が吹いて、木々の葉が擦れ合うざざっと言う音が聞こえた。炎が揺れる。俺の髪も風を受けて軽く舞い上がった。
「俺……」
カップを両手で持ったまま、口を開く。視線は揺れる炎に注いだままだったけれど、シサーの視線が俺を捉えているのを視界の隅で感じた。
「何が、出来るような特別な人間じゃ全然なくて。今もそうだけど、元の世界でもそうで」
「……」
「シェインとかシサーとか、凄く優れてるんだって俺でも見ててわかるから、羨ましいってのは正直思うけど。でもそうやって上見て憧れて指咥えて見てるだけじゃ、全然駄目だから……。これまでの苦労を、いきなり俺が今日明日で突然追いつけるわけないし」
シサーが静かにカップを口に運ぶ。
「いきなり上見て、なりたいったってなれるものじゃなくて……じゃあ、俺が今。出来ることが何なのか……それからやってけば、いつか必ず、自分のなりたい自分に近付いていけるはずだから」
言って俺はシサーを見てちょっと笑った。
「俺の世界にね、『千里の道も一歩から』ってことわざがあるわけ」
きょとんとシサーの銀色の瞳が俺を見る。
「どんなに長い道のりでも、一歩一歩進んで行けば良くて……その

第一歩を踏み出さなきゃ、ゴールにたどりつくことは出来ない」
「良い言葉だな」
「うん。……俺に、どれだけ何が出来るのかなんて、今の俺には全然わからない。何も、出来ないかもしれない。だけど、ユリアが泣くのを見たくない。怖い思いをさせたくない。……出来ることなら……」
守って……。
「……」
「……努力、するから」
そう簡単には、どうにもならない。
それは知ってる。
だけど俺はひとりじゃない。手を貸してくれる人がいる。教えてくれる人がいたって、学ぼうとしなきゃ何も俺の身にはつかない。
「俺、努力するから。だから……俺に、戦い方を教えて下さい」
シサーの口元に笑みが浮かんだ。
「明日から特訓だな。俺はスパルタ教育だぜ？」
……またスパルタなの？
「俺が、お前を強くしてやる」
シサーの言葉に被せるように、一際大きな音で火にくべられた枝がパチンと爆ぜた。

◆◇◆

レオノーラの街をやや南西に下ると、海沿いにファーラ大神殿がある。
広大な庭には聖典に登場する天使たちを模った像が置かれ、良く手入れの行き届いた木々や植物が風に揺れていた。
神殿の白い大理石の壁も磨き抜かれていて僅かな汚れもない。
正面に開放された扉から入るとそこはすぐに大聖堂になっている。
扉に入らずに、廻らされた回廊を歩いて行けば、聖職者たちの住ま

う神殿内部に入ることが出来た。大の男が2人で腕を回しても抱えきれないほどの太さがある神殿内部の連立する柱の間をラウバルは奥へと進んで行く。大聖堂の奥、祭壇の正面にこちら側に背を向けるようにして立っている老人が振り返った。

長身のラウバルに比べれば圧倒的に小柄なその体は、質素だが凝った刺繍が施されている白いローブに包まれている。頭にはローブとお揃いのつばのない帽子を被り、丸い顔には穏やかな表情が浮かべられていた。大司祭ガウナだ。それなりに高齢とは言え、背筋は伸びており緩やかな動きはしかし矍鑠としている。

「どうなされた」

人の良さそうな小さな目を細めたまま、問う。ラウバルは少し離れた位置で足を止めると、会釈をした。

「お耳に入れておいた方が良いかと思いまして」

「何か、あったのですか」

「いえ、まだ。……ただ、戦争になるかもしれません」

「戦争……」

ガウナが痛ましい色を目に浮かべ、そっと伏せた。

「また、多くの者が命を落とすのですね……」

ラウバルがそっと顔を横に振る。

「確定したわけではないのですが。……ちょっと、不穏な動きを感じておりますゆえ」

「不穏な動き……」

頷いてラウバルは祭壇の前に歩を進めた。ファーラ神の壮大な像がそこに祀られている。

ファーラ神は、人を慈しみ、愛するよう説く美しい女神だ。だが、戦いの女神としての側面も持っている。相反する2つの顔を持つのだ。複雑なその多面体は、まるで人のようだと思う。

ガウナもラウバルに従い、ファーラ神に目を向けた。しばらく黙して神に祈りを捧げる。

「まだ調査中のことゆえ、はっきりとは申し上げられませぬが……

『王家の塔』に向かったと言う奇妙な一団を目撃したと言う情報が」
「奇妙な一団……」
ガウナが微かに目を見開く。
「詳細を確認する為に、『王家の塔』へ人を派遣しました。まだ、報告は得られてはおりませんが……別ルートから得た情報ではロドリス王国に妙な賓客がいるとの話も」
「賓客、ですか」
「ええ」
いずれも詳細はまだ不明だ。決定的などんな出来事があるわけではない。
「全身黒ずくめの……ローブで身を包んだ魔術師だとか」
「特徴は」
黒ずくめの魔術師など、挙げていればきりがない。それだけでは『妙な賓客』とは言えないと判断したガウナが更に問う。
「……大きな黒い石を先頭に掲げたロッドを持っている、との話です」
低く言ったラウバルに、ガウナが身動ぎした。驚愕の色が浮かんでいる。
「まさか……」
「……やもしれぬ、と考えてはおります」
ガウナが飲み込んだ言葉を正確に把握してラウバルは肯定した。
「……やつだとすると、レガード様は……」
「滅多なことをおっしゃるものではありません、ラウバル」
「……は。失言でした。お忘れ下さい」
柔らかな叱責にラウバルは表情を変えずに謝罪した。
「『青の魔術師』も、何を考えておるのかわからぬ男ゆえ……」
ラウバルが言いながら顔を横に振った。長い銀髪が揺れる。正面に祀られた像に視線を戻した。
「奇妙な考えを起こしていなければ良いのですが」
ファーラ神は、何も言わない……。

第1部第8話　初めての勝利（1）

リノの村に到着するまで、魔物との遭遇率はかなり増えていた。
ギャヴァンを出発してからの5日間で俺はこの辺に出現すると言う魔物の全てに遭遇してしまう羽目になった。
昼間は魔物と戦いながら旅を続け、夜は夜襲に備えながら、時には魔物を撃退しながら剣を教えてもらった。
たかだか数日で剣捌きが格段に上がるわけではないけれど、それでも魔物に遭遇する。何度も遭遇してみれば、少しずつでもそういうもんだと思えてくる。最初は出来るだけ怖がらずに見てるだけ。次にはシサーに教えられた通りに剣を握って、何かあれば何とか出来るようにユリアを守って立つだけ。
けれど、それを繰り返していれば次第に魔物を見ることに慣れ、剣を握ることに慣れてくる。それに慣れてきたら、次は動き方。シサーが俺に、動き方を教え、戦闘の最中に指示を飛ばす。無茶なことを言いはしないから、次第に魔物に近付くことに慣れていく。
ユリアも少しずつではあるけれど、最初のように取り乱すことはなくなってきてはいる。使える数少ない魔法から防御魔法や補助魔法をかけて戦いをフォローし、回復魔法で傷を癒してくれるようにもなった。
……但し、俺にはまだ克服しなきゃならない最大の恐怖が、ある。
魔物と対峙することそのものに対する恐怖じゃない。命を狙われると怯えることでもない。
自らの手で、生き物の命を奪う行為をすると言う……そのふんぎりが、なかなかつかない。
シサーは、剣捌きや戦い方だけではなく、戦闘時の心構えなんてものも教えてくれる。すべきこと、考えるべきこと、見るべきこと……けれど、それを少しずつ叩き込まれて尚……決心が、つかなかった。

明日にはリノに到着するだろうと言うところまで来て、その日は野営を張った。見張りは、俺とシサーで交代で行っている。

食事を終えて剣の稽古をしてもらい、大きな木の陰でみんなが眠りにつくと、俺はひとりで焚き火のそばに膝を抱えて炎の揺れるのを眺めていた。

林、と言うほどではないけれど、数本の木が連立するその木陰だ。何かが近付いてくれば、草を踏み分け枝を掻き分ける音でわかる。

……早く、強くなりたいなあ……。

手の平を開いてじっと見詰めた。16年間剣など持ったことがない俺の手の平は、この数日間でマメだらけになっている。ヒーリングしてもらっちゃうといつまで経っても剣に馴染む手にはなれないので、これだけは放ったままでサポーターでフォローしていた。

この傷が治る頃には手の皮が厚く強いものとなって、剣を振るうことに痛みを覚えなくなるだろう。

覚えなく、なるだろうか。

けれどそれがまた俺を、怯えさせる。

その時俺は、別の人間になってしまっているような気がする。

剣を振るうこと——生き物の命を絶とうとすることを良しと出来るのは、これまでの俺じゃない……。

ユリアを守りたいと思う気持ちと、躊躇うことなく剣を振るうようになれば、それは自我の崩壊なんじゃないかと思う間で、俺は揺れ続けていた。

（疲れたなあ……）

リノの村はレオノーラよりやや北に位置する。つまりギャヴァンほど暖かくなく、夜になれば風は少し冷たい。山脈がすぐそばに控えているせいもあるのかもしれない。俺は荷袋にしまいっ放しだったマントを取り出して羽織った。

キサド山脈を背後に控えるリノの村に近付けば、当然キサド山脈も近くなる。褐色の切り立った険しい山脈だと言うことが昼間は見

て取れた。今は黒々とした巨大な壁が聳え立っているように見える。
夜鳥が鳴く声と羽音が聞こえた。いわゆるフクロウみたいに夜目の効く鳥だ。
焚き火に枝を放り込んで、抱えた膝に顎を乗せて小さくため息をつくと、不意にがさっと音がした。魔物か、と思って咄嗟に顔を上げる。けれど物音がしたのはみんなが寝ている大木の陰だった。目を凝らすと、眠っていたはずの誰かの人影がむくりと起き上がり、密やかに立ち上がる。こっちへ来るのかと思ったら、そっと反対側へと移動して行った。
燃え盛る炎のせいで、その周囲は却って闇が深い。けれど一瞬揺れた緩やかに波打つ長い髪……ユリアだ。
「……シサー」
眠っているシサーたちを放って俺がこの場を離れるわけにはいかない。申し訳ないけれどシサーを起こすことにする。
「……んあ？」
本当に眠っていたらしく、小さな鼾が途切れてシサーが答えた。
「ユリアが……」
「え？」
がばっと身を起こす。ニーナとレイアはまだ眠っているので、俺は小さな声で続けた。
「今ユリアが立ち上がってどこかへ行った。俺、探してくるからここお願い」
「俺が行こうか」
俺は黙って首を横に振った。シサーが頷く。
「わかった。……気をつけろ」
「うん」
俺は立ち上がってその後を追った。あまり離れるわけにはいかないけど、ユリアを放っておくわけにはいかない。……危ないじゃないか。
剣を携えて、ユリアが消えた方へ後を追う。カサカサと足元で草

や落ちた枝が鳴る音を聞きながら、俺は小さく呼んでみた。
「ユリア……」
返事はない。木々の間を縫って少し歩くと、開けた草原に再び出た。立ち止まる。耳を澄ますと、微かに風に乗って微かに声が聞こえた。……泣き声……？
声を追って、静かに歩き出す。俺が出たのとは少しずれた草原との境目にあたる場所に、ユリアが膝を抱えて蹲っていた。その姿に、ずきんと胸が痛む。
「ユリア」
俺の声に、ユリアが顔を上げた。波打つ黄金色の髪がするりと肩を滑り落ちる。
「カズキ……」
「危ないよ。みんなが心配する。戻ろう」
ユリアの顔がくしゃりと歪んだ。再び膝に顔を埋めてしまう。
「怖いの」
……こんな時間にこんなところにひとりでいる方が怖いと思うんだけど。
「レオノーラを出てから、ずっと怖い。先が見えなくて……」
「……」
「レガードが、そばに、いてくれないから」
その言葉を聞いて、思いがけないほど胸が疼いた。何だろう……ショック、に、似た……。
まさか。どうして。
ユリアがレガードを求めているのはわかりきっている。
……彼女は、レガードの婚約者だ。
「レガードが、恋しい？」
ユリアは顔を上げて躊躇いもなく頷く。
「会いたい。どこにいるのかもわからない。生きてるのかさえ。……もし間に合わなかったんだとすれば、わたしはこの先どうしたら良いの……？」

レガードへの思慕と切なさで涙に濡れるユリアの顔に、呼吸が詰まるほど胸を締め付けられた。

手を伸ばし、そっと髪に手を触れる。なぜか俺が苦しくて、その華奢な体を抱き寄せた。力を入れたら折れてしまいそうな細い肩。

……そんなに、レガードが……。

「俺が……」

苦く、押し出す。

「俺が見つけてあげるから」

「カズキ……」

「君のレガードを、必ず、見つけてあげるから……」

涙を溢れさせたまま、ユリアが俺の胸に顔を埋める。わかってる、俺はレガードの代理だ。俺が探してるのは、彼女の婚約者だ。

腕に抱いたユリアの温もりが、16年間感じたことがないほどに、愛しく思えた。そんなふうに感じるのは、初めてだ……。

自分の世界で、クラスメイトのなつみのことを可愛いなと思っていた。けれど、気がつく。それがいかに他愛のない感情なのか。

いつの間にか、身を挺してでも、もしかすると自我を崩壊させてでも、ユリアを守りたいと望み始めている、その想いに比べればいかにちゃちい感情だったか。

「ユリア……泣かないで」

――その時だった。背後に異様な気配を感じたのは。

ズル、グブ、と汚らしい音がする。背筋を粟立つような感覚が駆け上がった。……何か、いる。

「何……？」

剣の柄に手を掛け、ユリアを背後に庇って振り返った。ユリアが濡れたままの瞳を上げて暗闇を見据える。

「わからない……」

答えて、俺も草原に続く暗闇に目を凝らす。頼りない月明かりに照らされた黒い、影。頭は小さくつるっとしていて大きな尖った耳……。

（ゴブリン……）

剣を、鞘から抜き放った。使えるのか？俺、ひとりで？ゴブリンは何か得体の知れない言葉を呟き、俺たちの姿を見据えるように足を止めると、手にした棍棒を握る手に力を込めた。

負けじと睨み返しながら、乾き始めた唇を舐めて息を飲む。シサーに叩き込まれた通りに剣を構える手に、汗が滲む。

……落ち着け。

心臓が早鐘のようだ。腕も、膝も……全身が、かたかたと微かに震えた。

――勝敗を分けるのは、どれだけ冷静でいられるかだ。焦れば当たり前のことが出来なくなり、見えるものが見えなくなる。まず、冷静になれ。

シサーの言葉が蘇る。

――パニックは勇猛な部隊でさえ一瞬で壊滅に追い込む。戦争においては、前線の第１小隊の混乱から崩壊を招くんだ。

落ち着け……冷静になれ。相手は１匹だ。

震える両手に力を込めて、ともかくもゴブリンから目だけは逸らさないよう集中する。

技も力も経験もない俺がパニックを起こせばもう勝機はない。それだけは、シサーから普段、口うるさいほどに言われている。

――勝利を得るのは力量より精神力だ。まず、敵を恐れる自分を克服することが、最大の戦術だ。

俺に、出来るのか？相手を傷つけることが。

相手の命を奪うことが……！！

「カズキ……ッ」

この刃がゴブリンの体を貫くことを想像してぞっとした俺の背中に、ユリアの儚い、怯える声が届いた。

「ユリア……」

守、ら、なきゃ。

俺がここで怯むことは、ユリアを危険に曝すことと、イコールだ

……。

（……負けるわけに、いかないッ……！！）

ぷつん、と俺の中で何かが切れた。自分が今置かれている立場に気がついて目を見開く俺につられたかのように、ゴブリンが変な声を上げて棍棒を振り翳す。

負けて死ぬのは、俺だけじゃない。……ユリアには、指ひとつ触れさせない……ッ。

――攻撃をする時には必ず一瞬の隙が出来る。その瞬間を突け。

俺目掛けて一直線に駆けるゴブリンから視線を逸らさず、恐怖と葛藤を無理矢理飲み下して片足で地面を蹴る。ひゅんっと風を切る音がしたのは、その時だった。

「ギャアアッ」

いきなり体勢を崩したゴブリンの脇腹に両手で横になぎ払った俺の剣がヒットした。俺程度の力では一刀両断ってわけにはいかないけど、それでもアギナルド老に鍛えてもらったその刀身の鋭さはかなりのもので、相当の深手を負ったようにゴブリンが横に吹っ飛んで倒れる。けれど手にした棍棒は決して離さず、すぐに体を起こして俺に向かってしつこく迫ってきた。

俺の肩目掛けて棍棒が一閃され、咄嗟に身を引いたものの避け切れずに当たった。肩に激痛が走る。

「カズキ！！」

ユリアの声には応えず、飛び退ったゴブリンが再度俺目掛けて来るのを真っ直ぐ見詰めた。剣を、握り直す。最初と同じように地面を蹴って躍り上がったゴブリンに合わせるように、俺は剣を平行に構えて地面を蹴った。懐に飛び込む。

大きく手を振り上げた状態では、体はがら空きだ。腕を返す間もなく、その貧相な体に俺の構えた剣が深く飲み込まれた。鈍い、手応え。

「ギャアアアアアッ」

この世のものとは思えない悲鳴を上げ、剣が突き刺さった場所か

ら血を噴き上げながらゴブリンが仰け反った。共に地面に倒れ込む。
体を跳ね起こしてゴブリンに目をやると、ぴくりぴくりと痙攣を起こしながら仰向けに地面に倒れていた。口から血の泡を吹いている。その姿は間違いなく、息絶えた姿だった。
肩で息をつきながら立ち上がる。剣に手をかけて引き抜くと、そこからまた大量の血が噴き上がり、自らの手に残る肉を裂く感触と相まって激しい吐き気を誘った。
（……俺……）
涙で目が霞んでる。
ウォーウルフの時とは、違う。
俺は、自分の意思で、明確な殺意を持って、殺した。
カラン、と剣が俺の手から転がり落ちる。力が抜けてすとんと座り込んだ俺の目に、見覚えのないものが映った。
（……？）
倒れているゴブリンの肩口に刺さっているダガー。当然だが、俺のじゃない。
最初の一撃の時、風を切るような音がしてゴブリンが一瞬体勢を崩した。あれは、このダガーが飛来する音だったのかもしれない。おかげで助かったけど、でも、誰が……？
ぼんやりと辺りを見回すと、木々の合間に一瞬誰かの姿が見えたような気がした。黒髪の、小柄な姿。……誰？
「カズキ！？」
確かめる暇もなく人影は姿を消し、それとほぼ同時にざざっと草を掻き分ける音が聞こえた。シサーの声が俺を呼ぶ。
「……シサー……」
「……お前、倒したのか……」
座り込んでいる俺と、地面に転がるゴブリンを見て、シサーが呟いた。半ば呆然としたまま、頷く。肩が、痛い。
「うん……」
血の臭いが、離れない。

こうして少しずつ、血が、死臭が、俺の体を取り巻いていく。
……ユリアを守りたいと思うことは、こういうことだ。
「カズキ！！」
ユリアが駆け寄ってきた。シサーの後ろからレイアとニーナも姿を現わす。
「ユリア……怪我は、ない……？」
ユリアを、守ってやれた……。
ひとりで。
生き物を殺した。
自分の、意思で……。
「わたしはないわッ……カズキが守ってくれたものッ……。カズキこそ怪我は！？」
「あ……ちょっと……肩を……」
答えながら俺はまだぼんやりとしていた。微かに、心のどこかが麻痺をしていくような気がした。
「すぐ、治すわ。……アモル・オムニブス・イーデム。我らを守りし偉大なる女神ファーラよ。その下僕に深き慈愛をもって癒しを施したまえ」
ふわり、と俺の体が白い光に柔らかく包まれた。肩を走る痛みが、消えていく。
「……ありがとう」
礼を言うと、ユリアはふるふると顔を横に振った。ふわふわと下ろしっ放しの髪がその動きに合わせて揺れる。
「ごめんなさい……わたし、わたしが、抜け出したりしたせいで……」
大きな瞳から大粒の涙が溢れる。シサーたちは無言でこちらを見守っていた。
「守ってくれて、ありがとう……」
「ううん……」
潤んだ瞳が俺を見上げる。それを見て、愛しいのと、苦しいのと、

そして……。
血塗られた手と、ユリアを見比べる。
ユリアを守ることが出来るのなら、俺は……。
「危ないから、もうひとりで抜け出したりしないで。……必ず、レガードは見つけ出すから」
「……ごめんなさい。ごめんなさい」
「ユリアが、無事で、良かった」
「よし。んじゃ戻ろう」
シサーが言って俺の肩に手を置いた。
「シサーの、おかげだよ」
野営地へ戻るべく連立した木々の間を抜ける。ゴブリンの血をまだ拭っていないので、俺は抜き身の剣を片手に持ったままだ。
「シサーが俺に、いろいろ教えてくれたから……」
「そうか」
「うん……だから、ありがとう……」
こうして、少しずつ……。
「度胸、ついたんじゃねぇか？」
俺より高い位置にある目線が俺を向いていた。柔らかい笑みを浮かべている。
「……そんなこと、ないよ。でも……」
少しずつ、どこか、壊れていくんだろうか。
「とにかく、落ち着かなきゃって……」
「それが一番難しい」
「そっか……」
おどけるように言ったシサーの言葉に、小さく笑った。
血の臭いが染み付いて、その後は眠ることが、出来なかった。

ゴブリンとの戦闘に勝利したことをきっかけに、俺はこれまでよりももう少し積極的に戦闘に参加するようになった。
飲み込むしかない。そう、腹を括った。

生きなきゃならない。魔物は、脅威だ。俺を、そしてユリアの生命を脅かす存在だ。

……抵抗しなきゃならない。それは、殺戮じゃない。俺の生命を守るための、抵抗だ。

そう思わなきゃ俺は、いつまで経ってもユリアを守ることが出来ない。

もちろん自分でそれほど立ち回れるかと言うとそんなはずはなく、シサーの指示の通りに動くしか出来ないけれど、それでも俺は、自らに課すことにした。

苦くても、怖くても、どれだけ夢に見ても。

――他者を、攻撃することを。

生き延びる為に。

第1部第8話　初めての勝利（2）

◆◇◆

リノの村は、本当に小さな集落だ。砂漠を旅する旅人が必ず立ち寄る村だから宿屋はあったけれど、それでもたったの1軒で、ヘイズの町も小さな町だとは思ったけれど……ここに比べれば大都市と言ってしまいそうな気がする。何せ、1時間もかけずに村の中を1軒1軒回って来られそうな規模なのだ。

整備されていない土で出来た道が村の中を廻ってて、家も物置小屋みたいな……小さな家がぽつりぽつりとあって。妙に……寂しい気持ちになる。

この村には魔物から守る外壁はなかった。危なくないんだろーか。

「あんまり、人が住んでないんだ」

シサーたちが以前も利用したことがあると言う宿屋に荷物を置いて、俺とシサーは外へ出た。ただの散歩だけど、一応道具屋を覗いて来ようかって言ってて。ユリアとニーナとレイアは、とりあえず湯浴みをしたいと言って宿屋の人と交渉してたから……今頃風呂……とはいかなくてもお湯で体を洗ってるのかもしれない。俺も戻ったらお願いしてみよう。

「そうだなあ……。この辺は土地も痩せてるからあまり農作物も育たないし、一応海が間近に迫ってはいるから細々と漁をしながら食ってるって感じだな」

ギャヴァンからリノに向かう行程で一度遠く離れた海は、この村で再び間近に迫っている。ギャヴァンのように賑やかな活気はないけど、この村も潮の香りがした。

「あー、でも今日は久々に屋根のあるところで眠れるんだなー」

思いっきり伸びをする。リノについたのは日暮れ間近で、今も辺りはまだ薄暮に包まれていた。少しずつ空に雲が立ち込めているの

が少し嫌な感じだ。
「疲れたか？」
「そりゃもう。何かあちこち痛い気がするよ……。シサーっていっつもこんな生活送ってんの？」
「まあな。もう慣れたもんだ」
これまた町にたった1軒しかない道具屋を覗いて見たけど、目ぼしい物は何もなさそうだった。携帯食の補充だけして店を出る。
「シサーって、世界のあちこち行ってるの？」
「フレザイル以外は、とりあえず全ての大陸に1度は足を踏み入れたな」
シリーと同じようなことを言ってる。……パララーザはまだヘイズにいるのかな。それともどこかに移動したんだろうか。
「……ねえ、ナタって知ってる？」
ふと思いついて聞いてみた。まだほんの子供なのに……下手な大人よりよっぽど謎がありそうな少女。
「ナタ？」
シサーが首を傾げる。……知らないのかな。シリーもメディレスもシサーのことを知っていたから、パララーザのことは知っていそうなんだけど。
「パララーザのシリーって知ってるんでしょ？」
「おお。……何でお前さんが知ってんだ？」
「ヘイズで助けてもらったんだ。シサーに会いに行くんだよって言ったら、『ピカイチのイイ男』って言われた」
ついでに『あんたみたいなガキジャリ』とまで言われましたけどね……。
シサーが苦笑いを浮かべて頭に手をやった。
「またくだらねえこと言ってやがる……」
「旅してる間に知り合ったの？」
「まあ、そうだな。俺もあちこち旅をしてるし、パララーザもそうだからな。時々遭遇するんだよ。……ニーナには言うなよ、シリー

の話」
「何で？」
「仲が悪い」
「……」
シサーを大好きな人同士、反目し合ってるってわけね……あ、そう。
「ナタは、パララーザにいた女の子だよ。まだほんの子供の」
「子供？」
シサーが指先で後ろに束ねた長い髪の尻尾を玩びながら眉を上げた。
「うん」
通りには人の姿がない。家にはいるんだろうけど、あんまり気配もしなかった。何だかひっそりと暮らしているって感じがする。けれど、時間が時間だからか、ぽつぽつある家からは食事の用意をする良い匂いが上がっていた。勢い、空腹感を覚え始める。
「パララーザに子供なんかいないぜ」
「え？」
だって……。
「いたんだよ。紫の髪に紫の目の」
「紫？」
「うん」
ぽりぽりと頤を掻いてシサーが首を傾げた。
「知らねぇなあ……。しばらく見ないうちに増えたのか？」
それともナタって、パララーザの人間じゃないのかな……。それにしちゃ、仲が良さそうではあったけど。
「まあ、いいや……。シサー、今日も剣の稽古、よろしく」
「いいぜ。……やる気になってんなあ」
シサーがにやっと嫌な笑いを浮かべた。
「へっへっへー。若いってのはいいねぇ……いよいよ本格的に惚れたか」

「だだだ誰にッ」
「……俺だとは思いたくねえよな、少なくとも……」
「……」
そんなの、俺だって想像したくない。
宿に戻ると、身綺麗にしたユリアとニーナが広間でおしゃべりをしていた。
普段さほど来客のない村らしく、宿屋も農業で身を立てている普通の家が一応お客さんも泊めてあげるって感じで……つまり、普通の家だ。この村の中ではかなり大きな部類に入るとは思うけど。
「そろそろ食事にするけど、大丈夫かい？」
どこかぼーっとした感じの中年のおじさんが戻って来た俺たちに声をかけた。主人のチェザレさんだ。
「あ、はい。お願いします」
頭を下げながらユリアたちの方へ向かう。シサーは買ってきた荷物を置きに、一度割り当てられた部屋へと姿を消した。
「ユリア、お湯、もらったの？」
「うん。カズキも借りたら？」
「そうしようかなあ……」
砂埃と汗と返り血で、相当汚い。はっきり言って。
湯浴みをしたユリアたちのそばにいると、尚更自分の汚さが気にかかる。
「あの、すみません」
小さな台所を覗き込んで、食事の支度をしているチェザレさんに声を掛けた。
「俺も、湯浴みさせてもらっても良いですか？」
「ああ、良いですよ。風呂なんて豪華なものはこの村にはないんでねえ……。廊下の奥にね、小さな部屋があるんですよ。そこにお湯、持って行きますから」
「すみません」
タオルを取りに行くため部屋に向かうと、こちらへ来るシサーと

擦れ違った。部屋に戻って荷物を漁り、マントと上着を放り出してタオルを抜き出すと、チェザレさんに言われた通り廊下の突き当たりに向かう。木製の古いドアがあってそこを開けると、藁葺きで目隠しするようにぐるっと取り囲まれた半畳くらいの小さな空間があった。足元はスノコが置いてあって……でも、外だろ、これ。

チェザレさんは既にお湯を用意してくれていて、でかい盥の中に張られた水からは湯気が上がっていた。シャツを脱いで上半身裸になると、タオルをお湯に浸して体を拭く。

それからひどく苦労して頭を何とかお湯で洗い、俺はそこを出た。何か中途半端な気はするけど……やらないよりはましだろう……。

「ありがとうございました」

「あ、俺も俺も」

俺が広間に戻ると、入れ違いにシサーが湯浴みをしに行き、シサーが戻ってきた時には粗末なテーブルの上に質素な食事が並んでいた。……うー。久々のまともなご飯だ……。

「いただきますー」

パンに魚、具の少ないスープと言う質素極まりない食事ではあったけど、凄くありがたい。あっちの世界では食事がこれほどありがたいものだとは気がつかなかった。

「ユリア、シェインと交信ってやってんの？」

食事を口に運びながらいきなり思い出して聞いてみる。ギャヴァンからリノへ向かう行程の中では交信しているのを見掛けていないような気がしていた。

「うん。毎日、報告してるわよ、ちゃんと」

「そうなんだ」

「何だ？シェインと交信って」

「『遠見の鏡』って言うアイテムを渡されてね……毎日無事ですって報告しろって」

「相変らずユリアに対しては過保護だなあ……」

「王女様なんだから当然じゃないのよ」

ギャヴァンにいた時に、何か気掛かりなことがあるようなことを言ってたけど……どうなったのかな。
「レオノーラで、何かあったの？」
わいわいとシサーやニーナと話していたユリアは、俺に視線を向けた。スープに手を伸ばしながら首を傾げる。
「え？何で？特に何も聞いてないけど……」
「あ、そう？」
別に、何でもないのかな……。
なら、良いんだけど。
「いや別に……何でもないけど」
食事を終えて部屋に戻る。借りた2部屋の部屋割りは、当然俺とシサー、ユリアとニーナ、そしてレイアだった。
宿屋についた時、シサーは意地が悪い顔をして言ったものだ。
「俺はニーナと一緒で良いんだぜ？」
俺はユリアと一緒じゃ凄く困るんだよッ。
わざとそんなことを言ってはからかうシサーを強行突破して、現在の部屋割りを押し切ったのだ。……ってか当然。
「あーあ。カズキにニーナとの間を裂かれちまったなあ……」
意地悪くぼやきながらシサーがベッドのひとつにごろんと転がった。そんなシサーに、タオルを投げつける。
「あのねえッ」
「おーっと。いちいちムキになる辺りがまだまだ若いねえ……」
「おっさんくさ」
「何だとぉ？」
ベッドからぴょこんと体を起こしてシサーが俺に掴みかかった。その筋肉質の腕でヘッドロックを固められる。
「やーめーてー！！はーなーせー！！」
「……なぁにじゃれてんのよ……」
コンコンとノックされるのとほぼ同時の勢いでドアが開き、しらっとした顔でニーナがそこに立っていた。俺にヘッドロックを決め

たまま、シサーが顔をそちらに向ける。
「こいつが生意気な口利くから」
「生意気ってねえええ……」
良いから離してよ。
ふっと呆れたようなため息をつきながら、ニーナは部屋に入ってくるとさっきまでシサーが転がっていたベッドに腰を下ろした。すらりと伸びた足を組む。
「どうした？」
「何か、ちょっと変な感じがして」
「変？」
だからヘッドロック解いてよ……。
じたばたと俺がもがくので、ようやく腕を離しながらシサーが尋ねる。げほげほとむせながら俺はもうひとつの空いているベッドの上に転がった。
「……元々風の砂漠はシルフの力が強いところなのだけど」
風の砂漠だからなあ……。風の精霊の力が強いのは当然なんだろう。喉を押さえながら俺はニーナの言葉に耳を傾けた。
「何だか、猛り狂っているような……そんな感じがするの」
「猛り狂ってる？……シルフが？」
「そう」
ニーナの言葉にシサーは考え込むような顔付きをした。
「何でまた？」
「まだ、よくわからない。キサド山脈を越えてもう少し砂漠に近付けば、何かわかるかも知れないけど」
「そうか……」
俺はシェインと交信した時に言っていたことを思い出した。
―何か妙なことが起こっていそうなのでな。
確かに、そう言っていた。妙なこと、って何だろう……。
「まあ、行ってみるしかないな」
シサーが腕を組んで呟く。ニーナがこくりと頷いた。

まさか、『王家の塔』に近づくことも叶わないなんて、その時の俺はまだ知る由もなかった。

第1部第9話　新たな・・・味方？（1）

キサド山脈は、実際凄い険しい山だった。
切り立った崖に続く細い道をゆっくりと上っていく。足場が悪いことこの上ない。
「ユリア、平気？」
「うん」
横に並んで歩けるような状態ではないので、先頭をシサー、ニーナ、ユリア、そして俺の順で細い道を進む。レイアは相変らずふわふわと飛んでいるので隊列に含まれない。
朝早くリノを発ったにも関わらず、その足場の悪さと急激な斜面のせいで、ちっとも先に進んだと言う気がしなかった。既に太陽は真上まで来ている。
「もう少し先に進むと道が少し広くなる。そこまで行ったら一度休憩にしよう」
シサーのその言葉を支えにひたすら歩く。黄土色の乾いた土で辺りは覆われ、所々に生えている木々も何だか貧相だった。乾いている感じがする。
昨夜空を覆い始めていた雲は、出発する時には薄くなっていたけれど、今は再び頭上を覆い始めている。どんどん厚くなっていく雲に雨の匂いを感じて俺は不安になった。……やだなあ。雨が降ったら。
そんなふうに思って空を見上げてため息をつく。途端、ぽつりと俺の頬に水滴が当たった。
「ちッ。降って来やがったな……。少しペースを上げよう。こんなところで本降りになられちゃたまんねえ」
踏み外さないよう気をつけながらペースを上げて歩いて行くと、ようやく道幅が少し広くなり、更にその少し先に踊り場のように僅かな広いスペースがあった。その壁沿いに穿たれた小さな洞窟に飛

び込む。
「参ったなあ……」
洞窟の入り口で空を見上げながらシサーがぶるぶると頭を振った。ニーナがシサーにタオルを渡してあげる。俺も荷袋からタオルを取り出して濡れた頭を拭いた。
「ユリア、寒くない？」
やはり髪や顔の水滴をタオルで拭っていたユリアに問う。ユリアは笑顔を向けた。
「ありがとう。大丈夫よ」
「どーすっかなあ……」
顰め面で振り返るとシサーはこちら側に戻って来て地面に胡座をかいた。
「この先も険しい道が続くからな。雨で足場も視界も悪くなると、かなり危険だ。止むまで待つしかねえかな」
「雨は自然の恵みよ」
ニーナが機嫌が良さそうに言う。森の妖精エルフであるニーナにとっては雨は嬉しいらしい。シサーが肩を竦めた。
「別のタイミングで恵んで欲しいもんだねえ……」
「贅沢言わないのよ」
「へいへい」
幸い雨はそれほど長い間降らず、2時間ばかり待ったところで晴れ間が覗いてきた。山の天気は変わりやすいと言うのはこっちの世界も同じらしい。
たっぷりと休憩を取って再び切り立った崖沿いの道を歩き出す。最初より少しは広くなったとは言え、足場の悪さに変わりはない。しかも今度は雨で足元がぬかるんでいて、滑りやすくなっていた。勢い、進行速度も落ちる。
どれくらい進んだんだろう。だんだん足がだるくなって来る。
「もう少し行ったら、もう一度休憩しよう。そこで今日は野営をした方が良いかもしれねえな」

日は少しずつ傾き始めていた。確かに次の休憩ポイントを逃したら、次は野営を張れるような場所にいつ出会えるかわからない。

足元の崖から下は、先ほどまでは目も眩むような果てしない急斜が続いていたけど、今は景色が少し変わって川が流れていた。果てしなく下、ってわけでもない。ほんの5メートルくらい下。

雨のせいか川の流れは速かった。落ちたら助からないかもしれない。

そんなふうに思った瞬間だった。前方から小さな悲鳴が聞こえたのは。

「きゃッ……」

ふわりと束ねられた金色の髪が一瞬舞い上がり、ユリアの姿が俺の視界から滑り落ちる。……足を滑らせた!!

「ユリア!!」

反射的に俺はユリアの腕を掴んだ。

「ユリア!!カズキ!!」

シサーの声が聞こえる。

が。

「うわッ」

ユリアの重みと勢いに引き摺られて、俺まで足を滑らせた。冷たい水飛沫が上がり、俺は腕の中に何とかユリアを抱き締めながらシサーとニーナの叫び声を聞いたような気がした。

想像以上に水の流れが速い。ユリアだけは絶対に離すまいと腕に力を込めながらもがく。水に押し流されながらようやく顔を水面に出して酸素を肺に取り入れると、ユリアの顔も水面に押し上げた。

ガツガツと体のあちこちが、時々壁面に激突する。その度に痛みと衝撃で意識を手放しそうになりながらも俺は辛うじて意識を保つことに成功していた。……ここで意識を失ったらユリアと離れ離れになってしまう。第一、生きていられる自信が俺にはない。

(くっそー……)

何とか……脱出しなきゃ……。

でもこんな状態で何をどうしようがあるわけもない。ともすれば水中に引きずり込まれそうなのだ。両手はユリアを抱き締めるので塞がっているし、下手にもがけばそれこそ危険だし……。

あぷあぷしながら思案にくれる俺の視界に、崖から張り出した巨大な木の根が見えた。――こいつだ。

何とかあれに引っかかるしかない。このまま流されてって滝でもあったら大事だ。逃したらどうなるかなんて……想像もしたくない……。

俺は緊張してその瞬間を待った。木の根がどんどん近付いてくる。ところが、その根は思いの外巨大だった。岩に近いものがある。まずい、これは、この勢いで激突したら……。

しまった、と思った時には張り出した木の根に背中から叩きつけられ、視界の隅に眩い光を感じながらもその余りの衝撃に息も出来ずに俺はそのまま意識を失った。

◆◇◆

……生きてる。

ぼんやりと目を開けて、まずそう思った。あちこちに激痛が走るけど、動けないわけじゃない。数メートル離れたすぐには相変らず凄い勢いで川が流れていて、俺はその岸辺に倒れてたってわけだ。この辺りはさっきまで歩いていた場所と違って、草が生えていて木が多少生い茂っている。辺りはすっかり日が落ちたらしく、暗かった。

それからはっと辺りを見回すと、俺のすぐ隣にびしょ濡れのユリアが横たえられていた。俺が肩に背負っていた荷物や剣も一緒にそこに置かれている。ユリアが装備していたブレストアーマーやレイピア、ロッドもちゃんとそこに置かれていた。ユリアの荷物は、ない。……誰かが、助けてくれたんだろうか……って……。

（……うわぁ～ッ……）

思わず目をそらして、不謹慎ながら赤くなる。……あ、あのねえ、びしょ濡れってことは衣服が体にぴったり張り付いてて、その体の起伏がその……だなあ……。……思春期だしッッ。

ごほんと意味もなく咳払いをすると、俺は極力視線を背けながらマントを外して絞り、出来るだけ水気を飛ばしてからユリアの体にかけてやった。

でも……これじゃあこのままだと風邪引いちゃうよな。水を吸ったマントなんて、むしろ体温を奪うような気もする。でもそのままにしとくのは、俺の目の毒。

参ったなぁ。

立ち上がって川岸まで行ってみる。対岸は切り立った崖で、こっちとは高さが随分違った。俺たちが歩いていたのはあっち側だ。どのくらいの距離を流されたんだろう。

とりあえず剣だけは装備すると、ため息をついて俺は木々の間に分け入った。とにかく火を起こした方が良い。枝や枯草を集めて再び戻る。自分の荷物を漁って、ギャヴァンの道具屋で買った『炎の種』を取り出した。

これはひっじょーに便利なもので、直径1センチくらいの丸い形をしているんだけど、種とは言っても本当に植物の種なわけじゃない。火薬みたいなもんで、こいつを潰すと炎が出るのだ。燃えやすい草とかの中に置いて木の枝で叩き潰すと焚き火の出来上がりとなる。

かなり安価で売られているので、俺は結構大量に購入していた。ただ水浸しになっちゃったから火がつくかどうか心配だったんだけど……あんまり関係ないらしい。ちゃんと焚き火を起こすことが出来て安心する。

火の加減を見て、ユリアに視線を向けた。まだ、意識は戻らない。でも、豊かに盛り上がった胸の起伏が微かに上下しているから、息をしていることはわかる。

（……どうするかな……）

シサーたちとはぐれてしまったと言うことは、何とかひとりでユリアを守りながら合流しなきゃならない。草原を抜けて山に入ったと言うことは、魔物の種類とかも変わるんだろうけど……。

そんなふうに思って暗澹たる気持ちになったところで、背後の茂みからがさがさっと音がした。思わずびくりとして剣の柄に手を掛ける。立ち上がって振り返り、ガサガサ言う足音が近付く方向を見据えていると、現われた姿に俺は言葉を失った。力が抜ける。

「あなたは……」

ゴブリンに襲われた時に一瞬だけ見かけた人影。ダガーを投げてフォローしてくれた……？

「……あなたが、助けてくれたんですか」

やや伸び放題と言える黒髪に黒い瞳。久しぶりに見る自分以外のその組み合わせに妙に懐かしさを覚える。痩せぎすで目線は鋭く、尖った顎をしていた。飾りっ気のない長めの黒いシャツを腰のところでチェーンリングみたいなベルトで留め、擦り切れた感じのある膝丈くらいのハーフパンツを穿いている。年は俺とさほど変わらなさそうな感じだった。何も言わずにこちらに歩み寄ると、魚を刺した串を数本火の中に突き立てる。

「あの……」

「……」

「ありがとう」

「……」

何か言ってくれ。

困りきってとりあえずのそのそと剣の柄から手を外して再びその場に座り込む。少年も、その場に座り込んでじっと炎が揺れるのを見詰めていた。……何か間が持たない。

「……あんた、何者だ？」

「え？」

しばらくそうして黙って座っていたが、不意に少年が口を開いた。問われている意味がわからず、ぽかんと見詰める。

「何者って」
渋谷の高校生野沢和希ですと名乗ったところでわかるまい。
「レガードと、何か関係があるのか」
「え！？」
しばらく躊躇うような顔をしていた少年は、ややして意を決したように言った。……レガードって。
「レガードを、知っているの？」
「俺の質問に答えろ」
俺は返答に窮した。事情を説明して良い相手なのか判断がつかない。２度も命を助けてもらっているんだから、悪い奴じゃないとは思うんだけど……。でも、ことは、俺ひとりの話じゃないし。
口篭もる俺をじっと鋭い目線で見据える。
「あなたの正体がわからないから、話せない」
辛うじて俺はそれだけ言った。沈黙が訪れる。
「でも、助けてくれたことは本当に感謝してる。ありがとう。……俺は、カズキ。君は」
じっと炎に包まれて焼けていく魚を見詰めていた少年が微かに身動ぎをした。短く答える。
「シンだ」
「シン……」
「俺は別に助けたわけじゃない。あそこの……」
シンが向けた視線の先には、こっちの岸から川の方に乗り出すように垂れ下がっている木の枝だった。
「枝に引っ掛かってたからな。陸に引き上げただけだ」
言ってシンは焚き火に身を乗り出した。魚の串に手を伸ばす。齧り付いて焼け具合を確認すると、もう１本抜き取って俺に差し出した。
「あ、ありがとう」
……引っ掛かってた？２人仲良く？そんな好都合なこと、あるだろうか。

不審に思いつつもシンが嘘をつく理由が思い当たらないので、ともかくシンが見た時にはそういう状態だったんだろうと思うことにする。２人で黙りこくって串焼きの魚を頬張った。１尾食べ終えた頃、俺の背後で小さな呻き声が聞こえて振り返る。

第1部第9話　新たな・・・味方？（2）

「ユリア」
「……う……ん。……カズキ」
うっすらと瞳を開けて身動ぎする。ユリアの綺麗な翡翠色の瞳が俺を見据えた。立ち上がってユリアのそばに屈み込む。
「大丈夫？痛いところは、ないか？」
「ん。大丈夫みたい……誰？」
体を起こして微かにぶるっと震えると、シンを捉えて尋ねた。俺にもその詳細は良くわからないんだが。
「シン、って言うらしいんだ。俺たちを助けてくれた。……火に当たった方が良い。体が冷えてるだろ」
ユリアを促して焚き火に当たらせる。シンは串を抜き出して1本をユリアに差し出した。もう1本俺にも差し出してくれる。
「助けてくれたの？」
受け取りながらユリアが尋ねた。シンは何も答えない。
「ありがとう。……いただきます」
シンは自分にももう1本串を抜き取って齧り付いた。俺も魚を口に運びながら、シンに尋ねる。
「シンは、ここで何を？」
「……」
黙ったままシンが視線を上げた。俺の問いには答えない。……助けてもらったんだから命の恩人なんだけど……感謝は凄いしてるんだけど……。
……凄い、友好関係成り立たない人なんですけど。
「その顔は、レガードに似過ぎているな」
魚を食べ終わり、串を焚き火の中に放り込んだシンが低く言った。
ユリアが動きを止める。
「レガードを、知っているの？」

「……」
シンは再び沈黙で答えた。これじゃあ埒があかない。
「彼女は、レガードの婚約者だ」
思い切って言った俺に、シンの視線が動いた。真偽を問うようにユリアを見詰める。ユリアはその視線を受けて頷いた。
「……レガードの婚約者と言えば、王女様、じゃないのか」
淡々と言う。王女様がこんなところにいるとは信じられないと言う様子だ。
「こんなところで何をしている」
「レガードを、探しに来たの」
ユリアの言葉に、シンは少し考えるような仕草で沈黙した。
「この男は、どうしてこれほどレガードに似ている」
「……」
俺が異世界の人間だと言うことは伏せるとしたって、それについて話すのなら複雑に絡んだアルトガーデンの政治事を話さなければならなくなる。
「わけは、言えないわ」
ユリアも同じことをためらったらしい。
「それは、話せない。国の政に関わることだから」
きりっと言い放ったユリアは王女らしい気品を発して、シンを睨むように続けた。
「旅に出て行方不明になったレガードを探しているの。わたしの大切な、婚約者よ。……話せることは話したわ。あなたの番よ。レガードの、何を知っているの？」
そのやりとりを聞きながら、ふとこの世界の風習を思い出した。そうだ、この世界――いや、ローレシアやアルトガーデンの風習なのかも知れないけど、とにかくこっちは高貴な身分の人はおいそれと公的に顔を曝さないんだ。けれどシンは俺の顔をレガードとそっくりだと言い、その婚約者を王女だと言った。……つまり、レガードが何者かを知っていると言うことじゃないのか。

シンは黙って焚き火に視線を向けていた。ユリアも辛抱強く待つ。
俺は枝を折って焚き火にくべた。
「俺はレガードに借りがある。借りは、返さなきゃならない。……それだけだ」
「借り？」
俺とユリアが同時に放った問い返しには、シンは何も答えなかった。

◆◇◆

そこで一晩を明かし、日が昇ると共に俺たちは行動を開始した。
選択肢は2つ。この辺りを散策して、シサーたちを探すか、とにかく風の砂漠を目指すか。
個人的な感情で言えば、何が何でもシサーたちと早く合流をしたい。この辺りを捜索したいと言う気もしてしまう。
けれど、シサーたちだっていつまでも一所に留まってはいないだろうし、捜索するにはキサド山脈は余りに広大だ。それがある程度場所が限られているとしたって、だ。
それを思えば、風の砂漠へ向かう方が賢明だろう。そう判断して、俺は決断した。その方が結果としてシサーたちと早く合流出来るはずだ。
シサーたちも風の砂漠へ向かっていてくれれば……。
それはもう、祈るしかない。
シンはどうするのかと思ったら、驚くべきことに、俺たちが風の砂漠につくまで同行してくれると言うことだった。
「あの傭兵と合流するんだろう。まだ信じたわけじゃないが、本当にレガードの婚約者なのなら、放り出していくわけにはいかない。同行してやろう」
と言うのがシンの弁だった。
シサーのことを知っているのかと俺が驚くと、シンは淡々と答え

た。
「知っているわけじゃない。ギャヴァンでお前を見かけて、あまりにレガードに似過ぎていたので不審に思って後をつけていた」
その言葉で、タイミング良く救ってくれたわけがわかった。……つけてたって……。全然気が付かなかった……。
俺が呆然とそう言うと、シンは多分初めて笑顔らしき表情を浮かべた。
「当然だ」
でも、一体何がどうしてどういう根拠で『当然』なのかは教えてくれないんだよな。けち。
俺たちを先導するように山道を分け入って歩いて行くシンの足取りは迷いがない。前にも、来たことがあるんだろーか。
「シン、前も来たことが？」
昨日の雨のぬかるみは既にどこにもなかった。川沿いの林を抜けると、昨日同様乾いた土がむき出しになった山道が続いている。
「あるな」
「そうなんだ」
「何度も来ている」
何度も？
相変わらずシンは詳しいことは語らない。この秘密主義は何とかなんないもんか。それとも何か理由があるのかな。
ユリアの荷物は、シンが俺たちを助けてくれた時には既になかったと言うことだった。流されている時に落としたんだろうか。『遠見の鏡』も当然その荷物の中にあり、シェインと連絡を取ることが出来ないことをユリアはひどく気にしていたが……ないもんはない。考えても仕方ない。
今俺たちが歩いているのは、昨日歩いていたような狭く急な勾配の道ではない。どちらかと言えば、割りと単調な道だった。山道だから凄い広いとかそういうのじゃないけど、それでもそれなりの幅があって、別に3人で横一列になっても大丈夫だ。ただ、右手には

高い壁面が聳え立ち、左手には切り立った崖があると言う辺りは同じなんだけど。

のろのろとは言え、歩いていれば進んで行くわけで、少しずつ標高は上がっているらしく空気が次第に冷たさを孕んだものになっていった。そう言えばシサーの話で、湿気を含んだ風が山頂辺りで雪を降らせるとか……言ってた気がする。

まだまだ山頂には遠くて雪が降るって感じではないけど、気温は確実に下がっていってる感じがした。ぶるっと体を震わせる。

と、不意に先を行くシンが足を止めた。俺を振り返る。鋭い声が飛んだ。

「カズキ、気をつけろッ」

魔物!?

「ジャイアントスコルピオンだッ」

言うが早いか、シンは横っ飛びにステップを踏んだ。俺も剣を抜き放ちながらユリアを後方に押しやる。

「ユリア、下がってッ」

「はいッ」

ユリアが後方に退いたのを確認し、前に向き直る。シンが横にずれたおかげで前方にいる魔物の姿が視認出来た。黒と見まごう深紅の巨大なサソリ。その体長は1メートルはある。それが全部で3匹、前方に控えていた。

……シサーがいない。ニーナも、レイアもいない。ユリアを守れるのは、俺しかいないんだ……!!

怯むな。決めたはずだ。手を血に染めても、ユリアを守る。

俺は剣を斜めに構えた。1匹が威嚇するかのように、鋭いトゲの生えた尻尾を振り上げる。

「気をつけろ、毒があるぞッ」

サソリに向かって駆ける俺に、シンの声が背後から飛んだ。やっぱりサソリのトゲトゲには毒があるもんらしい。

1匹に狙いを定めて、俺は地面を蹴った。別の1匹がカサカサと

音を立ててシンのいる方向へ移動していく。俺の狙った1匹は、自分がターゲットと知って立ち向かう気なのか尻尾を振り上げたまま前脚を使って上体を僅かに反らした。真上から剣を突き立てるように落下する。

サソリがその尻尾を横薙ぎに払った。俺の足に当たるがバランスは崩れない。

が。

（!?）

アギナルドに鍛えられた剣の切れ味は抜群で、その硬そうな体をあえなく貫いた。間もなく絶命し、地面に着地をする。

痛ッ……。

途端、足に激痛が走った。続いて痺れるように感覚が消失して行く。さっきサソリの尻尾が足に当たった時に、まんまと毒を受けたらしい。だが、もう1匹のジャイアントスコルピオンが今更敵の存在に気が付いたのか何なのか、これまでぼーっとしてたくせに突如俺に向けて襲い掛かって来た。毒を受けてバランスを崩している着地直後の俺の前でドリフトよろしく前脚で体を回転させ、そのゴツい尻尾を勢い良く振るった。

「くッ」

もろにその衝撃を受けて、山際の壁面に吹っ飛ぶ。これが反対側だったら切り立った崖に真ッ逆さまだったわけで、それを思えば不幸中の幸いなのだろうけど……全身を壁に叩きつけられて「幸い」と思えるほど人間が出来ていない。

「カズキ!!」

毒は着々と全身を巡り始めているらしく、足の痺れは次第に上へ上って来て眩暈を起こした。霞み始めた視界で、サソリが恐ろしいスピードでこちらへ向かってくるのが見える。……立たなきゃ。

気力を振り絞って立ち上がったけれど、間に合わない。再びその尻尾が振り上げられた時、突然その尻尾が半ばほどで切り飛ばされた。尻尾を切り飛ばした物は、そのままブーメランのようにカーブ

し、俺を通り過ぎて後ろへ返る。
「シン！！……さんきゅ」
シンがチャクラムを投げて背後からフォローしてくれたのだった。
既に、シンの方へ向かったサソリは始末済らしい。尻尾を切り飛ばされた勢いで一緒に横へ吹っ飛ばされたサソリは、痛覚があるのか単にバランスが取れないのか、ジタバタもがいていたが、やがて猛然と俺の方に再びやって来た。くそッ……。
ふらふらする頭をこらえ、霞む視界でサソリを見据える。……やらなきゃ。
剣を握る指先に感覚がない。……しっかり、しろよ！！こんなとこで負けてるわけには……。
俺は力の籠もらない足で地面を蹴り上げ、剣を振り翳した。
ざしゅッ！！
鈍い、手応え。剣が硬いものを突き通す、その衝撃を両の手の平で受けながら、俺自身もその場に崩れ落ちた。
もう、限界……。
そのまま、俺の意識は暗転した。

第1部第10話　歴史の陰（1）

ガン、と勢い良くドアが開けられ、ラウバルは微かに眉を顰めた。
『相手の返事を期待しない形だけのノック』が遂に省かれ、『相手の意向を全く視野に含めるつもりのない訪問』に変わったかと嘆息する。
しかし書き物机から振り返り、シェインのその強張った表情を見るなり口から出た言葉は当初の予定から変更されていた。
「……どうした？」
「ユリアから連絡が来ない」
「……」
ふざけた表情以外滅多にすることのない宮廷魔術師の、苛立ったような表情にラウバルも息を飲む。
「……何か、あったのか」
「わからないから苛立っているのだ」
ふてくされたように言い捨て、シェインは窓際の長椅子にふんぞり返った。思わず椅子から立ち上がりながらラウバルは顎に手を当てる。
「……ぬかりはないのだろう？」
「あるわけがなかろう。仮に『遠見の鏡』を手放したとて、ユリアを守る魔法など重ねてかけてある。だが連絡がないのが気に入らぬ」
「忘れてるのかもしれぬぞ」
「そんなわけあるか。ユリアだぞ」
顰め面でぼやくシェインに、ユリアの身に切実な危険があれば何らかの形でシェインの魔法が発動することを確信し、ラウバルはとりあえず安心した。そうでなければ、ユリアを下にも置かぬほど大切にしているシェインの狼狽がこの程度で済むわけがない。職務など二の次、とっくにユリアを探して行方をくらましているに決まっている。

「……安全は、確かなのだな」
念を押すようなラウバルの言葉に、シェインは片方の眉を微かに上げてラウバルに視線を向けた。
「ユリアの生命は確実に保証しよう。この天才魔術師が全精力を傾けた魔法が発動する」
「ふむ」
ならば問題はあるまい。ふと気になってラウバルは尋ねてみた。
「『遠見の鏡』以外に、どのような魔法をかけたのだ」
「防御魔法だな。『光の壁』だ。俺がその場にいて、最強に発動させたのに匹敵する防御力があるはずだ」
それは凄まじい。ラウバルは思わず片手を額に当てた。さすが、『過保護』との風評は伊達ではない。
「お前とて楽ではなかろうに」
物質に魔力付与したのではなく、ユリアに対して防御魔法の発動をさせるのであれば、発動させた時にはシェインの魔力が消費される。
「ユリアに傷を負わせることを考えれば、大したことではないな」
言いながら両腕を頭の後ろで組む。それから僅かに顰め面をした。
「それから……空間移動の魔法だな」
「空間移動……」
ラウバルも僅かに顔を顰める。何か言いかけたその機先を制すようにシェインが続けた。
「出来れば発動して欲しくないのが本音だ。だからこそ、『遠見の鏡』を持たせた。発動することは、まずない」
空間移動の魔法に関しては、まだまだ研究段階にある、と言うのが現状だ。自由自在に行きたいところへ姿を現すなどとはほとんど伝説の域でしかない。現在完成されている形では、かつて行ったことのある場所へランダムに出現すると言う何とも不便なシロモノだ。つまり、ユリアにそれが発動された場合、レオノーラまたはシャインカルクへ戻ってくれれば問題はないが、どこへ姿を消すかわから

ないとあってはたまったものではない。魔法道具の中にはそれを可能とするものもあると聞いたことがあるが……。

「だが、生命を失うよりはましだろう。当面の危機を回避すると言う意味では応急処置的に最も効果があるからな」

ラウバルはほっと息を吐いた。書き物机に向けられていた椅子を引き寄せ、シェインの方へ向けて腰を下ろす。

「まあ、生命に別状が及ぶことはないと言うことは良くわかった。ならばそれほど不機嫌になることもなかろう」

「状況が読めぬのが嫌なのだ」

我侭を言うように言い放ち、シェインは組んだ腕を解くとぐしゃぐしゃと赤い髪をかき混ぜる。

「……それほど気にするのならば、やはり止めた方が賢明だったのではないか」

「止められるか。ああ見えてユリアは強情だ。止めだてしたところで、無理矢理抜け出して本当に行方不明になるのが関の山だろう」

それが言い訳だと言うことをラウバルは知っている。

「お前の魔力を持ってしてもか？」

「……」

「……カズキの旅は、必要以上に危険だ。わかっているだろうが」

冷淡とも言えるラウバルの言に、シェインは痛いところを突かれたように視線を落とした。ふてくされるような表情を浮かべ、ラウバルに背を向けて長椅子の上に上半身だけ横たえる。

「レガード様の身に何が起こったとしても、レガード様の姿をしたものが平然と旅をしておれば必ず何かを知っている人物が浮上する。それを陽動と言わずして何とする。言い換えてやろうか。それは、『囮』と言うのだ」

「……」

「レガード様に何かがあったのなら、そこに陥れた何者かが見過ごすはずがない」

シェインは長椅子に横たえた上半身を僅かに起こし、ラウバルの

方へ顔を向けた。
「……なぜ、おぬしは見過ごした？」
「何をだ？」
わかっているくせに嘯くラウバルを睨みつける。
「俺がユリアを送り出すのを、だ。カズキが陽動であればレガードの二の舞にならぬとも言えぬだろうが」
「お前がユリアの味方についているからな。宮廷魔術師に刃向かうほど無謀ではない」
「ぬけぬけと。俺がそんな戯言を真に受けると思うか」
「ではお前は陽動とわかっていてなぜ送り出した」
「……」
シェインは盛大に顔を顰めた。
「俺に言わせるのか？……いずれにしても、ユリアには『王の証』を受けてもらわねばならぬからな」
ラウバルは何も答えずに続きを促す。
「……いつまでも蝶よ花よと閉じ込めて可愛がるわけにはいかぬ」
「……」
「……このままではユリアはいずれヴァルスそしてアルトガーデン初の女王であり女帝として君臨することになろう。強くなってもらわねばならぬ。良き主となる為に、国民の姿をその目で直に見詰め、何を必要とし、何を恐れているのか、王城にばかりいたのでは知ることは出来ぬ。……レガードが行方不明の今、『王の証』を受けるのはユリアしかいない。ユリアが『王家の塔』へ向かわねばならぬのは、必然だ。レガードが見付かれば良いのだがな。言いたくはないが、不確定要素は未来に含めて考えるべきではなかろう」
多少詭弁が入るのは承知である。シェインがユリアを止められなかった理由はもっと至極簡単なものだ。だが宮廷魔術師と言う立場にあればこそ、口にするにはいささか憚られる。恐らくは、ラウバルも。
「まったくだな」

「かと言って、アルトガーデンの広大な領土がひとりの娘に継承される瞬間を狙うハイエナどもがいる今、王や後継者が不在の城を俺やおぬしがおいそれと空けているわけにもいかぬ。『レガード』王子をスケープゴートにするわけではないがな……。ましてユリアは顔が知られているわけでは……」

そこでシェインは言葉を途切らせた。視線をラウバルに向ける。

「……レガード様が何者かに襲撃を受けたとして」

低く、ラウバルが応じる。レガードが『王の証』を受けることを阻みたいものは大勢いるだろう。アルトガーデンが手に入るのだから。だが。

「その者はなぜ、『レガード様を知っていた』のだろうな？」

「……」

ラウバルの言葉にシェインが目を見張る。

「……そう言うことか……」

「まだ確定したわけではないがな」

得心のいったシェインは舌打ちをした。

「権力欲しさに兄が弟を襲うとは、まさに腐ったゴブリンだなあやつは」

シェインの言い草にラウバルは微笑した。

「滅多なことを言うな。確定したわけではないと言っている」

「第2王子であるレガードはロンバルトの外交などにも公には参加していない。諸外国との会議の席に参加するわけでもない。つまりヴァルス以外の諸国に基本的に顔を知られておらぬのだ。レガードの身分、立場、状況を細かく知りえて尚且つ動機があると来ればもはや確定であろうが」

落ち着かないのか、シェインは長椅子から立ち上がって窓際に歩み寄った。窓の外に視線を向ける。冷たそうな風が中に招じ入れられるのを待つかのようにカタカタと窓を揺らした。

「だがあのぼんくらがレガードに勝てるとは思えぬな。背後にいるのは誰だ？」

「ロドリスに、奇妙な動きがある」
「奇妙な動き？」
「表立ってはいないのだがな。……バルザックが絡んでるやもしれぬ」
「何……」
シェインの顔色が微かに変わった。ラウバルが静かにその視線を受け止める。
「……どこぞに潜んでたと思ったら、このタイミングか」
「まったくだ。『青の魔術師』と手を組んだかな」
『青の魔術師』と聞いて、シェインは苦笑した。まだご対面をしたことはないが、ロドリス王国の宮廷魔術師はシェインに負けず劣らず、若いらしい。そして現存する唯一のエンチャンターだと聞いている。
エンチャンターとは物体への魔力付与を得意とする魔術師を指す。ソーサラーの中にはこの能力を多少持つ者も少数だがおり、シェインもまたそのひとりだ。だが、エンチャンターと言えるほどに強力な魔力付与を出来る能力を有する者は『青の魔術師』のみだと言う。
実際のところは、もうひとり優れたエンチャンターが存在してはいるのだが、その人物は既にエンチャンターとしての能力を己に禁じており、世間には既に忘れられようとしている。つまりはエンチャンターと言える魔術師は、『青の魔術師』唯一人だ。
「詳細は現在調べさせているがな……。『王家の塔』それからロドリス、この2つの報告が良からぬ結果をもたらさねば良いと思うのだが」
どちらからともなく沈黙した。しばし各々の考えに沈み込む。
「……王女に関しては情報を待つ他ないな。風の砂漠に派遣している調査隊が何か情報を持って来るかもしれぬ」
「ああ……」
頷いてシェインはふっと顔を上げた。
「誤解しないでもらいたいのだが」

「何だ？」
「……俺は、カズキを捨て駒にするつもりは、さらさらないぞ」
「ふむ」
「……シサーたちがついていれば、少なくとも大過はあるまい。その為に、彼らに協力を依頼したのだから」
またも、それぞれがそれぞれの思いに沈み込む沈黙が訪れた。
時が経過すると共に、気がかりは増えていく一方のような気がした。減る気配がなく、まるでそれは何かの前触れのようだ。
何か――アルトガーデンの激震に、繋がらねば良いが。
（……バルザックか……）
黒石のロッドを持つ、魔術師。……かつての友。
ラウバルは自分に永き生命を与えることとなった、バルザックとの間に横たわる因縁に思いを馳せた。

一方同じ頃、ロドリス王国の森の中に建てられた屋敷のその奥、薄暗い部屋の中で黒いローブを身に纏った老人は水晶球に映し出される光景を黙したまま見詰めていた。
3人の人影が険しい山道でジャイアントスコルピオンと戦っていた。バルザックの視線はそのひとり、剣を握る少年に向けられている。
（……違う……）
彼が探している人物に、似過ぎている。だが、違うことに彼は気づいていた。
（何者だ……？）
古代のエンチャンターが魔力を付与した水晶球は、使用する者の魔力に応じて様々な場面を映し出すことが可能だ。だが、彼の探す人物……ロンバルト公国第2王子レガードの行方だけは、なぜかそこに映し出すことがない。
代わりにギャヴァンの街で、このレガードに似過ぎている少年を見つけ出した。それから時折こうして追跡をしてはいるのだが、そ

の正体は未だにわからない。
「レガードは、どこへ行ったのだ……」
低く、呻く。
レガードが見つからなくてもバルザック自身はさほど困りはしない。
だが、彼の『契約者』が、レガードの身柄を要求している。
青い瞳と青い髪を持つ若者の顔を思い浮かべた。明るい雰囲気の表情とは裏腹の、黒い悪意と野心。……『青の魔術師』セラフィ。
セラフィとの契約が成立しないことは、バルザックにとっても少々都合が良くない。また新しい計画を考え直さなければならなくなってしまう。
（レガードはもしや……奴の手元にいるのか？）
このバルザックの魔力を持ってしてもレガードの行方が掴めないとなると、もはやそうとしか考えられない。バルザックからでさえ、その姿を隠しおおせるほどのプロテクトをかけられる人物にはひとりしか心当たりがない。
「まあ良い……。ともかくこの少年を追っていれば、レガードに辿り着くやもしれぬゆえな……」
やれやれ、と言うように首を微かに横に振ると、水晶球の映像を消失させた。立ち上がり、小さく呟く。
「待っているが良い。……ラウバル」

第1部第10話　歴史の陰（2）

◆◇◆

火の爆ぜる音で目が覚めた。ぼんやりと目を開くと、辺りは既に暗い。体がひどく重く感じられて、ぼんやりとした頭で考える。

……何だったっけ……？

途端、頭にジャイアントスコルピオンの姿が浮かんだ。切り飛ばされた尻尾。猛然と俺に向かってくる姿。思い出して慌てて、体を起こす。

「カズキ！！」

俺が目覚めたことに気がつき、焚き火のそばでシンとじっと座り込んでいたユリアが俺を呼んだ。

「俺……」

鈍い手応えだけがあったことは覚えている。そこから先、意識が暗転してしまって記憶にない。

「ジャイアントスコルピオンの毒を受けたんだ」

「毒……」

そうだった。結構回りが早くて視界が霞んでたっけ。

「『王女様』が解毒の魔法をかけてはくれたんだが、毒を受けると回復魔法を使っても倦怠感が残るだろう。もう少し休んで……」

言い掛けたシンが不意に言葉を途切らせる。空を見上げて顔を顰めた。

「……とも言っていられないようだ」

つられて空を見上げると、鈍く空を覆った雲から、たまりかねたように滴が落ちてくるところだった。……雨だ。

「凌げるところがあるか、ちょっと探ってくる。その……」

きょろっと辺りを見回し、ほんの少しだけ岩が迫り出している壁面を指した。辛うじて大人2人くらい入れるか、というスペース。

「岩場の陰にいろ」
「あ、俺も……」
慌てて体を起こすと、シンは冷淡に言い放った。
「足手纏いだ」
さいでっか……。
軽やかな身のこなしで足音も立てずに消えていくシンの背中を見送ってユリアを振り返る。促して岩陰に移動しながら、小さく首を傾げた。
……もしかして。
勢いで一緒に行くとは言ったけど、良く考えたらユリアをひとりで放っておくわけにはいかないし、俺が本調子でないことを気遣ってくれたのかな……。
……本当に足手纏いなのかもしれないけどさ。
先程降り出したばかりの大粒の雨は、あっと言う間に大降りになり、黄土色っぽい乾いた土は見る見る水を含んで濃い褐色へと変化していった。ところどころの僅かな窪みに水が溜り、降ってくる雨が飛沫を跳ね上げる。
ぶるっとユリアが体を震わせた。夜になって、まだ微かに残っていた大気中の温度は雨に奪われてどんどん気温が下がっていった。吐く息がうっすらと白い。俺は羽織っていたマントを外し、ユリアの細い肩にかけてやった。
「あ……カズキ、寒くない？」
もちろん寒い。
「俺は平気」
「ありがとう」
ユリアは俺を見上げてにこっと微笑んだ。
それから雨に視線を注ぐ。叩きつける激しい雨の音だけが世界を覆っていた。
「……カズキは、どんな世界に住んでいたの？」
ひどく広範囲な攻め方で質問されると些か答えに詰まる。どんな

……どんな？

こうして改めて考えると、俺は説明できるほどきちんと自分の住むその世界と言うものを把握していないことに気が付いた。例えば政治。例えば経済。国際交流。文化。

ひどく、恥ずかしいことのような気がする。

元の世界に帰れたら、もっといろんなことに興味を持って積極的に知識を取り入れようと密かに決心しつつ、俺は今の可能な範囲で説明を試みた。

「……ここと同じように、いくつもの国があって……俺はその中の、『日本』と言う国に住んでて」

「ニホン」

「そう」

『日本』と言う国名に該当する言葉がヴァルス語にないので、まんま発音すると、ユリアがたどたどしく復唱した。まさに外国人が口にするのと同じイントネーションと言うか言い方で、ちょっとおかしい。

「ここと違って、『日本』には国王がいない。代わりに『天皇』ってのがいるけど、『天皇』は何だろ、いわゆる国のシンボルって言うのかな……。直接政治には参加するわけじゃなくて、国を治めるのは別に『総理大臣』ってのがいて、他に政治家がいて……」

ユリアはちんぷんかんぷんな顔をした。

「基本的には身分制ってのはなくて、みんな平等ってことになってるから、『総理大臣』も血筋じゃない。選挙で国民から選ばれるんだ」

「国民が？」

「そう」

まあ、本当の意味で平等なのかどうかはさておき。代々政治家の家庭なんかは、こっちで言う貴族みたいなもんなんだろうし。

それから俺は、自分にわかる範囲で日本の体制や海外との関係、それから自分の周囲の学校や家庭なんかの環境を手短に話した。

「……そう。良い世界に住んでいるのね」
雨音をＢＧＭにユリアがぽつりと呟く。顔を上げて俺を見つめた。翡翠色の瞳。
「行ってみたいわ、カズキの世界に。……カズキが生まれ育った場所を、見てみたい」
どきりとした。それは、ただの興味本位ってやつなんだろうけど。でも……。
シサーの声が脳裏を過ぎる。
――本格的に惚れたか？
（……）
これが、例えばただ海外とか……そう言う話なら。
……彼女の言葉に対して、もっと気楽に「今度遊びにおいでよ」なんて……言えるのに。
そりゃあ、彼女の暮らすヴァルスに比べて決して美しいとは言わないけれど。俺の住む東京なんかは。
だけど、ここことは違う何かはあるはずだし、ユリアと一緒に……あちこち遊びに行けたら。なんて。
（無理、だけどな……）
シンは、まだ戻ってくる気配がない。雨はますます激しく地面を叩き、淡い窪みに出来ていた水溜りは許容量を越えて既に溢れ出していた。まるで道そのものが川のようになっている。
「……その、さ。俺、こっちの世界に来たじゃん？」
「うん」
「……例えば、ユリアが向こうに行くってこととかは……出来ないの？」
ユリアは黙ってかぶりを振った。
「元々、人間があちらとこちらを行き来するようなことは出来ないの。だからカズキを迎えに行ったのもレイアだったのよ。妖精族なら、然るべき手段を使えば可能だから。そうでなければレイアに魔術付与した道具を与えたりしないでシェインが自分で行ったと思う

わ」

……あの中庭に、真っ赤な髪に真っ赤な瞳で巨大なロッドと偉そうなローブを身につけたシェインが現れたら、やっぱり度肝抜くと思う、俺。

「カズキは、魔力でこちらに無理矢理引きずり込んだ。外へ押し返そうとする力が働くものに対して、中から引っ張ったのよ。外から無理矢理押し込もうとしても、無理」

つまり、あっちの世界でシェインみたいに導いてくれる……その、魔力ってかそういうのがある人がいて、ガイドしてくれれば可能ってことなのか。……って、待って。俺、帰れんの？

「大丈夫」

焦ったのが顔に出ていたのか、雨が作る小さな川を眺めていたユリアがふっとこちらを向いて吹き出した。

「元々あなたはあちらの人間なのだから。ぽんと外に押してさえあげれば、あっちの世界が元に戻そうと働きかけて引っ張ってくれる。……わたしは、異質だから、駄目」

「……そっか」

別に、期待しちゃいなかったけど。

帰りたいけど。……帰りたいって、思ってるけど。

帰っちゃったら、ユリアとは、お別れなんだな。多分……一生。

シサーやニーナ、レイア、シェインやキグナス、ラウバルら……みんなとも、もちろん。

そんなふうに思ってしまうと、本当に帰りたいのかどうかさえぼやけていきそうで、どきりとした。

「……カズキは少し、変わっているわね」

自分の世界、こっちの世界について思いを馳せていた俺は、不意に言われた言葉に顔を向けた。ユリアが俺を見てそっと微笑む。

「そう？」

「うん。魔物と戦う時に、迷っているように見えるわ」

「……ああ」

そうか。この世界では、魔物と戦うことなんか当たり前のことだ。怖がりこそすれ、その命を絶つことに怯えているなんてやつはきっといないに違いない。

そう思うと少しおかしくて、俺は小さく笑った。

「生きてんだなって、思うから」

「……？」

「魔物でも動物でも……人でも。生きてるのは、一緒じゃん……。俺は、死ぬのは怖い。俺が死ぬのが怖いんだから、きっと魔物もそうなんだろうと言う気がする」

「……」

「そこまでも考えちゃいないだろうけど、でもどこかでそう感じているから攻撃してくるし、抵抗する。……そう、思える」

血塗られていく手のひら。

けれどそれでも尚、今も思う。

俺は死にたくない。ユリアを守りたい。だから、それを知りながら剣を振るうことを決めた。けれど心のどこかで、まだ迷う。

「自分だったら、どう、思うだろう。……全てを自分に置き換えて考えるのはある意味傲慢なのかもしれないけど、相手の気持ちを量る目安のひとつにはなる。少なくとも自分が嫌で、つらいと感じることなら、相手も喜びはしないような気がする。……だから、迷う」

「でも……魔物だわ」

「……うん。魔物だね」

馬鹿なことを言ったような気がして、思わず笑った。けれどユリアはそんな俺を真顔で見つめていた。

「……怖いよ」

「え？」

「命を奪うのは」

「……」

「魔物でも、人でも何でも、それは相手の命を自分が決めているってことだ……。そんな重たいもの、俺には背負えない」

「……」
「だけど、俺も奪われたくないから、そうすると、背負わざるを得ないんだ」
因果だ。
奪われたくないと思わせる気持ちが、奪わせる。そして、背負わせる。——他者の命というものを。
負うものが増えて、背中が重たくなってくる。次第に手が、血にまみれて赤く染まる。
「……争いごとは、好きじゃない」
「そうね……」
「他者を傷つけてまで、俺は、生きようとする自分が怖い」
それきり、沈黙になった。ユリアも黙りこくっている。俺も、これ以上言葉を紡ぐのをやめた。
これ以上言葉を重ねてしまえば、それは、この世界に生きることそのものを否定することになりそうで。
雨が地面を叩く音だけが、響く。
「……カズキにばかり、危険な思いをさせて、ごめんね」
ユリアがぽつりと言った。顔を向けると、視線はどこか遠くを見ていた。ユリアの口から零れる息も、僅かに白い。
「俺は……」
傷つけることに慣れていく、この手。
だけど俺は、そうしなきゃならない。
ユリアを守りたいから。……ユリアの為じゃなく、ユリアのせいじゃなく、俺自身がそう望んでいる。
「……」
「ユリアに、約束したから。レガードを、見つけてあげるって」
「……」
「だから、平気」
雨に定めた視線の片隅で、ユリアが微かに頷くのが見えるような気がした。

第1部第11話　躊躇い（1）

シンが戻って来たのはそれから間もなくで、シンが見つけて来てくれた程近い場所の岩壁が大きく迫り出しているその陰で野営を張った。

翌朝は雨が嘘のように上がって、低い気温のせいもあってか澄んだ青空が広がっていた。

ただ、そこから頂上までは道の険しさも手伝って5日程もかかり、やはりと言うか少しずつ雪が目につくようになっていった。とは言っても、深いと言うほどでもないのは、さすが南に位置する国だと言えるかもしれない。

魔物との遭遇率は、上がりもしなかったけど下がりもしなかった。ただ、山頂に近づくにつれて魔物の強さは上がった。……と思う。俺的に。

その代わり、ここに至ってようやく魔法石が『ごろごろ』し始め、何かケチって使っていたものが急に手軽になった。これは、でかい。

魔法石が豊富になったおかげでユリアも戦力として数えることが出来るようになったし、俺自身現在の戦闘能力では到底追い付かないような相手であっても何とか切り抜けることが出来たのだから、まさに魔法石様様とゆーやつだ。

それに、それなりに魔物との戦闘を重ねたおかげで、俺自身のスキルも少しずつではあったけれど、上がったんじゃないかと思う。攻撃を受けたり怪我を負ったりしなかったと言えば嘘になるけど、命に関わるような大怪我を受けたりすることもなかった。

シンが道案内についてくれるおかげで無駄な距離を移動することもなく、ようやく山頂だ。後は砂漠を目指して一挙に下山……ってなふうにいけばいーんだが。

険しい山の頂上は細々と痩せた木が生えていて、僅かに雪が積もっている。吹きすさぶ風にまるで凍えているようだった。風が強い

せいか、思ったほど雪が積もっているわけではないことにほっとする。

「こんなトコで野営したら死んじゃうんじゃないの？」

寒い。野営する前に死んじゃいそう。

シンはそれには答えずにすたすたと、既に下り坂になりかかっている斜面を進んで行った。……一言二言くらい、惜しむことないじゃんよ……。

仕方ないのでユリアと顔を見合わせて後を追う。

「シン！！どこ行く……」

尋ねかけて言葉を止めた。俺の後ろでユリアが小さく息を飲むのが聞こえる。

……祭壇が、あった。

「ファーラ神の……祭壇……」

シンが黙って俺とユリアを振り返った。

「キサド山脈の山頂には必ず祭壇がある。……らしい。俺はこのルートしか通ったことがないから、他を知らないけどな」

「何の為に……」

呟く俺の隣をすり抜けて、ユリアが祭壇の前に立った。

「旅の安全を見守ってもらう為だ。祭壇のおかげで、山頂には魔物は出現出来ない」

言ってシンも祭壇に目を向けた。

祭壇、と言っても、かなり小さい。俺の世界で言う、道路端にあるお地蔵さんの祠みたいな、あんな感じ。ただ、ああいう灰色の石で出来ているのではなく、大理石みたいなつるっとした感じの白っぽい石で作られているんだけど。

そこに白い雪がうっすらと積もり、厳かな雰囲気をアップさせていた。ユリアは何だか神妙な面持ちで祭壇を見ている。

元々信仰心だのと言うものに無縁の俺には、その……神様を祀る心理ってのはあんまり良くはわからないんだけど……さすがにファーラ教を守護する国家の王女様は、深い信仰心を持っているらしい。

不意にユリアが小さく口を開いた。歌を口ずさむ。
それは、ヴァルス語であるのはわかるんだけど、俺の言語能力では到底何を言っているのかわからない……多分、古語とかそういう感じの歌詞だった。ただ、雰囲気で聖歌のようなものなのだとわかる。……あ。
（何だ……？）
何を言っているのかはわからないけれど、不思議と懐かしささえ感じさせるそのメロディに耳を傾けていると、体中に力が漲ってくるような感じがした。険しい山道の行軍で疲れた体が癒されていく。
シンもそれは感じたらしい。不思議そうな表情を浮かべて辺りを見回し、それからユリアに視線を注いだ。
「……今のは？」
歌い終え、瞳を閉じて祈りの言葉を唱えたユリアが再び目を開いたのを見て尋ねる。綺麗な黄金色の髪に、ゆっくりと雪が薄く積もっていく。
「聖書の第８９番よ。……どうして？」
「疲労回復の魔法かと思った」
言うと、ユリアはくすりと笑った。
「そうかもね。プリーストの神聖魔法には、『神聖歌』と言う魔法もあるから。それは聖歌が魔法の発動となるもの。ただ、上級司祭しか使えないのだけど」
そうなんだ。でも、確かに疲労は回復されたんだけど。
「何か、癒された」
俺がそう言って微笑みかけた時、シンが不意に硬い表情で今来た道を振り返った。
「……シン？」
つられて振り返る。ここには魔物は出ないって……え！？
俺も微かに顔を強張らせて、曇り空と雪のせいで視界の悪い道の向こう……ちらほら木が寒そうに連立しているその奥を見据えた。
――人の、気配。

「レガード王子。ご生存なさってたとは。驚きだ」
現れたのは、武装した男たちだった。……6人。あんまり上品な雰囲気の人たちじゃない。何だろう……身につけている防具とかだけ見ると、どっかの国の兵士とかそんな感じなんだけど、雰囲気はイメージで言えば山賊。
「誰だ」
俺のことを、レガードだと思っている。けれどとてもじゃないが好意的な雰囲気だとは思いにくい。
先頭に立った、多分ちょっと偉そうな感じの男が、口元だけでにやっと笑った。って言うか、頭にもヘルメットみたいな防具をかぶっていて、すっぽりと目元まで覆われているのでチョビ髭の生えた口元しか見えない。
「先日お会いしたんだがな。こんな見苦しいのはお忘れか？」
いやいや、と言うように首を横に振る。下品な嘲笑が男たちに広がった。――先日お会いした!?それじゃあこいつら、まさか……!!
「せっかく命を拾ったご様子なのに、お忘れとはな。もっとも、次の機会はもうないでしょうが」
チョビ髭の言葉に、背後に控えた5人の男たちがざっと展開した。チョビ髭を中心に扇形に広がる。
「お前たちは、誰だ」
低く、尋ねる。チョビ髭は重ねて笑いを放った。
「名乗っても詮無きことだ。……おっと……そっちのお姉ちゃんは上玉じゃないか」
びくりと俺の背後でユリアが体を震わせた。チョビ髭が下卑た笑いを向ける。
「後でいただくとしよう。……貴様を始末した後にゆっくりとなッ」
その言葉をきっかけに、男たちが剣を抜き放った。
「やれ!!」
くそ、まじかよッ。

「ユリア、逃げろッ」
言いながら俺は剣を抜き放った。シンがチャクラムを構える。
「嫌ッ。わたしも戦えるわッ」
言うなりユリアはロッドを構えた。祝福の魔法だ。ゲームなんかで言う、いわゆるラックアップの魔法で、敵の攻撃の的中率を下げ、こっちの回避率を上げたりとかする。一見して効いてるのかどうか良くわからないんだけど、魔法石の的中率が上がったりとか「あ、ラッキー」的なちょっとしたことってのが確かにあるので、多分結構便利なんだと思う。
それからすかさずユリアは魔法石を取り出した。
「『ノームの手』ッ」
こちらへ駆けて来る男たち目掛けて拳ほどの大きさの黄石を投げつけた。破裂すると同時に、6人のうち4人の足止めに成功した。ラックアップの効果かもしれない。
「さんきゅ」
ノームの束縛を免れた2人が、ぞれぞれ俺とシンに向かって踊りかかって来た。俺に駆け寄って来た男と剣を切り結ぶ。シサー以外で人と剣を交えるのは初めてで、硬質な音を立てて叩きつけられたその斬撃は結構なものだったけれど、レオノーラを出てからの強行スケジュールで筋力はそれなりについているらしい。剣が吹っ飛ぶようなことは幸いにして、なかった。
「『火炎弾』ッ」
ユリアが動きを封じられた兵士に向かって魔法石を放つ。兵士の剣を押し返す俺の視界を、炎の塊が吹っ飛んでいくのが見えた。
（くッ……）
こういうの、雑魚キャラなんだろうけど……ちょっと普通の高校生の俺には荷が重い。どう考えたって、年齢差も体格差も、そして経験値も違う。俺と切り結んでいる男は、少しあざ笑うような笑みを口元に浮かべた。
「先日に比べて、随分か弱くなられたようだな」

「……ッ」
本物のレガードと比べないでよ……。
「バルザックなどおらんでも、余裕だな」
バルザック？
なんて考えている余裕はない。相手と交差させたままの剣を押し返すので精一杯だ。……と、その力がふっと抜けた。勢い前のめりに倒れそうになる。
「ぐおおッ……」
男は血飛沫ををあげて仰け反っていた。その頬にダガーが突き刺さっている。
「何をしている、カズキ」
シンだった。自分の方へ向かってきた男はもう始末してしまったらしい。チャクラムとダガーの2つの武器を使うシンは、うまく使い分けて距離があろうと接近戦だろうと、器用に立ち回る。
「ありが……」
礼を言いかけて、シンの方へ向けた顔が青褪めるのがわかった。チャクラムで吹っ飛ばされたらしい、男の、生首。頭部とお別れした体が、力なくそこに横たわっている。
（嘘ッ……）
久しぶりに感じる、吐き気だった。
魔物を殺すことは、俺を、そしてユリアを守るために俺自身に課した。課すことが、出来た。
けれど今襲われているのは、魔物じゃ、ない。――人間だ。
（人殺しは……）
――人殺しは、嫌だッッッ！！！！！
俺やユリアの生命を脅かす存在なのだと言うことはよくわかっているつもりだ。魔物に勝るとも劣らないだろう。……わかってるさッ、頭ではッ！！でも、どうして出来る！？人だ、人間だ、俺と同じ人間を殺すことなんか、俺には出来ないッ……！！
シンは『ノームの手』に縛られたままの男の首を、遠慮なくチャ

クラムで吹っ飛ばした。別の男に再びユリアの『火炎弾』が飛ぶ。
「早くそいつに止めを刺しちまえ」
シンから怒声が飛ぶ。俺に襲い掛かってきた男のことだ。頬を貫通し、突き刺さったままのダガーに未だ地面でのた打ち回っている。
……無理だよッ！！
「カズキ！！」
「出来ない！！」
「何言ってッ……」
「もらったあ！！」
まだシンにチャクラムを投げつけられていなかったチョビ髭が不意に駆け出した。『ノームの手』の効果が切れたらしい。俺とシンの隙を突いてユリアに向かって剣を構える。
「ユリア！！」
「ちッ……」
シンが舌打ちをして、まだ残っている男に向けかけていたチャクラムの標的をチョビ髭に変更しようとする。その瞬間、『火炎弾』を受けた男が『ノームの手』から逃れてシンに向けて剣を振り翳した。振り向きざま、シンのダガーが閃く。
その間、俺はユリアに向かったチョビ髭を追いかけて剣を振り翳した。……どうしよう、どうすれば良い！？
「ユリア！！」
「きゃぁぁ！！」
チョビ髭が地面を蹴る。……ユリアッ！！
あと一歩でチョビ髭の剣がユリアに届きそうになった、その時だった。
「何ぃ！？」
「きゃあああ！！！」
ユリアの悲鳴とチョビ髭の怒号。吹き上がる風と光の……壁。
「うッ……」
突然ユリアの周囲に、地面から噴き上がるように光の壁が出現し

た。それに弾き飛ばされてチョビ髭が地面に転がる。
（あ……）
何か、懐かしい匂いを感じた気がした。本当に何かの匂いがしたわけじゃなくて……何だろう……感じる。これ……シェインだ……。
この感じには、覚えがあった。そう、確か、水流に巻き込まれて意識を失う寸前。
（……シェインの、魔法だったんだ……）
ユリアを守る為の。
そのおかげで、俺とユリアは離れることもなく守られて……シンに発見された枝まで運ばれたんだ……。
「何だコイツ！！」
焦ったように言う男の背中目掛けて、シンのダガーが飛来した。背骨を少し外したわき腹に深く刺さる。
「ぐはッ……」
チョビ髭は呻きながら地面に転がった。安全を感じたのか、突然出現した光の壁が、柔かく霧散するように消えて行く。ユリアは恐怖で気を失ったのか、光の壁に包まれていたその内側で倒れていた。
「ユリアッ……」
剣を収めて駆け寄る。抱き起こすと、ユリアはぐったりとしていた。俺の背後で、シンがチョビ髭に歩み寄る音が聞こえた。シンにダガーで頬を串刺しにされた男もいつの間にかシンが止めをさしていた。結局、６人ともシンがひとりで倒したことになる。
情けないのと、人間の死体に囲まれているという事実とで、俺は、全身の力が抜けたようにへたりこんだ。ユリアを抱きかかえたまま。
……俺は、凄い……無力だ。
「おい」
呻き声を上げる男の背に刺さったダガーを引き抜いて、シンは低く言った。ダガーが抜かれる瞬間、血が噴出し、男は一際高い呻きをあげる。構わずにシンは男を足先で転がしてその首筋にダガーを当てた。

第1部第11話　躊躇い（2）

「ちょいと聞きたいことがあるな」
男は声もなく頷いた。
「その前にそのこけおどしの覆面をとってやろうか」
言って、シンは顔半分を覆う防具に手をかけた。一気に引き剥がす。
「……ほう？見た顔だな」
シンの声に振り返る。とは言っても俺が知っているはずもない。
「ガレリアに根を張っている盗賊団『銀狼の牙』のお頭さんじゃないか？」
ガレリア？どこだそれ。『銀狼の牙』？
俺には全然わからないが、シンの言葉は正解らしい。チョビ髭が青ざめたのは傷のせいだけではないだろう。
「……何者だ」
うーん、確かにどこだかの盗賊団のヘッドの顔を知ってるって言うのはタダモノじゃない気がする。そうじゃなくたって、レガードを知っているって時点で十分タダモノじゃないんだけど。ナタと言い、シンと言い……謎が多い。
「そんなことは関係ない。ガレリアからはるばる出張して来て、どんな用件だ？前にレガードに会ったとか言ってたな？知っていることを吐いてもらおうか。……誰に何を頼まれた」
シンってのは何度も言うけど、愛想がない。感情を一切表に出さないその淡々とした物言いは、何を考えているのか読めずに奇妙な迫力がある。チョビ髭は慌てたように言った。
「お、俺は何も知らねえよ」
「ほう……」
シンの鋭い瞳がすっと細められる。首筋に当てられたダガーを握る指先に力が込められた。刃が沈み込み、血が滲む。

「本当だ!!本当に何も知らないんだ!!ただ、変な男に頼まれて……」
「変な男？どんな」
「青い髪に青い瞳の若い男だ。突然俺たちの住処に現れて、バルザックってじーさんと一緒にこの男を殺せって、肖像画を渡されたんだよ!!」
息を飲む。じゃあレガードが消息を断ったのは、そのバルザックって奴と『銀狼の牙』の襲撃を受けたからなのか……!?
「見たこともないような大金渡されたから……」
「その、バルザックと言うのは何者だ？依頼して来た奴とは仲間なんだな？」
「知らねえ。バルザックは黒いロッドの魔術師だ。けど、依頼して来た奴は、バルザックのことを信用してないみたいだった。裏切らないよう監視しろとも言われた」
「レガードを襲撃した時に何が起きた」
チョビ髭は意図を問うように俺を見た。本人がいるのになぜそんなことを聞くのか訝しんでいるんだろう。お生憎だが、俺は本人じゃない。
「答えろ」
シンがまた指先に力を込める。
「わ、わかったよ。俺らとその男の仲間と戦闘になって……バルザックが魔法を使ったんだ。俺には良くわからない強力な魔法だ。その魔法が炸裂して、その場にいた全員が一瞬目が眩んだ。視力が戻って来た時にはそいつの姿は、その場になかったんだ!!」
なッ……。
「一度住処へ戻った俺たちのところに、またあの青髪の男が来て、探せって……」
「ご苦労」
言ってシンは、首に当てたダガーを真横に引いた。血飛沫が上がり、チョビ髭が仰け反る。

「シンッ駄目だッ……」
「もう無用だ。生かしておいてくだらない情報を流されても困る」
「シンッ……！！！」
血を噴いて息絶えたチョビ髭を地面に放り出して、シンが冷酷な顔つきのままで立ち上がった。それを呆然と眺めながら、唇を噛む。
……わかってる、シンの言っている意味は。でも……でも、そんなのは、違う……ッ！！！！
家族がいて、大切に思う誰かがいて……人である以上、それは絶対で……。
一方的な都合で、無抵抗な人間を殺すとかそういうのは……ッ。
そういうのは、俺には、受け入れられないッ！！！！
「……お前、本当に何者なんだ」
ダガーの血を拭って立ち上がったシンは、ダガーをしまいこみながら俺を見据えた。返す言葉を持たず、項垂れた俺はユリアを抱きかかえたまま沈黙を守った。
吐き気が、する。涙が出そうだ。
俺の周囲には今、人間の男たちの死体が、転がっている。
気が変になる……。
「お前、何か変だ」
その言い方はちょっと傷つくんですけど。
「……野営する場所を、探そう……」
のろのろと、ユリアを抱えて立ち上がった。
チャクラムでシンに首を吹っ飛ばされたいくつもの死体。そして足元に転がる、ダガーで首を真一文字に切り裂かれて絶命した男の体。薄く積もった白い雪の上に散る、赤い飛沫。……吐き気が、なくならない。こみ上げる涙がなぜか、頬を伝い落ちる。
背を向けた俺にシンは何か言いたそうな視線を投げかけていたけれど、やがて小さくため息をついて俺を追い越した。
「この少し先に旅人の為の小屋がある。今夜はそこだな。魔物の襲撃を恐れることなくゆっくり休める」

「……小屋？」
「ああ。現国王クレメンス８世は名君だ。俺は王侯だの貴族だのは嫌いだが、クレメンス８世陛下は善政を布いたからな」
先導するよう先を行きながらシンが淡々と説明する。
「国民の安全に重きを置いた政策だ。金のない地方都市に国費から防護壁を造り、商人が旅をするポイントに小屋を造った」
あ、と思った。
ヘイズに行った時、こんな小さな町にも防護壁があるんだなあと思った。……そういうことだったんだ。
「リノの村にはなかったけど……」
「全ての町や村に同時に出来るわけじゃない。少しずつ進めてたんだろう。これまでそんなことをしてくれた国王はいなかったからな。……この国はまだまだ至るところに不備がある」
「……」
それもそうか。いっぺんに出来るわけがない。
ユリアを抱えているから両手が使えずに、俺は自分の肩で無理矢理、頬を伝い落ちる涙を拭った。シンは、見えているだろうにそれについては何も言わず、話を続ける。
「レガードが継ぐならば、その意志を継いだ国政をしてくれるかもしれないな。……ここだ」
シンの言う小屋は、祭壇から僅か１０メートルほどの場所にあった。木製で何か農家の物置みたいな本当に小さな小屋だったけど、小さな暖炉がついている。何より屋根があるのがありがたい。
その床に、俺がマントを敷いてユリアを横たわらせると、シンは暖炉の様子を見てたまっている灰を掻き出した。薪をくべて火を起こす。
「俺、レガードの身代わりなんだ」
シンが炎の種で燃えやすい藁の束に火をつけ、薪に炎を移す。薄暗い小屋の中、シンの顔が炎に照らされて赤く染まる。
「……」

黙ってシンは、火掻き棒で薪の位置を調整した。構わず続ける。
何かを話していなければ、気が変になりそうだった。油断をすると、泣き出しそうだ。
「現国王クレメンス8世が病床について……後継者としてレガードが選ばれた。王位を受ける為、レガードは『王家の塔』に向かった」
「……」
微かにシンの表情が動く。
「風の砂漠か」
「そう。知ってるの」
「……続けろ」
「……」
やっぱり秘密らしい。
「……その途中でレガードが消息を絶った。その辺の詳しい話は、ユリアが言った通り、国政に関わることだから、俺の口からは言えない。ただ、レガードを探す為、『王家の塔』に向けて旅をする為……容姿がレガードに似ていると言う俺が、選ばれた」
「……容姿が似ているのは、偶然か」
「うん。別に身内でも何でもないから。……ただ、俺は」
言って良いんだろうか。でも、一緒に旅をするシンに伝えておかないと、さっきみたいな状況で危険に晒さないとも限らない。そんな気がする。
「……こっちの世界の人間じゃない」
シンが目を見開いた。いつも淡々としているその表情に「は？」と言うちょっとぽかんとした表情が浮かんでいて……妙に見慣れず俺は小さく笑った。
「何の冗談だ」
「冗談じゃない。……俺ってレガードそっくりなんだろ。俺はレガードに会ったことがないからわからないけど。こっちの世界でここまで似ている影武者を見つけられなかったんじゃないか？全く別の世界にいた俺は、こっちに引きずり込まれたんだ」

「まさか」
「だから俺は剣なんか握ったことがない。俺の世界では必要ないんだ。人を殺すことは禁忌とされている。……人を殺すことが、俺は、本能的に許容できない」
「……」
吐き捨てるように言う俺に、シンは複雑な顔をしていたが、やがて床に座り込んで荷物を漁った。干し肉やパン、ロートスの実なんかを取り出す。俺もそれに倣った。しばらく沈黙したまま、食事に専念する。
「……お前は、囮か？」
やがて食事を終えたシンがぽつりと言った。今度は俺が沈黙をする。
「レガードが消息を絶った。何者かが絡んでいる可能性がある。そこに起こったことを探る為、レガードの容姿を持った人間が再び旅をする。レガードの消息に絡んだ何者かが、コンタクトをしてくる。……そう。さっきの『銀狼の牙』のようにだ」
「……」
俺は噛んでいた干し肉を飲み下して小さく笑った。
「そう、なんだろうな」
「……」
「はっきりとは、言われなかったけど」
わけがわからないまま、旅に出た。けれど、前に進み、いろいろ考えていくほどに気がついていく。
レガードに似た俺に、レガードの行方を調査させる——俺は、多分、囮だ。
シャインカルクで見た面々を思い出すと、胸が痛んだ。はっきり告げられずに、囮とされたことに。……命を、懸けて。
けど。
「信じてくれてるって、そう、思うことにした」
「……」

「だから、ユリアがいるんだと思う」
シンの視線が動く。俺も横たわったままのユリアに視線を注いだ。
「レガードが消息を絶つことになったその何かに絡んだ誰かが接触してきて……俺が、死んだりとか。そうなるって思ってるんだったら、王女様のユリアの同行を許すはずがないって。……ユリアがここにいることが、彼らの俺に対する信用の証なんだって、そう思ってる」
その為に、シサーやニーナをつけてくれたんだろうと。
「めでたいやつだ」
「同感だ」
そっけなく言ったシンに俺は苦笑した。同感だけど。お人良しかなって思うけど。
……そう、信じたいじゃないか。
誰より、俺の為に。
誰かを信じることは、必ず俺自身の為になる。
「……シンのこと、話してはくれないの」
パチン、と俺の背中で暖炉の火が弾ける。窓の外では、止んでいた雪がまたちらつき出していた。裸の木々が凍えている。
「……俺は、ギャヴァンの盗賊ギルドの人間だ」
……。
「え!?」
ってことは。
「シン、盗賊!?」
「ああ」
うひゃー。そうなんだ……。
――盗賊と言ってもいろいろあるのよ。職業盗賊は、ギルドと言う組合に属してるわ。別に危険な存在じゃないわよ、普通にしてれば。
いつだか、レイアが言っていたことを思い出した。本当だ。別に危険な存在じゃない。どころか頼りになる。
シンが飛び道具を武器として愛用し、気配を消したり足音も立て

ずに移動するのが得意なわけがようやくわかった。シサーにさえ気取られずに俺たちの後をつけることが出来ていたわけも。きっと『銀狼の牙』を知っていたのも、同じ盗賊同士だからなんだろう。

「その……ギルドのシーフが、何でレガードを？」

「言っただろう。借りがある。……それだけだ」

言ってシンは立ち上がった。

「今はまだ、それ以上は話せない。……もう、休もう」

「……うん」

半ば無理矢理話を打ち切られ、俺は仕方なく頷く。まだまだシンは謎が多い。

小屋の出入り口のところに見張りをするように蹲り、目を閉じたシンをぼんやりと見詰めて、俺も壁に寄りかかった。ため息をつく。

窓の向こう、祭壇から道の方には、男たちの死体が転がっている。

――その夜もまた、俺は、眠ることが出来なかった。

第1部第12話　別離と再会

対、人と。
対、魔物と。
生命、と言う観点で言えば区別してはいけないんだろう。動物愛護団体から訴えられそーだ。魔物が対象に含まれるかはさておき。
でも、俺は、人間だから、そこにはやっぱり大きな隔たりがある。捕食しようとする生き物に対する、抵抗。ナタの言う通り、俺には抵抗する権利があって義務がある。
迷いが生じても……防衛本能が強く働く。
でも……。
うまく、言えない。……いや、違う。うまく言えないんじゃなくて、わからない。どう違うのかも、どうしたいのかも……どうすれば、良いのかも。俺の世界とこっちの世界と、『正しい』ことが違うから、今の俺の中で基準とすべきものがわからなくなっているから、自分の中での『正しい』ことを俺は考えきゃならない。
ただ、とにかく人を殺すのは嫌だった。元の……自分のいるべき場所に戻った時に、果たして俺は、人を殺めた体験を持つ自分を、許せるのだろうか。
ナタの声が蘇る。驕りがあるからこそ、躊躇が生まれるのだと。安全に守られ、自分の手を汚すことなく生きてきた者の傲慢。
けど、どうしても正しいと思えない。思えないのに、じゃあ自分を守る為に誰かが代わりに手を汚すのもまた……良しと出来ない。
そしてまた回る。堂々巡りだ。
俺がレガードとして狙われる以上、俺やユリアを守る為にシサーやシンが手を汚すハメになるのは、必然なのだから。俺は、それを見過ごし、目を瞑っていて良いのか？……良いわけがない。他人に手を汚させて自分はのうのうとしているわけにいかない。それじゃあただの、卑怯者だ。

でも……嫌だ。

どうしたら良いのか結論は出なかったけど、下山するまでの5日間、幸いにして山頂のように人の襲撃を受けるようなことはなかった。代わりに魔物はばんばん出たけど。

砂漠側の斜面に出たせいか、山のこっち側は吹き付ける風も強く、乾いていた。木や草もほとんどなく、暑さえ乾いている。下るに連れて段々、まばらでも生えていた木々が姿を消して、粗い山肌が露になっていった。見晴らしが良くなってくる。

「あれが、風の砂漠だ」

両側に聳えていた高い土壁が途切れ、景色が見渡せる場所で不意にシンが言った。強く吹き抜ける風がシンの黒髪を弄る。言われて向けた俺の視線の先には、どこまでも続く黄砂の砂漠が広がっていた。遠く、地平線は舞い上がる砂埃のせいか黄色っぽく霞んでいる。

「凄ぇ……」

思わず呟いていた。砂漠を見たのは生まれて初めてだ。俺は鳥取砂丘すら見たことがない。

どこまでも、砂だけだ。大きな起伏はないみたいで、ただただ陽に灼かれた一面の砂。荒く、厳しい自然の、猛々しい美しさとでも言うんだろうか。この中を旅したら美しいって言う感想なんかタチドコロに消えそうだけど。

「何だ、あれは……」

呆然としている俺の隣で、シンが眉を顰めた。訝しげな声を出す。

「え？何が？」

シンの視線の先にあるのは、広がる砂漠のずっと地平線の方……左右で言えばほぼ中心点にあたるようなところに見える、黒い渦に向けられていた。……渦？竜巻！？

どこまでも黄色いその地面に対し、その遥か遠くの空高くまで渦巻く竜巻はこげ茶を通り越して黒っぽい渦を巻き上げていた。ここからは遥か遠くて害が及ぶ危険性はなさそうなんだけど、距離を差し引いてもそれほど巨大な竜巻と言うわけでもなさそうだ。

「竜巻だ……」
「あの辺りには、『王家の塔』が見えるはずだ」
「え！？」
風に持っていかれそうな髪を押さえながら、俺と同様に呆然と砂漠を見渡していたユリアと俺が同時に叫ぶ。シンはこっちを見向きもせず、真剣な眼差しを竜巻に向けたまま呟いた。
「前に来た時は、あんなものは、なかった」
「前って？」
「……」
ええええ、答えてくれないとは思ってましたけどね。もう慣れましたけどね。
「『王家の塔』よりこっち側に竜巻が発生していると言うだけの話かもしれないがな。いずれにしても竜巻なんて滅多に起こることはないんだが」
「そうなの？けど、『風の砂漠』でしょ」
「それはそうなんだが、竜巻と言う現象はあまり見かけないな。……行こう。こんなところでぼんやりしていても仕方がない」
促されて歩き出す。
そこから麓までは、もう1時間ちょいくらいの距離だった。ようやく山を抜けて、久しぶりに開放的に広がる平地に何だかほっとしてしまう。いや、砂漠なんつったらまた別の魔物がうじゃうじゃいそうで嫌は嫌なんだけどさ。
「やっと越えた……」
「うん。……お疲れ様」
吐息をつくように呟くユリアに微笑みかけ、シンに向き直った。
シンが、俺が何か言うより先に口を開く。
「ここで、お別れだな」
……え！？
「ここから山沿いに北へ向かえ。3日ほど歩けばギルザードと言う街があるはずだ」

「ギルザード？」
砂漠なのに、街が？
「山越えをした者もする者も、必ず立ち寄る街だ。他に街がないからな。……例の傭兵たちも、必ず立ち寄るだろう」
「……シンは？」
「俺はこの先、行くところがある。……大丈夫だ。ギルザードまでは、恐らくジャイアント・スコルピオンかそのレベルの魔物程度しか出ないだろう。間違って砂漠の奥まで足を踏み入れなきゃな。お前でも何とかなるはずだ」
お前でもって……そりゃあシンに比べれば随分役立たずではありますが。
「行くところ？」
「ああ」
「ひとりで、行くの」
「ああ。慣れてる」
シンは視線をどこか遠くへ彷徨わせた。結局、シンのことは良くわからないままだ。
そして、随分助けてもらったお礼も何ひとつ出来ないまま。
「……わかった。ありがとう」
「また、必ず会う時が来る」
「え？」
「その時までに少しは剣の腕を上げとけ」
言ってシンは、そっけなく踵を返した。最後の最後まで、冷淡だ。
そう思うと何だかおかしい。
「シン、本当にありがとう」
シンの背中に投げかける。シンは振り向きもせずにひらりと片手だけ振ると、俺たちとは逆の方向……南の方へ向けて山沿いに歩き出した。
――必ず会う時が来る。
なぜ、だろう。

まるで必然のように断言したシンの言葉が耳に残る。
しばらくその背中を見送った俺は、ユリアを促して歩き出した。
「行こう。……ギルザードへ」

◆◇◆

シンと別れたその日は、以降魔物に遭遇することもなく平穏だった。じりじりと太陽が熱い。乾いた風も強く、時折目も開けられないほどだ。
砂漠の風景は淡々としている。どこまで歩いても同じような景色が続き、衝撃を吸収する砂のせいで足も重い。ただ、左手に山がずっと続いているので、その変化で辛うじて進行がわかる。
「シサーたち、どうしたかしらね」
「うん……。ギルザードで、うまく会えれば良いんだけど」
2日目になると、さすがに魔物に何度か遭遇した。けれど、シンの言う通りジャイアント・スコルピオンばかりで、山中でも何度も遭遇をしたので対応には慣れたものだ。
俺とユリアは、レガードのことについては口にしなかった。ユリアは意識を失っていたので、『銀狼の牙』の話は聞いていない。戦闘の最中に突如行方がわからなくなったなどと聞いたらどう感じるのか判断が付かず、言えずにいた。
「……もう少し歩いたら、休憩しようか」
「うん」
疲労のせいか、旅をしている間は口数が減る。無駄口を叩いていると体力が損なわれるのだと言うことが俺もユリアも身にしみてわかっていた。黙々と歩いて行く。
……それでも。
時折、ユリアに差し伸べる手、応える笑顔。
そのひとつひとつが、近くなっていく、と思うのは俺だけなんだろうか。

それとも、それは……俺が、レガードに、似ているから……？

左手にずっと続いていた山が、不意に途切れた。地面も砂漠ではなくなって、乾いてはいるものの辛うじて草原と言えそうな地帯に突入する。ずっと砂漠が続いていくんだと思っていたから、驚いた。

「凄い……」

ユリアが呟く。山が途切れた左手には突如深い渓谷が現れていて、その高さと言うか深さと来たら目も眩みそうだ。遥か何キロも先と思える下には、激しい水の流れがあることが辛うじて見える。いわゆる断崖絶壁と言うか。

その渓谷を越えた向こう側、こっちより随分下ではあるけれど、そこからは平地が広がっていた。深い森が見える。リノへ向かう途中、遠くに見えていた森があったんだけど……それだろうか。

「あれが、聖なる森よ」

「聖なる森？」

首を傾げるとユリアが俺を見上げた。渓谷から吹き上げる風がユリアの髪を舞い上げる。

「教皇領エルファーラにある森。とても深い森」

「ふうん」

「ファーラ教の聖地とも言える教皇領にあるから、そう呼ばれているの」

山に囲まれた乾いた砂漠を歩いて来たせいで、何にも阻まれない吹き抜ける風がひどく心地良い。この砂漠そのものが結構な標高にあるんだなと言うことに今更気が付く。遥か遠くまで望めるその景色が心を癒してくれるような気がして、俺もユリアもしばらく黙ったまま、そこに立ち竦んでいた。

抜けるように広がる空は青く、どこまでも続く美しい景色が、異国にいると言う感覚を強くさせる。それは同時に、郷愁を感じさせた。

……もうすぐだ。

風の砂漠まで、辿り着いたんだから。
レガードの行方の手掛かりらしきものも少しだけ掴んだし、きっと『王家の塔』まで行けば何かわかることもあるだろう。
そうしたら、おしまい。
俺の、当たり前の日常が戻ってくる。
「エルファーラってとこには行ったことがあるの？」
景色に目を細めながら尋ねると、その言葉にユリアがにこっと微笑んで頷いた。
「あるわ。大教皇にもお目通りしたことがあるわ。……尤も、大教皇のお姿を拝見したことはないのだけれど」
「へえ」
さすがアルトガーデンの皇女様。
「いつか……」
ユリアの髪が風に舞う。遠くを見つめる瞳をそのままに、ユリアが、言った。
「こんな危険な旅ではなくて、あちこち、回ってみたいわ」
「ああ……そうだね」
気楽にあっちとこっちを行き来出来れば、もっと素直に楽しめるのかもしれないな。
帰れるんだったら、外国とさして変わらない。いや、言葉を覚えた分、下手な外国よりはこっちの方がいやすいかもしれない。
そうしたら、こっちのいろんな国とか回ってみると、きっと物珍しいことばかりだろう。シサーがいればきっといろんなことを教えてくれるだろうし、何より、こっちにはユリアが……。
「……一緒に行けたら、楽しいわね」
「うん……え？」
聖なる森に視線を注いで言葉を聞いていた俺は驚いてユリアに視線を戻した。見つめる瞳が細められている。
……一緒に？
「俺と……？」

「うん。もっとゆっくり、カズキとあちこち行ってみたいわ」
どきりとした。
い、いや、深い意味はないだろう。わかっちゃあいるさッ。でも『俺と』って言った。そう言われれば嬉しいに決まってる。
どきどきしてしまって返す言葉が浮かばない俺を、ユリアが目を細めた柔らかい表情のままで見上げた。風に舞う、黄金色の髪。
「わたしね」
何かを言いかけた、その時だった。
「……カズキ、あれ……」
ふっと顔を、これから進む進行方向へと戻したユリアが不意に言った。ぼんやりしていた俺はその声で我に返る。
「え？」
「……シサーたちだわ」
つられて向けたその視線の先には、複数の人影が見えていた。まだ、距離にすれば何百メートルとか離れてるんだけど。でも。
「ホントだ……」
俺も呆然と呟く。顔を見合わせた。
「行こう！！」
「うん！！」
どちらからともなく、駆け出す。……間違いない。シサーたちだ！！
こんなにタイミング良く、うまく会えると思っていなかった。
歓喜と安堵。……これでもう、ユリアを必要以上に危険に晒さずに済む……！！
「シサー！！ニーナ！！」
「ユリア！！」
「カズキ！！」
向こうもこちらに向かって駆け出してきた。自然と顔がほころぶ。
たまっていたはずの疲れも、一気に忘れた。
「無事だったか！！」

「シサー！！」
……あれ？
駆けながら、目を瞬く。近付く人影は、３つ。サイズから考えて、レイアじゃない。
「えええええ！？」
駆けながら思わず目を丸くした。白金の髪、オレンジ色の瞳、俺よりちょっと小さな小柄な体。……思いがけない人物。
「キ、キグナス！？どおして！！！」

◆　◇　◆

ギルザードまではあと、ほぼ半日の道のりだ。合流した俺たちは、ともかくギルザードまで行ってそこで一度休憩しようということになった。
どうしてキグナスがいるのか、反対になぜレイアがいないのか、なぜこんなにタイミング良く会えたのか、あれからシサーたちがどうしていたのかなど、聞きたいことはたくさんあったし、俺も『銀狼の牙』のこと、シンのことを話したいのはやまやまだったんだけど。
「ここで話し込んでてもしょーがねえ。とりあえずお前らも疲れてるだろうし、街へ向かおう」
と言うシサーの言葉で、何はさておき街についてからにしようと言うことになったのだ。
それと、シサーたちと再会して僥倖なことがもうひとつあった。
ユリアの荷物だ。
足を滑らせた時、その場に荷物を落としてきていたらしく、ユリアの荷物はシサーたちが持っていた。もちろん『遠見の鏡』も無事だ。それを安心したように取り出してからユリアは俺に泣きそうな視線を向けた。
「今更連絡したら、怒られそう……」

……そんなこと言われても……。

途中で日が沈み、野営をしても良いとシサーたちは提案してくれたのだが、俺とユリアは強硬に夜間突破を言い張った。

疲れているのはもちろんなんだけど。疲れているからこそ……気を張ることなく宿で休みたい。

正直、汗と返り血と砂埃でどろどろだし。可能であれば早く風呂にも入りたいし。

街の灯りは遠いけれども、それでもここからもう見えていて、実際聞いてみると4、5時間くらいだってことだし。だとすると夜半頃にはつく計算になる。

それだったら、多少強引でも今日中にギルザードにつきたい、と言うのが俺とユリアの意見だった。

まあね。実際俺は昨夜もその前も、交替要員がいなかった為夜通し見張りをやって起きてて……ユリアに見張らせるわけにはいかないし。昼間にちょっとだけ仮眠を取ったけど、これだけ歩いて戦って、仮眠なんかで足りるもんか。なので、死ぬほど眠い。今すぐにでも眠りたい。

が。

あと少し頑張れば宿があると思えばやっぱり宿で眠りたい。

シサーたちもそんな俺たちの意見を尊重してくれて、結局日が落ちてからも街を目指して歩き続けた。夜の強行軍と言うことで魔物との遭遇率は俄然跳ね上がるのはもちろんなんだけれど。

「軽やかに踊る風の精霊シルフよ、その姿を刃に変えよ！！ウォラト！！」

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ダテ・エト・ダビトゥル・ウォービース・イグニス！！『火炎弾』！！」

シサーのグラムドリングが閃き、ニーナの、キグナスの魔法が飛ぶ。俺もはぐれる前から比べれば多少は戦い慣れたし、ユリアの回復魔法も効率的に発揮出来るようになっている。魔法石はふんだんに持っているし、砂漠の端辺を徘徊している魔物なんて雑魚だった、

はっきり言って。

怒涛のごとく、湧き出るワンダリングモンスターを撃破し、風の舞う砂漠近くの闇を薄らぼんやりと照らしている下弦の月が真上を通り過ぎようとした頃、ようやく俺たちは街までもういくらもないと言うところまで到着することが出来た。

「あれが、ギルザード……」

小さく呟く。ユリアも俺の隣に立って小さく頷いた。

人の住む空間に辿り着いたのは、いつぶりだろう。リノの村以来だから……既に半月近く経過している。安堵なのか、気が抜けたのか、体中にどっと疲れが押し寄せてくるのを感じた。

「今日はゆっくり休みな」

最後に戦ったコカトリスとサンドゴブリンの混成部隊で汚れたグラムドリングを拭いながら、シサーが俺に笑顔を向けた。

第1部第13話　ギルザードの夜

「黄昏てるじゃねえか」

ギルザードは、一応草原地帯にある街とは言え、やはり砂漠の街だ。乾いた土で出来た通り沿いの街並みは、土を焼いた煉瓦造りの建物ばかりで、軒並み背は低かった。風が強いせいだと言う。

街の中を通り過ぎる風も乾いていて砂塵を含んでいるせいで、街の空気は僅かに黄色く煙っているようにさえ見える。時折、僅かな草原地帯に生えている木々が風に弄られるような音が聞こえてきた。

深夜の来訪ではあったけれど、旅で何度もここに立ち寄っているシサーは衛兵も知っているらしく、ヘイズの時みたいに押し問答になるようなこともなくあっさりと門の内側に入れてもらうことが出来た。

シサーたちが宿泊していたと言う割と大きめな宿に潜り込み、荷物を置いて携帯食で簡単な食事を済ませた後、俺は、一応ロビーと言えそうな出入り口付近の空間に置かれているソファでひとりぼんやりと座っていた。洗ったばかりの髪がまだ湿っぽい。

砂漠の街だからか公衆浴場はなく、仮にあったとしたってこの時間じゃあやってないんだろうけど……仕方ないので、宿の人に迷惑がられながらも無理矢理お湯をもらい、それで体を拭くのが精一杯だった。

熱射に晒される昼間と違い、ぐんと空気に氷のような冷気を含んだ夜ではお湯でも体を拭くのはひどく寒い。乾燥してるから、髪なんかはすぐに乾くと思うけど。

にしても、やっぱり何か中途半端だ。……ま、やらないよりはね。

「シサー」

当初はギルザードについたら情報交換をしようと言う話だったんだけど。ギルザードまで強行突破と言う羽目になったせいで、みんな宿についたら即効で眠ってしまっている。話をするのは明日とい

う事になりそうだった。
ぼんやりと窓の外を眺めて頬杖をついていた俺は、その声に振り返った。ロビーには明かりはなく、窓の外の月だけが唯一室内を照らす光源だ。
「湯浴みに行ったきり帰ってこねえし」
言いながらシサーは、どすんと俺の向かいのソファに腰を下ろした。
宿には、俺たちの他にも客がいるみたいだったけど、そんなに多くもなさそうだ。いずれにしても、みんな寝静まっている。
「ああ、うん……。ごめん」
「別に構やしねえけど。キグナスは寝ちまったぜ」
「うん」
「随分、戦い慣れ、したんじゃねえか？」
「……」
考え込んでいたことだったので、俺は言葉に詰まった。
ソファの背凭れにふんぞり返るように寄りかかり、両手を天に伸ばしたシサーは俺の顔を見て首を傾げた。
「どうした？」
「……人に、襲われたんだ」
「人？」
俺の掠れた声に、シサーのシルバーの瞳が真面目な色を宿す。
「キサドの山頂に辿り着いた時に。俺を、レガードと間違えてた」
「カズキ、じゃあッ……」
がばっとシサーが身を起こす。俺はその続きを待つことなく頷いた。
「レガードを襲撃した、と言っていた」
「身元はわかったのか？」
黙って首肯する。強い風が、ガンと壁を叩き、窓を震わせた。透き間から時折入り込む風が、甲高い嫌な音を立てる。
「『銀狼の牙』って言ってた。……知ってる？」

「『銀狼の牙』？」
シサーは記憶を探るような顔をしていたが、やがて肩を竦めて俺に視線を戻した。
「いや、知らねえな。何者だ？」
「盗賊団、みたいだ。……ガレリアってどこにあるの？」
「ガレリアか？ロドリスとリトリアの境にある山だな。……ガレリアの？」
また、黙って頷く。シサーは片眉を顰めた。
「何でまた……」
それから話を促す。
「それで」
「戦闘の最中に、姿を消したと言っていた」
「戦闘の最中に？」
「バルザックがどうとかって言ってた」
「バルザック？」
シサーが何かを思い出すような目つきをする。
「……知ってるの？」
尋ねてみると、シサーは複雑な顔をしながら首を傾げた。
「聞いたことがあるような気もするんだけどな」
思い出してよ。
「良く覚えてねえ。そいつは？」
「バルザックが魔法を使って、その場にいた全員目が眩んで……視力が戻った時には姿がなかった、って」
「間違いないのか。嘘をついている可能性は？」
俺は黙って顔を横に振った。
「ないと思う。……その人は俺のことをレガードだと思ってた。その場にいたはずのレガードに対して、嘘をつくとは考えにくい」
それを聞いてシサーは微かに苦笑した。
「『お前その場にいただろう』と思っただろうな」
「うん。そんな顔をしてた」

つられて俺も小さく笑った。
「そのバルザックとか言う奴が、魔法で連れ去ったのか？」
俺はまた顔を横に振った。否定ではない。わからない、の意だ。
「でも、『銀狼の牙』はバルザックと……一時的とは言え仲間だったし、『銀狼の牙』はレガードを探していた。俺のことをレガードだと思ってもいた。……違うような気がする」
「やっと手がかりが掴めたと思ったらまた謎か」
「うん……。シン、と言う人は知ってる？」
唐突に出された名前に、シサーは困惑の表情を浮かべて否定の意を返す。俺は小さく息を吐いた。
「シサーたちとはぐれた後、俺とユリアはシンと言う人に助けられたんだ。漆黒の髪に漆黒の瞳の。……ギャヴァンの、シーフ」
「ギャヴァンの？」
「うん。ギルドの人間だって言ってた」
「それが何で」
「レガードに借りがあるって言ってた」
「借り？」
シサーが考え込むように黙る。俺もそこで一度口を閉ざした。
山頂での出来事を、思い出していた。吹っ飛んだ生首。白磁のような雪の上に舞い散った、赤い花びら。……俺に、人が斬れるだろうか。何度考えても、わからない。
「ギャヴァンのシーフが、ロンバルトの王子様に借りねえ……」
ばすっと再び背凭れに背中を預け、肘掛に頬杖をつくとシサーは気だるそうに呟いた。
「うん。……シサー。レガードの顔って、知られてるわけじゃないんだろ」
「ああ。一国の王子様だからな」
「知ってたんだよ。シンは。俺がレガードに似過ぎているのが気になって、後をつけてた」
「……」

「ユリアを、レガードの婚約者だと言ったら、『王女様じゃないのか』って言った」
「……何者なんだ？」
「わからない」
シンの無愛想な顔を思い出す。そっけない口調。
そして……。
「『また会うことになる』って言ってた」
「そいつがか」
「うん」
また、沈黙が訪れる。少しずつ下り始めたものの、まだ高い位置にいる下弦の月が、一瞬雲にその姿を隠した。その動きに忠実に、月明かりに照らされたシサーの顔を雲の陰が通り過ぎていく。月を覆い隠す雲が通り過ぎるのに合わせるように、シサーが身動ぎをした。
「そのシンとか言うやつが、レガードと遭遇するなら『王家の塔』に向かった時としか考えられないな」
「……そう？」
「ああ。……ま、幼少の頃とかそういう話ならわかんねえけどな。レガードはシャインカルク城に住んでいたこともあるし」
その話は俺もユリアに聞いた。
「ただ、その頃の話じゃねえとすると……それ以降、レガードがギャヴァンに立ち寄ったことはねえんじゃないかな。少なくとも、俺は知らないな」
シサーがヴァルスの禁軍にいたことを考えれば、そしてユリアやシェイン、一応ラウバルなんかとも面識があることを考えれば、レガードがギャヴァンに立ち寄ることが耳に入ってもおかしくない。
もしかすると、シンは……俺が思うよりも遥かにレガードの行方に関して有力な情報を持っているのかもしれない。
「しかし、何だってガレリアの盗賊団なんかがレガードを襲ったんだ？」

「青い髪に青い瞳の男に、金を渡されて頼まれたって」
そしてあの男はシンに首を掻き切られた。
思い出して青褪めている俺には、部屋の暗さが幸いしてシサーは気が付かなかったようだ。視線を窓の外に移して考え込むような表情をした。
「青い髪に青い瞳の男……」
「……心当たりが？」
「なくもない。有名人だ。が、会ったことがあるわけじゃねえし、そういう容貌だと言う噂を聞いただけでな。……それに、青い瞳に青い髪の男が満更いないってわけでもねえし」
「誰？」
「……ロドリスの宮廷魔術師だよ」
宮廷魔術師、と聞いてシェインを思い浮かべた。赤い瞳に赤い髪。まるでシェインと対照的じゃないか。
シサーは考え深げな視線を彷徨わせてから、ふっと顔を上げた。
「実はこっちも、ちょっと厄介なことがあってな」
「厄介なこと？」
嫌だなあ。
そう思ってから、思い当たった。キサド山脈を下るその道すがら、シンの呟いた言葉。
――前に来た時は、あんなものはなかった。
「……竜巻？」
尋ねてみる。シサーは渋面を作って頷いてみせた。
「気が付いたか」
「シンが教えてくれた。あそこは普段、塔が見える場所だって」
「良く知ってるな。……まあ、ギルドの人間だったら当然か」
「何で」
シンも、何度もキサド山脈に来ていると言っていた。そして俺たちと別れる時も「行くところがある」と。
黙ってシサーを見つめると、シサーは苦笑いをして片手をひらひ

らと振った。
「そんなご大層な話じゃない。風の砂漠にはいくつか遺蹟があるし、ダンジョンがある。つまりお宝が眠ってるってことだ。盗賊団が調査してたって不思議はねえだろ」
ああ……そういうことか。
「キグナスは、シェインの代わりにユリアを守る為、お前のフォローをする為に、シャインカルク……いや、シェインに派遣されたんだ」
今、唐突に話が飛んだ気がする。
……とは思ったんだけど、キグナスがなぜいるのかも知りたかったので、俺は黙って続きを待った。
「本当はもっと早く合流する予定だったらしいんだがな。ちょうど時期を同じくして風の砂漠へ調査団が派遣されることになった。いくらキグナスがソーサラーとは言っても、まだ見習いでもあるしひとりで後を追って旅をするのは安全なわけじゃねえからな。その調査団の出発を待って一緒にギルザードまで来たってわけだ」
調査団……。
「レガードの件とは、別件？」
再びシェインの言葉が蘇る。――妙なことが起こっていそうだと言う、声が。
「別件だ。……別件と言い切れるかどうかわからんが」
そこでシサーはいったん言葉を切った。視線を窓の外に向ける。相変わらず、外では風が強い。
「ニーナも言っていただろう。シルフが荒れていると」
リノの村でだ。思い出して頷く。何か、わかったんだろうか。
「奇妙な一団が『王家の塔』を目指していたらしいと言う情報があったそうだ。そしてそれを境に普段は起こらない竜巻が、風の砂漠で異常発生した」
「異常発生……。じゃあやっぱりあの竜巻は……」
「『王家の塔』を囲むように発生している」

囲むように……！？

「気になったんでな。俺たちもカズキたちの到着を待つ間、少し砂漠に出てみた。それほど接近したわけじゃないからはっきりとはわからんが、あれは『王家の塔』を中心に据えて発生している。……多分、近付けないだろう」

「シルフは、何か教えてくれないの？」

「竜巻の方向へ近付くに連れて、会話が成り立たなくなるらしい。シルフからは情報を得られない」

俺とシサーは互いの顔を見合って黙った。

『王家の塔』に近付けない……普段、発生しない竜巻によって。

――偶然なのか？『王家の塔』に向かったと言う一団は……例えば、『銀狼の牙』……？

「まあ、このくらい離れていれば、シルフもおかしくなるわけじゃないらしいんでな。カズキたちが下山してきたのを知らせてもらうことも出来たわけだが」

「あ、そうなの？」

通りでうまく再会出来たと思った。

「ああ。お前たちとはぐれた後、すぐにニーナがシルフを呼び出してお前らの安否と居場所を探ったんだがな……。目印があるわけじゃないし、シルフがお前たちの場所を掴んだって、こっちには上手く伝わらない」

「そうなの？」

「俺は会話が出来るわけじゃねえからわからんが。下級精霊には、いわゆる言葉なんかを明確に話すことは出来ないみたいだな。ニーナなんかは意思の疎通が図れないわけじゃねぇけど、場所を説明しろと言うのはちと難儀らしい。しかも、結構離されてたみたいだからな。どうにもならなくて先に来ることに決めたんだ」

「そう言えば、レイアは？」

忘れてた。

シルフの話で思い出して尋ねてみると、シサーはついていた頬杖

を外し、ソファに深く沈みこんだ。
「ユリアはシェインと交信を義務付けられていたんだろう」
「ああ……うん」
「ユリアの荷物が俺たちの手元にあるってことは、交信が途切れる。代わりにしてやろうにも、こっちはやり方がわからない。仕方ないからレイアに事情を説明させにシャインカルクに帰した。身軽に移動できるのはあいつだけだからな」
「ああ、そうか……」
ユリアは今日は疲れきって、部屋に入るなり寝てしまったみたいだし、無事合流できたことをまだ知らないだろうからやきもきしてるかもしれない。
話をしている間に、月はどんどん傾いていく。それに伴っているわけじゃないだろうけど、風の強さはますます増していくばかりだ。体は疲れきっているし、昨夜は寝ていないしで本当は死ぬほど眠いはずなんだけれど……妙に頭が冴え渡ってしまっていた。シサーと交わした会話に頭をめぐらせる。
「……『青の魔術師』か」
「その、ロドリスの宮廷魔術師？」
「ああ。俗称だがな。『青の魔術師』と呼ばれているな」
まんまじゃん。
「もし、その……『銀狼の牙』にレガードの殺害を依頼したのが『青の魔術師』だったら……どういうことになる？」
俺の問いに、シサーは低く答えた。
「……アルトガーデンに対する、謀叛と捉えられても仕方ないだろうな」
レガードがつくはずの帝位を狙っている人間は、いくらいたっておかしくない。俺が知っている範囲でも、アルトガーデンは膨大な領土を持つ。……レガードが暗殺されたら起こることは帝位継承者の再選。
あれ？でも。

「レガードの顔って、知られてないんじゃないの？」
シサーは肩を竦めた。
「そこまでは知らんよ。だが、公の場で高貴な身分の人間が顔を曝さないと言ったって、王城に仕える人間は当然知っているし、外遊する時はどうしたって部下の者がつく。部下がついていれば高貴な身分の人間だと言うことくらいはわかるし……ま、本気で調べる気なら知ることは不可能じゃねえだろう。まして……」
そこで顔色が曇ったのは、月影のせいじゃないだろう。
「……身内に裏切り者でもいれば、話は早いな」
「……」
裏切り者……。
「シェインが何か掴んでいるかもしれねえな」
「ああ……うん」
こちらとあちらで情報交換をすれば、不確かなことも確かなことになるかもしれない。考え込みながら、俺は頷いた。
「……と。随分話し込んじまったな。疲れてるだろ。お前も今日はとにかくもう休め」
言ってシサーが話を打ち切るように立ち上がるのにあわせて俺も立ち上がった。
「……また、人に襲われるかもしれない」
ぽつりと言った俺の言葉の意味を問うように、シサーが心持ち顔をこちらに傾ける。
風が建物を微かに揺るがす振動を足元に感じながら、もう一度、苦く、言葉を押し出した。
「シサー……俺には」
「……」
「……俺には、人が斬れるかどうか……わからない」

第1部第14話　ハーディン王城

「セ、セラフィ。まだその……奴は見つからぬのか」
ロドリス王国現国王カルランス7世の呼び出しに応じて謁見の間に馳せたセラフィは、内心の舌打ちを押し隠して笑顔を向けた。作り物のように整った顔に浮かぶのは、誰もが愛さずにはいられぬような、愛くるしい笑顔である。
「現在全力で調査中ですよ。そう遠からぬうちに安否を確認、可能であれば身柄を確保致しますゆえ、そうお取り乱し下さいますな」
「し、しかしな、万が一失敗した場合には我らロドリスはアルトガーデンに対して謀叛を企てたと言う誤解を招こう」
己の主君の言葉のあまりの馬鹿馬鹿しさにセラフィは思わず状況も忘れて吹き出しそうになった。現皇帝の定めた正当な後継者を弑し、次期皇帝を再選しようと言うこの試みが謀叛と言わずして何だと言うのか。それをこの期に及んで『誤解される』などと、誤解が聞いて呆れる。
心の中での失笑を億尾にも出さず、セラフィは柔らかな笑顔を浮かべたままカルランスを見やった。
中肉中背、どこと言って特徴のない貧相で凡庸な顔立ち。だが、やや落ち窪んだ眼窩には疑い深そうな色が濃い。臆病者の証だとセラフィは思う。
こと上に戴く国王に関しては、ヴァルスに完敗だとセラフィは苦笑した。臆病で猜疑心は強く、行動力と創造力に乏しい。
「ご安心下さい。必ず陛下をアルトガーデンの主にしてご覧に入れます」
口先だけの恭しい言葉に、カルランスはきょときょとと視線を泳がせた。それを小さく嘲笑い、頭を垂れる仕草で顔を伏せる。
カルランスをアルトガーデンの皇帝位につけるつもりなど、セラフィには微塵もない。この器の小さな男に務められるはずがない。

「陛下。セラフィが陛下のご期待に背いたことなど、ただの一度もございませんわ」

不意に、カルランスの横に控えていた妖艶な女性がその艶やかな唇を開いた。見事な黒髪は腰まで届こうかという長さがあり、まるで絹で誂えたかのような光沢を放っている。やや目尻の上がった大きな瞳は猫科の動物を連想させ、長い睫毛が緩やかに上下した。

ゆったりとした衣服に身を包んではいるが、その体の豊かな起伏を隠すことは出来ず、匂い立つような色香を放っている。

カルランスの8番目の愛人にして現在寵姫の地位を不動のものとしているアンドラーシである。

元々地方の豪商の娘で、ヴァルスの下級貴族出身の母を持つアンドラーシは、その美貌と智才の聞こえも高く、ついに2年前若干16歳にしてカルランスの側仕えとして王都フォグリアにある王城ハーディンに召された。以降、完全にアンドラーシに骨抜きにされたカルランスを意のままに操り、影の最高権力者と言っても過言ではない。

アンドラーシはセラフィに、最高の笑顔を向けた。男なら誰もがひと時の甘い夢を見たいと願わずにいられない笑顔である。だが、セラフィは無関心だった。

とは言え、アンドラーシは事実上の最高権力者だ。機嫌を損ねるのは得策ではない。

「恐縮です」

こちらも最高の笑顔をアンドラーシに向けると、アンドラーシはうっとりとした顔でセラフィを見つめた。その、誘うようにねとつくような視線を気付かない振りでかわし、飾り物の最高権力者に視線を戻す。

「ともかく。……こちらで万事取り計らいますゆえ、陛下はどっしりと構えておいでになって下さい。素行が不審とあらば、痛くもない腹でも探られかねない。増して、痛い腹なら尚のこと」

無礼とも言えるセラフィの言い草に、しかしカルランスは反論す

ることもなく黙った。アンドラーシがカルランスの顎に手を掛け、そっと撫でるようにその美しい顔を近づける。
「陛下。セラフィの言う通りですわ。全て部下にお任せになって、陛下はもっと大きな展望に思索をお巡らせ下さいませ」
「お、おお……大きな展望とは？」
「もちろん、アルトガーデンを掌中に収めた暁に行われる陛下の政についてですわ」
「そうかそうか。なるほどな」
あほらしい。
白けそうになる目元を辛うじて笑顔の形に留めたまま、セラフィは床についていた片膝を上げて立ち上がった。
「では陛下。御前を失礼致します」
「おお。では良い報告を待っているぞ」
「セラフィ」
背を向けて扉に足を向けたセラフィに、アンドラーシの甘ったるい声が投げ掛けられた。
「はい」
仕方なく足を止めて振り返る。アンドラーシの視線が芳醇な誘いの香りを纏ってセラフィに絡みついた。
「ご苦労様」
「……お気遣い感謝致します」
一礼して扉の向こうへと抜け出ると、セラフィは知らず深い溜め息をついた。
アンドラーシのおかげで、セラフィは微妙な立場にいると言っても良い。アンドラーシのセラフィに対する恋着は人目を憚ることなく寄せられる。プライドは高いし、仮にも王の寵姫であるからべたべたとまとわりつくことこそないが、これ見よがしな仕草に熱情の籠もった視線はおよそ遠慮や恥じらいと言うものを知らない。
セラフィにはアンドラーシへの興味はまるでないが、応じれば不埒者として謗られようし、つれなくすればアンドラーシの機嫌を損

ねる。つまらぬことで気を使わせるなと言ってやりたい。まったく、主君の寵姫に想いを寄せられる臣下など、不幸以外の何物でもないのだ。増してセラフィは、こと女性に対して興味がないと来ている。かと言って特殊な趣味があると言うわけでもないのだが。

（やれやれ……）

軽く頭を振ってつまらない考えを頭から振り払うと、思考を切り替えた。毛の長い豪奢な絨毯を敷き詰めた広い廊下を逸れ、階段を上る。

テラスに続く角を曲がり、大きな窓をはめ込んだ両開きの大きな扉を開くと、中空に浮かぶテラスに出る。見回りの衛兵がセラフィを見つけて敬礼をした。

「見回りご苦労様です」

別に見回りと言うわけではない。それを言うならお前だろうと言う言葉は口には出さずに飲み込まれる。代わりに人懐こい笑顔が浮かべられた。

「ご苦労さん。何か変わったことはあったかい」

「いえ。異変はございません」

「そう。……少し、風に当たらせてもらえるかな」

「は」

慌てて椅子を取りに行こうとする衛兵にセラフィは苦笑した。

「いい。放っておいてくれればそれで」

「しかし……」

「いいんだ。散歩しているだけだから」

笑顔を残し、衛兵に背を向けて歩き出す。やや狭まっている通路を抜け、更に吹き抜けの階段を上がると見晴らし台があり、セラフィは手すりに前のめりに体を凭せ掛けた。緩やかな風がセラフィの青い前髪を舞い上げる。――『青の魔術師』と言われるその外見的特徴が、セラフィは嫌いではなかった。

（……バルザックの奴、裏切ったわけじゃないだろうね……）

深夜、部屋でくつろいでいるところに突如現れたあの時以来、音

沙汰がない。
常に人懐こい笑顔をその端正な顔に浮かべているセラフィは、仕官や衛兵に人気がある。だが、その腹に渦巻くどす黒い悪意と厭世観を見抜ける者はいない。男でさえ見惚れるその容貌に、先ほどの衛兵が遠くからぼんやりと見惚れていることに気付かず、セラフィは黒い思考を廻らせた。
（『銀狼の牙』が、バルザックに見つけられぬものを見つけられるとは思わないけどね……）
『銀狼の牙』からも連絡はない。
全ての始まりは、2人の来訪者だった。
ロンバルト公国の第1王子レドリックが、深夜密かにハーディンを訪れたのは4ヶ月前のことだ。レガードのヴァルス後継者決定の打診が各国に為された直後のことだった。
風に髪を弄ばせたまま視線を遠くに向ける。ハーディンから遥か遠くに見渡せる豊かな大地。――ヴァルス。
ロドリスはローレシア大陸の中心部よりやや南に位置する。最南端のヴァルスとの間にはロンバルト公国の小さな領土が挟まっているが、間に高い山などが存在しない為、ヴァルスの西部にある険しい山々が辛うじてハーディンから眺めることが出来るのだ。
――陛下にご助力を仰ぎたい議がある。
レドリックの要求はレガードを暗殺し、自分をアルトガーデンの帝位につけること。その際のロドリスの利益は、ロンバルトの併合とレドリックの後見人と言う立場である。ロンバルトの継承権を持つレドリックがロドリスの力を借りてヴァルスの国王となり、アルトガーデンを掌中に収めれば、それは実質上ロドリスのロンバルトとヴァルスの併合に他ならない。
ロドリスにしてみれば、「何でお前なんぞの協力を得てレガードを暗殺せにゃならんのじゃ」と言う話でもあるが、何分レガードに関しては情報がない。唯一の情報源として自ら飛び込んできたレドリックをみすみす逃す手もないというものだ。

加えて、カルランスには年頃の息子がいない。女ばかりが7人、唯一の王子はまだ5歳にならない。ヴァルス王女ユリアの婿取り合戦に参加しようにも、持ち駒がないのだ。ロンバルト公国第1王子レドリックと言う建前があってこそ、実現可能となる壮大な夢だった。

尤も、レドリックが帝位に一度就いてしまい、ロドリスの国力がヴァルス、ロンバルト両国に浸透してしまえば後はレドリックなどは不要である。さっさと処分して正式に三国を統一し、カルランスがアルトガーデンの皇帝として君臨すると言うのが、カルランスとセラフィの間で密かに交わされている目標地点とされている。

……建前としては。

(陛下もレドリック王子も、使えない……)

セラフィの望みを形にするには、2人とも邪魔でしかない。

そして、もうひとりの来訪者……黒石のロッドを持つ、黒衣の魔術師――バルザック。

完成されていない空間魔法をただひとり操り、望み通りの場所を自由自在に行き来する正体不明のソーサラーだ。

(どいつもこいつも……信用出来ないか、使えないか)

バルザックが何者なのかは、セラフィも知らない。バルザックの目的がセラフィと一致を見たので、相互協力をしているだけのことだ。信用する気など最初からないのはもちろんだしお互い様だろう。

前のめりに手すりに寄りかかっていた体を起こし、代わりに背を預ける。考え込むように組んだ腕の一方の手を顎に押し当てた。

ふとその視線が動く。テラスへと上がって来たその階段の陰に向かって言葉を投げ掛けた。

「グレン。いるなら声くらいかけたら?物陰から見ているなんて趣味が悪い」

その声に呼応するように長身の男が姿を現した。漆黒の長い髪を無造作に後ろで束ねられているが、サイドからぼろぼろとだらしなく零れ落ちている。どこか能面めいた朴訥な顔を一層間抜け面に見

せる丸眼鏡の奥で、小さな金色の瞳がにこにこと細められ、その下の口はへらへらと締まりなく緩められていた。
「いやいや、セラフィさんがね、物思いに耽られているようだったので。お邪魔しちゃ悪いかなーなんて。心遣いってやつですよ」
止めを刺すようにその口から零れた間抜けな声に、セラフィは苦笑した。
年の頃は30前後と言ったところだろうか。セラフィより年上だ。だが、階級は宮廷魔術師であるセラフィの方が上である。
「そんな気を使うタチだっけ？」
「あれぇ？やだなあ、知らないんですかぁ？私、こう見えても大変な気ぃ使い屋さんでしてね、この前も酒屋のゴルヴィーさんに……」
べらべらと余計なことを口走りながら、グレン……グレンフォードは階段を上がってきた。
が。
最後の一段に足を掛けようとした瞬間。
「うわおおううッ」
テラスに足を引っ掛けて前のめりにつんのめると、どういう勢いでかそのまま逆戻りしてしまう。階段の下から「むぎゅう……」と良くわからない呻き声が聞こえ、セラフィは頭痛を覚えた。
「……グレン。遊びに来たのかい？」
「……ううううう……。……あああああッ。アーチボルト様からもらったカップケーキがあああああ」
「……」
ひとしきり呻いた後、よたよたと今度こそ確実に階段を上り積め、テラスの上へと上がったグレンは潰れたカップケーキを未練がましそうに両手の上に広げながらセラフィの元に辿り着いた。
「……召し上がられますか？」
「……結構」
背中を凭せ掛けたまま、手すりに肘をついて頭痛のする額を押さえていたセラフィはあきれたような視線をグレンに向けて柔かく拒

否した。その手の上の物は、とても階級上の人間に勧めて良いシロモノではなくなっている。
「そうですか？形は悪いけれど、味はこれで結構……おお。さすがアーチボルト様……本当に良いんですか？全部食べちゃいますけど」
「グレンのエサを横取りする気はないよ。僕は寛大だからね」
「ほっほっほっほー。寛大でございますよねえ……」
「……遊びに来たのか？」
「私が勤務時間中に遊んでいたことがありますか、失礼なッ」
「遊んでるんだか仕事してるつもりでやっぱり遊んでるのか、区別がつかないんだよね、君の場合は」
「……それは区別つける必要がないんじゃないですか？」
「報告じゃないのか」
ようやく促すと、ゴミ屑を綺麗に食べ終えたグレンはきりっとした表情を作り姿勢を正した。
「全くその通りです。いやはや、千里眼ですか」
「……良いから。どうなってるのさ」
「現段階ではですねえ、まあ、完了とまでは言えないんですが」
「今整うとは僕だって思っちゃいない。……進んでるんだな。予定通りに？」
「ええ。まあ公妃さまがちょっとまだごちゃごちゃおっしゃっておられるみたいですがね。このまま話合いが進めば、まとまるのはそう遠くない話でしょう」
「そう。安心したよ」
愛くるしい笑顔を浮かべたセラフィにグレンはほうっと溜め息をついた。
「……まったくセラフィさんはその笑顔で何人を騙してきたんでしょうかねえ」
「騙してきたって、嫌だな。人聞きの悪い」
「いやはや。最高の武器ですよ」
「そういう君も……」

続けようとしたセラフィの言葉は、一際強く吹いた風に吹き消された。セラフィの青い髪が中空に舞い上がり、グレンの長いぼさぼさの髪が踊る。

（……『ジェノサイド・イブリース』、か）

――殺戮の天使。

グレンが遥か遠くヴァルスの山々に視線を定めるのを眺め、セラフィは小さな吐息をついた。

第1部第15話　過去の柵（1）

ギルザードでまるまる1日骨休めをして明日出発しようと言うことになっていたので、疲労もたまり、寝たのも遅かった俺は昼過ぎまで眠り続け、キグナスのエルボードロップで目覚めた。……嫌だ、こんな目覚め方。

「ぐえッ。……もう少し優しい起こし方って出来ない？」

「……俺が『カズキ、起きて★』とか言って優しくキスのひとつでもしたら気持ち悪くてしょーがねえだろが」

それはそれで、ある意味目覚めは早いかもしれない。

したたかに打たれた背中をさすりながら、ようやく堅いベッドを這い出して、俺は着替えた。

昨夜寝る前に洗っておいた衣服は、ここの乾燥した気候で綺麗に乾いている。上は袖のないシャツだけにして、後のはとりあえずベッドの上に放り出し、キグナスと並んで部屋を出た。

「……みんなは」

「シサーは下のロビーでだらだらしてる。ニーナとユリアは買い物にでも行ったみてえだな」

そう言うキグナスも、ご大層なローブとか官服みたいなのじゃなく、ラフなシャツとパンツと言う出で立ちだ。こうしてるとますます、悪戯小僧風になる。

階段を下りると、昨夜話し込んでいたソファのひとつにシサーがだらしなく寝そべっていた。長い足が肘掛から飛び出している。

「おー。よーやく起きたかあ。良く寝てたなあー」

う。

「ニーナたちには、昨日の話はざっと話しておいたぜ」

「あ、ありがとう」

「腹減っただろう。ニーナたちが戻って来たらメシ食いに行くか」

そう言ってシサーが伸びをしたところで、ニーナとユリアが連れ

立って戻って来た。ドアが軋んだ音を立てて開くと、急に華々しい笑い声が飛び込んで来る。
「ナイスタイミング」
「あ、カズキ起きたの？寝癖ついてるわよ。かーわいーい」
油断をするとニーナはすぐにそうやって俺を子ども扱いしてはからかう。……くっそ。
ねめつけながら焦って前髪に手をやる俺を、ユリアがくすくす笑いながら見上げた。
「おはよ」
「あ、お、おはよ」
ユリアを見下ろして笑顔を向け、どきっとした。下ろしたままの緩やかに波打つ髪に、ギャヴァンであげた髪飾りが……凄い、嬉しい。何か安物でも無駄じゃなかったのかなって言うか、喜んでくれているみたいな気がして。
妙に照れ臭くなって、俺は髪に手をやったまま言葉もなく顔をそらした。つまんないことのひとつひとつに、こうしてどきどきしたりするのがまた一層照れ臭い。
「んじゃあ行くか」
照れた顔を見られたくなくて、片手で顔をそっと覆う俺の肩を、ソファから立ち上がったシサーの大きな片手がぽんと軽く押し出した。

◆◇◆

移動したのは泊まっている宿『砂上の楼閣』からすぐ近くの食堂『オアシス』だ。
ギルザードは、環境のせいか色黒の人が多い。髪の色や目の色も、黒とか茶とか、濃い色が多かった。次いで多いのが金髪だ。国ごと、と言うより、街ごとにそういう人種……って言うのかな。そういう特色があるのかなあなんて考える。

この街も結構大きな街で賑わっている感じだったけれど、上品で華やかなレオノーラとも開放的で陽気なギャヴァンとも違う空気感だった。何だろう……もっと地に足が着いていると言うか、堅実な感じの活気とでも言うんだろうか。

『オアシス』は、昼時をやや過ぎた時間帯のせいか、通りを歩く人の数を考えればそれほど混んでいるわけでもなかった。窓際の大きなテーブルに陣取って、ランチの定食をオーダーする。

「あとエール酒」

最後にシサーが言った。

「昼から飲むの？」

目を細めて言ってやると、シサーは飄々と背凭れに背中を預けて腕組みしながら頷いた。

「あたりめーじゃん。昼間に飲む酒は格別だしなー」

大人って……。

「あと水を４つ」

日本ではレストランで当たり前に出てくる水も、ここではそうはいかない。いちいち金を取られる。特にここは砂漠の街だから、通常より更にお値段が嵩む。

ウェイトレスのお姉さんが去って行くと、俺の向かいでシサーはテーブルに肘を乗せて頬杖をついた。

「さてと……作戦会議といくか」

「これまでの状況整理しといた方が良いわね」

シサーの隣に座ったニーナが両肘をテーブルについて組んだ手の上に顎を乗せてシサーを見遣った。

「そうだな。状況整理と行こう。……レガードがヴァルスの後継者、つまりユリアの婚約者として正式に選出され、各国に通知が行ったのが、ええと……４ヶ月前だったか？」

確認するようなシサーの視線に俺の隣に座ったユリアが頷く。そこへ水のグラスとエール酒が先に運ばれて来た。とりあえずそれに口をつけてからシサーが先を続ける。

「で、それから……クレメンス8世陛下が病床につかれた」
「ロドリスが猛反発をしていたの。だからお父様はわたしたちの華燭の儀の正式な日取りなどを決めることも出来ず、ロドリスと幾度も話し合いの場を持った。……お父様が臥されたのは、2週間後よ」
ユリアが補足する。シサーが頷いて、続けた。
「レガードが旅に出たのが、およそ3ヶ月くらい前」
「そう。そして1週間ほどで、行方不明になった」
「風の砂漠を旅する奇妙な一団が出たってぇのも、その頃だ」
ユリアとニーナに挟まれるような形でテーブルについているキグナスが口を挟んだ。
「ってことは、カズキが助けてもらったシンと言うシーフは……その間に恐らくどこかでレガードと遭遇している、と仮定しよう。そして仮に『銀狼の牙』を訪ねた男ってのがロドリスの宮廷魔術師だとすれば、『銀狼の牙』に接触しているのがこれより前……レガードとユリアの婚約発表がなされてから『銀狼の牙』出現までの間ってことになるな」
「うん」
「シンと接触を持ったレガードは『王家の塔』へ向かう為、風の砂漠に入った。ルートは不明。そして奇妙な一団……『銀狼の牙』及びバルザックと言う謎の魔術師の襲撃を受け、戦闘の最中に行方をくらました。どこへ行ったかは、まだ謎だ」
全員神妙な面持ちでシサーの言葉を聞いている。そこへオーダーした料理が運ばれて来た。
ランチ定食は2種類で、魚のムニエルみたいなやつがメインのものと鶏肉のステーキみたいなのがメインのものがあって、俺とシサーは肉の方を、キグナスとユリアは魚をオーダーしている。ニーナはランチと無関係にただサラダだけ。
とりあえずフォークに手を伸ばして食べる気がなさそうにサラダをその先で突付きながら、シサーがユリアに目を向けた。
「で？」

「捜索隊を派遣したのだけれど、見つけることが出来なくて……」
「その捜索隊ってのは、どこを捜索したんだ？」
「もちろん表立って仰々しくは出来ないから、密使のような形だったのだけど……レガードが通るであろうルートを、と聞いているわ。つまり、レオノーラからノイマンの湖やヘイズ、ギャヴァン、リノそしてキサド山脈」
「もちろん風の砂漠やギルザードも？」
こくりとユリアが頷くのを見ながら、パンをちぎる。口に放り込んで、思わずシサーを見た。
「……竜巻は、いつ発生したんだろう」
「だな。……その、レガードの捜索の際には、風の砂漠に竜巻が異常発生しているなんて話は」
「出なかったわ」
言いながらユリアはキグナスを見た。キグナスもかぶりを振る。
「俺も知らねえな」
「じゃあ恐らく……なかったんだろう、その頃はまだ」
結局食事には手をつけずにエール酒のグラスにばかり手を伸ばしながらシサーは宙に視線を定めたまま呟いた。
「……で。シェインがカズキを見つけ出した？」
ニーナがキグナスに尋ねた。パンに直接かじりつきながらキグナスが頷く。
「とりあえず、陛下がいらっしゃるうちに後継者を何とか形にしなきゃなんねえからな。レガード様の捜索がてら、一方で『王家の塔』の攻略も考えた方が良いんじゃねえかって話で」
「必要だったのはレガードの影武者か」
頬杖をついてぼそっと言ったシサーの言葉に、キグナスが凍りついた。ユリアは俺の隣できょとんとした顔をしている。どこかしらーっとした空気が流れ、俺は肉を頬張りながら苦笑した。
「……で？」
続きを促す。

「それで……シェインが宝物庫の魔術付与された道具に細工して、レイアに持たせてカズキを迎えに行かせたの」
「……そう言えば、シェインと連絡取った？」
今聞くことでもないんだけど。話の流れで思い出したもんだから、つい聞いていた。ユリアが俺を見上げて頷く。
「怒ってなかった？」
「全然怒ってなかったわ」
「……あ、そう」
激甘だ。
「話の腰を折っちゃった、ごめん。……で、俺がこっちに来たのが1ヵ月半ちょい前くらい？かな」
「そうね……」
俺の言葉をユリアが肯定する。ぼんやりと突然『浄化の森』に拉致されたことを思い出しながら、内心「たった1ヵ月半なのか……」と言う気がしていた。随分経ったような気もするけど。
……でも、元の世界で俺が行方不明になっているんだとしたら、既に十分な期間が経過してるとも言えるか。死んでることにされてもおかしくないかもしれない。
「一度、レガードの捜索は打ち切られたのか？」
ユリアはこくりと頷いた。
「シャインカルクにカズキ……レガードがいることになっている。レガードを捜索するわけにはいかないわ。それに、元々それほど大掛かりな捜索を組むわけにはいかない。……諸国にレガードが行方不明だと知られるわけにはいかないんだもの」
「じゃあ、その間に『王家の塔』周辺で竜巻が発生したわけだな。レガードを見失った『銀狼の牙』は、再びロドリスの宮廷魔術師の命令を受けてレガードの捜索を開始した。で、山頂でカズキとご対面したってわけだ」
「その……バルザックって男も、かしらね」
ニーナが綺麗に皿を片付けて、口元を拭いながら首を傾げる。俺

も最後のパンの一欠けらを口に放り込んで、水を一口飲んだ。
「バルザックって、キグナスは聞いたことある？」
キグナスならシェインとある意味一番近いから、何か聞いてるもかもしれないと思ったんだけど。
「いや。俺は知らねえなあ……」
「そうか？俺、聞いたことあるんだよな。ラウバルかシェインが知ってると思ったんだが」
みんなが食べ終わった今頃になって、ようやく食事に手をつけ始めたシサーが、豪快に鶏肉にフォークを突き刺しながらもごもごと言う。
「ただ、ちゃんと聞いたってわけじゃねえんだよな、多分。ちゃんと聞いてたら覚えてるだろうし。……会話の流れでちらっと耳にしたとかそんな……」
そこで不意に言葉を途切らせた。視線が一点に固定されたまま固まる。
「……シサー？」
「でも、それなら後でシェインに聞いてみれば早いんじゃ……」
そんなシサーに気付かずに言ったニーナの言葉を遮るように、シサーが呆然と呟いた。
「グロダールだ……」
「は？」
シサー以外の全員が目を丸くし、その意味を図りかねて問う。グロダールってだって……倒されたブラック・ドラゴンだろ？
「ユリア、シェインと交信ってのは、すぐに出来るもんなのか？」
「え？え、ええ、まあ……。宿に戻らないと『遠見の鏡』がないけど」
「戻ろう」
「え、だってシサー、食事の途中……」
「構わねえって」
がたっとシサーが立ち上がって足早に店を出て行くので、勢いこ

っちも急いでついていくしかない。慌しく精算を済ませて店を出ると、宿に戻った。

とりあえず、男3人が泊まっている部屋に集まることにして、ユリアが『遠見の鏡』を取りに行くのを待つ。

「シサー」

「あん？」

「グロダールって、ギャヴァンに現れた黒竜でしょ？」

「ああ」

「……何か、ヤバそう？」

キグナスとニーナもシサーに視線を注ぐ。

「ヤバいかどうかは、聞いてみないとわかんねえな。俺が考えたことが当たってるとすれば、もしかすると敵に回すにしちゃあちょっと厄介かもしれねえけど……」

シサーが言葉を切ったところで、ユリアが『遠見の鏡』を片手に戻って来た。ドアを閉め、俺が腰掛けているすぐ隣に腰を下ろす。狭いベッドだし、みんなで話す都合もあるので……距離が近い。

「ウティナム・タム・ファキレ・ウェーラ・インウェニーレ・ポッセム・クァム・ファルサ・コンウィンケレ」

ユリアが呪文を呟くと、『遠見の鏡』から光が放たれた。一瞬その鏡の面は眩く反射していて何も映していなかったのだが。

「わ」

「どうした？」

シェインが、そこに覗き込むようにして姿を現した。これってどうなってんだろ。あっちにもこれと同じような物があったりするんだろうか。

などと悠長に考えていたら、優しさ溢れ返る顔でユリアを見ていたシェインが、一転してむっとした表情をするとトゲの入った声で俺に言った。

「近付き過ぎだ。離れろ」

あのねえ……こんな小さいもん、こうしなきゃ見えないでしょー

が。
　向こうにこっちの映像が見えているのはわかったけど、どうなってんだろとは思ったんだけど、そんな話をしている場合でもないので飲み込む。ユリアがシェインに説明した。
「あのね、シサーがシェインに聞きたいことがあるそうなの。替わるわね」
　言って、鏡をシサーに手渡す。目を丸くして鏡を覗き込んでシサーは口元をほころばせた。
「相変わらず妙なことを考える男だ」
「久々の対面でその感想はなかろう」
「考えるだけじゃなく実行に移すからなあ、お前さんは」
「考えるだけで良いのなら、もっと凄まじいことを考えておるわ」
「……場を改めて聞かせてくれ」
　あんまり聞きたくないような気もする。
「聞きたいことがあるのだろう？」
　俺のいる場所からはシェインの姿は見えないので声だけだ。だがその声がすっと低められたのを感じた。シサーの声も同様に低く応じる。
「……バルザック」
「……」
　短い沈黙が訪れた。シェインが低く尋ねる。
「確かか」
「わからん。『あの時』も俺はちらりとしか見ていないしな。今回に至っては名前が出たと言うだけだ」
「……」
「何を知ってる」
「知っていると言うほどのことは知らんな」
「ほざくな。グロダールの時のことを忘れたとは言わさんぞ」
　自分は忘れてて今さっき思い出したんじゃん……。
「そんな昔のことは忘れたな」

「ぼけ老人が」
俺たちは黙ってそのやりとりを見守っていた。『グロダールの時のこと』とやらを知らない俺たちには口を挟む余地がない。
「シェイン」
睨めっこに飽きたのか、シサーがため息と共に言葉を吐き出した。
「何の関係もないカズキが命を懸けて戦っている。……話してくれ」
「……」
「あの、バルザックとか言う魔術師は、浅からぬ因縁があるな？」
シェインの答えはなかった。どんな表情をしているのかわからないけれど。
シサーは忍耐強くその沈黙を受け入れた。やがてシェインの声が聞こえ始める。
「……知っていると言うほどのことは知らぬと最初に言っただろう」
「まだそんな……」
「事実だ！！俺とてバルザックと会ったのはあのグロダールの時が初めてだ。会話を交わしたわけじゃあるまいし、大したことは知らぬ」
「じゃあ、本当に知らないのか？」
「最初からそう言っている。信じぬのはおぬしだろうが」
「日頃のお前の態度の成果だ、喜べ」
むきになったように言い募っていたシェインはその一言でぐっと押し黙った。シサーが勝ち誇ったような笑みを浮かべている。……子供の喧嘩じゃないんだからさ。
「だがまあ、おぬしらより知っていることが多少あるのも、事実だな」
「だからそれを話せ」
気を取り直したように言ったシェインに、畳み掛けるようにシサーが問う。
「その前に」
それを制してシェインが問うた。

「そちらで入手した情報から話してもらおう」
「……いいだろう」
頷いて、シサーは先ほどの状況整理を踏まえながらギャヴァンを出発してからの出来事を、事実のみを述べていった。その間、俺たちはもちろんシェインも一切口を挟まずに黙って聞いていた。

第1部第15話　過去の柵（2）

「レガードとギルドの盗賊の接点か」
話し終えて黙ったシサーの代わりにシェインが口を開く。
「『借り』とは何なのだろうな」
「さあな。カズキ、尋ねてはみたんだろう」
シサーの視線を受けて頷く。そりゃ聞いてはみたけどね……あの人の非友好的加減ときたら……。
「必要なこと以外話してくれない人でね……。ギャヴァンのシーフだって聞いたのだって、一緒に行動するようになってから5日だか6日だか経ってて……シンに関して得られた情報って言ったら、そのくらいだなあ」
隣でユリアもこくこくと頷く。ユリアも俺と同様、シンのそっけなさを身に沁みて知っている。
「その『また会う時が来る』と言うのが引っ掛かりはするがな……。まあ良かろう。聞く限り有害な人物と言うわけではなさそうだしな。『借り』とやらはその『今度会う時』にでも聞いてみれば良い」
話してくれるかは全然別問題なんだけど。
「それより『銀狼の牙』だな」
「ガレリアから遥々のご遠征だ」
「ご苦労なことだ。ロドリスには略奪する蓄えもなくなって豊かなヴァルスに出張か」
嫌味を洩らしてから、シェインはやや改まったように続けた。
「ロドリスに奇妙な賓客がいるとの情報がある」
「奇妙な賓客？」
「ああ。……黒石のロッドを持つ黒衣の魔術師だそうだ」
「……ビンゴか」
「わからんな。調査をしてはいるが、戻りがない」
「青い髪に青い瞳の男と、黒石のロッドを持つ黒衣の魔術師……。

双方特徴だけ挙がっていて決定的な証拠がないわけか」
「ああ。……ロドリスの宮廷魔術師セラフィと黒衣の魔術師バルザックが組んだ、としか思えぬが。決定的に示す証拠はない。セラフィが『銀狼の牙』を使い、バルザックと手を組むのも、その為だろうな。加えてロンバルトに裏切り者がいると思われるが、それも不確かだ」
「なるほど。そこからレガードの情報が漏れたわけか。……にしても用心深いことだ」
話が見えない。
「いずれにしても、現段階では動けぬな」
「だが組んだとしたって目的が……」
言いかけたシサーの袖をつんつんと引っ張る。言葉を途切らせて、シサーは俺に銀色の瞳を向けた。
「あ？」
「俺、全然話が見えてない」
「……悪い」
苦笑してシサーが組んだ腕の一方で自分の顎を撫でた。
「つまり、戦争になりそうってことだ」
「戦争！？」
シサー以外の全員が同時に聞き返した。
……それもそうか。ロドリスの一貴族とかならまだともかくとしても……宮廷魔術師――公職に就いている人間がヴァルスの後継者を殺害しようとしたのならば、それは間違いなくヴァルスは放っておくわけにはいかないだろうし、増してヴァルスの後継者はアルトガーデンの後継者だ。アルトガーデン内部の一王国であるロドリスが次期皇帝を暗殺すればそれは……シサーが昨夜言っていたように謀叛になる。謀叛と来れば当然アルトガーデンは制圧するしかない。
――つまり、戦争だ。
そうか……レガードを暗殺したいけれど、ロドリスに叛意があるとは知られたくない。知られても構わないのかもしれないけれど、

とにかく制圧に乗り出す口実を与えたくない……その為に、ロドリス宮廷と直接関係のないバルザックや『銀狼の牙』なんて辺境の盗賊団を金で動かしたりしたと……そう言うわけか。

ようやく話が見えてきたような気がする。

「ありがとう。……で？」

「現段階では、確実な情報がまだない。青い髪に青い瞳の男など他にいないわけではないし、黒衣の魔術師なら一層だ。ロドリスを叩く正当な口実はないな」

促した俺にシェインの声が応じる。

「それに、ロドリスとの戦争は……現状出来れば避けたいのが本音でもあるな」

渋面を作っていそうな渋い声を出してシェインが呻いた。

「ロドリスは、リトリアと並んでヴァルスに次ぐ大国だ。戴く主が不確かな状態で、ことを構えるには荷が重い」

説明をするように続けるシェインの言葉に、ニーナが不意に顔を上げた。

「……『ジェノサイド・イブリース』は、ロドリス兵だったわよね」

じぇのさいど・いぶりーす？

シサーが低く肯定した。

「ああ」

「何だ？それ」

ベッドの上に寝そべって、聞いてんだか寝てんだかって感じだったキグナスが問うた。

「ロドリスの戦士だ。確か、近衛警備隊か何かってことにはなってたと思うがな」

「ああ。俺もそう聞いているな」

「……会ったことは？」

「……戦場での遭遇だな」

「3年……いや、4年前か？ナタリアとマカロフ間で紛争が起こったことがある」

多分、俺やユリア、キグナスに説明してくれているんだろう。
言われて俺はシャインカルクで学んだ地図を頭に思い浮かべた。
ローレシア最南端にあるヴァルスのすぐ上にレガードのロンバルト公国、そのすぐ上にロドリス王国が確か来ていて……ロドリスと国境を接する形でバートとリトリアがあったはずだ。ナタリアはバートから更に北上、マカロフもリトリアを北上した位置にあり、ナタリアとマカロフは国境を接している。
「知っての通り、ナタリアはアルトガーデン帝国領、マカロフは独立王国だ。要請に応じて、アルトガーデンを統括する立場にあるヴァルスは兵5千を派遣している」
そんなことまでしなきゃなんないんだ。大変だなあ……。
「一方ナタリアはロドリスと常に友好関係を保っている。リトリアと接しているから小競り合いが絶えないと言うのもあるんだろうが、ともかく、ロドリスも友軍を派遣した」
シェインはそこで一旦言葉を切った。後をシサーが引き受ける。
「俺はその戦争に傭兵として参加している。ニーナもな」
「え!?」
俺の視線に応えてニーナが頷いた。そのか細い容姿からは、戦争に参加している姿なんか想像が出来ない。けど……そうか。シサーって傭兵稼業で食べているわけだし……共にいるニーナも同様だ。
「ロドリスに派遣された兵の中にいたんだ、そいつが」
「『殺戮の天使』……」
ニーナが補足するように呟いた。――『殺戮の天使』？
「ちょいと、剣を交えたくない相手だな」
「その人が、何なの？」
「いわゆる狂戦士、と言う奴か」
狂戦士……バーサーカー。
「敵味方の区別はつけているようだから、正式にバーサーカーとは言えぬだろうが、奴の剣が閃く場所で生き残る奴はいないと言う。恐ろしいほどの体力とスピードの切れを持つと聞いているが、俺は

見たことがあるわけではないのでわからぬ」
　オソロシイ。
「その通りよ。……敵でなくて良かったと思った」
　ニーナが青い顔で俺を見つめた。
「ああ。遊撃部隊を1人で撃破した。どこの部隊にも属しない、孤立無援の遊軍としてな。指揮系統を必要としない……と言うよりは、無意味なんだろう。群れて戦うタイプじゃない」
「ひとりで一個中隊程度なら殲滅すると聞いているな。……加えてクレメンス陛下が病床に臥され、レガード王子がいない今、ヴァルス軍の士気は上がらない。帝国髄一の強国ヴァルスが負けるとは思わぬが、戦争を行うのは些か嬉しくない」
　何だか……物凄く物凄く大きな話になって来たような気がする。
『殺戮の天使』……。
「しかし、仮に『青の魔術師』とバルザックが手を組んでいるとして、その目的は何なんだ？お前、肝心のバルザックの話をしてないだろうが」
「だから俺自身さほど知っているわけではないと言っておろーが。……バルザックは、ラウバルの知己だ」
「何！？」
「詳しいことは知らぬ。話さぬのでな」
　いまいましそうな声で言うとシェインはしばし黙った。
「……俺が知っているのは、さっきも言った通り、グロダールに絡んでいるのが奴だと言うことくらいだ。おぬしとさして変わらぬ。僅かな違いと言えば、その目的がラウバルにあると言うことを知っているくらいだ」
「その、グロダールの件にはどう絡んでたわけ」
「グロダールとの戦いの折にはシェインやラウバルもいたことは前にも話したろう」
　シサーが答える。頷いて先を促した。
「その時に話した通り、シェインと俺は遊軍としてグロダールの攪

乱に当たった。ラウバルは本陣の指揮だ。遊軍の動きで攪乱されたグロダールを本陣が攻撃し、その総攻撃でグロダールは倒れた」

「うん」

「そして本陣へ戻った俺とシェインが見たのは、グロダールではなく黒衣の魔術師と戦うラウバルの姿だった」

「え！？」

「状況がわからぬままに横からシェインが魔法攻撃でラウバルのフォローに入ってな。魔術師は姿を消した」

「じゃあ、それが……」

「ああ。去り際、ラウバルが奴に向かって叫んだんだ、その名を。それを耳に挟んだんだな、俺は」

そうなのか。うーん、じゃあまあ……忘れてても仕方ないとしよう。

「グロダールをギャヴァンに誘導したのは、あの魔術師なんだな？」

再びシェインとの会話に戻ったシサーに、シェインが肯定した。

「ああ。そのようだな。目的や手段などは俺も聞いておらぬ」

「話させろ」

「聞いて素直に話すようなタマならとっくの昔に聞きだしてるわ」

沈黙が訪れた。

つまり、レガードを消したいロドリスの宮廷魔術師がロンバルトの何者かからレガードの情報を入手し、戦争の口実を作らせない為に、一見王城と無関係な『銀狼の牙』とバルザックの協力を得てレガードを襲撃した、と。

バルザックが『青の魔術師』に協力したわけは現段階ではわからないが、バルザックって魔術師はラウバルと何か深い因縁があって……黒竜グロダールにギャヴァンを襲わせ、ラウバルをシャインカルクから引っ張り出して襲撃したわけだ？

ってことは、今回も何かその……ラウバルとの因縁に起因していると考えられないわけでもないと。

「そのバルザックって人は、直接シャインカルクにラウバルを襲撃

しに来るってことはないの？」
　ふと疑問に思って尋ねると、シサーが肩を竦めた。視線を鏡に落とす。
「バルザックはシャインカルクには入れぬ」
「何で」
「かつてはラウバルを狙って何度か侵入したらしいな。俺自身、一度遭遇したのだが。そこでガウナ殿が神聖魔法を強化した」
　ふうん。ガウナさんの聖なるバリアーで悪者バルザックはお城に入れないんだ。……そういうもん？ってか善人と悪人の区別ってつけられんのか？
「それはともかく、レガードの行方だ」
　シェインが話を方向転換した。
「バルザックが魔法を使って後レガードが行方をくらましたと言うことは……奴が行方を知っていると言うことはないか」
「そこを探るしかあるまいな」
「『王家の塔』の竜巻はバルザックとは無関係か」
「俺が知るはずがなかろうが。だが、一介のソーサラーに、一過性ならともかく常駐の竜巻を巻き起こせるとは考えにくい」
「グロダールをギャヴァンに誘導するほどの魔術師を『一介のソーサラー』と言っていいのか？」
「さあな。ただ俺の知る限り、ソーサラーの守備範囲ではそのような魔法は存在せぬ」
「魔力付与道具、とか……」
　俺がぼそりと言うと、シェインの溜め息が聞こえた。
「魔力付与された道具は今もあらゆる遺跡やダンジョンに眠っている。どのような道具が存在するかなど、計り知れぬ」
「ってことは可能性もある？」
「あるな」
　一度肯定はしたものの、シェインはすぐに「だが……」と続けた。
「だが、その場で竜巻を起こすだけでもそれだけの能力を要求され

るし、相当の魔力を消費する。それを果たして継続させられるような付与を出来るかどうかは正直疑問だ」

「シェインは魔力付与ってやつも出来るんでしょ？『遠見の鏡』とか。仮にシェインだったら、可能なこと？」

「残念ながら俺にはそこまでのことは出来ぬ」

「『青の魔術師』は、エンチャンターだと聞いているが」

えんちゃんたー。

俺の表情を読んで、ユリアが小声で教えてくれた。

「魔力付与を得意とする魔術師のことを言うの」

「ふうん……」

「ああ。かなりの能力を持っているとは聞いているがな。だが果たして出来るかどうか。会ったことのない人物の能力までは推し量れぬ」

「逆に言えば、人為的にそれを可能とするにはどんな能力を必要とする？」

シサーが攻める方向を転換する。それに答えたのはシェインではなくニーナだった。

「……精霊魔法あるいは、召喚魔法……じゃないかしら」

「召喚師か」

精霊魔法か召喚魔法ってことはつまり、風の精霊を召喚しているってことだよな。

「ジンが？」

ジンってのは、風の上位精霊だったと思う。

鏡の中から尋ねたシェインに、ニーナは考え込むような視線をそのまま向けた。

「かもしれない。……近付いてみれば、もう少し何か探れるかもしれないけど」

「では、それからだな」

話を打ち切るようにシェインが言った。シサーが真面目な面持ちでそれを受ける。

「当面の課題は2つか。『王家の塔』周辺の竜巻が……何者かがジンやシルフに制約をかけているのか。バルザックがレガードの行方を知っているのか」
「俺の方でラウバルに探りを入れてみよう。素直に話すとは思えぬが。ロドリスの動向にも注意を払っておこう」
「頼む。動きがあったら教えてくれ」
「そちらもな」
シェインとの交信を打ち切って、思わず全員溜め息をついた。
「ややこしいことになってやがるな、何か」
シサーが舌打ちをする。俺もベッドに仰向けに倒れこんだ。頭の中がぐちゃぐちゃだ。
「調査隊が何がしかの成果をあげてくれりゃあいいんだけどな」
ベッドの上に寝そべって頬杖をついたキグナスがぼやくように言い、顰め面をした。
「ま、大して期待出来ねえけど」
「何だか思っていたよりも随分と、大変なことになりそうね」
ニーナが再び溜め息まじりにぼやいた。
「……レガードが」
ぽつり、とユリアが呟く。
「レガードが、無事でいてくれたら良いのだけど……」

第1部第16話　近づけない想い（1）

……眠れない。

その日の夜中、なかなか寝付くことが出来なかった俺は、布団の中で右へ左へ寝返りを繰り返し、ついに諦めて体を起こした。

8畳くらいの狭い部屋に、幅の狭いベッドが3つ無理矢理詰め込まれていて、ドア側にシサーが長身を窮屈そうにして眠っている。その隣に俺、窓際にキグナスだ。

そっとベッドを抜け出して、音を立てないよう気をつけながら部屋を抜け出す。一応、何があるとも思わないけれど剣だけは帯びておいた。

廊下はしんと静まり返っている。窓から覗く月明かりを頼りに、階段に足をかけた。ぎい、と軋む音が思いの外大きく、内心びくりとする。……いや、別に悪いことをしようってわけじゃないんだから良いんだけど、そう言う問題じゃなくて……悪いじゃん。起こしたら。

宿には今日も何組かの客がいるみたいではあった。昨日とは違うみたいだけど。まあ、あんまり長居することもないのかもしれない。砂漠と山越えの間の中継地点みたいなもんだろうし。

ぎしぎし言う階段に冷や汗をかきながら下りきって、俺は正面玄関の内鍵を開けた。外に出ると昼間とは違うひんやりとした空気が肌に触れる。激しい寒暖差のせいか屋内の換気と保温が結構しっかりしてるもんだから油断した。その空気の冷たさに薄手のシャツ1枚しか着てこなかったことを後悔する。

俺の吐く微かに白い息の向こうの暗い夜空に青白い月がぼんやりと光っていた。薄く煙るようなその姿に、明日の天気を思って少し気が重くなる。雨とか降らないで欲しいな。暑いのも嫌だけど。……いや、砂漠の人にしたら降って欲しいんだろうけどさ。

別段行くアテがあるわけじゃないので、俺はそのまま出入り口の

僅かな段差にすとんと腰掛けた。
一応『砂上の楼閣』はメインストリートに面しているんだけど、昼間と違って今は人の姿はない。遠く、防護壁付近を守る衛兵が、時折ちらちらと動くのが見える。
昼間の話をいろいろ考えていたら、眠れなくなっちゃったんだよな……。単に寝過ぎだろって説もあるかもしれないけど。
明日からはまた砂漠を旅しなきゃなんないし、何があるかわかんないんだから寝ておくべきなんだろうけど……その方が良いに決まってるのは絶対なんだけど。
……戦争、か。
まさか、こんな身近に感じる羽目になるとは思わなかった。それはもちろん、自分が剣を持って戦ったりだとかそう言うのももちろんそうなんだけれど……。
話が、最初に認識していたよりもっと大きいことのような気がする。『王家の塔』に行って、レガードの行方について何か情報掴んで……って簡単にはいかなさそう。具体的に事態が見えてきたからそう感じるんだろうか。
そりゃあ最初から話は広大な帝国の皇帝位継承権の話であって、それを狙う諸国がいて……王子様がいて王女様がいてってのは、わかってはいるつもりだったんだけど。
（レガードは、どこにいるんだろう……）
行方不明の期間は単純計算で3ヶ月に上る。俺の、元の世界での行方不明期間より長い。倍の長さだ。まさしく……死んでいておかしくない期間。
考えて少しぞくっとする。……そう。普通に考えれば、3ヶ月も行方不明になってたら死んでるとしか考えられない。生きていてそれだけの期間があれば、普通は帰るなり連絡を取るなり、何らかの努力をするはずだ。増してレガードの肩には重い責務がのしかかっている。まさかそれが嫌で逃げ出したってわけじゃないだろう。大体戦闘の最中に行方をくらましたことがわかってるんだから。

じゃあ仮に、自分の意志で行方を眩ませたんじゃないとすれば……生きていると言う前提で、これだけの期間行方が掴めないと言うとどう言う事態が想定出来るんだろう。

自分で外部と自由に接触出来ない状態……つまり、病気や怪我で身動きが取れないか、或いは囚われているか。あと考えられるとしたら何だろう……記憶喪失とか？

そんなことを考えていたら。背後で僅かな物音が聞こえてぎくりとした。振り返る。

「……ユリア」

昼間と同じ、白いTシャツに黒いフレアミニを身につけたユリアが、ドアを押し開けて外に出て来ようとしているところだった。ドアを開けるには邪魔になるところに座っていたので、体をずらす。

「……どうしたの」

人気のない深夜だ。ひそひそ声は却って結構響いたりする。俺は極力低い声で尋ねた。

ユリアは微笑んで微かにぶるっと体を震わせた。「寒いね」と小さく笑う。長袖の俺だって寒いのに、半袖じゃあいかにも寒そうだ。

「眠れないの？」

逆に尋ねながら、ユリアはドアをそっと閉めて、俺のすぐ隣に腰を下ろした。

「うん……まあ。ユリアも？」

「……眠れないわ」

大きな瞳が今は少し切なげに細められ、長い睫毛が落ち込んでいるみたいに伏せられている。

「どこ、行っちゃったのかしらね」

「……」

「いろんなことが、難しいわ。いろんな人がいて、いろんな思惑があって……わかるけど。……ただ、無事でいて欲しいって、それだけだわ」

「……うん」

そう呟いたきり、ユリアは黙りこくった。俺も返す言葉がなくて、黙る。

不思議と虫の音や鳥の鳴く声のしない街だった。ただ、風の吹く音だけが聞こえる。そして遠くで木々のざわめく音。空を見上げると、先ほどまで月を煙らせていた雲は、強い風に吹き飛ばされてしまったのか姿を消していた。眩いほどの月が皓々と辺りを照らしていて、月が眩し過ぎて星が見えないなんてことがあるのを初めて知った。東京は月よりも街の明かりが明る過ぎて、星が見えない。

「……ユリア」

「ん」

「あの時……何を言おうとしたの」

月に視線を向けたまま、ふと尋ねる。ユリアが首を傾げるのが気配でわかった。

「シサーたちと合流する……直前」

風に吹かれ遠景を見詰めながら何かを言いかけたユリアの顔を思い出す。……続きが、気になる。

「ああ……」

ユリアに視線を向けると、愛らしい口元に微笑を象りながら抱えた膝に頬を寄せて俺を見た。

「わたし、カズキといると、安心するわ」

「……」

どう答えていいのかわからず、ユリアから視線をそらして俺は微かに俯いた。

「……俺は、頼りないよ」

「そんなことない」

俺に視線を向けたまま、ユリアが即座に否定してくれる。

「……」

黙ったままの俺に、ユリアは顔を膝から起こして手を差し伸べた。立てた両膝の上に無造作に放り出してある俺の手を取る。ひんやりとした指先が触れ、戸惑った。

「何……」
どぎまぎして顔を上げた俺に構わず、ユリアは黙って俺の手を広げさせる。そっとその手の平に指を這わせた。……剣を握るようになってから、ボロボロになった手の平。戦闘率が上がったせいで、血まみれだった俺の手の平の皮はようやく復帰して、今は厚くなっている。でも、ボコボコだ。
「綺麗な手よ」
「……ぼろぼろだよ」
「わたしを守ってくれようとした数だけ、厚みを増してる」
「……」
「……カズキを危険に曝しているのは、わたしだわ」
俺の手に手を重ねたまま、ユリアが押し殺したような声で言った。
「ユリア」
「昼間、シサーの言ったこと、シェインたちと話したこと、そして『銀狼の牙』のこと……。考えたら、眠れなくなった。……馬鹿ね。少し考えればわかりそうなものなのに。わたし、気がつかなかった」
「……」
「……カズキを、囮にしていたのね」
「ユリア、それは……」
「シサーが言ってた、『レガードの影武者』ってそういう意味でしょ」
「……」
「レガードが『王家の塔』に行くその体裁を整えて、レガードの姿をした者にレガードの行方を探らせる……その結果、何が起こるのかなんてわたし、考えなかったんだわ。……馬鹿ね。狙われるに、決まってるじゃない……」
また泣くかと思ったけど、ユリアは何かを堪えるように押し殺した声で、けれど声を潤ませるようなことなく淡々と続ける。
「……後悔してるの」
指を折って、重ねられたままのユリアの指先を包み込むようにし

ながら尋ねる。冷たい指先に、少しでも温もりを分けてあげられたら。
「わからない」
「……俺、別に知ってたから」
「……」
「ユリアの役に立てるんだったら、俺は、それで、良いよ……」
「カズキ」
「俺……」
続きを言うのを躊躇って、言葉を切る。ユリアを見ると、ユリアも俺を見詰めていた。ユリアの指先を包む手に、力が籠もる。
伝えたい。でも、伝えたくない。けれど、知って欲しい。
本当に、ユリアの力になりたいと、思ってるんだ……。
「安心するって……」
「……」
「俺が、レガードに似てるから？」
掠れた声を押し出すと、ユリアの大きな瞳が驚いたように見開かれた。急いでかぶりを振る。
「違う」
「……」
「それは、確かに似てるわ。似てる人を選んだんだもの。でも、違う。レガードだと思ったことなんか、ないわ。1度もないわ。……レガードはレガードだし、カズキはカズキだから……」
「良かった」
どこまで本心なのかは、わからない、正直。でもそう言ってくれたその言葉を信じることにした。小さく微笑む。ユリアがこつんと、おでこを俺の肩に凭せ掛けた。
な、何か、凄い良い感じじゃないか？鼓動が加速して、胸を突き破りそうだ。触れるユリアの温もりが……。
……痛いほど。
「カズキを大切に思っているわ」

ぽつりと消えそうな声で言われて、心臓が一層跳ね上がる。
「ユリア……」
「レガードやシェインに対してとは、違うの。自分でも良くわからない。でも、でもわたしね……わたし、カズキが……」
顔を伏せたままユリアが一生懸命言った。俺の脈拍は最早マッハである。ちょ、ちょっとこれは勘違いしそうになるぞ……。何か、彼女が俺に特殊な感情持ってるみたいじゃないか……。
どきどきする心臓が押さえきれず、その鼓動がユリアに伝わってしまわないかどこかで心配になりながら言葉の続きを待つ。けれどユリアはそのまま、言葉を飲み込むように俯いて、押し黙ってしまった。
「ユリア？」
「……何でも、ないわ」
……ここまで期待させといてそれはやっぱり俺が可哀想だと思う。
「どうしたの？」
「ううん……」
言ってユリアは顔を上げた。僅かに泣きそうに歪んでいる顔を無理矢理笑顔にしている、そんな感じの表情。
「部屋に、戻るわね……」
「ユリア」
「……ごめんなさい。忘れて」
呟くように言って、ユリアは立ち上がった。俺が制止する暇もなく、ドアの内側に姿を消す。緩やかに靡いたユリアの髪の名残を追いながら、俺もそっと立ち上がった。……意味が、良くわからなかった。
確かに、気持ちが通じ合ったような……そんな、感じだったのに。
急に翻られて、それをどう考えて良いのかが、わからなかった。

◆◇◆

暑い。

足元の砂はどこまでも広がっていて、踏みしめる感触はどこかソフトだ。おかげでひどく足が疲れる。

夜が明けて、俺たちはともかく『王家の塔』へ向けて出発した。ユリアはあれから眠れたんだろうか。はっきり言って俺は気になり過ぎて眠れなかった。……眠れるか！？気になるに決まってるじゃないか。

が、そんな可哀想な俺を余所に、ユリアは朝、顔を合わせた時には何事もなかったかのように普通だった。……女の子は難しい。

「あー、もう。風が強ぇなあああ」

俺の隣を歩くキグナスがぼやく。ギルザードを出てからかれこれ1時間以上が経過していて、まだその姿は見えるものの街は遥か遠い。砂漠を進めば進むほど風の強さは増していて、時折強く吹き付ける風が砂を打ち付けてくる。

「ふわ～ぁ……」

キグナスの言葉には答えずに欠伸をすると、キグナスが少しだけ下の角度から俺を覗き込んだ。

「お前、昨夜何してたんだよ」

「あ、え、は！？」

咄嗟にどもる。寝てたんじゃなかったのかよ……。

「な、何で？」

「別に何でってこたあねーけどさー。目が覚めたらいなかったから。どこほっつき歩いてんのかと思って」

「あ、ああ……」

俺って嘘のつけない奴だな……。

「別に、眠れなかったから……夜風に当たってただけ」

言いながら、前方をニーナと並んで歩くユリアの後姿に目をやった。

――わたし、カズキが……。

……言葉の続きが、知りたい。

「ふうん。まああれだけ昼間に寝こけてりゃあなあ」
寝こけてたって。
「途中でぶっ倒れんなよー」
「うん……平気だと思う」
眠いのは眠いんだけど、何か逆に変にテンション上がっちゃってる感じだし。頭が冴えてるって言うか。……そりゃあ、ここにベッドがあったら速攻で寝ちゃいそうな気もするけど。
「しっかしユリア様も頑張るよなあ」
「え？」
キグナスは、この辺はさすが王城に出入りしているせいか、ユリアに対して『王女様』の姿勢を崩さない。とは言ってもやはりシェインと血縁関係にあると言うか……ざっくばらんはざっくばらんなんだけど。
「頑張るって？」
「だって良く考えてみろよ。王女様だぜ？」
知ってますけど。
「王女様つったらお前……お城の奥でドレスに身を包んで『うふふ』とか笑ってるもんだろが」
……『うふふ』はまあともかくとして。
「言いたいことはわかるけど」
「だろー？何を好き好んで、汗まみれの埃まみれになって砂漠を旅するかって話だよな」
「……」
「……そんだけ、レガード様を大切に思ってるってことなんだろーけどさ」
ぐさ。
「うん……」
昨夜躊躇うように俺に何かを言いかけ、押し殺すように言葉を飲み込んだユリアは、レガードのことを思ったからなのかもしれない、とは……俺も、思った。

俺だって、わかってる。彼女が、レガードの婚約者だってことは。
婚約者――結婚、するんだよな、レガードが見つかったら。……
レガードと。
（最初からわかってたことなんだけど……）
レガードを見つけてあげたいとは思っている。それに嘘はない。
嘘は、ないんだけど……。
「キグナスって好きなコとかいんの？」
唐突な俺の言葉に、キグナスはぎょっとしたような顔をした。そう言えば俺、この世界の恋愛事情みたいなのって全く知らないような気がする。どういうもんなんだろ。あっちと同じように普通に付き合ったりとかする……んだろな、シサーとニーナを見てると。
一緒に旅をして魔物と戦うのを『普通に付き合う』と表現して良いもんかどうかは……微妙だけどさ。
「どういう頭の回路でそういう話になったんだ？」
「ユリアとレガードの話だろ」
そんなに不自然な流れじゃないと思う。別に。
聞いた割にそれ以上突っ込むこともせずに前を見て黙々と歩く俺に、キグナスは頬をぽりぽりと掻きながら首を傾げた。
「べっつに俺は……ねえなあー」
「ふうん。学校行ってたんだろ？」
「行ってたよ。エルレ・デルファルな」
「うん。同級生とかいるんじゃないの」
「いるけどなあ……学ぶので精一杯だったな、俺は」
そんなに真面目には見えませんけど。
「俺、頭悪ぃんだよ」
「見ればわかる」
「何だとお！！」
キグナスがロッドで俺を殴った。……武器を使うな武器を！！
「んでな、ほら……まあ、直系の家系ってわけじゃねーけど。いろいろいるわけだろ、俺の家系は」

「ああ……シェインの？代々宮廷魔術師ってやつ？」
こくこくとキグナスが頷く。その様子を見遣ってから、俺は進行方向少し先の砂に視線を向けた。ざざーっと遠くの方で風が静かに砂を巻き上げる音が聞こえる。

第1部第16話　近づけない想い（2）

「だからさ……俺だけ馬鹿ってわけにもいかねーし」
「けど別にキグナスのお父さんも魔術師とかそう言うわけじゃないんだろ？」
「うん、まあ……。けどな、何かな」
ふうん。
「お前は？」
「は？」
「お前ん家は、どんな家なんだ」
「ああ……」
さくさくと砂を踏みしめる微かな音を聞きながら、遠い異世界にあるはずの自分の家族を思い浮かべた。別に特殊な家庭じゃ全然なくて……どこにでもある、普通の家庭。でも、俺にとっては唯一の大切な家族だ。
「俺ん家は……普通の、庶民だよ」
「ふうん？」
「親父は会社員……人に雇われて働いてて、母親は専業主婦で。弟がいて」
「弟か」
「で、じーさんが、職人やってたけど」
「職人？」
「うん。時計のさ、修理とかやるようなそういうの」
とは言っても、俺はほとんど会ったことがない。じーさんと親父がめちゃめちゃ仲が悪いので。
「恋人とかいたのか？その……あっちに」
急に話が戻った。
さっきのキグナスじゃないけど、俺は自分の頬を人差し指で軽く掻きながら上空を見上げた。昨夜の不安は杞憂だったようで、天気

は心配の必要なんか全然ない、快晴って感じだ。雲ひとつない、澄んだ青空が広がっている。遥か遠くに、キサド山脈が見えた。
「いないよ」
「へえ」
「あんまりそういうの……良く、わかんなかったから、俺」
前にも思ったけれど、なつみに好感を持っていたのは確かだ。でも……こうして見ると、ユリアに対する感情とは全然違う。環境の違いはあるのかもしれないけど、ユリアに対するような、自分を突き動かす何かみたいなものは全く感じない。綺麗なもの、可愛いものに対する、素朴な感情にしか過ぎなかったことが良くわかる。
キグナスとぽつりぽつりと話をしながら、先頭を歩くシサー、それに続くニーナやユリアの後を5時間ほど歩いたところで、1度休憩をすることになった。とは言っても、砂漠の真ん中、木陰や何かがあるわけでもなくその場で休むしかないわけなんだが。
「必要以上に足が疲れてる気がする」
ぼやくと、シサーが俺の隣に座り込んで苦笑いをした。
「砂漠だからしょうがねえな」
「うわ」
そこへ突風が吹き付けてきて、思わずむせた。目を瞑って腕で顔を庇うが、その腕に吹き付ける砂が痛い。髪の中なんか、とっくの昔にざらざらだ。
「しっかし本当に凄い風だな」
「普段より？」
「そうだなあ……。まだこの辺は『こういう日もあるな』って程度でもあるけどな」
通常だって風の強さなんか日によって変わるだろうしね……それはそうかもしれないけど。
「ニーナ」
少しだけ離れた場所にユリアと並んで座り込んでいるニーナにシサーが呼びかける。バテたような顔をしていたニーナがこっちに視

線を向けた。
「何かわかりそうか」
「どうかしらね。何とも言えないわ、まだ。でももう……シルフとは意思の疎通が出来なくなり始めてる」
「そうか」
シサーがそう応じたのを見て、俺はふと遠くに視線を移した。……あれ？
「シサー」
「あ？」
「人がいる」
「え？」
俺の声にシサーも同じ方向を見る。声が聞こえたのか、他の3人もつられたように顔を上げた。
人がいる、とは言ってもまだ結構遠いんだけど。俺たちが今いる場所より少し先から緩やかに砂が盛り上がり始めていて小高い丘のようになっているが、そのほぼてっぺんよりまだ向こう。5人とか6人とか、そのくらいの人数の。
「……シャインカルクからの調査隊だな、ありゃあ」
立ち上がって見遣ったシサーが呟いた。砂地の上にべたっと倒れていたキグナスも跳ね起きて隣で頷く。
「本当だ。戻って来たんだ」
「何か、情報がもらえりゃああありがたいんだがな」
あんまり期待していないような口調で言って、シサーは荷物を手に立ち上がった。
「行くか」
「うん」
それぞれ立ち上がって砂を叩く。どうせ吹き付けてくるからあんまり意味はないんだけど。
言われて、再び歩き始めたのは良いが、しかしそこから先は結構長かった。単調な風景と言うのは、思ったより人間の感覚を狂わせ

るものらしい。通常より歩みが遅いってのもあるんだろうけど……。
双方歩み寄っているはずなのに、調査隊のところまで辿り付くのに４０分近い時間を消費していた。
「ユリア様！！レガード様！！シサー殿！！」
俺とユリアの前に調査隊が一斉に地面に膝をつく。凄い光景だ。
……そうだよな。俺がレガードじゃないと知っているのはシャインカルクでもほんの一部なわけで。
つまり彼らにとって俺は『レガード様』なわけで。
……どう対応して良いのか困る。
「デリス！！」
「よお」
どうやら知り合いがいるらしい。ユリアも破顔して駆け寄った。
シサーの名前も敢えて挙げると言うことは、シサーが禁軍にいた頃に会ったことがあるんだろう、きっと。
「ご無事で……ッ」
「わたくしは大丈夫です。あなたたちこそ、ご苦労ですね。無事な姿を見られて、嬉しく思います」
久々に見る、『王女様バージョン』のユリアに、何か変な感じだった。普段普通の女の子なのに、こうしているとそこに不自然さがない。身分の高い人間らしい、毅然とした雰囲気。……距離を、感じる。
「勿体無いお言葉」
「何か、わかったことはありますか」
「それが……」
どうやらこの中で１番偉いらしいデリスと言うゴツ目の、髪を短く刈り込んだ男性が頭を深く下げた。
「『王家の塔』周辺には全く近付くことも叶わず……。情報を集めようにも人はいない有様でして」
それはそうだろう。砂漠だ。

「そうですか」
特に落胆の色を示すこともなく、ユリアは鷹揚に頷いた。だが彼女が何か続ける前にデリスが口を開く。
「ただ、関係があるのかはちょっとわかりかねますが、『王家の塔』へ向かう途中にあるダンジョンが、最近何者かが侵入した形跡がありました」
「ダンジョン？」
風の砂漠には、たくさんの遺跡やダンジョンがあると言うシサーの言葉を思い出す。ダンジョン、って言葉の響きが……嫌だよな、何か。暗い感じで。
「シサー。関係があると思いますか」
ユリアに問われて、シサーは肩を竦めた。
「わかんねえなあ……。最近か」
シサーの問いにデリスは頷いた。
「これまでに誰かが踏み入れたわけではなさそうです。恐らく、長い間眠っていたのでしょう。単に立ち入れなかったのかもしれませんが。いずれにしても、侵入したのは新しそうでした」
「寄るだけ寄ってみるか？あんまり意味はなさそうだが」
大して興味もなさそうな顔でシサーがユリアに問う。ユリアは困ったような顔をして頷いた。
「可能性があれば、全て探ってみたいとは思いますわ」
「ですが」
遮るようにデリスが顔を上げた。
「我らもそう考えて侵入を試みたのですが……少し進んだところで通路が塞がれておりまして」
ユリアの言う『可能性』とはレガードの行方に関してだが、デリスの言うのは違うだろう。大体彼らの頭の中で、ユリアがこんなところにいると言うのはどのように処理されているんだろうか。『レガード』と一緒だから……一緒に『王の証』へ向けて旅をしていると理解しているんだろうか。

ま、いーや。何でも。
「じゃあ、奥まで行けねえってことか」
「は」
「塞がれてるってのは？人為的に？」
「恐らく」
キグナスの問いに、デリスはこちらへ顔を向けた。
「爆破物で塞いだものと思われます。竜巻にそれほど関係があるわけでもなさそうだったので、そこで打ち切ったのですが、行かれるのであればご一緒致します」
それはやめて欲しいなあ、とぼんやり思った。俺を『レガード』だと思い込まれていると、どうにも対応がしにくい。俺、レガード知らないもん。フリをしようにも出来るわけがない。
こっそり顰め面をしていると、シサーがちらりと俺を振り返って苦笑した。
「いや、そっちは王城へ戻って報告をしなけりゃならんだろう。場所だけ教えてもらえれば、こっちで勝手に行くさ。あんたらよりは、俺の方がそういうのにも慣れてる」
「ですが」
「入りゃしねえだろ。ちょろっと様子を覗いて来るだけだ。そんなに気を使ってるとハゲるぜ」
何とも失礼な物言いでデリスを黙らせた後、そのダンジョンの場所を聞き出して調査隊と別れる。見送る彼らに手を振って砂漠に歩を進めながら、シサーが俺に向かって笑った。
「……カズキの顔」
「……何だよ」
「『俺にレガードの真似なんか出来ないよ』って書いてあるもんだから、おかしくってな」
「黙りこくってるのは正解だったわね」
「カズキにレガード様のフリは無理だろ。あれほど気品がない」
言いたい放題言われている。

「あのねえ……」
「ま、王城の調査隊なんか一緒に来られたら肩が凝ってしょーがねえやな……」
わざとらしくくりくりと肩を回し、シサーはダンジョンの場所を書き込んだ地図に目を落とした。
「関係、あるかな」
隣から俺も覗き込む。風が表面の砂を攫うように吹いて、辺りが一瞬黄色く煙った。
「どうだかな。あんまり期待は出来そうにねえけど。行ってみるか、とりあえず」
「……あら？シサー、ここって……」
俺と反対側からやはり地図を覗き込んだニーナが何かに気付いたようにぽつりと呟いた。視線は地図に落としたまま、シサーが頷く。
「ああ……『３つ目の鍵』のダンジョンだな」
『３つ目の鍵』？
「何それ」
俺の視線にシサーが顔を上げた。
「詳しいことは良く知らん。そう言われてるって話を耳に挟んだだけだ。『１つ目の鍵』がローレシア最北の王国ワインバーガの森、『２つ目の鍵』がラグフォレストの山、そして『３つ目の鍵』が風の砂漠で手に入るんだそうだ」
へえ？何の鍵？
「が」
「何の鍵かまでは知らないのよねーえ」
がく。
じゃあ意味ないじゃん。
ありありと不満を顔に書いた俺に、シサーは地図を折畳みながら肩を竦めて見せた。
「生憎と俺は冒険者じゃねーからな。興味が持てん。傭兵稼業で食えるだけ稼げれば、余分にお宝を手に入れようとも思わないしな」

冒険してる人って話なら、シサーだって十分そのカテゴリーに入ると思うんだけど。

後ろからついてくるユリアとキグナスを時折振り返りながら言うと、シサーは緩やかに首を横に振った。

「冒険者ってのがいるんだよ。職業って話で言えば俺と同じ剣士だったり魔術師だったりするわけだが。パーティを組んで、ダンジョンを攻略したりとかそう言うのを専門にしてるのを冒険者と言うな」

ふうん。そう言う人たちもいるんだ。

「だからそう言う奴らなら何か知ってるかも知らんが。俺は真面目に攻略しようと思ったこともないんでな。調べたこともない」

「でも、興味のないシサーが噂を耳にしてるってことは、有名なダンジョンなんだ？それが最近まで攻略されてなかったってことは……」

「ああ。結構厄介なダンジョンではあったらしいな。だがまあ、出入り口付近の通路が爆破されて塞がれてるってことは……多分誰かが攻略したんだろう」

「攻略したら塞ぐの？」

「と決まっているわけでもないが。そうする奴もいるらしいぜ」

けど……そうやって聞くと確かにシサーの言う通りあんまり関係があるとは考えにくいかもしれない。まさかごく最近攻略されたダンジョンに、レガードを監禁してるとは思えないし。まして竜巻との関係なんてあると思えないし。

「ちょっと回り道になるんだが、寄るだけは寄ってみるか……」

そこでシサーは僅かに顰め面をした。銀色の瞳で何かに挑むように遥か遠くを見据える。ニーナが風に靡く長いさらさらの髪を片手で押さえながら溜め息をついた。

「あの辺は、厄介なのよね」

「厄介？」

俺の問い返しに答えたのはシサーだった。

「ああ。あの辺りはサンドワームやバシリスクの多発地帯だ」

◆◇◆

両脇に広がる畑では農家の人がのんびりとお弁当を広げている。昼食時だろうか。1年を通して総じて穏やかな気候に恵まれるロドリスでは真冬を除き何らかの実りがもたらされる。グレンの上司の髪の色のような空に綿菓子を連想させる雲がぽかんぽかんと浮かんでいる。

「はあああ……まったくセラフィさんは優しい笑顔を浮かべて人を徹底的に使う方ですよねえ……。これで特別手当ってのがないと来てるから、私、転職考えちゃいますよねえ」

「あんねえ、セラフィ様の悪口ばっか言ってると言いつけるよ？」

長身に似合わない情けない物言いに、隣を歩く女性が白けたような声を出した。ちなみにセラフィに使用を許可されたはずの乗馬は、昨夜の野営の時にグレンが繋ぎ損ねて逃げられている。そのせいで徒歩を強いられる羽目になり、彼女はすこぶる機嫌が悪い。

「あああッ。やっぱり！！そうじゃないかと前から常々疑ってたんですよ！！」

「ななな、何がさ」

「私の味方のような顔をしながら、エレナさんはやっぱりセラフィさんの味方ですね？エレナさんもセラフィさんにぞっこんなクチですね？」

エレナ、と言う愛くるしい音の名前の割には、長身でがっしりとした体躯の筋肉質の体をしている。肌は黒く日に焼けており、臙脂色の短く刈り込んだ髪はまるで男性のようだ。だが長い睫毛と髪と同じ色のくりっとした瞳が僅かに女性らしさを感じさせる。

「ななな何言ってんのさ」

エレナは色黒い顔を微かに赤らめたが、グレンはじっとりした目でそれを横目で見つめ、肩を落とした。

「大体あたしはあんたの味方のような顔をした覚えは人生掛けてた

だの1度もない。セラフィ様の味方なのは当っ然だろーが」
「全くセラフィさんが羨ましいですねえ。あれだけ男も女もたぶらかしてれば人生楽しい……」
セリフを最後まで言うことは出来なかった。エレナが鞘に収めたままのショートソードでグレンの頭を殴りつけたからである。
「……ううううう。エレナさん。逞しい女性がか弱い男性に武器を使って暴力を振るうのはやはり反則かと……」
「誰が逞しいって？」
「……ううううう」
殴られた後頭部を押さえ込んで蹲るグレンに、続けて蹴りを食らわせてやろうかと構えたエレナは、ふっとその視線を彼方へ向けた。王都フォグリアから海に程近い通りを北上している2人からは、岬のせり出しているモナの港が辛うじて見て取れる。
「……グレン」
「はひ……」
まだ蹲っている呑気な相棒に、エレナは呆然と言葉を投げかけた。
「……あんた、何かした？」
「は？」
ようやくグレンが顔を上げた。海上に向けたままのエレナの視線を追って、グレンもその黄金色の瞳を細める。
「あれは……？」
「モナの海軍だ……」
緩やかにモナの海軍と思しき船は、2人の視線に気付くはずもなく南下していく。思わず顔を見合わせた。
「私じゃありませんよ」
「でも」
「セラフィさんは、私の他にも使者を何人か飛ばしているはずです。そのうちの誰かが成功した、と言うことなんでしょうかね」
「だって……モナだよ？」
「モナですね」

何かを言いたげにグレンを見上げたエレナに答えず、グレンは突然慌てた顔になった。
「はッしまった」
「え？何！？何かまずいことが……」
「誰かが成功していると言うことは、私も成果を上げなければ特別手当どころか減俸になってしまうじゃああーりませんかッ。こうしてはいられません、エレナさん、急ぎましょう」
「……グレン……あんたって……」
「どういう思惑かは知りませんが、モナが今動くと言うことは、こっちもうかうかしていられないと言うことですよ……」
ふっと低められたグレンの声に、エレナは顔を上げて息を飲んだ。
「……そうか」
のどかな風景を横切っていくモナの海軍とは逆の方向へと、セラフィの使者たちは足を速めた。

第1部第17話　ひとつの真実（1）

深いブルーの石が嵌め込まれたイアリングを指先で弾いて、『遠見の鏡』を媒体としたシサーとの交信を打ち切ったシェインは舌打ちをした。ホログラムのように中空に映し出されていた鏡から送られる映像が消失する。

軽薄な印象の端正な顔は複雑な表情を浮かべて歪められていた。

（やはりか……）

ラウバルから『ロドリスの賓客』の話を聞いた時からそうだろうとは思っていたが……いざはっきり名前が出てくると、多少なりとも気分が塞ぐ。

６年前、シャインカルク王城内部でバルザックに遭遇した時のことを思い出していた。宮廷魔術師を拝命した直後のことだ。シェインは２０歳と言う異例の若さで宮廷魔術師と言う地位についた。史上最年少だ。当然、父にあたる前宮廷魔術師はまだまだ壮年であったのだが、既に己を凌駕した息子に地位を譲り、父は退官したばかりだった。

忽然と場内に姿を現わした黒衣の魔術師に驚愕したことを覚えている。空間移動魔法は、遥か昔の魔術師は体得していたと聞いているが、その能力を悪用する魔術師が多発した為、国が弾圧に乗り出し、淘汰された。空間移動の魔法に関する研究書なども全て焚書で失われている。

魔力付与道具でそれを可能にするものがあると言うのは、空間移動魔法を持つ『魔術師狩り』が行われる以前の物に限られており、そもそもの絶対数も少ない。もちろん国は『魔術師狩り』を行った後、そういった魔力付与道具も可能な限り処分している。

それから何百年も時が流れ、時代は廻るとでも言うのか空間移動の魔法は再び研究が行われるようにはなったが、何せ過去の資料が一切ない為にまだ中途段階なのだ。それを難なく操った魔術師の存

在に驚いた。
「ほう……？小僧、魔術師か」
シェインを一目見たバルザックの最初の一言がそれだった。そして次の瞬間、しゃがれた笑い声を立てた。
「……覚えておるぞ。黒竜グロダールの時に、おったな」
そのセリフが途切れた直後２つの魔力が交錯し、シャインカルク城の壁面が吹っ飛ぶ。異常事態に気づいた城内の者が駆け付け、バルザックは姿を消した。だが、その僅かな対峙でかなりの魔力を持つ魔術師だと言うことはわかっている。
なぜ、ラウバルを狙うのか。
（聞くしかあるまいが……）
かつても尋ねたことは無論ある。だが、ラウバルは全く解答を与えなかった。
「……しまった」
ぼんやり考え込み、ふと時計に目を向けたシェインははっとして立ち上がった。軍法会議の時間を回っている。バルザックの件は１度保留にして、シェインは足早に自室を出た。会議室へ向かう。
「すまぬ。遅れた」
悪びれない謝罪を投げながら会議室へ入ると、宰相ラウバルを筆頭に大司祭兼宮廷顧問ガウナ、財務大臣アドルフ、外務大臣ハイランド、国営大臣フォルト、枢密顧問官ラフトシュタイン、侍従長ブリューソフ、禁軍将軍スペンサー、国軍将軍ブレアなどの錚々（そうそう）たるメンバーが顔を揃えている。壁際にはブレア麾下の将官１０人が控えていた。
「遅い」
「すまぬと言っておろーが」
シェインは国営を担うこのメンバーの中で当然最も若い。たかだか２６歳の若僧が、大臣より上位の宮廷魔術師の地位についていることを快く思わない者も当然いる。身分や経歴に重きを置くヴァルス宮廷において、若年の重鎮に対する風当たりは強い。

「大したご身分だ」
「何。次期皇帝の戴冠に纏わる儀式の一環に出費を渋る財務大臣殿ほどでもなかろう」
しゃあしゃあと言い返して円形のテーブルの指定されている席に腰を下ろすと、財務大臣のアドルフは赤面して立ち上がった。二度に渡るレガードの『王家の塔』への旅への出資を強硬に反対したことを指している。
「まだ我が国の王ではない。一度はヴァルスが負担した。二度目ともなればロンバルトが手を貸しても良いはずだ」
「アドルフ殿。……シェイン、口を慎め」
言い返そうとしたシェインを、ラウバルが頭痛を堪えるような顔をしながら制す。
「議論すべきはシェインの怠慢でもアドルフ殿の忠誠心についてでもない」
辛辣な言葉を投げ、ラウバルは話を打ち切った。怠慢ではないと言い返したいところだがそこまで子供でもない。不満を顔に書きつつも押し黙る。
「ともかく。……ロドリスが各国に使者を飛ばしていると言う話は本当なのだな」
フォルトがハイランドに顰め面で問うた。各国に派遣されている外事官からの情報は、まずハイランドに奏上される。ハイランドは、外務大臣らしい人当たりの良さそうなソフトな顔に深刻な色を浮かべた。
「残念ながら。無論、ロドリスも慎重に行っておりますゆえ、その使者の目的及び成果については一切不明でありますが。聞かずとも明白でしょう」
「モナの海軍が動いたとの情報があるが」
「事実です。現在ロンバルト西南沖の共通海域に停泊中。それ以上、特に動く気配があるわけでもない」
「目的はどこにあるのだ」

「それがわかれば苦労はしないでしょう」
「まさかモナがヴァルスに攻め入るとは思わぬが」
「モナは長く我らヴァルスの盟友。裏切ることなどあるまい」
長老たちの会話を耳に入れながら、シェインは言葉を発さずに考え込んでいた。
（……果たしてそうだろうか）
国と国の関係ほど当てにならないものはない。治める者が変われば政策が変わる。もちろんそこには外交政策も含まれる。リトリア西部に位置するモナは3年前に王位が交代した。クレメンス統治下のヴァルスに対しては友好を保っていたが、クレメンスが倒れた現在果たしてそれを継続する意志があるかどうか。
モナを統治するフレデリク2世は、シェイン独自の情報網からは頭の切れる男だと聞いている。先王が急死した後、若くして公位に就いたが、国に篭って武力の増強を図ってきたはずだ。
かつてリトリアの脅威に曝されてきた狭い領土しか持たないモナを帝国の一部とし、繰り返しの外交政策で現在の領土にまで広げ、モナを治めるバーシェルダー家に拝領させたのは確かにヴァルスである。であるが。
恩あるヴァルスに逆らうことはあるまいと長老たちが高を括るのを、シェインは焦燥感を持って眺めた。大臣たちは、フレデリクがアルトガーデンの為に武力を増強したものと信じて疑わない。
「モナの海軍に対する警戒を強化することを提案する」
低く言ったシェインに大臣たちの視線が集まった。一瞬の沈黙の後、アドルフが声を荒げる。
「馬鹿な。今警戒すべきはロドリスだ。ロンバルト国境の要塞の兵力を強化すべきだ」
「無論、ロンバルト国境のラルド要塞は兵力を増強する。だがモナの海軍を放っておくのは危険だ」
「モナは、ロドリスの動きを入手して、我々に協力すべく海軍を動かしたのでは？」

ではなぜ海軍なのだ、と口元まで怒鳴りかけて飲み込んだ。仮にその通りだとすれば、陸軍を固め、何よりまずヴァルスに通達するのが筋ではないのか。

シェインの読みでは、ロドリスはまだ動かない。ロドリスがヴァルスに口実を与えたくないのは恐らく、他国との同盟なしにはヴァルスと正面きって争って勝てるだけの兵力がないからだろう。加えて未だレガードを探しているのは、陣頭に立つ王族の不在を確信したいが為、そしてレガードの戦陣指揮能力の高さを知っている為だと思われる。

それほど警戒しているロドリスが、レガードの行方も確かめられておらず、恐らく同盟も完全に固まっていない現状で動くはずがない。

だが、頭の堅い老人たちにはそれがわからない。モナとの関係が不変のものと信じて疑わない。いや……見たくないのかもしれない。

「兵力の優越は兵法の基本。分断するなど馬鹿げている」

言ったのはスペンサーだ。それを受けてフォルトが慌てたように言う。

「キール要塞の海軍を動かせば良いのでは」

「駄目だ」

簡潔にシェインは言い放った。

「何の策も講じず、仕掛けられるより先に海軍を動かせば下手に刺激することにもなりかねぬ。……モナが狙うとすれば、ギャヴァンだ。キール要塞の海軍の態勢を整えておくよう通達するのは当然だが、ギャヴァンに陸軍を派遣して襲撃に備えることが最良かと考えるな」

キール要塞はレオノーラより西の海上に浮かぶキール島の要塞だ。シェインは尚も淡々と続けた。

「モナは恐らく、交易権と海上権の拡大を狙っている。あるいは……」

王国への昇格か……。

ギャヴァン及びヴァルス北東の岬の街フォルムスは、他の大陸との交易権を独占している。つまり、トートコーストやラグフォレストから運ばれる荷はまずギャヴァンまたはフォルムスに運び込まれ、しかるが後に帝国内の各国の港へと輸出されるのだ。その際、検疫料が荷に上乗せされて出荷される。つまり帝国内の貿易窓口はヴァルスにある。

また、モナは痩せた土地で目ぼしい産物と言えば海産物しかない。しかし領土そのものが狭い為、ロンバルトと提携を組んで広大な海域を占めるヴァルスの海上権に目をつけてもおかしくはない。

交易権を取得することはモナの地理上難しいだろうが、ヴァルスの交易権の剥奪あるいはモナへの出荷に関する検疫料の免除を取り付けられればモナの国庫は豊かになるし、海上権を入手もしくは分割出来れば尚のことだ。

更に言えば、帝国内において王国と公国の待遇には当然区別がある。

元々帝国の領土を分割し、公家に委ねている公国は政策も帝国からの指導が入るし、納税額も高い。徴兵の際には真っ先に協力を求められるし、帝国の意に叛けば領土を取り上げられる。

対して王国は元々独立の王国であったのだから、政策は各国に委ねられているし、納税も希少だ。もちろん領土を取り上げられることなどない。

帝国内から上げられた収益は、王国公国に関わらず、国力で賄いきれぬ不備を補う為に使われるので、貧しいモナなどはその恩恵に最も浴しているとも言えるのだが、独立せずに帝国内で王国として認可されれば、徴税額は減るし、恩恵には変わらず浴することが出来る。

「大恩あるヴァルスにそのような真似をするはずもなかろう」

アドルフが刺々しい声で言い放った。

「おぬしのような若僧にはわかるまいが、そう言い切るだけの関係をこれまでに築き上げて来ているのだ」

「それは先代の話だろう」
ロンバルトの王子がヴァルスを裏切るご時世だぞとは、確定事項でもないので言いたくても言えない。
「何を……」
「ヴァルス国王クレメンス陛下と、モナ公先代カルロス5世殿の御世の話。現在モナは既に代替わりしており、ヴァルスも間もなく代替わりを余儀なくされよう。御伽噺（おとぎばなし）はこの際忘れていただきたい」
「無礼なッ」
「シェイン。口が過ぎるぞ」
ラウバルがとりなすように口を挟み、憤慨して立ち上がったアドルフは渋々着席した。
「兵力を分断することが馬鹿げているのは百も承知。しかしロドリスに対する警戒を解くわけにはいかず、海上から攻めて来るだろう敵に対応するには他にあるまい。アルトガーデン帝国内部の各国に出兵依頼をすべきだが、どの国がロドリスに与しているかは現段階ではわからぬ。自国で対処するしかない。……ロドリスはまだ動かぬ。モナに対する対応を早急にすべきだ」
言い切ったシェインに、ラウバルが微かに片眉を上げた。
「……ロドリスがまだ動かぬと言うその根拠は」
「……ここでは言えぬな」
それを語ればロドリスがレガードの消息を追っていることを話さなければならなくなる。現在ここにいる顔触れの中では、ラウバル、ガウナ以外にレガードが行方不明だと言うことを知る者はいない。彼らの中では、レガードは一度旅に出た後トラブルに遭遇し、軽い記憶混濁の後、再度『王家の塔』を目指して出発したことになっている。
「我々を舐めているのか」
ブレアが顰め面で問うた。アドルフのように甲高い声できゃんきゃん吼えぬ分、迫力がある。さすがは軍人と言えよう。シェインはブレアのことを嫌いではないが、親しくなるつもりもない。動じず

に淡々と答える。
「そう受け取られるのは心外だがな。言えぬものは言えぬ。機密事項だ。後にラウバルとガウナ殿にだけ、報告しよう」
ただ。
言いながら、密かに引っかかっていることを心の中で吟味する。
セラフィとバルザックが手を組んでレガードを陥れた。バルザックとの戦闘中、その魔法の発動に伴い、レガードは姿を消す。現在セラフィ……つまりロドリスは『銀狼の牙』を使ってレガードの行方を追っている最中だとすれば、バルザックは果たしてレガードの行方を知っているのだろうか。
知っているのだとすれば、セラフィとバルザックは、手を組んだとはいえその間に深い溝があることになる。つまり、バルザックがセラフィを裏切ったと言うことだ。その可能性はゼロではないし、そう考えてシサーたちにバルザックを追うよう匂わせたのだが……。
（バルザックも本当に知らないのだとしたら……？）
また、振り出しに戻ってしまうことになる。
軽く頭を振って、その考えを追い出した。今考えるべきはセラフィとバルザックではない。
肝要なのは、セラフィがレガードの行方を知らぬゆえにロドリスはまだヴァルスに対して攻撃を仕掛けられないと言うことだ。
だが、それもタイムリミットがある。カズキの陽動でレガードがヴァルス国内に生存していると思わせられるのもそう長くは持たないだろう。逆にバレた時こそ、レガードの行方をシャインカルクが掴んでいないとみて、クレメンス崩御と同時に襲い掛かって来る時だ。
北と南に兵力を分断すれば、それを再び合流させるのは広大な領土ゆえに容易ではない。ロドリスが動く前にモナを叩いておく必要がある。海上の脅威を取り除いてこそ、ロドリスを中心とするハイエナに対峙出来ようと言うものだ。
「……では、仮にシェイン殿の主張するように、モナがヴァルスに

攻めて来ようとしているのだとしよう」
　スペンサーが薄笑いを浮かべて口を開く。シェインは顔を動かさずに視線だけでその四角い顔を見つめた。
「だが、モナごとき貧乏国では相手に不足があろう」
　その言葉に、一同が嘲笑した。あまりの頑なさに、さすがのシェインも頭痛を覚え始める。
「……モナは、軍事大国となろうとしている」
「馬鹿なことを。モナは兵の増強に関心がない。ナタリア・マカロフ戦争の折に派遣された弱小部隊をお忘れか」
「その後に代替わりしているだろうが！！」
「代替わりしようが、歴代弱小部隊しか擁していない小国の軍事力などたかが知れている。フレデリク公は室内に籠もって書物を繰るのが趣味の若者だとか。そのような若僧に、俄かにヴァルスに対抗出来るだけの兵力を育てられるわけがなかろう」
「フレデリク公はナタリア・マカロフ戦争の時に出陣している。その際にヴァルス軍を内側からつぶさに観察していてもおかしくない。兵法は書物からも学ぶところが多くある。加えて、フレデリク公は戴冠してから軍法を改良し、軍事訓練を繰り返しているとの情報がかねてより繰り返し寄せられている。警戒するには十分な相手だと思うが」
「馬鹿馬鹿しい。大方、ナタリア・マカロフ戦争において、自国の軍の情けなさに涙でも零れたのだろう」
「貧乏国の軍事訓練にいちいち目くじら立てていては、大国ヴァルスの名に恥じようぞ」
「アルトガーデンの為に、少しでもましな軍を育てようとしてくれているのであれば、むしろ歓迎ではないか。あの弱小軍隊では、兵糧が減るのみで適わぬ」
　再び上がった笑い声に、シェインは歯噛みした。会話にならない。このままでは、ヴァルスはモナとロドリスに挟撃されることが目に見えている。

ロドリスと手を組まぬよう各国に使者を飛ばし、諸国の反応を見なければならない。手を組めるところがあれば、すぐにでも行動に移さないと手遅れになる。

ロドリスが同盟を組むよう画策するとすれば、真っ先に挙げられるのはどこだろう。

（やはり、リトリアか……）

成立するかはさておき、リトリアとの同盟を目論むのは間違いないだろう。ヴァルスに次ぐ大国を味方に引き入れぬ手はない。だが、ロドリスとリトリアは長く反目し合っている。応じない可能性も高いことを考えれば、リトリアに打診しながら同時に、ナタリアとキルギスも押さえたいと言うところか。

リトリアを中心に左右に広がるナタリアとキルギスを引き入れれば、仮にリトリアがヴァルス陣営に加わった時にロドリスが挟撃される恐れを排除出来る。だがその場合、ナタリアとキルギスの戦力は、対ヴァルス戦には期待出来ない。ロドリスとロンバルトに近接するバートとの同盟も疎かには出来ないだろう。

つまり。

（……アルトガーデン全土が巻き込まれる戦争になる……）

遡ればロドリスの婚家にあたるナタリアは、常からロドリスに迎合している。まずヴァルス側に引き寄せるべきはリトリア。バート、キルギスは状況に応じて右へも左へも変化する。陥落するよう画策すべきは、その三国。

第1部第17話　ひとつの真実（2）

そのままモナのこれまでの弱小ぶりをあげつらい始めた大臣たちに、シェインは何を言う気力もなくして頭を巡らせた。やらねばならぬことは、いくらでもある。少なくとも、まだクレメンスは生きている。その間には恐らくモナも含め諸国は攻めては来まい。ならば、クレメンスの在位中に出来ることをしておかねばならない。

大臣たちは頼りにならない。後にラウバルに直訴する必要があるだろう。

実りのないまま会議を終え、大臣たちが退室した会議室で、シェインは椅子に踏ん反り返って両腕を頭の後ろに回して不機嫌な顔をした。

「……やっておれぬ」

「そう言うな。これまでヴァルスを支えてきたお歴々だ」

「これまではこれまでは……。聞き飽きたわ。昔語りをしたければレオノーラの飲み屋でやれ。良い店を案内してやる。最大の敵は諸外国ではなく自国の要人どもだとは笑い話にもならぬな」

完全に臍を曲げているシェインを、ガウナが穏やかに嗜めた。

「歴史は侮れたものではありません。培われてきたものこそが、本領を発揮する場合もありますからね。もちろん、培われたものが全てではなく、その上に新たな土壌を築く場合もありましょうが。……お話を伺いましょう」

注意しなければわからないほどほんの僅か、ガウナの声が低められる。その声にシェインは預けた体を起こした。

「ロドリスが攻めて来ないとの根拠を話せ」

「その前にバルザックだ」

先ほどの不機嫌さを引き摺って強気に言い放ったシェインの言葉に、ラウバルとガウナは目を見張った。

「レガードに扮したカズキが襲われた。襲ったのはロドリス辺境の

盗賊団。……以前、バルザックと組んで、レガードを襲撃したそうだ」
「何……」
「『銀狼の牙』――その盗賊団だが、そいつらはある男に金を掴まされて頼まれたらしい。頼んだ男の特徴は青い髪に青い瞳。……一致するだろう」
「やはり『青の魔術師』か」
「なぜ、バルザックと組んだと」
ガウナが静かに尋ねた。それを受けてシェインは、立ち上がってテーブルの上に置かれたポットを引き摺り寄せると、カップに茶を継ぎ足しながら続ける。
「襲ってきた奴らが漏らしたそうだ。だが、レガードの行方は依然として掴めない。戦闘中に行方をくらましたそうだから、バルザックが何か知っているかも知れぬとは考えているのだが……。だとすると、バルザックの目的がわからぬな」
言ってシェインはラウバルを見据えた。
「何があった」
「……」
「そもそも『青の魔術師』と手を組む理由もわからぬが、仮に途中で翻ったとしてその意図もわからぬ」
「なぜ翻ったと思う」
「カズキの襲撃にバルザックは姿を現していない。『銀狼の牙』は『青の魔術師』の依頼を受けて、襲撃後もレガードを追っている。ロドリスがレガードの行方を知らぬ証拠だ。無論バルザックが翻ったのではなく、本当にレガードの行方を知らぬ可能性もあるがな」
飲むか、と言う仕草でポットを押しやると、ラウバルは頷いてまずガウナのカップに、次いで自分のカップに茶を注いだ。黙って口を運ぶ。
「宮廷と無関係の奴らを使うのは、ヴァルスに確たる尻尾を掴まれたくないからだろう。つまりロドリスはまだヴァルスと正面きって

争いたくない。実際、ロドリスと戦ってもヴァルスは負けぬだろう。だがそう言い切れるのは、上に頂く主がいて、ロドリスが単独である場合に限る」

「……」

「クレメンス陛下が戦陣におらず、レガード王子が陣営に加わらない。弔い合戦でもない限り、ヴァルスの士気は上がらぬな。兵の士気は勝敗を分ける。ロドリスが各国と同盟を結んで攻め入ってきた場合、苦しいことになる。……恐らくそれを狙っているのだろう」

「つまり、レガード王子がシャインカルクもしくは王城が把握する範囲内にいないことと、クレメンス陛下の崩御、そして……」

「同盟の成立か」

呟いたガウナの言葉を引き取るようにラウバルが呟いた。

「だから、ロドリスが動くには時期尚早だと」

「ああ」

頷いてカップを引き寄せると、シェインは指先でカップの淵を弾きながら頬杖を付いた。

「ただ、モナの動きはロドリスと共謀しているようには思えぬな」

「単独か？」

「わからん。ロドリスの動きに刺激された可能性はある」

ロドリスが各国と同盟を組むべく使者を飛ばしたのだとしても、モナにはいっていない可能性は高い。大臣たちが自負するようにモナがヴァルスに受けている恩恵は多大なもので、周知のことだ。

ヴァルス寄りの国に声をかけると言うことは、ロドリスの動きがつぶさにヴァルスへと漏洩する可能性を否定出来ない。呼び掛けるとしても、まずは味方に付く可能性の高い諸国と秘密裏に連絡を取り合い、そこが固まってからとなるだろう。危険を冒しても味方に引き入れたいリトリアは別にしても。

モナが単独であるとすれば、ロドリスを中心とした各国の動きを嗅ぎ付けて、出遅れまいとしたとも考えられる。だとすれば、モナはヴァルスを攻める意志表示としてまず海軍を動かし、その後にロ

ドリスにモナから使者を送った可能性さえある。
「ロドリスの目的はどこにあると見る？」
シェインの言葉に、ラウバルは白銀の瞳を向けた。
「アルトガーデンの覇権以外考えられまい」
「だろうな。レドリック王子がたれ込んで、ロンバルト、ヴァルス、ロドリスの三国併合を夢見たロドリスがそれに乗ったフリをした。無論、改めてレドリック王子は排除する腹積りだ」
異論はなかったので、ラウバルは黙って頷く。それを確認してシェインは挑戦的な一言を投げ付けた。
「ではそのロドリスと組んだ黒衣の魔術師の目的は、どこにあるのだろうな？」
「……」
「何者だ、やつは。目的は何だ」
畳み掛けるように矢継ぎ早に問うシェインに、ラウバルは吐息をついた。
「詳しいことは、話せぬ」
「この後に及んでいるのだぞ」
「ロドリスと組んだ目的まではわからぬ。だが、奴の狙いなら知っている」
「何だ」
ラウバルとガウナは一瞬顔を見合わせた。その後に静かに口を開く。
「バルザックの目的は、『ストームブリンガー』だ」

◆◇◆

何となく、やる気のない雰囲気の流れるリトリア王国王都セルジュークの王城ラナンシーで、現国王クラスフェルド１１世に対峙したエレナは、その怠惰な空気感に気圧されながらも一応、片膝を床につき正規の姿勢を取った。

「お前らか、ロドリスの使者と言うのは」
クラスフェルドは黄色く濁った瞳を面倒臭そうにエレナに向けた。濃紺の髪はぼさぼさで、ダークブラウンの瞳は眠そうだ。無精髭は生えているし、身に纏った衣類は質こそ良いものの着乱れている。玉座の肘掛にだらしなく凭れかかって裸足のままの片足は体に引き寄せられ玉座の上に立てられていた。
とても国の主とは思えない。まかり間違えたら浮浪者だと思ってしまいそうだ。
（これが一国の使者に対峙する王の態度か！？）
憤慨しそうな気持ちを何とか宥めながらエレナは顔を伏せた。
だが、戦陣以外において身分の高い者は御簾の後ろに姿を隠していることが多いこのローレシアにおいて、たかだか使者風情の前に姿を現してくれる辺りは、敬意を表してくれている……わけではないだろうが、そう思いたい。
「は。ロドリス王国ハーディン王城より参りました近衛警備隊第１小隊隊長エレナ・セル・ド・ロシェルと申します」
「ほう。で、そっちの無礼なうどの大木は何だ？」
言われてエレナははっとした。クラスフェルドの有様に唖然としていて、こちらの馬鹿のことを忘れていた。礼を尽くした正規の姿勢を取るどころかぼんやりと突っ立っている。慌ててエレナはうどの大木……もといグレンを床へと引き摺り倒す。
「へぎゃッ」
「失礼仕りました。武骨な軍人ゆえ、少々礼に悖るところがございまして……」
相棒を床に叩き付けておきながらエレナは再度深々とクラスフェルドに頭を下げた。しおしおとグレンはエレナに倣って姿勢を正す。
「名は」
「あ、私ですね、エレナさんの下に配属されております、近衛警備隊第１小隊隊員グレンフォード・ラ・シェ・ソードベリーと申しましてですね、ミナサマからは愛情込めて『グレン』と……」

尚も余計なことを口にしそうなグレンをエレナは背後で密かに殴りつけ、その高い頭を平伏させる。王の気質によっては、あるいは王城の空気によってはその場で即刻打ち首にされかねない。寝言は寝て言えと言いたくなる。

「ほう。お前の方が年上に見えるがな。部下か」

「いやあ、一生懸命働いてはいるんですけれどねえ……」

だがクラスフェルドのお好みには合ったらしい。昼間から酔っ払っているようなその赤ら顔を笑いの形に歪め、グレンに問う。

「軍人と言うが、戦功を立てられんのか」

「結構立ててる方だと思いますけどねえ……どうにも暴走する癖がありまして。若者の命は私には預けられないと言うことでしょうかねえ……」

もそもそと答えたグレンの言葉に、クラスフェルドが体を起こした。この怠慢極まりなく見えるリトリア国王は、その能力を戦場でこそ発揮する。勇猛さでは他国の国王に類を見ない武王なのだ。それゆえ、政治事には関心が持てず、また、王城でじっとしているのが性に合わぬ為に王城では遊び呆けている。おかげで大臣たちはきりきりまいだが、その武勇に一目置かれ、気さくに民衆の中に入り込んでいく為、民の信頼は篤い。

「……ほう。ではお前か」

眠たげだった瞳に鋭い光が宿った。起こした体をやや前傾にして乗り出すように尋ねる。

「は。何がでしょう」

「とぼけるな。お前のことなのだろう。『ジェノサイド・イブリース』とは」

グレンはだらしない笑顔を浮かべて頭に手をやった。

「いやあ～。そうおっしゃってくれる方もおられるみたいですがね。『天使』なんて言われるとやっぱりちょっと照れちゃいますね。あれですかね、やっぱりこの可憐な容姿がそう思わせるんですかねえ」

「『天使』と言うにはいささか天使に失礼だがな。良い。話を聞こ

う。王城を警備すべき近衛警備隊がわざわざ何の用だ。こうしている間にも王の身が危険にさらされているやもしれんぞ」

にやっと意地の悪い笑顔を浮かべ、ようやく話を聞く姿勢になったリトリア国王に、愚にもつかない世間話がこのまま展開されたらどのタイミングでグレンを切り捨ててくれようと考えていたエレナは我に返った。

「アルトガーデンへの忠誠を、諸国協力の元、今こそ示されるべきかと」

潜められた声に、しかしクラスフェルドは身動ぎせずに言葉を返した。

「忠誠とは？」

「アルトガーデンはご存知の通りいくつかの王国公国より成り立っております。一大事の折には各国が協力して帝国を支えるのが定めであり、大恩ある帝国への忠義」

「一大事と来るか」

どれほど言葉を飾ろうと、その真意は見えていると言うように、クラスフェルドはにやにやと笑いを浮かべながら先を促した。

「現皇帝がお倒れになられたのはご存知でいらっしゃいましょう」

「無論」

「クレメンス８世皇帝陛下にはお世継ぎがおりません」

「……おかしなことを言う。王女がいるだろう。そしてその王女がロンバルトの王子と婚約するとクレメンス殿から直々の書簡が届いたのは俺の妄想か？」

「帝国にとってのお世継ぎとは男児のみ。かつて女性が皇帝位を継承した試しはございません。安易な婚姻政策でロンバルト如き小国の、しかも第２王子にアルトガーデンの帝冠が渡るとあっては笑止千万にござりましょう。お世継ぎが途切れた場合には公平を喫して選挙を行うべき。そのことをヴァルスに教えてやらねば、歴史ある帝国が笑われましょう」

ロドリスは当面、戦争が終結すればロンバルト王子レドリックを

擁立するつもりではいるのだが、それはこの際置いておかれている。
『公正な選挙』を行い、レドリックを当選させれば良い話なのだ。
ヴァルスと言う大国が倒れれば、票の取得の裏工作など幾らでも謀ることが出来る。
「つまり、共にヴァルスを攻めろと」
単刀直入に言ったクラスフェルドに、エレナは敢えて明言を避けた。言質を取られてはたまらない。
「……飴ばかりばら撒いていては腐るばかり。時には鞭も必要かと存じます。アルトガーデンへの忠義の証として」
あくまでも謀叛ではなく、アルトガーデンの為なのだと言う姿勢を崩さない。その内心が見え見えであったとしても、体面とは重要なものなのである。
「実のある話をしたいが、良いか」
「何なりと」
「その場合、リトリアの利益はどこにある」
「……出兵には多くの痛みを伴います。過ちを犯そうとしているヴァルスを正す為、アルトガーデンの為とあらば懐が痛むのも致し方ございませんが、その代償をヴァルスに少々負担していただくことも道義に悖(もと)ってはいないかと考えます」
「つまりヴァルス領の分割か」
立場を考えれば仕方ないのだが、いちいちまだるっこしいエレナの言をクラスフェルドは明け透けに言い直す。言葉に詰まってエレナは一層深く頭を下げた。
「だがリトリアはヴァルスと離れてるからな。正直ヴァルスの領土など分割されても統治に困るな。むしろ俺なんかはロドリスの分割をした方が便利なのだが」
挑戦的に言ったリトリア国王にエレナは顔を上げた。
「それはロドリスに対し兵を挙げると言う脅しですか」
「そうは言っておらんだろう。利益関係の話だ。ま、空想だな。俺には少々空想癖がある。大目に見てくれ」

声を荒げかけたエレナを制すように、それまで黙ってやり取りを聞いていたグレンがのほほんとした声を出した。
「私たちの提案を考慮する余地がある、と言うお話をなさってるんですよねえ」
「グレン……」
「つまり、私たちが出兵の代償をヴァルスに支払ってもらう。その代わりロドリスはリトリアにご協力いただいた謝礼を払う。……おっしゃるのはガレリア地方辺りでしょうかねえ」
「ほう。そのように掛け合うと言うか？『ジェノサイド・イブリース』」
「そう焦ってはいけませんよ。急いてはことを仕損じる、慌てる乞食はもらいが少ないと言いましてね。私あたりが良い見本……いやいやそうじゃなかった」
「グレン！！」
「交渉の余地はある、とお見受け致しますが？」
ロドリスにとってガレリア地方は決して安い土地ではない。だが、リトリアの出兵を取り付けなければ対ヴァルス戦は些か苦しいことになるし、勝利を収めてヴァルス北部にある酒造地帯シュレード及び豊かな緑と鉱山を有するロンバルトを分割出来れば安い買い物とも言える。
「いずれにしても、私たち使者の権限で決定出来るものではありませんからねえ。その辺はおわかりいただきたいとは思いますけれど」
グレンの世間話でもするような物言いに、クラスフェルドはおかしそうに笑った。
「良い。リトリアの出兵条件はロドリスのガレリア分割、現ヴァルス領土における一部の植民地化、加えてヴァルスの交易権の剥奪だ。以上の条件を飲むと言うのならば、アルトガーデンへの忠誠を示す機会と受け取ろう」
「しかと承ります」
リトリアの出兵如何で、戦況は大きく変わることになろう。

歴史に大きな動きを刻みつけようとしている自分に、エレナはその身を震撼させた。

第1部第18話　風の砂漠～ダンジョン1～（1）

こうも、どこまでも同じような風景が続いていると、自分が歩いてんだか止まってんだか何なんだか、わからなくなってくる。遠くに見える山々は変化しているはずなんだけど……それすらも段々と同じに見えて来たりして。

途中魔物に遭遇したりはしたんだけど、既にすっかりお馴染みになってしまったジャイアント・スコルピオンやサンドゴブリンばかりで目新しい顔触れと言えばほぼ同レベルのジャイアント・アントと言う巨大な蟻くらいだった。その時までは。

砂漠に出てから3度目の夜が明け、地図上で言えばあと数時間でそのダンジョンに辿り着くだろうと言う、そのくらいの場所。

不意にシサーのグラムドリングがぼんやりと発光した。鞘に包まれて尚零れ落ちる白い輝き。――魔物が近い。

柄に手を掛けたシサーの表情が不意に強張った。同時に足元から何か異物感……嘘だろッ！？

「足元だッ」

シサーの怒声と同じタイミングで反射的に飛び退る。シサーはユリアを抱えて横へ向けて地を蹴り、キグナスやニーナもそれぞれ地面を蹴り付けてその場を散った。

瞬間、巻き上がる砂埃。黄色に煙ったその中から姿を現わしたのは、どこかぶにぶにした質感の、けれどあまりに巨大な生き物だった。5メートルくらいあるんだろうか。肥大化したイモ虫のようにも見えるが、決定的に違うのはその頭部だ。顔があるべき場所にはマンホールの蓋をどけたかのような、ぽかんとした穴が広がっている。そうは思いたくないけど、あれは口なんだろーか、やっぱり。

「アモル・オムニブス・イーデム。我らを守りし偉大なる女神ファーラよ。汚されし者の邪悪な手を清めたまえ」

ユリアが防御魔法をかけた。これでこちらの防御能力は上がった

はずだ。
　生まれて初めて見るサンドワームは、口の周りには何かうねうねする短い触手みたいなものが生えていて、同様のものが頭部や体からも突き出している。全体的に保護色なのかクリーム色っぽい感じだが、ところどころに鮮やかな緑の太いラインが横たわり、そこに浮かぶ赤い小さなぼつぼつが毒々しい。口からは濃緑色をした粘液質の液体を溢れさせている。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ナートゥーラー・ドゥーケ・ヌンクァム・アベッラービムス。『風の刃』ッ」
　すかさずキグナスの魔法が飛んだ。風の鋭い刃で体を切り刻まれ、サンドワームが身を捩る。シサーが地を蹴り上げ、頭部のすぐ下、イメージとしては首の辺りを真一文字に薙ぐ。閃いた白刃にサンドワームは鮮やかな緑色の血を噴き上げて仰け反った。その衝撃で口に溢れる粘液が振り撒かれ、それを吸った地面がどす黒く変化した。
「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ！！その身を裁きの矛と変えよッポエブスッ」
　ニーナの魔法が完成し、光の矢がサンドワームに突き刺さる。風の精霊や水の精霊の使役に長けているニーナだけど、砂漠である以上水の精霊の召喚は不可能ではなくても無理があるし、風の精霊は現在交信不能状態に陥っているので呼び出せない。代用と言うわけでもないだろうけど、このところニーナは光の精霊であるウィル・オー・ウィスプばかり呼び出している。
「カズキッ背中狙えッ」
「わかったッ」
　それにかぶせるようにキグナスの『火炎弾』が放たれた。サンドワームは一層激しく身を捩り、毒々しい粘液が次々と飛散する。それを避けながら抜き放った剣を構えて俺は背面からサンドワームに飛び掛かった。シサーの指示を受けて、がら空きの背面に切り付ける。

思いの外硬い皮を突き破る確かな手応えが手の平に伝わり、鮮緑の血が噴き上がった。だが、次の瞬間。

「うわッ」

背後から受けた攻撃にサンドワームが激しく頭部を振った。突き刺さった剣の柄に手を掛けたままだった俺はその衝撃をもろに浴びて砂地の上に吹っ飛ぶ。背中から思い切り叩きつけられて、一瞬呼吸が出来なくなった。

「カズキッ」

ユリアが駆け寄って来る。跳ね起きながら、それに答えた。

「大丈夫、怪我はしてない」

それよりも……。

軽く舌打ちをしながら、シサーたちの攻撃を浴びて毒の粘液をバラ撒いているサンドワームの背中に突き刺さったままの剣を見る。このままじゃあ丸腰だ。援護に回るしかない。

ポケットに入れてある魔法石を取り出す。拳大の紫色の石。

「『風の斧』！！」

突如鋭く太い刃に己を変化させた風が、サンドワームの巨体に襲い掛かる。幾つもの傷をその体に刻み付け、クリーム色の肢体は緑色に染まっていった。キグナスの『火炎弾』を受けた部分は濃い茶色に変色し、煙を上げながら何とも表現しがたい匂いを発している。

「あ、このやろ」

シサーの、どこか余裕があるぼやきが聞こえたと思ったら、サンドワームは砂煙を巻き上げて地面に潜っていった。その余りに激しい砂煙に視界が遮られる。ここでも風の強さは一緒なんだけど、風が砂煙を飛ばす勢いよりサンドワームが巻き上げる勢いの方が早い。

「どこ行った！？」

俺の怒声に、砂が目に入ったらしいシサーが片目を瞑ってむせながら怒鳴り返した。

「あいつは砂漠に潜ったりしてこっちを撹乱しやがんだ。まだ足元に潜んでるぞ。油断すんな」

「わかった」
俺が答え終えるか終えないかと言うところで、わずかに距離を置いた場所から噴水よろしく砂が噴き上がる。……って言うか俺の剣を返してくれ！！
「ユリア、レイピア借りても良い？」
視線をそちらに固定したまま尋ねると、ユリアが頷いて腰にぶら下げたレイピアを抜き放った。……軽ッ。俺のも相当軽いらしいけど、レイピアは更にその比じゃなく軽い。折れないかな、平気かな、なんて不安になっていると、予想を裏切って砂煙を風が吹き飛ばした後にはサンドワームの姿はなかった。……何！？
「後ろだッ」
「げえッ！？」
突如背後に舞い上がった黄色い煙に、咄嗟に顔を腕で覆う。サンドワームが出現したせいで斜めに盛り上がった足場に、ユリアが足を取られた。
「ユリア！！」
転倒したユリアに目掛けられた触手をレイピアで薙ぎ払う。その隙に再びニーナの『光の矢』とキグナスの『風の刃』がサンドワームを襲った。
「カズキ、ユリア連れてどいてろッ」
グラムドリングを翳したシサーが駆けて来る。その言葉に従い、俺はユリアを立ち上がらせて抱えるとその場を飛び退った。サンドワームが体を擡げる。シサーの足が地面を蹴った。頭部の真下を一閃し、着地する。
どうッ。
砂塵が上がり、その巨体が砂漠に崩れ落ちた。頭部と呼べそうな部分は、ない。僅かに時差を持って、少し離れた場所に緑色の血を噴き上げながら切り離された頭部が落ちる。そちらでも砂塵が舞い上がった。一瞬辺りが完全に黄色く染まるほどの砂埃。
「げほげほ」

視界が少し良好になるのを待ってから、俺はユリアにレイピアを返して倒れたサンドワームの胴部分に近付いた。背中に刺さったままの俺の剣を抜き取る。どばっと血が出た。うー……どろどろじゃん、俺の剣……。

顰め面をしているその視界の隅で、何か違和感を感じた。違和感……何だろう……。

……え!?

気が付いてはっと顔を上げる。シサーも渋面で顔を上げた。――グラムドリングがまだ白光を放っている。まだ、魔物がいる!!

「シサー!!」

「ちッ……こうも畳み掛けるようじゃ、やってらんねーなあッ」

言いながらシサーはぶんっと剣を振った。見据えたその先を追うようにして俺の目に飛び込んできたのは。

「今度はバシリスクかよッ」

キグナスが呻き声を上げる。いつの間にそんなトコまで近付いて来たのか、黒々とした影が俺たちの上に注いでいた。さっきのサンドワームより更にでかい。7メートルはあろうかと言う巨体が硬そうな鱗で覆われている。錆びた鉄のような色をしたその姿は、鰐皮のハンドバックを連想させた。腹部だけは薄く黄色っぽい、サンドワームのような色合いをしている。……む、無理でしょ、普通にッ!!

睨むだけで石化させる力があると言う薄緑色の小さな瞳が今は細められていて、何を思っているのかぼんやりと中空を見据えていた。顔からいくつもトゲトゲみたいなものが生えていて、目元まで大きく裂けた口からは鋭い牙がいくつも飛び出している。8本もの足のうち、後部の4本で器用に上半身を立ち上げていた。

思わず剣を構えたまま静観していると、バシリスクが砂塵に沈んだままのサンドワームの胴体に顔を向けた。小さな鼻の穴をひくつかせる。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ダテ・

エト・ダビトゥル・ウォービース・イグニス。『火炎弾』ッ」
「ギエェェッ」
先手を取るように、キグナスが『火炎弾』を投げつけた。突然受けた攻撃に、バシリスクの体がよろめき奇妙な雄叫びを上げる。シサーが駆け出した。
「アモル・オムニブス・イーデム。大地の恵み、大気の守り、その全てを統べるファーラよ、清らかなる守りにて邪悪な者を退けたまえッ」
ユリアがシサーを守護する魔法を飛ばす。次いでニーナが『光の矢』を放った。俺も剣を握り締めて走り出す。……ってこんなやつ、どこをどうやって狙ったら良いんだよ！？
「アモル・オムニブス・イーデム。大地の恵み、大気の守り、その全てを統べるファーラよ、清らかなる守りにて邪悪な者を退けたまえ」
立て続けにユリアが俺への防御を強化する。バシリスクが体勢を立て直す前に、シサーがグラムドリングを振るった。魔法を帯びるシサーの剣は硬そうなその鱗も易々と切り裂き、先ほどとは違う鮮血が空に舞う。
「ギアアアアッ」
背筋が凍るような鋭い雄叫びを上げると、バシリスクは前方の足を振った。着地したシサーはそれを難なくかわし、同時に剣を薙ぐ。重ねて、バシリスクの叫び。シサーと対になる位置からバシリスクに迫った俺は、その腹部目掛けて剣を払った。
（くッ……）
サンドワームより硬い。のたうつバシリスクが払った前足に引っ掛けられて俺の体が吹っ飛んだ。転がったままのサンドワームの胴体に激突して跳ね返る。
「カズキ！！隠れろッ」
か、隠れろったってッ……。
その声に、身を起こした俺は条件反射的にサンドワームの体の陰

に滑り込んだ。
（……うっわぁ……）
その僅かな後、俺を陰に潜めたまま、サンドワームの体がみるみるるモノクロになっていく。……石化だ。危なかった。俺が石化するところだった。
「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ。閉ざされた世界に眩いばかりの光を与えん。アウローラ！！」
ニーナの魔法が飛んだ。サンドワームの体の向こうで、激しい光が炸裂する。ウィル・オー・ウィスプでバシリスクの目晦ましを図ったんだろう。その瞬間に俺はサンドワームの石像の陰から転がり出た。剣の柄を掴んで、サンドワームを土台に足を踏み切る。同じタイミングでシサーがグラムドリングを翳した。
「悪く思うなよッ」
シサーの剣が光に眩んでいるその両眼の間を突き刺すのと、俺の剣が首筋に突き刺さるのと、ほぼ同時だった。
「ギャアアアアアアッ」
長い断末魔の叫びを上げ、その巨体は砂漠の中に崩れ落ちた。

◆◇◆

その辺りから『サンドワームやバシリスクの多発地帯』は始まっていたようで、そこからの数時間、恐らく真っ直ぐ障害物なしで行けば1時間くらいだっただろう『3つ目の鍵』のダンジョンまでの距離を、実に8回も魔物に遭遇する羽目になった。具体的にはサンドワーム5回のバシリスクが3回。
本当に、死んじゃうかと思った、まじで。
あのねえ、1匹だってあれだけ戦闘に手間取るってことは体力や魔法の消費ってのも結構なもんがあるわけで。いくらユリアが回復魔法かけてくれるつったって、それだって無限に出来るわけじゃない。回復魔法だって使えば使うほど、ユリアが消費するんだから。

でもって休憩する間もあらばこそって勢いで出てこられるとこっちだっていい加減「本当にすみませんでした、俺が悪かったのでどうかここは見逃して下さい」と言う気分にもなる。

それだけ遭遇しといて誰も石化しなかったってのは……全くめでたい。後半にはいい加減「やってられっかッ！！」と匙を投げたシサーの一言で、逃亡する方針に切り替わった。逃げられたんだから結果オーライだろう。

なので、すっかり日が落ちた頃になってダンジョンにたどり着いた時は思わず「ああ、助かった」と思った。……ダンジョンなんだけどさ。でも何かとりあえず、バシリスクは出ないわけじゃん？

「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ。閉ざされた世界に光を与えん。アウローラ」

ニーナの光の魔法で懐中電灯よろしく辺りを照らす。戦闘中とは魔法の加減が違うのか、同じ魔法でも全然光の炸裂度の違う、控えめな明り。

「こいつが『３つ目の鍵』のダンジョンの入り口だ」

砂漠の、その砂地の上に煉瓦で固められたような狭い入り口があって、ちょうど井戸のようにも見える。日が落ちて温度の下がった砂漠に、荷物の中からマントを引っ張り出して羽織りながら俺も覗き込んだ。井戸の中は真っ暗で、何も見えない。永遠に下まで穴が続いていると言われても信じる。

「どうなってんのかな」

「１エレほど下に、足場がある。そこから階段が続いてたな、確か」

１エレと言うのは、１メートル５０センチくらいの長さだ。染み付いている寸法が違う俺は、いちいち頭で換算しないとわからないのでちょっと面倒くさい。

「足場？」

「ああ。階段の踊り場みたいにな。……ニーナ。ウィル・オー・ウィスプをこっちに」

「はい」

シサーの言葉に応じてニーナがウィル・オー・ウィスプを掲げたその時、シサーの後ろの方にいたキグナスが声を上げた。
「おい」
「え？」
「こっち……これ、誰かが魔物と戦った形跡があるぜ」
言われて、ダンジョンの入り口を覗き込むように前屈みにしていた体を起こす。キグナスが言うのはダンジョンの入り口から5メートルほど離れた場所の、岩場みたいになっているところだ。
「何……」
近付いて初めて気が付く。岩場だと思っていたのは、石化したサンドワームの胴体だった。
「本当だ」
別にこのサンドワームは、俺たちが最初に倒した奴とは違って頭部と胴体が泣き別れていない。けれど石化してるってことは……サンドワームに襲われている最中にバシリスクに襲われて、咄嗟にサンドワームを盾にしたとか或いは逆とか、そんなところなんだろう。
「カズキ！！」
キグナスの隣で俺と同じようにサンドワームの石像に視線を投げかけていたユリアが声を上げた。応じて顔を上げる。
「何」
「これ……このダガー、見覚えがない？」
屈み込んでユリアが拾い上げたのは、直径２０センチくらいの刃物……ダガーだった。受け取ってウィル・オー・ウィスプの明りに翳す。
「あ……これ」
「何だ？」
一緒になって覗き込んだシサーが首を傾げた。
「シンの使ってたダガーと一緒だ」
シンは2種類のダガーを使っている。1つは小さなショートソードと言い換えても良いような、ダガーとしては少し大振りのもので、

これは接近戦なんかで多用する。もう1つは投げ専用の、果物ナイフみたいなダガーだ。いずれにしても、シンの使っていたダガーには柄の部分にちょっと変わった紋章が彫ってあった。今俺の手にあるダガーは、それと同じものが刻まれている。

――俺はこの先、行くところがある。

そう言ってそっけなく踵を返したシンの背中を思い浮かべた。行くところ……この、ダンジョンだったんだろうか。

「シン？例の、ギャヴァンのシーフか」

「うん」

「てことは、そいつはここに来たってことになるな」

「わかんないけど。……多分」

じゃあ、ここを攻略したって言うのはシンなんだろうか。

「ま、考え込んでても始まらない。……どうする？中を探ってみるか？」

シサーが組んだ片手を顎に当てて首をちょっとだけ傾げた。思わずユリアと顔を見合わせる。

「大きなダンジョンなのかしら」

「さあなあ……。これまで誰も攻略してねえダンジョンだから、その細部はわかんねえな」

「どう、思う？」

尋ねたユリアに答えたのはキグナスだった。

「俺は賛成出来かねますね」

「キグナス……」

「ダンジョンってのは、無鉄砲に計画性もなく入る場所じゃない。何の情報も持たないまま入り込んでも、迷子になって魔物のエサになるのがオチじゃねえかな」

「実は俺も同感なんだがな」

シサーも頷いた。……うーん。シンが入ったのかと思うと、入ってみたいような気もするんだけど。何か、シンのことがわかるのかもしれないし。

いや、ダンジョンなんて不気味なものに入りたくはないってのも本音と言えば本音だけど。
「それは……そうだけど」
「いずれにしても明日だな」
落ち込んだようなユリアの声に、シサーが苦笑した。譲歩するように続ける。砂漠の砂を攫う風が、シサーの長髪を弄んだ。
「明日日が昇ったら、その塞がれてるってとこまでは探ってみよう。何か、わかることがあるかも知れない」

第1部第18話　風の砂漠～ダンジョン1～（2）

◆◇◆

朝の光の下で見ると、ダンジョンの入り口から見えるその空間ってのは確かにそれほど深いものではなく、すとんと飛び降りれば何なく着地出来る程度の深さだった。覗き込むと足場は1メートル四方くらいのほぼ正方形をしていて、錆びた鉄板みたいな1枚続きの床になっている。

降りてみると床にしてはいささかぼこぼこの感触だった。良く見れば何か掘り込みがあって装飾がある。そしてそこからすぐに階段が続いていた。まさに踊り場って感じだ。

足場から入り口への僅かな壁は入り口を固めているのと同様の煤けた煉瓦が組み上げられて造られており、ちょうどサンタクロースが入る西洋の家の煙突ってこんなかなあとか勝手に思う。……そんなメルヘンチックな代物じゃあ全然なくて……ダンジョンに続いてるんだけどさ。

とりあえず、塞がれていると言うところまで行ってみることにして、順番に足場に下りた。砂の下に造られているせいなのか、ひんやりとした空気が足元に溜まっているかのようだ。足場からすぐ続いている下り階段は先が全く見えない真っ暗さで、加えてそこから流れ出てくる冷気が緊張を誘う。

外の天気は今日も乾いた晴天で、太陽の光が眩しいくらいだ。だからこそ尚更、階段から来る陰湿な静寂が……不気味さを感じさせる。

ウィル・オー・ウィスプを先行させて飛ばし、そのすぐ後をシサー、ニーナが、続いてユリアを真ん中に挟むようにしてキグナス、俺と続いている。

先頭の明かりから結構離れているので、俺のいる辺りは薄暗い。

周囲の様子は薄らぼんやりとしか見えないんだけど、やっぱり煉瓦造りになっているみたいだ。天井は高くない。いや、むしろ積極的に、低い。１７０ちょいの俺もかなりの圧迫感を感じるんだから、俺より長身のシサーは何だか支えそうだ。

幅も狭くて１メートルくらいだし、段のひとつひとつは足場が３０センチもないし、嵌め込まれている煉瓦は抜けかけていてぐらぐらしているものさえある。その癖傾斜は急なので一歩一歩が慎重になった。何だか閉塞的な気分になって来る。

砂漠にぽかんと開いている穴だし、風も強いから、中には結構砂も吹き込んでくるらしく、段の隅や壁の煉瓦の僅かな隙間なんかに砂が吹き溜まっていた。外と通じているせいか、ダンジョンで連想しがちな湿っぽさはなく乾いている。冷蔵庫を思わせる、冷気を孕んだ乾燥だった。

「砂漠の中に穴なんか開いててさ、砂が吹き込み過ぎて埋まっちゃったりとかしないの」

ざらつく砂で滑ったりしないよう気をつけつつ、すぐ前を歩くキグナスに問う。

「埋まってないんだから良んじゃねえの」

「……それで俺に答えたつもりになってんだったら、お前って不思議な奴」

「……失礼な奴だな、お前って」

俺たちのやり取りを聞いていたのか、ニーナが前方でくすくす笑いながら答えてくれた。

「この前までは塞がってたのよ。誰も立ち入れなかったの。入り口を開けることが出来なかったみたいね」

「ふうん？いつ開いたの？」

「はっきりとはわかんないわね。……いつだった？」

後半のセリフは前を歩くシサーに向けられたものだろう。「あ～？」と唸るようなシサーの声が遠くで聞こえた。場所が先頭としんがりなのに加えて、シサーは前方しかも下を向いているので、実際

の距離以上に遠く聞こえる。
「そうだなあ……3ヶ月前くらいだったか？お前とギャヴァンで会う前に旅に出てたって言ったろ？その時だな」
「ふうん？」
「あん時もバシリスクに遭遇しまくってたからな。面倒臭くなって逃げてるうちにこっちの方に来ちまったんだ。んで、開いてたもんだから、覗いた」
「入らなかったの」
「興味がねえって言ったろ」
本当に興味なさそうに言ってからシサーは付け足した。
「ほら、入り口の足場の床、あったろ」
「足場の床？ああ。鉄板」
「あれが入り口を塞いでた」
「え！？」
それであんなぼこぼこだったのか。床にしては豪華だと思った。扉だったのか。
「どうやって開けたのかしら」
黙って話を聞いていたユリアが疑問を発した。ニーナの声が短く応じる。
「わかんないわ」
さして長くもない階段を下り終えて、平らな道に入る。狭さは相変わらずだ。階段の上より、更に冷え冷えとした空気が流れている。上の穴から僅かに届く外の明かりと前方のウィル・オー・ウィスプの明かりでぼんやりと見える感じでは、ずっと同じように煉瓦造りの床と壁が続いているみたいだ。
「わざわざ爆破して塞ぐってことは、上の扉を元に戻すことは出来なかったんだろうな。……ま、侵入を防ぐ目的よりは、攻略済みを証明する為でもあるんだろうが」
じゃりじゃりと砂混じりの床を歩く複数の足音と、上の方で風の鳴る音を聞きながら俺は妙なことを考えていた。

ここのダンジョンが開いたのが、シサーたちが知る限りと言う限定付きだけど、3ヶ月くらい前。レガードが行方不明になったのも……ほぼ3ヶ月前。

……偶然だろうか。

でも、ダンジョンなんかに用のないレガードとどう繋がるのかなんか、考えても思いつかない。……あ、そうだ。シン。シンがここに来たのかも知れないんだった。シンは何しに来たんだろう。やっぱ攻略する為なんだろうか。ダンジョンに来る用事って言ったら、普通は他に考えられないんだけど。

ここに来たのかもしれないシンと、来るわけのないレガードと、ダンジョン。そしてシンはレガードに借りがある……。

……。

「はあ……」

何だか無駄に考え込んだ気がする。やーっぱ関係ないのかな。ただの偶然かなあ……。

溜め息をつくとキグナスが振り返った。

「何だよ、『はあ』って」

「……別に」

「ついたぜ」

前方でシサーの声が聞こえた。それと同時に足が止まる。続いているはずの通路のその途中、壁が突き崩されていて瓦礫の山が天井まで積もっていた。いや、天井が崩れているのかもしれない。大なり小なりの、砕けた煉瓦の山。

階段を下りきってからそんなに歩いたわけではないけれど、この辺りまではさすがにもう外の明かりは届かない。ウィル・オー・ウィスプの頼りない明かりが光源の全てだった。振り返ると後方には薄闇が広がっていて、階段の最下段の辺りに外から零れる僅かな光が見えるくらいだ。

「駄目ね」

「いや、わかんねーぜ」

ユリアの溜め息が聞こえる。通路を塞ぐ瓦礫の山の前に屈み込んだり軽く叩いたりして、あちこち探っていたシサーがくぐもった声で答えた。うず高く積もる瓦礫の天井の方、ちょうどシサーの顔よりちょっと上くらいの高さの壁との境に手をかけている。

「これ、意外と厚くねえな」

「厚くない？」

「ああ。手を抜いたんだか爆破物が不足してたんだかわかんねーけど。少なくともこっち側は、崩せそうな気がする」

言ってシサーは剣を抜いた。天井にごく近い辺りの壁と瓦礫の隙間に差し込んで、そっと動かす。

「でもシサー……危ないんじゃないの」

ニーナが顰め面で言った。

「こんなとこで爆破した馬鹿がいるってことは、その辺の天井や壁も弱ってるってことでしょう。下手なことしたら、崩れるんじゃないの」

「うまくやるからまかせとけって……」

半分神経が違うとこにいっちゃってるみたいに言いながら、シサーは剣で少しずつ瓦礫の山の一部を掘り出したり突き出したりして少しずつ崩していった。パラパラと細かい煉瓦がその動きに合わせて床に零れ落ちる。時に少し大きい破片ががらがらと山を滑り落ちた。

「シェイン、ラウバルから何か聞き出せたのかなあ」

ぼんやり立っていても何の役に立つわけでもないし、みんなでやるような作業でもない。勢い、通路確保はシサーに任せっ放しになって俺たちはその場に座り込んだ。幸いシサーも結構喜々としてやってるようだし。

「ラウバル殿の口を割らせるのはハンパじゃねえと思うけどなあ」

「シェインと言えども？」

「シェインと言えども」

「シサーは、結構こういう作業好きなのかしらね」

俺と同じように感じたらしく、くすくす笑いながらユリアがニーナに言った。ニーナが呆れ顔で肩を竦める。

「そうね。どっかの村に行った時に、村で唯一の橋が大雨で流されたんだけど……何か喜々として復旧に加わってたわよ。おかげで橋が完成するまでわたしもその村に足止めよ」

意外と言えば意外だけど、ハマりと言えばハマりのような気もする。

んでも、天井が崩れても砂が入り込んできていないってことは、上の階とかがあるんだろうか。階と階の間が開いた浮き床構造みたいになっているんだとすれば、天井が崩れて砂が雪崩れ込んでないのもわかる。

「シサー、代わろうか」

しばらくシサーが黙々とその作業に熱中し、天井と瓦礫の山の一角にほんの僅かな空間が開き始めた頃、さすがに悪いような気がして言ってみると、シサーは元気な顔で振り返った。

「馬鹿。こういうのは繊細かつ頭を使う作業なんだよ。おいそれと他の人間に任せられるか」

そうですか……。

やりたいならありがたいんだけどね。俺はやりたくないし。

しかし、魔物を切るだけじゃなくて瓦礫掘りもやらされる魔剣って一体……。

◆◇◆

「よっしゃー。突破だぜぇ」

呟きなのか喜声なのか判断が付かない微妙な声をシサーが上げたのはそれから30分くらい経ってからだった。慎重かつ大胆と言う、何とも矛盾したシサーの『瓦礫掘り』を見るともなしに見ていた俺たちは、その声を受けて立ち上がる。

瓦礫の山の上の方の一角に、人1人が腹這いになってくぐれるか

なってくらいの穴がぽっかりと開けられていた。
「お疲れ様ッ」
ニーナが笑顔で駆け寄る。シサーはちょっと得意そうに腰に手を当てて「まあ任せろよ」って……ファイターとしての職業とは違うと思う、何か。
「ありがとう、シサー」
礼を言ってシサーが開けた穴に近付いて覗き込んだ。暗くて良く見えない。高さはちょうど俺の顔の位置とほぼ同じくらいだ。少し瓦礫の山を登って向こう側に抜けるような形になるだろう。
「とりあえず、行ってみっか。穴、開けちまったし」
何を今更と突っ込みたくなるようなことをシサーが言って、ウィル・オーウィスプを先に穴の向こう側に送り込むとシサーが穴に手をかける。
「これ、登ってる間に崩れない？」
「崩れてくれたら崩す手間が省けるじゃねえか」
……埋まるだけだと思う、その場合。
足元のちょっと大きめの瓦礫の山に足を掛けて、シサーは体を両腕で懸垂するように引っ張り上げた。上半身をひとまず穴の向こう側に出してから、ひょいっと片足を穴の縁に引っ掛けたかと思うとあっと言う間に姿を消す。
「大丈夫？」
ニーナが穴を覗き込む。身長が俺とほぼ同じくらいあるニーナにとっても穴の位置は顔と同じくらいの高さだ。
「おう」
「じゃあ……わたし、行くわね」
シサー、ニーナに続いてユリア、キグナス、俺と隊列順に穴を乗り越えて向こう側へ降り立った。さっきと違って背後は、穴が開いているとはいえ瓦礫の山で塞がれている。天井は相変わらず低いし暗いし、あまり気分が良いものでもない。
不意に、何か嫌な予感がした。何だろ。根拠があるわけじゃない

んだけど……ぞくっとする。……良く、ない……感じ。
「おっとぉ……」
ウィル・オー・ウィスプを翳して進行方向を見据えたシサーが楽しそうに呟いた。何だかんだ言って、結構興味ありありなんじゃないの？シサーって。
「ダンジョンって感じだなあ」
ウィル・オー・ウィスプの明かりに照らされたものは、俺たちのいる通路から続いている分かれ道だった。今俺たちがいる瓦礫の山から少し先は僅かに広い円形の空間になっていて、天井が高くなっている。その壁には5つ、まるで塗りつぶしたような闇が口を開けていた。
分かれ道に続く通路の入り口の高さはどれもこれまでの通路と同じく2メートル弱くらいで、幅は1メートルくらい。全てが相変わらず煉瓦造りで、ぱっと見た限りは同一のものにさえ見える。通路の奥はどれも真っ暗で果てしなく直進しているように感じられた。
……何だか背筋が寒かった。果てしなく続く暗闇と言うのは、その奥からやってくる何かを思わせて不安感を煽る。
それに拍車をかけるように、奥で風の音らしき不気味な唸りが聞こえた。壁や天井に反射して響いているのがまた一層不気味だ。ユリアが微かに体を震わせて息を飲んだ。
「……どうするの」
ニーナもあまり良い気持ちはしていないらしい。ちろっとシサーを横目で見ると、シサーは腕を組んで1つの通路の奥を見据えた。
「うーん。どーすっかなー。……やめとくか？せっかく穴まで開けたけど」
くるっと顔だけ振り返ってユリアを見る。ユリアが俺を見た。……いや、見られても。
「俺、何かさっきから嫌な予感がするんだけど」
何か答えを要求されているような気がして仕方なく口を開く。シサーが片眉を上げた。

「嫌な予感？」
「うん、まあ……。別に根拠があるわけじゃないんだけどさ」
シサーはもう1度通路の奥をちらっと見て肩を竦めた。
「んじゃ、俺、ちょろっとその通路だけ探ってくるわ」
「え！？本気？」
「ああ。様子だけ窺ってくる。すぐ戻ってくるさ。……ニーナ、ウィル・オー・ウィスプ、借りるぞ」
「あ、うん。一緒に行こうか」
「いや、偵察するだけだ。みんなを頼む。変な横道とか入りゃしねーから安心しろって」
「じゃあ、ここでみんなと待ってる」
ニーナが頷くのを見届けて、シサーは5本のうちの真ん中の1本……俺たちがずっと歩いて来た通路のその延長線上にある通路へと足を向けた。小さな明かりと共にその暗闇の中を進んでいくシサーの背中は、あっと言う間に闇に飲まれて見えなくなる。
「もう。子供みたいなんだから」
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ペティテ・エト・アッキピエーティス、『導きの光』」
キグナスが呪文を唱えてロッドの先に仄かな明かりが灯る。ニーナのウィル・オー・ウィスプにばかり頼って彼女の魔力を消費することを危惧したのかもしれない。
再びぼんやりとした光に包まれ、俺たちはその場に座り込んだ。絶え間なく通路の奥から響く風の悲鳴。シサーが吸い込まれた闇を見つめる。
薄暗く照らされる壁や通路を眺めていて、不意に奇妙なことに気が付いた。良く見ると壁に石が幾つも嵌め込まれている。ひし形の、石。何色なんだろう。暗いせいで正確な色なんかはわからないんだけど……多分、青とか紫とか、そんな感じ。
それだけなら別にそんなに奇妙なことでもないんだけど、一定の間隔で配置されたその石は、僅かに光を放っているものと放ってい

ないものがある。本当に僅かで見間違いかと思うくらいの差なんだけど。と言って、光っているものはずっと光っているわけじゃなくて、互い違いに……ちょうどクリスマスツリーのライトみたいにランダムに点滅してるって感じ。

（何か、意味があるのかな……）

ダンジョンに無意味な装飾をわざわざ施すとは……思えない。

再びぞくりとした悪寒が背筋を駆け上がっていった。何だろう、何か……。

「……行こう」

「え？」

突然立ち上がった俺に、ユリアが驚いたように問い返す。

「こんなわけのわからないダンジョンで、短い間でもバラバラになったらいけないような気がする。今なら、まだそう遠くへは行ってないだろ。シサーを、追おう」

「カズキ……」

ニーナも立ち上がった。

「そうね。今なら追いつくでしょ。……怖いわ、何だか」

急いで、とは言っても足元にトラップなんか仕掛けられてたらたまらないので走り抜けるわけにはいかないんだけど、出来る限り慎重に、でも急いでシサーの後を追う。何だか不安で胸がどきどきした。後を追うようについてくる俺たちの足音さえ煩わしいほどの……。

「やべーとこに迷い込んじまったのかな」

明かりを持つキグナスを先頭に、ひたすら暗い通路を進む。早くシサーに合流したい。

『導きの光』の遥か先は本当に深い闇で、多分今この明かりが消えたら俺は自分の手でさえ見ることが出来ないだろうと思う。

気をつけて見ていると、通路の壁にもさっきの円形ホールにあったのと同じような石が埋め込まれていた。結構な距離を置いて、ぽつんぽつんと。

（……？）
「あ、いた」
ニーナが喜びを滲ませた声を上げる。俺たちの進行方向に、ウィル・オー・ウィスプの明かりが見えた。
「シサーッ」
ニーナが駆け出す。「何だよ、お前ら来ちゃったの？」と言うシサーの声を予想した。
「シサー？」
が。
「返事がない……」
キグナスの声色にも不安が滲む。俺の中の焦燥感は先ほどの比じゃなかった。空気が一際冷たくなったかのように感じられて鳥肌が立つ。
「シサー！？」
思わず駆け出していた。キグナスもユリアも、続いて駆け出す。俺たちより圧倒的に早くウィル・オー・ウィスプの元へ辿り着いたニーナの悲鳴が聞こえた。
「ニーナッ」
シサーの姿は、どこにもなかった。

第1部第19話　風の砂漠～ダンジョン2～（1）

「シサー！！シサー！！シサー！！」

気が狂わんばかりの勢いでニーナがシサーの名を呼び続ける。俺たちもウィル・オー・ウィスプのそばに駆けつけたが、近付いたからって状況は何も変わらなかった。そこにいるはずの姿はやはりどこにもなく、半狂乱のニーナがいるばかりだ。

心臓が、早鐘のようだった。背中を冷たい汗が伝わり落ちる。

……どこへ行ったんだよ！？

魔物と遭遇したわけじゃあ、ないんだろう。この程度の距離、これほどの静けさなら、シサーが戦う物音くらい俺たちのところまで響いて来てもおかしくない。

「ニーナ！！」

俺の隣で青ざめた顔をしていたキグナスが、不意に鋭い声を発した。

「騒ぐな！！耳の良い魔物が集まってきたら、俺たち一網打尽だ」

「……！！」

戦慄した。

その一言は、衝撃で状況判断がつかなくなっていた俺に、今置かれているのがどういう状態なのかを理解させるには十分だった。

シサーと言う強力な攻撃力を失った現在、見習いのソーサラーと初級プリースト、そして剣を握っていくらも経たない俺と言う限りなく頼りないメンバーだ。ニーナが唯一レイピアも下級精霊も使いこなし戦闘慣れしてるとは言え……上級精霊を使役するわけでもないし、細腕の彼女1人でどうなるものでもない。身軽なエルフであればこそ、ニーナだけなら敵前逃亡が可能でも、俺たちはそう言うわけにもいかない。

ふと見てみれば、ウィル・オー・ウィスプと『導きの光』の前後3メートル以降は暗闇で塗り潰されている。天井と床の区別すらつ

かない、深遠の闇。それがひたすら前にも後ろにも続いているのだ。
「とにかく、ここを少し探ろう。落とし穴とか隠し扉とか……何か、そう言うのがあるのかもしれない」
震えそうになる声を努めて平静に保って提案する。それに従って、しばし沈黙のまま壁や床を探った。円形ホールから続くこの通路はそれまでとは違い、狭いのは入り口だけで通路そのものは幅が2メートルちょいくらいある。天井の高さも、3メートルくらいはありそうだ。けれど外れそうな床も壁もなく、もちろん脇道があるわけでもないから、ここでシサーが忽然と姿を消したとしか考えられない。
……馬鹿な。
気になったことと言えば、やはり壁に例の石が埋め込まれていることだけれど、少なくとも俺が見ている間は点滅するようなこともなく、光を失ったままで沈黙していた。……やっぱり、関係ないのかなあ、この石。
カツ、カツ、カツ……。
石を見詰めてぼんやりと考え込んでいた俺の聴覚に、足音が飛び込んで来た。まるで騎士が甲冑を身に纏って歩いているような硬い音。それと共に、鎧が触れ合うようなカチャカチャ言う金属質の音が聞こえる。
「敵だ……」
全身が総毛立った。俺たちが元来た道、その、黒以外視覚に何も訴えかけない空間の奥から響いて来る。全身を闇色の甲冑に包んだ騎士の亡霊が、鋭い剣を振り翳して追ってくる姿を思わず幻視した。
「に、逃げましょう」
ユリアが震える声で言う。それを合図としたわけでもないだろうが、俺たちは走り出していた。進む先もひたすら闇でしかなく、突如そこに異形のものが姿を現したとしたっておかしくない。足元にはトラップが仕掛けられているかもしれない。けれど速度を緩める気にはなれなかった。後を追う足音は続いている。……いや、むし

ろ相手も速くなってる！！
カッカッカッカッ……。
全力疾走しながら、同じく走り出したらしい背後の魔物がどこから現われたのかを考えていた。続く先は俺たちがいた円形ホールだ。あそこには当然魔物なんかいなかった。５本の通路のうち、他の４本のどれかから移動して来たのかもしれない。それとも、ここに来るまでにどこか脇道があったろうか。……駄目だ、思い出せない！！
カッカッカッカッ……。
いつの間にか、無意識のうちに剣の柄に手を掛けたまま走っていた。今、魔物に直接攻撃を加えられるのは基本的には俺かニーナだけだ。ニーナは、動きは速いけど力があるわけじゃない。俺は動きも力も大したことない。つまり物理攻撃にはそれほど頼れない。魔法攻撃がほとんど効かないようなやつもいると言う。そんなのに遭遇したら、アウトだ……ッ。
通路はひたすら真っ直ぐ続いていく。迷うこともないけど、背後の敵から行方をくらませることも出来ない。息遣いが荒くなる。けれど不思議なことに流れるのは冷たい汗ばかりだった。
カッカッカッカッ……。
背後の通路からの足音は、物凄い勢いで俺たちに迫って来ていた。俺たちの走る速度より、圧倒的にあっちの速度の方が速い。暗くて見えないけれど、多分もう肉迫してる勢い……ッ。
「！？」
「嘘だろッ！？」
キグナスが悲鳴のような声を上げた。前方の暗がりからも何か、物音が……ッ。
これ以上突進するわけにはいかない。俺たちは足を止めて前方の暗闇を見据えた。柄に掛けたままだった手を引き、剣を抜き出す。指先が震えた。
ぺた、ぺた、ぺた……。
どこか柔かさのある足音が近付いてくる。それに伴って、フウゥ

ーッ……フウゥーッ……と、荒い息遣いが聞こえた。背後から近付く足音も変わらず接近してくる。

（――！？）

あれ？後方の足音……さっきと、何か違くないか？ひたひたと言う、足が地を蹴る軽い音と、それと合わせて床に爪がぶつかるような「ちゃっ、ちゃっ……」と言う硬い音。まるで追ってくる魔物そのものが一瞬で入れ替わったかのようだ。しかも先ほどより遠くから響いてくるように感じる。とは言え確実に近付いているので……だからどうしたって話だが。

剣を握り締めた手に、じっとりとした汗が滲んだ。キグナスも俺の斜め後ろでロッドを構える。

――来た！！

ウィル・オー・ウィスプの仄かな明かりが有効な範囲に、筋骨逞しい太い足がまず見えた。人の足のような形。だが、寒気を誘ったのはその肌だ。灰色にくすんだその肌はうろこ状のものでびっしりと覆われている。

「アモル・オムニブス・イーデム。我らを守りし偉大なる女神ファーラよ。汚されし者の邪悪な手を清めたまえ」

ユリアの防御魔法が俺たちを包み込んだ。

剣を構えた俺の目の前に現れたその人型の全身を見た瞬間、背筋を寒気とも恐怖ともつかないものが駆け上がる。身長こそ俺と大差ないか低いくらいではあるものの、むき出しの肩や胸はがっしりとした筋肉が浮き出ていた。もちろんそれも、灰色のうろこ状のもので覆われている。そしてその頭部、窪んだ、うつろな眼窩には目玉がない。黒くぽっかりと穿たれた穴が吐き気を誘った。

何かの皮を剥いだような、血をこびりつけたものを腰に巻きつけ、やはりごつい筋肉質の手にはモルゲンステルンと言うメイスが握られていた。頭に棘が生えた球形のものをくっつけている金属製の棍棒だ。鎖で鉄球が繋がっているモーニングスターとは違い、直、棒にくっついているので飛距離があるわけじゃないけど……こんな狭

い空間でそんなことは、何の救いにもならない。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ダテ・エト・ダビトゥル・ウォービース・イグニス。『火炎弾』！！」
「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ！！その身を裁きの矛と変えよ。ポエブス！！」
キグナスが『火炎弾』で先制攻撃を仕掛けた。続けてニーナが魔法を発動させ、それを受けて魔物がよろめく。俺は地を蹴って斜めに構えた剣を振り翳した。
「くッ……」
だが、メイスが横薙ぎに払われ、弾き返される。壁に吹っ飛んだ俺は背中に鈍い痛みを感じ、片目を顰めながら跳ね起きた。魔物が眼前に迫ってくる。振り上げたメイスを俺目掛けて打ち下ろした。辛うじて紙一重の差でそれを避ける。俺の顔のすぐ横、モルゲンステルンがめり込んだ壁からパラパラと煉瓦の粉が落ちた。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ナートゥーラー・ドゥーケ・ヌンクァム・アベッラービムス。『風の刃』！！」
「『風の斧』！！」
「類稀なる知恵者ノームよ、悪しき者に大地の制裁を！！ダレ！！」
立て続けに魔法、魔法石が投じられ、魔物が咆哮を上げる。怒り狂ったように腕を振り上げ、壁を打ち砕いた。痛みで混乱しているのか、幸い俺に当たったものはひとつもなく、腕を振り上げる隙を縫って剣を払う。
「ウガァァッ」
深く切りつけられた脇腹から鮮血が迸った。再度、俺に向けて腕を振り上げる。
ニーナがレイピアを抜いて、その背後から斬りかかった。振られたメイスを避けきれずに、俺は今度は先ほどよりもろに肩に受けて吹っ飛ぶ。壁に激突した時に気が狂いそうな痛みが突き抜けた。メイスの先端の棘が服を突き破り、肉を抉って、血がどくどくと溢れ

出す。
「カズキ！！」
「くッ……」
壁から崩れて呻く。どっか折れたのかもしれない。痛みが脳に向けて突き抜ける。
「アモル・オムニブス・イーデム。我らを守りし偉大なる女神ファーラよ。その下僕に深き慈愛をもって癒しを施したまえ」
駆け寄ったユリアが回復魔法を掛けてくれた。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ダテ・エト・ダビトゥル・ウォービース・イグニス。『火炎弾』！！」
その間に、身軽に相手の攻撃をかわしながらレイピアで攻撃を仕掛けるニーナをキグナスが援護する。
「さんきゅ」
ふわりと優しい空気に包まれて癒された痛みに、笑顔と礼を投げかけ、俺は再び剣を掴んで立ち上がった。だが次の瞬間事態は絶望的になった。
「ガァァァッ」
喉の奥から叫んでいるような掠れた咆哮が聞こえた。さっきの魔物じゃない。背後だ。――追いつかれた。
「ちッ……ヘルハウンドッ……」
振り返ったキグナスが舌打ちをする。すかさずユリアが魔法石を投げた。
「『ノームの手』！！」
地から突如湧いて出る茶色い蔦のようなものに四肢を絡め取られたのは、1メートルちょいくらいの大きさの赤錆びたような毛色の犬だった。血のような色の瞳に獰猛そうな光を滲ませてこちらを睨みつけている。開かれた口から覗く鋭い牙も舌も、その全てが黒く、だらだらと涎を垂らしていた。
「きゃんッ」
ニーナの悲鳴が聞こえる。最初の魔物の腕に振り飛ばされたのだ。

「カズキ!!ヘルハウンドはこっちで何とか足止めしとく!!グリムロックを先に片付けてくれ!!」
最初の魔物はグリムロックと言うらしい。
「わかった!!」
短く返事を返して、ニーナに向かってメイスを振り上げるグリムロックの背後に斬りかかった。
「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ!!その身を裁きの矛と変えよ。ポエブス!!」
素早く呪文を唱えたニーナの魔法『光の矢』と俺の剣が同時に襲い掛かる。
「グァァァッ」
身を捩ってグリムロックはメイスを取り落とした。咄嗟にそれを蹴り飛ばす。武器を失ったグリムロックに再度剣を振り翳したその時。
「きゃあッ」
「くぉッ」
背後からユリアとキグナスの悲鳴が聞こえた。それと同時に熱風が吹き付ける。グリムロックに向けたままの視界の隅で、床を舐めるように炎を掃射するヘルハウンドが見えた。……が、最優先課題はグリムロックだ。こいつを倒さなきゃユリアたちのフォローにも入れない。
もがき、のた打ち回るグリムロックの背中に、垂直に振り翳した剣を突き刺す。正面からもニーナがレイピアを付きたてた。血の噴水。満身創痍だったグリムロックは、口からも血の泡を吹き出しながらその場に崩れ落ちた。それを確認してユリアとキグナスの方へ向けて駆ける。
「大丈夫かッ!?」
「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ!!その身を裁きの矛と変えよ。ポエブス!!」
背後からニーナの魔法がヘルハウンド目掛けて放たれた。『ノー

ムの手』の効果が切れ、ヘルハウンドは強靭そうな四肢のバネで地を蹴りつける。『光の矢』を避けるとキグナスに向かって飛び掛った。

「キグナス！！」

くッ……間に合わないッ。駆けながらポケットに手を突っ込み、魔法石を取り出した。青の小石。

「『氷の矢』！！」

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、グッタ・カウァト・ラピデム・ノーン・ウィー・セド・サエペ・カデンドー。『氷弾』！！」

俺が魔法石を投げつけるのとほぼ同時に、キグナスの魔法が完成する。氷の礫と矢を同時に全身に浴び、ヘルハウンドの体が横っ飛びに吹っ飛んだ。壁に叩き付けられる。だが、すぐさま跳ね上がって四肢を踏ん張った。開けられた口。

「来るぞ！！」

炎の掃射だ。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、オムニア・エウント・モーレ・モドークウェ・フルエンティス・アクウァエ。『水膜』」

キグナスが起き上がりながら水系の防御魔法を完成させた。次の瞬間視界が赤く染まる。

「くぅッ……」

咄嗟に片腕で顔を庇う。キグナスの魔法がぎりぎり滑り込んだおかげで何とか火だるまにはならずに済んだものの、熱くないわけじゃない。いや、熱い。俺たちを包み込む『水膜』が散らしきれなかった炎で、ちりちりと腕が灼けるような感じがする。

「『氷弾』！！」

ユリアが魔法石を投げつける。レイピアを抜き放ったニーナが斬りかかった。俺も剣を握って駆ける。ヘルハウンドが跳んだ。

「ユリア！！」

「ユリア様！！」
「きゃあッ」
太い前足をユリアに向かって薙ぐ。腰の辺りに受けて、ユリアの華奢な体が壁に叩き付けられた。防具に丁度当たったせいで、爪による裂傷は免れたみたいだけど、壁に激突したその衝撃で息が出来ないようにむせている。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ナートゥーラー・ドゥーケ・ヌンクァム・アベッラービムス。『風の刃』！！」
キグナスの声にかぶせるように、俺はヘルハウンドに突っ込んだ。再度跳躍したヘルハウンドは真っ直ぐ俺に目掛けてくる。俺の剣が届く方が辛うじて早い。赤錆びた首の辺りを斬り付け血が吹き上がるのを眺めながら、俺自身もヘルハウンドの太い前足に薙ぎ払われた。背中から壁に激突する。
「ギャインッ」
まるで犬を車で跳ねたみたいな鳴き声がしてヘルハウンドが地に転がった。キグナスの魔法が直撃したらしい。
「類稀なる知恵者ノームよ、悪しき者に大地の制裁を！！ダレ！！」
畳み掛けるようにニーナの魔法『石弾』が飛来する。あまり土系、火系の魔法を好まないニーナだが、水系、風系を制限される今の風の砂漠では背に腹は替えられないと諦めたらしい。
むせながら体を起こした俺は、剣を構えなおして地面を蹴り上げた。袈裟懸けのように斜め下に向かって剣を振るう。地面に転がったままのヘルハウンドの体から、剣の軌跡を追って血飛沫が舞った。
「……終わったか？」
身動きしなくなったヘルハウンドに、荒い息をついてキグナスが問う。横たわるヘルハウンドのすぐ脇に着地して、俺はその生死を確かめた。
「……た、多分……」
肩で息をしながら俺は頷いた。立ち上がって、壁に凭れたままの

ユリアに近付く。
「ユリア……平気？」
「ん……。怪我は、ないみたい……だから……」
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、クーラー・イプスム。『癒しの雲』」
キグナスが治癒魔法をユリアにかけた。ほっと肩の力を抜いて立ち上がった。
「ありがとう」
「何とか、倒せたわね……」
ニーナも疲れた顔をして、拭ったレイピアを鞘に収めた。頷いて俺も剣をしまう。
が。
「オォ～ン」
遠くで、犬の遠吠えのような声がした。前方、グリムロックの来た方向だ。……嘘でしょ。勘弁しろよ。
「……逃げよう」
「とにかく、後をつけてきたヘルハウンドは倒したんだし、戻ろうぜ。奥へ進んでも進退窮まるばっかりだ」
嫌気が差したようにキグナスが言った。
「そうしよう。確かに無鉄砲に奥に進んでもしょうがない。……それにもしかすると、シサーと入れ違ってて、戻ってるのかもしれないし」
さすがにそれは希望的観測過ぎだとは自分でも思うけど。絶望的なことばかり示唆したってしょうがない。
一同が頷いて、ヘルハウンドに追われて逃げた道のりを戻り始める。先ほど聞こえた遠吠えは、不意に途切れるように聞こえなくなった。……シサーをちゃんと見つけることが出来るだろうか。
何より、それまで無事に生き残れるんだろうか。

◆◇◆

ヘルハウンドから逃げ続け、グリムロックに遭遇するまでにかかった時間は多分３０分くらい。尤も計ったわけじゃないし、こういう時って感じ方が全然変わるから、本当は１５分くらいなのかもしれないけど。どんなに長く見積もってもって話で。

ともかく、そんなに異常に長い間移動し続けたわけじゃないはずだ。

はずなのだが。

「……なあー。こんなに、移動したか？」

ウィル・オー・ウィスプを借りて先頭を歩く俺に、しんがりを務めるキグナスが尋ねた。ニーナが俺に続いて、その後ろをユリアが歩いている。

「……同感」

何やらげっそりして来て、疲れた声で応じた。

ヘルハウンドを倒してから、それこそ３０分以上……下手すると１時間くらい歩いているような気がする。

その間、魔物に遭遇しなかったのは良いんだけど、嬉しいんだけど、長いんですけど。

「おかしいわね」

ニーナもぼそりと言った。訝しげに呟く。

「そりゃあさっきは確かに走ってたし、危機感あったから、正確な時間は全然わからないけど……いくら何でも、こんなに歩いてないわよね」

「でも、１本道だよ」

先頭を歩く責任上と言うか、一応言い訳がましく言ってみる。道を間違えたはずなんてない。行きも帰りも、ひたすら１本の真っ直ぐ続く道を歩いているのだ。間違えられるものなら間違えてみろと言わんばかりの、直進。

「まさか、迷子……」

ユリアの呟く声が、静かな通路に響いた。前も後ろも、相変わら

ずの真っ暗闇。何も見えず何の変化もない。
「……あら？」
と、ニーナが不意に声を上げた。
「え？」
足を止めて振り返る。ニーナは明かりに仄照らされた少し先を見つめていた。
「あそこ、脇道があるんじゃない？」
「脇道？」
とりあえず進んでみる。明かりがちゃんと届く範囲になってみると、ニーナが指した辺りの右手の壁には２０センチほどの窪みがあった。脇道ではなく、壁と同じような色の、でも煉瓦じゃなくて錆びた鉄製の扉がある。

第1部第19話　風の砂漠～ダンジョン2～（2）

「扉？」
「さっきあった？こんなの」
「……でも、さっきは急いでたし」
「それはそうだけど……こんだけ戻ってきてるってことは、シサーの後を追ってる頃かなあ」
「にしては、まだまだ最初の場所に辿り着かない感じだけど……。まあ、先が見えないから何とも言えないけどさ」
　口々に言いながら、何となしに扉の前で足を止める。取り囲むような感じでそれを凝視して、悩んだ。
「……見た方が良いと思う？」
「あ、でも……シサーの手掛かりになるかもとか」
「ここに入ったのかもしれないって？」
　それにしちゃ場所が変って気もするけど。歩いて来た距離感から考えれば、本当言うとシサーが消えたらしい場所……つまりウィル・オー・ウィスプが残されていた場所なんかとっくの昔に通り過ぎて、それどころか円形ホールも通り過ぎちゃってるような感じなんだが。
「まあ、気になるところは調べた方が良いよね」
　そう呟くと、全員の視線が俺に集まった。……待って。それは俺に扉を開けろってハナシなの？
「わかりましたよ……」
　そりゃ確かにこう言う危険な役回りってのはファイターの役目なんでしょうが。けどでも俺、ファイターじゃなくって剣持って戦ってるだけで、高校生なんですけど、ただの。
　とは言え、こう言うダンジョンなんかでは至るところにトラップが仕掛けられているってのがお約束らしいし、扉なんかまさにその基本中の基本って感じだし、開けた瞬間何が起こるかわからないようなもん、ユリアやニーナにやらせるわけには当然いかないわけだ

し。
「気をつけろよ。毒を塗った矢が飛んで来たりとか、開けた瞬間魔物が襲って来たりとかするかもしれねーし」
キグナスが言う。あんまり脅すようなこと言うとやめちゃうぞ。
「下がってて」
3人が扉から身を引いて、何かあってもすぐ対応出来るよう構えたのを見て扉に手をかけた。思い切ってぐいっと扉を引っ張る。
「……あれ」
予想に反して、扉を開けても何もおかしなことは起きなかった。ちなみに実は押し戸だったなどと言うお約束なオチもなしだ。
「平気そうか？」
「うん……多分」
半開きにした扉から、中を覗いてみる。そこは通路と違って濃灰色の石造りの部屋になっていた。8畳くらいの広さだ。ガランとした部屋の隅には開けられた形跡のある宝箱が3つくらいある。部屋の中央より正面奥の壁寄りに、何か俺の胸の高さくらいの台座があって30センチ程度の像が2つ置かれていた。
壁にはカンテラが掛けられていて、細々と炎が揺れていた。おかげで薄暗いとは言え、魔法なしに中の様子が見ることが出来る。……ってか、このカンテラそのものも魔法で持続してるのかな。まさか管理人がいて、蝋燭が切れたら灯しに来るってわけじゃないだろ。
蝶番が錆びているらしく、扉を更に押し開けるとギィと軋んだ音がした。構わずに目一杯開けて、部屋の中に足を踏み入れる。
「何も、なさそうね」
俺に続いて部屋に入ってきたニーナが、辺りをきょろっと見回して呟いた。とりあえず、壁際の宝箱に近付いてみる。幅50センチくらいはありそうな宝箱で、ありがちな半円形の蓋が付いていた。もちろん今は開け放たれている。
「鮮やかだな～」
一緒になって宝箱を覗き込んだキグナスが感心したように呟いた。

「鮮やかって？」
「お手並み。これ、多分いちいち鍵見つけて開けたんじゃねーんじゃねーかなあ。大体ダンジョンにある宝箱って、鍵がどこ探したってないやつだって多いって言うぜ。鍵開けのスキル持ってるやつが開けたんだろ」
「シーフってこと？」
「とも限らねえだろうけど。まあ、８割９割は、職業盗賊じゃねえかな。苦戦した様子、なさそうじゃねえか？綺麗に開いてるよなあー」
やっぱりシンなのかなあ……。
「ねえ、これ見て」
宝箱にはあまり興味がないらしい女性２人が俺たちを呼んだ。２人とも、扉から入って正面の壁を見上げている。２つの像の間だ。
「何かあった？」
倣って視線を壁に向ける。扉正面のその壁には、規則性を持った凹凸が刻まれていた。壁彫刻って言うのかなあ。大小の２本の円を外枠にして、中心には何やら奇々怪々な図形が描かれている。大小の２本の円のその間には幾つか区切り線のようなものが縦に入っていて、区切られたそのひとつひとつに文字が書かれていた。
「何これ」
「魔法陣ね」
「魔法陣？」
何でそんなもんが？
「これ、最初の場所にもあったわ」
ユリアが呟いた。それを受けてニーナも頷く。
「あったわね」
え。何でそんなもん見てんの。
「どこに？」
「気付かなかったの？」
呆れたようにニーナが言う。キグナスもきょとんとした顔をして

いた。……何か男2人、注意力が足りないみたいじゃん。
「気付かなかった」
「床にね、描かれてたのよ」
「床？」
壁の石にばかり目が行ってたので気が付かなかった。
「何か意味ありげじゃん」
「でも、どうしようもないわね、何か」
ニーナが魔法陣に目を戻しながら溜め息をつく。俺は壁に近寄って、その魔法陣を良く見てみた。近付いてみると、その魔法陣はただ壁の石を削って作られたものじゃないらしいことがわかった。
いや、削られているはいるんだけど、ぶち抜かれてるって言うか……つまり、魔法陣を描く形に石が繰り抜かれている。抜き型って感じだ。繰り抜かれた向こうはどうなってるのか良くわからない。触ってみるとつるっとした感触で……ガラス、かなあ。これ。
何だろう。何のためにこんなややこしいことを？
ガラスのその向こうは、多分、砂。外？なのかな。
ここ爆破したら外に出られるんだろーか。……生き埋めになるのがオチか。
「気持ち悪ぃなあ、これ」
魔法陣に飽きたのか、キグナスの嫌そ～～な声がした。振り返ると顔を顰めて像を覗き込んでいる。
「何」
「人間じゃねえのか」
言われて見てみると、俺の胸の高さくらいの台座の上に飾られている像は確かに人間を模っているものだった。台座と同じくらいの大きさのざらざらした地面の上を、どこかよろよろした感じで中腰に歩き掛けている。何かを求めるように右手を器型に中空に翳し、左手はもがき苦しむように自分の首に当てられていた。
もう1つの像も、全く同じものだった。ただし方向が違う。2つとも中心……つまり互いを見るような形で作られている。

「何だろね」
あんまり気持ちの良いもんじゃない。苦悶の表情なんかやけにリアルで……バシリスクに石化された人間じゃなかろうかなんて馬鹿な考えが一瞬過ぎる。いや、大きさ的にありえないんだけどね。高さ３０センチくらいなんだから。
「あんまり目ぼしいものはなさそうね」
がっかりしたようにニーナが言った。
まあここにいきなりシサーがいるとは思っちゃいなかっただろうけど、どっかに続く階段とか、そう言うのがあれば良かったんだろうけど。
「そうだね。……行こうか」
とは言ってもどこへ行くのかなんて良くわからない。
とりあえず円形ホールを目指しているはずなんだけど……。
意味ありげなこの部屋が気にならないと言えば嘘になるし、さっきの戦闘と真っ暗な通路をひたすら歩き続けると言う気力も体力も著しく消耗する作業で疲れてはいるんだが。
こうしている間にもシサーの身に何が起こってるのかと思うと気が気じゃないし、早く合流してこんなトコ抜け出したいし。
「そうね」
ニーナが頷くのに合わせるようにして、俺たちは再び通路へと戻った。
扉を出て、右手に向かって真っ直ぐ歩く。ギルザードを出てから歩いて来た方向とダンジョンの入り口の方向から察するに、今は北に向かって真っ直ぐ歩いているはずだ。……はず……なんだけど。
「いくらなんでも、嘘でしょ……」
俺のすぐ後ろでニーナがぼやいた。全く同感だ。少なくとも、あの扉の部屋から既に２時間は歩いていると思う。感覚が狂って長めに換算しがちなことを差し引いても、だ。グリムロックやヘルハウンドの戦闘からは、３時間とかそんくらい歩いてると思う。
「おかしいよ、やっぱり」

魔物には遭遇していない。静かなものだ。俺たちの立てる僅かな足音と、防具や武器の触れ合うかちゃかちゃと言う音しかしない。後は……遠くで、風の音。でも最初に聞いたのより遥かに風の音は遠くなった。……遠くなった？元の場所に向けて歩いてるはずなのに？

「同じところ、回ってるのかしら」

どう考えたって、ヘルハウンドから逃げていた距離がこれより長いはずがない。そんなに何時間も走っていられるわけがないんだから。って言うか、これだけの距離を1度も曲がることなく直進してたらいつか海に出ちゃうぞ。サンドワームじゃないんだからさあ……砂の中を通って砂漠を横断するのもどうかと思うんだけど。

「ちょっと休もう」

「……そうね」

溜め息と共に言葉を吐き出し、ニーナが賛成した。足を止めてその場に座り込む。ずるずるとニーナもユリアもキグナスも、その場にへたり込んだ。

「おかしい。ぜーーーってぇ、おかしい！！」

キグナスが自分の両膝に顔を埋めてぼやく。ユリアは疲れ果てて言葉も出ないように壁に背中を預けて瞳を閉じていた。

「迷路、なのかしらね」

迷路ってもっと右に左に曲がったりするもんじゃないの？

「1度も角を曲がらないってのは、変だよ……」

「……よねえ」

「ワープトラップ……？」

閉じていた瞳を開いて、ユリアが長い睫毛を瞬かせた。

「ワープトラップ？」

「それよ」

ニーナが頷く。……そうか。そうだとすればシサーが忽然と消えたわけもわかるし、ひたすら直進してるのもわかるかもしれない。つまり、直進通路の途中でワープトラップに引っ掛かって、新たな

別の直進通路に飛ばされる。そこでまた新しい通路の直進部分に飛ばされれば、実際は同じところをぐるぐる回ってるのかもしれないけど、こっちにしてみればひたすら直進していることになる。

あ、そうか。追って来た魔物の足音が入れ替わったのって、そう言うわけだったのかな。考えてみれば、ヘルハウンドがあんなに金属質な足音立てるわけがないし、最初の魔物から逃げてるうちにワープトラップに引っ掛かって……で、ワープ先でヘルハウンドに遭遇したんだ。

もう少しダンジョンの……進行方向の先が見えていれば、例えばこの先に曲がり角があるだとか、あったはずの角が消えただとかってわかんのかもしれないけど、生憎ほとんど先は見えていない。壁や床はずっと同じ造りだし、気付くはずもないわけだ。

ワープトラップか……。

忽然と消えたシサー。どこのかわからない『第3の鍵』。開けられた宝箱。シン。ワープトラップ。風の砂漠。

（……あれ!?）

「ワープトラップだとしたら、トラップガイドがあるはずだよな。どのタイミングで作動してんだ?」

「カズキ?どうしたの」

ニーナが俺を覗き込む。……あれ?今……・。

「いや、何でも……」

何か……何か凄く重要なことが繋がったような気がしたんだけど。一瞬で忘れてしまった。

「何でもない。……トラップガイド?」

「だからさ、俺たちの動作のどこかに、ワープトラップを作動させる何かがあるわけだろ。例えば何かのスイッチを無意識に踏むとかさ」

「意味不明にワープ空間でもあるんじゃないの」

魔法のことなんかわかんないので、ほとんど投げ遣りな返事をする。

「馬鹿。ここは『3つ目の鍵』のダンジョンなんだろ。どこの何の鍵かわかりゃしねえけど、とにかく大事なもんなわけだよな、きっと。で、不特定の奴には奪われたくないからこんなダンジョンに仕込んでるわけじゃねえか。でも鍵なんか用意するくらいだから、受け継ぎたい誰かがいるんだろ、多分」

「ああ……孫とか？」

「それはわかんねえけどさ。ともかく、無差別稼動じゃその『特定の誰か』だって辿り着けねえじゃねえか」

それは言えている。

「だとしたら逃げ道があんだよ絶対。知らないうちに、ワープトラップのスイッチ押してんだ。気付けば、避けられるようにはなってるはずなんだよ」

「あああ！！！」

わかった。

突如大声を上げた俺に、ニーナが飛びついた。俺の口をその手の平で押さえつける。

「騒がないでよ馬鹿！！」

う、ごめん……。

「俺、わかったかも、その……トラップガイド」

「本当に！？」

みんなの視線を受けて俺は、壁にぽつりぽつりと設置されている石の存在を話した。

「見るタイミングによって薄く光ったり消えたりしてるみたいなんだ。光り方……って言うか、光ってる時間の長さも結構ランダムでまちまちみたいなんだけど。俺が見てた限り、平均して1分くらい光ってると思う。もう少し短い時もあるかな……」

「臭いわね、それ」

「光ってる時が、ワープトラップ作動中ってことか？」

「わかんない。逆かも知れないし」

とりあえず立ち上がって、俺は壁を見上げながら数歩歩いた。み

んなもついてくる。休憩していた場所からほんの5メートルくらいのところに石を見つけて、俺はそれを指差した。
「確かに、時々見かけたわね。でもただの装飾だと思ってたわ」
「時々、ほんの少しだけ光るんだ。よーく見てないと気が付かないくらい、本当に薄くなんだけど」
言いながら石を見つめる。みんなでじっと見守る中、少し経ってから石が光り始めた。ぼわーっと、光ると言うよりは色彩が明るくなったのかなって言う程度。
「本当だ」
光は40秒ほどで消えた。また元通り、薄暗い沈黙で壁に収まっている。
「良くこんなの、気が付いたわね。光ってるって言えないわよ、こんなの」
ニーナが褒めてんだか呆れてんだか、良くわかんない口調で言った。
「最初のホールになってるとこにもあったから。そこで気が付いたんだ」
「んじゃ、これが光ってる間にここを通過すると、ワープさせられてんのか。どこに跳んでんだ?」
キグナスが言う。
「それはやってみないとわかんないけど……光っている石から光っている石に跳ぶとか」
覗き込むには少し高い位置にあるので、首を伸ばして見上げながら勝手な想像を口にした。
「じゃあともかく……しばらく、光っている時は通過しないってやり方で進んでみましょーか。それで状況が変わらないようだったら、今度は逆にしてみましょ」
「じゃあ、行こう」
「ねえ、待って」
歩き始めようとした瞬間、ユリアが制止の声を上げた。

「さっきまでは最初の場所を目指してるつもりだったから、右手へ進んでいたわけでしょう。でもワープトラップで跳ばされてたんだとしたら、本当にそっちで良いのか、わかんないわ」

……まったくだ。

「もし他の階とかあるんだとしたら、階を越えて跳ばされているのかも知れないし」

「俺、このダンジョン、ワンフロアじゃないと思う」

ユリアのセリフを受けて俺は口を開いた。

「シサーが、爆破物で塞がれてる通路を掘ってる時に、思ったんだ。外から砂が流れ込んでなかった。このダンジョンは砂漠の中にあるんだから、外壁が爆破されたら砂が流れ込んでなきゃおかしい」

「そっか。そりゃそうよね」

「うん。だから上のフロアがあるんじゃないかなって思ったんだけど。……単に外壁が二重構造になってて内側だけ壊れたってだけなのかもしれないけどさ」

「でも、ここで突っ立っててもしょおーがねえじゃん」

議論に飽きたようにキグナスがロッドを弄びながらぼやいた。それも一理ある。どこにいるんだかわかんないのは確かだけど、黙って立ってたって先には進まないし。

「マップ、作りましょ」

言いながらニーナは自分の荷袋をごそごそ漁った。薄い茶色の、目の粗い紙束とペンを取り出す。

「マップぅ？」

「そうすれば少なくとも、今いる場所からはわかるようになるじゃないのよ。ダンジョンの基本なのよ、一応」

ゲームなんかだと自動的にマップがあるから良くわからない。

「マッパーがいれば良いんだけどね。生憎そんな技術持ってる人はいそうにないし。……誰が書く？」

言いながらニーナは俺を見た。自動的にみんなの視線が俺に集まる。……あのねえ！！

「カズキ、お前、元の世界で学生やってたんだろ？」
それがこの場合どこにどう活かされると？
「キグナスに任せたらぐちゃぐちゃになりそうだし、ユリアに書かせるわけにはいかないし、わたしは嫌だし」
嫌だしって、それ言ったら俺だって嫌だし。
「わかったよ……」
全員の視線の圧力に負けて、ニーナから紙とペンを受け取った。
深々と溜め息をつく。
「何か、やりたくないこと、みんな俺に回ってくるような気がする……」
「頼られてるのよ」
「頼られてるのよ」
ユリアが励ますように言い、キグナスが茶化すようにそれを真似た。
「こういうのは頼られてるんじゃなくて、貧乏くじを引かされてるって言うんだと思う……」

第1部第20話　風の砂漠～ダンジョン3～（1）

ワープトラップに引っ掛からないよう、慎重に歩を進めながら、俺はシサーが今どの辺りにいるのかをぼんやりと考えていた。

ウィル・オー・ウィスプが残されていたポイントにも、トラップガイドはあった。ワープトラップでシサーが飛ばされたのは多分間違いないだろう。……ウィル・オー・ウィスプを置き去りにしてしまったってことは、シサーはこの真っ暗闇のダンジョンで……大丈夫なのかな。

「ニーナ」

「何」

「シサーって、明かり、持ってるの？」

トラップガイドの石を壁に見つけて足を止める。薄ぼんやりと光っているのを見て、そこで消えるまで待機することにした。

「……自分の荷物は持ってたみたいだから。カンテラは持ってると思うわ」

微かに悲しげな声で、ニーナが答えた。さぞかし心配してるんだろうな。

「そう。治癒薬とかそういうのも？」

「うん」

「なら、良かった」

カンテラ持って魔物と戦うのはさぞかししんどいだろうとは思うけど。

「シサーは、強いから……ひとりでも、無事だと思う。ちゃんと、合流出来るよ」

振り返ってニーナに微笑みかけると、ニーナも笑顔を作って頷いた。

「そうね」

光が消えたのを見て、再び歩き出す。一応歩数で間隔を測って、

俺はマップを作ることにしていた。本当は方眼紙とかあれば良いんだろうけどないから、自分で大体等間隔になるよう罫線引っ張って、１０歩で１マスって感じで塗り潰してる。……こういうの、先頭を歩く人に任せるべきじゃないと思う、普通。

「あ」

俺のすぐ後ろでニーナが声を上げる。顔を上げると、ウィル・オー・ウィスプの明かりに照らされて角が浮かび上がっていた。

「曲がり角だわ」

心なしかニーナは嬉しそうだ。これまでと比べて、変化があったからだろう。

「えーと。左手に折れる、と……」

手にした紙に書き込んで、壁を見上げる。十字路とか分かれ道じゃなくて、単純に左に曲がる角だ。角も垂直で、取り立てて複雑な感じではない。

ワープガイドの存在に気が付いてから３０分くらい歩いたけど、結局ずっと直進だったので最初正直言って不安になった。けどどうやらここは、本当に直進通路だったらしい。この通路には物凄い勢いでワープガイドがあって、これに片っ端から引っ掛かってたらひたすら直進するハメになるのも頷けるような気がする。って言うか、やり過ぎ。

にしても。

このまま気が付かずにいたら、凄いヤバいことになってたかもしれない。

そんなふうに思ったのは、ワープトラップに引っ掛かったおかげで最初の『硬質の足音』から逃げられたんだなあなんてことを考えたからなんだけど。

まかり間違って、逆に魔物の眼前に飛ばされる可能性だって、ないわけじゃあないんだろ……。何も知らずに跳ばされて、目の前に突然魔物が出現したらやっぱりぶったまげると思う。

幸い、グリムロックとヘルハウンド以来、魔物には遭遇していな

い。このままずっと遭遇しないで済めばありがたいんだけどな。
なんて思った時だった。
「カズキ」
ニーナの緊張した声が聞こえた。その声で我に返った俺の耳に、荒い息遣いと聞き覚えのあるひたひたと言う足音。爪の音も混ざっている。
「ヘルハウンドか……？」
前方の吸い込まれそうな暗闇を見つめた。
ひた、ひた、ひた……。
「複数いる……」
姿が見えず足音だけ、と言うのは、凄く嫌だ。目前に来るまでどんな魔物なのか、確信が持てない。
「ガルルルッ」
獰猛な唸り声と共に、暗闇から塊が飛び掛ってきた。目視する暇もない。咄嗟に抜き放った剣を顔の前に構えて庇うが、鋭い爪が俺の頬を抉った。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、グッタ・カウァト・ラピデム・ノーン・ウィー・セド・サエペ・カデンドー。『氷の矢』！！」
「きゃあッ」
キグナスの魔法とニーナの悲鳴が重なる。ヘルハウンドは合計３匹。俺に襲い掛かった１匹とキグナスの『氷の矢』を受けた奴以外の最後の１匹がニーナに踊りかかったんだ。
「ニーナ！！」
「『氷の矢』！！」
ユリアが魔法石を投げつける。炸裂した『氷の矢』に、ヘルハウンドが仰け反って地面に転がった。素早く跳ね起きる。
「グルル……」
俺の剣で弾き返されたヘルハウンドは、地面に四肢を踏ん張った。ヤバイ、炎の掃射だ。つられるように他の２匹も四肢を踏ん張った。

「逃げろッ」
急いで後方へ飛び退る。が、ユリアが転んだ。駆け寄ろうとした寸前、僅かなタイムラグを持って3匹のヘルハウンドの口から炎が噴き出される……！！
「きゃあああッ……」
カッ……とユリアの足元から光が噴き上がった。彼女を取り囲むような、分厚い光のカーテン。まるで全く何者も寄せ付けないその勢いに妨げられて、炎が遮断された。シェインの魔法が発動したらしい。
「凄ぇ……」
俺のすぐ後ろでキグナスが呆然と呟くのが聞こえる。
「こんな凄まじい『光の壁』、見たことねぇ」
その恩恵でこっちまで炎が届かない。
「キグナス、ニーナ、今のうちに魔法……」
「おっと。言えてら」
「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ！！その身を裁きの矛と変えよ。ポエブス！！」
ニーナが素早く魔法を完成させた。『光の壁』が発動中なので良く見えないけど、『光の矢』が放たれたらしく、四肢を踏ん張ったままだったヘルハウンドの1匹が「ギャイン」と鳴いて吹っ飛ぶ。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、グッタ・カウァト・ラピデム・ノーン・ウィー・セド・サエペ・カデンドー。『氷の矢』！！」
続けてキグナスが同じ1匹に魔法を放った。立て続けに矢を浴びせられたヘルハウンドは、地面をのた打ち回っている。
不意に『光の壁』が消えた。炎の掃射が止んだからだろう。ユリアはあの時のように気を失ってはいなかった。呆然とした様子で辺りを見回している。構わず俺は剣を構えて突っ込んだ。
「ユリア、援護を！！」
ニーナがレイピアを抜いて怒鳴る。その声に我に返ったように、

ユリアがロッドを構えた。
「アモル・オムニブス・イーデム。大地の恵み、大気の守り、その全てを統べるファーラよ、清らかなる守りにて邪悪な者を退けたまえッ」
防御を強化してくれる。キグナスも続けて防御魔法をかけてくれた。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、オムニア・エウント・モーレ・モドークウェ・フルエンティス・アクウァエ。『水膜』！！」
俺とニーナでヘルハウンドを1匹ずつ相手取る。先ほど魔法を立て続けに受けたヘルハウンドに、ユリアが魔法石を投げつけた。
「『氷弾』！！」
「ギャンッ……」
一際大きく鳴いて、動かなくなる。止めとなったらしい。
「くッ……」
俺の剣を大きな跳躍でかわしたヘルハウンドが、三角跳びの要領で壁に足を着き、勢い良く蹴る。その反動を利用して俺目掛けて太い前足を振った。避けるけれど避けきれず、腕を爪で抉られる。着地する瞬間を狙って、俺は剣を払った。その反動で、傷ついた腕から血が振り飛んだ。
「ギャウンッ」
胴に大きく切り込む。その瞬間ニーナが俺の方目掛けて吹っ飛んできた。
「うわッ」
「きゃッ」
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ポスト・ヌービラ・ポエブス。『光の矢』！！」
2人仲良くもんどりうって地面に転がる。援護するようにキグナスの魔法が、ニーナと戦闘していたヘルハウンドに飛んだ。その隙に、俺が斬ったヘルハウンドが傷を振り払うように体を起こす。よ

ろつく体を足を踏ん張って支え、口を開けかけた。
「させるかッ」
跳ね起きて地面を蹴る。ヘルハウンドはたじろがずに炎を吐く姿勢を整えた。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、グッタ・カウァト・ラピデム・ノーン・ウィー・セド・サエペ・カデンドー。『氷の矢』！！」
「『氷弾』！！」
キグナスの魔法がニーナの方のヘルハウンドに、ユリアの魔法石が俺と対峙するヘルハウンドに放たれた。『氷弾』を受けたヘルハウンドは姿勢を崩してよろける。おかげで炎を吐くタイミングが失われた。力を込めて薙いだ剣がその首に深々と刺さり、断末魔を上げる間もなく地面に崩れ落ちる。
「はあ……はあ……」
肩で息をしながら地面に片膝をつくと、ニーナの方でも最後のヘルハウンドの始末が済んだところだった。
「ってぇ……」
抉られたあちこちが痛い。キグナスが近寄ってきて回復魔法をかけてくれる。みるみる傷が塞がって、やっぱ何度やってもらっても便利だなあとか……しみじみ……。
「しっかし凄かったなあ……さっきの」
まだ言ってる。
「そうなの？」
「俺が『光の壁』を使ったとしても、あんなになりゃしねえよ。……まだ使えねえけど」
ユリアがニーナを回復してこちらへ歩み寄ってきた。
「さっきのは……シェインが、わたしに？」
知らなかったの？
「と思うよ。……そういうもん？」
ユリアに答えて、キグナスに話を戻した。

「ああ。同じ魔法でも、使う人間の魔力によって効果ってぜんぜん違うんだぜ」
「え。そうなんだ？」
呪文によって効果のほどって変わるのかと思ってた。だってゲームなんかそうじゃん。３段階くらい強弱の段階があってさ……。
「そりゃそうだろ。例えば俺だったら、火系最上級攻撃魔法『炎の霧』を使ったって、グリムロック１匹を１撃で倒せるかどうかわかんねえけど、シェインだったら火系初級攻撃魔法『火炎弾』で１０匹くらいまとめて吹っ飛ばすぜ、多分」
げぇ。
「そ、そういうもんなんだ？」
「そういうもん」
シェインと喧嘩をするのはやめておこう。

◆◇◆

俺とニーナがそれぞれ怪我を治してもらい、再びダンジョンの探索を再開する。
以降も、ぽつりぽつりとヘルハウンド、グリムロック、コカトリス、ゴブリンなんかと遭遇したし、目新しい魔物としてはオーガーなんて言うおっそろしい魔物にも１度だけ遭遇したが、ずたずたに怪我をしつつも何とか生命は保っていた。……シサー、本当に大丈夫なんだろうか。
２時間くらいかけて何度か角を曲がりつつも直進コースを歩き続けた結果、俺の手元の地図は最初の地点へと戻ってしまった。つまりぐるーっと回廊状になっているらしい。俺の地図が正しければ、ほぼ正方形状の外枠を歩き、中がすっぽりとやはり正方形状に未踏地帯となっている。
「戻るか……」
最初の地点を正方形の下辺とすると、西側の、垂直に続いている

通路の割と北寄りの辺りに、1箇所だけ内側へ続くらしい道があった。どうやらそっちへ行くしかなさそうだ。ぐるぐると回っていても仕方がない。

元来た通路を北上し、途中、先ほど倒した魔物の死体を避けつつ30分ほどかけて上辺周辺まで辿り着く。右手に、やはり先の見えないさっき通り過ぎた通路があった。

「……こういうダンジョンで、倒した魔物がごろごろしてたら腐臭とか充満しないのかな」

ぼそっと呟くと、ニーナが肩を竦めた。

「魔物にもよるけど。ある程度腐敗が進んでくると、砂に還る魔物も多いし、魔物の死肉を食べる魔物もいるしね」

げえ……。悪趣味。

もうぐるぐる跳ばされて方向感覚なんかめちゃくちゃだから、とりあえず便宜上最初にいた地点を南とすると、角を曲がって通路はすぐ南下していた。何の変哲もない一本道。もちろん相変わらず真っ暗だ。

「もうどのくらいさまよってるのかなあ」

歩数に合わせてマス目を塗り潰しながら呟く。あの円形ホールを出てからあれよあれよと言う間に、予定外にダンジョンの奥地をさまようハメになってしまっている。短く見積もっても6時間とか？そのくらいになるのかな。時間感覚さえぐちゃぐちゃで、もうわけがわからない。

「よく考えたら歩き続けだね。何も食ってないし」

「そうね。どこか休めそうな場所を見つけたら、食事しておこうか」

「もうさっきの小部屋にさえ戻れねーからなあ」

後ろの方からキグナスが会話に参加した。

確かに、あそこって何か魔物入って来なさそうな感じだったし、休憩するにはうってつけだったのかもしれない。

「ユリア、平気？」

黙々と歩いているユリアが気になって、声だけで尋ねる。疲れた

ような声で「うん……」と言う短い返事だけが返って来た。へばって来ているのかもしれない。……そりゃそうか。飲まず食わずで歩き続けて、しかも魔物と戦って。ユリアじゃなくたってへばるよな。

１５分くらい通路を南下すると、僅かに左に逸れてまた南下した。でもそれはほんの５分くらいで、すぐ突き当たる。左に曲がって北上する通路が続いていた。

「……すーごーく、いや～な感じ」

「迷路みたいね」

「左手で壁伝ってったら出られるのかな」

「『左手の法則』？」

ニーナの言う通り、ダンジョンの中はまさに迷路みたいだった。ぐにぐに曲がって左右に分かれている通路もあるし、上へ下へ右へ左へ、地図の上はぐちゃぐちゃだ。

「……汚いわね」

「……うるさいな」

俺の書いた地図を覗いてニーナがぼそりと洩らす。仕方ないだろ、歩きながら地図書くなんて初めてなんだし！！難しいんだぞ、結構。それでも頑張ってんじゃん、努力してんじゃん……。そりゃあ、変なトコ繋がりそうになっちゃったりとかしてるけどさ。

東方向へ真っ直ぐの通路を進んで行くと、２０分くらいで壁にぶち当たった。道なりに南方向にジグザグになる感じですぐ西へ向かう通路があった。それに従って通路に足を踏み入れる。

……と。

ゴゴゴゴゴ……。

どこからともなく、地響きのような低い音がした。

「……何？」

思わず一同足を止めてしまう。止めてしまっ……て……。

「に、逃げろッ」

叫んだ。

何となれば。

「え、何!?」
「うわあああッ」
「壁!!壁が!!後ろ!!!」
会話になってない。
西へ続く通路に入ってすぐ、その通路の奥から壁がこっちへ向かって迫って来たんである。しかも物凄い勢いで!!
あんなもんに潰された日には、生き残る可能性どころか骨さえコッパだ。
「うわあああああ!!!」
「やだあああああッ」
「ちょっと早く行ってよ!!」
「精一杯!!!」
パニック状態で怒鳴りあいながら賑々しく逃げていく。
幸いその通路はそんなに凄い長いものでもなくて、壁が押し迫ってきてからは5分くらい全力疾走したところで角にぶつかった。走る勢いもそのままに角を左に曲がると、そこですぐに直進と右に折れるのと道が分かれている。咄嗟に迷って足を止めてしまうと、後ろからニーナが激突してきた。
「うわッ」
「きゃッ」
「きゃあッ」
「わわわッ」
「むぎゅぅ……」
結果として、俺に激突したニーナにユリアがぶつかり、ユリアにキグナスが激突して4人まとめてすっ転ぶハメになり、先頭だった俺は3人分の体重を一身に受けてつんのめった。潰される。
「何してんのよッ馬鹿!!」
ニーナが叫ぶその後ろを、ゴゴゴゴ……と重い唸りを上げてスピードを上げた壁が通り過ぎて行く。
ドシーンッ。

激震がして、パラパラと天井から粉が零れた。壁に壁がめり込んだのだ。……良かった、曲がってくるなんて器用なことするやつじゃなくて。

「あっぶっね～……」

キグナスがユリアの上に圧し掛かったまま後ろを振り返って呟いた。……って、重いから!!どいてッ!!!

「苦しいぃぃぃ……」

「あ、ごっめーん」

バンバン地面を叩いて抗議すると、順番にどいてくれた。……げほげほ。

「あ、ヤベ。今の距離よくわかんないな。適当に足すか」

地図を開いて、感覚で道を付け足す。ユリアがぴょこんとさっきの通路を覗き込んで振り返った。

「ここは、トラップガイド、なかったのかしらね」

「さあ……。でも、壁が着実に追いかけてきたってことは、移動してないってことじゃないの」

「そうよね」

「壁注意……と。んで?どっち行く?」

第1部第20話　風の砂漠～ダンジョン3～（2）

分かれ道なのでちょっと迷ったけど、とりあえず曲がってみたら右は5分くらいで行き止まりになっていた。戻って直進し、すぐ左手に折れる。また、角を曲がったり突き当たったり戻ったりしながら進んで行くと。

「あ」

思わず声を上げた。

「何？」

ウィル・オー・ウィスプが照らす、その少し先。行き止まりになっているんだけど、その突き当りの壁の手前。

「宝箱だッ」

「何ぃ♪」

俺の言葉にキグナスが即効反応する。女性2人は「あ、そう」って感じの冷たい反応だった。……ロマンってのがあるでしょ。

「これも開いてるんじゃねえか？」

ユリアとニーナを追い越してキグナスが俺の横に並んだ。勢い一緒に宝箱に近付く。魔法陣の小部屋にあったのと同じようなタイプの宝箱で、意外にも開けられていなかった。

「らっきー」

「でもさ、俺たち、開けられないんじゃないの」

この中の誰かが鍵開けのスキルを持っているとは思えない。

「それもそうだな」

「魔法で開けられないの」

「そう言う魔法もあるけどなー。俺、出来ねえ」

「駄目じゃん」

「シサーは鍵開け、出来るわよ。難解なものは無理だけど」

「そうなの？」

器用な人だ。でも今ここにいない人に頼るわけにはいかない。

「どうしようか」
「諦めたら」
ニーナが冷静に言い放つ。それも何か悔しくないの？
「実は鍵、開いてんじゃねえ？」
勝手なことを言ってキグナスが蓋に手を掛けた。
「そんなわけ……」
ぱかッ。
「うっそぉ」
「ありゃりゃ」
やったキグナスもぎょっとしたようにぱこっと開いた蓋を見つめた。ちなみに中身はと言えば。
「凄ぇ」
何だろう。良くわかんないけど、宝石とか金貨。金目の高そうな物。ご丁寧に、それを詰める為の袋まで一番上に用意されている。
「……いくら何でも胡散臭くないか？」
「……うーん。胡散臭いなあ」
「やめなさいよ。邪魔じゃないの」
どうでも良いらしいニーナが後ろで腕を組んで忠告した。
「大体他人が攻略した後だってのに、残ってる宝箱なんか怪しくてしょうがないじゃないのよ」
「言える」
「でもちょろっとくらいもらっとこーぜ、せっかくだし」
と、キグナスが袋を取り上げてざらっと金貨を放り込んだ瞬間。
「ななな何の音!?」
ガラガラと言う錆の入った金属音。結構重たい音だ。
「大変!!」
ユリアが叫んだ。……うわあああ。
「キグナス、駄目だ!!、それ、戻せッ」
戻る道の途中、ちょうど角の辺りで古びた鉄製の巨大な柵が降りてくるところだった。あれが閉まっちゃったら閉じ込められちゃう

じゃんッ。
「わ、わかったッ」
キグナスが慌てて袋ごと金貨を放り出す。バン！！と宝箱を閉めると、ギィィィ！！！と甲高い音を立てて柵が止まった。
「ほら、言わないことじゃない」
「行きましょ」
ニーナとユリアが戻って行く。叱られた俺たちは思わず顔を見合わせて後を追った。一度止まったはずの柵が、キィィっと言うでかい音を立てて再び巻き上がっていく。
「なあああんの為にあんなとこに宝箱置いてんだよッじゃあッ。トラップボックスなんか用意する奴の気が知れねえッ」
ぶちぶちとキグナスが文句をたれる。
「トラップボックスあり、と……」
「ミミックじゃなかっただけ、良かったと思うのね」
「みみっく？」
「宝箱に扮した魔物。蓋の部分が口になってて、物凄い鋭い牙がいっぱいついてんの。噛み付かれたらかなりの大怪我になるわよ」
ニーナが教えてくれるのを聞きながら、元の道へ戻って隊列を整えて、先を急ぐことにした。

◆◇◆

トラップボックスの場所からまた３０分ほど歩いて、どこにも休憩出来そうな場所ってのがなさそうだったので、仕方なく行き止まりの通路のトコで座り込んで休憩に代えることにした。片方が塞がってるってことは、警戒すべきは続いている方の通路だけってことだから、まあ、挟み撃ちになる心配だけはない。でも言い換えれば、逃げられない。
「つっかれたなあー」
キグナスがぼやく。ユリアは途中から言葉少なだ。心配になる。

「ユリア。あげる」
ロートスの実を放ってあげた。一応、疲労回復の効果はあるはずだ。
「ありがとう」
ユリアもキグナスも疲労回復の魔法を使うことは確かに出来るんだけど、先の見えないダンジョンでこれからどれほどの敵に遭遇するかもわからない。下手に魔法を消費したくないと言うのがあるのか、戦闘時以外では疲労回復の魔法を自分にかけたりはしなかった。
どうでも良いけど、疲れるな。
肉体的にもそうだけど、精神的に。もっのっすっごっく！！
何が飛び出すかわからない、先の見えない真っ暗闇を、細々とした明りでひたすら歩くと言うのは……げんなりする。正直、飽きる。
本当は緊張してないと危ないとは思うんだけどね。でも……だれてもくるでしょ。そんな何時間も歩かされたらやっぱし。
（あ～あ……何してるんだかな～）
今頃本当だったら……夏休みだろうか。雄高と遊んだり、文句言いながら宿題やったり。そんな当たり前のこと、してたはずだ。なのに俺はなぜか、得体の知れないダンジョンで魔物と戦っている。数ヶ月前、果たしてこんな夏休みを誰が想像しただろう。……するわけねーじゃんよ。
「シサーも、ここのどこかにいるのかしらね」
俺のあげたロートスの実をしゃりしゃりと齧りながらユリアが言った。
「だとすれば、どこかで会えるのかも知れないけど」
ニーナがぼんやり座ったまま答える。
この迷路が、俺が最初に思った通り正方形で構成されているものなのだとしたら、今は一応上半分の、更に半分くらいの面積は塗り潰されてきている。大雑把に言って、残り4分の3。
ただ、もちろんシサーも移動しているだろうからすれ違いが生じている可能性も否定出来ないんだけど、かと言ってじっと待ってる

わけにもいかないし。
「出来る限り地図を埋めて、それからまた、方針を考えよう」
「うん」
そこでしばらく休憩をして、俺たちは再び歩き出した。地図で言うと段々中心部へ向かってきているはず。
一旦、少し南へ下ってまた北へ続く直進通路を歩いていると角に当たった。左手に折れ……。
「何？何の音？」
頭上で何かが軋むような音がした。咄嗟に見上げる。
「げええ！！」
「ダッシュだッ」
頭上の壁が落ちてこようとしてるじゃないか！！死んじゃうっつーのッ！！！
「ひえええええッ」
「きゃあああッ」
思い思いに叫び声を上げながらダッシュで駆け抜ける。階段状に左、右、左、右とうねうねしたその通路は通り抜けるたびにいちいち、ズシン、ズシンと天井がおっこってきた。床に落下すると、ゆっくりと天井へと戻って行く。
「ひぃぃ……」
ようやく『天井落ち』シリーズの通路を抜けたらしく、落ちて来ない天井を見てスライディングするように床に崩れ落ちた。突如の全力疾走で、みんな俺と似たような有様だ。ぜいぜいと息を切らせて床に座り込んでいる。
「ああ、もう！！ダンジョンって大っ嫌い！！何でこんな意地悪いのよ！？」
ニーナが誰にともなく叫ぶ。
今走り抜けた通路には、実は分岐点があったんだけど……当然そんなものを調べている余裕なんかありはしなかった。戻りたくもない。

「天井注意……」
地図に書き込んで立ち上がる。
「ええと……さて。どっちに行けば良いんだ？」
今俺たちが座り込んでいるのは『天井落ち』通路を抜けたばかりのところで、右にも左にも道が続いていた。どっちもずっと続いたあげくに分岐してたりすると面倒くさくて嫌なんだけど。
「どっちでも良いわよ、どうせわかんないんだから」
ほとんど投げやりとしか言えないアドバイスをニーナがくれる。で、とりあえず左、つまり南下する方向に行ってみることにして5分ほど歩くと、そこはもう行き止まりだった。地図を埋めて道を戻り、北上する。右に行ったり下に行ったり左に行ったり上に行ったりを繰り返し、行き止まりに何度も遭遇したりして無駄に歩いた気もするけれど、そこそこ地図は埋まってきた……みたいだ。
「もうだいぶ……これって、中心付近にいるんじゃないの？」
足を止めて地図を書き足した俺の手元を、他の3人が後ろから覗き込んだ。書き込んでいる文字は思いっきり日本語なんで他のみんなには読めないだろうけど、図を読み取るのに影響はさしてないはずだ。で、この地図が合ってると言う前提とすると、上半分に関して言えば中心部を四角く繰り抜いてその周囲を周ってる感じ。
「中心には、何があるのかしら」
ユリアが首を傾げる。
「何かあると思う？」
「ぐねぐねと無駄に通路があったりして」
キグナス……どうしてそう言う寂しい未来を示唆するかな。
「ま、行ってみればわかるだろ」
言いながら再び歩き始めた。突き当たった道を西へ戻り、南下して行く。右、左、右とやや細かく道を折れ、右にも左にも何だか先に続いていそうな道に出たところで足を止めた。
「どうしようか」
ちなみに正面にも道は続いている。十字路と言うやつだ。

「困ったわね。とりあえず手前から行きたいところだけど……」
って、中心部を避けて、離れて来ちゃってるんだよな。このままだと外周……地図を書き始めた地点のひとつ内側の道まで戻ってしまう。
「んじゃとりあえず、北上してみようか」
右手に続く道に向かって足を向けた。
結構長い道で、１０分以上歩いてもまだ先がある。このままぐるっと周って中心の方とかに続いてたりしないかな……なんて考えていた時だった。
カツ、カツ、カツ……。
ガシャッ、ガシャッ、ガシャッ……。
不意に嫌な音が聞こえてきた。聞き覚えのある金属音。だらだらと続くダンジョンの探索で忘れ掛けていた恐怖が背筋を這い上がっていった。
「何……？」
ユリアが不安そうに呟く。思わず足を止めて振り返った。耳を澄ます。間違いなく、背後の暗闇の奥からその音は響いて来ていた。
カツ、カツ、カツ、カツ……。
硬質の、足音。触れ合う甲冑。確かに誰かが歩いて来ている音だった。心臓が再び早鐘のように鳴り出した。
「これって、最初に追って来たのと同じ足音……」
全くの同じ奴かはわからないけれど、同種であることは多分間違いないだろう。
「逃げよう」
「でも、また逃げている間にワープトラップに引っかかっちゃったら……ッ」
「く……」
確かにそうだ。これまでの苦労が水の泡になる。
「とにかく、進もう」
足音にはまだ少し距離がある。どこかで角を曲がってくれるかも

知れないし、引き離せるかもしれない。
この道の先が行き止まりかもしれないと言う可能性については極力考えないようにした。これまでに遭遇した行き止まりの頻度を考えれば、決してあり得ない話じゃない。けど、考えても道が繋がるわけじゃない。
トラップガイドに注意しながら、可能な限りの早足で通路を進む。視界のほんの少し先は真っ暗だ。挟撃されるかも、と言う嫌な考えを、頭を振り払って追い出す。額に嫌な汗が滲んだ。
「……近付いてる」
押し殺した声でニーナが言った。
「……うん」
俺も低い声で答える。足音は遠くなるどころか近くなる一方だ。
カツ、カツ、カツ、カツ……。
「あ、曲がり角だ」
ようやく直進通路が終わって、曲がり角が見えた。知らず、歩調が速くなる。焦りが俺の背中を押していた。
何でだろう、凄く怖い。ヘルハウンドだってオーガーだって、めちゃめちゃ怖かったのに、なぜかそれを遥かに越える恐怖が込み上げていた。……それは、ある種の予感ってやつだったのかもしれない。
角を曲がった瞬間、思わず駆け出す。ニーナたちも同じ気持ちなのか、何も言わずに後を追って走って来た。
カッカッカッカッ……。
つられたわけでもないだろうが、後を追う足音も走り出す。手の平に汗が滲む。……怖い！！
「嘘ッ……」
ニーナの悲鳴のような声が聞こえた。俺も同じ気持ちだ。まさか寄りによって……！！！
角を曲がった通路の先は、行き止まりだった。

◆◇◆

「戦うしかないッ……」

どちらにしても、もう逃げ場はない。

「ユリア、後ろに下がって」

ユリアを1番壁際にやり、俺は剣を構えた。隣でニーナもレイピアを抜き出しながらもいつでも魔法が唱えられるように構える。キグナスがその後ろでロッドを構えた。敵の姿を少しでも早く認識出来るよう、ウィル・オー・ウィスプをやや前面に飛ばす。

カッカッカッカッ……。

硬い足音は、もうすぐそばまで来ていた。角を曲がる。ぶつかり合う甲冑の音。それにかぶせるように、シャキン、と剣を抜き放つ音が聞こえてきた。体中を突き抜ける恐怖は、ハンパない。剣を握る手も、膝も、かたかたと震えているのが自分でわかった震えた。

「……ッ……」

声にならない悲鳴がユリアから漏れる。光に照らされて姿を現したのは、全身を黒い甲冑にくるんだ騎士だった。ただし、その頭部は髑髏(どくろ)だ。

「くッ」

キーンッ。

剣を打ち付ける金属質の音が響いた。問答無用で何も言わずに斬りかかって来た騎士の剣を、剣で受ける。甲冑にくるまれていない剥き出しの……骨さえ剥き出しのその顔が間近に迫り、何も映さない空ろな眼窩が肉迫していた。頭蓋骨にいくつも刻まれた傷が俺の瞳に飛び込む。

（つ、強いッ……）

その力は並大抵じゃなかった。そりゃあ俺は力があるほうでは全然ないけど……ッ。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ダテ・エト・ダビトゥル・ウォービース・イグニス。『火炎弾』！！」

キグナスの魔法が迸る。だが、骸骨騎士に届く寸前、霧散した。
「何ッ……！？」
効かない！？
「アモル・オムニブス・イーデム。大地の恵み、大気の守り、その全てを統べるファーラよ、清らかなる守りにて邪悪な者を退けたまえッ」
ユリアが俺の防御を固めてくれる。ニーナがレイピアを翳して駆け寄った。
「きゃんッ」
馬鹿な！！
俺と剣を交えている片手を離し、その腕で一閃する。ニーナが弾き飛ばされた。その間も、地面に踏ん張っている俺の足はじりじりと骸骨騎士に押されて後退していく。
くそッ……このッ……馬鹿力……ッ……。
ずずっ、ずずっと地面の上を俺の足が押されて行く。骸骨騎士は、ニーナを弾き飛ばしたその手を俺に振った。
「……ッッッ！！」
俺の体が壁に振り飛ばされる。剣が俺の手を離れて床に落ちた。背中から胸部にかけて、激しい痛みが俺を襲う。骨にヒビとか入ったんじゃないかと思うような痛みだ。俺が激突した振動で、壁がパラパラと粉を舞い落とした。

第1部第20話　風の砂漠～ダンジョン3～（3）

「カズキ！！」

ユリアの悲鳴が遠のきそうな意識を引き戻す。ニーナがレイピアを手に骸骨騎士に駆け寄った。背後から振り翳す。

「くうッ……」

呻きが聞こえた。歯が立たないらしい。

「アモル・オムニブス・イーデム。我らを守りし偉大なる……きゃッ……」

回復魔法を唱えかけたユリアの声が悲鳴に変わる。続く鈍い音。弾き飛ばされたんだ。

「くっそぉ……」

歯軋りして、壁に背中を預けたまま体を起こす。打たれた背中と胸の辺りが軋むように痛んだ。剣は俺より少し離れた位置にある。手を伸ばしても届かない。

骸骨騎士は俺の方へ剣を振りかぶって歩み寄った。無表情でゆったりとした動きがまた、気味の悪さに拍車をかける。

「類稀なる知恵者ノームよ、悪しき者に大地の制裁を！！ダレ！！」

ニーナの魔法が飛ぶ。だが、やっぱり届く前に霧散した。

「『火炎弾』！！」

壁にへたりこんだままのユリアが、魔法石を投じた。魔法の発動こそなかったものの、ぶつけられたと言う感触はあるのか骸骨騎士の顔が僅かにそちらへ向けられる。

その隙を突いて俺は地面を蹴った。タックルをかけるように剣に飛びつく。だが、態勢を整えるその前に骸骨騎士が肉迫した。眼前に迫る。鋭い斬撃で剣を振り下ろした。

「……ッ……」

俺の反射神経に感謝。顔の横すれすれで何とか剣を避ける。俺の代わりに叩きつけられた壁は微かに砕けて耳元に欠片を転がり落と

した。
「くっそぉッ」
キグナスの怒声が聞こえる。駆ける音。あろうことかロッドを振り翳して、今にも俺に止めを刺そうとしている骸骨騎士の背後から踊りかかった。
「くぁッ……！！」
だが、一瞬にしてその小柄な体が宙に舞う。血飛沫を上げていた。俺に向けたその剣を、横薙ぎにして背後から来たキグナスに斬りつけたのだ。
「キグナス！！」
怒鳴りながら身を起こす。こちらに向き直る前に脇を狙って剣を払った。
骸骨騎士が跳躍する。バックステップの要領で、こちらを向いたまま後方へと跳んだ。とりあえずこれで距離が出来る。
「アモル・オムニブス・イーデム。我らを守りし偉大なる女神ファーラよ。その下僕に深き慈愛をもって癒しを施したまえ」
ユリアがキグナスに回復魔法をかけている声が聞こえた。その声を背中に聞きながら、示し合わせたわけでもないが、ニーナと同時に飛び掛る。
「うッ……」
「うあッ……」
が、まるで歯が立たない。斬りつけられたニーナが、腕からどくどくと血を流しながら後方へ吹っ飛んだ。ほぼ同時に俺も脇腹を斬り付けられる。立て続けにその剣が俺に振り下ろされ、寸前で剣で受け止めた。
キーン！！
剣と剣がぶつかり合って、僅かな火花が散る。が、最初と同じ、圧倒的力の差で押されて行く。骸骨騎士の左腕が剣から離れた。右腕一本なのにこの強力さと来たらッ……。
（――え？）

ざしゅッ……。

何かに突き刺さる音が聞こえた。一瞬後に、血飛沫。噴き上げているのは、俺の、体。

手から力が抜ける。視線を下げると、骸骨騎士の左腕から突き出ている、研ぎ澄まされた杭のような部分が俺の腹部を貫いていた。不思議と痛い、とは感じなかった。……熱い。

「カズキ!!」

剣が手から離れる。鋭く太い骨が抜き取られ、自分の体がどさりと地面に崩れるのを感じた。床にぶつかる衝撃さえ、良くわからない。

俺を片付けたと思ったのか、骸骨騎士は左腕の俺の血をばっと振り払って体の向きを変えた。次の獲物を探している。

（駄目だ……）

こんなところで、倒れてちゃ。

ユリアが……。

そう思いながら意識が遠のきそうになる。自分の顔の下まで、血溜りが広がっていくのがわかった。指先を動かそうとするけれど、冷たく麻痺している感じで微かにでも動いたのかどうかすらわからない。

「きゃあああッ」

ユリアの悲鳴。

「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ!!その身を裁きの矛と変えよ。ポエブス!!」

ニーナ、こいつに魔法は効かない……。

そんなふうに他人ごとのように考えていた意識の片隅で、ガシャーン!!と言う盛大な破砕音に続く慌しい足音と激しい金属音が聞こえた。剣と剣がぶつかり合う音。誰かが何かを怒鳴る。名を呼ぶ叫び声。……歓喜の、声。

（……!?）

その名前が意識の中で形を持った時、失いかけた意識が辛うじて

戻った。全力を振り絞って顔を向ける。骸骨騎士が誰かと激しく切り結んでいた。あれほどの剣技、怪力をものともしない、対等に渡り合うその技量。

（無事、だったんだ……）

捜し求めていたシサーの姿を最後に目に映し、俺の意識は暗転した。

◆◇◆

「よぉ……目が覚めたか」

鈍い頭痛を伴って目が覚める。少し離れた場所に置かれたカンテラの薄らぼんやりとした明りの中、シサーの銀色の瞳がこちらを見詰めていた。

「シサッ……うッ……」

慌てて体を起こした俺は、腹部に根ざす鈍い痛みに打ちのめされて再び地面へと舞い戻った。

「おいおい。無茶すんな。生憎、相当深い傷でな。ウチのお2人さんじゃ全快にまでは出来ないそうだ。魔力の消費も今は激しいからな」

ああそうか。……俺、骸骨騎士に腹を串刺しにされたんだった。

「……そか」

やけに静かだ。床に転がったまま視線をさまよわせると、ユリアもニーナもキグナスも、床に倒れ込んでいた。眠っているらしい。

「あいつは？」

場所は、さっき戦闘を繰り広げていたそのままの場所だ。壁にあいつが切りつけた剣の後が残っている。俺の視線を受けて、シサーは後方を見遣った。つられて目を向ける。

「あ……」

「アンデットモンスターだからな。砂化した」

さっきまで骸骨騎士が身につけていた黒い甲冑や剣が、そこにオ

ブジェのように転がっていた。中身はない。その代わり、微かに盛られた砂がその周囲に散っている。なぜかその向こうに、粉々に砕けたガラスの破片が散らばっていた。

「倒したんだ……。あれは？」

俺の視線に気付いてシサーが苦笑いを浮かべる。

「間に合わねえと思って、咄嗟に手に持ってたカンテラを投げ出したんでな」

ああ、そうか……。

……やっぱ、凄いなあ。俺なんか、４人がかりだって歯が立たなかったのに。

「心配、かけたな」

「無事で良かった……」

「ニーナに散々叱られたよ。泣くわ怒鳴るわ、どっちかにしてくれって感じでな」

言ってシサーは照れたように苦笑した。優しい瞳を、行き止まりの壁に寄り添うように眠っているニーナに向ける。

「心配、してたよ」

「ああ。まさかあんなワープトラップが仕掛けられているとは、思いもしなかった」

本当、悪かったよ、と壁に背中を預けて呟く。

「頑張ったな。良くみんなを守ったじゃないか」

「別に俺が守ったわけじゃない……。俺に、シサーの代わりは務まんないや」

やっぱり、シサーがいると安心する。

俺は仰向けに転がったまま、片腕で目元を覆った。ダンジョンに入ってからの数々の戦闘を思い出す。何度も死ぬかと思った。何度も怪我を負った。シサーがいれば戦闘時間はもっと短い時間で済んでただろう。さっきの戦闘だって、シサーがぎりぎりで駆けつけてくれなかったら、多分全滅だった。……ああ、ユリアはわかんないけど。

「ウィル・オー・ウィスプは」
「召喚しっぱなしだったからな。解放した」
「ふうん。シサー、どうしてたの？」
「どうしてたも何も……とにかく戻らなきゃと思って探索してたよ」
そりゃそうか。
「うろうろしてるうちにワープトラップに気が付いてな。ちょっと気になることがあったんで、ある場所を目指してるとこだったんだ。ちょうどその角を曲がって真っ直ぐ行った先の……もういくつか角を曲がった辺りにいたんだけどな。そしたら複数の足音が聞こえたからお前らかと思ったんだけど、何せ真っ暗だろ。見えやしねえし、間違って魔物の集団だと面倒臭ぇし」
「ふうん」
「戦闘音が聞こえたからな。慌てて駆けつけたんだが、ワープトラップに引っ掛かってるわけにはいかねえから、突っ走るわけにもいかねえし。やべえんじゃねえかって気を揉んだよ」
やばかったです。
「ある場所って？」
「ああ……」
ぽりぽりと頬を掻きながらシサーは伸ばして床に投げ出してあった長い脚を引き寄せた。胡坐をかく。
「どうもこのフロアの中心部に、素直に辿り着けねえ部屋があるんだよな」
「素直に辿り着けない部屋？」
俺は今度はさっきみたいにいきなりではなく、そろそろと体を起こした。ずきんずきんと腹部が痛む。でもざっくり貫通してたことを思えば、やっぱり脅威の回復力だと思う。あのままだったら、きっと死んでたもんなあ。
何とか壁に背中を預けてポケットの地図を取り出した。
「お。お前、そんなもん書いてたのか」
「うん」

「ちょっと見せてみろよ」
言われて手渡した瞬間、シサーは顰め面をした。
「汚ぇ」
酷すぎる。
「……っと……この辺りだな」
シサーは憮然とした俺の表情には目もくれず、『汚い地図』に目を落とす。指で辿って、空白となっている中心部分の更にど真ん中を指で指した。
「この辺は道があるんだよ」
言いながらその周辺を指でぐりぐりやる。それからおもむろにポケットを漁って、紙切れを1枚取り出した。
「あ」
地図だ。シサーも地図を描きながら歩いてたらしい。
「……ってか人のこと言えないじゃん？」
「うるせえな」
大差ない汚さの2つの地図を見比べる。シサーの方が多くの道が書き込まれていた。
「写しても良い？」
「やるから続き書いてくれ」
そうくる？
渋々と受け取って、シサーの書いた地図を書き写しながらあれ？と思った。空白の中心部から斜め右下くらいの位置……小部屋がある。
「シサー。この部屋って」
「ああ。ここも胡散臭いんだよな。壁に魔法陣の掘り込みがある」
「2つの像がある部屋？」
「おう。……行ったのか？」
「うん。まだワープトラップに気付いてなかったから、ここから跳ばされまくったみたいだけど。行った」
そうか。あの部屋はこんな位置にあったんだ。指で地図を辿って

行くと、まだ結構ぐねぐねと歩かなきゃならない感じ。
「俺があちこち見た限りでは、気になるのはこの2箇所だな。隠し扉なんかもあったが、空の宝箱があったくれぇで」
隠し扉!?
「うっそ。あったの?そんなの」
「あったぜ。俺が見つけたのは今んトコ2つだな」
言ってシサーは地図上を指で示した。両方とも、俺たちも行っている通路だ。
「全然気が付かなかった……」
「結構わかりやすいぜ。ここのダンジョンマスターの癖なんだろうが、隠し扉がある周辺は煉瓦の組み方が微妙に変わる」
そんなの見てない。
あらかた地図を写し終えて、しみじみ覗き込みながらとんでもないことに気が付いた。シサーの地図は、7割は埋まっている。俺のと合わせて8割弱……でも。
「出口とか階段とか、そういうの、ないの?」
「今んトコ発見出来てねえんだよな。お前らも……だな、これ見ると」
「うん」
「……」
「……」
思わず顔を見合わせて溜め息をつく。
「……最初にいたフロアじゃねえことは確かだろうな」
これで地図の外周は埋まった。ところどころ埋まっていないところもあるけど、周囲の通路を見る限り多分行き止まり。もしかするとこのうちのどこかに階段があったりするのかな……。隠されてたりすると嫌なんだけど。
「ともかく、その2部屋を探って、何もなけりゃあ後はもう、しらみつぶしに地図を埋めていくっきゃねえな」
その言葉に、またも顔を見合わせて俺とシサーは溜め息をついた。

第1部第21話　風の砂漠～ダンジョン4～（1）

ここから中心部までの距離は、1番外周の1辺が30分程度だったことから計算すると、順当に行って2時間半くらいだと思う。

後はここからの抜け方を探すだけになった俺たちは、ともかくその中心部分の空白を埋めることに行動方針を定めて歩き始めた。

シサーが戻って来たので、これまで通り先頭をウィル・オー・ウィスプを翳したシサー、次いで地図を持つ俺、ユリアを挟んでニーナ、キグナスと言う隊列になっている。剣を持っている人間2人が先頭に並ぶと言うのはいささかバランスが良くないが、仕方ない。俺なんかよりキグナスの方が最後尾を務めるのにお役立ちかもしれないけどさ。『導きの光』で照らしてもいるし。

目覚めたユリアとキグナスが回復魔法を再びかけてくれて、ようやく俺は全快と言えるまでに回復した。

途中幾度か魔物に遭遇したりもしたけれど、やっぱりシサーがいると全然撃破する時間が違う。グリムロックなんかはほとんど、一刀両断の勢いだった。敵が近付くとグラムドリングが光るから、耳を研ぎ澄ます必要もない。先が暗黒に閉ざされているのは相変らずなのに、それほど恐ろしいものにはもう見えなくなっている。現金なもんだ。

十字路まで戻り、一旦西へ向かう。南下する道が行き止まりなことは、シサーの地図からわかっていた。西の通路はすぐ壁にぶつかり、そこを南下する。もうじき、俺たちが地図を書き始めたスタート地点の1本内側の道に当たるはずだった。

俺たちが骸骨騎士と戦闘していた頃、この通路の北部辺りにいたと言うシサーもこの辺はまだ地図を埋められていない。と言うか、この辺りの区域だけが埋まっていない。

「おっとぉ♪」

南下し続けて角に行き当たると、シサーは東へ続く通路を見て楽

しそうな声を出した。足を止める。
「なぁんか臭そうじゃねえか？この通路」
「何が？」
ニーナが問う。体だけ進行方向に向けたまま足は進めず、シサーはコンコンと左手の壁を剣先でつついた。
「見てみろよ」
言われて壁に視線を向けると、煉瓦の組み方が違ってた。他の通路は縦と横が1対2くらいの長方形の煉瓦を互い違いに組んでるのだが、そこの壁だけはぽつりぽつりと長方形の煉瓦の合間に半分に割ったような正方形の煉瓦が咥え込まれている。
「本当だ。……隠し扉？」
「いや、隠し扉があったところとは組み方がまた違うな。トラップだろ」
嫌だなあ、また壁が追っ掛けて来たり天井が墜落して来たりしたら。思わず顰め面をする。
「とりあえず行ってみるから、そこで待ってろ」
「とか言ってそのまま消えないでよ」
ニーナの言葉にシサーは苦笑した。
「保証は出来ねえけど……だからってここで立ってるわけにはいかんだろう」
それはまったく正しいんだけどね……。
言ってシサーが歩き出すのを、全員不安な視線を注いで見守った。ウィル・オー・ウィスプを連れたシサーが遠くなっていく。……と。
ヒュンッ、ヒュンッ、ヒュンッ！！！
「おぉ～ッ♪」
シサーが嬉しそうな声を上げて体を地面に素早く伏せるのと、風を切る鋭い幾つもの音が響くのとはほぼ同時だった。左手の壁から矢が立て続けに打ち出されたんだ。カッカッカッ！！！と反対側の壁に突き刺さると、透過するようにぼんやりと消えていく。
う……シサーと再会出来てて良かった。俺だったら気持ち良く串

刺しだ。もう串刺しは嫌だ。
「来た来た来た」
跳んだり伏せたりして器用に矢をかわしながら奥へと消えていくシサーの後姿から声が上がる。……楽しそうで何よりです。
「何であんな嬉しそうなの？」
ニーナが呆れたように呟いた。まったく同感だ。
シサーの通過に伴ってがんがん遠慮なく吐き出される矢と、遊園地のアトラクションにでも臨んでいるかのような楽しげな後姿が空気を切る音と共に消えていった。……変な人。
「シサー！？」
ここからはシサーの姿は見えず、ウィル・オー・ウィスプの明かりだけがゆらゆら揺れているのがわかる。そのおかげでシサーが止まったらしいことがわかって俺は声をかけた。距離にするとあそこまでどのくらいだろう。５０メートルよりはありそうだ。真っ暗で良くわからないけど。
「おお。終わったみてぇだぜ」
「どうなってるの」
「すぐ行き止まりだな。左に折れる通路がある。一旦そっち戻るから待ってろ」
言ってシサーはこちらへ歩き出したらしい。少しずつウィル・オー・ウィスプがこちらに近付いてきて大きくなっていく。ぼんやりとシサーが見え始めると、今まで聞こえなかった風を切る音が再び聞こえ始めた。
「お、始まったな」
また喜色を含んだ声を出すと、シサーの体が身軽に矢をかわして躍動した。少しずつこちらに近付いて来る。ヒュンヒュンッ、カッカッカッと言う音を引き連れて最後の矢を跳躍してかわすと、シサーは俺たちの前にしゅたっと着地した。
「……と、まあ、こんな要領だ」
出来るか！！！

俺がむくれた視線を投げ掛けると、シサーは肩を竦めた。
「1度発射されたら次が発射されるまで、ちょっと間がある。俺が先を行くから、少しだけ距離を置いてついてくるんだな」
「そうなの？」
「ああ。戻って来る時、最初は矢が出なかったからな。……行くぜ」

◆◇◆

マジック・アロウ・ゾーンを越えて、北上したり南下したりを繰り返して魔物を蹴散らしながらまたしばらく歩くと、東へ続く直進通路と南へ下る通路の分岐点に出た。東へ向かう通路の先はシサーの地図に描かれている落とし穴がある。とは言っても、落とし穴からこっちの通路は埋められていないので、その手前に突き当たりがあるのか、あるいは宝箱だとか階段だとか、そういう何かがあるのかはわからない。
「どうしようか」
地図を見ながら言う。
「とりあえず真っ直ぐ行ってみっか。その方が地図も埋まるし、先が短いのはこっちだしな」
その言葉に従って歩いていく。が、通路には特に記載するようなこともなく、地図上に既に載っている落とし穴にぶち当たった。どのくらいの落とし穴なんだろう。かなり巨大なものだ。幅は道一杯広がって、奥行きは暗がりで良く見えなかった。落とし穴って言うよりは断崖絶壁。もちろん落ちた先に何があるのかなんて、見えない。
「ニーナ、見えるか？」
俺たち人間より夜目が効くニーナにシサーが尋ねる。微かに首を傾げてニーナが前方を見据えた。
「どのくらいかしらね……4エレくらい？」
走り幅跳びの要領でやれば越えられるのかもしれないけど、踏み

切りに失敗したら奈落の底なんて嫌だし、大体別の通路から落とし穴の反対側に繋がってるんだから敢えてそんな危険を冒す理由もない。

地図を埋めて元来た道を戻ると、さっきの分岐点で南下した。一度西に向かってからまた南下すると、今度は東へ向かう直進通路だ。途中から地図は埋まっている。行き止まりなんてことになってなければ、この通路を直進して、行き当たったところで北上するとあの小部屋があるはずだった。行き当たる前に北上する脇道を逸れると、ぐねぐね曲がりながらもさっきの落とし穴の反対側に出る。この辺りはシサーは踏破済みで、ブランクゾーンはいよいよ、幾つかの行き止まりと思われる通路と中心部を残すのみとなった。

「どうする？とりあえず中心部の方向かってみる？小部屋行ってみる？」

歩きながら問う。

「気になるから真ん中行ってみよう。結構早い時点で俺はそっちの方へ行ったから気づかなかったんだが、多分ここにも隠し扉があるんだと思うんだよな」

隠し扉の向こうが階段とかに続いてたら良いんだけどな。

地図がほぼ完成したので、臨時マッパーを押し付けられていた俺はその役目を免除された。地図をシサーに渡して隊列を組み変える。シサー、ニーナ、ユリア、キグナス、俺と言う最初の隊列に戻った。角を曲がりながら北東の方角へと進んでいく。

「ダンジョン作る奴って、どういう精神構造してんだかなー」

俺のすぐ前を歩くキグナスが言った。どういう精神構造って言われてもなあー。

「んでもさ、宝箱とかあるんだから良いじゃん」

「空じゃん」

「空だけどさ……」

「他人の攻略した後のダンジョンを探索するなんて馬鹿らしくてしょうがねえなあー。危ないばっかでメリットがねえ！！」

宝箱って何が入ってたんだろ。財宝とか？そう言えばアギナルド老が「装備出来ない武器を見つけることもあるかも」みたいなこと、言ってたな。武器だの防具だのってのもあったりするんだろうか。

「どっかで防具、手に入らないかなー」

度重なる戦闘で、レガードの借り物はすっかりボロボロだ。シェインが防御魔法をかけてくれたから、ダメージは剥き出しのままより遥かに軽減されているとは思うんだけど、それでもあれだけ戦ってりゃ負担は大きい。汚れて来てるのはともかくとしても、壁に激突したり爪で切り裂かれたり腹刺されたりで、綻びまくりの穴あきまくり。マントも最早ぼろぼろで、このまま行くと俺は浮浪者だ。

「ねえだろ」

対するキグナスは、あちこち切れたりはしてるものの、前衛に立つ俺ほどじゃない。

「他人事だと思って」

「防具って身につけると結構動きが制限されるぜ。今ほど身軽に動けなくなるぞ」

あ、そう言う問題もあった。

「お前、ただでさえ力があるわけじゃねえんだから、敏捷度が命だぞ」

「うーん……でも、これ、あんまりじゃない？」

「おう。乞食みてえだな」

何も言わずに俺はキグナスを後ろから蹴りつけた。

北上すると行き止まり、通路途中の道を西に折れると中心部へ向かう、直進通路に出る。ちなみに北上した行き止まりの壁の裏側は、例の『天井落ち』ゾーンだ。当然西へと折れる。

角を曲がってすぐ、左右と正面に道が続いていて、左に進むと落とし穴に続き、右は行き止まりだ。直進して突き当たった角で、シサーが足を止めた。

「さて、と」

「何？」

「ここの通路を直進して、脇道を右に折れると中心に続く道なんだが、脇道に入らないで真っ直ぐ行くとどうなってんのかは、俺は見てないんだよな。行っとくか？」

言いながら歩き出す。

「行っときましょ」

１０分弱くらい歩いたところで、シサーの言う脇道に当たった。とりあえずそれを無視して直進する。地図を見る限りではどう考えても行き止まりなんだけど、何かあるかもしれないし。

先が暗いので視認は出来ないけれど、地図で言えばもうじき角に当たって右に折れるだろうと言う地点まで来て、暗闇のその奥から何か重たい音がした。

「……何だ？」

ゴトン。

凄く、重たい音。衝撃で足元の地面が揺れた。

ゴロゴロゴロゴロ……。

全員不審な顔で足を止める。

「……カズキ！！撤退だ！！」

シサーが踵を返して最後尾の俺に怒鳴った。状況がイマイチ飲み込めていないまま踵を返す。

「……う、わあああッ」

「勘弁してよッ」

ゴロゴロゴロゴロ……。

ウィル・オー・ウィスプの仄かな明かりが届くか届かないかと言うところ、暗闇が迫ってきていた。……違う、暗闇じゃない！！巨大な石が、ゴロゴロと重たい唸りを上げて俺たちの方へ肉迫しているんだった。

「だあああッもおおおおッ」

天井と床、壁と壁の間の隙間を埋める勢いで石は一直線に俺たちを目指している。

「さっきの脇道に入れ！！！」

全力疾走しながらシサーが叫ぶ。
「わかった！！」
俺も必死の形相で駆けながら怒鳴り返した。……どっから出て来るんだよこんなもんッ。
「ほんっとに精神構造わかんねえッ！！！」
キグナスのわめき声を聞きながら脇道に飛び込む。次々と脇道に転がり込んで、そのまま床にへたり込んだ。
途端、左の角の方から複数の足音が聞こえる。それを掻き消すように、ゴロゴロと重たい轟音を立てて転石がさっきの通路を驀進して行った。
シサーが剣の柄を握って立ち上がる。俺も呼吸を整えながら剣を抜いた。……あああ、もう。せめて息が落ち着くまで待って。
願い虚しく、角からゴブリンが現われる。正確にはゴブリン３匹のホブゴブリン１匹。ユリア、ニーナ、キグナスの魔法使いチームが後退し、ゴブリンたちは俺たちの姿を見つけると棍棒や剣を振り上げて駆けてきた。遠くでドシーン！！と言う轟音と共に足元が振動する。さっきの巨大石が壁に激突したんだろうか。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ナートゥーラー・ドゥーケ・ヌンクァム・アベッラービムス。『風の刃』！！」
キグナスが『風の刃』を叩きつければ、ニーナが『石弾』を浴びせる。その間にユリアが俺とシサーの防御を個人対象で固めてくれた。相手が４匹でも通路の幅を考えれば向こうも完全には散開出来ない。キグナスの『風の刃』を浴びた１匹が後方へ吹っ飛び、『石弾』を叩きつけられた１匹がたたらを踏む。その隙をついて剣を右腕に斬り付け、棍棒を叩き落した。シサーがゴブリンを既に１匹切り捨て、ホブゴブリンを相手取る。そこへ後方へ飛んでいたゴブリンが復帰して剣を翳した。
「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ！！その身を裁きの矛と変えよ。ポエブス！！」

棍棒を落としたゴブリンが、小賢しく俺の剣を避けながら懐に手を突っ込む。ダガーを逆手に構え、俺の剣を受け止めた。

「ギャア！！」

『光の矢』を受けて、シサーに躍り掛かっていたゴブリンが再び後方へ吹っ飛ぶ。のた打ち回っている間にシサーはホブゴブリンを一刀両断した。俺はと言えば、ちょろちょろと素早い動きでダガーを斬り付けてくるゴブリンの動きを避けるのに精一杯。

「後ろ！！」

ユリアの、注意を喚起する声が聞こえた。が、振り返っている余裕なんかない。その俺の耳に、またも複数の足音が聞こえてきた。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ダテ・エト・ダビトゥル・ウォービース・イグニス。『火炎弾』！！」

『火炎弾』が飛んできて、ちょこまかと素早く動くゴブリンが灼かれる痛みに動きを鈍らせる。剣を払ってゴブリンの脇腹に斬り付けると、「グギャッ」と呻いてゴブリンがよろめいた。そうしている間にも、いつの間にか俺の後方では戦闘が起こっている。ゴブリン４匹とホブゴブリン２匹が追加されていた。

「類稀なる知恵者ノームよ、縛めの手を伸ばせ！！オースィラ！！」

ニーナが発動させた『ノームの手』に、ゴブリン２匹とホブゴブリン１匹が絡めとられる。シサーが突進したホブゴブリンとゴブリン１匹にグラムドリングを振るった。その一撃で２匹とも絶命する。

「『火炎弾』！！」

俺も目の前のゴブリンをようやく切り捨ててそちらに向き直った。ユリアが身動き出来ないゴブリンに魔法石を投じる。ノームから逃れられずに灼かれたゴブリンは、悶絶した。

剣を振り上げてキグナスに斬りかかっているゴブリンに駆け寄る。キグナスは魔法を唱える余裕もなく、ロッドを両手で構えて辛うじてその暫撃を凌いでいた。

「大丈夫か！？」

その背中を逆袈裟に切り裂き、血を上げて仰け反るゴブリンには

目もくれずキグナスに怒鳴る。幸い怪我はないようだ。
「おうッ。……と？」
「終了、だな」
シサーがグラムドリングを振った。血汚れた剣が光を失って沈黙していく。
「怪我人は？」
「いない、かな？」
きょろっと見渡して答えた。ユリアが俺を見上げる。
「カズキ、切り傷がいっぱいあるわ」
最初のゴブリンのダガーから受けた傷だ。確かに細かな裂傷はいっぱいあるけど、毒とか仕込まれていたわけでもないみたいだし、大した怪我じゃない。
「平気、こんなの。魔法がもったいない」
手の甲から出る血をぺろっと舐めて、剣を鞘に収めながら顔を上げた。
「ええと……どっちだ？」
「こっちだ」
最初にゴブリンたちが現われた方の角に向かって歩き出す。脇道に入り、そこからすぐの脇道をとりあえず黙殺して直進した。すぐにぶつかった角を道なりに垂直に折れる。
「この裏だな」
そこは間もなく行き止まりになり、シサーがコンコンと壁を曲げた指で軽く叩いた。地図を覗き込むと、確かにこの裏側にはデッドスペースがある。
「隠し扉の特徴がねえなあ、ここは。……一応探ってみるか」
言われて全員で床だの壁だのを押したり、何かおかしなものがないか顔を近づけてみたりしたけれど、取り立てて何があるでもない。
「反対側か」
仕方ないので、道をやや戻って渦巻状にデッドスペースの反対側へと出る。だがそこにも、煉瓦の組み方が違うなどの特徴は見出せ

なかった。
「うーん。やっぱりぱっと見はわかんねえなあ」
「ってことは逆に、中身が楽しみになって来ない？」
腕を組んで壁を見上げながら呟くシサーに、ニーナが嬉しそうな声を出した。
「他の隠し扉みたいに目印となるものがないってことは、他の隠し扉と中身が違うってことでしょ」
「ただの分厚い壁だったりして」
……キグナス。
「とりあえず探ってみっか」
「これ、何かしら」
反対側と同様、壁や床を探ろうとしたその矢先、ユリアが声を上げた。全員の視線が集まる。ユリアの視線は行き止まりになっている通路の最奥の床に向いていた。床にも煉瓦が組み込まれているんだが、その角の1つが不自然に少し浮き上がっている。良く見なければわからない程度なんだけど。
「外れそうだな」
とは言っても、これまでにも外れそうに浮き上がっている煉瓦と言うのがなかったわけじゃない。でも、他にぱっと見、何があるわけでもないし。

第1部第21話　風の砂漠～ダンジョン4～（2）

「あれ？そこの壁、煉瓦が外れてる」
不意にそんなことに気がついた。浮いている煉瓦のすぐの壁に、ちょうど煉瓦1つ分のスペースが空いている。ここから抜け落ちたのかな。でもどっちにしても煉瓦が1つ足りない計算になるんだけど。
シサーが足音を立ててそちらに近付く。角にしゃがみこんで片膝をついた。全員ぞろぞろとそっちに集まる。
ガコッ。
シサーがその煉瓦に手を掛け、引き抜くとすんなりと抜けた。けど、何があるわけでもない。ただの、煉瓦1つ分のスペースが空いただけだ。
「例えばこの煉瓦をこっちの壁に入れてみたら？」
ニーナが言う。
「これが鍵穴でこの煉瓦が鍵ってわけか」
シサーは持ち上げた煉瓦を壁に押し込んだ。
ズ、ズ、ズ、ズ……。
カチンと煉瓦がぴったり穴に収まり、それと同時に地響きのような音がした。シサーが顔を上げてにやりと笑う。
「ビンゴだ」
よ～～～～く見ればその最奥の壁には縦に切れ間があったらしく、まるで切り取るように壁の一部が上へ向けてスライドしていった。空き始めた壁の向こう側には薄暗い、狭い空間が見て取れる。
ズン！！
一際大きな音がして、壁が動きを止めた。上がりきったらしい。入り口の高さは2メートル程度。このくらいの高さがお好きなダンジョンマスターだ。
「何があるんだぁ～？」

キグナスがわくわくしたように覗き込む。その後をシサー、俺、ニーナ、ユリアと中に入り込んだ。

北に向かって細長く奥に伸びた部屋だ。部屋と言うより、通路って感じ。これまで歩いてきた通路と壁も床も造りは変わらないし、幅も同じだからだろう。意外に長いし。ただ、あの小部屋と同じように壁にはカンテラが掛けられていて、ぼんやりと辺りを照らしている。

「奥に何かあるな」

これと言って目ぼしい物は目に飛び込んでこない。その通路の奥に、何か石碑のようなものがあるのが見えるくらいだ。

通路の奥までは3分もかからず辿り付いた。宝箱も何もなく、辿り付いてみてもやっぱり石碑だけだ。仮に宝箱があったとしたってどうせ空だろうからいーんだけどね。奥の壁には、何だか良くわからない模様が彫られている。上を頂点にした三角を支点にして真横に伸びる垂直の棒。

石碑は５０センチくらいの高さの台座の上に垂直に立てられていた。大した大きさはない。大き目のノートパソコンくらいの大きさ。厚さは5センチくらいだ。

「何て書いてあるの？」

何度も言うが、俺には文字が読めない。石碑の表面を穿つように刻まれた文字を無意味に指先でなぞりながら誰にともなく問う。大した文字量はなかった。

「『乾いた青の中天に、与えよ。さあらば与えん』」

「……それだけ？」

「それだけ」

何だよー……。

「誰に何を与えれば何をくれるの？乾いた中天って、誰」

「書いてない」

「とりあえずこれがキーワードってことかあ？」

シサーのぼやきに被さるように、ズ、ズ、ズ……と言う重い音が

聞こえた。
「あ、やべえ！！」
慌てて振り返る。通路の入り口の方だ。上がった出入り口が再びスライドして落ちてこようとしている。
「閉じ込められちゃう」
慌てて駆け戻り、半ば閉まりかけていた扉の外に転がり出ると、さっきの煉瓦は壁から床に戻っていた。時間がたつと自動的に転がり落ちるようになっているらしい。……本当、性格悪いよな。
「何か慌てちゃって、周辺探ってる時間なかったけど、良かったのかな」
「良いんじゃねえか。他に何がありそうでもなかったしなあ」
「与えるって誰にだよ」
「求めてる人を見つけなきゃって話？」
「求めてる人って……」
全員が顔を見合わせた。
「あの人しかいないじゃんね……」

◆◇◆

来た道をぐるぐると戻り、またも遭遇したゴブリンやヘルハウンドを薙ぎ倒して小部屋へ向かう。
求めてる人……小部屋にあった像しかない。『乾いた青の中天』ってのが良くわかんないけど。でも何をあげれば良いんだ？あげられるもんなら良いんだけど。
小部屋に続く通路に辿り付いて東へ向かう。途中新たな隠し扉をシサーが発見して中に入り、踏むと落とし穴になってるトラップパネルを避けて奥へ進むと宝箱があったんだけど、やっぱりここも空っぽだった。
「あ」
代わりにと言うわけでもないが、ユリアが声を上げて宝箱の陰に

転がっていたダガーを拾い上げる。
「カズキ。また、シンと同じダガーよ」
「本当だ」
やっぱり、間違いないと思う。
シンはこのダンジョンに来てるんだ。
前に見つけたのと一緒に、俺はそのダガーを荷袋に閉まった。また会う機会があるって話だから、その時まとめて返してあげよう。
こうもあちこちで投げ捨ててたら、こういうのってお金かかってしょーがないんじゃないだろうか。だから投げ専用のは小振りで割と安そうなんだろうし、それとは別に大振りのダガーも持ってるのかもしれないけど。
小部屋に再び戻って来た時、何だか妙にほっとしたような気がした。何十時間もたっているわけじゃないと思うんだけど、前にここに来たのが何日も何日も前のような気がする。
「こいつだよなあ……どう考えても」
２つの像の周りに集まる。当たり前だけど前に見た時と姿は変わってなくて、相変らず苦しそうで右手を中空に掲げていた。
像の間は、人ひとりが立ってちょうどかな？ってくらいのスペースしかあいていない。その間に立って２つの像を見比べているシサーの背中に向かって問いかける。
「何欲しいと思う？」
「うーん。首押さえて苦しんでるから、空気？」
壮絶馬鹿なことを答えたのはキグナスだ。空気なんかそこらじゅうに溢れてる。好きなだけ持っていけ。
「砂漠だから、求めると言えばやっぱり水じゃないの」
呆れたようにニーナが言った。シサーが台座に両手をかけて体を持ち上げ、像の翳した右手を覗き込む。台座の上のざらざらした感じは、言われてみれば砂漠を表していると言えなくもない。
「それ、いけそうだぜ」
「いけそう？」

「手の平に細い穴が開いてる。水なら流し込めるな。それなら『乾いた中天』っての、何とか当てはまりそうじゃねえか？」
確かに濡れてはないし、天に掲げられている。でも『青』くない。
「やってみようか」
ニーナが荷袋を漁った。水の入った筒を取り出す。砂漠を旅してるのはこっちだって同じで、喉なんか渇いちゃいない銅像なんかに貴重な水を上げるのは非常に嫌だけど、ここから出られなかったらどっちにしても水も食料もいつか尽きる。背に腹は替えられない。
全員が見守る中、シサーが片方の像の、手のひらで作った器にとくとくと水を注いだ。確かに穴の中から滑り落ちていっているようで、大した大きさもない器から水は零れ出したりはしてこない。でも。
「……どんだけ乾いてんの？」
何も起こらない。このままじゃニーナの水が空になっちゃう。
「まじいなあ。凄ぇ量を必要としてたらどうする？」
「でもそんな膨大な量の水を持ってダンジョン旅する奴なんかいないよ。通常持ってそうな範囲で何とかなるもんじゃないの」
「だよなあ」
なんて言っている間にニーナの水筒は空になった。……あああ。
「駄目だこりゃ」
「違うのかしら」
「いや、穴が開いてるってことはここを通る必然があるんだろうし、こんなとこ通過出来るのは液体くらいしかねえな。持ち歩いてる範囲って話で言えば水以外ねえだろうし」
「シサーならエール酒くらい持ち歩いてそう」
「じゃあ何か？酒を求めてるってのか？姿見ただけでこいつがもがき苦しむほどアル中だなんてわかんねぇよ」
それもそーだ。
「うーん……」
思わず腕組みをして唸る。全員頭を廻らせているので沈黙が訪れ

た。
「……あれ？ユリア、何してるの？」
ふと見ると、ユリアは何やら紙にペンでせこせこと書き込んでいる。覗き込むと、壁の魔法陣を写しているのだった。
「何か、意味ありそうでしょ。この先必要になると困るし……こう言う意味ありげなもの、メモするようにした方が良いかなって思って」
確かに。
言いながらユリアが手を動かすのを眺めつつ、頭を再び廻らせる。水で合っているんだと仮定して。何も起こらないってのは、どういうわけだろう。『乾いた青の中天に』って……乾燥してる青色で天高く上るもの？手が上がってるから中天？でも青くないんだけど。量が足りない？でも通常範囲で考えれば、あげられる量なんかたかが知れている。
何だろう。あげる場所？穴まで開けてて間違いってことはないだろう。大体あの像に、他に何かをあげられる部分なんかない。頭からかけるしかなくなってしまう。『中天』は体の中で1番高い部分って意味？んな馬鹿な。それにこれも『青』くない。
あ、もしかして『乾いた青の中天に』って対象じゃなくて『いついつに』って言う時を示しているのかな。だとすると例えば『乾い』ているのは晴れ、『青の』は青空、『中天』は、青空に上るものとくれば太陽しかない。つまり晴れた昼間。
あとは……あげ方……。
（あ、あれってもしかして……）
奥の壁の絵。あれももしかして関係あるんじゃないだろうか。あるんだとしたら、あれって……天秤？
シサーが自分の荷袋を開けて懐中時計を引っ張り出した。覗き込んで水筒を取り出すと立ち上がる。同じことを考えたのかもしれない。俺も自分の荷袋を漁った。
「何？わかったの？」

「時間、平気？シサー、俺、こっちやる」
「おう。ただ『乾いて』っかどうかは、こっからじゃわかんねえけどな。ま、砂漠だから十中八九乾いてるだろ。乾いてなけりゃ、相当の運の悪さだ」
ニーナには答えず、俺は試していない方の像に歩み寄った。シサーが先ほどの像に水筒を掲げる。
像は一対。壁に掘り込まれていたのは垂直に保たれた天秤。だとすれば意味するとことは均衡。片方にあげるのと同時に、もう片方にもあげなきゃならないんじゃないか？
２つの像は、距離がそれほど離れていない。万が一ひとりしかいなくても、真ん中に立って両方に同時に注ぐことは出来そうだけど、一応俺とシサーはひとつずつ、水筒を持ってそれぞれ像の前に立った。
「行くぜ」
「うん」
シサーの言葉を合図に、掲げた水筒の水を流し込む。今度は変化が起こるまでにそれほどの時間はかからなかった。
「あッ」
「やった」
ググググ……と唸りを上げ、水を注ぐ右腕が下がっていく。
「いつまで入れたら良いと思う？」
止まるまで入れてたらなくなっちゃう。
ちょっと不安になって言うと、穴から抜けてちっとも溜まらなかった水が、器に溜まり始めた。正しくやれば底なしってわけじゃないらしい。
「いっぱいになるまで入れて止めるか」
シサーの方も同じらしい。下がっていく右腕が満たされるまで水を注ぎ、止める。ほとんど俺の水筒は空に近くなっていた。……外に出られても水不足で死んだらどうしよう。
軋みを上げて下がっていった腕が動きを止める。下がりきったら

しい。何が起きるのか、ちょっとどきどきしながら像を見詰めていると、思いもかけない方向から激しい音がした。

部屋の奥、魔法陣が掘り込まれた壁の向こう側。

ダァァァンッ！！！

何か重い板が倒れたような音。そして。

「凄ぇ」

「うおー。何だこれ」

ざーっと言う凄まじい音と共に、魔法陣が白く浮かび上がっていった。……いや、違う、浮かび上がってるんじゃない。掘り込みの裏に嵌ったガラスのような透明な壁の向こうに積み上がっていた砂が、斜めに一斉に滑り落ちていったんだ。外との間を遮るものを失って、眩しいばかりの太陽の光が魔法陣の形に差し込んでくる。床に描かれる、光の魔法陣。

「わ」

「眩し……」

「これ、どうすれば……」

「あ、まずいぞ。上からまた砂が降って来てる。時間がたつと消えちまう」

くそぅ……そんなんばっかだな。よっぽどここのダンジョンマスターは、人に考える時間を与えるのが嫌いらしい。

「とりあえず、入ってみよう」

荷物をまとめて魔法陣の中に飛び込む。

カッ！！！

地面に描かれた魔法陣から、視力を奪うほどの激しい光が噴き上がり、俺たちを包み込んだ。

第1部第22話　風の砂漠～ダンジョン5～（1）

「……ここは？」

俺たちを包んでいた光が少しずつ地面に吸い込まれるように消えて行く。やがて光の魔法陣は姿を消し、床に刻まれた魔法陣だけが残った。……え？床に？

俺たちがいるのは、さっきの小部屋ではなかった。目の前にぽっかり開いた5つの口。5本の通路。

「最初の……場所？」

ニーナが恐る恐る言う。……最初の、円形ホールだ！？

「やった。さっさとこんなとこ、出よう」

キグナスが嬉しそうに言う。が、立ち上がって背後を振り返ったシサーが顔をしかめた。

「……いや、喜ぶのはちと早い」

「何……」

つられて振り返ると、そこにあるはずの通路を塞いでた瓦礫の山がなかった。どころか通路さえない。壁だ。

「なッ……！？」

何で！？

「良く似てる別の場所だな、こりゃ」

別の場所！？

「良く見ろよ」

言われて部屋を見回すと、最初のホールにはなかった壁のカンテラに気が付いた。等間隔で壁に掛けられていて、ウィル・オー・ウィスプも『導きの光』も必要ない。

「だぁぁぁッ……。なああんだよ、もおー……」

キグナスが床に突っ伏した。そんなこと言ったってしょーがない。脱力したいのは俺も同じだ。

「ともかく、行ってみるしかねーな」

「あれ？」
思わずげんなりしていると、背後の右奥の壁に切り込みが入っているのが見えた。切り込みって言うか、角。微妙に死角って感じの角度でちょっと見にくいんだけど。
「シサー、あっちにも道がある」
どの道から攻めてやろうかと通路を睨み付けたシサーの腕を引っ張る。
「え？……本当だ。じゃあれから行ってみっか」
近づいてみると、その角に繋がっているのは上り階段だった。
「ちょっと嬉しいかもしんない、これは」
上って良いじゃん何か。地上に続く気がして。
階段の幅は、1メートルくらい。
砂漠から続いていたのと同じ造りだった。狭くて急。壁の上の方にはやっぱりカンテラが掛けられていて、シサーが足を踏み入れると自動で点灯する。こんな便利なものがあるなら、さっきまでの通路にも是非完備しておいて欲しかった。
「んだよッ」
階段を上り切った先頭のシサーの毒づく声が聞こえる。ちなみに俺はどんじりなので、まだ階段の途中だ。
階段は大した長さじゃなくて、校舎を2階まで上った程度だ。シサーが毒づいたわけは俺のいる場所からでもわかった。左に折れて、行き止まりなんだ。
「行き止まらせるくれぇなら、階段なんか作るなッ」
キグナスも毒づく。シサーは行き止まりの壁の辺りを立ったりしゃがんだりしながら探っていたが、やがて立ち上がってこっちを見下ろした。
「こいつ、一方通行だな、多分」
「いっぽーつーこー！？」
「ああ。床に、この壁が動いた形跡が残ってる。この向こうは多分、最初のホールに続いてるな」

誰かこの壁を爆破して下さい。
「直にあそこに続いているかはわからんが……いずれにしてもあそこから続いてくる道だろう」
「じゃあ……」
「ああ。正規ルートに出たってことだろうな」
ルートなんか何でも良いから、外に出たい。
「つまり、ワープトラップなんかに引っ掛かって他のフロアに飛ばされたりしなければ、最初のホールから真っ直ぐここに通じてるってわけだ。……カズキ、とりあえず戻ろう。あっちの通路に行くしかなさそうだ」
言われて一旦階段を下り、魔法陣の辺りまで戻る。
「さーてッ。やってやろうじゃねえか、このやろう」
シサーがやたらと燃えている。いや、やけくそって言うんだろうか、世間では。
「何だかんだ言って、楽しんでるんじゃないの？」
「ちくしょう。こーなったら攻略してやろーじゃねーかッッッ」
だからもう攻略されちゃってるんだってば。

◆◇◆

シサーが俄然燃えてしまったので、俺たちは怒涛のごとく進撃を開始した。見る限りここのフロアの通路にはワープトラップはない。走り抜ける勢いで出現する魔物を片っ端から撃砕する。ニーナもキグナスもユリアも、遠慮なしにがんがん魔法をぶっ放した。
そんな中、相変わらず俺はマッパーを押し付けられている。人の書いた地図を散々汚いとか言った割りに、どうかと思う。
幸いと、このフロアはさっきのフロアほど複雑にはなっていない。変な罠なんかも仕掛けられていない。
ただ気になるのは、さっきよりずっと空気が冷たくなったことだった。砂漠の下、と言うことで、このダンジョンそのものの空気は

最初から結構冷たかったんだけど、ここのフロアに移ってから明らかに空気が冷えた。気温を基準に考えれば、最初のフロアが地下2階、今さっきまでいたのが地下1階、そして今は地下3階って感じ。そのくらいはっきりと気温が違う。つまり地上との深度がかなり明確に違う。

左端から3本目……中央の通路まで踏破した結果3本とも行き止まりで、その奥にあったのは宝箱だけだった。もちろん、空だ。

この通路も壁にカンテラは掛けられてはいたんだけど、階段と違って進んで行っても点かなかった。……けち。それとも何か意味があるのかなあ。

「残り2本か」

「割と複雑なダンジョンじゃなくて、まだ良かったんじゃない」

疲れた顔をしながらニーナが髪をかき上げた。切れ長の綺麗な瞳に、微かに憂いを浮かべている。

「そうだな」

まあ迷路になっているとは言っても、あっちとこっちで繋がって、尚且つぐるぐる回ってオチが行き止まりとかそう言うのは確かに今のところ、ない。行きつ戻りつはするんだけど、そう遅くない時点で行き止まりの道は行き止まるようになってはいる。

「にしても、古いダンジョンよね」

順番通り4本目の通路に入る。すると、この通路は階段と同じように壁に掛けられたカンテラが、進むごとにぽわー……ぽわー……と薄暗い光を投げ掛けてきた。階段の時は便利だと思ったけど、こうしてやられてみると便利と言うよりは薄気味悪い。さっきまでの通路が、カンテラはあるものの点灯しなかったせいもあるかもしれない。何だか誘い込まれているみたいだ。

「古いって、何で」

ニーナの呟きが後ろから聞こえてきたので、俺はマップを塗り潰す視線はそのままに後方に問い掛けた。今やほとんど、条件反射的に歩数を数え、升目を塗り潰している。ニーナの代わりに前方から

返答が戻って来た。
「ワープトラップのことだろ」
「何で？ワープトラップがあると古いの？」
造り方の問題なんだろうか。ロココ様式とかバロック様式だとか、そういうので建てられた時代がわかるとかみたいな。
なんて思ったけど、そういうジャンルの話ではないらしい。
「いや。今は空間移動の魔法を操れる奴はいないからな」
「昔はいたの？」
「ああ。昔は空間移動の魔法が完成されてた。一度弾圧を受けてなくなったんだ。だから、魔力付与して思い通りにワープトラップを仕掛けるなんて、その頃のソーサラー……いや、エンチャンターにしか出来ない」
ふうん。魔女狩りみたいなもん？……何か違うか。
相変わらず魔物は出没してたけど、俺が絶対会いたくない骸骨騎士は幸いにして姿を現さず、それ以上に強い魔物と言うのも今のところ、いない。
「こういうとこに巣食ってる魔物って、どっから湧いて出んのかなあ」
「さあなあ。俺、魔物になったことねえからわかんねえなあ」
「やっぱり、砂漠とかから入り込んでくるんじゃないの？」
俺の後ろからユリアが口を開いた。
「ふらっと入って見て『こいつは住み心地が良い』って？」
「そうそう」
「でも入り口閉まってたんだろ？どうやって入るのさ」
「その辺から湧いて出るんじゃねえか」
「そういうこと言うと湧いて出るよ」
「あ、ゴブリン」
みんなただ歩くことに飽きて、だらだらとそんな話をしているとユリアが前方を見て目を見張った。角を曲がったところで単独のゴブリンがぎょっとしたように足を止めたところだった。俺たちを見

て走って姿を消す。……何だか俺たちが魔物みたいじゃないか。
左右に分かれる道に出て、足を止めた。シサーが俺を振り返る。
「どうする？」
俺に聞かないで。２人して地図を覗き込んで指で辿る。
「もしかすると、なんだけど、右に行ったら多分ホールからの最後の１本に出るんじゃないかな」
「……だな。あるいは行き止まりか。本当なら一応行くべきなんだろうがどうせ宝箱があったとしたって空だしなー。マップ完成させる義理はねえし。んじゃ左行くか」
角を左手に折れる。ぽわー……ぽわー……と進行速度に合わせてカンテラが灯った。
「これ、ありがたいんだけど、ちょっと嫌だよね」
「ああ……っと……ここもか」
また、分岐道。右に折れる道と直進する道。この道は何か奥行きを見る限りは両方とも長そうだった。と言うことは、間違えると戻るまで苦労する。そんなに凄い奥まで見えるわけじゃないから確かじゃないけど。
「ちょっと、様子見てみる？」
右手の通路に身を乗り出してニーナが言う。そちらの方にぽわー……とカンテラが灯った。
「あ、やだな。またすぐに分岐……」
「ちょっと俺、見てくる」
「またあ！？」
何でこんな事態になっているのかわかってるんだろうか、この人。
シサーの一言に俺とニーナがじろっと睨む。
「こんなワープトラップダンジョンで、また行方不明になったらどうすんのよッ」
「しねえって。このフロア、ワープトラップは仕掛けられてないみたいだし……」
「わかんないじゃないのそんなのッ」

「ぼーっとしてたってしょーがねえだろぉ！？」
こんな魔物が徘徊している暗い地下で痴話喧嘩はやめて。
「そうそう何度も引っ掛かるほど間抜けじゃねえよ」
「じゃあ俺も行く」
ニーナが何か言い返そうとするのを引っ手繰るように俺は口を挟んだ。このまま言い合いを続けられたらそれこそ時間の無駄だ。……何の解決にもなっていない発言だと言う自覚はあるが。
「じゃあ、そういうことで。行こうぜ」
「これで二手に分かれちゃったらどうすんのよ馬鹿ッ」
諦めたようにニーナは吐息をついた。ひらっと手を振ってシサーが右手に折れる通路を歩き出す。それに伴って通路が仄かに明るくなり、道の先が見えた。その後を小走りに追うと、背後でユリアがくすっと笑うのが聞こえた。
「ニーナも苦労するわね」
「ホントよ。恋人選ぶんなら、じっくり考えてからにするのね」
「えッ……」
「ま、レガードなら大丈夫よ」
「……」
振り向くと、ニーナの言葉にユリアが微かに寂しげな笑顔を返すところだった。何となく、見ていられなくてシサーの背中に視線を戻す。
「あれ？」
「お？」
まだ幾らも歩かないうちに、左右に分かれる道に突き当たる。きょろっと道行に視線を這わせ、短そうな右手に折れた。すぐ向こうに突き当たりの壁が見え、また右に折れるのが見えたからだ。
ただ、こっちの道に足を踏み入れても、壁に掛けられているカンテラは点灯しない。
「明かりがつかないな」
「カンテラつけよう」

シサーが少し戻って、通路のカンテラの下で荷物を漁る。火を灯してそれを手に、再び右手の通路に戻った。すぐの角を右に折れた瞬間、何だか異臭が漂ってくるような気がした。

「……何の匂い？」

更に左手に折れると、そこには鉄の扉が嵌められていた。

「見とくか？」

「……そうだね」

扉の前に立った瞬間から、異臭はより強くなっている。何だか嫌な予感……それも、とてつもなく嫌な予感がした。見てはいけないものを見てしまうような気がする。

シサーがドアを探って危険がないか確かめる。

第1部第22話　風の砂漠～ダンジョン5～（2）

「鍵は？」
「かかってないみたいだ……いや、違うな。誰かが開けたんだ」
「そうなんだ。攻略した人たちなのかな」
「だろうな。……しかしこれは……結構厄介な鍵だな。シーフでも一流の腕がないと開けられないぜ、きっと。相当なお宝でも眠ってたんじゃねえか？」
言いながらシサーがドアを引いた。ギィ、と軋んだ音がする。
「……ッ！？」
その瞬間異臭は頂点にまで達した。閉じ込められていた悪臭が、外へ解き放たれる。
中に目を向けて、俺は戦慄の余り思わず声を上げそうになった。咄嗟に自分の口を両手で覆いながら咄嗟に引いた体が通路の壁にぶつかる。シサーもカンテラでその小さな部屋の奥……突き当りの壁の辺りを照らしながら、深刻な顔をしていた。
「これは……」
折り重なるようにしてそこに投げ出されている塊。まるで食い散らかされたように、部品はバラバラに飛び散っている。壁や床には黒っぽい染みが浮かび、ごっそりとそのまま残されているのは多分髪の毛。剥き出しの頭部には骨が覗いている。……複数の人間の、死体だ。あまりにバラバラなので、何人分なのかはちょっと見当もつかないしつけたくない。ここの、冷蔵庫みたいな気温にも関わらず、鼻の裏に沁みこむような強い腐臭を放っていた。
その一番奥の壁際に2つ置かれている、開けられた宝箱が悲しい。その片方の蓋の、留め金の部分に見覚えのあるトラップガイドと同じ石が光っているのが見えた。
「戻ろう」
「う、うん……」

通路へ戻り、元通りにドアを閉めた。青い顔をして口元を押さえたまま吐き気を堪えている俺を宥めるように、シサーの大きな右手が俺の肩を軽く叩く。
「……多分、ギルドのシーフだ」
「え！？」
ギルドのシーフって、まさか……。
「シン！？」
「いや、さすがにそれはないだろう。どう見たって数ヶ月は経ってる。シンって奴と別れたのは、まだ1週間やそこらだろ」
「あ、ああ……そっか」
焦った。ほっとした。
「でも何でギルドのシーフって……」
通路を戻りながら訪ねかけた時、遠くの方からニーナの声が聞こえた。
「シサー！？」
「おお～？」
何気なく返事をしながら、シサーは低く俺に言った。
「今の、言うなよ」
「……うん」
「通路、明かりは？」
ニーナの声が尚も続く。
「っかんね。途中から点かなくなった。こっちじゃねえってことなのかな……。まあカンテラあるから平気だ」
「もう良いわよ。戻って来てよ」
「ああ。今戻ってるとこだ」
何事もなかったように明るく答えるシサーの声が途切れてから、俺も低い声で問い返した。
「ギルドって、何で」
「ギャヴァンのギルドって話だが。あそこの連中は所属意識が強い。好んでどこかにギルドの紋章を入れている。ドアの近くに落ちてい

たバックルに、紋章が入ってた」
ギルドの紋章!?ってもしかして……。
「これ!?」
荷物を漁ってシンのダガーを取り出す。渡すと、シサーはカンテラの明かりに翳して頷いた。
「ああ。これか。シンってやつのダガーと同じだってのは」
「そう。……あれ?じゃあ、シンのとは限らないってこと?」
「わからんが、全く同じなら可能性は高いと思うぜ。同じ品物のダガーの同じ位置に同じ大きさの紋章を入れるとは考えにくいからな」
そ、そこまで言われると、本当に同じ物かは自信がないんだけど。
「でも、盗賊団なのに、足跡残すようなことするの?」
自動的にカンテラが点灯する通路まで戻ったので、必要のなくなった手元のカンテラの明かりを吹き消して、シサーは荷物の中に仕舞いこみながら苦笑した。俺もシサーに返してもらったシンのダガーを仕舞いこむ。
「盗賊団つったって、国に睨まれるような悪さをするわけじゃねえし。職業盗賊だからな、ギルドの盗賊は」
ふうん。
「特に頭が今の代に代わってからは、殺しや盗みを厳しく制限していると聞く」
そういうものなのか。
「けどさ……」
さっきの死体の有様を思い出す。まだ鼻が利かない。鳥肌が立った。
「腕の立つシーフが、適わないような魔物がいるってこと……?」
「まあ……」
シサーは片手を顎に当ててつるっと撫でながら微かに首を傾げた。
「シーフは総じて攻撃力がさほどあるわけじゃねえからなあ……何とも言えないが。ヘルハウンド辺りでも、束になって来られたら結構苦戦するんじゃないか?」

シンなんか俺より全然強いですけど。
「シンはチャクラムで人の首とか魔物とか、ばんばんふっ飛ばしてたよ」
「そりゃあ魔力付与道具だな」
「え、そうなの？」
「ああ。普通のチャクラムにそこまでの攻撃力はねえよ。……シーフは基本的にはそういう特殊な武器でも持ってない限り、魔法攻撃が出来ない。魔法を必要とするような相手だった場合は、ちとしんどいだろうな」
「どうだった？」
３人の待っているところまで戻ると、ニーナが小走りに駆け寄りながら尋ねた。
「おお。別に何もねえな。左の方は結構続いてるみたいだった」
「右に折れたら、通路は真っ暗だったの？」
「ああ。まあ……行くなってことだろ。突き当たりだったぜ」
「……じゃあ、こっち、行ってみようか」
俺は視線を逸らして直進する通路の方へ体を向けた。歩き始めるとカンテラが点いて、道標のように俺たちを導く。
「……カズキ？顔色が悪いみたい……」
ユリアが俺のそばに寄って顔を覗き込む。苦労して笑顔を作り、何気ない振りを心がけながら口を開いた。
「何でもないよ」
「暗くなったから怪談してやったら、カズキの奴びびっちゃったんだよ」
「やだ、ホント？」
シサーが脇から助け舟を出した。それを聞いて、ユリアが吹き出す。……そういう、助け舟を出しながら突き落とすような行為は良くないと思う。
「あのねえ……」
「本当だろー」

言いながら前を歩くシサーの背中を軽く拳で殴った。すーごく情けない奴みたいじゃないか、俺。

……びびってたのは、ある意味本当だけど。

「それじゃあもうひとつ、とーっておきのオソロシイ話をしてやろう」

「……すれば」

言っておくが、怪談なんかこれっぽっちも怖くない。……あのさあ、これだけ魔物に遭遇してて、アンデッドモンスターにだって遭遇して、現実の方がよっぽど怖くないの？今更とか言わないか？

「何ぃ～？可愛くないなあ、お前……。んじゃ話しちゃうぞ。やだったって遅いからな。……昔な、ある山奥にな……」

いつの間にかシサーの漫談なんか聞く羽目になりながら、ぽわーっとカンテラに照らされる通路を進む。けどおかげで、衝撃的なものを見たショックは少しだけ和らいでいた。それを狙ったんだろうか。

……さっきのは、何だったんだろう。

仮に見つけたダガーが確かにシンのものだとしたら、何度も考えたようにシンはここに来たことになるわけだけど……あの奥の部屋の死体がギルドのシーフなら、シンの仲間なんだろうか。

……あれ。でも俺と別れた時にはシンはひとりだったし、あの死体は数ヵ月前……。

完全にシサーの話を聞き流しつつ、手だけは無意識にマップを埋めながらも、俺は自分の考えに沈みこんでいった。

――何度も来ている。

キサド山脈で言ったシンの言葉が蘇る。……シンはキサド山脈を何度も越えているんだ。恐らくは風の砂漠、ここのダンジョンを訪れる為に。

そうか……ギルドは風の砂漠のダンジョンや遺跡を調査したりしているってシサーが言っていた。シンはあのダンジョンを攻略する為にギルドに派遣されてたんだ。そして以前のクエストで、仲間を

失った。それが多分、あの死体。
以前失敗したこのダンジョンの攻略をする為にシンはここを再び訪れた。それが、俺たちと別れたあの後。
（……）
何か、大事なことを見落としているような気がする。
「……んでな、そこでじーさんはばーさんにこう言うわけだ。『ばあさん、あのゴブリンはキメラにやられて仲間が全滅して……』。……っておい。カズキ」
大事なこと……何だろう。仲間が、全滅……？
「こら。……こいつ、全然聞いてねえな」
仲間が全滅するような魔物……。
……何で、シンだけ無事に逃れることが出来たんだ？
「そういうことか……」
ある考えに行き当たり、心臓が高鳴った。足を止める。
ひとりでどこかへ向かったシン。落ちていたシンのダガー。何度も訪れている風の砂漠。レガードへの借り。全滅したシンの仲間。なぜかシンだけが助かった。……ワープトラップの、ダンジョン。
「あ？」
突如呟きながら足を止めた俺に、シサーも振り返りながらつられたように足を止めた。って言うか、全員止まった。が、そんなことにも気が付かないほど、俺は自分の考えに沈みこんでいた。
「……ありがとう、シサー」
「おお？」
「シサーの話、為になった」
「だろ？……って何だよ。気持ち悪ぃな」
嫌味かそれは……とぼやきながら再び足を動かすシサーについて、俺も手と足を動かしながら再び考え込んだ。
……間違いないんじゃないかと思う。
シンは、レガードにその生命を助けられたんだ。
だから全滅の憂き目を見る危険の中、多分たったひとり助かった。

そして助かったのがひとり……シンだけだったからこそ、シンはダンジョンへの再挑戦へひとりで向かった。

問題は、どうしてダンジョンのこんな奥深くにいるシンをレガードが助けることが出来たのかってことだ。

『王家の塔』へ向かわなきゃならないレガードは、こんなダンジョンに立ち寄る用事なんかない。

（そうか……）

今は完成されてない空間魔法――過去のエンチャンターには自在に扱うことが可能で、ここはその技術が活かされているダンジョンだ。今まで俺たちが遭遇したワープトラップは、あくまでダンジョン内部を飛ばされるものだった。でも、外へ飛ばすトラップがあるとしたら？

このフロアには確かにトラップガイドは見掛けない。でも、ここに入ってからたった1度だけ……あの死体の部屋の、宝箱に。

あれがもし、宝に手を掛ける不届き者を外へと飛ばす、侵入者を追い出そうとする種類のものだとしたら。

「カズキ？……おーい、カズキー」

「駄目ね、何か考え込んじゃってるみたいよ」

シサーは、あそこの扉の鍵はかなり厄介だと言っていた。何か特殊な宝があったとしてもおかしくない。けれど、あそこを訪れたのはその鍵さえも開錠する腕前を持ったシーフたちだった。当然、宝箱のトラップにも気が付いて、作動させずに宝物を入手した。

……そして思いがけない魔物に襲われ、仲間は全滅、戦闘の最中に偶然トラップに引っ掛かったか、敢えて作動させたかはわからないけど、シンは外へ飛ばされた。

恐らくその時シンは満身創痍の状態だろう。加えてこのダンジョンの周辺はバシリスクやサンドワームの多発地帯だ。いくらシンが腕が立つと言っても、ひとりでぼろぼろの状態で逃れられるかは正直疑問だ。

そこを、レガードに助けられた……？

「……そういう、ことだったのか」
「何だ？」
半ば呆然と呟いた俺に、シサーがまた足を止めて振り返る。
「……実はさ……思いつき、なんだけど」
そう前置きをして、再び歩き出しながら俺は今浮かんだ自分の考えを話した。もっとも、さっきの行き止まりに死体があったことは、伏せたままで。
「なるほどな……」
俺の意見を聞いて、状況を正確に把握しているシサーが考え込む。ユリアたちはさっきの死体を見ていないから、何で俺がそこまで考えたのかまではわからないみたいだったけど。
「ただ、わからないのはレガードの行方だな」
「やっぱりシンが鍵だったんだ。……根拠はないけど、多分、シンが知ってると思う」

第1部第23話　風の砂漠～ダンジョン6～（1）

俺があんまり真剣に考え込んでいたので、地図を持つ俺に声を掛けるのを憚られてたらしく、いつの間にかシサーの勢いに任せてうねうねとダンジョン内を歩き回っていた俺たちは、回り回って元の場所に戻って来てしまっていた。元の場所……さっきの、異臭の部屋へ続く道。

「何？何か変な匂いがする」

「ああ、さっき腐敗しかけてる魔物がな……」

「やだッ」

「嘘ッ」

「ほら行くぞ。どっちにしてもそっちは行き止まりだ」

さっきシサーと俺が折れたのと反対の道……左手の、ちょっと先が長そうな通路に向かって足を向ける。俺はまだぼんやりとレガードの行方を考えていた。

シンがかなり有力な情報を持ってるんじゃないかとは以前も思った。多分その直感は間違ってないんだと思う。

じゃあ、シンに再び会うにはどうしたら良いんだろ？

ギャヴァンのギルドの人間だってのはわかってるんだから、ダンジョン出たらギャヴァンに向かえば良いんだろうけど、ギルドの場所ってのは一般の人間にはそうそうわからないらしい。

ギャヴァンで名前呼びながら練り歩くわけにはいかないし。

「わあ。凄い」

俺の後ろでユリアが不意に華やかな声を上げた。思わず顔を上げる。

これまでの通路と違う、ちょっと広いスペースが目の前にあった。部屋って言うには扉とかどこにもなくて、通路からそのまま流れ込んでて、反対側にもそのまま通路に続く出口があるのが見える。天井もここだけ少し高くなっていた。５メートルとかそんくらいあり

そう。
　ユリアが声を上げたのは、その、部屋と言うよりはホールだとかロビーだとかって言った方が正しいような空間の壁に描かれた壁画だった。俺も思わず目を奪われる。壁一面に大きく描かれた1枚の絵。
　ずんぐりむっくりな人物がこちらに背中を向ける形で船の舳先に腰かけている。船には財宝が積まれているみたいだ。波は結構荒い感じで描かれていた。遠くに微かに陸地が見える。
　その表現力の凄さは、絵心なんか微塵もない俺の心さえ打つほどだった。波のひとつひとつの猛々しさと心細そうな人物の後ろ姿の、その対照。そのくせ、繊細な色使い。
「ドワーフね」
　俺の後ろに立って腕組みをしながら、やはり壁画を見ていたニーナが言う。
「ドワーフ？」
　ってのも、シャインカルクにいた時に耳にしたな。土系の、妖精族だったはず。
「これがドワーフなの？」
　視線を壁画に戻しながら問うと、ニーナはしかめ面で答えてくれた。
「そうよ。鈍重な大地の妖精」
　鈍重なって……。
「なあーんか意味ありげだよなあ」
　キグナスの言葉を受けて、俺はユリアを振り返った。からかうように言う。
「これはメモしないの？」
「無理言わないで」
　ユリアは小さな唇を尖らせて、俺を睨むように言った。
　これを写せたら画家になれる。
「こっちに何か書いてあるぜえ」

既にホールの奥の方まで行ってしまったシサーの声が聞こえた。
通路のすぐ手前で何やら壁画の下の方にしゃがみこんでいる。行ってみると、シサーの前には小さな金色のプレートがあった。壁画に係るように壁に設置されている。板チョコくらいの大きさ。
「何て書いてあんの」
「『うみにみえるところ
うみのめがみがあらわれるとき
うみへつづくみちをさがせ』」
とにかく海に行って欲しいらしい。
「これ、俺、わかるかもしんねえなあ……」
プレートを読み終えたその勢いのままでシサーが呟いた。
「何だ？」
キグナスがシサーの横から覗き込んで首を傾げた。
「このダンジョンって『3つ目の鍵』が眠ってたわけだろ。今はないにしても。で、その前に『7つ目の鍵』と『2つ目の鍵』があったわけだ。それを揃えて最終的に向かう場所のヒントを示唆してるんだろうと思うんだが」
「うん」
「ラグフォレスト大陸なんじゃねえかな」
浅黒い頬を人差し指でかきながらシサーが立ち上がる。
「俺、ラグフォレストのシュートって街で育ったって言っただろ。港のある商人の街だって」
「うん」
「港とは方向が違うんだが、近隣にあるんだよ。潮が引くと海の中に道が出来る場所が」
「海の女神ってのは？」
「これがちと微妙なんだけどな。潮が引くと、『人魚岩』と呼ばれる岩が姿を現す。人魚に見えるくらいだから女神にも見えるのかもしんねえなあ」
「その道を行くとどこに続いているの？」

ユリアが尋ねた。
「洞窟だな。ただし、行き止まりになってる」
「奥に入れないんだ」
「ああ。……まあ、わかんねえけど」
どっちにしても、１つも鍵を手に入れてないんだし、大体最終的に何があるのか知らない俺たちが行く必要があるわけでもないから、確かに良いんだけど。
何か謎めいてて気にならないって言えば嘘になるよな、やっぱ。
「ドワーフが造ったのかしらね……」
ニーナが再び壁画を見上げて呟くのと、突然シサーの足が地を蹴るのと、その腰から下げられたグラムドリングが発光するのはほぼ同時だった。後方へ退く。一瞬後、シサーがいた場所に紅蓮の炎が三筋、噴きつけられた。避けられたのは、シサーだったからこそだ。
「何だッ！？」
剣を鞘から引き抜きながらシサーが怒鳴る。通路の陰からのっそりと姿を現したのは、いかにも獰猛そうな猛獣だった。犬のような姿をしているが、ヘルハウンドとは違う。首が、３つ。後方で揺れている尻尾は、ふさふさの毛は生えておらず……そう、どこか大蛇の尻尾を連想させる。ヘルハウンドより更に大きく、あろうことか３つの首の周りからは無数の蛇が生えていた。思い思いに蠢いている。お前はゴーゴンか。
時折、蛇から噴霧のような赤紫の霧が舞った。もしかすると毒……。
３つの頭部が真っ黒い牙を剥き出しにして、金属音のような唸り声を上げた。
「ケルベロスだ！！」
キグナスが後方へさがり、ロッドを構えながら叫ぶ。俺も腰の剣を抜き放った。
「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ！！その身を裁きの矛と変えよ。ポエブス！！」

ニーナが『光の矢』で先制攻撃を放つ。だが、ケルベロスはその巨大な図体に似合わない敏捷さでそれを避けた。前進する。阻むようにシサーが前方へ飛び出し、剣を振るった。対峙するように首を振ったケルベロスの頭が1つ斬り飛ばされる。伴って血糊と、蛇の首がいくつも壁面へ飛散した。

「やった……」

つったってまだ2つも頭があるんだけど……と思ったら。

「げえ……嫌な奴」

斬り飛ばされたはずの頭がみるみるうちに再生する。

「アモル・オムニブス・イーデム。我らを守りし偉大なる女神ファーラよ。汚されし者の邪悪な手を清めたまえ！！」

ユリアが防御魔法を放った。薄い乳白色の光が一瞬だけシサーを包み込む。続けてキグナスが『水膜』を張った。最初にケルベロスが炎を噴き出して来たからだろう。

舌打ちしながらシサーはその身を跳躍させた。合わせてケルベロスも地面を蹴り付ける。真一文字に描かれた剣の軌跡とケルベロスが交差した。着地した瞬間を狙って、俺の剣がその足を狙って払われる。

シサーの剣が負わせたらしい太い胴の傷から血が扇状に飛び散った。ばたばたっと大粒の雨が地を叩くような音を上げて床に鮮血を描く。立て続けに襲った俺の剣で僅かにたたらを踏むと、鱗で覆われた尾を俺目掛けて一閃させた。

「ぐぅッ……」

腹にくらって後方へ叩き付けられる。その間にシサーが背後から踊りかかっていた。再び斬り飛ばされる首。ニーナの『石弾』とキグナスの『風の刃』がほぼ同時にその胴体に叩き込まれる。

が。

「埒があかねえッ！！！」

飛ばされた首に新たな頭部が再生された。僅かに尾を振り上げるような仕草をして地面に四肢を踏ん張る。頭部を低く構え顎を引い

た。ヘルハウンドに酷似したその仕草……ファイアブレスの初動動作だ！！

「来るぞッ！！！」

言いながらシサーは左後方に跳んだ。キグナス、ニーナも散開する。最初からかなり後方にいるユリアはその間に『祝福』の魔法を発動させた。やや遅れて俺も地面を蹴って右に跳ぶ。

「うわッ」

三筋の炎が噴き上がった。冷気を孕むはずのここの空気が一挙に熱いものへと変わる。ケルベロスは炎を口から迸らせたまま、その首をもたげた。辺りを睥睨するように顔を振る。掃射された炎を受けて、キグナスの体が後ろへ吹っ飛んで行った。

右手に回り込もうと剣を構えたまま、駆ける。反対側からシサーが剣を振るった。ファイアブレスを飲み込み、ケルベロスが足を薙ぐ。それを軽く避けるが、続けざまに尾がシサー目掛けて叩き付けられた。

「くッ……」

避けきれずに呻きを上げてよろめく。そこへ鋭い牙が襲い掛かった。

「シサーッ！！」

叫びながら俺は振り上げた剣を打ち下ろした。斬り飛ばす、と言うわけにはいかないけれど、シサーに気を取られているケルベロスの首の１つに刃が食い込む。ぱっと血飛沫が上がった。

「ギィィアアアッ」

怒り狂った金属的な声を上げてケルベロスが頭を振る。シャァァァッっと言う音と共に、赤紫の煙が巻き起こった。酸味を含んだ刺激臭が鼻腔を突く。沁みるような痛みを受け、咄嗟に目を閉じた。

「げほげほげほッ」

「カズキッ！！」

ヤバイ、この感じは何か覚えがある。頭が痺れるような感じと全身が鈍磨したような重さ。毒だ。そう思った瞬間、全身に衝撃を受

けて体が浮き上がった。滑るように地面に背中から叩き付けられる。何か攻撃を受けたらしいが、感覚が鈍っているので良くわからない。

「再生を止めなきゃ堂々巡りだッ。キグナス、氷系の魔法は何があるッ」

遠くでシサーの怒声がした。何とか体を起こそうと試みる。が、思うように腕が上がらない。

「『氷縛』か『氷の矢』、『氷弾』なら使える！！」

「じゃあ俺が首を斬り飛ばしたら、再生する前に『氷縛』を首に叩き込んでくれ！！」

「了解ッ！！」

「アモル・オムニブス・イーデム。我らを守りし偉大なる女神ファーラよ。邪悪なものに侵されし体に浄化を」

不意に、体が軽くなった。毒の呪縛を逃れて、体を起こす。ユリアが解毒の魔法をかけてくれたらしい。だが次の瞬間に、再び赤紫の霧が舞い上がった。そばにいたシサーとニーナが直撃を食らう。シサーは何とか持ち堪えながら剣を薙いだが、ニーナがその場に崩れ落ちた。ケルベロスの前足がニーナの体を払う。

「……うッ」

咄嗟に地面を横っ飛びに蹴って壁の前に滑り込み、吹っ飛んできたニーナを受け止めた。勢いそのままに、ニーナを抱きとめたまま壁に背中から激突する。そこへユリアの解毒魔法が飛んできた。俺たちとは反対方向にケルベロスの首がひとつ飛んで行き、すかさずキグナスの『氷縛』が叩き込まれる。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、フォルトゥーナ・アウフェッレ・ポテスト・アニムム。『氷縛』！！」

「アアアアアッ」

雄叫びを上げて、見事に凍りついた首を振る。だが火系モンスターのケルベロスに、氷系の魔法は強い効力を発しているみたいだった。

「ありがと。……光を与えしウィル・オー・ウィスプよ！！その身

を裁きの矛と変えよ。ポエブス！！」

立ち上がりながらニーナは『光の矢』を放った。毒を受けたままのシサーは限界に達しようとしているらしく、足元が覚束ない。それでも振り上げられる腕や尾を避けているのはさすがと言える。

「アモル・オムニブス・イーデム。我らを守りし偉大なる女神ファーラよ。邪悪なものに侵されし体に浄化を！！」

遅ればせながらユリアが解毒魔法をシサーにかけた。続けて回復魔法。

「くっそ……しぶといッ」

駆けつけて斬りかかる。飛び掛って真ん中の首に上から剣を突き立てた。体重を掛けて貫くと、地面に降り立ちながら引き抜く。噴き上がる鮮血が俺の頬にまで飛び散った。

「『氷の矢』！！」

ユリアから、俺が傷つけた首目掛けて魔法石が投じられた。その脇で、シサーが残ったもうひとつの頭部を斬り飛ばす。血飛沫。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、フォルトゥーナ・アウフェッレ・ポテスト・アニムム。『氷縛』！！」

キグナスから止めの『氷縛』が叩き込まれた。

第1部第23話　風の砂漠～ダンジョン6～（2）

◆◇◆

キグナスの『氷縛』が致命的となり再生の道を閉ざされたケルベロスは、生き残った最後の頭を失ってその場に崩れ落ちた。あっと言う間に砂化して、さらさらと本当の意味で崩れ落ちた後、シサーは剣先でその砂山をツンツンと突きながら俺に言った。

「シーフたちが遭遇したのはこいつだったかもな。魔法が使えなきゃ、再生し毒も使うこいつの相手はきつかろう」

そのホールで僅かな仮眠をとった後、俺たちは先へ進むことにした。これ以上ホールにはめぼしいものはなさそうだったし、美術館じゃあるまいし、いつまでも壁画を眺めてても仕方ない。

下り階段に辿り着いたのは、それから本当に間もなくだった。シサーが覗き込むと、ゆっくりとカンテラが明かりを灯す。

「なーんで下るかね」

「地上に出たいっつってんのに、どんどん奥へと拉致されてってる気がする」

ああ、お日様が恋しい。

「ま、最終地点に辿り着きゃ、嫌でも外へ通じる道があんだろ」

「最後のアイテムを手に入れなきゃ行けない通路だったりして」

だから……キグナス……ッ。

「しょーがねーから下りてみっかあー」

階段は、短いものだった。１０数段くらいで階下に辿り着く。取り巻く空気はますます冷たい。さっきまでの戦闘での熱さはどこへやら、既に体が冷え切っているのが服の上からでも感じられた。

階段を下りてからは短い直進通路があって、４畳くらいの四角いスペースに行き当たる。両開きの、大きな扉がその行く手を阻んでいた。ちょっと豪華な掘り込みや装飾があって、何かラスボスでも

出てきそうな感じの入り口。取っ手のすぐ下には大きな鍵穴がある。
「『3つ目の鍵』があった部屋かな」
「入れんのか、これ」
行けなかったら、どうしたら良いんだろう。
シサーが扉に手を掛ける。鍵がかかっていることを危惧したけれど、幸いに杞憂に終わった。このダンジョンを攻略した人……多分シンが、鍵を開け放したまま帰ったんだろう。攻略したダンジョンをわざわざ鍵かけたりして元通りに戻す理由なんかないし。
ダンジョンそのものの入り口だとか、ここの部屋だとか、そういうところの鍵が『1つ目の鍵』『2つ目の鍵』なのかな。つまり、順番通りにダンジョンを攻略して鍵を入手していかないと、手に入らないような。
だからこそ、攻略することが出来なかったダンジョンなんだろうし。
ギィィィアアァァァ……。
老婆の叫びみたいな音を立てて、扉はゆっくりと開いた。何か飛び出してくるかもしれないから思わず全員構えてその様子を見守っている。開いた扉からシサーが中を覗き込んだ。
「……特に、危険はなさそうだな」
ラスボスがいるわけじゃないらしい。
言って扉を大きく開け放し、シサーは中へと足を踏み入れた。俺も続けて中に入り込む。
広い部屋だった。体育館……とまでは行かないけど、広さとしてはその半分くらいはありそう。天井もかなりの高さだ。壁や天井は石造りになっていて、何本か太い柱が部屋の中に突っ立っている。床の上に、何か銅像でも叩き壊したような残骸が2つほどあった。
何となく、京都の建仁寺の法堂を思い出していた。天井に有名な龍の絵が描かれているとこ。柱の他には特に何もないので、がらんとした感がちょっと似てる。
入り口の正面よりやや左手……一番奥の壁の中央には、顔くらい

の高さの位置に四角い穴が穿たれていて、ちょうど小さな棚みたいになっていた。ここから見る限り、そこには何も乗っている気配はない。その両サイドに門のように2本の柱が立っていて、天井までの高さはない。まるで何かの台座みたいにも見えるんだけど、それも何が乗っているわけでもない。

「ここに、鍵があったのかしらね」

ユリアが俺に追いついてきて肩を並べながら問う。キグナスが反対側の俺の隣に並んだ。ニーナはシサーと一緒に部屋の中央へ既に足を向けている。

「3つの鍵を集めると、何があるんだろうな」

「盗賊ギルドが集めるくらいだから、宝なんじゃないの？やっぱ」

「すっげぇのあったら、どうする？」

どうするも何も、俺たちは1本の鍵さえ手に入れてない。

「どうしようもない」

「何だよ、夢を持て夢を～」

「そういうの、夢じゃなくて妄想って言わないか？」

俺とキグナスのやり取りをくすくす笑いながら聞いていたユリアが不意に入り口の方を振り返って首を傾げた。

「あら？」

「ん？何かあった？」

「あれ……」

俺とキグナスも入り口の方を振り返る。

「あ、あんなとこにも魔法陣」

キグナスが呟いた。入り口の扉を開けたすぐ横の壁に、魔法陣が描かれていた。描かれていたって言うか、壁が掘りこまれていたって言うか。

「行ってみようか？」

シサーたちは、正面の壁穴の前で何か探っている。……ま、いっか。見に行くだけなら別に。

奥の壁穴はシサーたちに任せて、俺たちは魔法陣の方……入り口

の方へと戻っていった。
そんなに大きな奴じゃない。直径５０センチくらい。
「……」
……あれ？
「同じ奴か」
ちょっと背伸びをして魔法陣を覗き込みながらキグナスが言う。
同じ……そう、見える。見えるんだけどでも何だろ……違和感。
「何だあ？また謎解きか？」
訝しげな顔をした俺には気付かずに、キグナスがコンコンと魔法陣を叩いた。
……何だろ。どこがどうとは言えないんだけど、今までのと何か違うような……でも何が違うのか良くわからない。じろじろ見てたわけじゃないし……ただぱっと見た感じの印象が……。
「文字盤の配列が、違うわ」
「おわッ」
ユリアが呟くのにかぶせるように、キグナスがぎょっとしたような声を上げた。続けてがこッと言う音。見れば、その手には文字盤にはまっていたはずの文字が刻まれた石があった。
「……壊した……」
「ば、馬鹿。勝手に外れたんだよッ」
「こっちも外れるわよ」
腕を伸ばして隣の文字を引っ込抜きながらユリアが俺を見上げた。持ってて、とそれを俺に手渡して荷物から紙を引っ張り出すと、魔法陣を見比べながら首を傾げる。
「これの通りに入れ替えたら……どうかしらね」
「うん。とりあえずシサーたちに言ってみてからにしよう」
とりあえず石を元通りにはめて、シサーたちの元へ向かうべく歩き出した。シサーたちもこっちに向けて歩き出している。
「何かあった？」
「『３つ目の鍵』」

「えええ！？」
「……が、ここにあったらしいってことくれえか。……最後まで聞けよ」
じゃあ間置かないで早く言ってよ。
「ふうん。どうなってたの？」
「どっかの宝箱に鍵になるものが隠されてたんだな、多分。それを使うとあの棚みたいになってる部分の底面がスライドして開き、『3つ目の鍵』を収めた宝箱が現れるって寸法だったんだと思うぜ。……ま、詮無い話だな」
まったくだ。……と。
「うわ」
こっちに向かって来るシサーの顔を見つめながら話を聞いていたので足元が疎かになった。床に散らばってた銅像の残骸に蹴躓いて転びそうになる。
「……っぶな……」
「しかし、そのシンって奴が、仲間が倒れてから再度ひとりでここに挑んだんだとしたら、大したもんだよ」
何とかコケずに体勢を整えた俺に、半ば呆れてんだか感心してんだかわかんないような声音で言いながら、シサーは爪先でその銅像の残骸を突付きまわした。
「何で」
「謎解きやトラップなんかはお得意だろうから良いんだが。それに1度、2度、このダンジョンに入ってるんなら、あんなワープトラップに引っ掛かったりせずにこの上のフロアに直辿り着くだろうしな」
「うん」
「だが、こいつ……」
足先で尚も残骸をガシガシ蹴る。
「ガーゴイルだぜ」
「がーごいるッ！？」

ユリアとキグナスと俺は、思わずずざーッとその残骸から体を引いた。いや、何か気味が悪いじゃん……。

「ああ。恐らくここの宝の門番だったんだろ。しかもあっちと……」

手で、少し離れた位置に転がっている残骸を示して続ける。

「こっちとで2匹だ。そんなに恐ろしく強いわけじゃないが、こいつは魔法か魔法付与された武器でしか攻撃出来ないからな。ひとりで相手取るのはキツかったと思うぜ」

「……彫像じゃないの？これ」

「ゴーレムの一種だ」

ふうん……じゃあ、シンのチャクラムってのは結構なワザモノだったりするんだな。

「あと気になるのは、あの……」

言いながらシサーは背後を振り返った。『3つ目の鍵』が収められていたはずの壁穴に視線を向ける。その、壁穴の奥の壁がきらっと光ったような気がした。

「奥の壁だな」

「何か光ってるわね」

ユリアが首を傾げる。

「ああ。鏡みたいになってる。何だかな」

「最後だからって女性冒険者があそこで化粧直しをする……」

わけがない。キグナスを軽くどつく。

「そりゃあ無理だなあ……あの鏡板は角度がついてて天井の方を向いてる」

シサーも答えてやる必要ないと思う……。

「ま、いいや。そっちは？壁の魔法陣、調べてみたんだろ？何かわかったか？」

「ああ、あれね……」

どうも石が抜けるらしいことと、ユリアがメモに写した他の魔法陣との違いを述べながら魔法陣の方へ向かう。石を入れ替えて、ユリアのメモと同じ文字の配列にしてみようということを伝えたとこ

ろで、魔法陣の正面に辿り着いた。
「今度はパズルかよ」
シサーが面倒臭そうに言う。謎解きより矢を避けている方がお好きらしい。
「んじゃあいっそ、文字、最初に全部外しちゃおうぜえー」
キグナスの言葉で文字を一斉に取り外す。文字は全部で8個。メモを見ながらユリアが指示を出すことにして、他の4人で2つずつ石を両手に持つ。
「じゃあニーナの石からいきましょうか」
ユリアがニーナの手の中の石とメモを見比べながら言った。
「ええとこれは……右下の……ここ」
「ここ？」
「うん」
ガコンッ。
ニーナが穴だらけの魔法陣に石を1つ押し込んだ。
「次は？」
「これは……」
もう片方の石を覗き込んで、ユリアがまた穴を1つ指差す。
「こっち」
こんな調子でユリアの示す通りに、ひとつ、またひとつと石を穴に埋め込んでいった。
ニーナ、シサー、俺と穴に石を入れ終わり、キグナスの手に最後のひとつが残される。
「よっしゃ。じゃあラスト、入れるぜッ」
キグナスが最後のひとつを穴に押し込んだ。
瞬間。
「うおッ」
濃紫の光が魔法陣から放たれた。咄嗟のことで思わず目を瞑り、魔法陣の前から避ける。全員が魔法陣の前から身を引き、妨げるもののなくなった光は魔法陣の形のまま真っ直ぐに突き進むと正面に

位置する『3つ目の鍵』の壁穴の壁に突き当たり、その反射で天井へ向けて走った。そして天井に反射して、床へ――……。

――――――カッッ！！！

魔法陣の形を崩すことなく床へ降りて来た濃紫の光は、俺たちの周囲に魔法陣を浮かび上がらせた。ワープフロアの時と同じように、床に描かれた光の魔法陣から紫の光が突き上げる。

（……？）

やがて、目を眩ませる光の洪水が引いていくと、俺はゆっくりと目を開けた。辺りを見回す。

「……戻って来た……」

目の前の5本の通路。そして重要な、背後の塞がれた通路。

間違いなく、最初の、円形ホールだった。

第1部第24話　大神殿の封印（1）

シャインカルク王城内の階段を、ラウバルはやや急ぎ足で降りていた。足の下で緑色の絨毯が柔かく衝撃を包み込む。

王城内の通路は基本的に2種類に分かれている。赤色の絨毯が敷かれた通路を歩くことが出来るのは王族のみだ。他国からの使者などは敬意を表して歩くことを許されるが、宰相であるラウバルさえ例外ではない。無論、王族に伴われて外出する場合はその限りではないが、その場合も王族より退いた位置から絨毯を外れて歩むのが普通である。

緑色の絨毯が敷かれた通路は、基本的には貴族階級の通り道だ。女官や下働きの者が行き来する場合も多々ある通路だが、絨毯の上を歩むことは許されていない。

階段を下りきって、ホールとなっている空間を足早に過ぎる。途中、十字路となっている角で通り掛かった女官が足を止めて膝を折った。階級上の者が通る時の礼儀である。

「きゃ……シェ、シェイン様」

「おっと、失礼……ラウバルッ」

恭しく俯いた女官の口から悲鳴に似た声が漏れた。次の瞬間その声はどぎまぎしたものに変わる。通路からラウバルを見かけたシェインが飛び出して来たのだ。

代々宮廷魔術師と言う貴族の中でも特権階級とさえ言える家柄にあり、若く、才気溢れるシェインの名前が女官たちの間で囁かれることもあると言う。黙って立ってれば、整った顔立ちに気品があるのだから頷けなくもないのだが。

（……黙って立っていれば、な……）

本性を知らないと言うことは全く美しい。

「そんなに急いでどうした」

女官に笑顔を残し、シェインは足早にラウバルのそばへと歩み寄

った。今日はローブを身に纏っておらず、白いシャツに黒のパンツという至極シンプルなスタイルだ。書類仕事でもしていたのだろう。手に持ったロッドだけは相変わらずだが。

足を止めて振り返った姿勢のままラウバルは首を僅かに傾げた。

「急いでいるのはそちらに思えるが」

ラウバルのそばまで来て足を止めたシェインはきょとんとした顔で応じた。

「俺が？俺は別に急いでなどおらぬ。おぬしが急いでいたから、俺まで急ぐ羽目になった」

「……それは悪かった。何かあったのかと気を揉んだ」

「俺のセリフだ。そういう言葉が出るということはそういうわけではないのだな」

「ああ。大神殿に顔を出そうかと思ってな」

言いながら、一度止めた歩みを再開する。なぜかシェインまで並んで歩き出した。

「俺も行こう」

「……暇なのか」

「……失礼な。飽きただけだ」

やはり書類仕事らしい。居丈高に言い切ったシェインに小さく吹き出すと、シェインは横目でラウバルを睨んだ。

「何だかおぬしは俺と会話していると、俺を笑ってばかりいるな。もう少しよそでその表情を見せてやれ」

意外なことを言われて、ラウバルは微かに目を丸くする。その表情を読んでシェインは腕を組んだ。

「仏頂面ばかりしているから、『ラウバル殿は気難しい』などと言われる」

「怖いくらいがちょうど良かろう」

言いながら角を曲がろうとすると、シェインがぴたりと足を止めた。

「どうした？」

「街から行こう」
「街から？」
ファーラ大神殿は、レオノーラ内部にはない。レオノーラを出てやや南西に下った海沿いにあるのだ。だが政の要のひとりである大司祭が大神殿にいる為、シャインカルクから大神殿までは直結の通路が特別に設けられている。この為、王城からは街へ出ることなく、中庭を通じて大神殿へ向かうことが可能だ。要人が使用する通路である為、護りも堅い。
大神殿へ向かう際、ラウバルは常にこの通路を利用し、街へ出ることは滅多になかった。いつも通りそちらへ足を向けたのだが。
「シェイン」
「良いから」
シェインは構わず踵を返す。困惑しながらもラウバルはそれに従った。
「なぜ街からなど……」
「おぬしは街に出ることも滅多になかろう。いつもこーんな顔をしておるぞ」
言ってシェインはわざと極端にいかめつらしい顔を作った。ラウバルに関してはあながち間違いとも言えない。思わず吹き出す。
「そんな顔をしているか」
「しているな。その服で行く気か？」
言われて自分の服装を見下ろす。官服のままだ。身分の高い者、高位の役職にある者が大衆に顔を曝す場合には、身元を伏せるのが慣わしである。
行く気かも何も、行くつもりなどなかったのだとは言わず、ラウバルは黙って官服を示す上着を脱いだ。中に身につけている淡いブルーのシャツが露になる。
「邪魔だな。誰かに預からせよう。……おーい」
シェインは振り返って、先ほどすれ違った女官がまだ先ほどの場所からぼーっとこちらを見ていることに気が付いた。ひらひらと手

を振る。
「は、はいッ」
「すまぬ。預かってくれ」
言って大股に数歩歩くと、まだ距離のある女官に向かってラウバルの上着を投げた。
「システィーナにでも預けておいてくれ」
システィーナとは女官長である。４０を越えた女性で、仕事は出来るがいかめつらしさで言えばラウバルと良い勝負だ。
「か、かしこまりましたッ」
「行こう」
言ってさっさと歩き出すシェインの後に続いて王城を出る。門を守る衛兵たちが、ぎょっとしたように最敬礼をした。シェインがふらふらと出て行くのは見慣れたものだろうが、ラウバルと連れ立っていることに驚いたのだろう。
「歩いて行くのか」
「散歩だと思えば良い。たまにはゆっくりと外の空気を吸わねば気がおかしくなるぞ」
「……」
「特にここのところ、陰気な話しか舞い込んで来ぬからな。正直なところ頭が痛い」
そう言って微かに笑う。さすがのシェインも僅かに元気がないようだった。モナの海軍のことが気掛かりなのだろう。国を担う重鎮たちに意見を一蹴されたのがそれなりに堪えているらしい。ことがヴァルスの存亡に関わるだけに……。
「……」
シャインカルク城は街の中心部ではあるが入り組んだ場所にある。戦争の際に、仮に王都まで攻められようと一直線に大軍を送り込めぬように配慮されているのだ。国王がレオノーラから外へ出る時は、一度大神殿へ抜け出た後にそこから出立することが多い。
「……手応えは、どうだ？」

考え深げな視線を通りに落としていたラウバルは、顎に手を当てながら僅かに顔を傾けた。
「軍か？話にならぬな。ブレア将軍はともかく、スペンサー将軍が頑として国軍のギャヴァン派遣を認めようとしない。国軍将軍はブレア殿とは言え、スペンサー殿の方が長老ゆえな。地位としても禁軍将軍の方が上でもある。奴の首が縦に動かぬことにはブレア殿も身動きがとれぬ。……俺には軍を動かす権限などないからな。宙に浮いたままだ」
「そうか」
「ああ。このままでは遅かれ早かれ、危機的状況に晒されよう」
「私からも話してみよう」
「早急に頼みたいところだな」
宰相としてのラウバルの権限は、ヴァルスにおいてかなり強い。だが、政においてはその全てに及ぶ権力も、軍部となれば少々話は違う。地位から言えば国王に次ぐ立場にいるのだから軍部も言うことを聞かざるを得ないし、年齢で言ってもラウバルは誰よりも最年長なのだから理屈の上ではラウバルの命令は絶対なのだが。
軍部、特に禁軍はシャインカルクの中でも少々特殊なのだ。禁軍は『国王直営軍』との自負があるが為に、国王の命令以外は受け付けないと言う姿勢をとる。城内の縦社会における、将軍の自治部隊と言っても過言ではない。全くの別系統であるとは言え、国軍は意識の上では禁軍より下に位置する。禁軍将軍より国軍将軍が若ければ、尚のことその意志を無視することは難しいだろう。
「難しいかもしれぬがな」
禁軍を動かす国王は今や自分の体をベッドから起こすことさえ出来ぬ状態だ。意識不明の日も多い。もはやクレメンスは半月持つかどうか。……いや、良く持った方ではあるのだ。ガウナが心を砕いた延命が功を奏したとでも言おうか。
幾つかの角を曲がり、大通りに出た。色とりどりに着飾った婦人や若者が往来を華やかに闊歩する。その上品な活気に、ラウバルは

久方ぶりに触れた。
　ヴァルスの春は早い。冬はごく短い間だけで、既に仄かに春の気配が垣間見える。かと言って、地理を考えれば意外にも灼熱の暑さ、と言うわけでもない。ファーラの加護を一身に受けていると言われる所以だ。穏やかな気候は大地に豊穣な実りをもたらす。
　柔らかな緑の香りを運ぶ風に、ラウバルの白銀の髪が踊った。黄色い衣服の女性が多いことに気がつき、ふと首を傾げる。
「何か意味があるのか」
「え？……ああ」
　ラウバルの視線の意味に気がつき、シェインは苦笑した。
「今年は黄色が流行しているらしいな」
「シェイン！！」
　答え終わるか終わらぬかのうちに、通りに果物籠を積んで商売をしている年配の女性から声が飛んだ。
　身分を伏せる為に偽名を使う高級官吏も少なくないが、シェインは堂々と己の名前を公開しているらしい。さほど特殊な名前でもないからだろう。
「おう、メディア。どうだ、商売の調子は」
「おかげさんで」
　気さくに歩み寄り、果物籠からひとつ林檎に似たオレーアと言う果物を掴み取る。おもむろに齧り付いたシェインの手を、メディアと呼ばれた売り子の女性がぺしりと叩いた。
「お行儀が悪いよ」
　言いながらも真剣に咎める様子はない。恐らく、シェインが時々大量に果物を買い込んで来て城内でバラ撒いているのはここから仕入れているのだろうとラウバルは推測をつけた。
「ところであんた、変な噂耳にしたんだけど、聞いても良いかい」
「何なりと」
　しゃりしゃりとオレーアに齧り付いているシェインが頷くと、メディアは僅かに声を潜めて顔を近づけた。

「あんた、どこぞのお貴族様か何かなのかい」
「はあ？」
ラウバルは所在無くシェインとメディアのやり取りを静観していた。城外に出ることなど滅多にないので、街人とどう接して良いものか既に良くわからない。
「……そう言えなくもないがな。大したことでもないが。どこでそんなことを？」
綺麗に芯までバリバリと食べ終えたシェインが問い返すのを、「お前は野生の猿か」と思いながら眺める。
「『春霞の館』のミオが言ってたのさ」
シェインが出没する娼館のひとつだろう。ミオと言うのは馴染みの娼婦か。
「ミオが？」
ついでに指先までぺろっと舐めながらシェインが聞くと、メディアは軽く肩を竦めた。
「何でもあんたを嗅ぎ回ってる奴がいるって話さ。悪さしたんじゃないのかい」
「し過ぎていちいち覚えておれぬな」
「まったく、通りで物腰優雅だと思ったよ」
「おう。言わずとも気品とは滲み出るものだな」
「その割りに素行の悪さが目を引くからね。親御さんも嘆いてるんじゃないのかい」
「嘆き疲れて嘆くのをやめてしまったようだな」
嘯(うそぶ)くシェインに、メディアはくっくっと笑い、それからややや改まった。
「……お貴族様じゃあ、態度を改めた方が良いかねえ」
「いらぬ気遣いだ」
「そうかい？何にしても気をつけるんだよ」
「おう。……行こう」
毒気を当てられたように黙して2人を見守っていたラウバルを促

して、シェインは再び雑踏に足を向けた。メディアに軽く会釈をしてそれに続く。

「……と言うように、思いもかけぬ情報を与えてくれる」

「……なるほどな」

シェインが情報通なわけだ。

「市井に流れる情報と言うのは侮れたものではない。民間人は危機に敏感だからな。安穏と護衛で堅められた王城の奥に巣食う人間よりよほどいろいろなことを知っている。罪のない噂話と言うのはもちろんあるが、時に驚くほど真実に酷迫した情報を持っていることもある。……場合によっては情報の出所は誰かの想像であったりもするが、真実を突いていたりもするからな」

街人が大神殿へ向かうのと同じルートを大通り沿いに歩く。レオノーラから出て草原へ抜けても、道々に設けられたファーラ像が守護してくれるので、道中魔物に襲われることはない。ゆえに『聖なる道』と呼ばれる。

爽やかな風と人々の活気が平和を象徴するようで、ラウバルは小さく欠伸をした。このところ仕事に追われていて、ゆっくりと休んでいる時間がない。

「嗅ぎ回られているとは穏やかじゃないな」

メディアの言葉を思い出して言う。尤も、宮廷魔術師の身を案じるほどお人良しではない。

「ああ、そのようだな」

屋台に目を奪われながらけろりと言ったシェインは軽く肩を竦めて続けた。

「ヴァルスの高位官で最も狙いやすいのは俺だろうからな。まったくない話ではない」

「……」

思わず沈黙する。『稀代の天才』と装飾までつく宮廷魔術師のどこをどうすれば『狙いやすい』のか。

ラウバルの沈黙を正確に理解して、シェインは前髪をばさっとか

きあげながら答えた。
「こうもふらふら出歩いていれば、いくら身元を伏せようが筋の人間には自ずと漏れやすくもなる。シャインカルク城内にいる人間よりは街中をうろうろしている人間の方が狙いやすかろう。加えて人の噂には尾鰭がついていることもある」
つまり、軽い調子でふらふらと街を気安く出歩く宮廷魔術師など、噂ほど恐るるには足るまいと高を括るわけだ。確かに警護の堅い王城内部の人間を狙うのはそうそう出来ることではないし、そういう意味ではシェインが一番狙いやすいのだろう。……狙うだけ、ならばだ。手酷く返り討ちにあうのは目に見えている。
「ヴァルス周囲が水面下で慌しく利害を計算している。戦争が起こるのだとすれば、戦力は削るに越したことはなかろう。俺を狙う奴は増えるだろうな」
「ならば外出を控えた方が良いのではないか」
その忠告をシェインはさらりと一蹴した。
「これ以上控えていたら腐ってしまう」
大通りを歩く間に、シェインに声をかける人間は数多かった。他愛もない噂話から、ちょっと気にかかる情報まで幅広く入手する。
「おおーッシェイン！！！」
もうじき『聖なる道』へ差し掛かる辺りまで来て、小さな居酒屋前の路上テーブルで盛り上がっている一団のひとりが立ち上がった。明るい茶色の髪と抜けるような白い肌の若者だ。北部のどこかの国の出身の者だろうとラウバルは見当をつけた。ヴァルスには様々な国から人が流れ込んでいる。
「おう。ノース。盛り上がってるようだな。良いことでもあったか」
言いながらシェインはテーブルの上に広げられたフルーツや酒のつまみの盛り合わせに指を伸ばした。こうしてあちこちで摘み食いをして歩いているくせに、よくも太らないものだ。
「聞いてくれ！！ツェンカー自治領の新リーダーが決まったんだ！！」

「……何？」
シェインの視線がラウバルに微かに動く。それに答えて静かに首を横に振った。知らない。
「確かなのか？」
彼らはシェインが官職にあることを知らない。わざとフランクな調子で尚もつまみに手を伸ばしながら問うと、ノースと呼ばれた若者は照れたように頭を掻いた。
「へへ。実はまだ正式じゃないんだけどな。ほぼ確定だって話で」
「ほう？」
聞きながら頭を巡らせる。
ワインバーガ王国と並んでローレシア最北に位置するツェンカー独立自治領は、その呼ばれ方の通りどこの国にも属さず、国王も戴かない。いくつもの街から選ばれた代表者がそのツェンカーの政の中心人物となる。任期は5年。前リーダーのレオナードの任期がじき終わると言うことで、近々選挙が行われると言う話は聞いていた。
「ツェンカー北部の街ロドのアルディアと南部の小さな町ベイリアのルーベルトの一騎打ちになりそうだと言うことだったな。どちらなのだ」
「我らがルーベルトさッ」
「……ノースは、ベイリアの出身だったか？」
シェインの言葉に、ノースは誇らしげに鼻の下を擦った。
「もう、ノースったらこの前実家に戻って、その話を耳にしてから浮かれちゃって」
ノースの隣で呆れたように水色の髪の少女が言う。
「確か前評では、アルディアの方が有利だとか聞いていたが。ルーベルトは武力派だろう」
腕を組んで首を傾げたシェインに、ノースはびしりと人差し指を突きつけた。

第1部第24話　大神殿の封印（2）

「それが！！状況が変わったんだな！！」
武力派のルーベルトが当選確定と言うことは、まさかと思うがツェンカーもヴァルスへ戦争を挑もうとしているのだろうか。ツェンカーはかなりの破壊力を持つ重装歩兵を有している。戦力としては、かなり手強い相手と言えたはずだ。ワインバーガ王国との小さな紛争も絶えず、戦い慣れしてもいる。
暗澹たる気分になったラウバルだが、ノースの言葉は全く違う方向へと向かっていった。
「フレザイルの様子が気になってるんだ、ツェンカーは」
「フレザイルの？」
シェインが頓狂な声を上げた。恐らくラウバルと同じ方向に頭を廻らせていたのだろう。
「フレザイルが何だ？あそこには戦う相手がおらぬだろう」
「人はね」
「まさか……」
「トラファルガー……？」
シェインの後ろにひっそりと立っていたラウバルの呟きをしっかり受けて、ノースがびしりとシェインに突きつけた指をラウバルに向けた。
「まさしく！！」
「目覚めたのか？」
「や、それが良くわかんねーみたいなんだけどさ。時折、咆哮が聞こえるようになってるらしくって。まだ完全には眠りから覚めてないにしても、覚醒は近いんだろうって」
氷竜トラファルガーに備えて、武力派のリーダーが選ばれると言うわけか。ツェンカーはローレシアの中でもワインバーガやナタリアの一部と並んでフレザイルに近く、海の上に氷の大陸を望むこと

が出来る。トラファルガーが活動期に入って、その被害を最も受けるのは歴史を紐解いてもツェンカー地方だ。
「へっへー。そんなわけで、俺の故郷からリーダーが初めて出ることになりそうってわけだよッ。俺は鼻が高いよ……」
ノースはだぼだぼとグラスにエール酒を注ぎ足し、立ち上がったままそのグラスを天に翳した。
「かんぱーいッ」
「ほどほどにしとけよ」
苦笑してその場を離れる。道を逸れて『聖なる道』へと差し掛かると、人通りは急に絶えた。
「ツェンカー独立自治領も代替わりか」
「吉と出るか凶と出るか」
いずれにしても、正式に決定すれば外務官から報告は上がって来るだろう。情報を入手するシェインの手腕に、ラウバルは呆れて良いやら感心して良いやら区別がつかずに呟いた。
「……しかし見事なものだ」
「何もしておらぬが」
ただ歩いているだけで、あれほど声を掛けられ情報が寄せられるのは並大抵のことではない。ラウバルが頻繁に街に下りたとしたって不可能だろう。シェインならではなかろうかと心で結論を下し、民衆間の情報収集はやはりシェインに一任しておこうと密かに決意する。
「王女の様子はどうだ」
石畳を敷いた、幅2エレ弱ほどの『聖なる道』はその両側に花が植え込まれている。気の早い花は既に蕾を膨らませ、今にも花開きそうに見えた。心地良い風が緩やかにその葉を揺らす。等間隔で植え込まれているホーレフの木がさらさらと囁いた。
「何やら地下に迷い込んでおるようだ」
「地下！？」
「大方誰かがどじを踏んだのだろう」

今、王女と共に旅をしている面々を思い出す。女性2名はともかくとして、男性3名はいずれも何らかのポカをしてもおかしくないような気がしたので、シェインが指すのが誰のことやら判別がつかない。

風の砂漠には確かに前人未踏のダンジョンや遺跡がまだ残っている。そのうちのひとつに迷い込んだと言うことだろうか。おいそれと間違えて迷い込めるような場所でもないはずだが。

「レガードの手掛かりがあるやもと思って入り込んだらしいな」

「そうか……」

「調査隊と遭遇したそうだぞ。じき戻るだろう」

草原に新しい緑が息吹き始め、ゆるゆると昼下がりにこうして大神殿への道を歩んでいると、ふと現状の忙しさを忘れそうな気がしてしまう。

現在、シェインの進言を受けて、使者を飛ばす各国の割り出しと使者の選出、そしてヴァルス領内の各町村への出兵準備の通達などを行っている。兵糧や武器、防具の調達も行っておかなければならない。キール島の海軍も、共有海域上のモナ海軍を刺激しないよう準備を進めるように通達してある。

モナかロドリスかと言う点はこの際置いておいても、いずれ必要になることは火を見るより明らかな為、この辺りについては重鎮たちも協力的だ。

「モナは、相変わらずか」

「……どう踏む？」

逆に問い返される。

シェインは、幾つかの国に間諜を飛ばしているはずだ。尤もこれは全くの個人の裁量でやっていることなので、その報酬は自らの懐から支払われている。よってどこの国に何人飛ばしているのかまでは関知していない。することでもない。

「私はお前と同意見だ」

「と言うと、モナは友軍ではないと」

「ああ。フレデリク公には一度だけお会いしたことがある」
「先の戦争の折りか？だが、あの時はおぬしは……」
遮るようにラウバルは首を横に振った。ナタリア・マカロフ戦争においては、ラウバルは出陣していない。シェインもまた同様だ。2人が戦陣に立つとすれば、それは直接ヴァルスに関わる大事にのみ限られる。
「いや、もっと公が幼少の頃だ。まだほんの6歳、7歳……そのくらいだったろうか」
モナに王子が誕生した際の祝いの席であったと記憶している。フレデリクの弟だ。クレメンスの代理人としてラウバルと当時の外務大臣が祝賀の為モナを訪問したのだった。その頃シェインもまだ10歳やそこらだろう。王城に出入りするようになるのはその6年後だ。
「ほう。どう見た」
「屈託のある方だと」
「……ほんの子供が？」
「ああ」
厳格な父王とフレデリクは確執があったと言う。厳しい教育を施されてきたフレデリクは、冷酷無比な寡黙な男として育った。幼いながらに、皮肉な色を瞳に浮かべていたことを覚えている。あの時、何やら寒いものを感じたその印象は見事に的中してしまったようだ。
「ヴァルスの政治にひどく興味を覚えていた。軍部に関して、或いは政治に関して、幾つもの鋭い質問を投げつけて来ていたな。外務大臣がまごついていたぞ。君主としての資質を感じた。いや……」
君主ではなく……。
「支配者か」
「そのように見受けられた。……風評では確かに、室内に籠もるのがお好きな物静かな青年と聞いている。柔和で、剣などろくに使えないと」
「ああ。一応、そのようになっているな」

「そう思わせるのが手なのだろう。しかもそれを、公位継承の遙か前から周囲に植えつけている。先見の明がある。……そして野心家だ」

「では俺の知る情報を曝そう」

シェインは硬い表情で視線を前に定めたまま言った。話の内容とは裏腹に、頭上を、春の訪れを告げる小鳥が囀りながら旋回する。

「新しい情報としては2つだ。まずひとつは、ロンバルトのレドリック殿下が行方不明だそうだ」

「では……」

「ああ。間違いなかろう。裏切り者はレドリックで確定だ。行き先はロドリス以外にあるまい」

「……。もうひとつは」

「モナは、ロドリスに使者を送った」

「何？」

「海軍を動かした翌日のことだ」

ラウバルの視線を感じているはずだが、シェインは前方に視線を固定したままで続けた。

「使者への対応及びその内容は不明。だが、明らかだな。モナはロドリスと手を結んだ。海軍の目的はヴァルス侵攻だ」

「その話を、スペンサー殿には……」

そこでようやくこちらに顔を向ける。険の浮いた表情だ。

「話すわけがないだろう。言ったところでどこまで信用するやら」

「拗ねている場合ではないぞ」

「拗ねているわけではない。告げれば情報の在り処を問われよう。情報源は、俺独自の情報網だ。果たしてその言葉を受けてスペンサーが動く気になると思うのか」

「……」

「我が国の重鎮たちは、自国の宮廷魔術師より他国との過去を重んじる風習があるようなのでな」

口調だけ聞いていればシェインが拗ねているようだが、言ってい

る内容は真実だった。恐らく情報の出所はシェインの放った間諜だと言ったところで、鼻で笑われることだろう。その結末はラウバルにも想像がついた。

「だが、ますます火急となるな。挟撃される日が近くなる」

「まあ、一概にそうとも言えまいよ」

「同盟か？」

「ああ。モナから使者が送られようと、速急に返事はしてないだろう。相手がモナであればロドリスも慎重にならざるを得まい。自分の信用が置ける各国との同盟が成立せねば動くとは思えぬ。……その場合モナの動きはどうなるだろうな」

コツン、と足元の小石を蹴飛ばしてシェインが呟いた。答えは出ている。

「……単独で仕掛けてくるか」

「だろうな」

頷いて、僅かに首を横に振った。

「いや、事実そうなるかはわからぬが……せめてそうあって欲しいと願うのみだ」

モナは既に海軍を動かしている。だが思うようにロドリスは動かない。モナは焦るだろう。いつまでもぼんやりと海上に浮かんでいれば、開き直ったヴァルスから先制攻撃をくらいかねない。ロドリスの同盟成立まで果たして待てるだろうか。恐らく否、だ。ロドリスの重い腰を上げさせる為、そして信用を勝ち取る為、功を焦ってヴァルスに仕掛けてくる。

……そしてまた、そうでなくてはヴァルスにも現状勝機がない。指導者のいない軍で勝利を収めるには、各個撃破するしかないのだ。

◆◇◆

大神殿は既に春であるかのように花が咲き乱れていた。美しく手入れされた庭は見る者の心を慰め、一時の平穏をその心に与える。

「やはりお出でになりましたか」
ラウバルがここへ来るのを感じていたのか、ガウナは既に大神殿の入り口に佇み迎え入れてくれた。尤も、シェインを伴っているとは思っていなかったらしく、小さな目を見開く。
「奥へ」
大神殿本堂へ続く入り口を回避し、廻る通路へ足を向ける。本堂沿いにしばらく進み、渡り廊下を通って更に奥へ向かった。
「アモル・オムニブス・イーデム。我が偉大なる主ファーラよ……封じられし扉を開きたまえ」
綺麗に整えられた木々の間を縫っていくと、大神殿の半分程度の大きさの堂がある。ファーラ大神殿に仕える司祭たちすらも立ち入ることの出来ない空間だ。何重にもガウナの護りの魔法が固められている。
白亜の石で出来た重い扉に向かってガウナが魔法の解除を発動させた。それからゆっくりと扉の取っ手に手をかける。開いた堂の内側にまずガウナが足を進めると、ラウバルとシェインもそれに従った。
中にあるのは、外から見れば意外なほど小さな部屋だ。天井こそ高いものの、床面積はほんの4畳程度である。入り口から正面には祭壇が置かれ、ファーラに奉納された供物や護符などが捧げられていた。両脇には太い柱を思わせる、やはり白亜の石棚があり、置かれた聖杯には聖水が注がれている。
そして……。
「『ストームブリンガー』か」
シェインが祭壇の後ろの壁の高い位置に視線を向けて呟いた。ここに入るのは初めてのはずだ。
「ああ」
白亜の壁の天井と床の中ほどの位置に、クリスタルで作られた透明の箱が固定されている。その中に閉じ込められた、闇色の巨大な諸刃の剣。――魔剣『ストームブリンガー』だ。

主が訪れたことを知ったのか、ストームブリンガーはキィィィ…と超音波のような高周波の僅かな音を立ててその身を微かに振動させた。呪われし魔剣が、己の欲求を主へと訴えかける。

――血ヲ……

「良く懐いているじゃないか」

口をへの字に曲げてシェインはストームブリンガーから目を逸らさずに呟いた。どう受け止めて良いものか迷い、ラウバルはその言を黙殺する。

ラウバルの知る限り、バルザックが執拗にラウバルを狙う理由のひとつがこれだった。黒衣の魔術師の望みは魔剣ストームブリンガーを手に入れること。……いや、前の持ち主はバルザックだったのだから、奪い返すこと、と言うべきなのだろうか。例えそれが不正に入手したのだとしても。

「いつ以来だ」

「グロダールだな」

「あれ以来か。さぞ腹が減ったことだろう」

「……」

ストームブリンガーは、己の意志で血を求める。そしてその刃を埋めた相手の生命を吸い取り、己が主に注ぎ込むのだ。主の方が剣に負ければ、ストームブリンガーの意のまま、ただの殺戮者と化すだろう。

現在の持ち主はラウバル。本来召還師とは、己の生命を削り、召還獣を呼び出して使役する為短命となるのだが、ラウバルの場合はストームブリンガーによって永き生命をもたらされていた。ラウバルの生命を繋いでいるのは、これまで手にかけて葬り去った生命だ。

そんな己を忌み、ラウバルは大神殿にこの壊すことも捨てることもままならぬ剣を封じた。持ち出すのは、戦場のみ。普段はごく普通のバスタード・ソードを帯剣している。

ふと、ユリアの曇った顔が浮かんだ。なぜラウバルがこの剣を持つのか、忌み嫌いながらも手放すことをしないのか、込み入った理

由をユリアは知らない。知るのはガウナのみだ。だが、シェインにしろユリアにしろ、ラウバルの長寿の秘密がストームブリンガーにあることは元より承知である。

自己の手で断ち切った生命を取り込み、生命を繋ぐことに苦しむラウバルを知り、ユリアはラウバルがこの剣を握って戦いに出る時、悲しい顔をする。優しい王女だと思う。

「守護を、強化することは出来ますか」

静かにガウナに問う。入り口間際で2人を見守っていたガウナは、小さく頷いた。

「私で出来る範囲は越えておりますけれども。大教皇にお願いすれば、可能でしょう」

「大教皇のお力をお貸しいただけるよう……お願い出来ますか」

「やってみましょう」

言ってガウナはゆっくりと奥の壁へと歩み寄った。その壁を節くれ立った手でそっと撫ぜる。その奥にもうひとつある、完全に封じられた部屋へと意識を向けた。

「ここに封じられし者も……暴れ出さないとは限りませんからね……」

振り返ってラウバルを穏やかな表情で見つめる。

「念を入れ過ぎるということはありません。可能な限り早い対応を心掛けます」

「お願いします」

「……戦の際には、お持ちになるのですね？」

ユリアと同じ、悲しい瞳をガウナはラウバルに向けた。シェインは口を挟まずに黙って2人を見つめる。ラウバルはその視線に応えて静かに頷いた。

「……はい」

「呪われし永き生命を繋ぐ為に……」

首肯する。

「義務が……誓いが、ありますから」

第1部第25話　隠された目的（1）

再びゆるゆると王城へと戻る道すがら、シェインが組んだ腕の一方で指先にリズムをとんとんと取りながら首を傾げた。赤い髪が風に靡く。

「あんなところにあんな堂があろうとはな」

「ああ……」

「だが、堂そのものの大きさに、ストームブリンガーの封印堂は見合っていないようだな。奥に何がある」

「……」

沈黙で応えたラウバルに、シェインは短く吐息した。問いを変える。

「……バルザックはなぜストームブリンガーを狙う？ソーサラーには剣など必要なかろうが。欲しいのは永き生命か？」

「……」

「グロダールの一件も、奴の策略だろう。目的はストームブリンガーを帯剣したおぬしなのか？どうやってグロダールをおびき寄せた」

またもラウバルは沈黙したが、今度はシェインも辛抱強く解答を待った。

やがてラウバルが静かに口を開く。その足元で芽吹いた新草を踏み分けるわずかな音が聞こえた。

「やつはただのソーサラーではない」

「……？どういう……」

「やつは一介の魔術師ではなく、本来の姿は召喚師――私と同じく、召喚師だ」

その言葉を聞いて、シェインは目を見開いた。歩みが止まる。先日鏡越しに言ったニーナの言葉が蘇った。

――精霊魔法あるいは、召喚魔法……じゃないかしら

では。

この状況において、風の砂漠に竜巻を巻き起こしたのはバルザック以外に考えられないではないか……！！

「……なぜ言わなかった」

歩みを止めたシェインを不審に思い、ラウバルが足を止めて振り返ると押し殺したような声が聞こえた。どきりとする。

「おぬしは俺に、秘密事が多すぎる！！」

向けられた視線に含まれる真剣な怒りに、ラウバルは驚いた。その瞳の色と相まって、まるで苛烈に燃え盛る焔のようだ。

「風の砂漠に竜巻が発生していることは調査団を派遣した後、おぬしの耳にも入っていたはずだ！！バルザックがジンを召還したのだとわかっていれば、みすみすユリアたちを『王家の塔』に向かわせずにギルザードに足止めしたものを！！！」

シェインとて、ラウバルが気楽に他人に言えない事情を抱えていることは感じている。だからこそ、かつてもそれとなく尋ねはしたものの、バルザックについては深く触れるのをやめることにした。だが事情が違う。興味本位や好奇心ではない。

「俺が信頼出来ないと言うのであれば、今そう言え。重鎮たちと軋轢など起こさずにうまくやる宮廷魔術師は他にいくらでもいよう。俺は別に地位にこだわりなどない。代わりがいれば、いつでも降りてやる」

「シェイン……」

言い捨て、ラウバルを追い越して歩むシェインの深刻な怒りを感じ、ラウバルは動揺した。

表面上の付き合いしかしない宮廷内において、シェインは明らかに異質だ。明け透けにものをずけずけと言い、己の感情や意志を隠そうとしない。若さもあるのかもしれないが、恐らくは本来持つ性格において、人によっては我侭ともとられかねないその奔放さが、ラウバルには好もしく感じられた。

堅物と言われ、恐れられるラウバルに対し、あれほど遠慮なくものを言う人間は他にいない。

６年前、王城に現れて、シェインはあっと言う間にラウバルの懐に飛び込んだ。だが、逆はどうなのだろう。

ラウバルは人付き合いを得意としない。何代もの王に仕えた間、最も『人間関係』らしきものを築き上げられたのはシェインをおいて他にいなかった。

「シェイン、待て」

秘密主義のつもりはない。ただ、言えぬことは確かにある。ストームブリンガーがラウバルの元に渡った経緯、そしてそれを狙うバルザックの思惑、封印堂の奥に封じられし者、そして大元となる、バルザックとラウバルの関係については、現段階で気楽に口には出来ない。それはある人物との誓いを破ることに繋がる。

ただ、シェインを信頼していないわけではない。かつて交わした誓いを頑なに守ろうとする真面目さと、人付き合いの不器用さが相乗効果でシェインとの関係を突き崩そうとしている。

「その、悪かった。隠しているつもりがあったわけではないのだが……」

「……魔術師であると同時に召喚師であると言うのは、可能なことなのか……？」

「は？」

どんどん遠のいていく宮廷魔術師の背中に慌てて追いついたラウバルが逡巡しながら声をかけると、シェインから返って来た言葉は全く予想だにしなかった言葉だった。

「……ああ、いや……通常は難しかろう。ソーサラーとエンチャンター能力を併せ持つのとはわけが違う。召喚には己の生命を削られるゆえ、双方体得する頃には普通は死んでいるだろうが」

虚を突かれながらも答えると、シェインは考え深げな視線を前方に向けた。

「怒っているのではなかったのか」

ようやく隣に並んで歩き始めると、シェインは目線だけをラウバルに向けた。

「ああ、怒っているな。だがこれで今後はそういうこともなくなろう」
「……」
「だとすればこれ以上、過ぎたことを愚痴たれていても無駄だろうが。言うことは言った。それで本当におぬしが俺を必要とせぬのなら、俺自身の力不足を認めて黙って王城を去ろう。それもまた致し方ない。だが」
「……」
「俺だっておぬしが本当に俺を信頼しておらぬなどとは思っておらぬ」
あっけらかんと言うその姿に、ラウバルは思わず肩の力が抜けた。がくっと肩を落とす。
「まったく……変わった男だ……」
「変わってるのはおぬしだろう。2度目はないぞ。今回はっきり言ったからな。話せぬことは話せぬと言えば良い。だが今後は、話せることは話してもらおう。おぬしの性格から自動的には言わぬだろうから、最低限俺が聞くことには答えを用意することだ」
シェインなりに譲歩しているつもりなのだろう。もしかすると言い過ぎた、と本人としては反省しているのかもしれない。
「……努力しよう」
「では話してもらおうか。おぬしが話せることと言うやつを」

◆◇◆

湯浴みを済ませ、自室に戻りかけたセラフィは鏡に映った自分の姿に一瞬視線を止めた。上半身は裸のままだ。決して筋肉質とは言えない華奢なその体の上を走る無数の傷跡。幾筋もの線のようなものもあれば、染みのように広がったものもある。
幼少の頃に刻まれたその刻印は誰に治癒の魔法をかけてもらうこともなく、心に巣食う傷と同様生涯消えることはないだろう。

暗い光を瞳に落としてセラフィは浴室を出た。階段を上がり自室に入ると、着衣を整える。

ここはハーディン王城内の居室ではない。フォグリア郊外に構えた邸宅だ。とは言っても共に暮らす血縁者をひとりとして持たないセラフィにとって、豪奢な邸宅など必要ない。加えて他人に干渉されるのをひどく嫌う為、貴族としてはかなり簡素な造りだった。大きくすればするほど、使用人を雇う必然が生じる。ならば小作りでも自分の手で賄いきれる範囲のもので良い。どうせほとんどはハーディンで過ごしているのだ。今回ここに戻って来たのも、1ヶ月ぶりとなる。それに、身の回りのことを自分でやるのは嫌いではない。

外出の支度を整えたところで、ドアが控えめにノックされた。微かに顔をほころばせて答える。

「開いてるよ」

いつもの、グレンに『他人を騙す』などと評された意図的な笑顔ではない。自然な笑顔だ。

そっと扉が開かれて、この世界で唯一セラフィの領域に踏み込むことを許された少女が顔を覗かせた。

「おいで、マーリア」

両腕を伸ばす。

枯草色の肩まで伸びた真っ直ぐな髪と吸い込まれそうな夜空色の瞳。優しげだがどこか頼りなくきょときょとと動いている。痩せた体に纏う衣服は、宮廷魔術師の邸宅に居候しているとは思えないほど質素だった。別に買い与えてやらないわけではない。嫌がるのだ。

今年11歳になるマーリアは、セラフィにとって生涯かけてただひとりの大切な宝物だった。セラフィに招じ入れられてマーリアは、そっと押し開けた扉から中へと体を滑り込ませる。あどけない笑顔を浮かべ、とたとたとセラフィに駆け寄った。広げられたセラフィの腕の間に飛び込む。

「セフィ」

かつて住んでいた村が全滅したマーリアは身寄りがなく、幼い頃

に母親から受けた虐待で脳に障害がある。言葉を上手く話せないのだ。出会ったのは7年前。セラフィが17歳、マーリアが4歳の時だった。それ以来、親とも兄とも言える立場でセラフィはマーリアの面倒を見ている。

とは言っても、セラフィはこの邸宅にいることはほとんどなく、使用人を雇うことを嫌う為マーリアはひとりで過ごすことが多い。言語に障害があるとは言え、生活能力には別段問題があるわけではないのだが、幼い少女ひとりではセキュリティに不安がある為、エンチャンターである彼はマーリアを守るあらゆる仕掛けをこの邸宅に施している。お守り役として、ゴーレムも一体この邸宅を守っていた。マーリアの唯一の友人でもある。

「ごめんね、マーリア。僕はもう出かけなきゃならないんだ」

マーリアを腕に抱きとめたまま、耳元で囁く。顔を覗き込むとマーリアの顔が寂しげに曇った。

「ああ、そんな顔をしないで。今日……は無理かもしれないけど、明日にはまたここへ戻るから」

「ほ、ん、と？」

ゆっくりと言って首を傾げる。セラフィは笑顔を向けるとその頬に口付けた。

「本当だよ。だからそれまで、ラルと大人しくしておいで」

ラル、と言うのが、マーリアのゴーレムの名前だ。ウッドゴーレムの彼は、ストーンゴーレムほど武骨ではない。最初に造った小振りなストーンゴーレムはマーリアのお気に召さなかったようで泣き喚いたものだが、ウッドゴーレムに変えてみると大喜びだった。

「わ、た……。マーリア、まてる」

「うん」

たどたどしく微笑むマーリアが不憫で、再度抱き寄せてやる。本人が望めば街の学校に入れてやっても良いのだが、他人とうまく付き合えないマーリアはここでセラフィを待つことを望んだ。

「じゃあ……行くよ」

「は、い」
部屋を出て階段を下りる。階段の下に控えていたラルがマーリアと手を繋いだ。
「ラル。マーリアを頼んだよ」
物言わぬウッドゴーレムは、主人の言葉を噛み締めるように視線を注いだ。ラルと手を繋いだマーリアがセラフィに手を振る。それに笑顔を返して邸宅を出ると、セラフィは馬に飛び乗った。
セラフィの心の傷を癒してくれたマーリアの為なら何でもしてやりたいと思う。だが、最も彼女が望むこと……いつでもそばにいてやることだけが出来ない。
大通りを駆け抜け、ハーディン城へと急ぐ。モナからの使者が訪ねて来たと、宰相のユンカーから緊急に呼び出された。グレンもリトリアから戻って来たと言うことだし、久々に休暇とするはずだった1日が丸潰れである。マーリアに約束してしまった手前、何としてでも明日はこちらに戻らねばとは思うが、実際問題果たして可能かどうか。
バルザックに与えたロドリス辺境の森にある屋敷も、遠からず訪ねねばならないだろう。
（モナか……）
モナが海軍を動かしたことは知っている。だが、グレンの予想を裏切って、セラフィはモナには使者を飛ばしてはいなかった。完全に、モナの自主行動だ。
（どういう意図があるんだ……？）
モナはヴァルスに追従していたはずだ。陥落するのは容易ではないと踏んで、味方の勘定に入れていなかった。もちろん、こちらの味方についてくれるのであれば歓迎なのだが。
（おいそれと信用するわけには、いかないよね）
それに、こちらとしてもまだモナの動きに合わせて軍を動かすわけにはいかない。物事には段取りと言うものがあるのだ。クレメンスの崩御と同盟の成立までは、まだ見合わせたい時期だ。そして、

それまでにレガードの行方が掴めればベストである。
いざ侵攻、となって、ヴァルスがシャインカルク城からレガードを戴いて対峙してきたのでは洒落にならない。
慌しく王城に駆け込んだセラフィは、馬を衛兵に預けて正門へと駆けつける。うろうろとその出入り口付近でセラフィの到着を待っていたユンカーが、セラフィを認めて顔を輝かせた。
「セ、セラフィ殿」
「お待たせ致しました」
得意の笑顔を向けると、ユンカーはほっとしたようにセラフィを迎え入れ、急かすように足早に通路を急ぐ。
「久々の休暇のところ、申し訳ない」
「いえ。こちらの方が大事ですから。それで、モナの使者と言うのは？」
「現在陛下と謁見の間にて……」
一瞬舌打ちをしそうになった。ユンカーと言う男は真面目で善良なのだが、善良であるがゆえにセラフィにとっては今ひとつ使えない。気が小さいのだろう。もっとも、家柄も良く、官僚たちをまとめるには信頼に値する人物ではある。
（ろくでもないこと、言ってないだろうね）
ぼんくらとは言えども、カルランスは一国の主だ。彼の発言はロドリスの意志と見なされる。下手なことを口にしていなければ良いのだが。
「急ぎましょう」
言って通路を駆ける。相手の意図も見極めずに安易に馬鹿なことを国王が口走る前に辿り着かなければ。
「失礼します」
謁見の間に辿り着いて、ノックもそこそこに押し入った。突然開かれたドアに何事かと部屋中の視線が注がれたが、そこにセラフィの笑顔を見つけ、ロドリスの者は安堵の表情を、モナの使者はややぼーっと見惚れるような表情をする。

「遅れまして」
「良い。セラフィ、こちらへ」
カルランスが下ろされた御簾の後ろからあたふたと手招きをする。
そちらへ歩み寄るセラフィの後ろをユンカーが追い掛けた。
「お話はもう済まされましたか」
カルランスではなくモナの使者に尋ねる。見事な白髪で、顔に刻まれた皺は深い。整った身なりと気品から、相応の身分の人間と思われた。
「いえ、これからでございます」
「そう。良かった。わざわざご足労頂いて二度も話させてしまっては申し訳がないからね」
「は。お気遣い痛み入ります。モナより参りました外務大臣ローデツォと申します」
「宮廷魔術師のセラフィです。それで、ご用件は」
そつない笑顔を浮かべたまま、間髪入れずに問う。恐らくセラフィが駆けつけるまでの間、出来るだけ応接で待たせておいたのだろう。
「アルトガーデンの、現状と未来について、ご相談させていただきたく」
「現状と未来とは？」
セラフィが来たのでもはや解決と言わんばかりに、カルランスは御簾の後ろで黙りこくっている。その方がセラフィにとってもありがたい。
「我らが公王フレデリク2世陛下は、現在のアルトガーデンの将来について深く憂いております」
ローデツォは頭を深く下げたまま言を紡いだ。
「率直に申し上げましょう。モナはクレメンス皇帝陛下の決定に、不満を抱いております」
その、いっそ明け透けと言える言い方に、思わず吹き出す。
「良いのですか。そんな言い方をしては、モナはアルトガーデンに

叛意ありと受け取られましょう」
「そう取られても致し方ないかと。フレデリク公より、包み隠さず我らの意志を伝えよとの命でございましたので」
「では」
セラフィは笑顔を口元にだけ僅かに残してしまいこんだ。低く言う。
「ご存知ですか。使者の首と言うのは意外なほど価値がある。ヴァルスにあなたの首をモナ謀叛の報と共にお届けすれば、モナはいささか苦しい立場となりましょう。大臣となれば土産としての価値は一層上がる」
淡々と脅しを含めた発言をすると、ローデツォは表情を変えずに冷静そのもので頭を下げた。
「この白髪首ひとつでロドリスのご信頼をいただけるのであれば本望です。外務大臣としての職務も全うされましょう」
立派な覚悟だ。モナがロドリスの信頼を得るには一筋縄ではいかぬと腹を括ってきたのだろう。
「……失礼な発言をお詫び致します」
「いえ」
「では仮のお話をしましょうか。ロドリスにアルトガーデン粛清の意志があると仮定しましょう」
自国に対してはあくまで謀叛と言う言葉は使用しない。セラフィは立ったまま腕を組んでモナからの命懸けの使者を見下ろした。
「しかし、モナがヴァルスに相対するとどうして信頼出来ましょうか。これまでモナはヴァルス――アルトガーデンの恩恵を受けてきている。いささか虫が良い話だとは思いませんか」
「無論、やすやすと信頼を得られるとは思っておりませぬ。さすればこそ……」
「……海軍を動かした？」
「……は」
ローデツォは深く頭を下げた。セラフィは更に意地悪く問う。

「ですが、ロドリスが兵を挙げたとして、モナがこちらを攻撃してこないとは限らない。いやむしろ、これまでのモナとヴァルスの歴史を振り返れば、その方がより自然でしょう。いわく……『ロドリスに叛意あり』と」

「そのようなことは……」

「モナとしても、ヴァルスに相対することはいささか胸が痛むのでは？『忘恩の王』との謗りは免れぬでしょう」

ローデツォは顔を上げ、セラフィを見据えた。セラフィ以外の周囲の人間ははらはらと2人を見守っている。

第1部第25話　隠された目的（2）

「我が主も、心を悩ませておいでです。ですが、過去を重石として未来の可能性を摘み取ることは我らがフレデリク公の本意とすることではありません」

「いずれにしても、現段階ではロドリスは何の解答を与えることは出来かねます。――信頼を得るには、何らかの痛みが伴うものですね」

言外に、ロドリスと本当に組みたければ動いて見せろと告げる。その意図を正確に読み取り、モナの使者は低頭した。

「……は」

「ただし、時期を見誤ってはいけません。ひとりよがりは周囲に迷惑をかけることにもなりましょう。場を改めて、次回はフレデリク公にお話を伺いたく。……今日は、ここまでにしましょう。陛下、宜しいですか」

ようやく思い出したようにセラフィは形だけ御簾の後ろの君主に声をかけた。

「良い。おぬしに任せる」

「では、そのように。フレデリク公に宜しくお伝えいただきたい」

一層頭を下げて立ち上がったローデツォに声をかけると、ローデツォは立ち上がったままま頭を下げた。扉へ向かって歩き出す。

「ああ……」

その背中に、セラフィは最後の一言を投げ掛けた。

「誤解なさいませぬよう。……ロドリスに、叛意の意志は、ありません」

「……しかと」

ローデツォが退出すると、御簾がするすると巻き上げられた。カルランスがおどおどとセラフィを見詰める。

「ど、どういうことなのだろうな、セラフィ」

そこの胴体のてっぺんについているのは飾り物なのかと尋ねたくなる。笑顔を殺さず、カルランスに向き直ったセラフィは腕を組んだまま口を開いた。

「2つしかありません。ひとつは、ヴァルスの燻り出しの可能性。代替わりに際し、事実忠誠を貫く意志がある国と、ともすれば叛意を燻らせている国を炙り出すのです。もうひとつは、使者の言葉が真実だった場合ですね」

「と申すと……」

「モナに叛意があり、ロドリスと組んでヴァルスを叩きたいという意志です」

他に考えられまい。くどくどとつまらない説明をせねばならないことに頭痛を覚えながら、セラフィは頭を切り替えた。……果たして、どちらだろう。

（まあ、種は撒いた）

モナが本当にロドリス陣営につくつもりがあるのならば、近日中に行動を開始するだろう。モナがヴァルスを叩くのであれば、協力体制をとることにはやぶさかではない。しかしモナの目的と利害関係の擦り合わせも必要となるだろう。加えて先走られては少々困る。モナが単独でヴァルス侵攻を開始すれば効果は半減だ。どうせ組むのならば、挟撃しない手はないのだから。

「しばし様子を見ましょう。モナに対して軽はずみな態度は身を滅ぼすことにもなりかねない」

そう進言して謁見の間を退出する。続いて足早に自分の執務室へと向かった。リトリアからグレンが戻って来ているはずだ。

「グレン」

何の前触れもなく部屋のドアを開ける。瞬間がくりと床に伏しそうになった。

「……ここは君の寝室ではないよ？」

「はッ……し、しまった。ついうっかり……」

主のいない上司の執務室の長椅子で涎をたらして爆睡するとは良

い度胸だ。セラフィの言葉で目を覚ましたグレンはがばっと体を起こして口から垂れた涎を拭った。
「……涎はついてないかい」
「それも味のうちでしょう」
「……」
ついつい汚物を見るような視線でグレンと長椅子を見詰める。臆した様子もなく、グレンは寝そべっていた体を起こして長椅子にきちんと座り直した。
「それで？」
「リトリア国王の要求は以下の3点です。ロドリスのガレリア分割、現ヴァルス領土における一部の植民地化、加えてヴァルスの交易権の剥奪」
聞いて顔を顰める。グレンと対する形で長椅子に腰を下ろした。
「足元見てるな」
「ヴァルス領なんかもらっても困っちゃうって言っていた割りに、しっかりヴァルス領の植民地化も要求してますからねえ……いやはや。食えない食えない。セラフィさんと良い勝負……あいたッ」
手近にあったクッションをグレンの顔面目掛けて投げ飛ばし、セラフィは考え込んだ。
ヴァルス領に関しては問題ないだろう。戦争終結後に、同盟内で会議がもたれるはずだ。その際にどの国がどこを分割するかは決定される。交易権の剥奪に関しても、同盟諸国の望むところだ。問題はガレリア。しっかりとロドリスの力を殺ぐ要求をも突きつけるあたりは、抜け目がない。
ガレリア分割とリトリア出兵を天秤に掛けた損得勘定だ。
「で？」
「お互い検討の余地ありですねーと言い残して逃げ帰ってきました、はい」
「ああそう」
さすがにセラフィの一存で飲める条件ではない。議論の場を持つ

必要がある。
「他の諸国の動きはどうですか？」
立ち上がって部屋の隅のティーポットを勝手にごそごそと漁っているグレンの背中が問い掛けた。長椅子の背もたれに肘をつき、やや斜めにその後ろ姿を見遣りながら肩を竦める。
「ナタリアは問題ない。バートは返事を保留にしている。ヴァルスの様子を窺っているんだろう。キルギスも同様だ。ただしキルギスの方が手応えがある。時間の問題だろうね」
「そりゃあめでたい」
「……どのあたりが」
「保留にしているってことは、考えているってことですよ」
そう楽天的に行けば良いが。
勝手にお茶を注ぎ、セラフィの分と合わせて手に戻ってきたグレンは、再びセラフィの向かいに腰を下ろした。
「リトリアの件も含めて一度幹部会議が行われるだろう。追って指示を出すよ」
「ええ。……マーリアさんは、お元気ですか？」
グレンは不意に話題を変えた。セラフィは頬杖をついたままテーブルの上のカップに手を伸ばす。
「相変らずだよ。寂しい顔で僕を見送る」
「ハーディン城へ招いてしまえば解決なんじゃないですか」
グレンの言葉に、セラフィはゆっくりと首を振って茶を口に運んだ。
「マーリアには、見せたくない」
王城に渦巻く策略や陰謀を。……尤も、現在最たる陰謀を廻らせているのは他ならぬセラフィ自身だが。
――だからこそ。
「ハーディンのコワイお姉さん方が嫉妬に駆られないとも限らないですからねえ……」
グレンは両手を頬にあてると、大げさにぶるぶると震えてみせた。

セラフィが囲っている女性がいるとあらば、特にアンドラーシ辺りが怖い気もする。セラフィとマーリアはそういう間柄ではないのだが、何がしかの誤解が生じないとは限らない。

「でも一緒にいてあげられる時間が少ないんじゃないですかぁ？」

ぶるぶるするのをやめて、今度は縁側で日向ぼっこをしている老人のように背中を丸め、ずずーっと下品な音を立てて茶を啜るグレンに気のない視線を投げるとセラフィは遠くを見た。

「それで良いんだ。一緒にいる時間が増えれば、マーリアまで……」

「セラフィさん」

自嘲気味のセラフィの言葉に、グレンが声を荒げた。珍しいほどの真剣な表情を見て、セラフィは場も忘れて少しおかしくなる。

「前にも言ったはずです。あなたが汚れているわけではありません。……手を汚すのは、私の仕事なんですからね」

「……冗談だよ」

「いーえッ。今日と言う今日は私、断っ固としてッ！言わせていただきますッ。知ってますかぁ？私、怒ると怖いんですよぉ～？」

両手を腰に当てて鼻の穴を広げて言うが、残念ながら本人が意図したほどの迫力はない。

「セラフィさんは、マーリアさんと幸せになることだけを考えていれば良いんです。……あなたの傷は、あなたのせいではないんですから」

「わかってるよ」

全てを知るグレンの染み込むような優しさに、セラフィの答える声が、かすれた。

「……セラフィさん」

「……」

「……ヴァルス攻略に躍起にならなくても、マーリアさんは……」

「聞きたくない」

言いかけたグレンの言葉を、セラフィは目線を逸らしたまま制した。尚も何かを言いたげな視線をグレンはセラフィに注いでいたが、

黙殺すると諦めたように小さく溜め息をつく。
「それはそうと」
こほんと咳払いをしてグレンは調子を変えるように乗り出した体を背もたれに預けた。
「レガードさんの行方はどうなりました？」
セラフィは黙って顔を横に振った。黒衣の魔術師は現われない。
「近々バルザックを訪ねてみようとは思ってるんだ」
「おひとりで！？」
セラフィがバルザックと組んでいることを知っているのは、ハーディンでもグレンだけである。
「……そうだけど」
「いけません、そんな！危ないッ」
「危ないって言ったって……」
「あんな得体の知れないじーさんと2人きりになって、妙な気を起こされでもしたらどうするんですッ」
「は？妙な……？」
「襲われちゃいますよ……ごふッ……」
返す言葉を持たず、グレンとの間にあるテーブルから本を取り上げ投げ付けた。グレンは敢えなく地にひれ伏す。
「他に言うことはないのかい」
「ないれふ……」
グレンが情けない顔で潰れたまま答えたところで、カツカツと窓を叩く音がした。視線を向けると鳥が中へ入れて欲しそうに窓辺にとまっている。伝書鳩代わりのゴーレムだ。
『銀狼の牙』はセラフィの素性も知らなければ、連絡先も知らない。そのために『銀狼の牙』に貸し与えたのだった。古典的ではあるが、便利でもある。
「ようやく、か」
セラフィは立ち上がって窓辺に歩み寄った。窓を開けて伝書鳩を中に入れてやる。慌ただしくバタバタと中に入って来ると、伝書鳩

は真っすぐセラフィの腕にとまった。足には手紙がまきついている。
セラフィに本で殴られたまま長椅子に突っ伏していたグレンががばッと起き上がると、ぎょっとしたように体を震わせて飛び上がった。
「ゴーレムさえこの態度……こんなに頑張っているのに……。私の何がいけないんでしょうかねえ。セラフィさんだって私のことをちっとも評価して下さらないし、お給料もあげてくれないし、ごはんにも連れてってくれないし、お菓子もくれないし、特別手当もないし。セラフィさんだけじゃありませんよ。えええええ。セラフィさんだけだと思ったら大間違いです。そうです、大体この前花屋のチュリーザさんのとこにお邪魔した際にもですねえ……」
「……」
ぶちぶちと愚痴たれ出したグレンを放り、セラフィは小さく「ウェルブム」と呟くと、その足から手紙を抜き取った。セラフィ以外には手紙を抜き取ることが出来ないよう、呪文を施してある。
抜き取った、幾重にも折り畳まれた手紙を開くと見知った文字ではなかった。『銀狼の牙』の頭ヘルの文字ではない。とは言え、伝書鳩を飛ばすにも呪文が必要となる。間違いなくセラフィの元に飛んできたと言うことは、ヘルから託されたか……あるいは。
（消されたか？）
だが、誰に。
（決まっている……）
考えながら書面に目を落とし、セラフィの表情が真剣なものに変わる。あからさまに変わった顔色に、べらべらと誰ひとり聞くことのない講演をたれていたグレンが口を噤んだ。
「朗報ですか？それとも……」
「朗報、と言って良いのかな」
「何です？」
「レガードが見つかった」
「……！！」

「現在『王家の塔』をめざして風の砂漠を旅している最中だそうだ。『銀狼の牙』の頭はレガードに消された」
「……」
「『銀狼の牙』残党は現在レガードを追跡中。どうするか判断を仰ぐと言って来ている。……やっぱり生きてたみたいだね」
言ってセラフィがテーブルの上に投げ出した手紙を手にして一読すると、グレンはやや考えるようにして口を開いた。
「私が行きましょうか？」
「頼みたいのはやまやまだけどね。でも駄目だよ、それは」
「……そうでしたね」
近衛警備隊が次期皇帝を暗殺すれば、当然ロドリスはその責を問われよう。わざわざ異国の魔術師と辺境の盗賊団を使った意味がない。
「しかし、レガードさんが生きていたとなれば、ヴァルスの方も何か感づいたのでは？」
「だろうね。馬鹿ばかりじゃないだろう。まあ良いさ別に。明確な口実さえ与えていないければ、ヴァルスは仕掛けて来られない」
ようやく気を取り直したようにセラフィは再びカップを取り上げた。蔦の葉をモチーフにした美しいその模様を楽しむように眺めながら、しかしやや怒気を含ませた声で呟く。
「……バルザックは、裏切ったかな、やっぱり」
「なぜです？」
「『銀狼の牙』ごときに見つけられるものを、バルザックが見つけられないと思うかい？」
「んでもバルザックさんにも出来ないことはあるでしょうし」
「そりゃね。それは認めるよ。じゃなきゃそもそもレガードを仕損じたりしない。でもあのじーさんは、便利なオモチャを持ってるはずだ。名前までは知らないけどね」
「便利なオモチャ？」
「大昔の魔力付与道具だよ。どこで手に入れたんだか知らないけど」

「……どうするんです？レガードさんは」
膝の上に両肘を乗せ、組んだ両手に顎を乗せながらグレンは問うた。問いながら、その答えを知ってはいるけれど。
「決まってるだろう？」
優雅にカップを口元にようやく運んでセラフィは目を引くような華やかな笑顔を浮かべた。
「消すんだよ」

◆◇◆

セラフィの執務室を退室し、近衛警備隊第１隊室へと足を向けながらグレンは目を細めて窓の外へと視線を向けた。
王城内を歩くにはいささかお粗末なそのぼさぼさの髪に手を突っ込み、更にぐしゃぐしゃとかき混ぜる。もはや止めとさえ言えるその行動を通り過ぎる女官が不気味なものを見る眼差しで見ていたが、にへら～っと笑いかけてますます怖がらせておいた。……いや、グレンにしてみれば微笑みかけているつもりであって、怖がらせているつもりではない。
（わかってるんだかわかってないんだか……って感じですよねえ……）
それはお前だ、と言う突っ込みがどこからも入らないのを良いことに、自分をまんまと棚に上げ、空の青さを眺めながら、年下の上司の端正な顔を浮かべた。あどけないその笑顔の裏に落とされた影。抑圧された傷と痛み。
セラフィは自分の容貌が武器になることを良く知っている。それによって傷つけられてきたセラフィは、グレンと出会った時には既に逆にそれで自分を守る術を身につけていた。そして人を人とも思わない考え方を平気でしながら、そんな自分を自嘲している。
他人を信じず、愛さない彼にとって、マーリアは特別だ。恐らく、グレンもまた特殊な位置にいると思って良いだろう。そして逆もま

た然りだった。グレンにとってセラフィは、己の存在に意義を与えてくれた唯一の存在だ。セラフィとは逆に、心ではなく体に闇を宿すグレンを知る唯一の存在。

権力や地位にさして固執するようなタチではないセラフィが、ヴァルスの攻略とアルトガーデンの覇権に野心を燃やしているのは、それがマーリアの為に出来ることだと思っているからだ。ただし、それが本当にマーリアが望むことなのかと言うと……。

（セラフィさんさえそばにいてあげれば、マーリアさんは、それが幸せだと思うんですけどねえ……）

グレンはセラフィの望むように協力するだけではあるのだけれど……。

セラフィには、マーリアと幸せになって欲しいと密かに願っている。

2人の間にあるものが男女の愛情などではないことは承知の上だ。それに宮廷魔術師という地位にあればこそ、結婚関係さえ政治の対象となりうる。マーリアのような、過去に全滅し、現在は存在しない辺境の村の孤児とあれば不可能に近い。

（まあ……今のままでは、と言う話ですけど……）

セラフィの思惑通りにことが進めば、また違う意味で不可能だろう。セラフィ自身には、マーリアの幸せを望む気持ちはあっても、自分自身の伴侶にするつもりはまるでないのだから余計なお節介と言うところか……。

マーリアの村を全滅に導いたのは他でもないグレンフォードだった。危うくマーリアも、そしてセラフィをもその血塗れた刃にかけるところだったのだが。

（運命とは皮肉なもんですねえ……）

まさかこの自分が近衛警備隊などになってロドリス王城内をうろうろするとは。

魔物と紙一重だったあの頃には考え付きもしなかった。いや……。

（今も大して変わりはないですか……）

第1部第26話　思惑と想い（1）

「げほッ……げほッ……」

森奥深くにひっそりと建てられた屋敷の奥の部屋で、明かりもつけぬまま老人はむせこんだ。地下まで備える意外なほど広いその建物の、しかし一部屋しか老人は利用していない。黒い石を嵌め込んだロッドを節くれだった指先で握り締め、壁に手をつく。

（いささか……厳しいな……）

体にそろそろ限界が来始めている。このままではいずれにしても、長くはない。かつて得た生命力もそろそろ底を尽きようとしていると言うことか。

それを感じたからこそ、何としてでもこの計画でストームブリンガーを手に入れる為、多少の無理をしたのだが……。

（やはりジンを縛っておくのは負担が大きかったか）

かつて手にしていたストームブリンガーにより、バルザックは多くの生命力を吸収した。幾多の生命をこの手にかけ、それにより数百年の生命が蓄積されたのだ。

だが、どれほど貯蓄があろうとも、消費ばかりして補充しなければいつかは底を尽きる。召喚師であれば尚のことだ。いつの頃からか、老いることを知らなかった肉体はゆっくりと、しかし着実に蝕まれていった。

召喚を控え、言霊魔法を独学で身につけたことにより生命力の消費は節約されたが、それでもやはり人として生命を繋いでいれば死への行程は短くなる。

シャインカルク城へと何度も侵入し、ラウバルの持つストームブリンガーを奪い返そうとした。だが、大教皇ラムズフェルト4世と大司祭ガウナの神聖魔法で、大神殿の奥に厳重に保管されている為、邪悪な召喚獣を使役するバルザックはその聖なる空間に入ることは出来ない。

そこで考えたのが、ラウバルにストームブリンガーを帯剣させて引っ張り出すことだ。

ストームブリンガーはその邪悪さもさることながら、魔剣としての強力さも侮れないものがある。火急の時には必ずラウバルは帯剣するだろう。

黒竜グロダールを利用しようと考えたのは、ほんの思い付きだ。そしてその思い付きの為に竜の秘宝である竜珠を欲したバルザックは、休眠期だったグロダールに強力なイリュージョン（幻覚）の魔法をかけ、混乱させた。竜珠を奪い、怒り狂ったグロダールに竜珠はギャヴァンにあると幻覚を抱かせたのである。

ギャヴァンはヴァルスにとって重要な貿易都市であり、グロダールの凶暴さは半端ではない。しかも怒り狂っていると来ている。必ずラウバルがストームブリンガーを持ち出すとバルザックは信じた。果たして、ラウバルは帯剣して派遣された。だが、赤い髪の見習い魔術師と黒髪の傭兵に妨害され、断念を余儀なくされたのだ。

現在、バルザックはシャインカルク城にすら入り込めなくなった。もはや老い寂れた自分の身に残された時間はそれほどない。

これまでの道のりを振り返りながら、バルザックはロッドに嵌め込まれた黒石を弾いた。―グロダールの竜珠。

そんな折、飛び込んできたのがアルトガーデンの激震だった。クレメンスが倒れ、後継者はまだ年若い娘。

間違いなく諸国は目の色を変えるだろう。だが、下手な国が攻めたところでヴァルスを攻略するのは生半可なことではないし、通常であれば戦陣の陣頭指揮に当たるのは国王。ラウバルの役目はその間、王の代わりに王城の政を瑕疵なく治めることだ。

それではいくら混乱が起ころうと、バルザックにとっては意味がない。

ラウバルが国軍の陣頭指揮にあたるとすれば、代わる者がいない時だ。クレメンスは、病床に臥しているのだから問題はないし、王女は問題外である。排除すべきは、王女の伴侶―レガード。

レガード王子が戦陣に立つのと立たないのとでは、ヴァルス兵の士気が違うように相対する各国の士気も違う。バルザックの最終的な望みを果たすためには、そういった土台を整えることでヴァルスにそこそこ拮抗し得るだけの力を持った国でなければならない。そこで、ヴァルスにとって最大の仮想敵とも言えるロドリスに近付いたのだ。

バルザックにとって幸いだったことは、ロドリス国王が腑抜けであることと、野心を抱く宮廷魔術師がいたことだ。

ロドリス宮廷魔術師セラフィは、ヴァルスに戦争を仕掛けたがっている。無論、負ける戦争ではなく、勝てる戦争を仕掛けることを、ではあるが。

（だからこそ……）

バルザックはむせこみながらも、ゆっくりと椅子に腰を下ろし、水晶球にしょぼつく目を向けた。

広がる黄色い世界――風の砂漠。

だからこそ、バルザックは身の危険をおしてでも、負担のかかる上位精霊を呼び出して『王家の塔』への立入を封じた。

バルザックが見る限りセラフィは、ヴァルス王位にこだわっている。レガードが、あるいは王女かのいずれかが『王家の塔』を攻略してヴァルス王位を継承した後に、戦争を仕掛けて勝利を収めるのでは彼にとって意味がないのだ。レガードがいなくなることのセラフィにとってのメリットは、アルトガーデンの空位ではない。ヴァルスの空位と戦力の弱体化だ。

建前ではヴァルス領土を分割、ロンバルトを併合してロドリスの国力を増強し、アルトガーデンを掌中に収めることを目的としているが、国王はともかく宮廷魔術師の本当の目的は恐らくそんなところにはない。ロドリスが後ろ盾としてヴァルス王位をレドリックに継承させ、それを改めて排除することによってヴァルス王位を操れる、力。

（だが、知ったことではない……）

セラフィの目的がどこにあろうが、それが果たされようが果たされまいが、そんなことは関係はない。

肝要なのは、セラフィの目的がロドリスの国力増強でないが為に、仮にロドリスと無関係のところで誰かが王位を継承してしまえば放棄しかねないと言うところにある。

ロドリスには、陣頭不在のヴァルスを攻めてもらわねば困るのだ。新たな計画を練り直しているような時間は、バルザックに残されていない。

ストームブリンガーを手に入れて、そして……。

「……」

その先の、本当の狙いと言える考えに沈み込もうとして、バルザックははっと体を起こした。館に近付いてくる青い気配。――セラフィ。

連絡を寄越さないバルザックに痺れを切らして、先方からご訪問と言ったところのようだ。

（……どうするか）

レガードを逃してしまったせいで、ロドリスはなかなか重い腰を上げようとしない。確実にレガードを仕留めていれば、次期国王を失い混乱するヴァルスをナタリアと組んで勢いで攻める姿勢もあったのだが、タイミングを逃した為に慎重にクレメンス崩御と同盟の拡大に重きを置いている。

最終的にどちらが勝とうが知ったことではないバルザックとしては、時間も余りないことだし、さっさと始めて欲しいのだが。

（やはり、焚きつけるか）

視線の先には、砂漠を旅する『偽レガード』の一行がある。本物のレガードとは明らかに違うオーラを持つ、少年。

そして……。

その隣で黄金色の長い髪を揺らす少女に目を向けた。口元に薄く笑いを浮かべる。

これだけレガードにそっくりな少年なのだから、「本物だ」と偽

ってセラフィに首を差し出してやっても構わないが、ここまで来れば恐らくロドリスはいずれにしてもクレメンス崩御と同盟成立のタイミングを待つだろう。

それよりももっと、戦争が起こらざるを得ない状況にしてやれば良い。

（ヴァルス王女……）

通常ならば知るはずのない王女の顔を知るのは、バルザックが幾度もシャインカルクに侵入していればこそである。まさか王女自ら旅をしているなどと思いがけなかったことと、服装や髪型が全く違った為に気がつくのが遅れたが、この一行を何度か観察しているうちに気がついた。

利用出来るが、どう利用すべきかを検討していたのだが。

「そうさせていただこう……」

どうやらそれが、最も手っ取り早そうだ……。

「覗き趣味かい」

静かに、しかし高温を発する青の焔が部屋を訪れた。ゆっくりと振り返る。

「久しいな」

「そうだね。１ヶ月？それ以上？あんまり僕に会いに来てくれないもんだから、恋焦がれて僕の方から来てしまったよ」

ロドリスの宮廷魔術師は、美形と呼ぶに相応しい顔に笑顔を作った。だがその瞳にはどことなく険がある。

「光栄だな……」

「相変わらず陰気臭いね。せめて明かりくらい灯したら」

言ってセラフィは指に嵌め込んだ指輪から『灯火』を放った。言霊魔法で言う『導きの光』の上級魔法に該当し、灯す先を特に選ばない。

「……で？」

壁に肩を預けて、セラフィはゆっくりと腕を組んだ。バルザックを青い眼差しが見つめる。

「どうなってるのかな。その、水晶球に映っているのはレガード王子に見えるけど」
「ほう。目敏いな」
言ってバルザックはまたむせこんだ。ひとしきり咳き込んで、水晶球に向き直りゆっくりと撫ぜる。
「いかにも、レガードだ」
「ひとり占めする気だったのかな。僕がレガード王子を待ち焦がれているのを知っていて」
「誤解と言うものだろう。本物かどうか、様子を見ていたのだ」
「本物かどうか？どういう意味さ？」
「妙なことが起こっているようだ、と以前言ったはず……」
しゃがれた声が、『灯火』を灯して尚暗い部屋に響く。セラフィはその辛気臭さに僅かに鼻の頭に皺を寄せながら、バルザックの言葉に耳を傾けた。
「ああ……言ってたね」
「この水晶球にすら、しばしレガードの姿は映らなんだでな」
「なぜ？」
「わかりはせぬ……。良いではないか、今こうして映っている」
「……」
謎かけのような言葉で追究をかわし、バルザックはセラフィを微かに振り返った。真実のレガードは、未だこの水晶球にその姿を映さない。
「で、本物かどうかはわかったわけ」
バルザックは低い笑いを漏らし、明言を避けた。
「面白いことを教えてやろう。見るが良い」
言われるがままに水晶球を覗き込む。黄色い砂が吹きすさぶ中、５つの人影がバシリスクと戦闘をしているところだった。黒髪に赤いメッシュの入った少年――レガード。黒い長髪の、魔剣を握る青年。淡い金髪のエルフ。白金髪のソーサラー。黄金色に輝く髪と翡翠色の瞳の少女。

「これが？」
「ヴァルスの王女だ」
「……何？」
セラフィの顔に真剣な表情が宿る。――ヴァルスの王女？
「なぜ王女が……？」
「なぜだろうな」
「……」
王女がレガード王子と一緒に『王家の塔』へ？何の為にそんな真似を……。
「王女をどうする」
「……」
セラフィは忙しく頭を巡らせた。ヴァルス王女は重要なコマだ。消すか？だが消すことに何の意味がある。ヴァルスの王女を消してしまっては、レドリックにヴァルス王位を継がせることは出来ないのではないか。
……いや、そうとも限らない。レガードも王女も消えてしまえばヴァルスは後継者がいない。現国王クレメンスには兄がいたが、当の昔に王家の家系図から抹消されてしまっている。兄本人も死している。
無論時間を与えれば捻り出すだろうが、その前にヴァルスを叩いて終戦条約でレドリックの王位継承を条項に盛り込むことも可能なのでは。
――そう。ヴァルス王女などいなくても、不可能ではない。
しかし、その為には完膚なきまでにヴァルスを叩かなくてはならない。何の因果もなく王位を現段階で操ろうとすれば、ヴァルスの抵抗はかなりのものだろう。それならば王女と言う正当な血統を残した上で、そこへ結びつける方が遥かにヴァルスを陥落し易いはずだ。
諸国に対しては、アルトガーデンの帝位とは別に、ヴァルスをレドリックに与えると言う形を取れば文句は出ないだろう。何せ、レ

ドリックが継承する頃にはヴァルスは条約と言うナイフで諸国の皿に美味しいところを切り分けられている。

アルトガーデンの皇帝選挙はその後に『公正に』行えば良い。元々レドリックはヴァルスを継承するはずだったレガードと同じロンバルト王子。

それを利用すれば、ヴァルスとロンバルトの票は元より、エルファーラもヴァルス大神殿の票も集まる。

ロドリスの票は当面レドリックに投じられるし、ロドリスの言いなりであるナタリアも同様だ。キルギスは皇帝権にそもそも大して興味がないし、バートとモナはヴァルス分割の際の条件次第で票を獲得出来るだろう。

残るはリトリアだ。だがここまで来れば多勢に無勢である。ロドリスが後ろ盾となってレドリックをヴァルス王位につけることは、恐らくレガードの一件を持ち出して抵抗するだろうが、そんなものは簡単な言葉でかわせるのだ。

いわく――我々が不満を抱いたのは、帝国アルトガーデンの帝位を選挙なくしてロンバルトの王子が継承することである。帝国内の一国であるヴァルスを誰が継承するかは不満を抱くところではない。不幸にして愛する婚約者を失ったヴァルス王女が、その兄を婚姻相手として選ぶのは自然なことである。

つまり、ヴァルス王女には利用価値がある。尤も、消してしまったらそれはそれで、条約にレドリックのヴァルス継承を捻じ込むだけのことなのだが。

（流れは自然であるに越したことはないんだよね……）

「良い。ヴァルス王女は放っておけ」

王女であれば大した火種にはなるまい。

「生かす、と」

「当面はね。……『銀狼の牙』残党が、彼らを追っている」

「残党？」

「頭はレガードに消された。後はただの烏合の衆だ。心許ない」

「……」

「合流して、今度こそ間違いなく、レガードを消せ。必要なのは、レガードの首だ」

「よかろう。……朗報を、待っているのだな」

第1部第26話　思惑と想い（2）

◆◇◆

マーリアと約束したその日、幾つかの仕事を片付け、幾つかの仕事を放り出し、セラフィがフォグリア郊外の邸宅に辿り着いたのは既に夜半過ぎのことだった。マーリアは待ちくたびれて眠ってしまっていることだろう。約束を違えてしまったことに胸が痛む。

つい先だって、レガードの暗殺を指示してきたこの自分が、マーリアを待たせているだけでこれほど胸が痛もうとは。我ながら笑えてしまう。

馬を厩舎に繋ぎ、出入口の扉に手を伸ばしたセラフィはふと、中から漏れ聞こえてくる小さな歌声に気が付いた。

セラフィを、そしてグレンをも癒す、マーリアの歌。

エルファーラのどこかの村に伝わる歌だったはずだ。セラフィは思わずそこにたたずんだまま、か細い歌声に耳を傾けた。

知らず、当時のことを思い出した。

セラフィは元々、貴族などではない。いや、平均的な市民でさえなかった。ロドリス辺境の、孤立した寂しい村で生まれ育ったのだ。体中に負っている傷は、その頃実の親によってつけられたものだった。年を追うごとに女性を圧倒的に凌駕するほど美しく育ったセラフィに対し、父親は過剰な愛情から、母親は烈しい怨嗟から。日夜体と心に受けた暴行。心の崩壊はきっと、その頃から既に始まっていた。

そしてあの夜が訪れたのだ。

セラフィは自分の両親を、その手にかけた。明確な自分の意志を持って。

グレンもまた同じだ。裏の顔と、偉大な神官としての表の顔を持つ育ての親の血で刃を染め、故郷トートコースト大陸を追われた。

流れ込んできたのはロドリス辺境の村ヴァイン。――マーリアが母親と2人きりで暮らしていた、村。

グレンを育てた人物の、真実の姿は神官などではなく……。

（……？）

ふと気付くと歌声は途切れていた。しまった、ぼんやりとこんなところで考え込んでいる間に、待ちくたびれたマーリアは本当に眠ってしまったらしい。

そっと扉を開け、中に滑り込むと、仄明るい入り口そばの階段に座り込んでいるラルと、ラルに凭れ掛かって小さな寝息を上げている少女の姿が見えた。微かに軋んだ音を立ててラルが立ち上がろうとするのを片手で制し、マーリアに近付く。

すぐそばにしゃがみこみ、そっと顔を覗き込んだ。起こさぬよう気をつけながら抱き上げる。

「マーリア」

立ち上がり、その頬にそっと口付けると小さく囁いた。

「……マーリア。君に、必ず故郷を見せてあげる」

腕の中の温もりが、微かに身動ぎをした。

◆◇◆

開け放されたままのドアに寄り掛かり、ラウバルは形だけその扉をノックした。こちらに背を向ける形で机に向かっていたスペンサーがゆっくりと顔だけで振り返る。

「おお、これはラウバル殿」

「開け放したままとは開放的だな」

「天気が良いのでな。空気を入れ替えようと思ったのだ。王城内では何が起こるわけでもあるまい」

スペンサーは角ばったごつい顔に笑顔を浮かべてラウバルに体ごと向き直る。

シェインに対しては頑なな態度を見せるスペンサーも、その見た

目とは裏腹に遥かに年長にあたるラウバルにはそれほどでもない。無論、事実はさておき見た目が若ければこそ、無意識に若者扱いされることもしばしばだが。
「少々時間をいただきたいのだが」
「……ギャヴァンか」
「……」
ラウバルは無言で扉を閉めた。中に入り込む。
「軍の動向は現在どうなっている」
「国軍を3万、ラルド要塞へと差し向けた。禁軍は城内に留めてある」
「では差し向けた3万のうち、1万をギャヴァンへと至急進路変更していただきたい」
スペンサーの目に険が宿る。
「ラウバル殿ともあろうものが、あの若僧に影響されたか」
「影響されたわけではない。私はシェインと同意見だ」
「笑わせるな。危険なのはロドリスだ」
「モナは海路からギャヴァンへ必ず上陸する。上陸してからでは、遅い。仮にロドリスが動いたとしても、増援するまでに派遣軍2万と要塞の兵1万で持ちこたえることは出来よう」
「ロドリスは同盟を組んでいるのだぞ」
「成立までには時間を要そう。モナが攻めてくるのが恐らく先だ」
全く動じないラウバルに、スペンサーは歯噛みするように立ち上がった。
「ラウバル殿は、我々とモナの関係をご存知のはず」
「ああ。良く知っている。人とは時に裏切るものだと言うこともな」
「モナごとき、裏切ったところで……」
「ロドリスと挟撃されても、とるに足らぬと言えるのか」
「……」
「『モナごとき』と言うのであれば尚のこと、モナが先に攻めてくるのであれば撃破しておくべきだし、ロドリスと挟撃してくるので

あればやはり先に排除すべきはモナだ。いずれにしても、ギャヴァンに差し向ける必要を感じる」
「モナが友軍であると言う可能性は、既にラウバル殿の中にないか」
「ないな」
「……毒されておる」
「モナに派遣した使者は行方不明だ。恐らく王城ウォーター・シェリーの中庭にでも埋まっておろう。私はシェインの情報と分析を信じる。……ギャヴァンに国軍を派遣せよ」
埒のあかない会話に飽きて、ラウバルは居丈高に言い切った。スペンサーが唸るように言った。
「それは、命令か」
「宰相としての命令だ」
「何かあった場合、そなたの責任が問われよう」
脅すように低く言ったスペンサーに、ラウバルは失笑を向けて言い放った。
「良いだろう。全ての責任は、私が持つ」

（……ユリア）
シャインカルク城内の自室で書類に落としていた視線をふと窓の外に向ける。シェインのルビーのような赤い瞳に木々の木漏れ日が僅かに反射した。
一抹の不安が胸を過ぎる。
ラウバルの話は、わかった。バルザックがグロダールをギャヴァンにおびき寄せたことも、その目的も、ストームブリンガーを狙っているわけも、そしてバルザックが召還師であると言うことを話さなかったわけも。
（召還師としての能力を、控える為にソーサラーとなったとはな）
生命を繋ぎ止めるため、バルザックは数十年、いやそれ以上の期間に渡って召喚能力を封じ続けている。だからこそ、確証が持てなかったのだとラウバルは言った。

だが、控えると言うことはイコール使えないと言うわけではない。
……ユリアの身が、案じられる。
確かにシェインはユリアに防御魔法を施してあるが、それが万全ではないこともわかっている。例えば魔法を遮られた空間である場合。例えば――シェインを凌駕する魔法の使い手である場合。
（……わかっていたことではないか）
緩く頭を振り、不安な考えを追い払おうとした。
旅に出せば、どれほど心砕こうと、必ず危険は付き纏う。ならば引き止めれば良いものを、それが果たしてユリアにとって最良なのか疑念が湧くのを止められなかった。ユリアは飾り物ではない。意志のあるひとりの人間だ。王女と言う掛け替えのない身であらばこそ、本来ならば断固としてその責務の前に止めるべきだったのだろうが、シェインは一個人としてのユリアを尊重してしまった。
「……」
ふとその視線が動く。扉に近付いた。
「幾らだ」
「6千ギルと」
「待っていろ」
扉を開け、そこに陰のように立った男をひと目見て、シェインは僅かな会話の後部屋の奥へ向かった。金庫から金貨の入った皮袋を取り出す。それを手に扉に戻り、男を見据えた。
「話せ」
「モナがロドリスに送った使者は外務大臣です」
「……」
また、思い切った真似を。場合によれば命を落としかねない。
「対面の際に同席したのは、カルランス国王、宰相ユンカー、宮廷魔術師セラフィ他は不明。モナの使者は外務大臣ただひとり」
言葉を切った男に、シェインは視線で話を続けるよう促した。
「対応にあたったのは主に宮廷魔術師だったそうです。……以下は、報酬と引換えに」

シェインは皮袋を差し出した。代わりに書簡を受け取る。
「……カイザーに、宜しく伝えてくれ」
「……は」
カイザーはロドリスに潜入している間諜のひとりだ。男はその使者である。扉を閉めて部屋の中に戻りながら、シェインは書簡を開いた。視線を落として目を見開く。
（――だから言わぬことではないッ……）
ぐしゃり、と手の中の書簡を握り潰して、シェインは険しい顔をした。
再びのノックの音に、険を浮かべたままの表情を扉へ向ける。
「いるぞ」
「シェイン、国軍をギャヴァンに向けるよう……どうした？」
執務室ではなく私室にいたシェインを訪ねてラウバルがドアを開ける。シェインの顔を一目見て、頬に緊張を走らせた。
「……モナの海軍が、南下を開始した」
「何」
「次はフレデリクがロドリスを訪問するぞ」

第1部第27話　TORAUMA－傷－（1）

「だああッそっち！！そっち行ったッ」
「えッ、どっち！？」
「そっちだってばッ！！！」
「『風の刃』ッ」
「『炎の柱』ッ」
ずばーッ！！
――どごぉぉぉんッ。
「っしゃあ。いっちょあがりー♪」
地面に着地しながら、ぶんっとシサーが剣を振ると、その剣から振り払われた緑の粘液がびちゃっと俺の方目がけて真っすぐ飛んできた。……うわあ。
「これ、毒でしょ……気を付けようよ……」
寸でで避けて迷惑な顔で言うと、シサーは軽い調子で「おお、悪い悪ぃ」と手を振った。……だからさ。猛毒なんだからさ。
何をしているのかと言うと、飽きもせずにサンドワームとの戦闘中である。……ってか、終わったところである。いや別に飽きるとか飽きないとかって話じゃないんだが。やりたくてやってるわけじゃないんだけどッッ。
何とかかんとか、『3つ目の鍵』のダンジョンから抜け出した俺たちは、とにかく当初の予定通り竜巻渦巻く『王家の塔』を目指している。
ダンジョンに入って、当面わかったことは、『どうやらシンはここに来たらしい』ってことと、『シンはレガードとここで遭遇して生命を助けられたんじゃないか？』と言う憶測の根拠になるものを得たくらいだ。……どれも想像の範疇を出ないんだけど。別にシンを探してるわけじゃないし、レガードを示すものは実際は見つかっていないわけだし。

でも、ともかくシンが重要な鍵を握ってるってことと、逆にシンが何か知っているんであれば、レガードに緊急な危険は迫っていないんじゃないかってのが、今の段階での結論だった。

だってシンはレガードに借りがあるって言ってんだから、レガードの行方を本当に知っているんであればレガードに害を加えるようなことはないだろうし、逆に全然の見当違いで知らないんであれば……シンを訪ねてギャヴァンに行ったって、しょうがないわけだし。

いずれにしても確定事項でないわけだから、ともかく竜巻を探ってみようってことになっている。

「終了？」

レイピアを鞘に戻したニーナがへたりこみそうになりながら辺りを見回した。全員疑心暗鬼で周囲に気を配る。

だってちょっと、ひどかった。今の。

バシリスクが出たと思って、それとわぁわぁ戦ってたらサンドワームが足元から躍り出て。サンドワームの攻撃を避けながら、やっとこさバシリスクを倒してサンドワームと対峙したらそこへまた新たなサンドワームが砂を噴き上げてきて。２匹のサンドワームが砂中遊泳を自在に操って、ばかばかと出たり入ったりを繰り返すのを必死こいて倒し終えて「いえーすッ！！」と思ったら、またドシンドシンとバシリスクが現れ、「おいおいおいおい」なんて言ってる間に別方向からまたもいそいそとバシリスクがやって来て、「勘弁して下さい」と泣きを入れつつ、シサーが機転を利かせて互いに石化させることに成功、「いくら多発地帯だって言ったって多発過ぎ！！ここは集落か！？」と怒鳴りたくなるのを堪えていると地面が揺れてサンドワームがまた現れたのだった。

こうしてずらずら並べているだけで、いかに立て続けだったか。

へとへとだ。

大体、バシリスクだのサンドワームだのって基本単独行動なんじゃないのか？どう見たって群れてるよ、これ。

「だあーッ……休憩してえええ」

ばすっと前のめりに砂漠の上へ倒れたキグナスがぼやいた。そこをシサーが足先で突付く。
「おらおら行くぞ。んなとこで倒れてっと、またばふーって出てくるぞ」
ばふーって……。
「……そういうこと言うと、本当に出るからやめて」

『3つ目の鍵』のダンジョンを出て3日、山脈麓の僅かな湧き水で奪われた水を補給した俺たちは砂漠の旅を続け、『王家の塔』の大分間近まで近付いて来ている。って言っても、まだ何キロも先ではあるんだけど。
「ぶッ……」
進行方向から強烈な風が吹きつけて来て、思わず腕で顔を覆いながら眼を閉じた。痛いんだって!!砂漠でそんな強力な風に吹かれると。砂が顔面目掛けて飛来して来て、口の中までじゃりじゃりだ。
ようやくバシリスクやサンドワームに追いまくられることもなくなり、俺たちはのろのろと前進して行った。徐々に風の強さは凄いことになっていっている。今はまだ先に進むことが出来てはいるけど、あと数時間もすればこれ、風の圧力で前に進めなくなるんじゃないかと言う推測が……。
耳元にびゅうびゅうと風が吹き抜ける分厚い音が叩き付けられて、何か圧迫されてきてる感じ。足を上げるその一歩一歩が重く、まるで囚人の足につけられている鉄球を鎖で引き摺っているかのようだ。
以前、キサド山脈から見た時にも思ったことだけど、こうして近付いてみても竜巻の規模そのものは大したものじゃない。何だろう、その渦の大きさって言うの?本当に『王家の塔』の周辺だけで渦巻いてるだけって感じで。
ただ、小さくたって竜巻は竜巻。その中に入れるわけじゃないんだけどね。それに、その空気振動的な影響か近付くに連れてシルフが狂っていくからか、竜巻いてない半径何キロって辺りまで結構な

強風。……竜巻くって変な日本語だけど。
この辺りで魔物に襲われたりしてもまだ辛うじて戦えそうだけど、もうじき風が強すぎて戦うのが無理になりそうな気がする。それでも出るんだろーか、魔物。
「どこまで行けば良いの!?」
片手で額のところに庇を作って目元を砂から庇いながら怒鳴る。
俺、決して髪の毛が少ない方じゃないと思うけど、この風の勢いだけではげちゃいそう。
「ニーナ!!」
シサーも怒鳴った。やや前方にいるニーナやシサーと会話するには、こうしないと風の音で掻き消されてしまいそうだ。
「どうすりゃ良いんだ!?」
「わかんないわよそんなのッ」
……なぜかニーナが怒鳴っているとキレているように見える。
「何か感じないのか!?」
ニーナ以外に精霊と交信出来る者はいないので、ニーナが何か感じなければ何もわからない。当たり前だが俺なんかは論外である。
『ただの強風』としか認識のしようがない。
(あ、でもレイアなんかがいたら……)
……とっくに吹き飛ばされちゃってるかもしれない。
「さっきから読み取ろうとはしてるんだけど……とにかくシルフの悲鳴がうるさくて」
俺には良くわかんない話なんだけど、シルフってのは下級精霊だからとにかく風そのものの影響を実に良く受ける。つまり、原因が上級精霊のジンであろーが、魔力付与道具であろーが、不自然な作用によって風が吹き荒れていればシルフも荒れていくらしい。だもんで、シルフだけ見てる分には、その原因がどこにあるのかが一概に言えないんだそうだ。
「ジンを召還しているんだとすれば、どこかに必ず媒体となるものがあるはずなんだけどッ……」

「媒体！？」
「そう。……魔法道具ではなく、ジンの仕業だとすれば、必ずどこかに魔法陣があるはず！！」
「精霊魔法だったら、いらないんじゃねえか！？」
キグナスが大声で問うと、ニーナは首を横に振って叫んだ。
「これは精霊魔法じゃないッ」
「何で！？」
「精霊魔法では、確かに上位精霊を召還することは出来るけれど、これほど長く拘束することは出来ないわッ。召還魔法か魔法道具しかないッ」
「召還魔法だと媒体がいるのッ！？」
「自分の下に置いている召還獣ならいらないけどねッ。上位精霊を召還獣にすることは出来ないッ。魔法陣を敷いて、呼び出して拘束するしかないはずよッ」
召還獣と召還された上位精霊との区別がつかない。
「何で召還獣に出来ないのッ」
「上位精霊は気位も高いし、気紛れよッ。力で服従させることは出来ないし、特定の人間と契約を結ぶことはありえないわッ」
どうでも良いが、怒鳴りまくりの会話は疲れる。
「ただ、厄介なのは、魔法陣が敷かれているのはきっとッ……」
怒鳴り途中でニーナは視線を竜巻に向けた。正確には多分、竜巻の中心にある『王家の塔』。
「『王家の塔』にあるんだわッ……。だから、『王家の塔』を中心に発生してるんだと思うッ……」
んじゃあ見つけようがないじゃん。
「魔法道具にしたって、塔のどこかなんじゃないのッ！？」
「かもしんねえなッ……。闇雲に進んだってしょうがねえなあッ……」
「もう少しだけ進ませてッ……」
ニーナの言葉で、可能な限り塔へ近付くことにして、重くなって

いく足をおして再び前進を続けた。
「あッ……」
「わ、平気？」
強風に足を取られ、すぐ隣を黙々と歩いていたユリアがよろける。咄嗟に腕を伸ばして支えてあげると、俺に笑顔を見せた。
「ありがとう。……何だかわたし、転んでばかりみたい」
「足場が悪いところばかりだから、仕方ないよ」
「何の為に、竜巻なんか起こしたのかしらね」
「それはやっぱり……ヴァルスの王位を継承させたくないからなんじゃないの」
「でも、レガードは……いないのよ？」
レガードがいなくたって、ユリアがいれば王位を継承するには十分だと思うんだけど。大体レガードは、元を質せば他国の王子サマなんだし。王位継承する正当な権利があるのはそもそもユリアなわけだし。
「何で、『王家の塔』に行かなきゃいけないの」
いーじゃん戴冠しちゃえば、ってのはよそ者の俺の安易な考えなんだろーか。大体、レガードを風の砂漠なんかに送り出さないで、王城に閉じ込めたままさっさと戴冠させちゃえば別にこんな事態になんなかったわけで。
「何でと言われても……」
ユリアは困ったように首を傾げた。
「『王の証』を得られなければ、王にはなれないわ」
「『王の証』って、何？」
王錫、とユリアはやや前方の地面に視線を落として答えた。……王錫？
「王錫って、受け継がれるものじゃないの？」
「違うわ。与えられた王錫は、与えられた人間が死ぬ時に使えなくなる。ただの錫となって共に埋められるわ」
ふうん。使えないって……何に使うんだろう。

「与えるのは？」
「ファーラよ」
んじゃああの塔の中には女神様がいるんだろーか。いるんだったら内側から魔法陣を消して中に入れてくれないだろーか。
なんて馬鹿なことを考えていると、ユリアが肩を竦めた。
「塔の中にいるわけじゃないけど」
なんだ。
「中がどうなっているのかは、わたしも知らない。わたしが知っているのは、王錫をファーラに与えられた者が治めるヴァルスは、豊かに守られていること。ファーラに愛されていることが認められてこそ、ヴァルスはアルトガーデンの支配者として君臨し続けて来られたの」
「他の国には、その、『王家の塔』みたいな制度は？」
「聞いたことがないわ。ヴァルスだけ。ファーラ教を守護し、ファーラに守護される国であるからこそ、王となる者の責任は重い。だからこそヴァルスの王は継承するにあたって試練を強いられるのだし、ファーラに認められたからこそ守られる」
うッ、真っ向から吹き付ける向かい風で足先が砂に埋もれた。
なぜかこの辺りは少しだけ岩場っぽくなっていた。キサド山脈からの転石だろうか。結構大き目の岩が、ところどころにドカンと転がってたりする。
「エルファーラは？」
「え？」
「大教皇なんかは、最もファーラに近しい存在ってことになるんじゃないの？そういう試練みたいなの、ないの？」
「大教皇は、ファーラがお決めになるわ」
「ファーラが？」
「そう。大教皇の御印が顕れるのだと聞いているわ。そして永き生命をもたらされる。……不死ではないけど」
ふうん。何かファンタジック。

……って、待って。
ファーラに認められてこそ王錫が……『王の証』が与えられるってことは。
「『王家の塔』に入ったからって、もらえるとは限らない？」
「限らないわ。『王家の塔』でファーラに認められなければ」
……くそぅ。俺が何も知らないと思って、「代わりに『王の証』をもらってきてくれ」だなんていけしゃあしゃあと……。
もらえるわけねえええじゃんか。
（やっぱ馬鹿真面目に引き受けないで、さっさと帰せって叫べば良かった……）
ひどすぎる。
俺が万が一にも王錫もらっちゃったら、王になっちゃうぞちくしょうッ。
ラウバルとシェインの顔を思い浮かべて思いっきりカチンと来つつ、きょとんと俺を見つめるユリアに引きつった笑顔を浮かべた。
「王錫ってのは、塔で手に入るんだ？」
「ううん。王として認められると、大教皇の元へファーラより王に与えられた言葉が届けられるの。大教皇はそれを王錫に刻み、大神殿へと届けられる。そして大神殿より王冠と王錫が、戴冠式で新王へと授けられるのよ」
「……そう」
んでも、もしももしもこのままレガードが見付からず、俺が本当に『王の証』とやらをもらえちゃったらどうするつもりだったんだろーか。ま、なし崩しにユリアがついてきちゃったもんだからユリアが受けるんだろうけど、最初はそんなつもりじゃなかったわけで。
……俺に戴冠させる気だったのか？変だよそれはやっぱり。
それとも『王の証』とやらは結局大神殿に預けられるわけだから、「ごくろーさん」ってことで……。
……それはそれで鬼なんですけど。いや別に王になれって言われても困るわけだけどさ。

「カズキ？」
愛らしい顔でユリアが俺を覗き込む。はは……。

第1部第27話　TORAUMA－傷－（2）

……まあ、意地で帰ってたら……ユリアとはあれっきりだったんだよな。

つったって、別に何の進展があるわけじゃ、ないんだけど。大体ギルザードを出てから、何だかてんやわんやでそれどころじゃなかったし。

「……何でもない」

でも……。

街に戻れたら……いや、レオノーラに戻ってからでも良い。ユリアの気持ちを聞くことなんかは、出来ないだろうか。

あるいは、俺の……。

……でもそうしたら、いっそうつらくなったり、するんだろうか。

「何ッ……」

不意に前方でニーナの声が上がった。何事かと顔を上げる。ニーナが硬直したように足を止めていた。両手で耳を覆うようにしている。

「ニーナ！？」

「ニーナッ」

シサーが駆け寄った。俺たちもニーナのそばに駆け寄る。

ニーナの視線はどこか遠いところを見ているみたいだった。何か恐ろしいものでも見ているみたいな怯えた目をして中空を見据えている。

「ニーナ！？」

「何！？急にジンの叫びが……怒りがッ……何なの！？」

「ジンの声が！？」

鋭くシサーが問い返した直後だ。

――――――――ドォォォォォンッ！！！！

「きゃあああッ」

「何だ！？」
「うわあッ」
目の前に稲妻が走り、轟音と共に俺たちの前方にあった巨大な岩が弾け飛んだ。ビリビリと空気が振動する音が耳に届く。衝撃で砂漠の砂が吹き飛び、木っ端になった岩の破片と共にこちらへ飛来して来た。思わずユリアを背中に庇いつつ、腕で顔を覆う。……痛いって！！！
「……ジンの叫びが聞こえたか」
次いで、しわがれた声。もうもうと舞い上がる砂塵の中、いつ現れたのか黒いローブを身に纏った老人がそこに佇んでいた。痩せ細って、小柄だ。手に持ったロッドがそのせいで必要以上に大きく見える。てっぺんに黒い石を嵌め込んだシンプルなロッド……。
（――！？）
「バルザック！！」
俺がはっとするのと同時にシサーがその名を叫んだ。
バルザック―ロドリスの宮廷魔術師と手を組んで、『銀狼の牙』と共にレガードを襲った張本人……！！
「私を知っているか」
興味深そうに顔が動いた。でも、深くローブをすっぽりと被っているので、その表情までは見えない。黒衣の魔術師は顔をシサーの方に定めて、低い笑い声を立てた。
「お前か。グロダールの時に、ヴァルスの宮廷魔術師と共に私の邪魔をしたのは」
「覚えているようで光栄だねぇ……」
砕けた口調で言いながら、しかし緊張しているのはその目線で明らかだった。手が剣の柄に伸びる。
「ジンは私に縛られているのが気に食わぬでな。私の気配を感じて怒りを燃やしているようだ……」
シサーの手が剣に伸びたことなど気にならないように、ふっと顔を逸らして『王家の塔』の方角へ視線を向けた。独白のように呟く。

……じゃあ、この竜巻は。
「あなたが、竜巻を……」
思わず声に出していた。バルザックの顔がこちらに向けられる。どきりとした。
「……レガード、と呼んでおこうか」
「……」
俺が本人じゃないと知っている……。何だ？やっぱりシンじゃなくてバルザックがレガードの行方を知っているのか？
腰を低く落とし、剣の柄に手をかけた。指先が震える。
「残念だが、今日は私はレガードに用はない。お前たちの相手は、彼らがしてくれよう」
「彼ら？」
その言葉に、背後を振り返る。いくつかある岩場から、ざっと複数の人影が展開した。再び足元から巻き起こる砂埃を、強い風が攫って視界をクリアにしてくれる。思い思いの服装の、武装した男が7人。
「『銀狼の牙』の残党だ、と言えばわかるか」
「……！！」
残党……！！
「頭の仇を討ちたいそうだ」
「ユリア、下がって！！」
バルザックに対して背中に庇っていたユリアは、当然彼らからは剥き出しの状態だ。俺はユリアを後ろに突き飛ばし、何も言わずに剣を振り翳して飛び掛ってきた男の斬撃を剣で受けた。……うッ、痺れる。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ダテ・エト・ダビトゥル・ウォービース・イグニス！！『火炎弾』！！！」
「類稀なる知恵者ノームよ、縛めの手を伸ばせ！！オースィラ！！」
キグナスが『火炎弾』を飛ばす。俺の方に新たに駆けつけようとした2人のうちひとりがそれを受けて後方へ吹っ飛んだ。ニーナの

『ノームの手』でもうひとりがその場に縛られる。その間にシサーが相手の一閃を避けてひとりを斬り飛ばし、返す刀でもうひとりに斬り付ける。

「くッ……」

ニーナもレイピアでひとりと切り結んでいた。続けて魔法を唱えている猶予もなく襲い掛かられたらしい。相手の剣を打ち返し、素早く身を屈めて足払いを食らわす。

キグナスが立て続けに『火炎弾』をぶっ放して、自分に向かってこようとしたひとりに叩き付けた。当たり所が悪かったらしく、一挙に火だるまになる。更にもう一発、先ほども『火炎弾』を受けて後方へ吹っ飛んだ男に叩き付ける。

俺は、目の前の男の押してくる剣を遮るので手一杯だった。腕が震える。キサド山頂での出来事が脳裏に甦る。

（――出来ないッ……）

剣技で言っても力で言っても、ダンジョンの骸骨騎士の方が圧倒的に上だ。でも、俺は相手の剣を剣で受けたまま、それ以上のことが出来ずにいた。砂地に踏ん張った足の裏が、じりじりと後退していく。

「……それでは、私は先に失礼しよう」

黒い影が視界の隅に飛び込んできたのはその時だった。背後にいたはずの陰が、いつの間にか前方……『銀狼の牙』残党が先ほどいた辺りに移動している。

（――！！！）

どくんッ、と心臓がひとつ、大きく鳴った。黒い影……バルザックの腕の中に横たわる人影。――ユリアッ！！！

「ユリアッ」

動揺が剣に表れる。ぶれた俺の剣の隙を逃さず、目の前の男が一度剣を引いた。すかさず、横に薙ぐ。

「カズキッ」

が、それより一瞬先に、シサーの怒声が響いて血飛沫が舞い上が

った。シサーの刃にかかった男がのけぞって倒れる。
「ユリアッ」
もう一度叫ぶが、バルザックの腕の中にぐったりと仰向けに横たわったまま、ユリアは微動だにしない。バルザックが低く笑った。キグナスの『火炎弾』が黒衣の魔術師目掛けて真っ直ぐ疾るが、片手を軽く動かしただけで霧散した。
「私は偽物には用がない」
「どけえええッ！！！」
剣を片手にバルザックに駆け寄る俺の前を、『ノームの手』の呪縛を逃れた男が立ち塞いだ。剣を斜に構えて叩きつけて来る。それを剣で受けて弾き返すと、何も考えずに俺の腕は自動的に返す剣をその首筋に向けて叩き付けていた。……アギナルド老に鍛えられた、その、鋭い刀身を。
「王女は、預かるぞ……」
「ユリアーーーーッ！！！！」

ざしゅッ……。
（――……！？）

――――――……え？

「くそッ」
ニーナと切り結んでいたひとりを始末してシサーがバルザックに向けてグラムドリングを振り上げる。足が地を蹴ったその先に辿りつく直前、魔術師の姿はユリアと共に掻き消えた。
「くそッ、あのじじいッ……」

――――――目の前で、首が、吹っ飛んだ。……思い切り叩き付けた手の中に伝わる、鈍い感触。

「ユリア様ッ」
キグナスの、叫び。
――――何かを問うような、見開いて凍りついた瞳が、俺を見つめたまま視界の中を流れていく。……首から、鮮血を噴き上げ、ながら。
――――濃い、血の匂い。
――――びちゃッ、と……やや遅れて、俺の頬目掛けて返り血が飛散してきた。どこか粘液質っぽい、感、じ……。

「ユリア……」
ニーナの、呟き。

――――ばす……と、飛んだ生首が砂地に落ちて、血の染みを作った。頭を失った体が、ゆっくりと崩れ落ちる。俺の手からするり、と剣が抜け落ちた。
――――赤く染まった刀身。血に濡れた手の平。

「……カズキ？」
シサーが俺を振り返った。けれど俺の視線は目の前の何もない……何もなくなった空間をただ見つめていた。
心臓の音。全身の、神経が逆立っているような感覚。頭の一部を残して、ただ真っ白……。

――――俺は。

――――今……。

――――……何を、した？

「……人、を……」
「……え？」
「……ッ……うわあああああああッ」
全身の力がふっと抜けて、砂の上に膝をついた。首が飛ぶ瞬間の、虚ろな目を幻視する。
「カズキ！？」
「どうしたッ！？」
――――――ユリア……。

（人を、殺した）

――――――俺の中で、何かが、壊れた。

第2部　砕けた心　第1章　黒衣の魔術師

第2部　砕けた心
第1章　黒衣の魔術師

「安いよッうちはどこよりも安いよッ」
「ティレルの実、今が旬だよーッ。籠盛り今なら10ギルでどうだッ」
「流れの大道芸人モントの軽業が見られるのは今日までだよー」
ギャヴァンはいつでも祭りのように賑やかだ。炉端商が声を張り上げて果物を叩き売りすれば、向かいの飲み屋から馬鹿騒ぎが零れて来る。大通りでは大道芸人が曲芸を披露し、道行く人からは歓声と拍手が上がった。絶え間なく音楽と歌声が流れ、笑い声がかしましい。
いつも通りのはずのその光景。だが、ふらりとギャヴァンを訪れた旅人がいたら不審に思ったかもしれない。
――この街には、女性が……あるいは子供が。
……いないのだろうか？
そんな街の中心部から外れた港では、ちょうど着いた船が荷の積み降ろし作業に入っていた。
「さっさと終わらせて、冷たいエール酒でもぐっと行きたいねえ」
船から、眼帯をはめた屈強な男が降りてきた。この船の主グローバーだ。後ろに束ねた長い、オレンジ色の髪が日に透けて光る。
肌は陽に焼けて黒く、丸太のような太い腕は、いかにも海の男といった風情だった。
「よっしゃあー。気合い入れて片付けっぞぉーッ」
ギャヴァンに来るのは2，3ヶ月ぶりになる。この街は、グローバーの故郷と似た空気があり、好きだった。
グローバーが気合いの声を上げると、仲間たちの間からそれに応

えて歓声が上がる。が、その歓声が急に途切れた。
「何だ、あれ……」
「どうした？」
「頭……あれ……」
船員の声に促され、後方を振り返ったグローバーの目に飛び込んできたのは異様な光景だった。
沖に浮かぶ黒い塊。
思わず凍り付く。
「何だ……」
呆然と呟いたその数瞬後、グローバーの瞳にオレンジ色の光が映り込んだ。黒い塊から吐き出される、オレンジ色の光――。
「逃げろぉーッ！！」
叫ぶ間もあらばこそ、魔法弾と呼ばれる魔力付与道具からの砲撃が港へ次々と飛来した。
「うわあああッ」
「た、助けてくれえッ」
船員たちに落ち着いて街の方へと退避するよう指導しながら、グローバーは再び海上に浮かぶ怪物に目を向けた。
甲板にはためく国旗。あれは……。
（……モナ）

「……来たか」
クレメンスの意向である、ヴァルス領内ひいてはアルトガーデン帝国内に国民の安全の為に設けられる防護壁と旅小屋の設置についてシェイン、財務大臣アドルフと打合せをしていたラウバルは、通路を慌しく駆けてくる足音に、資料に落としていた目線を上げた。
「……？何です？」
アドルフがかけた眼鏡をずり上げながら問う。だが誰も答えぬうちに扉が慌しく叩かれた。
「宰相ラウバル殿！！至急奏上したい議がッ……」

「入れ」
「失礼しますッ」
転がり込んできたのは近衛警備隊隊員のひとりだった。顔色が蒼白だ。
「どうした」
「た、ただいまギャヴァン自警軍より早馬がッ……」
「……モナか」
「はッ。モナが、ギャヴァンに向けて襲撃を開始致しましたッ」
「わかった。下がって良い」
扉が閉まり、隊員が出て行くとラウバルはシェインに視線を注いだ。その視線に応じて宮廷魔術師が目を伏せて小さく笑う。
クレメンスが存命中に来てくれるとは僥倖だ。ヴァルス軍には戴く主が存在している……！！
「……始まったな」
「ああ。負けているわけにはいかない。……叩き潰してくれる」

帝国統一暦１５２９年花の月第４週。
アルトガーデン継承戦争開戦。

第2部第1章第1話　モナの思惑（1）

――――――――――モナのギャヴァン襲撃より3週間ほど遡る。

シェインは早足を通り越してもはや駆け足で、シャインカルク城の通路を軍事関係の居館であるバイラーの館へと急いでいた。表情には切羽詰まったものが浮かんでいる。

（つくづく、足並みが揃わぬなッ……）

このままではヴァルスが、他国から攻められるより先に自滅しそうだ……！！

連絡通路となっている空中廊下を駆け抜け、バイラーに駆け込むと螺旋状の階段を段抜かしに駆け降りた。その建物の1階にスペンサーやブレアの執務室がある。

「スペンサー将軍ッ」

半ば怒鳴りながら駆け込むと、そこには既に先客の姿があった。シェインよりひと足先にスペンサーを訪ねたラウバルとブレア将軍だ。ラウバルがたった今事情を聞き終え、愕然としているところにシェインが慌ただしく飛び込んで来たのだった。何の表情も浮かべずに国軍将軍ブレアがスペンサーの隣に立っている。

「ラウバル……」

「やはり来たか」

「ギャヴァンへ向けた国軍が動きを止めた。どういうわけだ」

それには答えず、シェインは単刀直入に切り出した。スペンサーの顔に勝ち誇ったような笑みが浮かぶ。黙って、書簡を中央のローテーブルに放り出した。スペンサーを睨み据えたまま、手を伸ばす。視線を落として顔が強張るのを感じた。

「……これは」

「フレデリク公直筆の、親善書簡だ」
再び視線を書面に走らせる。
モナは現在、ロドリスの不穏な動きに対し、ヴァルスの良き盟友となるべく軍事訓練を重ねていること、ヴァルス、モナ以外で唯一海軍を保持するナタリアがロドリスと組むことは必至である為、海軍の迅速な対応を心掛けていること、その為共通海域沖で多少の演習が行なわれても大目に見ていただきたいこと、挨拶が遅れた旨を深くお詫びすると言うこと、そしてヴァルスに対し、アルトガーデンに対し、敬虔な感謝の気持ちを捧げること……。
（しまった……）
なかなかどうして抜け目がない。シェインの情報ではフレデリクは先週ロドリスを訪問し、国王らと接見しているはずだ。その際の話の流れは非常にスムースで、ロドリスとモナの同盟成立は間もなくとさえ見えたと言う。
シェインは己の放った間諜から寄せられる情報には、絶対の信用を預けている。ひとつの国に対し、複数の間諜を放つのがシェインのやり方だった。間諜同士は、複数いることも知らされていないし、当然互いの顔も知らない。与えられている命令は、同じ。つまりひとつの事柄に対し、複数の返答が返って来る。
身銭を切っている以上いささか懐が痛むが、こうしておけば身を翻して二重間諜となった者がいた場合に情報の齟齬から炙り出しが可能であるし、偽の情報に踊らされる危険性も下がる。
ロドリスとモナに関しては、放った間諜のその全てが同じ報告を寄せた。
モナの叛心だ。
そのモナ公フレデリクがぬけぬけと、よりによってスペンサーにこんな書簡を寄越したのは。
（――間諜がいる）
シャインカルク城の中に。
ヴァルス重鎮の間で対モナに関して意見が分かれていることを知

っており、尚且つギャヴァンに向けて動いているはずの国軍の将軍ではなく、別系統のはずの禁軍将軍に書簡を宛てている。

理由は簡単だ。

ギャヴァンへ南下する国軍を止めるにはどっちつかずのブレアより、反モナ派の宮廷魔術師と軋轢を起こしていよいよ親モナ派として意固地になりつつある軍部最高権力者スペンサーの方が動かしやすいからだ。

（くそッ……）

間諜を炙り出さなければ、ヴァルスの情報は筒抜けになるばかりだ。

しかしまず、どうやって炙り出せば良いだろう。城内に出入りする人間は、数えていたらきりがない。スペンサーの意向を知っている人間は、それほど多くはないはずだが……。

（可能性があるとすれば……）

――国軍か？

モナを間に挟んで、スペンサー、アドルフとシェインが対立した会議の際に、その場に居合わせた人間は２０人。

シェインを含めた重鎮１０人と、ブレア麾下の隊長１０人だ。

早急に対処しなければ、ヴァルスの方針に対し、いちいち先手を打ってこないとも限らない。

（……）

だが、なぜフレデリクはこんな書簡を寄越すことが出来たのだろう。

『親善の書簡』と言うのは、絶対ではないがそれなりに重い意味がある。公王直筆とくれば尚のことだ。極端な言い方をすれば、これは『モナはヴァルスを攻撃しない』との誓約書とさえ言える。

加えて国交とは、ビジネスライクに割り切られるものでもない。国を動かすのは人間対人間だからだ。仮にヴァルスに対して親しみ込めた書簡を送りつけ、その舌の根も乾かぬうちにヴァルスに対して兵を挙げれば、モナは国間の信用を失う。ヴァルスはもちろんの

こと、現在味方となったはずの国でさえも今後信用をしないだろう。戦争で勝利を収め、大きな利益を手にしようと、これから築く長い歴史の上ではひどく不利となる。

何か手を打った上でヴァルスを攻撃出来る、建前が用意されているはずだ。あるいは思惑が。

尤も、直筆とは言え正式な契約書に調印しているわけではないあたりが……小賢しいと言えば言える。

「わかったろう、若僧。モナは、対ロドリス戦に備えている。ヴァルスの為にな。南下させた1万は、ラルド要塞へと戻し、ロドリスに備える」

「……」

対ロドリス戦に備えている――ヴァルスの為に？

（そうか……）

モナの思惑が、読めた……。

「己の浅はかさに言葉も出ぬか、シェイン殿」

（狡猾だな、フレデリクは……）

いずれにしても、この状況下でやすやすと書簡ひとつで信用をするなど馬鹿げている。

王城と言うのは、その国の気質と言うものが顕著に表れる場だ。ヴァルスは歴史ある大国にありがちな鷹揚な気質で、良く言えば歴史を重んじる、悪く言えば事なかれ主義の傾向にある。シェインなど下手をすれば「過激派」扱いされかねない。

だが、国軍を派遣しなければ、ギャヴァンは壊滅する。モナは確実にギャヴァン上陸を目指している。

やはりキール要塞の海軍を動かすか。しかし、万が一それを刺激としてモナが迅速にギャヴァンへ上陸してしまえば、国軍をスペンサーに遮られている現状ギャヴァンは抵抗する術を持たない。

ギャヴァンはレオノーラ同様国王直轄地扱いになっている為、私兵を持つ領主が治めているわけではない。代わりに自警軍はあるが、小国とは言え一国の正規軍の前に何が出来よう。

本来ならば、ギャヴァンに危機が迫った際にはギャヴァン北東岸にあるティレンチーノ要塞からの派兵と自警軍に加え、国軍を派遣しなければならないのに、現状この有様だ。――今、モナを刺激するのは得策ではない。海軍を動かすのは、ギャヴァン防衛の策が講じられてからでなければ。

キール要塞の海軍を戦力として数えるのは当然のことだが、モナは恐らく海軍と共に陸軍を船上に収容している。ギャヴァン上陸後に備えてだ。そして海上には海軍を残し、ヴァルス海軍に備える。ヴァルス海軍は、海上に残される海軍への応戦で手一杯になるだろう。ギャヴァンまでは任せられない。

陸地で対応出来る兵が欲しい。

ティレンチーノ要塞から派兵はさせるが、どこの国とも国境を接しておらず、海からの攻撃がまず考えられない以上、そもそも大した兵力を置いていない。がら空きにするわけにはいかないから、動かせる兵だけ考えれば2，3千がせいぜいだ。

西岸にあるザウクラウド要塞は7千ほど動かせるだろうが、ギャヴァン防衛の為にある要塞でもないのでいささか距離がある。モナが襲撃を開始してから移動を始めたのであれば間に合わないことは国軍と同じだ。

きっと目線を上げたシェインを、ラウバルが横目で見て口を開いた。

「スペンサー将軍」

「何だ」

「予定通り、国軍1万は南下させてもらおう」

「なッ……」

全員の視線がラウバルに集まる。スペンサーが机を叩いて書簡を指差した。

「先ほども申し上げたはず。南の危機は既に回避した」

「その書簡を額面通りに受け取れば、モナはナタリアの海軍が南下してきて海上からヴァルスを攻めることを危惧しているな？」

「それは……」
「だとしたら自国であるヴァルスが、モナに任せきりでどうする？ロドリスが本気でヴァルスに宣戦するつもりなら、ナタリアが同調するのは確かに必至だろう。海軍が下りて来れば、狙われるのはフォルムスかギャヴァン。何もギャヴァンに向けて進軍させなくても良い。ティレンチーノ要塞に向けて南下させよ。モナの申告に対して道義に外れてはいなかろう。……不満か」
ラウバルが自分の言葉通りに考えていないのは、その表情で明らかだ。ナタリアではなくモナに対する警戒として、国軍の南下を強要しているのは明白である。だが、舌に乗せられた言葉にも齟齬はない。言葉を失ったスペンサーに、ラウバルは尚も畳み掛けるように言った。
「私の権限で、南下を命じたはずだ。私の指示なくして背くような真似は許さぬ」
「だがッ……」
「言っただろう。私が全て責任を取ると」

スペンサーに、尚も国軍を南下させるよう要請を取り付けて執務室を後にすると、ラウバルとシェインはバイラーから本城へと続く空中廊下のテラスへと出た。眩しいばかりの太陽が南天を通り過ぎようとしている。
「……助かった」
設置された木製のベンチのひとつに腰を下ろしてシェインが言う。ラウバルはそれと向き合うような形で手すりに背中を預けた。
「お前は書簡の役割は文字面以上のものがあると踏んでいる……そうだな？」
「ああ。ギャヴァンを占領する腹積もりなことは、間違いないだろうな。それが、侵攻と言う名目になるか上陸と言う名目になるかは、恐らく我々の対応次第」
「理由を聞こう」

シェインは両手をベンチの座面につけ、やや反り返って青く澄んだ空を仰いだ。対照的な赤い前髪が風に舞う。

「モナは、どちら側にでも転がる。その為のロドリスとの接見であり、ヴァルスへの書簡だろう」

「ほう？」

「フレデリクとロドリスの会見は成功に終わっている。だが、モナの目的はヴァルスと敵対することでもなければロドリスと親しくなることでもない。モナの国力増強としか考えられない」

ヴァルスがモナを信頼する態勢を寄せれば恐らくは、ロドリスが攻めて来た際にロドリスとの盟約を翻してロドリスを攻撃しよう。無論、ロドリスへ向けて進撃する為に海上からギャヴァンに上陸、占領をして。

ロドリスとの盟約を翻す名目は至ってシンプルだ。「政権交代に際し、ロドリスに叛意があるかどうか炙り出しただけのこと。最初から我が忠誠は帝国のみにある」。

そしてヴァルスに要求を突きつけるのだ。

「盟友ヴァルス及び大恩あるアルトガーデンの危機に際し、モナは支援しよう。その代償としてモナが求めるのは海上権の拡大と交易権のモナに対する行使の免除、及び王国への昇格のみ」

ギャヴァン占領と言う、人質を取るような態度で。

逆にヴァルスがモナに対して要求を飲まない、もしくは敵対する意志を示すのであれば、ロドリスとの盟約通りヴァルスを攻撃するのだ。いわく、「我々は親愛の情を示し、盟友を続ける為の条件は提示したはずだが、ヴァルスが受け入れ態勢を取らなかった為致し方ない」。

シェインの意見を聞き、ラウバルは眉を顰めた。もし本当にその考えが事実ならば……随分とえげつない。

「もしそうなのであれば、危機を回避するには書簡を真に受け、今後モナから突きつけられるであろう要求を丸呑みする手段もある」

「……だが」

「ああ。こういう手段を講じるような男であれば、ここで一度飲めば今後も要求は吊り上がって行くだろう。アルトガーデンを統べるヴァルスとしては、言いなりになるわけにはいかない。弱みを見せれば、繰り返される要求で弱体化していくのみだ」

「では、どうすれば良いのだろうな……」

いずれにしても、モナのギャヴァン占領は避けられぬと言うわけか。しかし、モナがどちら側に翻るにしろ、やすやすと甘受するわけにはいかない。モナの用意した舞台の上で踊りを演じてやるわけにはいかないのだ。

「決まっている……結論は以前と同じだ。ロドリスが動く前にモナを叩くしかない」

「と言ってこちらから攻撃を仕掛けるわけにもいかないだろう。ヴァルスに対して海上にいる言い訳を用意したモナを叩く理由は表面上、ない。この後はゆっくりとロドリスが出撃するタイミングを待つだろう。ロドリスが出撃してこそ、ギャヴァンに上陸しながら右にも左にも転がる言い訳がたつようになるのだからな」

ラウバルの言葉に、シェインは大袈裟に肩を竦めた。……いや、ことの大きさを考えれば大袈裟と言うわけでもないのだが。

「やはり、リトリアの戦力が欲しいな……」

「まったくだな。リトリアがヴァルスと共に旗揚げしてくれれば、ロドリスはそれこそ戦力を割かなければならなくなる。あるいは、リトリアにかかりきりになるかもしれない。仮にナタリアがいるとしてもな。……とあれば、ヴァルスとしてはモナとロドリスが同時に進撃を開始したとしても余裕を持ってモナを壊滅させ、ロドリスへと対峙することも出来ようものを」

各国に派遣した使者は、一部は戻らず、戻って来た回答はどれも保留と言うものだった。状況を見極めてから考えるつもりなのだろう。色良い返事はロンバルトのみだ。だが、正直ロンバルトでは心許ない。――それこそ、レガードがロンバルトの陣頭に立つのならばともかく。

リトリアに派遣した使者は、戻らない。リトリアに飛ばした間諜の報告では、消されたのではなく足止めされているようだ。

つまりまだ、返答を用意していない。

「まあ、得られぬものを欲しいとわめいていても仕方がない。とすればモナから叩き潰すには、こちらから理由もなく仕掛けるわけにはいかぬ以上、やはりロドリスが動く前に向こうから仕掛けさせるしか手はない」

「モナに仕掛けさせるに必要なものは何だ」

「そうだな……ヴァルスはモナを受け入れる態勢にないことを示し、焦らせると言うのは？モナは、ヴァルス国軍の南下を当然対モナへの備えと読んだだろう。次は海軍を動かすかもしれぬと思ったやもしれんな。陸と海、双方のヴァルス兵力を足止めする為に書簡を寄越した。これでヴァルスに対し猶予が出来たと思うだろう」

「ああ。実際、現在は国軍の南下は停止しているからな」

頷きながらシェインは腕を組んだ。

「が、あくまでヴァルスが南下を続ける」

「……ヴァルスに受け入れ態勢がないと見なしはするだろうが、ヴァルスが敢えて1万の南下を続ける場合も当然考えているだろう。その場合は海軍が行動を始めることも読んでいると考えるべきだな」

「挑発にはやはり少々弱いな。それに『ヴァルスがモナを受け入れなかった』との口実を与えてやるのはいささか気分が悪い」

そこで一度考え込むように言葉を切ったシェインは、次に顔を上げた時には人の悪い笑みを口元に刻んでいた。

「こういうのはどうだ」

「何だ？」

「フレデリクに、使者を派遣する」

「……対ナタリアに備えてか？」

さっきの自分の言を思い出して、ラウバルは苦笑した。シェインも笑って肩を竦めた。

「『親善の書簡』をいただいて返礼がないとは、ヴァルスが恩知ら

ずと思われよう。我々は対ナタリアに備え、ティレンチーノ要塞に派兵する。ただし、『モナの友好を信じて』、半数」

「……残りの半数はどうする？」

「西岸のザウクラウド要塞に留め置きだ」

「ザウクラウドに？」

ザウクラウド要塞では、ギャヴァンが攻撃されてから移動しても到底間に合わなくなる。

「1万だと思っていたものが半数。ティレンチーノ要塞と自警軍、傭兵がいると考えてもギャヴァンに当たれるのは1万そこそこと言うことになる」

シェインの意図が読めない。モナを焦らせるはずが、安心させてどうするのか。

「敵の油断と言うのは、いつの時代も付け込む隙を与える」

ラウバルの困惑を読んで、シェインが補足した。油断……だが……。

「モナの兵力はどの程度だと考える？つまりヴァルスがフレデリクの書簡を受け取った上で、尚も南下を続ける場合、モナはどのように対応するつもりかと言う話なのだが」

「……やはりロドリスの出撃待ちだろう。モナはあくまでも、ロドリスの動きに沿って上陸したいはずだ」

「だろうな。モナが敵対意志がないと表明した以上、ヴァルスからおもむろに攻撃するわけにはいかぬことはわかっていよう。つまり猶予期間があることに変わりはない」

その言葉に、ラウバルは少し考え込むように視線を地面へと落とした。

「だが、ヴァルスの動きがどうなるかは五分五分……とすると、モナは当初から戦力として考えられ得る海軍と陸軍1万に対しては、仮に布陣されてからでも抵抗が可能だと考えていることになるな」

「モナの国軍は4万2千。国内の要塞に足止めの兵がいるだろうが、それは計算外だ。うち海軍は1万。王都をがら空きにするわけには

いかぬだろうから、王都の足止めが……1万……いや、1万5千は留め置くか？とすればギャヴァンに上陸する予定は2万前後。予測の範囲を出ぬがな。ギャヴァンにおける勝算という話なら、妥当な線か」

言いながらシェインは立ち上がってラウバルを促した。並んでテラスを抜けながら、ラウバルは眉を顰める。

「だとしたって自警軍を含めても、あちらの方が多いからな。加えてギャヴァンには強固な防護壁と門がある。籠城するにはうってつけだし、護るにあたっては攻める方より兵力は必要ない。ロドリス出兵まで持ち堪えるだろう」

「あとはどれほど徴兵を行って本国を固めているかがわからんが」

軍の編成は、国力によってその数は異なるとは言え、大きな差異はない。つまり常駐の国軍を数万保有し、戦時にはそれとは別に各地諸侯や農民らから徴兵する。基本的に軍の大半を占めるのは、徴兵された兵であり、主要な戦場及び指揮系統には訓練された国軍が割り当てられ、その他歩兵、重装歩兵には徴兵された兵士が割り当てられる。

小型快速船を主とするモナの艦隊はヴァルス艦隊ほどの運搬能力はない。海軍も同乗していることを考えれば、従軍出来る人数は限られる。最小限で迅速に陥落させたいと思えば、恐らく正規国軍で占められているだろう。本国の護りにも国軍をおかねばならぬだろうから、つまりギャヴァンへ上陸する兵力は自ずと定まる。

本城の通路を、ラウバルの執務室へ向けて歩きながらシェインは顎に手を当て視線を前方に落とした。

「ザウクラウド要塞では遠過ぎる。ティレンチーノ要塞に向けても持ち堪えるつもりがある。……どちらへ転んでも、モナに手出しさせることは不可能と言うことにならぬか」

「そうとは限らぬよ」

眉を顰めて呟くラウバルを、顔を下方へ俯けたまま目線だけでシェインは見上げた。

「では逆にモナは、我々の動きと戦力をどう予測していると思う？」
「……どう、とは？」
「言い換えよう。ギャヴァンは主要都市だ。そしてモナ艦隊がギャヴァン沖共通海域に停泊している。ヴァルスがまずすべきこととは、何だと考える？持ち駒はどの程度で、どう配置すると踏むだろうな？」
「……」
ラウバルは困惑しながら答えた。

第2部第1章第1話　モナの思惑（2）

「すべきことは……ギャヴァンの防衛だろうな。国軍南下の報は入っていただろうし、ギャヴァンにおける戦力として数えられるのは、国軍1万とティレンチーノ要塞、自警軍、傭兵。海上で海軍か。……そう、読んでいるのではないか？」

事実、現段階でギャヴァン戦にぶつけられる戦力はそれしかない。

「モナはギャヴァン上陸用に陸軍を用意しているだろう。陸軍が上陸した後、海軍はそこに停泊し、陸軍はそこに海と言う退路があればこそ前面から来るヴァルス軍にのみ備えれば良い。そういう意味では精神的に余裕を持って、占領する」

「……」

「そしてヴァルス海軍をギャヴァン沖でモナ海軍が阻むわけだ」

「……だろうな」

「海上の海軍は、チャラだ。陸上では、正規軍2万対寄せ集めの1万強。しかもモナは、ヴァルスの寄せ集め軍隊がギャヴァンに集まる前に自警軍を叩いてしまえば、後は防戦、籠城。勝算は十分ある」

「ああ……」

「……だが、モナ海軍がギャヴァン沖をどいてしまったら、敵地の只中に残された陸軍の動揺とはいかほどのものになるのだろうな？」

「……」

通路を曲がり、階段をいくつか降りてラウバルの執務室の前に辿りついたところで、シェインが言った。扉に手をかけながら振り返る。

「どかすのがそもそも容易ではないだろう。叩き潰すと言ったって……」

ラウバルの困惑にシェインは苦笑した。

「叩き潰せれば最も早いのだがな。そうはいかんだろう。……だから、自分からどいてもらおうじゃないか。ギャヴァンに攻撃を仕掛

けながらな」
「……まさか」
扉を開けて中に入る。続けてシェインも入り込むと、ほとんど定位置となっている長椅子の上に座り込んだ。長い足を組み、膝の上に頬杖をつく。
「どくさ。陸上のギャヴァン戦ではモナ海軍がいなくたって勝算があり、ヴァルス海軍がギャヴァンを見捨てればな」
「見捨てるッ!?だがモナには追う理由など……」
「目先の蠅ばかり追っていては、全体が見えなくなるな。……俺はひねくれ者ゆえ、海軍に南下して欲しいと思われれば北上したくなる」
「北上……」
「馬鹿正直に南下してやる筋合いもなかろう。モナはその時点で既にひとつ過ちを犯しているのだ。自軍と自国の間に敵国の要塞を置いているのだからな。尤も、モナがギャヴァンに迫らなければヴァルスは海軍を動かさないし、ギャヴァンを押さえたい以上他にどうしようもなかったのだろうが」
「では、モナ海軍を放って本国を攻める、と?」
「……モナの背後はがら空きだ。兵力をザウクラウド要塞に集結すれば、南にはキール要塞がある」
ラウバルの問いには正面からは答えず、シェインはやや穿った返答をした。本国を攻めることに意味はない。本国を攻めると思わせることにこそ意味がある。
だが、南下国軍の半数――5千とザウクラウド要塞稼動可能兵力7千のみでは威嚇に欠ける。加えて国軍に潜り込んでいるだろう間諜が、城内留め置きの中にいるのか、北上部隊にいるのか、南下部隊にいるのかが見えないのはやはり心もとない。
シェインには、軍及び要塞を動かすような権限はいっさいない。
ラウバルに動かせるのは……。
「諸侯に出兵の要請はしているな?」

「無論」
「ロドリス戦線に備えて北上するに当たり、一部をザウクラウド要塞を経由させよう。行軍とて宿営地は必要だからな。……諸侯軍が逗留中にギャヴァンが襲撃されれば、いかにスペンサー将軍と言えども、諸侯軍をギャヴァン戦に投与するなとは言うまい」
「……なるほど」
一部とは言え諸侯軍を留め置ければ、戦力は予定よりは増加する。
「傭兵部隊の編成も急がねばな」
「しかしこちらからモナ本国に攻撃を仕掛けるわけにはいくまい？」
「本当に仕掛ける必要はないさ。いつでも仕掛けられる状態にする……フレデリクが、本国を攻められることに危機感を覚えればそれで良い」
「だが、敢えてがら空きにしても南下するからには、本国の護りは当然固めているだろう」
「構わぬよ」
そう答えた意図を明らかにはせず、シェインは続けた。
「目線を海軍に向けたいが為に早くから長々と停泊していた、と言うのもあるのだろうが、ヴァルスがモナ本国へ直接仕掛ける可能性がないわけではない。本国の護りを疎かにしているとは考えにくいしな」
ローレシアにおいて、海軍とはさほど重要視されていない。
そもそも海軍を置き始めたのは、かつてラグフォレスト大陸と戦争を起こしたヴァルスだが、以降海軍の役割とはほぼ監視艇に近しいものがある。他大陸以外では、基本的に海から攻めてくる国が存在しなかった為だ。加えて、陸上の魔物は軍隊ともなれば避けて通るが、海洋の魔物は巨大なものが多く海軍を避けてなどくれない。そうそう現れるものでもないが、海上で砲撃を繰り返していれば襲われる確率は高くなる。ゆえに採算が合わない。
ナタリアが海軍を置いたのは恐らく対ヴァルスに備えて。モナも同様だろう。だが、船上からの攻撃がほぼ、昔の魔力付与道具であ

る魔法弾に偏る為、いずれの国も大した戦力を備えてはいない。
つまり、ヴァルス軍が分裂していて対モナに割ける兵力が限られている現在において、ギャヴァンの防衛などを考え合わせれば、ヴァルスが擁する海軍のみではモナ本国を攻め落とすことは出来ないと考えていると予想がつく。まさかギャヴァンにさして兵力を割かずに、そのほとんどをモナ本国へ差し向けるとは思うまい。
「それに、ギャヴァンはどうする？本当にギャヴァンを見捨てるつもりではあるまい」
当然だ。
見捨てるつもりなら、将軍と軋轢を起こして兵力の南下などさせはしない。
「仕掛けさせるのは、さほど困難ではなかろう。安堵した後であればこそ、人とは咄嗟に突き飛ばすものだ」
「……？」
「戦力を減らしたように見せ、モナにとって、想定外の戦力を想定外のところに叩き込んでやる」
挑戦的な色を浮かべて、シェインはまだ見ぬフレデリクを幻視するように空を睨みつけた。
「焦らせて攻撃に転じさせ……壊滅させるぞ」
「壊滅……」
「海から来るのが、海軍でなければならぬ道理もない」
「……何？」
ラウバルはシェインの言葉に目を見開いた。
「シャインカルクには、モナからの間諜がいる。せいぜい利用させてもらうさ。『兵は詭道なり』、だ。隠した手の内を漏洩させ、更に裏をかいてみせよう」
半ば独り言のように呟き、シェインはラウバルに視線を定めた。
「南で動かせる中から遊撃部隊を編成しよう。幸い、と言っては何だが、舞台は街中――撹乱する場所には事欠かぬ上に、モナは地の利を犯しているからな。味方と思っていた背面から、挟撃してやる」

「挟撃！？」
「……いずれにしても、ギャヴァンでの市街戦は避けられまい。住民に警告を呼びかけるぞ」

「何だ？何だ？」
「ギャヴァンが戦地に！？」
ギャヴァンの街の広場で、国からの使者が市民に避難を呼び掛けていた。街のあちこちにも注意書きを書いた札を貼り付けている。
「避難だって！？」
戦い、と聞いて男たちは血気逸った。元々祭り好きで血の気の多いギャヴァンの民だ。
「逃げろだなんて国もつれねえこと言うじゃねえか」
「ギャヴァンは俺たちの街だ。俺たちが守らねえでどうする！！」
「そうだーッ」
「俺たちの街は俺たちが守るぞッ」
「女子供だけ避難させろッ」
たちまちの大騒ぎを尻目に、ひとりの男が軽い足取りで木々の間をすり抜けて行った。
赤い髪……ヴァルス宮廷魔術師のような明るい赤ではなく、長年寝かせたワインのような深みを帯びた深紅の髪だ。やや癖のある肩までかかるその髪を、鬱陶しげに時折指先で弾きながら足音も立てずに進んでいく。
やがて男は街の外れに出た。港とは逆方向だが海に程近いそこは切り立った岩場が幾つかあり、洞穴のようなものもあいている。そのうちのひとつ……かなり巨大な岩場に危なげなく歩を進め、よく見なければ気がつかないような出入り口に手を伸ばした。遠慮なく開ける。
「ガーネット。……おーい。じじぃー」
住居として使用しているとは言え、そこはやはり洞穴だ。奥は暗い。その闇の中から歯形のついたオレーアの実が、男目掛けて飛ん

で来た。咄嗟に右手を出して、それを受け止める。
「いつまで経っても年長者に対する礼儀を覚えぬやつだ」
奥から姿を現したのは男にガーネット、と呼ばれた老人だった。本名は誰も知らない。いつの間にかここに棲み付き、男――ジフリザーグが、『守護する者』を意味するガーネットと言う呼称を与えてやったのだ。以来老人はガーネット、或いは単に『洞窟のじじい』と呼ばれている。尤も、その存在を知る者は限られているのだが。
「まったく。ギルドの長が聞いて呆れる……。お前について来る者は皆、心配で目が話せないに違いない」
「余計なお世話じゃい。んだよ、せっかく人が忠告しに来てやったのに」
ずかずかと奥へと入り込みながら、ジフリザーグは木製の椅子を引いて腰を下ろした。テーブルの上にオレーアの実を乗せる。
「忠告？」
「これ」
ひらっと差し出したのは、国から発行された避難警告だ。
「ギャヴァンが戦場に……？」
「ああ。市街戦になるだろうから、逃げたい奴はさっさと逃げろってさ。一応避難民の受け入れ先として、王城の館と要塞と大神殿が指定されているぜ。好きなとこに逃げろや。無事辿り着くよう国が護衛してくれる。今すぐって話でもないから、落ち着いて行動しろとよ」
「お前たちはどうする」
ちらりと目を落として紙をテーブルの上に投げ出すと、ガーネットは腕を組んだ。手に持っていた木製の薄汚れたロッドをテーブルに立てかける。
「俺たちは残って戦う。当然だ。ギルドが逃げ出すわけにはいかねえよ。市民も戦えるような奴の大半は残って戦う姿勢だ」
その返答に、ガーネットは笑った。
「相変わらずノリやすい街だ。……だが、わしはこの街を動く気は

ないな。せっかくの忠告だが」
「だと思ったよ」
ジフリザーグは背凭れに預けていた背中を起こし、『洞窟のじじい』を覗き込むように前のめりになった。
「んで相談があんだけどさ」
「何じゃ？」
「残る気なら、ギルドの護りに入ってくれねえかな」
「……」
ガーネットがここに棲み付くようになって以来、ジフリザーグを頭と仰ぐギャヴァンの盗賊ギルドは何かとガーネットを目にかけてやっている。そのお礼、と言うわけでもないだろうが、ガーネットはいつしかギャヴァンギルドの専属ソーサラーのようになっていた。ジフリザーグはガーネットの素性を知らないが、内心本当の自分の祖父のように慕っている。
「良いだろう。……何だかんだ言って、お人よしだな、お前さんも」
「面倒見が良くなきゃギルドの長なんかやってらんねえよ」
ダークグレーの瞳を眠そうに瞬かせて、ジフリザーグは頭に手を突っ込んだ。ぐしゃぐしゃとかき混ぜる。
「あの少年も戦うのか？」
「あの少年？……ああ。シンか」
言われて、愛想のない１４も年下の弟を思い浮かべる。実の弟ではない。ギルドの長を務めていた父親が拾って来たのだ。今はもうその父もいないが、ジフリザーグはシンを実の家族と思い可愛がっている。ジフリザーグにとっては、ギルドの構成員全てが家族のようなものとも言えるが。
「や、あいつには別の仕事があるからな。外に出してる。……頼むわ。戦場になったら、ちと洒落んなんねえし」
「まあ戦火は及ぶまいが……念には念を入れよう。わかった。ギルドの護りはわしに任せるが良い」

◆◇◆

やや饐えたようなかびの匂いが鼻につく。地下独特の匂い、とでも言おうか。

『研究中宝物庫』の中で、シェインは古い書物を引っ張り出しては繰っていた。

「こんなところにいたのか」

不意に、扉が重い軋みを上げて開かれる。振り返ると、ラウバルが空に舞う埃に微かに目を細めて視線を舞わせていた。

「おう。どうした」

「来客だ」

「来客？」

パタン、と手にしていた分厚い魔術書を閉じる。年数を掛けて溜め込まれた埃が、その衝撃で本から舞い上がった。思わず顔を背けながら書棚に書物を戻す。

「誰だ？」

「ギャヴァンの自警軍と市民軍の代表者だ」

その言葉に、目を丸くしてラウバルを見詰めた。ラウバルも微妙な表情でシェインを見詰めている。

「……自警軍と？」

「市民軍だ」

「市民軍？」

ギャヴァンには避難勧告を出したはずだ。市民軍の編成命令など下っていない。

「自発的に結成したようだな」

「自発的に？」

しばし顔を見合わせる。どちらからともなく、くっくっと肩を震わせた。笑いが零れる。

「……大した気概だ。逃げるより己の街を己の手で護ることを選ぶとは」

「全くだ。ギャヴァンならではかもしれぬな」
「行こう。そのような見上げた方々を待たせては申し訳ない」
手についた埃を叩き、宝物庫を出る。施錠して歩き出したシェインは、身分を示すご大層なローブは身につけていない。淡い萌黄色のシャツにダークブラウンのパンツである。ヴァルスの宮廷魔術師は、すぐに官服を放り出す癖があるようだ。
「ガウナ殿は」
「迎えをやっている。私がお前を探し回っている間に、もうついてしまっているかもしれぬな」
「それは悪かった」
円形テーブルを置いてある会議室に入ると、中にはシェインも顔を知っている自警軍の隊長と、飄々とした表情の青年が並んでテーブルについていた。深みのある赤ワインのような髪の青年だ。こちらは初めて見る。その斜め前に当たる位置にガウナが腰を下ろしていた。
「お待たせした」
「ご足労いただきまして……」
「ご足労いただいたのは、こちらだろう」
適当に空いている席に腰を下ろす。
「自警軍隊長のボードレーでございます。こちらは……」
「市民軍代表ジフリザーグです」
こちらもそれぞれ名乗りを上げる。自己紹介を済ませ、茶などの雑務をする為に隅に控える女官を下がらせた。作戦を耳にするものは極力少ない方が良い。自分で立ち上がって人数分の茶をカップに注ぎながら、シェインが問う。
「国は避難するよう警告を発したのだがな。市民軍とは？」
「我々の街は我々が護ります。……まあ、ギャヴァン市民は調子に乗りやすいんで」
ジフリザーグと名乗った青年が、肩を竦めた。思わずシェインも苦笑する。茶を注いだカップをそれぞれの前に置きながら、重ねて

尋ねた。
「編成は」
「人数は3千。１００人ずつの中隊に分かれ、各隊には隊長を置いています。更にそれを１０人ずつの小隊に分け、小隊長を」
「見上げたものだ」
ラウバルがやはり苦笑して呟いた。
「自警軍は3千だったか」
「はい」
とすれば、ギャヴァン攻防にあたってぶつけられる兵力は、国軍1万、自警軍3千、市民軍3千、ティレンチーノ要塞から3千、ザウクラウド要塞から7千、諸侯軍から1万。そしてそれとは別に海軍が1万5千。
「……ラウバル。当初の作戦と少々変更しよう」
手を顎に当てて考え込みながら、シェインはラウバルに言った。
「どう変更する」
「モナには、ギャヴァンへ投じる兵力が極小のものと判断してもらわねばならぬ。こちらの兵力を割かずに遊撃部隊が編成出来ると言うことだ。……市民軍の働きに期待して良いか」
後半のセリフは、ジフリザーグへ向けられた。ジフリザーグが黙って首肯する。
「無論、自警軍には、市民に被害が拡大せぬよう努めてもらいたい。……おぬしらの働きが、ギャヴァンを護る」
「……」
「俺は作戦を練ることは出来るが、現場に駆けつけるわけにはいかないのでな……」
事実、そこが弱いところだ。
平常時であれば、国王が陣頭指揮にあたり、国王の護衛と補佐を兼ねて宮廷魔術師が同行する。国王自らが剣を片手に兵士と同じ飯を食し、生命を賭けて戦えば軍の士気は圧倒的に上がる。その間宰相は王都を守り国土の防衛に専念する。

むろん、戦地に出たがらない国王もいないことはないし、そうでなくても主人が王城をあけるわけにはいかぬ場合もある。その場合は、宮廷魔術師を伴って宰相が国王代理として陣頭に立つ。王都にいようと、総大将は国王であり、宰相はあくまで軍の総指揮官に過ぎない。そしてその下に将軍職の人間がつく。

だが今回のケースで言えば、宰相、宮廷魔術師共に戦地に赴いてしまえば国土防衛の指揮をとる者がいなくなる。総指揮官をなくすわけにはいかぬから、いざロドリスと本戦に突入すれば、ラウバルが出征せざるを得まい。シェインは国土の防衛にあたることになる。

いずれの場合も大司祭は国民の救済にあたる為、戦力には該当しない。

……戦場にいない人間が作戦を指示することは、出来ないのだ。よって、実戦部隊の上に立つ人間には、徹底的に作戦を踏まえてもらった上で、尚且つ状況に即した判断力が必要とされる。

王城の内側から軍を操作しようとして、壊滅に追い込んだ例は山ほどある。連携し、信頼出来る現場の人間が必要だ。

「人を使う能力はあると自負している。迅速な状況判断もな」

不敵に言ったジフリザーグに、シェインは期待を込めて頷いた。

「信じるぞ。……作戦を、話そう」

第2部第1章第2話　フォグリア潜入（1）

ロドリス王国王都フォグリアは、どことなく雰囲気がレオノーラを彷彿とさせる。同じ、王都だからだろうか。上品な活気だ。

行き交う人々の口からは、ロドリス語とヴァルス語が入り乱れている。アルトガーデンを長年支配してきたヴァルスの言語であるヴァルス語は、帝国内の公用語になっていてどこの国に行っても使えると言うことだった。帝国内に限らず、ローレシアの帝国外の王国や他の大陸でもそこそこ通じるらしい。俺の世界で言う、英語に該当する言葉……と勝手に思い込んでいる。

俺は大通りに面したカフェでぼんやりと頬杖をついて、華やかに道を行き交う人の姿を眺めていた。目の前に置かれたカップには紅茶に似た飲み物が注がれているが、口はつけられていない。

ユリアがバルザックに連れ去られて、1ヵ月が経過しようとしている。ニーナが言うには、召還者が消えれば魔法陣は効力を失くしてジンは解放される――逆に言えば、バルザックを倒してジンを解放しないことには『王家の塔』へあれ以上近付けない。

「ね。うまくいったとして、バルザックを倒せるのかしらね……」

「……さあね」

『金髪ロングヘア』の俺の髪に体を隠して、肩からちょこんと顔を出したレイアが尋ねた。『王家の塔』を一度諦めてレオノーラに戻った俺たちに、再びついて来ることになったのだ。

頬杖をついたまま、俺はレオノーラへと一旦戻った時のことを思い出した。

「シェイン!?どこへ行くッ」

シサーがことの経緯を語り終えると、シェインは足早に部屋を出て行こうとした。ラウバルがすかさず言葉を発する。

「決まっているッ。ユリアを捜しに行く」

「馬鹿を言うな！！モナが間もなく攻め込もうとしていると言うのに、王城を放り出して行方をくらますつもりか！？」
「では放っておけと言うのかッ！？」
「王女が戻られた時に、治めるべき国がなくなっていては元も子もなかろう！！冷静になれッ」
「ユリアの身に何かあれば、俺は一生自分自身を許すことが出来ぬッ」
「落ち着けと言っている！！……ユリア様の生命を確実に保証すると言ったのはお前だろう。王女は生きている」
「……」
「ぬかりは、ないのだろう」
ラウバルが思いがけず優しい声で諭すと、蒼白な顔をしていたシェインは沈黙し、瞳を閉じた。
「そうだな……。すまない」
少し落ち着きを取り戻したシェインは、微かに首を横に振って、額に片手を押し当てた。
「『遠見の鏡』からも何も言ってこないのでな……」
「封じられているのだろう」
ラウバルの言に、俺は疑問が湧いた。
「『遠見の鏡』での交信が封じられているのなら、他の防御魔法も効かないんじゃ……？」
ラウバルはゆっくりと頷いた。
「シェインが王女に施した魔法は3種だ。『光の壁』、空間移動そして召喚魔法。……『光の壁』と空間移動の魔法に関しては、魔法が封じられた場合自動発動を期待するのは厳しいだろう。だが召喚魔法は違う。召喚魔法を封じるには、召喚獣の方を封じねばならぬ。ここにシェインが封じられておらぬ以上は、王女の危機に際してシェインが召喚されると言うのは、有効だ」
……召喚獣。
「じゃあ、逆に言えば……ユリアに何かあったら、他の魔法が発動

しない以上は……」
「確実に俺が呼び出される」
「……なら、ユリアは現段階で無事、と言えるな」
確認するように言ったシサーに、ラウバルとシェインは同時に頷いた。
「わかった。ともかくお前さん方は国政があるだろう。シェイン、ユリアのことはとりあえず、俺たちに任せてくれ。何らの危害が加えられていないと言うことは、バルザックはユリアに危害を加えることが目的じゃないのかもしれない」
「……」
「その代わり、何かあった場合にはお前が呼び出されるんだろう。その時は、ユリアを頼む」
何かを押し殺すような顔をしていたシェインは、やがて短く息を吐いた。
「……ああ。わかった」
それを見て、ラウバルもほっとしたように俺たちの方に向き直る。
「バルザックは、ロドリスに現在館を構えているらしい。ただし、場所まではわからぬ」
「とりあえず、そいつを見つけなきゃなんねえな」
「ああ。恐らくそれは、それほど困難ではないだろう。……館を与えた人間がいるはずだ」
「フォグリアに潜入して、情報を収集しよう」
「……頼んだ」

風の砂漠へ向かった時のように山越えをするわけではないから、シャインカルクから馬を借り、魔物に遭遇しながらもひたすらフォグリアを目指し、無事到着したのが、1週間ちょい前。
もちろん俺は乗馬なんぞと言う高尚な趣味はないので、シサーの後ろに乗せてもらっていたわけなんだが。情けないことに。
そして、到着して俺がまずさせられたことは、何と女装だった。

「シェインが言ってたろ。レガードの兄貴がフォグリアにいるらしいんだから。大体『青の魔術師』だってレガードの顔知ってるんだし。その顔、何とかしなきゃなんねえよな。と言って顔をとっかえるわけにはいかんし」
「髪型と髪の色が変われば、大分印象って変わるわよ」
「今、髪の色は黒なんだから、いっそ金髪にでもしたらどうだ？短いんだから長くすっか」
「服装も変えた方が良いわよね。あ、わたし、可愛い服、何か買って来てあげるわよ」
「……」
なぜ異世界に来てわざわざ女装なんかしなきゃなんないんだろう……。
ただの変装じゃあいけないんだろうか。
それはともかく、宿を決めた後、俺たちはヴァルス大使に会うために大使館へと足を運んだんだけど、やっぱり公の機関ではそういうアンダーグラウンドな情報は流れてこない。
「仕方ねえから、市井で情報収集するしかねえな……」
とは言え、シサーやニーナはともかく、俺とキグナスは情報収集のノウハウがあるわけでもないし、それから数日はやはり大した収穫を得ることも出来なかった。
状況が好転したのはフォグリアに入って４日目だ。……シサーにとっては、ある意味悪化、とも言えるかもしれないけれど。
「シサーッ！！」
その夜、食事がてら酒場へと入った俺たちに……と言うよりは、シサーに突進してきた人影があった。まさに突進、だ。どうやら同じ店の奥に陣取って盛り上がっていたらしい。
「げ。シ、シリー」
「シリー！！」
思わず俺とシサーの声がユニゾンする。ヘイズで会ったキャラバン、パララーザのシリーだった。ややほろ酔い気味らしいシリーは、

剥き出しの浅黒い肩までもほんのり紅潮させてシサーに飛びつく勢いだった。

しかし。

「あーら、お久しぶり」

横合いから氷の冷気を孕んだ声で、ニーナが最上の笑顔を浮かべてシサーの前に立ちはだかった。元々が繊細に整った顔立ちをしているので、氷の彫像に似て見える。

「何だ、まだシサーに張り付いてるのかい」

途端、上がりまくってたシリーのテンションは一気に急転直下、こちらも棘を生やした声と笑顔で応じた。……寒い。

「ええ。シサーがいるところには必ずいますから」

「そりゃあシサーも鬱陶しいこったねえ。男ってのは多少遊ばせてやんなきゃ息がつまっちゃうよねえ」

酒場なのに、この空気の冷え冷え感は何だろう。

「何でもいいから早く何か食おうぜえ」

空気を読めないんだか読む気がないんだか、キグナスが上げた不満の声で、とりあえずパララーザのいる座席へと俺たちも一緒につくことになった。シサーを挟んで右と左に陣取ったニーナとシリーの空気が怖いと言えば怖いのだが、まあ俺には直接は関係ない。

パララーザに混じって食事のオーダーを済ませると、ふいっとシリーが俺の方に身を乗り出した。

「綺麗なねーちゃんだと思ったらあんた……もしかしてカズキかい？」

ご名答。

「え、やだ、カズキちゃんなの？」

パララーザは、人数が多い。前回、俺は他の面々にはろくすっぽ会っていないのだが、多分ここにいるのも一部だろう。それでも１０人くらいいる。

でかい円形テーブルの、俺とはやや離れた位置に座っていたメディレスが、がたんと椅子から立ち上がった。相変わらずごつくて巨

大だ。
「久しぶりです。その節はお世話になりました」
「それは良いんだけど……」
メディレスがまじまじと俺を見るので、妙に居心地が悪い。
「……ちょっとワケありで女装してるだけで、別に趣味なわけじゃないんですけど」
「そういうこと、言ってるんじゃなくて……凄く、面変わりしたみたい」
……俺が？
言葉を失っていると、食事が運ばれて来た。メディレスが俺の隣に座っていた団員をどかして、代わりにその席を陣取る。思わず俺は自分の顔をそっと撫で回した。……そんなこと、ないけどな。誰にも言われなかったし。
「面変わりって……」
「顔付きが……。うまく、言えないのだけど……」
もじもじと言うと、ちらりと目線を俺に向ける。
「カズキちゃんを包む空気の色が、少し変わったみたいに感じるの。まるで、温度が下がったみたい。……何か、あったの？」
温度？
「……何も、ないよ」
短く答えると、メディレスは何か言いたそうに尚ももじもじと俯いた。が、結局「そう……なら良いの」と頷く。
「ナタは」
グラスの水に口をつけてから問うと、メディレスは小さく首を横に振った。
「あのコは、ウチのコじゃないのよ。シサーと同じで、旅をしている間にふらっと遭遇しては、ふらっといなくなるの」
シサーが以前「パララーザに子供はいない」と言っていたことを思い出す。ナタはパララーザの人間ではないらしい。それにしては、仲が良さそうではあったけれど……。

「じゃあ、ナタって、何者なんですか」
「それは知らない」
「ひとりで、旅を？」
「わからない。一緒に移動したりもするけれどね。ウチにいる間は仕事を手伝ってくれたりもするの」
「ふうん……」
その後、一部だけに凍えた空気感を残しつつも俺たちはパララーザの面々と友好を図り、結果としてシリーたちは俺たちの情報収集に協力をしてくれることになった。
これは、かなりの効果だ。
まず人数が違う。加えてパララーザは何度もフォグリアにも来ているから、あちこちの市民に顔が利く。各地を旅して回っていると言うことは、市井への潜り込み方にも慣れているし、どこをどうすればどういう情報が得られるかを実に良く知っているのだ。
そしてやはり、有益な情報が引っ掛かってきたのはパララーザの情報網だった。

「カズキッ。来た来た来たッ」
キグナスが慌ただしく戻って来た。それを受けて立ち上がる。
「行こう」
言いながら俺は、腰に長く巻き付けたスカートのようなものの下に身につけているパンツの、太ももに備え付けたダガーの柄の感触を確かめた。
俺とキグナス、そしてレイアはここ数日、ある家を張っていた。
舞い込んできた情報は、フォグリア近郊の森の中にあると言う一軒家のことだ。
数年前までナタリアのサーティスと言う女性が静養がてらここに住んでいたらしい。だが、既に年老いて身寄りもなかった彼女はひっそりと人知れず姿を消した。
当時の使用人はごく数人。そのうちのひとりが現在フォグリアに

住んでいると言うのだが、この男――ドルヴィスは陰気な感じの男で人付き合いもしない、仕事らしい仕事もしていない、ほとんど家に籠もりっきりなのだと言う。そのドルヴィスが唯一交流を持つ人物が、フォグリアの出張専門娼館『青兎の館』のリーザと言う女性らしい。

そういうサービスってのは、どこの世界にもあるものだ。

リーザは、ここ半年ほどドルヴィスはかなり羽振りが良いらしく、かなりの頻度で呼ばれるようになり、小遣いまでくれるようになったと仲間に話していたらしい。

これは怪しい、と言うことになる。タイミング的に言っても、ぴったりだ。

大体、何ら働いていないで家に籠もりきりなのに食っていけてる辺りも怪しいのだが。

……が、直接行って確かめてみようにも、サーティスの家屋と言うのも所詮は噂話。具体的な場所まで知っている人間がいない。いや、いるんだろうけれど、わからない。……ドルヴィスを除いて。

これはもう、ドルヴィスに場所と金の出所を吐かせてみるしかないだろう、と。

そういうわけなんだが。

ターゲットに警戒されては困るので、武器を大っぴらに携帯は出来ない。けれど、服の下に装備するにはバスタード・ソードではさすがに抜くのに苦労する。なので、ダガーを装備したのだ。

「しっかしお前……ほーんと、女装が似合うなあ」

「ホントよねー」

「……褒め言葉と受け取っておくよ」

嬉しくないんだが。

人込みを縫って、建物を陰から伺う。

「……どうする？」

「……眠らせてくれ」

「らじゃ」

俺たちが視線を定めているのは、人込みをこちらに向かって歩いて来る赤毛の髪の若い女の子だ。かなり若そうに見えるが、体のラインは成熟しきっていると言う見事なアンバランスさの持ち主で、くわえて清楚な顔立ちとは裏腹の扇情的に露出度の高い服装をしている。リーザだ。

ドルヴィスは情報通り彼女のことを相当気に入っているらしく、俺たちが張っていたこの数日でも既に2回は呼んでいる。

家に籠もりっきりで、ノックをしてもなしの礫のドルヴィスに扉を開けさせることが出来るのは、彼女だけ。申し訳ないが、利用させてもらうしかやりようがない。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、オーランドゥム・エスト・ウト・シト・メーンス・サーナ・イン・コルポレ・サーノー。『眠りの粉』」

大通りから死角になる、入り口の壁の陰に彼女が入った瞬間、キグナスが『眠りの粉』の魔法を発動させた。ノッカーに手を伸ばしかけていたリーザがどさりとその場に崩れ落ちる。

「……隠さなきゃ」

「その陰にでも寝かせておこう」

ドルヴィスの家の出入り口脇にある木製のベンチの下に、そっと寝かせる。折りよく、カバー代わりにかけられている布がすっぽりとベンチを覆っているので、ドルヴィスが扉を開けたくらいでは見えないだろう。外に置かれているせいか、やや薄汚いそんなものを若い女の子にかぶせるのはいささか気が引けると言うのが正直なところだけど……彼女には罪はないものの、仕方がない。

再び扉の前に戻り、俺は小さく溜め息をついた。キグナスがにやにやと笑う。

……果たして俺に、娼婦の真似が出来るのだろうか。

いや、立っているだけで良いんだ俺は。笑顔笑顔……。

「嫌だなんて言うなよ。他に方法ねえーんだから」

「……せっかく女装してんだから、利用した方がまだ俺が救われる」

自分に言い聞かせ、キグナスに下がるように身振りで示す。ノッカーに手を伸ばした。

ガンガン。

やや間を置いて中の物音が途切れ、返事が聞こえた。

「……はい」

喉に何か詰まっているみたいな、男の声。

俺の肩からちょこんと顔を出したレイアが俺を見上げて笑った。

それからドアに向かって声を上げる。

「『青兎の館』から来ました、出張サービスですぅ～」

「……」

沈黙が返った。

「あのう……」

「リーザじゃないな」

「ごめんなさぁい。リーザは今日、急遽お休みになっちゃったんです～。それでわたしが、代わりに」

「……」

また沈黙が返る。俺は辛抱強く返事を待った。

「聞いてないぞ」

「そんなぁ。お願いしますー。わたしこの仕事始めたばかりで、お客さんがまだあんまりいなくって。お安くしますから、せめて見てから考えてもらえませんかぁ？」

レイア、なりきってないか？

ややして扉が薄く開けられた。だが行動に移すには少々早い。内側からチェーンロックがかけられているのが見える。俺はにっこりと引きつった笑顔を浮かべた。……なぜ異世界に来て、男に媚びなきゃならんのだろう。

中から顔を覗かせたドルヴィスは、女装の俺を見て好色そうな光を瞳に浮かべた。次いでドアを閉じ、再び開けられた時にはチェーンロックが外されていた。

「良いだろう」

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、エト・アルマ・エト・ウェルバ・ウルネラント。『沈黙の風』」

すかさずキグナスが沈黙の魔法を唱える。ドルヴィスの顔が凍り付き、咄嗟に閉めかけたその扉に、俺は足を突っ込んだ。スカートもどきの長布の下から、素早くダガーを抜き出す。

通りを行く人の目につかないよう気をつけながら、鈍い光を放つその刃をドルヴィスの首筋に当てた。

「……入れてもらおうか」

ドルヴィスはぱくぱくと何か口を開け閉めしたが、魔法で封じられているので何の音声も漏れない。金魚のようだ。

自分の声が機能を果たしていないことを悟り、ドルヴィスは諦めたように身を引いた。表面上はにこやかさを取り繕いながら中に足を踏み入れる。

「おじさーん、ひさしぶりぃー」

大通りへのカモフラージュなのか、言いながらキグナスも俺の後に続いた。……お前のおじさんは宮廷魔術師だろう。

第2部第1章第2話　フォグリア潜入（2）

ドアを閉め、きっちりと施錠する。
「聞きたいことがあるんだ。おとなしく話せば別に害は加えない。ただし……」
一度言葉を切って、キグナスと同じドルヴィスのオレンジの瞳を覗き込んだ。
「下手な真似をすれば命は保証しないから、そのつもりでいて欲しい」
ドルヴィスは瞳に怯えの色を浮かべて小さく頷いた。あんまり首を上下すると刃が食い込むので、小刻みだ。
俺より身長の低い、痩せぎすの貧相な顔を見下ろして、俺はキグナスに視線だけを向けた。
「『解除』してくれ」
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、オーラー・エト・ラボーラー」
やっと言葉を解放されたドルヴィスは、緊張したように短く息を切らしながら俺を見上げた。
「あ、あんたたちは何者だ」
「何者でも良いでしょう。知らない方が、あなたの身の為だ。質問にだけ答えてくれれば良い。……ただし、こちらにはエレメンタラーがいるから嘘はすぐにわかる。その場合も、あなたの身に危険が生じることになる」
ちょこんと俺の肩からレイアが顔を出した。一見して妖精族とわかるレイアに、ドルヴィスが驚いたような視線を向ける。実際のところレイアは、いちいち魔法をかけて確認しなきゃ嘘だろうが本当だろうがわかりはしないのだが、と言うかレイアがそもそもそういう種類の魔法を使えるのかどうか俺は知らないのだが、エレメンタラーはそうそういるものでもないし、一般人にとって精霊魔法とは

不可解なもので多少のハッタリは効果がある。
「わ、わかった」
キグナスが、いつでも魔法をかけられるようにロッドを構える。
俺も、その首筋に当てたショートソードの刃はそのままに、低く尋ねた。
「ナタリアのサーティスと言う女性のところで働いていたことがあるはずだ」
「……」
「サーティスは、どうした？」
「そ、それは……」
口篭るドルヴィスに、俺はショートソードを握った指先に力を込めた。
「素直に言った方が良い」
「し、死んだ……」
「それで」
「あ……その……」
「それで、どうした」
「あ、あるだけの財産を持ち出して……」
それで食ってたわけか。場合によっては殺したのかもしれない。
じゃなければ、サーティスの話を振っただけでここまで青褪める理由もない。
……まあ、関係ないんだが。
「持ち出した財産の中に、屋敷の権利書もあったでしょう」
「あ、あった」
「それは今、どこにある」
ドルヴィスの体がぶるぶると震えた。顔を近づけてその怯えた瞳を覗き込む。
「最近羽振りが良いそうじゃないか。幾らもらった？売ったんだろう？」
「ご、５０万ギル……」

通貨単位はヴァルスと同じだ。帝国内での流通をスムーズにする為に統一されている。だが、物価はそこそこわかりはするが、地価までは俺には良くわからない。キグナスを振り返ると目を丸くしていた。

「通常の5倍は取ってるな。いや、もっとか？」

「どんな奴に売ったのかを教えてもらえるか」

「し、知らない……」

指先に、ぐっと押し当てた刃が首に食い込む感触。薄く血が滲み、ドルヴィスの顔が蒼白になっていった。……キサド山頂でのことが思い出される。尤もあの時は、『銀狼の牙』の頭にダガーを突きつけていたのは俺ではないが。

「ほ、本当だ。本当にわからないんだ」

「わからない相手に売ったって言うのか？」

「仲介者がいるんだ。そ、そいつも誰かに頼まれたって言ってた。どんなやつに売ったのかは、俺は知らないッ」

なるほど。仲介者か。しかも複数挟んでいるらしい。手の込んでいることだ。

「た、ただ、吹っかけても文句は言わねえし、すぐにでも必要としているみたいだった……。何でも身分の高い人が探してるから、金に糸目はつけない、すぐにって。お、俺だって持っててもしょうがねえ家屋だし、だから売っ払ったんだよ」

「仲介者を教えてもらおう」

仕方ない。わかるところから潰して手繰っていくしかない。

「リ、リデルの村の……ソーサーって男だ」

問うように視線を注いだ俺の目を注視して、ドルヴィスがかくかくと微かに頷く。

「どんなやつか教えてもらいたい」

「村の外れで薬屋をやってる。リデルに行って誰かに聞けばわかると思う」

……どうするか。

見ればドルヴィスの貧相な顔は、見る者に哀れを誘うほどの怯えを浮かべている。元々、大した悪党でもなさそうだよな。

「屋敷の詳しい場所は」

「ば、場所!?」

「……それも知らないのか?」

嫌味のように言いながら脅すように顔を近づけて尚もダガーを食い込ませると、一層血が滲んだ。すうっと血が流れていく。ドルヴィスは喘ぐように口をぱくぱくと動かし、それを見ていると少しおかしくなった。口元で小さく笑う。ぶるぶる震える指先が壁を指した。そこにはロドリスの地図が貼ってある。

「あの、地図で示せば良いか?」

「ああ。それで良い」

口元の笑みをしまいこみ、刃を首筋に当てたままドルヴィスと一緒に壁際へ移動する。頭にレイアを乗っけたキグナスが横から覗き込み、ドルヴィスの言う位置を確認した。ロドリスの郊外……フォグリアから見ると北西の位置にある海岸沿いの森だ。これで見る限り、大した距離があるわけでもなさそうだ。

「わかった。悪かったな」

言うなり俺はダガーの柄で、ドルヴィスの頭部を殴りつけた。ちょうどこめかみの辺りだ。短く呻き声を上げて、その場に崩れ落ちる。

「行こう」

「……鬼」

「何だよ」

「お前ってそういう奴だった?」

ダガーを太腿の鞘に戻し、着衣を整える。

「どういう奴?」

「無抵抗の人間をダガーで殴りつける」

「騒がれたら面倒だろ……」

何の因果もなく他人に暴力を振るうように言わないで欲しいのだ

が。
「魔法かけるとかあるじゃん」
「ああ、そういう手もあったな。……行こう」
俺たちは足早にドルヴィスの家を出た。人ごみに紛れて、現在宿泊している宿『緑の森』へ向けて歩き出す。
「結構簡単だったなー。もっと抵抗すっかと思ったけど」
「どう見たって小悪党って感じじゃないの」
「まあなー。カズキ見て、ドア開けたぜ？男殺しだねー」
「キグナスじゃ衛兵呼ばれちゃうわよねー」
「……どういう意味だ？」
「……どういう意味かしらねー」
「……」
両手を頭の後ろに回し、つま先を蹴り上げるように歩きながら、キグナスが俺を見上げた。
「あんな迫力、カズキに出せると思わなかった」
「……そうかな」
何か言いたそうに俺を見るキグナスに、俺は笑顔を作ってみせた。
「普段は、そんなでもないけどな。……何か、あれ以来……」
何かを言いかけて言葉を途切らせる。小さく溜め息をついて首を微かに横に振った。それを横目でちらりと見遣って、嬌声を上げて通り過ぎる女の子を避けながら、俺は作ったままの笑顔を微かに俯かせた。
「……何でもない」
別に、同じだと思うんだけど。
あれ以来、と言うのは『王家の塔』の時のことを指しているんだろうと言うことはわかる。わかるが、その続きまではわからない。
あの後、完全に恐慌状態に陥った俺は、ギルザードに戻るまでの道のりで全くの戦力にならなかった。……と、思う。良く覚えていない。
再び剣を握れるようになったのは……。

「シサーたちは、無事帰ってきたかな」
大通りを逸れて脇道に入る。人通りがぐっと減って歩きやすくなった。
「大丈夫だろ、あの2人だったら」
シサーとニーナは、現在ロドリスに在住だと言う知り合いのプリーストの元を訪ねていた。ユリアがいなくなり、回復・防御に長けている神聖魔法を使う人間がいない。加えて、これから対峙しようとしているのは魔術師だ。共に、ユリアを救いに行ってくれないか頼みに行っている。
そして俺、キグナス、レイアは、バルザックに館を貸した人物――宮廷魔術師セラフィに館を売り渡した人間を追っていたと言うわけだ。
『緑の森』は、その美しい名前とは裏腹の、ひどく寂れた宿だ。目立ちたくないが為にわざと寂れた宿を選んだのは、確かにそうなんだけど。……一生ここで暮らすわけでもないし。
宿に入ると、受付のところで見慣れてきた暇そうな店主が、相変わらず煙草をふかしていた。軽く会釈をして中に入り込む。廊下を歩くと、壊れそうな勢いでギシギシと床が悲鳴を上げた。全てが木製なのだが、天井の隅には蜘蛛の巣が張り、床の上は埃だらけだ。どれほど掃除をしていないのかが偲ばれる。
意外にもキグナスはひどく綺麗好きと言うか……掃除をするのが好きらしい。おかげで、部屋を同室で借りている俺はその恩恵にあやかっている。
通路を奥まで進み、突き当りのひとつ手前まで来たところで、最奥の部屋の扉が勝手に開いた。
「おーっと。帰ってきたな」
シサーが顔を出す。その下からぴょこんとニーナも顔を覗かせた。
「おかえりー。どうだった？」
キグナスがブイサインをしてみせる。
「いちお」

「ってことは、場所を吐いたか」
シサーの顔がほころぶ。
「よくあっさり吐いたじゃねーか」
「カズキが怖ぇ怖ぇ」
おどけるように言って肩を竦めると、2人の視線が俺に突き刺さった。……言うほどでもないと思う。
「……そんなこと、ないよ」
「んなことねぇよ。ドスの効いた声で口調だけやけに優しげで。却っておっかねえ」
「うるさい」
「うおッ」
キグナスを背中から蹴りつけ、ニーナに促されて部屋に入る。
シサーとニーナが使っているその部屋にはもうひとり、見たことのない女性が座っていた。年の頃は多分シサーと同じくらい。
流れるような濃緑の髪に、明るいブラウンの優しげな瞳。面長の色白で、ここが日本だったら『大和撫子』と言ってしまいそうな慎ましやかな雰囲気の美女だった。濃紺のローブから覗く細い手には、ユリアが持っていたような小振りのロッドが握られている。
「クラリス。そっちからカズキ、キグナス、レイアだ。……こっちは話してあったプリーストのクラリス」
シサーが双方に紹介してくれる。クラリスは、百合の花のようなたおやかな笑顔を浮かべた。
「初めまして。よろしくお願いします」
「あ、こ、こちらこそ」
美女の出現に動揺しているらしい。キグナスがどもっている。俺も黙って会釈した。
「……こんなお綺麗な女性が一緒とは思いませんでした。ニーナも気を揉まれているのでは？」
口元に笑顔を残したままクラリスが言った一言に、全員が沈黙をする。綺麗な女性？

次いで視線が俺に集まる。キグナスが吹き出した。……俺？
「……」
微かにバツの悪い表情を浮かべ、頭にかぶっていたフルウィッグを外した。
「……すみません。俺、男です」
「あらッ」
ニーナが腹を抱えてベッドの上で笑い転げている。笑い過ぎだろう。
「どうしてもシサーが、カズキの方が良いって言うんなら、しょーがないわー」
「だとよ」
……だとよと言われても。
「あんまり違和感がなかったものですから……。失礼しましたわ」
「いえ……」
「まあ、ドルヴィスをオトしたぐれーだからなー」
「何だ、それ」
キグナスの余計な言葉に、シサーが興味津々な顔をする。
「それがさ……痛ぇッ」
「余計なこと、言うなよ」
キグナスの頭を後ろからどついて、シサーに視線を向けた。
「カズキが俺に暴力を振るう……」
「振るわれるようなことばっかり言ってるからだろ」
不機嫌なまま言うと、シサーは「隠すことねーじゃんよ」とぼやいて、空いている方のベッドに転がった。両手を頭の後ろで組んで枕の代わりにしながら、顔だけをこちらに向ける。
「場所がわかったんだから、もうここを引き払って今日出発するか。……あんまり、のんびりしちゃいらんねーしな」
そう言った時だけ、真剣な表情になった。
「んで？確定だと思って良さそうか？」
転がったままの姿勢で俺を見る。太ももに巻きつけた、ダガーの

ベルトを外しながら頷いた。
「わからないけど。即金で通常の5倍近い価格で買い取ったって。かなりの金持ち、しかも切羽詰ってると思う」
「身元はさすがに吐かなかったか」
「って言うよりは、知らねえみたいだったぜ。更に何人かの仲介を通しているみたいだ」
床に直接胡坐をかいて座り込んだキグナスが、補足する。仰向けだったシサーは、ごろんと寝返りを打ってうつ伏せになった。
「場所は」
「リシア地方。海岸沿いの森だ」
「仲介の人間はリデルと言う村のソーサーって男だそうだ」
「リデルか。近いな。リシアなら方角的にはどうせ通過地点だし……。何人か間に挟まってるってことは、大した話は聞けねえだろうが、会えるんなら会うに越したことはないだろう」
そう言ってシサーが身を起こすと、ニーナがその脇に腰を下ろしてこっちに視線を向けた。
「こっちもひとつ。ユリアの件とは直接関係があるとは思いにくいんだけどね。……近衛警備隊の人間が活発に動き回っているらしいの」
近衛警備隊？
俺とキグナスがきょとんと視線を送ると、シサーが後を引き取って続けた。
「『ジェノサイド・イブリース』だよ。多分。長身長髪、眼鏡をかけた間抜け面の変人……もとい軍人が、このところ良くフォグリアを出入りしているそうだ」
凄い表現をされている。
「近衛警備隊の人が、王城離れて出入りしてて、良いものなの？」
「バルザックとつるんでるのがハーディンなのか『青の魔術師』独断なのかはわかんねえが、状況判断でいけば『青の魔術師』とバルザックが絡んでるのは確かだろう」

「うん」
「とすれば、レガードの失踪だけじゃなく、ヴァルスが今警戒しているロドリスの不穏な動きそのものも『青の魔術師』が大きく絡んでる可能性が高い」
戦争が起こるかもしれない、と言っていたラウバルの言葉を思い出す。
ロドリスがヴァルスに戦争を仕掛けようとしていて、それに大きく関与しているのが『青の魔術師』だとして、王城の警備をしているはずの近衛警備隊がちょろちょろと外へ出て行く――つまり外交にあたっていると言うことは。
「……『ジェノサイド・イブリース』ってのは、『青の魔術師』の腹心にあたるかもしれないってこと？」
「ご明察」
簡潔にシサーが答えると、ニーナがぱちぱちと手を叩いてくれた。
……それは大変に嬉しくない。
「じゃあこのままいくと、そいつと……」
「交えることになるかもしんねえな」
「いーやーだーなあああ」
キグナスが盛大に顔に皺を寄せて、床に倒れこんだ。俺だって嫌だ。まだ死にたくはない。
「ま、まだわかんねえけどな。挨拶がてら、ヴァルス大使館にも寄って行こう」
シサーが立ち上がるのに続いて、腰にバスタード・ソードを装備し直しながら、ふと思いついて俺はクラリスに顔を向けた。
「クラリス、会ったことが？」
尋ねてみると、クラリスはおっとりと頷いた。
「変わった方で……良く街でふらふらしているのをお見かけしますわ」
シェインのようだ。
「ただ、神殿にいらっしゃったことがあるわけではないのですけど」

「んじゃそうと決まったら、早速行動開始だ」

……ようやく。

動き出せる。

（ユリア……）

――待ってて。

第2部第1章第3話　街角の歌（1）

ヴァルスの大使館は、フォグリアの中心部を少し外れた住宅街の中にある。

現ヴァルス大使のアンリは５０代半ばくらいのおっとりとした紳士で、シサーが禁軍にいた頃には王城にいたのだと言う話だった。とは言え、一兵士と貴族、面識があったわけでもないけれど、シャインカルクから通達を受けている彼は総じて俺たちに丁寧に対応してくれる。

ただし、王女が連れ去られたのだと言うことは言っていない。信用しないわけではないが、どこから漏れるかわからない。『青の魔術師』が知っているのか知らないのかは良くわからないけれど、まあ、べらべら話すことでもないのは確かだろう……。

ちなみに俺は女装させられたままとなっているので、仮に彼がレガードの顔を知っていたとしても……レガードだともレガードのそっくりさんだとも思っていないだろう、多分。おかまだと思われるのも不愉快なので、おかげで俺は、アンリの前では口が利けない。

「そうですか……郊外の森、と言いますと、どの辺りです」

大使館の迎賓室でシサーが事情を説明すると、向き合って座ったアンリは顎から生やした髭を指先でつまみながら柔らかく尋ねた。

「リシア地方だな」

「リシア地方……ならばさして距離はありませんね……」

「ああ。馬で移動すれば、普通にいっても2日かかんねえだろう。飛ばしていけば1日で行けるんじゃないかと思うが」

「そうですね。……私の方でもひとつ、情報があります。関係があるかどうかは、判断しかねるのですが」

「何でも良い。聞かせて欲しい」

シサーが僅かに身を乗り出して尋ねると、アンリは鷹揚に頷いた。

「ロドリスとエルファーラの国境間近に、ファリマ・ドビトークと

言う山があります」
　言ってテーブルの下の書台から、巻かれた地図を取り出す。テーブルの上に広げて、指先で図上をなぞった。
　『ファリマ・ドビトーク』とは、山の名前らしい。キサド山脈と比べると半分程度の規模の山脈が、地図上に描き連ねられている。
「その近辺に、時折黒衣の魔術師が出没すると言う噂です。今は、村もなく住む人もいないはずなのですが。山に入る猟師たちの間で、持ち上がっている噂です」
「……出没？　出没して、何を？」
　アンリは、ゆっくりと顔を左右に振った。
「それは、わかりません。……まあ、あくまで噂ですけれど。それがお探しの魔術師かどうかも、わかりかねます」
　続けて、微かに顔を顰めて見せる。
「ファリマ・ドビトークは、呪われた山です。聖なる教皇領と境にしているから、そこで魔物が足止めをくらうのかもしれませんね」
「呪われた山？」
「ええ。……まあ、戯言（ざれごと）です」
　それきりアンリは、その件に関して口を噤んだ。思わずシサーと顔を見合わせる。
「それはともかく、ご用が？」
「あ、ああ……。『青の魔術師』の側近に、背の高い、眼鏡をかけた奴がいるかと思って。長髪の」
「……？」
　アンリは、シサーの問いに首を傾げた。小さな瞳をぱちぱちと瞬く。
「双刀の男のことでしょうか。グレンフォード、と言ったと思いますが」
「グレンフォード……？」
「ええ。私も直接面識があるわけではないのですがね……。近衛警備隊にいたと思いますよ、そのような方が。何度か見かけたことは

あります。『青の魔術師』の方は私もお会いしたことがありません。ですから、側近と言えるかどうかはわかりかねますが」

「……『ジェノサイド・イブリース』と呼ばれている男は？」

シサーが問うと、アンリは顔から表情を消して頷いた。

「その男です」

近衛警備隊の一隊員が『青の魔術師』の命令で動いているとなると……それはやはり特殊なのだろう、と思う。

だとすると、『ジェノサイド・イブリース』――グレンフォードと言う人物は、かなりの腹心と言うことにならないだろうか。わからないが。

「私がお話して差し上げられるのは、このくらいです」

「いや、助かった」

「……ロドリスは、現在荒れ始めています」

アンリは、まるで独白するように密やかに言った。全員の視線が集まる。

「フォグリアはさすがに王の膝元ですからね。そんなことはないですけれど。フォグリアを離れると、少しずつ国が荒れていきます。王は、寵姫に骨抜きにされている。国政に、目が向かなくなっているのです」

「……」

「村の中にまで魔物が入り込むこともあるようです。気をつけて下さい」

「ありがとう」

アンリに送り出されて、大使館を出る。キグナスが、ロッドを玩びながら唇を尖らせた。

「ハーディンは、バルザックとどの程度関わってんだろうなぁ～」

「さあな」

「……『青の魔術師』の独断、って可能性が、高いような気がする」

少し考えて、前を並んで歩くシサーとニーナの背中に向かって呟く。ニーナが顔だけで振り返った。

「どうして？」
「バルザックの屋敷の入手経路が」
俺のやや斜め前を歩くクラリスが、その言葉を受けて頷いた。
「ハーディンが絡んでいるのなら、慌てて屋敷など手に入れなくても、幾らでも斡旋出来る屋敷はありそうですものね」
その言葉に頷く。
国が直接絡んでいるんだったら、何も面倒な手間をかけて屋敷を新たに手に入れる必要はないんじゃないだろうか。ハーディンが不動産をどのくらい持っているかなんてわかりはしないので、想像の範疇を出ないが。
「……じゃあ、ハーディン王城は直接は」
「ふ～む。確かになぁ～。んじゃあ知らねぇかもしんねーな。得体の知れない魔術師と手を組んだなんてことは」
とすれば、この一連の騒ぎを操っているのはロドリス王城と言うよりは、『青の魔術師』だと言うことになる。
……ハーディンが陰謀の舞台なのであればシンプルに政治的国家権力の拡大だと考えられるが、国王が寵姫に牛耳られて腑抜けているとの話が真実とすると、果たして腑抜けの王が皇帝位継承者を暗殺してヴァルスに戦争を仕掛けるなんて、大それたことを考えるだろうか。
誰かに――例えば、その寵姫に唆されれば考えるかもしれないが……。
さっきの考えでいくと、ストレートに考えれば唆しているのは寵姫ではなく、『青の魔術師』。
その場合、一介の魔術師が国を唆す目的は、何なんだろう。自分の権力の拡大なのか？
大使館を出たそのまま、俺たちはパララーザがキャンプを張っているフォグリア郊外に向けて足を運んだ。協力を得た以上、出立する前にやっぱり礼は言っておくべきだろう。
フォグリアはなぜか、街中に小さな公園が多い。児童公園とでも

言えば良いだろうか。そんな雰囲気の小さな公園で、決まって公園は木々でぐるりと覆われている。そのせいで街の中はいたるところに木々の緑の姿が見えた。

街そのものも、ヴァルスのように防護壁で囲われてはいるのだが、防護壁のその内側にやはり街を囲むようにぐるりと木々で囲まれている。

レオノーラも街中に木々はあったけれど、もっと整然とした感じで街路樹、と言う印象だった。

（……？）

その歌声が聞こえてきたのは、もうじきパララーザのキャンプに辿り着く、と言うくらいまで郊外に近付いた辺りだった。防護壁手前の木々が森のように見えてくる辺りだ。

小さな歌声だった。多分、幼い女の子。

（ユリア……？）

歌声の主を探して、足を止める。なぜか、ユリアのことを思い出した。……そうか。歌が。

――聖書の第８９番よ。

ユリアが、キサド山頂の祭殿を目にして歌った……あの時の歌に、良く似ているんだ。

ただ、全くの同じものではなさそうだ。多分、コード進行だけ同じでメロディラインが少しずつ違うんだな……なんて思いながら視線をさまよわせる。木々の間を分け入ったその奥、小さな家があるのが見えた。小さな家とは言っても、３階建てくらいの高さはある。東京とは、そもそもの時点で比較にならない。

石を組んだ壁に囲まれたその家の門の脇に、女の子が座り込んでいた。膝を抱えて地面に座り込んだ彼女は、長い棒切れで意味もなく地面を掃くように左右に振り回しながら小さな小さな声で、その歌を口ずさんでいた。

何を言っているのかは、良くわからない。

ただ、あの時ユリアの歌に感じたような、何か……何かが。

「……カズキ？」
「え？」
呼ばれて、顔を上げる。
突然足を止めてしまった俺には気がつかなかったらしく、シサーたちは随分前まで進んでしまっていた。クラリスが、俺のところまで戻ってくる。
「どう、なさったのですか」
「あ、いや……」
答えかけて、頬を伝う雫に気がつく。――え！？
「……」
近付いたクラリスが、あっけにとられたような、痛ましいものを見るような目線を向けた。
「あ、あれ？何だ……どうしたんだろう……」
「……何か、気掛かりなことでもありますか？」
黙って首を横に振る。感情の起伏はなく、ただひとつの現象のように涙だけが頬を伝わる。
「別に……」
意識しないまま、ぼろぼろと零れる涙に動揺した。泣く理由なんかどこにもありはしないのに。
……歌に、触発されたんだろうか。でも、何で？
「これは、聖歌？」
誤魔化すように、目元を擦りながらクラリスに問う。けれども、涙はなぜか次から次へと溢れてなかなか止まらない。
人前で泣くのなど、果たして何年ぶりだろう。物心ついてからは記憶にない……などと他人事のように思っていると、クラリスは視線を空にさまよわせて小首を傾げた。
「似ていますね。似ていますが、違います。……きっと、エルファーラの歌だと思いますよ」
「エルファーラの？」
「ええ。エルファーラには、教皇庁のあるヴェルヌを除いて大きな

街はありません。その代わり、集落のような形で小さな村が点在しています。聖歌を元にした独特の歌が、村や地方ごとに伝わっているようです」

「聖歌を元に？」

「子守唄などで、母から子へと受け継がれることが多いみたいですね。……きっと、お母様がエルファーラのどこか、その歌が伝わる村の出身なのでしょう」

そうなのか。

きっとあの少女の母親が生まれ育った村というのは、聖書の第８９番を元にした歌が子守唄代わりに伝わっていて、それを彼女は赤ん坊の頃からずっと聴いてきたんだろう。

「……寂しそうですね」

クラリスの視線が、少女に向いていた。

「けれど……不思議ですね。まるでプリーストのようです」

「え？」

「癒されませんか。何か」

「……うん」

ユリアが歌った時にも、感じたけれど。

それと、同じような印象を受けた。心に沁み込むような……癒されるような。

治癒系の魔法をかけてもらった時とは違って……何て言うんだろう。真実癒されると言うよりは、安らぎがもたらされているような感覚だ。

怪我で言うならば、その傷そのものが完治するのではなくて……痛みが引く、と言うような。そんな感じに近い。

「おーい。何やってんだー？」

「魔法を修得しているわけではなさそうですけれど……プリーストの素質があるのかもしれませんね。行きましょう。シサーたちが痺れをきらしてますよ」

シサーの呼び声に、クラリスが苦笑を浮かべた。ようやく涙が収

まった俺も小さく笑みを模る。
「……今の、内緒にしといて下さいね」
歩き出しながら、バツが悪くて言うと、クラリスはくすりと笑って肩を竦めた。
「もちろんです。……何か、つらいことがあったら言って下さって良いのですからね」
つらいこと。
……ある、つもりはないんだけれど。
「うん……。ありがとう」
気遣いに感謝して、俺は小さく礼を言った。

パララーザに別れを告げ、フォグリアを出立する。メディレスは最後まで、俺のことをひどく心配してくれていた。
前に別れる時、次に会う時に借りを返すと言っていたはずだったのだが、結局また借りを増やしてしまったことになる。返すことが出来る日は果たして来るのだろうか。踏み倒すことにならなきゃいーんだが。
「日が暮れる前につけるか、ちょっとわかんねえかなあ」
俺を同乗させた馬を操りながら、シサーが空を仰いでぼやく。俺の分、余計な重みがあるので馬は迷惑だろうが、仕方がない。俺には俺の事情と言うものがある。……乗れないものは乗れない。
街を出てしまうと、そこに広がる草原の風景はヴァルスと大して違いはなかった。
一面に草地が広がり、ところどころに多少背の高い草むらが見える。名前のわからない花がぽつりぽつりと風に身を揺らし、天に向かって伸びる木が群れることなくその腕を空に掲げていた。風はヴァルスよりは幾分涼しく感じるが、それでも春の匂いが垣間見える。
「……誰かさんが引っ掛かってるから、予定より出発が遅れちゃったしねー」
さらさらと風に髪を揺らしながら、ニーナが隣に馬を並べてぼそ

りと言った。もちろん、シサーがシリーに引っ掛かっていたことを指している。ニーナの嫌味を、シサーは顔を逸らして黙殺した。

地図を見た限りでは、リデルはフォグリアからそう離れていない辺り――レオノーラからヘイズくらいの距離にあった。いや、もう少し近いだろうか。頭の中で地図を思い出しながら頷く。

「でも、馬だから歩くよりは早いし」

「今日は、リデルで泊めてもらうつもりでいた方がいーだろうな」

第2部第1章第3話　街角の歌（2）

フォグリアを午前中のうちに発って目一杯馬を飛ばせば、バルザックがいるだろう森には今日の夜には辿り着けたのかもしれないけど……残念ながら昼過ぎの出発となり、リデルに寄ってソーサーに会ってみてから行くとあれば、今日中にサーティスの――バルザックの屋敷に辿り着くのは多分不可能だろう。ついでに言えば、2人も乗せているシサーの馬は、目一杯飛ばしたって普通より遅い。

「それとも、行けるところまで行ってみるか？野宿でも良いし」

「バルザックの目的って、何なのかしらねー」

ニーナの馬の頭の上にちょこんと座り込んだレイアが、不意に呟いた。

「バルザックの目的、ね……」

それを受けて、俺も小さく呟く。

明らかに、バルザックはユリアを狙って来た。

俺がレガード本人じゃないことはわかっていたみたいだし、用はないとはっきり言った。そして俺たちが『銀狼の牙』に釘付けになっている間に、さっさとユリアを攫って姿を消した。

シェインたちの話でいけば、無事で……いるはずなんだけれど。

それに、ユリアが攫われてしまって勢いユリアにばかり目が向いてしまうが、レガードだって放っておくわけにはいかない。ロドリスと開戦するのであれば、それに向けて、何とか行方を捜さなければならないのだが。このままでは、ヴァルスを統べる王族が誰もいなくなってしまう。

シンが何かを知っているのだとすると、レガードは無事にどこかで生存しているだろうと思える、と言う期待に縋るしかない。

……バサッ。

そんなことを考えていると、遥か頭上で既に聞き慣れてきた羽音がした。見れば、シサーの剣が光を放っている。

「出たよ……」
ワイバーンだ。
「こいつはちっと、逃げらんねえからなあ」
ゴブリンとかだったら、馬なのを良いことに逃げられるんだが。
俺は相変らず女装のままだけど、今は隠す必要がないのでしっかり腰に帯剣している。左手で鞘を押さえ、右手を柄にかけた。
「キェェェッ」
甲高い鳴き声。シサーが馬を停めた。振り仰ぐ。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ポスト・ヌービラ・ポエブス。『光の矢』！！」
俺たちより少し後ろにいたキグナスから、魔法が飛んだ。いくつもの鋭い光が、ワイバーンに向けて放たれる。
その間に俺は、馬から飛び降りていた。馬に慣れていない俺は、地面に下りている方が圧倒的に戦いやすい。
頭の奥が、白く……しんと冷えるのを感じる。不思議なまでの静寂。モノクロの感情、とでも表現したくなるほどの虚無的な胸の中。剣を握る自分が、他人のようだ。
まるで予めプログラミングされた機械のように。……ただ斬れば良い。冷静に、状況だけを見据えて。
――――――――俺の手は、既に血塗られて真っ赤に染まっているのだから。
「ギャアアアッ」
光の矢を受けたワイバーンが雄叫びを上げ、怒ったように急降下して来る。
「のあッ」
馬に跨ったままのキグナスが、突っ込んできたワイバーンを辛うじて避けた。土煙が上がる。舞い降りてきた敵に、俺は地面を蹴って跳躍し、切り掛かった。シサーが馬を操って剣を振り翳す。
ワイバーンは飛ばれると面倒臭い。なので、その巨体を持ち上げる羽を狙うのが効果的なのだと、幾度かの戦闘で気がついた。

下から斜めに、剣を払う。数瞬後には、シサーの剣が長めの首に叩きつけられた。ぶんっと首を振り、尻尾を振り上げる。その胴部を目掛けてニーナとレイアから『風の刃』が振るわれた。

「ヒィィィンッ」

もがいたワイバーンの尾が、キグナスの馬に叩きつけられる。痛々しい悲鳴を上げ、馬が吹っ飛んだ。同時にキグナスが地面に投げ出される。

「げほげほげほッ……痛ぇぇぇッ」

キグナスの呻き声が聞こえる。馬から飛び降りたクラリスが駆け寄ってキグナスを助け起こすのを視界の隅で見遣りながら、俺は再度剣を翳した。鮮血色の弧が描かれ、ワイバーンがまたも雄叫びを上げながら手と尾を振り回す。

「……くそッ」

ぼやきながら、シサーがしゅたっと地に着地した。その後方を、シサーが跨っていたはずの馬が駆け抜けていく。どうやらワイバーンの咆哮に恐慌を来たし、暴れて逃げたらしい。制御するのを諦めて、叩き落される前に地面に降りたんだろう。見れば、先ほどクラリスが降りたせいか、クラリスの馬も既に姿がない。

「せっかくの足をどうしてくれるんだよッ」

苦情を口にしながら、シサーが地を蹴った。ぶわっと振るわれたそのずたずたの羽を越える高さに、体を跳躍させる。全く大した身体能力だ。俺にはあんな高さまで跳べない。

挟み撃ちをするように、下の角度から俺の剣がその首筋に突き刺さる。一閃されたグラムドリングを受けて、ワイバーンは最期の雄叫びを上げた。

どうっとその体が地面に叩きつけられる前に剣を引き抜き、後方へ飛び退る。薄く上がる砂煙の上に、シサーが着地をするのが見えた。

「くそー。歩きか」

気がつけば、馬はニーナが未だに跨っているただ1頭となってし

まった。2頭はワイバーンに慄いて逃げてしまったし、1頭はワイバーンの攻撃の余波を食らって動かぬ肉塊と化してしまっている。さすがに、1頭に5人も乗るわけにはいかない。

「運がねえなあ～」

剣を拭って、鞘に収める。ツンツンと剣先でシサーがワイバーンを突付きながらため息をつくのを見遣って、ニーナがからかうように言った。

「シャインカルクの馬は、ウィレムスタト産の名馬だからね。シェインに弁償を迫られるかもね」

「冗談じゃねぇ」

ひとり、しっかり馬を確保しているニーナがクラリスを背に乗せてやるのを手伝いながら、シサーが顔を顰めた。

「ウィレムスタト？」

「ああ……風の砂漠の更に向こうだよ。良質の馬の産地として、キルギスに次いで名高い」

「ふうん。キルギスに次いでってことは、キルギスがナンバーワンなんだ」

俺の言葉に答えたのは、キグナスだった。

「キルギスは元々遊牧民族だからな。……あーあ。また歩くのかよー」

そのぼやきに便乗して、俺も小さくため息をついた。

「……仕方ない。行こう」

果たして日が落ちる前に、リデルに辿り着くことが出来るのだろうか。

◆◇◆

リトリアから、山越えルートを避けた道を海沿いに南下していく影があった。南天まで上がった日が、その黒いぼさぼさの髪を照らす。

「はあああ……ついにひとりぼっちでリトリア往復ですよ。嫌になっちゃいますねえ。こうひとりで旅をしているとですね、いかに明るく朗らかでへこたれない私と言えどもちょっとこう……何て言うんですか？鬱々としたって言うんですか？そういう気分になってきちゃうわけですよね。せめてエレナさんがいればお話し相手に……エレナさんって私を見ると暴力を振るいたくなるんでしょうかね？お話って言うよりは、私が一方的に罵られているような気もしなくはないんですが……。その方がましってことになると、私、ドMってことになりません？それはちょっと……あ、歌でも歌いましょうか。何か楽しそうな感じしませんか？そうと決まったら歌を決めなきゃいけませんねえ……。何にしましょうか。こう、明るく元気なのが良いですね」

ひとりでもうるさい男である。

グレンは3度目のリトリアとの渉外を終え、フォグリアへ戻るところであった。現在のところ、あまり良い方向へは進んでいない。

恐らくは、ヴァルスが差し向けた使者の為だろう。リトリアをこちらに引き寄せるには何か策を講じねば、このままいくと少々危ういことになりそうだ。リトリア国王クラスフェルドは、ヴァルスとロドリスを両天秤にかけている。

眼鏡を人差し指で押し上げ、深刻な顔でグレンは歌の選定を開始した。小さく歌ってはぶつぶつと呟き、また別の歌を歌い始めるグレンに、道行く農民が薄気味悪い視線を向ける。

「あ、どぉもお。精が出ますねえ。こうもあったかくなって来ると、眠くなっちゃいますよねえ」

にや～っと笑いかけると、農民はびくりと体を震わせて慌てふためいて逃げて行った。爽やかな笑顔を浮かべたつもりのグレンは、寂しくその笑顔のまま見送る。

「……シャイですね」

そして再び、己を鼓舞する歌を真剣に考え始める。

馬には、やはりまた逃げられた。どうにも馬と言う生き物とは相

性が悪いらしい。なぜだか常に徒歩を強いられる羽目になっている。おかげで移動にばかり時間が取られ、効率が悪いことこの上ない。

「こりゃあ今日中にフォグリアにつくのは、無理でしょうねえ……」

１０曲ほど大声で騒音をがなりたてた頃、日が少しずつ傾いていった。オレンジ色に染まり始めた太陽が、海へ向けてゆっくりと落ちていく。それを遠く見つめながらグレンは尚もひとりで呟き続けた。

「落ちていく太陽って言うのは何ともはや、寂しい気分にさせるものですよねえ……はッ。いかんいかん。ブルーになっている場合ではないんですよ。あ、スキップでもしてみたらどうでしょう。ちょっと楽しそうじゃないですか？」

既に楽しそうを通り越して、狂人の領域である。良い年をした男がひとりで薄闇の中、歌をがなりたてつつスキップをする光景に遭遇する常識人にしてみれば、恐らくたまったものではあるまい。

「スキップじゃあ、イマイチ捻りがないですか？」

グレンの耳には誰かの意見が聞こえたらしい。ひとりごちて、提案を翻す。

「じゃあツーステップで行きましょう。ツーステップってのは、リズム感が大切なんですよ。いやホントに。出来ない人もいるんですよ？でも私はちゃあんと出来るんだなあ、これが。何をやらせてもこなしてしまうこの才能が怖いですね」

怖いのは才能ではなく己だ、とは誰も教えてくれない。

無駄な労力を消費して付近の農民を慄かせながらグレンがその村に辿り着いたのは、既に辺りは闇が支配する時間帯だった。魔物さえ、避けて通ったのかもしれない。

「今日はこちらにお邪魔するしかないですねえ……」

リトリアとの往復で、何度かこの村には立ち寄っている。

リデル、と言うその小さな村は、農業で細々と生計を立てている小さな小さな村だった。フォグリアまでは、馬で数時間、徒歩でも１日かけずに行けるほどの距離である。

「おなかも空きましたしねえ……」
全く無意味に体力を消費したグレンの腹が、ぐるるると抗議の声を上げた。最初からリデルをアテにしていたので、おやつと称して残りの食料を食べ尽くしてしまっている。
「……変ですね」
村の出入り口付近までやってきて、グレンはふと辺りを見回した。闇に包まれているとは言え、まだ七の刻にもなっていない。にも関わらずこの静けさは何なのだろうか。見れば、村の家々は灯りが全く灯っていなかった。いくら農民は朝が早いとは言っても……。
そして、漂う血臭……。
（……これは？）
村に足を踏み入れ、微かに顔を強張らせた。何が、あった……？
辺りに気を配りながら、歩を進める。
月明かりのみを頼りとし、グレンはその双刀に手を伸ばした。

第2部第1章第4話　血臭の夜　前編

馬をなくし、徒歩になってしまった俺たちがリデル付近に到着したのは夜の8時過ぎ――こっちで言う八の刻を回った頃だった。

……言い直す必要を感じないけど。一応。

すっかり日は落ちて辺りは暗く、都市であるフォグリアから離れてしまうと、遠くの方は月明かりがあってもほとんど見えない。レイアがウィル・オー・ウィスプを呼び出した。

「……変だな」

シサーがぼそりと言った。

かさっと、足元で草が鳴る。途中までずっと、リリリ……と鈴が転がるような虫の音が聞こえていたんだが、いつの間にか完全な静寂が訪れていたことに今更ながら気が付いた。すこぶる、宜しくない感じだ。

「人の気配が、ないですね……」

この村には防護壁がない。シサーに答えてクラリスが頷くのを聞きながら、村に向けてどんどん歩を進めて行く。

灯りが、見えない。いくら夜が早いとは言え、この時間に僅かな灯りさえないと言うのは初めてだ。……何かおかしい。

「血の匂い……」

俺たちより敏感なニーナが、長い耳をぴるぴると震わせて呟いた。

……血の匂い？

言われてみれば、空気の中に鉄の微粒子が含まれているかのような匂いが、微かに鼻につく。そしてそれは、村に近づくにつれて強くなっていった。

「うわ……」

村の入り口に立って、キグナスが顔を顰める。口に出しこそしなかったものの、俺も同じ気分だ。

嗅いでいるだけで胸が悪くなりそうな、濃厚な血の匂い。周囲の

空気に、赤く色がついていないのが不思議なほどだ。
「魔物に襲われたか、こりゃ……？」
同じく顔を顰めながら、村に入って行くシサーの背中がそう呟いた。無言でそれに続く。
アンリも言ってたな……最近国が荒れ始めている、と。村に魔物が入り込むこともあると言っていたっけ。
辺りには、人気どころか死体さえも特に目にはつかなかった。リアルな血臭さえなければ、ただの廃村だと思ってしまいそうだ。
虫の音さえない完全な静寂の中、整備されていない粗い道を進む。左右には一見して貧しいとわかる土壁の小さな家が、ぽつりぽつりと建っていた。
もちろん、僅かな人影さえない。
「……どうする？」
「探せば生きてる奴がいるかもしれない。魔物が……どんな奴かわからんが、いるんだったら、退治しといた方が良いだろうし」
生きてる人……いるんだろうか。
しかも、村を全滅させるような魔物って……。
「この分じゃソーサーって男も、会えないと思った方が良さそうだな」
「でも、サーティスの屋敷の場所はわかってはいるんだし」
「無駄骨になんなきゃいいんだが」
「でも、他にらしいところもないしね……」
錆びた匂いに鼻が慣れて来てしまった頃、不意に俺の足がぐにゃっと何か軟らかいものを踏んだ。
「うわ」
咄嗟に身を退く。
「どうした？」
「何か踏んだ」
言いながら良く見れば、地べたに長く転がった人だった。人家の開いた扉の陰に転がっており、薄闇も手伝って見えなかったらしい。

ぴょこんと手だけが出ていて、俺が踏んだのはそれだった。「うぅぅぅ……」と、どこか危機感のない呻き声が聞こえる。――生きてる。

「大丈夫ですか！？」

クラリスが慌てて駆け寄った。シサーやニーナも転がったままの男のそばにしゃがみこんだ。俺とキグナス、レイアもそのそばから覗き込む。

「しっかりしろ。何があったんだ？」

「クラリス、回復魔法を……」

「旅の途中で……」

ニーナがクラリスに言い終えるより早く、男が口を開いた。全員沈黙して続きを待つ。……旅の途中？と言うことは、リデルの人ではなく、たまたま立ち寄って災厄に巻き込まれたのだろうか。

「おやつが……」

「……」

『おやつ』？

……俺の、誤変換だろうか。

「何……？」

「おやつが尽きてしまったんです……」

……。

何か、状況と男の言っていることがそぐっていないような気がする。

「あら……？」

またも呻きながらもようやく体を起こした男を見て、１番そばにいたクラリスが目を見張った。シサーやニーナも、引きつった視線を向ける。

身を起こした男は、どちらかと言えばひょろりとした感じで、ぼさぼさの頭は後ろで長い毛をひとつにまとめてはいるが、乱れ放題だ。

間延びした感じの口元、丸眼鏡の奥の琥珀色の小さな瞳。両腰に

剣を挿している。……このフレーズは。まさか。
「あれぇ。クラリスさんですかー？」
ぐしゃぐしゃと、ただでさえひどい有様のヘアスタイルに自分で止めを刺しながら『殺戮の天使』はのほほんと笑った。
「こ、近衛警備隊員さん……」
唖然と言ったクラリスに、ちっちっと立てた人差し指を左右に振ってにやりと笑う。不気味だ。
「やだなあ。私とあなたの仲じゃないですかぁ」
「は、はあ」
どんな仲だ。
「グレンフォードですよ。覚えて下さい。愛情込めてグレンと呼んで下さって結構ですよ」
「はあ……」
クラリスが完全に毒気を抜かれている。……いや、クラリスに限らないんだが。
「っと、こんなお時間にこんなところで、何をなさっているんです？」
それはあんただろう。
血臭充満する人気のない村で、暗闇の中『おやつがないから』と言って道路に倒れこんでいられるその神経は、尊敬に値する。
……本当にこの人？『殺戮の天使』って。これじゃあどう見ても、『行き倒れの乞食』だ。かなり譲歩したって、強い人には見えない。初対面なのに悪いんだが。
「はあ、ちょっと……」
「ははあ。観光旅行ですか？良く見れば綺麗なお嬢さん方を連れて、立派なお兄さんとご一緒で。私？私はですねえ、諸用がありまして上司にこき使われている最中でですねえ、フォグリアに戻る途中なんですけれどね、あまりに歌を歌い続けて疲れたものですから、こちらでお宿をいただこうかと思って迷い込んだらこの有様でして。……いえ、計画性がないわけではないんですよ？ただ馬に逃げられ

まして、仕方ないのでツーステップなんか敢行しちゃったものですからついついお腹が空きましてですねえ、おやつをみんな食べちゃったんですよ。ここで食料を胃袋に補充しようと思っていたんですがね、アテが外れましてですねえ、さすがの私も精も根も果てまして行き倒れてしまったと、まあこういうわけなんですがね」

……どうしたら良いだろうか。言っていることが、さっぱりわからない。

（何で近衛警備隊の人が、王都間近で行き倒れるんだろう……）

歌う理由もわからなけりゃ、ツーステップを敢行した理由に至っては聞きたいと言う気も何か失せる。……いや、却って聞いてみたいかもしれない。

「つまり、お腹が空いてらっしゃるんですね？」

引きつった、けれども努めて優しい笑顔を保ちながらクラリスが言う。シサーが小さく溜め息をついて、荷袋に手を突っ込んだ。携帯食のパンと干し肉を差し出す。

「……ほら」

「うわわわ。良いんですか」

「ここまで聞いて、やらんわけにはいかんだろうッ！？」

「いやいやそんなつもりでは。いや、そうですか？いやそれほどにとおっしゃるのなら、私だっていただくのにやぶさかではないんですよ。それじゃあ遠慮なく……」

『それほどに』も何も、誰も何も言ってはいないけど。

……間違いじゃなければ、恐らくグレンフォード――『ジェノサイド・イブリース』と言われるその人は、俺たちの敵にあたる人物じゃなかっただろうか。

がつがつとシサーの渡したパンと干し肉を食い漁るその脇にやや距離を置いてしゃがみこみ、出来るだけ顔を見られないように伏せつつ両手で顎を支えて眺めながら、動物園の動物に餌をやっているような気がした。

「あ、すみません、図々しいお願いで何なんですがね、飲み物なん

かあるとありがたいなあーとか」
　全く図々しい。
「……はい」
　ニーナが水袋を取り出す。丸ごと渡してやると、グレンフォードはへらへらと笑いを浮かべながら、受け取ってがぶがぶと飲み干した。
「ぷはーッ。生き返りますねえ……。袖振り合うも他生の縁と言いますからねえ……」
「はは……」
　前世でこの人物と触れ合ってしまった己を呪っているような笑みをクラリスが浮かべ、ニーナの代わりに水袋を受け取った。ようやく、グレンフォードが立ち上がる。
　立ち上がってみると、馬鹿でかい。これで無駄な動きが多いとすれば、実に燃費が悪そうだ。
「で、クラリスさんはどうなさったんです？」
「あ、いえ、ちょっと親戚の家に行く途中で……」
「ああそうですか。物騒な世の中ですからねえ……。お仲間さんですか？」
　きょろりと俺たちを見回す。シサーとニーナが顔を見合わせて、ぽりぽりと頬を掻いた。かつて戦場で遭遇しているはずだが、グレンフォードの方はどうやら気がついていない。
「ええ……そのようなものです」
　とりあえず、流れでそれぞれ自己紹介なんかしてみる。
『青の魔術師』が『レガード』と旅をする面々を知っていたらまずいんじゃないか？と思わなくもなかったが、情報社会の俺の世界と違って、そこまで情報が流れてはいないらしい。いや、単にグレンフォードが知らないだけかもしれないけれど。
「そうですか。……こちらのお嬢さんは、随分ハスキーな声ですね」
　琥珀色の瞳を細め、グレンフォードが俺に言う。顔を不自然じゃないよう気をつけながら伏せていた俺は、ぎくりとした。一応、名

乗る時も極力小声……を通り越して、ほとんど囁くような声量だったはずなんだが。

「今ちょっと喉を痛めているんです」

クラリスがフォローしてくれる。俺は、黙ってこくこくと首を縦に振った。

グレンフォードが俺を覗き込もうとするので、慌てて咳き込むふりで顔を背ける。あまり見ないで欲しい。この人がレガードの顔を知っているのかは、わからないけれど。

「そうですかあ。まあ、季節の変わり目ですからねえ……。女性はお体には気をつけないといけませんよ。ああ、私、良い風邪薬を持っているんです。良かったらさしあげますけど」

言ってグレンフォードが、自分の荷物を漁る。汚いハンカチだの、何に使うんだかわからない赤錆びた鉄屑だの、謎のオモチャだの変な物をたくさん取り出して地面に散らばした後にようやく、これまた薄汚い茶色い小瓶を取り出した。全員冷や汗を浮かべて、思わずごくりと息を飲む。

「これこれ。……ええとですねえ、私も良くは知らないんですがね、ゴブリンの血とジャイアント・スコルピオンの殻とセイルの根と……」

待て待て待てッ。

それはむしろ毒じゃないのかッ!?

「あとは何ですかねえ……。何かいろいろ入ってるんじゃないでしょうかね」

殺す気かッ!?

……と怒鳴るわけにもいかず、俺は両手をブロックするようにそっと差し出して、顔を思いっきり下に俯けて拒絶の意を示した。

「え?そうですか?」

こくこく。

「残念ですねぇ。一食の恩を返さなければと思ったのですが」

一食の恩ならば、俺ではなくてシサーに返してくれ。

この人が『青の魔術師』の腹心だとしたら……思わず、ロドリスの宮廷魔術師に同情する。忍耐力に敬服だ。

「それはともかく」

しゃがみこんでごそごそと散らかしたガラクタを荷袋に詰めなおしているグレンフォードに、シサーが声をかけた。

「この村、どうなってるんだ？」

「どうなんでしょうねえ。私も先ほど到着したばかりで行き倒れてましたので、良くわからないんですけどね」

ようやくゴミ屑を詰め終えて、ゴミ袋もとい荷袋の口を閉めると、グレンフォードが立ち上がる。それにつられて、シサーの視線も上を向いた。

「魔物ではないかと」

わかっていながらこんなところに平然と伸びていたのか？

「生存者は」

「……わかりません」

さすがに神妙な顔で、グレンフォードが首を横に振る。……『殺戮の天使』。まさかこの人がやったわけじゃ……。

その異名から思わず疑惑の視線を向けたが、グレンフォードは何も気付かないようにふうっと溜め息をついた。

「一応私も、ハーディンの人間ですからねえ……。王都間近でこんなことがあっては調べないわけにはいきません」

ああそうか。この人、近衛警備隊なんだっけ。あまりに間抜けな感じなので忘れていたが。

と言うことは、俺流に言えば政治家のＳＰみたいなもんなわけだから……こんなこと、するわけがない。

じゃあやっぱり、魔物……？

◆　◇　◆

なぜか、敵対する『青の魔術師』の腹心ではないかと予想される

『殺戮の天使』と一緒に行動する羽目になった俺たちは、とりあえず村を歩いて探ってみることにした。
最初のシサーの発言ではないが、生存者がいるかもしれないし。
実際問題として俺たちに関係あるわけじゃないんだが、放っておくわけには……やっぱりいかないだろう。
「お仕事は、お忙しいのですか」
クラリスが、グレンフォードに問う。
うまい。そういう意図がクラリスにあったかどうかはさておき、うまく『青の魔術師』について何か聞ければらっきーだ。
「そりゃあもう。ウチは上司が私を馬車馬のようにこき使いますからねえ……」
「馬車馬ですか」
「あっち行けこっち行け肩を揉めお菓子を作れと」
……本当だろうか。何だかこの人から話を聞けても信憑性が薄いような気がする。
「上司ってのは？」
シサーが、横合いから突っ込む。グレンフォードの眼鏡が、ウィル・オー・ウィスプの光に反射してキラリと光った。
「私こう見えても、近衛警備隊ですからね。隊長さんが直属の上司と言うことになります、はい」
「隊長さんにお菓子作ってさしあげるんですか？」
「何かあんたが作るとまずそうだなあ～」
「何をおっしゃるんですかッ。エプロンの似合う可愛い私に」
「……」
「嫌な沈黙ですねえ……」
「近衛警備隊のあんたが、あちこち行かされるのか？どこに？」
シサーが更に突っ込む。
「そりゃあもう、海でおいしい貝を拾って来いだとか山で山菜を採って来いだとか」
……。

シサーとクラリス、グレンフォードが話すのを聞きながら、俺は考え込んだ。眉を顰める。俺と一緒に後ろを歩いているキグナスが、そっと耳打ちした。

「何か、食えねえ気がする」

「……ああ」

同感だ。

一事が万事この調子だから、突っ込む気も失せてくる。つまり、肝心なことは何ひとつ答えていない癖に、警戒心を抱かせない。

相手に馬鹿だ無能だと思わせるのは、非常に有効な策略のひとつだ……と思う。

それはそのまま相手の安心を誘い、安心は油断を引き連れてくる。油断をすれば隙が出来る。

……もしそうだとすれば、この人は……かなり、食えない。

「崖からバンジージャンプしたり、嫁姑問題に巻き込まれてみたり」真性の馬鹿、と言う可能性も俺には否定出来ないが。

「嫁姑問題、か。……つまり？」

けれど、シサーは今の言葉に何か引っ掛かったようだ。

低く尋ねる声に、グレンフォードも低い声で答える。心なしか僅かに変化した、語調。

「私には今のところ、王子様やお姫様が登場するような、御伽噺にはあまり縁がないのです。どろどろした、おじさま方とのおハナシしかね……」

「……」

空気が、僅かに硬くなった。

（……気付いてる？）

それとも何かの、例え話か？

……深い意味に捉えて良いのなら。

今のところグレンフォードは、レガード捜索やユリアに関しては直接関係……何らかの指示があるわけではなく、担当しているのは専ら政治絡みの国間交渉――恐らくは対ヴァルス戦線に関しての外

涉を行なっていると言うことになる、んだろうか。
つまり、俺が『レガード』だと気付いているが、手出しをしない……と？
そう、素直に受けとめても良いんだろうか。
シェインやラウバルいわく、『青の魔術師』は何を考えているのかよくわからない感じだと言う。そんな男の腹心だとすれば……一筋縄でいくとは思いにくい。
引っ掛け、だろうか。
まだ、グレンフォードは俺の顔をまともには見ていないはずだ。確信が持てないのかもしれない。
「……良くおわかりですね」
グレンフォードが、ちらりとシサーを見た。ふわふわと欠伸をしながら、シサーが伸びをする。
「んあ？まあな。ナタリアは内紛の火種を抱えてるからな。ハーディンから派遣されて巻き込まれる嫁姑問題つったら、ナタリアのミリイ公妃とシャトレーゼ公太后しかねぇだろ」
「ご明察に感服ですねえ……」
国際政治の話らしい。
「あんたが調停したのか？」
「勃発はしてませんでしたよ？」
しれっと答えたグレンフォードに、尚も何か言いたげな視線を一瞬向けたが、結局それ以上突っ込むのはやめてシサーが指先で髪を弄んだ。
「ま、俺なんかは御伽噺には最初っから縁がねえなあ～」
何も気づかないようにあっけらかんと。
俺が至る考えに、シサーが至らないわけがない。とすればその演技力は、大したものだ。
グレンフォードもにこやかに応じた。
「そうですか？」
「しがない旅人だからな」

「お仕事は？」
「傭兵稼業で食ってる」
「じゃあ腕には自信があるんですねえ……。怖いのが出たら守って下さいね。私を戦力に数えちゃ嫌ですよ」
……おいこら、『殺戮の天使』。
「変な奴」
俺の隣でキグナスが、ぼそりと呆れたように言い放った。

第2部第1章第5話　血臭の夜　後編

村を奥まで進んで行くほどに、血の匂いが濃くなっていく。
既に鼻も慣れてきてしまって、気持ち悪くなるようなことはないが、視界が赤く染まっていくような錯覚を覚えた。
「何があったのかしらね」
グレンフォードに嫌気が差したのか、後ろに下がって来たニーナが不安げな顔をした。その肩で、レイアがうつらうつらしている。大した度胸だ。
「……あれは？」
「集会場ですね」
村の入り口から道路を直進し続けて来ている俺たちは、どうやら村の中心部に辿り着いたらしい。やや円形に広くなったスペースの左手奥に、これまでの掘建て小屋みたいな家屋とは少々趣の異なる建物があった。大した大きさがあるわけでもないが、それでも小さな自治会館程度のスペースはありそうだ。こちらは木造らしい。
「集会場？」
キグナスが頓狂な声を上げる。
「ええ。村の人たちが何かを相談して決めたりする時にこちらを使うわけですね。私の知る限りでは、月に1度集会していたはずですよ、この村は」
「……今日は、まさか」
「……可能性は、否定しません」
月に1度の集会、その現場に何者かが？
「気持ち悪い」
ニーナが、青い顔をして口元を手で押さえた。
知らず、誰もが口を閉ざして集会場へ近付いて行く。扉は、閉められていた。
建物の側壁にいくつか樽が置いてあるのは……何だろう。

不意に興味をそそられて、みんなから離れて近付いてみる。……松明やカンテラ用の油だろうか。危ないだろう、それはやっぱり。危機管理がなってない。それともあまりに平和だと、例えば放火するような馬鹿がいなかったりすると平気なものなのだろうか。

「開けるぜ」

扉に手をかけ、シサーがその上方を睨み上げながら誰にともなく言う。グレンフォードが一歩、後ろに下がった。

「私を戦力に入れちゃ嫌ですよ」

「……」

この人って……。

シサーが扉を引く。

瞬間、溢れ出てきた血の匂いは、まさにむせ返るような、と言うやつだった。その濃度だけで窒息しそうだ。思わず息が詰まる。嗅覚の全てが一瞬で飽和した。

……その臭いに、嗅覚だけじゃなくて、感情が麻痺していくのが自分でわかった。何かの危険信号のように、耳鳴り。しんと冷えた心のどこかで、目の前の惨状がまるで遠いどこかの出来事のように……他人事のように、感じた。

「何だこれ……」

目の前に広がるのは、夥しい血の海だった。

テニスコート1枚分くらいの空間ががらんと広がり、薄暗いせいでその床に濃い色の奇怪な模様が描かれているように見える。壁と言い床と言い……ペンキで所構わず塗りたくって挙げ句バケツをぶちまけたかのような。

奇妙なのは、その中に食い散らかされた人の部品のようなオブジェが無造作に転がっていることだった。……リデルの村の人たちだろう。

部屋の壁際にはカンテラではなく、いくつか松明が掲げられているのが貧しい感じだった。殺戮が行われてから、どれほどの時間なんだろうか。松明はまだ、皓々と燃えている。窓が僅かに開いてい

るのか、微かにカーテンらしき薄布が寒々しくはためいた。
「こりゃまた凄いことになってますねえ……」
「ひでぇ……」
呆然と立ち竦んだまま、シサーが呟いた。不意にキグナスが、口元を手で押さえて身を翻す。吐き気がこみ上げたんだろう。俺も後を追って外に出ると、集会場出入り口付近の貧相な植え込みに顔を突っ込んで、キグナスが嘔吐していた。
戦争に行っているシサーやニーナと違って、キグナスはシャインカルクにいたのだから……多分、あんなものを見るのは初めてだろう。それもあれだけ大量に、そのほとんどがずたずたと来れば……これは仕方ない。
「大丈夫か」
背中をさすってやる。……いや、俺自身だって初めてなんだけれど。ダンジョンで見たギルドのシーフだってあそこまでじゃない。
ひとしきりキグナスが吐瀉し終え、顔を上げると涙目のまま俺を見上げた。
「ありがと……お前、平気なのか？」
「……うん。俺は大丈夫」
淡々と答えたところで、クラリスがやはり青い顔をして出て来た。両手で口元を押さえている。レイアが心配そうに、その後をふわりと追って来た。
「クラリス、大丈夫？」
「……ええ」
返事を最小限に抑えたのは、多分キグナスと同じで吐き気を堪えているからだろう。
「じゃあ……見張りを兼ねて、ここで休んでて」
「カズキ、戻るのか？」
まだ青い顔をしているキグナスが、問う。俺は頷いて、小さな笑みを口元に作った。
「シサーたちに任せっぱなしってわけにはいかないよ。俺は別に、

大丈夫だから」
「……」
「レイア、宜しく」
「あ、うん」
言い置いて、中へ戻る。村の中も血の匂いが溢れていたと思ったけれど、この集会場と比べたら話にならない。澄んだ空気のようにさえ感じる。建物の中に足を踏み入れると、空気そのものの濃度が変わったように感じた。肌にまとわりつく。
シサーたちは歩を進めて、部屋の中央部の方まで行っていた。そちらへ向かう。
足元にいくつも赤黒い血溜りが出来ていて、足を滑らせないよう気をつけながら、俺は辺りに目をやった。時折びちゃ、と言う音が上がる。
……にしても、ひどい。子供の頃に見た地獄絵図も、ここまでじゃない。
「おう。あいつら、平気か？」
近付いた俺に気付いて、シサーが振り返った。必要以上に、ウィル・オー・ウィスプがシサーのそばに張り付いている。何か調べてたんだろうか。
キグナスたちほどじゃないとは言え、その顔はやはり青い。
グレンフォードに疑念を抱かれたくないので、俺は黙って頷いた。
「お前は平気なのか？」
その問いにも、俺は声を出さずに首肯で応じた。
「ここに魔物が留まっている様子は、なさそうですよぉ」
この人だけが、通常通りだ。……何でこの光景の中でこれほど普通にいられるんだろう。
「そうみたいだな」
「……こんなこと、前にもなかった？」
ニーナがぶるっと体を微かに震わせ、頼るように、珍しく体にしっかりと巻きつけられたシサーのマントをそっと掴みながら呟く。

「前にも？」
「何です？」
「聞いた話だけど。何年か前に、ロドリスのどこかの村が魔物に襲われて全滅したんじゃなかった？一面血の海だったって。……グロダールより後よ」
「……」
その言葉に、グレンフォードは沈黙で応じた。シサーが小首を傾げる。
「ああ、そういやそんな話聞いたことがあるな……。どこだった？」
「良くは、知らないけれど」
「あんた、ハーディンの人間だろ。何か知ってるんじゃねーか？」
シサーがグレンフォードに振る。
……気のせいか？一瞬だけ、その飄々とした表情が姿を隠したように見えたのは。
「さてはて。よくわかりませんねえ……」
「そうか？同じ魔物かな」
「それは違うと思いますけど」
「……何で？」
「私の冴え渡り研ぎ澄まされた勘です」
左手を腰に当て、右手で眼鏡のフレームを掴みながらグレンフォードが体を反らせた。あてにならない。
「出よう」
やれやれと首を振って、シサーが歩き出した。それに従って、俺たちも外へ向けて歩き出す。
「お嬢さんは気丈ですねえ」
俺の後ろをついて来たグレンフォードが、話しかけて来た。僅かに顔だけで、ちらりと振り返る。
「こんな惨状見ても顔色ひとつ変えないとは。いやはや。驚きました私。はい。女性が強くなったと言うのは本当ですねえ。いえね、私も常々実感してはいるんですが。ほら先ほども申しました私の直

属の上司ってのがですね、女性なんですけどね、もう鬼と言うか何と言うか……いやいや。褒めてるんですよ？」

「……」

好きにしゃべらせておこうと思い、前に向き直る。もう出入り口はすぐそこだ。小走りに前方のシサーたちに駆け寄りかけた背中に、やや後方で足を止めたグレンフォードからその一言が投げつけられた。

低く、ひっそりと。

……多分、俺にだけ聞こえるように。

「バルザックさんは、お元気でしたか？」

「――！？」

何……！？

ぎょっとして思わず振り返る。まともに顔と顔が向き合った。その瞬間のグレンフォードの表情を見て、しまったと思う。……こいつやっぱり、レガードの顔を知ってたんだ……！！

得心のいった表情に次ぎ、あり得ない速度で抜き放った双刀を翳したその足が地面を蹴った。

咄嗟に何をすべきか、頭の中がホワイトアウトして、俺に出来たのは反射的に首を竦めて目を閉じることだけだった。

――キンッ！！

その俺の耳に、風と共に金属的な刃鳴りが飛び込む。

「悪ぃな」

「……素早い対応ですね」

「シサー……」

俺とグレンフォードの間に剣を翳して滑り込んでいるのは、シサーだった。グラムドリングが白い輝きを放っている。クロスの形に振り下ろされていた双刀を、輝く白刃が一身に受け止めていた。

「途中からこいつが危ねぇってうるさくってな。あんたの目から隠すのに苦労したぜ」

あ……やたらマントを巻き付けてたのも、ウィル・オー・ウィス

プをすぐ脇に置いてたのも、グラムドリングの警告光を遮る為だったのか。
一際高い金属音がして、グレンフォードが後方へと跳び退った。
それに伴って、シサーも態勢を直す。
「魔剣、ですか。珍しいですね」
「ああ。……魔物かあんたかは、迷うところだったんだがな。両方警戒しとくに越したことはないだろう？」
「全くです」
言いながら、グレンフォードが両手をだらりと下ろす。口元に浮かんだままの軽薄な笑みは、今となっては酷薄なものと映った。
「あんたの仕事は、おっさんの相手じゃなかったのか？」
言いながらシサーが、後ろ手でちょいちょいと親指を立てて動かした。下がれ、と言うことらしい。それを受けて、じりじりと刺激しないように後退を試みる。
「与えられた仕事しかこなせないようじゃあ、出世ってのは出来ないんですよ。だからこの年になっても警備隊員止まりでしてですねえ……まあ、上司の意向がわかっている以上は出来ることには、果敢にチャレンジしないといけませんしね」
「ご立派な向上心だな」
正面を向いたまま、血溜りの床に足を滑らせるようにして少しずつ後退していくと誰かにぶつかった。
「……ニーナ」
「……」
ニーナが、言葉もなくシサーとグレンフォードを見つめている。その唇が微かに震えているのが見えた。……そうだった。ニーナはかつて、戦場でグレンフォードの戦闘を目にしているんだった。
それきり、シサーもグレンフォードも沈黙する。
俺たちも、言葉を発することが出来ずに、黙ってその場を見守っていた。
グレンフォードが、剣を構える。シサーもそれを見据えながら、

腰を低く落とした。
緊迫した沈黙が続く。一瞬でも空気を乱せば、その集中を妨げてしまいそうで、呼吸さえもが煩わしく感じられる。多分、他のみんなも同じ気持ちでいるんだろう。誰も……それこそ魔法での援護さえ躊躇っているようだった。
見合ったまま、2人は動かない。能動的な戦闘の仕方を好むシサーにしては、珍しいと言える。
動かないままの空気の中、緊張感だけが高まっていった。空気の粒子のひとつひとつが肌に刺さるように、沈黙が痛い。
が。
「……キグナス、いるか」
ざわりと空気が変わる同じタイミングで、シサーが押し殺した硬い声を静かに発した。爆発的に高まる、殺気。グレンフォードの体から、黒い空気が噴き出して巨大になったような錯覚を覚える。琥珀色の瞳が、魔性の色合いを帯びて煌めいた。
「う、うん」
出入口のところにいるらしい。俺の背後から強張った返事が返る。グレンフォードが、一瞬前までいた場所から姿を消した。
「カズキ引き摺ってこの場を離れろッ」
そのセリフが終わるか終わらないかの内に、3つの剣が烈しい悲鳴を上げた。薄暗がりに咲いた火花が、その一瞬の生命を散らす。
2本の剣を自在に操り、右から左から上から下からとシサー目がけて繰り出される殺戮の刃は、その速さも鋭さも、見ているだけで鳥肌が立つほどだった。
と言うよりは、打ち付けられるその瞬間を視覚でとらえることが出来ない。立て続けに発せられる金属音と一瞬の残像で、辛うじてわかる。浴びせる方も並大抵じゃないけど、それを剣で受け返す方も尋常じゃない。
あそこでシサーが滑り込んで来てくれなかったら、俺は今頃、ここにバラバラに転がる村人の仲間入りだ。

「カズキッ……」
キグナスが小声で叫ぶ。同時に、腕を引っ張られた。
「見てたって仕方ねえだろッ……」
それはまったくその通りだけど。
見れば、刃鳴りの音は相変わらずでも、少しずつ……じりじりとシサーの方が押されていくのがわかった。グレンフォードの殺戮を受け止めるので多分精一杯、攻撃に転じる余裕がない。
対するグレンフォードは、まだ余力を残しているような感じさえある。避けているとは言っても、グレンフォードの剣は僅かに、けれど確実にシサーの腕や頬を細かく切り刻んでいた。細かな血筋や切り離された髪が、時折舞う。
「狙われてんのは、お前だ」
言ってキグナスは、まさに俺を引き摺るようにして集会場から外へと連れ出した。レイアがそれについて来る。
「この場をって……」
どこへ行けば良いんだろう。
「とにかく村から出よう。行く場所は、わかってるんだ。リシア方面に……」
「けど、置いていくわけには」
いかないだろう、やっぱり。俺を助けてくれたわけだし。
俺ってこんなに危機感のない奴だったろうかと思いながら淡々と反論してみると、正面から思い切り怒鳴られた。
「あのなッ……お前はレガード様なんだよッ。その首を掲げてロドリスに攻め込まれたら、ヴァルスもロンバルトも戦う前から総崩れになりかねないんだぞッ！？」
そういうものだろうか。クレメンス国王がいるのに。
不満の表情を読んで、キグナスがずるずると俺を引っ張りながら尚も小声で怒鳴った。
「病床の国王がいたって跡継ぎが曝し首じゃ先は見えてんじゃねえかッ。おめえの首ひとつでロドリスの士気は俄然上がるし、こっち

の士気は地に落ちるんだよッ。片や上がって片や下がるんじゃ、戦力差は開くばっかりじゃねえかッ。さっさと走れッ」

「カズキを守る為にシサーが盾になってるんじゃないのッぼやっとしてたってしょうがないでしょ！？」

俺の首を曝すだの曝さないだのと言うことが話題となるのも、複雑な心境だ。なかなか体験出来ることじゃない。

月明かりだけを頼りに、薄暗い、人気のない村を駆ける。ニーナやクラリスはどうしただろう。……シサーは。

（考えても仕方がないことはわかっているけど……）

リデルの村の付近は、ローレシアの他の街や村と同様近接した集落がない。

村中にさえ灯りや人の気配がないとなると、これはなかなか薄ら寒いものがある。増して、さっきあれほどの大量殺戮の現場を見た後だ。

「……なッ……！？」

不意に、キグナスが驚愕の声を上げた。異変を感じた俺も、ほぼ同時に足を止める。

もうじき、村の出入り口が見えてくると言う辺りまで駆けて来た頃だ。遥か後方で爆音と共に紅蓮の炎が闇を染め上げた。

「やだ、何ッ……！？」

振り返った後方で、立ち昇る炎の柱。夜を焦がす黒煙。

激しい炎を噴き上げて炎上しているのは、先ほどまで俺たちがいた……。

「何があったんだ……」

……そして、今もシサーやニーナたちがいるはずの、集会場だった。

第2部第1章第6話　砕けた心（1）

（やべえかもな……）

休む間どころか、反撃する余裕さえ与えない告死の刃を辛うじて弾き返しながらも足が押されて行く。増して足元は血の海。滑りやすいと言うには大分乾いているが、踏ん張るには少々摩擦が足りない。

剣の腕は、上々だと思う。が、魔性の瞳を持つ目の前のロドリス兵はそれを越える。恐らくまだ、その実力を出し切ってはいまい。

グレンが腕を一振りするごとに、シサーの顔や腕に刻まれる爪痕は増えていく。弾き返し、避けることに成功しているから斬りつけられる程度で済んでいるが、まともに当たれば首が飛ぶことは弾き返す斬撃の強さでわかる。

5合、10合と増していくごとに、腕は重くなった。体の動きが鈍くなる。このままいけば、集中力も途切れるだろう。その時が多分、最後だ。……いや、もう途切れ始めているのかもしれない。

グレンの握るセイバーが、装備している籠手の留め金に当たり弾け飛んだ。硬い音を立てて籠手が飛ぶ。衝撃で、腕に痺れに似た痛みが走った。

グレンはこれだけ腕を振るい続けているにも関わらず、顔色をひとつも変えない。そのスピードや鋭さにも、落ちがない。知性が備わっていることを考えればバーサーカーと呼ぶには値しないのだろうが、疲れ知らずの戦いぶりを思えばそう言われるのもわかる気がする。

「ッ……」

しまった、避けきれなかった。

グレンの左手から放たれた軌跡が、シサーの右腕を深く抉る。衝撃で、グラムドリングが吹っ飛んだ。視界の片隅に自分の腕から血飛沫が上がるのを認めながら、襲い来るもう1本の剣を寸でで避け

る。
だが、更に襲い掛かるもう1本が避けきれない。
「……！？」
そう判断したその瞬間、グレンの気がどこかへ逸れた。琥珀色の瞳が、何かを察知したように凝縮する。反射的にシサーは、後方へと跳んでいた。頭で判断するより、体に滲みこんでいる状況判断だ。同時にグレンも己の後方へと地を蹴った。
「何だッ……！？」
2人が先ほどまで剣を交えていた場所目掛けて、赤い閃光が叩き込まれた。
「あーらら……よけられちゃったぁ……」
閃光と見紛う速さで剣を叩き付けたのは、少女だった。恐らくは17，18歳ほどの。
ただし……。
（何だこいつは……ッ！？）
それはまさしく、『バケモノ』と形容するにふさわしい生き物だった。
人間の形状をしては、いる。
いるが。
「あーそーぼーおよおおおおおお……」
ゆらり、と体を起こし、鮮紅に染まったクレイモア（長剣の一種）を払うように下方へ振る。まだどこか、幼さを残す声。奇妙に間延びした話し方が不気味さを煽る。
シサーは思わず息を飲んで、少女の異様な姿に見入っていた。
顔の左半分が、溶解している。触ったらずぶずぶと指が沈み込んでしまいそうだ。眼窩がむき出しとなり、琥珀色の瞳の歪んだ眼球が飛び出している。口半分もその形が崩れ、口なのか溶解部分なのかの判別がつかない。
溶解している肌色は、木炭のような黒。無事に残った秀麗とも言える右半分と半ばで混じり合って、凄絶としか表現のしようのない

色合いを醸し出していた。良く見れば、その腕も足も、左半分が溶解した木炭のようだ。

それなりにあちこち回っているし、奇妙な魔物にも遭遇していると思うが、こんな魔物には遭ったことがない。……魔物、なのか？

「……出来損ないが」

言葉を失ったままのシサーの耳に、謎めいた一言が飛び込んできた。グレンだ。らしからぬ言い草もさることながら、その内容が。

（出来損ない……？）

『何の』？

ゆらり、と再び『バケモノ』の体が揺らぐ。その視線は、グレンに真っ直ぐ注がれていた。にやーっと、口元が弛緩するように緩められる。時折、不明瞭な発音の言葉やヴァルス語とは異なる言語が混じる、聞き取りにくい話し方。

「あんたぁ、おんなじにおいがするよぉ……？『おにいちゃん』なのかなぁ？アタシのさあああ。おーんなじ、におい、がするんだよねええ……」

言いながら、体ごとグレンに向き合う。シサーのことは完全に眼中に、ない。

グレンが微かに身動ぎをした。氷点下の冷気を含んだ視線を浴びせる。まるで、見下すように。

「ねえ……？そうだよね……？アタシたち、おんなじだよね？……そーうーだーよーねえええええッ！？」

言うなり、その身が躍動した。黒い影の残像を残して、グレン目がけて一直線に疾る。

彼女のターゲットは『お兄ちゃん』――グレンに定められたらしい。乾いた血のこびり付いたクレイモアを横薙ぐと、狂気と歓喜を迸らせて踊りかかる。

「あなたと一緒にされるのは、大変心外なんですがねえ……」

グレンが、いつも通りの口調でのんびりとぼやいた。だがその心中までは、推し量ることが出来ない。そのまま、何気ない動作で双

刀を掲げ、少女目掛けて一閃させる。
「ちぃッ……」
舌打ちをして少女が間一髪でそれを交わす。壁に跳躍し、床へと降り立った。膝をつく。少女が床に与えた衝撃で、掲げられていた松明が倒れた。それをきっかけに、まるでドミノ倒しのように幾つもの松明が雪崩打って倒れていく。はためいたカーテンと床に燃え移り、一気に炎上した。
「死んじゃえば、良いのに」
「残念ながら私には私の都合と言うものがありまして。そうですね、と言うわけにはいかないんですよ……」
カーテンを飲み込むように天井へ向けて駆け上っていく、燃え盛る炎を背景に言った少女に答え、グレンはちらりと視線を走らせた。ニーナがシサーに駆け寄り、精霊魔法を発動させるような姿勢でグレンを睨みつけるところだった。
深いため息を、ひとつ落とす。
「シサーさん」
弾き飛ばされた白光する剣を拾い上げ、シサーが呼び声に視線を向ける。
「私がとらなきゃならない首は、あなたではありません」
「……」
「私はどうやらこの人の相手を強いられるらしい。……レガードさんが姿をくらましてしまった今、あなたと剣を交える理由は私にはありません」
グレンがシサーとの戦闘を放棄したのを知って、ニーナがシサーの腕を引っ張る。その間に、少女がグレンに再び踊りかかった。身をかがめてそれを避け、反動を利用して剣を斜めに振り上げる。少女の手首から先が切り飛ばされ、コールタールのような黒い粘液質の液体が噴出した。
「こいつは多分、ひとりではありませんよ」
「シサー、行こうッ……」

ニーナに腕を引っ張られながら、シサーは唇を噛んだ。
完全に、グレンフォードに負けている。このままではプライドが許さない。
だが。
「勝負は、預けましょう」
その言葉を受けて、シサーは踵を返した。その背中を、ニーナとクラリスが追う。それを見届けて、床に落ちた自分の手からクレイモアを抜き取っている少女に目を向けた。
「……はああ。レガードさんを逃したとあっては、セラフィさんのお怒りは免れないでしょうねえ……」
やれやれ、である。
今から追えば、さして遠くまでは行っていないだろうが。
（一食の恩、もありますしね……）
レガードの戦力を削るに越したことはないのだ。グレンが見る限り、『レガード』が話に聞くほどの剣の使い手であるとは考えれらない。シサーさえ消してしまえば、後の仕事は楽になるだろう。シサーには、止めを刺すべきとわかっている。
クレイモアを左手に持ち替えて、少女がグレンと同じ琥珀色の瞳を煌めかせた。その瞳に宿るのは怒りか憎悪か。
「仕方ありませんねえ……とんだ邪魔が入ったものですよまったく」
この程度の『出来損ない』が、いくら小さいとは言えひとりで村を壊滅に追い込むとは考えにくい。
恐らく仲間がいる。それも同類の。
王都間近で、こんな魔物が跳梁跋扈している事態を放置するわけにはいかない。何人いるのかわからないが、一掃して回らなければならないだろう。放置してフォグリアへの接近を許すわけにはいかないのだ。……仮にも今の身分は『近衛警備隊』なのだから。
「なにぶつくさいってるんだよ、『おにいちゃん』！！！」
少女が再び床を蹴る。はああ、と溜め息をつき直してグレンは身を屈めた。

「ローレシアでヴァルス語を話すのは見上げた礼儀ですがね……」
本来ならば彼女から紡がれる言葉はローレシアで広く使われているヴァルス語ではない。移動する間に覚えたのか、それとも『元々』知っていたのか。
瘴気渦巻く、魔の山――ファリマ・ドビトーク。
グレンにとっては馴染みの深いその山を思い描きながら、細めた目で低く呟いた。
「減俸の代償は、払ってもらいますよ」
少女の腕から繰り出されるクレイモアと、グレンのセイバーが高い悲鳴を上げて激突した。

◆◇◆

「……やっぱり、戻ろう」
それなりの距離があるはずだが、それでも夜空を焦がそうと黒煙を噴き上げて伸びる灼熱の触手は、こちらまでその熱気を送り込んでくる。
何がどうしたのかはわからないが、何らかの衝撃で松明の炎が建物に引火し、表の樽を熱して膨張、蓋を吹き飛ばして炎上ってのが妥当なセンだろうか。
キグナスは逡巡するように、視線を俺の背後に向けた。キグナスだって、シサーたちが気になっているはずだ。だがこのまま飽くまで俺をグレンフォードから引き離すべきか、躊躇っているんだろう。
構わず踵を返し、元来た道を戻ろうとして目を見張った。
炎に照らされて赤く揺れる道を、ゆらゆらとまるで酩酊しているかのように左右に体を揺らしながら近づいて来る黒い人影。
いや……人影、が黒いんじゃない。そいつが、本当に『黒い』んだ。
「誰だあれ……」
キグナスが小さく呟くのが聞こえた。勢い、その人物を見守って

身動きをやめてしまう。
近づいて来たのは多分、女の子。……『女の子の形状』を思わせる、『何か』。
「まぁだ、生きて、る……」
風が運ぶ、ごうごうと炎の噴き上がる音に混じって、密やかに彼女は声を発した。掠れた、途切れ途切れの話し方。琥珀色の瞳が、眠そうに瞬かれた。
「ね……もうみんな死んじゃったと思ったのに……まだ、いたの？……ねえ、何で生きて、るの？」
無邪気とさえ言えるその言い方に、奇妙なものを感じる。
ゆらり、ゆらり……と、今や彼女はその姿がはっきり見えるところまで近づいて来ていた。腰の剣に手を伸ばす。しゃら……と刀身を引き抜く、曇りガラスのような音が響いた。
木炭を思わせる、くすんだ黒色の肌。大小とりどりの水疱が浮かび、おぞましさを感じさせる。
けれどそれを除けば形状としては、普通の女の子だった。
話し方も、ちょっと陰気でところどころ聞き取りにくい発音が混ざることを除けば……どこか普通の女の子を思わせる。
本当に彼女は魔物なのか、と言う疑惑を抱かせた。
その中において極めて異質なのは……左手に掴んだ、切り離された赤ん坊の、首。右手には斧を先端にくっつけたような形の、門兵が持っているのを良く見かけたハルベルトと言う長槍を持っている。
尤も俺は、まったくの亜人型の魔物と言うのにはまだ遭遇したことはないし、例えばニーナやレイアのような亜人種の、敵対するタイプと言うのがいないとは言い切れないのだが。
「しょうがないよねえ……死んでもらうしかさあ……。あたし、村に残ってる生きてる奴を一掃してこいって……言われてんだあ……。ちゃんとやってかないと、あのヒト癇癪起こしてウザイんだよねぇ……」
まるで掃除当番を押し付けられたようにさりげない口調でぼやき、

そのままの調子で「だからさ、死んでよ……」と、まるで簡単なことを提案するように彼女は言った。……無茶苦茶だ。

その手に握ったハルベルトを軽々と操って、俺たちの方に歩を進める。軽い、足取り。

嫌々、と言うような言い方だった割に、その表情は嬉しそうだ。

途中、手に持った赤ん坊の頭部を放り出す。何とも言えない、鈍い音が聞こえた。腰を低く落として、剣を構える。

「お前、何なんだ？」

どうやら彼女が『何者』なのかわからないのは、俺だけではないらしい。キグナスがロッドを構えながら、低く尋ねた。彼女が、艶やかに微笑む。

「あたし……？」

ちょっと、小首を傾げて。

「あたしは、人間だよ……。あんたたちと同じ。人間」

人間……？

ハルベルトをバトンのようにくるんと頭上で旋回させ、軽い足取りのまま眼前に迫った彼女に、キグナスが『火炎弾』を叩き込む。だが軽いステップでそれを躱した彼女は、口元に柔らかい笑みを浮かべた。

「ふふッ……かーわいーい……見習い……？」

それからまた前線に立つ俺に向かって、歩を進めた。

「『火炎弾』は……有効、だけどね……。残念だね……それじゃあ、届かないよ……？」

そのそばからレイアが『風の刃』を疾ばす。彼女はそれをも避け、体を宙に踊らせた。俺の握る剣とハルベルトがぶつかり合い、硬い音が炎で照らされる闇に響いて吸い込まれていく。

斬撃には思ったほどの衝撃はなかった。スピードはあっても、力はさほどではないらしい。言わば俺と同タイプだ。

尤も、俺の方が男だから多少力はあるし、スピードは彼女の方が上回るが。

ハルベルトを弾き返すと、意外なほどあっけなく彼女の体が飛んだ。よろけたその隙を突いて、剣を振りかぶる。

――同じ、人間……

残酷な色合いを帯びた白刃が、彼女の体を切り裂く。確かな手応えが、手の平を通して伝わった。……はずだった。

「何だこいつッ」

キグナスから悲鳴のような怒声が上がる。それに呼応するように、ゆらり……と彼女が弾き飛ばされた肢体を起こした。

「言ったでしょ……『人間』だって……」

ゆっくりと、立ち上がる。

剣の性能を考えれば、腕が落ちていてもおかしくないはずだった。にも関わらず、彼女の腕はあるべき場所についており、あまつさえ怪我すら負っていないように見える。

「あはは……」

言葉を失った俺の前で、彼女は体をくの字に折って笑い出した。小さかったそれは、次第に狂気の色を帯びて大きくなる。

「あははははッ……おっかしー……ッ。あははッ……ねぇそれって……普通の剣ッ……!?あははッ……。ねぇ、普通の剣だよねぇッ!?ださだささだよねぇッ!?」

腹を抱えて笑い転げる。一転して滲み出る狂気……。

――『普通の剣』？

「そんなんじゃさあッ、ダメだよ!!あたしに掠り傷ひとつ負わせらんないよッ!?ねえいいのッ!?それで本当に戦うのッ!?」

「感じ悪ッ……」

さもありえないと言うように小馬鹿にした感じで笑い転げる彼女に、キグナスが顰め面でぼやいた。確かに好感度が高いとは決して言えない態度だが、現在肝心なのはそんなことではない。

「キグナス、レイア。魔法を片っ端から叩き込んでくれ」

『普通の剣』では効かないと言うことはつまり、物理攻撃なら、魔剣じゃなきゃ意味がない……。

「あはははッ……ねぇ、何する気!?見習いくんの魔法なんか全然あたしに効かないよッ。さっき証明済みじゃん!?」

言いながらぶんっとハルベルトを回旋させて地を蹴る。俺に向けてその矛先を振るった。辛うじて剣先で弾き返すことに成功したけれど、斧の刃の部分が舞った俺の前髪を僅かに切り飛ばす。『火炎弾』、『風の刃』が続け様に疾るが、彼女は俺に弾かれた勢いそのままに身を屈めて側転の要領でその全てをかわした。

「だーかーらッ。効かないつってんじゃんよッ……」

……え?

今、何を言ったのかまったくわからなかった。ヴァルス語?俺の言語能力の問題なのか?

まるで癇癪を起こしている子供のようないらいらした口調で早口に何かをまくしたてると、ハルベルトが低い唸りを上げて襲いかかってきた。

が、キグナスとレイアも休むことなく魔法を彼女に叩き込む。そっちを避けながら俺に攻撃を仕掛けなければならない彼女は、どうしたって注意が散漫になり思うように動けない。おかげで俺は、難なく襲い来る長槍を弾き返すことが出来る。

「あああもうッ……当たらないって言ってんじゃんよッ!?当たんないんだよどうせッ。あきらめなよ鬱陶しいなあッ……。無駄なんだよ無駄無駄無駄ッ……」

また癇癪を起こしたように喚きながら、一層苛烈に俺に長槍を疾らせる。避けているだけじゃあしょーがない。何とかして攻撃に転じなきゃ、このままだとこちらが疲弊する一方で、いずれは長槍の餌食だ。

と言って、普通の物理攻撃は効かない。魔法は有効のようだが、キグナスやレイアの魔法では避けられてしまう。足止め程度にはなるが、命中しないので攻撃にはならない。

あと考えられる攻撃手段は魔法石くらいだが、生憎俺は攻撃を受け止めるのが精一杯で、そんなものを取り出して隙を突いて投げつ

けるなどと言う余裕をぶちかましている場合ではない。
……どうしたもんか。
「カズキッ」
考えあぐねている俺の耳に、複数の足音と共に救いの声が飛び込んで来た。
「ちぃッ」
少女が舌打ちをして、顔を僅かに背ける。ハルベルトを一旋させて、俺に叩きつけた。激痛に耐えて顔を歪めながら、咄嗟に足払いをかける。よろめいた隙を狙って長槍を弾き飛ばしてやると、彼女は顔を顰めて即座に懐からダガーを取り出した。避ける間もなく斜め下から斬り付けられ、予想さえしてなかった俺の頬を深く切り裂く。鮮血が飛び散った。
「カズキッ」
レイアの悲鳴。キグナスが、もはや何度目かわからない『火炎弾』を飛ばす。尚も俺に斬りつけようとしていた少女は、それをかわして横へ跳んだ。そこへ、背後から襲い掛かるニーナの『風の刃』が命中する。
「ぐはッ……」
やはり魔法は有効だ。
切り裂かれた頬の痛みに耐え兼ねて、思わずその場に膝をつくと、ぼたぼたぼたっと鮮血が地面を叩いた。
「アモル・オムニブス・イーデム。我らを守りし偉大なる女神ファーラよ。その下僕に深き慈愛をもって癒しを施したまえ」
駆け寄ったクラリスが、俺に治癒の魔法をかけてくれる。その間に、少女の前にはグラムドリングを構えたシサーが対峙していた。
「あの女の、仲間か？」
あの女？
クラリスから放たれた白い癒しの光に包まれ、脳を痺れさせるような痛みが引いていく。その俺の耳に、シサーの問う声が聞こえた。
「……」

少女は何も答えない。短い呻きを上げて体を起こし、憎々しげな視線をシサーに注いだ。

第2部第1章第6話　砕けた心（2）

「お前ら、何者だ」
油断なく剣を構えた状態でゆっくりと近づく。……グラムドリングは、魔剣。彼女に攻撃を加えられるはずだ。
「……教えてあげないよ」
「まあ良い」
微かに苦い顔をして、ぶんっと剣を振る。尖端を突くような姿勢で両手に構え、腰を落とした。
「俺は今、機嫌が悪い。まだやる気なら、遠慮はしないぜ」
「知るかッ。あんたも死んじゃいなッ……」
言うが早いか、少女は地面に投げ出されたままの長槍に手をかけた。こちらも突くように尖端を先に掲げてシサーに向けて突進する。素早い動き。
だが、勝負がつくのはあっという間だった。
「悪ぃんだが、立て続けに負けてるわけにはいかねえんだよ」
苦く吐き捨てて、少女の殺意を避けようともせずに正面から剣を力強く払う。金切り声を上げて長槍が再び吹っ飛んだ。返す手で円を描くように胸元に引き寄せられた剣が、そのまま彼女の胸に突き立てられる。
「くぁッ……ふ……」
短い悲鳴は、黒い血が噴き上げる断末の叫びに掻き消された。まるでコールタールが溢れ出ているような、濃度の高そうな液体。……人間だ、と彼女は言ったけれど、普通の人間はあんな液体を体から出さないことになっている。
「自分のしたことの、報いだ」
どさりと、少女の体が地面に崩れた。黒い液体は尚も体から溢れ出して、地面に血溜りの染みを広げていく。
「グレン、フォードは……」

シサーが、無言で少女の体から抜き取った剣を払う。問うと、シサーはその視線を俺に向けた。
「……とにかく、ここから出よう」
「う、うん……」
言って歩き出した背中を、追う。ニーナが何か言いたげな視線をシサーの背中に向け、結局何も言わずにそれに従った。キグナスやクラリス、レイアも歩き出す。
村の出口はもうすぐそこだ。
「あれ……」
出入り口のところに繋いであったニーナの馬の姿がない。良く見れば、繋ぎ紐が引き千切られたように頼りなくそこに横たわっていた。
「……逃げたかなこりゃ」
キグナスが足先で紐を突付く。
「動物は自分の危機に敏感だからな。魔物の気配に怯えて、尽力を尽くして逃げたんだろう」
淡々とシサーがそれに答える。まあ、いずれにしても5人に対して1頭しかいなかったわけだから……今更それほど違いがあるわけでもない。
「サーティスの屋敷まで、それほど距離があるわけでもない。いずれにしても、明日には辿り着くだろう」
「……うん」

◆◇◆

立て続けにいろんなことがあったせいか誰もが言葉少なで、リデルから2時間ほど離れた場所で野営を敷くことにした。
シサーの雰囲気が何やらおかしいこととグレンフォードがどうしたのかが気にはなるんだが、何だか聞くに聞けず、結局何がどうしたのか良くわからないままでこうして寝袋にくるまってしまってい

る。

俺が『剣を教えてくれ』と言った日から、無理のない程度にシサーは稽古を続けてくれてはいるが、今日はそれもパスだ。俺も……そんな気分でもない。

グレンフォードにバレてしまったので、俺はようやく女装から解放された。

ずたずただったレガードの服はシャインカルクへ戻った時に新しく別の物に替えてもらってはいるが、こちらもずたずたになるのにそれほどの時間は必要なさそうだ。

（本当に狙われてるんだな、俺……）

わかってはいたことなんだが。

何だか、ようやく実感をしたような気がする。今更。

前にも『銀狼の牙』に襲われたりはしたけれど……今日のグレンフォードの豹変ぶりを見て何だかひどく実感した。俺が『レガード』じゃなかったら、グレンフォードはただの『変人』で終わっていたかもしれない。

ぼんやりと、ギルザードに戻った夜のことを思い出す。

初めて人を手に掛け、完全に恐慌状態だった俺は、夜になると錯乱に近い状態となったりもして……あの時も眠れなかった。そして……ユリアがいた時のように、ふらりとひとりで外に出た。

悲しいくらい月が綺麗に街を照らしていて、どこか薄ら青くほの照らされる人気のない街。時折、遠くでちらつく衛兵の姿までが同じに見えて、乾いた冷たい空気の中、ただユリアだけがいなかった。

血に染まった俺の、手のひら。

あの男の瞳が、まだ俺に何かを訴えかけてくる。

――その時はまだ、俺の中にためらいも迷いも恐れも……あったはずだった。

いやむしろ、それは前より遥かに増していたはず、だった。

もう、剣なんか持つのは、嫌だったんだ……。

物陰から人が飛び出して来たのはその時だった。ショートソード

を地面と平行に構え、俺を目がけて一直線に駆ける……暗殺者。
（もう、嫌だ……）
命を狙われるのも、奪うのも。
どうでも良いような気がした。死ぬんなら死ねば良いような気がして、俺はぼんやりと男が駆けて来るのを眺めた。
そして――背筋に、戦慄。
（嘘だろ……ッ！？）
月明かりに照らされた、暗殺者の顔。それは、俺が風の砂漠で手にかけた男と酷似していた。
「仇だッ……」
どうして自分にそんなことが出来たのかは、わからない。小さく叫んで俺に剣をつき立てようとするその男の突進を俺はかわし、つんのめったその頬に肘鉄を食らわせていた。男が取り落としたショートソードを足で弾き、拾い上げる。
――ユリアを……。
（もう、嫌だ！！全部嫌だッ……やめてくれッ……帰してくれ……ッ）
――助けなきゃ……。
（剣を持つのは、もう、嫌だ――――――――……ッ）

――……ユリア……。

俺にかわされて、男はやや前のめりにバランスを崩した。どこか幼さを残す首筋。そこに、俺の手は自動的に剣を叩き付けていた。
浴びる、返り血。
（――嫌なんだ……）
心の中に残る躊躇いが、砕け散った。……もう、良い。どうでも。
何かを感じれば、心が砕けていく。

ならば、もういっそ……。

（……助けて）

ユリアへの恋着だけが、心の中で同じ場所に大切に残されている。

彼女を、守ってあげたいと思ったんだ。

けれど、いなくなって気がつく。守られていたのが、俺の方だと言うことに。

ユリアが背後にいると思わなければ、俺は多分とっくにこんなこと嫌になって弱音を吐いていた。

守りたいと、そう思わせてくれるユリアがいたから、逃げ出したくない自分でいられた。

そして今も、死んでる場合じゃないと、反撃する自分がいた。

そうじゃなければ、あの男のショート・ソードは容易く俺の命を奪っただろう。

そして、それが。

（――ユリア……）

守りたいと、強くなりたいと、思えば思うほどに俺の手を染め上げていく。

（――……会いたいよ……）

無事で……。

「……」

まざまざと思い返し、薄暗がりの中に手の平を翳してみた。ただ、真っ黒。血塗れては見えないことに、心のどこかで安心する。

あの後、衛兵たちが駆けつけ、あの男がタチの悪い盗賊であったらしいことと騒ぎに起き出したシサーたちがフォローしてくれたことで、とりあえずはしょっぴかれるようなことにはならずに済んだ。

『銀狼の牙』のメンバーだったのかどうかは俺にはわからないけれど、「仇」と言っていたことと顔が酷似していたことから……多分、身内だったんだろう。

きっとあの時、俺の心は徹底的に砕けたんだ。

同じ男を2度も手にかけた、その時に。

そして俺は一度は見るのも嫌になった剣を再び握ることが出来るようになり、どころか振るうことに何の躊躇いも迷いも……何の心の襞が震えることもなくなった。

（シサー、どうしたのかな……）

火の爆ぜる、ぱちぱちと言う音が聞こえる。

時折、見張りをしているシサーが立てる僅かな物音。誰かの小さな寝息。

シサーが火番をしているのと反対側は、ただただ暗闇が広がっていた。月明かりでさえ頼りない。それほどの深遠の闇。

（……眠れない）

ため息をひとつ、その場に残してそっと起き上がる。抜け出して焚き火に近づくと、シサーが静かに顔を上げた。

「眠れないか」

静かな声で問われ、無言で頷いた。焚き火を挟んで斜めの位置に座り込む。

「何か、あったの」

ぱきんと枝を折ってシサーが火の中に放り込んだ。勢いのある炎に飲まれ、か細い小枝はあっと言う間に燃えていく。

「今のままじゃあ、俺はあいつには勝てない」

短い沈黙の後、シサーがぽつりと言った。またぱきん、と枝を折る。

「ほぼ互角に、見えたけど」

シサーが小さく笑った。

「……さんきゅ」

「……」

「が、到底勝ち目はねーな」

「でも、じゃあ……」

俺の疑問を読んで、シサーは答えるように続けた。

「横合いから邪魔が入ったもんでな……。とんずらした」

苦く、言葉を押し出す。悔しそうな横顔が、揺らめく炎に合わせ

て明暗に揺れた。
「邪魔？」
「ああ……。お前たちを襲ったやつと同類に見えたな。グレンフォードにご執心のようだったぜ」
こんなシサーを見るのは多分、知り合ってから初めてのことだろう。かける言葉がわからない。
――立て続けに負けてるわけにはいかねえんだよ
さっきの少女に屈辱的に告げた言葉が思い出された。
「……次は、絶対……」
その言葉の続きは飲み込まれ、吐き出されることはなかった。
背後のみんなが寝ている岩陰の窪みから、「うーん……」と誰かが小さく呻くのが微かに聞こえる。
「グレンフォードに執着って……」
問うと、シサーは僅かに顔を顰めて横に振った。
「俺にも良く、わかんねーんだが。……同じ匂いがするとか何とかって言ってたな」
「同じ匂い？」
「ああ。『お兄ちゃん』とかって」
お兄ちゃん！？
ぎょっとして目を見張っていると、シサーはひらひらと手を振った。
「本当に血を分けた兄貴ってわけじゃないと思うぜ。どう見たって初対面って感じだったしな。何らかの比喩だなありゃ」
同じ匂いって……何なんだ……？
あの肌の色、噴き出た血、魔法しか効果がないこと……どう見たって人間じゃない。けれどあの仕草や話し方なんかは、人間らしいと言えなくもなかった。
何より。
「……人間だって、言ってたよ」
「え？誰が」

「あのコ」
俺の言葉に、シサーはどこがだよッ……と吐き捨てるように言う。
「さっきのはまだマシだったけどな。こっちに現れたのは半分が溶解してたぜ」
「溶解？」
「ああ。どろどろだ。マグマの魔物みてーな状態だぜ。目玉なんか落ちかけてて口なんかもぐずぐずで。あれが人間なわけねえだろが」
マグマの魔物と言うものを見たことがないんだが……溶解して平然と戦っていたのだとすると、やはり人間とは思いにくい。
それとさっきの少女が同種なのだと仮定すると……じゃあ、彼女の意味する「人間だよ」と言うのは、何なんだろう？嘘をつくことに何のメリットがあるんだ？嘘じゃなくて何か別の意味が……。
……別の意味？
「あと、気になることも言ってたな」
「気になること？」
シサーが長い棒で炎を突くと、ぱちんと何かが弾ける音と木炭が擦れ合う軽い音が聞こえた。線香花火を思わせる、細かな火の粉がふわりと舞う。
「『出来損ない』……」
呟くと、考え込むように視線を炎に定める。シルバーの瞳の中、オレンジの光がちらちらと揺れる。
「『出来損ない』？」
「ああ。グレンフォードが、そいつに向かって呟いた」
「何の……」
「さあな……」
出来損ない……。
『同じ匂い』。
『お兄ちゃん』。
「気に、なるね……」
言いながら、俺も枝に手を伸ばす。手頃な大きさのものを選び、

火の中に放り込んだ。
「ああ……」
グレンフォードは、どこか異質なあの少女に比べて遥かに『人間』に見えた。と言うか、疑いもしなかった。
……彼女は自分を、『人間』だと……。
（何だ？）
待て待て……何か、繋がりそうだ。繋がりそうで繋がらない。グレンフォードが何者なのかがわかれば、もしかするとまた狙われた時の対策が立てられるかもしれないのに。
キーワードが足りない。……落ち着いて、考えろ。
ヒントは、散らばってるんだ……。
……まず、『出来損ない』だ。
出来損ないが意味するものは何だ？決まってる。作成されたものだ。
誰かが作成した何かが失敗作だった、通常はその場合に使う言葉のはずだ。もちろん人間を揶揄する時に使う言葉でもある。『あいつは出来損ないだ』などと言う場合、意味することは『使えない人間』『能力がない人間』。
この、意味なんだろうか。状況的に考えにくくないか？だってグレンフォードはその……もうひとりの少女と初対面のようだったわけだろう？
……一旦、保留だ。
次は『同じ匂い』。
考えるまでもない。そのバケモノじみた少女は、グレンフォードを自分と同種の何かだと感じたんだ。それが何かまでは、今の段階ではわからない。
（でも、それなら……）
グレンフォードが何者にせよ、普通の剣じゃあ攻撃は無意味……？
（それでなのか……）
ひとりで1個中隊くらい壊滅すると言うのは。魔剣はそうごろご

ろ誰でも持っているわけじゃない。あれだけの剣技があり、敵の攻撃を受け付けないんであれば、奴にとって軍隊なんか連立する木と一緒だ……。

じゃあ『お兄ちゃん』は？

普通は、血をわけた兄弟を差すだろう。が、初対面なのであれば、これは却下だ。それ以外とすれば、単に年長の男性に親しみを込めて使う呼称ではあるが、それより……。

――？

（……嘘だろ）

突如、風の砂漠のダンジョンでの出来事が脳裏に蘇った。正確には出来事と言うよりは、シサーの話が。

（まさか、そんなことがありうるものなのか？）

思い浮かんだ考えに、茫然と顔を上げる。

キーワードだ。

……でも、まさか。

いや、でも……。

――そして、『あの時』のクラリスの言葉。

「……カズキ？」

黙りこくって考え込んでいたと思ったら、はっと顔を上げて凝固した俺にシサーが不審な声を上げる。

（だとすれば……）

グレンフォードには、クラリスの魔法が何らかの形で有効になるんじゃないのか？いや、わからない……わからないけど。

「まだ、わからないけど」

前置きをしてから俺はシサーを見つめた。視界の隅に揺れる、炎。

「グレンフォードは……もしかすると……」

第2部第1章第7話　ギャヴァン市街戦《前編1》（1）

フレデリクからスペンサーへ書簡が宛てられてからおよそ2週間の後、来たるべきロドリス戦線に向けて、北部ではラルド要塞に城から派遣された常駐国軍2万と各地から集められた諸侯軍5万2千が集結した。シャインカルクには、禁軍及び残留国軍が待機している。

一方で、ラウバルによって強制的に南下が進められた国軍のうち、半数の5千及び諸侯軍1万が急遽ザウクラウド要塞へと収容された。ザウクラウド要塞に常駐している1万と合わせれば、総勢2万5千となる。このうち、要塞へ留め置かれる3千を差し引けば、稼動兵力は2万2千だ。

ザウクラウド要塞より南海にあるキール島には、軍港が2つある。大洋である西海に面したキール軍港と、内海であるアルズール海に面したアルズール軍港だ。また、島の北端には小さいながら漁業で生計を立てている村があり、小さな漁港がある。アルズール軍港は普段は封鎖されており、ほとんど近郊の漁師たちの船が紛れ込んで遊んでいるような状態にあった。

キール島付近は春になると、海流との気温差が激しくなる為、入り組んだ地形も手伝って夜から朝にかけて深い霧に包まれる。深い移流霧と夜陰に紛れるように、数隻の大型のガレー帆船がゆっくりと西海キール軍港より島沿いに海へと乗り出した。

そして、何年ぶりにアルズール軍港の封鎖が解かれる。

翌朝、まだ濃い霧の残るアルズール軍港から、新たな船団が内海へと漕ぎ出した。

船団の一部は岬を回りこんで北上し、一部の砲撃船と小型快速船団は南下してキール島とヘイズ西岸の間の海を塞ぐように静かに停泊した。北上した一部が目指すのは、ザウクラウド要塞西である。

北上した位置にあるザウクラウド要塞は切り立った場所にあり直

接船をつけることが出来ないが、西側に突き出した岬を迂回して回りこみ、要塞をやや通り過ぎる形で更に北上すると湾のようになだらかになっていく。いずれにしても大型船の停泊が出来るほどの深度ではないが、漁師が使用するような小型の漁船ならば可能である。

……そして、それより数日の後、ティレンチーノ要塞から陸地を移動していく一団があった。

先行隊として編成の終了した傭兵部隊が、ギャヴァンへ向けて移動を開始したのだ。

「フレデリク公！！」

ギャヴァン沖に停泊中のモナ艦隊の旗船『シェルキー』の中で、海図とヴァルス地図を眺めていたフレデリクの元に慌しく男が訪れた。軍部補佐官のモルツだ。

「騒々しい」

「は、申し訳ありません。ヴァルス潜入中の情報官より火急の報せがッ……」

「火急の？」

言われて、フレデリクは眉を顰めた。

「ヴァルス軍の砲撃船が海上に停泊中と言うことなら知っているぞ。西海から北上した船団がいると言うこともな」

ヴァルスからは、いささか白々しい使者が派遣されて来た。陸軍の南下を取りやめ、対ロドリスに備えて収集中の各兵と共に付近の要塞に兵力を留め置くと言うものだ。

意図は明白である。ヴァルスにはモナに対する警戒を解くつもりがない。その為に中途半端な要塞に留め置かざるを得なくなったのだろう。海軍の出動も、仕掛けるつもりはないだろうが、モナがギャヴァンに侵攻したらすぐ対応出来るよう威嚇、としか考えられない。

北上した船団は恐らく、モナ本国へ向けて送られたのだろう。

だが、ヴァルス海軍は1万5千。その程度であれば本国に留め置

いた防衛軍で対応がきくはずだ。残念ながら、脅しにはならない。

当然モナ本国には対ヴァルス軍に備えて兵力は残してあるし、総力を挙げればともかく、現段階でヴァルスがモナに当てられる兵力はさほどないと聞いている。

ギャヴァンを取り返すつもりがあれば、モナへ派兵出来る数は最初からたかが知れている。こちらは、防衛に徹することが出来る兵力が残されていれば良い。

そのような計算があればこそ、危険を承知で少ない兵力を分断してギャヴァン侵略と言う作戦を決行したのだ。危険を恐れていては、他国の侵略など出来るものではない。

ギャヴァンの方は、西岸の要塞の兵力をぶつけるにしてはいささか距離があり過ぎる。初戦で実際モナに対して投入出来るのは、恐らく1万程度。ギャヴァン上陸を予定しているモナの兵力は、2万2千だ。

正面切って戦うのならばともかくとして、理由もなくギャヴァンへ布陣出来ぬヴァルスが後から兵力を投入した頃には、モナはギャヴァンを制圧している。とりあえず最初の戦いはギャヴァンの僅かな自警軍とモナの正規軍となるはずだ。傭兵部隊が移動しているとあっても、こちらの兵力の方が上である。

更に、制圧後にヴァルス軍がのこのこと乗り出して来たところで、幸いギャヴァンには強固な塀と門がある。兵站とするに豊富な食料もある。

籠城し防御するに当たっては、攻めるほどの兵力は必要ない。遅ればせながら西岸から援軍が送られたとて、籠城している相手を陥落するにはいささか少なく、更に援軍が送られるとしてもロドリスが挙兵すればそれもままならないだろう。

ヴァルスがモナと敵対するつもりなら、それはそれで良い。その為のロドリスとの会見だ。

いずれにしても、海上にいる理由をヴァルスに対して確保したモナは、ロドリス出撃まで様子を見るつもりでいる。ヴァルスが先攻

してくる危険性は、排除された。
「いえ、それが……」
しどろもどろに口を開くモルツに、フレデリクは目を上げた。
「停泊中のヴァルス艦隊の陰で、密かに別動隊がキール要塞より北上して……西岸の要塞へ向かったと」
「……西岸の要塞？」
西海から北上した艦隊とは別の、と言うことだろうか。
「はい」
「詳しく話せ」
「は……。ヴァルスは、国軍と徴兵した諸侯軍を西岸のザウクラウド要塞に集結。国軍の一部をティレンチーノ要塞へ派遣し、ギャヴァン防衛の初動に当たるように見せかけました。そして殊更密かに、朝靄に隠れて海軍が北上。……ですが、それがヴァルスの作戦だと」
「ほう」
「ヴァルス王城より各国軍へ通達された作戦は、以下の通り。――モナに、ヴァルスは兵力をザウクラウド要塞に留め置くとの建前で集結。その間に、キール島より艦隊を一部南下させてギャヴァン沖モナ海軍への威嚇と見せかけてモナ偵察艇の視界を妨げ、その背後でキール島の要塞からほぼ真北に当たるザウクラウド要塞に集めた兵力を収容、こちらの注意を引きつけるべく西海へ乗り出した海軍と島を回って合流し、モナ本国へ攻め入る態勢に入ると……」
「馬鹿な……」
フレデリクは、掛けていた椅子から思わず立ち上がった。集結した兵力をそのまま北上させてしまえば、ギャヴァンに対して初戦どころか増援さえ出来なくなるではないか。
「兵力は」
「詳細は不明。しかしギャヴァンに戦力を割かないとあれば、西の要塞に集結した兵力及び元々の要塞の稼動兵力、海軍を含めれば少ない数とは考えにくいかと」
「対するギャヴァン防衛軍は」

「自警軍と東岸の要塞にて対ギャヴァン戦に向けられた兵力及び要塞の稼動兵力を合わせ、およそ1万前後ではないかと予想されます」

「……」

つまりヴァルスは、一旦ギャヴァンを捨て置いて、モナ本国を壊滅させることによってこちらの撤退を図ろうと言うことか。ただでさえ籠城した敵を正面から陥とすには数倍の兵力が必要となる。まさか1万程度でギャヴァンに籠もったモナ軍を駆逐出来るとは思っていまい。

モナへ差し向ける兵力を確認する必要がある。

「下らぬ奸計を……」

大型船で妨げずとも、モナ艦隊の停泊している位置からはキール島付近の入り組んだ地形でアルズール内海の様子を知ることは出来ない。こちらが北上海軍を過小評価し、のんびりとギャヴァン沖に停泊しているうちにこっそりとモナ本国へ現稼動可能兵力を差し向けるつもりだったのだろうが……生憎情報はこちらに筒抜けである。

ヴァルスとは、決裂だ。

「……良いだろう。ヴァルス軍がモナへ辿り着く前に海上決戦だ。その上でギャヴァンも制圧してくれよう。こちらに情報が漏れているとも知らず、浅はかな戦略を後悔させてくれる」

海軍の兵力は、ほぼ拮抗している。

だが、モナ海軍は若いからこそ厳しい軍事訓練を繰り返している。ヴァルス海軍は、ここ数年来の平穏に慣れ、怠ってきたはずだ。負けるとは思えない。

船の機能で言えば、大型のガレー帆船や砲撃船を保有するヴァルスの方が上だが、小型快速船が主体のモナは小回りが効き、機動力がある。大型帆船は動きが鈍い。更に砲撃の加え方では、かなりの人数をまとめて叩くことが出来る。船を一艘沈めてしまえば、その乗員は一挙に海中だからだ。そう言った点で、頭を使えば兵力差は陸上戦より縮め易い。……無論、白兵戦となってしまえばその限りではないが。

「と申しますと」
「ヴァルスがギャヴァンを見捨てるのであれば、遠慮なくいただこう。残存勢力は1万……であれば、こちらが投与する兵力で十分叩き潰せる。制圧に1日もかかるまい。一旦海軍は引き、ヴァルス海軍を追撃するぞ」
「……では」
「ヴァルスは、モナの信義を疑っての進軍だ。それ以上の理由はいらぬ。……まさか擁した陸軍を収容したまま、無駄に引き返すわけにはいかぬからな。予定より早いが、仕方ない。シャインカルク城に使者を派遣せよ。その返答をもって」
フレデリクは、その貴公子然とした顔を前方に向けた。モスグリーンの瞳に映るのは、ギャヴァン。
「ギャヴァン侵攻だ。砲撃部隊を準備しろ」

◆◇◆

「……ほう。モナから使者か」
急な呼び出しを受けたのは、ラウバルが執務室で書類を繰っている時だった。
現在王城は、ギャヴァンからの避難民の受け入れ態勢でおおわらわである。レオノーラの四方を固める王都要塞に駐留する国軍人口を除外しても、4万の市民を擁するレオノーラほどではないが、ギャヴァン市民は3万に近い。戦闘が可能な者が残留しているとは言え、かなりの人数であり、それを魔物から援護しながら各避難先に送り届け、かつ生活を保障するというのは半端なことではない。
「わかった。すぐに行こう」
読みかけの書類に調印を済ませ、足早に応接室へと向かう。室内に足を踏み入れると、モナからの使者は黙って掛けていた椅子から立ち上がった。会釈をする。
「お掛けいただきたい」

ラウバルの言葉に、モナからの使者は言葉もなく能面のような表情を向けた。
「……私は掛けさせていただくが、構わぬか」
短い吐息と共に言葉を吐き出すと、使者は微かに首を上下させた。それを受けて、空いている手近な椅子に腰掛ける。
「ご用件を伺おう」
「我々モナは、御国に親愛を示す書簡をお届け致しました」
「確かに受け取っている。返礼を兼ねてこちらからも使者を派遣したはずだが」
とは言え、フレデリクはギャヴァン沖海上。直接奏上することは出来なかったはずではあるが、いずれにしてもヴァルスからの返礼は届けられているはずである。
「我々と協力すべく、ナタリアに備えて兵力の南下、と伺っている」
「そのように行動しているはずだが」
「では、海上の動きについてはいかが説明なされる」
女官がラウバルに茶を注いだカップを差し出した。それに視線を向けず、モナからの使者に視線を注ぐ。使者の前には既にカップが一脚用意されているが、口をつけられた様子はない。その女官を部屋から下がらせ、ラウバルは口を開いた。
「……何を指しているのか、判断がつかぬな」
表情を浮かべないラウバルの物々しい話し方は、それだけで対峙する者に威圧感を与える。だが使者は臆した様子もなく瞳を細めた。
「ではっきりと指摘して差し上げよう。ヴァルス海軍が北上を開始した意図はどこにおありか。加えて……」
そこで一度言葉を切り、ヴァルス宰相の表情を読もうとするように厳しい視線を送る。
「停泊中の大型軍船の陰に隠れるように、内海の軍港より船団が西岸の要塞へ向かったと」
ラウバルは、微かに瞳を上げた。だがその眼差しからは考えを窺い知ることが出来ずに、使者が続ける。

「それらの一連の動きは何を意図しているのかとお尋ね申している」
「……意図、とは？」
「知れたこと！！大型軍船で我らモナの偵察艇の視線を妨げ、その目を掠めるようにして船団が北上する意図はどこにあるのかと問うている！！」
「ザウクラウド要塞に兵力を遊ばせておくことに意味はなかろう。……集結した5万の兵力のその全てを、海軍と共に海上へと送り出すが、それがどうかされたのか？」
使者の顔色が変わった。初めてラウバルの顔に、表情らしきものが浮ぶ。口元に僅かな笑みを残し、更に畳み掛けるように問うた。
「疑問がおありか？」
「モナへ向けての進軍、とは思いたくはないのだが」
「思いたくないのであれば、思わぬ方が宜しかろう。先日の御国からの書簡に寄れば、警戒すべきはナタリアと。それはロドリスの動きに不穏なものを感じ、連動しているもの……つまりロドリスへの警戒を呼びかけていると受けたが、それについてはいかがか」
冷淡とも言えるその声音に、使者は僅かに怯んだような顔をした。気力を振り絞るように応じる。
「……私では明言しかねる」
「ほう……」
その応対に、ラウバルはゆっくりと腕を組んだ。刺すような視線を投げかける。
「不確かなことで海軍を動かし、警戒を？あなた方の主は妄想癖でもおありか？」
辛辣な一言に、使者は憤慨したようにテーブルに強く手の平を叩き付けた。
「無礼な発言をッ……」
「気に触ったのなら、謝罪をしよう。だが、ナタリアに警戒しロドリスへの警戒を怠るようではいささか矛盾が生じはしまいか。我々がロドリスへの警戒として船団を北上させることには、疑問の余地

はあるまい？遥々ギャヴァン沖まで遠征してくるモナ艦隊に比べればな」

「……」

「失礼だが、私は忙しい。用件が以上であれば、既に御用はお済みだろう。ナタリアに対してギャヴァンの援護をモナがしてくれるとおっしゃる。ならば我々は陸地に集結させた兵力はその全てを海へ向け、ロドリスの不穏な動きに備えよう。以上が北上の理由だ。モナが腹に含むところがなければ、いささかも危ぶむ余地はない。そのように、公にお伝え願おう」

苛立ったような視線を投げつけ踵を返しかけた使者の背に、更に言葉を浴びせる。

「無論、ロドリスに限らずヴァルスへの不当な接触があればいずこの国であろうと同じ――ヴァルスは排除の姿勢を崩さない。……今頃ヴァルス船団はアルズール内海を抜けて西海へと出ていよう」

「……」

無言で振り返った使者の視線を、正面から受けてラウバルはゆっくりと顔の前で手を組んだ。顎に両手を凭せ掛ける。さらりと落ちた艶のある銀髪が、肩を滑り落ちた。表情のない顔に、陰影を落とす。

「……モナの王城ウォーター・シェリーには、彷徨い出る亡霊はおらぬか？」

低い問いに、使者の顔が微かに強張る。最初に派遣されたヴァルスの使者が行方不明だと言うことを、知っているのだろう。恐らくは、その行方も。

「シャインカルクの庭にはまだ、空きがある」

ふわ……とラウバルの全身からオーラが逆巻いた。能力のない者には見えぬ銀光、だがただならぬ気を感じることは凡人でも出来ただろう。召還師としての、僅かな力の発動。ぞわり、と部屋の片隅で何者かの気配が生まれる。

「下らぬ詮索で、いたずらに空きを埋めることもあるまいな……？」

言外に、これ以上使者を派遣して体裁を繕うのはやめるよう告げると、額に冷や汗を浮かべ、使者は「失礼するッ……」と足早に出て行った。

「……ちょっと、脅しが過ぎたか？」

ひとり室内に取り残されたラウバルは、ひとりごちて小さく苦笑した。だが、これ以上下らぬ腹の探り合いをしていても無意味でしかない。取り繕うべき体裁など、フレデリクがロドリスを訪問した時点で壊れている。

ザウクラウドに集結させた稼動可能兵力は国軍５千、要塞軍７千、諸侯軍１万。実際のところは、海軍と合わせても５万になど到底満たないのだが。

兵力の詐称などは、日常のことだ。但し、過剰とするか過少とするかは、状況に寄りけりである。

（これで、開戦だ）

モナが、動く。

◆◇◆

その身を真っ赤に染め上げた太陽が完全に海の中へと姿を消し、海上を駆け抜けて来た潮の香を含む風が闇を引き連れて来る頃……

ジフリザーグは自警軍舎の粗末な椅子に腰掛けて机の上にばらまかれた地図とメモ書き、何かの通路の図面に視線を落としていた。

「牛はどーしたー？牛ー」

ジフリザーグがいる部屋は軍舎の１階、出入口間近のホールである。１２畳ほどのスペースには所狭しと人や物が溢れ、忙しなく騒々しい雰囲気だ。開け放された扉は大通りに通じており、しきりと人が出入りを繰り返す。

「牛、おっけーでーす」

「りょおかいー。……食うなよー？」

顔も向けずに、返された答えにひらひらと手で応じる。視線を地

図に落としたまま、手近に置いたカップに手を伸ばした。
「頭、空っす」
通り掛かった木箱を抱えた男が、その手元を覗き込んで忠告をする。ジフリザーグは顰め面で、顔を上げた。
「頭ってゆーな」
「しょーがないじゃないっすかー。頭なんだから」
それから「頭も根気の良いことで」と呟く。
それもそのはず、ジフリザーグはギルドの頭となってからずっと、この2年間しつこく言い続けている。
ジフリザーグにしてみれば、父が長であった頃から家族のように共に暮らし、己の幼少を知っている年上の団員たちに『頭』と呼ばれることが、イマイチ納得がいかない。と言うか、そぐわない。

第2部第1章第7話　ギャヴァン市街戦《前編1》（2）

「おーうッ。俺は何度も何度もしつっこく言い続けてやるぞーおッ」
へいへい頑張って下さいねえ……とギルド団員のフェイルは、木箱を抱えたまま奥へと姿を消した。それを見送って、再び図面に向き直る。手近なティーポットを引き寄せ、とぽとぽとカップに注いでようやく茶を口に運んだ。
「油紙と蝋が足りねーんだけど、どっかにあっかなあー」
「あ、港の倉庫にまだあったぜ」
ぶほーーーーッ。
「あーあ、ジフぅー……子供じゃねえんだから」
「げほッげほッ……き、気管に入った……」
素晴らしい霧を噴き上げたジフリザーグは、涙目になってむせながら立ち上がった。今の会話を交わしていた男たちを目で探す。
「おいおいおい。港の倉庫なんかまだ使ってんのかあッ!?」
目一杯凄んで怒鳴ってみせるが、間に『げほげほ』とむせこむ音が混じり、目には涙が浮かんでいるとあっては迫力も何もあったものではない。
「あ、まずかったすか?」
「まずかったすか?じゃねーよまずいよッ。海から攻めてくんだってんだろッ!?港の倉庫をのうのうと使う馬鹿がどこにいるよッ!?たーのーむーよー、もう……」
へたっと椅子の背もたれに、両手をつく。
「俺、宮廷魔術師サマに『まかせとけ』ってタンカきっちゃってんだからな?わかってる?頼むよまじでー……」
あぶねーなあもう、とぼやいて再び椅子に座り直してぐしゃぐしゃと髪を掻き混ぜた。
「何でそんな無茶なタンカきるんすかー」
「無茶ってゆーな。……俺より年下そうなのに何かこう……身分高

そうって感じで威厳があるもんでつい」
「張り合ってもしょうがないでしょー？こっちゃあ下級市民なんだから」
「うーるーさーいーなああ。俺にだって意地ってもんが……じゃなくて！！物資は全部ここと例の場所に移せよッ」
そこへ、先程の木箱を運んでいったフェイルが戻って来た。顔を寄せる。
「頭……全部なんて無茶っすよ……」
「全部だ全部ッ。……全部って言ったって手を抜く奴は抜くし、不可能なことは不可能なんだよ」
「不可能なことを要求しないで下さい」
「ばぁか。最初っから『可能な限り』なんて言ってちゃ『可能』なレベルが下がるだけだろー。頭使えよ。……ってだからッ。頭ってゆーなってばッ」
ジフリザーグがしつこく付け足したところで、斥候の役割をしていた同年のギルド団員ラリーが飛び込んできた。
「頭ッ。ヴァルス軍が動き出したッ」
「頭ってゆーなッ」
ラリーにも律儀に怒鳴って、立ち上がる。
「各リーダーはどこ行った？チームの作業はそのままに、リーダーだけ集めてくれ」
掛け声と共に、その場にいた数人が散らばる。間もなく、街の各所で作業をしていた市民軍のリーダーたちが軍舎にわらわらと集まって来た。
「ごくろーさん」
「何か動きがッ！？」
いきり立つような声が上がる。苦笑いを浮かべながら、ジフリザーグは頷いた。
「ヴァルス軍が動いた。となればモナも動く。開戦は遅くたって数日以内だ。罠の設置場所と塞ぐ場所、これに従って追加してくれ」

言って、今しがた睨みあっていた地図と図面を手近な男に手渡す。
「んで、各チーム、速やかに作業を終わらせて持ち場で待機」
一旦言葉を切り、先程まで向かっていた机に寄り掛かって腕を組んだ。
「必ず、最低でも2人一組で行動するよう徹底させろよー。相手は正規軍なんだからな。下手な茶目っ気起こして、真面目に武器持って戦おうとか思うなよ。どーせ負けんだから」
あくまで気楽な口調で話すジフリザーグにつられるように、数人から笑いが零れた。
「練習した通りに行動すれば良いんだ。運動会みてーなもんだろ。やることやったら、後は逃げ回れ。とりあえず目安は日没まで。簡単だろ、夜まで逃げてりゃいーんだ逃げてりゃ」
国軍相手ではただ逃げることさえ至難の業だが、殊更けろりとした口調で言われると大したことではないような気がしてしまう。
戦場で1番怖いのは過度の恐怖と、それに晒されて混乱する味方だ。緊張感は必要だが、過剰であることに益はない。
「ここは俺たちの街だ。誰よりも俺たちがこの街を良く知っている。負けるはず、ねーだろ?」
にっと白い歯を見せて笑うと、集まったリーダーたちの間から「おぉッ」と気合いの入った声が上がった。
「俺たちは、ヴァルス軍が来るまで持ち堪えりゃいーんだ。気楽にあたれ。退き時だけを間違えるな。……健闘を祈る」
言って、ジフリザーグは男たちを見回した。ひとりひとりの顔を刻み付けるように。……少なくとも、この場にいる全員が無事に戻ることは、ないだろう。
「……頼んだ」
その言葉を皮きりに、リーダーたちは持ち場へ戻るべく散って行く。背中を向け掛けたジフリザーグは、思い出したようにその後ろ姿に声を掛けた。
「っと、追加だ追加ー」

「何だよしまんねーなあ」
「自分で罠に引っ掛かんなよー」
「そりゃあジフだろ」
投げ返された言葉に、どっと笑いが起こる。思わずジフリザーグも、苦笑いを浮かべた。
「俺かい」
そして、この場に残った信頼するギルドの仲間達を振り返る。
「ギルドは」
「『洞窟のじじい』が居座ってますよ」
「戦争には参加しないが、ここは任せとけって伝言です」
ガーネットが守ってくれるのであれば、問題はない。
本来ならばその防御力をギャヴァンにも貸して欲しいところだが、元々ガーネットはヴァルスの民ではない。過剰な期待と言うものだろう。
何よりギルドを守らなければならない理由が、ジフリザーグにはある。
「おっしゃ。んじゃあ、招かれざる客人たちにもてなしをしようじゃないか」

第2部第1章第8話　ギャヴァン市街戦《前編2》（1）

フレデリクの開戦命令に従い、モナ海軍はギャヴァン沖から北上、魔法弾による砲撃を加えながらギャヴァンへ迅速に迫った。

本国へ想定外の多数勢力が差し向けられているとあっては、ロドリス挙兵まで待ってはいられない。ヴァルス海軍がモナに迫れば、それはギャヴァン侵攻に対する人質である。仕掛けようが仕掛けまいが、『仕掛けられる態勢にいる』ことが問題だ。そうなる前に、何としてでも足止めをしなければならない。

ギャヴァン港は砲撃を受けたせいで、人の気配がなかった。積荷を下ろしかけたまま、放り出して逃げ出した様子さえある。

モナ軍総司令官インプレスは、速やかにギャヴァン侵攻部隊を艦隊より上陸させた。フレデリクは艦隊の指揮に当たり、ヴァルス海軍を追い詰めるべく海上に残っている。ギャヴァン沖に残されたのは、輸送船3隻のみだ。無論、籠城するにはその物資では2万2千の兵を補うことは出来ない。略奪が大前提である。

本来ならば、退路の確保の為に艦隊がここに残留するはずだったのだが、状況がいささか変わったので致し方ない。だが、ギャヴァン防衛に充てられている兵はモナを遥かに下回る。制圧には不安はない。

隊列を整え、ギャヴァンの港は侵略者たちで埋め尽くされた。高く聳える防波堤の両端に、街へと続く門がある。今閉じられているのは、市民のせめてもの抵抗だろう。

「ヴァルス軍はまだギャヴァンに辿り着かない。街にいるのは取るに足らない自警軍だけだ。ヴァルス軍が到着する前に街を制圧して門を閉じ、公が戻られるまで籠城態勢に入るぞ！！」

有能な司令官の特徴のひとつに、堂々とした声と声量が上げられる。号令の声が逞しく自信に満ちているか否かで、それに従う兵士たちの意気込みは天にも地にも変わるものだ。

「行け！！略奪せよ！！」
号令と共に、モナ陸軍は隊列ごとに街への入り口に向けて進軍した。この扉の向こうには、母国にはない芳醇が約束されている。鴇の声と共に、攻城用の投石器が運び立てられた。ギャヴァンは海側の防波堤も防護壁を兼ね、それなりに堅固だ。
「……来るぞ」
閉じられた門の向こうで、ボードレーが呟いた。防波堤の裏、高く積まれた土嚢の上に、幾人も自警軍の兵士が身を潜めている。その眼下で、哀れなモナ陸軍が、閉じられた門を開く為に殺到していた。望むところに敵の兵力を集中させるのは、基本である。ましてやここは、街へ抜けるためには自動的に集中せざるを得ない。
投石器の準備が整う前に、仕掛けてしまうべきだ。
「まず第1陣、行くぞ」
ボードレーの掛け声と共に、兵士が一斉に屈めたその身を起こした。手にした壺を、港の兵に向けて叩き落す。
「な、何だ！？」
「自警軍だ！！」
運悪く壺が直撃した者の中には短い侵略の歴史を閉じた者もいたが、無論特記すべきことでもない。それよりも問題は、壺の中から降り注いできた液体だった。
「油……！？」
「射よ！！」
続けて放たれたボードレーの指令に、壺を手放し弓矢に持ち替えた兵士たちから火矢が打ち込まれた。油の洗礼を受けた兵士たちが、次々と火達磨になっていく。木製の投石器も、いくつか炎を噴き上げた。
「小賢しい真似をッ。もたもたするな！！早く門を破れ！！」
インプレスの怒声に、火達磨を免れた兵士たちは開門に必死になる。背面は海だ。ここを何とかして開けなければ、いずれにしても逃げ場はない。輸送船団は、全員収納するほどの能力を持たないの

だ。まさに必死である。
炎に全身を包まれた仲間が、水を求めて海へ幾人も身を投じる中、持ち込んだ材木と残った投石器でようやく破壊された門が開いた。上からは遠慮なく次から次へと、火矢が降り注いでくる。兵士たちは、門の向こうへと逃げ場を求めて雪崩れ込んだ。
「うわッ」
「ぐおッ」
だが、次の瞬間先頭を走り出た兵士たちの身が宙に浮いた。足場の不在を知った時には地の底にいる。そこへ、同様に足場を失った仲間たちが次々と転落して来た。落とし穴である。
「歓迎の準備をしていないと思われるのは、情に厚いギャヴァンの市民としては不本意だな」
モナの襲撃に備えた自警軍及び市民軍は、防波堤の裏にせっせと土嚢を積み上げて、門の手前には巨大な落とし穴を準備したのであった。上にすのこを渡して通路とし、モナ襲撃の報を受けるなりそのすのこを取り払ったのだ。単純ではあるが、火矢で焦って飛び出してくる兵士たちには効果的である。次々と立て続けに転がり落ちるがゆえに、圧死する兵も多数出るし、負傷する兵士はその上を行く。
「散れッ」
モナ軍が混乱に陥っているうちに、ボードレーは素早く退却命令を下した。罠の成功に酔いしれてここに留まっていては、たかだか3千の自警軍など一挙に叩き潰される。滑り台の要領で一気に土嚢から街へと降りた自警軍は、予め定められた通りに街の奥へと逃走した。
上陸するなり立て続けに嵌められた兵士たちの、一部血の気の逸った者が剣を片手に駆け出す。街の奥へと逃げ込んでいく自警軍を追う為だ。
「馬鹿者ッ。態勢を立て直せッ」
歯噛みしながらインプレスが命じる。ここは草原ではない。幅の

限られる市街路で軍の一部だけが突出して深追いすれば、各個撃破されるだけだ。

案の定、深追いをした兵士は道の先で、角から狙いをつけてくる弓矢の集中砲火を受けてばたばたと倒れた。ひとりひとりの技術は稚拙であっても、数を撃てば当たる。そして人の命を奪うには、致命的な1本がそこに混ざっていれば良い。

仲間がたかだか市民に倒されるのに頭に血を上らせた数人がまた駆け出すと、別の角から今度はカトラスを構えた小麦色の上腕逞しい男たちが飛び出す。味方を射ずに済むほど腕に自信がないのか弓矢はなりを潜めるが、カトラスの男たちは市民と言って侮れたものではなかった。

ギャヴァン市民は海の民である。言い替えれば気の荒い、水夫たちの街なのだ。プロではなくとも腕に覚えがあり、度胸だけなら正規兵にさえ負けない気概がある。

カトラスチームが突出したモナ兵を薙ぎ倒して、その勝利の勢いに押されるようにしてこちらへ駆けてくると、つられたように制されたこちらの兵がまた突出した。するとこちらへそのまま突撃をはかったかのような彼らは、するりと手前の角へ姿を消す。そして姿を消した弓矢部隊が再び姿を現し、集中砲火を浴びせた。

気が付けば、前方の通路に限らず右でも左でも同じようなことが行なわれている。挑発的に波打つように押し寄せては姿を消し、それを思わず追う兵が途中に湧いて出る別動隊の襲撃を受ける。引きずられるように街中まで引き寄せられ、モナ軍は分断されていった。

入り組んだ街の路地のあちこちで、戦闘音が起こる。

「魔術師部隊ッ」

インプレスは後方を振り返った。兵士たちに守られるように従軍している、僅か10人の魔術師たち。

モナは裕福ではない。ゆえに、魔力がある者がいたとしても学ばせるような財力は親にはないし、まして一流のエルレ・デルファルへ留学させるなど夢のまた夢である。それよりは労力としてごく普

通に使われるので、大した魔術師が育たない。ただでさえ魔力を持つ人間と言うのは、稀有なのだ。これまでのモナは、魔術師部隊など有していなかった。

だが、魔術師部隊の重要性に目を留めたフレデリクが、国の財から魔術師を育てるよう制度を整えた。まだ在位期間が短い為に実りは少ないが、それでも確実に魔術師が育っている。

インプレスの怒声に、魔術師たちが前へ進んだ。口々に呪文を唱え始める。

「やべ、魔術師だッ」

注意を喚起する声が前方で起こり、こちらの魔術師の呪文が完成しようとしたその時だった。

「な、何だ!?」

ババババババッ。

短い、だが連続的な破裂音、いや爆発音。

味方の中から突如起きた爆発に、兵が動揺する。耳を劈く（つんざく）ようなその音に、インプレスも思わず心臓を鷲掴みにされた。

「うわあッ」

「爆弾か!?」

だが、爆弾であればとっくに死んでいる。インプレスは足早に、音のした方へ向かった。混乱した兵は、更にばらばらと分散していく。街のあちこちでも同様の爆破音が響いていた。

「小細工をッ……」

はらわたが煮えくり返る。憎悪で出来たその声で吐き出し、足元の木の箱を蹴り飛ばした。――爆竹だ。

頭上を見上げると、ぶらん……とロープが、力なく中途半端な位置にぶら下がっているのが見えた。木から木、あるいは屋根から屋根へロープを渡して爆竹を詰めた木箱を吊り下げ、火矢で射ったのだろう。爆竹に炎が引火し、モナ軍の只中で突如爆発音がすると言うわけだ。ただでさえ混乱の生じている状態、モナ兵が動揺するのを狙ったのだとすれば的を射ていた。

「うあああぁッ」
「発破が仕掛けられてるぞッ……」
2万2千の兵は一体どうしたのか、市民に誘導され今や街中に散り散りになろうとしている。インプレスは歯軋りをした。たかだか数千の市民相手に良いようにしてやられていたのでは、フレデリクにどう顔向けすれば良いのか。
カトラスを手に踊りかかってきた男を、一刀で切り捨てる。細切れになった兵は、あちこちで自警軍や市民兵と戦闘を演じていた。乱戦だ。
ここまでの短時間で、モナ兵の被害はかなりのものに上ろうとしている。
（ふざけるな……ッ）
街中に響く爆竹の音と喧騒は、ジフリザーグのいる軍舎にも無論届いていた。窓から街へ視線を向けるジフリザーグの隣に、ギルドの団員が歩を進める。
「なかなか善戦しているようじゃないか。今の段階では、死傷者は圧倒的にモナ軍の方が多いようだし。こりゃあもしかすると……」
「馬鹿言うな」
冷静そのものの顔で、視線を窓から背けずにジフリザーグは応じた。……まずい方向に行こうとしている。
「そうすか？」
「たりめーだろ。相手は正規軍だつってんじゃねーか」
顔を顰めて言いながら、腕を組む。
「今は不意を突かれて混乱しているだけだ。態勢を立て直したら、こっちは斬られまくるぞ。……だから茶目っ気起こすなって言ったのに」
ギャヴァンの市民はノリやすいのは良いが、少々ノリやすすぎる。……逃げるタイミングを、恐らく完全に逃した。調子に乗って、白兵戦を挑んでいる気配が街のあちこちから漂ってくる。
敵勢力を引き回して小分けにしているから何とか善戦しているだ

ろうが、だとしたって相手は正規の訓練を受けた兵士だ。加えて、全勢力で言えば圧倒的にあちらの方が多いのである。

先発の傭兵軍が辿り着くまで、とにかくモナ軍を分散させて可能な範囲で兵力を削る。罠に嵌めさせる。国の指導も訓練も受けていない数千の自警軍と市民軍では、その程度が関の山だ。肝要なのは命を失わないこと。この街の住人が抵抗する意志があり、モナに握られていなければそれは制圧とは言えない。

だが混乱が生じ始めているこの状態で、状況が逆転するのはもう間もなくだろう。

「シド」

「おお」

「発破っていくつあったっけか？」

「3つっすね」

「みっつう！？」

認識よりかなり少なく答えられて、ジフリザーグは窓から目を離した。隣に立つ、ギルドの古株に目をむく。父親が亡き今、ジフリザーグにとっては父のようでも兄のようでもあり、時には弟のようでもある存在だ。

「ああ」

「あ、そっか」

そういや使ってるんだっけか。

思い出して、ジフリザーグはポンと手を叩いた。シドががくりと肩を落とす。

「かしらあ」

「頭ってゆーな。……そうだったそうだった。使ってるんだったよな。んじゃ3つでいーや。それと、白兵戦でもいける団員を何人か呼んでくれ。あと、援護で弓……が使える奴は今散らばってるのか」

普通の市民に、ロープで吊った木箱を遠距離から射落とすなどという離れ業が出来るわけがない。当然ギルドで腕の立つ者を貸しているのだ。

「ま、しょーがねえな」
言いながら、軍舎を奥へと移動する。シドがそれを追った。ジフリザーグはごそごそと武器庫を漁り、小振りの剣を1本抜き出して振ってみる。
「頭……どうするんで」
「頭ってゆーな。決まってるだろ。逃げ遅れた市民を援護だ。……やだなあ、俺、剣は使えねーんだけど」
苦い顔をしながらベルトを取り付け、剣を鞘に戻した。シドに目を向ける。
「上行って、ボードレーに『ここよろしくー』って言って来てくれ。んで上のギルドの団員……そうだなあ。15人ってとこでいーや。呼んできてくれや」
「了解ッ」
シドが踵を返すのを認め、ジフリザーグはロビーへ戻りながら再び苦い顔をした。腰に装備してある、自前の武器トゥルス（三方辺の投げナイフ）を確かめる。やはりこちらの方がしっくり来る。
（ま、しゃーねーやな……）
盗賊は戦闘にはあまり、向かないのだが。
階段の方角から、バタバタと足音が聞こえた。シドを先頭に、武装したギルドの団員たちがぞろぞろと降りてくる。最後尾にボードレーが続いた。
「んじゃ行ってくっから、ここ、頼んます」
「わかった。戻って来いよ」
「牛と一緒にね」
おどけて肩を竦めると、ボードレーが吹き出した。
ギャヴァンには、陥とすべき城はない。代わりに、象徴とされるのはこの軍舎。
加えて、ギャヴァンの街中からは兵站や略奪の対象となり得るものは、可能な限りここともう1つの場所へと持ち出してある。間違いなくここを攻めてくるだろう。ボードレーを初めとする1500

人の残留自警軍は、ここの護りにあたっていた。
「行ってきまーす」
散歩に出るような口調で軍舎を出て行くジフリザーグに、ぞろぞろと団員が続く。
その背を見送り、ボードレーは防衛の指揮を執る為に踵を返した。

◆◇◆

「冷静になれッ。相手は所詮市民だッ」
インプレスは声を限りに叫んでいた。自らも剣で、襲い来る市民兵を斬り捨てる。
フレデリクに徹底的に鍛え上げられたモナ軍を統率するだけあって、その剣技は生半可なものではない。次々とカトラスを振り翳して襲い掛かる男を切り捨て、薙ぎ払い、その堂々とした威厳ある声を張り上げる。
「態勢を立て直せ!!冷静になれば決して負ける相手ではない!!我々にはギャヴァンの富が待っている!!」
勇猛を見せ付ける自分たちの指揮官に、動揺の続くモナ兵は次第に落ち着きを取り戻していった。合間に、まだ頼りない魔術師兵の魔法が飛ぶ。勢いに乗って押していた市民軍が、次第に押されて行った。
ようやくあるべき姿に立ち返れたことに満足を覚えながら尚も2人を斬り捨てると、前方の路地から新たな足音と怒声が響いた。
「退けッ。ここは俺たちが援護するからッ」
(……ほう?)
言いながら飛び込んできた十数人の人影、そのうちのひとり、深紅の髪の男にふと目が留まる。襲い掛かるモナ兵に対峙する、その剣捌きは実に美しいものだった。無駄のない動きと的確な狙いでモナ兵を捌いている。
「すまねえッ」

幅がそれほどあるわけでもない通路のこと、新たな手勢が広がるせいで、逃げる市民軍をモナ兵はそれ以上追撃することが出来ない。

見れば周囲の男たちも、華麗とは言えないが身軽な動きをする。屈強ではない、だが……。

一瞬、深紅の髪の男と目が合った。小さくにやりと、その口元が笑いを模る。

「退くぞッ」

「へいッ」

短い号令の後、統率された動きで男たちが撤退に入った。最初に戦闘を演じていた男たちは、既に行方をくらませている。残っているのは物言わぬ死体だけだ。

撤退姿勢に入った男たちに、モナ兵のひとりが執念に剣を振り被った。瞬間、深紅の髪の男が振り返り、腰に下げた何かを引っつかんで投げつける。襲い掛かったモナ兵は、首から血を撒き散らしながら転倒した。

（トゥルスか……！？）

卍型の一片が欠けたような形に研ぎ澄まされた刃を持つ、三方辺の投げナイフだ。いずれの刃がぶつかっても深い傷……ともすれば致命傷を負うように出来ている。

ブーメランのように戻ってきたトゥルスを受け止め、男たちが路地へと姿を消す。インプレスは声を上げた。

「よせ、深追いをするな」

これ以上ばらけてしまっては適わない。取り急ぎ、軍を召集し態勢を整えることが先決である。

……トゥルスは、ローレシアにおいて騎士や兵士が普通に使用するような武器ではない。トートコーストの投擲武器だ。まして、普通の市民が携帯するような代物では到底ない。

無論ギャヴァンは貿易の街だから、その気になれば手に入れるのは困難ではないだろうが……。

（そうか……通りで）

戦闘市民兵は、どう見ても国が指導していない。にも関わらず、訓練を受けていない市民の集団にしては統制が取れすぎている。指揮をしているのは多分、普段から組織慣れしている人物。加えて先程の新手は、普段から組織だって行動している連中だ。

（盗賊か……。ギルドだな）

あの男が、ギルドの長なのだろう。

第2部第1章第8話　ギャヴァン市街戦《前編2》（2）

自警軍の指揮官が指揮をしているのかと思ったが、恐らく市民軍のリーダーはあの深紅の髪の盗賊だ。ともすれば、自警軍と市民軍の双方取り纏めているのかもしれない。

奴を押さえれば、市民軍は烏合の衆と化すだろう。制圧は楽になる。

「あの男を潰せ」

インプレスの言葉に、間近にいた将官が顔を上げた。

「は……あの男、と言いますと」

「いただろう、さっきの新手の中にトゥルスを腰に下げた深紅の髪の男が。あいつがリーダーだ。あいつを獲れば、統率する奴がいなくなる」

将官が目を見張り、伝令を伝えようと踵を返し掛ける。その背中に、インプレスは命令を追加した。

「制圧するぞ。落ち着いて当たれ。必ず勝てる。抵抗する奴は容赦なく斬れ。降伏した者は捕虜にしろ。深紅の髪のトゥルス使いを獲った者には特別な計らいをしてやると伝えろ」

「はいッ……」

その頃、突如賞金首となってしまったジフリザーグは、街のあちこちから聞こえてくる戦闘音を頼りに市民兵を援護して回っていた。

「良いから行けッ。振り返るな、真っ直ぐ手近なところから逃げろッ」

怒鳴りながら剣を振り捌き、モナ兵を蹴散らす。『剣は使えない』と言った割に、その剣捌きは見事なものだった。一流とは言えないが、一兵士と剣を交えるには十分過ぎる腕前と言えよう。

だが。

（くそ……もつか？）

傭兵部隊が到着するまで。
「っしゃ。退くぞッ」
囲まれていた市民兵の生き残りが粗方撤退したのを確認して、叫ぶ。近くでもまた、別の戦闘音と怒声が聞こえていた。そちらに援護に行ってやらなければならないだろう。
「あーあ、俺、こういう役回りする柄じゃないんだけどなあ」
駆けながらぼやくと、隣を走っている男がにやりと笑った。長身の、風にダークグレーの髪を靡かせる美形である。ジフリザーグの兄のような存在であるエスタシークだ。
「ぴったりすよ」
「……勘弁してくれ。俺は体力勝負じゃねーのに」
面倒見が良い辺りがぴったり……とエスタシークが言い掛けたところで、別の路地から激しい足音が接近してきた。響く甲冑の音。仲間ではありえない。市民兵はろくな装備をしていないからだ。後ろからも、先程剣を交えていた兵士たちが追い縋る音が響く。思わず舌打ちが漏れた。
「いたぞ、賞金首だッ」
路地から新たに現れた兵士の口から、声が上がる。その言葉に、ぽかんとした。
「……賞金首？誰が？」
「……この場合、やっぱ頭じゃないか」
「頭ってゆーな。……何で？」
「またろくでもないことしたんでしょう」
「あのなあッ……ってそんなこと言ってる場合かッ」
場合ではない。追い縋る兵の数が倍増し、さすがに青くなる。
「あんなにうじゃうじゃと相手取れるかッ」
一際足の早い兵が肉迫して来た。剣を振りかぶって躍り掛かる兵士に、トゥルスを投げ付けて牽制する。かつて手に入れた魔力付与道具である。
トゥルスにはブーメラン機能はないが、これは自動的にジフリザ

ーグの手に確実に戻る。加えて、個人的な改良を加えたそれは中心点の内側に取っ手がついていて、正面に向ければ盾代わりに剣を受け止めることも可能だ。

「ぐはッ」

兵が仰け反って倒れた時、既に周囲では幾つかの切り合いが始まっていた。

「くっそ……勿体ねーけど仕方ない。発破使うぞ」

言うが早いか、取り出した筒状の爆弾に点火する。ギルド特別調合の発破である。

「ほーら、危ねーぞー」

言いながらこれ見よがしにひらひらと振って見せると、モナ兵から動揺が走った。どころか、「うわあ」と味方からも動揺が走った。ぽん、と放り投げると一斉にモナ兵が退く。爆音が響き渡り、辺り一面が煙に包まれた。

「げほげほ」

「頭……本当に危ないっす……。俺らまで巻き添えくっちゃいますよ」

「以後気を付けよう……」

微妙な表情で答えながら、最も近い戦闘音を目指して駆ける。追い付いてきたシドを横目で見て、ぼやいた。

「なーんで俺が賞金首なんだよー」

「そりゃあやっぱり、頭のワルさは一目瞭然だからじゃないすか」

「頭ってゆーなーーーッ！！……俺のどこが悪いんだよ」

ため息と共に吐き出して、前方に見えたモナ兵のひとりにトゥルスを投げ付ける。市民兵のひとりと切り結び、今にも止めを刺そうとしていたその兵士は不意を突かれた攻撃にもんどりうって倒れこんだ。

「ジフ！！」

味方の到着に気付いた市民兵が叫ぶ。踊り掛かって来た敵兵を斬り飛ばしながら、ジフリザーグは怒鳴った。

「『あっち』でも『そっち』でも手近な方へ逃げ込めッ。俺らが援護するからッ」
「わ、わかった」
一体この言葉を何度叫んだことだろう。
だが、回数が増して行くごとに……駆け付けるのが後になればなるほどに、仲間の屍が目につくようになる。血濡れた民家の壁や塀。通路の端に捨てられるように倒れている、仲間。
（わかっちゃ……いたけどッ……）
見知った市民の死体から目を逸らしながら、唇を噛み締める。
どれほど迅速に動こうと、適切な指示をしようと、結局最後は個人の武勇がものを言う。正規軍対市民軍では莫大な被害が出ることなどわかりきっている。自警軍とて、市民軍に毛の生えた程度なのだから。
それがわかっていながら市民たちは軍を編成したのだし、王城は遊撃部隊として認可したのだ。けれど目の当たりにすればやはり、胸に迫るものがあった。大切なものをひとつひとつ、失っていくと言う感覚だ。
けれど、これは防衛戦だ。自分たちの街を不当な占領から守る為の。
避けては通れない。
「あッ、こいつッ……」
手当たり次第切り込んで行くジフリザーグの耳に、不意にモナ兵の叫びが飛び込んできた。
「賞金首だッ……」
「おいおいおーい……」
場を忘れて突っ込みそうになった。げんなりする。だからいつ何がどうして賞金首になってしまったのか、是非お伺いしたいところだ。
「人気っすね」
「……ああ。お前にわけてやりたいくらいだよ」

「遠慮するっす」
「遠慮するな。俺は仲間と喜びも悲しみも分かち合いたいよ」
「俺は嫌っす」
つれねえなあああッと喚くそのそばから、モナ兵が次々と血飛沫を上げる。その左右を守るように、シドやエスタシーク、ラリー、ゲイトなどの仲間が固め、剣を振るった。だが、狭い路地の奥まで敵兵がひしめき、倒しても倒してもきりがない。
「頭が逃げ隠れした方が良いんじゃないすかね」
息の切れ始めたジフリザーグに、シドが己も剣を振り回しながらやや真面目に言う。
「出来るかそんなことッ」
だが、返答は予想通りのものだった。密かにシドは嘆息する。ギルドとしては、こんなところでまだ若い頭を失うわけにはいかないのだが。
しかし、自分が真っ先に安全なところに逃げ込むようなギルドの長など誰が信頼するだろう。荒くれ者の団員を取り纏めるには、そんな根性では務まらないのもまた、真実だ。
あらゆる面でまだ未熟さを残す、情に深く面倒見の良い頭を放っておけない、との思いがギャヴァンギルドに家族のような温かさを根付かせているのかもしれない。事実、ジフリザーグに代替りしてからのギャヴァンギルドは、急速に結束が強くなった。ガーネットの評はある側面当たってもいる。
尤も、反面頭は切れるし統率力があるのはもちろんなのだが。
「うわー……」
華麗な剣捌きを見せながら、ジフリザーグが顔をしかめた。別の……背後の通路から響く足音。
「ここで挟まれたらさすがに一網打尽だと思うよなあ？」
「間違いねえすねー」
「どおすっかなあー」
「発破使うっきゃないんじゃないすか」

「同感だ」
剣を引き、モナ兵の突きを躱して足払いをかけると同時に、地に手をついた反動で後方へ飛ぶ。残った2本の発破を両方抜き出した。多分1本では撒けないだろうとの判断だ。ギルドの発破は導火線に『炎の種』が接着してあり、そこを叩き潰せば自動的に点火する。キナ臭い匂いが漂った。
「ばらばらに散れッ。一旦、『ガーネット』で落ち合おう。無茶はすんなッ」
「1番無茶すんのは頭でしょーが」
また俺かい、と苦笑いを浮かべた。前方後方それぞれに1本ずつ、白煙を撒き上げながら弧を描いて発破が飛ぶ。爆音と怒号、煙に紛れ、ジフリザーグは盗賊ならではの身のこなしで左右に立ち並ぶ家屋の塀を突破して姿をくらました。

◆◇◆

「いたぞ、こっちだーッ」
（しつけえーッ）
寿司詰め状態の路地を爆破物で脱出したジフリザーグは、単身街の北西を目指して駆け抜けていた。いくら盗賊とは言え、こうも街中至るところに捜索者がいては見つからずに済むわけがない。気が付けばジフリザーグは、多少数が減っているとは言え2万余の敵兵に追われる身となっているのである。
（くうッ……善良な市民のこの俺が……）
善良かどうかはさておき、納屋の陰に身を潜めて後を追う兵をやり過ごしてからしみじみとため息をつく。そっと顔を出して、これまでとは逆の方向に駆け出した。そのそばから不意に、物陰からモナ兵がひとり飛び出してくる。
ぎょっとしたのはお互い様、ジフリザーグは相手が声を上げる前に剣で一刀した。そのまま、男が飛び出してきた路地に駆け込み、

じぐざくに折れ曲がる。
「うおっと……」
最後の角を曲がろうとして、ひゅんっと言う風鳴りを耳にして地に体を伏せた。
（……っぶね～）
街の至るところに仕掛けられている罠である。ロープと木箱を使った、弓矢の自動発射装置だ。仕掛けた場所は頭に叩き込んでいるはずだが、失念していた。自分で指揮を執って仕掛けた罠にハマっていては、末代までの笑い者である。
ばくばく言う心臓を宥め、冷や汗を流しながら再び身を起こした。目指すは『ガーネット』だ。今回において、『ガーネットの棲み家』を指す。元々『ガーネット』の通称と棲み家を知っているのはギルドの団員しかいないから、わざわざ隠語を作る必要さえない。
だが、敵兵を連れて飛び込むわけにはいかない。完全に撒かなければ。
そう考えたその矢先から、またモナ兵に遭遇した。勢いそのままにひとりを斬り倒し、突破口を拓き駆け抜けるが、後を追って来る足音が続く。
敵兵を引き連れたままジフリザーグが辿り着いたのは、ギャヴァン北西の海に面した崖だった。遠く、キール要塞のあるキール島と、間に砲撃船が停泊している姿が見える。
港のある南から左右に向けて少しずつ高度の上がるギャヴァンは、東も西も北に向かって次第に海とその標高を異にしていく。最西に近いその辺りまで来ると、海面は眼下３０エレ（約４５メートル）にも達した。落ちればただでは済まない。
「賞金首だ」
「聞き飽きたよ」
諦めたように、剣を腰の鞘に戻す。丸腰になったジフリザーグは、降参するようにひらひらと両手を掲げて振った。取り囲むモナ兵はざっと見積もっても２０数人。さすがにひとりで切り抜けるのは、

不可能だ。
「何でこの短時間の間に、俺に賞金が掛かってるのか教えて欲しいんだがなー」
その問いに答えられるモナ兵はいなかった。困惑したように隣の兵と顔を合わせる。
「おいおいおいおい。俺は自分が狙われた理由も知らねえで死ぬのかよ！？」
「うるさい。理由なんか何でも良い！！とにかくお前を獲れば、特別な計らいをして下さるんだッ」
「だから何で俺なんだつってんのに……」
ってか何で俺の顔をみんな知ってんだよ……と小声で呟く。腰にぶら下げた特殊な形状の武器と、爽やかに海風に靡くその髪が目印となってしまったとは気がつかない。
「観念して首を獲らせろ」
何人もの兵が、抜き身の剣を手にじりじりと迫る。ジフリザーグが背にしている沈みかけた陽の光を受けて、きらきらと反射した。日没間際の今、海からの陽光を正面から受けているモナ兵はさぞ眩しいことだろう。
「そう言われて『おっけー』と答える奴が果たしてこの世に何人いるもんか……」
言いながら、ゆっくりと崖際へ後退していく。気付かれないように気を使いながら、ベストの背中側のポケットに手を突っ込んだ。盗賊の７つ道具と言われる様々な道具プラスアルファがジフリザーグのベストには装備されている。
そのうちのひとつ、そのポケットに入っていた物とは。
「そいじゃ」
言って、素早い動きで取り出した拳大の丸い石を地面に叩きつけた。義弟シンがワインバーガ王国の『１つ目の鍵』のダンジョンで手に入れた特殊魔法石――閃光弾。
地に叩きつけられたそれは容易く砕け散り、四方へ真直ぐな十字

光を発した。まばゆい閃光に、モナ兵どころか自分まで目が眩みそうになる。……眩んでいる場合ではない。

もう1度、今度は別のポケットからフックつきロープを取り出すと、次の瞬間ジフリザーグは崖下へ向かって身を翻した。

第2部第1章第9話　ギャヴァン市街戦《前編3》（1）

幕僚のひとりであるスタルフが近づいてきた気配で、インプレスは顔を上げた。
「『トゥルス』はどうした」
深紅の髪の市民軍リーダー――ジフリザーグを示す仮名は、その武器からそのまま『トゥルス』となった。インプレスの問いに、スタルフがやや力なく首を横に振る。
「あちこちで目撃はされているのですが。どうにものらりくらりと逃げる奴のようで」
さすがは盗賊団の長と言うわけか。そう簡単には捕まってくれないようだ。
「街の北西の崖に追い詰めたようなのですが、閃光を放つ魔法石で行方をくらましたようです」
「崖から？」
「はい」
となれば崖を下ったか海へ飛び込んだか。現場を見ていないのでいずれが可能なのかまでは判断がつかないが、まさか魔物でもあるまい。だとすれば空を飛んだり消えたりするわけがないのだ。
「先回り出来るような地形ではないか」
「は……崖下は、海です」
「どこへ降りていくのかの予測は」
「それが……かなり広い範囲でぐるりと海に囲まれている崖でして……一応、海に近接する陸地には兵を差し向けたのですが、引っ掛からなかったようです」
「まあ良い。自ら援護に走り回るような奴だ。どうせまた姿を現わす」
現在市民軍はそのなりを潜めている。モナ軍はようやく統制を取り戻し、街の北東にある軍舎を目指して行軍しているところだった。

だが、無人の人家や商店から略奪を行っているものの思うように物資が集まらない。どうやら事前に掻き集めているらしい。
とは言え、進軍した際に市民軍が生活を営んでいたのだ。外へ運び出したとは考えられない。街のどこかにあるはずだ。そして考えられるのはやはり、制圧に際して陥とさねばならない自警軍舎だった。報告では、見張りや防衛にあたっている兵もいると言う。
「軍舎を包囲して布陣し、明日の朝、日の出と共に総攻撃だ」
大した兵力はいるまい。市民軍もどこからか湧いて出るだろうが、大した数ではないことは先刻承知だ。
「は。……では、今日は」
「ヴァルス軍がこちらへ向かっているだろう」
インプレスの視線を受けて、スタルフが頷く。
「通常の籠城と違うのは、市民にとって籠城するのが我々敵兵で外から来るのが解放軍だと言うことだ」
「……はい」
「攻城は、中に外と連動する者がいれば、より容易になる。……当然だな。閉めた鍵を内から開錠してやれば盗人だって正面玄関から侵入出来よう」
「ええ」
「市民は当然、外から来る軍と連動している。ヴァルス軍の到着と共に、事前に仕掛けておいた発破を使って正面門と塀を破壊するぞ」
明確に場所と手段を告げた上司に、スタルフは目を丸くした。
「それは……そのような情報が……？」
「ああ。ヴァルスには間諜が入り込んでいる。市民軍は、正面門左右の外壁と内壁に発破を5発ずつ仕掛けている。正面門は破壊されやすいよう、細工が施してある。……閉められないよう壊してしまえば、ヴァルス軍の到着前に我々が補修してしまうのを危ぶんだのだろうな。一見、防衛に十分と思わせて放置させることを期待したんだろうが」
「では」

スタルフが興奮したように、顔を紅潮させた。
「正面門の補修及び発破の撤去、加えて防護壁の補強だ。幾つかの部隊には市民兵の捜索。残りは軍舎の包囲と攻城器の補修、作成にあたらせろ」
「は、はいッ」
これで、ヴァルス軍は到着したとて予定通りには街へ侵入出来ない。作戦を変更せざるを得なくなる。となればその分時間は稼げるし、その間に軍舎を押さえ、市民軍を駆逐あるいは捕虜とすれば、一般市民のいない今のこの街で内部から連動する者がいなくなる。……容易に侵入出来なくなると言うことだ。
最初の混乱でギャヴァン制圧に不安を覚えていたスタルフの胸に、光が射した。この戦争で勝利を納め、ギャヴァンの富を手に入れて国間交渉でモナが裕福になれば、貧困に喘ぐ仲間を見ないで済む。
すぐさま指示を伝えようと勢い込むスタルフに、インプレスが言葉を追加した。
「ギャヴァンには確か、地下水路があるだろう」
「地下水路……」
モナには設備投資するだけの資金が不足している為、ほとんどの街に地下水路の設置はなされていない。その為、その発想に至らなかった。
「捜索はしたか」
「あ、いえ、まだ……」
「あたれ。潜った市民軍と隠し物資が出てくるやもしれんぞ」

◆◇◆

「ジフッ」
「頭ッ」
ジフリザーグが集合場所『ガーネット』へ辿り着いたのは、既に日も落ちた頃だった。ワイン色の柔らかな髪には葉や小枝が絡まり、

日に焼けた人の良さそうな顔には細かな擦り傷や切り傷がついている。腕や足も同様だ。

「お待たせえ……」

ひらりと手を振り、頼りない笑顔を浮かべる。既に集まっていた団員たちが駆け寄った。

「よく、無事で……」

「おお～同感だあ～……。俺、よく無事だったなあ～……」

言いながら、くた……と入り口に両膝をつく。決して体力勝負とは言えないジフリザーグにしてみれば、3時間にも及ぶ全力での戦闘及び逃走劇と言うのは決して楽なものではない。

おまけに……。

「水……」

床に座り込んだまま言うと、手近にいたゲイトと言う年若い団員が洞穴の奥へと駆けていった。キサド山脈から流れ出るリー川の水脈の一部が、岩山を伝ってこの洞穴の奥に湧き水を作り出している。ギャヴァン市民の生活を支える水脈でもあった。

「頭……サバイバルでもしてきたんすか」

「……まあな」

頷きかけて「頭ってゆーな」としつこく付け足してから、ゲイトの運んできた水のグラスを受け取る。一気に水を飲み干した。

「ここまで、どうやって？」

「裏の崖下って来た」

「崖ぇッ！？」

ジフリザーグは閃光弾でモナ兵の目眩ましを図った後、特殊鉤爪付ロープを崖から迫り出している木に引っ掛けて崖下へと下りた。崖から数エレ下には、内側に穿たれるように岩棚がある。幅は狭いし、そこまでに続く壁面がやや隆起状になっている為、上からはほとんどその存在が見えない。

一旦そこに降り立ったジフリザーグは、十分時間をとって閃光弾と西陽で視界の覚束ないモナ兵の視察をやり過ごし、それから改め

て鉤爪を木々に引っ掛けながらゆっくりと斜めに崖を下ったのだ。途中から木々が密集して上からの視界を妨げてくれるし、足場がましになったところで方向転換し、１度上って海岸を迂回すればモナの捜索網にも引っ掛からない。

その崖へ辿り着いたのは、決して偶然ではない。モナ兵を引き離し、尚見付からないよう『ガーネット』へ向かうにはそれが最適と判断し、日没の頃合を計算しながら目指して来たのである。

だが、小さい頃からこの辺り一帯を根城とし、隅々まで……それこそ上から僅かに見えるだけの岩棚の存在まで熟知し、岩棚を越えた辺りから斜面が少しずつ緩やかになることを知っているとは言え、眼下に広がる海は荒く岩礁だらけだ。転落すれば骨が砕けるだろう。もちろん過去に命懸けで崖を下った経験などあるわけもない。ジフリザーグにしても、イチかバチかの賭けだったのだ。

ようやく安全地帯に辿り着いた今、ひそかに気にかかるのは閃光弾を使用してしまったことである。シンに怒られたら嫌だなあと内心軽くへこんでいると、側に仁王立ちになった団員グランドに怒鳴られた。

「やっぱりそんな無茶をするッ」

「他に方法がなかったんだよッ……シドは？」

答えてふと、団員が少ないことに気が付く。ジフリザーグに従って市民の援護に出た者は１５名。ざっと見回して、今ここにいるのは１０人だ。

「フェイルは？マーシーもいないな。ザクトとエスタシークも……。まだなのか？」

モナに狙われ崖まで下ったジフリザーグが、恐らく最もここまで……遠かったと思うのだが。

ジフリザーグの視線に耐えかねて、１番手近にいたグランドが痛みを堪えるような顔で目を伏せた。その仕草に、胸を突かれる。冷たい雫が背筋を滑り落ちた。

「何だよ？まだ来てないのか？」

「……」
「グランド！！」
ゲイトが唇を震わせて進み出る。
「シドさんは……俺を、助けて」
「……」
「他の、メンバーも……それぞれ……」
強く、唇を噛む。鉄のような味が口に広がった。握り締めた拳が震える。胸の奥に重たい石が沈んだ。仲間たちの笑顔が浮かぶ。温かい、温もりが。
こんな稼業だ。これまでにも仲間を失ったことがないわけではない。
とは言えやはり、堪える。
だが、個人の感傷に浸って良い状況でもなかった。重い沈黙を破る。
「……市民兵の避難は」
「今生き残ってるメンバーに関しては、無事例の……地下水路に」
「モナの動きは」
「市民兵の捜索をしながら、軍舎の包囲に取り掛かろうとしています。並行して、門の施錠と補強。それから……例の……発破の解除を」
ジェイクと言う団員が答える。ジフリザーグは目を上げた。
「……どこだった」
「正門横です」
「了解。……ラリー」
「はい」
「抜けられるか」
「はい」
「シャインカルクに通達してくれ。俺の名前を出せば入れてくれるはずだ。宰相か宮廷魔術師に。伝言は駄目だ。確実に本人に伝えろ。傭兵軍はどうした」

「まだです」
直ちに身を翻して駆けて行くラリーの背中を見遣ってから、その答えに鼻の頭に皺を寄せる。
「遅いな……何してやがんだ。じゃあもちろんヴァルス軍も」
「もちろんまだです」
そこまで聞いて、立ち上がる。全員に緊張が走った。
「行くぞ」
「頭、どこに」
踵を返しかけた足を止め、顔だけ振り返る。
「決まってる。軍舎の援護だ。市民軍と合流して、モナ軍の背後から襲う。闇が俺らを守ってくれるさ……」
「けど。頭、少し休んだ方が良い……」
「ばぁろ。休んでる暇なんかあっかよ。ボードレー、放っておくわけにゃいかんだろー」
言いながら、少しよろける。咄嗟に手を伸ばしてグランドが支えた。
「無茶っすよ」
「……シドを」
「え」
「シドを、フェイルを、マーシーを……ザクトを、エスタシークを……失ったんだぞ!?」
「……」
「黙ってられるかッ!!ヴァルス軍だって、俺たちの動きがなきゃどうにもなんねえんだ。……傭兵軍が到着したら……その時は、一休みさせてもらうさ」
拳を握り締めて、気合を入れる。己を叱咤して歩き出す長の背中に、他のメンバーも黙って従った。
市民兵の避難場所として利用している地下水路への入り口は街の至るところにあるが、いくつかを残して油紙や蝋を使って封鎖してある。『ガーネット』から最も近い入り口への移動は、暗闇も手伝

ってさほど困難なことではなかった。元々、暗闇を得意とする盗賊団だ。

入り口を開き、錆びた鉄梯子を降りる。南の街であるとは言え、地下水を引き込んでいる地下水路の空気はしんと冷えていた。時折、天井から滴り落ちる水滴が静かに流れる地下水に吸い込まれる音が、反響を伴って響く。

誰もが無言だった。

「……気付いたな」

地下水路は、石壁で半円形に固められている。水路を挟んで左右には幅０．５エレ（約７５センチ）ほどの細い石畳の通路が通っていた。街の下を複雑に入り組んだ幾つもの水路が走る形になっているので、その広さは半端なものではなく、複雑さも慣れた者でなければ地上に出るのが至難の業とさえなる。

先頭を歩くジフリザーグが、ぽつりと言った。すぐ後ろに続くグランドが、小さく頷く。

「の、ようですね」

どこか遠くで、金属的な足音が聞こえる。モナ兵の甲冑だろう。地下水路の存在に気付き、捜索を始めたらしい。

「まあ、好きなだけ探すが良いさ」

地下水路の存在に気づくことなど、最初からわかりきっている。それが遅いか早いかの違いだけだ。だが、それと並行する形で分岐して走る『もうひとつの地下水路』の存在には気付くまい。

第2部第1章第9話　ギャヴァン市街戦《前編3》（2）

ギャヴァンの街は、元から大きな街だったわけではもちろんない。最初はごくごく小さな、辺境の港町のひとつに過ぎなかった。今のように王都に次ぐ人口を抱えた大都市となったのは、ここ数十年の話だ。

ギャヴァンに貿易の拠点となる港を築こうと考えた国が街の整備に乗り出し、そのおかげで人口が爆発的に増えた。……それまでの設備では、追いつかなくなったのだ。

地下水路は当初、本来利用していたものを拡張する話となっていたのだが、余りに急激に人口が増えたこととかつての地下水路の設備の甘さに、新たに設けられることとなった。つまりギャヴァンの地下には、現在使用されている地下水路とは別にもうひとつ、旧地下水路が走っている場所が一部、ある。

地下水路と旧地下水路は当然交差する部分もあれば、全く無関係の方向へ伸びている部分もあり、市民兵は現在、地下水路から地下へ入り込み、交差点から旧地下水路へ潜り込んでいる。軍舎に置ききれない物資も、ここへ移動してあった。

加えて、この旧通路の役割はこれに留まらない。この後、重要な役割を果たしてもらうこととなっていた。

旧地下水路の存在は、多くのギャヴァン市民でさえ知らない。長く、ここを拠点に活動し拡大してきたギルドの協力あってこその利用である。

通じる出入り口はほんの僅か、そしてその大半はやはり、地下水路への入り口と同様に油紙や蝋、そしてこちらは石を使って塞いであった。利用できる極少の出入り口も、知らぬ者には気付かれぬよう板や蔦でカモフラージュがなされている。

「んで、どこだっけ」

「……頭」

「っと、この辺か」
頼りない発言をした長に、グランド以下9人ががっくりと揃って肩を落とす。気にする様子もなく、ジフリザーグは手探りで入り口を探した。灯りの届かない地下水路、夜目が効くとあっても限度はある。
「ジフ！！無事だったか！！」
旧地下水路へと入り込み、その入り組んだ通路を更に奥へと進むと、ようやく灯りが見えた。軍舎へと戻れず、こちらに避難した市民軍が集まっている場所まで辿り着いたのだ。
こちらは既に封鎖されているので、現地下水路のように水は通っていない。湿った空気が流れてくるせいで至るところに水滴はあるが、その程度である。おかげで、狭い通路だがそれなりの幅が確保出来ている。
「おー。無事無事。ここは、どんくらいだ」
ジフリザーグを見つけて、何人かが駆け寄ってきた。そうでなくとも、そこにいる人間のほぼ全ての視線がこちらに向いている。こちらから見えていない奥の方まで、人がいるのだ。
「ここは大体３００くらいだ。そっちの先と右に折れた行き止まりの方に２００ぐらいずつ。物資の辺りに１００くらいか？」
駆け寄ってきた男が、そばの男を振り返った。頷く。
「じゃあ、地下水路の総勢は……千に満たないのか」
愕然とした。市民兵は3千はいたはずだ。
「あっちに潜り込んだのは、どのくらいいるかわかるか」
「多分……ここより少ないと思う」
「……そうか」
暗澹たる気持ちになってきた。では、半分ほどが殺されたか捕虜になったのだ。自警軍の１５００人は軍舎に逗留していたはずだが、残りの１５００がどうなったのかを考える気にもなれない。
「今、上は……」
壁際にじっと座り込んでいた男が、おずおずと声をかけた。見知

らぬ男だ。疲れたような顔をしている。
「モナが軍舎の包囲を開始している。羊毛を詰めた袋や土嚢で、防護壁を内側から防御を固めたりもしてるみてーだ。それから」
言葉を切って、目の届く範囲の男たちを見回す。
「モナが気付いたようだぜ。ここへ来る途中、甲冑の音が聞こえた」
男たちに動揺が走った。それを制すように、殊更軽くひらひらと頭の上で手を振る。
「ああ、心配すんな。別にこっちがバレたわけじゃねー。あっちだ。あっちの地下水路の存在がバレんのなんか、最初っからわかってんだろ。今更動揺してどーおすんだよ」
「けど……」
「バレねえって。ここで宴会して大暴れする気があるわけじゃねーんだろぉ？」
「そりゃあジフだよ」
だから何でいつも俺なんだよ、とかくっと肩を落とす。それからそのまま、その場にしゃがみこんだ。
「んで、だ。何が言いたいのかつーと、出る時に注意しろってだけの話だ。地上に出るまでにはあっち通んなきゃなんねーからな」
「わかった。後ろと、他の待機場所に伝えろ」
手近な男の言葉を受けて、何人かが移動する。それと入れ違いになる形で、通路の奥から屈強な男が近づいてきた。オレンジ色の長い髪を束ね、片目には眼帯を嵌めている。
「グローバー」
その男の存在はジフリザーグも知っていた。親しいと言える間柄ではないが、グローバーの船はギャヴァンを良く訪れるし、飲み屋にも良く出没している。ジフリザーグは酒は飲めないが、それでも以前にも何度か言葉を交わしたことはあった。
「どうするんだ」
加えて、グローバーはたまたま港に立ち寄っただけの、言わばギャヴァン攻防とは無関係のはずなのだが、この街を守りたいと言っ

て船員と共に協力をしてくれている。ギャヴァンの水夫とも馴染みが深いので、何人かのリーダーと共に水夫たちの取り纏めを行ってくれていた。

「……奇襲を掛ける」

微かに顔を俯け言ったジフリザーグの言葉に、グローバーは腕を組んだ。その場の何人かに、また動揺が走る。

「ヴァルス軍は、どうしたんだ」

「俺たちを見捨てる気なのかな」

不安が伝染するように空気を震わせていくのがわかった。弱気になるのはまずい。

「馬鹿。ティレンチーノ要塞からだってすぐに駆けつけて来られないことだって、わかってただろ」

「けど」

「ギャヴァンを見捨てて困るのは俺たちだけじゃない。国だって一緒だ」

「……」

蹲った男のひとりが、抱えた膝に顔を埋めた。

「俺、もう、嫌だ……ッ」

「……」

その言葉に、胸を突かれる。

正規軍が相手なのだから、強い。それは最初から知っていた。頭では、だ。

だが、実際仲間がこうも簡単に半数以上行方が知れないとなると気が塞ぐ。見ると聞くでは大違い、と言う奴だ。

戦争において、兵力差が全てではないことはわかっている。他大陸では８０万の大軍が８万の兵に敗北した例さえあるのだ。だが、それをジフリザーグ率いる市民軍に当て込めて考えるのは、無謀が過ぎると言うものだろう。

徴兵される兵だって、実戦投入の前にプロ――将軍らによって厳しい訓練を受ける。何ら訓練を受けていない市民兵が、付け焼き刃

でどうなるものでもない。統率するジフリザーグとて、戦争屋ではないのだから。

勝てる要素など、最初からどこにもない。

ジフリザーグがすべきはただ1点。――負けないことだ。勝つことと負けないことは、イコールではない。

ゲリラ的に撹乱し、ヴァルス軍を街に引き込むだけなら少人数でも、出来る。どうせもうじき、傭兵軍が到着するのだから……。

「……良いさ」

立ち上がって男のそばに歩を進め、しゃがみ込んだジフリザーグは優しく声を掛けた。

「傭兵軍が侵入してくるのはこの旧地下水路だ。……この通路は、街の外へと通じている」

男が顔を上げる。

「知ってるだろ？」

その言葉に、声もなく頷いた。

旧地下水路の重要な役目――それは傭兵軍をギャヴァンの街中へと導くことだ。

攻城するにあたって、敵兵が外から坑道を掘ることさえある。まして今回のギャヴァン戦に至っては、事前から市街戦、籠城戦となることが読めているのだ。ただでさえガイドとなる通路があるのに、それを繋いでおかない馬鹿はいまい。

ただ、古く、一時国から見離された旧水路であればこそ、限界がある。国軍ほどの人数が通れる道には出来ない。ゆえに、傭兵軍を小分けにして初期投入する際にのみ使用することになっている。

「他の人も聞いてくれ」

立ち上がって、ジフリザーグは不安に曇る人々の顔を見回した。

「元々、この戦闘への参加は誰にも強制されていない。……国にもだ」

「……」

「逃げたい奴は、逃げてくれ」

微かなどよめきが走った。グランドがジフリザーグの肩を掴む。
「おいッ……」
「そーだろ？」
「……」
「……何人も、失ったんだ」
呟くような、ともすれば掻き消されそうな声を、誰もが静かに聞いていた。
「何人も、失った。これからも、失うんだよ。自分を守る権利は、ここにいる誰にも平等にあるんだ。逃げることは恥ずかしいことじゃない」
「ジフ……」
「この通路は、外へ通じている。ギャヴァンの外だ。夜は魔物が出るだろうから……朝、日が昇ったら、真っ直ぐティレンチーノ要塞を目指せば、必ず助けてくれる。今はまだ、命は保障されてるんだ」
「……お前は、どうするんだ」
グローバーの低い問いに、ジフリザーグはまたも顔を俯かせて小さく笑った。今、自分の顔が憎悪に染まっていそうで見せたくない。笑顔が成功している自信も、ない。
「……俺、大事な仲間失ったから」
「……」
「だから、俺……この街を、守らなきゃ……」
それ以上何も答えないジフリザーグに、グローバーが吐息をついた。言葉にしなくても、その意図は明確だ。
「それにほら、俺、宮廷魔術師サマにタンカきっちゃってるしな。中からの協力者がいなきゃ、ヴァルス軍が辿り着いたって中に入れねーっしょ」
ようやく、笑顔を作れた気がして顔を上げる。
「だから、行くわ、俺」
短く言って、踵を返した。ギルドのメンバーが、黙ってそれに続く。それを背中に感じて、ジフリザーグは低い声で言った。

「……連中は今、市民兵を探して街中を徘徊している。軍舎を包囲しながら、発破を解除しながら、防護壁を補強しながら。……それほどの大人数で行動しているとは考えられない」

現地下通路に近付くにつれ、水路を流れる水音が微かに耳につきはじめた。

「時は闇、俺たちの領分だ」

「……」

「片っ端から闇に引きずり込んで、消して行け」

「はい」

「……自分の背後の闇に潜む盗賊の恐ろしさを、心行くまで思い知らせてやれ」

第2部第1章第10話　来たるべき時（1）

エレナはセラフィの視線に耐えかねて、顔を伏せた。別にエレナが悪いわけではないのだが、何がしか居心地の悪い思いだ。

「……何だって？」

エレナのもたらした報告に、虚を突かれたような顔をしていたセラフィが、ようやく掠れた声を押し出した。

「あの、ですから……モナがギャヴァン攻撃を開始致しました」

「馬鹿な……」

モナ公フレデリクがロドリスを訪れたのは、3週間ほど前になる。その際、交渉を進めたのはローデツォの時と同様、セラフィが主だった。

フレデリクは、いかにも貴公子然とした容貌の持ち主だった。年令はセラフィと大差ないだろう。物腰が柔らかく、そつのない人当たり。にこにこと人に愛される笑顔を互いに浮かべて腹を探り合う嘘寒い空気が流れるその光景に、後で話を聞いたグレンは一言、こう評したものだ。

「狸が2匹」

それはともかくとして、モナに含みがあるわけではなさそうだと判断したロドリスは、モナと同盟を組む方向で現在話が動いている。意外にも最初にまとまりそうだったのだが……。

（焦り過ぎだ……！！）

ロドリスが動くには、まだ時期尚早だ。ゆえにフレデリクには先走らぬよう警告を出したはず。

（馬鹿げている……）

フレデリクと対面した際に、対ヴァルスへの対応策としてヴァルスに使者を派遣するようセラフィは提案した。いくら何でも、海軍が出動していれば、ヴァルスだって焦る。先んじて攻撃を仕掛けてこないとも限らないとなれば、ヴァルスへの出兵意志をロドリスに

示す為に軍を動かしたモナとて心安らかには眠れまい。ヴァルス王城の気質は良く知っている。これまでのモナとの歴史を逆手にとって油断してもらい、しばしの猶予を得る腹積りだったのだ。

と言って、フレデリクが功を焦るほど愚かには見えない。何か理由があるはずだ。

「ヴァルスがモナを煽ったな……」

苦く呟く。エレナが、顔を上げて頷いた。

「恐らくは。ヴァルス海軍が出動、各地諸侯から徴兵し、兵力を要塞に集結させています」

「……そう」

「加えて、海軍がいささか小賢しい動きを」

エレナはセラフィに視線を定め、真っ直ぐに告げた。

「小賢しい動き？」

「一度南下してアルズール内海に大型艦船を停泊、その背後で一部が北上。要塞を経由して兵力を収容し、モナ本国を襲撃する動向です」

「……なるほど」

小賢しい。

兵力の集結と海軍の出動で、モナの不安を煽ったのだろう。

モナはフレデリクに政権交代して以前よりは大幅に兵力は上がったし、機動力も上がった。正式に海軍を導入、鍛え上げたのはフレデリクだ。だがそれでもやはり貧しい小国ゆえにヴァルスやロドリスなどとはまだまだ比較にならない。

ヴァルスがギャヴァンに投じようとしている国軍は1万との報告を受けているが、諸侯からも徴兵しているとなればまた増えるだろうし、傭兵部隊、自警軍は勘定に入っていない。

その全てがギャヴァンに集結して布陣されれば、モナの陸軍は袋の鼠となるばかりだ。逃げ延びるには、ヴァルスが布陣する前にギャヴァンを制圧することである。そうなれば防護壁の内側に籠城して、ギャヴァンと言う街を人質に取れる。ヴァルスとしては内側に

自国の国民を擁するギャヴァンの防護壁に向けて、大砲を立て続けに無差別でぶっ放すなどと言う真似は出来まい。

海路を確保しているから兵站には困らないし、そもそもギャヴァンと言う豊かな街であればこそ長らく籠城することが可能だ。籠城するには攻める方ほど兵力を必要としないのだから。

ロドリスが動いてヴァルスが手一杯になるまで持ち堪えることは出来ようし、主要な港を押さえられていてはヴァルスも身動きが取れなくなる。そうなればモナの要求に応じる姿勢を取る可能性も、高くなる。

いずれにしても、海からヴァルスに攻められては話にならないから、ヴァルス軍を撃破または足止めするとして海軍が海上に控えていることが重要となる。

ただし。

『兵力のギャヴァン集結』が前提だ。本国に向けられるとなれば、話は別となる。

「そこが、モナの弱いところだよね……」

「と申しますと？」

「どうしたって総兵力が少ない。王都に兵は当然残しているだろうけど、相手は大国ヴァルスだ。モナに対してあれこれモメてたみたいだけど、それでも馬鹿に出来ない程度の兵は動かせるからね。進軍するには、モナだってそれなりの兵力を動かさなきゃならない。……モナ本国を守る兵力の脆弱さが引っ掛かる」

「しかし、ヴァルスはギャヴァンを放っておくと？」

「海軍を引き離す腹積もりなんだろう。モナ艦隊は、本国を見捨てるわけにはいかないだろうな」

「……どう、なさるのです？」

エレナの問いに、セラフィは首を傾げた。

「どうしようもないね。僕は警告は発した。……元々、モナは勘定に入っていなかったんだ。ちょっとでもヴァルスの戦力を割いてくれれば良しとしようか。それに、問題は海軍じゃない。仮に海軍が

撃破されようと、モナがギャヴァンを制圧出来ればヴァルスは北と南に戦力を割かなければいけなくなる。双方どれだけ健闘するかは、見物かもしれないよ？」

◆◇◆

エレナが退室した後、同じその場に座ったまま、セラフィはじっと考え込んだ。

『時間の問題』と思われたキルギスより先に、バートがロドリスに転んだ。あとは、何としてでもリトリアを引き込みたい。ロドリスの出撃にはまだ、早い。

モナには悪いが、しばらく単独でヴァルスを相手どってもらうしかない。弱小国でも、多少ヴァルスを疲弊出来る程度には役に立つだろう。

そしてやはり、セラフィにとって邪魔な存在はレガードだ。何をするにもその存在が引っ掛かる。

レガードの存在ひとつで、ロドリスが仕掛ける戦争そのものが……セラフィににとっては意味をなさなくなる。それほどに彼は、レガードの在不在にこだわっていた。――ヴァルスの後継者の存在に。

チャンスはもう巡って来ないかもしれない。レガードは若い。後継してしまえばもう……恐らく、次はない。

バルザックにレガードの追撃命令を下してから一月。あれから程なくして、バルザックは連絡を寄越して来た。ただし、お得意の空間移動魔法での突然の来襲ではない。珍しいことに、イリュージョンの魔法を使っての自己映像の投影だった。

「良い報告以外なら聞きたくないな」

表情を変えず視線だけを僅かに上げて告げたセラフィに、バルザックは低く笑ったようだった。深く被ったローブで相変わらずその表情は読めない。

そしてゆっくりと動かした右手、差し上げられたそこには。

「……本物か」
虚ろに定められた視線。――レガードの首級。
「近日中に、そなたの手に渡ろう。その時に自分の目で確かめるが良い」
「良いだろう。……近日中？」
バルザックの言を聞き咎めて問い返す。黒衣の魔術師は再び、笑った。
「……諸用でな。屋敷を空けている」
「諸用？」
「レガードの首級を手に入れて、どうする？」
それ以上追及されるのを嫌うように、バルザックは話を変えた。セラフィとて、バルザックのプライベートに興味があるわけではない。その問いに小さく笑った。聞きたいことはわかっている。
「知ってるかい。戦争ってのは始めたらやり直しがきかない。リスタートするわけにはいかないんだよ。だからこそ仕掛ける前の準備や判断が重要なんだ。……勝てる、と言う時までは動くわけにはいかないんだよね。そしてそのポイントは知っての通り3点だ。同盟の成立、クレメンスの崩御、そしてレガードの不在。ロドリス参戦には、まだ早い」
予想通りのセラフィの答えに、バルザックは小さく笑った。
ロドリスには別に、戦争を焦る理由などないのだ。『勝てる』と確信を持てるまで、じっくりと足場を固める気でいる。国が腰を落ち着けてしまった場合、それは長ければ年単位にまで延びる可能性が生じる。
尤も、今回に関して言えば『ヴァルスの空位期間』と限定されている為に、そうそうのんびりしているわけにもいかぬだろうが、それでも数ヶ月に及ぶ可能性は否定出来ない。……そうはさせない。
「良かろう……」
その為に、ヴァルス王女を連れてきた。じき、偽レガードが王女を奪還しに来るだろう。その時が、ヴァルスとロドリスの間に戦火

を巻き起こす時だ。
　ロドリスにはヴァルスとの戦争を、遠くないうちに始めてもらわなければならない。その為には、セラフィをバルザックの住む屋敷に招待する必要がある。
　遠からず、『レガード』一行もバルザックの屋敷を突き止めるだろう。その時までに、バルザックはいつでも目的が果たせるよう、下準備だけは整えておかなければならない。
「……改めよう。ヴァルスに備えてそちらも準備を進めておくのだな」
「言われなくても」
　短く言って体を翻しかけたバルザックは、去り際にふと思い出したように付け加えた。
「……『銀狼の牙』は全滅したぞ」
「何……！？」
　問い返す間もないほど鮮やかに掻き消えたバルザックに、為す術もない。真偽のほど、そして何があったのかは闇のままだ。何かを企んでいる――そうは、思うのだが。
（まったく……何を考えている……？）
　以来、音沙汰はない。セラフィ自身、こちらから連絡をする暇があるわけでもなかった。
　バートやナタリアと正式に調印し、打ち合せを進め、軍の編成に取り掛かる。
　キルギスやリトリア陥落の為の会議、会議、会議。
　その間にだって、通常の国政をやらないわけにはいかない。フォグリア郊外の邸宅にだって、あれ以来帰る暇さえないのだから。
　イリュージョンが示したレガードの首級。――本物か？
「……お邪魔しても、よろしいですか？」
　控えめなノックがなされ、そっと扉が開かれた。らしからぬその殊勝さにいささかぎょっとしながら、考え込んでいた顔をあげる。
「どうしたんだい、グレン……」

姿を現わしたのは、グレンだった。何だか頼りない笑顔を浮かべている。

「こんな時間に」

既に夜半を過ぎている。あと数時間で、朝を告げる鳥たちの声さえ聞こえてくるだろう。

「夜通し、フォグリアを目指したのか？」

どうせ馬にはまた、逃げられているのだろう。聡い動物は、魔性を飼うグレンを乗せることに怯える。鈍いのは人間だけだ。

けれど、『人間』でありたいと望むグレンは、飽くまで馬での移動を望む。そしてやはり、逃げられる。

「セラフィさんこそ、こんな時間までお仕事ですか？……シェンブルグの方へ伺ったのですが、ご不在だったようなので」

言いながらグレンは、その長身を室内へと滑り込ませた。

シェンブルグと言うのは、ハーディン敷地内に設置されている宮廷魔術師の居館だ。現在の主人は当然、セラフィである。

「お体に触りますよ……」

「何があった」

グレンの言葉には答えず、セラフィは単刀直入に尋ねた。何かあったに決まっている。

「報告は3点。火急はまず、レガードさんです」

簡潔にグレンが言う。ちょうど考えていたことだったので、セラフィは目を見張った。

「逃しました」

『逃した』。

つまり、生きて動いていたと言うことに他ならない。

（あのじーさん……）

わざわざイリュージョンの魔法で連絡を取ってきた理由がわかった。時間稼ぎだ。そして『銀狼の牙』は全滅。裏切りか……いや……。

（……）

バルザックは、何の時間を稼ごうとしている？そもそも『あのレガードが本物』なのか……？

レガードの首級さえイリュージョンならば、あの時バルザックが『本物だ』と断定したその言葉さえ疑わしくはならないか？

「……グレンが？」

ぽつりと尋ねる。グレンは叱責覚悟で頭を下げた。らしくない、しおらしい態度。

「ええ。……申し訳ありません」

「どうだった」

問われた意味がわからず、グレンは顔を上げた。

「どう、とは？」

「何か、感じなかったか」

年下の上司の勘の良さに、内心舌を巻く。

「さすがですねぇ。……あれは、もしかすると本物ではないんじゃないかと」

「……なぜ、そう思った」

顎を意味もなく撫でながら、グレンは琥珀色の瞳に宮廷魔術師を映し込んだ。

「『本物』と会っていないので何とも言えませんが。王族の空気はなかったですねえ。剣も未熟、国を統率する気質の持ち主じゃない。……聞いている『レガード』さんとは大幅に印象が違います。もっとも……」

先程のリデルでの戦闘、そして移動でますます乱れた長髪に手をやってため息を落とす。

「レガードさんを逃したのは、そんな理由ではありません。ただの、私の実力不足です」

ハーディンに関係する人間が『レガード』を襲撃するわけにはいかない。だがあの場合は別だった。ここはロドリス王国内、そして大量虐殺が行われたばかりの村。

侵入した不審者を近衛警備隊員が捕らえるのは、決して不自然な

ことではない。疑われるような真似をする方が悪いと言うものだ。
そこまで計算しての行動ではあったのだが。
潔い姿勢を見せるグレンに、セラフィは組んだ足に頬杖をついた。
「まさか。……レガードがロドリスに入り込んだ目的は何だ？」
セラフィの問いに、グレンは黙って首を横に振った。
「わかりかねます。ですが、もしかするとバルザックさんではないかと」
「……」
「復讐なのか、理由があるのか。遭遇したのはリデルの村ですからね。方角的にはさほどとんちんかんではないでしょう」
この状況が示すものは何だ？
みすみす『銀狼の牙』の全滅に手を貸さずに見捨て、セラフィに時間を稼ぎ、レガードがバルザックの屋敷へ向かっている。……バルザックは何をしようとしている？
そう考えて、ふとある考えに思い至った。バルザックの思惑とはいささか思考が逸れるが。
（もし、レガードが本物でないのであれば……）
あの時バルザックは、何と言った？共に旅する少女――『ヴァルス王女だ』と言わなかったか。
つまりその場合。
（シャインカルクもレガードの行方を掴んでいない……！？）
あくまであの『レガード』が本物でなければ、と言う前提ではあるが。
偽物が出没している理由は簡単だ。
ヴァルスも、レガードの行方を追っている。
いずれにしても、やはりバルザックと会う必要がある。そしてその思惑が何であれ、奴とはこれで決裂だ。
「……２つ目の報告は」
「リトリアです。ヴァルスに傾いています。まっとうにやっていたのでは多分、逃します」

「……そう」
最も嫌な展開だ。
ロドリスは、リトリアと国境を接している。ロンバルトもだ。リトリアが中立ならばまだしも、ヴァルスに傾倒すれば挟撃される。
「間もなく、ヴァルスの使者は朗報と共に放たれましょう」
「……」
「いささか汚い手段を使うことをお許し下さいね」
内心リトリアを諦めかけたセラフィに、グレンがそんな言葉を投げ付けた。
「何をする気だい」
「別に大したことを考えているわけじゃあありません。頭を使うのは得意じゃありませんからね」
「……好きにやってくれ。ナタリアを引き込んだ腕前に期待してるよ」
今回の一件にナタリアを引き込んだのは、一重にグレンである。元々ナタリアはロドリスに迎合しているが、公妃勢力と公太后勢力が一触即発で紛争寸前まで緊張が高まっていた。幾らナタリアでも、国内紛争が起きていたら他国との戦争どころではない。両者を和解させ、寸前で勃発を食い止めたからこその参戦である。
「3つ目は」
促したセラフィに、グレンの表情が曇った。その様子に不審なものを感じる。
「……どうしたのさ？」
「私はやはり、ロドリスにとって……セラフィさんにとって、疫病神なのかもしれません」
これまでの、結論から口にする報告の仕方とは打って変わった歯切れの悪さに眉を顰めた。
「……？何を言って……」
冗談かとも思ったが、そんな場面でもない。珍しく声音に含まれる真剣な色合いに、顎を乗せ掛けた手を解く。

「リデルの村が、全滅しました」
「……何？」
村が、全滅。
セラフィにとって馴染みのある言葉だった。そしてグレンフォードにとっても。
「魔物か」
「はい。……私、ですよ」
「……」
そこに含まれた複雑な響きを感じ取る。
「……合成獣だと？」
「ええ。『お兄ちゃん』などと呼ばれた日には、『妹よ』と呼んで駆け寄るわけにもいきませんからねえ」
「……」
――合成獣。キメラとも呼ばれるそれは、同一個体内に異なった遺伝情報を持つ細胞が混成している。突然変異として生じる魔物もいるが、人為的に合成されて生み出された魔物もいる。

第2部第1章第10話　来たるべき時（2）

グレンの内側に飼われている魔物シェイド。
炭化したような黒い、影のような肉体を持つ魔物だ。陰の空間に棲息する闇の生命体である。
だが、人間界を彷徨う時にはアンデッドに近いかりそめの姿となる為、不死ではないもののアンデッド・モンスターとして分類される。物理攻撃は受け付けず、魔法攻撃しか効果がない。グレンは育ての親の手によって、それを植えつけられた。
偉大な神官たるグレンの父親のもうひとつの顔――ネクロマンサー。アンデッドモンスターを操り生み出す、邪悪なクリエイターだ。
人間にアンデッドモンスターの邪悪な力を植え付け操ることを望んだ彼は、神官として孤児を引き受け次々とその実験台とした。だが大抵はそのまま死ぬか、シェイドに乗っ取られた。
たったひとつの成功例が、グレンだ。
まだ肉体が育ちきらず、自我が確立していないうちに合成された者は、人間とシェイドの溶け合った肉体を持つ傀儡と化した。そう、リデルの村を襲った少女たちのように。ただの、ジェノサイド・マシンと化す。
グレンが不幸にも成功例となってしまったのは、グレンが相応の年齢がいってから合成が行われたことと、単に相性が良かったに過ぎない。
それでも当初は、何度も内側に巣食うシェイドにその肉体と意識を完全に操られた。マーリアの……そして遡ればセラフィの故郷でもある辺境の村ヴァインを全滅に落とし込んだのは、シェイドに完全に乗っ取られていたグレンだった。セラフィとマーリアがいたからこそ、グレンは年を追うに連れてシェイドの制御に成功することが出来たのだと思っている。
ヴァインは、エルファーラとの国境地帯にあるファリマ・ドビト

ークの山頂近くだ。魔の瘴気が渦巻くとして人々に敬遠されていたその村に住むのは、様々な理由で普通の町に住むことが出来なくなった社会的な離脱者ばかりだった。

「……渡って来たのか？」

グレンの親と同様のことを行なう者がいないとは言い切れないが、少なくともローレシアにおいてグレンのようなアンデッド・モンスターと人間との合成獣が出ると言う話は他に聞いたことがない。グレン同様、トートコーストから渡って来たとしか考えられない。

「ファリマ・ドビトークの匂いにひかれた、んですかね」

私と同じように、と口の中で呟く。

元々魔性が巣食うとされて忌み嫌われていた山だが、かつては人が集落で生活を営んでいたのだ。それが確かなものとなったのは、ヴァインを全滅に追いやられて以降のことのようにグレンには感じられていた。

真実は知りようがないためにわからないが、死は穢れを呼ぶ。大量虐殺のその現場となったことが、元々の条件と相まって加速したのかもしれない。忌まわしい……強大な力を持つ魔物の通り道とされるがゆえに人が近づかず、世捨て人のみが細々と集っていたのだから。

「……それで」

「『出来損ない』が3人。ひとりは私が発見した時には既に死んでいましたが」

「死んでた？」

「ええ。恐らくレガードさんたちにやられたんでしょう。あとの2人は私が始末をしましたけれど」

「……そう。ご苦労だったね」

同胞を手に掛けると言うのは、どんな気分がするものなのだろう。無論、セラフィは他人の命を奪うことに何のためらいを覚えるわけではないのだが。

「で、『疫病神』って何なのさ」

あきれたように言うと、グレンは困惑に近い色を浮かべた顔を逸らした。

「わかりませんけれど。ファリマ・ドビトークを本物の、『魔の山』にしてしまったのは私だったような気もしますしね。それにひかれて魔性がロドリスに集い……『同じ匂い』を嗅ぎ取った彼女らのような魔物がフォグリアへ集まったら、セラフィさんやマーリアさんが危険に曝されないとも限りませんし」

「だとしたら、それはグレンをハーディンに引き込んだ僕の責任だろう。グレンが考えることじゃない」

「……」

「考えるのは得意じゃないんだろう。そういう人間がたまに頭を使ってもろくなことを考えない。無駄なことはやめるんだね」

飽くまで淡々と、殊更冷たい言い方をするセラフィにグレンは小さく苦笑した。

まったく……ろくなことを考えない。肯定をされたところで、自分の存在を唯一認めてくれたセラフィのそばを離れるなんて出来ないものを。

「そうですね」

「グレンが考えるべきは、リトリアだ。可能な限り、全力を尽くせ」

言い放って立ち上がる。グレンが短く首肯してそれに頷くのを見届けて、微笑みを投げかけた。

「僕も、今日はもう休もう。グレンもゆっくり休むと良い。いくら『人』ならぬ身でも、リトリア帰りで魔物と戦闘じゃあ疲れただろうから」

「……お気遣いはありがたく受け取ります」

ようやく微笑を見せたグレンと共に、執務室を出る。尚も言葉を掛けようとグレンを振り返ったセラフィの瞳に、いささか予想外のものが飛び込んできた。動きが止まる。不審に思ったグレンもつられて、そちらに目を向けた。

「アンドラーシさん」

通路の奥、身軽にステップを踏むようにこちらへ向かってくるのは国王の寵姫アンドラーシだった。たゆたう長い黒髪が、動きに合わせて揺れる。

「こんな深夜にご訪問とは……意味深ですねえ」

先ほどまでの殊勝さはどこへやら、野次馬根性丸出しのような声を出されて、思わずセラフィは足でどついた。

「……行くなよ？」

「……さぁて。他人の恋を邪魔するのは……。私、まだ馬に蹴られて死にたくはありませんからねえ……」

グレンを蹴り飛ばす勇気のある馬がいるものか、と内心毒づきながら、セラフィはアンドラーシに笑顔を向けた。

「いかがされましたか。火急のご用でも」

密やかな声で問う。甘さを含んだ澄んだ声に、アンドラーシは切れ長の瞳を細め、それからグレンに「何この邪魔な大木」と言いたげな視線を向けた。思わず内心苦笑いをする。

「陛下のことで、ご相談が。……時間も時間、セラフィのお部屋でご相談に乗っていただきたいわ」

言いながら、妖艶な笑みを浮かべる。

「このような深夜に、私の部屋に招じ入れればあらぬ誤解を招きましょう。無論、陛下を第一とお考えのアンドラーシ様のこと、周囲も良くおわかりでしょうが、中には想像の逞しい者もおりましょうから」

「想像？どのような？」

「主君と臣下の前に、男と女だと言うことが妙な噂に拍車をかけましょう。誤解される行動は、お控えになった方がよろしいかと存じます」

恭しく頭を下げるセラフィに、アンドラーシの細く綺麗な腕が伸びた。頬にそっと触れる。グレンの存在はどうやら、完全に眼中にない。

「……嫌な人ね」

「……」
「わたしの気持ちに気づかないとは、言わせないわ……」
「……何のことでしょう」
手を触れさせたまま涼しい視線を向けたセラフィに、アンドラーシは拗ねるような目線を投げた。微かに朱の唇を尖らせる。その愛らしい仕草だけで、普通の男であればふらふらとついていってしまうだろうが。
「陛下の寵を受けておられればこそ、軽々しい真似はおやめになった方が。……私は、陛下の臣下ゆえ」
「臣下の前に、男と女だと……先ほどのあなたのセリフよ」
「……ここに、いささか口の軽い男がおります。陛下に疑念を抱かれる前に今宵は」
突然セラフィが冷淡そのものの声のまま、グレンを指差した。ようやくその存在を思い出したかのように、アンドラーシの視線が『大木』もとい近衛警備隊員に向けられる。
「あら、まだいたの」
「……いえね、私もここにぼけっといるのはいかがなもんかとは思っているのですが」
「まったくね。気がきかないわ」
「……グレン、アンドラーシ様をお部屋までお送りせよ」
「はぁ……」
どうにも『押し付けられた』感が消えない。いや、まさにそうであろう。アンドラーシの不服そうな表情に、セラフィは機嫌を損ねないよう極上の笑顔を向けた。
「ごゆるりとお休みになられますよう。……おやすみなさい」

◆◇◆

ギャヴァンで市街戦が開戦された翌朝、シャインカルク城では重鎮たちが急遽召集をかけられた。まだ日の出間もなくのことである。

「こんな朝早くから申し訳ない」
会議に参加した面々を見回して、シェインが口を開いた。その隣の席でラウバルは黙したまま腕組みをしている。
「早急に耳に入れておきたいことが生じたゆえ、ご勘弁いただきたい。報告のみにて、時間はとらせぬ」
会議に参加したのはシェインを含めて１３名。
ラウバル、ガウナそして財務大臣アドルフ、外務大臣ハイランド、国営大臣フォルト、枢密顧問官ラフトシュタイン、侍従長ブリューソフ、禁軍将軍のスペンサー。ブレアは現在ラルド要塞の方へ赴いている為に不在だ。代わりに王都防衛にあたっている国軍の将官４名が出席している。
「リトリアが、同盟を表明した」
ぐるりと出席者を見回したシェインは、静かに口を開いた。どよめきが漏れる。
「但し、ロドリスがリトリアとの同盟を狙っている。リトリアの動向が読めるまでは、ロドリスは足踏みをしているだろう。こちらはモナとの戦端が開かれている。しばらくはロドリスが沈黙してくれるに越したことはない。よって、水面下で、と言うことになっている」
「正式な調印は」
「調印済みだ。リトリアは確かにヴァルスの同盟国となった。……モナの本国を叩いてもらう」
厳かに言ったシェインの言葉の後を引き受けて、ラウバルが続けた。
「使者が今朝、火急で駆けつけて届けられた報告だ。ゆえにこのような時間に召集をかけることとなった。知っていると思うが、ヴァルス海軍はザウクラウド要塞に召集した兵力を収容してモナ本国へと向かっている。目一杯ロドリスと両天秤にかけている振りを演じてもらい、ヴァルス海軍のモナ海域到着と共に総攻撃だ」
「……と言うわけだ。ご了解いただきたく」

誰からともなく、拍手が起こった。リトリアはモナと国境を接している。しかもヴァルスに次ぐ大国、国王クラスフェルドは武王。国内に総大将のいないモナはひとたまりもない。

報告のみの会議を終え、あっさりと解散となった。退室していく出席者を、観察するようなシェインとラウバル、ガウナの視線に気づいた者は果たしていたのだろうか。

会議に出席していた国軍将官プロクターは、大層ゆっくりと退室し、他の将官らと共に通路を歩んでいた。

「リトリアがヴァルスについてくれたら、もう勝ち戦だな」

「やっぱりリトリアはロドリスとは相容れないってことか」

連れ立って歩く同僚の声に耳を傾けながら、内心冷や汗を隠し切れない。

「……ちょっと、寄り道をしていく。先に戻っていてくれないか」

努めて冷静を装いながら同僚と別れ、城内の通路をゆっくりと……そして誰の姿も見えなくなったことを確認すると、今度は駆け足で駆け抜けた。

プロクターは元々貧しい家庭の生まれだ。身分が重視される王城で、国軍の将官にまでのし上がった努力は並大抵ではない。そんな自分を誇りに思っていたが、生来染み付いた貧乏癖とでも言おうか、どうにも金目のものに執着し、弱いと言う点を克服することが出来ずにいる。

……モナに買収されたのは、フレデリクが公位について間もなくだ。

周囲の、身分を振り翳す人間には辟易しているから特にこだわりもない。プロクターはあっさりと、モナの間諜となることを受け入れた。将官としては破格の情報料をもらうことが出来る。

（くそ……リトリアが……）

至急、フレデリクに報をもたらさねばならない。いつも使う、腹心とも言える使者の元へ駆けつけようと人目につかない階段を駆け下りようとした時、背後から氷のような声が投げ付けられた。

「お急ぎのようだな」
「……！！」
足を止め、振り返る。ぞくりとした。視線の先にいるのは、赤い髪の宮廷魔術師。軽薄さを孕んで整ったその顔は、真っ直ぐにプロクターに向けられていた。
（いつの間に……ッ）
「シェ、シェイン殿」
動揺を押し殺し、平静さを演じながらも声が微かに上ずるのを止められない。シェインは腕を組んで、ゆっくりと階段を下りてきた。プロクターを通り過ぎて阻むように階下で振り仰ぐ。
「それほど急いでどこへ行かれるのか。他の将官は職務へと戻ったようだが」
「……いえ、具合が」
「ほう。リトリアの、ヴァルスとの同盟を聞いて具合が悪くなったか」
嵌められた、とようやく気がつく。炙り出しだ。無意識に、腰に提げた剣にそっと手が伸びた。
「そのような言い掛かりは……」
こんなところで足止めをされている場合ではない。モナは遠いのだ。そしてリトリアはモナの隣国だ。急がなければ報が間に合わない。
「安心しろ。リトリアとはまだ交渉が進行中だ」
「なッ……！？」
飄々と言った宮廷魔術師に、唖然とする。シェインは、通路の踊り場にある大きな明り取りの窓から外へと視線を向けた。さらさらと葉擦れの音が聞こえそうな、木々の揺らめきが視界に飛び込んでくる。
「じゃあ先ほどのは、嘘……」
「嘘とは人聞きが悪いな。俺の希望が口から零れ出た」
めちゃくちゃなことを言いながら、シェインはプロクターに視線

を戻した。射るような鋭い瞳。言い逃れが通用しないことを察知し、剣を抜く。

「……なぜ、俺だと」

「わかったのはたった今だな。だが、シャインカルク留め置きの国軍の中にいることは今朝」

今朝？

微かに首を傾げて、シェインは口元に小さな笑いを浮かべた。

「他愛のないことだな。3種類の情報を各国軍に流した。ギャヴァンの市民軍が、ヴァルス軍誘導の為に仕掛けた細工の所在だ。後はギャヴァン侵攻軍の動向を見ていれば、どの情報がモナに漏れたのかがわかる」

「……」

「モナは、正門に仕掛けた発破への対応を最優先にした。その情報を持っていたのは城内国軍のみだ。……会議直後にひとり仲間を離れて急ぐとあれば、『俺です』と自白しているようなものであろうが」

「くそッ……」

プロクターは抜いた剣を斜めに構え、階段を蹴った。相手は魔術師。呪文を唱える暇さえ与えなければ勝てる。腐ってもこちらは将官だ。そして戦闘に有利な、高位に立っている。

だが、プロクターが予想もしない行動をシェインはとった。ロッドを投げ出し、ローブの下からショートソードを抜き放つ。勢いのついているプロクターの剣と火花が散った。

「馬鹿なッ……」

「魔術師だと思って剣が使えぬと思うのはいささか浅慮ではないか？」

地に下り、素早く距離を取って体勢を立て直しながらプロクターは愕然とした。思うに決まっているではないか。

「申し訳ないが、俺は多才ゆえな。剣の扱いもそんじょそこらの奴よりは長けている。魔法なんぞ使わずとも、己の身を守る手段には

不自由せぬ」
伊達に『街中をふらふらして四六時中狙われる高位官』をやってはいない。
「くッ……」
再び地を蹴り下斜めから繰り出したプロクターの剣を避け、シェインのショートソードが袈裟懸けに空を駆けた。胸元を斜めに切り裂かれる。深くはないが、それでも血が舞うに十分な程度の傷を受けて、プロクターはもんどりうった。滑るように通路を吹っ飛び、壁に激突する。咄嗟に閉じた目を開いた時には、剣が首筋に突きつけられていた。プロクターの剣は、シェインの足の下に押さえられている。
魔術師だと思って舐めた油断が、致命的となったのだ。
「さて、いろいろと事情を聞きたいのだがな」
しまいだ。もはや挽回はどうしたって不可能だろう。まだ握り締めていた剣の柄を手放した。諦めたような顔で、小さく息を吐く。
「無論、恩赦は……おい！！」
シェインが何か言い掛けたその隙に、プロクターはもうひとつ装備していたダガーを抜き出した。躊躇いなく己の胸に深々と突き刺す。何かをしゃべれば、プロクターの家族がモナから報復を受けかねない。もはや選択肢は、なかった。
「プロクター！！」
咄嗟にショートソードを放り出し、シェインはプロクターを抱き起こした。だが、既に呼吸はない。
「くそッ……」
顔を歪めて唇を噛み締めた。敵国の間諜となっていたことは、簡単に許せることではない。一兵卒ならまだしも、将官ともなればそれなりに交流もあるのだ。裏切られたと言う思いは一層強い。
だが、シェイン自身も他国へ間諜を放っている。そのうちの誰かが……と思えば、過酷な拷問を与えることは出来なかった。ゆえに、無罪放免と言うわけにはいかないが、それなりに恩赦を与えようと

思っていたものを。
窓から静かに差し込む朝の光を受けて、白い顔をしたプロクターをそっと床に横たわらせて立ち上がる。吐息を突いてショートソードとロッドを拾い上げた。人を呼ばねばならない。
……戦争はまだ、始まったばかりである。
これからどれほど、苦い思いを飲み下していかなければならないのかと思うと、シェインの胸に重い痛みが走った。
「……！？」
ガシャアアアンッ！！
頭上で何かを叩きつけるような激しい音が聞こえたのは、その時だった。慌しい人の足音、女官の悲鳴。
思わず息を飲み、顔色を変えて上方に目を向ける。吹き抜けとなっている螺旋階段、遥か上に続くのは……クレメンスの寝室。
――まさか。
「誰か！！……陛下が！！」
来るべき時が来た、との思いで顔を強張らせ、シェインは階段を駆け上った。

第2部第1章第11話　魔術師の館1（1）

「ひでぇ雨だなあー」
シサーが長い髪の尻尾を親指でぴんと弾きながら、曇天を見上げた。
水分をたっぷり溜め込んでいるかのように重たく垂れ下がった雲は低く、少し高いところに上ったらその『もこもこ』した感触を楽しむことが出来そうだ。
目が覚めて歩き始めてから、既に空は一面を覆う雲で暗く、空気には雨の粒子が漂っているような匂いがしていたのだけれど、本当に降り始めたのは今し方だ。そして、降り始めたと思った時にはもうびしょ濡れになるような、そんな降り方だった。まるでテレビの罰ゲームのようだ。
「やむかな」
俺とシサーの間にしゃがみこんで空を見上げたまま、キグナスが呟く。こちらももちろんずぶ濡れで、頭にタオルを被ったままだ。
「やあね。足止めされてるみたい」
背後でぼやくように、ニーナが呟く。振り向くと、俺たちが雨宿りに潜り込んだ大木の幹に寄り掛かるようにして腕を組んでいた。
「雨、好きなんじゃないの」
俺たち6人……いや、レイアは大したスペースとらないから5人が潜り込んでもまだまだ余裕がある巨大な木とは言え、時折葉と葉の間から垂れてくる雨水が額にかかり、片手で拭いながら言う。ニーナは軽く肩を竦めた。
「好きよ。恵みだもの。濡れるのは苦にならないわ。……でもまるで、行くなって言われてるみたい」
地を穿たんとするばかりに叩きつける雨に、視線を戻す。地面を叩いた雨が跳ね上がり、地表付近はまるで霧がかったように煙って見えた。雨の音以外に、聴覚に訴えてくるもののない世界。霞んだ

視界の遠くで、目指す森が既にその姿を現していた。
そこへ突然、足音が聞こえてきた。激しい雨を跳ね上げる、ばちゃばちゃと言う音。
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊！！」
貧しそうな身なりの男が2人、飛び込んでくる。突然の豪雨にやられたらしい。農民だろうか。首からタオル……と言うよりはボロ布と表現すべきなただの布をお揃いでぶらさげていた。例外なく2人ともぐっしょり濡れて、あちこちからぽたぽたと水滴を垂らしている。しきりと拭くが、ボロボロの薄布で何の効果もないようだ。
ちゃんと雨を凌げるようにつめてやると、俺はちょっと迷ってタオルをひとつ差し出した。まだ濡れていない新しいものだ。驚いたような顔をした男たちは、大層恐縮したように日に焼けた朴訥な笑顔を浮かべて、何か言いながら頭を下げた。
どうやら、ロドリス語らしい。さすがに王都外の農民にまでは、ヴァルス語が浸透していないと言うことだろうか。手で腕や頭の水滴を拭いながら、男たちは何やらしゃべり始めた。
内容がわからないし、興味もさしてないので、視線を空へと戻す。雲の切れ間から太陽の光が霞むように届き、けれども激しい雨は相変わらずで、遠くの森と相まってどこか宗教画のような壮麗で神秘的な光景だった。
ぼんやりとその光景に目を奪われながら、黒衣の魔術師を思い出す。
バルザックなんかに、勝てるんだろうか。
聞いた話では、かつてシャインカルクでシェインとも1度軽くやりあっているとのことだったけど、負けはしなかったが勝てもしなかった、と言う結果だったらしい。
当時シェインはまだ宮廷魔術師になりたてだと言うから、今はまた違った結果になるのかもしれないが、にしたって先代、先々代を凌ぐと言われていたわけで。
……そんな奴相手に勝ち目があると思えるほど、俺は楽天家じゃ

ない。
　ニーナの魔法は安定しているけれど、一発で倒せるような強力な魔法ではないし、レイアやキグナスはそれほど多くの魔法を使えない。クラリスは小さいとは言え神殿を預かっているそうだから神聖魔法の使い手としては上級なんだとは思うけど、生憎神聖魔法は攻撃をさほど得意としない。シサーだって魔法をぶっ放されたら避ける以外に手の施しようがない。俺は論外だ。魔法をぶつけられたら、とりあえず死ぬしかない。……嫌だな。
　シェインじゃないけど、勝てなくても良いから負けなければ……せめて、ユリアを取り返せれば。
　そこまで考えて気が付く。『王家の塔』攻略には、どちらにしても倒さなきゃならないのか……。
　しみじみと深いため息をついていると、視界の隅、俺の隣で蹲るようにしていたクラリスが身動ぎをした。何かに驚いたように目を見開き、顔を上げる。
「……クラリス？」
　気付いて声を掛けるが、クラリスは視線を一点に注いだままこちらを向かない。見つめているのは、さっきの男たちだ。彼らは先程から、絶え間なく雑談を続けている。
「＊＊＊＊＊＊？」
　クラリスが彼らに何か言った。微かにその表情が強ばっている。
……そうだった。クラリスは問題なくヴァルス語を話すから忘れてたけど、ロドリスの人なんだ。彼らの会話がわかったって不思議じゃない。いや、わからなきゃ不思議だ。
「どうしたんだ？」
　シサーに問われて、顔をそちらに向ける。ニーナやキグナスも、こちらを見ていた。
「……さあ」
「？」
　俺が首を振ると、シサーも彼らに視線を向けた。クラリスはまだ

彼らと話している。その会話に耳を傾けたシサーの顔色が変わった。
「どうしたの」
問うのと同時にクラリスが彼らに頭を下げ、立ち上がってこちらを向いた。
「……開戦だ」
え？
シサーの言葉を受けて、クラリスが頷いた。キグナスが立ち上がる。
「開戦って、ロドリス？」
「いえ。モナです」
モナ……じゃあ、ギャヴァンが。
「昨日、ギャヴァン港がモナより海上から砲撃を受けたと。……ギャヴァンはモナによって封鎖、籠城態勢に入っているそうです」
「……」
「もちろん、風の便りに聞いた、噂話の範囲を出ませんけれど」
開戦……。
「ユリアも、レガードも……いなくて大丈夫なのかな、ヴァルス」
「モナだけなら負けることはねーだろーが」
まだ硬い表情を残したまま、シサーが俺に答えた。それから微かに首を振る。
「わかんねぇけどな。絶対なんてことは、ないからな……」
「……」
「弱小勢力が大敵に勝利することなんか、幾らでもある」
……だとしたら。
考えようによっては、俺たちがバルザックに勝てる可能性も……
万にひとつでもあるだろうか。
「上がったわね」
雲が途切れ、晴れ間が覗く。大粒の激しい雨は次第にその姿を消し、さっきまでの夕闇のような暗さも嘘のように、眩しい光が差し込んだ。陽光から零れるように僅かに残った雨が完全に止んだ頃に

は抜けるような青空が広がり、目にしみる。
「行くか」
気分を変えるように、がらりと声の調子と表情を一転させたシサーが言う。
「ヴァルスは、シェインやラウバルに任せておけば大丈夫だ。俺らには俺らのやらなきゃなんねぇことがあるからな。……ユリアが待ちくたびれてるぜ」
「……うん」

◆◇◆

至るところに雨の残滓を残し、葉に宿る滴がきらきらと夕陽を浴びてオレンジに染まる。気温の下がった風が、どこからか潮の香りを運んだ。気が付けば、左手の遠くには海が見える。そして右手には、鬱蒼とした森が広がっていた。黒々とした森は、アギナルド老の家を取り囲んでいた森とは比べものにならない深さだ。
「今日中に、森を抜けるぞ」
先頭を歩くシサーが言う。常に全員の状態や状況を気遣ってくれるシサーにしては、強行突破案と言うのは珍しかった。
「うん」
夜、そして森の中とくれば魔物にはがんがん遭遇するだろうけれど、この森を抜ければユリアがいるのかと思えば……のんびり「んじゃ、野営でも」と言う気分でもない。
森は、近づいてみればますます大きく、背の高い木ばかりのせいか、密集しているからか、1枚1枚の葉が大きいからか、或いはその全てか……暗かった。
森の中にはまともな道なんかない。ただ、時折誰かが通るのか、草を無理矢理分け入ったような跡がある。
誰だろう。バルザックだろうか。それとも『青の魔術師』……。
昼間の豪雨で、木々はまだ水滴を残している。がさがさとシサー

を先頭に草叢を掻き分けていると、ただでさえ生乾きのような状態の全身が、またもあっと言う間に湿っぽくなった。風邪を引きそうだ。

森を抜けるのに3時間近くかかり、ようやく建物らしきものが見えた時には既に、夜だった。

「あれ、かな……」

森が途切れ、海をバックに地面が抉られるように低くなっている。俺たちがいる森との境とは、数メートルほどの段差が生じていた。ホーンテッドマンションを思い出させるような、豪奢で華麗だけどどこか陰気な感じだ。その頭上を蝙でも飛んでたらぴったり……と言うのは、バルザックがいると思う俺の偏見だろうか。

成城辺りにあるような豪邸と比べても、まだでかい。人と土地との割合か、こちらの世界はその辺、今の東京とは規模が違う。

そうは言ってもリデルやリノなんかは貧相だったし……金が物を言うのは同じか。

元々国外に使用人連れて静養に来るサーティスは貴族なわけだし、現持ち主だって俺の感覚で言えば何千万円に匹敵するような金額をぽんと現金で出すような次元の人間だ。恐らくはロドリスの宮廷魔術師なんだろうけど。

さすがにシャインカルクとは比較にならないが、小さな城と言えそうなその屋敷に目を向ける。何階くらいあるんだろう。5階くらいだろうか。灯りは灯っていない。

「どうするんだ」

何となく身を屈めて片膝をついて屋敷を凝視している俺とお揃いの姿勢で、キグナスがシサーを見上げた。シサーの視線もまた、屋敷の方向へと注がれている。

「馬鹿でかい家……」

呆れたように、レイアが俺の頭の上でぼやいた。レイアが根城にしているシャインカルクほどではないと思うんだが。

「夜のうちにカタがつきゃあ良いんだけどな。……見張りとかいる

と厄介だし、ちょっと見てくる」
言ってシサーが、草叢から体を起こした。
「カズキ、ここ頼んだ」
「あ、うん」
俺の返事を待たずに、シサーは僅かな足音を立てながら暗闇に紛れていった。どういうルートで偵察する気なのかわからないが、俺たちのいる、小さな崖のようなその道沿いに姿を消す。それを見送って、俺も体を起こした。
こういう時、最も危険な役回りと言うのは常にシサーが演じることになる。何かあった場合にそれが回避出来る可能性が高いのがシサーなのは確かだし、本人も別に何ら疑問がなく当然と受け止めている節さえあるのだから、それが救いではあるんだけど。
……ま、相変わらず頼りないってことなんだろうな。
そんなふうに思ってから、さっきのシサーの言葉を思い出した。
でも、そうか……。前は、シサーがみんなを離れる時には「ニーナ、頼んだ」って言ってたけど……。
……少しは、ましになっているんだろうか。
「本当にここで良いのかしらね」
立ち上がって腕を組んだ姿勢で、ニーナが屋敷を睨むような目付きをする。
「人の気配が、ありませんものね」
それを受けて、クラリスが小首を傾げた。月明かりの下、ニーナとクラリスが並んで立っていると妖精のようで妙に神秘的だ。
「違ったら、ヒサンね」
本物の妖精が、俺の頭の上で言った。……いや、ニーナだって妖精なんだが。どうしたって双方の妖精とも、性格が可憐とは言いにくい。
「どちらにしたって、探ってみるより他に動きようがない」
前髪を軽く手で弾いて言う。ここの情報だって、あれだけ時間と手間がかかってる。確かな裏はリデル全滅でとれなかったけど、そ

れなりには根拠のない話でもないんだからアテにするしかないだろう。

「中、入れんのかな」

座り込んだまま、キグナスが俺を見上げた。俺が知るわけもない。

「さあ……普通はすんなり入れてくれるとも思えないんだけど……」

少し……引っ掛かってるんだよな。

言葉を切った俺に、キグナスが更に尋ねた。

「けど？」

バルザックがユリアをさらった目的は何なんだろう、と思うのだ。あれから1ヵ月以上。害するつもりがあれば、とっくにやってる。そうじゃないんだとすれば、じゃあ……変な言い方をすれば、ユリアは――『ヴァルス王女』は、どう利用出来るんだろう。

漫画でも映画でも、そして現実の事件でも……目的が当人にない場合、往々にして利用目的は定まっている。餌、だ。

ただこの場合、『ヴァルス王女』を餌にして釣り上げようとしているのが何なのかは、現状俺からはわからない。

けれど目的はいざ知らず、間接的な目的が俺たちを……『偽レガード一行』をおびき寄せることなのだとしたら。

「入れるかもしれない」

『偽レガード一行』――つまりシャインカルクの手先を、『ヴァルス王女』を餌にロドリスまでおびき寄せた理由は、どこにあるんだろう。

それに、気に掛かると言えば、やはりギャヴァンの状況も俺にとってはひどく気掛かりだった。

短い時間とは言え滞在した街が戦火にさらされているとあっては、気にならないわけがない。『海南亭』の無愛想な店員や、ユリアの髪飾りを買った土産物屋、『再会の酒場』の威勢の良いおばちゃんなどはどうしているんだろう。

そして何より。

ギャヴァンギルドであるシンが、気に掛かる。シンの安否はもち

ろん、それと併せて……。

（……）

はっきり言えば、俺は、レガードの行方に関してギャヴァンギルドを疑っていた。

……別に、悪い意味じゃなく。

何らかの理由でレガードはギャヴァンに留まっていて、それがギャヴァンギルド内あるいは関連したどこかなんじゃないか、と。

つまり、シンに関しても『行方を知っている』なんて生易しいものじゃなくて、もっと直接的に関係しているんじゃないだろうか。

別に根拠のない考えじゃない。キサド山脈を旅する間、シンが言ったことを思い返していてふと気がついたのだ。

――お前は、囮か

――レガードが消息を絶ち、そこで何が起こったのかを知る為にレガードの容姿を持った者が旅をする。そうすれば、その消息に絡んだ何者かがコンタクトをしてくる。『銀狼の牙』のように。

……その言葉に、シン本人は含まれていなかっただろうか。

だってシサーは初めて会った時、俺に何て言った？

――事前に聞いてなきゃ、本人だと思っちまうところだった

シサーは、短期間とは言えシャインカルクの禁軍にいたんだ。シェインやユリアとも親しい。レガードだって、そうだろう。そのシサーがそう言うくらいだ、どれほど似てるのか想像に難くない。

なのに、『借りがある』だけのシンが、俺と話す前から偽物だとあたりをつけて尾行してるんだ。不自然じゃないか？

答えは簡単だ。レガードが、ふらふら歩いているわけがないことを確信していたから――最初から、知っていたから。

そうとしか、考えられない。

まあ、あくまで俺の考えに過ぎず……まだ、誰にも話していないことなんだけれど。

第2部第1章第11話　魔術師の館1（2）

ただ、もしそうだったら、今回のギャヴァン戦に巻き込まれて本当に死んじゃったら『おいおい』とゆーか……。

とは言え、いくら頭の中で気にかけたところで、ギャヴァンどころかヴァルスにさえいない俺に何が出来るわけでもないし、シサーの言う通り……ユリアを助けることが今の最優先事項ではある。

ユリアは、いるんだろうか。

バルザックに、勝てるんだろうか……。

もしかすると、ここで死ぬのかもしれない。そうは思うが、やっぱり不思議なほど、危機感は俺の中のどこにも、なかった。

かさかさと微かな音を立て、俺たちのいるそばの木が不意に葉を揺らした。どういう経路を回って来たのか、先程姿を消したのとは逆方向からシサーがひょこんと顔を覗かせる。

「よぉ」

よぉ、でなくて。

「……どうだった。何か、わかった？」

問うと、シサーは肩を竦めた。

「外に見張りはいねーな」

ふうん……見張りは特にいないのか。

バルザックは、魔術師であると同時に召喚師でもあると聞いている。けれど俺は召喚師と言うものが具体的にどういうものなのかが、未だに良くわからない。何となればその能力を目の前で使われたことがないので。

大体バルザック以外にはラウバルしか知らないんだ。そしてラウバルは、俺の前で召喚を行なったことはない。

命削られるって話なんだし、用もなくそうそうやることじゃないんだろうけどさ。

つまり、俺にはバルザックがどういう戦闘の仕方をするのかが正

直言って良くわかってない。召喚を控える為に魔術を学んだって話なんだから、あんまり関係ないのかな、考えても……。

「行くか」

小走りにそばへ寄ったニーナに笑顔を向け、それからこっちに向かって言う。

「どこか、降りられるようなところ、あった？」

歩き出したシサーに従って尋ねる。顔だけ僅かに傾けるようにして、シサーが頷いた。

「まあな。けどここからじゃあちと回り道だな。屋敷の裏手の崖が少し緩やかになってるから、そっちから行こう。大した崖じゃない」

「降りんのは良いけどさあ」

足で草をかき分けながら、俺のすぐ後ろを歩くキグナスがひそめた声で尋ねた。

「塀は越えられんのか？どうせ門は鍵かかってるだろ」

「ああ。でもあの程度の鍵なら俺が開けられる」

……そういや風の砂漠のダンジョンでニーナが言ってたっけ。シサーは鍵開けが出来るって。

ふとそんなことを思い出した。まったく器用な人とゆーか便利な人とゆーか。さっき偵察に出た時の身のこなしと言い、いつでも盗賊に転職がききそうだ。

「では、正面突破で行くのですね」

クラリスが司祭らしい、妙に厳かな口調で言う。

シサーが無言で、それに頷いた。

◆　◇　◆

窓から差し込む薄い月明かり。

埃の細かな粒子が、ふわふわとその明かりに反射して空を舞うのが見える。鼻につく黴くさいような匂いの原因は多分これだろう。

「随分、不用心だな……」

誰に言うでもなく、ひとりごちる。それを聞き咎めて、キグナスが俺を仰いだ。
「誰もいなかったりして」
「……」
思わず頷いてしまいそうになるほど、人の気配がなかった。でも、ただの廃屋ではないとは思うんだが。
ところどころ、意図的にではないにせよ埃が払われている部分があるから、住んでるかどうかは置いといて人の出入りがあることは確かだと思うんだよな……。
言い遅れたが、屋敷の中である。
シサーの言う『少し緩やかになっているところ』は俺たちがいた場所からさほど遠くはなく、屋敷の裏手に出た俺たちは塀沿いに表に回り、正面へと出た。
門には確かに施錠されていたんだけど、本人の言う通りシサーには何の問題もなかったらしく、あっさり開錠し、続く屋敷の入り口に至っては施錠さえされていなかった。無用心極まりない。それとも、強力な魔術師であるがゆえに……必要ないんだろーか、そんなセキュリティ。
入り口から入ってすぐ、正面奥には幅広い階段があって、続く2階は体育館のギャラリーのように左右に広がる手摺り付きの廊下になっているのが見えた。
吹き抜けになっている遥か頭上の天井には、巨大なシャンデリアが吊り下げられている。もちろん灯りはついていない。あれってどうやって灯すんだろう。天井そのものはかなり高い位置にあるにも関わらず、シャンデリアは何本もの長い鎖で下まで吊り下ろされていて、ちょうど2階のギャラリーよりちょい上くらいの高さに見える。電気……じゃないだろうから、可動式、なのかな。
玄関ホールは広かった。その割に装飾品らしきものは何もないので、いやにがらんとして感じられる。バルザックが住んでいるんだとしたら、あんまり煌びやかでも何か気持ち悪いから、これで良い

ような気もしなくはない。
ここから移動出来るのはどうやら、正面に続く階段と右手の両開きの大きな扉、左隅にある小さな扉の3箇所のようだ。
月明かりだけが頼りの薄暗いホールをぐるりと見渡して、ふと、ぎくりとした。2階ギャラリーの床へ続くこちら側の壁……正面階段から少し距離を置いたその左右に、今しも躍動せんと見える青銅の彫像。突起した飾り柱の影に隠れ、しかも暗いせいで良く見ないと気がつかないかもしれない。
つるりとした感の頭部に尖った耳がついている。どこかゴブリンを連想させた。痩せた節くれだった手は何かを掴もうとしているようにやや前方へと伸ばされている。
そして、背中から威嚇するように広げられた羽。……あれは、まさか。
「どっから攻めるー？」
「何かいるなぁ」
天井を振り仰いで言うキグナスに、シサーがグラムドリングを示して言った。注意を喚起しようとシサーを振り返る。
「シサ……」
それより一足早く、視界の隅で捉えたままの彫像が壁から解き放たれるのが見えた。風を切る羽音。
「ガーゴイルッ」
ニーナが鋭く怒鳴った。その時には既に、シサーが剣を抜き放っている。
俺も咄嗟に剣を抜こうとして、思い止まった。ガーゴイルは魔法か魔力付与の武器しか効果がないんだ……空飛ぶ相手じゃ、リデルの時みたいに足止めにさえならない。彫像なんだから爆弾でもあれば効きそうなもんだが、あいにくそんな高価なもんは持ってない。後は俺に出来ることと言えば、魔法石での援護くらいのものだ。
「確定かな、こりゃ」
天井近くからこちらを見下ろし、攻撃のタイミングをうかがって

いるらしい2匹のガーゴイルに目を向けながら、シサーが呟いた。
「確定？」
「ああ。ナマモノの魔物じゃあるめーし、ガーゴイルが普通の廃墟に棲み付くわきゃねーだろ。意図的に配置してるに決まってるじゃねーか」
それもそーか。
「おまけに、数年前まで人が住んでいた屋敷。となればガーゴイルを置いたのは、古代の魔術師じゃありません」
同じく視線を天井に向けたまま、クラリスが補足する。……最近でガーゴイルを生み出せるエンチャンターは、『青の魔術師』ただひとり――繋がった。
じゃあユリアは、この屋敷のどこかに、いるんだろうか。
「しっかし、やる気が感じられねーなあ」
呆れたようにシサーがぼやく。ガーゴイルは降りてくる気配がない。
「放っとくか」
ありなの？それは。
「仕掛けちゃいましょ」
ニーナが微かに構える。
「軽やかに踊る風の精霊シルフよ、その姿を刃に変えよ！！ウォラト！！」
上空で風が渦巻いた。ここからでは良く見えないんだが、『風の刃』がガーゴイルの1匹に命中したようだ。
「カズキとクラリス、下がってろ。レイア、そっち2人の守り頼んだ。3人で何とかなんだろ。……何かあったら魔法石で援護してくれ」
攻撃を受けて、猛然と急降下をして来た1匹に剣を構えながらシサーが言う。対処の仕様のない俺を気遣ってくれたんだろう。……う。しかしレイアに守られる俺と言うのも何だか情けない。が、しょうがない。

いつでも援護出来るように紫の大石を片手に、遠慮なく見物に回らせてもらうことにして壁際に下がる。

降りて来てみると、それはやっぱりどう見ても彫像で、柔軟に動く羽や腕がその硬質な質感との違和感を醸し出す。けれど、本来ならあるはずのないちろちろと揺れる舌とか……どういう生き物なんだろーか。

襲い来る鋭い爪を僅かな動きでかわし、シサーの剣が閃く。横合いから叩き込まれたキグナスの『風の刃』が、ガーゴイルの飛翔能力を奪った。地に叩きつけられる。

「1匹終了～」

気楽な声で言いながら、シサーの剣が止めを刺した。以前「大して強いわけでもない」と言っていたけれど、確かにシサーにとっては大した敵ではなさそうだ。これほどあっさり片付けられると、ぼけっと眺めていることに何の良心の呵責も感じずに済むのでありがたい。

ニーナが中空に浮かんだままのもう1匹に目線を向けて、毒づく。

「あれじゃあ門番の役に立たないじゃないのよ」

まったくだ。やる気のないことこの上ない。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ポスト・ヌービラ・ポエブス、『光の矢』！！」

キグナスが足の下で、砕けた彫像へと戻ったガーゴイルの破片を踏みしだきながら仕掛ける。だが、ひょいひょい避けて話にならない。

「本気で放ってくか？」

その言葉が届いたわけでもないだろうが、生き残ったガーゴイルが急降下して来た。シサーを避けて、ニーナに向かって爪を振り下ろす。

「ふざけないでよ何でわたしんトコ来るのよッ」

罵声を浴びせ、抜いたレイピアで爪を受け流すが、俺と同じで彼女の剣は普通の剣だ。シサーが地を蹴るが、馬鹿にするようにする

りと再び高く舞い上がる。
「のやろぉ」
カチン、と顔に書いて、シサーがキグナスとニーナに怒鳴った。
「当たらなくて良い、魔法で牽制かけてくれ」
「え、わ、わかった」
「何する気？」
「迎えに行ってやるッッ」
何ぃ！？
唖然としている俺の目の前で、シサーは剣を構えたまま駆け出した。キグナスが仕方なく魔法を立て続けに叩き込むが、ニーナはそれどころではなく怒鳴る。
「何する気なのよッ」
その間もガーゴイルは、ひらひらと魔法攻撃を避け続けている。シサーは剣を構えたまま階段を駆け上って行った。……おいおい、まさか。
「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ！！その身を裁きの矛と変えよ、ポエブス！！」
仕方なく、ニーナも言われた通りに魔法を唱える。ダブルの魔法攻撃を避けるのに精一杯で、ガーゴイルはシサーの動きにまで気がいっていない。２階に駆け上がり、通路をぐるっと回ったシサーはその手摺りに片手を添え、足を掛けた。……なんてめちゃくちゃな人なんだ。
「危ないッ……」
クラリスが切羽詰まった声を出すが、そんなもん、届いちゃいない。一気に勢いをつけて、剣を構えたまま手摺りを乗り越えた。
「馬鹿ッッ」
ニーナの呪文が悲鳴に変わる。
その目の前で、グラムドリングがガーゴイルに届いた。さすがにぎょっとしたような動きを見せるが間に合わない。
「ギャアアアアッ」

輝く刀身を叩き付けられて、鋭い雄叫びを上げて落下する。けれど、そんなもんを見ている人間は誰もいなかった。

「シサー！！」

ガーゴイルを斬り飛ばしたシサーは勢いそのままに、天井から長く吊り下がるシャンデリアに飛び移った。が、その勢いを支えられるわけもない。ぐらぐらと大きく揺れてシサーを乗せたまま、鎖が切れる。地面目がけて一気に落下した。重たい物が風を切る低い唸り。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ダビト・デウス・ヒース・クォクェ・フィーネム、『風壁』！！」

ガシャーンッッッ。

シャンデリアの砕ける激しい物音が耳を劈く。聴覚の全てが、その音に一瞬飽和した。咄嗟に目を閉じた俺は飛散するガラスの礫を覚悟したが、どうやら大丈夫なようだ。目を開ける。

「シサー！？」

「シサーッ」

「おお」

ニーナとレイアの悲鳴に、何事もなかったかのように答える声があった。

床一面に広がるシャンデリアの破片。咄嗟にキグナスが張った防御魔法で、ガラスの破片を浴びずに済んだらしい。シサーはと言えば、ガラス避けに使ったのか、珍しく小振りの盾を片手に俺からやや離れたシャンデリアの残骸の反対側で、五体満足に立ち上がった。

「良く無事だなあ……」

キグナスが呆れた声を出す。

「途中までシャンデリアに乗って落下して、適当な高さで飛び降りた」

サーカスか？

「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿ッ」

「倒せたんだから良いじゃねえか……」

罵声を浴びせまくるニーナに小声で反論し、シサーはグラムドリングを鞘に収めた。既に光は放っていない。
「そういう問題!?」
「猿じゃないんだから……」
怒鳴るニーナの声に隠れてぼそりと言うと、シサーがちろっと横目で俺を見た。
「……何か言ったか？」
「……何も？」
やっぱりこの人はいつでも盗賊に転職出来る。
「さってっと……いつまでも玄関ホールにいたってしゃーねーから、行くか」
「……変じゃないですか？」
ニーナを誤魔化すように歩き始めたシサーに、クラリスがひっそりと口を開いた。視線が集まる。
「変？」
「これだけ大騒ぎしているにも関わらず、誰も現れないなんて」
確かに。
2階以上の高さから、あれだけ巨大なシャンデリアを叩き落してるんだ。床に陥没してめり込んでるくらいだし、その音量はかなりのものだったと思う。
が、耳を澄ませてみても俺たち以外は静かなものだった。
「誰も、いねえのかな」
「って言ってもな。他に手掛かりがあるわけじゃねえし。バルザックがユリアをここに攫ってきたんじゃないとしたって、ここを捜索して次の手掛かり得るっきゃねえわけだし」
そんなシサーの言葉を聞きながら、俺は先ほどの考えが再び頭を過ぎった。
俺たちを釣る為の餌なのだとしたら、俺たちがおびき寄せられるのは『バルザックの館』以外に考えられない。……と、思う。だって俺たちはバルザックのことを知っているわけじゃないんだ。辿り

着くのは当面この屋敷しかないことくらいバルザックにだって想像がつくだろう。
とすれば、この屋敷に何があるんだろう……？
「何か、あるはずだよ」
考え込んだ姿勢のまま、俺は口を開いた。
「ユリアがいるにしろいないにしろ……ここに俺たちが導かれた理由があるはずだ」
顔を上げる。
「……探そう。ユリアを」

第2部第1章第12話　魔術師の館2（1）

……手の平が、じんじんと痛い。
心臓が、胃の辺りで早い脈を打っているような奇妙な感覚。
――ユリアがきっと、この屋敷のどこかにいる。
そう思うと、なぜかひどく気が急いた。緊張している、とでも言うのだろうか。それに近い感覚だ。
（早く……）
早く、助けなきゃ……。
1ヶ月以上だ。連れ去られてから。どんな思いをしているだろう。どうしているだろう。泣いて、ないだろうか……。
シサーたちが奥の小さな扉の方へ足を向けるのを見届けて、俺とクラリスはレイアを伴ってこちら側にある両開きの大きな扉の方へ足を向けた。薄く積もった埃の上を歩いて近づき、ふと首を傾げる。
（……？）
「どうしました？カズキ」
クラリスが俺を見上げた。
「うん……」
生返事をしながら、ドアに目を向ける。蝶番がこちら側についている、と言うことは内開きの扉だ。
「このドア、使われてないね」
「え？」
「内開きなのに、埃が動いてない」
扉を動かせば、浚うように埃が払われていくはずだ。ついでに言えば、他の部分と埃の積もり方に大差がないってことは、掃除した気配があるわけでもないから恐らくはバルザックがこの屋敷に移ってから一度も開かれていない、と言うことにならないだろうか。
「本当ですね……。じゃあこっちじゃないのかしら」
「わかんないけど」

「そっち、開いたか？」
クラリスとそんなふうに言いながら扉に手をかけてみたところで、キグナスが走り寄ってきた。
「まだやってない。これから。……開かなかったのか？」
ノブに手を掛けたまま振り返ると、ちょうどキグナスが俺の真後ろにたどりついたところだった。その後方からシサーとニーナも、こっちへ向かって歩いてくる。
「開かなかった」
「得意の鍵開けは？」
「ってゆーか、ノブもなかったし」
それは扉とは言えないような気がする。
そう思いつつ、ノブを回す。抵抗を予想していたんだが、思いのほかあっさりとノブはくるりと回り、キィ……と軋みをあげて扉は開いた。
「そっちは開くのか」
「開くみたいだね……」
言いながら、奥を覗き込む。ついでだから、もう片方の扉も開けて全開にしてやった。扉の動きに合わせて、こちら側の床の埃がすーっと払われる。扉の下の方に、もこもこと埃の玉がくっついた。
「あっちが本命ってことかな……」
ちょっと顔を顰める。こっちが使われている気配がなく、あっさりと開いて、向こうはノブさえなくて開かないんじゃあ、どう考えても怪しいのはあっちなのだが。
……どこが、ユリアに通じているんだろう。
どこに、いるんだろう……。
きっと、すぐそばにいるに違いないのに。
ユリアに近いところまでようやく……辿り着いているはずなのに……！！
「ついでに2階もちょっと見てくるか」
「……そう？」

「ああ。カズキ、こっち、その辺見といてくれ」
「わかった」
こっちに近づいてきてたシサーが、言って踵を返す。それに答えながら、俺は通路に足を踏み入れた。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ペティテ・エト・アッキピエーティス、『導きの光』」
キグナスが灯りを灯す。さすがに人の家に侵入する手前、一応灯りを控えていたのだが、あれほど豪快に戦闘しておいてもはや何の遠慮があろう、と言うところだ。
「その辺で待ってて」
クラリスに言って、キグナスと通路を少し進んでみる。奥の方までは暗くて良く見えない。ダンジョンの時のような恐怖感はないけれど、外から受けた印象通り広い家なんだなと言う気がする。
「部屋数、多そうだな」
「人ひとり攫って放り込んでおいても不自由はなさそうだよなー」
そういう表現か？
ここから見える限り、この通路にはそれほど多くの部屋があるわけでもなさそうだ。まあ、1階だしな……。1階って言うと大きな間取りの部屋が幾つかあるってのが定石だろうし。
「特に、何がいるわけでもなさそうか？」
左手に扉を見つけて、手を掛ける。
「開けてみる？」
「まあ……一応……」
念の為、剣を抜いて片手に持ち、扉を開く。
が、別段何が出るわけでもなく静かなものだった。広い部屋で古びたソファ、重たそうなカーテン、飾り棚の内側には何も入っていない。ここを引き払う時に阿漕でがめつい使用人たちがめぼしいものは運び出したんだろう。位置関係や広さから考えて、応接室と考えても良さそうだ。
「宝箱ねぇのかな、宝箱」

……あったとしたって、仮にも人の家なんだからそこから物を持っていくのは泥棒ではないだろうか。

至るところに蜘蛛の巣が張り、しかも埃が付着してふわふわと宙を漂っている。あまり気持ち良いとは言えない。

「後でゆっくり探るよな……」

とりあえず、害がなさそうなことだけ確かめて部屋を後にする。また少し進むと、今度は右手に扉があった。開けてみる。

「物置？かな」

４畳程度のスペースだ。特に何が置かれているでもなく、空いた木箱が３つ転がっているだけだった。

「食料だろ、多分。その辺に台所があるんじゃねえかな」

キグナスの言葉通り、そこから僅かに奥へ行ったところで調理場らしき部屋が見つかった。ここも埃まみれで、とてもバルザックがここで調理をしていたとは思えない。……してたとしたら、それはそれで笑っちゃうので……良いんだけど……。

あんまり奥まで行くのもまずいだろうか。適当なところで足を止める。天井は結構高く、『導きの光』に照らされてゆらゆらと蜘蛛の巣が揺れるのが見えた。拳大くらいの、結構でかい蜘蛛がゆらゆらとその真ん中で揺れている。あんなのがぼとりと落ちてきたら、さすがに気持ち悪いだろうな。

「うえー……良く見りゃ廊下も蜘蛛だらけでやんの」

確かに。まあ、廃屋みたいなもんだよな、この様子だと。バルザックがいたとしたって、通常の生活を営んでいるとも考えにくいし。

「虫、嫌いなの」

「ってわけでもねぇけど。汚ねぇの、嫌なんだよ俺」

そういやフォグリアでしきりと宿の掃除してたっけ、キグナスって。

「どうしようか。もう少し行ってみようか」

言いながら、ちょっと奥を探るように目線を向けた。向けたところで何が見えるわけでもないが。けどダンジョンじゃあるまいし、

果てしなく直進ってこともないだろう。
「あーんまし行かない方が良いんじゃねぇ～？はぐれても、何だし」
はぐれても先が見えてるような気がする。
少しでも早くユリアに辿り着きたく、僅かでも彼女に続く手掛かりが欲しい俺は、それに答えずに前を向いた。歩き出した俺にキグナスが一応ついてくる。そこから分岐点に出るのに、時間はかからなかった。右手に折れる廊下と、そのまま直進。どちらも先が暗い。
……やっぱり、これ以上はまずい……よな……。
「戻るか……」
「カズキー？」
俺の言葉にかぶるように、ニーナの声が響いた。もはや誰も「こっそり」などと言う言葉は念頭にないようだ。
「うん。今そっち戻る」
答えて歩き出す。とりあえず、大して何があるわけでもなさそうなことがわかったから良いだろう。……焦るな。落ち着け。
今、緊急に事態が悪化するわけじゃない。
……ユリアは、無事だ……。
「カズキさぁ……」
自分に言い聞かせて戻り始めた俺の少し後をついてきながら、キグナスがやや躊躇いがちな声を出した。
「え？」
振り返ると妙に真剣な……と言うか、どこか気遣うようなオレンジ色の瞳に出会った。
「何？」
「あんま、考え過ぎんなよ」
「……何が？」
唐突に、何だろうか。
見当がつかず、足を止めて見つめる俺に、同じく足を止めたキグナスが視線を微かにそらした。
「わかんねぇけど。いろんなこと。何か自覚ないで思いつめてるみ

たいな気がすっから」
「俺が？」
「おめぇ以外に誰がいるんだよ」
それはそうだけど。
「ユリア様、いなくなって焦んのわかるけど。慌てたってしょうがない。ここまで来てるんだ、どうせじき、何かわかるだろ」
「……」
何か……妙に意外だ。キグナスがそんなふうに気遣ってくれるのが。
……とか言ったら失礼なのかもしれないけど。あんまし細かいこと気にしないであっけらかんとしてるような気がしていたから……。
そんなふうに思いかけて、ふと気がついた。
そう言えば、ロドリスに来てから幾度か、キグナスが何か言いたげな顔をして言葉を飲み込んでたことがある。……心配してくれてた、んだろうか。俺が、気がつかなかっただけで。
「おめーが他の世界から来て……わかってるつもりだけど、本当のところは俺には良くわかんねぇしさ、実際。どういうとこから来て、ここがどんなふうに映っているのか。でも、本来のカズキにしてみたらやりたくないこととかいろいろ……やらされてんだろうし。そういうのどうして良いのかなんか、俺には全然わかんねーんだけどさ」
もそもそ言いながら、視線を廊下に向けて頬をかく。何となくその横顔をじっと見ながら、俺は黙ってキグナスの言葉を聞いていた。
「でもここしばらくで……ちょっと、変わった気がするから」
「……」
「メディレスってでけぇにーちゃんも、気にしてたぜ」
「ああ……うん」
「……このまま、どんどん壊れていかなければ良いけどって」
壊れてって……。
笑みを口元に作り、キグナスに向けた。

「別に、壊れてなんかないよ。どこも」
「そうか？」
「……うん」
「カズキを取り巻いていた優しい空気が、影を潜めたみたいだって言ってた」
「……」
それじゃあ今の俺が冷血漢みたいじゃないか。
「同じだよ、別に」
「カズキ、笑わなくなったから」
「……え？」
思わずキグナスを注視した。キグナスも真っ直ぐに俺を見ている。心なしか少し、寂しい表情をしているような気がした。
「そんなこと、ないだろ。笑ってると思うけど」
「笑ってる顔を作ってる――それが1番近い気がする」
「……」
答えに詰まる。
言われてみれば確かに、あれからこっち、自然と笑みが零れたのは……ドルヴィスにダガーを突きつけた時だけだった。――まるで狂気の始まりのように。
あの時以外に見せる笑顔は、意識して作っている……そう言っても、過言じゃないのかもしれない。
「そうかな……」
また、小さく口元に笑みを模った俺の声にかぶせるように、再びニーナの声が俺たちを呼んだ。思わず止めていた歩みを再開しながら、キグナスに微かに顔を向ける。
「同じだよ。俺は、俺のやれるようにやるだけだから……」
「やりたくねぇこととか、どうしても無理なこととか……言って良いんだぜ」
「……」
「その為に、他の……俺とかシサーとか、いるんだろ」

「……うん。ありがとう」
もう……やりたくないことなんて……。
……飽和してしまって、既に、ないけれど。

第2部第1章第12話　魔術師の館2（2）

戻ってみると、ちょうどシサーが階段を下りてくるところだった。
蜘蛛の巣でも引っかかったのか、顰め面で前髪を弾いている。
「何かあった？」
「いや、別段。ぱっと見た限りは何も。そっちは」
「こっちも。部屋が幾つかあったけど、人が出入りするような気配じゃなかったな。もっとちゃんと見てみないと何とも言えないけど。……じゃあ、2階はどっかへ続いてるんだ？」
「ああ。扉があったが、こっちも開いてたな。問題なく入れた」
「廊下は途中で分かれてたよ」
「ふうん？……とりあえず、そっちから探ってみっか？」
「そうだね……」
開かない扉は、ロビー奥のあの小さな扉だけ……。
とくればますます怪しいんだが、開かない以上入れない。出来るところからあたるしかないだろう。
「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ。閉ざされた世界に光を与えん。アウローラ」
ニーナがウィル・オー・ウィスプを召還し、とりあえず1階の両開きの扉から攻めることに決めて俺たちは歩き始めた。先ほどの部屋もざっと再度探ってみるが、やはり取り立ててめぼしいものは何もない。隠し扉や通路なんかも、ある気配がなかった。
「どう考えても、バルザックはいないよね？」
先ほどキグナスと2人で進んだ通路を、今度は全員で進みながら前を歩くシサーに向かって呟く。シサーは視線を前に向けたまま「ああ」と頷いた。頷きながら、片手に持ったままの剣をいきなりぶんっと振るう。
「……何？」
「蜘蛛だな」

ぱすっと微かな音がして、俺の足元に真っ二つになった蜘蛛の死体が転がった。さっきの拳大のやつよりもっとでかい。顔の大きさくらいはある。……嫌だな。

「やたら蜘蛛が多いよな……」

まだ微かにぴくぴくしているそれを、顰め面で見遣って通り過ぎながらぼそりと言う。

「廃屋ってこんなもん？」

「どうだかな……召喚してるかもしれねぇぜ」

「蜘蛛を？蜘蛛の魔物とかって、いるの」

「いるな。ジャイアント・スパイダーってのが」

「……でかい蜘蛛？」

「ご明察」

明察も何も、そのままだ。

「この屋敷のどっかに、いるのかもしれねぇ。大蜘蛛が巣食う場所には大小さまざまな蜘蛛がなぜか集まってくる。……奴は、召喚師だろう」

「……」

「……っと、分岐点だ」

ここまでは先ほど俺とキグナスで来ている。シサーがウィル・オ・ー・ウィスプを少し先へと飛ばした。さっきは見えなかった前方が明らかになる。

「階段？」

「そっちはどうなってんだ？」

直進通路の方にも同様に灯りを飛ばすが、こちらはまだ先が長いらしくて良く見えない。

「上がってみるか？」

「さっきのとこに続いてるのかもしれないわね」

後ろで聞いていたニーナが腕組みしながら、階段を見据えた。さっきのところに続いていることが確認出来れば、まあ選択肢は減るわけだから……。

「そうだね、行ってみようか」
俺の言葉を受けて、シサーが歩き出した。階段を上る。木製のその階段にも埃は積もっていて、やっぱり人が往来したような気配はなかった。
時々すーっと降りてくる、それこそ大小とりどりの蜘蛛を払いながら2階を探索して回る。さほど複雑な造りにはなっていないようで、ぐるっと歩いていくとさっきのロビーのギャラリーに戻って来た。通路の左右には1階と違ってかなりの部屋数があったけれど、その全てが無意味と言えた。
部屋を片っ端から探索し、階段を見つけては上ったり降りたりをするが、どうにも成果がない。言えるのは、上に上がるにつれて蜘蛛の巣や落ちてくる蜘蛛そのものの数が減ったことくらいだろうか。
「なああんもねえな……」
最後尾で、キグナスがぼやくのが聞こえる。こうも、魔物もいない、謎めいたところもない、もちろんバルザックなんかバの字もないとくれば緊張感も失せてしまう。隊列なんか既にぐちゃぐちゃだ。最後尾と言っても、ほとんど俺の斜め後ろのような状態になっている。
「ハズレかぁ？」
「でも、ガーゴイルはやっぱり不自然だし」
「だよなあ？」
「やっぱり、あの開かない扉なんでしょうか」
「つったって開かねぇしなあ」
「……でもさ、まだ1階は全部見てないよね」
途中で通路をそれて階段を上って来ちゃったわけだし。1階に何かあるのかもしれない。あ、地下とか。
「ここまで来ちゃってんだから、上まで全部探索終えたら、1階ね。それでも何もないなら、あの扉を何とかして開ける手段を考えましょう」
「やってらんねえ。手分けしようぜ」

2階、3階、4階と余りにも何もないので警戒する気が失せたらしいシサーが、最上階らしい5階に辿り着くなり言った。手分け、と言ったって、基本的に回廊状の直進通路で左右に幾つか部屋がある程度だから……右手の部屋を探索するか、左手の部屋を探索するかの違いくらいだ。

「カズキとキグナス……クラリスもそっち、頼むわ。ニーナ、レイア、こっち付き合ってくれ」

「了解」

とりあえず、それぞれに分かれて部屋を片っ端から見ていく。大体の部屋には物らしい物はなくて、時折誰かが昔に使っていたのかなと言う形跡の部屋が、ないこともないと言う感じだ。

サーティスって人は、どこの部屋を使っていたんだろう。

放っておくと、すぐにユリアの安否に考えが行ってしまって焦るばかりなので、紛らわせる為にそんなことを考えた。

静養しに来てたくらいだから、5階まで上がるのはしんどかったりするんだろう。とすれば、1階だろうか。

部屋を探索しながら、ふっと窓の外に目を向ける。かけられたままのカーテンは半開きの状態で、月明かりが零れていた。窓の外、高く聳えた木が葉を揺らしている。

――ユリアは温室育ちだ。さぞ心細いと思う。心を砕いてやってくれ。

かつて、シェインが俺に向けて言った言葉を思い出した。

今、きっと心細い思いをしているだろう。泣いてないか、怯えてないか……気になる、心配になる。

シェインの魔法がユリアを守ると言っても、俺が見ている範囲でも発動しないことがあった。ってことはつまり、危険度によっては反応しない可能性があるんだと思う。切羽詰った危険が迫っているんじゃない限り、発動しないと言うか。

そりゃあ確かに、転んだくらいで発動されても鬱陶しいと言うか先に進めやしないわけで、危険度によると言うのは理に適っている

と言えば言えるんだが。
でも……。
それに、別に魔法が封じられていない空間で危険に遭遇した場合にだって、シェインが召還されたわけじゃない。となればシェインのかけた魔法ってのは『危険度』によって発動される魔法が異なっているのかもしれない。
だとすると。
『召喚』の魔法は、『光の壁』が発動される時以上の危険状態にならなければ発動されないと言うことになるんじゃないだろうか。まさしく『切迫した』と言えるような、危険。
……シェインがああ言う以上、彼女の命に別状はないんだろう。それは、信用する。でも、『対恐怖』については何の対策も講じられないだろうし。
怖い思いをしているんじゃないかと思うと、気が焦る。焦っても仕方がないことはわかっているんだ。キグナスの言う通りで。
けれど、この屋敷にいるのではないかと思い、すぐそばにいるのだと思うのに、それを知らない彼女は今もどれほど心細いかと考えると……。
それで落ち着き払っていられるほど、俺にとって浅い存在じゃない……。
（焦っても、仕方ない……）
笑顔と泣き顔が交錯する。
それがまた、俺の気を焦らせる。
軽く唇を噛み締めて、気を落ち着かせるために短く息を吐いた。
……出来ることからひとつひとつ潰していくのが、1番近道のはずなんだから。闇雲に駆け出したところで、どうなるものでも、ない。
「カズキ、次行こうぜ」
「うん」
ひとつひとつ巡っていくが、やはり何の収穫もなかった。シサーたちも同様のようだ。最後の部屋に手を掛ける。

「どぉせここも……」
やる気のなさそうな顔で、キグナスがドアを開ける。途端、ずざっと僅かに後退した。
「何だよ……？」
その動作に目を丸くして、部屋の中を覗き込む。これまでのがらんとした部屋と違い、僅かながら調度が残されていた。ベッド、箪笥、サイドテーブル。
「もしかして、サーティス……？」
ベッドの中、ぽつりと残された白骨……多分、前のここの主人のなれの果てなんだろう。わざわざ異国に健康を取り戻しに来て、見捨てられたその姿。
「ひでぇ……」
キグナスが、ぼやく。近づいて覗き込んでみると、既に綺麗に白骨化している状態で、腐乱を残しているような様子はどこにもなかった。布団が全体的に黄ばみ、部分部分に濃く染み付いたような跡があるくらいで。
ドルヴィスら使用人に殺害されたわけじゃ、ないのかな。この様子からでは、良くわからないけれど。5階にいると言うことは……もしかすると運び込まれて放置されたりしたのかもしれない。身動き出来ずに。
にしても、杜撰だよな。死体を放置したまま売る奴も売る奴なら買う奴も買う奴だが、住む奴に至っては何をか言わんや、だ。俺の世界では考えられない。……魔物なんかがいたりして死ぬ人も多いし、警察機構のようなものが整っているわけでもないから、どうしたって杜撰になるのかもしれないけれど。にしたって限度ってもんがないのだろーか。
そんなことをつらつら考えながら白骨を眺めていると、キグナスがドアから顰め面で声をかけた。
「おめー、よく平気だなあ」
「お前こそ魔物は平気なのにこういうのは駄目なのか？」

「そーゆー問題かッ！？」
「似たよーなもんだろ。こっちのが攻撃してこないぶんましなんじゃないか」
「……」
「どーした？何か……前の持ち主か？」
言葉を失ったままのキグナスの後ろから、他の部屋の探索を終えたらしいシサーたちが顔を覗かせた。中に俺がいるのを見て入って来る。キグナスもそれに従って、中に入ってきた。
「この様子じゃ、さすがにこのフロアは使ってないんじゃないの。探索終わった後に言うのも何だけど」
「……だろうな。下に戻るか」
言いながら、その白骨を見下ろす。次いで入ってきたクラリスが悲しい顔をした。
「ひどいことですね。人の助けを借りなければ生きられぬ人が、味方となってくれる人間を持たずに財産目的の人間に囲まれていたとあっては……さぞ、心細い日々を送られていたでしょう」
言って、祈りの言葉を唱える。伏せられた長い睫毛が微かに震えていた。サーティスの心を思って胸を痛めているのかもしれない。生憎と、今の俺の心には何の波紋も起こりはしないんだが。
「行こうぜ」
クラリスが短い祈りを終えると、シサーは扉に向き直りながら促した。
「1階を除いて探索はほぼ終えた。……行こう。夜明け前に、片をつけるぞ」

第2部第1章第13話　魔術師の館3

階段を1番下まで降りる。先ほどは逸れた廊下を、今度は直進する方向に足を向けた。1階まで降りてくると、やっぱり蜘蛛が異様に多い。それも、奥に進めば進むほど、天井には所狭しと蜘蛛の巣が広がっていくようになっていった。

「気味悪ぃ」

『導きの光』で天井を照らしてキグナスが、鼻の頭に皺を寄せる。一緒になって天井を見上げた俺も、さすがにちょっとブルーになった。

取り立てて虫が苦手だのなんだのってのがあるわけじゃないが、好きなわけでもない。しかもそれが時折、もたっと落ちてくるとくれば……。

「いやあああッ」

シサーの背中に張り付くようにしていたニーナが悲鳴を上げて飛び退った。２０センチほどの大きさの蜘蛛がすうーっと糸を垂らしてニーナの間近に降りてきたのだ。何も言わずにシサーが、グラムドリングから持ち替えたショートソードを突き立てる。

「あああああ……もおお……嫌ぁぁぁ……」

珍しく涙なんか浮かべちゃってシサーにしがみついているニーナは、いつもと違って妙に女の子っぽく見えてちょっと可愛い。

「クラリスは大丈夫？」

黙々と歩いているクラリスがふと気になって振り返ると、いつも冷静沈着な彼女もどこか強張った笑顔を浮かべた。ちなみにレイアはとっととそのサイズをフル活用し、俺のマントの下に潜り込んでいる。

「え、ええ……」

大丈夫ではないようだ。その足元を、これまたややでか目の蜘蛛がすうっと歩くのを見て、ものも言わずに全身を震わせて飛びつい

てきた。……お化け屋敷じゃないんだから。
「フードとか、被ったら？」
半分抱き付かれたような状態のまま、クラリスのローブに手を伸ばす。
「直接頭の上に落っこちてこられるより、良いんじゃない」
「あ、あ、あ、ありがとう……」
こちらも目が泣いている。
クラリスの頭にフードをかぽんとかぶせてやって、前に向き直る。
歩きながら、俺は至るところに注意を払っていた。どこかに隠し扉のひとつでもあるかもしれない。ユリアへ繋がる道が、あるいは何かが。
ガーゴイルが、ここがバルザックに与えられた屋敷なのだと示している。『青の魔術師』とのその繋がりを。
……いるはずなんだ、きっと、この建物のどこかに。
今も、ひとりで。
長い間……1ヵ月ものの間……！！
もうひとつの扉、あっちなのかもしれない。けれど開け方が何かあるはずだ。ユリアに害を加えるつもりが取り立ててないなら、ただ閉じ込めておく必要なんかないはずなんだから。
「扉があるぜ」
背中にニーナを張りつけたままのシサーが、不意に足を止めて言った。突き当たりには言葉通り、扉がある。
「開くかな」
「さぁ～な」
言いながらシサーがショートソードを鞘に収めてしまいこみ、ドアに手を掛けた。かちゃり、と微かな音を立てて扉が開く。
「入れるな……っと、また奥にも扉がある」
シサーが扉を全開にすると、その内部が明らかになった。さほど大きくはない部屋だ。何だろう、王城の謁見室の手前にある、控え室みたいなイメージだ。１０畳くらいの広さはあるんだが、どっか

空虚な感じで壁際にソファが置かれている。
「ホントだ……」
そしてその部屋の奥、扉から正面の壁にはもうひとつ扉がある。
こちらはもっと重厚感のある……ものものしい、両開きの扉。
「こいつはちーっと、臭いんじゃねぇか？」
言いながら抜き放つ、発光した刃。嫌な、空気。
「……出るぜ」
俺も、剣の柄を握り締めた。シサーが一歩、足を踏み出す。その動きに合わせて、地面から黒い炎が舞い上がるような錯覚を覚えた。
「隠し魔法陣……？」
俺の背後にいるはずのクラリスの声が、噴き上がる黒焔と風にかき消された。
隠し魔法陣……？
「召喚獣は魔法陣、いらないんじゃないの」
真っ直ぐに前を見据えて、剣を構えたまま言う。ニーナの声が答えた。
「自分の支配下に置いている召喚獣にはいらない。けれどそれ以外にも召喚は出来るのよ。下級であれば、契約さえ必要ないわね」
黒焔が次第に姿を消し、ゆらゆらと陽炎のような名残が消えると、入れ違うように姿を現した巨体が顕になった。予想通りと言うか何と言うか……体長2メートルは越えるバケモノ蜘蛛。脚も含めたら全長どのくらいになるのか良くわからない。と、言うか、考えたくない。
黒を基調にしているが、背中には黄色い幾筋もの線が走り、頭には目なのか模様なのか赤いポツポツがライン状に並んでいる。中心に2本赤いラインが走り、その両サイドに1本ずつ、やはり緑色のポツポツがライン状に走っていた。
全身を硬そうな黒い体毛が覆っていて、体に比べれば細い、節くれだった複数の脚にも、まるで刺のように俺の指ほども太さがありそうな体毛が生えている。黒い、巨大なモールを思わせた。

「こいつぁ、本命か？」
魔物が……召喚獣が守っているとあれば、確かにこの扉は本命臭い。魔物を倒したら扉が開くなんて、ＲＰＧで良くありそうなパターンだ。
「シャァァァッ」
威嚇なのか、大蜘蛛がその口を開けて空気を吐くような唸りを発した。左右にでかく鋭い牙が覗いている。
蜘蛛って肉食だよな、そう言えば。虫食って生きてんだから。これだけでかければさぞ食う……んだろうな。そのサイズに見合った餌がどれほどあるのかわからないが、少なくとも俺たちはきっと美味しそうに見えていることだろう。
「アモル・オムニブス・イーデム。大地の恵み、大気の守り、その全てを統べるファーラよ、清らかなる守りにて邪悪な者を退けたまえ」
クラリスが防御を固めてくれた。幾度かの戦闘でわかったんだが、やはりクラリスの魔法はユリアより効果があるのは確かだった。かつてはもっと深い傷を負ったものが、浅くて済んだことが何度かある。
「腹狙え、カズキ」
そう言ってシサーは、大蜘蛛の右手に向けて床を蹴った。振り上げられた足がシサーを捉えようとするが、それより速く剣が叩き込まれる。
「わかった」
当たり前だが、蜘蛛は四つん這いと言うか……まあ、そういう状態である。つまり腹部は鉄格子のように長い脚で覆われ、床を向いている。シサーが体勢を誘導するからその隙に、と言うことだろう。
シサーによって脚を1本斬り飛ばされた大蜘蛛は、赤い斑点を煌々と光らせて別の脚でシサーに襲い掛かった。キグナスの『風の刃』がその胴体を斬り付ける。屋内だから『火炎弾』を遠慮したんだろうか。

ぼーっと見ているわけにもいかないので、剣を払ってもたげられた脚の1本に斬り付けた。思いのほか遥かに堅い。やはりシサーが軽々と斬り飛ばすようにはいかないようだ。

「軽やかに踊る風の精霊シルフよ、その姿を刃に変えよ！！ウォラト！！」

ニーナとレイアも続けざまに『風の刃』と叩き込んだ。その間、高く跳躍したシサーを狙うように、大蜘蛛がその後ろ脚4本で状態を持ち上げる。無事な前脚を振り上げた。そのタイミングを逃すまいと剣を握る手に力を込めて、再び地を蹴る。左から真横に、その腹部目掛けて剣を力一杯薙ぎ払った。

「うわッ」

脚と比べて圧倒的に柔らかいその腹部に斬り付けた剣は、間違いなくかなりの傷を負わせることに成功したのだが、痛みか何なのか大蜘蛛がバランスを崩した。後部の脚の1本が変な角度に振り上げられ、それに跳ね飛ばされる。

「……ってぇー」

何が痛いって、複数のトゲトゲした体毛が痛い。

床の上を滑るように弾き飛ばされた俺に、クラリスが駆け寄ってくる。大蜘蛛はその間にこちらに向きを変えた。くわっとその口を大きく開く。鋭い牙が剥き出しになり、口から何か白いものがこちら目がけて勢い良く吐き出される。

「カズキ、避けろッ」

んな無茶な。

シサーと違って凡人の俺には高速で飛来する蜘蛛の糸を避けるなどと言う離れ業が出来るわけもなく、あっさりとその塊に絡めとられた。そばにいたクラリスも巻き添えをくらっている。粘液質の、巨大な白いネットが全身に覆いかぶさっている状態だ。

もがいてみるが、とにかく強力に付着していて、剥がれるどころか一層絡み付いてくる。

「うわ」

しかも、獲物を捕らえたと思ったらしい大蜘蛛が驚くべきスピードでこちらへ向かって来るのが見えた。……そういや蜘蛛って、巣に絡んだ獲物がもがく振動目指して移動する習性があるんだっけ…などと悠長に考えているバアイではない。このままでは気持ち良く食事されてしまう。

「くそ……」

何とか剣を持ち上げて糸を切ろうと試みるが、思うように腕が上がらない。

「軽やかに踊る風の精霊シルフよ、その身を障壁の渦と変えよ。フェレンティース！！」

ニーナが、魔法で牽制をかけてくれる。それに追い付くように、シサーの剣が大蜘蛛の背中に突き立てられた。続けて襲うレイアの『風の刃』がその頭部を切り刻む。

猛然と怒りの目を向けて、大蜘蛛がシサーに向き直る。こちらに放った糸の名残を口から垂らしたまま、シサー目がけて再び口を開いた。吐き出される絡み合った糸。

剣を構えたままそれを見据えるようにしていたシサーは糸が届くその直前、跳躍して左に跳ぶ。

「……」

避けたよこの人……。

「どうにかなんねえのかこれッ……」

キグナスがこっちに駆け寄って来て糸に手をかける。ねばーっとその手に付着して、ひどく嫌そうな顔をこちらに向けた。

「よくこんなもん、まとわりつかせてられんなあ」

好き好んでやっていると思っているのなら、それは大変な誤解だ。先程から剣を利用して少しずつ解いてはいるが、離れたと思えばまた剣にくっついて戻って来るので埒があかない。

「『浄化』の魔法とか効かないでしょうかねぇ……」

効かないだろ。

おっとりとクラリスが言い、キグナスが目を上げた。

「『火炎弾』とかで燃えるんじゃねぇの？」
俺らまで燃やす気か？
「地道に外すしかないんじゃないか」
仕方なく、嫌な顔をするキグナスに手伝ってもらいながら、ようやく蜘蛛の巣を抜け出した頃には、大蜘蛛はもはや満身創痍の状態だった。
体中の至るところに血の染みが広がり、脚も何本も取れてたり取れかけたりしている。
「脱出成功かぁ？」
大蜘蛛の正面に陣取ったままのシサーの言葉に、顰め面を返した。
「一応は」
とは言え、まだ全身べたべたで、髪や服からふわふわと糸が垂れ下がった状態だ。不愉快なことこの上ない。
「シャァァッ」
さっきより幾分元気のない声で、大蜘蛛が威嚇の声を出した。シサーを手伝うべく、剣を構えて駆ける。
ズゥゥゥンッ！！
地響きのような音が聞こえたのは、その時だった。いきなり激しく揺れた地面に、一瞬動きが止まる。
「何だ！？」
大蜘蛛までが異変を察知したように、もたげかけた脚を止めた。足元から響く振動。
（まさか）
ユリアに何か……！？
過った考えに、心臓が止まる思いがした。僅かに血の気が引くのを感じる。
扉の前に居座るその巨体を突き飛ばして、駆け込みたい衝動に駆られた。――ユリア……！！
「地下か……ッ」
ゴォォォンッ！！

そんな俺を嘲笑うかのように、再び足元から……一層激しい破砕音が、響く。

「カズキッ、扉確認しろッ。もしも開くようなら構わねぇから先に行けッ」

振動が収まると、大蜘蛛はまたもシサーに向けて脚を振り上げた。それを躱しながら怒鳴る。

「わかったッ……」

「キグナス、カズキと一緒に行けッ」

「おうッ」

大蜘蛛が後退するシサーにつられて扉の前からその体をどけると、俺はすかさずその背後に回りこんだ。離れたとは言っても狭い部屋のこと、大して距離は開いておらず、ちょっと脚を動かしたら簡単に吹っ飛ばされそうだが、そんなこと構っちゃいられない。

「くそぉッ……！！」

ノブに取りついてしきりと回すが、がちゃがちゃ言うばかりで一向に開こうとはしなかった。押しても引いても、動く様子はない。気が急いて、汗で手が滑る。ニーナやレイアが飛ばす魔法の合間を縫って、シサーの声が届いた。

「開いたかッ！？」

「開かないッ……」

怒鳴る声に怒鳴り返しながら、尚も扉を揺する。そんなことをしたって開かないものは開かないとわかっているのに、やらずにいられない。

（ユリアッ……）

またも、足の下から振動が伝わって来た。その衝撃のせいか、部屋の隅からパラパラと石屑が落ちてくる。焦るせいで、心臓の鼓動が早くなった。

どうッッッ。

また、体に振動を感じた。けれど今度は床下からじゃない。と、同時にノブがするりと回る。これまでの抵抗が嘘のように、簡単に

ドアが開いた。
「カズキ、先行けッ」
シサーが、大蜘蛛に止めを刺したんだ。ドアが開いたのはそのせいだろう。やっぱり、『門番』を倒さないことには扉は開かない仕組みになっていたわけだ。
「うんッ……」
シサーの声に押され、中に飛び込む。
中は、広い部屋だった。応接間と思った部屋に匹敵する広さだ。けれど、あちらに比べてこちらの方が調度が多く、その分狭く感じられる。
どこか……どこかに、下へ通じる道がッ……。
駆け込んだ部屋の中、ソファやライティングデスク、書棚や飾り棚などその全てがやはり埃まみれだった。……いや、違う。
中央に設えられたライティングデスクと、それに合わせられた木製の椅子だけは、最近人が使用したらしい形跡があった。
（――そんなことはどうでも良いッ……！）
バルザックに関する手がかりなんか後回しで良い！！そんなことより、ユリアッ……。
「カズキ、こっちに扉ッ……」
俺と同時に部屋に飛び込んだキグナスが怒鳴る声が聞こえた。部屋の隅、分厚い本棚に体が半分隠れるようにしてこっちを見ている。
俺は剣を握り締めたままそちらへと駆けた。
「開くか！？」
「開く！！」
キグナスは既に扉を半分ほど開けていた。薄暗い空間、石畳になっているのが見える。そして僅かな踊り場の先には、下へと続く階段があった。
「行こうッ……」
ガァァァァンッ！！！！
ガラガラガラッ……。

促した俺の声にかぶせるように、先ほどよりかなり大きく聞こえる破砕音が飛び込んできた。やはり音の出所は地下だ。扉が開いたせいか、その振動もより激しいものに感じる。

「何だ！？」

バーンッ。

キグナスが手を放した瞬間、扉が内側からの突風に煽られて勢い良くこちら側へと開いた。咄嗟に避けた俺とキグナスを通り過ぎて、壁に勢いそのままに叩き付けられる。

「凄い風がッ……」

なぜか地下から、突風が吹き出しているんだ。風に靡く髪をそのままに、俺はキグナスを抜かして扉の内側に飛び込んだ。それほど階段は長くない。薄暗い階段を駆け下りながら、声を限りに叫んだ。

「ユリアーーーーーーッ！！！！」

そしてまた、轟音。地響きに一瞬よろけ、壁に手をつく。

「ユリアァァァッ！！」

風と轟音が止み、もう一度叫んだ俺の耳に。

「……カズキッ……！！」

確かに、ユリアの声が、聞こえた。

第2部第1章第14話　2つの焔（1）

どのくらい、時間がたったのだろう。
窓がなく、日の光がまともに届かない地下に幽閉され、もはや時間感覚がめちゃくちゃだ。
ユリアはため息をついて、座り込んでいた床から身を起こした。
（カズキ……）
同い年の、異世界から連れて来られた、婚約者とそっくりの少年のことを思い出す。
バルザックと『銀狼の牙』との戦闘、そこまでは覚えている。だがその後、気が付いたらここにいた。そして黒衣の魔術師が訪れた。
「しばしの不自由を我慢してもらおう。……何。すぐに解放される。どちらの解放になるかはそなたの運次第だろうが」
どちらの、とは恐らく生か死かと言う意味だろう。以来、バルザックはユリアのことなど忘れたように放っておかれたままだった。
ユリアが動ける範囲は、幽閉されている身を思えば意外に広い。どの程度の規模の建物かわからないが、恐らくはその地下のワンフロアまるまるに行動の自由が許されている。外へ出られないとの絶対の自信だろう。
事実、他のフロアへ通じる階段はたったひとつ、しかも頑丈に塞がれている。反対側の端にも階段はあったが、そちらは行き止まりになっていた。
食物や水は、ふんだんに用意されている。飢え死にをさせるつもりはないようだ。
だが、気味が悪いので、水だけを僅かに借用し、食物は元々自分で持っていた携帯食を節約しながら細々と口にして繋いでいる。
……カズキたちは、あれからどうしたのだろう。
何度も思ったことをまた繰り返し思って、胸に切なさに似た痛みが走った。

カズキの、澄んだ優しい瞳を思い出す。いつからだろう。気付いたら、ユリアの胸の特別な場所にそっとその優しい笑顔が滑り込んで来ていた。

ユリアは、『恋』と呼ばれる感情を知らない。知り得る環境にいなかった。シェインやレガードにそういった感情を抱くのは無理だ。あまりに近過ぎる。……唐突に訪れたその感情に、どう対処して良いのかわからなかった。

最初は、レガードに似ているからなのだと思った。けれど、その仕草や表情、声や話し方……全てが余りに違う。重ねて見ているのだとはどうしても、思えなかった。

レガードには、今も会いたいと思う。今でも変わらず大切だし、今どうしているのかと思えば不安で心が千切れそうだ。……けれど。

（会いたい……）

理由なんて知らない。理屈なんてわからない。ただ会いたい。それだけだ。そう思うだけで涙が零れそうになる。

何もわからない世界、すぐにでも自分の世界に帰りたいだろうに、『自分が出来ることなら』と真面目に頑張る姿勢が好きだった。

魔物なんか、戦闘なんか、嫌だろうに、立ち向かおうと自分を叱咤する芯の強さに惹かれた。冷静に状況を判断出来る頭の回転の速さが、頼りがいのある魅力と映った。

シェインやレガードのように、あるいはシサーのように、突出した特殊な何かの能力や優れた力があるわけではない。けれどそんな自分を知り、目を背けず、努力する前向きさが……そしてだからこそ、身近に感じられる直向きさが。

（……会いたい）

そばにいたいのに、そばにいると胸が痛い。話したいのに、話していると泣きそうになる。そんな自分を知られたくなくて、何もないフリをするのが精一杯だった。

けれど、想いが零れそうになったギルザードでの一夜。

慣れない剣を握り、膝の震えを隠して毅然とユリアを守ろうとす

るその背中を、ずっと見て来た。
自分の前に立つその後ろ姿を見る度に、自分が彼をこんな危険なことに引きずり込んだのだとの想いが消えない。シサーの言った一言は痛烈だった。――『レガードの影武者』。
まさしく、その通りなのだから。
そう考えたら、眠れなかった。レガードへの不安も消えない。何よりカズキの胸中を思うと……。
宿泊していた宿の扉の外、冷たい、月も凍える空気に曝されてカズキがぼんやりと外に座り込んでいた。あの時、自分は間違いなく、カズキに抱き始めた特別な感情を口にしようとしていた。
思い止まったのは、レガードのことを考えたからに他ならない。2人の間にある感情が何であれ、いずれは結婚し、国を背負わなければならない……他の人間に心を揺らしてはいけない立場にいる。
そう思えば、飲み込むしかない。いずれにせよ、カズキは全てが終わったら、自分のいるべき場所へと戻るのだから。
（帰らないで、なんて）
言えるわけもない。
けれど……。
伝えたい。
切実に心が叫んでいる。会えなくなって、自分の気持ちが想像以上に切羽詰まっていたことに気付いた。想いが遂げられなくても構わない。せめて知って欲しい。自分の想いを。
（ここを、出られたら……）
その時は……。
部屋をそっと滑り出る。シャインカルクの地下を思わせる、石造りのしんと冷えた通路。
何度も脱出を試みたその通路を歩き出す。……絶対に生きてここを出る。まだ、彼に何ひとつ伝えていないのだから。
ただ泣いて迎えを待つわけにはいかない。自分で考え、行動出来る人間でなければ、国を背負って立つことなど出来ようはずもない。

生か死か、いずれかの解放が訪れると言うことは、『救出』と『殺意』が共にこちらへ向かっていることに他ならない。『救出』はカズキたちだろう。『殺意』はわからないが、その両者が遭遇したら……カズキをまた危険に曝すことになる。その前に何とか自力で脱出したい。

いずれにしても、のんびりと穴を掘ったり鉄格子を錆付かせたりしている余裕がないのは確かだった。……錆付かせるような鉄格子などどこにもないのだが。

とにかく外へ通じる道を見つけなければならない。地下はそれなりに広く、多分貯蔵庫のような大きな部屋がいくつかある。ユリアはそのひとつひとつを細かく探索し、通気孔か何かがないかを幽閉されてから繰り返し丹念に調べていた。だが今のところ収穫はない。

荷袋の中から、髪飾りを取り出す。それを手に取ると、涙が零れ落ちた。

ギャヴァンで、カズキにもらったものだ。照れ臭そうに、ぶっきらぼうに。

――必ずもう1度、会ってみせる……。

大切に荷袋に仕舞い込むと、意を決して再び探索に乗り出した。以前探った時は、何も見つけられなかった。けれど見落とした何かがあるかもしれない。

乱雑に置かれた数少ない木箱や、何に使うのかわからない資材などをどけ、床を探る。しかしやはり、これと言って何もない。隅々まで探り、次に木箱を積んでは壁を探るが、成果はない。

やはり、ダンジョンなんかとは違うようだ。何者かのごく普通の居住空間なら、何か仕掛けがあろうはずもないが……。

せめて、『遠見の鏡』が使えれば。シェインに連絡が取れれば、状況は確実に何らかの変化を遂げるはずなのに。

ユリアの魔法は、バルザックにより封じられている。どうすれば『解除』されるのかがわからない。シェインのかけた防御魔法も、ユリア自身の魔法も、その全てが無効になった状態だった。

（駄目よ、投げちゃ）

言い聞かせ、ぶるんと顔をひとつ振ると次の部屋へ行く。同じ作業を繰り返し、やはり外へ通じそうなものはどこにもなかった。

……これはもう、何とか破壊するしかないのだろうか。

王女にしてはいささか過激なことを考え、これまで探った部屋を再び探る。確かどこかの部屋に、スコップか何かあったはずだ。ただ、幾多もあるどの部屋だったかは覚えていない。

仕方なく順番に部屋を覗いていき、数回目でようやく目的の物を見つけ出した。大振りなスコップ。ユリアが持つには少しばかり大きいが、選択の余地があるわけでもない。木箱の下に埋もれているそれを引っ張り出し、扉の方へ向かおうと立ち上がった時、耳に響く音に気がついた。ぞっとして振り返る。

（……足音？）

確かに、誰かの足音がする。

石畳の通路を、何者かが進んでくる音だった。

物音を立てないよう、そっとスコップを持ち上げて、今いる部屋の出入り口へ近付く。息を潜めて通路へ顔を出してみた。……バルザックだろうか。

カズキたちではないことは、明白である。足音は単数……ひとりだ。

（誰……）

心臓がどきどきする。小さくファーラの祈りの言葉を唱えた。魔法が使えないことはわかっているが、信者として、神への祈りは心を落ち着かせる効果がある。

瞳を閉じ、ひとつ大きく深呼吸をすると、再び通路を覗き込む。人影が見えた。心臓が跳ね上がる。相手もふっと顔を上げた。ユリアの姿を認め、足を止める。

青い髪に同じ色の瞳、作り物を思わせるほどの整った美しい容貌、ローブ。会ったことはない。ないが、しかし……。

「『青の魔術師』……？」

半ば無意識に口から零れたその言葉は、しっかりロドリスの宮廷魔術師の耳に届いたようだ。ふっとその顔に笑みが浮かぶ。

「僕のことを知ってるんだ？」

それからゆっくりと、石畳の上をこちらへ向かって再び歩き出した。部屋へ逃げ込もうと思ったが、そうしたところで逃げ場はない。まだ通路の方がましだと判断し、ユリアはスコップを引き摺ったまま通路へと足を踏み出した。

「バルザックも意外と隅に置けないなあ。こんなお嬢さんを囲ってたとはね……」

思わず油断を解いてしまいそうな笑顔に、却って寒いものを感じる。この男がその笑顔の裏でレガードを消そうとしたのだ……。

「……？」

微かに青ざめた顔でセラフィを凝視し、後退する黄金色の髪の少女に近付きながら、セラフィはふと見覚えがあることに気が付いた。あれは、そう……この館――通路の先に続くバルザックの部屋で。

「……ヴァルス王女」

低く呟いたその声に、翡翠色の瞳が怯えを含んで揺れる。……そういうことか。ようやく合点がいった。

バルザックの屋敷に向かうレガード、囚われたユリア、セラフィへの時間稼ぎ。――バルザックの目的は、レガードとセラフィの鉢合わせだ。

予定外にグレンとレガードが遭遇してしまった為に、不信感を募らせたセラフィが招かれるまでもなく自ら訪問してしまったが、恐らくは何らかの口実を設けてどちらにしても呼び寄せるつもりだったろう。まずは、セラフィとユリアを遭遇させる為に。バルザックがセラフィをここへ呼び寄せる口実など幾らでもある。

バルザック邸でセラフィと遭遇してしまえば、レガード襲撃の背景にロドリスが噛んでいることは疑いない。それを飽くまで伏せようとすれば、セラフィはユリアを消さざるを得なくなる。

だが、ユリアを消してレガードらと遭遇すれば同じことだ。彼ら

が本物だろうが偽物だろうが、シャインカルクの手の内であることに違いはない。むしろ、ヴァルス王女に手を掛けたと知られれば、レガードの時などより一層ヴァルスは血眼になる。理由もへったくれもない。開戦だ。

バルザックにとって、この場所における双方の鉢合わせを実現させるのは、さほど困難なことではない。

ユリアがバルザックに連れ去られた以上レガードがここを突き止めるのは必至だし、水晶球でそのタイミングを窺ってセラフィを誘き寄せれば良いのだ。

そして、バルザックが使用していた部屋までは通路が2ヶ所、一方は門番代わりの下級召喚獣がその通路を塞いでおり、それを倒さなければ扉は開かないようになっている。それを知っているセラフィは決して使用しない。使用するのは、バルザックが改造を施した、呪文で開閉する小さな扉から続くこの地下通路。そしてこの通路を使用するセラフィは、幽閉されているユリアと確実に遭遇する。

一方で何も知らぬ侵入者――レガードたちは、安全な道筋を知らない。扉を見つけても開ける呪文を知らない。ロビーでガーゴイルと戦闘し、勝利の末に開く1階と2階のいずれかの扉を通り、まともに行って辿り着くのは召喚獣の守る扉……そこで戦闘をしている間に、ユリアはセラフィによって地下で消され、それぞれから続く扉によってバルザックの部屋で鉢合わせだ。

ユリアをロドリスの宮廷魔術師に消されれば、ヴァルスは戦争を仕掛けざるを得なくなる。ユリアを消さなくても、レガードの襲撃をしたバルザックとの繋がりが明確に露見する。

加えて言えば、ここしばらくで少し呪文が変えられていた。そのことをセラフィは、知らない。この通路に入る為に使用した呪文は、現在、内からでは作動しないようになっている。中に入ってしまったセラフィには、再び開けることが出来ない。

そして召喚獣を倒さなければ、バルザックの部屋に通じる双方の扉は開かないように変更されている。

つまり、レガードたちがバルザックの部屋に辿り着かなければ、セラフィはこの屋敷から脱出が出来ない。――セラフィとレガード一行は確実に遭遇せざるを得なくなる。

嵌められたことを知り、セラフィは奥歯を噛みしめた。どうやら見縊られているようだ。ユリアは元より、レガードら一行も消してしまえばセラフィは何の制限もなく、自分のペースで開戦のタイミングを計ることが出来るようになる。

何かを考え込むように動きを止めたセラフィに、ユリアはじりじりと後退しながら視線を定めていた。心臓が早鐘のようだ。背筋を幾つもの冷たい汗が流れ落ちた。

『青の魔術師』は、自分を知っている。レガードを襲撃した張本人の屋敷でヴァルス王女と遭遇すれば、生かしては帰すまい。このままユリアを放置しておくことは、そのままヴァルスにロドリスを攻撃する口実を与える。

（どうしよう……）

この通路の続く先は、開かずの扉。けれど他に逃げ道はない。こちらはレイピアも持っている。……大して使えはしないが。

ガラガラとスコップを引き摺る耳障りな音を立てながら、ユリアは通路を走った。怖い。けれど怖がっている場合ではない。誰も助けてくれる人などいないのだから。

追ってきているかはわからない。振り返る余裕がないからだ。それに足音があったとしても、自分の引き摺るスコップの音で聞こえない。形振り構わず走るしかない。

ようやく階段が見えた。駆け上る。それほど長くないその階段を上りきり、その忌まわしい開かない扉の前に駆け込んだ。

「やだなあ、何で逃げるの？」

背中から投げつけられたその澄んだ声に、振り返る。急ぐでもなく、悠然とした足取りでセラフィが近付いた。階段のすぐ真下で、震えるユリアを面白そうに眺める。まるで鼠をいたぶる猫のようだ。秀麗な顔に優しい笑顔を浮かべるセラフィは、告死の天使を思わせ

た。死を告げる天使はきっと……こんな顔をしているに違いない。
「開いてぇ！！！！」
セラフィに背を向け、スコップを両手で持ち上げる。扉と石壁の間を狙って力一杯打ち付けた。
「痛ッ……」
衝撃でスコップを取り落とす。今の一撃で、扉ではなくユリアの手が傷を負った。指の隙間から血が流れ落ちる。スコップが床に落ちる、甲高い音が耳についた。そのまま勢い余って階段を滑り落ちていく。
「あッ……」
その余りに耳に痛い音に、セラフィが階段の下で片耳を塞ぎながら片目を閉じた。顔を顰める。その仕草や表情さえ優美に見えるのが忌まわしい。
「うるさい王女サマだなあ……」
ぼやく声が聞こえる。ユリアはもはやどうして良いのかわからず、再び扉に向き直った。ドアノブを両手で掴み、押したり引いたりしてみる。ガタガタと揺らすが、開く気配はちっともない。ついに両手をドアに激しく打ち付けた。
「お願い、開いてぇぇぇッ……！！」
「そんなに怖がらなくっても……」
苦笑する気配が伝わってくる。両目から涙が零れ、ユリアはセラフィを振り返った。のんびりと階段を上ってくる。優しい笑顔は相変わらずだ。ふっと「本当は良い人かも？」と思ってしまいそうになる自分が怖い。――そんなはずがない。バルザックと手を組んでいるのだから。
「開かないんだ？」
ちょっと小首を傾げるように尋ねる。無言のユリアに構わず、セラフィは微かに顔を顰めてため息をついた。
「そう。……あいつ、僕をここに閉じ込めるつもりか？」
そうぼやきながら、尚も階段を上る。一歩一歩確実に、ロドリス

の宮廷魔術師はユリアに近付いていた。
「まあ、君を消してからゆっくり考えようか」
無邪気な顔のまま、「ね？」と呼びかけるようにユリアに言う。やはり背筋が寒い。人を殺すことに何の躊躇いも覚えないのだ、この男は。
「……ッ」
これ以上後退は出来ない。意を決し、一か八かでセラフィの横をすり抜けて階段を駆け下りようと試みる。だがその試みはあっさりと失敗に終わった。
「おっと。どこ行くの？」
擦り抜けようとした瞬間、その腕が伸びる。繊細な容姿ではあっても、やはり男だ。ユリアなどに比べれば力が全然違う。掴まれた腕が痛い。
「は、離してッ……」
「良いよ？」
あっけらかんと言って、セラフィはぱっとユリアの腕を掴んだ手を離した。勢い余って、ユリアが階段から転がり落ちる。
「きゃあぁッ……」
鬼だ。大した段差ではないものの、転がり落ちればさすがに打ち付けたあちこちが痛かった。その様子を見てセラフィがくすくすと笑う。今度はゆっくり階段を下って来た。
必死で何とか身を起こし、手近な部屋へと転がり込む。階段と最も近いこの部屋は、恐らくこの地下の中で1番広い部屋だろう。前と後ろに出入り口も2箇所ついている。セラフィがこの部屋に足を踏み入れれば、うまくすれば通路からすり抜けていけるかもしれない。

第2部第1章第14話　2つの焔（2）

無理だとわかっていても僅かな希望に縋らずにはいられず、ユリアは部屋の奥へと駆け込んだ。楽しむような表情はそのままに、セラフィも後を追って部屋へと足を踏み入れる。

「あッ……」

振り返ってその様子を認めたユリアの足がもつれた。思い切り地面に転倒し、あちこちに擦り傷を作る。ずきずきと痛む腕や膝を叱咤して立ち上がろうとするが、過度の恐怖で膝が震え、思うように動けない。へたりこんだまま立ち上がることが出来ずに、そのままずるずると後退するユリアの少し手前でセラフィは足を止める。

「へえ。良く見れば随分愛らしいじゃないか。周りから愛されて生きて来たろう？」

ユリアからの返答はない。セラフィは構わず続けた。

「でもごめんね。悪いけど、死んでもらわなきゃね。僕が絡んでるとバレちゃったしさ」

セラフィはあくまでも世間話の続きのような調子を崩さない。むしろ、その表情は無邪気とさえ言えた。そっと歩を進める。

「可哀想だね」

近づいてきて、無邪気な残忍さを秘めた瞳でユリアを覗き込んだ。しゃがみこんで片膝をつき、その手をユリアの頬にかける。ひんやりとしたその指先に、ユリアは見開いた目を逸らすことが出来なかった。まるで氷の彫像のような美貌。

「君のお祖父様は選択を間違えたんだよ。おかげで君は死ななきゃならない。君は悪くないのにね。可哀想だ、本当に」

お祖父様……？

ユリアは目を見開いた。なぜここで先代が出てくるのか。

「そして君のお父様が、僕に付け入る隙を与えた。……残念だったね。せっかくこんなに、愛らしく生まれたのにね？」

唇を噛む。震えるほど怖い。自分はきっとこのままここで殺されるのだ。ヴァルスはどうなるのだろう。……カズキは、悲しむだろうか。

（……）

気力で全身の力を奮い起こし、まるで愛おしむかのように優しい視線を投げ掛けるセラフィの手をユリアは叩きつけるように振り払った。きっと強い視線を向ける。

「……殺したければ殺すが良い。わたくしは誇り高きヴァルスの王女。我が父君にてアルトガーデン皇帝陛下は、お前ごとき下らぬ小物の意のままにはならぬ」

先ほどまでの怯えた顔が姿を消し、真正面から目線を逸らさず睨みつけ、毅然と言い放つユリアを面白そうに見つめる。それからゆったりと腕を組んだ。

「構わないよ？」

「何……」

「皇帝陛下はどちらにしてももう長くはないだろう？」

セラフィは再び、ユリアの顔を覗き込んだ。青い瞳に、怯えを隠して毅然と睨みつけるユリアの姿が映っている。

「君がいなくてレガードがいなければ、後継者はいなくなるしね。ああ、大丈夫。ヴァルスのことは心配しないで。僕がちゃんと後任をつけてあげるから。レガードのお兄様なら、文句はないだろう？」

言って、楽しそうに笑う。

「不幸な君は、たったひとつだけ幸福なことに、祖国が戦禍に巻き込まれるのを見ないで済む。……僕だって可愛い女の子は嫌いじゃない。苦しまないよう、すぐに殺してあげるからね？」

セラフィが立ち上がった。数歩その場を退く。急激に、息苦しくなるほどの圧迫感が襲った。空気に狂気の色がついたようだ。それほどの無邪気な殺意。強力な、魔力。

セラフィの魔力が発動し、空気がビリビリと耳に痛いまでに微振動する。まるで空気そのものが意志を持ったように、緊張感が高ま

っていくのがわかった。肌に感じる違和感。
確実に襲ってくるだろう死を感じ、ユリアは戦慄した。瞳を閉じる。微笑んだままセラフィが両手を微かに掲げ、その両腕に嵌められている黄金の腕輪に刻まれたルーン文字が発光した。風がユリアの前髪を舞い上げる。――逃げられない。
瞳を閉じて歯を食いしばり、覚悟を決めたその刹那だった。
（……え！？）
「何……？」
僅かな間、セラフィが驚愕したように動きを止めた。
ユリアの荷袋からひとりでに舞い上がった『遠見の鏡』。緩やかに放たれる赤い、光。ヴァルス王城が保有する著名な秘宝。
カッ――――――――――――！！！！！
閉じた瞼の裏側で、閃光が炸裂した。

◆◇◆

「……お迎えに上がりました。遅くなりましたことをお赦しいただければ、幸い」
その波動の中に、良く知っている懐かしいものを感じて瞳を開く。視力を奪わんとばかりに炸裂していた赤い閃光がゆっくりと霧散するように消失し、その中から低い、けれど軽やかな声が聞こえた。薄暗い地下通路に現れたすらりとした長身、灼熱の赤い髪、軽薄そうな眼差し。
その姿を認め、ユリアは驚きのあまり声が出なかった。唖然と沈黙している主に、突如姿を現したヴァルスの宮廷魔術師は殊更に軽薄な調子で続ける。
「感激の余り言葉が出ないとお見受け致しますな。いやいや結構、このシェイン、言葉などなくとも王女のお気持ちは良く存じておりますゆえ、敢えてとは申しませぬ」
それはまあ、そう言われれば……確かにそうなのだが。

「あ……」
「あのような下賤な者がおりますゆえ、その愛らしいお口を開かれては汚れます。お控え下さい」
こうも言われてはありがたみに欠ける。
しかし。
元々無駄なことばかりを紡ぐ口ではあるが、何か違う。これは。
（怒ってるんだわ、多分……）
それも、かなり。
怒り狂っていると言っても過言ではないのではないだろうか。
「……ヴァルスの好色道化師か」
突然湧いて出るなりまくしたてるシェインに、毒気を抜かれたようにしていたセラフィが言葉を投げ掛けた。ゆっくりと振り返る。
「これだけかっこよく登場したならば、誰何くらいするのが礼儀と思うのだが、それを省略された上にそのような認識とあらば、無礼なと怒るべきか、『良くご存じだ』と誉めるべきか、些か判断がつかぬな」
「なるほど。噂に違わぬ道化のようだね」
「誉め言葉と受け取っておこう」
ユリアを立ち上がらせながらしれっと答えると、シェインはふっと顔に真剣な表情を浮かべた。真っ直ぐにセラフィを見据える。
「ロドリス王国はアルトガーデンに叛意ありとみなすが良いか。……『青の魔術師』」
「否定したところで受け入れてもらえるとは思えないな。無駄なことだよ。省いた方がお互いの為じゃない」
「その点についてはまったく同感だな」
シェインが嘯いてロッドを握り締めると、セラフィがふっと笑った。
「天罰でも下すかい」
「おぬしのこれまでの悪行の限りに天が罰を下すかどうかなど、俺には興味がない。おぬしと天とで話し合いの場を持ってくれ。……

だが、ユリア様を不安に陥れた罪は重い。例え天が許し、心優しきユリア様が許したとて、俺が許さぬ。この代償、おぬしの命で払ってもらおう」

「……出来るかな」

「やってみよう」

シェインが低く呟くのとほぼ同時に、セラフィが剣を薙ぐように腕を横に払った。前へと突き出された右手の中指にはめられた厚みのある金色の指輪が、仄かに光を放つ。

「……ユリア様。後方へ」

シェインが庇うように言うのと、セラフィから『石弾』が放たれるのとはほぼ同時だった。間髪入れず、シェインが『光の壁』を発動する。噴き上がる光と風にユリアは咄嗟に目を瞑った。叩きつけられる無数の『石弾』と『光の壁』が烈しく火花を散らす。

「お得意の玩具か」

浴びせられる『石弾』が途切れ、辺りを包んでいた光が消失した。発動した魔法の名残がシェインの髪を舞い上げる。揺れる前髪の下、口元に皮肉な笑みを浮かべ冷めたような鋭い視線で睥睨するシェインに、セラフィが微かに顔を俯けた。視線を伏せたまま、笑みを浮かべる。

「エンチャンター能力もあるんだろう？『遠見の鏡』には召喚能力なんかなかったはずだからね」

「魔力付与か？こんなものはただの児戯だな。玩具に頼るのは基本的には好かぬ」

冷酷な色合いを浮かべたまま言い放つシェインにセラフィが僅かに怒気を孕ませた。――現存する唯一のエンチャンターに対して『児戯』と言い切ったその言葉が、ロドリスの宮廷魔術師のプライドを刺激する。

「ふうん……遊びと言い切れるかな」

「言い切れるな」

「つくづく嫌な奴だな……」

「俺もそう思っていたところだ。まったくおぬしとは意見が合うな」
やれやれと言うように顔を顰めるセラフィに、追い討ちをかけるようにシェインが続ける。
「いつの時代にも、他人に認められぬのに自己評価だけが異様に高い奴と言うのがいるもの。俺なんか何も言わぬのに、世間が持て囃して適わぬ」
自己評価もここまで高ければ大したものだ。
「……では『児戯』ではない魔力付与を見せてやろう」
再び指輪から『石弾』が放たれた。ユリアに『光の壁』を発動させながら、自分は身を屈めて左へと跳ぶ。
（ちッ……）
このまま戦闘が続くのは、不利だ。相手はエンチャンター――つまり魔力を付与した道具での攻撃を仕掛けてくる。魔力付与道具の使用は、本人の魔力消費に繋がらない。消耗するのは、こちらだ。
地を蹴り、躍動しながらシェインはロッドを構えた。呪文を口の中で完成させる。ロッドから噴き出した魔力が、空間に突如炎で形成された微粒子を発動させた。火系最上級魔法『炎の霧』。セラフィが舌打ちした。取り囲む炎に、寸でで防御を固める。だが、守りを突き抜けて襲い来る細かな微粒子に身を焼かれ、顔を顰めた。防ぎきれない。
「どうした、『青の魔術師』」
挑発するようなヴァルスの宮廷魔術師の言葉に、セラフィは小さく笑った。
「言ったろう。『児戯』ではない魔力付与を見せてやろうと。……ヌンク・ペデ・リーベロー・プルサンダ・テッルス、アルマ・スリサズ」
素早く耳にはめられたピアスを抜き取る。呪文を唱えると同時に、床へと叩きつけられたピアスから光で構成された鎖が幾つも放たれる。そして、自身も鎖の合間を縫うように発光した。
「……木偶か」

鎖を躱して地に横っ飛びに滑り込んだシェインが、短く呟く。光の渦が消失し、そこに姿を現した巨体――ストーン・ゴーレムだ。原始的なだけに、ヒットポイントだけは高い。単純ながら通常であればてこずる相手だ。

「シェイン……」

壁際に下がったユリアが不安げな声を上げる。重いうねりを立てて地響きと共に足を踏み出したゴーレムを見据えたままで、シェインはユリアに答えた。

「ご案じなさいますな。あんなものは、ただの玩具に過ぎません」

物も言わずに、ストーン・ゴーレムが再び足を踏み出す。ずしん、と重い響きが起こり、パラパラと天井から粉が散った。……崩れたらどうしてくれるのか。その巨大な腕を振り上げ、低い唸りと共に風が巻き起こった。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ！！」

全く動じた様子を見せず、シェインは慣れた様子で低く呟く。呪文が完成した次の瞬間、目も眩むほどの激しい閃光がロッドから放たれ、空気が振動した。轟音が聞こえる。『雷撃』だ。

思わず瞳を閉じたユリアが、再びその目を開いた時、そこにいたはずの巨体は瓦礫と化していた。まさに一瞬の出来事だ。

「効かぬな」

淡々とシェインが呟く。セラフィは目を見張ると、面白そうに腕を組んだ。

「これほどストーン・ゴーレムが効かなかったことは初めてだよ。さすが天才魔術師とでも言っておこうか。ただの好色道化師ではなかったわけだ」

「あいにくとそれは仮の姿でな。本来はこちらが俺の姿だ」

ラウバルあたりに聞かれたら、「肯定するにやぶさかではないが、好色道化師も本性であろうが」とでも毒づかれそうなことを平然と言ってのけて、シェインは再びロッドを構えた。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ポスト・ヌービラ・ポエブス！！」

遮るもののなくなったセラフィ目掛け、眩いばかりの光を放つ無形の矢が襲い掛かる。セラフィは金色の腕輪をつけた両腕を、顔の前で交差させた。恐らく魔力付与をした防具なのだろう。

セラフィの腕輪から発される魔力とシェインの光矢が激しく激突し、護りを抜けた光の矢が秀麗な顔に幾筋もの血線を走らせる。地に踏ん張ったセラフィの足がじりじりと後退した。

「くッ……」

口から微かな呻きが漏れる。その美貌が、微かに歪んだ。

「……ッ！！！！」

気合いの声と共に、光矢が霧散した。同時に、腕輪が砕けて地に落ちる。

「ほう。やるな」

「……あーあ。気に入ってたのになあ、これ」

セラフィはさほど気にしている様子もなく呟いた。

シェインの邪魔にならぬよう、2人が対峙する部屋の中央を避けて、壁際へ移動したユリアは胸元に手を寄せて、睨み合ったままの2人を息を飲んで見つめた。セラフィが舌打ちをして片手を掲げる。その指に嵌め込まれた指輪が、煌いた。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、アブソーラビート・イース・タルタロス・カダント・イン・オブサカルム！！」

「コンファタティス・メルディクティス・フラームズ・アクリバス・アディクティス！！」

ほぼ同時に、2国の宮廷魔術師から魔法が発動される。まるで燃え盛る赤い焔と静かに灼熱を噴き上げる青い焔が噴出しているかのようだ。ユリアに及ぶ余波までが、叩きつけられる熱風のように感じられる。このままではこの建物そのものが崩壊してしまいそうである。

轟音と閃光、ビリビリと言う空気の振動を伴って魔力が激突した。
巻き起こる爆風に、石礫や木屑が舞い上がりこちらへと吹き付けてくる。吹き飛ばされそうな髪はそのままに、両足に力を込めて片腕で顔を覆いながらその細かな痛みに耐えるユリアは、ふと何かを耳にしたような気がして顔を上げた。
（――！？）
今。
名前を呼ばれた。
「カズキ……？」
掠れた声で呟く。
会いたいと思うあまりの幻聴か。
それとも……真実、そこに……？
「カズキ……」
名前を口にするだけで、泣きそうになった。耳を澄ませても2つの魔力が交錯し、石壁の上げる軋みに掻き消されて聞こえない。
「カズキッ……」
顔を上げたユリアの耳に、もう1度……今度は、確かに。
「ユリアァァァッ！！」
心臓が高鳴る。
ずっと、聞きたかった。ずっとその声で名前を呼んで欲しかった。
通路の方から聞こえる複数の足音。会いたい。自分はここにいる。
「カズキッ……！！」
掻き消されまいと叫んだその声は、届いただろうか。
「ユリア……」
魔力の激突が止むのとほぼ同時に部屋へと駆け込んできたその姿が、涙で霞んだ。
……ユリアがここに幽閉されている間ずっと、その心を支えてくれた少年が、確かにそこに姿を現していた。

第2部第1章第15話　Ｉｍｐｏｓｅｄ　Ｒｏｌｅ（1）

「ユリアッ……」

戦闘音だと気づいた時は、心臓を鷲掴みにされたような気がした。

これは……魔法！？

吹き付ける風の出所を追って、階段からすぐの部屋に駆け込む。

それとほぼ同じタイミングで、噴き上がっていた魔法が止んだ。視界に真っ直ぐに飛び込んできた、翡翠色の瞳……。

「ユリア……」

「カズキッ……」

安堵で、眩暈がした。

（無事で……ッ）

俺をとらえたユリアの瞳が、何かがこみ上げるように潤む。その口が何かを言いかけるように、微かに動いた。

――ユリアッ……。

（……やっと）

会えた……。

胸に押さえ込んでいた愛しさを、これ以上どう堪えたら良いのかわからない。

そのままの勢いでユリアに駆け寄ろうとした俺は、咄嗟に、ほとんど動物的な判断で足を止めた。後方へ跳ぶ。前へ向かって駆けていたものを無理矢理後方へ引き戻したのだから、太腿に妙な負担がかかって足元がよろける。

一瞬前まで俺がいた場所を、高速で何かが回転しながら通り過ぎた。大きさの割には激しい音を立てて壁にぶつかったのは……何だろう？アクセサリー、だろうか。恐ろしいことに石壁にめりこんでいる。アクセサリーだとしても、ただのアクセサリーじゃないのは確かだろう。あれじゃあ俺の首が吹っ飛ぶ。

「勘は悪くないようだ」

「『青の魔術師』ッ……！？」
「シェイン！！」
続いて部屋に飛び込んできたキグナスが、俺の言葉にかぶせるように叫ぶ。状況、容貌から察するにロドリスの宮廷魔術師と思われる男と対峙するように……ユリアを、庇うように立ちはだかっているのはヴァルスの宮廷魔術師だ。
２人とも、顔やローブのあちこちには細かな傷が走っている。が、致命的と言えそうなものは双方負っていないようだ。
「……『レガード』か」
『青の魔術師』が動いた。振り翳された指は真っ直ぐこちらに向けられている。何の前触れもなくその指先から『石弾』が放たれ、咄嗟に腕を顔の前で交差させかけた俺に、シェインから『風壁』が疾った。激突する爆音。目の前で石礫が次々と破砕音を上げながら砕け散っていく有様は、凄絶なものがある。間近で巻き起こる爆風に、俺の髪が後方へと凄い勢いでまきあげられた。
「邪魔臭いな、『好色道化師』」
……この状況下で『言い得て妙』と思ってしまうのはやっぱり失礼だろうか。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ダテ・エト・ダビトゥル・ウォービース・イグニス！！」
『青の魔術師』のクレームには応えず、シェインが魔法を唱える。聞き慣れた呪文、キグナスが好んで使う『火炎弾』だ。
が。
（な、何だあれッ……）
ゴォォォォッ！！！！
マンホール大くらいのでかさの火の玉が、幾つもシェインの周囲に巻き起こる。それだけで部屋の温度が１０度も２０度も上がったような感覚だ。炎の燃え盛るごうごうと言う音が、距離のある俺の耳にさえ届く。
僅かなカンテラで照らされただけの薄暗い地下が、まるで夕暮れ

に染まったようだった。その火の玉の全てがシェインの動きに合わせて、自身が意思を持つ生き物のように『青の魔術師』に襲い掛かる。

「……シェイン！？」

俺たちに続いて、追いついて来たシサーたちがいるはずのない宮廷魔術師の姿を見て驚きの声を漏らす。その間も俺の目は、シェインの『火炎弾』に釘付けだった。

「嘘でしょ……」

マンホール大の火の玉って、ハンパない。悪いけど。

「だから言ったろ……」

確かにこれなら、グリムロックなんかまとめて一瞬で薙ぎ倒す。が、相対するのも宮廷魔術師だ。グリムロックのようにはいかないらしい。

避けるように右へ床を蹴りながら手を翳した。空気が激しく振動するのが目に見えるようだ。『青の魔術師』の周囲で見えない障壁が立ち塞がっているように『火炎弾』がおっそろしい勢いで回転しながら塞き止められる。車のタイヤがフルで空回りしているのに似ていた。

唸りを上げる『火炎弾』が、幾つかその障壁の前に霧散した。それでも生き残った『火炎弾』が障壁を突破して『青の魔術師』に叩きつけられる……いや、叩きつけられる寸前に『青の魔術師』が身を屈めた。髪や腕を微かに焦がしながらも、すり抜けるように前方へ向けて地面を蹴る。塞き止められていた分加速した『火炎弾』は、『青の魔術師』にかわされて後方へ吹っ飛んで行った。背面の壁に激突し、石壁を破壊しながら自らも霧散する。破壊された石礫が凄まじい速さで飛来し、それだけで『火炎弾』の威力がどれほどのものだったのかが推測出来た。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ダビト・デウス・ヒース・クォクェ・フィーネム、『風壁』！！」

キグナスが石礫からこちらを守るべく、防御魔法を発動させる。

風と石礫が再び止み、『火炎弾』を避けた姿勢のままでいた『青の魔術師』が、こちらに忌々しげな視線を向けた。
「……ちょっと分が悪そうだな」
「現実把握能力はあるようだな」
「まったく減らず口を……」
言いながら『青の魔術師』は、腰のベルトに吊るした小さな布袋を抜き放った。一挙に中の物をぶちまける。……砂？
「媒介だよ。今日はこいつと遊んでてもらおう。……ヌンク・ペデ・リーベロー・プルサンダ・テッルス、アルマ・スリサズ」
「逃がすか！！」
シェインが『青の魔術師』に駆け寄るより早く、その間に全身黄土色をした巨体が立ち塞がった。それなりに高さのある地下の、しかし天井付近で能面のような頭が揺れている。とりあえず、でかい。
「サンド・ゴーレムかッ……」
キグナスが、視線を奪われたまま言う。シェインが微かに身構えたまま怒鳴った。
「効かぬと言っただろうッ。ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ！！！」
ロッドから噴き出る閃光。凄ぇッ……。まるで火炎放射器のような勢いでロッドから光の奔流がサンド・ゴーレム目掛けて噴きつけられた。それを受けて、その巨体は一瞬で霧散する。……うっそ。
「え！？」
その鮮やかさに思わず目を奪われていた俺だが、次の瞬間目を疑った。
「ちッ……！！」
「残念だね。こいつはストーン・ゴーレムのようにはいかないよ？何せ元々が細かな砂だ。石のように形成する物質そのものを破壊出来るようには出来ていない。……じゃあね。次は、戦場で会おう……」
見る見る元通りに整形していく意志を持った砂に、シェインが後

方へ飛び退る。駆け出そうとした『青の魔術師』の前に、シサーが剣を構えて立ち塞がろうとした。レイアが『青の魔術師』に『風の刃』を叩き込む。同時にシサーが力強く剣を払い、『風の刃』を片手で霧散させながら危ういところで後方へ跳んだ『青の魔術師』の前髪が散った。その間にキグナスとニーナがシェインの援護をすべく魔法を準備しながら、サンド・ゴーレムの方へ走り寄る。

「ついでだから、ヴァルス王女と『レガード』にまとめて消えてもらおう……！！」

シサーが繰り出した剣を避ける為に一瞬身を屈めて地に膝をつき、手で体を支えながら後方へ跳んだ『青の魔術師』が呪文を唱える。乱れた髪の中、青い瞳が一瞬こちらを向いた。ロッドの代わりなのか、突き出した指先、嵌め込まれた指輪から放たれる石礫――『石弾』ッ……！！

「ユリアッ……」

ユリアに駆け寄ろうとしたままの位置にいた俺は、咄嗟に地を蹴っていた。現状、シェインがユリアに施した防御魔法が生きているかどうかわからないッ……。

シェインがサンド・ゴーレムに魔法をぶつけたのか、猛火の熱風が横殴りに吹き付けられ、髪が舞い上がる。構わず、壁際のユリアの前に身を投げた。庇うように、腕の中に包み込んだ瞬間に、絶叫のようなクラリスの魔法が響く。

「アモル・オムニブス・イーデム！！大地の恵み、大気の守り、その全てを統べるファーラよ、清らかなる守りにて邪悪な者を退けたまえ！！！！」

次の瞬間続けざまに背中に襲い掛かる、息も詰まるような衝撃と激痛。さすが宮廷魔術師の放つ『石弾』はその強力さが並大抵のものではないらしく、これまでの戦闘で俺が見ていたものとは桁違いの威力のように思われた。クラリスの防御魔法をかけてもらってさえ……防いでであるとは到底思えない、背中に無数の包丁を突き立てたような、痛み。叩き込まれるその衝撃で、体中の至るところが絶

望的な悲鳴を上げて軋んだ。
「ぐッ……」
「カズキッ……！！」
守るように抱き止めた腕の中のユリアが、悲痛な声を上げる。『石弾』の衝撃そのままに、ユリアを腕に抱き締めたまま俺の体が吹っ飛んだ。ユリアの体が壁に、地面に叩きつけられないよう、その頭と背中を胸に庇っている俺の腕が石畳の上を滑る。骨と肉が削られるような、嫌な痛み。
ユリアを抱え込んだまま床の上を滑るように吹っ飛んだ俺は、そのまま頭から壁に叩きつけられた。割れるような痛みと吐き気。脳震盪程度で済めばむしろ幸運だと思える衝撃だ。
「カズキ、カズキ、カズキッ……」
激痛が支配する俺の脳裏に泣き出しそうなユリアの声だけが届く。
いや……。
……泣いてるの、かな……。
「ユリア……」
「イーラ・フロル……ブレウィス・エスト、インモディカ……イーラ、ギグニトッ……インサーニアム！！」
背後から無情にも、追い討ちをかけるような『青の魔術師』の呪文が聞こえた。途切れがちなのは多分、シサーの攻撃が加わっているせいだろう。自分を襲う敵に攻撃を加えず、飽くまで狙いはこちらしい。
重なり合うように再び轟音を立てるほどの猛火が、そしてキグナスの声とクラリスの声が立て続けに聞こえる。ユリアを胸に抱え込んだまま床に倒れこんでいる俺の背中に、新たに襲い来る激痛。巻き起こる風が猛然と俺の肩や背中を切り刻むのがわかる。腕から、肩から、背中から、血飛沫が舞った。サンド・ゴレームへ放たれるニーナやレイアの魔法に混じって何かが叩きつけられるような音、それと『青の魔術師』の呻きが微かに耳に届く。駆ける足音が、どこか、遠くで……。

「カズキ、カズキ……」
「……ユリア……」
全身がずたずたで、目も開けることが出来ない。
精一杯押し出した声は、ユリアの耳に届いただろうか……。
「痛い、ところ……ない……？」
指の1本も動かせない。
腕の中にいるはずのユリアの温もりさえ、わからない。
意識が飛ぶ寸前、額を地面にこすりつけたままの状態で途切れ途切れに尋ねる俺に答える、ユリアの声さえ耳に届かなかった。

◆◇◆

「いつまでそうしてる気だ？」
もはやどこがどう痛いのかさえ全くわからない、痛覚のみで形成されているような状態だった俺の全身から、ふわりとその痛みだけが掬い上げられるように掻き消え、何ひとつ自分の意思で動かすことが出来ないほどの重みがふっと軽くなるのと同時に、背中を蹴られた。閉じていた瞳をゆっくりと開ける。
「……ユリア」
飛び込んできたのは、涙でぐしゃぐしゃになった翡翠色の瞳。……あれほど会いたかったユリアが、俺の腕の中で涙まみれになっていた。
「まだ痛むところは、あるか」
今しがたとは打って変わった優しい口調でシェインが問う。ユリアを腕から解放し、体を起こした俺はその赤い瞳を見つめた。
「……大丈夫、みたい……」
「全く無茶をする」
どうやらシェインが回復魔法をかけてくれたらしい。どう考えても今しがたまで半死半生だったとは思えないこの回復力に、宮廷魔術師はどうやら伊達じゃないらしいと……ちょっと俺は尊敬した。

「クラリスやキグナスが咄嗟に防御魔法を重ねてくれなければ、さすがに俺がいるとは言っても手の施しようがなかったかもしれぬぞ」

そうだったんだ……。

……それであれだけずたずたってことは、確かに剥き出しだったらどうなってたのかと思うと……ぞっとする。

「ありがとう」

「こちらこそ、礼を言おう。……ユリア様を守ってくれたこと、感謝する」

真面目な顔で言われて、少し変な感じだった。

「カズキ、カズキ、カズキ……」

他に言葉が浮かばないのか、ひたすら俺の名前を繰り返して泣きじゃくるユリアに視線を向ける。

「……ユリア、ごめんね。俺、ユリアのこと守ってあげられなかった」

「何……」

「シェインがいなかったら、今頃……」

シェインが今この場にいると言うことは、『遠見の鏡』で召還されたとしか考えられない。そして、『青の魔術師』。――ユリアが切実な危険に曝されていたと言うことだろう。

シェインがいなかったら、ユリアは『青の魔術師』に消されていたのかもしれない。

「……ごめんね」

俺が助けてあげたかったけど。

ユリアが勢い良く顔を横に振る。その動きに合わせて、まだ溢れ出ている涙が振り飛んだ。

「また危険な思いをさせてしまってごめんなさいッ……」

……泣かないで欲しい。

笑顔が、見たい。

ユリアの涙は、俺の胸を締め付ける。

第2部第1章第15話　Ｉｍｐｏｓｅｄ　Ｒｏｌｅ（2）

「……会いたかった」
「……」
考えるより先に、口から出ていた。ユリアの動きが止まる。驚いたように見開かれた濡れた瞳が、真っ直ぐ俺を見つめていた。長い睫毛が、微かに震える。抱き締めたい衝動を押し殺し、代えた言葉が掠れた。
「ようやく、会えた……」
「カズ……」
俺のすぐそばにぺたんと座り込んでいたユリアが、その頭を俺の肩に凭せ掛けた。ふわりと俺の頬をその髪がくすぐる。両手で顔を覆うようにしながら、ユリアの肩が震えた。どうにも泣き止む気配がない。
「……カズキ、背が伸びたわ」
「え？……そう？」
「うん……。少し、髪も伸びたみたい」
「……うん。そうかもしれない」
「顔つきが、少し変わったわ」
「……」
冷血漢？
「知らない間に、男の子っぽくなってる。……会いたかった」
「……ユリア」
囁くように、小さく押さえた声で言った最後の言葉にどきり、と胸が疼く。
会えない間、ユリアも俺を想ってくれたような気がして。
早い鼓動。……痛みを感じるほどに。
至近距離で見つめる視線が、俺と同じ想いを錯覚させる……。
「……わたし……」

「カズキ、復活した？」
　ユリアがたどたどしく何かを言いかけた時、ニーナの声がやや離れた場所から聞こえた。その言葉ではっと我に返る。すっかりユリアしか目に入っていなかったが、そう言えば今、何がどうなってんだろうか。
　その言葉に続いて、どこへ行っていたのかシサーとニーナ、キグナスが部屋へ入って来る。気勢を削がれたのか、ユリアは困惑したような表情で顔を上げ、またも俯いてしまった。
「『青の魔術師』は……」
　意外にも文句も言わずに黙って俺とユリアのそばに立っていたシェインに、顔を向ける。シェインは忌々しそうな表情で、出入り口に目を向けた。
「逃したな」
「……そう」
「ああ。シサーの剣を避けながらおぬしに魔法を叩きつけるとは器用な奴だ。……かなりの深手は、負ったはずだが」
　視線の先の壁と床には、見て分かる程度の血痕が付着していた。そう言うからには『青の魔術師』なんだろう。数メートルの距離があるここから見て分かると言うことは、確かにそれなりの血量なんだろうけど……。
「屋内、しかも地下だからな。魔力のセーブをしないわけにいかぬゆえ……」
　……あれで？十分、崩れる寸前じゃないだろうか。
「それは、奴も同じ条件だろうが」
　端正な顔を歪めたままで、小さく呟く。そこに込められた意味までは、俺には推し量ることは出来ない。
「ゴーレムは……」
「『焔の霧』を立て続けに叩き込んでやったら再生しなくなったようだな。土も砂も焼けば死ぬものゆえ」
　なるほど……。

ようやく体を起こし、ユリアに手を伸ばしてやる。一緒になって座り込んでいたユリアは、それに捉まって立ち上がった。そのまま寄り添うように、そっと俺の腕にかけたユリアの手の温もりが止められない愛しさを掻き立てる。ようやく収まった、けれどまだ目尻に残る涙を、ちょっと躊躇いながらそっと拭ってやるとユリアが顔を上げた。俺を見上げる。

「……泣き過ぎ」

少し笑うと、ユリアも小さく笑った。大きな瞳が細められる。ようやく見せてくれた、微笑み。ローレシアに来てからずっと……俺の背中を押してくれた笑顔。

離れた場所に立っていたクラリスがこちらへ近づいてきた。シサーらもこちらへ集まって来る。

「これでこの屋敷の全探索は終了だな。……バルザックは、この屋敷にはいねえよ」

俺が半意識不明状態の間に、地下の捜索に乗り出していたらしい。上の部屋も、ひょっとして見てきたんだろうか。腕組みをしながらシサーが、シェインに視線を向けた。

「で、どうすんだ」

「……陛下が崩御された」

「え……！？」

硬い表情で淡々と告げたシェインに、動揺が走る。――崩御！？ユリアがびくりと体を震わせた。ヴァルス国王の崩御……ユリアの、お父さんが死んだことを意味する。

そして、国が大きな柱を本当に失ったことを。

「せっかく再会出来たところ申し訳ないが……ユリア様にはこのまま王城へとお戻り願いたく」

後半はユリア本人に向けて言う。俺のすぐ隣、体温が感じられるほど近くに立っていたユリアは、硬い表情のまま身動きをしない。

「ギャヴァンは、モナの占領下にある。……無論、取り返す算段はつけてあるが、現状そのような状態だ。……主なき状態では、ヴァ

ルスは立ち往生ゆえ。陛下の代理を務められる人間が、必要だ」
『次は戦場で会おう』。
青髪の魔術師の言葉が蘇る。――宣戦、だ。
「こちらとしても、レガード襲撃の裏が取れ、王女にさえ手を掛けようとしたとあらば放っておくわけにはいかぬ。ロドリスとの開戦には、時間はかからぬだろう」
見回すように全員に向けて言ったシェインは、再びユリアに視線を戻した。
「……状況を、ご理解いただきたく」
「わかっています……」
視線を俯けて、けれどユリアはきっぱりと言った。
「戻りましょう、王城へ。……ヴァルスを、守る為に」
それに頷いてシェインは、再びシサーに顔を向けた。
「……おぬしらには、このままレガードの捜索とバルザックの行方を追ってもらいたい」
「一刻も早く、戴冠しなきゃなんなくなったってわけだな」
「ああ。現状ユリア様を戴いてロドリスに挑まざるを得ぬがな。だが、『王家の塔』があの状態ではユリア様の戴冠とてままならぬ。火急だ」
「出来る限り急ぎはするが、約束は出来ねぇな……」
ふうっと深いため息をついて、シサーが前髪をかきあげた。シェインもそれに応えて、微かに首を横に振る。
「それは承知の上だ。とりあえず、いずれかで良い。どちらかが良い結果が出れば……また違おう」
「了解」
「キグナス、このままカズキのフォローを頼んで良いか」
キグナスが無言で頷いた。それに笑顔を向け、シェインの視線が今度は俺に向く。妙に大人びた感じの顔つき。
「……カズキ」
「うん」

「もうしばらく、付き合ってはもらえぬだろうか」
「……それは……もちろん……」
「酷なことを頼んでいることはわかっている。……すまない」
……。
「どうしたの、シェイン」
「何がだ」
「何か良い人みたいだから」
「……見上げた態度だ」
人差し指を折ったその関節で眉間をぐりぐりやりながら、シェインが吐息をついた。
「……ちゃんと、レガード見つけるって約束したから」
だから。
「大丈夫」
まだ、やれる。
いつか、必ずユリアのそばから姿を消す俺が、彼女にしてあげられることはそれほど多くはない。
そうでなくたって、大したことが出来るわけでもないから……。
だから、せめて。
……彼女のそばに、レガードを。
（……）
胸に、苦い痛みが走った。
「……あたしも戻るわ」
シサーの頭の上を椅子代わりにしていたレイアが、ふわりと飛んだ。こちらへ……彼女の、主の方へ。ユリアの視線が向けられ、それに応えるようにユリアが微笑む。
「レイア。心配かけたわ」
「ホントよ。ユリア様にはあたしがいなくっちゃね」
「どうやって戻るんだ？お前」
シサーがシェインに問う。ユリアとレイアを見るともなしに見ていたシェインが、その言葉に顔を向けた。

「召喚されたのでな。『遠見の鏡』の召喚で戻れる」
「……ユリアも？」
「ああ。一緒に連れて行く」
そう、なんだ。
ユリアが顔を上げた。俺を捉える大きな瞳が曇っている。
……やっと、会えたけど。
「ユリア」
……王女様だから、仕方がない。
ユリアの顔が、一瞬歪んだ。泣き出す寸前のように何かを押さえ込むような眼差し。きつく食い縛られた口元。
それが、笑顔に変えられる。涙を押し殺したような、切ない笑顔。
この表情は、見たことが、ある。……砂漠の街で。
「カズキ……」
掠れた声が俺を呼んだ。
「また、会えるわよね」
「うん」
約束なんか出来ないけど。
約束出来るほど……安全な旅ではないだろうけど。
……必ず、会いたいから。
頷いた俺に、堪えきれなくなったようにユリアの目から涙が零れ落ちた。けれど今度は自分でぐいっと拭い、毅然とシェインに顔を向ける。
「行きましょう」
「こっちも行くかあ」
シサーが頭に手を突っ込みながら、こっちを見た。応えて頷く。
「うん」
手がかりは――ファリマ・ドビトーク。
シェインに駆け寄ったユリアが振り向いた。一瞬だけ絡み合った視線。
今度は、ユリアの安否がわからない別離じゃない。

俺が生きている限りは。
「また」
会えるから。
シェインが口の中で呪文を唱える。床上にあった『遠見の鏡』から一瞬の光が立ち上り、間もなく3人の姿が掻き消えた。
「カズキ」
「うん」
ユリアの面影を追って視線を注いでいた俺は、シサーの声に振り返った。
ヴァルスとロドリスの戦争が間もなく始まる。共に国を背負うはずのレガードは、まだいない。
ユリアは……まだ、ほんの、俺と同い年の少女は、国の命運を懸けて苦しい戦いを強いられることになるんだろう。
助けになることが、出来るなら、俺は……。
「行こう」
……バルザックの行方を追って。

第2部第1章第16話　ギャヴァン市街戦《後編1》（1）

眼下に見下ろす街に、ゆらゆらと松明の炎が揺れる。モナ軍が夜営の準備に入ったのだろう。無論、自警軍舎を取り巻く包囲網は、いささかも緩められることはない。

「……ボードレー殿」

不意に、ドアが開いた。大柄の、口元に髭を蓄えた男が入って来る。それに続く数人の男たち。いずれも身のこなしはしなやかだ。自警軍舎に留まったギルドメンバーである。

「カイル殿」

窓から視線を外し、ボードレーは彼らに向き直った。

「どうなされた」

カイル、と呼ばれた先頭の男は表情を変えずに口を開いた。壮年の、見るからに寡黙で重厚な雰囲気を持つこの男は、確かギルドでもかなりの古株だったはずだ。

「我々はここを出る」

「……ジフを、探しに？」

短い問いに、カイルは無言で頷いた。

「無事でいるとは思うのだがな……だが」

言って、視線を窓の向こう……黒々と蠢く（うごめく）人影に向ける。その人影は、モナ兵には留まらなかった。捕らえられた市民――つまり、捕虜だ。次々と軍舎の裏手へと人影が送り込まれていく。

軍舎の裏側には、ギャヴァン市民である建築業者の資材倉庫が北と南に2箇所ある。南の資材倉庫は使う当てのない材木や石炭、石材などが多く置かれており、移動に難があった為放置されていたが、北の資材倉庫は中身を全て持ち出した為に空である。恐らく、そこを捕虜の収容所として仮に利用しているのだろう。

「あれだけの人数が捕らえられ、それ以上が殺されているだろう。

人手が足りないかもしれん」
　人手が足りないのはこちらも同じだ、と叫びたいのはやまやまだが、彼らはジフリザーグの下に強固に組織されている。言わば、別枠だ。止める権利もないし、止めたところで無駄だろう。
「全員か」
「全員だ」
　ギャヴァン盗賊ギルドの構成員は、全部で６０人かそこらいるはずだ。うち、一部はそれぞれギルド本部の残留と街中の戦闘に参加している。こちらに残っている中でも更にジフリザーグに従って出て行った者がいるから、軍舎残留はおよそ２０余名。
　だが、ギルドメンバーは腕が立つ。ひとりにつき市民兵５人くらいには匹敵すると考えれば、その戦力が抜けるのは……痛い。
　しかしそのことには一言も触れずに、ボードレーはカイルを見つめた。
「抜けられるのか」
　軍舎は、モナの包囲下にある。純粋に案じて言ったボードレーに、カイルは小さく笑った。
「抜けられる。外から、自警軍を援護することを約束しよう」
「……そうか」
　再び、窓の外に目を向けた。傭兵軍が到着をすれば、状況は何らかの変化を見せるはずだ。今頃きっと、それぞれのヴァルス軍にも動きがあるだろう。
――明日には。いや、遅くとも明後日には……。
　それまで、持ち堪えるしかない。
「ならば、何も言うまい。油断せず、気を付けて行ってくれ」
「無論だ。……ジフに伝えることはあるか」
　問われて、ボードレーは短く沈黙した。そして振り返る。
「『生きて、再会の酒場で飲み交わそう』と」
　ジフリザーグが酒を飲めないことを知った上での発言である。カイルも思わず笑った。

「同席しよう」
「ぜひ」
それから一転して真面目な表情になると、カイルはボードレーに手を差し出した。黙ってボードレーもそれを受ける。互いの目が互いを見つめた。
「……健闘を」
生きて、再び合い見えることが、出来るだろうか。

◆　◇　◆

「第1班、東側の壁、補強完了致しましたッ」
「ご苦労」
幕僚であるスタルフら数人とミーティングを行っていたインプレスは、上げられてきた報告に目も上げずに応じた。
現在モナ軍は、軍舎を包囲しながら班分けした兵たちに各作業にあたらせている。
「『トゥルス』は、出ないな」
モナから従軍していた測量士の描いた地図に視線を落としていたインプレスは、ふと思い出したように呟いた。市民軍の動きそのものも、完全になりを潜めている。
「地下水路はどうなった」
スタルフが僅かに苦く、表を上げた。報告を出来るような芳しい成果は、上がっていない。
「それが……」
「見つからないか」
スタルフの苦い声色を読んで、インプレスが顔を上げる。
「は。……まるで掻き消えたように、行方が掴めぬままで……」
「あのぅ……」
2人の会話をそばで聞いていた先程の兵士が、おずおずと口を挟む。その声に、インプレスとスタルフは視線を投げ掛けた。

「何だ。まだ何かあるのか」
「その……兵士たちの間で、ちょっと……その」
「だから何だ」
歯切れの悪さにいらいらしながらスタルフがせっつくと、兵士は慌てて言を続けた。
「す、すみません。ですから、あの」
兵士が消えてくんです、と続けられたその言葉に、インプレスとスタルフは思わず顔を見合わせた。
「消えるとは何だ？」
更に問い掛けたインプレスに、兵士は詳細を話し始めた。無表情で言葉を聞いていたインプレスは、やがて兵士が話し終えてその場を下がると、そばに立ったままのスタルフを見上げた。
「……出たな」
臨時にしつらえられた机に肘を掛けて小さく笑うインプレスに、スタルフが忌々しい顔をする。
「『トゥルス』ですか」
「他に考えられんだろう」
兵士の話はこうだ。
数人で編成されている班で街中を移動していると、目的地についた頃には人数が足りない。見回りに行くと出た者、あるいは何か道具を取りに行くと言ってその場を離れた者は、まず戻って来ない。
と言って、戦闘音は微塵も聞こえず、市民兵の姿など誰ひとりとして見かけていない。
異国の夜と言うことも手伝って、兵士たちはどうやら過剰に不安を覚えているようだった。
「闇で姿を隠し人を消す。盗賊の領分だろう」
ましてギャヴァンギルドは、その腕の高さで名高い。自分の庭で敵を消すなど、まさに赤子の手を捻るようなものだろう。驚くには値しない。ゲリラ戦に切り替えたか。少人数で多勢に立ち向かうには、最も効果的だ。

ゲリラ戦、しかも夜襲で大勢力に与える打撃は物理的消耗ではない。精神的消耗である。

いつ襲われるかわからない、どこに潜んでいるか見えないとくれば、兵士たちは疲弊し、弱っていく。しかも防ぎようがない。

考え込むインプレスの耳に、慌ただしい足音が飛び込んできた。斥候としてギャヴァン周辺に出ていた兵だ。血相を変えている。

「どうした」

「インプレス様ッ……。ヴァルス軍が……」

不吉な言葉に思わず立ち上がる。兵士は急いた様子を崩さぬままで、続けた。

「ヴァルス軍の進行速度が思いがけず速く……現在西の岬付近まで接近してます！！」

「何？」

西の岬は、ティレンチーノ要塞とギャヴァンのほぼ中間地点にあたる。単純に考えて、残された行程はほぼ半分。

行軍は大人数であるがゆえに、通常歩く進度より遥かに遅くなる。測量士に計算させたところではヴァルス軍のギャヴァン到着は明後日以降と踏んでいたのだが。

このままでは遅くとも、夜明け過ぎには到着しかねない。想像以上に時間がない。やはり、市民軍に引っ掻き回されて費やした時間は痛かった。本来の予定ならば、今日の宿は軍舎の中だったはずだ。

「防護壁はどうなっている」

「他にも、仕掛けられた爆弾が見つかっています」

「撤去は済んでるのか。正門の爆破物の処理はどうなった」

「確認しましょう」

スタルフの隣にいたイーヴォルが立ち上がり、天幕を出て行く。

ややして、2人の男を伴って戻って来た。爆破物の処理に当たっている班の班長だ。

「完了したか」

「いえ、それが……」

細い、ややしゃくれた顎を持つ男が口を開いた。
「少々、手間取ってます」
「ほう？なぜ手間取る？」
「かなり複雑な仕組みになってます。ダミー配線が複数なされてましてね。仕掛けられた爆破物同士も、複雑に相互作用を起こすようになってます」
「ヴァルス本陣が到着するまでに、全ての撤去を完了させておけ」
インプレスの命令に、技術者が下がる。スタルフがこちらに顔を向けた。
「……いよいよ本命、と言う感じですね」
複雑で解除が難解な爆破物を作れる者は、そうはいないだろう。手間もかかるし時間もかかる。ヴァルス軍誘導の為に仕掛けられたと言う話には、信憑性が増すと言うわけだ。
「スタルフ。予定変更だ」
「は。変更、と言いますと……」
「ただちに軍舎を落とすぞ」
スタルフが目をしばたいた。確かに予定通り明朝に仕掛けていては、表のヴァルス軍と中の自警軍の両方を同時に相手取る羽目になりかねない。早急に陥落させるには、策を講じる必要がある。
「捕虜を連れてこい」
「捕虜？どう、なさる……」
尋ねかけたスタルフの顔が、強張った。
「１０人程度で良い」
「まさか……」
「兵に呼び掛けよ。……攻撃を開始するぞ」

◆　◇　◆

複数の甲冑の足音が、ジフリザーグの耳に届いた。
誰かの庭先の葉を茂らせた木の枝に身を潜めていたジフリザーグ

は、同様にすぐ上の枝に身を潜めているゲイトに、無言のまま視線を走らせる。ゲイトは音も立てずに身を乗り出し、ややして右手を開いたままこちらに示した。5人、と言う意味だ。

答えを受けてジフリザーグが頷くと、ゲイトが身軽に地面に降り立った。

狙うは最後尾の男。細い路地を連れ立って歩いて行くモナ兵の、影を追うように続く。前方の男たちが角を曲がった瞬間、即効性の毒を仕込んだゲイトのダガーが閃いた。鎧の継ぎ目を狙って正確に飛んだダガーは、声を出す間もなく男の命を奪った。

ゲイトが戻るのを待ち、ジフリザーグは無言のまま親指で移動を示した。ゲイトもそれに無言で頷く。

現在、ギルドメンバーは2人1組となって、ギャヴァン市内に散らばっている。

次々と声もなく消えていく仲間たちに、モナ兵の間では動揺が走っているようだ。いつ襲われるかと思えば、おちおち休憩もしていられない。落ち着いて眠ることさえ出来ないだろう。

ジフリザーグと行動を共にしているギルドメンバーは、22名。軍舎から共に出て来たメンバーと地下水路からこちらに合流したメンバーだ。到底モナ兵とは比較にならない人数だが、目的は直接の兵力減少ではない。表立っての戦闘は、ヴァルス軍が到着した時にやっていただこう。こちらはそれまでに、モナ兵を衰弱させておく。

戦場における糧食と休養の確保は、最重要事項と言っても過言ではない。戦闘が始まる前から疲弊していれば、攻撃力はもちろん判断能力や俊敏さも失われていく。

街中を徘徊するモナ兵を避け、庭先から庭先へと移動して軍舎の方向へと向かう。軍舎の周囲には、モナ兵が陣を構えているはずだ。あまり近付き過ぎればさすがに危険である。

「頭……」

民家を伝い、軍舎の間近まで近付いていくジフリザーグに、ゲイトが不安な声を出した。まだ年若いゲイトを微かに振り返る。

ゲイトは、義弟シンと同年の１６歳だ。ギルドの中でもかなり若い部類に入る。元々はトートコーストの辺境にいたらしい。

トートコースト大陸は、多神教カルラ教を国教とする巨大な統一国家が治めているが、帝国に属しない部族というのももちろんある。帝国外の部族は大陸辺境に細々と暮らしているが、トートコースト大陸統一国家――バティスタ帝国は貧富の差が激しく身分制度が厳しい。そして最下層として組み込まれている奴隷は、ほとんどが元々は辺境で暮らす帝国外部族の者だった。

ゲイトも、住んでいた小さな集落が突如バティスタ帝国に襲われ、奴隷として売買されるところだったのだと言う。身ひとつで逃げ出した、逃亡奴隷だった。密航でトートコーストを抜け出し、ギャヴァンへと辿り着いたのが５年前。ゲイトが１１歳の時だった。

「近付かなきゃ、わかんねぇだろ」

「けど……危ないすよ」

「この街にいる時点で十分危ねーよ」

頭ってゆーな、と呟きながら、尚も隣の民家へと移る。渋々と、ゲイトもジフリザーグに従った。もう軍舎はすぐそこだ。窓に映る人影さえ、誰のものなのか判別がつきそうなほどである。裏手から近付いたジフリザーグの目に、資材倉庫が飛び込んで来た。

「頭……あれ……」

隣でゲイトが、呻きに似た声を上げた。モナ兵が周囲を多数固めている。縛り上げられたまま、次々と送り込まれていく人影。

「……捕虜だ」

はっきりとは見えないが、歩き方がおかしいものや兵士に引き摺られるように放り込まれる者もいる。相当の暴行を受けたのだろう。既に、半分死体のような状態の者もいるようだ。

「くそ……野蛮人が」

同じ軍隊でも、ヴァルス軍ならそこまではしない。ファーラ教を篤く信仰していると言う理由もあるが、捕虜に対して寛大な処置をすることは政治的に効果を発揮することがあるからだ。文明国と発

展途上国の差か。
「捕虜の居場所がわかったことは僥倖、かな……」
とは言っても、この状況下で解放など出来るものでもないが……。
「ゲイト、南の資材倉庫、ちらっと様子を見て来てくれ」
「はい」
視線を、捕虜を収容している倉庫に定めたまま、ゲイトに囁く。
短い返事の後、ゲイトが姿を消した。そこへ慌しい足音が聞こえる。
植込みの僅かな隙間から目線だけで探ると、男が急いた様子で一際大きなキャンプへ飛び込んでいくのが見えた。恐らくは、司令官が滞在しているのだろう。
(何か、あったのか?)
じっと周囲の様子に耳を澄ませた。何かことが起きたのだとしたら、その辺を徘徊している兵士たちの会話からわかるかもしれない。
「……さすが……スってとこか……」
ざわめきや甲冑の音、攻城器を作る喧騒の中、資材を抱えて通り過ぎる兵の声が聞こえた。
「じゃあもしかして、夜のうちに……」
「ありえるよなぁ……」
ずっと船の上にいて、ようやく陸に下りたと思ったら働き詰めで勘弁して欲しいよなぁとぼやく声が混じる。
(夜のうちに……?)
そっと首を傾げると、ぼやいていた男がそのままの声で続けた。
「夜間強行軍なんて勤勉過ぎて迷惑極まりないよな」
「……!!」
夜間強行軍。
(ヴァルス軍が間近に迫ってる……)
と言うことは、それより先行している傭兵部隊の到着は、もう間もなくだろう。ややもすると、もう到着しているかもしれない。
やっと訪れた朗報に微かに顔を明るくさせたジフリザーグの耳に、更に追うような足音が飛び込んで来た。資材を抱えて歩いていった

先行の2人を追い抜かしていく。その背中に、資材を抱えたひとりが声をかけた。

第2部第1章第16話　ギャヴァン市街戦《後編1》（2）

「どうした？」
「攻城するらしい。それに先立って、捕虜を連れて来いって」
（何……？）
どうする気だ。
嫌な予感に、ジフリザーグの顔が強張った。
「捕虜を？」
市民軍リーダーの胸中を知る由もないモナ兵のひとりが、問い掛けた。のんびりとしたその声に、苛立たしささえ覚える余裕がない。
「どうするんだぁ？」
「餌にするんだろ。開城を呼びかけて、投降させるつもりなんだろうよ」
声が遠ざかって行く。間を置く為にその場で身動きせずにいるジフリザーグの隣に、偵察から戻って来たゲイトが身を滑り込ませた。ゲイトを伴って元来た道を辿り、人気のない辺りまで来ると、民家の陰に身を滑り込ませる。
「南の資材倉庫は、どうだった」
「あっちは捕虜収容に使ってるわけじゃなさそうです。作った攻城器をいったん収めてるみたいすね」
「守備は？」
「大して固めてる様子はありませんでした」
「そうか……」
それから、今しがた自分が耳にしたことをゲイトに告げる。話を聞きながら、ゲイトの顔が硬くなっていった。
「……どうするんすか」
硬い表情のままの頭に、ゲイトも強張った声を投げ掛けた。真剣な色味を帯びたダークグレーの瞳が、ゲイトに向けられる。
「開城させるわけにはいかないし、捕虜を放っておくわけにもいか

ない。……ゲイト、頼まれてくれないか」
「そりゃもちろん……。何すか」
「ひとっ走りギルドに行って、イグニスを呼んで来てくれ」
「……？はい……」
イグニス――ギルド専属の爆弾技師だ。本名は別にあるが、炎を意味する『イグニス』と言う愛称で呼ばれている。父親もギルドで爆弾技師をやっており、先代が亡くなった今、ジフリザーグと同年のイグニスが現役を務めていた。防護壁に難解な爆弾を仕掛けたのも、彼である。そして、ヴァルス軍誘導の為に本当に仕掛けた発破も、彼が仕込んだ。
ダミーは精巧であればあるほど、ダミーとしての意味をなす。難解であれば作成に手間がかかるし、撤去されるつもりであれほど凝ったものを仕掛けるとは思うまい。そして、本物はより見つかりにくくなる。
「どうするんです？北の資材倉庫爆破しちゃったら、捕虜も一緒に吹っ飛んじゃいますよ」
「んなこたぁ俺だってわかってるよ」
「それに大体、今、ありったけの材料で発破作っちゃってるから、もう作れるだけの素材が……」
その言葉に、ジフリザーグは口元に笑いを作った。年の割に幼く見えるその顔が、一層幼く見える。
「南の資材倉庫には、何がある」
「何って……使われてないガラクタの資材とか……」
「爆弾じゃなけりゃ爆発しないってわけじゃない」
「え？」
ジフリザーグの言葉に、困惑した顔を返したゲイトは、すぐに得心がいったように目を見開いた。
「あ、そうか……」
「ハンパな知識で出来ることじゃねーけどな。でも、イグニスなら何とか出来んだろ。……それから、俺たちは北だ」

「え、でも、今解放しちゃったら……」
「しょうがねえだろ。南の資材倉庫が爆破されたくらいじゃ、モナ軍を混乱には落とし込めない。捕虜の解放までは出来ねぇさ。他にやりようがない。けど、放っておくわけにもいかんだろ」
恐らく自分たちの仲間も、何人かは捕らえられている。
「いったん、『ガーネット』に集合だ。捕虜を解放する」

ジフリザーグが打ち上げた連絡用信号弾を受けて、『ガーネット』にギルド団員が集まって来た。イグニスの到着はまだだ。
「まず、朗報だ。ヴァルス軍が近づいてるらしい」
言葉の内容の割には硬い表情のまま告げる。小さな歓声が上がった。
「今、どこに？」
「さあーな。そこまではわからん。が、モナが慌ててるってことは、期待しても良さそうだぜ」
「……悪い方の話を聞こう」
グランドが、硬い表情のままで言った。朗報に踊らされはしなかったらしい。ジフリザーグも硬い表情のまま、それに応えた。
「モナは、ヴァルス軍到着の前に軍舎を陥としたい。……捕虜を斬首するつもりだ」
「何……！？」
「捕虜を、解放したい」
「どうやる？」
グランドが尚も尋ねる。そこへ、ひっそりとゲイトとイグニスが到着した。ジフリザーグを除く全員が、驚いたような視線を向ける。爆弾技師であるイグニスは戦闘には向いていない。
「イグニス、どうして……」
「カイル！？」
そしてその後ろから姿を現した人物の姿を見て、思わずジフリザーグも声をあげた。亡き父の友人とさえ言うべき、ギルドの古株。

金髪に指を突っ込みながら、イグニスが肩を竦めてみせた。
「俺が呼ばれたってことは、どっか爆破したい場所でも出来たか？」
「爆破！？」
正面からイグニスを見据え、黙って肯定するジフリザーグにどよめきが走った。
「どこを爆破する気だ？」
「材料がすっからかんなのは知ってるよな？」
尋ねたグランドにかぶせるように、イグニスが口を開いた。
「導線や火薬がなけりゃ爆破出来ない程度の爆弾技師なら、いらねーよ」
「辛辣なこって」
へらへらと舌を出すイグニスを軽く小突いて、要領を得ないギルドメンバーを見回す。
「爆破するのは軍舎裏手、南側の資材倉庫」
「あそこなら、粉塵爆発が起こせるかな」
あとを引き受けて、腕を組み石壁に寄りかかったイグニスが答えた。
「資材倉庫には石炭がある。かなりの量があったから、モナだって運び出しちゃいないだろ。綿密な計算と環境が必要だから難易度は高いが……何とかなっかな」
飄々と言って、それからふと真顔をジフリザーグに向けた。
「が、計算するには倉庫の正確な大きさが必要だ。それに中に入れなきゃ起こせる爆発も起こせない」
「図面だ」
言って、ジフリザーグはベストのポケットに突っ込まれたままだった倉庫の図面をテーブルに放り出した。イグニスが手を伸ばして広げる。
「用意が良い」
「当たり前だ。ここに来る前に持ち主の家に寄って拝借してきた」
「侵入はどうする？」

「南の倉庫は攻城器しか置かれていない。警備は手薄だ。……だよな？」

イグニスのすぐ後ろに控えたゲイトに問う。緊張した面持ちのまま、ゲイトがしっかりと頷いた。

「おっけぃ。念の為、別の爆破手段も講じておくとしよう」

「任せる。ついでだから、せっかく作った攻城器にも吹っ飛んでもらおう。何人かつける。イース、リグナード、ルーズ、グランド。イグニスの援護についてくれ。それから残った奴は俺と一緒に……」

「2人で良い。大人数はかえって目立つ」

「じゃあ、グランドとルーズに頼もう」

ジフリザーグの言葉を受けて、2人がイグニスのそばによる。

「すぐに計算にかかってくれ」

それから、ジフリザーグはカイルに視線を向けた。

「カイル。軍舎の方はどうした」

「抜けてきた。ジフが困っているのではないかと思ったのでな」

「勝手な行動を……」

ため息混じりに吐き出す。軍舎残留を決定したのは長であるジフリザーグであり、勝手に脱出するのは命令の変更……越権行為とさえ言える。

だが、こちらの手勢が増えるのは確かにありがたい。

「何人だ？」

「全員だ」

「ぜんいんだあ！？」

それではボードレーが困っているのではないだろうか。

「あーのーなあああああ」

「外から援護してやれば同じことだろう。ボードレー殿より俺は、ジフの方が危なかしくて仕方がない」

「……」

返す言葉が見つからない。

「グローバーも、同意見だそうだ」

「な……！？いつ会った？」
「今さっき」
では、グローバーは、ひいては彼麾下の水夫たちは、まだギャヴァンに留まっているのだ……。
沈黙したジフリザーグを見遣って、カイルが続けた。
「軍舎を抜けてから一度、地下水路に行った。お前がどこにいるかわからんかったんでな」
「……」
「市民兵は誰一人、逃亡してないぞ」
その言葉に、顔を上げる。
「グローバーからの伝言だ。『市民軍はジフの指示を待っている。共に、闘おう』」
その言葉に、胸が鳴った。恐怖に晒されているのは皆同じだろうに……そして、逃げ出す手段も今ならばまだ、あると言うのに。
自分がギャヴァンを護っているような気になるのは、自意識過剰と言うことらしい。この街には、護る為に戦い抜く気持ちを持っている住人がまだまだいる。
「……くせぇ」
照れ隠しに小声で呟くジフリザーグの頭を、カイルがそのでかい手のひらで叩いた。頭を押さえて無言でうずくまる上から、更に声が降ってくる。
「もうひとつ伝言だ」
「今度は誰だよ」
「自警軍隊長殿だ」
「え！？」
「『生きて再会の酒場で飲み交わそう』と」
「……」
知らず、泣き笑いのような表情になった。このまま軍舎を放っておけば抵抗するにせよ投降するにせよ、隊長であるボードレーは命がないだろう。賞金首であるジフリザーグとて、人一倍死ぬ確率は

高い。
ならば。
必ず死地を抜け出さなければ。
「はは……。俺は酒は飲めねーって……」
まったく……。
どいつもこいつも意地の悪い……。
「それから、朗報だ」
「？　何だ？」
「ジフ、計算完了だ。こっちはいつでもオッケーだぜ」
そこへ、イグニスの声が挟まる。
「じゃあすぐに取り掛かってくれ。爆破時刻は、そうだな……３０分後。それ以上は待てない」
「３０分後だな。了解」
ポケットから取り出した懐中時計を確認して、頷く。
「こちらはそれまでに、騒ぎを起こす。暴動に便乗してモナを襲撃、捕虜の解放を決行する。イグニスたちは爆破を起こしたらすぐ撤退してくれ。グランドとルーズはそのままギルドまで、イグニスを送り届けてくれるか。市民軍がまだ協力してくれるなら、ギルドしかいないよりは……」
「慌てるな、ジフ」
「え？」
「こちらの朗報をまだ告げていない」
そう言えばそうだった。
「何だ、朗報って」
「来たぞ。待ちわびていた援軍が」
「何？」
「地下水路に進入中だ」
黙って目を見開くジフリザーグに、カイルがにやりと笑いを刻んだ。
では、傭兵部隊が。

「ホントか！？」
やはり。
「だったら……」
先刻までとは、考えを変えても良いかもしれない。
市民軍に戦闘意欲があり、傭兵部隊が合流出来るとなれば、撹乱などと言う手緩い真似でなくても良い。……戦闘開始だ。
敵勢力は単純計算で2万弱、こちらは傭兵部隊5千と地下水路の市民軍千とで6千。まだまだ少ないが、それでも戦闘に持っていけるだけの兵力になる。傭兵部隊は、戦闘のプロだ。
加えて、モナの士気をくじいてやれば、戦力差はより縮まることになる……。
「カイル。地下水路とのパイプ役を引き受けてはくれないか」
「いいだろう。俺と共に軍舎から出てきた連中はどうする」
「こっちに回してくれ。ギルドメンバーは俺と一緒に北へ向かってもらおう。……タイミングはわかるな？」
「暴動を起こすんだろう？」
「ちと予定より早いけどな。他に手段がねえもん。……傭兵部隊と市民軍の突撃のタイミングは、カイルに任せる」
「わかった。では、すぐに出よう」
カイルが足早に出て行き、イグニスらもこちらにひらっと手を振って見せて出て行った。それを見送ったその瞬間、不意にジフリザーグの視界が一瞬霞んだ。
（……！？）
湧き起こる、眩暈。
「頭？」
「……なんでもない」
微かにぐらついたジフリザーグに気づいた構成員が、不審な声を上げた。気づかれないよう頭を振って、殊更何でもない表情を作り顔を上げる。ジフリザーグはその場に残ったメンバーを振り返り、にっと笑顔を浮かべた。

「やりたいよーにはやらせてられないからな。このまま放っておいたらギャヴァンギルドの名が廃る」
だが、これ以上仲間を失うわけにはいかない。
「……退き時だけを、間違えるな。深追いをするな」
モナが来る前と同じ注意を、けれど前よりも厳重に厳かに、告げる。
「これ以上、失わせないでくれ」
見回す面々が無言で頷いた。
注意など、どれほどの効果を発揮するのか知れたものではなく…
…失わずにいられようはずも、ないのだが。
負けているわけにはいかないのだから、やるしかない。
「――行くぞ」

第2部第1章第17話　ギャヴァン市街戦《後編2》（1）

短い別れの言葉を残してカイルが部屋を去った後、ボードレーは再び、ひとり窓に向き直った。

戦場での別れは、そのまま今生の別れをも意味するかもしれない。けれどそれは、口に出さない。出しても意味がない。ファーラのみが知ることだ。

軽く頭を振り、デスクに向かう。乗せられた小さな額縁に、視線が引き寄せられた。妻と娘の肖像画である。まだ年若い妻と、４歳にならない幼い娘。今頃、どうしているのだろうか。不自由にしていなければ良いのだが。

ギャヴァン襲撃の報は、恐らくファーラ大神殿の方へ身を寄せたという妻の耳にも届いているだろう。ボードレーの身を案じているに違いない。

しばし家族に思いを馳せていたが、やがてそれを振り払うように立ち上がると、執務室を出て見回りがてら舎内を歩く。あの様子では、モナは今夜中に攻めて来るつもりがあるわけではなさそうだった。ならば、明日必ず訪れるだろう戦闘に備えて、こちらもゆっくりと休養を取っておいた方が良いだろう。

「隊長」

「ご苦労。変わったことはないか」

「はい。今のところ、異常は特に見られません」

「そうか。……モナが行動に出るのは、恐らく明日だろう。現在、夜営の準備に取り掛かっているようだ」

兵士の肩から、ほっと力が抜けるのが見てわかる。思わず苦笑した。

「休めるうちに、休んでおいた方が良い。交代で休憩を取ってくれ」

「はい。ありがとうございます」

破顔したその若い顔に、胸が痛んだ。まだ２０代と思われる青年。

父も母もいるだろう。悲しませることに、ならなければ良いのだが。
そんなことを憂いながら、その場を離れる。逗留する兵士たちを激励して回り、再び執務室に戻った時には、カイルたちが出て行ってから1時間近くが経過していた。彼らは無事、ジフリザーグと合流出来たのだろうか。
（……何だ？）
部屋に入り、窓の外に視線を向けて、ボードレーはふと目を見張った。黒々としていたはずの眼下は、先程より濃いオレンジに染まっている。――炎が。
（何を、する気だ……？）
ふたつの大きく燃え盛る炎の間に、人影が見えた。列になり、恐らくは繋がれたままでモナ兵に引き立てられるように。
捕虜だ。
嫌な予感がした。
「よせ……ッ」
窓の内側から、唇を震わせて小さく叫ぶ。そのボードレーの視界の中で、オレンジに照らされたモナ兵が剣を振りかぶった。
「――やめろッ！！」
だが、制止の声など届こうはずもない。尤も、届いたところで効果を発するとは考えられないが。
がたっと窓に両手を叩きつけるボードレーの前で、無力な捕虜たちが次々と斬首されていく。……ギャヴァンの、市民たちが。
そこへ、慌ただしい足音が飛び込んできた。振り返る。自警軍の兵士だ。
「どうした」
「捕虜のひとりが、モナからの伝言を持ってッ……」
「何！？」
兵士に従って、部屋を飛び出す。案内された部屋では、全身に傷を負った男が息も絶え絶えといった風体で介護を受けていた。痛ましい。

「ボードレー殿……」
「ご苦労だった。……モナからの伝言とは」
取り急ぎ、堅いソファに横たえられていた市民が体を起こそうとするのを押し止めながら、問う。男は、苦い顔で言葉を押し出した。
「伝言、です……。『至急、開城せよ』……と……」
「……」
「さも、なくば……捕虜を、斬首、すると……」
「何……」
先程のはデモンストレーションと言うわけか。見せしめとは阿漕な真似をする。
だが、夜営の準備に入っているように見えたのに、なぜ？
「軍舎の外で、何か動きが？」
ボードレーの言葉に、兵士は力なく首を横に振った。捕虜とされていた身でわかろうはずもない。
「そうか」
モナの要求に応じるわけにはいかない。けれど、捕虜を放っておくわけにもいかない。
「くそッ……」
ジフリザーグは今、どこにいるのだろう。連絡が取れれば、外の状況もわかるのだが。
「どうしますか……」
ボードレーは頭をめぐらせた。投降するわけにはいかない。それは、ギャヴァンの降伏を意味する。モナに制圧されれば、本陣が到着した時に、外と連動出来る者がいなくなってしまう。だが、捕虜をむざと斬首させるわけにはいかない。街にはギルドが残っているのだから、ヴァルス軍と連動するのは彼らだけでも事足りるのではないか……。
「！？」
ふと窓の外に向けた目線が、そのまま固定された。
遥か遠く、ギャヴァン北部の小高い丘の上に揺れる無数の灯り。

次々と灯されていくそれは、流れるように丘を下っていく。目を見開いた。

（ジフ……！！）

ジフリザーグが、動いた。

予定通りではない。ではないが、考えがあるに違いない。……あるいは、選択の余地がないか。

「隊長……ご決断を、お願いしますッ……」

「わかった」

搾るような声に重く、頷く。そして、放たれた捕虜の男に告げた。

「開城はしない。ジフの考えを、信じよう」

あの灯りがここに届くまでには、まだ時間がかかるだろう。モナ軍はまだ、気づいてはいまい……。

一同が息を飲む。ボードレーは繰り返し、決断を告げた。

「開城は、しない。……抵抗するぞ」

◆◇◆

「投降に応じる様子はあるか」

インプレスの問いに、スタルフが軍舎に視線を注いだままため息をついた。次々と斬り落とされた捕虜の首は、現在軍舎を睨むように曝されている。その中に知っている顔があれば、それを見る者の胸中は察するに余りある。

「わかりませんね。今の段階では、何とも。……いやに、静かなのが気になりますが」

「ふむ……」

返された答えに、インプレスはしばし考えるような表情をした。

そして酷薄に告げる。

「１０分、与えてやろう。それを越えたら、更に１０人の首を斬れ。そこからまた１０分後には２０人だ。その１０分後には３０人。以降も応じる様子がないのであれば、攻撃を開始するぞ」

「……」

ギャヴァン市民の、モナに向けられる怨嗟はどれほどのものとなるのだろう。

「わかりました」

インプレスが立ち去る背中を見送り、胸元から時計を取り出す。時間を確認して、軽く頭を振った。

仕方あるまい。これは戦争だ。あちらが開城に応じれば、こちらは自国の民を失わずに済む。

（開城してくれ）

スタルフとて、無抵抗の民の首を落としてまわるよう指示するのは、快適ではない。まだ、血に酔うほどの戦闘を繰り広げているわけではないのだ。

じりじりと、無為に時間だけが過ぎていく。軍舎には何の変化も見られなかった。時計の針が無情にもその時が来たことを知らせる。

こみ上げる苦い感情を押し込めて、冷酷に命令を遂行することを己に課し、スタルフはその場を動いた。ギャヴァンを陥落し、ヴァルスがモナとの取引に応じれば、モナは貧しさから救われるはずだ……。これは、彼らの権利と未来を掴む為に挑んだ戦いだ。

言い聞かせながら手近な兵士を呼び止めた。

「追加だ。捕虜を１０人、連れてこい」

「はい」

そしてまた繰り返される、鮮血に染まった呼び掛け。開城を呼び掛ける使者となる捕虜でさえ、満身創痍で指を切り落とされた状態となった。これで応じなければ、次は果たしてどうなるのだろう。

新たに斬り落とされた首を、門前に並べるよう兵に指示しながら暗澹たる気持ちを押し殺していると、不意に怒号が聞こえた。顔を上げる。続けざまに金属音と羽鳴りが聞こえた。

「何だ、どうした！？」

怒鳴りながら、剣の柄に手を掛け走る。軍舎の上方から、人影が見えた。どうやら軍舎から攻撃を受けたらしい。開城するつもりが

ないと言う意思表示だろうか。
　矢は、次々と射かけられて来る。モナ兵の中にも弓矢を取り上げて応戦する者がいるが、高度があるのとないのとでは当然飛距離も威力もまるで違う。無駄遣いと言うものだ。
「よせッ！！放っておけッ」
　どうせこちらに大したダメージは与えられない。
　スタルフが制止の声を上げたその時だった。別の方角から声が上がったのは。
「な、何だ、あれは……！！」
「騒々しい！！今度は何だ！？」
　苛立って怒鳴りながら声の方角に顔を向けたスタルフの表情が、そのまま凍り付いた。
「何だあれは……！！」
　不本意ながら、自分が怒鳴りつけた兵士と同じ言葉を呆然と呟く羽目になる。
　軍舎前の広場から、僅かに見える小高い丘。大して高いわけでもないが、周辺に民家はなく草木が生い茂り、モナ軍がまだ探索にまで及んでいない地域。
　そこから、流れ出るようにオレンジ色の炎が下る。そう、まるで……軍隊が、松明を掲げて猛烈な勢いで行軍をしているような……。
「ヴァルス軍だ！！」
「！！」
　誰かの叫びに、弾かれるようにスタルフはその場を駆けだした。インプレスがいるはずの幕内へと、足を走らせる。
「司令官殿ッ」
　駆け込んだスタルフに、外の騒ぎが耳に入ったのかちょうど表へ出ようとしていたインプレスが眉根を顰めた。
「外が騒がしいな。何があった」
「ヴァルス軍がッ……」
「何？」

短く告げた言葉にインプレスの顔色が変わる。スタルフと共に足早に外へ出ると、まだ遠く流れる灯りに息を飲んだ。小さな呻きが上がる。

「馬鹿な……ヴァルスは既に街に侵入していたと言うのか……！！」

しかし、どこから。

「……予め潜伏していたのやもしれません」

その説には無理がある、とわかっていながら、口にせずにいられない。

ヴァルス軍が予め街中に潜伏していたのなら、初戦でなぜ出てこなかった。正規軍が出ていれば市民の莫大な被害はなかったろう。それに、ヴァルスの情報は間諜からもたらされている。正規軍が潜伏していたと言うのなら、その情報はモナに伝わっているはずだ。

だが、侵入にも無理がありはしないか？街外から突如、外れとは言え街中の丘に、軍隊が出現できるような道があると？しかしそうでなければヴァルス軍は　魔物のように湧いて出たことになってしまう。

「各班号令ッ！！ヴァルス軍襲撃だッ。攻撃に備えろッ」

響いたインプレスの声に、伝令が飛ぶ。たちまちモナ陣営は慌ただしい空気に包まれた。武器を装備し直す音、仲間に呼び掛ける声が飛び交う。

とは言え、補強作業や市民軍捜索などにあたっていた兵たちがまだ街中に散らばっている為、総力とは言えない。ヴァルス軍は強い。あの、流れる灯りのひとつひとつが兵だとすれば、５千は堅いだろう。背後に立てこもった自警軍がいることを思えば、苦戦するかもしれない。

そうでなくてもモナ軍は、やっと訪れたはずの休養を返上する羽目になって士気が落ちている。慣れない船上生活が続いていたのも、痛い。

そんな内心の苦渋を押し隠して、インプレスは剣を手に前方を見据えた。炎の奔流は止まることを知らぬように押し寄せる。

いやむしろ、平地に入って尚、勢いが増したかのようだ。地を揺るがすうねり。足先から伝わる振動を受け止めながら、柄を握る指に力を込める。ヴァルス軍は陣形を整えることなく、そのままの勢いで突撃してくるかに見えた。

だが。

「……何!?」

炎の奔流がその姿を露わにした時、インプレスは思わず己の目を疑った。咄嗟に言葉が出ない。隣に立つスタルフも同様のようだ。前方に視線を定めたまま、凍り付いて動かない。

「……何だ、あれは」

「牛……ですね……」

余りに馬鹿馬鹿しい答えに、インプレスも返す言葉が浮かばない。こちらへ向けて防護壁沿いに一直線に押し寄せる暴徒は、間違いなく牛だ。それも……何千と言う数の。

「うわあああッ」

予想外の、だが破壊力で言えばヴァルス軍を上回るであろうその暴徒たちに、モナ兵の陣営は総崩れとなった。人間相手なら闘いようがあろうものを、牛の巨体が群をなして突進してくるとあればその破壊力は並大抵のものではない。しかもタチの悪いことに、暴徒たちはその両角に燃え盛る松明を括りつけられ、我を忘れていた。

「ふざけるなッ……」

こんなおちょくったような真似を考えつくのはギャヴァンギルドの長――『トゥルス』だろう。舐めた真似をしてくれる。

思わず剣を叩きつけそうになったインプレスを、スタルフは引きずるようにしてその場から引き離した。このままでは『暴動』に巻き込まれかねない。

各所を封鎖され、こちらへ誘導するような狭い道を突進して来た牛の群れは、ようやく広場に放たれて怒りの赴くままに思い思いに暴れ回っている。何人もの兵士たちが、その勢いを受け止める羽目になって命を落とした。軍舎の方からは、ここぞとばかりに矢が射

かけられ長槍が投げつけられる。背後に気を配っている余裕などどこにもないモナ軍は、牛と自警軍の望むままに踊ることとなった。
「いったん退けッ。牛さえいなくなればヴァルス軍はここにはまだいない！！」
だが、襲撃して来たのがヴァルス軍でなかったということは、相変わらずこの街には自警軍と僅かな市民軍しかいないと言うことではないのか。
インプレスの言葉が届いた者は、その意味を正確に理解した。所詮牛など動物。放っておけば散るに決まっている。闘うべき相手などどこにも存在しない。
しかし、モナ軍の希望は、激しい爆音と共に消し飛んだ。地響きを上げた西の空が、オレンジ色に染まる。
「何だ！？」
一体この言葉を、この夜の間に何度口にしたことか。
スタルフが見上げたその先には、軍舎の陰から勢い良く噴き上げる炎があった。またも轟音が響く。炎と黒煙に混じって木片が幾つも舞い上がるのが見えた時、スタルフは軽い恐慌に陥った。
「ヴァルス軍だ……」
「何？」
インプレスが、己の幕僚を見下ろす。だがスタルフの目は、夜空を染め上げる火柱と黒煙に向けられたままだった。
「ヴァルス軍ですよ……やっぱり侵入してるんだ……。敵襲と思ったものが牛の暴走だったって安心させて、怒らせて……油断したところで、今度こそ本物が……」
「まさか……！！」
スタルフの狼狽したような声が、周囲の兵士に不安を伝播させた。緊張が辺りを包み込む。何かに引火したのか、一際大きな爆発音が、牛の暴走する音に混じって響いた。怒号と羽鳴り、逃げまどう足音も暇（いとま）がない。
「だって人がいなけりゃ、あんな爆発起こりませんよ！！何者かが

意図的に……」

何者か――牛の暴動を起こした人間と、同じに決まっている。そうでなければ、こうも計ったようにことが起こるものか。

「私に続けッ。牛には構うなッ」

言ってインプレスは抜き身の剣を片手に、その巨体からは考えられない俊敏さで駆けだした。

とは言っても、暴れ回る牛の暴動をそう簡単に『構わず』にいられるわけもないのだが、それでもその場にいた幾人もが司令官を追って走り出す。

呆然とその場に立ち尽くしたスタルフの耳に、更に絶望的な物音と怒声が届いた。

「本物のヴァルス軍が来たぞぉぉぉッ！！」

「ヴァルス本陣が、街中に侵入してるぞぉぉッ！！」

続けざまに起こる予想外の出来事に総崩れとなっていたモナ軍に、勝機を見出す手立てはなかった。

第2部第1章第17話　ギャヴァン市街戦《後編2》（2）

◆◇◆

「無事か！？」
牛の暴走に紛れる形で北の資材倉庫への侵入を果たしたジフリザーグらの姿に、捕虜となっていた市民らの驚いた視線が集った。
「ジフ……ッ」
「頭……」
やはりギルドメンバーもその中にいたらしい。
「時間がない。自力で動ける奴はどのくらいいる？」
モナが牛にかき回されている間に脱出したい。
自力で動けないほどの者は、思ったより多くはないようだった。助かる。これならば助け合えば何とかなりそうだ。
「動ける奴は動けない者の脱出に手を貸してやってくれ。必ずこの場にいる全員が一緒に抜け出すぞ」
誰ひとり見捨てるような真似はしないと決めている。必ず、彼らのひとりひとりに無事な帰りを待っている人がいるのだから。
ギルドメンバーが、次々と捕虜を捕らえている縄を切って回る。自由になった者が、更にそれを手伝った。
「今なら手薄になっている。軍舎へ向かえ。ヴァルス軍の到着も、そう遠くはないはずだ」
「手薄？」
「傭兵部隊だ」
ジフリザーグの言葉に、密かな歓喜の声が上がった。
「モナ軍は今混乱に陥っている。多分、こちらの戦力そのものも、把握しきれていない状態だ。今なら軍舎に転がり込むことも可能だろう。怪我をしている者は、中で手当てを受けてくれ」
了解を告げる声が、あちこちから上がる。早速周囲の者に気を配

りながら、移動を開始しようとその場を立ち上がった者たちに、ジフリザーグは尚も呼びかけた。
「軍舎からボードレーの指揮に従って応戦してくれ。無理はしなくて良い。どうせ、勝てやしねーんだから」
深紅の髪に手を突っ込んでかき混ぜながら、気楽な口調でにやりと笑うギルドの長に、疲れた顔をしていた市民らの顔に微笑みが戻った。ジフリザーグの言葉は、なぜか追い詰められそうになる心を軽くしてくれる。
「けどな、今は奴らを減らす絶好のチャンスなんだぜ」
時は夜。兵士たちの士気が最も低くなるタイミングだ。加えてモナ兵は、多少引っ掻き回されたにしても兵力差で圧倒的優位に立っている――つまり、余裕があり、舐めている。城の間近に布陣しているのは、こちらを脆弱と判断した時の定石だ。
ところが、そこへいつの間にか侵入したヴァルス軍の行軍だ。恐らく肝を冷やしただろう。モナ軍はギャヴァン防護壁に頼っていて、最初から正面きってことを構えるつもりがなかったのだから。
しかし恐慌に陥った彼らの眼前に現われたのはヴァルス軍ではなく、牛。その瞬間、極限まで高まったはずの緊張は一気に弛緩する。無論、牛とは言え暴徒化している彼らの破壊力は並ではないし、事実その与えた損害たるや相当のものだろうが、「ヴァルス軍だ」と思ったものが実は違ったとくれば緊張の糸も切れる。
緊張と弛緩を繰り返せば、人は最初の緊張感には決して戻れなくなるものだ。そこへ新たに投げられた報――『本物のヴァルス軍の到着』。
ギルドメンバーが飛ばしているデマである。だが、その報と同時に傭兵軍が実戦投入されている上に、精神的に上下を繰り返したモナ兵は正常な判断能力を喪失している。集中力も、取り返すことが出来ずにいる。――今なら、戦える。
「この辺りは今、兵もまばらだ。わき目を振らずに軍舎を目指せ。襲って来る兵士は俺らが何とかする。いいな!?」

「わかった！！」
ジフリザーグの言葉と共に、扉が開かれた。裏手にまで僅かに喧騒は及んでいるようだ。至るところに牛の巨体が横たわり、それより遥かに多くのモナ兵士が地に伏している。そして暴れまわる牛と逃げ惑うモナ兵の姿は、それを上回っていた。
「行け！！」
最外をギルドメンバーが固める形で、捕虜たちは表へと駆け出した。歩けない者や立ち上がることすら叶わない者は、それぞれ何人かで抱え上げている。気づいたモナ兵たちがこちらへ来ようとするも、牛に襲われて間々ならない。こちらへ辿り着いたモナ兵は、ギルドメンバーが片っ端から切り捨てていく。
「振り返るな、真っ直ぐ軍舎を目指せッ」
剣を振りかぶって踊りかかってきたモナ兵を切り捨てながら、ジフリザーグが怒鳴る。トゥルスを投げ付け、新たに襲ってきた兵士と切り結んだ。市民の中には、既に息のないモナ兵の得物を取り上げ、自ら戦闘に加わる者もいる。狼狽から抜け出せずにいるモナ兵は、さして恐るべき敵ではなかった。
「ジフッ」
「カイル！！グローバー！！」
軍舎の方角から新たな足音がする。駆けつけてきたのは、ありがたいことにこちらの味方だった。カイルとグローバー、そして麾下の水夫たちだ。それぞれバスタード・ソードやカトラスを片手に、モナ兵を切り飛ばしながらこちらへ駆けて来る。
「無事だったか！！」
「心配かけたなー」
言いながら、市民に踊りかかるモナ兵にトゥルスを投げ付ける。人懐こい笑顔とそぐってない行動に、グローバーは苦笑した。
「悪いんだが、捕虜だった者たちが軍舎まで無事に辿り着けるよう援護してくれないか？」
「無論だ」

「表はどうなってる？」
「傭兵軍とモナ軍の戦闘が始まってる。今のところは、こちらが優勢だな。相変らず、牛はまだ暴れまわってるぜ」
　困ったようなグローバーの言葉に、ジフリザーグも思わず笑った。牛は別にこちらの味方ではない。不意を突かれていない分被害が少ないだけで、先方にとってはモナだろうがギャヴァン市民だろうが、無関係だろう。
　先導をグローバー率いる水夫たちに預け、ジフリザーグはゲイトら数人を伴って後方支援へと回ることにした。時折自分の仕事を思い出したように駆け寄ってくるモナ兵を切り飛ばし、暴行と疲労で悲鳴を上げる体を押して前進する市民たちを励ます。
　捕虜となっていた者たちは、ざっと数えて５００名前後。あとは……軍舎の方にどれほど逃げ込むことが出来ているのだろうか。
　幸い、裏手でありモナにとって重要な物資を置いているわけでもないこちら側は、兵士が少ない。混乱の只中にあり、表では傭兵軍との闘争が起こっているとなれば尚更だ。軍舎へと駆け抜けるのは、それほど困難なことではないように思われた。
「開門だ！！」
　裏から表へ曲がる方角から、グローバーの怒声が聞こえる。先頭は無事に辿り着いたようだった。そのことに安堵しかけたジフリザーグの耳に、不意に新たな物音が届く。通常では認知し得ない、僅かな物音――空気を切り裂く、羽鳴り！？
「何！？」
　咄嗟に周囲の人間を薙ぎ倒し、ジフリザーグは身を伏せた。ギルドメンバーは己の判断で身をかわしているが、市民たちの中には庇いきれなかった者が襲い来る矢を受けて倒れていく。
「走れッ！！そんなに距離はない！！」
　身を起こし、トゥルスを構えながら周囲の人間に向かって怒鳴る。わけもわからぬまま地に伏せていた市民たちは、その声に弾かれたように駆け出した。

「ゲイト、リグナードッ！！こっちについてくれッ。あとは援護しながら軍舎に転がり込めッ」
「はいッ」
「入ったらすぐ閉門しろッ。俺たちは気にしなくて良いからなッ」
「わかりましたッ」
ギルドメンバーが命令に従い、なりふり構わず駆けて行く市民たちのフォローに入るのを視界の隅で認めながら、ジフリザーグは矢が飛んできた方向に視線を定めていた。フル装備のモナ兵が数人、遠くでまだ炎を噴き上げる資材倉庫を背景に近付いて来る。先頭に立つ巨漢には、見覚えがあった。
「また会ったな」
手に持つのは、グレートソードの中でも更に大振りなように思えた。しかしその巨漢の手にあってはいっそショートソードにさえ見える。血塗られたその刃は、何者かの命を奪ってきたことを表わしていた。
「小細工をしたのは、やっぱりお前か。名を、聞こう」
「……ジフリザーグ」
目線を定めたまま、低く答える。その体から沸き立つような殺意に、油断が出来ないことを感じていた。
「俺を、賞金首にしてくれたのはあんたか」
「私だ。ギャヴァン侵攻を、任されている。インプレスだ」
「何で俺の首に賞金かかっちゃってんだか、ちょーっと覚えがないんだよなあ……」
「ないか？」
その背後に控えたモナ兵士たちも、剣を構えたまま油断なくこちらを見据えている。人数は、１２人。あの混乱の中、踊らされることなくいち早く立ち直った者たちだろう。インプレスはまるで、咳き込むように喉の奥を震わせて笑った。
「盗賊ギルドの長だな？」
「盗賊に何か私怨でもあんのか？」

「市民軍を指揮していたのは、お前だろう」
「……」
空気を読む力はあるようだ。ジフリザーグの行動、周囲の人間の雰囲気、それらを読んで統率しているのがジフリザーグだと判断したのだろう。
「お前を獲れば、制圧はぐんと楽になろう」
「そりゃーどうかな」
トゥルスではどうにもなるまい。視線は定めたまま、トゥルスを腰に戻す。その動きにモナ兵たちが一瞬身構えたが、鞘に収めたのを見て沈黙を守った。片手に持っていた剣を持ち替える。
「ギャヴァンは既に、俺の指揮下を離れている。……わかってんだろ」
「ヴァルス軍か？」
「ああ」
インプレスは尚も笑いを収めないまま、続けた。だがその視線に笑いはない。射るような鋭さだけがそこに宿っている。
「そうは思えんな。ギャヴァンに入り込んだヴァルス軍さえも、計画の一部としているのはお前だろう」
「……」
「牛の暴動、倉庫の爆破、兵力の投入。全てが連動しているからな。……ああ、そうだ」
そこでふいっと、インプレスは顔を背けた。背後、己の陰になる位置にいた部下に顔を向ける。
「土産を見せてやろう」
「土産……？」
インプレスの言葉に、兵士のひとりが何かを投げ出した。鈍い音をたて、僅かに液体を振り飛ばしながらボールのように地面を転がる。短いタイムラグを経てそれが何かを認知した瞬間、ジフリザーグの視界が一瞬完全に白くなった。心臓の音だけが、どくん、とやけに大きく響いたような気がする。

「……グランド……ッ……」
呟いた声が、周囲の物音に掻き消される。血気逸ったリグナードがショートソードを構えて駆け出そうとするのを、制しながらインプレスに視線を戻した。
「お仲間だろう」
「……そうだな」
イグニスとルーズはどうしたのだろう。無事、ギルドに戻ることが出来たのだろうか。胴を失ったグランドの頭部が、空虚な視線を無言でこちらに投げ掛けて来る。
脳裏を、痺れに似た痛みが駆け上がった。肌が粟立つのを堪え、奥歯をきつく噛み締める。ここでジフリザーグが取り乱せば、この場に共に留まっているゲイトとリグナードも同じ目に遭わせかねないのだから。
正規軍兵士、それを率いる将軍。正面から戦って勝てる相手ではない。考えるべきは、どうやってこの場から逃げ遂せるかだ。だが、生憎特殊な道具は既に品切れである。
「こちらがせっかく作成した攻城器が台無しになった。またいちから作り直さなければならないからな。破壊した人間に責任を取ってもらったのだよ」
言って、インプレスは微かに顔を後方へと向けた。顎をしゃくるような動きに、背後に控えた部下たちが剣を構えて展開した。剣を握るジフリザーグの手が汗で滲む。ゲイトがダガーを構えたのが、気配でわかった。
「当然、指示を下した人間にも責任を取ってもらおう」
その言葉が終わる前に、兵士たちが地を蹴った。襲い来る剣先を避け、巧みな剣捌きで相手取る。ゲイトのダガーが飛び、リグナードのショートソードが唸りを上げる。舞い上がる血飛沫に兵士が仰け反り、土埃が舞った。
ジフリザーグの剣がひとりの喉を貫き、返すその手で斜めから踊りかかる男の腕を斬り飛ばす。同時に反対側から襲い掛かった白刃

を、身を屈めてやり過ごして剣の柄をその顎に叩きつけた。その瞬間、足元がよろけた。

「くッ……」

「ジフッ……」

その隙を狙って、モナ兵の剣がジフリザーグの肩を切り裂いた。鮮血が振り飛ぶのも省みず、ジフリザーグの剣が相手の首に叩き込まれる。それを見届けることなく、襲い来る眩暈。

いい加減、体にきている。モナの襲撃からこっち、思案と緊張の中でずっと駆けずり回っているのだ。

新たなモナ兵が踊りかかり、ぶんっと頭を掠める刀身を辛うじて避けるが、髪が舞い、額に傷が走った。咄嗟に掴んだ土を立ち上がりながらその顔面に叩きつけ、目晦ましを図る。よろけたその体を蹴りつけて距離を開けたところに、別の刃が割り込んだ。

「お前の首は俺がもらおうッ」

インプレスが叩きつける幅広の剣身を、握るバスタード・ソードで受け止める。だがその斬撃の激しさに、指先が一瞬痺れた。手の平に伝わる振動に、握っていた剣が吹っ飛ぶ。舌打ちをしながら片膝を地について上半身を屈め、間髪入れず返された剣を、今度は後方に上体を逸らしてやり過ごした。そのまま地を蹴り後ろへ飛ぶ。手近に倒れて呻き声を上げるモナ兵を蹴りつけ、その手から剣を奪い取ることに成功した。

既に、呼吸は荒くなっている。

息をつくたびに、肩が大きく上下した。両手で諸刃の剣を構えながら、インプレスを見据える。その視界が、一瞬霞んだ。

（やべー……）

もう、こちらの体力が持たない。

ジフリザーグが疲労しきっていることを見て取ったのか、ゆったりとインプレスが近付いて来る。ゲイトもリグナードも、己が相手取っている兵士だけで手一杯だ。そうでなくても、こちらの方が人数が少ないのだから。何とか自分で片をつけなければなるまい。

両足を開いて腰を落とし、しっかりと正面に剣を構えながら、体がぐらつきそうになるのは止められなかった。視界の中で、インプレスが一瞬ぶれて揺れる。形を取ったと思ったら、もう一度。……ぐらついた視界の中で、インプレスの顔が一瞬よそへ逸れた。

（――？）

薄雲がかかったような頭の片の隅で、巻き起こる土煙を認識する。地面を揺るがすような振動。

「うわああ」

モナ兵の悲鳴が聞こえる。インプレスが、忌々しげに舌打ちをした。

「邪魔なッ……」

まだ興奮冷め遣らぬ牛が一頭、こちらへ向けて暴走してくる。既に松明の炎は消えているが、全身に切り傷を受けて尚、その大牛は怒り狂う元気を失わずにいた。

（避けらんねーよ……）

立っているだけで、精一杯になってきている。波に揺られているような頭の中で、牛が雄叫びを上げるのが遠く聞こえた。突如進路を変える。重なるように、煙幕が広がった。

（煙幕！？）

何かが起こったのだと気づいた時、ジフリザーグの腕を力強い手が掴んだ。久しぶりに聞く声が、ジフリザーグを現実に引き戻した。

「頼りない兄貴だ」

「――シンッ……」

「勝てない相手とは、戦わないことだな」

シンの黒い瞳が、ジフリザーグを見つめた。

「この隙に、逃げるぞ」

第2部第1章第18話　ギャヴァン市街戦《後編3》（1）

ギャヴァンにおける第二戦となったモナ軍と傭兵軍の戦闘において、その兵力差を思えばモナの失態は甚だしかった。

市民軍の策に翻弄され、闘う前から総崩れ状態だった彼らは、陣形を立て直す余裕もなく傭兵軍によって軍舎周囲からの撤退を余儀なくされたのである。

傭兵軍の戦い方は、実に巧妙だった。

相手が混乱状態でこちらの兵力を把握していないと見るや、市街と言う地形を利用して縦横無尽に隊形を変形させ、ヴァルス軍の総力をモナ軍に決して読ませることをしなかったのだ。

ゲリラ的に出没しては消えていく市民軍、軍舎から出撃して後背を守る自警軍の働きも大きかった。

ギャヴァンにとって、今回の戦闘における最大の戦功は、何と言っても捕虜の解放と軍舎付近の奪還だろう。現在は軍舎前の広場や通りには傭兵軍が布陣して、モナの干渉を許さない態勢を取っている。

軍舎の一室で目を開けたジフリザーグは、壁際の椅子で脚と腕を組んだ姿勢で眠っている義弟の姿を見つけた。

足元さえおぼつかなかったジフリザーグは、軍舎への入城を果たすなり崩れるように意識を失っている。誰かがここまで運んでくれたのだろう。

体を動かすと節々が痛んだ。だが、モナ兵に斬りつけられた肩傷は手当を受けた跡がある。痛いものは痛いのだが、治癒の魔法を使うような便利な人間はこの軍舎の中に存在しないので仕方がない。

痛みに顔を顰めながら、体を起こす。ベッドの上に上半身を起こしたところで、じっと目を閉じていたシンが、ふと目を上げた。

「目が覚めたか。相変わらず体力がないな」

その通りなので、思わず苦笑する。

「時間は」
「……3時を回ったところだな」
ちらりと時計に目をやって、シンが愛想のない声で答える。では自分は、3時間ほど意識を失っていたことになるだろうか。
「ゲイトとリグナードは、どうした？」
共に、インプレスの前から姿を眩ましたのは覚えている。リグナードはモナ兵から受けた深い傷で、半意識不明に近い重態だったはずだ。ゲイトがフォローしながら辛うじて、軍舎への帰還が果たせた。
「リグナードは手当を受けて休んでいる。生命に別状はないそうだ。安心しろ」
安心した。ほっと息をつく。
「ゲイトは元気なもんだ。今も傷を受けた捕虜のフォローを手伝って走り回ってる」
「そっか……」
「お前も黙って寝てろ」
とても心配しているようには聞こえないが、これでもひどく心配をしてくれていることをジフリザーグは知っている。事実、シンは良く気がつく。細かく他人に気遣いをしている証拠だ。感情表現が人一倍下手なだけで。
「……シン」
立ち上がったシンは、サイドテーブルに置かれた水差しに手を伸ばした。グラスに水を注ぐと、黙って差し出す。受け取って礼を述べながら、ジフリザーグはシンのシャープな瞳を見上げた。
「お前が俺の代わりに頭、やってみねーか？」
言葉の代わりに、ダガーが飛んできた。紙一重でジフリザーグの真後ろの壁に突き刺さる。
「……シンくん。俺、死にますけど」
「その程度、避けられずに死ぬなら死ね」
幾ら感情表現が苦手とは言え、他に表現のしようがなかったのか。

どこかで育て方を間違えたんだろーかと密かに所帯じみた悩みを吟味しつつ、グラスの水を口に運ぶ。怒りを微かに浮かべながら、シンが口を開いた。

「お前を信頼してついてきている構成員の前では、死んでもそんなことを口にするな」

『信頼』。

何と重たい言葉だろう。

自信があると言えば、嘘になる。自分の判断が、どこかで仲間を死に導いていないとどうして言えるだろう。

沈黙で答えるジフリザーグに、シンは短いため息をついた。

「何に迷ってるかは知らんがな。他の誰かなら正しい決断が下せると思うなら間違いだ」

この短い時間で失った多くの仲間の温もりが、消えない。

「ひとつ言えるのは、誰もお前が先代の息子だから従ってるわけじゃない。わざわざそんな理由で従ってやるほど暇人でもなければ従順でもない」

そこに込められた真意が、胸に迫る。

「ついでに言えば、お前が間違える人間だってことは全員が知ってるだろう。考えるだけ無駄なことだ」

「ひでー言い草だなあー」

思わず苦笑いを浮かべた。まあ確かにいつまでも愚痴っていたって仕方あるまい。

「シン、何でここにいる？」

「……最終地点の目処がついたからな」

言いながらシンは、先ほど投げつけたダガーを拾い上げ、片手で弄びながら壁際の椅子へと戻って行った。脚を組んで再び座る。

「そうか。じゃあ風の砂漠のダンジョンは、攻略したんだな」

シンは現在、ギルドが追っている財宝のひとつを担当している。大陸さえ選ばない節操のなさで散らばるダンジョンに眠る鍵。それらを集めてたどり着けるはずのどこか。

先代の頃から追い続けているそのクエストは、ジフリザーグに代替わりしてから一層真剣にその財宝の行方を追っている。ガーネットもまた、それを強く望んでいた。

シンが一度失敗して戻って来たのが、数ヶ月前。それから何度かひとりで探索に乗り出していたのは知っているが、いつだかギャヴァンに紛れ込んだある少年を追ったきり音沙汰がなかった。恐らく、そのままダンジョンの攻略に乗り出していたのだろう。

「船が必要だ。それに……」

ちらりとシンが、ジフリザーグを見遣った。

「ギャヴァンが戦火に巻き込まれていることは聞いていたからな。俺はこの街に心配ごとがふたつある」

「ふたつ？」

まともに問い返したジフリザーグを、シンがじろりと睨んだ。

「ひとつはお前に決まってるだろう」

ここでも俺かい、と言う呟きは口の中だけでしまいこまれる。

もうひとつ、と言うのはジフリザーグにもわかった。ガーネットにギルドを守らせている、その理由だ。

「いつ、出るんだ？」

「今すぐってわけにはいかないだろう。今は船が動かない」

それはそうだ。

「それに、俺だってギャヴァンのことは気にかかる。カタがついてからにするさ。どうせ全ての鍵は俺が持っている。他に攻略出来る奴はいないはずだろう」

「まあな」

焦ることはないだろう。前回のダンジョン――『3つ目の鍵』のダンジョンで、シンはパーティを失っている。誰かをつけてやらなければならないだろうが、現状ではそれも間々ならない。

「正体はわかったのか」

手の中でグラスを弄びながら尋ねる。腕を組んで壁に背中を預けたシンは、目線だけをこちらに向けた。

「どっちだ？」
「どっちでも」
考え込むような目つきでしばし黙り込んだシンは、ややして小さく頷いた。
「多分な」
「多分」
「会わせてみないことには本当にそうなのかはわからんとしか言えないが、まあ間違いないだろう」
その言葉に、息を飲む。問い返した言葉は掠れたものになった。
「……いいのか、このままで」
「ガーネットの守りが必要なんだろう」
「間違いないと言える根拠は？」
その言葉にシンが軽く肩を竦めた。
「『あいつ』に俺を騙す理由がないし、嵌めたのはこちらだ。……頭に馬鹿のつくお人好しだな。お前といい勝負だ」
「……褒めてるのかな」
「お前の耳には褒めているように聞こえるのか？」
「聞こえないけど、褒めていると思いたい」
「どちらにしたって、ガーネットも『あいつ』もいないここで議論したって始まらない。風の砂漠で別れてから、今どこでどうしてるかは知らないが、馬鹿じゃなければここに戻ってくるだろう。その時に考えるべきことだ」
「風の砂漠？じゃあ、そこまでは一緒に？」
「山脈越えだけだがな」
事情を知らぬ者が聞いても謎掛けのような会話を、打ち切るようにシンが立ち上がった。
「……今は、考えるな。ただでさえ要領の少ない脳味噌が爆発するぞ」
どうして素直に『今余計なことを考えて疲れることはない』と言えないのか。シンらしいと言えば言えるのだが。

「わーるかったな。中身の少ないおつむで」
「その分皺でカバーしろ」
「ジフリザーグッ？」
そっけなくシンが言い放ったところで、遠慮の欠片もない怒鳴り声と共に、ドアが勢い良く開いた。思わずぎょっとしてドアの方へ体を捻り、傷に痛みが走って激痛に呻く。
「うぅ～」
「ちょっとは考えて動きなよ、単細胞だね」
そんなジフリザーグに、シンに匹敵する容赦のない言葉を放ったのは、飛び込んできた女性だった。癖のない黒髪を2つに分けて縛り、紫がかった深い藍の瞳がきらきらと生気に溢れて輝いている。
「……メアリ、俺、怪我人」
「知ってるよそんなこと。手当てしてやったの、誰だと思ってんの？」
自警軍介護班として軍舎に逗留中のメアリは、ギャヴァン武器商人のひとり娘だ。武器の知識は豊富で、扱いもそんじょそこらの男よりは遥かに長けている、戦場の介護人としてはこの上なく頼もしい相手ではあった。
自警軍の介護班は全て女性で構成されており、いずれも多少の武術の心得があるにはあるが、その中でもメアリは戦力として数えることさえ出来そうである。
一見か弱いその容姿からは想像がつかない巧みな剣捌きと弓矢の扱いは、目を見張るものがある。そして中身も、その腕前に匹敵する男勝りだ。ジフリザーグとはギャヴァン戦以前から武器屋を介して面識があり、特別な間柄だった覚えはないものの、それなりに親しい。
「介護班だからね。脆弱な体力の持ち主であるギルドの頭の様子を見に来てやったんじゃないのさ」
……はずである。
「脆弱とか言うなよ」

「脆弱でしょうが。もっと鍛えなよ」
うるせぇ、と口の中で呟いたクレームはしっかり聞こえていたらしい。じろりと一睨みされて、ジフリザーグは小さく舌を出した。
シンは、『触らぬ神に祟りなし』と言わんばかりに他人ごとの顔で黙している。
「怪我人の様子はどうだ？」
「あんた？」
「俺はいーんだよ俺わッ」
怒鳴るジフリザーグを見て、メアリは小さく笑った。覗き込むようにベッド間近の椅子を引き寄せる。
「それだけの元気があるなら、大丈夫そうだね」
「……あ、ああ、まあ……」
いつもこうして微笑んでいれば、その笑顔に間違えて騙されることもあるかもしれないが。
「上は、てんてこまいだよ。怪我人の数に対して、介護人の人数が足りてない。おたくの団員に手伝ってもらっても、手一杯だ」
「そうか……」
グランドの、空虚な視線が蘇る。
「……物資は、足りてるか」
「何とか」
「重傷者は、どのくらいいる」
「……２００、ってトコかな。自力で動けないほどの……『重傷者』は」
その中に、死者の数は入らない。
「軽傷者は」
「そんなの数えてたらきりがないよ。……あんたも、一旦は頭を休めなよ。疲れちまうじゃないの」
「……ああ」
口だけで、おざなりな返事をする。それきり黙ったジフリザーグに、メアリは吐息を漏らして立ち上がった。グラスをサイドテーブ

ルに置き、ころんと横になる。そのまま顔を、腕で覆った。
「ま、今は小休止だよ。……後でまた様子を見に来るからね」
「俺はいい」
「ジフリザーグ……」
「俺の様子を見る暇があるなら、他の奴らに手を回してやってくれ」
「……」
顔を覆ったまま呟くジフリザーグに、メアリは小さく頷いた。
「そう。わかった」
「頼んだ。……お前たちしか、負傷者を救ってやれない」
「うん。知ってる」
その言葉を残し、視界を塞いだままのジフリザーグの耳にパタンと静かに戸が閉じられる音が聞こえる。やがて、壁際からシンが移動してくる気配がした。
「……腹は減ってないか」
言われてみれば、走り回ったわりには食べ物を口にしていない。
「減った」
視界を覆う腕を外し、あっさりと肯定したジフリザーグにシンがようやく笑顔を覗かせた。ドアに手を掛ける。
「大したもんがあるわけじゃないことは知ってるだろうが……待ってろ。何か持って来てやる」
意外と苦労性で義理堅い義弟の背中を見送って、ジフリザーグはベッドの中から天井を仰いだ。
……ことが多い。
だがシンの言う通り、全てが再び動き出すのはギャヴァンに安全が戻ってからだ。
街が、再び動き出してから。
（ちゃんと、弔ってやらなきゃな……）
その為には、生き残らなければならない。
視線を向けた小さな窓の外――暗く広がるその向こうに、幾つもの笑顔が、浮かんでは消えた。

モナが再び攻撃を仕掛けてきたとの報があったのは、それからおよそ2時間後のことだった。早朝5時になろうかと言う頃である。

疲労しきっている体でうつらうつらしていたジフリザーグは、地を揺るがす低い音と振動で目が覚めた。そばについてやはり半寝状態だったらしいシンとゲイトも同様に飛び起きる。

「何だ！？」

「見てきます」

いちはやくゲイトが部屋を飛び出す。ジフリザーグも、ベッドから跳ね起きて装備を調えた。間もなくゲイトが駆け戻って来る。

「モナが攻めてきてますッ。今傭兵軍が応戦、自警軍が援護するために武装準備を整えてますッ」

「行こう」

足早に部屋を出る。肩の傷が熱い痛みを放った。顔を顰めながら、通路を走り階段を駆け降りる。途中のテラスから外を覗いてみるが、軍舎を取り囲む背の高い塀で外の様子までは見てとれない。ただ、戦闘音と怒声が風に乗って耳に届く。

「今何時だ！？」

ここから見えるだけでも、空は重い雲に覆われていた。もしかすると一雨来るかもしれない。とは言っても、外は仄かに明るさを取り戻して来ている。喧噪に紛れて聞こえないが、静かな朝なら鳥の囀りが耳をくすぐることだろう。

「多分、5時前じゃないか」

「んな朝から元気なこった」

シンの答えに毒づきながら、モナとて元気が余っているわけじゃないことくらいわかっている。選択肢がないのだろう。

階段を駆け降りると、フル装備に身を固めたボードレーに出くわした。ジフリザーグを見て目を丸くすると、口元をほころばせる。

「随分元気になったようじゃないか」

「ならざるをえねーだろ。出るのか」

問うと、ボードレーは無言で頷いた。
「俺も行く」
ジフリザーグの申し出に、ボードレーが小さく首を横に振る。
「ジフはここに残っててくれ」
「何……」
反論しかけたジフリザーグに、ボードレーは小さな笑みを投げた。
「国軍はもう間近まで迫っている」
「……」
「到着までに要する時間は、ほんの僅かだ」
見開いた瞳に、自警軍隊長が小さく頷くのが見えた。
「誘導だけ、頼む。後は、国軍に任せよう」
よくやった、とボードレーの手がジフリザーグの肩を叩いた。
もちろん国軍が来たからと言って本当に任せっ放しと言うわけにはいかないが、それでも総指揮は国軍将軍が執ることになる。肩の荷が下りた、と言う奴だ。
「わかった。間違いなく、国軍を街中に招じ入れよう」
「頼んだ。防護壁付近にも戦乱は及んでるからな。開門するわけにはいかんようだ。気をつけてくれ」
その言葉に、つい苦笑が漏れた。戦場に出る人間が、城内に残る人間にかける言葉ではない。
「言うべき人間が逆だろ？」
ボードレーも、つられたように笑顔を見せた。
「そうだな」
それから、腰の剣を確かめる。準備を整えた自警軍兵士を振り返った。響く、堂々とした声。
「行くぞ」
「ボードレー」
咄嗟に、その背中に呼びかけていた。肩越しに、威厳を漂わせた顔が振り返る。
年は違えど、共に自警軍リーダー、市民軍リーダーと言う立場で

正規国軍兵士に挑み、守った。
彼は、間違いなくジフリザーグの戦友だ。
「……再会の酒場で」
「楽しみにしている」
――ボードレーの笑顔を見た、最後だった。

第2部第1章第18話　ギャヴァン市街戦《後編3》（2）

◆◇◆

街の南、港付近まで撤退を余儀なくされたモナ軍の被害は甚大なものだった。2万2千の兵は、市民軍との初戦、軍舎の攻防そして傭兵部隊との相次ぐ戦闘で1万8千にまで減少している。

あと少しで、ジフリザーグを仕留められるところだったインプレスの悔しさは尋常ではない。

奴を押さえておけば、多分全てを把握している人間がいなくなるだろうに。

「行軍中のヴァルス本陣はどうしてる！？」

いらいらしたように怒声を上げる総司令官に、将官が慌てて報告をした。

「は。この速度では恐らく数時間後には到着するかと……」

「軍舎付近の様子は」

「ヴァルス軍が布陣しています」

「侵入しているヴァルス軍の総勢力はどのくらいだ」

「それが……」

将官が口ごもる。

軍舎近辺に布陣しているヴァルス軍は、恐らく5千が関の山だろう。だが軍舎内部にいる総力はわかったものではない。大体彼らがどこから湧いて出たのかわからないのだ。と言うことは、目に見える彼らが全てではないかもしれない。

曖昧な事実が、将官を不安に陥れ、口を重くさせていた。

「くそ……」

このまま引き下がるわけにはいかない。これまでを思い返しながら挽回策を思案するインプレスの脳裏に、案が閃いた。

「……地下水路だ」

市民軍捜索においては芳しい成果が得られなかった、街中を走るもうひとつの道。
「は？」
「軍舎とて、水は必要だな？」
「はい……」
「地下水路から、必ず軍舎へ侵入出来る道筋がある。調べよ。同時に兵の編成だ。数は……5千で良い。道筋がわかり次第、投入だ。残った兵は全て、表から総攻撃を仕掛けさせろ。侵入の動きを悟らせるな。攻城器はどうなってる」
「新たに作成させてます」
「出来た奴から並び立てていけ」
「はい」
インプレスの指示に従い、急遽３００人がルート確認のために派遣された。一方で精鋭が選び抜かれ、工兵と混成された地下水路を辿っての軍舎攻略部隊が編成される。残った兵士たちも編成がし直され、ヴァルス軍に仕掛ける総攻撃に備えられた。
夜明けは、遠くない。
「司令官殿！！」
待ちわびた報告がもたらされたのは、傭兵軍への敗退から4時間が経過した頃だった。
「軍舎へのルートが確認されました！！」
「よし。全軍号令だ。総攻撃を開始するぞ」
インプレスの命令に、伝令が飛ぶ。
「各班号令！！」
モナの行動は迅速だった。この戦闘の勝敗如何で、ギャヴァン侵攻の結果が出ると言っても過言ではない。本陣到着前に軍舎陥落が果たせれば、従来の予定に従って籠城戦に持ち込むことが可能になる。
「襲撃だあーッ」
短期戦に持ち込まなければ、もうモナ兵が持たないだろう。早く

ことを終わらせて兵に休養を取らせなければ、籠城に持ち込んだ後に精神的に参ってしまう可能性すらある。僅かでも良い。ヴァルス本陣到着前に、時間がほしい。

既に精神的に切羽詰まっていると言っても過言ではないモナ軍は、勇猛だった。ここで負ければ、船上で耐えた日々から全てが無に返る。

いくらヴァルス軍が強いとは言え、行軍からそのまま乱戦明け、それも正規軍ではなく傭兵部隊とあれば、死に物狂いのモナ兵に苦戦した。ただでさえ兵力差は未だ歴然としているのだ。

「『火炎弾』！！」

時折、斬撃の合間を縫って、僅かな魔術師兵から魔法が疾ぶのも痛い。通常の兵士は魔法に対し、対抗する術を持たない。

「……ふん。はめられたか」

戦闘を見守って状況を見極めていたインプレスが、呟く。傍らに控えた将官が、目を瞬いた。

「はめられたとは？」

「当初の予想から、ヴァルスの状況は何ひとつ変わっていないと言うことだ」

「……？」

「要塞から先行部隊がいるとの報は、最初から入っていたろう。……奴らが、そうだろうな。潜伏していたのでも湧いて出たのでも、増して当初の予想より兵が増えたのでもない。予定通りだ」

「では……」

「敵兵力は、報告を受けた通りの５千余りと見て間違いないだろう。それと市民、自警軍。……総力で、兵力差は未だ１万近くあるはずだ」

にやり、と日に焼けた口元に笑みが刻まれた。

「勝つぞ」

「は、はい！！」

「敵は兵力を温存してなどいない！！」

グレートソードを振り回し、ヴァルス軍の血煙を周辺にまき散らしながら、インプレスは味方を鼓舞すべく叫んだ。
「ヴァルスの誘導に踊らされるな!!怯むべき理由はどこにもない!!」
戦場において、インプレスは決して無能な指揮官ではなかった。次々とヴァルス傭兵の命を剣の滴と変えながら戦中を突進するその姿は、敵には恐怖を、味方には勇気を湧き起こした。
「ここにいる兵力がヴァルス軍の全てだ!!我々は勝てる!!」
侵攻軍司令官の狙いは的確だった。疲労と不安で淀みがちだったモナ軍の暗雲が、目に見えて払拭されていく。
ややもすると、このまま正面突破で攻城することさえ可能かもしれない。
グレートソードを伴ったモナの死の旋風は、前進の代償をヴァルス傭兵の命で支払いながら尚も声を張り上げた。
「豊穣は、目の前だ!!」
「残念ながらそれは、ギャヴァン市民が日夜削って築いた実りだ。おめおめと奪われてやるわけにはいかんな」
「何?」
落ち着きのある低い声が、横合いから投げつけられた。振り返りざまグレートソードを叩き込むが、強い衝撃と共に弾き返される。
「……やるな」
「ありがたく受け取っておこう」
雑魚ではなさそうか。
突進をやめて、インプレスは血濡れた刃を一振りした。白刃を染めた鮮血が振り飛ぶ。
対峙する男は、声と同様落ち着きのある風体の持ち主だった。年の頃は４０前後か。剣を握る姿が馴染んでいる。
「ギャヴァン侵攻部隊総指揮官インプレスだ」
剣を油断なく構えながら名乗ったインプレスに、男は小さく微笑した。

「名乗るほどの者ではないのだがな……」
言いながら、剣を構える。美しい構えだった。
「ギャヴァン自警軍隊長……ボードレー」
その言葉に、インプレスは目を見開いた。
「ほう。ではギルドの長とグルを組んでいたのはお前と言うことになるか」
「……」
ボードレーはそれ以上口を開かない。腰を低く落とし、重心を定める。インプレスも、それ以上言葉を紡ぐのをやめた。
沈黙が流れる。
「！！」
先に動いたのはボードレーだった。力強く足を踏み込み、剣を真横に一閃させる。鋭い切り込みだった。風の悲鳴を一瞬耳にしながら、大剣を振って受け止める。ぶつかり合う刃と刃が、儚い火花を散らした。ボードレーの剣を弾き返したその手を返し、胴に狙いを定めて打ち込む。強く踏み出した足の下から土が舞い上がった。
５合、１０合と剣を打ち合わせていくうちに、少しずつ優劣が明らかになっていく。明らかに、足下の土が抉れて行くのは、ボードレーだった。繰り返される応酬に、顔や腕に血が滲む。額の汗が、血と交じり合って振り飛んだ。
「どうした！？」
次第に防戦に徹していくボードレーに、インプレスは余裕を取り戻していった。このインプレス相手に、ここまで打ち返したのは褒めてやろう。確かに、雑魚ではなかったようだ。だが……。
「見所があると思ったのは、私の買い被りか？」
所詮自警軍は自警軍か。正規軍とは、格が違う。
嘲笑と共に放たれた強い切り込みを辛うじて受けながら、ボードレーの足が地を削った。後方へ僅かによろける。
「はッ！！」
短い気合の声とともに、インプレスの大剣を避けたボードレーの

剣が低い位置に繰り出される。腹部を狙った渾身の一撃だった。
その一瞬、妻の、子の顔が、その脳裏に浮かんで消えた。
「ふんッ」
嘲笑と共に、切り込んだ刃が盾で弾かれた。その衝撃で、剣が弾け飛ぶ。次の瞬間にはインプレスの右手から鋭い突きが繰り出され、咄嗟に避けたボードレーは完全に態勢を崩した。続けざまに、襲う刃。――もうこれ以上避けきれない。
「貴様の次は、ギルドの長だ！！」
空気を切り裂く重い唸りと共に叩きつけられる刃を避ける術は、ボードレーにはなかった。
（――！！）
首筋に感じた熱い衝撃を最期に、ボードレーの意識は永遠に途絶えた。

◆◇◆

ズゥウゥンッ。
「……何だ？」
軍舎から転射設備を使用しての穹での射的と、火矢の人員配置、攻城器による砲弾で受けた破損の補修を指揮して走り回っていたジフリザーグは、足下から感じた低い振動に顔を上げた。そばにいた何人かも同様、顔に緊張を走らせて天井を仰ぐ。
音は、断続的に続いている。
被せるように階上からばたばたと足音が聞こえた。現在上のフロアは、怪我人の介護フロアとして使用されている。
「ジフリザーグ！！」
ことの次第を確かめようとして走り出しかけたジフリザーグは、背後から呼び止める声に足を止めて振り返った。
「メアリ」
「何の音！？」

「まだわかんねー。今確かめてくるから、お前は上で待ってろ。テッド、メアリと一緒に上に行ってくれ」
「わかった」
そばにいた構成員たちを介護班及び負傷者の護衛に割り当てると、改めて駆け出す。階段を駆け降りる途中で、グローバーと数人の市民兵に遭遇した。
「何の音だ!?」
「まだわからん」
「くそッ……」
ろくでもないことが起こっていなければ良いが。
足早に階段を駆け降りる。その背中にグローバーたちが続いた。物音と振動はまだ続いている。
「どこだ!?」
「1階か地下だろう」
近づくにつれ、振動は激しさを増していく。それに被せるように足音と戦闘音が聞こえてきた。幾人かの叫ぶ声。
(ちッ……)
嫌な予感は現実のものとなったようだ。内部の人間だけでは、戦闘音など起こるはずもない。
駆ける足を緩めることなく、剣を抜き放つ。誰かがこちらへ向かって駆ける音が聞こえた。
「ジフ!!」
「どうした!?」
「モナがッ……給水路を辿って……!!」
「くそッ……そのまま上に行って警戒と増援呼び掛けてくれ。数はどのくらいだ?」
「まだわかんねえ!!何とか食い止めようとはしてるんだがッ……」
「わかった。伝令だけ、頼んだ」
言って再び駆け出すその前方から、人の気配が近づいてきた。市民兵ではありえない甲冑の音。

「賞金首ッ！！」
「しつけぇッ」
角から飛び出すなり叫ぶモナ兵を一刀する。重ねるように襲いかかった右手の刃を避け、兵士に蹴りを入れた。だがその後方から新たに駆けつける足音に、市街での初戦を彷彿とさせられる。
「ジフ！！」
それを更に追うように現れた市民兵が、挟まれた形になったモナ兵に切りかかりながら怒鳴った。こちらはこちらで兵を相手取りながら、奥へ向けて怒鳴る。
「ゲートは！？」
「あちこち下ろしてるが追いつかねえッ」
最重要事項はここを切り抜けることではない。モナ兵が侵入するのを食い止めることだ。
襲い来る敵兵に剣を振るいながら、頭の中で軍舎の地下を思い描く。
侵入口は、地下水路だろう。懸念はしていた。護りも強化してあったはずだ。だが、ここに人がいる以上、必要となる水源に対する護りには限度がある。
その為、軍舎そのものにも水路からの侵入に対する備えとしてゲートが幾つか設けられてはいるが、何分手動で対応するしかない。不要と思われる通路は予め封鎖してあるが、それでも幾つかは残さざるを得ない。
（開いている通路は……）
考え、その通路のひとつに思い至った時、愕然とした。確か、最上階まで一直線に続く階段へ繋がる通路は開いている……！！
介護には水の確保が必要な為だ。
「グローバー！！」
後方から響く増援の叫びを耳にして、ジフリザーグは相手取っていたモナ兵を切り捨てながら怒鳴った。
「ここ、任せて良いか！？」

「おお！！」
返答を受けて、踵を返した。介護している部屋までは、こちらの方が近い。どれほどのタイムラグがあるかわからないが、間に合うかもしれない。
剣を振り、血飛沫を払いながら再び階段を駆け上がる。
モナ兵は、乗員数の関係からか、戦場につきものの娼婦を同行していない。そしてこの街に残された女性陣は、自警軍介護班のみ――見つかれば末路は知れている。
（じゃじゃ馬でも、一応は女だからなッ……）
取り立てて目を引く美人ではないが、好みによっては可愛く映ることもあるだろう。加えての鼻っ柱の強い武器商の娘は、余計な言動で真っ先に餌食になりかねない。
「ジフ！？何があった！？」
「モナが侵入だ。ケイン、手当たり次第、地下への援護を呼びかけてくれ。シュトレイド、一緒に上に来てくれるか」
途中で遭遇した市民兵と合流して階段を駆け上がり、最上階まで辿り着いた時、悲鳴が聞こえないことにひとつ安堵した。とりあえずモナ兵に先駆けて辿り着けたらしい。まだ、阻める。
「メアリッ」
剣を片手に握ったまま、通路を駆け抜けて怒鳴る。介護に当てられた奥に程近い部屋に飛び込むと、苦痛の呻きを縫って視線がこちらに集まった。
「警戒態勢だッ。モナ軍が地下水路より侵入中！！一部はこちらへ向かっている可能性がある！！全員奥へ退避、錠をかけてバリケードをはれ！！」
介護に当てているこの部屋の更に奥には、ゲートが下りる部屋がある。狭く、環境が余り良くないので、いざと言う時の避難所とするべくここを負傷者たちの部屋に当てておいた。
途端、負傷者たちが喧騒に包まれる。介護に当たっていた者たちや護衛をしていた者たちが慌しく移動の準備を始めた。それを見て、

階下から共に上がってきた市民兵たちを振り返る。
「シュトレイド、ここ、頼んだ。……イース、ボードヴィル！！」
護衛に当たっていた者たちの中からギルドメンバーの姿を探し、怒鳴る。ジフリザーグの声に応じて、２人がこちらへ駆けた。
「ちょっと一緒に来てくれ。まだゲートを閉められるかもしれない」
「ここはどうしたら良い！？」
血相を変えて、メアリや他数人の介護班の女性が駆けつける。
「ギルドの奴に、ここの増援も声をかけさせろ。重傷者を可能な限り奥の部屋へ。……何とか、ここに来させないよう努力はするさ」
「ジフリザーグッ」
踵を返すジフリザーグの言葉に、メアリが切羽詰った瞳を向けた。
「……信じるよ」
安心させるよう小さく笑いを残し、通路を駆け出したジフリザーグにイースとボードヴィルが従う。
下へ続く階段に向かって幾らも経たないうちに、硬質の音が近付いてくるのが聞こえた。階段に到着するまでに要した、ジフリザーグとモナ兵のタイムラグが埋まったらしい。間一髪で、負傷者たちの避難に間に合ったと言うわけだ。だがさすがに、ゲートの封鎖までは手が回らなかった。
何とか、ここまで侵入してきたモナ兵を駆逐せねばならない。
「塞き止めるぞッ」
剣を構えてモナ兵に切り込みながら、怒鳴る。イース、ボードヴィルも、それぞれ兵を相手取る金属音が聞こえた。人数は先方の方が多いが、階段と言う場所柄、幅はそれほどない。広がることが出来なければ、人数差はそれほどハンデとはならない。但し、ひとり頭の相手取る人数の負担は跳ね上がる。
階段を駆け上がってくる最初にひとりを蹴り落とし、続けざまに別の兵士に剣を振り翳す。別の角度から襲ってきたモナ兵に、イースの剣が襲い掛かった。１人、２人と傷を受けてバランスを崩すモナ兵が、味方を巻き込んで転がり落ちる。

左から水平に襲う剣を剣で弾き返し、そのまま腹に蹴りを叩き込んだ瞬間、ジフリザーグの剣が折れた。いとも簡単にバランスを崩した兵士が、またも味方を巻き込んで階段を転がり落ちていくがそれには目もくれず、視界を掠めて弾け飛んでいく切っ先に、折れた下半分を新たなモナ兵の首根に叩きつけてその手から剣を奪い取る。

ようやく上まで押し寄せてきていた敵兵をひと通り片づけて階段を駆け降りるが、下り階段のその先から、またも甲冑の音と人の声が響いた。新手だ。

……こちらに侵入しているモナ兵がどれほどいるかはわからないが、この階段は一本道だ。片付けながら階下まで辿り着ければ、今からでもゲートを封鎖することが出来る。

封鎖出来れば、こちらからの侵入は警戒しないで済むようになる。

「信じられちゃったからな。食い止めるぞ」

重なる戦闘に開いた傷から流れ出る血も顧みず、ジフリザーグは階段を駆け降りる勢いを緩めることなく、再び剣を構えた。

第2部第1章第19話　ギャヴァン市街戦《後編4》（1）

戦いの喧噪から離れた街の一角を、密やかに移動する2つの人影があった。共に大柄とは言えない。

「どうだ？」

「行け……そう……かな？」

前方のゲイトから返された頼りない返事に、シンは軽く息をついた。

「はっきりしろ」

「あ、待てやばい」

その言葉に耳を澄ませると、微かな物音が確かに聞こえるようだった。戦闘中とは言え、やはり防護壁付近の警戒に怠りはないようだ。

ヴァルス要塞軍到着の報が入ったのは、モナが再戦を挑んできてから半刻も経った頃だ。軍舎防衛に駆けずり回っているジフリザーグに代わり、シンとゲイトが誘導爆破の為に戦渦を抜け出したのだった。

若いながらも、長の信頼を勝ち得ている有能な2人である。

防戦準備段階でこの街にいなかったシンは、誘導爆破箇所を説明以上には知らない。

「まだ先か？」

その問いに、ゲイトが難しい顔をした。

「まだ先だ」

複数の足音が近づいてくる。身軽に塀を越えて木の上の人となったシンに続いて、ゲイトも葉陰に姿を隠した。眼下をモナ兵が足早に通り過ぎる。それと同時に、防護壁の向こう――ギャヴァン市外から、轟音が上がった。オレンジ色の光が一瞬、白み始めた空を焦がす。

「……来た」

要塞軍だ。
ぐずぐずしている暇はない。今頃モナは、ヴァルス軍のギャヴァン包囲に焦っているだろう。その焦燥に乗じて、要塞軍をぶつけたい。
「ちッ」
小さく舌打ちが漏れた。思うようにはいかないようだ。慌ただしい足音と共に複数のモナ兵が駆ける姿を確認する。こうも、爆破地点を徘徊されては身動きが取れない。
「爆破に大した手間は取らないんだな？」
懐を確かめながら念を押したシンに、ゲイトが頷いた。
「取らない」
良くもまあ爆破物が見つからなかったと思うが、イグニスと街人の思案の結果らしい。今後の街の修復、爆破物の作成にかかる費用や物資の面を考慮した結果、誘導爆破の為の発破は『防護壁内部』に設置されたのである。
一度、建築業者らが必要部分の壁を解体、イグニスが爆破に必要となる内部の空気容量及び爆破範囲に対する必要設置個所を計算し、内部に爆破物を埋め込んだ上で再構築したのだった。事前に市街戦が予想されてこそ行えた処置だ。
これにより、ヴァルス軍は市街侵入の為に必要以上の防護壁崩壊を招かずに済むし、砲弾及び修繕費の節約にもなる。強固な防護壁も内側から粉砕すればもろい。これを外側から本気で破壊しようとすれば、数倍の爆破物が必要となる。
更に、再構築されていることで倒壊しやすい造りにも出来る上に、モナの警戒を招かない。防護壁が破壊されていれば修繕してしまうだろうが、健在であれば必要以上に手を加えることはない。
後は、防護壁下方からツタを装って伸びている導火線から、接着されている『炎の種』を発火させてやれば良い。……のだが。
「ゲイト、爆破の方を頼んで良いか」
「え？うん……どうする……」

「こっちで引きつける」
ゲイトが目を剥いた。
「引きつけるって！？」
こういう能動的な緊張態勢の中なら、人は動きのある場所をめがけて殺到する傾向にある。対応しなければならないという強迫観念に駆られるからだ。
だとすれば、何か目を引く動きさえ起こせれば、この辺りをうろついている兵士たちはそちらに殺到する可能性が高い。もちろん全部と言うわけにはいかないだろうが、それでも多少は手薄になるだろう。ゲイトだってギルドなのだから、後は自分で対応してもらう。
「閃光弾がひとつと……煙幕が残りひとつ……か。何とかなるだろう……」
ダンジョンでふたつ見つけた閃光弾は、ひとつをジフリザーグにあげてしまっている。
「けど」
「逆に言えば、これが限界だ。こいつらを使いきる前に必ず何とかしてくれ」
ゲイトがふっとため息をついた。
「頭と兄弟だよな……考えることが似てる」
昨日モナ兵を引き摺りまわして閃光弾で逃亡したと言うジフリザーグの話を思い出してゲイトが言うと、その発言にシンは心の底から嫌な顔をした。尤も、ジフリザーグは引き付けたくて引き付けたわけではなかったが。
「あんな考えなしと一緒にするな」
「そっくりじゃん」
「血縁関係はない」
「育った環境の問題だろ」
ゲイトより更に幼くしてギルドで育てられたシンは、半ばジフリザーグに育てられたと言っても過言ではないのだから、望むと望まざるとジフリザーグの影響を多大に受けていることには間違いない

だろう。
「……じゃあ頼んだ」
言って、シンは音も立てずに地面に降り立つ。『あんな考えなし』とは言ったが、シンとてこの行動に具体的な後先があるわけではない。ただ他に手段がなかっただけのことだ。
現状、起こせる騒動で思い浮かぶのは光と音。
（音……）
ジフリザーグがイグニスにやらせたように、何らかの爆発を起こすのが最も手っとり早いのだろう、とは思う。警戒心を呼び起こすには最適だ。だが爆破物など持っていないし、たったひとりで可能と言ったら、何があるだろう。
（この辺りには、何がある？）
街の中心部を少し外れた、と言って決して郊外ではないのだが、事業者や組合、寄り合いなどがこの辺りには集中している。
（……そうか）
当たりをつけて、物陰に身を潜めながら歩き出す。この先、家や建物が途切れて広場になっている。
気配を消したまま目的に到着したシンは、身を潜めて辺りの様子を伺った。喧騒があちこちから流れてくる。軍舎付近での戦闘音、防護壁外のヴァルス軍の威嚇、そしてそれに対応しようと走り回るモナ兵。
一見して、ただだだっ広く広がる空き地であるここには、モナ兵の姿はないようだった。見回りはもちろんしているのだろうが、逗留してまで見張る必要性がないと判断したのだろう。事実、こんなところに身を潜められる場所はさしてないし、僅かに身を隠せそうな場所でも人数の幅が限られる。空き地の最奥――加工前の木材がロープで束ねられて積まれているその裏だ。
シンがここを訪れた目的でもあった。
辺りに気を配りながら、空き地へ身を滑り込ませる。抜き出した数本のダガーが、空に立ち込める厚い雲の隙間を縫った僅かな日の

光を受けてきらりと反射した。木材置き場に近付き、目を細める。曇天らしい空は、まだ明け方と言うことを除いても、暗い。が、狙いを定めるには十分すぎるほどだ。

「……」

どこを狙うのが効率的かしばし眺め、一瞬後にシンの手から立て続けに全てのダガーが放たれた。と同時に後方へと跳びながら閃光弾を叩き付ける。

ガラガラガラッ……！！！

正確に跳んだダガーが、木材を繋ぎ止めるロープを切り裂いた。戒めを解かれた木材は、重力に従って己の重みでバランスを崩し、激しい物音と木屑、埃を舞い上げながら転落していく。それと重なるように、目も眩むような閃光が走った。

ドゥゥゥゥッ！！！！

上から次々とぶつかり合いながら転落していくその轟音は、予想以上のものだ。加えて走った閃光は、かなり目立ったものになったのではないだろうか。

駆けつけてくるモナ兵と遭遇してはたまらない。こちらはひとりだ。素早くその場から引き下がろうとして、舌打ちが零れた。空き地へ続く道の右からも左からも、複数の足音が聞こえてくる。

（挟まれたか……）

あれだけ盛大に轟音と閃光を放っていれば、道理と言うものだが。素早い対応に感謝する気にさえなれない。

通りへ戻るのは愚策と見なし、ダガーを数本抜き出して片手に構えながら踵を返した。まだもうもうと埃を舞い上げる木材の方へと駆けて行く。身を潜めてやり過ごせればそれで良しだが、そう甘くはないだろう。捜索をしないわけもない。

木材の陰へと飛び込みながら、目の前に立ちはだかる塀を見上げた。この裏は、木材の加工場だ。２．５エレ（４メートル）ほども高さがある塀が聳えている。いくら身軽とは言え、足場もなしに乗り越えられる高度でもない。

足音が接近してきた。耳で、人数を数える。――7、8……14……18人。

「何者だ!?」

「まだわからんッ」

「その辺に潜んでるかもしれない!!探せッ」

怒鳴りあう声が空き地の入り口から聞こえてくる。

腹を決めて、駆けて来る足音に立ち上がるシンの頬を、ぽつりと雫が濡らした。ふっと空を見上げると、ぽつり、ぽつりと、まだ間遠に雨が降り始めたところだった。親指で水滴を弾き、兵士たちに意識を戻す。物陰からダガーを飛ばし、先頭の兵が喉から血を噴き上げながら仰け反るのを視界の隅で認めてから改めて塀を見上げた。

『足場がなければ乗り越えられない』――逆に言えば『足場があれば乗り越えられる』。

そして足場は、ある。

反動をつけると、自分が先ほど崩壊させた木材に勢い良く足を掛けた。バランスの悪い足場が崩れる前に三角飛びの要領で塀に取り付き、更に蹴り上がる。塀の天辺に手を掛け、両腕で体を引き上げた。

「いたぞッ!!」

「逃すな!!」

その声と共に空を切り裂く羽鳴りが幾つも聞こえた。弓箭兵がいたらしい。矢が塀に突き立てられる硬い音が後を追うが、その時には既にシンは塀の裏側へと身軽に姿を消していた。

「反対側だッ」

伸び放題の草をかき分け、加工場の敷地を駆け抜ける。反対側の塀をも乗り越え、通りに降り立つと角を曲がったその出会い頭に兵士と遭遇した。軍舎付近で戦闘が起こっている関係から、こちらに手が回る人員がそれほどいるとは思えないが、それでもヴァルス要塞軍の到着に伴って増加しているようだ。

「あ……」

兵士が口を開くより早く、ダガーをその喉元に一閃させる。血飛沫が上がるその様子を視界の隅に留めて尚も駆け出しながら、ふとキサド山脈での出来事を思い出した。

『レガード』に良く似た容姿を持つ『お人好し』。

――シンッ……

――……人を殺すことが、俺は、本能的に許容できない……

シンが『銀狼の牙』の頭ヘルの首を掻き切った直後のことだ。

自分の命を餌にされ、それを知りながら「信じてくれてるんだと思う」と笑える神経がわからない。

あんなふうに考える奴には初めて会った。お人好しだと呆れる反面……あの、咎めるではない、悲しい眼差しが胸に刺さって消えない。

（だからって……）

駆ける前方から、また新たな足音が聞こえた。曲がるのを中止して分岐路を駆け抜ける。こちらはひとり、モナにとっては大した脅威ではない。「まあ、良い」と諦めてしまわない程度に、出来るだけ引きずり回さなければならないことを考えれば、完全に姿をくらますわけにもいかない。

通り抜けざまに、剣を翳して踊り掛かるモナ兵にチャクラムを叩き込んだ。弾け飛ぶ首。血濡れた投擲道具を片手で受け止める。

（殺らなければ、殺られる……）

この街の、今の有様を見たら……あいつは何と言うだろう。

また、悲しげな目をするのだろうか。

（しつこいな……）

後方から追う音は、まだ続いている。再び、ずしん、と重い地鳴りが響き、北の空にオレンジの火花が散った。ヴァルス軍の威嚇に、後を追うモナ兵の間を動揺が走る。戻るべきかシンを追うべきか、迷っているのだろう。

誘導爆破はまだ成功していない。今戻られては困る。と言って肉迫されても困るが。

（ゲイト……ッ）

急いでくれ……！！

内心祈りながら、前方からの新たな足音に気づき駆ける速度を緩める。完全に挟まれた。前方から現れた兵の数を見て、さすがに絶望的な気分に陥る。ざっと見て数える気が失せるほどの人数だ。一体『材木転落＋閃光弾』でどれだけの人数がこちらに流れて来てしまったのだろうか。物には限度がある。

少しずつ本格的に降り始めていた雨は、路上にいくつもの濃い染みを滲ませていた。前髪がじっとりと湿り気を帯びていく。

足を止めて振り返ると、こちらの人数もいつの間にか増殖していた。襲い来る弓矢を避けながら、煙幕を取り出す。使うしかない。弓矢の攻撃は免れるし、煙幕が効いている間に姿をくらませば左右どちらへ行ったのかの判断がつかないだろう。少しは時間が稼げるはずだ。

ただ、もう逃げる手段がなくなるので標的になることは出来なくなる。

僅かな躊躇いが、シンの行動を鈍らせた。

「くッ……」

意識のそれた短い時間を縫って、飛来した矢がシンの左肩を貫く。その威力で体が微かに飛び、壁に叩きつけられた。痛みに顔を歪めながら、立て続けに襲う弓矢だけは辛うじて避けるが、その間に前後双方の兵士たちは剣を振りかざして間近に迫っていた。

（まずい…）

死ぬかもしれない。

「くそ…」

この勢いではもはや煙幕では気をそらすことは出来まい。腹を決めて最後の抵抗を試みようとダガーを両手に構えたその時だった。

――――――――ドオオオンッ！！

「何！？」

突如揺れた地面に、モナ兵の気が一挙にそれた。

見上げる視線の先、北の空に噴き上げる炎。そして、畳み掛けるような歓声と、続く地響き……。

「ヴァルス軍が侵入してきたぞーーーーッ！！」

遠い、叫び。

（間に合った……）

今なら、逃げられる……！！

肩の痛みを堪えながら煙幕を地面に叩き付けた。

巻き起こった視界を阻む煙に、モナ兵の動揺は一層深いものとなる。

雨音が激しくなるに従って掻き消えていく煙から視界が回復した頃には、そこにはただ、残された血痕を叩く雨の姿があるばかりだった。

◆◇◆

「……休まないの」

ヴァルス要塞軍が引き連れてきた激しい雨は、ギャヴァンで争いあう人間たちに思いがけず休養をもたらすこととなった。

ゲイトが防護壁を破壊し、ヴァルス軍がそこから殺到した当初こそ血みどろの戦闘が繰り広げられたが、地を穿たんばかりの勢いで叩きつけるその激しさに、視界と戦闘意欲を奪われた両軍は共に撤退、一時休戦状態へと入っている。

軍舎へと侵入していたモナ軍も、ジフリザーグ筆頭に軍舎内逗留兵の激しい抵抗の甲斐あってか、外の戦闘が退くにつれて撤退して行った。

当面のところは、防衛に成功したようである。

頭にタオルを被ったまま、顎を伝い落ちる雫を拭うこともせずにぼんやりと椅子に腰掛けているジフリザーグの背中に、声が投げ掛けられた。

肩の傷が、悲鳴を上げる。火照るような痛みは、熱でも引き起こ

しているようだ。再び流れ出した血が、ジフリザーグの肩口で雨の雫と混ざり合っていた。

「……ああ」

ぽつりと答える声は、外の雨音にさえかき消されてしまいそうだ。パタン、と扉を閉じる音が聞こえる。

「お疲れ様」

対するメアリの声も、悲しげなものだった。

「傷が、開いてる」

短く言って、メアリがそばによる。手際良く手当てをしなおしていくその間も、2人はずっと無言だった。

「……」

「……」

休戦に突入し、しばしの休養の後、市民軍及び自警軍は雨の中へと出て行った。先だっての戦闘で、命を落とした者たちを埋葬する為にだ。叩きつける雨の中、死体なのか何なのかさえわからないような有様の者まで可能な限りかき集め、軍舎の裏手に埋葬するという陰鬱な作業を今しがた終えたところである。

既に昼を回っているが、雨は一向におさまる気配を見せなかった。

「……何なんだろうな」

「え？」

「俺たちの、やっていることは」

身動きしないまま、ぽつりと漏らしたジフリザーグに返す言葉が浮かばず、メアリは沈黙を保った。

介護班と言う立場上、死者を嫌と言うほど見てきた。腕の中で息絶える者だっているのだ。自分の無力を感じずにいられない。ジフリザーグも、心許す者の死を立て続けに迎えているのだ。その気持ちがわかるだけに、掛けるべき言葉がわからなかった。

「ボードレーには、まだ幼い娘がいたな」

「……そうね」

「……」

それきり、しばらくの間ジフリザーグは口を閉ざした。何を思っているのかは、その背中からはわからない。

手当てを終えて、メアリはジフリザーグのそばに腰掛けたまま窓の外へと目を向けた。空を一面に覆う黒い雲は、まだ途切れそうにない。

雨音のみが支配する長い静寂を、再びジフリザーグが破った。

「……シンとゲイトは、どうしてる？」

誘導爆破に当てた2人は、その仕事をなしとげる代わりに共に重傷を負って戻って来た。介護班に手当てを受けさせ、休ませていた為に彼らは埋葬作業には参加していない。

「大丈夫だよ。2人とも、元気なもんだ」

答えられる問いが投げ掛けられたことにほっとしながらメアリが答えるのを聞いて、ジフリザーグは微かに顔を動かした。小さく微笑みを象る。

「そか」

「うん」

「頭ぁ～」

噂をすれば、だ。ゲイトが呼ばれたことを嗅ぎつけたかのように、扉の向こうで声を上げた。返答を待つまでもなく扉を開ける。中にメアリの姿を見つけて、ずざっと後じさった。

「……その反応は何さ」

「う……。さっきはありがとうございました……」

「よし」

よほど恐ろしい介護を受けたのか、ゲイトのメアリを見る目つきが猛獣を見ているかのようだ。その様子に、ジフリザーグは思わず吹き出した。

「怪我の具合はどうだ？」

くるんと椅子の上で回転して、扉の方向へ向き直る。食事を届けに来たらしいゲイトは、足で手近なテーブルを引き寄せてその上にトレイを置きながら肩を竦めた。

「メアリさんのおかげで。俺はレイラちゃんの介護が受けたいって言ったんですが何でもないです」

ぎろりと睨まれて間髪入れずに翻しながら、ゲイトは気遣うように小さく首を傾げた。

「頭こそ、肩の傷、どうです？戦ったり埋葬作業やったりで、傷口開いちゃったんじゃないですか」

開くも何も、最初から塞がるような隙はろくにありはしない。

「ま、大丈夫だ」

だがこの程度で引っ込んでいたのでは、戦闘要員などひとりとしていなくなってしまうだろう。

「そうすか？……それより頭」

「あ？」

『頭ってゆーな』と言うクレームが出なくなったことに気づかず、ゲイトは唇をやや尖らせた。

「食ってないそうじゃないですか」
「ん？ああ……」
「駄目ですよ、ちゃんと食わなきゃ。また倒れでもしたらどーするんですか。俺がこうして運んで来たんだから、ちゃんと食うもん食うんすよ」
その、世話焼き女房のような口振りに苦笑した。ゲイトの隣でメアリも声を押し殺して笑っている。
「……何2人して笑ってるんです」
「いや……何でも……」
「メアリさんも言ってやって下さいよ。介護班の立場から」
ゲイトの視線を受けて、苦笑いをしていたメアリも頷いた。
「でも、ゲイトの言う通りだよ。元々大して体力ないんだから、ちゃんと食って蓄えるんだね」
その言い種に、眉を寄せてふてくされたような表情になる。
「そう、人を虚弱体質みたいに言うなよな」
「似たよーなもんでしょーが」
「言われたくなかったら、がっつり元気に食っとくことです。俺なんかメシ4杯もおかわりしちゃって」
「……物資が少ないんだから、あんたは少し遠慮しな」
「……ハイ」
ようやく、少しだけ気持ちが上向いてきた。決して晴れるわけではないが、この場を仕切っている手前、人前でふさぎ込むわけにはいかない。その反動でもないだろうが、ひとりでいると止めどなく気が塞ぐ。今は、自分をわかってくれる顔触れだけがここにいることに、感謝をした。
その時、短いノックの音が響いた。ジフリザーグの返答を待たずに扉が開かれる。入ってきた姿を見て、目を丸くしたジフリザーグ

は思わず立ち上がった。
「イグニス」
「すまない。失態だ」
何の説明もなく簡潔に言ったイグニスの謝罪が、何を意味するのかは聞かずともわかった。黙って首を横に振る。
「お前のせいじゃない。……無事で良かった」
「ルーズも、怪我を負ったが無事だ。ギルドでガーネットの治癒を受けてぴんぴんしている」
「そうか……」
こちらの怪我人たちにも手を貸して欲しいが、多分無理だろう。ガーネットは人前に姿を曝すことと、ギルドメンバー以外の前で魔法を使うことをひどく嫌がる。強要すれば、姿を消しかねない。
「……あれほど大規模の爆発が起こるとは思わなかった」
そう、小さく笑うと、イグニスも笑みを覗かせた。
「見縊ってもらっちゃ困る。言ったろう。他の手段も講じると」
「……ああ」
「石炭があることで起こせる爆発ってのは、まだある。……混合爆発ってのを起こしてやったんだよ。石炭から作れる物質に、俺の私物を混合してやった。緑礬を使って精製出来る液体に銀を混ぜてやった化合物ってのは繊細でな。混合したら、衝撃を与えた瞬間にどかーんだ」
やはりイグニスが適任だったようだ。他の者ではそんな手段は思いもかけないだろう。思いついたところで、そんな物質を持ち歩いているわけもない。
「ギルドは、問題ないんだな」
「ああ。こっちは気にするな。……さて。報告もしたしジフのへたれた様子も見たし、俺は戻るぞ」
へたれたって何だよ、と笑う。その言葉にはゲイトもメアリも、思わず笑った。
「気をつけて」

「どっちが」
苦笑しながら、報告を終えたイグニスが部屋を出て行くのを見送り、ジフリザーグは湿った髪をかき上げながら窓の外に目を向けた。雨が降っている間は仕掛けては来ないだろうが……そうと決まったものでもないから落ち着かない。
「モナは、どうしてる」
座ったままテーブルを引き寄せ、トレイに手を伸ばす。せっかく持ってきてくれたのだから、口にしておこう。
「動きはないみたいすね。モナにしてみても、良い言い訳になったんじゃないすか」
言いながら視線は窓の外に向いていた。スープの皿に手を伸ばしながら首を傾げる。
「言い訳？」
「だって、出ずっぱりなのは向こうだって同じでしょう。もう要塞軍も到着しちゃったんだから今更焦る理由もないし、雨が降ったことで出撃出来ない言い訳が自分に用意出来るじゃないすか。ゆっくり休憩出来るってもんですよ」
「はは。確かにな……」
くすくすと笑いながら、今度はパンに手を伸ばした。非常時の為、焼き立てとはいかない堅いパンだが、それでも胃に物を入れると多少落ち着いていくようだ。
「……今更焦る理由はない、か」
呟いて、口元に笑みが浮かぶ。その表情は、少々底意地の悪いものとなった。
そう思っていれば良い。
本当の脅威はこれから、現れる。
その時こそ、ギャヴァン奪還となるはずだ。
……ヴァルスの宮廷魔術師は、実に性格が悪い。そしてそれは、ヴァルス国民にとって、歓迎すべきことだった。
「もうひと頑張り、だな」

誰に言うともなく、ため息と共に呟いた。
多くの仲間の死を、痛みを、無駄にしない為にも……必ずこの街を取り返して見せよう。

◆◇◆

雨が上がったその日の3時過ぎ、両軍は再び激突した。市街中心部の広場に、双方中央の主力を左右翼で挟んだ基本陣形である。小細工なしの、正真正銘の総力戦となった。
だが、連戦に疲労するモナ軍に対するヴァルス軍は無傷の国軍が投入されたばかりである。兵力差は依然としてあるものの、ヴァルス軍は実力でその差を埋めていった。
「休んでいても構わないのだぞ」
主力後背、本陣にて控える国軍将官アーベントの言葉に、傍らに控えたジフリザーグは黙って首を横に振った。ギャヴァンに派遣された要塞軍の総指揮官である。
雨が上がる前に、到着した要塞軍への報告を請け負ったのは、ジフリザーグだった。
本来ならば自警軍隊長であるボードレーの職務であろうが、ボードレーは既に帰らぬ人となっている。ボードレーを置いて他に、ギャヴァンの現状を把握している人間は、ジフリザーグが適任と言えた。
要塞軍到着まで、ギャヴァンを護る為に奮闘したジフリザーグらの働きを、アーベントは思いがけず評価してくれた。身分重視の風潮の高いヴァルス貴族にしては、珍しい気質の持ち主である。
ギャヴァン市民軍及び自警軍は、ここを戦場とした総力戦を展開するにあたって、ジフリザーグの裁量での行動を認可された。もちろん、訓練された要塞軍と行動を共にすることは却って邪魔になることも大きな理由のひとつだろう。だが、市街戦である以上、最もこの街に詳しい彼らの働きは侮れないとの評価もある。

ヴァルス軍は、基本編成としては4分の1が騎兵で編成されている。帝国一の強軍たる所以である。しかし今回の戦陣において、騎兵は僅か500しか投入されていない。戦地が市街であることと、モナ軍にやはり騎兵がいないことが理由として挙げられる。稀少な馬は、主に本陣の護衛にあてられている。

歩兵、重装歩兵と弓箭兵で形成された全軍の後背、本陣を守る形でジフリザーグ率いる市民軍が待機していた。体の良い補欠組であるが、一応は遊撃部隊との建前をもらった市民軍も、形成する200のうちギルドと自警軍から選び抜かれた250に馬が与えられている。しぶとい交渉の賜物である。

アーベントの言葉に、ジフリザーグは無言で顔を横に振ると、戦の喧騒に目を向けた。

ここまで来て手を引くわけにはいかない。恐らくこれがギャヴァンにおける決戦となるだろう。

「ザルフ!!」

アーベントの呼ぶ声に、将校ザルフが駆け寄る。

「左翼後陣、突撃だ。主力部隊はどうなっている」

「モナは中央一点突破の構えですね。真ん中を貫くように進軍してます」

「よし。左翼後陣を中央にぶつけよ。包囲で行け」

「はい」

主力部隊中央は苦戦しているものの、その左右は良く持ち堪えているようだ。左翼は、こちらの方が勢いがある。問題は……。

「アーベント殿」

しばしの思案の末、ジフリザーグは戦陣に注いでいた視線をアーベントに向けた。

「遊撃部隊を、動かします」

「何?どうする?」

「モナは右翼に砲撃隊と弓箭兵を配置している。そのせいで右翼は思うように前進出来ない。……市街から迂回して、側面から攻撃を

仕掛ける」
　アーベントがジフリザーグを無言で見返す。
「前面配置の砲撃隊と弓箭兵が散れば、後陣の歩兵は問題ないはずです」
「……良いだろう。許可しよう」
　モナ軍の側面からの攻撃であれば、ヴァルス要塞軍の攻撃戦略の妨げにはならない。アーベントの許可を受けて、ジフリザーグはその場を離れた。グローバーを探す。
「ここを任せていーか」
「構わんが。お前はどうする？」
「騎兵だけ連れて、モナの側面から突っ込む。こっちの判断は、グローバーに任せた」
　にやっと言ってその肩を叩くと、ジフリザーグは馬を与えられている者だけを召集した。
　どうせ捨て駒――ならば、「ギャヴァンの勝利は市民ありき」と認めさせる動きをしてみせよう。
　この街を護ったのは、誰よりもまず、市民たちの働きだ。
　本陣の更に後背を抜け、一頭たりとも遅れることなく市街裏道を疾走する。見慣れた街並みを駆け抜け、いくつかの裏道を抜けてモナ軍右翼まで間近と言うところまで辿り着いた。時間にして、大してかかってはいないはずだ。戦況にさしたる変化はないだろう。
　この道を一直線に駆け抜ければ、モナ軍右翼の側面だ。
「狙うは砲撃兵と弓箭兵だッ。歩兵には構うなッ。砲撃兵は砲台が破壊出来ればそれでもいい！！」
　右手に抜き身の剣を構え、片手で馬を操りながら前方に視線を定めたままで怒鳴る。戦場の喧噪が、ここからでも見てとれた。
「繰り返すようだが、深追いはするな、いつでも退けるように右翼周辺から離れるな。生きて戻るぞッ……」
　……もうすぐ。
　もうすぐ、決着が、つくはずなのだから。

「健闘を祈る！！」

その言葉と共に、２５０の騎兵が戦場へとなだれ込んだ。予想外の方角から突入して来たジフリザーグたちに、砲撃兵と弓箭兵が慌てて標的を変更するも、疾走する馬の勢いの前にあっては対応出来る者も限られる。

襲い来る砲弾を馬の手綱を捌いてかわし、飛来する弓矢を身を馬上に伏せてやり過ごしながら、砲台を操る砲撃兵を切り捨てた。

「撃ち込めえッ」

怒声が上がる。砲撃と射撃の標的が側面から現れた騎兵に分散したせいで、手薄になったヴァルス右翼が勢いに乗って突撃を開始した。

戦場を駆け抜け、砲撃兵や弓箭兵があらかたなりを潜めた辺りで、ジフリザーグは肩で息をつきながら馬上で剣を払った。従っていたカイル、ボードヴィルが倣って馬の歩みを止める。

「戦況は、どうなってる……？」

陽が、西へ傾こうとしている。状況を把握する為に中央へ目を向け、ジフリザーグは小さく呟いた。

「……嘘だろ」

アーベントは、中央突破のモナに主力左右の兵と左翼後陣の兵をぶつけるよう指示を出していたはずだ。

だが、ここから見える限り包囲は完成していない――左翼後陣が、対応出来ていない……！？

「どうしたんだ！？」

「予想より左翼の兵が強かったってことだな」

「くそ……」

主力左右も、モナを足止め出来ていない。このままでは本陣が危ない。

（どうする……！？）

今から戻って間に合うのだろうか。この僅かな人数が戻って、何が出来るだろう。どう動くことが、最も効果的なのか……。

（……）

腹を決めて、カイルとボードヴィルを振り返った。

「このまま駆け抜けて、モナの本陣を襲撃だ」

「本陣を！？」

勢いに乗っているモナは、ヴァルス陣営に食い込んでいる。言い換えれば、こちらは手薄になっている。

「頭を押さえれば1番早い。……総指揮官を、獲る」

馬首を返したジフリザーグの動きに、周囲に散っていた騎兵が従う。

想像通り、モナ陣営は手薄だった。とは言え戦闘を避けられるものでもないのだが、手綱を操り剣を捌くうちに、前方に本陣が姿を現す。

「ジフ」

真横を駈けるカイルが、剣を構えながら怒鳴った。

「お前は総指揮官に集中しろ。周囲はこちらで何とかする。気を散らすな」

「助かる」

目指す首はただひとり。――総指令官インプレス。

馬の上げる激しい土埃と馬蹄の響きに、インプレス周辺の兵がたちまち自分らのリーダーを守る厚い肉の障壁と化した。

馬上にあらばこそ、正規兵とは言え地上にある身をかわすことは困難ではない。時折モナ兵をこの世から叩き出しながら、目線は一直線にインプレスに注がれていた。

「来たか……」

奴の首だけは、自分で獲らねば気が済まない。ここまでジフリザーグが無事だったことは、インプレスにとって僥倖だった。

「良い。どけ」

真っ直ぐに己を目指して馬を駆る盗賊の頭に視線を定めたまま、大剣を抜き放った。

「しかし……」

「奴は俺が仕留める。お前たちは周辺の雑魚を始末しろ」
その言葉に、周囲の兵士たちがざっと散った。
突如開けた道に、ジフリザーグは両膝で馬を挟みつけ、半ば立ち上がった姿勢で剣を構える。勝てる理由がないのは承知の上だ。この状況下、この人数、モナを押さえるには総指揮官を獲る以外にない。
馬上から振り下ろされた剣を、インプレスの幅広の剣が弾き返した。戦場において馬に乗る者が圧倒的有利なのは鉄則とさえ言える。だがそのハンデさえものともしない剣技、度胸、そして体格の持ち主だった。
返す刃が、馬の胴を貫く。前身を上げ、悲痛な断末の悲鳴を上げる馬から叩きつけられる前に地面へ飛び降りたジフリザーグに、続けざまに白刃が振り下ろされた。
態勢を立て直す間もなく、右へ左へと襲い来る斬撃を受け続ける。まさに息をつく暇もない。
一際大きく振り被ったその隙を狙い、振り下ろされた瞬間の手元を正確に打ちつけたジフリザーグは、インプレスがたたらを踏んだのを見て後方へ跳んだ。距離を確保して態勢を立て直す。インプレスが小さく笑った。
「この前はもっとか弱いかと思ったぞ」
「寝不足だったんだ」
その言葉に、インプレスの口元が笑いを刻んだ。面白い男だ。つくづく興味をそそられる。思わず、惜しまずにいられなかった。戦陣の指揮を執るなど初めてだろうに、これだけ統率出来れば大したものである。と言って遠慮する気など、あろうはずもない。
「くッ……」
強く打ち込んだインプレスの剣を、盾代わりのトゥルスで受け止めたジフリザーグの口から呻きが漏れる。だが間髪入れずにジフリザーグの方も、右手から剣を叩き込んだ。インプレスの胸甲に僅かな亀裂が走る。その衝撃を物ともせずに振り被ったインプレスの剣

が、ジフリザーグの腕を深く抉り取った。開いた肩の傷からも、どくどくと血が溢れ出しているのを感じる。

続けて放たれた刃が、今度はジフリザーグの太腿に切りつけられた。鮮血が舞うのを視界の隅で見遣りながら打ち込んだ長剣の切っ先が、インプレスの喉元に浅い傷を刻む。

ダメージが大きいのは、こちらだ。

体力値も圧倒的にあちらの方が有利だろう。

続けば、ジフリザーグの持久力が息切れを始めるのは目に見えている。

何とか、打開策を練らなければ……。

「そろそろ観念してはどうだ」

頭を巡らせるジフリザーグに真っ直ぐ剣先を向けて、嘲笑するように、あるいは挑発するようにインプレスが告げる。剣を構えたまま黙しているジフリザーグに、尚も続けた。

「お仲間は大変なことになっているようだぞ」

はっとして、顔を正面に固定したまま視線を周囲に這わせる。

見れば、２５０騎の騎兵はその大半が地に伏し、僅かなギルドメンバーが善戦しているに過ぎなかった。

「遊びが過ぎたか。そろそろしまいにしよう」

ジフリザーグに向けた剣を、ゆっくりと振り被った。踏み出す足下から土埃が舞う。ジフリザーグの、剣を握る手に汗が滲んだ。背筋を伝う冷たい滴と肩の放つ熱が、集中力を奪う。

高まる緊張の中、その一瞬を待つジフリザーグの視界でインプレスが駆け出そうとした同じその時、予期せぬ方角から砲撃が聞こえた。

そして……。

「何が起こった!?」

インプレスが驚愕の叫びを上げる。ヴァルス陣営に殺到していたはずのモナ兵が、総崩れとなって潰走し始めたのだ。

遠く、背中に感じるその喧噪を受け止め、にやりと笑ったジフリ

ザーグの視線に、インプレスも顔を向けた。
街の南、青くたゆたう港に浮かぶ――軍船。
「まさか……」
ヴァルスの軍船は、モナへ進撃し沖合いへ出ているはず。あれほどの軍船が、残っているはずもない……！！
「ウチの宮廷魔術師は、少々ひねくれてるみてーだからな。モナ本土には、大して用事はないそうだ」
「何……」
では、そもそもの当初から嵌められていたと言うわけか……！？
モナ海軍は、幻のヴァルス船団を追って西海側から沖へと引き返し、ザウクラウド要塞付近の入り組んだ地形と視界を遮るキール島の陰に身を潜めたヴァルス軍はのうのうとこちらへ向かっていたと……？
とすると、あの船団に積んでいる乗員は、ザウクラウド要塞から流れ込んだ2万余の兵ということになりはしないか。
ドォォンッ。
旗艦らしき大型の船から空へ向けて噴き出したオレンジ色の炎が明滅し、地をも照らすその灯りを受けながら、ジフリザーグが真っ直ぐに剣を突きつけた。
「……俺たちの街から、撤退してもらおうか」
照らされたその軍旗――ヴァルス軍船であることは、もはや疑いようがなかった。

第2部第1章第20話　幻の王女（1）

月の光のみが、頭上の天窓から優しい包容を投げかける。
微かな虫の音しか聞こえない静寂の中、黒いドレスに身を包んだユリアはひっそりと祭壇に向かっていた。
祈りを捧げているのではない。祭壇の前に安置された、今は温もりを失った父と会話をしているのだった。
厳格ではあったが、優しい父王だった。若い頃、市井の中で生活をしていたと言う父王は、庶民の心を良く理解していたし、気さくでもあった。
身分や経歴に重きを置く傾向にあるヴァルス宮廷において、初頭こそ眉をひそめる者もいたようだが、その人柄に触れるうちに反発はなくなっていったと言う。リトリア、ロドリスを押さえ込んでいられたのは、クレメンスだったからこそと言わねばならないだろう。
「お風邪を召します」
カタン、と物音が響いた。振り返ると、扉のところに長身が姿を現していた。銀髪のヴァルス宰相は、自分などより遙かに父のことを良く知っている。
「ラウバル……」
静かに傍らに佇んだラウバルに、ユリアは再び父へと視線を戻した。
「シェインは、どうしているの？」
自分がここにいることを告げたのは、シェインに相違ない。ラウバルは、小さな笑みで応えた。
「あの男にしては珍しく、遠慮したらしい……。陛下との付き合いが浅い自分では、今のユリア様のそばにいるには役不足だと」
「……そう。ふふ……らしくないわね」
国にすれば気高い主であっても、ユリアにとってはたったひとりの父であり肉親だった。ユリアは母親を幼くして亡くしている。病

がちでか弱かった彼女は、いつも布団の中にいる印象ばかりだった。
「……輝く日の恵みを受け　月影の子守に身をゆだぬる
静かに神の御手に抱かれ　愛する者への祈りを捧げん
聖なる君と共にあらん　迷いし時には光を与えるだろう
聖なる君と共にあらん　痛みし時には癒しを与えるだろう
灯火を掲げよ　何人を許したもう神の愛に
灯火を掲げよ　何人を包みたもう神の為に……」
　小さな声で口ずさむ。聖書の第８９番。１番好きな歌だ。母が子供の頃に、痩せた手で頭をなぜながら歌ってくれた。心癒されるような気が、いつもしていた。
――疲労回復の魔法かと思った
　キサド山脈で、祭壇を目にして思わず口ずさんだ時にカズキが言った言葉だ。
「今頃、お母様とご一緒におられるかしら」
　歌い終えてそう呟いた時、涙が一筋頬を伝わり落ちた。一度壊れた涙の堰は、次々と大粒の涙を送り出してくる。これで、父も母も失った。近しい血縁と呼べる人間は、ユリアの知る限り周囲にいない。
――泣き過ぎ
　カズキの笑う声が、聞こえるような気がする。
「お父様のように、なれるかしら」
　それはとても尊く、遠い出来事のように思えた。だが、父が亡くなりレガードも不在の今、ユリアはそれをひとりで成さねばならない。
「君主に求められるのは、自分で何かを成すような突出した能力ではありません」
　しんと冷えた空気に、ラウバルの厳かな声が響いた。
「人と言うのは道具を扱う手段を知っていれば良いのであって、人自身が道具の性能を持っている必要はありません。飲食店の経営者が優れた料理人である必要がないように、あなたが優れた料理人に

ならなければならないわけではありません」
「でも、経営している人が料理をしている場合だってあるわよ」
悪戯めいたユリアの反論に、ラウバルは肩を竦めた。
「ヴァルスは個人商店ではありません。スタッフは、いるのですから」
言ってラウバルは、やんわりと微笑んだ。
「あなたが最初にするべきなのは、自分が何がわからないのかを知ることと、尋ねるべきことが何なのかを決めることです。政なら私やシェインが知っています。諸国のことならハイランドが。王城の人員配置や人間のことはブリューゾフが。そして戦のことならスペンサーとブレアが。わからないことは尋ねれば良いのです。まず学ぶべきことは、誰がどのような人間で何に向いているのかを知ることですよ」
それから、その視線を静かに眠る先代へと注いだ。
「あなたのお父上は、人心を掴む術を心得ておられた。人を使う才に長けておられたのです」
それきり、ラウバルは口を閉ざした。
宰相の言葉は、悲しみと不安の間を揺れ動くユリアを救い上げてくれた。ひとりでヴァルスを支えるわけではない。
「ラウバル」
「はい」
「お父様は、なぜ市井に下っておられたの」
それは、父の口からは決して明かされなかったことだった。
王族の醜い争いごとはもはやお前には関係ないのだから、と。まるで忌みごとを口にするかのように。
「……詳しいことは、私には」
「嘘よ、そんなの」
まだ涙の名残を目尻に残しながら微笑み振り向くユリアに、ラウバルが言葉に詰まる。そう、確かに嘘だ。けれど口にすることがユリアにとって最良なのか、わからない。

心優しい王女は……いや、実質ヴァルスの女王は、きっとまた心を痛めるだろう。

「兄君との間に、確執がおありだったとか」

辛うじて、無難な言葉のみを舌に乗せる。それ以上追及するつもりはユリアもないようだった。「そう」と小さく頷いて、父が眠る棺を見上げる。

……母と叔母も、余り仲が良くなかった。

ユリアの母は、教皇領エルファーラの出身だったと聞いている。エルファーラの人間は余り国間を移動しない為に、珍しいことだった。教皇庁へ訪ねた際に世話になった教皇庁高位官の娘だったのだそうだ。母に一目惚れをした父がどうしてもと母を娶り、その妹であった叔母も共にヴァルスへ来たのだと聞いている。そして妹は父の兄と婚姻関係を結んだ。

穏やかだった母に比べ、叔母は気性の荒い人間だったと記憶している。

決して悪い人ではなかったと思うが……。

（――……!?）

不意に脳裏によぎった記憶に、一瞬ユリアは戦慄した。血走った眼差し、乱れた髪……鬼のようなその形相。

（……何!?）

確かに、叔母の顔だ。自分はその姿を、間違いなく見ている。

だが、どこで？いつ？……どうしても思い出せない。

「ユリア様？」

突然硬い表情で押し黙ったユリアに、ラウバルが不審な眼差しを向けた。慌てて首を横に振る。

「な、何でもないわ」

何だったのだろう……今の、記憶は。

軽く頭を振って、記憶の中の狂気じみた叔母の姿を追い出すと、取り繕うように宰相の長身を振り仰ぐ。

「シェインは、疲れているのじゃない？」

宮廷魔術師と言う身分柄、それほど魔力を放出する機会がごろごろあるわけではない。そうそうあっても困るが。

ラウバルが小さく苦笑した。

「まあ……ユリア様の危機に駆けつけることが出来たゆえ、満足でしょう」

その言葉に思わず微笑んだ。同時に、再びカズキの言葉が頭を掠める。

――ごめんね。俺、ユリアを守ってあげられなかった

どんな気持ちでその言葉を言ったのだろうか。

結局、想いを口に出すことはなく……再び離れてしまった。

「ギャヴァンは、奪還が完了したようです」

カズキへと思いを馳せたユリアは、その言葉に我に返る。内容の重さに目を見開いた。

「いつ」

「報告を受けたのは今し方です」

シャインカルクへ戻って最初に驚いたのは、城に幾つもある館と大神殿に溢れる避難民の姿だった。監禁、そして父の死と、立て続けのユリアを慮ったようにラウバルもシェインも多くはまだ語らないが、自分が不在の間に諸国にはさまざまな動きがあったようだ。

それの最たるものが、モナのギャヴァン侵攻だと言うことだけは、聞いていた。

「そう……良かった」

自分の家に帰れないのでは心細かろう。思いの外長引かなかったことに安堵する。

「早かったのね」

「シェインが少々小細工を弄しまして」

言って思わず苦笑する。まったく意外なところで才能を発揮するものだ。

シェインの策は、複雑なものではない。

ザウクラウド要塞の兵を収容して全鑑をモナ本土へ叩きつけると

見せ、その複雑な地形を利用して湾となっている本土へと侵入し、潜んでいたのである。

肝要なのは、モナに間違った情報を流すことだった。当時まだどこに潜んでいるかわからない間諜に誤った情報を与える為、ザウクラウド要塞以外の自国の軍にでさえ、実際の作戦とは異なる情報を流したのである。南下国軍1万を半数に分け、それを率いていた将官をザウクラウド要塞留め置きではなくティレンチーノ要塞へ向かわせ、ギャヴァン防衛にあたらせたのはその為だ。これで国軍将官のいずれかであるはずの間諜に、真実が漏れる可能性の排除に努めたのだ。

実際に沖へ出たのは本来の海軍1万5千のみ。とは言え沖を進む船が正確に何隻なのかなど、計れるはずもない。残る2万余はモナの去ったギャヴァン近海を、悠々と南下したのである。

船を利用した理由はいくつかある。

まず、ザウクラウドからならギャヴァンまで、海上を移動した方が圧倒的に早いこと。モナ海軍をギャヴァン沖からどかす為には、フレデリク想定外の戦力が海上へと姿を消すこと、そして迅速にギャヴァンを奪還する為だ。

要塞軍がその戦力の全てと思い込み総力を挙げて叩き潰そうとしていれば、不意に現れた数万の大軍に戦意を失墜せずにはおれまい。まして北からの要塞軍と対峙しているのなら南の海から来る軍隊は背面――挟み撃ちだ。

シェインの狙いは兵力でモナを叩くことではなく、敵の戦意を根こそぎ奪うことでの潰走だった。そして、大きな流れは狙い通りにおさまったと言っても良い。

港から投入されたヴァルス軍の姿に、モナは恐慌状態に陥り、大半は異国の地に果てることとなった。残った者も捕虜として拘束され、ギャヴァンでの市街戦が終結を迎えたのはちょうど、シェインと共にユリアが帰城した頃だったと言う。報告がもたらされたのは、先ほどのことだ。

「間もなく、避難市民たちにも結果が……」
ラウバルが言い掛けたところで、神殿敷地内に指定されている避難所の方角から、わっと歓声が上がるのが聞こえた。まさしく伝令がいったらしい。ユリアとラウバルは思わず顔を見合わせ、小さく笑った。
「明日は忙しくなります。避難市民が街へ戻る手はずも整えなければなりませんし、陛下の葬儀も準備を整えなければなりません。それにギャヴァン修復と戦死者の埋葬、把握……」
ロドリスに対する構えも本腰を入れねばなるまい。
「……そうね」
ラウバルの言葉に、ユリアは再び悲しげな顔をした。
「きっとたくさんの人が、命を落としたのね……」
今、戦勝を耳にして喜びの声を上げている人の中にも、明日には大切な人の死を知り苦しむ人がたくさんいるのだろう。――今は、まだ知らないだけで。
それを思えば、心が痛む。
戦で勝利をおさめたところで、大切な人を失っていては何の意味があろうか。
そしてそれは、敵国であるモナでさえも……。
自分は、戦を知らない。
ヴァルスが戦ったことは何度もあるが、自分は戦場に身を置いたことはないからだ。常に、守られているから。
けれどそれは、戦に心を痛めないのと同意ではない。おこがましいかもしれないが、それでも心痛まぬ人間にはなりたくない。
人は、傷を受ければ痛いのだ。……誰だって。大切な人を失えば、心が血を流すのだ。
せめて、その痛みをわかろうと努力出来る気持ちだけは失いたくはない。戦が起こるたびにいつも思う。どうして争わずにいられないのだろうと。人は、何と複雑な生き物なのかと……。
「戻りましょう」

ラウバルに優しく促され、立ち上がる。戦時中の為、偉大な皇帝の死にしては略式ではあるが、それでも国を挙げての葬儀となる。ゆっくりと父のそばにいられるのは、多分これが最後だろう。

名残を惜しむように父を振り返ったユリアに、数歩足を進めたラウバルが顔を向けた。

「心安らかに、とはいかぬでしょうが……お疲れのことと思います。ごゆっくりお休みになりなさい」

「はい」

皆が、自分を心配してくれる。

重い責務があろうと、自分はヴァルス王女に生まれて良かった。

――父と、母の子に。

心からの感謝と祈りを捧げながら、ユリアはラウバルの後を追った。

ユリアを部屋へと送り届けた後、その足で執務室へ向かう為に足を向けたラウバルは、途中の中空テラスに揺れる赤い髪を見つけて気を変えた。踵を返して階段を上がって行く。美しい満月が光を落とすテラスの手すりに背中を預け、宮廷魔術師がひっそりと顔を上げた。

「月見か」

言いながらテラスへと踏み出す。シェインは小さく笑って答えた。

「まあな。おぬしは散歩か」

「そんなところだ」

歩を進め、隣に立つ。

幻想的に広がる庭園と、遠く城壁を越えてレオノーラの美しい街並みが眺められた。

「疲れていないか」

ユリアの言葉を思い出して尋ねると、シェインはゆっくりと首を横に振った。

「あの程度の戦闘で疲れていては、宮廷魔術師などやっておれぬ」

「そうか」
口先だけでもなさそうなので、素直に受け止めることにする。ラウバルに倣うように街並みに視線を向けながら、シェインが問うた。
「ユリアの様子はどうだ」
こんなところでぼんやりしていたのは、恐らくそれが本音だろう。気がかりで、部屋に落ち着いていられなかったに違いない。

第2部第1章第20話　幻の王女（2）

「大丈夫だ。ユリア様は、お強い」
「そうか」
それきりしばらく沈黙したシェインは、ややしてぽつりと呟いた。
「……ユリアが不憫でならぬな」
「……」
「己の伴侶さえも、選択の余地がない」
「……？」
色事に疎いラウバルは、そっと首を傾げた。
「王族の身ゆえ致し方あるまい。それにお前も、他人のことは言えぬだろう」
宮廷魔術師たる身分であれば、恋愛相手ひいては婚姻相手は誰でもと言うわけにはいかない。
きょとんと告げたラウバルに、シェインは微かに笑った。
「まあな。だが、俺はユリアがいればそれで良い。婚姻相手などどうせ、有力貴族の娘だろう。ろくでもないのばかりに決まってる。貴族の娘など興味がない」
その言い種に、思わず笑った。
「そういうお前も貴族だろう」
「だから言っている。支配階級の人間など、どっかいかれてて普通だ」
「溺愛するユリア様こそ、比類なき支配階級だぞ？」
「ユリアをその辺の貴族の娘と一緒にするな」
顰め面で言い放ってから、短いため息を落とす。
「……俺は男だからな。ユリアとは窮屈さが違おう」
言って遠くを見遣ったその視線の先に何が映っているのかは、ラウバルにはわからない。
「政略結婚に、疑問が？」

短い問いに、シェインは軽く肩を竦めた。
「そうは言わんさ。レガードとの結婚をユリアが嫌がっているとは思わぬし、不遇に落とし込むとも思えぬ。相手として何の不足があろうはずもないし、大体国王の子息など生まれた時から政治の道具だと決まったようなものだしな。……レガードが生きていたとしての話だが」
「ああ」
「まあ、考えたところで詮無き話だ」
小さく嘆息して、シェインが会話を打ち切ったところで微かな足音が聞こえた。揃って目を向けると、外務大臣ハイランドがテラスへと出てくるところだった。
「お揃いでこんなところにいらしたとは。……悪巧みですか？」
柔らかい笑顔で冗談めいて言うが、その頬が硬さを残している。探し回ったかのような雰囲気に、静かな緊張が走った。
2人の間近まで来たハイランドが、不意に低い声で静かに告げる。
「本日正午、ロンバルト沖にて先行していたヴァルス海軍とモナ海軍が、衝突しました」
「何……」
思いがけず早いことに、息を飲む。ヴァルス海軍の進行速度が遅いことと、モナ海軍の動きが速いことが原因か。小型快速船主体の海軍は、やはりその迅速さを侮れない。
「結果は」
シェインが結論を急かした。ハイランドが硬い表情のまま続ける。
「双方壊滅、生存者は不明です」
「なッ……！？」
「まさか魔物か？」
つられたわけでもないだろうが、低く問い返すラウバルに、ハイランドは僅かに青い顔で頷いた。
「恐らくは。正体までは、わかりません。何せ生存者がいない」
「……」

その言葉の持つ重要な意味に気づき、シェインの顔に緊張が走った。

「……フレデリク公は」

「もちろん、行方不明です」

ではモナは、戴いたばかりの主を早くも失ってしまったこととなる。恐らくは国内の継承を巡って、混乱が巻き起こるだろう。……つまりモナはこれ以上、ヴァルスに介入しているどころではなくなる。

「これ幸い、と喜ぶ気にもなれんな」

苦く呟いたシェインに、沈黙が訪れた。

ヴァルスとてその損害は甚大なのだ。４２隻の大型船、砲撃船、小型快速船を失っている。そしてもちろん、それらに乗船していた兵士たち……。

「ギャヴァンが終息したと言うことは、モナへの制裁も決定せねばならないでしょうね」

ハイランドが穏やかな顔に、僅かに苦悩を覗かせて呟いた。

ヴァルスにとって、モナは薄汚い裏切り者である。

ギャヴァン戦の決着が着き、モナの参戦はこれ以上は危ういとなれば、モナに対する結論は早急に突きつけることが必要だ。

帝国として、モナに対する処遇は極めて厳しいものとなるだろう。経済制裁、管理官の派遣、多額の罰金、バーシェルダー家に累のある者の拘禁――ひいては、モナと言う国家そのものの存続すら危ういかもしれない。だがそれに抵抗するにも、フレデリクは行方どころか生死さえわからない。

君主の行動の責は、国民が被ることになるのはいつの世も同じである。

沈黙をさらうように、３人の間を夜風が流れた。月を背に、靡く髪をおさえることもせずにラウバルが低く呟く。

「明日の会議は紛糾するぞ」

ロドリスとの開戦も、明日の報告で秒読みとなるだろう。

◆◇◆

セラフィがハーディン王城へ帰還したのは、既に夜半を過ぎた頃だった。シサーの剣を受けた肩や胸元は着衣が切り裂かれ、夥しい血痕が付着している。

端正な顔には屈辱と憎悪が交錯し、凄絶なまでの美しさを彩っていた。

シェンブルグの館へと戻り、屋敷へ足を踏み入れたセラフィはロビーで軽く目を見張った。相手もこちら以上に驚いた顔をしている。

「グレン。こんなところで何を……」

「セラフィさんッッッ！！！！！！」

耳をつんざくような大声を上げられて、ついつい今し方までの怒りを忘れてぽかんとした。

「どうなさったんですかその姿はッ！？」

「ああ……」

「人間、それだけ血を流したらいつでも死ねますッ。大変ですどうしましょうセラフィさんが死んでしまいますッ。あああ、そうですね、医師を、いや魔術師に魔法を……。宮廷魔術師を呼びましょうッッッッッ」

「……グレン」

「セラフィさん！！何をぼけっとそんなところに突っ立っているんです！？大怪我をしてるんですよ！？わかってるんですか！？さっさと横に……ああ、歩けないのですか？誰か人を呼びましょうッ」

あたふたするグレンにどう口を挟んだものか、ついついセラフィは眉根を寄せてため息をついた。大体宮廷魔術師など、呼ばずともここにいる。

「グレン……」

「はいッ！？」

「いいから少し落ち着いてくれ。……僕の仕事が何だったか覚えて

るかい」
「やだなあ、何当たり前のことをうわーおぅ」
言いながら、さすがに自分の口走ったことがどれほど中身のないものだったのかに気がついたらしい。
「わかったら一旦、そのソファに腰を落ち着けてくれ。怪我は全部治療済みだ」
疲労した表情で言いながら、ずたずたに切り裂かれたマントを外す。セラフィに言われた通りソファに腰を落ち着けたグレンは、再び立ち上がってマントを受け取りながらからからと高笑いをした。
「いやはや、少々動転してしまったようで」
「動転し過ぎだ」
言いながらロビーを横切って奥へと向かっていくセラフィの後を、マントを抱えたままのグレンが追った。
「ところで……どうなさったんです」
「……グレンこそどうしたのさ。もう深夜だよ」
つかつかと廊下を抜け、応接間にあたる部屋へと入ると、革張りのソファにどさりと身を投げ出した。
「私は明朝早くにフォグリアを発ってリトリアへ向かおうと思ってますのでね、今日のうちにセラフィさんにご挨拶を済ませてしまおうかと思ってお伺いしたのですが、いらっしゃらなかったようですので勝手に待たせていただいておりました」
言いながら、ずたずたのマントを丁寧にハンガーにかけると、その足でお茶の用意を始める。乱れた髪をかきあげながら、その背中にあきれた声を投げつけた。
「帰って来ないかもしれないとは思わなかったのかい」
「帰って来なかったらここで待ってるふりで眠って、朝食までしっかりいただいてから……あわわわわ」
「グレン、間違えているようだから念の為に言っておくけれど、ここは民宿じゃないよ？」
「や、やだなあ。わかってますよ。民宿ならお金を払わなきゃ……

いやいやいやいや。失言」
　失言が多い、と言うよりは、失言を除くと何も残らなくなってしまう。
「それより、セラフィさんこそどうされたんです」
　茶を注いだカップを2つ持って戻ってきたグレンは、1脚をセラフィの前に置くと自分は斜向かいにあたるソファに腰を下ろした。
「まさかバルザックさんですか」
「……」
　……そうだ、大体バルザックはどこへ姿をくらましたのだろう。
　沈黙を肯定と受け止めたグレンが、顔色を変えて身を乗り出した。
「だから言ったじゃありませんかッ！！襲われますよと……げふッ」
　神技的な早業でテーブルの上の書物をグレンに投げつけたセラフィは、そのままゆっくりと足を組むと頬杖をついた。
「『レガード』に会ったよ」
「え」
「逃した」
「……」
「……いや、逃げたのはこちらか」
　自嘲気味に短く笑い、グレンに視線を向ける。
「グレン。リトリアはこの1回で必ず落とせ。それからその足で、レガードを追え」
「……良いのですか？」
　もはやヴァルスに繕うべき建前はどこにもない。
「ああ。ロドリスはヴァルスと開戦だ。いずれにしてもヴァルスは仕掛けてくる」
　言いながら、苦い顔をした。間違いなく自分の失態だ。カルランスに報告しなければならないだろう。
　そして、出撃だ。
「本物だろうが偽者だろうが……」
　もう、構わない。ヴァルスはレガードの行方を掴んでいない、そ

れで十分だ。偽者であっても、ヴァルスとロンバルトへの牽制と動揺くらいには役立つだろう。どうせ奴が偽者だと知る人間など、さほど多くはないはずだ。

　顔が知られていないとは言え、全くの偽者をレガードと偽って首を曝すにはリスクが大きいが、あれだけ似ていれば十分曝し首にする価値もある。何も知らない、本物を知る誰かが「本物だ」と保証を与えてやれば、その打撃は大きいはずだ。

　いずれにしても、レドリックのヴァルス継承における危険因子は、排除しておくに越したことはない。

「エレナを連れて行くと良い。必ず首を持ち帰れ」

「はい……」

　頷きかけたグレンは、急にその身を震撼させた。青ざめた、強張った表情でセラフィを凝視する。

「……何だい」

「出発は明日ですよ!?今からエレナさんにそのお話を持って行くのかと思うと……ひぃぃぃぃ……」

「……いいよ。僕が話すから」

「是非」

「じゃあ呼んできてくれるかい」

「……ひぃぃぃぃぃぃ……」

　近衛警備隊は、城内に宿舎が班ごとに設けられている。非常時の召集は男女の差異なくかけられるし、情報の行き違いが生じては困るので、女性と言えども宿舎は同じ建物だ。ひとりひとりに個室が与えられるので、さしたる問題はない。

　よろよろとこの世の終わりのような蒼白さで応接室を出ていくグレンの背中を見送りながら、思わず小さな苦笑がこぼれた。もちろん、わざとである。

　えぐえぐと泣く声が通路を遠ざかって行くと、セラフィは物思いに沈み込んだ。

――ヴァルス攻略に躍起にならなくても、マーリアさんは……

わかってはいるのだ。しかしそうしてやる以外に、してやれることがわからない。……それをマーリア本人が望んでいないのだとすれば、結局この行動の全ては自己満足、と言うやつなのだろう。

（あるいは逆恨みか）

ヴァルス王女にとっては良い迷惑だろう。だがそれはマーリアとて同じこと――彼女の不幸は彼女が望んだわけではない。

……国になど、興味がない。国が自分の為に何をしてくれた？幼い体と心に無数の傷を受けた時に、救いの手を差し伸べてくれたか。

答えは否、だ。ヴァルスの興亡もロドリスの繁栄も全て興味がない。滅びるなら、滅びてしまえ。けれど、これ以上マーリアから奪うのは許容出来ない。ヴァルス王女に偏ってもたらされた恵みを、これからはマーリアが受け取る番だ。

……そもそもは、彼女が正統な後継者たるはずだったのだから。

馬鹿げているとしても、人は、人の為に生きている。

国の為に生きる気など、さらさらない――。

ヴァルスからその名を消された幻の王女の為に、帝国アルトガーデンは歴史の上に、深い傷跡を負うこととなる……。

◆

◆◇◆

禍々しい黒焔が噴き上げた。
その余りの苛烈さに、見る者がいればどれほど邪悪な異形の者がその黒焔から姿を現すのだろうと恐れ慄いたに違いない。
それほどにその焔は、巨大で悪意に満ちていた。
黒焔を噴き上げる魔法陣の周囲には、石や木を使用した複雑な……あるいは奇怪な小物が配置されている。
魔法陣の前に立つ黒衣の老人が何事かを呟くと、その動きに合わせるように一層噴き上げた黒焔が舞い踊った。いよいよ増していく禍々しさは、今しも強靱な魔物を生み出そうとしているかに見えた。
だが。
「く……」
空気を震わせるような低い音が上がったかと思うと、次の瞬間には黒焔は綺麗に消え失せていた。今し方の光景はまるで幻影であったかのように、微塵も黒焔の名残は残っていない。
「やはりまだ無理か……」
場が整っていない。様々な意味で、尚早と言えた。
「げほッ……」
むせこんだバルザックの口から、赤黒い飛沫が散る。その背中に、ごわついた声が投げかけられた。
「無理をすれば、時が満ちる前に力尽きようぞ」
「余計な気遣いだ」
口元の血を拭いながら、背後を振り返る。小柄な体はビヤ樽に似て、短い手足と濃い褐色の肌、大きな顔にはふさふさと豊かな髭が生えている。ドワーフだ。
「焦らずとも瘴気は集まろうが」

「……焦っているわけではない」
短く答えてそれきり黙りこくる老人に、ドワーフは鼻をひとつ鳴らすと踵を返した。
別に、友人ではない。単にバルザックにとって都合の良いこの地に、変わり者のドワーフが住んでいただけのことである。
と言って、全くそれだけの縁、と言うわけでもなかった。
バルザックが持ち込んだ黒竜グロダールの宝玉をロッドに仕込んだのは彼だし、現在試みている召喚に必要な道具の細工を施したのも繊細な職人である彼である。
彼は、バルザックが何をしようと興味がない。悪しき者を召喚したければするが良いし、この世の破滅を願うなら願えば良い。人間同士の争いなど些末な出来事だった。
石造りの小さな家へと戻り、壁にかけられた壮大なタペストリーへと視線を注ぐ。荒れ狂う海へと小さな船で乗り出すドワーフの背後には、財宝が山と積まれている。人間どもの矮小な財貨ではない。遠い昔に現モナ公国内にひっそりと村を築いていた、ドワーフたちの財宝だ。
モナに築き上げていた村は、リトリアとモナの戦争に巻き込まれて消え去った。生き残ったのはその当時、村にいなかった彼や同様の僅かな仲間しかいない。今は散り散りとなり、人との関わりを避けるようにひっそりと生を営んでいる。そして築いた富や財貨は、どこかへ隠された。
このタペストリーと同じ壁画が、どこかにあるはずだった。
人間どもを恨むつもりはない。けれど……。
……財貨などは、どうでも良いのだ。
肝要なのは、隠された財貨の中に彼の作品が入っていることだった。
（あのブレスレットだけは……）
彼が、心を込めて丹念に細工したものだ。右と左、両の腕に填められる対になったブレスレット。

当時縁のあったある少女の為に、造られたものだった。神に愛された少女の為に。

慈愛と逞しさに満ちたその少女は、彼の目にファーラ神の再来のように映った。純粋に、彼女を讃え、敬う為だけに心を込めて造った。

その惨事が起きたのは、最後の仕上げに、中央へとはめ込む石を――その瞳の色に似合う石を探しに出た間のことだったのだ。彼が戻った時には、既に彼の作品を含めたドワーフの財貨はどこかへと隠された後だった。

以降、ブレスレットの行方はわからないままだし、少女との邂逅も果たせぬままである。

（行方さえ……）

せめて、ブレスレットさえ彼の手に届けば。

あの時手にして戻った石は、未だ埋め込まれる先がないままに彼の部屋の奥に眠っている。

短い足をせかせかと動かして、彼は部屋の奥へと歩を進めた。棚の奥深くにしまいこまれた石をそっと取り出す。もう、会えないかもしれない。手渡すことなど、今更出来ないのかもしれない。けれど。

（せめて……）

ブレスレットをこの手に取り戻して、完成させることが出来たなら。送ることくらいは出来ようものを……。

だが、彼の力では、財宝の行方を追うことは不可能だった。様々なヒントを記してあったはずの書物や何かも、その戦争の折に消失してしまっている。どこへ行ってしまったのかは、わからない。

「……」

ひとつ、ため息をその場に残し、彼は窓際にその石を置いた。どうせ盗むような者など、この地にはいはしない。

彼が去り、再び静寂に包まれたその部屋の中で窓から射し込む光を受けた石が、きらりと紫色の光を反射した。

ＥＳＴ　第２部　砕けた心

第１章　黒衣の魔術師

ＱＵ

第2部　砕けた心　第2章　冒険者たち

第2部　砕けた心
第2章　冒険者たち

部屋の扉が控えめにノックされた。することもなくぼんやりと窓の外を眺めていたバイカーは、はっと顔を上げて扉を振り返った。
「はい」
がちゃん、と鍵の開く音がして、扉が開く。バイカーには開けることが出来ない扉だ。
「ご機嫌はいかがですか」
良いわけがない。『ご滞在』と言う名目で監禁されて1ヶ月が過ぎようとしている。
沈黙で答えたバイカーに、訪問した男は苦笑いを浮かべた。確か、リトリアの外務大臣を務めている男だっただろう。
「そう、苦い顔をめされるな」
無茶を言う。尚も沈黙を保っていると、男は懐から丁重に包まれた書簡を取り出した。
「それは……」
「長々とお引き留めしたことは、謝罪しよう。平に、ご容赦いただきたく」
「……」
「こちらとしても、安易な返事を差し上げるわけにはいかなかったゆえ、ご寛恕いただきたい」
「では」
見開いたバイカーの目の前に、書簡が差し出された。男が頷く。
「我々リトリアは、書簡の内容をご了解さえいただければ、ヴァルスに協力させていただくことに異存はない。……陛下より書状を預かって参った」

「……！！」

震える手で、書簡を受け取る。長く辛抱した甲斐があったと言うものだ。リトリアがいずれに参戦するかは、戦局を大きく左右する。

書簡の内容は想像がつく――かつて失ったリトリア領土の返還だ。バイカーが使者として放たれた時には、既に重鎮たちの会議に上っていたはずである。今頃はとうに結論は導き出されているだろう。

「あ、ありがとうございます……！！」

これまでの遺憾も忘れて、全身の力が抜けていくようだった。毎日気が気ではなかったのだ。リトリアがロドリスに汲みすることを決めれば、自分は間違いなく命がない。

「陛下に、ご挨拶などは……」

「必要ない。そなたの帰りを待ちわびておろう。すぐにでも持ち帰った方が良いのではないか。馬を用意させている」

「ありがとうございます」

必要ないと言うのであれば、遠慮なく省かせていただこう。風来坊のようなリトリア国王は、上品なヴァルス貴族に慣れきっている彼の肌には合わなかった。会わなくて済むならそれに越したことはない。

手早く身支度を整えて、足早にラナンシー城を後にする。馬を駆って市街門へ向かった彼は、ヴァルス王城シャインカルクからの正規の使者であることを示すプレートを示した。

戦時中とあれば尚のこと、国への出入りは厳しくなる。休戦の申し入れなどを伝える使者さえ阻まれるのであっては、事態の好転は見込めない。ゆえに、ことがスムーズに運ぶよう、使者は使いに出される時は日付と各国の王家の紋章を刻んだプレートを携帯するのが常だ。

だが、逆に言えばそのプレートを身につけている者は道中危険にさらされる。極秘の情報を携えている可能性が高い為、敵対する国の標的となりやすいのである。その為、関所を越えた時点でプレートを隠すのが通常だった。

だが、バイカーは急いたあまりに、それを忘れた。首からぶらさげたプレートを、軽く胸元に引っかけたままでヴァルスめがけて疾走した。

リトリアからヴァルスへ戻るには幾つかの道筋があるが、最短を選ぶならばガレリア山脈を越えてロドリスへ入る進路だろう。ガレリア山脈は鬱蒼と深く、一部非常に険しい道があった。かつては容易に逃げられないその地形を好んで根城にしていた山賊がいたらしいが、このところ噂が絶えている。

急激に細くなったその道にさしかかったバイカーは、馬を下りた。この手前で休憩を取った方が良いだろうか。夜の山越えは、魔物に遭遇するかもしれない。

そう考えて躊躇した矢先、前方から物音がした。どきりとして目を見張る。薄暗闇に目をこらしたバイカーは、月明かりにきらりと何かが反射したのを見て心臓が捕まれたような気がした。魔物の目が光ったのだと思ったのだ。

じっとりと汗の滲む手で、腰の剣に手を伸ばす。魔物の徘徊するこの世の中で使者に選出されるくらいだから、腕に覚えがないわけではない。とは言え、余裕でいられるほどではない。

「おやーおこんばんわー」

だが、がさりと茂みから現れた姿を見て、全身から力が抜けた。剣の柄から手を離す。

背の高い男だった。人が良さそうな顔に、間抜けに見せる丸眼鏡がちょこんと乗っている。先ほど反射したのは、これだったのだ。

「こんな時間の山越えは危険ですよぅー。ほらもう私なんか見て下さいよぉ。あっちで崖から転げ落ち、こっちで岩場に叩きつけられ……猛獣には襲われるし魔物は追いかけてくるし馬には逃げられるし同行者とははぐれるしで」

「……」

それは既に死んでいてもおかしくない。

「ですからおやめになった方が……うひゃおーうッ」

何をかましたやら、頭の悪そうな雄叫びが聞こえたかと思うと、がさり、ずざざざ……と言う音が聞こえ、そのまま姿がかき消えた。どこか下の方で「うう～……右足の小指を突き指した……」などと言うやたらと具体的な申告が聞こえ、ずるずると這い上がるような音が近づいてくる。

声をかけたものか、気味が悪いので放っておくか迷っているうちに、再び男が姿を現した。顔中にひっかき傷を作り、乱れた長い黒髪には枝やら枯れ葉やらを絡ませている。

「ほらね……危ないんですよ……」

「……」

言って這い上がってきた男に、ふと疑問がわいた。ガレリア山脈は付近に大きな街はない。まさか徒歩で遙々？ありえないことではないが……。

不意に、バイカーの握っていた手綱が強く引かれた。怯えたような嘶きが上がり、馬が激しく身をよじる。

「うわ……？」

ぐいっと体ごと引きずられる勢いで、馬がバイカーの戒めを逃れて駆けだした。あまりに突然の出来事で、咄嗟に態勢を崩したバイカーはもんどりうって地面に倒れ込む。気づくと、男はすぐ間近まで接近してきていた。

「本当に、馬ってのは聡い生き物ですよね」

「――え？」

目をしばたたく。男が腰に下げたセイバーに手を伸ばすのをのんびりと見つめた。

「危険な生き物を見ると、生存本能ってやつが働くわけですよ」

「……」

「人間って奴が、１番鈍いんです」

しゃら……とガラスのような音が聞こえた時には、既にバイカーの喉元に男の構えたセイバーが突きつけられていた。ぼんやりと、どこか他人事のようにそれを認識する。魔剣だろうか、仄かに剣か

ら青白いオーラがたゆたう。
「……ヴァルスの使者ですね？」
男の行動と、妙に丁寧な言葉遣いがそぐっていないような気がした。
剣をバイカーの首筋に押し当てたまま、男の伸ばした片手が首からぶら下がるプレートに触れた。
「良かった。すれ違ってしまわないか心配だったのです。……こうして無事放たれたと言うことは、何か素敵なお話をいただいたのでしょう」
「……」
答えるわけにはいかない。もっとも、男の方もさして返答を期待しているわけではなさそうだ。
「私はハーディンに縁のものでしてね。そのままお帰しするわけにはいかないんですよ。……おわかりでしょう？」
穏やかな口調を崩さないのがかえって恐ろしい。
「いやいや、私もね、こんな手荒な真似はしたくはないんですがね。いずれにしても、このままあなたがヴァルスに帰ればリトリアはロドリスと敵対することになるでしょう。まーずいんですよ。減棒になってしまう」
ですから人質になって下さいね？と覗き込んだその瞳が、黄金色に輝いた。
「ああ、大丈夫です。怖い思いは大してしませんから。いずれにしても、ロドリスとしては賭けに出ざるを得ないのですよ。指をくわえて見ていてはリトリアを持っていかれるんであればね……やらないよりは、やってみた方が結果が変わるかもしれないでしょう？」
だからね、と男が続けた言葉の先はバイカーの耳に届くことはなかった。ぼとり、とタチの悪いオブジェのように、その首が地面に落ちるのと、男が言葉を続けたのはほぼ同時だった。
「……あなたの首を、人質に欲しいんです」
ね？怖い思いは、しなかったでしょう……？

第2部第2章第1話　つかのまの安息（1）

「どうだった？」
「全然駄目ね」
戻って来たニーナの言葉に、隣に並んだクラリスも小さく頷いた。
「素早い対応で結構なこった」
苦い表情で、シサーが呟く。俺は少し眉を顰めて、クラリスに尋ねた。
「それって……アンリは大丈夫なのかな。殺されたりはしないの」
クラリスがため息をつきながら小さく首を横に振った。
「わかりません」
「平気だと思うわよ」
ニーナが横から口を挟んだ。
「外交官は利用価値があるから、殺されたりはしないと思うわ」
「利用価値？」
俺の問いに、シサーが代わりに答える。
「偽の情報流させたり、届いた情報を奪ったり出来るだろ。情報操作にはうってつけだからな」
ああ……なるほど。
「なら、良いけど」
バルザックの館を後にした俺たちは、とりあえずフォグリア近郊にまで戻ってきた。さすがにいけしゃあしゃあと王都に入り込むことは出来ないだろうな、と言うことで、ロドリス国民であるクラリスと、身軽なニーナがフォグリアへと偵察に行ったのだ。
俺はさすがにまずいだろうし。
「ただ、既に拘束されているような空気感ではありましたね」
「市街門の警戒なんか、半端ないって感じだったわよ。衛兵がうじゃうじゃいて、見てるだけで暑苦しいったら」
そんなんで果たして、そもそもロドリス王国から出ることは可能

なんだろーか。
「しょーがねえなあ。いったん街で準備を整えたかったけどな」
ひょいとシサーが肩を竦めてぐしゃぐしゃと髪をかきまぜる。
「ま、しょーがないね」
シサーの言う通り、実際バルザックはどこに行ったかわかんないし、ファリマ・ドビトークにいる保証なんかどこにもない。ってことはいつまで探索が長引くかわからないわけで、出来れば馬を手に入れるとか食料や薬を補充するとか……したかったんだが。
「じゃあ皆さん……お元気で」
俺たちから一歩引いた場所に立っていたクラリスが儚く微笑んだ。
「おう。平気か？」
「平気だと思います。フォグリアの知人の元を、とりあえず訪ねますから」
クラリスとは、ここでお別れになる。何束縛されることなく放浪しているシサーやニーナ、修行中で師匠の許可があるキグナス、そして最初からどこぞの馬のホネである俺と違い、クラリスには護るべき神殿がある。先の読めてる屋敷へ行くくらいならともかく、アテのわからない旅にまで連れて行くわけにはいかない。
「けど……グレンフォードに俺たちと一緒にいたことを知られてるし……素性も知られてるだろ？大丈夫なのかな」
いきなり兵士引き連れてクラリスを捕まえに行ったりとか、ないのかな……。
心配して言うと、キグナスが俺を振り仰いだ。
「んでもさ、おまえの予想が合ってりゃ、あいつ、神殿には入れねぇんじゃねぇの」
「ああ……」
俺の予想が合ってれば、ね……。
キグナスが言っているのは、グレンフォードの戦闘後に俺が立てたあいつの正体の推測のことだ。シサーと話していて脳裏に走ったふたつの言葉。

――キメラに襲われて全滅……
――神殿にいらっしゃったことがあるわけではないのですけど……
人間であり人間でない彼ら。
人ではありえない肉体能力。
……人間と魔物のかけあわせなんじゃないか、と言う……。
そんなことが可能かどうかは、俺は知らない。けれど『キメラ』と言う生き物が存在するのならば、ありえない話でもないんだろーか程度の推測だ。シサーいわく、『ネクロマンサー』とか言う種類の魔術師が存在すればありえるかもと言うことだったけれど、ローレシアでネクロマンサーの存在も人と魔物の掛け合わせも聞いたことがないと言うことだった。
ので。
微妙っちゃあ微妙だと思うんだが。
ただ、あの時シサーが引っかかったのが『言語』だ。彼女たちが時折口にした言葉は、トートコーストの言葉だったと言う。とすればグレンフォードもトートコーストから来たのかもしれないし、他大陸の話であれば『ネクロマンサー』とやらが存在しないとは言い切れないからわからない、とのことだった。
いくらシサーだって、数度しか訪れたことのない他大陸のことまでは詳しくわからない。
誰か、そこ出身とか何か詳しい人に話が聞ければわかることがあるかもしれないけれど……。
ともかく、グレンフォードが半魔物なのであれば、神殿に住むクラリスに手出しは出来ないんじゃないかと……そういう話だ。
「でも、何もグレンフォードがじきじきに来る必要はないわけじゃん。別にハーディンだって、人手不足だとかみんながみんな魔物だとかってわけじゃないんだろ」
「……みんな魔物って、どんだけ人手不足なんだよ」
人手不足で魔物が人間の王城に勤務するのはどうかと思う……そういう話じゃない。

「大体、俺の予想が正しいとは限らない……って言うか、確かな根拠はどこにもないし」
ほとんどでたらめの領域だ。
「あら、そうとも言えないわよ」
ニーナが腕を組んで小首を傾げる。
「そうかな」
「だって、あの化け物と何らかの繋がりがあるのは確かだと思うし、『お兄ちゃん』って言葉は同類を指してるんだとはわたしも思うわよ。あの化け物と同類なら人間とは言えない――どういう形であれ、魔物に属する何かだとは思うわね」
まあ、掛け合わせかどーかは置いといて、それは言えるか……。
「大丈夫ですよ」
クラリスを心配してやいやい言っている俺たちに、クラリスが微笑みながら口を開いた。
「神殿に入れるかどうかはわかりませんが、あの人、そういう行動をする人にも思えませんし」
「確かにそういうまともな行動をしそうには見えないよね……」
ぼさぼさの頭とへらへらした顔を思い出しながら言うと、クラリスの笑顔がひきつった。
それは、そうなんだけど……。
同時に、あの豹変ぶりを思い出す。
……必要とあらば手段を選ばない冷酷無比さが、そして笑顔の裏に冷徹な計算が……潜んでいるような気がして。
そんな俺の疑念を察したのか、クラリスが俺に向かって言った。
「カズキ、大丈夫です。わたしは、これでもロドリスの国民……タフタルの町の神殿をいただく程度には、教皇庁の信頼もいただいています。何かあれば、手を貸して下さる方も、いるでしょう」
「うん……」
なら、いーんだが。
「それに、危険と言う話であればカズキたちの方が危険なのですよ。

わたしには、祈りを捧げることしか出来ませんけれど……」
そう言って長いまつげを悲しげに伏せる。
「クラリスの言う通りだな。行くか」
「うん……そうだね」
確かにここでいつまでも心配してたって、ずっとクラリスについてるわけにはいかないし、兵士に見つかる危険性が上がるだけだ。
「じゃ、行きましょ。クラリス、また寄るわね」
「ニーナ、気をつけて」
見送るクラリスに別れを告げて、ファリマ・ドビトークへ向けて歩き出す。こうもたらい回しだと、返す返すも馬に逃げられたのが痛い。
「でも、山だしな……」
ファリマ・ドビトークの姿はここからも見えるが、見える限り結構険しそうだ。馬だとキツかったりするんだろうか。
「あ？何が？」
「いや、馬があったら便利なのかなとか思ったんだけどさ」
「ああ……山越えか」
「そう」
道によっては行けたりもするんだろうけど。国境越えみたいなのとか。
でも、キサド山脈なんかは馬が通れる道じゃなかったしな。
言ってみると、キグナスはぽりぽりと顎をかきながら空を仰いだ。
「キサド山脈だって、通る道筋に寄ると思うぜ。緩やかな回り道使えば、時間はかかるだろうけど行けるだろうし。事実、キャラバンや行商人なんかは馬だの何だの使うわけだから」
「ああ。そうか」
「ただ、ファリマ・ドビトークはどうだろなー」
言って、まだ遠くそびえる山を見遣る。つられて俺もそちらに目を向けた。
「人が、住んでないんだっけ」

「って言ってなかったか」
「うん……そうだね」
確かに人が住んでいなければキャラバンなどが行くわけもないし、だとすればいずれにしても馬なんか通りようがないのかもしれない。
「シサー」
前を歩くシサーに声をかける。天気の良いからりと晴れた朝、魔物なんかも出ないだろうし、全てを忘れてのんびりしてしまいそうな雰囲気。
「ん？」
心持ち顔を傾けた横顔を見上げる。
「そのさ、ファリマ・ドビトークってトコに行ったことは？」
「ないな。行く用がない」
「ふうん……」
じゃあ、本当に未踏なんだな……。
そう思えば、かえって不思議だった。バルザックが出没してるんだとしたら、何が目的なんだろう。普通の人には行きたいと思えないとしても、バルザックにとっちゃ魅力的な何かがあると言うことなんだろうけれど、それが俺たちにとって望ましいものとはやっぱり考えにくい。
（『魔の山』……）
確かにバルザックが好きそうなフレーズかもしれないけどさ……。
頭上を飛び回る鳥のさえずりを聞きながらそんなふうに思っていると、ニーナが俺を振り返った。
「ファリマ・ドビトークに行ったことはないけど、この辺なら何度かあるわよ。山に向かう途中に町があるの。今日はそこへ向かいましょ」
「元傭兵仲間がいるんだ。そこに泊めてもらおう」
「あ、うん」
……平気かな。俺たちって『お尋ねモノ』って奴になっちゃってんじゃないだろーか。何てったって宮廷魔術師と戦闘しちゃってん

だから。
　俺はあんまりこっちの王城内部のことだとか身分だとか政治だとかってのは未だにわかっているわけじゃないんだけど、でも宮廷魔術師ってのがその役職名からして凄いご大層な身分なんだろうってことくらいはわかるし、例えばシェインが何者かと戦闘して血だらけになって帰ってきたら……多分やっぱりそれはまずいだろうとは、思うし。
　それが仮想敵とも言える敵国の王城関係者だったら、是か非でも捕らえたくなるんじゃないかな……なんないんだろーか。
　荷車を押す、農民の姿が見える。何だかちょっと恰幅の良さそうなおばちゃんが3人、大きな笑い声を立てていた。そんなのを眺めていると、そんな切迫した空気なんか何だか忘れてしまって眠くなったりする。
「ちょっと話でも聞いておいた方がいーか……」
「そーね」
「おーい」
　ニーナの返事を受けて、シサーが呼びかける。笑い声がやんで、一斉に視線がこちらに集まった。そちらへ向かって移動する。
「おはようさん。何だい」
　おばちゃんのひとりが、荷車に寄りかかりながら首を傾げて、シサーを見上げる。
「王都が騒がしいみてーだから、何かあったのかと思って」
　しれーっとシサーが言うと、おばちゃんたちは顔を見合わせた。
「あんたたちは？」
「俺らはただの冒険者だよ。ヴァルスに戻る前に王都で一休み……と思ってたんだけどな。なーんか嫌な空気だって聞いたんでな。巻き込まれても面倒臭ぇし」
「あたしらにも、良くわかんないんだよ、まだ」
　気楽な口調のシサーに、おばちゃんも気楽な口調で応じる。うんうんと相槌を打つ他の2人を見回して、シサーに視線を戻した。

「ヴァルスじゃあ、モナと戦端が開いたって言うじゃねぇか。だからこいつはひょっとすると、と思ったんだが、そういうわけじゃねえのかなあ」
「どうかねえ。でも戦争が始まるらしいって噂は、あるのよねえ」
「確かに衛兵はやたらとうろうろしてるしねえ。鬱陶しいったら……」
「そうそう。門を出るのに呼び止められたりしちゃあ、たまんないってのよねえ」
……やっぱり、俺たちってお尋ね者？
それとも、ヴァルスとの開戦を控えたがゆえの警戒に過ぎないんだろうか。おばちゃんたちの話からは、そこまではわからない。
「ふうん？てえと、戦争ってわけじゃなくて誰か捜してるってことかな」
あくまで何も知らないように、シサーがさりげなく続けた。
「どうかね。あたしら街人には、何の話もおりちゃいないよ」
「王都に近づくのはやめとくかな、こりゃ」
軽く肩を竦めて、話を打ち切る。礼を言ってその場を離れると、シサーがぼそりと言った。
「何とかなりそうだな」
「え？」
「フォグリアでさえ街人が俺らのことを知らされてねぇんじゃ、他の町は一層だ。少なくとも『青の魔術師』は、表立って俺らを追うつもりじゃねぇだろう」
「でも衛兵は？」
「ロナードの町……ファリマ・ドビトークに行く途中にある町だが、あそこは防護壁はない。……衛兵は、いねーんだ」
「なんだ」
良かった。
それなら何とか今夜の宿は確保出来そうだ。
「どのくらい？」

「夕方にはつけるだろう。……そっから先は、ゆっくり休める場所はねぇと思った方がいーだろうなー」
自分で言っておいて、シサーは嫌な顔をした。
「今夜くらいは、ゆっくりしたいもんだな」
ところが、そうは問屋が卸さなかった。

◆◇◆

ロナードの町には、シサーの言う通り夕刻には到着した。確かに防護壁はなく、防護壁がないと言うことは、そこに詰める衛兵の姿もなさそうだ。
これまでに立ち寄ったどの町ともまた違う、いわゆる『町』と言う感じの雰囲気だった。近いのは……ヘイズ、かな。もろ住宅街と言う感じ。ただ、ヘイズと違うのは、町並みがお洒落なことだ。ディズニーランドの一角にでもありそうな、おもちゃのような雰囲気。
『魔の山』に行く途中の町だから勝手にどろどろした陰惨な雰囲気をイメージしていたもので、ちょっと意表をつかれた。……いや、良いんだけど。むしろ明るくて。
町について早々に、シサーの元傭兵仲間だと言うガルシアを訪ねる。町の本当の外れにその家はあった。家の裏手はすぐ、木々の生い茂った結構険しい斜面になっている。
ガルシアは『傭兵』と言うイメージがしっくり来る感じの、筋骨隆々としていて体中に古傷のあるおじさんだった。どっか寡黙な感じで、どっしりと存在感だけはやたらとある。
シサーやニーナと再会を喜び合った後、ガルシアは2階にある客室へ案内してくれた。部屋割りはフォグリアの時と同じでシサーとニーナ、俺とキグナスだ。……他に割りようがない。
「足りないものがあったら、遠慮なく言え。明日まではゆっくりすると良い。食事はいつ頃にする」
「……ガルシアが作ってくれるの？」

思わず尋ねてみると、ガルシアはにこりとも笑わずに頷いた。
「俺の手料理だ」
……。
「……ありがとう」
夕食はガルシアに合わせることにして、とりあえず明日の朝まではゆっくりしようと言うことになった。シサーたちと別れて、キグナスと割り当てられた部屋に入る。荷物を放り出してベッドに転がると、何だかようやく解放されたような気持ちになった。キグナスも空いている片方にダイブする。
「髪切ろうかなあ」
「……何だよ唐突に」
「別に」
だってこんなのんびりした……って言うか『普通』な空気感は久々だ。ユリアがいなくなってからは、街とかいても当たり前にそんなのんびりした気分になるわけもなかったし。その前はその前でひたすら砂漠、ひいてはダンジョンだったりとか。
何だか、最初にギルザードを訪れた時まで遡るかもしれない、下手をすると。
「俺が切ってやろーか」
にやーっと感じの悪い笑いを浮かべて、むくっとベッドから身を起こす。思わず凄く嫌な顔で、その笑顔を見返した。
「……どうやって」
「『風の刃』ですぱぱぱーんと」
あほ言え。
「髪じゃなくて頭の長さが変わる」
むしろ、なくなったらどーしてくれるんだ。
けらけら笑うキグナスに手近な枕を投げつけながら、体を起こした。思い切り伸びをしてあくびをする。
「だらしねぇ顔」
「あくびしてて尚緊張感ある顔してる奴なんていないよ」

第2部第2章第1話　つかのまの安息（2）

くしゃくしゃと髪をかきまぜながらベッドの淵に座ると、キグナスと向かい合うような形になった。
「どーしよっか」
まだ夕方。寝るには早い。
「どっかその辺、歩いて来るかあ？」
くりくりとオレンジの瞳を瞬かせるキグナスを見ながら、頷く。
「そうだね」
せっかく来たし。もう来られるかわかんないし。
息抜きにはなるだろう。
「シサーたち、どーすんのかな」
「声かけてみよーか。一応」
見物する理由はないだろうけど、買い物くらいはするかもしれないし。
部屋を出て隣の部屋の扉をノックすると、中で人が動く気配がして、少しの間の後に静かに扉が開けられた。俺と同じくらいの高さのニーナの顔が、そっと覗く。
「あ」
口を開きかけた俺に向かって、ニーナは立てた人差し指をそっと口元に当てると、物音を立てないように更に扉を開けた。部屋の中を示す。……嘘ぉ。
「……寝ちゃったの？」
早いだろ。
ベッドのひとつに、布団にずぼっとくるまった人影が見える。布団の端から長い髪の尻尾だけが、ちょろんと覗いていた。ひそひそ声で尋ねる俺に、ニーナが目を細める。長い耳が、微かに動いた。
「どこか行くの？」
俺の用件を察して、ニーナもやはり小声で尋ねる。

「うん。暇だからその辺で遊んでこよーかと思って」
俺の言葉にニーナが吹き出した。
「若者は元気ね」
……馬鹿にされとるんだろうか。
「若者ってあのねえ……」
それからニーナは、ちらりと背中を振り返った。
「わたしは、やめておくわ。シサーはあんなだし……。目が覚めて誰もいなかったら、可哀想だし」
おかーさんじゃないんだから。ガルシアがいるじゃん。……なんて、野暮なことは言わないが。
「わかった。じゃあ、行ってくるよ」
「そうね……戻ってきたら、食事、お願いしようか」
ニーナに手を振って俺たちの部屋へ戻り掛けたところで、キグナスの方が部屋を出てきた。
「行く？」
「うん。シサーたちは？」
「やめとくって。……ってゆーか、シサー、いきなり爆睡こいてるし」
下へ降りる階段へ向かいながら告げると、キグナスがかくんとコケた。
「早ぇだろ」
同感だ。
宿の外からは、子供のはしゃぐ声が聞こえてくる。差し込むオレンジ色の夕陽に目を細めながら、さっきのニーナの様子を思い出してみた。
……好きなんだろうなぁ、シサーのこと。
凄く、優しい顔をしていた気がする。本人が起きてる時には、なかなかあんな優しい表情見せないけれど。
宿を出て、とりあえず大きな通りを目指してみることにした。大きな、と言ったって大した大きさでもないんだけど……敢えて言う

なら、東京の下町とかにもこういう商店街ってあるよね的な程度で。とは言えそれよりはずっと、西洋風でお洒落だ。

「何か名産品とかねぇのかな」

すっかり気分は観光客だ。キグナスが、辿り着いた大通り沿いの店に視線を走らせながら言った。

「うまいものとか？」

「そうそう」

キグナスは、こっちの世界の人間とは言え基本的に今はシャインカルクでしか生活してないし、その前も学生時代にリトリアにいたくらいであまりあちこちを知っているわけではない。生まれも育ちもレオノーラらしいし。

そういう意味で、俺とキグナスはレベルが近いものがある。……知識で言えば俺の方が圧倒的に低いのは確かだが。

住宅街と言う感じの町並みのせいか、ギャヴァンみたいに屋台とか食べ物とかが溢れてる感じではなかった。いや、あそこの場合は食べ物どころか人が店からはみ出てたっけ。レオノーラも結構上品な割には露店みたいのも結構あったけど、ここはもっとこじんまりとしてる。店も、食べ物とかそういうものよりは、生活雑貨や小物、洋服や花なんかで、食料品とかも店先で食べると言うよりは買って帰って家で作るって感じ。

家庭的な雰囲気って言うのかな……。

「何か買っておいた方が良いものとかってあるかな」

「あー……プリースト、いねぇからな。薬とかそういうの、もうちっと増やした方が良いのかもしんねぇ」

「そう言えば俺、ずっと解毒剤、ひとつだけ持ってるんだよな……」

ユリアやクラリスがいたから、結局使い道なくて持ってるだけだったけど。

「何で持ってんの。しかも、何でひとつなんだよ」

「ひとつしか売ってなかったから」

言いながら、ヘイズの道具屋を思い出す。今にも壊れそうな看板。

あのおじさん、元気だろうか。もう名前も覚えてないけれど。
あれから、3ヶ月くらいしか経ってないはずなのに、何だか凄く昔の出来事のような気がした。いろんなことがあり過ぎたせいだろう。
あの時は、目先のことで精一杯で、まさかヴァルスを出てこんなとこまで来るとは思ってなかったな。『王家の塔』ってトコ行って、それで終わりなんだと思ってた。
「カズキ？」
ぼーっとそんなふうに思っている俺を、不審そうにキグナスが見上げる。
「いや……いろんなことがあったんだなあと思って」
「……いきなり何だよ。解毒剤からどうしてそこまで話が飛べる？」
「俺の頭の中で、いろんな展開があったから。今」
たった数ヶ月でいろんな人に会ったものだ。
「あ、あれ、道具屋かな」
「勝手に買っちゃって良いと思う？」
「良いんじゃねぇ？」
道具屋らしき店に入ってみると、中はすっきりと片付いて綺麗な感じだった。カウンターの内側で、俺たちとさほど年の変わらなさそうな女の子が店番をしている。
「いらっしゃいませー」
「えーと、薬とかって、ありますか」
こういう時、キグナスはほとんど口を開かないので、対応はほとんど俺になってしまう。
「薬ですか？ございますよー。どういったものをお探しですか」
どうしよう？
「薬草と毒消し？」
「んー……かなあ。疲労回復みたいなの、あればあった方がいーんじゃねえ？」
ああ、そうか。この先あんまりゆっくり出来そうなところもない

って話だったし、キグナスひとりの魔法に頼りっぱなしってわけにもいかないもんな。さすがにロートスの実だって、もう持ってない。ってかあったって食いたくない、いくらもちが良いったって。

「どのくらい買っとく？」

魔法に頼りっ放しだったせいで、その辺の感覚がイマイチ育ってないらしい。キグナスももちろん同様で、しょうがない、適当に買うことにする。

「えーと、何か疲労回復と治療薬と毒消しを３０個ずつくらい」

何だか凄いことを言っているような気がしなくもない。

けれど、４人いるわけだし、そうするとひとり頭１０個も行き渡らないわけだから……しつこいけど、先がどうなるかわかんないんだし。

「はーい。ありがとうございますー」

女の子ががさがさと袋に品物を詰めてくれている間に、他に何か必要なものがないかきょろっと見回す。

「あと、何かいる？」

携帯食は欲しいか……。

なぜか、食料品にも関わらず、旅に持って出るような携帯食ってのは、その辺の食品店にはない。道具屋でしか売ってない。旅人があちこち回らなくて済むようにと言う配慮だろうか。

追加して干し肉だの何だのを買って、キグナスを振り返る。

「こんなとこ？」

「そうだな……あ、馬とか一応聞いてみるか？」

……ここにはどう見たって売ってないんじゃないかな。

沈黙で答えた俺の目線に、キグナスが慌てたような顔をする。

「馬鹿、ここで買おうとはいくら俺だって思ってねえよッ」

良かった。

「でも、馬って高いんじゃないの」

「金ねえの？」

「あることはあるけど」

大金過ぎて怖いので、大半はシサーに預けてあるけど。だから実は、シャインカルクから貰ったお金の残高がどのくらいか、良く知らない。でも、いくらお金持ってるったって所詮は他人の金、先も見えないじゃあ節約するに越したことはないと思う。

「……」

「……」

「……」

感覚としてまだこの世界の金銭感覚が馴染まない俺と、そもそもが貴族で金銭感覚のいかれているキグナスではどうにもならない。

「……通れる道があるかと、売ってるとしたらどこかだけ確認しよ」

あとはシサーに任せよう。

「お待たせ致しましたあ」

「あの……」

店番の女の子から包みを受け取って、お金を渡しながら尋ねてみようと口を開き掛けたその時、表が騒がしいことに気づいた。

「……？　何？」

「さあ？」

良く耳を澄ませてみると、「号外ー！！」と叫んでるようだ。

「号外？」

「何だろう」

キグナスと顔を見合わせ、馬のことなんか忘れ去って表へ出てみる。町角に人だかりが出来ていて、チラシみたいなのを配っているみたいだ。

「もらってこいよ」

何で俺？

仕方なく紙を配っている男から1枚もらい、キグナスのところへ戻りながら視線を落とす。

（――！！）

……なんて。

相変わらず俺には文字が読めないので、全く無意味なただの紙切

れだ。
「はい」
「さんきゅー」
これじゃあ俺はただの使いっ走りじゃないか。
じとっとキグナスが視線を紙面に落とすのを睨んでから、尋ねる。
「で？何？」
「……」
「キグナス。教えてよ」
「……」
「おーい」
「……っかんねッ」
何だよ。
「何、わかんないって」
「ロドリス語で書いてある。読めねえ」
「……」
じゃあどっちにしたって役に立たないじゃないか。
「店の名前とかそういうのなら、結構ヴァルス語も書いてあんだけどな」
日本語の下に英語が書いてあるようなもんだろうか。
「じゃあ、後でシサーに読んでもらおう」
帝国継承戦争なんかに巻き込まれそうな……って言うか、巻き込まれている手前、やっぱり世の中の動きは知っておくべきだろうし。号外なんて出ているくらいだから、大きな動きがあったんだろうし。
そう思いながら、号外の紙切れを折りたたんでポケットにしまいかけた俺の耳に、その紙面に目を落としている人たちの話が飛び込んできた。
「やっぱりな、モナじゃヴァルスに勝てないんだよな」
――え！？
咄嗟に、キグナスと顔を見合わせる。
「ギャヴァン……！？」

戦闘が、終わったのか？
「聞いてくる」
読めないんだから、読んでる人に教えてもらえば早いだろう。
「え、おい」
「すみません」
今の声の主に声をかけてみる。４０代くらいの、気の良さそうなおじさんが２人、号外を覗き込んでいた。
「あ？」
突然話しかけた俺に、きょとんとした顔を向ける。ヴァルス語を話せる人と話せない人といるみたいだけれど、今、ヴァルス語をしゃべってたということは、会話が成り立つのは間違いない。
「すみません、号外の内容って教えてもらえますか？」
「ああ……ヴァルス人か」
いえ、日本人です。
「何でもモナがヴァルスに立てついてたみたいなんだけどな、決着がついたらしいって話よ」
「……ギャヴァン、ですか」
「だけじゃないみたいだな」
もうひとりの男性が、手に持った号外を指で追いながら補足してくれた。……だけじゃない？
「海戦もあったみたいだぜ、これによると」
海戦！？
「でもそっちは、生存者がいないそうだ」
「え……！？」
「生存者がいないって……」
俺の後ろで一緒になって話を聞いていたキグナスも、思わず声を上げる。
「いや、海戦には良くある話なんだよ。海の魔物は気性が荒いからな」
良くある話で片付けて良いもんなのだろうか。

「海戦の方は詳しいことはわかってないみたいだなあ」
「ギャヴァンの方は？」
「カタがついたのは昨日の夜か……」
昨日の夜……。
じゃあちょうど、『青の魔術師』と戦闘してる頃だろうか。
物凄い短期決戦だったんだ。
「勝ったのは、ヴァルスなんですね」
「らしいな。そうじゃなくてもヴァルスは強いのに、モナみたいなちっちぇえとこじゃあなあ……」
シンは、どうしたんだろう。
俺と別れてから『3つ目の鍵』のダンジョンを攻略して……ギャヴァンへ戻ったんだろうか。
「でもほら、モナってのはいつだか公王が替わったろう」
「ああ、でもあれは……」
そのまま、モナについての話に移り始めた彼らに礼を言って、その場を離れる。
「宿に、戻ろうか」
気がついてみれば、日は大分傾いているみたいだった。すっかり暗くなり始めている。
「……うん」
無事だと、いいんだけれど。

第2部第2章第2話　忍び寄る排撃

「先がわからなくなって来たな」
ガルシアの家で夕食を終えた俺たちは、そのままお茶を片手にテーブルを囲んでいた。シサーが手にしているのは、先ほどの号外だ。
その記事からわかることは、さっきの話以上には大してあるわけでもなかった。ギャヴァン沖に停留していたモナが上陸、一方で海上を進んでいたヴァルス海軍を追ってモナの船団が北上したこと、ギャヴァンは市民の抵抗と要塞から派遣された軍の活躍により奪回が完了したこと、海上では両軍が衝突をしたものの、何が起こったのか生存者がいないこと。
俺の元いた世界ほど情報技術の進んでいないこっちでは、写真なんかもあるわけじゃないし、具体的にどういう戦闘が行われたのか、どんな作戦がとられたのかなどは何ひとつわからない。パソコンやメールがあるわけでもないし。
「わからなくなって来たって？」
「モナの打撃のでかさだな。どのくらいの戦死者が出てるのかはわからねぇが、ヴァルスと違って莫大な兵力を抱えてたわけじゃねえ。ギャヴァン戦と海戦で失った兵力を考えれば、しばらく再興は出来ねえだろうな。これで、ロドリスについたと思ったモナは、ヴァルスの占領下だ」
じゃあモナは早くも離脱、と考えて良いんだろうか。
「他にも何か、ある？」
尋ねてみるとシサーは、裏っ返したりしながら記事を追って口を開いた。
「ツェンカーの代表者決定……ナタリアとロンバルトに挙兵の動き」
「……」
そう言われても良く実感が湧かないけど、大きな動きなんだろうと言うことはわかる。ナタリアとロンバルト……じゃあ、ロドリス

ももう動くんだろう。気になるのは、他の国がヴァルスとロドリスに対してどう動くのか、だよな。

……ツェンカーはあんまり関係ないのかな。帝国外の国だったと思うし。

「動き出したな」

ガルシアがぼそりと言った。ニーナがため息で答える。

しばらく紙面に目を落としていたシサーは、やがてばさっと号外を折り畳んだ。テーブルに放り出す。

「さてと。こっちの話をするか」

シサーの言葉を受けて、ガルシアが地図を引っ張りだした。この周辺の地図で、ファリマ・ドビトークから教皇領エルファーラまで載っている。

「山に入れる道は、ここと……ここ。この、2箇所だ」

ガルシアが指で地図上をたどる。全員でその図を覗き込んで場所を確認した。

「今いるのが……ここでしょ……で、この道か。ここからここまでは、道は？」

「こっちはこの町から猟に入る人間が使うからな。道は細いが、ある。こっちはちと遠い。回り道になるし、視界も厳しい。山道に入るまでも険しいから、まあ使うならこっちだろうな」

俺の問いに丁寧に答えて、ガルシアは更に指で山を辿った。

「こっちから入るとして、確かこんな感じで道を辿ってくと、この辺に猟師が休憩に使う小屋があるはずだ。そこでなら、休憩も出来ると思う」

ガルシアが示した場所は、地図上では入り口とさして離れてはいないところだった。2合目、とか言うんだっけ？

「ただ、道は細いし分かれ道も少なくない。山に慣れた猟師なら迷うことはないが、慣れてなけりゃ間違えるかもしれんぞ」

嫌だな。

「目印みてぇのは、ねぇのか」

ガルシアが腕組みをしてシサーに顔を向けた。
「ないな。頼りにするとすれば、道幅くらいか」
そんなアバウトなものを頼りにするのはどうだろう。
「こっちからの道ってのも、その猟師小屋に続いてんのか」
「続いてる。……はずだ。ただ、正確な道筋はわからんな。猟師小屋から少し下ったことはあるが、途中から獣道みたいになってたと思うぞ」
「……危ないな」
「だから言っている。こっちから行け」
「ねえ」
目の前に置かれたお茶のカップを取り上げながら、ガルシアに声をかける。2人の視線が一気にこっちに向いて、少し居心地が悪い。
「あのさ……『魔の山』とかって言うくらいだから、魔物とか多いんじゃないの」
「多いな」
「猟師とか、入るんだ？」
素朴な疑問なんだが。
猟師ってくらいだから、多少の魔物だったら戦えるのかもしれないけど。
そんなふうに思いながら返答を待っていると、ガルシアもカップに手を伸ばしながら頷いた。
「元々、3合目くらいまではほとんど魔物が出ることはなかった」
「あ、そうなんだ」
「上に行けば行くほど、魔物は増えるがな。ただここ数年で魔物の量が一挙に増えた。おかげで最近では1合目程度までしか入れなくなっている」
「じゃあ、猟師小屋に行く途中でも……」
「出るだろう。地元の猟師は、今は猟師小屋にも足を運んでいない。山裾付近で猟をするのがせいぜいだ」
そうなのか……そうだよな。アンリは「今は人も住んでない」っ

て言ってたから、前は……その猟師小屋が活用されていたような頃は、人も住んでいたんだろうし、魔物も少なかったんだろう。
そして今は人が住んでいなくて、魔物も増えた……。
……何で、なんだろう。
「じゃあ本番はそっから先ってわけか。……わかった。とりあえず猟師小屋を目指そう。明日はそこで夜明かしして……」
「そこから先は、休みなしね」
シサーの向かいでじっと話を聞いていたニーナが、ため息をついた。
「ガルシア」
身を少し乗り出して地図を覗き込みながら、尋ねてみる。
「昔、人が住んでた？」
「どこに？」
「ファリマ・ドビトークの、どっか」
ガルシアが小さく頷く。ごつい顔が、ちょっと強張ったように見えた。
「村が、あったな」
「村？」
「ああ。ヴァインと言う、小さな村だ。犯罪を犯したり、村から弾き出されたり、ともかく何らかの理由で普通の町や村にいられなくなったような人間が集って、住んでいたようだ」
はみ出し者の村ってわけか……。
「当時は俺もここに住んでいたわけじゃないから知らないが、『魔の山』と言われていたのは伝説の領域だったらしい。具体的に何があったから人々が近づかなかったわけではなく、単に『強大な魔物の通り道』がファリマ・ドビトークにあるという伝説があったようだ」
「ふうん？じゃあ、別に魔物がたくさんいたとかそういうわけでは……」
「なかったらしい。そうして人々が忌避するからこそ、人に交わっ

て暮らせなくなった人間が村を築いたんだろう。国にも見離されたような、そんな村をな」

「そうか……ヴァインか」

そこまで聞いて、ガルシアの隣でシサーが目を見張った。ニーナも隣ではっとしたような顔をしている。

「そうだわ……そこよ」

「え？何が？」

「リデルの村で話が出たろう。村一面が血の海になって全滅に追い込まれた村がある、と」

ああ……。

「それが、ヴァイン？」

今までずっと黙りこくって話をただただ聞いていたキグナスが、オレンジ色の目を瞬いた。シサーの目がそちらを向く。

「ああ」

「ファリマ・ドビトークに唯一あった村ね……」

「あそこが本物の『魔の山』に姿を変え始めたのは、その少し前だと言う」

ガルシアが補足する。

「少し前？」

後じゃなく？

「地元の猟師の話だが。『最近魔物が多い』と言う話を聞くようになり、猟師たちがだんだん足を踏み入れることが出来なくなってから、しばらくしてヴァインが全滅したと言う話が舞い込んできたそうだ。元々の伝承と相まって、いよいよ本格的に『魔の山』として恐れられるようになった」

じゃあ、人が住んでいる間からファリマ・ドビトークは姿を変え始めたと言うことになるんだろうか。

「とりあえず、こっちのルートを辿って、明日は猟師小屋を目指すってことでいいな」

言ってシサーは、俺たちを見回した。この中の誰も訪れたことの

ない『魔の山』。
「うん」
何があるか、わからない。
頷きながら俺は、ルートを頭に叩き込むように地図へ視線を落とした。

◆◇◆

――一面の血の海。
累々と続く死者の列が、暗く澱んだ暗雲の中を進んでいく。
赤い、毒素を含んだような霧が空気中を漂う。
死者の列から、不意に誰かが離れた。こちらへ向かって迷いない足取りで歩いてくる。こちら――俺の、方へ。
「気にすんなよ」
死者は言った。見知らぬ男だ。
「しょうがないだろ、だって」
仕方ない……そう、仕方ない。だってこうしている間にユリアがバルザックに連れ去られてしまう。――俺の前を、塞がないでくれ。
ユリアが……。
「な？だから仕方ねーんだよ……だから俺も……」
男の声が、不意に変わった。合わせるように、顔が歪んで崩れていく。歪んで……あの、男の顔に変わった。気づけばそこは、細かな砂を風が舞い上げる砂漠だった。『風の砂漠』だ。
男がゆらりゆらりとこちらに近づいてくる。首には、真一文字にかき切ったような赤い筋がついていた。そこからまだ真新しい血が溢れ出す。いつの間にか握っていた剣を持つ手が震えた。
「俺だって気にしちゃいないさ。ただ……」
「来るな……」
尚も熱に浮かされたように続けながら近づいてくる男に、俺は自動的に剣を構えていた。

膝が震える。手が汗で滑る。

「ただ……」

血飛沫。

噴き上がる鮮血に、視界が赤く染まる。纏わりつく血の臭い。咄嗟に目を瞑った俺の耳に、男の声が追い打ちをかけるように響いた。

「俺の生命を奪ったのはお前なんだと言うことを、覚えておくんだな」

（――！！）

目を、開ける。視界に飛び込んできた木製の天井は、寝る前に見たものとまったく同じものだった。荒く息をついていた俺は、ふうっと深いため息を吐き出して一度目を閉じた。

全身が、汗でぐっしょりだ。

……嫌な夢を見たらしい。夢の内容までは覚えていないが、鼓動はまだ早く体が小刻みに震えている。

気を落ち着けようともう一度深呼吸をして目を開けた俺は、不意に隣のベッドに腰掛けている人影があることに気がついた。

「キグナス……？」

どうしたんだ？

こちらも体を起こしながら尋ねると、俺が起きたことに今気がついたらしいキグナスが顔を向けた。

「ああ……起きたのか」

「うん？どうしたの？」

完全にベッドの上に上半身を起こして尋ねると、キグナスは薄暗がりでもわかるほどはっきりと顔を強ばらせて答えた。

「外から、物音がする……」

「物音？」

言われて耳を澄ませると、確かに何か不穏な音が聞こえた。……甲冑の音!?

ベッドから跳ね起きて、窓に近づく。カーテンの隙間からそっと

覗くと、家の前に兵士の姿が見えた。それも複数だ。
「……何だ？」
やっぱ指名手配？
『青の魔術師』の――ロドリスの追撃の手が及んでいることに息を飲んだところで、ドアが控えめにノックされた。続いてシサーの声。
「起きてるか」
「あ、うん」
「明かりはつけるなよ」
ドアが開く。フル装備に身を固めたシサーとニーナ、そしてガルシアがそこに立っていた。
「あれは？」
「気づいたか。……やっぱり、探してるらしいな」
何でここにいるとバレたんだろう。
ここに来るまでに言葉を交わした人たちの顔が、浮かんで消えた。
「カズキ、裏から逃げろ。どうせ1番狙われてるのは、お前の首だろう。ガルシアが案内する。キグナス、一緒に行け」
「シサーは？」
「足止めしなきゃ、すぐ追いつかれるだろう」
「でも」
「後で追いかけるよ、心配すんな。……ニーナ」
俺に言って、そのままニーナを振り返る。
「カズキたちについて……」
「嫌よ」
ニーナが遮る勢いで答えた。シサーが驚いた視線を向けるが、ニーナは一歩も引かない態度で見返した。
「ニーナ……」
「もう離れるのは嫌」
「……」
その言葉に、シサーも返す言葉が浮かばなかったようだ。……風

の砂漠の時のことを言っているんだろう。
「シサー、大丈夫だよ」
見かねて口を挟む。
「逃げるだけなら、キグナスと2人で何とかなると思う。……そっちの方が戦力は必要なんだし、ニーナはシサーの援護をしてあげて」
「……大丈夫か」
「大丈夫」
だと良いなあとは思う。
「わかった……」
半ば折れるような形で、シサーが頷く。
「じゃあ準備を整えてすぐに……」
言い掛けたところで、建物が揺れた。無理矢理出入り口を壊そうとしているような音が響く。
「ちッ……強引だな」
それはそうだろう。ノックしたところで入れてくれないことは、先方もわかってるだろうし。
「行く場所はわかってるな」
剣を抜いて駆け出す寸前のような姿勢で、シサーが確認する。中に戻って衣服を整えながら、それに頷いた。
「わかってる」
「気をつけろよ」
「……そっちこそ」
その言葉を最後に、シサーの姿が視界から消えた。追うようにニーナも駆け出す。ガルシアが俺たちを急かした。
「早くしろ」
俺とキグナスが荷物を持って部屋を駆け出たところで、さっきより一層強い振動が襲った。激しい物音が聞こえ、複数の人間の足音が聞こえる。
「こっちだ」
ガルシアに導かれるままに階段を駆け降り、物音が響くのとは反

対側へと駆けた。
「廊下の突き当たりに、倉庫がある。倉庫の本棚をどかせ」
本棚をどかすッ！？
「蹴倒して良い。その背面に扉がある。裏手に向かって斜面を降りていけ。麦畑に面したあぜ道に出たら、左へ直進しろ」
「うん」
「しばらく進むとファーラの祭壇が見える。それが見えたら道を外れて南東へ向かえ」
「道を外れて？」
尋ねた俺に、ガルシアは剣を抜きながら頷いた。
「道なりに沿って進むと、町の出入り口に出ちまう。それじゃあ意味がないだろう」
確かに。
「南東の方角にファリマ・ドビトークが見えるはずだ。しばらく行くと小さな川がある。そこから川沿いに進めば、登山口からそう離れていないところに出るだろう」
そんな大まかで果たして辿りつけるかは微妙だが、他に言いようがないんだろう。地図を片手に詳細を聞いている場面でもないし、あとは自力で何とかするしかない。
「わかった。……ガルシアは、大丈夫？」
走りかけた足を止めて問う。ガルシアはぴくりとも顔を動かさずに、淡々と答えた。
「これでも傭兵だからな」
「……ありがとう」
礼を言って、今度こそ本当に駆け出す。言われた通り倉庫となっている部屋に飛び込み、目についた最奥の本棚をキグナスと蹴り倒すと、盛大に本が飛び散り、本棚が地響きを上げて床に倒れ込んだ。
「けほッけほッ」
上がった埃に、キグナスがむせこむ。俺も腕で顔を覆って舞い上がる埃を避けながら、奥の壁に目をこらした。

扉、かどうかわからない。取っ手がないからだ。ただ、良く見れば切り込みがある。忍者屋敷のからくりみたいになってるんだろうか。

切り込みの最端にあたる壁に手を掛けると、そこから１０センチくらいを軸に、長い方の面がばこんと持ち上がった。続く先は、外だ。

「行こう」

ばたばたと足音が耳につく。何が起きているのか、時折激しい戦闘音が聞こえてきた。

俺もキグナスも外に出てしまうと、その背後でばたんとからくり扉が閉まる。試しに押してみると、扉はもう開かなかった。外からは、入れないらしい。

「あれだけの人数相手に、平気かな」

ぼそっとキグナスが呟く。

「……大丈夫だよ」

そう思うしかない。

「裏も探せッ」

表の方から怒声が聞こえた。思わずキグナスと顔を見合わせる。のんびりしているわけにはいかないらしい。

「ここでごちゃごちゃ言ってても仕方ない」

「うん」

「行こう」

キグナスを促して低い垣根を乗り越え、裏の草むらへと飛び込む。近づく甲冑と複数の人の気配が、木々の葉擦れにかき消された。

『ホンモノ』がいない今、俺自身の命もさることながら、下手すれば俺の首にヴァルスの命運がかかっている。

……ロドリスの手に落ちてやるわけには、いかない。

第2部第2章第3話　秘めた魔力（1）

飛び込んだ斜面を一気に滑り降りる。本当は自分でその速度をちゃんと制御したいのだが、傾斜の上の草と土で、滑った足に引き摺られていると言うのが正しいような気がする。

傾斜は結構キツく、滑り降りる体はほぼ後傾だ。変な風に突き出して生い茂っている木々の枝で目を突かれないよう左腕で顔を庇い、右手は地面にいつでも付けるよう後方に差し出しているような姿勢になっている。

木々と草がかなり密生しているので、飛び出している枝が腕といい頭といい体といい、当たりまくってバキバキと折れていった。ぶつかりあって揺れる木と木、葉と葉が立てる音だけが聞こえる。

踵を地面に押し付けてスピードが出過ぎるのを何とか押さえながら、それでもこの勢いで止まろうと思ったら尻餅をつくのは必至だろう。

それほど長い斜面ではなかったらしく、ややして前方、木々が途切れたその隙間から月明かりを落とした麦畑が広がっているのが見えた。そのままの勢いで放り出されてはたまらないので、後傾になったままで踵に一層力を込める。後方へ出した手を傾斜の表面をなぞるように引き摺って何とか減速を図った俺は、放り出されることなくガルシアに聞いたあぜ道に出ることが出来た。

途端キグナスがぽんと放り出された。減速に失敗したらしい。

「うわぁ」

べしゃっと地面に放り出されるのには見向きもせず、左右を確認する。右も左も、草木の生い茂った斜面と麦畑に挟まれて延々と続いていた。人影はない。

「何遊んでるんだよ、行くぞ」

声を潜めてキグナスを振り返る。ガルシアに言われたのは、左。

「遊んでるんじゃねえよッ」

小声で怒鳴りながらキグナスが立ち上がると、俺たちはあぜ道を走り出した。

のろのろしていて追いつかれたら、わざわざ足止めをしているシサーたちに申し訳ない。

道は、緩やかに波打ってカーブしている。そのせいで、ずっと先はどうなっているのかが良くわからない。

走る左手にはずっと俺たちが下ってきた傾斜が見えているが、次第にそれは林と言えそうな感じになっていった。つまり傾斜はどんどん奥に引っ込んでいき、こちら側は多分傾斜とはもう言えないだろう。

夜道、そして『魔の山』のそば。

何か出てもおかしくない。

そう考えた俺は、抜き身の剣を握って走ることにした。こっちが駆けていると言うことは、突如踊り出た魔物との距離が一気に縮まってしまう可能性がある。剣を抜き出す暇さえ惜しい状態にならないとは言えない。

「どこまで続くんだ、この道……」

「さあな。どっかにファーラの祭壇があるって言ってたけど……」

そこまで来たら道を逸れろって言われてるんだから、多分右手に麦畑が続いている以上はまだまだ先だろう。まさか麦畑を突っ切れってことじゃないような気がするし。

そう思ったその時、左手の林から踊り出た影があった。さっき俺が杞憂したほど近い距離ではない。ぱっと見てまだ１０数メートルの距離がある。俺とキグナスは咄嗟に足を止めた。４本足の、獣。真っ黒に見えるその全身を硬そうな毛が覆っているのが、月明かりで見て取れる。グルルル……と喉を鳴らしているような低い唸りが聞こえた。

「ウォーウルフ……ッ」

遭遇するのは、久々だ。

シャインカルクから放り出され、『浄化の森』を抜けた時以来だ

った。
「キグナス、下がって」
言いながら、剣を構える。ウォーウルフは唸りを上げながら、微かな爪音を響かせて、こちらへゆっくりと近付いてきた。
「援護、よろしく」
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ダビト・デウス・ヒース・クォクェ・フィーネム、『風壁』」
下がったキグナスが、後ろから防御魔法をかけてくれるのが聞こえた。その間も、ウォーウルフは確実に近付いて来る。
……怖い、と言う気持ちは、起こらなかった。
振り返ってみれば、おかしくさえある。
最初にコイツに遭遇した時は、怖くて全身が震えたっけ。逃げたかった、嫌だった、死にたくないと思った。
今は、そんな感情が湧き起こらない。
「カズキッ」
キグナスが注意を喚起する声が聞こえた時には、ウォーウルフの足が地面を蹴っていた。鋭い牙の並ぶ巨大な口を開き、真っ赤な舌が見え隠れする。
恐怖心の湧き起こらない俺は、ウォーウルフが射程距離に入るのを剣を構えたままで待った。
人の身体能力は、意外と侮れるものじゃない。そりゃあ力とかそう言うのには限度あるし、反射神経だとかそう言うのも個人差は凄くあるのは確かだろうが、それでも相手の動きをちゃんと見ていれば避けられるものは多いし、逆に反撃もいくらでも出来る。……ま、相手の身体能力が人間を圧倒的に越えちゃってる場合や魔法なんかの場合は、その限りでもないけれど。
それが出来なくなるのは、恐怖心に振り回されるからだ。
見えるはずのものをちゃんと見ていなければ、避けられるものも避けられなくなる。だから、負ける。
『怖い』とさえ思わなければ、相手の動きをつぶさに冷静に見て

いることが出来るから、人間の肉眼で認識出来る範囲の動きだったらそれに対応することはかなり可能になってくる。――そして、今の俺は『怖く』ない。

「ギャン！！」

ちッ……。

鋭い鉤爪を避けながら薙いだ剣は、ウォーウルフの胴部を掠ったに過ぎなかった。前よりましになっているとは言っても、別に大して強くなっているわけでもない。一撃必殺と言うわけにはなかなかいかない。

俺を飛び越えて背後に着地したウォーウルフは、唸りと土煙を巻き上げながら着地したその勢いで、そのままバウンドするようにこちらに向かって再び跳躍した。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ナートゥーラー・ドゥーケ・ヌンクァム・アベッラービムス。『風の刃』！！」

キグナスの魔法が疾び、一瞬遅れて俺の射程範囲内に飛び込んできたウォーウルフに剣を叩き込む。奴の前足より俺の剣の方が長い。今度は、鋭い爪が俺に届く前に俺の剣がその首筋に届く。

「ギャイン！！」

悲痛な悲鳴を上げ、ウォーウルフの体が横へと吹っ飛んだ。麦穂を薙ぎ倒す音と共に、麦畑へとその体が投げ込まれる。軌跡を描くように、血の跡が追った。

「やったか？」

キグナスの声を背中に受けながら、顔をウォーウルフが倒れ込んだ麦畑に向ける。青々と茂った背の高い穂影に隠れて、姿は見えない。

「どうかな……」

剣を振って、べっとりとついた血を払う。俺の一撃だけならともかく、同時に『風の刃』が襲っているし、これだけ夥しい血が出ていると言うことは死んでるか、そうじゃなくてもかなりの致命傷に

なったんじゃないだろうか。
がさ、がさ、と2，3度麦穂が揺れるのが見えたが、ややしてそれきり静かになった。どうやら片付いたようだ。
「行こう」
剣を拭うこともせず、キグナスを促す。再び駆け出した俺に、キグナスも黙って従った。
駆けながら、思い出す。……前にウォーウルフと戦闘した時は、吐いたんだ、俺。
――この手で生命を奪うのが……怖い
……笑いが、零れた。
俺の、変化。
（考えちゃいけない……）
心の奥に封じられた何かが、頭痛を引き起こした。

◆◇◆

しばらく駆けていくと、右手の麦畑が不意に途切れた。一際高い位置に草叢が広がったかと思うと、そのままなだらかに平地へと変わっていく。それと合わせるように左手の林も不意に途切れ、平地になった。
左右に草地が広がり、粗い、剥き出しの地面もその幅を少しずつ広げていく。
月の明るい夜だ。おかげで視界に困ることはない。逆に言えば、追う人間がいたとしたらこちらの姿も丸見えだ。
ただ、幸いにして追っ手がいる様子はなかった。
「祭壇ってのは……はぁ、はぁ、ドコにあんだよ……」
キグナスの息が切れ始めている。そういう俺だって人のことは言えない。体力値にさして差があるわけじゃない。
「はぁ……はぁ……」
答える声を、荒くつく息に変えて走る速度を緩めた。ガルシアの

家の裏手からは、結構距離を広げたはずだ。そろそろ速度を緩めておかないと、先ほどのように突如魔物に飛び出された時に戦えない。
「歩こう……」
「……そだな」
ぜぇぜぇ、と肩で息をしながらキグナスが頷く。走るのをやめて数歩歩き出した俺は、すぐにその足を止めた。
「キグナス」
「ん」
「人がいる」
顰めた声さえ響いていそうで怖い。俺の言葉にキグナスが、視線を追った。まだ、距離がある。遥か先に見える野営の火。
「ホントだ」
答えるキグナスの声に、安堵が含まれたのを感じて俺は危機感を覚えた。
「……道を逸れよう」
「え？何でだよ？」
「人には、会わない方が良い」
言いながら、緩く左手に向かってカーブしていくその道を右方向へと逸れる。慌てて俺の後を追って来たキグナスが、訝しげな声を出した。
「何？何だよ、人に会わない方が良いって。大体道を逸れるには早い……」
言われた場所に辿り着いていないのに、そもそも言われた通りにしてさえちゃんと辿り着けるかさえ定かじゃないのに、危険なことはわかっている。けれど多分、人に遭遇するよりずっと良いような気がした。
「何で俺たちに追っ手がかかってると思うんだよ」
「何でって……『青の魔術師』だろ」
「そういうことじゃなくて」
走るのはやめたものの、早足で草原に足を踏み入れる。目印とな

るはずのファリマ・ドビトークさえ、闇に吸い込まれてしまって良くは見えない。が、どうせ南東を目指さなきゃなんないってことは、左側に逸れておけば何とかなるだろう。星の見えない真っ暗がりが山だろうし。

「衛兵たちが俺たちの足取りを追えたのは、人との接触があったからだろ」

「……あ」

ようやく気づいたらしい。

「確かに『青の魔術師』は、俺たちの手配書をバラ撒いて捕らえるつもりはないんだろう。でも、衛兵を使って確実に探してる。誰かと接触すれば、そこから俺たちの足取りがバレる」

多分、ファリマ・ドビトークに入ってしまうのが1番安全なんだろう。対ロドリス、と言う一点に関しては。

今、人が、ほとんど近付かないんだから。

尤も、違う意味での危険度は圧倒的に増すのだろうけど。

それでも、ファリマ・ドビトークに行かざるを得ない以上、早く辿り着いてしまうにこしたことはないんじゃないだろうか。

問題は、登山口に辿り着けるかどうか。

まあ、敵が『山』と言うとかく巨大でどこからでもその姿を見ることが出来るんだから、果てしなく見当違いのところには出ないだろうとは思うけど、それでも逆に言えばでかいだけに、変なところに出てしまったら登山口に辿り着くまでに相当時間がかかりそうだ。

「この国で、もう人は信用出来ない。しちゃ、いけないと思う」

少なくとも、ロドリスを脱出するまでは。

……多分まだ俺の首に、価値があるだろううちは。

焚き火を遠くに見ながら音を立てないよう気をつけて、でも出来るだけ急いで俺とキグナスはその場を離れた。

少なくとも道は緩やかに東に向かってカーブをしているんだし、こちらはファリマ・ドビトークを目指して南下しているのだから、そのうちまた道にぶつかってくるはずだ、多分。

道にぶつかれば、そこからまた登山口を目指すのだって可能だろう。……だと、良いんだが。

黙々と進んでいくうちに、頭上の月がどんどん移動していく。ので、結構時間が経っているんじゃないかってことくらいはわかる。ただ、まずいのが……焚き火から遠ざかろうと移動をすれば道から必然的に大幅に外れ、遥か前方に見える黒々とした影が目指す山なんだろうと言うことくらいはわかるが、ガルシアに言われた場所を目指せているのかが定かじゃない。……と、言うか、ヤバい気がする。

いやでも……山裾にさえ辿り着ければ、あとはそこに沿って多分……東側へ行けば……。

「シサーたち、どうしただろな」

ずっと黙って俺の隣を歩いていたキグナスが、ぼそっと言う。柔らかそうな白金の髪がふわふわと揺れるのをちらりと見て、俺は目を伏せた。

「……さあ」

他に答えようがない。

「もう、ロナードを脱出してると良いけどね」

俺たちなんかよりはよっぽど……要領も良いし、強いんだから、大丈夫だとは思うんだけど。

ガルシアもいるんだし。

「そうだな」

……ここで彼らを失ったら、洒落にならないだろうな。

ファリマ・ドビトークに何しに行くって、バルザック――ヴァルスの宮廷魔術師に匹敵する、もしかすると超えるかもしれない魔術師を追いかけてるってのに。

シサーたちがいたってどうなるかわかったもんじゃないのに、俺とキグナスしかいなかったら無駄死は決定事項だ。

ユリアの力になると決めてるんだから、死んでる場合じゃないん

だけど。
「ともかく猟師小屋に辿り着かなきゃ話になんないよ」
最悪の事態はそれから考えれば良いわけで。今から考えても疲れるだけだ。
シサーたちと逸れっ放しで、じゃあヴァルスに帰ろうったって、いずれにしてもファリマ・ドビトークは越えなきゃなんないんだろうと思うし。
なぜなら『お尋ね者』の俺たちは、真っ当な道筋を通ってはロドリスを抜けることが出来ない。多分。
ヴァルス領内に入っちゃえば、いやそこまで行かなくてもせめてロンバルトに入れれば安心なんだけどな。でも、ロンバルトの第2王子とそっくりさんな俺がロンバルトをうろうろしてるのもどうかとは思うよね……。
「方角はこれで合ってん……」
「キィィッ……」
何を考えていたのか、顔を伏せていたキグナスがふいっと顔を上げて言いかけるのに被せるように、変な声がした。
「え？」
風が、動く。
ふわりと靡いた髪に振り返りかけた。
「何……」
「……ッ！！！！」
俺の背中に衝撃が襲い掛かったのは、全く突然だった。いきなり背中から叩き付けるような激しい衝撃を受けて、わけのわからないまま体が前方へ吹っ飛ぶ。同時に襲った凄まじい痛みはつい先日経験したものと酷似していた。
「く……ッ」
切り刻まれた痛みだ。……尤も、あの時ほどでもなさそうで、何が起きたのか全くわからない混乱状態ではあるけれど動けないわけじゃない。

「カズキ！？」
「キィィッ……」
投げ出された地面に叩きつけられた衝撃と、背中の痛みに耐えながら体を起こす。キグナスがこっちに駆け寄ろうとして、その姿勢のまま凍り付いていた。その後方、中空にふわふわと何かが浮かんでいる。月の光を背に浴びて陰になっているから良くは見えないけれど、似ているのはガーゴイル。でも別もんだ。

第2部第2章第3話　秘めた魔力（2）

「な……？」

地面に片手をついて体を起こしたまま、その姿を凝視した。バスケットボールくらいの丸い頭部に、尖った耳がついている。そしてその顔の正面には、面積の大半を占める巨大な目がひとつ。

顔の大きさに似合わない小さな体に、羽が生えていた。

「何……こいつ……」

『青の魔術師』に受けた時より全然軽いとは言え、背中が血濡れているのを感じる。痛くないはずがない。痛い。

小型の工作用カッターで、背中にめちゃめちゃに切りつけられたようなもんだ。背中全体が発熱しているかのような錯覚を覚える。

――『風の刃』？

「かんねッ」

目線を『一つ目』に向けたまま、キグナスが後退する。痛みに冷や汗をかきながらようやく立ち上がった俺は、小刻みに震える腕を叱咤して剣を構えた。

……こういう時、キグナスと2人ってのは、キツい。

前衛を誰かに任せて、とりあえず治癒をしてもらって復帰、と言うようなことが出来ない。キグナスだって治癒の魔法をかけようにも、こうして対峙している状態だとやりようがないだろう。魔法を発動している間に、キグナスが襲われないとも限らないんだから。

「魔法を、使うのか？こいつ……」

ともすれば背中の痛覚に集中してしまいそうな意識を前方の敵に向けながら呟く。その矢先、『一つ目』が巨大な目の下の小さな口をもごもごと動かした。……ヤバい、やっぱこいつ、魔法……ッ。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ダビト・デウス・ヒース・クォクェ・フィーネム、『風壁』！！」

キグナスが防御魔法を唱える。が、『風壁』を突破した『風の刃』

が俺とキグナスの双方を切り付けた。キグナスと同レベル、もしくはそれ以上の魔法使いと言うことになる。

「うッ……」

「くぅッ……」

とは言え今度はストッパーがあるから、さっきほどじゃない。腕で頭部を庇って、それを受ける。こんな痛み、背中に比べれば可愛いもんだ。

『風の刃』がおさまるのを待って、俺は剣を片手に駆け出した。『一つ目』の目がこっちを見る。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、クーラー・イプスム、『癒しの雲』ッ」

敵の意識が完全に俺に向いたことに気づいて、キグナスが治癒魔法を投げてくれた。背中の痛みが、吸い取るように消えていく。

「さんきゅッ……」

が。

「うわッ……」

『一つ目』に向かって剣を振り翳して跳躍した俺の視界に、とんでもないものが姿を現した。『一つ目』の周囲に巻き起こる火炎――『火炎弾』だ。

(勘弁ッ……)

さすがにシェインのほどじゃないとは言え、複数のバレーボール大の火の玉だ。あんなもんに直撃されたら火達磨になってしまう。

「カズキッ……」

『火炎弾』がごうッ……と音を立ててこちら目掛けて猛然と回転しながら、突っ込んできた。咄嗟に片手の剣を引いたせいでバランスが乱れ空中で態勢を崩すが、曲芸師じゃあるまいしそんなもん避けられるわけがない。

「キィィッ」

もう1度啼くその背後に新たな『火炎弾』が生まれる。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、オムニ

ア・エウント……」
キグナスが多分『水膜』を唱えるのが聞こえるが、それが完成するのを待たずに『火炎弾』が俺に叩きつけられた。
（――あれ）
ような気がした。
態勢を崩したまま『火炎弾』と衝突したはずの俺は、地面に投げ出されて軽くむせこみながら咄嗟に閉じていた目を開ける。体を起こすが、どうやら俺は燃えていない。
「……え？」
「な……？」
「キィィ」
三者三様、それぞれ予定外だったもので奇妙な間が開く。
「何……？」
見ていたはずのキグナスに思わず説明を求めると、キグナスはオレンジ色の瞳を瞬いたまま首を横に振った。
「……キィィッ」
気を取り直したらしい『一つ目』が、先ほど新たに生み出した『火炎弾』をリベンジと言わんばかりに俺に向けて再び放つ。
「うわッ……」
ごおおッ……と加速して襲い掛かる『火炎弾』に再び火達磨を覚悟した俺が、地面に座り込んだまま咄嗟に腕で顔を覆う。
だが。
（……？）
やはり、『灼熱地獄』はいつまで待っても襲い掛かる気配がなかった。
「……何だ？」
何が起こってる……？
腕を外して目を開けると、『一つ目』は動揺したように激しく上下動を繰り返した。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、エト・

アルマ・エト・ウェルバ・ウルネラント。『沈黙の風』！！」
その隙に気づいたキグナスが素早く魔法を唱える。……ナイスだ。
魔法使い相手に『沈黙の風』は、成功すれば絶大な効果になる。
「……！！」
もごもごと何か口を動かした『一つ目』が、ただでさえでかいその目をまん丸にした。
「やった」
キグナスの小さな呟きが聞こえる。魔法を封じるのに成功したらしい。
「さっさと片付けようッ」
何が起きたのかわからないのは気持ちが悪いが、火達磨になってないのは喜ぶべき事態ではあるし怪我も治してもらった。
剣を握り跳ね起きる。今度こそ、と地を蹴って『一つ目』目掛けて剣を振り下ろす俺に、おろおろと目を瞬いてひたすら口をぱくぱくさせた。
「……！！！！」
残念ながら発動されたばかりの『沈黙の風』は解除される気配もなく、むなしく口を開閉したままの『一つ目』の胴部に剣が食い込む重い感触が手の平を伝わる。
「……っと」
悲鳴を上げることさえ叶わず、半分以上胴部が切断された状態で地面に投げ出された『一つ目』のそばに着地し、よろけた足元を立て直した。
「どうなるかと思った」
いきなり背中から切り刻まれたもんなぁ……。
ため息をついているその視界の端で、『一つ目』の死体がさらさらと砂へ還っていく。砂化する種類の魔物だったらしい。結局名前とかは全然わからない。
「グラムドリングのありがたさがわかるなー……」
「まったくだ」

キグナスに答えて剣を拭う。……っと。そうだった。
「ねえ」
「あ？」
顰めた顔で『一つ目』の死体の砂山を覗き込んでいたキグナスが顔を上げる。剣を鞘に収め、さっきのことを思い出しながら尋ねてみた。
「さっき、何が起きたの？」
「さっき？……ああ、『火炎弾』」
「そう」
どう考えても俺には火達磨になるチャンスが、2回あったはずだったんだが。
ありがたくはあるけど、納得がいかない。
キグナスも思い出すように眉根を寄せて中空を睨み上げながら、不可解そうに答える。
「くらった、と思った瞬間さ」
「うん」
「……霧散した、ような気がするんだよな」
「……」
そんな馬鹿な。
「おめぇ、魔法攻撃効かねぇの？」
バケモノのように言わないでくれ。
「そんなわけないだろ……俺、この前だってさっきだって、背中がずたずたになってる」
あの痛みと傷と服についた血痕と刻まれた傷跡は、俺の妄想とでも？
「何か特殊能力とか？」
「あるわけないじゃんそんなの」
普通の高校生に。
「……」
「……」

答えがわからないので、ついつい顔を見合わせたまま考え込むように沈黙した。
あるんだろうか、そんなこと。
くらったと思ったら霧散した？
何で？
いろいろ考えてみるが、良くわからない。と、キグナスが『俺は今、超アタマを使ってます』と顔に書いて口を開く。
「特殊な能力じゃないんだったら、何か特殊な道具、とか……」
「特殊な道具？」
「魔法が効かないわけじゃねぇのはわかってんだけど……そうだな、『抗火系攻撃』的な何か……」
「火系攻撃限定で作動するような？」
「うん」
そんな今更。
だってこれまでだってケルベロスとかヘルハウンドとか……火系攻撃は受けて……。
（あ、でも……）
確かに攻撃はされたけど……直接くらったことはないんだ……。
その前に必ず誰かの防御魔法が効いてたから。
今回みたいに完全に間に合わなかったことが、なかった。
「でも俺、特殊な道具なんか別に……」
「うーん……」
答えながら考える。何かあったっけ？何か……。
（……あ）
目を見開いて、右手を耳元に持って行った。指先に触れる金属プレート。
――……ただ、それに関しては自動発動の防御魔法だと言うことがわかっている
シェインがくれた、ピアス。
全く何のお役にも立ってくれなかったんで、完全に意識の中から

抹殺していた。自動発動って言ってたから、襲われたら勝手に守ってくれるんだと思ってたけどそんなこと全然なかったし。

まさか、火系攻撃に限定されてるんだとは考えもしなかった。

これまでも、まともに火系攻撃をくらうような事態にはならなかったし。――つまり、自動防御するほどの危険な状態だったことは、ない。

「何かわかったのか？」

俺の表情を読んで、キグナスが尋ねる。

「……これ」

「これ？」

「ピアス。……シャインカルクを出る時に、シェインがくれたんだ」

「そういや前はそんなんしてなかったっけか。何だって？シェイン」

「使い方聞いたら『知らん』ってきっぱり言われた」

俺の答えに、キグナスががくーっと地面に崩れた。お前の尊敬する師匠の話だぞ。

「……いーかげんな」

「弟子の口からはっきり言っといてくれよ」

「そんなこと言って聞く種類の人間か？」

「う～ん……」

まあ、無駄な徒労に過ぎないとは思うけど。

国の命運賭けるぞつって送り出す人間に、使い方のわからない道具をくれるのもどうかと思う。

地面に崩れたまま、あぐらをかいて俺を見上げたキグナスが唇を尖らせた。

「それはともかく……んじゃ、そいつが1番臭いわけだ」

「うん……多分。って言うか、他にない」

あと持ってるものって言ったら剣と……町の道具屋で買ったようなシロモノと……レガードの服くらい。シェインが防御魔法を付与してくれてるのは確かだけど、ユリア相手じゃあるまいし、そんな凝ったことしてくれるかどうかは甚だ疑問だ。

って言うかしてくれないだろう。
大体『火系攻撃限定』ってのも意味がわからないし。
「んじゃあ……」
疲れたので、ついつい一緒になってキグナスの向かいにしゃがみこみながら、あの時シェインは何て言ってただろうか、と思い出してみた。
「カズキって、ヘルハウンドの時とかでも『水膜』かけなくて平気だったのかな」
「かもね……」
あの時……何て言ってた？
――どうやら、対となるアイテムがあるらしい
――それが何だかは、まだわかっていない
（対となるアイテム……？）
言ってた、よな。そんなこと。確か……。
「今度試してみる？」
「……それで失敗して死んだらどうすんの？」
「知らねえ」
おい。
「お試しサイズとかないの、『火炎弾』」
「……何だよ、お試しサイズって」
ねぇよそんなん、と言いながらキグナスが立ち上がる。ので、しょーがない。俺も立ち上がる。
「行くかぁ……」
「今度シェインに会ったらお礼言っておこ」
役に立たないもんをくれたと思ったけど、確かに助かったから。
……どこかに、このピアスと対になるアイテムが、眠っているんだろうか。

第2部第2章第4話　魔の山（1）

はあ、はあ、はあ……。

荒くつく息が耳にうるさい。胸の2サイクルエンジンは、過労で故障しそうだ。駆け続けた足も、膝に来ている。

すぐ後ろからは草をかきわけるざざっと言う音と、俺同様キグナスの荒くつく息が追いかけて来ていた。

と思ったら。

「うわッ」

短い悲鳴に変わる。

「キグナスッ」

咄嗟に振り返って伸ばした腕で、キグナスを掴む。不意に足下に開いていたらしい岩場の裂け目に足を滑らせたキグナスが視界から姿を消し、掴んでいる俺の体がその勢いと重みに引きずられて一緒に引きずりこまれそうになった。

「うわ……」

前につんのめりながら、足先に偶然感じた感触に足首を引っかけ、空いている左手で咄嗟に脇の岩場に手を伸ばす。

辛うじて引きずり込まれる勢いが止まった時には、俺もまさしく『崖っ淵』だった。

（くそ……やばい……）

早く、引きずり上げないと……。

思った時には手遅れだった。小汚い「ぐふぅ……」と言う唸りと共に、俺が突っ伏している地面の背後から草を踏み分ける音が近づいてくる。

「キグナス、早く上がれッ」

「んな無茶なッ」

確かに無茶だ。

ともすればキグナスに引きずられそうなので、振り返る余裕がな

い。俺の耳に、追いかけて来ていた魔物の呼吸と足音だけが聞こえる。どのくらい近づいているのかさえわからないのは気持ちが……。

「ガァァァッ！！」

「……『火炎弾』ッ！！」

間近で魔物の唸りが聞こえるのと同時に、キグナスが俺の腕からぶらさがってる状態で『火炎弾』を発動させた。俺の顔のすぐ脇を、小振りな猛火の塊が通り過ぎていく。

「ぎゃあぁッ」

「引き上げるぞッ」

キグナスの『火炎弾』の威力を信じることにして、背後を確かめずに体を無理矢理起こした。

効果があれば問題なしだし、効果がないんなら反撃出来る態勢にない俺が振り向いたって事態に変化はないだろう。振り向いているだけ時間の無駄。

「さんきゅうー……」

幸いにして『火炎弾』は効果アリだったらしい。いきなり背後から襲われるようなことなく、キグナスを引き上げることに成功した。

「うぐぅ……」

「逃げるぞ」

呻きを背に、駆け出す。キグナスがそれに続いた。

――魔の山。

そこまでたどりつくには、考えたほどの時間は必要じゃなかった。問題はたどりついた場所。

俺たちがぶちあたったファリマ・ドビトークの山裾から少し東へ進んだ辺りに山へと続く鬱蒼とした道があって、とりあえずそこから山入りはしたんだけど……やはりと言うか何と言うか、正しいルートではなかったらしい。ガルシアが『やめた方が良い』と言っていた方の登山口だ。多分。

でも、こっちからでも猟師小屋には続いているらしいし、地図も

何となくは頭に入っている。月や太陽の軌道から、方角はわかるし、問題は……。

「くそ……この道、本当に合ってんのか!?」

「知るもんか」

道がガルシアの言う通り、険しく多岐に渡っていることだ。そして絶え間なく襲い来る魔物。

山に入ってから間断なく襲われ続け、余裕なく道の選択を繰り返さざるを得ず、既に登山口に戻れるかさえ怪しい。

ともかく猟師小屋は登山口より南西にあるはずなんだから、そっちの方角に進むしかないわけなんだけど、道が思いがけない方向に曲がっていったりもするので……そうなると判断に困る。

加えて、魔術師ならではの鋭敏な感覚が仇となっていると言うか、キグナスの具合が山入りしてからずっと良くなかった。

「カズキ、やべぇ……」

蒼白な顔で俺の後ろを駆けながら、キグナスが呟くように言う。

「俺、魔法……さっきので、最後、かも……」

「まじ?」

「ごめ……」

言いながら、キグナスの足がもつれる。その時、俺の前方の茂みから飛び出した影があった。山入りしてから頻繁に遭遇する獣――ウォーウルフ。

「ちッ。キグナス、出来るだけ下がっててッ」

よくもまあ次から次へと……ッ。

剣を斜に構えて駆け出す。ほとんど動けない状態のキグナスから引き離さないと、襲われたら多分ひとたまりもないだろう。

そういう俺だって、怪我だらけで血塗れだわ剣を握りっ放しでへとへとだわ……人のことを言えたものではないんだが。

ウォーウルフが、牙を剥いて襲いかかる。鋭い爪を剣で受け流し、木の幹を利用して反対側へと着地したウォーウルフと対峙した。

魔法石は、既にない。

魔力を回復するような術も、ない。
何をそんなにやる気になっているのか、短い対峙を経て後絶え間なく飛びかかるウォーウルフの爪と牙が俺の肉を抉り肌を引き裂いた。
とは言え、俺だって黙ってやられていたわけではない。俺が傷を負うごとに、白刃も血濡れていく。ふらり、とよろける足元でこちらにウォーウルフが踏み出そうとした時、ほんの僅かに空気が動いた。
「……『風の……刃』」
飛び上がった獣の体が、後方に仰け反る。ダメージをそれほど与えられなくても、気をそらす役にはたったようだ。その一瞬を逃さずに振りかざした剣が、ウォーウルフの体に血飛沫を上がらせた。
「はあッ……はあッ……」
荒く息をつき、呼吸を整える。振り返るとキグナスは、崩れるようにその場に座り込んでいた。
「……さんきゅ。大丈夫か」
「も……多分これで……本当に……からっぽ……」
「うん……助かった……」
まだ呼吸を乱したまま、キグナスに近づく。手を貸してやって立たせると、辺りを見回した。
……どこか、休める場所を見つけないと。
キグナスはもちろんのこと、このままじゃ俺だって限界が来る。
「カズキ……水音、が、する……」
途切れ途切れに言われて耳を澄ませた。風が木々を揺らす音に混じって流れてくる音。
「本当だ」
音を追って、その場を僅かに離れる。生い茂った木々や草で見えなかったけれど、少し先は緩やかな傾斜になっていて、下った先に少し広い川縁と小さく急な流れの川が見えた。
「降りてみよう」

さっきと同じ場所でかろうじて立っているキグナスを振り返る。
俺は魔法が使えた試しがないのでわからないが、連発すれば結構体力を消耗するらしい。実際の体力との折り合いがどうなってるもんなのか、俺にはイマイチ感覚として理解が難しいんだけど。
そうでなくても山に入る前に夜中に叩き起こされ、おちおち眠れないまま山を目指してまる1日さまよい、あげく山の瘴気にあてられたままで魔物との戦闘の連続だ。俺が剣を振るい続けているのと同様に、キグナスも休むことなく魔法を使い続けている。しかも双方怪我を負っても回復している余裕がない。
「降りるのか……？」
頼りない声で呟くように言う。
「うん。休める場所があるかもしれない。そうじゃなくても、木がこうも生い茂ってるような場所よりは見晴らしが良いから……少し、休みやすいんじゃないか」
つらそうだけど、この辺では到底休憩なんか出来そうもないし。あと少し頑張ってもらうしかない。
「ゆっくりで良いから、気をつけて」
キグナスをフォローしながら、その緩やかな傾斜をゆっくりと下っていく。幸いそんな変な場所で魔物に襲われるような事態にはならなかった。川縁に降り立つ。
「ちょっと、待ってて」
辺りをきょろっと見回して、近づいてくる変な気配がないことを確かめると、キグナスに言い置いてその場から少し離れた。
（あ……洞窟……）
俺たちが下ってきた斜面続きに小さな横穴が空いているのが見える。あそこを使えれば、絶好の休憩場所になるんだけどな……。
近づいてみるが、暗くて奥までは良く見えない。キグナスの『導きの光』があるわけでもないので、俺は荷物からカンテラを取り出した。火をつけて中を覗き込んでみる。
（大丈夫……かな）

少なくとも魔物がいる気配はなさそうだ。奥行きはさほどなく、カンテラで照らしたすぐ先に果てが見える。念入りに中の様子を窺って、俺はキグナスを振り返った。手招きをする。

「平気そうか？」

近づいてきたキグナスが、息も絶え絶えと言う風情で尋ねた。

「うん。魔物の巣窟とかじゃなさそう。ここなら少しはゆっくり出来そうだ」

ただ、２人して中に入り込んじゃうと、入り口から襲われた場合に逃げようがない。

「俺、ここで見張りやってるから。そうすれば何か近づいて来たらわかるし、戦いようも逃げようもあるだろ。だからキグナス、中でゆっくり休んで良いよ」

言って入り口の岩場を示した俺に、キグナスが蒼白な顔をしかめる。

「それじゃあおめぇ、休めねーじゃん」

どっちにしたって２人でがーがー寝てしまうわけにはいかない。

「大丈夫だよ。ゆっくり座れるだけでも、多分全然違うと思う」

剣持って走り回るより、遙かに楽になれるはず。

「途中で、代わろうな……」

そんな死にかけみたいな顔で言われても。

ずるずると体を引きずるように穴の奥にへたりこんだキグナスが、そのままころんと横になるのを見届けて、苦笑しながら俺も岩場に腰を下ろした。ここだったら、近づく何かに気づけるだろう。

（そういや、獣系の魔物ばっかだったよな……）

ファリマ・ドビトークに入ってから遭遇した魔物を思い出す。オーガなんかの亜人型もいたにはいたけど、総じてみんな頭が悪そうな奴らばっかりだった。てことは多分、火を焚くことが効果がありそうだ。獣系の魔物は炎を嫌う。亜人型の頭が良い奴は炎のそばに人がいることをわかっていて接近してくる奴もいるけれど、ゴブリンの１匹程度なら今の俺だけでも何とかなるだろうし。

……ン十匹の団体様とかになるとどうにもならないけど。
（よし。火を起こそう）
その方が、安全を確保出来そうだ。
そう決めて、近場から枯れ枝や葉を集める。荷物の中から『炎の種』を取り出して火を起こした。
暗闇の中、目に染みる、オレンジ。ぱちぱちと焚き火の爆ぜる音を聞きながら、洞窟の中に目を向ける。ぐったりしたようにキグナスが横たわっているのが見えた。
「寒くない？」
「うん……。平気」
「腹、減らない？何か食った方がいーんじゃない？」
言ってみると、自分が空腹なことに気がつく。ごそごそと荷物を漁ってパンを引っ張り出すと、ひとつをキグナスのそばまで持って行ってやった。
「……さんきゅ」
礼を言って受け取ったキグナスは、横になったままもそもそとパンにかじりついた。よほどバテているらしい。体を動かすのがつらいんだろう。
「今干し肉も炙ってるよ。軽くだけど。いい感じになったら持って……」
「カズキ、ごめんな」
パンをくわえたまま焚き火の方へ戻る俺にの背中に、弱々しい声が投げかけられた。
「は？何が？」
「俺、あんまし大した魔法使えなくて……そんなに魔力自体がまだねぇから、バテんの、早くて」
「……」
って言っても、それは仕方ないんじゃないかなあ……。
焚き火のそばにしゃがみこんで、炙っている肉の加減を見ながらそれに答えた。

「それ言ったら、俺だってもうちょっとましだったら、そもそもキグナスが魔法の使いすぎでこんなにバテることはなかったんじゃないの」
「うーん」
「初心者2人なんだから、しょーがない。お互いの出来ることと出来ないことを補いあって、何とかするしかない。……俺は、キグナスがいてくれたおかげで今助かってる」
そろそろ肉もいいだろう。……いや、本当言うとまだ全然なんだけど、あんまり盛大に香ばしい香りがすると魔物への呼び水になりかねない。軽く温める程度が限界だ。干してあるから、そのまま食ったところで問題があるわけじゃない。食べにくいだけで。
「こっちも食べて。んで、食べたら寝なよ」
「うん……さんきゅ」
串に突き刺さった干し肉を受け取って、キグナスが小さな笑みを見せた。
「魔術師は魔法が枯れると、駄目だな」
「……そりゃあ仕方ないんじゃないの？俺なんか剣があったって最初からどうにもなってない」
かじりかけてたパンを飲み下し、肉を頬張る。こうして座って食事をすること自体、久々みたいな気がした。
「シェインてさ」
洞窟の奥から、ぽそっとキグナスの声が続く。
「あいつ、ロッドなんかなくたって平気なんだよな」
「え？」
って言うか、そもそもロッドって何で使うのかわからない。みんな持ってるから、まあとりあえず必要なんだろうくらいの認識だ。
「ロッドって、何で持ってるの？」
「別に。道具だよ」
道具なのは見ればわかるよ。
「ロッドなんかなくたって平気ってどういうこと？なくても魔法が

使えるって話？」
「うーん……それも、あるけど。ロッドを使うとより強力な魔法とか、楽に使えるって話で……本来、なくたって魔法ってのは本人の魔力の問題だから、使えるは使えるんだけど。でも俺なんかはロッドがないと、本当にろくな魔法が発動出来ない。シェインは、なくたってかなりのトコまで使える。……でも、そういうことだけじゃなくて」
「ふうん？」
「あいつ、魔法なくたって、剣が使えるから」
その声音が、妙に……神妙に聞こえた。キグナスを振り返る。
「そうなの？」
「うん。そりゃあ別に戦士並とは言わねぇけど。でも、一兵卒くらいだったら対等に渡り合える。もしかするとシェインの方が使い手かもしれない」
ってことは、確実に俺より剣の扱いに長けている。
「便利な人だね……」
しみじみと意味不明な感想を漏らすと、キグナスが元気なく笑った。
「あいつみたいなんだったら、魔法が……魔力が切れてもこんな足手纏いにならずに済んだんだけどな。だから、ごめんな」
「……」
比べる対象が間違ってると思う、多分。
「そういう便利な人、そんなにごろごろいないんじゃないの？自分で今出来ることを頑張ることに意味があると思うし、出来ることの中で何とかするしかないし」
ふうん……でも、キグナスって、シェインのこと好きなんだなー。
尊敬してるって言うか。羨んでるって言うか。
そんな感じ。
「シェインのこと、好きなんだね」
もそっと言うと、しばらく沈黙が返った。

「……凄ぇなとは、思う」
「ふうん……」
ある意味凄いけど。確かに。
「あれだけ傍若無人に振舞ってて人に嫌われないのは凄いよね……」
しみじみ言った俺に、キグナスの小さく吹き出す声が聞こえた。
「そりゃそーだ。一種の才能だなぁ。……ってそこかよ？尊敬」
「違うの？」
思わず笑いながら言うと、キグナスも少し明るい声で答えた。
「まあ……そういう意味でも確かに羨ましいけどな」
「うん」
「……カズキ、ようやく笑った気がする」
「え？」
「久しぶりに」
「……」
最後の干し肉を口に放り込んで、炎の中で燃えている枝を長い枝で突付いた。
「そう？」
「うん……」
小さく頷く声が聞こえ、それきり洞窟の中は静かになった。やがて、小さな寝息が聞こえてきて振り返る。
（寝た……かな？）
少しでも休んで回復してくれると良いんだが。
そう思って、俺も思わずあくびが零れた。
「ふわぁ……」
やっぱり眠い。
と言って、寝るわけにはいかないけど。
ぱちぱちと小さな音を立てる焚き火だけを相手に、俺はしばらくぼんやりと何も考えずに座っていた。体が重い。走り通しの戦い通しなんだから、当たり前と言えば言える。体力があるわけではないし。

（ユリア、どうしてるかな……）

今頃ヴァルスは、どんな状況になっているんだろう。ユリアと別れてから4日。まだ、たったの4日だ。なのに、腕に抱き締めたその温もりが果てしなく昔のことのように思える。

ロドリス国内に一応いる現状から言えば、まだ開戦はしてない気がするけど、ある意味ファリマ・ドビトークは世間から隔離されているので正直なところ、わからない。

それこそ……シェインやラウバルがついているんだから、きっと大丈夫だと思うけど。

（会いたいな……）

次に会えるのは、いつだろう。そもそもそこまで生きてられるかが心配だ。

何にせよ、ともかく猟師小屋に向かってシサーたちと合流しないと……。

生き延びないことには、会える日さえ来ない。

岩場に腰を下ろしたまま、洞窟の壁に背中を預ける。さわさわと水の流れる音だけが、闇の中に響いていた。

ユリアの笑顔を思い出す。その笑顔を思うだけで、これほど心を支えられるものだとは思わなかった。もう1度会いたいと、微笑んで欲しいと、思えるから死ねないと思える。

恋愛感情、と言うものが、これほど人を支え生かすものなのかと思う。魔物に襲われても怖いと思えなくなっている癖に、死んでも良いやと投げられないのは、多分ユリアの力になりたいと思い続けているからだろう。

（ユリア……）

体が、重い。先が、見えない。

けれど……。

（会いたい……）

君の笑顔が、もう1度、見たい。

◆◇◆

道とは既に言えないような状態の道を進み、草をかきわけたその先がようやく開けた。キャンプ場とかを思い出させるような、剥き出しの地面と木造りの小さな建物。

「あった……」

キグナスが小さく呟くのが、聞こえた。

猟師小屋までは、休憩をした川縁からさほど遠くはなかったらしい。散々道に迷いはしたものの、翌日の夜半近くなってようやく猟師小屋が見えた時には、思わず安堵のため息が零れた。相変らず魔物の出現率は高く、せっかくとった休憩も疲労回復の薬も既に無に返り、キグナスの体力値は極限まで落ちている。俺にはわからないけど、ファリマ・ドビトークの瘴気がかなりキツいらしかった。もちろん連続する戦闘での魔力の疲弊も相変らずだ。

「シサーたち、ついたかな……」

俺たちは散々道に迷ってるから、ついていてもおかしくはないと思うんだけど。

けど、シサーたちも迷ってないとは言い切れないし、猟師小屋に灯りはなかったからまだいないのかもしれない。

「……平気？」

「うん……」

体力だけでなく、キグナスの体調も決してまだ良好とは言えなかった。ファリマ・ドビトークにいる限り回復はしないのかもしれない。昨日枯渇するまで使い果たした魔力の代償も大きい。少なくとも、昨日ほど足元がふらつくことはないようだけれど……。

「あそこまで行ったら、ゆっくり休もう」

「……うん」

第2部第2章第4話　魔の山（2）

そう言う俺自身、ふらふらだ。結局川縁での休憩では、俺は一睡もすることが出来なかった。

小屋まで辿り着き扉をそっと開けてみると、少し埃っぽいような香りが鼻についた。ガルシアの話では、しばらく誰も使っていないそうだし、仕方ない。屋根があるだけでも御の字だ。

「あ、キグナス。ベッドがある」

中に入ってみると、さして広さはないワンフロアの……本当に『小屋』と言う感じではあったけれど、薪や暖炉も完備されていて、粗末ではあるけれど小さなベッドまであった。毛布なんかはさすがにないんだけど、あっても使いたくない気がするので別に構わない。

「キグナス、使いなよ」

「いいよ、お前使えば？」

俺より絶対キグナスの方がへろへろだと思う。

「ゆっくり休んで回復してくれた方がありがたい、俺は」

カンテラに灯りを灯して壁にかけながら言うと、キグナスはさも嫌そうに鼻の頭に皺を寄せた。

「俺だって回復したいよ」

「じゃあ、して」

「簡単に言うなよな……」

言いながらも妥協して、キグナスはのそのそとベッドの上によじ登った。その間に小屋の中を少し歩いて、中の様子を見てみる。特に備品と言えるものはなさそうだった。ベッドと椅子が2脚。薪を入れている木箱。そんくらい。壁際にひとつ謎の小棚があったけど、中は空だ。

「キグナス、寒くはない？」

季節的にはそれほど寒いという季節でもないけど、山の中だしキグナスは具合が良くないし、と思って暖炉の灰を何となく掻き出し

ながら尋ねてみると、ベッドの上の埃に顔を顰めつつ、綺麗に払う気力がないのか諦めたような顔をしていたキグナスが顔を上げた。
「いや……」
コン、コン、コン……。
「……？」
不意に物音が聞こえてキグナスとそのまま顔を見合わせる。目を瞬いた瞬間に、また同じ音が聞こえてきた。
コン、コン、コン……。
「……何？」
ドアの方だ。
そっと、ノックするような音。
キグナスも紙のように白い顔のまま、黙ってドアの方に視線を向けた。
「シサーたち？」
違うとわかりきっていながら、呟く。彼らだったら声のひとつもして良さそうだ。それほど防音効果のあるドアのようには見えない。
「まさか」
キグナスが小声で否定する。それに被さるように、また音が聞こえた。
コン、コン、コン……ガンッ！！
控えめな小さなノック、続けて脅すような、ドアを強く叩きつける音が響いた。
「な、何だよ……」
声のようなものは相変らず聞こえない。夜半近い山の闇の中、静けさの中に響く物音は気味の悪さを誘った。
「魔物……？」
例えばウォーウルフみたいな魔物だったら、そんな凝ったことをするとはとても考えにくいんだけど。でも例えば亜人系の……もう少し、頭の良さそうな魔物とかだったらわからない。
ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ！！

ドアが開かないことにいらついたかのような、激しいノックが繰り返される。ただの、猟師が休憩する為だけの目的であるこの小屋なんか、そのノックだけで壊れてしまいそうだ。ノックに合わせて小屋そのものがゆらゆらと揺れる。

「……開けてみるか？」

小屋について1度しまった剣を、再び抜き出す。キグナスを振り返ると、ベッドの上で身を起こしてロッドを握り締めていた。

「放っておけるもんだったら、おきたいけどな」

同感だ。ただひたすらノックするくらいだったら、うるさいけど戦うよりまし。

「……」

そんなふうに思いながらじっとドアの方の様子を窺っていると、やがてノックの音がやんで静寂が戻った。

「……いなくなった？」

何だかホラー映画のようだ。声のない物音、と言うものの不気味さをしみじみと痛感する。

「どうかな……」

そのままの姿勢で、俺もキグナスもしばらく外の様子に気を配っていた。木々を揺らす風の音だけが、微かに耳に届く。

「終わったみたいだ……」

コン、コン、コン……。

ほっとして構えかけた剣を下ろしてキグナスに向き直りかけた俺の耳に、再び控えめなノックの音が聞こえた。顔を強張らせて振り返る。……まだ、いる。

ガンッ！！……ガタガタガタガタッ……。

ついに無理矢理開けようとするように、ドア全体が軋みを上げて揺れ出した。まるでノブを掴んでドアを揺さぶっているような音と揺れ。こじ開けて入ろうとしているみたいだ。……声もなく。

剣を構えて、ドアに近付く。この小屋には窓がない。外の様子を窓から窺うようなことは、出来なかった。尤も、窓があったらそっ

ちを破られて侵入される可能性もあるんだから……なくて良かったとも言えるけれど。

ガンガンガンガンッ！！……メリッ……。

あまりに激しく打ち付けられる音に、ドアが軋む音が挟まった。まずい、ドアが壊れようとしている。

「ドアが、壊されるかもしれない」

剣を正面に構えて、ドアを睨みつけたまま呟く。キグナスもベッドから下りてロッドを構えた。柄を握る手に汗が滲んだ。

――ミシミシ……バリィッ！！

耳に痛い激しい音が響き、それと同時にドアが真ん中からくの字にひしゃげるように内側に折れ曲がる。繊維にそって鋭い幾つもの刺のように皮が剥けているのが、見えた。

「来る……ッ！？」

「くそぉッ……」

バンッ！！

最後の止めのように強い音が聞こえ、真ん中で割れたドアが内側に向けて吹っ飛ぶ。途端、外からの冷たい空気が中に吹き込んできた。

「……え！？」

ドアを蹴破ったその正体を見極めようと目を凝らす。だが、外に広がっていく闇の中には何者の姿もない。四角く口をあけた出入り口の向こうには、黒く陰になった木々が風に微かに身を震わせているだけだ。

「誰もいない……」

息を飲む。確かに、誰の姿もない。けれど、ドアが外から破られたのは確かだった。

「……目に見えない種類の魔物とかって、いるの」

目をドアの辺りからそらさないまま、キグナスに低く尋ねる。背中からキグナスが答えるのが、聞こえた。

「いくつか、いると思うぜ。……アンデッドなんかで言えば、ゴー

ストなんかは典型だろうし」
　ゴースト。……幽霊だ。
「そんなんだったら、たまんないな……」
　剣も通じないし、キグナスの魔法だって通じるかわからない。プリーストの魔法が効くだろうとは思うけど。
　しばらく同じ姿勢のまま、外から侵入する何者かがいないかどうかに神経を尖らせた。ゆるゆると吹き込む風が髪を揺らす。
「……いないな」
　本当にいないのか？
　だが、しばらく待っても誰かが侵入するような気配はなかった。剣を下ろしてドアの方にこちらから近付いてみる。このままここに突っ立ってても埒があかない。
「おい、カズキ……気をつけろよ」
「うん」
　散らばったドアの破片を乗り越えて、外に顔を出してみる。けれど何がいる様子もなかった。
（……？）
　何だったんだ……？
「キグナス、そこにいて」
　言いながら完全に小屋を出る。鬱蒼と取り囲む木々が影を落とし、雲に霞む月が僅かに剥き出しの地面を照らしていた。小屋から少し離れた広場の中央に立って、足を止める。振り向いてみても、小屋の周辺には何者の気配も影もない。どこを見ても、見渡す限りの無人……。
「……」
　そう思ったその矢先、ガサ、ガサと草木を掻き分けるような音が聞こえてきた。地面を踏みしめる足音が間に混じる。明らかに、誰かが近付いて来る音。
　体をそちらに向けて、俺は剣を構えた。何だか、嫌な感じだ。
「……ふ……ひゃ……ひゃ、ひゃ……ひゃ……」

細い道を辿るように姿を現したのは、小柄な男だった。粗末な衣服を身に着けている。不気味と言える笑いを浮かべながら、ゆったりとした足取りでこちらに近付いてきた。ゆったりと……まるで、少し酩酊しているように……。

（……！！）

その足取りには、見覚えが、ある。

陰になって良く見えなかったその姿が近付くに連れて、次第に明らかになっていった。背筋が震撼する。肌の上にまばらに浮かぶ木炭のような黒。水泡のような、細かな隆起。だらりと力なく落とした片手には、斧を持っていた。

リデルの村で遭遇したあいつと同じ種類……！？

（まずいッ……）

俺とキグナスじゃあ太刀打ち出来ない！！

「ひゃ……ひゃ……」

さっきドアを吹っ飛ばした何者かの存在など、その一瞬で忘れた。咄嗟に踵を返して駆け出す。どこに向かうつもりで、どうするつもりだったのかは自分でもわからない。ただ、まともに自分の体を支えることさえ怪しいキグナスからは、引き離さなきゃいけないと思った。目指したのは小屋から離れる方向だ。

「……どこぉ……行く、ん、だぁぁぁぁい？……ひゃ、ひゃ……ひゃ……」

奇妙に間延びした声と笑いが響く。俺の後を、足音と笑いがついてくるのが聞こえた。

（どうする……！？）

駆けながら考える。魔剣しか通用しないあいつらには、俺の剣は無意味でしかない。キグナスの魔法は当たれば効果はあるだろうけど、今は大して使える状態にない。この前常態であれほど効果がなかったものを、今のキグナスで何とか出来るとは思いにくい。

「うわッ……」

そんなことを考えながら駆けていると、不意に背中から叩きつけ

られた衝撃に息が詰まった。体が前に投げ出される。恐るべき素早さで、男が俺に体当たりを食らわせたのだと気づくのには少々時間がかかった。

「げほッ……」

軽くむせこんで立ち上がる。俺と対峙するように小屋への道を塞ぐ形で、男が佇んでいた。

「せ、っかく、さぁぁぁぁ、こんな、寂、しい山ん、中、で、さあぁぁぁ……会ったんだからよぉおぉ……」

佇んだ男が、間延びした声を投げ掛ける。剣を片手に握り締めたまま、俺はゆっくりと後じさった。

「仲良、く、しようぅぅぜぇぇぇぇ……？」

本当に仲良くする気があるんならな……。

「なぁぁぁぁぁッ！？」

一瞬後に、男の姿が俺の目の前から消えた。動作が素早いのはこの魔物の特徴なんだろうか。

「……ッ」

閃光のように目の前に閃く月明かりの反射。突然俺の寸前に現われて横に一閃された斧を地面を蹴って避けようとするが、鈍い鋭さを持って俺の胸を真一文字に切り裂くような衝撃が、体を後方へと突き飛ばす。強い衝撃を受けて、またも息が詰まった。切り裂かれた胸元から血飛沫が上がる。

「はぁ、はぁッ……」

ナマクラなのか、男の腕が大したことはないのかはわからないが、避けきれなかった割りには深い傷は負っていない。とは言え、刃がなまっていたって斧を叩き込まれた衝撃は並大抵のものではないし、上下生き別れにならずには済んだものの傷だって浅くはない。

血の気の引くような痛みに、脂汗が浮かんだ。刻々と胸元が、自分の血で生臭く濡れていくのがわかる。

「おぉ……？避けたなぁ……？」

くそ……。

激痛で体が震える。カタカタと激しく痙攣する腕で体を起こし、気合だけで握り締めた剣を杖に立ち上がった。一直線に胸に走る痛みが吐き気を誘う。膝が震え、背筋を寒気が駆け上がった。

「お前のぉ、持っている剣……」

「……」

「……いいなぁ……？」

さっき俺がいた場所で佇んだまま、男の視線が俺を向く。荒く呼吸をついて痛みと吐き気をこらえながらゆっくり持ち上げた剣は、腕の痙攣に合わせて大きくぶれた。

「それさぁぁぁ、くれよぉ……？」

「……」

「俺のこれさぁぁぁ……」

男はそこで1度、言葉を切った。俯いたその顔から、低い笑いが漏れる。

「……血錆びで、なまっちゃって、よぉぉぉぉぉ……？……ひゃ……ひゃひゃ……」

何とか、逃げなきゃ……。

剣を構えたまま、後退する。貧血が起こっているように、地球がぐらぐらと揺れた。自分の体が真っ直ぐになっているのかどうかさえ、わからない。

「お前が死んだら、俺が、それぇ……使ってやるよぉぉぉ……？」

余裕を感じているのか、俺が後退しているのはわかっているはずなのに男はその場を動かなかった。確かにさっき一瞬で間合いを詰めたことを思えば、このくらいの距離何でもないだろう。

どんどん呼吸が荒く、短くなっていく。額から次々と滴り落ちる汗が、俺の視界を一層遮った。

「だからよぉぉ……死ねよ……？」

（――え！？）

男がそう言った瞬間、がくんと体が大きく揺れた。霞んでいた視界が縦に激しくぶれ、全身に重力がかかるのを感じる。

（まずいッ……）

踏み外した……！？

後退していたせいで、自分の背後がどうなっているのか、足場があるのかを確かめることが出来なかった。広く草叢が続いているように見えていたその場所は、急にがくりと落差のある傾斜になっていたらしい。気がついた時には俺の体は、背中から滑るようにして草叢の中を勢い良く突っ込んでいくところだった。

「……！！」

男の声が聞こえたような気がしたが、正直それどころではない。何せ背中から傾斜を滑り落ちている。勢いが強制的に掻き分ける草と木の音だけを聞きながら、俺は完全に成す術がなく斜面を転がり落ちていった。

（いてぇッ……）

胸からは、多分相変らず血が溢れ出していることだろう。生臭い匂いに、自分の鼻が自分で麻痺してきている。背中や腕、顔にも幾多の引っかき傷が出来ているかもしれない。とにかく今認識出来ることは、痛みと体で風を切る勢いだけだ。

「……ッッッッ！！」

背中全体を叩きつける衝撃が襲い、胸を内側から圧迫するような痛みと外から切り裂かれた先ほどの痛みの両方に呼吸が麻痺しかけた時には、俺の体は重力に引っ張られるのをやめていた。

「はぁッ……はぁッ……」

一瞬胸に支えた呼吸を荒く繰り返す。自分の状況がわからない。自分の体で、胸に一直線のラインが走っていることだけが認識出来る。辿り着いた地面に倒れたまま、俺はひたすら呼吸を繰り返した。

しばらく何も考えることが出来ずにただ呼吸を続け、やがてうっすらと目を開ける。発狂しそうな胸の痛みは相変らずだが、投げ出された痛みと衝撃の方は少し和らいできたようだ。

「はぁ……ッ……はぁ……ッ……」

大きく息をつきながら、横たわったままでゆっくり首をめぐらす。

俺の周囲も、上に見える視界も、一面草木で覆われていた。真っ暗だ。多分、斜面の途中なんだろう。傾斜が平地に近い角度になったせいで転落が止まったんだ。

（……）

男は、追っては来ていないようだった。物音がしない。とは言っても、耳や感覚が遠のいていて現実感がないから本当かどうかは、良くわからない。

（……キグナス）

痛みを誤魔化すようにひたすら荒い息だけをつきながら、思い出す。あの小屋にそのまま置いてきてしまった。男はどうしただろう。どこかへ行ってくれれば良いんだが。今のキグナスは、襲われたらひとたまりもない……。

（戻らなきゃ……）

道筋はわからないけど、落ちてきたんだから上れば戻れるはずだ。そうは思うものの、体が思うように動かない。少し体を起こそうと思えば、貧血めいた眩暈が世界を揺らし、吐き気が喉元を駆け上がる。内部に食い込むような胸の痛みは熱さへと変わり、次第にそれさえも良くわからなくなっていった。

（……戻らなきゃ）

心の中で、繰り返す。歯を食いしばって何とか上半身を起こすと、俺はとりあえず手近な木の幹に体をもたせかけた。

「はぁ……はぁ……」

木々の間をすり抜ける夜風が、額から次々と溢れる脂汗をさらう。眩暈を落ち着かせようと瞳を閉じた。

（シサーたちが……）

いて、くれたら。辿り着いてくれたら。

キグナスも助かるかもしれない……。

「はぁ……はぁ……」

ゆらり、と幹から背中を起こす。手に張り付いたみたいに握り締めたままの剣を支えにし、木の幹に手をかけながらようやく立ち上

がった。前髪が汗で額に張り付いている。また夜風が俺の髪を弄り、そのひんやりとした空気の流れが心地良くさえあった。

木に寄り掛かるようにして、上らなければいけない斜面を見上げる。距離は結構ある。いっぱいに広がった草木で余り視界は良くはないが、果てしなく先の切れ間には僅かに夜空が覗いていた。あそこが終着点だろう。

（行ける、かな……）

激痛でカクカクと震えたままの膝と腕を圧して、一歩踏み出す。

ゴォォォォ！！と激しい音が聞こえ、強い風が上方から流れて来たのはその時だった。

（……？）

遥か上から木々を縫って吹き降ろされてくる風だから、それほど強いものではない。けれどその音だけは、驚くほどだった。額の汗を腕で拭いながら顔を上げ、目を見張る。

（何……？）

草木の切れ間、夜空の手前……生い茂る草木が暴力的な風に弄られて千切れそうなほどにざわめいていた。心臓が掴まれたみたいに、痛みも忘れて一瞬呼吸が止まる。

僅かに見える隙間に巻き起こる竜巻。俺が転がり落ちてきたその先は……竜巻の起こっている真下は多分、猟師小屋だ。

（嘘だろ……）

息を飲む。鼓動が早くなるのを感じた。焦りが、俺に吐き気と寒気を忘れさせた。

魔法なんかわからない。特殊な何かを感じるような能力なんかない。

でも、友達の気配は、わかる。

「……キグナスーーーッ」

遥か上空で巻き起こる、激しい暴風……。

あれを巻き起こしている源は……間違いなく、キグナスの魔力だ。

第2部第2章第5話　ｆａｃｕｌｔａｓ（1）

痺れているかのように重い体を叱咤して、斜面に向かう。今し方上空で渦巻いていた竜巻は、僅かな後にかき消すように消えた。名残のように追って吹き降りてきた風が、周囲の木々と髪を揺らす。

（何があったんだ……？）

キグナスの身に何事も起こっていなければ良いとは思うが、そう信じられるほど脳天気じゃない。

（あんなに魔力があったんだ……）

無意識――潜在能力と言うやつだろうか。普段使える範囲とはまた別の、奥底に眠る魔力。

あれだけの竜巻を巻き起こせる能力は、半端じゃない気がする。

軋むような体を動かし、木々を頼りにゆっくりと斜面を登り始めた。体を動かすごとに目眩が起きるほどの痛みが支配するので大して進みはしないけれど、あそこにうずくまっているよりは前に進む。

（これで襲われたらアウトだな）

歩くだけで手一杯なものを、戦うなんて真似が出来るわけもない。

（何が……起こったんだろう……）

少しずつ斜面を登ってはずり落ち、ずり落ちては少し這い上がると言う気が遠くなるような作業を繰り返し、ひたすら上を目指す俺の周囲で不意に風が流れた。柔らかく取り囲むように、空気が。

（――？）

そのことに気づいて、顔を上げる。前方の茂みが、がさりと音を立てた。

「グフッ……」

やばい……。

下品な獣じみた音と共に現れた姿に、頭がくらりとした。ホブゴブリンだ。今の俺に勝ち目はどこにもない。

（キグナス、ごめん……）

ふらりと傾いだ体を、木の幹に持たせ掛ける。貧血の引き起こす吐き気に大きく呼吸を繰り返しながら、ホブゴブリンが俺めがけて降りてくるのをただ見つめた。赤錆びたような剣には、凶々しい緑色のものが付着している。多分、毒だろう。

ずざざざ……と草をかき分けて降りてくるホブゴブリンが剣を振りかざして地を蹴った。その刹那、その体が弾かれたように吹っ飛ぶ。全身から切り刻まれたような細かな血飛沫をあげていた。

（何……？）

どこか朦朧とした霞んだ意識の中で、呟く。何が起きたのか把握出来ないままにいる俺の目の前でホブゴブリンが呻きを上げながら体を起こし、同時に別の方向から滑り降りて来るような物音が聞こえた。

「カズキ、無事！？」

「ニ……ナ……」

草木の陰から躍り出た姿に、思わず呆然と呟く。ニーナは、木の幹にもたれたまま唖然としている俺に、安堵の笑みを覗かせた。

「良かった、間に合った」

「シルフ……？」

さっきホブゴブリンが吹っ飛んだのはニーナの魔法……。

ホブゴブリンが体を起こして、再び剣を構える。駆け出そうとするその寸前、俺を守るように立ちはだかったニーナが再度シルフを召喚した。

「軽やかに踊る風の精霊シルフよ、その姿を刃に変えよ！！ウォラト！！」

自然ではあり得ない風が巻き起こり、ホブゴブリンに襲いかかると同時にレイピアを抜き放って地を蹴る。『風の刃』に切りつけられてもんどり打ったその体に、垂直に構えたレイピアを深々と突き刺した。

「ギャアアアッ」

振り絞るような雄叫びが、血の噴水を伴って上がる。それきり、

力を失ったように地面に沈んだままだった。
「危なかった」
小さく息をつきながら、ニーナがレイピアを抜き取って振り返る。刀身についた鮮血を拭う時、ひどく嫌そうに鼻の頭に皺を寄せた。相手がゴブリンだからだろうか。
「ありがとう……」
精一杯声を押し出す。剣を鞘に戻しながら、ニーナが笑みを覗かせた。
「猟師小屋に荷物だけ放りっ放しだったから……何かあったんだと思って、カズキたちを探してシルフを飛ばしたの。ヤバそうだったから、とりあえずシルフの守りだけ飛ばして探しに来たのよ。……歩けるの？」
近づいてきたニーナが、満身創痍の俺を見て顔を曇らせた。
「わたしは治癒は……出来ないのよね……」
「うん……何とかする……」
何ともなんないが。
大きく肩で息をついて幹から体を起こすと、激痛が走った。息が詰まる。あの男にやられた胸の傷がやはり堪える。
「……あの男に遭遇したのね？」
「え？じゃあニーナたちも？」
「シサーが相手をしてる。……心配ないと思うわ。きっともうカタがついてる」
それからニーナは辺りを見回すように、顔を上げた。
「オレアード」
「？」
「大地に溢れ、木々に流れ込む恵みをほんの少しわけてちょうだい。……オクリース」
ニーナが何かを祈るように、瞳を閉じて呟く。応えるように木々がさわさわとその枝を揺らし、ざざーっと葉が舞い落ちた。
「あ……」

引きずるほど重かった体が、僅かに軽くなる。傷の痛みは変わらないけれど、何かが流れ込むように体の中が満たされていくような感じがした。まだ溢れていた血も、止まったみたいだ……。

「何……？」

「オレアードは山の妖精。木々の生命力を少しわけてもらったの。怪我を治すことは出来ないけれど、カズキ自身の自然治癒能力を手伝ってはくれるはず。……治癒の魔法みたいに立ちどころに治ったりはしないけれどね……」

「ありがとう……」

確かに治りはしないけれど、少し体が軽くなった。貧血も引いたみたいだし、頑張れば何とか登れそうだ。眩暈と吐き気がないだけでも、随分と救われる。

「行けそう？」

「うん」

痛いけど。

まだ痛みの走る体を押して、登り始める。気遣うように寄り添ってくれるニーナに、キグナスのことを聞いてみようと口を開いた。

「ニーナ、キグナスは？」

「カズキ、キグナスは？」

「……え？」

「は？」

お互い目を見張る。

「一緒じゃ、なかったの……？」

「キグナスは猟師小屋に置いて来たんだ」

「……」

俺の言葉に、ニーナが黙って目を見開いた。

「ファリマ・ドビトークに入ってからずっと調子が良くなかった。俺も大して剣が使えるわけじゃないから魔法を連発する羽目になってて、かなり衰弱してた。……だから、キグナスは猟師小屋に残して休ませてたんだよ」

少しずつ空が近くなっていく。オレアードの協力で楽になったおかげで、のろのろであるとは言え、進行速度はさっきまでより随分上がっていた。

「何があったの？」

ニーナの問いに、猟師小屋についてから起こったことを説明する。

「……だから、キグナスからあいつ……あの魔物を引き離さなきゃいけないと思って……。それで、攻撃を受けて足を踏み外したんだ」

「じゃああの男以外にも魔物が……ううん、魔物かどうかはわからないけれど何者かが接近していたのね？」

扉を吹き飛ばした、姿の見えない何かだ。

「うん。多分」

「じゃあ小屋に残っていたキグナスは、もしかするとその何者かに襲われた可能性もある……」

「竜巻が起こったでしょ」

「ああ、うん。……キグナスの魔法？」

言われて、俺は短く首を振った。

「キグナスの魔力なのは間違いないと思う。でも、あんな魔法を使える状態じゃなかった」

そりゃあ俺だってキグナスが使える全ての魔法を知っているわけじゃないけど、あんな強力なものを使えるんならこれまでも使ってるだろうし、ロナードを出てからそんな急激に成長したわけじゃない。

「襲われて暴発したんだと思った、俺は」

「……」

「シルフには、引っかからなかったの？」

俺の問いに、ニーナが申し訳なさそうな顔をする。

「カズキが先に引っかかったから……一緒にいるもんだと思ってたし」

ああそうか。

「上についたらもう1度……」

「ニーナ」
言い掛けたところで、頭上から声が降ってきた。顔を上げると、木々の間からこちらを覗き込むように、シサーが見下ろしているのが見えた。
「シサー！！」
やっぱりこの人の姿を見ると、安堵で肩の力が抜けるような気がする。
「おう。無事かぁ？」
「俺は何とか……。シサー、キグナスを探して」
「え？」
俺の言葉をニーナが補足する。
「猟師小屋に残して来たんだって言うのよ」
「何？」
「でも、どこにも姿はなかったでしょ？」
会話をしている間に、ようやく上までたどりつく。手を伸ばして俺を引きずりあげてくれたシサーは、ぼろぼろの俺の姿を見て険しい表情を浮かべた。
「ひでぇ状態だな。大丈夫か」
「ニーナがオレアードの力を貸してくれたから何とか。それより、キグナスを探さなきゃ」
「何があったんだ？」
問われて、先ほどニーナにしたのとほぼ同じ説明を繰り返す。話を聞いたシサーは眉を顰めて「姿の見えない魔物か……」と呟いた。
「いるんでしょ」
「いるけどな。その話を聞いただけじゃ種類まではわかんねぇよ」
言って、ぐしゃぐしゃと髪をかき回す。
「姿が見えない類の魔物は厄介なのよね」
ニーナが複雑な顔でため息をついた。首を傾げてそちらを見る。
「厄介？」
「ああ。何らかの相手を操るような能力を持ってる奴が少なくない」

「操るって……」
「例えば体。例えば心、精神、感情……」
幽霊が人に取り憑くようなもんだろうか。
「もしそうなんだとしたら、操られて、それを排除しようとしたキグナスの奥底が、魔力を暴発させたのかもしれないわね。……さっきのカズキの話と合わせると、ちょっとヤバいわよ。それだけ衰弱してるのにあれだけの魔力を暴発させたら、体が持たないわ」
「ニーナ。シルフを飛ばしてくれ」
「わかった」
ニーナがシルフを召喚する。猟師小屋の方へ足を向けながら、俺はシサーに問いかけた。
「シサー。あの魔物は？」
「ああ。あいつなら片づけた。……カズキ、お前も少し休んでろ」
「嫌だ」
きっぱり言い切った俺に、シサーが困ったような顔をする。そりゃあこんな状態で大して何も出来ないのかもしれないけど……。
「キグナスがヤバい状態だって知ってたのに……そばにいたのに、俺」
もっと上手く立ち回る方法があったのかもしれない。考えても仕方ないとわかっていても、考えずにいられない。
猟師小屋の中を覗いてため息をつきながら、シサーが出てくる。参考になりそうなものは別段見当たらなかったらしい。
「最良は尽くしたつもりだろう。言ったってしょーがねえ。まだ何とかなるかもしんねーしな」
ぽん、と大きな手で俺の肩をひとつ叩くと、シサーはニーナを振り返った。
「ニーナ。どうだ？」
「変ね」
「え？」
空を見上げるように呟くニーナに、訝しげな表情でシサーが近づ

く。血が止まったとは言えまだ全身が痛む俺は、小屋の壁に背中をもたせかけた。離れていくシサーと立ちすくんだままのニーナを声もなく見つめる。

「その辺にいるわ……」

――――――――ゴォォォッ。

「うわ」

「何だ！？」

グラムドリングが白光し、ニーナの呟きをかき消すように、林の奥から立て続けの猛火が突然襲いかかってきた。

拳大の小振りのものではあるが、ひとつじゃない。まるでマシンガンでもぶっ放してるかのような連射だ。

「カズキッ」

ただでさえろくな動きが出来ないのに、無数に飛来する火炎を避けるなんて高度な技を披露出来るわけがない。咄嗟に顔をそむけて腕で覆う。

「なッ……？」

シサーの驚く声が聞こえた。その声に腕をどかして目を開く。火炎はまだ次々と襲って来ていたが、それが俺の目の前で片っ端から弾けるように霧散していった。

（やっぱり……）

俺に火系攻撃は無効、というのは図らずも証明されてしまったらしい。

「後で説明する」

俺に注意を払っている場合じゃない。手短に言って、攻撃の止んだ暗がりに視線を戻した。

再度火炎が飛んでくる気配はない。何事もなかったかのように、ただ木々が葉を揺らしている。

油断を解かずに林を注視していると、やがて木が不自然に揺れた。がさ、がさと……人が、踏み分けているような……。

「キグナス……」

近づいてきた人影が、月明かりに照らし出される。白金の髪が、ふわふわと風に揺れた。

「……」

シサーやニーナも、キグナスを見つめたまま動かない。グラムドリングは、まだ白い警告光を発していた。

「悪ぃ、間違えたッ」

顔色や目つきにおかしなところはない。

「魔物に襲われて、戦ってたからさぁ」

口調や声も、キグナスだ。

こっちへゆっくりと近づくキグナスの足取りも、危なげないものだった。元気そのものの足取り。

（――だからおかしいんじゃないか！！）

さっきまであんなにふらふらだったのが嘘のような回復力だ。あんだけ魔力を放出したとは思えない……。

（キグナスの魔力じゃなかったのか？それとも）

近づいてくるキグナスが何の偽りのない、俺の知っているキグナスそのものに見えて、俺は混乱した。

（さっきの火炎は、キグナスの『火炎弾』……）

としか、考えられないよな？

あんなことが、疲弊しているキグナスに出来たのか？あんな……連射。

第2部第2章第5話　ｆａｃｕｌｔａｓ（2）

あの竜巻を起こしたのがキグナスの魔力だったとすれば潜在能力的には可能かもしれないが、自分で使いこなせる段階にいるのか？だったら何で見習いなんかやってる？どうしてこれまでの戦闘で使わなかった？

「カズキ、キグナスじゃないわよ……」

前を見据えたままのニーナから低く注意を喚起する声が飛んだ。

「うん……」

同感、だ。

「なぁにおっかねぇ顔してんだぁ？魔物はもう、いねぇよ」

姿は、キグナス。

……でも、キグナスじゃない。器だけが本物のキグナスなんだとすれば、どうしたら良いんだ……！？

間近まで近づいてきたキグナスに、シサーが威嚇するようにぶんっとグラムドリングをないだ。風を切る低い唸りが白光の残像と共に消える。

「いーや。いるみてぇだぜ？それもタチの悪い面倒臭ぇのがなあ？」

「……」

「グラムドリングの性質を知らないキグナスじゃねぇはずなんだが？」

シサーの言葉が途切れるのと同時に、キグナスの小柄な体が後方へ跳んだ。それに伴うように変色していく顔色。構えたロッドから『風の刃』――違う、『風の斧』が放たれた。

「軽やかに踊る風の精霊シルフよ、その身を障壁の渦と変えよ。フェレンティース！！」

「ニーナ、カズキを集中的に守れッ！！」

「わかった！！」

全員対象で防御魔法を発動させたニーナが、更に俺への防御を強

化してくれる。けれど、それでも尚、弱められた『風の斧』が防御を突破して襲いかかった。

「くそ、半端ねえぞ、この魔力ッ」

怒鳴りながらシサーが、体を翻すキグナスを追う。背後から襲いかかる刃をステップで辛うじてかわしたキグナスは、逃亡を諦めたようにその場に踏み留まってロッドでシサーの剣を受けた。

魔力はキグナスが使いこなせてないものを引き出しているかもしれないが、身体能力はそれほど変わりはないらしい。少なくともいきなり凄い怪力になったとか驚異的な跳躍力でどっか行っちゃうなんてことはなさそうだ。

でも……このままだと……。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ……『裁きの雷』！！」

シサーが剣を引いた一瞬の隙を突いて、キグナスがロッドを振り翳す。どこからともなく雷が頭上を照らし、一気に地面目掛けて走りぬけた。

「くそッ……」

グラムドリングを振り翳し、それを受けながらシサーが横へ跳ぶ。魔剣で魔法を受けるなんてことも出来るらしい。グラムドリングに激突した雷が十字光のように疾り、ニーナから守りが飛んだ。

「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ！！その輝きで全てを包み込んで！！モリス！！」

俺とニーナを包み込んだ光が消え、視界が再び戻った時には既にシサーとキグナスの攻防が再開していた。魔法を使う隙を与えないつもりなんだろう。恐ろしい速さでシサーの剣が次々と振り下ろされ、キグナスはそれをロッドで受けるのが精一杯だ。勢いに押され、上半身は後傾になりつつある。

このままじゃあキグナスがッ……。

「シサッ……」

駆け出しかけた俺を、ニーナが押し止める。

「キグナスがッ……」
身体能力に変化がないのなら、キグナスがシサーに勝てるわけがない。シサーが手加減しているのは見ればわかるけど、あれじゃあ……。
「うあッ……」
キグナスの足がもつれる。転倒しかけた隙をついて、シサーが剣を振りかぶった。そのまま勢い良くキグナスに叩き込む。――ただし、刃の方じゃない。柄だ。
「うッ……」
柄でしたたかに頭部を殴られ、小さく呻くとキグナスの体が崩れ落ちた。それを見て、ニーナの制止を振り払うと痛む体を引きずるように駆け出す。
「カズキッ」
ニーナの足音が俺に続いた。
「シサー、キグナスは？」
「完全に何か憑いてるな」
地面に崩れたままのキグナスを見下ろし、確認するようにニーナに視線を送る。それを受けてニーナも小さく頷いた。
「……どうするの」
キグナスの顔色は土気色をしている。
「しょうがねぇ」
シサーが奇妙に冷薄な声音でキグナスに視線を戻した。すら……っとグラムドリングの切っ先をキグナスに向ける。
……え？
「このままじゃあ、どんな災厄をもたらすかわかったもんじゃねえからな。残念だが……」
「シサーッ！！」
「体内に入り込んでる奴ごと死んでもらうしかない」
怒鳴る間もあらばこそ、シサーの剣が閃光のようにキグナスに叩きつけられる。その瞬間、頭ががんっと激しく殴られたような痛み

が走った。いつもの……けどいつもより一層激しく、飛びつこうとした体がよろけるほどの頭痛に眩む俺の視界で、剣が届くより先にキグナスの体が後方へ弾け飛ぶ。

「ニーナ！！」

「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ！！その身を裁きの矛と変えよッポエブス！！」

間髪入れずに怒鳴ったシサーに、ニーナが魔法を唱える。何が起こっているのか完全にわからないでいる俺の前で、ニーナの放った魔法が何者かに命中した。

「ギャァァァッ」

「そこかッ」

言ってシサーが剣を構え直す。地を蹴ってグラムドリングで一文字に空を切った。同時にニーナの魔法が更に叩き込まれる。

「カズキ、キグナスを頼むッ」

「う、うん」

頼まれたけど、どうすれば良いんだろうかこの場合。

わけのわからないまま、キグナスに向かって駆ける。そばに寄ってみると、横たわったままのキグナスは、蒼白ではあるけれど先ほどの土気色ではなくなっていた。

「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ！！邪なる者に聖なる裁きを！！ウルヌス！！」

「ウアアァァアアァァアアア……」

背後から、身の毛のよだつような悲鳴が聞こえてくる。地獄の底から響いてくるような、奇妙に暗い響きを伴った悲鳴だった。

背筋が震撼しそうなほどの断末魔の声。と言っても、本当に鼓膜に振動が伝わったわけじゃなさそう……言うなれば、心に直接と言った感じだ。空気がびりびりと振動し、ばんっと何かが破裂するような風圧が襲った。

それきり、静かになる。

「……」

キグナスの上体を抱き起こしたまま振り返ると、光を失った剣をシサーが鞘に収めるところだった。
「何が起きたの？」
「憑いてる状態だと、肉体が受けたダメージはそのまま憑いてるやつへのダメージになる。身動きが取れない状態で体を傷つけることを示唆すりゃあ、助かる為には出てくしかねーだろう」
「キグナスの体を抜けたところで攻撃を仕掛けたわけ。……どう？衰弱してない？」
言われてキグナスに向き直る。改めてみると、キグナスの呼吸はかなりか細いものに感じられた。
「息はしてるけど……凄く小さい」
「弱った体を乗っ取られて、あげく好き放題魔力使われちゃあな……」
シサーも深刻な表情で呟く。
「ニーナ」
「うん。……オレアード。また、力を貸して欲しいの。……オクリース」
ニーナが呟き終えるのと同時に、キグナスの顔色にほんの僅か血色が戻る。けれど呼吸が浅く細いのは相変わらずで、意識が戻る気配もまるでなかった。
「とにかくこんなとこに寝転がしておくわけにはいかんだろう。一旦、小屋に戻ろう。お前も休まなきゃなんねーだろう？朝までは、ゆっくり寝ろ」
キグナスを抱え込んでいる俺を促して、代わりにシサーがキグナスを抱き上げた。ニーナが、俺に手を貸してくれる。
「大丈夫？」
「うん……ごめん。ありがとう」
礼を言って、まだ頭痛を引き摺る額に手を当てる。頭は痛いわ体は怪我だらけだわ、確かに休まなきゃ進めないだろう。
「……びっくりした」

「あん？」
「さっき」
「ああ……」
微かに振り返ったシサーの横顔が、苦笑した。
「驚かせて悪かったな」
「ううん……演技だって全然わかんなかった。完全に騙された」
「そんな悪人面してたか？俺」
「うん」
俺の返事に「のやろぉ」とシサーが笑いながら軽く蹴った。
「ま、そんくらい……本気でやるくらいの気持ちでやんなきゃ、あのテは騙し込めねぇからなぁ。結果オーライってことで」
「うん。ありがとう。……さっきの、魔物？」
「多分、ラルウェアじゃないかしら」
らるうぇあ？
俺に手を貸してくれているニーナの顔に、目線を向ける。
「はっきりとは言えないけどね。人間に悪感情を抱く無形の魔物で、アンデッドではないんだけど……ま、そんなようなもんよ」
そんないい加減な説明……。
「目に見えない魔物って、見えない分断定するのが難しいのよ」
そりゃそうだろうけど。
「そういや、お前、さっきの『火炎弾』……ありゃ何だ？」
思い出したように、キグナスを抱えたままのシサーが振り返る。
そうだった、忘れてた。
「俺にも良くわからないんだけど」
前置きをしてから、ここに来る道中の出来事を話すと、シサーは片眉をひょこんと上げて首を傾げた。
「シェインにもらったピアスか」
「うん。……まだ、確証はないけど。それ以外に考えられないから」
俺の歩みがまだのろいせいで、シサーたちも速度が遅い。ゆっくりと猟師小屋に辿り着き、ようやくキグナスをベッドに横たわらせ

る。シサーがマントをかけてやり、その顔を覗き込んだ。
「とりあえず意識が戻ってくれりゃいーんだが」
「うん……」
シサーの後ろに立って、キグナスの顔色を窺う。あの竜巻、そしてさっき見た光景が思い出された。
「……あんなに魔力があったんだね」
「さすがクライスラーの血筋ってとこか」
振り返ったシサーを見上げて首を傾げる。
「クライスラー？」
「シェインの家系だよ。伊達に『天才魔術師』と血縁やってるわけじゃねぇってことじゃねぇか」
ああ……そうか。
言われて、先日見たばかりのシェインの魔法を思い出した。サンド・ゴーレムが一瞬でコッパになったっけ。復活しちゃったけど。
それに、大車輪みたいな『火炎弾』。見てはいないけど、立て続けに発せられていたらしい猛火の魔法。
同じ、血筋なんだよな……。
――直系の家系ってわけじゃねーけど。いろいろいるわけだろ、俺の家系は
――だからさ……俺だけ馬鹿ってわけにもいかねーし
以前、風の砂漠でキグナスが言っていた言葉を思い出す。自嘲するような響きを持った言葉。
――あいつみたいなんだったら……
――ごめんな
（馬鹿だな）
比べることなんか、ないのにな。
「カズキも、寝とけ。あ、メシ食ったか？」
その言葉に黙って首を振る。ニーナがパンを投げて寄越した。
「食べときなさいよ。ますますバテるわよ」
「このドア、なんとかなんねぇかなぁ……」

工事好きの血でも騒ぐんだろうか。
ドアがついていた部分をためつすがめつして、諦めたように溜息をつきながら足元に散らばっているドアの破片を取り除く。
「野営より視界が悪い分却って落ち着かねぇなぁ、何か」
「ガルシアは、どうしたの？」
食欲はさしてないけれど、ニーナに渡されてしまった手前パンにかじりつきながら尋ねる。シサーがちらりと目を上げた。
「ガルシアはまた住める場所を探すってどっか行った。アテはあるんだろう。落ち着き先が決まったら連絡を寄越すって言ってたぜ」
「そう……」
せっかくあんな綺麗な町に住んでいたのに、俺たちに巻き込まれて悪いことをしたと思う。別にわざとじゃないんで仕方ないんだけど。
「気にすんな。元々傭兵だしな。あちこちふらふらすんのは慣れてる。何の恨みを買って狙われるかわかんねぇし。あいつなら、大丈夫だ」
「なら、良いけど」
自分の水袋から水を一口飲んで、壁に背中を預ける。まだ体の節々が痛んで、胸の傷で軽くむせた。
「シサーたち、遅かったね。迷った？」
「いや……迷ったわけじゃねぇんだけどな……」
言いながら自分の荷袋を漁る。パンを取り出しているシサーの代わりに、水袋を紐解いていたニーナが後を引き取った。
「一度、フォグリアの方まで戻ってたの」
「え？何で？」
「しつっこくってよぉ……。まさか衛兵連れて山入りするわけにはいかねぇし、ファリマ・ドビトーク目指してるってバレると厄介だから、一度フォグリアの方向まで戻って撒いてきたんだ。仮にも『魔の山』なんだから、俺たちが入ったって確証がなけりゃ入る気にはなんねぇだろう」

こうして考えてみると、道具屋で馬の通れる道を尋ね損なったのはラッキーだったのかもしれない。あそこで聞いていたら、ファリマ・ドビトークへ向かったことはばれればれだ。魔物と衛兵の両方を相手取る気にはさすがになれない。

「そうなんだ……。お疲れ様でした」

俺が捕まってたら、やっぱり『曝し首』だったんだろうか。それともヴァルスへ『趣味の悪いお届け物』だったんだろうか。いくらユリアに会いたいと言ったって、そんな対面はしたくない。

「ニーナは、平気？」

シサーがパンを飲み下して立ち上がり、暖炉のそばに屈み込むのを横目で見ながら尋ねる。やはり火を起こすことにしたらしい。俺が中途半端にやりかけたままの灰の掻き出しを始める。

「何が？」

「キグナスは『ファリマ・ドビトークは瘴気が凄い』って言ってたよ。俺はわかんないんだけど」

「ああ……妖精って、意外とタフなのよ？」

俺の言葉にニーナがくすっと笑った。水を一口飲んで膝を抱える。

「瘴気は確かに強いけれどね。この山にも、木の精霊も風の精霊もいるでしょう？」

「ふうん……」

パチン、と微かな音が聞こえて、俺の左手がぱっと赤く染まる。シサーが暖炉に火を起こし、その眩しさが目に沁みた。

「そろそろ寝とけよ。もうじき、朝になっちまうぜ」

「うん……」

炎がちろちろと赤い舌を伸ばしながら暖炉の中を嘗め回すのを見ていると、とろとろと瞼が重たくなっていくのを感じた。昨夜は寝ていないし、戦い通しだし、崖から落ちるし、考えてみれば当たり前だ。

第2部第2章第5話　ｆａｃｕｌｔａｓ（3）

「俺らがここまで来る途中に、祭壇があったんだ」
遠のいていく意識の中で、シサーの声が遠くに聞こえる。
「祭壇……？」
「ああ。ぼろぼろで、どんだけ役に立ってんだかはわかんねぇけど……そこの周辺だけは一応魔物も出なかったから、少しはたしになってんだろう」
山に入る猟師たちの為の祭壇だったんだろうか。それとも、多分この先にあるだろうかつての村……ヴァインの人たちの……。
「戻ることになるが、キグナスの意識が戻らねぇことにはどうにもならねぇからな。明日は1日、そこで休憩を……おい？」
「寝ちゃったみたいよ……」
くすくすとニーナの軽やかな笑い声が微かに耳に届いた。人の動く気配がして、ふわりと何かがかぶせられる。
「おつかれさま……」
その声を最後に、俺の意識は眠りの底に完全に引き込まれていった。

◆◇◆

翌日は、出発ものんびりだった。もうじき日が真上に差し掛かるんじゃないかと言うくらいの時間帯。１０時とか１１時とか、そんくらいだろうか。
シサーたちと話しながら眠り込んでしまった俺は、そのまま昏々と眠り続け、ニーナに起こされるまで1度も目が覚めることはなかった。夜の間は魔物の襲撃はなかったようだ。……いや、正直言えばあったかどうかすらわからないんだけど。
キグナスの意識はまだ戻らない。顔色も白いままだ。瘴気に当て

られているせいで、回復が通常より遅いのかもしれない。そうじゃなくても、ありえない魔力をぶっ放している。
「こっち、ちゃんと道があるんじゃんね……」
先頭は、キグナスを背負ったシサーが歩いている。俺の後ろを、ニーナ。オレアードの力のおかげで、普通より怪我の回復が早いらしいとは言え、治ったわけではない俺の全身はまだぼろぼろだ。節々も痛けりゃ怪我も痛い。
「ああ。カズキたち、どっから来たんだ？」
「多分、ガルシアがやめとけって言った方」
「やめとけって言われると行きたくなるやつがいるんだよなぁ……」
そんなんじゃないやい。
「迷い込んじゃったんだよ」
歩きながら、べこんとシサーのふくらはぎを軽く蹴飛ばす。けたけた笑いながらシサーが、軽くコケるように膝を折った。
「馬鹿、キグナス落とすだろ」
「気をつけてよ」
「んじゃあ蹴るなよ」
昼間と言っても、草木の鬱蒼と生い茂る山の中は尚薄暗い。でも、道が狭いとは言えちゃんとある分、俺たちが来た方よりは遥かに明るく見えた。木漏れ日がところどころに射し込み、小鳥の囀りさえ聞こえる。
「あっち、本当にひどかったよ。道なんかないようなもんだったし、次々に魔物が出るもんだからついつい適当に道を選ぶ羽目になるし」
「こっちも岐路は多かったけどな。ガルシアが幅の広い道を選んでけって言ってたろ」
「ああ、うん」
「結構それがわかりやすくてな。迷わずに済んだ」
ああ、俺たちもそっちに辿り着いていればあんなに時間がかからずに済んだかもしれない……。
俺たちの方が圧倒的に弱いんだから、楽な方を通らせてくれれば

良いものを神様も意地悪だ。おかげで、俺もキグナスもずたずた。……そりゃあ勝手に道をそれたこっちが悪いっちゃあそれまでなんだが。

猟師小屋から2時間ほど戻ったところに、シサーの言う通りファーラの祭壇があった。確かに『風雨に晒され放題晒されました』って感じでぼろぼろだったけれど、不思議とその佇まいには威厳があり、神聖な空気が漂っている。

「どれだけ効果があるかはわかんねぇけど、仮にも魔物を寄せ付けない祭壇だ。出発するのは明日にして、今日は1日ここでキグナスを回復させよう。その辺で休ませるより、ちっとは回復の効果があるんじゃねぇか」

「ここだったら、山の瘴気にも当てられずに済むんじゃない？」

シサーの言葉に従って、祭壇のすぐそばに簡単に寝場所を作って、意識不明のままのキグナスを横たわらせる。近付いてみると、祭壇の周囲の空気はしんと清浄な気がした。気分の問題……？

（でもないか……）

微かに体が軽くなる。気づいてないだけで、山の瘴気とやらに俺も当てられているのかもしれない。そうじゃなくても、ほんの少しだけ疲労がとれていくような気がする。

「カズキも本調子じゃねぇんだから、一緒になって祭壇のご利益に預かっとけよ」

「うん。……シサー、どこ行くの？」

荷物を下ろしかけて、シサーが休む雰囲気になっていないことに気づく。

「一緒になってここでぼーっとしててもしょーがねぇからな。俺だけでもちょっと道の確認に行って来る」

「つってまた行方不明になるの？」

「……結構引っ張るなお前」

だって大変だったんだぞ、『3つ目の鍵』のダンジョン。

ニーナが、俺とシサーのやりとりに吹き出した。

「カズキ、ここだったらシルフが使えるから行方不明にはならないわ。わたしがシサーの行方を探し出せるもの」
ああ、そうだった。あの時はダンジョンの中で、しかもシルフが使い物にならない場所だった。
「とゆーわけだ」
「でも、気をつけてね」
行方がわかるとは言っても、魔物がうろうろしている山の中だ。
「ああ。ついでに水でも湧いてる場所がねぇか見てくるよ。……ニーナ、カズキとキグナスを頼んだぜ」
「うん。気をつけてね」
シサーが元来た道を戻っていくのを見送って、キグナスのそばに腰を下ろす。
「もしもバルザックがいなかったら、どうする？」
じっと回復を待つってことは、することがない。同じように木に寄りかかって座り込んだニーナに尋ねてみる。
「さてね……探すしかないけど」
「ニーナ、バルザックの気配ってのはシルフでわかったりしないの？」
「何らかの護りを張ってるみたい。それにわたし、あの魔術師のことを良く知らないもの」
「良く知らない人はわからないの？」
「場合によっては何となく探ることくらいは出来ることもあるけど……」
魔法も万能じゃないんだな。
「何らかの護りに入っていたり、制限をかけたり……してると難しいわね。魔法を使う人間は特に、普段から魔法に対するガードを固めていることが多いもの」
「じゃあ、レガードは？」
話の流れで思いついて聞いてみる。レガードなら、ニーナも知っているだろうし魔術師じゃないのに。

俺の問いに、ニーナは力なく首を振った。
「全然わからない」
（じゃあ……）
じゃあ、レガードのことは、誰かが護ってるってこと……？
……誰から？
「ともかく、バルザックがいてもいなくても、このまま山越えをして1度シャインカルクへ戻りましょう」
「うん」
シャインカルクへ、か。
戻るんだったら、何の成果もなく戻るんじゃなくて……せめて、何か状況の変化を掴めてから戻りたいけどな。
「とにかく、カズキもキグナスも、回復してよね」
言葉の割りに優しい口調で言われ、俺はニーナに小さく微笑み返した。
「うん……わかった」

◆◇◆

人の気配がする。……ニーナ？
いつの間にか寝てしまったらしい。うつらうつらした意識の中で、ぼんやりと考えた。ニーナ以外に考えられ……。
（……？）
不意に、空気が暖かくなったような気がした。ふわりと体が軽くなって浮くみたいだ。……あ……疲れが……。
（癒しの魔法……？）
ニーナは使えないはず……。
けれど、確かに癒されていく。みるみる傷が塞がっていくのがわかる。胸の、大きな傷でさえ。
（誰……？）
――カズキ。

不意に声が聞こえた。聞き覚えがあるような気はするものの、誰かまではわからない。

――今は、あたしも力を貸してあげることが出来る。でも、命を失った後ではあたしにも何もしてあげられないんだ……。

俺の困惑を無視して、声は淡々と告げた。

――それは、自然の摂理に背くことだから。

『自然の摂理』。

このフレーズは知ってる。前にそう言った人かいた。なのに思い出せない。凄く簡単なのに。

（夢……？）

起きている時だったら、凄く簡単に思い出せるのに。

……『起きている時だったら』？

そうか、俺、まだ寝てるんだ。まず起きなきゃ……。

――無理だよ、カズキ。今はあたしが誰かは思い出せない。

くすくすと軽やかに、くすぐるような笑いが響く。

――それより……どんな相手も必ず敵の最も弱いところを狙ってくる。あんたたちのメンバーで言えば、カズキかキグナスだ。

返す言葉がない。

――キグナスは、自分の魔力の使い方をまだ知らない。使い方を知らない魔力は、ないのと同じなんだ。……あんたも、とんでもないアイテムを持っているのに、まだ使えないでいるけどね。

とんでもないアイテム？

（シェインのくれた、ピアス……？）

――でもね、この先どんなアイテムを手に入れることになったとしても……アイテムは、アイテムなんだ。

意味が分からない。

内心首を傾げていると、一度言葉を途切らせた『声』が再び続けた。

――アイテムは、アイテムでしかない。使うのは、あんたたちなんだよ……。

（どういうこと？）

――アイテムに頼っていたら、いつか足元を掬われる。最後に自分を守るのは、自分の力だってことを忘れないで。

俺の困惑に気づいているのだろうけれど、それに構わずに『声』はやや口早に言葉を紡いだ。

――油断しないで。どんな時でも。あたしが助けてあげられるのにも、限度がある……。

（誰……？）

片鱗だけが、意識の片隅によぎった気がした。まるで残り香のように……紫色……。

（どうして、助けてくれるの）

くすくすくす……とまるで密やかに反響するように笑いが響く。

――だってあんたは『異質』だから。この世界において。

異質……。

――あたしと、同じ……『異質な人』だから……。

（同じ？じゃあ君も異世界から……？）

――ううん。そういう意味ではないけどね。あたしは、元々ここの住人だよ。さてと。……そろそろ行かなきゃ。

元々ここの住人なのに、異質？

（まずい、行っちゃう……）

起きなきゃ。

気は焦るけれど、目が覚める様子がない。そうしている間に気配が遠のいていくのを感じる。

（待って……ッ）

――また、会おう……。

（ありがとうッ……）

（……）

ぼんやりと目を開けると、木々の間からオレンジ色の夕暮れが微かに差し込んでいた。

（……？）

ゆっくり体を起こす。軽く頭を振って目を覚ましてから辺りを見回してみると、ニーナがすぐそばの木にもたれてうつらうつらしているのが見えた。

（今……何か……）

とても大事な夢を見たような気がするんだけど……。

思いながら体を軽く動かすと、いやに軽くなっているような気がした。体中を支配していた痛みがどこにもない。

（あれ？）

慌ててあちこちにあったはずの傷を見てみるが、信じられないことに綺麗に……消えていた。

（うっそお……）

祭壇の力？こんなに回復力あったっけ？

急いでキグナスの方に目を向けると、キグナスの顔色は普通と言ってもおかしくないくらいに戻っていた。健康的な血色。呼吸も正常に見える。

回復、したんだ……。

俺と同じで。

「うーん……」

背後でニーナの小さな声が聞こえる。

「あれ……カズキ」

振り返ると、ニーナが眠そうに目をこすりながら俺の方をぼんやりと見ていた。

「寝ちゃった」

「ニーナ。……キグナスが」

「え？」

俺の言葉に、ニーナが慌てて近付いてくる。一緒になって覗き込むと、ほっとしたように白い歯を覗かせた。

「顔色が、良くなったわね……」

「うん……」

これなら、目が覚めるのも近いかも知れな……。

「カズキ……」

ニーナに向けた目線をキグナスに戻すより早く、ニーナが俺の肩をがしっと掴んだ。視線はキグナスに落としたまま……。

つられてキグナスに戻した俺の目が見開かれる。

「う……」

眩しそうに、あるいは、うるさそうに。

けれど、確かに。

「……キグナス」

「カズキ……？」

薄く開けられたキグナスのオレンジ色の瞳が、俺を、ぼんやりと捉えていた。

第2部第2章第6話　冒険への道標（1）

どうしてもファリマ・ドビトークの山中を移動しているせいか、一時は完全に回復をしたものの、今もキグナスの状態は消して快調とは言えない。ニーナがオレアードの力を借りてくれてキグナスを包んでいても、厳しいものはあるらしい。

けれど今はシサーもいるし、ニーナもいる。ガルシアの言う通り高度が上がるに連れ魔物との遭遇率は一層上がっていったけれど、俺とキグナスの2人だった時に比べれば楽なものだった。

キグナスは、俺が小屋を出て行ってから間もなくの記憶が飛んでいた。まだ使えないはずの魔法を連発したことも、どうやら記憶にない。あれだけの魔力を使いこなせるようになれれば妙な考えに悩まされることもないだろうとは思うのだが、それにはまだ時間がかかりそうだ。

休憩をした祭壇から歩くこと3日。

「あれ、何だろう……」

この山に入ってから遭遇するようになったバグベアと言うゴブリンが巨大化したような魔物との戦闘を終え、息を切らせながらふと見上げた空、木々の切れ間に覗いたものが目に止まった。

「あれ？」

俺の言葉に剣を拭っていたシサーが、顔を上げる。木々の隙間に覗く……建物？微かに人工的な建造物らしきものが、沈み始めた太陽の光を静かに受けている。

「あそこがヴァインの跡地、か」

「もうすぐね」

戦闘で乱れた髪を弾いて、ニーナが息をつく。

もうすぐと言っても、人が今も健在な村ではないから安全でないことは同じだろうけど……スタンプラリーじゃないが、ポイントに辿り着いたぞと言う気分にはなる。別にヴァインを目指しているわ

けじゃないけど、結構上って来てるし、山越えも半分近くまで到達してるんじゃないだろうか。

それに村の名残でも残っていれば、今夜は建物の中で休憩をすることが出来ると言うことになるし。野晒しよりは、ましだろう。

「魔物が増えてきてから……全滅したって言ってたよね」

「ああ」

「何で、増えたのかな……」

「ここに溢れる瘴気につられてるのよ」

「ああ……そういうことか……」

溢れるようになった瘴気が、まるで撒き餌のように魔物を呼ぶ。だったら問題は魔物が増えたことじゃない。瘴気が立ち上るようになったことだ。

誰かが何かしたんだろうか。誰か――黒衣の魔術師……。

俺も握ったままだった剣を鞘に収め、キグナスを振り返った。少しつらそうではあるけれど、前ほどキツそうでもない。

「キグナス、平気？」

「おう」

「さーて、バルちゃんはどこで何してやがんだかなー」

……バルちゃんって。

「そんな可愛く呼んだって、バルザックはバルザックだよね……」

本人がいなかったとしても、何をしに来てたのかがわかればまた……何か違うと思うんだけど。

このままシャインカルクに1度戻るにしたって、手土産になるんだけどな……。

上の方に行くに従って、道がどんどん草木に埋もれていく。かつて道があった名残はあるけれど、横から伸び放題に生えている草が道を覆い隠すようにしているせいで、足元が凄く見難い。その上石がごろごろしてたりするもんだから、ユリアじゃないが転びたくもなる。

「ま、ちょうど夜だし、今日はあそこで休めばいーよな。……あー、

またかよ」
　歩いている間、グラムドリングはほぼ発光しっ放しだ。グルル…と言う唸りと共に木陰から飛び出してきたウォーウルフに、間髪入れずにシサーが刃を叩き込む。
「やっぱりシサーって便利な人だね……」
　あっと言う間に弾き飛ばされ、血を迸らせながら地面でぴくぴくと痙攣するウォーウルフの姿に呆れたような気分になる。あれだけ俺が苦労していたのは何だったんだろう。比べるのが馬鹿だとわかってはいるが、虚しくもなるだろう……。
「便利って何だよ便利って……」
「あいた」
　ゴンと剣の柄で頭を小突かれて、軽く前につんのめる。何だか最近、言葉だけじゃなくて手足が出るようになっている気がするのは気のせいだろうか。暴力反対。
　建物が垣間見えた場所から1時間ほど進んで行くと、急に道が開けた。剥き出しの、痩せた感じの地面が広がり、どこからどう見ても立派な廃墟としか言いようのない小さな小屋がぽつんぽつんと間遠に建っている。変な話だが、どの小屋もぱっと見る限りドアがない。
　まだ夜ではないけれど、日が落ちてきて薄暗くなってきているのが一層侘しさをかきたてる。木々の隙間から零れ入るオレンジ色の西日が、無人の村を照らしていた。山なんかにいるせいで沈むのも早いし。
「これが、ヴァイン？」
「だろーなぁ」
　村……と言うには規模が小さいような気がした。人が住んでいた頃はもしかするともう少し建物があったのかもしれないけど……でも跡形もなくなるとは考えにくいから、やっぱり元々凄く小さな集落だったんだろうな。
「泊まれそうなとこ、探してみっかー。バルザックの手掛かりもど

っかにあるかもしんねぇし」
全滅した村、と言うフレーズでリデルを思い出す。それは必然的に、リデルで遭遇したハーディンの近衛警備隊員の記憶を引き連れて来た。グレンフォード……『青の魔術師』の腹心。
集落の中に足を踏み入れながら、ぼんやりと思い出す。あの時、ヴァインの話が出てるんだよな、確か。
――同じ魔物かな
――それは違うと思いますけど
リデルを全滅に導いた魔物と同じ何かがグレンフォードに眠っているんだとしたら、ヴァインを全滅させたのはあいつだったりして。
（……まさかね）
だとしたってどうと言うことでもないか……。
「何で急激に瘴気が濃くなったんだろうなぁ」
隣を歩くキグナスが、きょろきょろしながら目を瞬く。少々顔色が悪いが、それでも元気そうに無邪気な表情で俺を見上げた。
「うん……瘴気がひどくなったりしてる？」
問いかけると、キグナスは鼻をひくつかせるようにしてからくしゃっと顔を嫌そうに歪めてみせた。
「船酔いでもしてるみてぇ」
「……いいよ。吐いても。手伝おうか？」
「……手伝うの意味がわかんねぇ」
瘴気って臭うわけじゃないんだろうから、鼻をひくつかせてもあんまり意味がないよーな気がする。
「げぇ」
視線を薄暮に染まる集落のあちこちに向けていたキグナスが、突然ずざっと足を止めた。嫌な顔をして見つめるその先に転がっているのは、白骨だ。良く見ればぽつんぽつんと石か何かと見間違いそうなほどナチュラルに転がっている。
「……だから全滅した村なんだってば」
死体のひとつふたつ、なきゃおかしいだろう、却って。

「何でそんな冷静なんだよ」
「慌てたって消えるわけじゃないだろ……。だから何で魔物は怖がらないくせに、白骨は怖いんだよ。襲われたことないじゃん」
「襲う白骨もいるけどなー……」
「うあー。なんじゃこりゃ」
のろのろ歩きながらそんなくだらない会話をしている間に、随分先に行ってしまったシサーが声を上げた。
「何かあったのかな」
キグナスと並んで2人を追いかける。シサーは、今にも倒壊しそうなほど風化した一軒の小屋を覗き込んでいた。
「どうし……」
言い掛けて絶句する。一緒になって覗き込んだ小屋の中を、ウィル・オー・ウィスプのぼんやりとした灯りが照らしていた。
「……何、これ」
「何があったんだ？これ……」
並んで首を突っ込んだキグナスも、目を丸くして呟く。
狭い小屋の中には、かつて人が生活を営んでいただろう名残がまだあった。人が消えてから誰も足を踏み入れていないんだろうから、当時の姿そのままなんだろう。
粗末なテーブル、椅子、壁から壁に渡されたロープに干されたままの布巾。テーブルの上には手作りのような小さな籠が置かれ、中にはかつて食べ物だっただろう黒い塊がいくつかある。そのすぐ脇に置かれたヒビ割れた小皿の上にも、何かが乗っていた。いずれにしても埃まみれだ。
生活感を漂わせたまま時を停止させたその空間は、あるはずのもの――『人』の不在を強く感じさせる。
でも目を引いたのは別にそんなことじゃなくて。
「……凄いね」
中に完全に入り込んで、しゃがみ込む。足下に散らばる木片をつまみ上げた。

「ドア、だよね」
「多分な」
ものの見事に切り刻まれた、扉。折れたとか割れたじゃない。刃物の切り口だ。
「魔物に襲われて全滅したんだろ？」
キグナスの声を聞きながら、木片を落として立ち上がる。
いくら刃物だって、普通ドアなんかあんなふうに切れないぞ？それこそチェーンソーだのレーザーだのがあるんならまだしも、ローレシアでその類をお目にかけたことはない。
ってゆーか、考えるまでもなく、ないだろう。
「亜人型だな、間違いなく」
亜人型の魔物……。
「刀剣類を身につけた奴……それも、ややもすると魔剣だな。腕前もかなりのもんだろう」
亜人型で、刀剣類を身につけた凄腕の持ち主がヴァインを全滅に導いた魔物。
（……）
「ニーナは？」
立ち上がって外に足を向けながら、シサーに尋ねる。つられたように他の2人も歩き出した。
「その辺にいるんじゃねぇか」
良く良く見てみれば、足下にも白骨が落ちている。死んだ時にそうだったのか、死後そうなったのかわからないけれど、綺麗な人間の形を保ってはいなさそう。つまり、頭蓋骨がこっち、大腿骨はそっちと言うようにばらばらに飛び散っている。扉がずたずたってことから考えれば、死ぬ時にあちこち斬り飛ばされたと考えるのが妥当かな……。
そんなことを考えていると、どこからともなくニーナが姿を現した。同じようにその辺をうろうろ探っていたんだろう。
「何かあった？」

首を傾げるその背後を、いつの間にか俺のそばを離れたキグナスがとことこと歩いて行くのが見えた。ひょこん、とその辺にある小屋に顔を突っ込んでは中を窺って更に歩いていく。

「別に何も……。キグナス、気をつけろよ。集落たって別に安全なわけじゃないんだから」

「おー」

だんだんこっちから遠ざかって行くのを気にして声を掛けると、キグナスは振り向きもせずにロッドを握った片手をひらひらと振った。

「……わかってんのか？」

だから危ないっつーのに。本調子じゃないくせに。

そのまま木陰に姿を消してしまうので、思わず後を追う。キグナスが姿を消した木陰の先には、他の小屋から更にぽつんと孤立するように建っている小屋があった。そばに寄り添うようにもうひとつ、更に小さな小屋がある。食料庫とかそんな感じだろうか。

「キグナスッ」

キグナスの小柄な背中が多分居住空間だったろう小屋の方に入り込んで行くのを見て、呼びながら後を追う。

「キグ……」

後を追って中に入ると、キグナスは『導きの光』を灯したロッドを掲げ、小屋の中央にしゃがみこんでいた。ちなみにこの小屋も例外なく、扉は刃物で刻まれている。

建物の中はさっき見た小屋ほど粗末ではなかった。大きくはないけれど物は良さそうなテーブルや椅子の他に、当時はお洒落だっただろうカーテンや花を活けていたと思われる高級感のある花瓶なんかの装飾品もある。床にも、今でこそ色褪せているが、リアルタイムでは華やかな色合いだったと思わせる絨毯が敷いてあった。

「キグナス？」

何かただならぬものを感じて、しゃがみこんだその背中に声をかける。返事がないので近づいてみると、キグナスの足下には白骨化

した死体が転がっていた。多分、綺麗な方だろう。全身バラバラではなく、上半身と下半身の泣き別れで済んだ様子だ。どちらにしても生きていられないことに違いはないが。

「……どうしたの」

尋ねながら気がつく。キグナスが覗き込んでいるのは白骨じゃない。多分落ちていたんだろう、指先につまみあげたもの。

「指輪……？」

「カズキ……」

俺の声なんか耳に入っていないように、指輪を見つめたままでキグナスが緊張感をはらんだ声を出した。

「……はい」

「これ……どういうことだ……？」

「は？」

どうもこうも、何の話かが見えてないんだが。

「その指輪が、どうかしたの？」

首を傾げる俺に、キグナスがようやく顔を上げる。それから黙って指輪を俺に差し出した。

「？」

受け取って視線を落とすと、良く見れば指輪に何か彫り込まれている。

何か――あれ？

「これ、どっかで見た」

「どっかじゃねぇよ、こんなん、シャインカルクにはごろごろしてるだろッ」

言われて思い出す。そう言やシャインカルクの通路に、これと同じ模様を縫い込んだ旗が……ってちょっと待って。

「ヴァルス王家の、紋章……？」

目を見開いて尋ねる俺を、緊張した面もちでキグナスが真っ直ぐ見つめ返した。

「ああ」

「何で……？」
沈黙したままお互いの顔を見つめる。
どういうことか、良くわからない。
どうしてそんなものがあるのかもわからないけれど、これが意味するものが何なのかさえわからない。
「……」
「……」
「……この、白骨が？」
こくり、とキグナスが頷く。
「何か、妙に気になったからこっちに来てみたんだよ。胸が騒ぐって言うか」
「勘？」
「みたいなもんか？何となく。……そしたら、こいつに隠れるようにして」
「……指についてたりしたの？」
俺の問いに、またも首肯する。
じゃあ、この白骨が指輪……ヴァルス王家の紋章を刻んだ指輪の持ち主？
「……誰？」
思わず視線を骨に落としながら、呟く。今度はキグナスも、目を伏せて顔を横に振った。
「わかんねえ」
「おい、２人とも……」
もう一度手の平に乗せた指輪に視線を落としていると、小屋の外からシサーの呼ぶ声が聞こえた。長身の人影が姿を現し、その後ろを弾むようにニーナがついてくる。
「……？　どうした？」
黙ってシサーに指輪を差し出す。目を瞬きながら受け取ったシサーは、視線を落として絶句した。その背後でニーナも息を飲む。
「何だこれ……」

「ここで見つけたの？」
キグナスが黙って頷く。シサーが真剣な表情で眉を寄せた。
「何でまた……」
「盗んだとか？」
最も深い意味を求めなくて済む回答を口にする。
シサーが深刻な表情のままで首を横に振った。
「わかんねぇな。盗めるもんか？」
「王家の紋章が入った装飾品は、王族にしか許されない。王に身につけることを許されないと身につけられない。……王の、権限で」
そーいや、王錫を使えるだの使えなくなるだのって言ってたっけ？そう言う細々としたことってのがファーラに認められた王にしか出来ないのかな。身につけられないって意味が良くわかんないけど。壊れるとか？弾かれるとか？まさかどっか飛んでっちゃうってこたないだろうけれど。

第2部第2章第6話　冒険への道標（2）

「身につけられないって何」
「紋章が消える」
って待って。じゃあ。
「……王族！？」
「の中の誰かって可能性は高い」
何でこんなところに……！？
「ちと、家探ししてみよう。何か出てくるかもしれん」
「う、うん……」
シサーの言葉に従って、まだ混乱した頭を整理出来ないままに小屋の奥に足を向ける。
寝室になっていたと覚しき部屋があり、こちらもまた他の小屋より整えられていそうだった。王族の誰かなのかと思えば納得もいく。どういう経緯かは置いておいて、他の、集落から弾き出された人間たちより元々のランクが違うんだ。持ち物がしっかりしていても不思議はない。仮に追われて家具を持ち出すことが出来なくたって、金目のものを身に着けていた可能性はあるわけだから。逆に、何でこんなところにいたのかが不思議ではあるけれど。
そこに備えられている棚や積んであった箱などをキグナスと一緒に手当たり次第漁ってみると、しまい込まれている衣類などもこんな辺境にいたとは思えない代物だった。
けれど。
「ないな……」
あちこちに収納出来るような広さはない。目につくところを2人で片っ端からひっくり返して行くが、身元に繋がりそうなものは何ひとつ見つけることが出来なかった。
「どうだ？」
白骨のある部屋を見ていたシサーが、顔を覗かせる。力なく首を

振りながら、そちらに足を向けた。
「何も。そっちは」
「ねぇな。そっちもか」
「うん。……何か、クサイけど」
「だな」
「やっぱり？」
「ああ。……中身をごっそり抜かれただろう小さな引き出しがあった」
「こっちも、洋服類なんかはまるごと残ってる感じなのに、ひとつだけ……引き出しの中にあった更に小さな引き出しの中身が、空っぽになってた」
ニーナがシサーの後ろから顔を覗かせて、腕を組んだ。
「何者かが持ち出した後、ってことかしらね」
「この指輪だけ、死体についてて見落としたんだろう」
だとすると、あの白骨は誰なんだろう？ユリアと繋がる誰か……誰？
「あと気になることが……」
「気になること？」
「うん……」
曖昧に頷きながら部屋を出る。白骨のある部屋を念の為ぐるりともう一度見回してみてから、シサーを振り返った。
「小さな子供がいたんじゃないかな、と思うんだけど」
「服があったか？」
「うん。……でも、骨の勘定が合わない気がして」
言いながら首を傾げる。
「って言ってもこの家にいる時にその魔物に襲われたとは限らないし……どっかその辺の草叢とかにあるのかもしれないけどね」
それと、寝室を漁って気がついたことがもうひとつ。あの白骨は多分、女性だ。衣類が女性ものしかなかった。この家に住んでいたのは女性と幼女……つまり、母親と娘じゃないかな。

「キグナス、心当たり全然ない？」
考え込むように腕を組んで片手を顎に押しつけながらキグナスに視線を流す。それを受けてキグナスは、力なく否定の意を返した。
「ヴァルスの王族で、何らかの理由でヴァルスにいられなくなった女性」
「わかんねぇよ。俺がシャインカルクに来てから大して経ってねぇんだ。シェインはもしかすると何か知ってるかもしれねぇけど……」
「……」
「何か知ってるとすれば……」
「ラウバル、だろうな」
「うん」
「……」
「……」
「……」
「……ラウバルねぇ……」
異世界の馬のホネ、ソリの合わないフリーランスの傭兵、人間の国と直接関係ないエルフ、そしてまだまだ見習いの、宮廷魔術師の甥。
果たしてこんなメンツを相手にあのラウバルが、王家の内情に絡んでそうなそんなネタをおいそれと教えてくれるだろうか。
（ユリアは、何か知ってるのかな……）
無邪気な笑顔を思い出す。まるで春の風に撫でられながら揺れて開く花のような笑顔。
（ユリアの身内の女性……）
ってことになるよな。
ストレートに母親が浮かんでしまうけれど……そういやユリアの母親って会ったこともなければ話にも出なかったな。そりゃあ俺はクレメンス陛下にも会ったことはないんだけど。必要も別に、なかったし。大体寝込んでたし。
ついつい黙ったまま４人で顔を見合わせると、シサーが頭痛を堪

えるような顔をしてぐりぐりと自分の手を額に押し付けた。
「シェインかユリアに聞いてもらうのが1番早いだろうな」
「……だね。それ以前にどちらかが何か知ってる可能性だってあるしね」
シサーが、ポケットにしまいこんださっきの指輪を取り出す。
「バルザックやレガードとは何の関係もねぇのかもしれねぇが、気になることは片づけるにこしたことはねぇだろう。どうせシャインカルクに戻ったついでに聞いてみればいいだけの話だ」
面倒くさそうに明るい口調で呟くと、指輪に視線を落としたまま、低く続けた。
「どっかで繋がってるかもしれねぇからな……」
どっかで繋がってる、か。
小屋の外へと足を向けながら、もう1度視線を切り刻まれた扉の木片に向けた。
繋がってそうな匂いは、あるんだよな……。
ただそれが、レガードやバルザックの行方と繋がるかはわからないんだけど。ぐるっと回って、どこかとどこかが繋がっていそうな。
……グレンフォードや『青の魔術師』に繋がっていそうな。
さっきの話——ここを襲撃した魔物のタイプが、グレンフォードにぴったりだ。あの人を『魔物』と分類するとして。
でもぴったりだからってそうとは限らないし、何でそんな奴がハーディンに入り込むことになったのかわからないし、大体それが何なのかはもっとわからない。
んでも、ヴァルス王家の紋章を刻んだ指輪……王族しか身につけられないはずの物を身につけていた白骨がそこにあったってことは、どこかに絡んでいきそうな気がする。
例えば、そう……『青の魔術師』がレガードを襲撃したその背景に。
「どうすっかな……小屋ん中に泊まるか？あんまり頼りになりそうにねぇ小屋ばっかりだよなぁ……」

「扉はどこも全開だしね」
何で扉が全開なんだろう。見境なく殺して回ったってことだろうか。恐れて家の中に閉じこもった人々と、容赦なく扉を破壊して侵入する亜人型の魔物の姿を幻視したような気がする。そしてその姿が、突如酷薄な殺戮者に姿を変えた……グレンフォードに。
集落の中心部の方へ戻りながらシサーがぼやくのを聞き流して考え込んでいると、目の前でシサーが突然足を止めた。考えに沈みこんで見ていなかったので、勢いがんと顔面をぶつけるハメになる。
「あいた……何？」
「迷い子か……」
え？
突然、この場にいる誰のものでもない声が聞こえた。
変な方向……右手の繁みの方向に顔だけ向けたシサーが険しい表情をしている。それを見上げてから俺もその視線を追って顔を向けた。
「こんな山奥に何用だ」
がさり、がさり、と草を踏み分けて歩く音が近付いてくる。ちらりと視界の隅で窺うと、グラムドリングは沈黙したままだった。……敵、ではなさそうだろうか。
「……ほぉ？木々が騒がしいと思えば……エルフの娘がこんなところに」
どこか芝居めいた口調で姿を現したのは、手足と目鼻のついたヒゲもじゃのビヤ樽だった。
もとい。
「ドワーフ」
ニーナが目を見開く。
（へえー……これが）
噂の。
目を丸くして、繁みから全身を現した人物を見つめる。俺の腰辺りまでしかなさそうな背の低さ。体躯はどちらかと言えばがっしり

した感があって、肌はどこか浅黒かった。そのせいかやっぱり印象は、ビヤ樽。

（そう言えばあの後ろ姿……）

『3つ目の鍵』のダンジョンで見た壁画、あれに描かれていた人物の後ろ姿を見てニーナが「これがドワーフだ」って教えてくれたっけ。

「何をしに来た。お綺麗な森の妖精が迷い込むところではなかろうに」

「説明する義理はないわね」

その鼻につくような言い方に、腕組みをしながらふんっとニーナがそっぽを向く。それを見て、ドワーフは面白そうに肩を揺らした。

「森の妖精は大地の妖精がお嫌いか」

「大地の妖精が嫌いなわけじゃないわ。礼儀知らずが嫌いなだけ」

こんなとこで喧嘩始めないでよ、森の妖精。

「おじさん……いや、おじーさん……」

どっちだろう。

咄嗟に口を挟んでから思わず迷う。決めてから口を挟めば良かった。妖精なら長寿なんだろうからそれで言えばおじーさんな気もするけど、同じ扱いでニーナに「おばーさん」とか言ったら多分叩き殺されるだろうと思えばそれもどうかと思うし。見た目で判断しようにも『ビヤ樽に目鼻』にしか見えないものだから判断が難しい。

中途半端に口を挟んでつっかえてしまった俺に視線を向けたドワーフが、喉の奥をくつくつと鳴らして笑う。

「ヘイリーだ」

名前らしい。

「俺はシサー。エルフはニーナだ。こっちはカズキ、キグナス」

目線を逸らさないまま名乗り返したシサーに、ヘイリーはふいっと視線を叛けた。笑いを飲み込んで、視線を周囲に彷徨わせる。

「こんなところには、何もありゃせん。宝探しの冒険者ならばよそをあたるのだな。それとも無人の村で死者の財を奪うか？」

「ヘイリーは、ここに住んでるんですか。この山に」
俺の言葉に、また視線がこっちを向く。僅かな沈黙の後、無言のまま頷いた。
「こんなところに……」
でも、じゃあ。
「人を、探してるんだが」
低く言ったシサーをヘイリーが見返す。その表情は、良くわからない。
「人などおらん。見ればわかろう」
「黒衣の、魔術師だ。……見てねぇか」
「……」
「この山に出入りしていると言う情報がある」
ヘイリーが黙って顔を上げる。それから視線を伏せて顔を横に振った。
「知らんな」
「何でもいい、何かおかしなものを見たとか気配を感じたとかでもいいんだが」
「知らん」
「……そうか」
あっさり引き下がったシサーにちらりと目を上げると、それ以上追及されるのを嫌うようにくるりとその小さな背中を向けた。元来た草叢にがさがさと入っていく。
「あまり、山を騒がせるな。迷惑だ」
「って言ったってなぁ……」
魔物が襲ってくるんだから、静かに受け止めるわけにはいかない。死んでしまう。
シサーが頭に手をやって困ったように苦笑している間に、ヘイリーの姿はがさがさと繁みの奥へいなくなっていった。ついつい全員で黙ってその背中を見送ってしまう。
「……見てないって」

完全にその姿が消えてからシサーを見上げると、苦笑をそのままにシサーが肩を竦めて答えた。
「知らねぇって言われちゃあそれ以上こっちは何も言えねぇよな。本当かどうかはわかんねぇけど」
「本当に知らないんだったら、どこ行っちゃったんだろう」
「ガセネタだったのかなぁ」
「さぁてな。山は広いから、あのドワーフが見てねぇだけかもしれねぇし。バルザックが山に入る目的がこの道筋とは見当違いの場所だって可能性だって、否定は出来ねぇしな」
って言ったって、山狩りをするわけにはいかない。何かありそうな場所に目算をつけて移動するしか、俺たちにはやりようがないじゃないか。
「何にしても、休憩にしましょ。今日はもうこれ以上は進まないでしょう？」
ヘイリーの態度がまだむかついているのか、どっか不機嫌な表情でニーナが提案する。それを受けて移動を再開したその直後、不意にずしんッと言うような地響きが上がった。次いで……。
「何！？」
「キグナスッ」
叩き付けるような瘴気。鈍い俺でも風圧のように突然膨れ上がったそのどす黒い悪意を感じたくらいだから、ずっと影響を受け続けているキグナスはもろだったらしい。がんっと体当たりするように俺の方に向かってよろけたその体を支えながら、顔を上げる。ここより更に少し高い位置、木々の間から一瞬だけ、黒煙が噴き上がっているように見えた。
けれどそれも一瞬のこと、すぐに何ごともなかったかのように静かになる。
「……」
「……何だったんだ？」
キグナスを支えたままで視線を黒煙――いや、瘴気が吹き上がっ

た場所に注ぐけれど、それきり何も起こらないようだ。少しの間全員が沈黙して様子を窺っていたが、刻々と日が落ちていくだけだった。

「バルザック……？」

としか、考えられない。

「行ってみようッ」

「うん。……キグナス、平気？」

「平気。さんきゅ」

気持ち悪そうに口元を押さえていたキグナスに確認だけすると、シサーが駆け出した。それを追ってニーナ、そして俺とキグナスも続く。

方角は、ヘイリーが姿を消した方だ。

（じゃあさっきのは嘘？）

それとも本当に知らない？まさか。

「あのくそドワーフ、やっぱ嘘じゃねぇかッ」

「くそドワーフって……」

でも、同感。

俺たちの動きでさえ敏感に察して来たものを、あんな瘴気を巻き起こすバルザックの存在に気づかないもんか？この広い山の遙か遠くならまだしも、どう考えたってヘイリーの行動範囲内じゃないか。

「どっちでもいい、とっつかまえてやる」

駆け出すシサーの背中を追って、俺たちもドワーフが姿を消したその茂みに向かって次々と飛び込んだ。

第2部第2章第6話　冒険への道標（3）

◆◇◆

茂みはそれほど深く続いているわけではなく、すぐに抜けて道にぶちあたった。上に向かって緩く続くその道を駆けること数分で、黒煙まがいの瘴気が噴き上げただろう場所に辿り着く。その場にはわかりやすくも、奇妙なオブジェが残されていた。聖杯のようなもの、剣を象ったであろうもの……その全てが本物ではなく模して造られたものだと言うのが見てわかる。何かの、儀式のように。

多分何らかの規則性を持って配置されたそれらは、ニーナいわく本来は魔法陣が描かれたその内側に設置されているんだろうと言うことだった。召喚に失敗したが為に、魔法陣も姿を消したのだろう、と。「んじゃ取っ払っちゃえ」と思ったんだが、ニーナに厳しく止められた。どんな魔法を固めているかわからないので呪術道具に手を触れることはタブーらしい。

（召喚……）

何を、召喚したかったんだろう。

ニーナの意見によれば、これがバルザックがここに出入りする理由じゃないかと言うことだった。自分が契約を結んでいない相手、それももしかするとかなり危険性が高いような奴を召喚して成功するには、磁場が整っていた方が良い。環境の力を借りると言うわけだ。

『魔の山』――ガルシアの言うように、『強大な魔物の通り道』と言う伝説があったような場所を磁場として行う召喚なんか、ろくでもないに決まっている。

「あのくそドワーフを探して、バルザックに関して知ってることを吐かせるぞッ。他に奴を追う手掛かりがねぇッ」

ロドリスと手を組んでレガードを襲撃してみたり、かと思えば『

魔の山』で怪しげな召還を行ってみたり……何を考えてるんだかさっぱりだ。ラウバルの仇敵、とかって言い方をいつだかシェインがしていたっけ……。ラウバルを狙うことと、この一連の動きと、関係があるんだろうけれど……。

ともかく、グラムドリングも沈黙を守ったままだったから、多分どこかへ消えたんだろう。バルザックは、空間移動の魔法を使う。確かにそんなもんを使われて逃げられた日には、追いようがあるはずもない。

（そうだよな……）

忌々しげに言ったシサーの言葉に行動方針を定め、きっとまだそこら辺にいるんだろうヘイリーを捕まえる為に辺りを探りながら、その言葉の意味をしみじみ考える。空間移動をするってことは、仮に万が一何かの間違いで追いつめることが出来たって……逃げられちゃうじゃないか。

本当に何て途方もない奴を相手取るハメになってしまったんだろーか。最近忘れそうだけど、俺、ただの高校生なのに。

（ヘイリーが何か教えてくれると良いんだけど……）

こっち側に消えていったんだから、きっとこの先のどこかにいるんだろうとは思うんだが、なかなかどうしてやっぱりヘイリーの行方を追うのさえ簡単なことではなかった。何せとにかく道が悪くて魔物が多い。ようやく小屋を見つけることが出来た時には、既に日没なんかとっくの昔、あとちょっとで真夜中に手が掛かるくらいの頃合だった。

それだけ探したわりには、例の魔法陣の場所から距離にして大して離れてはいないところにあったと言うのがまた、虚しい。道がなく、草木に隠されて見えなかったらしい。

石造りの小さな小屋だけれど、細かなところに手入れが行き届いている感じだ。さりげに見晴らしの良い場所に建てられていて、視界を遮るものなく遠くまで抜けた風景は、遙かな場所まで見通せそうだった。夜なのが残念だけれど、微かに闇に浮かぶ灯火は多分街

だろう。
あの灯りの下のどこかに、ユリアも眠るのだろうか。
「ふん。呼ばれもせぬのに来おったか」
ぼんやりとそんなことを思っていると、不意に背後で声がした。
……ヘイリー。
「バルザックとオトモダチか？」
振り返ったシサーが嫌な顔を見せて口を開く。どこに行っていたのか、手に斧と枝を束ねたものをぶら下げ、こちらを睨むように足を止めていたヘイリーはその言葉に鼻をひとつ鳴らした。
「知らんなそんなやつ」
「知らんことはねぇだろう。ついあんたが去った直後にその辺で妙な真似をしてたろーが」
言っている内容の割にはキツい素振りを見せず、半ば呆れたように頭に手をやるシサーをちらりと見ると、ヘイリーは無言で俺たちの前を通り過ぎた。小屋に近づき、ドアに手を掛ける。
「ヘイリーさんッ……」
このままじゃあ、何の答えも得られないまま家に逃げられてしまう。そんな完璧にシカトの態勢に入ることはないじゃな……え！？
慌てて声をかけながら開いた扉の奥に何気なく目を向けた俺の、次に予定していた言葉はたちどころに消えた。代わりに予定外の言葉が口から飛び出す。
「あの絵……ッ」
「え？」
「は？」
位置的には俺のいる場所がベスポジだったようだ。他の3人からは全く見えなかったようで、一斉に「何を言ってるんじゃ」と言うようなぽかんとした応答が返ってくる。
ただひとり、無言で顔を強張らせたヘイリーを除いて。
「ヘイリーさんッ」
動きを止めた隙をついて、閉められる前に駆け寄る。驚きの表情

を浮かべていたヘイリーが、そのままで俺を見上げた。
「……知っているのか、あの絵を」
「知ってます。……と、思います」
言いながらそちらに近づく俺に続いた3人が、後ろで息を飲むのが聞こえた。扉の隙間から辛うじて見える奥の部屋、その壁に掛けられているタペストリー。
「あれ……」
間違いない。
『3つ目の鍵』のダンジョンで見た壁画だ。
「何でこんなとこに……」
呟くキグナスをちらりと見遣ってから、ヘイリーは俺に視線を戻した。
「……いいだろう。話を聞こう。お前たちがわしの望む情報を持っていれば、わしはお前たちの望む情報を与えよう」
やった。
思わずシサーと顔を見合わせる。シサーが「良くやった」と言うように、片目を瞑って俺に向かって親指を立てた。同じ仕草で返して、ヘイリーの後を追う。招じ入れられた室内は見た目通り広さがなく、人数分座れる椅子もなかった。仕方ないので主に話を進めることになるだろうシサーとニーナ、そしてもちろんヘイリーが椅子に腰を下ろしてテーブルにつき、俺とキグナスは各々壁際に寄りかかって床に座り込む。
「まずはそちらの話を聞かせてもらおう」
シサーがちらりとこちらを見る。俺が何かの反応を示す前に、向かいのヘイリーに顔を戻した。
「先に言っておくが、その絵に絡んだ詳しい事情を知っているわけじゃない。既にあんたが知っていることかも知らんが、知らなかったとしても俺たちの話から何か得るものがあるのかもわからない」
「構わん。そこの小僧が……」
言ってヘイリーは、シサーの肩越しに俺を見た。

……小僧はやっぱり俺……だよね……。

「そこの小僧が絵を見て顔色を変えたと言うことは、同じ絵を見たと言うことだろう。わしは、他のこの絵の在処を知らん。多分わしにとっては価値がある話となろう」

「わかった」

ひとつ頷いて、シサーは『3つ目の鍵』のダンジョンのことを話し始めた。

大陸を選ばずに散らばる連動した3つののダンジョン、長い間誰も立ち入ることが出来ずにいたこと、そのダンジョンに関する詳しい手がかりは今のところ流れておらず、攻略した何者かがその情報を握っているだろうこと、今は既に攻略されていたからこそ中に入れたこと、ダンジョンの奥深くにその壁画があったこと。

攻略したのが、そして情報のほとんどを握っているのがギャヴァンの盗賊ギルドにほぼ間違いないんだろうけれど、多分意図的にかそのことにはシサーは触れなかった。ヘイリーがこちらの期待する話を渋った時の、切り札にするんだろう。

「そこに眠っていたものは何だったのだ」

一通りシサーが話し終えると、ずっと同じ姿勢で固まったように聞いていたヘイリーが顔をあげた。対してシサーが軽く肩を竦めて見せる。

「そりゃ知らねぇよ。言ったろ。俺たちが入った時には既に攻略された後だ。当然肝心のお宝は空っぽだ」

「それはそうだ」

シサーの言い種に、ヘイリーは初めて笑顔を覗かせた。

「とんだ骨折り損のくたびれ儲けだったわけだな」

「そのとーり。トラップボックスの宝以外にはコイン1枚残されてねぇ」

それからそこで、シサーは1度言葉を切った。テーブルに肘をついて体を乗り出すようにすると、にやっと口元に笑いを浮かべる。

「が、多分何があったかの予想はつく」

「ほう？」
　ヘイリーが興味深そうに片目を見開く。焦らすような間をおいて、シサーが口を開いた。
「鍵だよ」
「鍵？」
「ああ。そこのダンジョンは『３つ目の鍵』のダンジョンと言われている。最奥の部屋にも恐らく鍵があっただろう痕跡は見つけた。ここからは想像の範疇を出ねぇが、多分他の２つのダンジョンにも、それぞれ鍵が眠ってたんだろう。ま、それ以外にもちょっとしたお宝なんかはあったみてぇだがな。この３つのダンジョンが全てじゃない」
「……」
　少し何かを考えるように、ヘイリーが視線を彷徨わせた。それから窺うように、シサーに視線を戻す。
「まだ続きがあると？」
「ある」
「……」
　何を考えているのか、ヘイリーは体を微かに捻って奥の部屋のタペストリーに視線を注いだ。あの壁画と同じものがここにあるってことは、ヘイリーは間違いなくあの絵に描かれているドワーフと何らかの繋がりがあるんだろう。そして絵の中に積まれている、その財貨とも。
「……黒衣の魔術師の行方を追っているのだな」
　やや長めの沈黙の後に、ヘイリーはおもむろに顔を戻して口を開いた。シサーにではなく、ぐるりと俺たち全員を見回すように。
　その視線を受けて、図ったように全員が頷く。ヘイリーは小さくはっと息を吐いて、顔を微かに俯けた。
「確かに、あの黒衣の魔術師が出入りしていたことは認めよう。だが奴は、しばらくここへは戻ってこないだろう」
「なッ……」

「どこに行ったんだ!?」
切羽詰った表情の俺たちを面白そうに眺めた後に、ヘイリーは低く頷いた。
「話してやっても良い。わしは奴の友人でもなんでもないのでな。わしが知っていることならば、話してくれる。……だが、交換条件だ」
また!?
ずるいよ……。
「何だよぉ」
さっさと話せよと言い出しかねない雰囲気を全身に孕ませて、シサーがため息をつく。
「ドワーフの財貨を見つけてもらおう」
「はあ!?」
あっさり言ったその言葉のとんでもなさに、思わず全員ががたっと立ち上がった。床に座り込んでいた俺とキグナスも例外じゃない。
ちょっっっと待て。
「無茶苦茶だ!!そんな時間は……」
「まだ話していないことがあるだろう」
「ッ……」
「ダンジョンに入ったことで得た情報が他にもあるな?人間は騙せてもわしの目は誤魔化せぬな」
年の功?
「代わりに、この宝のことでわかることを話してやろう。悪い話ではないはずだ。財貨を見つければ、そのほとんどはくれてやる」
ええ?
宝を探して来いって言うのに、いらないわけ?
目を点にしている俺たちに構わず、ヘイリーは淡々と続けた。
「わしが欲しいのはただひとつ……その中にあるだろう、金色(こんじき)の腕輪だ」
「腕輪?」

「両の腕に対になっている。……わしの作品なんでな」
そういや、ドワーフって器用なんだっけ。
「それ以外のものは、全てくれてやる。悪い話ではなかろうが」
「残念ながら、この中に財宝って奴にそれほど興味を持っている奴ってのは、いねぇんだよなぁ」
シサーやニーナは大して宝に興味があるわけじゃないし、俺もキグナスも宝箱で盛り上がりはするものの財宝そのものに熱い思いがあるわけじゃない。ただのロマン。
がんっと背もたれに背中を叩きつけるように椅子に座り直してぼやくシサーをちらりと見てから、さっき立ち上がったそのままでヘイリーに質問を投げかける。
「その腕輪に、何か思い入れが？」
じゃなかったら、器用な職人のこと、もう1度作れば良い。
俺の問いに、ヘイリーがちらっと目を向ける。口元に小さな笑みを刻んだ。
「贈り物だ」
「贈り物……」
ふうん……。
何かこの偏屈な感じと他人への贈り物を大切に思うギャップが妙にそぐわず、この人意外と良い人なんじゃないかと言う気がしてしまった。
他人にはわからなくても、自分の中で譲れない大切なものってのは誰にも必ずあるはずだ。
「……何でそんな大切なものの行方がわからなくなってしまったんですか」
「元々わしは、ダイナと言う村に住んでいた。ドワーフの集落だ」
俺が尋ねているからか、俺に顔を向けてヘイリーが話す。
「ダイナがあったのは、モナ公国の外れ……リトリアとの境に当たるフラウ地方」
その言葉に、シサーがふっと顔を上げた。

「じゃあまさか」
「人間どもの下らぬ戦争に巻き込まれてな。村はなくなった」
「……」
憎々しげに、と言うわけでもなく、ヘイリーは淡々とした調子を崩すことなく答えた。その話し方が却って……自分の住む村を失った悲しみを感じさせた。
「戦争？」
「ああ。もう随分昔の話になるけどな。リトリアがモナに仕掛けた侵略戦争だ。いくつかの町や村が戦塵に帰したと聞いてる」
「わしはちょうど村を留守にしていてな。戻ってきた時には、わしの作品を含めたその全ての行方がわからなくなっていた」
「……」
「あの作品はまだ完成していない。彼の人の腕に届く、そのことだけを願って作られたものだ」
「……」
それきりヘイリーが口を閉ざす。こちらもそれぞれの思いに沈み込んで、静寂がその小さな小屋を支配した。
……手掛かりは、確かにあるんだよな。
シサーの言っていた、ラグフォレスト大陸シュートの『人魚岩』。
そして、間違いなく……。
（シン……）
ギャヴァンギルドには、俺たちも俺たちの都合で会わざるを得ない。
そしてヘイリーが口を割ってくれないことには、バルザックの行方はもう手掛かりがない。ここにずっといれば、もしかするとまた『ろくでもない召還』とやらを試みに現れることもあるかもしれないけれど、保証はない上に来たとしたっていつになるかわかったもんじゃない。
時間がないのは確かだし、何だかヘイリーに良いように話を持っていかれているような気もするけれど……『人間どもの戦争』に巻

き込まれて村を失ったドワーフが『人間ども』の事情に頓着してくれるとは考えにくいし、そもそも元々の流れがヘイリーに有利なんだから仕方がない。ヘイリーにはバルザックのことを話す義理はなくて、腕輪だって手に入れたくても困ってはいないだろうけど、俺たちは正直困ってるわけで。

「だーッ……くそッ……」

思い切り顰め面で、ぐしゃぐしゃと髪を掻き混ぜながらシサーが呻く。

「ったよッ。じゃあ譲歩案ってことでどうだ」

「何だ」

「さっきあんたが言ったのは正解だ。ダンジョンに入って得た情報がある。最後の、宝の隠し場所のヒントと……」

「……」

「多分、その宝にあと一歩ってとこまで詰めてる奴が誰か、だ」

「ほう」

「そいつに交渉するってことでどうだ」

ヘイリーが、ぴくりと片眉を動かした。

「どう交渉する」

「宝を手に入れた暁には、お前さんのとこに必ずその腕輪だけを届けるよう」

「言って聞くのか」

「さあーてな」

鼻の頭に皺を寄せて、肩を竦める。その様子を見ながら、俺はシンのことを思い出していた。交渉してみる価値は、多分ある。無愛想で冷酷なところもあるけれど、嫌な奴じゃない。少なくとも俺やユリアを助けてくれた。

問題は、そもそもギルドがギャヴァンのどこにあるかわからないってとこなんだよな。

「聞かせるしかねぇだろう。知人に協力してもらうさ」

「……」

ヘイリーは少しの間その言葉を吟味するようにじっとしていたが、やがて顔を上げて頷いた。
「それが出来るのならばそれでも構わぬ。誰が見つけようと、わしは手元に腕輪が届けばそれで良いのだから」
「じゃあ……」
「その代わり、黒衣の魔術師の話は、それが済んでからだな」
「……ッ……」
「当然だろう。いずれにしても、全ては手元に腕輪が届いてからだ」
「……ッッッッわかったよッ！！！！」
半ば怒鳴るようにして、がんっとシサーがテーブルに項垂れる。
「交渉、成立だな」
その様子を見てヘイリーが意地の悪い笑みを浮かべて立ち上がった。
「……では、財貨に辿り着くのに必要な可能性がある情報を教えてやろう。来るが良い」

第2部第2章第7話　君に捧げるもの（1）

――――――リトリア王国ラナンシー城。

宰相フラクトルは、急ぎ足で彼の主君がおわすはずの謁見の間へと向かった。

政に関する雑務を嫌うクラスフェルドは執務室にいるより、遊び呆けているか玉座でぼんやりと酒をくらっていることの方が多い。

「陛下ッ」

部屋へ飛び込んだフラクトルは、思わず脱力のあまり床にスライディングしてしまいそうになるのを何とか持ち堪えることに成功し、鼻毛を抜いては丁寧にサイドテーブルに並べる赤ら顔の国王にため息混じりの言葉を投げかけた。

「……陛下。鼻毛がなくなってしまわれるかと」

「おお。鼻の穴が心機一転だな」

「そんなところは心機一転なさらずともよろしい」

ごほんと咳払いをするフラクトルにからからと笑いながら、クラスフェルドはテーブルの上に整列した鼻毛を払いのけた。

「どうした」

「ロドリスからの使者が、陛下にお目通り願いたいと」

「ほー……」

ロドリスの使者……プライドの高そうなヴァルス使者より、よほど興味深い男だ。べらべらと余計なことをしゃべるわりには、付け入る隙を持たない。肝心なことは漏らさず煙に巻く。へらへらと愛想が良いように見えて、瞳の奥に笑いはない。

個人的に興味をそそる相手だ。

「ヴァルスに協力を示した以上は用なしだがな」

言ったその視線は、自国の宰相を通り過ぎてその後ろに向けられた。目を丸くした宰相が振り向く。

「なッ……どうやって」

「いやいやお城ってのは広いですからねえ。その気になれば蟻の子どころかこんなでかいのまで入れちゃうこともありまして」

その言い種に、クラスフェルドの口が笑いを刻む。城の警備は堅い。どこでロドリスの使者――グレンが足止めをくらったかは知らないが、生半可な人間に入ることなど出来るわけもない。

「転職したらどうだ」

「え！？いや私などでは到底国王などと言う偉大な仕事はとてもとても……」

誰も『玉座を空けるからここに転職しろ』とは言っていない。

「あほか。お前の転職先は盗賊だ」

「いやあ、あんなコワイおにーさん方に囲まれたら私、ぶるぶるしちゃいますよ。小心者ですからね」

後から衛兵が駆けつけるが、国王がのんきに話しているものだからどうすべきか判断に迷ってつい足を止めてしまう。それに気づいた侵入者はふと振り返ると、フラクトルにのんきな笑顔を向けた。

「あ、そうだ。私、自分の連れまで撒いてきてしまいました。宜しければこちらまでご案内いただけますか？」

思わずフラクトルの額に青筋が走る。お前は何様かと問うてやりたい衝動を堪えて君主に視線を向けると、クラスフェルドは苦笑を浮かべて片手をひらりと動かした。「聞いてやれ」と言うことだろう。

「で、無理矢理何の用だ？」

リトリアは既に、ヴァルスとの同盟を表意している。

ヴァルスに傾いた理由は、以下の2点だ。勝利を納めた末のナタリア領土の割譲、そしてバートのロドリス陣営参入。

現ナタリア領は、かつてのリトリアの領土がその大半を占めている。当時まだ独立王国であったリトリアとヴァルスの戦争の末に、リトリアから切り分けられ公国として誕生した。リトリアが帝国に組み込まれたのは、それからしばらく後のことである。

つまりナタリア内の旧リトリア領の返還は、リトリアにとって悲

願とも言えるのだ。
　今回の戦争において勝利を納めれば、ヴァルスは旧リトリア領の一部返還を示唆している。恐らく、先日帰した使者の報で確定となるだろう。ナタリアはロドリスの友国であり、ヴァルスの敵国であるから問題もない。
　そしてバートのロドリス陣営参入。
　バートはリトリア、ロドリス共に側面に位置している。領土拡大を狙うならば、格好のポジションに位置しているのだ。だが占領するには友国であってはならない。侵攻の建前には、敵国と言う立場が必要不可欠だ。
　ロドリス領土であるガレリア地方を手に入れてロドリスの力を削ぎ、豊かな地をリトリアに組み入れたい思惑もないではない。しかし、ロドリスの決断が遅い為に、迅速な対応が見込まれるヴァルスとの協力体制へと議会が傾くこととなった。どのような部下がいようと、最終的な決断は君主が下す。ロドリス国王は決断力と行動力に欠ける為、ヴァルスより多く使者を派遣しているにも拘らず回答が延びていた。
「いえね、ガレリア分割案がようやく形を取りましたので」
「ご足労いただいて悪いのだがな、リトリアはヴァルスと共に立つことを決断した。命があるうちにさっさと帰れ」
　あっさり言い放ったリトリア国王に、使者は落胆したように低くうなだれた。……ように見えた。
　己の誤解に気づいたのは、その肩が微かに震え、低い笑いが漏れて聞こえたからである。
「……ほう。笑う余裕があるか」
「いえいえ、失礼しました。そうですね、先にそちらをお話するべきでした」
　クラスフェルドが目を上げたところで、フラクトルの背後のドアが開いた。衛兵に左右を固められるような形で、エレナが立っている。グレンを見るなり目をつり上げた。

「お前なあッ」
「うわ～ぉ。エレナさん。無事たどりつかれたようで何より何より」
怒り狂う上司に適当な挨拶を投げかけて、グレンがこちらに向き直るのを待ってから、クラスフェルドが先を促す。
「先に言うべきだった話を聞いておこうか」
「はいはい。ですからですねえ……あいたッ」
そばまで歩み寄ったエレナに向こう臑をしたたかに蹴り付けられて悲鳴を上げ、前かがみに足をよたよたと押さえながら、尚も落ち着いた声を試みる。目指しているのはさしずめ『クールな参謀』ムードだろうか。やりたいことはわからなくもないが、痛そうに足を押さえる姿が全てを裏切る。
「ええと……ですからですね……何でしたっけ」
「……フラクトル。お帰りだ」
「は」
「あいや～ッッッ！！！ですからですねえ、あの、あ、そうだ」
険しい顔で衛兵を引き連れて歩み寄ろうとするフラクトルから、のたのたと逃げながらグレンが口を開く。飛び出した言葉は、詳細を聞かずにいられぬ気にさせるには十分だった。
「ですからですね、ヴァルスはリトリアが私どもにご協力いただけることをもうご存じですし」
「……どういうことだ」
フラクトルらの動きが止まる。クラスフェルドも黙って目を上げた。応えるようにグレンが足を押さえていた手を放し、直立に姿勢を正した。
「ヴァルスは、リトリアの回答を使者の首として受け取ったはずです」
「何……！？」
低く告げた声に緊張が走った。リトリアへの使者が首となって帰国すれば、ヴァルスはそれをそのままリトリアの返事と受け取るだろう。つまり、協力体制の意志はないと。

「これを、お返ししておきましょうか」
言ってグレンが差し出したのは、ヴァルスの使者へと預けた書簡と使者を証明するプレートだった。いずれも夥しい血痕が染み付いている。勢いで受け取ってしまったフラクトルの強張った顔から目線を逸らし、リトリアの風雲児は低い返事を返した。
「随分手荒な真似をしてくれるものだ」
だらしなく椅子に深くもたれかかったまま、肘掛に乗せた腕に体を預け、クラスフェルドが顔の半分を片手で覆う。だがその下から覗く口には笑みが浮かんでいた。くっくっと喉の奥からこみ上げてくる笑いを堪えるように肩を揺する。
「どのようなお返事を持たせたのかは存じませんがね、首から下がなかったらさすがに陛下のお返事はうまいこと伝わってなかったんじゃないでしょうかねぇ……」
「ではうまいこと伝える為にはどうすれば良いかわかるか？」
言いながらクラスフェルドは顔を覆った手を外し、ゆらりと立ち上がった。武王である彼は、玉座にあっても必ず帯剣している。その逞しい腕が腰へと伸びた。それを見て、グレンの背後に立つエレナが剣を抜きかける。その動きを察知し、リトリア国王に瞳を向けたままのグレンの片手が素早くそれを制した。このような場でいかなる理由があろうと、国主たる人間に刃を向けるわけにはいかない。
「お前の首と共にその奸計をご報告して差し上げれば、済む話とは思わぬか」
「いやはやまったく」
笑みを殺すことなく剣を抜き放つその動きを静かに見据えたまま、グレンは軽く肩を竦めた。
「その通りですよ。ただし」
「……」
「……出来れば、のお話でしょう？」
「ほう？俺には出来ぬと？」
数段高い位置に設えられている玉座より一歩、また一歩とゆっく

り降り立つクラスフェルドに動じる様子を見せずに、グレンは静かにその黄色く濁った……だが、鋭い光を放つ目を見返した。その背後を衛兵たちが固める。

「この場にそれを出来るものは、いませんし」

「言うな」

笑いを浮かべたままのリトリア国王に、グレンが微かに顔を俯けた。口元にはゆったりとした笑いを刻んでいる。その顔に酷薄な色が宿ったことに、誰が気がつくことが出来ただろうか。

「おっしゃったのはあなたのはずです」

剣1本分の距離を置いて足を止めたクラスフェルドの刃が、真っ直ぐにグレンに向けて突きつけられる。

「『ジェノサイド・イブリースとはお前のことか』、と」

「……」

「私に傷ひとつ負わせることは出来ません」

静かに顔を上げたグレンとクラスフェルドの視線がぶつかる。睨むでもなくただ互いの顔を見つめるその空気に、誰かの息を飲む音だけが微かに聞こえた。

「ロドリスとしても、精一杯の手です」

長いとも短いとも言えぬ沈黙を破ったのは、ロドリスの使者だった。身動ぎひとつせずに低く言葉を紡ぐ。

「ヴァルスの使者が戻ってしまえば、同盟は成立してしまう。ならば無茶でも荒くても止めるしか手はありません。……今頃ヴァルスは、リトリアに対しても警戒態勢を強めていることでしょう」

「……」

「既に選択肢は、ありません」

「強迫に持ち込む気か？」

剣を突きつけたまま、クラスフェルドが問う。グレンは静かな調子を崩さぬままに否定した。

「我々が望むのはリトリアとの足並み揃えた協力体制です。……これまで何度か足をお運びさせていただいたことで、私は陛下との交

流を深めたと勝手に感じております」
「……くッ……」
不意に、クラスフェルドが剣を下ろした。堪えていた笑いを吐き出すように、顔を崩す。さもおかしそうに笑い出した君主に、ロドリスの使者たちを取り囲んでいた衛兵に動揺が走った。
「どこからそのような自信が湧いてくるのか疑問だがな……」
「やだなあ。私の人柄でしょう」
「答えになっとらん。……まあ、良い」
下ろした剣を片手に握ったまま、クラスフェルドの鋭い視線がグレンを射る。それを真っ直ぐ見返したまま、グレンはクラスフェルドの言葉を待った。
「お前の言葉が事実ならば、ヴァルスは確かにリトリアの返事をお前の望み通りに受け取るだろう。ならば選択肢はあるまい。……ガレリアの分割は、確定だな？」
「ええ。ここに、……調印済みの書簡が」
ならば条件は悪くはない。何より、ヴァルスとの約束事項は勝利を前提に進められているが、ロドリスのガレリア分割は勝敗に左右されない。リトリアの参戦を条件に、終戦後確定だ。
「いいだろう。お前に踊らされるのは少々気分が悪いが、条件としては悪いものではない」
「陛下！！」
「では」
「が、条件をひとつ追加させてもらおうか」
「うわ～ぉ」
剣を鞘に収めて玉座に戻るリトリア国王の背中に、グレンの弛緩したようなため息が投げかけられた。
「足元見てらっしゃる」
「汚い真似をしたのはお前だろう。そのくらい大目に見ろ。何、大したことじゃない」
玉座の前に戻ったクラスフェルドは、ちらりと視線を背後に向け

た。グレンがへなへなと床に崩れている。
「今さっきお前が言ったな？俺との交流を深めたと信じたと」
「はあ、まあ……また何かまずいこと言っちゃったんでしょうかねぇ～……私の口は」
「それはお前次第だな」
「へい」
『はい』と答えたつもりが、顔が歪んでいるせいで妙な発音になってしまう。エレナに蹴られた足を抱える間もなく、クラスフェルドの口から条件が投げつけられた。
「リトリアとロドリスが友軍であれば、問題はなかろう。ヴァルスとの総力戦のみで良い」
「は……？」
「お前は俺の陣営で、俺と共に出陣してもらおう」

◆◇◆

宰相ユンカーとの打ち合わせを終えて書類を片手に抱えて執務室へと戻ったセラフィは、暗い静寂の中に沈んだ窓の外にふと視線を向けた。小さく吐息をつく。
今日も、邸宅には戻れそうもない。マーリアがきっと寂しがっていることだろう。せめてグレンがいれば、自分の代わりに様子を見に行かせるのだが、リトリアを回りレガードの追跡を命じてしまった以上当分の間は戻るまい。
癖のない青い髪に手をやり、くしゃりとかき上げる。憂いを帯びた瞳を伏せて書き物机に足を向けたその時、ドアの外で物音が聞こえた。ふと顔を上げる。
「セラフィ様」
「いるよ」
「失礼致します」
静かに入ってきたのは、ユンカーの秘書官を務める男だ。フット

ワークが軽く人当たりも良いながら、口数が少なく余計なことを口にすることがない。宰相の秘書としては信頼に値する人物である。
「こんな時分までご苦労だね」
緩やかに笑いかけながら椅子を引くセラフィに、秘書官――アークフィールは穏やかな苦笑を浮かべた。
「セラフィ様も人のことをおっしゃっている場合ではないでしょう」
「まあね……おかげで本邸に帰る余裕がどこを探してもない」
鼻の頭にわざと皺を寄せて言って見せるとすぐに微笑みに変える宮廷魔術師に、アークフィールも軽く吹き出しながら書類を差し出した。
「追加をしてしまって大変申し訳ないのですが」
「しょうがないよ、君のせいじゃないだろう。……何？」
「ユンカー様宛ての書簡に紛れてまして。……グレンフォード殿からの報告書です」
「ああ……」
「私も少々早とちりしまして、その、封を……」
頷いて受け取りながら、セラフィはすぐそばに立つアークフィールを見上げた。萌黄色の瞳が、バツが悪そうに細められている。確か３０半ばやそこらだったように思うが、若々しいその顔はまだ３０前と言っても通じそうだ。
「どうせユンカー殿にもご報告の必要があることだろうから構わないけれどね」
「いえ、破ってすぐに気づきましたので、中には目を通しておりませんが」
「ふうん？それはわけのわからないものを見ずに済んで良かったね」
セラフィの言い草に、アークフィールも思わず吹き出す。言いながら書簡を開けたセラフィは、すぐに視線を宰相の秘書官に戻した。
「届けてくれたものを悪いんだけれど、ユンカー殿にこのままお持ちいただいて結構だよ」
「……グレンフォード殿からと言うことは、リトリアに何か動きが」

「おちた」
その言葉に、アークフィールが黙って目を見開く。瞳と同じ色の髪が、さらりと揺れて額に零れ落ちた。
「では」
「リトリアは、こちらにつく。……ようやく運が向いてきたな」
足を組んで机に肘を凭せ掛けながら微笑むセラフィに、書簡に目を落としたアークフィールも微笑を返した。
「結構ですね。ユンカー様もお喜びになられることでしょう。さすれば、すぐにでもご報告させていただきたく存じます」
「うん。終わったらすぐ休みなよ」
興奮したように顔を微かに紅潮させるアークフィールに苦笑を漏らしながら、そっと宥める。宰相本人がのんびりしているだけに、秘書官である彼の苦労は耐えないことだろう。
足早に部屋を出て行きかけたアークフィールに、セラフィも書類の束と向き直ろうと椅子の上で姿勢を直す。ふと、アークフィールがドアの手前で足を止めた。
「そう言えば」
「うん？」
ぺら……と書類に気のない視線を向けたまま返答を返すと、軽く笑いを含んだからかうような声が投げかけられた。
「セラフィ様は邸宅に誰か囲っておいでだと言う噂が」
「……」
思わず目を瞬く。ゆっくりと顔をアークフィールに向けると、書簡を大切に右手に持ったままで興味深そうな色を浮かべてこちらを見ていた。その顔につい吹き出す。
「嫌だなあ。どこでそんな話が出るんだい」
「セラフィ様は、ファンをたくさんお持ちですからね。皆がそわそわしてますよ」
「まさか。残念ながら、そんな色恋沙汰と呼べる話で喜ばせてあげることは出来ないな」

「それは皆も安心なさることでしょう」
肩を竦めるセラフィの答えに、アークフィールもくすくすと笑いながら穏やかに答えた。
「何せアンドラーシ様もセラフィ殿に夢中との噂ですからね」
その言葉に、胸の内で凍りつく。あれほどわかりやすく表出していれば噂にならぬ方がおかしいが、国王の寵姫に想いを寄せられているとあらば、当然国王の不興を買いかねない。
若くしてセラフィは、カルランスの信頼を一身に背負っている。それはセラフィにとっては、自分の思うままに権力を振るうことが出来るということだ。だが視野の狭い国王のこと、一度不興を買えば今度は止め処なく不信感を募らせるだろう。いよいよヴァルスとの戦争が開始すると言う時になって、この地位を捨てる気はない。
「まさか」
内心の舌打ちを押し隠して得意の笑顔を向けながら、セラフィはやれやれと言うように頭を振って見せた。

第2部第2章第7話　君に捧げるもの（2）

「アークフィールはそんな戯れ言を真に受けるのかい？」
「いやあ……」
「アンドラーシ様は陛下の寵を良くご存知のはずだよ。アンドラーシ様もまた、誠心誠意、陛下の寵にお応えのはずだ。……滅多なことを言うものではないよ」
柔らかく窘めるセラフィに、アークフィールは小さく首を竦めた。舌を覗かせる。
「それは失礼致しました。魅力的なセラフィ様のことですからね。ついつい世間も口の端に上らせたがるのでしょう」
「一緒になって口の端に上らせるのではなく、諫める側に回ってもらえるとありがたいな。そのような噂が耳に届けば、僕がアンドラーシ様のご不興を買いかねないよ」
わざと大きくため息をついて見せると、書簡を持ち上げて髪をかき上げながら、アークフィールもつられたような苦笑を浮かべた。
「まさか」
「いやいや……女性は恋愛ごとにおける誤解を嫌うからね」
「心しておきます」
アークフィールは宰相の秘書官だ。彼の誤解はユンカーを通じて国王の耳に届きかねない。
「頼むよ。オティクスやフリストと余計な噂話をするんじゃないよ？」
アークフィールと同年代の秘書官たちだ。それぞれ外務大臣、財務大臣の側仕えである。冗談めかしたセラフィの言葉に、アークフィールも笑いを残したまま頷いた。
「しかと。肝に命じて」
……宮廷魔術師と宰相の秘書官がくすくすと密やかな笑いを漏ら

している頃、噂の主であるアンドラーシは自室を抜け出し王城の通路を急いでいた。

もちろん噂通り、恋焦がれる部下の執務室を訪問する為である。今日はカルランスは、正妻の寝室への訪問を余儀なくされている為、自由な身だ。

アンドラーシは自分の中に宿るセラフィへの想いを、恋と信じて疑わなかった。

１６歳と言う若さで恋する自由を奪われ、以来２年もの間、男盛りをとうに過ぎた国王の相手をする為だけにハーディンの奥深くへ閉じ込められているのだ。恋に恋する彼女の視線が、周囲にいる男性陣の中で最も地位、才覚、容貌、年齢的に目を引くセラフィに向くのは自然な流れと言うものだろう。

一目姿を見ることが出来た時には胸躍らせ、会えない日には心を焦がす。それが真実恋でなくとも構わないのだ。彼女は恋に似たその感情で十分だったし、夢中だった。アンドラーシにとっては、国の大きな動きなど現状関係がない。自分の中の感情を見つめ、セラフィを手中に納めることだけが全てである。

自分の姿が男の目を引き付けずにおれないことを、アンドラーシは承知している。今も王城内の男の視線を集めていることも、良くわかっている。けれど、肝心の宮廷魔術師の視線だけが、自分を素通りする。

それがまた一層、セラフィへの想いをかきたてるのだ。

あの、どこか氷のような笑顔を、本物の温もりあるものに変えたい。

表面ばかりなぞり合うこの王城の中で、誰にも心開くことがないのではないか。ならば自分が彼の心許せる存在になりたい。

幻想だとしてもそれはアンドラーシにとっては真実の想いだったし、彼女自身を陶酔させる幻想だった。

幾度も訪れているその執務室が近づくにつれ、鼓動が上がる。知らず膝が震え、歩みが遅くなった。そのことが彼女自身を、そして

想い人を救うことになったことに彼女は気づいていない。
（いるかしら……）
セラフィは執務室に不在のことも多い。若くして王の信任を誰より勝ち得ている彼は、恐らくこの城の中の誰より多忙だ。そうでなくとも、どこか謎めいていてどこへともなく姿を消すことも少なくない。
そしてアンドラーシにとっての難問は、何よりセラフィ自身の態度だ。いたとしたって難攻不落の笑顔の鉄壁である。どうすれば自分に振り向いてくれるのか、そのとっかかりさえわからない。柔らかい、けれど取り付く島のない拒絶は、続けばやはり堪える。
間一髪でアークフィールが退出した後の扉の前に佇み、しばし躊躇する。扉の隙間から微かに灯が零れているから、多分在室中だろう。
ノックの形を作ったまま止めた手を、思い切って扉に軽く打ちつける。硬質の音が静かな廊下に響き、やがて中で人の動く気配がした。ドアノブが音を立てるのと同時にアンドラーシの心臓も高い音を立てる。開いた扉の内側に、彼女の恋しい人が驚いたように目を見開いて立っていた。
「……これは。アンドラーシ様」
妖艶な、ともすれば女性めいてさえ見える容姿とは裏腹な低い……けれどやはりどこか艶めいた甘い声が、アンドラーシの名を呼ぶ。
「まだお仕事をしているの？体を壊すわ」
どきどきする胸を押さえながら、問いかける。微かに失笑するように、セラフィの口が笑いを象った。
「私の職務ですから。……火急のご用ですか」
柔らかい口調は決して崩さない。目をひきつけずにおれぬ笑顔を絶やすことはない。けれど……誰に対しても同じその態度では、ポーカーフェイスと変わりはない。
「お話がしたくて」
「このようなお時間になさることでもないでしょう？陛下がご心配

されます」
「お部屋に入れて欲しいわ」
「男ひとりの雑然とした仕事場にお入れするわけには参りません。お目汚しです」
僅かに開いた扉の隙間を塞ぐように立つセラフィは、部屋へ入れるつもりが微塵もないことが見てとれる。静かな拒絶に、アンドラーシは胸塞ぐ思いを堪えて唇を尖らせた。上目遣いに首を傾げる。
「意地悪だわ」
「そうですか？」
「そうよ。……陛下は、アスティアーナ様のご寝所でお寝みよ」
「ではアンドラーシ様も、そろそろお寝みになってはいかがでしょうか。夜気はお肌に触りますよ」
そこまで言って、セラフィはふうっとため息をついた。アンドラーシより頭ひとつ高いその位置で、物憂げに目を伏せる。その仕草だけで優美に見える。
「ねえ……どうしてそんなにつれなくするの？」
「そのような言い方をされては、アンドラーシ様が私に含むところがおありかと誤解を招きます。お控え下さい」
「誤解じゃないわ、そんなのわかってるくせに」
「……一部で口の端に上がっております」
低く言ったセラフィの言葉の真意を図りかねて、アンドラーシは目を瞬いた。
「陛下のご不興を買えば、私もあなたもこのままではいられないでしょう。陛下の耳に下手な噂が届く前に、お控えになられた方が宜しいかと考えますが」
「だって……」
言っていることはわからなくはない。けれど、素直に頷けるほど簡単に諦められるのならば、これほど軽々しく通ったりするわけもない。一度でも腕に抱き締めてくれれば、それを思い出に耐えることも出来るのに。

本当の苦しみがそこから始まることにまだ気づいていないアンドラーシは、そんなふうに思って俯いた。

「お話の相手ならば、いつでも致しますから。ただし陛下の目のあるところで、日の高いうちに。……良いですね」

それでは何の意味もない。表面を滑る会話を増やしたところで、セラフィの内面に近づくことは出来まい。唇を噛むアンドラーシに凍てついた視線をちらりと投げかけたセラフィは、吐息と共に部屋から外へと歩み出た。後ろ手でドアを閉める。

「お部屋までお送りしましょう。……私も本日はここまでで、退城させていただくことと致します」

その言葉にアンドラーシは顔を上げた。退城……では、今日はハーディン内のシェンブルグの館ではなく本邸へ戻ってしまうのだ。

アンドラーシの訪問がセラフィを辟易させてそう決意させたとは夢にも思わずに、アンドラーシはセラフィを見つめたまま小さく頷いた。

「そう……今から？」

「ええ。たまには戻らなければ、愛妻が待ちわびてますゆえ」

アンドラーシを促して何気なく言うその言葉に、思わず背筋が凍りつく。――『愛妻』？

「……嘘よ。だってセラフィは結婚してないもの」

震える声で、すたすたと先を歩くセラフィの後を追いながら言葉を投げかける。笑顔で冗談だと流してくれるのを祈りながら返事を待っていると、セラフィは微かに横顔だけをこちらに向けて振り返った。

「正式な結婚はしておりませんが。家族と思い大切にしている女性はおりますので」

「嘘でしょう？」

「私がアンドラーシ様に嘘を申し上げることはございません」

それは忠義を疑うのと同義であると言外に告げた言葉に、アンドラーシは口篭った。

「ごめんなさい。でも……信じられなくて……。……信じ、たくなくて」

ともすれば置いていってしまいそうなセラフィの背中に追い縋りながら、小さく呟いたその声に、セラフィは怜悧な笑みを浮かべた。

「信じなさるも信じなさらぬも、アンドラーシ様の胸ひとつです。ご自由になさって下さって結構ですよ」

慇懃無礼、とでも言うのだろうか。丁寧な口調、敬う姿勢をいささかも崩すことなく「好きに受け取れ」と突き放すその言葉に傷つきながら、アンドラーシは尚も尋ねた。

「どういう、身分の人なの」

「……」

短い沈黙がある。出過ぎた質問だっただろうか。いや、けれど宮廷魔術師であるセラフィの婚姻相手は政治的な意味も持つ。王の寵姫として、問うことは無意味ではないはずだ。

「さて……現段階では余り多くを申し上げることは出来ません。けれど」

一度言葉を切って、セラフィはまたちらりと視線をこちらに投げた。口元に含む笑い。

「私などでは身に余る程度には、身元の確かな方ですよ」

◆◇◆

体を軽く揺さぶられて目を開ける。見慣れたラルの能面のような顔が、マーリアを覗き込んでいた。心配げな顔をしていると言うことは、また何かうなされていたのだろう。木製の彼には表情などと言うものはないが、それでも何となく感じるものがある。眠い目を瞬くと、涙の名残に自分でも気がついた。

「ラ、ル。……あぁっと」

礼を言ったつもりだが、上手く発音出来ない。それでもラルは、マーリアの意図を理解してくれる。

布団からもぞもぞと身を起こして壁にかけられた時計に目をやると、まだ日付が変わる前だった。日付が変わってしまえばもうセラフィが戻ることはないと諦めるが、逆に言えば変わるまでは諦めがつかない。

「セ、フィは、いそ、が、しの、かな」

小さく呟くマーリアを慰めるように、ラルの無骨な木の手が撫でる。ラルの気遣いに笑顔で応えて、マーリアは小さく歌を歌い始めた。

マーリアは、歌うのが好きだ。たくさんの歌を知っているわけではないが、幼い頃どこかで良く耳にしたファーラの聖歌は、いくつか知っている。ファーラ教の教義や宗教の持つ意味合いは良くわかってはいないが、聖歌は歌うと元気になれるような気がするから好きだった。

優しかった頃の母を思い出す。

「あ……」

歌声だけが微かに響く静寂の中、不意にラルがぴくりと顔を上げた。同時にマーリアも歌を途切れさせる。馬の蹄の音――セラフィだ。

「……かえ、て、きた……」

瞳に輝きを宿して立ち上がるマーリアの腕を、ラルが支える。それにつかまりながら、マーリアは部屋を抜け出した。急ぎ足で階段を駆け降りる。

マーリアにとっては、セラフィが全てだ。父の記憶はない。母は物心ついた時にはどこか狂っていた。手を差し伸べてくれたのは、セラフィだけだ。マーリアの喜びも悲しみも、その全てがセラフィと共にある。

「セ、フィ！！おか、り、さい！！」

扉が開いてセラフィが中に滑り込んでくるのと、階段を駆け下りたマーリアが到着するのとは、ほぼ同時だった。転がるようにセラフィに飛びついてくるマーリアに、セラフィは目を丸くしながらも

微笑を隠せずに抱き止める。
「まだ起きてたのかい」
「ね、てた。けど、お、きた」
「僕が起こしちゃったのかな？」
柔らかなマーリアの髪を頬に感じながら、抱き締めたその肩の細さに胸が痛む。マーリアは余り食事をとらない。言語能力に障害がある以外は健康体なのだから、多分ひとりで口にする食事の味気なさが嫌なのだろう。そんなことを思う時、グレンが時々口にしていることをつい真剣に吟味したくなる。
（ハーディンに……か）
マーリアをそばに置いておきたいと思い、寂しげな様子を不憫に思うのに、反面やはり自分のそばに置いておいてはいけないとの思いを消せない。清浄なマーリアが染まることはないだろうと思うのに、どうしても薄汚れている自分を必要以上に近づけてはいけないような気がしてしまう。
「ラル。留守をありがとう」
背後にひっそりと控えているゴーレムに労いの言葉をかけ、マーリアと手を繋いで応接間へと足を向ける。セラフィに纏わりつくようにはしゃぐ様子を見て、ふとセラフィは心の中で苦笑した。
（アンドラーシ様に感謝、かな）
アンドラーシの訪問がなければ、区切りをつけられずについついつい今も仕事を続けていたことだろう。今日途中で放り出した分明日しんどいことになるだろうが、このマーリアの様子を思い出せばそれさえも頑張れそうか。
「マーリア。もう、お寝み？」
羽織っていたマントを外し、ソファに放り出しながらマーリアの頭をそっと撫でて囁くと、マーリアはぷっと口を尖らせて頬を膨らませた。
「セ、フィ……マー、リアがお、きあ、ら……いな……もん」
それは恐らくそうなるだろうが。

ナタリアは、既に動き始めている。海と陸の双方からの南下だ。ロドリスの徴兵も刻々と進んでいる。バートはまだ動きがないが、国内ではヴァルスと対峙する準備に入っていることだろう。

ロドリスの動きは、ナタリアと連動している。ヴァルスとの全面戦争が開始されれば、ますます忙しくなるのはわかりきっていた。セラフィ自身が出陣することはなかなかないだろうが、それでも大きな会戦には行かざるを得まい。何せカルランスは、ハーディンから一歩も出るつもりはないだろうから。

「明日は、一緒に朝食をとろう」

考えを変えて言いながら、ソファに腰を下ろす。甘えるようにその隣に飛び乗ったマーリアの瞳が、くりっと見開かれた。

「ほ、と？」

「本当だよ」

優しく微笑むセラフィの首に、マーリアが飛びついた。恐らくアンドラーシが見たいと願っている笑顔は、今浮かべているような笑顔を指すのだろう。

そのままソファの上で、マーリアを膝の上に座らせてやる。肩から回したセラフィの腕の間から顔を出し、小さな両手でしがみつくようにして見上げるマーリアの顔は、この上なく嬉しそうに輝いている。

……触れ合いに飢えているのだ。まだ、ほんの子供なのに。ラルだけでは決して満たされることのない、人の温もり。

そしてそれはまた、セラフィも同じことだった。自覚があるわけでも不満があるわけでもないが、マーリアの空気に触れるたびに感じる羽目になる。多分、自分は得ることのなかった『温かな家族』と言うものにどこか羨望を抱いているのだろう。無償の愛情を注ぎ、注がれ、いるだけで癒される空気と言うものに。

（失わずに済むのなら……）

ずっとこの腕の中に守り続けたいと、そう願ってはいるけれど……。

「セ、フィ。マー、リ、ア、きょ……お、そと、で、え……」

たどたどしくセラフィが不在の間の出来事を一生懸命話すマーリアに相槌を打ちながら、ぼんやりと当時の記憶を蘇らせていた。マーリアの足首に光るアンクレット。そして、服から伸びた足や腕、首筋に覗く折檻の跡。

――7年前のことだ。

貧しい家庭に生まれ育ったセラフィは、一流と言えるエルレ・デルファルの出身ではない。宮廷魔術師としては希有なことに、私塾での学歴のみである。

自らの両親をその手に掛けた後、ヴァインを出て数年をエルファーラの辺境にある神殿で過ごし、ロドリスの小貴族に里親として引き取られることとなった。だがその新しい家でも今度は義母がセラフィに魅了され、嫉妬にかられた義父によってリンクスと言う町の私塾へ住み込みで入れられたのである。

17歳まで師の元で言霊魔法を学んだセラフィは、その卓越した能力と稀少と言えるエンチャンター能力を買われ、恩師の紹介により当時の宮廷魔術師の元へ弟子入りすることとなった。

マーリアと出会ったのはその頃だ。

ハーディンへ上がる数日前、ふらりとヴァインへ立ち寄ったのだ。あの頃の屈辱と苦痛を己に刻みつけ、必ず上へのし上がってやる為に。

かつての自宅だった場所へ足を運び、家の外でうずくまって小さな声で歌を歌っている少女――それが、マーリアだった。

その歌を聴いた時の気持ちは、今でも覚えている。それまでの人生で一度たりともセラフィの心に訪れることのなかった、安寧。血を流すことさえも忘れるほど荒み、涸れ果てた心に染み入る癒し。それはエルファーラの神殿でさえセラフィに与えてくれることのなかった、心の休息だった。

柔らかな幼い歌声は魔力に似て、けれどそれだけでは説明がつかぬ癒しの力に満ちていた。彼女の、身に纏う静謐な空気がまるでセ

ラフィの全身を冒していた毒を浄化するように。
そしてそれと同時に、マーリアの姿もまたセラフィの心に強い印象を刻んだ。寒空の下、薄手のワンピース1枚を身に纏い、覗く腕や足には痛々しい傷跡が見え隠れする。セラフィの心が崩壊を始めたこの同じ場所で、同じ痛みを味わいながら尚清廉な気を放つマーリアの存在は、セラフィに強い衝撃を与えずにいられなかった。
ハーディンに上がってからも度々ヴァインに足を運ぶようになったのは、マーリアのそばでだけ自分の心に安息がもたらされることを知ったからだ。同時に、彼女を心ない母親の仕打ちから解放したいと強く望むようになった。
そんな折りだ。
あの『魔物』がヴァインを訪れたのは。
村そのものが壊滅し、マーリアのそばで『魔物』――グレンフォードが自我を取り戻し、そしてセラフィはマーリアを自分が引き取ることを決意した。母親の残した日記を含む書類などからマーリアの身元がわかったのはその時だ。そしてセラフィは、マーリアの為にしてやれることを己に問い始めた。
マーリアのアンクレットには、ヴァルス王家の紋章が刻まれている。身につけて今尚紋章が消えずにいると言うことは、ヴァルス国王――クレメンス8世もしくはその先代にあたるベリサリオス4世に、ヴァルス王家に名を連ねる者として認められたことに他ならない。最強の身分証だ。
とは言え、一度王家から抹消したマーリアの存在をそう簡単に公的に認めるとは考えにくい。だとすれば、それはそれで結構だ。
ロドリスがヴァルスに勝利し、レドリックとユリアの婚姻を成立させ、ロドリスの国力をヴァルスにまで及ばせる。ヴァルスが実質ロドリスの傀儡となったその時に、レドリック、ユリア共に抹殺してしまえば良い。カルランスの嫡男であるウィリアムをアルトガーデンの皇帝として擁立し、マーリアをヴァルスの女王として即位させればカルランスは文句を言わぬだろうし、ウィリアムとマーリア

が婚姻関係を結べばマーリアはヴァルス王家に返り咲くことが出来る。マーリアのアンクレットを見せてやれば、カルランスは喜ぶだろう。ヴァルス貴族も文句は言うまい。そしてそれなら、マーリアの後見人としてそばにいてやることも出来よう。

それこそ、美しい流れと言うものではないか。

（もう少しだ……）

もう少しで、手が届く。

クレメンスの崩御、リトリアの陥落。

レガードの首を除いて、必要な駒は揃った。

仮に『本物』がどこかに生きていたとしても、この際戦のどさくさに紛れて消すのでも良い。出来ればヴァルス・ロンバルト両軍の戦意喪失に利用出来れば尚良いのだが、最悪、戦争の終結までにヴァルス後継者がいなくなれば良いのだから。

「でね、ラル、があ……」

（マーリア）

他の誰もいらない。

望んだ家族などもう欲しくない。

一生君のそばで支えよう。それが望む幸せの姿だ。

その笑顔が曇ることのないように。

だから、その為に。

（君に……）

――君に、ヴァルスを、あげる。

第2部第2章第8話　狂宴の幕開け（1）

帝国継承戦争の戦線は、西と東の二部に分けられた。具体的にはロンバルト西北に位置するルオー川、そしてヴァルス北東のレフトライン地帯である。

最初の動きはナタリアだった。海軍がヴァルス東端の港町フォルムスを目指して南下を始めたことを皮切りに、帝国アルトガーデン内部の各国では戦へ向けての初動が開始された。

ロドリスは国土防衛に5万を残し、陸地を南下するナタリア軍2万、バート軍1万5千と合流する為に2万が東南へ移動を開始する。連合軍総指揮官に指名されたのは、ロドリスの名門貴族アレックスだ。一方で2万5千が単独でヴァルスを目指してこちらは西南へと向かった。こちらを率いるも、名門貴族出身のライオネルである。

バートは、国土防衛に充てた3万を除く全てが、ロドリス・ナタリア軍と合流を目指して南への移動を開始した。対すべく近隣のロンバルトが、自軍2万を阻止の為に差し向ける。その援護の為にヴァルスは2万をロンバルトとの合流に向かわせ、一方でフォルムスのナタリア上陸を回避する為に5千を差し向けた。フォルムスの守備要塞ファルツ要塞も戦闘態勢に入っており、壊滅した海軍の再編成と造船も急がせている。

リトリアにはまだ、動きはない。ロドリスに汲みすることを決めながらも、恐らくは様子見の姿勢をまだ崩すつもりがないのだろう。キルギスは完全に静観の姿勢を取っている。主を失ったモナは現在、国主の存命を信じて議会で編成された暫定政権となっていた。帝国によるモナへの制裁はまだ確定されておらず、未決済のままヴァルスはロドリスとの戦端への構えで大わらわである。このままだと状況如何によっては戦後処理と言うことになるかもしれない。……制裁の内容によっては、まだモナに使い道があるのだけれど。

「ギャヴァンの復興はどうなってる」

「自警軍の新隊長が選出され、ギルドと共に中心になって進んでいます。いくつか資材の不足を訴えて来たので現在対応中」
「アドルフにもう少し経費を割いてやるよう言ってやれ。あそこが動かなければ資金の調達も出来ないと脅してやるのだな。造船の進行状況はどうだ」
「１０隻ごとにフォルムスに向けて船団を編成して出来次第出発させています」
「ロドリスの動きは」
「軍の編成が完了したところまでで、後の詳細はまだ……」
「ラウバル、いるか」
外務大臣ハイランドの言葉を遮るように、執務室のドアが開けられた。言わずと知れた宮廷魔術師である。
「……シェイン。ノックくらい……」
「リトリアがロドリスにおちたぞ」
ラウバルのクレームを遮って告げた言葉の重さに、衝撃が走る。まだハイランドさえも掴んでいない情報だった。
「ロドリスの滞在外交官はアンリだったか」
険しい表情をそのままに、シェインが口早に問う。目を見開いたまま、ハイランドが頷いた。
「ええ。まだ報告は上がってません」
「アンリからの情報には気をつけるのだな。拘束されてるぞ」
「……」
「そのうちＳＯＳが暗号で上がってくるかもしれぬな」
物問いたげなハイランドの視線をかわして、ラウバルに向けて答える。
「……言ったろう。独自の情報網があると」
「リトリアとロドリスが手を結んだのはいつだ」
「正確にはわかりかねる。だが恐らくここ１０日ほどの出来事だろう。リトリアはまだ動く姿勢を見せていない」
「ではやはりバイカーの首が挨拶代わりか」

ずっと音沙汰のなかったリトリアへの使者の首が早朝にレオノーラの要塞に投げ込まれたのは、まだ記憶に新しい。
「ロドリスの奸計だ」
「何」
バイカーの首が投げ込まれたことによって、重鎮たちは色めき立った。スペンサーなどは強硬に、リトリアに対して即刻兵を挙げることを提案する始末だ。確認の方が先だろうなどと冷静な頭で考えるシェインとは、またも真っ向から対立する羽目となる。無論リトリアへの使者の再派遣も検討された。
そうしているうちに飛び込んできた報だった。ロドリスに潜入している間諜からの報告だ。
「バイカーを襲ってヴァルスとリトリアの同盟に猶予を設け、その間に間に割って入った。この程度の策を餌にリトリアを陥落するとは芸達者な奴がいるな」
「……ユリア様はどうしておられる」
忌々しげにばさりと前髪に手を突っ込むシェインの言葉に、しばし考え深げな顔をしたラウバルが話題を方向転換した。今しがたの険しい表情とは打って変わって、シェインの口が小さく優しい笑みを浮かべる。
「寝食も忘れて学んでいる。教えているラフトシュタインが音を上げるほどだ。存外、良い君主となるやもしれぬぞ」
「クレメンス陛下の子だからな」
「……では、私はこれで」
2人の様子を見て、ハイランドが退室しようとする。その背中にラウバルが声を投げかけた。
「大臣を召集してくれ。ロドリスとリトリアの同盟について会議だ。裏をとる」
「わかりました」
扉が静かに閉まると、肩を軽く鳴らしながらシェインが『定位置』へ足を向けた。壁際に設えられたソファに体を投げ出す。

「……ユリア様も、お体を壊されないよう見張っておらねばならぬな。一途な人ゆえ」
「レガードが戻るまで、自分がクレメンス陛下の遺したものを守らねばならぬと必死なようだ。無関係なカズキを巻き込んでいる責任も感じているようだな」
「ユリア様に責はなかろう」
かけたままの書き物机からちらりと振り返るラウバルの言葉に、口元で微笑を象ったシェインが頷いた。そのままの姿勢で腕を伸ばし、柔らかい午後の日差しの差し込む窓を開ける。
「その通りだ。カズキを巻き込んだ責は俺にある」
通り道を見つけた風が春の香りを乗せて流れ込み、赤い髪が風に揺れるそのままにシェインが目を細めた。
窓の外から木々のさざめきと共に街のざわめきが運ばれてくる。今しも取り囲む諸国と一触即発であるとは思えないほどの、穏やかな光景である。
「どうなったかな……」
否定も肯定もせずにただ沈黙を守ったラウバルの耳に、シェインの呟きが届いた。
「何がだ」
「無論、カズキらの動きだ。レガードの生還もしくは『王家の塔』の解放……取り急ぎはいずれかで良いから、カタがつけばと思うのだがな」
「黙って任せるしかあるまい」
訪れた沈黙に、ラウバルはユリアへ思いを馳せた。
どこか庶民的な気質を持つ父王の影響か、ユリアは王城で育った王女のわりには考え方が砕けている。人の意見を聞く耳を持つのだ。そのくせ、こうと決めたら頑なになる強情さも持ち合わせてはいるが、いずれは人の意見を取り入れて政策を貫き通す強さへと育つだろう。
シェインと別れて自分の執務室を出たラウバルは、足を国王の執

務室に向けた。そこでユリアが、ラフトシュタインから政に関する知識を詰め込まれているはずである。先ほどのシェインの口ぶりを考えるに、しごかれているのはユリアかラフトシュタインかは定かではないが。

扉をノックすると、中からユリアの声が答えた。

「どうぞ」

「失礼します」

中は乱雑だった。ユリアが掛けている艶やかな褐色の机の上には書物が山と積み上げられ、床にまで書類が広がっている有様だ。書物に埋もれるようにして顔を上げるユリアの隣で、分厚い書類の束を抱えたラフトシュタインが妙にほっとしたような表情をこちらに向ける。

「ラウバル殿」

「シェインに、随分頑張っておられると窺いました」

壁際に掲げられた灯火が、ちらちらと視界の隅でオレンジ色の炎を揺らした。扉を閉めてユリアの方へ足を向けながら、柔らかく口を開く。だがユリアは笑みさえ浮かべぬ硬い表情のままで、顔を横に振った。

「全然よ。まだまだ足りないわ。まだまだ駄目だわ。……実務をラウバルとシェインに任せたままでごめんなさい」

そう呟くように答える顔には、濃い疲労が滲んでいる。『寝食を忘れて』と言う言葉はどうやら大げさではなさそうだ。

「少し休憩をなさい。体を壊されては元も子もありません」

「そうですよ。無理に詰め込まれても、こういったことはゆっくり……」

「ゆっくりしてられる状況じゃないわッ」

ラフトシュタインの声を遮り、ユリアがテーブルに手のひらを叩きつけて立ち上がった。珍しいことだ。かなりぴりぴりしているらしい。

「ユリア様」

「……ごめんなさい。でも……」
そこまで言って、歯を食い縛る。ユリアの肩に宥めるように手を置き、椅子に座らせる。
「ラフトシュタイン殿の言う通りですよ。根を詰められてもろくなことにはならないでしょう。少し、街の空気にでも当たっておいでなさい」
ラウバルの提案に、ユリアが長い睫毛をしばたかせる。
「街……？」
「シェインをつけましょう」
言って、ラウバルは目を伏せた。小さく笑う。
「最近城に篭って職務にかかりきりだから、ストレスも溜まっていることでしょうし。シェインは我々には教えられないことを教えてくれるでしょう。私もいつだかシェインと街に出て少々驚きましたゆえ」
「……？」
「城の奥にばかりいては視野が狭くなる。一般人にとって当たり前のことが我々に見えなくなりがちなのかもしれません。……視察も勉強です。肩の力を抜いて、心おきなく行ってらっしゃい」

◆◇◆

レオノーラの大通りは、今日も喧噪に包まれている。ユリアの少し前をゆっくり歩くシェインが、気遣うように振り返った。
「ユリア。迷子にだけはなってくれるなよ」
「やあね。子供じゃないのよ」
むくれたように唇を尖らせる仕草に、シェインは軽く肩を竦めた。前に向き直って歩を進めながら、その言葉に答える。
「俺にとっては似たようなものだ」
「ひどいわ」
いつの間にか季節は、花に隠れて緑が芽吹く季節へと移り始めて

いる。息吹の名残を乗せた風が、日を追うごとに少しずつ柔らかな熱をはらんでいく。まだ衣服の袖は長いけれど、人いきれの中を歩いていれば額に汗が薄く光ることもある。

「ラウバルの言う通りだ。肩の力を抜け。ろくなことにならぬ。真面目過ぎるのも考えものだぞ。適当にやってれば何とかなる」

「そんなわけには……」

「何の為に城の中をぞろぞろと人間がうろうろしてるのだ。おぬしに使われる為だぞ。使ってやらねば悪いだろう。学ぶ姿勢は大変良いが、学ぶだけで詰め込んだ知識を使えなければ無駄な労力だ。知識は必要最低限を押さえたら、後は状況に応じて取り入れてゆけ。それまではラウバルの立ち居振る舞いを見て学ぶのだな」

黙りこくるユリアに、シェインは小さな吐息をついた。国を自分が支えねばと焦る気持ちはわかる。何せ、最初からレガードにヴァルスを預けるつもりだったクレメンスは、ユリアに帝王学を何ひとつ学ばせてはいない。

だが、肩肘を張っていては折れてしまう。シェインから見れば、この城の誰も彼もが真面目に過ぎて頭が固い。

「おぬしには世紀の色男を筆頭に優秀な部下が揃っておろーが」

「色男？シェインじゃないでしょーね」

「俺以外におらぬだろう。まさかアドルフとは言うまい？」

しゃあしゃあと言い放つシェインに、ユリアが吹き出した。ようやく浮かべた心からの笑みに、自身もほっと笑みをこぼしながら最愛の王女を優しく見遣る。

ユリアに甘い、との自覚はある。最愛と言う言葉に、今のところ嘘はない。とは言え、そこには恋愛感情めいた色合いがあるわけでもない。

シェインが唯一自分の主と認めたクレメンスの愛娘であり、能力とは関係なしにシェインの人間性をこの王城で最初に受け入れてくれたのがユリアだった。だからこそユリアに注ぐ無償の愛情は、強いて言えば兄妹愛に限りなく近いものだろう。

無論、天性の女好き、と言う所以もあろうが。
「俺もラウバルも好きに使えば良い。気がかりなことがあれば片っ端から相談しろ。他の奴には言えぬことも俺には言えるだろう？政のことでも今日のドレスのことでも構わぬ」
町並みをゆっくりした足取りで歩きながら、シェインが顔だけを傾ける。その優しい表情に、ユリアの顔が泣きそうに歪んだ。
「……焦っているのは、わかっているのよ」
「……」
「でも、今この瞬間にもカズキは命を落としかけているかもしれない。そんな危険なことに巻き込んでおいて、もしもわたしがヴァルスを守れなかったらと思うと、怖くていても立ってもいられないのよ」
「……ユリア」
その声の持つ切実な響きに、足を止める。ユリアの表情が苦しげに崩れていた。
「『スキンティア・エスト・ポテンティア』――お父様が私に向かっておっしゃった言葉よ。……わたしは何も知らなさ過ぎる。何の力もなさ過ぎる。学ばなければいけないのよ」
クレメンスがユリアに残したという言葉を、シェインは胸の内で反芻した。
『知ることは力である』。
だが、それは果たして学問としての政を指すだろうか。
「お父様の遺したものをわたしが守ることが出来なかったらと思うと、怖くて仕方がないのよ……」
繰り返すユリアに、言葉に詰まってシェインは視線を人並みに向けた。続く商店街は活気に満ち、ところどころに出ている屋台は人で賑わっている。
「クレメンス陛下は、良く街に降りておられた」
ぽつりとこぼした言葉に、ユリアが目を上げる。整った横顔は、人混みの中に亡き主の背中を探すように遠くを眺めていた。

「俺も城にじっとしている方ではないからな。ふらりと遭遇してぎょっとしたことが1度ならずある」
「……そう？」
ユリアの知る父は、王城にしかその姿がない。ユリア自身がシャインカルクから出たことがほとんどない為だ。外出するとすればそれは、警護の者を連れた公式のものである。
「君主の資質は、自分で何かを成すことではない」
止めたままだった足を再び動かしながら、シェインが小さく言った。ラフなシャツの裾が、行き交う人の巻き起こす風にふわりと翻る。
「……ラウバルも同じようなことを言っていたわ」
ついて歩くユリアの声に、ちらりと振り返ったシェインがふっと口元を緩める。
「そうか。……陛下は、人々を良く見ておられた。街に降りることは、遊びではない。人々が何を求め、何を恐れ、何を喜ぶか。知識ではなく肌で感じ、共有するには自分が街に降りて歩き、触れ合うしかあるまい」
「……」
「国民は、君主なしでも生きてゆける。国民なしで生きられぬのは君主の方だ。世の中にはそこを間違える支配者が多すぎるな。……陛下は、理解しておられた」
すれ違う人や屋台に座る人々が、時折シェインに声をかける。実に知り合いが多いらしい。ユリアを連れているせいかシェインも足を止めるようなことはせずに、軽い挨拶のみを返して通り過ぎた。声をかける方も見慣れぬ美少女を連れているシェインに好奇の目は向けるものの、深い追及をする様子はない。
「ユリアがしなければならぬことは、人々を知り臣を知り、自分の理想とする国を描いていくことだ。具体的な施策を考えるのは臣の役目。上がって来た施策から取捨選択をすれば良い。遂行するのもまた、臣だ」

「……」
「人の使い方を覚えることだ。それが1番難しくもあるぞ」
「……」
「執務室に篭って学んでばかりでは身につかない。人との触れ合いの中から学び取っていくものだ」
子供たちが歓声を上げて通り過ぎた。うちひとりがシェインに体当たりをするのを受け止めて笑う。前を行く仲間たちの後を追う為に、振り向きもせずに駆けて行く子供の後姿をそっと見送りながら、シェインが目を細めた。
「……レガードは、必ずカズキが見つけてくれよう。それまでの辛抱だ」
「シェーイーンッ」
返事を返そうと口を開きかけたユリアが顔を上げるのと同時に、後方から甲高い声が聞こえた。2人して足を止めて振り返ると、人の間を身軽にすり抜けてひとりの女性が駆け寄ってくるところだった。肩まで伸びたオレンジ色のふわふわの髪と、そばかすの浮いた愛嬌のある顔。美人ではないが、くるくると動く瞳が好もしく、生地の少ない薄手のワンピースの下にははちきれそうに豊かな肢体が見て取れる。
「おう。ミオ」
「最近ご無沙汰じゃないよーッ。新しいコでも見つけたの？」
そばまで駆け寄ってきたミオは、ユリアの隣に立つと品定めでもするようにじろじろと無遠慮にユリアの全身を見回した。
「随分可愛いコ連れちゃってさ」
「馬鹿なことを言うな。最近はいろいろと忙しくてな」
今はユリアも『遠見の鏡』を身につけているわけではないから突然呼び出されるようなことはないだろうけれど、戦の準備に忙しい。娼館にふらふらと足を運んでいるような余裕があるわけでもない。

第2部第2章第8話　狂宴の幕開け（2）

「そんなつれないこと言わないでさぁ、遊びに来てよー。寂しいよー」

じたばたと足を踏み替えながらシェインの袖を掴むミオにユリアが目を白黒させていることに気づいて、シェインが苦笑いをする。

「……ま、友人だ」

ユリアに向けてミオをそう紹介すると、ミオはユリアに笑顔を向けた。

「どぉもー」

「あ、初めまして……」

「……ミオ、業務規定に背くのではないか？」

ぎこちない挨拶を返すユリアに、シェインは前髪に片手を突っ込んでくしゃりとかきあげながら呆れた視線をミオに向けた。どんなトラブルに発展するかわからないので、仮に上客だったとしても街中でしかも女性と歩いているところを娼婦が声を掛けるなどご法度だ。

「だってぇ」

「だってじゃなかろーが」

ぴしっとミオの額を人差し指で弾くと、ミオがくしゃっと顔を顰めて両手で額を庇った。

「いたーい」

誰が見ても娼婦であることは明らかだが、世間を知らないユリアはそんなことには気づかない。『友人』と言う言葉を真に受けて、曖昧な笑顔を浮かべる。

「この可愛らしい彼女の方はあたしには紹介してくれないの？」

「あー……ユリアだ」

王女だなどとは言うわけにはいかない。

「えー……俺の、妹のようなものだ」

「ええぇ？嘘だぁ。シェインの妹がこんな上品なわけないじゃない」
「……失礼だな。妹ではない。妹のようなものだと言ったであろーが」
「ふうーん？」
目を瞬いてユリアをしげしげと見つめていたミオは、ふと思い出したような顔つきでシェインを見上げた。
「そう言えばさ、聞いた？」
「何をだ」
問い返しながら、ちらりとユリアに視線を向ける。それに気づいてきょとんとユリアが視線を返した時には、シェインはミオに視線を戻していた。ユリアもミオの言葉の続きを待って、顔を向ける。
「マイルス島だっけ？モナのさ、下の方にある島」
「ああ」
ロドリスの西、モナの南に位置する島だ。ヴァルス海軍の逗留地であるキール島よりは小さいが、それでもそこそこ大きな島である。小さな漁村が２つほどあったように思うが、いずれにしても大した人口はいない。
「あそこにさ、何人か人が流れ着いたとかって話。誰かに聞いた？」
「……何？」
シェインの顔が凝固する。――流れ着いた？
「あのさ、ベルがさ……知ってるでしょ？あたしがシェインにつけない時にさ、代わりにさ」
「ミオ……」
つい真剣になった表情ががくりと崩れる。落とした肩をそのままに、ミオの肩に手を置いた。ユリアの前でそんなことを言ってくれるなと言いたい。
「ともかく……それで？」
「うん。ベルがね、言ってたんだけど。ヴァルスとモナの……例の海戦で行方不明になった人たちじゃないのかって」
「……ほう」

ユリアの手が、シェインの腕を掴んだ。驚いたようにミオを凝視しながら、空いているもう一方の手を胸元に握り締めている。
「詳しく教えてくれないか？」
ミオの肩を押さえつけたままだった手を外して、安心させるようにユリアの肩に回されたシェインの腕を見遣りながらミオが微かに首を傾げた。
「詳しくってほどあたしだって知らないけどさ……」
「知ってることだけで構わぬよ。どこからそんな話を仕入れた？」
シャインカルクにはまだ、そんな報告は上がってきていない。あくまで噂話の範疇を出ない段階なのだろうが……。
あまり真剣になっていて妙に思われては困るので、敢えて興味津々の表情で好奇心剥き出しのように笑顔を向けて尋ねるシェインに、ミオは小首を傾げて肩を軽く竦めた。
「ほら、あたしってさ、こんな仕事してるでしょ？いろんな人に会うし……」
「どんな仕事ですか？」
まだシェインとミオの関係を読めていないユリアが、無邪気に尋ねる。ぎょっと肩を揺らしたシェインが押し止めるより早く、ミオがにやーっと嫌な笑顔を浮かべてユリアに言った。
「あたし？娼婦」
「……」
ようやく合点の言ったユリアの視線が、シェインをじっとりと睨みつける。王城で色恋沙汰とは無縁に育てられ、厳格なファーラ教信者である彼女は、女性の体を商売道具として見なす職業を嫌悪している。別段、ファーラ教で禁じているわけではないのだが。
「や、まあ、で、何だ？」
潔癖なユリアの視線をかわすように、肩に置いた手で慌ててしきりと髪をかきあげながら無理矢理話を戻すシェインに、ミオはひとつ頷いて途切れた話の続きを口にした。
「そう、だからね、いろんな人がいるわけじゃない。旅して来た人

が骨休めに足運んでくれたりもするし。で、こないだベルがついたお客さんがね、北の方から旅してきた人だったらしいんだわ。ほら……ロドリスの北西部とモナの南端って海を挟んで近いでしょ？何かあの辺の村に立ち寄った時に、そんな噂を聞いたんだって」

「そんな噂？マイルスのか？」

「そう。何人か海岸に打ち上げられていて、そのまま死んじゃった人とかもいるみたいだけど何人かはまだ生きてて、でも重傷で意識不明のままマイルスの漁村が面倒を見てるんだって」

「……」

沈黙したシェインに、ミオは構わず軽い口調のままで続けた。

「ま、ホントにあの海戦で行方不明になった人たちかどうかはわかんないみたいだけどね」

「ほう」

「だって意識不明だから口利いてるわけじゃないし。鎧とかつけてたわけじゃなさそうだし」

それはそうだろう。そんなものを身につけていたら沈む以外に術がない。海に投げ出され、それでも何とか装備と言う重石から脱出することの出来た人間が漂流したのだろうが……。

「ヴァルスの国民だと良いのだがな」

頭に過ぎる考えを微塵も見せずに、世間話の調子を崩さないままそんな感想を述べるシェインに、ミオも深く同意した。

「うん。海軍の中にはお客さんも何人かいるしね。あれ以来、来ないから巻き込まれたのかもしんないし。心配だよね、やっぱさ」

耳にかかる髪をかきあげながら通りを行き交う人に目を向けるミオに、シェインはちらりとユリアへ視線を流した。無言のまま、ユリアもシェインを見上げる。

ヴァルス海軍ならば、良い。モナ海軍であったとしても、ただの兵卒ならば良いだろう。

だが、まさかとは思うが、その中にフレデリクがいたら。

（いや……）

その中でなくても構わない。そうして無事陸地に辿り着いた人間がいるのだとすれば、モナ暫定政権が信じているようにフレデリクが存命している可能性は否定出来ない。

フレデリクが万が一存命していた場合……戦線を早々に離脱したと思われたモナが復帰してくる可能性すらある。そうなれば、ヴァルス・ロンバルトは、ロドリスを中心としてリトリア・バート・ナタリア・モナの5カ国を相手取る羽目になる。

ならば。

（モナへの制裁は、火急だ……！！）

かなり苦しい戦いを強いられることになりそうな予感に小さく落としたシェインの吐息が、和やかに通り過ぎる人々の嬌声に掻き消された。

◆◇◆

ライオネル率いるロドリス軍2万5千は、リシア地方北部にある要塞ガーラントを出て海沿いに南下を開始した。目指すはロンバルト西部の要塞デルフトである。

ロンバルトは、おっとりとした気質から軍事に力を入れる方ではない。背後に控える大国ヴァルスの守りに甘んじている節もあるのだろう。それゆえに陥落すべき要塞も少なく、そもそも領土そのものが大きくはない。

ロンバルトの首都ウォルムスは、領土のほぼ中央に位置する。ライオネルの行軍の狙いは、デルフトを陥落してロンバルト首都ウォルムスに迫り、ヴァルス北西部に聳えるラルド要塞からの派兵の壊滅だ。一方でロドリス東南、ファリマ・ドビトークの麓で合流を予定しているロドリス・ナタリア・バートの連合軍は、険しいファリマ・ドビトークの中でも最も山越えをしやすい南から中立地帯エルファーラに一旦入り、ヴァルス最北の要塞リミニに迫って後ウォルムスでのライオネル率いるロドリス軍との合流を予定している。

ローレシア大陸の最南に位置するヴァルスは、地理的に攻めにくい。更に王都が南部に位置する為に、陸地から攻めるには数々の障害を取り除かねばならなくなる。間に立ちはだかるレハール、アンソールなどの城塞都市も侮れない。

ライオネルが率いる2個大隊はパイク兵（長槍兵）、コルスレット（重装長槍兵）を中心とした３００名を1個中隊とする２０旅団と歩兵、重装歩兵、竜騎兵（乗馬歩兵）や輜重部隊などである。１日の進行速度は４５エレが限度であり、時にはそれより落ちる為、ガーラントからおよそ４３０エレの距離がある国境ルオー川までは１０日の日数を要した。

（これがルオー川か……）

ロドリスとロンバルトの国境でもあるその大河を前に、まだ２０歳のリニウスは感慨深く心の中で呟いた。

ロドリス北東、ナタリアにほど近い小さな農村に生まれ育った彼は、雄大な光景のひとつとして知られるその大河を目にするのが始めてだ。

今回のこの従軍は、リニウスにとって初めての経験となる。優れた馬術を買われた彼は、竜騎兵として連隊に組み込まれていた。馬上にあるとは言え、竜騎兵はあくまで歩兵であり、騎兵とはその格も扱いも違うのだが、馬上から戦闘せよと言われてもリニウスの方も困るのでその待遇に不満はない。

ぼんやりと雄荘な河の流れに目を奪われていた彼の耳に、不意にけたたましい喇叭（らっぱ）の音が飛び込んできた。はっと顔を上げるとどうやら全軍に後退命令が出されたようだ。隊列に従って馬主を返す。

「……どうしたんだ？」

私語は隊長に見つかれば厳しい処罰を受ける。出来る限り抑えた声で隣を進むやはり若年の竜騎兵に尋ねると、彼も微かに首を傾げてリニウスに応じた。従軍経験のない若者たちには口をきくことも許されない、名門貴族出身の将軍の考えなどわかろうはずもない。

ルオー川を離れた森の中まで完全に退却すると、野営の準備をす

るよう通達が行われた。
まだ日は高い。
（……？）
リニウスがそっと首を傾げながら馬を下りようとすると、不意にリニウスの所属する一旅団に召集がかけられた。旅団長であるディラが残忍な表情を顔に浮かべて、声を張り上げる。
「第一師団竜騎兵第六旅団はこれから単独でルオー川の渡河に入る」
（――え？）
『単独で』？
リニウスが目を瞬いている間に、ディラは説明を続けた。
「単独渡河の目的は、全軍渡河の危険の排除――ラティスを焼き討ちにする」
「……！！」
ようやく合点がいった。ルオー川からさして離れていない場所にあるラティスの町には衛兵の駐屯所がある。小さな町だから戦力は恐るるには及ばないが、ロドリスの侵入に際してデルフト要塞への伝令を役目としていたはずだ。渡河の最中にデルフトからロンバルト軍が襲撃してくれば、致命傷を受けかねない。その前に、不安の種を取り除いてしまおうと言うわけだ。
使命を負った竜騎兵第六旅団は、川から離れた森の中を密かに上流へ向かって移動を開始した。
リニウスの全身は緊張に包まれていた。遠からず始まるだろう戦闘に、微かな恐怖とそれを遙かに上回る高揚感。
命など惜しくはない。この戦で戦功を挙げられれば、彼は村の勇者だ。
しばらく森の中を静かに移動し、日が傾く頃数騎が渡河地点を決定すべく川へと探索に出た。やがて渡河地点が決定され、日が完全に落ちるのを待って行動が開始される。
奇妙な光景だった。川の上空に浮かぶ月がひっそりと水面に影を投げかける中、３００騎もの人馬が黙々と列を成して静かに川を横

切っていく。木々のざわめきと水の激しい流れの音だけが、ただ宵闇を支配していた。時折暗い空を夜鳥の黒い影が通り過ぎていく。

無事、全騎が対岸へ渡りきった頃には、月は頭上にさしかかろうとしていた。疲労困憊（ひろうこんぱい）ではあるが、夜のうちに攻撃を仕掛けねば夜襲の意味がない。

体に鞭を打って静かな行軍は続く。先刻と同様森に身を潜めた進軍だったが、これくらいの人数になれば魔物も襲っては来ないのだと言うことをリニウスは初めて知った。

竜騎兵第六旅団が進む度に安らかな安眠についていた鳥たちが驚いて飛び立つ。その都度、バレはしないかと内心冷や汗をかく。

過度の緊張の中、進行が止まった。眠りの静寂に包まれた小さな町ラティスが、その前方に姿を現していた。

「我々の働き如何（いかん）で全軍の動きが変わる。女子供も容赦なく殺せ。恐れることなく戦った者は、英雄だ」

（英雄……）

騎士に憧れて志願兵となったリニウスは、その言葉にたちまち魅了された。許された殺戮、それは罪ではなく功となる。

「行け！！」

ディラのかけ声と喇叭に鬨（とき）の声が上がった。もはやここまで来てしまえば、こそこそと隠れることに意味はない。リニウスも周りに負けじと馬を疾走させ、ラティスへと駈ける。戦功に逸る竜騎兵が、勢いに任せてその頼りない町門を破りなだれ込んだ。

竜騎兵の基本は馬を下りて戦うことにある。馬はただの移動手段であり、戦闘時には一介の歩兵と化すのだ。馬を下りたリニウスは、震える腕を叱咤して剣を片手にその小さな町を駆けた。

兵に志願してから厳しい訓練を受けている。人の殺し方なら一通りは身につけたはずだ。だがこれが初戦。恐れを抱かずに済むはずもない。

深い眠りに沈んでいた町は無力だった。突如押し入ってきた侵略者たちに為すすべもなく、自分がなぜそんな目にあっているのかわ

からぬままに死んでいく。町の後背をついた侵入により、恐らく夜間も行われていただろう警備が気づくのが遅れたのだった。

家の中にいても殺戮者たちがなだれ込んで来ることを知った町人たちが、逃げようともがく。決死の覚悟で立ち向かう男たちも、厳しい訓練をくぐり抜けた竜騎兵の刃に命を散らしていった。

それはまさしく一方的な殺戮だった。衛兵たちが装備を調えて駆けつけるも、勢いのついているロドリス軍の前に圧されてしまう。

「いやぁぁぁッ！！助けてぇぇぇッ！！」

容赦なく血濡れていく刃に、鼻につく鮮血の狂宴に、リニウスの理性が少しずつ麻痺していった。内側から湧き上がる凶暴な欲望。つい先日までは、村人の誰かが亡くなれば涙を流して心からの祈りを捧げていたはずの、どこにでもいる普通の青年だった彼は、手にした凶器が朱の塗装を濃くするにつれてそこに快感を見出し始めていた。

獲物を求めて路地裏に駆け込んだリニウスの前方に、胸に幼子を抱いた若い母親の姿が見える。空いた片手にはもうひとり女の子。突然その路地に姿を現したリニウスに、恐怖と驚愕の入り交じった表情を浮かべたままで顔を強ばらせていた。咄嗟にどうすべきか判断がつかないのだろう。その、追いつめられた小動物のような姿はリニウスに凶暴な衝動をかき立てた。

（――こうして人は血に酔い、戦で狂っていくのだ……）

心の片隅の呟きに目を瞑りながら、鈍くなった刃を拭ってリニウスは獲物へと足を進めた。

この全てが、功となる。

心行くまで、楽しませていただこう。

第2部第2章第9話　オーバーフロー　前編（1）

松明の灯が、窓の外に増えていく。リートリッヒは小さく息をついて、眼下の光景に目を向けていた。どうやらラティスの町は、ロドリスのルオー川渡河の報をこのデルフト要塞に届けることは叶わなかったらしい。突如現れた2万を越える大軍にデルフト要塞は迎撃準備に入っているが、果たして……。

この要塞を守るリートリッヒは、弱冠27歳の若者だ。王都ウォルムスの名門貴族クライバー家の次男である彼は、今回のロドリス侵攻の報を受けて、王城ヴィルデフラウより派遣されたにわか城主である。

「……リートリッヒ様」

従来この要塞に常駐して守っている将軍シュトワードの声に、リートリッヒは振り返った。

こちらもまだ36歳と年若い。

「ヴァルスからの援軍は間に合うだろうか」

感情の滲まない、淡々とした問いかけに、シュトワードの顔に苦渋が浮かぶ。

「わかりかねます、としか申し上げられませぬ」

リートリッヒの視界の中では、刻々と要塞に迫ったロドリス軍が野営の準備に取りかかっていく。明朝、日が昇ってから行動を開始するだろう。

要塞に逗留している軍は8千。とてもロドリスに太刀打ち出来る兵力ではない。防戦一方の戦いを強いられることは、明らかだった。

ヴァルス援軍がロドリスを背面から攻撃してくれれば、勝機はあるのだが。

翌朝になって、ロドリス軍は行動を開始した。

いくつかの部隊に分かれて、整然と散っていく。何か考えているらしい。直接攻撃を仕掛けてくるつもりでは、なさそうだ。

リートリッヒは城内の兵に、警戒を怠らないよう呼びかける。要塞は元々戦闘を前提に造られている為、これから補強し直すなどの手間は特に必要としないはずだ。攻城対策として城門や塀の上に投石器や弓砲なども設置されてはいるが、現段階では何の用も為さない。距離が遠すぎる。

じりじりとデルフト要塞軍が見守る中、ロドリス軍のある者は地に濠（ほり）を造り始め、またある者は木材を運び込んで来た。数日の沈黙を過ぎ、刻々とロドリスの意図が読めてくる。

「シュトワード！！騎兵を3千だ！！」

リートリッヒの命令に従って急遽、3千の騎兵が城外へと送り出された。それをロドリスもほぼ互角の3千6百の騎兵で応じる。その間も着々とロドリス軍の作業は続けられていく。狙いは囲い込みと攻城塔の造成だ。

デルフトは天然の要塞とも言えるべき場所にあり、ロドリスが陣営を築いている方角からは険しく切り立っている岩場の上にある。続く道は1本で、その両側も険しい崖になっていた。

ロドリスはその道の入り口から両側に広く要塞を取り囲む形で濠と土塁を造り上げ、唯ひとつの道に破城槌（はじょうづち）を備えた攻城塔を築き上げようとしているのだ。

木枠を中にして石を組み上げた強固な塁壁ではあるが、おめおめと指をくわえて見ていてやる理由もない。数倍の兵力とは言え、工事に取りかかっている今、その全てが戦闘要員として即投入出来るわけではない。

小競り合いを繰り返す中、ロドリス軍の攻城塔は着々と出来上がっていく。デルフト要塞軍も火矢を放ったり何とかその作業を妨げようと試みる。

焦燥の中、じりじりと時だけが過ぎ去って行った。

◆◇◆

ヘイリーの無茶苦茶な要求を受け入れてようやくファリマ・ドビトークを越えた俺たちは、一度教皇領エルファーラを経由してヴァルスに入った。エルファーラとほど近い城塞都市アンソールから一路、レオノーラへと向かう。

こっちを出てから一体どのくらいぶりの帰還になるのか、既に感覚がめちゃくちゃで正直良くわからないが、多分……ほぼ1ヵ月半ぶりくらいだろうか。

アンソールから南へ向かうこと5日、ほぼ平原と言える向こうに見覚えのあるシャインカルクの城下町が見えた時、思わず全身の力が抜けるのを感じる。何だろう……『帰ってきた』ような。

故郷に帰る気分って、こんな感じかもしれないな。俺がこの世界で1番馴染みがあるのはやっぱり、レオノーラだから。

（『故郷』か）

最近、思い出さなくなってきたな。あっちの……俺が本来いるべき世界のことを。

忘れたわけじゃないが、日々生き抜くことで精一杯だし、多分……違和感が俺の中でなくなってきているからだろう。

わからないことは多分まだまだあるけれど、今のところ生活に不都合はなくなってきている。

（帰れなくなったら？）

それとも、『いつか帰れる』と思うからそんなふうに思うんだろうか。帰れなくなったら、漠然と俺が描いていたはずの未来とあまりに違う姿に、違和感をまた覚えるんだろうか。

「うあー！！やっと戻って来たぁー！！」

レオノーラを本物の故郷とするキグナスが、俺の隣でくしゃりと相好を崩した。シサーとニーナも気が抜けたような表情で、近づく街並みに目を向けている。

「今日は心の底から休めそうだなあ」

「お風呂にゆっくり入れる」

嬉しそうに交わす言葉に小さな笑みを象って返しながら、俺の意

識はシャインカルクへと飛んでいた。ヴァルス王城――ユリアに。
微かに心臓の鼓動が速くなるのがわかる。会えるだろうか。会える、よな……。
（……かっこ悪……）
心臓の位置にそっと片手を当てて顔を伏せる。もう少し……あの、街に、ユリアがいると思うだけで速くなっていく鼓動に乾いた笑いが洩れた。自分で情けなくなるほど……。
会いたいと逸る気持ちが、胸を締め付ける。どれほど想ったとしたって、どうなるわけじゃないことなんか最初からわかり過ぎるくらいわかっているのに。想い始める、前から。
そばにいる間に抱き始めた想いは、離れている間に会えない時間に育てられ、今は……。
……傷つくことになるのなんか、わかりきっているのに。
なのに。
（いつか、傷つくことになっても良いから）
それでも、会いたい。
「キグナスって自分の家、帰んないの？」
自分を誤魔化すように軽く髪をかきあげて、意識を逸らす。このままだとシャインカルクに戻る目的を忘れてしまいそうだ。
って言ったって、現状報告と骨休め、そして例の指輪の件だけなんだけど。
ま、気分の問題として……別にユリアに会いに行くわけじゃなくて任務の一環なんだと言う意識でいないと、第一目的にユリアが来てしまう。それは何となくよろしくない。
「俺ぇ？シャインカルクに帰る」
拉致られた頃なんかを思い返すと、キグナスは自宅がレオノーラにあるわりに帰らない。
宮廷魔術師であるシェインは王城敷地内に居館を与えられていて、そこに居候と言うか転がり込んでいると言うか。
「キグナスって自宅帰らないよね……」

「別に帰ってもしょーがねぇじゃん」
「何だっけ……ヴァレンシア……じゃなくて」
それじゃあ俺的にはオレンジだ。
舌を噛みそうな名前のシェインの居館の名前を思い出そうとして言った俺に、キグナスが笑った。
「ヴァレンティアナ。……シェインの館な」
ようやくレオノーラの防護壁を抜けて街に足を踏み入れると、『安全地帯』に足を踏み入れたような気がした。ヴァルス国内で最も警備が堅いはずのこの街で、魔物に襲われることもロドリスに狙われることもないだろう。
「とりあえずは真っ直ぐ、シャインカルクに向かおう」
旅の汚れを払うようにシサーがぱさっと髪を払いながら提案し、俺たちは久しぶりに歩く王城への道のりをゆっくりと辿り始めた。華やかな人々の行き交う大通りを逸れ、複雑に入り組んだ道を歩いていく。
「戦争って、どうなってんのかな」
前と全く変わらない上品な活気にぽつりと呟くと、ニーナが軽く肩を竦めた。小首を傾げる。
「さてね。王都が巻き込まれるのは後になるから」
「そうなの？」
「そりゃそーだろう。いきなり攻められてたまるか」
そりゃそうか。将棋で言えば王将ってとこだよな。そこ取ったら勝敗決まるんだし、そこに辿り着くまでにはそりゃ歩兵から香車からいて守り固めてるわけだし。……って別に俺、将棋に詳しいわけじゃないんだが。
まあそれはわかるんだけど、だからつってこうも普通の空気してるのが意外だった。人間、足下に火がつかなきゃのんびりしているものらしい。
「ただ、シャインカルクはこの限りじゃないと思うぜ」
少し前を歩くシサーがちらりと俺を振り返って、そう忠告した。

「仕切ってんのはこれから会う面々だからな。……ぴりぴりしてると思った方が良いと思うぜ」

「しばらくぶりだな」

シャインカルクへの入城は、『レガード』な俺はもちろんのこと、キグナスもシサーもニーナも全員が顔パスだ。

何の問題もなく城内に足を踏み入れた俺たちが、取り急ぎ通された応接室で待たされていると入って来たのはラウバルひとりだった。

「手短に聞こう。そちらの状況はどうなっている」

『ぴりぴりしていると思った方が良い』って言ったって、俺から見ればこの人はいつもぴりぴりしているような気がするので違いが良くわからない。

「あんただけか？」

苦手なのはお互い様、ってところだろうか。シサーとしてはシェインがいた方が、圧倒的に話しやすいんだろう。そう尋ねるが、ラウバルは無言で頷いた。

（ユリア、どうしてるのかな……）

職務中、だろうか。

会えるかと密かに期待していたので内心落胆しながら、頭を切り替える。

『レガード』と『バルザック』だ。

「ロドリスの一件は、ユリアとシェインから聞いてるな？」

「無論だ」

「まずひとつ。ロドリス駐在ヴァルス外交官アンリが押さえられている」

「やはりか。こちらもその話は耳にした。次を聞こう」

「それから現状だ。レガード捜索及び『王家の塔』攻略に係るバルザック捜索、いずれも捜査中。進行状況を話そう」

味もそっけもないシサーの言葉に、ラウバルも愛想のかけらもなく頷く。

「ファリマ・ドビトークを捜索した。理由は以下だ。『王家の塔』攻略にはバルザックの捕獲もしくは討伐が必須であること、バルザックらしき人物がファリマ・ドビトークに出現するらしいと言う情報を入手したこと、仮にガセネタであったとしても正規ルートでのヴァルス帰還が見込めない俺たちはいずれにしても山越えをしなきゃならないと言うこと。よって無駄にはならないと判断した」

「バルザックがファリマ・ドビトークに出没すると言う情報はどこから得た」

「拘束される前のアンリだ」

「ふむ……。終えて尚捜査中と言うことは、ガセだったか」

「いや。ただし俺たちは遭遇することが出来なかった。代わりに奴の行方に関して、手がかりがありそうな人物と遭遇した。情報を提供すると言っている。だが交換条件だ」

どちらも余計な口を挟まないので、報告のテンポが速い。淡々と状況を語るシサーに、ラウバルが時折短い質問を挟み、相槌を打つ。

「……以上の理由から、明朝、ギャヴァンに向けて出発する。場合によってはレガードの生存が確認出来るかもしれねぇな。その後の動きはギルドとの交渉次第で、恐らくはラグフォレストもしくはファリマ・ドビトークと言うことになるだろう」

「わかった」

シサーが口を閉ざすと、ラウバルもひとつ頷いて沈黙が降りる。例の指輪はどうするんだろう。シェインはどこ行っちゃったんだろうか。いないのか、いるけど同席していないだけなのか、ラウバルを見る限りわからない。と言って、ラウバルに指輪の件を聞いても教えてもらえる気がしない。

「シェインはどうした」

同じことを考えたのか、一通り報告を終えたシサーが椅子の背もたれに背を預けながら尋ねた。微かに顎をひいてラウバルを見据える。

「……」

ラウバルもそれに対するように、ちらりと目を上げた。相変わらず表情はない。
「……シェインは外出中だ」
「外出中？」
「こちらの状況を話しておこう。ギャヴァン戦の話は聞いたか」
「ああ。耳にしたな。ギャヴァン奪還と、海戦における両国の被害」
「ではそれは省こう。……まず、ナタリアが海陸双方から南下を開始。バート、ロドリスと合流して3カ国連合軍がロンバルト東部から侵攻を狙っている。ロドリスは一方で西からのロンバルト侵入も進めている。こちらが目指すのはデルフト要塞……地図が必要か」
懸命に頭の中の地図を掘り起こしている俺に気づいて、ラウバルが短く言った。答える前に立ち上がり、壁際に設えられた棚から大きめの地図を手に戻って来る。
「あ、すみません……」
にこりともせずにばさりと地図を放り出すラウバルに、恐縮した気分で頭を下げると、シサーが苦笑いを浮かべた。
「デルフト要塞はここだ。ロンバルト首都ウォルムスの西部、ヴァルス要塞ラルドの北東部に位置している、ロンバルト西部で唯一の要塞だ」
唯一……。
「じゃあこれを落とせばロドリスはウォルムスまで一直線ってわけね」
半ば俺に説明するように確認したニーナに、ラウバルが無言で頷いた。
「ラルド要塞からはデルフトへの援軍を向けている。シェインは、デルフト防衛戦の援軍として送り出した」
「――！！」
その言葉に、思わずどきりとした。デルフト要塞の防衛戦に……じゃあ、戦争に？
「どうした」

凝固した俺に気づいたように、ラウバルが顔を上げる。自分の動揺の理由に思考を巡らせながら、俺は短く首を振った。

「いえ……続けて下さい」

急に、状況を身近に感じた。

俺の周囲には、戦争に行ったことがある奴なんて、いない。

……いや、近所のおじいさんとかは第二次世界大戦の経験者もいるんだろうけれど、正直他人ごとだ。だって今は元気にその辺散歩してたりするんだから。

でも……。

第2部第2章第9話　オーバーフロー　前編（2）

（シェイン……）

ずきっと頭が痛んだ。頭痛を堪えて、代わりにすっと冷静になっていく頭で考える。

そうそう死んだりは、しないだろう。だってあの人はあー見えて『稀代の天才魔術師』なんだから。

「シェインが、行ったのか？」

俺がつまらないことに動揺している間も、淡々と話は進んでいく。ラウバルが微かにため息混じりに頷いた。

「国王不在時なんかはあんたが出るんじゃないのか」

「通常はな」

と言うことは、今は通常じゃないらしい。

「諸事情につき、私が残る方が最適だろうと判断した」

「諸事情？」

「そこまでは話す必要性を感じぬな。こちらのことだ」

「……」

……やっぱこの人、指輪の件なんか話してくれないと思う。

「まあ、いいや……」

ラウバルが残った方が良い理由を追及するのを諦めたように、シサーが前髪をくしゃっとかきあげた。腕組みをして話を促す。

「ともかく、シェインは出陣中、なんだな？」

「ああ」

「リトリアはどうした。キルギスは。モナの状況はどうなってるんだ」

矢継ぎ早な質問に、ラウバルは抑揚のない低い声で応じた。

「リトリアはロドリスとの同盟を表意した」

「……確かか」

「確かだ。キルギスは静観している。動きはない。まだこちらに引

き入れることも可能だろうが、現段階では中立の立場を取っている。
モナは、保留だ」
「保留？」
「公王フレデリクの行方が掴めない」
目を見開いたシサーが、椅子から体を起こした。ニーナが息を飲むのが聞こえる。
「例の海戦か」
「ああ。公主の生存を信じて、モナ議会は暫定政権を立ち上げた。それを後押しするように、マイルス島に残兵の漂流が報告されている」
言いながらラウバルは、地図上を指でなぞった。多分、俺の為だろう。
それによるとマイルス島はモナ南端から少し南、ロドリスの西に位置する島だ。どのくらいだろう、四国くらいあるのかな……そんなにないか。佐渡よりは大きそう。日本地図並べてるわけじゃないからわからないけど。
「その中にフレデリクは？」
「いなかったそうだ。だが生存者がいる以上、モナ公王の存命の可能性は否定出来ぬな」
「……」
それがどういうことになるんだろう。
モナはロドリスに味方してギャヴァンに攻め込んだわけだから、そしてそれがモナ公王の発意だろうから、その人が生きてれば当然……戦線復帰か……。
敵国は5カ国。
対するこちらは、2カ国。
状況を良く知らない俺でも、それが余りに不利なことくらいはわかる。全体の兵力差は実際どのくらいなんだろうか……。
（ユリア……）
さぞ、不安だろう。

けれど俺には、この件に関しては何もしてあげることが出来ない。出来るわけがない。

早く彼女の力になってくれるパートナーを探し出し、戴冠させてあげられるよう頑張るしか。

それしか、してあげられることがない。

軽く唇を噛んで、頭を振る。考えても仕方がない。出来ないものは出来ないんだから、出来ることを考えて頑張ろう。

それが、彼女の為になるはずだから。

「モナは、放っておくのか」

「戦力の供給を要求する方向で話が動いている」

尋ねたシサーに、ラウバルがひとつ頷いて答えた。

「アルトガーデンを統べるヴァルスへの攻撃は、許しがたい裏切りだ。このままでは戦争終結と共に、経済制裁や領土分割などの措置をとることとなろう。だが、至急国内を整え、こちらの援軍として兵力を提供すれば制裁は軽いものとする。……トレードオフだな」

「……万が一のフレデリク生還の前にやらなければ」

「意味はない」

それきり沈黙になる。各々、何を考えているのかはわからない。

「ユリア様は、どうしてらっしゃるんですか」

それまでずっと黙りこくっていたキグナスが、ぽつっと尋ねた。

「ユリア様は執務中だ。この件に関しては私からご報告差し上げるから案ずるな」

いるんだ、ユリアは。

……この、城のどこかに。

不安だろうと思えば一層会いたいと痛む心に、俺はそっと目を伏せた。シサーが俺の隣で嘆息する。

ユリアにもシェインにも会えそうもないと覚悟したのか、僅かにためらうような表情をした後にポケットに手を突っ込んだ。

「……？」

シサーが握りしめたままテーブルの上へ差し出した拳に、ラウバ

ルが目を瞬く。次の瞬間、開いたシサーの手のひらからコロンと指輪が転がり落ちた。
「……」
「……」
誰もが無言だ。ラウバルは静かに指輪に視線を注ぎ、俺たちはそんなラウバルの反応をじっと見守る。
（……うーん）
よ、読めない……。
眉ひとつ動かさずにただ指輪を見つめるラウバルからは何の心の動きも読むことが出来ず、何か知っていることがありそうかどうかすら見当がつかない。見事なまでのポーカーフェイス。
「……誰のものだ」
僅かな表情の変化さえ見落とさないと言うように、シサーがラウバルから視線を逸らさずに尋ねる。ラウバルは沈黙のまま顔を上げた。
「何だ？これは」
「オトシモノだ」
人を食ったようなシサーの答えに、ラウバルが再び指輪に視線を戻した。
「誰のものか、あんただったらわかるんじゃねぇかと思ってな」
黙したままのラウバルに、しびれをきらしたようにシサーが問う。黙ったまま指輪を見つめていたラウバルは、やがて顔を上げて正面からシサーを見返した。
「……」
「今は『王家の紋章』は消えてる。持ち主の手を離れて俺が持ってたからな。でもそんだけ凝った意匠の指輪だ。見覚えくらいあるんじゃないか」
シサーの言葉を聞いて、俺とキグナスが思わず顔を見合わせる。
そっか。『許された者』以外だと消えちゃうんだから、ここに辿り着く前に、消えちゃったのか……。

それじゃあそこに紋章が刻まれていたって説得力に欠けちゃうじゃん、と思ったんだが、意外にもラウバルはあっさりと俺たちに回答を与えた。

「クレメンス8世陛下の兄君の奥方……ユリア様にとっての伯母君のものだ」

「……シェリーナ妃？」

おばさん……！？

キグナスは心当たりを思い出したらしい。あっけにとられた俺たちをぐるりと見回して、今度はラウバルが問いを投げかける。

「どこで見つけた。どこにおられた？」

ラウバルは両手をテーブルの上で軽く組み合わせながら、ぐるりと俺たちを見回した。キグナスが答える。

「ファリマ・ドビトークの廃村……ヴァインです」

「ヴァイン？」

「魔物に襲われて殲滅された村だよ。今はもう誰も住んじゃいねぇ。ごろごろ白骨が転がるばっかりでな。……そん中にあったってわけだ」

「ほう……」

微かに目を見開いたラウバルは、小さくため息のように応じて視線を指輪に戻した。テーブルの上で揺れる灯りを受けて、指輪がきらりと光を反射する。

「そんなところに……」

「あっさり話してくれるとは思わなかったな」

目を丸くして、どっか拍子抜けしたように言うシサーに、ラウバルが小さな笑みを口元に刻んだ。

「大臣クラスなら誰でも知っていることだ。隠すことに意味はなかろう」

なるほど。

「クレメンス陛下の兄上様とくりゃあ、まさに王族だ。その奥方様があんな辺境のうら寂れた村に住んでいたワケってのは教えてもら

えんのか」
「……多少ならば、良いだろう。ただし約束してもらいたいことがある」
「何だよ」
「他言無用だ。……ユリア様にもな」
ユリアにも……？
訝しげな沈黙に気づいてはいるだろうに、ラウバルはそれについてはもう何も語ってはくれなかった。ふうっと息を吐き出して、背もたれに体を預ける。両腕を軽く体の前に組んで、視線をテーブルの上に定めた。
「兄君であるアウグスト様がおられるにも関わらず、弟君であるクレメンス陛下が即位なされたのは、アウグスト様がご乱心だったからだ」
「ご乱心？」
「ああ。元々野心のお強いお方ではあったのだがな。猜疑心がお強く、クレメンス陛下がアウグスト様を差し置いて王位を狙っておられると疑っておられた」
「……」
クレメンス８世の先代――父にあたるベリサリオス４世には息子が２人いた。
ひとりは言わずと知れたクレメンスであり、もうひとりは兄にあたるアウグスト。
アウグストは迷信深く猜疑心の強い男で、武才のない書物に埋もれるのを好むような人物だったらしい。対するクレメンスは社交的で明るく、若かりし頃から街に下りては遊び、ベリサリオスの信頼も篤く、他大陸との戦争の折などには弱冠１４歳にして部隊を任されることもあったと言う。
そりゃあ、アウグストが猜疑心に駆られるのも無理はなかろーと言うものだ。どっちが人望が篤そうって、話聞いてるだけでわかるもんなぁ。

そんなわけで、アウグストは2度、クレメンスの暗殺を企んだと言う。

そこでベリサリオスはクレメンスを守る為に、シャインカルクから遠く離れたメッシーナと言う街に避難させることにした。それから27歳になるまでの10年間、クレメンスは王城離れた市井の中で生活をすることとなる。

クレメンスの追放にアウグストは一度は安心したものの、その頃にはベリサリオスの心はもうクレメンスの王位継承に決まっていた。そのことに気づいたアウグストは、今度はベリサリオスへの反逆を企てる。

さすがにこれに激怒したベリサリオスがアウグストを妻子ともどもレオノーラ郊外の館に幽閉し、その後に国外追放を決定した。それと同時にクレメンスはシャインカルクへ召還され、ベリサリオス在位中には父王を支える幹部となって国政に参加することとなる。

……ラウバルの話は、そんなところだった。

確かにそんな話だったら大臣クラスの人間は知ってて当然だろうし、あっさり口を割ったのも納得が行く。むしろ納得が行かないのは、ユリアへの口止めだ。

何で？

「アウグスト様とそのご家族が国外追放なされた頃、ユリア様はその頃まだ幼少であられた」

俺の質問に、ラウバルは息をついて目を伏せた。

「当時のことは、あまり細かいことをご存じないだろう。伯父上と伯母上が祖父君によって追放なされたとあれば、お心を痛められる」

「……」

それだけ……？

そりゃあそうかもしれないけど、ユリアだって馬鹿じゃないんだから、反逆を企んだ伯父が追放されることは……。

不審に思って眉を顰めかけた俺は、不意に思い出した記憶にそっと目を見開いた。あの白骨がユリアの伯母さんだったって言うんだ

ったら、一緒に住んでいたと思われる幼女がいるはずだ。
共に、ヴァルスを追放された何も知らない幼い女の子が。
思い当たって、顔を上げる。ラウバルが、俺の表情に僅かに目を細めた。
「クレメンス陛下のお兄さんには……」
「……」
「……わかりました」
ラウバルが気遣ってるのは、そっちか……。
ヴァインの寂れた廃屋にひっそりと残された家具を思い出す。その中に眠っていた、幼い子供の衣類。何も知らず、もしかすると自分の身分さえ知らずに王家から追放された少女。
それを知れば、確かにユリアは心を痛めるかもしれなかった。本来であれば同じ待遇……もしくは、それ以上の待遇を受けるべきはずの幼い従姉妹の姿に。
「ベリサリオス陛下は、レオノーラ郊外に幽閉するだけじゃ納得がいかなかったのか？」
「……」
シサーの問いに、ラウバルがちらりと目を上げた。黙ったまま顔を左右に振る。
「ここまでだ。アウグスト様と共に、奥方であられるシェリーナ様も追放されている。その後どこへ行ったかは知らなかったが、ヴァルスを離れてヴァインで人目に触れぬよう暮らしていたのだろう。『王家の紋章』を刻んだ指輪のわけはこれでわかっただろう」
言いながらラウバルは立ち上がった。これ以上話をする気はないと言うことだろう。仕方なく俺たちも椅子から立ち上がる。
「私は執務に戻るが、何かあるか」
ラウバルの視線を受けて、シサーがぐるりと俺たちを見回す。それに応えて俺は、小さく否定の意を返した。
「ないと思う。とりあえずは」
ギャヴァンのことだったら、シサーの方が詳しいだろうし。

「んじゃそんなところだな」
「わかった。ご苦労だったな」
労いの言葉を投げてドアに足を向けたラウバルが、ドアの前で足を止める。ふと振り返って、俺たちに向けて多分初めて『優しい』と言えそうな笑顔を向けた。
「部屋を用意させるゆえ、今日はゆっくり休め。……命だけは、落としてくれるなよ」

第2部第2章第10話　オーバーフロー　後編（1）

「……でぇ、これがぁ、挨拶だな。『ようこそ』。良く宿とかで見る文字だろ」
「うん。……キグナス。字、汚い」
「教えてやってんのにうるせぇなぁ」
「あれ？キグナスって左利きだっけ？」
「おう。……今頃気づいたのかよ。ロッド、左手に持ってんじゃねぇか、俺」
「そんなん気にしたことなかった」
言いながらせこせことキグナスが書いてくれた文字を書き取って、隣に日本語で意味を書く。
ラウバルとの対面を終えた俺たちは城下に下りて明日の準備を済ませてから、自由行動になっている。シサーとニーナにはラウバルから客室が用意され、俺はキグナスにくっついて主のいないシェインの居館に押し入った。
何となれば、せっかくだから文字の方も少しは勉強しておこう、と。
俺に先生役を指名されたキグナスは、豪華な夕食を終えた後こうして拘束されている。
「書いたか？……おめぇ、字、綺麗だなあ」
「……キグナスがひど過ぎるんじゃないかなぁ」
俺だって別に習字とかやってたわけじゃないし、取り立てて達筆なわけじゃない。
「次な、次ー……何知りたい？」
「うーん。あと何が便利かな……じゃあ道具屋で行こう。棚に並んでそうな商品名」
ヴァルス語を、英語のアルファベットの綴りとかみたいに構成で覚えているわけじゃなく、耳で聞き取った音から覚えている俺には、

構成する文字を覚えて組み合わせるより単語のかたまりを表記してもらった方が覚えやすい。
　俺の言葉に従って紙の上に「ソーマ草……疲労回復……」とか呟きながら書き出して行くキグナスの手元をぼんやりと眺めながら、俺はテーブルの上に頬杖をついた。
「ヴァルス王家ってさ」
「んぁ？……バケツ……水を入れる……」
　……何を書き出してるんだ？
　まあいいや。
「今はもうユリアだけ、になるのかな……」
　いや……アウグストとシェリーナの娘が生きていれば別だけど。
「直系はな。傍系はいるだろ。先代……いや、もう先々代になるのか？ベリサリオス陛下は豪傑だったらしーからなー。庶子だったらごろごろいるかもなー。……エール酒……シサーのお供……」
「……」
　直系はユリアだけか……。
「ベリサリオス王の更に前にはワインバーガか何かに王家の女性が嫁いだりもしてるし、そーゆーの入れちゃうと、傍系はわっけわかんねぇな」
「ふうん？じゃあワインバーガとは姻戚？」
「ってほどの付き合いには発展しなかったみたいだぜ。それに今は政権交代があったから前王朝だし」
　ややこしそうだからやめよう。覚えてもしょーがない、そんなこと。
「ふうん……」
　さくさくとキグナスが紙の上にまさしく得体の知れない線画芸術を展開している間に、俺はまたヴァルス王家へと頭を戻した。
　ベリサリオスの2人の息子アウグストとクレメンス。
　クレメンスが即位し、アウグストが家族共々ヴァルスを追われた。
　行き先は、ロドリスのはみ出し者の村ヴァイン。

アウグストがどうしたかは知らないけれど、アウグストの妻子――シェリーナとその娘はヴァインで他の村人同様魔物に襲われた。
その魔物はロドリスの宮廷魔術師の腹心をどこか彷彿とさせる。
……シェリーナは、確かに死んでいるだろう。じゃあその娘は？
アウグストは？
（あ、でも……）
アウグストが生きてたって、もう結構な年いっちゃってるよな。
クレメンス陛下がいくつだったのか知らないけど、それより更に年上なわけで。
問題は娘の方？でも娘が生きてたとしたって、そして仮に魔物がグレンフォードだったとしたって……それが、何なんだ？何がどうなる？
（何であの人、『青の魔術師』の腹心なんだろう……）
どう考えたって普通の人間じゃないよなぁ。『青の魔術師』はそれを知らない？……わけない。
「おっしゃー。こんなとこかぁ」
だんだんテーブルに突っ伏すように熱中していたキグナスが唐突に上げた声で、俺の思考は中断された。顔を上げる。
「……大作だね」
「おう！！大作だ！！さあ、遠慮なく書き取れ！！」
「……ありがとう」
頼んだのが俺とは言えいささか呆れた気分になりながら、キグナスが書いてくれた一覧を引き寄せて自分のカンペに書き移す。
「これは何て書いてあんの」
「これはー……」
キグナスの解説をひとつひとつ書き移し、意味を書き込みながら頭に叩き込む。少しでも覚えれば、その分周囲への迷惑が減る。……はずだ。
「キグナスさあ……」
「おう」

「名前、教えてよ」
『大作』を踏破してキグナスに戻しながら、おもむろに言った俺に、キグナスが目を瞬いた。
「……エルアード・キグナス・フォン・ブロンベルグ」
「へえー。それ、フルネーム？……ってそうじゃなくて。みんなの名前の、書き方」
ああ、何だ……と呟きながら、キグナスが紙をまたせこせこと汚し始めた。それに黙って目を落とす。
「……ふうーん。キグナスってそういう名前だったんだ。シェインは？」
「シェイン・アルバート・フォン・クライスラー」
「ラウバルは？」
「ラウバル・アルヴァ・フォン・ラトゥール」
「……ユリア、は？」
答えては書いていくその文字を眺めながら口にした時、少しだけどきどきした。……別に……少しだけ。
「ユリア・クリスティーナ・シェ・フォン・ヴァルス」
さらさらっと書いて、顔を上げる。無邪気な表情でその文字をなぞりながら俺を見上げた。
「クリスティーナってのは、母上の名前をもらったらしいぜ」
「お母さん？」
「そう。クリスティーナ王妃。その妹がシェリーナ妃」
「え！？」
シェリーナって。
じゃあ姉妹でヴァルスに嫁いで来たんだ。
「何でもエルファーラの貴族の娘って話」
「ユリアのお母さん……クリスティーナ王妃ってのは、どうしてるの？」
「もう随分前にお亡くなりだ」
「え……」

そうなんだ。
全く話に出ないからそんな気はしてたけど。
「お体が弱かったみてぇ。俺も良くは知らねぇけど。でも綺麗な方だったらしいな。あと、エルファーラの人には時々いるけど、人を癒すような力があったみたい。治癒、ってのとはちょっと違うみてぇだけど、そばにいるだけで癒されていくようなさ」
……それで、なのかな。
ユリアが歌った歌を、そんなふうに感じたのは。
「ただ、一概に遺伝とも言えねぇみたい。シェリーナ様にはそんな話聞かねぇし。人柄とか素質とか、何かそういうのが関係あるんじゃねえの」
ふうん……。
んでも教皇領ってのは特殊なんだな、何となく。
書いてりゃ多少は覚えるだろと思ってつらつらとそんなふうに思いながら紙に文字を書きなぐっていると、その手元をじっと見ていたキグナスが頬杖をつきながらにやーっと笑った。
「おめぇの名前も、俺に教えてよ」
「え？俺の名前？」
「うん」
「だって俺、どう表記していーかわかんないよ」
「おめぇ、馬鹿？」
……キグナスに言われるのは何だかちょっと心外だ。
「ヴァルス語でだったら俺が自分で書けるよ。カズキの言葉でどう表記すんだ？って聞いてんだろ」
ああ、何だ。
言われてペンを走らせる。ヴァルス文字が書き散らされた紙の中で、『野沢和希』と言う漢字表記は何だか妙に浮いて見えた。
「ふえー。難しいなあ。俺の名前は？」
言われて、正確かどうかわからないけどカタカナで『キグナス』と書いてやると、キグナスはちょっと嬉しそうにそれを覗き込んだ。

「何かカズキの名前に比べて随分簡素。単純」
「人が単純だからじゃない」
「んなわけねえだろッ」
けたたけた笑いながら俺を小突いて、キグナスが立ち上がる。そのまま部屋を出て行くので、また黙々と単語を書き取っていると、やがて戻って来たキグナスは本を片手に持っていた。
「やる」
「？　何？」
受け取ってぱらぱらとめくって見ると、子供向けの言葉の本らしい。ところどころに落書きがある。
「俺が昔シェインに勉強教わってた本。あいつ、馬鹿みてーに保管してあってさー」
「ふうん？じゃあこれ、キグナスの落書き？」
「そう」
2人してくすくすと笑う。こんな和やかな気分になったのは久々だった。前にキグナスに「笑わなくなった」って言われたけど、確かにもの凄く減ったような気も自分でするけれど、時々まだこうして笑えるから大丈夫だと思う。
ページをめくると、俺と同じくらいの年のシェインと、まだ幼いキグナスが見えるような気がした。
「ありがとう」
子供向けの英語の本みたいに、文字とイラストが書いてあるから勉強になりそうだ。

そのまま、頭のページからゆっくり追っていく。しばらく黙々と没頭していると、隣で魔術書を読んでいたキグナスの方から寝息が聞こえていることに気がついた。寝てしまったらしい。
ちらりと顔を向けると、椅子の背もたれに完全に体を預けてくてーっとしている。風邪、引かないだろうか。
起こそうか少し躊躇って、俺は同じ部屋のソファにかけてある膝

掛けみたいなものを持って来た。それをキグナスに掛けてやってそっと部屋を出る。

俺も、休憩しよう。

少し城の中を散歩することに決めてヴァレンティアナを出ると思い切り伸びをした。……ら、あくびがこぼれた。

戻って来てまだ寝てたら、起こしてやろうかな。

館からは、渡り廊下を伝って本城シャインカルクの方へ向かうことが出来る。そちらへは足を向けず、俺は直接庭の方へ向かう出入り口へ向かった。ふかふかの絨毯を敷き詰めた長い廊下についている窓から、中庭の木々がざわざわと揺れている黒い影が見える。城や中庭に設置されている灯火の温かな光が、そっと暗い夜を照らしていた。

（どこに、いるのかな……）

駄目だ、シャインカルクにいると、どうしてもユリアのことが頭から離れない。そんな場合じゃないとわかっているけれど、これで会うことが出来なかったら次はまたいつになるんだろう。

（情けないなー）

自分で自分に呆れながら、くしゃくしゃと髪を掻き混ぜる。会いたい。少しだけで良い。声が聞きたい。笑顔が見たい。そんなことばかりが頭を回って、馬鹿みたいだ。

でかい両開きの扉を開けると、守りについている衛兵が直立した。俺のことをロンバルトの王子サマだと思っている彼らは、総じて俺が通るとカチコチになってくれる。嬉しくない。

「お疲れ様です……」

なんて言っちゃいかんのだろうか、次期ヴァルス国王。

どうしても庶民根性の抜けない俺は、どう頑張っても低姿勢にならざるを得ず、結果としてどうもぎこちないこととなり、出来ればあまり知らない人には遭遇したくない。

入り口から外へ出ると、冷たくない、けれど温くもない気持ちの良い夜風が髪を撫でた。舞い上がる前髪を目で追って、ふと馬鹿な

ことを考える。
レガードをコピっている俺は、髪型もレガードだ。こうして見ると、ちょっと特殊な髪型してるよな。髪形って言うか、髪の色。
一部だけ色が違う髪の色の人と言うのは、他に見たことがない。
(染めてたのかな)
おしゃれ?別にいいんだけどさ、どっちだって。
俺だって染めてるんだし、それをお洒落でやる人がこっちの世界でいないとは限らないわけだし。でも、俺って髪の毛伸びて来てんのに染めてる髪の根元、黒くならないんだよな。何で?何か嫌な予感。
このまま俺、黒髪に戻れなかったらどうしようなどと考えつつ中庭を進んでいく。途中で柵を越えると、そこから先はヴァレンティアナの敷地ではなくシャインカルクの敷地だ。また門兵に遭遇して会釈をしながら通り過ぎる。
(あんまり離れると迷子になるかな)
戻れなくなったらだっさいな……。
シャインカルクの中庭に入り、綺麗に刈り込まれた芝の間を抜ける遊歩道に入る。空を見上げると、輝く下弦の月の下、シャインカルクの城内の灯りが窓から零れているのが見えた。
(せめて……)
窓に映る君の姿だけでも。
……なんて。
(意外にロマンティストじゃん、俺……)
浮かんだ考えに自分でつい恥ずかしくなって突っ込みながら、窓を見上げる。残念ながらその内側には誰の姿も垣間見ることは出来なかった。
しばらくのんびりと庭園を散策し、外から続く階段を上ってシャインカルクの中空庭園に足を向ける。ベンチを見つけてそこに腰を下ろすと、そのままごろんと転がった。
高校の中庭でも、こうして転がっていたことを思い出した。

そこから順番に、起こった出来事を思い返していく。ぼんやりと月を見上げながらベンチに転がる俺の耳に、時折衛兵が巡回する鎧の音が聞こえた。

……やっぱり、ユリアに、会いたい。

触れたい。抱き締めたい。この城のどこかにいるはずなのに。

記憶の中の姿を思い返してみても薄れていくばかりで、手が届かない。

……早く何かつかまなきゃとは思う。

無事見つけ出してレガードをユリアのそばにと思う気持ちは本心だ。

けれど……。

（……本当に？）

心の奥底で意地悪く問いかける俺がいるのもまた、本音だろう。

……どうして、一点の曇りもなくレガードの生還を願える？自分には手の届かない彼女を腕に抱きとめる権利を持つ男の存在を。

残念だけど、俺はそこまで善人じゃない。

（……）

軽く頭を振って、それ以上考えることを自分に禁じる。その考えをつきつめてしまうととんでもない考えに辿り着いてしまう。いくら何でもそこまでは望んでいるわけじゃない。俺と同じ顔の男の死を願っているほど悪人でもないはずだ。

（……戻ろう）

諦めた方が、良さそうだ。今日はもう会えないだろうし、明日だって多分……。

「……」

ため息をついて、ベンチから体を起こす。片足をベンチの上に立てたまま、目を伏せてため息を繰り返した俺の耳に微かな足音が届いた。

衛兵の足音とは種類の違う、軽い音。

何気なく顔をあげる。瞬間、心臓が跳ね上がった。

第2部第2章第10話　オーバーフロー　後編（2）

「……ユリア」
「カズキッ」
俺が来たのとは違う方向……上から中空庭園に続いている階段を、軽い足取りで駆け下りてくる姿。
（幻覚？）
いよいよヤバイ？俺。
呆然として信じられないでいる俺の前に幻覚……もとい、ユリアが近づいてくる。下ろしたままのふわふわの長い髪がユリアの動きに合わせて肩で揺れ、ドレスを両手で摘み上げて息せき切って駆ける姿は、まるで逃げ出してきた花嫁みたいだ。
「良かった、まだいた」
まだぼんやりと動けずにいる俺のすぐそばまで辿り着くと、ユリアは曇りのない笑顔で俺を見下ろした。咄嗟に言葉が出てこない。
……ダサい。
「……どうして」
やっと口から出た言葉は、それだけだった。さっきからずっと鼓動が速くて、ユリアの耳に届いてないか不安になるくらいだ。ベンチから立ち上がってユリアの正面に立つと、ユリアは俺を見上げて目を細めた。息を切らせている。
「シサーに、聞いて」
「シサー？」
「ヴァレンティアナにいるのは聞いたけれど……行くのは、迷って。そうしたら、さっき窓からカズキが中空庭園を歩いているのを見たって教えてくれたの」
心から感謝します、シサー様。
「だから……あ、だからその……別に用事があるわけじゃないんだけど」

「……うん」
急に恥らったようにぱっと口を両手で押さえて言う表情に、微笑が零れた。理由も用事もなく、俺を探して息せき切って来てくれた、それだけのことが嬉しい。
（どうしよう……）
俺、すっげー、好きだ……。
ささいな仕草も、照れたように俺を見上げる目線も、風に揺れるその髪のひとつひとつさえも。
反面、こういう『いかにもお姫様！！』と言うスタイルのユリアを見慣れていないので、可愛いと思いながらもどこか遠く感じられて寂しくも……あるけれど。
「……元気？」
あれほど会いたいと思っていたのに、伝えたいことならたくさんあるはずなのに、こうして会えてしまえば言葉が浮かばない。辛うじて言った俺の言葉に、ユリアはふわりと頷いた。花開く微笑。
「カズキは少し会わない間にどんどん男の子っぽくなってくわね」
「え？……そう？」
からかうように言って浮かべた悪戯っぽい笑みが、たまらなく愛しい。どんな表情も、その声も。
「うん」
俺のすぐ間近で、ユリアが腕を伸ばした。長くなってきた前髪に触れる。まるでそこに全神経があるかのように、熱を持ったみたいに感じた。高鳴る心臓が口から出そう。
「最初に会った頃より、こないだより、また少し伸びたみたい」
「髪？」
「じゃなくて。背」
「ユリアはどんどんちっちゃくなってるね」
どきどきしてるのは相変わらずだけど、精一杯普通を装ってそんなふうに返す。ユリアが拗ねるように唇を尖らせた。……触れてみたい。

「ちっちゃくなるわけ、ないじゃないの……」
「……」
「それに、大袈裟よ。背が伸びてるって言ったって、2エレも3エレも伸びるわけじゃないじゃない……」
「……」
「……カズキ？」
「え？あ、はい？」
ユリアの唇に完全に頭を奪われていた。キスしてみたい、などと突然思ってしまった俺はどっかおかしいんだろーか。
下から覗き込むユリアにヨコシマな気持ちを読まれていそうで、つい赤くなりながら片手で顔を覆う。
「……何の話でしたでしょーか」
「……何考えてたの？」
「いや別に……」
言えるわけがない。
（好きだって言ったら……）
……伝えたら、ユリアは、どうするだろう。
困るだろうか。困る、だろうな。
「大変そうだね」
口から出てしまいそうな言葉を押し留めて、違う言葉に変えて押し出す。何千人何万人の人間の命をその細い肩に背負っているユリアに、余計なことを言って動揺させるわけにはいかない。
伝えることさえ出来ないことに切なさを覚えながら言った俺の言葉に、ユリアが複雑な笑みを返した。
「そんなこと……」
「無理、してない？」
してるに決まっている。わかっているのに、そんな平易な言葉しか出てこない自分が恨めしい。気のきいたセリフのひとつも言えれば良いのに、ユリアがそこにいるだけで頭がいつもより回らない。
「……ん。大丈夫よ。わたしは」

「……」
「座らない？」
翡翠色の瞳が、橙色の灯火を淡く映し込んで煌めく。ユリアがふわりとベンチに腰を下ろすのを待って、俺もその隣に座り直した。
「わたしは、カズキと違って命の危険にさらされているわけじゃないもの。まだまだ努力出来るはずよ。全然足りないわ」
きゅっと淡いルージュの乗った唇を強く結ぶ。ユリアの切羽詰まった表情に、心配になった。
「……ユリア」
「……」
「自分をそんなに追い込まない方が、いいんじゃないかな……」
いや、思い詰める気持ちはわかるんだが。何せことは国家規模だ。だけど、どれほど大事と構えていたとしたって、人間には限界があるに決まってる。
「『まだまだ頑張れる』ったって、自分の許容量１００％頑張っちゃったら、何かあった時にもう力が残ってないよ？」
「……」
ユリアの視線が、無言のまま俺に向く。政治のことなんか何もわからない俺の言葉なんて、どれほどの意味を持てるかわからないけど……。
「周りの為にも自分の為にもどこかで余力は残しておかなきゃ」
少しでも思い詰めた気持ちを軽くしてあげることが出来たら。そう思って笑顔を作る。
「みんなが動いてる。ユリアの力になる為に。見えないけど俺たちも、そう。ひとりだと思わないで。……遠くても……」
「……」
「……遠くても、いつもユリアの為に何がしてあげられるか、考えてるから」
こ、これってちょっと告白めいてないだろーか。大丈夫かな。このくらいなら大丈夫だろう。そう思ってそっと照れる俺の目の前で、

ユリアが潤んだ瞳を上げた。
「ありがとう……」
少しでも支えになれたら。
……本当は俺なんかじゃなくて、本物のレガードだったら……きっともっと現実的に彼女の力になってあげられるはずなのに……。
「みんながそんなふうに、誰かを、何かを大切にしていれば、こんな争いなんか起こらずに済むのに」
俺から目線を逸らして、丁寧に手入れされた木々に顔を向けながらユリアがぽつりと言う。黙ってユリアの横顔を見つめていた俺は、その言葉に微かな疑念が湧き起こった。
誰かを大切に思う気持ちがあれば、争いは起こらないだろうか。
……俺には、逆……に、思える。
「戦争は、一方だけじゃ成り立たない……少なくとも継続はしない」
「……」
「モナやロドリスが攻めてきて、ヴァルスがそれに応じるから戦争になる。……戦わなきゃ守れない」
「でも!!戦えば必ず誰かの大切な人を奪うわ!!誰かが必ず泣いてるわ!!わたしは……」
言っているユリア自身の瞳が、どんどん泣きそうに曇っていく。
それを堪えるように唇を噛んで俯きながら、か細い声で続けた。
「わたしは……シェインが死んでしまったら、泣くわ……」
「……」
シェインが死んだら、か。
戦争に出てるってことはそこで必ず死んでる人がいるわけだし、それがシェインではありえないとは限らないわけだから。
「ヴァルスを守りたいと思ってるわ。心の底から。でも争いたくないわ。争わずに守る方法はないの?」
「……」
「どうして奪う為に戦いを仕掛けるの?ロドリスはどうしてって、そればかり頭を巡るわ」

風に流されそうな儚い呟きに、俺は答えを探して視線を彷徨わせた。

『奪う為に』？――結果として何かを奪うことになったとしたって、それが『奪う為』とは限らない。

「争いが起こる理由は利己的な考え方が全てとは限らないんじゃないかな……」

言いながら気がつく。……そうだよな。争いが起こる理由が必ずしも自己の利益に基づくものとは限らないんだよな……。

野生の動物でも、子供がそばにいれば母親は必要以上に凶暴になる。大切だと思いこめば思い込むほど、神経が過敏になって守ろうと攻撃的になったりする。

俺だってそうだ。ユリアがいなかったらここまで魔物との戦闘に慣れることが出来たかどうか、わからない。奪う為じゃない。……守る為。

その為には、先に攻撃を仕掛けることだってありうる。

「大切だと思えば思うほど、過剰な考えが働いたりして……」

モナの侵略だって、公王が自己の功績に逸ったと言う考え方と、貧しいと言う国民の救済――負担を軽減する権利獲得の為の非常手段だったと言う考え方と成り立つわけだし。

真実どちらかはわからないけど。

ロドリスの……『青の魔術師』の反逆の理由も、まだ見えてないどこかにあるのかもしれないけれど。

「人がいれば、いるだけ考え方がある。その中には真逆のものもあるかもしれないし、争いをなくすことは多分出来ないし、俺は自分の大切なものを守る為だったら」

ユリアを守る為だったら。

「……何を傷つけても良い」

「違う！！」

ユリアが押さえきれないように叫んで立ち上がった。愛くるしい顔には、ただただ悲しい色が落とされている。

「どうしたの？カズキ。それじゃあ駄目よ！！その考え方をする人が争いを起こすのよ。誰も傷つけたらいけないわ！！何の為でも。そうじゃなくたって人は必ず人を傷つけるのよ？傷つけないと決めたって必ず傷つけるのに」

「ユリア」

「守る為に戦わなきゃならないことがあるのは、わたしだってわかってる。でもそこに疑問を感じ、矛盾を感じ続けなきゃ駄目よ。許容したら終わりだわ。……わたしは、あなたを見ていてそう感じたのに」

俺を……？

まさか。

血に汚れた自分の手。脳裏にフラッシュバックする血飛沫。

俺がかつてそんなふうに見えたのなら、それは。

（偽善だ……）

頭ががんがんする。吐き気がこみ上げる。急に襲い掛かった目眩がするほどの痛みの中、自分の心の奥底で何かが悲鳴を上げている気がした。

「カズキがわたしに教えてくれたのに」

悲しげにユリアが繰り返す。胸の奥深くに沈む何かが軋むように、吐き気を引き起こした。――何かを考え、何かを感じそうになるたびに、いつも襲う激しい頭痛。

（……逃げ……てる……？）

俺。

「カズキ？」

――自分の都合でとかそう言うのは、違う……ッ

――大切に思う誰かがいて、大切に思ってくれる誰かがいて……人である以上、それは、絶対で……

（そんなふうに考えてたら、生きていけないじゃないか……ッ……！！）

「……俺じゃ、ない」

「え……？」
「もし、俺を見ていてユリアがそう感じたんだとしたって、それは、今の、俺じゃない……」
くしゃりと前髪を掴んだそのまま額に押し付け、顔を俯けたまま押し殺した声で吐き出す。
「俺は、俺の大切なものを守る為だったら誰にだって、何にだって剣を向ける。躊躇わない。迷わない。時には自分から仕掛けても構わない」
「……カズキ……」
「じゃなきゃ、守れない」
悲しげなユリアの視線を横顔に感じる。目を閉じて、深い息と共に続けた。
「俺は、必要があるなら争いを避けるつもりも、戦闘を回避する気も、ない」
「……それじゃあ、『自分が良ければいい』ってことになっちゃうわ。自分の守りたいものさえ守れれば、それで後はどうでも構わないの？」
「構わないよ……」
ヴァルスの為に何かすることが、ユリアの為になるのなら。
それがユリアを守ることに繋がると言うのなら。
自分の命だって、どうでも良い。
頭痛はひどくなっていく一方で、前髪に突っ込んだ片手で額を強く押さえながらそれきり黙った俺の耳に、しばらくしてぽつりとしたユリアの言葉が届いた。
「……わたしの、せい……？」
意味が分からなくて、顔を上げる。俺の視線にユリアは顔を背けて立ち上がった。そのまま、言葉もなく悲しげな顔を残して歩き出す。
「ユリア……」
掠れた声は、届かなかったかもしれない。少しずつ離れていくユ

リアの背中は、俺の見守る中……やがて小走りに見えなくなっていった。

（嫌われた……かな）

つい先ほど見せてくれたはずのユリアの笑顔が、幻のように浮かんで消える。自嘲的な笑いが零れた。

会いたかったのに。

あれほど、ユリアの姿を望んでいたのに。

（こんなはずじゃ、なかったんだけどな……）

心臓が先ほどとは違う音を立てて、苦い痛みが走った。代わりに少しずつ引いていく頭痛。

（でも……）

嫌われたとしたって、俺は、彼女が大切だから……。

どう思われたとしたって、彼女にした約束だけは……。

「はは……」

今しがたまで手の届く距離にいた彼女の見えない笑顔が、遠かった。

第2部第2章第11話　接触（1）

ギャヴァンへ向かう旅路。
ロドリス国内やファリマ・ドビトークの切羽詰まった道中に比べて、気分的にはかなり余裕のある道中だった。
シサーたちにとっては慣れた道だし、俺も同じ行程を経験済みだし、この辺りに出る魔物は把握済みだし。
実に何ヶ月ぶりに辿るこの道は、いろんなことを思い出す。
（少し、肌寒かったっけ……）
半袖だったな、俺。
レイアと2人で心細くて、ウォーウルフに襲われた。
……って俺の制服、ドコ行っちゃったんだろう。この服で高校の中庭に戻された日には、俺、二度と学校に行けない。
「アウグストの件は、裏に何かあるな、まだ」
ぼんやりと歩く俺の前を、シサーとニーナがのんびりと歩いている。
「ま、あそこまで話してくれただけでもびっくりね。裏にまだ何かあるのは承知の上よ」
「こっちに関係あることじゃなきゃいーけどなー。……ふわぁ……」
「ギャヴァンの復興はどのくらい進んでるのかしらね」
「その前にどんだけ被害に遭ったかだよなー」
伸びながらあくびをするシサーの、束ねた長い髪の尻尾をくいくいとキグナスが後ろから引っ張った。
「シサーん家ってギャヴァンだろ？」
「あぁ」
「なかったりしてなー」
シサーが苦笑いしながら、足でどつく。目を細めてそれを眺めやりながら、俺は気づかれないように小さなため息をついた。翡翠色の瞳が、目の前にちらつく。潤んだ、悲しい瞳に滲む俺を責めるよ

うな色。
……ユリアとは、あれきりだ。昨夜気まずい別れ方をしたきり会っていない。
気にはなる。なってはいるが、おいそれと会えるような相手でもない。昨日のように向こうから会いに来てくれればまだしも、大体俺は彼女の部屋の場所さえ知らないんだ。
『婚約者』がユリアに会いに行くのは別に不自然じゃないだろうけど、部屋を知らないのは不自然だし、俺が部屋を知らないことをわかっている人間には逆に尋ねにくい。
結果としてあのまま……どうにも出来ずにまたこうして、離れてしまっている。
眉根をきゅっと寄せて俺を見据える眼差しが、消えない。笑顔を思い出したいのに、悲しい顔しか浮かばない……。
「ギルドと連絡を取る手段ってのは、何か心当たりはあるの？」
……は。
へこんでたってしょーがない。ユリアの幻影を追い払って、気持ちを切り替えようと今後の行動に考えを向ける。キグナスと小突きあって……と言うよりはほとんど一方的に小突いていたシサーが俺を振り返った。
「昨日な、夜、大神殿の方に顔を出したんだよ実は」
「そうなの？」
そう言えば俺、神殿って行ったことないな。どの辺にあるのかは何となくわかるけど……正確には良く知らないし。
「声かけてくれれば良かったのに」
「別に何しに行ったわけでもねぇからな。挨拶に行っただけで。したら先だっての市街戦で、中心になって抵抗したのが自警軍とギルドだったって話を聞いたんだよ」
え？ギルド？
「じゃあ……」
「ああ。自警軍とギルドには繋がりが出来てるはずだ。本当は商人

の友人から辿ってこうかと思ったんだが、自警軍を当たった方が早そうだ」
「じゃあとりあえずは自警軍？」
「ああ」
頷いて前に向き直るシサーの髪が背中で揺れるのを眺めながら、シンの姿を思い浮かべた。
ギルドが抵抗の中心だったってことは、シンも戦闘に参加してたんだろうか。それとも、ダンジョン探索をしていた彼はいなかったんだろうか。
（シンがいなかったら……）
どうしよう。俺らより先に例のドワーフの宝を追っているわけだから、もうどっか行っちゃったかもしれない。
それは、まずい。
けどだからと言って他に行くアテがあるわけじゃないんだから、とにかくシンがいようがいまいが、ギルドに行って何とか話をねじ込むしかない。望む通りにいかなくても何か新しい情報が入るかもしれないし、そういう交渉ごとはシサーがきっと何とかしてくれるだろう。……他力本願。
のどかな空気に包まれたままギャヴァンへ向かい、レオノーラを出てから2日目の昼過ぎに到着する。戦場になったって話だったから荒れてるのかと思ったけど、復旧が進んでいるのか俺が前に来た時とそんなに大きな変化はなさそうだ。……ま、原爆投下とかするわけじゃないしね。一瞬で街が消し飛ぶとかって話じゃないから、逆に言えば破損も人為的に可能な範囲が限られてるんだろう。
まだところどころ壊れてたりはするけれど、概ね街の人は元の生活に戻り始めている……ような感じがする。それともまだ俺の目に付いてないだけで、大きく破損したところなんかもあるんだろうか。
「結構大丈夫そうだな」
「うん。被害はそんなになかったのかなあ」
「ならいーけどね……」

ニーナが何かを憂いたような表情で街を見回す。どこか人々の熱気を含む街の空気が、ニーナのさらさらの髪をそっと揺らした。何かを感じようとするように、長い耳がぴるぴると揺れる。

「おう。シサー。久しぶりじゃないか」

自警軍の詰めている軍舎は、街の中程よりやや北西にあると言う。相変わらず賑やかな大通りを歩いていると、テキ屋みたいなおじさんが屋台から顔を出した。知り合いらしい。

「おやじ、無事だったか」

「おうよ。そう簡単に死ぬわけにゃあいかねぇだろう」

言っておじさんはけたけたと笑った。けれど良く見ると……あれ？

「……おやじ。指、どうした」

同じことに気づいたらしいシサーの笑顔が、硬いものに変わる。子供向けのおもちゃみたいなものに囲まれて座っているおじさんの、煙草を挟む指が2本足りない。

「ん？あぁ、ちょっとな。あいつらにやられちまってな」

あいつら……モナ！？

「一応お国は避難勧告出してたんだがな。国も冷てぇじゃねぇか。俺たちの街だからな。勇敢な奴らが立ち上がったってわけよ」

誇らしげにおじさんが語る。昼間から酔っ払ってるような赤黒い顔には、良く見ればいくつもの傷痕があった。それも多分まだ新しい。

「まあそん中でちょっと指をやられちまったって話だ。なぁに、大したこたぁねぇよ」

ひらひらと煙草を挟んだまま振る手にはまだ包帯が巻かれ、裏腹の明るい笑顔が痛々しい。捲り上げた袖から覗くごつい腕も、切りつけられたような痕が見られた。それをちらりと見遣って、シサーが真剣な眼差しで口を開く。

「いつも手伝ってた兄ちゃん、いるじゃねーか」

「……お、おお」

「今日はどうした？」

子供が高い歓声を上げて人混みを駆け抜けていく、元気な足音と笑い声が通り過ぎた。彼らにとっては、ひしめく人たちも障害物競走の障害物に過ぎないんだろう。背中に明るい笑い声を聞いたまま、おじさんがふっと寂しげに目を伏せる。

「……あいつは可哀想なことをしたよなあ」

「……」

沈黙が流れた。広場の方から届く楽しげな音楽が、おじさんの表情と沈鬱なコントラストを生み出す。

「もし祈ってやるんだったら、軍舎裏手の方にある合葬墓地に行ってやってよ」

「合葬？」

尋ねる俺におじさんが寂しい目を向けて頷いた。野太い眉の下で細められた小さな目が、微かに光る。

「ひどい有様だったからな。個別埋葬してられる状況じゃなくってなあ。可哀想に一緒くただ」

「……」

「この街守ろうとしたみんなだ。暇見て一度、行ってやってくれや。……海が見える場所に、みんなで一緒に眠ってるからよ」

おじさんと別れて軍舎へ向かう。何となく『自衛隊』のイメージを描いてしまう俺は軍舎も妙に消防署みたいなシンプルな建物を想像してしまっていたんだが、石造りのどっちかって言うと要塞みたいな雰囲気の建物だった。そこまで大きくはないけど。

「知り合いとかいるの？入れる？」

建物伝いに巡っている壁沿いに入り口へ向けて歩きながら尋ねる俺を、ニーナが振り返った。

「隊長をやってる人をね、知ってるの。……ほら。『再会の酒場』ってあるでしょ」

「飲み仲間か」

俺の隣を歩いていたキグナスが、軽く肩を竦める。振り返ったシ

サーが肩越しに苦笑いをした。
「まあ飲み仲間っちゃあ飲み仲間だな。口数があんまり多い男じゃないが、若い頃にラグフォレストの正規軍で騎士をやってた綺麗な剣技の持ち主で……話を聞いてると勉強になったな」
ふうん……『若い頃』ってことは今はもうおじさんだったりするのかな。
「自警軍とギルドが一緒に戦ったって言うんなら、ボードレー……ああ、その隊長だが、彼なら何か知ってるんじゃねぇかな」
「シサーはギルドの人は知らないんだよね？」
蔦の這う壁を眺めながら確認すると、シサーはため息混じりに頷いた。
「新しい頭の顔くらいは知ってるけどな。別に知り合いじゃねぇし」
「自警軍の隊長さんとはどこで知り合ったの？飲み屋？」
話しているうちに入り口が見えてくる。暇そうに見張りの人がいて、防護壁を守っている衛兵と同じ鎧を身につけていた。
「グロダールだよ」
「え？じゃあその時にその人も一緒に戦ったんだ？」
シサーが頷いたところで、見張りの衛兵がこちらに気づいたような欠伸を飲み込んだ。頭を下げてその前を通り過ぎる。……え？いーんだ？
目を丸くしているとニーナがくすくすと笑った。
「元々市民の為の組織だもの。割と自由に入れるのよ」
「へえ」
交番に市民が入ってっても怒られないようなもんだろうか。確かにいちいち見咎められちゃあたまんないよな。その代わり用事もなくふらふら入れるもんでもないんだろうけど。
門を抜けて庭に入ってみると、敷地は結構な広さがありそうだった。建物そのものは『要塞』と言うには小振りな気がするけど、それでも決して小さいわけじゃない。
建物の中に入ると受付みたいのがあって、すぐ広い部屋になって

いた。テーブルとか椅子が結構乱雑に置かれている。違う部屋へ続いてそうな扉や階段が奥の方にちらりと見えた。
「誰かに用ですか」
うわぁ。
受付からひょこんと女の子が顔を覗かせたので、予想をしてなかった俺は驚いた。黒い長い髪を2つに縛った、くりっとした目の女性。シサーと同じくらいかちょっと若いだろうか。『自警軍』にこんな普通の女性がいるとは思わなかった。
「人に会いに来たんだ。手が空いてるようだったら呼んで欲しいんだが」
「いーですよ。誰？」
「隊長の、ボードレーを」
気持ち良く頷いて立ち上がった彼女の顔が、凍り付く。その反応に驚いて、俺たちは黙って彼女を見返した。
「……？　何だ？」
「あ……ご存知ない、んですね」
「……」
その迷うような哀れむような言葉に、空気が凍り付く。強ばった表情で、彼女が悲しげに目を伏せた。
「今は、新しい隊長が」
「……市街戦か」
低く尋ねたシサーの声に、彼女が小さく頷く。誰もが無言だった。階上から誰かの歩き回るような足音だけが響いた。やがて顔を伏せていたシサーが押し殺したような声で静寂を破る。
「……そうか」
「あの、新しい隊長、呼びましょうか？」
気遣わしげに尋ねる彼女に、シサーは作ったような笑顔で辞退した。
「や、いいや。すまないな」
「いえ……」

会釈をして建物から出ていく俺たちに、受付の部屋から出てきた彼女が追いかけてくる。
「あの」
「うん？」
「軍舎を出て裏手の……海の方の丘に、戦死したみんなが眠ってます。その……倉庫跡の、もっと裏手に」
「……」
「お花でも、添えてあげて下さい」
「……ああ。ありがとう」
その言葉を最後に軍舎を出る。傾きかけた柔らかい午後の光を受ける芝の緑ののどけさが、さっきのおじさんの時にも感じたように……却って痛々しさを際立たせて、シサーに声をかけるのが少し躊躇われた。
「どーすっかなあ……」
衛兵にも軽く会釈をして、とりあえず通りに出る。はあっとため息をついて前髪に手を突っ込んだシサーが、少し前の地面に目線を定めたまま呟いた。
「……当初の予定通り、セイルに協力してもらうか……あるいは」
「武器屋のラージルなら何か知らないかしら」
「シサー」
「あん？」
多分内心相当ショックを受けてるんだろうと思うけど、全くその様子を見せようとしないので、どう言葉をかけるべきか少し迷う。
「そのさ……頭の顔は知ってるって言ってたじゃん」
「ああ」
「例えばどっかに飲みに来たりとかさ、しないの？」
もし何か飲みに行ったりしてるような人とかなら、飲み屋で引っかけたり出来ないだろーか。別に直に頭じゃなくたっていーんだけど、他のギルドメンバーは何せ顔がわからない。
俺の言葉に、シサーが少し渋い顔をする。隣でニーナも髪を払い

ながら、吐息をついた。
「見たことねえな」
うーん。盗賊団の頭なんつったら、酒癖と女癖が悪そうなのに。勝手なイメージだが。
「それに、いたとしたっていきなり声かけてそんな話ふっかけるわけにはいかねぇし。と言って、下手に街でギルドを嗅ぎ回ってたら危なくてしょーがねぇし」
「……なあ」
軍舎を出てすぐの場所で今後の行動を決めかねていると、キグナスがロッドで自分の肩を軽く叩きながらぐるっと俺たちを見回す。
「埋葬地、行ってみねぇか？」
「……」
「どうせすぐ近くにいるんだ。……この街を守った人たちだろ？」
キグナスの提案に、一瞬シサーは虚を突かれたように目を瞬いた。それからふっと優しい、寂しい色を浮かべて目を細める。
「そうだな……」
どんな、様子だったんだろうな……。
ぽつっと頷いて歩き出すシサーの背中を追いながら辺りを見回した俺は、市街戦に思いを馳せた。
俺は戦争も戦場も、目の当たりにしたことがない。今は普通に見える光注ぐこの街も、血の雨に晒されたんだろうか。ギャヴァンには他に要塞も城も砦もないって話だから、モナに狙われたのはきっとこの軍舎だったんだろう。とすれば今いるこの辺り一帯も……。
少しずつ、陽が傾いていく。受付の女の子が教えてくれたように、軍舎の敷地を囲う塀が途切れて破壊された倉庫らしき建物を抜けると、次第にゆるゆると道が上っていった。芝みたいな背の低い草が地面を覆う緩やかな斜面が西からのオレンジの夕陽を柔らかく受け止めている。
上りきってみるとそこからは海が望めて、沈み始めた太陽がきらきらと波間に光を投げかけていた。海風が、俺たちの髪を巻き上げ

る。

「ここか……」

丘はそれなりに広くて、少しずつ下りに入る斜面の少し先を、植え替えたばかりのような花が規則性を持って綺麗に並んでいた。何かを囲むように、大きな円を描いている。

一部だけ花が途切れ、こちらに向けて石碑のようなものが建っていた。俺たちの他にも何人か、手を合わせに来たらしい人の姿。石碑の前にも、何か思いを込めているようにじっと動かない人影が佇んでいる。……誰か、知っている人が亡くなったんだろうか。深みのある赤い髪が海風に揺れていた。

「思いの外、痛手を負ったのかもしれねぇな」

芝生を踏んで埋葬地の方へゆっくりと下っていく微かな音と波の音が重なり合う。風が運ぶ潮の香は、最初にこの街を訪れた時のことを思い出させた。

石碑の方へ何となく足を向けると、近づく俺たちに気づいたのか男が振り返った。小柄で、俺より明らかに年上なのに妙に眼差しにあどけなさがある。日に少し焼けた顔は、どこか人の良さそうな感じだった。詐欺とかに真っ先に餌食になりそうな無邪気な目。

「ああ……悪い」

言って石碑の前をどこうとするのを、シサーがかぶりを振って押し止める。

「いや、いい。邪魔をしたみたいだな」

シサーの言葉に、男がくしゃっと相好を崩した。僅かに体をずらして石碑が見えるように空け、再び石碑に向き直る。足元に敷き詰めるように置かれた、たくさんの花束。

「俺は毎日来てるから、構わねーよ」

毎日……。

「あなたも、誰か、知っている方が？」

尋ねた俺をちらりと振り返って、ダークグレーの目を伏せた。

「……」

悪いことを聞いただろうか。
沈黙で答える彼に少々居心地の悪い思いをしていると、男が石碑に目を戻しながら頷いた。
「たくさん」
「……」
石碑の板面に目を走らせると、俺にはまだ読めないヴァルス文字が並んでいる。雰囲気から察するに、ここであった出来事とかここに何があるかとかそんなのが書かれていて、その先に埋葬されている人間の名前が書かれているんじゃないだろうか。定番通りなら、の話だけど。

第2部第2章第11話　接触（2）

「……先頭を切って戦ったって聞いた」
しばらく、ただ繰り返す波の音の中、黙っていたシサーが不意に口を開く。顔を上げた男には目を向けず、石碑に視線を定めたままでシサーが続ける。
「一市民として、礼を言う」
そこでやっと男の顔を見たシサーに、男が小さく笑った。少し癖のある髪に手を当てて、くしゃくしゃと掻き混ぜる。思わずキグナスと顔を見合わせた。
（『先頭を切って戦った』って……）
この男、ギルド！？
「別に、俺らだって困るからな。俺たちの、街だから」
うっそぉ……。
シサーが顔色ひとつ変えなかったから全く気がつかなかった。男の方も特に何も尋ねないってことは、ギルドの人間だってわかっていることはさして特殊でもない、んだろう。
「……当時、俺はここを離れててな」
また石碑を眺めながらシサーが呟く。ギルドの男が、ちらりとシサーが帯びた剣に視線を落とした。
「傭兵か何かか？それとも冒険者？」
「傭兵だ。いたら、何か力になれたかもしれねぇけど」
「そうだなー。一緒に戦えたかもしんねーな」
「……ボードレーが、戦死したと聞いた」
ぽつんと言った言葉に男が顔を俯ける。
「ボードレーの、知り合いか」
「ああ」
男が石碑に手を伸ばす。差し出した指先で板面の名前をなぞった。一カ所でぴたりと止まる。それを目で追っていたシサーが続けた。

「……一緒に戦場に出れれば良かったのに」
「……」
傾いていく陽に、お参りに来ていた人たちが少しずつ帰っていく。海上の冷気を集めた風が冷え込んできて、シサーの長い髪をさらおうと弄ぶ。
「あんた、名前聞いてもいーか？」
「ああ。俺はシサー。ギャヴァンの東南に家がある。こっちはニーナだ。そっちはカズキとキグナス」
ついでに紹介してもらって頭を下げると、男の視線がぐるっと俺たちを見回した。
「ふうん？俺はジフリザーグ。ジフでいい。……傭兵か。みんな？」
「俺とニーナはな。後は……」
言いながら俺とキグナスを振り返ったシサーが、微妙な沈黙の後、苦笑をした。
「……ま、おまけだ」
おまけ！？
ひどすぎる。そりゃあ職業聞かれても困るんだが。
俺とキグナスの責めるような視線をあっさり無視して、シサーが男……ジフに向き直った。
「でも、街が灰塵に帰すようなことになんなくて良かった。……モナの、フラウみたいにな」
ジフが小さく笑う。
「まさか。相手は大国リトリアじゃない。こちらも、大都市だ」
「ドワーフの集落のようにはいかないか」
「もちろん」
邪気のない笑顔でシサーに頷いたジフは、それから軽く伸びをした。あくびを噛み殺すような顔をして髪をかきあげる。
「あのドワーフの集落にも、生き残りがいるだろうにな。……今頃、失った故郷に思いを馳せているかもしれねぇな」
「ギャヴァンの市民がそんな思いをすることがなくて良かったよ。

……さあって」
　シサーに答えて、ジフリザーグは石碑に目を戻した。それから、遠く揺れる波間へ。
「……俺は、そろそろ帰るかな」
「悪かったな。『対話』の邪魔をしたみたいで」
　歩き出したジフの背中へシサーが投げた言葉に、ジフが顔だけ振り返る。人懐こい笑顔。
「言ったろ。俺は毎日来てるから構わねーって。……じゃな」
　薄暮の中、遠ざかって行く背中を黙って見送り、その姿が完全に闇の向こうに紛れてから、シサーが低く言った。
「ギルドの頭だぜ」
「――えッ!?」
　俺とキグナスの驚きの声が重なる。……頭!?
「じゃあ超重要人物じゃん!!」
　あっさり別れちゃって良かったんだろーか。
　目を剥く俺に、シサーが苦笑を返した。
「別に今ここで何を聞いたところで何も答えちゃくれねぇよ。結構食えねぇと思うぜ」
　そりゃあ仮にも盗賊まとめてる人なんだから……あっさり口を割るとは思えないけど……。
「ギルドがレガードのことを何か知ってるんだとすりゃあ、頭が知らねぇわけねーだろう。少なくともシンって奴がお前の顔見てレガードと繋げてんだ。知ってる可能性は高いな?」
「……うん」
「なのにあいつ、お前の顔を見ても僅かたりとも動揺しなかった。目に、ほんの僅かな驚きを滲ませることさえしなかったんだぜ?……大したもんだ」
　……シサーだって大概人のこと言えないよ。ジフの顔見た瞬間からギルドの頭だって気づいてたんだろうけど、微塵もそんな素振り見せなかったじゃないか。おかげで全く気がつかなかった。どっち

も狸だ。
「んじゃあ、どーすんだ？」
「……とりあえずちょっと、街を歩くか」
キグナスの言葉に、シサーが歩き出す。ニーナが後を追いながらくすっと笑った。背中から受ける夕陽の名残が、ニーナの整った顔に陰影を刻んだ。
「おいしい屋台なんかもいっぱいあるわよ。今のうちに食べておいた方が良いかもね」
「カズキも前はそれほどゆっくりしてないし、キグナスもあんまり来たことねぇだろ？せっかくだから見物してけよ」
「あ、うん」
シサーの言葉に頷いて後を追う。　さっき上ってきた緩やかな丘を下りながら、微かに合葬墓地を振り返った。
心の中で、祈りを捧げる。――そっと。
（守る為に戦ったあなたたちに……）
心からの、冥福を……。

◆　◇　◆

ジフと別れてしばらく、シサーはギャヴァンの街を歩き回った。ゆっくりと無作為に、かなりの広範囲を歩き回る。至るところで街人に声をかけられ、戦闘の時の様子やその後の復旧作業のことなどの情報を仕入れ、俺は素直にそれが目的なのかと思っていた。
完全に日が沈み、夜がやってくる。街中の街灯や店頭のランプに心癒すような柔らかな光が灯り、ヴァルスの港街はどこかセピアめいたオレンジの灯りに包まれ始めた。
喧噪は相変わらずだ。宵闇が街を支配しようとしても、この街の人々は屈するつもりがないらしい。むしろ夜が濃くなるにつれてますます賑やかになっていくみたいだ。
ロドリス王都フォグリアでも感じたけれど、昼と夜は華の色が違

うように思える。
「……そろそろ、行くかな」
「え？」
ぼそっと言ったシサーに、ニーナが頷く。軽く俺を振り返ってみせた。
「今日の宿泊先にね。シャインカルクほどのおもてなしは出来ないけど。眠る部屋くらいは提供出来るわ」
やっとシサーとニーナの家に向かうらしい。ニーナの言う通りちょろちょろと屋台を覗いたりもして腹は減ってないけど、疲れて今度は少し眠い。
「……こんだけいろんな人を知っていてさ」
変わらずのんびりした足取りで人通りの多い大通りを逸れていくシサーの背中に、疑問を投げかける。
「何でギルドの場所はわかんないの？」
何か知ってても良さそう。あるいは知っている人を知っているとか。
素朴な疑問だ。
俺の問いにシサーが微かに鼻の頭に皺を寄せてから、軽く困ったような笑みを浮かべる。
「ギルドの場所は、変わるんだよ」
変わる？
「ギルドは本部と支部があるんだけどね、本部の場所は団員の幹部しか知らない。支部は団員以外の闇稼業の人間なんかも知っていたりするけれど、その場所を頻繁に変えるの」
「移動先を知る手段は一般の人間にはわからねぇな」
ふうん……。
「ギルドって、どのくらいの人数がいるの？」
「さあ……正確には知らねえが、１００人はいないだろ。ン十人ってとこじゃねえかな」
中小企業ってとこ？でもそんだけの人数がいるもんを、しょっち

ゅう移動すんのってしんどそうだよなぁ。そりゃあ別に無意味にやるわけじゃないだろうけど、ご苦労サマって感じだ。
「どっちかって言うと家につく前に……外のうちに仕掛けて来て欲しいんだけどな」
……は？
「そうねー。ま、何もないならないで、違う手を考えるしかないわね。……今、何人？」
「さあなあ。俺がわかる範囲は2人。もっといるだろう」
「家だけ確認するのかも」
「でもそうだったらひとりでコト足りるだろう」
……あちゃー……。
今頃気づいた。シサーが街中歩き回ってた意図。思わずしかめ面で額を片手で押さえつける。
「……そーゆー『囮』みたいなことやってんなら先言って」
「『囮』？」
隣でキグナスがくりっとした吊り気味の目をしばたかせ、対するシサーがにやーっと笑ってみせて前に向き直った。
「おう。勘がいーじゃねーか」
逆だよ。今の会話を聞いてわからない方がおかしい。むしろもっと早く気づくべきだった。
「だっておめぇらに言ったら行動が不自然になって尾行に気付かれちまいそーだかんなー」
「……ついてんだ？尾行」
「おう。ばっちりな」
危ないじゃん。
はーっとため息をついて、さっきのシサーとジフの会話を思い出す。
『フラウ地方』。
『ドワーフの集落――生き残り』。
わざわざこの単語を示唆することで、ジフの注意を引きつけたん

だ。
（馬鹿……）
何で気がつかなかったんだろう……。
「？　何？」
俺以上に感づくのが遅いキグナスが首を傾げる。声を潜めてそっと教えてやった。
「ギルドの尾行だよ」
「え！？」
「馬鹿！！」
言った途端頓狂な声を出され、思わず平手で目一杯キグナスの頭を叩きつける。「いてぇー」と呻きながらキグナスが地面にしゃがみこんだ。
「振り向いたりするなよ？」
「……何で尾行？」
「シサーがさっき、話を振ったからだろ」
それから、シサーの背中に小さく問う。
「……どーすんの？」
「何が起きても抵抗はするな。しゃべるな。……ギルドは今、無用な殺戮の制限をされてるはずだ。こっちが下手な真似しなけりゃ殺されるようなことはまずねぇだろう。大体、俺たちが何を知ってるのか知りたいはずだ。殺しちまったら何もわかんねぇからな」
「……うん」
「ただし、下手な真似すれば即効性の毒を仕込んだダガーがシュッ……だ」
言いながらシサーが、軽く手首を振る。ダガーを投げる真似をして見せて、おどけたように舌を出した。
「さっきジフに直接フラウの話を振ったところで、話しちゃくんねぇだろうと思ったからな。俺たちの目的はフラウの件で交渉がしたいだけだ。出来ればギルドに案内してもらえればありがたい。レガードの件もあるしな。……出来るだけ、ギルドともめたくない」

「……うん」
「だから向こうから仕掛けさせたんだよ。……チャンスは1回きりだ」
「……うん」
「キグナスも魔法で何とかしようとか思うなよ。呪文が完成する前にお亡くなりだ」
「……わかった」
一通り俺たちが理解したところから、辺りは次第に人気のないものになっていった。建物とかないわけじゃないんだけど、倉庫とか会館みたいな雰囲気。住宅街や商店って感じじゃない。ところどころに広い草地があって資材とか積まれたりしている。
「この辺は随分寂しい感じだね」
「ああ」
「シサーん家ってこっちの方？」
キグナスもきょろっと辺りを見回して尋ねる。遠い大通りから流れるざわめきが他人ごとみたいな静けさ。
「本当は別の道からも行けるんだけどな。ここを抜けるとまた少し、人が住んでる区域がある。そんなにたくさん住んでるわけじゃねーけどな。その一画だ」
他の道から行けるってことは……きっとわざわざ人通りの少ない道を選んでるんだろう。……狙いやすいように。
シサーに合わせてゆっくりと歩く。『襲われる』のが前提とくれば妙に構えてしまって当然だろう。意識して背後の気配を探ろうとしてみるけれど、残念ながら俺程度では何も感じることが出来なかった。尾行がついてるなんて到底思えない、完全な静寂。
（シンが来たりしないかな……）
そしたら少しは話が早い……。
（……）
かどうかは謎だけど……。
愛想ないもんなぁ……。何も話してくれないし。友好関係が成り

立ったと思っていーのかさえわかんないし。必要があれば遠慮なく殺されそう、俺。

日夜一緒に行動したあの数日間は何だったんだろうとそこはかとなく虚しくなって、ため息をつく。何か感じたような気がして何気なく振り返って、次の瞬間首筋にひんやりした感触が触れた。ぐいっと腕を引っ張られ、そのままねじあげられる。

「いてぇッ……」

良く見りゃ俺のすぐ後方を歩いていたはずのキグナスもしっかり同じ状態だ。いつの間に。

俺とキグナスを押さえつけている2人はそれぞれ若くシンや俺らと年が近そうに見える。知らない人だけど。そして更にその背後に2人シサーと同年代くらいの男が影のように立っていた。前を歩いていたシサーとニーナが振り返り、後ろの男たちのダガーや、俺には名前のわからない射程範囲の広そうな道具が狙いを定めた。

「聞きたいことがあるだけです。別に害を加えるつもりはない」

俺にダガーをつきつけている男が口を開く。ちらりと視線を落とすと、ダガーには何かてらてらと光るものが塗られていた。やだなあ、毒なんだろうなぁ……。

それから後ろの男が小さく笑ったのが聞こえた。

「予想済みなんだろ？」

それに答えて、シサーが軽く肩を竦める。

「何の話かな」

「頭がね、言ってましたよ。『あーやだなあ。絶対こっちが食いつくの狙ってんだろーなー。やだなあ』ってぐずぐずと」

ぐずぐず……。

何か、『盗賊団の頭』ってイメージを着々と崩してくれる人だよなあ……。

緊迫してる場面なはずだけど、俺にナイフ突きつけてる男がラフな丁寧語なので、つい気が緩む。キグナスを押さえている男が吹き出して突っ込んだ。

「ゲイト」
「ま、ともかく。……こっちも手荒な真似をする予定はないんすよ。今んトコは。話の内容によりけりだけど、何にしてもちょっと黙って付き合ってもらえませんかね？」
だけど、そこに潜む迫力は本物って感じがした。シンと似た匂いと言うか……油断したら本当にやられそうな。
必要があれば、多分殺すことをためらわないんだろうなと言う印象を受ける。
「って言っても、無理にでも付き合わせるつもりだろう？」
「やだな、あんたもそういうつもりなんでしょ？」
俺の首筋のダガーはそのままに、ゲイトと呼ばれた男が軽く顔を伏せて笑う。
「あんたらもこっちに何か話があるから餌を撒いた。こっちにとって問題なのは、あんたらが持ち込もうとしてるのがメリットかデメリットかってことっすね」
対の腕輪ひとつとは言え、「宝の一部をよこせ」って話だからデメリットかもしれない。
でも、ヘイリーの話を考えればギルドだけじゃあそもそも宝に辿りつけないかもしれない……そう考えればメリットかもしれない。
どちらに取るかはギルドの頭……ジフリザーグ次第、と言うところだ。
「おっと。物騒な得物だけは、こっちにもらっときましょーか。わかってると思いますけど、余計な真似はしない方が身の為だ。素直に聞いて下さいね」
ゲイトが続けた言葉に、シサーとニーナが剣を前に投げ出す。それを見てゲイトは、俺が帯びている剣もベルトごと解除した。キグナスのロッドも、押さえている男の手の中だ。後ろに控えていた男2人が油断ない顔で歩み寄り、拾い上げる。それを確認して、ゲイトが再び口を開いた。
「じゃ、行きましょうか。……あなたたちの望み通り」

第2部第2章第12話　盗賊ギルド　前編（1）

目隠し。
後ろ手にロープ。
で、盗賊に連行されている。
普通の高校生活で体験出来ることじゃなかろーと思えば、ありがたくて涙が出ると言うもんだ。
俺のそばには最初と変わらず、ゲイトと言うらしい年の近そうな男がそばにいる。……と思う。気配も足音もほとんどしないので、時折本当にいるのか不安になるんだけど。
俺たちは多分、人気のない細い道を引きずり回されているような感じだ。速度を変えたり、途中でぐるっと体を回転されて方向感覚を狂わされたりもしたから、土地勘があるはずのシサーとニーナを警戒しているんだろう、多分。車なんて便利な誘拐道具はないわけだし。
人のざわめきは、遠い。人気のないところを移動していることに違いはないようだ。風が運ぶ波の音は遠くなったり近くなったりする。
やがて進む足がゆっくりになった。物音がする。ギィ……と何かを押し開けているような音？ゲイトの手に歩くのを止められてじっと待っていると、やがてそっと押された。ひんやりした空気が流れ出てくる。
「階段があるから、気をつけてもらえますか」
はい！？
「足下、滑りやすいですから」
おいおいおい。
一応気遣ってくれているのか、速度はかなりゆっくりだ。目隠しをされていて尚、視界が暗くなったのがわかる。それなりに整備されていただろう道路から、確かに滑りやすそうな湿った石畳の雰囲

気。けれどこの石畳もデコボコとかではなく、それなりには整備されていそうな感じだろうか。

階段がある、と言ったってどこから階段なのかわからない。ゲイトがまた注意を促す。

「あと1．5エレくらいです」

え?えーと、1エレが大体1．5メートルくらいだったから2メートルちょいくらいか?『エレ』と言う感覚がないので計算するのが面倒だ。

ゆっくりと気をつけて歩いていくと、段差にぶつかる。足の裏、前の方には地面がない。下り階段だ。

見えず、手も使えず、見知らぬ場所で階段を降りることがこれほど心許ないとは。魔物との戦闘やロドリスの追撃から逃れて、こんなところで普通に転落死したら浮かばれない。

ゲイトが手を貸してくれてようやく下りきる。ちなみに他の人がどんな様子かは見えないから知らない。

(水音……?)

今までそれどころじゃなくて気がつかなかったけど、平らなところに出てみると周囲の音に耳がいく。

確かに水の流れる音がしているみたいだ。そんなに凄い音じゃなくて、浅い水位でゆっくりと流れるような。

時折『ぽちゃーん』と言う音と、俺たちの足音が響く。……俺たち、とは言っても盗賊たちのは数に入らない。どうやったらこんな静かに歩けるんだ?まるで幽霊につき従われてる気分だ。

(水路、かな)

この空気の冷たさと湿り気を帯びた岩の匂い、感触……覚えがある。

「ゲイト……さん」

水路らしきところに入ってからは、総じてゆっくり歩いてくれる。ジフと言い、この人と言い……シンと言い、本物の『わるもん』て感じがしないものだから、つい緊張感が緩い。

声をかけた俺に、隣で小さく笑うような気配がした。
「……ゲイトでいーすよ。何」
「じゃあゲイト。……今ってギルドに向かってる、んですよね」
「まあ……そうなるな」
「シンって、いるんですか」
俺の問いに、言葉に詰まったような沈黙がある。けれど実際俺の言葉をどう受け止めたのかは、わからない。表情や微妙な目線なんかが、人間の感情を読み取るのにいかに多くの情報を与えていたのかがわかる。見えないから、残された『声』と言う情報だけでは、俺には想像することさえ難しい。
「……何で？」
「前に、助けてもらったから」
「……」
そのくらいは言っても問題はないだろう。他人の命を助けて咎め立てされることはない、と思うし、助けてもらったんだからシンの素性を知ってもおかしなことはない、だろうし。
市街戦があったことを考えれば、無事なのかどうかくらいは知りたい。……この雰囲気からすると、死んじゃったりとかはしてない、のかな。声のトーンが急に落ちるとか、そういう悲しい匂いは感じない。
「悪いんだけど、今は答えられないな」
困惑をはらんだ声が、沈黙の後に返る。
「何で？」
つい素で突っ込むと、ゲイトが小さく笑った。
「あんたも変わってるなあ。あんたら、今盗賊ギルドに連れてかれようとしてるんすよ？武器を取り上げられて。怖くない？」
ジフとシンを見てるから何か怖くないなあ。
「別に……」
「あんたらがこっちにとってどういう相手なのか、まだ判断がつかないんでね。ギルドのことを話すわけにはいかないですね。ま、も

うちょっと辛抱して下さい」
もうちょっと辛抱して、『こいつら用なし』と判断されたら消されるんだろうか。沈黙した俺に、ゲイトが苦笑する声が届く。
「代わりに今日の天気の話とかならつきあいますけど」
……何だって異世界まで来て初対面の盗賊と目隠しされて天気の話をせにゃならんのだろう。
「や、いいです」
仕方ないので、しばらく黙って黙々と歩く。後ろからキグナスがくしゃみをする声が聞こえた。
「寒いのか」
「酒でも飲ませてやろーか」
「倒れちゃうんじゃないか？」
「そいつ、そー見えて　ザルだからどこまででも飲むぜ」
「何ぃ？やるなあ……」
緊張感ないよなぁ……。
「……そろそろいーか」
半ば呆れた気分で歩いている俺の隣で、ゲイトがぽつりと呟く。それと同時に止められた。目隠しを外される。
2、3度目を瞬き、辺りを見回す。真っ暗で何も見えない。目を凝らしていると次第に目が慣れてきて僅かに視界が戻る。予想通り湿り気を帯びて微かに黒い岩壁が光った。
細くて狭い通路だ。天井も低い。聞こえていた水音は、今はもう聞こえなかった。水路の跡のような溝を歩いているみたいだけれど、水の名残はない。
どうでもいいけど、こんな暗闇で良く迷わずに歩いてるよな。
「もう、目隠しはいらないんですか」
全員が目隠しを外されたのを見て、歩き出すゲイトの背中に尋ねる。ちらりと顔だけ振り返って、ゲイトがくしゃりと笑みを浮かべた。
「ここがどこだか、もうわかんないでしょう。地下水路なことはわ

かるでしょうが、どこの入り口からどう歩いてここまで来たかは、彼らもわからないはずだ」

微かに目でシサーたちを示して、俺に目を戻す。

「だから、もういらないです。ギルドに辿りつくのは不可能でしょうから」

そこからもまたしばらく、水路を右に曲がったり左に曲がったり、少し高い位置にあるような細い水路をくぐって抜けてまた降りたり、進路は複雑この上なかった。本当にこういう道筋なんだろうか。それともやっぱり、わざと複雑な移動の仕方をしているんだろうか。

ぐねぐねと進み、ようやく壁に鉄梯子のついた行き止まりで足を止めた。どうやらこれを上るらしい。

「……」

……すみません、俺、両手を縛られたまま垂直に梯子を上るなんて離れ業が出来る自信がないんですけど。

つい冷や汗を浮かべて無言でゲイトを見ると、梯子に沿って上を見上げていたゲイトが先ほどより小振りなダガーを抜き出した。毒は塗られていないようだ。ゲイトもそんな曲芸まがいを披露させるつもりはないらしく、ダガーでロープを切ってくれる。

「ありがとう」

と礼を言うのも妙な気はするが。

自由になった両手をぷらぷらしてみると、縛られていたわりに痛くはなかった。跡もない。結構がっちり縛られていたはずなのに、どういう技術なんだろう。

盗賊たちに促されるまま梯子を上る。天井は開閉出来るようになっていたらしく、今は開いていた。抜けた先は天井が低くて頭をぶつけそうだ。石造りの建物の一部のように見える。床下みたいなそっけない雰囲気。

そこを抜けるとまた下り階段があって、石階段を下りながら思わず呆れた。

「いつもこんなふうに行ってるの？」

ゲイトが笑う。
「まさか」
ああそう。やっぱり俺たちを混乱させる為なわけね。
階段を下りきると扉があり、木製のそのドアから中に入るとようやく建物の中、といった感じの場所に出た。確かにもうここがこの街のどこに位置するのかなんて、俺にはさっぱりわからない。
通路の壁にはところどころドアがある。部屋があるらしい。壁も床も石造りで、装飾品などがいっさいない……無愛想な建物だった。不意に前方のドアが開いて、ひょろっとした感じの男が顔を覗かせる。
「ボードヴィル。どうしたんだ？……何だ？ぞろぞろ連れて」
顔を覗かせた男が、シサーのそばについている男に向かって尋ねた。ボードヴィルと呼ばれた茶髪の男がひらりと片手を振ってそれに応える。
「頭の希望で、ちょっとな」
「ふうーん」
「頭、どこ行った？」
「さあ？ここのどっかにはいるんじゃねーか？」
そう言や本部と支部があるとかって言ってたっけ。ここはどっちなんだろう。
ひょろっとした男と別れて俺たちが連れて行かれたのは、通路を曲がったところにある部屋だった。何かがらんとしている。木製のテーブルの上にカードゲームみたいなものが乱雑に散らかっていた。そばのグラスには飲みかけのまま忘れられたような気の抜けたエール酒。男所帯って感じ、何か。
「ここで待っててくれますか」
ゲイトのその言葉を最後に、今までそばにいた盗賊たちがドアの外に姿を消す。扉を閉められると、完全に俺たちだけになった。
「だあーッ。くそ、疲れたなあッ」
シサーが手首を振りながらぼやく。それを見遣りながら、キグナ

スがテーブルに向かう椅子をひいた。
「結構歩かされたぞ」
「地下水路たぁなー」
「どういう意味？」
ぼけっと立っていても何もならない。足が疲れたので、俺も手近な椅子をひいて腰を下ろす。
「地下水路があるのはまあ、知ってるけどな。見ての通りかなり複雑だ。下手に入り込んだら二度と出られねぇって言われてんだよ」
確かに。
「普通の地下水路ならともかく、旧地下水路ってのもあるらしくてな……そいつがまた複雑に入り組んでて……それを利用してんだな。ギルドは」
ふうん……。
「レガード、いると思う？」
テーブルに頬杖をつきながら、指先で散らばったカードを弄ぶ。俺には見慣れない絵柄のカードで、どうやって遊ぶものなのか見当がつかない。
「さあな。ここにいるかはわかんねーし、いたとして素直に話してくれんのかわかんねーし。それについてはシンって奴がいたらそっちに聞いた方が……」
シサーが壁に寄りかかって腕組みをしたところで、再びドアが開く。姿を現したのは先ほど石碑の前で遭遇した男……ジフリザーグだった。思わず立ち上がる。
「別に座っててーさ。歩き回らされて疲れたろ」
目を伏せて笑いながら軽く肩を竦める。中に足を踏み入れながら、ちらりと目を上げた。
「……っと。その前にも随分街中を歩き回ったみたいだしなー」
ジフの後ろからゲイトと、知らない男が2人入って来た。髭を蓄えた年輩の男性と、ゲイトより少し上くらいに見える金髪の男性。
「そんなに構えないでくれ。別に何をしようってわけじゃない。こ

っちも聞きたいことがあるし、あんたらもそうだろう？それをお話し合いしてみようって話だ」

言いながらジフは、俺たちに向かい合うような形で椅子を引いた。座るジフのサイドに2人の男が黙したまま立つ。

こうして見ると、石碑の前にいた時とは少し違う人物みたいに見えた。もう少し大人びて見える。少し、そう……『裏』の匂いを放っている。

「シンと会ったんだろ」

ジフは斜め前に座る俺に、口元に笑みを浮かべながら尋ねた。黙ってそれを肯定する。ジフが苦笑いに似た笑みを浮かべてくしゃっと赤毛をかきあげた。

「あいつ愛想ねーからなー。そっけないだろ」

まったくその通りなんだけど、肯定しちゃっていーんだろーか。つい返答に詰まる俺には構わず、ジフは続けた。

「あいつ、俺に向かってダガーを投げつけやがるかんな」

「……」

それは冷たいとかそっけないとかとは次元が少し違うと思う。

それからジフはふいっと顔を上げて俺を見た。目に浮かぶいたずらっぽい笑い。そのまま、話題を転換する。

「あんた、どこの国の人間だ？」

その問いに、俺はまた返答に詰まった。今度はさっきのように軽い意味じゃない。ジフの質問の意味は多分、レガードと絡んでるだろう。どう答えたものだろうか。

迷って、俺は慎重に口を開いた。困ったら、むしろ相手に答えさせてこちらの判断材料を増やそう。

「どこの国の人間に、見えますか」

「……さあーてな。少なくとも、ヴァルスじゃねーな」

質問に質問で返した俺に、ジフがにやにやと笑う。シンは俺のことをジフにどのくらい話してるんだろう。ギルドはレガードの、何を知ってるんだろう。

「どうしてヴァルスではないと？」
「言葉がな。綺麗にしゃべってはいるが、どっか自然じゃない。イントネーションや言い回しに、微妙な癖がある。ヴァルス語を母国語としない話し方だな」
「……ご想像に、お任せしますよ」
言って俺は、曖昧に微笑んだ。特に答えなくても責められるような話じゃないだろう。ジフがひょこんと眉を上げて肩を竦める。深く追及するつもりはこちらもなさそう……。
「あ」
その顔を見ていて、不意にシンのダガーを預かりっ放しなことを思い出した。
咄嗟に呟いてしまった俺に視線が集まる。しまった、どうしよう。そんなに見られたら何か言わなきゃいけないじゃないか。
「実は……」
言いかけて、背後の壁にもたれたままのシサーを振り返る。下手なこと言って余計になったらまずいだろーかと迷ったが、シサーが「どうぞ」と言うようにひらっと手を動かしたので従うことにした。
「実はシンに渡したいものがあって」
「渡したいもの？」
微かにジフが眉を寄せる。頷いた俺は、荷袋の中から持ったままだったシンのダガーを抜き出した。テーブルに2本並べて置く。ジフが目を瞬いて1本を手に取った。
「……？」
「あの、拾ったんで。シンが同じものを持っているのを見ているし、返してあげた方がいーのかなと」
言った瞬間、ジフが吹き出した。
「……何ですか」
「いや……それでシンに会いに来たわけじゃねーだろ？」
そんなわけなかろーが。
良く見ればジフの両サイドの2人までご丁寧に笑ってくれている。

3人より更に後ろ、ドアのそばにひっそり控えていたゲイトに至っては、向こう側を向いて腹を抱えている。……馬鹿にされているんだろうか、俺。

「……ま、じゃあこれはありがたくシンに返すとして……ゲイト」

「わかりました」

まだ笑いを噛み殺すような表情でダガーに手を伸ばすジフに名前を呼ばれたゲイトが、するりと部屋を出て行った。扉が閉まってから、壁に背中を預けたままのシサーが低く口を開く。

「どこで拾ったかは興味がないか？」

沈黙してジフが目を上げた。シサーを見るジフの目には、俺に向けた時にはなかった警戒の色があるような気がする。対するシサーはもちろんだ。お互い、不利にことが運ばないよう探り合っているからだろう。逆に言えばジフはシサーのことを舐めてない。俺は対象外。……どうせね。

「……どこでもいーさ、別に」

「『うみにみえるところ
うみのめがみがあらわれるとき
うみへつづくみちをさがせ』」

ぼそりとシサーが続ける。相変わらずジフの表情からは何も読めない。訝しげに眉を微かに顰める様子は本当に何も知らないみたいだ。

……シンに聞いてないのかな。

そっと内心首を傾げる俺の横で、シサーが小さく笑ったのが聞こえた。

第2部第2章第12話　盗賊ギルド　前編（2）

「3つの鍵は手に入れたんだろ」
「……街を見たか？」
シサーの言葉には触れず、ジフがふと思い出したように問う。話の展開をねじ曲げたジフに、探るような目線を向けながらシサーが頷いた。
「まだ、あちこち壊れてるだろう。軍舎裏の資材倉庫や東側の防護壁なんかな」
「……ああ」
「その辺を爆破したのは主に俺らだったりするんだが」
そう言ってジフは、苦笑を浮かべた。けれどその瞳が、寂しそうに曇っている。
「最近になってようやく、街が動き始めた。ようやくだ。少しずつ人が、元の生活に戻っていく。けれどまだ、完全じゃない」
伏せた瞳を上げて、テーブルの上に両肘をつく。顔の前で組んだ両手越しに、ジフが真っ直ぐシサーを見た。
「国はアテにはしていない。援助は望むところだが、それどころじゃないだろうこともわかっている。……言いたかないが、資金、労力の提供に多大な貢献をしているのは、俺たちだ」
ジフの意図するところが読めなくて、沈黙を守る。こういう繊細な展開をしている場合、俺のような素人が下手に口を挟まない方が得策だろう。馬鹿なことを口走って何らかの言質をとられてもたまらない。
「まだまだ足りない。回収もしなきゃ、こっちもやってられない。……あんたも市民ならわかってくれるよな？」
ちらりと振り返ると、シサーが渋面で前髪に片手を突っ込むところだった。それから渋々、と言う感じで頷く。
「……ああ。感謝しよう」

その言葉を聞いて、ジフがにやりと笑った。
「ギルドは資金源をトレジャーハントから調達している。情報と協力なら望むところだ。俺たちはギャヴァン市民の良心に期待している。……話を聞こうか？」
はー……そーゆーことか。
ギルドにとってメリットのある話以外は最初から口にするなと言う、言外の強迫。俺たちの話を聞いて、メリット・デメリットを判断するんじゃなくて、最初からメリットしか受け入れないと言う強い、けれどさりげない姿勢。
挑戦的な色合いを浮かべて見据えるギルドの頭に、シサーがしばし沈黙した。やがて口を開く。
「……いいだろう。それほど悪い話じゃないはずだ」
「ドワーフの生き残り、とか言ってたな？　いるのか？……いや、いるんだろうが、会ったのか」
「ああ」
壁に背中を預けて腕を組んだまま、肯定する。
「フラウから持ち出され、隠された宝は、彼らの村の財産を隠しただけに過ぎない。最後まで辿りつく為には、正当な権利があることを証明する必要がある」
「……」
ジフが顔を顰めて、小さく舌打ちをする。いったん背けた顔を正面に戻し、シサーを促した。
「それで？」
「証明する為の手段を聞いている」
「……」
考えるような短い沈黙の後に、ジフが目を上げた。
「……で？」
「遠回しに言ってもしょうがねぇ。こちらの要求はひとつだ。その中にあるはずの一対の腕輪を手に入れたい。理由は、俺たちが会ったドワーフが正当な持ち主だと考えられるからだ」

「証拠は」
「ない。が、宝に辿りつく為の情報の正しさが証明されて、彼の言う通りの腕輪が見つかれば、状況証拠としては十分だろうと考えている。少なくとも、無関係なら知っているはずがないだろうからな」
「……ま、それはいーだろう。そっちの要求はその腕輪を持ち主らしき人物に返す代わりに、最後の情報を提供すると……こういうことでいーのか」
確認するように言ったジフに、シサーはやや間をおいて顔を左右に振った。ジフの言葉を、否定する。
「近いけど、少し違うな。腕輪を持ち主に返す代わりに、多分どこかであるだろう持ち主を証明する謎解きに協力する」
「……」
ジフが目を見開く。ジフだけじゃない。周囲に控えた3人の盗賊もだ。それに臆することなく、シサーは淡々と続けた。
「理由は2つだ。……ニーナ」
シサーの言葉を受けて、じっと黙っていたニーナが口を開く。紡ぎ出された言葉は独特のイントネーションでリズミカルに、まるで詩の朗読のように滔々と続いた。一度言葉を途切れさせ、再び口を開く。
「妖精語よ」
「……」
「……人間には、発音出来ないわ」
「とゆーわけだ。持ち主たる彼らの村に伝わる、有名な伝説を歌った一端らしい。村で知らぬ者はいないと言う話だし、興味深いのはその内容が……」
「隠された秘宝を探し求める、その最終章なのよ」
「……それが、どこかで必要になると？」
ジフの言葉にシサーとニーナが同時に頷く。
「大事が起きた時には必要となるとして、伝えられてきたらしいの。……そして、大事が起きた」

「それからもうひとつがこれだ」
言ってシサーが取り出したのは、濃いこげ茶色の石だ。どういう細工なのか、良く透かしてみると石の内部に模様のようなものが刻まれている。かの村――ダイナの紋だと言う。
「ダイナのドワーフは、生まれた時にこの石を渡される。ひとりにつき、ひとつ。必ずだ。それを預かってきた。悪いんだが、俺たちを信用して渡してくれたものを、他人に貸しちまうわけにはいかねぇんだよ」
「……いまいち理解が出来ねーんだよなー」
そこまで黙って聞いていたジフが、親指で自分の顎を撫でながらぼそりと言う。意味を問うようなシサーの目線に、ジフが肩を竦めて答えた。
「どうしてそのドワーフの為にそこまでする？今の話を真に受ければ、あんたらにメリットはねーよな？」
「ある」
「どんな」
「俺たちはその腕輪と引き換えに、ドワーフが持っている情報を知りたい」
その言葉にジフが何か言いかけた時、さっきまでゲイトが立っていたドアがノックされた。返事を待たずに、開けられる。ゲイトに続いて入ってきたその姿を見て、俺はまたも思わず立ち上がっていた。
「シン！！」
俺と同じ黒髪に黒い瞳、鋭利な顔つきはしばらく会わない間に一層シャープさを増したような気がする。さっきと同じように壁際に控えたゲイトの前を通り、シンはちらりと俺を見てからジフに顔を戻した。……驚くとか喜ぶとか、ないかな。
「呼んだみたいだが」
「ああ」
シンの言葉に、ジフが相好を崩す。再び笑いを堪えるような表情

で、テーブルの上のダガーを親指で示した。
「あっちの少年から、お前にお届け物」
「は？」
ジフの言葉にきょとんと目を丸くしたシンは、俺に一瞬視線を向けてからダガーを見つめる。で、がくっと額を押さえながら項垂れた。
「……ご苦労なこった」
「落ちてたから拾って来ちゃったんだよ……」
「相変わらず変な奴だな」
……持ち主がわかってたから持ってきたのにこの言い草。
「こんなの投げまくってたら金がかかってしょうがないじゃん……」
「……ま、ありがたく返されておこう」
最初から素直にそう言ってくれ。
憮然としたままの俺に、片手で掴んだダガーを軽く振ってみせてからジフに向かって口を開く。
「用はそれだけか」
「もうひとつ増えた。……フラウの件だ」
「……」
「彼らが同行を名乗り出ている。理由は、宝に辿り着く為に必要と思われる情報を持っていることだ」
「何？」
シンが驚きを浮かべた表情でこちらに向いた。まず俺に、それからぐるりと他のメンバーを見回す。それを見つめ返しながら俺は、まずシンが無事だったことに安堵をし、そして……。
「こちらで預かることは出来なさそうだ。どうしたい」
「詳細を聞かなきゃわからん」
（レガード……）
聞かなきゃ。聞けるタイミングがどこかにあるだろうか。
困惑したように眉を顰めるシンに、ジフが先ほどのシサーとニーナの話をまとめて伝える。黙ってそれを聞いていたシンは、考え込

むように組んだ腕の一方の手を顎に押し当てながらジフに尋ねた。
「お前はどう考えてるんだ」
にしても、ジフってギルドで1番偉い人なんじゃないんだろうか。シンのこの態度のでかさって凄い。そりゃあジフって身内には気安そうな感じはあるけど。
「どうもこうも……最終地には距離がある。行って無駄骨にはしたくないからな。……まだ信用したわけじゃないが」
そこで一端言葉を途切れさせたジフは、視線を隣に控えるおじさんに向けた。
「カイルがついてれば、妙なことにはなんねーだろう」
「ならば俺が文句を言う筋合いじゃない」
「だそうだ。と言うわけで、同行は了承しよう。条件付でな」
「条件付？」」
そんなにみんながみんな条件をつけてくれると、もう最初の方の条件から忘れていきそうだからやめて欲しい。
つい顰めツラで、問い返したシサーに答えるジフの言葉を待つ。ジフは体を前に乗り出し、テーブルに肘をついてはっきりと強い口調で言った。
「その腕輪の返却は、腕輪以外に宝が存在した場合に限らせてもらう」
「足元見てんなぁ……」
「こっちだってここまで追い詰めるのに相当の費用をつぎ込んでいる。回収しなきゃ話にならないと言ったろ？別に最終の財宝じゃなくたっていいさ。ダンジョンのどこかに眠る宝が何らか存在してればいい。これまでの経験からすれば、その可能性はかなり高いしな」
思わず全員の視線がシサーを向く。ダンジョンを攻略したところで、俺たちはその腕輪が手に入らなければ何の意味もない。けれどギルドにはギルドの言い分もあるわけで、それを拒絶してもこっちにはもうテがない。とにかくギルドと協力して宝を手に入れて、それからどうにかするしかなさそうだ。

「わかった」
はあっとため息混じりにシサーが承諾する。ジフがにやーっと笑ってとすんと椅子に背中を預けた。確認するようにシンを振り仰ぐ。
「じゃ、それでいこう。……さて、メンバーだな。全員行ってもらう必要はないわけだ」
ジフの視線がまたこちらに戻った。全員はいらないってことは、誰かが行って誰かが行かなかったりすることもあるってことだろうか。嫌だな、何となく。
「今、フラウに関して1番動いてるのはシンだからな。同行者を選定してもらっても、いーぜ？」
「待てよ。こっちは4人でひとまとめと考えてもらわなきゃ困る」
「……腕の立つ戦士はいるに越したことはないだろう」
慌てたように口を挟むシサーに、シンがぼそりと言った。それからニーナとキグナスに視線が向く。
「さっきの話ではエルフにいてもらわないわけにはいかんだろうし、そっちは……ソーサラーか？」
黙って頷くキグナスに、シンは無表情のままで頷いた。
「ならばいて損はないな」
そこで視線が俺に向く。
「……」
どうせ使い道がありませんよ……。
じっとりした俺の視線に、しばらく沈黙していたシンが意外なことに小さく吹き出した。
「……ま、いてもいいだろう」
「……そこまでおまけな言い方しなくても良いんじゃないの」
「ただし、足手纏いにだけはなるなよ。剣の腕は上がったのか？」
「上がってませんよ」
「……じゃあ使い道がないな」
使い道がないとか言うな。
「まあ盾くらいにはなるだろう。ジフ、俺は全員でも別に構わない

が」
弾除けにするな。
ビシビシと飛ばす抗議の視線をあっさり無視して許諾したシンに、苦笑いを返したジフがこちらに向かって言った。
「だそうだ。こちらからは3人出す。あまり大人数になるとダンジョンでは却って邪魔だかんな。但し舐めてもらっちゃ困る。妙な真似をしたら、遠慮なく消えてもらうからそのつもりでいてもらおうか」
人懐こい爽やかな表情でさらりと言うジフに、思わず乾いた小さな笑いが漏れた。
「その辺は信用してもらっていい。こっちだって宝なんかもらっても困る。……それより、運搬はどうするつもりなんだ?ラグフォレストだろう」
どうやらまとまりそうな気配に安心したのか、警戒を緩めたような表情で軽く首を鳴らしながら尋ねるシサーにジフがにやっと笑った。
「そこまで掴んでるのか。そう。ラグフォレスト大陸だ。詳しい話は、シンと詰めてもらって構わない。運搬は信用出来る人間を使うつもりでいる」
「航海技術が優れてなきゃ、話になんねーぜ」
「安心してくれ。そっちのプロだ。……シン。出発はいつにするんだ?」
「人手が揃ったからな。明日にでも」
少し気になる言い方で答えるシンに、ジフが頷く。フラウの件がまとまったら、レガードのことをシンに聞かなきゃ。でもどうやって切り出したらいいんだろうか。下手なことを言って隠されたり、何かまずいこ……。
「だそうだ。出発は明日」
「じゃあ明日、港で会おう」
まずい!!

「シン！！」
シンがあっさりとそう言ってこっちに背中を向ける。ので、思わず俺は焦った。このままじゃレガードのことを聞きそびれてしまう！！
ジフに聞いてもいいんだろう。でもジフは何だか読めない。シンだってそりゃあ話してくれるかなんか全然わからないけど、でも、だけど……。
「……」
慌てた俺の声に、シンが驚いたような表情を浮かべて振り返る。
「ユリアが……ッ」
あんな悲しい顔をさせたまま、ユリアと離れるわけにはいかない。俺が嫌われてしまったんだとしたって、せめて……せめて、彼女の心の支えになるものを……その、生死だけでも……！！
「ユリアが、レガードの安否を心配してるッ」
俺の口から出た名前に、俺とシン以外の人間に動揺が微かに走った。俺自身、言ってしまって良かったんだろうかと心のどこかでまだ迷いながら、でも言っちゃったもんはしょうがない。構わず続ける。
「今のヴァルスの状況は知ってるんだろ！？ユリアはそれを背負わなきゃならない。……助けになってやれるのはレガードなんだよ」
「……」
「知っていることがあるなら教えてくれ。せめて、その……安否だけでもユリアに届けたい」
無事でいるなら、遠く離れる前にそれだけでも。
それがユリアの心を支えてくれるはずだ……。
……本当はこんなことは俺が勢いで口走っていい話じゃないのかもしれない。もっとちゃんと話し方を考えて、ギルドの思惑とか何を知っているのかとか、こちらの手を見せずに引き出すような。
だけど俺にはそんなやり方はわからないし、盗賊団相手に対等に渡り合えるわけがない。

ただ、俺はとにかく……またしばらく戻って来られなくなる前に聞いておきたかった。戻ってからじゃあ、遅いんだ……。

答えを待って真っ直ぐ見つめる俺を静かに見返して、シンは無言のまま視線をジフに向けた。それを受けてジフが口を開く。

「……ちょうど良い。こっちとしてもその件に関しちゃ、確認しときたいことがあるんだよなー」

その言葉に息を飲む。じゃあやっぱり、ギルドがレガードと絡んでいることは見当違いじゃないんだ……。

「せっかくだから、お互い気にかかる点は片づけとこうじゃないか。……海の上に出る前に、な」

第2部第2章第13話　盗賊ギルド　後編（1）

「足下、気をつけて下さいね」
さっきと同様、目隠し状態の俺のそばに控えてくれているゲイトが注意を促す。幸い、武器は返却をされて手も縛られていないけど、見えないのはやっぱり心もとない。
今度はゲイトを除いて俺たちを『連行』しているメンバーは、顔触れが違った。
ジフ、シン、カイル、カイルと反対側に控えていたリグナードと言う男性、そしてゲイト。
またも暗闇を不安定な足取りで歩きながら、さすがに心が騒ぐのは否定出来ない。
俺たちがさっき連れてこられたのは第2支部と言うところで、これから移動しようとしている先は、ギルドでさえ幹部しか知らないと言う、本部だ。
そして俺たちがそこへ向かっている理由はただひとつ……『レガード』が、そこにいるからだった。
「はーい。曲がりますよー」
少しは警戒を解いてくれたのか、さっきより軽い口調で促すゲイトに苦笑しながら、俺は先ほどの話を思い出していた。

「まず、あんたたちの正体がわからんことには話せないな」
レガードの名前を口走った俺に、ジフがぐるりと首を回しながら言う。見据える目線は鋭く、口火を切った責任から俺は、何からどう話したものか迷いながら口を開いた。
「ヴァルスの現状を、知ってますか」
俺のいた世界なら、テレビがあり新聞がある。ネットもあるし、情報は細部に至るまで物凄い速さで届けられる。総理大臣に誰が就任したとか、倒れたとか、そんなの高校生の俺の耳にだって届くけ

れど、この世界でそういう上位階級の人間の情報と言うのがどのくらいの速さで民間人にまで下りてくるのかがわからず、俺自身、それは素直な問いでもあった。

「ヴァルスを治めていた国王クレメンス陛下が崩御されたのは、知ってますよね？」

「あぁ。まだ正式な後継者が即位したって話は聞かないけどな」

ジフのその言葉が、どの程度本音で話しているものなのかがわからないよな……。レガードのことを正確に知っているなら、即位しているはずがないことくらいわかるはずだ。

「クレメンス陛下には、娘しかいない。それがユリアです」

「それは、知ってる」

「俺たちは、彼女から依頼を受けてレガードを探しているんです」

「……」

沈黙のまま、ジフの目線が話を促す。それに従って、俺は言葉を続けた。どこまで話して良くて、どこまでが駄目なのかが微妙なんだけど……もうここまで来たら俺の判断で話すしかないだろう。まずいことがあれば、シサーやニーナが止めるだろうし。

「ヴァルスの王女であるユリアは、ロンバルトの第２王子レガードと婚約をしている。……レガードは、ヴァルスの次期国王です」

「正式な華燭の儀は行われてないんじゃなかったか」

その問いに、俺は記憶を掘り起こしながら頷いた。……そう。確かに、婚約の儀式みたいなのを行う前にロドリスと揉めて、クレメンスが倒れた。正確に言えばレガードはユリアの婚約者とは言えないんだろうけれど、ヴァルス国王が直々に認めたんだ。婚約者と言ってしまっても構わないだろう。

「あくまでそれは、形式上の話であって、実情は婚約者です。クレメンス陛下はもちろん、ユリア本人もそう思っている。段取りが狂っただけのことだと俺は認識してます」

「ま、そうだろうな。聞いてる限り、ごたごた言ってるのは外部で、ヴァルス内に異論はなかったわけだから」

「ええ。……でも、そのレガードがある日突然行方不明になった。原因も場所もわからない。だけど、何とか見つけなきゃならない。……特に今は、火急です」

既に諸国は動き出している。ユリアはヴァルスを守らなきゃならない。……だけど彼女は、諸国の他の国王と違って、戦場に立つことは出来ない。

「各国との火種が燃え上がろうとしている。ユリアには支えてくれる手が必要なんだ。レガードが、無事に戻ってきてくれることが」

「……そうだろうな」

頷いたジフは、目線を俺に定めたままで腕を組んだ。

「だが、そこであんたらがどう絡むんだ？何であんたはそんなにレガードと似てる？身内か？」

「俺は、レガードが行方不明になった経緯を掴む為に泳がされてる、囮だからです」

ここまでは、シンに話したことだ。シンがジフに話したのか話してないのかはわからない。齟齬が出ないか試されているのかもしれない。

「シャインカルクは、レガードが行方不明になった経緯を全く知らない。唐突に行方不明になったレガードの行方を知る為には、行方を絶った時と同じ状況を作り出すことが手っ取り早いと考えた。そこで選ばれたのが俺です。俺はレガードに会ったことはないけれど、見ての通りレガードにそっくりだから」

と他人に言われているだけで、俺本人は知らないが。

「シサーたちは元禁軍で、単体で戦力にならない俺のフォローをしてくれている。キグナスは、宮廷魔術師の甥です」

ジフが少し驚いた顔をした。確認するように送った視線に、キグナスが頷く。

「ヴァルス王城シャインカルクから正式に、レガード捜索を依頼されています。彼の行方に関して知っていることがあるんだったら、教えて下さい」

真っ直ぐに言ってそれきり黙った俺に、ジフも沈黙を守った。誰も口を開かない。俺がジフから視線をそらすことなくじっと回答を待っていると、考え込んでいたジフが顔をあげた。口を開く。

「俺たちが知っている人物が、あんたらの探している人物と同一人物だとは現段階で保証してやれないんだよな」

……え!?

その言葉に、思わず俺はシンを見た。だってシンはあの時……。

「『レガード』と名乗った人物の行方は知っている。そしてその人物が、あんた……カズキって言ったか?カズキと良く似た容姿の持ち主だと言うことも認めよう。けれど、それがロンバルトの第2王子……ひいてはヴァルスの後継者である『レガード』と同一人物だと俺たちが断定してやるわけにはいかない」

「……」

「なぜなら、それは俺たちも知らないからだ」

繰り返すように言ったジフに、思わず言葉を失った。俺たちは、ギルドはレガードが何者なのか知っている上でその身柄を押さえているんだと思っていたから。どうやらそこに、誤解が生じているらしい。

「ただ、身なりやシンの知る立ち居振る舞いから、身分の高い人間だろうと言う予想はついていた、とは言える。逆に言えば、ずっとその程度の認識だった」

「だってシン、じゃああの時ッ……」

レガードの婚約者はヴァルスの王女だって……。

混乱して思わず言葉を失ったままシンに視線を向けると、シンはひらりと片手を振りながら短く答えた。

「悪いな。確信が持てなかったから、嵌めさせてもらった」

何いぃいぃ?

あっさり言ったシンに、唖然として立ち上がる。じゃあ、知ってたわけじゃなくてカマかけたってわけだったのか!?

「……シン……」

「こっちも確かめたかったんだ」
がくぅぅとテーブルに額をくっつけて突っ伏す俺に、シンが苦笑いするような声が聞こえた。あんな無表情で言われたら、信じるに決まってるじゃないか……。
この世界に来たばかりの高校生と、世間知らずの王女を嵌めるのは、盗賊のシンには実に簡単なことだったに違いない。特にシンみたいに表情も話し方も淡々としていれば尚更だ。
「ねえ、でも待って。どうして身元がわからないの？」
あっさり嵌められた自分の浅はかさについつい脱力していると、不意にニーナが背後から問う。ジフが俺を通り過ぎてニーナに視線を向けながら頷いた。
「問題はそこだよな。それについて今から話そう。……シン」
顎で微かに促すジフに、頷きながらシンがこちらを向いた。口を開く。
「俺があの後『3つ目の鍵』のダンジョンに向かったことはわかってるだろう」
「うん」
ひらひらと、俺が渡したダガーを振りながら尋ねるシンに、俺は肯定を返した。あのダンジョンに俺たちも入り、シンのダガーを見つけたことからあちこちが繋がり始めた。
「あのダンジョンには他のダンジョンには見られない特徴がある。これは、『1つ目の鍵』『2つ目の鍵』のダンジョンにも共通する特徴だが」
「ワープトラップね」
「正解」
ニーナの言葉にシンが淡々と頷く。
「お前たちがあのダンジョンのどこまで入ったかは知らんが……」
「最後の部屋まで行ったみたいだぜ」
言いかけたシンに、ジフが口を挟む。何だ、やっぱりさっきシサーが言ったあの壁画の下のプレートに書かれてたフレーズ、知って

るんじゃん。
「ほう。やるな」
だって最後まで行かないと出られないじゃないか。
微かにシンが目を見開いて、驚いた表情をしてみせる。それからまた元の無表情に戻って、俺を見た。
「なら気づいてるだろうが、正規ルートにはワープトラップはほとんどない。あるのは宝の周辺だけだ」
シンの話を聞きながらあのダンジョンを回想していた俺は、その言葉で思い当たる。……あの部屋だ。宝箱と、食い散らかされた死体。
そこから語られた話は、あの時俺たちが立てた予想を裏付けていくもの、と言える。
ギルドのメンバーをパーティとして攻略に入った彼にとっては、これまでの経験値からさほど困難なダンジョンとは思えなかった。3つのダンジョンのワープトラップの仕様が異なるせいで、引っかからなかったとは言わないが、抜け出すのにそれほど苦労はなかったと言う。ただし、ぬかりなく宝を手に入れる為に全て踏破はしたけれど。
そして戻った正規ルート。
「……油断をしていたんだろうな、多分」
そう言ったシンの声音には、どこか苦いものが混じっていた。
「あのフロアはワープフロアより魔物も弱い奴の出現率が高いし、トラップも大してない。どちらかと言えば単調なフロアの中でようやく見つけたあの部屋……鍵のかかった部屋に、気が緩んだんだ」
それは、シサーがあの時言っていたように、かなり厄介な鍵だったと言う。鍵には複数のトラップが設定されていて、その全てを解除するのはいくら盗賊とは言え大変な手間だった。
そして、魔物を呼び寄せるトラップを解除し損ねていたことを見落とした。……そう。宝箱に仕掛けられていたトラップに。
「しまったと思った時には、たったひとつの出入り口がケルベロス

に塞がれていた。あの狭い部屋の中、逃げ道なんか限られている。どれだけ戦おうが再生する首。仲間が、次々にやられた」

その言葉を聞きながら、壁画の間で遭遇した三ツ首の魔物のことを思い出す。キグナスの氷の魔法が、俺たちの助けになったんだ。

――盗賊にこいつの相手はキツかろう

シサーの言葉が耳に蘇る。

「最後は俺ひとりになってな。選択の余地がなくなって、宝箱のトラップを作動させた。……お得意の、ワープだ」

やっぱり……。

そうして外に飛ばされたシンは、砂漠の真ん中で満身創痍の状態でサンドワームに遭遇し、そこを、『王家の塔』へ向かう途中のレガードに助けられた……。

……ここまでは、推測通りだ。問題は、この先。風の砂漠まで行ったはずのレガードがどうしてギャヴァンの、しかもギルドの本部なんかで意識不明に陥っているかだ。

俺の見つめる中、シンが訥々と言葉を紡ぐ。

レガードに危ないところを救われたものの、彼らの中にもソーサラーやプリーストはいない。シンの負った傷を回復できる人間はその場にはいなかった。

そこでレガードはギルザードまでシンを送ることを提案したが、何としてもすぐにギルドに戻りたかったシンが強硬にギャヴァンに戻ると言い張るのに折れ、途中まで同行を申し出てくれたと言う。

「……そのおかげで俺は、今こうして生きている。借りは必ず返さなきゃならない。だが別れてしまえば2度目があるかはわからない。そう考えて、レガードにダンジョンで手に入れた宝の一部を感謝を表して渡した」

宝？

ダンジョンの中にいくつか宝箱があったことを思い返しながら、続きを待つ。けれど何をあげたのかまでは、シンの口からは特に語られなかった。

「そしてレガードと別れ、俺は一度ギャヴァンに戻った」
ああ、戻ってしまった。レガードはどこに行っちゃったんだろーか。
でも、キサド山脈の頂上での出来事を思い出すと……シンはレガードとバルザックらの戦闘は、知らなかったんだよな。だったら一度離れてしかるべきか。
レガードの助けを借りて何とかギャヴァンまで戻ったシンは、数日をギャヴァンで過ごした。ギルドには専属の魔術師がいるらしく、傷の回復はたやすかったけれど、怪我を負ってから治療までに時間がかかった為、消えずに残った傷もあると言う。
ふうん……じゃあ、レガードと再会するのはいつなんだろう。再び風の砂漠に行ってから?でもそうすると日数的に結構ずれが……。
「そこへ、全く突然、レガードが現れたんだ」
……は?
今、ものすっごい大事なところが理解出来なかったんですが。
シサーたちも同様で、眉を顰めたり首を傾げたりする俺たちに、ジフが苦笑混じりの注釈を付け加える。
「現れたっつーか降って湧いたっつーか」
その注釈によって俺たちの混迷は一層深くなった。
降って湧いた?
口を噤んだシンの後をジフが引き取る。組んだ腕の片方の親指を顎に押しつけながら、口を開いた。
「まさしく『降って湧いた』んだよ。……ギルド本部の中に突如現れたんだ。それも、意識不明の状態で」
その時シンは、ジフやカイルなんかとギルド本部で今後の動きについて打ち合わせているところだった。そこへ、どさりと言う音が聞こえ、振り返った時には既にレガードが床の上に意識不明のまま倒れていたのだと言う。
シンの恩人だと言うことを知ったギルドは、その時からレガードの身柄を預かることになるわけだが、身元を証明するようなものを

持っているわけではないし、シンでさえその正体を聞いたわけじゃない。

身なりやシンと過ごした数日で、貴族階級だろうと予想はついたものの、どこの『レガード』なのかはわからなかった。

ヴァルス王女と婚約をしているロンバルトの第2王子が『レガード』だと言うことくらいは知識として知ってはいたが、レガードと言う名前は貴族の息子にない名前ではないし、はっきり言って王侯貴族など縁がない。まさか、とは思うものの確かめようがないままでいた。

「シンがあんたを……カズキをギャヴァンで見かけて、後をつけたのはそう言うわけだったんだ。レガードの正体をつきとめる良い機会になるかもしれないしな。本当にロンバルトの王侯だとすれば、こちらも黙って見過ごしているわけにはいかない」

そんで俺をハメたわけだ……くそ。

「じゃあそれでレガードがロンバルトの第2王子だって……？」

尋ねた俺に、シンが頷く。

「いずれにしてもその可能性が強まった、とは思った。それをギルド……ジフに伝えることが出来たのは市街戦の最中だ」

「よって対応が遅れている。こちらも、市街戦にケリがついてからは修繕作業に忙しい」

悪びれた様子も見せずにジフがさらりと言った。まあ正直それどころじゃなかったってのが本音だろう。

ふうん……でも、何で突然ギルドになんか現れたんだろう？

『銀狼の牙』の説明によるとレガードは戦闘の最中に行方不明になっている。

「レガードに渡した宝ってのは、何なんだ？」

じっと黙って聞いていたシサーが口を開いた。ジフが笑みを浮かべて頷く。

「ポイントはそこだ。……シン」

ジフの呼びかけに応じて、シンが腰から何かを抜き取った。チェ

ーンリングのようなベルトの右腰の辺りに引っかけられていた装飾品……いや、バックル？

「レガードに渡したのと同じものだ。手に入れた2つのうち、1つをレガードに渡し、1つは俺が持っていた」

つい受け取ってまじまじと見る。シサーとキグナスが一緒になって覗き込み、思わず同時に顔を上げた。

シルバーのシンプルなプレートで作られたバックルだけど、高級感が漂う。高そうなシロモノではあった。そして、中央に埋め込まれた装飾石。

「見覚えがあるだろう」

「あるも何も……」

ダンジョンの中ではずっとこいつに気をつけて歩いていたんだ。変なところに飛ばされないよう、トラップに引っかからないよう。

まだぼやーっと光る様子が目に焼き付いている。……あの石と、同じもの。

「まさか、レガードがギルドに現れたのは……」

「まず間違いないだろう。なんちゃら言う魔術師の魔法で窮地に追い込まれ、この魔法石で対のもうひとつがあるギルドに空間移動したんだ」

ダンジョンの中で、俺自身が適当に口にした言葉を思い出す。石から石へ。あながち、間違いじゃなかったようだ。

（じゃあ、レガードは……）

無事、なんだ……。

ようやくそのことに、安堵を覚える。多分もう、間違いないだろう。

俺たちが探しているレガードは、ギルドが保護している『レガード』だ。

「……会わせて、もらえるんですか」

俺はわからないけど、シサーやキグナスが会えばわかるだろう。

ジフが頷いて俺に答えた。

「構わない。会わなきゃ確認出来ないだろ。ま、また不自由な思いはしてもらわなきゃなんねーけどなー」
言って立ち上がったジフに続いて俺たちも立ち上がる。
バックルをシンに渡す俺の手元を見ながら、ジフが微かに渋い表情を見せた。
「ただ、言っておかなきゃいけないことがある」
言っておかなきゃいけないこと？
目を瞬いてそっちを見遣る俺に、続いてシサーに顔を向けながらジフが言葉を続けた。
「悪いんだが、すぐにレガードの身柄を渡してやれるかどうかは、俺には判断がつかねーんだ」

「……シン」
視界を閉ざされた暗闇の中、近辺にいるはずのシンに呼びかける。
返事はない。構わず俺は続けた。
「どうしてあの時、レガードが無事だってことを教えてくれなかったの」
相変わらず、俺たちの足音だけが響く。遠くに水の流れる音が聞こえ始めて、水滴の音が『ぽちゃーん』と反響した。
しばらく回答がない。こっちも黙って待っていると、やがて前からシンの声が答えた。
「俺が話すべきではないと判断した。理由は後でわかるだろう」
後で？
レガードの身柄を今俺たちに渡せるかわからないと言うのと何か関係があるんだろうか。
視界を遮られたまま、そっと首を傾げる。ジフってギルドの頭なのに、彼にも判断がつかないってのはどんなわけなんだろう。理由はまだ、教えてもらっていない。
それに、そう……意識不明のままじゃあ、ユリアの力になんてなってくれないじゃないか。そりゃあ見つからないより良いけどさ。

何で意識不明なんだろうか。バルザックの魔法のせい？空間移動のショックとか？理由なんか何でも良いが、目覚める手段だけはわからなきゃどうしようもない。

第２支部に連れて来られた時ほどじゃないけれど、結構な距離をまた歩かされて後、目隠しをされたままで梯子段のようなものを上り下りさせられる。そこからまた歩き、やがてどこか外に出たみたいだった。俺の周囲の空気の匂いや温度が変わる。耳に、遠いざわめき。

（海の音……？）

目隠しされてるから周囲は全然見えないんだけど、波の音が聞こえる。

またしばらく歩いていくうちに、波の音がどこか遠くで反響するような不思議な音が聞こえてくる。遠いような近いような奇妙な感覚。目を瞑っているから尚更妙に感じるんだろう。やがてそれに、木々がざわめくような音が混じり始める。

（どこなんだろうな）

本部って。

どうせ俺はギャヴァンの街そのものを知らないから、わかりようがないんだけど。

そのままどこか建物の中へ連れて行かれる。今度は建物の中に入ってからもしばらくは目隠しを外してはくれなかった。ゲイトが申し訳なさそうに横で謝罪する。

「すみませんね。この辺には窓とかあるんで、外の風景とか見られたりすると困るんですよ」

「何で、本部の場所って内緒なんですか？」

聞いてみると、小さな笑いと共に「それこそ、内緒です」と言う返事が戻って来た。……まぁ、資金源を『トレジャーハント』から得ているってことは、そういう財宝管理とかってのももちろん本部なんだろうし……いろいろあるんだろうけど。

建物の中を進んで階段を下りたところでようやく、目隠しを外し

てもらうことが出来た。ふるふると顔を振ってから、辺りを見回してみる。

支部と同じ、無愛想な石造りの壁。天井は低く、飛び跳ねたら手が届きそう。

「この奥だ」

親指で先を示したジフの言葉にどきっとした。俺の中で緊張感が高まる。もしかするとローレシアに来てから多分1番、緊張しているんじゃないだろうか……鼓動が速まり、口が渇いた。

探し続けて来たレガードが、この先にいる。

第2部第2章第13話　盗賊ギルド　後編（2）

「ゲイト。ガーネットを呼んで来てくれ」
「はい」
「行こう」
何やら指示を受けたゲイトだけが踵を返し、俺たちはジフに促されるままに奥へと足を向けた。
しかし、ギルドの本部って幹部しか入れないとか言ってなかったか？カイルやリグナードはともかく、シンやゲイトはどう見たって俺と同年代なのに……盗賊団の幹部ってこと？幹部ってそもそも何なんだろう。偉い人？凄い人とか。要は頭の周囲にいることを許されてる人なんだろう。
ジフの足がひとつの扉の前で止まる。ちらりとこっちを振り返ってから、扉に手をかけた。中に入る。
それなりに、広い部屋だった。最低限の調度が整えられた、客室って感じの雰囲気。
パーテーションみたいな小さな仕切りがあって、その向こうにベッドがある。横たわる人影に、俺はそこから一歩も動くことが出来なくなった。
（あれが……）
あの人が。
すぐ隣でキグナスが息を飲むのが聞こえる。
「レガード様……」
呟きを残して小走りに駆け出す。後を追うようにニーナが続いた。
シサーが立ったまま動けずにいるの俺の背中をぽんと押す。それを受けてようやく……俺は部屋に足を踏み入れた。シサーが笑いかける。
「初めましてだな」
「……うん」

これほど探し続け、考え続けて今、初めて会う。……変な感じだ。
ベッドのそばに駆け寄っていたキグナスとニーナが振り返る。背後でジフが扉を閉めるぱたんと言う音が静かに響いた。
（……この人が、レガード……）
俺の見つめる視界の中、その人は身動ぎせずに静かにベッドに横たわっていた。胸に膨れ上がる複雑な思い。
探し続けてきた人物が今、目の前に存在している。意識不明のまま。
「はは……」
小さく笑う。閉じた瞼、鼻、唇。部品のひとつひとつとか、少し細い顎とか。
「……ホント、そっくりじゃん」
俺と。
不思議な感じだった。縁もゆかりもない異世界の王子サマ。生まれも育ちも、多分性格も、何もかもが違うはずのこの人が、これほど自分と似ていることが。
「だろ？」
複雑な俺の気持ちを知ってか知らずか、シサーが僅かにおどけたように笑う。
旅してるせいか、俺の方が今は日焼けして少し黒い。レガードの方が、閉じたその目元が優しそう。間違い探しのように比較しながら、安堵する反面……心のどこかで泣きたいような苦い思いがこみ上げた。
……この人が、ユリアの、婚約者……。
沈黙したまま、全員がレガードを見つめている。それぞれ何を思っているかはわからない。
けれど俺以外の3人はレガードと何らかの交流があったはずだから、思うところはあるだろう。
でも……とにかく……。
（無事で、良かった……）

俺がいなくなった後も、ユリアを支えてくれる手が。
「頭」
不意に背後でドアの開く音がした。振り向くと、ゲイトがそっと中に入ってくるところだった。その後ろを小柄な人影がついてくる。……誰だろう？おじいさん。濃緑のローブを身に着けて、どこか歴史を感じるようなロッドを握る手は枝みたいに細い。
魔術師、だろうか。ギルドには専属の魔術師がいるようなことをさっきシンも言っていたし。
「……ほう」
老人は中に入ってくるなり、俺を見て目を細めた。
「よう似ている」
「初めまして……」
何だかわからないままついつい挨拶を口にしてみる。老人がおかしそうに笑った。
「紹介しよう。ガーネットだ。……本名は俺も知らねー。本人に聞いてくれ」
「ガーネットで良い」
ジフの雑な紹介に、ガーネットはにやーっと笑った。白い歯が健在だ。
「ギルドがレガードの身柄を手元に置いておきたい理由は、ガーネットにある」
「え？」
ひょこひょこと確かな足取りでこちらへ近づいてきたガーネットは、俺たちを通り過ぎてレガードのそばまで歩み寄った。覗き込むようにして満足げに頷く。
「顔色は悪くないな。意識不明と言うことは自分で健康管理が出来ん。面倒見るのはなかなかどうして大変なことじゃ」
「レガードが必要って、どうしてですか」
「……物事には、語れる時と語れぬ時とがある。今は、語れぬ時だ」
老人の背中が独白のように呟く。

「『与えられた力は今、己の意志を持って暴走し始める。それは時に猛り、時に操り、人々の命を喰らい尽くした。喰らい尽くした命を糧に、力は又暴走を始める。永遠に繰り返されるかのように思われた。穢れた者がその力を奪い合い、集い合った。人々は恐れ、祈り、泣きながら、竪琴を手にこの世の終わりを歌った。すると、楽園から男がやって来た。彼は神の祝福を受けていた。彼は言った。「見よ。禍は姿を隠し、血を屠る刃はただの剣と変わる」』」

……？

まるで聖書のような一節を口にする。

「今は多くを語れる時ではない。……わしがレガードを手元に置いておきたい理由は、『穢れた者』から彼を遠ざけたいからだ」

「『穢れた者』って……」

「黒衣の魔術師を知っているだろう」

振り返った老人が、ぐるりと俺たちを順番に見つめた。最後の視線が俺で止まる。

「あんた、バルザックを知っているのか」

「奴の持つ『千里球』を遮ることが出来るのは、恐らくわしくらいだろうからな。かっかっか」

え!?

「『千里球』？」

「奴は、魔力に応じて全てを見通せる魔力付与道具を持っている」

『遠見の鏡』みたいなもんだろうか。でもあれはちょっと違うか。どこでも何でもお見通しって感じのアイテムじゃなかったしな。

「わしは彼に頼みたいことがある。そしてそれを、バルザックには知られたくない。だから、レガードを手元において、その行方を眩ましておきたかった」

「でもそれじゃあ、ヴァルスがッ……」

「シャインカルクには、通達させよう」

俺の言葉を遮るように、ガーネットが続ける。

「ラウバルに相談してみれば文句はあるまい。レガードの身元が王

侯ならば、場合によっては大神殿の協力も仰げるだろう。大神殿にはバルザックも侵入出来まいから、大司教の力を借りることが出来るのであれば、わしはレガードの身柄をシャインカルクに返そう」

「ええ！？」

「ラウバルを知ってるのか！？」

このおじーさん、一体何者なんだ！？ラウバルってだって、宰相だぞ！？

ぎょっとした俺たちにガーネットはからからと笑って口を閉ざした。『多くを語れる時ではない』からだろうか。話してくれる時が来るのかな。

「……頼みたいことって、何ですか」

俺の問いにも、ガーネットは黙って首を横に振るだけだった。ちらりとジフの方に顔を向けてみるが、ジフも軽く肩を竦めただけだ。

「俺は詳しくは知らねーよ。そのじじぃに聞いてくれ」

言った瞬間、老人とは思えないマッハでガーネットがベッドのサイドテーブルから水の入った小さな桶を投げつけた。「のわぁ」とジフがそれを避ける。がしゃーんッと言う盛大な音と共に、水を撒き散らしながら桶が向こう側の壁に激突した。

「年寄りへの礼儀を覚えろと言ったろッ」

「当たったら痛ぇじゃねぇかぼけじじいッ」

……。

頼みたいこと、か……。

謎かけみたいだ。レガードを手元に置いておきたい理由を教えてくれてはいるけれど、結局その全貌はこっちには全然わからない。

ただ、何か事情は深そうだ。

「あんたが何者なのは知らんが、ラウバルと話を決めるってんだったら、文句は言えねぇよ」

しばらく何かを考え込んでいたシサーが、くしゃくしゃと髪をかきあげながらため息混じりに口を開いた。

「とにかく、レガードが無事に生存していることと、ギルドで身柄

を預かっていること……この2点だけは間違いなくシャインカルクに伝えてくれ。……ヴァルスは、レガードの生還を待っている」

自分の用事は済んだとばかりに背中を向けるガーネットの代わりに、ジフが頷く。真っ直ぐな眼差しでシサーに答えた。

「約束しよう。……必ず、シャインカルクには通達する」

◆◇◆

ギャヴァン港の向こうには真っ青な海が広がっている。分厚い、濃い雲がもこもこと海から空に向かって広がっていた。一足先に夏の匂い。

（夏かあ……）

そーいや俺、夏休み目前で拉致されて秋口に飛ばされたから、随分夏を経験してない気分。

ロドリスが春の匂いってとこでローレシア最南まで来ちゃったから、春も短い感じだなあ。まだ夏ってほどの気温ではないけど、空の色は初夏を感じてしまう。

風に前髪を弄ばれながら、俺はぼんやりとレガードのことを考えていた。

（まさか、ずっと、意識不明だったなんてな……）

ベッドに横たわる静かな顔を思い出す。怖いくらい酷似している容姿。

目の当たりにしてみれば、あまりに複雑だった。

自分が、レガードの亡霊のように思えた。

ユリアは、俺とレガードを重ねてはいないと言う。キグナスも、シサーも、でも……。

どうしたって俺は彼の代理で、俺自身の存在そのものは、ひどく薄いもののような気がした。俺が今立つ場所に本来いるべきなのは、彼なんだと言う寂寥感。

（……早く帰ろう）

自分のいるべき場所に。
この場所が少しずつ居心地が良くなっていくものだから、少しずつ忘れていく自分の立場。自分の、世界。
この場所には、レガードが立つ。そしたら、不安に揺れるユリアの心もきっと……。
（君にした約束が……）
ユリアにした「必ず見つけてあげる」と言う約束を無事に果たせたから。
……俺の手は、君に、必要なくなる。
「カズキー。なぁにぼやっとしてんだぁ」
潮の香りに目を細めていると、後頭部を硬質のものでつつかれた。振り返るとキグナスが、ギルドから返されたロッドで自分の肩を軽く叩いている。
「いや……海だなって思って」
「カズキって海を見るの、初めてか？」
「そういうわけじゃないけど。前にギャヴァンに来た時もここに寄ってるし。ただ何か海ってしみじみしない？」
「しない」
あっさり言って歩き出すキグナスをどつくと、大げさによろけたキグナスが反撃してくる。それを避けて駆けだした俺がシサーとニーナを抜かすと「元気だなあ……」と呟く声が風に流された。
港の奥の方にはでかい船が見える。でかいと言ってもそりゃあ俺の世界の大型客船なんかとは比較にならないけど、結構なでかさ。
船着き場の付近には何人かの姿が見えて、思わず俺は足を止めた。追いかけて来ていたキグナスが背中に激突して、一緒になってつんのめる。
「うわ」
「ってえッ」
仲良く地面に突っ伏していると、ゆったり歩きながら通り越していくシサーがため息混じりに繰り返した。

「……元気だねぇ」
あきれたように言わないでくれ。
去っていく背中を睨みつけながら、キグナスをはがして体を起こす。もう一度、前方にたまっている人たちに目を向けた。
ギルドの人間は、シンとゲイト、そして昨日ジフのそばに控えていたカイルと言うおじさんが行くと聞いている。見える姿の中にはその3人の他にジフの姿があった。ジフに向かって船から下りていく人影をぼんやりと眺めて、人知れず目を見開く。
「カズキ？行くぞぉ」
立ち上がって歩き出したキグナスが俺を振り返った。生返事をして歩き出しながら、船から下りてくる男を見つめる。
（あの人……）
見たことがある。
近づくにつれて、彼の特徴的な姿が明らかになった。オレンジの髪、逞しい躯体に眼帯。
俺が初めてここを訪れた時に、ここで積み荷をしていた男の人だ。
（ジフの知り合いだったんだ……）
あの人。
「グローバー！！」
そんなことを思っていると、先行しているシサーとニーナから声が上がって、驚く。
え？シサー、知り合い！？
「おぉ。シサーじゃないか。久しぶりだな。どうした」
「どうもこうもあるか。ご同行、だ」
グローバーと呼ばれた彼がひゅいっと口笛を鳴らす。
「何だ。グローバーとも知り合いか」
ジフが少し呆れたように言って、それからシサーに向かって笑った。
「市街戦において多大な貢献をなさった、ラグフォレストの船乗りサマだ。今回ラグフォレストに向かうにあたって、適任だろうと判

断した。信用もおける」
「おーっと。言ってくれるなあ。もっと褒めてもいーんだぜぇ」
「この辺にしとこう」
軽く肩を竦めてグローバーを受け流し、シサーに向けて軽く首を傾げた。にやっと笑う。
「信用してもいーかって気になってきたぜ」
「知り合いは多いに越したこたねーなぁ。まさかグローバーが俺の信用になるたぁ想像外だ」
「ボードレーも、だろ」
「まーな……」
それからグローバーがこっちを見る。俺とキグナスを見比べてシサーに尋ねた。
「オトモダチか？」
「連れだ。カズキとキグナス」
「ふうん」
どうやら俺のことは覚えていないらしい。それもそうだろうと思いかけて、グローバーが自分の顎を撫でながら目を丸くする。
「……見覚えがあるな。前に、ここで会ってねーか」
凄い。思い出してくれた。
笑みを象って、俺は頭を下げた。
「思い出してくれたんですね。凄い」
「ちょっと、印象的だったからな」
「印象的？」
「髪の色が特徴的だろう。それに雰囲気がな……妙に、印象に残った」
髪の色？
やっぱこの前髪、珍しいんだろうか。
思わず赤い前髪を指先で摘んでいると、グローバーはからからと笑って踵を返した。船の方から水夫たちの元気な笑い声が流れてくる。それに海鳥の遠い鳴き声が重なった。

「じゃあ準備が出来たら上がって来てくれ」
準備ったって……。
一体ここで何をどう準備したら良いんだろうか。
つい船へ戻っていく背中を見送っていると、ジフが俺たちを見回した。何気ない調子で口を開く。
「シャインカルクに人を派遣した。レガードの件は今日の夜には届くだろう。安心していい」
「……ありがとう」
「ま、あのじじぃがあー言ってやがるから、あんたらがラグフォレストに行っている間にこっちはそっちの話を何とか進めとく。これ以上王城に心配はかけねーよう最善は図るから、安心して行って来てくれ」
くしゃりと前髪に手を突っ込んで、ジフが視線を海に向けた。シェインとは雰囲気の違う赤い髪が、海の匂いを街へと運んでいく風にふわふわと揺れている。何かを思うように波間を舞う海鳥を眺めていた視線を、ふいっと背後に控えたギルドメンバーに向けた。
「んじゃ、頼むぜ」
「頭ぁ、ギャヴァンの修復、頼んますよー」
ゲイトがあどけない笑顔で釘を刺した。
「油断すると頭はすーぐサボるんだから」
何か、しっかり者のヨメさんみたいに呆れた口調で、自分らのリーダーに向かって言う様子がおかしい。対するジフがまた、叱られた子供みたいに顔を顰め、そっぽを向きながらへろっと舌を出した。
「誰がだよ」
「だから頭がですよッ。ちゃんとやるんすよッ」
「わぁーったわぁーった」
「じゃあ、行くか」
「んじゃ頭ぁ、行ってきまーす」
船に向かって歩き出したシンに続いてカイルとゲイトも背中を向けかける。それに続いて俺たちも歩き出そうとした時、苦笑いを浮

かべていたジフがふと目線を伏せた。
「……退き時だけを間違えるなよ」
静かに、けれどどこか強い響きを持つ彼らの頭の言葉に、３人が足を止める。振り返った彼らに、ジフはどこか淡々と続けた。
「無茶なことはするな。ヤバいと思ったら撤退しろ。別に、急いでるわけじゃねー。再挑戦はいつでも出来ることを忘れるな」
「……はい」
「カイル。しっかり見といてくれよ。特にシン。意外に無謀な真似、してくれるからなー」
ジフの言葉にシンの視線が突き刺さった。
「お前ほどじゃないだろう」
「俺ぇ!?俺のどこがッ」
「お前の場合は存在そのもの全てが無謀だ」
「……育ての親に何てコトを……」
「どっちもどっちっすよ……」
ぼそっと口を挟んだゲイトに、シンとジフのじっとりした視線が向けられる。何だか兄弟みたいだなあ……。
つい苦笑していると、カイルがジフの頭を平手でぺしりと叩いた。その勢いのままにジフが頭を項垂れる。
「あいてッ」
「まとめるなら早くまとめろ」
……ああ……『盗賊団で一番偉い人』のイメージが……。
重々しく言ったカイルに、恨めしい視線を投げかけてからジフはため息混じりに続けた。
「ま、気をつけてくれってことだ。……あんたたちも」
「さんきゅ」
俺たちのことも案じてくれたジフに、シサーが笑顔を向けた。一歩体を退いて下がったジフに、カイルが他のメンバーを促す。
「……では、行くぞ」
レガードのことはひとまず、ジフとシャインカルクに任せよう。

俺たちは『王家の塔』の攻略の為……バルザックの行方を掴む為。
宝探しの航海に……ラグフォレストへ向けて。

第2部第2章第14話　歯車（1）

「まーったく、どうなるかと思ったよ。馬鹿、ぼけ、考えなしの間抜け」
「はぅぁ～……」
立て板に水のような、澱みなく続けざまに発せられるエレナの悪口雑言にしおしおとうなだれながら、グレンフォードは情けない顔で頭をかいた。
リトリアを出て、ロドリス北西の小さな集落カンサスを目指して移動中である。
「大体こんな綱渡りで良くリトリアが陥落したもんだよ。相手は武王だ、玉座の間で斬られても文句は言えなかったんだからな。いくらリトリア宮廷がユル～イったって、正式な使者を斬って捨てたなんつったらあーなんのが当たり前で……」
「まあまあまあまあ、うまいこと流れてくれて良かったですねぇ……」
適当に相槌を打ちながら、視界に姿を現した集落に視線を定めた。リトリアの放蕩国王から少し気になる情報を入手したゆえの回り道だ。カンサスを出れば後は要塞ガーラントを経由して、リシア地方からどこかへ移動して行った『レガードご一行』の追跡開始である。衛兵の駐屯所に立ち寄れば多分必要な情報はセラフィから届けられているだろう。
カンサスは小さな村である。元来農業国であるロドリスらしく、豊かな自然が海風に揺れていた。まだ植えられて間もないだろう田圃の苗が、張られた水面を柔らかな緑で彩っている。
もう数ヶ月もすれば、一層鮮やかな緑が伸び伸びと風に揺れるだろう。そして黄金色の実りが、人々の生活に豊穣をもたらす。
「……何か、聞けるといーけどね」
いい加減悪態を口走るのをやめたエレナが、同じように苗の影が

揺れる田圃に目を細めながら呟いた。
気になるのは、ロンバルト沖で激突したヴァルスとモナの海戦からの生存者の行方だ。
最初に発見されたのは、モナのマイルス島。以降、ぽつりぽつりと報告が寄せられていると言う。現在のところはロドリス西岸、マイルス島を越えたモナの南だ。ロンバルトやヴァルスに関しては、現状情報の入手が難しくなっている為不明である。
「はぁぁ……私、リトリア陣営に参加しなきゃいけないんですかねぇ……」
後から付け加えられたリトリア国王からの条件を思い出してぼやくと、エレナが軽く肩を竦めて笑った。
「まったく特殊任務の多い部下だよ。ま、リトリア参戦の条件だからね。セラフィ様も駄目とは言うまい。思う存分使われて来な」
「はあー。私はロドリス国民として誇りを持ってセラフィさんをお守りする所存であるはずなんですけどねぇ」
つまりはレガードの追跡も、期間が決められていると言うことだ。もちろんのんびりやるような任務ではないが、それ以上に戦の状況を常に押さえていつでも戻れるよう……もしくは必要時までに任務を完了して、自由の身になっている必要がある。
村の中には青年の姿が少ないようだ。恐らく兵卒として徴収されている為だろう。
必要な情報はフレデリクの生死だ。海中に消えたのならそれはそれで良い。だが、ヴァルスに身柄を押さえられるのが少々不都合である。
「襲った魔物ってのは、何なんだろうな」
村に足を踏み入れながら口にするエレナに、グレンは軽く肩を竦めた。答えようがない。
「何とも言えませんね。巨大な魔物が多いですから。水竜リヴァイアサンではないことは確かでしょうが」
「わからんよ？休眠期を終えて移動して来たのかもしれない」

冗談めかして見上げるエレナに、グレンは苦笑を浮かべながら柔らかく、けれどきっぱりと否定する。
「ありえませんよ。活動範囲が違い過ぎる。……しかし、残る竜は４匹ですか。グロダールはもういない……はずですからね」
「でもみんな休眠期だから、あんまり関係ないだろ」
「とも言い切れませんよ」
グレンの言葉にエレナが眉をひそめた。見上げる臙脂色の瞳を、静かに見返す。
「氷竜トラファルガーは、目覚めが近そうですから」
「……そんな予兆が？」
「私がちょうどナタリアにお邪魔した時に、地響きのように咆哮が聞こえました。彼が目覚めると少々厄介ですね」
「厄介？」
「ええ。……ナタリアが、身動きがとれなくなります」
「ああ……」
それは確かにそうなるだろう。ナタリアはツェンカーやワインバーガと並んでトラファルガーの捕食地域だ。
「それはちょっと、痛いかな……」
まあ、リトリアがこちらについている分にはいくらでも勝機はあるだろうが、友軍は多いに越したことはない。その分自国の負担が軽減する。
カンサスの村を包む空気は、のどかなものだった。質素で慎ましやかな雰囲気が、昼下がりのおっとりとした空気に静けさを上乗せしている。
村の中の畑脇に生えた大きな木の下で、老人が居眠りをしていた。大きな籠を抱えた老女が、その横の畦道をゆっくりと通り過ぎる。
「ちょっと尋ねてみましょうかねぇ……」
アテもなくさまよっても仕方あるまい。怪我人病人は家の中と決まっている。ただ村をさまよっていたところで、誰に何の話を聞けるはずもない。

「ちょいとそこを行くおじょーさん」
軽快なスキップとと共にしまりのない笑顔で道行く老婆に声をかけるグレンに、エレナは眉間に皺が寄るのを止められなかった。警戒を解くつもりだろうが、一層増していることになぜ気づかない。
ついつい『連れ』だと思われるのを避けたい気持ちが強まり、足を止めたままその様子を遠巻きに眺める。何やらオーバーアクションで両手を動かしまくっていたグレンが、こちらを振り返った。
「エレナさあああんッ」
同類とだけは思われたくないものだ。躊躇いが、エレナの返事を鈍らせる。
「エレナさんってばッ。……あ、あの人ね、私の連れでして」
老婆の視線がばしばしとこちらを向くのが、胃に痛い。自分だけは真っ当な姿勢を貫こうと決意を固めながら、仕方なくそちらに足を向ける。グレンがだらしない笑顔を浮かべて、ずり落ちる丸眼鏡をしきりと指で押し上げた。
「あのですね、こちらのお嬢さんがちょうどこれから漂流兵を保護してるとこに行くってお話ですから」
「いやだね、お嬢さんなんて年じゃないよ」
グレンの言葉に笑いながら、それでも老婆はそこはかとなく嬉しげだ。女性と言うものはいくつになっても、若く扱われるのが嬉しいらしい。軍隊に身を置いているエレナにはわからない感覚だ。
「へえー……そりゃラッキーだ」
「ええ。ですからね、ご案内いただければ幸いかなーと」
そのまま老婆について歩き出す。手にしていた籠には、果物が詰め込まれていた。差し入れらしい。今はグレンが代わりにその籠を抱えている。
「良く見りゃあ立派な身なりをしているねえ。お2人とも兵隊さんかい」
身が軽くなったついでに口数の増えた老婆が、だが足だけはゆっくりと動かしながらグレンとエレナを見比べた。

「兵隊さん……ってのとはちょっと違いますけどねえ……」
「違うのかい？立派な剣をぶら下げて」
驚くほど矍鑠（かくしゃく）とした老婆だ。歩みこそ遅いものの、足取りは確かだし、腰もさして曲がっていない。
「いえいえ、ただの税金泥棒ですよ」
「んじゃあ役人さんかいねえ……」
投げ掛けられる日差しが、海面に反射して白く光る。寄せては返す碧は、遠く空との境目が溶け合って区別がつかない。近隣の小さな漁船が微かに波間に見え隠れし、海を挟んでぽっかりと小さな陸地が緑を繁らせている。――マイルス島だ。
「……何人くらい、流れついたって？」
眉を寄せて尋ねるエレナに、グレンの半分より更に小さな老婆がエレナを見上げた。
「5人、いや6人だったかねえ。どっちにしても大した人数じゃないよ。今残ったのは、たったひとりだ」
「ひとり……」
「後の方はお亡くなりになったんですかねぇ……」
手に持った籠から仄かに漂う果物の香りに鼻ををひくつかせながら尋ねるグレンに、老婆が頷いた。
「可哀想に。みんなここに辿り着いた時にはもうかろうじて生きてるって感じでねえ……。次々に亡くなったよ」
「これは、ひょっとしてお見舞いの品ですか」
グレンが手に持った籠をさす。それを受けて老婆が深々と頷いた。
「村に唯一の医者の家にいるんだけどね、栄養をとらせてやんなきゃと思ってね……ほら、あそこだよ」
老婆が示したのは細々と続く畑から少しだけ逸れた位置に、ひっそりと建てられた小屋だった。質素な佇まいである。
「今生き残ってらっしゃる方のお国なんかはおわかりですかねぇ」
丸眼鏡を押し上げるグレンの頭を、馬鹿にするようにひらひらと蝶が舞う。老婆がそっと首を傾げた。

「さあてねえ。わたしにはちょっとわからないよ。どこか違う国の人間だってことくらいしかねえ」
「ほうほう」
海戦で行方不明になった人間はヴァルスもしくはモナ、この2カ国。ヴァルスの場合は、傭兵などを考慮に入れればどこの国の人間がいるかは知れたものではないが、基本的にはそうなる。
共用語であるヴァルス語を理解する人間は多いから、それを考えればモナ兵かと考えたくなるが、このような辺境の老婆にとってはヴァルス語もモナで使われているリトリア語も一緒くたに『異国語』かもしれない。
いずれにしても会ってみればわかるだろう。焦るようなことでもない。
老婆の歩みに合わせてのんびりと歩き、医師の家に辿り着く。老婆は無遠慮に扉を開けた。
「先生」
慣れた空気で入って行くところを見ると、馴染みでいつもこうして届け物をしているのだろう。
「おう。らっしゃい。……どちらさん？」
開いた扉の中は、あっさりその全貌が見渡せるほど狭かった。奥に扉が見えるから、一応はこちら側が診療所、と言うところだろうか。
小作りな棚やテーブルが置かれ、その奥の書き物机に向かっている男がこちらを見て破顔した。
30過ぎくらいの若い医師だ。どこかぼうっとした頼りない顔つきをしている。
「そちらはどちらさんかな」
目を瞬いて再度首を傾げながらも、人の良さそうな顔に笑みを浮かべている。立ち上がった若医師に、老婆がグレンとエレナを紹介した。
「お役人さんだそうだよ。ほら、先生んとこにいる若いの。先の海

戦の兵士じゃないかって話でしょう。だからね……」
「ああ……」
役人、と聞いて医師が顔を顰めた。自分のところで保護している病人のことを、あれこれ詮索されたくないのだろう。
「いえね、私も別に怪我人病人においたをしようってわけじゃありませんからご安心を。ちょっとお話を聞けるようならそれに越したことはないだろうと言う程度のことでして」
役人を名乗るにはいささか軽薄な言い回しで来訪意図を告げるグレンに、医師は軽く頷く。
「申し遅れましたが、私はグレンフォードです」
「エレナです」
「私はリクベル。しがない町医者です」
立ち上がったそのままに、ラフな裾の長い上着のポケットに両手を突っ込む医師に、老婆が声をかけた。
「わたしゃ帰るよ。しっかり食べさせてやってよ」
「はいはい。ありがとう」
グレンが持ったままの果物籠に苦笑を浮かべてリクベルは肩を竦めた。
「漂流者から金を取るわけにもいかない。と言って食わせないわけにはいかない。こう言った心遣いは素直にありがたいものです。……さて、お話を窺いましょう。とりあえずお掛け下さい」
申し訳程度に置いてある椅子を勧められ、腰を下ろすことにする。
「彼に聞きたい話の種類と言うのを聞いておきましょうか。患者の精神に不安を投げ掛けたり動揺を誘うような話であれば、僕は医者の見地から止めなきゃなりません。そう言ったお話でないことを祈ります」
「逆に聞きますが、どのような話を避けるべきなんでしょうかねえ。何が起きたか聞かないことには、何ともならないんですが」
グレンの問いに、リクベルは複雑な表情を浮かべた。考えるような沈黙の後、短く息と共に吐き出す。

「……あまり詳細を突っ込んで聞かないのならば、まあいいでしょう。それで良いですか」
「聞きたいのは、概ねそんなもんです」
フレデリクの行方を尋ねるか否かは、彼の様子を見て判断しよう。そもそも自分以外の生存者の行方など、知っている方がおかしいのだから。
こちらだって真剣に問いただすつもりがあるわけでもない。わかることがあれば聞いておきたいと言う程度のことである。
「わかりました。……こちらです」
リクベルに促されて立ち上がる。示されたのは奥の部屋だ。
扉を開けたそこに広がっていたのは、更に狭い部屋だった。医師の私室、と言うにはあまりに簡素だった。たったひとつ置かれたベッドには、男がぼんやりと横になっている。
「エクセルさん」
リクベルが柔らかい声で呼びかけた。エクセル、と呼ばれた男が顔を上げる。
「調子はどうですか」
歩み寄る医師に、エクセルが微笑み返した。良く見ればかなり若い。多分まだ１０代だろう。ややもすると先の海戦が初戦だったかもしれない。助かったのは僥倖だ。
「悪くないです」
答えながら、続いて入って来たグレンとエレナに首を傾げた。リクベルを見上げる。
「お客様ですか」
「君にね。……お話を聞きたいってことなんだよ。嫌なら追い返すけど」
本人たちを前にしゃあしゃあと言うリクベルの言葉に、グレンは思わず吹き出した。エクセルがしきりと瞬きを繰り返しながら、リクベルと訪問者たちを見比べる。
「あ、僕は別に……何でしょうか」

「いえね、私共はロドリス王国ハーディン王城に縁の者でして。大したことじゃありません。先の海戦で何があったのか、お聞き出来たら良いなあと思ったまでのことですよ」
あっさりと来訪目的を告げたグレンに、エクセルは目を見開いた。
「ロドリス……」
「エクセル、不都合なことや言いたくないことは言わなくて良いからね」
リクベルが口を挟む。柔らかいのんびりした口調で言われて、さすがにエクセルも吹き出した。
「先生……」
「仕方ないだろう。俺にとっては患者の健康が第一なんだから。思い出して具合が悪くなるような種類のことは、思い出して欲しくないんだからね」
軽く肩を竦める医師にくすくすと笑いながら、エクセルの顔がグレンとエレナを見比べた。
「大丈夫です。……何が起こったのか、詳しいことは僕にも良くわからないと言うのが本当のところです」
「君は、どこの国？ヴァルス？それともモナ？」
エレナの問いに、エクセルが複雑な表情を浮かべた。
「僕は……」
「ご安心下さい。別にどちらだとしても、私たちは何をするつもりも、誰に報告するわけでもありませんから」
ロドリス、と言う国に対する警戒を読み取って口を挟んだグレンに、エクセルはまだ迷うような目つきをしながら頷いた。
「僕は、ヴァルス兵です」
「ふーむ。初陣ってやつですか？」

第2部第2章第14話　歯車（2）

黙って頷く。ヴァルス兵……では、モナの公王の行方など知る由もないだろう。むしろ尋ねることによってロドリスがフレデリクを探していると思われたくはない。尋ねない方が得策だろうか。

「どんな状態だったんですか？何でも魔物じゃないかって憶測が入り乱れてますけど」

「はい。それは間違いないです。モナの海軍が海上を進むヴァルス軍に接近して、砲撃を放ってきたので……ヴァルスがそれに応戦している間に、突如両国の海軍の間で海水が噴き上げたんです」

繰り返される砲撃の合間を縫って接近する両軍の間に突如噴き上げた海水と、そこに見え隠れする魔物の巨大な姿。波間をのたうつ焦げ茶色の姿は巨大な蛇に似て、時折覗く頭部らしき部分には鋭い角がついていたと言う。話を聞く分には、恐らくシー・サーペントだろう。歴史を紐解いても、時々海戦で刺激を受けて大暴れする魔物である。そこに特に奇異なことはないが、問題は一度興奮して海面に浮上してくるとしばらくの間活発に活動をするようになると言うことだ。

「気がついたら海面に投げ出されていて……咄嗟に身につけていた装備を全部外したんですけど、もがいている間に沈む船の渦に巻き込まれて……。そのまま僕は意識を失ってしまったんです。もう駄目だと思っていたんですが、気がついたら……」

恐怖を思い出したように蒼白な顔をしながら、リクベル医師を見上げる。

「気がついたら、ここに」

「救助用の小型ボートに上手い具合に引っ掛かっていたようで、そのまま海上を漂流していたようなんですよ。それをカンサスの漁船が見つけましてね」

「ほうほう。そりゃあ幸運でしたねぇ」

「じゃあ、他に助かった人がいるかどうかなんてのは……」
エレナの質問に、エクセルは力なく顔を横に振った。予想していたので、特に失意する理由もない。ではフレデリクが生きてるかどうかは、まるでわからないと言うことか。可能性としては、薄いだろうが……。
「そうですか。結構ですよ。ありがとうございました」
これ以上は得るところもないだろう。そう判断してリクベル医師に頭を下げる。
「どうもお騒がせしましたね。失礼しましょうか、エレナさん」
「ああ、うん……」
歩き出しかけて、ふとグレンが思い出したように足を止めた。見送る医師と患者を振り返る。
「そうだ。しばらくは、近隣の猟師も海に出るのを控えた方が良いでしょうね」
「え？」
「シー・サーペントは、海上に浮上してくるとしばらくその周辺で活動します。行動範囲も広いですからね。しばらくするともっと北や南へ移動するかもしれませんけど、少なくとも現状はロドリスやロンバルト海域をうろついているでしょうし」
エクセルの体が小刻みに震えた。リクベルが宥めるようにそっと肩に手を置く。
「これまでも、シー・サーペントは海戦で暴れた後に近隣の漁船や商船を襲っています。気をつけるに越したことはないと思いますよ」
ちらりと振り返ったグレンに、リクベルが頷くのが見えた。
「わかりました。……しばらくは、海に出るのを控えるよう、警告を呼びかけます」

◆　◇　◆

「間に合わなかったか……！！」

遠く噴き上がる黒煙が、まるで昇竜のように夕陽に染まる空へとたなびいている。

それを馬上で認めたヴァルス　ラルド要塞軍将軍ガーフィールが、呻き声を上げる。そばに控える将官たちも言葉にならない呻きを上げて、空に視線を定めた。

「様子を見てくる。スフォルツ、ザクトゥール、共に来てくれ」

険しい表情で将官、将校それぞれ1名ずつ呼びかけて馬首を返すシェインに、ガーフィールが慌てた声を出した。

「危険です」

「大人数では人目につこう。どんな様子か見てくるだけだ。それによってこちらの動きも変えねばならぬゆえな」

言って馬を駆るシェインに、名指しされた2名が続く。戦場の喧噪はまだ遠い。少人数での行動でむしろ心配されるのは、魔物の方だ。もちろん生半可な魔物では、将官と将校を引き連れた宮廷魔術師の命など奪えるはずもないのだが。

デルフト要塞は高度にあり、そこを巡る攻防を見晴らせる場所を探すのは容易ではない。

頭に叩き込んだ地図を引っ張り出し、進路を吟味しながら馬を進める。やがて、要塞とほぼ同じ高度と思しき崖へとたどり着いた。つまり戦闘が行われている要塞へ続く道は見渡すことが出来る。

その光景を見下ろして、三者三様に息を飲んだ。スフォルツが緊迫した顔でシェインを振り返る。

「シェイン殿……！！」

「……まずいな」

思わず舌打ちが洩れた。完全にロンバルトが押されている。破城鎚はデルフト要塞の塁壁に食い込み、その根幹である木組みの露出した部分に放たれた炎が燃え移っていた。これではいかにも侵入はたやすく、陥落するのは時間の問題だろう。

「デルフトを奪還しなければッ……」

焦ったように言い募るザクトゥールに、シェインはたなびく黒煙

に視線を定めたまま、低く答えた。
「馬鹿を言え」
「では放っておくと!?」
「そうは言わぬ。が、要塞の奪回に固執してはこっちが壊滅だ」
「……」
「あのありさまでは、デルフトの奪回は叶うまいよ」
「しかしッ」
「残兵の逃走を援護しよう。あれほどの混戦状態、我々が参入したところで回復は望めまい」
「……」
スフォルツが悲痛な顔でシェインを見上げ、視線を眼下の混戦へと落とした。
「いずれにしてもこのままでは壊滅だ。ロドリスがここを拠点に狙う先は王都だろう。要塞軍の生き残りが駆けつければ、ウォルムス防衛に一役買うさ。……戻るぞ」
再びシェインらと合流したヴァルス軍は、シェインの意見に従ってロンバルト残兵の逃走を援護する為に進軍を開始した。デルフトへ続く一本道に群がるロドリス軍の後背をつく形で展開した5千のヴァルス軍を率いるのはガーフィールである。
突如現れた敵の援軍の姿に、当初こそ動揺したロドリス軍だが、要塞内や付近のロンバルト軍の一掃に一部の兵力を割くと、全兵力を急遽旋回させた。後背のヴァルス軍に迎え撃つ為である。
新たに投入された戦力とは言え、その数はざっと見る限り数千。開けた場所に展開しているヴァルス軍に対して狭い道から雪崩出ると言うハンデがあるにしても、負ける人数ではない。こちらは勢いに乗ってもいる。
侵入を果たしたデルフト要塞の中でロドリス軍将軍ライオネルは、望める窓から下を見下ろした。ロドリス軍が移動を開始する間、ヴァルス軍は整然と隊列の立て直しに入っている。
ロンバルトの残兵はもうさほどの数はいないだろう。城内はほぼ

片付けたし、後は塁壁の内側から外に向かっている方に善戦している僅かな兵がいるのみだ。

「たかだか数千とは言え、ヴァルス軍だからな。数は減らしておくに越したことはない」

そうひとりごちるライオネルの足下には、袈裟掛けに胸を切り裂かれた青年が横たわっていた。床に流れ出した夥(おびただ)しい量の血液が、彼の意識はもうこの世にないことを物語っている。デルフト要塞総指令官リートリッヒだった。

刻々と陣営を形作っていく両軍は、それが完成する前にヴァルス軍が攻撃を開始した。それはそうだろう。せっかく有利な地形にいると言うのに、わざわざロドリスが不利な地形を脱するまで待ってやる理由はない。

ふと敵の立場になって思ってしまった自分に思わず苦笑いをしながら階下へ降りようと背を向けた時、ライオネルはふと視界の外に異質なものを見たような気がした。再度、顔を窓の向こうへと向ける。

「な……！？」

その顔が、驚愕に凍り付いた。ヴァルス軍が展開し、ロドリス軍が雪崩打つその左方に突如噴き上がった炎の柱……何だ、あれは！？

思わず固唾を飲んで見守る中、躍り出た炎の柱が移動を開始する。更に目を疑うべきことに、柱から放たれた幾筋もの炎の奔流が、己に意志のあるひとつの生き物のようにうねりながらロドリス軍へと襲いかかったことだ。

まさしく絡み合った火竜のように、ありえない方向へのたうつ炎に、ロドリス兵士が焼かれ、おののきながら道を開ける様が見える。

（魔術師か……！！）

しかも、並大抵の魔術師ではない。一介の魔術師兵に出来る技ではなさそうだ。休む間もなく放たれ続ける豪火にロドリス軍が開けた道筋を、不意にその後ろから躍り出た影が突っ込んでいく。馬……いや、騎兵だ。

（要塞に突撃して来るつもりか……！？）

驚異的な魔力を放つ魔術師の存在に顔を強ばらせ、ロドリス軍の陣頭指揮を執る為に、ライオネルは剣を掴むと走り出した。

ロドリス軍将軍に『動く炎の柱』と認識されたシェインは、魔法を使う都合上、馬を下りた単身でロドリス陣営を切り崩す羽目になっていた。とは言え、その身を取り巻く豪火の柱に近寄れる者などいはしない。時折まるで触手のように、うねりを上げて炎が襲いかかってくるとあれば尚更である。

そうしてシェインがロドリス兵を蹴散らして開けた道を、シェインに従う５００騎の騎兵が突入していく。目的は無論、逃げ道を失っているデルフト要塞軍の援護である。

残念ながらこの要塞は、回り道をしてロドリス軍の向こう側を突くような真似は出来ない。突き崩して突破する以外に手段がないのだ。

ましてロドリス軍が、ご丁寧に濠や土塁を築いてくれたとあれば尚のことである。

ヴァルスの好色道化師……もとい天才魔術師が立て続けに放つ魔法が、ロドリス軍に大きな動揺と打撃を与えていた。何せ一兵卒には魔法に立ち向かう術がないのだ。まさしく脅威である。

大きく道が開けたところで、不意に炎の柱が姿を消した。身ひとつとなった魔術師の姿に気づいた兵士が、果敢にも剣を片手に地を蹴る。だが、それはやはり無謀な勇気だったようだ。ちらりと赤い瞳が攻撃を仕掛けてくるその姿をとらえ、僅かな間を置いて青い一筋の雷光が天から地をめがけて駆け抜ける。まるで空間に亀裂が走ったかのような一瞬の光景の後、今度はたどり着いた地表を四方八方に駆け抜けていった。

地上を疾る稲妻に、幾人もが絡め取られる。まさしく『歩く凶器』である彼は、整った口元に笑みを刻んだ。

「俺を何とかしようと思うならば、せめて宮廷魔術師を引っ張りだ

して来るのだな……」
　小さくひとりごちて前方へと駆け出す。その周囲に出現した巨大な火炎に、彼を止めようと言う勇気のある者は既にいなかった。湧いた火炎はごうごうと音を立てて彼の周囲を旋回しながら、時折炎の触手を迸らせる。
　塁壁の内側に駆け込んだシェインは、ロッドを構えながら辺りを見回した。折り重なるように倒れる傷を負った兵士たち。その間を縫うように、シェインの姿を認めたロドリスの兵士が、剣を構えて駆け寄ってくる。
　火炎弾を連射して蹴散らしながら奥へと進むシェインに、蹄の音が近づいた。スフォルツだ。
「シェイン殿ッ」
「……ダビトゥル・ウォービース・イグニス……。スフォルツ……無事か」
　問いかけるそのそばから、火炎弾がバラ撒かれていく。生きた砲撃台のようなその有様に思わず笑いを浮かべながら、スフォルツが馬を進めた。
「味方を火だるまにしないで下さいね……」
「わからんな。自分で気をつけるよう言ってくれ」
　にやっと笑いながら嘯くシェインに苦笑を返しながら間近に寄ったスフォルツが、後ろに乗るよう促した。
「撤収はほぼ呼びかけたと思います。後はもう、各々の判断と裁量に任せるしかないでしょう。我々も、そろそろ撤退を」
　その言葉に頷いてシェインが後ろに飛び乗ると、スフォルツが馬首を返した。行きと同様、帰りも道を開けさせてやらねばなるまい。
「巻き込まないで下さいよッ」
「巻き込まれてくれるなよッ」
　尚も念を押しながら馬を駆るスフォルツの背後で言い返しながら、シェインが魔法を発動させた。
「……メディオー・トゥーティッシムス・イービスッ」

巨大な火炎がわき起こり、前方を塞ぐロドリス兵の壁めがけて突っ込んでいく。

ロドリス兵がデルフト要塞の兵士に踊りかかるのを弾き飛ばし、開けた道を共に駆け抜けて行くと大声でヴァルス軍に呼びかけた。

「撤退だッ！！」

その声に反応して、ロドリス軍を引きつけていたヴァルス軍が後退を始める。剣を交えながら、ロドリス軍はヴァルス軍追撃の構えを見せた。後退するヴァルス軍に従って、戦地は次第に移動していく。

ロドリス軍の第一の目的は、デルフトの陥落。要塞から離れていくことにロドリス軍が不安を覚え始めた時、急激に辺りに霧が立ち込めた。木々の合間を埋め尽くすように湧き出てくる濃霧。それは、視界が霞んだと思った時にはあっと言う間に数エレ先の視界を奪い去っていく。ロドリス軍に動揺が走った。

「くそッ……全軍、退けぇッ」

ライオネルの怒号が飛ぶ。これだけ陣営が崩れた状態で、敵が前方に控えるだろうこの複雑な地形を濃霧の中進むほど馬鹿ではない。ラルド要塞からのヴァルス援軍も叩くに越したことはないが、見た限りさしたる勢力でもなさそうだ。一度態勢を立て直してから追撃しても良いだろう。どうせ向かう先はロンバルト王都――ウォルムスだ。

そう判断したロドリス軍が、混乱を飲み込みながら撤退を図る。足元に気をつけるよう呼びかけながら濃霧の中を抜けたライオネルは、薄笑いを口元に浮かべて振り返った。

「すぐに、片付けてくれる……」

世界が薄煙に霞んでいく中、ヴァルス軍は完全に姿を消した。

◆　◇　◆

「……はぁ……はぁ……」

デルフト要塞軍の残兵の逃走を援護し、ひとまず要塞付近からの脱出を図った馬上で、シェインは荒く息をついていた。馬を操るスフォルツが心配げに振り返る。
「大丈夫ですか、シェイン殿」
「……ああ」
短い返答を返し、消費した魔力と体力の回復に努める。
最終的にロドリス軍からヴァルス軍の姿を隠した霧――それも広範囲に渡る濃霧の魔法は、ひどく力を消耗する。その場に単発で起こすのではなく、いわば自然現象のひとつを起こすのだ。道理であろう。
「追ってくる、気配は、あるか」
息を繋ぐシェインに、スフォルツがかぶりを振った。
「大丈夫です。今のところは。何とか撒いたようですが」
「ふん……」
小さく鼻を鳴らし、ふてぶてしい表情で目を細めるも、その力なさと顔色の悪さは隠せない。
「ガーフィールのそばに寄せてくれないか」
「はい」
夕闇が迫って来ている。辺りにはまだ先ほどの霧の名残が立ちこめ、微かに肌寒さを感じさせた。
やがてガーフィールの馬が前方に見え、スフォルツは宮廷魔術師の意向に従うべく声を上げる。
「ガーフィール将軍」
全軍は緩やかに進軍している。向かう方角の見当はついているだろうが、この霧の中ではロドリス軍も容易には追いつけまい。
「シェイン殿。大丈夫ですか」
「大丈夫だ。怠けてたツケが回っただけのこと……繊細なものでな」
減らず口が叩ければ大丈夫だろう。ガーフィールは苦笑を浮かべて肯いた。
「どうなされるおつもりか。このまま真っ直ぐウォルムスを目指し

て構わぬか」
　問うた将軍の言葉に、シェインは軽く目を伏せた。低い笑みがこぼれる。
「デルフトの奪還は叶わずとも、侵略者共の数を減らすことは出来よう。むざむざとウォルムスの挟撃を許してやる筋合いではない。幸い俺たちは奴らとウォルムスの中間にいるからな。せいぜい妨害させてもらうさ」

第2部第2章第14話　歯車（3）

濃霧に進軍を妨げられたロドリス軍は、一旦デルフト要塞へと撤退した。

このまま放置しておけば、隙をついて奪還されてしまう。それでは苦労が水の泡だ。

要塞を押さえることのメリットは、精神面と物質面の双方にある。精神面は無論、敵への権威付けだ。

ひとつひとつ要塞を落としていくことは、相手の陣地と言うマスを、ひとつひとつ自分の色で塗り変えていく作業である。

そして物理的な側面とは、物資の補給だ。要塞には多くの備蓄がある。多くの人間が長期間の滞在を予定しているのだから当然のことである。行軍を続け、自らの備蓄所から離れていけばもちろん不安である。手近なところに新たな備蓄所を確保しておくに越したことはない。敵の物資であれば尚一層、である。

ここからウォルムスまでは、もう遮るものは何もない。どうせ先のヴァルス軍もウォルムスを目指すだろう。移動行程の中で追撃し、ウォルムスへの援軍を減らしておけば後の仕事が楽になる。どうせ大した兵力ではなかった。

ロドリス軍は5千をデルフト要塞の守備と修繕に充て、一夜明けた翌朝、残る全軍がデルフトを出発した。濃霧で進路が妨げられるのはヴァルス軍とて同じこと。それほど驚異的な速度で移動したとは考えられない。まだ、ヴァルス軍に追いつくことは可能だろう。

時折斥候を飛ばしては、先行しているヴァルス軍の足取りを確かめる。ウォルムスに入る前に壊滅させねばならない。

要塞付近の岩窟地帯を抜けると、道は次第に草木に覆われた緩や

かなものになっていく。やや拓けた平地部分に差し掛かった時、そこにいくつも焚き火の跡があることに気がついた。どうやらヴァルス軍の野営地であったらしい。

早速ライオネルはその規模を確認させた。これで今自分たちが追っているヴァルス軍の勢力が見当がつく。やがてもたらされた報告に、ライオネルは満足した。その規模およそ1万弱。デルフトに仕掛けてきた人数のほぼ倍近い。どこかに伏兵でも置いていたのだろうか。だが、ロドリス軍に太刀打ちするには、いささか脆弱だ。

数日をかけてヴァルス軍の野営の跡を追跡していたロドリス軍は、行程の中でふと妙なことに気がついた。時折投げ捨てられるようにして草むらに転がる装備、少しずつではあるが、縮小していく野営の規模。

これらの状況が示すものは……逃亡兵か。

進むごとに、ヴァルス軍の野営地は規模を少なくしていく。その距離も少しずつ縮まっていった。もう少しで追いつく。獲物を追いつめていく快感に、ライオネルは勝利を幻視した。

「全軍停止ッ！！」

緑豊かなロンバルトの王都までほど近いその緩やかな山間には、澄んだ水を湛えた美しい湖がある。柔らかい弧を描きながら静かに広がっていく湖に沿って、鮮やかな緑が揺れている。風景に彩りを添える季節の花が、甘やかな香りを滲ませた。

燃える太陽が低い位置から投げかける西日に、静かな水面が赤く染まる。

……ここならば見通しは、悪くない。

少し先まで進むと、弧を描いていく湖に繁る木々が覆い被さるように道を埋めていっているように見えた。危険だ。万が一ヴァルス軍が引き返してきた場合、思いがけない乱戦へともつれ込む危険性がある。

相手が予期していない戦闘は指揮系統が混乱するから望むところだが、こちらまで予期していないのは望ましくない。

この場で野営を張ることに決めたライオネルは、全軍に停止を命じた。斥候に周囲の偵察を命じ、安全を確認した上で野営の準備に取りかかる。

地形を確認したところによれば、この先、ウォルムスへ抜ける前に平地に差し掛かる。ライオネルはそこでの決戦を心に決めた。正面からの総力戦を挑めば、兵士の逃走を許してしまっているヴァルス軍に負けはしまい。最後に見た野営地の位置からするに、もうさほどの距離はないはずだ。恐らく明日には追いつくだろう。魔術師ひとりいたところで、それで戦況が大きく左右されるわけでもない。――勝てる。

程なくして、ロドリス軍は野営の準備を終えた。明日の総力戦を前に、休養はしっかり取らねばならない。全軍速やかに、眠りの海へと沈み込んでいく。もちろん、万が一の夜襲に備えて交代での見張りも立てた。

奇妙な物音が聞こえたのは、その日の明け方近くになってからだった。月の光が滲む藍色の空が、少しずつ朝を迎える準備を始める。まだ暗いながらも鳥の囀りが微かに響き始め、夜襲を受けずに朝を迎えたことに見張りの気が緩み始める時間帯だ。

カサリ、カサリ、と草を踏み分けるような音。微かに聞こえる、金属質の音。

（……？）

安堵に包まれて、ついうっかり眠くなりかけた見張りの全身に緊張が走る。湖のすぐそばと言うこともあり、水分を多く含んだ空気はじっとりと湿り気を帯び、至るところに朝露が浮かび始めていた。眠る兵士たちの装備や全身も例外ではない。空気中の水分が体温を奪い、全身はひんやりと冷えてさえいる。

「おい……」

そばで同様にうつらうつらし始めていた見張り仲間に声をかける。その声に我に返った仲間たちが、朝靄（あさもや）の奥に目を凝らした。白く霞む露混じりの木々の向こうに、黒々とした影が接近してくる。まだ

距離はあるものの、それは間違いなく……。
「ヴァルスだッ……」
「奇襲だぁぁぁぁッ！！！！！」
不意に吹いた一陣の風が、朝靄を取り去る。
湖を迂回して、前方からこちらを目指して整然と突っ込んでくる姿は、間違いなく先日姿を消したヴァルス軍だった。

◆◇◆

大神殿の礼拝堂には、最奥の壁際に祭壇が設えられている。がらんとした、質素で荘厳な空気に身を包み、偉大なるファーラ神がその祭壇の中に美しい佇まいを見せていた。
ファーラ女神像には数種類あるが、ここ、ヴァルス大神殿にある女神像は、右手に剣を、左手には錫を持っている。これがファーラを象徴する、最たる姿だと言われていた。
剣が表すものは、戦。ファーラ神はそのたおやかな姿にそぐわない戦姫でもある。守り勝利に導く女神だ。
そしてその一方で、人を愛し、慈しむことを説く慈愛の神でもある。左手は命に繋がり、その手に持つ錫には平和を意味するリングをモチーフにしたデザインが為されていた。
それを見るたびにユリアはその答えを問うてみたくなる。今は特に……尚更だ。
人を愛し、守ることと、戦い争うことは、相容れるものなのだろうか。
どうしても理解が出来ない。納得がいかない。
――必要があるなら争いを避けるつもりも、戦闘を回避する気も、ない
責める自分を見つめる陰った微笑み。その瞳に滲む寂しげな色が、胸に刺さる。
けれど、どうしても頷けなかった。カズキの言うことは、わから

なくはない。わからなくはないけれど、認めてしまえば終わりではないだろうか。

……どうしたのだろう、と思う。前は、あんなふうには考えていなかったはずだ。はっきり聞いたわけではないけれど、剣を握る手が、ユリアを守る背中が……奪わなければならない自分に疑問を抱き続けているように見えたのに。

あんなふうには決して、考えてなどいなかったはずなのに……。

（わたしのせい？）

誰に対しても何に対しても、優しい気持ちで接しているように見えた。魔物の命を奪うことにさえ、躊躇っている姿を覚えている。

彼が旅する間に起きた出来事が彼を変えていったのだとすれば、それは……自分のせいだ。

……大切なもの。

ユリアにとって守り抜きたい大切なものは、父の遺したヴァルスだ。そして守りたい大切な人は、ユリアを取り巻くその全ての人々だ。

誰しも大切な誰かがおり、必ずその人を大切に思っている誰かがいる。必ずだ。その誰かが深い悲しみに落ちることがないように、ユリアは国の主として民のひとりひとりを守りたい。

そうは思うのに……何と難しいことなのだろう。実際にはユリアは、シェインと言う兄にも似た存在を戦地に送り出すことを、黙認しなければならなかった。

――俺は自分の大切なものを守る為だったら……

（自分の、大切なもの……）

その言葉は、何を指していたのだろう。彼の大切な人は、誰なのだろう……。

ちくり、と胸の奥が痛んだ。……そう。いるに決まっているではないか。今し方、ユリア自身が考えたことだ。

必ず大切に思う誰かがいる、と。

（本来の、居場所に……？）

カズキがいるべき場所はここではない。そこに彼の大切な誰かがいたところで、何の不思議があろう。もしくは、こちらで旅する間に誰かと知り合う機会があってもおかしくはない。

その考えに自分でどきりとし、ふと上げた顔の先でファーラが静かにユリアを見つめている。自分の心を見透かされているようで、ユリアはそっと顔を伏せた。

……そんなことに心を揺らしている場合ではない。女神の荘厳な空気に、諫(いさ)められているような気がする。

ユリアが案じなければならないのは最愛なる婚約者の身であり、ヴァルスのこれからだ。個人的な感情に身を委ねている場合ではない。

（でも……）

まるで言い訳をするように、胸の内で呟く。

（でも、無関係じゃないわ。カズキたちの動きでレガードのことも、ヴァルスのことも、影響が出るんだもの……）

それに彼を危険に曝しているのはユリアだ。その身を案じて何が悪い。当然と言うものだ。

（ヴァルスの為に動いてくれているんだもの。その身を心配することくらい、許されるはず）

懸命にファーラへとも自分へともつかぬ言い訳を胸中で繰り返しながらも、女神を正視出来ずにユリアは長い睫毛を伏せた。

自分の心を正面から見つめれば、それは『不実』であるような気がする。

確かに、カズキに惹かれているのだ。幽閉された極限状態の時には、その想いを口にすることさえ決意するほどに。

けれど我に返ってみれば、自分には婚約者がいる。そしてそれは、動かし難い決定事項だ。

……疑問に思ったことはなかった。そこに迷いを感じたことなどただの一度もなかった。

ユリアはレガードを大切に思っている。レガードもまた同様だと

知っている。そして、双方そこに恋愛感情と呼べるものが間にないことも、また……。

「ユリア様」

礼拝堂の開け放した扉に、小柄な人影が見えた。呼びかける声に振り返ると、老いて尚背筋をぴんと張った大司教の姿がそこにあった。

「ガウナ様」

「ユリア様の祈りを、ファーラが聞き届けられました」

「え……？」

陽光を背に中へ足を踏み入れるガウナの言葉に、ユリアが目を瞬く。跪(ひざまず)いていた体を起こし、立ち上がりながらガウナに向き直った。ガウナがユリアを穏やかな微笑みで見つめる。

「レガード様の、行方が」

「――え」

どきりと心臓が跳ね上がった。一瞬言われた意味がわからずに、大きな瞳を見開いて瞬きを繰り返す。真っ白になった頭の片隅でレガードの笑顔が蘇り、きゅっと胸元に握った手が小刻みに震えた。

「レガード、が……？」

余りのことに、まだ理解が追いつかない。今自分は何を言われているのだろう。もう一度ガウナの言葉を頭で繰り返す。

「レガード様の行方が、わかりました」

「……」

レガードが、見つかった――。

どくどくと心臓が高鳴り、震える膝が自分を支えられなくなった。力が抜けてすとんとその場に座り込むユリアの両目から、大粒の涙が溢れ出す。

「本当に……？」

「はい。……無事、生きておられると」

「……良かった……ッ！！」

まだ、信じられずにいる。自分は今、幸福な夢を見ているのでは

ないだろうか。溢れ出す涙に、両手で顔を覆いながら紡ぐ言葉を見つけることが出来ずにいた。ガウナがそっとユリアのそばにしゃがみこむ。

「ガウナ様ッ……ありがとうございますッ……」

喉が詰まる。胸に込み上げる思いを押さえきれずに、声が震えた。ガウナの温かい手がユリアの肩にそっと触れる。

「無事だったのね……良かった……」

思えば長い期間だ。数ヶ月の行方不明期間に、半ば諦めた気持ちにさえなっていた。無事で見つかる可能性は、限りなく低いような気がしていた。両手で顔を覆ったまま、ファーラに感謝の意を捧げる。

「会いたいわ。今、どこに……？」

涙を止めることが出来ないまま顔を上げるユリアに、ガウナが小さな吐息をつく。

「ええ……それなのですが」

その表情に複雑なものを読み取って、ユリアは微かに眉根を寄せた。やはり見つかったと言うのは自分の聞き違いだったのだろうか。いや、そんなはずはないのだが。

「ご無事でおられるのは確かですが、意識をお持ちでないと」

「え……？」

「昏睡状態であられると言うことです」

「……！！」

驚きの余り息を飲む。

「そんな、どうして？」

「わかりません。現在、ギャヴァンの盗賊ギルドが保護をしていると言うことで、その身柄をどうするかを……ラウバル殿がご対応中です」

「どうするかって……？」

「……そのことで、幾つかご報告が」

見上げるガウナのその後ろ、先ほど大司教が入ってきた同じ扉に、

今度は長身の人影が姿を現わした。宰相のラウバルだ。低い声に顔を上げる。そしてその背後に小柄な人影を見つけて、内心そっと首を傾げた。濃緑のローブを身に纏った、老人だ。

「ラウバル……」

見慣れぬ姿に立ち上がりながら見つめるユリアの視界の中、老人を連れたラウバルがゆっくりと礼拝堂に歩を進めた。

「そちらは……？」

尋ねるユリアの前で、ラウバルがそっと老人を振り返る。老人がユリアを眺めて「こりゃー別嬪さんじゃなー」と軽口を叩いた。気難しい顔をしたラウバルが横目でじろりと睨む。

「……尊師」

ラウバルの声に老人が首を縮める。

――『尊師』？

「最近はギルドの馬鹿息子にもっぱら『ガーネット』と呼ばれておるんでな。お前もそう呼んで構わんよ」

「呼べるわけがないでしょう。……ご紹介致します」

飄々と言って白い歯を覗かせた老爺にため息をついて、もう一度ユリアに向き直ったラウバルが老人を紹介した。

「シュリヴィドル尊師――私の、恩師です」

第2部第2章第15話　ロンバルトを灼く灯（1）

男は、自分がどこへ向かっているのかを知らなかった。
それどころか彼は、自分が誰なのかも知らなかった。
目が覚めたら、『あばら家』としか言いようのない粗末な小屋に横たわっていた。
体を動かしてみると、節々が痛いが動けないわけではなさそうだ。
立ち上がって見ると、彼以外小屋の中には誰もいないことがわかった。
貧しいながらも一応家具らしきものはあるし、彼が寝かされていたのは多分ベッドの一種だ。と言うことはここは誰かの生活圏なのだろうし、だとすれば彼を寝かせた人物がいるはずだ。
そこで、日が暮れるまで誰かが戻ってくるのを待ってみたが、誰も戻ってくる気配はなかった。彼を拾って介抱してくれた、その小屋にたったひとりで住んでいた老人が森で魔物に襲われて帰らぬ人になったことなど知るはずもない彼は、じっと夜明けを待った。悪いと思いながら小屋の中の食物を漁り、食い繋ぎながら幾日か、待った。だが、帰ってくる人も訪れる人も、いなかった。
仕方なく、置き紙をして外に出てみることにする。後ろ髪を引かれる思いはしたが、誰も戻らないこの小屋にいつまでもいても仕方がない。
外に出てみると、この小屋は海岸沿いにあることがわかる。どこかの村の内部ではなく、完全に孤立した小屋だった。何かを尋ねようにも、尋ねる人間がいない。
そこで、まずはここがどこなのかを尋ねる為に彼は人のいる集落を探し求めて歩き始めていた。戻れなくなっては不安だから、海岸沿いにずっと歩いていくことに決めた。
歩きながら、自分が何者なのかを考える。目覚めてからの数日で、いくつかわかったことはあった。

まず、言葉。言葉は問題なく話すことが出来るらしい。置き紙をしたことでもわかるように、文字も書くことが出来る。そして、日常生活に必要な常識的な記憶も欠落しているわけではなさそうだ。

ただしこれは『多分』と言う注釈がつく。彼のいた小屋の中にあった生活用具には用途や目的がわからないものが幾つかあったし、口にした食物は舌に合わないような気がしたからだ。何かが欠落したせいなのか、それとも元々知らないのかは、定かではない。だから、『多分』。

身なりは、良いとも悪いとも言い難いような気がする。きちんと洗って畳んで枕元に置いてあった衣服を自分のものなのだろうと見当をつけて身につけているのだが、質そのものは悪くない衣服のようなのに、どうにもぼろぼろだ。

海風に吹かれながら目を細めて歩いていると、海を挟んで遠くに岬のような陸地が見えた。まだ、遥かに遠い。あそこまでこのまま歩いていくにはきっと幾日もかかることだろう。

（ここは、どこなんだ……）

ローレシア大陸のどこかではあるのだろう。海沿いに遠く岬が見えるということは……ロドリスの海岸沿いか、モナの海岸沿いだろうか。自分が今南に向かって歩いているのだとすれば、バートの海岸沿いかもしれない。いや、太陽の位置から判断するに、南に向かっていると言うことはないだろうから……。

地理を思い描いてから気づく。自分は地理に関する知識も多少なりとも持ち合わせているようだ。

モスグリーンの瞳に映る岬を眺めながら、ため息を落として淡い金色の前髪をかき上げた。

彼は何もわからないし、何も持っていない。これから自分がどうすれば良いのかさえ、わからない。自分に何が起こってこんなことになっているのかも、わからない。

とにかく、誰かに何かを聞いてみなければ。

自分が誰なのかはわからなくても、ここがどこなのかは、教えて

くれるだろう。

◆◇◆

ヴァルス軍追撃に出たロドリス軍が野営地に定めたベルジューヌ湖畔は、それなりの標高にある。薄いテントでは、春に差し掛かったばかりの朝方の冷え込んだ気温を防ぐことは出来ない。

寝ている間に下がった体温に追い討ちをかけるように熱を奪っていく朝靄に、冷えた体を自分で抱き締めていたリニウスは、慌しい足音とけたたましい喇叭の音で目を覚ました。

唐突に打ち切られた眠りに、まだぼんやりとする頭で重い体を起こすと、見計らったように別のテントで休んでいた同旅団の先輩が駆け込んできた。

「敵襲だ!!ぐずぐずするな!!」

「!?」

まだ血の廻らない頭は、その言葉を理解するのに少々時間がかかった。敵襲……敵襲!?

「ヴァルスですか!!」

「他におるまいッ」

それもそうだ。

急激に頭が目覚める。

「直ちに装備を整え、表に出ろッ」

急かされるままに慌ただしく装備を身につけながら、自分の動きがどこか鈍いような気がした。それはそうだろう。デルフトの攻防と行軍で疲れているのだ。ようやく寝たと思えば朝もまだ薄暗いうちから、こうして叩き起こされている。湖畔の朝は冷え込む。追い打ちをかける朝靄に更に熱を奪われ、身体機能は著しく低下しているのが自分でわかった。血糖値も上がらない。食事をとることさえ間々ならないのだから、脳と体が活性化するにはまだ少し、時間がかかるだろう。

装備を調えてやっと外に駆け出てみれば、まだ微かに煙る朝靄から見える空は重い曇天だった。一雨来るかもしれない。

「くそ……汚い手を」

「ヴァルス軍は逃亡兵が相次いでいる。今の戦力さえ、1万には満たないだろう。奇襲をかけるしか勝つ手はないと踏んだのだろうな。……負けぬ」

「……はい」

自分の馬に跨りながら、将軍ライオネルと副将軍バルタザールが話すのが聞こえた。それは、行軍の間も兵士たちの間で囁かれていた噂だ。

ヴァルスが最初に投入したのは数千。野営地の痕跡を見れば実数はそれ以上だとはわかるが、温存兵力をあわせてもロドリス軍の半分程度だ。更に逃走兵が出ているとなれば一層少ないだろう。

勝った、とは、口に出さずとも誰もが考えたことだ。

「騎兵第3旅団、進軍開始しますッ」

「竜騎兵第6旅団、準備完了!!出発します!!」

「ヴァルス軍と対する前に先行した騎兵及び竜騎兵と共に、可能な限り隊列を組み直せ。相手は我々の半数だ。基本陣形で正面突破しろ。パイク兵はどうした!?」

バルタザールの怒声を聞きながら第6旅団長ディラの指示に従って馬を駆って行くと、前方でいち早く態勢を整えた騎兵隊が陣形を整えているのが見えた。速度を緩める。リニウス属する竜騎兵第6旅団は、左翼右列に組み込まれることになった。パイク兵が間に合えばパイク兵が、間に合わなければそのまま右左翼の中央よりに組み込まれた竜騎兵が、中央を請け負うこととなるだろう。

馬を進めながらふと、ロドリス軍前面で、距離を置いてヴァルス軍がやはり陣形を展開しているのが見えた。だがこちらはまだ兵が揃ってさえいない。騎兵・竜騎兵は馬に乗る都合上装備が軽いし移動速度も速いが、歩兵・重装歩兵ではそういうわけにはいかない。主力となるパイク兵の到着もまだだ。戦闘態勢に入るのは、ヴァル

スの方が恐らく先だろう。
　自分のいるべき場所を確かめ、すべきことを確認しながら目でヴァルス軍の動きを追う。整然と組まれていくヴァルス軍の陣形に、特に奇異に思える点はない。尤も、経験値の浅いリニウスでは、その判断が正しいかどうかは良くわからない。総数は、確かに予想通りこちらの方が多いようだ。
　気がかりな点は魔術師の存在と、ヴァルス軍の主力が騎兵と言う点だ。名馬の産地ウォルムスタトを抱えるヴァルスは、軍編成における騎兵の割合がキルギスに次いで多い。
（負けるはずがない）
　まだ体が重い気がする。我に返ってみれば空気はまだ冷たく、胃袋は食物を要求した。
　少しずつ兵が揃い、ロドリス軍が前衛を完成させた頃、やはりヴァルス軍が攻撃態勢に移った。土煙をまき散らして第1陣である騎兵隊が肉迫してくる。応戦する為にロドリス軍も、整わない陣形はそのままに騎兵隊が突撃を開始した。それに竜騎兵隊が続く。
「第6旅団、進撃！！」
　号令に従って、竜騎兵第6旅団は騎兵隊に続いた。リニウスも戦場へと馬を駆る。最初こそ戦うことに緊張と恐怖を抱いていた若者は、今もまだその名残はあるものの、ラティス焼き討ちとデルフト攻防戦で血の味を覚えた。
　ヴァルス軍の中央は、歩兵で構成されている。中央寄りに位置していたリニウスは、馬を下りて剣に手をかけた。
　戦場において生き延びることは、要は運だ、と言う気がする。リニウスは歴戦の戦士ではない。剣技の訓練は受けたが、それだって他の志願兵と一緒に一定期間受けただけだ。傭兵や経験豊かな兵士などと渡り合える技量は、どこにもない。
　だが、対するヴァルス軍だって実状は似たようなもののはずだ。大半はリニウス同様徴兵もしくは志願を募って、昨日まで畑を耕していた人間に剣を持たせている。

戦場で、誰と剣を構えるかなのだ。
リニウスは腕のたつ人間と対峙して生き延びる自信はないけれども、リニウスと同立場の人間相手だったらわからない。
ひとり目と切り結ぶ。運は悪くなかったようだ。相手もリニウスと同じ、にわか兵士。
辛くも相手の首に剣を突き立てることに成功し、上がる血飛沫を浴びながら次の相手を探す。そうして2人目、3人目と相手の人生を断ち切ることで自分の命を繋ぎながら、リニウスは必死に戦場を走った。
その視界の隅に、兵士とは明らかに違う出で立ちの赤い髪の男を認めたのは、戦端が開いてからどのくらい経ってからだったのだろう。随分と戦場の隅まで来てしまったらしい。
時間の経過とともにどんどん重たそうに垂れ込めていった曇天からは、ぽつりぽつりと微かに雨が降り始めていた。
（魔術師――――！！）
デルフト要塞で見た炎の柱を思い出した。もちろんたったひとりの存在で戦況が激しく変わるかと言えば答えは否だが、魔術師……それも驚異的な魔力とくれば兵力としては『ひとり』と換算するのは過ちだろう。つまり彼を穫れば、その成果は大きい。
（出来るか？）
出来る自信は正直なところ、ない。けれど、チャレンジしてみる価値はある。リニウスは、魔術師や魔法と言うものがどんなものなのかを良く知らなかった。彼の村には魔術師はいない。
魔術師の周囲にはロドリス兵士が数人、殺到していた。それに臆した様子を見せずに、魔術師がロッドを構えた。このまま何事も起こらなければ、彼は四方八方から襲い来る剣を、全身から生やしたようになるだろう。
しかし次に目の前に現れた光景に、リニウスは自分の目を疑った。
血飛沫を上げて全身を貫かれたのは、襲いかかったロドリス兵だ。低い唸りを上げて突き刺さったのは、『地面』だった。

魔術師の周囲の大地が、突然鋭利な突起物を幾つも隆起させたのだ。その様子はまるで剣山だった。デルフトで見た炎のように、地面が意志のある生き物のように彼の周囲に襲い掛かる敵兵を貫いていく。襲い掛かった数人を例外なく串刺しにした地面は、噴き上がる赤い霧に満足したようにやがて平静を取り戻した。

（これが……）

魔術師の力。

勝てるわけがない。けれど、放っておいてはロドリスは負ける。

焦りが、彼の中の勇気を力づける。幸い魔術師はこちらに背を向けていて、リニウスの存在を気に留めていない。

自分を鼓舞して剣を握る手に力を込めたリニウスが躊躇いを残したまま立ちすくんでいると、魔術師の右方……リニウスの対角に位置するところから、同様に考えたらしいロドリス兵が躍り出た。魔法を唱える余裕がなかったのか、魔術師がロッドで剣を受け止める。

（今だ！！）

咄嗟にリニウスも地を蹴っていた。ひとりに対し2人、魔法を唱える暇さえなければ勝機はあるはずだ。

先に襲い掛かったロドリス兵の剣をロッドで押し返し、背中から襲ったリニウスの剣に魔術師が振り返った。間近に迫る剣に一瞬驚愕の表情を浮かべ、ロッドを返す。硬質の音が鳴り響き、受け止めたロッドが魔術師の手から離れた。

（やった！！）

吹っ飛んだロッドは、魔術師から4エレほども距離を置いて地に落ちた。弾き返されたこちらも体勢を崩して地面に降り立ったが、すぐさま剣を握り直しながら魔術師に剣を向ける。先ほどの兵士も、ほぼ同時に地を蹴った。

勝利を確信したリニウスだったが、2人の兵士に剣を向けられている魔術師が不意に小さく笑った。一瞬、目の錯覚かと思った。そうでなければ、気が違ったか。

「ぐはぁッ！！」

「なッ……」

だが、魔術師は身を屈めると同時にローブの下からスモールソードを抜き放った。目を疑う。柄を逆手に構えて先の兵士の首筋に一閃させると、返した刃でリニウスの剣を受けた。その勢いに押されて、リニウスは地面に投げ出された。

だが魔術師の手にロッドはない。剣と剣の戦いならば、他の兵士と一緒……いや、それ以下のはずだ。身を起こして尚挑もうと剣を掴むリニウスの目の前で、スモールソードを構えながら、魔術師が再び小さく笑った。

「魔術師ならば装備はロッドだけ、と思うべきではないな。……ダテ・エト・ダビトゥル・ウォービース・イグニス」

低く穏やかに呟いた魔術師の周囲に、炎の塊が浮かび上がる。拳大の小振りなものだが、いくつも、いくつも。

「ロッドがなければ魔法は使えまいと言う思い込みもまた、同様……」

炎と同じ赤い瞳が、リニウスを捉えた。魔術師の動きに反応したように、火炎がふわりと動きを見せる。次第に激しく地を打つ雨にさえ、炎の勢いは弱まる気配がなかった。

「無知な己を恨め」

それが、リニウスがこの世で最後に聞いた言葉だった。

◆　◇　◆

デルフト攻防における第2戦とも言えるベルジューヌ湖畔での戦いで、ロドリス軍はヴァルス軍に完敗を喫した。

理由としては、いくつか考えられる。

まず、ロドリス軍がヴァルス軍の戦力を見誤っていたことであろう。

デルフト要塞に現れたヴァルス軍は、５千。野営地に残されていた形跡はおよそ1万に満たないもので、逃亡兵の匂いがすることか

らロドリス軍は5千から1万に満たない数千との判断を下した。
殊更わかるように痕跡を減らしていったヴァルス軍の意図は、そこにある。
実際にラルド要塞及びシャインカルク城より派遣された援軍は、1万8千。デルフト要塞での戦いと守備によって人員の割かれたロドリス軍と、ほぼ拮抗する兵力を持ち合わせていたのだ。
夜明けと早朝の境目の時間、見張りの兵の気が緩み始めた時間帯を狙って奇襲をかけた1万のヴァルス軍は、早々と休憩と食事をたっぷりと摂り、体温を奪う冷気と降り出しそうな雨から身を守る為に、全身にオリーヴ油までも塗って準備を整えていた。
対するロドリス軍は、準備の整わない寝起きを襲われ、下がった体温と血圧を正常に戻す術も食事を摂る間もないままに、戦いへともつれこんでいる。途中激しく降り出した雨に体温は一層奪われ、気力も体力も、準備を整えたヴァルス軍とは比較にならない。
混乱を収めることが出来ぬままに必死でヴァルス軍に抗うロドリス軍は、中央に主力を配しヴァルス軍の中央突破を目指していた。対するヴァルス軍は右左翼に主力を備えていた。双方の主力対非主力の戦闘は、主力の優位に進んでいくこととなる。……そう。両軍の思惑通りに。
中央突破を狙ったロドリス軍の主力パイク兵に押されて、ヴァルス軍歩兵は後退していった。反面、右左翼に配置された騎兵隊の戦闘では圧倒的にヴァルス軍の優位で、ロドリス軍の右左翼は後退していく。――そしてロドリス軍の主力は、ヴァルス軍主力に囲まれた状態で取り残されることとなる。
ヴァルス軍はロドリス軍の右左翼を叩き潰して、囲い込むように進軍していった。途中から別の進路をとって迂回してきたヴァルス軍の残りの8千が背後から現れるに至っては、ロドリス軍の逃げ道はもはやどこにもなかった。唯一敵のいない北側には、ベルジューヌ湖が水を湛えている。ヴァルス軍による、ロドリス軍包囲網の完成である。

逃走するロドリス兵を容赦なく追撃するヴァルス軍の前に、ほとんどの兵はその屍を晒し、逃げ出した先の美しい湖を赤く染め上げた。逃走に成功した兵は、およそ5千に満たなかった。

一方、エルファーラからロンバルト入りを果たしたロドリス・ナタリア・バートの連合軍と、迎え撃つヴァルス・ロンバルト帝国軍の戦闘は違う様相を呈していた。

ファリマ・ドビトークの尾根を越えて中立地帯エルファーラから侵入した連合軍は、ロンバルト西北にあるヴォルガ要塞を陥落、続けてニールブラウン要塞をも陥とし、勝利の勢いに乗って王都ウォルムスへと肉迫した。

両軍は、ウォルムス北部に広がるエルベ平原で陣営を構えた。正面からの、文字通り小細工なしのぶつかり合いだ。

連合軍は前衛にバートを据え、後背をロドリス・ナタリアの混成軍が守った。帝国軍は、ヴァルス軍を中央としてロンバルト軍が左右を固める陣形である。

最初に崩れたのは左翼ロンバルト軍だ。猪突猛進とさえ言えるバート軍の猛攻に耐えかねて左翼が後退し始めたことにより陣営に隙の出来た帝国軍を、切り崩すようにロドリス軍が突っ込んでいった。これにより、帝国軍中央・右翼と左翼は完全に分断されてしまう。

孤立したロンバルト軍が潰走すると、統制のとれなくなった帝国軍は半ば自滅するような形で壊滅した。

遮るものを取り払うことに成功した連合軍は、一路、王都へと邁進する。

第2部第2章第15話　ロンバルトを灼く灯（2）

「……三勝一敗、か」

ロドリス王都ハーディン城にてその報せを受け取ったセラフィは、小さくひとりごちた。

同室していた宰相ユンカーが、ロンバルト周辺の地図を取り出す。指で道筋を辿りながら、顔を上げた。

「ここと……ここの要塞は、陥落ですね」

「こちらもでしょう」

セラフィの指が、地図上を滑る。

「ヴァルスに大敗を喫したとは言え、デルフト要塞は我々が押さえているはずです。まあ、ロンバルトがヴァルスをけしかけて奪還しようとすれば危ういでしょうが……」

言いながら、引っ込めた手で顎を押さえつけたセラフィの口元が小さな笑みを浮かべた。

「ありえないでしょうね。無意味だ」

そんなことをしている間に、ウォルムスが占領されてしまうだろう。

「ライオネル将軍が率いていた軍を壊滅させたヴァルス軍は……」

セラフィの指が再び地図上へと戻る。その指先が示すのはベルジュヌ湖だ。そこからすうっとウォルムスへの道筋を辿った。

「デルフトの残兵と合流して、ウォルムスの援護……」

「……どのくらいの戦力を備えているでしょうかね」

「さあて……。西南へ向かったこっちを大敗させたくらいだからね。数千ってことはないだろう。2万前後か……」

答えながら考える。ナタリア海軍の存在、そしてウォルムスへ投

じられた兵。ヴァルスとて、そうあちこちに大軍は送れないだろうが。

だが、ウォルムスはロンバルトの王都。いくらロンバルトが軍事的に頼りなく、ヴァルスとて決して頼みにはしていなかっただろうとは言え、こうも開戦と同時に陥落されてはたまるまい。友軍がひとつもなくなってしまうのは、いかにも心細かろう。

（となれば、思いがけない勢力を差し向けて防衛にあたる可能性もある、か……）

ロンバルト通過ごときに、いつまでもぐずぐずしてはいられない。本命はあくまでヴァルス――レオノーラだ。

「陥とせるものなら、さっさとロンバルトには陥ちて欲しいんだよね。どうせロンバルトなんか、長くはもたない。なら、さっさと手を引いてくれるに越したことはない」

レガードの首でも投げ込んでやりたいが、見つからないものは仕方がない。正面から攻めて地道に……いや。

（もうひとりいるんだっけ……）

それも、手元に。

「ユンカー殿」

ぼんやりと視線を落としていた地図から目線を上げたセラフィに、同様にしていたユンカーが顔を上げる。

「誰か人を……」

言いかけて言葉に詰まる。

レドリックの存在は高位官しか知らない。下手に下働きの者などを使うわけにもいかない。

ため息をついて立ち上がりかけたセラフィの耳に、ノックの音が届いた。ユンカーの返事を受けて入ってきたのは、秘書官アークフィールだ。

「失礼します。ユンカー殿、サーディアールの糧食の補填（ほてん）についてリトリアから打診が……どうなさいました？」

手にした書類に半ば視線を落としたまま室内に足を踏み入れたア

ークフィールは、いやににこやかなセラフィの視線を受けて足を止めた。きょとんと目を瞬く。

「良いところに適任の人材が来てくれた、と思っているところだよ」

椅子に腰を落ち着け直したセラフィが足を組みながらテーブルに頬杖をつくと、アークフィールは困ったように片眉を軽く上げて微笑んだ。

「ああしまった、と嘆くべきところでしょうかね。何かご用ですか？」

「異国の王子様を迎えに行って欲しいんだ」

セラフィの言葉を受けて、アークフィールはますます大袈裟に眉を上げる。

「やはり嘆くべきところですね。わかりました。ご用件は承っておいた方が宜しいですか？」

冗談めかして肩を竦めた後、書類をユンカーに渡しながら真顔で尋ねたアークフィールに、セラフィはやや人の悪い笑みを浮かべた。

「そうだな……伝えておいてもらおうか。その方が王子様も、塒（ねぐら）から出てくる気になるだろうからね……」

祖国ロンバルトから行方をくらませたままになっている第1王子レドリックは、ロドリス王都フォグリアのハーディン本城からやや離れた敷地内の邸宅に転がり込んでいる。館の中に入ったアークフィールは、その人気のなさに嘆息した。予想通り、上のフロアにいるのだろう。

前髪に片手を突っ込んだまま歩き出したアークフィールは、階段に足をかけて再びため息をついた。

ロドリスの現国王も人のことを言えたものではないが、ロンバルトの第1王子は更にひどい。いや、君主の座について国政をしているところを見たわけではないからそうと決まってはいないのかもしれないが、こんな主を戴きたくはないと思ってしまう。国が傾く。

ロドリス国王カルランスは、確かに能無しかもしれない。だがそ

れは現状、アンドラーシに夢中で国政に目が向かないからだ。以前も決して有能だったとは言わないが、それでも彼の気の弱さが幸いして人の意見を良く取り入れる。良くも悪くも他人の言葉を鵜呑みにしやすい彼は、一度信じてしまえば無用に部下を疑ってかかるようなことは滅多にない。

ゆえに、元来優しい気質にある彼は、穏やかに宰相ユンカーと宮廷魔術師セラフィの言う通りに国政を行い、つつがなく運営してきたのだ。これで部下まで無能であれば目も当てられないかもしれないが、ユンカーとセラフィはロドリスにおいてなくてはならない人材ではあった。

だが、ロンバルトの第1王子はどうだろう。

深くその人柄や能力を知るわけではないが、アークフィールが見る限り、レドリックは野心こそ強いもののそれを組み立て実行する能力にはいささか欠けているような気がする。にも関わらず、周囲を顧みない。己を中心に展開されているその世界に組み込まれる国民は、たまったものではないだろう。

カルランスとの決定的な違いは、他人の意見を聞き入れる姿勢にあるかどうかだ。

もちろん他人の意見に左右されてばかりいてはどうにもならないが、大して考える能力もないくせに他人の意見も聞かないのであれば、一層どうにもならないではないか。

やれやれ、と首を振り、階段の最上部まで辿り着く。

人の気配のなかった館で、唯一そのフロアだけが人の気配が存在した。正直なところ、あまり近付きたい空気ではないのだが、ここで踵を返すわけにはいかない。

仕方なくその部屋の前にまで行き、握り締めた拳をドアに打ち付ける。微かに部屋の中から聞こえてきた甘やかな女の声が、不意に途切れた。

「レドリック殿」

声を掛けると、じっと沈黙してその場で待つ。だが再び悩ましげ

な女の微かな声が再開され、いつまで経っても開く気配のない扉に辟易して今度は先ほどよりいささか強めに扉を叩いた。
「殿下！！」
やがて、中で人の動く気配がした。どうやら睦みごとを中断してくれたようだ。思わず身構えて待っていると、開けられた扉から男が姿を覗かせる。
アークフィールは知る由もないが、レガードと血を分けた兄弟、と言われて納得のいく容貌をしてはいる。ただし、やや知的で優しげな顔立ちをした弟より、兄の方が目付きにどこか粗暴さを滲ませていた。『お楽しみ』を中断させられたせいか、今は尚一層険のある顔つきをしている。
「……気がきかねぇ」
乱れたダークグレーの髪をかき上げながら視線を背けて呟くレドリックに、アークフィールはそつのない笑顔で応えた。
「それは大変失礼致しました」
ロドリスに転がり込んでからの彼は、日夜あてがわれた貴族の娘と部屋に籠もることで忙しい。祖国――それも王都が戦禍に晒されようとしていると言うのに良いご身分だ。
「上乗せするようで大変申し訳ないのですが、ハーディンへ足をお運び戴きたくお迎えに上がりました」
柔らかく告げたアークフィールの言葉に、レドリックはあからさまに舌打ちをした。鼻の頭に皺を刻みながら、アークフィールに視線を戻す。
「用件は何だ」
「……ロドリス軍は、ロンバルト王都に肉迫しています」
微かにレドリックの目が動く。だがそこに肉親を心配する色は窺えなかった。王都と言えば彼の両親がいる。……いや。この男は実の弟の暗殺を期待しているのだったか。
血の絆を大切に思うアークフィールには、権力の前に家族を踏みにじるその神経がわからない。確かにロドリスにおいて味方ではあ

るはずだが、個人的に付き合いを深めたいとは到底思えない人格だった。
だが、現状ロドリスにとっては価値のある身柄ではある。
「ほー」
「ウォルムス陥落にあたり、殿下のご助力を戴きたいとユンカー殿とセラフィ殿が申しております」
「助力？俺は戦場には出ないぜ」
全く他力本願も甚だしい。だがこちらとしても、レドリックを戦場に放り出して万が一のことがあっては困る。
「ご安心を。殿下のお手をそのような形で煩わすようなことはございません」
アークフィールの言葉に、微かに片目を顰めるようにしたレドリックは、「ちょっと待ってろ」と言い残して部屋の中へと姿を消した。短い時間をおいて、着衣を整えて再び出て来る。そうして現したその姿は、確かに王侯の品位のあるものとも言えた。
「痛み入ります」
扉を閉めながらちらりと中の方に視線を向けたレドリックが、アークフィールに視線を戻して口元に皮肉な笑みを浮かべた。
「風邪でも引かれたら困るからな。手短に頼むぜ」
「……心得ました」

◆　◇　◆

どこか意識の遠いところで、微かな音を聞いたような気がして、アンジェリカ公妃は目を覚ました。窓から差し込んでくる光が余りに鮮やかな朱で、一瞬室内が燃えているのかと錯覚するほどだ。
「……カレン」
ゆっくりと見回した室内の隅で、公妃アンジェリカの姪にあたる女性が、花を活けた花瓶をテーブルに飾っているところだった。アンジェリカの声に、カレンが振り返る。

「あら。起こしちゃいました？」
「いいえ……元々うつらうつらしていたようなものだから。……綺麗ね」
カレンの体を越えて向こうに見える花に、目を細める。その手を伸ばして花を整えながら、カレンが微笑んだ。
「せめてこのくらいしないと。心が安まりません」
冗談めかして肩を竦める後ろ姿は、だが本音だろうと言う気がした。事実、アンジェリカがここしばらく寝付いているのも心労からだ。
「お庭にね、出てみたらちょうど綺麗だったものですから。お目にかけたら公妃様も少しはお元気になられるかしらと思って」
カレンだって不安で仕方がないだろうに、気遣ってくれることに感謝をして、アンジェリカは微笑んだ。
まだ３６歳と年若い公妃は、ロンバルト公王にとっては２人目の妻にあたる。最初の公妃は、長男レドリックを産んで間もなく死亡した。その３年後に公王フェルナンドの後妻となったアンジェリカは、第２王子を身ごもった。つまりロンバルトの２人の王子は、異母兄弟にあたる。
アンジェリカの心労のひとつは、この兄弟のことだった。
ゆくゆくは父を継いでロンバルトを治めるはずの長男は、実母の故郷を訪ねると出たきり音沙汰がない。ロンバルトの西北にあるその地に使いをやってみれば、確かに来訪はしたものの忽然と姿を消してそれきりだと言う。
対する弟……彼女にとっては最愛の実子であるレガードはと言えば、婚家となるはずのヴァルスに行ったきり、こちらも連絡がない。ヴァルスからの連絡によれば、ヴァルス王位継承――ひいてはアルトガーデンの帝位継承の為の試練に出ていると聞いている。だが、レガードが王城ヴィルデフラウを離れて数ヶ月……そんなに、かかるのだろうか。
「レガード様なら、大丈夫ですよ」

息子を憂いた公妃の胸中を察したように、カレンが明るい声で言った。

「レガード様は、しっかりされてる方ですから。ご心配には及びませんわ。ロンバルトの窮地には、必ず駆けつけて下さいます」

「……そうね」

アンジェリカは布団から体を起こしながら、曖昧に微笑んだ。……そう。確かに良く出来た息子だ。だが胸騒ぎがしている。

レガードが生まれた時のことを、思い出していた。生まれついての赤い一房の髪。アンジェリカにはそれが何か、不吉な予兆のような気がしてならなかった。その不安を打ち破ったのは、レガードの父たるフェルナンドだ。

赤い髪は、力を持つ者に多い。神に愛された御印だと。何らかの優れた能力の顕れが赤い髪で、レガードはきっと神から何らかの役割を仰せつかったのだと。

現実には優れた才能は髪の色に左右されると決まったものではないが、ローレシア……特に広くヴァルスにおいてそのような言い伝えがあるのは確かだった。

だが、黒髪の中に一筋の赤髪と言うのは珍しい。それがアンジェリカを不安にさせたのだ。

神に何かを仰せつかったのだとすれば、なぜ純然たる赤髪ではないのだろう。

神は、彼女の息子に何を託したと言うのだろう……。

アンジェリカがそう言うと、フェルナンドはレガードを抱き上げて笑った。

「レガードは、『7番目の使い』なのだよ」

「『7番目の使い』？」

「そう。黒髪に一房の赤い髪は、『7番目の使い』だ。この子はフアーラに愛される子になるだろう」

……未だにアンジェリカには『7番目の使い』の意味はわからない。聖書の中にもそのような文言は出て来なかったように思う。た

だ、不吉な印ではないのだと言うことがわかれば、それで良かった。
「陛下は、ご無事かしら」
目覚めた時には燃え盛っているようだった太陽も、今は少しずつその光を弱め、室内は少しずつ藍色の影が忍び込んでいる。目を細めて窓の向こうを見遣る公妃に、カンテラの火を入れながらカレンが頷いた。
「大丈夫ですとも」
フェルナンドは、ロドリスら反帝国軍の侵入に対峙すべく、自ら軍を率いて戦場へと向かった。相次ぐ要塞の陥落に、苛立ったせいもあるだろう。
フェルナンドが出征してから、まだことを構えたと言う話は聞かない。だが2つの要塞を陥とした連合軍が、ウォルムスを目指しているとの報せは受けている。
もうひとつの、アンジェリカの心労の理由だ。王都は大丈夫だろうか。2人の息子たちが帰ってくる場所は、あるだろうか。
アンジェリカが口を開きかけた時、彼方で地響きが聞こえたような気がした。彼方――そう、遠方だ。ウォルムスの街ではない、と言う意味においては。
だが……。
「アンジェリカ様ッ……」
カレンが悲鳴を押し殺すような声を上げた。その理由はアンジェリカにも、すぐにわかった。視線を向けた窓の遙か向こう、遠くにほんの僅かに明かりが見える。たなびく黒煙が細く空へと筋を作っていた。薄暮に霞み始めた風景に浮かぶオレンジは、西陽の名残などではないことは明らかなことだった。
(陛下……)
微かに震える唇を噛みしめて、見つめる先へと祈りを捧げる。
まるで、不吉な出来事の前兆のように広がっていく光。
(あれは……)
あれは、ロンバルトを灼く……ロドリスの、炎だ。

第2部第2章第16話　初めての航海　－ギャヴァン～シュート－（1）

『青い空！！白い雲！！』と大声で意味不明に叫びたくなるほどの、塗り潰したみたいに鮮やかな青空。

遙か頭上で旋回する海鳥の鳴き声を、潮風が運んでくる。少しべたべたする、海独特の風は太陽の熱を孕んで生温い。

陸を離れて3日。船から見える風景は、既に単調なものになっている。遠くに見えていたヴァルスの地も、今は水平線の彼方に没してしまってどこにも見えない。ただただ続く海面の上に、寄せては返す波の白い泡が見えるだけだ。

俺はグローバーの船の甲板に上がり、その最後尾を陣取って、船が水面に描く軌跡をぼんやりと見つめていた。

暇だ。

することがない。

そりゃあ俺たちは別に『お客さん』じゃない。荷物運んだり、掃除したり、いろいろ手伝ったりはするけれど、航海技術があるわけじゃあ当然ないから、基本的に役に立たない。

こうしてぼんやりと、陽の光を反射して輝く波間を見つめながら船で揺られていると、しかもすることがないと、何だかぼんやりして眠くなる。『レガードの安否』と言う心配ごとがひとつ減ったのも、それに拍車をかけているかもしれない。

ラグフォレストまでは、ほぼ2週間くらいの道のりだと聞いている。あと2週間もこんなふうにして過ごしたら、『休みボケ』にでもなりそうだ。

「カズキ」

背後からかけられた抑揚のない声に、俺は寄りかかっていた舳先（へさき）から顔だけ上げて、振り返った。船室から続いてる階段を上ってくるシンの黒髪を、海風がもてあそんでいる。その階段の向こうでは、陽気に笑い声を上げながら水夫たちが動き回っている姿が見えた。

「暇そうだな」
言いながら近づいてきたシンは、隣に並んで微かに笑った。
「キグナス、どうした？」
航海するに当たって一応部屋を割り当てられているんだけど、狭い……寝場所しかないような部屋に2人ずつが押し込まれている。俺は例によってキグナスと一緒なんだけど、キグナスは船酔いでげろげろ状態のはず。隣室がシンとゲイトだからキグナスの様子を知ってるかと思って尋ねてみると、シンは浮かべた笑みをそのまま苦笑いに変えた。
「ゲイトがそばについてからかっている」
「……」
からかうんじゃなくて気遣ってあげてよ。シンもあっさり言ってないで止めてやってくれ。
俺とキグナス、シン、ゲイトは4人ともほぼ同年代だし、ゲイトは凄く人懐っこい人だったから、3日も一緒に過ごしていればさすがにだいぶ打ち解けてきた。俺は、シンとは前にも寝食を共にしてるし。
どうやらゲイトはキグナスがお気に召したらしく、何かと言ってはちょっかいを出しているようだ。
「今からあんな状態で、この先もつのか？到着する頃には内臓まで吐いてそうだぞ」
内臓吐いちゃったら、さすがのキグナスも生きてらんないと思う。
シンの言い種におかしくなりながら、俺はまた舳先に両腕を組んでその上に顎を乗せるように体を預けた。時折、船で砕けた波が飛沫を上げるのが見える。
「お前は船酔いしないんだな」
海と向かい合っている俺とは逆に、背中を預けながらシンが俺を見た。精悍な首筋には、良く見れば傷痕が見える。襟に隠れて良くは見えないけど、胸元の方にまで伸びている感じだった。ケルベロスにやられたやつなんだろうか。

「うん。俺、子供の頃から乗り物は強かったんだ」
「ふうん？」
それに俺はキグナスと違って、船も海も初めてじゃない。そりゃあそうしょっちゅうこんな長い時間乗ってたことがあるのかつったらないわけだけど、子供の頃母方の祖父母がいた九州にわざわざ船で行ったことがある。うろ覚えだけど、その時は確か船中一泊とかだったはずだ。当時3歳くらいだった弟の拓人が今のキグナスみたいに船酔いになって眠れなかった覚えがある。
兄弟か……ギルドって何か兄弟みたいだったよな。
「ギャヴァンのギルドって、仲が良いんだね」
俺の言葉にシンは一瞬虚をつかれたように、きょとんと目を見開いて俺を見た。それから微妙な表情で空を仰ぐと、くしゃくしゃと髪をかき混ぜる。
「あー……そうか？」
「うん。そんなふうに思えた。兄弟みたいって言うか、家族みたいって言うか」
何となく波間を見つめながら、シンに答える。それから、シンの横顔に視線を向けた。
「ギルドって、そういうもの？」
「まさか」
驚いたように、呆れたような表情を浮かべた。頭上を旋回している海鳥の甲高い声をＢＧＭに、目を伏せながら軽く肩を竦めて見せる。
「盗賊ギルドは盗賊を取りまとめている。仲良しになんかなるわけないだろう。でかくなればなるほど、普通はもっと政治的な駆け引きや思惑が入り乱れてくるだろうな」
政治的な駆け引きや思惑か……。
「頭領に就任するのが誰だとか、派閥だとか。そういう諍い（いさか）はどんなところでも起こるものだ」
「じゃあ、ジフが就任した時も、何かそういうのがいろいろあった

りしたの」
　ジフが頭になってからまだ数年って話だっけ。風の砂漠でシサーがそんなようなことを言っていた気がする。考えてみれば、ジフって盗賊の頭なんかやってるにしては随分若いんじゃないだろうか。キサド山脈で襲ってきた盗賊の頭だって、結構壮年て感じだった。
「そんな殺伐とした感じには見えなかったな」
「あいつがあんなふうだからな」
「あいつって……」
　ぞんざいな言い方がおかしくて、俺は目を細めた。
「ま、ギャヴァンギルドに関して言えば、実際家族みたいなものだ。俺も……それにゲイトもだが、不本意ながらあの馬鹿に育てられたようなものだし、カイルは先代の親友だ」
「そうなの？」
「ああ。俺は自分の親を知らないからな。先代が俺を拾ってきて、ジフに弟だと言って押しつけたらしいから、その流れでジフの弟ってことになってる」
　そうなのか……。
「ゲイトが来たのはもっと後だ。とは言え１０歳かそこらで……あいつもそこからは俺と一緒にジフに育てられた。ゲイトは元々はトートコーストだ」
「……え！？」
「え？」
　唐突に大声を上げて体を起こした俺に、シンが驚いたような顔をして俺を見た。
　トートコーストって確か……あの、リデルを襲った魔物の出身地じゃなかったっけ？そりゃあ本人に聞いたわけじゃないから、『その疑いが濃厚』と言うだけだが。
（ふうん……）
　じゃあ後でゲイトに聞いて……。
「おぇ～……ついて、くんな、よぉ……」

視線を海に戻してそんなふうに考えていると、不意にその思考が近づいてくる聞き慣れた声に遮られた。振り返ると案の定、青い顔をしたキグナスと、面白そうな表情でそれに従うゲイトが、こちらに向かって階段を上がってくるところだった。
「いやいや、ちゃんと見届けてあげないと」
「何を、見届け、ん、だよ……ついて、来るなら、手ぇ貸せ……」
よたよたと階段の手すりに縋るようにして階段を上がって来たキグナスは、黙ってそっちを見ている俺とシンに気がついた。
「……大丈夫？寝てたら？」
「静かに寝かせてくれる気があるんだったら、このうるせぇの何とかしてくれよー……」
……。
ゲイトは悪びれない顔でにこにこと俺たちを見上げると、ひらりと片手を振った。
「こんなとこにいたんだ」
シンが答えようと口を開きかけたところで、ぐらりと大きな波に船が揺れた。途端、階段にしがみついていたキグナスがばしっと口を押さえて船縁にダッシュする。この揺れで支えもなしにダッシュするとは天晴れなバランス感覚だ。
「おぇぇ……」
……。
それを見てゲイトが爆笑していた。
「あーおもれー。キグナスって何であんなおもろいんだろ」
本人は面白いつもりじゃなくて必死だと思う、多分。
「キグナス、平気？」
２人が来たせいで体の向きをシンとお揃いにしたまま舳先に寄りかかると、船縁から体を乗り出すみたいにしていたキグナスが、そのままずるーっと床に崩れた。
「……もぉ、吐くもん、が、ねぇ……」
「じゃあやめたら？」

「このこみ上げる熱い想いをどう処理していーかわかんねぇ……」
「……それは『熱い想い』じゃなくて『吐き気』って言うんだと思うけどな」
ついつい真顔で答えてしまった俺に、ゲイトが腹を抱えて笑った。
この人、笑い上戸なのかな……。
「下まで連れてってあげようか？」
これで部屋に戻したら、キグナスがここまで来た理由が全く意味不明だが。
俺の言葉にキグナスが床に座り込みながら、力なく顔を横に振った。
「や……少し、風にあたりたい……。横になると、揺れが、全身にリアル……」
なるほど。
「どっかこの船ん中で揺れねぇとこ、ねーのかなー……」
船なんだから、基本、ないだろう。
「ねえ。ゲイト」
半ば呆れた気分で死にかけのキグナスとその前にしゃがみこんでいるゲイトを見つめながら、俺も船縁に背中を預けて床に座り込んだ。
「んー？」
「ゲイトって、トートコーストなんだって？」
「え？出身？」
「うん」
キグナスがへたれた表情のまま、ちらりと俺を見る。キグナスのつむじに指先を伸ばしていたゲイトが、こちらに視線を向けた。
「そーだけど……んでももう、こっちの方が記憶としては長いけどね。１０歳くらいまでしかいなかったし、幼少の頃なんか覚えちゃいないし」
「ああ、そうか……。いや、それでもいいんだけど。もしわかったら教えて欲しいなってことがあるだけだから」

「教えて欲しいこと？」
ゲイトが立ち上がって、首を傾げる。頷きながら、俺はどう尋ねたもんか考えた。何をどう聞けばいいんだろうか。でも何かあの魔物、もしくはネクロマンサーについて少しでもわかれば、グレンフォードについてわかることがあるかもしれない。
あいつがロドリスの人間として……『青の魔術師』の腹心としてレガードを追っていれば、きっとまたいつかどこかで会うことになる気がする。
「……ゲイト、ネクロマンサーって、知ってる？」
「は？」
キグナスの前から立ち上がったゲイトが、俺の方を見下ろしながら目を瞬いた。
「何？それ」
あれ？
「魔術師、だよ」
へろんへろんとキグナスが口を開く。今度はそっちに顔を向けて、ゲイトは首を傾げた。
「魔術師？人名か？」
「じゃなくて……ネクロマンサーって種類の魔術師……。いろいろあんだろ、魔術師にも。ソーサラー、エンチャンター、イリュージョニスト……そゆ……得意分野の、種類」
「ああ……」
キグナスの説明で理解したように頷いたゲイトは、片手を腰にあてながらちょこんと首を傾げた。
「んで、その『ねくろまんさー』ってのは何を得意とするんだ？」
「……融合魔術……死霊の支配……」
「……」
キグナスの答えに、ゲイトが目を見開く。確認するように俺を見るので、俺は軽く顔を横に振った。俺だって人に聞いた知識であって、別に自分の知識じゃないから良くわかっていない。

「死霊……アンデッド系ってことだよな。それを支配下に置くのが得意分野なら、それは召喚師っつーんじゃないの？」

ああ、なるほど。言われてみればそんな気もする。

答えを求めて俺もキグナスを見ると、キグナスは青い顔のまま、力なく否定的に首を振った。

「全然……別もん……」

ふうん……そうなんだ。

何だか良くわからないが、ネクロマンサーってのはあくまで魔術師に分類されるらしい。

キグナスがそう言うんだったら、きっとそうなんだろう。

「ふーん。ま、いーや。んでそのネクロマンが何だって？」

適当なところで切らないでくれ。それじゃあ何なんだかわからないじゃないか。

「そういう、アンデッドを使役するような魔術師の話をトートコーストで聞いたこと、ない？」

ネクロマンサーって魔術師の存在が確認されないことには、『アンデッドとの合成獣』なんじゃないかって言う俺の予想は成り立たない。するとグレンフォードの正体が全く不明になってしまって、対応策の講じようがなくなる。

でも、そもそもネクロマンサーって何？から入るゲイトが何か知ってる可能性は薄いだろうなと思いながら尋ねてみると、案の定ゲイトは唇を尖らせながら困った顔をした。

「知らないなあ」

そうだよな……幼少の頃しかいなかったんだったら、トートコーストのことを良く知らなくても道理……。

「悪いな」

「ううん……ありがとう」

「その『ネクロマンサー』ってのがどうかしたのか」

それまで黙って聞いていたシンが、口を開いた。

「いや……」

どう答えたものか言葉を選んでいると、キグナスが青い顔を上げて口を開いた。

「ゲイト、肌がぐずぐずの魔物、知らねぇか？」

「肌がぐずぐずの魔物？」

第2部第2章第16話　初めての航海　－ギャヴァン～シュート－（2）

眉を顰めて、ゲイトが問い返す。けれど尋ねたキグナスが「あぁ」と頷いたままつらそうに両目を閉じて空を仰いでしまったので、代わりに俺が注釈を付け加えた。

「人の姿に似てて……肌の色とか黒いんだ。木炭みたいな色。普通の物理攻撃は効果がなくて、俺が見たやつは普通の人間ぽい姿してたけど、シサーやニーナが見た奴は半分どろどろになってるよーなのもいたって」

あの禍々しい生き物をどう表現すればうまく伝わるかわからないけど、俺の言葉でゲイトは思い当たることがあったみたいだ。両手をポケットに突っ込んで少し前傾になりながら答えた。

「シェイドのことか？」

「いや……違うんじゃないか」

口を開いたのはシンだ。組んだ片手に頬杖をついて自分の顎を支えながら、微かに眉根を寄せる。

「シェイドは溶けてなんかないだろう。特に亜人型とも言わないような形態だったと思うが」

何だ……と少しがっかりしていると、シンの言葉に記憶を探るような顔つきをしていたゲイトが、やがて顔を横に振った。

「いや、シェイドだと思うけどなー。ガキん頃、親に言われたもん。悪さばっかしてると、シェイドの仲間にされちゃうよって。俺の住んでた村から少し離れたとこに気味悪ぃ森があってさ、夜になるとシェイドが徘徊すんだって言われてた」

「それが……そういう亜人型の……？」

尋ねた俺に、ゲイトが肯定して続ける。

「肌はぼこぼこで……基本、亜人型。どろどろみたいなんもいたみたいだ。噂では、元は人間だって話だから、親もそういう叱り方してたんだろうけどさ」

……それだ。
「シン」
シンが無言で俺を見る。
「シンの言う『シェイド』ってのは？」
「基本的には、無形の魔物だと聞く。だが人間界に姿を現す時には、かりそめの有体となるんだそうだ。そのせいで特定の形態を保つことはなく、元来、実体がないせいで通常の物理攻撃は効かない。アンデッドではないが、アンデッドに分類される魔物だそうだ」
「有体って、どんな？特定の形態がない？」
「ああ。確固とした形状はないらしいな。いわばアメーバ状が近いか？」
「うー……ん……」
少し、ずれる。
ちらりとキグナスを見ると、ちょうど目を開けたキグナスがシンの言葉を肯定するように小さく頷いた。キグナスの認識も、シンと同様だと言うことだろう。
ふうん……。
ゲイト、シンとキグナスの、認識の違い。
同じ魔物の話をしているはずなのに、その姿にずれがある。
単に大陸が違うから、同じ名前、同じ概念の魔物でも異なってしまっただけなんだろうか。古来の日本の幽霊には足がなく、海外の幽霊には足がある、という認識の違いのように。
それとも……。
（その認識の違いこそが、ネクロマンサーの存在の証明に……）
繋がったりは、しないだろうか。
例えばローレシアで言うシェイド。それこそが、シェイド元来の姿を指すもの。
そしてトートコーストで言うシェイドは、シェイドがネクロマンサーの手を経て放出された後の姿、と言うように。
ゲイトの言うシェイドのイメージは、あの魔物のイメージに近い

ものを感じる。グレンフォードとは到底結びつかないけれど、トートコーストで言う『シェイド』がネクロマンサーを介した存在なのだと言えれば、彼らとグレンフォードを繋ぐ『お兄ちゃん』と言う言葉が『同一のネクロマンサーから生み出された』と言う意味なのだと理解出来ることになる。

「その、魔物だのネクロマンサーだのが、何かあるのか」

考え込んで黙ってしまった俺の頭上から、シンの言葉が降ってきた。我に返って顔を上げる。

「いや……何でもない」

グレンフォードは、俺たちを追ってくるだろうか。だとすれば、シンやゲイトも知っておくに越したことはないんだろうけど……。

少し躊躇って、俺は結局話すのをやめた。あいつがトートコースト産のシェイドの化け物だとしたって、プリーストがいない今、いずれにしてもどうにも出来ないもんな……。

――後に俺はこの時の判断を、深く、後悔することとなる。

◆◇◆

「ふうん……これがな……」

食事を終えた後、ロビーみたいになっている広い船室でシサーが目の前に広げられた2枚の紙を見比べて呟く。

1枚は、ただの絵だ。手書きの……誰かが模写でもしたみたいな絵。もう1枚も絵が描かれているんだけど、こっちには何が何だかわからない文字が絵と一緒にのたうっている。

2枚の紙に描かれている絵はほぼ同じもの……海に突き出た岩の絵――シュートの『人魚岩』。

しっかし、俺の世界でもそうだけど、何でこれが『人魚』になっちゃうんだろう。そりゃあ奇妙な形はしてるものの、『人魚』ってほどじゃない。時々どっかの地方の観光地とか行くと「これのどこ

をどうしたらそう見えたの？」って名前がついてるものとかあるけど、そんな感じ。

「これを見て、ラグフォレストだとあたりをつけたのか」

「ああ」

隣に座ったカイルが、短く肯定する。

今見せてもらっているのは、ギルドが最終地をラグフォレストに定めた根拠になるものだ。２枚のうち、１枚はダイナの資料から発見されたもの、そしてもう１枚は一般の書物の中から見つけられたシュートの案内文の一部。

ギャヴァンギルドは、何でもジフの父親……つまり先代の頃からダイナの宝を追い始めていたらしい。先代が亡くなってジフに代替わりし、ジフがその事業の後を継いだと言うわけだ。加えて、あのおじーさん――ガーネットが探しているものがダイナの宝に紛れている可能性があるのだと言う。ガーネットを実の祖父のように慕うジフは、それもあって熱心にダイナの宝を追っていると言うところらしい。

長いことダイナの宝を追っているギルドは、時間をかけて、散り散りになった資料を可能な限り手元に集めている。風の砂漠のダンジョンで例の壁画と文章を見つけたシンは、ダイナの資料にあったこの、海から突き出た岩の絵を思い出したのだそうだ。

そこで、このイラストが描かれている地をまずは調査してみたところ、ある冒険家の手記の中にシュートの『人魚岩』の話が見つかったと言う。

「変だとは、思わないか」

全員黙って２枚の紙に視線を落としていると、しばらくしてカイルがぼそりと言った。

「『人魚』だ。要求されているのは『女神』にも関わらず」

「……」

シサーが考える目つきをして顔を上げる。

「……ふうん。それが『鍵』ってわけか」

「だろうと考えている」
シンが短く答えた。
……ダイナの資料に含まれていた『人魚岩』。けれど、『うみのめがみ』じゃない。だったら『人魚』を『めがみ』にしてやんなきゃいけない？
（道は出来るけど、行き止まりって言ってたな……）
前に。
『人魚』が『めがみ』になる時、それが鍵になって『うみへつづくみち』が拓ける？
「ここで言う『めがみ』はファーラだと考えていーのか」
自分の顎を指先で軽く弾きながら再び紙に目を落としたシサーの言葉に、カイルが肯定の意を返した。
「恐らくな。ダイナのドワーフにとって、女神はファーラだろう。……ラグフォレストにおいても、信仰の要はファーラだな？」
「ローレシアほど深い信仰じゃねぇけどな」
「とすれば他に考えられんだろう」
「『女神に変える』意味ってのはわかってんのか？」
「聖書の一部だ」
直接答える代わりに、シンが別の1枚を取り出した。シサーの方へするりと押し出す。
「？　？　？」
横から覗き込んではみるものの、俺にとっては意味をなさない線画の羅列だ。覚えた単語もないではないけど。
『海』とか『船』とか。
「そっちの手記と聖書を、良く見比べてくれ」
カイルの言葉に、シサーと、俺の反対側から覗き込んでいるニーナが黙々と2枚の紙面に目を落とす。キグナスはと言えば、俺の左側で相変わらずの半死半生。テーブルに突っ伏していた。
「キグナス、平気？」
どこからどう見たって平気じゃないのに、どうしてこう聞いてし

まうんだろう。人間って残酷だ。
　埒もあかないことを考えながら声をかけてみると、キグナスが目だけ上げた。
「船から降りたい」
「降りてもいーけど、今降りると今以上に生死の境をさまようことになると思うよ」
「……おめぇ、時々鬼のように毒舌な」
「……そうかな。事実を指摘してるだけだと思うけど」
「普通、『陸地につくまで待て』とかゆーんじゃねぇの……」
「陸地についてないことわかりきってて言うんだから、いじられたいのかと思って」
　どうやら話してる方が気が紛れるようだ。それに気づいて会話を繋いでいると、隣でシサーがぱさりと紙をテーブルに置いた。
「『神殿』か」
「『うみのめがみがあらわれるとき』って、そういう『時』を表してたのね。『時』と言うよりは……『場所』と言うか」
　置いていかれる。
　無言のまま視線でシサーに訴えると、シサーがこっちをちらりと見て「後でな」と片づけた。
「『人魚のために造られた神殿』……不自然だろう？心当たりのある『神殿』があればありがたいな」
「ある。……あの廃墟にそんな伝承があったとは知らなかったな。……じゃあ、潮が引いた時に現れる道と洞窟は……？」
「洞窟？」
「『人魚岩』の辺りはひどい遠浅で、潮が引くと道が出来る。続く先は海に沈んだ洞窟だ。……それのことかと思ったんだが」
「ふうん……どうだろうな」
「さあな」
「関係ないのかしら。引っかけとか」
「ただ、俺たちは実際に現場を見て判断しているわけじゃない。『

人魚』と『女神』の相違、聖書の記述とその手記から『神殿』が入り口じゃないかと予想しているだけだ。それが正しいかどうかは行ってみなければわからんし、もしかするとその洞窟が怪しいかもしれないしな」

聖書の記述とやらがわからないので、いまひとつ話が見えない。仕方ないので、シサーの手元から紙を引っこ抜いて視線を落とす。

『海……船……人々……海……海……人……魚……海……人々……神殿……人々……神殿……海……町……』。

……何だか俺、真剣に馬鹿みたいだ。こうも文法がわからず、ごく限られた単語しか覚えてないとなると、単語の並びから文脈を推測することさえ不可能に近い。これで文章を読めと言うのは無理とゆーものだ。

聖書ってことだから、ファーラって名前がちょこちょこ出て来てたりするのかな。繰り返し出てくる単語……これだろーか。

（……）

頼みの綱のキグナスは死亡寸前だし。

（まあいーや……）

どうせ後で教えてくれるってことなんだし……。今無駄に悩んでみてもしょうがない。

真面目にみんなの話を聞こうにも、根拠となっているものがわからないもんだから、半ば放棄するような形でテーブルに頬杖をついてキグナスの髪をつつき回す。

つつき回しながら、昼間に甲板でしていた話を思い出していた。

（シェイド、か）

ネクロマンサーの存在は、良くわからなかった。だけど、ゲイトの言うシェイドは亜人型。

『シェイドがあれ』なのか、『シェイドと人間があれ』なのかわかんないけど、ともかくシンはアンデッドだって言ってた。

（アンデッド……）

グレンフォードを単に『魔物との融合体』なんだと思ってたから

神殿なんかは立ち入れないんだろーなって思ってたけど、アンデッドとくればますます……。

（ますます……）

……プリーストがいないのが痛い。

いやでも、魔法は有効なんだよな。ただ確かプリースト……それも上級になれば、アンデッド系を一発で何とかするよーな種類の魔法があったはずなんだ。

クラリスがいたらな……。

今なら、クラリスがいたらグレンフォードは脅威にならないかもしれない。だけど神聖魔法の使い手がいない今、シサーさえ勝てるかわからない相手とすると、今度襲われたら痛い。

今はメンツは増えたし、腕は立つんだろうけど、あくまで盗賊……剣士じゃない。シサー以上の戦力を彼らに求めるのは多分酷だよな。

聖書の紙と、いつの間にかラグフォレストの地図なんか引っ張りだして話し込んでいる面々に、視線を向ける。

（カイル……）

強そうだけど。

シサーとどっちが腕が立つだろう。年齢知らないけど、ジフのお父さんの親友ってことは相応の年齢だろうし、実際そう見えるし、経験値はいろいろ豊かそうではあるんだが。

『青の魔術師』の腹心――ロドリスの人間だと思えばどうしてもグレンフォードが頭の片隅から消えず、つらつらとそんなことを思って完全に会議からはぐれ者になっていた俺を、不意に耳に飛び込んできたシサーの声が現実に引き戻した。

「じゃあ、とりあえずはそれに決まりだな」

テーブルから体を起こす俺にシサーが顔を向けた。

「ラグフォレストについたら、まずは、『神殿』だ」

第2部第2章第17話　人魚の神殿（1）

『またある時、主は海へ船で乗り出す民を守るために、海へ向かった。
　10ヶ月続いた嵐は、主が海へと舞い降りた時に静まり、主は人の姿をした
　魚へ身を変えてしばらく海を守ることにした。
　人々は感謝をし、10ヶ月をかけて女神の為に岬に神殿をこしらえた。
　主は人々の心に痛く喜び、神殿をもらいうけた。
　その日から女神は、鐘の音と共に海を守り、鐘の音と共に町を守った。』

◆◇◆

今後の行動方針としてはとりあえず、ラグフォレスト大陸の港町シュートに船をつけてもらった後、俺たちは町で食料の補充とか一応情報収集なんかをしてみて、少なくとも一晩はゆっくりと宿をとって、休憩をしようと言うことになっている。目的の場所はそれほど遠い場所でもなさそうだし。
　俺たちを下ろした後、グローバーたちはしばらくこの町に滞在すると言っていた。グローバーは本来、シュートを拠点にしている船乗りらしい。
（あれがシュートか……）
　船の舳先に両肘をついて体重を預けたまま、顎を乗せる。少しずつ、俺にとっては新たな国の新たな町が、近づいてきていた。
　聖書の切れ端の内容は、会議の後に部屋でシサーに教えてもらった。人魚が女神の化身――ダンジョンで見つけたプレートの文章と

照らし合わせると、こういうことになる。

『うみにみえるところ』――これは多分、ダンジョンそのものの場所を指すだろう。行かなきゃならない目的地のある辺り。

『うみのめがみがあらわれるとき』――人魚が女神に姿を戻した理由は、神殿をもらったから。そして『鐘の音と共に町を守る』……女神に戻る。キィになるのはきっと、女神の為に建てられた神殿と鐘の音だ。

『うみへつづくみちをさがせ』――これはダンジョンへの行き方ってことだろう。

手記に書かれていた案内文によれば、シュートではかつて『人魚岩』……『人魚』のために建てられた神殿があると言うことだった。ただ、その場所にまでは触れられていない。

シュートと言う町で生まれ育ったわりには辺りにさほど詳しくないと言うシサーは、それでも何とかその『神殿』に心当たりを見つけた。

シュートの町には、町中と郊外に神殿がある。

町中の神殿は、今も町の人の信仰を支える要となる要所だ。もちろん司祭もいるし、訪れる参拝者もたくさんいる。

けれどそれとは裏腹に、郊外の神殿は廃墟なのだそうだ。いつ建てられたものなのか誰も知らないし、もちろん守る人もいない。町外れの小高い林の奥深くにある寂れた神殿で、今では子供たちが時折肝試しにその周辺へと訪れることがあるくらいで、基本的には危険だからと林に立ち入ることも禁止されているのだそうだ。

町中の神殿はダンジョンへの鍵にしては人目に付きすぎるし、方向的にも人魚の為に建てられたとは考えにくい。けれど、郊外の神殿の方は、方角的には『人魚岩』と同じなのだと言う。海を望むことも出来る。

となれば、やっぱり怪しいのは郊外の神殿だ。とりあえずは、そこに足を向けてみようと言うことで全員の意見の一致を見ていた。

「うぁー……陸地だぁぁ……」

ここまでの船旅は順調で、幸い変なもんに襲われたり大荒れになるようなこともなく、予定通りにシュートの町が水平線に姿を現したのを見て、キグナスが帆柱を抱擁した。……いいけど。別に。

「早く降ろしてくれ……」

さすがにもうげろげろ吐いたりはしてないけどやっぱり快適ではないらしく、船旅の間、キグナスの食は細かった。またまたダンジョンなんかに行くんだから体力つけなきゃいけないと思うんだけど、衰えさせてどーする。

「シサーの実家って、この町にあるんでしょ？」

俺の隣に立って目を細めているシサーを見上げると、見下ろして頷きながら短く答えた。

「まーな」

「家に帰らないの？」

「帰るわけねぇだろ」

まだ遠い、けれど少しずつ近づく陸地に目を細めたままでシサーはぼそりと言った。

「そう？せっかく帰るのに。心配しない？」

別に無理強いする気はないんだが。

「しねぇよ。死んだと思われてもおかしくねーな。……言ったろ？折り合いが良くねぇって」

「ああ……」

まあね……聞いたけどさ。

「うるせぇの。でかい商家ってのは、いろいろと」

「いろいろ？」

「久々に帰ってエルフなんて連れてってみろ」

「何かまずいの」

悪いんだけど、俺は実家にエルフを連れ帰る事態になり得ないので想像がつかない。敢えて想像するとすれば、ま、間違いなく両親は現実を拒否するか俺の正気を疑うか……いずれにしても、シサーの話の参考になりそうな想像は出来ない。

「だって別にエルフがいるのは普通でしょ？」
「普通じゃねぇよ。稀少なんだってことはわかってんだろ。……異種族なんだよ。似て見えたってな。……引き離そうとするに決まってんじゃねぇか」
あー……。国際結婚とかだって、家によってはあれこれ言われたりするもんなあ。日本の話だけど。異種族なんつったらとんでもないってもんだろーか。俺の世界では異種族連れて帰る人はいないだろうけど。
「ニーナを傷つけに帰るようなもんじゃねぇか……。俺はもう、家は捨てたんだからいらねぇよ」
「ふうん……」
何だかんだ言ってこの2人って、お互いのこと大切にしてる、よな。甘い雰囲気なんか微塵も感じたことないけど。……少なくとも、俺の視野の範囲内では、だけど。
どのくらい一緒にいるのか良くわからないけど、わかり合ってる感じがある気がするし。
パートナー的って言うのかな。俺とキグナスがわかってなくても、シサーとニーナで通じ合ってることは少なくない。
「何だよ……」
「べっつに。若い人はいいなあと思って」
俺の言葉に、シサーが吹き出しながら頭を小突いた。
「お前に言われることじゃねぇな」
それからシサーは揺れて近づくシュートの町に視線を戻した。
「……ま、お前もいつかこの先、いい出会いもあるだろ」
「……」
シサーは、俺がユリアを想っていることを知っている。はっきり宣言した覚えはないけれど、聞かれた覚えはあるし、勘がいいから気づいてるだろうし。
なのにそんな言い方をするのは……ユリアのことに触れないのはきっと、シサーなりの気遣いなんだろう。

叶いようがないこともまた、シサーだってわかりきっているだろうから。
そう思って作り上げた笑顔は、痛み混じりになっていたかもしれない。
「うん。……そうだね」
叶わなくても、きっとこの先にも、俺にだって誰かとの出会いはあるのかもしれない。
だけど……。
「船を降りる準備を始めるか」
「うん」
シサーの背中を追って歩き出しながら、俺はそっと胸の痛みに顔を顰めた。
だけど、俺は……。
（忘れる、くらいだったら……）
忘れることで出会う誰かと、いつか手に入れる幸せなんて。
……欲しく、ないんだ。

◆◇◆

船を降りても続いていた足元がおぼつかない、揺れているような感覚は、ゆっくりと町を歩いている間に次第に弱くなっていった。
ラグフォレスト大陸シュート。
「キーグナース。だーいじょーぶかー」
ゲイトがキグナスをゆさゆさと揺さぶる。ずっと船酔いに苦しんでいたキグナスは、可哀想に、安定した大地を踏みしめている恩恵を未だ受けきれずにいる。完全な千鳥足。オプションで鮨折でも持たせたい。
「んがあーッ！！揺さぶるなーッ！！」
予定通り、まずは下見がてら『神殿』とやらに行ってみようかと言うことになっている。一応今日は場所の確認だけ出来ればいいや

って感じなんだけど。
神殿の場所に心当たりがあるのは、シサーだけだ。果たしてそれが本当にダンジョンへ続く鍵になるのかわからないが、とりあえず見るだけ見て場所の確認くらいはしてみて、何かわかることがあるかもしれないし。もしどう考えても違うなら、改めて対策を練らなきゃなんないし。
「ギャヴァンと、ちょっと似てるね」
後ろでキグナスが雄叫ぶのを聞き流しながら言うと、隣に並んだシンがまだ高い位置にある太陽に目を細めた。
「ああ。俺もそう思った。港町だからな」
「港町は雰囲気が似てる？」
「そうだな……似てると思う。だが、ギャヴァンとシュートは本当に良く似ているな」
何でシサーがギャヴァンを選んだのかが、わかるような気がした。海の香はきっとどこも同じだろうし、町の雰囲気が生まれ育った町に似ていればやっぱり落ち着くだろう。
少し違うかもしれないけど、シンの黒髪と黒い瞳の組み合わせが故郷を思い出させて俺を安心させるのに似ているだろうか。
「俺、こっちの人間じゃないんだって、前に話したじゃん」
カイルと並んで歩いていくシサーについて歩きながら口を開くと、シンは無言でこっちに視線を向けた。
「俺の世界の俺がいた国ってさ、みんな、シンと同じ髪と目の色してるんだ」
「黒か？」
「そう。俺も別に、レガード真似して染めてるだけで、本当は全部黒髪だし」
シンがひょこんと眉を上げた。
「みんなか」
「そう。みんな」
俺の返答を聞いて、シンがまた目を上げて空を仰ぐ。どっか呆れ

たみたいな。
「それは気持ちが悪いな」
俺にしてみたら、こうも節操なくやり放題って感じだと落ち着かない。こんなに思い思いでいーんだろーか。……別に良い悪いの問題じゃないが。
「レガードってどうしてここだけ赤いのかな」
前髪をつまんでいると、何をされているんだか背後からキグナスの雄叫びが聞こえていた。すっかり仲良くなったみたいで良かったね。
「赤い髪は、ファーラの力の一部を特別に授けられてるって説もあるな」
「……へ！？」
ぼそっと言ったシンに、頓狂な声で聞き返すと、シンは目を伏せて軽く肩を竦めた。
「爺婆の間で言われてる迷信だ」
「ふうん？そうなの？」
「ああ。実際問題そんなところで決まりゃしないけどな。ただ、赤髪の者は優れた何かの気質を持っている率は高いとは言うが」
シェインとか？
あの人、一応『天才』。
「ジフも？」
ギャヴァンギルドの長も赤い髪に類すると気づいて言ってみると、シンが虚を突かれたような笑みを浮かべた。
「あいつは別に特殊な能力なんかあるわけじゃない。……まあ、盗賊としては優秀と言えるのかもしれんが」
「そうなの？」
「ああ見えてな。スキル的なものはかなりのトコまで行ってると思う」
「ふうん……」
最初にジフに抱いた印象ってのを思い返してみると、おかしい。

詐欺とかに真っ先に餌食になりそうって感想だったっけ。あどけない、人を信じやすそうな顔してたから。職業柄、そういうところも却って武器になったりするのかもしれない。

「じゃあ、レガードの前髪も何か特別だったりするのかなあ」

それがあのおじーさん……ガーネットの『頼みごと』に関係あったりするんだろーか。

だってレガードの身元とか知らなかったんだから、ガーネットはもちろんレガードのことを知らないんだろうし、だったら頼みたいことが出来るなんて変じゃないか。

したら外見的特徴……赤い前髪に理由があったのかなとか。そりゃあ『レガードの内に眠る何かの匂い立つようなオーラ』なんてのがあるんだったらともかく。俺、そういうの信じられないし。

それにガーネットが探してるって言う何かと、レガードと、何か関係があるのかな。その……『頼みごと』ってやつに。

シンにもその辺はわからないらしい。軽く肩を竦めてそれきり黙る。

「シン、前より少し話してくれるようになった気がするな……」

シサーの背中について歩いているうちに、気がついたらかなり町外れまで来てしまったみたいだ。人がまばらで、どちらかと言えば住宅街って雰囲気。街路樹や庭先の緑があちこちに目に付く。港のあった町の東側とは反対の西側はちょっとした山に通じていて、町からは直接階段が続いていた。そこを上っていく。

「そうか？」

「だって前なんか何聞いても、何も答えてくれなかったもんね」

笑みを覗かせることなんかまずなかったし。

今は会話の合間に白い歯を覗かせることもたびたびある。そりゃあ凄い爆笑してくれるようなことはないけど。

「前は、俺も警戒があったからな」

「ああ……そうか」

「レガードが何者だとしたって身分が高い人間だろうとはわかりき

っていたし、王侯貴族の疑いは濃厚だった。そのレガードを探していると言うお前だって何者なのかわかったものじゃない。下手なことを口にしてお前がレガードにとって不都合な人間だった場合、ことは国単位のトラブルに発生する可能性がある」

「うん……」

実際、ああしてシンが接触を持ったのが俺じゃなくて例えば……グレンフォードのような人物だった場合、シンがレガードの所在を漏らしたら命は間違いなくなかった。それはヴァルスとロンバルトの運命を左右するわけだし、あの時点で俺がそう言う人間じゃないと言う保証はシンにはなかったんだもんな。

「仮にユリア……カズキが連れていた彼女が本当にヴァルスの王女だとすれば、何もあの場で慌ててレガードの件を告げなくても、王城に連絡を取ればより危険ではなくなるだろう。城に伝えればいずれお前たちにも伝わるし、万が一お前たちが何者だったとしてもレガードに危険が及ぶ可能性は低くなる」

つまり今は俺への警戒を解いてくれたってことなんだろうか。

第2部第2章第17話　人魚の神殿（2）

石造りの階段は一段一段が広く低い。茂る木々の間を縫って青い海の波間を、光が白くきらきらと反射しているのが見える。

シュートは、ギャヴァンよりやや北ではあるけど、ほぼ同じくらい南に位置している。海風は湿った熱を含み、暖かい。ってゆーか、暑い。

砂漠の乾いた暑さとは違う……俺にとっては良く知る夏を意識させる種類の暑さだった。日中もっと気温が高くてもう少し季節が進むと、蝉の幻聴でも聞こえるかもしれない。

「あああああッ！！シンッ！！」

緑を揺らす風に目を細めていると、相変わらず後ろでぎゃあぎゃあ騒いでいたキグナスが猛然と階段を駆け上がって来た。名指しで怒鳴られたシンが、追い越して立ち止まったキグナスに目を瞬く。

「お前、仲間だろッ！！あいつ、何とかしてくれよッ」

つい振り返ると、ゲイトがへらへら舌を出しながらゆっくり階段を上がって来た。それをちらりと見て、シンがそっけなく答える。

「他人だ」

「良かったね。船酔いからようやく脱出出来たみたいで」

あっさりした俺とシンの言葉に、キグナスが「んがーッ」と叫びながら階段を駆け上がって行った。元気元気。

「何したんだかしらないけど、あんまり興奮させないでよ。夜眠れなくなったらどうすんの」

ゲイトを振り返りながら窘めると、隣でシンが「お前も大概ひどいことを言ってるみたいだが」と呟いた。ゲイトが笑いを噛み殺すようにして両手をポケットに突っ込んだまま、追いつく。

「キグナス、ギルドに入らないかな」

「あんなうるさい盗賊、どう使えば良いんだ？」

「魔術師だから使い道はあるだろ。ガーネットみたいに魔法を使う

のも人前に出るのも嫌がるわけじゃない」
「宮廷魔術師の甥が盗賊ギルドなんて入るわけがないだろう」
「ゲイト、よっぽどキグナスが気に入ったんだ？」
そのキグナスは今、シサーにまで追いついてめでたくそちらで小突き回されている。
俺の言葉に、シンが呆れた目線をゲイトに向けた。
「普段自分が1番下っ端だからな、俺もゲイトも。からかえる対象がいて嬉しいんだろう」
「そうそう」
……ゲイトはともかく、シンはとても『1番下っ端』の態度じゃないと思う。
「しかし威厳も尊厳も、かけらもない魔術師だな」
「見習いだし、叔父さんも叔父さんだし。……シサー」
歩きながら声をかけると前を行く4人が振り返った。……と、なぜかキグナスが恨みがましい目で俺を見る。俺は多分何も悪くないと思うんだが。
「『人魚岩』そのものは、どこにあるの」
そこそこ高台に上ってきていて海が見晴らせるから、見えないだろうか。『女神の化身である人魚』の為に建てられた神殿なんだから、あまり離れてないよう気もするし。方角も同じってことだし、『人魚岩』は港から離れた場所にあるって以前シサーも言っていたから、こっちの方から見えてもおかしくない。
尋ねた俺の声に振り返ったシサーは、親指で上を指した。もうすぐ階段が途切れ、鬱蒼とした林道に入っていくのが見える。
「もーじき神殿がある。その辺りから多分見えるだろう」
「多分？」
止めた足を再び動かして階段を上がりながら、聞き返す。足を止めたまま待ってくれていたシサーたちが、俺たちが追いつくのに合わせて一緒に階段を上がりながらおどけたように答えた。
「俺はガキの頃しかこの辺にいないし、いた間はほとんど親の監視

下だ。遊び回ったりしてらんなかったもんで、そんなに詳しくない」
ああ……学校に放り込まれてお勉強って言ってたっけ。
「ただまあ……そうは言っても生まれ育った場所だからな。多少の記憶はある。……その程度だ」
やがて階段が途切れた。続く林道は土が踏み固められただけのもの、それが生い茂る雑草の間を続いている。
見上げれば高くそびえ立つ針葉樹は空に近い位置で葉を茂らせ、自身の重みで斜めに広がる枝が日の光さえ覆い隠している。
おかげで、階段より涼しく感じられた。日光って熱持ってるんだなあ……。
高い位置を吹き抜ける風が、木々を揺らす。そのざわめきは静かな雰囲気と相まって、神社や寺に続く参道を思わせる。
似たようなものだよな、神殿に続くんだから。和風か洋風かの差異で。
「あれか」
俺の前を行くカイルのでかい背中が呟くのが、聞こえた。見ると２０メートルほど先が急に拓けて、むき出しの地面が広がっていた。
上を覆う木々にも切れ間が出来て、日暮れの色を滲ませ始めた空が再び覗いている。
青い海をバックに、その神殿は静かにそこに佇んでいた。
「廃墟みたい」
「廃墟なんだよ実際」
足を止めて神殿を見上げるニーナを追い越しながら、シサーが答えた。その背中を小走りに追うニーナに、俺も続く。
近づいてみれば、元は白かったんだろう煤けた石壁にはヒビが走り、凝った彫り込みのなされた柱はかつての美しさの面影を残してかえって侘びしい。
「ここなのかな。……あ、そうだ。『人魚岩』見える？」
「と思うぜ。こっちだ」
シサーがくいっと片手で促した。キグナスが俺の後についてくる。

「ぜっけーだなー」
目を細めるキグナスの髪が、下から吹き上げた風に煽られた。俺の髪も多分同様だろう。
神殿の裏手に回って木がまだ生え続くその先は、結構切り立った断崖になっていた。でも高度は思ったほどはない。
岩壁に叩きつけられて砕け散る波の泡が見てとれる。太陽が遠く、西の水平線に姿を隠そうとしていた。
「どれ？……あ、あれ？」
緩やかに弧を描くシュートの町から少し距離がある波の合間に、ぽつりと岩が波に洗われているのが見える。ここから距離があることを差し引いても……そんなに巨大ではなさそうだ。海面から顔を出しているのは1メートルもない。
「潮が引くとあの辺一帯はほとんど海水がなくなる。こっちの……」
言いながらシサーは『人魚岩』よりだいぶ沖寄り……こちらの断崖側の海を示した。
「この辺で急にがくんと深くなるんだ。岩の辺りからこっち、しばらくは遠浅が続くな。満潮時はさすがに波もあるしキツいだろうが、波さえなければ深さ自体は大人なら水ん中を歩いて行ける」
へえ。だから潮が完全に引けば道が現れるわけだ。
『うみにつづくみち』……この神殿か、あっちの遠浅の海か、どっちだろう？
「後であっちまで降りてってみよう。その頃には岩は、海ん中に埋没しちまってるかもしんねぇけどな」
神殿の方に戻ると、盗賊チームは神殿周辺を探っていたらしい。シンが顔を上げた。
「特にトラップなんかはなさそうだ。どうする。開けてみるか」
言って古い鍵を片手でくるんと弄ぶ。
「『3つ目』？」
「ああ」
風の砂漠のダンジョンの最後の部屋を思い出した。

俺自身は見てないけど、部屋の奥に鍵があったんだろうって痕跡はあったって言ってたな。

あそこまで辿りついたシンが手に入れた鍵。

やや、大きめのものだった。全長が俺の手のひらを広げて指まで含めた長さくらいありそう。……それより少し小さいか。女の子の手のひらくらいだったらちょうどかもしれない。

「今までの経験を言うと、1つ目……マヌールのダンジョンはダイナの残された書類から謎解きが鍵だ。2つ目緑竜の森のダンジョンは1つ目の鍵、風の砂漠のダンジョンは2つ目の鍵、それぞれで最初の扉を開けることが出来る。その経験則から言えばこいつが使えれば正解だ」

「万が一ここじゃないとすると、他に神殿って言ったら町中にあるでかい奴しかねぇな多分。それかまったく違うか……。いずれにしても行動方針を考え直さなきゃならなくなるからな。確かめた方がいーんじゃねぇか」

「じゃあ確かめとこう。ただし、戻れなくなっても知らないぞ」

そっけなく言って手の中で鍵を鳴らすと、歩き出すシンに続く。戻れなくなったらあんまり嬉しくない。まだ準備整えてないし。

「戻れなくなったりすること、ある？」

「ある。一応扉を固定したり、あるならトラップの解除をしたりはするが、処置のしようがない場合もあるな」

処置のしようがない？

首を傾げていると、シンが歩きながら振り返って小さく笑った。

「マヌール……『1つ目の鍵』のダンジョンは、扉を開けて入った瞬間足下がなくなった。扉や鍵穴で連動しているトラップなら外から解除も出来るが、中で何かを感知して中で全てが作動するものだと、解除のしようがない」

……恐ろしい。

「マヌールの場合は床全体の重心感知だったみたいだ。……使えるな」

最後の言葉は独り言のように呟きながら、シンが鍵穴に鍵を差し込んだ。ついつい全員が沈黙して見守る中、鍵が開く少し錆びたような音がする。

「……さて」

まだ鍵を穴に突っ込んだまま、シンはカイルとシサーを振り返った。

「どうする。開けてみるか？とりあえずは」

ここで「ああ、鍵が使えたからきっとここだ。じゃあ帰ろう」ってわけにいかないと思うんだけど。

シンが鍵を抜き、扉に手を掛けた。さっき周辺を探っていたから、扉に罠がないことは確認済みなんだろう。

開いた扉から、中に光が射し込む。神殿の中は暗く、がらんとしていた。動いた空気に、舞い上がる埃が反射している。

天井は高く、見上げる上の方の壁に一応飾り窓がついてはいるが、どれもこれも煤けて明かり取りの意味を失い掛けていた。扉から正面には祭壇らしきものがある。見上げればその遥か頭上には、やはりこれも寂れた鐘が吊り下がっていた。

「寂れてんなー」

キグナスがシンのわき腹から顔を突っ込んで中を覗く。それに頓着せず、シンは中に足を踏み入れた。

「ゲイト、扉の固定頼んだ」

「了解ー」

ひとり扉のところに留まったゲイトが、何か道具を取り出したのを見て、俺も足を止める。

「扉の固定って？」

「どんなトラップで扉が閉まっちゃうかわかんないから。中に全員入った途端、閉じこめられたらたまんないでしょ。さっきシンが言ってたように解除できないトラップってのもあるし、そもそも感知出来ないトラップだってある。そんなのが作動して扉が閉まっちゃうことのないように、扉自体が閉まらないようにしとくんだ」

へえ。なるほど。
「確実なのは扉をぶっ壊しちゃうことなんだけど……ま、こんなとこで結構役には立つ」
言いながらゲイトは扉の付け根に3箇所、大きめの楔（くさび）を打ち込んだ。それから鎖で取っ手になっている部分を絡めて動かないよう固定する。鮮やかな手際だ。
「これで駄目な場合は魔法かかってるから、そういうのは何したって駄目だし。完了っと」
作業の終わったゲイトに促されて、みんなに続いた。中に入る。
見渡す限り、他に部屋はなさそうだった。ここだけ。一体ここで何をどうすれば何がどうなるんだろう。キィは『神殿』と『鐘』だろうっつったって、あんな高い位置にある鐘をどうしようもない。鐘突き台だってあるわけじゃない。
シンとカイルは辺りを探っている。慣れた身のこなしで、妙に職人を思わせた。……いや、職人か。
こういう技術を持ってたら、風の砂漠のダンジョンでも迷子になんなくて済んだのかもしれないな。
「……トラップなんかは特になさそうだな」
床とか壁とかを探っていたカイルがこっちに戻ってきて告げたのを受けて、シサーが歩き出す。
神殿の床には薄く土埃が積もり、俺は何となく扉から正面の最奥の壁際の祭壇に向かった。
祭壇の奥の壁はがくがくと階段状に隆起して、祭壇のちょうど背面の壁は堂のように抉られている。雰囲気としては神像でも置かれて然るべきなのに、そこにはただ空洞があった。
祀られる神のいない神殿。
「『人魚』が海から上がってくんのを待ってんだなー」
俺にくっついてきたキグナスが、同じように主のいない祭壇を見上げて言う。
聖書の文面になぞらえているなら、ここに祀られるべきは女神が

姿を変えている人魚……彼女は鐘の音と共に、海を、町を、見守っている。あくまでここは『帰る場所』と言うわけだ。

「……俺について来ても、悪いんだけど俺はゲイトから守ってあげられないよ」

ぽそりと言うと、キグナスがごんと前のめりに祭壇の縁に頭をぶつけた。

「俺、カズキかシンのそばにいるのが1番ましだってわかったよ……」

「何だよそれ……」

「俺は含まれないのかぁー？」

背後から忍び寄っていたらしいシサーが不意に、握り締めた両手でキグナスのこめかみの辺りをぐりぐりとやった。そういうことするから、省かれるんだと思うよ。

「んがあああッ」

癇癪でも起こしたようにキグナスが吼える。船旅が暇だったせいで、完全にゲイトとシサーのストレス解消台が定着してしまった可哀想なキグナスの為に口を開き掛けた時、目を向けたシサーが光った。

いや……シサーじゃなくて、ポケット。

「んあ？」

「何……」

カラーン、カラーン……。

キグナスとシサーが動きを止める。と、次の瞬間、誰も何もしていないのに何かに反応するかのように祭壇の鐘が体を振動させた。小刻みだったそれが、次第に勝手に大きくなっていく。

「何だ？」

カラーン、カラーン、カラーン！！カラーン！！！！

「どうしたッ！？」

異変に気づいてこちらに駆けつけてくるカイルの声、そして彼らの足音と轟音が重なった。ゴゴゴゴゴ、ドコーンッ！！！！と、足

元……床下の更に低いところで何か巨大なものが倒れたようなくぐもった音と振動。

「やべぇ、何かに反応しやがったな」

シサーがポケットから取り出したドワーフの石が、煌々と光っている。アースカラーの石に見合った暖色の柔らかい色。石と鐘が、反応し合ったんだろうか。

――汝、財を手にする資格の一を得たり……

不意にどこからか声が聞こえた。音の出所はわからない。その場の全員がきょろきょろと辺りを見回すその中で、声は続けた。

――盗人か、真に資格を有するものか、見せてもらおう……

声が途切れるのと共に、祭壇の奥の空洞の床が光を噴き上げる。それが天井の鐘に反射するように変な角度を折れ曲がって……やばいぞこれッ。風の砂漠のダンジョンを抜ける時と同じ手法――光の魔法陣だッ……。

「跳ばされるッ……」

思わず口走った言葉は光の奔流にかき消された。咄嗟に瞑った瞼の裏で、烈しい光の交錯が、見えた気がした。

第2部第2章第18話　海底のダンジョン1　【反転】（1）

マールがたどりついたのは大地の神殿だった。
がらんとしたその神殿は、ルシルウの冬の大地のように薄く白い。
小さな足跡を残しながらマールが奥へと歩いていくと、祭壇の陰からホビットが現れた。
ホビットは目を丸くして叫んだ。「ドワーフだ!!」
「いかにも」
ホビットの言葉にマールは頷いた。まだドワーフとしては年若いけれど、しっかりした体躯、浅黒い肌、ぎょろぎょろと動く目、その全てがマールがドワーフであることを教えている。
「ドワーフだ!!ドワーフが来た!!」
ホビットは繰り返した。慌て者のホビットは、きょときょとと目を動かしながら飛び跳ねて手を叩いた。「私はドワーフを待っていたのだ!!」
「それはどういうことだい？」
マールは言った。
「私はここを訪れるドワーフに鍵を渡すように言われていたのだ！そうだ、鍵だ!!」
言いながらホビットはまるでコマネズミのように走り出した。祭壇の奥から鍵を手に戻ってくる。
「私はこれをお前に渡せば良い!!さあ、私は自由だ!!」
ホビットは慌てた様子でマールに鍵を押しつけた。そしてマールが驚いている間に神殿を出て行った。
マールは鍵を手に入れた。かつてドワーフが失った財産を手に入れる鍵だ。

◆◇◆

カツンカツン、と言う音が時折聞こえる。盗賊チームがトラップの有無を確認する音だ。

もちろん全部の場所でやってるわけじゃないけど、こうしてると地道な作業なんだなあと言う気がする。

俺にも何か出来ることがあればいーんだが、あいにくシーフスキルなんかこれっぽっちもない。

今度余裕を見て、誰かに鍵開けくらいは教えてもらった方が良いだろうか。どこかで役に立つかもしれない。……立たないかもしれないが。

俺たちがいるのは、広い部屋だった。真四角のだだっ広い部屋。床にも正方形のタイルが1枚1枚張り巡らされていて、それ以外には壁際に彫像が4つあるだけだ。それぞれの辺のちょうど真ん中辺りに、等間隔で配置されている。

神殿から光の魔法陣で跳ばされて、気がついたらこの部屋だった。とりあえず、何があるかわからんから動くなと言われてじっとしている。

見回す限り、出口も入り口もない部屋だった。普通に、閉じこめられている状態。

天井は高い。光源がどこなのかわからないが、暗い部屋じゃなかった。それに床の質感とかつるつるして光っていて……何となく綺麗だ。地下鉄とかと続いている地下通路を思い出す。

ここに跳ばされてからこっち、シサーの剣はずっと光りっ放しだった。敵の存在を感知していると言うことだ。けれど、感知されたはずの敵の姿は一向に現れる気配はない。おかげで最初はしていた魔物への警戒も、今ではほとんど消え失せている。近くにいるはいるんだろうが、襲ってくるような場所にいないのかもしれない。壁1枚向こうとか。

「ざっと見る限り、でかいトラップはなさそうなんだが……」

複雑な表情で言って、シンが戻ってきた。散っていたカイル、ゲイトもこちらに歩いてくる姿が見える。

「どうやって出るのかわかった？」
　尋ねるとシンは、無表情に親指で正面の壁を指した。
「多分あそこに出口が出来るな。が、作動のさせ方がまだわからん。これから調べる。とりあえず命に危険がなさそうかだけ確認してきただけだ」
「ふうん？」
　彫像じゃないんだろうか。きちんと等距離に配置されてるから、何か臭そうなんだが。
　歩き出そうとした俺を、シンが止める。全員に向かって今度は、床を示した。
「床トラップがあるから、動く時は気をつけてくれ。特にキグナス」
「何で俺ッ！？」
「お前が1番注意力に欠けてそうだと言う判断だ。深い意味はない」
　キグナスが無言で肩を落とす。取り合わずにシンは淡々と続けた。
「多分床に落とし穴がある。それもランダムに複数。見分け方は簡単だ。良く見ればタイルに動いた形跡がある。見てれば避けられる」
「……形跡ってどんな？」
　試しに聞いてみると、シンはきょろっと辺りを見回してくいっと手を振った。示されたとこについていく。
「こういうやつだな」
　言われて良く見てみれば、他のより確かにタイルとタイルの間に隙間と思しき感じがある。つなぎ目の線が太いと言うか。
「物が動く場合は必ず動いた形跡やつなぎ目がある。それを見ればわかるだろう」
　ああなるほど、そいつは簡単……ってわかるか、こんなもん。自分と一緒にしないでくれ。タイルごとに目をこらさなきゃわからないじゃないか。そんなことをしてたら、彫像に辿り着いた頃には明日になっている。
　げんなりした俺に、シンは苦笑をもらして提案をくれた。
「心配なら、俺たちの誰かについて歩くんだな」

その方向でお願いします。
「つーと、あっちの壁を動かす手段を探さなきゃなんねぇわけだな」
黙って聞いていたシサーが、自分の顎を撫でながらさっきシンの示した壁を指す。少し離れた床に屈み込んで片手をついていたカイルが、顔をあげた。
「作動させてみるか」
「何を？」
「落とし穴だ」
言いながらカイルは、足を踏み出した。片足を別のタイルに乗せた状態で、かんっと踵を打ちつける。瞬間、カイルの足の下がぱっくりと口を開ける。タイルが消えた。
……いや、消えたわけじゃないか。まるでスプリングで支えられてたみたいに、床下に引っ込んだらしい。
「それほど深くはないな」
ぱこんと黒い口を開けたままの空洞を覗き込むカイルの声が、聞こえる。ゲイトが近づいていった。多少不自然な歩き方をしているのはきっと、落とし穴を避けているからだろう。
それを見る限り、その数は結構多い。
「中はどうなってる」
「ただの穴だな。別段何も仕掛けてはいないようだ」
「ふうん……」
シンがぼそりと「怪しいな」と呟く。
「じゃあ何のために……？」
呟きながら数歩歩いて、さっきのカイルのように床を蹴りつけた。開いた空洞は、同様にただの空洞らしい。
「臭いな」
中を探っていたシンが、ひょいと顔をあげた。カイルの方を見ると、さっき開けた穴は塞がってしまったようだ。開いたら開けっ放しにしといてくれれば避けるんだが。戻ることないじゃないか。
「おい、カイル、ゲイト」

「うんー？」
「どっかに鍵、もしかすると宝でもあるかもしれないぞ」
「え？穴のどこかに？」
思わず俺が反応すると、シンは立ち上がりながら頷いた。
「穴に落とすだけでさして深くない。これならすぐに上がってくる。何の為の罠だ？」
『穴に落とすだけ』って言うけれど、頻繁に落とされてたら前に進まないじゃないか。
とは言え……シンの言うことにも一理ある。
少し歩いてはがんッ！！と床を片足で蹴り開けるシンについていくっついていくと、穴はことごとくただの穴だった。確かにちょっと不審だ。
「罠の中に隠されてることだってあるんだ」
「でも穴ってたくさんありそうじゃねー？こん中から1個1個探すのか？」
俺とシンの会話を聞いていたらしいキグナスが、鼻の頭に皺を寄せる。
「まさか。何かヒントがあるだろう……」
それきりシンが黙る。ヒントか……。
この部屋にあるとすれば、彫像だけ。何か特殊な隠し方してるんじゃなけりゃ、怪しいのは彫像。
もっとそばで見てみようと、ついつい考え込みながら彫像のひとつに足を向ける。と、足下が不意になくなってがくんと体に重力がかかった。
「うわあ」
……あほか俺は。
これだけ話してた後に、まんまと落とし穴に落ちてる自分が情けない。
「いてぇ……」
平らな穴の底にしては変な感触を受けながら呻く。何だろう。俺、

何かの上に座ってる。
「あ」
「気をつけろと言った矢先にやるなよ。……どうした」
呆れた声を投げかけながら近づいて来たシンが、中を覗き込んで少しだけ目を見開いた。
「宝箱」
かなりちっちゃいけど。
立ち上がって持ち上げてみる。長さ15×20センチくらいのもので、持ち上げた感触もかなり軽かった。振ると、ごとごとと音がする。あまり期待は出来ない。
とは言え、中身を見たくないほど好奇心が涸れているわけじゃない。試しに蓋に手を掛けてみると、鍵がかかっていて開かなかった。
「貸してみろ」
しゃがみこんで俺の手元を見ているシンに箱を渡す。シンは軽く持ち上げて箱の裏なんか意味不明に眺めると、腰にぶら下がった細長いピンみたいなものを手にした。鍵穴に突っ込む。
「こんなんで開くんだ」
「簡単だな」
言うそばからカチっと言う音がして、蓋に手をかける。今度は簡単に開いた。
「なーんだ……」
中身を覗き込んで、つい呟く。開いてみると、中にはナイフがひとつ入っているだけだった。それも錆びかけていて、余り役に立ちそうもない年代モノだ。
「外れだな。ただのガラクタだ」
「……」
一応手に取ってナイフを鑑定するように見ていたシンが、ぼそりと言ってナイフをひらひらと振る。
「何に要り用になるかわからないから、持って行くだけは行った方がいいかもしれないが……ま、十中八九ただのガラクタだろうな…

…」

ガラクタか……あ。

「じゃあ俺、もらっていい？」

「構わないが……何に使うんだ？使い道がないぞ」

だって俺、忘れかけてたけれど、何らかを武器職人のアギナルドさんに持ってかなきゃならないんだ。

……こんなもの、アギナルド老だって欲しいかわかったもんじゃないが、意外に俺、『使い道のない刀剣類』と言うものに遭遇しない。これを逃すと買って持って行く羽目になるかもしれない。

シンの許可を得て受け取ったナイフをとりあえず荷袋に納めて、ようやく穴から這い出る。

「でも、穴の中に宝が隠されてる可能性があることはわかったな」

「ああ……そうだね」

頷く俺の足元で、今さっきまで口を開けていた穴が元通りに閉じた。だから閉じるなと言うのに。

「何かあったか」

キグナスを連れたゲイトが近づいて来る。カイル、シサーは各々勝手に部屋の中を動き回っているようだ。カイルはともかく、こんなトラップを作動させずにすたすた歩いているシサーはどっかおかしいとしか考えられない。ちなみにニーナは座り込んでそれを眺めている。やる気を感じられない。

「ガラクタの入った宝箱だ」

「おっとぉ。じゃあ宝がある可能性があるな」

「ああ。ちょっと適当に穴を探して回ってくれ。こればっかりは地味な作業になるな……。カズキ、俺の後ろついてこい」

「え？」

「彫像が見たいんじゃないのか」

俺が穴にはまった理由ははばれているらしい。

「うん……さっき見て回った時に、変わったところはなかったの」

「どうかな。それぞれ単体ではおかしなところはなさそうだが。全

体にはまだチェックしてないからな」
　シンに連れられて、1番近い位置に設置されている彫像に近付く。白い大理石のような綺麗な石で造られたものだ。……女神だろうか。流れるようなストレートの長い髪、ギリシア神話のような衣装を身に纏っている。右手に握って斜めに翳しているのは、剣。
「これは……ファーラ？」
　俺はレオノーラでも神殿に行ったことがない。祭壇には何度かお目にかかったが、そこにファーラの姿はなかった。もしこれがファーラなのだとすれば、見るのは初めてだ。
「ああ。戦姫としてのファーラ神の姿だな」
「戦姫としての？」
　見上げながら尋ねると、同様に俺の隣で彫像を見上げながらシンが頷いた。
「ファーラには2つの姿がある。戦の神としての姿。象徴するのは右手に握った剣だ。もうひとつの姿は慈愛と平和の女神としての姿。これを象徴するのは左手に握る錫だな」
「左手？」
　見上げる彫像の左手は、右手に握った剣の刃にそえられるように伸ばされている。錫なんてどこにもない。
「正式な姿はそうなんだ。だが場合によってどちらかになっていることも多い」
　俺の疑問を察したように、シンが注釈を加えた。ふうん。じゃあこれは戦姫バージョンってわけだ。
「この部屋の彫像は、みんな同じもの？」
　きょろっと見回して尋ねる。シンも同じように見回してから頷いた。
「俺が見た限りでは、全部剣を握っているパターンのものだな。でかい神殿なんかに行けば正式な剣と錫の神像が置かれているが、小さな神殿なんかではその神殿がより強く打ち出している方針に沿った神像を掲げるな」

「ふうん……」
ここにある彫像は全部戦姫、か。
それからシンについて他の彫像も見て回る。一通りぐるっと見ている間に、宝を探して回っているらしいキグナスとゲイトの歓声が時折届いた。
「……決まりだな」
「……だね」

第2部第2章第18話　海底のダンジョン1　【反転】（2）

歩きながら、ささやかながらも彫像の違いに気づく。同じことに気づいたらしいシンが時々離れた位置からロープでその距離と場所を確認する。そんな作業を繰り返して、元の場所に戻ってきた時にシンがぼそりと呟いた。応えて俺も頷く。

彫像の手に握られているのは全て剣。ポーズはほぼ同じだ。だけど剣の指している方向がほんの少しずつ違う。

全ての剣が指しているタイルは、多分同じもののようだ。シンが歩き回りながら計ったから、多分間違いないだろう。北から6番目、西から11番目のタイル。

「シーン。何かわかったかあー？」

ゲイトが遠くから声をかける。それに片手を軽く挙げて応えると、無言でシンは目的のタイルへ歩き出した。……い、今ので意志の疎通はあったんだろうか。謎だ。

目的のタイルまで到着すると、シンは屈み込んでその周辺を軽くチェックした。それから立ち上がって、これまでと同じように踵を振り下ろす。

「あれ？何もないね」

意に反して、ただの穴だ。出口を操作するどころか宝箱さえない。脇にしゃがみこんで首を傾げていると、シンが無言で中に手を突っ込んだ。

「あったぞ」

「え？あった？」

見れば、シンの手は穴の中で不自然な方向に曲げられていた。穴の側壁に突っ込んで、更に上に向けて曲げられている。

「横穴が開いていて、その中の天井にレバーがある」

「意地悪だなあ……」

「カイルッ！！」

一旦体を起こしてカイルを呼ぶと、ゲイトたちのところに集まっていた全員がこっちを向いた。
「レバーがある。そっちは何かあったか」
「ああ。今そっちに行く」
向こうでも何か見つけたらしい。答えるカイルとゲイトを先頭に、こちらに向かって来る。
「そっちは何があったの」
尋ねると、ゲイトが片手に持ったものをひらひらと振った。小さくて良く見えない、けど……金属の輪っか？
「……何？」
「金属の輪っかだな」
「……」
近づいてきたゲイトの手のひらに、ころんと直径１５センチくらいの輪っかが転がっている。装飾とかは特にない。厚みもないし、本当にただの金属の輪っか。用途不明。
「……」
ガラクタしかないんじゃないの、ここ。
「必要？」
「さあ。要り用になるかもしんないじゃん？だってこんなもんだけ入ってる宝箱なんか不自然でしょ。本当にただのガラクタが外れで入ってることだってあるけどさ。ま、あとはいくつか金貨の入った袋を見つけたから……レバーがあったって？」
「ああ……」
足元から、シンのくぐもった声が聞こえる。いつの間にかシンは床に仰向けになって片手で体を支えながら、穴の中に頭を突っ込んでいた。横穴のレバーを覗き込んでいる。背筋が疲れそうだ。
「別段怪しげなことはなさそうだがな。……カイル、魔物が出そうな気配はどこかにあったか」
「いや……探れる範囲ではないな。何かを作動……例えば出口が開いたら現れたりするのかもしれん」

穴に頭を突っ込んだままのシンに、カイルが否定的な返事を返す。
それを受けて体を起こしたシンが、穴の中に手を突っ込み直して全員を見回した。
「じゃあ一応、戦闘準備をしておくんだな」
シンの言葉に、全員が武器を構える。俺も剣の柄に手を伸ばした。
「行くぞ」
シンの声と共に、ギィ……と歪んだ音が足元から聞こえた。

◆◇◆

煉瓦造りの通路には暖かな家のように松明が灯っている。
まるでマールを導くかのように、マールが歩く度に松明が灯っていくのだ。
歩き進んでいくうちに、やがて道が2本に分かれていた。
正解はどちらかひとつだ!!
「どちらへ行こうか」
マールが足を止めて悩んでいると、きらきらと光の粉が降ってきた。
現れたのはニンフだった。
「私があなたを助けてあげられるわ」
「ありがたい」
「だけど代わりにお願いがあるの」
マールの前を行ったり来たりしながらニンフはその小さな小さな両手を差し出した。
「『妖精の水』があったらわけてちょうだい。もう5日も口にしてないの」
「そいつは大変だ!!」
マールは急いで腰に提げた水袋を取り出した。ニンフはそこから水を必要なだけ口にすると、元気を取り戻した。
「ありがとう。助かったわ。お礼にこれをあげる」
ニンフが差し出したのはエルドナの小さな花束だった。

エルドナの花は疲労がたちまちとれる。そしてニンフは右の道を指した。
「正しく進みたいのなら、こっちの道を行きなさい。あなたはきっと望む結果を得ることが出来ると思うわ」

～中略～

ニンフに言われた道を進んできたが、その道は行き止まりだった。
マールの正面には扉があった。右側には泉があった。泉は滔々と美しい水を湛え、女神の像がひっそりとマールの訪問を待っていた。
「女神だ！！」
マールは叫んだ。「私は正しい者だ。私は資格を持つ者だ。私の為に道を開いてくれ！！」
マールの言葉に女神が応えた。閉じた瞳が開き、女神は扉を指し示した。
「行きなさい」
女神の言葉に扉が開いた。

◆◇◆

「開いた……」
レバーの音が途切れるのと入れ替わりにぎしぎしと軋む音がして、シンが先ほど示した場所の壁がこちら側へと倒れ込んで来た。ずしん、と重い衝撃が床から足に伝わり、埃が舞い上がる。
……と。
「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ！！その身を裁きの矛と変えよ。ポエブス！！」
急に背後を振り返ったニーナが、間髪入れずに魔法を発動させた。剣を抜き放って構えながら振り返った俺の目に、『光の矢』を避ける為に跳躍する４本足の魔物の姿が飛び込んで来た。額には３つの

目、まるで青い石をはめ込んだかのようにきらきらと光っている。全身をふさふさと覆う長い毛は緑色で、ぱっくり開いた巨大な口からは真っ赤な舌が覗いていた。2メートルはある、犬型の魔物……いや、猫型か？

「うわぁ」

「どっから出やがった！？」

言いながらシサーが、剣を片手に地を蹴る。カイルの怒声が、注意を喚起した。

「足元の落とし穴、気をつけろッ」

「忘れてたぜぇっと……」

答えながら、シサーが魔物に剣を振り被る。カイル自身もカトラスを握りながら、こちらを振り返った。

「シン、こっちの加勢しろ。ゲイトはその2人連れて先に行け」

「りょおかーい」

軽い返事を返して、ゲイトがこちらを向く。くいっと手招きしながら、にこっと笑った。

「落とし穴だらけで足場が悪いかんな。戦わずに済んでもーけものッ。行こうッ」

ゲイトに続いて開いた扉を駆け抜ける。

「逃げ場の確保も重要な役目……ほら来た」

続く通路は、部屋と同様タイル張りだった。つるっとした感のある四角い通路の奥に、巨大な陰が揺れている。

こちらに気づいてどすどすと近づいてくるその姿には、見覚えがあった。風の砂漠のダンジョンでも遭遇した。……オーガーだ。

「くそ、こっちも大概楽じゃねぇぞッ」

怒鳴りながら、キグナスがロッドを構える。

「こいつじゃどーにもなんないかなーっと」

ぼやきながらゲイトは左手にダガーを構えたまま、右手にショートソードを構えた。

「ゲイトの得意なのは、ダガー？」

剣を構えて正面に迫ってくるオーガーに視線を定めたまま、問う。
視界の中で同じように前を見据えたままで、ゲイトが肯定した。
「そう。一応はね。飛び道具なら基本的に扱えるものが多いけど、馴染み深いのはダガー」
迫って来るオーガーは、こちらもまたでかい。３メートルくらいあるんだろうか。まだ距離は結構あるんだと思うが、何せでかいので遠近感がおかしくて距離が掴めない。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ダテ・エト・ダビトゥル・ウォービース・イグニス。『火炎弾』！！」
俺とゲイトの後ろに控えたキグナスが、お得意の『火炎弾』を飛ばす。が、距離があるせいかキグナスの放つ『火炎弾』の速度では避けられてしまう。
「キーグナスッ。援護、しっかり頼むぜぇー。カズキ、行くぞッ。迎撃だッ」
この人、意外と好戦的？
駆け出すゲイトに促されて、俺も駆け出す。先方もこちらに向かってどしどし駆けて来るから、距離が縮まるのは思ったよりもあっと言う間だ。
「剣は使えんだろッ？」
「何となくねッ……」
「オオオオオオッ」
言葉尻で反動をつけて地を蹴りつけながらダガーを飛ばすゲイトと、答える俺の声に、オーガーの叫びが重なる。目の前に飛び出て来たゲイトの動きにつられて腕を振り挙げるオーガーの横をすり抜けるように、身を屈めた。先ほどゲイトが投げつけたダガーが数本、肩の辺りに突き刺さっている。
「『風の刃』ッ」
飛距離を考えてか、魔法を変更したらしい。巨大な手で捕まれる前にゲイトが切りつけたショートソードに続けて、『風の刃』がオーガーの全身に細かな傷を刻む。

（硬ぇーッ……）

オーガーの脇をすり抜けてバッド宜しく剣をその背中から脇腹にかけて叩きつけた俺の手に、硬い筋肉の感触が伝わった。こちら側の攻撃に気づいたらしいオーガーが苦悶の声を上げながら身を捩る。振り回した腕が壁に当たり、ばごんっとでかい穴が開いた。……ひー……。

「おーっかねぇー……ッキグナス、目を狙えッ」

どこか余裕を残しながら、オーガーの腕を柵代わりに、片手を軸に乗り越えながらゲイトが怒鳴る。魔法の発動を返答に代えて応じたキグナスに、オーガーの目元から血が噴き上げた。ちょっと外してるが、上等だ。

雄叫びを上げながら頭上を仰ぎ、痛むらしい目の辺りを片手で覆うオーガーに剣を突き立てる。やや距離を置いて宙に跳んだゲイトが、立て続けに数本のダガーを背後から放った。

「ギャアアアアッ」

全く亜人型の魔物は、悲鳴が人間と似ていていささか気分が悪い。今度こそ命中した『火炎弾』に、オーガーがもんどり打って倒れ込む。巻き込まれたらこっちもお陀仏だ。

突き立てた剣を抜いて飛びすさると、持ち直すかのように立ち上がりかけたオーガーが動きを止めた。げふっと大量の血を口から溢れさせたかと思うと、そのまま前のめりに体が傾く。

ずしーんッ。

盛大な轟音を立てながら崩れ落ちたオーガーは、そのまま身動きをしなくなった。

「……あーったく……『即効性』だっつーのにこの効きの遅さ……たまんねーなー」

床に片膝をついていたゲイトが、ぼやきながら立ち上がる。

「毒？」

「そ。最初のダガーにも今のにもしっかり仕込んであるのに、オーガーってのは鈍いんだよな」

ゲイトの声を聞きながら剣を拭って顔を上げると、キグナスの後ろ、さっきの部屋から続く出入り口のところにシサーたちが立ってこちら側を見ているのが見えた。
「……どう見ても見物してたふうなんですけど」
そっちの戦闘が終わってたんなら、何で参戦しないかな……。
じとっと睨みながら歩いていくと、シサーがにやーっと笑った。
「やるじゃねーか」
「見てないで手伝ってよ」
「いやいや、教え子が成長してくのは嬉しいよ」
「教え子……」
まあ……異論はないんだが。
「さてと。進んでみるかぁ。どっち行く?」
伸びをしながら、シサーが尋ねる。この通路は、部屋から出てすぐ左手に折れるものと直進するものがあった。左手の方はすぐに壁で、右に折れ曲がって先に続いている。
「こっちから行ってみよう」
カイルの言葉に従って、俺たちは直進通路の方をまず探ってみることに決めた。先ほど、俺たちがオーガーと戦闘した方だ。通路にどかんと倒れたままのオーガーが邪魔。
「ここは落とし穴になってないのね」
「見る限りはなさそうだな」
改めて見ると、こちらも結構綺麗な通路だ。天井はオーガーより少し高かったから、そこそこある。壁も床も、タイルの質か磨いたみたいにぴかぴかだ。道幅も広くて3メートルやそこらはある。
長く続いている通路だった。けれど果てしないわけでもない。向こう側の壁がここからでも見える。オーガーが姿を現した角のある辺り。
壁際には、これまた部屋と同じように等間隔で女神の彫像が配置されていた。
「でもさあ、本当に俺らがフラウの……ええと、ダイナだっけか?

そこのドワーフだったら、あんなもんに襲われてたら宝になんか辿りつけねぇんじゃねぇのー？」

ぐりぐりと自分の顎にロッドのてっぺんの青い玉を押し付けながら呟くキグナスに、先頭を歩くカイルが振り返った。

第2部第2章第18話　海底のダンジョン1　【反転】（3）

「魔物の存在は、ダンジョンの製作者の意図とは無関係の場合も多々あるからな」
「仕込んだわけじゃなくて住み着いたってか？」
「大半は、そうだろう。ダンジョンは長いこと無人のものが多い。ここのダンジョンは、造られてからかなりの月日が経っているはずだ」
「フラウ侵略戦争からだろ？」
「それ以前だよ」
キグナスの前を歩くゲイトが、カイルを補足するように口を開いた。
「それ以前？」
「そう。フラウ侵略戦争の頃に、慌ててこんなもんをあちこちに造れるわけないじゃん。書物によれば、かつてのダンジョンの名残を尚改築して、何かの為に備えたってことになってるな」
みんなの話を聞きながら、彫像を眺める。さっきだって彫像にヒントがあったんだから、何かあるかもしれないと思うのは自然の流れだろう。
（こっちは……フルバージョンか……）
さっきの部屋にあったのが戦姫バージョンだとすると、こっちはフルバージョンと言うことになる。右手には錫、左手には剣を握る女神の像だ。
さっきからずっと見ているけれど、こうして見る限りどれも全く同じものに見えた。剣や錫の角度、表情や体の向き、どこを取っても違いがあるように思えない。ただの装飾なんだろうか。
「あ、そう言えばシサーの剣、静かになったね」
カイルの斜め後ろ辺りを歩いているシサーの腰に提がったグラムドリングが目に入ってふと言うと、ちらっと顔だけ振り返ったシサ

ーが吹き出した。
「俺の剣がくっちゃべってたみたいに言うなよ」
「ある意味騒いでたじゃん」
「ある意味な……。ま、静かになったのはいーことだ……と。何だ？ありゃ」
シサーの言葉に前を見ると、奥の壁にはプレートが貼られているみたいだった。タイルと同じホワイトグレーのプレートで、保護色みたいに同化して気づかなかった。近づいてきたから認識出来るようになったらしい。
（うーん……これも変じゃないよなぁ……）
手近にある女神像にちらりと目を向けて、目をこする。右手には剣、左手には錫……同じものがこうも並んでいると、次第に混乱して来る。
「分岐してるな」
正面の壁に目が向いているみんなとは違う方向を見て、隣のシンがぽつりと言った。言われてみれば俺たちが今いる場所からほんの少し先は、壁が2メートルくらい途切れて左手方向に折れる道がある。
「本当だ」
「見てきます」
ゲイトが言って、カイルのそばを離れる。ややして戻って来たゲイトは、眉をひょこんと上げて肩を竦めた。
「平行線みたいだ」
「平行線？」
「そう。今来たこの道とずーっと平行して走っている通路みたいだけど」
言われて俺も足を向けてみる。折れる通路が短く、すぐに行き止まりの壁があった。代わりに左右に続く道……本当だ。
「……こっちも向こうが行き止まりだね」
「ちょっと待ってて」

言って、ゲイトが走り出す。見送っているとあっと言う間に最奥の壁まで辿り付いて、角を曲がっていった。と思ったら。
「何だこりゃ」
「繋がってんな～」
平行線のもう1本の通路の方に姿を現した。この様子だと、出入り口付近の左通路がここに繋がっているんだろう。つまり、回廊だ。
「ま、とりあえずぐるっと歩いてみっか」
微かに唇を尖らせながら言ったシサーに頷いて、カイルが再び先頭を歩き出す。それに続いて歩きながら彫像を見ていくけれど、やっぱり妙なところは何もなかった。
「何て書いてある？」
プレートの前まで辿り着いて、見上げているシサーに尋ねてみる。
「……ふーむ」
「何かヒント？」
「ヒントって言うのかね……。ここのダンジョンについて軽く書いてあるな」
案内板？
何て親切な。
「ここのダンジョンについてって？」
シサーの隣で同じようにプレートを見上げていたシンが、珍しくその顔に嫌な表情を浮かべてこちらを振り返った。
「ここのダンジョンは、5階層に分かれているそうだ」
「5階層？」
「ああ。……『反転』『幻惑』『転走』『虚影』『浄化』」
「ふうん。……で？」
「以上だ」
参考にならない。
「5階層……ここは1階層目？」
だとすると『反転』……『反転』？
「とりあえず、進んでみましょ。他に参考になりそうなことも書い

てないし」
　ニーナに促されて歩き出しながら、何かが引っ掛かる。さっきゲイトがぐるっと歩いて来たのと同じ道のりを歩きながら、もう1度女神像に目を向けてみた。
「シン」
「何だ」
「……右に剣、左に錫って言った？」
「ああ」
　頷きながらシンは、目を伏せて笑った。
「『反転』だな」
「……うん」
　気づいてたのか。
　ここに置かれている女神像……どれを見ても同じだけど、そのどれもが……間違ってる。
　正しい女神像の姿は『右手に剣、左手に錫』だ。ここの女神像はどれもが『右手に錫、左手に剣』を持っている。
　……どれもが？
（いや……違う……）
　途中……ちょうどシンが「通路がある」と言った辺りにあった女神像は、逆じゃなかったか？
　どうせ同じと思い込んでちらっとしか見なかったし、通路の存在に気がそれたからつい流してしまったけれど、確かそう……『右手に剣、左手に錫』。
「出発地点に戻って来たな」
　やっぱり回廊らしい。ぐるーっと歩いて、元の場所にまで戻ってきてしまった。オーガーが相変わらず無言で倒れている。歩いている間、どちら側の通路もどこかへ続くような道や、出入り口になりそうな場所はどこにもなかった。
「シン。あの、左右の通路が繋がるあたりにある、右側の通路の彫像……気が付いた？」

「え？」
「ひとつだけ、正しい女神がいた」
「いや……通路の方に目が行ってたな。見てない。行ってみよう」
「どうした？」
シサーが長い髪の尻尾を片手で振り振り尋ねる。
「ここの女神像、間違ってるでしょ」
「ああ……左右が逆だな」
「正しいのがひとつだけあったんだ。何かあるんじゃないかな……」
「気づかなかったな。どこだ？」
「あっち」
とりあえず、全員でまたさっきの2本を繋ぐ通路にまで戻ってくる。ちょうどその通路とほぼ同じ位置の右側の壁に設置されている女神像。
通路の方に気が逸れることを狙って、ここに設置したんだろうか。何て感じが悪いんだ。
「……本当だ」
確認してみると、それだけは確かに正しい姿をしていた。
「道が拓けるといーんだがなー」
「ちょっと待ってろ。探ってみる」
とりあえず、プロの方々に任せてみることにして、俺たちは壁から離れて反対側の壁に背中を預けた。カイルとゲイトは、像を探るシンのそばに立って作業を眺めている。
「もしこれでハズレだったら、後は何が考えられると思う？」
3人を眺めながら、考えてみる。当たりならそれで良いけど、ハズレならまた何か先へ進む方法を考えなければならない。
（『盗人か、真に資格を有するものか、見せてもらおう』って言ったよな……）
あの神殿で。
つまり俺たちは、試されている。
試す……どうやって？どこで？

ダイナのドワーフである証明。それは、常に試されるものなのか、あるいは最終的な……例えば財宝の直前で試されるものなのか。
「……ないな」
考え込む俺の耳に、シンの声が聞こえてきた。顔を上げると、目が合う。
「ない？」
「変わったところはなさそうだ。……ハズレか？」
軽く舌打ちをしながら、俺ももう1度女神像の前に足を運んでみた。シンがわからないものを、俺がわかるわけはないんだが。
「こっちだな」
女神を睨みつけながら黙って考えていると、背後でカイルの声がした。もう1本に続く通路だ。そちらにしゃがみこんで、床を探っている。
「こっち？」
「ああ。多分、ここに何かある。だがスイッチになるものがない」
「離れた場所にあるんじゃねぇか。それこそ女神像とかな」
「それも有り得る。が……」
「女神像に仕掛けはないぞ」
シンの言葉にカイルは、立ち上がってあっちとこっちの通路の果てを見てから、いささか渋面でため息をついた。
「少し時間がかかるな」
さっきの部屋でも、マメにやってりゃ莫大な時間がかかりそうなものを、女神像がヒントを持っていたんだよな。どう考えてもたったひとつだけ正しい姿をしている女神像には何かあるとしか考えられないんだけど、何もないとシンは言うんだし……。
（『試す』……）
「ニーナ」
「うん？」
「例の、ダイナの伝説って、どんな？」
大雑把な話は聞いてはいるけれど、細かなシチュエーションなん

かは伝説を丸暗記しているニーナ以外に誰も知らない。
俺の考えを読んだように、ニーナは少しだけ困ったような顔でため息をついた。
「伝説の流れに沿ってるんじゃないかってこと？」
「可能性はあるかな、と思ったんだけど」
ニーナが緩く顔を横に振る。
「わたしもそれは考えたけど、同じシチュエーションはないみたい」
「うんー……ま、それでもいいや。教えてもらえるかな」
食い下がると、ニーナは時々思い出すような顔つきをしながら、妖精語ではなく俺たちにわかる言葉……ヴァルス語で翻訳をして聞かせてくれた。
ドワーフの若者であるマールが、かつてゴブリンたちに滅ぼされたドワーフの集落の宝を求めて続ける旅の、最終の地イルハンドラ。神殿からイルハンドラに入り込んだマールは、途中で出会う妖精たちの助けを借りて、宝が隠されているという扉の前に辿り着く。
その全てが歌として語られていて、ニーナが覚えさせられた分だけでも実に１５編にもなるので……悲惨だ。ニーナの努力に、頭が下がる。
「いーよな、そんだけ安易にコトが進みゃあ……」
俺の隣にしゃがみこんでニーナの話を聞いていたキグナスが、ぼそっと言った。全く同感だ……どうして伝説ってこういい加減なんだろう。
いろいろと突っ込みたい部分はあるにしても、伝説に文句を言っても仕方ない。『マールの冒険』を思い返して、気になるシーンをもう１度頭の中で反芻した。
「ニーナ」
「え？」
「俺たち、試されてるはずだよね」
「ああ……そんなようなこと言ってやがったな」
ニーナの隣に立つシサーが、腕組みした片手を顎に押し付ける。

見上げた俺の目を見て、シサーが目を丸くした。
「……なるほど」
「だって、俺たちが『証明する手段』として受け取ったのは、石か、ニーナの歌しかないんだよ。ヘイリーだってそれくらいしか証明する手段を思いつけなかったんだろうし。……階層ごとに試されるのかもしれない。だとすると」
「ニーナ。ドワーフが女神に扉を開けてもらった時の言葉だ」
「え？」
「キーワードが隠されてるってわけか」
いつの間に戻ってきたのか、シンが俺の背後でぼそりと言った。
それに応えて頷く。
「ストレートに同じ状況が用意されているわけじゃないかもしれない。だけど、伝説の中に含まれる何かが、ヒントになっている可能性はあると思う」
「『私は正しい者だ。私は資格を持つ者だ。私の為に道を開いてくれ』？」
「それを妖精語で女神に訴えてくれないか」
「わかった」
シサーの言葉に、ニーナが女神像に向き直る。このフロアの中で、唯一『本物の女神像』。
「『＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊』」
言い終えたらしい。ニーナが、向かい合う女神像を見上げた。
……果たして。
「あッ……」
「来たッ……」
ず、ず、ず、ず、ず……と言う重たい音に振り返る。まだそのそばにしゃがみこんだままのカイルの背中越しに、今し方まで通路だった部分にぽっかりと下へ続く階段が姿を現していた。

第2部第2章第19話　海底のダンジョン2　【幻惑】　前編（1）

女神の示した扉をくぐり抜け、続く道は狭い洞窟だった。
マールは灯りを持たない。暗い洞窟をひたすら歩いていく。
ドワーフにとって暗いことは困難にならないのだ！！
村に伝わる陽気な歌を口ずさみながら歩いていくマールの目に、外の明かりが飛び込んで来た。外だ。洞窟を抜けたのだ。
暗い暗い洞窟を抜け出したマールは、カーンカーンと言う高い音を聞いた。
辺りを見回すと、そこにはグノームが数人陽気な踊りを踊りながら靴を造っていた。
「やあ。これはグノームじゃないか！！」
マールは楽しくなった。グノームはドワーフにとって親愛なる親戚だ。
マールは歌い、踊りながら輪の中に入っていった。
「やあ。ドワーフだ」
「ドワーフだ」
「ドワーフがやって来た」
「やれ、歌え。やれ、働け」
「やれ、歌え。やれ、働け」
しばらくマールはグノームたちと楽しい踊りを踊り、歌った。だが突然グノームが倒れたのだ！！
「ああ、疲れた！！」
「働き過ぎだ！！疲れた」
マールはニンフにもらったエルドナの花を思い出した。
「これはエルドナの花だ。きっともっと働けるようになるに違いない！！」
「そいつはありがたい！！我々は靴をたくさん造らなけりゃならない！！」

エルドナの花をあげると、グノームたちはたちまち元気になり、倍の速度で歌い踊りながら靴を造った。
「おかげで助かった!!我々はお前さんの力になろう」
「この靴をやろう。作りたての、履き心地の良い靴だ」
「きっと倍の速さで歩けるようになるに違いない!!」
「そう言えばお前さんはどこへ向かおうとしているんだい!!」
尋ねられて、マールはドワーフの財産を知らないかと尋ねた。
グノームのひとりがぽんと手を打った。
「ミスター・ハリーバールに聞いてみると良い!!」
その提案にグノームたちは喜んだ。
「そうだ!!ハリーバールだ!!」
「ハリーバール!!森の主だ!!」
「ハリーバールに冬は来ない!!」
「そいつは一体誰なんだい!!」
慌てて尋ねるマールに、踊りながらグノームが答えた。
「ハリーバールは森の主だ!!何千年、何万年もセイリエルースの森を守っているのだ!!」
「木の姿をしていて普段は眠っているんだ!!」
「そいつを起こすにはどうしたらいいんだい!?」
「歌うのさ!!」
グノームたちは踊りながら声を揃えて叫んだ。
「ハリーバールは陽気な歌が大好きなんだ!!そうだ!!森の主だ!!『森の歌』だ!!」
グノームたちに礼を言って、マールはハリーバールに会うことに決めた。
グノームたちにもらった靴は、マールの足を2倍にも3倍にも速くした。

◆◇◆

カイル、シサー、ニーナ、キグナス、ゲイト、俺、そしてシンと言う隊列で、順番に階段を下りていく。さっきまでの明るいタイルの通路とは違い、ありがちな石造りの暗い階段だった。

灯りはないが、余り長くはない階段で、すぐに果てが見える。上からの灯りもあるし、先頭のカイルが灯すカンテラの灯だけで十分だった。

階段を下りきったところはすぐ、小さな踊り場のような平らなスペースがある。そこからすぐにドアがあるのが見えた。

「……開く？」

ニーナが尋ねるのが聞こえる。答えの代わりにドアの開く小さな音が微かに響いた。

「どうなってんだあ」

「何だこりゃ」

中を覗き込むようにしているシサーの姿は見えるが、俺のいる位置からは扉の中までは見えない。

みんなに続いて中に入ってみると、そこは外だった。

「え？どこここ」

「2階層目だろ」

扉からすぐ、森が続いている。

「だって外だよ。あれ、じゃあさっきの部屋は2階だったのかな」

「……ダンジョンなんかであんまその辺真面目に取り合ってると、わけわかんなくなるぜ、多分……」

んなこと言われても、俺の中では地下か何かに下りたような感覚だったのに、開けてみたら森の中じゃあ何か納得がいかない。

これもダンジョンの中なんだろうか。

木々の合間を縫って涼しい風が流れて来る。見上げる隙間の空は青く、白い雲が流れていくのが見えた。鳥のさえずりが聞こえてきて、日を遮る木陰の涼しさにのどかな気持ちがしてしまう。

「カズキ」

「ん？」

揺れる葉に目を細めていると、シンに頭を軽く小突かれた。
「ぼーっとしてるなよ。油断していると命取りになるぞ」
「うん……ぼーっとしてた？」
「ああ。平和な顔をしてたな」
平和な顔……。
森の中を続く道は、１本道のようだった。幅１メートルちょいくらいで、むき出しの地面は乾いたライトブラウンをしている。道の左右には背の低い丸っこい木が植えられ、その根元からは草や淡い色合いの花が揺れている。
「道ってこっちでいーのかな」
「さあな。とりあえずはこれしかない。……違うようなら、扉からやり直しだな」
あんまり時間をかけたくないんだが、と呟くのを聞いて不意にギルドでシンが少し引っかかる物言いをしていたことを思い出した。
――人手が揃ったからな
裏を返せば、人手がなかったことになる。
シンがまだ出発してなかったおかげで俺たちは助かったけど、市街戦後、どうしてすぐに出発しなかったんだろう。
尋ねてみると、シンは複雑な表情を見せて黙った。しばらくそのまま黙って歩く。
道は緩やかにカーブを描いて続いている。大きなカーブに差し掛かったところで、シンが答えた。
「行く人材を割けなかったんだ」
「え？」
「ギルドのメンバーは半数以下に減ったからな。……市街戦で」
半数以下……。
――誰か、知ってる方が……？
――……たくさん
石碑の前でぽつりと答えたジフの声が蘇った。
「そんなに……」

「ああ。俺が街に潜入した時は後半戦だったが、その頃には既にかなりやられてたみたいだ。後始末は後始末で、ジフも言ってたようにギルドがかり出されている。器用だからな。便利屋のようなものだ」

普段から余り感情を滲ませることのないシンはいつもと同じ、淡々と言った。

「ギルドが追跡している財宝は別にここだけじゃない。……単純に、人手を割くことが出来ずにいたんだ」

「……そう」

「俺は船だけ何とかなればひとりでも構わなかったし、最低でもカイルとゲイトが同行するとは言われていたからそれで良かったんだが、あいつが駄々こねるもんだから足止めくらってたのさ」

「駄々？」

あいつってのは多分ジフなんだろうな。『駄々こねて足止め』って……一体……。

「懲りたんだろう。周囲の人間が減っていくのに」

「……」

「同行者が増えればひとりひとりの生存率が上がる。とは言ってもダンジョンに行くんじゃ限度はあるが、最低でも6人は確保するまで待てと言って聞かなくてな」

「ふうん……」

「……もう、失いたくないんだそうだ」

「……」

考えてみれば、これまでの行程の中で誰も失うことがなかったのは、幸運なんだろう。

ジフの言う『もう』は市街戦を指しているんだとは思うが、それだけじゃない。その前とかは知らないけど、少なくとも風の砂漠のダンジョンでもギルドメンバーが命を落としている。

シンに同行させるのに頭数を増やしたかったのは、ギルドメンバーひとりひとりの生存率を上げたかったから。……安全では、ない

から。
普通に旅してたって今日死ぬかもしれないこの世界、ダンジョンとくれば魔物の巣窟だ。……本当に幸運だったんだな。俺たちは。
ついしみじみとそんなふうに思わざるを得なくて黙り込む。元々口数の少ないシンもそれきり黙って、後は前方からキグナスの遠吠えが聞こえるだけだった。
……と。
「カズキ、気をつけろッ」
視界の隅でシサーの剣が光ったと思ったら、シンが背後を振り向きながら怒鳴った。咄嗟に剣に手を掛けながら振り返る。木々の隙間を縫うように、背後の空から明らかに敵意を剥き出しにした巨鳥が飛来して来る姿が、目に飛び込んで来た。
これまで誰ひとり失うことなく来た俺たちは幸運かもしれない。
だけどこれからも誰ひとり失いたくない。
『幸運』を維持する為に……必死に、戦うしかない。

立て続けに襲いかかってくる魔物を撃破しながら森の中を進んでいくが、果てはなかなか見えない。と言うか、どこに向かっているのかわからない。
「駄目だな。このまま歩いても埒があかない」
どこまで行っても1本道がただ続いているだけだ。風の砂漠のダンジョンを思い出すけれど、あちらと違うのは風景がちゃんと変わっていくこと……多分、ワープで跳ばされて同じところをぐるぐる回ってるわけじゃない、とは思うんだが。
「ちと、あそこで休憩しよう」
カイルの言葉を受けてシンが指した先は、下生えの草や木が途切れて小さな空き地みたいになっていた。
「言われてみれば腹減ったー……」
キグナスの言葉で気がつく。青空につい騙されてたけど、神殿についた時点で夕刻だったんだ。あれから1階層目を彷徨ったりして

ることを考えれば、もう結構良い時間になってるはずだ。腹も減るし眠くもなってくる。
「そうだな。ちょっと本腰入れて休憩しておこうぜ」
短くあくびをして、シサーがカイルを仰いだ。賛成。
「食事もしておいた方が良いしな。交互で眠っておくことにするか」
同意して歩き出すカイルの背中について行こうとして、ニーナが少し妙な顔をしていることに気がついた。微かに耳を動かしながら、空を仰いでいる。
「ニーナ。どうかした？」
「え？……ううん。何か変な感じがしただけ……何でもない」
変な感じ？
敏感なニーナの『変な感じ』と言うのはちょっと気になる。だけどニーナもそれ以上説明する気はないようだ。……いや……しようがないのかな。
なのでそれ以上追及するのはやめて、みんなに続くと地面に荷物を投げ出した。カイルとシサーは打ち合わせ風に立ち話をしている。シンとゲイトの姿は見えなかった。
「結構疲れたね。やっぱり」
すとんと座り込むと、先に地面に直にあぐらをかいていたキグナスがごろんと転がった。地面に大の字に伸びた状態で、横に座る俺を見上げる。
「そりゃそーだろ。ここまでずっと船の上、それが終われば今度はダンジョン。ああ風呂に入りてぇ」
そんなリズミカルに訴えられても。
「でもさ、1階層目が結構簡単な感じで……この調子だったら何とか結構良いテンポで進めないかな。難解な感じ、あんまりしない……」
「そだなー。それでいきゃいーけどな。んでも何か進めなくなったりしたら、あの伝説からヒントを探しゃいーんじゃねぇの？……あんなふうにばんばんヒントをくれる奴とかいりゃあいーのに」

「んでもあれって口承伝話でしょ……どんどん簡略化されたりしたんじゃないの」
「あーそうかもなー。伝承って細かいところ、どんどん杜撰になってくかんなー」
「変な言い回しのセリフが多いのも、口承のせいかもしんないね」
荷袋を漁って食料を取り出しながらぼそぼそとキグナスとそんなことを言っていると、周囲の偵察に出ていたらしいゲイトとシンが戻って来た。
「気になるもの、発見」
にやにやしながら、ゲイトが言う。かじりかけたパンをくわえながら体を起こしたキグナスが、「ひになるもお?」と尋ねた。
「ああ。宝箱、らしきものだな」
ゲイトの隣に黙って立って腕を組んでいたシンが、ちらりとこっちを見てぼそっと答える。キグナスが飛び起きた。
「宝箱ッ♪」
「キグナスって貴族階級のくせに金汚ぇなぁ」
「金汚ぇって何だよッ。んだって、何が入ってんのか楽しみだろおお♪」
呆れたように言うゲイトに反論しながら、パンを口にしまいこんでゲイトとキグナスが元来た方へと戻って行く。シンが無言で俺の方を見るので、俺も干し肉を飲み下しながら立ち上がった。
「カイル」
「ああ」
「宝箱だ。勝手に中身チェックしてくるぞ」
「頼んだ」
キグナスとゲイトが姿を消した方に歩き出すシンに続く。穏やかな青空は相変わらずで、鮮やかな黄緑の草や乱れ咲く花、深い緑を湛えた巨木の間の細い道なんかはどこかメルヘンチックだ。
「カズキ、早く早く」

第2部第2章第19話　海底のダンジョン2　【幻惑】　前編（2）

苔を敷き詰めたみたいな細い道を歩いていくと、キグナスが幅数メートルもありそうなでっかい木の根元にしゃがみこんでいた。樹齢どのくらいになるんだろうか。横から覗き込むみたいにして、ゲイトが立っている。その足元には確かに箱があった。宝箱……なのかもしれないが、どちらかと言うと堤と言う感じの箱だ。Ａ４のコピー用紙とか入ってるダンボールくらいの大きさの、長方形の箱。少しだけ大きい蓋がかぽんと被さっている。

「これ？」

「おお」

「何か箱からして既に年代モノの匂いがするね」

箱が苔むしている。だけじゃなく、小さな花まで咲いている。

「鍵穴は？」

「それが、ないんだよな」

箱の正面を覗き込むように屈みこんだゲイトが、くぐもった声で答えた。

「さっきも見たんだけど、鍵穴はないんだ。代わりに気になるのが……」

言いながらゲイトは、箱の側面を示した。模様が入っている。綺麗な円の窪み。

「見覚えのある円の大きさだろ？」

「見覚え……ああ」

ゲイトたちが第１階層で見つけた、意味不明な金属の輪っか？

「あ、じゃあ、あれが鍵になってるんじゃないかって？」

「じゃねーかなーと思ってる。まだ試してないけど」

言いながらゲイトは輪っかを取り出した。くるんと人差し指を真ん中に入れて回転させてから、黙って俺の隣に立っているシンを見上げた。

「やってみていい？」
「早くしろ」
「んじゃ行ってみよう」
「早く早く」
キグナスがきらきらとオレンジの瞳を輝かせて急かした。
「結構重い？持ってみた？」
「ああ。持ってはみた。大した重さじゃないな。箱自体の重さとさして変わらない……」
「開いた」
シンの言葉に被せるように、ゲイトの声が重なる。
一応はわくわくして覗き込んでみた俺たちは、蓋が半ば以上開いた瞬間からがくーっと項垂れた。
「またガラクタ？」
「何だこりゃ……」
蓋が完全に開くと、中に入っていたのは鉄の棒だった。直径３０センチくらいのただの棒。
「……こんなに容量いらねぇじゃん」
「……でも斜めにぴったり入ってるから、この対角線の長さが必要だったんだよ」
中に手を突っ込んで取り出した棒をゲイトがひらひらと振ると、しゃがみこんだ膝に両肘をつけて顎を支えたキグナスがため息混じりに呟いた。
「んでもさ……」
「多分、続くな」
俺が言いかけた言葉と多分同じことを、シンが言う。
「だよね」
「ま、そうだろうな。ガラクタに見えるけど、次にまた何かの鍵になってんのかもしれない」
わらしべ長者みたいだ。
そんなことをふと思ってから、ドワーフのマールの話を思い出し

た。
そう言えばあの話も……どっかわらしべ長者みたいだよな。
ニンフにもらった花、その花をグノームにあげて、代わりにマールは靴をもらう。靴の代わりに今度は……。
（そっか……わらしべ長者か……）
次々と交換されていく物。最初は金属の輪っかで始まって、それが最終的に何に変わるのかはわからないけど……何かに変わるのかもしれない。
「んじゃ、後生大事に持って行きますか」
ぱこん、と蓋を元通り閉めながら、ゲイトが棒を振ってため息をついた。

◆◇◆

「……野沢くん」
やっぱり結構疲れているらしい。全身が重い。
食事を終えて交代で眠ることにした俺たちは、見張りの人間以外は寝袋にくるまっていた。外が明るいから眠れないかなと思ったりもしたが、案外すぐに眠りについてしまったようだ。
ゆさゆさと軽く体を揺さぶる感触に、深い眠りの淵から少しずつ意識が引き戻される。
「野沢くん……」
……？
ぼんやりとした意識の中で聞こえる声に、違和感を覚えた。しばらくその違和感が何だかわからないまま、ぼんやりと眠い頭で考える。
違和感……ああ、そうか。
しばらくそんなふうに呼ばれることがなかったから……。
（――え？）
『野沢くん』？

違和感の正体に気が付いたことで、急激に頭が覚めた。瞼の裏に感じる外は、明るい。目を開ける。と同時に、思わずがばりと起き上がった。

「きゃ……」

今まで眠っていたはずの俺ががばっと起き上がったので、覗き込んでいたらしい女の子が驚いたように身をそらした。小さく悲鳴を上げる。

肩口で揺れるさらさらの髪、白地に大きなリボンが胸元についた可愛らしい制服、綺麗に整った顔……知ってる顔だ。『あっち』で俺のクラスメートの、秋名なつみ。

……って。

……はぁ？

（なつみ……！？）

何で……！？

「ど、どうしたの？野沢くん」

「ここは……」

『何でなつみがいるんだ』？

横になっていたベンチの上で上半身だけ起こしたまま、俺は辺りを見回した。綺麗に敷き詰められた芝生、ぽつんぽつんと生えている、丁寧に手入れされた木々の向こうには灰色のコンクリートの建物。

俺の横にしゃがみこむようにしていたなつみが目を丸くしたままで俺を見上げる。

「学校……？」

尋ねるでもなく呟く俺に、なつみがくすっと笑う。妙に懐かしい感じのするその笑顔。それもそうだ。何ヶ月ぶりなんだろうか。最初の頃は見ていた『本来の世界の夢』も、最近では見ることがない。

「学校だよ。もう5時間目、始まっちゃうよ」

5時間目って。何て今の俺の感覚にそぐわない平和な言葉なんだ。

（嘘……だろ……？）

何が何だかわからないまま、もう1度辺りを見回す。揺れる木々の向こうに見えるのは確かに校舎。……って、え?は?校舎?ガラス張りの渡り廊下には、移動授業があるらしい生徒の姿が垣間見える。

(キグナスは?)

シサーは。ニーナは。……シン、ゲイト、カイルは……?

(俺……)

……戻って、来ちゃったのか!?

いや、落ち着け、良く考えろ。寝る前のことを思い出せ。

寝る前……。

「野沢くーん」

「……」

ゲイトたちと宝箱を開けて、みんなのところに戻って……宝箱の中身と、多分今後も取り替えっこでどんどん物が変わってくんじゃないかって話とドワーフの伝承を繋げたりしてて……で……とりあえずは休もうって話になって……。

(別に……変なことはないよな……)

そう。何も変わったことなんか起きてなかった。いつも通りの野営……寝袋にくるまって……俺の隣はキグナスが同じように寝てて……最初に見張りに立ったのは確かシンとゲイト。

「夢でも見てたの?」

(夢……夢?)

寝たんだから、夢を見てもおかしくない。

「野沢くーんってば。ねえ。もう予鈴鳴っちゃってるんだよ」

完全に、本当の意味で別の世界に頭が行ってしまっている俺に、なつみが困ったような顔をする。俺となつみのいる中庭には、他に人の姿はなかった。

「でも、今なら、言えるかな……」

ぽつりとなつみが俯いて呟くように言う。それを半ば聞き流しながら、俺は自分の耳元にそっと手を持っていった。

（……ない）
シェインにもらった、ピアス。
目を上げてみれば、見慣れていたはずの一部だけ赤い前髪は、黒かった。見回してみれば俺が身につけているものも、レガードの服じゃない。シャインカルクのどっかに置きっ放しになってたはずの、制服。
（あっちが、夢……？）
浮かんだ考えに、どきりと胸が疼いた。痛みに似た疼きに、僅かに喉が詰まる。信じられるとかられないとか……それ以前にまず信じたくない思いが走った。
とにかく、落ち着け。間違いなく俺は今混乱している。落ち着いて、記憶を辿れ……。
昼休みに中庭に来たことは覚えている。深夜映画を見てたせいで眠かった俺は、昼寝してこうと思ってベンチに転がった。それは確かだ。間違いない。
けれど、そこから先が、夢？
軽くなった耳たぶを無意味に引っ張りながら、記憶を探る。最初に出会ったのはレイア。キグナスとは浄化の森で会った。シャインカルクに連れて行かれて、シェインやラウバル……そして……。
（ユリア……）
最後に見たはずの、悲しい顔が瞼を掠める。……夢？まさか。そんなはずない……！！
「野沢くん」
次第にわけがわからなくて混乱を深めていく俺の耳に、なつみがどこか儚げな声で呼びかけた。まだユリアやキグナスたちの幻影に囚われている俺を見上げる顔が、心持ち赤らんでいる。
（こっちが夢……？）
「あのね、もう夏休みに入っちゃうから、その前に、言いたいことがあって……」
「……うん」

でも、これが、『こっち』が俺の現実なのは、確かだ。本来俺がいるべき世界。いるべき居場所。
俺の住む世界には、魔物も魔法も……ないんだから。
じゃあやっぱり、あれは、全て、夢……？
……ユリア、も……？
「あのね、わたしね……」
ぼんやりしたままの俺の腕に、なつみが手を掛けた。確かな感触。
「わたし、野沢くんが好きなの……」
「……へ！？」
言うなり、ぐいっと腕を引っ張られる。ベンチの上で上半身を起こしたまんまの姿勢だった俺は、バランスを崩しかけた。咄嗟にベンチに片手をついて持ち堪えている間に、なつみがふわりと俺に抱きつく。……って、えええええ？
（何だ何だ何だ？）
もはや何が起こって何がどうなっているのか、俺の脳味噌は完全に置いてけぼりだ。
「なななつみ？」
慌てふためく俺の耳に、チャイムの音が響く。さっきのなつみの言葉から察するに、本鈴だ。
「ねえ、学校抜け出しちゃおうよ……」
「はいい？」
俺の首に両腕を絡めて、なつみが耳元に囁く。熱い吐息が……あああああの、そそそその……。
「なななつみ？」
あんまりっちゃああんまりに急激な状況変化と急展開に、俺の心臓は混乱のまま早鐘のようだ。なつみの唇が耳に触れれれれ……。
な、なつみってこんな感じの人だっただろーか。って待て、俺、今し方「好き」だとか言われたか？言われたとして、こんな唐突に抱きついてくるような人だったか？これじゃあ告白を通り越して、誘惑だ。いやでも俺のなつみの記憶はかれこれ数ヶ月前、その前だ

って知り合ってまだ3ヶ月くらいで良く知ってるわけじゃない。じゃあそういう人だったのかもしれない。そんな馬鹿な。あああああ、収拾がつかない。

「2人で、どっか、行こ……？」

耳元から顔を離したなつみは、今度は俺を至近距離で見上げて目を細めた。色っぽい目つきにちょっと、妙な想像を誘われたくなる。いやいや誘われてる場合じゃないだろう俺。

「ど、どっか？」

「2人になりたい……」

待て！！

唐突にこっちの世界に戻されて、そこからして混乱しきっていると言うのに、混乱から立ち直る前に告られてしかもこんな怪しげな誘いをもらってしまっては、混乱から脱出の仕方がわからない。

「なつみッ……！！」

とにかく、この現状から逃げ出してみよう。

頭の中を整理して、何が起こっているのか把握してからでなければ、なつみに拉致されるわけにはいかないじゃないか。……別にその後なら良いって話じゃないが。

そう心に決めて、がしっとなつみを引き離す。そうだよ、大体これが夢なのか現実なのかわからないけど、何はともあれここは学校だ。抱き合ってる場合じゃない。誰かに見られたらどうするんだ。

「ちょっと俺、今、わけわかってないから、その話は後日ゆっくりッ」

「え？」

「じゃあ、そういうことで！！」

俺は今、超絶ひどいやつかもしれない。今目の前で起こっていることだけで判断すれば、俺は告ってくれた女の子にこういう態度を取って目の前から逃亡することになる。

「野沢くん！？」

とは言え、今の俺はどちらにしても、なつみにまともな態度が取

れる自信がない。なつみを引き離したそのまま、俺はベンチを下りて駆け出した。

一体、何がどうなってんだ……！？

第2部第2章第20話　海底のダンジョン2　【幻惑】　後編（1）

そういうつもりがあったわけじゃない。どこかへ向かう目的があって、中庭から駆けてきたわけじゃない。

ただ、駆けながらいろんな考えが浮かんでは消えた。

いろんな顔が……浮かんでは、消えた。

（家……）

ただ無我夢中で体の動くまま走って来た俺が我に返ると、自分の家の前だった。

……覚えてるもんなんだな。体が。

家を目指して来たつもりなんかなかったけれど、きっと本能で知ってるんだろう。自分にとって1番……安全な場所を。

こうして目の前にしてみると、全身が安堵するように力が抜けた。

それと同時に、今いるここが夢だと思えなかった。抱きついてきたなつみの感触、走ったことで体に感じる重い疲れ、息切れ。夢だとしたら、余りにリアルだ。

（嘘だろ……）

呆然と家の前に佇んで、思う。

（本当に、俺……）

帰って、来ちゃったのか？

あんな、中途半端なところで……？

「あら？和希？」

門に手をかけたままぼんやりと立ちすくむ俺の耳に、懐かしい声が聞こえた。顔を向けると買い物帰りらしい母親が、スーパーの袋を片手に俺を見て立ち止まっている。

「あんた、学校終わったの？……あら？それ、上履きじゃない？」

「あ……」

そうだった。履き替えるなんて真っ当なことを思いつく精神状態じゃなかったものだから、そのまま帰って来てしまったらしい。…

…まあ、うちの上履きはスニーカータイプだから、そんなに恥ずかしい状態でもないと思うんだけど。

「どうしたのよ？具合でも悪いの？」

懐かしさに、不覚にも泣きたいような気がする。何の心構えもなく数ヶ月引き離された肉親。しかもこの数ヶ月は毎日精一杯で、数ヶ月より遙かに長く感じられる。

「……ただいま」

ようやく声を押し出す。目を瞬いていた母親は、俺の言葉にくすっと笑いながら再び歩き出した。こちらに近づいてくる。

「おかえり。……やあね。何なのよ。何ヶ月も会ってなかったみたいな顔して」

変な子ね、と言いながら俺の横を通り過ぎて、動こうとしない俺の代わりに門を開けた。

その背中に続いて家の中に入った途端、ふわりと鼻を懐かしい匂いが刺激した。……家の、匂い。

「ただいま……」

もう1度、繰り返す。本当に帰って来たんだと言う気がした。……帰って、来ちゃったんだと言う気が、した。

（何だよ、それ……）

湧き上がるのは、なぜか歓喜じゃなかった。焦燥、もしくは……落胆？それに近い、胸に苦く重い感じ。その正体も理由もわからないまま、軽く唇をかみ締める。

「あんた、鞄とかどうしたの？」

「……」

「どうしたの？本当に変よ、あんた。何かあったの？」

ぼーっと今度は玄関に突っ立ったままの俺に、さっさとキッチンに入って行った母親が、顔だけ覗かせて眉を顰めた。心配そうな顔。

「……何でもないよ」

何がどうなったのかはわからないままだけれど、微笑みを作る。苦い思いに満ちた笑みになった。

ここが、俺の現実……。
（じゃあ、あっちは？）
夢？
幻？
……それとも、現実……？

母親に促されるまま家に入った俺は、かつてそうしていたように自室に入って制服から私服に着替えた。しばらくして俺の鞄を持った雄高が、家を訪れた。
「おーまえ、何だよー。帰るんなら一言断ってからにしろよなー」
何から考えていいのかわからないまま、何となくぼうっと自分の部屋にいた俺は、これまた懐かしい雄高の顔を見るなり、全てを話してしまいたい衝動に駆られた。
何がどうなったのか、客観的な意見を聞きたくて。
「雄高……」
「んー？何だよ？寝てたのか？」
だけど……。
……何て言うんだ？何を言うんだ？
客観的な意見なんか、わかりきっている。中庭で寝ていた俺は、夢を見ていたんだ。あまりに深く夢を見すぎていて、リアルに感じすぎた。目が覚めて、夢と現実が混乱している。
――それ以外に、考えられないじゃないか。
「いや……何でもない」
誰かに聞いて欲しいと思う反面、言えないと思う。口から出かかった何かを飲み込み、俺は笑顔を作った。
――カズキ、最近笑わなくなったから
キグナスの声が、耳に蘇る。
「ちょっと体調が悪いんだ。……鞄、ありがとう。少し、寝るよ……」
別れの言葉も、言えなかった。

「うん？そうか？」
「……うん」
少し俺を変な顔で見ていた雄高は、頭をかきながら微妙な表情で鞄を差し出しながら首を傾げた。
「……和希」
「ん？」
鞄を受け取る。確かに俺の鞄。……あの日、持ってたもの。
「何かあったんなら、言えよ？」
――やりたくねぇこととか、どうしても無理なこととか……言って良いんだぜ
「……」
「ま、何もしてやれねーかもしんねーけどな」
「うん……さんきゅ。でも本当に、大丈夫だよ」
気遣いに感謝しながら作った笑顔のまま雄高と別れた俺は、部屋に戻って鞄を床に下ろすと、そのままドアにもたれかかってずるっと座り込んだ。
閉じた瞳を片手で覆う。
シェイン……ロドリスとの戦争に出陣したきりだ。どうしただろう。無事に戻って来られるといーんだが。
シン……ようやく打ち解けてくれ始めたんだけどな。愛想がないのは相変わらずだけど。
シサーとニーナ……ずっと最初から俺を助けて、支えてくれた。少しは、足手まといじゃなくなって来たかもしれなかったのに。
キグナス……あっちで多分、俺にとって1番の友達。俺より年上のくせしてどっか抜けてて頼りないけど。
そして……。
（……ユリア）
あんな悲しい顔をさせたままになってしまった。伝えたい言葉なら、他にあったはずなのに。
何ひとつ、伝えることが出来ないまま……。

（嘘だろ……）

浮かんで消えるいくつもの顔、いくつもの声。

何も伝えられないまま、全てを途中のままで放り出して来てしまった。俺は、あちらへの行き方がわからない。

しばらくそうして、ぼんやりと座り込んでいた。その間、自分が何を考えていたのか覚えていない。ただ、様々な思いや記憶が浮かんでは消えていった。

次第に、部屋に薄闇が忍び込んでくる。電気もつけずにぼーっとしている俺の部屋は暗く、けれど窓から差し込む外の光が家具の輪郭を浮かび上がらせている。俺の家は代々木にある。東京２３区に含まれるこの場所では、ローレシアのような真の闇は訪れることがない。

もう、闇の中に異形のものの気配を感じて気を張る必要はないんだ。命を狙われることなんか、ありえないんだから。

「……良かったじゃないか」

何はともあれ。

口に出して呟いてみると、薄闇に放り出された俺の言葉は行き場をなくして白々しく浮かび上がった。

階下から母親の作る夕食の匂いが階段を上がってくる。何だっけこれ……カレー。

いつの間にか学校から戻ってきたらしい弟の拓人が、母親に何か怒鳴られる声が聞こえる。

（良かっただろ……）

心の中で繰り返す。

帰りたいと思っていた。俺の大切なものは、みんなこっちに残して来たんだ。帰りたかった。

レガードは無事、見つかったんだ。意識不明だとしてもそれはもう、俺に何が出来るわけじゃない。レガードを見つけることと、彼が行方不明になった背景を知ること――ユリアとの約束は、果たしたんだ。俺のしなきゃならないことは、もうないはずだ。

……俺がいた場所に本来立つべきなのは、俺じゃない。レガードなんだから。

（夢……？）

手のひらを開いてみる。剣を握り続けたせいで、ぼろぼろになってたはずの手のひらは、何事もなかったように柔だった。マメのあとひとつない。

立ち上がって鏡を覗き込む。伸びてきてたはずの髪は短く、少しずつ上がってきてたはずの視界の高さは、かつてこの部屋で過ごしていた時と変わらないような気がした。

……夢、だったんだろうか。全部。

その手を血で汚した記憶さえ。

……君を抱き締めた、温もりさえ……。

「和希ー。ごはん出来たわよー」

階下から響く母親の声に、我に返る。

夢だったとしても、現実だったとしても、いずれにしても。

「うん……今、行く」

……いずれにしても、全部、終わったんだ。

手の中から再び……大切なものを、こぼしたまま。

◆◇◆

「おはよー」

俺にとっては、ひさびさの登校。

あの日の朝そうしていたように、迎えに来た雄高の自転車の後ろに乗って、のろのろと歩いていく生徒たちを追い越していく。黒い髪と黒い瞳の群れ。多少茶髪だの何だの混ざってるとしても、本来の姿は統一されたその姿。

初夏の風と、まだ熱を放つ前の眩しい太陽の中、制服姿の中になつつみの後ろ姿を見つけた。

（……そうだった）

忘れてた。なつみのこと。
俺、彼女に何か答えを用意しないといけないんだろうか。
「なっつみー！！はよーっす！！」
何も知らない雄高が明るく声をかける。振り返ったなつみが雄高の後ろに俺の姿を見つけて、陰った笑顔を覗かせた。
「……おはよう」
「……はよ」
どんな顔をして良いのかわからなくて、顔をそらしたまま挨拶を返す。幸いこちらは自転車だ。雄高の漕ぐ自転車は、あっと言う間になつみのことを追い越して行った。
「なあ」
「え？」
もうじき校門が見える。自転車のペダルを漕ぎながら、雄高がぼそっと口を開いた。
「お前、なつみと何かあったの？」
「え？」
な、な、な、な、何で！？
「昨日、お前もなつみも、何か様子が変だったから」
「……」
自転車が校門を抜ける。チャリ置き場に自転車が入る前に飛び降りて待っていると、自転車を停めた雄高が複雑な表情を浮かべて片手の中で鍵を鳴らしながら、戻ってきた。
「なつみに告られたりとかしたんだったらさあ」
「……」
「つきあっちゃえばいーじゃん」
……は？
「付き合ってやれよ。可哀想じゃん。いーじゃん、あいつ可愛いし」
「……」
気楽に言いながら歩いていく雄高に、違和感を覚える。
雄高って、こんなふうに言う奴だっただろうか。良く事情も、俺

の話も、聞きもしないで。
俺と雄高の間では恋愛めいた話ってのは出たことがない。俺自身に特に好きだと思うような人がいなかったせいもあるだろうし、雄高も多分そうなんだろう。
そりゃあ誰々が可愛いだのスタイルがいいだの×××だのって話をしたことがないとは言わないが、その程度だ。この年齢の男なら興味が湧くだろう常識範囲の話で、特定の誰かについてとかそういうのは……なくて。
だから、雄高が恋愛話でどういうことを言うとか言わないとかは、正直良くは知らない。
知らないけど、でも俺は雄高という人間については、良く知っている。
「つき合えよ。なつみに良い返事してやんなよ」
だけど、俺が何も言っていないことに対して、押しつけがましい意見なんか言う奴だったか？俺が相談でもすれば、親身に考えてはくれるだろうが。
これじゃあ俺の意見や気持ちは無視して、なつみの援護に回っているようにしか見えない。
「好きな奴とかいるわけじゃないんだろ」
下駄箱で靴を履き替えながら、どきりとした。黄金色の髪が脳裏をかすめる。
「好きな人……？」
小さく呟く。俯いた視界の中で、小さな足が近づいてきた。
「野沢くん」
なつみに追いつかれたらしい。
「おはよう」
「……はよ」
はにかむような笑顔に、昨日逃げ出した罪悪感が押し寄せる。
「昨日の返事、考えてくれた？」
昇降口には次々と生徒がやってくる。こんなところでそんなこと

をあからさまに聞かれると思っていなくて、言葉に詰まった。靴を履き替えた雄高が、俺となつみを黙って見比べる。
その目の前で、なつみが俺の腕に腕を絡めた。
「ね……良い返事が、欲しいの」
ななな何か、変だぞ、やっぱり。
まるで誘惑するような色っぽい目つき。朝っぱらから昇降口でどうかと思う。
「あの、なつみ……」
「和希。男らしくねーなー。なつみが可哀想じゃないか」
あのなあ。
「野沢くん、2人でどっか行こうよ……」
「いや、あの……」
「ねえ、2人になれるとこに行こーよ……」
言いながら、なつみがまたしなだれかかってくる。誘うみたいに俺の首に這わされる白い腕。……絶対違う!!絶対おかしい!!こんな人じゃなかったはず……ってゆーか、普通の神経の持ち主なら出来ると思えない。
「ね」
「……なつみ、離して」
「何でそんなにつれないの？ねえ、わたしのこと、嫌いなの？」
間近でなつみが覗き込む。その綺麗に整った容姿、確かに可愛いと思ってはいた。いや、今だってこうして見ればやっぱり可愛いとは思うさ。
だけど。
ユリアの幻影が、俺の脳裏に走る。責めるような悲しい眼差し、拗ねるように尖らせた唇……思い出したくて思い出せずにいた、花開くような、笑顔……。
切ないような胸が痛むような、そんなふうに心の底から湧き上がる愛おしさ。他の誰かを可愛いとか綺麗だとか思うことはあるとしたって、そんなふうに感じるのはユリアにだけなんだ。

なつみが何かおかしいとは思う。理由は知らない。原因なんかわからない。だけどそんなことより何より、俺はユリアじゃなきゃ嫌なんだ。他の誰も欲しくない。少なくとも今は、俺は……。

「……好きな人がいるんだよ」

昨日の混乱が、また頭に蘇る。雄高にもなつみにも感じる違和感。それともそれは、俺の頭がおかしくなったのか？長い夢に染まって、夢の中のユリアへの想いに引きずられているだけなのか？

混乱が、恥も外聞も投げ出させる。登校して来た生徒たちの行き交う昇降口で、人目も構わずしなだれかかるなつみと、そのなつみを援護するような雄高に、思わず俺も周囲を構わずになつみを引き離す。そんなにでかい声で言ったつもりはないけれど、まるでみんなが耳をそばだてていたかのようにしんとなった。

「……じゃあそれでも、いーわ」

は？

一瞬驚いたように目を丸くしていたなつみが、やがて気を取り直したように口を開いた。

「それでもいいって言ってんのよ。……どっか、行こうよ……」

「なつみがそう言ってんだから、いーじゃん。どっか行って来いよ」

だからどっかって、どこだよ！！良くないだろ！！

「何だよ、何か、おかしいよッ……」

せっかく引き離したのにまた腕を絡めるなつみを、再度無理矢理引き剥がす。途端、なつみが泣き出した。

「ひどい……」

待ってくれ。ひどいって。

「あーあ。和希が付き合ってやらないから泣いちゃったじゃないか」

そう言われると弱い。両手で顔を覆って俯いてしまったなつみに、わけがわからないまま謝る羽目になる。

「なつみ、あの、ごめん……言い方がきつかったかもしれないけど……」

果たして自分が悪いのかさえわからないまま謝っていると、足を

止めてこちらを見ている生徒たちの後ろから先生が姿を現した。
「何騒いでるんだ。早く教室に行きなさい」
「野沢くんが秋名さんを泣かせちゃったみたいで……」
誰かが余計なことを言う。その言葉に先生が顔をこちらに向けた。
「１－Ａの野沢か」
「あ……はい」
誰だっけ。この先生。

呼ばれたのでとりあえず返事をしていると、先生は俺となつみを見比べた。それから口を開く。

「じゃあ野沢。秋名が可哀想だから、どっかで2人きりでゆっくり慰めてやんなさい」

……すっっっげぇ、滅茶苦茶なこと言ってますけど。

「好きなところに行って慰めてやるんだな。秋名、野沢を連れて行っていいぞ」

いやいやいやいや先生。言ってることがおかしいだろうが。教育者なら止めんかいッ。

「はい。ありがとうございます」

今し方まで泣いていたはずのなつみが、顔を上げてにっこりと微笑んだ。ぐいっと俺の腕を掴む。

「野沢くん。行きましょ。道玄坂の途中に良い場所があるわ……」

もっのすごく、風紀上宜しくない気がするんですが。

何だか先生にまで公認でとんでもないところに拉致されかけた俺は、思わず全力で抵抗しようと試みたが、なつみは俺の抵抗を許さない信じられない怪力で俺の腕を引っ張った。……何だ!?この怪力ぶり……ッ。

「なつみッ、俺はッ、ユリアがッ……」

思わず下駄箱にしがみつくようにしながら怒鳴ると、なつみの手からふっと力が抜けた。

見ればなつみは、隠微な笑みを浮かべながら下駄箱に張り付く俺に手を差し伸べた。顔を覗き込むようにゆっくりと……妙にいやらしい手つきで顔を撫でる。

「夢の話でしょ……？」

目を見開く。

……俺は、ユリアのことを言ったのは、今が、初めてだ。

「お前……誰だ……？」
「カズキ、伏せてッ」
呆然と呟く俺の言葉に被せるように、鋭い声が飛ぶ。聞き覚えのある女性の声……って、え！？
言われるままに張り付いていた下駄箱から咄嗟に飛びすさりつつ、声の方向に目を向ける。途端、突き刺さるように巻き起こった風が、もの凄い音を立てながら下駄箱をずたずたにした。
向けた目の方向、校舎に入る出入り口に佇む人影。逆光になっているけれど、淡いブロンドが背に受ける光を反射する。信じられない形相で睨みつけるなつみの視線を真っ向から受け止めて、真っ直ぐに立つ……。
「ニーナッ……！？」
「カズキ、こっちに来て」
片手を前に突き出すようにしてなつみに定めたままで、ニーナが早口に言う。何が何だかわからないまま、俺はニーナの言葉に従って駆け出した。
「野沢くんッ」
いずれにしても、あんな変ななつみのそばにいたら、俺、襲われる。
「ニーナ……何がどう……」
しかしどうでもいいが、『俺的日常』の学校に『どこまでもファンタジー』なニーナがいるのはもの凄く異様だ。
駆け寄った俺に、ニーナはなつみにターゲットを定めたまま、ちらりと目を向けた。くすりと口元に笑いを刻む。
「カズキ、純情クンで命拾いしたわよ」
は！？
「どういう……」
「サキュバス」
「は？」
さきゅばす？

「夢魔、と言えばわかる？」
夢魔……？
「人を誘惑する魔物よ。誘惑に乗らずに良かったわね。乗ってたら今頃、やばかったわよ」
誘惑する魔物って……じゃあ、なつみが？
「カズキの記憶に眠る元の世界を引き出して、誘惑しようとしたのね。彼女は、カズキの恋人？」
「違う。クラス……知り合い」
「そう。綺麗な人だわ」
サキュバス……じゃあこれは、魔物の支配する夢の世界？俺の記憶を引き出して、作り上げた……。
なら、俺はあっちの世界から引き戻されたわけじゃない……？
胸を塞いでいた重苦しい何かが、不意にふっと軽くなるのを感じる。
（良かった……）
――良かった？
浮かんだ考えに、自分でぎょっとした。元の世界に……こっちの世界に、戻りたいはずなのに。
……なのに、ニーナの横顔が泣きたいほど俺を安堵させている。
「自分の一途さに救われたわね、カズキ」
その言葉に、俺は見透かされているみたいで微かに赤くなった。
嫌だな、どこからニーナは知ってるんだろう。俺がユリアの名を口走ったのは知っているんだろうか。
……誘惑して来たのがユリアだったら、間違いなくやばかったな、俺。
多少妙だと思っても、乗っちゃったかもしれない。せっかくだし。
「さて。さっさとやっつけて、この世界をぶち壊してやんなきゃね」
言いながらニーナが、体を低く構える。片手の上に渦巻く風。俺には見えないけれど、シルフ。
「取り憑いてるとか、そう言うわけじゃないんだよね」

念の為、確認する。呪文を完成させたニーナの手を起点とするように、渦巻いていた風が激しくなった。

「安心して。夢よ。……彼女の作り上げたね」

さっきまでいたはずの雄高や先生、生徒たちが次第にぼやけて消えていく。残されたのは、風に煽られるように制服のスカートをはためかせてこちらを睨みつけているなつみだけだ。なつみとは思えないその険しい表情のまま、ニーナの手から『風の刃』が放たれるのと同時に、地を蹴って跳躍する。外した凶器の風が地を抉り、土煙が噴き上がった。

「ちッ……邪魔なエルフッ……」

「おあいにくだけど、カズキをあげるわけにはいかないのよ！！」

怒鳴りながらシルフの攻撃を避けるサキュバスに、ニーナが嫌味に怒鳴り返した。サキュバスの体から、何か粘液質のどろっとした黒いものが出てくる。アメーバみたいにうねうねしながら、こちらに触手を伸ばした。

あちらで見ればまだ何とか受け入れられるものの、こちらの世界観の中で見させられるとその非現実度は甚だしいものがある。ああ、いよいよ俺の現実が壊れていく……。

「うわッ……」

身を削りながら『風壁』を強引に突破した触手が、俺の体を絡め取る。ぐいっとおっそろしい力で引き摺られてなつみの方へと引っ張られる俺に、ニーナが『風の刃』を叩き込んだ。……もとい、俺を絡め取っていた触手に、だ。

「……ッ……」

引っ張られていた触手がぶち切れて、その勢いのまま投げ出された俺は、昇降口の扉に背中から叩きつけられた。ガシャンとそこに凭せ掛けられていた棒状のものが倒れ込んで来る。――デッキブラシ。

問題なのは、今の俺にはニーナを手伝おうにも剣がないことだ。こんなデッキブラシが役に立つかはわからないが、素手より幾分ま

しだろうか。
「野沢くんッ……」
なつみの姿をしていたって、あれはなつみじゃない。
「野沢くン、アタシと一緒ニ、行コうヨ……」
なつみの姿をしたサキュバスが、俺に触手を伸ばしながらも駆けて来る。剣がないのは返す返すも惜しい。思わず笑いたくなる。前の俺なら、正体を知ってたってその姿をしている相手に手はあげられなかったかもしれない。……悪いんだが、なつみの姿をしていたって、敵だと思えば容赦する気になれない。生憎と、そんな情めいたものは、今の俺にはないんだ……。
触手に絡められる前に、手探りだけでデッキブラシを跳ね上げる。ナイスキャッチ。近付いてきたなつみの胴めがけてその持ち手を力一杯叩き込むと、なつみの体が衝撃を受け止めきれずに下駄箱に激突した。そこへニーナの『風の刃』が追い討ちをかける。
「ニーナ、どうすればいい!?」
ニーナの周囲で渦巻く風の影響で、他の辺りも風が強い。デッキブラシを片手に持ったまま、周囲の風にかき消されないよう怒鳴る。ニーナの声が怒鳴り返した。
「繰り返すけど、これは夢なのよッ。カズキの記憶と磁場を使ってサキュバスが作り出した世界……さっさと目覚めて!!」
目覚めてったって!!
「どうやってッ」
「知らないわよそんなことッ」
キレてるんだろーな、これは。単に。
「何でこんな夢が作り上げられたのかが問題なのよ……ッ」
「……」
思わずニーナの方を振り返る。下駄箱からずるりと体を起こすなつみから目線を逸らさないまま、ニーナが続けた。
「帰るなとは言わないわ。当然なんだとは思うわ。だけど、投げ出すつもりでもあったのかと思うと、残念だわッ」

――え？
投げ出すつもり？
「そんなことッ……」
「早く帰ろうと、思ってるんでしょう！？」
見開いた目に、あの時俺が考えたことがフラッシュバックする。
――自分が、レガードの亡霊のように……
――……早く帰ろう　自分のいるべき場所に
――俺の手は、君に、必要なくなる
「手前勝手で結構よ、わたしは帰りたいなんて思って欲しくないわ、本当は！！」
「……ニーナ」
体を起こしたなつみから、触手がまた放たれる。俺にじゃなく、ニーナに向けて。ニーナを先に排除すべきだと判断したのかもしれない。容赦ない『風の刃』が、目に見えない刃物のように唸りを上げて切り刻む。
「レガードが見つかって、複雑になるのはわかるわ。でも信用されてないみたいで、不愉快よ！！」
ニーナ……どうして……。
「わからないとでも思った？カズキの考えそうなことくらい、わたしだってシサーだってわかるわよ。その証明が、具現が、この世界の大元になっているんじゃないの！？」
「……」
「あんたは何の為にわたしたちの世界で頑張ってきたの！？誰の為！？何の為！？ここで投げ出していいわけじゃないでしょう！？」
「……」
「……こっちの世界に戻りたいと思わないで。少なくとも今はまだ、思わないで。あなたの1番大切な人は、どこにいるの！？」
俺の1番大切な人……。
凶器となっているシルフが、次々となつみ――サキュバスに襲い掛かる。切り刻まれていく中で、次第になつみはその姿を変容させ

ていった。うねりをあげて伸びゆく髪。白目しかない瞳。
「ノざ、わ……クん……」
サキュバスの触手が、切り刻まれて飛び散った。サキュバス本体も、細かな傷をいくつも全身に負って黒い血を振り飛ばしている。
レイピアを抜き放ったニーナが、背を向けたままで言った。
「あなたの最愛の、守りたい人はどこにいるのよ！？」
――――――ユリア……。
レイピアを構えて地を蹴ったニーナに、サキュバスの触手が襲い掛かる。けれどシルフを使役しているニーナに届くことはなく、レイピアの切っ先がサキュバスに届いた。
（まだ、帰れないッ……）
こっちの世界に。
「ギゃあああアあああアアあああア！！！！！！」
脳裏にユリアが、キグナスが……シサーやシンの姿が閃光のように浮かび上がり、それと同時にサキュバスの雄叫びが上がる。
地獄のように響くその声の中、頭に受けた強い衝撃が、そのまま俺の意識を闇の淵へと突き落とした。

◆◇◆

「……」
目を開けると、高く澄んだ青空が広がっていた。それを覆い隠そうとするみたいに天に向かってそびえる木々が腕を伸ばして鮮やかな緑を揺らしている。
そしてそれより遙か手前で、心配そうに俺を覗き込むオレンジの瞳……キグナス。
キグナスの肩越しに、シサーの髪が揺れているのが見える。更にその後ろでは、無表情にこちらに視線を落としているシン。
「シサー！！カズキ、目ぇ開けたッ」
「キグナス……」

「おうッどっか痛いとこないかッ！？」
「……何で……オレンジなんだろうな……」
「……は？」
安堵、していた。
寝る前に見た光景と、ほぼ変わらない光景だ。ダンジョン第2階層の森の中。思い思いの色をした髪と瞳――ローレシア。いや、ここはラグフォレストだったか……。
「シサー……カズキがおかしなことを口走るー……」
呆れたようなキグナスのぼやきを聞きながら、体を起こす。体はきっとずっと眠っていたんだろうと思うのに、ひどく重かった。
「ニーナ……」
俺が横たわっていたすぐ脇に、力が抜けているようにニーナが座り込んでいて、その体が倒れないようにシサーが支えている。良く見ればニーナの手はしっかりと俺の手首を掴んでいた。
「生還おめでとう」
シサーが笑う。その言葉に、ぼんやりと記憶を辿った。
生還……。
「……うん。ありがとう」
座り込んだまま、視界にちらちらと揺れる赤い一房の前髪に片手を突っ込みながら、乾いた笑いをこぼした。……わかってしまった。
俺は、あちらの世界に戻りたいとは、思ってない……。
自分で、衝撃の事実だ。
……いや、もちろんずっとじゃない。ずっとここにいたいと本当に思っているかと言えば、それもまたきっと嘘になる。
だけど、すぐにでも帰してくれと思っていたはずの気持ちは、今はもうどこにもないんだとわかった。
レガードが見つかった今、俺の居場所はここにはない。それは知っている。僻(ひが)みでも何でもなく、レガードと同じ顔をした人間がヴァルスでうろうろしているわけにはいかないからだ。あっちに残してきたはずの大切なもの。それは今だって変わらず大切だ。

だけど、もう少しだけ。
ここで手に入れたものがいつまでもあるわけじゃないことはわかっている。
わかっているからこそ……。
（あと、少しだけ……）
「カズキ、やっぱどっか悪いんか」
覗き込むキグナスの目に、泣きたくなった。いつか失うとわかっている、かりそめとは言えそれを体験してしまった後だからだろう。感傷的になってるんだ。
「大丈夫だよ……本当に」
「ニーナ」
キグナスに答える俺の声に、シサーの声が重なった。顔を向けると、力なくうなだれるようにしていたニーナの目が開くところだった。
「ニーナ」
「……カズキ。お疲れさま」
顔を上げたニーナが、掴んだままだった俺の腕を放しながら、疲れた笑みを浮かべる。
「ちょっと、言いたい放題言い過ぎたかしらね」
「言いたい放題は今更でしょ……あいて」
ぱしん、と軽く頭をはたかれる。
「ありがとう。……あの、何がどうなったの」
未だに俺は何が起こっていたのか、半ばわからない。
支えていたシサーに礼を言いながら自力で姿勢を直したニーナは、笑みを浮かべたまま俺に視線を戻した。
「サキュバスは精神を司る精霊の一種。女性を襲うのはインキュバスと言うわね。自らに生殖能力を持たない彼らは、人の力に寄生して種を繋ごうとする。ま、単純に言えばカズキの子供が欲しかったのねー」
言ってニーナはにやーっと意地悪く笑った。ので、その意味を理

解した俺は、がーっと赤くなった。……こ、子供って……。
「だから好みの異性の姿を借りて誘惑するわけ。カズキの場合は、元の世界に対する思慕を利用されたと言えるんじゃないかしら」
なるほど……ユリアではあちらの世界にそぐわないと言うわけだ。
「少しはおいしい思い、したか？」
「するわけないだろッ！？」
真っ赤になってシサーに怒鳴り返している視界の中、ふいにキグナスが立ち上がった。複雑な表情を浮かべている。
「キグナス？」
「ん？ああ、何でもねぇ……その辺にカイルとゲイトがいるだろうから、呼んでくるわ」
「ああ……うん」
……？
「にしても、サキュバスの被害に遭ったのって、俺だけ？」
「そーね」
何で！！
憮然とした表情を浮かべる俺に、シサーとニーナがお揃いでにやにや笑った。……くそ。似てるぞこの2人。
子供が欲しいんならもっと成熟した男を狙えよなッ。この場にだって少なくとも2人はいるだろうが！！
「サキュバスは選り好みするのよ。良かったわね、好みのタイプだったみたいね」
魔物にもてて嬉しい理由が俺にあると思うのか？
「コトが起こってるのは精神世界になるからね……対抗出来るのが、わたしだけだったのよ」
噛みつきそうな目で2人を睨みつけている俺に、シサーが優しく目を細めた。ぽんと俺の頭に手をおく。
「何ごともなく済んで良かった」
「……うん」
「んじゃあ行くかーッ。お疲れのニーナとカズキには悪いけどな」

立ち上がるシサーに、ニーナが続く。黙ってそばにいたシンも、それに続きながらこちらを振り返った。微かに口元に笑み。
「手がかかる。……行こう」
「うん」
――信用されてないみたいで、不愉快よ
その、あんまりと言えばあんまりな物言いを思い返して、小さく笑った。
信用していないわけじゃない。自分の存在に自信がもてないだけだ。けれど、思い返せばこっちに来てから俺に差し伸べられる数々の手は……『俺自身』に対して差し伸べられた手は、確かにいくつもあったはずで……。
……ずっととは、言わない。
ずっと続くとは思ってない。
だけど……。
――わたしは帰りたいなんて思って欲しくないわ
（ありがとう……ニーナ）
もう少しだけ。
もう少しだけ、このままで……。

第2部第2章第21話　海底のダンジョン3　【転走】　前編（1）

森の中を細く続く道を、辿っていく。どうやら途中から、本当にループゾーンに入ったらしい。ある一定の景色が繰り返されるようになっていった。

「だあーッ。あの、ロープみたいなツタ、さっきも見た！！」

キグナスが、空を仰いでぼやく。指で示した枝から枝へ伝うようなツタは、確かに俺も見覚えがある。

「間違いなくループしてるな」

先頭のカイルが近くの巨木に近づいて、ぼそりと言った。幹に深く突き刺さったナイフを引き抜く。

「さっき俺が刺したものだ。間違いないな」

ループを疑って確認の為に刺したんだろうか。

「第2階層は『幻惑』か」

ぽそっとゲイトが呟く。そうだった。そう言えばそんな名前がついてたんだっけ……。

（『幻惑』……）

俺がサキュバスに見させられた夢――それも『幻惑』と言えば言えるんだろうけれど、カイルの言うように魔物の介入は製作者の意図とはかけ離れている可能性が高い。

とすればサキュバスの幻惑はダンジョン的に言えばいわばオプション、予定外。つまり本来の『幻惑』は他にあることになる。

「まさしくこの道が『幻惑』なんだろうな」

俺の後ろでシンが言う。この道が『幻惑』、か。

「何かを見落としているんだろう、多分」

「見落としてる？」

「大雑把に言えば、考え方は第1階層と変わらないんじゃないかなあ」

少し前を行っていたゲイトが足を止めて、俺とシンが追いつくの

を待った。
「あっちだってさ、回廊だったっしょ。間違った女神像の中に混じったたったひとつに気づかなければ、ぐるぐる回ってた」
「ああ……じゃあここも、いわば回廊状態になってるんじゃないかってこと？」
「そ」
「途中に逸れるべき道があるのに、見えてないんだな。第1階層と違って面倒なのは、森の中だってことだ」
シンが淡々と言いながら、辺りを見回した。
「木や草が生い茂っているってのは、それだけで視界が悪い。剥き出しのタイルとはわけが違う」
それもそうだ。例えば何かのレバーやらスイッチやらがあったとしたって、草に隠れてちゃ見えないし、石の下に隠れてるのかもしれない。そんなもんをひとつひとつ、草でもかき分けて石をどかすなんて不可能に近い。
「うーん」
「『ハリーバール』か」
考え込むように、自分の顎に組んだ片手を押し当てていたシンが呟く。何だっけ、それ。
「『セイリエルースの森の主』だろ」
きょとんと目を瞬いていると、ゲイトが補足してくれた。……ああ。ドワーフの伝承か。サキュバスのせいで俺の中では『あっちの世界』で過ごした感があるものだから、ニーナから話を聞いたのがだいぶ前のような気がしてしまう。
「どっかにいるんだろうな。『ハリーバール』が」
「んでも『ハリーバール』のヒントはなかったよね」
伝承だからもしかすると抜け落ちてるのかもしれないけど……って待て待て。それじゃあ永遠に辿りつけない。
「ああ。なかったな」
嫌なことを考えてしまって、つい内心冷や汗をかいていると、そ

んなことはお構いなしにシンがあっさり肯定した。ヒントがなけりゃわかんないじゃん、『ハリーバール』。
「『普段は眠っている』か……」
「ニーナは『森の歌』ってやつを知ってるのかな」
「さあ。聞いてみよう。……ニーナ」
弾むような足取りでシサーの後を歩いているニーナに、シンが声をかける。軽やかに振り返ったニーナが足を止め、さっきのゲイト同様、そのままそこで俺たちが追いつくのを待つ。一緒に歩き出しながら、ニーナが首を傾げた。
「何？」
「『森の歌』ってやつは、見当がつくか？」
シンの言葉にニーナは2、3度目を瞬いてから微笑んだ。
「わかると思うわ。森はわたしたちの領分だもの。ドワーフの伝承にさえ使われているとくれば、それほど知られているものは限られてるわ」
わたしたちの領分……。
「ニーナ。森の精霊とかから何かヒントとか、聞けたりしない？」
ふと思いついて尋ねると、ニーナはそちらの質問には否定的に首を振った。
「この森は精霊の気が微弱なの。ないことはないけれど、多分ダンジョン内の仮想空間だからだと思うわ」
「そっか……」
まあ、俺が思いつくことをシサーやニーナが気づかないとは考えられないし、やれるんならとっくにやってるか。
第2階層は『幻惑』。
何かに騙されている。
キィワードになるのは多分『ハリーバール』……としか考えられない、よな。
マールは鍵を使って最終地に入った。
俺たちは『3つ目の鍵』を使って神殿に入った。

マールは女神に扉を開けてもらった。
俺たちは女神の彫像にヒントが隠されていた。
……とすれば次の段階でくるのはやっぱりグノームたちのエピソードのどこかが、俺たちの次のヒントになると考えるのが妥当だろう。
キィワードになりうるのはいくつかないわけじゃないけれど、やっぱり1番それらしいのは、マールが宝の話を聞くために訪ねる『ハリーバール』。
普段は木の姿をしている『森の主』だろうな。
伝承の中では、『ハリーバール』の居場所について深くは触れていない。グノームの話の中でもそうだし、次のシーンでは伝承にありがちな杜撰さでマールは『森の主』に行き着いている。
だけど、『森の歌』を歌えったって場所がわからないんじゃやりようがない。まさか無作為に大声で歌いながら練り歩くわけにはいかないだろう。歌を知っているのはニーナだけなんだ。それをやって何か起こるにしたって、起きた時にはニーナの声は嗄れている。
『ハリーバール』――普段は眠っていて、『森の歌』で何かが起こる木の、特定の仕方があるはずだ。何か。
「『ハリーバールに冬は来ない』……どういう意味なんだろうな」
考え込むような顔をしていたシンが、ぼそりと言う。
『冬は来ない』……。
冬眠しないとか。
……そもそも冬眠する木を聞いたことがない。
逆に冬が来る木ってのは？『ハリーバール』に冬が来ないんだとして、他の木には冬が来るってことになる。冬が来ると何が起こる……。
（……あ）
「戻ろう」
俺たちとは少し離れた位置にいたシサーが、不意に大股で戻って来た。

「え？戻る？」
「ああ。……『ハリーバール』は常緑樹だ。言われてみればここは落葉樹ばかりだからな」
冬が来れば、葉が落ちる。葉が落ちないのは常緑樹――『ハリーバール』は常緑樹だ。それも『森の主』ってくらいだから、樹齢を重ねた巨大な木。
俺が気づいたことと同じことを言われてすんなりと納得はしたものの、常緑樹ってどこかにあったんだろうか。針葉樹と広葉樹なら区別はついても、落葉樹と常緑樹の区別なんて俺、わからないし。
「ゲイトが覚えてた。お前たちが『宝箱があった』って騒いでいた場所があったろう」
俺を通り過ぎながら、シサーが教えてくれる。
「野営した辺りの？」
それに追いつきながら、あの宝箱を根元に置いていた木を思い出した。太くて樹齢何百年も何千年もありそうな……。
（『森の主』……）
あの木のことだったのか……。

元来た道をひたすら戻り、野営した場所まで戻って来る。そこから宝箱のあったメルヘンチックな脇道を進んでいくと、昨日と変わらず足下に宝箱を置いた巨木が静かに佇んでいた。
「何か起こるのかな」
「起こってくんなきゃ困んだろう」
そりゃそーなんだが。
「じゃあ歌うわよ」
木と向かい合うように立ったニーナが、俺たちを振り返った。少し照れたような顔をして、自分の頬を撫でる。
「……何か恥ずかしいわね」
「綺麗な歌声、期待してますよー」
ゲイトがからかうようににやにやと言って、ニーナがそれを睨み

つけた。
「ずるいわよ。もう……」
それから諦めたように木に向き直る。息を吸い込むようにその背中が揺れ、ニーナの細い声が歌を紡ぎだした。
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊
＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊　＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊　＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」
（……凄いな）
目的も忘れて、思わず聴き入る。ニーナの細い声はハープを思わせる柔らかなソプラノで、奏でる旋律は懐かしさを感じさせるものだった。まるで妖精……ってそうだった。すぐ忘れがちだけど、この人妖精。
（ふうん……）
良く出来た絵を見ているみたいだ。
緑深い森の中、時を感じさせる荘厳な木の前で美しい歌声を響きわたらせるエルフ。まさしく『森の妖精』と言う言葉がしっくり来る。
ドワーフが歌えば酒瓶でも片手に陽気なものに聞こえるのかもしれないけれど、エルフが歌うとそれは、明るいながらも優しい歌に聞こえた。何を言っているかは全く理解不能だが。
やがて歌を歌い終えたニーナが、木と向き合ったまま軽く息をつく。木は少しの間、沈黙を保っていた。
……が。
「消えてく……」
キグナスが呟くのが聞こえる。目を見張る俺たちの前で、その太い木の幹が少しずつ薄くなっていった。代わりに巨大な黒い口が徐々に浮かび上がって来る。
「入り口……？」
幹の一部が綺麗に消えた後には、ぽっかりと口を開けるように、

巨大なうろが姿を現していた。

◆　◇　◆

マールはハリーバールに会った。
ハリーバールは眠れる森の主だ。ハリーバールは何でも知っているのだ!!
「ハリーバール!!」
マールはその偉大な姿に歓喜して叫んだ。
そしてグノームたちの言う通り、『森の歌』を歌った。歌いながら踊った。
マールは次第に楽しくなった。
「私を呼ぶのは誰だ!!」
すっかり陽気に歌って踊っていると、やがて地面をびりびりと揺らすような声がした。
「楽しい歌だ!!私も一緒に歌おう!!」
言いながらハリーバールは枝を揺らしながらマールと一緒に歌いだした!!グノームにもらった靴は、マールに一層踊りを上手にさせた。
「やあ、楽しい!!こんなに楽しいのはいつぶりだ!!」
「私はハリーバールに聞きたいことがあるのだ。ミスター・ハリーバール。ドワーフの宝の隠し場所を教えてくれ!!」
ハリーバールは木の枝を揺らした。
「よし来た!!私の体を上っててっぺんまで行きなさい。リトルモアが連れて行ってくれるだろう」
マールはハリーバールを上った。汗をかき、時にその枝で眠りながら上った。ハリーバールは背が高い!!
やがてたどり着いたマールは、てっぺんの木の枝に立って大声で叫んだ。
「リトルモア!!私を連れて行ってくれ!!」

すると、遠くの空から鳥が飛んできた。紫の羽をした綺麗な鳥だ。
リトルモアが来たのだ。
「私がお前を運んでやろう。さあ、私の背に乗るが良い！！」
ハリーバールの言ったことは本当だったのだ！！マールはリトルモアの背に乗った。
けれども、幾日か飛ぶうちに大きな鳥が現れた。リトルモアより大きいのだ。
大きな鳥は鞭のようにその羽でリトルモアをひどく叩いた。リトルモアは、まるで萎んだ雲のように真っ逆様に墜落した。
マールは水の中に放り出された。水だ！！森の中にある湖に落とされたのだ！！
「助けてくれ！！」
マールはもがいた。するとウンディーネが現れた。彼女は水の妖精なのだ。
「私が助けてあげられるわ」
ウンディーネはマールを岸に連れていった。
「助かった！！」
「代わりに、助けてあげて欲しい人がいるの」
「私で出来ることならば、私は何でもしよう！！」
するとウンディーネはマールを連れて木陰へ行った。そこには老人が岩に腰掛けていた。
「どうなさったのですか」
「私は動けなくなってしまったのだ」
「なぜ動けなくなってしまったのですか」
「なぜなら靴が壊れてしまったからだ」
老人の言葉にマールは飛び上がった。
「私は急いで南の神殿に行かなければならない。私は司祭なのだ！！」
「そいつは大変だ！！」
マールは急いでグノームの靴を差し出した。

「こいつはグノームの靴だ。何倍にも速く神殿へ行けるに違いない!!あのグノームだ!!」
「助かった!!」
老人はぴょんと岩から飛び降りた。
「だが君が困るのではないかね?」
「それなら大丈夫!!」
マールは自分の靴を持っているのだ。
老人は早速グノームの靴を履くと、マールに赤い石を渡した。きらきら光る綺麗な石だ。マールは喜んだ。
「代わりにこれをやろう」
「ありがたくもらうことにしよう!!だが私はこれからどうしたら良いのだろう」
考え込むマールに、老人が言った。
「神の言葉に従えば、きっと道は拓けるだろう」
「そうしよう!!」
マールは頷き、老人は走り去った。

第2部第2章第21話　海底のダンジョン3　【転走】　前編（2）

◆◇◆

現れたうろの中は、階段でも穴でもなく、まっすぐ続いていく通路になっていた。外から見ればでかいとは言え木の幹として納得出来る奥行きしかないのに、中から見るとずっと奥まで続いている通路。何て納得のいかない……。

これまでと同じ隊列で進んでいく。真っ暗なので先頭のカイルと真ん中ら辺のキグナスがそれぞれ、カンテラと『導きの光』で道を照らしていった。やがて果てが見えてくる。どう譲歩したって木の幹なんかぶち抜いて、異空間になっているとしか思えない。

次の階層は……『転走』。

……嫌な予感。

「う、わー」

先に通路から出ようとしていたキグナスから、変な声が上がった。後に続いて外の光景を視界に収めた俺も、思わず顔を顰めて、むき出しの自分の両腕を抱き締めるように交差させる。

「風景が寒ぃー」

夏も間近な海と港町で、俺は上着とマントを脱いでいる。タンクトップみたいなシャツ1枚で、腕はむき出しだ。今だってそれで寒いわけじゃあないけれど、視覚が訴えてくるものから何となく凍えそうな気分。

踏み出した地は、雪原だった。

いや、雪原と言うと語弊があるかな……。氷だ、どちらかと言うと。

足元はアイススケートでも出来そうなつるっつるのアイスバーン。見渡す景色はどこまでも白かった。

「ひえ～。カズキ寒そうだな～」

キグナスがひらひらとロッドを振りながら、俺を見上げる。
「寒くないのはわかってるだろ」
気温は別に変化してないし、その同じ空間にこうして隣あって立ってるんだから。
「そりゃそーだけど、見るのが寒い。毛皮でも羽織ってて欲しくなる」
そんなんしたら多分暑い。
「これは困るな」
見渡す限りのだだっ広い氷原に、シンがぽつりと呟いた。その横顔に目を向ける。
「困る？」
「指針となるものがない」
指針……。
確かにこうもただただ、だだっ広い空間が広がってるようじゃあ、どこを目指してどっちに行ったら良いのかわからない。
「伝承はどうなってたっけ……」
聞くともなしに呟きながら思い出してみる。
グノームの次はハリーバール、そしてその次は確か……リトルモア。
とりあえずマールは鳥に運ばれて湖に墜落するわけだ。
「リトルモアって、何かキィになると思う？」
言いながら氷原に踏み出す。と、既に氷原に立っていたシサーが俺を振り返った。
「おい、足元凍え滑るから気をつけて……」
つるッ。
「うわあ」
びたんッ。
シサーの忠告の甲斐なく、足を滑らせて尻餅をつく。それを見て、キグナスがけたけたと笑った。
「だせー」

つるッどしん！！
「人のこと言えないじゃん……」
どうでもいーが、滑りやすさがハンパない。ワックスでも塗ってるんじゃなかろーか、氷の上に。くそ……『転走』。走ってなんかやるもんか。
「行き先もそうだけどさ……うわ」
立ち上がろうとしてまたコケる。先に進めない。
「何遊んでるんだよ」
そういうシンは、さすがナイスなバランス感覚で危なげなく立っている。
「で？何だ」
呆れたように立ち上がろうとした俺に手を貸してくれながら尋ねられて、言おうとしたことを思い出した。
「うん……『リトルモア』って関係あると思う？って言うかキィになるのは何だと思う？」
「まだわからんな。臭いのは『リトルモア』『湖』『ウンディーネ』……それから『司祭』か。そんなところだよな」
シンの手を借りて何とか立ち上がった俺は、その後は自力でバランスを保ちながら数歩踏み出した。
「とりあえずここでぼーっとしてたって仕方ないだろう。とにかく歩いてみりゃあ何かあるかもしんねぇし」
さっきから立ち上がろうとしてはコケて、ほとんどコサックダンスめいた状態になっているキグナスを助け起こしてやりながら、シサーが言う。ちなみにゲイトは、その横で腹を抱えて大爆笑だ。
「それはそうかもしれないけどさ……」
転ばないように気をつけながら応じる答えは、つい消極的になる。普通の足場ならともかく、一歩一歩がこれだけしんどいとくれば、そうなりもするだろう。出来れば無駄な距離の移動は極力避けたくなる。
「少し行くと、こっちの方角に湖らしきものが見えるぞ」

少しその辺を見て来たらしいカイルが、戻って来て告げた。――『湖』。

「じゃあ、とりあえずはそこだな」

カイルの言葉を受けて、シサーが頷いた。カイル、シン、ゲイトは危なげなく進んで行くし、盗賊まがいのシサーや身の軽いニーナなんかも辛うじてバランスを保っているものの、そんなにすたすたと言うわけにはいかない。俺とキグナスは急がせようものなら末路は知れているしで、進行速度は亀も真っ青なスローペースだったけれど、カイルの言う湖はそんなに凄まじく遠距離にあるわけではなかったらしい。見る限り平坦で同一色の風景だったからわかりにくかったけれど、間もなく湖だった。

気温を考えれば不思議はないけれど、この白い風景の中、凍り付くことなく滔々と水を湛えている湖と言うのもどこか妙な気がする。湖は、さほどの広さはなさそうだった。ここから見て対岸がわかる。対岸にも何もなさそうだ。

覗き込んでみると、深さは結構ありそうな気がした。水は澄んで透明なのに、底は見えそうにない。それとも先ほど湖の存在に気づかなかったのと同じ理由からだろうか。

「こうアテも目標物もないとなると途方に暮れるな」

「足腰が痛ぇ」

『湖』……『リトルモア』を飛び越してそっちのエピソードに移ったんだろうか。そもそもが別段伝承を全くなぞっているわけじゃないので、どれが飛ばされてどれが来るかは判断するのが難しい。

じゃあ次は……『ウンディーネ』なんだろうか。

なんて思った視界の隅で、またキグナスがすてんとコケた。……いや、コケさせられたと言うのが正しい。ゲイトに軽く肩を叩かれたんだ。

ちなみに俺の方はと言えば、さっきよりは何とか足場の状態に慣れて来た。ちょっと押されたくらいだったら多分何とかなる……だろう。けど、でもだからと言って。

「こんな状態で魔物に襲われた場合、俺は戦力として何かが出来る自信がない」

ぼそりと小声で言う。いや、戦力どころか逃げることさえ儘ならない。せめて魔法石でもあればなあ。でも使い果たしたきり補充が出来てないから……まあ、ないもんをアテにしたってしょうがないわけだが。

「ああ……こんなもんでも役に立つか？」

既に疲れ果てた様子の俺たちに、カイルがふと思いついたように荷袋を漁る。ぽんとこちらに放ったのは、半円のぎざぎざした金具だ。……あ、滑り止め？

「ありがとう」

キグナスと両足分の2個ずつを受け取って装着してみる。快適とはいかないけど、さっきよりは幾分まし。

「あんたらも一応いるか？」

とりあえず盗賊チーム3人が持っていた4つをそれぞれ貸してもらって、シサーやニーナも念のため装着しておくことにしたらしい。特に魔物との戦闘では、シサーの戦力に滑られてるわけにはいかないし。

「どうすっかなー」

とんとんと滑り止めの効果を確かめるように数回飛び跳ねたシサーが、参った、と言うように髪に手を当てる。それに答えて、シンが顔を上げた。

「ちょっとギルドのメンツでその辺を……」

言いかけたその言葉を遮るように、ずずんッと言う音が聞こえた。それに重ねるように……咆哮……。

「期待通り、出てきたらしいぜ……」

期待してませんて。

「とりあえずはカズキ、キグナス、ニーナは下がってるんだな。魔法での援護だけ、よろしく頼むぜ」

言いながら抜き放ったシサーの剣は、煌々と光っていた。白い世

界の中、余り目立たなかったみたいだ。
少し離れた氷の塊の陰からのっそりと白い動物が姿を現した。……北極グマ。
……いや、こっちの世界にはそもそも北極がないんだから北極グマって言い方はおかしいので、白クマ。しかもでかい。あれは魔物じゃなくて、ただの肥大した熊なんだろうか。だとしたって脅威であることに違いはないが、魔物であるよりは良いような気がする。何となく。だってただの動物なら何か予定外の攻撃を仕掛けてくるようなことはないだろう。
白クマは、どしどしと足元の氷原を踏みしだきながら、獲物である俺たちを見つけたらしい。両腕を振り上げて威嚇しながら、こちらを目指して移動してくる。
「氷系魔物だから、火系魔物が良く効くだろなー」
言いながらキグナスがロッドを構えた。残念ながら俺は見物コース、出来ることはまずないだろう。でもシサーたちだけでそんなに苦労せず何とかなりそ……。
「……うわぁ」
反対側――今俺たちが歩いて来た方角をちらりと見たゲイトが、ぼそりと呟いた。……え？
「……うわぁ」
挟み撃ちだ。
思わず同じ反応を示しながら、腰の剣に手をかける。果たして、滑り止めつけたくらいでこの足場の中まともに戦えるかどうか。
「グォォォ！！」
新たな白クマBが雄叫びを上げながら、どしどしとこっちに向かって迫ってくる。それに共鳴するように、最初の白クマAがまた咆哮を上げた。
「……『火炎弾』ッ！！」
距離を測っていたキグナスが、手近になった白クマBめがけて『火炎弾』を放つ。

ゴォォっとうねりを上げながら襲いかかる炎に一瞬怯んだように足を止めた白クマBは、次の瞬間地についた四肢を踏ん張った。途端。

「うわッ、何だあれッ」

ぼこッぼこッと白クマBの背中が盛り上がる。生まれた何か……毛玉が、凄い勢いでこちらめがけて飛来した。……くそ、やっぱ魔物だあれ!!普通に考えて熊の背中から毛玉が生まれて飛んでくるなんてありえない。

「……『風の刃』!!」

立て続けにキグナスが『風の刃』を発動させる。それと同時に、ニーナもシルフの魔法を毛玉に向けて完成させた。宙で毛玉がばらばらになる中、本体である白クマBだってぼーっとしていたわけじゃない。どどどどッと氷を巻き上げながらこちらへ突進している。

ちらりと見ると、白クマAは主にシサーとカイル、援護にシンとゲイトが相手取っているようだ。あちらは心配ないだろう。心配なのはこちら。俺が剣を使うしかない。

キグナスとニーナの魔法が援護をくれる中、俺は剣を抜いて構えた。とにかくバランスは崩すわけにはいかない。……ってゆーか、何で魔物は滑らないんだよ?汚い。

命中した『火炎弾』に、白クマBが耳を覆いたくなるような苦悶の声を上げる。そこを狙って駆け出した。とは言え全力で走れるわけではなく、どっかのろいのは仕方がない。

スピードより、バランス優先。

距離を縮めて、地を蹴る。蹴った瞬間、ついどきどきした。剣を構えてつるべしゃなんて、やっぱりやりたくない。

意外ときっちり踏み切ることに成功し、垂直に構えた剣が白クマBの肩口に深く突き刺さる。その肩に両足をつけて剣を引き抜こうと試みた瞬間、白クマBが激しく身を捩った。

「ガァァァァァッ!!」

痛みにもがくその動きに、俺の剣が抜けて血の噴水があがる。と

同時に、俺の体は白クマBの暴れる勢いに合わせてふっ飛んだ。氷原に叩きつけられる。

……だけなら良かったんだが。

「カズッ……」

「うわぁぁぁ……」

何せ滑り止めをつけなきゃ歩けないほどの足場。投げ出された俺は勢いそのままに床の上を滑り込んで行く羽目になった。すっさまじい速度で氷原を滑走し、挙げ句そのまま投げ出される。

ざぶーんッ！！

気がついた時には湖の中だ。こうなってみると、視覚の問題だけで実際の気温が氷点下じゃないことがありがたい。何の防寒対策もなく氷点下の湖に放り込まれたんだったら、心臓麻痺だ。

水面の高度がさほど低くなかったことも幸いした。これが崖みたいになっていれば、心臓麻痺だの溺れるだのって前に、全身骨折と内臓破裂で死んでいる。

とは言え、決して幸いと喜べる状態じゃないのも事実だ。何の心構えもなく湖に叩き込まれた俺は、飛び込んだ勢いで水中深くまで沈み込んだ。自分の沈む勢いで周囲に巻き起こる渦が俺の体を翻弄し、上下左右の感覚が全くわからない。しかも鼻に水が入った。痛い。

何とかその自制の効かない渦の中を逃れようともがく。激しく渦巻く水の中、ぐるぐると回転していた俺の体は、ややしてようやく水の翻弄から脱出することに成功した。握ったままだった剣を鞘に収め、水面の方向を探る。

どうやらこの湖は結構深い。足元に水底はまだ見えず、頭上から漏れる明かりもまだ距離があった。ともかく酸素を供給しなければ。

まだ流れの荒い水中で腕をかき、ようやく水面に顔を出す。

「ぷはぁッ」

大きく息を吸い込んだところで、今度はぐいっと何かに体を引っ張られた。強い力にまた水の中へと引きずり込まれる。……何だ！？

咄嗟に目を瞑り、ともかく酸素だけは逃さないようにしながら、足首に何か太いものが巻き付いているらしい感触に気がついた。引っ張られているのはそこだ。引きずり込まれながら目を開く。

「がぼおッ」

ああ危ない。酸素。

ぎょっとして開きかけた口を慌てて閉じながら、改めて俺を引っ張るものを凝視する。

俺のすぐ足の下でじっと俺を見つめているのは、真っ白い女の顔だった。いびつに広げられた口には笑みが浮かび、かっと見開かれた目が俺を凝視する。蛇のように太い髪が水中をうねうねと動きながら、俺の足首を絡めとっていた。……ホラー映画かよ！！

「ごぼッ……」

まずいな。このままでは沈められてしまう。髪のような触手は、俺を手繰り寄せるように体を這い上がって来た。腰の辺りにもぐるりと絡み着く。

（しまった……剣……）

絡み着いた触手は、俺の剣をしっかりと押さえ込んでいた。これじゃあ抜き取ることが出来ない。その間も着実に、俺の体は引きずり込まれていった。

地上では2頭の白クマ、しかも白クマBの方は魔術師2人で相手取る羽目になっているはずだ。俺の身に起きていることなど知りようもないし、何とか自力で抜け出さなければ。

ともかく、この触手を……ッ。

もがきながら、背に回された荷袋を漁る。開いた荷袋の口から物が出てしまわないよう押さえつけながら、袋の中を漁る俺の指先に硬い感触が触れた。

（くらえッ……）

抜き出したそれを、触手に叩き込む。第1階層で見つけたナイフだった。

大して役に立つ物ではないのかもしれない。けれど錆びてぼろぼ

ろではあっても、『腐ってもナイフ』だ。渾身の力を込めて突き刺せば、痛いだろう。

俺の狙いは外してはいなかったようだ。女の目がくわっと見開かれ、絡みついた触手の1本が液体を水中に振りまきながらするすると後退していった。遠慮なく次々と触手にナイフを突き立てる。

ようやく触手から体が自由になった時には、結構深くまで引きずり込まれていたみたいだ。上に戻ろうと顔を上に向けかけた俺の体に、今度はもの凄い力で圧力がかかるのを感じた。水そのものが流れる強い圧力。

（嘘だろッ……）

見れば、今俺がいる位置よりやや下方に、横穴が開いているのが見てとれた。今し方俺を引きずり込もうとしていた女の首が、水に引きずられてもがくのが見える。水は凄い勢いでその横穴に吸い込まれていた。その力に抵抗すべく、必死に水をかく。が、徐々に俺自身もその流れに飲まれ始めた。かいてもかいても進まないどころか引っ張られ……。

（うわぁッ……）

不意に、全身にかかる力が巨大になった。流れ込む水流の、本流に乗ってしまったらしい。

全身の圧力に抵抗する術もないままに、俺は湖の底に開いた横穴の真っ黒い口に吸い込まれた。

第2部第2章第21話　海底のダンジョン3　【転走】　前編（3）

◆◇◆

（……）

ゆらゆらと、体がゆるーく揺れている。体が冷えきっているような気がして、薄く目を開けた。途端、ざぶんと水の中に沈んだ。

意識がない間は丸太のように浮いていられたものが、意識が戻った途端体のどこかに変に力が入ってバランスが悪くなったんだろう。

「がぼッ……ぷはあ！！」

驚いたまま、じたばたと水面に顔を出す。出してみると、さして深さがないことに気がついた。

水路みたいだ。幅2メートルくらいの通路を水がゆっくりと流れていく。どうやら俺はこの水路を漂って来たらしい。

流れ自体が大して速いものじゃないので、俺は立ち上がって足を止めた。水は俺の太股くらいまでの深さだ。あの湖の横穴から繋がっているんだろうか。

（寒……）

とりあえず、水から上がってみることにする。水路のすぐ脇には小さな半円形のスペースがあって、上に続く短い階段が見えた。上がってすぐにベランダみたいな柵のついた窓が壁からこちらに向けてついている。

スペースからややして、水路沿いに細い通路があるみたいだ。通路になる辺りから水路はトンネルのようになっていて、俺くらいの身長だと少し屈まないと頭が天井につきそう。

いずれにしても、その全てが白い。氷の質感のもので構成されている。第3階層内にいることは間違いないようだが。

（どこなんだろう……）

さっきいた氷原からの位置関係として、俺は今どの辺りにいるん

だろうか。
　水路から上がり、腰の剣と背の荷袋を確かめる。この2つがとりあえずは俺の命綱だ。
「……っくしゅッ……」
　荷袋を床に落としたところでくしゃみが漏れた。水にずっと浸かってたせいで、体温を奪われたらしい。体が冷たい。
　いくら景色で見るほど寒くないとは言っても、日が当たるわけではないし、びしょ濡れの服をずっと身につけていたら風邪でも引くかもしれない。ダンジョンなんかで風邪をひくのはいかにも辛そうで嫌だ。
　とは言え……。
「……」
　足元に落とした荷袋に視線を落とす。どこをどう見ても隙のない濡れっぷりだ。うーん、コンプリート。そりゃそうだろう。湖に沈んだ挙げ句に水路を漂っていたんだから。もちろん中身だって例に漏れずびしょびしょだろうし、とすれば中に入っている衣類が難を逃れるとは考えられない。
　つまり着替えはない。
　濡れた衣類を着てるのが嫌だっつったって、まさかマッパになってるわけにはいかないし、仕方ない、上半身だけ脱いで堅く絞ると、同じように堅く絞ったタオルで体を拭く。
　荷袋の中身を取り出して確認しているうちに、俺は暗澹（あんたん）たる気分になってきた。
　びしょ濡れのマントや衣類はこれまた目一杯絞って、寝袋についても最善の努力を図って、とりあえずその辺に広げて干してみる。
　それから食料、薬類、雑貨……。
　薬類は、良い。特に破損とかしてるわけじゃないから、治療薬とか使えそうだ。雑貨も別に問題ない。『炎の種』なんかはびしょびしょでも差し障りがなさそうなことは以前実証済みだし、カンテラは使えるだろう。

それより何より、食料だ。パンや干し肉なんかはどろどろで、到底食べれる状態にない。木の実や果実類は破損してるもの以外は何とかなりそうだけど、大してない。

（まずいな……）

これが森だの山だの草原だのなら、小動物を捌いて食料にすることも可能だが、どうもこんな氷の地に食料に出来そうな生き物はいそうにない。当然だが、魔物は論外だ。

となると、俺は一刻も早くシサーたちと合流しないと、餓死と言うロドリスとも魔物とも関係のない、至って真っ当な理由で生とおさらばすることになる。

（魔物か……）

荷物を広げた床にあぐらをかいて、どろどろに崩れたパンを睨みながら考える。

食料と言う問題もさることながら、魔物が問題なのはもちろんだ。ましになったとは言え、俺は相変わらずひとりで魔物をばんばん相手に出来るような腕前など、どこにもない。シサーにとっちゃ雑魚敵であっても、俺にとってはキグナスの援護があってやっと、と言う魔物なんかごろごろいる。キグナスがいたって手が出ないような魔物なら、多分もっとだ。

死ぬかも知れないな、ここで。

さわさわとゆっくり流れる水路の水を眺めながら、そんなふうに思った。

怖い、とは相変わらず感じないようだ。

それならそれも、悪くないような気さえした。

（下手に地上で死ぬより……）

他大陸のダンジョンの中で死ぬ方が、害がないかもしれない。ここで人知れず死んでしまえば、ロドリスだって俺の首を悪用のしようがないだろう。

――まだ、帰れない……

『青の魔術師』の顔を思い出しながらそんなことを考えていると、

ついさっき自分が考えたことが頭をよぎった。
――もう少し……
……あっちの世界にまだ帰れない、と思ったのは、まだどこかでユリアの力になりたいと思うからだ。
まだ、何か俺にも出来ることがあるんじゃないかと信じているから。
現に、今追っているバルザックの行方を掴むことは、『王家の塔』の開放に繋がる。俺自身がいなくたってシサーたちだけで何とかなるのかもしれないが、少しは力になれる部分もあるかもしれない。
それに、俺が少しずつ築いているはずの、人間関係。もう少し、彼らのそばで……。
……何にしても、こんなところで投げ出すのは嫌だ。
（だったら……）
だったらそれは畢竟（ひっきょう）、命を失いたくないのかもしれない。
生き延びなければならないと言うことだ。
成功するか否かはいざ知らず。
「……頑張ってみるか」
また、シサーやキグナスたちに会えるように。
またユリアに、会えるように。
もう、俺に笑顔を見せてはくれないかもしれないけれど。
立ち上がって俺は、進路となりうる道を確認した。
問題点は次の3つだ。
ひとつは、進路。
俺は、氷原に対してここがどこに位置するかわからない。そして伝承が示すはずのヒントも、見つけるべきものや向かうべき場所もわからない。
シサーたちと合流するに当たって、彼らが今どこら辺にいてどこに向かっているのかわからないし、自分と彼らの間にどのくらいの距離や道筋があるのかが見当もつかない。地図を書こうにも、道具がない。

２つ目は、食料の稀少さだ。
とにかく虱潰(しらみつぶ)しに道を辿ることにしたって、時間がかかれば食料のない俺は力つきる。つまり進路を定めるのに、さほど闇雲に時間をかけるわけにはいかないわけだ。
３つ目は言わずと知れた魔物の存在。
けれどこればっかりは祈るしかないし、頑張るしかない。太刀打ち出来る可能性があるものに遭遇するかどうかは、ひとえに運にかかっているとしか言えないんだから。後は出来る限り気を配って、遭遇する前に何とか回避するか。
（うー……ん）
さて、どうしよう。
みんなとはぐれたからと言って、慌ててじたばたしたって事態が好転するわけじゃないだろう。むしろ慌てるとろくなことにならない。落ち着こう。で、対策を練ってから行動を開始することにしよう。
（あ、水）
せっかくこんだけ飲める水が豊富なんだ。補充しておこうっと。
ばらまいたままの荷袋の中身から、空いた水袋を取り出して水路から水を汲む。餓死することはあっても水不足で死ぬことはなさそうだ。食料不足と水不足なら、食糧不足の方が生き延びられる期間は長いはず、確か。
疲労回復の薬もあるし……何とかしばらくはひもじいながらも食い繋げるだろう。
（どこに続いてるんだろうな）
水を汲みながら、左右に続く水路の先に視線を向けた。どちらにしたってトンネルみたいになってて、あんまり見えないんだけど……。
（湖に繋がってるのかな……）
上流の方に目を向けてふと思う。
続いている、はずだよな。

だって俺は、あの湖から流されて来たんだから。
多分意識不明のままあちこちぶつかったんだろう痣や擦り傷、軽い打ち身みたいなものなら体中のあちこちにあるが、大きな怪我はひとつも負っていない。ってことはきっと、例えば凄い高いとこから滝みたいに落とされたりはしてないんだと思う。
だったら、辿って行けば近いところまで行けたりしないだろーか。
あの水流を思い出せば、また水に潜ってあの横穴から湖に出ることはまず無理だろうけれど、迂回して近いところに出られたりはするかもしれない。入り組んでて不可能って可能性は全然否定出来ないけど、シンじゃないが指針がない、他に。
（上は、どうなってんのかな）
水路から背後を振り返って、上から望む小さな窓を見上げる。腰の剣に一応片手をかけながら、その小さな階段を上ってみた。
滑り止めがあると言ったって、とんでもなく滑る足場だ。ゆっくり慎重に階段を上りきってみると、これはちょっと複雑そうだった。
階段はどこかから続いてくるカーブを描いた細い通路に繋がっていて、その先はそのまま右手の方へと消えていく。すぐそこで更に右に直角に折れ曲がって、そこが下から見える窓と繋がっているらしい。その辺りは四角い、広めのスペースで、続く通路は遙か先へと消えていく。その途中には別の分岐点もあるようだ。
「……」
危険すぎる。やめよう。
進むなら水路沿いを上流に向けて、と決めて、またそろりそろりと階段を下りた。
何にしても少し休憩して、せめて服が身につけられる状態になってからにしよう。じっとしている方が、うろうろするよりは魔物との遭遇率だって低い。
そう決めて、荷物が散乱したままの場所に戻ってくる。
こうして完全にひとりきりになるのは、こちらに来てからは多分初めてだ。

いつも誰かがいた。
いつも誰かが、手を貸してくれた。
たったひとり、完全に孤立無援で何かをしなきゃならないようなことはそんなにない。
だけど、今回はひとりで乗り切らなきゃならない。じゃなければ死ぬだけだ。
しばらくその場でぼんやりと時間の経過を待った俺は、シャツが身につけられそうな感じになってきたところで行動を開始した。
荷袋の中に荷物を詰め直す。マントや上着はさすがに乾かなかったけれど、仕方がない。
そのうち、雑巾みたいな異臭を放つようになったらどうしよう。洗濯すれば何とかなるだろうか。
つまらないことを考えながら、とりあえず水路の上流を目指して歩き出す。微かに身を屈めながらトンネルに入ると、向こう側はすぐに見えた。短いトンネルは、緩くカーブを描いている。
シサーたちはどうしただろう。
心配しているだろうか。
下手に探したりしていないと良いんだが。
ここは、シルフが俺の無事を伝えたりはしてくれるんだろうか。前にキサド山脈で彼らとはぐれた時には、俺とユリアの無事をシルフが伝えてくれたはず。シルフの伝達能力では、俺の居場所までは正確に伝えられなかったみたいだけれど。
俺にもそういう能力があればいいのにな。せめてシルフを使役するんじゃなく、意志の疎通だけでも図れれば。
（羨んでばかりだな、俺……）
ふと気づいて、苦笑が漏れた。
羨んでたって仕方がない。他人は他人で、羨んだって俺の能力になるわけじゃないんだから。
俺自身には大して何が出来るわけじゃないけれど、だからって羨ましがってても進展はないよな。……とにかく、出来ることを最低

限ちゃんと出来るように。
今は……。
せめて自分の命くらいは、自分で守ることが出来るように。

第２部第２章第２２話　海底のダンジョン３　【転走】　後編（１）

最初の魔物に遭遇したのは、歩き始めてから小１時間くらい経った頃だった。

最初の方針に従って、俺はとにかく水路に沿って道を進んでいった。途中幾つか別方向へと向かう道なんかにも遭遇はしたんだが、変な茶目っ気を起こすと命取りになりかねない。こういう場所では考えをころころ変えるより、初志貫徹を目指した方が安全性が高いような気がする。

そう考えて、とにかく水路を左に見ながらずっと進んでいた。

万が一のことを考えて、２０歩ごとに壁に剣で傷をつけている。水路沿いに戻れば元の場所には戻れるはずなんだが、何となく。

第１階層で見つけたナイフを湖でなくしたのは痛い。こういう作業には向いていたのに。

やっぱりアギナルド老には購入して持参だろーか……などと考えながら、剣で壁に傷を作り上げた俺の耳に、何かの鼻息のようなものが聞こえた。作業をやめて、耳を澄ませる。

音が聞こえてくるのは、進行方向だ。時々、最初にあったようなトンネルもどきがあって、その出口付近の壁に俺は傷を作っていた。

フゥーッ、フゥーッと言う音は、ぺたぺたと言う足音と共に近づいてくる。

俺が今いる位置から少し先、トンネルを抜けた辺りは右に緩やかに曲がっていっていて、多分少し広いスペースがありそうな壁の切れ間が辛うじて見える。そのぎりぎりのラインに、肌色の、裸足の足先が一瞬だけ覗いて引っ込んだ。

（……？）

鼻息は相変わらず続いている。足音と共に近づいたり遠くなったりするのは、察するにうろうろと歩き回っているんだろうか。

変なふうに握ったままだった剣を、静かに握り直す。どうするべ

きか、少し迷った。
今ならまだ、引き返せる。向こうは俺の存在に気づいていない、もしくは見つけていない。
ここからそっと引き返して別の道へ行ってしまえば、戦闘は回避出来そうだ。
けれどその場合、俺は迷う率がかなり高くなる。
とは言え、今進んでいる道がそもそも正しいとは限らない。
……どうする？
しばし悩んで、俺は3つ目の選択肢を採択した。
待機。様子を見る。
あいつがどんな魔物かは全貌が見えないからわからないが、ともかく俺に気づかずにどっか行ってしまえば、俺は戦闘も回避出来るし進路変更も必要ない。
出来ればこの方向で、あの魔物にもご賛同いただきたいものだ。
いささか虫の良いことを考えながら、息を殺してじっとする。視覚以外で敵や獲物の存在を感知することの多い魔物相手に、効果のほどは疑問だが、一応体を低くし壁際に張り付くように身を隠した。背後の気配に気を配ることも、もちろん忘れてるわけじゃない。こういう状況下、前からも後ろからも魔物が現れた場合、俺に逃げ道はなくなる。退路は最重要事項だ。……って言ったって、背後から現れた場合自動的に退路はなくなるし、どうしようもないんだが。
じっと息を殺す俺の前で、鼻息は長い間うろうろしていた。やがてその全貌が、一瞬だけ俺の前方の通路に姿を見せる。全身を白い長い毛で覆われた、2メートルくらいの2足歩行の生き物。顔や手足は肌色、巨大な白猿と言ったその容姿は雪男を連想させ、つい突っ込みを入れたくなる。
カイルいわく、ダンジョンの魔物の大半は自動的に棲みついたもの。そして、くどいがここの冬景色はあくまで視覚にそう訴えるだけで気温的には温暖だ。
とすると。

……雪男はやっぱり、本物の雪山にいて然るべきだと思うんだけど。

熊は、許そう。別に熊は北海道にだって本州にだっているわけだし、あの白クマが白かったのはただの保護色だと思えば理に叶う。

でも雪男はなしでしょう……それとも風景が似てればそれで良いのか？そんなアバウトなのか？そんなに毛もじゃで暑くないのか？

……こんなことを考えている辺り、やっぱり俺の『恐怖』と言う感情はどこかへ行ってしまったんだろうか。それともじっと待機してることに飽きたのか。

やがて先方も同じところをうろうろすることに飽きたのか、鼻息が少しずつ遠ざかって行った。ぺたぺたと言う足音も次第に聞こえなくなっていく。

それでも俺は、まだその場で同じ姿勢を保った。引き返してきたり、歩くのを一時的にやめただけかもしれないと思えば、確信が持てるまで様子を見るべきだろう。

（……もう、いいかな）

前方の様子を探ることに全神経を集中させる。どうやら本当にそこからは移動したような感じだった。雪男の気配のようなものは感じられなくなっていた。――前からは。

（何ッ……！？）

背筋が一瞬泡立つような感覚に、一気に背後を振り返る。先ほどまで前方をさまよっていた鼻息と足音が、唐突に背後に回り込んでいた。長くないトンネルの反対側、いつの間にか移動してきた雪男の顔が、真っ直ぐ俺を見据えていた。

しまった、前にばかり意識を集中し過ぎた……ッ。

「うがあッ！！」

喉の奥を鳴らすようなダミ声を上げて、雪男はどすどすと俺に迫って来た。さほど速い動きとは言えなさそうなものの、図体がでかいだけにストライドもでかい。

舌打ちをしながら、剣を構えて立ち上がる。こんな狭いところで

戦えない。せめてさっきあいつがいた辺りなら、多分少しは広いだろう。

雪男に背を向けて俺は駆け出した。瞬間、足が滑った。

「うわあッ」

ずるッ。

立ち上がったその場ですてんとコケる。横にかかる力があったわけじゃないから、大して移動も出来ずに同じ場所で体勢を崩す羽目になった。あっと言う間に雪男が間近に迫る。

うつ伏せから仰向けに転じる間もあらばこそ、巨大な両手を広げた雪男がつかみかかって来た。咄嗟に足を僅かに振り上げて、その太いもじゃもじゃの足を力の限り蹴りつける。

バランスを崩した大猿を畳みかけるように蹴り付けると、今度は完全にバランスを崩しながらつーッと後方へ向かって床を滑っていった。『転走』は魔物にも有効らしい。予想外の勢いで雪男がすっ飛んでいく。

が、こっちも蹴り付けた反動を受けて体が勢い良く滑り出していた。そのまま水路に再び突っ込む羽目になる。その瞬間、衣類などを乾かそうと試みた時間の全てが無に返った。

とにかく、雪男が体勢を立て直す前に水から上がって通路に出なければ。

こんなところで戦闘なんか一層出来ない。

水の中で体を跳ね起こし、まとわりつくような抵抗の中、急いで通路に近づく。見れば雪男も体勢を整えて立ち上がったところだ。

「フンガアアアッ!!」

怒ってるんだろうか。

立ち上がって雄叫ぶ雪男には見向きもせず、水路から通路へ這い上がる。今度はコケてる場合じゃない。あいつだってそう何度も同じ手をくらってはくれないだろう。

バランスを意識しながら今度は駆け出すことに成功した俺は、どすどすと肉迫する足音を背にトンネルを抜けた。そこはやはり少し

広いスペースがある。最初に俺が水路から上がった場所と似ていた。違うのは、階段だけじゃなくて奥に続く通路がこのフロアにもあることだ。右と左にひとつずつ入り口があるから、どちらかがぐるりと迂回して、トンネルの向こうに続いているんだろう。

「うがあッ」

背後に迫った雪男の声と気配。腕を振り下ろす空気を感じて、身を屈める。空気を裂くぶうんっと言う音と共に、太い腕が頭上を通り過ぎた。振り向きざまに、剣を切りつける。切りつけた反動を受けて、俺の体がまた横滑りに移動した。今度はコケたわけじゃないけど。

「ギャアッ」

切りつけた刃が腕に当たったようだ。真っ赤な血をばたばたばたッと垂らしながら、雪男が顔を上に仰ぐ。

さてさて。

どうしよう。

闇雲に攻撃を仕掛けるのをやめたのか、雪男は血の溢れる片腕をもう片方の手で押さえつけながら、俺を睨みつけて喉の奥から唸り声を上げた。俺も目線を逸らさずに剣を正面に構えて、見据える。

まともに戦って勝てると思えない。

ただでさえ力があるわけじゃないのに、足下が滑るせいで一層剣には力がないんだ。大したアクションだって出来るわけじゃない。下手な動きをすれば奴の目の前ですってんころりんだろう。

いや……むしろそれを狙うか……？

背後に抜けられれば、目が後ろにでもない限り、正面より攻撃しやすいはずだ。雪男は壁を背にこちらを向いて立っている。背後に抜ければ壁を使って素早く立つことも可能かも……。

（うまくいくかはわからないけどなッ……）

どっちにしたって正面からは多分勝てないし、逃げられない。

なら、やるだけやってみた方がお得だろう！！

剣を抱え込むようにして、こちら側の壁を蹴り付ける。そのまま

スライディングよろしく足から雪男に突っ込んでいく俺に、雪男は咆哮を上げながら両腕を振り上げた。すり抜ける前に俺を捕まえるつもりだろう。あっちが素早いかこっちのスピードが勝つかだが、この床を滑るスピードはかなりのもんだと滑りまくった俺は知っている。

辛くも雪男の手を逃れてガニ股の間をすり抜けた俺は、壁に両足で着地するように滑るのを止め、同時に剣を壁に突き立てた。跳ね起きて引き抜いた剣を、俺を捕まえる為に前かがみになったそのでかい背中、中でも首筋めがけて突き立てる。

「ンギャアアア！！」

「うあッ……」

暴れる雪男に弾き飛ばされて、俺の体は反対側の階段に叩きつけられた。剣は猿の首筋に刺さったままだ。しまった、武器がない。

「ウオオオ！！」

怒りか痛みかその両方か、雪男は両腕を振りかざしながら、階段の途中に叩きつけられたままの俺めがけて突進してきた。ごぼごぼと言う変な音が混じるのは多分、首に剣が刺さったままだからだろう。

咄嗟に逃げようと体を捻る。が、足ではなく手が滑って上手く体勢を直せない。地面を揺らしながら迫り来る雪男に、もう駄目かと思ったところで雪男が足を滑らせた。

「……グボォッ」

仰向けにがんっと倒れ、びりびりと壁や床が振動する。見れば、俺が先ほど突き刺した剣が倒れた自身の重みと勢いで、完全に首筋を貫いていた。血がどくどくと噴き出して白い毛と氷を夥(おびただ)しい赤に染め変えている。

（た、助かった……）

止めはどちらかと言えば自滅って感じだったが。

多分俺の突き刺した剣の痛みで、この滑る床の上、平衡感覚を失ったんだろう。それで足を滑らせたせいで、剣が完全に雪男の首を

貫いたわけだ。
しばらく俺は、叩きつけられたままの階段に座り込んでいた。雪男が本当に動く気配がないことを確認して、立ち上がる。
途端。
ずだだだッ。
「いてぇー……」
滑り落ちた。
この階層を抜ける頃には、きっと俺の全身は魔物と無関係の痣だらけだろう。
打った腕だの足だのをさすりながら、顰め面で雪男に近づく。足で反対側にひっくり返すと、そのまま押さえつけて剣を引き抜いた。まだ新しい血がどばっと溢れ、返り血が跳ね上がる。
先が思いやられる。
こんなもんが徒党を組んで数匹で現れた日には、俺は一体どうすればいいんだろう。

◆◇◆

水路沿いの道は、しばらくは単調なものだった。ぼつんぼつんと右手にたまに広い空間が空いていて、時々トンネルがある。それの繰り返しだ。
（どこまで行けばいーんだろうなー……）
……飽きるな。
いやいや、飽きて気が緩んだところを何かに襲われないとも限らない。
とは言え、ずっと気を引き締めて歩くと言うのはなかなかどうして大変だ。
「ふわぁ……」
みんな、どうしたかな。
進む道は見つけたんだろうか。どこへ向かえば合流出来るんだろ

う。第3階層の出口は必ず通ることになるんだろうから、それを見つけることが出来れば活路は見いだせるんだろうけれど、既におかしな道筋を辿っているだろう俺は、キィがどれでどう活きるのかさえわかりかねる。

やがて通路が途切れ、上り階段にぶつかった。これまで見たような、スペースから続く階段ではなく、通路が途切れてそこに現れた階段だ。これ以上水路に沿った通路はなく、この道を進もうと思えば階段を上がるしかなくなる。水路は続いてるのに。

階段は短く十数段だ。上りきってすぐ左に折れていて、水路を跨ぐようにして向こうの壁の穴に消えていく。水路を越える歩道橋のような状態。

どうしようか迷い、上ってみることにした。一歩一歩慎重に階段を上がって行く。上に立って更に上流の方を見晴らしてみると、どちらにしてももう大して進んでいけるわけではなさそうだった。行き止まりになっていて、やや高い位置にある水が通れるだけの小さな壁の穴から水が出ている。水の上を浮かんでいる状態なら通れたのかもしれないが、今みたいに立って歩いている状態じゃあ無理だ。

俺、あそこから落ちたのかな。

……落ちたんだろうな。と言って別にそんな凄い高さがあるわけじゃないから投げ出されても痛くはないだろうけど、多少の浮き沈みはあっただろうに、どんだけ本気で意識不明だったんだよ。つくづくうつ伏せで流されなくて良かった。うつ伏せだったら意識不明のまま窒息死だ。怖い怖い。

水路を眺めるのをやめて、先に進もうと体の向きを変える。進む先は暗いようだ。カンテラを用意した方が……。

「……」

そう思ってから、その音に気づく。足音。静かな、ぺたぺたした。雪男のよりは軽そうだけど、どうだろう。

（階段……）

降りた方が良いだろうか。下の方がまだ退路が安定している。こ

こで慌てて逃げようとすればきっと、階段で滑ってずでで……となるのがオチじゃないだろうか。

そうは思うものの下手な動きは却って危険のような気がして、剣に手をかけながら俺はじっと前方の闇を見据えた。いつでも剣を抜けるよう構えた俺の目に、その姿が飛び込んでくる。――グリムロック。

前に風の砂漠のダンジョンで遭遇した奴だ。てらてらと濡れたように光る灰色の鱗状の肌。しっかりした体躯の上に乗る顔の中、眼球のない落ち窪んだ眼窩。握る手には、モルゲンステルン。

……多分、いける。対峙した経験がある魔物は攻撃パターンが予想できるから、幾分気が楽だ。と言って勝てるかは定かじゃないけれど。

こいつは特殊な攻撃の仕方は、特にはない。

小さな鼻の穴をひくつかせ、グリムロックががモルゲンステルンを振りかぶる。軽く地を蹴って振った武器のてっぺんについた鉄のトゲトゲが、数瞬前に俺がいた床にどごんとめり込む。橋が壊れたらどうするんだ。渡れなくなるじゃないか。

避けた俺に、グリムロックが更に一歩を踏み出す。踏み出しながら腕を横薙ぎに振り、振った先の橋壁にまたも鉄球がめり込んだ。その空いた脇腹めがけて剣を打ち込む。が、モルゲンステルンの握った柄の方で弾き返された。金属音と軽い痺れ。

旋回するようにモルゲンステルンをめり込んだ壁から引き抜いて、俺に振る。ほとんど条件反射的に上体を逸らして避けるが、鉄球から突き出たとげとげが俺の腕の肉を抉りとった。屈んだその姿勢のまま、地面に手をついてグリムロックの足を力一杯蹴り飛ばす。と、同時に手が滑り、グリムロックも俺も仲良くすてんすてんと転ぶ羽目になる。ああ、何か情けない。命かかってんのに。

単に手を滑らせただけの俺の方が、足蹴りをくらったグリムロックより体勢の回復が早かった。立て膝の姿勢で何とか剣を構えると、グリムロックに向けて両手で振る。確かな手応えを感じると共に、

反射的に振ったらしいモルゲンステルンが、俺の腹部に叩き込まれた。
「ぐッ……」
「ウガアアアア！！」
互いの攻撃を受けて、それぞれの体が飛ぶ。グリムロックの体はそのまま床を滑り、俺が先ほど上ってきた階段脇の壁に激突した。そのまま跳ね返って、勢い良く階段を転がり落ちていく。
「げほッげほッ……」
が、残念ながらそんなものを見届けている余裕がない。こちらはこちらで、モルゲンステルンを腹にくらって壁に激突してるんだ。咳き込んだ口から血が出た。
（いてぇぇぇ……）
激突したそのまま、腹を抱えて床に横向きに倒れこむ。微かに目を開けてみれば、腹を押さえる手に血が滲んだ。大量に出血してると言う感じでもないけれど、怪我をしていることにも違いはないらしい。
「げほッ……」
もう1度むせる。氷の床に、赤い飛沫が飛んだ。
「はあ……はあ……」
腹を抱えたまま、ころんと全身の力を抜く。階段を転げ落ちていったグリムロックは、上がってくる気配がなかった。しばらく俺もじっとそこで痛みを堪えていたが、滑らないよう苦労して体を起こす。壁伝いにゆっくりと階段の上に立ってみると、変な形にひしゃげたグリムロックが階下に転がっていた。死んでるらしい。
それを見てもう1度、床に座り込む。……くそー……痛ぇ。
トゲトゲで穴の開いたシャツを捲り上げてみると、腹にはトゲトゲに肉を抉られたらしい傷跡と内出血が見られた。……治癒薬……。
全身がずきずきと痛む。荷袋を漁って治癒薬を取り出すと、服用してみた。今までキグナスがいたから、使ったことはほとんどない。
（……あー）

微妙だなー……。

薬の効果を待って、少しの間じっとする。ここで魔物に襲われたら、もう無理。

やがて徐々に現れた治癒薬の効果は、魔法に比べれば微々たるものだった。そりゃあ、マ〇ロンとかオロ〇インとかよりは効いてんのかもしれないけどさ……。

「はあ……」
きついなー。
ため息混じりに立ち上がる。出血は治まっただろうか。でもそのくらいだ。痛みが軽減されたとはちょっと思えない。血のこびりついた腕と手を拭うすべもなく、剣を鞘に収めて荷袋を肩に引っ掛ける。こっちでいいんだろうか……。
当面進路に定めた壁に続く穴の方向に足を向けかけて、空気が動くような気配を感じた。こういう状況に晒されっ放しで数ヶ月、さすがに危機管理は多少は出来てきているらしい。……まだ、魔物がいる。
「＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊　＊＊＊＊＊＊＊」
ゴオオオ！！
そう感じた瞬間、前方の闇からオレンジの光が浮かび上がった。
解読不能の言葉。――魔法！？
「うわッ」
咄嗟にどうしようか判断に困った俺を救ったのは、まさしく『転走』の床だった。つまり動揺してバランスを失った俺は、すてんともはや何度目かわからない転倒をする羽目になった。その頭上を炎の塊が掠め飛んでいく。
「……ってぇぇ……」
そのうち脳震盪でも起こすんじゃないだろうか。
したたかに打ち付けた腰をさすりながら、体を起こす。その俺の目の前に、ゆらゆらと何かが近付いてくるのが見えた。変な仮面みたいなのをかぶった、黒いローブ姿。３０センチくらい、地上から浮いている。
（うわー……）
……ないわー……。

魔術師か？これ。人かどうかはわからないけれど、魔法を使う好意的じゃない存在だと言うのは見りゃわかる。

魔法使いに俺ごときが叶うと思ってんのかよ……。まじ、ないって……。

先ほどしまったばかりの剣の柄に手を掛けながら、じりっと床に片膝をつく。陸上の、スタートダッシュのような姿勢をとって、剣を抜き放った。魔術師は何も言わず、動きもみせない。

じっと静かに睨み合う中、再び魔術師が片手を動かした。得体の知れない言葉を放ち、浮かび上がった炎の塊が音を上げて俺に襲い掛かる。

「……ッ……って、あれ？」

咄嗟に片手で顔を覆った俺は、いつまで経っても襲い掛からない衝撃や熱さに、閉じた目を開けた。飛来してきてたはずの炎の塊は、どこにもなかった。

（……そうだった）

俺、火系攻撃は大丈夫なんだった。

つい忘れていた。

魔術師は不気味に沈黙したままだ。ともかくこのままじゃあ埒があかない。意を決して、剣を片手に低い姿勢のままで地を蹴る。もちろん、滑り止めのついた踵に力を込めて。

ぶんッ。

袈裟懸けに切りつけるが、今しがたそこにあったはずの魔術師の姿が消えるようになくなった。と思ったら、少し外れた位置で指先を伸ばす。空間移動の魔法は基本的にはないと聞いているから、移動したんだろう。

「くそ……うわッ……」

炎の魔法は通じないと理解したらしい。次に魔術師の指先から放たれたのは、氷の礫（つぶて）だった。めでたくまともに喰らう羽目になる。

「くぅッ……」

細かな氷礫が連射のように叩き込まれ、これは相当痛い。腕や顔

のあちこちを抉られ、飛来するスピードで床に叩きつけられた。
「げほッ……」
またもむせこむ羽目になった俺に、宙に浮いたままの魔術師が無言で片手を振り上げる。その手の平にバリバリと生まれてゆく一際でかい氷の塊。それをどうする気かは聞かずともわかる。
終わった。
やっぱり俺程度じゃあ、ひとりでダンジョンを抜けるのは不可能だ。
今度は逃れられないだろう衝撃を予想して、そのくせどこか平静な気持ちで着々と育つ氷の塊に目を向けている俺の目の前で、いきなり魔術師の体がこっちめがけて吹っ飛んできた。
「うわ」
自分の意志で、という感じじゃない。後ろから予想外の衝撃を受けて吹っ飛ばされた感じだ。思わず伏せる俺の背後で、魔術師が氷壁に激突したような音と振動が感じられた。
（な……？）
「カズキッ……」
思わず背後を振り返って魔術師の末路を唖然と見つめる俺の耳に、声が飛び込んでくる。軽い足音。
声の方向……階段に顔を向けた俺の目に、紫の髪が揺れるのが見えた。

◆◇◆

「ナタ……！？」
余りと言えば余りに予想外の人物の登場に、開いた口が塞がらない。床に叩きつけられたまま座り込んでいる俺に、階段を上りきった少女……ナタが駆け寄ってくる。
「間に合って良かったよ。あんた、行方不明になっちゃうんだから」
行方不明って、どこの時点からの話をしているんだろうか。

「ナタ、どうして……」
「あ」
驚いたまま目を見開いて見つめる俺の問いは完全に無視して、ナタは俺の背後に目を向けた。つられてそちらに目を向ける。
「あ」
コローン。
何が起きたのか不明だが、壁にぶち当たっていたはずの魔術師の体が消えていくところだった。代わりに何かが床の上に転がり落ちる。
「やりぃ。アイテム持ち♪」
「アイテム持ち？」
「そうそう。たまーにいるんだよね。魔法使うような奴には結構多いけど」
言いながらナタは、軽い足取りでそっちに駆けていった。『転走』の床も何のその、まるで影響を受けていないような足取り。
「あー。残念だね。これはカズキには使えないなぁ」
「何？」
「魔術師のアイテムだね」
言ってナタが示したのは、チェーンのようなものに繋がったリングだった。キラリと金色の光を放つ。
「ロッドに装備するんだよ。魔法の威力の増幅になるはずだ」
「へえ……」
言いながらナタが俺に渡してくれるので、つい受け取る。
「もらっていいの？」
「あたしはいらないし」
魔法の威力の増幅……キグナスにあげれば喜ぶかもしれない。再会出来たらの話だが……って、だから！！
「……ナタ、どうしてここに」
「いちゃまずい？」
まずいとかまずくないとかって話じゃなくておかしいだろが。普

通に。
「ともかく、痛そーだねー。ちゃっちゃと治すか」
「……え？」
まだ床に座り込んだままの俺の横にナタもぺたんと座って、にこっと笑った。相変わらずの大人びた眼差しとあどけない笑顔。……治す？
「アモル・オムニブス・イーデム。我らを守りし偉大なる女神ファーラよ。……癒しを！！」
瞳を閉じたナタが言葉を放つ。……神聖魔法！？ちょっとユリアとかクラリスと呪文が違うような気がするけど、概ね、似てる。優しい光が俺に降り注いだ。
「ナタ……」
目を見開いたまま、体が軽くなるのを感じる。傷が癒され、痛みが吸い取られていく。
「はーい。カズキくん、ふっかーつ」
ぱちっと目を見開いて、猫のような両目をくるくるさせたナタは、勢い良くひょこんと立ち上がってばしっと俺の肩を力一杯叩いた。
「いてぇッ……」
「あれ？まだどっか痛い？」
じゃなくてあんたが叩いたんだろーが、今。
「……すっげー聞きたいことがいろいろあるような気がするんだけど。俺」
どうしてここにいるんだとか、俺と再会したのは偶然なのかとか、偶然じゃないなら何の為なのかとか、どうやって俺の居場所がわかったのかとか、さっきの魔物に何をしたんだとか、そもそも治癒をしてくれたってことはナタって魔法が使えるのかとか、じゃあどうしてあの時わざわざメディレスにやらせたのかとか、ひとまとめにして何者なのかとか！！
「気のせいだよ多分。じゃあ行こうか。それともここに座ってる？」
これだけの疑問の数々を「気のせい」で片付けるな。

俺より年下の少女に翻弄されながら、仕方なく俺は押し黙って立ち上がった。握ったままの剣を鞘に戻す。
「ともかくさ、先に進みましょ」
「ナタは、一緒に行ってくれんの？」
「だーってカズキだけじゃ危なくてしょーがないでしょ」
ぐ……。
そりゃあそうだが、屈強な男とかに言われるならともかく、年端もいかない少女に言われるといかにも情けない。
とは言え、人を見かけで判断すると痛い目を見る。ナタが今し方、俺がやられかけてた魔術師を一撃で始末したのは疑いようのない事実だ。
「……何者なの、ナタ」
過去にもこの問いは口にした気がする。見つめる俺の視界の中で、ナタは少し意味ありげな笑みを浮かべた。どこか……儚いような。寂しいような。
（……？）
「何者なんでしょ。さてさて、こっち？」
「知らない」
「知らないって何よ。こっち行こうとしてるんでしょ」
「それはそうだけど、別に目的があってそっちに行こうとしているわけじゃない」
「……じゃあ何でこっちに行こうとしてんのさ」
「何となく」
ナタも別に道を知っているわけじゃないんだろうか。
首を傾げる俺の前で、ナタは小さく口の中で何か呟いた。が、特に変化は……。
「……あれ？」
目の前の暗い空間が、暗くなくなった。日の射す、普通の場所のように辺りが見て取れる。目を瞬いている俺を見上げて、ナタがにーっと白い歯を見せた。

「便利でしょ」
「何……魔法？」
「神聖魔法『可視皓』。『導きの光』とか『灯火』みたいに目に見える炎を灯すわけじゃなくて、本人の暗視を助ける。猫の目みたいなもんだ」
つまり夜目が効くようになったと言うことだろうか。これは便利かもしれない。炎を掲げているのは敵にも目印を与えることになるが、これは要は周囲は真っ暗に変わりはないわけだろ？
「へえ～……」
「こっちに行くと何があんのかなあ……」
「……ナタ、どうして俺がここにいるってわかったの」
弾むような足取りで、俺の数歩先を歩くナタの背中に問いかける。顔だけ微かに振り向かせてから、ナタはまた前に向き直った。
「わかってたわけじゃないけどね。あたしね、神殿とか祭壇とか、場所にも寄るけどそれを使って移動することが出来るちょっと変わった能力があんの」
「――え！？」
いや、それは『ちょっと変わった』どころじゃなくて『相当変わっている』と思うんだけど。
「だからって何を出来るわけでもないけどね……。だから、カズキの後を追ったわけ」
……『だから』がどこにかかってるのかわからない。祭壇や神殿を使っての移動が出来るから俺を追うと言うのは意味不明だろう、やっぱり。
「そしたら第3階層でカズキ、ひとりで行方不明になっちゃったでしょ。これは大変だってわけで探したんだ。そしたら……カズキ、壁に傷を作って歩いてたじゃない」
「ああ……」
「あれを見つけたし。ああこっちに行ったんだなあってわかったから、追っかけてみたの」

……凄ぇ納得出来るような出来ないような……。
「何で俺の後を追うの」
「危なくてしょうがないから」
「くッ……いつから？」
「最初から。でも別にずっとじゃない、時々だよ。あたしだって別に暇なわけじゃない」
最初からかよ？
言葉を失う俺の前で、ナタはくるんと俺を振り返った。にこっと笑う。
「……カズキはこの世界の住人じゃない。いろんな意味で心配だった。その心配は、当たっているみたいだけど」
「え……？」
「そのうち教えてあげられる、かな？あげられないかな？どっちかな？」
なぞなぞのように、歌うように、また前に向き直りながら、ナタは軽い足取りで先に進んで行った。ああ、意味がわからない。
答えてくれるかはわからないけど、とにかく聞くだけは聞いてみよう。いくつか質問を投げかければ、そのうちいくつかは答えてくれるかもしれない。
「じゃあ、何者なのかは置いといて……神聖魔法を使うってことは、ナタは、プリーストなの？」
エルファーラの人とかは、それっぽい能力を備えている人もいるみたいだけど、ちゃんとした神聖魔法は聞く限り修行とか勉強とか、何かそういうのが要りようのようだ。それを思えば神聖魔法を使うナタはちゃんと学んだ人間――プリーストと言うことになる。
「……そうね……そう言えるかな」
こんな小さいのに！？
そうは思うものの、そう言われれば納得がいくような気がした。
あの時……前に会った時にナタが得々と俺に語ってくれた話の内容……プリーストの言葉だと思えばその内容に納得がいく。どこか神

がかっていると言うか。
「じゃあ何であの時、わざわざメディレスに回復魔法を使わせたの？」
プリーストなら、ナタが自分で回復魔法を使えたはずだ。だけどパララーザでナタは、メディレスを呼んで俺の回復をさせた。魔法をケチったわけじゃないだろう。
ナタが足を止めて俺が追いつくのを待つ。壁の中の通路は、狭く、ただただ直進だ。先に明かりが漏れてくるのが見えている。
「あたしはね、パララーザに神聖魔法の使い手だと知られたくないのさ」
「何で」
「ううん。パララーザに限らず。……カズキも変だと思ったでしょ。あたしが神聖魔法を使うのを」
「ああ……うん……まあ」
何でこんな小さい子が、とは思った。
「だから。あたしが何者なのか興味をそそるような真似は、極力したくないのさ。こんな小さな子供がってただそれだけで、興味を引く対象になってしまう。それが嫌なだけ」
「……ああ……そうなんだ」
じゃあ、ナタのことをあれこれ聞くのはまずいだろうか。
んでも、気になるもんは気になるんだけど。
「あとは聞きたいことは？」
俺の考えを見透かしたようないたずらっぽい笑みに、言葉に詰まる。そう言われると……聞かれたくないものをあれこれ聞くのもどうかと思うじゃないか。
「……シサーたちが、どうしているかは知ってる？」
少し迷って、俺はやや方向をずらした問いを口にした。ここまで俺を追って来たんだったら、知っているかもしれない。けれどナタは首を横に振った。
「わからない。そりゃあ最初のだだっ広いところまでは、あたしだ

って知ってたけどね。その後はカズキを追って来ちゃってるんだもん。あたしは別に、千里眼じゃないんだから」

「そうなの？」

「そりゃそうだよ。神様じゃあるまいし。身を隠す術に長けているだけ。あとは、ちょっと変わった能力があるだけ。……それだけ」

「ふうん……」

やっぱり何か納得がいかないけど。

曖昧な表情で頷く俺に、ナタが笑顔を向けた。

「ともかく姿を現しちゃったしね。このダンジョンを抜けるまで、一緒にいてあげるからさッ」

第2部第2章第23話　海底のダンジョン4　【虚影】　前編（1）

「あ、カズキ。出た出た」
「え？」
「魔物。来るよ」
第3階層『転走』。
俺たちのとっている進路は、進んでいくうちに階層内の階段を上がることを余儀なくされ、必然的にフロアが少しずつ上がっていった。
そしてこの階層は、フロアを上がっていくに従って、魔物の出現率及び強さが……上がっていった。
にも関わらず。
「んじゃ、頑張ってねー」
「ナタッ。手伝ってくれよッ」
「ガルルルルッ……」
「……あたしはいみじくも神に仕える身……そーんな戦うなんて怖くってえー」
殴るぞ。
そんな感じで、ナタは戦闘にほとんど手を貸してくれないのだった。
基本、見てるだけ。
自分が襲われたら、避けるだけ。
ここで再会した時に、ナタは神聖魔法の攻撃魔法を使った。しかもあの魔術師を一撃で吹っ飛ばしたんだ。となればかなり上位と言うか上級の魔法を使いこなすことに間違いない。
その気になれば遭遇している魔物をばんばん片づけていけるに違いないのに。
「あ、ほら、カズキ、たいへーん。後ろからもう1匹～」
大変だと思うなら、手伝えよなッッッ。

「ナターーーッ！！」
「頑張ってねー」
……ぶっっっっっ殺すッ。

一事が万事この調子なので、せっかくひとりじゃなくなったにしろ、戦闘は期待したほど楽なものにはならなかった。
とは言え……。
「ああ、痛そー……『アモル・オムニブス・イーデム……』」
怪我を治療してくれるのはやっぱり、ありがたいんだけどね……。
「さってっと……どっちに行ったらいーかなあ……」
ナタと再会してから、丸1日は経過したんじゃないかと思われるくらいの時間が過ぎた。さまよって水路からも完全にはぐれた俺は、そこからの位置関係からして既にわからない。
一応、要所要所に傷をつけるのだけは怠らないで続けてはいるんだが、これだけ距離を歩いてきてしまったものをどうする気にもなれない。こっちが間違ってるかどうかの確かめようがないし、そうだとしたってじゃあこれまで通り過ぎてきた分岐点のどれが正しいかを確かめると言ったって……考えるだけで気が遠くなる。
今歩いている道が行き止まりにでもなりゃあね……諦めもつこうってもんだが。
続いてしまうので、こちらもつい歩いてしまう。
「また分岐ー。どっちかなあ」
「さあね。先の方に何か見える？」
「んー……あ、こっち、更に分岐してるみたいだよー。左は……階段に続いてるね」
「じゃ、階段」
まあ、ひとりでこんな先の全く見えないところでさまよっていることを考えれば、一応こうして相談出来る相手が一緒にいると言うのはやっぱりありがたい。
例えそれが、何ら建設的なものでないとしても。

「また階段なの？」
「だって俺、結構深い湖に沈んで流されたんだ。普通に考えて、俺はシサーたちより下にいたってことになるだろ」
「うーん。まあねえ」
「だったら、上に上がる方が何となく元の場所を目指してる気になる」
全く浅はかな根拠だとは思うが、しょせん指針になるものは最初から何もないんだ。どう考えようが俺の自由。
ともかく、魔物が強力になっていくことを承知で、出来るだけ上の方向に続く道を目指して俺とナタは歩き続けた。逃げ回って下にばかりいたんじゃ、どうにもならないだろう。
「何だろねーこれ」
今俺たちが歩いているフロアは、それほど分岐が多発しているわけではなかった。しばらく一本道、それから分岐、進むとまたしばらくは一本道……と言うような感じだ。歩いている先の通路の床を見つめて、ナタが不意に首を傾げた。
「え？……ああ」
通路の床に時々見かける変な模様だ。真ん中に二重の円、その周囲を取り囲むように菱形の模様がぐるりと円を描いている。菱形の模様はちょうど時計の文字盤のような配置になっているみたいだった。１２個。
白い床に掘り込まれているから、模様も総じて白いんだけど、菱形の模様にはひとつだけ常に赤いのが混じっている。意味ありげではあるが、意味はわからない。
しばらく続いた一本道が進んでいくうちに緩やかなスロープに変わり、魔物にもめでたく数多く遭遇し、数多の傷を負ってはナタに回復してもらい、やがて小さな泉の湧いているそこそこ広いスペースに出た。
この『転びまくり』の足場で緩やかなスロープになり、挙げ句魔物と戦闘すると言うことがどれだけ悲惨なことか。まあ、雪男との

戦闘のように、むしろそのスロープを利用して何とか勝機を掴めたのだから一概に悪いとは言えないのだろうけれど。
「……あ、ここ」
「ここ？って何？」
泉に目を留めたナタが、ぽつんと呟く。
スペースは歪んだ円形をしているみたいだった。ここへ続く道は複数あるみたいだ。逆に言えば、あちこちへと続く道が泉を中心に放射状に伸びている。もちろん先は見えない。
「あたし、前にも来た……？」
「前にも？」
前ってほど昔に訪れているわけではないだろうから、今回俺を追っていた間に、と言う意味だろう。
「うん。……多分。それとも良く似てる別の場所、かなぁ……」
「じゃあ……」
ナタが俺を探している間に通ったってことは、元の……氷原に続く道に出たってことだろうか。
「……ねえ。ナタって、どうやって俺を追って来たの？」
何となく泉に近づいてみる。小さな泉の真ん中にはやっぱり氷の質感を思わせる彫像が立っていて、手に持った水瓶から水が注がれる趣向のシロモノだ。
「ん？どうって？」
だから道筋とかさ、と言いかけて言葉が止まる。
「どうってほどのこと、してないよ。……カズキが行方不明になって、どうしようかと思って」
……ナタは、「神殿や祭壇を使って移動が出来る」とか、言ったか？
最初にそれを聞いた時は、単純に最初の……ダンジョンに入ってくる時のあの神殿を思い浮かべてて……そしてそれは間違いじゃないんだろうけど、でも良く考えたら、そうやって移動したのが最初だけであとはあの氷原から足で歩いて来たんじゃ、俺が流された深

い水路まで辿りつけるわけがない。ナタが言ってたのは、シサーたちのいたあの氷原からこの内部まで潜り込んだ手段そのものを指してた……？

「ナタ……」

「……中まで入って、あたしはカズキの気配がわかるから、それを頼りに歩き回って……だから歩いた道なんかはっきり言って覚えてないし」

「え？」

「ここを通ったのは多分確かだとは思うけど、戻り方なんかわかんな……え？」

俺の気配がわかる？

意味不明なことを言われて、言いかけた言葉を飲み込む。その意味を尋ねると、ナタは瞬きを繰り返しながら答えた。

「だからさ、カズキは『異質』なんだって何度も言ってるでしょ。白いものの中に黒いものが混じってたら、目立つでしょ。あたしにしてみたら、音鳴らしながら歩いてるみたいなもんなんだよ、カズキって。だから『こっちの方にいる感じがあるなー』ってのがわかるんだもん」

ああ、そういうことか。

「ナタ、氷原からこの……内部までは、祭壇を通ってきた……？」

わかるようなわからないような気分でとりあえず納得しながら尋ねると、ナタは俺を見上げたままで「うん」と屈託なく頷いた。

「じゃあ、この階層内には、祭壇がある……？」

「あるよ」

――くそ……馬鹿か、俺はッ……。

『祭壇』――『神の言葉に従え』。

キィじゃないかッ……。

「ナタ、氷原から内部に来た時の祭壇ってのがどこにあるかは、覚えてる？」

俺の質問に、ナタはスペースから幾筋も続く通路をぐるっと見回

した。
「……わかんない」
「……だよな」
こうなったらひとつひとつ、虱潰しに探すしかないだろうか。
ナタは特殊な経路を使って俺を追って来た。残念ながら普通の人間である俺には祭壇から氷原へ戻るなどと言うおかしな真似は出来ないから、ナタがここへ来た道を使って最初の場所からリスタートするなんてことが出来るわけがない。
だけどこの階層に祭壇が存在し、キィになるのが司祭の言葉であるのなら、出口に辿りつくことは可能かもしれない。
「とにかく、祭壇があることに間違いはないんだよな……」
「それは間違いないよ。じゃなきゃいくらあたしだってこんなとこまで追っかけて来られない」
「どの通路から来たんだろうな……。ナタ、覚えてること、何でもいーから教えてよ」
「覚えてること？」
「祭壇からこの泉までの行程で」
とにかくひたすら俺の気配を追うことに集中してたんだろうから、あんまりいろんなことを覚えてはいないんだろうけど……でも例えばどのくらいかかったとか分岐があったとかなかったとか。
「うーん……そうだなあ……」
ナタはきゅっと眉を寄せて、思い出すような目つきのまま天井を睨んだ。
「そんなにすぐ近くでもなかったと思うけど、遠かった覚えもあんまりないなぁ、ここに続く祭壇からは。で、確か真っ直ぐ……」
「ふうん。じゃあ正しい通路がわかれば祭壇までは結構すぐ……」
……って……は？
『ここに続く祭壇からは』？
「うん。そうだね……」
「……ナタ」

「うん？」
「……祭壇って、その……いくつか、あるの」
ナタの言葉に引っかかりを覚えた俺が恐る恐る尋ねると、ナタは「うん」と無邪気に頷いた。
「うまい具合にカズキに近いところに出られなくてさ、あたし、カズキの気配を追いながらいくつか祭壇をハシゴしたもん」
ハシゴかい。
（どういうことなんだろう……）
この階層の中に、今までの階層にはなかったと思われる祭壇があるってことは、伝承の内容と併せて考えたってその祭壇が何らかのヒントになってるとしか考えられないんだけど、それがいくつもあるってのは、どんなわけなんだ？正解がいくつもあるってことなのか、それとも第1階層のように、ひとつだけが正解なのか。
普通に考えりゃ、正解はひとつだろうな。でもどーやって正解の祭壇を見つければいーのかがわからない。……ま、いずれにしたって祭壇に辿りつけなきゃしょーがないし、とりあえずは手近にある祭壇についてから考えてみた方が良いだろう。
まずは、ここから祭壇への道。
さあ、どれだ？
何かヒントになるものがあったりするんだろーか。別に、ないんだろーか。……そもそも、正しい道を辿ってた場合どこからその祭壇に来るもんなのかって問題もあるよな。俺はもちろんおかしな方向から来ているだろうし、ナタだってとんでもない……およそダンジョンの制作者の予想を大きく外れたところから出現しているだろうし。そう考えると祭壇へ続く道に何らかのヒントがあるにしたって……ここにあるとは考えにくい……。
（あ、でも）
こんだけ幾つもの分岐があるんだとから、逆に言えばどこを歩いていてもここに集中してくる可能性ってのは高いだろーか。どこを彷徨っていてもここに集まって来て、ここにあるヒントを元に祭壇

へ続く道へ進むことになる、ような。
そうすると『祭壇は幾つかある』ってのが良くわからなくなってくるが、ま、それはそれ。考えてもわかりようがないから、放っておこう。
んじゃあここに何らかのヒントがあると決めつけて。
（ウンディーネ……？）
出口に繋がるキィが『神の言葉』――祭壇なんだとしたら、その前、湖から助けてくれた『ウンディーネ』は、俺たちに救いの手を差し伸べてくれないだろうか？
だって、いるじゃないか。『ウンディーネ』なら、そこに。
とりあえず泉にヒント探しのターゲットを定めることにして、俺は良く観察してみることにした。ナタが俺の真似をして隣に立ち、じっと泉に目を向ける。
泉の大きさは４メートル四方くらいの方形。水を湛えるその周囲を青みを帯びた石でぐるりと囲ってある。高さはちょうど膝くらいまでで、それほど高くはない。座るのにちょうどくらいの高さ。
そして中央に１メートルくらいの高さの台座があり、上にはやはり青みを帯びた氷のような女性像。高く掲げた手には水瓶。その口から、澄んだ水が下の泉に注がれている。
彫像は、緩やかに波打つ長い髪を腰まで垂らし、薄布のようなものを纏った半裸のような姿だ。
しげしげと彫像の姿を見つめる俺の視界でふと、赤いものが揺れたような気がした。視線を下げてみると、水の中……ウンディーネの土台を中心に、水底には何か模様が描かれているみたいだ。
覗き込んでもっと良く見てみようとしても、注ぎ込まれる水が波紋を作り、あまり良く見えない。
「カズキ？何かあった？」
「わかんないけど、底に何か模様が見える」
言いながら片足を掛けてトン、とその縁に飛び乗る。少し高い位置からの方が見やすいだろう。ゆらゆらと細かな波を刻む水面に揺

られて良くは見えないけど……その模様と同じものには、覚えがあった。通路の床に時々あったものだ。

時計の文字盤のように１２箇所に打たれた菱形の窪み。１箇所だけ、赤い石がはまっているのも同じだ。

……この、赤い石の方向が進行方向？

そう思って見比べてみれば、水底の模様の延長線上には確かに通路が存在している。俺たちが通ってきたものを含めて、１２本。

じゃあ、この赤い石が進行方向なのかなと思いかけて、何かが頭の中に引っかかった。それはそれで良いとして、今までの通路にあったのは何の為だったんだろう？

何か、理由があるのか？

「カズキー」

……あるのかもしれない。この、水の中の模様の意味を正確に理解する為の、何かが。

性急に答えを出すのをやめて、今まで見かけたこの模様のことを思い返してみる。これまで、どんなところで見かけた？

全部に気がついたかどうかは定かじゃないけど……。

（……あ）

思い返してみて、ひとつの共通点に気がつく。ここに来るまでにこの模様が刻まれていた床は、全て一本道、だ。

しばらく、分岐や交差のない通路。直進だったりカーブしてたりってのはあって、赤い石の位置ってのは俺たちが歩いてきた方向に対しては多少まちまちだったけど……。

（……）

……まちまち？

何で？今、俺が考えたのは、『赤い石が進行方向』だ。それがこれまでの通路でも適用されているかはわからないけど、一貫性を求めるならば、そうであるべき。だけど振り返ってみれば赤い石の方向は進行方向ではなかった。……むしろ進行方向を指してたものは、ひとつもなかった。

じゃあ進行方向を指してたのは……？

「あ……そうなのか……」

だから分岐のない一本道にしかなかったのか……。

「何？何かわかった？」

「わかった」

すとんと泉の縁から飛び降りる。進行方向をいつも指していたのは、赤い石から右に5番目の窪み。俺が思い出せる範囲での話だけど。

通路によって向きが変わってたのは、通路が直進だったりカーブだったりして通路そのものの角度が違ったことと、模様の描かれていた位置が必ずしもカーブや角と一定距離ではなかったから。だからそれに対して、赤い石の位置がまちまちに見えた。

必ず一本道にあったのは、分岐点にあったんじゃあ正しい道のわからない来訪者に『赤い石から5番目』が正しい進路を指すものだと確信を持たせられないからだ。一本道なら、進むべき方向は決まっている。赤い石から5番目の窪みが常にその『定まった方向』を示していると気がつけば、ここでヒントにすることが出来る。

その考えに従って赤い石から右へ5番目の窪みの延長線上の通路を進み、小1時間くらい進んでみると、果たして祭壇が姿を現した。俺の分析能力も馬鹿にしたものじゃない。

「やった。さーすが」
「……って一概に喜んでもらんないんじゃないか」
飛び跳ねるナタに苦笑しながら、祭壇に視線を向ける。俺たちの目的は別に、祭壇そのものじゃない。祭壇を使って、この階層の出口を見つけることだ。つまりこの祭壇で何をどうするかがわからなければ、どうにもならない。
さて。
「どーしよっか……」
何にしてもまずは、祭壇を調べて……。
ズシン……ッ。
祭壇の方に向けて足を踏み出し掛けた全身に、地鳴りするような床からの衝撃が、伝わった。

◆◇◆

「何だッ!?」
「ありゃー。こりゃあ大物当てたかもよ?」
嬉しそうに言うなよ。
ナタをじろっと睨んでから、剣を抜き放つ。地響きの方向は……。
「左か」
「左だね」
祭壇を中心に据えて左右の奥へ続いていく通路。その左側から、こちらへ向かう重い足音が。
「まったく……嫌な予感だなッ……」
剣を握る手に、汗が滲んだ。俺で太刀打ち出来る相手ならいーけどな。
そうため息をついた俺の目に、その姿が飛び込んできた。

「……あ～……悪いね、ナタ」
「何さ」
「終わったわ」
暗い通路からのっそりと姿を現したのは、巨大な爬虫類型の生き物。言い換えれば、小型のドラゴンのような姿をしている。しかも、ところどころ腐敗しているように崩れて異臭を放っている。ワイバーンやワイアームに似てるが、見たことはない、な。
「クォォォォッ……」
何とも表現しにくい音を吐き出しながら、そいつは俺たちに向かって威嚇するように尾を振り上げた。その尾も、ずるりと皮が剥がれ掛けている。
「おっと。こりゃあ今のカズキには結構大物だね」
「……何て奴」
剣を構えて腰を低く落としながら、尋ねる。視線を魔物に固定したままの俺の耳に、「ドラゴンゾンビ」と短く答えるナタの声が届いた。……ドラゴンゾンビ!?ドラゴンじゃないか。
「……ドラゴンって5匹しかいないんじゃなかったのかよ」
「ああ……そりゃあドラゴンの中でも特に覇種（はしゅ）と呼ばれる奴らだろ。小型のも、いるんだよ。あれはそれのアンデッド型だね」
そんなあっさり言ってくれるな。小型と言えど十分でかいぞ。バシリスクにはそりゃああれよりでかいのもいくらでもいたが、そん時はシサーと言う戦力がいた。キグナスもニーナも……ユリアも。
だけど今は、俺ひとりなんだからな。
ドラゴンゾンビは、ずるっと体を動かしてこちらに移動してきた。変な音と異臭は相変わらずだ。動きはそれほど素早いわけではなさそうだけど……。
「……防御くらいはした方がいーかもね」
地響きを上げて近づく姿に、短く言ったナタが魔法を発動させた。
……と。
「ッッッッ……！！！！」

不意に、魔物の姿が視界から消える。消えたと思ったら、全身に骨が砕けるんじゃないかと言う強い衝撃が襲った。

まじかよ？こいつ、おっそろしく動きが速いぞ！？

消えたと見まごうスピードで移動したドラゴンゾンビが振った尾が、自分の体を弾き飛ばしたんだと気がついた時には、右側の壁に全身を叩きつけられていた。

「げほッ」

辛うじて握った剣は手放さずにいる……らしい。むせこみながら体勢を立て直そうとするその前に、また体が宙に舞う。脇腹に熱い痛みを覚えた。

「カズキッ」

ナタの悲鳴が聞こえる。そう思った時には、また壁に激突していた。

全然……歯が、立たねーじゃん……。

「クォォォォッ」

痛む全身に体を起こそうと試みていると、閉じた瞼の外がカッと一瞬白く染まり、続いて魔物の咆哮が聞こえた。痛みに怒り悶えるような声に薄目を開けると、ゾンビの体が白く発光しているみたいだ。まるで、白い稲妻に絡め取られているように、時折放電するような光が空へ走る。

「……ナタ……」

見ればナタが小さなロッドを構えるようにして、ドラゴンゾンビを睨み据えていた。風もないのに、何かに巻き上げられるように揺れる長い髪。

「……」

ナタが口の中で何かを呟く。ドラゴンを包む白い光が一瞬凄まじい光を放って視界を奪ったと思ったら、次に目を開けた時にはその姿はどこにもなかった。……そんな馬鹿な。

「うーん。やっぱりカズキにはちょっと荷が重かったなー」

「……あのねえ……」

そういうこと出来るんだったら、早めにお願いしますよ……。
がくんと全身の力を抜いて、打ちつけられた場所でそのまま床に崩れる。手加減なく2度も壁に叩きつけられりゃ、体中が痛い。慣れない。
「……ナタって、おっそろしく強いんじゃないの、もしかして」
ロッドを長い上着の裾の下にしまいこみながらこっちに近づいてきてしゃがみこんだナタに、床に転がったまま目だけ上げて尋ねる。猫のような目を瞬いてナタは笑った。
「やあだよー。こんな可愛らしい女の子捕まえて」
近所のおばちゃんみたいに言って笑いながら、俺に回復を施してくれる。
「ありがとう」
「どういたしましてー」
「……でも、もっと早くに手を貸してくれてもいいよ?」
立ち上がりながらぼそっと言うと、ナタはぺろりと舌を出して振り返った。
「あたしが手を出しちゃうと、カズキ、強くなれないじゃない」
「手遅れになったらどーすんだよ」
「手遅れにならないだけの防御をしてるもん」
……それであれだけ痛かったってことは、なかったらあの一撃か二撃で死んでたってこと?俺。
「カズキ、筋はいーもん。剣捌きは悪くない。もっと自信持ってやってりゃ、きっともっと強いと思うのに」
「……」
短く息を吐いて、手に握ったまま何の用もなさなかった剣を収める。ともかくも魔物はいなくなったわけだし、祭壇を探ってみて脱出の仕方を何か得ないと。
そう思って祭壇に近づくと、祭壇に飾られている棒の天辺に輪っかがいくつかついているやつが、シャランと音を立てて仄かに光った。……ああ、そうか。今頃気がついた。この飾りの棒って、ファ

ーラの錫を表してるのかな……。
「＊＊＊＊＊＊＊＊」
どこからともなく声が聞こえて来る。聞き覚えのある声に顔を上げた。１番最初の神殿で聞こえたのと同じ声。だけど、何を言っているのかはさっぱりわからない。……妖精語？
声はまだ続いている。わかりもしないくせについ黙っている俺の横で、ナタが目を瞬きながら宙をくるんと見回した。
「＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊　＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊」
声が途切れる。
「……まずい」
「何？」
「何て言ってるのか、さっぱりわからなかった」
そう言えば今まで、ニーナじゃなけりゃどうにもならない場面ってのがあったっけ。言い換えれば妖精語が操れないとどうにもならないって場面が。
各階層ごとに『資格』とやらを試されるんだとすれば、この階層内でシサーたちと合流しないと抜けられないぞ、俺……。
「わからなかった？って？……今の、おっさんの言葉？」
そのことに気づいて祭壇を凝視したまま固まる俺を、ナタが見上げる。頷く俺に、こともなげに続けた。
「あたし、わかるよ？」
「……え！？妖精語じゃないの！？今の」
「妖精語だねえ」
あんたは妖精か？
「だって妖精語って……」
「うん。人には発音できない音が入る。だからあたしも、話せはしないけどね」
ヒアリングなら出来るってわけか……。

「……ホントに君、何者なの……」
「さあて、何者でしょ。さ、行こ行こ」
「行こって」
「今の声、道を教えてたよ」
「え？」
「こっちこっち」
軽やかな足取りで、ナタが右の通路へと歩き出す。慌ててその後を追いかけた。
『神の言葉に従え』――祭壇で、妖精語で道を教えてくれるってことだったのか。
ヒントを聞いたはずのナタについて、しばらく歩く。最初の分岐から先は道が多岐に分かれていて、なるほどこれは教えてくれなきゃ正しい道を行ける確率は何十分の一……もっと少ないか？
とは言え、あんまりまとめて教えられても覚えられるもんじゃない。しばらく曲がって分かれて戻って曲がってをしていくと今度は壁に小さな祠があり、そこでまた続きの道を教えてくれる。
6個目か7個目の祠を過ぎた頃、ようやく広い場所に出た。
泉のあった空間と同じくらいのスペースがぽっかりと空いていて、行き止まり。奥の壁のところには、また、女神像。
「あ、いたいた」
女神像の姿を認めて、ナタが小走りにそちらへ向かう。その後をゆったりと追いながら、きょろっと見回してみた。
ここに通じる道はこれ一本みたいだな……。ってことは、ここがこの階層のゴールだとすれば、ここにいればシサーたちが来る？
女神像の両サイドには、宝箱がひとつずつ置かれている。近づいてみると、開けられた形跡はなさそう。もちろん俺には開けられない。ああ鍵開けが出来ればな。やっぱり今度、教えてもらおう。
それはともかく、じゃあシサーたちはここにまだ来てないってことになるよな？シンたちがいて、宝箱が荒らされないわけがない。
それとも、ここから先がまだあるんだろうか。この階層の中に。

祭壇がいくつかあったってのが気にかかるんだけど……。
「ここでどうするとか、言ってた？」
女神像を見上げているナタに尋ねる。ナタはくるんと振り返ってから、女神像を指した。
「錫と剣を入れ替えろってさ」
ここの女神像も、フルバージョンだ。右手に剣を、左手には錫を持っている。
少し迷ったが、双方に手を伸ばして外してみた。背の低いドワーフ対象のせいか、俺の身長なら余裕で手の届く高さに設置されている。
「で、入れ替えるの？」
「そう」
入れ替えたら何か起こっちゃうんだろーか。……ちゃうんだろーな。起こってくれなきゃ困るんだから。
でも、ここで待つべきかどうするべきか決めてからじゃないと……。
「何ぼけっとしてんの」
「いや、シサーたちとどう合流すべきかと思ってさ」
でも、ここがこの階層のゴールじゃなかったら待ってても仕方がないし、最悪ゴールがここだけじゃないってこともありえるかもしれないし。
やってみといた方が良いだろうか。
『第３階層終わり』とか書いておいてくれりゃあいーのに。
迷いながらも、結局俺はやるだけやってみることにした。最悪、第４階層の入り口で待ってりゃ何とかなんだろう。
半ば開き直りに似た何かに背中を押されて、入れ替えた剣と錫をそれぞれ女神に持たせる。
……と。
「うわぁッ」
ぱかんっと足下がなくなった。なだらかに、ではあるけれど、『

転走』の床を引きずった超絶滑りやすいスロープに放り込まれ、ジェットコースターなんか一昨日来やがればりの超高速で、斜め下に向かって滑走する羽目になる。

「ナタッ……いるかッ……！？」

まさか置いて来てはないだろうとは思うものの、そして置いて来てたとしても俺にはもはやどうしようもないものの、聞かずにいられない。

とは言え、風を切る音で返事があったとしても聞こえそうにないんだが。

案の定ナタの返答は耳に届かず、振り向いて確認しようにもそんな余裕もなけりゃ可能な状態でもない。

しょうがないんでされるままに滑り落ち、光が見えたと思ったら、俺はそのままの勢いでどこぞの床に背中から滑り出ていた。

「……ってえッッ！！」

思い切り勢い良く放り出され、何かに激突してようやく止まったと思えば、後ろから俺と同様すっ飛んできたナタに激突された。……くぅぅぅ……。

「いててて……」

ナタのスライディング・キックをくらった状態のまま体を起こす。と、手を突いた地面が茶色をしていることに気がついた。……土？

顔を上げて辺りを見回し、ぽかんとする。今までいた白い世界とは似ても似つかない光景。暖かみの、ある……。

一面に広がる田畑。質素と言える石造りの小さな家々。続く畦道と、遠く揺れる豊かな木々。

同じように目を瞬いて辺りを見回したナタが、呟きながら顔を向けた。

「ここは……？」

「第４階層……？」

◆◇◆

マールは司祭にもらった赤い石を使って、神の為に髪飾りを作った。
女神の為の髪飾りだ。女神の髪に、マールが見つけた黄金のプレートは良く似合うに違いない。ドワーフは鉱物を見つけるのが得意なのだ！！
赤い石をはめ込んだ髪飾りはとても繊細に仕上がった。
「女神よ！！あなたに捧げるためにこれを作った！！」
すると女神が答えた。
「これは大変素晴らしい。お礼にわたしはあなたを導くでしょう」
手の中の髪飾りが消え、代わりに変わった形の金属の板が手の中に現れた。不思議な形にでこぼこしているのだ。
マールはそれを大切にしまうと、辺りを見回した。マールの目の前に道が現れた。

～中略～

マールが進んでいくと、扉が現れた。古くて頑丈な、大きな扉だ。
扉の前にある大理石で出来た柱に、不思議な形をした板がはめられていた。しかしその板は半分だ。
「この板を当てはめるに違いない」
マールは、その窪みに合うように、女神にもらった板をあてはめた。
ぴったりだ。
すると、重たい音が響いて扉がゆっくりと開き始めた。

第2部第2章第２４話　海底のダンジョン４　【虚影】　後編（１）

「村、みたいだね……」
立ち上がって遠くを見晴らしてみる。どれもこれもシンプルな佇まいの小さな家。それから畑。
第４階層は、『虚影』。……『虚影』？
まさか村になってるとは思わなくて驚いたまま、俺はナタを見下ろした。
「とりあえず、歩いてみようか」
……ってそうだった。ここって第４階層の入り口……。
「……」
自分たちが滑ってきたはずの方向を振り返って愕然とする。そんな俺の表情を見てナタも振り返った。
「あーらら」
「……」
「これじゃーどっから出たのかわかんないね」
俺たちが来たはずの、第３階層から続いてくるはずの道が、どこにもない。まさしく俺たちが降って湧いたかのように、寸分の切れ間もないのどかな風景が、前にも後ろにも右にも左にも広がっている。
「どっから来たんだよ、俺たち……」
「……ねえ。あたし、嫌ーなこと考えちゃった」
呆然と呟く俺の服を、ナタがくいくいと引っ張る。まだ何も言われてないのに既に嫌な顔をしながら、俺はナタを見下ろした。
「……何」
「祭壇がさあ、いくつかあったって言ったでしょ」
「うん」
「どの祭壇に導かれるかで、出現する場所が変わったりしてね。第４階層」

何いいいい？
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……ごめん。あたしが悪かったよ」
「……いや、ありうる……」
だとしたら、第３階層の出口は元より第４階層の入り口でシサーたちを待ってたって進展はないってことにならないか？
第３階層はたまたま何とか抜けられたけど、何としてでもこの階層内で合流しなきゃ、次はどうなるかわかんないぞ？
せっかく立ち上がったものの、頭を抱えてまたしゃがみこんでしまった俺の肩を、ナタがぽんぽんと叩いた。
「ねー、元気出してよー。ほら、ひとりじゃないしさあー」
「……」
「あたしがいるじゃんー。何とかなるよー」
「……そうだな」
頭抱えてたって仕方がない。
あっさり言って立ち上がった俺に、ナタの方がむしろ目を丸くしてから笑った。
「何だ、簡単だなー」
「前向きに考えるしかないだろ。確かにひとりじゃないんだし、何とかなるさ」
ナタなんか俺よりずっと強いんだし。
それに、第３階層よりは雰囲気的に何とかなりそうな気がする。
そりゃあ地理がわからないのはあっちもこっちも一緒だが、何かこう……村だし。
縦にも横にも、挙げ句水の中にまで及ぶ第３階層に比べると、平面のこちらの方が御しやすい。……気分になれる。

「どのくらいの広さがあるんだろうな」
「さあてねー。村風だけど、誰かいんのかな」
「どうだろな」
第3階層と違って、景色が『風景』として変わるから道が覚えやすい。そりゃああっちとこっちを平気で繋げたりするようなダンジョンの中、どこまであてになるかは知れたもんじゃないが。
不要になった滑り止めを外して荷袋に放り込むと、しばらく辺りをうろうろしてみるが、人どころか魔物さえいる気配がなかった。小屋の中なんかも覗いてみるが、中も同様だ。
村の雰囲気自体はのんびりとしたもので、もう実際の時間はわからないがここはとりあえず晴れた昼間、のどかな昼下がりと言った感じだ。
だけど人の気配はなく、荒れたり寂れたりしていないのに動くもののない村は、何だか却って不気味な感じだった。
「何なのかな」
「さあ？あたし、そもそもここが何なのかわかってないし」
「は？」
リズムを取るように人差し指をふりふりしながら言ったナタに、目を丸くする。
「何なのかわかってないって？」
「カズキがこんなとこで何してんのか。……何してんの？」
思わずかくっとうなだれた。まったく、本人も言っていたが千里眼ではないらしい。俺たちが何しにここへ来てるかも知らないで、俺の後をつけてきたんかい。
「……ナタって変わってんね」
遠足でもしてる小学生みたいに、無邪気な顔でにこにこと俺の隣を歩く様子に思わず呆れる。
「へ？何なのさー、突然ー」
「何で俺の後なんかついてきたの」
「頼りないから」

「……ッッッ……それはいーんだよだからッ。本当にそんな理由だけでついてきたわけじゃ、ないだろ？」

メリットがどこにもない。それどころかデメリット極まりないだろう。

見下ろす俺の視線に、ナタはニ、三度目を瞬いてから、とんとんと俺より数歩進んで、くるんと振り返ると後ろ向きに歩きながらにこっと歯を見せた。

「何で？」

「何でって……」

ここしばらくナタと一緒に歩いているが、相変わらず何者なのかは俺にはさっぱりわからない。真っ向から尋ねられると何て言えば良いのかわからず、俺は少し口ごもった。

「だって……危ないじゃん」

「でも、これが本当の意味であたしのしなきゃなんないことだと思ってるから」

……？

「これ……？って……？」

「迷える人に手を差し伸べること」

のどかな道は相変わらずだ。頭上を旋回して鳴く鳥の声と、爽やかな風に目を細めながら、前に向き直って少し先を歩くナタの背中に目を向ける。

「何？」

「カズキは、可哀想だから」

「は？」

思いがけない返答が返ってきて、俺は歩く足を止めた。構わずに歩くナタが、数歩進んでくるりと振り返る。

「可哀想……？」

「ねえ。人って、自分の不幸には敏感でも、幸福には鈍感な生き物だとは思わない？」

「……？」

いきなりされている話の内容がわからず、俺は沈黙したまま返答を避けた。ナタは構わずに続ける。
「人は、誰もがみんな、ひとりで『生』と言うものを戦ってる。それは、誰しもそうなの。誰もが世界にひとりで、誰もが自分の足で立って歩いてるの」
「……」
「同じ歩調で歩けない人もいるし、歩き方の合わない人もいる。だから互いに気遣いあって、譲り合って、時には自分に我慢を強いながら歩いてるの」
「……うん」
ナタは言葉を続けながら軽い足取りでまた歩き始めた。ので、それに続く。
「なのに、視野が狭いと、そのことを見落とすのよ」
「……」
「自分だけが、ひとりで歩いているのだと思っている。合わせたり、我慢したり、悩んだりしているのが自分だけだと思うわね。自分だけは違うという意識にかられる」
そう言ったナタの横顔は、どこか辛辣なその内容とは裏腹に切ない色を浮かべていた。
「そしてそれが、自分の生きる周囲を否定することに繋がる」
「……」
「『ここは本当の自分が生きるべき世界じゃない』『自分がいるべき本当の場所がどこかにあるはずだ』……そんな幻想を抱いたりね」
ひょこん、と軽やかに両足で飛び跳ねて前に出たナタは、また足を止めて俺を振り返った。
「これって、悲しいことだと思わない？」
何と答えて良いのかわからない。
ナタが足を止めてこちらを見上げるので、俺もまた足を止めた。
「世界は用意されてるものじゃない。居心地の良い場所を探しているのはみんな同じ。作り上げていくしかないのに」

「……うん」
「『本当はどこかに本当の居場所が』なんて幻想。そんなものはどこにもない。自分が今いる場所は、間違いなく自分がいるべき場所で、自分と世界との努力で居心地の良い場所にしなきゃいけない。……だけどそれは、とても幸福なことなのに」
俺たちの歩いている道は、緩やかなカーブになって続いている。その両脇にはぽつぽつと民家があり、その合間には畑があった。農作業用の手押し車や鋤（すき）、積まれた藁までも村に営みの匂いを感じさせるのに、誰もいない。多分中心の方へ向かうんだろう方向に、小さな階段が続いている。段に一歩足をかけたナタは、「ね」と同意を求めるように首を傾げた。
「自分で自分の築き上げていく環境が、自分のいるべき場所であること。それが当たり前で、不可侵の現実なのよ。……なのに、カズキは逆なんだもの」
俺……？
無言でナタを見つめる俺に、ナタは哀れむような目つきを向けた。
「逆って」
「カズキは自分の投げ込まれた環境に、自分の足場を作ろうとしてる。本来なら受け入れられないこと、受け入れたくないこと、それを受け止めて、そのことで受ける傷さえも飲み込んで、周囲との中に自分の居場所を築き上げようとしてる」
「……」
「……居場所は、ここでは、ないのに」
「……」
「どんなに築き上げても、形にしてみても、カズキは確かに異物なんだもの。調和してる中で、ひとり、不整合なんだもの」
ひとり、不整合……。
その言葉は、結構深く俺の中に突き刺さった。常に自分でそう意識しているから、尚更なのかもしれない。
「どれだけ頑張っても、あなたはここには居場所がないんだもの。

どれほどうまくいっているように見えたって、世界があなたを拒絶するのよ。……だって、ここにいちゃいけない人だから」

「……」

「ただ生きているだけで、そのことを諾と出来ずに心を殺してる……それが、図らずもその証明なんだよ」

「……」

ナタの言葉はいちいち正しくて、俺には反論する術がない。黙ったまま、階段を上り始めた俺の背中を、足を止めたままのナタの声が追いかけた。

「……あたしと同じ」

「え？」

その言葉に足を止めて振り返る。ナタはまだ先ほどの場所に佇んだまま、少し寂しい目で俺を見ていた。

「あたしは、異物ではないけどね。でも、異質。世界の中にとけ込むことが出来ない」

「……？」

「あたしが望んだことではないけれど。だけど、あたしは、異質であれとファーラに定められたんだ。だからあたしは、弾き出されることはないのに中に入っていくことが出来ない。どれほど努力して居場所を築いても、あたしの居場所はそこにはない。どこにもない」

言っていることが、難しい。ほんの幼い女の子なのに、ナタの言葉は時々理解を超える。

ファーラに定められた……？

『異質であれ』と？

なぜ？どんなふうに……？

俺の顔には疑問がありありと浮かんでいるだろうに、ナタはそれには答えずに視線をそむけた。

「だから、カズキを放っておけないの。あたしとは違う、本当はカズキの整合性を持つ世界があるカズキに、あたしと同じ……自分の世界にさえ内蔵されないほどの傷を負って欲しくないんだ」

「傷……」
「世界があなたを含めた調和を諾としているのに、あなたが諾と出来ない……そうなって欲しくない。あなたがいるべき場所は、確かにあるのだから」
「……」
ナタは、やっぱりどこか神がかったように言って口を閉ざした。
彼女の言っていたことを俺は半分も理解出来たかどうか怪しいが、ともかくナタは本当に俺を……『異世界の住人である俺』を心配してくれているのだろうと……それだけは、何となくわかる。
「こんなところで答えになった？」
不意にナタが語調を変え、いつもの人をからかうような笑顔で足を前に踏み出した。その言葉にはっと我に返る。半ば呆然と聞き入っていた自分を誤魔化すように、前髪に手を突っ込んでかきあげながら、俺はまた足を動かした。
「……難しすぎて、答えになってないよ」
「難しい？そうかなあ」
「大体『傷を負って欲しくない』って言うんなら、戦闘にも手を貸してくれよな」
「それはそれ。まだしばらくここにいるんでしょ」
「ここ？」
しばらくこんなダンジョンにいる気はない。
「この世界に」
「ああ……まあ……。そうなるだろうとは思うけど」
「だったら少しでも強くなんな。いろんな意味でさ」
くそ……。
階段を上ってしばらくは一本道のようだ。いや、住宅街とかにあるような小さな路地ならいくつか見当たるが、でかい通りや道と交差はしていない。
「ナタって、いっつもそんな小難しいこと考えてんの」
「小難しい？どの辺りが？」

「世界がどうだとか。自分との整合性だとか」
その言葉に、ナタは少し黙った。ちらりと視線を下げると、ナタは真面目な顔で階段の床を見つめながら上ってくるところだった。
「……うん。考えてるね」
「ふうん？」
「いろんな人が、幸せであれって思ってる。だけどなかなか、そうはならない」
「……」
「だから、その為に何が出来るのかなって思う。どうしてあたしは、異質でなければならないんだろうって」
階段を上がりきって歩き出す。続く先は、畑がなくなり、もう少し民家が増えたようだ。地面がむき出しの道を、軽くつま先を蹴り上げるようにして見ながら言うナタの仕草は幼い子供そのままで、けれどその表情はまるであらゆるものを見て悟った人間の横顔のようだった。
「自分を大切にし、周囲を大切にすることで足場を自分で作っていく——その幸福を、たくさんの人が知るべきだと思う。人は、誰しもがひとりなんだと知り、誰しもがひとりで生きているわけじゃない。手を伸ばして、周りを見て、取り巻く想いに気がついて」
「……」
「あなたは、ひとりじゃない。あなたが見えていないだけ。あなただけがひとりなんじゃない。みんな、ひとりで戦ってる。……そう、知って欲しい」
視線を前に向けて誰にともなく言ったナタは、白い歯を見せて俺を見上げた。
「だから、あたしはいろんな場所に行くの。あたしに出来ることは知れているけれど、たくさんの人に会うの」
「それが、あちこち旅してるって言ってた理由？」
「そう。目で見て、手で触れなきゃ、本当にその人が感じていることはわからないから。それはほんのひと握りかもしれないけれど、

本当の平等ではないと言う人もいるかもしれないけれど、出来ないことを嘆いていても始まらない。それならあたしは、自分の出来ることをしたいから。だから、たくさんの人に会う為に……たくさんの場所に行くの」

ナタが『異質』だと言う理由は、俺には良くわからない。きっと『何者なのか』ってのに直結するんだろう。

だから、聞かない……方が、良いんだろう。

しばらく村の中を徘徊してみるが、人影も魔物も怪しげな何かも特に見つけることが出来ず、俺とナタはとりあえず休むことに決めた。幸い、休めそうな場所ならいくらでもあるわけだし。

どうせ誰もいないんだからでかいのとか選べばいーものを、つい小さくよりぼろいのを選んでしまうあたり……貧乏性なんだろうか。

いや、だって。何かやっぱ不法侵入でもしてるような気がして、居心地が悪いんだよ……。

ともかく、歩いていた道沿いの小屋を一夜の宿として借りることに決めて、俺たちはそうそうに腰を落ち着けた。第2階層の森とは違って、正しい時間かどうかは疑問だが一応日が暮れてきている。

「ついでに何か食うものないかなー……」

入り込んだ小屋も、粗末ではあったが調度らしきものもないではないし、生活空間の匂いのするものではあった。なので手持ちの食料に乏しい俺は、ついそんな期待を抱いてみたりしたんだが。

「……」

「……」

「……いいって。あたしの、わけてあげるって」

食えそうなものは何ひとつとしてない。

「いや、まだいいや……まだ何とかなるから気にしないで。いよいよ困窮極めたら手を貸して」
「……見てるあたしの方がいたたまれないから、頼むから食べて」
ああ……一応食うに困らないだけの食糧は持って旅しているはずだったのに、どこで間違えてこんなことになったんだろう。
「……ありがとう」
ナタに多少の援助を得て食事をとってから、俺たちは早々と眠りにつくことにした。することがあるわけでもないし、疲れてるし、どうせうろうろするなら夜よりは早く起きて朝の方が良いし。
粗末な部屋とは言え、壁や屋根があるのは安心だ。少なくとも何の物音もなく魔物が忍び寄ってくることはない。……多分。
日が沈みきってから、部屋の中程でナタがくるんと寝袋にくるまるのを見て、俺はドアに寄りかかるようにして座り込んだ。剣も手近なところにスタンバイする。明らかにナタの方が強いと言ったって、女の子を鳴子代わりにするわけにはいかないだろう、やっぱり。
「へへー」
「……何だよ」
「女の子扱いされるってーのは気分がいーねー」
「何だそりゃ」
「ふふふー。変な気、起こさないでねん」
「……俺はロリコンじゃない」
どんな気を起こせとゆーんだ。
「馬鹿なこと言ってないでさっさと寝なよ」
呆れて言った俺に、ナタは「はぁい」と素直に目を閉じた。ため息をつきながら、俺もドアに深くもたれかかって目を閉じる。
この階層で、明日こそはシサーたちに会えるかな……会えなかったとしても、抜けることは可能だろうか。

幸い、ナタが妖精語のヒアリングだけは、出来るから……。
つらつらとそんな考えの断片が浮かんでは消え、遠くでナタの寝息が聞こえたと思いながら、俺も少しずつ現実から意識が遠のいていくのを感じた。

◆◇◆

扉を抜けると、そこは岩場に囲まれた小さな村だった。
足を踏み入れると、マールは目を瞬いた。
「我々の村だ!!リーフダーツの、我々の村に帰ってきたのだ!!」
ゴブリンに襲われて失った、あの村だ!!
喜んだマールが村の中に飛び込んでいくと、長老が現れた。リーフダーツで誰よりも長く生きているナウムだ。
「マールよ」
ナウムは言った。
「お前が探している宝とは何だ」
「私が探しているのは、我々ドワーフの財産だ」
ナウムは、マールの言葉に頷いた。
手招きされるままにマールが連れて行かれたのは、村の外れにある丘だった。丘からは、小さな村が見渡たせる。
ナウムが言った。
「探し続ける心、旅の間の勇気、手を差し伸べてくれる優しさ。全てが、お前をここに導いたのだ。ここはお前の村だ。ここは我々の村だ。失った宝、それは、共に暮らす失われたはずの温もりだ」
マールは涙を零した。
そうだ。我々は帰ってきたのだ。
あの戦で失った宝、それは、我々の村なのだ。

◆◇◆

カタ……カタカタ……。
何か、いろんな夢を見ていたような気がする。
体は疲れているはずなのにどこか気が張っていて、眠りきれずにうつらうつらしていた俺は体に伝わる振動で意識を取り戻した。背中から……ドア？
そっと開けようとしているような動きに、もたれていたドアから背中を起こして振り返る。辺りはまだ真っ暗だ。窓から射す月の光の中、ナタが目を覚ました。
「……ん？」
「し……何か、いる」
声を潜めてナタに告げる。そっと体を起こして剣を構える間も、ドアは小刻みに揺れていた。時折、ノブを揺する。
「魔物かな」
剣を構えてドアから離れる。一応形だけは守るようにナタの前に立つ俺の背中にナタが問いかけるが、俺にだってわかるわけがない。軽く肩を竦めて応じる。
「さあね。違うと願いたいけどな」
暗闇の中、前を見据えながら答えた俺の願いは、神に聞き届けられたらしい。ドアの向こうにいる何者かが、そっと声を上げた。
「……誰か。ねえ、いるんでしょう」
思わずナタと顔を見合わせる。
「誰？」
こんなダンジョンの中に。
「ねえ。誰か、いるならここを開けて。……助けて」
「……開けて、みようか」
小声でナタに囁く。『助けて』とは……ちょっと、穏便じゃないじゃないか。
「うん」
ナタの答えを受けて、右手に持った剣を下ろしながらドアに近づいた。ノブに手を掛ける。

「君は、誰」
ノブに手を掛けたままでそっと尋ねると、驚いたような沈黙が返ってきた。揺れていたノブも鳴るのをやめる。やがて押さえたような細い返事が聞こえた。
「僕は、スウィニ。悪い奴じゃないよ。お願い、助けて欲しいの」
声を聞く限りは……子供？
まだ小さな男の子みたいな感じだ。
何で小さな子供がこんなダンジョンに？
疑問に思いながらも、とりあえずドアを開けてみる。
まだ夜中の時間帯なんだろうか。人のいない農村の中灯りはなく、ただ月だけが照らす暗闇の中、ドアのすぐそばに小さな人影があった。かなり小さい。俺の太股くらいの位置に頭がある。
「君は……」
「ドワーフ？」
俺とナタの問いかけに、スウィニと名乗ったドワーフが頷いた。
「うん」
口振りを見ると子供……なのかな。だけどどっかおっさんくさくて髭までがっつり生えてるもんだから……何だかなあ……。
まあ、いーや。ドワーフの子供って言ったって、年齢なんか知れたもんじゃない。俺よりは遙かに年長者の可能性がある。いや、まずそうなんだろう。
「中に、入っても良い？」
スウィニはきょときょとと小屋の中に視線を彷徨わせ、俺を見上げた。
「うん。どうぞ」
俺ん家じゃないけど。
そっと中に小さな体を滑り込ませてきたスウィニは、一度辺りを窺うようにしてから扉を閉めた。すぐに壊れそうな頼りない閂（かんぬき）を下ろす。
一応訪問者がいると言うことで灯りを灯そうとカンテラを取り出

す俺に、スウィニが静かに飛びついた。
「駄目。灯りは」
「へ？」
「あいつらに見つかる」
あいつら？
そう言えば『助けて』とか言ってたな。
スウィニの言葉に従ってカンテラをしまうと、月明かりだけを頼りに俺は床に直接あぐらをかいて座り込んだ。
「どういうこと？あいつらって誰？」
「悪い奴らだ」
そんなひとまとめな。
スウィニは内気そうな目を伏せてもそもそと答えると、俺とナタとを見比べた。膝を抱えて座ったナタが、その膝に顎を寄せるようにしながら口を開く。
「でさ、君は何してんの？こんなとこで」
「こんなとこ？」
「だってここ、ダンジョンの中じゃん」
呆れたようなナタの言葉に、スウィニは瞬きを繰り返して顔を横に振った。
「僕はここに住んでるんだ。僕も、みんなも」
「みんな？」
誰もいないみたいだったけど。
「じゃあここは、ドワーフの村だってこと？」
ナタの更なる問いに、スウィニは無言で頷く。……う、うーん。
まあ魔物が勝手にダンジョンに棲み付くくらいだから、妖精が棲みついたってまあ……いいんだろうけど……変なこと、ないのかもしれないけど……変だよなあ。
「で、悪い奴らって？」
あぐらをかいた膝に頬杖をついて顔を支えながら聞くが、スウィニが答えるより早く窓の外で音がした。金属的な音、誰かの気配。

（え……？）

その時、どこか遠くで悲鳴が聞こえたような気がした。それに被さるような怒号。荒々しい物音。

それはまだ場所としては距離がありそうだったが、それとは別にさっき近付いてきた気配がこの小屋のすぐ近くで物音を立てる。

「……」

「来た……」

スウィニが小声で呟く。それには答えず、俺は抜いたままだった剣を握り直して窓の外に目を向けた。

「あいつらが、僕たちの村を襲ったんだ。みんな殺されたり連れて行かれたりした。僕もこのままじゃあ殺される。僕を、助けてくれる？」

「……どうすればいーの」

家の外に意識を向けたまま問う。スウィニが短く答えた。

「退治して」

「……」

ナタはともかく、果たして俺ごときに何とか出来るような奴ならいーけどな……。

思いながら立ち上がって窓から様子を窺ってみる。その時、人の声を聞いたような気がした。

……人……？

外から見えないよう気をつけて窓際に立った俺の心臓が、微かに鳴った。ついてきたナタが小さく俺の名を呼ぶ。

「カズキ……」

人だ。小さな村の衛兵が身につけてるような、チェーンメイルの簡素な鎧を身につけている。この小屋のそばの通りで何かを話し込む2つの影。耳を澄ませると、薄い家屋の外から会話が漏れ聞こえてきた。その背後、どこか遠くの方から悲鳴と怒号が絶え間なく流れてきて、暗い夜空の一部が赤く反射するのが見えた。——火！？

「どこかまだその辺にいるはずだ」

「見つけ次第、動くものは片っ端から殺せ」
穏当ではない。片っ端から、にはきっとスウィニだけではなく俺たちも含まれるんだろう。……いいさ。殺られる前に殺るのは、魔物と一緒だ。やがてその影がこちらに向かって歩いてくる。
「来るぞ」
「カズキ、大丈夫なの？」
「……平気」
技量が平気かどうかは難しいところだが。
「スウィニ。あれが、敵なの？」
「そう」
「彼らは、何者？」
視線を外に向けたままで、ナタが問う。スウィニは小さな声で「侵略者」と呟いた。
侵略者？ダンジョンの中に？
ともかくスウィニに奥に隠れるように言って、ドアに向かって剣を構えたところでドアが激しく揺れた。
「ナタ」
「うん」
「……援護、よろしく」
ガシャーンッ！！
強行突破を決めたらしい。荒々しくドアが破られ、飛び込んできた男たちがこっちを認識する前に床を蹴った。胸はチェーンメイルに覆われていて無理がある。狙うなら首筋と、先ほど決めている。狙いを定めて剣を下から振り上げたところで、ナタが魔法を発動するのが聞こえた。
「アモル・オムニブス・イーデム、森羅万象その全てを普く照らす神々の目よ、惑わし闇を聖なる灯に変えよ！！」
途端、炸裂する白い世界。
俺にとっては背後の出来事でも、侵入者たちにとっては目にもろだったろう。視界を奪われて眩んだようにたたらを踏んだひとりに

俺の剣が襲いかかる。
　白い光をまだ放つ世界の中、赤い血飛沫だけが有色のもののように見えた。
　仲間に何が起きたのかわからないでいるもうひとりに、そのまま返す刃を突き立てる。
「うわッ」
　咄嗟に風を切る音でも聞いたのか、男が腕を振り上げた。剣が篭手に当たって弾き返される。構わず俺はもう一度切り込んだ。男の足が俺を蹴りつける。バランスを崩してよろけた俺に、男が剣を構えて間近に迫った。
　けれど、刀身が俺のものより短い。咄嗟に突き出した剣が、俺の真正面で男の額に飲み込まれていった。俺の方目掛けて噴出す、鮮血。
（俺……）
――剣を持つのは嫌だ……ッ……
　どこかで、誰かの悲鳴が、一瞬だけ、聞こえた。
「カズキッ、平気!?」
「俺は、平気……」
　どさり、と男の体が床に投げ出される。悲鳴を上げる間もなく命を絶たれた男は、崩れた床にあっという間に血溜りを広げていった。
「仲間は、どのくらいいるんだ?」
　今みたいに不意をつければともかく、俺ひとりで何とか出来るわけがない。息をやや荒くつきながらスウィニを振り返ると、隠れていたスウィニが物陰から顔を覗かせた。俺を見上げる。
「ありがとう」
「まだ、終わりなわけじゃないんだろ?あと、どのくらいいるんだ?」
　動かないことを確認する為に、出入り口付近に転がる2つの死体に視線を戻しながら訪ねた俺に、スウィニが黙って首を横に振った。わからないってことだろうか。

あんまりたくさんいるようじゃ、俺の手に余る。何か対策を練るために、どこか安全な場所と言うのはないんだろうか。

じっと黙って考え込む俺を、やはり黙って見つめていたスウィニがぽつんと尋ねた。

「ねえ……」

「え？」

「……どうして、泣いてるの？」

「……」

泣いてる……？

言われて手を上げてみると、頬に触れた指先に涙が伝った。……涙？誰の？……俺？

「さあ……」

泣いている自覚がない。

ぽかんとして、涙を拭う。拭った手の平は、血塗れだった。……血塗れ……そう、だって今俺は、人の命を奪ったから。

「……欲しいものを手に入れようとする時」

ぼんやりと涙と血の入り混じった指先を見つめる俺に、スウィニが不意に言った。今までの子供じみた雰囲気とは異なる雰囲気に顔を上げる。

「何かを失わなければならないことがある」

「……スウィニ？」

「我々は、人と共存している。だが、時には我々を守る為に立ち向かわなくてはならないこともある」

「……」

「勇気を持ってそれに立ち向かえ。今、お前は己にとって最も恐るべき敵に打ち勝った。そうあれ。さすれば、二度と村を失うことはあるまい」

何かに取り憑かれたようにそう語るスウィニの言葉に目を見開いた。……え？これってダンジョンのイベントなのか？

「ここに来るのが、ドワーフって前提の言葉みたいだね」

隣のナタが俺を見上げて、そっと小声で告げる。その視界の隅に、先ほど倒したはずの男たちの死体が映らなくなっていることに気がついた。……なくなってる。

「村の外れにある洞窟に向かえ」

そこでスウィニは言葉を切った。それから行き方を説明すると、続けて早口で何かを告げる。……妖精語。

「その言葉で、開くことが出来るだろう。進め。最後の階層に」

そこまで言って、不意にスウィニの姿が掻き消えた。

――己にとって最も恐るべき敵

……そうかな。

俺は、別に今更、人と対峙する、ことなんて……。

「カズキ？」

ぼんやりと手の平を見つめる俺に、ナタが心配そうに声を掛けた。顔を上げて、笑顔を向ける。

「ううん……」

今更、そんなこと、どうとも思ってない……。

「何でもない。……行こうか。その、村はずれの洞窟に」

第2部第2章第25話　海底のダンジョン5　【浄化】　前編（1）

まだ朝が来る前の暗い空の下、スウィニに言われた通りの村外れの洞窟とやらを目指して歩く。ナタは何を思っているのか、無言だった。

俺も俺で……自分の考えに沈み込んでいた。

ユリアの言葉が、耳に浮かぶ。

――戦えば必ず誰かの大切な人を奪うわ!!誰かが必ず泣いてるわ!!

ファーラは、戦の神でもあると同時に慈愛を説く神だと聞く。俺にはそれが、矛盾に思えて仕方がない。別に俺は信者じゃないし、信者になる予定もないし、教義の解釈なんかどうでもいいとは思いつつ……どうしても気になった。

その2つが共存するのか?そんなの、アリか?だって、相手に情けをかけていたら、勝利を納めることは出来ないじゃないか……。

――守る為に戦わなきゃならないことがあるのは、わたしだってわかってる

――でもそこに疑問を感じ、矛盾を感じ続けなきゃ駄目よ

額に飲み込まれていく剣先。噴き出す鮮血と、濃い血の匂い。

その光景が目の前に蘇り、軽い吐き気が起こる。

……今更。やったのは俺じゃないか。

あいつらを殺したのは、俺だ。魔物でも捕食の為の小動物でもない。俺と同じ人間を、そうと知りながら意図して殺したんだよ。それが、何だ?襲われそうだった。だからやった。俺自身のみならず他の2人を含めた保身だ。……なのに何でこんなに引っかかるんだよ……ッ。

「ナタは、プリーストでしょ」

久しぶりに感じる頭痛に顔を顰めながら、ぼそりと口を開くと、黙って隣を歩いていたナタは「うん」と短く頷いた。

「ファーラって、人を愛しなさいみたいなこと、説いてんじゃないの」

俺にまさかファーラ神の教義を問われるとは思っていなかったらしく、ナタが驚いたように顔を上げたのがわかった。前を見据えたままの俺の横顔に、ナタの視線を感じる。

「……うん。そう言う意味合いのことは、説いているけど」

「でもナタは、さっき俺が人を……ダンジョン内のイベントとは言え人を手にかけるのを、助けたよね」

「……」

「それってのは『神の意志』とやらには反しないの」

別に責めてるわけじゃない。ただの素朴な疑問だ。淡々と尋ねる俺に、ナタは質問の意図を考えるように軽く首を傾げてから息をついた。

「ファーラは、戦姫でもあるから」

「うん。知ってる」

頷いた俺に、ナタの訝しげな沈黙が返る。俺は更に質問を重ねた。

「『戦の神』と『慈愛の神』。……戦うことと、人を慈しむことは、相容れるものなのか？俺には両者が背理しあってるように思える」

「ああ……」

「……生きてるだけで、手が血に染まっていくんだ。嫌だと思ってた。誰かを傷つけて長らえるのは、何か違う気がしてた。だけど、長らえなきゃと思うと、そう思う気持ちを捨てなきゃならないんだ。ファーラの矛盾……俺とは、真逆に見えるよ……」

結構、まだ早い時間だったんだろうか。ゆっくりとは言え歩いているうちに時間は少しずつ経っているはずだが、朝が訪れる気配はまだない。ナタが視界の外で身じろぎをした。

「正しい解釈とかそういうのは、あたしにはわからない」

見下ろすと、ナタは時折見せる神がかった神秘的な表情を浮かべていた。

「だから、これはあたしの解釈でしかないけれど」

「うん」
「戦うって、どういうことだと思う？」
逆に問われ、言葉に詰まる。どういうって……。
「争い、じゃないの」
「あたしは、そうじゃないんじゃないかなって思ってる」
「……」
「ううん。カズキの意見を否定してるわけじゃない。言葉ひとつの捉え方は人それぞれで、どんな解釈も間違ってるとは言えないんだと思う。ただ、あたしは争うことも含めたもっと広いことだと思ってるの」
「……ふうん？」
「どうして争いが起きるのかって話をしようか。……なぜ？」
なぜって……。
「人は、自分にとって有意義な何かが侵害されそうになると攻撃的になる。それは大切な人かもしれないし、物かもしれない。生きるのに必要と認識しているものかもしれないし、誇りや意地、友情や愛情……信義や信念、そう言った目に見えない何かかもしれない。生きる為の快楽そのものかもしれない。そこに傷がつけば、つきそうになれば、攻撃的になる。……理由のない争いは、ない」
やがてスウィニが俺たちに教えた噴水が、見えてきた。多分、ここが村の中心部なんだろう。言われた通りに、右へ続く道に足を向ける。どこかの家屋の扉が、風に揺れてカタンと小さく鳴った。
「そうして考えると、戦うことって言うのは何かを守ろうとする気持ちの表れなんだとは思わない？」
「ああ……うん」
似たようなことは、あの時俺も考えた。何かを守る為……ああ、そうか。例え戦の原因が権威欲であったとしても、それは言い換えれば自らが今置かれている立場を守る為、人々の信頼を守る為と言う考え方に置き換えることが出来るのか……。とすれば戦うことはイコール何かを守る為なのだと言えてしまうのかもしれない。その

対象となるものが、何であれ。
「戦うことは、守ろうとすることなの。自分を。自分の周囲を。……何かを」
「……うん」
「戦いに勝つと言うことは、守りきったと言うことなの。自分が愛し、信じる何かを」
「……」
「人は、ううん、生ある者は皆、生命を繋ぐ義務がある。生きなければならないの。脅かされたら、抗わなければならないの。それは、義務なのよ」
ナタは闇に視線を向けたままで訥々と続けた。
「そう、考えてみると、それは果たして相反するものでしょーか」
くりんっと目を上げて、ナタは不意に冗談めいた口振りで言った。
「……え？」
「戦うこととは自分を守り、周囲を守ること。何かを愛し、信じていると言うこと。慈愛とは、相手を尊重し、同じように相手も生命を繋ぐ義務の元に何かを守ろうとしていることを理解すると言うこと。……それは、果たして相反するの？」
ふうん……。
戦いをイコール傷つけ合うこと、慈愛をイコール無条件に愛することと捉えるとこれほど相反するものが、考え方ひとつで確かにだいぶ視点が近くなったような気がする。共に、何かを大切にして愛することなんだと言うような気が。
「あたしはね」
さっきまでの厳かな口調ではない、軽い表情でナタは微笑んだ。
「あたしは、同じ表現手段を持つ生き物同士は、理解しあえると思っているよ」
「表現手段？」
「『言葉』と言うね。あるいは表情や仕草かもしれない」
「ああ」

「何かを大切に思う気持ちを持てる生き物同士は、理解し合うことは不可能じゃない。だって相手にも想う何かがあることは、気づけるはずなんだもの」
「……うん」
「あくまであたしの解釈でしかないけれど……ファーラの御言葉は、真摯に生きよ、と言うことなのだと思ってる」
「……」
「だからあたしは、自分の生命を繋ぐ為に必死に戦うよ。戦うけれど、相手も必ず尊重する。戦う時は真剣に戦う。相手も、自分の生命を繋ぐ義務に忠実に従っているのだから」
それからナタは、少し申し訳なさそうに上目遣いで俺を見た。
「戦うたびに、カズキに傷がついていることは、わかってはいるんだ」
「……」
「本当は、わかってるの。だけど……だけど、カズキは『生きよう』と言う気力が……あまりに微弱なんだもの」
ナタの言葉に、俺は顔を上げた。
「だからね、ごめんね。荒療治だって、わかってるの。わかってるんだけど、自分で対峙して、向き合って、もっとちゃんと受け止めて欲しいんだ。自分で自分の生命を守ることの……その重みを」
「……」
「生命を繋ぐ義務を負う相手の生命を断ち切って、繋ぐ生命。それは、攻撃を仕掛けてきた相手だけとは限らない。人は捕食する生き物だから、他者の生命を断ち切って取り入れて繋いでいく。……それが、どれほどの重みを持つか」
「……」
「生き延びようとする生命を断ち切って繋いできた生命を投げ出すことは、他者の生命をも軽んじることになる。自分の手で自分の生命を守っていくことで、今繋いでいるその重みをちゃんと受け止めて。……投げないで」

「俺は……」
動かしかけた口を噤んで、軽く頭を振る。何を言いかけたのかは自分でも、良くわからない。
「相手も必死に立ち向かってくる。こっちも死に物狂いで立ち向かう。……前に、言ったでしょ。生命の『摂理』だって」
「……うん」
摂理、か。
（生きようと言う気力が微弱……）
頭の中で繰り返して、小さく笑った。そうだな、そうかもしれない。生きたいと強く願う気持ちは、きっと今の俺にはないから……。
……不整合、だから？
そうまでして繋ぐ生命。そこには何の意味があるんだろう？他の犠牲を強いて尚生きようとする傲慢さ。それは、何の為なんだ？
「でも、どうしたの？急に」
「え？……あ、いや……」
作った笑顔を浮かべながら、心配そうに見上げるナタを見下ろす。自分でもどうしてそんなことが気になったのか、良くわからない。
ユリアの言葉が引っかかるから？
それは、あるだろう。
そこに、今の自分の在りようを……理由付け出来る何かが欲しかったから？……今更？
……それも……あるのかもしれない。
剣を振るうことに、人の返り血さえ浴びることに、ためらう気持ちがなくなった。けれどそんな気持ちを引き戻すように、時折起こる頭痛。何かから逃げている、何かから目を背けている、そんなふうにシャインカルクで感じた。
だけどそこを突き詰めて何になる？やらなきゃいけないことは同じだ。生きる為に他者を手にかける。ならば考えない方が良い。
だけど本当にそんなんで良いのか？わからない。考えたって正しい答えなんか見つかるわけがないじゃないか。ぐるぐる回る考えに

疲れ、放棄し、果ては生命を繋ぐことさえどうでも良くなる。生かされているのは、ユリアがいるから。
薄く唇を噛んだ。行き詰まる思い、在りようの肯定の仕方がわからない。世界と俺の不整合。なのにまだ、帰りたくない。
（ユリア……）
……会いたい。

◆◇◆

マールは祭壇の前で意識を取り戻した。
神殿の祭壇の前だ。
夢の中ではホビットがマールに鍵をくれたのだ。
崩壊した村、リーフダーツ。神殿だけが無事に残っていたのだ。
マールは長い夢を見ていた。長い長い夢だ。
失われた村を求めて、マールは旅をしていたのだ。
息をついて体を起こしたマールの手には、鍵が握られていた。
夢の中でホビットがくれたものだ。
それを手の中に確かめて、マールは祭壇の奥へと進んだ。
長い旅が、始まる。

◆◇◆

「……あれ、かな？」
「そうじゃない？」
村をほぼ横断して、俺とナタはスウィニに言われた洞窟と思しきものを見つけた。ようやく、空がうっすらと白み始めている。
相当村の外れまで来たと思う。あれほど立ち並んでいた民家は今はどこにもなく、ただただ畑と山。それに、特徴的なのは、至るところにやはり石造りの四角い小さな建物が見えることだった。
「……何なのかな」

「何が？」
「あの、ちっちゃい建物」
俺の言葉にナタがきょとっと辺りを見回して、猫みたいな目をくりくりさせた。
「鍛冶場、かね」
「鍛冶場……」
ダイナの村の再現、だったりするんだろうか。
ここに来たのが本来来るべき資格を持つ……ダイナのドワーフだったら、ここに辿りついた時に何を思っただろうか。
『虚影』――失われた、かつての故郷。
「……あ。ねえ」
そんなことを思って今来た道を振り返ってみる俺の服を、ナタがつんつんと引っ張った。
すぐにその理由がわかる。
「あ……」
洞窟の手前の人影、長身の人物がこちらに気づいて立ち上がった。
……シサーたち！！待っててくれたんだ？
手を大きく伸ばしてこちらに振る姿に、俺も応えて片手を上げる。
「良かったね」
「うん……」
「カズキぃぃぃぃッ」
シサーの横で勢い良く跳ね上がった人物が、そのままどどどどッと俺めがけて突っ込んできた。思わず足を止める俺に構わずその勢いのまま……って、おいッ。
「うわ……」
どすーんッ。
「……」
キグナス……。
「カズキ、無事だったんだなー。良かったー。心配したんだよ俺ぇ……」

「……ありがとう。ごめん」
ほとんどタックルをくらったみたくキグナスに飛びつかれたまま、尻餅をついてその肩を軽く叩く。シサーとニーナがキグナスの後を追うように、こっちに走ってくるのが見えた。
「カズキッ……無事再会出来て、良かった」
「もう。次から次へと手のかかるコね」
……。
すみませんね。
キグナスがのそっと俺から離れ、地面に座り込んだままで近づいてきたシサーたちを見上げる。
「シンたちは」
「この階層内を、お前を探しに行ってる。俺たちは行き違いにならないように待ってたんだ。出口は多分、ここだろう？……第3階層からは、いきなりこっちに放り出されたからな。この階層のどっかにいることを祈るしかなかったよ」
「いきなり放り出された？」
「ああ。祭壇があって女神像があんなと思ったら、いきなり最初みたいにこいつが」
言いながらシサーが、例の石を取り出した。親指で空に弾いて受け止める。
「反応しやがって、足元がなくなりやがった」
へえ。俺の時とは違う女神像だろうか。パターンがいくつかありそうだ。
「シサーたち、第4階層ってどこに出た？」
「どこって？」
「放り出されたんでしょ」

言いながら、ようやく立ち上がる。俺の真横に座り込んでいたキグナスも一緒になって立ち上がった。
「畑のど真ん中に放り出されたな」
あー……やっぱ、パターンが違う。
いくつかあった祭壇ってのは、やっぱりナタが言った通りだったんだろうか。迷惑な。
憮然と顔を顰めている俺に、シサーがほっとしたような笑みを覗かせた。
「良く、抜けられたな」
「ああ、うん。ナタが……」
頷きながら俺は、少し離れた俺の背後でこっちを見ているナタを振り返った。みんなの視線がそっちを向く。
「……彼女は？」
「初めましてぇー」
シサーの目線に、ナタがにーっとえくぼを浮かべて笑う。紹介しようと思って片手を挙げかけた俺は、そのまま言葉に詰まった。
「ええとー……」
プリースト……とは、言われたくないんだろうな。
何者か……は、俺も知らないし。
まさか祭壇で移動出来る……なんて、どう考えても異常だろうから興味をひかずにはいられないだろうし。
……困った。
「そのー……」
シサーたちが俺の紹介を待っている。
「……ナタ」
「……」
仕方ないので名前だけ紹介してみると、シサーたちはきょとんと

したまま彼女に視線を戻した。ナタが爆笑する。……笑うなよ。あんたの紹介に困ってんだからさ。そういう態度だと言っちゃうぞ。
「えーと、その辺で知り合ったって言うか……」
「その辺ッ！？」
「ダンジョンだぞッ！？」
ですよね。
「あのー……実は前にも会ったことがあって……あッ」
そう言えば昔、シサーには簡単に話したことがあったっけ。確か……キサド山脈麓の、リノの村で。
「シサー、このコだよ。前に言ったパララーザの……」
いきなり思い出したように言う俺に、シサーが首を傾げる。少し思い出すような顔つきをするその横で、パララーザに反応したニーナがシサーを横目で睨んだ。
「ああ。このコか。紫の……って」
「そうそう」
勝手に通じあった俺とシサーに、ナタが首を傾げる。
「何？」
「いや、前にナタにヘイズで助けてもらった後……シサーに話したんだ。パララーザの話を。俺はナタってパララーザの子供だと思ってたし……。そしたらシサーはナタのことを知らないって言ってたから、あれ？って思ってさ」
「ああ」
ナタがシサーを見上げた。
「パララーザの知り合い？」
「ってほどでもねぇけど。俺も奴らも年中うろうろしてるから、何度か遭遇したことがあるって程度の話だ」
「ふうん？」
「ヘイズって、ヴァルスのヘイズか？」
キグナスが口を挟む。そっちに頷いて、俺はその時のことを簡単に話した。

「レオノーラから最初、シサーに会う為にギャヴァンに向かってて……深夜にヘイズについたら衛兵に中に入れてもらえなくてさ。そしたらたまたまパララーザと一緒にいたナタが、中に入れてくれたんだよ」

「んで、それが何で……」

「いや、何か再会しちゃったもんだから」

曖昧に濁す俺に、シサーは不審げに軽く片眉を上げたが、あまり話したくないのを察したのか「まあいーや」と話を切り上げた。シサーってこういうとこ、あっさりしてて助かる。

「あ、そうだ、カズキ」

今の話を忘れ去ったような口調で、シサーがころっと言って荷袋に手を突っ込んだ。

「これ、やる」

「え？」

そう言ってシサーが取り出したのは……魔法石。

「ええ？」

「この階層にぽつぽつ落ちててな。ありゃああったで便利だから、拾っといた」

言いながらシサーは、手に掴んだ魔法石をごろごろと俺の手の中に落とした。大小色とりどりの石が7……8個。

「気がつかなかった」

「便利だろ？」

「もらっちゃっていいの？ありがとう」

礼を言いながら荷袋にしまいこんでいる俺に、シサーが笑う。

「礼を言われるこっちゃねぇだろ。カズキがそれを使う時は、援護してもらってんのはこっちだ」

それはまあ、そうだけどさ。

「とりあえず、カイルたちが戻るのを待とう」

促されて洞窟の入り口まで戻ると、荷物を放り出す。安心したせいか、体がふっと軽くなったような気がした。

いや……軽くなったのは、心だったかもしれない。
「シサーたちも、会ったの？……スウィニに」
荷物を放り出して座り込みながら尋ねる俺の前で、シサーがダイナマイトみたいな筒状のものに繋がっている『炎の種』を引火した。
「シンたちにカズキ見つかったって教えてやんないとな」
にっと笑うシサーの手元から、煙幕じゃなくて閃光弾のようなものが打ちあがる。……へえ。こんなもん、あるんだ。
目を丸くしてその閃光弾がぱっと空に散るのを眺めている俺の前で、シサーが手近な岩に腰掛けながら先ほどの俺の質問に答えた。
「ドワーフのガキな」
やっぱりスウィニはそっちにも出たらしい。出迎えロボットみたいなもんか？随分な出迎えだったけど。
スウィニは俺に『最も恐れている敵』とか何とかって言ってた。じゃあ相手によって戦う敵ってのは変わったりするんだろーか。シサーたちみたいに複数の場合ってどーなんのかなあ。俺とナタの場合は何だか一緒くたになってたけど……。
……あれって何でなんだろ。何かマニュアルじゃないけど、あんのかな。誰かひとりをランダムに選ぶとか、一番嫌がる度合いが高いとか。
スウィニの言葉は、明らかに俺に向けられてた、よな。何でなんだろ。何で？
「何、された？」
聞いてみる俺に、シサーが軽く笑う。
「何されたって……」
けたけた笑いながらシサーは、キグナスの背後、俺の位置からは正面に聳える山を親指で示した。
「何か仲間を助けて欲しいとか言ってあの……山ん中まで連れて行かれてよぉ……」
山ぁ？
俺とイベントが違う。

「何につかまってるとかどうしてつかまったのかは、ろくすっぽ答えやしねぇ。何か臭ぇなと思ったら、いきなりとんでもねぇものを出しやがった」
「とんでもねぇもの？」
黒竜グロダール、とシサーが呟く。……グロダールッ！？
「だってグロダールはッ……」
「幻影だろう。……いや、ここの言葉を借りれば『虚影』か。ともかくその類だ」
だってあいつは、死んだんだから……と笑いを収めたシサーの目が前を見据えた。
「人生ん中で2度もあんな奴と戦う身にもなれっての……寄りによってあいつ出しやがるかんなー」
「倒したの？」
「いや。途中で消えた」
「カズキッ」
消えた？
首を傾げている俺の背中から、ゲイトの声が聞こえた。立ち上がって振り返る。
「無事だったのかーッ」
「ごめん。探させて。ありがとう」
「怪我はしてないか」
心配してくれているとはとても思いにくい無表情で、シンがゲイトの後に続く。その後から更にカイルがこちらへ戻ってくるのが見えた。
「うん。大丈夫」
「すぐ、出発するのか」
シンは俺を素通りしてシサーに尋ねた。シサーが俺に確認するように視線をくれたので、応えて頷く。
「俺は平気」
「だそうだ。じゃあ、すぐに出発することにしよう」

「これでも食っとけ」
立ち上がって歩き出したシサーに続こうとする俺に、シンが何かを放った。咄嗟に受け止めて、目を丸くする。ロートスの実。
「ひとりで切り抜けてきたんじゃ、疲労は抜けないだろう」
そっけなく言いながら通り過ぎるシンにきょとんとしたままの視線を送っていると、ゲイトが笑いをかみ殺すような顔をした。
「ああ見えて、結構心配性」
あ……そうなのか。
「シン、ありがとう」
慌てて言いそびれた礼を口にする俺に、シンがちらっと横顔だけ振り返ってひらひらと片手を振った。それきりそっけなく歩いていく。
そうか……心配、してくれてたのか。
ありがたくロートスの実を齧りながら、みんなの後についていく。みんなが心配をしてくれたことが、素直に嬉しい。
「よっしゃ……行くぜ」
シサーの声に応えるように、ニーナが妖精語の言葉を唱え始めるのが聞こえた。

◆◇◆

スウィニが言っていた『扉を開ける言葉』をニーナが口にして、何もなかったはずの洞窟の奥に、するすると扉が姿を現した。そこから中に入ると狭い洞窟のような通路に繋がっていて、果てはさほど遠くはない。
「グロダールが消えたってどういうこと?」
すぐ先に見える明かりを目指して歩きながら、先ほどの言葉の続きをシサーに問う。俺の斜め前を歩きながら、シサーはぐりぐりと首を回しながら「さぁ〜てな」と答えた。
「かんねーんだよなー。途中で、消えたんだよ。そんでスウィニが

いきなり取り憑かれたみてぇにしゃべりだしたんだ」
ここへの道筋をな、とシサーが親指でこの洞窟への入り口を示す。
……ふうん……。
グロダールは、途中で、消えたんだ？
何だか良くわからないなあ。キグナスを除いて他の全員はグロダールとの戦闘経験があったり、なくたってギャヴァン市民なんだからグロダールの怖さって奴は多分良く知ってるんだろう。だから、グロダールが出るのはまあ……良いんだけど。
「何かのバグじゃねぇか」
そんなゲームみたいなことを言わないでくれ。
「スウィニが何か変なことを言っていたのよね」
扉を開けるだけ開けると、先行を盗賊チームとゲイトに攫われたキグナスに任せることにしたらしいニーナが、不意にこちらの会話に参加してくる。
「変なこと？」
「『歴史は繰り返す』」
「……」
セリフも……俺たちに言ったものとは違うようだ。思わず、隣を歩くナタと顔を見合わせた。
「……どういう意味？」
「言ってる意味は、大体わかるのよ」
「要は、かつて村を失ったように同じことを繰り返すなってぇ話でな。人との共存、それと平行して自分たちの手で自分たちを守れってなことを言ってはいたんだが」
ああ……言い回しは違ってても、言っている内容にそれほど相違はなさそうだ。
そこで一度言葉を途切れさせたシサーに、ニーナが後を引き取るように顔をしかめた。
「だって、まるで何かを暗示してるみたいじゃない」
「どういうこと？」

「俺たちにとってはグロダールとの戦闘は『通り過ぎた歴史』だ。その戦闘が途中で奴が消え、『歴史は繰り返される』……まるで、終わってねぇみてぇだってさ」

シサーは苦笑いを浮かべて、ニーナを親指で示した。

「考えすぎだって言ってんだが」

「だって」

苦笑するシサーに、ニーナが拗ねるように唇を尖らせた。

「嫌なのよ、何だか。気持ちが悪いんだもの」

「考えすぎだ考えすぎ。倒したろ」

「それは、そうなんだけど……」

「……そう言えばさ」

話の流れで、何となく、思う。……考えすぎ……俺こそ、考えすぎ、とは……思う、んだけど……。

「グロダールの死体って、どうなったの」

俺の問いに、シサーが虚を突かれたような顔をした。ぽかんと俺の顔を見つめてから、考える。

「砂化した……んじゃ、ねぇかな」

「……」

砂化……。

何だろう。何が引っかかってるのか良くわからない。良くわからないけど……。

「ドラゴンゾンビ、ってのに、遭遇……したよ」

ぽつっと、不意に思い出したことを口にする。シサーがちょっと嫌な顔をして俺を見下ろした。

「お前、今、凄ぇ嫌な方向に話が向かってるの、わかってるか？」

「……うん。でも、怖いよね？そういう可能性とかさ」

真面目な顔でそう続ける俺に、シサーが何か考えるような目つきをする。黙ったシサーを置いて、ニーナが口を開いた。

「にしても、良く生きてるわね、カズキ」

「は？」

「だって、ドラゴンゾンビだなんて。難易度は相当のものよ？」
「あー……」
うん、まあ確かに俺ひとりなら確実に死んでた。生きてるのはナタのおかげだけど、ナタが神聖魔法を使うと言えないから、しょーがない、また曖昧にごまかす羽目になる。
「はは……まあ、何とか……」
「ドラゴンゾンビか」
「？　何？」
引っかかったような顔で呟きながら足を止めるシサーに、顔を向ける。尋ねようと口を開きかけた俺を遮るように、ゲイトとキグナスの歓声めいた声が響いた。
「おおー」
「凄ぇ～」
その声に、考え込んでいたシサーがはっと顔を上げる。
「ああ……抜けたらしいな」
「今、何考えてたの」
歩き出すシサーにつられて、俺も止めた歩みを再開しながら改めて尋ねる。それに答えてシサーは口を開きかけたが、答える前に何かを振り払うように2、3回頭を軽く振って笑顔を覗かせた。
「……いや、何でもない。行こうぜ」

第2部第2章第26話　海底のダンジョン5　【浄化】　後編（1）

「天井たっけぇな～」

少し先を歩くキグナスの、感嘆するような声が聞こえる。その声がくわんくわんと反響し、暗い先の方へと消えていった。

第5階層――『浄化』。

最後の階層。

短い洞窟を抜けると、その先は鍾乳洞のようになっていた。

見上げるほどの高い天井から、巨大なつららのように石灰岩が垂れ下がっている。……石灰岩で良いんだよな？違ったっけ。

濡れたように光る壁も天井も、どこか深い蒼を帯びている。何となく涼しげな雰囲気。いや、実際空気もひんやりしてるみたいだ。

天井から時折、冷たい滴が伝って落ちる。でこぼこの床の窪みには垂れた滴が小さな水たまりをいくつも作り、新たな滴がそこに落ち込む音が響く。

「例のがらくたは、何か宝に変わったりした？」

シンとゲイトが並んで歩くその後ろを歩きながら尋ねると、振り返ったゲイトがにやっと笑った。もったいつけるような感じの笑み。

「へっへっへ」

「……ありがとう。いいや。シンに教えてもらう」

教えてくれなさそうなのであっさり趣向替えすると、ゲイトが唇を尖らせた。

「何だよもう。……ほら、これ」

いとも簡単に敗北して、ゲイトがポケットを漁った。取り出したのは、鍵。古びた金色の大きな鍵で、持ち手には赤い大きな石がはめ込まれている。それだけで価値はありそうな代物。

へえ……こりゃまた随分……。

「まともになったね」

がらくたから始まったとは思えない。……この、赤い石ってのも

『マールの冒険』に絡んでるのかな。マールは『赤い石』を埋め込んだ髪飾りを女神に捧げて、村へと続く鍵を……。
（……あれ？）
一瞬、何かが引っ掛かる。
「第３階層が結構厄介だったぞ」
何に引っ掛かったのか探ろうとしかけた俺に、前からシンが顔だけ振り返って話を続けた。ので、考えるのをついやめた。
「そうなの？」
「ああ。第３階層は宝箱が多くて、あの……がらくたで開けられる宝箱とそうじゃない……まあ、普通の宝箱とあってな」
高い天井を見上げながら答えていたシンが、不意にぴくっと肩を竦めて顔を顰める。水滴をくらったらしい。
「へえ」
「こっちの……」
前髪に残る滴を弾きながら、親指でゲイトがひらひら振る鍵を指しながら続ける。
「宝箱が、次はどこへ行けそこへ行けって指示しやがる」
「あ、じゃあそれを辿って？」
「そう。でもあの床だわ魔物は多いわ指示に従ってくと脱出ルートからは離れてくわ」
そりゃめんどくさい。
シンとゲイトに交互に説明を受けながら、後ろをついてくるナタを時々振り返る。
「ナタ、はぐれないでよ」
「目印があるから平気」
俺は猫の鈴じゃない。
「でも」
憮然としながら前に向き直って話を続ける。
「じゃあ、結構宝は見つけたんだ？」
「おう」

「半分はがらくただがな。金貨や宝石の詰まった袋はいくつか見つけたな。あとは……」
シンが荷袋に手を突っ込む。
「こんなもんだ」
でかい宝石を埋め込んだシルバーのバングルとネックレス、ちょっと豪華なナイフ……宝剣ってやつか。これだけでも結構価値はありそうだけど。
「でも宝探しって言っても、そんなに持ちきれないほどってこと、ないんだ」
カリブの海賊みたいなさ。
俺に見せたアクセサリー類をまたしまいながら、シンが苦笑いを浮かべた。
「持ちきれないほど入手出来ることは、まずないな。宝の在処なんか大方はデマだ。その中であたりがあればラッキーって程度だし、途中経過で何らかのおまけが手に入るようなことは滅多にない。辿りついたって、せこい箱に石が数個入ってるだけ、なんてこともある。それだってあるだけましだ」
「ほら、ウチの頭も言ってたっしょ？」
ゲイトが後を引き取る。
「カズキたちが探してる腕輪……それを渡すのは他に宝があった場合に限るって」
「ああ……」
そんな保険、かけられたな、そう言えば。
「あんたらのおかげで宝はあるだろうって保証はもらったけど、それが探してる腕輪だけなんてことにもなりかねないもんね」
「はは～……」
なるほどねー……。
ふーん。でも、ギルドが気合い入れて追っかけるわけだ。これまでのダンジョンでもサブ的な宝は見つかったって言ってたから、当たりやすいって見込みがあったんだろう。

何でそんなに宝があんのかな。
思って、第４階層を思い出す。
……村の、再建？
それを願って？
だけど、ダイナのドワーフは散り散りで……ヘイリーだって今は、フラウからかけ離れたロドリスの地でひとり暮らしている。
実際問題難しいだろうけれど……願ったものは、それなのかもしれな……。
（……）
そこまで考えて、嫌な考えに行き当たる。ついでに足を止める。
「ふぎゃ」
唐突に足を止めた俺に、ナタが激突してきた。それに構わず愕然と顔を上げた俺に、前を歩くシンとゲイト、背後のナタの視線が集まった。
「……どした？」
「まさか、とは思うんだけど……」
ドワーフの伝承――『マールの冒険』。
あれのオチは、どうなってた？
俺の言葉に、シンとゲイトが凍り付く。
「……ってまさか」
「……ドワーフの村を再建したどっかへの行き方だとか、説教じみた何かだとか、そんなんだったらどうする？」
やべー。考えなきゃ良かった。
ありえないことじゃない。
マールの冒険は夢オチ、宝らしい宝は最終的に出てこない。彼らの宝は、『失われた村』、そして共に暮らす温もりだ。
「ま、だとしても……」
つい輪になったような状態で足を止めたまま沈黙していると、シンが前髪をかきあげながらため息混じりに口を開いた。
「ここまでの過程で宝は多少入手はしているし、いずれにしても入

り込んだ以上攻略をしなけりゃ出られん」
……ま、ね。
再びぞろぞろと歩き出しながら、眉を顰める。
それは、それで良いさ。俺たちが求めてるのは財宝じゃない。別にざくざく出てこなくたって、構わないんだ。
けど。
例えばヘイリーの腕輪が、ダンジョンのどっか、それも見落としてる宝箱とかに入ってたら、どーすんだよ。
実際俺は、第3階層で宝箱を逃している。仕方ないじゃないか。開けられないんだから。
そんなことをつらつら考えているうちに、そう言えばナタと再会した時に手に入れたものがあることを思い出した。ポケットをまさぐる。
「キグナス」
鍾乳洞の中は、真っ直ぐだ。柱や巨大な水たまりを迂回するものを道とするならその道は余りに多岐に渡ってはいるんだけど、どっちにしてもそれが続いてるのは同じ場所、でかい意味で同じ道だ。しかもそれが見てわかる。
なので、迷うことも何もなく、俺たちはひたすら鍾乳洞の中を進んでいった。魔物も出ない……静謐（せいひつ）な空気。
「んあー？」
今はシサーは先頭でカイルと並んで歩いているし、ゲイトは俺の前をシンと並んで歩いている。おかげでその更に少し前をぼーっと平和に歩いているキグナスに近づきながら『それ』を差し出した。
ナタが倒したあの魔術師が持っていたアイテム。
「これ、あげる」
「？　何？」
キグナスが目を瞬く。俺も軽く首を傾げながら、差し出された手の上にそれを乗せた。
チェーンで繋がる金色の小さなリング。

「俺にも良くわかんないんだけど、魔術師のアイテムだって言ってたよ。……ナタ」

わからないのでご教授願おう。振り返りながらナタに呼びかけた俺につられて、キグナスも足を止めて振り返る。その脇を、ゲイトがキグナスを小突きながら通り過ぎた。……素直に通り過ぎてあげてよ。

「何？」

「これ、どうすれば良いの？」

「ああ」

キグナスの手の中の金具を示すと、ナタはにこっと八重歯を覗かせてロッドを示した。

「ロッドに装着するんだよ。例えば……」

そう言えば、ナタだって魔法を使うし、ロッドだって持ってるんだよな。ナタは、何でいらないのかな。

そう内心首を傾げてから、ドラゴンゾンビをあっさり始末した光景が目に蘇った。

……ま、あれだけの実力があれば、いらないっちゃいらないかもしれないけど。明らかにキグナスにあげた方がお役立ちだろう。

それとも、ソーサラーとプリーストじゃあ異なるんだろうか、装備が。

考えてみりゃ、魔法の種類も違うし、ロッドのタイプも違うしな。つらつらとそんなことを考えている間に、ナタはキグナスのロッドにそれを装着した。

てっぺんについている青い石の下、その土台にリングを繋ぎ、チェーンで絡めている。キグナスが動かすと、しゃらっと音を立てた。

「どーなんの？」

それをふりふり、俺に尋ねる。だから、俺に聞かないでくれ。わかるわけがない。

「さあ」

「使える魔法の種類は変わらないよ」

並んで歩き出しながらナタが説明する。気づいてみれば、シサーたちもシンやゲイトも随分先に進んでしまった。
「ふうん？」
「けど、その威力は圧倒的に変わるはずだ」
「……その辺の加減みたいなのは……」
「やりながら自分で体得するんだね」
ナタの言葉に、キグナスは握ったロッドを見つめた。それから俺に視線を戻す。
「ありがとう」
「……や、俺は使い道ないわけだし」
「どしたんだ？拾ったのか？」
まあ似たようなものだ。
「遭遇した魔物が持ってたんだよ」
「へえ」
もう一度ロッドを見つめてから、キグナスが嬉しそうに笑う。
「これで強くなれるといーんだけどなあ」
「だけど、気をつけなよ」
ナタが横から、諫めるように口を開いた。キグナスがオレンジの目を瞬く。
「気をつける？」
「アイテムに頼ると、人の能力は成長をやめる。ロッドを使うのはまあ仕方がないけれど、強力になったからってコントロールを怠けたら、ロッドなしでの魔法が使えない」
「……今だって使えないやい」
「ってまんまで放っておいたら、ずっと使えないだろ。意識して、コントロールするようにするんだね」
それからナタは、ぽつっと呟くように言った。
「アイテムに頼ると、いざと言う時に自分を守れなくなるからね」
……あれ？
どこかで、聞いた。

そうは思うものの、いつ、どこで聞いたのかわからずにいる俺の横で、キグナスが神妙な顔で頷いた。
「ん、そっか」
こんな年端もいかない少女に言われてるにも関わらず、反発する様子を見せずに頷くキグナスがおかしい。基本的に根が素直と言うか……育ちが良いんだろうな。何か。可愛がられて育ったって言うか。シェインも可愛がっているみたいだし。
「んでも、これで何か変わるかな。変わると良いな。……別に魔力が変わるわけじゃない？」
「魔力自体が増えたり減ったりするわけじゃないけど、同じ消費量で強力になるから、節約にはなるんじゃないの」
「へえー。いいなあそれ」
「ここは、魔物出ないのかな」
「どうだろうね……ねえ、気づいてた？」
「え？」
「おーい」
ナタが何かを言いかけるのを遮るように、前方からゲイトの声が上がった。見れば、先行していた5人がこちらを待つように足を止めて振り返っている。
「チェックポイント」
……スタンプラリーじゃないんだけど。
「え？」
「多分、ダイナの石だな。それで扉を開けるんじゃねぇかな」
追いついてシサーの示す方を見ると、岩窟に埋もれるようにして扉があった。ちょうど腰の辺りの低い位置に、窪みがある。ドワーフくらいの身長だったら目の辺りに位置するだろうと思われる場所。
「いきなり何かが起こってもたまんねぇからな。全員が揃ってからの方が良いだろう？」
「うん。そうだね」
せっかく再会出来たのに、またはぐれてしまったら洒落にならな

い。
　頷く俺の目の前で、シサーが「じゃ、行くぞ」と例のダイナの石を取り出した。それを窪みにはめ込むのを見ながら、ナタを振り返る。
「で、何？」
「何が？」
「さっき、何か言いかけたんじゃないの。『気づいてた？』って、何に」
　扉の動きに目を向けたまま、尋ねる。手は半ば無意識に腰の剣に伸ばされた。他の面々も、何が起きても良いように一応武器を構える姿勢だ。扉が開いた途端に何かが出て来ないとも限らない。
「ああ……」
　石に反応して、扉が自動的に開く。それと同時に、石がぽとりと外れて地面に落ちた。何て杜撰な。手近にいたので、それを拾い上げてシサーに渡す。
「待ってろ」
　唐突に魔物が飛び出してくるようなことはなさそうだ。シサーの剣も静かなものだし。
　カイルが言い残して、シンを連れて中に入る。それを見て、まだ一応剣の柄に手は掛けたままなものの、気を抜いて俺はナタに視線を向けた。ちなみにみんなが戦闘体勢に入っている中、ナタだけは自然体。
「いや、だからね、壁に時々刻まれてる文字」
「え？」
　気づいてない。
「壁にところどころ、聖書の文言が刻まれてる……」
　へえ？そうだったんだ？
　俺が首を傾げていると、その言葉に反応したのは扉のすぐそばにいたニーナだった。
「気づいてたわ」

「第3階層でも思ったけど、ここは随分、ファーラ教色の強いダンジョンなんだね」
え？そうなの？
俺はそんなことを思う機会がなかったんだけど。
そりゃあ言われてみれば、女神像ってのは多かったりするけど、でもそれってローレシアなら道端に祭壇があったりするわけだし、ローレシアほどじゃないって言うけどラグフォレストだってファーラ教が強いって言うし、大体ここ、ローレシアのドワーフのダンジョンだし。
だからそれほど気に留めるほどでもないような気がしてた。
ニーナがナタを振り返って頷く。
「そうね。ここもそうだけど、第3階層の抜け方がね……あなたが、導いたの？」
「そう。妖精語ってだけじゃなく、カズキがわかるわけがないじゃない」
「……え？抜け方って？」
祭壇があって……祠が道を教えてくれてって、あれ？
意味がわからずにいると、ニーナが吹き出した。
「やだ、教えもしなかったの？」
「教えても無駄だもん。結論だけ教えた」
「祠で道を教えてもらった、でしょ？」
要領を得ない俺に、ニーナが説明をしてくれる。
「うん」
「質問形式になってたのよ」
「質問？」
「そう。……問われたのは、ファーラ教の教義」
「……」
思わず無言でナタを見る。ナタはへらーっと舌を出した。
「例えば……そうね、ファーラの右手に持つのは錫と思うなら右へ、剣と思うなら左へ、みたいな感じ。間違えればそこから祠はなかっ

たのかもしれないわね」
「ええ!?」
そ、そうだったのか。
俺には妖精語はもちろんまったくわかりはしないし、話を理解して聞いていたのはナタだけだから、そんなことには全く気がつかなかった。
じゃあ、ナタがひとりで質問の答えを見つけて俺を導いてくれたってわけだったのか。
それは悪かったな……。が、ナタの言う通り、ファーラ教の教義だのなんだのって質問を投げられたところで、俺が答えられるはずもない。対するナタはこう見えてプリーストだ。得意分野だろう。

「そうだったのか。ごめんね。ナタ」
そうは思うものの、がっくりしてつい謝罪をしていると、ナタが照れたように笑った。
「へへへ」
「でも、じゃあ良くそっちは抜けられたね」
ニーナは妖精語は理解出来ても、敬虔なファーラ教信者だとは思えない。そもそもエルフがそういうのを信仰したりするのかわからない。……あ、でもここってドワーフのダンジョン。そこでこうなら、それは別にありなのかな。でも普段の様子を見てると、少なくともニーナは別段深く信仰してるわけじゃなさそうだよな。
思いながら答えを待っていると、ニーナは笑いながらキグナスを示した。
「キグナスが大活躍だったわね」
「え!?」
何て予想外な。
俺の視線を受けて、キグナスが照れ臭そうに鼻の頭をかく。
「やっぱりこう見えて、ファーラ教を守護するヴァルスの貴族なのね」
「ふえ～」
「だって他のメンツ、見てよ。シサーにカイルにシンにゲイト。……誰がファーラ教に通じてるって言うの」
そりゃまあ確かに。
民間の間でも信仰されてるんだから知らないことはないだろうけど、深くいろいろ突っ込まれるんだったらかなり危ういものがある。
「キグナス……やるじゃん」
「やらされんだよ、そういうの。ユリア様ほどじゃねぇけど」
キグナスが貴族階級なんだって言う認識を初めてしたような気が

する、俺。
「ダイナのドワーフってのは、随分と敬虔な信者なのね」
ニーナの言葉に、ナタが顔を跳ね上げた。
「ダイナのドワーフ？」
「え？」
「ダイナって……モナの、フラウにあった？」
「ナタ……？」
何だかナタの顔つきが変わったような気がして驚く俺たちに、戻って来たカイルが声をかけた。
「少し行くと、滝があるみたいだな。多分滝の裏に道がある」
促されて歩き出しながらナタを見下ろすと、ナタが小声で尋ねた。
「ここは、ダイナのドワーフが作ったの？」
「うん。って言うか、ダイナのドワーフのダンジョンなんだ」
「そう……」
そう言やナタって、俺たちが何しにここに来てるのか知らないんだっけ。
扉を抜けた先は、似たような風景が広がっていた。今歩いてきたのより少し狭めの鍾乳洞。
「俺たちはダイナのドワーフに頼まれて探しものをしに来たんだよ」
「探しもの？」
「そう。……自分の作品って言ってた」
「ああ」
ドワーフは自分の作品に深い思い入れを持つからね、とナタが納得したように頷く。
「シンたちはギャヴァンのギルドで、まあ彼らは単にここの財宝を追ってて……利害が一致したから、一緒にダンジョンの攻略に協力しあってるってわけ」
「そうなんだ」
「うん。……ここは、宗教色が強い？」
先ほどの話題を尋ね返した俺に答えたのは、黙って俺とナタの話

を聞いていたキグナスだった。
「強ぇな」
「そう？」
俺にしてみれば、自分の世界……それも日本なんかに比べたら、最初から宗教色が強く感じられるもんだから、何か今更と言う気もする。
「祠で示される内容ってのは、結構コアだったぜ。俺もわからなくて当てずっぽうだったりしたもん」
「ダイナのドワーフってのは、信仰が強いんだよ」
「へえ？そうなの？」
「うん」
ふうん……。
話しながら歩いていく間に、洞窟の幅は狭くなっていく。カイルの言っていた滝の水音らしきものが次第に迫力を持って近づいてきて、ますます空気がひんやりしていくのに伴って、やがて『いかにも洞窟』と言うようにすぼんでいった。激しい水音に包まれながら出口を抜けると、急に視界が開ける。
と言って外に出たわけではないが、天井は最初の鍾乳洞より更に高くなったし、左右も開放的に拓けた感がある。
何と言っても、鍾乳洞の出口から数メートル先は豪快な崖になっていて、遙か下には碧い水を滔々と湛えていた。俺たちがいる高度からほんの僅か下の正面には向かい合うように崖があり、そこから流れて来る水がもの凄い重爆音を上げながら水を下に叩き落としている。これが、水音の正体だ。
「ひゃ～……すっげぇ迫力」
下を覗き込むようにしてキグナスが呟く。見下ろす眼下は数十メートル……どころじゃない、だろうか。落ちたら間違いなく命がない。第3階層で俺が突っ込んだ湖がこんなんでなくて良かったとしみじみ……。
「あの裏に、道がある？」

黙って俺の隣に並んだカイルに、顔を上げて尋ねる。カイルは逞しい両腕を組んで滝を見据えながら頷いた。
「しばらく見てろ。……水量が減る時がある」
「え？」
言われて、俺とキグナスは黙って滝に視線を向けた。しばらく沈黙して滝を見つめる。気づいてみれば全員が同様にして、その瞬間を待っていた。
「……あ」
見守る中、湖に流れ落ちる水流が徐々に細くなる。なりはするものの、決してなくなるわけではないんだが、幅が狭くなったせいでその水流――滝の裏側が、僅かに恒間見えた。
「ほんとだ……」
小さく呟く。滝がなくなるわけではないからその全貌は見えないけど、水が流れ落ちるその裏側に小さな黒い口が開いているのが見える。だけど、滝の両サイドに見える隙間からじゃあどう考えても入れそうにない。どうやってあの洞窟に入れば良いんだろうか。
って言うか。大体。
「……どうやってあそこまで行くんだ？」
ぼそっとキグナスが呟く。問題はそれだよな。
ぐるっと見える範囲を見渡してみるが、どう譲歩してもあそこに続く道はありそうにない。
今俺たちがいる場所は岩棚のようになっていて、すぐに絶壁で途切れている。向こうとこっちを隔てるように崖と湖、反対側の岩棚だって、水の流れる口が開いている程度ですぐに壁だ。あそこからどこかへは、とても行けそうにない。
滝の裏にもここと同じような張り出しが湖の数メートル上にあって、あそこに立てれば裏の洞窟には入って行けるんだろうけれど……。
「ヒントになりそうなもの、あったっけ」
滝に目を向けたまま、ぽつんと言う。キグナスも、そちらを見た

ままで答えた。
「ないんじゃねぇか？」
「……」
マールは長老に丘に連れて行かれる。そこから見渡した光景、失われた彼の村――それが、彼らの宝。
「シサー」
ぼんやりと、また水流を強めていく滝を眺めている俺の耳に、シンの声が届く。つられてそちらを見ると、シンとゲイトが何かを発見したみたいだ。今出てきた洞窟の出入り口付近、それもかなり低い位置……ドワーフ仕様の高さにあるプレート。
第1階層や風の砂漠のダンジョンにあったプレートと同じものなんだな、考えてみれば。材質とかデザインとか。
一緒になって近づいてみると、大きさの割には何の文字とか刻まれているわけではなく、例の石をはめるんであろう小さな窪みがあるだけだった。
「鍵ってどこで使うのかな」
滝の裏に入ると使える場所があるんだろうか。
そんなことを思いながら石を置くシサーの手元を見つめる。静かに声が響いた。聞き覚えのある声……。
――……時を待て……
最初の神殿の、あの声だ。
思わず辺りを見回しながら、言葉の続きを待つ。
待つ、ん、だが。
「……」
……えぇぇ～？
それだけかよ。
勢い、全員が嫌な空気の沈黙に陥っていると、不意にシンが「おい」と呟くのが聞こえた。振り返ると、隣に立つゲイトにさっきのプレートを親指で示している。
「あ」

「何か起きた？」
「文字が出てきた」
「どれ？」
再びプレートの周りに集まる。覗き込んでみれば、さっきはなかった文字が浮かび上がっていた。それを見て、またも全員が嫌な沈黙になる。
「……ねえ」
明確にわからない俺だけが口を開いた。
いや、確かに明確にはわからない。けれど何となく見覚えのある文字の並び、そして僅かに混じる俺の覚えた単語。
まさかとは、思うが。
「これ、まさか……」
プレートの前にしゃがみこんだままのシンが、珍しく苦い表情を浮かべながら俺を見上げて答えた。
「ああ。『３つ目の鍵』ダンジョンに書かれていたのと、同じものだ」
「な……」
……にぃー！？

◆◇◆

『うみにみえるところ
うみのめがみがあらわれるとき
うみにつづくみちをさがせ』――。

……気分は、振り出し。
とにかく、『時を待て』と言うんだから、ここで野営をするくらいの気分で時間が過ぎるのを待つことにしてみる。これは、何となくわからなくはない。
滝の水量は、何の加減なんだか増えたり減ったりしている。ちょ

うど、通れるくらいに減る瞬間があると言うことなんじゃないか、と言うのが俺たちの意見だった。

尤も、その時にあちら側にどうやって渡るのかまではまだわからない。『その時』までに何とかその手段の見当くらいはつけておきたいとあれからあちこち探り倒したが、もうこれ以上わからないと言うところまでやり尽くし、以降、俺たちは各々地面に座り込んでぼけーっと無為に時が過ぎるのを待っている。

あのフレーズがまた出てきたのはどういうわけなんだろう？出口の在り処？まさかと思うが本当に振り出しに戻されるわけじゃないだろうな。

「……あ」

あてがなくただ時が経つのを待つと言うのは、精神的に結構疲れる。そのせいか誰もが無言の中、ニーナがぽつんと呟くのが水音の中に聞こえた。その声に顔を上げている間にも、滝の水量がみるみる減っていく。それも……これまで増減があったのとは比較にならないほど速やかに。

「来たか」

ニーナの隣で、座り込んでいたシサーが立ち上がる。俺も立ち上がって崖際に歩み寄った。みるみる減っていく水は、あっと言う間に細い流れに変わり、まだちょろちょろしてはいるものの、あれなら抜けて裏の洞窟に行ける。

けど。

「……くそ。どうやってあっちに渡りゃあいーんだよッ」

ゲイトが盛大に顔を顰めて舌打ちをした。確かに期待したような、向こう側へ行けるような変化は……。

――盗人か、真に資格を有するものか、見せてもらおう……

途切れた水音に、声がかぶさる。いつもの声、そしてこのフレーズもまた、知っているものだ。

最初の神殿で言われた言葉……。

「こんだけ試して、まだ試したりねぇのかよ」

そうは言っても、あんだけ試されてここまで来た割に、実際この中に受け継ぐべき資格を持つ者はひとりもいないからなあ……。疑り深くなってもそりゃ道理、なんて思いたくもなるんだが。

ここに来るまでの『試験』に切羽詰まったものを感じたことがないから、ついそんなふうに思う。

が。

これまでと違ってここの『試験』はそんな生易しいものではなかった。

――我々ダイナのドワーフは、ルシルウの泉のウンディーネと相互協力の契約を交わした……

相互協力の契約？

――……彼女の名を、答えよ……

声が、問う。

誰もが、息を飲んだまま口を開かなかった。

その問いに答えられる者は、ここにはいない。わかるわけがない。

それこそ……ダイナのドワーフでもない限り。

――……盗人、その正体を表したり……

答えに詰まる俺たちに、今まで淡々と言葉を紡いでいた『声』が色を滲ませる。嘲るような、あるいは……怒りを滲ませるような……。

――うぬらの恥を知るが良い

――今こそ、欺き続けた汚れを『浄化』してくれよう……

その言葉に、緊張が走る。やばい、これまでと違って、外したら制裁がある……！？

それきり静かになった声に、俺たちも沈黙して何が起こるのかを思わず待った。シサーの剣の白光――何かが起こる……！！

「うわ……」

キグナスの呟きが聞こえた。足下から洞窟全体を揺るがすような重い響きが、それをかき消す。視界が何重にもぶれるように足元が細かく、激しく揺れ、俺は目の前で起こっている展開に完全に目を

奪われていた。
「嘘だろッ……」
どごんッどごんッと重い音を立てながら、崖下から浮かび上がってくる岩が積み重なっていく。重い唸りを上げながら、意志でも持っているかのように……まるで、何かを組み立てていくかのように。
「まさか……」
目の前で次々と造り上げられていく姿。
それは、ロドリスの館で見たものを彷彿とさせた。――『黒衣の魔術師の館』で見たもの……。
「ゴーレムだッ……」
第5階層――『浄化』。
このネーミングは、間違いだ。『浄化』なんてもんじゃない。……『粛正』だ。
ドゴーンッ。
組み上がったゴーレム……ストーン・ゴーレムが、その巨大な腕を振り上げる。重力のまま振り下ろされた握り拳が、地面に破片を巻き上げながら叩きつけられた。咄嗟に全員、その破片を避けながら地面を蹴って散開する。……勘弁しろよッ……こんな狭い崖っぷちで戦えってのかッ!?
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ナートゥーラー・ドゥーケ・ヌンクァム・アベッラービムス……『風の刃』!!」
「軽やかに踊る風の精霊シルフよ、その姿を刃に変えよ!!ウォラト!!」
続けてキグナスとニーナの魔法が発動される。ゴーレムに俺の剣は効果がないッ……。舌打ちしながら、先ほどシサーにもらった魔法石を取り出す俺の目が捉えたものを、つい俺自身が疑った。
耳を劈(つんざ)くような豪快な音。ゴーレムの右肩が木っ端になっている。
「キグナス……」
「……嘘ぉ」

当の本人が目を点にして唖然としている。キグナスの『風の刃』……それが、今まででは考えられないほどの威力を発揮してゴーレムの体を粉砕したんだ。

これが、あのアイテムに引き出されたキグナスの力……。

しかも、まだほんの一部かもしれない。

ドカーンッ。

右肩を粉砕されたにも関わらず、顔色ひとつ変えずにゴーレムが足を踏み出し、また手を地面に叩きつける。拳大以上の砕かれた破片が四方八方に高速でばらまかれ、その破片をくらうだけでも多分、相当のダメージ。

「うひゃー、いいなあ、これぇ」

「浮かれてないで何とかしろよッ」

スキップでも始めそうにご機嫌なキグナスに、横合いからゲイトの怒声が飛ぶ。その間に魔力付与道具を持つシサーとシンが、ゴーレムに踊りかかっては攻撃を加える。カイルはゴーレムの前方でその動きを引きつけ、ゲイトはパンツのポケットから何かを取り出して、口で何かを噛みきった。……発破!?

ちなみにナタは相変わらずの見物コース、悪いんだが俺も大した力になれない。

「『ノームの手』ッ……」

足止めくらいにはなるだろうか。手にした魔法石をゴーレムに向けて叩き込む。それに被せるように、調子に乗ったキグナスが魔法を飛ばした。

「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、ナートゥーラー・ドゥーケ・ヌンクァム・アベッラービムス……『風の刃』ッ♪」

更に、ほぼ同時に着火した発破を『ノームの手』に絡められたゴーレムへと投げつけたゲイトが怒鳴る。

「散れッ」

その声を受けて、接近戦を挑んでいたシサーらが後方へと逃れる。

起こる爆音、爆風、立て続けに炸裂したキグナスの『風の刃』。折り重なるような種々の風圧を受けて、ゴーレムが作り上げた瓦礫が舞い上がっては吹き飛んできた。全身に石礫を浴びて、痛い。

「軽やかに踊る風の精霊シルフよ、その身を障壁の渦と変えよ。フェレンティース！！」

無言で、欠けまくった体を起こしながら腕を振り上げるゴーレムに、ニーナが俺たちを防御する。

「カズキッ、ナタを守れよッ」

シサーから飛んだ声に、思わずナタと顔を見合わせた。ナタが俺を見上げて嬉しそうに微笑む。

「守ってね」

「……」

俺の守りなんか、あんたにゃ必要ないでしょが……。

呆れて、にこにこするナタを見下ろす俺の視界で、ゴーレムから離れたこちら側に駆け寄ってきたカイルが背中の荷物からボーガンを取り出すのが見えた。魔法石をゴーレムに投げつけ、『ノームの手』による拘束の延長を図りながらそれを見る。カイルはゴーレムではなく対岸……滝の方の壁をめがけて続けて3発、ボーガンを放った。放たれたボーガンにはロープがそれぞれついていて、カイルはこちら側のロープを崖際の岩に固定した。

「何……」

「このままじゃあ『資格』を認められなかった俺たちは、向こう側に渡らせてもらえそうにない。水が弱くなってる間しか穴には抜けられんだろうから、時間もさほどないだろう」

カイルが低い声で答えながら、ぐいっとロープの固定具合を図るように引っ張る。

「俺が行く」

ゴーレムに投げつけたチャクラムを受け止めて地に降りたったシンが、こちらに駆けてきた。……行くって。

「あっち側で確実に固定したら、ナタとカズキは渡って来い」

……渡るって……まさかとは思うが。

第2部第2章第26話　海底のダンジョン5　【浄化】　後編（3）

認識したカイルとシンの意図を現実と受け止めたくない俺の前で、シンは腰の袋から金具を取り出した。鉤爪のようになっているそれをロープに引っかけ、2、3回体重をかけるようにしてロープの具合を確認すべく体を弾ませる。

「『風の刃』ッ♪♪」

キグナスの快調な魔法と爆撃音が続く中、シンがふわりと体を崖下に踊らせた。片手でぶら下がった金具が勢い良くシンごと、対岸に向けて滑り落ちていく。その体重にぐいっと下に一度たわんだロープが、左右の儚いストッパーに支えられて持ち堪える。

「シンッ……」

なんて剛胆な。

つい崖を覗き込むと、水面は遙か下、落ちたら間違いなくただでは済まない高さだ。覗き込むだけで胃が縮む。

シンの背中はみるみる小さくなり、やがて向こう岸に……と、うわあああ……。

ブチィッ……ガン、ガシャンッ……。

対岸に突き刺さっていたボーガンの1本が、弾け飛ぶように抜けた。当然渡されていたロープも一緒に弾け飛んで、奈落へ吸い込まれていく。

思わず息を飲む中、シンは残り2本のロープで向こう岸へと辿り着いた。

「……っかねー……」

「まあ、これ用に改造してあるとは言え、こういうこともあるだろうな」

そんなあっさり呟くけど、下手したらシンは真っ逆さまだよ、カイル。

「ゲイトッ、もっとでかい発破ってのはねぇのか！？」

「光を与えしウィル・オー・ウィスプよ！！その身を裁きの矛と変えよ。ポエブス！！」
「無茶言うなよッ。こっちだって市街戦で物資が不足してんだッ」
時折背中から爆風と石礫を感じながら、対岸でこちらに背中を向けて作業をしているシンの背中を見守る。やがてシンがくるっとこっちに向き直り、片手を上げるのが見えた。それに応えたカイルが、シンが持っていたのと同じ鉤爪の金具にロープをくくりつける。
「？」
「スライダーには限りがある。残念ながらひとりにひとつずつ渡してやるわけにはいかんからな。誰かが渡りきったらこれでたぐり寄せる」
ああ……そうか。
それからおもむろに、カイルが俺の方を見た。
「じゃあまず行け」
「……」
俺ですか？
「まさか彼女を先に渡すわけにはいかんだろう」
カイルがナタを示す。
そりゃそうだ。そりゃあ、わかってるんだが。
「……」
ひゅるるるる……。
つい覗き込んでしまう崖っぷち。
胃が痛くなるほど、高い。
頼りになるのは2本のロープ。
以上。
（……）
「早くしろ。水流が戻る前にこれだけの人数が渡らなきゃならん」
ですよね。
（仕方ない）
シンは補強も何もしていない一発目を渡ったんだ。怖じ気付いて

どうする。情けない。
とは言え。
「……」
スライダーを手に、崖っぷちに立つ。
「うわーお。高いねえ」
他人ごとのように言うなよナタ。俺が行ったら次はあんただ。
「はあ……」
不思議だよな……死ぬかもと思ったことは何度もあるし、魔物と対峙したって怖くない。いや、今だって怖いとは多分、頭では思ってない。
けど、体が。
胃の辺りをせり上がるような緊張感。これってやっぱり、怖いんだろうか。
「……じゃあ、行きます」
覚悟を決めて、スライダーを握る手に力を込める。思い切って地面を蹴ると、ふわりと体が浮いた次の瞬間にはがくんと全身に重力がかかった。
（うわー……）
が、それも一瞬のことで、すぐさま手に持ったスライダーが俺の体を引き留める。ロープがたわんだかと思うと、俺の体はすっさまじいスピードで斜め下めがけて滑り出していた。下る勢いで起こる風が耳元でびゅうびゅうと音を立て、髪が毟（むし）られるんじゃないかって勢いで後方に引っ張られる。
（ひぇ～～～……）
これで手が滑ってみろ。高校生活では味わえない死に様が体験できる。もはや俺の頭にはゴーレムの存在など片鱗さえも残ってはいない。
耳元で風を切る音と体中に受ける風圧、重力で息が詰まりそうになっていると、やがて速度が緩くなった。ロープの傾斜がなだらかになってきたんだろう。

みるみる眼前に迫っていた岩肌が、急に近づく速度を落とす。さっきの速度では辿り着いた時に壁に叩きつけられる自信があったが、これなら何とかバランスを取って着地できそうだ。
「ご苦労」
「……っと……」
滑る勢いに任せて、スライダーから手を放して降り立った俺に、迎えてくれたシンが笑う。
「あー、心臓に悪かった……」
「道が出来ないからな、これ以外にやりようがない。しかも」
言いながらシンがすぐ近くで上からぽちゃぽちゃと落ちてくる水流を見上げながら、カイルに向かって片手を挙げる。
「時間がないんじゃないか、多分。これを逃すとまた次はしばらく待たなきゃならんだろう」
「うん……そうだね」
するするとカイルに巻き取られて、スライダーが向こう側へと戻って行く。一方で、シンが再度こちら側のボーガンを補強した。
スライダーが完全に向こうに戻りきり、続いてこちらに渡ってくるナタが中程まで来たところで、対岸から一際でかい爆音が届く。ゲイトがさっきのよりでかい発破を使用したらしい。
ただでさえ体のあちこちがぼろぼろと欠けていたゴーレムは、それで間違いなく止めとなったようだ。一挙に残った全身が粉砕され、まるでその一部だけ砂嵐でも起こっているかのようにぱっと細かな粉塵が舞い上がったように見えた。ここから見ても決着がついたことがわかる。
「まだ、大丈夫だよね……」
「さあな」
時折滝の様子を見上げてみれば、水流が戻るまでにはまだ余裕がありそうではある。
けれど、急いでおくに越したことはないだろう。
カイルが対岸でみんなを急かしているのが見える。ゲイト、ニー

ナ、キグナス、シサーと次々にこちら側へスライダーで湖を渡り、その間、シンは幾度もボーガンの補強をしなおした。
「ひぃぃぃぃ……おっかねえええええ……」
「いよいよ最後か？」
滝の裏に見える洞窟に向き合って、けろっとしているシサーがにやっと笑いを浮かべる。
さっきまでのご機嫌はどこへやら、スライダーですっかり怯えきったキグナスが地面にへたりこんでいる間に最後のカイルが渡り終え、俺は手を貸してキグナスを立ち上がらせると、その肩を軽くぽんと叩きながらシサーに続いて洞窟へと足を向けた。
「ほら……急ぐぞ」
「……うん」

◆◇◆

「資格はもらえなかったけど、大丈夫なのかな……」
この洞窟もあまり長くはなさそうだ。既に先が見えている。出口へ向けて歩きながら呟く俺に、まださっきの恐怖を引きずったようなキグナスが答える声が届いた。
「どっちにしたってあのまんまあそこにいるわけにゃいかねぇし、しょうがねぇんじゃん？」
「そりゃそうだけどさ、わかってるか？俺たち、ヘイリーの腕輪を手に入れなきゃ、バルザックの行方がもうわかんないんだぞ」
「あ、そうだった」
「……」
ダンジョンを満喫したみたいで何より。
短い洞窟を抜けると、小さな部屋に繋がっていた。見上げると、ここの天井もめちゃくちゃ高い。けど、ちょっと不思議な光景だった。
不思議だったのは天井じゃなくて、壁。

ぐるりとその小さな部屋を囲むように広がる壁は、ガラス張りのように透けていた。二重構造になっているらしく、内側の壁から隙間を置いて外側にもうひとつ、そちらは不透明な、床と同じ青味を帯びた黒い岩壁だ。

2枚の壁の間には何もない。少なくとも今のところは。けれど、内側の壁の向こう側に水跡があることと、隙間の床に水の名残がまだ僅かにたまっているところを見ると、水が隙間を満たすようになっているらしい。水位が上がったり下がったりするような。

……どういう、ことだろう。

何か、嫌な感じ。意味もなく上がったり下がったりするとは考えにくい。いや、理由があると言うより、例えば自然とそうなるとか……自然とそうなる？

潮の、満ち引きのように？

そのイメージは、俺に何かを彷彿とさせた。何か……何……？

（あ、そうか……）

少し考えて、その答えに行き当たる。シサーが前に言っていた、『人魚岩』の辺りの潮の満ち引きを連想させるんだな、何となく。

結局、あの『道が出来る』とかって話は関係なかったんだよな。だって俺たちは結局『人魚岩』に近づくことなく、このダンジョンにこうして入り込んでいるわけだし。

この小部屋には、正面にドアがあった。鍵になるのは『わらしべ長者』で手に入れた、ゲイトの持っている鍵だろうと思ったのは俺だけではなかったんだが。

意に反してそうではなかった。

「あれ？」

「どうしたの？」

「開いてる……」

開いてる？

ゲイトの言葉通り、その扉に鍵はかかっていなかったようだ。するりと抵抗もなく扉は開き、ゲイトは首を傾げながら中を覗き込ん

だ。
「う、わ……」
途端、中から小さな感嘆の声。
「どうし……」
続いて中に足を踏み入れた俺にも、すぐにその理由がわかる。
扉から続く部屋は、広いものではなかった。奥行きは3メートルくらい、幅は……5メートルよりはありそうかな。だけど10メートルはないと思う。ゲイトが声を上げた理由は、その正面の壁を見たからだろう。壁一面を埋めるような、でかい1枚の絵。
風の砂漠のダンジョンのような壁画じゃない。ちゃんとした絵画だ。キャンバスで言えば何号ってことになるんだろう。壁を埋めるそのでかい絵は、丁寧な細工の為された豪奢な額縁に収められていた。見た感じでも美術的価値は相当ありそうな代物。
だけど。
「……これ？」
絵に視線を定めたままぽつんと呟く俺に、シンが唸るのが聞こえた。
……ありうるな、とは思ったんだよ。確かに。
だけど……。
「『財産は故郷』ってか……」
同じように絵画に視線を定めたままで、キグナスがぼそりと呟いた。
絵に描かれていたのは、少しだけ高い位置から見下ろした村の風景。それは第4階層の光景に良く似て、陽気な笑い声を上げているだろう鍛冶場のドワーフや、酒樽を囲んでいる姿がここからでも良く見える。風の流れさえ伝わりそうなその動的で尚美しい光景は、本来の資格を持つドワーフならその温もりさえ感じて涙をこぼすであろうほどの……だけど。
ではあるが。
「これはさすがに持ってはいけねぇなあ……」

シサーが呟くのが聞こえた。
まったくだ。いくらこれが美術品として価値があるとしたって、こんなものを持って帰れるわけがない。
「こぉゆーオチかよぉ」
キグナスがぼやくのを聞きながら、そっと眉を顰めて考える。見渡す限り部屋の中には他に何もなく、どこかへ続きそうな道や部屋などももうどこにもなかった。
（じゃあ……）
ヘイリーの腕輪は、どこにいったんだ？
ダイナのドワーフにとっての財が失われた同胞の村――それはそれで、良いとしよう。だけど当事者であるはずのヘイリーが、村中の財産……抽象的なものではない『財宝』が何者かにどこかへ持ち出されたことを示唆している。間違いなく『財宝』と呼べるものが姿を消しているんだ。それは、どこへ行ったんだ？
風の砂漠で見たあの絵は、いささか誇張があるにしたって、それなりの財貨があるはずで……。
ダンジョン内に散らばっていた宝箱か？少なすぎやしないか？いや、その全部を……それこそ４つのダンジョン内に散らばっていた宝箱を見たわけじゃないから憶測に過ぎないけれど……。
「……」
「……あ」
がっかり、としか表現のしようのない沈黙の中、不意にニーナが声を上げる。顔を上げると、ニーナは部屋の隅にしゃがみこんでいた。その背中からは何をしているのかは良く見えないが、ニーナがぐいっと何かを動かすような仕草をし、それに連動するかのようにガコンッと音がした。ちょうどゲイトのいる辺りの床の一部がぽこんと開いている。どうやら何かのスイッチをいじったらしい。ゲイトも部屋に入るなり絵画に目を奪われていたから、まだそのスイッチの存在に気づいていなかったんだろう。開いた穴からは小さな箱が覗いているのが見えた。……宝箱！？

「っしゃあッ。これが本命かッ！？」
ゲイトがその箱に飛びつく。シンとキグナスもゲイトのそばまで駆け寄って、その箱を取り囲んだ。
「……あ、これ」
「ここの鍵だったのか」
そんな声が聞こえて、俺もそちらに足を向ける。箱の大きさは４０センチくらいだろうか。５０センチに足らず、３０センチより大きい感じだ。
例の、ゲイトが持っている鍵は、この箱の鍵だったようだ。じゃあこの箱が『わらしべ長者』の最後の変換？
（何だろう……）
何か、ずっと引っ掛かってるんだよな……。
そうは思うもののそれが何かまではわからなくて、考えたまま鍵穴に鍵を差し込むゲイトの手元を見つめる。カチリ、と音が響き、続いてゲイトの手がその蓋を引き上げた。
開けたその中には金銀財宝がぎっっしり！！
……なんてことは残念ながらここでもなく、中から出てきたのは……。
「これが、最後の宝なのか？」
俺の隣で無表情に組んだ腕についた手を顎に押し当てているシンが、中身を取り出すゲイトの手元を見つめている。
中から出てきたのは、また彫像だ。それも女神像……。
「大したシロモノじゃねぇぞ、これ」
取り出したゲイトが鑑定するようにためつすがめつして、彫像の感想をそう漏らす。造りこそ精巧と言える美しいもののような気がするが、その材質とでも言うんだろうか。盗賊のゲイトがそう言うんだから、例えば宝石になるような石で造られているようなものではないらしい。
大きさで言えば箱に見合った、３０センチそこそこの大きさがあるから、これが例えばルビーだの何だので出来てりゃ話はまた別な

んだろうが、ただの石で出来ているんじゃあ……ただの石じゃん。いやでも、美術品的価値があったりとか。

「どう考えたって、こっちの『鍵』の方が財産的価値があるぜ。これがオチなら俺は怒る」

彫像を放り出しかねないゲイトの手からそれを受け取って、眺めてみた。隣から、シンとキグナスが覗き込む。

「……でも、ちょっと変だよね、この女神像」

「ああ」

ファーラを模してはいるんだろうとは思うんだけど、その姿はこう……妙に濡れそぼっていると言うか……手にした錫からも水が滴るような細工がなされていて、俺は女神像なんて多数見たわけじゃないけれど、何か不自然なものを感じた。

何だろう。何がこんなに引っ掛かってるんだ？黙って女神像を見つめる。シンとキグナスも考え込むように横合いから同じように像を見つめ、ゲイトだけふてくされきったような様子であぐらをかいた床からそんな俺たちを見上げていた。

……と。

「おいッカズキッ」

いつの間にかこの場を離れていたらしいシサーが、慌ただしい足音と共に部屋に駆け込んでくる。顔には少し、危機感が滲んでいた。そのシサーの背後から、水音が……水音？

「え？」

彫像から顔を上げてそっちを向いた全員に聞こえるように、シサーが早口で言った。

「やべぇ、ここの出口、時間が決まってるらしいッ」

「ええッ！？」

「もうじき、出られなくなるッ」

何だとおッ！？

「どういうことッ！？」

「いいから来いッ。これ逃すと次またしばらく待たなきゃならなく

なるぜッ」
　言われるままに駆け出す。俺に続いてキグナスやシンも駆け出し、絵画の間を抜けた小部屋で水音の正体に気がつく。二重構造の壁の内側に、水が上からぼたぼたと降り注いで来ているのが見えた。左側の奥にはさっきはなかった階段が姿を現し、カイルが俺たちの到着を待っている。
「周囲のチェックはぬかりないか」
「ない！！あれ以上は何もないッ」
「わかった。ニーナとナタは先に行かせたぞ」
「さんきゅッ。俺たちも行こう」
　促して階段を駆け出したシサーの言葉によると、結局大したものがなさそうだと判断したシサーやカイルが宝に見切りをつけて絵画の間の前の小部屋に戻って出口を探っていたら、からくりになっている隠し扉を見つけたのだそうだ。開けてみるとどういうわけか続く階段は一面びしょ濡れで、遙か頭上に浮かぶ光……出口に向かう途中に、開閉式の門があった。疑問に思ったカイルが探ってみるとその門は外の何かからかかる圧力で自動的に開閉するようになっているようだ。
　何かの圧力……。
「水圧だよ」
　階段を駆け上がりながら、シサーが説明してくれる。
「あの部屋の周囲はお前らも見ただろう。仕組みまではわかんねぇが、周囲の水が増減する。その加減で、あそこの門が開閉するようになってんだ」
　言っているそばから、階段をちょろちょろと水が伝って降りてくる。確かに少しずつ、浸水してきてるんだ。
　とりあえずあの彫像だけを抱えて脱出を図った俺たちが階段を駆ける間にも、水はみるみる浸入してきていた。駆ける足元が水を跳ね上げる。
「こんだけ苦労して成果はこれだけかよッ！？」

「最中にも宝はあっただろッ。俺たちなんか成果なしだッ」
ぼやくゲイトに答えながら、ようやく門を駆け抜けた。それからややして、通路中が軋むような音が聞こえる。
ガターンッ。
続いて盛大な音と地響きが聞こえ、振り返ってはいないけど門が閉じたらしいことがわかった。
「多分、今頃あの滝も元通りなんじゃねぇか」
前を駆けるシサーの声に顔を上げる。……そうか。なるほど。
穴に抜けられるのは水流が緩まっている間だけ。あの謎に答えられて資格を認められれば、ゴーレムとの戦闘なんかしなくて済んだはずだし、時間にはもっと猶予があったはずなんだ。もしかすると例の『声』が、タイムリミットや抜け方なんかを教えたりしてくれたのかもしれない。
何らかの作用で水がせき止められている間だけ、脱出口が開く、と言うことを。
あの滝と、部屋の周囲を囲む二重構造の壁――あれがきっと脱出可能時間の目安になるんだろう。部屋の周囲に水がたまり始めたら危険信号、と言うように。
「抜けたッ……」
シサーの声と共に、俺自身も階段の最上に辿り着いた。久々に感じる青い空と眩しい太陽。
そして抜けた先に、思わず俺は、息を飲んだ。
「ここは……」
「『人魚岩』……!?」

第2部第2章第27話　代償（1）

かさり、かさり、と草を踏み分ける音が上ってくる。
日は既に傾き、階段を上り始めた頃にはまだ斜めに差し込んでいた夕陽も、今は影を潜めていた。
「本当に、こんなところに来たのかね……何しに？」
「さぁて……彼らの目的は、我々にはわかりませんからね。ただ、この町は、彼らの仲間のあの傭兵さんの……故郷だとか」
長身の人影が、上り詰めた階段から更に奥へと足を進めていく。
辺りに人影はないようだ。
「何だ？」
「……神殿、ですか」
暗い影を落とす木々を背景に、うっそりと神殿が静かに佇んでいた。今はその姿さえも陰になって良くは見えない。
「ここが、目的地？」
「どうでしょうかねぇ。この辺りに、いるんでしょうかね？」
「わからんな。……その辺を、探ってくるか」
「そうですね。お願いしても良いですか？」
長身の男の言葉に、小柄な方の人影が頷きながら木陰に姿を消しかける。その背中に、男は尚も呼びかけた。
「ああ、油断しないで下さいね」
「何だよ？」
「あの傭兵さんは、なかなか腕が立ちます。気をつけるに越したことはない」
男の忠告に、小柄な人影が鼻で笑うのが聞こえた。
「あんたも、そっちの神殿を探っておいてよ」
「わかりましたよ」
今度こそ見送って、男は神殿に歩を進めた。扉は開いているようだ。いや……あえて、固定をしてある。

（ふむ……）

固定の仕方を見る限り、プロだ。

ここに辿り着くまでに仕入れた情報に寄れば、『彼ら』は今、ギャヴァンのギルドを味方につけて共に行動をしているはず。であれば、納得がいく。

（さぁて……ここのどこかにいるんですかね）

そっとため息をつくと、男は静かに神殿の方へと足を向けた。

◆　◇　◆

（何か、釈然としないんだよな……）

海風が、洗い立てでまだ湿っぽい俺の髪を緩やかに撫でる。その風に目を細めながら、俺は頭に引っかかる何かを考え続けていた。

ダンジョンの第5階層を抜けた俺たちが出た先は、海の真っ直中――『人魚岩』のすぐそばだった。シサーが前に言っていた、潮が引くと出来る遠浅の道、姿を現す行き止まりの洞窟。

あれは、ダンジョンへの入り口だったんじゃない。出口だったんだ。

『人魚岩』のそばのその洞窟は、満潮時には海の中に水没する。そのせいで脱出出来る時間が限られ、ダンジョン内への浸水を防ぐ為に階段の途中に設置された門が、潮の満ち引きで水圧に応じて開閉するわけだ。

多分滝の水量や小部屋の二重構造の壁の水量が増減するのも、潮の満ち引きが関係あるんだろう。

俺たちが第5階層を抜けたのは結構ぎりぎりだったんだろうとは思うが、シサーが言っていたように海は深くはなく、歩いて町に戻ることが出来た。

『人魚岩』を越えると急に深度ががくんと深くなると前に言っていたが、そちら方向から俺たちが現れたと言うことは、きっとあのダンジョンはその海底にあったんだろうと思う。

ともかくも『人魚の神殿』に始まったダンジョンの探索は、終わったわけだ。何ら、収穫を得ることのないまま。

海から町に戻った俺たちは、グローバーたちが拠点にしていると言う港からほど近い倉庫街を訪れていた。水夫たちが根城にしていると言うだけあって、広いし食料は豊富だし、簡単になら水浴びまで出来る設備までである。

その恩恵にあやかって、俺はダンジョンでのあらゆる汚れを流し落としてきたその帰りだった。

時刻はまだ、夕刻を過ぎた頃だ。俺たちがダンジョンを抜けたのが夕方より少し前、グローバーたちと別れてからは丸5日が経過していたと言う。

……これから、どう動けば良いんだろうな。

首から引っかけたままのタオルを片手で弄び、グローバーが貸してくれた倉庫の一室へと足を向けながら、黒ずんでいく空に遠く視線を向けた。

俺たちはヘイリーに腕輪を渡さなければ、バルザックの行方がもう、わからない。

そしてここのダンジョンで腕輪を手に入れられなければ、それ以上腕輪の探索そのものをしようがない。

……なかったんだろうか、本当に。それともやっぱり、見落とした宝箱のどこかに……。

（だとしても……）

いずれにしてももう、ダンジョンを脱出してしまった。もう、終わったんだ。

水夫たちの何やら沸き上がる歓声を遠くに聞きながら、借りた部屋のある倉庫の入り口でふと足を止める。

（……本当に、終わったのか？）

引っかかる。どうしても。

再び足を動かして中に入りながら、俺はゲイトが持っていた鍵を思い出していた。古びた、金色の大きめの鍵。はめこまれた赤い石。

……気になるんだよな。
マールの冒険譚から俺たちが得たポイントは、２つ。
ひとつは彼の動きによる、俺たちのダンジョン脱出手段――謎解きへのヒントだ。
マールはホビットからもらった鍵で最終地に入った。
俺たちは『３つ目の鍵』でダンジョンに入った。
マールは女神に道を開いてもらった。
俺たちは女神像から第１階層を抜けた。
マールはハリーバールに導かれて空へ旅立った。
俺たちは常緑樹から第２階層を抜けた。
マールは司祭の言葉に導かれて女神へ呼びかけた。
俺たちは祭壇の言葉に導かれて第３階層を抜けた。
……ここまでは良い。素直にいかなくなってくるのは、ここからだ。
マールは女神に鍵をもらって『失われた故郷』に辿り着いた。
俺たちはスウィニに指示されて『失われた故郷』――第４階層を抜けた。
マールは長老に宝の何たるかを語られた。
俺たちは……。
（……）
考え込みながら、倉庫に入る。少し埃っぽい、暗い通路を奥へ進んでいった。人の気配はない。
（そもそも、第４階層をマールの辿り着いた『失われた故郷』とかぶせるのが間違ってるのか……？）
伝承の『失われた故郷』との再会をこちらで示すものが、飛んで第５階層の絵画だとすると、どうなる？
その場合、第４階層のイベントは伝承に該当するものがなくなるが、そもそも伝承は謎解きのヒントになっているだけで、全くなぞらえているわけではないことを考えればありえないとは言えない。
なぜなら第４階層はスウィニの登場により、謎解きをする場面がな

かったからだ。
じゃあ、飛んで第5階層……絵画を『失われた故郷』に見立てると、マールに比べて俺たちはワンアクション不足しているような気がするし、けれどこれも……これまですっ飛ばされたエピソードがあることを思えば不自然じゃないんだろうか？考えすぎなのか？
……ゲイトの鍵とマールの髪飾りの相似性には、何ら関係はないんだろうか。
軽く頭を振って、最奥の部屋に足を向ける。
駄目だ、どうしても何か引っかかってすっきりしない。考え方の方向を変えてみることにする。
マールの冒険譚から得たもうひとつのヒントは、彼が次々と手に入れた物を変化させていく……宝の、入手の仕方。
妖精の水の代わりにエルドナの花を手に入れ、その花と引き替えに靴を手に入れたマールは、更に靴と引き換えて赤い石を入手する。最終的にはそれを元とした髪飾りと引き替えに『失われた故郷』へ辿り着く。
俺たちは……細かな過程は俺は知らないものの、次の宝箱を開けるためのガラクタが手を変え品を変え入っていて、最終的にそれはあの鍵へと姿を変えた。
終わりの方のエピソードは、こっちに謎解きの必要がなかったことを考えても……やっぱりこっちに関連するような気がするよな……。ダンジョンの脱出方法と言うよりは、宝の手に入れ方を示唆しているとしか思えない。
けれど、だとしてもやっぱり、ワンアクション足りない。
加えて言うと、もしも仮にあの絵が『失われた故郷』――ドワーフの宝ならば、これまで『次の宝の鍵』となってきていたはずの宝箱の中身を、あの絵画のある部屋で使用すると言うのは納得がいかない。あの絵画がドワーフの財貨だと言うなら、例えばあの部屋に入る扉に使用すべきだ。
じゃああの鍵を使って開けた箱に入っていた彫像……やっぱりあ

れが最後の宝なんだろうか。それなら流れそのものには納得がいくが、入っていたものには納得がいかない。

財宝としての価値が、中身より鍵の方があるなんてこと、あるか？

「……シン」

考え込みながら部屋に入ると、俺と同様納得がいかないらしいシンがひとり、床に座り込んで彫像と睨みあっていた。俺の気配に顔を上げる。

「疲れはとれたか」

淡々とした口調で、微かに口元に笑みを覗かせながら、シンは床に座り込んだままで俺を見上げた。その脇を通り過ぎて、壁際の椅子にすとんと腰掛けながら濡れた髪をかきあげる。

「そんなに簡単に取れないよ。……みんなは？」

「キグナスとゲイトは外に行ってくるって言っていた。シサーとニーナはグローバーのところだ。カイルとナタは知らん」

「ふうん。シンは水浴びとかして来ないの」

「ああ……行くかな……」

ちょっと悩むように微かに唇を尖らせ、手にした彫像を床に置く。

「……このまま終わられるのは少々つらいな」

それからシンは、立てた膝に肘をついて、苦笑を浮かべながら俺を見上げた。

「少々どころかかなりつらいよ。俺たちはヘイリーの腕輪が手に入らなきゃどうしようもない」

「それと引き換えに入手したい情報ってのは、何なんだ？」

尋ねてからシンは、口篭るように「まあ……言いたくないなら構わないが」とぼそりと付け足した。

「『王家の塔』の竜巻、覚えてる？」

少し迷って口を開く俺に、シンが顔を上げる。

「ああ。あれが、関係あるのか？」

「あの竜巻を起こした人物を追っているんだ。……ガーネットが言ってた、バルザックって人のことを」

「……」
目を瞬いて、シンはしばらく無言で俺を見つめていた。それからふっと息をつく。
「言っていたな、そう言えば」
「そいつを探してるんだ。腕輪の持ち主のドワーフが、何か知ってる」
「……ガーネットには聞けないのか？」
聞かれて俺は軽く肩を竦めた。
「さあね……何か教えてくれれば良いけど。腕輪が見つからなかったから、そうしてみるしかないのかな……」
「あの口ぶりでは『現在』のそいつの居場所を知っているかはわからんがな。何か心当たりでもあるかもしれん。聞いてみる価値はありそうじゃないか？」
「うん……その場合さ」
椅子の背もたれに体を預けながら、シンを窺う。
「例えば俺たちが望めば、ガーネットに会わせてくれたりする？」
ガーネットに聞いてみようって言ったって、俺たちはギルドの場所を結局知らされていないし、シンたちがその気にならなければ、ガーネットと再会することさえ間々ならない。ラウバルと知り合いらしいって言ったって、ラウバルがギルドの場所を知っているとは考えにくいし。
俺の質問に、シンが笑った。
「そのくらい別に構わないだろう。俺が繋いでやるさ」
「そう？」
「ああ」
「……ありがとう」
けど、ガーネットはガーネットとして、ヘイリーの腕輪を見つけてそっちの話を聞くのがやっぱり1番だとは思うんだよな。
何せリアルタイム、あの直前までバルザックはファリマ・ドビトークにいたんだから。

そんなことを思いながら、シンが再び視線を落とした彫像に、俺も椅子の上から視線を向けた。
「……引っかかるよね？」
「……引っかかるな」
あの鍵を使って開けた箱。
中に入っていたのは、鍵よりも財産的価値の薄そうな彫像。
……何かあるような気がする。このままでは、済んでないような気が。
けれど、じゃあ何がどうなるんだろう。どこがどう不自然なんだろう。……どこが、間違って……。
（あ……）
彫像を睨みつけながら巡らせた考えが、不意に閃くように繋がった。寄りかかった体を思わず起こす。
じゃあ、例えば。
これまでの宝箱と同じように、これもまた何かに変わる『鍵』なんだと、したら……？
その考えに行き当たり、目を見開く。濡れそぼった姿。水から上がった女神。
彼女が帰る先は、どこだ？
「……シン」
――祀られる者の姿のない神殿
「……」
シンが無言で俺を見上げる。
――濡れそぼった女神像
「……続きが、ある」
「え？」
――『人魚が海から上がってくんのを待ってんだな』
「神殿だよ……」
――マールは、夢から目覚めて、どこに辿り着いた……？
「神殿？」

「この女神像は、最後の宝なんかじゃない。もちろん、あの絵も、だ」

次の鍵へと姿を変えていく宝箱の中身。ゲイトの鍵で開いた箱に入っていたこいつも、宝じゃない。鍵だ。

開けるべき場所は、最初の神殿……女神像を祭壇に返してやることがきっと、『最後の鍵』――。

俺の言葉に、シンが小さく笑う。

「……俺も今、ちょうどそうじゃないかと思っていたところだ」

「じゃあやっぱり……」

「多分な」

真っ直ぐに俺を見上げながら続けるシンは、微かな笑いを浮かべたままで彫像に視線を戻した。

「……回り回って俺たちは多分、最初の神殿で使うべき『鍵』を、手に入れたんだ」

◆　◇　◆

「終わったと思ったのになぁ～……」

キグナスのぼやくような声が聞こえる。キグナス……これで本当に終わっちゃったら困るんだよ？俺たち。

せっかくあんなダンジョンなんかから抜け出してようやくゆっくりしていたものの、俺とシンの考えが「まだ続きがある」と一致してしまい……しかもみんな納得してしまったので、俺たちは急遽装備を調えて倉庫街から神殿へと再出発することになってしまった。

一旦水浴びしたりとくつろいでしまったもの、再度緊張感を取り戻してダンジョンへと言うのはなかなか酷な話ではある。ぼやくキグナスの気持ちもわからないではない。

が、このまま終わってしまっては困る。ただローレシアに手ぶらで帰るわけにはいかないんだ。

何としてでも、ヘイリーの腕輪を手に入れなきゃ。

……『王家の塔』の、解放が出来ない。レガードがいたって、戴冠が出来ない。

一方でキグナスと対照的なのが、ゲイトだ。この先、まだ宝が眠っている可能性があると知ってうきうきのるんるん。スキップしそうな軽い足取りで、神殿へ続く階段を駆け上がっていく。

「早く早く」

「ゲイト、うるせぇ……」

「なぁぁんだよ、キグナスの好きなお宝ちゃんだぞぉ？」

「休みてぇ」

時間は既に、闇が降りてくる頃合いだ。どうせ町に戻っちゃったんだから明日の朝でも良かったんだろうけれど、ゲイトが乗り気だし、大体有効期限みたいなものがあったらたまらない。

風の砂漠のダンジョンでもそうだったし、ここのダンジョンの最後の脱出もそうだけど、わりとこの一連のダンジョンマスターはせっかちな気がする。ある一定期間しか通過出来ないような造りになっていることが幾度かあったし、俺たちは資格をもらえずに脱出しているからわからないけれど、資格をもらえていたらもしかすると『声』がその辺も含めて何か教えてくれたのかもしれない。

……例えば、『次に潮が引く時までに』とか何とかかんとか。

ま、そんなのはあくまで俺の想像に過ぎないが、万が一そういう指定期限があった場合……目も当てられないじゃないか。

そんなわけで、そのことに気づいた時点ですぐに行動を開始することになったんだが。

「やっぱ、朝になってからの方が良かったかもね」

ゲイトが駆け足する勢いで階段を上がっていくので、ついそれにつられている俺の隣で、やはり保護者のようにゲイトに続くシンが目を上げた。カイルやシサーたちは俺たちの随分後ろの方にいる。キグナスは中途半端にその間。

「そうか？」

「うーん。視界が悪いから、何か……」

嫌な、感じがして。

第2部第2章第27話　代償（2）

先日来た時と同じように、階段は生い茂った木々に空を覆われている。月明かりさえ隠して足元に陰を落とし、階段の段差もおぼつかない。

良くこんな中、あんなに快調に駆け上がって行くよな……。

半ば呆れた気分で、既に影とさえ認識出来ないゲイトを見遣る。

いや、見えないんだけど、いるはずの方向。

「……まったく」

階段を上りきった頃には、だいぶシサーたちを引き離してしまったみたいだ。この辺で一度待ってた方が良いんじゃないかな……。

「？」

シンがふと、何かに気づいたように足を止めた。構わずに俺は、既に神殿まで辿り着いてその入り口からこちらを振り返っているゲイトに足を向ける。

「ゲイト」

「早く早く♪」

聞けよ。

俺の制止も構わずに、ゲイトはするりと神殿の中に姿を消した。仕方がないので俺も、その後を追って中に入る。

神殿の中は真っ暗だった。僅かに月明かりが埃っぽい内部を照らしている。ゲイトは夜目が効くから良いかもしれないけれど、普通の人間である俺にはこんな暗闇、良く見えない。

「ゲイト。シサーたちが追いつくのを待っ……」

ゲイトの姿を探して目を凝らしながら、奥へと足を進める。祭壇の付近まで辿り着いた時、不意に全身を何かが貫くような感覚が俺を襲った。――まるで、全身が総毛立つような。

（――！？）

「うわッ！？」

少し離れた位置にいたゲイトが、声を上げて地面を蹴るのがわかる。何かを避けるような動き、僅かに外から射す月明かりに何かが中できらりと反射した。

「ゲイトッ！？」

咄嗟に剣を抜き放った俺の叫びに、ゲイトの返事はない。代わりに中から、聞き覚えのある声が響いた。

「……正解でしたね」

何……！？

「お待ちしておりましたよ。――レガードさん」

背筋をぞくりとした感覚が突き抜ける。闇の中に更に濃い影を落とす長身、乱れた長髪、丸眼鏡の奥の琥珀色の瞳……グレンフォード！！

「ゲイトッ」

抜き放った剣を構えながら怒鳴る。闇の中から答えはなかった。

……ゲイトッ！？

「……あんた、魔物じゃないのか」

くそッ……ゲイトさえこいつがいたことに気がつかなかったなんて、何て奴だッ……。

シサー……頼む、早く来てくれッ……。

剣を構えながら、後退する。ゲイトの姿を探したいが、一瞬でも目を離した隙に襲われそうだ。視線をそらす余裕がない。

背後の神殿の出口が、遙か遠いもののように思えた。

「私ですか？」

慣れて来た目が、ようやく少しずつグレンフォードの姿を俺に認識させる。細部はもちろん見えないが、あの時と同じように2本のセイバーを構えているのは見えた。

「なぜです？」

「神殿には、入れないんじゃないのかよ……」

困惑するような沈黙が返った。やがて密やかな答えが返る。

「……誰が、そんなことを？」

「俺の勝手な、予想だけどね……」
答えながらじりじりと下がる。俺の動きはわかっているだろうに、阻止しようと言う素振りを見せないのが余裕を感じさせて、却って焦らされた。
「ネクロマンサー、ってのは、知ってるんだろ……」
「……」
「トートコーストからローレシアまで、何しに来たんだ？」
勝てる、わけはない。
時間稼ぎの意味も含めて言葉を紡ぐ俺の構えた剣の切っ先は、真っ直ぐにグレンフォードに向けられている。……しまったな。効果のない剣よりは、魔法石を構えた方が良かったかもしれない。けれど僅かな動きさえ刺激しそうで、今更手が出せない。向けられる剣にいささかも怯んだ様子を見せずに、グレンフォードは笑いを含んだ返答をした。
「あなたもなかなか失礼な方ですねぇ」
「……そうかな」
「そうですとも。……真実なら一層傷つくとは思いませんか」
（――え！？）
真実！？
驚いて言葉のない俺に、グレンフォードの姿がぶれる。やばい、と思った刹那、予想外の方向にグレンフォードはセイバーを一閃させた。
キン！！……カシャーンッ。
軽い金属音と着地するような足音、舌打ち。
「ちぃッ……」
「ゲイトッ！！」
「ギャヴァンの盗賊ギルドですか」
どうやら今まで身を潜めていたゲイトが何か仕掛けたらしい。俺に答えなかったのは、声から居場所を察知される恐れがあったからだろう。弾き返した姿勢のままで低く応じるグレンフォードに答え

る声は、またもなかった。
「邪魔ですねぇ……」
やれやれ、と言うように何気なく呟きながらグレンフォードが辺りを見回す。次の瞬間、ゲイトがどこからともなくグレンフォードの前へと躍り出た。首筋を狙うように間近に定められたショートソード……しまった、ゲイトッ！！
「もらったッ……」
「ゲイトッそいつにはッ……」
その瞬間、視界の中で闇から黒い影が飛び出すのが見えた気がした。
ザシュッ……！！！
そして続けざまに、肉を貫く鈍い音。真っ暗な神殿の中でさえ、何か液体が……鮮血が、勢い良く噴き上がるのが見えた。
「ゲイトッ……」
「――――――――――ッ！！！！」
鮮血を噴き上げて、グレンフォードのセイバーに貫かれたのは、シンだった。
「シンッ……」
グレンフォードの前に躍り出たゲイトのショートソードは難なくグレンフォードに弾き返され、返す刃がその体を串刺しにしようとしたところで間一髪、シンがゲイトの前に滑り込んだんだ。
暗がりの中、声もなく黒い影が動きを止める。
「シンーーーッ！！！」
頭が痛くなるほどの、絶叫。誰の？……俺の？
敵を仕留めたセイバーが、するりと抜き取られる。スローモーションのように、シンの体が支えを失って床に崩れた。鈍い音、染みのように暗がりの床に広がっていく血溜り。グレンフォードがシンの体を貫いたセイバーを払い、重ねるように俺の後ろから近づいてくる軽い足音が聞こえた。
次の瞬間。

――――――――――――――――――――――――ドォォォォッ！！

「何……」

轟音のようなものが聞こえた。それと同時に天井をぶち抜いて来たような勢いで、眩しいほどの白い閃光――それも、直径２メートルはありそうなぶっとい光の柱が上から叩きつけられる。床に激突した閃光が、そのまま床を走るように八方へと駆け巡る白い十字光。

「ナタッ」

駆け込んできた小柄な人影が、そのまま俺とグレンフォードの間に滑り込む。その隙を突いて、ゲイトがグレンフォードとの間合いを広げた。

シンは、床に崩れたまま動く気配がない。

「……これは」

無言のまま、ロッドを構えてグレンフォードと向き合う小さな姿に、ロドリスの狂戦士が琥珀色の瞳を煌めかせて口元に笑いを刻んだ。

「中立、ではないのですか」

……？

ナタは何も答えない。

「やはり正義はヴァルスにあると？」

揶揄（やゆ）するように重ねるグレンフォードに、ナタが低く答えた。

「神の正義がどこにあるかは、あたしは知らない」

「そうですか？」

「けれど」

謎かけのような言葉を紡ぐグレンフォードに、ナタの硬い声が応じる。

「あたしは、人として、人を守る義務がある」

「……そうですか」

その言葉に、ふっとグレンフォードが笑いを刻んだ。どこか自嘲するような、諦めたような。

「私は、あなたの守備すべき範疇には含まれませんね」

「残念ながら。……例えそれが、あんたに罪科（つみとが）のないものだとしても」

「いえ、結構ですよ？」

先ほどシンの体から抜き取ったままの血塗れたセイバーを下ろし、体ごとこちらに向き直った。気づいてみればゲイトの姿はどこにもない。どさくさに紛れて、姿を隠したようだ。

「己の認める範囲でしか慈悲を施さない神など、こちらからお断りです」

「言うね」

「本心ですよ。身も知らぬ他者の肯定を必要とするほど、私の存在は希薄ではないと信じていますからね。……今は」

「……そう」

会話を繋ぐ間も、2人の様子には隙がない。けれど……躊躇いを見せているのはグレンフォードの方、のように思える。

「しかし、参りましたね」

「……」

「神殿ごときならば、私もさして困りはしないのですがね……」

だらりと下ろした両腕はそのままだ。嘆息するようなグレンフォードに、ナタが微かに腰を落とした。腰の下辺りに、何かを発動させるように構えた右手。

外から刃鳴りと駆けるような足音が聞こえたのはその時だった。それから駆ける足音と、闇の中に湧き起こった猛火の塊が、風を切って飛来する。

「ちぃッ……ソーサラーですかッ……」

キグナスの『火炎弾』だ。剣を両手に構えたままでそれを横っ飛びに避けるグレンフォードの脇を『火炎弾』が掠め飛んで、空で破砕した。

「あれはあんたの仲間だろう？」

ナタの声に、グレンフォードが険しい表情を浮かべ、目を眇（すが）める。

「あれ、と言うと」

「女兵士だよ」
「……やはり彼女は、あの傭兵さんとは渡り合えなかったみたいですね」
　呟くように言う。そして次の瞬間、グレンフォードは素早い動きで地を蹴った。セイバーをこちらに向けて一閃させながら走り出す。
「ファーラッ！！！」
　短いナタの言葉。呪文ではないけれど、さっきのよりやや小さめの白い光の柱が俺たちとグレンフォードの間を隔てた。遮る柱から巻き起こる爆風と眩さが、一瞬俺の視界を奪う。
「『風の刃』ッ……」
「キグナス、逃げろッ！！」
　魔法が飛来する方角から察するに、キグナスは神殿の出入り口にいる。グレンフォードがこちらに構わずに神殿の出口へと駆けて行くのを見て、咄嗟に叫んだ。通り抜けざまにやられかねないッ……。その後を追うように駆け出すナタにつられて、俺も出口へと向かう。
「シサーッ！！」
　俺の声で、キグナスは神殿の出入り口から逃げたようだ。グレンフォードが素早い動きで、外へ飛び出す。追って出てみれば、シサーが木に背中を預けるようにして剣を構える何者かを追い詰めているところで、グレンフォードがその脇間から狙ってセイバーを叩きつけた。シサーが剣を引いて後方へ跳ぶのと重ねて、ニーナがシサーへ防御の魔法を飛ばす。
「エレナさんッ」
「『火炎弾』ッッ」
　セイバーを横薙ぎ、シサーとの間に距離を作ったグレンフォードが、木にもたれかかる人物に駆け寄る。そこへ神殿脇から転がるように出て来たキグナスの『火炎弾』が飛来した。グレンフォードが再び横っ飛びにそれを咄嗟に避けている間に、エレナと呼ばれた人物が地面に崩れ落ちる。立っているのも精一杯だったらしい。駆け寄るグレンフォードに、三度（みたび）キグナスの『火炎弾』とカイルの剣が

襲い掛かり、グレンフォードがそれを避けながらエレナのそばへ転回してセイバーを構えた。カイルのカトラスを、その体ごと弾き返す。

「ファーラッ。秩序の裁きをッ」

ナタが鋭い声を発し、白く光る巨大な矢が突如中空に姿を現した。グレンフォードめがけて矢が飛来し、エレナを抱えたグレンフォードが間一髪のところでそれをかわす。地面に激突した矢は、先ほどの柱と同様に十字光となって地面を疾った。

「全く、あなたの仕事だけが手間取りますね」

矢を避けた位置から更に数歩、地を蹴って後退したグレンフォードが、腕の中にエレナを抱えたままで神殿の入り口に立つ俺を見つめた。

「やはり私はひとりで仕事をする方が向いているようです。次回はひとりでお邪魔しますよ」

「待てッ」

低く告げる声に、シサーが剣を振り翳して踊りかかる。両手の塞がっているグレンフォードは身を屈めてそれをやり過ごすと、また後退して距離をとった。

「それではとりあえずのところは、失礼しましょう」

言って闇に姿を消したグレンフォードに、シサーもそれ以上追い縋ることはしなかった。しばらく、無言のままグレンフォードが消えた闇の中に目を向ける。

「――シン」

グレンフォードが視界から消えると、俺は神殿を振り返った。神殿の内部をに駆け戻る。先ほどの場にシンは崩れたままだった。そのすぐそばに、ゲイトが座り込んでいる。

「ゲイトッ……シンはッ」

ゲイトは無言だ。ナタが……そしてシサーたちが外から続いた。

「シンッ」

血溜りにも構わずにその場に片膝をついてしゃがみこむ。シンの

体は力などどこにも入っていないようにぐったりとしていて、胸から下は薄暗闇でも見て分かるほどに血でぐしょぐしょだった。濃い血の匂いが、今更のように鼻につく。

「俺が……」

ゲイトが掠れた言葉を飲み込んだ。

「ナタッ。シンを、助けてッ……」

すぐ脇に無言で立つナタを見上げる。シンを取り囲む面々が、ナタに視線を向けた。今更ナタが神聖魔法を使うことを伏せたって仕方がないだろう。いや、そうじゃなくたって……。

「……もう、手遅れのようだよ」

「そんなッ」

「……ごめんね、カズキ」

ナタの目が無機質のように、静かに俺を見返す。

「あたしには、何もしてあげられない」

「……シンッ……」

頭を殴られたようなひどい頭痛。見下ろすシンは、不思議と静かな顔をしているように見えた。

いや……不思議と、じゃないか……。

シンはいつでも、無表情だっ……。

「嘘だろ……」

俺のすぐ後ろからキグナスの声。ニーナが泣くのを堪えているような声が聞こえる。回り込んで向こう側に移動したカイルが、シンの体に屈み込んだ。

――もう、失いたくないんだそうだ

誰ひとり失うことなくここまで来た幸運。

それはわかっている。

わかっては、いる、けれど。

――その、魔物だのネクロマンサーだのが、何かあるのか

あの時、シンに、ゲイトに、グレンフォードの存在を伝えていればッ……。

「シン……」

動かないシンの体を抱え込むようにして、ゲイトが声を押し出した。抱きかかえるその肩は、泣いているように小刻みに揺れていた。

押し寄せる慙愧（ざんき）の念。

――これからも誰ひとり失いたくない

……バルザックを追うことの代償は、余りにも、大きかった。

第2部第2章第28話　prodition（1）

……どのくらい、そうしてぼんやりとしていたんだろう。
重い沈黙の中、ニーナとキグナスが嗚咽を堪える声と鈍くなった鼻にまだ尚つく血の匂い。
ゲイトは、シンを抱え込んで黙ったまま、微動だにしなかった
ぼんやりと、やがて立ち上がったカイルが人魚の彫像を台座に置くのを眺める。頭が緩慢で、全ての出来事が夢の中のようにどこか頼りない。
現実感がなかった。
何もかもが。
薄いフィルターを1枚隔てているような感覚だ。その中で、割れるような頭痛と吐き気だけが、いやに現実味を帯びて俺を苛(さいな)んでいる。
――死、と言う単語が、ぽつりと突然頭の中に浮かんだ。
あまり、リアリティを持って俺の生活の中に組み込まれることのない文字だ。
それは、唐突に訪れる。
何の予兆も、正当な理由もなく、死が人から人を奪う。
「ここまで来たんだ。最後に眠る宝を手に入れなけりゃ、話にならんだろう」
それは……そうだ。
シンが追い続けた宝。このまま放っておいてはシンだって浮かばれない。
……ヘイリーの腕輪を追っていた俺たちに……巻き込まれたんだから……。
（鐘の音……）
真綿のような頭で、それを認識する。ダンジョンも、鐘の音で始まったっけ……。

ゆっくりとした動作で顔を上げると、祭壇の上……遙か頭上の天井から釣り下がった鐘が何かの合図のように高音の、けれどどこか優しい音を高らかに鳴らしながら、少しずつ降りてくる。
「こんなところに道が……」
ニーナが息を飲むのが聞こえた。降りて来た釣り鐘は、そのまま天井へと続く梯子になっていた。
「これを辿って行けば良いのか？」
「他に考えられんだろう」
シサーとカイルが話す声が聞こえる。
それからシサーがこちらを振り返った。
「行ってみるが、どうする？」
ここまで来たんだから……腕輪を……手に入れなきゃ……。
「……ゲイト」
ぼーっと立つ俺の足元で微動だにしないゲイトに呼びかける。
「道が、開けたよ……」
頭が、痛い。
割れそうだ。
「……ゲイト」
「カズキ」
ぼんやりしたままもう一度呼びかける俺を、シサーが制止した。
そちらを向くと、シサーが黙って顔を左右に振った。
「お前は、どうする？」
「どうするって」
「……ここで、待っててもいーぜ」
ああ……。
「行くよ」
カイルが先頭をきって梯子を上っている。その下で泣きはらした目をしたキグナスが俺を見ていた。
「……」
その肩を無言で軽く叩いて、通り過ぎる。ニーナもまだ沈鬱な雰

囲気を漂わせて、少し離れた場所で両手に顔を埋めていた。そのそばにナタがついている。
「……ニーナ」
「慣れないわね。何度、体験しても」
「……」
蹲(うずくま)ったまま動く様子のないニーナに、俺はナタの頭を軽く撫でた。
「ニーナをよろしく」
「……うん」
カイルに続いてシサーが梯子を上がっていく。ゆらゆらと揺れるそれを何となく下から支えながら、もう一度ゲイトを振り返る。それから、シサーが上り終えたのに続いて、ゆらゆらと揺れる梯子に手をかけた。天井にぶら下がっていた鐘に足をかけると、微かにしゃらん……と音が聞こえた。
……シンとゲイトは、子供の頃からギルドで一緒にジフに育てられている。
幼なじみで兄弟で親友――みたいなものなんだろう。失えばそのショックは大きいに違いない。
……まだ、知り合ってから間もない俺なんかより、ずっと。
頭が麻痺しているような感じがする。動きの鈍い頭で、シュートへ渡る船でのことを思い出した。
……あの時、俺が。
シンとゲイトにグレンフォードのことを言っていれば、こんなことにはならなかったんじゃないだろうか。
あいつには、普通の武器じゃあダメージを与えられない。
そのことを知っていたら、ゲイトだってあんな攻撃の仕方はしなかったはずなんだ。
不思議なくらい、頭が鈍磨していた。悲しいとか、悔しいとか……寂しいとか。
そういった感情は起こらなかった。
ただ、ぼんやりしている。ただ……自分がどうすべきだったのか

を、考えている。
俺があの時話していたら、違っただろうか。
……ひとつ言えることは、シンは間違いなく、俺の巻き添えをくって死んだんだと言うことだ。
「カズキ」
「……え？」
梯子を上りきってぼうっとそこに佇む俺に、シサーが声をかける。
その間に後に続いていたキグナスが、梯子を上りきった。
「……行くぜ？」
「ああ……うん」
ゲイトは、今何を思っているだろうか。シンと生きてきたこれまでを振り返っているんだろうか。それとも、自分を責めているんだろうか。
……責められるべきは、俺なのに。
「ようやく、か」
梯子を上って、狭い天井裏のスペースを数メートル歩くと、すぐに下り梯子があった。位置から察すると多分、祭壇の壁の裏に抜けるんだろう。
心に重い影を落としながら、全員黙って梯子を降りる。降りた先には小さな部屋があり、さすがにここでもぎっしりとはいかなかったが、それでも……壁際に設えられた小さな棚を埋めるほどに、見るからに価値ありそうな物がいくつも並んでいた。
並ぶ財宝も、俺たちの心を沸き立たせることは出来なかったけれど。
「見せて、やりたかったな……」
先に立つカイルが、ぽつりと言うのが聞こえた。
……そう、だよな。
今は、シンがこの一連のダンジョンの件で動いていると言う話だったんだから。
あと一歩……本当に、あと、一歩だったんだ……。

陳列された品々は、やはり『カリブの海賊』とはいかなかったものの、俺から見ても……繊細なデザインが為されていて、豪奢で……かなりの価値があるだろうことはわかった。この場の全員で手分けすれば持ちきれないこともなさそうだ。

「へイリーの、腕輪……」

ぽつんと呟く声が、他人のもののように聞こえる。陳列された装飾品類に目を向けると、その中のひとつに、ふと目が留まった。

対になっている一組の腕輪。

「あれか……」

金色の、腕輪だった。幅3センチくらいの厚みのあるもので、手首と言うよりは、二の腕につけるような種類の腕輪だ。細かい、多分植物をモチーフにしたような凝った模様が丁寧に彫り込まれ、その模様の中にところどころ丸く小さく窪みがある。そしてそれとは別に、一際大きな丸い窪み。

「ここに石をはめ込むつもりだったんじゃねぇかな」

俺と並んでその腕輪に近付いたシサーが、指先でその窪みをぐりぐりとつつきながら腕輪にしみじみと見入った。

「……うん。そうだね」

そんな感じ。

「本当に、その腕輪だけで良いのか」

不意にカイルが俺たちに問う。その言葉に顔を上げたシサーが、翳った笑みを見せた。

「言ったろ。……もらうほど、興味がねぇって」

「無欲だな」

「無欲ってわけじゃねぇよ。……そーゆーもんは人を狂わせるからな。関わり合いになりたくねぇだけさ」

その間に、俺はそっと腕輪を手に取った。隣に並んだキグナスが、俺の手元を覗き込む。

「これの、為に……」

「……」

手の中の重み。
ヘイリーと交わした約束、そしてダンジョンのことが頭を過ぎる。
そして……。
「シン……」
……これで、俺たちは、バルザックを追うことが出来る。
ファリマ・ドビトークに戻り、ヘイリーに会って……『王家の塔』へ。
「……ごめんな」

――――――シンの命を、その代償に、支払って。

◆◇◆

「……ゲイト」
ゲイトはシンを抱え込んで深く俯いたまま、ぴくりともしない。
カイルがもう一度呼びかける。
「ゲイト。……安らかに眠らせてやろう」
「……」
「……」
全く反応のないゲイトに、カイルは小さく息をついて歩きだした。
小声でシサーに何か言うと、促して外に出ていく。
「……」
無言で俺もその後に続く。頭痛があまりにひどく、それ以上シンのそばにいるのがつらかった。
神殿から外に出ると、シサーとカイルの姿を探す。暗闇の中カンテラの灯りだけがぼんやりと明るく、俺はそちらの方向へ足を向けた。
シサーとカイルが、黙したままで地面を掘っている。道具なんかがあるわけじゃないから、どこから見つけてきたのか赤錆びた鍬みたいなものと、ショートソードを使っていた。

……そうか。シンは、ここに眠るんだ。
まだ、ぼんやりとしたままの頭で考える。
そうだよな。夏が始まろうとしているこの時期、そうじゃなくたってローレシアまでは船で2週間かかるんだ。連れて帰るわけには、いかない。
「手伝うよ……」
人間ひとりを埋める穴、それも、そう簡単に掘り返されたりしない深さまで掘るのはなかなか手間だ。俺の言葉に、シサーが陰った笑みを向けた。
「……そうか」
「何か、道具、ある？」
「神殿の裏にぼろぼろの道具がいくつかある。どれもこれもひどいもんだからわかんねぇが、使えそうなものがあったらそれ使ってくれ」
「わかった」
言われた方に足を向けると、確かに地面に振り下ろしたら折れそうな鍬（くわ）とか、トンボみたいな木製の道具とかがいくつかあった。手にとってどれが使えそうか悩んで、錆びて穴だらけの鉄道具よりは苔の生えたトンボの方がましのような気がしてそれを手にシサーたちのところへ戻る。
途中、泣きはらした目のままのキグナスが加わって、ようやくスペースを確保すると、いかにも冷たそうな土の中にせめて草を敷き詰めてシンを横たわらせ、少しずつ土をかける。静かにされるままになっているシンが、らしくなくて変な感じだ……。
「シン……」
少しずつシンの体が、土に覆われていく。
「ヘイリーの腕輪は、手に入れたよ……」
……俺も、変なんだろうか。
泣くでもなく、喚くでもなく、ただただ、ぼんやり……。
「ゲイト」

ここまではカイルに連れてこられたものの、相変わらず身動きしないゲイトに、カイルが声をかける。手にしたものをゲイトに渡した。

「これ、お前が使え」

シンの、チャクラム。

「……」

ようやくゲイトが顔をあげる。

それからゲイトは先ほどシンを抱えていたその代わりに、チャクラムにじっと視線を落としていた。やがてぽつりと口を開く。

「……頭に、何て言おうかな」

「……」

かける言葉を見つけてやれなかった。ニーナがまた堪えきれないように小さな嗚咽を漏らして身を翻す。シサーがその後を追い、カイルは別の方向……神殿の裏手の方へと姿を消した。ナタは静かに瞳を閉じている。キグナスもまた涙が溢れてきたようで、ぐちゃぐちゃの顔を伏せてじっと黙っていた。

「シン、あれ、持ってなかったんだな」

「あれ……？」

「……レガードを助けた、バックル」

「……ああ」

あれを持っていたら、助かったんじゃないだろうか。レガードがそれで命を救われたように。

対のひとつがどこにあるかはわからないけど、シャインカルクかギルド……その、いずれかだろう。

どちらにしたって、それ以上の危害が加わることはありえない。

「財宝は、あくまでギルドのものであって、個人のものじゃない」

「……」

「そりゃあ相手はシンだし、シンが欲しいって言ったところで頭が文句を言うわけじゃねぇけどさ。……でも、基本、そうだから」

「ああ……そうか……」

持ち歩いていたわけじゃないのか……。
……助かった、かも、しれなかったのに。
「置いて帰りたく、ねぇなぁ……」
「……」
沈黙守ったまま、木々の切れ間に目を向ける。
抜けた向こうは、暗い海。
――ギャヴァンとシュートは、本当に良く似ているな
ローレシアから遠い、別の大陸ラグフォレスト。
……シンの故郷であるギャヴァンと似ていると言うこの町であることが、せめてもの、慰めに……。
「……置いて、帰りたくねぇよ……」
ゲイトの声が、遠く……波のさらう音に、掠れて、消えた。

第2部第2章第28話　prodition（2）

◆◇◆

ばたばたばたッ。

慌しい足音が近づいてくるのを耳にして、ナタリアとバート、そしてロドリスの3カ国連合軍を指揮するアレックスは視線を落としていた地図から顔を上げた。

ロンバルト公国首都ウォルムスからほど近い町――アナトリア。

エルファーラから国境越えをしてロンバルトに入った連合軍は、ヴァルス・ロンバルトの帝国軍を打ち破り、いくつかの要塞を陥落せしめて進軍した。

エルベ平原で大きな会戦を構えたヴァルス軍とロンバルト軍はそれぞれ東西へ分かれて潰走、西のヴァルス軍はウォルムスから北西に位置する岩窟地帯ルアン・ジンベルに要塞を築いて逗留、一方で東のロンバルト軍は貯蔵地域であるアナトリアの諸侯アントワーヌの領地へ逃げ込んだ。ウォルムスからの、公王フェルナンド率いる援軍との合流を果たし、再起を図る。

だが、ウォルムスを目指して行軍してきた連合軍の前にロンバルト軍は敗戦、ウォルムス北部のラリベラへと落ち延びた。アナトリアを占拠した連合軍は、相次ぐ戦闘の骨休みをしながらアナトリアで暴挙を欲しいままに行い、首都ウォルムス攻略の契機を窺っている。

ウォルムスは、深い緑に囲まれた窪地のようになった平地にある。デルフトから、高くはないものの険しい山道を抜け、深い森と豊かな川に囲まれた自然美しい街だ。

街自体の守りは、さほど堅固と言うほどではない。だが、深い森や川に囲まれ、その外側を更に山に囲まれている為、いささか攻めにくいと言える。

「アレックス殿ッ」
アナトリアの中で最も豪奢な、元々この地に住まう諸侯の持ち物である館に身を落ち着け、戦いの合間の休養を楽しんでいるアレックスの元に慌しく訪れたのは、幕僚であるルジュドだった。
「騒々しい」
再び地図に視線を落とす。
いくら相手がロンバルトとは言え、次なる土地は王都。さすがに簡単には攻め落とせまい。多少の時間がかかるのは致し方なかろう。
公王率いるロンバルト軍は、連合軍にとってはウォルムスへの行程には妨げとならない場所に逗留しているのだから放っておくことも出来るのだが、しかし公王を放っておく手はあるまい。先方とて、おめおめと連合軍が通過するのを見ているとは考えにくいし、やはりここは多少回り道であってもロンバルト軍を叩いておくべきか。
公王が陥落してしまえば、ウォルムスも抵抗なく陥落する可能性が高い。
「どうした」
考えながら、飛び込んできた幕僚を促す。ルジュドは手にした書簡をアレックスに差し出した。
「？　ハーディンか」
「はい。……至急、ご覧いただきたいとのご伝言です」
「ほう？」
何かあったか。
軽く眉を上げながら、ルジュドから受け取った書簡の封を切る。目を落として、思わず息を飲んだ。
「……何」
「どうなされました」
一礼して室内から出て行こうとしていたルジュドが、アレックスの漏らした声音に足を止めた。それには答えずに、アレックスは黙々と書状の内容に目を落としていた。
やがて、その口元に笑いが広がる。

「……面白い」
「何か、良い情報が？」
訝しげに尋ねるルジュドに、ようやく顔をあげたアレックスは頷いた。
「ルジュド。将軍を集めろ。作戦を練る」
「……は」
上司の意図をわかりかねたまま頷くルジュドに、アレックスはにやりと笑いを向けて答えた。
「ロンバルトを、陥とすぞ」

一方、ラリベラまで敗退したロンバルト公王軍は、諸侯マウリッツの屋敷の一室にて今後の巻き返しとウォルムス防衛に思いを巡らせていた。ラリベラはウォルムスを目指す連合軍の位置するアナトリアに比べればウォルムスより西に位置している。連合軍のウォルムス進撃には、何ら脅威にはならない。
「失礼します」
とは言えこのままただ闇雲に進軍したところで、アナトリアの二の舞だ。足止めどころか壊滅に追いやられてしまう。
西に潰走したはずのヴァルス軍と連絡を取りたいのだが、連合軍とてもせっかく逸れた帝国軍の2国が連絡を取り合うのをおめおめと許してやる筋合いもない。巡回が厳しく、実行に移すことが出来ずにいる。
ノックの音に顔を上げたフェルナンドの苦い表情を読んで、部屋へ足を踏み入れたパウルは、苦笑を浮かべた。
「陛下、朗報です」
「何？」
「ラミア殿が」
パウルの言葉に、フェルナンドは目を瞬いた。
ラミアは、ロンバルトの宮廷魔術師である。ウォルムス防衛を含め、首都に残して来た。

「なぜ」
フェルナンドの声に応えるように、室内に入り込んだパウルの背中から人影が滑り込む。若草色の緩やかな髪を左側にまとめて長く垂らし、目尻のほくろが妙に色っぽい。年齢不詳の美貌、と言えるが、その実５０歳を越える。レドリックなどは、いかなるまやかしを使ってか老いることのない宮廷魔術師を、敬愛を込めて『バケモノ』と呼ぶ。
「ラミア」
「陛下がお困りかと」
フェルナンドの前に跪いたラミアは、一度伏せた顔を再び上げて彼女の主を見据えた。
「エルベ平原での戦役において、レーモン将軍が壮絶な死を遂げたとの報、窺いました」
ロンバルトにおける、数少ない有能な将軍だ。レドリックやレガードの、武芸の師でもある。
「それではさぞお困りかと」
「だがウォルムスはどうなる」
ラミアが小さく笑った。
「……レドリック殿下が」
「何！？」
フェルナンドは驚いたように立ち上がると、目を見開いてラミアを凝視した。
「戻ったか」
「ええ。さすればウォルムスはレドリック殿下にお任せするのが筋かと。私は、僭越ながら前線に出ておられる陛下のお力添えを出来ればと思い、こうして馳せ参じました次第にございます」
「そうか……」
立ち上がりかけて腰を浮かしていたフェルナンドは、息をつくようにすとんと椅子に座り込んだ。肘掛けに肘をつくと、深く顔を覆う。

「戻ってきたか……」
「……はい」
「どこにいたかは」
「いえ、それは。けれどこの状況下、お尋ねになるのは連合軍を撃退した後でも宜しいかと。肝要なのはお世継ぎがご無事でおられたことです」
「……ロドリスに拘束されていたのではあるまいな」
覆った手から目だけを覗かせて呟くフェルナンドに、ラミアは静かに顔を横に振った。
「わかりかねます」
「レガードは」
ラミアはまたも静かに顔を横に振った。
「……そうか」
しばし考え込むように沈黙する主を、こちらもやはり黙して見つめていたラミアがやがて口を開いた。
「陛下。私をヴァルス軍との連絡にお使い下さい」
「……」
意を問うようにフェルナンドが目を上げる。ラミアはその目を真っ直ぐ見つめた。
「ヴァルス軍と再度足並みを揃えたいと……けれど、人をやれずに困っておられる。そう、お見受け致します」
「……わかるか」
「わからぬラミアではございません。私なら魔力で武装しておりますゆえ、人手は割かずにすみましょう。それはそのまま、人目につかぬということにござります」
「しかしまったくひとりと言うわけにはいくまい」
ラミアは笑った。
「私兵を連れております」
２０年近くヴィルデフラウの王のそばに仕えるラミアは、無論貴族……それも、上級貴族である。私領に私兵を抱えている。

「そうか」
「お任せ下さい。必ずやヴァルス軍を陛下の元へお連れ致しますゆえ」
深々と頭を下げるラミアに、フェルナンドはしばし逡巡した。しかし迷っている時間はない。ぐずぐずしていれば連合軍がウォルムスに迫ることは明らかだ。
「では、そなたに任せても良いか」
「かしこまりました」
俯いたままの口元に正体不明の笑みを浮かべたラミアは、顔を上げる時にはその笑みをしまいこみながら口を開いた。
「時に陛下」
「何だ」
「ヴァルスは二手に分かれておりますね？」
元々ロンバルト軍と共に連合軍と相対した、言わば正規のヴァルス軍と、後にラルド要塞から派遣されたヴァルス要塞軍である。フェルナンドは肯定した。
「ヴァルス軍率いるはこの度指揮官に選任された名門貴族ローデリヒ公。要塞軍を率いるは、ラルド要塞将軍ガーフィール公」
「その通りだ」
「そして……」
探るような色を含ませて、ラミアが続ける。
「……宮廷魔術師クライスラー公――シェイン殿」
僅かに低くなったその声に気づかずに、フェルナンドは重ねて肯定した。
「では、すぐにでもヴァルス軍との連絡に参りたいと存じます。今、知りうる限りの情報を私にお与え下さい」
「そうだな。連合軍がいつ行動を開始するやもしれぬ。すぐにも旅立つ方が良かろう。ついて参れ」
……そう。ならば連絡を取るのは取り急ぎ、ヴァルス要塞軍の方とさせていただこう。

天才と名高いその男がいる方に。

（面白い……）

ラミアに情報を与えるべく立ち上がったフェルナンドの、初老の背中に続きながら、ロンバルトの宮廷魔術師はそっと口元を綻ばせた。

第2部第2章第29話　棘（1）

「……何だ？」

鬱蒼と繁った木々の黒い陰が、不意に騒音を奏でたような錯覚をした。闇に身を隠すように静かに移動を進めるヴァルス軍の陣頭付近で、シェインは微かに眉を顰めた。

――戦闘音、馬の蹄、嘶き（いなな）……。

「何者ですかね」

シェインの間近で馬を進めていたスフォルツも、空を仰いでその視線をぐるりと回した。

まださほど近いわけではない。見えるはずもない。

「様子を見てくるか」

「誰かやりましょうか」

馬首を返すシェインに、ガーフィールが慌てて声をかける。シェインはスフォルツに来るようにジェスチャーしながら、柔らかく拒絶した。

「案ずるな。面倒くさそうだったら、首は突っ込まぬ」

「そのようにお願いします」

「俺たちへの使いがロドリスとはち合わせぬとも限らんからな。……行こう」

促して馬首を巡らせると、戦闘音の出所を追って馬を駆るシェインのすぐ後をスフォルツと数騎が続いた。

「こっちか」

森の中は視界が悪い。しかも隆起や陥没が生い茂った草木に埋もれて存在しているため、生半可な馬術では到底偵察にはならない。

相変わらず先は見えないが、視界を遮る豊かな緑のもう間近に迫っているようだ。シェインが速度を緩めた。窺うように前を見据える。

「4人……5人か？ひとりは女だな」

服装や動きから察するに、女性を含めた5人が装備に身を固めた人間――恐らくは、ロドリス兵と何やら一戦交えているようだ。……放っておくのはいただけない。

「加勢しよう」

言いながら手綱を片手で操ってロッドを構えるシェインに、スフォルツが苦笑した。

「面倒ごとは避けるのではなかったんですかッ！？」

言いながら、自らも剣を片手に疾走する。

「女性が絡まれているとあらば、男として見て見ぬふりは出来まいッ」

「その通りですけどねッ……」

と、その視界の前方で火炎が上がるのが見えた。それを認知しながら、重ねるようにシェインも魔法を閃かせる。馬上ゆえに恐怖を与えぬよう、風の魔法を選択する。

「『空撃』ッ」

巻き起こる風の脇合いから、スフォルツが剣を構えて躍り出る。それに続く数騎のヴァルス兵が木々の合間から飛び出してきて、ロドリス兵は驚愕の声を上げた。

「魔術師か。やるな」

馬上のままロッドを構えて口を開くシェインに、先ほど闇を燃え盛らせた女性から怒鳴り声が飛んだ。

「どっちの味方だいッ！？」

「あちらはロドリス兵だろう。残念ながらあちらに加勢してやれぬ立場にいる」

答えるそばから更に重ねて『空撃』を飛ばし、それを受けたロドリス兵が倒れていく。尚息のある者を、ヴァルス兵が止めを刺していく。

瞬く間にロドリス兵を片づけると、こちらの手勢であるらしい兵士たちが無言でこちらに向き直った。それから馬上の女性の指示を待つように控える。どうやら発言権があるのは、彼女のようだ。

「礼を言っておこうか」
萌える若葉のような色をした長い髪をばさりと払って、彼女がシェインに向き直った。剣を収めたスフォルツらがシェインの背後に控えたのを、彼女も同様に見てとったのだろう。
「出すぎた真似だったかと反省しているところだ。追い打ちをかけないでくれ」
口元に笑みを浮かべて嘯くシェインに、対峙する女性が吹き出した。
「思ってもいないことは言うものではないな」
「そうか？半ば本気だ。大した魔術師だと知っていれば見物に回ったものを」
肩を竦めてみせると、女性は顔をくしゃりと崩して笑った。それを見て、シェインも笑みを返す。
「私はラミア。名を聞いても良いか。返礼は何も出来ぬが、恩人の名も知らぬようでは礼に悖ろう」
笑いながら続けるラミアに、シェインはやや大げさに眉を上げて見せながら答えた。
「隠すほどの名でもないからな。シェインだ」
「シェインか。ついでに、道を教えてくれると助かる」
こちらを真っ直ぐ見つめるラミアの深い海のような瞳を見返しながら、ラミアの素性に考えを巡らせた。
口調、態度から察するに身分の低い人間ではありえない。人を上から見て使うことに慣れている人間だ。このような時期、このような時間に、こんなところで何をしている？
「教えてやれることなら良いが。何せ俺もしがない旅人だからな。大したことは教えてやれんと思うが」
そうは言うものの、作戦や今後の行動を練る為に、地図は頭に叩き込んである。主要となるポイントならばある程度押さえてはいるはずだ。
シェインの返答に、ラミアはゆっくりと顔を横に振った。

「尋ねたいのは場所ではない。……軍隊を見かけはしなかったかと思ってな」
その言葉に、シェインの顔色が微かに変わった。
「その顔色は、知っている、と言う返事と受け取って良いか？」
ラミアが重ねる。シェインは探る目つきで口を開いた。
「おぬしらが何者かでこちらの返答が変わろうな。……何者だ？」
ロドリス兵とことを構えていたと言うことは、こちらにとってそれほど不都合な人物とは考えにくいが。
念の為、ラミアの回答を待って口を噤んだシェインに、しばし黙っていたラミアがひとつ頷いた。
「良いだろう。そなたらを信じよう」
「そいつは光栄」
「我々は」
そこで一度言葉を途切らせたラミアは、シェインを見据えながら一気に後の言葉を続けた。
「……我々は、ロンバルト公王からヴァルス軍への、使者だ」

◆◇◆

「ロンバルトの宮廷魔術師とはな。驚いた」
野営を敷いたキャンプの中、食事を採るために細々とあちこちで起こる焚き火を赤い瞳に映し込みながら木の幹に背中をもたせかけるシェインに、ガーフィールが頷いた。
「シェイン殿もお目にかかるのは初めてか」
「初めてだな。大体にして宮廷魔術師たる身は、自国への他国からの訪問の際にこそ同席するものの、他国への来訪には同伴しない。双方そうであれば相見える機会などそうそうありはしない」
巨頭会談として各国の王が一同に会する際でさえ、同伴するのは宰相、宮廷魔術師は十中八九『お留守番』である。
「しかしよくもまあここまで辿りついたものだ」

嘆息するように言うガーフィールに、口元に刻んだ笑みだけで返してシェインは視線をさまよわせた。階級上の者が使用しているテントのそばに若草色の髪を見つけて視線を定める。

ラミアにヴァルス軍の所在を尋ねられて、陣営へと連れ帰ったのはもちろんシェインらである。ロンバルトの、しかも宮廷魔術師とくれば扱いは俄然丁重にならざるを得ない。美女とくれば尚更である。

ガーフィールがラミアに見とれているのに気づいて、シェインは思わず苦笑いを浮かべた。

「好みか」

「あ、いや、そういうわけではないのだが」

ごほんと咳払いをして、ガーフィールはラミアから目を逸らした。

「女性と接する機会が余りないゆえ、その……扱いに困りますな」

しどろもどろに言うのが巨漢に似合わずにおかしく、笑いをかみ殺しながらシェインも再びラミアに目を向けた。

「まあ佳い女であることは認めよう。……いささかトウがたっているがな」

シェインの言葉に、ガーフィールがきょとんと首を傾げる。

「そうですか？若そうに見えますがね」

「一見、な。……まあ良い。それより……」

尚も笑いをかみ殺すようにしていたシェインは、ひとしきり笑うとふいと声のトーンを低くした。

「……どう思う」

その言葉に、今し方の青年のような表情を飲み込んだガーフィールは、歴戦の将軍の顔つきを見せて口を開いた。

「噛み砕いて検討し、ルートを確認してから決定すべきかと」

「……」

ロンバルトの宮廷魔術師がもたらした情報についてである。

彼女の言に寄れば、現状は次のようになっている。

まず、連合軍。

アレックス率いる三ヶ国連合軍は、ロンバルト軍を敗退させたままアナトリアにある。だが、ウォルムスへの進軍を開始するにあたって、彼らは軍を2つに分けた。

主力となる部隊はそのままに、切り分けた別動隊が密かにアナトリアを離れ、東へ向かったと言う。ラミアの推測を借りるならば、恐らくはアナトリアの連合軍に対してウォルムスが固めているその守りの後背から現れるつもりだろう。

一方、ロンバルト公王率いるロンバルト軍は、逃げ込んだラリベラに現在も逗留中。徘徊する連合軍によりヴァルス軍との連携を取りたくとも儘ならぬまま沈黙する羽目になっているようだ。当のヴァルス軍――シェインら、ラルド要塞援軍ではなくレオノーラより派兵された正規軍は、エルベ平原の会戦から潰走後、ルアン・ジンベルから動きを見せない。

そしてシェインらは、正規ヴァルス軍とまず合流を果たし、その上でのロンバルトの援護に入るつもりであったわけだ。シェインらの動きは、恐らくは連合軍は把握してはいまい。

ラミアの意見と言うのは、正規ヴァルス軍にはロンバルト軍との合流を依頼し、こちらは東へ向かった連合軍を叩いて欲しい、と言うものだった。ウォルムスを挟んで現在シェインたちは西にいる。ウォルムスの東側へ向かった連合軍を襲撃するのはいささか荒唐無稽のような気もするが、ラミアに言わせればそうとも限らないらしい。

現在シェインたちがいる地点から一度南下していくと、下った平原を横切る形になっているファルスリフスト川にぶつかる。ルオー川に合流している支流である。そのファルスリフスト川を上流の方に進んでいくと、山の中を抜けていくルートがあるのだそうだ。そちらから東へ向かえば、その距離はかなり短縮になる。連合軍別動隊の前面に出ることも可能かもしれない。ただ、難なのが足場が少々悪いことだと言う。

「……」

ラミアに視線を向けながら、シェインはその言葉を吟味していた。気にかかるのは連合軍の動きだ。なぜ二手になど分かれる？ウォルムスが前面に対して守りを固めているとしたって、仮にも王都だ。主力のいない少数の別動隊に、簡単に突破出来るとは思えない。そんなことに気づかぬほど愚かなのか、それとも。

（……それとも、ウォルムスを突破するあてでもあるのか）

いまひとつ、判然としない。

判然としないと言えば、ウォルムスの防衛にあたっているのは誰なのだろうか。定石通りに行けば、王都防衛にあたるのは宮廷魔術師――ラミアだろう。だがロンバルトの宮廷魔術師が女性であることから、その補佐に当たる人物が確かいたはずだ。補佐官ヨーゼフにはシェインも会ったことがある。彼が指揮を執っているのか？ひとりで？補佐官と言う身であればいささか出過ぎではないだろうか。とは言え上官である宮廷魔術師の指示がさあれば、そうせざるを得ないだろうし、ありえない、とは言えない。

それに、ラミアたちがここまで無事に辿りつけたのもまた、どこか不自然のような気がする。ヴァルス、ロンバルト双方の連絡が遅れているのは、偵察、監視を兼ねて連合軍が徘徊しているせいだ。目的はもちろん、ヴァルス・ロンバルトの連携の阻止だろう。あちらにしてみればせっかくばらけたもの、そのまま各個撃破出来ればその方が楽に決まっているのだから。

それを、公王軍のいるラリベラからここまで大過なく辿りついたのがどこか解せないような気もし、けれどそこはやはり伊達に宮廷魔術師と言う身分ではないのだろうと思えば合点もいかなくはない。女性であることと、連れている私兵の装備が軽装であることも幸いしているのかもしれない。下手な兵士よりは連合軍の目をかいくぐることが出来そうではある。

気になる点をひとつひとつ考えてみれば、解はないではないのだ。そうではあるのだが……。

曖昧な何かを払拭しきれずに沈黙するシェインの前に、先ほど遠

くに見た若草色の髪が揺れた。考え込んでいる間にこちらに向かっていたらしい。
「悩み事がおありか」
言いながら、ふっと口元に笑みを刻む。考え込む表情を拭い去り、シェインは微笑を浮かべながら顔を上げた。隣でガーフィールが凝固している。
「無骨な軍人の中に可憐な花が一輪迷い込んだのでな。手折ろうと目論む奴がおらぬかと心配している」
「ほう？可憐な花とは私と認識して良いか？」
「無論」
「他人ごとのように言うな。そなたは手折ろうと目論まない自信があると言うことか」
「高嶺の花、と言う言葉がある。俺は自分の分をわきまえているからな。分不相応な真似はしないことに決めているのさ」
シェインの言葉に、ラミアは機嫌が良さそうに笑った。
「私は棘の多い花ゆえな。……顔も達者なら口も達者か」
「追加しといてくれ。芸も達者だ。……巨頭会談、と行こうか」
迷子になりそうな会話を打ち切って、ガーフィールに視線を向ける。淀みなく話すシェインを感心したように眺めていたガーフィールが、慌てて頷いた。
「はい」
「我々としては、確実にロンバルトの助力となる動きを希望する。ラミア殿の提案と、こちらの予定といずれがより勝率が高いかを確認した上で行動の選択をしたいと考えるが、いかがか」
ラミアが頷く。
「予定していた今後の動きを教えてもらえるかい」
「ガーフィール」
ラミアの言葉を受けて促すシェインに、ガーフィールが口を開く。この部隊の指揮官はあくまでもガーフィールである。
「正規ヴァルス軍はルアン・ジンベルにいると聞いています。ゆえ

に我々はそちらとの合流を。予定しているルートとしてはセルフト山地を越え、ソヌートを経由して、先行隊を派遣。ヴァルス軍と連絡を取り合流、しかるが後に東へ向かい、ロンバルト軍と連携を図ろうと考えています」

「連合軍が出てくるやもしれぬな？」

「出てきたとしても総力とは考えられません。だとすれば、我々の敵ではない」

ラミアはしばし考えるように黙り込んだ。偵察部隊程度の規模ならば危ういが、現在ロンバルトにいるヴァルス総勢が行軍する中、巡回部隊程度の連合軍に負けることはまずあるまい。

問題になるのは、ロンバルト軍との連絡だ。ロンバルトがヴァルスとの連絡に足踏みをしていたのと同じ理由で、危険はこちらにもつきまとう。

「……それで」

そのことに触れずに促したラミアに、ガーフィールが首を横に振った。

「そこからは、ヴァルス軍と合流してからでなければ決められん」

「ほう？何も考えておらぬわけではなかろう？」

「考えられる作戦としては」

ガーフィールから視線を逸らし、沈黙して聞いていたシェインにラミアが問う。いささか挑戦的な口振りに、シェインがちらりと片目を上げた。

「ゲリラ戦だろうな」

「ゲリラ戦！？」

「それほどにヴァルス軍は少ないのか！？」

ラミアとガーフィール双方から上がった驚きの声に、シェインは制すように片手を上げた。

「落ち着け。そういうわけではない」

「じゃあなぜ」

「ゲリラ戦は何も少数対多数の時にのみ取りうる作戦とは限らない。

……帝国軍は連合軍に、2度、負けているな？」
「……」
ラミアが無言で頷く。シェインは両手を広げて、大げさに肩を竦めて見せた。
「ならば何度も同じ戦法で挑んで叩き潰されていても仕方なかろう。手法を変えるべきだ」
「だがなぜゲリラ戦など」
「正面から負けているのであれば、こちらの得意分野に引き寄せねばならなかろう。彼らに比べて我々が圧倒的に有利な点は、どこだ？」
相手の反応を見るように、シェインはしばし黙った。ラミアが考えるように眉を顰める。シェインは解を与えた。
「地の利だ」
「地の利……」
繰り返すラミアに、シェインは頷いて淡々と続けた。
「連合軍は地の利を犯している。彼らにとってロンバルトは不案内だ。加えて言えば山岳部の多いバートはともかく、平地の多いロドリスとナタリアは足場の悪い地での戦には慣れていないだろう。対する我々にはこの地を庭とするロンバルト軍がいる。我々ヴァルス軍にとっては、親しみはあるとは言え多くの兵にとって不案内な地であることは連合軍と違いはないが、ロンバルト軍にとってはそうではない。特に戦地となるのは王都近辺だ」
「……」
「公王率いるロンバルト軍を先頭に、合流した正規ヴァルス軍が背後に控える形で連合軍へ進撃する。……そうだな。奇襲をかけるような形で勢いに乗っているように見せるのが得策かな」
「……何の為だ」
「連合軍を引きつけるためさ」

第2部第2章第29話　棘（2）

ラミアは目を瞬いた。意図していることを酌もうとする色を瞳の中に見つけ、シェインが説明を加える。

「勢いに乗っていると見せて、連合軍へと突っ込む。連合軍はもちろん跳ね返そうとする。それに相対して『しまった』と言う素振りで慌てて撤退すれば、連合軍はこちらの意図を図ろうとせずに深追いしてくる。いわば『ざまぁないな』と言う心情、ついでに嘲笑でももらえれば儲けものだ」

シェインの言い種に、ラミアとガーフィールが吹き出した。シェイン自身小さく笑いながら続ける。

「そうなれば後は、連合軍はこちらの動きに食いついて思う場所まで引きずり込める。それこそ、勢いに乗ってな」

「……して、引きずり込む場所とはどこだ」

「シュトックガルムの森さ」

あっさりと言うシェインに、ラミアが感心したようにため息をついた。シュトックガルムはウォルムスほど近くの深い森だ。なるほど、ロンバルト兵には余りに馴染み深く、連合軍にとっては厄介な戦場だろう。

「そこで少々ロンバルト軍には頑張っていただこう。連合軍をかき回し、森の奥へと引きずり込んで、戦力を無効化させる。小分けになったら、ヴァルス軍の出番だ」

「どう出る」

「まずはロンバルト軍の背後に控えているヴァルス軍だな。小分けにされた相手に対し、ある程度のまとまった戦力をぶつけよう。更に……」

ヴァルスの宮廷魔術師は、いささか人の悪い笑みを口元に滲ませた。

「……ヴァルスの別動隊が、森へ入り込んだ連合軍の後を追ってい

た、と言うのはどうだ？」
「……背後から現れると？」
「かなりの恐慌状態になること請け合いだな」
「だが、連合軍もヴァルス軍の存在には警戒をしているのではないか」
「その為に頭からロンバルトの背後に控えさせる」
「そうか……」
連合軍は、正規ヴァルス軍の動向は何となく掴んでいるとしても、デルフト方面から現れたシェインら要塞軍については情報はさほどいっていないはずだ。何せ、彼らと剣を交えたロドリス軍は壊滅してデルフト方面へと戻っている。
「……なるほどな」
シェインの語った内容を吟味するようにじっと地面を見つめていたラミアが、不意に笑いを含んで顔を上げた。
「デルフト攻略の第二戦で、ロドリスを潰走させたのは、そなたか」
「まさか。魔物でもあるまいし、俺には軍隊を壊滅させるような力はありはしないさ」
目を伏せて笑うシェインに、ラミアもそれ以上は触れずにふと笑いを飲み込んだ。それから今後の展開を思索するように、視線をさまよわせる。
「……迷うところだな」
躊躇うように呟くと、ラミアはシェインを見上げた。
「迷う、とは」
「シェイン殿の言う策が成功すれば、それは確かに連合軍をロンバルトから追い出すのに良い策のように思える。だが」
「だが？」
「……連合軍の別動隊の動きが、気になるのだ」
躊躇うようにしていたラミアは、だが次第にはっきりと言葉を紡いだ。
「これは私情が入っているのやもしれぬ。そなたが言うようにいけ

ば、良いと思う。だが、連合軍の別動隊は公族の通路についての情報を入手したと聞いた」

「……何？」

その言葉に、シェインとガーフィールが同時に声を上げる。ラミアが応えて頷いた。

「どこの国もそうだろうが、統治者の為の秘密の通路と言うものがある。それはわかるな？」

無言で頷く。

何かあった時に王族、公族が街の外へと抜けられる通路はどこの城にも存在している。その存在を明確に知る者は王族と、それに近しい身分の者だけだ。

……通路は普通、城から街外のどこかへと抜ける。だが逆に言えばその所在をつきとめれば、街中を通らずに城へと辿りつく。

とは言え、普通は外からでは中へ入り込めないようになっているものだが……。

問うてみると、ラミアは無言で顔を横に振った。

「そのようにはなっている。だが、どのように入手したのかがわからぬ以上、入り込み方をも入手していないとは、私には言えない。むしろ、そうでなければ別動隊などやるだろうかと思えてならない」

明確に連合軍がどこまで知っているかはわからぬが、最悪の事態を想定した上で回避したいということだ。

得心がいって、シェインは深刻な沈黙を守った。

ヴィルデフラウには、レガードの実母アンジェリカ公妃がいる。フェルナンドに伴われて、幾度かレオノーラへ外遊に訪れてもいる。連合軍がヴィルデフラウに侵入すれば、ただでは済むまい。シェインにしても他人ごとではない。

「……では、こういうのはどうだ？」

しばし考えて、連合軍の別動隊を駆逐したいと言うラミアの意見を考慮に入れる。

「ヴァルス軍にはとにかく、ロンバルト軍と合流してもらおう。い

つまでもルアン・ジンベルに立てこもっていたところで仕方ないからな。我々はラミア殿の意見を採って一旦南へ戻り、東へ抜ける。そちらで、連合軍の別動隊を妨害する」

そこで一度言葉を切る。果たしてそううまくいくかどうかはわからないが……。

「……成功すればむしろ、良いかもしれぬな」

ひとりごちるシェインに、ラミアが問いかけた。

「どういうことだ？」

「東へ抜けて連合軍の別動隊を叩いた後、北上する。ロンバルト軍を主流に、そちらではゲリラ戦を展開してもらおうと言うのは予定通りだ」

「ふむ」

「とすると、我々は連合軍がまるで敵の来襲を意図していない側面から現れることにならないか？」

「そうか……」

連合軍がシェインらの部隊をどのように認識しているかはわからないが、いずれにしてもデルフト方面……西側を警戒しているだろう。まさか突然東側から姿を現すとは思ってはいまい。

とすれば、かなり相手の意表を突くことが出来る。

「……良し。それでいこう」

「かなりの強行軍になるな」

ラミアが苦笑する。それを受けて、シェインの笑いも苦くならざるを得なかった。

「いささかきついかな……。だがそれも別動隊の規模にも寄ろうし、我々がいなくともシュトックガルムでロンバルトがゲリラ戦を展開すれば、勝ち目はあるだろう」

「だと良いが」

「さて」

不安げに顔を曇らせるラミアを景気づけるように、シェインは明るい声で促した。

「とりあえずは、ルートの確認といこうか」

◆◇◆

ラミアの言う『東へ抜ける道』は、ヴァルス要塞軍の現地点からさほど離れているわけではなさそうだった。馬で早駆けの出来る数人なら、夜のうちに行って帰って来られる距離だ。

実際にその道が『軍隊が通ることが可能かどうか』を判断して欲しいと言うラミアの言葉を受けて、ラミアとその麾下の私兵４名、それからシェインとスフォルツら数名がルートを確認する為に夜陰に紛れて陣営を発った。月が地上に投げかける優しいヴェールのような光が足下を照らす中、静かに馬を進めて行く。

「……道としては、２本、ある」

シェインの少し先を進みながら、ラミアが微かに顔を振り返った。

「ここから近い方の道の方が、移動距離が短い。その代わり足場が少々悪いがな」

可能ならばそちらの方が時間短縮になる、と呟くように続ける。

「ならば、とりあえずそちらのルートへご案内いただけるか」

「そのつもりだ」

ラミアの先導に従って分け入っていく山道は、獣道のような状態だった。豊かに繁った木々が、自身の葉の重みに耐えきれずに深くうなだれ、垂れ下がっている。人間の方は馬に跨って嵩（かさ）を増しているのだから、視界の悪さは一層だ。足下も一面が草に覆われている。だが平らに踏み固められた地面がそこそこの幅を保っているし、崖や窪地によるぬかるみや陥没があるわけでもない。これなら、進行速度は多少落ちようとも行けそうだ。

しかし、道はそのままを維持して続いているわけではなかった。

「ひとつ目のルートは、ここからだ」

ラミアが馬を止め、広がる光景にシェインは思わず唸った。スフォルツが代弁するように口を開く。

「これは……無理ですね」
数メートル先には切り立った崖、眼下には山を下る急流が突き出た鋭い巨大な岩々の間を駆け抜けていく。無論、橋はかかっている。ロープなどで吊られた頼りない吊り橋などと言うものではない。木でかけられた橋だ。さほど川幅がないせいで、崖下と斜めにつっかえ棒のように支えている。
だが。
軍隊が渡るには、いかにも心許ない。
兵士は、ひとりひとりが装備に身を固めている。装備と言うのは、いわば鉄の塊である。通常より遙かに重い重量の人間が、何千人と通過するのだ。
それだけではない。輜重部隊などは糧食などの荷を積んだ車を備えている。その重みは半端なものではない。
馬を下りたシェインは、橋の側へと足を進めた。確認してみると、それなりに強度はありそうではある。小分けにして手間をかければ何とかなるかもしれない。
しかし、危険は冒さないに越したことはない。
「迂回路はないのか」
橋の袂にしゃがみ込んでいたシェインが、渋面を浮かべながら立ち上がると、同様に馬を飛び降りて隣に寄り添ったラミアが苦笑した。
「やはり危険か」
「どう見ても危険だろう。数千人がここを行軍してみろ」
「少数に分けてもか」
「その場合かなりの少数になるだろうな。ここを渡るだけで数日かかる。しかも……」
渋面のまま、シェインは橋を渡った先に視線を向けた。歩き出す。
「渡りきった先の道も、少々いただけない」
言いながらすたすたと橋を渡っていく背中を、ラミアが追いかける。取り残された部下たちはどうしたものかと馬から下りて、こち

らを見守っていた。
構わず橋を渡りきったシェインは、舌打ちをした。
橋を渡ってすぐに、急なカーブがある。橋がかかっている場所こそまあまあ開けて見えるが、そのすぐ先は人ひとりがやっとと言う細い道だ。もちろん山側と逆は、急流に続く崖である。危険極まりない。
「やはり無理か？」
「無理に決まっている」
素人目にも明らかだ。
もちろん、危険を承知で山越えを強行した軍隊と言うのは史上にいくつも存在する。だがそれはやむを得ぬ事情を抱えている、もしくはその価値があると判断される場合だ。
果たしてこの場合、そこまでの価値はあるのか。大体これでは時間の短縮どころか延長だ。余りに時間を食っていては、山越えそのものに意味がなくなる。苦労して東側に抜けてみれば、連合軍別動隊はヴィルデフラウへの侵入を果たした後だったなどと言うことになりかねない。
「迂回路は遠いのか」
それほど馬鹿には思えなかったのだが。
いささかラミアに失望しながら踵を返して橋を戻るシェインについて、ラミアも再び橋を戻りながら頷いた。
「ある。それが、もうひとつのルートだ」
「それはここからどのくらいかかる」
早口で尋ねるシェインに、ラミアが足を止めた。橋の中程から、今戻っている側の、木々に覆われた一角を指さす。
「あの辺りだ」
ならば遠くはない。
「ちょっと見てこよう」
橋を渡りきると、馬を下りたスフォルツが寄ってきた。
「どうです」

「半数は川の底だな」
「……」
皮肉混じりのシェインの返答に、スフォルツが言葉を失った。その間にラミアが迂回路へ続く道へ足を向けて、シェインを振り返る。
「こちらだ」
「？　馬はなしか？」
「歩いてすぐに行ける。シェイン殿にちょっと確認してもらえれば十分だろう。ご希望であれば、改めてそちらを案内しよう」
「……わかった」
小さく吐息をついて、歩き出す。続こうとしたスフォルツやラミアの部下を、ラミアが押し留めた。
「良い。すぐに戻る」
「しかし」
「はぐれる危険がある距離ではない。……行こう」
言ってさっさと歩き出すラミアに、仕方なくついていく。ここへ来るまでの道と同様、木々が邪魔をするものの、幅はそこそこある。下り坂だが急ではないし、この辺りは問題なく通過出来るだろう。
坂を下り、ややなだらかになったところで、ラミアが左手に逸れた。足元が急に湿った岩場に変わる。階段になっているが、長くはないし急ではない。
（こちらなら……）
今のところは行けるだろう。
階段を下っていくと、湿っぽい洞窟になっていた。途中、間に川が挟まるが、対岸へ向かって幅の広い岩が飛び石のようにあちらとこちらを繋いでいる。輜重部隊がいささかつらいが、先ほどの橋ほどの困難ではない。
「どうだ？」
もう間近に見える洞窟の出口へ足を向けながら、ラミアがシェインを振り返る。シェインは肩を竦めた。
「迷う余地がないな。こちら以外のルートは考えられまい」

「そうか」
「一応、ここを抜けた先も見ておきたいな」
この高度であれば……恐らくは何とでもなるだろうが。
シェインの言葉にラミアが頷きかけた時だった。
ズンッ。
後方から腹に響くような重い音が反響し、異変を感じた時には立て続けに起こる轟音と振動が耳を突き刺した。体を揺るがす。
「何だ!?」
「崖崩れかッ!?」
馬鹿な。
だが、轟音の源は確かに洞窟……それも、シェインたちが入ってきたその口を塞ぐ形で転落してきた岩だった。巨大な岩盤が、退路を塞いでいる。
「まずい、戻れなくなった」
呟くラミアの言葉を耳にしながら、ふと爆風に乗って流れてきた匂いにシェインは眉を顰めた。
キナ臭い……発火物特有の……。
(発破か……?)
なぜそんな匂いがしなければならないのかに気づきかけた瞬間、今度は洞窟の出口の方から複数の甲冑の音が聞こえた。外の光を背にした青い甲冑が目に飛び込んで来るや否や、咄嗟にシェインは体を捻ってラミアを背後に庇いながら『雷撃』を疾らせていた。――ロドリス兵。
「ラミア殿」
空を駆け抜ける雷を受けて数人が地面にもんどりうち、仲間を盾にした数人が外へと逃げ戻る。次の魔法を発動すべくロッドを構えたまま、シェインは前を見据えて低い声を出した。
「後ろへ」
「ほう? 守ってくれるか」
「当然……」

『雷撃』に後込みしていたロドリス兵が再度洞窟の出口に立つのを睨み据えたシェインは、答えながら奇怪なことに思い当たった。

「……佳い男だねぇ」

なぜ、ロドリス兵が、ここにいる？

待ち伏せをするには、余りにおかしい。

なぜなら、ここへ来ることはシェインさえも今し方まで知らなかったことだからだ。

それを、ご丁寧に爆破物で入り口をタイミングを見計らったように破壊して、出口を塞ぐなどと言う真似が、なぜ出来る。

「本当に、私好みだ……」

（――しまった……ッ）

――――――――――――ドゥッ……！！！！

解に当たった瞬間、完全に油断していた背後……それも至近距離から『空撃』をまともにくらって、シェインの体が前のめりに崩れ落ちた。ロッドを構えたまま、ロンバルトの宮廷魔術師は、薄く笑った。

「私は、頭の良い男は、好きなんだよ」

ラミアの呟きは、地に崩れたシェインの耳に届くことはなかった。

◆

◆◇◆

その日、ラウバルの元にはいくつかの凶報が訪れていた。

「失礼します、ラウバル様」

このところ、ようやくユリアはラフトシュタインとフォルトに付き添われながら、実務に取り組み始めている。それを見守り、時には意見やアドバイスを与えながら自分の仕事を行うラウバルには、息をつく暇もない。

ようやく自分の執務室に戻り、決済を控えた山積みの書類から目を逸らしたくなる思いを飲み込みながら執務机に向かいかけた途端、来訪者があった。

「入れ」

入室してきたのは近衛警備隊第1班隊長だ。構わず椅子に腰を下ろしたラウバルは、ちらりと目を向けて書類に手を伸ばした。

「どうした」

「は。門兵のところにいささか怪しい男が参りまして」

「怪しい男？」

気のない返事をしながら、書類をめくる。警備隊長は、やや決まり悪そうに頭を下げた。

「ご報告するほどではないかとも思いましたが、その……シェイン様のお名前を挙げられましたので」

「シェインの？」

眉を顰めて、体ごとそちらに向ける。ラウバルが報告に興味を持ったことに気づいて、警備隊長は続けた。

「『本来シェイン様にお届けするはずのものがある。もしシェイン様がお留守の時には、宰相ラウバル様にお渡しするよう伝言を受けている』と」

「……？」
シェインに渡すはずのものとは何だろう。
大体、何者なのだろう。
「何だ？それは」
「書簡、と申しております。こちらがお渡しすると言っても、頑として直接でないとお渡しが出来ないと申しまして、しかも……」
その書簡が全てではない、と男が言うのだと言う。
続きは、男の頭の中に入っているのだと。
その言葉に、ラウバルは弾かれたように立ち上がった。
「――！！　通せ」
シェインの放っている間諜からの情報だ。
途中で盗まれたりすることを恐れ、全ての情報を書簡に記してはいないのだろう。肝心の情報は恐らく、その男の口から語られるはずだ。
「は、はい。かしこまりました」
警備隊長が慌てて出て行くと、しばらくして彼に連れられたみすぼらしい男が入ってきた。どろりとした目付き、興味なさげにラウバルを見据える。警備隊長が退室すると、男はぼそりと口を開いた。
「……ラウバル卿で宜しいか」
「そうだ」
品定めするように男はラウバルを見つめ、それから書簡を手渡した。受け取ったラウバルに、開けるように促す。それを受けて、ラウバルは書簡を紐解いた。
書かれている内容は、ロドリス軍の動きについてだ。ロドリスに放っている間諜からの情報らしい。指揮官、ルート、装備などについて詳細が書かれてはいるが、それはある程度こちらで掴んでいる情報でもある。
「……以下は、報酬と引き換えに」
ラウバルが目を通し終えたことを読んで、男が口を開いた。
「いくらだ」

「8千ギルと」
小さく息を吐いて、ラウバルは金庫へ足を向けた。無論国庫ではない。ラウバルの私産である。
その袋を手渡すと、男は低い声でぼそぼそと続けた。その内容を聞くに従い、ラウバルの顔色が変わっていく。目を見開き言葉を失うラウバルの前で、男は用が済むと静かに出て行った。取り残された執務室で、愕然としたまま、男の姿の消えた扉を見つめる。
男の言葉は、そのまま信じるとすれば恐ろしく深い情報を提供していた。生半可な地位の人間が得られる情報とは考えにくかった。
（レドリック殿が……）
ウォルムスへ帰還……。
もちろんそれを促したのは、ロドリスだ。これで、ロンバルトは押さえられたも同然だろう。
（しまった……）
手を、打っておくべきだった。
焦燥に駆られるラウバルの前で、今し方閉まったばかりの扉が再びノックされた。掠れた声で応じると、訪れたのは外務大臣ハイランドだった。こちらも硬い顔をしている。
「朝報では、なさそうだな」
「おっしゃるラウバル殿も、いささか顔色が良くないようです」
「……聞かせてくれ」
促すラウバルに、ハイランドは小さな吐息をついて口を開いた。
「2点、ございます。1点は、リトリアが動きを開始致しました」
さすがのラウバルも、思わず舌打ちが漏れた。このタイミングか。
「どう動いた」
「今のところ、まだ正確な目的地はわかりません。とりあえずは、西の方角へ向かっているようですが」
西……？
「そうか」
ついにリトリアが動いた。レドリックの戻ったロンバルトしか味

方をつけていないヴァルスとしては、かなり苦戦するだろう。
「もう1点は」
聞きたくないと耳を塞ぐわけにもいくまい。
更に促すと、ハイランドは一層表情を硬くした。どうやら凶報は、こちらが本題のようだ。
「……シェイン殿が、行方不明です」
「何!?」
だが、予想だにしない言葉に、ラウバルはまたも大声を上げて立ち上がっていた。かけていた椅子が、盛大な音を立てて床に転がる。
ハイランドが静かに続けた。
「ラルド要塞からの報告です。同行していた者が全て行方不明の為、詳細は不明とのこと。わかっている状況としては、ロンバルトの宮廷魔術師以下数名が合流、連合軍の別動隊が妙な動きを見せているゆえ、要塞軍にはそちらへの対応を願いたいと申し出、ルートの確認に向かった先から行方が知れぬそうです」
レガードが見つかったと思ったら、そちらか。
つくづくロドリスはやることが汚い。
歯噛みしながら、ラウバルは執務机に強く握り拳を押し付けた。
ロドリスの示唆による、レドリックの帰還。
ロドリスを後ろ盾につけたレドリックが帰還した理由は、恐らくウォルムス陥落の為だろう。
どの王城にも王家専用の脱出用通路がある。王族とは得てしてそういうものだ。危険を回避する為に、国民を置いて真っ先に外へと脱出する為である。
だがそれは、外部と繋がっている通路に他ならない。
通常であればそれを使って内部に入ることは不可能ではあるが、内部にレドリックがいれば可能である。そこから連合軍の別動隊とやらを招じ入れ、ヴィルデフラウの混乱に乗じて今後レドリックの戴冠に邪魔になりそうな人物は一掃してしまえば良い。そしてヴィルデフラウの占拠を理由に、ウォルムスは正面からノックしてくる

連合軍に無血開城だ。連合軍にとってのウォルムス陥落は、容易いものとなる。

そして、先ほどの間諜の言によれば、レドリックの帰還にはもうひとつ理由がある。

ヴァルス陣営の主要人物の、拘束である。レドリックからその使命を賜ったのが、恐らくは宮廷魔術師――ラミアだったのだろう。

ロンバルトはヴァルスにとっては、盟友だ。現在ロドリスら連合国軍には到底近付けない人物にも、ロンバルトの人間であれば近付くことが出来る。

ヴァルスの中心人物の叛心を唆し、成功すればヴァルスは内側から瓦解していく。そこを外から一気に叩けば、壊滅だ。

シェインが、ユリアのいるヴァルスを裏切るとは微塵も思わない。だが、次にシェインに待っているのは、死だ。

ロドリスは、こちらがレドリックとロドリスの癒着に気づいているとはまだ知らぬだろう。だとすれば、ロンバルトの裏切りを知る主要人物を生かしておくわけがない。

確かにシェインは、魔術師としては優れているだろう。しかし、そのシェインを雲隠れさせたのだ。必ずシェインが生きて帰ってくるなどと、どうして言えよう。

（――――――くそッ……）

道が、塞がっていく。

次第に、手詰まりになっていくような気がする。

血が滲むほどきつく唇を深く噛み締めたラウバルは、ハイランドに向けて掠れた声を押し出した。

「ハイランド殿」

「はい」

「ユリア様には、シェインの件は内密に」

「……わかりました」

苦く頷くハイランドの声を耳にしながら、ラウバルは胸のうちで切実な祈りを捧げた。

（頼む……）

シェイン。

――――――無事であってくれ……。

帝国統一暦１５２９年風の月第１週

――――――ウォルムス陥落

ＥＳＴ　第２部　砕けた心

第２章　冒険者たち

第3部　ローレシアの戦禍　第1章　氷竜トラファルガー

第3部　ローレシアの戦禍
第1章　氷竜トラファルガー

（ちッ……しつこいッ……）

リトリア王国とロドリス王国の国境間際リンドンの町へ差し掛かる山道を、少女はもの凄い勢いで疾走していた。その後を、複数の足音が追いかけていく。

追われる少女の年の頃は15、16くらいだろう。まだ女性と言うには幾分幼い。流れるように艶やかな長い山吹色の髪を無造作に束ね、更に覆うように薄汚れた布でくるんでいる。栗色の瞳には険しい色が浮かび、腰には似合わぬ長剣が携えられていた。

「どこへ行ったッ!?」

「あっちだ!!足音が聞こえるッ!!」

いかに静かに駆けようとも、山道であれば草木の揺れる音が嫌でも立つ。

とても穏便とは言えそうにない怒号が飛び交い、届く声に、少女の表情が焦りの色に染まる。このままでは遠くないうちに確実に、追い詰められるだろう。

剣は使える。だがひとりで相手取れる人数には限界がある。今は逃げるより他に、生き延びる術はない。捕らえられたらどうなるかなど、考えたくもなかった。

（権力に集る小蠅共がッ……）

内心毒づきながら斜面を駆け降りかけた少女の足が、怯んだように止まった。前方からも足音……回り込まれたか。

（くそ……）

見た目にそぐわぬ荒々しい言葉遣いで胸中に吐き捨て、半ば諦めかけて剣に手を伸ばす。ただただ捕まってなどやるものか。どうせ

人生の終幕を迎えるとしても、何人かを道連れにしてくれる。奥歯を噛み締め、前方を睨みすえたまま剣を引き抜きかけた矢先、不意に脇の茂みから伸びた手が少女を掴んだ。

「何ッ……」

驚愕が漏らした呟きごと、少女の体は茂みの中へと引きずり込まれた。口を押さえられ、言葉が出ない。無論、悲鳴をあげたところで助けてくれる人間などいはしないことはわかりきっている。

言葉を奪われたまま、少女の体はそのまま上方へと引き上げられた。鬱蒼と茂った木の上だ。抵抗する術もなく、少女は何者かのされるがままにその大きな木の枝葉の間へと押し込まれた。眼下で、少女を追いかけていた武装兵たちが通り過ぎていく。もちろんそんなものを見ている余裕などどこにもない。

（誰……）

口を押さえられたまま、少女は自分を押さえつけている人物に目を向けた。男性だ。屈強、とは少々言い難い。どちらかと言えばインテリ風の細面の顔……どこか、気品さえ感じさせる。

青年は少女の口を塞いだままで、モスグリーンの瞳を暗闇に定めていた。何者かは全く判明しないが、ともかくもこの男が自分を助けようとしてくれていることだけは肌で感じる。

「何!?いなかったのか!?」

「ちッ……あの小娘、どこに行きやがった」

「探せッ。道などそれほど多くはない」

双方の武装兵たちが、少女を見つけられぬままに出逢ってしまったらしい。怒りにまみれた声が聞こえ、そっと息を飲む少女の前で、青年がこちらに視線を向けた。自分の口元に人差し指を立てて当てると、少女に向かって上を指す。もっと上へ上がれと言うことらしい。

それに頷いて、少女は青年の拘束から逃れた。木の幹に足をかけ、枝を揺らさぬよう慎重にもう一段上の太い枝へと足をかける。

「この辺にはいないようだな」

「もっと奥を探せッ」
息を詰めて少女と青年が見守る中、悪意を塗した武装兵たちの声が少しずつ、遠ざかって行った。

第3部第1章第1話　『失われた聖書』（1）

白っぽく澄んだ空の下、茶色い低い山々が稜線を描いている。
「カズキー。どうしたー？」
「あ、うん。何でもない」
ふと足を止め、目を細めて景色に視線を向けていた俺は、シサーの声に振り返った。
足の裏に感じているのは、ローレシアの大地。
ローレシア、とは言っても、俺たちが今いるのはギャヴァンじゃない。キサド山脈を越えて風の砂漠より更に西――ウィレムスタト地方と呼ばれる地域だ。
ラグフォレスト大陸シュートを経ったのが、およそ2週間ほど前。ウィレムスタト西岸の小さな漁村ナザレに到着したのが今から4日前。
グローバーの船は大型商船だ。小さな漁村の港になど船をつけることは出来ず、3日ほど沖合いで波の穏やかな日を待って備え付けの小型船での上陸になった。
ギャヴァンへ向かわなかったのには、もちろん理由がある。
向かわなかったと言うよりは、向かえなかったと言うのが正しい。ギャヴァンに戻る海が船で渡れる状態にないらしい、と言う話を耳にしたのは、シュートを旅立とうと言うまさにその日だった。ギャヴァンからシュートへ渡る船が次々と行方不明、船は欠航が相次いだ。巨大な海洋生物が出没、しているらしい。
ここからは乱れ飛んでいる憶測にしか過ぎないが、原因はどうやら例のロンバルト沖でのヴァルス対モナの海戦にあるとの見方が強いようだ。ひいてはあの海戦で二国の海軍を葬り去ったその魔物そのものも。
シー・サーペント――水夫たちは、その魔物をそう呼んでいた。
俺は見たことないし、見たくもないし、どんなんなんだかわからな

いが、海戦をめちゃくちゃにするくらいだからまあ……ハンパないんだろう。

ロンバルト沖でヴァルス軍、モナ軍を壊滅させたその魔物は、近隣の漁船などを襲いながらゆっくりと南下、現在ギャヴァンからの……あるいはシュートからギャヴァンへの商船がいくつも行方不明になっているのは、そいつがギャヴァン沖近隣にまで移動して来たんじゃないかって話だった。普段は海洋の魔物は滅多に浮上してくるようなこともないらしく、そのせいで海戦を襲ったと思われる魔物と同一視されている。

そんなわけで現状、ギャヴァンへの渡航は出来そうになく、と言っていつまでものんびりしているわけにはいかない俺たちは、シュートから北上して適当なところで下ろしてもらったと言うわけだ。

ちなみに更に北上した場所にある港町フォルムスには、別の理由で近づくことが出来ない。

別の理由――ナタリア海軍のフォルムス襲撃。

まだ砲撃を受けただの上陸しただのって話ではないみたいだけど、驚異の回復力で藻屑と消えてしまった海軍と船を再編成したヴァルスが次々と軍船をフォルムスの防衛に投入、今はフォルムス沖での小競り合いを繰り返しながらの睨み合いだと聞いている。

ま、どっちにしたって近づいても良いことはありそうにない。

ナザレを出発した俺たちが現在目指しているのは、ウィレムスタト中央に広がるヴェル山地を挟んで反対側にあるレジーナと言う街だった。ウィレムスタト地方は湾を挟んでロドリス、エルファーラを臨む岬状の陸地だ。その東岸に位置するレジーナから船で湾を渡ってエルファーラへ抜け、エルファーラ経由でファリマ・ドビトークへと言うわけだ。

本当はギャヴァンから一旦レオノーラ経由で……と思っていたんだけど、こんなところにいるんじゃレオノーラへ向かうのは無駄足でしかない。ちなみにロドリスに渡るのは、考えるまでもなく論外。

レジーナへ向かう面々は、シサー、ニーナ、キグナスそして俺、

と言う本来のメンツに戻っている。
　カイル、ゲイトはもちろんギャヴァンへ帰るし、ナタもどこぞへ行くと言うので昨日、分岐路のあるヴェル山地の麓で別れたばかりだった。ギャヴァンの方向へ向かう彼らはこのままウィレムスタトを南下して風の砂漠に入り、キサド山脈を越えることになるのだろう。
　……ゲイトは、あれ以来、かつての陽気さが嘘のように影を潜めた。口を開くことはほとんどなく、妙に凄みが増したような印象がある。別れの時にも、言葉はなかった。
　このままではさすがに礼に欠いていると思うので、ヘイリーのところへ行った後、レオノーラへ戻る時にはギャヴァンのギルドにも挨拶に行きたいとは思っているんだが、シンを失ったジフの顔を見るのがつらいと言う気もする。
「レジーナまで、あとどのくらいかかるかな」
　ヴェル山地を迂回する為に南下した俺たちは、分岐路を境に再び北上している。右手に聳(そび)えるヴェル山地に目を向けたまま誰にともなく呟くと、前を歩くシサーがこちらを振り返った。
「5日はかかんねぇんじゃねぇかな」
「名馬の産地なんだっけ」
「そうよ」
「どっかで馬が手に入れば楽かなぁ」
　何気なく言うと、シサーはいささかいかめつらしい顔をした。
「ここの馬は高い」
　さすが名馬。
　この数日、ここまで来る間に相当戦い通しだったおかげで何となくだるい肩をぐるぐると回しながら、そよそよと前髪を揺らす風に目を細めた。平和な空気、だけど生憎平和な気分にはなれそうにない。
　何気に、戦の余波が、しっかりと俺たちにも及んでいる。
「しばしの平穏ってか」

キグナスも気を抜いたように、ロッドを握り締めた片手を空に伸ばしてあくびを浮かべた。

魔物の数が、異様に多い。

確かに俺はウィレムスタト地方……風の砂漠を越えてこちら側に来るのは初めてだけれど、昼間でこの遭遇率はちょっと異常だと思う。いや、夜間だとしても、多い。畳みかけるように、次から次へと魔物が湧いて出る。

シサーいわく、これは戦の余波なんだそうだ。

軍隊同士の戦闘が起こっている場所もしくは行軍している付近などは、魔物が出没しない。不思議なことに、魔物は軍隊を忌避するのだそうだ。やっぱり危険を感じるんだろーか。

つまり、軍隊がいる場所を魔物が忌避する皺寄せが、別の地域へと及ぶ。

現在この辺りで言えば、北方――フォルムスに軍隊がおり、そちらの方へは魔物が近付けない。その分ウィレムスタトの南方へと魔物が流れ込み、勢いちょうどその辺りを移動中である俺たちはバタバタと魔物の群れに遭遇する羽目になっていると言うわけだ。おかげでナザレを経ってからこっち、昼といわず夜といわず戦い続けることになり、カイルやゲイトたちと別れてからは4人に減ったわけだからその負担も増している。

2人で風の砂漠を横断しなければならないカイルやゲイトほどの負担ではないけれど。

「……ガーネットの欲しい物って言うのはあの中にあったのかな」

何が欲しかったのか知らないけど。

ぼそっとひとりごとのように呟くと、キグナスが自分の顎をロッドでぐりぐりしながら唇を尖らせた。

「どぉだろなー。ってか、何したいんだろなー」

変なの……。隠し場所さえ知らなかった財貨の中に何か特定の物があるって、どうしてわかっていたんだろう。あのおじーさん、普通の財宝とかを欲しがりそうな感じではないしな。

ラウバルの知り合いみたいだから、何か聞いたら教えて……。
……教えてはくれないだろうな。
それに、ガーネットと言えば、レガードはどうしただろう。目覚めただろうか。あるいはその手段は何かわかっただろうか。
戦争はどうなってんのかな。何しろ違う大陸にいたもんだから、どうなっているのか全くわからない。今いる近場のフォルムスの様子をちらりと聞いただけで、他の状況はさっぱりだ。
シェインはどうしたんだろう。レオノーラには戻っただろうか。
それともまだ出征中かな。
気になることはいろいろある。
現状、確かめようもないんだが。
「カズキ、来た」
「うぁー。団体様だな」
負担が大きくなった、とは言え、俺ひとりならともかくも、このメンツがいてワンダリングモンスターにびびることはさすがにもうない。
それに何より。
「先手必勝ッ。……『火炎弾』ッ」
ゴォォォッ……。
かつてとは比較にならない豪火が、俺の横をすり抜けていく。くらったゴブリンがまとめて3匹、息絶えたようだ。それを認識しながら、俺も近くのゴブリンに切りかかった。
ローレシアに戻ってからのこの数日、キグナスの成長はめざましいものがあった。
ラグフォレストにいる間は、例のアイテムを手に入れてからさほど戦う機会がなかったせいもあるだろう。ダンジョンのゴーレム、そしてグレンフォード。その前の、グレンフォードの連れらしき女性兵士との戦闘は、キグナスは参加していない。相手がひとりだったせいで、シサーのみの対戦だったと聞いている。
が、ローレシアに戻って魔物との戦闘が俄然増えた。その間にキ

グナスは例のアイテムの使いこなし方を覚え、最初は暴走してるかのようなこともあったけど、今じゃかなり加減の仕方を体得している。

これまではどちらかと言えば援護と言う立場だったキグナスは、一転して主戦力と言えるまでになった。多少の魔物なら、キグナスひとりで片づけることすら可能なくらい。ナタの言う通り使える魔法が増えたわけじゃないけれど、ひとつひとつが明らかにレベルアップしてるのが見てわかる。

結局『ゴブリンの団体様』は5匹をキグナスがなぎ倒し、シサーが4匹を、俺とニーナがそれぞれ2匹ずつ倒した。俺も前よりは多少戦力が上がって来ているとは思うんだが、キグナスに比べればそりゃあささやかなもんだ。

「途切れたか？」

「さっさと行こう。こんなことしてちゃ時間がかかってしょーがないよ」

「……『火炎弾』ッ」

言っているそばから、キグナスが後ろを振り返って攻撃魔法を放った。視線を向けるとコカトリスとウガルルムの混成部隊。

「しょおがねえなあ、もうッ」

「……ウォラト！！」

こんなことをしていて、果たしてレジーナには予定通りにたどり着くことが出来るんだろーか……。

◆◇◆

魔物が余りに多発するせいで、レジーナに到着したのはナザレを発ってから2週間近くが経過していた。通常なら10日もかからないって話なんだけど。

そこから更に船で半日かけて内海を渡り、対岸であるエルファーラの小さな集落アンクルに到着した時には、シュートを出てから一

月が経過していた。
ようやく辿りついた中立地帯――エルファーラ。
ウィレムスタト地方との間に挟むコーデラ内海沿いにあるアンクルは、とても小さな集落だった。村とさえ言いにくい。実際世帯数は数百しかないと言うから……まあ、かなり少ないだろう。
聞けばエルファーラは、街として人民が組織されているのは、首都であり教皇庁のあるヴェルヌのみだと言う。
んじゃあいろんな政治的なことはどうなってんのかと言えば、各集落や集落間にある教会や神殿がいわゆる町政レベルの運営を行うのだそうだ。大きな動きや采配などは全て教皇庁に上げられ、2人いる教皇が執り行う……完全な、中央集権制と言える。
ちなみにここで俺が初めて知ったのが、教皇と言うものの存在だった。
これまで大教皇ってのがいるってのはちらちら聞いてはいて、何か魔法がかった大規模なことはその大教皇ってのに頼むよーな何かそんな感じは何となくわかるんだけど、その下に教皇ってのが更に2人もいるとは思わなかった。いや、言われてみればじゃあ何で『大』教皇なんだって話だけど、俺の世界じゃ教皇に『大』がつくのって特に業績がどうとかこうとかって話だったような気がするし、何となく納得してしまっていた。
教皇ってのは正式には枢機卿団の中でも特に偉い……枢機卿事務長と秘書長とかって言うらしい。3人もいたら『皇』じゃないじゃんって気もするし、確かに。
けれど通俗では教皇庁のトップクラスの偉い人なんだからと言うことで、何となくそう呼ばれてしまっているようだ。で、ホンモノの教皇には区別の為に『大』がつく、と。
大教皇ってのはその名の通りまさしくトップ、宗教における権威の頂点である人物を指すわけだけど、2人の教皇は政治の執政官としてのトップにあたる。俺は勝手に『天皇陛下』と『総理大臣』と認識して片づけている。

ともかくもエルファーラはヴェルヌ以外にでかい街は存在せず、アンクルのような細々とした集落が累々と続いているのだそうだ。
「どうせだから、いくつか先の集落まで行っておくか？」
とりあえずはアンクルの集落内を歩きながら、シサーが西の方角へ視線を向ける。まだ日は高く、昼を回ったばかりと言う頃合いだ。通常ならこの時間から町を出て移動なんて始めたら間違いなく次の町になんて辿りつけないだろうけど……。
「つけるの？」
「つけるな。頑張れば今からなら……どこまで行ける？」
「ラクサスまでは行けるんじゃない？」
「かな。じゃあ、ロドリス方面で、次の次の集落くらいまではつけるってことだ。さすがに日は落ちるだろうが、とは言ってもエルファーラに魔物は出ないしな。さしたる危険はないだろう」
ああ、そっか。そう言やそんなこと、前にも聞いたっけ。
「じゃあ行っちゃおうよ。その……ラクサスまで。でも、宿とかは、あんの？」
「宿泊施設は多いわよ。ヴェルヌを訪れる人は多いからね」
聖地の巡礼みたいなもんか。いわゆる参拝者の為に宿泊設備が多いと言うわけだろう。
「ちゃんとした宿屋ってのもあるけどね。それとは別に巡礼者用の路傍と呼ばれる宿泊するだけの施設があるわけ。本当にただ寝る為だけの場所だけどね」
なるほど。さすが聖地。
「んじゃあそのラクサスまで行ってみて、そこで今夜はおしまいってとこかな？明日には抜けられるかな」
んでも、魔物がいなけりゃだいぶ進行速度は上がるだろう。
しばらくは戦闘しなくて良いとなれば、ようやく気が休まると言うものだ。ローレシアに帰還してからこっち、張りっぱなしだった気をようやく緩めることが出来る。
アンクルの集落を抜けて、再び次の集落へ移動する草地に出た時

は癖で何となく構えたくなったが、実際エルファーラの草原に魔物の姿は影も形もなかった。いっそ、感動すら感じる。集落間の距離が短いのも良い。この調子だとエルファーラを抜けること自体はさして難はなさそうで、抜けた直後に『魔の山』ファリマ・ドビトークかと思うと……もうエルファーラから出たくないと言う気にさえなる。

アンクルも、次の集落イリリーも、そしてラクサスもそうだけど、総じて雰囲気が良く似ていた。全部繋がっている同じ集落なんだと言われてしまえば納得できる。そのくらいに同じ町並み。

畑がずっと続いている。土壁の質素で小さな家が続いているけれど、道や建物の配置なんかを見ればきちんと整備されていて、貧しいと言う感じではなかった。駆け回る子供とかも身なりはしっかりしているし、痩せ細ってるとかじゃない……健康そうな感じ。

お店のようなものは、余り多くはなさそうだ。あっても、農業の傍らやってますって雰囲気で、自給自足で成り立っちゃってんのかなって感じがする。自給出来ないものとかってのはどうするのかな。ヴェルヌに行くんだろうか。パララーザみたいなものを頼っているのかもしれない。

「さーて。メシをどーっすっかな」

「食堂とかってあんのか？どっか心当たりは？」

歩く家々からは、家庭っぽいのどかな夕食の匂いが漂ってくる。キグナスが鼻をひくひくさせながら、前を進んで行くシサーに問いかけた。

「確かこっちの通りをこっちの方に進んでいくと、でかい大衆食堂みたいなのがあったはずで……」

「へー」

「屋外にテーブルがいっぱい設置されててね。メニューなんかはそんなになかったと思うけど、その代わり安いわよ」

屋台村みたいなもんだろーか。

いや、メニューがそんなにないってことは、どっちかと言うと、

祭りで甘酒を振る舞ってるようなのと似たような光景だろうか。
「ま、いーよ、何でも」
落ち着いて温かい物が食べられるなら、それで。
あとはどこかで携帯食とか補充が出来ればいーんだけどな……。
……などと思っていた矢先だった。
その人物と遭遇したのは。
「もし……あなたは」
ぐるぐる鳴る腹を押さえて、大衆食堂とやらへ向かう俺たちとすれ違った一団がいた。どうやら神官、だろうか。雰囲気と服装から察するに。
その中のひとり、それも、中で一番偉そうな衣服を身に纏っている老人に呼び止められて、心当たりなんか当然あるわけない俺はきょとんとした。
「は？」
「……ああ、やはり。そのお顔は間違いありません」
その言葉を聞いて、嫌な予感がする。
『そのお顔』ってまさか。
（レガードの知り合い！？）

第3部第1章第1話　『失われた聖書』（2）

「ご無事であられたのですね。ご心配申しておりました」
やばい、間違いなくレガードの、知人だ。だけど俺には誰なんだかさっぱりだ！！
言葉に詰まったまま凍り付く俺に、空気を読んだシサーが割り込んだ。
「生憎、彼は事故にあってちょっと記憶が混濁している。自己紹介をいただけるとありがたい」
シサーの言葉に老人が目を見開いた。問うように俺に視線を向ける。俺も曖昧な微笑みでその言葉を肯定した。
「それは、大丈夫なのですか」
俺はね……どこをとっても五体満足の健康体だ。実際のレガードはいざ知らず。
そうは思うもののそう言うわけにはいかず、俺は口を開いた。
「大丈夫です。ありがとう」
レガードの話し方を知らないものだから、つくづく難儀だ、知らない人物を真似ると言うのも。
「そうですか……。お体に支障がないのであれば、ひとまず安心致しました」
そう言って微笑む老人に、心が痛む。申し訳ないが、俺は本人じゃない。と言ってばらすわけにはいかない。
でも……。
一度だけ見たレガードを記憶に蘇らせながら、俺はちらりと老人を見た。
俺とレガードは、確かに似ているかもしれない。それも、そっくりと言える。
だけど、別人だ。生まれ育った環境や性格なんかは全く違う。その違いは確実にルックスにも表れているはずで、まじまじ見れば違

う部分はあるはずだ。それこそ……そう、身長とか。
本当に身近な人間……それも例えば肉親だとかそれに近い人間であれば、気づかないとは思えない。一卵生双生児だって母親は見抜くんだ。多分ユリアは知らなくとも「似てる」と言ったって別人だとはすぐに見抜いただろうし、ラウバルやシェインも同様だろうと思う。もしかするとシサーやニーナも。
なら、この人はきっと、限りなくレガードに近い存在だと言うわけではないんだろう。俺をまじまじと覗き込んで、俺をレガードだと思っているのならば。
でも『心配してた』って言ってたってことは、レガードが行方不明だったことを知っているんだろうか。王城でさえ一部の人間しか知らない機密事項を知っているとすれば、タダモンじゃない。何者だ？
そう胸の内で結論づけつつ不審に思っていると、老人は俺の考えを裏付けするように口を開いた。
「私はエルファーラ教皇庁に仕えるヴォルテルラ公爵家ハーヴェルと申します。娘はクリスティーナ……不肖ながらクレメンス2世皇帝陛下のお側に仕えることを許されました。ユリア様とレガード様のご婚姻が成立なされた暁には、畏れ多くもお祝いなどをお贈りさせていただく所存にございます。……お見知り置きを」
何……！？
その言葉に思わず全員が絶句した。
（娘はクリスティーナって、この人……）
ユリアの、おじーさん……ッ！？

◆　◇　◆

……落ち着かない。
与えられたやたらめったら広い部屋で、俺はひとりそわそわと部屋の中を歩き回っていた。

座っては立ち、立っては座り。
……落ち着かないッ！！
窓から覗く景色は、エルファーラに入ってからの質素極まりない風景とは少々違う様相を呈している。
教皇庁のある大都市ヴェルヌだ。
ラクサスで会った老人……ユリアの祖父君にあたるハーヴェル枢機卿はヴェルヌ、それも教皇庁近郊に邸宅を構える、長年教皇庁に勤める司祭枢機卿なのだそうだ。もちろん貴族と言える身分であり、しかも名門とさえ言える。何せ皇妃の親、皇族の姻戚だ。
（ユリアのおじーさんか……）
ハーヴェル卿は、ばったりと遭遇した孫の婚約者をもてなさないわけにはいかないと断固として譲らず、ラクサスの集落から一路、首都ヴェルヌのヴォルテルラ公爵家にまで拉致されることとなった。実際婚約者でも何でもなく、王子サマとしての立ち居振る舞いなんかこれっぽっちもわかりゃしない俺にしてみれば良い迷惑だが、そうも言っていられない。一応、最初にレオノーラにいる間に、怪しまれない程度に振る舞うことを叩き込まれているが、そんなものはもうほぼ忘れてる。
何とか、疑われることなくつつがなく過ごさなきゃと思う反面、こんな広い部屋をもらっても処置に困る。
（せめてキグナスがいればなあー）
たかだか４人の客人には、それぞれ個室を与えられてしまった。おかげで暇を持て余して仕方がない。
ヴェルヌに到着したのは既に夜で、一息ついたところで食事、湯浴みと、全力でレガードを演じながらそれらをこなした俺は、ようやく解放されてから部屋に閉じこもった。これ以上レガードを強制されてはたまらない。とは言え、部屋に籠もったところですることがあるわけでもなく、しょーがないので窓際に椅子を引きずって座り込み、うろうろと歩き回ってはまたぼーっと窓の外を眺める羽目になっている。

……ユリアのおじいさんか。
クリスティーナ皇妃のお父さんと言うことは、もうひとりの……シェリーナ妃のお父さんでもある。ハーヴェル卿は知っているんだろうか。シェリーナ妃の末路と言う奴を。
それに……そうか……。ユリアのおじいさんと言うことは、シェリーナ妃の娘……ユリアの従姉妹にとってもおじいさんにあたるわけだ。
ハーヴェル卿は、シェリーナ妃、その娘、そしてアウグスト卿の身に何が起こったのかを知らないだろうか。
そこまで考えて、思わずふうっと息をついた。窓辺に乗せた両肘に顎を乗せて、ずるずると沈み込む。
知ってたとしたって、聞けっこない。
レガードが知らないのはおかしなことじゃないだろうが、立場を考えれば根掘り葉掘り聞くのはどうかと思うよな。あまり心象は良くないんじゃないだろうか。
いずれにしても、皇帝位についてしまえば、必要があることならばレガードの耳には入ってくることだ。それもヴァルス宮廷内から聞くべきことであり、エルファーラでこそこそ嗅ぎ回るような真似が、シェリーナ妃の父にとって良い印象を与えるとは考えにくい。
とすれば、レガードの立場を思えば余計な詮索は出来ない。
気に、なるんだけどな。
『魔の山』ファリマ・ドビトークのヴァインで見つかった、王家の紋章。シェリーナ妃とその娘の消息、アウグストの追放。
何があったんだろう。
（アウグストの追放が……）
いつだっけ。１０年前くらい？
（いや、わかんないのか……）
はっきり何年前と聞いたわけじゃなかった。
……ファリマ・ドビトークが『魔の山』に姿を変え始めたのは……ここ数年って話だよな。だからその前に、ヴァルスから追放され

たシェリーナ妃とその娘はヴァインに行っているんだろうし、ユリアが幼少で良く覚えてないとかって話だから……10年くらい前とかそれ以前だろう、多分。

関係ないけど、グロダールはいつだったっけ。シェインが宮廷魔術師に就任したのが6年前って言ってたか？グロダールの時はまだ見習いって話だったからその前――10年前くらいって話だっ……。

（……？）

考えながら、そっと眉を顰める。

何か、変だな。

繋がりそのものはわからないのに、何かことが多いような。

……何か、あったのか？その頃に。

まるで、その頃既に何かが動き始めていたみたいな……。

俺がこんなとこでひとり考えていたって何もわかりはしないとわかっていながら、つい頭を巡らせていると、ふと耳にノックの音が届いた。我に返って顔を上げる。

「はい」

「俺ぇ」

キグナスか。

「うん」

頷いて椅子から立ち上がると、ドアの方へ足を向けた。扉を開ける。

「することがねぇ。夜の街でも散歩しようぜぇ」

キグナスも暇を持て余しているらしい。こちらとしても、キグナスの申し出は望むところだ。

キグナスもヴェルヌに来るのは初めてだと言うので、街に出てみることにして部屋を出る。あまり遅くまでふらふらしているわけにもいかないだろうから短い時間になるだろうが、籠もっているよりはましだろう。

そう思いながら外へ向かう間も、通り過ぎる下働きの人間がいちいち下がっては膝をついて頭を下げるので、何だか凄く落ち着かな

い。言ってしまえばむしろ迷惑。
「……どぉだ？皆様にかしづかれる気分は」
「もう勘弁して」
にやにやとからかうキグナスに天井を見上げながらため息を返していると、ふとその視界の隅に大きな絵画が映った。改めてそちらを見直す。
「どうした？」
「肖像画？」
足を止めた俺につられたように、キグナスも足を止めて視線を追った。
さすが公爵家の屋敷は大邸宅と言える規模があり、外へ続く正面玄関はそのまま吹き抜けのロビーへ続いている。続く階段はぐるりとロビーを取り囲むように見下ろす廊下へと続き、更に上に続く階段は左右に分かれたやはり吹き抜けの螺旋階段が2本。
その肖像画は、2本の螺旋階段の間を上下に抜ける壁にかけられていた。同じ大きさのキャンバスが縦に2つ、豪奢な額縁に収められている。結構上方にあるせいか、さっきは気がつかなかったな。いや……それどころじゃなかったのかもしれない、俺の精神状態。
1枚は2人の若い女性が描かれていた。ひとりが椅子にかけ、もうひとりがその後ろに寄り添うように立っている。良く似た雰囲気で、一見して姉妹とわかる。
もう1枚は家族のもののようだった。長椅子に女性が2人。ひとりは胸に幼女を抱いている。そして長椅子の両脇には老いた男女、長椅子の後ろには壮年の男性が2人。
上の、姉妹の姿と、下の長椅子に座る2人の女性の姿が重なる。時代は違えど、多分同じ人物だろう。上が若かりし娘時代で、下が大人の女性となってからと言ったところだろうか。
とすれば。
（ユリアのお母さん……？）
クリスティーナ皇妃とシェリーナ妃だろうか。

思いながら、中央の女性に抱かれた幼い少女を眺める。それは多分、間違いなく幼い頃のユリアだった。

まだ短いけれど輝く黄金色の髪、翡翠色の瞳と柔らかで上品な微笑み。絵の中でも愛らしい姿はそのままに幼くなっている。

「クリスティーナ皇妃と、ユリア様だ」

「……うん」

皇妃は、確かに綺麗な人だったようだ。面立ちはユリアと良く似ている。こうして見ると健康的なユリアに比べればだいぶ線が細い……か弱そうな感じがしないでもないけど。

「じゃあ、ユリアを抱く女性……クリスティーナ皇妃の隣に座るのはシェリーナ妃？」

「じゃねぇか？」

シェリーナ妃の娘は？まだいなかったんだろうか。

「後ろの男性は誰なのかな」

「ハーヴェル様のご子息ヴォルミン様とニコラ様です」

うわあ。

誰に聞くでもなくぼんやりと呟いていた俺は、背後から湧いて出た返答にぎょっとして、手をかけていた階段の手すりにつんのめりかけた。

「おや、驚かせてしまったご様子。失礼致しました」

俺の様子に丁寧に頭を下げたのは、はげ上がった頭に白い髭だけがふさふさと豊かなおじいさんだった。その割にはしっかりした体躯で背筋もぴんと伸びている。執事のバルドゥだ。部屋に案内してもらう時にも食事の時にも会っている。

「い、いえ……」

「お出かけでございますか」

執事、か……。

じゃあきっと、いろいろと詳しいんだろうな……。この絵のことくらいだったら、聞いてみても差し支えないだろうか。

「あの」

「はい」
とか言って、既にレガードに説明済みだったらどうしようか。まあでもハーヴェル卿そのものもわからなかったくらいだから、絵画の1枚くらいいーだろう、忘れてても。
開き直りに似た気分で、俺はバルドゥに向き直った。
「中央が……ユリア、抱いているのがクリスティーナ皇妃ですよね」
言いながら、悩む。敬語を誰にどの程度使って良いものなんだろう。そりゃあ日本語ほど複雑怪奇ではないが、敬称をどうつけたもんか迷う。特にユリア。今の俺からすれば、王女とは言え婚約者なんだから呼び捨てていーもんだろーか。
……ま、いーや。
「いかにも、おっしゃる通りでございます」
「反対側の隣は、シェリーナ妃……」
「はい」
それからバルドゥは短く沈黙をした。おもむろに目を伏せる。
「……ご不快であられるならば、お許し下さい」
「……」
は？
意味がわからずにいる俺とキグナスの前で、バルドゥは顔を伏せたまま悲しげに続けた。
「ハーヴェル様も人の親でございます。先代ひいては先々代のご不興を蒙ったのは重々承知でございますが、子を思う親の気持ちは皆同じと汲んでいただけることを、主人に代わりまして深くお願い申し上げる次第でございます」
思わずキグナスと顔を見合わせる。
これは……何か聞けるチャンスかもしれない。
「10年近く前の、その……？」
期間をとりあえずアバウトにくくってみる。レガードが何も知らないのは多分不自然だろうが、薄らぼんやりとしか知らなくたっておかしくもないだろう。何せユリア自身がどれほど覚えているか定

かではない記憶だ。他国の王子であるレガードが、小耳に挟んでいたとしても詳細を知っているはずがない。……多分。

バルドゥは、今度は深く沈黙した。やはり勝手にべらべらしゃべってくれることを期待するのは、少々ムシが良いようだ。

そりゃそうだよな……主人に不都合がありうる話なら、次期国王が詳細を知らなきゃ知らないでそれに越したことはないわけだし。積極的には話してくれそうにない。

「この絵の頃にはまだ、ユリアの従姉妹君は生まれておられなかったのですね」

少し考えて、話の角度を変えてみる。視線を絵画に戻しながら可能な限り上品な話し方を心がける俺の横顔に、バルドゥが視線を上げた。

「ええ。マーリア様はまだこの頃は、ご誕生なされておられませんでした」

追放されたユリアの従姉妹は、マーリアと言うらしい。

「いつ頃描かれたものなのですか」

「15年前になりますか」

15年前……絵の中のユリアは1歳か2歳と言うことになる。アウグストの追放に伴って、その妻であるシェリーナ妃も一緒にどこぞへ幽閉されているはずだ。であれば当然当時の王の孫娘であるユリア、そしてクレメンスの妃であったクリスティーナ妃と共にこんな肖像画を描いてもらえるはずがない。この頃はまだ、シェリーナ妃は自由の身だったと言うわけだ。

この絵からおよそ5年――何があったんだろう。その近辺で恐らく、グロダールがギャヴァンに出没している。ラウバルに付きまとっていると言う、黒衣の魔術師の誘導で。

アウグストの生死も聞いてみたいところだが、どうにも怪しまれずに尋ねる言葉を思いつけない。シェリーナの死亡は多分俺たちが確認しているが、マーリアの行方はわからない。……そしてファリマ・ドビトークは『魔の山』へと姿を変えた。

かつてヴァインの跡地で感じた気味の悪さが、再び脳裏を掠めた。
何かがわかりそうで、わからない……。
「良い絵だと、思います。大切になさるよう、ハーヴェル卿に、お伝え下さい」
欠けているパズルのピースが、まだまだ、多いみたいだ……。
「宜しかったら、下で旦那様のお相手をしていただけますか？」
『追放された王兄妃の絵画を飾っていることを受容した次期国王』に、ほっとしたようにバルドゥが促す。……良かったんだろうか。
俺には良くわからない。でも俺の感覚で言えば自分家に自分の娘の絵を飾って何が悪いって気がするし、大体彼女が追放された経緯を知らないんだから咎めようがない。

第3部第1章第1話　『失われた聖書』（3）

バルドゥに促されるままに階段を降り、食事をした部屋を更に通り過ぎて奥へと足を向ける。

……あー、嫌だな。レガードを演じたまま話し相手なんて、俺に出来るだろうか。途中で不審感をもたれるんじゃないかと思うと気が気じゃない。行方不明だったことを知ってるんだしユリアのおじーさんなんだからバレてもいーじゃんって気がしなくもないが、俺が判断して良いこととは思えない。

うだうだ考えながら歩く俺に、キグナスが小さな声で囁いた。

「……ま、頑張ってくれ」

「一緒に盛り上げてよ」

「何を盛り上げんだよ。大体俺、皇妃様のお父上でユリア様の祖父君なんて偉い人、どう相手していーかわかんねぇ」

あんたも貴族でしょ……。

「俺よりはお偉いさん、慣れてんじゃないの」

「見くびるな。慣れてねぇ」

……言葉の選定が間違ってる。

ごちゃごちゃ言っている間に部屋に到着し、覚悟を決めた俺は扉を見つめてこっそりと深呼吸をした。

せっかく何か興味深いことを知っていそうな人と知り合ったんだ。プラスに持っていかなくてどうする。

「どうぞ、お入り下さい」

開けられた扉の奥を、バルドゥが恭しく示した。

◆　◇　◆

おずおずと、通された部屋に入る。部屋の奥では、ハーヴェル卿がゆったりとソファに腰掛けて微笑んでいた。気品と威厳。

レガードとしては、威厳はともかく気品では負けている場合ではない。背筋を伸ばす。無理があるのは承知の上だ。少なくとも下品にだけはなれないだろう。

「お邪魔ではないですか」

何とか笑みを取り繕って、足を踏み入れる。キグナスがちらりと「誰だオマエ」と言うような目線を送るのを感じた。……うるさいな。

「邪魔などと。とんでもございません」

「では少し、話し相手になっていただけませんか」

言葉を選び選びなものだから、自然と口調はゆっくりしたものになる。ハーヴェル卿が鷹揚に頷いた。

「私ごとき年寄りでお相手が務まりますならば」

「何をおっしゃいますか。お……私にとって興味深いお話をいろいろご存じでしょう」

本音だ。

聞いてみたい話はある。問題はレガードじゃないとばれずに、尚且つ失礼にならずにどこまで引き出せるかだ。難易度高いな。やめとく方が無難だろうな……。

ハーヴェル卿に勧められるままに、向かいのソファにキグナスと並んで腰を下ろす。バルドゥがどこからともなく、お茶を運んできてくれた。

「ありがとう」

さあ、何を話せば良いのやら。

言葉を探して頭を巡らせた俺だが、ハーヴェル卿が一足先に口を開いた。

「お体の方は、もうよろしいですか」

「あ、はい。……お気遣い、ありがとうございます」

「ユリア様も、ひどく心配しておられたことでしょう」

……。

「ええ……」

ちくりと胸が痛む。……そう。ユリアは本当にレガードを心配していた。

レガードの無事を聞いた彼女は、どれほど喜んだだろう。もう、再会しただろうか。

考えれば胸の痛みがひどくなり、微かに息が詰まった。

ハーヴェル卿が気づかずに続ける。

「でも、ご無事であられたことを知った時は大層喜んだことでしょう」

「……そうですね」

「ユリア様は、貴殿のことをとても大切に思っておられるようです」

「……」

「大切にしてやって下さい。……差し出がましいのは承知です。冥土へ旅立つ年寄りの世迷い言と、出過ぎた発言をお許し下さい」

「はい……」

ぼんやり頷きかけて、慌てて顔を上げる。しまった、これじゃあ『死にかけ』を肯定してるみたいだ。

「あ、いえ、じゃなくてあの……」

「……」

「た、大切にしますってことを言いたくて……」

言った言葉は結構、俺の胸を抉った。

本当に俺が、大切にしてあげられれば良いのに。

……大切に、するのに。

「そうですか。安心いたしました」

慌てて言ったきり顔を伏せる俺に、ハーヴェル卿はおかしそうに笑った。俺も何とか、作った笑顔で返す。

「ハーヴェル卿はまだまだお若くていらっしゃいます。そんなことをおっしゃられては、ユリアが悲しみます。まだまだお元気でいらして下さい」

俺は、今は、レガードなんだから。

ユリアの……婚約者らしく……。

「私たちの、婚儀の際には……ぜひ、祝福をしていただきたいのですから……」

変な言い方だろうか。だけど王族の結婚式ってどんなもんなんだかわからないし、この人が招待されたりとか列席するだのしないだのってのが良くわからないから、つい何か妙な言い回しになった。

何より、自分自身が道化に思えて仕方がない。

想う女性を手に入れることが確約されている男に成り代わって吐くセリフの虚しさと来たら、類がないくらいだ。

「ありがとうございます。とても楽しみにしておりますよ。……エルアード殿は、シェイン卿の後を継がれていずれは宮廷魔術師におなりですか」

「ま、ま、ま、まさか」

「さすればレガード様もユリア様も、さぞお心強いことでしょうに」

あたふたと否定するキグナスに、ハーヴェル卿はくすくすとおかしそうに笑った。シェインにも会ったこととかあるんだろうか。キグナスがシェインの甥に当たると言うことは、先ほど食事の間に話題に出ている。

「ユリア様はレガード様と同様、シェイン卿のことも慕っておられるご様子。エルアード殿は年も近くておられるし、シェイン卿の甥子がおそばにおられれば、レガード様がユリア様とご結婚なされて後、シェイン卿がいつか引退することとなってもヴァルスの国政は安泰でしょう」

もごもごと顔を赤らめて俯くキグナスに優しい目線を向けてから、ハーヴェル卿はおもむろにこちらに視線を向けた。柔らかい眼差しはそのままに、俺の顔を見つめる。

シェリーナ妃のことを聞いてみたい気持ちはあるが、とても聞きにくく言葉に迷う俺に、不意にハーヴェル卿が小さく呟いた。

「『7番目の使い』……」

……は？

「『7番目の使い』？」

唐突に言われた言葉の意味がわからず、そのまま問い返す。何？何のことだ？1から6番目まではどこ行っちゃったんだろうなどと、つまらないことがつい気になる。

「いえ。あなたのお父上……ロンバルト公フェルナンド様が良くおっしゃっておられたものですから」

レガードの父親が？

「お聞きになったことはございませんか」

俺は黙って顔を横に振った。実際のレガードはどうだか知らないが、俺自身は全く初めて聞く言葉だ。知らないものを知っているとは言えない。俺の返答にハーヴェル卿が笑う。自分から話のそれたキグナスが、俺の隣でふうっと安堵の息を吐いた。

「そうですか」

「何です？それは」

「いえ、ただの例えですよ。あなたの髪の色が、知っている者にはそれを連想させる。……それだけのことです」

「……？」

答えが曖昧だ。わからないでいる俺に、ハーヴェル卿は笑いを収めて説明するようにゆっくりと口を開いた。

「聖書には、失われた一章があります。それはご存じですか」

「いえ……失われた？」

「ええ。かつて空間移動魔法の大弾圧が行われた時、聖書に一部改正が加えられました。空間移動魔法の解析に繋がると言うので、そこを含む章がまるまる、削除されたのです」

「じゃあロン……父が言っていた『7番目の使い』と言うのは、その中に……」

見も知らぬ人を父と呼ぶことに違和感を覚えながら尋ねた俺は、その瞬間ガーネットがかつて口にした聖書のような文言を思い出した。もしかしてあれも……。

「――『与えられた力は今、己の意志を持って暴走し始める』」

突然呟いた俺に、ハーヴェル卿が黙って目を見開く。構わずに俺

は、ガーネットの言葉を記憶から掘り起こしていた。
「『それは時に猛り、時に操り、人々の命を喰らい尽くした』」
ええと……何だっけ。さすがに一度会話の流れで耳にしただけの文章を丸暗記してはいない。竪琴がどーとかこーとか……眉を寄せて記憶を辿る俺に解を与えたのは、ハーヴェル卿だった。
「『楽園から男がやって来た。彼は神の祝福を受けていた』」
「……ご存じなのですか」
「失われた聖書の一部ですね。レガード様こそ、なぜ」
やっぱり……。
宗教がかった文章だとは、思ったんだよな。じゃあガーネットがレガードに何か頼みたいってのは、その辺に何か理由があるのか？
「いえ……ある人に言われたものですから。少し、気になりまして」
「それは『7番目の使い』についての記述ですね。……最初からお話しましょうか」
そう前置きをして、ハーヴェル卿は深く掛けていたソファから体を起こした。両手を膝の上で組んで、体をやや乗り出す。
「帝国歴８１３年のことです。年々増加していた空間移動を悪用する魔術師――リッチと呼びますが、彼らはデル・カダルと呼ばれる組織を結成し、組織的に悪行を行うようになりました。デル・カダルは各地に増加し、ローレシア全土に渡る大弾圧が行われたのです」
ローレシア全土……そんな大規模なものだったのか。
「行われた粛正は、ひどいものだったと聞きます。事実悪行をしていた者もしていなかった者も、空間移動の魔法はおろか魔力があるとされる者は被害に遭いました。いえ……そう囁かれただけでも」
まさしく『魔女狩り』だ。
「魔術師はそこで相当数、減少しました。今、魔術師のそもそもの数が少ないのはその為だと聞きますが、一概に遺伝で生まれるものとも言い切れない為定かではありません」
「あの……その時、聖職者は対象にはならなかったんですか」
実数は知らないが、今俺の知る範囲では言霊魔法を使う人と神聖

魔法を使う人と、ごろごろいるわけじゃないと言うのに変わりはないような気がする。今の魔術師の誕生率が弾圧のせいだと言うなら、聖職者も弾圧にさらされて絶対数が減ったんじゃなきゃおかしくないか？

しかし、ハーヴェル卿は緩やかに否定した。

「エルファーラは、弾圧には参加していません。神聖魔法を使う人間が魔術師と同様、溢れ返っていないのは、自分のものとする為には神の元に修行を積まなければならない為です。しかし潜在的には多くの人が素質を持つはずです。特に、外部では聖職者さえ被害に遭っているでしょうが、多くが逃げ込み、難を逃れたこのエルファーラでは」

あ……なるほど。エルファーラの人たちには自然と神聖魔法らしきものを使える人がわりといるとか何とかって……そういう歴史上のこともあったのか。聖職者として神聖魔法を自分のものにした多くの人が、弾圧から逃れる為にエルファーラに逃げ込んだのであれば、確率は同じにしたって分母がでかけりゃ分子もでかくなる。

「じゃあ、エルファーラは、弾圧の旋風に巻き込まれることはなかった……？」

すっかりレガードを装うことなんて忘れて、素で尋ねる。ハーヴェル卿は悲しげに否定をした。

「いえ。累が及んだのが、聖書の改竄（かいざん）です」

ああ……そうか。

「聖書に描かれているのは、ファーラの言葉のみではありません。神にまつわる事実、あったとされる出来事、伝承……そう言ったものが織り交ぜて編纂されています。その中に含まれる、空間移動の根幹だとされる部分が、当時の為政者は気に入らなかったのですね。その部分だけ抜き去るのは前後の意味が繋がらなくなるから、章が丸ごと抹消された」

「どんな記述だったんですか。その、空間移動に関して」

黙りこくっていたキグナスが、ぽつんと尋ねた。魔術師らしく、

空間魔法が気になるんだろう。尋ねたキグナスに顔を向けて、ハーヴェル卿は苦笑混じりに応じた。

「大した記述ではなかったようですよ、今となってはね。けれど国ぐるみの規模の弾圧となれば人は判断力を失います。過敏になっていたのでしょう」

「じゃあ直接、会得するような手段が描かれていたわけではなく……」

「ええ。違います。……抹消された章に記載されていたのは、ファーラから使わされたとされる使徒の話です。人々を救う為に使わされた使徒たちはそれぞれ不思議な力や道具をもってして人々に救いの手を差し伸べたとのことですが、その中で『4番目の使い』が空間移動の魔法を使い、人々に与えたとされる場面があるそうです。そこについては完全に抹消されている為に、教皇庁さえ今はわかりません」

教皇庁さえわからないとは。何て暴力的な。

「ただし、他の記述についてはいくつか残されている、あるいは見つかっているものがあります。……『3番目の使い』、『6番目の使い』、そして……」

そこでハーヴェル卿は、言葉を途切れさせた。俺を見る。

「『7番目の使い』です」

「……」

「『6番目の使い』については全編が見つかっていますが、『3番目の使い』と『7番目の使い』に関しては部分部分しか見つかっていません。その為不明な点はあるのですが、それでも全く見つかっていないものに比べればエピソードは多少なりともわかっています。……あなたのその髪は、とても珍しい」

ハーヴェル卿の目線が、俺の前髪に向けられる。特徴的な、赤い一房の前髪。

「『7番目の使い』は、天から舞い降りたわけではありません。人です。聖書の中に登場する、ファーラが作った国グリースの第2王

子です。あなたと同じ特徴を持つ彼は、ある日突如ファーラからの使命を帯びる。その使命が何なのかは、見つかっていない為に明らかになっていません」

「ファーラからの使命……」

「ええ。前後の記述から察するに、人々を救ったのは確かです。それが、先ほどレガード様がおっしゃられた場面なのだと思います」

「そこで具体的に何をしたかは……」

「わかりません」

ふう……ん。

じゃあ、ガーネットがレガードに何か頼みたいとか言うのは、その『7番目の使い』になぞらえてのことだろうか。でも、何をさせたいんだ？人々を救うって言ったって……その内容がわかっているわけじゃ……。

（――わかってたら？）

ガーネットのことを思い出しながら、頭を巡らせる。どのようにしてだか、ガーネットが失われたままの『7番目の使い』に関する記述を知っていて、そのエピソードにレガードを重ねて何かを託したいのだとしたら。

……内容が、知りたい。別に、俺に直接関係があるわけではないだろうが。

でもそう言い切れるだろうか。ガーネットは、俺たちが追っている黒衣の魔術師のことを知っている。レガードをバルザックから隠したいがゆえにガーネットはレガードを保護し、そして行方不明だった。だったら、無関係とは言えないかも知れない。

（ラウバル……）

何か、知らないだろうか。

ラウバルがいつから生きてるんだか知らないが、弾圧が行われる前からラウバルがいたんだとすれば、改竄が行われる前の聖書の記述を知っていることはありえないことじゃない。知っていたとしたら、教えてくれるだろうか。教えてくれるだろう。これは別に、隠

すような内容じゃないはずだ。
（『7番目の使い』……）
事実レガードが『7番目の使い』になりうるかどうかはわからないが、少なくともガーネットにそうであることを期待されていることに間違いはないだろう。動機がちょっと弱いようにも思えるが、俺の知らない理由がガーネットにはまだあるのかもしれない。
考え込む俺に、ハーヴェル卿が気分を変えるように口を開いた。
「私も、そしてあなたのお父上のロンバルト公も、その髪はあなたがファーラに愛された証なのだと思っています。お気になさることはない。ファーラのお導きが、あることでしょう。あなたは、あなたのようにヴァルスを治めてゆけば良いのですよ」
「はい……ありがとう」

第3部第1章第2話　魔術師の行方（1）

「すーげーぇ」

見上げる空は雲ひとつないコバルトブルー。それを背景に天へ向かってそびえ立つ尖塔は白く、目映いばかりの荘厳さがあった。

ヴェルヌのシンボルとも言える建造物――教皇庁。

ハーヴェル卿に送り出されて翌日、俺たちはヴェルヌの街へ出ていた。

のんびりしているわけにはいかない、早くヘイリーに腕輪を届けなきゃならない。

わかってはいる。だけどせっかく教皇庁なんてインパクトのある名所があるんだから、見ときたい。

そうごねる俺とキグナスに無理矢理つき合わされているシサーが、髪をくしゃくしゃしながら眩しそうに目を細めた。

「どうせだから、中も行ってみるか？」

「行く行くー」

何だかんだ言ってシサーもつき合いが良い。その提案に、キグナスが元気良く返事を返す。

「中とか入れるんだ」

「一般公開してるトコだけな。……あ、おい、キグナス。はぐれんなよッ」

「おーうッ」

答えながら、キグナスの小柄な背中が人混みに埋もれていった。

さすがエルファーラ一の大都市は、人が多い。いちいち歴史のありそうな建物が立ち並ぶ通りには、巡礼の聖職者や敬虔な一般人って感じの人たちで溢れ返っている。他の集落とは違って店なんかも多く、賑わっている感じだ。

ヴォルテルラ公爵家からは、教皇庁まで遠くない。続く道を歩きながら見上げる建物は、さすが立派。

（カメラ欲しいなー）

そんな、久しく忘れていた真っ当な感覚に浸りつつ人混みを縫う。

教皇庁の本体は、ベージュっぽい大きな石を組み上げたどっしりした感じの造りになっている。幾つかある尖塔が白く塗られた煉瓦造りで……いや、そもそもそういう石なんだろうか。わからないがやけに綺麗。

一般公開されていると言う方の建物は両開きの大きな扉が開け放され、出入り口のところではシスターらしき人が2人出迎えていた。ぞろぞろと並ぶ巡礼者や、多分俺たちみたいな単なる見物の人の列に混じってみる。少し前の方で、キグナスの白金の髪がふわふわと揺れるのが見えた。あー、あんなとこまで行っちゃってるよ……。

何だかこういう『観光してます』的な雰囲気ってのは久しく感じることがなく……そりゃあ魔物と戦ったり国に追われたりダンジョンを彷徨ったりしていれば、どんな場所に行ったところで「へえ～」などとのどかに見て回れるわけもない。やっぱ、この国に魔物が出ないってことと、あまりに教皇庁が荘厳な感じがするせいだろう。いや、周囲につられているのもあるかもしれないな。

「中には何があるの」

「礼拝堂だよ。礼拝堂に続く通路には、宗教画やそれにまつわる道具なんかの展示もしてあんな」

「大してあるわけじゃないけどね」

ふうーん。美術館みたいなもん？

いや、違うか。日本でもリアルに運営してるお寺とか行って、展示品とかあるもんな。そーいう感じか？またも京都の寺とか思い出しながら、人の列に従ってゆっくりと中に入っていく。

別にアトラクション待ちとかってわけじゃないから人の流れは早く、わりとすんなり大聖堂の建物に足を踏み入れる。煌々と射していた陽を石の建造物が遮って、不意に少し暗くなった。とは言っても、結構明るいは明るい。出入り口からすぐは小さなロビーのようになっていて、見上げた天井は数十メートル、かなり高い。その天

井がドーム状になっていて、くり貫かれた模様から光が注いできている。

ロビーはすぐに途切れ、扉の正面から続く真っ直ぐな通路は天井ががくんと低くなっていた。って言ったって２０数メートルはありそうだし横幅も広い。５メートルやそこら、あるだろう。

中に入った人々は、進行方向が二手に分かれているみたいだ。通路を歩いていく人たちと、少し先の右手に折れる人。階段もあるけれど、そっちに足を向ける人はとりあえずはいない。

「あっちに行く人たちは何？」

「今から礼拝でも始まんだろう。あっちは礼拝堂だ」

あ、なるほど。じゃあ本物の巡礼者って奴か。中は見るだけ見たいけど、ありがたいお話とかは聞きたくない、別に。

そんな不信心なことを考えながら通路の先に視線を向けると、真っ直ぐ続く通路は左右の壁に絵がずーっとかけられているみたいだった。それを見てみようと足を向けると、礼拝堂の入り口からひょこんとキグナスが顔を出した。

「何だ、中、行ってきたのか」

「うん。凄ぇ。やっぱりエルファーラの聖堂は格が違うなあ」

俺の視線に気づいたキグナスは、感動したような顔で言いながらこっちに向かって歩いてきた。

そう言えばダンジョンで、キグナスが意外とちゃんとファーラ教の知識を持ってるとかって言ってたっけ。だとすれば、いわば本物を目にして俺にはわからない感動があるのかもしれな……。

「でけぇー。すーげぇ、広ぇー」

……そこ？感動のポイント。

俺にも出来そうな感動のレベルだ。

「こっちはずっと絵か？」

「そうみたい。……あ、奥の方のあれは何か物が展示されてんね」

突き当たりの角には、彫像らしきものも見える。あれは展示してるわけじゃないか。察するにファーラ像だろう、多分。ある意味見

飽きている。どこまでも不信心。
　とりあえず順番に見ていくことにして、俺は左側の壁に掛けられている絵に顔を向けた。１００×７０くらいの大きさで、説明書きなどは一切ない。尤もあったところで、俺の知る限られた単語でどの程度わかるかはかなり怪しい。
「……何だか、嫌な絵だね」
　ぽつっと呟く。前にもここに来ているだろうシサーとニーナはどこかに行ってしまったらしく、キグナスだけが俺の言葉に答えた。
「ああ……」
　描かれているのは、噴火口だろうか。そして、そこから舞い上がる……黒い、竜。
　眉根を寄せて次の絵に進むと、黒竜はどこかの街の上空に現れていた。
「……」
「……」
　沈黙して次々と絵を見ていく。これって……。
「ドラゴン退治を描いてる……」
　描かれている場面は１枚ごとに変わり、街を襲ったドラゴンから人々が逃げまどう様子、決起する姿、戦う場面などだ。黒竜が終わるとそれは今度は水竜、風竜、地竜……。
「……キグナス」
　その絵の中に、気になるものがあった。一箇所の絵の前で足を止めて目を定めたまま、隣のキグナスに呼びかける。
「人々がドラゴンに戦いを挑む前にさ……」
「うん」
「必ずあるこういう絵って……何だと思う……？」
　ドラゴンとの戦い方は、それぞれだ。軍隊が押し寄せているものもあれば、冒険者らしきごく僅かなパーティが立ち向かっているものもある。けれど、そういった戦いの絵の前に必ず、戦いに赴く人が……何か、人じゃないものと対面している場面が挟まれていた。

対面する相手も、戦い方と同じで様々なんだけど……。
黒竜の前には、カバ……いや、カバじゃないか。何か良くわからない、他の動物とごちゃまぜになった巨大なカバみたいな生き物。
水竜の前には、白いふさふさとした犬っぽい……いや、狼。それも、かなり巨大な。
風竜の前には人っぽい形をした、だけど、そう……寺とかの入り口にある風神とか雷神とかああいうごっつい顔をした赤い巨人。
そして地竜の前にはイカ？これまたでかい。しかもイカにしちゃあちと足が多くないか？
変だよな。ドラゴンと戦うはずなのに、必ず間に何か違うものと会っている。それも、戦闘してるとかって雰囲気じゃない。
そしてドラゴンを倒した暁には、必ずファーラ神らしき女神と、その、戦う前に人々が対面していた何かがファーラの前に跪いている。それが、ひとつのドラゴンについての一連の絵の締めになっているみたいだ。例外なく。
「意味は、あんだろけどな」
キグナスがぼそっと言うのと同時に、先ほどの礼拝堂の扉が閉められた。礼拝が始まるらしい。気がついてみれば通路はいやに静かで、人の姿はかなり減っていた。みんな礼拝堂の中に入ってしまったんだろう。後には礼拝に参加しない何人かが、俺らと同じように通路の絵を眺めている。
「聖書の中にはないの？」
「ない。……少なくとも、俺は知らねぇ」
聖書の中にない場面が描かれている……？
「『失われた聖書』に含まれる部分なのかな」
「どうだろな。ハーヴェル卿は『使い』について書かれた部分が削除されたっておっしゃってたけど、もしかするとそれだけでもないのかもしんねぇし」
「……」
「だって、ねぇんだからわかんねぇじゃん」

歩を進めて次の絵……氷の大地に浮かび上がるドラゴン――氷竜シリーズの絵を眺めていた俺は、やはりこれまでと同じようにドラゴンと人々が戦う場面の前の絵……何か、空気をイメージしているような……いや、風かな？風をイメージしたものに目鼻がついたみたいなものを人々が対面している絵を通り過ぎ、次の絵に目を向けて凍りついた。

「氷竜かー」

「……」

「絵を見てるだけで寒ぃなぁ……」

俺の様子に気づいた様子もなく、キグナスはぼそっと言いながら足を進めた。それに答えずに、俺は凍りついたまま半ば無意識に自分の耳に手をあてる。

指に触れる、重み。シェインのくれたピアス。

（……どういうことだ？）

氷雪吹きすさぶ氷竜との戦闘シーン。剣を片手に躍り上がる男の、その耳に光るのは、赤い石と金色のプレートのピアス。

良く見なけりゃわかる大きさじゃない。だけど、『火系攻撃』から俺を守ってくれているのが多分このピアスだと気づいてから、ずっと気になっている。多分そのせいで、気がついたんだろう。キグナスは全く気がつかずにいるくらいなんだから。

そりゃあ、大して凄い特徴的なデザイン、とは言えない。別にどこにでもありそうと言えばありそうで、深く気にしなきゃ気になることでもないのかもしれないけど。

……でも、やっぱり。

（気持ち悪いな、何か）

たまたま、と言うことはあるだろう。繰り返すが大したデザインじゃない。金属のプレートには何か文字のようなものが刻まれていたような気がするが、俺自身はこのピアスを大してしみじみ見た覚えはないし、絵の中のピアスは小さすぎてそんなところまで見えない。いや、むしろ描かれていない。

だから、何てことはないはずだ。
ないはず、なんだけど。
……すっげー嫌だ。
何かすっげー……嫌だ。
何が嫌って、俺のつけているものとそっくりのピアスをしている奴が『ドラゴンと戦っている』のが、もの凄く嫌だ。そういう不吉なことは是非ともやめていただきたい。俺はドラゴンなんかとは絶対に戦わないぞ。こっちの世界に来た時にもうそう決めてるんだからな……死んじゃうじゃないか。
あ、でもそう……大体、みんな今休眠期だよな。黒竜――火竜はもういないし、あとはみんな寝ちゃってるはずで……。
「氷竜は活動期が近いらしいなあ」
……キグナス。
「そうなの？」
「んー？いや、俺は良く知らねえけどー。ほら、いつだか……ロナードか。ヴァルスとモナのギャヴァン戦が決着ついたとかって号外、出てたろ？」
「ああ……うん」
俺がキグナスにパシらされたあれか。
通路を歩き出しながら、頷く。キグナスもそれに倣いながら、続けた。
「あん中にさ、ツェンカーの代表がどうとかこうとかってあったの、覚えてるか？」
「う、うーん」
うろ覚え。
「あったんだよ。そん中にちらっとそんなようなことが書いてあったみてぇだ。代表者選を決定したのは、氷竜トラファルガーの目覚めが近いことが大きな原因だろうって」
「ふうん？」
ドラゴンと代表者選がどうしたら関係あるんだか、良くわからな

い。でもまあいいや、そんなことはどうでも。誰が代表だとか落ちたとか俺に関係があるわけじゃないし、わかるわけもないし。
そんなことより大事なのは、氷竜の目覚めが近いらしいってとこだ。嫌だな、寄りによって絵とマッチしてる。黙って寝とけよ。
まあでもこのピアスが何か関係あるとか決まったわけじゃないし、大体俺、氷竜なんかと縁はないし。
「……フレザイルだよね」
「は？」
「トラファルガー」
「ああ。そう」
「ドラゴンは自分の棲み処を大きく離れては活動しないんだよね」
「らしいな」
なら、平気だ。
俺はフレザイルなんかに行くわけじゃない。行くわけがない。断固として用事なんかない。行かない。ああ良かった。
「カズキー。上の資料室にも行ってみようぜー」
「んー」
答えながら俺はもう一度、氷竜と戦う場面にちらりと目を向けた。
（氷竜トラファルガー……）
「カーズキー」
「今行くー」
何となく、その絵を目に焼き付けて、俺は階段に足をかけているキグナスの方へ、足を向けた。

◆◇◆

ハーヴェル卿が馬を貸してくれて、エルファーラからファリマ・ドビトークまでが１０日。そばの小さな集落に馬を預けて『魔の山』に分け入ること3日……。
「しつっこいわねえーッ」

前を駆けるニーナの吐き出す声が流れてくる。時折伸びている木の枝から腕で顔を庇いながら駆ける俺も、ちらりと振り返って小さく吐息。

「やっつけちゃった方が早いんじゃない」

「同感だ、お前ら先行っとけ。すぐ追いつく」

舌打ちしながら、シサーが剣を構えて戻っていった。その言葉を信じて、構わず走る。相変わらずあんまり具合の宜しくないキグナスが不意に、魔法を前に向けて発動させた。

第3部第1章第2話　魔術師の行方（2）

ファリマ・ドビトークは、元々魔物が多い。戦の余波で他の地さえ魔物が増えたりしているんであれば、尚更だ。

ロドリスの方から山に入るよりは若干ヘイリーの小屋まで行きやすいとは言え、こうも戦い詰めだと辟易してくる。

「ギャアアアッ！！」

シサーが駆け戻っていった後方から、断末魔の悲鳴が聞こえた。

俺たちを追ってきていた魔物をシサーが片づけたんだろう。こっちはこっちでそれどころじゃない。

「……ボエブス！！」

先ほどキグナスが放った『風の刃』をくらって木の間から転げ落ちて来たプテラノドンみたいな魔物に、ニーナが『光の矢』を放つ。その間に脇の茂みから躍り出たウォーウルフに、俺は握ったままだった剣を一閃させた。

「ギャインッ」

「ギェェェッ」

複数の戦闘が交錯してかしましい。

プテラノドンをキグナスとニーナに任せてウォーウルフの喉を俺の剣が貫いていると、背後からどさっと言う音が聞こえた。振り返ると草木を縫ってシサーが現れるところで、その足下にはノールと言うゴブリン系の魔物が血を噴いて倒れていた。

「背後ががらあきだ」

「そんなあっちもこっちも構ってらんないよ」

ぼやく俺の声に被せて、枝ががさがさがさっと大きく揺れる音と小さな地鳴り。プテラノドンが片づいたようだ。

「まったくこんなトコ棲んでんなんてホント変わってんなぁ」

「道、間違えてないよね」

「間違えちゃねーだろ……っと、あとちょっとだ」

見上げる先にはほんの少しだけ、前に来たヘイリーの小屋が見え隠れしている。……良かった。これで迷ったりしてたらたまんないよ。

「ドワーフは魔物に襲われないわけ？」

歩き出しながら尋ねる傍ら、シサーが剣を払う。ドラゴンフライと言うトンボみたいな魔物が、それをくらって絶命した。

「んなこたねぇだろ。それならエルフだって襲われちゃおかしい」

「ドワーフと一緒にしないで」

「妖精族って点じゃ一緒だろが……」

「じゃあ良くこんなとこでのうのうと暮らしてられるなあ」

「人と違ってとろくねぇからな」

「……ドワーフってとろいんじゃないの」

「運動能力じゃなくて感覚の話だよ」

ごちゃごちゃ言いながら、道を上がっていく。時折魔法や剣が閃くながらも何とか小屋の前にまでたどり着いた時には、日が落ちかけていた。

「泊めて……は、くれねぇだろうなあ」

前回はしっかり追い出された。

呻くシサーの目の前で、不意に扉の方が勝手に開いた。家の中の光源を背に、陰を落としたビヤ樽が佇んでいる。

「約束を果たしに来たか」

「さーすが、ノック前にバレるとは」

「あれだけ山を騒がせておいて何を言っている」

相変わらずの、愛想のない物言いだ。

ヘイリーは目の前のシサーを見上げると、鼻息をひとつ鳴らして背中を向けた。

「入るなら入れ。中に魔物を入れるなよ」

「魔物とご相席はこっちだってごめんだ」

シサーがヘイリーに言い返すのを聞きながら家の中に足を踏み入れた俺は、半ば無意識に部屋の奥に目を向けた。

部屋の奥にかかるタペストリー。
（……）
その絵は、必然的にシンの記憶を蘇らせる。特に、キサド山脈の時の記憶を。
「財貨は見つかったか」
一応は歓迎してくれるつもりがあるらしい。ヘイリーは、テーブルの上にどんと酒瓶を置いた。……酒かよ。どこから手に入れてくるんだ、大体。
「ああ。……見つかった他の財宝については約束通り協力者に全部あげちまったが、構わないな？」
「構わん」
「これで、間違いないか」
ひとり椅子にかけたヘイリーの正面から、立ったままでシサーは腕輪を取り出した。『人魚の神殿』で手に入れた、対の腕輪。
ヘイリーはかけた椅子から身を乗り出して、シサーの差し出した腕輪を受け取った。無言で、それにしばらくの間視線を落とす。それを見るシサーも、何も言わなかった。急かすようなことはせず、ただ黙ってヘイリーの反応を待つ。
やがてヘイリーが嘆息するように、目を伏せた。
「……間違いない」
「あんたの探し物だな？」
「わしのだ」
知らず、小さな安堵の息が漏れた。これで違ったら目も当てられないもんなあ。探し直してる余裕なんかあるわけがない。
「俺たちは約束を果たしたぜ。……話してもらおう。黒衣の魔術師の、行方を」
真っ直ぐに問うシサーに、ヘイリーが視線を俯ける。手の中の腕輪しみじみと見つめながら、頷いた。
「良いだろう。わしの知る限りのことなら話してやる。……ともかく、座れ。そうも立ち並んでいては落ち着かぬ」

ヘイリーの言葉に従って、前回同様シサーとニーナがテーブルについた。椅子が足りないのも相変わらずだ。俺とキグナスはまたも、壁際ですとんと床に座り込んだ。ヘイリーが酒をグラスに注いで、シサーとニーナに押し出す。

「後ろのは、必要か」

俺とキグナスが無言で首を横に振ると、ヘイリーは「つき合いが悪い」と小さくぼやいた。……キグナスはともかく、俺はそんなに飲めない。大体未成年。今更と言えば今更だけど。

「今話したからと言って、今すぐ発つわけではなかろう。酒でも飲みながら、ゆっくり話してやろう」

「ほう？一夜の宿でも貸してくれんのか？」

「無論だ。恩ある者たちには礼をせねばならん。もてなしは出来ぬが場所の提供は出来よう」

へえー。

こりゃまた随分と態度が緩和したものだ。よほど腕輪が返ってきたのが嬉しいんだろうか。

「何から話したものか」

「……朝まではまだ時間があるな。せっかくだから順を追って話してもらおうか。あんたがあの魔術師と知り合ったわけから、奴の行き先――どうしてそれがあんたにわかるのかを」

腰を落ち着けることに決めたらしいシサーが、提案する。愛おしむように手の中の腕輪を撫でていたヘイリーは、やがて顔を上げると酒瓶に手を伸ばした。

「出会った経緯は大したことではない。奴にとってこの地が都合が良かった。わしはここに棲んでいた。それだけだ」

「偶然か」

「それ以上でも以下でもないな」

「あんたは何でこんなとこに棲んでんだ？」

指先で自分のグラスを弾き、シサーが問う。ヘイリーは静かに顔を横に振った。

「聞いても詮のない話だ。わしは人とこれ以上かかわり合いたくなかった。『魔の山』ほどに適した場所はあるまい」
「そいつぁ悪かったな。関わっちまって」
軽く苦笑するシサーに、ヘイリーは真顔で否定した。
「避けたとて、関わるものは関わる。神に定められたことは避けられまい。こうして関わってしまったのは神の導きだ。わしが黒衣の魔術師を知っているのも、おぬしらがここへ迷い込み、わしの腕輪を見つけだしてくるのも」
何か神がかったこと言うなーと思って、思い出した。ナタが言ってたっけ。ダイナのドワーフは信仰が深いって。
「じゃあ、黒衣の魔術師にとっては何が都合いーんだ？この……魔の地が」
シサーの言葉にヘイリーはちらりと目線をあげた。そのまま短く答えた。
「召喚じゃな」
「……召喚」
魔法陣が組まれていたことを思い出す。そう、あいつは確かに何かの召喚を試みていた。失敗、したんだろうけど。
「この地には魔物の通り道があると言われている。悪しきものを呼び寄せるには磁場が良いと言うことだ。実際、バルザックがちょっと餌を撒いただけで、あっと言う間にこの山に集う魔物は増殖した」
「餌？」
「瘴気と言うな」
ああ……つまりバルザックがここでの磁場をより高めるために、瘴気を上げるような呪術だか召喚だか何だかを施したわけだ。したらそれをきっかけに勝手に魔物が集まり、瘴気が高まり、それでまた魔物が集まり、瘴気が高まって……自動的に本物の魔の山へと進化していった。
「だが、奴が召喚したい魔物を呼び寄せるにはまだ足りない」
「……」

「奴の力不足なのか、磁場がまだ完全に整っていないのか、あるいは」
「……封じられているか、ね」
ニーナが低く後を引き取る。ヘイリーが頷いた。
「いずれかは、わしにはわからん。だが奴はここの磁場を寄り強力に整える為に、呼び寄せたい魔物に最も適した取り込む瘴気を求めて移動した」
それが、バルザックの居場所……。
「どこだ」
シサーの問いに、ヘイリーが正面から見返す。短い沈黙を守り、やがて、答えた。
「黒衣の魔術師の行き先は、黒竜の島――ヘルザードだ」

◆◇◆

――あの魔術師のロッドについている黒石が何かは、知っているか？

（ヘルザードか……）
宿を借りたヘイリーの小屋は寝静まっている。小さな小屋だから本当に場所を借りただけって感じで……ヘイリーが奥のタペストリーのある部屋に引っ込むと、俺たちは出入り口からすぐの、さっきまで話をしていたその場所でそれぞれ寝袋にくるまった。
――わしと奴が最初に会ったのは……そうさな、１０年ほどか。わしはその頃既にここに住んでいた。
――……ヴァイン？ああ、あったな。人間たちの暮らす陰気な集落がな。だがあの村の人間もわし同様、他者との関わりを避けて暮らしていた。わしの存在には気づいてもおらんかったろう。
ヘイリーの話に寄れば、１０年前にはまだヴァインは集落として存在していた。けれどバルザックがあの魔法陣の場所で召喚にあたっての儀式を行うようになって魔物が集まるようになり、ヴァイン

が全滅するまでに要した期間は3年……ヴァインの全滅は、7年前だ。

――奴は、召喚師だな？召喚師は契約を取り付けた相手の強さや数で己の強さを計る。そして悪しき者が力を欲するのは世の常だ。奴は恐らく強力な召喚獣を欲していた。そして目をつけたのが……。

（黒竜グロダール……）

魔物の中で上級に位置するドラゴン、その中で更に覇種と呼ばれるエレメンタル・ドラゴンの内、最も強力で凶暴とされる、火竜。

――黒竜の支配を望んだ奴はヘルザードへ行った。どのようにしてかは知らぬが、奴は黒竜を導いて人の街を襲わせた。……ヴァルスの港街ギャヴァンだ。それに何の意味があったかも、わしは知らぬ。

その理由ならこちらが多分知っている。……ラウバルだ。

――そしてグロダールは人間の前に力つきた。それが奴の狙い通りだったのか、予定外だったのかもわしにはわからん。黒竜を支配するのに黒竜がいなくなってしまっては話にならんからな。だが奴がここで召喚の儀式を行うようになったのは、それ以降のことだ。……奴は黒竜を幻惑させて手に入れた竜珠を手にしていた。それが、奴のロッドに装備されている黒石だ。

バルザックの持っていたロッドについている禍々しい黒石を思い出す。人の頭くらいありそうな大きな石だ。ドラゴンの持ち物にしちゃちっちゃいような気もするんだけど……そんなもんなのかなあ。そりゃまあその石を使って何するわけじゃないんだろうから、いーんだけど。別に。

――奴いわく、黒竜の竜珠はこの先の召喚に必要なのだと言っていた。正確に伝えよう。『黒竜は黒竜でなくなり、真の覇者とならん。最強種の魔物として蘇った黒竜は竜珠の導きで我が手に落ちるだろう』

この、バルザックの言葉の意味がわからない。『黒竜は黒竜でなくなり』？どういうことなんだろう。いずれにしても、グロダールは死んだわけだし……。

……でも、話の流れからすると、バルザックのその言葉はグロダールが死んだ後のものだ。変だな。まるでグロダールが生きている、あるいは何らかの形で蘇るみたいじゃな……。

（――！？）

思わず跳ね起きた。行き当たった考えに、背筋が戦慄した。

死んだ黒竜グロダールを最強の召喚獣として支配下に置くつもりだとしたら……？

この世界には、ネクロマンサーと言う魔術師が存在するんじゃないか。

シェイド――アンデッドとの合成獣であると思われるグレンフォードには魔剣あるいは魔法しか通用しない。風の砂漠で遭遇した骸骨戦士は逆だったから一概にそうとは言えないけど、生前にはない何らかの特性が付与される可能性はある。だとしたらアンデッドとして蘇る黒竜は、恐らく間違いなく、最強だ。

バルザックがそういう手法を身につけているのか、そういった仲間がいるのかはわからない。だけど蘇らせることを前提としていたのだとすれば、バルザックの言動に納得が……。

（いや、待てよ……）

バルザックがネクロマンサーとしての能力があるんだかないんだかわかんないが、いずれにしてもファリマ・ドビトークで行っていたのは『召喚』の儀式なんだよな？召喚ってのはアンデッド・モンスター化してないただの死体にも出来るもんなのか？それともそれがネクロマンサーのやり方？……いや、違う。

――全然……別もん……

召喚師とネクロマンサーは全くの別物だと、キグナスが言っていた。であれば、バルザックが行っていたのはあくまでも『召喚』だと考えて良いんだろう。……それは、何を、示している？

……ぞっとした。

俺の考えが正しければ、グロダールは、どこかにいるんだ。既にネクロマンサーの手を、通り過ぎて。

だけどエレメンタル・ドラゴンは下級魔物じゃない。契約がなければ支配下には置けないし、そうそう召喚にも応じない。だからバルザックは磁場が最初から整った『魔の山』を選んだ。けれど黒竜の竜珠と言うアイテムを使って尚、黒竜はバルザックの召喚に応じない。だからバルザックはヘルザードへ渡った。黒竜が棲んでいたその島で、竜珠に黒竜自身の気を取り込むために。

（でも……じゃあ……）

ロドリスと手を組んだのは、何の為だったんだ？ロドリスが黒竜の何かを知ってる？まさか。グロダールはギャヴァンで果てたんだ。それならヴァルスの方がよっぽど何かを知っていそうってもんだし、大体ラウバルを狙うのと何の関係があるって言うんだ？

それに、黒竜グロダールがアンデッドとして復活しているのなら、どうしてどこにも姿を現さない？どこに、いるんだ？

（ヴァルスの方が、何か知ってる……？）

知って、るのか……？もしかして。

――砂化した、んじゃねぇかな……

シサーでさえ、グロダールの死体がどうなったのか良くわかっていない。と言うことはきっと戦いの混乱の後、グロダールの死体は、そこで埋葬されたとか腐敗していったとかじゃないんだ。

何だろう……。

――奴のロッドに竜珠を仕込んでやったのは、わしだ。

どちらにしたって、今ギャヴァン沖を船が航行出来ないと言うことはヘルザードに渡ることは出来ない。シャインカルクの指示を仰ぐことになる。

レオノーラで、何かわかることが、あるのかもしれない。

いや。

……吐かせてやる。

第3部第1章第3話　ｍｅｎｓ　ｖｅｎａｔｕｓ（1）

ロドリス王国ハーディン王城。
久々にフォグリアの邸宅で短いマーリアとの時間を過ごしたセラフィが帰城して執務室へと足を向けていると、不意に背後から呼び止められた。
「セラフィ様」
「……ああ。アークフィール」
柔らかな表情を浮かべて、宰相の秘書官が階段を下りてくるところだった。足を止めて下りきるのを待つ。
「どうしたんだい」
「ユンカー様のところに、レドリック殿下から書簡が届きました。セラフィ様をお呼びしろとのことですので、お迎えに上がる最中です」
柔らかな笑みを浮かべる宰相秘書官に、セラフィも笑顔を向けた。
「僕がもう少し遅かったら探し回らせるところだったね。そうならなくて良かった。行こう」
「ですが宜しいのですか。まだご自分の執務室に行かれてないのでは」
促すセラフィに従うように今下りてきた階段をまた上り始めながら、アークフィールが小さく首を傾げる。
「いや、構わないよ。執務室に入ったら最後、不在時にたまりまくった書類に引き留められて出られないかもしれない」
やれやれと大げさに肩を竦めてため息をついてみせると、アークフィールが吹き出した。
「セラフィ様は、昨夜はご自分の邸宅にお戻りでしたとか」
「そう。たまには時間を見つけて戻らなければ、廃墟になってしまう」
「おや。では待つ人がいるからお帰りになると言うわけではないの

ですか」
からかうような悪戯めいた笑みに、セラフィは否定の意を返した。
「たまには掃除くらいしてやらないとね」
あっさり言って階段を上がりきったセラフィに、アークフィールがぎょっとしたような声を上げた。
「ご自分でですか？」
「そう。……ああ。使用人を置くのは嫌いなんだ。自分の領域を荒らされている気分になる」
アークフィールがぎょっとした理由に気づいて補足する。確かに、自分で自分の屋敷を掃除して回る宮廷魔術師など類を見まい。
「それに好きなんだ、結構」
元々貴族などではないゆえに、自分の面倒を自分で見るのに慣れている。追いついたアークフィールが苦笑した。
「モップを片手に邸内を歩き回っているセラフィ様と言う図式は、失礼ながらそぐいませんね」
「そうかい？イメージなんて無駄なものは払拭するに限るよ」
イメージを多大に利用してのし上がって来た自分のセリフではないが。
「ぜひ今度落ち着いたら、遊びに伺いたいです」
笑いを噛み殺すようなアークフィールの言葉に、セラフィも笑った。
「構わないよ。たまには奉仕されるのも悪くないだろう？」
「セラフィ様に『ご奉仕』などしていただいた日には、落ち着かないような気もしますね」
戦風の吹き荒れる中、一時の穏やかな会話を楽しみながら訪問した宰相の執務室では、実直でおっとりした宰相が青い顔をしていた。
「失礼致します。お呼びですか。……どうされました」
アークフィールの言に寄れば、ユンカーの用件はレドリックの書簡だ。青ざめるような内容が書かれているのか。ウォルムスの陥落に失敗？そんなはずはない。ロンバルトからの報告では、ヴィルデ

フラウの占拠は既に完了したと聞いている。ロンバルト公王は戦死、アンジェリカ公妃は城の奥で拘束されているはずだ。ヴィルデフラウの主は、ロドリスの息のかかった第1王子レドリックとロンバルト攻略を進めてきた連合軍である。

眉を顰めながらユンカーの差し出した書簡を受け取ったセラフィは、紙面に視線を落として次第に表情を険しくしていった。

「寄りに寄って……」

「どうなされました？」

書簡の内容を知らされていないらしい秘書官が、訝しげに問う。

アークフィールなら構うまい。ユンカーとセラフィがレドリックに下した『ヴァルスの要人を拘束して反間（寝返った間諜）として陥落せよ』と言う指示を知っている。

書簡を半ば押しつけるように手渡したセラフィに目を瞬いたアークフィールは、書簡に視線を落として息を飲んだ。

「宮廷魔術師……」

「要人も要人だ。陥落出来ればあたりはでかい」

険しい表情のまま、セラフィは腕組みをして吐き捨てた。

「……だが外した場合もでかいな」

一度だけ対峙した、ヴァルスの宮廷魔術師を思い浮かべる。したたかそうな強気な顔つき、ゴーレムを一瞬で破砕した能力。

レドリックの報告に寄れば、拐かしたのはロンバルトの女宮廷魔術師だ。実力はあるのだろう。だが、対する相手は組みしやすいとは言い難い。伊達に若くして高位官を務めているわけではあるまい。

武骨な軍人などに比べれば、それは貴族めいた優男の方が女の目を引くかもしれないが、そんなことで大失敗すれば自分らの首が危うくなることがわかっているのか？まかり間違って逃走でもされた日には、レドリックとラミアの動かし難い叛逆をヴァルスに握られることになる。既に相対しているロドリスとしては構わないが、レドリックがヴァルスの手によって消される可能性は、限りなく高い。それは、ロドリスにとって重要な手駒が減るということである。

（全く……これだから女は……）

しょせん馬鹿王子に従う女宮廷魔術師など浅はかなものか。政治を知らぬ要塞幹部で手を打てば良いものを。

ラミアと言う人物を知っているわけではないが、シェインを味方として陥落させる可能性があるとは、セラフィには考えられなかった。癪には触るが、狡猾であろうことは一度の対峙で感じている。

「しかし、宮廷魔術師を陥落出来れば有力ですよね」

淡々とアークフィールが呟く。中途半端な要塞の幹部などよりは、遥かにヴァルス政権に食い込む影響力を持っていることに違いはない。持つ情報も半端ではないだろうし、操作できる情報も然りだ。

「落ちないのであれば消せば良いのでしょう？この書面では陥落にはこれから取りかかるのですね」

「消せればね」

「……」

「逆にこちらの情報を搾り取られて逃走されてごらん。……あの男なら、やりかねない」

アークフィールが顔を上げる。

「セラフィ様はクライスラー卿をご存知ですか」

「一度だけね」

「どうご覧になりました？」

「口は達者だな」

「……」

「……口が達者と言うことは、頭の回転が速い」

ただの悪態ではないことを読み取って、アークフィールの視線がセラフィの分析を促す。

「減らず口が得意と言うことは、会話の流れを煙に巻くのが得意と言うことだ。つまり話術での陥落では一筋縄ではいかない。逆手に取られて主導権を握られる可能性すらある」

「……では」

「さっさと消してしまうのが一番だろうな。あの手合いは生かして

おいてもろくなことがない。味方についたように見えても、信用が出来ない。大体、レドリック殿下に言いくるめられてロンバルトを裏切るレベルの人間には、扱うのはまず無理だろう」

とは言ってもそもそもレドリックになど大した情報を与えてはいないのだから、その配下の宮廷魔術師だってさしたる情報は持っていないはずだ。ヴァルスの宮廷魔術師だって、持ってもいない情報をロンバルトの宮廷魔術師から搾取することは不可能ではあろうが……いろいろと面倒臭いことに違いはない。

セラフィの言葉に、真剣に聞き入っていたアークフィールが不意に笑った。

「ロンバルトの王子も随分な評価ですね」

「当然だよ。何のために『要塞の』幹部を狙えとしつこく言ったと思っているのさ。……シャインカルクの要人など、陥落させるのはハナから無理だとわかりきっている」

全く寄りに寄って厄介な人物をさらったものだ。宮廷魔術師の行方が知れないとなれば、ヴァルスは血眼になって探し回るに決まっている。手放しに解放するわけにはいかぬし、陥落するには多分手強い。下手な茶目っ気を起こさずにさっさと消してしまうべきだ。

「……今はまだ、ご無事なのですね」

「そうだろうね。……ユンカー殿。レドリック殿下に変更を至急伝えましょう」

「へ、変更ですね」

まだおどおどしながら頷く宰相に、セラフィは酷薄な笑みを見せて肯定した。

「ええ。……陥落など試みずに消してしまえ、とね」

◆◇◆

鈍い頭痛と全身の痛み、それから何かを押さえ込まれているような不自由感。

浮上したシェインの意識が最初に知覚したのは、その3点だった。

「……ッ……」

咄嗟に体を起こしかけ、次の瞬間には支えきれずにベッドに崩れる。

（何が……起きたんだ……？）

痛みを発しているのは頭、背中、胸部だ。特に胸部はひどい。肋骨でも折れているかのようだ。

荒く息をつきながら、もう一度体を起こす。自分の状況を確認しようと周囲に視線を走らせて、眉根を寄せた。

部屋だ。それもかなり調度類は整っている。良く考えてみれば自分はベッドに寝かされていた。

（……？）

最後に見た記憶は、押し寄せるロドリス兵だ。それから……。

（……ラミア）

そうだ。彼女が裏切り者であると認識した瞬間から、記憶がない。なぜ自分はこんなところにいるのだろう。これではまるで、客人だ。

「……ッ……」

とりあえず起きてみようと動かした体がまた、悲鳴を上げる。気をつけたつもりだが、胸の激痛が脳天に駆け上がる。

顔を顰めながら片手を胸に当て、妙なことに気づいた。服をはだけてみると包帯が巻かれている。治療をしてある。

（……？）

何か妙だ。放ってあるのでも、治癒の魔法を施しているのでもない中途半端さが気にかかる。

ベッドの淵に腰掛けることに成功し、シェインはようやく落ち着いて自分を顧みてみた。

ロッドはない。少なくとも見渡せる範囲には見あたらない。護身用に携帯していたショートソードも、ない。ヴァルスの官服である宮廷魔術師のローブもない。

ともかくも自身に治癒を施そうと魔法を発動する。――発動しようとして、凍り付いた。
「お目覚めか」
愕然としたところで、部屋の扉が開いた。部屋の奥まった場所に置かれているベッドに腰掛けているシェインからは、十数エレの距離がある。姿を現した女性は、シェインの姿に微笑みかけた。
「おかげさまで良い目覚めだ」
皮肉を言いながら、痛みを堪える。ラミアは若草色の髪を片手で弾きながら、笑った。
「すまぬな。リミッターをつけさせてもらっている」
「……そのようだな」
魔術師の魔法を封じる呪具だ。手首に填められた見慣れぬ腕輪がそうなのだろう。シェインの魔法は、使用出来ない状態にされている。目覚めた時の不自由感は、それだ。
「いささか治療が杜撰なようだ」
ラミアを見据えながら尚も皮肉を口にすると、部屋に入って扉を閉めたラミアは笑った。
「完治させるわけにはいくまい。魔法が使えぬとは言え、五体満足で走り回られては余り都合が良くない」
やはりか。
痛む場所があるなら好都合、と言ったところだろう。但し死なれては困るから、適切な治療のみは施したと言うわけだ。
「……ここはどこだ」
低く呻くように問う。シェインを警戒してか、ラミアは距離を取ったまま壁に寄りかかって腕組みをした。
「具体的には教えてやれぬな。私の所有する建物だ、とだけ言っておこうか」
それでは手がかりにならない。上級貴族であるラミアは、国外に別荘を持っていたとしても不思議ではないからだ。事実、歴史ある特権階級であるクライスラー家は各地にばらばらと別荘を所有して

いる。
「あれから、どれだけ経った」
尚も現在地の把握を試みて、シェインは重ねた。経過した時間が限定出来れば、移動できる距離も限られてくる。ラミアはシェインの問いを深く受け止めなかったのか、あっさりと答えた。
「１０日だな」
「１０日……」
舌打ちがこぼれた。強力な魔法をくらった場合、命を落とさずに済んだとしてもその波動が脳や神経に悪影響を及ぼす。シェインはまだ知る由もないが、レガードの昏睡と同じ理由だ。相手の魔力によっては、そのまま意識が戻らないことさえありうる。
どうやら殺すつもりは最初からなかったようだから、手加減をしてはいたのだろう。１０日で済んだのならむしろ幸いと言えるかもしれないが、その間ヴァルス軍にとって自分が行方不明だったかと思えばそうも言っていられない。いや……。
（『行方不明』は継続中か）
ここから脱することが出来なければ、自分の所在どころか生死さえヴァルスから不透明であることに相違はない。
「……痛むか」
「痛むな」
苦い表情のまま押し黙るシェインに、ラミアが心配そうに眉を寄せた。優しげな声音を出されたとて、この状況に落とし込んだ本人とあらば、感謝をする気にはなれそうにない。
「さっさと用件を片づけるのが互いの為だ。俺を生かしているのはなぜだ？」
ともかくも、情報を集めなければどうにもならない。現状では今後の行動方針さえ定めかねる。可能な限りの情報を引き出してから考える方が、無駄がないだろう。
１０日の期間のうち何日が移動にあてられたのかが不明だが、まさかロンバルトからヴァルス方面には向かわぬだろうから、現在地

は恐らくロンバルトかロドリス南部。最大が10日では、ロドリス北部より北に行くことは出来まい。

「俺を生かしてこんなところに連れ込んでると言うことは、何か利用価値があるのだろう。利用方法を聞いておこうか」

ラミアは小さく笑ったまま答えない。

「意外とあの王子様も信頼できる部下をお持ちのようだ……」

話の方向を変更してみることにする。壁から体を起こして窓際のテーブルに足を向けたラミアは、シェインの言葉に小さく吹き出した。テーブルの上のティセットに手を伸ばす。

「……どういう意味だ？」

「レドリック殿下の指示だろう」

「なぜそう思う」

「他におらぬだろうが」

「私の独断かもしれぬな」

「レドリック殿下がロドリスと通じておられることは、こちらでもわかっている。……レドリック殿下がウォルムスの投降を約束して王都に帰還。違うか？」

ラミアは目を伏せて、ティポットを取り上げた。

「お茶でもどうだ。水分が不足しているだろう」

「確かにな。いただこう。但し水分以上に情報が不足している。水不足でどうにかなる前に、情報不足で脳細胞がストライキを起こしそうだ。そちらの補給も至急お願いしたいな」

穿ったシェインの返答に、ラミアが笑いだした。ティカップをひとつ、シェインに差し出す。

「お茶がこぼれるので噛みつかないでいただけるか」

「心しておこう」

今この場でラミアを襲ったところで、どうにもなるまい。短い会話でシェインの判断を読んだのか、それはラミアの方でもわかっているようだ。先ほどとは違いあまり警戒を見せる様子もなく、ラミアはシェインにカップを差し出した。大人しく受け取る。傷が疼い

た。

（……どうしたものかな）

第3部第1章第3話　ｍｅｎｓ　ｖｅｎａｔｕｓ（2）

沈黙して、揺れる液体の表面に映る自分を見つめる。ラミアが立ったまま、黙ってカップを口に運んだ。同じティポットから注がれたのだから、害はないだろう。大体何かする気なら、意識不明の間にとっくにやっている。そう判断をして、カップに口をつけた。

ラミアの言う通り、体は水分を要求していたようだ。

黙って茶を飲み干しながら、シェインは考えを巡らせた。

確認すべき点はいくつかある。

当然だが、まずは生かして拘束しているその目的だ。

次いで、現在地。

ラミアの行動が、誰の意志によるものなのか。それによって定まるだろうシェインを拘束している人員配置の規模。

シェインのロッドの行方。

最低限、これだけは押さえておかねば、脱出など計っても仕方がない。

「……俺の部下はどうした」

不意に気がついて尋ねる。ラミアは顔を横に振ると、短い返答で応じた。

「すまないな」

その一言で、スフォルツらがどうなったのかわかった。唇を噛みしめるシェインに、ラミアが視線をそむける。

ともかくも、用があるのはシェインだけなのだとわかった。ではなぜシェインなのか。

答えは恐らくその地位だろう。だが宮廷魔術師を拘束することに何の意味がある。戦力の減少？ならば殺してしまった方が早い。人質？何に対する？こう言っては何だが、宮廷魔術師など替えがきく。空きが出たら補充すれば良い。

やはり、良くわからない。殺されるならまだしも、生かされてい

る理由がわからないのだ。捕虜と言えばそうなのだろうが、今ひとつ待遇がそうは見えない。

ではラミアを指示したのは誰なのか。十中八九レドリックだろうが、であればレドリックはウォルムスに戻ったのだろうか。帰城している？

（……）

そうだと仮定するならば、ヴィルデフラウは連合軍の手に落ちているに違いない。ギャヴァン戦と同じ理由だ。内側から連動する者がいれば、外からの攻略はたやすくなる。

「俺がいなくなって、戦況がどうなったかは教えてもらえないのか」

空のカップを弄びながら問うと、ラミアは苦笑するように頷いた。

「それは構わぬだろう」

「ウォルムスは、連合軍の手に落ちたんだな？」

シェインの言葉に、ラミアが目を見張った。

「良くわかるな」

正解だ。

ラミアの背後にいるのはレドリック、その手綱を引いているのはロドリスで多分間違いないだろう。

「……ロンバルトはおぬしの祖国ではないのか」

シェイン自身、愛国心と言うものがそれほど強いかと問われれば微妙なところだ。だが、ヴァルスにはユリアがおりキグナスがいる。ラウバルや、気に入らないながらも大臣たち。彼らは大事な同僚だ。レオノーラや故郷アンソールで触れ合った町人、グロダールやギャヴァン戦など直接間接関わらず共に窮地を乗り越えたシサーやニーナ、ギルド。尊敬し、愛する肉親。

『国家』と言うものに、強い思いがあるわけではない。だが、ヴァルスと言う国を作っているのがそれらひとりひとりであり、そこに築いた繋がりと言うものであればこそ、シェインはヴァルスを守らなければならない。ゆえにロンバルトの宮廷魔術師の行動は……

そしてレドリックは、理解することが出来ない。

「祖国だな」
ラミアはあっさりと肯定した。
「だが仕方あるまい？主君の命だ」
「……妙なことを言う。おぬしの主はフェルナンド公だろう。フェルナンド公はウォルムスを死守する為に、先頭を切って連合軍と剣を交えておられたのではなかったか」
低いシェインの問いに答えるラミアの声も、低かった。
「いずこの国にもどの時代にも世代交代と言うものが存在する。そなたもこの世界に属しておればわかろう？次代を担う人間の懐には早く飛び込んでおくべきなのだ」
「だから恩あるフェルナンド公を裏切って、レドリック殿下に翻ったのか」
魔術師は比較的、権力欲などには疎い傾向にある。元来魔術そのものが学問であり、それを追究し操る魔術師は学者だ。研究者たる彼らの最大の関心は研究対象である魔術であり、それ以外に対する興味が極めて低い。
だが、そうしている間に自動的に集まってきた権力にふと目を向けてみると、意外とそれが便利なものであると気がつく。財力は快適なものであると認識を改める。そうしてラミアのように権力欲に取り付かれる魔術師は、大体ある一定の階級を越えてしまった者に現れる。
「綺麗ごとは、やめよう。我がロンバルトは第1王子であるレドリック殿下が治められる。私は次期君主に従ったまでのこと」
「現君主を捨てておいてか」
皮肉まじりの笑みで吐き出すシェインに、ラミアが笑った。
「いや、私の言い方が悪かったな。フェルナンド公は既に現国主ではない。……先代だ」
「何……」
目を見張るシェインの前で、ラミアは顔色を変えずに頷いた。
「フェルナンド陛下はラリベラにおける戦役で、尊い命を散らされ

た」
思わず拳を握る手に力がこもった。
「ヴァルス軍は」
「ルアン・ジンベルから動きを見せておらぬな。ロンバルト軍は単独で連合軍を相手取っての、苦しい戦いだったようだ」
何をしているのだ、と怒鳴りたい思いを飲み込む。要塞軍は合流したのだろうか。ヴァルス軍が移動を開始する前に、連合軍がロンバルト軍に仕掛けたのだろう。
「……では、ロンバルトは」
「陥落だ」
「……」
ヴァルスは正真正銘、孤立無援となった。
至急レオノーラに飛んで帰りたい。ラウバルと今後の戦略を練って立て直さねば。レガードはどうした。ユリアは。
胸に渦巻く焦燥を無理矢理飲み下しながら、歯を食いしばる。こんなところで、魔法を封じられて虜囚となっている自分が情けない。
「どちらにせよ、ロンバルトは勝てぬ」
黙ってシェインを見つめていたラミアが、再び口を開いた。
「ウォルムスの陥落は、所詮時間の問題だ。ならば無血開城が最も国民の命を垂れ流しにせずに済もう。……レドリック殿下はそう、お考えだ」
「そちらの方が、綺麗ごとに聞こえるな」
冷淡なシェインの指摘に、ラミアはふっと笑った。
「どう言われても構わぬが」
ラミアとて、その言葉を信用しているわけではあるまい。むきになって反論せぬのが良い証拠だ。
「フェルナンド公亡き後、レドリック殿下がロンバルト公となられる。……いずれはロドリスの後ろ盾を得て、アルトガーデンの主となろう」
「ほう」

やはりか。
ロドリスと通じた目的は、確かにそこにあるらしい。とすればレガードの暗殺を目論んだ大元は、『青の魔術師』の懐に自ら飛び込んだレドリックだろう。ロドリスからすれば、勢力拡大の為の良い手駒が自ら飛び込んできたようなものだ。
「そなたには、頼みがあるのだよ」
険しい表情で思考を巡らせるシェインに、不意にラミアが微笑みかけた。本題を投げて寄越す気になったらしい。
「……何だ」
「現アルトガーデンは、あちこちに亀裂が生じ始めている。ヴァルスの独裁政権から生まれた歪み――そうは思わぬか」
「……」
「政権交代にあたって各国が剣を掲げたのが、その証拠であろう？」
「……だとしたら何だ？」
『ヴァルスの独裁政権から生じた歪み』――認めたくはないが、一理あるかもしれない。
「今は、帝国を建て直す時期ではないかと思うのだよ」
「……」
「長い歴史の中で生まれた膿が、支柱が脆弱になったのを見て一気に吹き出した」
「それはユリアのことか？」
氷点下の冷気をはらんだヴァルスの宮廷魔術師の声に、ラミアが目を上げる。
「まだ若い娘、と言うただそれだけの判断では説得力に欠けるな」
「だが事実だ」
「間違えるな。ヴァルスの後継者がユリアであることがイコール弱体化ではない。物事を一定の秤にしかかけられぬ単細胞の視界にのみ、そう映っているだけのことだ」
言い切ったシェインに、ラミアが黙り込んだ。気を取り直したように口を開く。

「随分と買っておられるようだ」
「俺は無能は嫌いだ。世の中には石頭が多くて困る。ゆえに柔軟な人間への評価が一層上がる」
「共に、アルトガーデンの建て直しに力を尽くさぬか」
「……」
訝しげなシェインの視線に、ラミアは力を込めるように続けた。
「現在の、ヴァルスの独裁政権を崩して体制を立て直すには、一度ヴァルスは敗北せねばならぬ。高見まで上ったヴァルスの地位が落ちてこそ、列国と等しい立場となり、アルトガーデンは新たなる体制を布くことが出来るだろう。ヴァルスの敗北は必要悪だ。共に帝国を建て直さないか」
上った相手と並ぶ為に追いつこうと言うのではなく、相手を引きずり下ろそうとする辺りが浅ましい考えだ。
「レドリック殿下の元でか」
「そうだ」
「断る」
短いシェインの返答に、ラミアは尚も食い下がった。
「私はそなたのような人間と共にやってみたい。レドリック殿下に手を貸してはもらえぬだろうか」
「繰り返すが、断る」
にべもない返答に、ラミアがため息をついた。
「状況がわかっているのか」
「わかっていないように見えるか」
「見えるな。……そなたの選択肢は現在2つしかないのだ」
「ほう」
「我々に組みするか、ここで虜囚となるか」
「ではひとつ付け加えてやろうか。拷問の末の惨死、とな」
「そう言うな。私はそなたをそのような目にあわせたくない。考える時間をやろう」
ラミアの言葉に、シェインは笑った。それこそ、随分と買われた

ものだ。
「……では聞くが、『我々』とは誰のことだ？おぬしとレドリック殿下のふたりでは考えようにも話になるまいな」
「まさか」
「ロドリスか」
ラミアは、微かに優越を滲ませて目を細めた。
「だけではない。連合軍全てだ」
「連合軍全てが、ロドリスとレドリック殿下の結託と父王への裏切りを後押ししているのか。正気の沙汰とは思えぬな」
さすがにラミアが不愉快そうに眉を顰めた。
「大義の前に情は不要だ。親子と言えど志が違えば相対することも致し方あるまい」
「大義か」
「そうとも」
「……レガード殿下のことはどう考えている？同じくロンバルト王子だが」
ラミアの手が、シェインの空のカップを取り上げる。飲むか、と尋ねるような仕草に肯定の意を返した。くれると言うのだからいただいておこう。話の流れ如何ではもう口に出来ないかもしれない。
「レガード様は、ヴァルスに染まり過ぎている」
新たに差し出されたカップを受け取りながら、話に耳を傾ける。
「ロンバルト宮廷には、大きく言って2つの派閥がある。親ヴァルス派と反ヴァルス派だ」
ナタリアと同じだ。国家ぐるみで特定の国に迎合していれば、それに対する反感を持つ国民は必ず出る。レドリックの懐に潜り込んだ反ヴァルス派からすれば、レガードは祖国を捨てて大国におもねるようにも見えるだろう。それは理解出来る。
「レガード様が戴冠なされたのでは、ヴァルスの現状――アルトガーデンの現状に変化はあるまい」
「ではレドリック殿下はヴァルスはヴァルスとして、ご自分はあく

までロンバルト公王として帝冠を戴くと、こういうことで良いか」
いささか意地の悪い質問を投げかける。まさか芳醇の地であるヴァルスを放棄して、帝冠のみで満足するとは思えない。だが、今の建前を突き詰めればそういうことになる。
痛いところを突かれたのか、ラミアは顔を顰めた。
「レガード様がヴァルスにおられては、新体制の妨害になりかねぬ。レドリック様はヴァルス、ロンバルトを併合してアルトガーデンの主となり、ロドリスと協力して各国と足並みを揃えた帝国展開を志しておられる」
「では主のすげ替えが行われるだけで、結果はさして変わらぬな。いや、もっと悪くなるか。ロドリスが帝国に深く浸食していく。もはや拮抗する力を持ちうる国など、このローレシアの地からはなくなるわけだ」
目を伏せて皮肉な笑みを刻んだまま引かぬシェインに、ラミアは一度開きかけた口を閉じた。やれやれ、と言うように顔を緩く振る。
「まあ、今しばらく時間をやろう」
「……判断材料のひとつとして、確認をしておきたいのだが」
「答えられるものなら答えよう」
「俺が是とした場合、ロッドは返してもらえるのだろうな」
シェインの問いに、ラミアは表情を変えずに頷いた。
「すぐにでも返そう。但し、口先だけではないと判断が出来てからになるがな」
「そりゃあ仕方がない。その代わり、おぬしも魔術師ならばわかるだろうが、ロッドは俺にとっては大切なものだ。下手な衛兵に汚い手で触られては不愉快だな」
「安心しろ。他の者には触れさせぬゆえな。……この部屋からは、出られぬ。ゆっくりと考えるのだな」
話を打ち切るように言ってカップをテーブルに置いたラミアに、シェインも低い声で応じた。
「ああ……ゆっくり考えさせてもらうさ」

◆◇◆

体の痛みは、深夜になっても引く様子がなかった。動けないわけではないが、ラミアの言う通り五体満足で走り回ると言うわけにはいかないようだ。

（くそ……）

忌々しいリミッターを睨みつける。これさえなければこの程度の怪我、瞬く間に治癒すると言うのに。

他人の屋敷に身ひとつで幽閉されていて、することなどあろうはずもない。暇を持て余しベッドに転がってあちこちに考えを巡らせていたシェインは、体を起こしてベッドに腰掛けた。

どうやらラミアは、ろくな情報を持っていそうにない。恐らくレドリックがそもそも大したことを知らぬのだろう。

それは何を意味するのか。――ロドリスから、レドリックがいかに軽く扱われているかと言うことだ。

仮にも王族、それも、今後皇帝として推挙していこうと言うのなら、レドリックを含めて様々な協議を行い、行動方針を決めていくのが筋だろう。だがレドリックは恐らくは何も知らない。ロドリスからしてみれば、ヴァルス政権に食い込む駒に過ぎない。物事には流れと言うものがある。特にヴァルスほどの大国相手ならば尚更、仮に敗北せしめたとてロドリス国王がヴァルスで戴冠するわけにはいかないが、ヴァルス先王が正式に定めた後継者レガードを消してしまえば、その兄がそれを継ぐのは流れとしては悪くはない。レドリックはロンバルトの継承権も持っているのだから、二国まとめてレドリック支配下に置くことが出来る。後ろ盾としてロドリスがヴァルス政権に食い込んでいくのは、そう難しいことではないはずだ。

ロドリスの国力が及んだところで、傀儡（かいらい）の王は、消される。

（本気で気づいていないのだとすれば、愚かなことだな……）

第3部第1章第3話　ｍｅｎｓ　ｖｅｎａｔｕｓ（3）

ため息を落として立ち上がったシェインは、とりあえず出入り口に向かった。ともかくも、レドリックの身など案じている場合ではない。脱出の方策を考えなければ。

わかりきってはいても、一応確認だけはするべきだろう。ドアノブに手を伸ばしてみるが、やはりドアは開きそうにない。

部屋の中を見回して、今度は目に付く窓に足を向ける。窓の外から見える景色は暗いが、どうやら崖を背に立てられているようだ。崖の下は見えない。高さも分からない。ただ、この部屋自体は４階ほどの位置に存在することは分かる。開いたところで下りられる高さではないが、軽く窓を叩いてみてから手近な椅子を振り上げた。窓に向けて叩きつける。

ガァーンッ！！

盛大な音が上がり、椅子の方が壊れた。折れた足の破片がシェインめがけて飛来するのを避けながら、椅子を床に投げ捨てる。胸部の激しい痛みが、シェインの呼吸を荒くさせた。

わかってはいたが、確かに出口はないらしい。恐らくこの部屋の周囲に、透明な厚い壁がはりめぐらされているような状態だ。

微動だにせず椅子を破壊した窓を睨みつけながら、シェインはその場で腕組みをして頭を巡らせた。

脱出するにあたって、必要不可欠なのはロッド。魔術師にとってロッドとは、「なくしたから新しいのを」と言うような種類のものではない。見習いを卒業する際に師から贈られるものである。失うわけにはいかない。

ラミアは「すぐにでも返そう」と言った。つまり、この屋敷内のどこかにある。暗に管理をしているのが誰かを問うたシェインに対する答えを考えれば、ロッドはラミアの私室だ。そこへ侵入する必要がある。

それから、魔法を封じられている現状であらばこそ、武器が必要だ。どうにかして武器を手に入れなければ、この部屋から抜け出したとて屋敷から抜け出すことは適うまい。ラミアの背後にレドリックがいるとなれば、それなりの人員配置が行われている可能性が高い。

現在地については、ロンバルトかロドリス南部だろうという推測以外に得られなかった。但しこれは脱出してから知ることが可能である。この際置いておこう。

（ともかくも、この部屋から脱け出さねばな……）

開いている場所が、あるいはこちらから開けられる場所がないのであれば、常套手段ではあるが手段は自ずと定まってくる。

開けられる人物に、開けさせれば良い。

◆◇◆

以前から聞いていた風評では、使えそうな男だと思った。

実際に会い、言葉を交わし、その印象は寄り強くなった。

ラミアは、どちらかと言えば物事に深い思慮を持つ方ではない。短慮と言えば短慮、大らかと言えば大らかと言える気質にある。軽薄、と言う点で言えばレドリックと良い勝負だろう。

訪れた要塞軍の中、無骨なガーフィール将軍とフットワークの良いシェインでは、自然とシェインに目が向くと言うものだ。自ずとターゲットは絞られた。

シェインを手元に欲しい。味方となれば心強いに違いない。

ロドリスを手放しに信用するわけにはいかない。レドリックを支えたいと思ってはいるが、自分だけではいかにも心もとない。信用の置ける強い味方が欲しい。

レドリックからは、ロドリスがヴァルスの宮廷魔術師を消してしまえと言っていると相談を受けている。だが、あっさり消してしまうには惜しい人材だ。もうしばらく粘ってみてから考えても遅くは

ない。どうせ、魔法を封じられているシェインにあの部屋は脱け出せない。脱け出せたとて、魔術師にとって唯一の護身とさえ言える魔法を使えないのだから、大した敵ではない。

意識が戻ってからの1週間、ラミアは毎日シェインの部屋へ足を運んだ。無論、シェインの意志を確認するべく、あるいは味方に引き入れるべくであるが、時には他愛のない話だけをして出ていく時もあった。

シェインの消息不明期間は、既に20日に近い。

「そろそろ考えは変わったか」

夕食を終えた頃合を見計らって、微笑を口元に部屋の中へ入って来たラミアは、シェインがベッドに横たわったまま片腕で顔を覆うようにしているのを見て、怪訝な表情を浮かべた。

「……どうした」

「いや？」

短い返事を返して、シェインは億劫そうにベッドに体を起こした。それから小さく呻く。……顔色が良くないようだ。

「痛むのか」

「痛むな。普段魔法でさっさと治してしまうゆえ、回復が遅いな」

呟くように言って片手で顔を覆うシェインに、ラミアは眉を寄せて近づいた。

「思いの外長引くな」

「まったくだ。こうも体が痛んでひとり閉じこめられていると、おかしくなってくる。おぬしの来訪が楽しみにさえなってきた」

ぼやくようなシェインの言葉に、ラミアが笑いだした。

「良い傾向だな。あとひと押しと言うところか」

「馬鹿を言ってくれるな。一時の気の迷いと後々後悔しそうだ。何とか踏みとどまるさ」

「……そなたのように頭の回転が速く優れた能力をもあわせ持つ人材は、そうはいまい」

陥落するなら、弱くなっている今かもしれない。こういう男は一

時の気の迷いだとしても、一度こうと決めたらそれを貫こうとするだろう。自分自身の意趣替えをそうころころ許容するタイプではなさそうだ。……であれば、一瞬でもその気にさせれば、陥落の余地はある。明言させてしまえば、信用が置けそうな気がする。

ラミアはそう判断し、真剣な眼差しで言を重ねた。

「そなたの能力を生かせるのは、出来上がった既存の体制で安穏とそれに乗るのではなく、時代の遺物を破壊し、新しい体制を生み出す時にこそ生かされるのではないか？ヴァルスだ、ロンバルトだなどと言う小さな話ではない。アルトガーデン全土に渡る改革だ。帝国内の各国がレドリック様を掲げてその時を待つ今こそ、そなたの能力が最大に生かされる時ではないだろうか」

熱心に語るラミアに、シェインは苦笑を浮かべて緩く顔を左右に振った。

「参ったな」

「良いではないか。ヴァルスは既に孤立無援だ。敗北を迎える日はそう遠くはない。ヴァルスが敗北すれば、ヴァルスの重鎮たちはその責任を取ることになろう。だが今の時点で我々への協力を約束すれば、そなたはそれを免れる。悪い話ではないはずだ。私はそなたのように客観的に冷静に物事を判断し、分析し、自ら考える能力のある人間をそばに欲しい」

「今は周囲におらぬか」

「おらぬな」

ラミアがシェインを味方に引き入れたいと考えたのは、『天才』と評される風評もさることながら、物事の組み立て方や捉え方に触れたからだ。身柄を望む気持ちに嘘はない。シェインが少し考えるような仕草をした。それからふと目を上げる。

「……一応聞きたいのだが」

「何なりと」

「そちらに寝返った場合、俺には何のメリットがある。――目に見えるメリットの話だ」

「……」

ラミアは一瞬押し黙った。答えられないのではない。シェインが地位や金を要求するのが、少々意外だったのである。

「そなたでもそういうことが気になるのだな」

思わず口に出してしまったラミアに、シェインが笑った。

「当たり前だ。俺だって慈善事業をやるわけにはいかぬ。ヴァルスを裏切る、と言うリスクはあまりにでかい。ならばそれ以上のメリットがなければ、いかに心揺れようと乗る価値はない」

弱くなっている、とは言っても、やはり冷静だ。己の地位に拘りを持つラミアにしてみればシェインの考えはひどく真っ当で、加えて安心した。権力に固執する人間は、信義や人情を振りかざす人間を恐れ、あざ笑う。理解が出来ないからだ。ラミアは、シェインが自分と同類らしいことに安堵を覚えた。

「……何が望みだ？」

「そうだな。ヴァルスの宮廷魔術師――この地位は、保証してもらおうか」

「無論。ヴァルスが敗北を喫した後でも、そなたの地位、財政その他において、今より不自由になることはない。報奨も、出そう」

「それからヴァルス宮廷現幹部の一新」

「……一新か」

少々虚を突かれたラミアに、シェインは皮肉な笑みを浮かべた。

「ヴァルス宮廷は頭が固い。石頭ばかりでは改革など出来るはずもないな。使えるメンツが揃わぬなら俺は降りる」

「……考えておこう」

どうせヴァルスを押さえ込むには、既存の重鎮たちは一掃するしかない。ラミアはシェインの要求を尊重すべく、承諾した。

「他にはないのか」

「今のところはな。……つり上がるかもしれぬが、良いのか？」

皮肉な笑みを崩さないシェインに、ラミアがまたも苦笑して腕を組んだ。息をつく。

「限度はあるがな」
「安心しろ。俺が皇帝になりたいなどと口走ることはない」
そう笑ってから、シェインは不意に激しく咳き込んだ。
「どうした」
「肺が多分傷を受けているのだろう。それと微熱が続くせいかな。やたらと喉が乾く。すまないが、茶を入れてもらえるか」
「ああ……待っていろ」
シェインの咳き込む様子がつらそうで、案じながらラミアは踵を返した。ティポットの乗る棚へ足を向けながら、治癒の魔法を施しそうになる自分に苦笑する。
それはさすがにまだ早いだろう。あと少しだ。体の不調と閉塞した空間は、人を弱気にする良いポイントだ。弱気になっているところに、つけ込む隙が出来ているのだから、もう少し様子を見て……。
（……！？）
「何の真似だ？」
シェインに背を向けてティポットに手を伸ばしかけたまま、内心の舌打ちを押し隠してラミアは低く尋ねた。
首筋に背後から押し当てられている冷たい感触――はっきり見えないが、刃物だ。
「悪いな。やはり気が変わった」
低く、けれど涼やかな声が真後ろで答える。ラミアの首に刃物を押し当てているのはもちろん、囚われの身のヴァルスの宮廷魔術師だ。
「……謀ったな」
「この程度を『謀った』などと言われるとかえって恥ずかしいな。いささかあざといかとも思ったが、どうやらそうでもなかったようだ」
しれっと答えるシェインに、ラミアの顔が歪む。
「そなたを信用した自分が恨めしいな」
「裏切った人間に言われると気分が良いな」

まったく減らず口は止まることを知らない。先ほどまでは好ましくさえ感じられたテンポの良い会話が、今は忌々しくさえ感じられる。

「今ならまだ、考える余地をやるが」

尚も譲歩するラミアに、シェインが笑った。

「見くびるなよ。これでも俺はヴァルスの貴族だ。メリットデメリットの問題ではない。俺の主は、ヴァルス王家だ」

静かな冷たい声音に、鳥肌が立つ。ラミアは、掠れた声を押し出した。

「どうしてもか」

「俺は、自己の主をクレメンス陛下と定めた。亡き今はそのひとり娘であるユリア様と、クレメンス陛下の定めた後継者であるレガード殿下が俺の主だ。それ以外にひざまずくつもりは毛頭ない。俺自身に恥じる生き方はしなくないのでな。貫くと決めたものは、貫き通す」

背後にいるシェインの顔を見ることは出来ないが、酷薄な眼差しを浮かべているのが見えるような気がする。

「そんなものを、どこから手に入れた」

「知りたいか？……おしゃべりな給仕が、どこへ行ったのだろうな？後で、ベッドの下でも探ってみてくれ」

「何……」

すっと背中が冷えた。

虜囚の身であるシェインであるが、食事をさせないわけにはいかない。当然、部屋に食事を運ぶ人間がいる。

その都度運ぶ人間は変わるが、何があるかわからないゆえに武器を携帯しているのは確かだ。

そしてシェインの部屋に食事を届けに行った人物は、すぐに戻る者もいれば、なかなか戻ってこない者もいた。シェインに捕まって会話の相手を強要されるのである。

相手にしない者もいる。いや、大半だ。だが、中にはうまく逃れ

られない者もいる。最初こそ叱責をしていたが、聞けば交わす会話は他愛のないものであらばこそ、次第に放置するようにもなっていた。それが繰り返されれば、「またか」と多少戻りが遅くなっても気に留めなくなっていた。

最初は確かに、警戒していたのだ。そこに何か意図があるのではないかと。だが本当に何ごともなく繰り返されていたゆえに、いつの間にかただの暇つぶしだろうと言う認識を植えつけられていた。魔法の使えない怪我人の魔術師が、衛兵相手に武器を奪うなど出来るわけがないと言う先入観が手伝ったのも、否めない。

「そんなものを振り翳して、扱えるのか」

「油断している衛兵とやりあって勝てる程度にはな。……芸も達者だと言わなかったか？」

「怪我はどうした」

「おかげさまで回復済みだ」

言葉を繋ぐ。だが、活路を見出せそうにない。

相手は自分と同様、魔術師だ。魔術師の弱みを良く知っている。

魔法の発動には、呪文を完成させるだけの時間が最低限必要だ。

そして『言霊魔法』を使用する以上、言葉の力を借りずには発動させることは出来えない。言葉を紡げばこの距離で聞こえぬはずはないし、魔法が完成する前に突きつけられた刃が自分の命を奪う。接近戦において、魔術師は身を守る術を持たない。

「どうする気だ」

「決まっている。ヴァルスへ帰るのさ。……取り急ぎ、俺のロッドを返してもらおうか」

尚も言葉を返そうと口を開きかけたラミアは、結局飲み込んでそのまま口を閉じた。ため息をついて、ゆっくり歩き出す。

それに続きながら、シェインが低く告げた。

「妙な気を起こそうと思うなよ。生憎俺は運動不足でな。焦らせると手元が狂うかもしれぬ」

「……」

「衛兵に囲まれた日には、もうどうせこちらも逃げ道がないからな。ひとりの旅路は寂しい。手近な人間にご同行願いたくなるかもしれんな」

「……わかった」

恐らく、本気だろう。

シェインの言葉にうそ寒いほどの殺気を感じて、ラミアは素直に頷いた。ロドリスがシェインを消せと言ってきた理由が、わかったような気がした。そう簡単に陥落出来る相手ではなかったと言うことだ。

だが、この屋敷から脱出することは適うまい。ドアの外にはラミアが伴ってきた衛兵がいる。屋敷の中にも何人もいるのだ。殺すには惜しい男だが、本人がどうしてもこちらに寝返るのは嫌だというならば、仕方あるまい。

シェインを刺激しないよう、ラミアはゆっくりと静かに扉を開けた。現れたラミアに衛兵が姿勢を正す。次の瞬間、刃をその首筋に押し当てているシェインに衛兵がぎょっとしたように体を揺らした。

「貴様ッ……」

「おーっと。騒がないでもらおう。ご主人様の首に傷がつく」

低いシェインの言葉に、ラミアが頷く。抜いた剣を構えたままどうしたものかと動きを止める衛兵に、ラミアは押し殺した声を投げた。

「言う通りにしてくれ」

「しかしッ……」

「この部屋は出口がないのだったな」

「……」

シェインの言葉の意図を図りかねて、ラミアはちらりと視線を後ろの方へ向けた。だがシェインが見えるほどに顔を動かせぬので、その表情まではわからない。

「そこのドア番」

ラミアを人質にとったままゆっくりと体の向きを回転させて部屋

から出たシェインは、ラミアを衛兵と自分との間の盾にするように廊下を僅かに後退すると、衛兵に向かって声を投げた。
「剣を下ろして、俺の代わりに部屋に入ってもらおうか」
「何……」
「早くしてもらえるか。しばらくの幽閉生活で気が短くなっている」
衛兵の視線が、問うようにラミアを向く。それに応えてラミアは頷いた。ともかくも今は、シェインの好きにさせるしかないだろう。衛兵が渋々とそれに従う。開け放したままのドアの内側に衛兵が入るのを見て、シェインの声がラミアに問うた。
「俺の代わりだからな。鍵を閉めてもらおう」
「……何の為にこんなことを」
鍵束を取り出しながら、ラミアはそろそろと扉を閉めた。施錠しながら問うラミアに、シェインのせせら笑うような声が聞こえる。
「決まってるだろう？あいつを放置して仲間を呼ばれたら邪魔だからさ。さて。ロッドの場所にご案内いただこうか」
歯軋りしながら、ラミアは進行方向を指差した。ゆっくりと歩き出しながら、屈辱を堪え、胸の内で呟く。
脱出など、出来まい。自分がシェインの部屋に行ってから３０分以上戻ってこない場合は、衛兵がやってくることになっている。魔法の使えない魔術師など相手ではない。
あと、５分。
ラミアの部屋に辿り着いた頃には、ラミアとシェインを探して血眼になった衛兵たちが、屋敷内を徘徊するだろう。

第3部第1章第4話　脱出（1）

屋敷の中は静かだった。ラミアの進む通路には、人の気配がない。ラミアの首筋に給仕から取り上げたバスタード・ソードを押し当てながら、慎重に進むシェインの額には、微かに脂汗が滲んだ。荒くなる呼吸を、気づかれぬよう整えようと試みる。

……回復済み、などと言うのは、でまかせだ。肺に傷がついてるだろう、と言った言葉は嘘ではない。1度激しく咳き込んだ時に、微かに目に鮮やかな鮮血が混じっていた。喀血（かっけつ）は、肺もしくは気管支が出血している証拠だ。動悸は速く、時折軽度の呼吸困難のような状態に陥る。ラミアの魔法をくらった衝撃で肋骨が肺を傷つけ、呼気が胸腔に漏れるなどの状態が推測された。続けば、多分、死ぬ。

脳を冒されているような鈍い頭痛は、まだ魔法の余波が残るせい――ラミアがシェインを見て「顔色が悪い」と認識したのは、あながち間違いではない。事実だ。ただそれを逆手に取って演技であるように見せただけのこと……不調を悟られては、困る。

「殺しておくべきだったのだろうな」

沈黙に耐えかねたのか、ラミアがぽつりと口を開いた。その声に笑ってみせる。

「そうだろうな。だから最初に自己申告したろう」

ラミアが口にした『シェインの選択肢』に自主的に拷問死を付け足したことを示して言うと、ラミアの顔が歪んだ。まったくその通りだ。搾れる情報を搾り取って、息の根を止めておけば。

「レガード様は、お元気でおられるか」

階段を上がる。相変わらず人気はない。衛兵たちは階下に集中しているのだろうか。

「なぜ聞く？おぬしはレドリック殿下の手先だろう？」

「気にかかるのでな」

「ヴァルスの動向か」

あまり、レガードについて突っ込まれたくない。尤も、答えたくなければ答えなければ良いだけではあるが。
「それもそうだが……ロンバルトの危機に際して、姿を見せぬのが腑に落ちぬのでな」
「……」
痛いところを突かれる。さすが宮廷魔術師は自国の第2王子のことを良くご存知だ。自己の利益の為に他国に身柄を預ける後継者と違って、レガードの性格ならば誰が止めようが先頭に立って軍を率いておかしくない。どこにも姿がないのは、レガードを知る人にとってはいかにも不自然だった。
「こちらにはこちらの事情がある」
不機嫌に答えを濁すと、ラミアがふっと笑った。
「ほう……？その事情とやらの前にロンバルトがみすみす敗北していくのを、黙って眺めておられるレガード様だっただろうか」
「……何が言いたい？」
「手を下すまでもなく、レガード様はお亡くなりなのではないかと思ってな」
「……」
それに対する答えを、シェインは持っていない。シャインカルクからのレガード発見の報を、シェインはまだ受け取っていなかった。
「好きに受け取るが良いさ」
曖昧な回答で濁し、シェインは話を打ち切った。何にしても、シャインカルクと連絡を取る手段を考えなければならない。
5階へ上がったラミアは、やがてひとつの部屋の前で足を止めた。
シェインが低く囁く。
「おぬしの為に念を押しておいてやろう。扉を開いて衛兵の姿が見えた瞬間、おぬしは俺の同伴者となる」
「わかっている」
ラミアの答えは短い。その手が扉を開いた。下手に違う部屋などに連れて行って、それがわかった瞬間、刃が貫くことになりかねな

い。シェインは、追い込まれた鼠だ。躊躇いは見せないだろう。そう判断したラミアは、ともかくシェインに素直に従うことに決めていた。ロッドを返したところで、リミッターがある以上シェインは魔法を使えない。恐らくその解除を要求するだろうが、成立する前に衛兵が駆けつける。何とか隙を見つけて距離さえとれれば、逆転はある。

「さーて。女性の私室に押し入って不躾ではあるが、さっさと用事を済ませよう。……ロッドはどこだ」

悠長にしていられないことは、シェインだってわかっている。ラミアが黙っていようが、いずれ衛兵たちが異変に気づく。その前にロッドを取り返して、階を下がらなくてはならない。2階程度ならばともかくも、魔物や盗賊でもあるまいし、4階やら5階から脱出を図るのは不可能だ。

大人しくシェインに従ったラミアは、寝室へと足を向けた。部屋の更に奥にある部屋だ。寝台間際に確かに自身のロッドを見つけ、シェインはひとまず安堵をした。無駄な真似をしないでくれるのがありがたい。下手に動き回られるだけで、不調のシェインにとっては堪える。

「不満はないか」

「ないな。衛兵の汚い手に晒されなかったことに感謝をしよう」

言いながら、逡巡する。リミッターの解除を要求したいのはやまやまだ。だがそれが、ラミアに契機を与えることになりはしないか。このような状況に慣れているはずもない。判断に迷うシェインの耳に、階下からの慌ただしい物音が届いた。

「……」

「……私は何もしておらぬが」

「……わかっている」

タイムリミットだ。衛兵たちが、状況の異変に気がついた。

そう認識した瞬間、シェインはバスタード・ソードの柄をラミアのこめかみに叩き込んだ。

「うッ……」

短い呻きを上げ、ラミアの体が床に崩れる。

「悪いな。女性に手荒な真似をする趣味はないのだが」

こちらも進退窮まっている。

床に崩れたラミアを寝台に横たわらせ、ロッドをひっつかむと剣を構えて駆け出した。部屋を飛び出る。

ラミアを解放した理由は2つだ。人質を取っているとその分動きが鈍くなる。衛兵に囲まれるのは必定だ。その前に階下へたどりつきたい。加えて魔術師とあらば余計な気苦労が増す。

ついで、ロッドとバスタード・ソードを装備して尚且つ人質を取っていると、動きが不自由で仕方がない。人間の手は2本しかないのである。

どちらにしたって、無事に脱出出来る可能性がさほど残されているわけでもない。ラミアが意識を取り戻す頃に脱出出来ていなければ、死んでいる。囲まれれば腕の立つ剣士などではない自分など、どうにもならない。人質はもはや必要ない。

部屋を駆け出たシェインは、屋敷の配置を頭の中で確認して、今来たのと逆の方へ通路を駆け出した。明確に目的地がある。

シェインはもちろん、この屋敷のことなど知らない。だが、窓があれば多少なりとも情報を得ることが出来る。陽の昇る方角から察するに、屋敷は南を正面に建てられ、シェインがいた部屋は西側だ。僅かに見える建物の雰囲気からは裏手のようだったから、多分西北、屋敷の北には草木が深く茂る崖があり、東側の裏庭にちらりと見えるのは多分厩舎。得られた情報はそこまで――だが、馬を手に入れられれば、単身よりは遙かに脱出の可能性が跳ね上がる。

東側目指して階下へ降りて行ければ、2階、建物の配置によっては3階からの脱出は可能かもしれない。貴族の屋敷には階段が多い。シェインを追いつめるつもりなら衛兵はあちこちから迫って来るだろうが、逆に言えば小分けでばらばらと来ればこちらにしても突破口がある。

馬を手に入れたところで正面は門や塀で抜け出すことは不可能だろうが、厩舎の裏手に手入れの行き届いていない門塀らしき姿が垣間見えた。多分この屋敷そのものが普段使用されておらず、加えて裏手が崖であることから警戒が緩くなっている。さすがに人間が無理矢理突破するのはしんどかろうが、馬ほどの重量がかかれば、あるいは。

シェインが生きて脱出出来る、唯一の可能性だ。他に選択肢は、ない。

ともかくも馬を入手出来なければ話にならない。5階から4階へ抜ける階段を探して駆け抜ける。途中にあった階段は、下から複数の気配を感じたので見逃した。更に東へ駆けた先の階段から、難なく降りることに成功する。

このまま一気に駆け降りたい衝動に駆られるが、慌ただしい足音が迎え討つように上がってくるのを感じ、シェインは4階の通路を逸れた。どうやらこの建物はL字型になっている。どこかの通路から本館と繋がる別館なのかもしれない。

角を折れて見つけた先の階段から、衛兵が数人駆け上がって来るのが目に入った。やはり遭遇しないと言うわけにはいかないようだ。剣を構える。

階段における戦闘は、平地よりも優劣が明確に分かれる。高い位置にいる者が低い位置にいる者よりも有利であるのは、鉄則だ。衛兵たちが階段を上りきる前に、シェインは先頭の衛兵が掲げた剣を払って矛先を逸らした。次の瞬間に蹴りを叩き込み、それに巻き添えを食らって雪崩れる衛兵を尻目に階段の手すりに飛び乗る。

「げほッ……」

手すりを滑り降りて階段に着地した瞬間、胸が圧迫された。吐き出す咳にはまたも鮮血が混じっている。が、構ってなどいられない。このままではどちらにしても確実に死が待っているのだ。

（ユリア……）

降り立った3階の通路を、人の気配のしない方へと駆け出しなが

ら、ぐいっと手の甲で口元を拭った。愛する主の姿が脳裏を過ぎる。
ユリアを裏切ることは、ない。命を懸けてでも、己の持てる全てをユリアに捧げよう。その為には、何が何でも生きてヴァルスに帰ってやる。懸ける命はこんなところで失う為にあるのではない。
後方から、体勢を立て直したらしい足音が追って来るのが聞こえた。加えて前方からも慌しい金属音が聞こえてくる。
（終わったか……！？）
いや、手前に左へ逸れる通路がある。そこからも衛兵が来てしまえばもう終わりだが、幸いにしてこちら側からはまだ手が回って来ていないようだ。……と、駆ける通路の途中の開いたドアから衛兵が姿を現した。迷路でもあるまいし、どうなっているのだこの屋敷は。
突進して来るシェインに、衛兵が僅かに驚いたように身を引きながら剣を抜こうとする。それより先に、駆ける勢いのままバスタード・ソードを叩き込んだ。血飛沫が上がり崩れる傍らを、構わずに駆け抜けようとして、方向転換する。この通路はそのままコの字型に階段へと続いているようだ。見える吹き抜けの階下から、新たな衛兵が数人上がって来ようとしているのが見えた。後方はもちろん、衛兵が追って来ている。
たった今片付けた衛兵が現れた扉はどこに続いているのかわからないが、選択肢がない。崩れたままの衛兵を乗り越えて中に飛び込むと、薄暗い通路に続いていた。絨毯を敷き詰めたこれまでの廊下とはひどく雰囲気の異なる、埃っぽい、石畳の館だ。目の前は下に下りる階段、右手には先の見えない通路。
逡巡して、右手の通路を選択する。このまま階段を下りても、東側に辿り着けない。衛兵から逃げ回っている間に、少しずつ西側へと戻ってしまっている。屋敷の全体像から言えば、既にどの辺りに位置するのかが全く見当がつかなくなってきた。
（別館……）
駆けながら、思う。通路に灯りがついていないので、こちらはも

う本当に使用されていない雰囲気だ。だとすると少々都合が良くない。シェインのいた館から見えた厩舎とは、距離が開くような気がする。どこかで戻れれば良いのだが。

「どっちだ!?」

「そっちを探せ!!」

シェインを追っていた衛兵たちは、二手に分かれたようだ。暗い通路がシェインの背中を隠してくれたらしい。昼間ならまだ陽が多少なりとも射すのだろうが、今は夜である。頓(とみ)に暗い。とは言え、追われていることに変わりはない。

(どこか……部屋に……)

喉が、ヒューヒューと言う奇妙な音を上げる。肺で空気が漏れていると言うのに盛大に駆け回ってしまったのだから、状態は悪化していく一方だ。貴族の屋敷は広い。一度姿をくらましてしまえば、多少の猶予は出来るだろう。呼吸を整えなければ、このまま本当に呼吸困難になりかねない。

そう判断して、シェインはわけもわからず左手に現れた細い通路に飛び込んだ。続く先は行き止まり、右手に細い回廊状の階段が見える。必然的にそれを上る羽目になる。

(上に戻ってどうするッ……)

自分で自分に毒づきながらも、選択の余地がない。周囲の埃っぽさは増し、この建物は総じて物置のような扱いとなっているのだと理解した。恐らくは、外から見れば尖塔のようになっているのではないだろうか。塔に上ってどうする。いよいよ袋の鼠だ。

思いながらも、衛兵の気配が遠のいたことに気が緩んだ。道をそれたシェインに気づかずに直進していったのだろう。ついでに階段を駆け上がる速度が落ちる。上がりきったところは、左右に続く細い通路だった。窓のない剥き出しの、腰の辺りまでの高さしかない壁。見上げると、円錐形に尖った屋根の下には微かに鐘が見えた。

(鐘台か……)

思いながら、そのまま通路に崩れる。吐き出す咳から鮮血が飛び

散った。漏れる空気に圧迫されていく胸を押さえながら、強く目を閉じる。

喉の奥が、谷間を抜ける風のような奇妙な音を立てていた。口の中が、錆びた鉄のような味がする。脱出出来るような気が、しない。……もうこのまま、出来ないかもしれない。

（馬鹿な……）

目を閉じたまま、ころんと仰向けに転がった。ともかくも、静かに呼吸が落ち着くのを待つ。庭の方から衛兵たちの怒声が、風に乗って流れてきた。

「どこに行った！？」

「どこかにいるはずだ！！探し足りないんじゃないのか！？」

その通りだ。まだこうして屋敷の中に俺はいる。

皮肉な返答を心の中で返しながら、ゆっくりと体を起こした。痛む胸を押さえながら、立ち上がる。壁の隙間からそっと下を覗くと、松明を片手に彷徨う衛兵たちの姿が見えた。篝火（かがりび）も焚いているので、良くも悪くもそこそこ視力を保つことが出来る。『お庭担当』だ。分厚い壁と背後の崖を信じてか、庭の衛兵はさほど数が多くはない。いや、総数そのものが、それほど多くないのだろうか。その辺りは判断がつきかねるが、庭には屋敷内で遭遇した衛兵にはいなかった弓箭兵の姿が見えた。

馬を手に入れることが出来たとしても、射かけられたら苦しいところだ。乗馬の技術はそこそこあると思うが、何せ的がでかい。

「ヴァルスへ……」

もう一度、呼吸を落ち着かせてから再び気を奮い立たせる。何としてでも、ヴァルスへ。――ユリアのそばへ。

「さぁて……ここは、どこなのだろうな……」

最初に自分が監禁されていた部屋から考えると。

小さくひとりごちて、再度壁の隙間から外を覗き見る。

見える庭は、闇に浮かぶ範囲でも手入れが行き届いている。煉瓦を敷き詰めた通路はアーチをくぐり、聳（そび）える正門に続いていた。シ

ェインのいる位置からは、左手に見える。つまり現在シェインがいる位置は、屋敷の南東……厩舎は、この裏手だ。

（とすれば、こちらかな）

赤い瞳が、右に続く通路を捉えた。左手は細いながらも先に続き、行き当たって更に左に折れている。シェインが進路に定めた右手は、ほんの数エレ先で下り階段に続いていた。定めて歩きかけたシェインの耳に、一度は遠のいた甲冑の音がまだ遠く、届いた。聞こえてくるのは左の先からだ。

（どちらにしても選択肢はないらしい……）

どうやらこの建物にも捜索の手が及び始めた。姿を見られる前に、階段を駆け下り始める。後方の声はみるみる遠ざかり、どこまで続くのか先ほどより長く感じる距離を駆け下りるシェインの前方から、足音が聞こえた。

「こんなところにいたのかッ」

「ちッ……」

舌打ちと共に、迎え撃つ。人ひとり程度の幅の急な階段だ。何人いようが、相手取るのは常にひとり。ただし、後方から追いつかれればもう退路はどこにもない。

「ごふッ……」

先頭の男の喉を貫き、鮮血の噴水を喉から上げながら倒れるその後ろから、新たな衛兵が剣を突き出す。それを払って蹴り飛ばし、よろけたところで止めを刺しながら、最初の男の剣を取り上げた。痛む胸に、脂汗が首筋を湿らせる。

こちらに詰め掛けていた5人を片付けた頃、上から足音が降りてきた。追いつかれてはたまらない。シェインが衛兵たちに対して有利に立てたのと同じ理由で、今度はシェインが不利となる。

第3部第1章第4話　脱出（2）

倒れたままの男たちを乗り越えて階段を駆け下りると、階段が途切れて直進する細い通路と左手に折れる通路に出た。左手は、2エレほどの短い橋のように吹き抜けて、その先が小さなロビーのように少しだけ広い空間になっている。橋から下を覗き込んでみると高さはなく、石畳のスペースが下に広がっていた。枯れ草などが雑に積まれ、床にも草が散らばっている。そしてこの階と同じ方向に通路が伸びているのが見えた。鼻につく匂い……嘶き（いなな）。

下りてくる足音に押され、橋の柵を乗り越える。着地して顔を上げると、視線の少し先に、壁を抉るようにした大きな横穴が見えた。そして、柵。4つあいたうちの2つには、馬が小さな嘶きを上げながら、繋がれている。

（そうか……）

外出する為に、一時的に馬を繋ぎとめておく為のスペースだ。厩舎からこちらへ外出に使用する馬を移動させ、体を拭いたり鞍を取り付けたりする。恐らくラミアは、外出する予定でいたのだろう。では、この馬は出かける準備が万端だ。

「すまないが、付き合ってくれ」

言いながら、柵を開けて馬を出す。階段を下りてきた足音が、シェインの姿を目に留めた。橋の上から覗き込んで怒声を上げる。

「貴様ッ待てッ」

「逃げられると思うのか！？」

待てと言われて待つものか。構わずに引き出した馬に飛び乗りながら、お決まりのセリフに失笑した。

「やってみなけりゃわからんなッ」

こんなところで馬が手に入るとは思わなかった。後はもう無理矢理、裏庭の壁を強行突破するしか手段がない。

（死ぬな……）

心の中で、半ば、覚悟を決める。
これだけの衛兵を相手にここまで辿り着けただけでも、強運だ。
ここからはもう、本当に運任せにするしかない。
足踏みしていても仕方がないのだから、行くしかない。
（ユリア……）
胸の奥に最愛の主の笑顔を抱きながら、シェインは死の覚悟を固めて馬場を飛び出した。

◆◇◆

「本当にこちらなんだろうな」
既に日が落ちきった道を、２つの影がゆっくりと進んでいく。ひとりは女性――それも、まだ少女と言えそうな若さだ。それに従うように歩く男は恐らく２０代中ほどだろう。
「あの老爺の言葉が正しければそのようになるが、それ以上は私にはわからないな」
どちらかと言えば独り言に近かった少女のセリフに生真面目に返す男の言葉遣いは、どこか品がある。対する少女も、言葉遣いこそ雑なものの、凛とした気品のある横顔に苦渋を浮かべた。長い山吹色の髪をぱさりと払って、栗色の瞳で星が瞬き始めた夜空を睨み上げる。
「諦めて、野営をするか……」
「この辺りでの野営は、危険だな」
「じゃあこのまま彷徨うのか、エディ」
少女にエディと呼ばれた若者は、考えるように沈黙した。さらさらの品の良い淡い金髪を微かな風が撫ぜていく。男が手にしたカンテラの灯りが、モスグリーンの瞳にちらちらと滲んだ。
「もう少し、進んでみよう。この時間ならばまだ、いくら農村でも眠りにつくには早い。ソフィアだって、魔物の心配をせずに眠りたいだろう？」

エディの言葉に、ソフィアは小さく唸った。それはその通りだ。しばらく海風に晒されて水浴びもしていないので、肌がべたべたするのも気持ちが悪い。

エディが野営を嫌がるのには、理由があった。そろそろ、ロドリス王国の王都付近に差し掛かっている。戦時中である今、いろいろと警戒が厳しいゆえに、余計なことに巻き込まれるのは御免だ。王都に近寄るつもりはないけれど、目指している方向が王都を越えて東側にあたるので、どうしても近辺を通過しないわけには行かない。特に現在、村があると聞いたのでそちらを目指して僅かに東南に進路を採っている。いよいよ王都の方向である。

「それに、私たちはロドリス軍などに誰何（すいか）でもされると少々面倒なのは、わかっているだろう」

「ただの旅人だ。文句はあるまい」

「戦時中はそれでは通じないことも多々ある」

あっさり斬り捨てるエディの言葉に、ソフィアは小さく唸りながらも押し黙った。その通りなのだから反論出来ない。仕方なくエディの言葉に従ってもうしばらく歩いてみることにしながら、黙々と隣を歩くエディの横顔に視線を投げかけた。

何者なのかは、ソフィアもわからない。何せ、本人が自分が何者なのかわからないと言うのだから、わかりようがない。

ただ、『追っ手』に追われるソフィアを助けてくれた。記憶がないと言う男は今後の行動の目的も特にないらしく、なし崩しに一緒に行動をする羽目になっているが、その間にどこか生真面目な気質に触れるに従って、ソフィアも彼を信用し始めている。恐らく本当に、記憶もなければ行動方針もないのだろう。

名前も、もちろんわからない。しかし共に行動をするのであれば、名前がなければ呼びにくいことこの上ない。その、どこか貴族めいた容姿や立ち居振る舞いからエドアードとつけてやったのはソフィアである。

ソフィアの勘では、エディは間違いなくどこかの貴族階級だ。た

だし、本人が記憶を失った経緯さえわかっていないのだから、それ以上わかりようがない。

頭は良さそうだった。運動能力も悪くはない。ただ、どちらかと言えばブレーン気質とでも言うのか、剣を振るうよりは物事を思慮するタイプのようである。悲しいかな、剣の腕はソフィアの方が上のようだ。けれどソフィアは物事を短絡的に考える癖がある。自分の代わりにいろいろと考えてくれるエディがそばにいるのは、心強い。

まだ、旅の本当の目的をエディに話してはいないけれど、遠くないうちに真実を話し、協力をしてもらえれば尚良いと考え始めている。

「もう少し進んでみて、もし村がないようだったら……一度、戻った方が賢明だろうね」

「戻る!?どこまで!!」

「夕刻に分岐路に出ただろう。どうせ野営をするなら、あそこまで戻って北の道に向かった方が良い」

「ああ、そうか……」

戻るのは時間の無駄と言う気がして嫌なのだが、確かにエディが危惧するように、ロドリス兵は素行が余りよろしくなさそうだ。国内だから一般国民に手荒な真似はしないだろうが、ソフィアにしてもエディにしても、ロドリス国民でないことは言葉で知れる。

言語は、帝国アルトガーデン共通であるヴァルス語が最も普及している言葉であるが、大きく言って、それ以外に3ヶ国語が存在する。

ひとつは、ロドリス語だ。これは、ロドリスはもちろんバート南部、そしてナタリアで使われている。

次いで、リトリア語。リトリアとモナ、バートの北部が使用する言葉だ。

そしてキルギスは独特の民族なので独自のテュルク語をしゃべる。余談だがロンバルトは、ヴァルスと同じくヴァルス語だ。

ソフィアとエディがしゃべることが出来るのは、ヴァルス語とリトリア語である。……いや、エディはどうやらロドリス語も話すことが出来るようだが、母国語としない者の発音をする。そこから察するに、エディはリトリアかモナ、バートのいずれかの出身だと分かる。

ともかくも、明らかに他国民である2人に対して、ロドリス兵が自国民と同じ扱いをしてくれるとは考えにくい。それを考えれば、やはり軍隊とは遭遇しないに限る。

つらつらとそんなことを考えながら辺りの風景に何気なく目をやると、開けていた右手が次第に木々に覆われていくのに気がついた。小さな山のようになっていると言うか、森のようになっていく。

「エディ」

「何だ？」

「森の中だったら、大丈夫なんじゃないかな……」

「ああ。今度は魔物の出現が気にかかるところだな……」

「魔物だったらわたしが……」

言いかけて、言葉を飲み込んだ。どこかから喧騒が聞こえてくる。

「……何？」

「さあ」

まだ少し先――それも、頭上の方から聞こえてくるようだ。複数の人間の声、物音、甲冑の音……？

「何の騒ぎだろう」

眉を顰めながらも、とりあえずは足を進める。音の出所を気にしながら頭上を振り仰いでいると、右手の森の中、それも崖のように高い位置に、微かに屋敷らしきものがあるのが見えた。誰か貴族の別荘か何かだろう。それは別に良いのだが、どうやら騒ぎはそこから漏れ聞こえてきているようである。

「……何か、あったのかな」

「何かあったんだろうな」

あっさりしたエディの返事に唇を尖らせながら、ソフィアは屋敷

を見上げて足を止めた。
次の瞬間だった。
ギギギィ……ガシャーーンッッッ。
「何!?」
盛大な物音が耳を劈く。まるで大きな何かが破壊されたような激しい音、それに続いて馬の悲痛な雄叫び。重なるように怒号と何かが墜落してくるような木々のざわめき。一斉に飛び立つ、鳥たち。
ズシーンッ……ガンッ、ガンッ……ガシャーンッ……。
地鳴りのような音が響き、やがて静かになった。頭上の騒ぎは相変わらずだ。思わずソフィアとエディは顔を見合わせた。
「……行ってみよう」
「ソフィア」
「だって」
エディの阻止も顧みずに、ソフィアは物音のした方向へ足を向けた。屋敷の方ではない。屋敷から何かが墜落してきた、その方向である。
がさがさと、森の中を木々を分け入っていく。意外と距離があったらしく、目的の場所にはなかなか辿り着けなかった。道がないのも、遅々として進まない理由である。
「確かに、何かが、落ちたよね……?」
「多分な」
「何が……?」
落ちたのは、大きなものだ。
どんどん奥へ進んでいくソフィアに、仕方なくエディも続く。面倒なことに首を突っ込みたくないと言っているのに、人の話を聞いていない娘だ。
「あッ……」
「何かあったか?」
「エディ、カンテラの灯りを貸して」
言われるままにカンテラを差し出すと、ソフィアはそれを受け取

って少し先の地面へ掲げるように照らした。
「何だこれは」
「柵……？」
残骸と成り果ててはいるが、どうやら元は壁だの柵だのと言った種類ものだっただろうと言う気がするガラクタが、山となって木々を押し潰している。見上げる木々の隙間からは、屋敷の方の様子は良く見えない。
「……あッ」
眉を顰めて屋敷の方を眺めるエディの前で、ソフィアが小さな声を上げた。視線を向けると、明かりの先にはガラクタとは異なる類の落下物が目に入った。馬の遺体だ。上から転落してきたせいか、見るも無残な有様である。
「……行こう、ソフィア」
「うん……」
目を叛けながらソフィアを促して、踵を返しかける。ふとその視界の隅で、見落としていたらしい何かがちらりと映った。
（……？）
気になって、もう一度顔を向ける。……大振りの木の上に、何かが引っ掛かっている。
「……ソフィア」
「え？」
「灯りを……」
「え、あ、はい」
視線をそちらに定めたままカンテラを要求し、受け取った灯りを高く掲げた。暗闇の中に目を凝らす。
「人だ」
「え、人？」
エディの言葉に、ソフィアが顔を跳ね上げた。乗り出すように闇に目を凝らし、息を飲む。
「本当だ」

「……どうするつもりだ」
「助けるに決まっている」
「死んでるだろう？」
「近付いてみなけりゃわかんないよ。……馬と一緒になって落ちてきたんだったら、馬が緩衝材になって助かったかもしれない」
面倒なものを見つけてしまった。上の屋敷の連中に追われたらどうする、と言う言葉を飲み込み、仕方なくソフィアに続く。構わずソフィアは、まるで猿のように身軽に木の上へと上がっていった。ぎりぎり、としか言えない状態で枝葉に引っ掛かっている姿を見て、ぞっとする。僅かにずれたら、あの馬と同じ運命だっただろう。
若い男だった。燃えるような赤い髪に、葉がいくつも絡まっている。端正と言える顔には無数の傷がつき、良くみれば左の腕を矢が貫いていた。胸は血に染まり、口元にも血が滲んでいる。いや……腰の辺りにも、切りつけられたような怪我が。
「ソフィア。どうだ」
エディが下から急かすように問う。何かあったのは間違いないだろうから、屋敷の連中がこの男の捜索に下りてくることを懸念しているのだろう。それはわかる。ソフィアとて、妙な連中に巻き込まれたくないのは確かだ。
手早く男の生死を確認しようと、口元に耳を近づけた。そっと目を見開いて、息を飲む。
「生きてる……」
ソフィアの耳に、確かに男の呼気が僅かに聞こえた。儚く、今にも途切れそうに、けれど、確かに。
「エディ、生きてる」
状況を考えれば信じ難いことに、男――シェインは確かに、辛うじて生命を繋ぎとめていた。

第3部第1章第5話　急転（1）

見下ろすユリアの視界の中、静かな表情のままでレガードが小さく呼吸を繰り返している。

何度見ても、泣きたくなる。生きているのが、嬉しくて。意識が戻らないのが……悲しくて。

意識不明の状態でギャヴァンの盗賊ギルドに保護されていたと言うレガードは、現在その身柄をレオノーラの大神殿に移されていた。ガーネット――ラウバルがシュリヴィドル尊師と呼んだ人物に替わって、大司祭ガウナがレガードを何者かから保護している。

意識は、戻らない。黒衣の魔術師から受けた魔法が、レガードの全身を未だ苛んでいる。いかに強力な魔術師であろうと、ガーネットの使う言霊魔法では回復させる手立てがなかった。根本的に種類が違う。浄化をすることが出来るのは、プリーストの上級魔法だ。

けれど、数ヶ月に渡って体の奥深くまで侵食した悪しき波動は、ガウナの浄化をもってしても回復しきれなかった。残るは大教皇だが、現在戦時中――中立であるエルファーラは、いかにヴァルスと言えど特殊な恩恵を施すことが出来ない。かつての国間条約でそう定められている。大教皇の施しに縋る誰もと同じように、申請をし、受理されるのを待たなければならない。

「レガード」

大神殿の一室にあてられたレガードの部屋で、ユリアは執務の間を縫ってひと時の面会に訪れていた。寝台の隣に設えられた椅子に腰を下ろし、その顔を覗き込む。

「……情けないわ、わたし」

意識はなくとも、聞いてくれているような気がする。クレメンスの代わりに、レガードの代わりに、ヴァルスを背負って立たなければならない今……そして、シェインがいない今、ユリアは弱音を口にすることが出来る相手がいない。レイアは聞いてはくれるだろう

が、やはり口にしてはいけないような気がする。
レガードにだけ、こうして弱音を吐くことが許されるような気がする。
「あなたの祖国を、守ることが出来なかった」
ロンバルトは、連合軍の前に陥落した。王都は現在連合軍の占領下にあり、レガードの父は戦死、母は生死がわからない。
「ヴァルスも……」
その続きは、恐ろしくて口にすることが出来なかった。続いてヴァルスも陥落――そんなことがあってはならない。
「どうしたら、いいの？」
形勢を逆転すべく、シャインカルクは連日重鎮たちとの会議を繰り広げている。だが、かつてシェインがぼやいていたように、シャインカルクの要人たちは腰が重い。口にする意見は保守的なものばかりで、参考にならない。そもそも、ロンバルトは彼らにとっては、所詮他国なのだ。誰も不利益をまだ蒙っていない。自らに災難が降りかかってこなければ、老い寂れた柱は崩れそうになっていることに気がつかない。
……いや、それはさすがに穿った考えだろう。そうは思う。思うが、ならばどうして建設的な意見が何ひとつ出てこない。ロンバルトを切り分けることで譲歩するだの、モナをロドリスとリトリアにくれてやるだの、譲歩案ばかりでしかもそのどれもが現実的とは思えない。
連合軍の目的は、ヴァルスの陥落だ。それをユリアは肌で感じている。
ラウバルもいろいろ考えてはいるのだろうが、まだ不甲斐ない自分の代わりに執り行わなければならない執務が多過ぎる。国王も宮廷魔術師もおらぬ今、采配を行えるのがラウバルしかいないのだ。無理もない。手が回るわけがない。
だからこそ、自分がしっかり立たなければならないのだとわかっている。だが、頭でわかっていても、実際にどう振舞うべきなのか

がまだわからない。
――どうして、ヴァルスは窮地に陥っているのかを、考えてごらん。
ユリア……
レガードの声が聞こえた気がする。もう随分と耳にしていないその優しい声を反芻し、ユリアはその問いに対する答えを探した。
「それは……ロンバルトが陥落してしまって……ヴァルスは、孤立無援だわ」
――本当に？
無言で、レガードの顔を見つめる。――『本当に？』？
「だって……味方は、いないわ」
――良く、考えてごらん。味方をしてくれる国は、本当に、どこにもないのかい……？
レガードの声に、帝国内の国を見回す。
ロドリスは考える余地がない。ナタリア、バートも、実際にヴァルス・ロンバルト軍と戦を交えている。リトリアもロドリスと組んだと聞いたし、モナは主がいない。援軍を要求してはいるが、大体にして対ヴァルス戦でモナは絶対的に兵力不足なのだ。送れる人材が整っていない。残るはキルギスだが……。
「でも、キルギスは、使者を送っているわ。何度も送っているわ。それでも答えてくれないんだもの」
――ユリアは、頭が固いな。もっと柔軟に考えた方が良い。
レガードの言葉の意味をもっと考えようとした時、扉が開いた。
振り返ると、レイアがこちらを覗き込んでいた。
「……お邪魔しちゃった？」
「レイア。……いいえ。そんなことないわ。どうしたの？」
「ううん。ユリア様が、喜ぶんじゃないかと思って」
「え？」
くすり、とレイアがいたずらめいた笑みを浮かべる。
「国外どころか、帝国外……ラグフォレストまで行っていたカズキたちが、帰ってきたわよ」

「……え！！」

思いがけないレイアの言葉に、ユリアは思わず叫びながら立ち上がった。カズキたちが……。

（――！！）

胸に湧き上がった歓喜に翻弄されかけたユリアの意識を、先ほどのレガードとの『対話』が引き止めた。……今、何かが、引っ掛かった。

「……ユリア様？」

「……」

――味方をしてくれる国は、本当に、どこにもないのかい……？

――国外どころか、帝国外……

「そんなこと、ないわ……」

立ち竦んで目を見開いたまま、閃光のように脳裏に走った考えに、ユリアは息を飲んでその身を翻した。

……逆転の可能性は、ゼロではない。

◆◇◆

一方、シサーたち帰城の報に、ラウバルもまたシャインカルク城内を小走りに移動していた。ひとつ仕事を片付けていたせいで、少々待たせてしまっている。

残りの雑務を秘書官に押し付けて応接室に入ると、どこか緊張感のない面々が一斉にラウバルに視線を向けた。足早に、席へ向かう。

「待たせたな。すまない」

「こっちは別に構わんが。……相変わらず、シェインはいないのか」

礼儀も何もあったものではない。テーブルに頬杖をついたまま、一国の宰相にシサーが問う。立ち上がったのは、辛うじて貴族根性がなくもないキグナスだけだ。今更こちらも期待してはいないので、別にどうでも良いのだが。

「シェインは、いない」

消息不明であることを告げるべきか、迷う。特にキグナスは血筋なのだから、このままであれば遅かれ早かれ告げねばなるまい。そうは思うが、まだ時期尚早と判断し、結局言葉を飲み込む。

ラウバルが席に着くと、キグナスも再び腰を落ち着けた。女官がそれぞれに茶を配り終えると、彼女を退室させてシサーと向かい合う。

「どうした」

「経過報告と、あんたの判断を仰ぎたい。……ファリマ・ドビトークのドワーフが、黒衣の魔術師の行方について口を割った」

「どこだ」

「奴の行き先は、ヘルザードだそうだ」

「ヘルザード!?」

思わずオウム返しに聞き返す。ラウバルの中で、バルザックの行動が繋がっていく。

執拗にストーム・ブリンガーを狙うのは、そこに目的があったのか。

ギャヴァンを襲った黒竜グロダール。

グロダールの竜珠を仕込んだロッド。

国を追われたクレメンスの兄アウグスト。

持ち主に生命を取り込む魔剣。

……ロドリスと手を組んだ、黒衣の魔術師。

音を立てて嵌めこまれていくパズルのピースにラウバルが息を飲む目の前で、テーブルに頬杖をついたままのシサーが口を開いた。

「あのじじぃをとっ捕まえなけりゃ、『王家の塔』と戴冠は一向に進みやしないだろう。ヘルザードまで行きたいのは山々なんだが、現在ギャヴァン沖の航行は……」

「禁止されている」

そうか……ヘルザードに渡るには、当たり前だが船が必要だ。だが、今ヴァルスの港はどこも封鎖されている。ごくごく内海を航行する漁船だけが小さな港から出入りできるだけだ。ヘルザードに渡

れるような設備の整った船が出港出来る港は限られているし、そもそもヘルザードへの航路が取れない。

「だろ？……どうする？」

シサーの問いに、ラウバルはしばし沈黙して考えを巡らせた。

バルザックを何とかしなければ戴冠が出来ないのは、確かである。だが、シサーたちがヘルザードに渡ってどうなる。いずれにしてもバルザックは、ヴァルスに姿を現す。ラウバルにとって目的が明確に見えた今、それは必ずだ。ヘルザードでバルザックの満足する結果が得られるわけではない。バルザックには、どうしてもストーム・ブリンガーが必要のはずだ。そしてそれも、これまでのように悠長ではないだろう。ロドリスと組んだ理由も、今ならば大方予想がつく。

であれば、ことはこちらの問題となってくる。シェインではなくラウバルがシャインカルクに残った理由である。そう決めた時には詳細が繋がってはいなかったが、何やら暗躍している以上バルザックがストーム・ブリンガーを狙ってくるだろうことが予想されたからこそ、ラウバルはシャインカルクに残ることに決めた。シェインもそれは同意の上だ。

ともかくも、そうであるならばもはやシサーたちの手は必要ないだろうか。レガードの身柄がこちらに戻っているのだから、特にカズキは解放してやっても良いのではないか……。

（いや、そうか……）

シェインが、いない。

カズキをこちらの世界に引きずり込んだシェインがいない以上、カズキを元の世界に帰してやれる手段がない。

「……」

「ラウバル？」

黙りこんだラウバルに、シサーが痺れを切らしたように問いかける。言葉を選んで迷いながら口を開きかけたラウバルの耳に、慌しい足音が聞こえた。やがて足音が扉の前で止まる。

「入りますよ」
ユリアの声だ。開く扉に、ラウバルは思わず立ち上がった。
「ユリア様」
「久しぶりですね。シサー。……ニーナ、キグナス……カズキ。ご苦労です」
先ほどとは違い、がたんと4人が一斉に立ち上がる。それに微笑を残して、ユリアはラウバルに向き直った。ユリアは少しずつ、君主らしい威厳を身につけ始めている。
「相談があります、ラウバル」
「……今、ですか」
「ええ。出来ればカズ……シサーたちにも協力していただきたいのです。まとめて話を聞いてもらえば、無駄がないでしょう」
「は……しかし……」
「その前に、シサーたちが今後どう動いていくのか、現状どうなっているのか、教えていただけますか」
何やらユリアが突拍子もないことを言い出すのではないかと内心はらはらしながら、ラウバルは状況を簡単に説明した。彼らがバルザックの行方に関する情報を掴む為にラグフォレストに渡ったことまでは、ユリアも知っている。黒衣の魔術師がヘルザードに姿を消したらしいと言うことを聞いて、ユリアは目を丸くした。
「ヘルザード……？何の為に……」
答える者は、いない。
その沈黙に、バルザックを追う面々に視線を走らせたラウバルは、彼らが何かを知っているらしいことに気がついた。特にカズキが、今までにない険のある眼差しを向けている。だが、口に出しては何も言わない。ラウバルも深く触れることはせずに、顔を横に振った。
「そこまでは、何とも」
「そうですか……」
ユリアが考えるような目つきをして、4人を見回した。それから、ラウバルに視線を戻す。

「では、シサーたちはヘルザードに渡ることになるのですか」
「そのことですが……」
任を解いてやっても良いのではないか、と言う考えをどう伝えるべきか迷いながら、口を開く。
「現在、ギャヴァン沖に魔物が棲息中の為、航行することが出来ません。ゆえに、彼らをヘルザードに渡らせるわけにはいかない」
「ああ、そうでしたね」
「ですから……」
「では、黒衣の魔術師の追跡は、一旦保留、と言うことになりますね？」
続けようとしたラウバルの言葉を遮るように、ユリアが言った。心なしか、その顔が生き生きとしているような気がする。嫌な予感がする。
「……まあ、そう、ですね」
だが言っていることはその通りなので、渋々頷くラウバルに、ユリアは満足げに頷いた。どうやらここに駆け込んできた理由――シサーらに協力して欲しいと言うユリアの考えにそぐう展開のようだ。益々嫌な予感が高まる。
「では、当面シサーたちにお願いすることがあるわけではありませんね？」
「……は、それは、まあ……」
「では、わたくしの方からお願いがあります」
何を口にするつもりだ。
ラウバルは思わず身構えた。構わずにユリアが意気揚々と口を開いた。
「シサーたちには、わたくしを守ってツェンカーに向かってもらいます」
「ユリア様！？」
「何い！？」
「ユリア！？」

ラウバルの驚愕の叫びと、シサー、ニーナが叫ぶ声が重なる。思わず、ユリアを除く全員がテーブルから愕然と立ち上がっていた。

「ユリア様……ツェンカーって……どういう……」

「今から、説明します。ともかくも椅子にお掛けなさい」

第3部第1章第5話　急転（2）

厳かに言うユリアに、全員が唖然としたまま再び椅子に腰を下ろした。それを見回して、ユリアが静かに口を開いた。
「シサーたちは、現在ヴァルスがどういう状況に置かれているかをご存知ですか」
「や……良くは……知らねぇけど……」
「盟友であったロンバルトは、連合軍の前に倒れました。ヴァルスは今、孤立無援です。見回す周囲は、敵ばかりです」
「……」
沈黙が訪れる。やがてぽつんとカズキが口を開いた。
「……キルギスは」
「使者に対する答えがない。彼らは恐らく、どちら側にも参戦する意志がない」
ラウバルの答えに、カズキは微かに眉を顰めて黙り込んだ。それから、ユリアに続きを促すように視線を戻す。
「その通りです。帝国内に、救援を求めることは現状、出来ません。……ですから、帝国外に救援を求めます」
「しかし……」
「ツェンカーは、史上に名を残すほどの重装歩兵を保持している。……ですね？ラウバル」
「それは、そうですが」
「しかも常々、ワインバーガとの紛争が絶えません。常日頃から鍛えられています」
「……どうしてツェンカーなんですか」
ぽつっとカズキがまたも口を開いた。頭の中に地図を描いているのだろう。異世界の少年の為に、ラウバルは席を立って地図を取り出した。テーブルに広げる。
「あ、すみません……」

短い謝礼を口にして、カズキは地図を覗き込んだ。
「マカロフは、手を借りることによって帝国に侵食してくる可能性があります。帝国の今後を考えれば、救援を求めることは出来ません。危険過ぎます。ワインバーガは、帝国の紛争には手を貸さないでしょう。理由がありません」
「じゃあ、ツェンカーは……」
「ツェンカーは、ナタリアに対する警戒があります」
ユリアは立ち上がって、指先で地図を辿った。ツェンカーとナタリアは国境を接している。勢力拡大を狙って、ナタリアは時折ツェンカーに牙をむく。
「手を貸せばナタリアから１０年間の不可侵を約束させるとすれば、協力を期待することは出来ます。期限を区切ればツェンカーにとっても現実味があって信用出来ましょうし、こちらもナタリアを押さえ込んでおくのが可能ですからね。……ツェンカーは、政権交代があったばかりです。政情を安定させる為に、自分の政権下においてナタリアの不可侵が約束されていれば、警戒しなくてはならない国が減ります」
永久不可侵など、約束させるのは不可能だ。それはツェンカーとて理解出来るだろう。だが、１０年という区切りは確かに現実味がある。無期限であれば無視しかねないナタリアも、有限であるとなればナタリア自身が１０年くらいならば黙っているだろうし、ヴァルスが押さえ込むことも可能である。
「何より、ツェンカーの戦力は、有望です」
ユリアの言葉に、ラウバルは唸った。まさか帝国外の国を持ってくるとは思わなかった。視野が狭くなっていたらしい。ツェンカーの戦力が力を貸してくれれば、状況に変化があるかもしれない。少なくとも、リトリアとナタリアを引き付けておくことが可能になる。
それは、わかった。
しかし。
「では、誰か人を……」

「わたくしが、救援を求めます」
「ユリア様！！」
強く言い切ったユリアに、ラウバルはまたも立ち上がっていた。
戦禍渦巻くローレシアを、ユリア直々縦断させるなどとんでもないことだ。だが、ユリアは怯まない目でラウバルを見据えた。
「ラウバル。聞いて下さい」
「そのような我侭を認めるわけには参りません」
「我侭では、ありません」
確固とした意志があるらしい。ラウバルのセリフを、ユリアはきっぱりと、だが静かに否定した。
「考えてもごらんなさい。現在戦を構えている各国は、そのほとんどが国の主が自ら軍を率いて戦地に赴いています。ギャヴァンを襲撃したモナ、ナタリア、バート、そして……ロンバルト」
「それは……」
「リトリアはまだ参戦していませんが、間もなくでしょう。武王と呼ばれるクラスフェルド王が戦陣に出ないわけはありません。残すは、ロドリスとヴァルスのみです」
「……」
「わたくしは、女ですから、戦陣に立つことは出来ません。ですが、各国の王が自らを危地に曝して戦っていると言うのに、帝国の第一人者として君臨するヴァルスの主が安全な場所に引きこもっていて、誰が信頼出来ますか」
「……」
「特にツェンカーは、独立自治領です。自らを自らで支え、立つ国です。その国に協力をお願いするのに、安全な場所から人をやって指示をするようでは同意を得られるとは思いません」
毅然と意志を語るユリアに、ラウバルは言葉を見つけることが出来なかった。いつの間に、このような政治力を身につけたのだろうか。
「戴冠はしていませんが、わたくしはクレメンス陛下の娘です。わ

たくしがヴァルスを守らなければならないのです。ならばわたくしが頭を下げないでどうするのですか」

「……ユリア様……」

「わたくしに万が一のことがあっても、レガード様がおられます。いずれは大教皇のお力添えで、必ず目覚める日が来ることでしょう。わたくしが、ツェンカーの援軍を連れてきます。ラウバル、あなたがレガード様と共に、ヴァルスを守っていて下さい」

返す言葉が、ない。

何より強い決意が、ラウバルの反論を奪った。今のユリアの意見を潰すことは、彼女の国主としての自覚さえも奪うことになりかねない。

「今は、ひとりの兵でも惜しい状況です。従者は、必要ありません。少人数の方が移動も目に付かないし、シサーたちとは以前にも旅をしています。……守ってくれますね？」

「あ、はあ……それは、そりゃまあ……」

唖然としているせいか、何だか頼りない返事を返すシサーにくすりと笑って、ユリアはラウバルに告げた。

「反対意見は、受け入れません。命令です。……良いですね、ラウバル」

「……はい」

そう言われては頷くしかない。大体、たおやかに見えて強情なのだ、この王女様は。それは知っている。だが、それだけではない……ヴァルスを守りたいと言う強い意志がラウバルを圧倒して、言葉を飲み込むことしか出来なかった。

「今日の会議で、正式に大臣に通達します。出発は、明後日。シサーたちは、その間体を休めてください。わたくしは準備に取り掛かります。ラウバル、大臣たちに召集をかけて下さい」

「……わかりました」

「では、わたしはこれで退室します」

言い残してユリアが退室すると、ラウバルは深いため息と共にテ

ーブルに肘をついた。
　ユリアの言葉に、間違いがないだけに止めようがない。
　自分だけ安全なところにいる主など、誰が信用する。それはその通りだ。自ら危地に赴いて国を守る為に戦ってこそ、兵は我もと従うのである。だが女性であるユリアに、戦陣に立って皆を率いることは出来ない。ならば出来ることはと考えたのだろう。自ら援軍を求めて頭を下げれば、ツェンカーだって考えるに決まっている。頭上から指図する人間に従うはずもないと言うことも、また。
「随分、君主らしくなったんじゃねぇか？」
　頭の上からシサーが評するのが聞こえた。そう、ラウバルもまたそう感じているからこそ、反対など出来るわけがない。
「……ユリア様の身柄を、預ける」
「いいのか？」
「いいも何も、ご本人がああおっしゃるのだから、そうするしかないだろう」
　後は、シサーたちを頼みにするしかない。実際、ご大層な従者をつければ却って人目につくだろうことはわかっているのだ。このような時勢であらばこそ尚更、少人数の――それも、旅慣れた冒険者であるシサーたちの方が、あらゆる意味で頼りになるだろうことも。
「ともかくも、部屋を用意させよう。詳細についてはまた、明日時間を設けよう」
「りょおーかい」
「では、私も職務があるので失礼する」
　ぐらぐらする頭を抱えたまま、ラウバルは足早に応接室を出た。人目につかぬよう、ユリアの旅の準備を整えさせ、同時に大臣に召集をかけて会議にかけなければならない。考えをまとめながら通路を歩き出したラウバルの背中に、思いがけない声が飛んだ。
「あのッ……」
　誰のものかを認識して、目を丸くしながら顔を上げる。振り返ると、カズキがラウバルを追うように部屋を飛び出てくるところだっ

た。
「何だ」
いつも距離を置くようにしているだけなのに、珍しいこともある。目を瞬きながら足を止めてカズキを待つラウバルに、カズキは真っ直ぐな視線を投げかけながら口を開いた。
「……聞きたいことが、あります」
無言で続きを促す。カズキは目線をそらすことなく、ラウバルを見据えていた。
「バルザックがヘルザードへ行った理由について、あなたは何も尋ねなかった。わかっているんでしょう」
「……」
「……黒竜グロダールの行方について、教えて下さい」
思いがけない方向から攻められて、ラウバルは眉根を寄せた。振り向いたままだった体を、カズキに向き直らせる。
「黒竜グロダールは、ギャヴァンで果てた」
「それで済んでいないでしょう。あなたは何か、知っているはずだ」
「知っていたとしても、話すことではないな」
「――俺たちはッ……」
冷たい言葉を返すラウバルに、カズキの瞳に怒りが燃え上がった。握り締めた片手を、壁に叩きつける。
「俺たちは、あんたが城の奥にいる間に魔物の間を駆けずり回って真実を追いかけている。命懸けだ」
「……」
「自分たちが、何をやっているのかを知りたい。わけもわからないまま引きずり回されるのは、もうごめんだ」
「……バルザックを追っているのだろうが」
言葉少なに対峙するラウバルの視界で、応接室の出入り口にシサーたちが立つのが見えた。距離を置いたまま、黙ってこちらの成り行きを見守っている。
「ああ、バルザックを追っているさ。だけどそれが何なんだ？『王

家の塔』の解放、それはわかってる。だけど黒衣の魔術師にとって『王家の塔』なんて成り行きの一環でしかないだろう。目的がわかっていれば、あちこち駆け回ってあいつを探し回る必要なんかなかったんじゃないか！？あんたはそれを知っているんじゃないのか！？」

「……」

それは、誤解だ。カズキたちよりラウバルの方が情報が多いことは確かだろうが、ラウバルとて全てを知っていたわけではない。バルザックの行方がヘルザードだと知って、わかることがあっただけである。そして、言ってはならないことも、ある。

無言のラウバルに、カズキは苛立ったように言葉を重ねた。

「少なくとも、グロダールの所在を知っているはずだ。バルザックは、グロダールの身柄を欲している。違うか」

「……そうだろうな」

「そしてそれとあんたを狙うことにも関係がある。もしかすると、先王の兄であるアウグスト卿やシェリーナ妃の追放とも何か関係がある。その辺りを全部、話してもらおう」

「それを聞いて、どうなる？」

「バルザックの行方を追う為に、仲間が命を落としている！！」

「……」

それは、初耳だ。

見回す限り、シャインカルクから見送ったメンツは五体満足で雁首揃えているようだが。

目を瞬くラウバルの前で、カズキは先ほど叩き付けた拳を壁に押し当てたままでラウバルを睨みすえた。大人しい少年かと思ったが、旅の間に面変わりしてきたようだ。怒気を孕ませたその表情は、思いがけないほどの迫力があった。

「……仲間？」

「ギャヴァンのギルドだ。巻き込まれて命を落とした。あんたには関係ないか？だからこっちがわけもわからずバルザックを追ってい

ても、そこで得た情報を搾り取っておしまいか？」
ギルドか……。
腕組みをしながら、ラウバルは嘆息した。
レガードの件もあるし、ならば後々、こちらからもギルドに声をかけてやらなければなるまい。そう考えながら、ラウバルはカズキの視線を正面から受けた。
「……いいだろう」
あれだけ言いたいことを言ったくせに、受け入れたラウバルに意外な表情を浮かべてカズキが見返す。一体自分は彼らにとってどう映っているのか、疑問に思う。
「バルザックは、必ずヴァルスを訪れる。……話せることは、話してやっても良い」
「本当に……？」
信じられないような表情を浮かべるカズキに、ラウバルは小さく吐息を落とした。
「話させたいんじゃなかったのか」
「あ、それはそうだけど……」
「だから、話してやろう。但し、話せることだけだ」
「……」
カズキの視線が意味を問う。
「ことは、王族の内情に絡む部分もある。今、私の口から話して良いことではないこともな」
事実、既に彼らは巻き込まれている。シェインが戻らねば、カズキさえ物語の途中で離席、と言うわけにはいかない。知る権利は確かにあるだろう。
今後、起こり得る事態に、今から備えておく為にも。
「部屋に、戻れ。立ち話で済む話ではない」
暗澹たる気持ちでカズキを促しながら、ラウバルは再び応接室へと足を向けた。

第3部第1章第6話　神が与えしもの（1）

シャインカルクに到着してから4日目の夕方。
ラウバルから馬を借りて出発した俺たちは、翌日にはギャヴァンにまで辿りついていた。
本当は単身で早駆けとか出来るんならね……その日のうちにギャヴァンに到着することも不可能じゃあないらしいんだけど。
何せ俺は馬に乗ることが出来ない。ユリアの馬術も相当覚束ない。俺はシサーの、そしてユリアはニーナの後ろに同乗させてもらっている。早駆けなんか出来るわけもない。
「キグナス。後で俺に乗馬、教えて」
「おう。いいぜ」
情けない。自分で乗れるようになりたい、せめて。
でも馬って難しいんだろうなあ。生き物だからバイクだ車だってのとはわけが違うんだろうし……。いや、俺はどっちも免許なんか持ってないけど。
街中を馬で通行することは原則、禁止されているらしい。街の入り口で馬を下りて徒歩になる。夕刻のギャヴァンの街は、食欲をそそる匂いや音楽に溢れ、相変わらずの陽気さだ。綺麗に整備された石畳の上を、海から射す西陽がオレンジ色に染め上げ、その上を人々がかしましく行き来する。船乗りらしき屈強な男たちの集団、仕事途中なのか手に籠を持った男、両手に食材の入った紙袋を抱えておしゃべりに興じる女性たち。
戦禍渦巻くローレシア、とは言っても、真っ先にその嵐を抜けてしまったギャヴァンは、既に立ち直ろうとしている雰囲気になっている。
「何か腹が減った気になるなぁ」
「ふふ。今日はこの前とは違うところで食事しましょう。おいしいところに案内するわ」

よだれが垂れそうな顔で辺りを見回すキグナスに、ニーナが笑う。確かに、それほどでもなかったくせして鼻先を焼きたてのパンだの串焼きの肉だのの匂いが過ぎれば、腹も減ってくる。

黒衣の魔術師の捜索がいったん保留になった俺たちが次に向かわなければならないのはローレシアの北――ツェンカーだ。じゃあなぜ反対方向であるギャヴァンへ向かったのかと言えば、理由はふたつだ。

相互協力とは言え、手を貸してもらって……そして、シンを巻き込んでおいて、ギルドに対してこのままと言うわけにはいかない。レオノーラまで戻って来てるんだし、ここでまた出発してしまったら戻って来られるのはいつになるかわからないし、今しかないだろう。

それが、ひとつ目の理由。

もうひとつは、ガーネットに会う為だ。ラウバルに聞いて、わからなかった点について……ガーネットの補足を必要としている。

とは言ってもギルドの場所がわからないのは相変わらずだ。代わりに俺たちは、カイルから連絡用の信号弾を受け取っている。

「集合墓地に行ってみるか？」

馬の手綱を引きながら、シサーが丘の方角に目を細める。信号弾を上げなくてもギルドの長がいる可能性を考えてのことだろう。

「そうだね」

答えて頷きながら、視界の隅でユリアが、その髪の影に潜り込んでいるレイアと何かを話してくすくす笑うのが見えた。

ツェンカー行きの許可を自力でラウバルからもぎ取ったユリアは、最初に俺と一緒に『王家の塔』を目指していた時と同じ、若草色の軽い装備を身につけ、長い髪を高い位置で縛っている。王女様ではなく、初心者の冒険者といった風情だ。何となくそちらに視線を向けると、俺の視線に気づいてユリアがふっとこちらを向く。それから笑いを収めて、目を伏せた。

（は～……）

内心ため息をついて、俺もシサーに視線を戻す。
「ジフが、いるかな」
「どうかな。ま、いなきゃいないで……。んじゃあともかくも行ってみよう」
……ユリアとは、シャインカルクを出発してから、口をきいていない。
避けてるわけじゃ、ないんだ。俺は。
ただ、俺が避けられている……ような気がする。
（やっぱあれかなぁ……）
以前、最後に会った時に気まずく別れた、あれのせいだろうか。
仲直りするとかしないとかって話じゃなく、もっとシンプルに……嫌われた、とか……。
（……は～ぁ）
ありうるよな……。何だか良くわからないけど、俺の考え方は、ひどく彼女の考えに反しているようだ。それが嫌われる原因になったんだろう、きっと。
（仕方ないだろ）
嫌われたところで。
それが俺自身の偽りない考えなんだ。それを嫌われるなら、どうしようもないじゃないか。
そうは、思うものの。
「……」
また、ちらりと視線を向けるとユリアと目があった。そしてまたユリアがふいっと……今度は顔ごと逸らす。
……つらいなぁ。
何がつらいって、これからツェンカーまで行って帰って、その間ずっとこんなふうにそっけなくされてたらやっぱり堪えると思うよな……。
そんなふうに思いつつも、シサーたちに続いて前にも辿った丘への道を進んだ。

奇しくも、時刻は以前と同じくらい――夕刻だ。海から射す西陽が丘を訪れた人々に優しい抱擁を投げかける。
「ゲイトとカイルは、もうついたかな」
「ついてんだろ、いくらなんでも。余計な寄り道をしてなけりゃあな」
隣を歩くキグナスと話しながら、辿り着いた丘の上をぐるりと見回した。ぽつりぽつりと影を落とすお参りに来たらしき人々が、海風に押されて帰路につこうとするのも前と同じだった。けれど、例の石碑の前に、ジフの姿は見当たらなかった。
「いねぇなぁ」
「ま、そうそう暇じゃないわよね」
「んじゃあ信号弾で呼び出すしかねぇかな？」
石碑の周囲には、いくつも花束が添えられている。綺麗に刈り込まれた芝生が広がる中、その周囲だけ色とりどりの花が揺れて、人々の想いを伝えていた。毎日きっと、誰かしらが訪れるんだろう。亡き誰かとの会話をする為に。
カイルから預かったらしい信号弾をぽんぽんと手の中で弾ませてシサーがちょっと考えるような顔をした時、背後から、聞き覚えのある声がした。
「お揃いでどうした」
「……ちょうど良かった。あんたに会いたかったところだ」
右側から西陽を浴びて左半分に黒い影を落としながら、ギャヴァンの盗賊ギルドの頭が、こちらに向かってゆっくりと丘を上って来る。振り返ったシサーのセリフに、ジフがにやっと笑った。そのまま俺たちを通り過ぎて石碑の方へと足を向ける。何となく、俺たちもその後に従った。
「何でこんなとこにいるんだ？」
「あんたがいるかもしれないと思って」
「カイルに信号弾をもらったんだろ」
「この辺でばったり会えるんだったら、それに越したこたぁねぇだ

ろう」
　ジフが石碑の前で足を止める。片手に持った、無造作に麻紐で束ねた小さな花束をぽんと投げ出した。
「あんた、本当に毎日来てるんだな」
「ずっとなんか続きやしないさ。人は痛みも悲しみも、時間と共にすり減らしていくからな。……だから、続くうちは続けようと思ってるだけのことだ」
　ジフの顔からは、何も読み取ることが出来ない。シンの話を聞いているんだろうけれど、こちらを責める色も、悲しみで憔悴しているような様子も、何も窺うことは出来なかった。無言で石碑を、それから視線を転じて海の方へと目を向ける。
「……腕しか見つからない奴、なんてのも、いてな」
「……」
「それがウチの構成員だったりすると、未だ夢に見るからな。まだ、しばらくは続くだろーな」
　それからジフはくるりとこちらを振り返った。
「で、どうしてギャヴァンに？目的のものは見つかったんだろう？」
　ジフの言葉にシサーが頷く。
「ああ。おかげで必要な情報は得ることが出来た。……礼を、言おうと思ってな」
「そりゃまた義理堅いことで。こっちにしてみてもあんたらがいなかったらどうにもなんなかったみてーじゃねーか。お互い様だ」
「……それと、謝罪を」
「……」
　ジフの目が意味を問うようにシサーを見返した。それから、口を開こうとしたシサーを制して片手を軽く挙げる。
「シンのことがどうとかって話なら、必要ない」
「……」
「誰が良いとか悪いって話じゃないだろ。あんたらが何かいわくありげなのはこっちだって……シンだって承知の上なんだ。何かあっ

たとしてもそれは想定内、後は力量不足と判断の誤りだ。それ以上でも以下でもない」

「だが……」

「何があっても、己の責任なんだ。じゃなけりゃ、ダンジョンの探索なんか、出来ねぇよ。だから、何も必要はない。カイルとゲイトから報告は受けている。それで終了だ」

あくまで淡々と語るジフの顔には相変わらずどんな表情も浮かんでおらず、それだけ見ているとまるで、ギルドの構成員を替えのきくコマか何かのように思っているように見えた。ある種……冷徹な。

けれど、毎日石碑に足を運んで死者を弔っているのだと思えば、その、全てを飲み込んで、ギルドの頭として自分の胸ひとつに収めているんだろうと……そんな気が、する。

「……わかった」

シサーがジフの言葉を受け入れて謝罪の言葉を胸にしまうと、ジフがにこっと人懐こい笑みを覗かせてぐるりと俺たちを見回した。ユリアとレイアに目を留めて、ひょこんと眉を上げる。

「にしても随分な綺麗どころを連れて来たじゃないか？そっちはピクシーか？」

「え？ああ……ユリアとレイアだ。こっちは、ギャヴァンの盗賊ギルドの長で……」

「ジフリザーグだ」

「あ、は、初めまして」

「ギルドの長にしては随分若いのねー。それともただの童顔？」

ユリアが挨拶する傍らで、レイアがユリアの肩に腰掛けたまま、しょっぱなから失礼な口を利く。さすがだレイア。

ジフが苦笑しながら答える。

「いくつに見えてるかは俺にはわかんねーけど。どっちにしても頭としては若造には違いねーかな。……せっかくだから、カイルに会っていくか」

「ああ……そうだな。それともうひとつ、頼みがあんだ」

後半のセリフをシサーに向けて言ったジフに、シサーが答えて口を開く。石碑に背を向けて歩き出しかけたジフが足を止めて首を傾げた。

「頼み？」

「ガーネットってじいさんがいたろう。彼に、会いたい」

「あぁ……あのじじぃか」

きょとんと目を瞬いたジフは、少し視線を考えるように彷徨わせた。

「構わねぇけど……どっちにしてもギルドに来てもらった方が良いだろうな。ガーネットは自分の住処を人に知られるのを好まない。ギルドに呼び出す」

「俺たちはどっちでも構わないんだが……いいのか？ギルドに案内してもらって？」

促して歩き出したジフに続くシサーの問いかけに、ジフはくすっと笑った。

「いいさ。本部に連れて行くわけじゃない。第2支部に行こう。そっちなら、闇稼業の人間なら誰でも知っているからな」

◆◇◆

ジフに連れて行かれた『盗賊ギルド第2支部』は、丘のある街の西側からずーっと街を突っ切って反対側……東南の方向へ向かった建物だった。1階に瓦版の印刷所みたいなのがある。おじいさんが事務所の奥で暇そうに居眠りをしているのが、扉のガラス越しに見えた。

あのおじーさんはこの建物にギルドが入っていると知っているんだろうか。それとも無関係で全く知らないんだろうか。

そんなことを思って無言で居眠りおじいさんに視線を釘付けにしていると、振り返ったジフが俺を見て小さく笑った。俺が考えていることがわかったんだろうか。けれど敢えて何も答えずに建物の横

の路地へ入る。
「こっちには大概カイルが詰めている。今も多分、いんだろう。……カイル～」
狭くて急な階段を上っていくと、2階に出た。階段はまだ上に続いていく。外から見た限り3階建てくらいありそうだったもんな。上には何があるんだろう。上もギルド？
ジフが声をかけながら2階の扉を開くと、中には何もないがらんとした部屋があるだけだった。人の気配はどこにもない。
……と思ったら。
「そっちじゃねぇよ、こっち」
少し離れた足元から、ジフの声が聞こえた。どうやら床の一部が開閉式になっていて隠し階段があるらしい。階段は1階をぶち抜きで地下に続いているみたいだった。
ジフにシサー、ニーナが続き、その後にキグナスが続く。その後に俺もゆっくりと階段を下り始めた。結構急な階段。
「ユリア……」
ユリアがしょっちゅう転んでいたことを思い出して、振り返る。俺の背中に続いていたユリアが一瞬きょとんと俺を見返し、そしてふいっと顔を背けた。
「……」
ので、勢い、何も言えなくなってしまった。口にしかけた「気をつけて」と言う言葉を飲み込み、前に顔を戻す。
何だか……本当に嫌われたみたいだな。
……俺は、背中に感じるユリアの気配にさえ……こんなに、鼓動が早くなってるって言うのにな。
「おお。カイル」
先に階段を下りきったシサーが、入った部屋の中で声をあげるのが聞こえた。
「無事に風の砂漠を越えられたのね」
「そっちこそ行くところがあるんじゃなかったのか。それはどうな

った」
　キグナスに続いて部屋に入る。そこは、広さとしては15畳くらいの一部屋だけでそんなに凄く広いわけではなかったけれど、乱雑に箱や棚が置かれ、真ん中に据えられた木のテーブルの上には何やら書類が散らばっているのが見えた。部屋の奥の床で4人ほどの男が輪になってカードゲームをしているのが見える。ジフやシサーの姿に、テーブルの椅子に掛けていたらしいカイルが歓迎して立ち上がったところだった。
「ゲイトはいないのかな」
　見回す限り、人の姿はそんなもん。カードゲームをしている盗賊たちも見覚えがある人の姿はなく、ぽつっと尋ねるでもなく言うと、キグナスが曖昧に「んあ、あぁ……」ともごもごと答えた。カイルとシサー、ニーナが互いのあれからを簡単に報告し合うのを聞きながら、続ける。
「まあ、あと第1支部と本部があんだろ?そのどっかにでもいるんじゃねぇか。その辺、ほっつき歩いてるとか」
「ゲイトは、いない」
　こちらの声が聞こえたのか、キグナスの向こうに立っていたジフが、不意にこちらの会話に答えて口を開いた。その答えに、眉を顰める。
「いない?」
「ゲイトは今、出かけてんだ」
「出かけてる……じゃあ、また別のダンジョンとかに?」
　シンがいなくなって……例えばそれを引き継いで、とか?
　尋ねる俺に、ジフは黙って顔を横に振った。それからなぜか少し言葉を選ぶような顔をする。
「ちょっとな。調べたいことがあるってことで……ま、私用だ」
「私用……」
　そりゃあまあ、別に盗賊だって私用はあるんだろうけどさ。
　良くわからないけど……まあ、いいや。

「そうですか。……ゲイト、元気でしたか」

第3部第1章第6話　神が与えしもの（2）

俺たちと別れる時には、別人みたいだった。それほど長い期間を一緒にいたわけじゃないけれど、でも船でラグフォレストに向かう間からシュートを出るまでほぼ3週間……その間に知っていたゲイトと言う人物は、帰りの船では姿を消していた。

少し時間が経って……ほんの僅かでも本来のゲイトを取り戻してくれれば良いんだけれど。

が、俺の祈りも儚く、ジフは複雑な顔で小さく吐息をついた。

「仕方ないな。元気になれって方が、無理な話だろうし。少し、気が晴れるまでしたいようにさせてやろうかと思ってさ」

「……そう、ですか」

「ああ。……イース！！」

不意にジフが顔を奥に向けて、カードゲームをしているひとりに呼びかけた。イースと呼ばれたこげ茶の縮れ毛の男が立ち上がる。

「はい？」

「ちょっとガーネットをここまで呼んで来てくんねぇか。お客さんだと伝えてくれ」

「へい」

イースが出て行くのを見送りながら、胸の内で少し躊躇う。躊躇ったものの、結局俺は、口を開いていた。ジフから、視線を背けたまま。

謝罪をすることに、意味があるかどうかはわからない。

謝罪したところで、シンは戻ってくるわけじゃない。

俺自身の自己満足に過ぎないんだろう。けれど、口にせずにいられない。少なくとも、俺に責があることを伝えないのは卑怯だという気がする。

「シンの命を奪った奴は……」

「……」

「俺を、狙って、来たんです」
ジフがちらりとこちらに視線を向けるのがわかる。顔を見ることが出来ずに、俺は抑えた声のままで続けた。
「俺が、シンと、ゲイトに、正しい情報を与えてやれなかった。……今更言っても、仕方がないけれど、俺は……」
「さっきも言っただろ？」
「……」
「誰かのせいじゃない。全てを踏まえた上で、本人の責任だ。……そういう仕事なんだよ。俺たちは」
突き放すでもなく、もちろん慰めるでもなく、ジフの声はあくまでも淡々としていた。普段は人当たりの良い、柔らかい話し方をするのに、この件に関しては殊更抑揚のない……そう、せずには、いられないんだろう。
俺を狙って現れたグレンフォード、バルザックを追う俺たちと同行していて巻き込まれたシン、奪われたものを……俺が、ジフから奪ったものを、重責として感じずにはいられず、下唇を噛み締めた。
「魔物、らしいな？」
「……」
無言のまま言葉を発せない俺に、ジフがぽつっと尋ねる。
「それも、聞く限りでは結構手こずりそうな」
「……はい」
「ゲイトがそれを調べてる」
思わず顔を跳ね上げた。ジフは表情を変えないまま、カイルとシサーたちに視線を定めたままで、続けた。
「あんたらと連絡を取る手段を教えといてくれ。何かわかったら、連絡する必要があるかもしれねーだろう？ゲイトがどう出るかわかんねーから……何とも、言えねぇけど」
「あ、はい……」
連絡……連絡を取る手段……。
じゃあ電話してってわけにはいかないもんなあ……。

「シャインカルクに連絡してもらえれば、何とかなるんじゃねぇか？」

黙って俺とジフの会話を聞いていたキグナスがぽつんと、ジフにではなく俺に向かって言った。

「ああ、そうか。って言うか、それしか、ないよな……」

「どこか、移動する予定なのか？」

ジフがあどけない目をくりくりさせて俺とキグナスを交互に見る。

それに頷いて、俺は階段のそばに無言で立ったままのユリアにちらりと視線を走らせた。

「まあ……これから、ツェンカーの方に……」

「ツェンカー！？」

ジフが、頓狂な声を上げた。ユリアが無言でこっちを見る。

「そりゃまたどうして」

「いや……まあ、いろいろと用事があって」

戦争の援軍を求める為に王女様直々膝を折りに行くんですとは、言って良いのかわからない。曖昧に濁す俺に、ジフはそれ以上突っ込んだことは尋ねずに「ふうん？」と微かに首を傾げた。

「まあ、いーけどさ。……そうか。じゃあ安易に連絡を取るってわけにはいかなくなるな」

「でも、シャインカルクにはどうしてもマメに連絡を取らざるを得ないと思うんです。あちこちの大使館はあまりアテにならないから……マメにとは言ってもたかが知れてるだろうけど、それでも可能な限り俺たちの所在を明らかにしておく必要があるし、だから……」

「何かあったらシャインカルク経由ってことで、ひとまずは納得しとくしかなさそうだなぁ」

「はい」

「じゃあ、それはそれとして」

連絡手段についての話を打ち切ったジフは、すとんと壁に背中を預けて寄りかかると、腕組みをしながら俺とキグナスを見た。

「何しに行くんだか知らねぇから何とも言えねぇけど、一夜の宿く

らいは協力出来るかもしれねーぜ？」
「え？」
「知人がいんだよ、向こうに。ええと、どこだっけかな……おぉい、ルーズ。ジークがいるのはどこだったっけ」
「ジーク？ジークフリートっすか？えーと確かぁ……」
「オーバスヴェルグだよ」
「ああ、それそれ。オーバスっす」
人の言葉を借りて答えたルーズに苦笑いを浮かべてひらっと手を振ると、ジフは再びこちらに顔を戻した。
「だそうだ。ジークフリートって……元は、ギャヴァンの奴で、今は向こうで武器屋をやってる」
「武器屋！？」
「ああ。必要なら紹介状を用意しても良い。俺からの紹介だったら、良くしてくれるはずだ」
武器屋……何か、力になってくれそうだけど。
一応シサーに声をかけておこうと思ったところで、階段の方から不意に人の気配がした。ガーネットが到着したようだ。微かに、緊張した。
「おぉ。生きておったか」
……。
会うなり失礼な。
「そりゃあじじぃの方だろーが。いつまでこの世に居座るつもりだ？」
ガーネットの言葉に、ジフが憎まれ口を叩く。途端、ガーネットが手にした古びたロッドでゴンとジフの頭を殴った。
「まったく１０年前から変わらん悪ガキだ」
１０年前には既にジフは『ガキ』と言える年齢じゃなかったんじゃなかろーか。そりゃあガーネットに比べたら誰も彼もがガキかもしれないが。
「あんたら、このじじぃに用があんだろ」

殴られた頭を押さえてガーネットを横目で睨みながら、ジフがこちらに向かって呼びかける。親指で指されたガーネットは、からからと笑いながら俺とキグナスに向き直った。シサーとニーナもガーネットの到着に伴って、こちらに移動してきている。

俺たちをぐるりと見回したガーネットが、不意に俺の後ろに視線を留めて目を細めた。

「おお。レガード卿の婚約者のおじょーちゃん」

「こんにちわ……」

え？ユリアと知り合い？

きょとんとユリアを振り返って、それから気がつく。レガードがシャインカルクにいて、ラウバルとガーネットが知り合いってことは、レガードを送り届けた時に会ってるのか……。

一瞬驚きはしたものの、そう納得する俺の前で、ジフの方がかたっと体を仰け反らせた。

「じゃあ……あんた……」

ユリアが王女様だと気がついたらしい。ひきつった顔で視線を向けるジフに、ユリアがくすりと笑った。目を伏せる。

「気に、なさらないで下さい」

「気になさらないでと言われてもなぁ……」

困った顔で頭を掻くジフに、シサーがちらりと視線を投げる。それを受けて微かに表情を改めたジフは、大声を上げるでもなく、けれど良く通る声で奥の盗賊たちに声をかけた。

「人払いだ。悪いが、貸してくれ」

その言葉に、カードゲームをしていた男たちが立ち上がる。何だか急に押し入って邪魔しちゃったみたいで申し訳ない。

「ついでに、ロッソのじじぃがくたばってねーか、見てきてやってくれ」

「そっちの3人も、こっちに来い」

部屋を出て階段に足を向ける男のひとりにジフが指示を下すをそっちのけに、カイルが俺たちを手招きした。招かれるままにテーブ

ルに足を向ける。
「へい。……頭ぁ、口が悪いなぁ」
「うるせぇ。リフィールはビットんトコ、徴収にお邪魔しろ。期限だ。ギャヴァンでの事業に手を引くか支払うか、選択してもらってこい。あとは上で待機。よろしく」
指示を受けて盗賊たちが出て行くと、部屋の中は静かになった。テーブルに向かう椅子は4脚。ガーネットがひとつに掛けると、シサーとニーナ、そしてユリアがテーブルにつく。俺とキグナスは相変わらず、4人――いや、主に口を開くのはガーネットとシサーだろうから、2人の会話が聞こえる場所で壁に背中を預けた。並ぶようにジフが俺の隣に立つ。カイルはガーネットのすぐそばに控えた。
ガーネットに聞きたいことは、大きく言えば、1点だ。
ラウバルからは得られなかった情報――『失われた聖書』について……ガーネットは確実に何かを知っている。
「さ・て・と……俺とカイルは、いても構わないな？」
ジフが念を押すように尋ねる。が、微塵も出て行くつもりはなさそう。シサーが小さく笑って頷いた。
「別に構わないさ。大したことを聞きたいわけじゃない。……聞きたいのは、『聖書』についてだ」
終わりのセリフはもちろん、ガーネットに向かってのものだ。向いたシサーの視線に、ガーネットが笑った。
「それなら聞く人間を間違っておるのぉ。教皇庁にでも行った方がよかろ？」
「教皇庁なら訪問済みさ。枢機卿から気になる言葉が出たんでね。意味を確認させて欲しいと思っているんだ」
「訪問済みか。……気になる言葉、とは？」
「『失われた聖書』」
ガーネットが微かに目を細める。
「『与えられた力は今、己の意志を持って暴走し始める』『それは時に猛り、時に操り、人々の命を喰らい尽くした』『楽園から男が

やって来た。彼は神の祝福を受けていた』。……『7番目の使い』とは、何のことですか」

俺の言葉に、ガーネットの視線がこちらを向いた。シサーが重ねる。

「レガードを手元に置いていた理由ってのは、そこにあるんじゃねぇかと思ったんだが、どうだろう?」

シサーに視線を戻して、ガーネットは何食わぬ顔でぽりぽりと顎を掻いた。「年をとると乾いていかん」と小さく呟くと、椅子の背もたれにずるりと寄りかかる。前にも思ったけれど、何だか緊張感のないおじいさんだ。

「ラウバルには尋ねたか」

「ああ。知らんそうだな。本音かどうかはわからんが、それについての知識は持ち合わせていないと言われた。『シュリヴィドル尊師』に尋ねてみろ、とな」

テーブルに頬杖をついてぼやくようなシサーの言葉に、ガーネットがくっくと笑う。皺だらけの顔の中、細めた目が皺と一体化して区別がつかなくなった。

「本音だろう。ラウバルは嘘はあまり上手ではない。嘘をつくくらいなら跳ね除けるか黙っている。……それに、『あの頃』にはラウバルは聖書など余り手に取ったこともなかったろうからな」

「じゃあ、やっぱりあんたも……」

「そうさな。ラウバルよりは20年ほど長生きしとるがな」

ラウバルも、そしてガーネットも……『失われた聖書』が存在していた頃に、既に生きていたんだ……。

「『失われた聖書』には、何が書かれていたんだ? レガードとどう関係がある?」

「話せるところのみを話してやる。ラウバルは何を語った?」

ガーネットの問いに、シサーは少し答えを躊躇った。ユリアがいるからだ。あの時……ラウバルが俺たちに自分の持つ情報の一部を明かした時、ユリアはその場にいなかった。けれど、やがて迷いを

吹っ切るように口を開いた。
「バルザックと自分の関係、そして黒竜の行方。バルザックとロドリスが手を組んだ理由」
シサーの回答にガーネットは少し、意外そうに眉を上げた。
「ほう？バルザックとの関係？」
「……同じ人物を師と仰ぎ、共に召喚を学んだ間柄だと」
それを聞いてガーネットは小さく笑った。頷く。
「間違いはない」
「あんたがその、２人の師にあたる人物じゃないのか」
「わしか？」
「あんたも、召喚師なんだろう？」
「わしには召喚なんざ出来ゃーせんよ」
ええ！？だって。
ラウバルが『尊師』と呼ぶ以上、普通に考えてそうだとしか思えないんだが。
けれど、ガーネットは口元に笑いを浮かべて小さく呟いた。
「だから誤解を招くと言うておるのにな。まったく頑固で言うことを聞かん」
「じゃあ、あなたはラウバルの師にあたるわけではないんですか……？」
じゃあおかしいじゃん、『尊師』なんて言うの。
ついつい疑心暗鬼で『騙されないぞ』と言う気分になり、ガーネットを見つめる。……いや、そんなところで嘘をついてもメリットがあるとは思えないんだけどさ。何となく。
俺の問いに、ガーネットは緩やかに首を横に振った。視線を投げかける。
「いや。師であることには違いなかろうなぁ。だが召喚師ではない」
「？」
「わしが奴に教えたのは、学術であり世の中のことじゃ。召喚の技ではない」

「じゃあ……」
ラウバルとバルザックの召喚師としての師匠さんは？
「召喚師としての師にあたる人物はわしの兄じゃ。今はもう、この世にはおられない」
ああ……そうなんだ。
（……）
いやいや、良く考えたらそれが普通だぞ。ラウバルを含めてあんたらがおかしいんだ。おかげでこっちの感覚も少しおかしくなってる。
「兄の元で修行を積む2人に、わしが学術を教えたのじゃ。と言って大したことを教えたわけではないがな」
ふうん。ともかくもガーネットがラウバルの師にあたる人物であることには違いない、と。
そして真実2人の師匠――召喚の技を教えた人物はもうこの世にいない……。

第3部第1章第6話　神が与えしもの（3）

「ふむ。わかった。ではそれを踏まえて話してやろう」
「……いーんだぜ。別に踏まえずに知ってるだけを話してくれても」
ぼそっとクレームをつけるシサーに、ガーネットはからからと笑った。
「そうはいかんなぁ。ラウバルがわしに期待する程度に留めておいてやらんとな。……何、『失われた聖書』については概ね話してやることが出来よう」
「じゃあ、まあ……」
顔に皺を寄せて嫌な表情を浮かべながらぐしゃぐしゃと髪をかきまぜたシサーは、すとんと椅子の背もたれに体を預けてため息混じりにガーネットを見据えた。
「ともかくも、その話せることをまず聞かせてくれないか」
「良かろ。……『失われた聖書』についての話は、どこまで聞いている？」
「どこまでも何も、大して聞いちゃいねぇよ」
そう言ってシサーは俺の方に視線を投げた。シサーとニーナは俺とキグナスから話を聞いているだけで、ハーヴェル枢機卿から直接話を聞いているのは俺とキグナスだ。応えて口を開く。
「俺たちが聞いたのは、空間移動の魔法に対する大弾圧が行われて……その時に、エルファーラでは概ねその『狩り』の被害が少なかったと」
「ほう」
「けれど無傷ではいられなかった。聖書の改竄が行われたと、聞きました」
「そうじゃな」
「その時に改竄されたのが……いえ、抹消された章が、ファーラからの使いについての話だと。それがまるまる抹消され、現在見つか

っているのが一部。その中の……」
「……」
「『7番目の使い』を言う言葉を、ロンバルト公王が、良く口にされていたと言うことしか」
口を閉ざすと、ガーネットは自分の皺だらけの顎を節くれだった右手で往復するように撫でた。少し考えるようにした後に、何に対してだかひとつ頷いて俺を見る。
「『失われた聖書』――抹消された部分に記載されていたのは、2編。ひとつはそなたの言うようにファーラの使いの話じゃ。これが、7話」
「……はい」
「そしてもう1編。こっちには、ファーラが人々に賜った、己を護る秘宝にまつわる話じゃ。これが、5話」
「秘宝……！？」
全員が驚きを顔に浮かべて目を見開く。初めて聞く話だ。ガーネットはさらりと頷いた。
「ラウバルがこの聖書に関する記述について知識を持ち合わせていないのは、ラウバルはまだヴァルスの宰相などではなかったからじゃな」
「はい」
「教義や聖書についての知識は、ヴァルスにおいては官僚、貴族、そしてもちろん王侯や聖職者は必須事項として叩き込まれる。ヴァルスがファーラ教の守護国としてエルファーラから認定されているからの。だが、民間人においてはそうとは言えぬ。……ジフ。お前はファーラ教についてどのくらい知っている」
不意に話を振られて、ジフは微かに嫌な顔をしながら肩を竦めて見せた。
「ろくに知りやしねぇよ。教義の漠然としたところは知ってるけどな。聖書なんて手にとったこともねぇし」
「こんなものだ。まあ教養のある民間人はもう少しはましじゃろう

が、概ね差はあるまい」
「……悪かったな。教養がなくて」
ぼそりと毒づくジフを軽く無視して、ガーネットはこちらに向き直った。
「信仰は、深い。聖書に目を通すものも多い。だが民間人……それも、裕福と言えない民間人には正式な聖書を手に入れることはなかなか出来ん。礼拝に訪れて教会で拝むくらいだ。日参して手書きで書き写す。教義を司祭の口から伝え聞く。聖書を手に取ったことがあったとして、失われた部分を記憶から判別することはなかなか出来んだろう」
俺はファーラ教の聖書って奴を実際に見たことはないけど……思い返せばキリスト教なんて『新約』と『旧約』とあったりするし、聖書なんて読破して尚完全に掌握するのは信仰心が深くなけりゃ出来ないだろうな。結構厚みもあった気がするし。新旧で何が違うんだか俺には良くわからないけど。
今は仮にも宰相なんだから把握してるんだろうが、かつて民間人であったなら――民間人？
「ラウバルって、貴族じゃないんですか」
「貴族じゃありゃーせんよ。もう遠い昔の話になるがな」
ふうん。じゃあ、己の実力と努力で伸し上がってきたわけだ……。
「さて。肝心の聖書の話に移ろうかの。まずは第1編……ファーラの使いの話じゃ」
何となしに、緊張した。秘宝の話ってのも気になるけど、とりあえず当面聞きたいのは使いの話だ。
「正確に言えば、ファーラの使いと言っても様々じゃ。ファーラの爪や髪から生まれた使いが最初の3人。『1番目の使い』『2番目の使い』『3番目の使い』。これらは、ファーラの分身として奇跡を起こす。地が割れ、嵐が起こり、海が暴れるのを鎮めてゆくのじゃな。まさしく人智を超えた奇跡というやつじゃ。そして『4番目の使い』『5番目の使い』『6番目の使い』『7番目の使い』……

これらは、只人じゃ」
「只人……」
「つまり、人間だったと言うことじゃ。その辺の者と変わらん、普通の生活を送っている者が、突然ファーラからの使命を帯びる。それと同時に奇跡の力を授かる」
ハーヴェル卿も、それは言っていたな。
何だっけ？何とかって国の第2王子だった男が突然ファーラの使命を帯びるとかって。
「使命を負った人々は、奇跡の力を授かると共に、その体に変化を起こした。『4番目の使い』は右の手の甲に赤い文字が現れた。『5番目の使い』は右の爪が全て赤く染まった。『6番目の使い』は右の瞳が赤くなった。そして『7番目の使い』は……」
「右の髪の一房が赤く染まった……？」
ニーナがぽつりと呟く。ガーネットがそれに頷くのを見ながら、半ば無意識に右の前髪を、かき上げた。そのまま、片手で押さえる。
「赤い髪が優れた能力を持つと言われるのは、ここから来る逸話じゃな。『赤』はファーラから授かった力の証、と言うことになる。今は聖書に記載されておらずとも、その名残がそう言った言い伝えとして残されていると言うわけじゃな」
ああ……そうだったのか。
以前シンがそんなようなことを言っていたのを思い出した。そして、その『失われた聖書』の『7番目の使い』に現れた特徴を知っていたから、ロンバルト公王はレガードのことを『7番目の使い』――ファーラに愛された子なのだと言っていたわけだ。
「そんで？『7番目の使い』ってのは、何をしたんだ？」
「『禍は姿を隠し、血を屠る刃はただの剣と変わる』」
その言葉は、前も聞いた。
前……ガーネットに、初めて会った時に。
「災いを齎す――いわゆる、カオス・アイテムじゃな。それを治めると言うのが『7番目の使い』が行ったことじゃ。そして、人には

生まれつき持つ属性と言うものが存在する。……それ以上は、今の段階では話せん」

不満げな沈黙が支配する。それじゃあわかんないじゃないか。何だよ『属性』って。

じとーっとした俺たちの視線は当然感じているだろうに、ガーネットは意地悪くにやにやと笑っているだけだった。話してくれそうにはない。

「何で、話せないんですか」

「ラウバルがお前たちに話していないことに触れそうなのでな」

「どうしてラウバルは俺たちに話さなかったんだ？」

「恩師との誓約に触れるからじゃろうのぅ」

「誓約？」

くつくつと喉の奥を鳴らすように笑ったガーネットは、ふっと笑いを収めながら小さな吐息に変えた。

「それは、わしの為でもあろうが」

「……？」

「ともかくも、第1編は大まかに言ってそのような内容になっている。詳細を知りたいか？」

「『7番目の使い』については話してくんねぇんだろう？だったら他の使いの詳細を聞いたところでしょうがねぇ」

嫌味のようにガーネットを薄く睨みながら言うシサーに、ガーネットはふぉふぉふぉふぉふぉと皺だらけの口をすぼめて笑った。

「続く第2編は、ファーラが人々に身を護る術として与えた秘宝じゃ」

シサーの言葉には答えずに話を進めてしまう。ので、仕方ない、俺たちも黙って話の続きを聞いてみることにした。

「この世で、人々が命永らえるために脅威となる存在がある」

「魔物か」

「その通り。が、普段は魔物は、人里にはそれほど襲撃をしてこない。旅でもすれば別じゃがな。少なくとも人里におればそうそう魔

物に襲われることはないし、時代が進んで整備も進んできておる。普通に生活をしている分には、さほど脅威とは言えまい。……じゃが、例外がある」

「例外？」

「エレメンタル・ドラゴンじゃよ」

その言葉を聞いて、思わず息を飲んだ。教皇庁で見た、ドラゴン退治を描いたギャラリーを思い出す。

あれが、やっぱり『失われた聖書』の一部を描いたものだったんだ……。

「エレメンタル・ドラゴン――竜種の中でも特に覇種と呼ばれる彼らは、眠りが永い。じゃが、一度目が覚めれば次の休眠期に備えて大量の食料を求めて自分の餌場を徘徊する。奴らにとっては人里であろうが何だろうが関係はない。食いでのある大きさじゃないが、人間はうまいそうじゃぞ」

って言われても俺はドラゴンじゃないんで食べる気にはなれない。

「人里を襲う彼らに対し、腕の立つ人間であってもなかなか対抗することは出来ない。一方的な殺戮に、身を護る術もなく逃げ惑うのが精一杯じゃな」

ドラゴンとの戦闘経験を持つシサーとニーナが険しい顔で深刻に頷いた。

「そこで、ファーラは、人々に己を護る秘宝を授けた。……エレメンタル・ドラゴンを倒す為に特殊な力を発揮する、魔剣じゃ」

「何……？」

エレメンタル・ドラゴンを倒す為の魔剣！？

シサーとニーナが思わずがたっと立ち上がる。俺とキグナスは最初から立ってるから変わらないが、気分としては似たようなもんだ。

そんなもんがあるのか！？

「覇種は、５種類。用意された魔剣も、５種類じゃ」

「それは、どこにッ……」

「覇種には、それぞれエレメンタルの属性がある。５種類の魔剣に

付与された魔力は、それぞれに対抗する魔力。火竜には水の剣カリバーン、水竜には風の剣ヴァジュラ、風竜には大地の剣ミョルニル、地竜には氷の剣ニヴルヘイム、氷竜には炎の剣レーヴァテイン」

剣の名称を俺たちに告げたガーネットは、一旦口を閉ざして身を乗り出したままのシサーを見返した。

「これらの剣は、単体では使うことは出来ん。剣として為す為のアイテムが必要になる」

「アイテム？」

「魔剣は、ドラゴンに襲われた時に、自らを護る為のもの。無用な殺戮を繰り広げる為に与えたものではない。ゆえに制限がかかっている。自在に、気楽に使って良いものではない」

「……」

「ファーラは、魔剣を使う鍵を、上位精霊たちに預けた。水の剣カリバーンの鍵を大地の上位精霊ベヒモスに、風の剣ヴァジュラの鍵は氷の王フェンリル、大地の剣ミョルニルの鍵は炎の巨人エフリート、氷の剣ニヴルヘイムの鍵は海の妖魔クラーケン、そして炎の剣の鍵は風の王ジン」

その言葉を聞いて、教皇庁にギャラリーでキグナスと交わした会話が脳裏にフラッシュバックした。

――人々がドラゴンに戦いを挑む前にさ……

――うん

――必ずあるこういう絵って……何だと思う……？

――意味は、あんだろけどな

ドラゴン退治を描いたギャラリーに必ずあった、人々が『人ではないもの』と対峙する姿。

あれは、それぞれの上位精霊から魔剣を使うための鍵を受け取る儀式だったんだ……。

そう考えてから、背筋を嫌な考えが這い上がる。あの時見た絵、氷竜と対峙する剣を構えた男の耳で光ったピアス。

対になるアイテムがあるというシェインの言葉。

火系攻撃が効かない、俺。
……まさか、このピアスって。
（炎の剣の、鍵なのか！？）
は、外したい、今すぐ。
愕然とする俺に気づかず、シサーがガーネットへ、質問を口にした。
「それぞれの鍵ってのは、上位精霊を呼び出さないとなんねぇのか？」
「本来は、な。じゃが、これは聖書に記載されていた神話の世界……魔剣が存在し、それぞれの鍵が存在するのも確かなようじゃが、長い年月をかけて、それぞれがもはや散り散りになっているらしい」
「何ぃ？」
「覇種と呼ばれるドラゴンは、同時期には1種につき1匹しか存在しない。が、魔剣をもって倒されても、数百年……あるいは数千年の時を越えさえすれば再び新たに生まれ来る。魔剣をもってかつて倒された覇種は、わしの知る限りでは3種じゃ。――火竜、風竜、氷竜」
「……どういうことだ？」
「つまり、使用されたことのない魔剣は2種しかない。風の剣ヴァジュラと氷の剣ニヴルヘイム。それ以外の魔剣あるいは鍵については、既に聖書にあった通りの場所にはないそうじゃ」
だからなのか……。
そっとピアスを片手で触れながら、呆然とガーネットを見つめた。
もしもこれが本当に炎の剣の鍵なのだとしたら、本来ジンからもらいうけなきゃならない。だけど長い年月をかけて一度ジンの手を離れた鍵は、どういう流れを辿ってかシャインカルクの宝物庫の中に眠ることになった……。
「……水の、剣……カリバーンって」
それぞれが何かを考える沈黙の中、ぽつんとニーナが目を上げる。
黒竜グロダールの行方についてラウバルから情報を得ている俺たち

にとって……そして、バルザックが必ずそれを狙ってくるだろうことを考えれば、もっとも関係があるのが、火竜を制す水の剣の行方だ。……俺的には炎の剣についても個人的に気にはなるんだが、とりあえずそれはそれ、今は別に必要ない。いや、必要になんかなりたくない。

ニーナが続ける前に、言わんとしていることがわかったらしい。ガーネットが頷いて口を開いた。

「エクスカリバー、とも言うな」

……ええ!?

どこかで、聞かなかったか?どこかでエクスカリバーが眠ってるって伝説がどうとかこうとか……。

――ルサルカと言う湖の乙女がいて、彼女はエクスカリバーと言う魔剣を守護していると言われているわ

「ノイマンの湖……?」

あれは、そう、いっちばん最初……俺とレイアが2人だけで浄化の森を抜けた時に、レイアが雑談交じりにそんなことを言っていた。

ユリアの肩に座り込んでいるレイアを思わず見ると、レイアは俺の言葉に反応して顔を上げた。こちらを向くと、否定的に顔を横に振りながら唇を尖らせる。

「言ったでしょ。ノイマンの湖に、エクスカリバーはないわ」

「じゃあ、どこに?」

「さあ、今話せることは話した」

不意に、話を打ち切るようにガーネットが立ち上がった。その遮り方に不自然なものを感じて声を上げる。

「ガーネット」

「何じゃい」

「エクスカリバー――カリバーンの行方を、知ってるんですか」

「物事には、語れる時と語れぬ時とがある」

立ち上がったガーネットは、俺の問いかけには頓着せずに階段に足を向けた。その背中が、間を置いて答える。

以前に会った時と、同じ言葉。
「……今は、語れぬ時だ。時が来たら、その時に語ろう」
「時は、いつ来るんですか」
ガーネットの背中が歩き出す。階段まで辿り着いて扉に手を掛けると、振り向かないままでガーネットは短く答えた。
「『7番目の使い』が目覚めた時、全ての事態が終息に向かうじゃろう」
ガーネットの小さな背中が階段に姿を消すのを無言で見送って、胸の内で繰り返す。
全ての、終息……。
ラウバルの言葉、ガーネットの話、そして帝国継承戦争。
何かが見えたと思うと、何かが見えない。
微かな焦燥と苛立ちを胸の奥に押し殺しながら、俺は、胸の内でガーネットの言葉を反芻した。
……ともかく、今は、『7番目の使い』が目覚めるのを待つしかない。

第3部第1章第7話　残された時間（1）

ギルドを出て街に戻った俺たちは、街の食堂で食事を終えた。
今日の宿は前回ギャヴァンに来た時と同様にシサーたちの家にお邪魔することになっている。
「お、カズキ、あれ何だろな」
「え？どれ？」
夜になって尚喧騒の絶えない表通りを、俺とキグナスは人込みを縫って歩いていた。先に家に戻ると言うシサーとニーナ、そしてユリア、レイアとは食堂を出たところで別れている。俺とキグナスはただの夜遊び。
「あらー、カワイイー、ボーヤたち、安くしとくわよー」
「きゃははは。寄ってかなーい？」
時折客引きの娼婦たちにからかわれて、思わずキグナスと顔を見合わせる。
「……キグナス、寄ってけば」
「何で俺なんだよ！！」
「血筋がそうなのかと思って」
「シェインと一緒にするんじゃねえ」
ギャヴァンの夜は、誘惑が多い。
通り沿いには屋台みたいな出店が並び、あちらからもこちらからも良い匂いが漂っている。並ぶカンテラが路面に柔らかな橙色の灯を投げかけ、立ち並ぶ飲み屋からは豪快な笑い声が響く。人も多いし、顔を上げれば通りの様子を窓から覗くしどけない姿の女性が見え隠れする。
遠く、港の方は暗い海が広がり、それを背にぽつりぽつりと港の灯りが揺れて綺麗だ。そしてその背景にはずっと、様々な音が流れていた。人々の話し声や笑い声、足音、どこか……多分、広場の方からの音楽や拍手。

毎日、祭りでもやっているみたいだな。本当の祭りの時は一体どんなんなっちゃうんだろうか。
「おい、カズキ。あっち行ってみようぜ。広場の方」
「うん」
キグナスに促されるままに道を逸れて広場の方へ続く道に足を向けた。拍手や歓声が楽の音と共に少しずつ大きくなる。
「お前さぁ、ユリア様と、何かあったのか？」
広場の方から流れてくる喧噪混じりのぬるい風に目を細めながら、キグナスが唐突に尋ねた。そんなことを聞かれると思ってなくて心の準備が出来ていなかった俺は、返す言葉に迷った。
「……何、それ」
「だって、城を出てから口を利いてないんじゃねえ？」
「……」
不自然に映るらしい。
少し困って俺は頬を指先で軽く掻きながら、近づいた広場に目を向けた。俺たちの歩いている道はそのまま進んでいくと自動的に広場に入り込んでしまうように繋がっている。無愛想な灰色の石畳である普通の路面と違って、色とりどりの丸い形の石が敷き詰められていた。
石畳が広がるその向こうにはかなりの広さで綺麗に刈り込まれた芝生が広がっていて、楽団……俺流に言えばバンドや軽業師などが篝火や松明の明かりに照らされながらそれぞれのアートを披露していた。周囲の黒々とした陰は見物客だろう。出し物に合わせて大きく揺れたり、わっと沸いたり。
「別に……何も、ないけど」
芝生の方へ足を向けながらぽつんと答える俺に、キグナスがちらっとこちらを横目で見た。
「……へえ」
「……何だよ」
こちらも横目で睨み返し、ひとつのバンドの、少し距離を取った

位置で足を止める。特に見たいものがあるわけではないのか、キグナスも俺に倣って足を止めた。
「まあいーけど」
「いいも何も、何もないってば」
大体ユリアだって、俺を怒ってるとかって感じじゃないんだから。そっけないだけで。
「嫌われたんでしょ、単に」
バンドの持つ楽器は、どことなくオリエンタルな雰囲気だった。ギターと言うよりは、琵琶に似た、けれどそれよりも大きめの弦楽器。和太鼓と言うほどでもないけど、ドラムのフロアタムよりはボディの質感が和製っぽい大きな太鼓、笛。竹槍のように長いものに、椰子の実みたいな丸っちいものがくっついている楽器なんてのもある。
「こーゆーこと言うと、不敬罪とか言われんのかなあ」
聴いたことのない、不思議な感じの楽曲に耳を澄ませていると、キグナスが小声で呟くように言った。
「カズキとユリア様って……」
「うん」
「……」
「……」
「……」
「……何だよ」
「やっぱやめた」
気になるじゃないか。
「言いかけてやめるって最低だぞ……」
「何とでも言え」
顔ごと向けて睨みながらクレームをつけるが、キグナスはどこ吹く風で顔をそむけた。そのまますとんと芝生の上に座り込んでしまう。
俺たちがいる辺りは、どこのバンドや芸人からも離れているせい

で、人はまばらだ。それでも混雑を嫌ってかぽつんぽつんと人の姿はないわけじゃない。
「今度はツェンカーかぁ」
「うん……ツェンカーって、どんなところ？」
俺もキグナスの横にすとんと座り込んで、バンドに目を向けながら尋ねる。今はこちらで言う光の月……俺流に言えば、7月とかそこらに該当するはずだ。昼間は空から照らす熱と海が照り返す熱気が暑いけれど、夜になると海が大気の熱を吸い取って微かに冷気を、そして潮の香りを含んだ風を送り込んでくる。
「俺も行ったことがあるわけじゃねぇからなぁ……」
「ふうん？北だから涼しいのかな」
「んー。でも、涼しいなんてもんじゃねぇと思うぜ」
え。
「光の月なのに？」
「間近にフレザイルがあるだろ。暑い季節は来ねぇって聞くからな」
「そうなんだ？」
「あぁ。こっから、馬と船とをフル稼働させたとしたってツェンカーに到着するのは……ん～……3ヵ月後くらいになんだろぉ？」
「ぐぇ。そんなかかんの！？」
「かかるだろ。したらー……雨の月も半ばってトコか？凄ぇ寒いと思うぜ」
雨の月……9月頃か。日本だったら残暑とかって頃ではあるけど、それも半ばを過ぎれば確かに風は冷たくなり始めたりもするし、氷の大陸が間近にあると来れば尚更だよな。
そんなことを考えつつ、頭の中でヴァルスの地図を開いてこれからの進路を思い描いてみた。
ヴァルスは最南、そしてツェンカーは、最北だ。単純に言ってローレシア大陸を縦断することになる。
が、ラウバルの言う通り、そのド真ん中で戦争が勃発している手前、どうしたってそこをヴァルスの首領がのこのこと歩いているわ

けにはいかない。大体、俺たちはグレンフォードに狙われたりもしているし、そもそも陸地を旅するのは時間がかかり過ぎる。

そこで、現在考えられている主なルートは航路……それも、シュートへ向かった時のような大型商船などではない、もっと小さな連絡船で陸地からは大きく離れずに北へ向かおうと言うものだ。

とは言っても、ギャヴァン港は今、封鎖されている。使うことは出来ない。フォルムスもまた同様だし、大体ヴァルスの東側の海から北上なんてしたら沈められるのがオチだろう。目当てにしているのはヴァルス最西端にある連絡都市カサドールだ。ギャヴァンのような大型商業都市ではないから大きな港があるわけではないらしいけれど、国が海や気候などの調査を行う機関がある街で、各調査の為に港や連絡船などは備えられているらしい。

現在モナはヴァルスに大敗して、その監視下にある。その関係で時折モナへ連絡船が航行するらしく、俺たちはカサドールからまずモナの表玄関オラフへ向かうことにしている。そしてオラフからマカロフ王国の内海沿いにある街リボーンにモナの船で送らせて、そこからはマカロフ王国北部を横断してツェンカーに向かう。

海からの移動は風や気候に大きく左右されるから何とも言えないけれど、シー・サーペントがヴァルス南海に移動をしたと言うことは西海は既に比較的安全と言えるらしい。何でも大型の魔物が暴れまわった後の海と言うのは、それを恐れて他の魔物が一層浮上して来なくなるのだそうだ。だから問題なのはどちらかと言えば、ここからカサドールへ向かう旅路の方。

特に、少し前にロンバルト北西部の辺りでロドリス軍が暴れているとのことだし、その辺りの魔物が北へ南へと移動している可能性が高く、ギャヴァンはヴァルス全体から見れば東南に位置するので距離もある。

「無事につけるといいなぁ」

「……馬鹿言ってんなよ。王女連れてんだから、無事につけなきゃいけねぇんだよ」

そうだった。
「でも凄いね。ヴァルスから、モナ……マカロフ……で、ツェンカー。4ヶ国、ハシゴだ。いろいろ見られる」
「マカロフか……」
抱えた自分の膝に両肘を組んで、その上に顎を乗っけながら言った俺の言葉に、キグナスが何か少し含みのあるように呟いた。そっちに視線を向ける。
「？　何？マカロフに何かあるの？」
「や」
短く答えて首を振りながら、キグナスは背中の方に両手をついて空を仰ぐように体重をかけた。
「そんなでも。前に、知り合いが行ってるって聞いたから、いんのかなって思っただけ」
「知り合い？」
「学生時代の」
「ああ」
エルレ・デルファルのお友達か。
全国から生徒の集まるエリート学校だって言うからな……良く考えたら各地に知り合いがいてもおかしくないんだ。
でも、電話やメールがあるわけでもないし、連絡手段は手紙だけのこの世界……思うように会いにも行けないだろうし、疎遠になってっちゃうんだろうな。結構、寂しい話ではある。
「連絡取ってるんだ？」
「いや。1度手紙が来たっきりだな。それももう……2年前の話か？だから、今もいるかは知らねぇ」
「ふうーん」
そのまま手のつっかえを外して、キグナスがころんと芝生に転がる。俺も抱えていた膝を崩して片手を地面につきながら、空を仰いだ。
友達か。

そうだよな……せめて、連絡が取れればな。
（いや……）
そう思いかけて、自分でその考えを否定した。
あちらとこちらで連絡が取れてしまえば、俺はますます帰りたいと思えなくなってしまうかもしれない。サキュバスに見せられた夢の世界で気づいた自分の本音に対するショックは、今もまだ残っている。
「……あっちとこっちでも、連絡が取れりゃあいいのになぁ」
すると、どこをどう考えたのか、俺と同じ思考に辿り着いたらしいキグナスがぽつっと言った。思わず見下ろす。
「……」
「……んだよ」
「いや……何で？」
あっちに連絡を取りたい人がいるわけでもあるまいし。
目を瞬いて見下ろす俺の視線に、キグナスは鼻の頭に皺を寄せた。両手を組んで頭の枕にしていたその腕で顔を隠すように挟みながら、くるんと向こう側を向いてしまう。
「そうしたらさあ」
「うん」
「カズキが帰っても、たまにはどうしてんのか、わかんだろ？そっちも、こっちも」
「……ああ」
「何だよ、その間は……」
キグナスの思考が、俺の考えと逆の方向に働いていたことに気がついて、小さな笑いを口元に模る。
そうか……そうだよな。俺が、あっちに帰ってからも……。
そうしたら、手のひらから零れるものは少なく感じられるのかもしれない。
「……ううん。何でも、ない」
くすくす笑う俺に、キグナスがふてくされたような顔でこちら側

にころんと向き直った。遠くに揺れる篝火の灯りが、キグナスの顔に濃淡の影を浮かび上がらせている。俺の世界ではありえない瞳の色も、今ではもう見慣れてしまった。

第3部第1章第7話　残された時間（2）

「まあ、おめーえはさっさと帰りたいんだろおけどなあ」
「そんなこと、ないよ。何で？」
「だって、サキュバス……」
「……」
その言葉を聞いて、あの時――サキュバスの夢から目覚めた時に、キグナスが何か複雑そうな顔をしていたことを思い出した。
「そう言えばあの時、何か、言いたそうだったね」
「俺？」
「うん」
「……そうか？」
俺の問いかけに、キグナスが寝転がったまま鼻の頭を指先で掻く。何かを誤魔化すような顔をして空を睨み上げると、そのままの表情でぼそぼそと答えた。
「そう言うわけじゃねぇけど。あん時ニーナが『元の世界への思慕を』どうとかこうとかって言ってただろ」
「ああ……うん」
「戻りてぇんだろうなやっぱ、って思っただけ」
「……」
「無理矢理付き合わされてんだろなって。……悪いな。あちこち引きずり回されてさ」
俺の顔を見ずにそう謝罪されて、今度はこっちが複雑な気がした。
「さっさと帰ろうって思ってた」
「……」
「レガードが見つかった時。俺はここにいるべきじゃないんだろうなあって」
体重を掛けていた片手が疲れて、体を起こす。軽く腕を振りながら、視線をバンドに戻して言葉を選んだ。

夢の中の、ニーナの言葉が、耳に蘇った。
「俺、ニーナに怒鳴られた」
「何て？」
「『信用されてないみたいで、不愉快よ！！』って」
「え？信用？」
きょとんとしたキグナスの問いに、顔だけ振り返って笑みを乗せる。
「そう。俺の思ったことが、筒抜けだったみたい。……そうやって、俺と、レガードは全くの別もんで……俺は俺自身として、『レガードの影武者』としての俺じゃなくて俺個人ってもんを認めてくれて……それは、昔、キグナスも言ってくれたことがあるけど」
「ああ……うん、まあ」
「複雑だよ」
「……」
キグナスも芝生から体を起こした。両手で体を支えたまま、無言の視線が言葉の意味を問いかける。
「やることやったら帰ろうって思ってて、それが気がついてみたらレガードじゃない俺個人に人との関わりが出来ていて、それを認めてくれて、俺もその気持ちが嬉しくて、そうしたら……」
「……」
「……そうしたら、帰りたくなくなっちゃうじゃないか」
「……」
「そんなふうに思った」
キグナスから言葉はない。返す言葉が、見つけられないんだろう。
だってキグナスは、ここで築いた全てを放り出してどこか違う世界で生活を再開するような未来は存在しない。
「だけどそんなふうに思ったって、どんなふうに思ったところで、それは俺自身には結局選べないんだ。俺が残りたければここにそのまま残れるわけじゃない。帰るのが嫌だって、俺は帰らなきゃなんないんだよ。だったら築く関係なんか薄い方がいいに決まってるん

だ」

そう思いながら、反面、思う。

本当に、それで良いのか？

人との出会いは、起こる出来事は、全て無駄じゃない。嫌な出会い、嫌な出来事でも、自分が何かを見つけようと思えばそこに意味がある。

出会えて感謝出来るなら、尚更。

そのことで受ける傷が大きくなるとして、それを恐れて得るもの全てを放棄するのはやっぱり本末転倒だとも、思う。

いつか必ず失うんだとしても、そこで築いた何かが俺に与えるものは、多分、きっと、大切なんだ。

うまく整理出来ないままにぽつぽつと話す俺の言葉に、キグナスは黙っていた。

繰り返し、同じことを悩んでいるとは自分でわかってる。考えたところでどうにもならないことも。

だけど、どうして考えずにいられるだろう。どうして、恐れずにいられるだろう。

以前に比べて鈍磨した感情。けれどそれでも尚、心のどこかが、ずっと疼いている。

「……キグナスはさ」

俺の言葉に考え込むように黙ってしまったキグナスに、気持ちを切り替えるように俺は声を変えて口を開いた。

「俺の住んでた世界って、想像つく？」

俺の言葉にキグナスは、まだどこか重くなった話題に気をとられているみたいだったけれど、俺に合わせるようにおどけた表情を見せて眉をひょこんと上げた。

「あっちとこっちじゃあきっと、いろんなことが違うんだろうなあ。俺、カズキの住んでた世界ってのが、多分まったく想像がつかねえ」

そう言って、くすくすと笑う。

「どうかな……そんなに別に違わないよ。……いや、相当違うか」

「どっちなんだよ」
「相当違う」
「んじゃあさあ」
キグナスがちょこんと首を傾げて俺を見上げた。
「お前はこっちに来て最初、何に驚いた？」
「俺？一番最初は……」
あっちでレイアを見た時も驚いた……って言うよりは現実を拒絶したけど、こっちで最初に驚いたのは……。
「……目」
「え？」
キグナスのオレンジの瞳が瞬いて見返す。
「キグナスの目を見て、驚いた」
「俺の目？」
「そう。俺の住む世界にも世界中を見ればいろんな色の人がいるだろうけど、オレンジってのは見たことも聞いたこともないもん。だからぎょっとした」
俺の返事を聞いて目を丸くしたキグナスは、次の瞬間けたけたと笑い出した。
「ささいなことで驚くもんだな」
「ささいなことの方が驚きの実感としてはリアルだったよ」
異質さが極めてでかいほど、感覚が麻痺するって言うかイマイチわからないと言うか……レイアなんて異質過ぎてある意味おもちゃに近いと言うか。
だけど似て見えるのにありえない色をしているキグナスの目を見た時は、かえってリアルで……。
「俺がカズキの世界に行ったら、そうやっていろいろ、お前から見たらつまんねぇことで驚いたりすんだろな」
「そうだね……」
想像してみると、それは少し面白い。
まさか他のところにはいられないだろうから、俺の家に居候？最

初に何に驚くだろう。ありがちだけど、車や電車なんかだろうか。
俺の家の辺り――東京だったら余りに自然がないことだろうか。高層ビルの高さ、服装……いろいろ、あるだろうな。
「キグナスがこっちの世界に来たら、俺と一緒に学校に通えば良い」
「うぇー。やだよ俺、わかんねぇ世界でわかんねぇ言葉で授業なんか受けんの」
「わからないから学ぶんだろ」
ウチの高校の制服を着て、困った顔で教室にいるキグナスを思い浮かべるのは、何だか俺に小さな笑いを誘った。ありえないとわかりきっているからだろう。そんなことは、ありえない。
人は、あちらの世界に行くことは、出来ないんだから。
「何笑ってんだよ」
「何でも……。そろそろ、行こうか。あっちの方にあった店も、覗いてみようよ」
「おう」
いつかはここの誰とも会わなくなる。
わかっていても、今はまだ考える必要はないはずだ。
ツェンカーへ行く3ヶ月。
ツェンカーから戻る3ヶ月。
……少なくともまだ、半年は、俺に残されているんだろうから。

◆◇◆

シサーとニーナが拠点として暮らす家は、一言で言えば大雑把な造りをしている。
正面玄関から入るとそのまま石畳の床がだだっ広くぶち抜きで広がっていて、そこに存在感のある樫のテーブルや椅子が置いてある。剣だの防具だの、何だかわからないでかいブリキのバケツみたいなのだの、雑多と言えば雑多。
右手の奥へ行くと扉での仕切りがない部屋に数段の階段からその

まま繋がっていて、そちらが調理場みたいだ。
左手の奥は少し暗くて、2階に続く石造りの階段がある。それと、奥にもうひとつの部屋。かつて、もうひとり同居をしている人がいた名残だと言う。
2階にはシサー、ニーナの部屋がそれぞれあって、客室と言うか余剰の部屋がひとつと小さいながらもバルコニーがあった。この階の更に上にはまるごと物置になっている3階がある。
今回は、ユリアとレイアがニーナの部屋を借りている。ニーナは1階にある部屋を使うと言うことだった。俺は例のごとくキグナスと同室に押し込められている。みんなが寝静まった家の中を流れるのは、ただ、静寂。時々、街の遠くの方から人の笑い声が夜に響く。
ベッドの上で目を向けた窓からは、白っぽい月がヴェールのような光を暗い夜空に投げかけているのが見えた。石壁をくり貫いたみたいな窓にはガラスがはめ込まれ、薄い布がぶら下がってはいるけれど、月明かりを遮りきれてはいない。
隣のベッドからは微かにキグナスの寝息が聞こえる。時々、寝言。俺の言語能力では今ひとつ何を言っているのか解読不能。
ベッドの上で体を起こす。小さくため息をつくと、廊下の方で小さな音が聞こえた。木造のような床の軋みはないけれど、静かに歩く足音。やがてそれがバルコニーの方へ消える。誰かが、出て行ったらしい。
（……ユリア？）
微かに心臓が鳴る。
ユリアじゃないだろうか。どうしたんだろう。……どうしたのかな。
行ってみようか？と言う思いがよぎる。今なら誰に何の邪魔をされることなくユリアと話が出来る。そっけなくなった理由を聞けるんじゃないかな……。
そう思いながら、動けない。
本当に嫌われたのだとしたら、迷惑だよな、普通に。「来ないで

よ」なんて……口に出して言いはしないだろうけど、顔に浮かんでたら多分かなりへこむ。

でも……。

このままにしとくのは、やっぱり何か気持ち悪いじゃないか。それなら正面から「あんたなんか嫌い」とか言われる方がまだましなような気もしないか？そんなに嫌われるほどの覚えもないと言えばないんだけど。そしてそんなことは言われないに越したことはないんだが。

（……行ってみよう）

避けられてるような気がするのが、俺の気のせいとか一時の気分ってこともあるかもしれないわけだし。

少々ムシの良いことを考えて自分のテンションを上げると、俺はようやくベッドから静かに下りた。キグナスが何かに向かって何かをやめるよう懇願するのを聞きながら、部屋を抜け出す。ユリアと話せるかもしれないと思うと、鼓動が速くなった。シャインカルクで事務的な問いかけをしたことを除けば……それこそ、シュートへ向かう前のあの時まで遡るんだから、もう……本当に随分前になる。

バルコニーへ抜ける扉の前で足を止めて、片手で心臓の辺りを押さえる。本当に凄い、どきどきしてる。

ユリアと話せると思うと、いつもこうだ。かっこ悪いな……他のことでは大して心動かされないくせして現金だ。

（……またシカトされたら嫌だなあ）

この後に及んで、また、躊躇う。俺は自分がこんなに情けない奴だとは思わなかった。扉に手を掛けて自分の想像に打ちのめされてがっくりしつつ、俺は思い切って静かに扉を開けた。海風が、吹き込んでくる。

「……」

月のヴェールの中、街と向かい合っていたユリアが振り返った。高い位置で縛られていた髪は解かれて、光を転がり落としながらふわりと揺れる。その姿に、胸が痛くなった。

こうしてユリアと2人になる度に、痛感する。
自分の中の、彼女のへの想い。

第3部第1章第7話　残された時間（3）

静かに扉を閉める俺を無言で見つめたユリアは、そのまま戸惑うように視線を下げた。その仕草に、微かに後悔が浮かぶ。やめておけば良かっただろうか。でも……だけど……。

「……レイアは」

苦い思いが胸にこみ上げて、その場から動けないまま何とか言葉を押し出す。聞きたいのはそんなことじゃないのに、他に言葉が見つからない。そんな自分がまた苦く、こちらも顔を逸らしながら小さく問うと、ユリアは顔を俯けたまま元のように背中を向けた。彼女の背中まで、たった2メートルくらいの距離……なのに、遠い。

「眠ってるわ」

「そう……」

完全に無視を通されなかったことにどこかで安堵し、反面かつてとは違う言葉少なな返事に失望する。

やはり、お邪魔なようだ。言葉を探し出すことが出来ずに、俺は小さく吐息をついた。

戻ろうか。

当たり障りのない言葉が形にならないまま幾つも浮かんでは消える。彼女の笑顔を諦めた俺は、迷って、けれどやっぱり、口を開いた。

「……俺は、随分嫌われたみたいだ」

ユリアが無言で振り返る。悲しげな瞳からは、俺に対するどんな感情があるのか、読み取ることが出来ない。

「理由を聞ければと思ったけど、言いたくなければ部屋に戻るよ」

「……嫌いになったわけじゃ、ないわ」

短い沈黙を挟んで、ぽつりと呟く。そしてまたくるりと俺に背中を向けた。

「嫌いになんて、なるわけがないわ……」

「……」
儚い声はともすれば消えてしまいそうで、遠く響く波の音にさえ掻き消されそうだった。ユリアの言葉に、微かな希望が胸に宿る。
嫌われたわけじゃ、ない？
じゃあ、どうして……。
「避けられてる、俺」
「……」
「……違う？」
ユリアの背中は答えない。返答を待って黙って見つめる俺の前で、ユリアが、手を置いたバルコニーの手摺りに深く項垂れた。コツンとおでこを押し付けて俯いた肩を長い髪が滑り落ちる。
「わたしは、勝手だわ」
「え？」
「わたしは、あなたにとって、疫病神でしかない」
「……？」
意味が、わからない。
そっと眉を寄せて続きを待つ俺に、ユリアが言葉を探しながら儚い声のままで続けた。
「この世界に引き込んだのもわたし、あなたをレガードの囚にしたのもわたし、ロドリスの宮廷魔術師と戦わせたのもわたし、常にわたしはあなたを危険に晒している」
「ユリア……」
「そう、わかっているのに……なのに、こうしてまた、危険なことに引きずり込んでる」
「……」
「危険な思いをさせたくない、そう思って、離れていれば無事でいるか心配でたまらないくせに、なのにこうして性懲りもなくあなたを危険な場所に連れて行こうとしているの」
心臓が大きく鳴った。
俺のことを、心配して……。

特殊な意味じゃないってわかってる。全てが自分のせいだとそう思っているんであれば、それは、そう……責任、みたいなもんだろう。

そうは思うが、だけどそれでも、嬉しかった。

嫌われたんだろうと思っていればこそ、尚、一層……。

「ヴァルスのことを思えば、わたしはこれが最良だと思った。嘘じゃない。ヴァルスには味方をしてくれる強い国が必要だわ。ツェンカーの力が必要だと思っているわ。その為に、わたしが直接交渉をするべきだとも思っているし、ツェンカーに向かうにはカズキたちの力を借りるのが一番向いていると思っているわ。全部、本音よ。だけど……」

俯いたままのユリアが細い声で続ける。畳み掛けるように、吐き出すように。

「だけど、それはまたカズキを危険に晒してるってことなのよ……」

「……」

「危険な目に遭わせたくないの。それも本音よ。だけどそうならないの。そうしてるのはわたしなの。きっと心のどこかで甘えてる。あなたはきっと許してくれるって。傭兵のシサーやニーナとは違うわ、ヴァルス貴族であるキグナスとも違うわ。あなたには何の関係もない、なのにあなたはきっと許してくれるって心のどこかで甘えてる。そんな自分がまた許せない。そう思えば、そばにいられないと思う。合わせる顔がないのよ。なのにツェンカーまで一緒に行って欲しい。自分の強欲さに、呆れるしかないわ……。だってわたしは、口で心配してると言いながら、あなたをまた引きずり込んでいるのよ」

震えながら吐き出す声に、胸を突かれた。

迷いながら、悩みながら……だけどそれは、それでも俺と一緒にいたいって……そう、聞こえる。

俺の耳が、都合良く解釈し過ぎか？

ヴァルスのことを考えるとこれが最良だと思いながら、俺の為を

思えばツェンカーへの同行をさせない方が良いと思える、俺の安全を願っているのに、けれど一緒に行って欲しい。……理屈に対して、俺といたいと思ってくれる感情が強いからそれに振り回されている自分を許せないと……そう、聞こえない、か……？

「そんな自分を知っているのに、笑顔なんて向けられないわ。わたしは、ずるいわ」

「ユリア」

救われた。

俺の解釈が合ってるかわからない……と言うか、希望的観測なんだろうとも思うけれど、だけど、少なくとも俺は嫌われたわけじゃない。口先だけのフォローだとは考えにくい。俺の無事を思ってくれて、そして俺がツェンカーまで同行することを望んでいる……それはあながち間違いじゃあないだろう？

「隣、行っても、いい？」

少しでも近くに行きたい。本音を言えば、触れたいよ……。

だけど、それは出来ないから、せめて隣に。

俺の言葉に、ユリアが沈黙する。それから、小さな返答が届いた。

「……うん」

ようやく扉の前から離れて、ユリアの隣に並ぶ。ユリアは手摺りに押し付けていた顔を起こし、けれどこちらに視線は向けずに俯いたままだった。

間近で見るユリアの横顔に、泣きたいほどの愛しさが胸にこみ上げる。

ギャヴァンの東南にあるシサーの家のバルコニーからは、遠くはあるけれど海が見えた。顔を反対側に向ければ、夜に包まれた街。ほんの少しだけ高い位置にあるから、遠くまで見晴らせるわけではないけど、高い建物がないのも手伝って、昼間ならそこそこ町並みが眺められる。

「良かった」

「……」

「嫌われたんだと、思った」
顔を伏せたままで微かに首を横に振るユリアに、目を細めた。
「引きずり込んでよ」
「……」
「俺は、ユリアがツェンカーまで一緒に行って欲しいって思ってくれただけで、嬉しいよ」
暗い街に目を向けて、ユリアの心を軽くしてくれる言葉を探す。
ユリアがこちらに視線を向けたのがわかった。
「いーじゃん、ずるくても。俺が良いって言ってるんだから」
「わたしは……」
「それに俺は、ユリアがずるいとは思わないよ」
「……」
「ユリアが俺の無事や安全を思ってくれたことが、嬉しい。だけど、俺もユリアを守ってツェンカーに連れて行ければと思ってる。俺自身がそう望んでる。ユリアじゃない、俺が安全でない道を自分で選んでる。ユリアが悪いわけじゃない」
「……」
悲しげにきゅっと唇を小さく噛むユリアに、微笑を向ける。
俺にとっては、何より……会えずにいたこれまでより、こうしてそばにいられる……それだけで。
「俺がそう言ってもユリア自身がそう思えなければどうにもならないのかもしれないけど、でも俺は、自分で望んで今ここにいる。ユリアに押し付けられたわけじゃない。俺が選んでいることなのに、どうしてユリアが俺に悪いと思う必要がある？」
「……」
「前にも言ってる。ユリアの為に何をしてあげられるのか、考えてるって。俺は、俺の出来ることならユリアの力になりたいと思っているし、それが俺の望むことだから……」
だから。
「……笑顔を、見せてよ」

顔を見て、言えなかった。さっきのユリアのように、両手をかけたバルコニーの手摺りに俯くように、小さく言う。
「寂しいよ」
「……」
「避けられてる方が、俺は、つらい……」
自嘲するようにちらりとユリアに視線を向けると、ユリアは言葉を失ったままで俺を見返していた。それから、長い睫毛を伏せる。
「たくさん、いろんなこと悩んでると思うから、俺のことなんかで自分を責めないで。別に……今すぐここでさあ笑えって言っているわけじゃないんだけど……」
俺の言葉に、ユリアが微かに目を細めた。少し、俺の気持ちがわかってもらえただろうか。
「普通にさ」
「……ありがとう」
「一緒に、ヴァルスの援軍を連れて来よう」
「うん……」
ユリアの気持ちがほぐれてくれるように笑顔で言った俺の言葉に、ユリアも笑顔を覗かせてくれた。ようやく取り除かれた気まずい空気にほっとして、俺はバルコニーの手摺りに背中を預けると、そのままますとんとしゃがみ込んだ。
良かった……嫌われたわけじゃ、なくて。
「……ツェンカーに行くって言うのは、ユリアが考えたの？」
少しは、会話をしても大丈夫だろうか。話題を変える俺を、ユリアが見下ろす。
「そう」
一度頷きかけて、それからユリアは考えるように街に視線を戻した。
「……ううん、わたしだけじゃないわね」
「うん？」
「レガードが……教えてくれたの」

「……え？」
思わずユリアを見上げる。レガード？
「意識が、戻ったの？」
この前聞いた話では、レガードはまだ昏睡状態から目覚める気配がないと聞いている。魔法を受けた衝撃で脳とか神経とか、何だか良くわからないがそういうものに影響を受けていて、どうとかこうとかって。俺は勝手に脳震盪の延長版みたいなもんかと思っている。
ともかくも意識はない……話せる状態にはないと聞いているんだけど。
俺の問いに、ユリアはゆっくり顔を横に振った。寂しそうな横顔を覗かせ、それから小さく微笑んで俺を見下ろす。
「意識は戻ってないけれど。……弱音を聞いて欲しい時に、レガードのところに行くの」
「……」
「レガードにだったら、言っても良いような気がして」
「……」
「そしたらね」
俺の複雑な胸中に気づくはずもなく、ユリアは照れたように大きな瞳を優しく細めた。何かを思い出すような、誰かを……想う、ような。
「レガードが教えてくれた気がする。『もっと周りを見てごらん』って」
「……そう」
「それで、気がついたの。手を貸してくれる可能性がある国があることに」
ユリアは……。
……ユリアは、本当にレガードを大切に想ってるんだな。
それは、前から感じている。それは知っている。でも……本当に。きっと自分の吐いた弱音に対して、レガードだったらこう言ってくれるんじゃないかとかそう言うふうに考えながら、昏睡している

レガードのそばにいるんだろう。
意識不明の状態においてさえユリアを支えてやれるレガードに、俺が太刀打ち出来るわけがない……。
「……ツェンカーから戻った時に」
「ん」
一転して痛みを訴える胸を堪えて言葉を押し出す。
誰を、想っていたとしても……。
「レガードの、意識が、戻っていれば、いいね……」
「そうね……」
俺は、俺に出来ることをやるだけだ……。

第3部第1章第8話　予兆（1）

「あッ……カズキ、今の見た？」
「え？ごめん。見てなかった……何？」
「海鳥が、海に墜落するみたいにね……水に突っ込んでいくのよ」
「へえ？」
小型商船の舳先で、過ぎていく景色を眺めながら、隣でユリアがはしゃぎ声を上げる。海風が、アップにまとめたユリアの長い髪を撫でて過ぎていく。
「餌でも取ってるのかな」
「あんなふうに水に突っ込んで、餌が取れるの？」
「うーん。どうだろう」
「だってあんな上から加速してるわ……あ、ほらッ。今度は見た？」
「ごめん、見なかった」
「もう。ちゃんと見て」
……幸せ。
「この辺は戦禍が一度通り過ぎた後だから、平和なのねー」
拗ねたように軽く俺の腕を叩くユリアに笑う俺の頭の上で、白けたようにレイアが言った。俺の頭と見ればベッドだと思うその認識を改めてもらいたい。

ジフからの使いだと言って、ギルドのリグナードと言う男性がシサーの家の扉を叩いたのは、翌日――――カサドールへ向かう日の早朝のことだった。
俺たちの予定としては、ギャヴァン出発後、一旦レオノーラ付近まで戻って通過し、そこから西へ進路を取る。つまりはカサドールまでをずっと陸路と言うことだ。陸路は時間がかかるけど、他に手段がないのだから仕方がない。
……と、思っていたわけだが。

「街の東側に、キール島への渡し船をやっている奴がいる。そいつを使え」
「渡し船？」
「聞いたことあるな……。カザス経由でメイアンに品を横流ししている業者だろう」
シサーの言葉にリグナードは小さく笑った。
「深くは聞くな。……頭が話をつけてある。カザスまでは『番人』が送る。カザスで乗り換えて『売人』にメイアンまで乗せてもらえ」
「『番人』ってのはどこにいるんだ？」
「俺が案内する。『売人』への繋がりは『番人』がつける。……もう出発出来るのか？なら、さっさと行こう」
シャインカルクの馬をギルドに預け、メイアンとやらで再度馬を入手することに決めて、リグナードに連れて行かれたのは街の南東――――ギャヴァン港からさほど遠くないところにあるちょっとうらぶれた宿屋だった。客入りは余りないのか、カウンターに歯が抜け切っちゃったみたいな顔をした小さなおばあさんが、ひとり、口をもぐもぐさせながら座っている。……あ、でも寂れてるみたいなのは宿の方だけかな。続く食堂はわりと人がいるみたいだ。宿が寂れてるのはギャヴァン港封鎖の影響だろうか。
「海ものの品出しだ」
もぐもぐしているおばあさんに近づいたリグナードの言葉に、おばあさんが無言のまま立ち上がった。ゆっくりとどこかへ消えるとややして戻って来た時には、手に２０センチくらいの木片を持っていた。文字が書かれてある。リグナードはそれを受け取ると板面をちらっと見て俺たちを促した。宿の方の奥に向かって歩き出す。
黙って従っていくと、リグナードは奥の部屋の扉を開けた。中に入ると更にもうひとつ、扉があった。ただしこっちには鍵がかかっているみたいだ。しかも……いかつい鍵だなあ……。直径２０センチくらいのごっつい鉄の円盤みたいなのがドアノブのところにぼこんと嵌まり込んでいて、円に沿って数字が並んでいる。その真ん中

からこれまたごつい『レ』の字のドアノブが飛び出ている。
リグナードがその数字盤に指を伸ばした。数字盤は円の中央へ向かう細い溝にはめ込まれていて、スライドするようになっているらしい。リグナードが数字盤を動かすと、バネでもついているようにすぐに元の位置に戻る。
そうして幾度か数字盤をかしゃかしゃとスライドさせると、やがて手を止めた。ノブに手を伸ばす。
カチャ。
扉が、何の抵抗もなく開いた。
「凄いな……。暗証番号？」
リグナードは小さく笑って答えない。最初にもらった木片をパンツのポケットに突っ込むと、さっさと中に足を踏み込む。
おばあさんから受け取っていた木片に書いてあったんだろうか。『品出し』ってのがキーワードなのかな。それで暗証番号を受け取って、鍵を開ける。例えば暗証番号が日替わりとかになるのかもしれない。だとすればこの扉の場所を知っているとしても、おいそれとは入れないもんな。
余計なことを考えながら、リグナードに続く。中はすぐに地下へ続く階段になっていて、下るに連れてなぜか空気が湿っぽくなるのを感じた。それにあわせて、水音が微かに聞こえる。
「『番人』」
湿気を帯びた石の階段を下っていくと、薄暗い、小さな部屋があった。どちらかと言えば洞窟って雰囲気だ。右手のすぐそばには川があって、俺の世界で言う小型遊覧船ぐらいの規模の船が停泊している。左手の、抉られたような部屋の奥にはカンテラが灯され、帽子を目深に被った薄黒い男が椅子に座っていた。この人が『番人』らしい。
「海ものだ」
「わかった」
「悪いな。頼んだ」

「カザスまでだぞ」
「ああ。その後は『売人』に繋がりをつけてくれ」
『番人』に木片を手渡し言葉を幾つか交わすと、リグナードがこちらを振り返る。親指で椅子の男を示した。
「『番人』だ。カザスへの今日の出荷に便乗させてもらう。後のことは『番人』に聞け。じゃあ、俺は行くぜ」
え、もう行っちゃうの？
あっさりと言って今来たばかりの階段を戻っていく後ろ姿に、シサーが慌てて声をかける。
「おい、あんた」
「あ？」
「ジフによろしく伝えてくれ」
「……おう」
微かに笑ってリグナードの後ろ姿が見えなくなると、シサーは沈黙したままの『番人』に向き直った。
「俺はシサー。あんたのことは『番人』と呼べば良いのか」
『番人』が無言で頷く。それに応えて頷いたシサーは、川の上でゆらゆらと揺れている船に目線を向けた。
「あれで、連れて行ってくれるのか」
またも『番人』の答えは無言の首肯だった。無口な人だ。
「ジフからは、何と聞いている？」
「『荷を運べ』と」
……荷。
それから、『番人』は椅子から立ち上がった。つれない様子で船のほうへと歩き出す。岸に間近につけた船にすとんと飛び乗ると、こっちを振り返った。
「乗れ」
「あ、ああ」
思わず顔を見合わせながら、促されるままに歩き出す。ユリアがちょいちょいと俺の服を引っ張った。

「え？」
「何か、変わった人ね」
「……うん」
前夜、バルコニーで話したことで、ユリアとの気まずい空気が払拭されたようだ。とくれば、以前と違ってユリアへの想いを明確に自覚している俺としては……まあ、何だ……やっぱりこうしてユリアのそばにいられるのは、嬉しい。
船にはごくごく小さな船室がついている。本当に小さい。船の規模自体が１５メートルくらいだろうなって規模のバルシャ（小型帆船）で、船と言うよりはボートと言う雰囲気だ。……大丈夫なのか？
船には『番人』の他に、更に４人の人間がいた。いずれも無口な人たちで、自己紹介も何もあったものじゃない。『番人』に案内されて、船倉に入ると、そこはごくごくごく小さな部屋で、しかもこれ一室しかないようだった。俺たちはレイアを省いて５人。寝ようと思ったら、ぎゅうぎゅうだ。……いや、一室じゃないな。奥に扉がある。けれど、先ほどの扉のようにごっつい鍵がついていた。
「何があんのかな」
「本来運ぶつもりの荷が入っているんだろう」
ああそうか……。俺たちのことはついでに運んでくれるんだもんな。
「カザスって、どこなの？」
とりあえずは荷物を床に置いて、シサーに尋ねてみる。船室、とは言っても何もない。むき出しの、煤けた木の床があるだけ。船自体が大きなものではないから、高さもない。シサーは直立出来ないし、俺やキグナスも少し首を曲げないと苦しいところだ。楽なのはレイアだけ。勢い全員床に座り込む。
「ギャヴァンの西――――アルズール内海にキール島と言う島がある。ヴァルスの海軍基地がある島だな。キール要塞と言うが」
「うん」
荷物の中から地図を引っ張り出して、シサーが広げた。

「その更に北西……キール島の北端に、小さな漁村がある。そこが、カザスだ。カザスから北上すると本土……ここにはメイアンと言う街がある。ギャヴァンからカザスまではこの船なら恐らく――――5日。カザスからメイアンまでは1日はかからねぇだろうから、陸路で半月はかかる距離をおよそ6日で移動出来ることになる。ただし」

地図を広げたままシサーが、あどけない顔で地図を覗き込んでいるキグナスに向いた。

「前と違って、船が小型だし、エルファーラへ渡った時ほど乗る時間も短くない。アルズール内海は波が穏やかだが、船が小さいせいで前より揺れを感じるかもしれねえぜ」

シサーが言った途端、がくん、と船が動き始めた。この船も帆と人の手とで前進するんだろうか。

「ひぇぇ……」

シサーの言葉に、キグナスが青褪めた。

「何か、見えてきたわ、カズキ」

相変わらず『番人』も他の乗員も寡黙で、必要最低限以外は口を利かない。いわゆるアングラな仕事をしてるんだろうから、べらべら無駄口を叩くようじゃしょうがないのかもしれない。何かを手伝おうと思っても、むしろご迷惑の様子なので何も出来ない。グローバーの船にいた時よりも、俺たちは一層暇だった。

アルズール内海は、シサーの言うように、波がとても穏やかだった。夏の日差しを波が照り返し、きらきらと眩しい。暑くはあるけれど、海を進む船体がきる風が心地良くもあった。けれど、船の揺れは確かに大型商船より大きく、キグナスは相変わらずの半死半生だ。俺たちから少し離れた甲板の床で、朦朧としている。

はしゃいだ様子のまま、ユリアが俺の腕を掴む。どきどきしながらユリアの指す方向に顔を向けると、ずっと正面の遠くに見えている島――――キール島に、何か建物らしきものが見え始めていた。

「本当だ……」
「あれが要塞？」
「だろうね」
キール要塞だ。
――――ギャヴァンを出てから、３日。
キール島の漁村カザスまでは、残すところ、あと２日。

◆◇◆

カザスには、予定通り５日で上陸することが出来た。余りにキグナスが哀れなのでそこで一泊させてもらい、『番人』から『売人』に他の品々と共に引き渡されて１日、ローレシア本土メイアンの街に到着することが出来たのが、ギャヴァンを出発してから実に６日目の夜。
シサーに聞いた話によれば、メイアンと言うのはあまり品の良い街ではないらしい。と言うか、治安が良くないらしい。ギャヴァンのように闇稼業をやっている人間をきっちり制圧している、ギルドのような存在がないのだそうだ。だから、一般人でも追い剥ぎだとかカツアゲみたいなのの被害にあったりする。
「特にユリア、気をつけろよ。カズキとキグナス、ちゃんと目を配っとけ」
「わたし？どうして……」
「若くて可愛い女の子はそれだけで商品になるもの」
「……」
商品になんかさせるものか。
メイアンは、街を歩いているだけで確かに雰囲気がヤバそうだ。行ったことないけど、アメリカのダウンタウンとかってこんな雰囲気なんだろうか。荒んだ雰囲気の建物が立ち並ぶ通りは、大通り以外は薄暗いところが多く、壁には山のような落書き、建物の陰には積まれたゴミと、座り込んだ風体の悪い男たち。

うーん。俺なんか、一発で負けそうだな。魔物相手の戦闘に慣れたとは言っても、人間相手に試すことはほとんどないので、そういう基準で言えば自分の力量がどの程度まで伸びたのかがわかりにくい。……でもな。少なくとも人間よりは魔物の方が動きが速いことは多いだろうし、それを考えればある程度いけるだろうか。相手がシサーのように腕が立つんだと、どうにもならないだろうが。

うだうだ考えながら、宿を探して明るい通りへ向かう。光の見える方向を目指して行くと、そちらの通りは多少、見栄えがした。

「ちょっと今日は高ぇとこに泊まるぞ。こういう街で宿代をケチるとろくなことにならない。無用なトラブルに巻き込まれる。増してユリアがいるんだ。大事をとるに越したことはない」

シサーの言葉で選んだ宿は、出入り口に私兵らしき姿が見える宿だった。確かに他のお安い宿に比べて、遥かにセキュリティがしっかりしていそうだ。

いつも通り、男性陣と女性陣でそれぞれ部屋を借り、食事をする前に俺とシサー、そしてキグナスは、メイアンの街の道具屋へ足を運んでみることにした。わざわざ危険な真似をすることもないだろうと言うことで、女性陣は宿に置き去りだ。それなりにガードが堅そうな宿、中にいる分には滅多なことはないだろう。まあ、何かあったとしても、ユリアはともかくニーナが黙っているとは考えにくいけどさ。

「こうやって考えると、ギャヴァンのギルドって凄いのかなあ」

先ほどとは違う道でも、やっぱり一本裏に入ってみれば、何やら『悪〜い』ことになっている。

「何だよいきなり」

「ギャヴァンって、ヴァルスにとってはかなり巨大な貿易都市でしょ……ってことは、人も多いし、品物の出入りも激しい。商売するには、うってつけじゃん」

「ああ」

「犯罪とか多くて、おかしくないんじゃないの」

だけど、キグナスと2人で夜に街を歩いていても、娼婦とかにからかわれることはあっても変なのに絡まれるようなことはなかった。レオノーラみたいに国政のお膝元――――いろいろな意味で警備が厳しいだろう街とは違うだろうに、警察機構のようなものがしっかり整っていないこの世界で、王都と同じくらい安全なのは凄いような気がする。

「ゲイト、どこ行ったんだろうな」

シサーからやや遅れて俺のすぐ隣を歩いているキグナスが、ぽつんと言った。

「……うん」

ゲイトが単独で動くことに決めたのは、グレンフォードにシンの生命を奪われたからだろう。俺が以前言っていた『ネクロマンサー』、そしてトートコーストで言うシェイドの話を手掛かりに、グレンフォードを追い詰めようと考えているんだとは思うんだけど……。

「ひとりであいつ――――グレンフォードを付け狙ったりするんじゃなけりゃ、いーんだけどな」

ぐりぐりとロッドを顎に押し当てながら、キグナスが呟く。それには全く同感だ。

魔法を帯びたものしか効かないと言うことを差し引いても、シサーと渡り合う力量……いや、シサーに「今の俺じゃあ適わない」と言わしめる力量の持ち主だ。生半可な知識と腕で勝てるとは思いにくい。これでゲイトにまで何かあったら、俺は、シンだけじゃなくゲイトまでもジフから奪うことになってしまう。

「あ、これ、道具屋じゃねぇか」

シサーが言って、一軒の小さな建物の前で足を止めた。ドアの前に看板が置かれている。それも例に漏れず落書きだらけだけど、俺の儚い知識を掘り返しても『道具屋』と書いてあるようだ。

「入ってみるか」

そう言ってシサーが扉に手を掛けた時だった。

「……？　何か言った？」

「んあ？俺？言ってねえ」
キグナスが俺に答える目の前で、シサーがさっさと中に入っていく。俺に答えて目を瞬いたキグナスは、ちょこんと首を傾げてシサーに続いた。
「？」
確かに何か声がしたような気がして、気になった俺はそのままそこで辺りをきょろっと見回した。別に人の姿はない。通りのちょっと遠くに、たまっているガラの悪そうなのが何人かいるだけで、その声が届くはずもなかった。
（ま、いっか……）
ギャヴァンのギルドがどうとかって……聞こえた気が、したんだけど。
（気のせいかな……）
そっと首を傾げて、キグナスが開け放したまんまの扉の中に足を向けた俺の耳に、改めて……確かに、聞こえた。
「……ギャヴァンのギルドは駄目だ。俺たちにはちょっと敷居が高いな……」
……？
何の話だろう。
知っている名前が出て少し興味を惹かれた俺は、中に入るのをやめて辺りをもう一度見回した。声の出所を探す。その間も会話は続き、時折微かな金属音と馬の蹄の音が混じる。
「……確かにな。ギャヴァンが使えりゃもっと……」
「流通を握ってるのは、ギルドだろう？」
「ああ……。まとめて手に入れるには一番だろうけどな……」
どうやら彼らが話しているのは、道具屋と隣の建物の間の、えっらい細い通路だ。ずっと奥。馬の蹄の音はその更に向こうだろう。こんな狭いスペースに馬が入っているとは思いにくい。

第3部第1章第8話　予兆（2）

馬か……俺たちも手に入れなきゃな。でもカサドールについたらまた船だし、小型連絡船ってことだから、また馬は置き去りかもしれない。不経済。レンタカーみたいなのがあればいいのに。

声の出所と、ギルドの名前が話の流れで出ているだけらしいことがわかって満足した俺は、今度こそ店に入ろうと踵を返した。何だかろくな会話ではなさそうだし、大体こんな狭い暗がりで話しているくらいだから、人に聞かれたい話じゃないんだろう。関わらないに越したことはない……。

「せめて長剣があと２０口、何とかなんねえかなあー」

（……え？）

再び、足を止める。と、もうひとりの男の声が慌てて遮った。

「馬鹿。声がでかい」

長剣２０口？

（何に、使うんだ？）

しかも『あと２０口』ってことは、前提として既にいくらかの武器を入手済みまたは入手予定があると言うことになる。

どっかの貴族とかなら、私兵がいると聞いているから、武器を集めるのは考えられる。特に今は戦時中だから、尚更。

だけどこんなうらぶれた街で人目を避けるようにと言えば、真っ当な話とは考えにくいじゃないか？

まずい話を聞いてしまったんだろーか。

（……）

そんなふうに思って凍りつく俺の耳に、更にもうひとり、別の人間の声が届いた。馬がぶるぶる言ってるから、そっちの方から人が増えたんだろうか。口早にしゃべる言葉は、ヴァルス語ではなさそうだった。俺が耳にしたことがないだろう言語。

そうは言っても、俺はヴァルス語とロドリス語、あとは妖精語く

らいしか耳にしたことはないし……トートコーストの言葉も魔物がしゃべってるのはちらっと聞いたけどそんくらいで、他にどういった言語があるのかまでは良く知らない。

今までヴァルス語でしゃべっていた声までも、そのわけのわからない言葉に切り替わってしまい、俺には全く内容が把握出来なくなってしまったので、ついつい立ち聞きしちゃったけど、急に興味が殺がれた。

ま、いいや。内容がわかったところで、その意味するところが俺にわかるわけでなし。

近づかないに限るのでさっさと店に入ろうとしたところで、キグナスが迎えに出てきた。

「カズキー。何のろのろしてんだあ？」

あ、馬鹿。あいつらに俺がここにいたのがばれちゃうじゃないか。

「何でもないよ」

キグナスを中に押し込んで、自分も中に入ろうとした視界の隅で、更にもうひとり、今度は俺のいた方の道から男が路地に入っていくのがちらりと見えた。幸い、ただの道具屋の客だと思っているようで、こちらには何の注意も払わなかった。足早に闇に姿を消す。こちら側の耳に、キラリとマキビシみたいな飾りのイヤリングが、妙に目に付いた。さっきの連中の仲間なんだろうか。

首を小さく傾げながら道具屋に入ると、俺がぼさっとしている間に買い物を済ませたらしく、シサーがカウンターで精算をしているところだった。

「何してたんだ？」

「いや、何でも？」

答えながら、ちらりと振り返る。

閉じた扉からは、外の様子を窺い知ることはもう、出来なかった。

◆◇◆

道具屋を出て宿に戻る道すがら――――シサーが、行きとは違う道を、辿っている。
「……何か、あるんだ？」
まさか道を間違えてるってこたあないだろう。俺の問いにシサーが小さく頷いた。
「つけられてんな」
シサーの返事に、キグナスがロッドをぎゅっと握る。
「……何で？」
「さあ？深い意味のないただのチンピラかもしんねえから、何とも言えねぇな。大体この街で絡まれなきゃなんねえ理由が『不運』以外にあるとは思えねーんだが」
宿への道を逸れているのは、変なもんをユリアやニーナの元に連れ帰りたくないからだろう。
多分でたらめに歩くシサーは、やがて、ますます閑散とした通りに出た。街灯や建物から漏れる灯りがなく、月明かりだけが頼りの……。
「悪いんだが、大した金は持ってねーぜぇ？」
シサーが足を止めて、正面を向いたまま後ろの気配に言う。不気味な沈黙が返った。
「それとも何か用事か？」
言って振り返るシサーに倣って、俺とキグナスも振り返る。数十メートル先に、黒い影がいくつか見えた。
黒い影は答えない。
「そんだけ群れて追い剥ぎした日にゃ、ひとりあたりに大して行き渡らねえぞ」
人数は……8人。
呆れたようにこりこりと顎を掻くシサーの軽口には当然答えず、影が近づいてくる。
5メートルほどの場所で止まると、ようやく口を開いた。
「……そこの」

中心に立つ、カトラスの男が、俺とキグナスを顎で指す。
「どっちかのガキに、ちと、大事な話を聞かれたんじゃねえかと思ってな」
……。
「はあ？言いがかり……」
「あ、それ、俺だ。多分」
言い返すシサーについい告げると、かくんとシサーがコケた。
「……お前な」
そういう不都合なことは黙っとけ、とぼそりと言う。……どっちにしたって解放してくれなさそうじゃないか。会話が空回りしないだけましだろ……。
「でも大して何が聞こえたわけでも……」
言いかけるが、一体どこまで聞こえたと思っているのか、問答無用と言った様子で黒い影が武器をちらつかせて散開する。ので、しょうがない、俺とシサーも剣を抜く。
「カズキ」
「……うん」
「やれるか？」
剣を構えて男たちを見据えたまま、シサーが問う。いつだか俺が、「俺には人は斬れない」と言ったからだろうとは、すぐに予想がついた。
……そう呟いた時の俺とは、もう、違う。
「やれる」
腕は別だけど。
剣を構える俺に小さく頷くと、シサーが低い声で付け足した。
「殺す必要はない。抵抗出来なきゃそれで良い。キグナスも手加減しとけ」
「その方が却って難しいよ」
相手に負わせる傷の度合いを調整するには、相当の技量がいる。
俺にそんな高等技術を期待しないでくれ。

俺の返答にシサーが小さく吹き出した。微かな足音だけを立てて、男たちが武器を構えて駆けて来る。シサーが背後のキグナスに言った。

「キグナスッ、減らせッ！！」

「りょおかいッ。……ダテ・エト・ダビトゥル・ウォービース・イグニス。『火炎弾』！！」

闇に巻き起こる猛火が、男たちを目指して襲い掛かる。それをくらわず、更に慄かなかった者だけが、武器を振り翳して地を蹴った。俺の左側でシサーの剣が唸りを上げて男のひとりの剣を弾き飛ばした。甲高い音を上げて闇の中に消えてゆく剣には目もくれず、もうひとり別の男の腕に剣を切りつける。俺も、こちらに襲い掛かってきた男のひとりの剣を剣で受けた。キグナスが援護の魔法を飛ばしてくれる。

「……ドゥーケ・ヌンクァム・アベッラービムス。『風の刃』！！」

殺傷能力のある風を受けて、男がひとり、全身を切り刻まれて吹っ飛んだ。細かな血を噴き上げながら、地面をのた打ち回る。一方で、先だって『火炎弾』を喰らわずに済んだものの、怖気づいた奴に向けて、こちらにも追い討ちのように『風の刃』が襲い掛かる。

「ちッ……お前ら何もんだッ……」

俺に剣を翳している男が舌打ちをした。悪いんだが、俺には剣を交えながらおしゃべりしているような余裕はない。剣を引いた隙をついて、その剣を弾き、返す前に腹部を俺の剣が貫く。男が悲鳴を上げて、体を仰け反らせた。抜いた剣に、血飛沫が上がった。

俺がひとりとことを構えている間に、シサーとキグナスが大方片付けてくれたらしい。おさすが。

「どうするかな……」

「とんずらしようぜ」

どさりと男が地面に崩れるのを見届けていると、シサーとキグナスの声が聞こえた。……この男は、生きてるんだろうか。死んだ、んだろうか。

俺には良く、わからない……。
「カズキ、怪我してねぇか？」
キグナスがちょこんと首を傾げる。こんなあどけない顔をして、今、一体何人薙ぎ倒したんだろうな。
「うん……してなくはないけど、治癒するほどじゃない……。平気」
答える俺の脇を、剣を収めたシサーが大股に通り過ぎていった。血溜りを作りながら地面に呻く男のひとりに近付いていく。さっき、真ん中にいた男だ。
「あんた」
「……」
近付いたシサーが声をかけると、男が呻きながら微かに顔を向けた。全身ずたずたってことはこいつは、シサーの剣じゃなくてキグナスの魔法にやられたんだろう。
シサーが先ほど手加減しろと言ったからそうしてるんだろうけど、『手加減の仕方』をまだイマイチ押さえきれていないらしいキグナスの魔法は、以前の『本気』よりも強力だ。ちょっとただ事じゃないほどのずたずたさ加減。悲惨だ。
「俺たちは別に、ただの旅人だ。あんたらが何をしているか知らねぇし、興味もねぇ。あいつが何を聞いたにしたってその意味なんかわかっちゃいねぇし、これ以上の揉め事は互いの為にも良くねぇんじゃねぇかと思うが、どうだ？」
男の回答は呻き声だ。低くドスの効いた声で囁くようなシサーの言葉に、男が微かに首肯したように見えた。
「あんたらも、あんまり突付き回されたくねぇ事情があるんだろうが、こちらだって同じだ。何も聞きゃしねぇよ。代わりに、これ以上こっちに構わねぇでもらいたいんだがな？約束するならこれで、しまいにしよう。どうしてもちょっかいかけたいって言うんなら……」
言いながらシサーは、ショートソードを抜き出した。すらりと男の首に当てる。

「手出し出来ないようにさせてもらうしかねぇが？」
「……わかった……」
ため息のように微かな返答が返った。こんな脅しをされたら否定する馬鹿はいないだろう。
「よし。お利口さんだ」
からかうように言って、にっと笑ったシサーは、ショートソードを収めながら立ち上がった。呻きを上げる男たちの間を縫って、俺たちを促す。
「行こう」
「……これ、放っておいていいの」
「持ち帰るわけにはいかんだろう」
そりゃそうなんだが。
俺も剣を拭って鞘に収めると、俺と剣を交えた男を一瞥した。脳裏に、対峙した男の顔が過ぎった。
「さて。予想外のトラブルで遅くなっちまったなあ。ニーナが怒り狂ってなきゃいいんだが」
「う、うーん」
ようやく、宿に向かって歩き出す。男たちに襲われた辺りが見えなくなり、やがて大通りに出ると、ちらりとシサーが俺を見た。
「で、何を聞いた」
「え。大したことを聞いたわけじゃないよ、本当に」
「そうか？」
「うん。確かに何か……『あー、アングラな話してるなー』って感じではあったけど」
何だか手が気持ち悪い。魔物を斬る時……それも亜人型の魔物を斬る時の手触りと大きく違うわけじゃないのに、斬った時の感触が手のひらに染み付いたみたいに残る。それを拭うように腰の辺りに意味不明に擦り付けながら、俺はシサーを見上げた。
「……武器を調達している、って感じだった」
「武器か」

「うん。最初、ギャヴァンのギルドがどうとかって言ってたのが気になって、つい聞いちゃったんだけど、途中から何語かわからない言葉になっちゃったし」
「ギルド？」
隣に並んで俺とシサーの会話を聞いていたキグナスが目を瞬く。
「うん。別に、それは大した話じゃなかったんだけどね。繋がりが欲しいけど無理だなーみたいな」
「ああ」
俺の言葉に、シサーが笑った。
「メイアンのチンピラみたいな闇稼業の人間には、ちと敷居が高いかもしんねぇな」
「そう。そう言ってた」
「ギャヴァンのギルドは、ルートもいろいろ持ってるし、金も情報も使える人間もあるからな。底辺で仕事している奴がギャヴァンギルドと仕事出来れば、一挙に格が上がんだろう。その前に、それなりの品格がねぇと、ギャヴァンギルドとの繋がりは持てねー」
ふうん。そういうもんか。上下社会だ。
「何語かわかんない言葉になったって、何語だ？」
キグナスがロッドを頭の後ろで担ぐみたいに回して、両手で首筋をトントンと叩きながら俺を見上げた。……だからわかんないんだってば。
「何語かわからないんだから、わからない」
「そりゃそーか」
「ヴァルス語、ロドリス語じゃないのは確か。トートコーストとも多分違うんじゃないかなあ……確信はないけど」
くしゃくしゃと無意味に髪を掻き混ぜながら答えたところで、ユリアたちが待つ宿の明かりが見えてきた。
「さーて……待たせちまったからな。頑張ってお姫様たちのご機嫌を取るとしますか……」
苦笑いを浮かべながら、シサーが俺とキグナスを振り返った。

「……俺、部屋に戻ってるね」
「おお。わかった」
夕食を宿続きの食堂で取ると、俺はそう言って席を立った。隣のテーブルについていた冒険者らしき人たちと、エール酒片手に盛り上がっているシサーが、俺に答えてひらひらと手を振る。
話しかけてきたのは、向こうのテーブルのファイターらしき男の人だ。シサーの剣に目を留めて、そこから武器について語り始め、気がついたら「お連れ様？」と言うくらい一緒くたになっている。
俺も別にそういう赤の他人といろいろ話すのは嫌いではないんだけれど、とにかくそのパーティ、全員が全員、酒が強い。女性のニーナやユリアに強引に勧めることはしないけど、男と来れば遠慮がない。同じ勢いでこっちにも酒を勧めてくる。ザルのシサーやキグナスはいいけれど、俺はそんなに飲めるわけじゃないから、今の時点で頭がくらくらだ。もうついていけない。
酔いが回って微かに回る視界を何とか制御しながら、食堂を出る。ああ、もう……明日酒が残ってたらどうするんだよ。
疲れも手伝ってるんだろうな……眠い。宿の階段をギシギシと上り、その途中で足を止めるとコツンと壁に肩を持たせ掛ける。
ツェンカー……遠いなー。これで行って協力してもらえなかったら、嫌だな……。飛行機でぶーんって行って帰って来られればいーのになー。飛行機かー……飛行機だったらキグナスも酔わないかな。ユリアって船、大丈夫だったなー……。
酔った頭でとりとめのないことを考えながら、壁から肩を起こす。ゆっくりと残りの階段を上りきっていると、不意に背後から小走りの足音が近付いてきた。
「ユリア」
「やだ、カズキ。大丈夫？」

◆◇◆

「うん……」
階段の下から俺を見上げているのは、こちらも微かに酔ったような赤い顔をしたユリアだ。俺を追うように階段を上ってくる。俺ほど飲まされたわけじゃないから足取りなんかは確かなものだけど、それでも少し上気した顔をしている。
（色っぽいなー……）
……酔ってる、俺。馬鹿なことを言い出さないよう自制しよう。
ぺしぺしと軽く自分の顔を叩いていると、そんな俺を見てユリアが笑った。
「やだな、何してるの？」
「や、何でも……」
並んで階段を上がり部屋の方へ足を向け、今度は無意味に自分の頬を撫でつつ、ユリアを見下ろす。
「どうしたの？ユリアも戻るの？」
「うん……カズキにね、聞きたいことがあって、追いかけて来たの」
「俺？」
「うん。……部屋、入っても良い？」
男部屋の前で足を止める。酒のせいで微かに赤い頬、大きな瞳は潤んでいる。そんな文句なしに可愛い顔で言われて、お断りをする理由がない。

第3部第1章第8話　予兆（3）

「構わないけど……」

ど、どきどきする。べ、別に部屋って言ったって俺のひとり部屋じゃないし、シサーとキグナスと共用だし、だだだから何が起こるわけでもないのはわかってるんだが、でもどきどきするぞ。何せこっちは酔っ払いだ。しかもユリアも多分ちょっと酔ってる。つい余計な期待が働くのは仕方ないだろ!?

ぶるぶると頭を振りながら、ドアを開けた。部屋に入ると、振った頭が一層くらくらした。ユリアが遠慮がちに俺に続いて部屋に入り、ドアを閉める。

「……どうしたの？」

閉め切った宿の部屋に、酔ったユリアとふたりきり。

……俺、余計なことをしてしまいそうです。

「ふふ。シサー、楽しそうだったわね」

部屋は、狭い。メイアンでそれなりの宿を取ったと言っても、そもそものグレードがそれほどでもなさそうなので、3人分ベッドが押し込まれていればそれで部屋の空間は使いきってしまう。日本のホテルや宿のようにテーブルや椅子、テレビや飾り棚などがあるわけじゃないし、座る場所はベッドしかない。

自制の為にドアのところに立っているユリアから、最も離れた奥のベッドにすとんと座る俺に、ユリアが大きな目を細めて笑った。

……何でそんな無防備かな。可愛いな……。

ぼーっとユリアを見つめる俺の前で、ユリアがこっちに歩いてくる。すとんと俺に向かい合うような形で、真ん中のベッドに腰を下ろした。せっかく置いた距離が、無駄になった。

「カズキも、酔ってるの？」

「え？う、うん……ちょっと。あんまり俺に近付かない方が良いよ」

「どうして？」

いろいろと。
ベッドに腰掛けて、前屈みに自分の膝に両手で頬杖をついたユリアが、俺を覗き込むようにして目を瞬く。……触れてみたくなるじゃないか。狭い部屋で、ベッドとベッドの間だって狭い。３０センチやそこらしかないんだぞ。座ってる膝さえ気をつけないとぶつかる距離――――腕さえ伸ばせば抱き寄せられる距離にいるんだ。……で、ふたりっきり。
「き、聞きたいことって、何？」
余計な考えを頭から目一杯押し出しつつ、けれど酔いが余計な望みを引き戻す。見下ろすユリアの微かに酔った色っぽい顔つきが、一層それを煽る。ユリアから目を逸らし、早鐘のような心臓を押さえて尋ねる俺に、ユリアが儚いため息のような声で答えた。
「あのね……」
「うん……」
何だろう。
「わたし……」
ど、どきどきする。
長い睫毛を伏せて迷うような仕草をしたユリアが、顔を上げて俺を見つめた。
「わたしにも、教えて欲しいの」
……。
「何を？」
「ラウバルの、話と言うのを」
「……」
ああ……それね……。
淡い期待が切ないよ。挫けるな、俺。
「わたしが退室してから、ラウバルが何かを話したのね？」
いろいろと余計な方向に頭が働いてしまっていた俺には気づかずに、ユリアが再び目を伏せる。ほんの僅かとは言え『何か素晴らしい展開』でもないだろうかと期待せずにいられなかった俺のしょう

もない落胆の前で、ユリアは今度は本当にため息をつきながら続けた。
「わたしには、言えないことなのかなって……聞くのを迷っていたんだけど」
「……」
「わたしが聞いてはいけないことなのなら、聞かないわ。……いけないことなの？」
ラウバルもシェインも、過保護に過ぎるんだよな、多分。
真剣なユリアの眼差しに、俺も吐息をついた。
ユリアをいろんなことから守ろう守ろうとし過ぎていて、それは見当違いではないところもあるんだろうけど、やり過ぎている時もあるんじゃないだろうか。だからユリアも、尋ねて良いのかいけないのかを迷う。
けれど俺たちが聞いた話は、ユリアに告げていけない話ではないだろう。むしろユリア――――ヴァルスの君主たる人間が知らない方が、まずいんじゃないだろうか。
ラウバルはもしかすると話すタイミングを待っていた、あるいは逃していたのかもしれないけど、ユリアが知らなくて良いこととは思いにくい。
そう判断して、俺は口を開いた。
「知っているべきだと思う」
「だったら、教えて。ラウバルは、何を話したの」
「ラウバルが俺たちに話したのは、３点。ギルドでシサーがガーネットに告げたことだ。――――ラウバルとバルザックの関係、グロダールの行方、バルザックがロドリスと組んだわけ」
「ええ」
「ラウバルとバルザックは、シサーが言っていたように、同人物に師事して召喚を学んだ……いわゆる、学友だ」
言いながら俺は、座っていたベッドにころんと横になった。あまり高くない板張りの天井を見上げながら、ラウバルの言葉を思い出

す。
「その、召喚師のお師匠さんは、もうこの世にはいらっしゃらないのね？」
「とガーネットは言ってたね」
「どうして、そのバルザックが、ラウバルを狙うようになったの？」
「詳しいことは俺たちにも教えてくれなかったんだけど……」
バルザックは、恩師の元からいくつもの呪具や宝具――――魔力付与道具を盗み出した。次第に己の能力を、邪悪な方向へと向け始めたバルザックを、彼らの恩師は破門し、追放した。
「盗み出した……」
「そう。……バルザックが空間移動の魔法を使えるのは、本人の能力じゃない。その時盗み出した魔力付与道具の力だ」
召喚能力と魔術を併せ持つ、黒衣の魔術師。彼は、己の生命を削る召喚魔法を節約する為に新たな能力として言霊魔法を身につけた。バルザックが言霊魔法を扱えるようになった頃には、空間移動の魔法は弾圧を受けて淘汰されている。考えてみれば、バルザックが空間移動の魔法を使うのは、時期を考えればおかしなことなんだ。じゃあどうして可能なのか――――風の砂漠のダンジョンのように、あるいはレガードの命を救ったバックルのように、空間移動の魔法を発動する魔力付与道具を持っているから。
そう、ラウバルは言った。
「じゃあ、その道具さえ奪えば……」
ユリアが目を見開く。けれど俺は、ベッドに転がったままでユリアをちらりと見上げた。
「バルザックがその道具……腕輪らしいんだけど、それを身につけているのは……」
言いながら、自分の左の二の腕を示す。
「ここだ」
「……」
「取り外すのや腕輪だけ破壊するのは、まず不可能」

全身をすっぽり覆うローブの下、二の腕についている腕輪だけを外させるのは、無理だ。本人の能力じゃないとは言え、空間移動を封じるのは難しい。あいつとの戦闘が厄介なことには、今も違いはなかった。

「ラウバルを狙うのは、正確にはラウバル自身を狙っているわけではないって言ってたよ。ラウバルが、バルザックの欲しい魔力付与道具を持っているから、それを奪い返したくて狙ってくるんだって」

「奪い返す？」

「バルザックが、恩師から盗み出した中にあった魔力付与道具らしい。つまり、元々は恩師の物、それをバルザックが盗んで一時期自分の物として使っていた。それを恩師とラウバルが奪い返し、今はラウバルが保管している」

「……そう」

言いながら、頭を巡らせる。

この話の中で、気になるんだよな。

召喚魔法は、生命を削る。ラウバルは何か特殊な事情で、生命を永く保っている。

けれど、同じだけ生きている人が、ラウバルの他にいるじゃないか。――――バルザックとガーネットだ。

ラウバルたちの恩師は、既に死んでいる。じゃあどうしてバルザックとガーネットは未だ命を繋いでいるんだ？

そう考えると、ガーネットはともかく、バルザックが狙っているのは……召喚を試みるのに必要な『生命』を繋ぐ、何か。かつてバルザックがそれを持っていたのなら、今はその名残を引き摺って生きているのだとわかるし、ラウバルが今それを持っているのであればラウバルが長寿である理由にもなる。ガーネットも何か、その辺りの恩恵を受けるチャンスがあったのかもしれない。

つまりバルザックの目的は、その『何か』を手に入れることによって、召喚魔法を制限なく使うことが出来るようになること――――その為に果てない生命を手に入れることだ。

俺の考えに、ユリアは目を見開いて息を飲んだ。その表情に、ユリアをじっと見上げる。
「……何か、心当たりがあるの？」
俺の問いに、ユリアは無言だった。しばらく回答を待ってみるが、やがてユリアは顔を伏せてしまった。
「ない、ことはないわ」
「何？」
「ごめんなさい。わたしは、言えない」
「……そう」
ラウバルが、俺たちに「言えない」と言っていたことだろう。そしてガーネットが「恩師との誓約に触れるから」と言っていた。
まあ、ユリアが知っているんだったら、いずれ俺たちも聞くことは出来るかもしれない。
「グロダールの行方、と言うのは？」
やがてユリアがぽつりと尋ねた。
「グロダールは……黒竜ね？ギャヴァンで果てたのではなかったの」
「……グロダールは、いる」
天井を睨みながら、低く答える。
「いるって、どういうこと？」
「黒竜グロダールは、ヴァルスの大神殿に封じられている」
「……え！？」
ユリアが驚いたように立ち上がった。寝転がったまま、見下ろすユリアに視線を向ける。
「どういう経緯でそうなったのかは、話してくれなかった」
王族の内情に触れるからと。
それで、確信した。クレメンスの兄アウグストとシェリーナの追放は、グロダールの復活に絡んでいる。
「一度ギャヴァンで死んだはずのグロダールは、アンデッドとしてこの世界に蘇生を果たしている。封じられているのがヴァルスの大神殿、大教皇とガウナが重ねてかけた封印の中で、今もこの世に出

るのを待っている」
「嘘でしょう……？」
「ラウバルが嘘をついてるんじゃなけりゃ、事実だよ」
「……」
「バルザックは、召喚能力を制限なく使い、自分の使役下に黒竜グロダールを召喚獣として手に入れたい。けれどドラゴンは通常、人の支配下には下らない。絶対に、下らないんだと聞いた」
「そう、聞くわ……」
「だから、ヴァルスの手で殺させた。アンデッドとしての蘇生を経ると、何らかの形で主を持つようになるんだって？つまり、召喚獣として自分の支配下に置くことは、不可能ではなくなると言うことだ」
「そう、ね……」
「通常ならアンデッドとして蘇らせたネクロマンサーが主となる。けれど、グロダールには今、主が定まっていないんだとラウバルが言っていた」
「どういうこと？」
ユリアの問いに、俺は首を横に振った。それは、俺もわからない。
「けれど、そうは言っても元々矜持の高いドラゴンだ。加えて、大神殿に封じられている。召喚獣にする為の呼び出しに封じられている黒竜は応じないし、そうじゃなくてもなかなか呼びかけには応えない。だからバルザックは、黒竜を引き寄せる磁場を整える為に竜珠を使い、黒竜自身の気を封じ込める為にヘルザードに渡った」
「でも、どうしたって封じられているものは呼び出せないわ」
「だから、ロドリスと手を組んだ」
「……？」
ユリアが、形の良い眉を顰める。
「大神殿には、バルザックは近付くことが出来ない。穢れを纏っているから、聖なる空間に近付くことが出来ない――――魔物と同じにね。けれど大神殿に近付くことが出来る者は、たくさんいる」

「……」

「ごく普通の人間なら、大神殿には何の抵抗もなく近付くことが出来る」

「じゃあ……」

「ヴァルスとロドリスの戦争を唆したのは、ヴァルス大神殿そのものの破壊をさせる為だ。その為には、ヴァルスに拮抗し得る国力を持つ国である必要があった」

現在、ヴァルスと戦える国はロドリスとリトリアの二国。

けれど、リトリアはヴァルスと領土が離れているせいもあって、余りヴァルスの攻略などに乗り気にはならない。むしろ、ロドリスとの国力争いに目が向く。一方でロドリスは、隙あらばヴァルスの国力を削ごうとしている。一国では対ヴァルス戦で苦しいところだろうけれど、ロドリスなら他の国と連動してヴァルスを追い詰めることが出来る。――――現状、そうなっているように。

そうしてロドリスを中心として対ヴァルス軍がレオノーラに攻め入り、勝利を収めれば、シャインカルクや大神殿そのものをロドリスが押さえることになる。バルザックの取引は恐らく、そこだ。『青の魔術師』の代わりにレガードを追い、『青の魔術師』はバルザックの代わりに大神殿――――『封印堂』の破壊によってその封印を解く。建物そのものの破壊で封印がどうなるかはわからないけど、少なくとも近付くことは出来るようになるし、封印の種別によっては、大司祭ガウナを押さえて封印を解かせる。

その時に磁場さえ整っていれば、一瞬でも封印に緩みが出来れば黒竜を召喚することが出来る。

下手な国では、そもそもレオノーラまで攻め入ることが出来ない。ロドリスであればこそ、そこまでヴァルスを追い詰めることが出来る可能性がある。

バルザックが『青の魔術師』と手を組んでいた理由はそこにあるのだろうと言うのが、ラウバルの意見だった。

「じゃあ、この戦争の引き金になっているのは……」

「『青の魔術師』にも何か理由はあるんだろうけれど、それを焚き付けて煽ったのは、バルザックだ」

バルザックが『王家の塔』を封じている理由も、そこだろう。『青の魔術師』にとって不都合な展開があれば、大神殿の封印が解かれない。

今現在彼らの関係がどうなっているのかは俺たちには窺い知ることは出来ないけれど、レガードの戴冠でバルザックにとって不都合が生じるとは考えにくいもんな。

「じゃあ、もしかして……」

ユリアが再びベッドに腰を下ろして考え深げに視線を彷徨わせた。酔いは、引いてきたみたいだ。俺も、くらくらしていた頭が話すうちにはっきりしてくるのを感じる。

「いずれにしても『王家の塔』は、ジンの竜巻から解放される……？」

「その可能性は、低くはないと思う」

ジンを『王家の塔』に縛り付けているのは、バルザックの召喚。召喚獣になり得ない上位精霊を強制的に支配下に置いている間、バルザックの生命と魔力は消費され続けている。長く続けることは不可能だし、そんなことを続けていてもバルザックにメリットはない。『青の魔術師』の目的がわからないから何とも言えないけれど、仲良しこよしってわけじゃないんだろうから、バルザックが自分の目的を果たせた時に、『王家の塔』をジンで封じ続けることに意味はなくなる。

バルザックにとって、戦争の最終的な勝利なんか、多分どうでも良い話だ。黒竜を呼び出すことが出来た時点で、バルザックは多分、ジンを自動的に解放する。

けれどそれは同時に、大神殿が押さえられていると言うこと――――レオノーラに、連合軍が攻め上ってきている時と言うことだ。

……そんなものを悠長に待っているわけには、いかない。

そして、同時に。

「水の剣『カリバーン』……」
ベッドから体を起こして、最初と同じようにユリアと向かい合う形で座り直しながら、ガーネットの話を思い返した。
黒竜を制する魔剣――――カリバーン。
「最悪の事態も想定して、カリバーンの行方も追わなきゃならない」
「最悪の事態……」
バルザックの思惑通りにことが運べば、ヴァルスにとっては本当に最悪だ。
ロドリス率いる連合軍に王城と大神殿を制圧され、挙句の果てに、黒竜が蘇る。――――ヴァルスの、レオノーラで。
ヴァルス軍は、連合軍と対峙しながら、黒竜をも相手取る羽目になる。ロンバルトさえいない今、その可能性は低いとは決して言えない。
ガーネットが、カリバーンの行方を知っていそうではあるんだが、どうにも現段階で話してくれそうにないからな……。
「対抗、出来るかしら」
深く俯いたユリアが、考え込む俺に手を伸ばした。胸元のシャツをきゅっと掴む手が、震えている。
「……ヴァルスは、負けないよ」
抱き寄せた腕の中、微かに震えたままで、ユリアが小さく、頷いた。

第3部第1章第9話　メイアンの因業　前編（1）

メイアンからカサドールまでは、途中いくつかの町を経由しながら、メイアンで手に入れた馬で移動をする。

予想通り魔物の出現は多く、その道中は平穏とはとても言い難かった。

「……で、ここで留まってんだよ。だからここの部分をこう……ピックで押してやるだろ」

「え？ここ？」

「じゃねえよ。こっち。要は……ほら、ここでこう留まってんだろ。こいつを押し上げて、テンションで回転させてやりゃあ開くんだよ。簡単に言や」

「ああ……」

「で、こっちの……そう。その奥のボトムピンをまず確認すんだよ……」

そんな剣呑とした旅路の中、俺はシサーからは鍵開けの技術を、キグナスからは乗馬の技術を学んでいたりする。まったく、学ぶことが多くて大変だ。もちろん剣の稽古は未だ健在。なぜなら俺は未だにシサーから一本も取れない。

何で鍵開けなんか教わってるのかと言えば、例の海底のダンジョンでふとそんなことを思い出したから。技術はないよりあった方が良いに決まってる。使う場所が出るか出ないかは運次第。

乗馬は、言わずもがな、だ。ひとりで馬に乗れるようになりたいから。他人の手を煩わせずに済むのならそれに越したことはない。

メイアンから移動をする間に立ち寄った町で買ったワイヤーで一番簡単な錠前の中身のモデルを作ってくれたシサーは、それを元にその仕組みを説明してくれて、更に開け方の講釈をしてくれた。それで俺が理解したところで、もうワンランク上の錠前。どうでも良いがこの人、どこでこんな知識を得たんだろう。

一番単純な仕組みの錠前の鍵開け、と言うのは、拍子抜けするほど簡単だった。まあ、これを小さな鍵穴相手にやるんだとまた違うのかもしれないが……こんなもんなんだな。それとも意外と才能あるのか？俺。

「何かあった時にピックがねぇとしょうがねーからな。靴にフックピック仕込んどきゃ、ピックもテンションも何とかなんだろ」

ともかく。

魔物と戦いながら進む道すがらそんなことをしつつ、カサドールまでは途中オスロー山地と言う割合緩やかな山越えをして、３週間ほどで到着することが出来た。鍵開けはちゃくちゃくと腕が上がり、初歩的なものなら何とかなりそうな気がする。乗馬技術の方がどちらかと言うとおぼつかない。

大体、乗馬の何が駄目って、乗ってるだけで痛くなると言うのにこれを自分で制御しようと思うと、馬を挟みつけている膝の皮が剥けてくる。太股も擦れてくるし、そもそもが鞍だって俺の住む世界ほどには発達しているわけじゃない。乗馬を制す頃には鍵開けがプロ並みになっているかもしれない。そのくらい、時間を要しそうだ。

辿りついたカサドールの街は、小綺麗で閑静な雰囲気の街だった。何か幾何学的な模様を描いて色とりどりの煉瓦が敷き詰められた幅広の通り沿いに、こじんまりとしたお洒落な店が並んでいる。区画整理もきちんとされているような整然とした道が交差していて、通りを歩く人たちも淡い金髪や上品な栗色、青や碧の瞳が多く、西洋にいるような気がした。

「さて……とりあえずは、公庁か」

カサドールには気候や海域を調査したり研究する機関があると聞いている。気象庁と海上保安庁が一緒くたになってあると思っていーんだろーか。街並みが整然としているのも、国の公的な機関があるせいなんだろう。そういう公的機関の建物を総称して公庁と言うらしい。ここの公庁は正式には天理調査府と言うようだ。

ラウバルから書状を預かっている俺たちは、ともかくもまずは公

庁へ行く必要がある。街の出入りを守っている詰め所に足を向けた。詰め所で公庁の偉い人――天理長官のカール公と言う人に中継ぎを頼み、しばらくしてカサドールの街の中心部にある公庁へと案内してもらう。

そこでまた中継ぎを頼み、書状を預け、カール公に会えたのは、応接室で待つこと１０数分した頃だった。

「お待たせ致しました」

柔らかな挨拶を口にしながら姿を現したカール公は、背の高い、けれど威圧感のない爽やかな風貌の男性だった。マリンブルーの短く刈り込んだ髪が、若々しく見える。年の頃は恐らく３０代後半か４０代前半といったところだろうか。柔和な雰囲気の人物で、身につけた官服がしっくりと馴染む上品な人だ。

「書状は拝見させて頂きました。宰相殿から事前に通達も受けております」

下官が、テーブルについている俺たちに飲み物の入ったカップを配り終えると、彼を退室させたカール公は、おもむろに俺とユリアの前に片膝をついて深く頭を垂れた。何だ何だ。

「お初にお目にかかります。私はカサドール天理調査府調査官吏長官カール・ダーレン・フォン・ヴェルゲンと申します。レガード殿下並びにユリア皇女様におかれましては、ヴァルスの為これからツェンカーまで足をお運びとのこと。痛みいります」

参ったな。

ラウバル、俺のことをレガードだと言って通知したのか。……いや、でもカールは官僚なんだし、後々本物のレガードと会う機会があるかもしれないし、俺がレガードじゃなかったら後で「じゃあれは誰だったんだ」ってことになんのかもしれないけどさ……やりにくいじゃないか。

「レガード殿下が皇帝位に就かれた暁には、ますますお力になれるよう鋭意努力致す所存でおります。お見知り置きを」

「あ、はい」

思わずちらりとユリアを見ると、ユリアも無言で俺を見上げた。
立場上、『レガード』を差し置いてユリアが応じるわけにはいかないからだろう。そう思って答えてはみるものの、プロの方々のようにいくわけがない。何とも曖昧な返事をする俺に気づく様子もなく、カール公は頭を下げたままで続けた。
「こちらにご滞在の間は、尽力を尽くして……」
いやいや、そんなに長い間、いないから。
ともかく立って座って欲しいんだがどうして良いのかわからずに困惑している俺に、ユリアが小さく吹き出した。それからカール公に声をかける。
「カール。お気持ちは良くわかりました。ともかくも、お立ちなさい」
「しかし」
「わたくしたちがこちらへお邪魔していると言うことは、公的には内密の事項となっています。あなたの様子がそのようでは、大声で宣伝しているも同然ですよ」
ユリアの笑いを含んだ声に、ようやくカールが顔を上げた。それから、笑う。
「椅子におかけなさい」
「では、失礼して」
官吏ってのは、面倒くさいなあ。公職にあるから、下手なことは出来ないんだろうけどさ。
ユリアのくだけた態度に、カール公も少し相好を崩してようやく向かいの椅子に腰を下ろした。
「レガード様。わたくしの口からお話しても宜しいですか？」
「うん……頼む」
ゼヒオネガイシマスと頭を下げたい気分だ。俺が困っているのを見かねて、だけど俺――『レガード』を立てる為にそう尋ねてくれたんだろう。気遣いに感謝。
ユリアは俺の回答に目を優しく細めてくすりと微笑むと、カール

公へ改めて向き直った。
「それではわたくしから紹介しますね。こちらがシサーとニーナ。フリーの傭兵です。彼らはラウバルの指示を受けて動いています。そしてこちらがキグナス。宮廷魔術師シェインの甥です」
そこでカール公が、微かに目を見張った。紹介されたキグナスに視線を向ける。それから微笑んで口を開いた。
「さようでございましたか。シェイン様には、個人的にご恩があります」
「え？」
「私事でございますが。……失礼致しました。お続け下さい」
シェインに個人的なご恩？
レオノーラから離れたカサドールの地にまで知人がいるとは、何て顔の広い人なんだろう。
カール公の言葉に、ユリアが頷いて続けた。
「わたくしたちのリーダーはシサー。わたくしとレガード様はそのパーティの一員に過ぎません。あくまでラウバルに派遣されたシサーを中心とするパーティとして、今後振る舞って下さい。……良いですね？」
「はい。かしこまりました」
「何かあれば、全てシサーに。シサーもそのように。宜しいわね？」
「もちろん」
「では、後の話は頼みます。シサー、そしてカール。お話を進めて下さい」
そこまで言って、ユリアは身を引くようにテーブルにかけていた手を下ろした。ユリアの視線を受けて、シサーが頷く。
「あんまり堅苦しい空気は得意じゃない。ユリアもレガードも、公式訪問じゃない今は王侯だってことを一旦忘れてくれ」
「わかりました」
「じゃあ話を進めよう。ラウバルからどのように聞いているかを教えてもらえるか」

シサーの問いに、カール公が頷いた。
「現在帝国継承戦争の戦況において、ヴァルスは芳しい成果を上げることが出来ずにいると伺っています。王都ウォルムスの制圧、ロンバルトの陥落」
そこまで言って、カールはちらりと俺を見た。『俺』が『ロンバルト王子』であることを気遣って、言葉を選んでいるのかもしれない。実際は俺は、ロドリスへ行く途中にロンバルトを通過したに過ぎないんだが。
「モナに援軍を要請しているものの、モナは国内が整っていない。このままでは身動きが取れないので、レガード様とユリア様が直々にツェンカーへ足を運ばれて、協力を求められると伺っています」
言いながらカール公は、背後の壁際にある小棚に手を伸ばした。巻いてあった地図を引き寄せ、テーブルに広げる。
「その際に進路は、このカサドールから海路――モナのオラフからマカロフへ乗り継ぎ、そこから陸路を取って行かれる。我々カサドールの役目は、モナのオラフまで安全に送り届け、更にマカロフまで渡る船の手配を」
「そうしてもらえるとありがたい」
シサーの肯定に、カール公も無言で頷いた。それから、一度視線を地図に戻して短い沈黙を挟んだ後、再び吐息混じりに口を開く。
「それから、我々はラウバル殿より、もうひとつ指示を承っています」
「もうひとつ？」
「はい。カサドールは、今回の戦役にまだ兵を出していません。温存しておくよう指示を受けた為です」
「ほう」
「その温存兵力を持って、モナへ向かえと」
沈黙が降りた。
カール公は地図から顔を上げて、ぐるりと俺たちに視線を向けると、言葉を続けた。

「ひとつは、モナの国内を整える為ですね。我々カサドールは、公庁のある街の中で最もモナに移動をしやすいことから、モナの動向や彼らへの通達の役目を負っています」
「『モナ担当』か」
「その役目の一環として、モナの国内を早急に整える為に派兵を決意されたと言うことです。……理由のひとつとしては」
繰り返すように付け足したカール公に、シサーがちらりと目を上げた。微かに目を細めて、カール公を促す。
「……別の理由としては？」
「リトリアの動向の、監視です」
シサーに答えて、カール公も微かに声を落とす。どうやらそちらの理由が本命のようだ。
「リトリアの動向？」
「はい」
「どういうことだ？リトリアがロドリス側についたと言う話は聞いたが」
「ええ。リトリアは連合軍に下りました。けれど今はまだ、参戦はしていません。しかし動き始めてはいます」
「だろうな」
「……西へ」
西？
シサーが息を飲んだ。
「リトリアの狙いは、モナ？」
「の可能性があります。それがロドリスとの協議の結果の行動か、あるいはリトリアの独断かは定かではありませんが、リトリアはこの混乱に乗じてモナの制圧を目論んでいるかもしれません。だが現状、国の整っていないモナは、リトリアに攻撃されればひとたまりもない」
「放っておくわけにはいかないってか？」
「リトリアにモナを制圧され、彼らが国内を整えれば、こちらの援

軍として徴収するはずだった兵力は逆にこちらに牙を剥くことになる」

なるほど……。

カール公が広げてくれた世界地図を睨みつけながら、その言葉に暗澹たる気持ちになってくる。

モナは現状、一度ヴァルスに敗北していることもあって、大した戦力にはならない。ならないけれど、進退窮まっているヴァルスとしては僅かな援軍でも欲しい。だから暫定政権の元、援軍の調整と国内の整理を進めているはずだ。とは言えそれはとても、無傷のリトリア国軍が乗り出してきて太刀打ち出来るレベルにはない。モナ軍がヴァルスの援軍として協力体制を敷いて戦うならばまだしも、リトリアがモナ本国に攻め入ってことを構えればひとたまりもなく、ヴァルスはもちろんそれを助けているどころではない。そうしている間にリトリアがモナを完全制圧し、ヴァルス援軍になるはずだったモナ軍がこちらを攻めてくるとなると……もう、収拾がつかない。

フレデリクが行方不明だってことが話をややこしくしているんだろうな、多分。

元々ヴァルスを攻めてきた公王が今もモナに君臨していればまた状況はいろいろと違った……それも、ヴァルスにとっては不利な状態で違ったんだろうが、フレデリクはおらず、暫定政権はヴァルスへ抵抗を試みているわけではないから、ヴァルスとしては戦役の敗北措置としてこちら側に引き戻すと言う手段が可能となっている。だからこそ、リトリアがモナを攻める姿勢でいれば、放っておくわけにはいかないわけだ。

「カサドールだけで、足りんのか？」

シサーの問いに、カール公は、またため息をそっとついた。力なく顔を横に振る。

「もちろん、我々だけでリトリアを相手取れと言うのは無理な話です。ですが放っておくわけにはいかず、ともかくも状況の把握、モナ国内の整備、防戦の指揮は執らねばなりません」

「……なるほど」
「ですので、すぐにでも出発をしなければならないのは我々も同じですが……」
そこまで言って、カール公は渋い顔で言葉を途切れさせた。それから、無理矢理作ったような苦笑を浮かべる。どこか疲労したような顔つきだった。
「カサドールは、荒れてきています。……それが、気がかりです」

◆◇◆

「カズキ、出かけんのか？」
「うん。その辺見てこようと思って」
カール公との話を終えて、ともかくも俺たちをオラフへ運ぶ連絡船の出発は明後日となった。今日、明日と、公庁のすぐそばにあるカール公の邸にご厄介になることにして、借りた部屋に荷物を置いた俺が階段を降りていると、上からシサーに声をかけられた。
カール公もハーヴェル卿と同じく上級貴族だ。屋敷がでかい。ひとりに一部屋与えられてしまったし、更に言えば『ヴァルス後継者』である俺とユリアは、フロアさえ違う部屋を与えられてしまった。同じフロアで良いのに。
「キグナスは？」
俺の後を追うようにトントンと階段を数段降りてきたシサーが、首を傾げる。
「カール公から面白い魔術書を借りたとかって、部屋に籠もってる」
「んじゃひとりで行くのか？」
「うん」
頷いていると、今度は下からユリアが上に上がってくるのが見えた。階段に止まったままで話している俺とシサーに首を傾げる。リボンで留めた長い髪が、動きにあわせて揺れた。
「どうしたの？」

「ユリアも連れてったらどうだ？」
「何？」
「いや……どっかその辺、散歩して来ようかと思って。……行く？」
聞いてみると、ユリアはぱっと顔を輝かせた。
「行きたい」
「そう？じゃあ……何か見てきて欲しいものとかある？」
「また、明日にでも買出しに行けば良いだろう。今日は気にしないで散歩して来ていーぜ」
「わかった。……ユリア、行こう」
「うん」
にやにやと手を振るシサーを軽く睨みつけて、ユリアを促す。階段を上りかけたままで足を止めていたユリアは、俺が降りてくるのを待って一緒に出口の方へと向かった。
俺たちがカサドールに到着したのは、昼過ぎくらいだ。そこから公庁を訪問してカール公と話し、今の時間はまだ夕刻。食事にも寝るにも早過ぎる時間だ。1時間か2時間くらい街を散歩してみるとちょうど食事の時間帯だろう。
「ユリア、レイアは？」
「どっか行っちゃったわよ。……わたし、カサドールって初めて」
屋敷を出て、長い庭を抜け、通りに出るとユリアが言った。その言葉に、俺は小さく吹き出した。
「ユリアはどこも初めてだなぁ……」
「だって……あちこち行く機会なんてなかったのよ」
俺の言葉に、ユリアが拗ねるように唇を尖らせる。
カール公の屋敷は、公庁の建物が見える、貴族の屋敷が立ち並ぶ一角にあった。この辺は上品過ぎてあまり面白そうじゃない。街の入り口の方まで戻れば、大通りに面して店とかが並んでいたから、そっちの方まで行った方がいいだろうな。
そう思いながら、ユリアと並んでのんびり道を歩く。こうしてユリアと2人で街を歩くのは最初のギャヴァンまで遡るなあなどと思

いながら、何となく辺りを行き交う人に目を向けた。カール公の言葉を思い出す。

カサドールが、荒れてきていると言っていた。

カール公は、それがとても気がかりなのだと言う。

その話によれば、現在カサドールには、武器や防具などの売買を違法に行う組織が流れ込んできて、盛んに活動をしているらしいと言うことだった。

こういうご時世だ。武器や防具は需要があるし、需要があれば高値が付く。高値が付くものならば裏で商売しようとする人間はもちろん出るだろうし、違法に商売をしている人間がいれば違法に取引をしたい人間も出てくる。

戦争の影響やシー・サーペントのせいでギャヴァンやフォルムスなどの大きな港が封鎖されてもいるし、通過出来ない場所なんかも増えている。そこで、俺たちがカサドールを行路に選んだように、ローレシア北部との中継地点としてカサドール、ギャヴァンとの中継地点として更にメイアンなどが闇取引の場所として選択されているらしく、このところ治安が悪くなって来ているのだとカール公は言っていた。

でも、こうして見ている分には治安の悪さなんて感じないけどな……。メイアンならわかるが、カサドールは街並みも綺麗だし、風体の悪い人間がたまっているようなこともなさそうだし。

カサドールを拠点にしているらしいそういう組織の中でも特に悪質な……武器屋から盗み出したり、正規のルートの積み荷を襲撃したりしている組織は、果ては不法に人身売買まで行うこともあるらしい。特にやり方がえげつなく、かつ狡猾でメンバーの顔も行方も掴めない『紳士倶楽部』と言うふざけた名前の組織があるのだと言う。武器が必要なのはモナへ派兵するカサドールの軍も同じだから公庁も品不足になるし、とにかく悪質な『紳士倶楽部』だけでもモナへ派兵する前に何とか摘発したいと考えているのだが、どうにも拠点としている場所を掴めずにいるのだそうだ。これまでの調査で

得た情報からすれば大した人数ではなさそうだから、拠点を押さえれば一網打尽に出来そうだと言っていた。
武器ってのは、普通にしてても高いもんな。需要が高まって、更に闇取引なんかじゃあ相当高く売れんだろう。良い商売なんだろうが。
「この街は金髪碧眼の人が多いね」
「そうね。わたし、カサドールの人に見えるかしら」
と言われても、そもそも俺にはこの世界で人を見て国の区別さえつけられない。
それに、同じ『金髪碧眼』とは言え、ユリアの髪や瞳の色が一番綺麗に思える……とは、さすがにキザ過ぎて死んでも言えない。
今はユリアは髪を長いリボンで留めているが、俺が以前あげた髪飾りは今も大切にしてくれているらしく、時折使っているのを見る。こういう機会にでもまた新しいのをあげたいとは思うものの、所詮はやっぱり他人の金。俺自身に稼ぐ手段でもあればいーんだが、そんな手段もなけりゃ時間もない。

第3部第1章第9話　メイアンの因業　前編（2）

軒並み並ぶ店を見て回りながら通りを進んでいくと、やがてあちこちの道から続いてくるらしい広場に出た。

とは言えギャヴァンみたいに馬鹿っ広いわけではなく、結構こじんまりとしている。真ん中に小さな噴水があって、猫が3匹、その近くで丸くなって寝ていた。

住宅街の中に突然ある感じで、ご近所の奥様がたのたまり場にでもなっていそうだ。もしかするとこういう小さなたまり場みたいなのがいくつかあって、大きな公園みたいなのは他にあるのかもしれない。

「カズキ、猫」

ユリアは結構動物が好きなんだろうか。庭師と一緒に庭弄りをするのが好きだと聞いたことがあるし、植物だの小動物だのが好きなのかもしれない。小走りに猫の方へ駆け寄るユリアに小さく笑いながら、俺は辺りをぐるっと見回した。どこか大きな公園とか広場とかがあるんだったら行ってみたいけど、果たしてどの道が続いてるんだろう。何だか海底のダンジョンの第3階層を思い出す。

この広場から分かれる道は幾筋かあって、今はこの付近には人はいないみたいだった。ひとつの道の入り口に立って続く先を眺めていると、不意にユリアの方から「きゃ……」と小さな声が上がった。何気なく振り返って、凍りついた。

「ユリアッ」

振り返った先では、薄茶けた髪の男がユリアを片腕で押さえ、こちらに見えるようにその首筋にダガーを突きつけていた。そこにいたはずの猫たちは、驚いて散ってしまったようだ。今は1匹も姿がない。

癖のない顎まで伸びたスダレのような髪の隙間から、浅黒い肌と鋭い目が覗いている。男は黙ってユリアにダガーを突きつけたまま

でこちらを見ていた。――何者だ？
「……ユリアを放せ」
剣の柄に手を掛けながら男を睨み据える。黙って俺を見ていた男は、ややして口を開いた。
「心当たりはないか？」
心当たり？
こうして襲われた心当たり、と言うことだろうか。大体こいつが誰なんだかわかりもしないのに、心当たりなんかあるものか。……いや。
（メイアンか？）
まさかと思うが。
「……さあ。ないな」
下手に動けばユリアに傷が付くと思うと、剣を引き抜くことさえ叶わず、柄に手を掛けて男を睨み据えたままで短く答える。男が小さく笑った。
「ないか」
「ない」
「メイアン、と言ってもか？」
「……」
やっぱりか……。
内心、軽く舌打ちをする。俺が立ち聞きしてしまった例のアレだろう。大したことを聞いていないと言うのに、何てしつこいんだ。街を変わってまで追いかけてくるなんて、相当やましいに違いない。……あの時、俺が立ち聞きしてしまったその時、それだけ重要な何かを話していたと言うことなんだろうか。
「メイアンが、何だ？」
とは言っても、認めるわけにはいかないだろう。心当たりがあると言ってしまえばまた、しつこいに決まっている。実際俺は、ここまでつきまとわれるほどの何も聞いちゃいない。
表情を動かさないまま問う俺に、男が、笑った。

「まあ、いい」
ブンッ！！
次の瞬間、いつの間に俺の背後に男の味方がいたのか、風を切る音が聞こえると同時に、頭部に鈍い衝撃と痛みを感じた。体が地面に崩れ落ちる。
「カズキッ」
「これからゆっくり、話をしよう」
殴られた衝撃で意識を手放した俺の耳に、ユリアの悲鳴と男の言葉は、届かなかった。

◆◇◆

目が覚めたのは、2畳くらいの暗い小さな部屋だった。ユリアの姿はどこにもない。殴られた頭部が重たい痛みを発し、吐き気がする。
壁際に設えられた椅子に両腕ごとぐるぐると縛り付けられていた俺は、それからややして部屋に入ってきた男たちから尋問を受けることになった。もちろん、遠慮なく殴る蹴ると言うありがたい暴行付きだ。
「さて、約束通りゆっくりとお話をしようじゃないか」
そう口を開いたのは、先ほどユリアにダガーを突きつけていた男だ。スダレのような髪の隙間から残忍な目付きでこちらを見ている。それなりの立場にいる人間、と言うことだろうか。縛られたままで男を睨み上げる。
「ユリアは」
「女の心配よりは、自分の心配をした方が良い。こっちの質問に答えてもらおうか？」
「心当たりはないと言った。俺は……そして彼女も、何も知らない」
「メイアンで何を聞いた？」
俺の言葉を全く意に介していない様子で男が尋ねる。その男の両

脇にいたマッチョなデブとマッチ棒みたいな長身が俺の両脇に足を進めた。嫌な空気だ。

「何のことだ」

言い終えた瞬間、マッチョデブの膝蹴りが座ったままの腹に入った。余りの痛さに、一瞬視界が白くなる。

「……げほッ……」

「とぼけるのはやめた方が良い。こっちはリムザンから話を聞いている」

リムザン？

腹に受けた痛みに、体をくの字に折ったままで顔を上げる。スダレが口元に笑みを張り付かせたまま、俺の視線に答えた。

「お前たちがのしてくれただろう」

つけてきたあいつらか……。

あの時真ん中にいたカトラスが、リムザンだろうか。思わずため息をついた。こんなことになるなら、止めを刺しておくべきだった。結果論だが。

「お前が話を立ち聞きしたのは、俺たちの仲間とそのクライアントだな。わかるだろう？放っておくわけにはいかないんだよ」

「……だったら、あんな、ところで、話すべきじゃ、ないんじゃないか……」

町の人間だって偶然に耳にしかねないだろう。その度にいちいちこんなことをしていたら、きりがないんじゃないだろうか。

腹と頭の痛みで途切れ途切れに言うと、マッチ棒がいきなり俺の顔を張った。団扇みたいなでかい手でまともに平手打ちをされて、顔が反対側に勢い良く向き、その反動で椅子ごと倒れそうになる。それをマッチョデブが片手で押さえた。切れた唇から血の味がした。

「お前たちは、『売人』の手引きでメイアンに入ったらしいな？」

え？

「何者だ？」

尋ねる声のトーンが微かに落ちる。スダレは低めた声のままで、

続けた。
「『売人』は繋がりのある相手からしか荷を運ばない。人なんてもっての外だ」
なるほど……。
そういう癖のある人物と繋がりがあると判断したから、あの立ち聞きも偶然とは思っていないってことだろうか。……偶然だってば。本当に。
「更にカサドールに入ってから、まっすぐ公庁に向かっているな？」
「……」
「普通の冒険者では、ないだろう。……公庁の人間か」
そういう、ことか……。
俺たちが国の機関に携わる何らかの立場にいると考えていて、そういう人間だった場合、万が一にも俺が何かを聞いていたら彼らの立場が危ういと言うわけか。いや、彼らの立場ではなく彼らの『クライアント』の誰かかもしれないが、その辺りについてまでは良くわからない。
「違う……」
間違ってないだろう。俺は『異世界の馬のホネ』だ。尤も俺は公庁どころか国の中心部の人間に、『後継者を詐称』するよう時折強要されはするけれど。
「『売人』とはどう繋がっている」
「……」
答えて、ジフたちに迷惑がかからないだろうか。
そう躊躇った俺の沈黙に、マッチョデブがまた膝を跳ね上げた。今度は顔面だ。さっき殴られた痛みと重なって、眩暈がした。鼻から多分血が出ている。幸い折れはしなかったようだが、もはや顔のどこがどう痛いのかも次第に良くわからなくなってきた。
「……ギルド」
「ギルド？どこのだ。盗賊か」
「ギャヴァン……」

仕方なく答える。掠れた声はしっかりスダレの耳に届いたようだ。
俺の回答に、スダレは少し考えるような沈黙をしたが、その表情まではわからない。体に力が入らなくなってきて、前のめりになりかけた体を、椅子に縛り付けているロープが支えているような状態になって来ている。
「ギャヴァンのギルドか……。お前はギャヴァンの人間か？」
声もなく、頷く。こんな嘘ならバレないだろう。王都レオノーラだと言うには危険だと言う気がした。
「どうしてギルドを知っている」
「頭の弟と、友達だったから……」
これは嘘になるだろうか。ならないだろうか。シンの顔が脳裏に過ぎった。
「じゃあ、『売人』との繋がりはギャヴァンの盗賊ギルドと言うことでひとまず納得はしてやろう。……公庁へは何をしに行った？」
「挨拶……」
「挨拶？何のだ？」
困ったな……適当な回答が浮かばない。確かに街について公庁に真っ直ぐ行っているんであれば、公庁に用事があるとしか考えられないし、公職にない人間が公庁へ行く用事が俺には思いつけない。
「……」
答えに迷った沈黙に、またマッチョデブが蹴りを叩き込んだ。重ねるようにマッチ棒が組み合わせた両手を後頭部から振り下ろす。暴行が重なり、次第に俺の意識が朦朧としてきた。こんな頭ではうまく言い逃れが出来ないかもしれない……。
「言い訳を考えようと思うなよ？調べる気になれば調べられる。……素直に言え」
調べる気になれば調べられる……？
どういうこと……。
「傭兵、で……」
ぼんやりとした頭で、ともかくもユリアが王女で俺がその婚約者

の代理であると言うことを知られずに公庁へ行く理由を探す。必死で頭を回転させながら、血の滲む口を微かに開いた。
「聞こえねえッ！！」
マッチ棒が脇腹に蹴りを入れる。……くっそ……楽しんで痛めつけてやがるな……。
俺の体が椅子ごと吹っ飛ばないように押さえて蹴りつけて来るものだから、衝撃をどこにも逃がすことが出来ずに目一杯くらって俺は呻いた。呻きながら、もう一度口を開く。
「傭兵で、ギ……ギャヴァンの……自警軍から……カサドールの公庁宛てに書状を預かった……」
ギャヴァンは確か国の直轄地だから街を治める諸侯はいなくて、公庁のようなものもなかったと聞いている。あるのは自警軍だったはずだ。けれど言わば、あれが公庁みたいなもののはず。だとすれば言ってることはそれほどおかしくはないはずだよな……。
痛みを堪えて微かに開いた目に薄らぼんやりと汚い床だけを映しながら答えた俺の言葉に、スダレはまた考えるような沈黙をした。
「書状とは何だ？」
「……中身は、知らない……。ただの、使者、だ」
「どうしてそれがギルドを介して『売人』からメイアンへ渡る？」
「時間の、短縮、を、図っ……た、だけ」
「ほう。……時間の短縮、な」
それは間違いじゃない。元々は陸路を使う予定だったわけだし、海路を使ったのは早く移動出来るに越したことはないからだ。
項垂れたままの俺の回答に、スダレはややして質問を変えた。
「で、メイアンで何を聞いた？」
「何、も……」
また、どこからか衝撃を受けた。もう、どっちが何を使って俺に何をしたのかが、だんだんわからなくなってきている。
「何を聞いた？」
スダレが繰り返す。だけど俺はこの問いには本当に何も答えるこ

とが出来ない。
「……何、も、聞いて、ない」
「ではどうして立ち聞きをした？」
「ギャヴァン、の、ギルド、の、名前……」
「それが聞こえたからか？……で、何を聞いた？」
「何も」
繰り返す俺の回答に、顔が横へ張られる。続いて、腹。眩暈と吐き気と痛みが、次第に俺の世界を揺らして、意識を手放すことを望み始める。
「何を聞いた」
針の飛んだレコードのように繰り返される同じ質問。答える俺の回答も、同じものしか用意出来ない。
「本、当……に、何も、聞い、て、ない……」
どうしてここまでこだわる……？
俺が公職の人間ではないと納得したかどうか知らないが、公庁に出入りする人間だとはわかっているだろうから……公人に知られるとまずい何か。――何だろう。
「つまりお前にとっては、聞いた内容は意味があるものではなかったと思えると言うことか？」
スダレの声が質問を少し変えた。その意味をぼんやり考える。頷きかけて、内心首を傾げた。
思える、わけじゃない。意味があることを聞いていない。理解出来たのは武器を集めていると言うことだけだ。
「いや……本当に、聞いてない」
「何かの会話は聞いただろう。……その内容を誰かに話はしたか？」
だから聞いてないものは話してないって……。
そう思いながら黙る俺の顔がまた、殴られる。
……何かを聞いたはずの俺にその意味がわからなかったとしても、その内容を誰かに告げれば何かがわかってしまうかもしれない――そこまで、考えているわけだ。

だから、俺が何を聞いたのかを知りたく、更に俺が誰に何を話したのかを押さえておきたいのかもしれないが、俺は本当に何も聞いていないわけで……意思の疎通が図れない。そういう思い込みは非常に迷惑だ。

とにかく俺から言葉を搾り取りたいスダレからは繰り返し同じ質問がなされ、それに答える俺の答えも当然同じ回答になり、その都度頭に、腕に、腹に、足にと至るところに暴力を受けた俺は、そのうち本当に意識を再び失う寸前にまでなった。もう言葉を発することさえ出来ずにぐったりとロープに身を預けているような俺に、やがてスダレも一度打ち切るつもりになったらしい。口を割らないまま衰弱して死んでも困るから、一旦休憩と言うことだろう。

「明日また、やり直しをしよう」

スダレの言葉に、俺の体を縛り付けていたロープが解かれる。ロープのおかげで辛うじて椅子に座っている状態だった俺の体が地面に崩れると、マッチョデブとマッチ棒が乱暴に引き起こした。

「連れて来い」

どうやら違う部屋に連れて行かれるらしい。

マッチョデブとマッチ棒に両腕を支えられて引き摺られるように連れて行かれたのは、石造りの地下牢のようなところだった。殴られまくって目は開けられないし、自分でまともに歩ける状態にもなかったので周囲の様子は余り良く見ていない。

「カズキッ……」

ガチャン、と何やら金属音が耳に届き、これまた乱暴に床に放り出された俺の耳に、思いがけずユリアの声が届いた。驚いて顔を上げたいが、上げられる状態にない。床に投げ捨てられたボロ雑巾のように、小さな呻きを上げて、口の中で小さく「ユリア……？」と呟くのが精一杯だった。

「カズキッ」

床に崩れたままの俺に、ユリアが駆け寄ってくる。抱き起こそうと伸ばされた腕が届く寸前に、スダレがにやっと笑ってユリアの腕

を引っ張った。軽く払うようにされ、ユリアが壁に背中をぶつける。
「……やめ……」
何とか体を起こそうと腕に力を込める俺の前で、スダレがにやにや笑いながら腰に挿したショートソードを抜いた。その切っ先をユリアに突きつける。
「このお嬢さんに目の前で何かをすれば、吐く気になるかもしれないなあ？」
ユリアが目を見開いてスダレを凝視した。ショートソードの切っ先が、ユリアが身につけているシャツの襟元をすっと切り裂いた。胸元に縦に１０数センチほど入った切り込みに、ユリアが身を引く。全身の力を振り絞って体を起こした俺は、スダレを睨みつけて怒鳴った。
「ユリアに手を出すなッ……」
「おっと？まだ少しは元気が残っているようだ？少しずつ彼女の衣服を切り刻もうか？目の前で彼女が弄ばれれば、どんな気持ちがするだろうなあ？」
ショートソードの先をユリアの胸元に向けたままで、スダレが笑う。マッチョデブとマッチ棒は、俺とユリアが放り込まれている牢の鉄格子の外で黙ってこちらを見ていた。彼らは手出しをする予定はないようだ。
「ユリアに手出ししたら、殺してやるッ……」
「ほお？その状態で何が出来る？」
「……陵辱するなら、するが良い」
からかうように剣の切っ先を俺に向けたスダレに、不意にユリアが低く鋭い声で言い放った。その声音に思わず俺もスダレもユリアに顔を向ける。今し方まで怯えたような顔を見せていたユリアが、青褪めたまま、けれど強い眼差しでスダレを見据えていた。
「後で、死ぬほど後悔をさせてみせよう」
ユリア……。
思いがけず気丈に言い放つ姿にあっけにとられていると、スダレ

が不意に笑い出した。さもおかしそうにけたけたと笑い、ユリアに顔を戻すと目を細める。

「良い度胸だ」

「口先と思うならば後で悔やむことになろう」

「……後は、ないな」

目を細めたままでスダレが言った。

「用が済んだらお前たちは、遠い異国へ売り払われる」

その言葉に目を見開く。カール公が摘発したいと言っていた組織は、もしかしてこいつらか……！？

「お言葉通り陵辱してやりたいのはやまやまだが、途端に廃人のようになって売り物にならなくなる女も多いからな。……せっかく高値で売れそうな商品だ。そのままで、売り払ってやる。売られた先でどうされるかまでは、責任が取れんがな。それと……」

言ってスダレは剣先を軽く振った。咄嗟に避けるが、何せろくに身動きが出来ない体、避けきれずに頬に鋭い痛みが走り、血が振り飛んだ。

「お前の方は、思う存分痛めつけてやる。安心しろ。男は片目くらいなくたって荷運びの奴隷程度なら買い手がある」

「……『紳士倶楽部』」

スダレに険しい顔を向けたままでぼそりと口に出す俺に、スダレは一瞬黙った。俺からその名前が出るとは思わなかったんだろうか。答えが一目瞭然だ。こいつらが、『紳士倶楽部』だ。

もちろん俺の言葉に答えるつもりなどないようで、やがてスダレは軽い笑いを口元に刻んだまま、俺とユリアを睥睨（へいげい）して、告げた。

「2人で過ごす最後の夜だ。……明日また、心行くまで遊ぼうじゃないか」

第3部第1章第10話　メイアンの因業　後編（1）

「カズキ……」

再び目を開けると、俺の顔のすぐ真上に悲しい顔で俺を見下ろすユリアの顔があった。

スダレたちが出て行ってから、俺はそのままやはり意識を失ってしまったらしい。

意識が戻っても尚、受けた暴行の傷が癒えるはずもなく、全身の全てが痛みを訴えた。

「……ユリア」

言葉を押し出す。灯りのない地下牢は暗く、牢の外の通路から微かにカンテラの灯りが届いているだけのようだ。

体を横たえられた床は堅く、頭の部分だけ……膝枕をしてくれているユリアの温もりが伝わっていた。

ユリアの瞳から涙が零れ落ちる。

「良かった……このまま目が覚めなかったら、どうしようかと思った……」

俺の頬を両手で優しく包み込むようにして涙を零したユリアは、そのまま俺の頭を抱き抱えるようにして深く俯いた。髪に頬を寄せる。視界が黄金色の長い髪で覆われた。

「ごめんなさい。わたし、ロッドを持って来ていないの。わたしの力では、治してあげられない……ごめんなさい……」

「ユリア……」

俺の声にユリアが体を起こす。

「巻き込んで、ごめんね……」

「……」

「ユリアを、連れて来なければ良かった……」

手を伸ばしてその髪に触れる俺に、ユリアが目を見開く。

ユリアを連れてさえ来なければ。

……俺ひとりだったら別に、殺されたって構わないのに。そりゃあ、痛いのが長々と続くような死に方はご勘弁願いたいけれど。

「彼らは、何者なの？」

やがてぽつりとユリアが問う。俺は両目を閉じてため息をついた。正確には俺にも良くわからない。

「多分、でしかないけど……」

「うん」

「カール公が言っていた、カサドールを拠点に武器の闇取引をしているような種類の奴ら、じゃないかな……」

俺の答えに、ユリアが息を飲むのが聞こえた。目を開けて見上げる。

「多分だけどね。俺たちを売るって言ってたから人身売買のルートも持ってるってことだと思う。……カール公が目をつけてた奴らなのかもしれない」

「それが、どうして」

「メイアンで俺が、あいつらの仲間の話を偶然、立ち聞きしちゃったんだ」

ユリアの長い髪に指先で触れながら、またため息をつく。

「話の内容なんて、大して何も聞いちゃいないんだけどね。彼らはそうは思ってはいないみたいだ。俺が公庁へ来るような人間と知って顔色を変えてる」

でも、そう言えば。

ユリアにそこまで言ってから、スダレが妙なことを言っていたことを思い出した。

俺たちが何者かを、調べようと思えば調べられるようなことを言っていた。公庁を訪問した客に過ぎない俺たちを調べられるって、どういうことだろう。……まさかと、思うけど。

（官吏の中に、仲間がいる……）

だとしたら、なかなか摘発出来ないのは、その誰かが裏で何かを操作しているからかもしれない。でもそれなら、俺が公人だろうが

馬のホネだろうが、何聞いてたって同じようにもみ消せないんだろうか。そりゃあカール公に直接何かを伝えちゃどうにもなんないかもしれないけど。

それとも。

（やっぱり、クライアントの方かな）

ヤバいのは。

彼ら自身は公庁の誰かに味方がいて何とかなるにしても、クライアントの立場がヤバくなると信用をなくすから顔色を変えている、とか。

ヴァルスの公人に知られたくない……いや、もしかするとそれがヴァルスだろうがどこだろうが、関係ないんだろうか？

だって、話していた言葉はヴァルス語じゃなかった――他国、だろう？

何で……あ。

（公人だったら……）

順序だてて考えてみよう。

まず、スダレたちはカサドールを拠点に武器や、時には人身売買にまで手を出している組織……恐らくは、『紳士倶楽部』だ。

当然彼らには取引先――クライアントがいて、俺がメイアンで偶然話を聞いてしまったのは、『紳士倶楽部』とクライアントの会話だった。

実際は何を聞いたわけではないけれど、スダレたちは俺が何かを耳にしたのではないかと思って、警戒している。

なぜ、警戒するのか。

俺が公庁に出入りするような人間だと知り、加えて『売人』の手を経てメイアンに入るような、少し特殊な人間だからだ。……いや、ここは順番が逆なんだろうな、本当は。『売人』を介すような人間だから何者なのかが気になり、目をつけていたら公庁に入ってったってトコだろう。

公庁に出入りするような俺が、耳にした何かを公庁の誰かに漏ら

すと困るから、彼らは慌てた。
けれど彼らは、俺たちのことを調べようと思えば調べることが出来る。多分、公庁の誰かやその周辺の人間と、何らかのツテがある。どうして俺が公庁に出入りするような人物だと困るのか。
可能性のひとつとしては、シンプルに、彼らの組織について何かが漏れることで、自分たちが摘発されるからかもしれない。あるいは、公庁関連の誰かと繋がりがあって、その誰かに累が及ぶからかもしれない。
そしてもうひとつの可能性が、クライアントに何らかの迷惑が生じる可能性だ。
前者であれば、さして考える必要はない。ストレートな話だ。自分や仲間が摘発されて組織が瓦解するのが嫌だから、俺を拉致した。後者であるとすれば……どういう場合にクライアントに迷惑が生じる？
考えられるのは、やっぱりまずは摘発されることだろう。スダレたちの組織と繋がっていることで、クライアントもどこからか摘発に繋がっていくかもしれない。公人かもしれないし、アングラな組織なのかもしれない。
だけど、カール公の口ぶりによれば、これまで『紳士倶楽部』は摘発を免れている。公庁関連の誰かと繋がっているんだとすれば、保護されているのかもしれない。だとしたら、俺が多少話を聞いたくらいで摘発に直、繋がるとは言いにくい。であれば、スダレたちは免れることが出来そうだし、そこから手繰ってクライアントに辿り着くとは考えにくい。
加えて言えば、彼らはヴァルス語ではない言葉を使用していた。他国の人間だったら、ヴァルスの公人に知られたところで、直接迷惑を蒙ることはなかなかないんじゃないだろうか。
逆に、他国なのに迷惑が生じる可能性は、どんなことがあるだろう。
ヴァルスの公人に知られると迷惑がかかる、他国のスダレたちの

取引先。公人が『紳士倶楽部』のクライアントの情報を何か入手した場合、どう動くのか。あるいは動きがあるとしたら、どんな時だ？

……もしそれがヴァルスと国交のある国の何者かで、目論んでいることがその国にとって大事であれば、ヴァルスの公人がそれを聞いたら通達するに決まっている。

武器を集めるくらいだから、まさか内乱……？

「ユリア」

「え？」

「ヴァルスは、どこと国交がある？」

唐突な質問に、ユリアが首を傾げた。けれど問いはせずに答えてくれる。

「ローレシアの全土よ」

対象がでかい。

「全土か……」

「ええ。一番繋がりが薄いのは、ワインバーガかしら。時折、交易をするくらいで……。帝国内部の国はもちろんのこと、マカロフとツェンカーとは、恒常的に貿易を行っているから……」

「ふうん……じゃあ、もし万が一、マカロフやツェンカーに、あるいは帝国内部の他の国を揺るがすような……それこそ反乱だの内乱だのの情報を入手したら、通達する義務はある？」

「帝国内部には、あるわ。マカロフやツェンカーには義務を負っているわけではないけれど、親交があるから通達くらいはするのが礼儀でしょうね」

「なるほど……」

じゃあ、スダレたちのクライアントとしての容疑は、ヴァルス語、ロドリス語を使用するヴァルス、ロンバルト、ロドリスそしてエルファーラと、ヴァルスと国交の薄いワインバーガを除く各国と言うことになる。そのいずれかの国で、何か揉め事が起ころうとしているのかもしれない。

「どうしたの？」

「……いや。何でもない」
そこまで考えて、俺は片手を額の上に乗せた。
まあ、いいや……今はそんなことを考えても仕方がない。俺が立ち聞きしたことで誰に迷惑がかかりうるかなんか、正直どうでも良い話だ。
そんなことよりもまず……。
「あ……起きられる？」
「うん……」
ようやく、ゆっくりと体を起こす。
そんなことよりもまず、俺は、ここの脱出の仕方を考えなけりゃならない。
さっきのスダレの言葉によれば、とりあえずユリアに妙な手出しをすることはなさそうだ。だけど、俺が何かを知っていると思い込んでいて、知りもしない俺が吐くわけもなく、いらいらしたスダレが気を変えるかも知れない。ユリアに手出しは絶対されないとは、言えない。
それに、そうじゃなくたってこのままじゃあ売り飛ばされてしまう。ユリアを巻き込んだのは俺の責任だ。何としてでもユリアだけは、ここから脱出させてみせる……。
何とか立ち上がってみるが、全身がとにかく痛い。
けれど、意識を失う前は腕一本動かすことさえつらかったことを思えば、意識不明が良い休養になったんだろう。多少の回復はしているみたいだ。
大体、今も流血してるだのどっか折れてるだの取れてるだのって話じゃない。基本的に打ち身ばかりのはずだ。多少の内出血や内臓に傷くらいはついてるかもしれないけど、動けないわけじゃない。
……動け。
「どう、するの？」
立ち上がった俺を、床に座り込んだままでユリアが見上げる。痛みを堪えて、何とか安心させられるように笑みらしきものを顔に作

り上げた。
「逃げよう」
「でも……」
「何とかする」
言いながら、とりあえず状況を確認する。
俺とユリアがいるのは、狭い石造りの牢だ。床も壁も牢で、幅3メートル、奥行き2メートルくらいの暗い空間。一辺は全面が鉄格子で、一部に同じく鉄格子の扉がついている。天井は高くない。俺より少し高いくらいだから、2メートルちょいってとこだろう。窓はないし、物らしきものは全くない。
鉄格子から見える外の様子はすぐ壁だ。鉄格子から1メートルくらいの距離を置いて、同じく石造りの壁が見える。壁にぽつんとカンテラがかかっていた。
扉に近付いてみる。格子の間から手を外に出してみると、ごつい鍵がぶら下がっていた。逆さにしたU字ののツルと四角い本体で成る……俺流に言えば、南京錠と言う奴だ。
（……いけるかもしれない）
何か特殊な仕組みを付け加えたりしていなければ。……ありがちな南京錠なら、俺でも開けられるかもしれない。
「カズキ？」
「時間かかるかもしれないけど、開けてみる」
言いながら扉のそばにしゃがみ込む。シサーが、俺の履いている靴底に細い穴を開けて左右に1本ずつ、ピック用のピンを仕込んでくれた。それを抜き出して、外にぶら下がっている南京錠に手を伸ばす。
俺の手のひらくらいあるでかい奴だから、ぐるっと回転させれば真横に向いて、下面にある鍵穴には余裕で手は届くんだけど……何せ鉄格子が邪魔。初めて実践するんだから、せめて真横に向くんじゃなくてこちらを向いて欲しいものだ。
「ユリア、ごめん。手を貸してもらえる？」

「何すれば良い？」
「こいつ……下から手を出して、底がこっちに向くように持っててもらえるかな……」
鍵開けをするのに、基本的には両手が必要になる。自分で南京錠をこちらに向かせたままなんて、俺には出来ない。
ユリアに協力してもらって、ともかくも鍵開けに専念することにする。この牢から出られなきゃ、脱出なんか出来るわけがない。
（まず、テンションで負荷をかけて、奥から……）
メイアンからカサドールへ移動する間にシサーが説明してくれた鍵の内部の基本構造や、鍵開けの手順を思い返す。鍵穴の内部に複数のピンが存在する場合、テンションをかけながら、そのひとつひとつをピックで押し上げていかなきゃならない。指が滑ると押し上げたピンが戻っちゃって、やり直し。
間に鉄格子はあるし、鍵穴は真横向いちゃってるし、こっちは初心者だし、鍵開けはどうにも遅々として進まず、あと一歩と言うところまで来て何度も中でピンが戻ってしまった。次第に、いらいらしてくる。
「ユリア、ごめん。なかなか上手くいかなくて」
しつこく蹴り飛ばされた痛みが尚残っている両腕が、不自然な作業を続けていることで痺れたようになってきた。軽く唇を噛みながらも作業を続ける俺に、ユリアが首を横に振る。
「そんなことない。……ごめんね。わたし、手伝えなくて」
王女様が鍵開け技術を持っていたら驚く。
それからしばらく黙々と鍵開けに挑み続けていると、やがて、ようやく、カシャン……と音が聞こえた。左手でテンションをかけていたピックが、不意に軽くなってするっと動く。
「……開いた……」
解錠する音が、俺の心も軽くした。ユリアが手に持って支えたままの錠を受け取って、牢の内部から、扉に引っ掛かっている南京錠を静かに外す。芸は身を助く、だ。

錠を床に置き、そっと開けたドアから外を覗いてみた。左右をきょろきょろと見てみると、それほど広い部屋ではなさそうだ。
「ちょっと、待ってて」
「気をつけてね」
「うん」
ユリアを牢に残して、外に出てみる。歩いてみると、体の各所にまた激痛が走った。くそ～……痛ぇ～……。遠慮なくやりやがって……。
何気なく腰に手を伸ばし、自分が帯剣していないことに今頃になって気が付いた。舌打ちをする。どうやら奪われたらしい。あと俺が持っているものと言えばポケットに入れっ放しになっている、シサーが錠前のサンプルを作ってくれたワイヤーと、その残り物だけ。
そりゃあそうだよな。武器を売買している奴らなんだから、俺の持っているアギナルド老を唸らせた高価な剣を見逃すはずがない。くそ……奪い返すチャンスなんかあるだろうか。なかったらなかったで、諦めるしかない。ユリアの脱出が優先だ。とは言え丸腰は心元ないよな……。

第3部第1章第10話　メイアンの因業　後編（2）

牢を出て数メートル先は、7段しかない小さな階段があった。それを上ると鉄板みたいな扉があり、ちょうど頭の位置くらいにA4大くらいの覗き窓がある。ここにも鉄格子が嵌まっていた。そっと外を覗いてみると、ドアの外には小さなスペースがあるみたいだ。右手にまた、上へ続く階段。正面にはもうひとつ、内開きの扉。距離はない。人の姿も、今のところはないようだ。

ここの扉も、開けられないかな……。

扉の向こうに人の姿がなさそうなことをもう一度確認してから、先ほど抜き出したままの2本のピックを手の中で弄ぶ。シンやゲイトなら、あっちの錠もこっちの扉も、するっと開けられたりするのかな……いやいや。比べたって仕方がない。

とりあえず挑戦だけはしてみることにするが、こちらの錠はどうやら俺レベルでは開きそうになかった。何日か頑張ればわからないけれど、何日も頑張っているわけにはいかない。一旦、諦めることにする。

扉を背にすると、階段の左手には壁との間に1メートルもなさそうな無意味な空間があった。床が見える。右手の2畳くらいの空間には、何やら乱雑に木箱やら布やらが放置されていた。そちらに足を向けてみる。

良く見れば布の下や足元には折れた剣だの、ツバのないダガーだのが転がっていた。開けて覗いた木箱の中も、空だったり、壊れかけた刀剣類だったり、意味不明な布だったり。

……ふうん。売り物になりそこねた商品ってとこだろうか。この木箱に売り物と、カモフラージュとして布とを詰め込んで出荷していると言うのが妥当なセンじゃないか？

そんなことを考えながら、1本を手に取ってみる。錆びたバスタード・ソード。でもまあ、丸腰だの、柄のない剣だのよりはましだ

ろう。とりあえずはそれをお借りすることにする。
そこからすぐに先ほどの牢、牢を通り過ぎて向こう側へ行ってみると同じくらいの広さのスペースがあり、こちらには特に何も置かれてはいなかった。俺の頭より少し高い位置に通気孔らしきものが見えて、ここも格子がついている。
これが、今俺たちがいる部屋の全てだ、多分。カンテラは、牢の正面にあったあれしかないみたいで、かなり暗い。
さて、どうしようか。
「カズキ……どうだった？」
「ドアがひとつだけ。もちろん鍵がかかってる」
「開きそうにない？」
「今ちょっとやってみたけど、俺じゃあ無理かもしれない」
他の手段は何か、あるだ……。
考えかけて、牢を出てきたユリアの姿に思わずぎょっとした。場合も忘れてつい赤くなりつつ視線を定めてしまっている俺に、一瞬きょとんとしたユリアははっとしたように自分の胸元をかきあわせた。スダレに切り裂かれた胸元が左右にはだけて、そりゃあそんな凄いことになっているわけじゃないけど、何つーか……。
「……良かったら、着て」
「……あ、ありがとう……」
マントの下に着ているレガードの上着を脱いで、顔を背けながらユリアに手渡す。ユリアも胸元をかきあわせて俯いたままで、それを受け取った。……ああ、どきどきした。
……そんなことに気を取られている場合じゃない。呑気な。これ以上のことをユリアにされたらどうするんだ。怒りで多分、気が狂う。
今のところ、見張りが来そうな様子は、ない。
だけどこの先も来ないという保証があるわけじゃない。
のんびりしているわけにはいかないんだから、何とかさっさと手段を考えなきゃならない。

ユリアがレガードの上着を身につけている間に、俺はまた通気孔の方へと足を戻した。俺より少し高い位置にあるそいつを睨みつける。

通気孔か……。

一応、映画や漫画の常套手段だよな。だったらやってみない手はないだろうか。本当に出られるのかな。……やるだけやってみるか。

牢を挟んで反対側のスペースへ行くと、適当な木箱をひとつ選んで運んでくる。意外としっかりした箱で、と言うことは重さもそれなりにあって、全身が痛む俺には難事業だった、はっきり言って。派手な物音を上げるわけにはいかないし。

何とか木箱を通気孔の下に運び込み、ユリアに支えてくれるようにお願いすると、よじ登る。通気孔を塞いでいる格子に手を掛けてみると、意外とあっさりと格子が外れた。壁にぽっかりと、黒い穴が口を開けている。べたっと床に張り付けば、何とか人ひとりが横たわることが出来そうだろうか。

「ここから、出るの？」

「出られるかわからない。見てみる」

言って、通気孔に体を押し上げる。……ぐえッ。マッチョデブに散々蹴り上げられた腹が、激痛を訴えて涙が出そうになった。

詰まりそうな息を何とか整え、痛みに萎えそうな腕を叱咤して、匍匐（ほふく）前進を試みる。通気孔の中は当然真っ暗で、もちろん狭くて、しかも少し進んでいくともう行き止まりだった。……いや、行き止まりじゃなくて、左手に折れている。折れた少し先にまた格子があって、その先は更にまた右手に折れていた。こんな体ギリギリの幅で、軟体動物じゃあるまいしそんなにぐねぐね曲がれるわけもない。この幅で格子を外せるわけもない。お手上げだ。

とりあえず一度戻ることにして、俺は同じ姿勢のままでずるずると今度は後退を始めた。打ち身だらけの体での匍匐後進は、地獄だ。再び通気孔から部屋へと戻った俺は、埃まみれの苦痛まみれで声も出ず、まさしく哀れだったに違いない。

しばらく、ユリアがおろおろする前で、声もなく腹を抱えて蹲る。
ここから出ないことには、明日襲う痛みは今日の比じゃないはずだ。
何せ「片目がなくても良い」とか言ってたくらいだからな……まさしく拷問が待っていると思ったほうが良いだろう。死ぬのは良くても、痛いのは余り良くない。
呼吸を落ち着けてから立ち上がると、頭をめぐらせて部屋を見回す。ドアと通気孔――何にせよ、どこかに通じていそうなのはこの2つしかないんだ。だったらこの2つから出るしかない。どうやって出たら良いだろう。使えるものは、ここにあるものだけだ。限られている。
少し迷って、俺は考えを定めた。
『紳士倶楽部』だとすれば、カール公の情報では人数はさほどはいないはずだ。それに、懸けよう。
「ユリア。悪いんだけど、髪を縛っているリボンと髪の毛を数本……もらえないかな」
思いつける手段で、脱出を試みてみるしかない。

◆◇◆

準備は、した。
錆び付いているながらも、とりあえずの武器も手に入れた。
傷は、回復してない。だけどこれはどうしようもない。
後は、仕掛けるだけ。
「ユリア。良い？」
「うん……」
ユリアの返答を聞いて、俺は、積み上げた木箱に目一杯蹴りを叩き込んだ。
――――ガラガラガラッ……ガッシャーンッ。ガシャンッ……ガンッ……。
さすが、刀剣などの金属を詰め込んだだけあって、トーテムポー

ルのように積み上げたそれを蹴りつければその崩れる音は盛大だ。
背後に激しい物音を聞きながらもそれを見届けることはせず、俺は全力でユリアが身を隠す、階段脇の謎のスペースに駆け込んだ。狭いスペースだから2人もいれば、ぎゅうぎゅうだ。ほとんどユリアを腕の中に抱き締めるように体を寄せ合って、身を潜める。
ドアが開いても、ここは内開き……つまりこちら側にドアが来る。カンテラは部屋にひとつで暗い。それが、そして奥の方でしたはずの物音が、俺たちの姿を隠してくれることを祈るしかない。
ばたばたと足音が複数近付いてくるのが聞こえ、背筋が緊張した。ドアを開けてここにいるのが見つかったら、その瞬間もう終わりだ。
「何しやがったッ」
怒声と共に、勢い良くドアが開かれた。ガンッと開いた扉が、俺たちの頭上を掠めて壁に当たって跳ね返る。飛び込んできた男たちは、とりあえずは前方に視線を奪われてこちらにはちらりとも目を向けずに駆け込んでいった。
「逃げやがったのか！？」
「まさかッ。逃げられるはずがッ……」
開いたままの牢の扉に、マッチョデブが舌打つのが聞こえる。牢の先、奥の方に木箱や刀剣が散らばるのが見え、男たちはそちらへ足早に向かった。数は、４人。当然こちらには完全背中を向けている。今しかない。ユリアを促す。
「いたぞッ」
「こんなところから……追えッ」
とても心臓に悪い言葉だが、こちらに向かって言った言葉ではないのは、ちらりと様子を伺ってわかる。成功かな。ともかく、ドアは開いた。
彼らが俺たちだと思って釘付けになっているのは、『俺のマント』だ。
大した仕掛けをしたわけじゃない。俺がいつも一番上に身につけていたマントを剣で適当な大きさに幾つか切り裂き、俺が持ってい

たワイヤーやユリアのリボン、そして紐状に切り裂いたマントで長い紐を作り、マントに繋いで通気孔からぶら下げたのだ。紐は通気孔の奥、もうひとつの格子のところまで続き、格子をくぐってまた部屋へと折り返している。つまり格子を軸にして、マントを通気孔から吊っている状態だ。

紐の先には、ゴミの中にあった剣がついていて、格子がはまっていた金具にワイヤーを通して渡し、これまたワイヤーで作った輪っかを通気孔の天井からぶら下げ、通気孔の淵に落ちるように置いた剣を吊っていた。

つまり通気孔を正面から見ると、右に切り裂かれて身軽になったマント、左に紐で繋がった剣がぶら下がっている状態だ。

この、剣を吊った輪っかを引っ掛けている、通気孔に渡したワイヤーの両サイドはかなり長く取っていて、その2本は手前に伸びて通路の上で1本に縒り合わさっている。相当長いワイヤーを、通気孔を底辺に三角形を描いているような感じだ。で、その頂点から1本の線が出ている、と。

それを、角を曲がる手前に置いた木箱を経由させ、何本か撚り合わせて強度を上げたユリアの長い髪を使って牢の鉄格子に結び付けて橋渡しにし、物音につられた奴らが通路を駆け抜けると髪が切れて支えを失った通気孔の剣が自身の重みで落ち、紐で繋がったマントが通気孔の中へと滑り込んでいく。要は、つるべ落としだ。

通気孔の下に散らばった木箱は足台にしたと思うだろうし、俺が身につけていたマントが通気孔の中へ潜り込んでいけば、俺が急いで入っていったように見えるんじゃないだろうか。剣の重みで素早く引き上げられるよう軽くする為に随分マントは細くなったが、そんなことには気が付かないだろうし、目に付きそうなところはワイヤーにしてある。暗いし、咄嗟には何のことだかわからないだろう。

大して時間は稼げないが、それで構わない。要は開いたドアから外へ逃げ出せるだけの時間があれば良い。

マッチョデブたちが通気孔に消えていったマントに気を取られて

いる間に、足音を立てないよう気をつけながら急いでドアから出る。幸い、後を追うようにバラバラと人が来るようなことはなさそうだ。実際問題、何人の組織なんだろうか。あの４人とスダレじゃあ少なすぎるだろう、いくらなんでも。

出る時に何気なく扉を見ると、この扉は二重ロックになっていたようだ。鍵を差し込んで施錠するシリンダー錠と、回転させてフックに引っ掛けるタイプの鉄の閂の２つ。シリンダー錠は鍵を持っていない俺にはかけられないけど、せっかくだから閂くらいはありがたく下ろしておこう。これで更に少しは時間が稼げるはずだ。

静かに扉を閉めて閂を下ろすと、進路を決める。ドアの外は、先ほど見た通りだ。出てすぐに階段と、正面に扉。

外に出たいんだから、ここが地下でない限り、階段を上がるのは得策じゃない。正面の扉に手を掛けてみると、思いの外すんなりと扉が開いた。

扉の向こうは、だだっ広い倉庫のようだ。２０畳とか……いや、もっとあるのかな。牢と同じく石畳の床が無愛想に広がっている。俺の立つ左手のすぐそばに、向こうにあったのと同じ種類の木箱が幾つか詰まれていて、右手には粗末な木の椅子が３つ置かれていた。地面に意味不明にやかんが置いてある。煙草が散らばってたりもするから、ここに座って時間を潰したりしてるんだろうか。

肝心のドアは、右と左の壁、それぞれにひとつずつあった。それと、割合高い天井の上のほうには格子の嵌まった小さな明り取りの窓がいくつか見え、そこから微かに外の音が流れてくる。――波の音。

「海……？」

「海の近くみたいだね」

カサドール自体がそもそも海のそばではあるんだが、街中じゃあこんな近くに波の音は聞こえないだろう。だとすればここは、港？

「ここのドアは、開いてるのかな……」

牢に閉じ込めた奴らもそろそろ気づいて良いはずだ。騒がれて他

の人が集まっても困る。
　ともかくどちらかの扉を開けてみようと思いかけた時、左手のドアの方で音がした。咄嗟にユリアを掴んで木箱の陰に身を潜める。
　木箱の隙間からそっと窺ってみると、開いたドアから入ってきたのは男ひとりだった。見たことのない男だが、あまり人相は良くないので仲間だろう。男の後ろに一瞬だけ見えた景色は、夜で暗いから良くわからなかったけれど、多分外。左手の扉は、外に続いている。
　男は何気ない足取りで、こっちの方へ歩いてきた。ユリアがぎゅっと身を硬くするのがわかる。片手で軽くユリアの肩を抱きながら、もう片方の錆びきった重い剣を握る手に力を込めた。あいつひとりなら、何とか出来るだろうか。騒ぎにはなりたくない。
　油断なく男の様子を窺っていると、男はやがて俺たちのすぐそば、先ほど見かけた椅子のひとつに腰を下ろした。俺たちの気配にはまるで気づいていないようで、完全に無防備でこちらに背中を向けている。帯剣はしているが、もちろん握っているわけでもない。……迷ってる場合じゃない。相手がひとりの今しか、チャンスはないぞ。
　腹を決めると、ユリアを残して俺は木箱の陰から飛び出した。俺の気配に、やかんを取り上げていた男が振り返る。剣を握る俺に一瞬ぽかんとした顔をしてみせ、がたっと椅子から立ち上がった時には俺は剣を構えていた。
「何ッ……」
　小さな声を遮るように繰り出した剣の狙いは、首筋――もとい、頚動脈。かなり錆びついていて多分斬ることは出来ないだろうから、後はもう突くしかない。一応先は尖っている刃物だから、折れさえしなければ刺さりはするだろう。首の動脈を傷つけられれば、それだけで致命傷になる。
　……そうだろうとは思っていたけど、これだけ何度か人を斬ってみりゃ体感として理解している。人間の動脈が、どこを狙えれば傷つけられるのか。どの程度の深さが必要か。……手応えが、どんな

もんなのか。
　頚動脈を切られた時、血糊でも仕込んだのかと思うくらい、人間は血液を噴き上げる。
　剣を突き立てるのと同時に、刺さったままで剣が折れた。けれど男の生死は決したようだ。身を引いて、お約束の噴水を避けている間に、男が椅子の上に倒れ込む。音を響かせて椅子と男が血溜りに崩れ落ちると、俺は男が帯びていた剣を抜き取った。……う。やっぱり、元々俺が持っていたものよりは、遥かに重い。だけど錆びた上に折れた剣よりは随分ましだろう。
「行こう」
　青褪めて木箱の陰に立っているユリアを促し、男が入ってきたドアの方へと足を向ける。こっちのドアは、確実に開いているはずだ。果たして、ドアは開いていた。続いているのはやはり、外だ。それも、予想通り海。
　建物から出て数メートル先はもう、黒い海だった。煉瓦を敷き詰めた整備された地面がずっと右手の方へと続いている。左手はすぐに海だ。
　雰囲気としては、港の倉庫街。倉庫街ね……ここから武器だの人だのを出荷していたと言うことだろう。
　そんなことはどうでも良いが、どこへ向かえば外に出られるんだろう。俺たちがいた建物はこの並びの中で一番端にあったらしく、同じような建物が細い路地を挟んで幾つか続いているのが暗がりからでもわかった。
　とりあえず、左手には海しかないんだから右手に進むしか……。
「カズキ」
　そう決めて歩き出しかけた俺の頭上から、不意に名前を呼ぶのが聞こえた。……え？
　ユリアの声じゃない。咄嗟に振り仰ぐ俺より先に、ユリアが驚いた声を上げた。
「レイアッ……」

「ユリア様、心配したわッ」
夜空と倉庫を背にふわふわと浮いているのは、レイアだった。こっち目掛けて一直線に降りてくると、手を伸ばすユリアに抱きつく。

第3部第1章第10話　メイアンの因業　後編（3）

「ああ、見つかって良かった……」
「ごめんなさい、探したの？」
「探したわよッ決まってるじゃないのッ」
それからレイアが俺を見る。
「何があったの」
「『紳士倶楽部』」
短く答える。レイアが黙って目を見開いた。それから、倉庫に視線を投げる。
「ここが？」
「拠点かどうかは知らない。だけど多分俺たちを拉致したのが『紳士倶楽部』で、ここの倉庫を利用してるのは間違いないんじゃないかと思う」
確認したわけじゃないから、絶対とは言わないけど。
「……どうすれば良い？」
レイアが眉根を寄せて、俺に問うた。
ここから、脱出したい。その為には精霊魔法を使うレイアの存在はありがたい。
だけど、果たしてそれがベストだろうか。『紳士倶楽部』の存在で、カサドールはモナへの派兵に足踏みをしている。カール公は彼らを摘発したい。俺が無事に戻ってからじゃあ、『紳士倶楽部』はここを引き払った後かもしれない。
「レイア。……ここから、公庁まではどのくらいかかる」
「あたしの移動はそんなにはかからないけど……」
「公庁から、とりあえずシサーたちだけでも辿り着くとしたら、どのくらいかかるかわかるか」
俺の考えていることがわかったようだ。レイアは難しい顔をした。
「……早くても、1時間近くかかるかもしれない」

そんなに……。
唇を噛んで、迷う。
その間、ユリアを連れて逃げていられるだろうか。いや、俺たちがここに留まっていなくても良いんだ。逃げ出せるだろうか。
「可能な限り急いで、シサーたちをここに連れてきて。……出来るなら、カール公たちにも」
「わか……」
レイアが頷きかけた時、俺たちが今出てきた倉庫の方でガーンッと金属的な物音が上がった。閉じ込められていた奴らが出てきたんだろうか。階段の方から味方が降りてきて開けたのかもしれない。やばい。
「ユリア、行こうッ。レイア、頼むッ」
「わかったッ」
ユリアの腕を引いて走り出す。レイアがいれば戦力になってくれるのは間違いないだろうけれど、あいつらから逃げ回らなきゃならないのは同じだ。ここから自力で脱出しなけりゃならないことも同じ。俺とユリアはレイアと違って飛んでいくわけにはいかないんだから。
『紳士倶楽部』が何人いるかわからない。だったら一刻も早く、助けを呼んでもらった方が、確かかもしれない。問題はそれに、どれだけ時間がかかるかだ。
倉庫のドアが開く音がする寸前に、俺は倉庫の間の路地を折れた。
とにかく、逃げ切ることだけを考えよう。

◆　◇　◆

この一角にはとにかく倉庫が多いらしい。
同じ大きさの倉庫が碁盤の目のように立ち並び、倉庫の間を駆け抜けては足音に遭遇し、それを避けては路地に駆け込むので、海とは反対の方へと抜けたいのだがなかなかそれが叶わない。今のとこ

ろまだ剣を交えてはいないけど、そうなるのも時間の問題かも……。
「いたぞッこっちだッ」
「反対側を塞げッ」
塞がれてたまるか！！
「モーリス！！右から抜けろッ向こう側に行けッ」
後ろから追ってくるのは、マッチ棒だ。それとネズミみたいな男の2人。
倉庫と倉庫の間を駆け抜けて、塞がれる前に向こう側に何とか脱け出すが、こっちを塞ぐべく向かっていた奴らが右から左から……左の方が距離がある……ッ。
「こっちッ」
ユリアの手を掴んだままで、俺は左に折れるとその手前ぎりぎりで更に右に折れた。ぱっと見る限り、俺が剣を交えて何とかなりそうな相手がいない。ひとりならまだしも、全部2人一組になっていて、俺では到底歯が立たない。逃げ回るしかない。
また左に折れて、更にそこを左に曲がる。つまりぐるっと回って、さっき出てきた通路へ戻る。じぐさぐに逃げ回る俺の姿を見失ったらしい怒声と足音が聞こえ、俺はさっき入ってきた倉庫と倉庫の間の道を、また駆け戻った。――くそッ。これじゃあ最初の倉庫の方角に戻ってるッ。こんなことを繰り返してるんじゃあ、永久にこの倉庫街から抜け出せないッ……。
「ユリア、平気ッ！？」
「へ、平気……大丈夫よ……ッ」
息が上がってる。これだけ走り回れば、そりゃあ息も切れるだろう。そういう俺だって、息切れ、動悸、そして全身に残る怪我の痛みで死にそうだ。
だけど、何とか撒けた今の内に、距離を広げておきたい。距離を広げるったって、そもそもが大して広い範囲を逃げているわけじゃないからたかだか知れているんだろうが……。
倉庫の間をまた適当に折れながら移動し続け、やがてでかい通り

にぶつかった。とは言ってもあくまで倉庫街の中、渡った反対側にも同じような倉庫街があるだけではあるが、ブロックが変わると言う雰囲気だ。

でかい通りと言うことは、見晴らしが良い。抜ける俺たちの姿を見られたくないので、左右に注意を払って一旦足を止める。肩で息をしながら見回すと、左手の先には海が見えた。……くそッ。海の辺りからこれしか移動出来てないのかよ。

ともかくも、反対側に渡る。次のブロックでもとりあえずは海と反対側の右手を目指そうと足を向けかけて、不意に真っ直ぐ抜けた方向からガラガラと言う重たい音が聞こえた。台車に重たいものを乗せているような音だ。加えて言えば、慌しい感じ。……何だ？

「あっち側も探せッ」

そうしている間に声が聞こえる。後方の、それも進行したい方角からだ。――ちッ。そっちに行きたいってのにッ。

だけどあっちのブロックから真っ直ぐこっちのブロックへ移って来るんであれば、これで俺が右手に折れるとまた鉢合わせる恐れがある。仕方がないので左手、結局海側へ戻ることを余儀なくされながら、俺はまたユリアの手を引いて倉庫の間をじぐざぐに駆けた。台車の音が近付く。

（まずいかな……）

まずいよな、多分。

台車が動いていると言うことは、人がいる。それがあいつらの仲間じゃないとは限らない。いや、この状況下で呑気に何かを運んでいるんだったら、仲間の可能性の方が高い。俺の追跡とは別に、違う任務を負っているのかもしれない。

そんなことを考えて、俺は後方から追ってくる音とも台車とも距離をとるべく、走った。とすると方向は必然的に海方向の、さっきのブロックの方角になる。どんどん最初の倉庫へと戻っている。

こっちのブロックとあっちのブロックを隔てているでかい通りの近くまで戻ってしまって、ついでに言えば倉庫一列を挟んで向こう

は海と言うところまで戻ってしまって、躊躇した。この状態で向こうのブロックに渡るのは非常に危険じゃないだろうか。

……と、声がした。

「急げ。集めた分だけでも何とか出荷しちまわないとまずい」

「あといくつだ」

「2箱だ。いけるだろう」

『紳士倶楽部』だろうか。

俺がこのまま脱出に成功してしまう可能性を踏まえて、ここに置いてあった品を運び出しているのかもしれない。

が、そんなことはどうでも良い。

「あ、ちょっと待ってくれ……」

仕方がない、向こうのブロックに戻るよう……。

そう決めて駆け出しかけた瞬間、予想外の角からいきなり男が飛び出してきた。向こうも俺の姿に驚いたようだ。荷運びチームの誰かだろうか。「うわッ」と小さく呟くのが聞こえ、咄嗟に俺は剣を叩き込んだ。

「うわあッ」

「何だ!?どうした!?」

しまった。

「いたぞッ、あいつッ……」

呻きながら尚も喚く男にとりあえずもう一太刀叩き込み、ユリアを引き摺って走り出す。……怖いものだな。もう剣を敵に叩き込むことが、ほとんど条件反射になりつつある。技量はまだまだだけど、考えるより先に、自動的に手が動き始めている……。

「どこだ!?こっちか!?」

「おおい!!こっちだ!!こっちにいるぞー!!」

呼び掛けるなよッ。

でかい通りに飛び出て、向こうのブロックに抜ける前に、逆にあっちに渡ろうとしている男たちが通りの先に見えた。俺の姿を見つけて方向転換し、こっちに向かって疾走してくる。ちらっと見て、

思わず顔を歪めた。マッチョデブだ。あいつの膝蹴りは、相当効く。
もう、息も持たない。
ユリアだって足がもつれてきている。転ばずに済んでいるのが奇跡だ。
俺たちの位置を明確に掴んだらしい『紳士倶楽部』がぞろぞろと追いかけて来るのを背後に感じながら、俺は戻ってしまったブロックをまたじぐざぐに逃げた。
「そっちに追い込めッ」
「こっちを塞げッ」
走る左手からも声がする。左側には向かえない。まさしく追い込まれて行った俺は、選択肢がないままに右手に折れて走り抜けた。
――もう、逃げ切れない。
そこは、最初の倉庫の前だった。
前は、海。
右も、海。
左には倉庫で、後ろには『紳士倶楽部』だ。もちろん俺がひとりで相手取れる人数じゃない。
結構、逃げ回ったと思うけどな……シサーたちは、間に合わなかったみたいだ。
「ドアは、開く？」
倉庫の中に戻っても仕方がないかもしれないが、反対側にもドアがあったし、向こうに抜けられるかもしれない。
けれど、帰ってきた答えは絶望的だった。
「開かないッ……」
鍵をかけてくれたようだ。ありがたくて涙が出る。
「ユリア……そっちの、陰に隠れてて」
倉庫のドアのそばにも、例の木箱がある。隠れられるような感じじゃないけど、少しでも陰に隠したくてユリアをそっと押しながら剣を握り直した。倉庫を左に見て海を背に、剣を構えながらじりじりと後退する。

こちらに逃げ場がないことを見て取った『紳士倶楽部』も、追う足を緩めた。ざっと見て１０人前後。荷運びチームも向こうのブロックにいたから、これで総勢だとすれば『紳士倶楽部』は１０数人ってところか。どちらにしても、俺でどうにか出来る相手じゃない。

「よくもまあ、逃げ回ってくれた」

息を切らしながらマッチ棒が言った。マッチョデブの姿もある。スダレは、見当たらなかった。荷運びの指示でもしてるのかもしれない。

無言で剣を構えながら、唇を噛む。

ユリアだけでもどうにかならないだろうか。海に飛び込むとか……港の近くって船が停泊するから深いんだよな、確か。

「ユリア、泳げる？」

「お、泳げない……」

じゃあ死に方が変わるだけだ。

最後の悪あがきで、近付いてくる『紳士倶楽部』から目を逸らさないまま頭を回転させるが、名案が浮かばないままでマッチョデブの声が届いた。

「クソガキはこの場で殺してやるッ」

マッチョデブが吼えて駆け出すのを合図にしたように『紳士倶楽部』が押し寄せた。……押し寄せ、かけた。

――――ゴォォォッ！！

不意に、視界の隅にオレンジの光が燃え上がる。『紳士倶楽部』の背後、暗闇を焦がす猛火の熱。

ガンッ、ガンッ……。

「カズキィーーーーッ！！」

被せるような激しい物音と、俺を呼ぶ声……キグナス！！

「キグナスッ！！」

慌しい物音に、『紳士倶楽部』が動きを止めた。自分たちの背後を見遣る。倉庫の向こうのでかい通りから、小柄な人影が走り出てきた。

「カズキ！！ユリア様！！」
「キグナス！！」
「何だてめぇ……」
「――――『火炎弾』ッ」
襲い掛かる烈火の炎に『紳士倶楽部』が身を引いていると、その背後に駆けつけたいくつもの人影が飛び込んできた。鋭い声が上がる。
「『紳士倶楽部』だな？誘拐罪、暴行罪、不法な人身売買と武器の密売、窃盗罪そして不敬罪――その他の余罪について、話を聞かせてもらおう」
「あれは……」
「カール公よ」
目を見開いて呟く俺に、頭上から答えが返った。見上げると、夜空からふわりとレイアが舞い降りてくるところだった。
片目を瞑ってブイサインをしながら、レイアは小さく舌を出した。
「待たせたわね。……もう、大丈夫」
その笑みを受けて、俺の手から剣が滑り落ちる。気力だけで持ち堪えさせていた全身が、気が抜けると同時に痛みに支配され、力が抜けた。
「良かっ……」
ユリアが助かって、良かった……。
安堵の中、小さく呟いた俺の体は、そのままその場に崩れ落ちた。
もう、何も考えることが、出来なかった。

第3部第1章第11話　動静（1）

見下ろす庭園の風景が、変わって見える。
揺れる枝葉の囁きに心洗われ、庭園を彩る鮮やかな花々に安らいでいた頃には戻れないのだろうか。
ロンバルト公国ヴィルデフラフ城の庭園を行き来する侵入者たちの姿に、窓際から見下ろしたアンジェリカ公妃の赤茶色の瞳から涙が零れた。
「公妃様」
背後からかけられた声はカレンのものだ。心配そうな声音が、アンジェリカを案じていることを表している。
「お体に、障りますよ」
「……ええ」
素直に頷くと、アンジェリカはカレンに勧められるままにテーブルについた。カレンが手に持ったティポットから、温かいお茶を注ぐ。
「ご心配なさらずとも大丈夫です。レドリック様が、おられますから。ロンバルトに良きように計らって下さいますよ」
「……」
ヴィルデフラウは現在、帝国に反抗する連合軍の支配下にある。
王城内を闊歩するのは連合軍、既知の寵臣たちは、ある者は殺され、ある者は囚われたと聞いている。ただし、城の中を自由に歩くことを許されない為、真実の程は知らない。誰がどうしているのかを知る術はない。
アンジェリカは、一応は無調法な扱いを受けることを免れている。今の扱いは監禁ではなく軟禁と言えるだろう。話し相手、そして身の回りの世話としてカレンと同室することが許され、ヴィルデフラウの奥深い客室のひとつに幽閉されている。
けれど、不幸中の幸いとも言えるその待遇も、アンジェリカの心

を晴らすことなど出来はしなかった。
フェルナンドが身罷(みまか)られたとは、レドリックから聞いている。フェルナンド亡き今、おめおめと自分だけが生き延びるなど許されて良いはずがない。却って生き恥を曝すことが屈辱的とさえ思える。
けれど反面、愛する実子のことを思えば、生き恥を飲み込んでも生き延びなければならないと思う。少なくともレガードがどうしているのかを知りたく、もしヴァルスで生きているのならば、生きなければならない。
例えこの先、これ以上に屈辱的なことがあるのだとしても、息子の為に自分は耐えなければならない。
「母上」
アンジェリカの悲壮な決意を、不意に聞こえたノックの音が遮った。義理の息子の声と気づいて、アンジェリカの背中が僅かに緊張した。
「あら。レドリック様。……はあい。今お開けします」
何も気づいていないカレンが立ち上がる。アンジェリカは微かに顔を強張らせたまま、その動きを見つめていた。
この一連の出来事の中で、アンジェリカはレドリックに不穏な空気を感じていた。根拠があるわけではない。義理とは言え、母親の勘と言うやつである。……いや、根拠がない、と言えば嘘になるのだろうか。
レドリックは、どこへ姿を消していたのだろう。
音沙汰もなく、囚われていたと言うのならまだわかるが、健康的な顔色で危地のウォルムスへ戻って来た。――ウォルムスが陥落したのは、それから間もなくだ。
アンジェリカは、母親と言うにはいささか失格である自分を知っている。レドリックには元々何か、得体の知れないところがあるような気がしていた。母親であるのだからレガードと分け隔てはいけないと言い聞かせてきたものの、生理的に受け付けないものはどうしようもない。はっきり言えばアンジェリカは、ずっとレドリッ

クに嫌悪感を抱いて来た。
レドリックが何か、すべきではないことをしているように思えてならない。神の前で恥じることをしているのではないかと思え、そう感じる自分を情のない人間と思う。どうして息子を信じてやることが出来ないのだろう。
尚も凍りついたまま、開く扉を見つめる。レガードと僅かに面影が似ている長男を無言で見つめる母の視線に、レドリックが笑みを刻んだ。
「つつがなくお過ごしですか」
「……」
つつがないはずもない。幽閉されている身で、「快適だ」などと答えようがあるだろうか。
無言のままのアンジェリカに、部屋に足を踏み入れたレドリックが近付いてきた。その背後でカレンが扉を閉め、ティポットに手を伸ばす。
「……外は、どうなっていますか」
レドリックは、この王城内の人間としては唯一、外部との連絡を許されていると聞いている。アンジェリカはそこにも何か不審な匂いを感じずにはいられないが、レドリックが「交渉の賜物だ」と言うのであればそうなのかもしれない。レドリック曰く、連合軍の目的はあくまでもヴァルス陥落であり、協力体制にさえつかなければロンバルトを占拠するつもりはないのだとのことだし、さあればロンバルトは多少の不自由は強いられようとも戦役から手を引くとの約束で解放される可能性もゼロではない。であれば、その交渉の矢面に立つであろうレドリックに寛容な対応が為されていてもおかしくはないのかもしれない。
（本当に……？）
王族は、何らかの責任を問われるものではないのだろうか。
だが、フェルナンドが責任を問われて戦死したことで、片がついているのかもしれない。ロンバルトを占拠するつもりがないのであ

れば、継承者を残しておく必要はあるし、その際における様々な約束事を取り決めるにはレドリック以外にいないのも確かなのだから。
「連合軍指揮の下、ともかくもまずは市民の生活の復興に着手していますよ」
「ロンバルト貴族はどうなったのです。大臣たちは」
「者によりますね。が、母上が心配なさることではない」
「……」
冷たく回答を打ち切ったレドリックは、テーブルのそばに立ったままでカレンが差し出したティカップに口をつけた。そのままアンジェリカをちらりと見る。その視線になぜかぞっとした。レドリックの目付きは、母親を見る息子のものとは思えない。男が女を見る目付きに似ている。それがアンジェリカには、薄気味悪い。
「母上の待遇に、頭を悩ませているのですよ」
「……」
「連合軍は、先王と同じく責任を問うてはどうかと言っている」
「……」
「先王が身罷った恨みも一入(ひとしお)だろうと。……しかしあなたは、私の母ですからね。私としても、苦しいところですよ」
「何を、言いたいのですか」
「私の腹ひとつ、と言うことです」
口をつけたカップをソーサーに戻し、レドリックは嘲笑うようにアンジェリカを見下ろした。
「わたくしは……」
その視線に耐えかねながらアンジェリカは震える口を開いた。
「わたくしは、陛下のおそばに行くのであれば、恐ろしくはありません。責任を問われても、構いません」
「そうはいきませんね」
「連合軍はそれを望んでいるのでしょう。ならば下手に逆らうのはあなたの立場も追い込むのではありませんか」
何を考えているのかわからず、ただ薄気味悪さだけを感じたアン

ジェリカは必死で言い募った。王侯の情交は歴史上乱れていることも少なくない。実母と息子で情交を交わす者さえいるのだ。義理の母とくればどうして躊躇う理由があるだろう。まさか母を妾として後宮に置くつもりではと思えば、全身に鳥肌が立った。それなら死んだ方がましだ。

怯える母の胸中を知っていると言うように、薄笑いを刻んだままレドリックが何かを言いかけた時、再び扉を何者かがノックした。レドリックが振り返る。

「誰だ？」

「レドリック様。火急のご報告でございます」

「火急の？……わかった」

ドアの外からの回答に不機嫌そうな色を滲ませたレドリックは、カップをソーサーごとテーブルの上に置いてアンジェリカを振り返った。

「では母上。その辺りについてはまたゆっくりとお話しましょう。用件が出来ましたので、失礼させて頂く」

「……わかりました」

肉食獣を前にしたかのような母の目線に、レドリックは僅かにこれまでの溜飲が下がったような気がした。

アンジェリカは、義理の母親だ。そして何かにつけて気に入らない弟の、実母だ。

レドリックを見る時のアンジェリカの目付きが、常に気に食わなかった。嫌悪を押し殺すような顔でレドリックを見る。

受け付けない息子の、まるで情婦のような生活を押し付けてやれば、あの女のすました顔がどのように歪むのだろう。少々年は食っているが、まだ十分に美しい。何よりアンジェリカの存在は、レガードへの切り札になる。レガードが確かにいなくなり、不要になってからアンジェリカもそのそばへと送ってやれば良い。

母親への歪んだ憎悪を飲み込んで、レドリックは部屋を出た。そこに待ち構えていたのは宮廷魔術師ラミアとの連絡に当てている使

者だった。
「ラミアから何か連絡が来たか」
「ラミア様がお戻りです」
「……何？」
思わず動かしかけた足を止める。無言で問うレドリックの視線に、使者が答えた。
「火急のご報告を直接とのこと。現在『淡雪の間』でお待ちです」
使者の言葉に従って、レドリックの居館であるディモルフォセカへ向かう。『淡雪の間』はその1階にある来客の控え室だ。
「ラミア」
使者を下がらせて部屋に足を踏み入れると、ラミアは青褪めた顔つきで窓際に佇んでいた。
「どうした。椅子にかけ……」
「申し訳ございません」
青褪めたまま、ラミアが床にがばっとひれ伏す。その様子に、レドリックは眉を顰めた。ラミアは、ロドリス王都フォグリアより僅かに西北にある街ウォーリッツ付近の別邸にて、ヴァルスの宮廷魔術師の身柄を預かっている。何かとんでもない失態をしたに違いない。
「……ヴァルスの宮廷魔術師が、どうした」
「逃しました」
押し殺した声で、深く俯いたままのラミアの返答に、レドリックは知らず、険しい表情になった。
「逃した？」
「はい。……申し開きの言葉もございません」
「当たり前だ！！」
怒鳴りながら、手近な椅子を足で蹴りつける。ガタンと派手な音を立てて、椅子が転がった。その物音に、ラミアがぴくりと肩を震わせる。
「何でそんなことになった？ロドリスは消せと言っていると伝えた

だろーがッ」
「は……申し訳ございません」
「そんなことは聞いてねぇよ。何でそんなことになったかと聞いてんだ」
「……」
「生かしといたのか」
「はい……」
思わず盛大な舌打ちをする。ラミアが勝手な真似をして失態したと言うことが腹立たしい。怒りを隠そうともせずにいらいらと別の椅子をまたも蹴り飛ばすレドリックに、ラミアはひたすら無言で平伏していた。レドリックが尖った声で促す。
「何でそんなことになったのか、状況を説明しろ」
「はい……」
「なぜ生かした」
短い沈黙の後、ラミアは小さく息をついた。
「ロドリスを、手放しに信用するわけには参りません」
「当たり前だ」
「ですが、ロドリスの後ろ盾がなければ、現状味方は余りにも心細く感じました」
「……」
「ヴァルスの宮廷魔術師は、レドリック殿下のおそばにおければ使えると判断しました」
「その結果がこれか」
「……」
「で？見張りを怠ったわけではあるまいな」
「まさか」
ラミアが顔を跳ね上げる。その顔を、レドリックが嘲笑するように見下ろした。
「では警戒してて逃げられたってわけか？……粗末な話だな」
「は……」

「魔法に制限をかけてたんじゃねーのかよ？」
「はい」
「それで逃げられたのか」
忌々しげに言うレドリックに、ラミアは返す言葉もなく一層頭を下げた。それを苛立って眺めながら、腕を組む。ともかくも責めているだけではどうにもならない。ロドリスに知られる前に手を打たなければ。
「どこへ逃げたのか見当はついてるのか」
「いえ……とりあえず、逃げた方向をすぐに探索は致しましたが……盗んだ馬の死体だけが残されていて、当の本人の姿はどこにも見あたらず……」
「何としても探せ。見つけ次第その場で……」
言いかけて、ふと言葉を切る。ラミア自身に余り動かれては、ロドリスに不審を持たれよう。詮索されるのは嬉しくない。
「お前の私兵を使え」
「……はい」
「お前は動くな。ロドリスに不審に思われては困る。ウォーリッツの屋敷に滞在し、細かく指示を出してヴァルスの宮廷魔術師を追え。状況は必ず把握しろ」
「はい」
「それから……」
言いかけて、頭を巡らせた。ヴァルスの宮廷魔術師は、どう行動しようとするだろうか。決まっている。ヴァルスに戻ろうとするに違いない。その為には通常ロンバルトを通過しなければならないが、ロンバルトの宮廷魔術師が裏切って動いていることを知っている。ならば警戒してエルファーラの方へ向かおうとするかもしれない。
「オアスンのノルディック公爵を動かせ。ヴァルスの宮廷魔術師の容姿や状態を伝えて、そちら側からも追跡させろ。ヴァルスへ戻る道を塞げ。何としても……」
「……」

「生きてヴァルスへは、帰すな」

◆◇◆

ゆっくりと、意識が浮上していく。

何か、繰り返し嫌な夢を見続けていたようだ。

汗に濡れた体をぼんやりと認識しながら微かに目を開けると、薄汚れた板張りの低い天井が視界に入った。

（……ここは……）

そう思ってから、シェインは、さほど遠くない過去にも似たような状態にあったことを思い出した。あの時に目覚めたのは、そう……ロドリスの宮廷魔術師の別宅だった。

横たわったまま、ゆっくりと顔を動かす。自分の呼吸が荒いことに気がついた。全身は至るところが軋むように痛み、どうやら状態はあの時とは比較にならないほど悪化していることを理解する。しかし状況はどうだろう。一体何がどうして、どうなったのだろうか。

脂汗を浮かべながらゆっくりと視界を動かすと、狭い部屋の壁際には老人が居眠りをしているのが見えた。何だか嫌に平和な光景のような気がして、虚を突かれる。

第3部第1章第11話　動静（2）

（誰だ……？）

そのまま視線をあちこちへと彷徨わせた。

壁も床も粗末な板張りの部屋だ。小さな部屋で、埃っぽい。老人は唯一の椅子に腰掛けて居眠りをしており、その老人の周囲には摘んできた草が詰め込まれた籠がいくつか転がっていた。選り分けている最中に眠ってしまった、と言う風情だ。

老人のそばには、窓がある。

青空が広がっているのが僅かに視認出来、昼間であるらしいことがわかった。

ゆっくりと顔の向きを戻し、天井を眺めながら記憶を遡ることにしてみる。

ラミアの屋敷中を駆け回って、手に入れた馬で裏の柵へ体当たりをさせたことは覚えている。自殺行為であることは承知の上だ。但し、屋敷の窓から見て、果てしなく続く崖とは思いにくかったし、太い枝を広げた巨木が茂っているように見えたから、少なくとも正門を突破しようとするよりは生還の可能性があるやもしれぬとの判断である。事実、運良くこうして生き延びている。

（ユリアに知られたら、怒り狂うのだろうな……）

どうしてそんな無茶をするの！！と泣きながら引っ叩かれそうだ。

その想像にくすりと笑ってから、再び真面目な表情へと戻す。

記憶にあるのは、柵が馬の重量を支えきれずにひしゃげたところまで。裏手へ辿り着く前に全身に負った矢傷や刺し傷などで、馬の背にしがみついているのがやっとだった。しかし、飛び出して突然大地を失った馬が恐慌状態に陥り、枝葉の中へと落下して突っ込んでいくところで記憶がぷつりと途切れている。

素直に考えれば、自分が今こうして生きているのはおかしい。

ラミアたちにしてみればシェインが姿を消した方向が明らかなの

だし、シェインは意識不明なのだから、あの後すぐに駆けつければシェインの捕獲は出来たはずだ。捕獲したならば、今度こそ生かしておくとは考えにくい。

だがこうして生きていると言うことは、ラミアの手を逃れて何者かの救いの手があったと言うことなのだろうか。

（あのじーさんか？）

居眠りしている老人だろうか。

「はあッ……」

何にせよ、あちこちが激痛塗れだ。手首の腕輪の感触は健在である。リミッターはもちろん装着されたままらしい。痛みを紛らせるように大きく息をつくと、それに重ねるようにドアが静かに開かれた。

「……」

「……」

入ってきた人物と、思わず無言で顔を見合わせる。

すらりとした上品な風貌の男性だった。物憂げなモスグリーンの瞳の上で、淡い金髪の長すぎない髪がさらさらと揺れている。

「目が覚めたのか」

「ああ。……いろいろと聞きたいことがあるのだが、誰に何を尋ねて良いかわからない。おぬしが尋ねるべき人物だろうか？」

余り長く話すと呼気がつらい。気胸はまだ肺を侵しているようである。そこまで話して息を荒くつくシェインに、青年は無言で視線を向けた。ゆっくりと近付いてくる。

「どの程度まで答えられるか自信はないが。尋ねてみるか？」

どことなく人を食ったような答えに、閉じた片目を微かに開けながらシェインは小さく笑った。

「尋ねてみるとしよう。……あの老爺は何者だ？」

まさかそこから尋ねられるとは思わなかったらしい。青年は目を瞬いてから、後方を振り返った。呑気な年寄りは、まだ夢の世界を彷徨っているようだ。微かないびきが聞こえる。青年はもう一度こ

ちらに顔を戻すと、生真面目な口調で答えた。
「彼については私も深い知識を得ているわけではない。この村に唯一の医者だと聞いたに過ぎない。意識不明の人間を同行する羽目になったので厄介になったまでのことだ」
「……」
意識不明の人間とはこの場合、やはり自分のことだろうか。
好意的とも悪意的とも言いにくい曖昧な言い回しに思わず無言に陥って青年を見上げるが、青年は何も頓着していないように黙ってシェインを見下ろした。
「では、俺をここまで連れてきてくれたのは、おぬしだと思って良いか」
「良いのだろうな。私の背に負っていたのだから」
「それは手間を掛けた。……感謝する」
今ひとつ状況が読みにくいが、ともかくもこの青年がシェインを救って医者の元へと運んでくれたと言うことのようだ。
「名前を聞かせてもらえるか」
「私か？……」
問い返してから、青年はしばし戸惑ったような沈黙を挟んだ。困ったように見返されても、シェインの方も困ってしまう。
「……どうしても嫌だと言うのなら、今の質問はなかったことにさせて戴いても良いが」
「いや、そういうわけではないのだが。……仮名で良いか？」
「……構わぬが」
何やら妙な会話をしているような気がするのは自分だけだろうか。
狐につままれたような奇妙な困惑を引き摺って見上げる青年は、貴族めいた上品な顔を微かに顰めて躊躇いがちに答えた。
「今は、エドアードと言うことになっている」
「……そうか」
「ソフィアはエディと呼んでいるので、そなたもそのように呼んで構わない」

「ではそうさせてもらうとしよう。俺は、シェインだ」
ヴァルスの宮廷魔術師であることは言わぬ方が良いだろう。まだエディが何者であるのかわからない。
官服やローブを身に纏っていたわけではないから、生半可なことではシェインの身分はバレはしないだろう。
「エディ」
「何だ」
「状況を教えてもらえるか」
「状況？」
「俺がここに運び込まれることになった経緯だ。ここがどこであるのかも教えて戴けるとありがたい」
シェインの問いに、エディは腕を組んで考えるような顔つきをした。それから思い出すように口を開く。
「まずここは、インファーと言う村だ。農村だろうな。小さい村だ」
「インファー……？」
聞き覚えがある。
どこだったか記憶を探りながら、シェインはエディの話に耳を傾けた。
「私とソフィアはキアヌからアンフェンデスへ向かう途中だ」
「キアヌ……アンフェンデス……」
キアヌと言う地名には覚えがない。アンフェンデスの方は聞き覚えがある。ようやく合点がいって、シェインは口を開いた。
「……ここは、ロドリスか」
「そうだ。……何だ。それも知らなかったのか」
「ワケありでな。それで？」
「キアヌはロドリス西岸にある小さな漁村だ。そこから東側の都市アンフェンデスへ向かう途中で、そなたが崖の上から転落してきた」
「……」
「正確には、その付近を通過中、激しい物音がしたので、ソフィアが突っ込んでいったのだな。私はその後に従って、転落してきたそ

なたが木の枝に引っ掛かっていたのを助け出す羽目になった」
「その、先ほどから出ている『ソフィア』と言うのは同行者か？」
シェインの問いに、エディが短く頷く。
「後で会うことになるだろう。私としてはそなたを置いて行っても構わなかったのだが、ソフィアが人の道に悖る（もとる）と言って聞かぬので……上の屋敷の連中がそなたを追って来た場合、非常に厄介なことになりそうだったしな。私もソフィアも面倒ごとには余り巻き込まれたくないゆえ、仕方なくそなたを抱えて急いでその場を立ち去ったのだ」
「……」
もう少し言い方はないものだろうか。
汗の滲む顔で苦笑いを浮かべたシェインは、エディを見上げて礼を述べた。
「仕方なくでも助かったことに違いはない。……心から礼を言う」
「礼ならソフィアに言ってくれ」
「しかし実際、俺を負って来たのはおぬしだろう」
「そうだな」
「その分の礼と受け取ってもらえれば良い。何……金品をやれるわけではないからな。言葉くらい気楽に受け取っても良かろう」
「……」
シェインのひねくれた物言いに、しばし考え深げな顔をしたエディは、やがてひとつ頷いた。
「そうだな」
どことなく風変わりな人物であるらしい。興味をそそられたシェインは、エディ本人について質問を口にしてみることにした。
「おぬしは、何者だ？」
「……」
シェインの問いに、またもエディが困惑したような沈黙をする。
先ほどと似た空気に、シェインはそっと内心首を傾げた。名前を尋ねた時にも、エディは戸惑っていたようだ。自分の素性について触

れられたくない理由でもあるのだろうか。
　思いながらエディの回答を待つシェインに、エディがようやく沈黙を解く。
「それについての解答は非常に難しい」
「では、『ソフィア』は？」
「そちらについても、難問と言える」
「……」
　何とも奇妙な回答に、シェインが返答に困っていると、エディは不意に背後を振り返った。老爺が目覚めたらしい。
「先生」
「おお……エディ」
「怪我人の意識が戻ったようだが」
　エディの言葉に、椅子から立ち上がる気配がした。軽く足を引き摺るような音が聞こえ、先ほど椅子の上で居眠りをしていた老人がシェインを覗き込むように視界に姿を現した。
「ソフィアを呼んで来よう」
　代わりにエディがそう言い残してシェインのそばを離れる。老人は皺の中に埋もれかけた細い目を見開いて、シェインの顔に手を当てた。
「顔色は、少しは良くなったようじゃな」
「……手当てをして頂いたご様子。感謝する」
「わしに出来る治療はたかが知れている。胸や腕、足の表出した怪我に治療は施し、吐血と呼気から肺の出血が窺えたので薬湯を飲ませたが、それがせいぜいじゃ。後は休んで体力をつけながら、巡礼の聖職者が来るのを待つ他ないの」
「聖職者……」
　医者に出来ることは、限られている。病は魔術師でもどうにもならないから医者に診せるしかないが、怪我ならば魔法を頼った方が明らかに確実だ。ゆえに、村や町には医者がひとりはいることが少なくはないが、怪我の治療などでは医者による応急処置の後、巡礼

の聖職者を頼ったり、神殿を訪れたりする。神殿では午前中に説教が行われ、午後には魔力の施しを受けたい人間が列を成すわけだ。

「この辺りで、最も近い神殿は、どこだ……」

のんびりといつ来るかわかりもしない巡礼者など待っている場合ではない。ヴァルスに帰らなければ。少なくとも、自分の生存とロンバルトの状況を伝えなければ。

その為には、自分から赴いて聖職者に回復してもらう必要がある。インファーと言う村の名前に聞き覚えこそあれ、正確にその位置を把握しているわけではないシェインは、ロドリスの地図を頭に思い浮かべた。老人が回答を与える。

「ここから一番近いのは、タフタルじゃろうな」

「タフタル……」

そこだ。

シェインは目を見開いた。

王都フォグリアから程近い町タフタル――シサーの友人であるクラリスが住んでいる。彼女は神殿を任された聖職者だ。彼女なら、自分が何者であるかを飲み込んでくれた上で治癒を施してくれると信じられる。

「ここからはどのくらいだ」

「通常なら1日もあればタフタルに到着出来ようのう」

「1日……」

では現在シェインがいるこの村も、フォグリアに非常に近いと言うことになる。長居するのは危険だ。痛む体に焦燥が駆け上がった。

一刻も早く移動をするに限る。レドリックがこのままシェインを放っておくとは考えにくい。魔法が使えぬ今、体もろくに動かないようではさすがにひとたまりもない。思わず体を起こしかけて、激痛にベッドへ沈むように舞い戻るシェインに、老人が慌てて手を伸ばした。

「無茶を……」

「入るよ」

そこへ、鈴を転がすような愛くるしい声が投げられた。同時に扉が開き、呻きながら微かに目を開けたシェインの目に少女の姿が飛び込んできた。年の頃と、山吹色の緩くウェーブがかかった長い髪が、どこかシェインの最愛の少女を彷彿とさせた。その背後からエディが無言で入ってくる。

「ああ、本当だ。目覚めたのだな。先生、具合はどう？」

「……俺の、ロッドは」

呻きながらも尚、身を起こそうとするシェインに、少女が慌てて駆け寄った。老人は呆れたようにシェインを見下ろしている。

「痛むのじゃから無茶な動きはしなさんな」

「すぐにでも、移動をしたい」

「何馬鹿なこと言ってんのさ」

シェインを手荒にベッドに沈め直すと、少女が腕を組んでこちらも呆れたように言った。

「あなたは丸2日も意識がなかったのだぞ。それを今すぐに移動だなどと血迷っているとしか思えない」

「2日……」

時間だけが無為に過ぎてゆく。苛立って顔を歪めるシェインに、少女がため息をついて腕組みしたまま見下ろす。

「事情を聞かせてもらえるか？」

「……助けてもらって申し訳ないが、事情を話すことは出来かねる……」

「ではどこへ向かいたいのかを聞かせてもらおう？」

第3部第1章第11話　動静（3）

「体を回復したい」
「……」
「タフタルの聖職者に、知り合いがいる。ここからタフタルは、さして遠くないと今聞いた。……回復をして、行かねばならぬところがある」
「もう少し状態が落ち着いてからにしても良いのではないか？」
「これ以上時間を費やしていられない」
言い張るシェインに困ったように、少女が背後のエディを振り返る。無言で眺めていたエディが、少女を示してシェインに言った。
「彼女がソフィアだ」
「……わかった」
今の話の流れは、彼女の紹介などと言う空気ではなかったような気がするのだが。
話の腰を折られたような気分でふうっと息をつくと、シェインはベッドに横たわったままで覗き込む少女を見上げた。
「おぬしが俺を助けてくれたと、先ほどエディに聞いた。礼を言う。心から、感謝をしている」
ソフィアが目を瞬く。それから照れ臭そうに頭に手を当てると、考えるように視線を彷徨わせた。再びシェインに視線を定めて口を開く。
「ともかくも一度落ち着いて話をしてみないか？今すぐ、と言っても、実際問題あなたの体はすぐにここから移動出来る状態にないのだから」
「……」
「わたしは、ソフィア。あなたの名前はシェインで良いのだな？」
「ああ」
「話せるところだけで良いから、事情を聞かせてはもらえない？」

「……」

男っぽい口調のわりには優しく問われて、シェインは逡巡した。助けてもらって無下に突き放すことは出来ないが、さて、何をどう説明出来るのだろう。

彼らの素性がわからない以上、シェインがヴァルスの高位官であることは知られるわけにはいかない。

ヴァルスの周囲は、敵だらけなのだ。ロドリス、リトリア、バートやナタリアはもちろんのこと、ロンバルトさえも信用ならない。既に敗北しているモナならば余地はあるが、それも微妙なラインである。エディにしろソフィアにしろ、ヴァルス人でないことが言葉で知れる為、おいそれと自分の事情を口にするわけにはいかなかった。しかもここは、ロドリス国内だ。

「……ちょっとした誘拐事件さ」

ともかくも、少々歪曲した説明を試みてみることにする。

「誘拐事件!?」

「ああ。まあ、誘拐されたのが俺なのだが」

「……」

「それで脱出を試みたわけだが、我ながら少々手荒な脱出の仕方をしてしまったゆえ、崖から転落する羽目になった。おぬしらが見た屋敷と言うのが誘拐犯の屋敷だな」

言ってみれば随分と雰囲気が違うような気もするが、言っている内容に概ね間違いはあるまい。

飄々と言うシェインに、あっけにとられたソフィアが目を丸くしてシェインを見つめる。

「が、俺の身内からすれば、俺は突然誘拐されてしまってそれっきりとなっている。半死半生とは言え生きて脱出したとは知らぬゆえ、恐らくはいたく心配しているだろう。ゆえに早く俺の無事を伝えたい。端的に言えば、それだけのことだ」

「ふうん……？」

シェインの言葉を考えるように眉根を寄せた少女は、そのままの

表情でちらりとシェインを見た。
「シェインは、その……冒険者か何か？」
「なぜだ？」
「ロッドを持っているでしょう。魔術師ではないの？」
「……ああ。まあ、一応はその端くれだな」
「今は、自分に治癒の魔法が施せない？……その、わたしは魔法には疎いゆえ、余り良くわからないのだが」
「施せるのなら、目覚めた瞬間に施している」
返す返すも忌々しい。ラミアに対する怒りにすっと目を細めたシェインに、ソフィアが微かに息を飲んだ。
「どうして？魔力を使い果たしてしまったとか？」
「悪い魔法使いに魔法を封じられてしまったのさ」
「魔法を封じるなんてことが出来るのか？」
瞳を閉じておどけたシェインの物言いに、ソフィアが生真面目に答える。再び目を開けてソフィアを見上げながら、シェインは答えた。
「出来る。リミッターと言う呪具にのみ、それが可能だ」
「それを外すことは？」
「リミッターをつけた魔術師本人か、それ以上の魔力の持ち主にのみ可能だな。ちなみにつけられた本人はそいつと比べて優れてようが劣ってようが、関係なく外すことは出来ぬ」
そう……その問題もあった。
何とかリミッターを外さなければ、戦陣復帰など出来たものではない。
ラミアはロンバルトの宮廷魔術師だ。いささか軽薄とは言え、魔力そのものは侮れたものではないだろう。シェイン本人に外すことが叶わぬ以上、シェイン以外で誰かラミアを越える魔力の持ち主を見つけなければならない。ガウナならば魔力そのもので言えば可能性はなきにしもあらずだが、魔力の種類が違うゆえに恐らくリミッターの解除は叶うまい。

だが、最優先事項は、ともかくも健康体を取り戻すことだ。五体満足に動ければ、リミッターを外されるまでは剣を片手に持ち堪えることも出来よう。今のままではそれさえもままならない。今はクラリスに会うことが、最も優先されるべきことだ。

「……タフタルと言うのは、どこにある？」

考え深げな沈黙を守っていたソフィアが、ふいと口を開いた。ちらりと目線を向けて、答える。

「ここから1日程度の距離、と聞いた」

シェインの回答に老人が頷いた。

「ここから北東の方角へ向かって、通常ならば1日程度……お前さんのその状態なら3日はかかるじゃろうけどの」

「北東……」

ソフィアがエディを振り返る。エディは諦めているようにふっと息をついて頷いた。それを見届けて、ソフィアは再びシェインに向かった。

「わかった。北東ならば、いずれにしてもわたしたちの進路と同じ方向だ」

ソフィアの言葉に、シェインが目を見開く。それに頷いて、ソフィアは続けた。

「わたしとエディが、同行しよう」

◆◇◆

このところ、何もかもが慌しいような気がする。

ロンバルトを陥落せしめて、今はその内部の平定に忙しい。もちろんいつまでもロンバルトごときに関わっているわけにはいかぬから、ヴァルス攻略への段取りも取り計らわなければならない。

「ヴォルガからリミニ要塞をまず撃破しましょう」

国王カルランスを交えての軍法会議が日に数度も行われ、セラフィの頭の中は各国の地図と軍隊と予算でいっぱいである。

「ニールブラウンに逗留中の軍はどうする」
「ウォルムスを経由させて……そこから国境越えが妥当でしょうな」
「城塞都市レハールの攻略には時間を食いそうだ」
「放置は出来まい。ロンバルトから撤退中のラルド要塞軍の動きはどうなっているのだ？」
「まだ国境を越えたとの報告は上がってきておりません。要塞軍が帰城する前に何とかレハールを叩ければ良いが……」
「いずれにしても、各要塞へ増援せねばならぬでしょう」
「デルフトから西回りで、ラルド要塞を押さえさせるのも手でしょうな」
「エルファーラを経由して、城塞都市アンソールの攻略と言うのは」
「中立地帯エルファーラでの3日以上の滞在は占領と見なされる。アンソールまで3日では抜けられまい。レハールを攻略してから進撃するのが筋だろう」
ヴァルスは立地上、王都レオノーラを非常に攻めにくい。王都に辿り着くまでに幾つもの難関を突破せねばならず、ともかくも幾筋もの行路を利用して各所から攻め上るしかない。
「……リトリアの動きは、どうなっていますか」
大臣たちが唾を飛ばしながら口々に今後の戦略を展開する中、黙って地図に視線を落としていたセラフィの言葉に答えたのは、外務大臣レージェンドルフだった。
「リトリアは現在二軍が行軍中ですね。ドラテルロ将軍率いる一個大隊がサーディアール要塞目指して南下を続けています」
「もう一軍は」
「それが……」
セラフィの視線に、レージェンドルフは微かに顔を曇らせた。
「ストラトス将軍率いる一個大隊……と聞いています。行路は王都セルジュークから、西へ。西を回り、ロドリスを通過してそちらからヴァルスを目指すと伺ってはいますが……」
「が？」

「……未だ、南下の様子は見せないと」
「……」
どうやらリトリアは、何やら勝手な動きをしているようだ。とりあえず一個大隊だけこちらの援軍として差し向けて、自分はモナを攻め落とそうなど虫の良い話ではないか。
「モナだね」
「……どうしますか」
「このまま勝手な単独行動をされても困るからな……放っておくわけにはいかないでしょう」
少し思案をすると、セラフィはレージェンドルフに向かって顔を上げた。
「ともかくもクラスフェルド王の意志を確認しましょうか。……全く手間のかかる」
「意志を確認とおっしゃいますと？」
「私の方で一度、預からせて下さい。状況が読め次第、会議の場でご報告致します」
リトリアについては、バートやナタリアのように力関係がこちらに分があると言うわけではないがゆえに、頭が痛い。思い通りに操作しようとするのはなかなか至難の業だ。クラスフェルドも食わせ者のようだし、リトリアがモナ攻略に重きを置いているようであれば、ややもすれば国王自らが西へ進軍している軍隊に紛れ込んでいないとも言えない。
面倒臭い男だ。
頭痛を堪えるような顰め面になるのを抑えきれずに苦いため息をついていると、その横合いから別の頭痛の種がのほほんとした声を割り込ませた。
「しかしロンバルトを陥落せしめし今、ヴァルスとは言え敗北は見えたようなものではないか」
我らが国王クレメンスである。
思わず顔を上げて、その呑気な顔を目の当たりにすると、セラフ

ィは今度はその頭を張り倒したくなる衝動を堪えねばならなかった。相手はアルトガーデン一の最強国だと何度言えばわかるのか、このぼんくらは。

最初からロンバルトの戦力など、大して勘定に入っていない。ロンバルトがいなくなったことでヴァルスの士気は大いに落ちようが、それでもまだまだ警戒するに十分な戦力を抱えているのだ。それに、ヴァルスの王城はローレシア全土に数少ない召喚師を宰相に抱えている。召喚獣を戦力に持ち込まれてしまうと、計算など成り立たなくなる。現在、宰相は王都から動いていないと聞いているが、いずれにしてもどこかで交えねばならなくなるだろう。その際にはその麾下にある、正体も数も戦力も全くわからない召喚獣さえ敵戦力に踏まえて当たらなければならないことがわかっているのだろうか。

しかし、そうは言ってもカルランスはロドリス国内で比類なき高貴の身、頭上に戴く最高権力者である。まさか「この脳天気」と張り倒すわけにはいくまい。

それに、カルランスが機嫌が良いのは、良いことなのだ。性根が臆病に出来ているカルランスは、不安に駆られれば尻込みしかねない。ここまで各国を動員しておいて、今更臆病風に吹かれては困るのである。カルランスが「やっぱりやめた」と言い出せば、こちらの思惑や計画がどうであれ、ロドリスは意味不明に退陣を余儀なくされかねない。

そう自らを納得させて、セラフィは優しい笑顔をカルランスに向けた。

「さようでございますとも。ロンバルトなき今、孤立したヴァルスなど敵ではございません。レドリック殿下もご助力を惜しみなく下さっておりますゆえ、もう間もなく陛下の頭上に帝冠を掲げてご覧に入れましょう。陛下も惑わされることなきよう、ごゆるりとお待ち下さいませ」

セラフィの言葉と笑顔に満足げにうんうんと頷くカルランスに白けていると、不意に会議の席から「そう言えば……」と言う呟きが

上がった。国営大臣ケラーだ。
集中した視線に一瞬口を閉ざしたケラーは、何かを思い出す目付きをしながら再び口を開いた。
「確認した情報ではないことをご了承戴きたいのですが」
「ええ。何か、変わったことがありましたか」
「ロンバルトのレドリック殿下ですが……」
ぴくり、とセラフィの背筋が緊張する。頼りにならないだけに、不安の種を幾つも撒いていそうで心許ない。何か余計なことをしでかしているのではないかとの心配が胸に過ぎるセラフィの顔色には気づかずに、ケラーは続けた。
「何か、独自で兵を動かしている様子だと小耳に挟みまして」
「独自に兵を……？」
思わずユンカーと顔を見合わせる。人の良い顔でしきりと目を瞬く様子を見れば、ユンカーも何も受け取っていないことがわかる。
眉を顰めて、ケラーへと視線を戻した。
「何の為に……？」
「いえ、そこまでは。ただ、軍と言うような規模ではなく、私兵規模の人数であるらしいとのことで……今ひとつ、その行動の意図が読めませんが」
「そう……」
確認の必要がありそうだ。
ともかくもリトリアの件とレドリックの件をセラフィで預かることとし、フォグリアから各ロンバルト国内の要塞へ援軍を派兵することを決定して会議を終了すると、セラフィはその足でユンカーと共に宰相の執務室へと足を向けた。
「お帰りなさいませ」
室内に足を踏み入れると、秘書官アークフィールが相変わらずの柔らかい笑顔で出迎える。
「アークフィール。レドリック殿下から、何かご報告は上がってきているか」

宰相が口早に尋ねた。ちょうど書簡の整理をしていたらしいアークフィールは、手にした書簡に視線を落として否定的に顔を振った。
「いえ……本日付ではお預かりしていないようでございますが。いかがされました？」
「いや、良い。……ヴァルスの宮廷魔術師に何かあったのでしょうか、セラフィ」
「さて……」
ユンカーの言葉に、アークフィールの視線がセラフィへと動く。微かに肩を竦めて、セラフィは視線を窓の外へと向けた。
「さっさと消すようには言ったはずですがね。あれから何ら報告が上がってこないと言うことは、さしずめ逃げられたかな？」
「……」
「……案じなさらずとも大丈夫です、ユンカー殿。我々の情報は、クライスラー卿には伝わっていないはずですからね。困る可能性があるのはレドリック殿下です」
「ですが、レドリック殿下がヴァルスに暗殺でもされると、少々面倒臭いですよね」
アークフィールがふと口を挟む。ため息でそれに答えたセラフィは、やがて顔を上げて頷いた。
「全く、使えない人間を立てなきゃならないとなると手間がかかって仕方がないな。こちらで手を打つとしようか」
「どうなさるおつもりですか」
「グレンとエレナを任に当てる。……一旦、呼び戻すことにしよう」
グレンをつけておけば、ヴァルスもレドリックも、下手な真似は出来るまい。

第3部第1章第12話　海に消えた記憶（1）

「リヴァールへの船は、明日の早朝だな」
「ああ、本当ですか。それは助かります。早朝と言いますと……早朝ですかねぇ」
「早朝つったら日の出と一緒にだ」
「日の出と一緒……楽しそうですねぇ……」
ちゃぷちゃぷと波止場で体を揺らすボートの整備をしながら言う男の背中に、グレンはぐしゃぐしゃと髪をかき上げた。既に時間は間もなく夜半だ。大した休養は取れそうにない。
彼らがいるのはラグフォレスト大陸シュートよりやや北上した位置にあるロクソンと言う集落である。シュートよりも遥かに規模の小さなその集落は、ギャヴァンやフォルムスなどの大きな港街には降ろすことの出来ない荷などを、時折対岸にあたるヴァルス海岸沿いの小さな集落リヴァールへ運び込む。
シュートからは現在、船が出ない。ローレシアに渡るには、正統な筋を通っていたのではいつまでかかるかわからない。ゆえにグレンとエレナはシュートを離れ、その筋の人間を頼ることに決めた。
「……グレン」
無言でボートの整備を続ける男を見るともなしに眺めていると、エレナの気配が近付いてきた。振り返ると同時に、声が投げかけられる。
「泊まれそうな場所はあったよ。そっちはどう」
「明日の朝には出発出来そうです」
「そう。……良かった」
振り返るその姿には、シサーとの戦闘で負った傷は既にない。
ラグフォレストの神殿で『レガード』たちの前から姿を消したグレンは、エレナを抱えてシュートを離れた。そのまま近隣の漁村ロウシェンでエレナの骨休みを図った後、一度シュートへ戻り神殿で

エレナの回復を行ってから、改めてシュートを離れて北上した。
エレナを、『レガード』たちの追跡――正確にはシサーとの再戦から意識を引き離すのは、手を焼いた。あれほど一方的に完膚なきまでに叩きのめされたエレナは、屈辱の余りシサーとの再戦にひどく執着したのだ。
ともかくもエレナを説得し、彼らも既にシュートを発ってしまったことだろうから、ひとまずはローレシアに戻る為にロクソンへと足を向けたのである。
『レガード』たちが現在どこにいてどこへ向かっているのか、足取りは最早定かではない。しかし、ヴァルスの主要都市のいくつかで人間を買収してある。彼らは必ずヴァルスへ戻るだろうし、いずれかの街で彼らの足取りを掴むことは出来るだろう。
「リヴァールに渡ったら、ともかくもキサド山脈より向こうへ戻らなけりゃならないね……」
グレンの隣に立って、遠く遥か彼方を真っ直ぐ睨みながらエレナが言う。グレンは微かに目を細めた。
「アンソール辺りを目指せば……」
「エレナさん」
「え？」
「リヴァールに戻ったら、行動を別にしましょう」
「……」
エレナが無言でグレンを見上げる。その視線を感じながら、グレンは冷淡とも言える口ぶりで続けた。
「あなたは、ロドリスに一度帰った方が良い」
「何……」
「足手纏いなんですよ」
淡々と告げたグレンの冷酷な言葉に、エレナは微かに息を飲んだ。そして次の瞬間、怒気を孕ませた眼差しでグレンを睨み上げる。
「セラフィさんには、私から……エレナさん」
エレナはしばし無言でグレナを睨み上げていたが、やがて黙った

まま踵を返した。その背中に思わず呼びかける。
「だったらもう、ここで別れよう」
「けれど」
「放っておいて！！」
「……」
きつく怒鳴るエレナの声に、グレンは嘆息して足を止めた。
『レガード』自身は、大した能力があるわけではない。大して何を出来るでもない、ごく普通の少年であるとグレンは見ている。
けれど、それを取り巻く周囲の人間は、少々厄介だった。特にあの――紫の髪の少女。彼女の存在が、グレンにとっては最も厄介だ。彼女の素性が何者なのかは知らないが、魔性と紙一重であるがゆえにグレンは聖職者の存在には敏感である。人でもあるから神殿に近付けないようなことはないけれど、居心地はひどく悪いし、何より聖職者の使う魔法……神聖魔法は効果的である。
恐らく彼女は、生半可なプリーストなどではない。グレンが彼女から受ける威圧感の凄まじさが、それを語っている。
エレナが、彼らを相手に自分で自分の身を守ることが出来ないのであれば、グレンにとっては足手纏いにしかならない。紫の髪の少女とシサーの2人を相手取ってエレナを庇ってやるのはひどく手間だ。
そして、エレナは彼らの前で自分の身を守ることが出来ないことがわかった。エレナの腕は、シサーに劣る。このまま彼らに再戦を挑んだところで、『レガード』を仕留めるのは厳しいかもしれない。むしろグレンひとりならば、自分の動きにのみ集中することが出来る。
「エレナさん」
そう判断してのグレンの言葉は、エレナのプライドをひどく傷つけるものだったらしい。頑なな背中に吐息混じりに呼びかけると、エレナが足を止めて振り返った。
「勘違いしないでよ」

「……」
「あたしは、私情であんたに付き合ってやっているわけじゃない。セラフィ様の命令で『レガード』を追っているんだ。あんたの言葉であたしはあたしの仕事をやめるわけにはいかない」
「ですから……」
と、不意にグレンの言葉が途切れる。目を上げると、一羽の鳥がグレン目掛けて舞い降りてくるところだった。セラフィのゴーレムだ。『銀狼の牙』ヘルとの連絡に使っていたのと同じものである。
舞い降りてくる鳥を模したゴーレムから手紙を受け取ると、グレンは無言で書面に視線を落とした。エレナの背中が離れていく。
「……エレナさん」
「放っておいてってば」
「セラフィさんからの、伝達です」
「……」
エレナが足を止めた。険のある眼差しで、グレンを振り返る。その顔を、グレンは静かに見返した。
「私もあなたも、任務の途中放棄を余儀なくされるようですよ」
「え……？」
「安心して下さい。私とはやはり別行動になりますから。……エレナさんは、リヴァールからロンバルトへ向かって下さい」
険を取り除いて、エレナは目を見開いた。その目を見返したままで、グレンが続けた。
「ロンバルトの王子様の護衛と監視だそうです」
「……あんたは」
「私は……」
書面を丁寧に折り畳みながら嘆息したグレンは、再び顔を上げて、口を開いた。
「私は、リトリアへ向かいます」

◆◇◆

医師である老人からシェインがタフタルまで移動することを許可されたのは、結局目覚めてから3日経過してからだった。

この程度の小さな村では、冒険者が使うような治癒薬も効果の低い安いものしか手に入らない。それでも服用しないよりはと多少の効果を見込んで、治癒薬や薬湯、そしてひたすらの休養で何とか自力で歩くことが出来るようになってから、ようやくインファーから出て行くことを許されたのである。

その間、共にインファーに足止めをされることになったソフィアとエディは、体よく老人にこき使われていたようだ。シェインに付き合うことにした為に申し訳ないとは思うが、ソフィアなどは割合楽しそうに手伝っていたようだから良いのだろうか。

「最近は魔物が多い」

自力で歩けるようになったとは言え、決して健康状態とは言いがたいシェインは、現在戦力とはなりえない。常に高見にいることの多かったシェインからすれば、ひどく屈辱的ではあるが、致し方ない。

「戦の余波だろう」

ホブゴブリンを片づけた剣を拭いながらぼやいたソフィアの言葉にシェインが答えると、剣を構えるだけ構えて何もせずに終えたエディが顔を上げた。

「そうだろうな」

「へえ？戦の余波？」

見ている限り、どうやら最も腕が立つのはソフィア、と言うことになりそうである。

エディも使えないわけではないが、どちらかと言えば頭脳労働派と見受けられた。シェインは元来魔術師であるゆえに、やはり武闘派とは言いがたい。情けなくはあるが、剣の腕はソフィアが最も優れているだろう。

「魔物は戦場を忌避するゆえな……。正確に言えば、軍隊を忌避す

る。その分、別の地に魔物が流れる」
「ああ。そうなのか」
剣を鞘に収めながら、ソフィアが髪を払った。若い女性の旅は余計な厄介ごとを引きつけるので、ソフィアは普段長い髪を布でくるみ、まるで少年のように装っている。言葉遣いも女性らしいとは言いがたいので、それほどの違和感はない。
魔物との戦闘で乱れた髪を元通り布でくるみ直しながら先を歩くソフィアが、シェインを振り返った。
「そろそろ日も落ちてきたな。もう少し進んだら野営をしよう。それまで歩けるか」
「ああ……」
ソフィアの心遣いがありがたい反面、情けない。だが物理的にシェインの体は傷だらけで、長距離の移動に持ち堪えることが出来ない。休み休みでないと、傷ついている肺から漏れる空気が胸を圧迫し、喉から笛のような音が聞こえる。
つくづくとリミッターが邪魔である。いっそ手首ごと切り落としてやりたいくらいだ。
「思いの外、タフタルまでは早く到着出来そうじゃないか」
「そうだな……この分なら明日の夕刻には辿り着けるだろう」
ソフィアとエディが言葉を交わしながら地図を覗き込むのを眺めて、シェインは肩で息をついた。
……奇妙な2人だ。
インファーを発ってからタフタルへ向かう道中、2人のことについて得られた情報は、些末だった。
まずはソフィア。
年齢は17歳、出身はリトリアと聞いている。
知ってはならぬことを知ってしまった為に、『悪い奴ら』に追われてリトリアを出国したのだと言った。現在はロドリス北東の街アンフェンデスを目指しているらしいが、そこへ向かう目的は何なのか、『悪い奴ら』とは誰なのか、そしてそもそも何を知ってしまっ

たのかについては一切口を割らなかった。ソフィア自身の身元についても、リトリア出身であると言うこと以外は口にしない。

次いで、一層奇妙なのはエディだ。

リトリアから追われたソフィアを追っ手から庇ってくれたのが、エディだったと言う。

だが、エディ自身については、何もわからなかった。ソフィアもそれは、知らないようだ。何せ――エディ自身に、自己の記憶がない。

目覚めた時には既に記憶がなく、仕方ないのでアテもなく移動をしている最中にソフィアに遭遇しただけで、どこへ向かうつもりも何をするつもりも取り立ててあったわけではない、とエディは言った。

失っている記憶は、己に関してのみ……地理や言語、日常生活に必要と思われることについては欠如していないようだと判断している、とはエディの弁である。それによれば、エディは自身のことを恐らくどこかの貴族階級なのだろうと考えているようだ。理由としては、移動する間に触れた民間人の生活の空気感に時折何か違和感を感じることや、文字の読み書きが出来ること、己の持つ知識の幅広さが挙げられる。使用人を使い、教育を受けられる環境で生まれ育ったのだろう。

だが、ともかくも自身についての情報を持たないエディに、「名前がないと不便だ」との理由でソフィアがエドアードと仮名を与えたらしい。以降、することも特にないエディは、やや短慮な嫌いのあるソフィアに何となくくっついて歩いていると言うことのようである。

だが。

「シェイン？どうした？」

「……いや」

「痛むか？」

「平気だ。もう少し進むと川にぶつかるな。そこまで、行こう」

横から地図を覗き込み、痛みに悲鳴を上げる体を堪えながら笑顔を向けた。

……2人の素性が、気にかかる。

魔術師の勘は、鋭い。その勘が、何かを警告している。

エディがどこかの貴族階級――それにはシェインも同感である。生まれ育ちから匂い立つ品位、と言うものが人にはある。エディは確実に上流階級の人間だ。それは仕草や態度、言葉遣いにも、そして交わす言葉の内容からも感じられる。シェインが見る限り、エディは政や戦についても深い知識を持ち合わせているようだ。それは、一般の民間人には持ち得る知識ではない。知識のみならず、己の考えも持っている。

そして、似たものをソフィアにも感じていた。……いや、知識と言う点では、ソフィアはエディに遠く及ばない。だが、品位と言う点で言えば、エディに勝るとも劣らない。

ソフィアはエディと違い、自身の情報を知らないわけではない。飽くまでも、シェインに……そしてエディに、伏せている。

けれど彼女から感じる品位も、彼女の素性を上流階級の人間であると告げていた。つまりは、リトリア貴族だ。

リトリア貴族であるソフィアが、なぜロドリスをたったひとりで見知らぬ男だけを伴って旅をしている理由があるのだろう。そして彼女が知った『知ってはならぬこと』と言うのは何なのか。

リトリアは、アルトガーデン継承戦争において、キー国とも言える国である。リトリアの動向は、ヴァルスの将来にも深い影響を与える。気にならないわけがない。

「お、川だ。ここらでいいかな」

先頭を切っていたソフィアが、前方に見える川に小走りになった。はしゃぐようなその無邪気な姿を見れば、性根の曲がった人間には見えない。そもそも見ず知らずのシェインを救ってくれたことを考えても、正義感の強い人物なのだろうと言う気はする。

だが、正義の定義とは、難しいものだ。

人によって、その基準は異なる。
特に戦時中である現在、自身がどこに属するかによってその『正義』は種類が変わるだろうし、ヴァルス高位官であるシェインと、敵軍にあたるリトリア貴族のソフィアでは大きく視点が異なることは間違いない。
彼女の正義が、シェインの正義とイコールとは限らない。
いずれにしても、シェインの素性をソフィアに知られるわけにはいかなかった。ゆえに、シェイン自身も己の素性を偽っている。命の恩人と感謝すれば心苦しくはあるが、ヴァルスの高位官として己の私情に振り回されるわけにはいかない。ソフィアとエディの素性もしくはどのような人物なのかが確定してからでなければ、余計な情報を知られるわけにはいかない。

第3部第1章第12話　海に消えた記憶（2）

野営、とは言っても、シンプルな荷物しか持っていないソフィアとエディは、野営も至ってシンプルなものである。

火を起こし、食事を摂り、寝袋に包まる――それが全てだ。キャンプなどと言う上等なものではない。

簡素な食事を摂り、エディを見張りに立てて早々に寝袋に包まる。魔物が横行すればこそ、日が沈めば早いうちに休養してしまうに限るのだ。余計な動作は魔物を惹き付ける。戦闘能力が通常の3分の1にさえ満たない今、身を潜めて夜明けを待つのが最良である。

日中の移動がシェインの体に大きな負担をかけ、高熱を発したシェインは半ば意識不明に陥るように混沌と眠りに落ちた。なるべく2人に面倒をかけないよう振舞っていることが、負担を過剰にしているのだろう。うなされるように深い眠りに落ちていたシェインの意識が再び戻ったのは、明け方近くなってのことだった。

冷え切った空気に、少しずつ意識を浮上させたシェインが薄目を開けると、焚き火の側で膝を抱えているのはエディではなくソフィアだった。いつの間にか見張りを交替したらしい。焚き火を挟んで反対側で寝袋に包まるエディの背中が見える。

まだ熱の残るだるい体と朦朧とした意識のままソフィアを眺めていると、ソフィアはため息をついて立ち上がった。川の方へ足を向けて間もなく戻ってくると、シェインを覗き込んで目を丸くした。

「何だ。目が覚めてたの」

「……たった今な」

どうやら、高熱のシェインを気遣ってくれていたようだ。気づいてみれば額には水に浸したタオルが乗せられている。ソフィアは額のタオルを取り上げると、入れ違いに手に持ったタオルを乗せた。ひんやりとした新しいタオルが心地よく、息をついて瞳を閉じながらシェインはため息混じりに口を開いた。

「つくづく、手間をかけるな」
「病人怪我人はそういうことを気にしなくて良いって大昔から決まっているんだ」
「自分が寝たきり老人になった気分だ。……いや。宿老ならば智に世故に長けてそれも許されようが、俺如きではどうにもならぬな」
半ば愚痴のようなシェインのぼやきに、ソフィアは笑いを噛み殺すようにして隣に膝を抱えた。
「明日にはタフタルに到着する。そうすれば、元気も出るだろう？」
「……そうだな」
口を閉ざすと、虫の静かな音が聞こえた。さわさわと風が木の葉を揺らす。濃紺の空に東側からゆっくりと光が射し始めるのを感じながら、シェインは膝を抱えて隣に座る少女を見上げた。
「おぬしもお人好しだな」
「わたしか？」
「ああ。見も知らぬ他人にここまで手間をかけるとは物好きだ」
シェインの言葉に、ソフィアは小さく笑った。
「そうか。……そうかもな。けれど、あなたの目指す方向がわたしと全く見当違いであれば、さすがにここまで手を貸してはやれなかったかもしれない」
「ああ……アンフェンデスか。何をしに行く？……言いたくなかったら、別に構わぬが」
「……」
見上げるシェインを、ソフィアは無言で見下ろした。それから視線を逸らす。
「……人に、会いに行こうと思っているんだ」
「人に？」
「ああ。アンフェンデスにいるわけではないけれど」
「……ほう」
人に会いに、か……。
知ってはならぬことを知って、その情報を携えて人に会いに行く

リトリア貴族――全く、気にかかる。
けれど、素性が気にかかるのはお互い様のようだ。ソフィアは抱えた自分の膝に頬を寄せて、シェインを見下ろした。
「エルファーラの貴族であるシェインにとっては、こんな野営で申し訳ないな」
ヴァルス、と言う言葉を伏せる為に、シェインは己の身元をエルファーラと偽った。最も敵視され難く、シェインにとって最も偽りやすい国だからだ。エルファーラで使用される言葉はヴァルス語であるし、シェインの出身地であるアンソールはエルファーラに程近い。
「……いや」
とは言え、偽りであることに相違はない。罪悪感に、心が痛む。
「エディも、どこかの貴族なのだろう」
偽りの素性について語るのは、余り気持ちが良くない。意識して話を逸らしたシェインに、ソフィアは視線をエディに向けて頷いた。
「そうだね。本人がわからないと言うのだから、わからないけれど」
「見当もつかないのか」
「どうかな。わたしは勝手にモナかリトリアだろうと思っている」
「なぜ」
「何となく。だけど、わたしの知る限りでは……」
恐らく心当たりがないのだろう。言葉に詰まるソフィアをちらっと見ると、シェインは何気なく口を開いた。
「……おぬしもリトリア貴族だしな」
「……」
ソフィアの視線がシェインに戻った。それを黙って見返す。しばし無言でシェインを見つめたソフィアは、やがて小さく息を吐いた。
「わかるか」
「わかるな。エディと同じだ。立ち居振る舞いに、品位を感じる。わかるのはそれだけだ。死にかけの怪我人にその程度知られたところで、不都合は恐らく生じまいよ」

シェインの言葉に、見つめていたソフィアが力を抜いたように微笑んだ。それから朝陽の方向へと目を逸らす。
「人を信用するのは、難しいな」
その言葉には深い意味があるようだ。沈黙して言葉の続きを待つシェインに、ソフィアは悲しげに続けた。
「手を貸してくれていると思っていた人物が笑顔の裏で企んでいることを知ってしまえば、この先わたしは何を信用して良いのかわからない」
「……」
「それを思えばわたしの味方は余りに儚く、信じたいのに信じて良いのかがわからなくなる」
「『わたしの味方』か」
「……あなたにも」
ソフィアはどこか悲しげな色を浮かべてシェインを見つめた。
「あなたにも、エディにも話して手を貸してもらえたらと思う。けれど、あなたもエディも、話して良い人物なのか、わたしにはまだ判断がつかない」
「エディはともかく、俺は時期尚早と言う奴だろうな」
あっさり答えるシェインに、ソフィアは目を瞬いた。その栗色の瞳に朝陽が反射し、気がつけば濃紺だった空は少しずつ白いものが混ざり始めている。
「おぬしもわかってはいるだろうが、俺も事情を抱えている。おぬしも何か、簡単に口に出せぬ事情を抱えている。何も知らなければこうしていられるかもしれぬが、事情を知れば互いの立場が変わるやもしれぬ」
「……」
「少なくとも俺は、今のこの状態では立場を違えたくはない」
「そうか？」
「それはそうだろう。何かの間違いがあって寝首でもかかれてみろ。今の俺を片付けるのは簡単なことだ」

シェインの言葉に、ソフィアが吹き出した。
「俺の寝首をかくならば、俺が健康状態を取り戻してからにしてもらいたい。ゆえに、まだおぬしの事情を知ろうとは思わぬし、俺の事情を語りたいとも思わぬな」
「都合の良いことを言っているな」
「当然だろう。誰が己に都合の悪いように事態が進むことを祈るものか」
くすくすと笑うと、ソフィアは小さくなり始めた焚き火に枝を投げ込みながら、尋ねた。
「シェインは、どうして誘拐されたの」
「全くタイムリーな質問だ。うかうかと人を信じるものではないな」
熱で温くなったタオルを自ら裏返して額に当てなおしながら答える。ソフィアが無言で振り返った。
「……裏切られたの」
「裏切られたな」
それも……ロンバルトと言う、ひとつの国家に。
公王フェルナンドは戦死したと聞いた。では、公妃アンジェリカは。
今、2人が亡き者だとすれば、ロンバルトはレドリックの元、連合軍に手渡される。
ヴァルスが状況をどこまで正確に把握しているかだ。ロンバルト陥落の報は無論入っていようが、その支配が誰のものとなっていると認識しているかで、今後の行動に大きく違いが出るだろう。
「……そう。この前の話では、魔法を封じられているのはそのリミッターと言う道具のせいとのことだったね」
「ああ」
「シェインを誘拐したのは、魔術師なのか」
「魔術師だ」
それも……宮廷魔術師。
細めた目で宙を睨むシェインに、ソフィアはしばし無言だった。

ややして言葉を選ぶように口を開く。
「シェインも魔術師なのだろう。その……友人か何かだったのか」
「いや。そういうわけではないがな」
「ふうん？リミッターを解除するアテはあるの？」
ソフィアの素朴な疑問に、シェインは小さく唸った。まさしくそれが問題だ。今浮かぶ心当たりは、父であり先代のヴァルス宮廷魔術師である父くらいしかない。本来ならば今でも現役で就任していておかしくない父ならば、ロンバルトの宮廷魔術師に劣ることはなかろうが。
「……いずれにしても、すぐには無理だな」
「そう？」
「ああ」
つまり、最低でもロンバルト越えは魔法なしで行わなければならない。厳しいことになりそうである。
ため息をついたシェインは、話題をソフィアに転換した。
「ソフィアは、魔法には疎いと言っていたな」
「ああ……そうだな。わたしはあまり魔法を使う人間が身近にいたわけではないので……」
「剣技に優れている」
ソフィアがくすりと笑った。
「父の名に恥じぬように訓練した」
「ほう。父君は剣達か」
「……」
なぜかそこでソフィアは、複雑な顔をした。視線を彷徨わせ、答えに迷うような顔つきをしてから、小さく頷く。
「ああ」
「その細腕、その若さで、それだけの技量があれば父君もお喜びだろう」
父の名に恥じぬよう——そして貴族と前提すれば、ソフィアはリトリアの将軍の娘か。と来ればますます、シェインの素性を知られ

るのは苦しいところだ。
そう考えながら、魔物と戦闘するソフィアの姿を思い返す。
無論、歴戦の剣士には到底及ばないが、女性であることとまだ年若いことを考えれば上等と言えるのではないだろうか。身のこなし方は大したものだし、少なくともシェインよりは技量がありそうではある。
シェインの言葉に、ソフィアは長い沈黙を落とした。その間にも刻々と日が昇り、朝が訪れたと言えるようになった空を見上げ、ようやく口を開いたソフィアの呟きは、どこか悲しげな色を孕んでいた。
「どうかな……」
「……？」
「父は、わたしの腕など……良くは知らぬと思う……」

◆◇◆

タフタルには予想通り、その日の日が沈む前には到着することが出来た。
インファーを出てからは丸2日――通常よりは時間を必要としたが、多少の回復をしてから出たおかげか老人の予想よりは時間をかけずに済んだようだ。
タフタルは、さほど大きな集落ではない。町と言うには少々規模が小さいが、村と言うには大きく且つ洗練された空気感であると言う感じである。
「少し、待っていてくれ」
タフタルの町について、シェインはまず道具屋に足を伸ばした。この辺りの神殿の分布がどのようになっているかわからないが、もしもこの近辺の村なども一手にここの神殿が引き受けているのだとすれば、神殿は怪我人の応対でてんてこまいかもしれない。いくらクラリスを見知っているとは言え、気兼ねなく押しかけられるほど

の間柄ではない。そうでなくても、常識的に気が引ける。しておきたいことが他にあるのだから、時間を見て合理的に行動すべきと考えてのことだ。

道具屋で行ったことは、手持ちの装飾品の換金だった。

戦場からラミアに拉致され、身ひとつで幽閉されていたシェインは、手持ちの金銭がない。ロドリス国内にもクライスラー家私有の屋敷があるとは言え、訪れるのは危険過ぎるし、大体そこへ辿り着くまで無一文と言うわけにはいかない。それ以前の問題として、インファーで医者に世話になった代金やタフタルに辿り着くまでの食事などは全てソフィアの懐に頼っている。このままただで別れるわけにはいかない。

シェインのイヤリングは、かなり高価なものである。片方には『遠見の鏡』と連動した魔法を仕込んでいる為、そう安易に手放すわけにはいかないが、片側はただのイヤリングだ。換金するにやぶさかではないし、当面の路銀としては十分だろう。

シェインに費やした分の代価を支払った後、シェインはその足で今度は武器屋へ向かった。現在シェインの装備は、ロッドだけである。ラミアの屋敷で入手した剣は、残念ながらどこかの過程で落としてしまったらしい。ソフィアやエディも、意識不明ながらシェインがしっかり握って離さなかったロッドには気を使ったけれど、剣には気がつかなかったとのことだから馬から転落する際に森の中に落としたのだろう。

それはそれで良い。別にその剣である必要などどこにもない。しかし、魔法も使えぬのに装備がロッドだけでは余りに心許ない。何にせよ、武器は必要なのである。

バスタード・ソードとショート・ソードをそれぞれ1本ずつ入手し、ようやく神殿へ足を向けた頃には既に日が沈んでいた。今夜はこの町に滞在するらしいソフィアとエディも一緒になって神殿まで足を向ける。

「タフタルの司祭とは、どのような知り合いだ」

インファーからの移動で悪化の一途を辿り始めているシェインを気遣って歩きながら、エディが問うた。
「どのようなと言うほどでもないがな……」
元を質せば、シェイン自身の知人ではない。シェインがクラリスに会ったのは数年前に1度、そして青の魔術師セラフィとの戦闘の際に1度……以上だ。

第3部第1章第12話　海に消えた記憶（3）

「友人と、かつてパーティを組んでいた仲間だ、と言えば良いかな……」

「ほう」

パーティを組んでいた、と言うのはいささか大げさだろうか。シサーやニーナが何かの縁があって同行していて、立ち寄ったレオノーラでシェインと顔を合わせたに過ぎない。

だが、彼女の人となりはわかっているつもりだし、そうでなくとも政治の絡まない小さな町村の聖職者は敬虔だ。信仰に国境はなく、彼らは総じて分け隔てなく慈悲を施す。ゆえに、シェインの素性を知っていても躊躇うことはありえないし、裏でハーディンに密告することもないだろう。

「2人も今日はタフタルで宿泊か」

体を引きずるように通りを神殿へ向かって歩きながら問うと、物珍しげに辺りに視線を投げかけていたソフィアが、弾むように振り返った。

「そう。もうこの時間だし、今から出れば野営を余儀なくされてしまう。宿に泊まって、お風呂もあるようなら入りたいし」

それからソフィアがシェインを見上げた。

「シェインは、どうするの」

これからクラリスに会い、治癒そのものには時間はさして必要ないだろうが、クラリスのあるいは司祭の誰かの手が空くのを待つなり何なりしていれば、それなりの時間は要するかもしれない。いずれにしても、シェインも今夜はタフタルに泊まる以外にないだろう。

「どこかに宿を取るつもりなら、同じところに取れば良い。わざわざ別にする必要もないだろう？」

ソフィアの提案に、シェインは首肯した。

「そうだな。……とすれば、先に宿を決めてしまった方が良いかも

しれないな」

神殿の習慣は、大体どこも似たようなものだろう。六刻にはその日の修練を終え、そのまま祈りと食卓につく。七刻にはその日の訪問者の整理や明日の準備……つまるところは書類仕事である。それも概ね九刻前には終わり、就寝前の祈りを捧げて神殿そのものが寝静まる。クラリスを訪ねるならば、六刻前か、さもなければそれを過ぎて七刻以降……今からの訪問ではちょうど、食卓についている頃になりかねない。

着々と悪化していく体の状態を思えば今すぐにでも神殿に駆け込みたいのはやまやまだが、もうここまで来ていればこの苦痛も先が見えている。一応は気遣いを見せて、シェインは通りに立ち並ぶ宿に目を向けた。

とりあえずのところはシェインの言葉を受け入れて、宿を決める。隣続きの2部屋を借りることに決めて、シェインはエディと同室に足を踏み入れた。

途端、体がずっしりと重く感じられ、硬いベッドに体を投げ出す。

「つらいか？」

喉の奥から風が抜けるような音がする。何より堪えるのは、表出している各所の傷より、肺に受けた傷だった。

答えを口から出すことが出来ずに荒く呼吸を整えているシェインに、エディはちらりと目線を向けると窓際へ足を向けた。

「ここで横になって待っていてはどうだ？知人なのだろう。私が神殿に行って呼んで来てやっても良い」

「……いや……」

ベッドの上で仰向けになって片手で視界を覆いながら、シェインは荒い呼吸を繰り返した。

「少し休めば、自分で行く」

「そうか。なら良いが。無理はしない方が良い」

「ああ。気遣いに感謝する。……ソフィアと、食事でもして来たらどうだ？」

「怪我人を放って？」
シェインの転がるベッドの間近にエディの気配を感じて、シェインは微かに視界を覆った片手をずらしながらちらりと見上げた。
「気にするな。ここまで手を貸してくれただけでも御の字だ。これ以上足手纏いになるのは、俺の本意じゃない。宿の中でぼうっとしているのでは、ソフィアだって暇だろう」
「そなたは食事をどうする？」
「『健康体』になったら適当に食うさ。生憎、食いたいと思えない」
「わかった」
しばしの考えるような沈黙を挟んで、やがてエディが頷いた。その気配が無言で部屋を出て行くのを感じ、シェインは再び瞳を閉じた。
全く……本意ではない。
魔法も使えず、体のあちこちに不具合が生じたまま、同行者の手を煩わせるなど屈辱以外の何物でもない。
ラミア――この返礼は、いつか必ず受けてもらう。

部屋を取るなりベッドに沈み込んでしまったシェインは、そのまま眠り込んでしまったようだ。不調と言うのはどうにも休養を要するものらしい。眠っても眠く、動かずとも体は気だるい。
「……いつ、戻ってきた？」
気づいてみれば、隣のベッドにはエディが腰掛けて書物のページを繰っていた。食事を終えて戻って来たのだろうか。全く気がつかなかった。
「今は、何時だ？俺はどのくらい眠ってた？」
「今は七刻を半分ほど過ぎようとしているところだ。眠っていたのは一時間程度だろう」
「そうか……」
ではそろそろ神殿に足を向けた方が良いだろう。休んだおかげか、少しは移動も楽になっていそうだ。

「食事はして来たのか？」
「ああ」
「俺は、今から神殿に行ってみようと思うが」
「もう少し、待ってみないか？」
「え？」
体を起こしかけたシェインに、エディは手にした書物を閉じながら顔を上げた。
「今、ソフィアは公衆浴場に行っている」
「……神殿に赴くのは俺ひとりで構わぬが」
「行き倒れになられでもしたら、ソフィアの寝覚めが悪いだろう。少し待ってやってくれ」
「……」
飽くまでも『ソフィアの』寝覚めが悪い辺りがエディらしい言い草でおかしい。
もう一度ベッドに沈み直して、シェインは思わず笑った。
「おぬしはどういう人物なのだろうな」
「私か？唐突に何だ」
「風変わりだ。記憶を失くす前と今と、性格に違いが出るわけではないだろう？」
シェインの言葉に、エディは足を組むと考え深げな顔を見せた。
「どうなのだろうな」
「全く思い出せないか」
「出せないな」
「……試しに、目覚めた時の状況を俺に説明してみないか」
エディが目を瞬いてシェインを見下ろした。それから、余り感情の浮かばない顔で視線を宙に彷徨わせる。
「説明してどうなる？」
「話すことで何かの記憶を刺激するかもしれぬな。記憶と言うのは繋がっている。何かひとつが引っ掛かれば、そこからずるずると記憶が引きずり出されるかもしれぬ」

「ふむ……」
シェインの回答に、エディは小さく口元だけで微笑んで軽く肩を竦めた。
「私自身はさほど記憶に固執してはいないのだが」
「取り戻さなくても困らぬか？」
「私はさして困らないな。わからないのだから、困りようがない。……けれどまあ、やってみるとしようか」
「気がついたのは、いつ頃だ？」
深い意味があったわけではない。
エディがソフィアを待てと言うので、それまでの気楽な暇つぶしのつもりだ。
そこから何かを得ようと思っていたわけではない。
しかし。
「そうだな……花の月が終わる頃か」
エディの言葉は、エディ自身ではなくシェインの脳裏を刺激した。
（花の月……？）
「目覚めたのは、どんな状況だった」
「ひどい建物だったな。最初は、物置にいるのかと思ったほどだ」
「そんなにひどかったか」
「……いや、今思えば、そうとも言い切れぬが。農村などでは良く見かける程度の家屋だ。だが私はそれ以前に、そんな建物に足を踏み入れたことがなかったようだ」
「どこかの貴族だとすれば、妥当だろうな」
シェインは普段から街をふらふらしているし、故郷アンソールでは身分も何もなく遊び回っていたから覚えはあるが、通常の貴族であれば農村や漁村で貧しい暮らしを強いられている人々の家屋などゴミ置き場同然に見えても致し方ないだろう。
「そこは、どこだったのだ？」
「最初は、どこにいるのかは全く判断がつかなかったな。ともかく人が戻って来ないので、人を探して建物を出た。そこからしばらく、

北へ向かって海岸沿いに歩いた」
そうして最初に辿り着いた集落が、ロドリス西岸沿いのキアヌと言う漁村だったとエディは言った。
それが再び、シェインの記憶を刺激する。
「キアヌへ向かう途中、ずっと海の向こうに岬上の陸地が見えていたから、ロドリスかモナかなどと考えてから、自分に地理の知識があることに気がついたな」
「……なるほど」
答えながら、シェインも頭にローレシア大陸の地図を思い描く。
自分が目覚め、歩いている方角が北か南かわからぬとくれば、とりあえずは海を挟んで岬が見える地形を浮かべるだろう。その結果、キアヌに辿り着いてロドリスであることがわかったわけだ。
だとすると、キアヌはロドリスの北――リトリアに寄り近い地域に位置する漁村となる。
ゆえに、そこから更に彷徨ったエディは、リトリアから脱出したソフィアと遭遇することになったのだろうが。
（……マイルス島）
――マイルス島だっけ？モナのさ、下の方にある島
ロドリス北西の海岸沿いであれば、モナの南部にあるマイルス島とそれほど遠く離れているわけではない。
レオノーラで遭遇したミオの言葉が蘇る。
「自分の身元を示すようなものは、何も所持していなかったのか」
花の月の終わり――ちょうど、ギャヴァン戦が終わった頃合だ。
あの時、ギャヴァン以外でももうひとつ戦端が開かれていた。……ロンバルト沖で。
「そうだな……私の所持品らしきものは、衣服くらいで……」
言いながらエディは、自分の衣服のポケットを漁った。
「そう。後で気づいたのだが、その衣服にこのような物がついていたな」
「何だ？」

「カフスだ」
そう言ってエディは、取り出したボタン状の物をシェインに差し出した。ベッドから体を起こして、それを受け取る。
――あそこにさ、何人か人が流れ着いたとかって話
マイルス島には、ヴァルスとモナの海戦で行方不明になった人間が流れ着いている。
以降、ロンバルトとヴァルス海域の境にあるヘーウィン島にも僅かながら船の破片や防具、そして死体が流れ着いたことを考えても、ロドリス西岸に人が流れ着いてもおかしくない。
（あの戦役の……被害者か？）
シェインとて、ヴァルス貴族の全てを見知っているわけではない。けれど、エディのヴァルス語はヴァルス人のものではないし、ソフィアの意見を踏まえてもヴァルス貴族ではない。
であれば、エディは、モナ貴族に属する人間だと考え得る。
「……随分、質の良い物だ」
つい考えを巡らせながら視線を落としたカフスに、シェインの声が掠れた。どくんと心臓が、音を立てたような気がした。気づかずにエディが、軽く肩を竦める。
「ひとつだけ、ポケットに入っていた。もうひとつは取れてしまったのだろうな。私が気づいた時には既になかった。その時身につけていた衣服はひどい状態だったのでとっくに破棄してしまったが、それだけは何となく、手放してはならぬような気がしていてな」
「……ああ。正しいだろうな」
視線をカフスに落としたまま、答える。刻まれた模様に、カフスを持つ手が、震えた。……ファーラも悪戯が過ぎる。
（バーシェルダー家……！！）
面に刻まれた紋章は知っている。
それもそのはずだ。ギャヴァン戦におけるモナの敗北措置で、幾度かモナ宮廷と書面のやりとりをしているし、何よりギャヴァン戦寸前にモナ公王フレデリクからスペンサーへ宛てた直筆書簡を、シ

ェインは目にしている。
その書簡に刻まれていた紋章と、それは同じものだ。
モナ公国を治めるバーシェルダー家の係累がどうなっているのかなどシェインは把握していない。
けれど知る限りで直系は、公位を継承した２３歳の青年と１６歳の王弟……そして新公王の行方が知れない今でも王弟が継承せずに暫定政権が立ち上がっていると言うことは、王弟には何らかの不具合があると考えられる。つまり王弟は勘定に入らない。仮に他に庶子がいたとて、モナ公国の紋章とイコールであるその紋章を身につけることが許されるわけがない。
加えて、あの時期にあの辺りにいたバーシェルダー家直系の人間と来れば、自ずと答えが定まってくる。そして、エディの年齢は、どう見積もっても２０代前半だろう。
シェインの考えが正しければ、エディの記憶は海に消えたのだ。
そう……ヴァルスとモナの、海戦によって。
「生きて、いたのか……」
「え？何か言ったか？」
「……いや。何も」
エディの素性は、貴族などと言うものではない。
れっきとした、支配階級の人間――行方不明のモナ公王、フレデリク２世だ。

第3部第1章第13話　火種（1）

エディがモナ公王フレデリク2世――衝撃の事実だった。

いや、確定したわけではないのだ。けれど、一度そうではないかと思ってしまうとそれは、限りなく真実に近いような気がする。

ソフィアが公衆浴場から戻るのを待って向かった神殿で、クラリスへの取り次ぎを頼んでから通された待合室の中、シェインはひとり深い考えに沈み込んでいた。

エディとソフィアは、神殿の礼拝堂に残している。クラリスとの会話を、聞かれたくなかった。

（モナ公王とリトリア貴族が行動を共にし、ヴァルスの宮廷魔術師を拾うとはな……）

神殿には、既に一般の訪問者の姿はない。

町の声を遠くに聞きながら、しんと静かな待合室で、皮肉な笑みを小さく浮かべる。

問題なのは、現在の状況ではない。それによって、何が起こり得るのかと言うことだ。

最大の問題点となるのはやはり、フレデリク――エディに、自己の記憶がないことだろう。モナと言う国家の動向を、己の意志で左右出来ることを知らない。モナの最高権力者である、自覚がない。

エディは、その剥き出しの権力を利用したい人間から、身を守る術がないと言うことだ。

シェインにとってまず主要なのは、それがヴァルスにどう影響を与え得るかである。

記憶のないモナ公王が、リトリア貴族と共にロドリス国内を移動している――それが、ヴァルスの不利益に繋がるのは、どのような場合だろう。エディにどんな接触があった場合に、ヴァルスに不都合となり得るのか。

まず考えられるのは、やはりロドリス。

フレデリクは、自らロドリスを訪問してもいる。ハーディン王城内に顔を知られている可能性は高く、そしてここはロドリス国内だ。もしもロドリス宮廷がフレデリクの身柄を押さえた場合に、起こることは何だろう。……決まっている。フレデリクを操作して、モナを押さえるのだ。正統な公王の身柄を手に入れれば、至極簡単なことである。

敗北措置でヴァルスの干渉を大人しく受け入れているモナ暫定政権も、自らの王をその全面に押し出されれば、あっさり手のひらを返すだろう。そして再びロドリスの指揮下、ヴァルスに牙を剥くわけだ。もちろんその為には、記憶のないフレデリクを懐柔する必要は生じるだろう。フレデリクではなく今のエディがどう判断するかまでは今ひとつ読みにくいところではあるが、かつてのフレデリク自身の行動をもってすればさほど困難ではないかもしれない。

なぜなら、かつてヴァルス侵攻に乗り出したのは他ならぬフレデリクの意志であり、現状フレデリクが健在ならばどのように考えて動くかを考慮すると、恐らくはロドリスの庇護を求めてその懐に自ら飛び込む可能性が、最も高いからである。

一カ国でも味方が欲しいヴァルスは、苦渋の決断として、モナ暫定政権に援軍を要請していたはずだ。

だが、敗戦と公王の不在で収拾のつかないモナは、その要請に応えることが出来ないでいる。援軍を出す前にまず、国力を多少なり回復させねばならず、自力でそれを出来ないモナの復興に手を貸しているのは、結局のところヴァルスだ。そして唯々諾々としてヴァルスの言いなりになっているのは、暫定政権である。

しかし、『敗北措置』はもちろん『公王不在によるモナの戦線離脱』が前提である。公王が戻り、戦線復帰するのであれば、その限りではない。モナに抵抗の意志があると言うことなのだから。

仮に、ここで自らの意志を持ったフレデリクなら、この現状をどう考えるだろうか。

まず、ヴァルスにモナの復興を助力させる為に現状を維持する―

―フレデリク自身は姿を見せずに、遠隔地からヴァルスの国力を使ってのモナの復興を志すだろう。それは当面、ヴァルスの動きの一部を拘束することであり、国力を削ぐことでもある。

モナの国力が回復してきたところで、フレデリクがロドリスを後ろ盾に舞い戻るわけだ。そして再び、ヴァルスを攻撃する。

ヴァルスとの交渉に応じていたのはあくまで暫定政権であり、そこに公王の決定はなかったと言い訳が出来る。ロドリスにつく理由は明快だ。ヴァルスの言いなりになっていては、モナの権利獲得には何ひとつ進展がない。利用するだけ利用して、飽くまで初心を貫く。

それを考えれば、対ロドリスと限定した場合、フレデリクに記憶がないのは幸いと言えた。

今のフレデリク――エディならば、そもそも己の初心がわかりはしない。自覚がないから、自らロドリスの袖の下に潜ることはあり得ない。つまり、エディの身柄をロドリスに拘束されることがなければ、モナが再びヴァルスに牙を剥くことは現状考えにくい。

では、自覚がない今、エディにとって最も危険な国はどこか。―

―恐らくは、リトリアだろう。

リトリアは、常からモナの領土に興味がある。敗北して、敵国ヴァルス指揮下に落ち着いた公王不在のモナ……これでもかと言うお膳立てではないか。

だが、フレデリクがモナへ戻ってしまえばヴァルスに牙を剥こうとするだろうことはクラスフェルドにも予想はつこうし、そうなればモナは敵国ではなく友国となる。無論、攻撃を仕掛けるなどもっての他だ。リトリアがモナを侵略出来る理由がなくなる。リトリアにとって、フレデリクがおらず、頼りない暫定政権がおろおろしている今が格好のチャンスのはずだ。そのリトリアが、万が一記憶のないモナ公王の存在を知ったら、どのような行動に出るかと言うことである。

恐らくは、フレデリクは、消される。

もちろんフレデリクが、モナ公王フレデリクたるならば話は別である。他国の王を暗殺するなど国際問題であるが、だが今のエディは、フレデリクではない。『記憶喪失のただの男』であり、そんな者が何ごとかに巻き込まれて命を落としてしまったところで、リトリアの知ったことではないのである。本人に自覚もないものが俺にわかるものかと言う話であり、そして自覚のないフレデリクが、エディとして暗殺されたことは浮上することのないまま……表立っては海戦で戦死したとして処理されるのだ。

そうして公王がモナに舞い戻って友国として戦線復帰する可能性を摘んでから、リトリアは意気揚々とモナに侵略戦争を仕掛ける。敗北国としてモナを支配下に置いているヴァルスとしては、モナを放っておくわけにはいかない。ロンバルトを越えて進軍してくる連合軍とは別に、モナを挟んでリトリアにも戦力を割かねばならなくなる。かなり、頭の痛い事態と言える。尤も、リトリアに関して言えば、現状既に公王を亡き者と見なして侵略の動きがないとは言い切れないのであるが。

いずれにしても、誰かにエディの素性を察知されてその身柄を押さえられるのは、ヴァルスにとって不利益に繋がり得るし、エディが消されるのもまた寝覚めは良くない。

彼自身の以前の意志を考えれば、ロドリスに引き渡してやるのが最も彼の為かもしれないが、生憎とシェインはヴァルスの高位官だ。そうしてやるわけにはいかない。

そしてこうなって来ると、いよいよソフィアの素性と目的と言うのが気にならざるを得ない。

国の動きとは何ら無関係なのであればそれに越したことはないが、無防備に自覚のないモナ公王を伴って、ロドリスやリトリアで行動をされればヴァルスに迷惑がかかり得る。

何にしても、フレデリクの所在を掴んだのであれば、このまま放置するわけにはいかないではないか。その動向を掴んでおく必要がありはしないか。

だが、このままヴァルスに対して音沙汰なしで、エディについて回るわけにはいかない。ロンバルト宮廷魔術師を味方につけているレドリックがヴィルデフラウ城にいることと、フレデリクの存命、そしてシェイン自身の無事を、ラウバルに伝えなければならない。

どう行動することが、ヴァルスにとって最良なのか。

今後の行動方針を、シェインは早急に決めなければならなかった。このままいれば、翌朝にはエディとソフィアとの別れが待っている。

身動きをするのが億劫で、深くソファに体を沈めたままで頭を廻らせていると、やがて扉の外から足音が近付いてきた。どうやらクラリスの手が空いたらしい。ともかくも、体を支配するこの痛みから解放されることだけはありがたかった。

「シェイン様ッ……？」

扉が開くのと同時に、慎ましやかな雰囲気の美女が飛び込んで来る。体を動かす気力がなく、ぐったりしたままでシェインは顔だけをそちらに向けた。元気のない笑みを、クラリスに向ける。

「久しぶりだな」

「どうなさったのですか。……いえ、事情は後でお伺い致します。ともかくも早急に、治癒を施します」

「会うなり、悪いな。頼む」

飛び込んできて、シェインが崩れたままのソファの傍らに膝をつくと、クラリスが痛ましげな顔をしながら呪文を唱える姿勢に入った。

「……少し、時間がかかるかもしれませんよ」

「ああ」

「傷を負ってから、時間が経ってますね？それも複数、それぞれが深いのでしょう。……加えて、波動が」

「魔法をくらってる。まだその余波が、体に残っているだろう」

「わかりました」

それだけ聞くと、クラリスが治癒の魔法を唱え始めた。同時に、クラリスの周囲が柔らかい光を放ち、次第にシェインを取り込んで

いく。体の奥深くまで侵食していた痛みや重苦しさが、少しずつ軽くなっていくように感じる。体の隅々にまで入り込んだ黒い魔力と傷が、吸い取られていくかのようだ。まさしく浄化されていく体に、シェインは瞳を閉じて回復の時を待った。

ラミアから受けた魔法の余波をも取り除く為だろう。通常の治癒の魔法とは異なる呪文とファーラへの祈りを唱えるクラリスの優しい声だけが、部屋に静かに響く。

長いとも、短いとも言えるその時間を過ぎて、クラリスが口を閉ざしたことに気づいたシェインは、ゆっくりと目を開けた。

体の至るところでシェインを苛んでいた毒素のような重さと痛みから、ようやく解放されたことを理解して、ソファから体を起こす。

「……いかがですか」

クラリスが、そばに跪いたまま、シェインを見上げた。

「助かった」

「痛むところは」

尋ねられて、痛んだはずの各所を探る。自分の体の動きを確かめて、シェインはクラリスに感謝の意を示した。

「ないようだ。……感謝する。本当に」

「これが、わたしの仕事です」

深く頭を下げるシェインに、クラリスが少し照れたように控えめな笑みを向けた。それから、その表情を真剣なものに改める。

「何があったのですか。どうしてこのようなところに。……おひとりですか」

「一応、今のところ同行者はいなくはないが。……俺の、本来の周囲の人間と言う意味で問うているのならば、ひとりだ」

「……」

無言で見上げるクラリスに、シェインはようやくソファに掛けたままで姿勢を正した。健康体とはこれほど軽いものかと、感動したくなる。思うままに動けなかったこれまでが嘘のようで、いっそ馬鹿馬鹿しくさえなるほどだ。

「……リシアの館では、世話を掛けた」
黒衣の魔術師バルザックの館での一件だ。クラリスは、目を伏せて顔を横に振った。それからそっと、立ち上がる。
「わたしが出来たことは、さほどありません」
そう答えて、片手に持った小さなロッドをシェインの向かいのソファの上に置くと、部屋の隅へと足を向ける。
「何か、お飲みになりますか」
「ありがたく戴こう。……相変わらず美人で安心した」
体が治るなりの軽口に、ティポットに向き合っていたクラリスの背中がくすくすと笑う。
「ありがとう。あなたも相変わらず素敵ですよ。……お食事は、もう？」
「いや、まだだ。ここを出てから適当に何とかする」
「そうですか？……どうぞ」
シェインに熱い茶を注いだティカップをひとつ手渡すと、もうひとつを持ってクラリスはシェインの向かいに掛けた。一口カップを口に運んで、ようやく美味しいと感じることが出来たことに、感謝を覚える。
「魔法とは不便なものだな」
「そうですか？」
「普段、簡単に治るものと思えていればこそ、使えなくなった時の不自由さに縛られ、免疫や回復力の弱い己に気づく」
顰めた顔でぼやくと、クラリスは両手でカップを持ったまま、笑った。
「そうですね。頼り過ぎることは、人の体の持つ自然の力を押さえ込むことに繋がっているのかもしれません」
「以後、気をつけることとしよう」
「……使えなくなった、とは、どういう意味ですか」
挨拶代わりの短い会話の後、クラリスが本題に触れる。持ち上げたままだったカップをテーブルのソーサーに戻し、シェインはクラ

リスを見つめた。
「シサーたちには現在、少々特殊なことを頼んでいる」
「ええ」
「あの場にいたあなたならおわかりだろうが、帝国アルトアーデン皇帝継承者の影武者として動いている人間がいる。あなたもご存知の、カズキだ」
「……はい」
「そして俺とあなたが再会することになったあの屋敷に幽閉されていたのはユリア――ヴァルス王女だ。それは、ご存知だろう」
「ええ」
「だが、お察し戴けていると思っているが、いずれについても軽々しく口に出来る種類のことではない。ヴァルス宮廷内でさえ、一部の者しか知らぬことだ」
「……」
「それを承知の上で、シサーとニーナがあなたに同行を依頼したと言うことは、あなたが信用に値する人物だと言う彼らの判断だと俺は勝手に考えているが、その認識で良いだろうか」
シェインがこれから口にしようとしていることも、おいそれと口にして良いことではない。クラリスを信用して良いか、と真っ向から尋ねるシェインに、クラリスは静かに見返した。
「わたしが信用に値する人物かどうかは、わたしが判断出来ることではありません。ですが、わたしは、わたしの信じるファーラの心がありますし。人の恩には報いねばなりません。わたしが彼らの期待に応えねばなりませんし、裏切る行為は許されません。わたしは、シサーともニーナとも友誼があると信じています。友誼に傷が入る言動は、神の前で恥じることです。わたしは、彼らの温情に対して誠意を持った行動を今後もしていくことでしょう」
「……頼みがある」
クラリスの言葉に、シェインは短く要望を告げた。クラリスが、口を噤む。

「わたしに出来ることであれば」
「シサーやニーナは、現在、俺やラウバル……ヴァルスの宰相だが、その依頼を受けて動いていると思ってくれて良い。彼らを裏切らない行動は、俺の信用に値する行動と信じて、あなたに頼みがある。……俺には今、あなたしか頼れる人間がいない」
「……」
「ヴァルスに、行ってはもらえないだろうか」
クラリスが、黙って目を見開いた。シェインも、クラリスを見つめる視線を逸らさないまま、言葉を切った。
厄介なことを頼んでいることはわかっている。図々しいことも、承知の上だ。だが、今ほどクラリスに告げたように、シェインには他に頼れる人間がいなかった。
「ヴァルスに……？」
「俺は、ヴァルスに戻ることが出来ない。だが、至急ラウバルに奏上したいことがある」
「なぜ、わたしなのです？ヴァルスに戻れないとは、どういうことですか」
「今言った通りだ。他に頼める人間がいない。ロドリス国内にクライスラー家が所有する邸宅には、恐らく俺は近付けない。近付いたところで、そこから放たれる人間がヴァルスに辿り着ける気がしない。ロドリス国内の大使館は、使えない。そして俺は、ヴァルスに向かうことが出来ない」
「……」
「状況を、聞いてもらえるだろうか」
真摯に見つめるシェインの言葉に、しばし躊躇ったような表情を見せたクラリスは、やがてしっかりと、頷いた。
「お伺いしましょう」

◆◇◆

神殿から、宿へ戻る。
隣室を借りているソフィアと部屋の前で別れると、部屋に足を踏み入れたシェインは、エディの背中を見つめて複雑なため息をついた。
ギャヴァンを間に挟み、攻防を競ったのは戦略上で言えば自分とこの男であると言うことが、思わず眩暈を引き起こした。まさかロドリスの安宿で、寝食を共にすることになろうとは、一体誰が想像しただろうか。……いや、そもそも、フレデリクに命を救われたこと自体が、混迷を極めた事態なのだと思わざるを得ない。
「……エディ」
神殿からの帰り道で購入した衣類をベッドの上に放り出しながら、シェインはエディの背中に声を投げた。エディが静かに振り返る。
「このまま、すぐ休むか？」
シェインの問いに、エディが僅かに目を瞬いた。
「何かあるなら、付き合っても良いが？」
「ならば付き合ってくれ。おぬしは酒は飲めるのか？」
きょとんとしたままで、エディが首を傾げる。
「恐らく、としか答えられないが。記憶を失ってから、酒を口にする機会が数度しかなかった。それも付き合い程度で、さほどの量を口にしていない」
「ソフィアは飲まないのか」
「そのようだな。だが、口にした数回の中でも酔った、と言う覚えがないから付き合えるとは思うが……飲みたいのか？」
「せっかく回復したんだからな。久々に解放された気分だ」
にやっと笑うシェインに、エディがやや呆れたような吐息をついた。
「現金な奴だ」
「おう。己の不運を呪ってくれ。……下の食堂からもらってこよう。部屋の方がゆっくり出来るからな。何、浴びるように飲ませようと思っているわけではない。寝酒程度だ。そう構えるな」

エディの考えを、知っておく必要がある。
まずは、エディの持つ知識だ。そして戦における考え方。万が一、記憶を取り戻して、あるいは取り戻さないままでモナ公王として復位した場合、どのような人物であり得るのか。
これまでの話を聞いていると、エディとソフィアは行動を共にしている間、宿に泊まる際にはまとめて一部屋で済ませてきたらしい。今夜に限っては、部外者と言えるシェインがいる為に部屋を分けたが、フレデリクの動向を押さえておく為にシェインが今後も同行した場合、3人まとめて一部屋となる可能性が高い。であれば、エディと2人でじっくり話を聞いてみる機会と言うのは早々訪れないかもしれない。
自身の行動方針を明確に決める為にも、エディとゆっくり話をしてみる機会は重要と言えた。
食堂から酒と簡単な摘まみを手に入れて部屋に戻ると、エディは窓際の壁に背中を預け、書物のページを繰っていた。
「おぬしはつくづくと、書物が好きなようだな」
半ば呆れたように足でドアを閉めながら、エディのそばに足を向ける。そのまま近くの床にすとんと座り込んで、略奪してきた品々を並べ立てるシェインに、書物を閉じながらエディが小さく笑った。
「そうだな」
「以前から、そういう習慣があったのだろうな」
エール酒を、勝手に2つのグラスに注いでいく。
シェインの記憶の中では、フレデリクは部屋の奥で書物を繰っているのが好きな青年だとの話があったはずだった。
「多分な」
短く答えて、ベッドの上に書物を投げ出しかけたエディに、手を伸ばした。目を瞬いたエディが、その意図を汲んで書物を手渡す。

第3部第1章第13話　火種（2）

「どこで手に入れた？」
「ここに来る途中にあった町の道具屋だ。退屈しのぎになるかと思って、購入してみた」
「……また、渋いものを読んでいるな」
ぱらぱらとページを捲りながら、呆れざるを得ない。トートコースト大陸バティスタ帝国の、戦の歴史についての手記だった。記憶を失ってまで、勤勉である。
「面白いか」
「面白いな。自分だったらどうするだろうと想像しながら読み進めると、いろいろと興味深くはある」
「……」
なるほど。恐らく以前もそのようにして、自分と歴史上の人物や事象との違いを比較しながら、知識や考えを取り入れていったのだろう。
「では、おぬしに興味深い酒の肴を提供しよう」
「？　何だ？」
「リアルな話だ。現在、戦が巻き起こっているのは、知っているな？」
「ああ……」
エディが、曖昧に頷く。
「それについて、おぬしはどの程度の知識を持っている？」
グラスをエディの方に押し遣りながら尋ねると、エディは僅かに首を傾げながらグラスを受け取った。
「さほど知っているわけではないな」
「そうなのか？」
「ああ。目が覚めた時には知らなかった。キアヌの村でちらりと耳に挟み、その後ソフィアから教えられた程度に過ぎない」

「……ほう」
意外と言えば、意外である。それともそういうものなのだろうか。そう思いながら、エール酒のグラスに口をつける。
「では、知っているのはどの程度だ？」
「ヴァルスに対して、ロドリスを中心としたナタリア、バートそしてリトリアが旗揚げをしたと言うことくらいだな。ロンバルトは、ヴァルスについたと聞いた」
「……モナは？」
「モナ？ああ……そう言えばどうしたのだろうな。聞いていない」
「そうか」
では本当に、進行中の戦の状況について、エディは知識を持ち合わせていないようだ。フレデリク自身が戦の初頭で記憶を失ってしまっているせいなのか、それともそもそも常識的な知識『しか』エディの記憶には残っていないのかは定かではない。
「では、俺の知る範囲で簡単に説明しよう。ことの発端は、知っているか？」
「いや」
「発端となっているのは、ヴァルスそしてアルトガーデンの代替わりだ」
「代替わり？では先王はお亡くなりか」
「ああ。亡くなった。そして先王クレメンス陛下には、嫡子が娘しかいない。そこでロンバルトの第2王子との婚姻政策を取った。それに反発をしたのが、ロドリスだ」
「ユリア、と言ったか？」
「そう。それはわかるのだな」
「うっすらとな。……それで？」
「ロドリスは、ヴァルスの……アルトガーデンの継承について異議を申し立てた。そしてナタリアやバート、リトリアと共に戦を仕掛ける方針を固めた。最初に動いたのは――」
床に直接置いた皿から干した魚の細切りをつまみながら、一度言

葉を切る。エディの僅かな表情の変化も見逃さないつもりで、その顔を真っ直ぐ見つめながら続きを口にした。
「モナだ」
「ほう？モナも反ヴァルス派か」
だが、エディの表情には何の色も浮かばなかったように見えた。僅かに拍子抜けした気分で、肯定する。
「ああ。そうなるだろうな。ヴァルスに攻撃を仕掛けたモナによって、実質開戦、ヴァルスの港街ギャヴァンとロンバルト海上において初戦が行われた」
「それは、どうなった？」
「モナの敗北だ。モナ公王は、行方不明だ」
「そうなのか」
おぬしだろうと言いたいのはやまやまだが、今は告げるタイミングではない。演技ではなさそうな純粋な驚きを顔に浮かべてグラスに口をつけるエディに、シェインは、エディの考えを引き出す為の言葉を口にした。
「簡単にだが、それらが今度の戦の前提だとしよう。……もしもおぬしがロドリスを指揮する人間だとしたら、どう動く？」
シェインの問いに、エディが笑った。
「なるほど。興味深い酒の肴か。書物の中でやるのではなく、リアルな今を題材にシュミレーションすると言うわけか」
「その通り。おぬしはそういったことを考えるのが好きなようだからな」
これで、いくらかエディの考え方を引き出すことが出来るだろう。地理についてもいくらか知識があるようだと言っていたが、それについてもどの程度のものなのかを図ることが出来る。わからないことが余りに多ければそれは、記憶を失っているせいなのか元々知らぬのかの判断が難しくなるが、知識を豊富に持ち合わせているようならば話は早い。それは、一般の民間人やただの貴族とは言い難い。
壁に背中を預けながらグラスを口に運ぶと、エディは考えるよう

にしばしの沈黙に陥った。
「私がロドリスを指揮するならば、か。……東側から攻めるだろうな」
「東側？ヴァルスのか？」
少々意外な展開を口にされて、問い返す。考え深げな眼差しのまま、エディが頷いた。
「ロンバルトはどうする？」
「正直、ロンバルトはロドリスにとって大した敵ではないだろう。何より押さえねばならぬのがヴァルスであるのは確かなことだ。ならばヴァルスの力を削ぐことに、全意識を集中するだろうな」
「ヴァルス東を押さえることでその力を削ぐと言うポイントは？」
「押さえなければならないのは、主要な港。そしてヴァルスが最強と言われる所以である、騎兵の弱体化」
「……フォルムスと、ウィレムスタトか」
唸るように確認するシェインに、エディが淡々と肯定する。
「フォルムスについては説明は不要だろう。他大陸との重要な貿易都市だ。押さえておくに限る。ウィレムスタトは、ヴァルス騎兵にとっての原動力だ。馬が押さえられればこれ以上騎兵の増強も補充も出来ない。ヴァルス騎兵の弱体化だろう」
その通りだ。ヴァルスの主力が騎兵である以上、戦で不足していく兵の補充に馬が出せぬようでは、戦が進むごとに騎兵が減っていく。それはそのままヴァルスの主力が弱体化していくことを示している。
「ロドリスからならば、コーデラ内海を渡ってヴァルス東部に移ることも可能だろう。ナタリアを味方につけているのだから、船を出させるのも可能かな……いずれにしても、大した距離を航海するわけではない。ともかくもまず東部を制圧すれば、ロドリスは大きな港と名馬の産地を一挙に押さえることが出来る。押さえた地域から、自分たちの軍馬を出させれば尚良いな」
「……」

「それと同時に、ナタリアの持つ海軍に海から攻撃をさせれば、フォルムス付近にあるファルツ要塞からの派兵にも足止めが出来る。ヴァルス軍はウィレムスタト地方に辿り着く為には山越えと砂漠越えをしなければならない。実は、東部の制圧はさして困難ではないような気がする。そして東部を制圧したら、砂漠の街ギルザードを押さえてそこを拠点にキサド山脈越えだな。いくつかに部隊を分けて、アンソールとギャヴァンを狙う。一方で、リトリアには西部からの進軍を進めさせ、ラルド要塞とカサドールを狙わせるかな」

そこまで言って、エディは考え深げに言葉を切った。シェインから見て的確と思えるエディの思考に薄ら寒くなりながら視線を向けると、エディはそんなシェインの様子には気づかずに自分の頭の戦略に気を取られたように呟いた。

「そうか……リトリアは危険だな」

「何？」

「リトリアは、ロドリスと本当の意味で足並みを揃えて動くとは考えにくいからな。余り戦略に含めて考えると、逆に足元を掬われるかもしれない」

「……では、視点を変えてみよう。リトリアなら……おぬしがリトリアの指揮にあたるのならば、どう動く？」

「今度はリトリアか？」

そう笑うと、皿の上の乾き物に手を伸ばしてエディは視線を空に彷徨わせた。そして一点を見据えるように視線を定めると、すっとその目を細めた。

「……モナを狙うな」

との結論をモナ公王が出していると思えば、複雑な気がするが。

しかしやはり、冷静に考えても、リトリアはモナを攻撃すると言うのが妥当な線だろう。

「モナは、先ほど言った通り、『反ヴァルス軍』だぞ？つまりリトリアと同立場だ」

「同立場、と言うのは語弊があるな。既に負けているのだろう？」

「……ああ」
「であれば、敗戦国。加えて公王が不在とくれば、狙うに不都合はないだろう。なぜなら敗戦国となったモナは、ヴァルスの支配下に置かれるからだ」
まったくいちいち頷くしかない。離脱を余儀なくされたモナは、既にロドリスら反ヴァルス軍の友国とは言えない立場になった。エディの言葉通り、リトリアが侵略戦争を仕掛けるのに、不都合はない。
「今なら、モナを陥落出来るな。ヴァルスには、モナの防衛に割いているような戦力はさほどない」
そこまで言ってから、エディはふと言葉を切ってシェインを見た。
「モナには現在公王がいないと言っていたな？」
「ああ。それは確かだ」
その所在についてはシェインは把握していると思われるが、現在モナに不在であることは確かである。
「ではモナの政権を握っているのは、誰だ？……そもそも、モナの公王は誰だった？」
その問いに、シェインは虚を突かれたように黙りこくった。
「……エディ」
「何だ？」
「つかぬことを尋ねるが、各国の現国王や王朝の把握は？」
エディもきょとんとシェインを見返したが、ややして答えた。
「まずヴァルスは、その名の通りヴァルス王家。クレメンス8世が治めていたが、先ほどの話では身罷られて、唯一の嫡子が王女ユリア、だったな」
「ああ」
「ロンバルトを支配するはヴァッセンベルク家。頭首はフェルナンド7世だったか。嫡子はレドリックとレガードの2王子と記憶している」
「間違いない」

「ロドリスを治めるのはイヴレア家。現国王はカルランス7世だったか？王女ばかり何人かいたと思うが、それはさすがに良くは覚えていないな。上から４人は既に嫁いでいて、アーデルハイトがロドリス貴族ノイマルク家に、２番目のミリイがナタリア公家、３番目フロイラがナタリア貴族のシュタイアー家、そしてアグネスがロドリス貴族のオタカル家だったか？それ以外は記憶が薄いな。末にウィリアム王子がいたのだったか」

思わず言葉が出ない。良く把握をしているものだ。

「次いでリトリア、ヴェルフェン家のクラスフェルド１１世は確かまだ独身だったな。ゆえに嫡子はまだいない。だが庶子がいるとの噂もあったが、これは定かではない」

「そうなのか？」

「事実は知らない。だが、リトリア宮廷で勢力を二分しているマグヌスとライナルトがいる。マグヌスはヘッセン家の流れを汲んでいたのだったかな。ルーデ・ヘッセンが後ろ盾にいて、マグヌスを援助している。一方ライナルトは６年前から急成長したのではなかったか。アルノルト・クレーフェが突如ライナルトに助力を始め、いきなり勢力を伸ばし始たらしい。アルノルトが突如ライナルトの後ろ盾についた理由がわからない為、勝手な憶測が飛んでいると言うようなことらしい」

「庶子を誰が押さえているか、と言う種類の憶測か？」

「そうなるな」

聞きながら、内心、舌を巻いた。フレデリクは実に勉強熱心だったようだ。殊に、リトリアの政治勢力に詳しいのは、多分リトリアに対する警戒が最も強いからだろう。今の話を聞いていても、シェインなどは登場する人物がどのような役職、どのような人物で、それによって何がどうなるのかなどわかりはしない。それほどリトリア情勢について詳しいわけではない。だが、エディが、シェインすら知らぬようなリトリア宮廷の事情についての知識があることは、驚くべきことと言えるだろう。

エディはそのままナタリアやバート、キルギスについても同様に民間人では知り得ぬ知識を口にした。それを聞いて、シェインはやはり確信せざるを得なかった。

各国の王族や宮廷事情に通じていること、そしてリトリアについての知識がずば抜けていること――フレデリクならば、至極納得がいく。

「……では、モナは」

危険かもしれない。

モナの宮廷事情について記憶を蘇らせようとすれば、それはそのまま自身の記憶の発掘にも繋がる可能性がある。フレデリクが記憶を取り戻せば、ロドリスの元へと走るだろう。

だが、シェインの心配に反して、エディはそっと首を傾げて眉を顰めた。

「不思議だな」

「何だ？」

「他の国の知識はあるようなのに。モナに関しては、何も知らないようだ」

「何も？全くわからないのか？」

「どこにある国だとか、王都はどこだとか言う知識はあるようだが。ただ、現在の公家がどこだったのかが思い出せないな」

（……なるほど）

ようやく合点が行く。自身に関する記憶のないエディは、己の素性に繋がる意識をもすっぽりと消失しているわけだ。それによって、もちろんモナ公家バーシェルダー家の記憶はないし、自身である現公王や血縁である王弟、先代などについても失っている。バーシェルダー家は長くモナを治めてきているはずだから、自分の先祖である歴代の公王についても思い出せない。つまり、モナ公国に君臨する者の記憶の全てがない。だから、モナに関しては、何もわからない。

もしかするとそれは、それだけフレデリクがモナ公王としての意

識が強かった為かもしれない、とふと思う。
海戦の最中において、フレデリクはモナの勝利を志し、その胸の内は戦略とモナのことでいっぱいだっただろう。そして受けた衝撃により、強く意識し過ぎていたそれに関してだけ、記憶を失う羽目になったのだろうか。
「……モナを治めるのは、バーシェルダー家だ」
エディが、低く口を開いたシェインに顔を向ける。
「現公王は、フレデリク2世。3年前に継承したばかりの、まだ若い王だ」
「……」
「彼が、最初にヴァルスに戦を仕掛けた。だが、今は彼は行方不明……子供はおらず、王弟がいるはずだが継承したとの話は今のところ聞いていない。行方不明の王の代わりに国を治めているのは、暫定政権だ」
「暫定政権？」
「ああ。宰相や貴族らが都度会議を行い、全ての決定を行っている。彼らは王の生還を信じている。生死が明確になるまで、新王を立てる気はないと聞いた」
しかし、やはりエディはその言葉にも何の感慨を覚えるわけでもなかった。淡々と「ほう」と呟く。
「それはまた、実に信頼の篤い公王だな」
「……全くだな」
本人に言われてしまうと、いかに返答すべきか迷ってしまう。
思わず顎をぽりぽりと掻きながら適当な相槌を返すと、シェインは話を戻すことにした。……いや、進めることにした、と言うべきだろうか。
シェインにとっては、ここからが本題だ。
「では、モナの話に移ろうか」
「モナの話？」
「さっきの続きさ。視点を変えよう。……エディがモナ公王ならば、

どう行動する」
　自分の未来の行き先が、見えなくなってきた。今後の心の準備も含め、エディの考えを知っておきたい。――自らがモナ公王だったことを知った時、果たしてエディは、どのような行動に出るだろう。
「今の話の流れでは、答えに迷うな。モナ公王は行方不明だろう？」
「行方不明にならなかったとして、一度敗戦したヴァルスに対してはどう出る？」
「私なら……そうだな。引き下がることはしないだろうな」
　やはり、と胸の内が冷える。たった一度、いや、市街戦と海戦それぞれをカウントするとしても、たった二度の敗北ではフレデリクは引き下がるつもりはない。
「モナがヴァルスに攻撃を仕掛けた理由は何だ？」
「さあ。俺はそこまでは関知していないな。逆に問うが、何だと思う？」
「……各種の権利獲得と言うのが、妥当な線だろうな」
「権利とは？」
「モナは、貧しい国だろう。国力がない。私がモナ公王であれば、自分の代で国力を上げることを望むだろう。だが、ヴァルスの締め付けがある。まずは自国の負担を軽減すること、次いで、プラスとなる権利を獲得すること」
「……」
「その為には、武力を持ってヴァルスに歯向かうしか術がない。……ああ。ならばその前に、軍隊を整備する必要性があるな。モナには確か今まで魔術師部隊などはいなかったのではなかったか？ならばそれを導入せねばならないだろうな。それと、兵卒のひとりひとりの精度を上げる必要もあるだろうな。大軍を作ることが出来ないのだから……」
　余りにもフレデリクの行動を踏襲した考えに、ぞっとした。きっとこれがフレデリクの考えだったのだろう。自分の代でモナの力を伸し上げる為に継承前から準備を進め、軍法を改正して海軍を導入

し、軍隊を整備した。そして、ヴァルスに要求を突きつける為に、乗り出したのだ。

フレデリクがヴァルスに敗北したのは、フレデリクのせいではない。

海戦で両軍が海へ消えたのは飽くまで魔物のせいであるし、もしかするとギャヴァンに上陸した軍隊を指揮していたのがフレデリクであれば、制圧されていたのはこちらだったのかもしれない。

「まあ、どちらにしても一度戦を仕掛けて、すぐに引き下がることはしまいな。情勢を整えて、再戦を挑む。幸い、モナは孤軍ではない。ロドリス率いる他国がいるのだから、すぐに戦線復帰することにさほど不都合があるとは思えない」

「では、現実行方不明の今……この状況下でおぬしがフレデリクなのであれば、どうする？現状、モナが敗北後に公王が行方不明になり、暫定政権の元、モナはヴァルスに支配されている」

シェインの言葉に、エディは短く笑った。その笑みがフレデリクの笑みに思えて、シェインは僅かな緊張を覚えた。

第3部第1章第13話　火種（3）

「決まっている。ロドリスに救援させる」
「……モナに食い込んでいるヴァルスはどうする？」
「暫定政権がヴァルスに従う方針を見せているのならば、それにしばらくは便乗して援助をしてもらうのが良いだろうな。だがそれではモナは何の権利獲得も出来ぬまま、ヴァルスのモナに対する支配権のみを強めてしまったことになる。余りに馬鹿馬鹿しい。援助するだけしてもらったら、追い払うだろう」
「……」
「ロドリスを連れて、モナ公王にはヴァルスへの抵抗の意志があることを明らかにする。……ロドリスを後ろ盾にする理由は、もうひとつある」
「何だ？」
「リトリアを追い払えるからな」
「……」
「先ほど、私がリトリアを動かすのならば、モナの侵略に乗り出すと言った。であれば、クラスフェルド国王もそう考えている可能性は捨てられない。しかしロドリスとリトリアは、友国だ。真実の程は定かじゃないがな。少なくとも建前上はそうなっているはず」
「ああ」
「だったら、ロドリスを後ろ盾につけたモナには、リトリアも手出しが出来なくなる。これでモナに手出しをすれば、リトリアは裏切り者だ」
やはり、危険だ。
それがやはり、フレデリクの考えなのだ。
記憶を取り戻せば、あるいは取り戻さなくても、ロドリスの手に落ち、自身がモナ公王であると知らされれば、エディはフレデリクとしてヴァルスに攻撃を仕掛けてくる。ロドリスの後ろ盾を持って、

リトリアの干渉に圧力をかけて。
エディを、このまま放置するわけにはいかない。
ロドリスの手に落とすわけには行かない。
目の届くところにおいて、しばらくの間はその動向を見守る必要がある。
「……ところでエディ。頼みがあるんだが」
「何だ？」
「アンフェンデスまで、俺もやはり同行させてもらえないか」
いつの間にか空になっているエディのグラスにエール酒を注いでやりながらさりげなく言うと、エディが驚いたように目を見開いた。
「私は構わないが、そなたが困るのではなかったか」
「いや。ちと状況が変わった。セルジュークに向かう」
「セルジューク？リトリアか？」
リトリア王都だ。エディが驚いたような表情のままで重ねて尋ねる。シェインは笑いながら、手首のリミッターを示した。
「このままでは不自由でならない。外せそうな人間の心当たりを思い出した。クラリスが俺の代わりに俺の身内と連絡を取ってくれる。明後日、戦争の終結と平和を祈る巡礼団がエルファーラへ向けて発つことになっているそうだ」
クラリスは元々そのメンバーに含まれてはいなかったのだが、シェインの頼みを受けて共にタフタルを発つことにしてくれた。
「リトリアに……？」
問いかけたエディは、その質問を最後まで口にはしなかった。途中で気がついたのだろう。自分で回答を口にする。
「エルレ・デルファルか」
「その通り。幸いにして俺は、卒業生だ」
恩師の中には、リミッターの解除が出来る者もおろう。エディについていく口実としても、方角は悪くない。アンフェンデスへ向かう道すがら、ソフィアの目的如何でまた、いろいろと行動方針を定めることも出来よう。

「エルファーラの司祭や神官にはリミッターの解除は出来ぬゆえな。恩師を頼る方が確実と考えた」
果たしてこの選択が、吉と出るか、凶と出るか。
「ソフィアが喜ぶ」
厄介なことに、繋がらなければ良いが。

◆◇◆

「～♪」
小さな歌を口ずさみながら、マーリアはとたとたと庭に臨む広い窓に向かう。さんさんと降り注ぐ陽の光に目を細めながら、大きなガラスに手を掛けた。
ハーディン王城シェンブルグ館――ロドリス宮廷魔術師の、居館だ。
フォグリア郊外のセラフィの館からマーリアが移って来たのが、一昨日。
戦に追われて帰る暇が一層ないセラフィが、マーリアをシェンブルグに移すことに決めたのだった。ここならば、夜通し執務室に籠もることになっても、日に数度は顔を覗かせることも可能になる。
だが、ラルを連れて来ることが出来なかった為、やはりマーリアはひとりだった。代わりに小さなゴーレムをくれるとセラフィは言ったが、まだその用意が出来ていないらしい。
シェンブルグ館は、豪奢だった。
これまでのセラフィの館が貴族としては異質なほど質素だった為、その余りの差異にマーリアは未だに戸惑わずにいられない。一昨日はセラフィがそばにいてくれたからともかく、昨日などは余り動いてはいけないような気がして思わず部屋でじっと動けなかった。
窓を開けると、初夏の風が優しく吹き込んで来る。マーリアの枯葉色の髪をふわりと巻き上げ、マーリアは機嫌良く笑顔になった。
（お外に、出てみたいな……）

セラフィには、むやみに館の外へと出ないように言われている。けれどここにはラルもいないし、陽射しの注ぐ外の柔らかな風の中はいかにも気持ち良さそうだった。

庭先に出るくらいだったら、怒られないだろうか。

迷って窓から身を乗り出したマーリアは、下のフロアに大きなテラスがあることに気がついた。

テラスならば、外に出ていることにはならないのではないだろうか。そう考え、部屋の窓を開け放したままで身を翻す。広い廊下を抜けて、美しい螺旋階段を降りると、先ほどいた部屋の真下の部屋に辿り着いた。

本来ならば使用人が幾人もいるだろう宮廷魔術師のこの邸宅にも、人の気配は少ない。

さすがに王城の管理下にある屋敷であるから使用人がいないとは言わないが、それでもセラフィが可能な限り人払いをしているらしく、屋敷の中は静かだった。

広い部屋を通り抜け、これまた大きな窓に手を掛ける。そこはそのまま庭先のテラスへと続いており、マーリアはそっとテラスへ降りた。

宮廷魔術師の邸宅に与えられた庭もまた、広い。綺麗に植え込まれた木々や、風に揺れる花々に目を細め、マーリアはテラスを端まで行ってみると、手摺りに寄りかかって身を乗り出した。

目に鮮やかな、丁寧に刈り込まれた芝の緑に目を細める。風は一層心地よく、このまま眠くなってしまいそうだ。

テラスの中に、ゆったりとした籐の椅子を見つけ、マーリアはそれに腰を下ろしてみた。窮屈な靴を脱いで、椅子の上に長く横になってみる。太陽が眩しく、閉じた瞼の裏までが黄色い。

「♪～～」

気持ち良くなってきたマーリアは、椅子の上に寝そべったまま、目を閉じて再び歌い出した。歌うのは好きだ。気持ちが癒される気がする。ここに、ラルがいてくれたら良いのに。

ぱたぱたと足を軽く動かしながら歌う声の合間に、しゃらしゃらと金属音が混じる。マーリアの足についているアンクレットが、ぱたぱたと動かすその動きにあわせて音を立てているのだ。それがまた気持ち良く、マーリアは小声で歌い続けた。アンクレットは決して誰にも……それこそ、シェンブルグの使用人にさえも見られてはいけないよとセラフィに言われているが、今は誰もいないのだし、問題ないだろう。

「ワンッ」

そのままとろとろと眠り込みそうになっていたマーリアを、不意に聞こえた犬の声が現実に引き戻した。はっとして顔を上げると、庭先に真っ白い綺麗な犬が入り込んでいるのが見えた。まさか野良犬が入り込めはしないだろうから、誰かが飼っているのだろうか。ぱたぱたと尻尾を振りながら、品の良さそうなその犬は、マーリアを誘うように見つめていた。その顔が「遊ぼ」と言っているように思えて、マーリアは裸足のまま、テラスを降りた。

「お……で」

庭先に下りてみると、少しちくちくするけれど、それでも柔らかい芝は裸足の足に心地良い。白い犬は、マーリアに呼ばれるまま、こちらへ歩いてきた。頭を撫でてやる。

「マー……リア、よ」

「ワン」

そのままその場にしゃがみ込む。犬はぱたぱたと尻尾を忙しく振りながら、こちらも機嫌が良さそうに舌を出してマーリアに鼻先を近づけた。

人懐こい犬だ。暇を持て余していたマーリアは、すぐにその犬と遊ぶことに夢中になった。犬と戯れては、ころころと芝生の上を転がる。のどかで、気持ちの良い昼下がりだった。

「あはッ……くすぐ、た、よー」

けらけらと笑い声を上げて、芝生の上に寝転がる。覆い被さるように上から覗き込んできていた犬が、不意に、何かの気配に気づい

たように耳を立てて顔を上げた。
「ど、た、の？」
尋ねながら、マーリアも体を起こす。犬の視線につられて顔を向けると、庭が途切れて整備された渡り石の奥、シェンブルグの敷地に入る門のそばに人影があった。
（……？）
マーリアは、この城の人間をセラフィとグレンしか知らない。佇んでこちらに視線を向ける美しい女性が誰なのかなど、知るすべもなかった。
（綺麗なひと……）
まるで、物語の中のお姫様のようだ。
絹でしつらえたような長い黒髪は艶めいて腰に届き、花飾りや宝石が飾られている。身に纏ったドレスはバランスの良いボディラインを象っていた。長い睫毛を瞬いてこちらを見ていた彼女は、やがて真っ赤な唇を開いた。
「どこの子かしら」
その言葉がマーリアに向けられたものと気づき、マーリアは体を硬くした。
セラフィとグレン以外の人間と口を利くのが、マーリアは恐ろしい。上手く話すことが出来ないマーリアに対して、周囲の人間の視線は冷たかった。口を開けば、「頭がおかしいのかしら」と言う言葉が返ってくる。
無言のまま芝生に座り込んでいるマーリアに、彼女は少し迷うような顔つきをした後、門から中に入ってきた。衛兵も特に咎め立てる様子はないようだ。障害なく庭先に入り込んだ彼女は、マーリアに近付いてきた。
「どこから、迷い込んだの？ここは子供が遊んで良い場所ではないわ」
彼女が、王の寵姫アンドラーシであることを知らないマーリアは、無言のまま彼女を強張った顔で見つめていた。一方アンドラーシも、

マーリアをここへ連れて来たのが他でもないセラフィであることに考えが至らなかった。

なぜなら、アンドラーシの目には、マーリアは貴族階級の人間とはとても映らなかったからだ。貴族の女性は、幼くても髪を長く伸ばす。その髪を宝石や花で飾り、美しく結い上げる為だ。マーリアの肩口の長さの髪は考えられなかったし、身につけている衣服もドレスではない、ひどく質素なものだった。どこか痩せて貧相な感じのする容貌も、ハーディン王城にいて良い種類の人間とは思いにくかったのだ。

無言でアンドラーシを見詰めるマーリアに首を傾げながら、アンドラーシはふと、彼女の裸足の足首に光る物に気がついた。アンクレットだ。彼女にそぐわないほど質の良い物に思えて、目が留まった。嵌め込まれた石も、本物のようだ。宝石を繋ぐ金のプレートには、何かが彫りこまれている。

アンドラーシの視線に気づいたマーリアがはっと足を引っ込めるが、その模様はアンドラーシの目にしっかりと入った後だった。

（……？）

見覚えがあるような気がする。

だが、それが何だったのか思い出せずにいると、マーリアの隣にじっと座ったままだった犬が、また「ワン」と鳴いた。

「アンドラーシ様」

その声に、振り返る。

途端、アンドラーシの心臓がぎゅっと掴まれたようになった。

「セラフィ」

「セ、フィ……」

同時に、マーリアが呟く。そのことに驚いているアンドラーシの前で、門から庭先に入ってきたセラフィがマーリアの前にしゃがみ込んだ。

「靴は、どうしたんだい」

「あ、ち」

「駄目じゃないか。外を歩く時は、必ず靴を履かなけりゃならない。育ちの悪い子だと思われてしまうよ？ここは街じゃない。陛下のいらっしゃるお城なんだから」

「ごめ、さ、い」

どういうことなのだろう。

状況が良く読めずに、アンドラーシは無言でセラフィの背中と立ち上がる少女を見つめていた。セラフィは、少女の衣服についた芝を払ってやると、そっとその体をテラスの方へと押し遣った。マーリアのそばに座っていた犬は、名残惜しそうにぱたぱたと尻尾を振っていたが、やがて飽きたように庭の隅の方へと歩いていくとそのまま外へ出て行ってしまった。

「今は、中に入っておいで。足を洗って、お部屋に戻るんだ」

「おこ、て、る？」

たどたどしく尋ねる少女に、セラフィが優しく首を横に振る。

「怒っていないよ。僕も、後で行くから。部屋に戻っておいで」

しょげたように頷くマーリアが、テラスから靴を手に屋敷の中へと戻っていくと、それを黙って見送っていたセラフィがアンドラーシを振り返った。

「このようなところで、何をなさっておられるのです？」

「……あの」

これまで見たことがないほどの冴え冴えと冷たい顔つきに、アンドラーシは怯えた。怒っているのだろうか。セラフィに恋心に似た感情を抱くアンドラーシは、セラフィに嫌われることが怖い。他の男にならばもっと高慢に振舞うことも出来ように、セラフィに対してそうすることが出来ない。

「あなたに、会いに……」

それは、半ば本当ではあるが、半ば嘘でもあった。

セラフィが、シェンブルグに女性を置いているらしいとの噂を聞いて、真偽を確かめに来たのだ。

それがまさか年端も行かない、貴族の娘などには到底見えない彼

女と繋がらなかっただけのことである。嫉妬に胸を焦がした彼女の思考回路は、持っていた情報と目の前の現実を上手く繋げ合わせることが出来なかった。

アンドラーシの返答に、セラフィは冷たい目つきのままでため息を落とした。それから腕を組んで、テラスの方へとちらりと視線を向けると、アンドラーシに視線を戻す。

「それだけですか」

「……ごめんなさい」

無言で答えるセラフィに、アンドラーシは恐る恐る口を開いた。

「今の少女は？」

「……私の、家族のようなものですよ」

「家族？」

「ええ」

目を瞬いているアンドラーシに、セラフィは少し、何かを迷うような考えるような顔つきをした。それから、アンドラーシを手招きする。

「え？」

「お話が。……こちらへ」

庭は、ぐるりと背の高い木で覆われている。そしてそれとは別に、ところどころに陽射し避けの大き目の木が植えられていた。その木陰へと手招きされるままにセラフィに従ったアンドラーシは、次の瞬間、セラフィの腕の中に抱き締められていた。

（え……？）

常日頃の淡白な対応からは考えられない出来事に、アンドラーシは状況が理解出来ずにただ目を瞬いていた。その最中にも、体だけは状況をわかっているように鼓動が加速する。

「アンドラーシ様」

「はい……」

耳元でセラフィの声が、名前を呼ぶ。早過ぎる鼓動に呼吸さえ乱れながら、アンドラーシは掠れた声で答えた。

次第に、自分の身に起こっていることを脳が理解し始める。――
今、自分は、恋焦がれてきた宮廷魔術師に抱き締められているのだ。
彼女にとってはその事実だけで頭が飽和し、その前後の繋がりなどどうでも良くなった。
「何か、ご覧になりましたか？」
「……え……？」
何か……何だろう。
現実感のないぼんやりとした頭のまま、セラフィの言葉の意味を精一杯考える。
何かを見たか？――何のことだろう。犬と戯れる少女の姿を見ただけだ。そう思ってから、一瞬何かが引っ掛かった。
（何か……）
見たような気が、しはしまいか。
アンドラーシの表情を素早く読んで、セラフィがその唇に唇を重ねる。
夢にまで見たセラフィの胸に抱き寄せられ、重ねられた口付けに、アンドラーシは夢見心地になった。彼女にとって甘やかな短い時間の後、唇を離したセラフィの美しい顔を間近でうっとりと見上げる。
「アンドラーシ様」
「はい……」
「全て、２人の秘密にしませんか」
「全て……？」
とろんと呟くアンドラーシに、セラフィが天使のような笑みを浮かべて覗き込むように頷いた。
「そうです。……あなたがここに来たことも、ここで起こったことも――ここで、見たものも」
「秘密……」
「あなたと私の、２人だけの秘密です。……私の、お味方下さいますか」
ずっとつれなくされ続けてきたのだ。そう言われて、恋焦がれる

セラフィに逆らうことなど、アンドラーシは露ほどにも浮かびはしなかった。

「はい……」

「……約束の、印に」

駄目押しのように再び重ねられた唇に麻痺したアンドラーシの脳裏には、既に、マーリアのアンクレットなど片鱗さえも残ってはいなかった。

第3部第1章第14話　敵襲（1）

ロンバルト公国先王フェルナンド7世とその妻アンジェリカ公妃は、非常に仲睦まじい夫婦だった。

ゆえに、今まで先代が使用していた公王の執務室のテラスには、アンジェリカのスペースとして僅かな庭園と花畑、花籠や籐の椅子が設えられている。

現ロンバルト公王として執務室を占拠しているレドリックは、執務机に向かうゆったりとした椅子に腰を下ろして座面に乗せた足の片膝に肘をつきながら、窓の外に広がるアンジェリカの庭園に苦い視線を送っていた。

レドリックにとって今後の展開として望ましいのは、ロンバルトは敗戦国として今後の戦況を静観していることである。理由としては、やはり表立ってはヴァルスにロンバルトの――レドリックの叛心を糾弾されたくなかった。戦況がどう転がるか確定しているわけではない今、万が一ヴァルスが勝利をもぎ取った場合に苦しい立場に置かれることになるのは、避けたい。このままロンバルトは戦線離脱を図り、ヴァルスの敗北が確定して後、レドリックは正式にロンバルトを戴冠、ひいてはヴァルス王女ユリアと婚姻関係を結び、ヴァルス王冠そしてアルトガーデン帝冠を手に入れる。

いや、ヴァルス王冠に関しては、ユリアを女王として戴冠させても構わないのだ。但し、その実権はあくまでも掌握するつもりでいる。

いずれにしても、レドリックの裏切りが公になった時に厄介ごとに繋がらないとは言えない。

（ヴァルス王女か……）

レドリックは弟レガードと違って、ユリアと深い面識があるわけではない。だが数度見かけた印象では、大した美少女だった。妻として迎えるに不満はない。恋愛感情や愛情を抱くことはないだろう

が、自らの装飾品としては申し分ない女性だろう。
問題は、今現在、レガードの身柄がどこでどうしているのかだった。ヴァルスが敗北しようが、レガードが生きている限り、ロドリスを背後につけているとは言えヴァルス王家に食い込むことは難題だ。レドリックの知る限り、未だレガードの抹殺に成功したとの話はない。ロドリスも意外と無能である。
渋面でテラスの籐の椅子を見遣って、レドリックはアンジェリカの処遇に考えを馳せた。フェルナンドが戦地で戦死してしまっている為、身代わりとしてアンジェリカを公開処刑することでロンバルトの制圧を知らしめるべきとの意見も上がっている。だが、レドリックはその意見に賛成することが出来ずにいた。親愛の情などでは無論、ない。処刑してしまった後から使い道に気がついたところで、手遅れなのである。その辺りを吟味してからでないと、結論を出すことが出来なかった。そしてレドリックには、ひとりで解を見つけ出せるほどの頭脳がない。片腕となるほどの人材に、レドリックは恵まれていなかった。
ロンバルト王都ウォルムス陥落から一月……光の月も半ばに差し掛かり、ウォルムスを占拠していた連合軍は、ヴァルス侵攻の動きを開始している。
ナタリア・バートの3万弱の軍がウォルムスから西南へ移動、現在ヴァルス西北のラルド要塞を目指して進軍し、一方でロンバルト東側のヴォルガ要塞とニールブラウン要塞に逗留中のロドリス軍3万5千がヴァルス北東のリミニ要塞を目指していた。ロドリス北部にあるサーディアール要塞に到着したリトリア軍2万は、このまま南下を続けてナタリア・バート軍と合流し、ラルド要塞を攻城する手はずとなっている。
ヴァルス西北端の港街フォルムスにおけるヴァルス軍とナタリア軍の攻防戦は、次第に激化しているようだった。避難する人民が、エルファーラに辿り着く前に魔物に襲われて死亡すると言う事故が相次いでいるとの噂もある。ギャヴァン沖を船が航行できない今、

ヴァルスは海軍の増援をすることが出来ず、陥落まではあと一歩だろうとの見方が日々強まっていた。

そしてロンバルト公国ヴィルデフラウ城内の『清掃』は、ほぼ、完了している。

親ヴァルス派――言い換えればレガードを慕う連中は、城内から一掃した。表立っては言わないが、彼らの中にはレガードのロンバルト継承を望む声もあると言う。そして兄より人望の篤い弟を信奉する連中は、熱心だった。ゆえに生かしておくことは、後々の憂いを残すことになる。

但しその中でも、こちらに翻りそうな者に関しては地下牢に幽閉、もしくは監視をつけて自宅に軟禁と言う形を取っている。味方はひとりでも多いに越したことはないのだから。

（どうすっかな……）

ラミアからはまだ、良い報告が上がって来てはいない。だが、このままヴァルスの宮廷魔術師が追撃を逃げきってヴァルスに戻ってしまえば、己を拐かしたのが誰なのかを隠し立てしてやる理由はないだろう。ヴァルスは、ロンバルトへの制裁を考える。と言って、連合軍と足並み揃えてヴァルスへの攻撃に転じるのは現状、無理だ。

ぎしぎしと椅子を無意味に揺らしながら当て所なく考えを彷徨わせていると、不意に扉をノックする音が聞こえた。顔を僅かに傾けながら返事をすると、開かれたドアの向こうに顔を覗かせたのは連合軍将軍アレックスだった。

「何だ」

アレックスは、レドリックがロドリスと手を結んだこと、そして敗戦国となったロンバルト公家であることへの侮蔑を隠そうとしない。それがレドリックにはひどく気に入らず、皇帝位を継承した暁には目にものを見せてくれると思っている。

「ハーディンからの使者ですよ。あなたの動向の把握と身辺の護衛の為に、そばに控えることをお許し戴きたい。……エレナ殿」

体の良い監視と言うわけか。レドリックはだらしなく椅子に掛け

たままで、アレックスの方向に目を眇めた。その慇懃無礼な態度とどこか人を小馬鹿にしたような顔つきが、いちいち気に障る。
「はい。……失礼致します」
そう言って入室して来たのは、女性だった。思いがけず片眉を軽く上げて、来客に目を向ける。背は高く、女性にしてはがっしりとした体つきをしているようだ。フル装備に身を固めていると言うことは、やはり兵士なのだろう。
女性は一礼して片膝をつくと、レドリックに向けて名乗った。
「ロドリス王国ハーディン王城より参りました近衛警備隊第1小隊隊長エレナ・セル・ド・ロシェルと申します。この度はレドリック殿下の身辺警護を言い渡されて参りました。おそばに控えることをお許し戴きたく存じます」
「許すも許さねぇも、関係なく付きまとうつもりだろう。いーさ。好きにしろよ」
「……は。ありがたく存じます」
レドリックの言に対する感情を表情に滲ませることなく、エレナは深く叩頭した。一応は近衛警備隊隊長を名乗るだけあるだろうか。アレックスのように不快にさせることは、とりあえずのところはなさそうである。
何となくそう見て取ってから、レドリックは椅子の上に体を起こした。エレナに問いかける。
「で？いきなり身辺警護ってのは、どんなわけだ？……ああ。そっちの連合軍将軍。お前はもう下がれ」
ロドリスの将軍職を全く尊重するつもりのないその態度に、アレックスは微かに顔を顰めながら、口を開いた。祖国を売り渡した男であろうが、敗戦国であろうが、一応はロドリス王国と手を結んだ公族である。アレックスより身分が高いことに違いはない。
「お言葉ではありますがね。私の方からも少々殿下にお話がございます。それが済みましたら退室させて戴きますとも」
邪魔臭い無頼漢には、さっさと消えて欲しいのだが。

内心に留まらず、実際に舌打ちを口にしながら、レドリックはエレナに立つように言い渡した。
「そっちの椅子にでも座ったらどうだ？」
「いえ。それは致しかねます。このままで」
「で？」
「……は」
レドリックに言われたそのままに立ち上がったエレナは、短く問うレドリックに無表情のままに答えた。
「確認させて頂きたい点がございます」
「……何だ」
「レドリック殿下は、ヴァルスの宮廷魔術師の身柄を預かっておられたかと存じますが」
今度は内心のみでそっと舌打ちをしながら、レドリックはエレナを見返した。
「そうだな」
「現在、ヴァルスの宮廷魔術師の身柄は、如何様（いかよう）になっておりますか」
「……」
「先日、レドリック殿下は、私兵を動かしたかと存じます」
「……」
「その意図は」
「それを聞いてどうする？」
忌々しげに顔を顰めたレドリックに、エレナは静かに口を開いた。
「誤解なさいませぬよう。殿下の御身を案じておりますゆえでございます」
「どういう意味だ？」
「もしも殿下が私兵を動かされた理由が、ヴァルスの宮廷魔術師の逃亡などである場合」
「……」
「殿下の身に、不都合が生じはしまいか、と」

ちらり、とレドリックは視線を上げた。エレナが真っ直ぐにその目を見つめ返す。
「……どういうことだ」
「ヴァルスの宮廷魔術師がヴァルスへ舞い戻った場合、殿下はヴァルスからその身柄を狙われる可能性がありはしますまいか」
「……」
「ヴァルスにとっては、些か不満を感じる事態であることは、ご承知かと存じます」
ご不満なのは確かだろう。現状、唯一の味方国であったはずの後継者が率先して裏切っているのだと知れば、ご不満どころか怒り心頭のはずである。レドリックは鼻の頭に皺を寄せながら、目を細めてエレナを見返した。
「さすれば、ヴァルスが殿下の御身に害を加えようとすることは考えられます。私の派遣は、それを案じてゆえのこと。殿下の安全を、不肖私がお守りさせて戴く所存にござります」
「ヴァルスが俺の暗殺を目論むだろうと……こういうことか？」
立ったままで深く頭を下げたエレナを見遣りながら、すっと背筋が冷えた。――暗殺。全く、その通りだ。ヴァルスはロンバルトのみならず、いや、レガードを慮ってロンバルトではなくレドリックに制裁を加えようとする可能性がある。無言で一層頭を下げたエレナの態度が、その可能性を示唆していた。
「再度、確認致します」
無言に陥ったレドリックに、エレナが窺うような視線を投げかけながら、改めて問いかける。
「ヴァルスの宮廷魔術師は、殿下の監視下を離れて逃亡中なのですね？」
「……ああ」
「であれば、ロドリスからも追撃の手を向けさせましょう。アレックス将軍。手配を」
「承った。……つきましては、殿下」

エレナの言葉を受けて頷いたアレックスは、続けてレドリックに顔を向けた。何やら威圧的なものを感じて、レドリックは内心微かに怯んだ。
「何だ」
「ロンバルトの軍の、再編成を」
「……な」
アレックスの話は、どうやらそれらしい。対ヴァルスへ向けての、ロンバルト出撃の要請だ。
咄嗟にレドリックは、椅子から立ち上がっていた。先ほどちらりと頭を過ぎった考えではあるが、実際問題、それは無茶だ。
「馬鹿言えッ」
ロンバルトは、つい先日までヴァルスと足並み揃えての友軍だったのだ。兵士たちは連合軍との実戦も交えている。幾らなんでも一朝一夕で手のひらを返したように、共に戦ってヴァルスに仕掛けるなど出来るはずがない。統制は取れない。
「今すぐになどと、無茶な話だッ。ロンバルトには親ヴァルス派が多い。昨日今日でいきなりヴァルス軍に仕掛けることなど、兵たちが納得しない。静観するならばまだしも、攻撃を仕掛けさせるのは現状不可能だ」
「何とかなさって下さい」
声を荒げるレドリックをどこ吹く風と受け流し、アレックスは薄ら笑いを口に刻んだ。
「戦況は既にヴァルスにとって向かい風となり始めている。ここで、唯一の味方国であったはずのロンバルトがヴァルスに進軍してくれば、ヴァルス兵の気力を根こそぎ削ぐことが出来ましょう。良いチャンスだ」
「だからと言ってッ……」
「今日明日でなくとも、結構。但し、このまま静観の姿勢を取るおつもりだけはなきよう、手元に残った部下を使ってロンバルト軍の再編成とヴァルス進撃をご考案戴きたく」

言葉に詰まるレドリックに、アレックスは薄笑いを浮かべたままで念を押すように、繰り返した。
「再度申し上げます。ロンバルト軍の再編成を、早急にご検討下さいますよう。……我々と同じ目的を掲げるならば……」
「……」
「今一度、殿下の誠意と、実のある行動を。……期待、しておりますよ」

◆◇◆

アンフェンデスは、ロドリスとリトリアの国境間近にある。アンフェンデスまで辿り着ければ、バートを僅かに挟んで北はもうリトリア……そこから察するに、リトリア貴族であるソフィアの目的は正確にはアンフェンデスではないのだろうとシェインは踏んでいる。
ソフィアは人に会いに行くと言った。そしてアンフェンデスにいるわけではない、とも。目的は、リトリアへの国境越えだろう。リトリアの何者かに追われている彼女は、恐らくリトリア国内を移動するよりはと一度ロドリスへ入り、ロドリスを経由して横断し、リトリアの目的の街へ向かうつもりなのだろうと推測がつく。しかし、まだそれについての説明は、ない。
タフタルからアンフェンデスまでは、通常ならば徒歩でおよそ1週間ほどの行程であると聞いている。直線距離にすればそれほどの距離でもないのだが、途中に湿地帯や、やや険しい岩窟地帯を通過するがゆえに移動に多少の時間を要する。
シェインの同行について、ソフィアは快く承諾をしてくれた。むしろ、願ったりと言うような様子だ。やはりエディと2人では、心許ないのだろう。味方は多いに越したことはないのである。
共にアンフェンデスへ向かうことに決まり、魔物の出現が多いながらも4日目には中間地点と言える湿地帯に差し掛かっていた。続いていた草原が途切れ、荒れ放題と言うような様子で草木が生い茂

り始め、やがて足元がぬかるみ始める。
「やっぱり、迂回路を取った方が良かったんじゃないのか！？」
垂れ下がってくる木々のせいで、昼尚暗い湿地帯の中空には、ふわふわといくつもゼリー状のものが浮遊している。グレルと言うクラゲのような姿をしたその魔物は、複数の触手に毒を持つ。
襲い掛かってくるグレルの1匹を剣で真っ二つに切断しながら怒鳴るシェインに、エディの声が答えた。
「戻るか？」
「今更か！？」
「この状態が続くのならば、戻ることを検討した方が早いかもしれないな」
足元の泥濘（でいねい）は、次第にひどくなっている。時折足を取られながらも、剣を振るってはグレルを片付け、のろのろと先へ進んでいく。
「こんなところで、一通りは片付いたか？」
ソフィアがまとめて2匹のグレルを薙ぎ払い、中空に視線を彷徨わせて呟いた。見回す周囲にはとりあえず、魔物の姿は見えないようだ。
「ああいう小粒な魔物は、邪魔臭いな」
「と言って大型に出て欲しくはないのだが」
「それは、そうだけど」
咎めるように釘を刺すシェインに、唇を尖らせて見せながら、ソフィアは剣を拭って鞘に収めた。3人とも既に足元はどろどろである。
「これ以上深くなると、ちょっと厄介だな。脱け出せなくなるかもしれない」
「やっぱり戻ろう」
エディの言葉に従って、方向転換をする。今来た道を戻りかけて、不意にソフィアが軽い足取りで小走りに跳ねた。
「あ、ねえ」
「え？」

「ところどころ、足場がある」
「足場？」
ここの湿地帯は、場所によって深さやぬかるみがまちまちだ。急にふくらはぎ辺りまで浸かってしまう時もあれば、足首までで済むこともある。だが、そう言うソフィアはまるで堅い地面にいるように、軽々とステップを踏んで見せた。
「この……ところどころに、この草が生えているでしょう？」
「どれ……ああ、この紫の斑点のある葉か」
「そう。これの生えているところってのは、ぬかるんでいないみたい。だから、この草を目印に……」
言いながらソフィアは、再びステップを踏むように軽々と草から草へ、飛び移った。わりと頻繁にある草なので、飛び石程度には足場を確保することが出来る。
「先ほど気づくべきだったな」
「今気がついただけでも感謝してよ」
「それもそうだ。感謝しよう」
一旦、泥濘がひどい地帯を抜け出して、それぞれ泥を吸って重くなった足を顰め面で簡単に払うと、ぬかるんではいるものの、堅いと言える地面に戻って再び歩き出す。歩き出しながら、シェインは後方を振り返った。
「だが、あの『飛び石』が続くのなら、戻らずとも進めるのではない……」
シェインが言いかけたところで、ふと前を歩くエディが動きを止めた。そのまま、何かを探るように前方を見据えている。
「？　どうし……」
問いかけて、シェインもその理由に気がついた。何か音がする。草木を踏み分ける音――馬の、蹄だ。
「……どうする」
エディが前方に視線を定めたままで、短く問う。視線を定めているとは言え、鬱蒼とした暗い森の中だ。その先が見えているわけで

はない。けれど聞こえる物音は、それほど遠くもない。
「厄介ごとには巻き込まれたくないな」
答えながら、シェインは内心に微かに湧いた緊張を隠しきれなかった。まさか、シェインを追うレドリック配下の者か。追われる覚えがあるだけに僅かに心を緊張させていると、隣に並んだソフィアもまた、息を飲んだ。
「装備を身につけているな。金属音がする」
微かに風に乗る音は、馬の蹄や嘶き、そして金属音。だが、聞く限り、フル装備と言う感じでもなさそうではあるが……。
「とりあえず、こっちへ向かって来るようだな。面倒ごとは避けたい。出会いたくないから、やはり戻るのはやめて進もう」
急遽、方針と進路を１８０度戻して、今折り返してきたばかりの道を再び先へ進む。自然と早足になるが、後方の物音は騎乗しているのだから、次第に間合いは近くなっていった。内心、焦りを覚える。
もしもシェインを追う者であれば――シェインの素性がソフィアとエディにバレることになりかねない。それにはまだ時期尚早と思えたし、加えてその中にラミアがいるとすれば、かなり厄介である。魔法を封じられたままでは、勝算がない。
一方で、ソフィアの方もまた、緊張した面持ちをしていた。ソフィアはソフィアで、追われる心当たりがある。飄々としているのは、記憶喪失の男だけである。
草木が茂る暗い森とは言え、１本道を辿っていてしかも後者の方が進行速度が速いとくれば、距離が縮まらないわけがない。やがてこちらから視認出来る位置まで姿を現した一団は、シェインたちの姿に目を留めたようだった。
ちらりと振り返って後ろの集団の姿を確認すると、ひとまずシェインはほっと息をついた。とりあえずのところは、ラミアの姿はないようだ。
人数は、８人。フル装備で身を固めているわけではない。どちら

かと言えば、軽装備と言える。

第3部第1章第14話　敵襲（2）

「お前たちッ」

後方から、怒声が飛ぶ。先方が何者であるとしても、まだこちらの正体までは把握していないだろうが、ともかくも威圧的にこちらを呼び止める声に、一応はシェインたちも足を止めた。走って逃げれば、却って厄介ごとに繋がりかねない。

「お前たちは、何者だ！？」

言いながら、近付いてくる。

言葉を発しているのは、一際軽装備の男だった。顎までの長さの青銅色の髪、顎鬚を僅かに生やした顔は、恐らくは４０代半ばと言ったところだろうか。戦闘を生業に生きている人間のようには見えない。むしろ、その類の人間を屋敷の奥から顎で使う――貴族階級のように、見える。

当面、シェインに心当たりのある顔ではなかった。そのことに安堵を覚えながらも、レドリックがどのような手段を使ってシェインのヴァルス帰国を阻もうとするのかが予想出来ていないだけに、気を緩めるわけにはいかないと言うのが正直なところである。

こちらも彼らが何者かわからないので、余り距離を詰めたくない。じりじりと後退しながら、シェインは口を開いた。

「しがない旅人さ」

おどけて肩を竦めながら、男の放つ言葉が最初からヴァルス語であったのが奇妙だと言う気がした。ここはロドリス国内、であれば誰かもわからぬ相手に誰何するのであれば、自然とロドリス語が出るのではないのだろうか。それをこちらが理解しないと見てから、共通語であるヴァルス語に切り替えるのならばわかるのだが。

そう首を傾げていると、エディとシェインの隙間から、ソフィアがそっと顔を覗かせた。そしてそれを見た途端、『顎鬚』の目付きが変わった。同時に、ソフィアが背後で間合いを取って剣を抜くの

がわかった。
「どうしたッ!?」
どうやら、『当たり』はソフィアの方だったようだ。ソフィアの動きにそのことを察知して、剣を抜き放ちながら、シェインは短く怒鳴った。
「『わるもん』さッ」
答えながら、ソフィアも腰を低く落として剣を構える。その前方で、『顎鬚』の背後に控えた男たちも騎乗したまま剣を放った。
「ソフィア・カテリーナ・ヴァン・デ・ファルネーゼ、様でございますな?」
男の言葉に、ソフィアは無言だ。だが、ちらりとエディがソフィアに視線を走らせた。それからやはり何も言わずに、前に向き直る。
「ようやくお会いすることが出来まして、光栄でございます。……悪いようには致しませぬゆえ、どうぞこちらへいらして下さい」
尚も無言のソフィアに、背後の男たちがじりじりと馬を進めた。こちらを取り囲もうとするような動きを見せる。
「さもなくば、少々手荒な手段を選択せざるを得ませぬな」
「そうでなくとも、最初からそのつもりだろう。無駄口はよしたらどうだ?」
騎乗した相手が、8人。
内、『顎鬚』は部下を使うつもりだろうから数に入れないとしても、7人。苦しいところだ。
「どうする、エディ」
剣を構えながら、後退する。エディもちらりとシェインに視線を走らせると、再び男たちに視線を定めながら、吐息をついた。
「勝率は低いな。逃げるしか、ないだろう」
「同感だ。――ソフィア、走れッ」
シェインの怒鳴り声を合図に、3人は体を翻した。戦って勝算はなくとも、逃げて逃げ切れる可能性ならば、ある。後方からは、地を揺るがすような重い振動と音が湧き起こった。

「逃すな、追えッ」
8騎の馬が猛進して来るのだ。その地鳴りは凄まじく、それだけでも逃げる足に力が籠もると言うものだった。
だが。
「何ッ……」
「うわあッ」
不意に、地響きが止むように消え、代わりに驚愕の声と荒く泥濘を跳ね上げる音が聞こえた。振り返ると、どうやらうまい具合に泥濘にはまり込んでくれたようだ。彼らはシェインたちのように、僅かなスペースの堅い足場を渡ってくるわけにはいかぬし、何より馬の重量は人間よりも遥かに泥濘に深く沈み込む。
「くそ、待てッ」
そう言われて待つ馬鹿がどこにいるのだろう。オリジナリティの低いセリフに失笑しながら泥濘を駆け抜けると、距離を開く為にしばらく走り続けた3人は、やがて、足を止めた。
「ぜぇ……ぜぇ……」
「はあ、はあ……」
「もう、大丈夫、かな……」
「さ、あ、な……。でも、馬、を使って、あの泥濘を、渡りきる、のは、至難の業だと思うぞ……」
「そうだよね」
どうせ全身、泥だらけである。遠慮することなく各々地面に座り込み、木にもたれかかって、少しの間、呼吸が落ち着くのを待った。
ややして、ソフィアが立ち上がる。
「行こう。あんまりぐずぐずして、また追いつかれたらたまらない」
「……ああ。そうだな。エディ、行けるか」
立ち上がって、のろのろと歩き出す。足場は未だぬかるんではいるが、沈んで纏わりつくほどではない。暗い木々の隙間からも、一応は魔物の姿もないようだ。
「ソフィア」

「ん」
「あれは、おぬしを追って現れたな？」
「……」
がさがさと先頭を歩くソフィアの背中に、問いを投げかける。その問いに、ソフィアはしばらくの間、無言だった。
シェインも、重ねて問うことはせずに、黙って歩いた。歩きながら、思考を廻らせる。
ソフィア・カテリーナ・ヴァン・デ・ファルネーゼ――それが、ソフィアのフルネームのようだ。だが、シェインにはファルネーゼ家と言うのがどのような家なのかを知らないし、追ってきた男が何者なのかもわからない。ただ、『顎鬚』は貴族階級に見えたし、ソフィアの命を狙っていると言うよりはその身柄を欲しているかのように見えた。
一体、ソフィアは何者で、何を知っているのだろう。
「リトリアからわたしを追って来た一味の男だ」
やがてソフィアが、前を向いたままでぽつりと口を開く。その声にはっと顔を上げると、ソフィアは微かに顔を振り返った。
「言ったろう。わたしは知ってはならぬことを知ってしまったと」
「……ああ。そう言っていたな」
肯定するシェインの視界の中で、ソフィアはふっとどこか皮肉げな、自嘲的な笑みを横顔に浮かべて、再び前に顔を戻した。
そして、続けた。
「リトリア内部は、分裂している」
「……何？」
「リトリア王城の派閥抗争が、激化中だ。……リトリア国王の足元には」
「……」
「クラスフェルド王の足元には、既に、火がついているんだ」

◆◇◆

ようやく湿地帯を抜け、何とか『わるもん』共の追撃からも免れて、一夜明けると今度は険しい岩窟地帯に差し掛かっていた。
タフタルを発ってから、5日目。クラリスは既に、エルファーラへ向けて旅立ったはずだ。
乾いた黄色っぽい土が地表を覆い、所々に申し訳程度に草が生えている。シェインの3倍はありそうな高さの奇妙な形の岩が幾つも地面から生えるように連なり、吹き抜ける風のせいか、岩には横縞が刻まれ、不思議な光景が続いていく。
魔物の出現は、相変わらず、多い。戦闘を繰り返しながらの行程は、どうしても迅速にと言うわけには行かなかった。
「……ちぃッ。エディ、大丈夫かッ！？」
目下のところストーン・ジャイアントとの戦闘中であるシェインは、投げつけられた岩石を避けた反動で地面に片手をつきながら、後方にいたはずのエディに怒声を投げた。その返答が返る前に、空を裂いて飛んでいった巨大な岩石が、地面から突き出た岩肌を破壊する轟音が響く。
「しぶといッ」
「グァァァァッ」
前方で聞こえたソフィアの声に被せるように、ストーン・ジャイアントの苦痛の呻きが聞こえた。シェインも片手に剣を構えて、地を蹴った。
ドゥウゥゥッ……。
激震と轟音、そして土埃を巻き上げて、ストーン・ジャイアントが絶命する。ようやくその巨体が動かなくなったことを認め、シェインは肩で息をつきながら岩場に寄りかかった。
「手間が掛かる……」
魔法が使えれば、ストーン・ジャイアントごとき、一撃だ。もどかしいことこの上ない。何より、剣による戦闘に慣れていないシェインにとって、肉体的疲労が甚だしい。剣を拭ったソフィアが、笑

いながら近付いてきた。
「良いじゃないか。せっかくの機会だ。どんどん剣の腕を磨けば良い。剣も魔法も使いこなせるならば、最強だぞ」
「他人ごとだと思って……」
「シェインはもっと筋力を鍛えねば駄目だな。……エディもだぞ」
剣を杖代わりに、ほぼ見学コースであったエディが、不意に向けられた矛先に目を瞬く。それからシェインと顔を見合わせて、軽く肩を竦めた。
「ほら、だらしないなあ、2人とも。男だろう!?さっさと立つ!!立って歩く!!」
最も体力値が低いはずのソフィアが最前線に立って魔物と戦い、挙句けろりとして男共にハッパをかけながらさっさと歩き出すとはどういうわけだろう。ふうっと息をつきながらようやく剣を収めると、シェインとエディも仕方なくソフィアに倣った。
「わ～。凄いなあ」
「崖から転げ落ちるなよ」
先ほどの復讐と言うわけではないが、崖のように急斜面になっているその淵に佇んで景色を望むソフィアに、意地悪な口調で言いながらその頭を軽くロッドで小突いた。そのままエディと並んで通り過ぎていくシェインに、ソフィアがむっと唇を尖らす。
「痛い」
「そいつは失礼」
「こんなに綺麗な景色なのに」
「心和ませているほど、心の余裕がない」
魔物が頻発しているとくれば、安全を確保した内にさっさと移動してしまいたいと言うのが普通だろう。景色を見てうっとり出来る神経の方が謎である。
「意外と繊細だなあ」
ぼやきながら仕方なさそうに背後をついてくるソフィアに、思わず笑った。

「意外とは聞き捨てならぬな。どこを取っても繊細に出来ているだろう」

「それはない」

シェインの軽口に、けらけらと笑いながら、ソフィアが軽い足取りでさっさと先を行くエディの方へと駆けていく。その後ろ姿を眺めながら、シェインは微笑んだ口元から笑みを拭い去った。

――クラスフェルド王の足元には、火がついている。

ソフィアの話に寄れば、リトリア王城は今、激震している。

原因は、クラスフェルド王の武力主義、そしてロドリス陣営への参戦だ。

クラスフェルドは、武王と言われるだけあって、戦でこそその能力を発揮する戦好きだ。元来文化国であるリトリア国王としては異質なほど、侵略戦争を目論んでは、軍隊に力を入れる。当然軍隊は力を持つようになり、その勢力を伸ばし始めている。

一方、それが気に入らないのは、文官だ。

普段は、放蕩と言える国王の尻拭いに走り回り、国王を何とか制御しながら国政に務めているのは文官たちだと言うのに、勢力を伸ばし、権力を欲しいままにしている軍部に対して不満を抱くのは至極当然の流れと言えるだろう。

加えて、戦争と言うのは財政を蝕む大きな要因である。クラスフェルドが王位を継承してから多発する侵略戦争で、その都度リトリアの財政は圧迫され、それを取り返す為に侵略戦争で広がった領土を中心に徴収する。そしてそれが、リトリア国内に貧富の差を広げていた。

文官たちは、リトリア国内の格差を縮めていくことが目下の課題だと考えている。だが、そこへまた、戦争だ。戦争は、軍部の権力をまた強め、格差を一層広げることに繋がる。

更に言えば、リトリア国内には反ロドリス感情を持つ人間が少なくない。王城内部もまた然りで、会議に会議を重ねて利益をも検討した上で導き出された、ヴァルス陣営としてならば参戦するも良し

との決断が、クラスフェルドの変心により独断でロドリス陣営として参戦することが確定された。のみならず、クラスフェルドはこの機に乗じてモナへの侵攻を企てている。これによって、文官の不満は決定的に高まったのだ。

そうして一部で、クラスフェルドへの諫言を提唱する動きが持ち上がった。ソフィアも、それについては賛成だった。リトリアは、端から見ているほどには国内が安定していない。広がる格差に、最下層の農民たちからは不満の声も上がり始めている。モナへの侵攻は、もはやロドリスと連動していないリトリア単独の動きとしか言えぬし、ヴァルスを相手取ってモナを制圧しなければ負債は取り戻せない。ソフィアは、モナへの侵攻には反対だし、そもそもがリトリアの参戦から反対なのだ。

だから、クラスフェルドへの諫言を行うことは、賛成した。

モナへの侵攻を踏み止まって、ロドリスに多少の援助をする程度で、出来れば早々の戦線離脱を検討して欲しい。今しばらくは国政に目を向け、国内の安定と経済力の向上を志し、侵略戦争をモナに仕掛けたいのであればその後にするべきだと考えるからだ。

だが。

ことは、それに留まらなかったのだ。

次第に、事態はソフィアの思惑とは違う方向へ逸れ始めている。そして、向いてはならない方向へと、流れ始めている。それを推し進めているのは主に宮宰アルノルト・クレーフェと言う人物なのだと言う。先に現れた『顎鬚』は、アルノルト・クレーフェの腰巾着であるエブロイン・ドムスと言うらしい。

クラスフェルド王を討とうとする動き……それを知ったソフィアは、リトリアからの脱出を図った。ソフィアが志すのは、クラスフェルドを王座から引き摺り下ろすことでも、首を刎ねることでもない。忠誠を誓うからこその諫言による、王の改心だ。

脱出を図ったソフィアは、リトリア東部にあるシガーラントの街を目指しているのだと言う。そこの領主フリッツァー・ウィルディ

ンは、ソフィアにとって信頼がおける。全てを話し、反乱軍の制圧とクラスフェルドに今一度考え直してもらうことを、協力してもらいたいと考えているのだと言う。

ソフィアの話は、シェインの心にも波紋を投げかけた。

リトリア内部での分裂の動き――ヴァルスの立場から言わせてもらえば、ことが起こる前に鎮圧してしまうのは得策ではないのである。内部が乱れていれば、リトリアはそれこそ戦争を仕掛けているどころではなくなるのだ。ヴァルスへは元より、モナへの侵攻も留まらざるを得ないだろう。であれば、シェインとしてはむしろその火種を煽ってやりたいくらいである。

だが、ソフィアは、反乱軍に大きな動きが出る前に鎮圧する為に、シガーラントへと向かっている。反乱軍を鎮圧してしまえば、クラスフェルドは足止めされることなくモナへの侵攻を図り、それは結果としてモナを挟んでのヴァルスとの対峙となる。

ソフィアの話を聞いてから、シェインは自分がどうするべきなのかを考えあぐねていた。もちろん、シガーラントへ到着したからと言って、うまく火事を消し止められるかどうかは別問題である。フリッツァーが反乱軍を制圧する為に私兵を率いたとしても、タイミング的に火事が起こってからと言うことも十分有り得る。

だが、「かもしれない」をあてにしているわけには、いかない。

それに、クラスフェルドを暗殺するだとしないだのと言う話になると、それはリトリア国内のお家事情である。ヴァルスの宮廷魔術師としては、そこに深く関与するのは、いただけない。

そしてシェインの中でひとつ、ソフィアの話に引っ掛かりを覚えるところもないではなかった。

ソフィアは、弱冠17歳の少女だ。いくら貴族……それも恐らくは有力貴族であるとしても、反乱軍の中でソフィアの存在感が些か大きいように感じる。

ソフィアの意向と同意……果たしてそれは、反乱軍にとってそれほど大きなものなのだろうか。クラスフェルドを討つと言う動きを

ソフィアに知られ、それをどこかで漏らされては困ると言うのはわかるが、エブロインの態度がソフィアの身柄を欲しているように見えたこともまた、引っ掛かる理由のひとつだ。

話を聞いた上で、やはり尚、思う。

ソフィアは、何者なのだろう。

「……何だ？」

じゃれつくソフィアを適当にいなしながら歩いていたエディが、不意に足を止めて呟いた。それを受けて、シェインとソフィアも視線をエディに向ける。ついで、その視線を追った。

「何だ、あれは？」

エディが視線を向けているのは、やや下の階層に位置する道だった。岩窟地帯に入って少しずつ高度が上がり、幾つもの岩場があるとは言え木々に覆われているわけではないこの辺りは、これまで辿ってきた道筋が一望出来る。

そして、さほど遠くないここへ続く道筋へ、土埃が次々と姿を現すのが眼下に見えるのだった。

「エブロインかッ……」

ソフィアが見下ろして舌打ちをするのが聞こえる。ともかくも、逃げた方が良さそうだ。こちらの3人で相手取って勝てるとは思いにくかった。

「走るぞ」

言うが早いか、駆け出すシェインに、ソフィアとエディが続く。だが、見渡す限り、逸れられる道も隠れられる場所も、ありそうにはなかった。段差や岩場はあるものの、広く開けた薄黄色い風景は、先々の方まで見渡せる。相手が馬と来れば、逃げるのは至難の業だった。

「どうするッ……エディッ」

「どうするもこうするも、策を講じようがないな。どうにもしようがない」

「黙ってやられるのか？」

「そうは言わないが、そうなるかもしれない」
「……」
少しでも距離を引き離すべく、走る。段差を乗り越え、駆ける後方から、迫ってくる土煙と馬蹄が近付いてきた。これ以上、逃げることに意味はありそうになかった。
「やられるしか、ないなッ……」
走りながら、剣を抜く。エディが小さく吹き出した。
「黙ってやられるのか？」
「黙ってやられるのは、癪だからなッ……少しは、抵抗を試みてみようか」
そう言い放って足を止めたシェインに、エディ、ソフィアも剣を抜いて倣った。こちらが逃げるのをやめたことを見て取って、追跡者たちも速度を緩める。馬上にあるのはやはり、昨日泥濘にはまり込んでいたエブロイン一団だった。
「ソフィア様の身柄を、こちらへもらおう」
「力ずくで、お願いしようか」
「……良いだろう」
しゃらん、と、背後の男たちが馬に跨ったままで抜刀する。それを睨み据えて剣を構えながら、冷たい汗が背筋を伝うのは否定出来なかった。
「何とか、ソフィアだけでも逃がしてやりたいところだがな」
「馬鹿を言うな。追われているのは、わたしだ」
前に視線を定めたまま反論したソフィアは、それからそのままの姿勢で小さく笑った。
「それに、そういうセリフは、わたしの剣技を越えてからにしてもらおう」
「ではきっと、永遠に口にする機会はなかろうな」
答えながら、微かに視線を彷徨わせる。
辺りにあるのは、立ち並ぶ巨大な岩と、ところどころに見える段差だけ。

この現状を、打破する手段は、あるだろうか。
「では、力ずくで戴いていくッ」
エブロインの怒声を号令として、剣を抜いた男たちが、一斉に馬上から地を蹴った。

第3部第1章第15話　ｂｒｅｖｉｓ　ｌａｒｖａ（1）

「カズキぃ。朝だぞぉ～。起きろぉ～？」
「……うーー……ん……」
「メシ行こうぜぇ。乗合馬車に乗り遅れちゃうぞぉ」
まだ半分寝ているような頭の中で、キグナスの声が近付いてきた。
……と、思ったら。
「ぐえッ」
どしッ。
背中に衝撃と重量がかかって、俺はうつ伏せにベッドに寝たまんまで呻いた。
「……だから。もう少し優しい起こし方して」
「んなこと言うと、次は本当にちゅうするぞ」
「それだけはやめて」
「じゃあ自分で起きろ」
今回はエルボーではなく、俺の上に全身でダイブして来たキグナスは、俺の呻き混じりの苦情にあっさりとそう答えて立ち上がった。
仕方なくもぞもぞとベッドから体を起こす俺に構わずに、すたすたとドアへ向かって行く。
「俺、先に下、行ってっぞぉ？」
「は～い……」
眠い。
だるい。
ベッドの上で体を起こしたまま、ぐしゃぐしゃと髪を掻き混ぜてあくびをした俺は、まだ薄暗い窓の外に目を向けた。……朝じゃない、こんなの。明け方って言うんだ。
カサドールの連絡船に送られて、モナのオラフに到着をしたのが、炎の月の終わり。
俺たちに同行したカール公の手配で、オラフを発ったのが、雨の

月に入ってすぐ。
そこからまた船に揺られ、マカロフのリボーンに足を踏み入れた時には、雨の月も半ばを過ぎた頃だった。レオノーラを発ってからは、既に2ヶ月以上が経過している。
今現在俺たちは、ツェンカーを目指してマカロフを移動中だ。一昨日リボーンを出発して、シサーの傭兵仲間がいるアスコと言う町に立ち寄っている。あちこちに知り合いがいて、便利な人だ。
（あ～……眠ぃ～……）
何だかもう、疲れが取れない。
マカロフは、軍隊がうろうろしているヴァルス周辺とは違って、特に戦禍の余波ってのが及んでいるわけじゃないから、『魔物が異様に多い』と言う事態からはようやく脱出をすることが出来た。加えて言えば、魔物は北部より南部の方が多いらしく、ローレシア大陸の北部に当たるマカロフは通常でもヴァルスなんかよりは魔物が少ない。
おかげで乗合馬車と言うのがヴァルスより発達していて、金はかかるが、現在それでの移動が可能となっているのが非常に助かる。助かるんだが、まだ鳥の声さえ微妙なこんな早朝に叩き起こされるのは、つらい。
と言うのも、長距離移動の乗合馬車があると聞いてこのアスコと言う町を訪れたんだけど、長距離馬車は1日に1本、それも早朝にしか出ていないとのことだった。隣の町まで行くくらいだったらもう少し頻繁に出ているらしいんだが、俺たちはマカロフを横切ってツェンカーまで行かなきゃならないわけで、出来れば1日の移動距離を稼いでおきたい。と来れば長距離の乗合馬車に頼るのがやはり妥当で、そうすると1日にたった1本しかないそれを逃さない為にはまだ薄暗いうちから行動を開始しないとならなくなる。
「寒……」
布団から這い出た俺は、小さくひとりごちて袖をさすった。いつだかシリーからもらった薄手の長袖シャツを着て寝ていたんだが、

これだけだと少し寒い。
と言って、マントだ上着だを羽織るのは、たかだか朝メシを食うだけには大袈裟過ぎる。
「下行こ……」
何か服、買った方が良いかもしれないな。大陸の北部に移動して来ているし、季節も秋へと移り変わろうとしている。俺流に言えば9月も半ばを過ぎた今、氷の大陸に近付いているせいもあって、10月半ば過ぎくらいの気候に感じる。ぶるぶるするほどではないが、長袖でも少し肌寒いような気がすると言うところだ。
部屋を出て階段を降りていくと、ちょうどレイアがふわふわと上がって来るところだった。降りてくる俺を見て、にたっと笑う。
「寝ぼすけカズキ。顔が寝てる」
「疲れてんの」
「もっと逞しくなんなさいよ～」
うるさいな。これでも前に比べれば、随分体力ついたと思うぞ。
反論を口に出さずに目で訴えるが、レイアはどこ吹く風と受け流して、すとんと俺の頭の上に座り込んだ。
「みんなは？もう起きてんの」
「シサーとヴィクトルは、広間でカードゲームをやってるわよ。キグナスはそれの見物ね。ユリア様とニーナは、エリーさんのお手伝いをしてるわ」
ヴィクトルと言うのが、シサーの傭兵仲間の人だ。シサーとあまり年齢が変わらなさそうな細面の人で、おっとりしているように見えるんだが、2メートルくらいのごっつい鉄槍を振り回すと聞いている。エリーさんは、その奥さんだ。ヴィクトル同様、おっとりした感じの優しそうな人で、こちらは別に鉄槍は振り回さない。
「ふうん」
とりあえず外に出て、井戸から汲み上げた水で顔を洗う。こうしてみると、しみじみと水道と言うものは便利なんだなと言う気がした。シャインカルクだの貴族の屋敷だのは建物の中に水を引き入れ

てポンプみたいなものがついてたりするが、一般の家庭にまではなかなか普及しないらしい。でもこうして家の庭にあればましな方で、小さな村とかだと共同であったりするから……大変だよな。生活必需品である水を使うだけでも。

「冷て……」

顔を洗っただけで、鳥肌が立った。息こそ白くはないものの、今の時期でこれだけ肌寒さを感じるとなると、本物の冬が来たらどうなるんだろう。顔なんか洗う気になれない。洗濯機なんかも当然ないから、自分で洗うんだろうな。大変だよな。……他人ごとじゃない。俺もまだ当分この世界にいるんだから、大変だ。しかもこれからますます氷の大陸に近付いて行こうとしているんだから、季節も寒くなっていこうとしているんだし、ツェンカーは結構つらいかもしれないな。

（ツェンカーか……）

持参してきたタオルで顔を拭いながら、ふと、北東の方角に視線を向けた。

もちろんここからツェンカーが見えるわけでもフレザイルが見えるわけでもないんだが、薄い雲に覆われたまだ藍色を残す空に、何か少し、ぞくりとした。

「カズキ？どうしたの？」

「……何でもない」

ツェンカー――氷竜トラファルガー最大の捕食地帯。

エルファーラで見た奇妙な宗教画を思い出す。そして、ガーネットの言っていた『覇竜を倒す為の魔剣』の話を。

嫌だ嫌だと言いながら、結局のところ、こうして引き寄せられるようにツェンカーへと向かっている。……トラファルガーの棲息地間近へ、目覚めが近いと噂されているこの時期に。

面倒なことにならなきゃいいんだが。

（ドラゴンなんかと会いたくないなぁ……）

いやいや、こういうのって考えてると現実になったりする。考え

るのをやめよう。そうすれば現実にならない。……と思いたい。
どうしても宗教画と俺の耳のピアスが重なり、目覚めの近いトラファルガーの襲撃地域に向かっていることが嫌な予感を加速させ、無理矢理その考えを頭から追い出しながら家の中へと戻る。
でも、覇竜の魔剣ってのは、どこにあるんだろうな。
トラファルガーのもそうだけど、何より黒竜だ。グロダールを制す魔剣の行方……絶対、ガーネットが何か知っていると思うんだけどな。教えてくれても良いじゃないか。グロダールが暴れ回ってから教えてくれたって、手遅れじゃないのか？それからカリバーンのある場所に行って戻ってきた時には、ヴァルスがぼろぼろになってるかもしれないじゃないか。薄情な。
（いや……）
ガーネットが今ヴァルスにいると言うことは、ガーネットだってグロダールが暴れ回ったら困るんじゃないだろうか。
だとしたら、そんな無駄な時間と手間をかけさせない……と考えれば、実は案外すぐ近くにあるのかもしれない。ガーネットが薄情なんでなければ。
何にしてもガーネットはすぐに口を割ってくれる感じじゃないし、他に何か知ってそうな人、いないかな……。
（『属性』って、何なんだろうな）
人には属性があるって言ってた。あれは、どういう意味なんだろう。
まだ眠い頭でそんなことを考えながら、タオルを片手に広間へ入っていく。広間のソファではレイアの言う通りシサーとヴィクトルがカードゲームをしていて、その横にキグナスがしゃがみ込んで見物をしていた。ちょうどユリアが、キッチンの方からパンの入った籠を抱えて入ってくるところだった。俺に気づいて、笑顔をくれる。
「おはよう、カズキ」
「おはよ。良い匂い」
「エリーさんがキッシュを焼いてくれたの。とっても美味しそうよ」

「へえ。ユリアもお手伝い？」
「……パンの焼き方を教えてもらったのだけど」
言いながらユリアの方に近付いていくと、ユリアが少ししょげたような顔で俺を上目遣いに見上げた。その顔つきにきょとんとパンの籠に視線を落とす。
「……」
「……」
「……大丈夫だよ」
ユリアが作ったものとエリーさんが作ったものが一目瞭然だ。しゅんとした様子が可愛くて、くすくす笑いながらシサーたちの方へ足を向ける。シサーの方に軍配が上がっているらしく、朝から機嫌が良さそうだ。その、俺にはルールがさっぱりわからないゲームの様子を見ている間に朝食の支度が整い、全員で食卓につく。
それを終えると出発の支度を整え、エリーさんが持たせてくれたお弁当を手に、ヴィクトルの家を後にした。ようやく空が白み始め、鳥の囀りが至るところから響き始める。澄んだ空は、今日の晴天を予感させた。
「結構、こんな早朝なのに、人がいるものなんだね」
乗合馬車の集合場所は、町の出入り口付近だ。帝国外だからか、この町の防護壁とか門の造りはアルトガーデン内部の国とはだいぶ様式が違って、どっちかって言うと強固そうと言うよりは、お洒落。魔物があっちより少ないってのが理由かもしれない。
その門の付近には、俺たちと同じく旅支度を整えた風情の人がそこそこたまっているのが見える。旅人だとか冒険者だとかって言う感じの人たちばかりだ。
「長距離を移動する為にはこれに乗るしかねぇからなぁ。どうしても固まんだろ。……お、来たぜ。あれじゃねぇか？」
シサーの言葉に視線を向けると、ガラガラと町の中から大きな通りを馬車がこちらに向かって走ってくるのが見えた。馬を６頭も使った大型のものだ。やがて近くまで辿り着いた馬車が速度を落とし、

人々が集まるその付近へ停車する。
「行こう」
馭者が馬車から降りて来て、人々に大声で何か呼びかけ始めた。
ちなみに俺は何を言っているのかわからない。マカロフでは、ヴァルス語が人によっては通じなくもないけれど、帝国内ほどには使われておらず、一般の人は大概わからないのだそうだ。シサーもそうだし、ヴィクトルみたいに傭兵だったりすると、どの依頼を受けるかでどこの国に属することになるかわからないから各国の言葉を押さえていることは少なくないが、少なくとも一般の冒険者とかには余り浸透していない。
（多分、ここじゃないと思うんだけどな……）
シサーに促されて馬車の方へと足を向けながら、周囲の人々の言葉に耳を傾けてそんなことを思う。考えているのは、例の、『紳士倶楽部』のクライアントのことだ。
別にもう済んだ話だし、どうでも良いっちゃあ良いんだが。
でも、あの時メイアンで耳に挟んだ言葉のイントネーションや響きとは、マカロフの言葉は違うような気がする。とは言え、あの時ちらりとしか耳にしていないわけだし、人によって話し方に違いも出るだろうし、確かな意見なんかじゃ全然ないんだけどさ。でも俺、結構耳は良い方だと思うから、何か違う気がする。
カサドールはあの後、『紳士倶楽部』の摘発に成功し、ついでに言えば公庁にいた『紳士倶楽部』と繋がっている公人の摘発にも成功した。組織そのものは大して大きくはないけれど、公人の庇護の元、手広く闇事業に手を染めていた『紳士倶楽部』は、かなりの数の闇組織と取引があったらしく、ともかくも『紳士倶楽部』を押さえたことで、違法な武器の売買や人身売買などは少しは鎮火するだろうと言うのがカール公の見方だった。
ま、何にしても俺からすれば、ユリアを無事に連れて帰って来られて良かったって……それだけだ。
カサドール軍は、俺たちを伴って先発したカール公と一部の部隊

を追って、準備が整い次第モナのオラフに出発すると聞いている。あれからモナと、そしてリトリアがどうしているのかは、俺は知らない。どうしてるんだろうな。何せこちらは情報の伝達が遅い。

「結構混むのね……あ、でも広いんだ」

人が乗る場所は、座席なんてものがない。俺的に言えば、軽トラの荷台に木で出来た壁や天井がついてるって感じだ。あれよりはもっと広いけど、ともかくあんな感じでただ乗る場所……と言うか、人を積む場所だけがあると言う感じ。荷台の前後には荷物を置く為の棚らしきものがあるが、それを使う人はいないらしい。自分の手から離して、他人に持って行かれることを警戒しているんだろう。

乗り込んだ人々が、各々適当に自分らのスペースを確保して座り込む。俺もキグナスと並んで壁際に腰を落ち着けると、更にその隣にユリアが腰を下ろした。レイアはユリアの荷袋の中だ。シサーとニーナは俺たちと向かい合った壁際に座り込んでひとり旅らしき風情の男と話し込んでいる。

「んでこっからどこまで行けるんだっけ……アスコがここだから、ここと、ここと……」

「ここも経由すんだろ。んで次が終着点のグリンローズ」

キグナスと地図を広げて覗き込んでいると、俺の隣からそれを見ていたユリアが、俺の顔を見て不意に首を傾げた。

「カズキ、ここ、どうしたの？」

「え？どこ？」

「ここ……赤くなってる」

言いながらユリアが伸ばした指が、俺の頬に触れた。つつくようにしてくすくす笑うユリアの顔が、近い。

「何か筋みたいになってんよ」

それを見てキグナスが、補足する。ユリアの指が触れたところを撫でながら、どぎまぎして視線を地図に戻した。

「寝てる間に引っかいちゃったのかな……」

何となく。

何となくでしか、ないんだけど。
ユリアとの距離が、前より、近いような気がする。
正確には、シサーの家のバルコニーの夜以降。
それが、メイアンではどさくさに紛れて、本当に軽くだけど抱き締めちゃったし、カサドールの騒ぎで更に……ユリアが、気を許してくれてるような……。き、気のせいだろうか。だけど今も実は、ずっと肩が触れ合ってるくらいそばに座っている。いや、そりゃまあ狭い荷台、だけど……。
（期待するな期待するな）
期待したところで……婚約者付きの異世界の王女サマ――何がどうなるわけでもないことは、わかってんだけどさ。わかってんだけど……期待しちゃうじゃないか。
「痛い？」
「ううん。別に痛くはないよ。何か凄い爆睡してたみたいだから、寝ながら暴れでもしたのかな……」
「カズキって静かに寝るよな」
「そう？キグナスは寝ててもうるさいよね」
「俺があ？そうかあ？嘘だよそんなん」
「時々、寝てるくせに誰かに何か頼んだり謝ったりしてるよね。楽しそう。寝ながら何してんの？」
「知るかよッ」
俺とキグナスの会話にくすくす笑っていたユリアが、ふっとその視線を俺に向けたところで、がくんと馬車が動いた。ガタガタと大きく揺れて、窓の外の景色がゆっくりと動き始める。
わりかしすぐにアスコの町を出て、そこから続く石畳の道を、草原の中走り出した。
「今日は、グリンローズに泊まるのかしら」
「んじゃないの？何時くらいにつくんだろうなぁ。でもこの速度で行けば……凄いね。あと2日くらいでマカロフ、抜けちゃうんじゃないか」

飛行機がありゃあ、1日もかからないだろうが。譲歩して、新幹線でも良い。

「いろいろ見れたら良いのにな」

以前、ユリアが「ゆっくり旅をしたい」と言っていたことを思い出す。どこか閑散とした感のある窓の外の風景に目を向けながら言うと、ユリアが目を細めて俺を見上げた。その優しい顔つきが、だから……。

「そうね」

何かを、期待させるんだ。目つきとか、顔つきとか、そういう他愛ないものに含まれる甘さと言うか……柔らかさって言うか。

絶対、気のせいじゃないと思うんだけどな。

気のせいかな……。

……気のせいだろうな。

車内の人々は、シサーたちのように隣り合った人同士で話をしていたり、寝てしまっていたり、手紙を書いている風情だったりと、時間の潰し方はまちまちだ。俺とキグナス、ユリアは3人で外の景色を見たり会話をしたりしているうちに、やがて次の町へとついたらしい。

第3部第1章第15話　ｂｒｅｖｉｓ　ｌａｒｖａ（2）

「おぉ～。町についたぞ～」
窓の外に目を向けたキグナスの言葉で視線を向けると、やはりお洒落な防護壁に囲われた町が近付いてくるのが見えた。
「ここは……何て町だっけ。ええと」
「レイバーだ、レイバー」
「そう言えば、マカロフって何か名産とかないの？」
「知らねえ」
「果実酒が美味しいわよ」
「ふうん。町に下りて買い物とか出来たらいいのにな」
「そんで置いて行かれて翌朝を待つんじゃ、長距離馬車に乗る意味がねえ。……あッ。カズキッ、何か変なイキモンがいるッ」
「え？どれどれ？……何あれ、ペット？」
「魔物の一種じゃねえか？」
「可愛いじゃない」
「……可愛いですか？」
「……可愛いかなあ」
馬車がレイバーの町に入っていくと、窓に張り付いて移動していく町の風景に目を奪われる。まるで修学旅行中の小学生のようだ。
レイバーでは町の中ほどにあるらしい停留所に馬車が止まり、客の入れ替わりと馬の付け替えが終わると、馬車はすぐに走り出した。
乗っている人間は、ぽつりぽつりと入れ替わる。アスコから終点のグリンローズへ行く人間は、それほど多いわけではなさそうだった。最初に俺たちと一緒に乗った人の3分の1くらいは既にいない。代わりに数人が、入れ違うように乗り込んで来ていた。
「何か良い匂いがするね」
「昼メシでも作ってんじゃねえか？そういやもうじき、そういう時間帯だよなあ。腹減ったぁ」

「まだ早いんじゃないの……前倒しで食っちゃうと、到着した時には腹ペコだよ」
　ユリアの更に向こう隣には、やや距離を置いてレイバーからおじさんが乗り込んで来ていた。ゴトゴトと揺れる振動と音の中、何となくそのおじさんを見て、耳についているイヤリングがふと目に留まった。マキビシみたいな形の飾りがついたイヤリング。……何だっけ。どっかで見た気がしなくもない。
　そんなことを思っていると、何か手紙みたいなものに視線を落としていたおじさんが、ふと俺の視線に気づいたように顔を上げた。ごそごそと紙切れをしまいながら、俺に話しかけてくる。ヴァルス語だ。
「ぼーずたちは、どこへ行くんだ？」
「え？俺たち？」
　ひとり旅みたいだから、暇なんだろう。ユリアとキグナスが口を噤んでしまったので、おじさんを放置するわけにもいかないから口を開く。
「終点まで」
「グリンローズか？何だ。遠くまで行くなあ。親戚でも訪ねんのか？」
「そういうわけじゃないけど……ツェンカーに行きたくて」
　そう答えると、おじさんが目を瞬いた。
「ツェンカーか。何しに行くんだか知らねえが、やめといた方が良いんじゃねえか？」
「え？何で？」
　思わずユリアと顔を見合わせて、おじさんに問い返す。おじさんが、こりこりと自分の頬を掻きながら、窓の外へ視線を向けた。
「先月、トラファルガーが出たらしいぞ」
　ぐえ。
「……まじですか」
「いや、本当かどうかは知らんがな。まだ襲撃して来たわけじゃな

さそうだが、空を旋回して去ってったとかって話だ。それに……」
目覚めたんだろうか。
背筋に冷たいものを感じながら黙りこくっていると、おじさんはそんな俺には気づかずに続けた。
「ツェンカーも何だか、揉め事が起きそうだしな」
「揉め事？」
「あんたら、どこから来た？」
「え？」
問い返した言葉には答えずに質問返しするおじさんに、首を傾げながら答える。
「ヴァルス、ですけど」
「そうだろう。さっきからヴァルス語でしゃべってたからな。そうじゃねえかと思ったんだ」
「はあ……それが？」
「何でも、ヴァルスの偉い人が、ツェンカーを訪ねようとしてるって話を聞いてねえか？」
ぎくーッ。
一瞬目を見開いてしまってから、俺は慌てて顔を横に振った。まさか、「あ、それ、俺たちのことかも」と言うわけにはいかない。
「知らない、です」
「そうか？らしいんだよ」
「……へえ。何の為に」
このおじさん、何者なんだ……？
ツェンカーには、ユリアが到着する前に、先触れとして使者が放たれている。使者がどんだけ俺たちより先行しているかは知らないけれど、少なくともツェンカーの要人――新代表のルーベルトには、ヴァルスから訪問する人間がいることは事前に知らされる。
だけど、そんなのは公に宣伝されることじゃない。もちろん、ヴァルス国民だって知っていることじゃない。知っているとすればヴァルスとツェンカーの幹部だけになるはず、だと思うんだが。

「さあなあ。それは俺は知らねえけど。そんな噂があるってことしか」

噂……？

俺の内心には気がつかずに、おじさんはのそのそとあぐらをかき直しながら軽く肩を竦めた。

とりあえず、見る限りは俺たちに不審なものを感じているようには見えない。……多分。

「で、それが？」

「それが、一部に反感を生んでいるらしいんだな」

「反感？どうして？」

「ヴァルスっつったら、今、戦争中だろう？」

「はい」

「あんたたちも、それで逃げ出して来たんじゃねえのか？何でも、かなり形勢が不利って話じゃねえか。ヤバイんじゃねえか？ヴァルスは」

ちらっと視界の隅で窺うと、ユリアが曇った顔で視線を伏せた。おじさん、頼むからユリアを不安にさせるようなことを言わないでくれ。

「そんなこと……別に俺たちは、逃げてきたわけじゃないですけど」

「ああ、そうかい？まあともかくな、ヴァルスがツェンカーを帝国に引き込もうとしてるんじゃねえかって危惧を感じてる奴らもいるみたいだからな。だから揉め事が起きそうだって言ってんだよ」

「……」

「今ローレシアで安全なのは、マカロフかワインバーガ、それかキルギスくらいのものじゃないか。後はどこに行ったって、揉め事の嵐だ。せっかく安全なマカロフにいるのに、余計なトコに行って命を脅かすこともねえんじゃねえかと思っただけだがな」

そう言ってからおじさんは、俺が帯剣していることに気がついて笑った。

「ぼーず、腕っ節に自信はあるか」

「ありません」
きっぱりと答えると、おじさんは楽しそうに一層笑った。
「立派な剣をぶら下げてるじゃないか。お嬢ちゃんを守ってやらにゃ」
思わずユリアと顔を見合わせる。それから苦笑いを浮かべて、曖昧に頷いた。
「それは……そうしたいとは思うけど」
言いながら、何となく剣をさする。今俺が帯剣しているのは、シャインカルクからもらったあの剣じゃない。カール公からもらったものだ。
カサドールで『紳士倶楽部』に奪われた剣は、結局戻っては来なかった。
何でもカール公たちが到着した時には既にあの『荷運びチーム』たちが荷物をあらかた運び出した後だったらしく、そして多分俺の剣もそこに紛れ込んでいる。
カール公たちが倉庫を捜索した時には、それらしいものは見当たらなかったそうだ。もちろんまだ俺たちがいた間は簡単にしかチェックしていないから、大々的に家捜しすればわからないけど、でも、恐らくは、ないだろう。
俺の剣は多分、『紳士倶楽部』最後の仕事として、例の取引先の奴らの手に渡っちゃったんだ。
――武器を集めるくらいだから、まさか内乱……？
そこまで思い返して、捕らえられていた牢の中で考えたことが、蘇った。
『紳士倶楽部』のクライアントは、武器を集めている。公人の耳に触れたくない、他国の闇組織。まさかあれは、ツェンカー？
「戦が起こりゃあ、その騒ぎに便乗してやろうって輩はごろごろいるもんだからな。何でもリトリアも何やらキナ臭い匂いがするみたいだし」
「キナ臭い？」

「そっちは本当に俺にはわかんねえけど。ま、どれもこれも噂だ」
「でも……」
おじさんの言葉に、しばし黙る。口を閉ざした俺の代わりに、ユリアが口を開いた。ちなみにキグナスは何してるかって言ったら、おじさんが話し掛けてきた途端に何だか小さくなってしまった。黙って話を聞いているんだかいないんだか、と言う感じだ。
「でも、マカロフも、トラファルガーの捕食地帯に入るでしょう。本当に氷竜が目覚めたのなら、マカロフも安全とは言えないわ」
「そりゃそうだがな。その全土が捕食地域に入っているツェンカーよりは随分とましだろう。マカロフの南部やら西部やらなら、間違いなくトラファルガーは襲撃して来ない」
「おじさんは、どこに行くの？」
「俺か？俺は、レンスバレロだよ。グリンローズのひとつ手前の町だ」
俺なんかより、若くて可愛い女の子とオハナシしている方がやっぱり嬉しいらしい。にこにこと相好を崩したおじさんとユリアの会話に時折口を挟みながら、俺はおじさんの言葉を頭の中で考えていた。
牢の中で俺が考えたことは、メイアンで聞いた言語とヴァルスとの国交を根拠として、ヴァルス、ロンバルト、ロドリス、エルファーラ、そしてワインバーガ以外のどこかで……逆に言えばモナ、リトリア、バート、ナタリア、キルギス、ツェンカーそしてマカロフのいずれかで、揉め事が起ころうとしているんじゃないかと言うことだ。揉め事――内乱。
ただし、今の俺の感覚から察するに、この対象国の中からマカロフは外れるような気がする。マカロフの言葉を聞く限りは、俺の聞いたあの言葉と、何かが違うような気がしている。とすれば残るは6カ国。
どうでも良いやと思っていたけれど、冷静に考えればあんまりどうでも良くない。残った6カ国の内キルギスを除いた5カ国は、い

ずれも現状ヴァルスの今後に影響を与え得る国だ。モナやツェンカー内部で内乱と言える揉め事が起こってしまえばヴァルスにとって打撃だし、リトリア、バート、ナタリアで揉め事が起これば戦線からリタイアする可能性が出て来る。ヴァルスにとっては、プラス。

果たして、どこの国だろう。

「おじさん」

「何だ？」

「さっきの、ツェンカーの揉め事の話だけどさ」

あんまり余計なことを突っ込むと、それこそ余計な揉め事が起こるだろうか？でも、ツェンカーに行くって言ってんだから、気にするくらいは不自然じゃないだろう。さっきおじさん自身も言ったことだ。命を危険に晒すようなことになるんじゃないかってなことを。だったら、詳しく聞きたくたって、おかしくはないはず。

「おお」

「何かこう……武器集めたりとか、集結したりとか、そんなんだったりするの？」

出来るだけ、不安げな顔つきを作って尋ねてみる。おじさんは俺の様子に特に疑問はないのか、今度は顎をかきながら首を傾げた。

「さあなあ。そう言う話は、俺は今のところ、知らねえなあ」

「そう？」

「ああ」

だったら、ツェンカーじゃないんだろうか。

ヴァルスの要人の訪問――それがツェンカーで何らかの火種になり得るんだとしたら、果たしてツェンカーは俺たちを受け入れてくれるんだろうか。それに何より、トラファルガーが本気で活動を始めてしまったら、それこそツェンカーはヴァルスに手を貸しているどころじゃないんじゃないだろうか。それを言えばナタリアも多分そうだろうから、ナタリアは戦線離脱する可能性が高くなるわけだが。

「ヴァルスのお偉いさんが来るってのは、デマなのかねえ」

「さあ。少なくとも、ヴァルス国民にはそういう話は伝わっていないよ」

内乱が起こりそうな国――どこなんだろう……。

◆◇◆

おじさんが言葉通りにレンスバレロと言う町で降りていくと、グリンローズまではそこからもう間もなくだった。

今いるのはマカロフからツェンカーまでの中間地、ナタリアの国境間際と言うところだ。

「う……ああ～ッ……」

馬車をようやく降りることが出来て、思い切り伸びをする。いくら魔物が少ないとは言っても夜間に移動するのが危険なことには変わりないから、到着した時もまだ夜とは言えないけれど、それでももう夕闇さえ空から姿を隠そうとし始めていた。すぐに夜だ。

「やっとついたわねえ～」

ニーナがへたった声を出す。自分らで歩いているわけではないけれど、ずっと乗り物に乗りっ放しと言うのは、かなり体が疲れる。途中、２回ほど１０分程度の休憩は挟んだけれど、それでも後はほぼ荷台で揺られっ放し。体がぎしぎしと音を立てそうだ。

「さてと、宿を探すか……」

シサーもだるそうにぐりぐりと肩を回しながら、歩き出す。赤レンガを敷き詰めた綺麗な通り沿いには可愛らしい建物が並び、出店のようなものが並んではいるものの、その出店さえも可愛らしい雰囲気だ。建物のベランダには手入れされた花籠や緑が並び、鮮やかな色合いの出店にも花籠や緑がセンス良く飾られている。レトロな雰囲気。

……では、あるんだが。

「何だ……？」

シサーが歩き出して、眉を顰めているような声を出した。通りに

人の姿は多い。行き交う人々もさることながら、道路の端や建物の影、路地などにも人が溢れている。薄汚い布を敷いてその上に丸くなっていたり、汚れた服装で壁にもたれるように眠っていたり。その姿はさながら、ホームレスのおじさんたちみたいだった。いや……そうなんだろうか？実際。

西洋的な可愛らしい街の雰囲気と余りに裏腹で、どこか奇妙な気がする。

「どうしたのかしら」

「ちょっと聞いてくる」

シサーが言って俺たちのそばを離れると、その辺の屋台で果物を売っているおばちゃんに近付いていった。傭兵でいろんな国の言葉を身につけているシサーは、マカロフの言葉も何とか話せるらしい。2，3言葉を交わしてこちらに戻って来ると、シサーが顰め面でぼやくように言った。

「ちょっと、街自体が混み合ってるみたいだな」

「街自体が混み合ってる？」

「ああ。……ツェンカー、ワインバーガ東部、ナタリアの一部から、人が流れ込んで来てる」

「何……」

問いかけて、気がついた。今シサーが羅列した地域――トラファルガーの捕食地帯だ。

気がついたのは何も俺だけじゃない。全員が目を見開いて、無言でシサーを見詰める。シサーもそれに、渋面のままで頷いた。

「そういうこった」

「トラファルガーがツェンカー上空を旋回してたみたいな話、聞いたよ」

「いつ聞いた？」

「さっき、乗合馬車の中で、おじさんが言ってたのよ」

「そうか……」

第3部第1章第15話　brevis larva（3）

ユリアの答えに、少し考え深げに沈黙をしたシサーは、それから辺りをきょろっと見回した。

「いずれにしても、今日の宿を何とか見つけなきゃなんねえなあ。んでも、ご覧の有様で、宿を取るのが結構しんどいらしい。うんと金をかけりゃあ空いてる宿もあるかもしれねえけどな」

それもそうか……避難民みたいなものだろうから、誰も彼もが金持ちってわけじゃないだろう。多分安い宿から埋まっていってて、こういう状態だったら高価な宿なら空いてるのかもしれない。

「じゃあ、それを当たってみるしかないかしらね……」

ニーナが渋々と言う感じで、口を開いた。俺たちだけならまだしも、ユリアがいるのだから宿を取らないわけにはいかない。何かあったら洒落にならないんだから。……カサドールではかなり際どかったけど。

ともかくも宿泊先を決めるべく歩き出す。通りの幅は結構広かったけれど、それでも尚人が多く、しかも屋台みたいな出店なんかもあるので、混雑が凄い。

ようやくそれから少し逃れたと思ったら、大きな噴水のある広場だった。けれど避難民の姿はここにも多く、美しいと言える景観と相まってなんとも妙。

「なかったら、どうすっかなあ」

「シサー、この街には知り合い、いないの？」

「そう至るところに知り合いがいるかよ……」

「エル……ッ！？」

シサーと俺が会話を交わす合間に、不意に、言葉が割って入る。誰かを呼ぶような女の子の声に、一瞬奇妙な間が出来た。

それから、キグナスがぽかんとしていることに気がつく。……あれ？そう言えばキグナスの名前って……。

「俺？」
オレンジの瞳をぱちぱちと瞬いて、俺に尋ねる。
「俺に聞かれても、わかるわけがない」
「エル！！こっち！！」
エルアード・キグナス・フォン・ブロンベルグ――それがキグナスの本名だっけ。
そう俺が気がついた時には、もう一度女の子の声が名前を呼んだ。声の主を探して辺りをきょろきょろする。そして、俺たちから少し離れた噴水のすぐそばの屋台から、女の子がこちらを真っ直ぐ見ていることに気がついた。屋台って言うよりは、俺流に言えばフラワーワゴンって感じだ。カントリー風の可愛らしい出店で、ここも花籠が飾られている。……あれ。でも売ってるのは花じゃないんだな。パンとか、クッキーとか、そんな感じだ。
「何だ？知り合いか？」
シサーがきょとんとキグナスに尋ねる。それにまたキグナスもきょとんと顔を見返して、首を傾げた。
「知らな……」
「エルってば。エルでしょ！？わかんないのッ！？もうッ……薄情だなあッ」
「明らかにキグナスの知り合いみたいだけど。心当たり、ないの？」
「ねえ」
「あ、何かマカロフに学校の友達がいるとかいないとか言ってたじゃん。その人じゃないの？」
「え？だってあれは……」
言いかけたキグナスが、視線を彼女に戻して、固まる。それからみるみる顔に驚きを広げて、彼女に問い返した。
「シア！？シアか！？」
心当たりがあったらしい。
そう叫ぶと彼女の方へ駆け出すキグナスに、シサーと顔を見合わせてともかく後についていく。

「うひ～。本当にお前、シアかよ？」
「そう見えないのかよ～」
「見えねえ」
ワゴンで販売しているのは、やっぱりパンとかクッキーみたいだった。何種類もを小さな籠に幾つもわけて、飾ってある。ワゴンの上の方には花籠やグリーンが吊ってあって、まさしくカントリー風だった。販売をしているのは彼女ひとりのようだ。
キグナスがシアと呼んだ女の子は、年の頃は俺たちと余り変わらないんだろうか。若い。アイボリーの真っ直ぐな髪は背中まで長く伸びていて、カチューシャで押さえていた。目鼻立ちのはっきりとした顔立ちをしていて、オリーブ色の大きな瞳が快活な印象を与える。ちょこっと頬の辺りにそばかすが浮いていて、コケティッシュな雰囲気の持ち主だった。
「エルは、変わんないねえ。人込みの中でもエルだって、すぐにわかったよ」
「お前って凄ぇ奴……」
それから、彼女の目が俺たちに向く。
「初めまして」
「あ、ごめん。ええと、俺のエルレ・デルファルん時の同級生で……シア」
「シアーネです。シアで良いですよ」
「……おめぇがさつな言葉を使ってねえの、初めて見る……」
「うるさいよエルわッ」
ぱしっとシアがワゴンの内側からキグナスの頭を叩いた。「いて」と呟きながら、キグナスが顔を上げて今度はこっちをシアに紹介する。
「んで、そっちから、ニーナ、シサー、ユリア様、カズキ」
ユリアだけ『様』がついてるのも妙は妙なんだが、シアは特に頓着した様子もなくにこっと笑顔で改めて頭を下げた。こちらもそれぞれ頭を下げる。

ふうん。同年代の友達と一緒にいるキグナスを初めて見るな。何となく、シアに制圧されている感があって面白い。
「でもエル、何でこんなところに？」
「ちょっと用事があってツェンカーに向かってんだよ。おめぇこそ、レンスバレロにいるんじゃなかったのか？」
「うん、こないだまではレンスバレロにいたんだけどね。レンスバレロのパン屋さんで修業がてら働いていて、先月からね、こっちに移ったんだ」
「へえ。何でまた」
「ひとりでやってみようと思って。それで今はこうして、ワゴン販売でやってるの」
キグナスの言葉に答えたシアは、それからぐるっと俺たちを見回して苦笑いを浮かべた。
「驚いたでしょ」
「え？」
「人が多くて。以前は、こんなんじゃなかったんですけど」
シアの言葉に、シサーが頷いた。
「聞いたぜ。……トラファルガーだろう」
シアが、硬い表情で頷く。
「そう。咆哮が聞こえ始めたのはもう去年辺りからなんだけど、それが少しずつ間隔が狭くなってる。この前はついに、ツェンカーの上空まで飛来したって聞いた」
「そう聞いたな。本当か？」
「それはわからない。あたしはツェンカーの人間じゃないから。ツェンカーから流れ込む人の話もまちまちで、どれが本当なんだか良くわからないの。だけど、どちらにしたってトラファルガーはもう間もなく、活動を開始する」
深刻な顔でそう言い切ったシアは、それからキグナスの方へ顔を戻した。
「今、到着したの？」

「ああ。長距離乗合馬車で、アスコから」
「じゃあ、疲れたでしょ。宿は？」
「探そうと思ってるとこだけど……この有様じゃあ、期待出来ねえかなあ……」
「ウチに泊まれば？」
ぼやくように答えるキグナスに、シアがあっさりと言った。「ふえ？」と目を瞬くキグナスに、シアがにこっと笑ってまた俺たちに視線を向けた。
「良かったら、だけど。泊まるところを探すの、きっと大変でしょう。ウチで良かったら、何も出来ないけど、寝る場所の提供くらいは出来ると思います。その辺で寝るよりは、少しはましなんじゃないかな」
「それはありがたいけど……良いのか？」
「うん。それほど大きい家じゃないから、窮屈かもしれないけれど」
そう前置きをしてから、シアは、もう一度キグナスに微笑みかけた。
「迷惑じゃなかったら、一晩の宿を提供します」

◆◇◆

シアが住んでいると言う家は、噴水のある大きな広場から２０分ほど奥の方へ移動したところにあった。
小さい、とは言うけれど、俺と同年代の女の子がひとりで住むにはちゃんとした一戸建ての家で、聞いてみればシアが以前勤めていたレンスバレロのパン屋さんの店長さんから借りているのだそうだ。１階建てのこじんまりとした家で、リビングと小さなキッチン、それから他には２部屋があるだけだった。
「客室と言えるのが、この部屋しかないの。全員入るには……狭いよね？」
１部屋はシアの寝室に当てられているらしい。それの他にあるも

う1部屋は、確かに、レイアを勘定しなくても5人でここに寝ろと言うのは厳しいものがなくはない。
「いいよ、俺たち、こっちの部屋で寝る。適当にやるから、布団とかいらねぇし」
寝る時には男性陣3人がリビングを借りることにして話がまとまると、とりあえず夕食を取ることにする。荷物を置いて近くの食堂へ足を運ぶことにした。ちなみに目立つレイアはお留守番だ。
「ボリュームはあるし、味もオススメだよ。おいしいんだから。おじさん、今日の日替わり、何？」
「今日はリズルと野菜のクリーム煮か、ケルルの蒸し焼きだ」
「じゃああたし、クリーム煮」
リズルと言うのはどうやら白身魚、ケルルと言うのは小動物のようだ。各々適当に注文をして料理が運ばれてくるのを待つ間、シアはこの街の最近のことを話してくれた。
「とにかく引っ切り無しに人の出入りが激しいよ。マカロフの西部に向かおうと思う人がとりあえず立ち寄るって感じで、先月の頭辺りからはこんな様子だったみたい。あたしはその頃はまだこっちにいなかったけど、レンスバレロなんかも人の出入りが増えてたし」
「みんな、どこを目指してるんだ？」
「さあ。だけど帝国は今、戦争中でしょう？だからもう、逃げる先って言ったら、マカロフかワインバーガの西部か……そんなとこしか思いつかないんじゃないかなあ」
気持ちはわかるけどね……とシアはテーブルに両肘をついて、組んだ手の甲に顎を乗せた。ため息をつく。
「何せドラゴンなんか出た日には、一気に街がひとつ壊滅するってんだから。マカロフでもこの辺りはトラファルガーが出るか出ないか、微妙と言えば微妙じゃない？まあ概ね大丈夫だとは思うけどさ。逃げといた方がいいのかなあとか思ったり、まあ大丈夫かあって思ったり」
「実家はあるんだろ？」

「うん」
キグナスの言葉に、シアが頷く。それを受けて、ユリアが尋ねた。
「実家は、どこなの？」
「ナタリアだよ。ナタリアのロセットって言う小さな町。南部の方だから、トラファルガーとはまあ関係がないね」
「そう……」
やがて注文した食事が運ばれて来る。それぞれメインとなるクリーム煮か蒸し焼きと共に、パンと簡単なサラダがついた。ちなみにニーナは相変わらず、サラダだけ。
「シアちゃんのパンには負けるがなッ」
「ふふ。おじさんのパンも、あたしは好きだよ」
「泣かせるねえ」
軽口を叩いておじさんがいなくなると、食事に手をつける。俺が頼んだのは蒸し焼きって方だけど、どっか鶏肉みたいなあっさりした肉だった。どんな動物なのか今ひとつわからないのが気にはなるが、まあ気にしない方が良いだろう。食えるんだから、気にせず食っておいた方が良い。
「シアも、魔法が使えるの？」
エルレ・デルファルと言えば、魔術師養成の学校だ。普通に考えればその学校でキグナスと同級生だったってことは、シアも魔術師ってことになる。そう思って尋ねてみると、シアは苦笑した。
「残念ながら。あたしは使えない」
「え、だって」
「あたしはリタイア組なんだよ」
「リタイア組？」
きょとんと尋ねると、シアは屈託なく頷いた。その隣でキグナスが複雑そうな顔をしてパンをちぎっている。
「エルレ・デルファルってのは、厳しいから。落ちこぼれにはついていけないように出来てるんだ。だから、出来ない奴は、強制退学になる」

「そうなんだ……」
「何だっけ。単位の取得とかあるんだよな？試験がしょっちゅうあるとかって聞いたことがあるけど」
口を挟んだシサーに、シアは顔を向けて頷いた。
「そう。そんであたしは駄目だったってわけ。実技にいくまでに落ちちゃったし、その後自分で勉強したりしたわけじゃないから、今は本当に何も使えないんだ」
へえ～……そうなんだ。
何となくしみじみと、キグナスを見る。本人が自分のことを馬鹿だ落ちこぼれだ言うものだから、今ひとつなのかと思っていたけれど、そういうわけじゃないんじゃないか。だってキグナスはまがりなりにも卒業をしているんだから。
魔術師ってのがごろごろいるものじゃないと言うのはわかっていたつもりだけど、でも本当に魔法を実戦で使える人間ってのはエリートにあたるんだな。エルレ・デルファルがエリート街道ってのは話には聞いているけれど、何せ俺の知っている卒業生がアレとコレなものだから、エリートって感覚がなかった。
「何だよ」
しみじみと見ている俺の目線に気がついて、キグナスが目を上げる。
「いや……キグナス、エリートくんなんじゃんと思って。俺、初めてキグナスを尊敬した」
「褒めてるのか？喧嘩売ってるのか？」
「褒めてる以外に聞こえるの？」
「聞こえる」
「あ、そうだ。シア、知っていたら教えて欲しいんだがな」
俺とキグナスがごちゃごちゃ言っているのを笑って聞いていたシアに、ひとりさっさと皿を空にしてしまったシサーが思い出したように話を振った。シアが顔を上げる。
「何？」

「ツェンカーに、何か胡散臭い動きと言うか……そういうのがあると言う話は聞いたことがあるか？」
　シサーの問いに、パンを口に放り込んだシアは眉を顰めて首を傾げた。
「ツェンカーに？」
「ああ」
「……あたしは、ないなあ」
「そうか」
「リトリアじゃなくて？」
「リトリアか……」
　呟くように言って、エール酒のグラスを指先でなぞる。
「リトリアにも何か変な動きがあるらしいってのは、俺もさっき馬車ん中でちらっと聞いたな」
「わたしたちも聞いたわ」
「リトリアは、内乱の動きがあるって聞いてるよ」
「反乱か」
　シアが硬い眼差しで頷く。
「クラスフェルド王に対する反乱の動きだって。今、どこまで話が進んだのかは知らないけれど、それは確かみたい」
「ツェンカーは？」
「ツェンカーは、あたしは聞いたことがないよ。でも、新代表が決まってまだ間もないから……おかしくはないとも思うけど」
「う～ん……そうか」
「ツェンカーに行くんだったら、そっちで話を聞いた方が確実だと思うよ」
　それはそうなんだろうけど。

第3部第1章第15話　ｂｒｅｖｉｓ　ｌａｒｖａ（4）

でも、どっちなんだろうな。
どっちにそういう不穏な動きがあるのかで、ヴァルスの動きにも大きな影響が出るし、そもそも俺たち自身の今後に多大な影響が出るんだ。
だけど今のところ聞く限りでは、リトリアのセンが強そうだろうか。情報が他国の民間に下りてくる速度を考慮すれば、リトリアに関しては既に何かでかい動きが起こっているのかもしれない。対するツェンカーは、何か起こるのだとしても、まだ実際の大きな動きと言うのはまだないんだろう、多分。
だけど――トラファルガー……。
「リトリアでは、今度の戦に対する不満があるんだって話を聞いてるよ。だけど、詳しい話は良くわからない」
「戦に対する不満か……」
「ツェンカーは、トラファルガーの襲撃に備えて今度の代表を選んだんでしょ？」
ニーナの問いに、シアがクリーム煮の野菜をフォークで刺しながら頷いた。
「そうみたい。だけど、もうひとりの候補者を補佐として、問題なくいってるみたいだよ」
「もうひとりの候補者……アルディアとか言ったか？補佐官に立ってるのか」
「そう」
「……その、支持者たちは？」
「……」
俺の素朴な疑問に、シアが黙る。黙ったままで、俺を見つめた。
そんな凄いことを言っただろうか。
「それは……わからないけど」

「じゃあ、火種になり得るものは、なきにしもあらずか」
支持する側とされる側が一心同体とは限らないもんな。ルーベルトとの協力体制をアルディアが受け入れたとしたって、その支持者たちも同じとは限らない。
それが、そしてヴァルス王女ユリアの訪問が、何かトラブルに繋がらなきゃ良いんだけど……。
「あーうまかった」
しばらくして食事を終えると、店を出る。シアおすすめのお店は、味も良かったし、ボリュームも十分で、しかも安かった。
買い物に行って適当にシアの家に帰っていると言うシサーとニーナと別れて、俺とキグナス、ユリアは、シアの案内でグリンローズを少し歩いてみることにした。人の姿はやはり、多い。
「マカロフって果実酒が美味しいの？」
「美味しいよ。小さいのもあるから、買って行けば？その辺の屋台で飲み比べなんかも出来るはず」
シアに案内されて、混雑の合間を縫って屋台を覗く。飲み比べと言っても結構気前の良い量で、あんまり何種類も比べてたら、それだけでべろべろになりそうだ。
「すっごい、フルーティなのね」
「果実の味が濃いなあ。甘い」
「飲みやすいな。香りが芳醇だね」
「ユリアちゃん、あんまり飲まない方が良いかもよ。口当たりの割には、結構アルコールが強いんだ」
屋台を覗いては試食をもらったり、謎の彫り物に笑ったり、ちょっとしたゲームに首を突っ込んだりしてみる。屋台に並ぶものは結構町や国の特徴が良く出るから、俺はこういうのを見ているのは凄く好きだった。
「後はそうだなあ。見せ物小屋でも行ってみる？それか……あ、そうだ。良いとこがあるんだ」
「へえ？何だ？」

「月華公園」
「ゲッカコウエン？」
「うん。マカロフの中でもこの辺りにしかない月華草ってのがあって、昼間はただの白い花なんだけどさ……今日は月が綺麗だし、きっと綺麗だよ。行ってみようか」
そう言って、シアとキグナスが前を歩き出す。ユリアを何気なく振り返って、俺は足を止めた。
「カズキ……ッ」
「ユリア、平気？」
俺とユリアの間を数人が隔てていて、ともすればユリアがはぐれそうだ。足を止めてユリアを待つ俺に追いついたユリアは、大きな目を丸くして、俺を見上げた。
「置いて行かれるかと思って焦っちゃった」
「人が凄いから気をつけないと、はぐれちゃうな……って、あれ？」
言ってるそばからこれだ。
前を歩いていたはずのキグナスとシアの姿が、既にどこにもない。
「え？あれ？はぐれちゃったの？」
「……かな。まだその辺にいるよ。追いかけよう」
そう言って歩き出しかけて、ユリアを顔だけで振り返った。ユリアが俺を見上げる顔を見て、迷う。浮かんだ考えにどきどきして、躊躇って、それから、隣を歩くユリアの手を、繋ぐ。
「……ユリアとまで、はぐれても、困るから」
「う、うん……」
照れたせいで、そっけない口調になった。そっぽを向いてぼそっと言い訳がましく言う俺に、ユリアも恥ずかしそうな掠れた小さな声で頷く。
細い、柔らかい、小さな手。
繋いだユリアの手から伝わる温もりに、鼓動が速くなる。キグナスの姿を探して人込みの中に視線を向けるけれど、神経はユリアと繋いだ手に、気配に行ってしまっていて、どこか上の空だ。彼女と

手を繋いでいる、それだけで、幸せに感じた。
「いないわね」
「うん……どこに行くって言ってたっけ。ゲッカコウエンって言った？」
「と思うわ。じゃあ、そこに行ってみる？」
「そうだね」
ユリアも、繋いだままの手を嫌がる気配はない。恥ずかしそうな顔をしてはいるけれど、外そうとする様子はなかった。そのことに安心して、だけどどきどきしたままで月華公園と言うのを探してみることに決める。
「そこに行ってみていなかったら……戻ろうか」
「そうね。……どこにあるのかしら」
「さっきの口調だったら、その辺なんじゃないの……何せ、文字も読めないし、言葉もわからないからな……」
全くもって『外国』だ。
ともかくも、今いる、狭い路地に人がひしめいている状態から脱け出す為に歩いていく。大きな通りにぶつかって、そこでは少し、混雑から解放された。と言って、せっかく繋いだ手を放すつもりは微塵もないわけだが。
「誰かヴァルス語がわかる人、いないかな」
「旅人っぽい人なら、わかるんじゃない？」
「わかるかもしれないけど、その場合月華公園がわからないんじゃない？行商人風の人とか狙いかな」
「そうかも。あ、あの人はどう？」
「よし、聞いてみよう」
基本的には、常に殺伐としている旅の中、こういう僅かな時間に心が洗われる。交わす言葉や笑顔、そして、君の声。……伝わる温もり。
どうしても愛しい。手に入ることがないと、知っていても。
仮初（かりそめ）でも良い……今だけだってことは、わかっているんだ……。

だったら逆に、今だけでも――君のそばにいられる間だけでも。……一時的にだけでも、せめて気持ちが、通じ合えれば、良いのに……。

「こっちの方みたいだよ」

「ここでしか見られないお花って、どんなのなのかしらね」

「うん。……キグナスたちは、いるのかな」

ヴァルス語を何となく理解してくれた行商人風のおじさんに道を聞いて、その言葉通りに月華公園を目指して歩いて行く。メインストリートなんかからは少し外れていくせいか、人の通りは相変わらず多いものの、少しずつごちゃごちゃしなくなっていった。広いとも狭いとも言えない何とも中途半端な通りにぶつかり、言われた通りにそれを左に曲がる。この通りには出店はなく、けれど避難民のような人たちがいるのは相変わらずだ。

そうしてその道を少し行くと、やがて黒い大きな門が見えた。そのすぐそばに受付みたいなのがあって、門の内側はすぐに遊歩道のようなものが続いている。左右には木々が立ち並び、カンテラの灯がぼんやりと照らしていた。受付に近付く。

「ここかな」

「公園みたいではあるわね」

「行ってみよう。違ったら違ったで……とりあえず、人の家ではなさそうだし」

ヴァルス語のままで、２人であることを告げる。受付のおばさんはさすが接客業、ヴァルス語をカタコトで理解してくれて、ここがシアの言っていた月華公園であることを確認して中に入ってみることにした。どうやらここは、有料らしい。だけど別に高額でも何でもなく、俺の感覚に置き換えれば１００円くらい。公園を綺麗に整備しておく為の費用を、来訪者からカンパしてもらってると言うような風情。

安いとは言え有料だし、門もあるしで、中に入ってみるとここには避難民の姿は見当たらなかった。綺麗に整備された遊歩道の中、

人の気配はあんまりなさそう。ないことはないんだろうけど、カップルばっかりなんだろうか。結構、静かだ。街の屋台の方のざわめきが、風に乗ってここまで届く。

「あれは……何だろうね。湖？てほどじゃないか。池かな」

遊歩道の少し先に、池が見える。そして、門から入ってすぐは少しの間続いていた左右の木々が途切れ、敷き詰められた芝生が広がった。その芝生の合間に揺れている花に、目を奪われる。

「これ、かな……」

「そうじゃない？凄い、綺麗ね」

昼間はただの白い花って言ってた。

だけど、月の光を浴びたその花は、まるで花びらが発光しているかのように、夜の中で光を放っている。

色は、それぞれだ。薄青く光っているものもあれば、赤がかったような光り方のものもある。それが、芝生と言い、木々の合間と言い、光りながら風に揺れていた。

「すっごいな……」

イルミネーションのようだ。けれど、自然に生えている植物のせいか、光に毒々しさは一切なく、どこか柔らかく儚くて、上品な輝きだった。

「あっち、凄いわ。お花畑？」

「行ってみよう」

ユリアが池の右側を指す。顔を見合わせて笑うと、俺とユリアはそちらに向かって歩き出した。

何か、これじゃあまるでデートでもしてるみたいだ。ユリアとふたりで手を繋いで、不思議な花の光が揺れる幻想的な風景の中……。

「綺麗……凄いわね、本当に」

「うん……」

この辺りは、月華草が多く植えられているみたいだ。足元が、柔らかい光に一面包まれている。これが全部花だと言うのが、不思議だった。面白いものがあるんだな。

「シャインカルクにも植えたいわ」
「種とか持って帰れないのかな。育たないのかな」
「どうなのかしらね。後でシアに聞いてみるわ」
手を繋いだまま、ゆっくりと、花の間の細い道を進んでいく。左手の池が、月の光と花の光を反射して、きらきらと輝く。
……こうしている間にまた、ユリアへの想いが、育つ。繋いだ手に伝わるユリアの存在が、伝えたい想いを深くしていく。
「一緒に来られて、良かった」
ユリアがふと足を止めて、不意にそんなふうに言った。俺も足を止めて、ユリアを見下ろす。
「え？」
「離れている間は、怖かったの」
怖かった？
意味がわからないでいる俺に、ユリアが笑った。目を細めて、微かに顔を揺らす。ふわっと長い髪が、緩やかな風に揺れる。
「カズキがどうしているのか、いつも考えてた。何かあったらどうしようって、怖くて怖くて仕方がなかった」
「ユリア……」
「今は、こうしてそばにいられるから、どうしているのかがわかるから、そんな不安が必要なくなったわ」
無言でユリアを見つめる。
……いつも？いつも考えてた？――俺のこと？
そ、そんなこと言わないでくれ。そうじゃなくたって、初めて手を繋げて少し、浮かれている。そんなふうに言われたら、勘違いするぞ。……それ以上が、欲しくなるじゃないか……。
さっきよりももっと、鼓動が速くなる。
見つめる俺に、ユリアも無言で見つめ返していた。
言葉ではなく、心が触れ合っているような空気。切ないほど、込み上げる想い。
「俺は……」

「うん」
伝えたい。……ユリアが好きだ。
「俺は、この世界に来てからずっと、ユリアのことだけ考えてる」
ユリアが大きな目を、更に見開く。
伝えたい。
触れたい。
誰より、好きだ……。
「ユリアの力になりたいって、ずっとそう思ってるから、俺は……」
精一杯言葉を選ぶ俺に、ユリアの瞳が俺を見つめたままで不意に少し潤んだ。
その表情が、俺の中の期待を後押しする。
まるで、ユリアも俺と同じ気持ちでいてくれているように見える。
途切れた俺の言葉に、ユリアが一瞬視線を伏せた。
それから再び、俺を見上げる。――お互いの間に、迷うような空気。
どきどきし過ぎて、胸が痛いくらいだ。
「俺は、ユリアが……」
迷いながらユリアの頬に繋いでいない方の手をそっと触れると、ユリアがゆっくりと瞳を閉じた。
（……まじ？）
ちょっと、これは……。
唇が触れ合う寸前、最後の肝心な一言を口に仕掛けたその瞬間。
「すっげえな。これが月華草？」
……くぅぅぅ。
「そう。マカロフにしかないんだよ……あっれえ？」
「あ、カズキ」
「ユリアちゃん」
木々に遮られた遊歩道の方から、がさがさと言う音と共にキグナスとシアが姿を現した。
（……くっそぉぉぉ……）

あと5秒！！
「いつの間に来たのー。……どしたの？2人とも」
「別に……」
キグナスの声が聞こえた瞬間、むしろ不自然とさえ言える距離を咄嗟に空けた俺とユリアに、キグナスとシアがきょとんと視線を向ける。気まずいやら照れ臭いやら悔しいやらで、曖昧にそっぽを向きながらぐしゃぐしゃと髪を掻き混ぜた。
「探したんだぞぉ」
「ごめん。ここに来るって聞いてたから、その方が確実かと思って」
「まあね、あの人込みじゃあ、見つけるのは大変だと思うし。だからあたしたちも、もしかしてと思ってこっちに来たんだ」
「ああそう？」
返事をしながら、ちらりとユリアに視線を向ける。ユリアの方もちょうど、俺の方に視線を向けたところだった。目が合う。どこか気恥ずかしい空気、だけど、目が合ったまま、ユリアがふわりと笑っ……。
（……うっわ～～～……）
ちょっと、今の笑顔は、たまんないぞ……。
（何でも出来る気がする、俺……）
その笑顔の為だったら。
ユリアの為だったら――トラファルガーでも反乱軍でも、受けて立つ。
単純と笑うなら笑ってくれッ。
……どんなに難題だとしたって、ツェンカーを、ヴァルスの味方に引きずり込んでやる。

第3部第1章第16話　ツェンカーの武器商人（1）

翌朝、シアに見送られる中、再び長距離馬車に乗ってグリンローズを発つ。

グリンローズまで乗って来たのと同じように、荷台に箱がくっついているような馬車の窓から振り返ると、シアはいつまでも名残惜しそうに見送ってくれていた。

「キグナスの初恋の人？」

「……違ぇよ」

「何で？可愛いのに。仲良さそうだったし」

「仲は悪かなかったけど。でもあいつ、あんなに女らしくなかったもん」

グリンローズからまたいくつかの街を経てマカロフを移動し、宿泊を挟んでまた長距離馬車を乗り継ぎ、ようやく到達したツェンカーの国境で馬車を下ろされる。ここからは国が違うから、また徒歩での移動を強いられることになる。

とりあえず俺たちがまず向かうことにしているのは、ツェンカーの中でもオーバスヴェルグと言う街だ。そこそこ大きな街だと聞いている。

向かう理由は、ジフの紹介状。

ジフからオーバスヴェルグの武器商ジークフリートと言う人への紹介状を預かっているから、せっかくなので会いに行って、何か良いことがあったら良いなあと。

ツェンカーに妙な動きがあると言うのならば、ルーベルトに会う前に確かめておきたいし、トラファルガーがうんたらってのも、話を聞けるに越したことはない。と言うか、聞かないことには落ち着かない。

マカロフの北部についた辺りから気温は下がり、ツェンカーに入った今、目に見えて寒くなっている。国境の町クルモから、たまた

ま知り合った旅芸人の一座に伴われてツァハリーアスと言う小高い山地から東を見晴らすと、海の向こうに白々とした大陸らしきものを望むことが出来た。
　氷の大陸――フレザイル。
「うおーッすっげえーッ景色が寒いーッ」
「あれは本物だもんね」
「何だ？本物って」
「海底のダンジョンの第3階層だろ？」
「そうそう」
　ツァハリーアス山地の山頂にある小さな村ウードに立ち寄ると言う旅芸人一座と別れて、俺たちはそこから一路、下山をすることになる。オーバスヴェルグはツェンカーの東側に位置していて、今回の代表者戦でルーベルトに敗北することになったアルディアの出身地である大きな街ロドと、ツェンカーの首都フリュージュのちょうど間くらいになるらしい。国境越えをしていきなりオーバスヴェルグに到着することは出来ないから、今日のところはツァハリーアス山地を越えた麓の村セリムに立ち寄ることになっている。
　ツァハリーアス山地は、どこか木々の凍えた、寒々しい風景の山地だ。今は雪こそ降っていないものの、降った日でもあったらしく、ところどころ日陰には僅かに積もった雪の名残が垣間見える。日が短く、昼を過ぎてまだ夕方には早い時間だと言うのに、既に日が翳り始めていた。吐く息は、ほのかに白い。
「魔物の姿は、あんまりないんだね」
　ヴァルスを移動中、余りにも魔物が多発していたせいで、こういう山地なんかを歩いていると、つい警戒する癖がついている。それは別に悪いことではないんだろうが、こう警戒しているのに何も出ないと逆に気が緩む。
「言ったろ。北部は南部より元々魔物が少ねぇんだ。戦禍で魔物の発生率が入り乱れているヴァルスなんかと比べりゃ、随分少ないように感じてもおかしくねえなあ」

俺の言葉に答えたシサーはそこまで言ってから、辺りをきょろっと見回して微かに険しい表情を浮かべた。
「……それだけじゃねえかもしれないけどな」
「どういうこと？」
「最強の魔物の徘徊を恐れて、身を潜めているのかもしれねえ」
「でも……氷竜は活動を開始しているのかしらね。レイア、何かわからない？」
ユリアの問いに、荷袋の中から顔を出したレイアが、顰め面で答えた。
「嫌な感じ」
「何それ」
「精霊の気が、乱れているのよ」
すぽんと荷袋に戻ってしまったレイアの言葉を補足するように、ニーナもどこか薄ら寒い顔をしながら口を開いた。
「精霊の気が乱れてる？」
「そう。……危険かもしれないわよ。これ。本当に」
ニーナがそう言うんなら、結構ヤバイのかもしれない。
魔物の姿はどこにも見えないにも関わらず、何かが薄ら寒い。乾いた淡いベージュのような地面には緑の姿はなく、左右に立ち並ぶ木々も葉が落ちて枯れ荒み、間を吹き抜ける冷たい風が嫌な音を立てる。
クォォォォ……ッ……。
その音が聞こえたのは、一瞬風が止んだ、その隙を縫ってのことだった。
「何……？」
ユリアが不安そうな顔で、辺りを見回す。シサーが険しい目線を遥か遠くへ送りながら、微かに目を細めた。
「安心しろよ。今、その辺にいるわけじゃねえ」
「……氷竜？」
「の、咆哮だな」

グラムドリングの警告光は、ない。静かなものだ。それを思えば、確かに氷竜は今すぐ俺たちを危険に曝すわけではないんだろう。

けれど。

クォォォォォッ……コォォォォォッ……。

奇妙な反響を伴って、再びその声が響いた。冷気を運ぶ風に乗って、人々を恐怖に陥れようとツェンカーの上空へ響いて消える。

「ユリア」

視線を遠く――フレザイルの方角へ向けたまま、シサーが低く呼ぶ。同じく視線を遠くへ向けたままで、ユリアが小さく掠れた声で答えた。

「何？」

「行くのか。……フリュージュに」

確認するようなその問いかけに、一瞬息を飲んだユリアは、ややしてシサーに真っ直ぐな視線を向けて頷いた。

「行くわ。必ず、ヴァルスに、手を貸してもらう」

◆◇◆

ツァハリーアス山地を越える間、時折人とすれ違った。それは、まるで夜逃げのようにも見えた。

トラファルガーを恐れて、ツェンカーを逃げ出す人々の姿だろうと思う。

その姿は、誰もが恐怖に怯えて、無口だった。試しにトラファルガーが飛来したとかしないとかって噂の真偽について聞こうと思っても、顔を逸らして逃げてしまうか、「ツェンカーに行くならやめた方が良い」と言う曖昧な警告か、そのいずれかしか得ることが出なかった。

けれど、あれが確かにトラファルガーの咆哮だと言うのなら……捕食地帯に住む人々が逃げ出すのも無理はないだろう。

ツェンカーの全土がトラファルガーの捕食地帯に入ると言っても、

もちろん、一度の目覚めで全土を襲撃し尽すと言うわけじゃない。ターゲットにされて壊滅になる街もあれば、無傷に済む街もあるわけで、トラファルガーが活動に入ったからと言って必ずしも襲撃を受けるとは限らないのだそうだ。

けれど、トラファルガーにとっての襲撃対象地域はツェンカーの全土に及ぶ。まるでロシアンルーレットのようなものだ。当たるかもしれない。当たらないかもしれない。けれど、当たってしまった場合には、ほぼ確実に逃れられない。

そう考えれば、まだわからないうちに逃げ出したくなるのも道理だろう。逆に言えば、わからないものだから逃げ出そうとしない人々ももちろんいるわけで……と、言うよりはそっちの方が大半なわけで、ツェンカーのあちこちではトラファルガー対策が開かれてもいるらしい。

ツァハリーアス山地を越えてセリムを訪れた俺たちが、ようやくオーバスヴェルグの街に到着したのは、既に霧の月に入ってからのことだった。いよいよ寒さが増していく。マカロフで多少なりの衣服を揃えはしたものの、ツェンカーでまた装備を改めた方が良いかもしれない。マカロフも結構寒かったけれど、ツァハリーアス山地を境にあっちとこっちではまた気温がかなり変わるらしい。霧の月つったら、俺的に10月。だけど気温としては、もう1月のようだ。吐く息は、昼間でも真っ白。

「とりあえずは、チェックポイントだな」

徒歩での移動で、日暮れも間近になってから、オーバスヴェルグの市街門が見えて来た。ここに来るまでの間に、既に3回もトラファルガーの咆哮がツェンカーの空に響き渡っている。これで、ついた途端に襲われでもしようものなら、何の為にヴァルスから遥々やって来たのだかわからない。

「素直には、いかないでしょうね」

オーバスヴェルグに向かって歩き続けながら、ニーナがぽつんと言う。それに答えて、ユリアが微かに緊張したような面持ちを見せ

た。

「いかないかもしれない。けれど、ここまで来たんだもの。交渉だけはしてみなければ、話にならないわ」

モナ、マカロフは、現在ヴァルスとしては敵国と言える国じゃない。

その為、シャインカルクにいるラウバルとの連絡手段として、それぞれの国にあるヴァルスの大使館を使用することが出来る。電話やメールが出来るわけじゃないし、書簡のやり取りにしたっていちいち時間がかかるからあんまりリアルタイムの情報は良くわからないけれど、とりあえずラウバルから届いた情報を見る限りでは、霧の月の今、ヴァルスはまだ敗北を喫したとの話は届いていない。

戦況は良くないみたいだけれど、例えばここでツェンカーを引き込むことが出来たら、挙兵したツェンカーに対してナタリア、うまくすればリトリアもヴァルスからの撤退を余儀なくされるはずだ。その間に、何とかカール公がうまく立ち回ってくれて、モナも挙兵に漕ぎ付けられれば尚良いわけなんだが。

リトリアで内乱って話が、本当だったら良いな。そうすれば、クラスフェルド王に対する反乱の動きって話だから、リトリアはかなり手足を縛られることになる。

そんなことを考えながら市街門をくぐると、オーバルヴェルグは何となく、堅実な感じの空気が漂う街だった。

華やか、とは言えないかもしれない。けれど、白い石壁に赤みを帯びた屋根の建物が整然と立ち並び、大小さまざまな石を敷き詰めた道は広く、綺麗な街並みだった。華やかさに欠けるのは多分、緑や花が少ないせいだろう。

いや、それだけじゃないかもしれない。

（疲れてるな、何か……）

道を行き交う人々の顔が。

疲れている、と言うのとは違うだろうか。浮かない顔――街に残っている人々も、きっとトラファルガーの恐怖に怯えているんだろ

う。

ドラゴンか……ドラゴンねえ……。

会わないって決めたはずなんだけど、何だかもう崖っぷちと言う気がする。秒読み開始の気分だ。

ドラゴンとなんか戦いたくないのはもちろんのこと、出来れば会わずに済めばありがたいんだが、だけど俺自身ドラゴンの実物を見たことがないので、実は余りその恐ろしさと言うものが、良くわかってはいない。大きささえも今ひとつわかってはいない。海底のダンジョンで遭遇したドラゴン・ゾンビ……あれよりでかくて、あれより強いんだろうとは思うものの……。

「とりあえずは、ジークフリートって人のところに行ってみる？」

行き交う人々の冴えない顔を眺めながら、言ってみる。泊めてもらえるような状況ならららっきー、そうじゃなくてもまあ……グリンローズなんかとは真逆で、この様子だったら宿に困ることもなさそうだろう。

「そうだな……道具屋で、聞いてみっか」

シサーの言葉に従って、街を進んだ中ほどで見つけた道具屋にとりあえず足を踏み入れる。建物自体はわりと綺麗な道具屋で、それなりの広さの店にいくつもの棚が立ち並んでいた。

「いらっしゃいませ」

明るい女の子の声が聞こえる。そういうものなのか何なのかは良くわからないが、道具屋さんと言うのは総じて若い女の子が店番をしていることが少なくない。ちなみに武器屋は、基本的に男性が多い。理由があるのかないのかは、知らない。

お店の奥から出て来た女の子の姿に、シサーが口を開く。それに答えて、女の子も愛想良く笑顔で答えた。とは言え、その会話の内容までは、俺にはさっぱりわからない。ツェンカーで使われているイリアス語だと言う。わかるわけがない。

「これ、何に使うんだと思う？」

「さあ……頭に乗っけるんじゃねえの？」

「乗っけてどうするの？」
「踊る」
「……その発想が斬新だよね」
「馬鹿にすんなよ？」
言ってることがわからないので、暇つぶしにその辺の棚を覗き込んでキグナスと下らないことを話しながら、俺は内心首を傾げた。
メイアンで聞いた言葉――あれが未だに気になっているのは相変わらずなんだけど、やっぱりこうしてイリアス語を耳にしても、良くわからない。
ただし、逆に言えばマカロフの言葉のように「これじゃないと思うなあ」と言うほどでもない。
近いような気がする。メイアンで耳にした言葉と。韻の踏み方と言うか、発音の仕方と言うか。
だけど、全く同じ文章を話してくれる人がいるわけじゃないから、違うと言われれば違うような気もする。
リトリア語ってのも聞いてみれば、もう少し一番どれっぽいかってのがわかるかもしれないけどな。残念ながら、リトリア語は今のところ耳にする予定がない。
いずれにしても、あのメイアンの件はともかくとしても、リトリアもしくはツェンカーで何か起こるんじゃないかって話はあるわけだけど……。
「ついでに、何か買って行くか」
「ああ、うん……そうだね。キグナスがこれが欲しいみたい」
「誰が欲しいつったよッ」
「頭に乗せて踊りたいんじゃないの？」
「じゃあ2人にお揃いで買ってやろうか？」
「……俺も？」
馬鹿なことはとりあえず置いておいて、ありがちに薬や携帯食の補充をすると、店を出る。道具屋でジークフリートの武器屋の所在を聞くことが出来たらしいシサーの道案内に従って歩きながら、そ

の途中で衣服も追加して購入をしてみた。今の装備だと、俺だけじゃなくてとりあえず全員、心許ない。

「んーで、3本目の角を左に行ってー……おっと、あったな、飲み屋。こいつの裏手にあるはず……」

シサーの先導で言われた通りに歩いて行くと、そのちょっと上品とは言いにくいその飲み屋の裏側に、確かにこじんまりとした店構えが見えた。ドアの横に立て看板があって、何やら梵字のような、書いてあることの想像さえつけにくい文字が書かれている。ヴァルス語で手一杯だ、俺は。

怯える人々が外出を控えるせいか、日が沈み始めて人の気配は一層少ない。飲み屋も疲れた風のおじさんが数人、ひとり飲みしているのが見える感じ。ギャヴァンなんかのうるさいぐらいの賑やかさはかけらもない。

「何かこう……全体的に寂れてる感があるよね……」

「時期が時期だからだろう。普段からこうってわけじゃねえけど……」

言いながらシサーが武器屋の扉を開けた。キィッと言う音が響き、覗いた店内には誰もいない。小さな店内にはいくつか剣や防具が展示してあって、だけどその品数は余り多くはないようだ。

「店員さんが……」

「いらっしゃいませ」

「うわ」

いないのかと思ったら、いつの間にかカウンターの内側に姿を現していてびっくりした。蜜柑色の癖のないさらさらの髪と明るい茶色っぽい小さな瞳の男の人だ。背は高いけれど、ちょっとひょろっとした感じがあって、にこにこと人の良さそうな笑顔を浮かべている。微笑むと、細い目が糸のようになってしまって見えなくなる。

「何かお探しですか」

「今、どこから現れたんだ?」

余りに唐突にカウンターの内側に現れたので、シサーがヴァルス

語で呆れたように言う。すると、それに応えてか、男性もヴァルス語で「ああ」と笑ってカウンターの下を指差した。
「ここ、僕の倉庫になってるんです。最近お客さんもあんまり来ないし、暇な時は下に籠もっていることも少なくなくて」
言われてカウンターを覗き込んでみると、床に、地下に続いているような扉が見えた。男性は「よいしょ」とそれを閉めると、改めて俺たちに愛想の良い笑みを浮かべた。
「武器ですか？」
年の頃はシサーと変わらないくらいだろうか。思ったより若い。ぱんぱんと手の埃を叩くような仕草をしながら、カウンターの内側から出て来る。
「いや、人を訪ねてきた」
「人？ここには誰もいませんよ」
「ジークフリートって人なんだが」
シサーが名前を出すと、男性がきょとんと細い目を瞬くそれから自分を指差した。
「僕ですか？」
「やっぱりあんたか。ジフリザーグの紹介で」
その言葉に、ジークフリートは一瞬口を噤んだ。それから目を見開く。
「え？ジフ？ギャヴァンの？」
「そう。ギルドの」

第3部第1章第16話　ツェンカーの武器商人（2）

「うわあ。懐かしいなあ。ジフの紹介で？ってことはあんたたちも、ギャヴァン？」

「……ま、そんなようなもんだ。とりあえず、預かっている書状に目を通してもらえるか？」

「そりゃあもちろん。へえ～ジフかあ。ジフ、元気？」

シサーから書状を受け取りながら、ジークフリートが再びにこにこしながら尋ねる。それから「あ」と呟くと、頭をかきながら俺たちに手招きをした。

「ギャヴァンからのお客さんに立ち話もないですねぇ。どうぞ、良かったらそこ、かけて下さい。ああ、椅子が足りないな。ちょっと待ってて下さいね」

そう言って店の隅にあるテーブルと椅子を示すと自分はいなくなり、やがて不足している椅子2脚を持って戻って来た。それからやかんを持ってくると、カウンターの後ろの棚から取り出したカップにお茶を注いで入れてくれる。

「ありがとうございます」

「すみません」

「いやあ、気が利かなくて……どうぞどうぞ。遠慮せず」

そう言いながら自分はカウンターに背中を預けて寄りかかりながら、書状を開いた。

「ジフ、ヘッドになったんでしょ？あれはどうしてますか？小生意気な弟、いたでしょう。シン。あとうるさいの。ゲイトって奴。メアリやエスタシークなんかはどうしてますか？」

どう答えて良いのかわからない。苦い沈黙が降りて、ジークフリートはきょとんと首を傾げた。それから書状に視線を落とす。

「その……メアリとかエスタシークって人は、俺らは面識がねぇな」

「ああ、そう？」

「ジフがヘッドになったのは確かだ」
「そっかあ。昔はすんごい嫌がってたって話だけどね……ふうん。あんたら、フリュージュに行くのか」
書状に目を通し終えたらしいジークフリートが元通り紙を畳みながら顔を上げると、応えてシサーが頷いた。
「言い遅れたが、俺はシサーだ」
シサーが言って、順番に自己紹介をしていく。それを受けて頷いていたジークフリートは、やがて体を起こして店の外に一度出ると、看板を畳んで、ドアにぶら下がっていた『営業中』の札らしきものをひっくり返して戻ってきた。
「今日はもう店じまいですね。改めて、僕は、ジークフリートです」
「え、だってまだ早い……」
「いーんです。どうせ、最近は客が来やしないんですから。今はいろいろと仕入れも厳しいご時勢で、品薄でもありますしね。それに……」
どこかで似たような意見を聞いたような気がすると思っていると、ジークフリートは人の良さそうな笑みを浮かべたままでちらっと手元の書状に視線を落とした。
「ジフに頼まれたら、出来るだけのことをしてやんなきゃ、悪いですから」
「あんたは、ジフとはどういう繋がりだ？幼友達とかってやつか」
お茶の入ったカップを弄びながらシサーが何気なく尋ねる。カウンターに寄りかかったままでジークフリートが笑う。
「みたいなもんですね。ジフの方が僕より随分年上だから、一緒に遊んだわけじゃないですけど」
「ああ、そうか」
「ちょっと借りがありまして。ジフの頼みなら気合い入れとかないとまずいかなーっなんて。まあ付き合いも長いですからね。ジフに『良いようにしてやってくれ』って言われたら、聞かないわけにはいかないなあ」

言いながらカウンターに置いたやかんを取り上げたジークフリートは、同じくカウンターの上に置いてあったカップをひとつ取り上げてやかんからお茶を注いだ。自分専用のカップらしい。やかんを再び置く。

「でも、その為にはあんた方の事情を少し聞かせてもらわないと、僕に何がしてあげられるのかがわからない」

「それはそうだな……」

ジークフリートの言葉に、シサーは苦笑をして押し黙った。

彼に、何をどう話して良いか考えているんだろう。

「まあ、あなた方が僕をどのくらい信用してどのくらい話をするのかにもよります」

人の良い笑みを浮かべたままで、ジークフリートはそう言ってカップに口をつけた。意外と食えない人のような雰囲気をかもし出しているのは、どこかジフと最初に会った時のことを思い出させる。

「ジークフリートさん」

「ジークでいいですよ。何？ええと、カズキ？」

「はい。じゃあ、ジーク。……ジークも、盗賊ってわけじゃあないんですよね」

「僕ですか？」

ジークが俺の言葉にくすくす笑った。

「違いますよ。僕はしがない武器商です。ジフとは知り合いだけど、僕は取り立ててギルドと深い付き合いをしていたつもりはありません」

ああ、そうなんだ。

「だけど、さっきも言った通りジフには個人的に借りがあって、ジフやギルドと仲が良かったメアリと言うのが僕の幼友達にいるんです。１２歳の頃から僕は彼女の父親に弟子入りして武器商について学ばせてもらっていたから、その繋がりでその辺の民間人よりは少しギルドの一部と知り合っているだけです」

「ふうん？メアリってのはギャヴァンの武器商か」

「の娘ですね。彼女自身は今は自警軍で働いているはずですけど」
「ジフへの借りってのは?差し支えなければ、だが」
何をどこまで話すべきか判断する材料としてだろう。ジークのことについて突っ込むシサーに、ジークはわかっていると言うようにやにやしながら頷いた。
「差し支えないですよ。要は、命の恩人って奴なんです」
「へえ?ジフが?」
「ええ。子供の頃、魔物に襲われかけたことがありましてね。それをジフが助けてくれた。彼らが来てくれなければ多分僕は、あのまま食われていたでしょう。まあ、それで、それ以来ジフに懐きまして」
「ああ、なるほど。それをきっかけに友人関係になったわけか」
「はは。先ほども言いましたが、年齢が離れてますんでね。友人と思ってくれているかはわかりませんが。僕としては、ジフに感謝をしていると言うところです」
そこでジークは口を閉ざした。シサーも少し考えるようにして、黙る。とりあえず、ジークと言う人をどう判断してどこまで話すのかは、シサーにお任せしよう。俺が口を挟めることじゃない気がする。
でも、ジフからジークへの書状には何をどの程度まで書いてあったんだろうな。
書状には封印が為されているし、他人への手紙を読むもんじゃないし、俺はもちろん、誰もジークへの書状を見ているわけじゃない。ジフ自身がそもそもツェンカーに向かう俺たちの目的を知っていたわけじゃないけれど、ユリアがヴァルス王女だと言うことは、ジフは知っている。
「ジークは、元々ギャヴァンだろう?」
「はい」
「どうしてツェンカーに?」
カップを撫でながら、ジークは軽く肩を竦めた。

「深い意味はありませんね。敢えて言うならば、ここの気質が好きだったとしか」
「へえ？」
「ローレシア大陸の中で、唯一国王を戴かない自治政権でしょう。そういう気概が何となく好きでしてね。どうせ自分で商売するんだったら、好きなところに行ってやってみようかなってだけですよ」
「そんで、ギャヴァンから来たのか？ひとりで？」
「アテもなく、と言うわけではないです。さっきも言ったメアリの父親が、紹介してくれましてね。僕が１６歳の頃に、今度はツェンカーの武器商の元で手伝わせてもらっていたんです。ロドと言う大きな街ですが。そうして２０歳になった頃に、オーバスヴェルグで独立をしました。５年前ですね」
じゃあこの人は今、２５歳ってところか。１２歳から武器商の仕事……既に１３年も続けていることになる。凄いな。
こっちの世界は、何となく早熟だ。シアにしても、俺と同い年で既に独立している。ワゴン販売だとしたって、彼女はあれを仕事として生計を立てているわけだ。ジークに至っては１２歳……俺の感覚で言えば小学生のうちから仕事を学び始めている。考えられない。
親の稼ぎで無駄飯食らいをただ置いておく、と言う余裕がないんだろう。もちろん学校に行って学んだりしているような人もいるわけで、そういうのはそれはそれで無駄飯食らいってわけじゃないんだろうけど、民間の子供は俺の世界のように誰もが学校に行けるわけじゃなさそうだ。となれば、学校に行けない子供たちは、ある程度の年齢になったら働かざるを得ないんだろう。シュールだ。
ジークが俺の年の頃には、家を離れて外国で仕事の修業をしてたんだな。で、この年にして起業していると。……俺がジークの年になった頃には、どうしてるんだろうな。
（生きてるかな……）
そもそもそれが問題だ。
「じゃあもう、ツェンカーで武器商の仕事に携わっているのは……」

「かれこれ9年ですか。10年近くなります」
そこで一度言葉を切ったジークは、シサーににやっと笑って見せた。
「だから、ルートはそれなりに安定したものを持っています。……ルートと言うのは、武器の流通だけじゃありません」
「……」
「情報も。……表のルート、裏のルートと」
さすがと言えば、言える。
俺たちが必要としていることが何なのか、察しが早い。
武器商ともなればアンダーグラウンドなところとも繋がらないわけじゃないだろうし、こう見えてこの人、それなりの修羅場をくぐってたりするんだろうか。
探るように目を細めたシサーは、しばしの沈黙を挟んで口を開いた。
「こっちの事情を話す前に、ひとつ、聞いておきたいことがあるんだが」
「どうぞ」
「あんたの持つ情報ルートは、政権にどのくらい食い込んでいる？」
ジークが軽く目を瞬いた。それから少し考えるようにして、答える。
「ルートそのものは、繋がっているともいないとも。その程度です」
「ふうん？あんた自身は？」
「……僕、ですか？」
「ああ」
シサーの聞きたいことを察したらしい。ジークは口の端を持ち上げて、持っていたカップをカウンターに置いた。
「僕は、多勢派、とでも言っておきましょうか。取り立てて政権にクチバシを突っ込む立場にもいないし、意見もさしてあるわけじゃないです。大多数が支持するところに、僕も流れておこうと言うくらいですか。決まったことに反対するほどの熱意もなければ、推進

運動をするわけでもない。僕の明日の商売の方が重要――そういう、立場です」

「信じよう」

そう言ってシサーは、背中を預けていた椅子から体を起こした。いずれにしても、ツェンカーにおいて現状、味方になってくれそうな人は他にいるわけじゃない。ルーベルトに会うことはもちろん出来るだろうが、あくまで政治絡みである彼らに本当の意味での味方を求めることは現状、時期尚早だし、政治絡みのツェンカーの実情と言うのは、ストレートに聞けはしないだろう。民間人と言える立場の人間の協力は、出来れば欲しいところだ。

「とりあえずのところは、あんたを紹介してくれた、ジフを信じて」

「それはこちらも同様です。あんたらが、係わり合いになりたくない人間ではないことを信じますよ。僕の協力を期待した、ジフの為に」

シサーの言葉に、ジークも笑った。それからすっと笑いを引っ込めて、真面目な表情で尋ねる。

「それで、ヴァルスから遥々ツェンカーを訪ねて来た用件は」

「あんたらの新代表ルーベルトに会いたいんだ」

「……」

ジークが沈黙をする。

「とは言っても、そこへの繋がりをあんたにつけてくれって話じゃない。会うことは恐らくは、困難じゃねぇだろう」

何せ、一国の宰相から直接連絡が行っている。そして訪問しているのは、一国の主だ。……まだ、正式なものではないにしても。

「へえ？」

「だけど、その前に知っておきたいことが、幾つかある。状況によっては、ルーベルトに会うことそのものが、危険になりかねないって話を耳にした」

「会うことそのものが危険になりかねないって話？」

「いや、ルーベルトに何かされるとかって話じゃねえけどな。……

ツェンカー内部に、妙な動きはないか」
「……」
ジークが黙る。
乗合馬車の中でおじさんが言っていたことには、ヴァルスの王侯がツェンカーを訪問すると言う話が漏れているらしい。そして、ツェンカーの一部ではそのことによってツェンカーが面倒ごとに巻き込まれるんじゃないかって危惧する動きがある、と言うような種類のことを言っていた。もしもそれが本当なのだとすれば、ユリアがルーベルトに会うことそのものが危険である可能性がある。ルーベルト自身がどちらの考えの持ち主であれ、場合によってはユリアの拘束もしくはツェンカー内での暴動を誘発する恐れ。
だとしたら、おいそれとルーベルトを訪問する馬鹿はいないだろう。
とりあえずのところは、その話の真偽を確かめなけりゃならない。
「妙な、動き……ねえ」
考えるように視線を彷徨わせたジークは、やがて考えを定めたようにシサーに視線を戻して口を開いた。
「あります」
「……それについて、詳しく教えちゃもらえないだろうか」
「構いませんが、その為にはあなた方の目的の全貌を話してもらう必要がありますね。僕はジフに恩はあるけれど、現在はツェンカーの人間です。ツェンカーを無駄に騒がせるようなことになっては困りますから。あなた方の事情をきちんと聞いて、それによって判断させて下さい。但し」
「何だ」
「どんな内容であれ、あなた方から伺った内容については、決して他言はしません」
「何をもって保証する？」
「信用してもらうしかありませんね。武器商として仕事をしていれば、耳にしてはならない種類の話も流れ込んでくる。それでもこう

して10年近くひとりで武器商を営んで来られたと言うところを、信用してもらうしかないでしょう」

「……わかった」

ちらりとニーナに視線を走らせたシサーは、ニーナが頷くのを確認して頷いた。何かの魔法を発動したとかそういう感じではないから、恐らくはお互いの彼を信用に値する人間かどうかの判断を確認したんだろう。それからユリアを振り返る。

「ユリア。話しても良いか？」

「はい」

「許可が下りたんで、俺から話そう。まず、ヴァルスの現状と言うのは、知っているか」

「ええ。何となくですが。……帝国内部の各国を敵に回して奮闘中、とのことですが」

最南端であるヴァルスの情報と言うのは、最北端と言えるツェンカーにまではやはり詳しくは伝わらないらしい。アバウトな情報を示したジークに、シサーが肯定して頷いた。

「まあ、そうだな。正確には、ロドリス率いるナタリア、バート、そしてリトリアの進軍に抵抗中だ」

「四ヶ国……」

呟くように言ったジークは、眉を顰めて問い返した。

「対するヴァルスは、一国ですか」

「ロンバルトは敗北した」

「モナは」

「モナが率先してヴァルスに襲い掛かってきた敵国だ」

「まさか」

「既にモナは敗北が決まってヴァルスが押さえているが、戦力には現状なり得ない」

「……」

「つまり、ヴァルスには今、味方がいない」

その言葉の深刻な響きに、ジークが真面目な視線をシサーに向け

る。微かに顔が強張っている。
「対する敵国には、ロドリスそしてリトリアがいる。リトリアは俺の知る限りではまだ大掛かりな動きはなかったが、今頃は既にヴァルスへの進軍をしているのかもしれねえ。ロドリスはとっくだ。ロンバルトを占拠してるからな。多分もう、ヴァルスへ向けて動き始めているだろう」
「……苦しいですね」

第3部第1章第16話　ツェンカーの武器商人（3）

「その通りさ。苦しいんだ。……だから、ツェンカーに来た」
「どういうことです」
「ヴァルスの後継者直々に、膝を折りに来たのさ」
そう言ってシサーが示したユリアに、ジークはきょとんと目を向けた。それからシサーに視線を戻して、またユリアを見ると、またシサーに視線を戻す。
「って……え？あれ？まさか」
「そのまさかなんだよ」
「ユリアって……ヴァルス王女のユリア様ですか」
目を見開いて問いかけるジークに、ユリアが静かに頷いた。元々ヴァルス国民であったジークも、ヴァルス王女の名前くらいは知っていたってことだろう。ただそれが、目の前のユリアと繋がっていなかったってだけで。ってことは、ジフの書状にも、そのことについて触れてはいなかったんだな。
「ツェンカーに、援軍を求めに来ました」
「援軍って……」
「交渉の材料としては、ナタリアの押さえ込みだ」
ユリアの言葉を引き取って、シサーが続ける。
「大きな動きをツェンカーに望んでいるわけじゃない。ナタリアと、場合によってはリトリアを引き付ける動きさえしてもらえればと思っている。勝利の暁には、ナタリアに期限付きの不可侵を約束させる。勝敗に関係なく参戦の責任はヴァルスが請け負うし、謝礼金は無論のこと、その他の条件についても、協議させてもらえればと考えている」
「ツェンカーが援軍を出す理由は？」
「ヴァルスの弱体化によってナタリアの国力が増強する。増強すれば、これまでの歴史を振り返って、ナタリアはどういう動きに出る

？」

「……ツェンカーへの進撃ですか」

「その可能性は、高いと言っても言い過ぎじゃない。ヴァルスに夢中になっているナタリアを、背後から叩いて置くことはツェンカーにとっても悪い話じゃないはずだ。今だったら、ヴァルスはもちろん、ロドリスだってナタリアを支援することは出来ない」

「その隙をついてワインバーガ辺りが動き始めたらどうしますか。もしくは、マカロフが。ツェンカーは、瓦解する」

「その二国については、既に、押さえてあります」

答えたユリアに、ジークが視線を向けた。

「へえ。どうやってですか」

「ワインバーガに関しては、謝礼金。中立を約束してくれたことに対してまず前払いで、勝利が確定した後に、更に謝礼金と言う形で」

「マカロフには？」

「マカロフには、まずワインバーガと同様前払いの謝礼金。そして勝利確定後には、貿易の際の税金の半分をヴァルスが5年間負担することと、謝礼金」

「なるほど。それで、帝国継承戦争への接触を禁じたわけですか」

「ええ。いずれも、宰相からの通達が行っています。……ツェンカーがナタリアを攻撃すれば、それはツェンカーの帝国継承戦争参戦です。逆に言えば、ツェンカーが仕掛けることによって、ワインバーガとマカロフは戦争の終結まではツェンカーに手出しをすることは許されません」

つまり、ほんの一時的なものとしてもツェンカーがヴァルスに協力すれば、マカロフとワインバーガは決してツェンカーに手出しをしてはならなくなるわけだ。なぜならその時点でツェンカーは、参戦国と言うことになる。国間条約で中立を約した二国は参戦国のいずれにも手出しをすることは出来ず、帝国継承戦争が完全に終結するまでは、ツェンカーの安全は確保されたようなもんだ。逆に、参戦しなければツェンカーは常にワインバーガとマカロフへの警戒を

怠ってはならない状態……ヴァルスへの参戦は、結構ツェンカーにとってメリットがあるはず。

何せ、まだ代替わりしたばかりの不安定な政権だもんな。安定する前に狙われたっておかしくない。

「なるほど……それは、恐らく魅力的でしょうね」

唸るように納得したジークは、「それで」と話を促した。

「ヴァルスは苦しい戦いを強いられている。その援助をツェンカーに求める為に、ルーベルトに会いに来た。けれどその交渉を始めるに当たって、不安要素が2つある」

「2つ。何でしょう」

「まずはご存知、トラファルガーだ」

「……」

ジークが硬い表情で頷いた。

「それは、妨げる大きな要因にはなるでしょうね」

「だろうな。氷竜に襲われてりゃ、理屈もメリットデメリットもありゃしねえ。それどころじゃねえだろう。トラファルガーへの警戒を怠れない今、ツェンカーは兵を自国から動かせない可能性がでかい」

「その通りです」

「飛来したと言う話は、事実か」

シサーの問いに、ジークは硬さを残したままの表情で「はい」とため息混じりに吐き出した。

「事実です。と言っても僕が見たわけではないですが。飛来したと言うのは、ツェンカー北部の町カーマインですね。それ以来カーマインからは逃亡者が相次いで、今や人の気配はほとんどないと聞いています。逃げる際にこの街を経由する人もいますから。その話を聞く限りでは、事実と言って間違いがないでしょう」

「なるほど……」

「あの」

ずっと黙って2人の話を聞いていた俺が口を開くと、ジークは表

情を変えずに視線だけを俺に向けた。
「マカロフからこっちへ向かう山中で、変な音を遠くで聞きました。あれは、やっぱり」
「トラファルガーです」
うーん。やっぱり本物のドラゴンの咆哮なのか。……まずいな。このままではツェンカーの援助を求めるのは厳しそうだぞ。
鼻の頭に皺を寄せて俺が押し黙ると、ジークは視線をシサーに戻して口を開いた。
「当面の問題は、まずはトラファルガーを何とかすることでしょうね」
「……何とかするって」
「トラファルガーが実際に活動を始めようが始めまいが、少なくとも今のこの状況ではツェンカーは国外に兵を出すことは出来ません。それは、間違いないでしょう。ツェンカーの兵を動かすことが出来るのは、ただひとつ――トラファルガーへの心配を、取り除くことです」
「……」
取り除くねえ……取り除くったって……。
……取り除く？
その意味に気づいて、凍りつく。
その考えに既に至っていたらしいシサーが、取り立てて驚く様子もなく舌打ちをした。
「ち……やっぱり、そうなるのか」
「それ以外に考えられないでしょう。人々の恐怖がここまで高まっていれば、実際活動していようがしていまいが、トラファルガーがフレザイルで生きている以上は警戒せざるを得ないんですよ。警戒しなくて済むようになる為には、ひとつしかないでしょう。……人の手で、眠りにつかせることは出来ないんですから」
いよいよ、嫌な話の流れだ。
ツェンカーを動かす為には不安の種を取り除く――トラファルガ

ーを、始末する。
「それで、もうひとつの不安要素とは？」
「ヴァルスの王侯が訪問するって噂があるらしいじゃないか」
シサーの言葉に、今度はジークが目を瞬いた。
「え？そんな噂が？どこで？」
あれ？
きょとんとするジークに、俺とキグナスは無言で顔を見合わせた。
だって。
「マカロフで、乗合馬車に乗ってたおじさんが言ってたんだ」
「マカロフで？」
「そう」
「……妙な話ですね」
そう？
首を傾げる俺に、ジークは視線を床に定めて考え込むような顔つきをした。口を開いてくれるのを待っていると、やがて顔を俺に戻して説明してくれる。
「ユリア王女がツェンカーに援軍を求めてくるってのは、言ってしまえば機密事項でしょう」
「ええ」
「ロドリスサイドの国に漏れでもしたら、ちょっと厄介なことになる。それは、ツェンカーへの援軍って話もさることながら、ヴァルスの首領が国を離れてツェンカーまで来てるってことも」
「そうね……」
「それが、ツェンカーの内部、それも幹部に漏れているのならば話はわかります。王女が出向くくらいだから、先触れが出ているでしょう？」
「それは、もちろん」
「だったら、ルーベルトもしくはその周辺の人間は知ってて当然として、それをマカロフの人間が知っているのはちょっとおかしくはないですか」

「……」

「僕と同じルートあるいは似たルートから情報を漏れ聞いたと言うのならばともかく、それは一部の人間に限られるはずです。少なくとも、民間で囁かれている噂ではないはずです」

僕と同じあるいはは似た、と言うのは武器に携わる人間だとか、何かこうアングラなルートを持つ人間ってことだろうか。

……やっぱり、妙なことなんだ。

あのおじさんに聞いた時に感じた奇妙な感覚を思い出す。ヴァルスそしてツェンカーの要人が知っているのならば、疑問はない。けれど、一般の人に噂として漏れているのは、やっぱりどう考えてもおかしい。――逆に言えば、あのおじさんは、一般の民間人じゃない。

「じゃあ、カズキたちが話した男ってのは……」

「恐らくは、ほぼ間違いなくツェンカーの人間、それも中枢機関に近い人間もしくは近い人間と通じている人間と言うことになるでしょう」

「何で俺たちにそんな話を……」

言いかけて気がついた。

あのおじさんは、俺たちがヴァルス語を話しているからって言って、ヴァルス語で話し掛けてきた。ヴァルスの人間だろうと予想をつけていたようなことも言っていた。

と言うことは、「ヴァルスの要人がツェンカーを訪問するらしい」と言う話の裏が欲しかったのかもしれない。

民間人だと思っていただろうから知っていると思ってはいなかったかもしれないが、それについての何かの情報を得ることが出来るかもしれないと考えた可能性はある。どうせ通りすがりの乗合馬車、駄目で元々だ。

「何の為に……」

「決まっているでしょう。来て欲しくないんですよ」

ジークの低い声に、微かに息を飲む。そう、あのおじさんは確か

にそんなニュアンスの人たちがいるってなことを言ってもいた。ヴァルスの要人が訪れることを快く思っていない人間がいると。
「それについての話なら、少し情報を提供することが出来そうですね」
ジークの言葉に口を噤んでいると、カウンターから背中を起こしてやかんから俺たちのカップにお茶を注ぎ直してくれながら、ジークが声を潜めたままで言った。その言葉に、シサーが顔を上げる。
「本当か」
「ええ。……言ったでしょう。伊達に武器商をやっているわけじゃないんですよ」

◆　◇　◆

「本当にトラファルガーと戦わなきゃなんないと思う？」
オーバスヴェルグの街は、どこを歩いてみても、何か物寂しい。元々が堅固で地に足の着いた感じの街並みをしているせいもあって、閑散としたムードが一層寂しさを煽る。
公衆浴場があると言うのでそこへ行って、やや遠回りの道筋をジークの家に戻る道すがら言ってみると、洗い立てでちょっとぺしゃんとした髪をしきりと気にしながらキグナスが俺を顰め面で見上げた。
「俺、パス」
「それ言うなら、俺もパスで」
ユリアの為にトラファルガーでも反乱軍でも来いと思いはしたものの、避けて通れるなら出来るだけその方向でお願いしたいものだ。
「何で俺らがそんな大物、退治してやんなきゃなんねえんだよおおお。こっちが退治されちまう」
「それは、同感だけど。でもさあ……」
口篭りながら、俺は濡れた髪をかき上げて、耳のピアスを弾いた。……確信があるわけじゃない。誰かに保証をもらったわけじゃない。

だけど、そう思えてならない。
氷竜トラファルガーを制覇する魔剣レーヴァテインの、鍵。
「キグナス」
「んあ？」
「エルファーラの神殿で見た絵、覚えてる？」
「絵？ああ。展示されてた奴な。覚えてる」
「あれを見た時、俺、ぞっとしたんだよ」
「ぞっとした？」
「うん」
キグナスがきょとんと俺を見上げた。吹き付ける冷たい風が濡れた髪を一層冷やし、風邪でも引きそうだ。ちょっとでも避ける為に思わずタオルをばさっと頭から被せながら、頷く。
「氷竜の絵……戦闘を描いた絵の中でさ」
「うん」
「レーヴァテインを翳す男の耳に、これと同じピアスが描かれてた」
「……何？」
キグナスがぴたりと足を止めた。凍りついたような視線に頷いて、俺も足を止める。
「言わなかったけど」
「本当か？」
「うん。……いや、本当かどうかは、わからない。絵の中のピアスは小さくて、本当にこれと同じ物なのかはわからないし、これがそんなに有り得ないデザインとも思えないし。だけどさ、多分このピアスの効果で、特殊な効果があったの、覚えてるか？」
「……」
強張った表情で、キグナスが頷いた。特殊な効果——火系攻撃からの、防御。
再び歩き出した俺について来たキグナスを振り返って、問いかける。
「氷竜の剣は、何て言ってた？ガーネットは」

「……炎の剣」
「炎の属性を持つ剣の鍵だったら、自身をその攻撃性から守る為に火系攻撃への耐性があったって、おかしくないよな」
「そうだな……」
「シェインが言ってたんだ。『対になるアイテムがあるはず』って」
「それが……レーヴァテイン？」
「じゃないか……」
言いかけて、今度は俺が足を止めた。何かが記憶の中に引っ掛かった。炎の剣レーヴァテイン……炎の剣。以前にも、炎の剣って言葉を聞いた、ことが……。
「……キグナス」
「え？」
「黒竜の剣カリバーンは、別名エクスカリバーって言うって……言ってたよね」
「ああ」
「じゃあ、レーヴァテインは？」
「え？レーヴァテインは……？」
「……ラグナロク、なんじゃないか？」

第3部第1章第16話　ツェンカーの武器商人（4）

以前……まだ、ヴァルスに来たばかりの頃、パララーザのシリーが言っていた。

フレザイルに眠る、神々の炎の剣。魔力を持たない人間でも火の魔法を使うことが出来る、と。

もしもそうならば、トラファルガーを倒す兆しは、ゼロじゃない。いや、フレザイルに眠るラグナロクがレーヴァテインで、そしてレーヴァテインの鍵がこのピアスなのだとしたら……トラファルガーを倒すことが出来るのは、俺たちしかいない。……冗談じゃない。

（あ、でもそうとは限らない……）

そうだよな。良く考えたらシサーたちはかつて、カリバーンを手に入れたわけじゃないけれど黒竜グロダールを倒している。それを思えば、別段魔剣を手に入れなくたって倒すことは出来るわけだ。ただ、その苦労が随分違って勝率がかなり変わるだけ……。

「……」

だから、冗談じゃないっての。

「どうだろうな。そうかもしんねえ。ラグナロクってのは、あれだろ？フレザイルの氷の柱に埋まってるって言う……」

先ほどの俺の問いに答えながら歩き出したキグナスの背中に、俺は目を丸くして視線を向けた。

「何？ラグナロクって場所、わかってんの？」

「俺は知らねえけどー。フレザイルのどっかに巨大な氷の柱があって、その中に埋まってるって話だぜ。誰も取ることが出来ないんだとかって。ただの伝説かもしんねえけど」

ああ……じゃあ、前にレイアが言っていたエクスカリバーの在り処みたいにデマの可能性もあるわけか。

誰かに確認出来ないだろうか。確認したって、取りに行きたくはないが、知らないより知っている方が良いに決まっている。

「ただいまあ」
なんて思っている間に、ジークの家についた。今日は、ジークが宿を提供してくれると言うことで、宿泊させてもらうことになっている。
ジークの武器屋は、1階が商用スペース、2階に居住用スペースがあって、2階は広さはあるけれど部屋数のない……言ってしまえば一部屋ぶち抜きと言う大雑把な状態になっていた。つまり、雑魚寝を予定している。
「ああ、お帰り」
シサーたちはどこかへ行ったのか、もしくは2階にいるのか、姿がない。カウンターの裏側からジークの声だけが聞こえてきて、覗き込んでみるとカウンターの床の扉がぱかんと開いていた。
（ラグナロクって……武器、だよな……）
だったら、仮にも武器商であるジークは何か知らないだろうか。
……って、そうか……。
グロダールの魔剣の行方も、もしかしてヴァルスの武器商だったら、知ってたりは、しないか？
（アギナルド……）
武器商ではないけれど、武器職人だ。アギナルド老が、もしかするとカリバーンの行方について何か知っていることがあるかもしれない……！！
うわ、そうだよ。どうして今まで思いつかなかったんだろう。蛇の道は蛇だ。知っているとは限らないけれど、知らないとも限らない。少なくとも俺だとか、普通の奴らに比べれば武器について精通していて、入ってくる情報量だって違うはずなんだから。
ヴァルスに戻ったら、必ずもう一度アギナルド老の元を訪れてみよう。
密かにそう決意しながら、ジークが何やらごそごそやっているその扉の中を上から覗き込んでみる。ともかくも、アギナルドが今ここにいるわけじゃないんだから、まずはラグナロクについてジーク

に聞いてみることにしよう。
「ジーク」
「んん～？」
「……何してんの？」
「良かったら下りてきますか？」
「ん～……お邪魔します」
興味はある。武器商の倉庫。
キグナスと顔を見合わせると、俺は持っていたタオルとかをカウンターの上に置いて階段をそろそろと下りてみた。その後ろにキグナスもついて来る。
「あ、思ったより広いんだ……」
倉庫の中は、壁にひとつカンテラをかけただけの薄暗い空間だった。広さは8畳くらい。だけどもっと狭いのかと思っていた。
壁には手作りのような木の棚が設えられていて、そこにごちゃごちゃと変なモンが置かれている。床にもごろごろと変なモンが転がっている。まともそうに見えるのは、奥の壁に掛けられている棚とその下の木箱の中身ぐらいで、あとは正直みんな『変なモン』。
あと……何だろうな。壁にいっぱい変な傷跡がある。
「……何、これ」
壁際に近寄って棚の上の『弓矢のなりそこない』みたいなもんを突付いて尋ねると、部屋の真ん中にあぐらをかいてゴリゴリと木を削っていたジークが笑った。
「それは失敗作」
「何？失敗作って」
「俺、こうやっていろいろ自分で武器を考案するのが趣味なんですよ。これ見て、これ。……見てて下さいね」
「え？」
そう言って立ち上がったジークは、すぐそばの木箱から変な鉄の棒のようなものを取り出した。長さは３０センチくらい。それを右手に持って、左手で何かをカチッと……。

――ばすッッッ。
「うわ」
「ははは。ね、ちょっと便利でしょ」
いきなりその鉄の棒が、ガチャガチャガチャッと伸びて、その先端が壁に突き刺さった。変な傷跡の正体は、これらしい。こうやって何か作ってはここで実験するから、壁が傷だらけになるんだろう。
「何？槍？」
「根本的にはね。だけど伸縮自在だから、持ち運びに便利だし、敵に射程距離を掴まれないから、油断させられる」
「は～。自分で作ったの？」
「そう。後ね、これはね……」
そう言って今度取り出したのは……何て表現すれば良いんだろう。凸みたいな形の鉄の塊から、紐で繋がれた丸いボールが出ている。
「これはね、ここで実験すると火達磨になっちゃって危ないから」
やめて。
「実演出来ないんですけど……ここをね、こうするとストッパーが外れて……で、これを回すと歯車が動いてこれが上に上がってって、ここで着火して……魔法で言う『火炎弾』を連射で撃つような感じで……」
……マシンガンだ。
かなり手動だから俺の知るマシンガンほどに速くはないだろうけれど、要はやりたいのはそういうことだと思う。
うーーーん……。
「武器、好きなんですね……」
「既存のものだけじゃあつまらないでしょう？でもどれもこれもまだ、実用性には欠けちゃって、売りに出すのはまだ先になりそうなんですよ」
「実用性に欠けるって、何で？」
「扱い方が面倒だったり、すぐに分解しちゃったりしてね……いろいろ大変なんです」

「ジーク」
にこにこしながら、そっと見せてくれた武器をしまい直すジークのそばにしゃがみ込む。キグナスは俺の後ろで、何だかきょときょとと辺りを見回していた。
「はい？」
「ラグナロク、って知ってる？」
「ラグナロクですか？知ってますよ」
ラグナロクの行方も、知ってるだろうか。
「ラグナロクって、レーヴァテインって別名があったりする？」
「ああ。別名って言うと、語弊がありますけどね。国によってそう言う言い方をする国があると言うか……本来ヴァルスでは『レーヴァテイン』と言っていたようですよ」
ああ、そうなんだ。
「そのラグナロク……レーヴァテインが、フレザイルにあるって話を、昔聞いたことがあるんだ」
すとん、とキグナスが無言で俺の隣に座りこんだ。それを見て、俺も床にぺったりと腰を下ろしてしまう。
「ええ。僕も聞いたことがあります」
「それは、本当？」
真顔で尋ねる俺に、ジークは細い目を瞬いて首を傾げた。
「事実かどうかは、僕もフレザイルに行ったわけじゃないのでわかりませんけど。かつての僕の上司が、冒険心で確かめに行ったことがあるそうです」
「……え！？フレザイルに！？」
ぎょっとして大声を上げた俺に、ジークは苦笑して頷いた。
「子供みたいな人でしょう。けれど、伝説の魔剣の存在と言うのは、武器商としてはやはり心を揺さぶりますからね」
「……」
「あったそうです」
「本当に……？」

「ええ。氷の柱の中に。……けれど、それを抜き出すことはどうしても出来なかったそうですが」
「どうして？」
「炎を当てても、道具で破壊しようとしても、氷の柱に傷は付かなかったそうです」
それを引き出す鍵が、俺のこのピアスなんだろうか。
ああ、嫌だ。考えれば考えるほどに嫌だ。今すぐ耳を切断して誰かにくれてやりたいくらいだ。だってこれ、俺じゃなけりゃならないってもんでもないだろう。このピアスがあれば良いんじゃないのか？要は。
けれど、逆に言えば……これは、立派な、ルーベルトとの交渉材料のひとつだ。
（……）
ジークの話では、ツェンカーをヴァルスに引き込むのはちょっと、トラブルの元になりそうだ。ジークでさえ知っていること、代表者であるルーベルトが知らないとは思えない。だとしたら、こちら側に引き寄せる為には、結構でかい代償を支払う必要がある。取引材料として、トラファルガーの始末は、かなり有効と考えられる。
「にしても急に、どうしたんですか」
「いや……ちょっと、気になったもんだから」
「そうですか？」
「うん。……トラファルガーを倒すことは、ルーベルトの首を縦に振らせる理由に繋がると思う？」
ため息混じりに尋ねる俺に、ジークはきょとんと目を見開いてから、頷いた。
「それは多分、確かでしょう」
「……そう」
ジークの話に寄れば、ツェンカーの中でヴァルスへの警戒を囁く動きがあると言うのは、確からしい。
ルーベルトじゃない。アルディアでもない。……アルディアの、

元支持者たちだ。
先にもジークが言った通り、ヴァルスの要人の訪問について民間人に噂が流れていると言うようなことは恐らくないだろうとのことだった。
但し、あくまでも『民間人に』だ。
国政幹部については、もちろんその限りじゃない。何よりヴァルスからの使者がルーベルト自身を訪問しているのだから、その周囲の人間には自ずと漏れる。
けれど、その目的そのものがどの程度漏洩されているかまでは定かではないらしい。
ジークいわく、ヴァルスの使者が訪ねて来たと言うことは国政幹部に漏れているだろうが、その内情についてまでは一部の限られた人間しか知らないだろうとの見方だった。
つまり、明確な目的がわからないまま、憶測が飛んでいる。
その中でも有力な説として上がっているのが、『ヴァルスがツェンカーをアルトガーデン帝国内部に組み込もうとしている』と言うもののようだとジークは言っていた。
それはどういうことかと言えば、現在の『独立自治領』を謳っているツェンカーの存在意義そのものを覆す説だ。
当然それには、反ヴァルス感情が伴っている。実際のところヴァルスはツェンカーを帝国に取り込もうと言う意志はこれっぽっちもないんだが、ヴァルスの最高権力者が直々に遥々訪問すると言うことでそんな憶測が飛び交っているわけだ。
そしてそれに伴う警戒――アルディアの元支持者たちの中では、その時に備えて武器を収集する動きが出て来ていると言う。
ジークがこの辺りの情報を耳にしたルートは、その筋からと言うわけだ。
水面下で密かに結束し、ヴァルスの要人とルーベルトが接触を持ったその時にこそ、武器を手に決起する可能性がある。そうしてルーベルトを引き摺り下ろし、ヴァルスから守り、アルディアを再び

代表者の地位へと押し上げようと言うことだろう。
そのせいで今、正規の売買ルートでは武器が不足しているのだそうだ。それで、「どこかで聞いた話だ」と言うことに気がついた。
どこか――カサドール……。
ジークによれば、その動きにアルディア本人が加担している可能性は薄いだろうと言う。彼自身言っていた通り、彼の情報ルートは主に武器の流通ルートと関係しているから政治勢力の詳しい情報が入ってくるわけではないけれど、アルディア自身は本来武力主義とは無縁の気質で、それゆえにトラファルガーの襲撃を控えて武力を支持する時勢に、ルーベルトへの敗北を喫したとの話だった。
ともかくも、『ヴァルスのツェンカーへの干渉』を恐れる反ヴァルス思想の動きはもちろんルーベルトだって感じているに決まっているし、だとすればトラファルガーの件がなかったとしても、ヴァルスの要請に応じない可能性がある。応じればそれが、反ヴァルス派の誤解を後押しして暴動が起きかねないことは当然考えているだろう。であれば、静観の姿勢を取る可能性がかなり高い。
それを覆して首を縦に振らせるには、トラファルガーをちらつかせると言う手段が、今考えられる範囲では最も有効だろうと言う気は、確かにする。
ツェンカーにとって、今一番気掛かりなのは、間違いなくトラファルガーの襲撃だ。
それを片付けてやるから、代わりにヴァルスに援軍を寄越せと……こういう交渉ならば、成り立つ可能性はかなり、高い。ルーベルトにしたって、国民への弁明が可能だろう。「ツェンカーの危機に際して助力をしてくれたヴァルスに、援助をする」――何て美しい流れだ。
問題は、その助力が半端ない内容である上に、しかも俺たちが自分自身で何とかしなきゃならない可能性が限りなく高いと言うことだ。大体、普通にトラファルガーに負けちゃったら話にならない。
その辺りについてもっと情報を集めて対策を練る為に、俺たちは

明日オーバスヴェルグを発って、首都フリュージュではなく北の街ロドを訪れることになっていた。ジークの武器商としての師匠であり、ツェンカーでの父とも言える人物のいる街だ。

その為に、ジークも俺たちと一緒にロドへ向かってくれることが、先ほど、決定している。

薄暗い顔をして黙り込む俺に、ジークが苦笑して俺の肩をぽんぽんと軽く叩いた。

「ま、ともかくも一度、ロドの僕の師匠を訪ねてみましょう。その時に例の火種の話も、そしてそのラグナロクの話についても、聞けることがあるはずです」

「……うん」

「ヴァルスのことは、僕だって心配です。悪いようには、しませんから。信じて下さい」

「ありがとう」

気遣ってくれるジークの言葉に、俺も何とか笑顔を作り上げ、礼を口にして立ち上がろうとした。

その時。

――クォォォォォッ……。

そのままの姿勢で、目を見張る。遠く響く咆哮……トラファルガー……。

――ビリビリビリッ……。

「うぉあ。な、何だよ……」

空気を揺るがすようなびりびりした振動に、キグナスがどこか怯えたように辺りを見回した。常にどこか飄々とした顔をしていたジークも、さすがに微かに緊張した声で視線を見えるはずのない遠くへと向ける。

「響く声が、近くなってますね……」

「どういうこと？」

尋ねる俺に向けられたジークの顔は、青かった。

「トラファルガーの活動が、本格的に活発化していると言うことで

す」
「……」
「襲撃まではもう……」
秒読み開始でしょう、と続けたジークの声を嘲笑うように、遠く、もう一度空気を震わせる咆哮が、夜に響いた。

第3部第1章第17話　『地上の星』（1）

「だからね、旅に向いている靴ってのはそうなっている奴が多いんですよ……」

朝早くにオーバスヴェルグを発って、ロドへ向かう。オーバスヴェルグで馬を手に入れようかと言う話もあったけれど、ジークいわくツェンカーは荒い岩山や山岳地帯が多くて、余り馬を扱うのには向いていないんだそうだ。

で、徒歩で移動する間、ジークと雑談なんかしている。

「底が厚くてクッションが効いていると、足の裏を守ってくれるし、地面にかかるステップの反動で次の一歩が軽いんですね……」

何でもジークは元々、ギャヴァンで靴屋の息子だったらしい。メアリさんと言う人のお父さんに武器商として弟子入りする前は、家の仕事を手伝っていたそうだ。

「でも、ジークが跡を継がなくて、お父さん、困らなかった？」

「ウチはね、僕も入れて４人、兄弟がいるんですけど。男ばかりで」

「うん」

「僕の上の２人の兄は１５歳を迎える前にそれぞれ、一人立ちして家を出ちゃったんですよ」

俺の今の年には独立してるって……自分がガキに思える。あっちの世界に戻れたら、俺も早くからひとり暮らししようかな。でも都内に家があって都内の高校に通ってて、普通に怒られるだろうな……。

「んで、弟がね、靴屋を継ぎたいって言ってたんで、こりゃ幸いと僕は押しつけたわけです」

オーバスヴェルグからロドまでは2日ほどの距離だ。小高い岩場のようなところに差し掛かって、そこで野営を敷くことにする。

ツェンカーの夜は、はっきり言って、寒い。

こんなところで野営なんか出来るのか？と思ったら、この岩場の

辺りは熱を発する散熱岩と言うのがところどころ地中に埋まっているらしい。そのせいでいわば地熱が高い部分があって、ちゃんと野営をする場所を選べば寒い思いをせずに済む、とジークは言った。

「少し、場所を探して歩いてみましょうか。要は、暖かい場所を探せば良いんですよ」

そう言ってジークが歩き出すなり、冷たい風が吹き付けた。高度が上がってるから尚更気温が下がっていて、触らなくても顔が冷えきっているのがわかる。

キグナスとニーナ、そしてユリアとレイアを一旦岩場の陰に残して、シサーとジークと一緒に、野営場所を探しに行く。少しずつ岩場の高い場所を歩きながら何気なく顔を上げて、俺は日の沈みかけた北の空に異様なものを見つけた。足を止める。

「どうした……」

ぽかんとしたままの俺に気づいて、少し離れた逆方向へ歩いていたシサーがこちらへ向かって来た。問いかけた言葉が、途切れる。

「何だ？あれ？」

シサーの目にも、異様に映ったらしい。

北の空にいくつも舞う、何かの姿。一見カラスが夕刻の空に舞うのに似ているが、距離を考えるにそんなサイズじゃない。正確にはわかるわけがないけど、思いつくのは……ワイバーンのような。

「魔物？」

シサーが目を眇めるようにして、呟く。俺も、飛翔する影に無言のまま視線を定めていた。

「2人とも、どうしました？」

ひとりでさっさと先に進んでしまっていたジークが、戻って来る。俺たちがついて来ないことに気がついたらしい。

「魔物が……」

ジークに顔を向けながら言うと、北の空に視線を向けたジークが「ああ」と笑った。

「ドラゴンクローラですね」

「ドラゴンクローラ？」
シサーも知らないことがあるようだ。オウム返しに聞き返して、また視線を戻す。
「行きましょう。早くしないと、ユリアさんたちが凍えちゃいますよ」
そう笑って促されて再び歩き出しながら、ジークに問う。
「ドラゴンクローラって？魔物？」
「まあ、魔物と言えば魔物でしょうねえ」
ジークが苦笑して頷く。
「だけど、非常に大人しい魔物なんですよ。図体はでかいけれど臆病で、人を襲うなんてことは滅多にない魔物だそうです。ローレシアでも北部の、更に一部しか棲息していません」
「へえ」
「それが、何であんなに飛んでたんだ？」
シサーが、またその姿を探すように視線を遠くへ向けた。まだ、北の空を舞うカラスのような姿が見える。
ジークが、小さく笑った。
「要は、トラファルガー対策です」
俺もシサーも、無言でジークの横顔を見上げた。
「ドラゴンは、空を飛ぶでしょう。あんな攻撃能力の高いものに飛ばれて、対するこちらは地上です。勝てるはずがない」
「……まあ、な」
「ツェンカーの人間は長い間氷竜の存在に苦しみ、その恐怖に怯えて来ました。対策も、いろいろ練りました」
「例えば？」
「例えば、地中に住む、と言う対策が講じられていたこともあるようですよ。ツェンカーの北方へ行くと、その名残を見ることも出来ます。ロドも、そうです」
名残？
「じゃあ今は、地上に住んでるんだ？結局」

俺の質問に、ジークは片眉をひょこんと上げて、頷いた。
「完全に地中に街を作り上げる技術は、残念ながら持てなかったようですね。それでも階層を作るような感じである程度まではやったみたいですが……人ってね、お日様の下に出たがる生き物みたいですよ」
「……」
「そうでなくともドラゴンは休眠期が何百年と長くて、活動期は、目覚めて咆哮が度々響き本格的に覚醒して人里を襲うようになるまでの1年を合わせても、10年程度と短い。中でも最も行動的なのは最初の1年目、後は数年おきに断続的に襲撃するように変わります。つまりは、最も危険なのは数百年に1年。そうなってくると、人々も『まさか自分が生きている間に来るなんて』と、警戒を怠るようにもなるんですよ」
富士山の噴火みたいなもんだろうか。爆発したら静岡の一部は凄いことになるだろうけど、とりあえず人は普通に住んでるんだし。関東圏に大地震が来ると言われながらも、首都はやっぱり東京のままだったりするし。
確かに、「関東圏の直下型大地震が来たら、ヤバイんだろうな」と思いながらも、俺の実家だって代々木から北海道や沖縄に引っ越すことは多分ないだろう。
コトが起こればどうなるのかが予測出来たって、起きない事態への警戒心を保ち続けるのは難しい。そうして人々は、日陰の暮らしから目を逸らし、地上の街へと戻ったわけだ。
「後は、高層の防護壁なんかを作った街もあるみたいですね。だけどやっぱりお日様は恋しいし、地上からの高さを作ったって飛翔するドラゴンには無意味でしょう？空を覆わなければ意味がないんですよ。だからそれも、ツェンカー全土には広がらなかった。……そうして苦心の末の対抗策として残ったのが、ドラゴンクローラの飼育です」
時折遠くから響いて来る「フォーン……」と言う妙に低い響きは、

ドラゴンクローラの啼き声だろうか。
「ドラゴンクローラは、子供の時から育ててやれば、人にも懐きます。そこに目をつけて、数十年前からドラゴンクローラの飼育を試みるようになりました。そうして、僕は具体的な手段は知りませんが、ドラゴンクローラを操って飛翔することが可能になりつつあるんです」
「へえ。凄い」
「だけど、臆病な魔物が、ドラゴンとの戦闘対策になんのか」
シサーが突っ込む。それを受けて、ジークが頷いた。
「問題はそこです。非常に温厚な気質のドラゴンクローラは、人にさえ怯える。増して最強の魔物であるドラゴンなんて、出てきただけで棲み処の奥深くに潜り込んでしまうことでしょう。人を乗せて飛翔し、戦闘するなんてもっての他です。ツェンカーがドラゴンクローラの飼育を始めても戦争に投入しなかったのは、まさにそれが理由です」
ああ、そうだよな。ツェンカーはちょくちょくマカロフだのワインバーガだのナタリアだのと小競り合いを起こしているわけだし、それに投入しているんだったらシサーが知らないのはおかしい。知らないのは、実戦投入されたことがなかったからなんだ。
飛翔能力のある乗り物を持たないこの世界で、飛行部隊を作れればかなりの戦力増強になるはず。ツェンカーの一部にしかドラゴンクローラが棲息しないのであれば尚更、強みになるはずだ。だけど投入していない――投入出来なかったのは、ドラゴンクローラの臆病な気質のせいか。
「そこを克服する為に、長い年月を必要としたんですよ」
「……じゃあ、今は」
「克服しつつあるようです。僕は聞いた話でしかありませんが。……あっちの方に行ってみましょうか」
「克服って、どうやって」
シサーの言葉に、すたすたと方向転換して歩き出したジークが軽

く肩を竦めた。
「さあ。僕にはわかりません。そういう噂を聞いただけです。それこそ、ルーベルトさんに会えたら、詳しく聞くことが出来るでしょう」
そう言って数歩歩いただけで足を止めたジークは、にこっと笑って俺たちを振り返った。
「見つけました。地熱地帯です。ユリアさんたちを、呼んできましょうか」

◆◇◆

ロドの街は、ジークの言う通り、少し不思議な形状の街だった。
街の入り口は、岩場に囲まれた階段になっている。一段一段が奥行きの広い、浅い階段だ。天井もあるので、洞窟の中へ下りていくような感じがする。ただし、入り口からも、先に見える出口からも外の明かりが漏れているので、真っ暗ではない。……でもこれ、夜になったら結構怖いんだろうな。
階段を下りきると、そこで一瞬岩場の天井が途切れた。明かりはここから漏れていたらしい。そうしてすぐにまた、洞窟のような通路を歩いていく。
通路を抜けると、やはり岩場に囲まれたドーム状の地形に出た。半円形の岩壁の向こうに、木造の建物がいくつも寄り添うように建ち並ぶのが見える。
ただ、こうして見晴らす限り、余り広い街には見えなかった。
「言ったでしょう？階層を作るようにして、街が広がっているんですよ」
街を歩いてみると、ジークの言う通り、また先ほどのような階段があった。一見洞窟に続いていきそうな階段。けれどそれを抜けると、また同じようにドーム状の地形に街が広がっている。
「昔はね、岩場の屋根で覆われているようになっていた部分もあっ

たようです。けれど結局太陽が恋しくなり、屋根になる部分は全て取り払われた。結果として今は、階層だけが残された、変な街並みになってしまったと言うわけですね」

ふうん……。その屋根が残っていたら、防御力は高かったんじゃないだろうか。明かりなんかはどうやって取り込んでいたんだか、知らないが。

ジークの武器商としての師匠であるカレヴィさんの武器屋は、階段を2つ抜けた階層に入ってすぐのところにあった。ロドの街も、総じて人の気配が少ない。ここもやはり、トラファルガーに怯えているんだろう。

ジークがかつて働いていたと言う武器屋は、でかかった。3階建ての建物で、1階のスペースの全てが商用スペースとして開放されているみたいだけれど、販売スペースと買い取りスペースとで2部屋あり、1部屋の広さは30畳くらいありそうだ。働いている人も、何人かいる。

カウンターに近付いてジークが何ごとか呼びかけると、販売スペースの一番奥にあるカウンターの向こうで書き物をしていたおじさんが笑顔になった。ツェンカーの言葉で答える。何を言っているのかは、わからない。

ぽっちゃりした感じの人で、左右にぴょこんと伸びた口髭。アニメのキャラクターにでもいそう、こういう人。

立ち上がっても、余り大きくはなさそうだ。キグナスより小さそうだから、160センチくらいだろうか。

ジークの背後で興味深そうにおじさんを見つめる俺たちに気づいて、にこにことしゃべりながらおじさんがカウンターの外に出て来る。部屋の隅で武器を磨いている人とか、窓掃除をしている人も、俺たちがおじさんのお客さんだと判断したらしく、接客してくる気配はなかった。

ジークが何かを言っておじさんが頷くと、そこから言葉が、ヴァルス語に切り替わった。

「ちょっといくつか聞きたいことが出来まして。カレヴィさんだったらきっと力になってくれると思って、お邪魔しました」
このおじさんはカレヴィさんと言うらしい。
多分俺たちがヴァルスの人間であることを告げてくれたんだろう。答えるおじさんの言葉も、ヴァルス語に変わっていた。
「ほう？俺で出来ることなら構わんが。お友達か」
商人とかってのは、いろんな国の言葉を話せる必要性があるのかもしれないな。特にヴァルス語は、帝国内部では幅を利かせているたと思う。言葉だ。つくづく、俺が覚えたのが他の国の言葉じゃなくて良かったと思う。
カレヴィさんの視線に応えて頭を下げると、ジークが俺たちを振り返って、紹介した。
「ええ。ちょっと古い友人からのツテで、遥々僕の祖国から訪ねて来てくれたんです」
「また遠くから来たなあ。大変だったろう」
「仕事が終わってからで構いません。少し、お時間をもらえませんか」
ジークの言葉に、カレヴィさんは軽く肩を竦めた。
「仕事中と言ったって、ご覧の有様だ。客になる人間がいないのは、ロドも同じさ。裏に来い。……＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」
「＊＊＊＊」
カレヴィさんの呼びかけに答えて、武器を磨いていた店員が片手を挙げた。「ここを頼む」とか何とか、きっとその類のことでも言ったんだろう。
それからカレヴィさんに促されて、カウンターの中に入る。その奥には扉があり、更に奥へと通じていた。カレヴィさんとジークに続いて、俺たちも中に入っていく。
「大きな武器屋さんなのね」
俺の後ろに続くユリアの声が聞こえた。

「うん。俺、こんなに大きな武器屋って初めて見た気がする」
と言うか、今まで用事がなかったので、武器屋に足を運ぶようなことがなかった。レオノーラやフォグリアなんかにはでかい武器屋もありそうだけど、あんまり記憶にない。
ちょろっと振り返ってそう笑みを向けると、ユリアも優しく目を細めた。
……あれから、結局、ユリアとは何もない。
基本的には複数人数で行動をしているんだから、ユリアと2人きりになれる機会が早々訪れるものでもないし、あんな千載一遇のチャンスがそうあるわけでもないんだ。「じゃああの日の続きを」といくわけもなく、残念ながら見通しは立ちそうにない。返す返すも悔やまれてならない。
けど。
あれ以来、俺の心に一抹の希望が芽生えてしまったのは、確かだ。あの時ユリアは確かに、目を瞑ってくれたと思う。俺の幻覚じゃないだろう。とすればユリアだってあの時は『そういう気』になってくれてたってことで、それってつまり次のチャンスはゼロじゃない。
ユリアも俺に、何らかの好意を抱いてくれているのかもしれない。
「余り綺麗なところじゃないですがね、その辺に適当に腰掛けて下さい」
奥に続く部屋は、事務室のようなところだった。8畳くらいの広さで、真ん中にでんッと木のテーブルが置かれている。壁際にはやはり木製の本棚が並べられていて、紙が飛び出しそうなファイルとか、分厚い本とかが並べられていた。帳簿とかカタログとか、そんな感じだろうか。
本箱の隣に背の低い棚があって、そこにはやかんとカップが乱雑に置かれている。カレヴィさんは「ちょっと待ってて下さいね」と言い残すと、やかんを片手に更に奥の扉に消えて行った。お茶の用意をしてくれようと言うんだろう。

扉が閉まると、椅子のひとつを引いて腰を下ろしたジークが、俺たちを見回してにこっと笑った。
「カレヴィさんは、信用して良いです。僕の父のようなものですから。商売っ気が強いところはありますが、悪い人ではありません。それに……」
話しながら手振りで椅子を勧めるジークに従って、俺たちも腰を下ろす。
「僕なんかよりも、ずっといろいろなツテを持っています。様々な情報が、彼の元に流れ込んでいます。あなた方に有益な情報を、カレヴィさんはきっと持っているでしょう」
そこまで言って一度言葉を切ったジークは、「但し」と真面目な顔で俺たちを改めて見回した。
「人は、自分を信用しない人間には、本当に協力はしてくれません。それは、わかりますね？」
「ああ」
「彼から本当に有益な話を聞きたいのならば、彼を信用して、彼にきちんとあなた方の状況を説明する必要があるでしょう。それについては僕は、一切口を挟みません。僕が言って良いことだとは思えませんから。あなた方の判断に任せます。だけど、僕は、保証します」
「……」
「カレヴィさんは、力になってくれます。信用に値する人物と、僕は信じています」
扉の向こうからぎしぎしと言う足音が近付いてくる。カレヴィさんが戻って来たらしい。そこでジークが口を噤むと、ギギィと音を立ててドアが開いた。カレヴィさんが湯気の上がるやかんを片手に、入ってくる。

第3部第1章第17話　『地上の星』（2）

「いやいや。お待たせしてすみませんねえ。安いお茶しかないんだがねえ。こんなもんしかなくて」

忙しなく言いながら、にこにことやかんのお茶をカップに注いで、俺たちに回してくれた。礼を言って受け取ると、手元に置いてシサーの出方を待つことにした。こういう場面では、俺とキグナスはほぼ役立たずに近い。

「それで、どんなお客さんなんだい？ジーク」

ようやく腰を落ち着けたカレヴィさんが、まずはジークに尋ねる。

「先ほども言ったように、僕の昔馴染みから紹介されましてね、僕のところへ来てくれたんです。彼らがツェンカーに来るにあたって、協力してやってくれと言うことで……まあ、僕に出来ることがあるとすれば、カレヴィさんを紹介してあげることくらいかなと」

「それは買い被られたものだねえ。じゃあ、元々はジークを訪ねて来たわけではなく……？」

後半のセリフは、シサーに向けてのものだった。シサーが頷く。

「ツェンカーに来る用事があったから、知人がツェンカーで協力してくれそうな人物を紹介してくれた、と言う流れだ」

「ほほう。知人とはどのような？差し支えなければ」

「盗賊ギルドの頭さ」

シサーの回答に、カレヴィさんは目を丸くした。元々がコミカルな顔立ちなので、そういう表情をするともはや漫画に近い。

「それはまた、ディープな知り合いだねえ」

「まあな」

「じゃあ、あなた方も、『そのスジ』なのかい」

カレヴィさんの質問に、シサーが黙って顔を横に振る。それから改めて、口を開いた。

「俺は、ただのギャヴァンの傭兵だ。こっちのニーナやカズキもま

あ……似たようなもんで」
　俺には傭兵になれるようなウデも技術も何もないので、ちょっといたたまれない。
　顔を顰めた俺に苦笑すると、シサーはそのまま雑談のような口ぶりで続けた。
「でもまあ、商売って話で言やあ、得意な方じゃないんでね。仕事を掴むのには一苦労だ」
「どこかの傭兵隊に所属はしてないのかい」
「してねぇ。今いち、ああいう組織は向いてないみたいでな。個人のツテから転がり込んでくる仕事を請け負うのが大半だな。たまに、ヴァルスの傭兵隊の要請を受けて参加することもないでもないが、どうもな」
　軽く肩を竦めるシサーに笑って、カレヴィさんがやんわりと尋ねた。
「元々、そういったことを生業とされている家系かい」
「いんや。俺は元々は商家……広い意味で言えば、あんたと同業者だ」
　シサーの回答に、カレヴィさんは「ほお」と小さく声を上げた。
「どこの」
「ラグフォレスト大陸のシュートさ。主に装飾品なんかを扱う家でね」
「そりゃあまた、裕福な出だなあ。何でまた傭兵に」
　カレヴィさんの問いに、シサーが笑う。
「さっきも言ったろ。商売って奴が、得意じゃない」
　シサーの回答に、カレヴィさんも笑った。
「ああ。なるほど」
「商売ってのは、時勢にも大きく影響されるだろう。もちろんそう言う意味で言や、傭兵って商売も同様だけどな。売れる品、売れない品、羽振りの良いルート、落ち目になっていくルート……ルートが落ちりゃあ、商売やる方も大赤字だ」

「その通りだよ」
「武器商には今、何やらしんどいことになっているとジークにちらっと聞いたな」
シサーの言葉に、ジークが軽く目を上げた。けれど何も言わずに、軽く口の端をきゅっと上げて笑う。カレヴィさんが頷いた。
「今は、苦しいね」
「でも、変な話だろう？アルトガーデンじゃあ戦争中だ。ツェンカーでもトラファルガーの襲撃が予感される。飛ぶように売れそうなもんだけどな」
シサーの言葉に、カレヴィさんは苦笑いのような表情でため息をついた。手を伸ばして、自分のカップを引き寄せながら口を開く。
「人は、ドラゴンに戦いを挑もうとは思わないんだ」
「へえ？」
「圧倒的強者の前に、逃げ惑うことしか出来ない。考えてもみてごらん？豪邸のような巨体が、殺人的な冷気を振り撒きながら宙を自在に舞う。剣を一本買ったところで、何が出来る？」
「けれどそれが集まれば、話は違う。軍隊ってのがあるだろう」
「軍隊はね、あるよ。民事会もトラファルガー対策の為に武器を集めたし、人間を鍛えた。それは、確かだ」
ツェンカーの政権を握る人たちは、民事会と言うらしい。
「だったら」
「おかげで確かに一時期は飛ぶように売れた。そのおかげで、今の売上の悪さがカバーされているようなものだ。けれど、今はルートそのものが品薄で、店に良い品が回って来ない」
カレヴィさんが、深々とため息をつく。
「へえ。あんたが持っているいくつものルートが？」
「そう。妙な奴らに襲撃をされたりして、品物の強奪が横行している。普通のルートからは商品が姿を消していき、裏の流通を頼れば価格は高く、品は悪い。武器が、おかしなところからおかしなところに流れている」

「で、大打撃を受けているわけだ」
確かめるようにシサーが言った。カレヴィさんはまたもため息混じりに頷いた。
「大打撃さ。これが続けばどうなるかと思うと、ため息しか出ない。迷惑な話さ」
そこまで聞くと、シサーは頷いた。それからやや身を乗り出すようにして、カレヴィさんを見つめる。
「本題に入ろう。協力が欲しい。ただし、他言無用だ。……俺たちの話を聞いてもらえるか」
真っ直ぐ見つめるシサーの言葉に、しばし無言で見つめ返していたカレヴィさんは、やがて真摯な目付きで深く頷いた。
「ええ。それじゃあとりあえずは、お伺い致しましょうか」

◆◇◆

シサーとカレヴィさんの雑談のような会話を聞きながら、俺は、先日シサーから聞いた話を思い出していた。
ジークと会った後のことだ。
人は、大きな行動を起こす時には、必ず理由がある。
その理由はその時々でそれぞれだけれど、行動が自分と誰かとで共に起こす行動である場合、相手に対する信用度合いは、理由そのものに大きく影響されると言う。
わかりやすいのは、金銭や物品で相手を動かす。「こうしたら、これをやる」と言う相手の物欲を動かして、行動させる。
これは最も相手を動かすのに簡単な手段ではあるけれど、逆に、最も裏切られる可能性が高いんだそうだ。
確かに金で動かした相手ならば、金で他からも動かされる。こっちが１００ギルで契約したのならば、２００ギルで話を持ちかけてくる相手に動かされるだろう。つまり、信用性が、かなり低い。「どうせ裏切る」くらいの気持ちでいるのがベストらしい。

そして次に、目的や利害関係の一致。

利害が一致すれば、それぞれ自分自身の目的や利害の為に動いているのが実情だから、金銭などで動かすことに比べれば裏切る確率はぐっと下がる。裏切ることが、自分自身の目的と逸れる行動である可能性が高いわけだから。それはつまり、誰の為でもなく自分の為ってわけだし。

但しその場合、より良い協力者が現れた場合はそっちに乗り換えるし、目的そのものが変わってしまったりするとあっさり裏切ってくると言う。相手の状況や様子を見て、警戒を怠らずに協力体制でいる必要があると言うわけだ。

最も信用が出来るのは、相手の行動が「そうしたい」と望む気持ち発露であること、言い換えれば情や信義なのだそうだ。

綺麗ごとに聞こえるかもしれないけど、ぎりぎりの選択を迫られた時に、人は自分の保身を優先するようになる。

金銭などで動かしていた場合なんか、そういった窮地に立たされた瞬間に１００％、裏切る。なぜなら、金をもらっても死んじゃったら何もならないことはわかりきっているからだ。

そこへ来ると、「誰かの為にやってやりたい」「自分自身が相手の為にこうしたい」と思ってやっている行動の場合は、保身よりもそう思う気持ちを優先する可能性がぐっと上がる。共に行動をしている誰かに対しての情や信義があれば、最後の最後まで裏切らないかもしれない。

人は、他人に認められたいと願う気持ちが最も強い欲望だと言う説もあるんだそうだ。自分が認めた相手ならば尚のこと、その気持ちは強くなる。認められたいのであれば、裏切るわけにはいかない。例えば俺だって、ユリアを裏切るくらいだったら死ぬだろう。

と来れば、その前の段階……そこまでの窮地に立たされてさえいない状態で裏切る可能性が、極端に落ちる。だからこそ、信用に値する。

今の俺たちは、ある意味、綱渡りの状態だ。

火種を抱えるかもしれないツェンカーで、ヴァルスの国主を連れて歩いている。

シサーやキグナスたちが俺を裏切ることはありえないだろうと思うのは、いわゆる情や信義から来る信頼関係って奴だと思うし、ツェンカーで得られる協力がそれであるに越したことはない。

だけど、それは一朝一夕で得られるものでもない。

安易に信用した人物に下手な情報を流して裏切られてしまったら、洒落にならない状態。だけど、最も信用出来る人材は、簡単には手に入らない。

シサーがカレヴィさんに振った話は、彼に対する信用度を測る為のものだろう。そう思いながら、俺は彼らの話を聞いていた。

ジークには、確かにユリアが王女であると言うことを告げている。俺たちとジークの間には、信頼関係と言えるほどのものはまだない。にも関わらず告げたのは、シサーがまずジフを信用に値する人間だと信じ、そのジフとジークに信用関係があるのだろうとの判断だろう。

けれど今度は、話が違う。

信頼関係の出来ていないジークの保証では、少し弱い。

それは、カレヴィさんが俺たちにとって信用に値する人物だと決められる理由にならない。

だからこそシサーは、第2の行動理由をカレヴィさんに求めたんだ。いや、目的の一致を見ているわけじゃない。だから信じる理由ではなく、裏切らない理由を求めて。

俺たちにとって危険だと思われるのは、ヴァルスを敵視する集団……武器を集めているのは、彼ら『アルディアの元支持者たち』だ。

そして彼らの行動によって、武器商であるカレヴィさんの商売には大打撃が出ている。

『アルディアの元支持者たち』の動きがカレヴィさんにとってメリットのあるものに変われば話は別だが、現状少なくともカレヴィさんにとって邪魔な存在である『アルディアの元支持者たち』とカ

レヴィさんが繋がる理由がないし、裏切る理由もない。
それを確認したからこそ、シサーはカレヴィさんに話をすることに決めたんだろう。
共通の敵の存在が、あるんだから。
「……」
シサーが俺たちの状況を話し終えて口を閉ざすと、カレヴィさんもしばらくの間、沈黙を挟んだ。
考えるように視線を彷徨わせ、それからシサーに顔を戻す。
「それで、私に求めるものは、何だい」
「情報を教えて欲しい。それがまず一点だ」
「他には」
「ツェンカーと言う国を知っているはずのあんたとジークに、どうルーベルトに接触を図るのが最も良いか、知恵を貸して欲しい。場合によっては、それに必要な行動の協力も頼みたい」
「ふむ。それから？」
「出来れば今日の宿を貸して欲しい」
最後の言葉に、カレヴィさんは笑った。おっけぃ、と言うように、笑いながら両手を軽く挙げる。
「良いだろう。ヴァルスがツェンカーを帝国に取り込むつもりでないことを保証するなら、私の知っていることを話してやっても良い。『地上の星』は我々武器商にとって、非常に厄介な存在だ」
「『地上の星』？」
聞き返すと、カレヴィさんが俺の方を向いて頷いた。
「あなた方の言うところの、『アルディアの元支持者たち』だ。彼らは自らを『地上の星』と名乗っていると聞いている。その実数や実態までは、私も把握をしていないがね」
「つまり、どこにどの程度潜んでいるものなのかは、全く把握出来ないってことだな？」
シサーの低い問いに、カレヴィさんはにやっと笑った。
「そうは言わない。まず言えることは、彼らが最も多いのは首都フ

リュージュと、フリュージュの北……アカンサだ」
「アカンサ……」
「小さな町ですよ」
ジークが補足する。
「いわゆる、人の住む町ですね。大きな特徴のない町ですけど。……アカンサが多いんですか？」
終わりのセリフは、カレヴィさんに向けられたものだ。カレヴィさんはそれに応えて頷いた。
「ロドは？アルディアの、お膝元じゃないのか」
「ロドの街は、アルディアの出身地だ。ここには確かに、彼の信奉者が多い。けれどだからこそ、その存在が明るみに出やすい」
「なるほど……」
「私の知る範囲では、闇ルートを通じて運ばれて来た刀剣類は、まずこの街に運び込まれている。この街の武器商の被害が最も多いのは、そのせいだ。そしてこの街から、アカンサへと流れていく。武器の保管は、アカンサの役目だ」
「アカンサに本拠地がある？」
「と、私は思う。アカンサが選ばれた理由は恐らく、平凡過ぎる住宅地だからだろう。そしてフリュージュへ襲撃するに、遠くない」
言いながら立ち上がったカレヴィさんは、棚から地図を引っ張り出してくるとテーブルの上に広げた。
「ここがロド。そしてアカンサが、ここ。フリュージュはここだから……すぐだろう」
「ああ……」
ユリアとルーベルトが接触を持った時に、アカンサから『地上の星』が進撃してくるわけか。
「武器の流出は、ヴァルス、リトリア、そしてツェンカー内部からが最も多いと聞いている。ヴァルスは、他大陸との貿易の窓口だから、そもそもの品が豊富だ。これは現在、カサドールからの流通だと聞いた」

思わず顔を上げた。
カサドールから、武器が流出している闇ルート――『紳士倶楽部』は、ここに繋がっていたのか……。
「リトリアは、クラスフェルド王の武力主義の為だろうな。元々軍部の粗悪品や払い下げられたものを流すルートがあったから、そこから流れて来ている。そしてツェンカーの内部だ」
そう言って地図から顔を起こしたカレヴィさんは、真っ直ぐシサーに向けて言った。
「『地上の星』について今すぐわかることは、このくらいだ。後は追って、調べさせよう」
「出来るのか」
「さあね。やってみなけりゃわからない。ともかくも今の段階では、『地上の星』が反ヴァルス感情を持っているらしいと言う噂に過ぎないのだから、まずはその噂が真実なのかを確かめる必要があるでしょう」
「ああ。そうだな」
「ただの噂に過ぎないのであれば、それに越したことはない。妙な警戒をすることもなく、素直にルーベルトに会えば良い。もちろん、反ヴァルス感情がないからと言って、ルーベルトが素直にツェンカー軍を投入してくれるかは話が別になるがね」
「承知している」
「いずれにしても」
カレヴィさんは眉根を寄せながら、俺たちを見回した。
「直接王女を連れてフリュージュへ行くのは、危険過ぎると言えるだろう。まずは誰かがフリュージュへ視察に行ってみることを勧めるが、どうだね」
その言葉を受けて、地図に視線を落としたままのシサーが、肯定の意を返した。
「同感だよ。……そうすることにしよう」

1993

第3部第1章第18話　氷竜トラファルガー（1）

シャインカルク城から預かった俺の剣は、カサドールで闇へと消えた。

正直言ってそんなにあの剣に固執をしているわけじゃないけれど、今持っている剣に比べれば圧倒的に使いやすかったのは確かだし、戻って来て欲しいのが本音だ。

闇の中へと消えた俺の剣……ロドからアカンサへ流れ込んでいる武器の一部は、カサドールから流れて来た品だと言う。

だったらきっとこの国のどこかに、俺の剣はあるんだ。誰かが持ってるんだろうか。

何か悔しいなあ。アギナルド老の言葉を考えれば、あの剣は多分そんじょそこらの剣より、高価だ。だとしたら、誰かがさっさと自分の物にしてしまっている可能性は高い。剣の手入れなんかほとんどわからない俺が魔物と戦い続けて来られたのは、ひとえにあの剣の性能の一言に尽きる。錆だとか刃毀れだとかと無縁の、剣。

あー……悔しい。返せ。

「そんじゃあ、後、頼んだぜ」

「うん。気をつけて」

「お前らもな」

カレヴィさんの提案を素直に受け入れて、俺たちは当面、二手に分かれることになった。

と言っても、基本的には偵察組と待機組。

フリュージュへの偵察に出るのは、シサー、キグナス、そしてなぜかジークの3人だ。

シサーはもちろん行かなきゃ話にならないだろうし、キグナスはその魔法が手助けになるだろうと言う考えから、そしてジークは、ツェンカーの住人だからその意見や知識を見込まれての同行だ。

一方で待機組である俺とユリア、ニーナ、そしてレイアはと言う

と、何もロドでぼけっと日向ぼっこをして時間を潰すわけじゃない。俺たちは俺たちで、ロドの街から更に北西にあるツェンカー軍の要塞へ行ってみることにしていた。

何をしに行くのかと言えば、例のドラゴンクローラの訓練とやらの様子を見に行くことにしている。トラファルガーとの戦闘をも視野に入れて行動しなければならない俺たちは、トラファルガー対策であるドラゴンクローラについても無知と言うわけにはいかないだろう。

もちろん、ユリアがヴァルス王女として行くわけには、少なくとも現段階行かない。カレヴィさんが要塞の武器の補充へ行くのを、手伝うと言う名目だ。

とは言え、いかにもお嬢様然としたユリアが武器商を手伝うのはかなり不自然なので、ユリアはこれもお留守番だ。ニーナがその護衛のような形で共に残り、代わりにレイアが俺と一緒に来ることになっている。この割り振りにもまた、理由がある。

そこそこでかい店舗を持つ武器商であるカレヴィさんは、自前の馬車を持っていて、それに武器を積んで要塞まで行くらしい。だけど、それこそそんな乗合馬車に匹敵するようなものじゃあ全然ない、一頭引きの小さなものだ。

となると、定員が限られる。

武器と言うのはそこそこ重い。一頭引きではそう何人も人間を乗せることは出来ず、レイアだったらサイズ的に問題ないわけだ。

「要塞の武器の補充って言うのは、カレヴィさんがやってるんですか」

ユリアとニーナに見送られてロドの街を離れると、ガタガタと舌を噛みそうに揺れる馬車の上で聞いてみる。片手に鞭、片手に手綱を掴んで馬を操作しながら、カレヴィさんは笑った。

「ロドの街には私と同じくらいの規模の店舗が、あと3つある」

「へえ」

「そこでの持ち回りになっているな。軍隊は、大きな売上になるか

らな。不公平が出ないように、組合でそう決まった」
　ロドから要塞までは、馬車で半日くらいだそうだ。馬車の速度はかなり遅くて、歩いているのと余り変わらないような気がする。荷車がごろごろ言う音で余り聞こえないけれど、馬の歩く音がもしも聞こえるとしたらきっと『ぽっくり、ぽっくり』だろう。『パカッパカッ』じゃないことは確かだ。
　陽射しは出ているけれど、空気は冷たい。馬車に揺られて吐く息も白い中、ゆっくりと進んでいく。ロドの街で防寒対策用の衣服を買って、マントなんかも今までと違うものを身につけているけれど、それでも要塞についた頃には体は冷え切っていそうだった。
　ツェンカーは岩場が多いと聞いたけれど、要塞までの道には大した起伏はないらしい。遠く見える景色に、海が白い光を反射しているのが見える。
　そしてその向こうに、フレザイル。
「あ、そうだ……」
　それを見ていて、思い出した。カレヴィさんは以前、レーヴァテインを探しにフレザイルまで行ったってジークが言っていた。
『地上の星』に気を取られていて聞き忘れていたが、せっかくだから聞いてみよう。暇だし。
「何だい」
「カレヴィさん、フレザイルに行ったことがあるって聞いたんですけど」
　聞いてみると、カレヴィさんは一瞬虚を突かれたように黙り、それから吹き出した。
「ジークの奴だな？」
「ええ。本当ですか」
　肯定する俺に、くっくっと笑ったカレヴィさんは、やがて笑いを残したままで頷いた。
「本当さ」
「レーヴァテインは、見つかったんですか」

「ああ。見つけたな」
そう言ってカレヴィさんが、目を遠くの白い大陸へ向ける。思い出すような目つきをして、前に顔を戻した。
「こういう仕事をやっていれば、伝説の魔剣はやっぱり見てみたい。出来れば、手に入れたいものだ。だから、行った。レーヴァテインは、確かに氷の大地に眠っていた」
「剣の在り処を、どうやって突き止めたんですか」
「聞いたのさ」
「聞いた？」
聞き返す俺に、カレヴィさんがこくりと頷く。
「今から行く要塞の幹部に、私の古い知り合いがいる。後で、彼も交えて話をしよう」
「その人は？」
「かつて、レーヴァテインこそがトラファルガー対策の最たるものではないかと考えて、フレザイルを探し回った人間さ。レーヴァテインのことならば、きっと彼以上に知る人間はいないだろう」
「レーヴァテインが、トラファルガー対策……」
じゃあ、その人だったら……。
このピアスについての知識も、何か、持ち合わせては、いないだろうか。

◆　◇　◆

要塞は、奇妙だった。
通常の要塞は、建物が単独で建っているのが、普通だと思う。
もちろんその周囲に塀があったり濠があったり、そう言うのはいろいろあるんだろうが、ともかくもそういう建造物のはず。俺は多くを知らないけれど。
けれどここの要塞は、背後に聳える岩山からそのまま繋がっているような、何とも妙な風貌をしていた。

聞いてみれば、そもそもここの要塞はドラゴンクローラの飼育や研究、調教を目的として造られているもので、ドラゴンクローラの棲み処と言うのが岩場の中になるらしい。つまりあの岩山の内部に、ドラゴンクローラの飼育場所が造られていると言うわけだ。

「ふえぇ……」

要塞の間近になると、聳え建つ要塞の背後を、変な生き物が飛翔しているのが見える。

ロドへ向かう最中に見えたのはこれだったのかと、間近で見ればぎょっとした。

「あれが、ドラゴンクローラだ」

カレヴィさんの説明を受けながら、ぽかんと空を仰ぐ。寒さから身を隠す為に俺のマントの下に潜り込んでいたレイアも、顔をちょこんとだけ出してその光景を眺めていた。

「通行証を！！」

要塞の門にガラガラと近付いて行くと、門兵が駆け寄ってきた。それに、木で出来た通行手形のようなものを取り出して見せて門が開くと、そのままガラガラと馬車のままで門を通過する。門を通過すると、石畳に石壁の要塞内部にそのまま繋がっていた。

要塞と言うのは初めて入ったけど、俺のイメージからすると一番近いのは、学校。

どかんと建物がひとつあるっきりってわけじゃなくて、門と頑強な壁で囲まれた敷地の中にメインとなる要塞の建物があり、それとは別に幾つかの建物が点在している。渡り廊下のようなもので繋がれているものもあれば、孤立している建物もあった。校庭じゃないけど、広い敷地が広がっているのが見える。そこが、この要塞の目的であるドラゴンクローラの訓練所のようになっているらしい。俺たちが馬車のままで向かったのは、メインの建物ではなく、それと部分部分で繋がっているサブっぽい建物だ。その１階に武器保管庫があるらしい。

それと……何だろうな、この匂い。

要塞についてから、何かずっと良い匂いがする。花の香りのような。

ともかくも、俺の本来の目的は別にあるとは言え、建前の目的はカレヴィさんの武器補充だ。ここでもまた衛兵に通行手形のようなさっきの木片を見せて許可を得ると、積んで来た荷物をどんどん運び込んだ。もちろんレイアは何もしない。俺のマントの中で、まあるくなっているだけ。

「とりあえずそこに置いて。そう。そうしたら次はこっちだ。ここに、粗悪品やら壊れた奴やらある。これをざっとチェックして、持って帰る必要がある物とない物の区別をつける」

「……俺に区別がつけられるものですか」

尋ねてみると、カレヴィさんはけたけたと笑った。

「とりあえずカズキは、折れているだの鍔がないだのと言うわかりやすいものだけ除いてくれ。わからない物をここに寄せて……そう。そうしたら、私が見よう」

見よう見まねながらカレヴィさんの指示通りに武器商の見習いのような作業を3時間ほど続け、仕事があらかた終わったかなと言う頃になって、武器保管庫に人が入って来た。

「＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊」

「＊＊＊　＊＊＊＊＊＊」

入って来たのは、甲冑に身を包んだ壮年のおじさんだった。がっしりしたガタイ、背は高い。けれどマッチョと言うのとも少し違い、武骨と言うよりは上品な顔立ちをしている。短い、明るいライトブラウンの髪に、同じ色の口髭を生やし、ダークグリーンの瞳が優しそうだった。同じ口髭でも、カレヴィさんにように漫画っぽくはない。

「＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」

カレヴィさんと、おじさんが再会を喜ぶように軽く抱擁し合う。

ぽかんとその様子を黙って眺めていると、ややしてカレヴィさんが俺を振り返った。イリアス語のままで、俺を紹介するような素振り

を見せる。何を言っているんだかわからないが、とりあえず頭を下げてみた。

「初めまして。カズキです」

と、思い切りヴァルス語で言う。

カレヴィさんが、俺に説明するように口を開いた。

「私の新しい見習いだと紹介した。彼は、ヴァルトだ。この要塞で副将軍の地位にいる」

へえ。副将軍。偉い人と言う風情はあったけれど、やはり偉い人のようだ。

「そして先ほど言った、レーヴァテインの研究者だ」

そこまで俺に説明すると、カレヴィさんはヴァルト副将軍に向き直った。そのまま言葉を交わし始めて、軽く放置プレイな俺。

やっぱり言葉がわからないと、不便だな。

最初にヴァルスに来た時も感じたけれど、しばらくツェンカーにいるのだとすれば、結構しんどいかもしれない。と言ってそう簡単に次から次へと言葉なんか覚えられるわけもないが、せっかく、ジークにしてもカレヴィさんにしても、両方話せる人がいるんだから単語とか挨拶くらいは教わっても良いかもしれない。

そんな勤勉なことを考えながらぼけっと2人を眺めていると、カレヴィさんが不意に俺を振り返った。促すように片手を挙げる。

「ドラゴンクローラの訓練を、間近で見せてくれるそうだ。行ってみよう」

「あ、はい」

親しげに言葉を交わしながら前を歩くカレヴィさんとヴァルト副将軍の後ろを歩きながら、一体言葉の通じない彼にどうやってレーヴァテインの話を聞こうかと頭を悩ませる。

とは言ってもな……悩んだところで、カレヴィさんに通訳をしてもらう以外に手段なんかありゃしないんだろうが。

ヴァルト副将軍について行くまま外に出ると、そこはもう、先ほどの訓練場の中だった。綺麗に芝生が一面に張り巡らされてはいる

が、ところどころ激しく抉られているのはドラゴンクローラの仕業だろうか。外に出ると、この要塞に入ってからずっと花についていた香りが、一際強くなった。

「う、わ……」

そして、その異様な光景に、思わず小さな呟きが漏れる。牧場みたいに訓練場のあちこちに、ドラゴンクローラの姿が見えた。だけど馬みたいに平和な光景では全然ない。何やら……異様だ。とにかく、異様だ。ちなみに上空にも、異形のイキモノが飛び回っているのが見える。

ドラゴンクローラは、俺から言わせると小型のドラゴンみたいにも見えた。ワイバーンなんかとやや近い、爬虫類のような生き物だ。大きさは、ここにいるものを見る限りでは、3～4メートルくらいが標準なんだろうか。肌は褐色っぽく、ワニのような感じに見える。その背中にコウモリのような翼が生えていて、体に不釣合いなほど羽が大きく見えた。

「ぶッ……」

と、不意に強い風が巻き起こる。土埃と冷気の混ざり合った風を顔面に受けて、咄嗟に腕で庇いながら顔を背けると、俺を見てヴァルト副将軍が笑った。

「＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊」

「ドラゴンクローラの羽が巻き上げる風だそうだ」

カレヴィさんの通訳に訓練場へ目を向けると、ちょうど上空からドラゴンクローラが舞い降りてくるところだった。ずしんと小さな振動が体を揺らす。背中に騎乗していた兵士が、ドラゴンクローラを労うように軽く叩いて、下りて来た。

「ドラゴンクローラは、凄く臆病な魔物だって聞きました」

カレヴィさんを通じてヴァルト副将軍に尋ねるべく、口を開く。

ヴァルト副将軍は俺の言葉に、頷いた。

「非常に臆病な生き物だ。元来、草食動物や植物、そして岩を主食とする彼らは、人間程度の大きさの生き物からして攻撃をする性格

にない」
「それを、どうやってトラファルガーとの戦闘にぶつけるんですか」
尋ねてみるが、ヴァルト副将軍はカレヴィさんに向けて二言三言、何かを言うと、軽く顔を横に振るような仕草をした。きょとんとカレヴィさんの言葉を待っていると、カレヴィさんも苦笑をして彼の言葉を伝えてくれた。
「教えられないそうだ」
「ああ……」
そうか。軍事秘密みたいなものだろうか。
「どうやって、乗るんですか」
質問を変えてみよう。違う質問を口にすると、ヴァルト副将軍は眉をひょこんと上げて、俺を見た。それから笑う。図々しい奴だと思われているのかもしれない。
それから、くいっと片手を「おいで」と言うように動かして歩き出した。一瞬カレヴィさんを見上げて、それから副将軍の後に続く。
ヴァルト副将軍が連れて行ってくれたのは、手入れをしてもらっている最中らしいドラゴンクローラのところだった。騎手だろうか、兵士がひとり、濡れた布でその体を拭ってやっている。ドラゴンクローラが鼻を鳴らす音が聞こえて、何だかおかしい。
ヴァルト副将軍に声をかけられて、兵士が振り返った。こうしてしみじみと見ると、この訓練所の内部にいる兵士は、衛兵とかと装備が少し違う。格が上のような光沢、そして軽装備だった。騎乗する都合があるからかもしれない。
しかし……この図体で大人しいとはな。近くで見ると、鋭い牙とかはなさそうだった。そのわりに、爪だけはいやに攻撃的な形状をしている。これで草食動物なんかを引っ掛けるんだろうが、この巨体から見れば草食動物って言ってもどこまでがターゲットに含まれるんだろう。カバくらいだったら食っちゃうんだろうか。いや、人間程度の大きさも攻撃しないって言ってたから……物凄く限られた生き物しか食わないんだな。保てるのか？この図体を。

ごわごわとした肌はひどく触り心地が悪そうで、背中には騎乗する為の鞍らしきものが取り付けられていた。手入れの最中だからか、ぶらんとベルトのようなものが外されてぶら下がっている。

「まず、ドラゴンクローラは、棲み処に特徴を持っている」

不意にこちらに向かって口を開いたヴァルト副将軍の言葉を、カレヴィさんが俺に伝えてくれる。

「特徴？」

「ある植物の生える場所を棲み処として選ぶ傾向にあるんだ。非常に芳香の高いもので、ドラゴンクローラはその香りのする場所に安心する習性がある。それを利用して、騎乗する人間はその芳香を身に纏い、ドラゴンクローラが小さい時から特定の人間が育て続ける」

芳香……。

その言葉でようやく合点がいった。要塞に花の香りが充満しているなんて言う不自然な事態に、納得がいく。この香りは、ドラゴンクローラの棲み処の匂いなわけだ。

「子供の頃から育て上げた人間がこの芳香を身に纏って、ようやくドラゴンクローラに騎乗することが許される。騎乗出来る人間は、どのドラゴンクローラでも乗れると言うわけではない。必ず、自分が世話をしてやった奴にのみ限られる」

うわ。物凄く乗る人間を選ぶんだな。

「他の人間を同乗させることは出来るんですか」

「通常の場合ならば、可能だ。そのドラゴンクローラの騎手が手綱を握り操作をするのであれば、別の人間を乗せることも出来る。だが、戦闘状態になった場合にそれが可能かどうかはわからない」

「……」

「まだ、確かめることが出来ていないからな。そうして……」

言いながらヴァルト副将軍がそばの兵士に片手を差し出した。兵士が何かを副将軍に渡す。……何だろう？金属の、鈴のようなもの。だけど短い棒がついている。

「これで、操縦するのだ」

「どうやって？」
「これで音を鳴らすことが出来る。出す音によってすべき行動をドラゴンクローラに覚えさせるのだ」
そう言ってヴァルト副将軍が鈴を兵士に返すと、兵士がにこっと笑って鈴の部分を握り締めた。同時に棒の部分を親指で操作して、軽やかな音を鳴らす。
……と。
「わ……」
今まで気持ち良さそうに鼻を鳴らしていたドラゴンクローラが、のっそりと体を擡げた。まるで「乗れ」と言うように兵士を振り返る。出発の合図だろうか。
「へええ」

第3部第1章第18話　氷竜トラファルガー（2）

頭は良いんだな。馬より良かったりするのかもしれない。

「彼は、ラーヴル。このドラゴンクローラにはラビと言う名前がある。ラビの騎手は、ラーヴルだけだ」

副将軍に紹介されると、ラーヴルはまたにこっと笑って頭を下げてくれた。こちらも慌てて頭を下げる。

でも、『自分のドラゴンクローラ』ったってなあ……区別、つくんだろうか。放牧したら区別がつかなさそうだ。いや、育てて来ているんだから、区別がつくものなのか？

「では、邪魔したな。ラビの手入れを続けてやってくれ」

ヴァルト副将軍がそうラーヴルに労うと、ラーヴルは頭を下げて再びラビに向き直った。出かける気になってしまったラビを宥めるようにして、軽く体を叩いている。

それに背を向けて歩き出す副将軍とカレヴィさんに従ってその場を離れながら、俺はちらっとラーヴルとラビを振り返った。

乗ってみたい気も、するよな。別におもちゃじゃないんだから「乗せてくれ」とは言えないが、空を飛ぶと言うのは人類の憧れって奴で。

魔法があるこの世界でも、多分飛翔する魔法と言うのはないんだか、あっても難易度が高過ぎるのか、少なくとも俺は見たことも聞いたこともないし。……いや、シェインでさえ「空を飛ぶ」と言う話を聞いたことがないから、ないのかもしれない。

副将軍とカレヴィさんは、2人だけで言葉を交わしながら前を歩いている。会話のわからない俺は完全な置いてきぼりだが、時折ヴァルト副将軍がちらりとこちらに顔を向けた。何を話しているんだろう。

どこへ向かうつもりなのか、そのまま要塞の中に入る2人について、俺も中に入る。2人に従って自動的に階段を上り、通路を歩き、

また階段を上り、要塞の上の方にまで連れて来られて来ているみたいだった。

やがて、部屋へと案内される。来客用なんだろうか。取り立てて私的な匂いのない部屋だから、ヴァルト副将軍の執務室とかでさえないんだろう。俺ごとき、そんなところに連れて行ってくれるはずがない。

促されるまま部屋に入り、入り口でドアを押さえてくれていたヴァルト副将軍がパタンと扉を閉める。何かちょっと、嫌な予感がしないでもなかった。

「座りなさいと言っているよ」

カレヴィさんは特に何も思っていないようだ。俺の気のせいだろうか。内心、首を傾げながら、示された部屋の中央にあるソファに腰を落ち着ける。ヴァルト副将軍が長い足でつかつかと歩いて、テーブルを挟んだ反対側に腰を下ろした。

そして俺を、じっと見つめた。

「レーヴァテインに興味があるようだ」

前置きも何もすっ飛ばして、唐突にそんなふうに言う。いや、俺は直接彼の言葉を理解しているわけじゃないからカレヴィさんがすっ飛ばしたのかもしれないが、ともかくも、そんなふうに話し始めた。

「え、カレヴィさん」

「ああ。先ほど、カズキがレーヴァテインに興味があるらしいから、良かったら話してやってくれないかと頼んだんだ」

「それは、どうも……」

確かに、ここに来る馬車の中で、言いはした。

けれど何か、妙な匂いがする。……いや、気のせいだろう、考え過ぎだ。カレヴィさんの友人なのだし、警戒し過ぎているんだろうとは思う。

「なぜ、興味がある？」

考えとは裏腹に、心の中で警鐘が鳴り響いていた。下手なことは

言わない方が良い。少なくとも俺には、副将軍がどういう人間なのかわからない。

自戒しながら、言葉を選ぶ。

「伝説の、魔剣だと聞いています。誰も、手に入れられないと。……それだけのことです」

微かに滲んだ緊張を読み取ったように、副将軍が笑った。

「そう構えないで欲しい。君に何をしようと言うわけではない。そうだな、伝説の魔剣に興味を持つのは、少年ならば当然のことだ。増して武器商の見習いならば」

「ええ……そうですね」

嫌だな、何か。ちりちりと頭の隅を焦がすような警戒心を消すことが出来ず、俺は副将軍を見つめていた。すると不意に副将軍が、片手を軽く挙げて立ち上がった。笑いながら何かを口にする。カレヴィさんも笑いながら応じた。

「お茶を入れてくれるそうだ。カズキの緊張を和らげてやろうと」

「……ありがとうございます」

その言葉の通り、ヴァルト副将軍は部屋の隅にあったティポットから飲み物をカップに注いだ。それを持って戻って来る。

「私は冷たい飲み物が好きでね。温かい物がよければ出させるが」

「いえ、結構です」

「要塞の中は温かいからねえ」

何の緊張感もない声で、カレヴィさんがカップのお茶をすする。俺も、副将軍が差し出してくれたカップを受け取った。

「いただきます」

あれ？

受け取りながら、副将軍の指がふと目に入る。左手の中指についた、ごっつい指輪。装飾品と言うには武骨で、武具防具にしては軟弱な。

（これ……）

マキビシのような、飾り。

警鐘が激しくなる。フラッシュバックする光景。前にも同じ物を見た。……ツェンカーに向かう馬車の中で。

――偶然か？

「私は、このツェンカーと言う国を、とても愛している」

俺の視線に気づかずに、ヴァルト副将軍が再び向かいに腰を落ち着けながら、ゆっくりと足を組んだ。

「トラファルガーは、我々にとっては、何者にも変えられない脅威だ。ツェンカーは長い間、トラファルガーに対抗する為の手段を研究しているが、これと言うものがない」

「ええ……」

「レーヴァテインには、その力があるのではないかと私は考えている」

「……」

「これまでトラファルガーにツェンカーが襲われたのは、6度。これは、ツェンカーと言う国が出来てからの話ではないがね。その前、この辺り一帯を襲った記録を紐解けば、と言う話だ」

「はい」

「その中でトラファルガーに立ち向かうことが出来たのは、記録を遡るとただの一度だけだ」

無言で、副将軍の言葉を待つ。

「それはツェンカーと言う国が出来る前の話で、詳しいことはわかってはいない。けれど調べられる範囲で言えば、立ち向かったのはひとりの男。彼が用いた手段は、剣」

「……」

「不思議だろう。軍隊でもない。魔法でもない。ただのひとりの人間に、剣一本で何が出来る。……ただの伝説として片付けられている」

「へえ……」

「けれど私はそれがどうしても引っ掛かったのだよ。そこで、可能な限り調査をした。これは国の機関を使ったわけでも、正式な調査

でもない。私自身の、個人的な興味だ」
「はい」
「私にはその剣が、今はフレザイルに眠る炎の剣なのだと思えてならない」
それには俺も、同感だ。
恐らくはまだ魔女狩り――聖書の改竄前の話だったんだろう。レーヴァテインの鍵を手に入れた男が、同時に剣をも手に入れた。そして氷竜を制する魔剣をもってして炎の魔法を操り、トラファルガーに立ち向かった。
「レーヴァテインを手に入れるには、鍵が必要なのだと言う」
ヴァルト副将軍が、厳かに目を細めて、言う。
「私はその鍵についても調査を進めた。そうしてわかったことは、それはピアスの形状をしているものだと言うことだ」
心の中の警鐘が、また速度を増す。見据える副将軍の眼差しが、俺の耳元に向けられているような気がしてならない。
しまったな……俺が、浅はかだった。
これがレーヴァテインの鍵なのだとすれば、レーヴァテインを手に入れる為に俺自身に危険が襲い掛かる可能性がある。軍部の人間だったら、鍵を手に入れる為に俺本体を始末するくらいわけないんじゃないだろうか。……これが、トラファルガー対策になるのだと考えているのなら尚更、俺の命ごときどうでも良いだろう。
「そう、なんですか」
「ああ。……時に、君もピアスを嵌めているね」
「ええ。珍しいことではないでしょうけれど」
「見せてもらえないか」
「……」
無言で副将軍を見詰め返す。俺の内心は、切羽詰っていた。
見せるだけなら構わない。けれど、副将軍はレーヴァテインの鍵であるピアスがどんなものか、知っているんだろうか。俺は、これが間違いなく鍵なのだろうと思っている。対になるアイテムがある

と言うこと、炎の属性に対する耐性、エルファーラの宗教画……ヴァルト副将軍がもしもこれがそうなのだと判断したら？

トラファルガーを制す為に、レーヴァテインを手に入れる為に、奪おうとするかもしれない。

「困ります」

警戒も露に、短く答える。カレヴィさんが、ようやく俺たちの微妙な空気に気がついたらしく、俺の返答に慌てた。

「カズキ」

鍵を奪われて困ることは、何だろう。

まず、このピアスは、留め金と言うものがない。そもそも、繋ぎ目と言うものが存在していないのだから、それを繋いで離す部品がないんだ。耳から外れないようにストッパーがついてはいるが、それは外れない。

俺の耳から離そうと思うと、ピアスか俺の耳か、いずれかを切断する必要があると思う。シェインならそんなことをしなくても抜いてくれるかもしれないが、このおじさんにそんな技が出来ると思えない。ピアスを傷つけるくらいなら、俺の耳をぶち抜くかも知れない。勘弁。

次いで、トラファルガーへの対抗手段がレーヴァテインならば、俺たちはそれをルーベルトとの交渉材料にする必要がある可能性がある。こんなところで、このおじさんに奪われてしまうわけにはいかない。ツェンカーをヴァルスに引き寄せる強力な条件を、失うことになる。ユリアの為に、トラファルガーでさえ使ってやると決めたんだ。

それに実際問題、ヴァルト副将軍が何を望んでレーヴァテインを欲しているのか、俺には不明瞭だ。このおじさんがどういう人かもわからず、強力な魔力を持つはずの魔剣の鍵を、おいそれと渡すわけにはいかない。純粋にトラファルガー討伐の為ならば問題ないが、悪用するつもりだったら、取り返しがつかない。

そして最後に、そもそもの持ち主が誰であれ、シャインカルク城

に渡った経緯が何であれ、このピアスを俺はヴァルスの宮廷魔術師から受け取っている。現状ヴァルスの管理下にある秘宝とやらを、ほいほい渡すわけにはいかない。

結論としては、ヴァルト副将軍に今奪われるわけにはいかない。少なくともユリアとシサーの同意が最低限必要だ。

「カレヴィさん。伝えて下さい。……ヴァルト副将軍は、何か誤解しておられるように見えます」

副将軍から目を逸らさずに低く言うと、カレヴィさんはちょっと困ったような顔をして、それから俺の言葉を伝えた。どう伝えたのかは、わからない。やがて副将軍が、笑った。

「どうして警戒している？そのピアスが見たいだけだ」

「ただの、ピアスですよ。街の雑貨屋で買った」

「お洒落な物だ。私はこう見えても、お洒落なタチでね」

それほどセンスが良いピアスだとは思えないんだが。

無言の俺に、ヴァルト副将軍も少し無言だったが、やがて困ったように苦笑をして肩を竦めた。

「良いさ。わかった。なぜだかわからないが、私は嫌われているのかな。無理強いはしないこととしよう」

あれ。

意外とあっさり引き下がった。

もしかすると武力に訴えてくるかもしれないと警戒していた俺は、それで軽く肩透かしをくらったような気がした。副将軍が、すとんと背もたれに体を預ける。

「まあ、レーヴァテインがフレザイルにあるのは確かな話さ。私は実際に足を運んでいるのだからね」

「だけど取り出すことが出来なかった」

「その通り。私が鍵を持っていなかったからだろう。尤も、鍵を持っているからと言って、手に入るかどうかは恐らく別だろうが」

別？

目を瞬く俺に、ヴァルト副将軍は薄く笑った。

「魔剣を操るには、適性を問われるのだそうだ」
「適性？」
「そう。……魔法を操る人間がいるとする。けれど、魔術師は全ての魔法が得意だと言うわけではない」
「……」
「火の魔法を得意とする人間もいれば、水の魔法を得意とする人間もいる。だろう？」
「ええ」
キグナスなんかは火系攻撃が得意、って言って良いんだろうな。副将軍が言っているのは、そう言うことだろう。
それが、適性？
「じゃあ、炎の剣と言われる物を操るには……」
「炎の適性が必要だと言うことになる。仮にその人間が魔術師であった場合、火系魔法を得意とするようなね」
その言葉で、不意に理解した。
以前、ガーネットが言っていた言葉――『人には属性がある』。
そう言う意味だったのか。
「それは、いわゆる『魔剣に選ばれた特定の人間がいる』と言うような意味ですか」
考えながら尋ねる俺に、ヴァルト副将軍は軽く肩を竦めた。
「恐らくは違うだろうと私は考えているよ。例えば炎の魔剣を使える特性の人間が、この世にたったひとりと言うわけではないだろう。火系の魔法を得意とする魔術師は、世の中に何人もいる。それは、その適性が個人特有のものではなく、人間がいずれかの適性に分類されていると言うことを示しているのだと思う。つまり世の中に炎の適性を持つ人間や水の適性を持つ人間が何人もいて、扱うことが出来るのは合致する人間だけじゃないかと言うことだ」
血液型みたいなもんだろうか。
ガーネットの言い方を考えれば、その言葉はあながち的外れとは言えないような気がした。

『人には属性がある』……特定の人間にしかないものなのであれば、『属性を持つ人間がいる』とか何とかって表現になるだろうし。

「それを思えば、果たして私が鍵を手に入れたところで、使えるかどうかはわからないのだからね。……さて」

そう締め括って、ヴァルト副将軍は俺とカレヴィさんを見比べた。

「こんなところで、少年の好奇心の満足に役立てたかな」

心の中の警鐘が、止む。

俺の、考え過ぎだったんだろうか。

先ほどの副将軍はこのピアスを狙っているように見えてならなかったが、あっさり引っ込めたところを見ると、それこそただの好奇心だったんだろうかと言う考えが生まれる。

とすれば俺は、結構失礼な奴だ。

「……ありがとうございました」

先ほどの謝罪の意味も込めて頭を下げると、副将軍が屈託なく笑った。

「お安い御用だ。私も興味のあるレーヴァテインの話であれば、いつでもしてあげよう」

そうして後半は、カレヴィさんに向けて言葉を紡いだ。それに答えて、カレヴィさんも何かを言う。再び副将軍の目が、俺に戻った。

「私もそのうち、久々に店へ遊びに出向くとしよう。そうだ、良かったら……」

副将軍が俺に向けて、何かを言いかけた時だった。

――クォォォォッ……。

ツェンカーに来てから何度か耳にした、魔物の雄叫び。トラファルガーの咆哮だった。

けれど、いつもと少し、違う。

「何ッ……」

びりびりと空気を震わす振動は、肌に直接訴えかけてくるようだった。全身に立つ鳥肌に、目を見張る。……近過ぎる！！

副将軍が顔色を変えて、窓の方へと駆け寄った。俺とカレヴィさ

んも、咄嗟にそれに従う。
「何だ、あれ……」
思わず呆然とした呟きが漏れた。
久々に、『恐怖』と言う感情を、思い出した。
咆哮は絶え間なく上がっている。窓のガラスが音を立てて揺れ、のみならずテーブルのカップがカタカタと音を立てていた。空気が細かく振動して、まるで細波のように打ち寄せてきている気がした。
「襲撃開始か……！！」
副将軍が何かを早口で呟き、カレヴィさんが答えるでもなく呆然と呟くのが聞こえた。
――遥か遠くの上空。
にも関わらず、肉眼でその姿がはっきりと視認出来る。
毒素を含んだ白のような色の、凶暴な生き物がそこには浮かび上がっていた。巨体を持ち上げる羽の動きが、見える。鎌首を擡げるような、何かに狙いを定めた姿勢。口から吹きつけているような白煙は、見ているだけで凍てつくようだ。
（あれが、トラファルガー……）
遥かな距離を越えて尚叩きつけて来るようなその存在感に、握り締めた拳が小刻みに震えた。
氷竜トラファルガーの、覚醒だ。

第3部第1章第19話　リトリアの始動（1）

「アムリア？　アムリアッ。どこに行ったの！？」
リトリア王国セルジュークの一軒の家で、母親の怒声が響いていた。
が、子供の応答がないと見ると、やがてそれがぼやきに変わる。
「まったく……店の手伝いもしないで……」
母親の声と足音が遠のいていくのを確認すると、アムリアはそっと物陰から抜け出した。
（遊びに行っちゃおー）
若干5歳になったばかりの少年は、大人では通れない小さな建物の隙間に体を滑り込ませた。アムリアの、秘密の通路である。
建物の横を抜けて、そのまま雨水を集める溝に潜り込む。今は乾季で、ひび割れた溝には小さな雑草が生えていた。藁と木材で作られた蓋で塞がれる狭い空間を物ともしないのは、子供の小さな体ならではだろう。
この溝を這うように進んでいくのが、最近のアムリアの流行りだった。大人から「通ってはいけない」と言われることほど、遊び心をかきたてることはないのである。
雨溝は、民家の間をくねくねとすり抜けて続いている。屋根がちょうど途切れた辺りで広場へ抜ける道に出ることが出来るので、アムリアは小さな鼻歌を歌いながら溝の中を進んでいった。
（ルーウェイの奴、うまく抜けられたかな）
アムリアの家は、王都セルジューク近郊の農村から運ばれて来た果実を売る仕事をしている。遊び仲間のルーウェイの家も同業者で、商売を営む家の子供は物心がついた頃には家業の手伝いを強いられる。
いかに、親の目を誤魔化して逃げ出すかが腕の見せ所なのだ。
雨溝を覆う蓋は、粗い作りになっていて、時折割れ目から日の光

が零れている。通る場所によっては井戸端会議をする主婦の会話や、誰かの家の庭先で話す声なども響いてきた。

まさかこんなところを人間が通っているとは誰も思わないから、アムリアは頭上の会話を通り過ぎながら僅かに優越感に駆られる。

「……攫うのに成功したらしい」

ぺたぺたと四つん這いに進みながら、いつものように頭上から聞こえてきた声に、アムリアは最初、何も気に留めなかった。

けれど、続いた言葉に、思わず前へ進む手を止めた。

「生きてるだろうな」

「ああ。多少の傷は負ったかもしれないが、命に別状はないそうだ」

「なら良い」

（……）

目を瞬いて、首を傾げる。

まだほんの子供であるアムリアには、その言葉の意味するところは良くわからない。

けれど、どこか不穏な会話であることを嗅ぎ取って、息を止める。

頭上の声は、足元にアムリアがいるなどと思いもせずに、潜めた声で、続けた。

「陛下は間もなく出陣されるそうだぞ」

「……モナか」

「決まっている。……クリスファニアに到着した時が、決起の時だ」

クリスファニアは、セルジュークから西南の位置にある大きな街だ。アムリアの家に届く品の一部は、クリスファニアを経由してくるから、アムリアも何となく名前は知っている。

交わされている会話の正確な意味を理解出来ずとも、アムリアは何か聞いてはならない話を聞いてしまっているような気がした。これが知られたら、お母さんにひどく叱られるかもしれない。

かたかたと小刻みに震える体でその場から動くことが出来ずに、アムリアは青褪めたまま母親が怒った時の顔を思い浮かべた。

「……様は、クリスファニアにお連れするのだな」

「さよう」
「殺す……いや、失礼。討つことに、同意は」
「……いや。だがそれに構うことはない。ともかくも、クリスファニアの方に伝達を頼む。私は、出陣の準備を整えねばならぬゆえ、そろそろ戻ろう」
それから二言、三言の言葉を交わして、アムリアの頭上は静かになった。
思わず止めていた息をほっと吐き出し、アムリアはそろそろとその場を四つん這いのまま動き始めた。
まだ、心臓がどきどきしている。額を濡らしているのは冷や汗と言う奴だ。
ようやくいつもの出口を前方に見て、アムリアは必死の思いで手足を急がせた。すぽんと雨溝から顔を出して日の光を浴びると、安堵に泣きたくなった。
聞いてはいけない話を聞いてしまったような気がする。
黙っていなくてはならないだろうか。
それとも、母親に話さなければならないだろうか。
「へぎゃ」
蓋の割れ目から顔を出したまま、泣きそうな顔で悩んでいると、遥か頭上から突如奇妙な声が聞こえた。振り仰ぐと、大人が驚いたような大袈裟なポーズで、アムリアを見下ろしていた。
「雨溝から子供が生えてますね……」
琥珀色の眼差しを見上げ、アムリアは意図せず、震える唇を動かした。
「ぼく……」
「はい？」
「『殺す』って……」
「……は？」
アムリアを見下ろす長身の男は、ぽつりと呟いたその言葉を聞き咎めるように間近にしゃがみ込んだ。ぼさぼさの乱れた長髪の隙間

から、人懐こそうな表情が覗き、それがアムリアの気を緩めた。
「ぼく……」
「何ですか？　私で良かったら、話してみませんか？」
「……」
「……何か、怖いお話を聞いてしまったような顔をしてますよ？」
どきりとする。そしてその声音に安堵して、アムリアは泣き出した。
「よ、良く、わかんないけど……」
「良くわからなくて良いですよ。……何か、聞いたんですね？」
確認するように問われ、頷く。
「君は、この穴の中で遊んでいたのですか？」
遊んでいたとは少し違うが、アムリアは再び頷いた。
「ふうむ。じゃあ、君が聞いた声の相手は、君がそこにいることを知らないで話していたと言うことですね。何を言っていましたか？」
「……」
「ああ、いーんですよ。意味がわからなくても。良く覚えていないのなら、覚えている言葉だけでも良いんです」
優しく聞かれ、アムリアは懸命に会話に出てきた単語を思い出した。それを、ぽつりぽつりと伝える。
「陛下が……クリスファニア……で、けっき……」
「『陛下がクリスファニアでけっき』？」
「モナ……それから、『殺す』って……」
「……」
男は、アムリアの言葉の意味を考えるようにしばし黙った。
「『殺す』と言うのは、誰のことかわかりますか？」
問われて、アムリアは少し考えた。思い返してみても、良くわからない。首を傾げながら、男に答える。
「わからない。『討つ』って言ってた」
「『討つ』……」
アムリアの言葉に、男の顔色がやや変わる。やはりまずいことを

聞いてしまったのかとはらはらしていると、無言で考え込むようにしていた男がやがてアムリアの頭に片手を乗せた。安心させるように僅かに笑みを浮かべる。
「わかりました。ありがとう。このお話は、私が引き受けます。君は、忘れてくれれば良いですよ」
そのことにほっとしてアムリアも笑みを返すと、男が念を押すように繰り返した。
「良いですね？　私が引き受けましたから」
「うん」
「……このことは、誰にも言ってはいけませんよ」

リトリア王国ラナンシー城は、慌しい雰囲気に包まれていた。
セラフィの命令を受けてラグフォレスト大陸から急遽リトリア王国を目指したグレンが城へと辿り着いた頃には、既に光の月も後半に差し掛かろうとしていた。『人魚の神殿』における『レガード』たちとの戦闘から2ヶ月が過ぎようとしている。
グレンは現在、自分の手を離れた彼らの動向を、知らない。
エレナとは、ヴァルス王国ウィレムスタト地方レジーナで別れた。エレナはレジーナからエルファーラを経由して、レドリックのいるロンバルト王都ウォルムスへ向かったはずである。
数ヶ月ぶりに訪れたセルジュークは、相変わらず文明国としての落ち着いた華やかさで賑わっていた。戦時中とは言え、戦地となっているのは遥か南方の国――現状ロンバルトであるのだから、リトリア国民の生活にはさしたる打撃はないのだろう。
だが、王城ラナンシーへ足を踏み入れた途端、慌しい気配が漂ってくるのを感じた。
セラフィからは、リトリアは対ヴァルス戦へはおざなりな戦力の投入を図り、一方でモナ侵略の動きを見せていると聞いている。
クラスフェルドへの取次ぎを頼んで待たされている控え室で、テーブルの上にあるフルーツの砂糖煮を摘んでは口に放り込みながら、

グレンはラナンシーへ向かう途中で出会った少年の言葉を思い出していた。

街に走っている雨溝で遊んでいたらしい少年は、どうやら問題のある会話を耳にしたらしい。

（『討つ』ですか……）

単に誰かを狙ったり殺したりする時に使用する言葉ではない。

概ね、「自分に理由がある」と信じている人間が使用する言葉である。

そしてその会話の中に『陛下』と言う単語が含まれていたとすれば、『討つ』の対象は『陛下』である可能性は低くない。

加えて言えば、民間人が使用するにはやや不自然さのある言葉ではあった。

国王に対して『陛下』と言う言葉を民間人が使用しないとはもちろん言わないが、失礼ながらいささか品位を感じもする。一般名称でもあるが、仕える者が国王に対して使用する呼称に近い言葉でもある。

少年の言葉を素直に解釈すれば、クリスファニアにてクラスフェルド王にとって、一大事が起こる可能性があった。

それからもうひとつ、少年は気になる単語を口にした。

（『モナ』……）

なぜ、『モナ』と言う単語が出て来るのか。

クラスフェルドは、モナへの侵攻を企てている。そして、『クリスファニアで決起』と言うことは――モナ侵攻への不満が募っていると言うことだろうか。

（恐らくはクラスフェルド王配下の者に、モナ侵攻への不満を募らせてクリスファニアへの進軍をきっかけに反乱を企てている者がいる……）

果たして自分は、その情報に対してどうすべきだろう。

ひとつ言えるのは、ロドリスとしては今クラスフェルドを討たれては、困るのである。

現在クラスフェルドを王に戴くリトリアは、ロドリスの友国として承認されている。実際はのらりくらりと対応の遅いリトリアではあるが、それでもリトリアがこちら側についていると言うだけで、ヴァルスに対しては十分威圧的なのだ。その効果だけでも、リトリアをこちらに引きずり込んだ甲斐があるほどに。

けれどこれで万が一クラスフェルドが反乱者の手によって討殺されてしまうとすると、また話が変わる。

混乱に陥れば無論のこと、仮にすぐに王位に就く人間がいるとしたって、その人物がクラスフェルドと同様ロドリスと手を携えることを諾とするかはわからない。

元々リトリアはロドリスと反目し合う関係にあることを考えれば、戦線離脱もしくはヴァルスサイドに寝返る可能性すら考え得るのだ。それは全て、どんな人物が王位を継承するかによって左右される。

そんな博打を持ち込みたくはないから、クラスフェルドにはこのままリトリア国王として君臨してもらわねば困るのである。

考えあぐねながら砂糖煮の壺を綺麗に空にした頃、ようやく扉が開いた。中継ぎの者が迎えに来たのかと顔を上げると、ドアを開いたのはクラスフェルド王その人だった。宰相のフラクトルが、その背後に従っている。

「呼びもせぬのに戦の匂いを嗅ぎつけたか？　『ジェノサイド・イブリース』」

入るなり投げ掛けられたからかうような言葉に、苦笑いをしながら立ち上がる。

「いやいや。陛下がどうなさっておられるのか、日和見ですよ」

妙な挨拶だ。

グレンはそっと目を眇めた。

戦が巻き起こっているのは、周知の事実である。そして、リトリアを巻き込んだのは他でもないグレンの尽力だ。

そのグレンに対して「戦の匂いを嗅ぎつけた」とは、いささかおかしな言葉ではないか。――ロドリスの関知しない戦が起ころうと

しているのならば、ともかく。
「勝手な動きをするなとの牽制か？」
クラスフェルドは、間違いなくモナへの侵攻を画策しているのだろう。
にやっと笑いながらソファへどかりと腰を下ろすクラスフェルドに、グレンは殊更肩を竦めて見せた。
「まさか。我々と御国は『友軍』ですからね。思い通りに操作しようなどと思っていませんよ？　もちろん陛下のお心にはアルトガーデンの為に良き計らいをして下さるおつもりがあることでしょうし」
にこにこと嘯くグレンに、クラスフェルドは笑いを浮かべたままで目を細めた。

第3部第1章第19話　リトリアの始動（2）

「少なくとも、ガレリアに見合う相互協力は、お約束して戴けているはずですし」
「リトリアは、モナを攻めるぞ」
「は……」
あっさりと口を割ったクラスフェルドは、一瞬言葉に詰まるグレンに、念を押すように繰り返した。
「モナを攻撃する」
余りに悪びれぬ態度に、さすがのグレンも頭を抱えたい気分になった。グレンの役割はリトリア王の腹を確認することではあるが、モナへの侵攻を堂々と認められて「わかりました」とセラフィに報告するわけにはいくまい。
ロドリスは、ガレリア地方をリトリアに割くのだ。ならば、その分の働きはしてもらわねば困るのである。
「締結した条約では、『ヴァルスへの派兵を最低6万』と記されておられたかと思います」
「モナはヴァルスに押さえられている。ならばそこを攻めることは、ヴァルスを攻めることと齟齬が生じるか？」
「『ヴァルスへの派兵』ですからねぇ……。それは～、我々とのお話には上がっていなかった行動のような気が致しませんか？」
「せぬな」
「モナは、既に敗戦による戦線離脱国とお考え下さいません？　この際モナは放っておいてですねえ、ここはみなさん足並みを揃えて、やはりヴァルスの王都を落としてしまうのが一番まぁるく納まるのではないかと……」
「モナを攻めることは、ヴァルスへの牽制に繋がろう？」
「……」
ああ言えば、こう言う。

かくんと項垂れたグレンは、片手を額に押し付けて話の方向を転換することにした。
クラスフェルドはこの機に乗じて、どうしてもモナに攻め入りたいのだろう。
であればそれは許容するとして、それとは別にヴァルス戦線へ派兵の約束を取り付ければ、セラフィも文句は言わないはずだ。
「……わかりました」
「では話は済んだな」
「いやいやいやいや。ここからが本番です、陛下」
恐らくはモナへの侵攻が、クラスフェルドの寿命を縮める。
そう言いたいのはやまやまだが、それが臣下の中に燻っている火種である可能性を考えれば、浅はかに口にすることは出来なかった。
ラナンシー城の誰が加担をしているのか、部外者であるグレンには全く見当がつかない。つけようがない。今ここで口にして、フラクトルの口からどこかに漏れれば、それが導火線となる可能性さえある。
「ではですね、モナの件はひとまず置いておいてですね。ヴァルス戦線の方への派兵を増やして戴きたいと」
「ほう」
「少なくとも現状、ロンバルトを越えて行軍しているのは2万。……これはいささか少な過ぎやあしませんか？　モナへ率いるのは、どの程度のおつもりです」
「現在、1万5千が先行しているな」
「1万5千……では、約束の6万にモナへの派兵が含まれていると考えても、最低2万5千は不足している勘定になりますね」
「それを率いて、俺がモナへ向かう」
「それではそれを1万に減らして下さい」
「どんな権限をもって俺にそれを指図する？」
にやにやとソファの肘掛に頬杖をつきながら尋ねるクラスフェルドは、グレンがどう答えるかを見ているだけのようにも思える。嘆

息しながら、グレンはクラスフェルドに答えた。
「私が、陛下に同行させて頂くと言うのは、いかがでしょう」
「ほぉ。お前が俺と共にモナへの侵攻に行くと言うか？」
「さすがに減らした1万5千人分働きますとは言えませんがね。お手伝い出来ることはあると思います。……そして1万5千を、ヴァルスで戦端を開くロドリスに貸して下さい」
「良いだろう」
付いていた頬杖を解き、背もたれに深く背中を預けて両腕を組みながら、クラスフェルドは赤ら顔を笑いの形に歪めた。
「増兵しよう。ヴァルスへの派兵は、2万。俺は1万5千とお前を率いて、モナへ行く。それで良いか？」
「それで、手を打つとしましょうか」
少なくとも現段階でクラスフェルドの耳には入れられない。
ならばクラスフェルドのそばにいて、その機会を手に入れることが必要だろう。
場合によってはその身を守る術を、講じなくてはならないかもしれない。

◆◇◆

痩せた木々が点在する乾いた山岳地帯を、騎乗した2つの影が進んでいく。
双方傷だらけ、衣服にも切りつけられたような痕が見受けられる。
「……撤いたか」
赤髪の男――シェインが問うでもなく呟く。それから忌々しげに顔を顰めた。
「どの辺りか、見当はつくか」
やや遅れてついてくるエディが、感情の読めない表情で顔を上げた。
「おおよそは。予定していた方角と少し逸れてるな。このまま行く

と東……海の方向に行ってしまうだろう」
「どこかで軌道修正しなければな……」
苦い表情で太陽を見上げるシェインに、エディは僅かな沈黙の後、問うた。
「これからどうするつもりだ？」
振り返ったシェインは、にこりともせずに応じた。
「決まっている。お姫様を奪還するのさ」
屈辱的な敗北感と共に、ソフィアを追う一団――エブロインたちの襲撃を思い返す。
――ソフィア様に傷はつけるなッ！！
対峙を覚悟したシェインたちに踊りかかろうとする男たちへ向けて、エブロインが怒声を上げた。咄嗟に散開したシェインたちは、連立する岩柱を盾に防戦一方に回るしかなかった。
――エディ！！
シェインが、襲い掛かってきた2人からの防衛戦を強いられている中、ソフィアの悲鳴のような声が聞こえた。
彼らの標的は、最初からソフィアだ。
その理由はまだわからないが、シェインとエディは、彼らにとって添え物に過ぎない。
畢竟（ひっきょう）、ソフィアへの狙いが集中し、シェインやエディがそれぞれ馬上の攻撃からの防衛戦を強いられている間に、ソフィアは男たちに囲まれた。いくら腕が立つとは言え、馬上から複数狙われては、逃れる術がない。
剣を構えて身動き出来ずにいるソフィアに、男がひとり背後から首筋に剣を突きつけた。彼らの狙いがソフィアの命だったならば、彼女の人生はそこで終焉を迎えたことだろう。
だが、幸いにして彼らの狙いはソフィアの命ではなく、その身柄だった。
自らに襲い掛かる男の馬を攻撃して落馬させたエディがソフィアの背後の男に切りつけ、それを受けて男が落馬すると、別の男がエ

ディに切りかかった。一方でこちらも馬を奪取することに成功したシェインがエディのフォローに入ると、その隙を突いてエブロインがソフィアを殴りつけて気絶させ、己の馬に引き上げた。

――ソフィアッ……！！

そしてエブロインは、シェインやエディが手一杯と見て取るや否や、ソフィアを抱えて馬を翻したのである。

数人がエブロインに従って場を離れ、数人がシェインとエディの足止めに残り、彼らとの戦闘を余儀なくされている間にソフィアを攫ったエブロインの姿は影も形もなくなってしまった。

手勢の減ったエブロイン一団からもう一馬を略奪することに成功してその場からの撤退を図ったシェインとエディは、ようやく今、追撃してきた敵兵を振り切ることが出来たのだ。

ソフィアの身柄と引き換えに拾った命と思えば、このままにしておくわけにはいかなかった。

だが、一口に奪還と言っても、彼らが何者でどんな狙いがあってソフィアを攫ったのか、そもそも彼らはどこを拠点としている人間なのかすらわからぬようでは、行動のしようがない。

「ともかく情報を集めなければ、何も出来ぬな。エブロインと言う名前に、聞き覚えは？」

エディはリトリア宮廷に詳しい。彼の知識を期待して尋ねてみるが、エディは軽く首を傾げてみせただけだった。

「さあ。私の記憶にはないみたいだ」

「となると、かなりの小物かな。要は雑魚キャラか」

有り体に言えば、ソフィアの行方はエブロインの元、と言うことになるだろうか。

けれど、ソフィアの口ぶりを考えればエブロインは単独行動ではない。

となると、彼を飼う人間の元と言う可能性も考えられる。

いずれにしても、このまま闇雲にソフィアの行方を追っても、雲を掴むような話だろう。

「なぜソフィアの行方を追う？」
連中からの逃亡を最優先にして疾走して来た為、進んでいる方角はいささか予定外の方角のようだ。とは言え目下のところ先へ続く道は一本だけである。戦闘していた台地から続く道を適当に選択して来た為、戻るのも困難と言えた。
アテを定めることの出来ないまま、どこかで別れ道があることを期待して馬を進めるシェインに、エディがぽつりと意外なことを尋ねた。
「なぜ、とは？」
せっかく傷を治したばかりだと言うのに、また傷を負っている。以前ほど深い傷ではないとは言え、全く落ち着かない。
「このまま放っておくことも出来る、と言っているのだが」
「……」
思わずエディを振り返った。どういう意味だろう。ソフィアを見捨てようと言う話なのか、エディひとりで奪還すると言っているのか。
表情からは、窺えない。その意味を言葉で問うことにして、シェインは前に顔を戻した。
「どういう意味だ？」
「どうって……言葉の通りだ。そなたはそもそもセルジュークへ向かうのだろう。選択肢はある。付き合わずとも私は責めないと言っている」
見捨てる、と言い出したのではないことを見てとって、シェインは小さく息をついた。
「俺はソフィアに命を助けられている。返礼するのが人道だろう」
「人道か」
エディが小さく笑うのが聞こえた。
「意外と義理堅いな」
「筋は通さないとな」
それに、リトリアの動向は押さえておく必要がある。ことは、決

して小さくはない。リトリアと言う国の中核に迫る動きと言える。
改めて後方を振り返ってエブロイン麾下の者たちが確かにシェインたちを見失っただろうことを確認すると、再びエディに向けて口を開いた。
「ソフィアはファルネーゼ、と言ったな。ファルネーゼ家と言うのに聞き覚えは？」
「……」
シェインは、通り一遍のことしかリトリア宮廷に関する知識はない。
いくつも名前が出てきたところで、シェインには把握しきれないと言うのが正直なところだが、とりあえずのところは情報を引っ張り上げて取捨選択していくしかないだろう。
エディは短い沈黙を挟んで、振り返ったシェインを見た。
「ある」
「どんな家だ」
「先日話した内容を覚えているか？」
先日――宿で酒の肴に語り合っていたリトリア王朝の話だろうか。
シェインの回答を待たずに、エディは淡々と続けた。
「マグヌスとライナルトがリトリア宮廷で勢力を二分していると言ったろう」
「ああ」
「ライナルトのフルネームが、ライナルト・アーガトン・ヴァン・デ・ファルネーゼだ」
無言でエディを振り返る。
ではソフィアは、リトリア宮廷において特権階級の嫡子と言うことか。
「ファルネーゼ家は、リトリア宮廷で代々宮廷枢密顧問官を務めている文官の家系だな。そしてライナルトの後ろ盾についているのが宮宰アルノルト・クレーフェ……アルノルトは現国王クラスフェルドの母ドロテーア王母に、故郷を模した庭園を献上していたく気に

入られたそうだ。そのせいで王家に対する発言権が文官の中では強いと聞く。それが、ライナルト……ファルネーゼ家の後ろ盾についているわけだが」

「ほう……」

やはりエディは、リトリア宮廷について、かなりの知識を有している。

情報を頭に叩き込むシェインに、エディが僅かに声を低めた。

「そして、ファルネーゼ家は、7年前に養子縁組みで娘を迎え入れている」

「娘を……？」

眉間に皺を寄せるシェインに、エディは含みのある表情で首肯した。

「それが、ソフィアか？」

第3部第1章第19話　リトリアの始動（3）

「かどうかは、わからない。だがもしもそうなのだとすれば、ソフィアがフリッツァー・ウィルディンをシガーラントまで訪ねたかった理由がわかる」
「なぜだ？」
「フリッツァー・ウィルデン――7年前にシガーラントへ封じられた諸侯だ。武器などを集めて反逆を企てているとの罪で元帥の地位を剥奪され、セルジュークからシガーラントへの異動を余儀なくされた。その際に、フリッツァーの娘がファルネーゼ家へと養子に組み込まれている。それがソフィアだったのだとすれば、ソフィアが『絶対的に信頼に値する人物』として協力を依頼する筋が通る」
「なるほど……。父親、か……」
荒く寂れた台地の終わりが見えてきたようだ。馬を止めて前髪を揺らす風に目を細めながら、シェインはエディに向けて微かに首を傾けた。
「仮にソフィアだとしよう。それが最も筋が通る。……なぜ養子に？」
エディは静かに首を横に振った。
「そこまでは、わからないな」
「何か臭うな」
「ああ。……ここ数年で急に台頭してきたライナルトは、突如アルノルト・クレーフェを後ろ盾につけた。アルノルトが助力する理由が、わからない」
「……」
無言で視線を見交わす。互いの考えは恐らく近しいところにいるのだろう。
シェインは小さな笑いを口元に刻んで、再び視線を風景に戻した。
「シガーラントへ行って、状況の整理といこうか。……シガーラン

ト公がきっと、答えを与えてくれるさ」

◆◇◆

ロンバルト公国ヴォルガ要塞とニールブラウン要塞から、ヴァルス北東のリミニ要塞へ向けて進撃を開始したロドリス軍3万5千は、光の月の終わりにはリミニ要塞まで2日の距離に迫っていた。

ガーフィール将軍率いるヴァルス　ラルド要塞軍及びロンバルト国内に留まっていたヴァルス軍はその報を得て帰城の予定を急遽変更、リミニ要塞を目指してウォルムス南方のヴァルス国内を北上する。

一方でロンバルト国内を西南へ移動していたナタリア・バート軍3万は、国境を越えて主力のいないラルド要塞を目指していた。

ヴァルス国内における両軍の初戦は、もはや秒読み開始と言って良かった。

「ラウバル殿」

ユリア、そしてシェインが不在の今、ラウバルの抱える仕事は膨大である。

友国ロンバルトの敗北、いよいよ国境を越えてヴァルスへ進軍してきた連合軍への対策、日増しに激しくなる港街フォルムスにおけるナタリア海軍との攻防戦への増援手段、そして国政と、やらなければならないことはきりがない。

重鎮たちとの会議を重ね、各地に伝達を飛ばし、書類を片手に城内を駆けずり回るラウバルは、執務室で自身の椅子を温める暇がなかった。

何にせよ、現在最も窮地に陥っているのはフォルムスである。

戦と無関係のシー・サーペントの妨害によってフォルムスへの派兵にギャヴァン沖の航路を取れない今、応急処置としてヴァルスはウィレムスタト地方に造船場を建設した。先週よりようやく造船に取り掛かったところであるが、果たして援軍が間に合うかどうか。

書類を取る為に足早に執務室へ向かっていたラウバルは、背後から呼び止める声に足を止めて振り返った。ちょうど大司祭ガウナが階段を下りてくる姿を認め、体ごとそちらに向き直る。

「ガウナ殿」

「今、少々お時間を戴くことは出来ますでしょうか」

ガウナも現在、大忙しのはずである。

ヴァルス国内ではまだ大規模な戦闘は行われていないが、ロンバルト各地やフォルムスでヴァルス兵は傷を負っている。兵士たちを救う為に神官たちは旅団を編成し、各地への派遣はガウナが取り仕切っていた。

「ええ。どうなされました」

階段を下りきってラウバルのそばまで足を進めたガウナは、僅かに声を低めてその問いに答えた。

「客人が。ラウバル殿に面会させる必要があると判断しました」

「客人？」

「ロドリスからの客人です」

その言葉で一瞬、シェインの間諜が脳裏に過ぎる。

だが、ガウナの答えはラウバルの想像を越えていた。

「ロドリスはタフタルの神殿より、シェイン殿からの使者です」

「……何？」

ばさっと手にしていた書類を取り落とす。心臓が大きな音を立てた。

切れ長の目を見開いたラウバルに、ガウナが真顔で厳かに頷く。

「では、シェインは……」

「ご無事でいらっしゃると伺いました」

思わず、ファーラへ感謝の祈りを捧げた。

（シェイン……！！）

生きていたのか……。

シェインの行方が知れなくなってから2ヶ月――無論捜索の手は伸ばしたが、何せ敵に押さえられたロンバルト国内である。その成

果は芳しくなく、もはや、諦めねばならぬかと考え始めていたところだ。

「ともかくも、こちらへ」

それきり片手で顔を覆って言葉の出ないラウバルを、ガウナが促す。

辿り着いた神殿の応接室で待っていたのは、流れるような濃緑の髪の女性司祭だった。ラウバルの姿を認めて掛けていたソファから立ち上がると、小さな祈りを捧げてラウバルに視線を注ぐ。

「タフタルの神殿を預かる、クラリスです」

ガウナの紹介を受けて、女性司祭――クラリスが、深く頭を下げた。

「お初にお目にかかります」

「ヴァルス王国宰相ラウバルと申す。こちらこそお初にお目にかかる。……シェインからの使者と伺った」

気が急いて口早に尋ねるラウバルに、クラリスは旅の疲れを感じさせない穏やかな顔で頷いた。

「では、シェインは無事と思って良いか」

「はい。シェイン様は、ご無事でおられます」

その言葉を受けて、全身の力が抜けたような気がした。続く戦闘で暗雲渦巻くラウバルの心に、唯一もたらされた朗報だった。

ひとまず安堵をしてクラリスにソファを勧めると、ラウバルもガウナを促して向かいのソファに腰を下ろした。

「今、どこに。シェインに何があった」

「順番にお話致します。まず、シェイン様は現在、ロドリス王国におられます」

「ロドリス……」

「はい。私はロドリス王国タフタルの聖職者……シェイン様は、傷を受けてタフタルを訪ねて来られました」

それからクラリスは、簡潔に、かつわかりやすく丁寧な言葉でシェインの事情をラウバルに伝えた。

ロンバルト公国第1王子レドリックがヴィルデフラウ城に戻っていること、レドリックには宮廷魔術師ラミアが味方についていること、シェインを拐かしたはラミアであり、ラミアによって魔法に制限がかかっていること、ソフィアとエディと言う旅人に身柄を救われて共にタフタルを訪れたこと、タフタルから先アンフェンデスまで彼らに同行するつもりでいること、彼らの行き先は恐らくリトリア王国であることと魔力回復の為に一度セルジュークへ向かうつもりであること。

「なぜシェインはヴァルスへ戻って来ない？」

そこまで聞いて、ラウバルは眉を顰めた。クラリスが、僅かに緊張した面持ちでラウバルを見返す。

「まだ、最も重要なことをお伝えしておりません」

「何だ」

「シェイン様は、その同行者……特に、エディと名乗る人物に、注意を払っておられるようです」

「注意を？」

「はい。……シェイン様は、こうおっしゃいました。『モナ公王は生きている。恐らくは、己の記憶と引き換えに、海戦で消えかけた命を拾ったのだ』と」

「……」

その言葉に、ラウバルとガウナは同時に息を飲んでソファから身を起こした。

「では、そのエディと言う人物が」

「モナ公王フレデリク様とお考えです」

フレデリクが生きている……。

「記憶が、ないのか……？」

目を見開いたまま呟くラウバルに、クラリスは力なく顔を横に振ってみせた。

「私は頷くことが出来ません。エディと言う人物に、私はお会いしておりませんから。けれど少なくともシェイン様はそうお考えで、

エディと言う方に同行する決意を固められたとお考え下さって結構かと存じます」

それからクラリスは、シェインの見るエディと言う人物についての考察を伝えた。

その容姿、戦略や政についての秀でた知識、書物を読む趣味、剣の腕より頭脳労働派と推察されること、どこか淡々とした思考回路から考えるに復位した場合の危険性、そしてモナ公家であるバーシェルダー家の紋章を所持していることなど、恐らくは現状知り得た情報を事細かに記した手記を手渡し、時折クラリスがそれを言葉で補う。

間違いなくラウバルの知るシェインの筆跡であるその報告書は、シェインの存命を諦めかけていたラウバルに希望と感慨を与え、それ以上に大きな情報を伝えていた。

まず、レドリックの裏切りは、これで憶測や状況判断ではなくなった。

報復処置を考案する必要がある。

そして、フレデリクの動向について目を光らせておく必要が生じた。これについては、状況を見てシェインが再度報告をしてくるのを待つ以外にないだろう。

加えて……。

（この少女は、何者だ……？）

シェインが文章内で触れている、フレデリクを伴ってロドリスを移動するリトリア貴族と思しき――何者かに、追われる少女。

彼女は何者なのだろう。

書面からは、シェインはフレデリクのみならず、彼女についても何か思うところがあるように伺える。

だが、これについてもまた、シェインからの報告を待つ以外になさそうだ。リトリアに、何かが起ころうとしているのだろうか。

（モナと、リトリア……）

一通りクラリスからの情報を受け取ったラウバルは、しばしその

内容に頭を巡らせた。
それから、ややしてガウナに向かって、口を開いた。
「カサドール公……カール公に、連絡を取りましょう」

ラウバルがクラリスと面会している応接室から更に奥の通路へ向かうと、やがて階段へ行き当たる。
その階段を上がって通路を進んで行くと、ファーラ神像と神聖魔法に守られた小部屋があった。
中には、ロンバルト第2王子レガードが、未だ意識不明のままで昏睡に陥っている。
静かに、その白い顔色を見つめる人物がいた。ギャヴァン盗賊ギルドの魔術師ガーネットだった。
この部屋にはユリアとラウバル、シェイン、そして大神殿関係者以外は立ち入ることが出来ないようになっているが、ガーネットはラウバルとガウナの特別な計らいによって自由に出入りすることが許されていた。
数ヶ月レガードの体調を見守って来たガーネットは、今もこうして頻繁にレガードの様子を慮っては足を伸ばす。
（全ての責任は、わしにある……）
ジフリザーグと軽快に言い合いをする陽気な姿は、今は、微塵もない。
沈鬱な静寂の中、ガーネットは微動だにしないレガードの顔を見つめたまま、思いを馳せた。
帝国継承戦争――起こるべくして起こったとも、言えるだろう。
先帝クレメンス8世は、誰もが認める賢帝だった。そして嫡子が若年の王女ひとりとなれば、帝位の継承を巡って一悶着起こるのはどこにでもある話だ。
けれど、燻った火種は、レガードの継承によって燃え盛ることなく鎮火したかもしれない。
少なくとも、耳に聞く風評ではレガードは人格においてもその能

力においても傑出した人物なのだから、彼がユリアと結ばれ、帝位とヴァルス王位を継承することによって火種は小さくなったかもしれないのだ。……つまり、帝国継承戦争は、起こらなかった。

それを狂わせたのは、ひとえに黒衣の魔術師の存在だったと言っても過言ではない。

本来であれば遥か昔にいなくなったであろう黒衣の魔術師が未だ暗躍出来るのは、そして黒衣の魔術師が盲目的に振り回されている執念と野望に火をつけたのは、自分だ。

遠い昔の記憶ながら、ガーネットは未だ、あの頃の記憶を鮮明に持っていた。

学者や研究者が時折足を踏み入れる魅惑的な誤りの道に、あの時の自分は確かに足を踏み入れた。

そしてそのことが、現在巻き起こっている騒乱の根本となっている。

その根を絶たなければ、自分は死ぬことは出来ない。

繋いだ命も、もう、間もなく期限を迎えることだろう。

自分がいなくなった後にも、その尻拭いをラウバルに永久に押し付けるわけにはいかない。

憂いの元を、本来あるべき姿へ戻してやってこそ、安心して眠りに付くことが出来る。

その為にガーネットは、レガードの手を必要としていた。数百年の時を経て、彼だけがガーネットを救うことが出来るはずだった。

――『2つの属性』を併せ持つ彼こそが、ガーネットの過ちを白紙に戻すことが出来る存在なのだから。

第3部第1章第20話　tremor（1）

グレンから受け取った報告書をくしゃりと手の中で握り潰し、セラフィは秀麗な顔に苛立ちを浮かべた。

リトリア国王はあくまで単独行動をするつもりのようだ。全く、思い通りに動かない男である。

ともかくもグレンが、更に2万の派兵を取り付けたようだから、当面はとりあえずそれで良しとするしかないが、リトリアがモナを攻撃すると言うのは、ロドリスにとって是非が分かれるところでもある。

モナは現在、誰が見ても弱体化をしている。ヴァルスが背後についているとは言え、リトリアに襲われればひとたまりもないだろう。

そうしてリトリアはモナへと領土を伸ばす。ロドリスのガレリア地方も併合する。戦争が終結した暁には、リトリアは莫大な領土を手に入れることになる。

大してヴァルス戦線に派兵せずしてその結果では、各国から不満の声も上がろう。それを甘んじて放置しておくわけにはいかないが、まさか阻止するわけにもいくまい。

グレンがクラスフェルドのそばに控えるとのことだから、何か状況に変化があるのを期待するしかないが。

（新たに条約を締結する必要があるかもしれないな……）

執務室で書簡の山と向かい合いながら、セラフィはグレンの汚い字を睨みつけた。リトリアがモナを侵攻することがヴァルスへの牽制だと言い張るのならば、それによってリトリアが攻略するモナの領土などについても『連合国』全てでどうすべきか検討する必要がある。あるいは、モナを支配下に収める代わりにリトリア領土のどこかをナタリア、バートに分割処置を講じるか。

「セラフィ様」

腕を伸ばしてローレシア大陸の地図を手元に引き寄せたところで、

ノックの音がセラフィの思考を遮った。構わず地図を机の上に広げながら、ノックに答える。宰相秘書官アークフィールの声だ。
「いるよ」
「失礼致します」
指先でリトリアの国境を辿っている間に、アークフィールが扉を開ける。顔を上げてアークフィールを振り返ると、宰相の秘書官はなぜかいささか渋い顔をして、部屋に足を踏み入れた。
「……？　どうした？」
「いえ。ユンカー様が、セラフィ様をお呼びでいらっしゃいます」
「ああ、そう。すぐに行こう。何か嫌な報告でも上がったのかい」
半ばリトリアの領土に気を取られながら尋ねて立ち上がるセラフィに、アークフィールは軽く両眉を上げてみせた。
「まあ、私ではどちらとも判断致しかねますけれど」
アークフィールを促しながら執務室を出て、セラフィは首を小さく傾げた。
「リトリア軍が、今ひとつ意志の疎通が出来ていないようでございまして」
またリトリアか。
顔を前へ戻しながら、つい鼻の頭に皺を寄せる。
「ヴァルスへ向かっているリトリア軍のことか」
「ええ」
ヴァルスの北部には、東にリミニ要塞、西にラルド要塞が存在する。
リミニ要塞を3万5千のロドリス軍が攻撃し、ラルド要塞をナタリア・バート軍が攻撃すべく進軍していたはずであるが、それとは別にロドリス王国のサーディアール要塞を越えて南下してきた2万のリトリア軍には、まずラルド要塞へ向かうよう指示が行っている。
ラルド要塞からは要塞軍がロンバルトへ出撃していて、主力が現状いない。
ゆえに、無傷のリトリア軍を投入して、ラルド要塞を真っ先に陥

落させてしまおうとの計算である。
　撃破する兵力が肝心ではないのだ。『ヴァルスの要塞を陥とす』ことに重要な意味がある。
　要塞を陥とされればヴァルスは大きく動揺し、連合軍は勢いがつく。弱い方から片付けてしまえば、ラルド要塞陥落後に、リミニ要塞への戦力へも投入出来る。
　そう計算しての戦略だったはずだが。
「リトリア軍は、どう動いていると？」
「リミニ要塞へ向かっているとの報告が上がって来ているようです」
「……」
　セラフィは無言でため息をついた。
　複数の国が協力し合って戦えば、意志の疎通が図れなくなることはないではない。
　それぞれ実際の指揮系統が別に確固として存在しているのだから、往々にして起こることではある。
　だが、ロドリス、ナタリア、バートの三カ国は、ここまでとりあえずさしたるすれ違いもなく事を進めてきたのだ。
　それが、リトリアひとつ入るだけで、統制が乱れる。
「リミニ要塞にね……」
　ナタリア・バートの軍は、３万だ。ラルド要塞を陥落させるのが不可能な兵力ではないが、更にリトリア軍２万を投入してラルド要塞を迅速に陥落させようと言う意図が、ぶち壊しである。
「セラフィ」
　アークフィールと階段を上がっていると、背後から軽やかに名前を呼ばれた。その声にセラフィは内心、一層顔を顰めたい気分になった。
　とは言え無視をするわけにもいかないので、足を止めて振り返る。
「アンドラーシ様」
「ちょうど良かったわ」
　アークフィールが複雑な表情を浮かべて身を引くが、どこか興味

津々でセラフィとアンドラーシを見比べる視線を感じる。
マーリアのアンクレットを見ただろうアンドラーシの口封じに彼女の恋心を利用して、咄嗟に『まさしく口を塞いだ』のは失敗だったと思わざるを得ない。
アンドラーシは、今まで以上にセラフィへ熱愛の籠もった視線を向けてくるようになった。
「何でしょうか」
セラフィの態度は、あくまでも以前と変わりはしない。彼女への口付けは恋情のかけらもないのだから、当然のことだ。だが、アンドラーシはセラフィの笑顔の鉄壁に、以前ほどには怯まなくなった。
「先日、リリアーナ様にお菓子の作り方を教えてもらったの。今はソリージュの花もとても綺麗な季節だわ。良かったら、お茶にどうかと思って誘いに来たの」
背中に刺さっているだろうアークフィールの視線が痛い。
笑顔が微かに引きつりながら、セラフィはアンドラーシを黙らせる言葉を探した。
「恐れ多くも不肖私にお声を掛けていただくとはありがたく存じますが、生憎両手が塞がっております」
「少しくらい息抜きも必要よ」
「陛下の息抜きにあわせて私もお誘い下さるとは恐縮ではございますが」
あくまで、カルランスが同席することが最前提であるとの言葉を強調し、セラフィは拒絶の意を頑なに口にした。
「私が同席しては執務気分が抜けずに陛下もいささか興醒めされましょう。お言葉だけありがたく受け取らせて戴きます」
「陛下は……」
「陛下のお心を癒して差し上げて下さい。それでは、急ぎ用がありますゆえ、御前を失礼致します」
何かを言いかけたアンドラーシの言葉を奪い取るように、セラフィは笑顔のままで締め括った。内心、「空気を読め」と怒鳴りつけ

てやりたい気分だ。
さっさと踵を返して階段を上がり始めたセラフィに、アークフィールがアンドラーシを気にかけた様子のままで挨拶を口にして続く。背後にまだアンドラーシの気配を感じて気が気ではないセラフィは、自然と足早になった。
「……宜しかったのですか？」
国王の寵姫の視界から外れただろうところで、アークフィールが小声で問う。殊更、冷静な口調で、セラフィは静かに返した。
「何がだい」
「私のことならば、お気遣いされずとも……」
「アンドラーシ様は、陛下とのティタイムに僕をお誘い下さったんだ」
「……」
「社交辞令におめおめと乗っかるようでは、気が利かないと言うものだろう？」
必死に弁解すれば、却って勘繰られる。
先ほどのアンドラーシへの返答こそが真実であるとセラフィ自身が思わなければならない。
セラフィの言葉に、アークフィールが口を噤んだ。セラフィもそれ以上の言葉は口にせず、アンドラーシへの忌々しさに胸の内だけでため息を落とす。
彼女はまだ若い。セラフィに想いを寄せていることも、重々承知している。だが、なぜもう少し己の立場を考えない。軽率な真似は、セラフィの立場も己の立場も貶めると、少し考えればわかりそうなものだ。
微妙な沈黙のままでユンカーの執務室に辿り着くと、こちらはこちらで浮かない顔の宰相がため息を落としていた。頭からアンドラーシへの苛立ちを振り払って、ユンカーから詳細を聞くべく柔和な笑みを顔に作り上げる。
「お呼びとのこと……いかがされましたか」

「幾つかの報告が上がってきました」
「リトリアと、意志の疎通が図れないとアークフィールのぼやきは既に伺いましたが」
苦笑交じりのセラフィの言に、ユンカーもつられたように苦笑を浮かべた。いくつかの報告書をまとめた束をセラフィの方へ差し出しながら、椅子を勧める。アークフィールが奥からティセットの乗ったトレイを運んで来た。
「拝見して宜しいですか」
「ええ。もちろん」
椅子に掛けながら、報告書に目を通していく。
ローニー将軍率いるロドリス軍のリミニ要塞への砲撃による攻撃開始に伴い、リミニ要塞から8千の兵及び要塞内部からの迎撃で開戦。ロドリス軍は攻城の為の土木工事を進めつつ、幾度かの戦闘を経て報告書の時点での被害は８００となっている。ヴァルス軍の被害は、不明だ。
しかし一方で、ロンバルトから撤退したラルド要塞軍とヴァルス軍が合流し、リミニ要塞手前のハンネス盆地に集結していると言う。リミニ要塞攻撃の報を受けての対策と思われた。恐らくは、リミニ要塞を攻撃しているロドリス軍の撃破を目論んでいるのだろう。
だが、ロンバルトを南下してリミニ要塞を目指しているリトリア軍が、国境の街ラウノへ到着している。であれば、せっかく勝手な真似をしてリトリア軍がリミニ要塞へ向かっているのだ。ヴァルス軍を叩いて欲しいところであるが、これはいささか都合が良いと言うものかもしれない。
こうして報告書があちこちから寄せられてくるポジションにいれば状況を把握することが出来るが、ヴァルス軍、リトリア軍共に、恐らくは双方の現在位置を把握してはいないだろう。
「ヴァルス軍に、リトリア軍をぶつけたいところですね。伝令を飛ばしましょうか」
しかし、万が一と言うこともある。そうユンカーに提案しながら、

報告書を読み進めていく。
　ナタリア・バート軍の方は、まだ戦いが始まってはいないようだ。予定より少々進行速度が遅いようである。
　だが、こちらの要塞には主力がいない。陥落にはそれほどの時間はかからないだろう。
　であれば、ラルド要塞陥落後にナタリア・バート軍をリミニ要塞に向かわせて合流させれば良い。ヴァルス軍がリミニ要塞付近に進軍していることを考えれば、予定外のリトリア軍の動きは案外効を奏するかもしれない。
　目を通し終えた報告書の束をテーブルに放り出し、セラフィは顔を上げた。
「リトリアの主力は、モナへ向かうようですよ」
「やはりですか」
「クラスフェルド王が直に率いていくようです」
　軽く肩を竦めるセラフィに、ユンカーは顔を歪めて盛大なため息をついた。
「とりあえずは、ヴァルスへの派兵を更に2万お約束戴きました。それに関しては一旦、ロンバルト王都へ向かわせましょう。要塞での戦況に応じて、どこへ投入すべきか考えれば良い」
「そうですか……。2万……」
　ため息の止まらないユンカーの気持ちはわからなくはない。
　この時点で本来ならばあと4万の派兵となるはずが、半分になってしまったのである。計算違いも良いところだが、グレンの報告書によればその2万さえも危うかったと見える。
「とりあえず、グレンがクラスフェルド王のそばに控えておりますゆえ」
　こちらもため息混じりになりながら、セラフィは椅子の背もたれにすとんと寄りかかった。
「これ以上、勝手な真似をさせるわけにはいかないですからね……」

◆◇◆

ヴィルデフラウ城を訪れたラミアは、レドリックの怒りを思い浮かべて嘆息しながら通路を進んでいた。レドリックの居館の方へ足を向けて衛兵に止められる。本日5度目の制止だった。辟易して足を止め、ロドリス軍将軍アレックスの証書を突きつける。

「良いだろう。通れ」

（我が物顔か……！！）

現在ヴィルデフラウ城は、ロドリスを中心とした連合軍の支配下にある。

そのことを考えれば当然のこととは言え、己が特権階級である国の王城でこの扱いは、いたく気分が悪い。

そもそも、ロンバルト王都ウォルムスの無血開城は、レドリックの協力あってのことである。連合軍にしてみれば鼻で笑うところではあるが、あくまでもラミアは『取引の上の協力体制である』と言うつもりでいた。

とは言え、口に出しては何も言わずにディモルフォセカの館へ足を踏み入れる。ヴァルスの宮廷魔術師の行方が依然として掴めないと言う報告をするのは気が重いが、沈黙を通すわけにはいかない。

下働きの人間にレドリックの在室を確認すると、応接室でレドリックを待つ。やがて現れたレドリックは、不機嫌を絵に描いたような顔をしており、ラミアの気を一層重くさせた。

「進歩のない報告なら聞きたくない」

「……申し訳ございません」

先に釘を刺されては、それ以上言葉がない。

ソファに体を投げ出すレドリックの前に跪き、深く頭を下げるラミアに、レドリックが浮かない声で言った。

「良い。座れ」

「しかし……」

顔を上げたラミアは、レドリックの疲弊したような顔色を見て、

思わず言葉を飲み込んだ。自分の立場を忘れて、レドリックを案じる言葉が飛び出す。
「どうなされたのです」
「何がだ？」
「顔色が優れません。どこか不調でもおありですか」
「いや？　……座れ」
再度促され、ラミアは素直に従った。レドリックと向かい合う形でソファに腰を下ろし、茶を運んできた下女が下がるとレドリックが改めて口を開いた。
「で、見つかっていないわけだな」
「はい。誠に申し開きの言葉がございません」
「ロドリスの網にも引っ掛かって来ない」
「……」
レドリックの言葉に、ラミアは目を見開いた。
「ロドリスの……？」
「ああ」
「では、ロドリスに……」
「言った」
ヴァルスの宮廷魔術師を逃したことをロドリスに告げれば、レドリックの立場は苦しくなるのではないだろうか。
そのことに気づいたラミアは、ますます頭が下がった。苦い思いでいっぱいになる。
と言って謝罪の言葉ばかりを繰り返していてもどうにもなるまい。そう思えば言葉を飲み込むしかなく、ラミアは己の勝手な判断による失敗を改めて悔やんだ。

第3部第1章第20話　tremor（2）

「ロドリスの連中も、ヴァルスの宮廷魔術師を追っている」
「さようでございますか……」
「連中にとっても、でかい獲物だろうからな。何も戦場でなくたって首を獲る価値がある。宮廷魔術師の戦力は、削っておくに限る。最大の武器である魔法を封じられている今なら、尚のことだ」
「しかしロドリスにも未だ見つけることが出来ていないのですね」
「ああ」
レドリックの顔色が悪いのは、そのせいなのだろうか。
そう考えて口を噤んでいると、レドリックは視線を空に彷徨わせてソファの肘掛に頬杖を付きながら考えるように眉根を寄せた。
「オアスンからも発見の報告は上がってきていない……」
オアスンと言うのはレドリックの実母の故郷である。彼はオアスンに行くのが好きだった。これまでにも度々足を運んでは、実母の遠縁ノルディック公爵家に滞在をして過ごしている。
オアスンはロンバルト東部に位置しており、エルファーラの方へ抜けてヴァルスへ向かうにはその付近を通過せざるを得ない。ゆえにレドリックは、懇意にしているノルディック公爵を動かして、ヴァルスの宮廷魔術師捜索に当てていた。
「ロドリスの網にも引っ掛からない……と来ると、『ヴァルスへ向かうはずだ』と言う前提こそが過ちかもしれんな」
ラミアに問うでもなく、独り言のように呟くレドリックに、ラミアは疑問の視線を投げかけた。
「ヴァルスへ向かわないとなると……」
「どこへ向かうかまでは知らねーよ。が、ウォーリッツからヴァルスへ行こうとすれば、ロンバルトを通過しないことは有り得ない。ロンバルトにこれだけ網を張っているのに引っ掛からないと言うことは、ロドリスに留まっているか……あるいは」

「あるいは？」
「北へ向かったか」
「北？」
オウム返しのラミアに視線を向けたレドリックは、小さく鼻を鳴らすが特には何も言わずに頷いた。悪態のひとつでも言いそうなものなのに静かなことが、却ってラミアの胸中の心配を煽る。
「どこへ、なんて聞くなよ。それは俺だって知らないさ。単に、南へ伸ばした捜索に引っ掛からないから、逆方向の北を疑っただけだ」
ない話ではない。
ラミアはシェインの小賢しい顔を思い浮かべながら、レドリックの言葉の意味を考えた。
ヴァルスの宮廷魔術師ならばヴァルスへ戻ろうとするだろう――そんな素直な解釈が、あの男に通用するかと言えば、疑問がないでもない。ヴァルスへの道が封鎖されることに気づかぬとは思えないし、北へ向かうのはこちらの裏をかいていると言える。
だが、裏をかく為だけにアテも目的もなくこの戦時中の今、放浪するとは考えにくい。どこへ向かっているにしても、目的地がどこかあるだろうと思うのだが……。
（――！？）
突如脳裏に走った考えに、ラミアは思わず立ち上がっていた。レドリックが驚いたように、ラミアを見上げる。
「どう……」
「エルレ・デルファル……」
「ラミア？」
ヴァルスの宮廷魔術師は、エルレ・デルファルの出身だ。
そのことに思い至ったラミアは、加速する鼓動に瞬きを止めたままでレドリックを見つめた。
「レドリック様。ヴァルスの宮廷魔術師の行方が、わかりました」
「何？」
「己の恥を雪ぐ機会を与えて下さい。既にロドリスに報告済みとの

ことならば、わたしが動いても今更不審に思われることはありません」
「そりゃそうだが……何だよ？」
「エルレ・デルファルです」
レドリックの視線が、無言で言葉の意味を問う。ラミアは意気込んで続けた。
「ヴァルスの宮廷魔術師は、リミッターで魔法を封じられています。そのリミッターを解除出来る人間を探しに、エルレ・デルファルに向かったのです」
それであれば、捜索の網に引っ掛からない理由も説明出来る。彼は、ロドリスにあるウォーリッツの館から脱出して、そのままロンバルトには向かっていないのだ。エルレ・デルファルのあるリトリア王国へ向かったに違いない。魔法さえ回復すれば、仮にも『天才』と名高い宮廷魔術師だ。たったひとりでも追撃の兵を撃破することが可能となるかもしれない。リミッターを解除してからヴァルスへ戻るつもりなのだと思えば納得もいこうと言うものだ。
ラミアの言葉を聞いて、考え深げに黙ったレドリックは、やがて静かに頷いた。
「良いだろう。今一度チャンスをやる。お前がリトリアに出向いて、ヴァルスの宮廷魔術師を殺して来い」
「ありがとうございます」
今度こそ、確実に息の根を止めてやる。もう、余計な期待は抱かない。
そう気を逸らせて、準備に取り掛かる為に退室しかけたラミアは、終始レドリックの元気がなかったことを思い出して振り返った。
「レドリック様」
「何だ？」
「何か、気掛かりなことがあるのならば、お伺い出来ませんでしょうか」
「……」

ラミアの言葉に、レドリックは一瞬きょとんと目を丸くした後、何か言いたげに僅かに口を動かした。
それから考え直すように口を閉ざし、顔を小さく横に振る。
「何でもない。気にするな」
「さようでございますか？」
「ああ。お前はヴァルスの宮廷魔術師を追うことに集中しろ。次は、良い報告を期待するぞ」
「は。かしこまりました」

ラミアが部屋を出て行くと、口をつけられずに残った向かいのカップをぼんやりと眺めながら、レドリックは同じ姿勢でぼんやりとした。
レドリックの頭を悩ませているのは、ロンバルト軍の再編成の件だった。
ロドリス将軍アレックスからは、執拗に要請を受けている。
苦悩に苦悩を重ね、現状ヴィルデフラウ城内で動かせるロンバルト貴族に相談を持ちかけはしたものの、やはり返って来た返事は渋いものだった。
ロンバルト軍を、対ヴァルス戦線に投じるのは、どうしたって至難の業なのだ。
とは言えこのままでは、レドリックの立場が次第に危ういものとなる。
どうすべきかの判断をつけることが出来ず、レドリックは連合軍とロンバルト貴族の間に挟まれ、苦悩から逃れることが出来ずにいた。
「失礼致します」
ぼんやりとしていると、ノックの音が響いた。声と共に現れたのは、レドリックの護衛と称した監視役のエレナだ。
「ああ……お前か」
「宮廷魔術師殿がお帰りになられたようですので。お話はお済みか

と」
「済んだ」
「では、少しお時間を戴けませんでしょうか」
黙ってエレナに視線を向ける。ロドリス王国近衛警備隊隊長は、無表情にレドリックを見返していた。その視線を黙って受けて、やがて口を開く。
「アレックスか」
「は」
「わかった」
また、ロンバルト軍再編成の件だ。
うんざりしながら立ち上がりかけたレドリックに、エレナが片手で軽く制した。
「殿下はお掛けになってお待ち下さいませ。そこに控えておりますゆえ、呼んで参ります」
やがてエレナに招じ入れられたアレックスは、レドリックの視線を顧みずにソファに断わりもなく腰を下ろすと、レドリックを睥睨するように目を細めた。エレナがレドリックのそばに、無言で控える。
「そろそろ色よい返事を伺いたく」
「何度も言っている。打診は何度か図ったが……」
「このままでは我々も、ロンバルトに対して実力行使をせねばならなくなりますな」
「……」
明らさまな脅しの言葉に、レドリックは顔色を失った。
これまでとは違い、ロンバルトに対して敗戦国としての処遇を施すことになると、アレックスはそう言っているのだ。
「どういう意味だ？」
掠れたレドリックの声に、アレックスは小気味良さそうに笑った。
「言葉の通りですよ。ロンバルトは敗戦国として、我々への戦力の供出を強制し、その公族には相応の責任を取って戴きます」

「間違えるなよ。俺はお前の傘下にいるわけじゃない。ロドリスと言う国と協力し合う立場に……」

「ロンバルトからこちらの望む協力が得られないのならば、こちらだけ助力するのも筋違いと言うものでしょう」

アレックスの言葉に、レドリックは歯軋りした。このままでは、やはりレドリックの立ち位置そのものが危うくなる。もはや言い逃れは出来そうにない。

そう判断しながら、レドリックは、尚も逡巡して言葉に詰まった。

「……わかった」

そして、迷いを振り払うように、言葉を絞り出した。

「わかった。……督戦隊を、編成しよう」

◆◇◆

ロドリス東部アンフェンデスまでは3日、そこから更にバートを越えてシェインとエディがリトリア王国に足を踏み入れるまでは、10日の時間を要した。

ソフィアの目指した街――シガーラント。

国境の警戒が厳しく、行商人の一団に紛れ込むなどの苦心をした為に過剰な時間を必要とし、シガーラントに到着した時には思わず肩の力が抜けた。

「問題は、フリッツァーとどう連絡を取るかだな。屋敷もわからんし、とりあえずは宿を決めて対策といこうか」

シガーラントの街は、明るい色のレンガを敷き詰めた整然とした道と、やはり同系色のレンガで統一された街並みだった。整然とした小奇麗な印象である。レンガや屋根の色調のせいか、明るい雰囲気に思えた。

通りは賑やかと言うほどではなく、思ったほど人通りが多くない。それが、どこかのんびりとした空気を醸し出している。過ごしやすそうな街に見えた。

「フリッツァーにしてみれば、私もそなたも得体の知れない人間だからな……」

「ソフィアが真実フリッツァーの娘だったならば、門前でソフィアの名前を出せば会うことくらいは出来ようが」

周囲の空気につられてのんびりと歩きながら、あっさりと言うシェインに、エディがきょとんと目を向ける。

「紹介状も何もなしにか」

「関係ないな。どういう経緯でか知らんが、自身がここへ封じられると同時に娘を養子に出している。そしてその娘が宮廷の陰謀の渦中に巻き込まれている。得体の知れない男が2人訪ねて来て、娘の名前を口に出せば興味は湧こう」

自分ならどうするかと考えてのことである。

シェインの実家クライスラー家は、名門だ。ヴァルス貴族で聞いたことがない人間はいない。

そのクライスラー家に得体の知れない何者かが正面玄関から訪ねて来たとして、果たしてどのような展開になるかを想定してみる。

まず、門兵に止められるだろう。そして誰何（すいか）と訪問理由を問い質される。

身元不確かとなれば追い返そうとするだろうが、その人物が意味ありげなことを口にすれば、門兵の権限で判断出来かねて上の者に伝達する。上の者は家の内部に詳しいから、それが身内に関することであれば、内部の人間に確認をする。

仮に、「キグナスの身にトラブルが降りかかっているゆえ取り急ぎ」とシェインの耳に届けば、それがどのような人物なのかを確認せざるを得まい。

問題は、その先だ。

「『警戒』と言う名の下であることを否定はせぬがな」

「護衛つきか」

「そうなろうな。だから問題は、フリッツァーに会う手段ではない。フリッツァーの所在を確かめることと、最大の問題は……」

「いかにしてこちらを信用させて話を引き出すか、か」
「ご名答。いずれにしても、この風体ではいささか体裁が良くないな。情報を集めるついでに、表面ヅラだけでも取り繕っておくとしようか」
「情報を集めると言ったって……どうする？」
やや気後れしたような様子のエディを振り返り、シェインはにやっと口元に笑みを浮かべた。
「情報が集まる場所と言えば、決まっている。――酒場だ」

服装を改めて宿を決め、日が落ちるのを待ってから街へ再び出る。昼間の間にも市場を回って情報収集を試みたが、成果の程は今ひとつだった。
食事がてら、まずは大衆食堂を兼ねていそうな大きな酒場へ足を伸ばす。
「いらっしゃいッ。空いてるトコに好きに座んなッ」
酒場と言うのはどこの街でも廃れない商売だ。レオノーラやギャヴァンほどではないが、この店もそれなりの繁盛を見せている。
テーブルについてオーダーをしながら、ソフィアはどのように過ごしているだろうと気になった。
エブロインの態度を見る限り、殺害されたり暴行を受けることはなさそうだと判断している。不自由は強いられようが、それなりの処遇が与えられるだろう。
ならば、食事なども適宜与えられるはずだ。
運ばれて来た野菜の串焼きや若鶏と芋のトマト煮込み、サラダや、バターを塗って焼いた薄パンとエール酒を眺め、胸が塞ぐような思いを飲み込む。
エディの言うように、シェインには別の選択肢が存在する。セルジュークへ向かい、しかるが後にヴァルスへ戻って戦陣復帰するのである。
だが、エディ――フレデリクを放り出して、ソフィアをこのまま

にしておくことは、出来ないように思われた。
「ここで、何をする？」
薄パンに手を伸ばしながら、エディが尋ねる。生まれ育ちが支配階級である上品なエディには、ここで何をどうするつもりなのかが想像出来ていないらしい。生まれはともかく育ちの悪い上流階級であるシェインは、半ば以上を空けたエール酒のグラスを置いて説明した。
「俺たちがやらなければならないことは、まず情報を集めることだな。俺たちは双方、この街について詳細な知識を持ち合わせてはいない。ゆえに、まずはこの街そのものの情報を得る必要がある。……情報は、どこにあるものだと思う？」
「どことは？」
「人が持っているものなのさ」
「ああ……」
「人間ひとりひとりが、複数の情報を持っている。複数の情報を持つ人間が集まる場所には、情報も数多と集まる。人のいないところには、情報は落ちていない」
「だから酒場か」
「昼間に行った市場も同様だ。それはわかるな」
手を伸ばしてトマト煮込みを薄パンに乗せるシェインの言葉に、エディは頷く。
「ところが、情報と言うのは、種類がある。剣について詳しく聞きたければ、果物屋に行っても話は聞けない。武器屋に足を運ぶだろう」
「ああ」
「俺たちが欲しい情報……フリッツァーの所在や人物について、情報を持っている人間がいる。だが俺たちには、そもそもその人物がどこにいるのかさえわからない」
「そうだな」
「ゆえにまずは、どこへ行けばフリッツァーの情報が得られるのか

を知る必要がある。雑多な情報が最も多いのは、市場や酒場、闘技場などの娯楽空間、そして、娼館だ」

「娼館……」

「男の情報は女が持っているものなのさ」

第3部第1章第20話　ｔｒｅｍｏｒ（3）

すぐにはフリッツァーの情報を得られると思ってはいない。ただ、この街の諸侯であるフリッツァーに関する噂話程度ならば、耳にすることが出来るかもしれない。

ともかくもまずは、周囲の人間の会話に耳を傾け、更に情報を引き出す相手を絞り込むことである。

幸いにしてエディはリトリア語を解するし、シェインにしてもヴァルスの高位官としてロドリス語、リトリア語はある程度習得している。ヴァルス語を含め、この店で飛び交う会話の9割は、理解することが出来るはずだった。

「周囲に気を配れ」

しばらくは、食事をしながら周囲に気を配ることに集中する。時折僅かな会話を交わしながら、2人の男は寡黙に食事を進めた。

酒場だから、主な会話は仕事や女の話である。客の主体が男なのだから、仕方がない。中には帝国継承戦争や各国の状況への風評や意見なども見られたが、現段階ではシガーラントの人間にとって大きな割合を占めるものではなさそうだった。

めざましい情報はありそうにはなかったが、その中でもいくつかわかったことはないでもない。

前提として、シガーラントはリトリア東南部ヴォルディノ地方最南の街にあたる。フリッツァーはヴォルディノ辺境伯として7年前に赴任してきた。エディの情報によれば、それは謀叛の懲罰として、王都から追われるような形である。

だが、そのつもりで耳を澄ませていると、いささか疑問が湧かないでもない。

聞く限り、シガーラントは情勢が落ち着いている豊かな街のように思える。人々の生活は、快適なようだ。街を歩いた感想としても、同様である。国境を含むヴォルディノ地方には、バートとの交易窓

口があるのだから無論のことだ。
加えて、辺境伯は通常、広大な領土を所有する。ヴォルディノ辺境伯シガーラント公フリッツァーもまた、例外ではなさそうだ。
果たして、封じられた諸侯に豊かな土地を与えるものだろうか。
余り多くはないが、会話から耳に聞くフリッツァーの風評も、上々と言えそうだった。フリッツァー以前の領主の評判が、どうやら余り良くなかったようだ。その差異からの加点もあろうが、少なくとも不満が溜り溜まっている様子ではない。
とは言え、このような場……横暴な領主であれば尚のこと、下手なことを言ってしょっ引かれても困ると言うことも考え得るし、酒の肴程度に過ぎないのだから鵜呑みにするわけにもいかないが、会話の合間に見え隠れする感触は悪くはない。
フリッツァーは、本当に反逆を試みてシガーラントに封じられたのだろうか。
まずはそんな疑問を胸に浮かべつつ、新しいエール酒のグラスを受け取ったシェインの耳に、不意に大きな声が飛び込んで来た。
「本当のことよッ。俺ぁ、４年前の馬術競技会で……」
「また始まったよ。ベルントの武勇伝ッ」
大きな笑い声につられて、目を向ける。
先ほど入れ替わりのあった少し先のテーブルで、既に酔っているらしい数人の男たちが大声で盛り上がっていた。
やはりつられたらしいエディも、きょとんと目を瞬いてそちらに顔を向けている。
「フリッツァー様にお誘いを受けたんだろう？」
「そうとも。……くぅ～。あの時受けていれば、俺は今頃……」
「変わらんよ。今頃立派な馬具屋さ」
茶々を入れるような声に、またテーブルが沸く。
注意して会話を拾うと、どうやら彼らは馬具を扱う組合のようなものらしい。恐らく寄り合いがあって、その流れで飲みに出たのだろう。

「……こいつかな」
粗方テーブルの皿を空にして、エール酒のグラスを軽く振りながらシェインが呟く。エディが無言でその意味を問うた。視線をちらりとモスグリーンの瞳に向けて、答える。
「第一段階さ」
テーブルの中でも一際がたいの良さそうなベルントと言う男は、4年前にフリッツァーが催した馬術競技会で優秀な成績を修め、その技量を評価したフリッツァーから表彰の際に雇用してやるとの誘いを受けたようだ。それに際して一度、フリッツァーの屋敷を訪問してもいるらしい。
馬を6頭も繋げた豪奢な造りの馬車が迎えに来ただの、フリッツァーの一族が直々に頭を下げただの、話はかなり誇張されている風情で細部については眉唾ものではあるが、フリッツァーに評価されたとのことについて疑惑の声も否定の意見も上がらないところを見ると、その点については真実なのだろうと思われる。
ならば、話をしてみる価値はある。
エール酒を舐めながら彼らの様子を窺っていたシェインは、ベルントの真後ろのテーブルが空いたことを見て取ると素早く立ち上がった。グラスを片手に移動すると、背中からベルントに呼びかける。
「ちょっといいか」
「あ？」
また大声で笑っていた彼らは、介入したシェインに一瞬きょとんとした沈黙を挟んだ。
「おぬしらは、馬具を扱う人間と見えるが、見当違いなら他をあたる」
「おおッ。わかるかい」
わかるも何も、先ほどまでの会話を聞いていればわからぬはずもないのだが、敢えて突っ込まずにシェインは破顔した。
「ちょうど良かった。俺はバートからリトリアに入ったばかりなのだが、持っていた馬具が壊れてな。代わりを探したいのだが、何せ

初めて訪れた街だ。良い馬具を扱う業者がいれば、教えてもらえるとありがたい」

「そんならウチをおいてないな」

「馬鹿を言え。ウチだろう」

酔いで陽気な彼らは、本気なのだか冗談なのだか、声高に名乗りを上げた。その様子に、思わずシェインも苦笑をする。

「そんなには必要ない。何だ。全員馬具商人か」

「そうとも」

「ならばついでだ。良い馬具の見分け方について、講釈してもらいたいな」

自分の得意分野について尋ねられれば、人は嬉しいものである。シェインの投げた肴に、テーブルの男たちは意気揚々と話し始めた。時折、冗談交じりに質問や反論を投げ掛けながら巧みに話題を広げていくシェインに、気づけば会話の主導権はほぼシェインの手中に収まっている。

ひとしきり彼らの満足いく話題を広げ、掘り下げ、話させて場に馴染むと、シェインは次の肴を投げ込んだ。

「……馬術も巧みなのだろう？」

ベルントと言う男の馬術競技会の話は、先ほどの様子を見る限りでは酒の場では定番のようだ。投げれば、シェインに語ることは間違いない。案の定、ベルントは鼻の穴を広げて誇らしげに口を開いた。

「もちろんのことだ」

ベルントは、仲間の揶揄や茶々を物ともせずに、新しい人物に自分の優秀さを語ることに熱中した。先ほど聞いていたより更に話が大きくなっている。そのことに思わず笑い出しながらベルントを煽り、満足を深めたところで、シェインは最後の肴を投げた。

「フリッツァーと言うのは、何者だ？」

「ここの、領主様だよ」

ベルントの向かいに座っているハーシーと名乗った白髪の男が答

えた。
「ほう。馬術競技会と言うのは、毎年恒例のイベントなのか」
「そうだよ。シガーラントは、昔からカラクティスと言う競技が盛んな街なんだ。馬上で槍を操りその腕を競う伝統競技で、シガーラントの人間は三度のメシよりカラクティスが好きなんだ。秋に、実りを感謝して行う祭りなのさ」
「だけど前の領主はその辺を全然わかってなくてね。数十年の間、馬術競技会は開催されなかった」
「それを復活したのが、今の領主様ってわけか」
なるほどな、と内心ひとりごちる。フリッツァーはどうやら、人心を掴む術を持っているらしい。統治するにあたって重要なのは、食料と娯楽である。人々は満足いくだけの食料があり、娯楽を与えられれば、統治者を褒め称える。
「人心を知る、さぞ立派な人物なのだろうな」
ベルントが大きく頷いた。
「ご立派な方さ。俺ぁ、もう、ここの領主がフリッツァー様に替わって本当に感謝してるんだよ」
「ではさぞ、リトリア国王の信頼も厚かろう」
「そりゃあそうさ。そうに決まっている」
では、なぜシガーラントに封じられたのだろう。
フリッツァーは、本当に反逆を目論んでいたのだろうか。
けれど、その解をここで得ることは出来ない。フリッツァーの人柄や街の評判、おおよその居住区域などを聞き出して満足することにしたシェインは、明日ベルントの店を訪問する約束をして席を立った。先ほどのテーブルから呆れたようにこちらを見ていたエディを視線で促して、店を出る。
次いで、彼らから聞き出した情報を元にいくつかの場所に足を運び、日付も変わろうと言う頃になってシェインは『華苑』と言う娼館の前で足を止めた。
エディが困惑したようにシェインを見返す。

「入る気か？」
「入らないのか？」
にやっと笑うシェインに、エディが軽く肩を竦める。
「私にはちょっと、向いていそうにないな。止しておくとしよう」
「楽しむことを勧めるが、ま、強要することでもない。じゃあ一度、ここで別れよう」
モナ公王を無理矢理娼館に連れ込むのも気が引けるので、あっさりと譲ったシェインは、エディに向けて片手を振った。
「朝までには宿に戻るさ。……おやすみ。エディ」

◆◇◆

「人を探していると言うのは、あなた方ですか」
シガーラントに到着してから4日目の夜。
食事をとって宿に戻ったシェインとエディに、背後からそう声をかけた人物がいた。
振り返ると、綺麗なシルバーグレイの髪を持つ上品な老人だ。身なりは良く、立ち居振る舞いも品がある。
その老人は、シェインたちが戻ってくるのを待っていたかのように宿の出入り口にあるソファから立ち上がった。それを見て、シェインは微かに目を細めた。
――撒いた種に、芽が出たようだ。
「そう言うあなたは、何者だ？」
尋ねながら、推測する。
シェインの狙い通りならば、フリッツァー・ウィルディンの使用人……恐らくは、執事クラスの人間。
「失礼致しました。私はヴィートと申します」
「俺はシェイン。こっちはエディだ」
答えたシェインに頷いて、ヴィートは改めて口を開いた。
「私の主人が、お伺いしたいことがあるそうです。お会い頂きたく、

勝手ながらお迎えに上がらせて頂いた次第でございます」

シガーラントでの最初の夜に、馬具商人であるベルントたちからフリッツァーについての一般的と言える情報をいくつか入手したシェインは、その後エディを連れて2軒酒場を回り、次いで賭博場へ、最後にシェインひとりで『華苑』という娼館に向かった。

ベルントたちから得た情報の中に、次の2点が含まれていた為である。

1点はまず、ウィルディン家の財政管理人の話だった。

ローレシア大陸には、セム人と言う人種が存在する。彼らは遥か昔には小さな国を築いていたが、侵略戦争によって国を失い、現在ではセム人だけの国家と言うものを持たない。

ゆえに、ヴァルスやロドリス、リトリアなど、ローレシア大陸の諸国に散らばって生活をしており、例えばリトリアに住むセム人あるいはセム人の血の混じっている人種をセム系リトリア人などと呼んだりする。

セム系人種は国を持たないが為に時代によっては迫害を受けたりもしたが、それとは裏腹に宮廷管財人や貴族の財政管理人などに登用されることが少なくない。

なぜなら彼らは極めて鋭敏な数学的能力を持っており、また、表立って財や金に固執することは恥ずべきことであるとされた時代に卑しい仕事と思われた金融業務は、かつて迫害を受けて職に付くことなど出来なかったセム系人種が唯一就くことが出来る職種であったからである。

現在では金融業務へのおかしな偏見もかなり払拭されているし、セム系人種が迫害を受けているようなこともない。

だが、その流れから現在も金融業に携わる人間にはセム系人種が多くいる。

ウィルディン家の財政管理人も、例に漏れず代々雇用されてきたセム系リトリア人の家系であるらしい。

シェインがそこに目を留めたのには、セム系人種の傾向と言うものがある。

他民族の国で肩身の狭い思いをしながら、時には理不尽としか言えない迫害を受けながら生きてきた彼らは、自国を持たないがゆえに逆に民族意識が非常に強い。同胞を家族のように大切にし、同じ国内で暮らす同胞とは身分や立場をおいて親密に交流する傾向がある。

セム系人種の交流の場としての専用の店も存在するくらいで、ウィルディン家の財政管理人も、居住地域付近のそういった専門店に足繁く通っていることに相違ない。

ウィルディン家付近のセム系人種の集う店を特定する為に向かったのが、次の酒場だった。その店の店員には、セム系リトリア人がひとりいると聞いたからだ。

彼女の話から店の場所を割り出してセム系人種の店に足を向けると、シェインはそこで種をひとつ撒いた。

ベルントの話に含まれていたもう1点は、ウィルディン家の子息のことである。

正確な家族構成などは、もちろんわからない。

だが、フリッツァーにはシルヴィオと言う20歳になる息子がおり、悪い人間ではないが、とにかく博打が好きで夜な夜な賭博場に姿を現すのだと言う。

その賭博場に足を運び、無論シルヴィオと言う人物の特定は出来なかったが、代わりに彼が度々訪れると言う娼館の情報を入手したと言うわけだ。

そうして向かった娼館『華苑』にて、シェインはもうひとつ、種を撒いてきた。

双方、撒いた種は同種である。

――自分たちの仲間である『ソフィア』と言う女性を探している。

山吹色の髪に栗色の瞳の、17歳の少女だ。

――この店で働いていると言う噂を聞いたのだが、知らないか。今

この場にいない人間にも、何人か尋ねてみてもらえないだろうか。
――俺は、シェイン。メインストリートに面した『橙の灯』という宿にいる。
ウィルディン家の財政管理人と子息の出入りする場所を特定して、噂を置いてきた。
いずれは彼らの耳にも届くだろう。彼らの耳に届けば、フリッツァーの耳にも報告が上がる。ソフィアがフリッツァーの娘ならば、フリッツァーはシェインたちのことを調べざるを得ない。
こちらからフリッツァーへの接触を図れば引き出せない話も、フリッツァーからこちらへ接触させれば引き出せる可能性がある――苦肉の策である。

「主人とは誰だ？」
恭しく頭を下げるヴィートに、シェインはそ知らぬ顔で尋ねた。
けれど、確信している。この数日間、こちらにばれぬように周囲をちょろちょろとする気配があった。恐らくは、こちらのことを事前に調べたつもりだろうが、生憎とこちらは互いの素性さえお互い明確に伝え合っていない仲である。調べられたことは、たかが知れているだろう。
「シガーラントの名門、ウィルディン家でございます」
「……何？」
その言葉に、絶句してみせる。エディはと言えば、完全にシェインに対応を任せきりで、無言で成り行きを見守っていた。シガーラントでの情報工作の過程において、舌先三寸はシェインに委ねる腹に落ち着いたらしい。
「招かれる覚えがないな。こっちはシガーラントに来たばかりの、通りすがりだ」
「人をお探しでおいででしょう」
「どうしてそれを知っている？」
ヴィートが柔らかく微笑む。

「私どもの街でございますから。お助けすることが出来るかもしれません。ですので、主人はあなた方にお会いすることをご希望しておられます」

「……承知した」

頷いてみせながら、シェインは内心、気を引き締めなおした。

ここで失敗をすれば、ソフィア奪還への糸が途切れる。

何としてでも、フリッツァーの協力と情報を引き出さねばならない。

第3部第1章第21話　邂逅（1）

ヴィートに導かれたのは、シガーラント郊外にある小じんまりとした建物だった。乗せられた馬車を降りて建物を見上げたシェインは、本邸ではないと判断した。

その割には、衛兵の数が異様に多い。通常からこうなのか、シェインたちへの警戒か。恐らくは、後者だろう。

フリッツァーにはとにかく、シェインたちが、ソフィアの身を真実案じているのだと言うことを理解してもらわなければならない。目的はウィルディン家への接触ではなく、ソフィアの無事にあるのだと言うことを。

案内された建物は、質の良い調度が適度に整えられていた。華美を好む人間ではなさそうだ。至るところに槍や防具が飾られていることを見て、そう言えばフリッツァーが剥奪された地位は元帥であったことを思い出した。フリッツァーは元々、軍人だ。

通された部屋には既に、白髪の男が待っていた。口に蓄えた髭も白く、皺の刻まれた顔は精悍で実直そうな雰囲気が漂っている。体躯はしっかりしており、シェインたちを見て立ち上がると身長も高いことが見て取れた。

彼が、フリッツァーだろう。

フリッツァーと思しき人物の背後には2人の若者が控え、更に、部屋の後方にも衛兵が2人立っている。

ここからが、最初の正念場だ。

ここをクリア出来なければ、何もわからぬリトリア国内でソフィアの奪還を図るのは荒唐無稽な計画となる。

「急にお呼び立てして、申し訳ない」

柔和な笑みを浮かべて出迎えるフリッツァーに、シェインは警戒の色を浮かべて足を止めた。まずは、フリッツァーにこちらの警戒を解く努力をして戴こう。ぐるりと部屋を見渡し、衛兵に目を留め

てから、フリッツァーを見返す。
「このようなところに呼ばれる心当たりがないゆえ、困惑していると言うのが正直なところなのだが」
フリッツァーは、並んで立ったシェインとエディを見比べて、頷いた。
「それはこれからお話させて戴くことだ。……何をしようと言うわけではない。そんなに、警戒をしないでもらえるか」
「警戒するなと言うのも無理な話さ……。初めて訪ねた街で、４頭引きの馬車に出迎えられてみれば、衛兵の守る立派な屋敷に招かれている。知らないうちにこの街の規律でも犯してしょっ引かれるのかと思っても仕方がないだろう？」
肩を竦めてみせるシェインに、フリッツァーは苦笑しながら部屋の中へと促した。
「何か心当たりでも？」
「さあ？　道中考えてみたが、浮かんだのは初日に娼館に向かったことくらいかな。風紀の網をかいくぐって行かなきゃいけなかったのかもしれない」
困惑顔のシェインにおかしそうに笑ってみせたフリッツァーは、改めて座るよう促しながら自己紹介をした。
「女を抱き、酒を飲むのは男の文化だ。法で規制することは出来ないさ。遅れたが、私はフリッツァー。シガーラントを治めるウィルディン家の頭主だ」
ようやくエディと並んで腰を落ち着けながら、シェインも名乗り返す。
「私は、シェイン。こっちはエドアードだ。偶然迷い込んだに過ぎない私たちにご用とはどういったことなのか、お伺いしたい」
姿勢を正して正面から切り込むシェインに、フリッツァーは笑いをしまい込んで頷いた。
「そこに控える……」
言って、ドアのそばに控えるヴィートを示す。

「ヴィートにも聞いたと思うが、あなた方が人を探しているとの話を聞いてね」
「人探しなんて数多とある話さ。いちいち手を貸していてはきりがないだろう？　……それとも、私たちの探し人に心当たりがあると思って正解なのかな」
フリッツァーは先ほどのシェインのように軽く肩を竦めてみせた。下女がテーブルにカップを置いて下がると、シェインを見据えて口を開く。
「力添えが出来るかもしれないと考えている。なぜなら、私の知る人物に同じ特徴を備えた人間がいるからだ。だが、それについて話すには、あなた方の正体が私には見えない。あなた方が何者で、なぜその人物を探しているのかを知りたい」
本題だ。
会話の主導権を、こちらに引き寄せなければならない。シェインは胸の内でフリッツァーを掴む為に必要な銛を選定した。
まず、ソフィアにとって、そしてフリッツァーにとって危険な人物ではないことを理解させなければならない。
次に、ソフィアが危機的状況に陥っている為に、自らが動く気になってもらわねばならない。
そしてそれは、シェインにとっては不本意ながらもリトリア国王の為になると言うことに気づかせる。……但し、フリッツァーが本当に反逆を試みた人間かどうかを、その前に判断する必要がある。
帝国がこのような状況でさえなければ、シェインの身元を明らかにするのが最も手っ取り早いのだ。身分のある人間には、身分が最大の保証書となるのだから。
けれどリトリアとヴァルスが相対する関係にある今、それは命取りになりかねない。モナ公王もまた同様である。
結論から言えば、シェインもエディも、その身分を明かせない。最大のネックは、そこだった。
「なぜ探しているかと言えば、命の恩人だからだ」

フリッツァーの胸中を探りながら、ともかくも口を開く。長い沈黙は不審を招く。適度にテンポを保って、フリッツァーの関心を引きつけなければならない。

「命の恩人？」

フリッツァーは、興味深そうに目を瞬いた。想定していた回答に当てはまらなければ、人は好奇心を刺激される。

シェインは短く頷いた。

「あなた方が探しているのは、１７歳の少女と伺った」

「ああ。ソフィアと言う女性だ。崖から転落して重傷を負った私を見つけ出して介抱してくれたのが、彼女だ」

そこまで言ってシェインは、隣で沈黙を保つエディを親指で指した。

「薄情な男ゆえに素通りしかけたエディを叱咤して背負わせたのが、彼女と言うわけだ。ソフィアがいなかったらエディは私を見捨て、私は野山で人知れず死んでただろうな」

やり玉に挙げられて、エディが苦笑する。それを見て、フリッツァーも誘われたように小さく笑んだ。

「では、あなた方が探しているソフィアと言う人物と先に出会ったのは、そちらのエドアード殿と言うことになるか」

「ああ。こちらは、私とは逆になるな。エディがソフィアを救ったと聞いている」

答えたシェインの言葉に、エディが軽く眉を上げた。

「そんな大袈裟な話ではない。追われているようだったので、匿ったに過ぎない」

「と言うわけだ」

「追われていた？」

エディの言葉に、フリッツァーが食いつく。

「その少女は、何者に追われていたのだ」

「リトリア貴族」

「……」

声を低めたシェインに、フリッツァーが押し黙る。
奇妙な沈黙が訪れた。
「なぜ」
「彼女はそのリトリア貴族に不都合なことを聞いてしまったらしいな」
「どのような？　追っていたリトリア貴族の名は」
エディの視線がシェインに向く。それに答えてシェインは、フリッツァーに向けて口を開いた。
「今の段階で話せることではない」
「……良いだろう」
安易にべらべらと話す人間だと思われることは、不利になる。情報の重さによって使い分けられる人間だと思わせることは、使える人物だと言う印象に繋がる。その為には、決然とした意思表示が必要だった。
短く拒絶するシェインに、フリッツァーは一旦矛先を収めることにしたようだ。素直に頷いて、質問を転換した。
「しかし探していると言うことは、現在共には行動していないとなるな。ソフィアと言う人物はどうされた？」
「行方が知れない」
短い、わかりきっていると言えば言えるシェインの回答に、フリッツァーがまたも押し黙る。
「どうして行方が知れない？」
「襲われた」
「その、リトリア貴族の何者かにか」
無言で頷くシェインに、フリッツァーは難しい顔で唸るようにため息をつく。こちら側に引き寄せるべく、シェインは尚も口を開いた。
「先も言ったように、私は、彼女に命を救われている。恩には報いなければならない。必ずだ。私は彼女に感謝をしている。攫われた彼女を助けなければ、道理が通らない。だから彼女の行方を探して

いる」
　嘘ではないが、敢えて繰り返したことには意味がある。
　改めて明言をして印象付けることで、一度持った信義を裏切らない誠実な人間であると思わせるのは、今後フリッツァーから協力を得るにあたって重要なことだった。
「攫われたのか？」
「ああ。攫われた後に、どこかへ売り飛ばされたのかもしれぬ」
「それが、娼館を訪れた理由か」
「若い女性が売り飛ばされる先といえば、決まっている」
　どうやら、芽が出たのは娼館の方に撒いた種らしい。フリッツァーの背後に無言で控えている若者のひとりが、もしかすると子息のシルヴィオなのかもしれなかった。
「シガーラントを訪ねて来た理由を尋ねても良いか」
　考えるような目つきで沈黙をしていたフリッツァーは、やがて新しい質問を口にした。
「彼女が、シガーラントへ行きたがっていたからさ」
「彼女が？」
「そう。彼女は、シガーラントに信頼出来る人物がいたらしい。だが……」
「だが？」
「それが誰なのか、私たちは知らされていない」
「……」
　こちらから提示出来る情報は、そこまでだ。
　シェインの方からフリッツァーに助力を要請すれば、そこに何らかの意図を勘繰られる。有力貴族とはそういうものだ。
　だから、シェインたちがソフィアとウィルディン家を結び付けてはいないと思い込ませる必要がある。最初からウィルディン家がシェインらの視野に入っていないと思わせれば、フリッツァーらに対する何らの意図がないと言う思考に結びつくはずだ。助力を自分から申し出るのであれば、受身であるこちらに何らかの意図があるは

ずもない。
　ゆえに、フリッツァーの方から接触させるように、仕向けた。
「襲撃してきた人物がどのような人物なのかも、私たちにはわからない。ソフィアの行方を探してはいるものの、手掛かりも何もない。だからとりあえずは、彼女が訪れたがっていた街へ足を向けたと言う次第だ。その過程で、彼女に似た人物の噂を聞けば、片っ端からあたっているわけさ」
「成果は」
「ないな」
「だろうな」
　初めて、僅かながら自身の意見らしきものを口にしたフリッツァーに、シェインは微かに片目を上げた。フリッツァーはやや険しい表情を浮かべ、テーブルに視線を固めている。
　打ち込んだ銛は、正確にフリッツァーの心に引っ掛かったらしい。こちらの話に、フリッツァーは興味をそそられている。
「だろうな、とは？」
「その前に、あなた方の身元を問うても良いか」
「……」
　来た、とシェインは内心緊張を高めた。身分が最大の保証書となると言うことは、裏を返せば身分を明かせない人間は警戒を煽る。これをどう乗り切るかが、最大の難所と言える。
「他国の貴族階級である、と言わせてもらおう」
　しかし、言えないものは言えない。と言って、弱い態度は不審を一層煽る。開き直った強い態度で臨むことに、シェインは腹を決めた。
　シェインの回答は、フリッツァーにとって納得のいかないものではなかったらしい。恐らくは、シェインとエディの態度を見て、その判断はつけていたと見える。民間人であったならば、領主の屋敷に突然招かれては、臆しておどおどとするのが普通だ。怯んだ様子のなかったことに、そしてフリッツァーに対して腰の引ける様子が

なかったことに、貴族階級の風格を見出していたのだろう。身分ある人間は、身分ある人間に慣れている。
「そうであろうな」
「だが、ご存知の通りの情勢だ」
「情勢とは？」
「帝国継承戦争さ」
「……」
「私やエディの出身国が、リトリア貴族であるあなたに何らかの先入観を植え付けないとは言えない。私とエディは貴族としてではなく個人として彼女の行方を追っている。しかし、あなたにとっては余計な思索を招く結果になり得る」
フリッツァーが警戒心を高めるのを感じる。その顔を真っ直ぐ見つめながら、弱気にならないことを自分に言い聞かせた。
自分たちはフリッツァーの助力など必要としていない、こちらの情報が欲しいのはフリッツァーの方だ――あくまで、そう思わせなければ。
「では、身元は言えないと？」
「言う必要を感じない。そしてそれを咎められる理由もない」
声に感情を含ませず淡々と語るシェインに、フリッツァーは押し黙ったままだ。シェインは軽く肩を竦めて見せた。
「そうだろう？　そちらから一方的に接触してきて、我々から個人的な背景を搾取するのは手荒に思える。俺たちも、そしてソフィアも、互いの出自を知らない。ソフィアのフルネームは耳にする機会があったが、それだけだ。家との付き合いではなく利害関係のない個人同士として共に行動をし、信じ、仲間として動いて来た。あなたが我々の出自と言う余分な情報に保証を求めるならば……」
「……」
「協力は辞退する。独力で、ソフィアを探す」
無言のままのフリッツァーに、シェインはソファから立ち上がった。

「エディ。行こう」
「待ちなさい」
性急なシェインの態度に、フリッツァーが制止の声を上げた。これで、現段階における力関係の分は、こちらにあると思わせることに成功したと言っても良いだろう。
シェインの話を聞いて恐らくソフィアの身を案じるフリッツァーは、シェインらの協力を得なくてはならないと感じている。実際のところ、フリッツァーの協力を得なくてはどうにもならないのはこちらの方なのだが。
飽くまでフリッツァーにおもねらない態度を貫くつもりで、シェインは無言で振り返った。フリッツァーが嘆息する。
「あなた方が探しているソフィアは、恐らくは、私の娘だ」
打ち込んだ銛が、獲物を釣り上げた。
そう感じながらも顔に出すことはせずに、シェインは訝しげな顔をして見せた。
「まさか」
「そう問い返す理由は何だ」
「彼女の姓は、ファルネーゼと聞いている」
「それには理由がある。……少し、歩み寄って話をしようじゃないか。掛けなさい」
促されて、シェインは再度ソファに腰を落ち着けた。
「ファルネーゼを名乗るソフィアが、ウィルディン家の娘だと言うその理由を教えて欲しい」
「それを話せば、父親が娘を案じるのは当然のものとしてあなた方を呼び立てた理由を納得してもらえるか」
「もちろん」

第3部第1章第21話　邂逅（2）

「ソフィアは、7年前にファルネーゼ家に養子に出した」
裏づけが取れた。
はっきりと断言したフリッツァーに、シェインはエディの話を脳裏に蘇らせた。
ソフィアは確かに、7年前、フリッツァー・ウィルディンの元からライナルト・ファルネーゼの元へ、養子として手渡されたのだ。
……なぜだ？
「ウィルディン家に娘は不要か」
「そうではない。それには政治的な理由がある。だがそれは、話すことではない」
やはり現状では深い話を引き出すのは、困難だ。シェインは頭を巡らせた。
ソフィアを攫ったエブロインは、ライナルト・ファルネーゼに助力するアルノルト・クレーフェの一派だ。
フリッツァー・ウィルディンの元からライナルトにソフィアが手渡された――このことには、政治的にどのような意味がある？
「だが、養子に出したとしても娘は娘だ。あなた方が探している人物が私の娘ならば、娘の身に起こったことが気にかかる。当然の父親心理だ」
「ではあなたも俺たちと同様にソフィアの身を真に案じる人物として、協力を期待出来ると思っても良いか」
ともかくも、協力を明言させることだ。
シェインの言葉に、一瞬言葉に詰まったフリッツァーは、やがて頷いた。
「……無論」
あとは、どれだけフリッツァーから情報を引き出せるかだ。
ことは恐らく、リトリア宮廷に深く絡んでいる。正体の知れない

シェインとエディに、フリッツァーがべらべらと口を割るとは考えにくい。と言って現在の持ち駒では、今ひとつ状況が読めない。
「アルノルトと言う人物を知らないか」
攻める方向を考えあぐねていると、それまで沈黙を保っていたエディが口を開いた。フリッツァーの視線が、その物静かな青年に向けられる。
「宮宰だ。ファルネーゼ家と懇意にしている。……それが？」
「だとすると、不思議な事象が起こっているのだが」
「不思議な事象？」
「ソフィアを攫ったリトリア貴族は、ソフィアいわく、アルノルトと言う人物の配下に当たる」
「……」
「不思議だろう。今の話によれば、現在の父親と懇意にしている人物に追われていることになる。それは、大きく言ってしまえば、現在の父親から逃げ出して、かつての父親を訪ねようとしていたと言うことになろう」
「……」
「そなたが確かにソフィアの父親だと言うのならば、彼女がシガーラントに訪れて会いたかった人物はそなたと言うことになるが、ソフィアが逃げ出したいほどの家に手渡したのがそなたならば果たして会いたいと思うかどうかと言う疑問が浮上しよう？」
フリッツァーは、エディの淡々とした意見に黙って耳を傾けていた。だが、次第にその顔が、僅かに歪む。
「だとすれば、ソフィアは、そなたが望んで引き渡したのではなく、引き離されたのだと考えられる。間違いだろうか」
自身の口から語らぬのであれば、こちらから解を示してその正誤を判断する。エディの意図するところは、そこらしい。シェインは口を噤んで、エディに場を譲ることにした。フリッツァーから答えはない。
解を待たずに、エディは続けた。

「となると、果たしてソフィアの身柄にどういった価値があるのかと言う点が気にかかる。ごく普通の貴族の娘であれば、彼女の価値は政略結婚へのコマにしかならぬだろう。そもそも、引き離すようにして養子に引き取る理由が不明瞭だ。そなたと何らかの力関係を結びたいのであれば、それこそ政略結婚を進める方がスムーズなのだから。ならば、彼らの目的はウィルディン家と政治的な縁を結ぶことではなく、ソフィアそのものに意味があると考えられる。しかも、あれほど執念深く追ってくるとなれば、その価値はかなり高い」

「……」

「ウィルディン家と政治関係を結ぶ以上の重さがある価値とは、何が考えられるのだろうな」

場の空気が、硬化していく。それは、エディの言葉が真実を突いていると言うことに他ならない。

ソフィアには、宮廷で派閥抗争をしている人間にとってウィルディン家――当時元帥の地位を持っていたフリッツァーと政治関係を結ぶよりも深い価値があるのだ。

「……この街の領主は、7年前に赴任して来たそうだ」

エディの後を引き取って、シェインが改めて口を開いた。

「ソフィアが養子に出されたのも、7年前。噂話で聞く限りでは、ここの領主は民の信頼が厚い。気紛れな民の信頼を集めることの出来るような実力ある諸侯が娘を奪われてシガーラントに移ってきたとなると……何か、策略の匂いがするな。考えられる筋書きとしては……」

一度、言葉を切る。

この先は、賭けだ。

筋書きの正誤によっては、この後衛兵に取り囲まれる可能性もないではない。

だが、この数日で得た……そして、こうして対面して見て取った人柄から判断するに、横暴な態度に出る人物ではないと読んで、シェインは続きを口にした。

「ソフィアに政治的価値を見出したファルネーゼ一派が、その身柄を押さえる為にあなたを策略に嵌めて地方へ追いやり、ソフィアの身柄を無理矢理引き取った。そういった手段を講じる人物であれば、何らかの良からぬ謀を目論んでいる可能性がある。それを知ったソフィアがファルネーゼの手から逃れ、あなたに救いを求めようとした。だが、辿り着ける前に、ファルネーゼの投げた網に引っ掛かった。それほどの彼女の政治的価値……さしずめ」

「……」

「王位の継承権を持っている、と言うのはどうかな」

「……お前たちは、何者だ？」

唸るようにフリッツァーが問うた。その言葉は、シェインの筋書きを肯定しているのと同じことだ。

確認した。――リトリア国王の庶子は、ソフィアだ。

「先ほども申し上げた通りだ。他国の貴族階級に過ぎないさ。……もしもそうだとすれば、大事になる」

ここまで状況を知って、今更そ知らぬふりは出来ぬはずだ。あと一歩で、フリッツァーを動く気にさせることが出来る。

「どういうことだ」

「決まっている。ソフィアは必死の思いであなたに助けを求めようとしたのだ。それは、彼女にとって状況がそれほど切羽詰っていると言うことを示している」

「……」

「リトリアに、火の手が上がろうとしているんだ」

◆◇◆

（かなり、厄介なことになったな……）

フリッツァーは、とりあえずシェインとエディに宿の提供を申し出た。

表面上としては知らせてくれたことへの礼と言うことになってい

るが、シェインらの正体が不透明であるがゆえに監視の意味も含むだろう。

だが、当面そんなことは大した問題ではない。ともかくもフリッツァーの懐に潜り込むことには成功した。第一段階はクリアしたと言える。

であれば、次の段階は決まっていた。

いかに、シェインとエディがフリッツァーの役に立つことが出来るかを知らしめるのである。有用な人物と判断されなければ、協力体制を強いることは難しい。

与えられた部屋のバルコニーに出て、ウィルディン家の庭園を眺めながら、シェインはため息をついた。夜風が、優しくシェインの髪を撫でて通り過ぎる。

……わかっている。ソフィアがしたかったことは、してやったのだ。フリッツァーは動き出す。ここで手を引いたところで、何ら咎め立てされる理由はない。エディが以前言ったように、セルジュークでリミッターの解除をしたら、ヴァルスへ帰れば良い。後は、リトリア国内の問題だ。

クラスフェルドが討たれようが討たれまいが、知ったことではない。いや、本音を言えば、討たれてしまえば良い。だが、いずれにしてもそれについてはシェインは手を触れるつもりはない。

だが。

（ソフィアを助け出すのだけは……）

自らの手でやらねば、気が済まない。

それが、正直なところだった。

こだわる理由は、フリッツァーに言った通りだ。元々彼女に救われた命、そして彼女の身柄と引き換えに拾った命――一方的に受け取るだけでは、自身が許さなかった。恩には報いなければならない、そう決まっている。

けれど、ソフィアを救おうと思えば、それは図らずしてリトリアの騒動に加担することに相違ない。なぜなら、ソフィアが騒動の原

点……リトリア国王の隠された庶子なのだから。

（本当に、とんでもない……）

今振り返れば、リトリア王国継承者とモナ公王が道中を共にし、ヴァルスの宮廷魔術師を拾ったと言う波乱含み極まりない事態だったのだ。当時はそこまで気がついていなかったとは言え、数奇過ぎる運命に頭を抱えたくなっても致し方ないと言うものであろう。

だが逆に言えば、これはとんでもないチャンスとも言える。

立ち回りによっては、帝国継承戦争に、大きな楔（くさび）を打ち込むことが出来る。

フリッツァーは取り急ぎ、セルジュークに人を派遣して状況を確認することになっていた。まずはファルネーゼ家、アルノルト・クレーフェ、そして宮廷官僚。

シガーラントは、リトリアの辺境に位置し、尚且つこの度の継承戦争での徴兵も請け負っていない。手持ちの情報は、フリッツァー自身が儚いものだった。

（どう売り込むかだな）

昼間であれば綺麗に整えられた庭が眺められるだろうに、今はざわざわと木々が枝葉を揺らす黒い影が見えるのみだ。僅かに浮かぶカンテラの灯りが、希望の兆しのように闇に柔らかく見え隠れする。

フリッツァーと対面して、未だ不可解な点は幾つかある。

だが、それを性急に引き出すことは少なくとも現状不可能だろう。追い追い、埋めることが出来れば良い。

とは言うものの、このままではその『追い追い』が掴めるかどうかが不安定なところでもあった。

シェインとエディは、現状、フリッツァーに売り込めるほどの何も持たない。

双方、剣の腕は大したことはないし、最大のセールスポイントになる魔法は封じられている。エディも戦略を練らせればその才を発揮するかもしれないが、そもそもそこまでの権限に辿り着けない。

リトリアでの人脈はない、強大な兵力を持ち合わせているわけでも

ない。
　使い勝手として考えられるのは……。
（捨て駒、か）
　リトリア宮廷に顔を知られていないこと、リトリア宮廷とのしがらみが何もないことは場合によっては利点にもなり得るが、宮廷と言う対象であるがゆえに人脈を全く持たない時点で入り込むことが出来ないとも言える。
　異国で大きな行動を起こそうとすると、不自由でならない。フリッツァーに対して、この先どのようにポジションを確保すべきか、解が浮かばない。
　半ば頭を抱えるように手摺りに両肘をつくシェインの耳に、隣の部屋の窓を開ける小さな音が届いた。顔を上げると、エディが顔を出すところだった。
「よう」
　微かに笑ってみせる。エディは目を丸くして、隣のバルコニーに降り立った。
「リトリアの夜は、過ごしやすいな」
「季節柄、尚更な。リトリアは通年、気候が穏やかだ」
「眠れないのか」
「……今後の行動方針を定めかねてる、と言うのが本音だ」
　エディから視線を背けて暗い庭園に顔を戻す。エディが無言でこちらを見つめる視線を、横顔に感じながら吐息を落とした。
「おぬしの言う通り、ソフィアにこだわる必要はなかろうな。少なくとも俺にはせねばならぬことがあり、行かねばならぬところがある。リトリアの情勢に深く関わりたくない気持ちもある」
「……ヴァルスの官僚だからか？」
　声を潜めたエディの言葉に、シェインは目を見開いて手摺りから体を跳ね起こした。
「なぜ……」
「途中で気がついた。そなたと同じ特徴を持つ宮廷魔術師が、ヴァ

ルスにいたことに」
　迂闊だった。
　エディは、その辺の民間人や地方貴族とは違う。
　会ったことはなくとも、シェインの能力は名高い。ロドリスの宮廷魔術師と同様に「赤い髪に赤い瞳の宮廷魔術師」として知っていてもおかしくはないし、更に言えばフレデリクはヴァルスと交戦する為にヴァルス宮廷についても調査をしているはずだ。ヴァルス宮廷には、フレデリクに買収されていた官僚がいたことでも窺い知れる。
　フレデリクとしての自覚がなくとも、エディはフレデリクの知識は所有しているのだから、気がつかぬ方がおかしい。
「そうか……」
　否定をすることに意味はない。
　そう判断して、シェインは短く肯定した。エディの表情に、詐称を責める色は見当たらない。
　夜気に、密やかな声は良く響く。エディを促して室内に戻ったシェインは、改めてエディの与えられた隣室へと向かった。相変わらずベッドの上に投げ出された書物に苦笑しながら、手近な椅子を横向きに引き寄せて腰を下ろす。
　ソファに掛けたエディが、バルコニーでの話を再開した。
「ヴァルス宮廷は、そなたの帰還を願っているのではないか」
「だろうな。いずれにしてもセルジュークに向かわなければならないことは確かだが、ソフィアをこのままにもしておけない。それは、個人的な感情でもあるし、ヴァルス官僚としてでもある」
「リトリア情勢に興味があるか」
「ここまで関わって、見届けないではいられないだろう。それに、この騒動でソフィアが命でも落とそうものなら、悔やんでも悔やみきれぬな。……だが」
「だが？」
「フリッツァーにどうすべきかが、今ひとつ読めていない」

親指を唇に押し付けて苦い表情で考え込むシェインに、エディが短い沈黙の後、口を開いた。
「行動を別にする必要があるだろう。とりあえずのところは」
「フリッツァーとか？」
「ああ。フリッツァーは、我々の身元を確認出来ないことに不安を覚えている。現時点で信頼関係を築くのが難しいのだから、ソフィアがいるだろう場所の特定が出来たら私たちは単独行動でそちらへ向かうべきだ。そなたはエルレ・デルファルへ立ち寄る必要もあろう」
「まあ、な」
「フリッツァーにはフリッツァーで、自身の考えに基づいてリトリア国王とソフィアを救う手立てを考え、行動してもらえば良い。元々、元帥と呼ばれる人間だ。馬鹿ではなかろう。足並みが合うはずがないのだから、合わせずに別行動を取り、しかるが後に必要に応じて再協力をすべきと思うが、どうだ？」
「再協力が成り立つかな……」
どこかで邂逅することは可能だろうか。
逡巡するシェインに、エディはあっさりと笑みを浮かべた。
「そなたは、『天才』と名高い宮廷魔術師だろう？」
「世間の風評と言う話ならば、否定はせぬよ」
「ならば、魔力を復活させれば、フリッツァーはそなたの戦力を認めざるを得まい」
なるほど……最大のセールスポイントが現在活かせないのだから、活かせるようになってから売り込めば良いと言うことか。
フリッツァーにしてみても、手元にわけのわからぬ人間がうろうろしているよりは、用事が済んだらさっさと退散してもらった方が心落ち着くと言うものかもしれない。
焦って協力体制を敷こうとしなくても、目指す場所が同じならば恐らくチャンスは再び巡ってくる。巡って来なければ、掴みに行くことも出来るだろう。

「そうだな……」

第3部第1章第21話　邂逅（3）

現時点ではまだ、シェインたちにフリッツァーの戦力までは必要ではない。

内乱が巻き起こったその渦中にソフィアがいる場合は必要ともなろうが、今の段階ではソフィアの居場所さえ特定出来ればシェインとエディだけで救出に向かうことも不可能事ではないのだ。

「フリッツァーの調査の戻りを待ってソフィアの居場所を掴んだら、フリッツァーの行動は彼に任せ、俺たちはセルジューク経由でソフィアを助けに行こう。そういうことで、良いか」

確認しながら、一抹の不審を捨てることは出来なかった。

そううまく、ことが運べば良いのだが。

翌日、シェインとエディはフリッツァーの屋敷を辞去すると、その足でそのまま王都セルジュークへの移動を開始することにした。

ソフィアの行方についてはまだフリッツァーの元に情報が戻っていない為、シェインたちも知ることが出来ない。

だが、このままぼうっと待っていても時間の無駄である。いずれにしてもセルジュークへ向かわねばならぬのだから、フリッツァーからの情報をセルジュークで受け取ることにして旅立つことに決めた。

「やはり俺たちが気になるらしい」

時折地図を確認しながら進む道中で、シェインは馬上から小声で隣のエディに呟いた。それを受けて、エディも笑う。

「致し方なかろう。彼は以前王都で謀略に嵌められているのだろうからな。今回も謀略ではないとは言い切れないさ」

「全くだな。振り切ってしまうとフリッツァーと距離が開くと思えば、むしろちゃんとついて来ているか確認したい気分になる」

フリッツァーの部下たちが、シェインたちの後を追跡して来てい

るのだ。
　シェインたちがセルジュークで何をするつもりなのか、一応理由は話してあるが、ともかくもこちらの動向を知っておきたいのだろう。
　ばれないようについて来ているつもりだろうが、生憎とシェインもエディも馬鹿ではない。
「だが、まあ……考えようによっては使い勝手があるかもしれぬな」
　フリッツァーの部下を後方に引き連れてシガーラントを出てから、セルジュークまでは馬で急いで４日だ。
　到着した懐かしい街並みに目を向けながら、とりあえずはエルレ・デルファルの方角へ向かう。街中で馬上にあるのは基本的には許可を受けた人間だけだから、馬を下りて引きながら路上を進んだ。
「エディは、セルジュークに来たことは？」
「あるみたいだな。覚えがある」
「ほう？　何をしに来たかは？」
　シェインの問いに、エディは路沿いの店に目を向けながら軽く肩を竦めた。
「それは聞かれても答えられ……」
　そこで言葉を途切れさせ、エディは顰め面で片手を額に当てた。
「……エルレ・デルファルか」
「え？」
「この道を通って、エルレ・デルファルへ向かったような気がするな」
「何……」
　言いかけて、気がついた。
　モナ軍に魔術師兵を導入したのはフレデリクなのだ。公位継承後はエルレ・デルファルで学ばせる費用を国庫から出す制度も作ったと聞いたことがあるし、調査の為に自ら足を運んだりしていたのかもしれない。
「だが、何をしにエルレ・デルファルになど向かったのだろうな…

…。私には魔法はこれぽっちも使えないのだが」

「さぁて。記憶を取り戻してみればわかることだろうがな」

答えながら、頭の中にエルレ・デルファルの恩師を幾人か思い浮かべてみる。エルレ・デルファルはリトリア王国にあるとは言え、全国から魔術師になる優秀な人材が集まる場所だ。戦争の際に、リトリアがエルレ・デルファルの学士などから徴兵を強制しては各国もたまらないので、かつて帝国内全土で協定を結んでいる。戦時にエルファーラが中立となりヴァルスを懇意にしないのと同様、リトリアもエルレ・デルファルに不当な圧力をかけることは出来ないとされているのである。

言わば、リトリア国内における中立地帯――それが、エルレ・デルファルだった。

元々は私学だったそれは、今では帝国アルトガーデンの国庫や内部各国の国庫から寄付金が多額に出ている。ゆえに、どこの国へも背くことの出来ない機関なのである。

「フリッツァーは、ソフィアの情報を掴んだのだろうか」

レンガの敷き詰められた大通りを歩きながら、エディが問うでもなく呟いた。

「そろそろ掴んではいるだろうさ。問題はそれをちゃんと俺たちに伝えてくれるかだが……」

元々フリッツァーは、セルジュークに住んでいた貴族である。こちらに屋敷も所有していれば、知人もいる。

エルレ・デルファルの事務長フォイヴォスとフリッツァーは共に兎狩りなどに度々足を運ぶほど懇意にしているとのことで、シェインの行き先がエルレ・デルファルと知ったフリッツァーはフォイヴォスに書簡を預けておくと言っていた。

フォイヴォスと言う人物をシェインは残念ながら知らないが、ともかくもフォイヴォスに会ってみるのが最もスムーズな流れとなるだろうか。

「とりあえずはエルレ・デルファルで事務長殿にお会いさせていた

……」

「シェイン！！」

エディに顔を向けて言いかけたシェインの言葉が、不意に遮られた。覚えのない男の声に目を瞬いて振り返ると、ローブを身につけた松葉色の髪の小柄な男がこちらへ向かって駆けて来るのが見えた。

その顔に見覚えがありつつ誰だか思い出せずに一瞬悩む。それから、学生時代の同級生の中に、その顔を見つけ出した。

「アーベル」

「ああ、覚えてくれてたんだね。良かった」

エルレ・デルファルにいた頃の学友だ。

シェインは、その傑出した能力と華やかな家柄から、嫉妬や羨望で敬遠されることが少なくなかった。ゆえに僅かな学友しか得ることが出来なかったが、アーベルは、特に親しかったことこそないものの嫌な思いをさせられたこともない。

おっとりした、穏やかな人物で、そこそこ優秀な成績の持ち主だったと記憶している。

「どうして……おぬしは、モナではなかったか」

「うん。だけど、卒業後にそのままエルレ・デルファルに残っているんだ」

「ああ……そうなのか」

「まだまだ下っ端研究員だけどね。座学の授業の準備などは、させてもらってるよ」

エルレ・デルファルで働く学士や研究員なども、概ね卒業生であることが多い。なるほど、アーベルは卒業してモナへは帰らずに、セルジュークに留まり続けていると言うことか。

しばらくぶりに見知った顔に出会ったことで思わずほっと相好を崩したシェインは、何となくアーベルと一緒に歩き出しながら口を開いた。

「リファルト教授はお元気でいらっしゃるか」

シェインの知る限り、最も優れていると思われる恩師だ。かなり

の高齢であったが、矍鑠（かくしゃく）とした老人で、唱える呪文に当時感嘆したものだ。

かつてリトリアの宮廷魔術師にと熱望されていたと言う彼ならば、ロンバルトの宮廷魔術師には劣ることはないだろう。

だが、アーベルの答えはシェインを失望させるに十分なものだった。

「リファルト教授は、今は退かれてね……」

「何？」

思わず足を止める。

エルレ・デルファルに勤める人間は、それこそ世界各国から集まっている。退陣してしまったのであれば自国へ帰ってしまう者も少なくないし、となると他の人物を当たらなければならなくなる。

驚いたシェインに、アーベルも足を止めながらぱたぱたと片手を振った。

「ああ。でも週に1～2日はいらっしゃるよ。名誉管理官として、教授を見回る職をなさってる」

その言葉に、ほっと肩の力を抜いた。

「今日は、いらっしゃるか」

「うーん。お休みだったんじゃないかなあ。リファルト管理官に会いに来たの？」

「まあ……」

無言で2人を見守っているエディと顔を見合わせて、シェインは曖昧に頷いた。その答えに、アーベルは少し考えてから首を傾げてシェインを見上げた。

「だったら、ご自宅を訪問された方が早いと思うよ。ここからそんなに遠くない」

そう言ってアーベルは、リファルトの邸宅の位置を口頭で説明した。シェインにとってもエルレ・デルファル周辺のセルジュークは既知の場所なのだから、理解をするのは早かった。

「そうか、助かった」

いずれにしても事務長に会わねばならぬから後ほどエルレ・デルファルへ向かうことにはなるが、魔力の回復は一刻でも早いに越したことはない。

「今から学園へ戻るのか」

「そう。僕は今日は、午後出勤なんだ」

「後で、改めてそちらにも訪問させてもらうさ」

事務長から、フリッツァーの書簡を受け取らなければならないのだから。

「本当に助かった。礼を言う」

笑顔で心からの礼を口にして頭を下げるシェインに、アーベルはやや照れ臭そうに笑って片手を振った。

「いるかどうかは、保証出来ないけどね」

◆◇◆

「来たか……」

セルジュークの郊外にあるレドリック私有の屋敷に身を落ち着けていたラミアは、シェインらしき人物がセルジュークに入ったとの報を受けて立ち上がった。

予想通り、ヴァルスの宮廷魔術師は、リミッターの解除の為にセルジュークへ訪れたらしい。

ならば行き先はエルレ・デルファル――今度こそ逃すものか。リミッターの解除が叶う前に、始末してくれる。

すぐさま、ロンバルトから伴ってきた私兵１０人を連れて屋敷から出る。リトリア王城には事前に馬の使用と多少の私兵を率いている旨の許可を済ませている。

（エルレ・デルファルで片付けられればな……ッ）

馬を走らせながら、ラミアは顔を歪めた。本当ならばエルレ・デルファルに人員を配置して待ち伏せし、そこで片付けてしまうのが最も早いのだ。

だが、中立地帯であるエルレ・デルファルを私兵で取り囲むわけにはいかないし、戦場になっているわけではない他国にそれほどの人員を率いてくることは警戒を煽る。断念せざるを得なかった。

監視としてひとりくらい放っておくことは出来るが、エルレ・デルファルの前で襲撃するわけにはいかない。であれば、シェインがエルレ・デルファルに入ったことを報告されても手遅れにしかならない。

妥協案としてセルジュークの各凱旋門に人員を配置して、シェインが街を訪問するのを待ったのである。

エルレ・デルファルは広大な敷地を所有するがゆえに、門が四方八方にある。だが、それらの門を使用して中に入れるのは教授や研究員、学生証を持つ在学中の人間など、現在エルレ・デルファルに関係している人間のみで、外部の人間が通過出来るのは正面の正門と決まっていた。卒業生もまた、例外ではない。

凱旋門からシェインがどこへ消えたとしても、エルレ・デルファルへ向かう以上最終的に辿り着くのはそこと決まっている。まだ門を通過したとの連絡もない。シェインが学園に辿り着く前に、人気のないどこかで片付けてしまう必要がある。

正門へ続く大きな道は真っ直ぐな一本道で、左右に植林された美しい遊歩道だ。

だが、ここは人目につくし、ここへ来るまでに辿る道筋はいくつか考えられる。

念の為、遊歩道付近に４人の私兵を残し、後の６人を連れたラミアは、凱旋門に配置していた情報員からの報告を元にシェインが辿るだろう道にあたりをつけた。一度そちらの方角へ向かったのならば、相当歪んだ精神の持ち主でない限り、こちらの道から姿を現すはずだ。

そう判断して、馬を進める。ばったり遭遇してしまっては処置に困るから、周囲を警戒しながら辺りを探っていたラミアは、前方の道にその姿を見つけて目を見開いた。

服装こそ変わっているものの、間違いない。――ヴァルスの宮廷魔術師だ。

シェインは、隣に並ぶ男性に向かって何かを言いながら、左手に折れる道を示していた。それぞれ馬を率いてはいるが、馬上にはない。

（見つけたぞ……！！）

シェインの姿を見つけて加速する鼓動に、微かに体が緊張で震えた。

まるで恋をする乙女のようだ。狙っているのがその心ではなく、命である点を除けば。

今度こそ、レドリックの為にもその首を獲ってくれる……！！

人目につかぬタイミングを狙って動きを止めるラミアの前で、シェインの姿が角を曲がった。遊歩道にも私兵は残してあるのだし、大丈夫なはずだ。連れの男がどれほどの腕前なのかは知らぬが、たかだか2人……こちらの人数に適うはずもない。逃しはしない。

シェインを追って角を曲がる。何も知らぬシェインたちは、緩やかにカーブを描くその道をゆっくりと進んでいた。まだ、人目がある。騒ぎにはなりたくない。

この道は住宅を通る道で途中に住宅の間を縫う分岐が幾つかあるとは言え、エルレ・デルファルへ続く遊歩道に出るには真っ直ぐだ。そちらへ向かうことは疑いないのだから、下手に見つかることのないよう多少の距離を置いて後を追いながら、ラミアはタイミングを計っていた。

狙うなら、遊歩道へ入るその寸前……そこでこの道は一度、左右の住宅が途切れ、短い林に入る。

「……！？」

そう計算しながら、緩やかなカーブに一度姿を消したシェインたちの姿が再び前方に現れることを予想して馬を進めたラミアは、不審を感じて速度を上げた。

距離を縮めれば見えるはずの彼らの背中が、見当たらない。

（何……！？）

しまった、気づかれたか……！？

そのことを理解して、ラミアは馬を走らせた。だがやはり、道の先には誰の姿も見えなかった。

視界から消えた一瞬の間に、どこかの角へ曲がったのかもしれない。だがいずれにしても、この辺りにいることに相違はないのだ。

「くそッ、探せッ……」

ヒュンッ……！！

馬の速度を落として、付き従う私兵に怒鳴りかけたラミアの頬を、背後から一瞬何かが掠めて飛んでいく気配がした。掠めた何かが、ラミアの頬に一筋の赤い血を滲ませる。

目を見開き、思わず動きが固まった。

ラミアの頬を掠めたものは、矢ではない。ダガーでもない。――目に見えぬもの。

（まさか……！！）

その意味を理解したラミアは、咄嗟に背後を振り返った。その視界の中で、背後に控えていたはずの私兵たちが、血を噴き上げながら呻きと共に落馬していく。

「久しいな……」

道の先にあるは、ヴァルスの宮廷魔術師。

人目がないのを良いことに、その姿は馬上にあった。ラミアの追跡を知って道を逸れ、回って背後に現れたらしい。

馬を気遣ってか、シェインからやや離れた路上に、風が渦巻いているのが目に見える。自然に巻き起こったものではないことは、目に見て明らかだった。

（馬鹿な……）

エルレ・デルファルの門は、まだくぐっていないはずなのに。

「会いたかったぞ。まるでおぬしに恋焦がれている気分だな」

低く言う声に滲む、酷薄な笑み。迸って香り立つ、壮絶なまでの怒り。

威圧されて言葉のないラミアに、ヴァルスの宮廷魔術師が低く続ける。その片腕が、軽く、動く。

「俺が味わった苦渋の味……おぬしにも、味わわせてやろう」

薄く笑ったシェインの笑みに、ラミアの背筋が凍りついた。

第3部第1章第22話　鎖（1）

自国、と言うものがどれほど過ごしやすいところなのかを、立て続けに痛感する羽目になっている。

素性を伏せて敵国に身を置いているだけでも不自由でならないのに、この上、捕虜となり得る人間の身柄を押さえてしまったとくれば、己の手柄の重さに涙が出ようと言うものだ。

魔力さえ復活してしまえば、そして油断をしていなければ、ラミアはシェインの敵ではなかった。加えて言えば、今回不意を突かれたのはラミアの方である。負ける余地がない。ラミアが「まさか」と思っている間に叩き潰すのは、それほど困難なことではなかった。

ともかくも、エディに戦闘不能となったラミアの身柄を預け、エルレ・デルファルにてフリッツァーからの書簡を受け取ったシェインは、ひとまず『眠りの魔法』でフリッツァーの尾行を置き去りにすると、セルジューク郊外の公園へ足を向けた。水辺の木陰で馬を休ませながら一息入れる風を装って、対策に頭を悩ませる。

戦闘能力を回復したシェインの最初の餌食となったラミアは、現在意識不明の状態で、端から見れば眠っているのと大差なかろう。無論、リファルト管理官に解除してもらったリミッターは、現在ラミアの魔力を封じている。

「なぜ生かした？」

怪しまれぬ程度に人目を避けた場所を見つけて落ち着くと、エディが芝に横たえられたラミアを見下ろした。シェインの魔法を封じた本人だと言うことは、ここに辿り着く前に告げてある。

水に口をつける馬に目を細めながら、シェインはどさりと地面に腰を下ろした。

「雑魚ならばともかく、こいつに関してはあそこで遺体を捨て置くわけにはいかぬゆえな」

仮にも一国の宮廷魔術師である。さすがに問題が巻き起ころう。

ラミア配下の者に関しては、引き受けていられない。リトリア当局には、暴漢に襲われたとでも何とでも処理して戴く他ない。

「そういう身上の人間か」

「まあな」

「だが、どうする？　足手まといこの上ない」

「まったくだな」

「この際、フリッツァーの部下に押しつけてはどうだ？」

「そうしたいのはやまやまだがな……」

ラミアがこのまま意識不明ならば、それも良かろう。

だが、殺してしまうわけにはいかなかったからかなりの手加減をしている為、目覚めは恐らく早いだろう。仮に『沈黙の魔法』をかけたとて、永久と言うわけにはいかない。

ラミアの身柄をフリッツァーに押しつければシェインの素性がばれることは明白であり、ラミアは捕虜として裁かれることも押さえておくことも出来なくなる。

フリッツァーにシェインの素性がばれるのは、好ましくなかった。ヴァルス貴族、それも宮廷魔術師と知られれば、味方につけるはずのフリッツァーが強敵とさえなる。

理想的なのはもちろん、ヴァルス軍に預けることではあるのだが……。

そう考えて、ちらりとエディを見上げた。

この際譲歩をして、モナ軍でも良い。

そこでシェインの思考は、『もうひとつの問題』に僅かにスライドした。悩みの要因である記憶喪失男は、無理矢理一株の草場から草を食む2頭の馬に呆れたような視線を注いでいる。

エディに己の素性を告げるタイミング及びその告げ方――これは、政治的な作用が生じる。無計画と言うわけにはいかない。フレデリクを掲げてモナに再び反旗を翻させるわけにはいかないのだ。エディをヴァルスに引き寄せてから、あるいは引き寄せられる見込みを掴んでから取りかからなければならない。そして、予見しないとこ

ろからいきなり暴露されてもまた、困る。
どちらを向いても頭が痛い。
「何にしても、宿を押さえよう」
意識不明の女性を連れてうろうろしては目立って仕方がないし、動きにくい。仮の足場を作る必要がある。
「数日はここで情報を集める必要があるだろうな」
まだ未開封のフリッツァーの書簡を指先で軽く弾きながら言うと、エディも首肯した。
「書簡の裏を取るか」
話が早くて助かる。
「ま、『裏』と言うほどのことは期待出来ないだろうが……。ともかくも人目につかぬところで内容を改めてからになるな」
それと同時に、ラミアの身柄をどう処置するかも考えねばならない。現状でどこかに預けることは考えにくいから、目立たぬように連れて移動する手段を講じることが必要である。
更に言えば、フリッツァーの配下の者にラミアが何者か興味を抱かれることは避けたかった。シェインたちが、自分たちを襲撃した人間を連れて歩いているとなれば興味を抱くだろうことは想像に難くないし、ラミアの身元が割れれば「それに襲撃を受けるシェインもしくはエディは何者なのか」と言う興味をまた煽ることになる。
だからこそ甘んじていた尾行を撒くことにしたのだし、この先も出来ればついてきて戴きたくはない。
シェインの戦闘能力の一端を見せ付ける良い機会になったのだから、その報告を携えてシガーラントへお帰り戴きたいものである。
（何とかラウバルに連絡が取れぬかな……）
結局のところ、シェインの頭を最も悩ませているのはそこだった。
通常、通信は書簡をもって行われる。人が携えて馬や足、もしくは船によって各地に設置されている伝令所を介して運ばれるのである。重要な密書などは、ひとりの使者が携えていくこともあれば、訓練された伝書鳩を使うこともあるが、いずれにしても公的な機関

を使用出来る立場にいなければ出来るものではない。加えて、日数を必要とし、危険を伴う所業である。

身分を使うことの出来ない環境下、国境を越えて通信を行うことは容易ではない。敵国とくれば尚のことだった。

リトリアにいる利点としては、シェインにとってヴァルスやエルファーラを除く他国では最も王都に知人がいると言う部分と、ヴァルス配下のモナと隣接している点である。

だが、そうは言っても知人の数など儚いものだし、在学中には多かった滞在者も卒業と同時にどこへ行ってしまったか知れたものではない。モナとて、リトリアからすれば『獲物』なのだから、容易に通信を行えるはずもない。

「ちょっと、手近な宿を探して来よう。エディ、悪いがそのご婦人を見張っていてくれ」

「わかった」

苦悩したまま、ともかくも宿を見つけるべく公園から抜ける。せっかく撒いたフリッツァーの配下に遭遇せぬよう気をつけながら、尚もラミアの処遇とラウバルへの連絡手段に思い悩むシェインへの回答は、思いがけず、セルジュークの雑踏の中にあった。

セルジュークの街は、メインストリートに沿って走る路地裏にまで所狭しと露店が溢れ、幅の狭い道などはひどく混雑する。人に当たらぬように歩きながら、露店と露店の間のスペースに一風変わった人影が座り込んでいるのが目に留まった。

薄汚い茣蓙(ござ)を地面に敷いて、鳥かごを2つ置いている。中には2羽ずつ、計4羽の鳥が、止まり木で羽根を休めていた。

くすんだ松葉色の外套に身を包んで座る小柄な姿。恐らくは少年……いや、エルフ？

「『書簡屋』とは、何だ？」

足を止めて声をかけると、少年は顔を上げた。ずれた外套のフードから覗く耳は、精霊族の特徴を備えている。繊細で秀麗な顔つき、華奢な細い体。間違いなくエルフの子供だった。

シェインの言葉に、少年は鳥かごの前に置いた手描きの張り紙をちらりと見た。それから、白い歯を見せてにっと人懐こい笑みを浮かべる。
「『書簡屋』さ」
「初めて聞く商売だな」
「みんな、頭が固いんだよ。……何？　運んで欲しい書簡でもあるの」
「『書簡屋』の内容によりけりだ。書簡を運ぶ仕事を請け負っていると、そういうことで良いか」
どの程度信頼性のある手段が確立されているのか。依頼するかしないかは、その程度による。
前に片膝をついてしゃがみ込んだシェインに、少年はもう一度白い歯を覗かせた。
「僕は、シーレィ。見ての通りの精霊使いさ。エルフが使役を最も得意とする精霊は、何か知っている？」
「風の精霊だろう。……シルフを使うのか？」
シルフには、人間界の物を運ぶような能力はなかったはずだ。人間の無知を知っての詐欺商法だろうか。
一瞬そう考えて訝しげに眉を顰めるシェインに構わず、シーレィは鳥かごを指した。
「そう。ところで、こっちの鳥は知っている？」
尋ねられて向けた視線の先では、手の平サイズの柑子色の鳥が、つぶらな瞳を瞬いてこちらを見返していた。可愛らしく小首を傾げては、小さく啼く。
「……いや。何だ？」
「これは、雲啼（クロム）と言う鳥だよ。ローレシアではリトリア北部にしか棲息してない」
「ほう」
「雲啼はね、シルフの支配を非常に良く受けるんだ」
「……」

にやっと笑うシーレィに、意図するところが読めた。
要するに伝書鳩……但し、帰巣本能を利用するわけではないから、到達地点を伝書鳩ほどに選ばない通信手段だと言うわけだ。
とは言え、鳩より更に小型の生き物ゆえ、運ばせられる書簡はメモ程度……必要最小限に限られる。長距離にも耐えることが出来ないのではないだろうか。
「おぬしの指令を受けたシルフに支配させた雲啼で、書簡を思い通りの場所に運ばせると……こういうことで良いか」
「ご名答♪」
罪のない顔で笑うシーレィに、シェインは思わず呆れた。
精霊魔法を使って便利屋を営み、人間界で商売をしようとは困ったエルフもいたものだ。
「禁忌ではないのか？」
「禁忌ってのは、見つかるから禁忌になるのさ。見つからなければ、禁忌になりようもない。……で？　どうするの？　運ぶの？　運ばないの？」
早速交渉に入ってくるシーレィに、シェインは両眉をひょこんと上げてから、考えを巡らせた。
もしもそれが事実ならば頼みたいのはもちろんのことだが、確認すべき点がいくつかある。
「どの程度の距離まで請け負うことが出来る？」
詳細を聞いても、そもそもヴァルスにまで運べぬようでは検討する余地がない。
最も肝心なことを尋ねると、シーレィは「ふふん」とやや小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。
「ローレシア大陸なら、全土に渡って。ラグフォレスト大陸も、配達範囲だ」
「何？　事実か？」
「この雲啼って鳥はね、渡り鳥なのさ。夏になるとリトリアに渡ってきて、冬になるとラグフォレストへ行く。その程度の飛距離は、

何でもない」
ならば検討の余地はある。
口を開きかけたシェインに、シーレィは「だけど条件がある」と付け足した。言葉を飲み込んで、問い返す。
「条件？」
「個人宅や、特定の人間に直接渡すようなことは出来ない。わかるね？　僕が知らない人の元へは、シルフを操ることは出来ないんだ」
「……」
それは、痛い。
「ではそもそもどうやって受け渡しをするシステムなんだ？」
「僕の把握出来る大きな建物、店、公共施設に託して、そこから個人の手に渡すようにすることだね。例えば神殿の司祭に送るのならば、神殿へ送って、雲啼の書簡を受け取った人物から司祭へ手渡されるようなさ」
「……」
シーレィの言葉に、シェインはしばし考え込んだ。もしもシーレィに依頼するのであれば、書簡の内容はそもそも暗号文とせざるを得ない。ならば、ある程度信頼出来る人物あるいは施設へ向けて送って、しかるが後にラウバルに辿り着くようにすることは出来ようが……。
「おぬしが把握している施設となると、かなり限られるのではないか？」
「舐めてもらっちゃ困る。これでもこの仕事を始める前から、広くあちこちには行っているんだ。仕事を始めることにしてからは、各地の地図や絵、資料なども作ってる。小さな町や村はその限りじゃないことは認めるけど、主要都市と言える大きなところの主要施設は、大体押さえてるはずだよ」
「……わかった。それについてはまた後で確認することにしよう」
一応、商売人としてプロのプライドはあるらしい。
だが、どこにどのように送って誰を経由するかを、こちらで手落

ちのないように考案しなければならない。
　レオノーラは無論ヴァルスを代表する大都市だから問題ないだろうが、まさかシャインカルクと言うわけにはいかない。王城関係者だと自白しているようなものである。
「日数は、どのくらい必要とする？」
「到着するにはほとんど必要ない。相手の都合にもよるかもしれないけど、長くたって２日で十分さ」
「上等だな」
「じゃあ、早速だけど……」
　シェインを客と定めたらしいシーレィが交渉を始めようとするのを、シェインは片手を挙げて制止した。
「待て。確認するが、これまでの実績はあるのだろうな」
「もちろん。……あ、証拠を出せとか言い出さないでよ。そんなもん、あるわけがないんだ。わかるよね？　こういう商売なんだから、どういう書簡を運んでるのかってことくらいさ。履歴や証拠を置いておくわけにはいかないんだ」
　矢継ぎ早に弁明するシーレィに苦笑しつつ、頷く。実績があるにせよないにせよ、物証があるはずはない。
「だけど、成功率は１００件運べば１００件ってところさ。顧客満足、みんなにこにこ。にこにこ印のシルフ配達だよ」
　１００件と言うのは、かなりの誇張だろう。こんな胡散臭い書簡屋に依頼をする人間が、そう数多といるはずがない。然るべき筋から運べるのであれば、その方が安全率が跳ね上がる。
「どうやってそれを確認する？」
「確認？」
「俺がおぬしに依頼をしたとしよう。俺の届け先に確実に届いたと言うことを、俺にどのように証明する？」
　シーレィは、やや嫌な顔をした。
「細かいな」
「当たり前だ。わけのわからぬところに届いては困る。そうでなく

とも、おぬしが何者かに買収されて預けた書簡を横流ししないとは限らない」
「疑い深いと女にもてないよ」
「余計なお世話だ。生憎と困っていない。どうやって俺に確認させる？」
「相手に返信をさせれば良いじゃないか」
「良かろう。返信まで受け取ってから代金を支払うわけだな」
至極当然のように言ったシェインに、シーレィは更に嫌な顔をした。それから指を2本、立てる。
「前金で2千ギル」
「馬鹿を言え。前金で5百ギル払ってやる」
「ふざけんなよ。千ギル」
「7百ギル」
「千ギル！！」
「8百ギル。後金で、2千2百ギル」
「……成立」
半ば渋々、と言った風情ではあったが、後金の2千2百ギルが効いたらしい。頷くシーレィに、シェインはにやっと笑って鳥かごを示した。
「安全を期して、2羽、使ってもらおうか」
「じゃあ倍で合計6千……」
「追加料金としてプラス千ギル、後金だな」
反論を許さないシェインの姿勢に、シーレィががくーっと項垂れた。
だが、やはりなかなか客はつかないのだろう。どこからどう見ても不満顔全開で、頷く。
「汚ねぇなぁ」
「汚いのはそちらだろう。どうせ元手はゼロだろうが。計4千ギル手に入ると思えば、良い商売だろう？」
「シルフを遠くまで飛ばすのは疲れるんだぞ……。で、どこまで？

配達条件はさっき言った通りだよ」
「ヴァルス。レオノーラならば問題あるまい」
「問題ないよ。レオノーラはね……結構詳しいんだ、僕。浄化の森があるでしょう？　エルフの国から最初に出たのがヴァルスだったからね。……えぇと、で、レオノーラのどこ？」
短い沈黙を挟んで、手順と書簡の内容を考える。
「王立図書館を知っているか」
「もちろん。ラテルナ通りだね。王立図書館へ運ぶの？」
「いや。その通りの一本裏を行くと、賭博場がある。そこは？」

第3部第1章第22話　鎖（2）

「知ってる」
「ならば話が早い。目的地は賭博場の裏にある店だ。そういう指定は、出来るか」
「うん。いいよ。裏ね、裏……」
ごそごそと手描きの地図を取り出したシーリィは、視線を落とすと口を噤んで顔を上げる。
僅かな笑みを口元に浮かべて、シェインはシーリィに告げた。
「そこで働く女性に、恋文を送って欲しいのさ」

◆　◇　◆

シーレィの伝令を使ってラウバルからの返信を受け取るまでには、5日かかった。間に複数の人間を挟んだがゆえに、これは致し方ないことだろう。
そうは言っても通常の連絡手段から考えれば、これは驚異的な早さだし、意外なほど信頼性があると見てシーレィに素直に感謝をしたシェインは、後金はもちろんのこと、謝礼として約束より更に千ギル多く支払った。もしもまたどこかで頼むようなことがないとも限らぬから、こういう場合は気前良く振る舞っておく方が良いのだ。
（ヴァルスに戻ったら、ミオにも礼をせねばな……）
ラウバルからの直筆の返信であることを確かめて宿へ戻りながら、内心ひとりごちる。
今回の件で、大きな功労者は、レオノーラの娼婦であるミオだった。
シーレィから放つ書簡の宛先を、シェインはまずレオノーラの娼館『春霞の館』にした。宛先はミオ、差出人はシェインの名である。シェインがミオを懇意にしていることは周知のことであるから、こ

こは問題なくいくだろうと予想された。
娼婦の中には、文字は書けずとも簡単になら読める者も少なくはない。ミオもまた、然りだった。ミオに文字を教えたのは、他ならぬシェイン自身だ。
問題は、ミオがシェインの意図を酌んでくれるかどうかである。
シェインがミオに宛てた書簡の内容は、次のようなものだ。

旅先のセルジュークにて、ヴァッセンベルグの園に咲く棘のある珍しい花を見つけた。棘を封じて君に贈りたい。
君がいつも、口にしていた聖歌が胸によぎる。４日後には帰る。

２．１３．１２．２４　１．１８　６．２０２．１１．１５４．３８．８　１．２０　３．１５－１９６．４－１２

ミオ。
俺がいない間、変わりはないか。
君がいつも祈るレオノーラの海辺で、この書簡と俺の名と共に、無事の帰還を祈ってくれ。

平文をなぞれば、恋仲にあるミオへ思慕を綴った内容に見える。
だが、事実は無論、違う。
シェインがどこで何をしようとミオにとっては関係のない話だし、わざわざ旅先から書簡を届けられる覚えはないはずである。
なのに届いたこの文面に不審を感じて、隠された望みを察してくれるかどうかだけが心配だった。
彼女に託した部分はひとつ……文中で改めて彼女の名で文章を区切った意味はそこにある。名前以降が、ミオに宛てた文面だ。
ミオは、敬虔な信者などでは到底ない。聖歌など歌いもしなければ、いつも祈りを捧げているはずもない。
そして、レオノーラには、海辺はない。

娼婦は、様々な客と相応に親しく触れ合う為、往々にして政治ごとにも利用される。彼女たちもそれを知っている。

ミオはシェインの素性を知りはしないが、余りにも不自然なその文面を見れば、頭の良い彼女はシェインが何かを自分に託したのだと察するだろう。

王都レオノーラの一部として見なされている地域で距離を遠く置かずして海が臨める場所は、一箇所だけだ。そして祈りを捧げるとくれば、大神殿以外にありえない。

――書簡と俺の名前を、大神殿に届けてくれ。

それより前の意味は、ミオにはわかるまい。わかるはずもない。

シェインの名前が出されれば、必ずガウナの手元に渡る。

ガウナは、そしてラウバルもまた、意味するところを考えるだろう。

セルジュークはもちろん、リトリア王都だ。シェインの現在地である。

だが、セルジュークからレオノーラへは、４日では帰りえない。

となれば、４と言う数字に意味があることがわかるはずだ。

意味するところは、その前の「聖歌」。聖歌の第４番である。

スパルジェス　メ　ドミーネ　ヒスゥオポ　エ　ムナダーヴォ
ラヴァ　ビス　メ　エ　サパ　ニーベン　デ　アルバーヴォ
ミ　シ　リ　リ　メ　デラス　シークァンダム　マーグヌム
ミ　セ　リコールディ　アム　サ　アム……――神の栄華を褒め
称えよ
我らに愛と慈悲
を賜りし　聖なる母よ
戦ある時には勇
気を持って
穏やかなる日に
は感謝の祈りを……

続く数字通りに聖歌の第４番をなぞれば、ヴァルス語の文章が浮かび上がる。――「ラミア捕獲。引取りを待つ」。

それがわかれば、冒頭もまたラミアを示し、魔力を封じてあるがゆえに引取りを要求していることがわかるだろう。ロンバルト公国ヴァッセンベルグ公家の棘のある花は、宮廷魔術師ラミアをおいて他にない。

果たして、シェイン意図は、問題なくくみ取られた。

ミオが届け出た大神殿にてシェインの書簡は無事ガウナの手を経てラウバルの手に渡り、その返信と共に鳥は再び放たれた。

書簡と共に雲啼が運んで来たチグルと言う木の実を手ずから与えた者の、「戻れ」と言う命令で雲啼はシーレィの元に戻る。書簡末尾に記されたその指示はラウバルかガウナのいずれかから下され、雲啼はシーレィの元に戻った。

「代わるか？」

「いや……もうしばらくしたら、代わってくれ」

麻で出来た粗末な衣服に身を包み、木の葉を絞った汁で髪を染め、土で顔を汚して荷車を引くシェインの姿は、どこから見ても宮廷魔術師ではない。少々容姿に繊細さが残りはするが、立派な貧民である。

一方で、荷車に積み上げた藁の束が崩れないように横から支えるエディもまた大差ない状態であった。モナ公王たる気品は、見る影もない。

積み上げた藁の束の中には空洞を設け、意識不明のラミアが押し込まれていた。ただ押し込めたのでは窒息してしまう可能性があるから、後方は外気を取り入れられるようにして布で目隠しをしてある。

藁運びの貧民を装って、意識不明のままのラミアを人目に触れずセルジュークから運び出すと、シェインとエディは時間をかけてゆっくりと国境へと向かっていた。

ラウバルからの文面もまた、一見ではそれとわからぬ内容になっ

ている。
　まるでミオからの返信を装った内容に隠された指示を辿れば、シェインとエディが次に取るべき行動は限られた。
　ひとまずラミアを連れて、リトリアとマカロフの国境……林業を営む小さな村エンにて、ラミアを引き取る人間が現れる。
　ラミアは、現在、まだ昏睡から目覚めてはいなかった。衰弱が心配されるが、反面、「なぜ俺がそんな心配をしてやらねばならんのだろう」と言う一抹の疑問が浮かばないでもない。
　まあ、それほど長きには渡らないだろう。フリッツァーの配下がうろついている危険性もあるし、ラウバルの返信を受け取るや、シェインとエディはセルジュークを発った。
「尾行の奴らは、どうしたかな」
　少しずつ陰っていく日に空を仰ぎながら、何気なく口を開く。あれきりフリッツァーの配下たちは見かけていない。再発見されてこちらが気づいていない可能性も皆無とは言わないが、ほぼそれに等しいだろう。
「さあな。一部が戻って、一部が私たちを探していると言うのが妥当か」
「クリスファニアに向かったんじゃないか」
「かもしれぬな」
　いずれフリッツァーの戦力を必要とする時までに、しっかりとこちらが戦力になり得る点をお伝え願いたいものである。
　時折、シェインらと似たり寄ったりの風情で歩いている農民とすれ違う。彼らが運んでいるのは、事実彼らの生活の糧だろう。こちらの偽装工作とはわけが違う。
　そんなことを思いながら、シェインはフリッツァーの書簡によるソフィアの居場所に思いを馳せた。
「本当にソフィアがクリスファニアにいるのかな……」
　小さくひとりごちた声は荷車を引くゴロゴロと言う音に掻き消されたかと思ったが、エディの耳に届いたらしい。

「さあな。ともかくは、行ってみる必要があるだろう」
フリッツァーが果たして、本当にソフィアの居所を伝えてくれているかどうかは、現状確かめようがない。エルレ・デルファルからフリッツァーにシェインの身元がばれるかもしれないとの危惧はあったが、現在のところではそれも明らかではない。
だが、ともかくも、一応の指針は手に入れることが出来た。
フリッツァーの書簡が示すソフィアの行方は、クリスファニア―セルジュークから西南へ下った大都市である。
セルジュークに滞在していた数日で集めた情報によれば、ソフィアがいるとされているクリスファニアには、文官が多く別宅を所有していると言う。
「何にせよ、国王軍がクリスファニアに向かったと言うのは間違いなさそうだろう。ならば、信憑性はなくはない」
「いずれにしても、得るものがある、か……」
「国王軍がクリスファニアにいるとなれば、何がしかの情報を得ることが出来よう。全くの無駄足にはなるまい」
「……こうしている間に、騒ぎが起きなければ良いが」
「……」
エディが沈黙で答えた。
ソフィアが王位継承権を持つと言う話が本当であれば、そしてアルノルト・クレーフェらが反旗を翻そうとしていると言うのであれば、その目的は明白である。ソフィアを陣頭に掲げて王を討つのだ。
力による世代交代――国王軍がクリスファニアに向かい、ソフィアがクリスファニアにいるのであれば、火の手が上がるのはもう間もなくかもしれない。
出来るならば、その前にソフィアを奪還したい。火の手が上がってからでは、リトリア情勢に深く食い込むことになる。
さっさとフリッツァーが挙兵してくれれば良いのだが。
エンに辿り着いて程なく、ラミアは昏睡から回復した。意識不明

の人間の面倒を見るのは手間がかかるので、却ってありがたくもある。もちろん、手足の自由は奪っている状態で監視下においているが、思いの外、ラミアは静かだった。完全に黙秘を保つつもりでいるらしい。

シェインの投げたいくつかの問いにさえ答えるそぶりはなく、最後にはシェインも辟易して放棄した。尋問なり拷問なりは、エディはもちろんシェインにとっても管轄外であるので、預ける人間に任せることにする。ヴァルス宰相に報告はしたのだ。後は、然るべき人間が然るべき処置を施すだろう。

数日の間、シェインとエディはエンの村から程近い草地で寝起きした。

人に紛れてその村の住人を装うのは無理だからである。小さな村は、人の付き合いが深い。

木の陰に当たる地面に荷車と共にいれば、昼間は休憩しているように見えようし、夜は帰るところのない者に見えようか。

そうして、日に数度、エンの村へ足を運ぶ。

ラミアを引き取る人間の名前まで知らされていないゆえに、すれ違っていないかと思えば落ち着かない。早く荷物を預けてクリスファニアへ向かいたいとの気持ちもある。

詳細はラウバルから聞くことが出来ていないが、シェインの予想ではラミアの身請けをするのはモナに駐屯しているヴァルス軍から寄越される人間だろう。

であれば、レオノーラからカサドールを経てモナに連絡が行き、そこからこのエンへ向かうはずだ。

どれほど急いだとて、ある程度の日数がかかるのは我慢するしかない。

それらしき人物の話を聞くことが出来たのは、シェインたちがセルジュークを発ってから、半月近くが過ぎた頃だった。既に炎の月も2週目に入っている。

「ほう？　怪しげな異国人か」

真夏の盛りではあるが、リトリアの更に北部に位置するエンでは、灼熱の暑さと言うわけではなかった。

とは言え、やはり注ぐ太陽が目に眩しい。昼間には、額に汗が滲んだ。

ちょくちょくとエンの村を歩いては、村の外で寝泊りをしているシェインたちを、村人たちはどこからか流れて来た浮浪者だと思っているらしい。勝手に解釈してもらえるならばそれに越したことはないので、シェインの方も敢えて訂正はせずに放ってある。

襤褸を身に纏っていることが彼らの警戒を緩めているらしく、次第に村人とも顔見知りになって来ていた。時折、作業の手伝いを頼まれれば手伝ってやり、その礼として多少の食料を提供してくれる。

ただし、エディもシェインも口を開けばその出自が匂い取られる可能性があるので、極力口を開かないようにしている。口から先に生まれてきたようなシェインにとっては苦痛であるが、仕方がない。

だが今日は少し、状況が違った。時折作業を手伝ってやっている、林業を営む年配の女性たちの噂話が耳に飛び込んできたからだ。

見慣れない風体の異国人が、数時間おきに村を回っては出て行くのだと言うものだった。

（ようやく来たか……）

ラウバルの指示を受けた人間だ。

「どこにいる？」

短く尋ねるシェインに、集まった数人の女性は、しきりと額の汗を首から提げたタオルで拭きながら互いに顔を見合わせた。

「そこまではちょっとわかんないねぇ」

「だけどいっつも西から来るよ」

「そうさ、ヴィヴィーの家の裏手の方から来るんだよ、ありゃあ」

「やだね、あんな方に何があるのさ」

「お山にいるのかねえ」

「お山なんか魔物の巣窟だろ？　あれじゃないのかい？　ほら、いつだかキャラバンが来た後にさ、小さな掘っ建て小屋を残していっ

たじゃないよ。あそこにいるんじゃないのかい？」
「いやだねえ……変なのが流れ込んできたりしなきゃいいけどねえ」
少し尋ねるだけで、女性たちは淀みなく会話を続けた。シェインがいることなど既に忘れているような顔で、しきりと「怪しい異国人」について知っている情報を代わる代わるにまくし立てる。
「ありゃあ、逃亡兵じゃないのかい？」
「まさか。こんな辺鄙なところまで流れて来やしないよ」
「こんな辺鄙なところだから逃げ出して来るのさ。隊長さんだって、こんなところまでは探しに来やしないだろ？」
「……兵士の身なりをしているのか？」
口を挟んだシェインに、女性のひとりが顔を顰めた。
「してないよ。剣は腰にぶら下げてるけどね。ほら。兵隊さんなんて言ったら、もっとしっかりした装備をしているもんだろう？」
「逃げ出す途中で捨てたんじゃないのかい？」
「ありゃあ悪い冒険者だよ、きっと」
しきりと話を続ける女性たちに別れを告げて、話に出た村の西の方へ向かってみることにした。『ヴィヴィーの家』と言うのは残念ながらわからないが、西側から村を抜けてみれば『キャラバン跡地の掘っ建て小屋』には出会えるかもしれない。
恐らくは、互いが互いのことを探しているのだろう。こちらもこうして姿を変えているのだし、向こうも本来あるべき姿ではここへ来ることが出来ない。国境越えも苦労したはずだ。マカロフから来たのであれば南方よりは警戒も緩いだろうが、それでも関所があるような道は使えない。獣道や川を渡るなどの難所を越えて来たはずである。
ふらりと、いつもと同じ様子で村を歩くシェインの姿を、特に咎め立てする者はいなかった。西へ向かって歩きながら、どうやってラミアを引き渡すかを考える。
村人の口の端にこれほど上っているとなると、その数日前から姿を現すようになったシェインと会ったりすれば、村中を勝手な憶測

が駆け巡る。その中には真実に近いものがないとは言えない。危険である。全く、田舎の人間は噂話が好きなものだ。

これほどの小さな村になると、外部との出入り口がどことは限られない。きちんと区切られているわけではなく、いわばどこからでも出入りが可能である。

どこから村へ入ることが出来るかを、何となく歩いてチェックしていると、ちょうど、小さな畑の間の道に差し掛かったところでふたりの男が向こう側からこちらへ向かってくるのが見えた。

多分、エンの村人ではないだろう。

足を止めて彼らが近づくのを待つ。近づいて来た彼らも、こちらの様子を見ているようだった。やや距離を保ったまま、足を止める。鳶色の髪の男が一瞬口を開きかけ、それから動きを止めた。

次の瞬間、がばっと地に伏せるように片膝をつくと、頭を下げる。

「シェイン様……！！」

どうやらこちらの顔を見知っているらしい。もうひとりの男は、地に伏せた男が口にした名前にぎょっとしたように、慌てて倣った。

「やめてくれ。こんなみすぼらしい男にそんなことをしては、かえって目立つ。端から見たら、やる人間が逆だ」

ラウバルからの使者もさすがに貴族めいた装いはしていないが、それでもシェインよりはましである。さしずめ、行商人を装ったと言うところだろうか。

「随分、思い切ったものですね……」

シェインの言葉に従って立ち上がると、鳶色の髪の男は呆れたようにそう評した。

第3部第1章第22話　鎖（3）

「このまますれ違ってしまうところでしたよ……」
「やるなら徹底せねばな。……俺の『恋人』の祈りは神に届いたか」
「ええ、しっかりと。お贈りする花を、承りに参りました」
「安くしといてくれよ。生憎、貧しいのでな」
笑いを浮かべて宣うシェインに、男たちも笑いを浮かべる。それから姿勢を正した。
「申し遅れました。ヴァルスはカサドール天理調査府より参りました。カサドール海域巡邏隊第3領海部隊長ピエラと申します。こっちは私の部下マギエル。この度、カサドール公カール殿より拝命して、シェイン様の元へ派遣されて参りました」
久々に聞く堅苦しい挨拶に、やや苦笑する。
「ロンバルトの宮廷魔術師の身柄を預けたい。何人で来ている」
「我らを含め、5名です」
「経路は」
「モナからキルギス、マカロフを経由して、グラジー川を越えて参りました。帰路は、スルズージ山脈を越えてマカロフへ入るつもりです」
「ま、せいぜい気をつけてくれ。……モナは、どうなってる？」
気負って話すピエラにあっさりとした労いをかけると、重ねた問いにピエラは背筋を張ったままで答えた。
「現状可能なモナ軍の編成はほぼ終わりました。ですが、リトリアが国境付近に布陣している為、モナ軍をレスヴァーレィ地方にあるハンノ要塞に配備。現在警戒中です」
「ほう」
クラスフェルドがヴァルスへの派兵を放り出して送り込んだリトリア軍だろう。
頭の中に、リトリアとモナの国境地帯の地図を描く。リトリアの

ソヴェウレイユ地方と、モナのフラウ地方からレスヴァーレィ地方――それぞれ、争いの歴史を示すように堅固な要塞が守る地域である。

（反乱軍は、こいつらをどう考えているのだろうな……）

ソヴェウレイユ地方に派兵されている軍は、クラスフェルドの腰巾着ではないのだろうか。

もしも争いがクリスファニアで起きるのであれば、駆けつけられない距離ではない。

「モナに迫っているリトリア軍は、どのくらいだ？」

「正確にはわかりかねます。が、恐らくは1万から2万と推察されます」

ならば反乱軍にとって、クラスフェルド救援の為に駆けつけられればしんどかろう。

駆けつけられないタイミングを待っているのか。

（さしずめ……国境に控えたリトリア軍がモナと開戦するタイミングで勃発、ってところか……？）

国境に再編成が終わったモナ軍がいると言うのは、シェインにとっては朗報かもしれない。

「王都シドには、無論ヴァルス軍がいるな？」

「もちろんです」

「どのくらいいる」

「カール公率いるカサドール軍2万が」

「カールもいるのか」

「はい」

カサドール公カールは、以前、陰謀によって罷免されかけたことがある。ちょうどカズキがこちらに来たばかりの頃だ。

それを免れたのはシェインの進言によるものであり、長官に昇進したカールはシェインに恩義を感じている。

恐らくは、シェインの要求に最大限協力を図ってくれることだろう。

「そうか……。では、カールに助力を頼むことになるかもしれぬ」
なるべく穏便に済ませたいがゆえ、そんな事態にならないことを祈りたいが、用心はしておくに越したことはない。
「こんなところで立ち話もないな。おぬしらが今いる場所を聞いておこう」
「はい」
「夜にはそちらを訪問する。……カールに、伝えて欲しいことがある」

◆◇◆

「私はですねぇ、本来あんまり歩くのは好きなわけじゃないんですよ。たくさん歩いてると、ほら、何ですか？　お腹が減りません？　お腹が減るとですねぇ、こう、頭の中がいろいろな煩悩で支配されてくるわけですね。食べたいとか食べたいとか食べたいとか。最近はですねえ、私、先日ラグフォレストに行って参りまして。やっぱり大陸が違えば食べ物も違うんですね。そちらで出会ったパティエと言うお菓子……ご存知ですか？　小麦粉を練ったものにロイロルの花びらを混ぜ込みましてね、それを一口大の大きさに千切って焼くわけですよ。そしてそれに生クリームでデコレーションしまして、蜂蜜をたっぷりかけて、ロイロルの花で作ったジャムとアーモンドを砕いたものを乗せるわけですね。……え？　知らない？　そりゃあ不幸ですね。これがまた絶品なんですよ。あぁ、食べたくなって来ましたね。歩いているせいでしょうかねえ。もうかれこれ何年こうして歩いてることでしょう。……４日？　たった４日でしたっけ？　いえいえ、でも４日も歩き通していれば上等……」
クラスフェルドが率いるリトリア国王軍は、グレンがラナンシー城に到着をしてから１週間後にセルジュークを発った。シェインたちがセルジュークに到着をしたのは、この２日後である。
クリスファニアまでは、およそ１２日間の行軍になると聞いてい

る。

なぜかセラフィのそばに控えることが出来ないまま、リトリア国王軍に従軍しているグレンは、客将と言える立場にもかかわらず歩兵隊に混じって歩いては愚にもつかないことをとめどなくしゃべっていた。

本来ならばクラスフェルドのそばに控えるのが筋だろうが、国王はもちろん馬上にある。

グレンがそばにあれば馬は怯えて隊列を乱しもするので、こうして国王や騎兵隊から離れた歩兵隊の中に寂しく埋没していると言うわけである。

従来、軍隊と言うのは規律が厳しく、行軍中の私語などもってのほかである。無駄口は伝令に支障を来たすし、余分な体力を損なう。

これだけ話していれば叱責ものだが、相手が客将とあっては歩兵隊長も怒鳴りつけるわけにもいかず、そのまま放置されていた。周囲の兵卒にとっては良い迷惑である。

「あなたはどちらの出身ですか？　フィーモリア？　どこです？　あ、待って下さいね。わかりました。リトリアの東北部にある街でしょう。なかなか大きな街と聞きますが、住み心地はいかがですか……」

やがて、野営地が決まったらしい。ゆるゆると全軍が停止態勢に入る。とは言え1万5千の兵及び工兵や輜重部隊なども入れればその長さは数エレにも及ぶので、歩兵部隊の速度が緩まった頃には先方の部隊は既に野営体制を整えていた。

「ふぃぃぃ。今日のごはんは何でしょうかねぇ」

何かを勘違いしているこの男は、そう呟きながら歩兵隊を離れた。ただでさえぐしゃぐしゃの髪を自分で掻き混ぜながら、クラスフェルドの控える天幕へ足を向ける。

「どぉもぉ。お邪魔しても宜しいですか？」

天幕を守る兵士に軽いノリの挨拶をして中を覗く。中では、クラスフェルドの幕僚が一同に会していた。視線が一斉にグレンに注が

れる。
　クラスフェルドが笑った。
「どうだ？　歩兵隊の居心地は」
「いやぁ、皆様、軍律を良く守られる方ばかりでですねえ、なかなか私のお相手をして戴けないんですよ。私ひとりでお話をする羽目になっておりまして。それともリトリアの方はシャイなんですかね」
「大方、ロドリスの客将に取って食われることを恐れているのだろうよ」
「軍事会議でいらっしゃいますか？」
　国王軍の主要陣と言えるメンバーが顔を揃えているのを眺めてのんびりと尋ねるグレンを、クラスフェルドが手招きした。
「お前も参加していくか？」
「陛下！！」
　それに対して、声を荒げたのは、リディアファーン将軍だった。古傷の残る精悍な顔に険しい色を浮かべて、グレンを見据える。
「この度には友軍とは言え、ロドリスの軍人。会議に参加させるのは、賛成致しかねます」
　ロドリス国民と言うだけで嫌われたものである。
「陛下はこの男をお気に召しておられるようですが、リトリア軍を調査する為の諜報員やもしれませぬ」
「我々リトリア軍は、この男ひとりが集めた情報で後々ロドリスに叩きのめされるほど脆弱なのか？」
　対する国王の返答は、気負うでもないあっさりしたものだったが、辛辣を極めた。将軍の顔が紅潮する。再び彼が口を開く前に、グレンは素早く、しかしのんびりとした口調で割って入った。
「私は会議って聞くと眠くなっちゃうんですよ。陛下がどうされているのか、ご挨拶に伺っただけですので。私は外で野営の設営をお手伝いさせて戴きますね」
　そう言い置いて、さっさと退散することにする。
　天幕を離れて歩きながら、グレンはしばし考え込んだ。

リトリアは、クラスフェルドが戴冠して以来、軍部が力を強めていると聞いている。
だが、その軍部もやはり、クラスフェルドの元に一丸になっているわけではないのだろうか。
力をつければ、派閥を生む。
そういうことだろうか。
もちろん、君主の言いなりになることが良いとは限らない。機嫌を損ねるのを承知の上で、悪いことは悪いとはっきり意見を述べる必要がある。
リディアファーン将軍のような存在は、必要である。
（私もそうすべきだったんでしょうかねえ……）
遙か遠い空の下にいる、彼の上司を思い浮かべた。
セラフィがこだわっているヴァルスの王位は、全て彼の最愛の少女の為だ。当たり前の幸福に飢えた彼は、当たり前に享受するはずだった幸福をマーリアに与えたいと思っている。それはわかっている。
だが同時に、マーリアの幸福はそこにはないだろうことも、グレンには明白なことだった。
彼女は、王族に返り咲くことはもちろん、彼女を見捨てた家族に今更望みは持っていない。
ただ、セラフィのそばで生きていければ、それで幸せなはずなのだ。
（もっと……）
強く進言すべきだっただろうか。
ヴァルス侵攻に、彼の求める意味はない、と。
（今更……）
全く、今更だ。
既にことは起こっている。
今すべきことは過去を悔やむことではなく、未来をどう決すべきかだ。

しばし兵卒と一緒に野営の設営を手伝っていると、やがて会議を終えたらしい幕僚たちが天幕から姿を現した。
その中からリディアファーン将軍が、グレンの姿を見つけて歩み寄ってくる。
「グレンフォード殿」
「あぁ、どぅもぉ。お疲れさまでしたぁ。いやぁ、何が一番大変って、この木材がですねぇ……」
「陛下がお呼びだ」
グレンの無駄口には付き合う姿勢を見せず、リディアファーン将軍は軽く天幕を示した。
「はあ。私をですか」
「陛下を待たせるな。さっさと行け」
すげなく言われ、軽く肩を竦めながら言われた通りに歩き出す。
「入りますよ。グレンフォードです」
中から許可する声を受けて、天幕に足を踏み入れる。中にいたのは、クラスフェルドひとりだった。
グレンの姿を認めてにやっと笑う。
「お呼びと伺いましたが、輜重部隊から干し肉を2~3、がめたのがばれちゃったんですかねぇ」
「お前は馬鹿なのか利口なのかわからんな。今日の食事は抜いてくれと言う自己申告か？」
「ああ、やっぱりばれちゃったんですね。違うんですよ。悪いのは全てこの右手であって、私は止めたんですが……」
「何か言いたいことがありそうだと見えたが？」
天幕の床に直に座って、傍らに置いた椅子の座面に頬杖を付きながら、クラスフェルドが遮る。グレンは口を噤んでそのダークブラウンの瞳を見返した。
「身中に虫がいるお心当たりはございますかね」
「何のことだ？」

問い返すクラスフェルドを見つめ、彼は承知しているのではないかとグレンは感じた。
「良からぬ騒ぎを企む輩ですよ」
「お前のことか？」
「私に狙えるのはせいぜい干し肉程度。地位を狙うような根性はありませんよ」
「根拠を聞こうか」
グレンは軽く肩を竦めた。
「街で小耳に挟んだ程度です。ですが、調査の余地はある。大事が起きてからでは遅いですからね」
「手緩いな。俺は、名前まで押さえたぞ」
「……！！」
琥珀色の瞳を見開いて息を飲んだ。
「では、ご存知で……」
「ご存知もご存知だ。主要陣ならば名簿も作れそうだな」
唖然と言葉の出ないグレンを、クラスフェルドはにやにやと笑って見据えた。
「なぜ、敢えて……」
「ネズミ捕りをしておくのも、良かろう？」
では、奸臣を洗い出し、忠臣を選抜する為に、敢えて謀叛を起こそうと言うのか……！！
「危険です……！！」
思わず口をついた言葉に、クラスフェルドが笑った。
「危険か。忠義面した反臣を飼っていくのと、ここで一掃してしまうのと、果たしてどちらが本当の危険なのだろうな」
「しかし」
「安心しろ。お前が心配するほど俺はひとりぼっちではない」
と言うことは、呼応して動く人間がいると言うことか。
そう判断しつつ黙りこくるグレンに、クラスフェルドが薄く笑った。低い問いを口にする。

「国王が民に残せるものは何なのだろうな」
「え？　それは……善政、って奴ですかねえ」
「違うな」
短く答えたクラスフェルドは、どこか皮肉な笑みを浮かべていた。
「何も残せんのさ」
「……そう、ですか？」
「人は死して何も残せん。国王とて同じこと。いかに善政を敷いたとて、存命の間の出来事だ。死んで世代が代われば、それは続かぬ。ヴァルスを見ろ」
「……」
「クレメンス8世は名君だったぞ。そして崩御するなり、ハイエナが死肉を食らいつくそうと集まってくる」
グレンは微かに笑った。
「それは、我々のことですか」
「無論だ。何を建前にしたとて、ヴァルスの政権交代につけ込んだ卑劣な仕打ちであるとの謗りを避けることは出来ぬ。……カルランス7世も、そして俺もな」
「……」
「善政を敷こうと、死肉には盗人が群がる。後には何も残らない」
「……意外と、ペシミストですね」
グレンの評に、クラスフェルドは皮肉に口を歪めた。
「現実主義者（リアリスト）だよ、俺は。この上ないくらいのな。悲観論者（ペシミスト）ほど、理想主義者じゃない」
それからクラスフェルドは、座面についた頬杖を解いて、大儀そうに体を起こした。
そして、笑った。
「せっかくいるのだからな。お前にも、役割を与えてやろう」

第3部第1章第23話　ｒｅｓｏｒｔ　前編（1）

――――カーマイン、全滅。

ツェンカー北部の小さな町カーマインに襲来した氷竜トラファルガーは、一夜にしてその町を壊滅に追い込んだ。

ツェンカーは、ドラゴンクローラを飼育しているフェティール要塞から2千の兵とドラゴンクローラ10騎を送り込んでこれに対抗しようとしたけれど、ほぼ全滅、数十人の兵士と3騎のドラゴンクローラが重傷を負って命からがら逃げ出すことに成功しただけだったと言う。

即刻ユリアのいるロドへ飛んで帰りたかったのはやまやまだけど、トラファルガーがツェンカー上空で動いている間に移動するのは危険だとヴァルト副将軍から足止めを食らった俺は、ユリアとニーナが心配しているだろうから、連絡役として一足先にレイアをロドへ返した。

そして、カレヴィさんと一緒にフェティール要塞で一夜を過ごし、その翌日にはカーマインへ向かった。

ヴァルト副将軍率いる部隊がカーマインの救済活動に向かうと聞いて、行っておくべきだと言う気がしたからだ。

覇竜が、どんなものなのかを知る為に。

一応は救済活動と言う名目でカーマインに同行したわけだが、そしてもちろん出来ることがあるならばするつもりだったんだが、実際問題として出来たことは大してあったわけじゃない。

町一面が氷竜の冷気で凍り付いて、それが溶けるまでは手の施しようもなく、そして生存者なんかいなかった。

直後には、もしかすると生きている人もいたのかもしれない。

だけど、辛うじて生命があったとしたって、あの冷気でいずれにしても生き延びるなんて出来やしないだろう。
トラファルガーや瓦礫のせいでか人間の肉体の一部と思しきものがなかったとは言わないが、それさえも氷の中に閉じこめられていて、凄絶と言うよりは、静謐だった。
結果として、主に行って帰ってきただけと言うのが正しい。
そうして、俺が要塞で待っていたカレヴィさんと再びロドの街へ戻ったのは、最初に発ってから5日後のことだった。
豪勢なことに、ヴァルト副将軍率いる20名の護衛つきだ。
帰り着いたロドの街は、まるで廃墟のようだった。人の姿がなく、気配さえ感じられない。
「怯えているのだろう」
街に入って店へ向かいながら、カレヴィさんがそう説明した。
ヴァルト副将軍がカレヴィさんに何かを話しかけるのを聞きながら、ユリアがどうしているかを思う。
怯えていないだろうか。
それに、シサーとキグナスはどうしているだろう。
フリュージュは、どんな様子なんだろう……。
(――急がなきゃ)
猶予がない。
いつ、どこがトラファルガーに襲われるかわからない。
首都が壊滅になったらどうしようもないぞ……。早いとこルーベルトと会う算段をつけて、レーヴァテインを……。
(いや……)
逆にしてしまえばいーんだ。
いっそ、さっさとレーヴァテインを手に入れて、いつでもトラファルガーを迎撃出来る態勢に持ち込んでからルーベルトとの交渉に入る。
(直接対決になったら……)
……駄目だ。

やれるなら、トラファルガーとは巣穴――フレザイルの地で交えた方が被害が少ない。
武器を手に入れて、街を襲うのを待つなんて真似は出来ない。
けれど、先にトラファルガーと交えてしまったら、交渉材料には使えない。
「同時進行が出来れば良いのかな……」
思わずひとりごちる。
例えばの話だけど、ユリアがルーベルトと交渉を進めて、同時に俺たちがレーヴァテイン探索に出る。俺たちが確かにレーヴァテインを手に入れて戻ったら援軍を出してくれって約束を取り付ける。
問題は……誰が、どちらの役割を担うかだ。
ユリアをフレザイルに連れて行くわけにはいかない。ドラゴンとの対決が待つかもしれないってのに、連れて行けるわけがない。そもそもルーベルトとの会合にユリアがいないわけにはいかない。
だけど、ツェンカーだって決して安全なわけじゃない。トラファルガーにいつ襲われるかなんてわかったもんじゃなく、『地上の星』だってユリアを狙っているかもしれない。護衛になる人間をおかないわけにはいかない。
レイアはユリアから離れないだろうから、それは決まりとしても……。
一方で、まず俺はフレザイルに行かなきゃならないだろう。
レーヴァテインの鍵を持っているのが俺なんだろうから、いなきゃ話にならない。
そして、ドラゴンの巣穴を探るだろうと言うのに、シサーの戦力にいてもらわなきゃ洒落にならないし、キグナスもまた同様だ。ニーナにいて欲しいのももちろんだし……。
シサーが2人欲しいなー。
そしたら、俺たちがフレザイルに出発してから時期を見計らって、ユリアのそばでルーベルトと会う算段をつけてもらえるのに。
（俺たちだけで何とか出来るか？）

フレザイル探索を。
（……）
出来るもんか。
（情けないなー……）
結局のところ、どちらもシサーがいないと身動き取れないんだ。
俺が同じくらいの役割を果たせるんなら、簡単なのに。
俺たちが借りているカレヴィさんの店にすぐ隣接している建物に到着して中に入ると、建物の中も異様に静かだった。ここはカレヴィさんの店で働く従業員に住居として貸している部屋がある建物で、今は俺たちの他に5人の人間が寝起きをしていたはず……。
やがて、ぎしぎしと小さな軋みが聞こえ、階段のところから男が顔を覗かせた。俺たちが最初に店を訪ねた時に、武器を磨いていた男だ。
「＊＊＊＊＊＊！！」
「リント」
男が驚いたように叫んだ。カレヴィさんが答えて名前を呼ぶ。彼の名は、リントと言うらしい。リントが転がるように階段の陰を出てくると、それに階上からの物音が続いた。
「カズキッ……」
ユリアとニーナだ。
ヴァルト副将軍が、小さく口笛を吹いて何か言った。察するに、冷やかしだろう。通訳してもらうほどの内容じゃない、多分。
「無事だったのねッ……」
いや、そもそも俺、襲われてないし。
「襲われたのは、俺が行ってたフェティール要塞から更に北だよ。……俺は、トラファルガーを遠くから見ただけ」
後半の声は、少し、低くなった。ニーナもこちらへ近づきながら、低めた声で答えた。
「見たのね」
「要塞からね」

「＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊」
　その間にカレヴィさんがリントに何か尋ねる。答えるリントは、どこか言いにくそうに口篭って俯いた。
「＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」
　リントの答えに、カレヴィさんが目を見開く。
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊　＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊……」
「＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊　＊＊＊＊」
　それからカレヴィさんは、俺に向かって元気のない笑みを向けた。
「従業員は、逃げちゃったみたいだね。カーマインから最も至近距離にある大都市は、ロドだからって。次に襲われるのはロドに決まってるって噂が広がって……街そのものからかなりの人間が逃げ出したらしい」
　リントが更に何かを言った。それに答えたカレヴィさんは、元気なく顔を横に振って俺を見上げた。
「命には代えられない。……店の休憩室に行こう。お茶を入れて、一休みしようか」
　促されて、とりあえず店の方へ向かうことにする。
　前を歩くカレヴィさんと肩を並べたヴァルト副将軍の背中を指して、ニーナが小声で尋ねた。
「誰？」
「フェティール要塞の副将軍」
「それが何でついて来たの？　しなきゃなんないことは、別にあるんじゃない？」
　カーマインの救済を指してるんだろう。
　俺は軽く頭を振った。
「さてね。……俺もカーマインに行ったけど、とりあえず当面はさほど出来ることはなさそうだって判断したみたいだよ。出来る限りの街の片付けなんかは、別の将軍が担当してるみたいだ。ヴァルト

副将軍は、ロドの様子を視察だってさ」
「ふうん……」
「何？」
前を向いたまま短く問うと、ニーナが小さく鼻を鳴らすのが聞こえた。
「別に」
従業員居住宅から店はすぐだ。小さな通りを挟んで店に入る時に、ユリアが俺の服を軽く引っ張った。
振り返ると、ユリアが大きな瞳を細めて、少しだけ照れ臭そうに笑った。
「おかえりなさい」
……。
「た、ただいま……」
て、照れ臭い。
何かどんな顔をして良いのかわからなくて、つい顔をそむけながら答える俺とユリアの間を、しら～っとレイアが通り過ぎた。
「はいはい、お邪魔しますねー……」
……馬鹿にすんなよ？
ふわふわと中に消える後ろ姿を軽く睨んで、改めてユリアを見下ろす。
「変わったこと、なかった？」
「うん。こっちは。カズキは？　何かあった？」
「うん……」
曖昧に答えながら、店に入って休憩室に足を向ける。他の人の姿は既に見えない。
「シサーたちと合流したら、改めて話すけど……」
「けど？」
「ヴァルト副将軍が、少し気になる」
「気になる？」
「うん……まあ……」

口ごもる俺を心配げに見上げるユリアに、俺は作った笑顔を向けた。
「いや、何でもない」
根拠もないのに、下手なことを言うのは良くない。
ともかくもシサーが戻ってから意見を聞いてみることにしよう。
ユリアに変な先入観を植え付けるのも……何だし。
「あ、そう言えばね、昨日カレヴィさんのお店に、ちょっと変わった人が来たのよ」
休憩室に入ると、既にリントがお茶を配っているところだった。
「変わった人？」
「うん。兎を連れて歩いててね、彼が歩くとその後を兎がひょこんひょこんとついてくのよ」
「アレンだね」
ユリアの声が聞こえたらしいカレヴィさんが口を挟んだ。
「アレン？」
「そう。変わった男。家はフリュージュにあるんだが、四六時中ふらふらしてる」
「こんなとこまで？」
「ロドにも家があるからね」
ロドにもフリュージュにも家が……。
ってことは、兎男は金持ちなんだろう。
「ふうん」
「アルディアの息子さ」
……。
「な……？」
アルディアの息子……！？
ユリアやニーナも聞いていなかったらしい。カレヴィさんの言葉にぎょっとしたような顔をする。
カレヴィさんは、片手をひらひらと振った。
「ぼんやりした男さ。政治ごとの役には立たないよ。さあ、そんな

ところに立ってないで座りなさい。リントがお茶を入れてくれた」
促されて椅子に掛けながら、尚も兎男アレンが気になって尋ねた。
「何しに来たんですか」
「何ってことないよ。たまーにふらっと来るんだ。弓の腕は一人前なんだがね。まあ、変わった男だよ。年中ふらふらしては、狩ばかりをしている」
「へえ？」
アーチャーってやつだろうか。
「悪い子じゃない。少しおっとりし過ぎてるだけだ」
「でも、お父さんは政治家でしょ。そんなんでいーんですか？」
俺流に言えば『2世』だろ？
後を継ぐ為に政治の勉強をしたりしないんだろーか。
「ツェンカーでは、特に頭首や議会を世襲しているわけではないからね。もちろん父親が有能な議員であればその息子への期待も高まって民衆の支持は受けやすくなるだろうが、別段決まっているわけではないのだよ。国王とは、違う」
うーん。民主制。
まあ、いいや……。別にアレンが議員になろうがなるまいが、それは関係ある話じゃないし。
ようやくリントが入れてくれたお茶に口をつけながらそんなことを思っていると、ヴァルト副将軍が何か言った。カレヴィさんがそれに答えて、笑う。
言葉がわからないので参加のしようもないし、俺はそっとニーナをつついた。
「そう言えば、シサーたちから連絡、来た？」
「ううん。もう、フリュージュについてはいると思うんだけど。今日の夜か明日の朝には来るかしらね。……あのポンコツが、どのくらいちゃんと機能するもんなのか知れたもんじゃないけれど」
呆れたようなニーナの言いぐさに、思わず俺は小さく笑いを象った。

ニーナが言っているポンコツってのは、ジークが作った通信機のことだ。

通信機、とは言っても、電波だとかがあるわけじゃあないから、書簡を運ぶ装置なんだけどね。

骨董品を扱う業者から買った魔法付与道具を使っての装置なんだけど、これがまたなかなかどうして、かなり怪しい。

まあ……まだ、実際に試したわけじゃないから何とも言えないわけだけど。

磁石のN極とS極みたいに引き合う2つの玉（ぎょく）があって、それの1つをこのカレヴィさんの店の庭に置いてあって。

で、もう1つはジークが持っていて。

書簡をつけて放てば自動的にここに来るとかって話なんだけど、「間に障害物があってもいーのか？」とか「それって一方通行にしか使えないじゃん？」とか「うまくいったとしたって、1回きりしか使えないんじゃん？」とか。

いろいろ思わなくはないんだけどね……。

「カズキ」

ここにいないジークに何となく呆れていると、ヴァルト副将軍と話していたカレヴィさんに名前を呼ばれた。

「え？」

「カズキたちも、いずれフリュージュに行くだろう？」

「え？　ああ……それは、まあ」

ルーベルトを呼びつけるわけにはいかないだろう。

「ヴァルト副将軍が、別邸を貸してくれるそうだよ」

その言葉に、一瞬顔が強ばった。

カレヴィさん、何て説明したんだろう。

俺の表情を読んでカレヴィさんが苦笑いを浮かべる。

「安心しなさい。余計なことは口にしていないつもりだ。ヴァルスのギャヴァンから訪ねてきたあなたの友人の傭兵が、フリュージュへ仕事を探しに行っていると言った。様子を見たら一度戻り、次は

カズキたちも様子を見に行くと言ったら、ヴァルト副将軍が宿を提供してくれると答えた」

ヴァルト副将軍は、にこにこと俺とカレヴィさんを見比べている。胸をよぎる不安……いつの間にか、人の好意を素直に受け取れなくなっているんだろうか。

「絶対に守らなければならないものがあるから、とても警戒するのは良くわかる。だけど、ヴァルト副将軍は正義感が大変に強い人だ」

……『正義感が強い』か。

「そうですか。わかりました。また改めて、相談させてもらいます」

◆◇◆

「ニーナ。相談が、あるんだけど」

カレヴィさんの従業員用建物に本来いるべき人間は、既にリントひとりしかいない。

部屋はいくつも空いているので、今は俺もユリアたちもひとりひと部屋借りている。

ヴァルト副将軍と彼が伴って来た兵士たちは、カレヴィさんの家の方に伴っていった。それからどうしたかは知らないが、仮にも公職の人間なんだからどっかアテがあるんだろう。

そうして、夜になって食事を終えてから部屋にいた俺は、ふと思い立ってニーナの部屋を訪れた。

「いいわよ。何？」

「フレザイルって、どんなところ？　どんな魔物がいるところなの」

「ああ……」

何をしていたのか窓辺に立っていたニーナは、ベッドに腰を下ろして足を組んだ。手近な椅子を引き寄せて俺が腰を下ろすと、口を開く。

「氷の魔物は、強いわよ」

「ふうん……。ニーナ。『人の属性』って、何？」

「え？」
「前に、ガーネットが言ってたろ。そんなこと。……あれの意味を知りたいんだ」
「どうしたの、急に」
まだ、シサーやニーナには、俺がこのピアスをレーヴァテインの鍵だと考えていることは言っていない。
ずっと確信が持てていなかったせいもあるし、そうだとしか思えなくなってからはタイミングを逃してて。

第3部第1章第23話　ｒｅｓｏｒｔ　前編（2）

シサーたちが帰ってきたらヴァルト副将軍の件も含めて話さなきゃと思ってたけど、それより前にニーナに相談をしてみたくなった。
「トラファルガーの剣……レーヴァテインは、フレザイルにあるラグナロクのことなんじゃないかと思うんだけど」
尋ねるでもない俺の確認の言葉に、ニーナが頷く。
「そうでしょうね」
「それを手に入れられれば、トラファルガー打倒の可能性は随分と高くなると予想される。……だよね」
「ま、ね……」
ニーナは、組んだ膝に頬杖を付きながら俺を見た。
「だけど、ラグナロクは手に入らない宝剣として有名よ。ガーネットいわく『鍵』が必要なんだってことだけど……」
「『鍵』なら多分、俺が持ってる」
「……え？」
ニーナが驚いたように息を飲んで、俺を凝視した。それを見つめ返して、繰り返す。
「『鍵』を持っているのは多分、俺なんだ」
ニーナが無言のまま俺を見据えるので、俺も無言で耳元を軽く弾いた。
耳元――ピアス。
「それが？」
「確信はないんだ。わからない。だけど、多分」
「それは、最初からつけていたものよね？　わたしがカズキに初めて会った時には、もう、ついてた」
「うん。……シャインカルクで、シェインからもらった。元々、俺のものじゃない」
沈黙が降りる。

破ったのは、ニーナだった。
「それが、どうしてレーヴァテインの鍵だと？」
「エルファーラの聖堂で、『失われた聖書』の一部を描いた絵があったでしょ」
「ああ。ドラゴン退治の」
「うん。あれを見て。……あの時は、何のことだか良くわからなかった。だけどガーネットから『失われた聖書』の話を聞いて、まさかと思った」
「どういうこと？」
「氷竜と戦う、剣を握る男の耳に、これと同じもの……少なくとも、酷似しているものが描かれてる」
ニーナの白い喉が、微かに上下する。
「フェティール要塞に行って、ヴァルト副将軍が『レーヴァテインの鍵』について話してくれた。彼はレーヴァテインを長年研究しているらしい。……『レーヴァテインの鍵』は、ピアスだよ」
「……」
「シェインはこれを俺にくれる時、こう言ったんだ。――『対になるアイテムがある』」
「……」
「……フレザイルに、行くべきだと思う」
考え込むように再び沈黙をするニーナに、俺も黙った。静かな部屋に、風がかたかたと微かに窓を揺する音だけが聞こえる。カーマインの全滅でまた人が逃げ出した街は、ゴーストタウンのような静けさだった。
「それと『人の属性』って話と、関係があるの？」
「ある」
頷いて俺は、手短にヴァルト副将軍の言葉を伝えた。無言のまま聞いていたニーナは、俺が言葉を切るとため息混じりに頷いた。
「正しいと思うわ」
「じゃあ、人はそれぞれの属性とかってのに分類されるもんだと思

って良いんだね」
言い換えれば、誰もがいずれかの属性に分類されるもんなんだと。
確認をすると、ニーナは首を傾げるように小さくかぶりを振った。
「そうとは言い切れないけれど。無属性の人間もいると思うわよ。逆に、複属性の人間も」
「そんなこと、あり得るの？」
「と思うわ。はっきりは、知らないけど」
「……例えば、誰がどの属性を持っているかなんて、わかったりする？」
それがわかれば、俺が鍵を持っているとして、レーヴァテインを扱えるかどうかだけでもわかることになる。
そう思って尋ねるが、ニーナは困ったように片眉を上げただけだった。
「わたしには、わからない。わたしが感じることが出来るのは『精霊』であって、人間じゃないのよ」
「そっか……」
「それならいっそ、かなりの魔力を持つ人間の方が見分けられるんじゃないかしらね。同じ人間同士、そして属性を操る魔術師として。……でも」
がっかりする俺に、ニーナが思い出すような目つきをしながら言葉を続けた。
「カズキは、ピアスの威力で火系攻撃を受けないって言ってたわよね」
「うん。……多分、だけどね」
「だとすれば、火性の適性はあると思う」
「本当？」
「ピアスの持つ力を引き出せているってことでしょう。そういう特性を持つ魔剣の鍵ならば、適性のない人間には力を発揮出来ないんじゃない？」
なるほど……。

『鍵』の力を発動出来ているんだから、俺が魔剣の方も操れる可能性はないわけじゃないわけか……。

「……もう。それにしても、何で今まで黙ってたのよ」

やがてニーナがしかめ面で、拗ねるように唇を尖らせる。怒るかと思っていたから、少しだけほっとして俺は小さく舌を出した。

「ごめん。別に隠してたわけじゃないんだけど。そうだと思いたくなかったってのが、本音かな。確信がなかった」

「今はあるわけ？」

「ないよ。さっきも言った。だけどかなりの確率だと思ってる」

「……そう」

「ヴァルト副将軍が、興味を示した」

何となく、カレヴィさんの家がある方向に目を向ける。

もちろんその方向にはそっけない壁があるだけで、何も見えない。

「どういうこと？」

「ヴァルト副将軍がレーヴァテインの話をしてくれた時、俺のピアスを見せてくれって言ってた。全くただのピアスだと思うなら、見る必要はないと思わないか」

「そうね……」

「俺の誤解かもしれない。だけど俺は、ヴァルト副将軍に警戒をしてるってのが、本音。彼がレーヴァテインを欲して、『失われた聖書』もなしに『鍵』の存在を知ったのは確かだ。もし彼が『鍵』を目の前にしたら、どんなことをしてでも欲しがるんじゃないかと思った。ツェンカーをトラファルガーから守りたいと思うのならそれは妥当だとも思うし、ドラゴンクローラを飼育する要塞の責任者のひとりとして仕方がないとも思う。だけどその反面、彼個人の執着にも感じられる。いずれにしても、ヴァルス王国の宝物庫に保管されていた品を……それも、強力な魔剣の鍵を、安易に渡すほどの信用がまだ出来ていない」

「そう……」

ふうっとニーナがため息をつきながら、組んだ足を組み替えた。

繊細に整った秀麗な顔に、考え深げな色を滲ませる。
「何となく、嫌な匂いがするのよ」
「嫌な匂い？」
「そう。……何がどうとは、はっきり言えないのだけど」
「ヴァルト副将軍？」
「嫌なことが起きそう。彼を見て、何となくそう思ったわ。……言わなかったけど」
そう言えばニーナ、「誰？」って聞いた時、ちょっと嫌な顔をしていたっけ。
「ニーナの『嫌な感じ』って、当たるからなあ」
「当たらないで欲しいわ、そんなもの」
「だって俺がサキュバスに憑かれる前もそんなよーなこと、言ってたし」
「だけど、具体的にわからなきゃ、対策のしようがないじゃないのよ」
「そりゃそうだ」
頷いて、一瞬何かが記憶を掠めた。
気を引き締めなきゃって思った感覚と、それからなぜかナタのどこか押し殺したような悟りきったような表情を思い出す。
――命を失った後では、何もしてあげられないんだ……
「……わかっていても」
「え？」
「わかったとしても、どうにもならないことってのも、あるのかな」
ぽつんと言った俺の言葉に、ニーナが訝しげに首を傾げた。
「何よ、それ」
「わかんないけどさ」
「運命論は、好きじゃないわね」
不可解な顔をしていたニーナは、不意にきっぱりと言い切った。
「決まっているから仕方がないなんて、努力を放棄してるだけじゃない。甘えよ。決まってなんかないわよ」

ニーナらしい強気な発言に、俺は小さく笑った。
何だろう。胸に落ちた小石のような不安感は。
「……そうだよね」
いつか、予言されたような気がする。
不吉な未来を。
その時から既にそう決まっていたかのように、厳かに。
それが何かはわからない。
わからないけど。
――変えられるんだろうか。
（それが何なのかわかれば……）
変えられるかもしれないのに。
「そう言えば、ユリアは？」
なぜか胸にこみ上げた焦燥感にそんなことを思っていると、ころっと声のトーンを変えてニーナが言った。
ぼんやりしていた俺は、その言葉で顔を上げた。
「え？　……さあ。部屋だと思うけど。何で」
「ううん。最近、ユリアとカズキの雰囲気がイイ感じに見えるから」
そう優しく微笑まれ、妙にどぎまぎする。顔が火照った気がして撫でながら、思わず視線をそむけた。
「べ、別に……。普通だろ……」
「そりゃね。男がこんな奥手じゃね」
うるさいよ。
思わず睨むと、ニーナはかみ殺したように笑った。思い切り馬鹿にされてる感がある。
「いーわね、何か。やってることが若くて」
「あのなぁ……」
抗議の色を滲ませて言ってやるが、ニーナはどこ吹く風と受け流した。
「ま、頑張りなさいな」
「俺が頑張っちゃっていーわけ？」

「え？　どういうこと？」
婚約者がいるだろ？　あんたらの知人だろ！？
「レガードはどうなんだよ」
ふてくされて言ってやると、ニーナは複雑な、困ったような笑みを浮かべた。
「それをわたしに聞かないで。わたしが何て答えたところでユリアはレガードの婚約者だし、カズキは自分の世界に帰るんだから」
「だったら変にけしかけるなよな。無意味じゃないか」
「……そう？」
俺の抗議の言葉に、思いがけずニーナが真顔で問い返した。
ので、つい二の句に詰まって黙る。構わず、ニーナが続けた。
「限られた時間だとしても、想いが通じ合えることに、意味はない？」
「……」
「今この刹那だけでも良いからと、考えたことはない？」
「……」
ない、と言えば、そりゃあ嘘になるけど……。
そう思ったまま黙ってニーナを見ていると、そこにどこか自嘲的な色が含まれているような気がした。
そう思ってから、気づいた。
――シサーとニーナは、生きる長さが違うことに。
同じ世界の住人じゃない、俺とユリア。
だけど、同じ時の流れじゃないシサーとニーナもまた……異世界の住人同士なのかもしれない。
いつだかのシサーの言葉を思い出す。
――異種族なんだよ。似て見えたってな。
「ニーナは、そう思った？」
「え？」
「今だけでも良いからそばにいたいって。そう、思ったんだ？」
俺の問いに、ニーナは少し寂しげな笑顔を覗かせた。

「思ったから、そばにいるのよ」
「……」
「彼の一生は、わたしにとっては一瞬だわ。彼の死が、わたしより先に来るのは、ほぼ確かなことだわ」
「……うん」
「それを見るのが嫌。だから離れようかとも思ったわ。だけど、出来ないの」
「……」
「あの人は確かに、わたしを永遠のような時間の中に置き去りにして、どこかに行ってしまうのに」
それなりの時間をニーナとも過ごして来たと思うけど、こんな表情を見せる彼女は見たことがない。胸を突かれた。
「次に生まれるとしたら……」
かたかたと、風が窓を揺らす。
「次に生まれるとしたら、彼と同じ時の中に、生まれたいわ……」
寂しげなニーナの呟きに、強くなった風の音が、重なった。
想う人に想われて、同じ世界の同じ時の中、同じ景色を見て生きることは、思っている以上に奇跡的な幸福、なのかもしれな……。
――ガシャァァンッ!!　……ガシャンッ!!
ぼんやりとニーナの秀麗な顔を眺めていると、突然耳を劈くような破砕音が階下から聞こえてきた。立て続けに、二度。
一瞬ニーナと顔を見合わせ、次の刹那、俺もニーナも弾かれるように立ち上がる。
「何だッ!?」
「下から聞こえたわね」
まさか『地上の星』が……!?
部屋を飛び出すと、ちょうどユリアが別の部屋から顔を覗かせたところだった。……良かった。とりあえずユリアに何があったわけでもないようだ。
「ユリア」

駆け寄ると、部屋から完全に廊下に出てきながら、ユリアが俺を不安げに見上げた。その周りを、レイアがふわふわと舞う。
「何の音？」
「わからない。下だな。ニーナ。ユリアのそばにいて。俺、見てくる」
「わかった」
腰の剣に手をかけながら、階段を駆け下りる。階下では、リントがやはり廊下に立って不安げな顔をしていた。
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」
ごめん、不安なのはわかるんだけど、言ってることがわからない。
「＊＊＊＊　＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」
リントが何か言いながら、廊下の奥を指差す。あっちの方から音がした、と言うようなことだろう。
頷きながら物音がした方へ行ってみると、廊下についている窓が盛大に割れて廊下にガラスが散らばっていた。
良く見れば、通路を挟んで対面している窓も割れている。二度続いた正体は、これだろう。だけどこっちはガラス片がほとんど落ちていない。
「侵入者……？」
いや、違うな……。
だったら姿がないのはおかしいし、窓の割れ方を見ても、どちらかと言えば何かが割れて突き抜けたって感じ……まさか。
嫌な予感がして、剣から手を放すと『何かが突き抜けて出て行っただろう窓』の方へ近づく。
割れた窓から外を覗く。俺の予感は案の定、当たっていた。
庭にあるのは、ジークの通信装置。地面に転がっているのは、ジークが持っていった玉を仕込んだ『送信用ボックス』。
（……ジーーークゥゥゥゥ……）
頼むよ……。
間にあるはずの障害物は、ぶち抜いて進んで来たのか？

危ないこと、この上ないじゃないか……。
手すりにしがみついたまま、呆れ果てても言えないでいると、状況を理解したらしいリントが、何か言いながら俺の肩を軽く叩いた。かえって力が抜ける。
「カズキ？　どうだった？」
不意に上の方から、ニーナの声が響いた。
余りに馬鹿馬鹿しくて、どう説明すべきかわからない。
「平気。何でもなかったから、降りてきて大丈夫だよ」
とりあえずはそれだけ伝えると、やがてニーナとユリアも降りてきた。その間に窓を開けて、庭に降りる。
箱を開けると、中から折り畳んだ紙が出てきた。開いてみるが、もちろん読めない。
「何よ？　どうしたの」
ヴァルス語だってことはわかるんだけどなあ。
そう思いつつ、出入り口に回って外へ出てきたユリアとニーナに紙を手渡した。
「ジークだよ。窓を2枚ぶち抜いて、書簡が戻って来た」
俺の言葉に、さすがにニーナが呆れた顔をした。
「ポンコツ……。手荒なこと、この上ないじゃないの」
「まったくだよ。何が起きたのかと思った。……何だって？」
「……」
俺に尋ねられて紙に視線を落としたニーナは、そのまま軽く眉を顰めた。ユリアも横から覗き込んで、首を傾げる。
「何？」
「『フリュージュに到着しました』」
「『何とか仕事を見つけられそうです』……？」

第3部第1章第24話　ｒｅｓｏｒｔ　後編（1）

「シサー！！」

ロドからフリュージュまでは、平穏なものだった。魔物たちもトラファルガーを恐れて息を潜めているらしい。

街の出入り口のところには広く開かれた門があって、待合い所のようなスペースがあった。

そこにシサーの姿を見つけ、ニーナが朗らかな顔で駆け寄る。

「よう。無事ついたな」

応えるシサーは、預けていた壁から背中を起こしてこちらに向かって歩いてきた。装備をいっさい身につけない軽装だ。もちろん帯剣だけはしてるけど。

「キグナスとジークは」

「宿で待ってる。お前らがいつ到着するかわかんねぇからな。交代で待ってんだ」

「そっか。ありがとう」

携帯メールって何て便利なんだろう。

俺たちを促して歩き出しながら、シサーが小さく微笑んだ。

「書簡は無事届いたみてーだな」

「……ジークに『実用化はしばらく先にして』って言っといて」

「自分で言ってくれ」

余りに手荒なシサーたちからの書簡が届いたのは、今から3日前のことだ。

『仕事が見つかりそう』と言う謎の文面と共に、フリュージュへ向かうよう指示されていた。当面、火急の危険はなさそうだと判断されたことと、離れ離れの間にトラファルガーにどちらかが襲撃を受けてはたまらないからだ。

ただし、ユリアは変装するよう追記されてはいたけれど。

「ま、午後になる前に着いてくれて良かった」

「何？　午後に何かあるの？」
「仕事が決まったって言ったろ？　午後には行かなきゃなんねえんだ」
「それ、何なのよ」
ニーナが拗ねるように唇を僅かに尖らせる。
「市政が、トラファルガー対策に義勇兵を募ってる。人間の数自体が減ってるせいで、足りてねーんだろう」
「え、まさか」
「応募した。入隊試験は、一発だったぜ」
にっと得意げな表情で親指を立てるシサーに、思わず呆れる。
そりゃあそうかもしれないけどさ……。
「そんなんでさ……ルーベルトが首を縦に振ったって、ヴァルスへの援軍なんか集まるの？」
「対人間なら、もちっと何とかなんだろう」
みんな、とにかくドラゴンと戦うのは嫌なようだ。
俺だって嫌なんだが。
「にしたって……何だってそんな……」
「懐に入るにゃ一番早ぇだろう。まあ、そう簡単に頭に近づけやしねぇだろうが、情報は少しは入りやすい。せっかくだからツェンカーの金で腕を鍛えて、適当なところで脱退するさ」
鬼。
「静かね……」
シサーについて歩きながら、ユリアがぽつりと言う。
長い髪は束ねて、フードのように深く頭から被ったマントにすっぽりとくるまっていた。
身なりもかなり質素に見えるし、知らない人から見れば一見王女様だとはわからないだろう。
「ここも、人が減ってるんだろうね」
フリュージュは、全体的に灰色っぽい街に見えた。
道路が石畳のせいもあるだろうし、建物は石材と木材を混合して

るみたいだ。
そしてここも、首都と言うことを考えれば驚くほど人通りが少なかった。
「あと、カズキに頼みたいことがあってな」
「俺に？　何？」
出来ることなら良いけど。
シサーが答えかけて、ふと体の向きを変える。向かった先には宿屋らしき建物があった。
「あ、そうだ。もう、宿を借りなくても良いかもしれない」
「え？」
「そうなのよ。詳しくは後で話すけど、別宅を貸してくれるって人がいてね……」
宿の中も、人が少なそう。
冴えない顔色の店番が、入ってきた俺たちにちらりと視線を投げかけた。
だけどそれきり、何も言わずに再び俯いてしまう。
「奥だ」
「俺に頼みたいことって何？」
「部屋でまとめて話してやるよ。そう慌てなさんなって」
案内されたのは、廊下の一番奥の部屋だった。
ノックをして返事を待たずにドアを開けると、床に座り込んだジークはまた相変わらず怪しげながらくたをいじっていて、キグナスは窓際の椅子でうつらうつらしていた。
「あ、おかえりなさーい」
ジークが新妻よろしく笑顔で迎える。部屋の中に入りながら、俺は首を傾げた。
「キグナス、ロッドは？」
ほとんどキグナスと一体化しているロッドが見あたらない。俺の言葉に、キグナスが眠そうな目を瞬いた。
「そこ」

「ふうん？　何でこんなこと？」
キグナスが示したのは、布にくるまれた長い包みだ。壁に立てかけられているそれを手に取って尋ねると、シサーが代わりに答えた。
「魔術師って、目立つだろ」
「ああ……まあね」
そりゃあ別に、誰も彼もが振り返るとか、街を噂が駆け回るってわけじゃないけど、一般人に比べれば多少は目に留まる。
少しでも目立ちたくないから、カモフラージュってわけだ。
「とりあえずは、お互いの報告といこう。あまり時間がない。そっちの話を先に聞かせてもらえるか」
「うん。フェティール要塞に行ってきたよ。ドラゴンクローラも、見せてもらった」
「どうだった。実用性は、ありそうか」
真ん中のベッドに腰掛けながら首を傾げる。
「それは、俺にはわからない。だけど、この前のトラファルガー……カーマイン襲撃の時は」
「ああ」
「１０騎投入して、３騎しか戻らなかった。いずれも、重傷だ」
「……」
シサーが少し複雑な顔をして、手近な椅子を引き寄せた。横向きに座りながら、軽く片目を眇める。
「初戦だろう？」
「多分」
「なら、ある程度は仕方がねえだろう。騎手の方だって戦い方が良くわかってなかったろう？　とりあえず実戦経験者がゼロから３人にまで上がったってのは、進歩だろう」
「ま、ね……」
それから、俺が聞いた限りのドラゴンクローラの様子や、フェティール要塞についてのことをシサーたちに伝える。
シサーはしばらく無言で俺の言葉を聞いていたけれど、ヴァルト

副将軍のことやレーヴァテインの件（くだり）になると、やや顔色を変えた。
「……いずれにしても、フレザイルに行くべきだと思ってるんだ。俺は」
「ユリアを連れてか？」
シサーが痛いところをあっさりと突いた。名前が挙がって、ユリアが目を見開きながら俺とシサーと見比べる。俺も、ため息混じりに答えた。
「そりゃあ……そうするなら、いろいろと考えなきゃならないとは思ってるけど」
「と言って、それほど悠長に構えている余裕もねえな」
「うん。……だけど」
シサーの言葉はその通りなので、頷くしかない。頷きながら、尚も主張した。
「ツェンカーでトラファルガーを迎え撃つだけじゃあ、きっと足りない。レーヴァテインが手に入るなら、それに越したことはないよね」
「そうだな」
「だったら、フレザイルに仕掛けた方が、街の被害は少ないと思う」
「それも、その通りだ」
「だから、平行線がベストだと思う。ユリアはタイミングを見てルーベルトと交渉を持って、一方ではフレザイルにレーヴァテインを取りに行く」
「ルーベルトと接触を持つのがそもそも容易じゃない」
「……」
短いシサーの意見に、俺は押し黙った。
シサーが片手で前髪をかき上げながら、浮かない顔つきで続ける。
「ルーベルトとユリアが接触する時点で危険が起こりうる。だったらユリアのそばには、必ず誰かをつけておかなきゃならない。とは言え、俺たちはここにいる人間が全部だ。トラファルガーは、全員が向かったところで勝てるかどうかなんかわかりゃしない。どう人

間を割り振るべきか、それを一歩間違えれば」
「……」
「全滅だな」
やっぱり、無理だろうか。
やるんだとしても、順番に片付けていくべきなんだろうか。
まずは、ユリアとルーベルトが会う算段をつける。交渉を持ちかけ、ある程度話がまとまったところで、トラファルガー対策に乗り出す。
だけどそんなふうに、うまくいくかどうかわからない。何がわからないって、トラファルガーがいつどこを襲うかがわからないのが、痛いんだ。
相手は魔物だ。こちらの都合なんか考えてくれやしない。そうしている間にトラファルガーがあちこち襲撃したら、手遅れになりかねない。一刻も早く打開しなきゃ、話が進まないどころか霧散する。
「じゃあ、やっぱり無理なのかな」
「とも言わねぇけどな」
考え深げな表情を浮かべて、シサーのシルバーの瞳が天井を睨んだ。
「ルーベルトと直接ユリアが会う算段をつけるのは、今の段階では難しい。『地上の星』がどこからどう狙うかわからないからだ」
「うん」
「だけど、ルーベルトの配下の人間なら、わかんねぇぜ」
「え……？」
どういうこと？
首を傾げると、シサーが天井から視線を俺に戻して、言葉を続けた。
「地位が下がれば、接触は取りやすくなるんだ。義勇軍に入る目的は、そこにもある。何とか、ルーベルトに打診してくれそうな人物に、当たりをつけてみるよ」
それからシサーは、窓際のキグナスと俺とを見比べた。

「それじゃあ、こっちの話をしようか。……さっきも言ったが」
「うん」
「カズキ、それからキグナスには、頼みたいことがあるんだ」

◆　◇　◆

「キグナスー。何してんの？　追いてっちゃうよー」
大声を上げながら玄関のドアを開けて、外に出る。
途端、冷たい風が全身に吹きつけてきて、思わず俺は建物の中に舞い戻った。
シサーたちが宿泊していた宿を引き払って、訪れたのはヴァルト副将軍がフリュージュに持つ別邸だ。
確かに俺は、ヴァルト副将軍に警戒心を持っている。
だけど、この先どのくらいツェンカーにいることになるのか良くわからないし、宿代だって馬鹿にならない。警備の儚い宿では、ユリアを置いておくのも心配だ。
ヴァルト副将軍が何にせよ、狙っているかもしれないのは俺のピアスのはず。ユリアがヴァルス王女だとは気づいていないはずだし、少なくとも下手な宿にいるよりは、軍人の別邸にいる方がユリアの安全は確保出来ると思われた。
と、言うわけで、ヴァルト副将軍の紹介状を管理人さんと言うか執事の人に渡して、いけしゃあしゃあとお邪魔している。
「待ーてよお。……あれ？　お前、今外に出て行かなかったか？」
「寒かったから、戻って来た」
「軟弱だなあ～……ひぃぃぃ。寒ぃッ」
フリュージュに先行したシサーたちは、まずはジークの旧友である武器商を頼り、更に彼女を介してカレヴィさんの知人に会わせてもらい、紹介状を渡して情報収集をしたらしい。
そして、『地上の星』の存在は武器商の間では今有名であることと、彼らの警戒対象がやはりヴァルスにあると言うことに裏が取れ

た。

更に言えば、『地上の星』は恐らくほぼアルディアの元支持者たちで構成されており、アルディア自身は何の関係もないだろうと言う意見は、カレヴィさんと一緒だったと言う。とすれば、このセンは、ほぼ信用して良いかもしれない。

いずれにしても、ユリアとルーベルトが、何の策もなしに接触するのは、確実に危険だと言うことだ。

そうは言っても、ルーベルト本人の意見を聞かなきゃ話にならない。こちらの意図も、正確に伝えなきゃならない。

仲介に入った武器商の女性の紹介で対トラファルガーに向けての義勇軍編成で募兵をしていると聞いたシサーは、早速応募をしてみたと言うわけだ。

早くもシサーの腕前は傭兵隊長にいたく気に入られているらしく、シサーは、彼からルーベルトへ続く人間のルートを辿っていこうとしている。

一方で、俺たちには俺たちで、その間にすることがあった。

――アカンサに行ってみてくれねぇか？

――俺は、義勇軍で情報を集めて、場合によってはルーベルトと接触を図れそうな人間を探してみる。その間に、ジークはカレヴィのツテを当たって情報収集だ。ニーナとレイアは、ユリアのそばにいろ。ユリアは、動くな。

第3部第1章第24話　ｒｅｓｏｒｔ　後編（2）

その言葉に従って、俺とキグナスは翌日、アカンサへ向かうことにしている。

アカンサはフリュージュから半日もあれば行けると言うことで、要は単に偵察だ。

カレヴィさんいわく、『地上の星』は本拠点をアカンサに置いている。

最初は憶測でしかなかったその言葉は、俺たちがロドにいる間に、ほぼ確かなものになった。カレヴィさんが調べさせていた情報に、戻りがあったからだ。

その戻り情報の中に、『地上の星』の見分け方のひとつとして、特殊な合図があるらしいと言う情報も手に入った。

左手を広げ、右の人差し指と中指をブイサインのように左の掌につき立て、次に、開いた右手の掌に左手の拳を押し当てる。これを、一瞬で素早くやる。同胞なら、同じ仕草を返す。

この合図が確かかどうかはわからないけれど、相手が同胞かどうかの区別が良くつかない時、そしてそれを判断したい時、彼らはその仕草を見せることがあると、一部の武器商の間では言われているようだ。

ま、アカンサが本拠点かどうかは置いておいても、ほぼ確実に出入りはしているだろうと思われるので、少なくともアカンサの様子だけは見てみる必要はある。

とは言ってもシサーは義勇軍に入ってしまった手前、そっちに行かなきゃなんないし、なので仕方がなく俺とキグナスと言うゴールデンコンビで行くことになったわけだ。……何がゴールデンって、頼りなさにおいて。

フリュージュからは、馬車も出ていると言う。時期が時期だからかなり本数は少ないみたいで、逃すとまた明日まで待つか徒歩で行

くしかない。
それは嫌だから早めに出ようとしているんだけど、キグナスがもたついている。
今の状況は、そんなとこ。
「あ、しまった。ロッドをくるんでる袋、忘れてきた」
「……早く取ってきてよ」
「おう」
呆れる俺の言葉にキグナスが体を翻すと、俺はもう一度外に出てみた。……ひ～。寒いな、やっぱり。朝と言ってもまだ早い。塗り潰したみたいに息が白い。
（あれ？）
いつまでも建物の中にいたって話が進まないので、渋々外に出てみると、ヴァルト副将軍邸のすぐ前の通りに荷車が止まっているのが見えた。
良く見ると、その前で男がしゃがみ込んで、何やら四苦八苦している様子。察するに、後輪が外れたらしい。
「大丈夫ですか」
あ、言葉、通じないんだった。
言ってから気がついて口を閉ざすと、男が俺の声に顔を上げた。
男……って言うよりは、少年だ。俺より年下かな。そんな感じのあどけなさが残った顔つきをしている。
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊」
ごめん、しゃべれないし、わからない。
門を開けて外に出ながら、頭をかく。それから、身振り手振りで、代わるように示した。少年が素直にどく。
俺、こういうのを直すのって結構得意なんだよな。機械いじるのとか割と好きで、子供の頃はラジコンとか自分で分解して組み立て直したりしてたし。
俺の自信はあながち的外れなものではなかったらしく、外れた車輪は無事元に戻すことが出来た。試しに、軽く車体を持ち上げて嵌

まり具合や回り具合を確かめていると、背後からキグナスの声が聞こえた。
「お待たせぇ～。……どした？」
「や、車輪が外れちゃったみたい。もう直った」
「へえ？　お前、意外と器用だなあ」
「ん。多分キグナスよりは」
「うるせえよッ」
それから少年に向き直って、指でオッケーサインを作ると笑ってみせる。少年が、感激したような表情を浮かべて、勢い良く頭を下げた。
「＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊！！」
……ま、正確にはわからないけど、多分お礼なんだろう。
「どう致しまして」
こっちの言葉も通じてないだろうが、一応答えると、俺は少年に手を振って、キグナスと歩き出した。
「無事つけるかなあ」
「大丈夫だろ。フリュージュから次の停留所がアカンサだってんだから、乗って、次に止まったら下りりゃいいんだよ」
「ま、ね……」
言葉のわからない場所で、しゃべれない人間だけで未知の場所を移動するのはかなり不安感を呼び起こす。
「とりあえず……乗合馬車の待合所に辿り着けるかが、心配だなあ……」

「ここ、どこ？」
「えぇとなぁ……あ、これだろ？　さっきいた通りがこれか？　んでぇ、右に曲がったからぁ……」
「面倒臭い。貸してよ」
「俺じゃあ頼りないってのかよ」
「頼りない」

心配は杞憂だったらしく、何とかアカンサまで到着をすることが出来た。

出来たのは良いけど、これまた言葉もわからずにアテもなく偵察をすると言うのは、ひどく無謀な行為だったりするわけで。

俺とキグナスは、乗合馬車を降りてから、片手の地図を頼りにアカンサをうろうろしていた。

と言っても、言葉が話せない俺たちのこと、町の人に会ったところで情報収集は出来ない。基本的には、地理的な視察だ。

「あ。あっちの道じゃねえ？」

「馬鹿、勝手に行くなよ……」

俺とキグナスに期待されていることは、大したことじゃない。

言葉もわからない異国の土地。危なっかしさがチャンピオンクラスの俺たちに、大したことが出来るはずもない。

シサーから託されたのは、街の様子を見て来て欲しいってことと、出来れば『人が多数出入りしているような場所を押さえて欲しい』ってことだった。それも別に必須じゃない。出来ればってだけ。

まあ、一応はそこに焦点を絞って、人が多数出入りしているような場所だったり、何かをいろいろ運び込んだり運び出したりしていても不自然にならなさそうな場所を探しては地図にチェックをする。

「キグナス、待ってよ」

地図ごと路地に入ってしまったキグナスを追って、俺も体を翻す。小走りに背中を追おうとして、ふと視界の隅に入ったものに、足を止めた。

（ヴァルス語……？）

路地沿いにある、バーのような雰囲気の小じんまりとした店のガラス窓に、ヴァルス語で文字を書いたびらが張ってある。

いや、イリアス語と併記してあると言った方が正しいかな。多分。

そりゃあ、イリアス語がヴァルス語になったところで、俺には読めないって点じゃあ一緒なんだけどさ。

でもキグナスなら、これは読めるはず。

……ま、雰囲気から考えるにわざわざ読んでもらう必要があるかと言うと……そりゃあ、別になさそうなんだけど。

しーかし、言葉ってのは話すより読み書きする方が難しいもんなんだな。

ってゆーか、別もんなんだろうな。

これだけ話せるようになってんのに、読むも書くも相変わらず俺には出来ない。

キグナスを忘れ去ってぼーっと張り紙を眺めていると、突然肩を軽く叩かれた。

キグナスだと思って何気なく振り返った俺は、予想に反して見たこともない男だったので、きょとんとする。

「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」

男が何か言った。もちろんわかりはしない。

年の頃は、俺より少し上くらいだろうか。くすんだ草色と言うか、灰色がかった淡い緑の髪を肩くらいまで伸ばし、何となく軽薄そうな、人なつこそうな雰囲気だ。

俺の様子を見て取ったのか、藍色の目を瞬いて、おどけるように眉を上げた。

「何だ。言葉、わかんないのか」

何だ。ヴァルス語しゃべれるのか。

「そんな張り紙見てっから、仕事、探してんのかと思ってさ」

『そんな張り紙』？

もう一度見てみるが、何度見たってもちろんわからない。

だけど、こう言うってことは求人か何かだったってことか。

男に答えようと口を開きかけたところで、ようやく俺の不在に気づいたらしいキグナスが少し先の路地から戻って来るのが見えた。

軽く片手を挙げると、キグナスは俺と男を見比べながら近づいてくる。

「カズキ。……どしたんだ？」

「ううん。……何？　仕事を紹介してくれるの？」

もう一度、男に向き直る。
「探してんならちょーどいーやって思ったんだけどな。どうなんだ？　探してんのか？」
どうすべきだろう。
返答に詰まった俺が僅かに視線を彷徨わせると、ふと、男の手が、奇妙な動きをした。
（――！？）
開いた左手に、つき立てた右の二本の指先。次に、開いた右手に押し当てた、左拳。
何気なく、素早く、そして何食わぬ顔でにこっと俺に笑いかける。
「……うん。そう」
――――――『地上の星』……！？
「仕事を、探してるんだ」
反射的に答えていた。
やばいだろうか。
やばい、匂いはする。
何気なさを精一杯装いながらも、鼓動が加速して口が渇いた。あの合図を見た瞬間の俺は、どうだっただろう。無関係の人間なら、気づかないか首を傾げるかのどちらかでしかないだろうが、俺の反応はその合図を知っている者の反応になっていなかっただろうか。
緊張する俺に、男がなつっこい笑みを浮かべ、両手をポケットに突っ込んだ。
「この時期のツェンカーで仕事探したあ、酔狂だなあ。国外人だろう？」
「……そう。ロンバルト」
ヴァルスの名を口にするのは、本能的に避ける。
俺はこの世界で、国ごとの人の外見的特徴の区別がつかないから、俺にどこと偽るのが可能なのかが良くわからない。
だけど、元々ロンバルトの第2王子を模倣しているんだから、ロンバルトと偽って間違いはないはずだ。少なくとも「日本」と答え

るよりはましだろう？
　案の定、男は俺の言葉をすんなりと受け入れた。
「ロンバルトからわざわざツェンカーまで？　そりゃあますます物好きだなあ」
　男の目つきや声音に、探るような色は感じられない。少なくとも、俺がわかる範囲では。
　大丈夫、だったのかな……？
　キグナスは、俺の傍らで黙って成り行きを見ている。
　俺は頭の中で、不自然じゃない理屈を考えた。
「ロンバルトは今、俺が就けるような職がないんだ」
「へえ？　どんな仕事を探してる？　傭兵職なら困らないんじゃないか」
　男が、ちらっと俺が帯剣しているのを見て言う。俺は肩を竦めてみせた。
「強くないんだ。入隊試験で落ちる。ツェンカーならトラファルガー対策で募集してるって聞いたけど、それも入隊試験で落ちちゃった」
　俺の言葉に、男は笑った。
「弱そうだ」
「うん。強くなりたいんだけど。軍に入れば訓練してくれるでしょ。だけど入れてくれない。何か仕事、ある？」
「腕が立つならないでもないけどなあ」
　だから立たないんだってば。
　……何とか、この男から聞けることはないだろうか。『地上の星』なら、不用意な接触は危険かもしれないとわかってはいる。
　だけど、せっかくのチャンス、このまま逃すわけにはいかないだろう。
「ま、日雇いで良けりゃ、都合してやらないでもないな」
「日給？」
「仕事が終わりゃあ、その場で賃金を支払ってやるよ。荷運びなら、

出来んだろ？」
　キグナスと顔を見合わせる。
「やる」
「おーけぃ。ついてこいよ」
「ありがとう。運ぶって、何を運ぶの？」
　歩き出した男の背中について行きながら尋ねる俺に、キグナスも続いた。男が振り返って、少し鋭い目を、細めた。
「カナモノだよ。中身は、聞かねぇ方が良い。……実はさ、予定してた運び屋が逃げやがって、ちと焦ってたんだ、俺」
「え？　どういうこと？」
「荷運びの日雇いにその辺の浮浪民のガキを何人か使ってんだが、逃げやがってよ。ちょーど探してたんだよ」
　言いながら、舌を出して笑う。
「最初っからお前らだってことにしとけよな」
「おっけぃ。キツいんだ？」
「本当に運ぶだけだ。倉庫に積んである木箱を、別の場所に移す。ちと重いがな。脳味噌はいらねー。……いや、深く考えねー方が、身の為だ。脅しじゃないぞ。忠告だぜ」
　不穏な空気だ。
　真っ当な仕事じゃないのは、まず間違いない。
「いーよ、何運ぶんだって。とりあえず今日のメシが食べれれば、俺はそれでいーんだから」
　頭の悪い、金に困ったガキだと思ってもらおう。
　身なりにしたって、俺もキグナスも今は目立ちたくないから大した服装をしていない。
　演技が上手くいっているかはわからないけれど、軽い口調を心がけて軽く肩を竦めてみせた。俺以上に演技なんか期待出来ないキグナスが黙りこくってるのは、妥当だろう。
「それが一番良い。それが一番長生き出来んだ。ま、俺もしょーがねーから手伝ってやってるだけなんだけどな。それこそ、金の為だ。

しょうがねぇやなあ」

第3部第1章第24話　ｒｅｓｏｒｔ　後編（3）

どうやら男は、俺とキグナスにさして警戒をしていないようだ。
ここに来て俺は、ようやくそのことを信じられる気がして、ほっとした。……ま、俺もキグナスも、どっちかって言えば騙すよりは騙される風貌だしな。
シサーのように「デキる」空気感がないってのは、逆にこういうところで役立つものだ。……いや、実際デキないですが。
以前、ジフに、ギルドで対面した時に、俺とシサーに対するジフの顔つきが違ったことをふと思い出した。余り喜べることじゃないが、とりあえずは喜んでおこう。
「へえ？　お兄さんも、雇われ？」
「雇われってのともちと違うけどな」
「ふうん？」
首を傾げて、前を歩く男の背中を見上げていると、柔らかく吹いた風がふと、彼の髪を僅かに巻き上げた。
一瞬だけ露になった耳元に、背筋を衝撃が駆け上がる。
「……ねえ。ひとつ聞いても良い？」
男が微かに振り返る。
「何だ？」
「同じイヤリングをしてる人を見たことがある」
『マキビシ』のようなイヤリング。
どうしてこの男もしている？
顔だけ微かに振り返った男の表情が、止まる。
「へえ？　どこで？」
「マカロフの乗合馬車。話してたおじさんの耳についてた」
メイアンで『紳士倶楽部』と合流した男も。
……そして。
「何か意味が、あるの？」

「さあね？　流行、ってやつだろう？」
男の横顔が、にやっと笑った。
（――ヴァルト副将軍……）
ヴァルト副将軍は、『地上の星』……！？

◆　◇　◆

「シサーッ！！」
「カズキッ！！」
なぜかアカンサで日雇いバイトをする羽目になって小金を稼いで一泊した俺とキグナスがフリュージュに戻ると、義勇軍の訓練を終えて帰ってきたシサーの物音を聞いて俺は転がるように部屋を飛び出た。
相変わらず、ヴァルト副将軍の別宅だ。
アカンサから帰るなり引き払うなんて不自然な真似はもちろん出来ないので、ともかくもシサーに相談しようと思って待ち構えていたんだが、対するシサーもなぜだか受けて立つ勢いだった。
「え、何？　どうしたの？」
「お前こそどうした？」
互いが互いの剣幕にびっくりして、妙な間があく。
それから、伝えたい情報をお互い持っていることを理解し合って、シサーが低く「表に行こう」と囁いた。
「あ、うん」
ヴァルト副将軍の宅内で「あの人、『地上の星』だよ」とは俺もさすがに言えないので、その言葉には賛成だ。
上の階にいるユリアたちにも声をかけて、執事の人に外で食事をする旨を伝えて表に出ると、歩きながらまずシサーが言った。
「ナタリアが襲われたぞ」
「――えッ！？」
全員、揃って驚いた声を上げる。

「ナタリアって……トラファルガーに？」
「もちろん。ナタリアのリンガーが、壊滅だそうだ」
どこ？
俺の表情に、目を見開いていたニーナが補足してくれた。
「ナタリアの東北端の町よ。ナタリアでは最もフレザイルに近い地域にあるわね」
「そこが、壊滅？」
「ああ。ツェンカーから一旦それてくれたのはこっちにしちゃあラッキーだが、町が壊滅となると喜んじゃいられねえな」
「あッ……」
その言葉を聞きながら、何となく思いついた考えに、思わず声が上がった。
みんなの視線が俺に集まる。
「何？」
「いや……。じゃあ、まさかと思うけど、継承戦争から、ナタリアは……」
「今んとこはまだ、離脱したって話は聞いていない。だけど、可能性はかなり高い」
「そうだよね……」
自国がドラゴンに襲われてるってのに、他国の侵略をしている場合じゃないだろう。
喜んじゃ悪いが、ヴァルスの立場からすれば敵国が減るってことは喜ばしい。エゴイストと言わば言え。
「それについては、追い追いツェンカーにも情報が入ってくるだろう。今のところは、確かなことは言えない」
「うん。……シサーの話って、それ？」
「いや」
言いながらシサーは、足を郊外の方へ向けた。飲食店が点在する辺りからは、どんどん逸れていく。
こういう状況下で辛うじてやっている数少ない店は、当然客も少

ない。そういう店で話をすれば、どうしたって話が筒抜けになる可能性がある。

誰かに聞かれる可能性を摘む為に、店で話す気はないと言うことだろう。

シサーが足を止めたのは、人気のない公園の広場だった。

遠く海の彼方には、氷の大陸が僅かに見える。

「糸を掴んだ。……と、思う」

広場の真ん中近くまで足を進め、シサーがおもむろに口を開いた。

隠れる場所も何もありゃしない広場の真ん中だから、誰かに盗み聞きをされる心配もない。

公園自体に人の気配もないけれど、それでもシサーは殊更低く、告げた。

「ルーベルトに直接繋がっているわけじゃない。だけど、秘書官に繋がるパイプを見つけた。ルーベルトには秘書官が5人いる。そのうちの1人だ。信用に足るかどうかはわからねぇが、元々ルーベルトの家で使用人をやっていて、出馬するに当たって一緒にフリュージュに来たと言う筋金入りのルーベルト派だ」

「じゃあ、その人に繋がりをつけられれば……」

「ルーベルトと連絡が取れる。ルーベルトの信用は、かなり厚そうだぜ。そいつを掴めれば、かなり強い。ちょっと時間を食うかもしれねぇが、そいつに続く糸を辿ってみる。今はまだユリアの存在は匂わせない。俺が、糸を手繰る」

シサーの言葉で、全員の顔に微かな希望が滲んだ。

今の、手も足も出ない状況が打破出来るかもしれない可能性。

「そいつを掴み次第、フレザイルに行こう」

シサーの視線が俺に向いた。

「じゃあ、レーヴァテインを……」

「押さえとくのが、ベストだろうな。トラファルガーは先日カーマインを襲撃して、今度はナタリアを襲っている。断言は出来ねえが、今ならまだ猶予はあるかもしれない。遠くないうちにもう一度くら

い襲撃は予想されるが、その後は多分少し、間があく」
「そういうもの？」
「ああ。次あたりにフリュージュが襲われなければ、時間は稼げるだろう。それまでに何とかパイプを繋いで、フレザイルに行こう」
「ちょっと待って。誰が行くの？」
尋ねるニーナに、シサーは……意図的だろうか、無表情に続けた。
「フレザイルに行くのは、俺とカズキ、キグナス。それが、ベストだろう」
「ちょっと待ってよ！！」
ニーナが声を荒げた。
「その人数で、トラファルガーが何とかなるわけないでしょう！？わたしも……ッ」
「ユリアのそばにいろ」
シサーは、見たことがないほどニーナの反論を許さない強い口調で言い切った。ニーナが、言葉を飲み込む。
「俺がパイプを繋ぐ。その後の算段は、ニーナに引き継ぐ。ユリアを守って、ルーベルトの助力を引き出してくれ」
「シ……」
「ジーク。この中で一番この国に詳しいのはお前だろう。ユリアの補佐を頼む」
ニーナの言葉を遮るシサーに、ジークもややニーナを気にかけながら頷いた。
「はい。僕は元々ヴァルス国民ですから。ヴァルスの王女様の為とあらば、全力で。……あの、でも……」
「シサーッ！！」
ニーナが尚も怒鳴る。シサーがちらりと視線を向けて、冷徹な声色で告げた。
「ニーナ。がっかりさせないでくれ」
「……」
「他に割り方があるか？　お前なら、ユリアをちゃんと守ってやれ

るだろう？」
「でも、３人でフレザイルってのは、ちょっと無謀だと言う気は僕もしますよ？」
ジークが、フォローするように口を開く。
対するシサーは、打って変わって冷徹さを潜めた苦笑を浮かべた。
「そりゃわかってる。実際問題、３人になりゃしないだろうと思ってるよ。この中で行くのは、３人だ」
「え？　どういうこと？」
他に誰が……。
「ヴァルト副将軍が、フリュージュに来る」
どくん、と心臓が鳴った。
思わずキグナスと顔を見合わせる。
「え……？」
「とりあえず、首都の防衛を固める方針だろう。ドラゴンクローラ部隊を率いて、フリュージュ北部のダンテラス要塞に来るそうだ。さっき、義勇軍に通達があった」
「じゃあ、別宅に滞在する……？」
「要塞にいる必要があるだろうから、ずっととは言わないがな。当然、自分の別宅と行き来をするだろう。だとすると、俺たちの行動は漏れないはずがない」
「３人になりゃしないって……」
「ヴァルト副将軍か、もしくはその部下か……同行することになるだろう。先日のカズキの話じゃ、彼はレーヴァテインに執着しているな？　それを手に入れようとするのを、見過ごすとは思えない」
「それでいいの？」
「頭数として、利用してやろうと思ってるぜ」
そう言って、シサーは小さく笑った。
「手勢をくれるなら、ありがたいだろう？　フレザイルの魔物は、トラファルガーだけじゃない。強い魔物も多いんだ。兵士を貸してくれるなら、借りて行こうじゃないか。軍隊の責任者なら、フレザ

イルに渡る船の一隻や二隻、期待出来る」
「でも……」
「レーヴァテインは別に、奪われやしないさ。誰も取り出すことが出来なかった魔剣は、『鍵』を持つカズキに取り出せなきゃ誰も取り出せない。そして『鍵』を持つカズキでなきゃ、恐らくは扱えない」
「……それは、そうだけど……」
「ヴァルト副将軍は、レーヴァテインを手に入れてから引き離すことだって可能さ。少なくともフレザイルの地で剣を奪い合いするほど馬鹿じゃねぇはずだぜ。……『氷の大陸』でそんな無駄な争いをしてたら、生還出来ない」
「シサー」
頭が混乱してきた。
どうすればベストなんだ？　どう行動するのが、最良なんだ？
ユリアはルーベルトと会わなきゃならない。下手に会うと、『地上の星』を触発して暴動になる。
ユリアを守って、ルーベルトとの交渉に持っていける人間が、彼女のそばにいなけりゃならない。
俺たちは、ヴァルスにツェンカーの援軍を連れて行かなきゃならない。交渉材料は、レーヴァテインとトラファルガーだ。
レーヴァテインを手に入れる必要がある。ユリアの交渉と同時進行で、トラファルガーを片付けられればベストだ。レーヴァテインを取りに、フレザイルに行かなきゃならない。
ヴァルト副将軍は、『地上の星』の一派――あの『マキビシ』は、『地上の星』のシンボルだ。
ヴァルス王女ユリアは今、ヴァルト副将軍の懐にいると言える。その素性を知られていないままで。
そしてヴァルト副将軍が、フリュージュに戻って来る。
「ヴァルト副将軍は、『地上の星』だ……」
いくつもの情報が頭をぐるぐると回って、優先すべきがどれなの

か、最も良い流れが何なのかの整理もつかないままで、俺は口を開いた。
シサーの瞳が、こちらを向く。
「……ほぉ」
「アカンサに行って、わかった。星みたいな形のトゲトゲの飾り……ヴァルト副将軍がしてる。メイアンでも見かけた。あれは、『地上の星』の、シンボルだ」
「だったら尚更、奴の動向を知っておく必要がありはしないか？」
シサーの回答は、冷静だった。
「ユリアを、ヴァルト副将軍の邸宅においておくのは、危険だよ……」
「それについては、同感だ。ルーベルトの秘書へのパイプを繋ぐ算段の中に、ユリアの身柄をどこか別の場所へ移すことも含めて考えよう」
そこまで言ってから、シサーは頼りがいのある笑みを浮かべて、俺の肩を軽く叩いた。
「この事態が片付けば、少しは状況も変わるはずだ。……フレザイルに行って、『切り札』を取って来ようぜ」

第3部第1章第25話　氷の大陸（1）

「カズキィ。見ろよ、これぇ。凄くねえッ！？」
景色は白い。
吐く息も真っ白で、鼻の奥までつんと痛い。
そのくらい寒い。
ツェンカーとフレザイルを繋ぐ狭い海域をゆっくりと進む船の上で、寒さへの完全防備を整えて甲板に出ると、はしゃいだキグナスの声が聞こえた。
「寒……。何？」
「これこれぇ。俺の髪ぃ～」
にこにこと嬉しそうにキグナスが指したのは、ふわふわと逆立った髪のてっぺんだった。一カ所の先端だけ、かちんこちんに凍って、まさしくツノ。
「このな、先っちょだけ濡らして出てみたら、あっとゆーまにツノになったッ」
「……」
ああそう……。
腕を伸ばして触ってみると、確かに先端だけが鋭利に凍って、根本の方はふにゃっとしている。
「やるならサボテンみたいにすればいーのに」
「そんなんなるほど濡らしたら、凍傷で頭が腐っちまう……うッ……揺れたッ……」
以前よりだいぶましになったとは言え、相変わらず船の揺れはつらいらしい。
今の今まで船酔いなんか忘れたかのようにご機嫌にツノを見せびらかしていたキグナスは、一際大きく船が揺れると、途端に青褪めた顔で口元を押さえた。
キグナスのツノの向こうには、少しずつ近づいてくる氷の大陸が

水面の向こうに見える。
……フレザイルまで、あと、少し。

ルーベルトの秘書官ウィーリッツに接触を図るのは、シサーにとっては大した難事業にはならなかったらしい。
あれから数日のうちにウィーリッツとの接触に成功、彼が『地上の星』に属するものではないことを確認したシサーは、一旦ユリアの身柄をウィーリッツの屋敷に預けることにして、ルーベルトと会う算段はニーナとウィーリッツで進めていくことになっている。
ウィーリッツの話では、ルーベルトの方もこの事態に困惑をしているのだと言うことだった。
ツェンカーの代表者としては、ローレシア大陸をほぼ統べるアルトガーデンの中の最強国ヴァルスと交流を図っておくことは悪いことじゃない。
ラウバルからの通達を好意的に受け取り、ユリアの来訪を待っている最中で起こったあらぬ誤解は、ヴァルスの有力者に面通しをする機会を失わせる――ツェンカーにとって、不利益なことであると考えていると言う。
つまり、シサーからの接触は、ルーベルトにとっても渡りに船と言うわけだ。
だったら、話は早い。
ルーベルト自身がユリアと会うことにしり込みをしているのでなければ、本人の協力を得られるわけだから、『地上の星』を掻い潜って面会することは不可能ごとではなくなるはずだ。
ニーナがユリアのそばについていれば、状況に応じて彼女が機転を利かせるだろう。
そう信じて、シサーはニーナにユリアのそばへ残るよう言ったのだから。
だけど……。
「何だ、こんなとこにいたのか。酔狂だなあ、お前らも……」

呆れたように言いながら、甲板へ出て来たのはシサーだった。シサーも、俺に負けず劣らず寒そうに、自分で自分の腕を抱えるようにしている。

「寒ぃ～……。鼻水まで凍るな、こりゃ」

「それって凄ぇ痛ぇんだろうなぁ……」

あの時のシサーの言い方に、ニーナはひどく傷ついたみたいだったのが気にはかかるんだが、俺が口出しすることじゃないので、何も言っていない。

2人には2人の、俺にはわからない関係があるんだから、口を挟むことじゃないと思っている。

けれど、あの直前にたまたまニーナの気持ちを聞いているから尚のこと、ニーナが傷ついただろうなと言う気がした。

「氷の大陸が見えるかと思って」

「何もわざわざ今見物しなくたって、後で嫌と言うほど見れるだろ」

「見るって言うのとちょっとニュアンスが変わる気がする」

「『乗る』んだから、見れんだろーが」

それじゃあ全貌がわからないじゃないか。

「船室と外の空気吸ってるのとじゃ、船酔い度合いが格段に違ぇんだよッ。俺、わかったんだ。最初っから船室に行かねぇで外の空気吸ってればひどくなんねぇって。後な、空気が冷てぇのもいーみたい。頭が冷めるって言うか、酔いが冷めるって言うか」

「……つって一晩中外にいたら死んじまうぞ」

「わかってらいッ」

「まあせいぜい、あと4日、頑張ってくれ」

言いながらシサーが、俺に並んで手摺りにすとんと背中を預ける。空気が「冷たい」を通り越して「痛い」としか表現のしようのない寒さの中、こんなところにいる俺たちはまさに『酔狂』。

だけど……こうして、近付いてくる大陸を見ていれば、覚悟も決まるんじゃないかと言う気がして。

向かう先は、氷竜の棲まう大地だ。

とりあえずの目的はレーヴァテインを手に入れることだとは言え、可能ならばトラファルガーをここで片付けたい。

つまり、氷の大陸に下りれば、それはもうドラゴンとの対戦を控えて降り立つと言っても過言ではない。

（絶対戦わないって決めてたんだけどな～……）

最初にヴァルスについた時に。

けれど、今回の話の流れで、『フレザイルに行ってレーヴァテインを見つけ出し、そんでもって出来たらその場でトラファルガーをやっつけちゃいましょう』コースは、俺の提案と言っても過言ではない。

何をやってるんだか。

だけど……あらゆる意味で、トラファルガーを放置することはしかねるわけだし、やれることはやっておくべきだろう。

……死ぬとしても。

でも今回に関しては、死んじゃあまずいんだよな。こっちが死ぬってことは、トラファルガーが野放しになるってことなんだから。

「トラファルガーの咆哮、聞こえねぇなあ～」

「聞こえなくていーんだよ。聞こえるってことは、『リアルに今活動中です』ってことなんだから。今こんなとこでわけもわからず襲われてみろ」

「食われに来たのかって感じだなあ」

自分のツノを誇らしげに突付きながらフレザイルを望むキグナスののどかな声を聞きながら、つい、感心した気分になった。

これから『覇竜』と呼ばれる魔物を相手取ろうとしているわりに……意外と豪胆だよな、キグナスって。白骨には怯えるくせに、ドラゴンは怖くないんだろうか。

「あ、そう言えば……」

そんなことを考えていて、ふと思い出した。

この3人の中で、ドラゴンとの戦闘経験がないのって、俺だけなのか……。

「え？　何だ？」
「いや。そう言えばキグナスも、ドラゴンと戦ったことがあるんだなあと思って」
「俺？　あぁ……グロダールか」
「うん」
正確には、グロダールの虚像、だけど。
「どうだった？」
「おっっっっかねえええええ。何の心の準備もなく、いきなりあんなん出されて、俺、どうしようかと思った」
「でも、戦ったんでしょ」
「そりゃまあ……何とかしねぇことには話が進まねぇもん」
「怪我とかしたの？　そう言えば」
「魔法でファイアーブレスを防ぎきれなくて、くらったけどな」
「えッ！？　それで助かったの？」
「今生きてんじゃねぇか……。あれってほら、結局ダンジョンのイベントだったろ？　だから死ぬこたぁねぇみたい、多分。ホンモノだったら死んでただろうけど、一撃で死ぬほどの怪我にはならなかったし、グロダールが消えると同時に怪我も消えたんだよ」
「あ、そうなんだ。……シサー？」
俺とキグナスが、『対偽グロダール戦の思い出』に花を咲かせている間、シサーが終始無言だった。そのことに気がついてふと呼びかけてみると、シサーがはっとしたように顔を上げた。
「あ？　何だ？」
「ううん。ぼーっとしてるから、どうしたのかと思って」
「いや……。あん時、考えたことを思い出してな」
「あん時考えたこと？」
言われて、ドラゴンゾンビがどうとかこうとかって話をしていた時に、シサーが何か考え込んでいたことを思い出した。それだろうか。全然別のことかもしれないが。
問い返す俺に、シサーは少し難しい顔をして、空を睨んだ。

「カズキがドラゴンゾンビがどうこう言ってたろ」
「ああ、うん」
「……あん時、何か妙だなって気がしたんだよな」
「妙？」
「ドラゴンゾンビ？」
キグナスがきょとんと首を傾げる。
そう言えばあの時、キグナスってゲイトに攫われて前の方に行ってて、俺の話は聞いていないんだ。
そう思ってドラゴンゾンビに遭遇したことを話すと、キグナスはあの時のニーナと同じように顔を顰めて「ひぇ～」と呟いた。
「お前こそ良く無事だったなあ」
「うん、まあ、いろいろと運が良く……」
「にしても、何でドラゴンゾンビなんか？」
「……え？」
問われている意味がわからなくて、俺はきょとんとキグナスを見返した。
「どういうこと？」
「あんまり、聞く魔物じゃねぇから」
「？」
どういうことだろう。
無言で首を傾げると、シサーが冷たい風に顔を顰めながら答えた。
「ローレシアでも、そしてラグフォレストでも、そう見かける魔物じゃねぇんだよ。アンデッド・モンスター自体、そうそう会わないだろう？」
「ああ……言われてみればそうだね」
良く考えたら俺、アンデッド・モンスターってそれ以外に会ったことがない。
「まあ、いねぇわけじゃねぇけどな。ゴーストとか、ガースト、グール、シャドウ……ヴァンパイアなんかもそうか。そういう、自然に発生するアンデッド・モンスターもいるわけだし」

「……？」

『自然に発生するアンデッド・モンスターもいるわけだし』？

じゃあ、自然に発生しないアンデッド・モンスター……。

「リッチなんかは自ら望んで自らをアンデッドにするってぇ話だが……」

「何、りっちって」

「魔術師のアンデッドだよ。生前魔術師で、死後にアンデッドになることを選んだ魔術師ってこと」

何て趣味の悪い。

そう言や、エルファーラでハーヴェル卿が、空間移動魔法を悪用する組織デル・カダルの魔術師のことを『リッチ』と呼ぶとか言ってたけど、もしかするとそこから取ったのかもしれない。「悪い魔術師」的な意味で。……ま、どうでもいいんだが。由来なんか。

俺に答えたキグナスの言葉を肯定するように頷いたシサーは、そのまま続けた。

「そういうんじゃなけりゃ、アンデッドに襲われてアンデッドになったり、もしくは他の魔物と同じようにどこかから湧いて出る。通常のアンデッド・モンスターはそうなんだが、アンデッドが他の魔物と違うのは、人が生み出す場合があるってところだ」

「……」

「ゾンビだとかラッディング・コープス（蠢く死体）なんかは、自然に発生するとは、余り聞かない」

「……誰かが作ったってこと」

「その通りだ」

「それって、ネクロマンサー？」

グレンフォードの酷薄な眼差しを思い出しながら尋ねると、シサーは真っ白い息を吐き出しながら、首を傾げた。

「かどうかは、わかんねぇけどな。死術は、ネクロマンサーのように専門的にやってる奴だけが出来るとは限らねぇんじゃねぇか。ちと魔力のある普通の人間が魔術書を見よう見まねでやって、間違っ

て出来ちゃったなんて話もあるみてぇだし」
「そんな簡単なの？」
「簡単じゃあねぇからそう起こりゃしねぇけど、稀にそういうこともあるって話だ。元が魔術師ならもっと話は早ぇだろうし。ただ、いずれにしても、誰かが死術を施さなきゃゾンビやラッティング・コープスは生まれない。……だな？　キグナス」
「って聞いてる」
「だから、妙な気がしたんだよ。ラグフォレストでゾンビが出るなんて話、あんま聞いたことねぇからな。それも……ドラゴンゾンビなんて」
「……それって、どういうこと？」
いるはずのない魔物。
誰かが生み出さなきゃ生まれてこない、魔物。
眉を顰める俺の顔を見返して、シサーが鋭い目を微かに細めた。
「生み出した誰かが、いるってことだ。いつ生み出したのかも、何の為に生み出したのかも知らねぇが、小型ドラゴンを使って死術を試した奴がな」
トートコーストにはいるかもしれないネクロマンサー。
ラグフォレストやローレシアでは余り見ることのない『人の手を介した魔物』――じゃあ……。
「通常、ローレシアやラグフォレストでは見かけないってことは、ネクロマンサーってのはほとんど存在しないってことだよね」
「と、思うな」
「それがいるってことは、可能性のあるトートコーストから移動してる？」
もちろん、特定の誰かと言う話じゃない。
だけど、ネクロマンサーって種類の魔術師がいると予想されるのは、今のところトートコーストだけだ。
だとすれば、ネクロマンサーはトートコーストから他の大陸へ移って、その死術とやらをやっていることになる。

それとも、ローレシアやラグフォレストにも、活動しているネクロマンサーがいるってことなんだろうか。

「グロダールに死術を施した人物がいるはずだろう」

「……うん。だけど、ドワーフのダンジョンとグロダールの蘇生の時期は、ずれるよね」

「だから、同じ人物……同じ時期だとは限らない。だが、同じ時期ではないとも言い切れない」

第3部第1章第25話　氷の大陸（2）

「何で」
「作られて放置されたドラゴンゾンビが、勝手にダンジョンに棲み付いた可能性もあるからさ」
ああ、そうか……。
ダンジョンの作られた時期と魔物の発生は必ずしも同じとは限らないもんな……。
「トートコーストの人なのかな……」
思わず、海の遥か彼方を望む。
もちろん、トートコースト大陸は、片鱗さえも見えはしないけれど。
「さあな」
ゲイトは、どうしているんだろうか。

◆◇◆

ツェンカーの東岸リュンスクの港を発ってから、5日目。
ようやく、フレザイルに船が着いた。
今回同行しているのは、俺とシサー、キグナスの3人は元より、シサーの予想通りヴァルト副将軍配下の兵士20名だ。
彼らは、どうやらフェティール要塞からロドへ帰る時に一緒に来てくれた人たちと同じメンバーらしい。つまるところは、ヴァルト副将軍にとって、子飼いの兵士たちと言うことになるんだろう。
あの時は『兵士たち』って感じで正直個体の区別なんてついていなかったが、ここに来て目立つ人たちは何人か個体識別が出来るようになってきた。
首都防衛と言う別の任務から離れられないヴァルト副将軍の代わりに彼らを取りまとめているのが、ナヴィラス。すらっとした、ど

こかニヒルな雰囲気を持っている。
　ナヴィラスといつも一緒にいる、図体のでかい白髪の大男が、ラギラ。彼の装備は剣ではなく、バッシャーと言う棍棒のようなものらしい。モーニングスターの鎖のない奴だ。鉄の棍棒の天辺に、トゲトゲの鉄球がついている。
　正確に言われたわけじゃあないけど、恐らくはこの2人がヴァルト副将軍からこの遠征を託されているんだろうと言う気がしている。逆に言えば、レーヴァテインを手に入れてから、主に警戒しなきゃいけない人たち、なのかな……。
　彼らは知ってるんだろうか。ヴァルト副将軍が、現代表ルーベルトと相対する組織に属する人間だと言うことを。
「さて、どうする」
　こちらのリーダーをシサーだと見て取っているらしいナヴィラスが、兵の隊列を整えさせて尋ねて来た。
　兵士たちはほとんどみんなヴァルス語を話せないみたいだけど、中には話せる人もいるみたいで、ナヴィラスはこっちに話を振る時にはヴァルス語を使ってくれる。
「俺たちは、行動の主権はあんたらに委ねろと言われている。協力はするが、好きに行動してもらって構わない」
「なあ、ここはあんまり滑らねぇんだな」
　結局は船酔いでげろげろ状態だったキグナスは、青い顔で踏みしめた氷の大地に踵を軽く弾ませながら、俺を見上げた。そして、そのまますとんとしゃがみ込む。
　首脳会談はシサーに任せることにして、俺もキグナスの隣にしゃがみ込んだ。
「そうだね。だって第3階層は、目的がそれでしょ」
　氷の表面を触ってみると、あの床のように、磨きたてられてるみたいにつるつると言うわけじゃない。
　普通に傷とかついてて、氷の細かな破片とか積もった雪とかもあるわけで、少なくともこの辺りはそうそう滑りそうにはない。

「カズキ、キグナス。何、氷と戯れてんだ？　行くぜ」
「いや別に戯れてるわけじゃ……。キグナス、行ける？」
「行ける……」
船酔いの名残を残すキグナスに手を貸して立ち上がらせると、既にシサーはナヴィラスと肩を並べて歩き出していた。それに兵士たちが続いていく。
俺たちを待ってくれているのか、足を止めたラギラが大声で笑いながらキグナスの肩をばしばしと叩いた。
「＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊！！」
わからない。
「何だって？」
「俺に聞くなよ。ヴァルス語で精一杯なんだ」
「俺だってヴァルス語とリトリア語で限界だよ」
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊！！」
ああ、不便だ。
船の中で聞いた話によると、レーヴァテインが眠ると言う柱の場所はヴァルト副将軍が地図に記入してくれているらしい。氷の大陸をあちこち探し回る手間がないだけでも、ひどく助かる。
白い風景は、他の色がなさ過ぎて、起伏の区別がつきにくい。空一面を覆うような曇天と相まって、フィルター越しのような曖昧模糊とした世界にいるような錯覚を覚える。
「雪とか、降らないといいけどね」
先頭を歩くシサーたちと、しんがりを歩く俺とキグナスの間には、ヴァルト副将軍の兵士が挟まっている。てれてれと歩く俺とキグナスとは違い、訓練された規則正しい歩行だった。前方を身軽な兵士が、そして後方は資材などの荷物を運ぶ兵士が整然と列を成している。
氷の大陸は、強い魔物が多いと聞いた。
だけど、これだけ戦闘を職業とする人間がわんさかいて、何をか言わんや、だ。そもそも、魔物は軍隊を忌避すると聞いている。通

常人なんか訪れないだろう氷の大陸の魔物にそんなコモン・センス、通用するか否かは疑問だが、いずれにしたって「オ願イシマス」だ。俺たちの出る幕なんか、ないだろう。

すっかり他人の集団に押し付ける気満々で歩いていると、次第に空が一層曇ってきた。吹き付ける風も冷気を増して、強くなる。

「嫌だな……。天気が崩れそう」

空を見上げて顔を顰めると、自分のつま先を眺めながら黙々と歩いていたキグナスが顔を上げた。

「ざびぃ……」

「うん……」

冷たい空気は、なぜか、澄んでいるような透明感を感じさせる。呼吸をすると、内部が浄化されるような感覚に伴って、体の中が芯から冷えたような気がした。

ツェンカーを発つにあたって、防寒装備は更に強化している。ツェンカーの北部に棲むと言う狼の毛で作ったフードつきの防寒服に身を包み、ゴツいブーツとグローブ。吹雪いた時に備えて、顔を保護するマスク。

防寒服は、思いの外ごつくはない。一応、魔物と戦うことを前提としているわけだから、ジークとヴァルト副将軍のアドバイスを参考にして防寒服の中でも最も動きやすいものを選んでいる。

とは言え、通常より動きにくいことに違いはない。

防寒服の中に、更にもこもこと着ているキグナスは、どこか着ぐるみを彷彿とさせる。

見渡す限り真っ白い景色の中、異質なものは、何もなかった。

「あ、降って来た……」

その時までは。

「＊＊＊＊＊……」

「フロスト・ニクシー！？」

前方で兵士の呟きが聞こえた、と思ったらそれにキグナスの怒声

が重なった。
なだらかに盛り上がる雪の丘陵の上に、白いドレスの裾と金色の長い髪がはためく。……白い、女。
「下がれッ！！」
「＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊！！」
前方からシサーとナヴィラスの怒声が同時に聞こえた。
そう思った瞬間、叩きつけるような冷気が前方から襲い掛かる。
耳元でがなり立てる氷雪の合間に、誰かの悲鳴が聞こえた。目を開けると、白い風景の中に一瞬鮮やかな赤が、ぱっと散った。
「なッ……」
「うッ……」
「キグナスッ！！　魔法ッ！！」
前方で、兵士の首がすぱっと飛ぶのが見えた。咄嗟に口元を押さえるキグナスに向けて、シサーから怒鳴り声が飛ぶ。その声さえも、強く吹き付ける風と雪に流された。
女が、ふわりと優雅に微笑む。
「……『火炎弾』！！」
女が片手を挙げるのと重ねて、キグナスの魔法が完成する。この冷気の中でも揺らぐことのない火炎が、キグナスの意志に従って女の方目掛けて襲い掛かった。兵士たちは、フロスト・ニクシーと言うらしい女の攻撃に躊躇ったまま、動くことが出来ずにいる。
『火炎弾』と、女の放った冷気の塊がぶつかり合う。その間に、シサーが剣を構えて駆け出した。ナヴィラスがそれに続く。
「＊＊＊＊＊！！」
ラギラが怒声を上げながら、兵士たちの間を駆け抜けていった。それに刺激されるように、兵士たちの数人が女を目掛けて殺到する。
「ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ、フランマ・フォーモ・エ・プロクセィマ、『炎の衣』！！」
キグナスが、前衛に立つ兵士たち全員に向けて火系防御魔法を放った。だが、その加護を受けることの出来なかった兵が、シサーの

攻撃を避けながら放った女の冷気を避けきれずに後方へ飛ぶ。立て続けに襲うシサーの剣が女の片腕を切り飛ばし、ナヴィラスがバランスを崩した女に、剣を叩き付けた。それを避けて跳躍した女の姿が一瞬消える。

……と。

「うわあッ……」

突如、女の姿が俺の眼前に現れた。女が無事な片手を挙げる前に、ほとんど脊髄反射のように剣を叩き込む。身を引いた女に、キグナスがすぐ間近から、再び『火炎弾』――けれど単発ではなく連射を放つのが、聞こえた。

「カズキ、引けッ」

次の瞬間、マシンガンのように放たれる『火炎弾』が次々と女の体に穴を穿った。衝撃を受けるたびに空を揺らぐ女は、奇妙な踊りを踊っているように見える。

「キグナス、しゃがめッ！！」

前方からシサーの新たな怒鳴り声が響き、わけもわからずキグナスがしゃがみ込むと、いきなり目の前で女の胴が切断された。その背後から切りつけた勢いそのままに、シサーが地面に着地をする。

『アアアァァァァァアアアアアアァァァァァァアアアァァアアアアアァ』

女の白い目がかっと見開かれ、いやに真っ赤な長い舌が口から飛び出していた。金色に波打つ髪の中に埋もれるように、仰向けに上体が……続いて、下半身が、氷の大地に崩れ落ちた。

それを見届けて、シサーが立ち上がる。微かに顰めた顔で、小さく呟いた。

「……却って手間がかかんな」

それから俺とキグナスに怪我がないかを確認すると、背中の方を振り返った。

「＊＊　＊＊＊＊＊　＊＊＊＊」

短く何か言う。いろんな言葉が話せる人が羨ましい。

くわっと目を見開いたまま地面に仰向けに倒れていた、真っ白なビスクドールのような女は、やがて雪の大地に溶けていくように消えていった。後には何も残らず、彼女と共に現れた氷雪混じりの強い風だけが、今も残る。

「今のは？」

シサーが足早に前方へ戻っていくのを見ながらキグナスに尋ねると、キグナスは鼻の頭に皺を寄せて俺を見上げた。

「フロスト・ニクシー、だと思う」

「って言う魔物？」

「氷と雪を操る亜人型の魔物だよ」

俺的に言えば、西洋風雪女って感じだ。

「何人か、死んだな」

前方で集まっている兵士たちの背中を遠巻きに見ながら、呟くキグナスが頷いて、歩き出した。

「治せる奴が、いるかもしれねぇし」

「そうだね」

俺は出来ることは何もないけど。

ナヴィラスが、俺とキグナスに視線を向けた。

「遺体を、埋める」

物言わぬ肉体となって並べられたのは、３名。ひとりは首と体が切り離され、２人は胸と腰からひどい出血をしていた。今の状態では良くわからないが、もしかするとちゃんと繋がっていないのかもしれない。

キグナスが青い顔で、口元を押さえる。

「治せる奴は……」

「生きてる奴は、軽症だ。今治してもらうほどではない」

感情の滲まない声で言うと、ナヴィラスが歩き出した。その向こうに、ラギラが雪の柔らかそうな部分を探している姿が見える。兵士たちが、ナヴィラスに続いた。

「たった１回の遭遇で、もう、３人……？」

俺たちと同じようにその場に留まってナヴィラスの背中を見送るシサーが、俺の呟きに顔を向けた。
「連携が、取れてねぇんだよ。要は」
「え？」
「対人間と、対魔物じゃあ、戦い方が違う。そして彼らは、対人間用として集団で訓練を受けたそのスジのプロだからな。勝手がわかっていないんだろう」
「……」
「魔物との戦闘は、相手の数が多い時はまだしも、強い敵が一匹、二匹の場合……こっちの人数が山ほどいたって『捨て駒』にしかならない」
「捨て駒って……」
「敵の気を散らす。それだけの役割しかしちゃいねぇんだよ、頭数なんてのは。今の……フロスト・ニクシーとの戦闘に関して言やぁ、俺ら3人だとしてもかかった時間は多分変わらねぇぜ。そして多分、死者も出ない」
「だったら、人数が増えた意味って……」
「確率の問題だ。敵にとってのターゲットが分散される。それだけだな。統制が取れてなきゃ、敵への攻撃率は、下手すりゃ下がる」
痛ましそうな色を滲ませて、シサーの視線が足元に横たわる兵士たちに注がれた。
それから、気を取り成すように、顔を上げて俺に笑いかけた。
「そんな心配そうな顔、すんなって。仮にもプロの集団だ。……すぐに、慣れるさ」

◆◇◆

ヴァルト副将軍が記してくれた地図によると、レーヴァテインはフレザイルのほぼ中央に位置する神殿に安置されているのだと言う。
また神殿か、と思ってはみたものの、良く考えれば思い切り宗教

色の強い魔剣なんだから、安置されているのが神殿なのは仕方がないような気もする。
俺たちが最初に到着をしたのは、フレザイル南西部。
とりあえずの目的地までは、ひたすら歩いておよそ3日程度の距離と聞いていた。
けれど、この3日と言うのが、ハンパない。
当然、夜になれば日も沈むし気温も下がる。人のいないこの土地には宿泊施設なんか無論あるわけもなく、と言ってむき出しで野営なんか出来るはずもなく、必然的に作る羽目になる。

第3部第1章第25話　氷の大陸（3）

ツェンカーと言う寒い地域には元々、道具屋で『組み立て式簡易バンガロー』みたいなものが売ってはいたんだけれど、俺たちはそれを使うわけじゃない。

何と言っても、同行者たちは『その類のプロ』なんだ。

戦争などで行軍をしていれば、野営の設営はもちろん橋や要塞を組み立てることさえある。そうは言っても工兵だの輜重部隊だのを引き連れているわけじゃないから大した造作が出来るわけじゃないが、フレザイルまで彼らが持参してきた木材や防水布を使って、簡単なテントを組み立ててくれた。

寒いには寒いに決まっているが、ないより、まし。かなり、まし。

そうして2日の道のりを移動しながら魔物に遭遇しているうちに、シサーの言う通り、兵士たちの動きが良くなってきた。

通常、大人数において対人間を見込んで訓練を受けている彼らは、最初こそ混乱の中で更に2人ほど命を落としたが、次第に魔物相手の戦闘に慣れてきたようだ。

慣れてしまえば、これほど頼りになる人たちもいない。

残念ながら魔法を使う人間はキグナスだけなので、戦闘と言い、戦闘後の回復と言い、キグナスはひとりで大忙しだが、兵士たちの動きがスムーズになってから俺とシサーは専ら見物コースに回ることにした。

フレザイルに到着をしてから、3日目――。

――氷の神殿が、ようやく、目の前に姿を現した。

「前が見えねえええええ！！」

朝もまだ暗いうちから、テントを吹き飛ばしそうな強風に見舞われ、豪雪の中を歩き始める。

昨日は1日澄んだ高い空が見えるほどの晴天だったのに、この気

候の変わりようときたら何とかして欲しい。
　食事と、体を温める為の果実酒を口にしてからテントを片付け、行動を開始した時には氷雪は益々ひどくなっていた。風も強いので、まさにこれは吹雪……いや、ブリザードだ。
「あ、そっか……」
　ともすれば、少し前を歩いているはずの兵士たちの姿さえ見失いそうだ。吹き付ける氷雪が時折、顔を覆うマスクの合間を縫って叩き付け、血でも出そうなほど痛い。
「氷の魔物が強いってそのせいもあるのか……」
　小さくひとりごちる。
　環境的に、人間の攻撃能力が圧倒的に落ちるんだ。
　こんな状況の中で襲われたら、俺のような未熟者には普段の7割も自分の能力を発揮出来ないだろうし、対する相手は自分の土俵なんだから常に１００％のはず。
　だから、氷の魔物は強くなるのかもしれない。
「あ～～～ッ！？　何か言ったかあッ！？」
　耳元を吹き飛ぶ風と、覆っているフードで互いの声もほとんど届かない。隣を歩くキグナスが怒鳴るように問い返し、俺は小さくかぶりを振った。
　別に、わざわざご報告するような内容じゃない。
　一寸先も見えなくなりそうな視界の中、辺りを見回しても同じく氷雪が吹き飛ぶのが見えるだけで、果てしない闇に取り残されているような気分になる。
　冷気に晒され続けて、体中の筋肉が凝固しているみたいに冷え切っていた。寒すぎて、無意識に力が入りっ放しなんだろう。触らなくても自分の体が冷えていることがわかり、何となく防寒服の中で体を竦める。
　寒いと言うのは、それだけで体に疲労を強いるものらしい。早くどこか寒くないところに辿り着きたいと言う願望は、切実だ。
　本当に辿り着けるんだろうか、このまま遭難して帰れなくなるん

じゃないだろうか――そんな気がしていた時だった。前方から、歓声が上がった。
「あれか！？」
「＊＊＊＊！！」
「＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊！！」
ああ、わからない。
だけど、魔物に遭遇した時の怒号のようなものとは明らかに違う。先の見えない前方から、シサーの声だけが、風に乗って届いた。
「カズキッ！！　キグナスッ！！　はぐれてねぇかッ！？」
「いるよッ！！　はぐれてないッ！！」
「神殿だッ！！」
え？
シサーの声が届いたのを見計らったかのように、不意に、視界がぶわーっと晴れた。
風が、氷雪を押し流して一瞬だけクリーンにしてくれた視界に、荘厳な氷の神殿が姿を現す。
「ひえー。すげー」
透明な太い柱と壁で作られた神殿は、まさしく聳えると言うような、威風堂々とした様子だった。
「でかいな……」
再び視界が遮られた。
一瞬だけ見えた神殿を脳裏に蘇らせながら、前方の声にあわせて再び足を進める。
高さは、どのくらいあるんだろうか。ぽっかりと開いた大きな口は、高さ１０メートルはあるように見えた。横幅も、７メートルやそこらはあると思う。
それを支える氷の柱は太く、建物は左右に２０メートルほどあっただろうか。
氷のブロックをひとつひとつ積み上げたように、それはまるで、ギリシアの神殿を氷で作り直したかのようにも見えた。……いや、

見たことないけど。ギリシアの神殿。
ようやく、吹雪を抜けて、建物へと辿り着く。
建物へは緩い丘陵を登り、更に氷で出来た階段を上って続いていた。
これだけ氷雪が豊富に降り注ぐ場所だと言うのに、不思議と階段も、そして神殿の出入り口や内部にも、吹き溜まった氷雪が足場を悪くしているようなことはなかった。整形された時のまま、保っているように見える。
「ぷはあッ。あ～……建物だあ～……」
まるで何かに守られているかのように、開け放した神殿の入り口から氷雪は吹き込んでこなかった。
一番最後に中に入り込んで、キグナスがフードをばさっと外しながら息をつく。フードに凍り付いていた氷雪が飛んで、氷の床にぱらぱらと水滴や破片を落とす。
「凄いね……」
中は、一面の空洞だった。
何もない。
氷で出来たタイルを敷き詰めた床、ところどころに太い柱が建ち並び、それ以外は何もない。
全てが、どことなく、ほの蒼く見えた。
吐く息は相変わらずあり得ないくらいの白さだけれど、吹雪は既に外部の出来事だ。
俺も、キグナスに倣ってフードとマスクを外しながら、辺りを見回した。凍り付いていた前髪から雫が滴り落ち、それを指先で弾きながら天井を見上げる。尚も、髪から溶けて流れる雫が額を濡らし、それを片腕で拭いながら、視線をそのまま動かした。
「ここに、レーヴァテインが、あるの？」
「ある、はずだ」
俺の言葉に答えたのはナヴィラスだった。ナヴィラスの手元にある地図をシサーが横から覗き込んでいるが、俺の方を向いて肩を竦

める。
「この神殿のどこにあるかまでは、描いちゃいないがな」
「聞いた限りでは、複雑な構造ではない」
「だろうな。何しろ、ヴァルト副将軍はともかくとして、カレヴィもレーヴァテインのところまで辿り着いているんだ。一商人が、難解なダンジョンを攻略できるとは考えにくい」
それもそうだ。
もちろんひとりでこんなところに来たはずはないけれど、ただの武器商人であるカレヴィさんが辿り着いているんだから、そんなに大変なことではないはず。
「ともかくも、進んでみよう」
「カズキ、キグナス。前に来い」
「あ、うん」
これまでずっと隊列の最後尾を歩いていた俺とキグナスは、シサーの手招きに応じて隊列を組み直す兵士たちを追い抜かした。地図を持つナヴィラスとシサーのすぐ後に続く。ラギラが兵士たちの最後尾についた。
「誰が、作ったんだろうな」
再び天井をぐるりと見回しながら、そんなことを考える。
魔剣を与えたのは、聖書によれば、ファーラ。この神殿も、ファーラが人間たちに与えたんだろうか。
凍えた空気だけが辺りを支配する神殿には、荘厳な静寂が満ちている。
静かだった。
俺たちの足音と、兵士たちの装備が立てる微かな金属音だけが、氷のタイルに吸い込まれていく。
だだっ広い部屋の最奥には、扉のはめ込まれていない出入り口がぽっかりと黒い口をあけていて、そこを出るとすぐに下へ続く階段だった。例に漏れず、これも氷で出来ている。
「気をつけろよ」

「うん」
薄暗い階段は、それでも不思議と完全な闇ではなかった。光源はどこにも見当たらないのに、全体的に薄ら蒼く、まるで氷のタイル自体が、各々微かな発光をしているかのような錯覚を覚える。
「ここから、トラファルガーの巣穴は遠いのかな」
「さてな。トラファルガーの巣穴に関しちゃ、さすがにヴァルト副将軍も知らねぇみたいだからな」
「そうだよね……」
氷竜の巣穴には誰も行ったことがあるわけじゃないんだよな。
レーヴァテインの眠る氷の神殿にはわりとスムーズに辿り着けたけど、問題はこの先か。
フレザイルは、地図を見る限りは結構広い。面積で言えば、４つの王国があると言うラグフォレスト大陸と同じくらいなんだ。村も町もなく、情報を与えてくれる人間がいるわけでもなく……氷雪吹きすさぶ氷の大陸を、氷竜の巣穴目指して彷徨うのはぞっとしない。
それに、時間がかかり過ぎる。
階段は、長かった。
果てしなく続いているんじゃないかと思うような長さの階段を下りて、辿り着いたこれまた広い部屋で、息を飲んだ。
「あれが……」
「レーヴァテイン……？」
部屋自体は、上の部屋とさして変わらない。
ぶち抜きの、氷造りの広い部屋に、ところどころ太い柱が、高い天井を支えている。
上の部屋と違うのは、奥の一面に荒削りの氷の壁が聳え立ち、その中心部に綺麗に象られた氷の柱が設えられていることだった。
綺麗に磨き抜かれたような、透明な氷の柱。
そしてその中――天井に近い中空に、一振りの剣が抱え込まれているのが見えた。
一見して豪奢な印象を受けるデザインを施した金色の柄や鍔、は

め込まれた大きな赤い石、白く神々しく輝く刀身。
誰もが、知らず息を飲む。まるでその剣に魅せられているかのように、誰もその場を動こうとはしなかった。
「＊＊＊＊＊＊＊　＊＊……」
ナヴィラスが、何かを呟く。
吸い寄せられるように歩き始めるのに従って、俺たちもゆっくりと奥へ向かって歩き始めた。
レーヴァテインを閉じ込める氷の柱は、太い。幅が2メートルはありそうだ。そして、高さは15メートルくらいだろうか。4階建ての建物相当、と言える。
その、上の方に閉じ込められている、眠れる宝剣は、見上げるだけで首が痛い。位置しているのが天井の方が近いんだ。
実際問題、こんなものを一体、どうやって取り出したらいいんだろう？
「氷は、傷ひとつつかなかったって言ってたね……」
ヴァルト副将軍もカレヴィさんも、取り出そうとして取り出せなかったと言う。
どうすれば……。
考えながら柱に近付いて行くと、不意に視界の隅で何かが点滅した。最初は微かに、そして次第に、強く。
「カズキ、ピアス……」
すぐ隣で、キグナスの声が聞こえる。
「うん……反応、してる」
視界の隅に僅かに捉えられる赤い光。ピアスの石が光っているのだろうことは、言われなくても予想がついた。
そしてそれに呼応するように、柱の中のレーヴァテインも、赤く光る。……いや、光っているのは、剣そのものじゃない。剣の柄についた赤い大きな石が、赤い光を放っているんだ。
「反応して……どうなるんだ？　自動的に出てくるのか？」
「さ……あああ？」

さあ、と言おうとして、声が裏返った。
「き、消えるッ」
レーヴァテインの石の発光を受けて赤く染まった柱が、不意にその姿を次第に薄めていく。まるで陽炎のように、幻のように、ゆらりと揺らめいて、やがてそのまま消失した。
「き、消えちゃったじゃんッ」
駄目じゃん、消えちゃあ手に入れられないじゃ……。
「あ？」
焦りまくった次の瞬間、バリバリリッ……と音が聞こえた。……ような気がした。
「え、な、何ッ……！？」
足元が揺らいだように感じ、咄嗟に足元に目を向ける。
次の瞬間、思わず俺はぎょっと息を飲んだ。喉を引きつった声が駆け上がる。
「うわッ……」
足元の氷に、ビシビシビシと細かな亀裂が凄いスピードで生じているところだった。微かな破片が舞い上がり、それに合わせて足場が崩れ、重力に引き摺られるような衝撃がかかる。
「カズキッ！？」
「うわあああッ……」
落ちるッ……。
キグナスとシサーの慌てたような叫びを耳にしたような気がするが、咄嗟に何が何だかわからなくて、良く覚えていない。
完全にバランスを崩した俺は、重力の引き寄せるままに床に叩きつけられ、顰め面で体を起こして、更にわけがわからなくなった。
（何……？）
何が、起こったんだ……？
足元の氷の床一面にヒビが入り、割れた底から俺は更にどこか下へ叩き落された……はず。
だけど、床に叩きつけられて目を開けてみれば、そこに広がる光

景は、先ほどの光景と大差あるものじゃなかった。
広がる氷の部屋、奥の氷の壁、そしてそこにある太い氷の柱――
消えたはずのレーヴァテイン。
（な？　……あれ？）
見上げた天井には俺が落ちてきたような痕跡は微塵もなく、穴なんてどこにも開いていないつるっつるの一枚板に見える。
まるで階段を下りてきたところまで時間を巻き戻されたような感覚に陥りかけて、違和感に気がついた。
周囲には、誰もいなかった。
シサーやキグナスは元より、ナヴィラスやラギラ、その他生き残った１３名の兵士たちも。
完全に俺ひとり……いや。

第3部第1章第25話　氷の大陸（4）

（何だ、あの馬……）

氷のそばに、馬が一頭いる。

それも、普通の馬じゃなかった。

額に突き出た一本の長いツノ……一角獣？

――カズキッ……。

唖然と立ち上がる俺の耳に、不意にどこからかシサーの声が響く。

安堵をして顔を上げた俺は、声の出所を探して辺りを見渡しながら、その声に答えた。

「シサー！？　どこにいるの？　どうなった……」

――お前だけ、壁を挟んで反対側にいる！！

「……は？」

壁を挟んで反対側にいる？

意味がわからず、尚もきょろきょろと見回す。

一面、氷で閉ざされた世界は、どこを見ても透き通って見えるけれど、俺の目にはシサーたちの姿はどこにも見えなかった。

レーヴァテインの柱のある正面の壁を除いて、他の壁は確かに天井へ向けてこれまたつるっつるの一枚板だけれど、目を凝らしてもその向こうには誰の姿も見えない。

――お前には、こっちが見えないのか？

「見えないッ！！」

お前には、ってことは、シサーたちには俺の様子が見えているってことだろうか。

何で？　ピアスのせいか？

――良くわからんが、『鍵』を持つのがお前だからだろう。お前だけが選ばれて、そっちの部屋に引き摺り込まれたんだ。

そんなあ。

「じゃあ、この柱の剣は……」

さっき姿を消した剣はダミー……いや、もしかすると『壁のこちら側』に俺が今いると言うことは、例えて言うなら鏡面世界のようなものだろうか。

氷の壁に映された鏡面の中……その中に、ホンモノのレーヴァテインが眠っていた、とか。

――それが、本物かもしれない。

シサーの声が答える。

『それ』と言うってことは、シサーからはこの柱の剣も、見えているんだ。

――こっちの剣は、お前と一緒に消えたままだ。壁に映された世界の中に、俺たちの姿がなくてお前と剣が映っている……そう、見える。

そんなややこしい真似をしないで、みんなこっちに連れてきてくれよ。

迷惑に顔を顰めながらついそんなことを思っていると、柱の傍にいる一角獣が、小さく「ブルルル……」と啼いた。片足を、軽く氷の床に叩きつける。

（あれは、何なんだ……？）

どうして、一角獣なんて……。

――カズキ、気をつけろ。

「え？」

シサーの声に硬い響きがあることに気がついて、見えないとわかっていつつも、つい中空に視線を投げ掛けた。

――奴は、ヤバイ。

ヤバイ？

奴って……一角獣のことだろうか。

視線を馬に向けると、まだ俺と距離のある場所のままで馬もこちらを見返していた。ダークブルーつぶらな瞳は、とてもヤバイ生き物には見えない。

それに一角獣って……ユニコーンって奴じゃないのか？　俺的に、

勝手に良いイメージがなくもない……。
――一角獣ってのは、獰猛な魔物だッ！！
「……えッ！？」
――攻撃手段はツノと突進くらいしかないが、その速さは馬を越えるッ……。
ちょ……俺ひとりで戦えってかッ！？
ぎょっとしていると、まさしくそれを証明してくれるかのように、一角獣が蹄で地を掻いた。準備運動のように2～3回軽く掻くと、次の瞬間、逞しい後ろ足が地面を蹴る。……嘘だろお！？
「ちょ、まっ……！！」
咄嗟に剣を抜きはするものの、果たしてどうしたものだろうか。
と言うか、なぜこんなものがいて、戦わなきゃならないんだろう。
しかもひとりで。
盾になりそうなものは、柱くらいしかない。
思わず剣を片手に柱の影に身を滑り込ませるが、地響きのような足音に続いて激突するような音が聞こえた。次いで、俺が身を潜めた柱をぶち抜いて、一角獣のツノが突き出てくる。……おいおいおいおいおいおいッ！！！！！！
――ゲヌイト・オムニア・フォルトゥーナ・カウサエ・マナ……ッ。
と、シサーと同様にどこからともなくキグナスの声が聞こえた。
魔法での援護をしてくれる心積もりらしい。
――……『火炎弾』ッ……！！
呪文が完成する。
だが、それは事態の好転には僅かたりとも結びつかなかった。
――ちッ……駄目かッ……。
一角獣がツノを引き抜く動きを柱越しに捉えて、とりあえず当面逃げるべく走り出す。
が、走り出したところで、速度で適うわけがない。
とにかく、柱があるのを良いことに柱から柱へ走るわけだが、こ

の体当たり一角獣、柱を突き刺しては破壊する。このままではいずれ、隠れる場所さえなくなってしまう。

何とか、打開策ッ……！！

――ツノ狙え、カズキッ！！

そりゃ無茶だ。

――一角獣の弱点は、ツノだッ。

「無理だよッ！！　どうすりゃッ……」

あ、魔法石ッ……。

海底のダンジョンでシサーが俺にくれた魔法石が、まだ俺の手元に残っていたことを思い出す。荷袋に手を突っ込んで走りながら探り、手に触れた適当なものを確かめもせずに一角獣目掛けて投げつけた。

「ブルルルルッ……キェェェェェェンッ……」

空に出現した氷の矢が、一角獣に次々と襲い掛かる。投げつけたのはどうやら、『水石』だったらしい。その衝撃で軽くたたらを踏んで悲痛な悲鳴を上げた一角獣に、俺は剣を構えて足を止めた。

くそッ……どうする？

片手で荷袋を漁る。触れた手ごたえは、３つ。元々大して持っているわけじゃない。効果を確認している余裕はない。

怒りと痛みに目が眩んだような一角獣が、再び蹄で地を掻いて駆け出した。出来るだけぎりぎりまで引きつけてから横滑りに手近な柱を回り込み、猛進に急ブレーキをかける一角獣が転回する前に後背に回り込む。気分は闘牛。

地を蹴って、その臀部に剣を切りつけた。嘶きを上げて、馬が『氷矢』を受けた血だらけの上体を逸らすように二本立ちになる。けれど、これじゃあ拉致があかない。ツノを狙わなきゃならないんだったら、後背にいたってしょうがないッ……！！

振り飛ぶ血を顧みず、一角獣が態勢を回復する前に魔法石を取り出す。叩きつけるのと、頭を振った一角獣の長い角が俺の左肩を突き刺すのとがほぼ同時だった。

――カズキッ！！

投げつけた石が、『ノームの手』を発動する。怒った一角獣は、俺を突き刺したまま持ち上げると、思い切り頭を振った。ツノから腕が抜けて、反対側の壁まで体が吹っ飛ぶ。叩きつけられ、溢れ出す血と痺れに似た痛みで、俺は起き上がれずにその場で呻いた。このタイミングで『ノームの手』だったのは、幸いだ。そうじゃなかったら俺は身動きできないまま、今度こそ確かに串刺しだろう。

「くぁぁぁぁ……」

首筋から脳裏に駆け上がる痛みに、二の腕を掴んでのた打ち回る。動くたびに氷の床が赤く塗装され、遠くで一角獣の嘶く声が聞こえた。痛みの余り目が涙で滲み、気を逸らそうとついた呼吸が荒くなる。

――……『癒しの雫』ッ……！！

キグナスの声が聞こえる。回復させようとしてくれるのはわかるが、これもやはり効果がなかった。変わらずのたうつ俺に、キグナスが悔しげに怒鳴るのが聞こえる。

――くっそおおおッ……カズキィッ……！！

『ノームの手』の効果は、それほど、長くない……。

奴が動きを封じられている間に、何とか、しなきゃ……ッ。

激痛に縛られながら、剣を杖にして体を起こす。肩を貫かれた左手は使えない。右手だけで立ち上がるが、その右手さえも痛みで激しい痙攣を起こしている。

体を引き摺るようにして、一角獣に近付いた。これで効果が消えたら、もうおしまいだ。そうわかっているけれど、どっちにしたってこれじゃあ逃げられない。

剣を脇に挟みこんで、魔法石を取り出す。現れたのは、赤い石。

それも……大きい方。

「くらえッ……」

弱々しく一角獣に向かって投げつけるが、激しい鼻息と共に頭を荒く払った一角獣の勢いで、石が弾け飛んだ。予定外の方向で、炎

の柱が上がる。
　舌打ちをしながら豪火の上がる音を聞いている俺の前で、一角獣の束縛が解かれた。痛みに顔を歪めながら、片手で剣を構える。
――カズキッ、無茶だッ……！！
わかってるさッ……だけどどうにもならないだろッ！？
間合いを取って剣を振り被ろうとした時、怒り狂う一角獣の突進する地響きにあわせて、別の轟音が聞こえた。
……ズズン。
（え？）
腹に響く低い音に続き、ビシビシビシッと何かにヒビが入るような音が混じる。
そして……。
――カズキッ、逃げろッ！！
――柱が崩れるッ……！！
「うわあッ……」
咄嗟に、床につき立てた剣を軸にして、自分の体を横に吹っ飛ばした。投げ出された瞬間に、さっき貫かれた肩を強打して激痛に声を上げながら、氷の床の上を滑る。
　その体に、床が衝撃を伝えた。耳を覆いたくなるような爆音。氷の礫が、いくつも俺を目掛けて飛来するのに、胎児のように丸まって耐える。
「何……」
　振動と氷の礫がやんだのを感じて、俺は恐る恐る目を開けた。先ほど俺がいたはずの場所を……そして、一角獣が突進してきていたコースの上を、一直線に砕けた氷の柱が埋め尽くしているのが見えた。
「何が……？」
呆然と、呟く。
――『炎の柱』だ。
「え？」

――さっき投げた『炎の柱』が、柱を破壊したんだよ！！
そう、だった、のか……。
それを聞いて、俺は思わずその場に崩れ直した。瓦礫を押しのけて、一角獣が這い出てくる様子は、なかった。
（気が……）
遠くなる……。
痙攣ががくがくと激しくなる。背筋を悪寒が這い上がり、頭から血の気が引いているのに気がついた。視界がどことなく暗く、目がちかちかする。痛みに、体の力が入らないまま床に崩れている俺に、キグナスの声が届いた。
――くそッ……死んじゃうじゃねえかッ……。どうすりゃあっちに行けんだよッ……。
自分の肩から、血液が流れ出ていくのがわかる。
鼻につく鉄の錆びたような匂いの中、失いそうな意識を何とか気力で引き止めていると、見覚えのある赤い光がぼんやりと閉じた瞼の裏に感じられた。
（……ピアス……？）
ピアスが、光ってる……。
力を振り絞って、薄く目を開ける。
今まで、俺がそばを走り回っても反応ひとつしなかったレーヴァテインが、前の部屋の時のように赤く光を放っているのが見えた。
レーヴァテインを取り込んでいた氷の柱が、溶けるのではなく……薄く霞んで、消えていく。
支えるものがなくなったにも関わらず、不思議な力で中空に留められたままのレーヴァテインが、やがてゆっくりと地面に向かって下りてくるのが見えた。
閉じ込められていた姿そのままに、剣の切っ先を下にして、静かに。
痛みに支配されたまま、けれどレーヴァテインに気を取られて呆然とその様を見つめる。微かに床から持ち上げた耳に、不意に、声

が聞こえた。
——役者不足ダナ
……。
何か、聞こえましたが。
「……キグナス。何か言った？」
掠れた声を振り絞る。きょとんとしたような間を挟んで、キグナスの声が答えた。
——俺ぇ？　何も？
——何だ？　何か、聞こえたのか？
重ねてシサーの問いが聞こえる。
さっきの声は、明らかに2人のどちらの声でもなかった。
「うん……何か、聞こえ……」
——オ前ニ、僕ヲ使イコナスコトガ、出来ルノカア～？
……。
思わず、視線を床に突き刺さった位置で微動だにしないレーヴァテインに定めた。
まるで小学生の男の子のような、少年めいた透明な声。
（まさか……）
レーヴァテインの、声なのか……？
無理矢理、体を起こす。立ち上がることは出来ず、がたがたと震える体で這いずるようにレーヴァテインの方へ少しずつ移動した。
こいつを手に取らなきゃ、終わらないような気がして。
ちかちかして霞む目を、時折ぎゅっと瞑って視界の回復を試みながら、ようやくその近くまで辿り着く。
俺の動いた跡には、べったりと赤い軌跡が床の上にこびり付いていた。
「レーヴァ……テイン……」
レーヴァテインの突き刺さった床には、いつの間にかその鞘が置かれている。鮮やかで細かな模様が刻み込まれた、華麗な鞘。
レーヴァテイン自身も、近くで見れば凝ったデザインの剣だった。

「トラファルガーを……倒したい……」

自身の剣を杖にして、よろ……と立ち上がる。激しく震える体を叱咤して、腕を伸ばした。――これが、氷の大陸に眠り続けた魔剣……。

――サァテナ……

レーヴァテインを掴むと、その瞬間、視界がぶれた。

――倒セルカドウカハ、オ前次第ダ

第3部第1章第26話　樹氷の森（1）

――どんな相手も、必ず敵の最も弱いところを狙ってくる。あんたたちのメンバーで言えば、カズキかキグナスだ。

――アイテムは、アイテムでしかない。使うのは、あんたたちなんだよ……。

――アイテムに頼っていたら、いつか足元を掬われる。最後に自分を守るのは、自分の力だってことを忘れないで。

◆　◇　◆

目を開けると、俺を覗き込むキグナスの瞳が真っ先に飛び込んできた。

それを見て、微かに既視感――ああ。サキュバスの夢から目覚めた時も、俺を心配全開の顔でキグナスが覗き込んでいたっけ。

「良くやったなー。お疲れッ」

俺の意識が戻ったのを見て、キグナスがほっとしたように笑う。白い八重歯が、ちょこんと覗いた。

「俺、戻って来たんだ……」

体をゆっくり起こすと、どうやらそこは、『俺が飛ばされる前の部屋』らしい。あっちの部屋にはなかった階段に繋がる扉が見える。もちろん柱の破片なんかも見あたらない。

「みんなは……？」

今ここにいるのは、俺とキグナスだけみたいだった。どことなく怠さの残る体、けれど治癒済みらしく痛むところはない。

「シサーはラギラと一緒に、神殿内部に他に何かないか見に行ってる。ナヴィラスは部下を連れて、この付近を偵察に行った。今の状態じゃあ、トラファルガーをどこに探しに行けば良いのかわかんねえ」

ああ、そうか……。
傷は塞がったらしいものの、血みどろの服は変わらずだ。べったりと血の染み込んだ服を見下ろしてため息をつき、俺の隣にそっと置かれているレーヴァテインに手を伸ばす。レーヴァテインの柄についている赤い石が、俺に応えるように微かに光った。
「痛むとこ、ないか？」
心配そうに眉根を寄せて、キグナスが尋ねる。あの時も、こんなふうに聞かれたな。
「うん。ありがとう。……凄いな。本当に、魔法が強力になったんだな」
レーヴァテインは、誰かが収めてくれたのか、刀身を鞘に包まれていた。無意味にそれを撫でながら言うと、キグナスがいやに無邪気な顔で首を傾げた。
「何だ？　それ」
「痛みなんかどこにもないし、むしろ怪我をする前より元気になってるよ。回復し過ぎちゃったみたいだ」
片手で、一角獣に貫かれたはずの辺りを撫でてみるが、怪我をしたその名残さえどこにもなさそうだった。
キグナスが、笑う。
「何だ。だったらもっと、けちるべきだったな」
「治るかどうかのぎりっぎり？」
「そう。『やべぇ足りてねぇ、ちょっと痛いの勘弁して』くらいでぇ～」
「ひどいな」
俺が笑うと、キグナスもまた笑った。
「お前、また少しずつ、笑うようになってきたな」
キグナスが、自分の両膝を抱えて、軽く天井を仰ぐ。
「そう？」
「ん。かなあって思う。一時期ほどは、見てて暗くなくなったんじゃねぇ？」

「……」
ひどい言われようだ。
苦笑を浮かべて、俺は背中を壁にもたせかけた。
「慣れたのかな……」
「何にだ？」
「さあ……何にだろうね」
一時期は頻繁に感じていた頭痛が、気がつけば感じなくなっていた。
キグナスの言う通り、笑うこともその頃より多少は増えた気もする。――心の奥底に、何かを閉じ込めて鍵をかけた箱があるような感覚は、残るけれど。
まるで、自分の感情がどこかで分離したみたいだ。一時期は、全てを奥底に押し込めようとしていたものが、『何か』だけを残して、後の感情を少しずつ復帰させようとしているみたいに。
『何か』……何だろう？　メディレスの言うように、それは『優しさ』とか『良心』とか……そう、言われるものなのかもしれない。
「あのな、カズキからこれ、もらったろ？」
微かな自嘲を感じる俺には気がつかず、キグナスがロッドについた金属のアイテムを指先で鳴らした。
海底のダンジョンで手に入れた、魔術師の為のアイテムだ。
「うん」
「ちょっと、つけ方、変だったみてぇ」
「え？」
俺にもキグナスにもつけ方がわからなかったから、あの時確か、ナタがつけてくれたはず。
「変？」
「うん。わかんねぇけど、フリュージュにいる間に、変な風に留めてあるなあって思って、俺、自分で少しいじったんだ」
「そうなんだ」
「そしたら……ここの、氷の大陸についてからさあ」

そこで一度言葉を切ったキグナスは、少しだけ得意そうに鼻の下をこすって笑った。
「無尽蔵に魔力が溢れ出てくる感じ」
「……え？」
何か、心の片隅で、警報が鳴った。
「無尽蔵に？」
「うん。例えばさ、入れ物があるとすんじゃん。そこに入ってるのが魔力。元々は、そこと繋がってる出口がすっげえ小さかったのが、俺」
「アイテムを見つける前な」
「そう。で、その間口を広げたのが、このアイテム」
「うん」
「……その間口が、ごそっとなくなっちゃったみたいなのが、今」
「……」
無言でキグナスの顔を見る。
アイテムとロッドの繋ぎ方を変えることで、汲み出す魔力の力量が変わった……つまり、ナタのつけ方では、まだセーブがかかっていた。
ナタは、「同じ魔力の消費量で、魔法が強力になる」とか言ってたから、実際はキグナスの言うように魔力の消費量が増えたって話ではないんだろうけど、実際の増減は置いておいて、魔法そのものが強力になっていることで、本人の感覚ではそう感じるってことなんだろう。
……そこに、意味があったわけじゃ、ないんだろうか？　ただの、ミス？
「それ、平気？」
「ん～。別にこれと言って負担はねえけどなあ」
「ふうん……？」
なら、良いのかな。
やっぱただのミス？　「あ、ごっめ～ん」とか言ってやりそうな

キャラではある。
それとも、わざとセーブするようにしていたんだろうか？　……アイテムに、頼り過ぎないように。
「キグナスって、そのアイテムなくしたら魔法、使えんの？」
「馬鹿にするなよッ。使えるさッ。……前レベルなら」
「ロッドなくしたら？」
「……」
おいおい。
「ま、追い追い修行しますとゆーことで」
「……」
「でも、使ってる魔力は俺の自前だろッ。んじゃあ俺の自力じゃんか」
「うーん」
でも、そのアイテムって言うガイドがないと、途端に間口がちっちゃくなっちゃうんだろ？
「無事レーヴァテインも手に入ったし～。これで、何とかカタがつくといいけどなあ～」
つい気にして考えていると、すっかりその話が終わったらしいキグナスがあくび交じりに伸びをした。
座ったまま、のそのそと這って移動して来ると、俺の隣に並んでこてんと壁へ背中を預ける。
「うん。そうだね」
もう一度、レーヴァテインを見遣る。
ツェンカーを動かす為の鍵、になるはずのもの。
「早くトラファルガーが片付いて、で、帝国継承戦争が終わってぇ……」
「で？」
「でぇ……」
促してみると、キグナスが言葉に詰まった。ちらりと視線を向けると、何かを一生懸命考えているような目つきをしている。

「何？」
「平和って、訪れんのかな」
こりゃまた、でかいところにいった。
「さあ……それは、どうだろうね」
日本では、少なくとも俺が生きていた１６年の間では、戦争のようなものが起きた試しはない。
だけど、世界での戦争は、起きている。人は、どこの世界でも争い合っている。
ここでの話を聞いていても、少なくともここ数年だか十数年だかの間にヴァルスは幾度か参戦しているし、それを考えれば……そして、その真剣な横顔を見れば、安易な解答は出来かねた。
「それこそ、ユリアや……シェイン、ラウバルらの頑張りにかかってるんじゃないのか」
もちろん、レガードも。
俺の記憶の中では未だ意識を取り戻していなかったことを考えて敢えて省きつつ、心の中で付け加える。キグナスが、ふうっとため息をついた。
「そうだよな。努力すりゃあさあ、何とかなんのかな」
「平和を望んでるんだ」
「そりゃあそうだろ～」
答えながら、キグナスが足をぽすんと投げ出す。広げた足の間にロッドをころんと置いて、それを手で弄びながら中空を眺めた。
「殺し合いは、したくねえな」
「……」
「早く戦争が終わってぇ～、無事に戴冠が済んでぇ～、んで～」
「んで？」
「一緒に修行しようぜ～」
「……はあ？」
答えが思いっきり間抜けになった。
「俺、こうやってあちこち回ってさあ、冒険者っての、やりたくな

った」
「あんたの将来は宮廷魔術師なんじゃなかったの」
「う～ん。そりゃまあな、そんだけの実力がついて、シェインみたいになれたらいーよなあって思いはするけど」
「ああなりたいんだ」
「そこ、噛み砕いて繰り返すな。偉い誤解が生じる」
「あ、そう。ああなりたくないわけね……。んで？」
「んで～。……？　何だっけ？　あ、そうそう。だから、シェインみたいになりてぇなあって思わなくはねぇけど。でも、今まで単に目標値が何もねぇから宮廷魔術師に憧れてたってのは、あるんだよ」
「ああ……うん」
何もないから宮廷魔術師ってのも、多分壮絶なことのような気がするが。
突っ込むことはせずに、俺はキグナスの話に相槌を打った。
「シェインは、シェインの意志で宮廷魔術師になった。そこに何らかの意味があるんだと思う。でも、俺は別になくて。……俺、何したいかなあって言ったら、こうやってカズキなんかとさ、あちこち行って、困ってる人とかの手助けとか出来たらいーなあって最近思ったりする」
「俺は……」
口を開きかけて飲み込む俺に、キグナスが笑った。
「わかってるよ。でも、考えるだけで楽しいじゃん？　……俺だって、実際は、冒険者になんてなるわけにいかねぇよ。宮廷魔術師になれなくたって、俺は城の役人になるしかねえもん」
「……そういうもの？」
お貴族社会ばっかりは、未だに良くわからない。何せ、こちらの世界に来て初めて目の当たりにしたと言うのに、そして俺は『王子様の代理人』だと言うのに、外をふらふらしてばかりで一向に馴染める環境にいないんだから。
今し方の、無邪気に夢を語る表情を消して、どことなく悟った目

付きでキグナスが頷いた。
「そういうもの。出奔でもすりゃ別だろうけど、俺にはそんな度胸ねえし。俺は一人っ子だから、出来悪くたって、家名背負わなきゃなんねえもん。家族も、シェインも放り出すなんて、俺、出来ねえから。だから、役人。決定」
「ふう、ん……」
不自由なんだな、結構。
でも、考えてみれば確かに、シェインだって「言い放題のやり放題」に見えても、価値観が結構固定されてる部分はないわけじゃない。「主の為ならば命も懸けよう」――彼は、まだ出会って間もない俺に、そう言った。俺からすればその発想は、任侠的であると同時に不自由のようにも思える。
「でも、ちょっと夢見てるくらいは、いーじゃん？」
決められている未来……恐らくは、結婚も不自由なんだろう。ユリアに決められた婚約者がいるように、上流貴族階級であるキグナスもまた。
「それにさ、俺、もう一度……ファリマ・ドビトークに行ってみてぇんだよな」
何て奇特な。
つい絶句してキグナスを見るが、キグナスは自分の考えに沈み込んでいるかのようで、ぎょっとした俺の視線には気がつかなかったようだ。
「もう一度、あのドワーフに会いに。んでもまあ、個人的に気になるだけだから……終わってからで、いーんだけど」
「個人的に気になる？」
「ん？　うん……」
少し、言いにくそうに口ごもったキグナスは、それから改めて俺を見た。
「紫の髪の女の子、いただろ」
「ああ……ナタ」

「そう。彼女のことを、あのドワーフが何か知ってんのかなと思って」

思わず無言でキグナスを見返す。キグナスも、黙って俺を見返した。

ナタって……。

キグナスの口から、ナタのことが出るとは思わなかった。

「あのコに最初に会った時、前に会ったことがあるような気がしたんだ。しばらく何だかわかんなかったけど、考えて気がついた。……ファリマ・ドビトークで前に、俺を助けてくれたのは彼女のような気がする」

第3部第1章第26話　樹氷の森（2）

「助けて……？」
その言葉に、記憶のどこかが触発される。
前にファリマ・ドビトーク……助けて……祭壇。
「それが、どうしてヘイリー……」
尋ねかけて、口を閉ざした。
シサーとラギラが戻って来るのが、見える。
「んだからお前、自分の世界に戻る前に、それだけ付き合ってくれよなッ。カタがついたら、2人でプチ冒険てのも、悪くねえだろッ」
キグナスも、彼らの姿が見えたらしい。締め括るように言って、軽く舌を覗かせる。
「それが済んだら本当に……」
「……」
「……本当に、サヨナラ、だな」
全てが終わったら、か。
夢を『語る』しか出来ないキグナスの、小さな夢。
俺だってナタの正体なら気になるし、今更1ヶ月や2ヶ月延びたところで、大して困るでもないだろう。
「うん……いーよ」
「本当かッ？」
こちらに片手を振って近づいてくるシサーたちに手を振り返しながらもう一度頷くと、キグナスがくしゃりと笑った。
「約束なッ。んじゃあ、俺とカズキでも心配ないように、しっかり魔法の腕磨かないとな」
「頼んだ」
「何言ってんだよッ。お前はもちろん、剣の腕を上げるんだぞ」
「剣の腕……」
って、コレか？

ついつい視線をレーヴァテインに向けている間に、シサーたちがすぐ近くまで来る。
「よう。生き返ったか」
「何とかね。この中、他に何かあった？」
期待せずに聞いてみると、案の定、シサーが苦笑いを浮かべた。
「まあ、想像通りってところだ」
それからシサーは、俺の前にしゃがみ込んで、ぽんと頭を軽く撫でた。
「良く無事だった。ひとりで良くやった」
「成長した？」
「もっと成長するんだな」
調子に乗ってみると、あっさりと切り捨てられた。まあ、最後はらっきーだったことは、否定しない。
こっそりと首を竦めていると、シサーの隣でラギラが俺に向かって何か言った。それからシサーに向かって、言葉を続ける。それを受けたシサーが、小首を傾げるようにして、俺に向き直った。
「レーヴァテインを抜いてみたいそうだ。……どうする？」
「え？　ああ……」
言われて、俺はレーヴァテインを持ち上げた。華麗な鞘と、柄。思うほどの重さは、なかった。
「良いけど。それは別に」
まさかここでいきなり持って逃げるとは考えられないし。
あっさり頷いて差し出すと、ラギラが嬉しそうに受け取って柄に手を掛けた。それを眺めながら、シサーが俺に問う。
「お前、あの時、何が聞こえたんだ？」
「あの時？」
「一角獣を倒した後だよ。……何か、ぶつぶつ言ってたじゃねぇか」
ぶつぶつって。
シサーの言い草に顔を顰めながら、立ち上がる。つられたようにキグナスも立ち上がった。ラギラが柄と鞘に手を掛けたまま剣を眺

めているのを見遣りつつ、シサーの疑問に答える。
「レーヴァテインの声が聞こえたんだ」
「え？　話すのか？」
「話すって言って良いのかなあ……」
どう譲歩したって、レーヴァテインに口はない。
「頭の中に聞こえたって感じ」
「今は？」
「俺が目が覚めてからは、静かだよ」
レーヴァテインの言葉は、ヴァルス語でもなければイリアス語でもない。もちろん日本語であるはずもなく、頭の中に響く声の意味を俺が勝手に認識しているような感じだ。
レーヴァテインが『話すこと』自体が突っ込みどころ満載で、頭の中に響くに至ってはそのシステムについ頭を悩ませてしまう。最も納得が行く解答が「俺の妄言」と来るとなると……考えるな、俺。
文系だと思っていたけど、俺は意外と理系脳のようだ。
「ふうん。……＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊」
後半のセリフは、相変わらず鞘に刀身を収めたままレーヴァテインを眺めるラギラに向けられたものだ。多分「抜かないのか」とか何とか言ったんだろう。
ラギラが、困惑したような視線を返した。
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊」
「え？」
「シサー、何？」
「抜けない、らしい」
ラギラから、シサーが剣を受け取る。試しにシサーが引っ張ってみても、やはり剣は抜けないようだった。
「お前じゃないと、抜くことさえ叶わないってわけか」
「鞘に収めるのは出来るのに、引き抜くことは出来ないんだ？」
何気なく尋ねると、シサーがきょとんとシルバーの目を瞬いた。
「あ？　何だ？　それ」

「誰かが収めてくれたんじゃないの？　俺、抜き身のままで気を失った」
「いや。お前がこっちにいきなり現れた時には、剣は鞘に収まってたよ」
嘆息して、剣を俺に返す。俺の手元に戻って来た途端、頭の中に声が響いた。
――オ前ニ抜カレルノモ　不本意ダガナ……
何ぃ？
「……」
「カズキ？」
「……」
「何、変な顔してんだ？」
俺も、お前のような魔剣を探しにわざわざ氷の大陸くんだりまで来たのかと思うと、涙が出そうだよ。
「何か聞こえたのか？」
勘の良いシサーが俺の様子を察して、尚も尋ねる。
「俺に抜かれるのは不本意だとさ」
抜いてやる。
言いながら剣を引き抜くと、先ほどの不満とは裏腹にするりと刀身が鞘から引き抜かれた。
腹が立つくらい、神々しい白刃。
剣を抜くことさえ叶わなかったラギラが、ほうっとため息をついてレーヴァテインを眺めた。それから、俺に向かって何かを口にした。
「そうか……それも、そうだな」
それを聞いて、シサーが少しだけ目を見張る。二言、三言、ラギラに言葉を返すと、改めて俺に彼の言葉とシサーの考えを伝えた。
「レーヴァテインなら、知ってるんじゃねえか」
「え？」
「トラファルガーの、巣穴だよ。……レーヴァテインに、聞いてみ

てくれ」

◆◇◆

魔剣と言うのは、どうやら性格が悪いらしい。
――オ～ット　コノ辺リデ東……ダッタ　カナァ
この辺りって……お前には場所が見えてるのか？　口と同様、お前には断じて目もないぞ。……だから、考えるなってば、俺。
「かなあ、じゃなくてはっきりしてよ」
シサーとラギラの言葉に従って、レーヴァテインにトラファルガーの巣穴を尋ねてみると、返ってきた言葉はこうだった。
――サァテナ　知ッテハイタガ　ドコカニ引ッ越シシタカモ知レナイシナァ　ソモソモ僕ノ記憶ガ正シイカナァ
こんな歪んだ奴を頼りにして良いものか。
そこはひどく悩みどころではあったが、それから間もなく戻って来たナヴィラスたちにも収穫らしい収穫はなく……と言って、いつまでも神殿に籠もっていたって仕方がない。
目的は、『レーヴァテインを手に入れること』じゃあないんだ。
『レーヴァテインを手に入れて、トラファルガーを倒すこと』。
しばしの検討の末、ともかくも『ご立派な魔剣様』の仰ることを信じてみようと言うことで、再び氷雪の逆巻く大地へ彷徨い出ている、わけ、だが。
「何だって？」
「ちょっと待って。すげー微妙」
何せ、案内役の根性が、悪い。
教えてはくれるものの、合ってんだかないんだかって感じで、不安感たっぷりだ。
「東に向かうのか？」
尋ねる俺に、レーヴァテインの赤い石が、応えて光った。
――ドウダッタカナァ　北東ダッタカナー

このやろう。
「何？　何だって」
シサーが俺に尋ねてくる。
レーヴァテインは、抜くのもさることながら声も俺にしか聞こえないらしく、俺を介さなければ他の人にはレーヴァテインの言葉は通じなかった。
だから俺がこうして間に入るわけだが、どうにも小憎たらしいレーヴァテインの言葉を伝えると、周囲のイライラが俺に向けられる。俺に向けないで欲しい。
「東だとか北東だとか、はっきりしない」
こんなだだっ広い大陸で、東に向かうのと北東に向かうのとじゃ、雲泥の差がある。シサーが舌打ちをした。
「はっきりしろよ」
俺じゃないってば。
「どっちなんだよ」
――東～　東～　『樹氷ノ森』ノ　北ノ東～
「はあ？」
――　……
く、黙りやがった……。
指針を耳に出来るのが俺だけなので、シサーやキグナス、ナヴィラスらがみんな俺を見ている。
ため息混じりに、俺はレーヴァテインの言葉を伝えた。
「『樹氷の森』の北の東、だってさ」
「『樹氷の森』が、そもそもどこにあるんだよ」
「東、なのかな……」
「これなんじゃないのか」
渋面を作る俺をよそに、ナヴィラスの涼しい声が聞こえた。開いているのは、ヴァルト副将軍から預かった手書きの地図だ。氷雪を避けるために表面には鑞が塗ってあり、やや曇って見えるが、雪でぼろぼろになるよりかなりまし。

「らしいものが、あるか」
「わからないが。森とは書いていない」
ナヴィラスの手元を、シサーが横から覗き込む。それから顔を上げて、北東の方角を見据えた。
「こっちか」
何が東だ、馬鹿野郎。
「氷の柱が連立している地帯があるみてぇだな。ヴァルト副将軍はその先へは進んでいないみたいだが、しばらく続くとのメモ書きがある」
「ざっと見た限りはこれがクサイが……まあ、閣下もそうあちこち回られたわけではないだろうから、確定とは言えんな。……少年」
はい、俺ですか？
ナヴィラスの目がこちらを見据えたので、俺もそちらに向かって歩いた。キグナスが無言で、俺の後をついてくる。
「もう一度、魔剣に問うてみてくれ。ここでの無駄足は、致命傷を招く」
「……うん」
それは、同感だ。
「レーヴァテイン、教えてくれよ」
これまで使っていた剣と入れ替わりに腰に帯剣している、ご大層な魔剣に呼びかけてみる。レーヴァテインが応えてくれないと、物に向かってぶつぶつ言っているみたいで、ひどく居心地が悪い。
「北にある、氷の柱が連立しているところが『樹氷の森』なのか」
――……
嫌な奴、もとい嫌な物だ。
「何だよ。トラファルガーを怖がってるんじゃないだろうな」
試しに挑発してみるものの、魔剣たるもの感情的にはならないらしい。
「おーい。なあ、頼むよ。お前の助言が頼りなのに」
泣き落としも、スルー。

俺は今、孤独だ。

うんともすんとも言わない剣を相手に、しきりと話しかける俺の身にもなってみろ。どこからどう見ても、完膚なきまでの『痛いコ』じゃないか。

「いい加減にして……」

――東……

え？

今度は脅してみようかと思ったところで、遮るようなレーヴァテインの声が聞こえた。……東？

「東、って言ってる」

「確かか？」

「その真偽まではわからないよ。でも、そう言ってる。……北東の、氷の柱じゃないんだな？　東なんだな？」

――東……

第3部第1章第26話　樹氷の森（3）

レーヴァテインは、面倒臭そうに繰り返した。これが、誰もが憧れた宝剣かと思うと殺意すら湧いて来ようと言うものだ。

「東か」

「地図には、何かある？」

尋ねてみるが、ナヴィラスは無表情に顔を横へと振っただけだった。

「これを見る限りは、副将軍閣下は東へは足を伸ばされていないようだ。特に目ぼしい記載はない」

「ふうん……」

わざわざ氷の大陸まで出向いてきて手に入れたのがコレじゃあ力も抜けるが、氷竜打倒の強力アイテムだと思えば捨てるわけには行かない。

今ひとつ信用ならないが、さて、どうするべきなのか。

「シサー。どうする」

「『氷竜の魔剣』サマが仰ってるんだから、信じてミマスカ」

食ったようなシサーの意見が受け入れられ、とりあえずはレーヴァテインの言う通り、東へ進路を取ることにする。

幸いにして氷雪はちらちらと言う程度、魔物にも遭遇しない、問題点は極寒のみと言う平和な行程を経て、夕刻も間近であろうと言う頃……前方から小さな歓声が上がった。

「あれか」

ナヴィラスが、こちらを振り返る。鋭い視線を更に細めて先を見遣り、そのまま俺の方を振り返った。いや、聞かないで欲しい。

なだらかな丘陵が織り成す起伏のみの白い景色に、良く見れば鋭利なシルエットが浮かび上がっている。

良く良く見れば、木々の形に良く似たものが連立しているらしい。

とりあえずレーヴァテインに騙されなかったことに安堵しながら、

歩を進めていく。近付いてみると、それは、どこか奇妙だった。
『樹氷』は、通常、樹に纏わりつく氷雪が見せる繊細で鮮やかな芸術だ。
けれどここの『樹氷』は、そもそもが氷だった。むしろ『氷樹』。
『氷で出来た樹』。
「うわ～、すっげ～」
キグナスが見上げて、素直な歓声を上げる。
氷で出来た樹は、枝葉も伸ばし、それに更に氷雪が纏わりついていた。透き通った枝、白い筋が走る幹、それがきらきらと空気中の光に反射して、場が場でなければロマンティックで幻想的と言えるだろう。
それほど自身を反射するわけではないけれど、どこかミラーハウスを彷彿とさせる気もする。
「ここを抜けて、北西ってことか……」
シサーが言いかけて、言葉を途切れさせた。不思議に思ってその視線を辿る。ちらちらと降る雪と『樹氷』で白く煙る森の奥に、小さな影が、見えた。
樹の陰からそっと姿を覗くように、ぽつんとひとつ……ふたつ。
――いや、増えてる……。
「何だ……？　あれッ……」
ぼうっと光るように現れては、形を取る。現れた姿は、子供のように見えた。
「魔物、だよね……」
剣を引き抜いて見据えたまま、尋ねる。近くにいたキグナスが、頷いた。
「だろうな」
「何て奴」
「わかんねえ」
ナヴィラスの号令で、兵士たちが整然と前衛に構える。
元々魔法を使うキグナスは後衛、最も弱い俺も通常は後衛で見物

――だったけど。
「カズキ、剣に慣れとけ」
「うん」
この先は、別だ。トラファルガーと戦う前に、レーヴァテインと言う特殊な剣に慣れておく必要がある。
レーヴァテインは、炎の魔法が操れると聞いている。それは、本人もとい本剣にも確認済みだ。
問題は、こいつの根性の悪さのせいで、その発動のさせ方が全くわからないと言うこと……。
「――『火炎弾』ッ」
前方で壁のように俺たちと魔物を隔てる兵士たちの間では、既に戦闘が起こっている。魔物の全貌は俺にはまだ良くわからないが、どうやら通常の物理攻撃は有効のようだ。
上がる悲鳴は、人間のものだけ。斬られても突かれても無音の敵方は、兵士たちに恐怖を募らせているようだった。
次々と湧いて出る白い魔物が、兵士たちをすり抜けてこちらへ向かって来る。俺たちを守る為だろう、そばにいたシサーが、白光を放つ剣を構えて短く怒鳴った。
「来るぞッ」
ようやく見えたその全貌は、氷の彫像が動いているかのようだった。
俺の腰くらいの高さ、白い肌に白い目、白い髪に白い服を纏い、白い短刀を振りかざして踊りかかってくる。この地における、見事なまでの保護色。
シサーが薙いだ剣に弾かれる『白いの』をくぐり抜け、別の『白いの』が翳した剣を、レーヴァテインで受ける。
（な……!?）
何だ!?　この、重さはッ……!?
異様に重たく感じる剣に、間合いを間違えた。『白いの』の小振りな剣に肩を切り裂かれ、血が舞った。

（いてえッ……！！）

顔を歪めながら、辛うじて相手を弾き返す。そのままの勢いで剣を叩き込もうとするも、やはり、水の中をかいているかのような重さにタイミングが狂った。

「ちぃッ……！！」

「カズキ、どうした！？」

難なく俺の剣を避けた『白いの』と、いつの間にか横から襲い掛かってこようとしていた別の『白いの』を一挙に薙ぎ倒しながら、シサーが怒鳴る。助けてくれなければ、俺は今の剣で喉を貫かれていた。

「剣がッ……」

仮にも魔剣――先まで使っていた剣に比べれば使い勝手は良くなるだろうとの期待は、あった。

けれど、これじゃああれにも劣る！！

「レーヴァテインッ！！」

思わず怒鳴った。

剣の本体が重く、俺の筋力不足と言うならまだわかる。けれどこの重さは、そういう種類の重さじゃない。空気に対する粘液質な抵抗、摩擦力……そんな感じ。大体、これまでにだって持っていたけれど、こんなに重みはなかったはずだ。

俺が怒鳴っている間に、またも襲い掛かってくる『白いの』を、シサーが弾き飛ばす。視界の隅でかっ飛んでいく赤い塊は、キグナスの魔法だろう。前衛の方は、相変わらずわらわらと湧いてくる『白いの』にてこずっているようだ。

――言ッタロ

短い沈黙を挟んで、レーヴァテインの声が聞こえた。

不満げな声、それが一転して嘲笑を孕んだものへと変わる。

――オ前ガ　力不足ナンダッテナァ

「くッ……！！」

こ、こいつ……。

どうしてくれよう？
「カズキ、どうしたんだッ！？」
俺をガードするシサーから、再び怒声が飛ぶ。尚も剣を思い通りに振ろうと試みながら、俺も怒鳴り返した。
「まともに動かないッ」
「はあ？」
「思い通りに、動かないんだよッ……」
持ち主の動きに抵抗する魔剣なんか、ない方がまし。元の剣の方がよほどまともな動きが出来ると思うが、生憎と邪魔なのでラギラに預けてしまって手元にない。
――足リテ　ナインダヨナァ
「え？」
――足リナインダヨ……匂イハスルノニ、道筋ガ通ッテナインダヨナァ……
はぁ？
言っている意味がわからない。
周囲の戦闘をよそに、のんきに眉を顰めていると、不意にぞわり……と自分の中で何かが動いた。……ような、気がし……。
「う、わあああああッ……」
突然、レーヴァテインが刀身を跳ね上げた。『俺が持っている』のに俺の意志なんか関係なく、むしろ俺の腕を振り上げる勢いで自らを擡げる。
そして次の瞬間には、俺の意志なんかこれまた全く無関係に、その刀身から炎が迸った。
火炎放射器の勢いで炎を突然ぶっ放し、のたうつ炎流は誰の制御を受けることもなくあらぬ方向へと奔走し、至るところで味方の悲鳴が上がる。
炎で出来た鞭のようなそれは、なかなかどうして強力らしく、暴れる先々で樹氷を薙ぎ倒した。ただでさえ自由とは言いにくい森の中、暴れる炎と崩れる樹氷で、大騒ぎ感がある。

「――『水膜』ッ」
キグナスが味方を守る為に防御魔法を飛ばし、同時にシサーの怒声が叩きつけられた。
「カズキッ！！」
「お、俺じゃないッ」
激流を押し出して暴れ回るホースのように、レーヴァテインの刀身がぶれる。五体満足でも抑えられそうにないものを、大したことないとは言え肩に怪我をしてれば尚更だった。努力虚しく、抑えきれずに俺がレーヴァテインに放り出されると、同時に炎の奔流も収まった。
既に俺から前は、樹氷が薙ぎ倒されまくってかなり見晴らしの良い状態になっている。
（くそッ……！！）
隙を狙って襲い来る『白いの』の攻撃を避けながら、再びレーヴァテインに飛びつく。途端、どくんと心臓が大きく鳴り、次いで今度は剣先からちょろ～んっと炎が漏れた。
「あのなあッ」
念の為に言っておくが、決して俺は遊んでいるわけではない。
他のみんなの敵は、次々と湧いて出る『白いの』だと言うのに、俺の敵はただひとつ――レーヴァテインだとは。
今し方、自ら俺を振り回すぐらい身軽だったとは思えないほど鈍重に戻ったレーヴァテインを、叱咤して持ち上げる。持ち上げることは出来るんだが、これを振ろうと思うと……。
（鈍いッ……）
どうにも、俺とレーヴァテインは気が合っていないようだ。
再び振り出しに戻って、シサーに守られながらレーヴァテインとの地味な格闘を密かに繰り広げていると、不意にその場の空気がざわめいたような気がした。
「何……」
ああ。

間もなく、そう感じたわけを理解する。
あちこちで起きていた戦闘が止み、代わりに今まで完全な無音だった『白いの』たちが、空気中を見上げて何かひそひそと音を立てているんだ。
空気そのものを振動させているような、密やかなざわめき。
「な……？」
その様子に、こちら側も攻撃の手が止まる。
やがて、いくら倒してもきりがなかった『白いの』たちが、突然――本当に突然、一斉に、姿を消した。
「何だ？」
前衛の方で魔法の援護を繰り出していたキグナスが、気味の悪そうな表情で辺りを見回す。
空気の中に、高まっていく静寂と緊張。
それは、『嵐の前の静けさ』と言う言葉が、ひどく似合う静寂だった。
シサーの剣は、低い唸りを上げるように光を放ち続けている。
「まさか……」
「＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊……」
キグナスの声と、誰かの呟きが、重なった。
――――――――――そして、その時が、訪れた。
不意に頭上から投げられた、黒く大きな、影。
「トラファルガーだ……」

◆　◇　◆

見上げる上空に、その生き物がいた。
遠くから見たあの時はくすんだ白のように見えたけれど、こうして近くで見ると、やや青味がかっているように思える。
爬虫類のような姿態、長く擡(もた)げた首が、やや傾げるように微かに動く。巨体を持ち上げている翼は緩やかに動き、それが起こす風が

樹氷を揺らす。
それは、一見、穏やかな生き物のようにも見えた。
距離があるにも関わらず見える瞳が、深い湖のような色をして見えるからだろう。
レーヴァテインが樹氷を薙ぎ払ったせいで見通しの良いこちらは先方からも良く見えているらしく、トラファルガーはこちらに目線を据えたまま、反対側に小さく首を傾げた。
そして、その巨大な口が、開かれた。
「クォォォォッッッ！！！！！！」
びりびりと空気を揺るがす咆哮が、大気中を支配する。震える空気に樹氷が耳障りな音を立て、そして同時にそれは、呆然としていた人間たちを恐怖と混乱の淵へと追いやった。
「……＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊！！」
誰かの悲鳴。
だけど俺には、振り返っている余裕なんて、なかった。
「カズキッ……樹氷の陰にッ……」
「――『炎の衣』ッ……」
シサーとキグナスの声が聞こえるが、俺はその場に立ち尽くしたまま動けなかった。
どくん、どくん、と大きく脈打つ鼓動。手が、吸い付いたようにレーヴァテインから離れない。体中から何かをかき集めているような、内側がさわさわする奇妙な感覚。沸騰しているように熱い血液が、体内を逆流していくみたいだ。
――どくんッ。
「うわあああッ……！！」
次の瞬間、レーヴァテインから炎が迸った。
またも、俺の意志など完全に無視したレーヴァテインの暴走だ。
まるで放電でもしているかのように幾筋もの炎を迸らせ、その中でも極めて太い……一抱えはありそうな火流が、空に浮かぶトラファルガー目掛けて一直線に疾った。

「グオアアアアアアアアッ」
「あいてッ……」
鼓膜に突き刺さるような咆哮と、俺の小さな悲鳴が重なる。何せ水圧に暴れるホース並にぶれるレーヴァテインを、抑えきれなかった。反動で投げ出された体が樹氷の残骸にぶつかり、同時にレーヴァテインが音を立てて落ちた。
戻る、静寂。
そばにいたシサーが、俺を助け起こそうと手を貸してくれる。投げ出されて何が起きたのかを全く見ていなかった俺は、顔を上げて、背筋を戦慄が駆け上がった。
「カズキッ……」
シサーが俺を引っつかんで、樹氷の陰へ向かって地を蹴る。次の瞬間、頭上から拳大の氷礫が雨のように降り注ぎ、逆上したトラファルガーの咆哮が地面を振動させた。床に叩きつけられると同時に、地面の小刻みな振動を全身に受ける。

第3部第1章第26話　樹氷の森（4）

不用意なレーヴァテインの攻撃が、トラファルガーを怒らせたようだ。

「＊＊＊＊＊！！　＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊！！」

氷礫が樹氷や地面に当たる硬質な音と、トラファルガーの咆哮の合間に、微かにナヴィラスの怒声が聞こえる。我に返って何かを指示しているんだろうとは思うんだが……。

「うわあッ」

ガラス窓をぶち破ったような甲高い音と共に、間近の樹氷が破砕された。背後でも、同じように氷片が飛び散る音が聞こえる。

ぶうんっと低い唸りが聞こえ、それが風の巻き起こした音だと気づいた時には樹氷に叩き付けられていた。それを認識した途端、俺より少し離れた左方で、激しく何かが粉々に砕けるような音がした。絶え間ない氷竜の咆哮。人々の、悲鳴。

もう、立て続け過ぎて、何が起こっているのか、俺自身が今ひとつ理解が追いつかない。

「何ッ……どうなってッ……」

不意に、空気中の冷気が増した。今までちらちらとしか降っていなかった雪が、氷雪となって次第に強さを増していく。悪くなっていく視界の中、ようやく空中を見据えると、氷竜は俺から数十メートル離れた辺りの中空すぐ近くまで、舞い降りてきていた。

雄叫びと共に、トラファルガーの口から吐き出される煙のような冷気。長い首を樹氷に叩きつけるように薙ぎ払う。耳に痛い音が畳み掛けるように響き、あっと言う間に吹雪と言える状態の中、シサーが視界の隅で駆け出した。

俺たちとやや離れた場所から、キグナスの放つ炎が上がる。前よりスムーズにアイテムの力を引き出せるようになったと言うキグナスの火炎は、以前とは数十倍もの違いがあることが、目に見えてわ

かった。
（すげ……）
轟音に似た、野太い氷竜の叫びが上がる。それで、キグナスの魔法が功を奏したらしいことがわかった。
ファリマ・ドビトークで噴き上がった魔力の暴走を思い出す。キグナスは確かに、奥底に秘めている魔力には凄いものがあるのかもしれない。
思いながら、俺もレーヴァテインを放り出したところへ向けて駆け出した。絶え間ない悲鳴と怒声の中、同じ場所に転がったままのレーヴァテインを拾い上げた。
「レーヴァテインッ！！　お前の扱い方を教えてくれよッ」
戦うべき相手がそこにいて、使うべきアイテムがここにある。なのに、どうにもなっていない。
――駄目ダ　駄目ダ　ワカラナインジャ　駄目ダ
「何言ってんだよッ」
とりあえずは、レーヴァテインを掴んで喧騒の最中（さなか）へ駆ける。現場から逃亡しようとする兵士数人、そして血飛沫と、重傷を負っている兵士の姿もあった。
――教エルモノジャナイノサァ
教えられなきゃわかりようがないだろう。
……と、駆ける背後に怖気を感じた。空気を太く切り裂くような低い音と、樹氷を濁流のような速さで粉砕する……。
「――『炎の衣』ッ……」
寸前で、キグナスの魔法が割り込んだ。その直後には、トラファルガーが森を舐めるように叩き込んだ尾の直撃をくらって、俺自身が樹氷を薙ぎ倒しながら弾き飛ばされる。
「げほぉッ……」
最後に破砕した樹氷の幹に凭れ掛かるように仰向けになって、全身の痛みを感じながらも、心の底からキグナスに感謝をした。
恐らくは、更に個人対象で、発動出来る最大限の魔力を使って、

俺の防御を固めてくれたんだろう。
じゃなかったら、死んでる。普通に。
にも関わらずこの衝撃、この痛み、レーヴァテインはまたどこかへ行ってしまった。何してんだ、全くもって。
（使いこなせるのか、か……）
この場で使う為に手に入れた魔剣のはずなのに、氷竜を怒らせるだけ怒らせてそれっきりでは、迷惑でしかない。
俺では、使いこなせないのかもしれない。
体を起こすと、また豪火が噴き上がるのが見えた。森のすぐ上まで下りてきていた氷竜が、魔法を避けるべく再び上空に舞い上がるのが見える。
――確率の問題だ。敵にとってのターゲットが分散される。それだけだな。統制が取れてなきゃ、敵への攻撃率は、下手すりゃ下がる。
シサーが先日言っていたことを、思い出した。あちらこちらに兵士が散っているおかげで、確かにトラファルガーの意識は分散されている。俺を弾き飛ばしたことなど多分理解していないだろうし、だから俺を追撃しようとも思わないわけだ。
それは、確かに助かるけど……。
（剣を、探さなきゃ……）
実際問題、俺から感じ取れる範囲で言えば、トラファルガーに効果的な攻撃を加えられているのはキグナス唯一人と言って過言ではなさそうだ。
とりあえず、『白いの』から受けた肩の傷以外は五体満足に動くのを確認して、改めてキグナスに感謝しつつ立ち上がると、不意に、上空が赤く染まったように感じた。
次いで、幾つもの傷を負ったシサーが俺の方へ駆けてくるのが見えた。
「話にならねえ。とりあえず、撤退だッ」
「撤退！？」

「今戦い続けたって、こっちの被害が拡大するばっかりで倒せる日なんか来やしねえよッ。……キグナスが、この辺りを全力で防御してる。ばらばらに『樹氷の森』の、果てまで逃げるぞ。あいつの目を晦ますことに成功したら、その後、神殿で落ち合うことにした」

その言葉を聞いて、胸が、疼いた。

「……うん。わかった」

込み上げる感情が、喉を塞いだ。

――――――――……悔しい。

◆◇◆

トラファルガーが出現したおかげで、『樹氷の森』の他の魔物は、一切姿を現さなかった。

キグナスが、使える魔力を注ぎ込んでトラファルガーを引き離し、氷の枝葉を伸ばす樹氷に身を隠してもらって森を駆け抜ける。

シサーとキグナスの3人で『樹氷の森』の中を逃れ、戦闘地からかなり離れたところでしばらく待機した後、やがてトラファルガーの咆哮が遠ざかるのを確かめてから俺たちは神殿への道を辿り始めた。

『樹氷の森』を出た時には、既に辺りは闇に包まれていたが、激しい氷雪はトラファルガーが連れて来たものだったらしく、『樹氷の森』を離れてみれば穏やかなものだった。

間もなく朝になるだろうと言う頃にようやく神殿へと辿り着き、今、キグナスは死んだように眠っている。

「全滅か……？」

神殿で落ち合うと言っていたはずだが、今現在、神殿には俺たち3人しかいなかった。

様子を見に外へと出ていたシサーが、全身に雪を纏わりつかせて戻って来る。

「……誰も、戻って来ない？」

「今のところはな。……降ってきやがった」
会話が、神殿内にいやに響く。
白くなった頭をばさばさと払いながら戻って来たシサーは、それきり無言で壁に背中を預けた。
気力がないので、俺も壁に背中を預けて座り込んだまま、無言で脇に置いたレーヴァテインを、弾いた。
お前、俺に、どうして欲しいんだよ。
どうしたら、お前をちゃんと扱えるようになるんだよ。
ため息。
レーヴァテインを手に入れたからって、トラファルガーがすぐに何とかなるとは、思ってはいなかった。
だけど、こうまで何も出来ないとも、思わなかった。
いや……何も出来ないより、タチが悪いよな。挑発だけして、あとは沈黙。最悪だ。
ぼんやりとそう思いながら、『樹氷の森』で倒れていた重傷者たちの姿を思い出す。
あれのきっかけになったのは、レーヴァテインを持った俺。……いずれにしても、ああなったのかもしれないが、それにしてもあれほどの混乱に陥れるきっかけを作ったのは、レーヴァテインの火流だったように思えてならない。
なのに、心の中に波紋は広がらなかった。
それよりも、こいつを扱えていないことが悔しい。……それだけだ。
「カズキ……？」
もう一度ため息をついていると、レーヴァテインとは反対側の隣に横たわっているキグナスが、薄く目を開けて俺を見上げていた。
「落ち込んでんのか……？」
まだ疲れきったような顔色のままで、キグナスが掠れた声を押し出す。……落ち込む？　そうか、落ち込むべきなんだろうな。
気がつきもしなかったことに自嘲して、俺は顔を横に振った。

「いや。……こいつを、どーすりゃいいんだろうなって思ってた」
「そか……」
「うん。……まだ、誰も来てないから、寝てて良いよ。疲れたろ。……助かった。ありがとう」
シサーは、黙って扉の方へ目を向けている。俺たちの声が聞こえていないはずもないが、会話に口を挟む気はないようだった。
「俺ぇ……」
「うん」
「最低だ」
「……は？」
言いながらキグナスは、仰向けに転がったままで片腕を目の辺りを覆った。
「何……」
「防御魔法、他の兵士の人たちに、かけきれなかったんだ」
「……」
それは、まあ、そうかもしれないが。
無言で視線を落とす俺に、キグナスは構わずに続けた。
「シサーと、お前。意図的に、防御が偏ってる」
「……でも、全体防御はしてたんでしょ」
「してたけど。それだけ。更に個人対象で重ねてかけたのは、お前とシサーだけ。……死なずに済んだ奴も、いたんじゃねぇかな……」
要するに、贔屓（ひいき）が入ってる、と。
それは仕方がないんじゃないかと思うのは、俺自身が「偏った恩恵」に浴することが出来ているからだろうか。
「……出来ないことを嘆いても、仕方がない。出来るんだったら、全員にやってただろ。そうしなかったのは、出来るのにやらなかったからじゃなくて出来なかったからじゃないのか」
黙っていたシサーが、口を挟んだ。キグナスが沈黙する。顔を上げると、シサーの視線が俺に向いた。
「お前も、これからやれることを考えろ。失敗は嘆く為にあるんじ

ゃない」
　キグナスが、ため息をついて何かを言いかけた。腕を目の上からどかし、体を起こそうとして……叩きつけるように開いた扉に振り返る。
「ナヴィラス……！！」
　神殿の出入り口に姿を現したのは、ナヴィラスだった。思わず立ち上がる。後ろに2人、つき従うように兵士が立っている。その更に背後、外は、ひどい吹雪で暴れ回る氷雪しか見えなかった。
「無事で……」
　壁から背中を起こしたシサーが声をかけるが、それには見向きもせずにナヴィラスが真っ直ぐ歩いてきた。体中の雪を振り落とすこともせず、憎悪に彩られた目で見据えているのは、俺だった。
「貴様……ッ」
「おい……ッ」
　無言で俺の正面まで来たナヴィラスは、言うが早いか、俺の胸倉を掴んだ。ぐいっと顔を近づけ、険しい目付きで俺を睨みつける。その前髪を伝う雫が、俺の頬にかかった。
「貴様の、身勝手な行動がこの結果を招いたんだッ！！」
　『俺の身勝手な行動』と言うのは、恐らく先制攻撃を仕掛けたレーヴァテインの火流のことだろう。
「ナヴィラスッ。それは違う」
　シサーが遮る。俺は、返す言葉もなく無言で顔を逸らした。襟元が閉まって、言葉を返すも何も、息も苦しい。
「何が違う！？　部隊はほぼ全滅だッ」
「トラファルガーが不意をついて現れたのは、別にカズキのせいじゃないだろう」
　シサーが、胸倉を掴むナヴィラスの手を取って、俺の首を解放する。急に空気の通りが良くなって、俺は微かにむせた。
「いずれにしても、トラファルガーは攻撃を仕掛けてきた。こちらが簡易砲台だの、投石器だのを準備する間もなくな。それは、あん

たもわかっていることだ」
「時間は稼げたかもしれない！！　こいつがトラファルガーを怒らせたりしなければッ……」
「攻撃を仕掛けたのは、カズキの意志じゃない」
自己を弁明する気がなく無言を貫く俺を、シサーが代わりに弁護してくれる。キグナスは、冴えない顔色のまま、無言でやり取りを見守っていた。
「何だ、それは？」
「わかってるだろう、『魔剣』なんだよ。制御しきれる前に、暴走してるんだ。トラファルガーが現れる前の戦闘でも、わかるだろう」
「だったらッ！！」
ナヴィラスの片手を押さえたままだったシサーの手を振り払うように、ナヴィラスが指先を俺に突きつけた。
「いずれにしても、こいつの能力不足が問題だ！！　このままでは、レーヴァテインなんて持っていても無駄でしかないだろうがッ！！」
その通り。
「だったら、どうするんだ？」
ナヴィラスの言葉に、シサーが微かに目を眇めた。珍しく感情的になっているナヴィラスに比べ、声を荒げることないシサーにやや気圧されたような顔つきをしながら、ナヴィラスが続けた。
「私が、使ってやる」
「取り出せもしなかったものを、使えると言うのか？」
「そのガキが取り出せたのは、単に鍵を持っているからに過ぎないんだろうがッ！！　私が鍵を持っていれば、もっと上手く使いこなしてやるさ！！」
ナヴィラスの背後の兵士が、剣を構えた。
シサーが、失笑する。
「鍵は、外れない。あんたがカズキ以上にちゃんと剣を使いこなせるかどうかは知らないが、いずれにしても鍵を持っている人間でなければ、鞘から抜くことさえ出来ない」

「だったら鍵を奪えば済むだけのこと」
「言ったろ。鍵は、外れない。……害を加えて外そうと言うのであれば」
低い声で言いながら、シサーが剣の柄に手を掛けた。
「こちらも全力で抵抗する」
一触即発に高まっていく空気に、キグナスも蒼い顔のままロッドを構えた。
庇われるだけの俺。何て惨めな。
冷静な姿勢を崩さないシサーと、ロッドを構えるキグナスに、頭に血の上っていたナヴィラスも少し冷静になったらしい。ナヴィラスはさておき、後ろの兵士よりは明らかにシサーとキグナスの方が上だし、形勢不利と判断したようだ。
未練がましく俺を一睨みすると、吐息をついて、一歩下がった。
それを見て、シサーが更に続けた。
「落ち着けよ。俺だって争いたいわけじゃない。ここで仲間割れは、ごめんだ。氷の大陸に永住する気はないんだろう？　俺もあんたも、船を使って帰らなきゃならん」
「帰る……帰る気なのか？」
ナヴィラスの発した問いに、シサーは目を眇めたままで、肯定した。
「今のままで、どうするつもりだ？　何か出来るつもりなのか？」
「……」
「一旦、フリュージュに撤退だ。……態勢を、立て直す」

第3部第1章第27話　心の豪火（1）

「こんなところにいたのか。……相変わらず酔狂だな」
フレザイルを離れてフリュージュへ戻る船の舳先で、ひとり、ぼんやりと波間を見つめていると、背中からシサーの声が聞こえた。
振り返る俺の頭をこつんと小突きながら、俺の隣に寄り掛かる。
「ひとりになるなって言ったろ」
「うん……。ごめん」
微かに笑ってみせると、シサーも眉をひょこんと上げて微笑み返した。
並んで、波間に目を向ける。
「キグナスは、部屋か？」
「ん？　うん」
もう、どういう状態かは説明の必要がないだろう。
「ナヴィラスは？」
「別に。とりあえずは、普通だよ」
「……そう」
あれから、しばらく神殿で他の生存者の到着を待ったけれど、結果としては虚しいものだった。
トラファルガーとのほんの僅かな戦闘で、生き残りは、6人だ。
時間としては、ごく短い間だったにも関わらず。
吹雪が止むタイミングを待ち、重い足取りで船へと戻ると、そこで待機していた操縦士の運転で、俺たちは一度フレザイルを離れた。
ゆっくりしていられないことはわかっているけれど、気候や食糧、魔物など、悪条件の重なる中で、レーヴァテインの扱いなどじっくり悩んでいたら、別の理由で命を落としかねない。
そうして戻る船の居心地の悪さと来たら、なかった。
ナヴィラスらは、一度矛先こそ収めたものの、俺に対する敵意はむき出しだ。

俺をひとりにすると、何があるかわからない――そんな懸念の元、船中ガードをされている俺は何だかお姫様状態で、常にシサーかキグナスのそばにいるよう強く言われている。

「もーすぐツェンカーか。明日の朝には、つくかな？」

すっかり日が落ちた夜の海は、暗い。雲の切れ間から僅かに零れる月の光が、波にきらきらと反射する。

「明日の朝には、つくよ」

冷たい海風が、シサーの髪を持ち上げてはなぶる。視界の隅にそれを見ながら、闇の彼方にツェンカーの地が見えないか、探してみる。

「あっちは、進んでるかな」

シサーが、俺に言うでもなく独り言のように呟いた。

それを聞いて、あの時のニーナの、寂しそうな悔しそうな……何とも言えない表情が心に蘇る。

「ニーナなら、大丈夫だよ。ちゃんと、進めてくれているはず」

そう言ってちらっと見ると、シサーは小さく「そうだな」と頷いた。

「……後悔とかさ、してたりする？」

その横顔を見て、何となく尋ねてみる。シサーは、妙な表情で軽く片眉を持ち上げた。

「はぁ？」

「ニーナに、少しきつい言い方に見えたからさ。反省でもしてるのかなーと……あいて」

わざとしたり顔で言うと、シサーにまた小突かれた。

「『片想い』に言われる筋合いじゃ、ねぇな」

あ、なんてことを。

それを言われたら、何も言い返せないじゃないか。

口を噤んでじっと睨むと、シサーはちらりと苦笑をして、また海へと視線を戻した。

「俺がそばにいることが当たり前になり過ぎちゃ、駄目になる」

「……え？」
波の音にかき消されそうな、小さな呟き。
聞き返す俺の言葉には答えず、シサーは無言のまま遠い横顔を見せている。
「いつか、いなくなるから？」
言葉を補って再度尋ねてみると、シサーは微かに笑った。
「風の砂漠のダンジョンのこと、覚えてるか？」
「うん……？」
「多分、脈絡もなくはぐれたのは、あれが初めてだったな」
シサーが『ついうっかり』ワープトラップにはまった時のことだろう。
随分一緒に旅しているだろうに、あれがそんな画期的な出来事だったとは。
シサーが向かい合っていた舳先から体を起こし、逆に背中を預けながら続ける。
「昔、仲間がもうひとりいたんだ」
「ん？　……『もう一部屋』の持ち主？」
シサーの家には、２人の個室とは別に『誰か』が使っていたらしい部屋がある。
思い出して言ってみると、シサーは感情の滲まない声で頷いた。
「元々は、あの家は彼の持ち物だ。ラグフォレストから流れてきた俺とニーナが出会って、その後に知り合った彼と行動を共にするようになり、あそこを拠点に動くようになった」
「……うん」
「クラリスと出会ったのも、そのくらいの頃だよ。一時は４人で動いていたこともあってな。……そうだなあ」
そこで言葉を一度切ると、シサーは小さく吹き出した。
「ちょうど、お前がこっちに来たばかりの頃……お前見てると、まるで昔の自分を見てるみてぇだったな。多分、ニーナもそんな気分だったんじゃねえかな。あんなふうだったよ、俺も」

「……『あんなふう』って、どんなふう？」
「だから……。『あんなふう』だよ」
何となく馬鹿にされているような気がするのは、気のせいだと思いたい。
「それで？」
小さく唸ってシサーを睨んでいた俺は、吐息をついて、話を促した。苦笑していたシサーが、笑みを飲み込んで少しだけ、寂しげな目つきを見せた。
「だから、尚更だったんだろう」
「どういうこと？　尚更？」
「あの頃の俺の姿とカズキがダブって見えるのと同時に、俺の姿が『彼』の姿にダブって見えていた……んじゃ、ねえかな」
つまり『彼』とやらは、シサーにとってはお師匠様のような……頼りなかったシサーにとって頼りになる人物だったんだろうか。
「ラグフォレストにあるダンジョンのひとつで、あの時の俺のように、突然彼が消えた」
ぽつっと言った声に、顔を上げる。見上げたシサーの顔に浮かんでいるだろう表情は、濃い陰影に消されていて、読めない。
「見つかったのは、剣と、血溜りだけだった」
「剣と血溜り……」
シサーが軽く、腰の剣を指で弾く。
「それからクラリスがタフタルに帰って、俺とニーナの2人になった。……風の砂漠のダンジョンで、俺が彼のように、二度と戻って来ないことを考えたんだろうと思うよ。ニーナは」
「……」
風の砂漠で、狂ったようにシサーの名を呼んでいたニーナの姿が記憶に蘇った。
「あれがきっかけだろうな。多分お互い」
「お互い？」
「俺と離れることをニーナが異様に怖がるようになって、そんな姿

を見て俺は、これじゃあ駄目だと思う」
「ああ……」
「俺がいなきゃ駄目な奴には、なって欲しくねぇだろ」
そっけない言い方だけど、ニーナのことをちゃんと考えてる……気が、する。
「俺がいなくなったら抜け殻みたいになっちゃ、困んだよ。いつか離れることを怖がってるくらいだったら、そばにいない方がましだろ。そんなんじゃ、意味がねえだろう」
「……」
「ひとりに戻った時に、あいつにとってマイナスになるようじゃ、そばにいなかった方が良かったってことになる。……あいつにとっては一時でも、プラスの出会いでありたいだろ」
一時でも——例えそばにいるのが、一時的なものであったとしても……。
傷を生むだけじゃない、得る何かがある出会い。
じき離れることがわかっているユリアを想っている俺にとっては、その言葉は、他人事じゃなかった。
「そばにいる間にも、それぞれが依存せずに自分でちゃんと立っていれば、離れた時にも過ごした時間に意味を見つけられる。そうであって、欲しいんだよ」
俺よりあらゆる意味で大人であるシサーは、そのあっけらかんとした性格から、何かを悩んでいる姿と言うのは考えたことがなかった。
けれど、気づく。
そう見えるのは、自分の中で確固とした考えを自らが導き出して、悩みや迷いを表に出さないだけなのだと。
強く見える人間と弱く見える人間の違い——悩まない人間も、迷わない人間も、いるはずがないのだから。
「ニーナはきっと、わかってるよ」
俺もいつかユリアのそばから離れた時に……それでも無意味では

なかったと、心の底から思うことが、出来るだろうか。

◆◇◆

フレザイルからの船が、ツェンカーの港町リュンスクに着き、そこからフリュージュまでは乗合馬車で1日もかからない。

今ひとつ『呉越同舟』テイストが消えない気まずい船中を引きずって、フリュージュに一刻も早く着くことを願わずにはいられなかった。

俺たちがレーヴァテインを持って逃亡することを恐れているナヴィラスたちも、ヴァルト副将軍の元に戻ればとりあえずはお役目御免だ。

ユリアたちはウォーリッツの手配した場所へ、そして俺たちはフレザイルへ行ってしまったわけだから、ヴァルト副将軍の屋敷は引き払った形になっているわけだけど、船も出してもらったのだし、大体借りた兵隊はほぼ壊滅なわけだし、彼の元に挨拶をしに行かないわけにはいかない。

フリュージュに到着して俺たちが最初に向かわなければならないのは、ヴァルト副将軍がいるはずのダンテラス要塞だった。

ナヴィラスの先導で要塞に入り、ヴァルト副将軍を呼ぶ為に彼が出て行くと、扉が閉まったのを確認してからシサーが深く息をついた。

「とりあえずは、ジークに連絡……かな」

ヴァルト副将軍にユリアの居場所を知られたくないので、ジークの知人の家に行くと言う名目で武器商たちの手を借りて極秘裏に、ユリアはウォーリッツの懐へと入った。

ゆえに、俺たちでさえ、現在ユリアがどこにいるのかは、知らされていない。

ユリアのそばにはニーナが必ずいるはずで、連絡手段として接触出来るのはジーク、そしてレイアだ。

こういう時、レイアの存在ってのは、ひどく重宝。
（ユリア、どうしてるだろうな）
不安な思いをしていないだろうか。
ニーナやレイアがいるんだし、大丈夫だとは思うけど。
万が一トラファルガーにフリュージュが襲われたとしたって、『国賓』と知っている国家機関中枢の懐にいるんだから、きっと、最も安全なはずだ。――『地上の星』にさえ、気取られなければ。
今、何をしているだろう。
今、何を思っているだろう。
「……ユリアと直接連絡は、取れないんだよね」
ぼそっと確認してみると、シサーが少しだけ、申し訳なさそうに困った顔で笑った。
「悪いな」
「……いや、別に……」
謝られることじゃない。
無意味なことを聞いた自分に少しバツが悪く、目を逸らしながらテーブルの上のカップを指で弾く。
俺が考えなきゃならないことは、レーヴァテインの御し方だ。
「同じ『ヴァルスからの使者』に鍵をつけるんなら、シサーにしてくれりゃ良かったのに」
ぼやきながらピアスを弾くと、シサーが苦笑いを浮かべた。
「そう言うな。仮定を語っても仕方がない。それに」
「それに？」
「俺には多分、レーヴァテインは扱えねえだろう」
「え？　何で」
「想像でしかねぇが、『エルフの剣』であるグラムドリングを抵抗なく使えてるからな。エルフが嫌う火系の属性は、持ってねぇのかも」
ああ……そう言えばシサーの剣は、エルフが鍛えた魔剣だと遠い昔に聞いたような気がする。

「キグナスなら扱えるかもしれねーけどなあ」
にやにや笑いながらそう付け足したシサーに、黙ってお茶を啜っていたキグナスが思い切り鼻の頭に皺を寄せた。
「属性で扱えたって、俺には剣が扱えねえ」
「だそうだ。ま、つーことでカズキしかいねえやな」
「剣の腕って話をするんだったら、俺だって大して扱えやしないよ」
「そんなことねえだろ。身のこなし方は、身についてきている。腕だって、随分上がったはずだろう」
そりゃあ対象が『ウチのクラスの男子』とかだったら優勝出来るかもしれないけどさ……ドラゴンだぞ？　どらごん。
「もし、『鍵』が問題なく外れるんだったら、それこそナヴィラスにでもヴァルト副将軍にでも……託した方が、いーのかな」
ため息をつきながらついついそんなふうに言うと、シサーに軽く小突かれた。
「それは、最終手段だな。ことの経緯は知らねえが、『鍵』の所有者は確かにヴァルスなんだ。その処遇は国同士の間で取り決めることで、簡単に決めてトラブルが生じても困る」
ま、ね……。
何にしても、今ここでほいほい渡すわけにはいかないのは確かだけど。
シサーの言い分は尤もで、俺が反論もなくため息をついていると、ドアの外から足音が聞こえた。
やがて、部屋の前でノックの音に変わる。
「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」
ヴァルト副将軍が何か言いながら姿を現すと、シサーが立ち上がりながら何か答えた。つられて、俺とキグナスも立ち上がる。
やがて彼に促されて全員が椅子にかけると、しばらくはヴァルト副将軍とシサーの、俺とキグナスにはわからない会話が続いた。ナヴィラスからもちろん報告は受けているだろうけれど、フレザイルでの出来事をシサーがまた改めて、説明しているんだろう。言葉を

話せない俺には、口を挟む余地はない。
と言って、キグナスと雑談を繰り広げるわけにもいかないので、ただその光景を眺めることになる。
暇なので、俺は幾度も考えたレーヴァテインのことを、またぼんやりと考えた。
――足リナインダヨナァ
あの時、レーヴァテインはそう言った。
足りない？
――匂イハスルノニ
匂い……レーヴァテインの原動力となる、何か。火系属性と言われる、その資質って奴だろうか。
――道筋ガ見エナインダヨナァ
俺の中の何かと、レーヴァテインを繋ぐ道筋。
だとすれば、一度繋がってしまえば後は容易になると言うことになる。
どうすれば、俺とレーヴァテインは、『繋がれる』んだろう？
どうすれば、もっと上手に交流を……。
（――？）
「カズキ」
「え？　あ、何」
シサーに名前を呼ばれて、顔を上げた。気がつけば、シサーもそしてヴァルト副将軍も俺を見ている。

第3部第1章第27話　心の豪火（2）

お約束の『噂の魔剣をちょっと拝見』してヴァルト副将軍が一通り盛り上がると、俺に大人しく剣を返却しながら彼が俺に、何かを言った。

「え？」

首を傾げている俺には構わずに、シサーが代わりに答える。対するヴァルト副将軍の視線も、俺からシサーへと移り、俺はまたも話題の脇役へと転落した。

「何だと思う？」

「さあ？」

キグナスと顔を寄せてひそひそ言っていると、やがて話がついたようだ。シサーが、俺たちの方を見た。

敢えての無表情……だけど、複雑な色合いを帯びているような気がする。気のせいか？

「ヴァルト副将軍からの、お申し出だ」

「うん……？」

「今夜、この要塞で催される社交会に、このまま参加をして欲しいそうだ」

社交……。

「な……」

に……！？

◆◇◆

どうやらこれは、問題だ。

今後の予定を検討するからと少し席を外してもらい、ヴァルト副将軍が一時退室をしてから、シサーが渋さの満ち満ちた表情で、説明をしてくれた。

ちなみに、ヴァルス語で話せば別に彼にはわからないんじゃ？と思ったりもしたんだが、どうやらシサーは少し、疑っている。
万が一にでもヴァルト副将軍が、「実はヴァルス語を話せる」可能性を危惧しているんだろう。
「社交会と言う名の、壮行会みてぇなもんだろう」
このご時世に何をのんきな、と思ってみれば、そう言うことらしい。
沈み込む人々の心を少しでも活気付け、労を労い、氷竜の襲撃に備えて士気を上げたいと。
「戦争の最中に謝肉祭を催したりするのは、珍しいことじゃねぇからな。だから、この要塞で行うわけだ」
と、義勇軍の訓練をサボりっ放しの志願兵は、そう宣った。
「何でそんなカオしてんだ？」
キグナスが首を傾げる。深く椅子に寄りかかって腕を組みながら、シサーが、吐息をついた。
「ルーベルトは、来るぞ」
「えッ！？」
「ヴァルト副将軍が俺たちを招きたい理由は、『氷竜の魔剣を手にしている』からだ」
「……それって」
俺たちが……俺が、レーヴァテインを所持しているのは、確かだ。
そしてルーベルトにそのように紹介されて会わされた場合……俺たちの立場は、壮絶微妙なものとなる。
裏で、ユリアとルーベルトが会合する算段を取り計らっているところで、その話題に上がるであろうレーヴァテインを持つ俺らと公然と会ってしまった場合、『ヴァルスの正式な使者』の一部であることを伏せるのも後に問題となるだろうし、言ってしまうのはもちろん大問題だ。
と言うか、俺たちがルーベルトと顔をあわせてしまうこと自体が問題だ。

レーヴァテインを持つヴァルス使者がルーベルトと顔を会わせたにも関わらず素性を伏せ、後に身元が公になれば伏せていたことに後ろ暗いことがあると思われかねない。

何かやましい結託が裏であってこそ、互いにそ知らぬカオをしたのではないか、と。

ルーベルトにしても、何らかの濡れ衣を着せられる口実になりかねない。

と言って、公然と「ヴァルスの使者です」と言ってレーヴァテインを翳せば、「やはりヴァルスの使者は間違いなくいる」と噂話の裏づけをすることになり、「レーヴァテインを盾にツェンカーを脅そうとしている」とか何とか、誤解を払拭する機会がないまま騒ぎになる可能性がある。

まあ、裏で動いているのは確かだし、『レーヴァテインを盾に』脅すんではないが、交渉しようと言うのはあるから、当たらずとも遠からずかもしれないが。

「……断ろうよ」

それが、最も無難な選択だ。

そう判断して提案すると、シサーが唸った。

「ヴァルトは、レーヴァテインを押さえておきたい。つまり、俺たちのことを押さえておきたいと言うことだ。ユリアたち……ジークと連絡を取りにくくなる動きはしたくねぇな。不自然な言動は不要な注意を招く。『氷竜の魔剣』を持つ人間が、氷竜対策の為にルーベルトと会うことを拒絶するのは、やはり少し、不自然だ」

「……」

「じゃあ、どうする？」

「ともかく、状況を確認して来る」

シサーが、立ち上がった。

「ユリアたちの状況とルーベルトの今、『地上の星』の状況を把握してくるから、お前たちはとりあえず、ヴァルト副将軍の指示に従ってくれ」

ともかくも、じたばたして変に目を光らされるよりもヴァルト副将軍の提案は何食わぬ顔で受け入れる方向で話がまとまると、しばらくしてヴァルト副将軍が戻ってきた。
シサーだけは一度俺たちを残して要塞を離れるが、遅れても社交会には出席する旨を伝えると、彼は快く応じた。
もしかするとシサーがいない方がいろいろと与し易いと言う考えもあるのかもしれない、と思うのは疑い過ぎだろうか。
ヴァルト副将軍が、俺たちに通訳となる人間をつけるから時間まで自由にすると良いと言いおいてシサーと一緒に出て行ってしまうと、何だか人質のような気分になった。
「シサーが戻って来る前に、何も知らないルーベルトに会わされたら、どうする？」
「まだユリアたちと何の話も進んでなくて？」
「そう」
「とりあえずは、黙ってるしかないんじゃないの……」
黙っていれば、とりあえずはトラファルガーのカタがつくまで、余計な騒ぎは起きずに済む。
「通訳ってさ、ここの要塞の人間かな。それとも『地上の星』関係の人？」
「ナヴィラスだったらどうする？」
彼もヴァルス語が話せるから、不思議はない。
キグナスが、笑った。
「ナヴィラスの方が嫌がるんじゃねぇの」
「それもそうか」
「まあ、嫌だからつって上官の命令を拒絶出来るはずもねぇけどな～……」
キグナスの言葉に被さるように、不意にドアをノックする音が響いた。
ナヴィラスだったら本当に嫌だな。
返事を待たずに開けられたドアに顔を向け、次の瞬間、俺もキグ

ナスも、絶句した。
「……な」
「あんた……」
「よう。また会ったな」
入って来たのは、２０歳そこそこくらいの男だ。
肩の辺りまで伸びたくすんだ草色の髪と、藍色の瞳――アカンサで、俺たちにバイトを斡旋した男だ。
頬にかかる髪に隠れるように、『マキビシ』のイヤリングが光っている。――『地上の星』。
「どうして、こんなところに……」
「そりゃあお互い様だろう？」
言いながら中に入ってきた男は、先ほどまでヴァルト副将軍が掛けていた椅子に腰を下ろすと、テーブルに頬杖をついた。こちらを見て、にやにやと笑う。『お互い様』とか言う割りに、男が驚いていないのが気にかかった。
「だって……軍部の人？」
「さあ？　まあ、関係者だよ」
首都要塞の関係者が、何だってあんなところで闇組織のバイトの斡旋なんかやってるんだよ？
にやにや笑いながらの雑な返答に、俺とキグナスは思わず顔を見合わせた。
これは、どう受け止めるべき事態なんだろう。
この男は『地上の星』……ヴァルト副将軍もそうなのだから、不思議はない。けれど、それほどに政府関係者に『地上の星』の人間は多いのか？　だとすれば、結構窮屈だ。
知らず、レーヴァテインの鞘を片手で押さえた。
多分ヴァルト副将軍が欲しているレーヴァテイン、彼と同じ闇組織の人間……警戒は、怠らないに、限る。
「軍部関係者が、どうして仕事の斡旋なんて？」
「こんなところへ来る人間が、何であんなところで日雇いの仕事を

した？」
　男が笑みを湛えたままで問い返す。互いにスネが痛むようだ。
「触れられたくねーなら、そっちも突っ込まないことだ」
「……」
　あっちもこっちも、食えない人ばかりで嫌になる。
　かくっと首を折ってため息をつくと、男が立ち上がった。部屋の隅にあるテーブルからティポットを片手に戻って来ると、自分の為に新しいカップに注ぐ。次いで、こちらのカップにも注ぎ足してくれた。
「ありがとう」
「俺は、セル……セルで良い。そっちは、カズキとキグナスだったか？」
「そう」
　あの時、彼の名前は聞いていないけれど、俺とキグナスは名乗ってある。どうやら覚えていてくれたらしい。
「偽名じゃなかったのか？　ま、いーや。了解。社交界に、出るんだろ」
　とりあえず、先立っての出会いについては言及しないようだ。逆に、言及して欲しくないからなんだろう。
　あの時と同様、軽快で友好的な雰囲気につい緩みそうになる警戒心を保ちながら、俺は応えて頷いた。
「その予定、らしい」
「レーヴァテインってのは、それか」
「……」
　一瞬返事を躊躇ったものの、良く考えれば隠すことに意味はない。どうせヴァルト副将軍から聞いているはずなんだ。頷くと、セルは「へえ」と呟きながらテーブル越しに身を乗り出した。
「俺には、良くわかんねえけどなあ。その価値が。金になりそうだとは思うけどな」
　売られてたまるか。

セルの斡旋で俺たちが運んだ木箱の中身は、恐らく刀剣類だったことを思い出して、俺はレーヴァテインを庇うように体を傾げた。
「金にされても困る」
「しねーけどさ。まあでも……そいつで本当にトラファルガーが黙るんだったら……」
言いながら再び椅子に腰を落ち着けると、セルはにっと白い歯を覗かせた。
「重宝だ」
ちゃんと扱えればね。
「さてと。ずっとここにいたってしょーがねえし、俺が手配された意味もないし、要塞の中でも歩いて来ますか」
先ほど入れたばかりのお茶をずずーっと一気に飲み干して、セルが立ち上がった。
「こっちの建物だったら、わりとどこに行っても大丈夫だ。要塞を見て回るなんて、そうそうないだろう？」
そしてセルは、おどけたように恭しいポーズを取って見せた。
「不詳、私目が、ご案内を務めさせていただきますよ」

◆◇◆

いくつかのテーブルに、大皿に乗った料理やグラスが置かれている。
ざわめきの中、挨拶を交わし合い手を握り合う人々は、一見してそれなりの身分や役職にあるんだろうかと言う気がする。
セルに案内をされて、要塞のあちこちを見させてもらったり、雑談をしてみたり、やけにのどかに時間の経過を待って、社交界とやらの時間を迎えた。
シサーは相変わらずまだ、戻って来る気配はない。
社交会とは言っても、別にダンスパーティがあるわけではもちろんなく、要塞内及び関係各者の親睦会に過ぎなさそうだと言うこと

は始まってみてからわかった。
　会場となっているのは、俺たちがヴァルト副将軍と面会した部屋があるのと同じ建物……セルはそこを、北の宮殿と説明してくれたが、その1階にある大きなホールだ。
　セルに連れられてホールへ来てみると、人々が続々と集まって来ているところのようだった。
「俺たち、どうすれば良いのかなあ……」
　どう考えても、軍部関係者や政治関係者の中に、俺とキグナスは浮いている。
　知り合いなどいるはずもないし、ホールの入り口から中へと入っていく人々の姿を見ながら呟くと、セルが笑った。
「食ってりゃいーんだよ、別に。金に困ってる若者には、うってつけだろう？」
　意地が悪い。
　返す言葉に詰まっていると、セルも人の流れに目を向けながら、妙に鋭い横顔を見せた。
「魔剣の持ち主ってことで、後で紹介されんのかもしれねーけど、俺にはその辺は良くわからねーな。いずれにしても、しばらく出番はないと思う。適当に旨いもの、食ってりゃいいさ。……ただ、一応は、気をつけておけよ」
「え？」
「魔剣を狙う不届き者ってのが、いるかもしれねーかんな」
　あんたは？
　つい突っ込みそうになって飲み込みながら、俺は曖昧に頷いた。
　扉から中を覗いてみると、ホールの奥の方にヴァルト副将軍の姿が見える。立食形式で、グラスを片手におじさんたちに囲まれていた。確かにしばらく、することはありそうにない。いや、あっても困るんだが。
　キグナスが、興味津々の目付きでホールの中を覗き込んだ。腹が減っているのか、手近なテーブルに並んでいる料理の皿を覗き込ん

でいる。
それを眺めながら、俺は傍らのセルに尋ねた。
「セル、この辺りにいる？」
「え？　ああ、まあ。どこか行くんなら、一緒に行ってやるけど」
「ううん。その辺見て来たいだけ」
「その辺？　ま、いーけど。あんまり遠くに行くなよ」
「うん」
親のようだ。
ホールの中に入る気になれず、俺は先ほどセルに案内された通路を戻り始めた。
ホールの近辺には小さな部屋がいくつかあって、セルいわく、倉庫のようになっている。先ほどちらりと覗いた部屋のひとつに、俺は再び足を向けた。
中に入ると、淡いオレンジ色のカンテラが頼りなくかかっている。ほのかな灯りの中、壁際には幾つかの楽器がひっそりと沈黙しているのが見えた。
多分ここは、楽器部屋だ。
ホールで何かを行う際に、ＢＧＭとして生演奏をしている人たちがいる。今日も音楽が静かに流れているし、他の時も多分そうなんだろう。
俺の発想だと、普通そう言う人たちは自前の楽器があるんだと思うんだが、ここにあるのは予備なのか、それともこっちの世界では会場が貸し出すものなのか、もしくは今日の演奏者のものなのか。
その辺は良くわからないが、ホールにいるよりこっちにいる方が、面白そうだった。
ギャヴァンのストリートでも変わった楽器とかあったけれど、こちらはこちらでまた、使い方の良くわからない楽器とか置いてある。
長い棒に椰子の実のようなものがくっついているもの、腰のくびれた箱、かくかくと折り曲がった竹細工のようなもの。
ボンゴに良く似たタイコや、木製のウィンドチャイムのようなも

の、木琴やクラシックギターのようなものも置いてある。
何となく、そのクラシックギターに似たものを指先で触れていると、背後でキグナスの声が聞こえた。
「カズキ。こんなとこで、何してんだ？」
「ああ。いや、向こうにいても、面白くなさそうだし。キグナスは食べてれば？」
「何だよそれ……」
呆れたように言い返しながら、キグナスも中に入ってくる。手近な椅子のひとつに掛けながら、俺に向かって首を傾げた。
「お前、楽器なんて興味あるの？」

第3部第1章第27話　心の豪火（3）

「ん？　や、あるってほどじゃないけど……自分の世界で、ちょうど弄り始めたばっかりだったから」
「へえ？」
キグナスが驚いたように目を丸くした。
「何だ、お前、そんな特技があったのか」
いや、特技ってほどじゃ。
始めたばっかりだったって言ったばかりじゃないか。
「何かやってみせてよ。何やってたんだ？　ギルコ？　ヴァッティーニ？」
ごめん、何言ってんだかわからない。
返答に困って、立てかけられたクラシックギターを引き寄せる。
自分の世界のものとボディの形なんかが違って、弦を軽く弾いてみると、音の響きはもっと丸くて柔らかかった。
「勝手に触って、大丈夫なのかな」
「大丈夫だろ、壊さなきゃ。1曲くらい。な、お前の世界の曲、何かやってよ」
きらきらと無邪気に言われると、出来もしないのについつい応えなきゃいけない気がするじゃないか。
嫌だなあと思いつつ、ついつい抗いきれずに、俺はため息をついて椅子を引いた。変な形のギターを抱えて、腰を下ろす。
まあ、テレビの旅番組なんかでも現地でお世話になった人に、お礼として自分の出来ることをみんなやってるわけだし。……何か、違う気もするけど。
「本当に、下手だからね」
「いーって」
ああ、そんなに無邪気に見ないでくれ。
いたたまれないながら、俺は弦に手を掛けた。少し音が変？　ま

あいいや。
　諦めて、かつて……今となっては、何だか『遠い昔』のような気がする高校に入ったばかりの頃に練習したうちの1曲を、小さな声で歌い始めた。
　アメリカの、誰もが知っている大物アーティストの楽曲。古い名曲で、その曲を初めて聴いた時には、涙が出た。メロディーと、その歌詞に。
　――世界を癒そう
　――世界を、より良い場所にしよう
　――なぜ僕らは、生命あるものを傷つけるんだろう
　――君と僕の為に、そして人々の為に、生まれてくる子供たちの為に……
　そういう歌だ。
　どうして、この歌を選んだんだろう。
　かつて感動した曲、今は剣を持つ俺がこの歌を口ずさんでいる違和感……いや、むしろ、だからこそ？
「すげえッ。俺、びっくりしたッ」
　込められた歌詞のひとつひとつの意味……そんなことを考えながら、危なっかしく何とか終える。似ているようでどこか俺の世界と違う楽器に、散々と言えば散々間違えたし、音が違うまま通した部分もあったけど、それでも一応キグナスは拍手をくれた。
「だから本当に下手だったろ……」
「上手くはねえけど」
「……」
　ギターを元の場所に戻すべく立ち上がる。俺の背中に向かって、キグナスが続けた。
「でも、良かったよ」
「……どーも」
「言ってる意味はわかんねえけど、凄ぇ綺麗なメロディ。お前が作ったの？」

滅相もございません。
ギターを置いて、キグナスを振り返る。音楽は国どころか次元をも越えたらしい。思わず苦笑した。
「まさか。俺の世界で有名な曲。俺がこれを書いたんだったら、俺は今頃有名人だ」
「芸人か」
「……」
何か、ニュアンスが変わっちゃうんですが。俺的には。
「傷ついている世界を救おうって曲。いつも、どこかで生命が失われていく。……流す涙は、幸せの為でありたいって、そういう曲だよ」
「……へえ」
「剣を鍬に持ち替えれば良いって。生命を奪う為ではなく、耕す為に」
「んじゃあ、騎士はみんな農民か」
キグナスがくすくすと笑った。
「剣を持つ人間がいる限り、平和には、なんねえのかな」
「……」
無意識に、レーヴァテインを撫でる。
「何で、その歌を選んだんだ？」
「……さあ」
俺もキグナスも黙ると、外の方からさざめきが流れて来た。おじさんたちの笑い声に混じって、華を添えているのか女性の声も漏れ聞こえてくる。
「シサー、どうしたかな」
大規模な戦争真っ最中のこの世界で、援軍を求めにこの国へ来て、剣を片手に……妙な波紋を投げ掛けてしまった。
今の俺の心情には、余りにそぐわない歌。以前の俺の心にあれほど感動を呼び起こしたこの曲も、今の俺には共感が出来ない。剣を鍬に持ち替えたら、この世から消えるだけだ。

なのに、どうして今更、この歌を選んだんだろうな。
弦を押さえていた指先が微かに痛んで、それをまた指先で撫でながら振り返る。
「剣を、持ちたくねえんだろうな」
俺の言葉に答えずに、キグナスの声がぽつんと響いた。
カンテラの微かな灯りの中、真摯な眼差しでこちらを真っ直ぐ見詰めている。
「俺？　別に、そんなこと……今は、考えてないよ」
前は、そんなふうに思ったこともあった気はするけれど。それももう、過去のことだ。――……ホントウニ？
「お前は、こっちに来ちゃいけなかったのかもしれない」
「……」
無理に作ったみたいな苦い笑いで、キグナスが微かに目を細める。
「お前の為に」
「そんなことないよ……」
「お前のいたところは、平和なところなんだろうな」
「……」
それは、どうだろう？
魔物はいない。確かに。ドラゴンなんて言う圧倒的脅威に曝されているわけでもない。
だけど、必ずどこかで争っているだろう？
「人がいる限り、平和なんて、ないよ」
「人は存在いしちゃいけないのか？」
「……そういうわけじゃないけど。でも、そうだな……」
目前の危機を置き去りにしたような華やかな笑い声をＢＧＭに、俺は少し、考えた。
それが一番、手っ取り早いのか？　人のいない世界。そこには平穏が訪れる？　だとすると、人の存在ってのは、何なんだろう？
「違うだろ」
黙ってしまった俺に、キグナスが唇を尖らせた。

「難しいこと言われると良くわかんねぇけどさ、そうじゃねえと思うな。……価値、ねぇの？　人って。争うだけ？　俺も？　お前も？　いる価値ねぇの？」

「……」

「変われば、済む話なんじゃねぇかな」

「何が」

「人が。……たまに、思う。争いって、憎悪の連鎖反応も原因のひとつなんだ。その連鎖を誰かが止めなきゃ、駄目なんじゃねぇかな」

数珠繋ぎに繋がっている憎しみ。

何かを奪われたと感じる誰かが、その報復に何かを誰かから奪う。そうして奪われた誰かが、また、報復に乗り出す。

連鎖のように繋がり、誰かが断ち切らない限りそれは永遠に終わらないと知りながら、誰もが自分の番で断ち切るのは不公平だと考える。

そして、繰り返される争い。

だけど、自分の身に降りかかった時に、果たして自分でその連鎖を止める勇気が自分にあるだろうか。

「ちっちゃい勇気があって、ちっちゃい優しさがあって、それがみんなだったらきっと、大丈夫になるのにな。だって、人って凄ぇじゃん？　まあ中には俺みたいなぱーもいるけど、いろんなこと考えて、いろんなものを生み出して、人を思って……」

そう言ってあどけなく白い八重歯を覗かせるキグナスは、多分本当にそう思っているんだろうなと言う気がする。

そんなに簡単にはいかないと言うことは簡単だけれど、みんながそう……キグナスのように考えていれば、せめて心に留めておけば……？

「守る為に起こる争いは？」

「攻める側に今言った気持ちがあれば、そもそも守らなきゃならねぇ事態にはなんねぇんじゃねえの？」

「攻める側も、何かを守ろうとしてるのかもしれない」

「うーーーん。他人を攻撃することで守ろうとするんじゃなくて、別の手段を考えるッ」
「魔物は？」
「食われんのは嫌だから、戦うッ」
「……何か、今の話と矛盾が生じるような……」
くすくす笑いながら突っ込むと、キグナスがむきになったように吼えた。
「矛盾してねえッ！！　人と人との争いの話をしてるッ」
「別の生き物との争いは肯定するんだ」
「自然の摂理の範囲内でなッ。……人間同士のそれは、範囲外だ」
威張るように言う姿に、俺は零れてくる笑いが止められなくなった。
笑いながら、俺は多分、キグナスの存在に結構救われているんだろうと言う気がした。
「物凄い、行き当たりばったりで思いつきで話してるだろ……」
「うん。まあな」
「こういう深いテーマは、熟考してから意見を述べることをお勧めするよ」
「俺に難しいことを要求するな」
連鎖を止める勇気があるかは、自信がない。
だけど、心に留めるだけでも、何かが少しは変わるだろうか？
「セルが探してるかもしれない。そろそろ、戻ろうか」
まだ笑いを引き摺ったままでドアの方に足を向けかけると、「うん」と頷いたキグナスが、続けてぽつんと呟いた。
「俺さあ……お前に会えて良かったよ。きっと」
思わず無言で振り返る。
唐突な言葉、真正面から言われるにはなかなか照れ臭い言葉で、冗談で返そうと口を開きかけた俺は、その顔つきを見て言葉を飲み込んだ。
「少しはさあ、役に立てたって……思っても良いんだよな……？」

「……何で、過去形なんだよ」
なぜかその顔つきが、どこか寂しげに見えた。
寂しげ……いや、儚いと言う方が、しっくりくるだろうか。
それが何かに似ているような気がして、何か……そう。
「別れの言葉には、まだ随分早いんじゃないか」
別れの言葉を口にする時に、似て見えた。
俺の言葉に、キグナスが一瞬虚を突かれたような顔をする。
「ん？　そんなふうに聞こえたか？」
それから、笑みを覗かせた。それを見て俺は、なぜだか少しほっとした。
キグナスにそんなつもりがあったわけじゃないことが、わかったからかもしれない。……いや、あるはずは、ないんだが。
けれど、呆れたように見遣る俺の前で、キグナスはまだどこか寂しげな名残を残したまま、続けた。
「何かな、何か、ちゃんと伝えておきたくなった。俺は、お前に会えて良かったと思うって。人の存在の価値なんて、俺は本当はさ、良くわからないよ。だけど、何かの役に立っていると思いたい。誰かにとって、価値があると思いたい」
「……うん」
「ご大層な意味なんてなくて良いよ。誰かの役に立ちたい。馬鹿だし、落ち零れだけど、生きていることに意味があると思いてぇもん」
『馬鹿だし、落ち零れだし』。
この言葉は、時々キグナスから聞く言葉のような気がする。
もしかするとキグナスは、俺が思う以上に『自分の存在価値』と言うものに不安を感じているのかもしれない。
多分ずっとコンプレックスのようなものを抱えていて……あ、そうか……。
（だからか……）
ロッドに装着したあのアイテムに、ひどく依存しているのは。
彼にとって、強力な魔法を使えることになったことが、自己肯定

に繋がっているんだきっと。
「当たり前だろ」
本当に馬鹿だな。
『強力な魔法』は確かにありがたいし、氷竜から俺たちをカバーしたその威力は役に立つなんてレベルの騒ぎじゃないけれど、それがなくてもキグナスにはキグナスなりの存在価値が、あるのに。
少なくとも俺にとっては……多分、笑みが戻り始めたのは、友達でいてくれるキグナスの存在がかなり大きいだろうと思うのに。
「キグナスが友達でいてくれることで、俺は随分救われてるよ」
友達に感謝を伝える機会などなかなかあるものでもなく、これはこれで恋愛とはまた異なる気恥ずかしさがあるもので、言い方は多分かなりそっけなかった。
「馬鹿で落ち零れだけど」
「繰り返すなよッ」
怒鳴るキグナスに、思わずまた笑った。
「だけど、それがキグナスだろ」
そう言って再び歩き出す俺の背中に、キグナスが小さく笑って頷く声が、聞こえた。
「うん。……へへ。ありがとな」

◆◇◆

宴は、わりかし単調に進んでいる。
楽器部屋から戻ってみるとホールの中ではあちらこちらで小さな塊になって、談笑が続いているようだ。
その光景を眺めながら、氷竜が襲撃して来た場合、一体この中の何人が生き残るんだろうなどと言うシュールなことが頭を過ぎった。
「俺、何か食おうかなあ～」
「食えば。シサー、早く戻って来てくれないかなあ」
じゃないと何か、落ち着かない。

食べ物の辺りにふらふらと歩いていくキグナスを眺めながら、俺はその場で辺りを見回した。セルの姿を探すが、一見して見当たらず、周囲を取り巻くのはわけのわからない言葉ばかりだ。

（あれ？　兎……）

きょろきょろと見回していると、不意に視界に異質なものが飛び込んできた。宴の会場には余りにそぐわない生き物。――兎。

俺のいる場所から反対側の壁にある、開け放した扉の向こうの通路を、ひょこんひょこんと兎が通り過ぎて行った。何て不自然……兎？

（――アレン）

心に引っ掛かったことに気がついて、そっと目を見開く。

そうだ、確かロドでカレヴィーさんが言っていた。兎を連れて歩いている変人……じゃない、一風不思議な青年が時々訪れるのだと。

彼の名はアレンで、確か……。

第3部第1章第27話　心の豪火（4）

（アルディアの息子……）

だった、よな？　確か。

『地上の星』が支持している、代表者戦でのルーベルトの対抗馬だった人物の息子のはずだ。

まあ、こういう集いなのだからいることには別に疑問はないが、こんなところに兎を連れて歩いているのはやっぱり疑問だ。どうかと思う。

残念ながら兎が通り過ぎるのを見ただけでアレン本人の姿は見えなかったけれど、兎が単独でいるわけじゃないだろうから、俺が見たのはきっと本人が通り過ぎた直後だったんだろう。

暇を持て余しているので、そんな愚にもつかないことを考えていると、背後からぽんと肩を叩かれた。

ここで出会う知り合いは限られているはずで、セルかもしくはヴァルト副将軍、あるいはシサーがなどと一瞬で考えながら振り返ると、そこにいたのはそのうちの誰でもなかった。

アイボリーの短髪の下、緑っぽい、鶯色（うぐいす）の優しそうな目が細められている。セルと年が近そうなその青年は、どこかで見た気もするけれど、どこで見たのかが今ひとつ思い出せなかった。

誰だっけ？

俺より高い位置にある顔を微かに傾げ、彼が何かを言う。言うが、それはヴァルス語ではなくツェンカーのイリアス語なので、進歩のない俺にはわからない。

困惑する俺に、彼はくすくす笑いながら何かを取り出して見せた。鈴のようなものに金属の棒が……あ、これ。

ドラゴンクローラを操縦する道具だ。

「あッ。え、ええと……ラーヴル」

だっけ。

俺がフェティール要塞を訪れた時に、ドラゴンクローラを見せてくれた兵士だ。ドラゴンクローラの名前は確かラビ、そして騎手の名前がラーヴル。

ヴァルス語しか話せない俺だけど、個人の名前は万国共通だ。俺の言葉に、ラーヴルが手を叩いた。鈴を再びしまいながら、片手を差し出してくる。

「凄い。良く俺のこと覚えて……」

って、言ってもわからないか。

握手に応えながら言いかけて口を噤むと、俺の言ったことが雰囲気で伝わったのか、ラーヴルは自分の短い前髪を摘んで見せた。それから、俺を指差す。

ああ……この赤い前髪が目印になったのか。そう言えば以前、ラグフォレストに連れてってくれたグローバーも、この前髪で見覚えていてくれてたっけ。

続けてラーヴルは、身振りで俺の名前を尋ねた。……多分。

「カズキ、です」

「カズキ？」

たどたどしい発音で、俺の名を呼ぶ。頷いてみせると、ラーヴルが頷きながら親指を立てて見せた。

言葉がわからなくても、お互いその気があれば多少の交流は図れるもののようだ。

察するに、どうやらこの宴に参加する為に、フェティール要塞から何人かドラゴンクローラの騎手が招かれているようだ。ドラゴンクローラも来てるのかな。あれに乗って移動するんだったら、フェティール要塞までも僅かな時間だろう。今はこの要塞のどこかにいるんだろうか。それ用の場所ってのも、あったりするんだろうか。

そんなことを思っていると、ラーヴルの肩越しにキグナスの姿が見えた。さっき兎が通り過ぎたのとは別の扉から覗く通路にいる。いつの間にあんなところまで。

キグナスは、足を止めて振り返っているみたいだった。誰かに呼

び止められた風だ。何となく見ていると、姿を現したのは知らない男だった。足元に、兎。

（アレ……）

――！？

「ごめん、ラーヴル。また、後で」

ラーヴルに断わって、その場を離れる。突然の俺の行動に目を丸くしたラーヴルを軽く拝み、俺はホールの中を走り出した。

あちこちにグラスや皿を片手に人が集っているものだから、真っ直ぐ走れない。いつの間にかキグナスの姿は見えず、俺の鼓動は速くなっていった。

キグナスに声を掛けていたのは、多分アレンなんだろう。兎を連れて歩くわけのわからない奴が、そうごろごろいるのでなければ。

そして、姿を現したアレンが腰に帯びていたもの。

（あれは……）

――カサドールで奪われた、俺の、剣だ。

距離があったのは否定しない。見間違いかもしれない。

だけどもしアレンが挿しているのが、『シャインカルクからもらった俺の剣』だったら、それってどういうことになる？

アレンは、『地上の星』だと言うことだよな。

アルディアは違うと聞いているけど、その息子はそうだってことなのか？　それとも実はアルディア自身もそうなんだろうか。もしそうなのだとすれば、反乱因子は本当に中枢の至るところにごろごろといることになる。

「キグナス！？」

ようやくホールを抜けて通路に出るが、どこへ行ったのか、キグナスの姿もアレンの姿も見えなかった。通路にもところどころに人が溜まっているのが見えるが、その陰に隠れているようなこともなさそうだ。

どこかを曲がってしまったんだろうか。出て行っちゃった？

「キグナスー？」

足を緩め、辺りを見回しながらキグナスを呼ぶ。答える声はなく、俺は通路を逸れて庭に出てみた。

シャインカルクほどではないけれど、それでも結構な広さがある庭園の中、闇を吸収したような黒々とした木々がざざーっと風に揺らぐ音を立てる。

（……？）

キグナスの姿はやはり見当たらない。どうしたんだろう。別に心配するほどではないだろうが、その姿を探して庭の奥深くへと足を向ける。

「おーい……」

ちょっと、神経過敏になっているんだろうか。

嘆息して、足を止めた。

そうだよな。別に子供じゃないんだし、人が大勢いる宴の場所、しかも要塞で魔物が出るわけでもなし、大体ロッドさえ持ってりゃキグナスは俺より遥かに強いんだ。

それに、狙われる可能性があるのはレーヴァテインを持つ俺の方だろうし……ってそうだよ。むしろ俺、こんなところにいないべきじゃ？

（そのうち、戻って来るか……）

放っておこう。

くしゃくしゃと髪を掻き混ぜて、俺は踵を返した。……返し、かけた。

「ヴァルスの使者だろう？」

小さく舌打ちが漏れる。

いつの間にか背後に、人間の気配があった。

首筋に、何か硬質のものが当てられる。見えないけれど、刃物だろう。……しくじった。キグナスとアレンに、気を取られ過ぎた。

「一緒にいたのは、ヴァルスの王女か」

たどたどしいヴァルス語だ。声は、低くて良くわからないけれど、多分知らないもののようだった。誰だ？　『地上の星』？

「とりあえず、ここでは人目につくからな。悪いが、一緒に来てもらおう」
無言のままの俺に構わず、男が刃物を俺の首に押し当てたまま、背中から手を伸ばした。口元に何か押し付けられる。薬品のような、匂……。
途端、脳裏が麻痺するような痺れ襲いかかる。
刺激臭が鼻についたと思ったのは、ほんの一瞬だった。すぐに、何もかもがわからなくなる。
自分の肉体さえどうなっているのかが、全く知覚出来ないような感じだった。
（キグナスは……？）
キグナスは……どこへ、行ったんだろう……。

◆◇◆

（いてぇ……）
頭が痛い。
殴られた時とはまた違う、内側から込み上げる割れるような痛みと吐き気が、俺の意識を引き上げた。
（何だっけ……）
うっすらと目を開く。ちかちかする目を凝らしてみると、どうやら石造りの小さな部屋にいるようだった。
暗い。
正面についたドアの上部に、鉄格子が嵌められた細い窓だけがある。そこから僅かに漏れる明かりしか頼りになるものがなく、部屋の様子は良くわからない。
まだぐらぐらする頭で、自分に何が起こったのかを考えてみる。
とりあえず現状を把握しようとして、身動きが取れないことに気がついた。見れば両手首は天井から吊り下がるぶっとい鎖で1本に繋がれていて、足にもそれぞれ壁から生えた足枷に繋がれていた。

……おいおいおいおい。
（嘘でしょ……）
動けないじゃないか。
慌てて腰に視線を落としてみれば、レーヴァテインはどこにもなかった。案の定、取り上げられたらしい。
返す返すも、ホールを離れたことが悔やまれた。
ようやく慣れてきた目で部屋の中をよくよく見回してみれば、鉄製のベッド、巨大な万力のようなもの、壁に幾つも掛けられた刃物の類。今更ながら気づいてみれば、微かに漂う部屋に染み付いた鉄のような匂い。……血。
（拷問部屋……？）
気づかなければ良かった。また拷問ですか？
カサドール、そして『地上の星』へと続くこの一連の流れで、既に俺、2回目なんですけど。
しかもカサドールの時と違って、何やら本格的なムードに溢れている。殴る蹴るの暴行だけで終わったあちらは、可愛いものだと言う気さえする。
いっそさっさと殺してくれれば良いが、この様子を見る限りは『死なない程度に限界まで痛めつける』ことを良くご存知の方がお相手のようだ。何て嬉しくない。
何とか、しなきゃ。
力を込めて、腕を引っ張ってみる。だが、鎖はびくともしない。足の方も同様だ。到底抜け出せるような代物じゃない。
（くそぉ……）
何でこんなことになったのか、そもそもここはどこなのか。
それを考えるのは、後にしよう。
そう決めて、とりあえず現状を脱け出すことを最優先にじたばたしてみるが、何の実りもないどころか体力の無駄遣いと言うことに気がついた。
これから拷問を受けるんであれば、体力は温存するに越したこと

はないかもしれない。いや、尽きるのが早ければ、その分早く楽になるんだろうか。

にしても……何を聞き出すつもりだ……？

カサドールでもそうだったけれど、拷問は『何かを聞きだすこと』が目的のはずだ。

中には趣味だの何かの復讐だのといったこともあるかもしれないが、概ね、そのはず。

レーヴァテインを奪うことだけが目的ならば既に達成されているわけだから、後は俺を殺しちゃえば良いだけだろう。でもこうして生かして拷問部屋に放り込んでいると言うことは、聞きたいことがあるに違いない。

俺が暴れるのをやめると、部屋には不気味なまでの静寂が戻った。しんと冷えた湿っぽい空気……地下室、だろうか。

（どこの地下なんだろう……）

要塞？

要塞だったら……あれだけ広いんだから、拷問部屋のひとつやふたつあっても良さそうだ。捕虜を入れておく場所とか。

人々が談笑し、グラスを交わすその足元で、拷問で血塗れになる俺――何て殺伐としてるんだろう……。

両腕を強制的に上げられたままで次第にだるくなって行くのを感じながら、ついそんな無意味なことを考えて、げんなりした。

――一緒にいたのは、ヴァルスの王女か

ちッ……いつからバレてたんだ？

俺をここに連れて来るのに直接手を下した人物が誰か、を考えるのは恐らく意味がない。ただの、手足だ。

それより肝要なのは、その指示を下した人物の方だろう。

その人物……。

「目覚めは、いかがかね」

扉が開く。その重たい音に顔を上げると、予想通りの人物がそこにいて、笑いたくなった。

ヴァルト副将軍だ。
「最高だよ。予想通りで、笑いが止まらない」
「そうか。驚いてもらえなかったのは、残念だね。もう少し、驚いて欲しかった」
「『あなただったのか』と叫んで欲しかった？　それは無理だ。あなたがレーヴァテインに執着しているのはわかりきってる。……『地上の星』だと言うことも」
ヴァルト副将軍が、動きを止めた。沈黙して俺を見詰めると、改めて部屋の中に入って来ながら、顔を拷問道具の方に傾ける。
「そうか。それも気づいていたのか」
「シンボルがあるだろう？」
「ああ、これか」
ヴァルト副将軍が、指に嵌まった指輪を翳す。
「元々は、ただの私の趣味だったのだがね。いつの間にか、他の者たちが真似をし始めた」
「へえ……」
今の言葉で、ヴァルト副将軍の地位が『地上の星』の中でどの程度のものなのかの察しがついた。表の地位の影響もあるんだろうか。かなりの幹部だ。
そう思いながら、セルが「ただの流行りだろう？」と言って笑ったのを思い出す。あながち、嘘ではなかったわけだ。
シサーの危惧通り、問題なくヴァルス語を操るヴァルト副将軍は、ゆっくりとした歩みで壁際の刀剣類を手で辿った。腰に挿した自分の剣は、使うつもりがないようだ。俺を振り返り、感情の浮かばない顔で静かに尋ねる。
「どれが良い？」
どれも嫌だと言ったって聞き入れてはくれないんだろう。
「カレヴィさんは、あんたを『正義感の強い人物だ』と言っていたよ」
「ほう？」

答えを逸らす俺に、ヴァルト副将軍が小さく笑う。
「『地上の星』は、ツェンカーにとっての反乱軍だ。あんたの裏切りを知ったら、カレヴィさんはきっと悲しむだろうな」
「悲しむことはない。彼の評価は変わらないだろう。私は、正義だ」
「裏切り者だろう」
遮るように言い切ると、今まで感情の浮かばなかったヴァルト副将軍の顔に怒りが燃え上がった。
「私が正義だ！！　ヴァルスの干渉など許さない。ツェンカーはこの大陸で崇高な志を持った唯一の国だ。それをルーベルトは、ヴァルス王女……いや、女王の色香に惑わされてツェンカーを売り渡そうとしている」
「違う」
「お前も惑わされているクチか？　やり手だな、彼の人も」
ユリアを侮辱するような物言いに、怒りが胸の内を駆け上がった。これほど大きく感情が膨らむのは、多分、久々だ。
「アルディア殿こそが、我らの最良なるリーダーなのだよ。ルーベルトごとき粗野な男、どうなることかと思えば……。お前たちが共にいた彼女が、ヴァルス王女で間違いないな？　彼女を、どこへやった」
「ヴァルスに協力することが、何で売り渡そうとしていることになる？」
「アルトガーデンに組み込む腹詰もりだろう」
「違うッッッ！！」
「レーヴァテインの鍵を携え、ツェンカーを強請りに来たのだ。だがもうレーヴァテインは、私が手に入れた。その鍵は、後でゆっくり預かることとしよう。……さて」
ヴァルト副将軍の手が、刀剣類の隣にある鎖で出来た鞭のようなものに伸びた。
「最初は、このくらいから始めてみようか。私は普段、帯剣していることが多いのでね。なかなか違う武器を手にする機会が少ない」

そんな解説は別にいらない。
「ヴァルス王女はどこにいる」
シャラ……と鎖が解き放たれる音がする。戒めを解かれて床に落ちた鎖が高い音を立て、ヴァルト副将軍の視線が俺を捉えた。
「言うと思うのか」
と言うか、知らないが。そもそも。
「すぐに言われては面白くないだろう？」
カレヴィさん。正義感の強い男は、拷問に快楽を見出したりはしないと思いますよ。
心の中で報告をしながら、今から始まるのだろう過酷な時間に暗澹たる気持ちになる。救いの手はきっと訪れないだろう。
（そう言えば、キグナスは……？）
俺の心の問いを読んだように、不意にヴァルト副将軍が口を開いた。
「拷問と言うのは、その生がある間にどれだけじわじわと痛みを与え苦痛を長引かせられるかに意味がある。その為に様々な道具があるのだから。ただ暴行を加えるだけでは、拷問としては甘い。早々と死んでしまうようでは尚のこと」
「……？」

第3部第1章第27話　心の豪火（5）

「君は、お友達よりも少し、頑張ってくれたまえ」

どういう意味だ？

心臓が凍りついたような気がした。目を見開き、その意味が自分の中で形を取る前に、足音が聞こえた。

「副将軍」

その声に、つられて顔を上げる。開いたままのドアから姿を現したのは、セルだった。そうだよな……セルだって、『地上の星』だ。

（キグナス……？）

さっきのヴァルト副将軍の言葉は、どういう意味だ？

あの言い方じゃ、キグナスに何か良くないことが起こったみたいじゃ……。

「セルフィオ。どうした」

本当はセルフィオと言うらしい。

セルは、無言でセルを見詰める俺には見向きもせずに口早にヴァルト副将軍に何かを告げた。イリアス語で、俺にはわからない。

対するヴァルト副将軍も口早に何か答え、やがてちらりと俺を見た。次の瞬間、手に握った鎖の鞭を俺の方に叩きつける。

「――――ッ……」

的確にこめかみの辺りに命中し、打たれた痛みと切れた痛みに無言で呻く俺を一瞥して小さく笑った。

「残念だ。少し待っていてくれ。すぐに戻る」

何……？

何かが起きたのか……？

ずきんずきんと痛むこめかみに片目をきつく瞑っていると、足早に出て行くヴァルト副将軍に従うセルが、一瞬ちらりとこちらを見た。それから、ヴァルト副将軍の代わりにドアを閉める。鍵をかけるような音が聞こえ、また部屋には静寂が戻った。

「いってぇ……」

誰もいなくなったので遠慮なく呻きながら、先ほどのヴァルト副将軍の言葉を、もう一度頭で反芻した。

どういう意味だ。

キグナスはどうしたんだ？　俺と同じように、ここのどこかにいると言うことか。どこにいるんだ？　どう……。

（……？）

考えていると、今閉まったばかりのはずの扉が、不意に小さく開かれた。そっと、まるで周囲を伺うように、静かに。

驚いて顔を上げる俺の視界で、静かに誰かが中を覗く。子供だ。細く隙間を開けると、通路の左右を見渡すようにして中に滑り込んできた。一度扉を音も立てずに閉めると、小走りに俺のそばによって来る。

手には、鍵を持っていた。

「何……」

問いかけて、見覚えがあることに気がついた。

「君は……」

ヴァルト副将軍の屋敷の前で、荷車の車輪が外れて困っていた少年だ。

え？　何だ？　どういうことなんだ？

わけのわかっていない俺の前で、少年は小さく人差し指を唇に当てた。静かに、と言うことだろう。いずれにしても彼とは多分会話が成り立たないので、俺も素直に頷く。

少年は、手にした鍵で俺の手足の戒めをひとつひとつ解き放って

いった。
（何者なんだろう……）
どうして助けてくれるのかも良くわからない。
けれどありがたいのは確かだ。
「ありがとう」
あの時とは逆に、今度は俺が礼の言葉を口にする。やはり彼には通じていないだろうが、それでも意志は伝わったらしく、少年が控えめに笑って頷いた。
それから、俺を先導してドアへ向かい、通路の左右を再び見回すと右手を指差す。続いて、上を。
察するに、右へ行って階段を上れと。
そうすると、外に続いているんだろうか。
「わかった。ありがとう」
だけど、ここのどこかにキグナスがいるんじゃないだろうか。
それに、レーヴァテイン……。
探すことは、可能だろうか。
言葉が通じれば少年に尋ねることも出来そうなものだが、生憎とそれは叶わない。少年はここでお別れらしく、早く行けと俺を急かしている。その言葉に頷いて、とりあえず俺は走り出した。幸いにして、人気はないようだ。
（どうする……？）
俺は今、先ほどヴァルト副将軍とセルが消えたのとは別の方向に向かっている。他の人間がいないとは限らないが、少なくとも彼らと正面から遭遇と言うことはなさそうだ。
少しだけ、この辺りを探してみよう。少しだけ。
駆ける通路は石畳で、壁も石だ。いわゆる地下牢と言うような造りをしていて、全体的に通路は暗い。
間を置いてぽつんぽつんと俺がいた部屋と同じような扉があり、どの扉も閉まっている。ただ、扉についている小窓から見る限り、人のいる部屋はなさそうだ。

道なりに角をひとつだけ曲がると、間もなく突き当たりの階段に辿り着き、通路はそこで更に右に折れていた。少年が上がれと言っていたのはこの階段だろうと思うが、少し、この通路も覗いてみて平気だろうか。

僅かに逡巡し、腹を決める。

もしもキグナスも俺と同じように捕らえられたのだとしたら、まさか放ってはいけないじゃないか。

直前にアレンといる姿を見ているし、アレンが『地上の星』と言うこともありうるんだし、大体そう……ヴァルト副将軍の、言葉が。

けれどその通路は短く、すぐに下へ続く階段に遭遇してしまった。どうしようか。余りうろうろしていては、少年の好意が無に返る。この階段を降りてみて、複雑そうだったら一度諦めて脱出しよう。

緊張しながら、短い階段を駆け下りた。どうやら杞憂だったらしく、続く通路は非常に短い。洞窟のような行き止まりがここからでもわかり、扉は右と左の壁にひとつずつあるだけだった。

これなら、探りきれる。

一瞬背後を伺い、それから足音を立てないように足早に歩き出した。

手前にあった左手の扉からまず中を伺うが、暗くて良く見えない。けれど、人の姿はなさそうだった。続いて、突き当りの壁間近にある左手の壁の扉から、中を覗いてみる。こちらも特に人の姿は……。

……血の、匂い？

背筋が戦慄した。

僅かな小窓から漏れてくるほどの、血の匂い。

鼓動が加速し、咄嗟に扉を開く。

思いがけず抵抗なく開いた扉に、嫌な予感に背中を押されるまま、中へ飛び込んだ。

「キグナス……ッ！？」

部屋は、俺がいた部屋と同じ造りで灯りがない。けれど背後から差し込む光で、部屋の隅のほうに蹲るようにして倒れている人影を

見ることが出来た。
誰かまでは見て取れない。けれど俺は、キグナスだとしか思えなかった。
部屋に入ると同時に、血の匂いは胸を詰まらせるほどに濃くなっている。
「キグナス！？」
ぴくりとも動かないその姿に、血相を変えて名前を呼ぶ。胸が凍る思いで駆け出す。
「キグナス！！」
近付いてみれば、それは確かに、キグナスだった。
ありえない想像を無理矢理心の隅に押し遣って、真っ白な頭で隣にしゃがみ込み、震える手を伸ばす。
全てがどこか麻痺しているような感覚の中、その体を抱き起こした瞬間、閃光のような衝撃が走った。
「嘘だろ……？」
どこにも力の入らない体、そしてむせ返るような血の匂いが舞い上がる。
その半身は血塗れで、ローブの色は元の色がわからないほどに変色をしていた。床に広がっている血溜りが、微かにびちょりと粘液質な音を立てた。
――キグナスの全身はぼろぼろだった。
「キグナス……？」
瞳を閉じたまま身動ぎをしないキグナスの顔は、静かだ。
抱き抱える俺の腕にかかる重みは、まだほのかに温かさを残している。
（嘘だろ？）
「こんなところにいたのか。手間をかける」
背後から、声が聞こえる。
だけどそれが何なのか、わからなくなっていた。
ただ、凍りついたようにキグナスを抱えて座り込んだまま――――

――――。

――――――今、起きていることが、わからない。

白い、頭の中。

鼓動だけが速い。

血の匂い。

腕の中の重み。

フラッシュバックする『人魚の神殿』。

――やりたくねぇこととか、どうしても無理なこととか……言って良いんだぜ。その為に、俺とかシサーとか、いるんだろ。

――約束なッ。んじゃあ、俺とカズキでも心配ないように、しっかり魔法の腕磨かないとな。

――俺さあ……お前に会えて良かったよ。きっと。少しはさあ、役に立てたって……思っても良いんだよな……？

キグナスは死んだのか？

その、八重歯を覗かせたあどけない笑顔が脳裏に蘇った瞬間、俺の周囲を取り巻く全ての音が消失した。
外界の音が全く耳に届かない。
完全な静寂……視界が、赤く、染まる。

――――――――――――殺してやる……！！

「さあ、続きをやろうじゃないか……」
無音の中、ぽん、と背後から俺の肩に手が置かれた。
それを合図のように、自分の周囲が一瞬にして豪火に包まれたような錯覚を起こす。
俺の中で、何かのタガが、外れた。
キグナスをそっと床に横たわらせ、代わりにきつく握り締めた右手の中に。
「何ッ……！？」
――――レーヴァテインが。
ヴァルトが驚愕の顔で何かを叫んだようだ。
「剣をどこからッ……！！」
次の瞬間、振り向きざまにまるで反射のような速さで、レーヴァテインをヴァルトに叩き込んでいた。

「ぐふッ……」
手に返る鈍い手応えさえ、現実感がない。
何も聞こえない、音のない世界。
どこか他人事のような、映画の画面を観ているような視界の中でヴァルトの体が夥しい血を噴出しながら、仰け反って後ろへ倒れ込む。
ゆらり、と体が揺れた。
ヴァルトの血で染まったレーヴァテインから、炎が暴走するように噴き出す。
渦巻く炎の向こうで、とめどなく血の溢れ出す腹を押さえたヴァルトが、地面に座り込んだままでじりじりと後退した。
「い、いつの間にレーヴァテインを……」
剣を通じて、俺の全身が炎に包まれている。
こいつの扱い方など、知ったことじゃない。
こいつに認められようが認められまいが、そんなことはどうでも良い。
「俺に、従え」
――覇竜ノ剣ハ　心ヲ食ラウ……
それがどうした？
――ソノ覚悟ガアルノナラバ
覚悟なんて、どうでも良い。
――ソノ覇気ヲシテ　オ前ヲ主ト　認メヨウ
噴出する怒りと憎悪が、俺を支配する。
レーヴァテインを抑え付け、ヴァルトをこの世から抹消する為だけの暴力的な意志と炎を全身に纏わり付かせ、キグナスの血溜りから一歩ゆっくりと踏み出す。ヴァルトが呻きながら、立ち上がった。
「た……助……」
強く振ったレーヴァテインから、巨大な炎の鎌のようなものが空気を裂いて飛ぶ。避けられずにそれを受けたヴァルトは、炎に包まれるではなく、まるで灼熱にまで熱した鉄鎌で切り付けられたよう

に血を噴き出した。
　無感動に、焼け爛れたような傷口を抑えてのた打ち回るヴァルトを見据えながら、俺は、レーヴァテインの声に答えた。
「好きなだけ、食らえ」
　心など、くれてやる。

第3部第1章第28話　氷竜来襲（1）

――争いって、憎悪の連鎖反応も原因のひとつなんだ。その連鎖を誰かが止めなきゃ、駄目なんじゃねぇかな。

◆◇◆

目の前で、『副将軍であるはずの男』が血にまみれて呻いている。
小刻みに震える体と、俺を見上げる恐怖に彩られた視線に、歪んだ笑いがこぼれた。
キグナスの恐怖と苦痛は、どれほどのものだったろう？
ロッドを奪われ、理不尽な痛みに曝され、最期に何を思っただろう？
確かにキグナスは、ロッドに頼っていたかも知れない。
けれどそれは、命を失うほどの、罪なのか？
ごうん……と魔剣の炎が、低い唸りを上げる。
そして、一際大きな炎を吐き出すと、それはそのまま獣の姿を取った。
炎で象られた、狼だ。
ヴァルトが、喉をひきつらせるような悲鳴を上げる。
今なら、『扱い方は教えるものじゃない』と言ったレーヴァテインの言葉の意味が、理解できた。
教えられるものじゃない――レーヴァテインの使い方が、今の俺にはわかる。それが、レーヴァテインが俺を主と認めたことなのだと言うことも。
炎狼の上げる唸りが、空気を震わせた。ヴァルトが血塗れの全身を引きずるように、隅へ隅へと逃げようとする。
無駄だよ。
逃げられない。

瞑い笑みを湛える俺の意志を正確に読み取って、炎狼が地を蹴った。ヴァルトの姿が炎狼に遮られ、俺からは見えなくなる。
だけど、足りない。
これじゃあ足りない。
なあ、あんた、俺に言ったよな？
どれだけ苦痛を長引かせられるかに意味がある、と。
すぐに言ってしまっては面白くないってさ。
その言葉に則って、キグナスを痛めつけたのか？
キグナスは、あんたの欲した情報なんて、持ってなかっただろう？
だからいくら何されたって、言わなかった。……言えなかったんだよ。
気づかなかったか？
なあ――気づかなかったのかッ！？
「カズキッ！！」
レーヴァテインが、俺の内側にたぎる怒りに合わせて生み出した炎の塊を、炎狼に遮られたままのヴァルトめがけて撃ち込む。
その反動を、ただ受け止めながら無感動に立ち尽くす俺の目に、セルの姿が飛び込んで来た。
「セル……？」
俺の右手の魔剣からは、構わずに炎が放たれている。
ぼんやりと視線をセルの方へ彷徨わせる俺に、セルは扉を盾にするかのように僅かに身を引きながら、ヴァルトだったモノに顔を向けた。
（こいつも……『地上の星』……）
敵、か……？
「カズキッ！！　やめろッ！！　俺は敵じゃないッ！！」
敵じゃ……ない……？
セルが、蒼白な顔で続ける。半ば悲鳴のような声だった。
「カズキッ！！　とにかく落ち着いてくれッ！！　……もう、死んでるよッ！！」

からん……。
硬い音を立てて、レーヴァテインが落ちる。火の弾も、炎の獣も、同時に揺らいで姿を消した。
「カズキ……」
それを見て、セルがほっと息をついて、部屋の中へと入ってくる。
「セルは、『地上の星』だろう……？」
無言で、青い顔で、眉を顰めてヴァルトだったもの……既に原型を留めているとは言えないソレを見つめていたセルは、俺の言葉にそのまま顔を上げる。
「そうだよ」
「だったら……敵だよ……。俺は……『ヴァルスからの使者』だから……」
「……」
「知ってるよね？」
どこか呆然としたままで、定まらない視線で問う俺に、間近まで近づいたセルは硬い表情で頷いた。
「ああ。知ってる」
「キグナスを……返してくれ……」
もう一度、レーヴァテインを使おうと言う気力がなかった。
ぽつんと、血と焦げ痕だらけの暗い部屋に投げ出された俺の言葉に、セルが顔を歪める。
俺の肩に両手を伸ばし、うなだれるように深く頭を下げた。
「俺が、目を離さなければ……」
「……？」
「力不足だった。すまない……」
何……？
セルは、何を言ってるんだ……？
わからないのは、俺の頭が、おかしくなったせいなのか？
考えようとしてみるが、すぐにどうでも良いことのような気がした。

そう、そんなことはどうでも良い。
今、目の前のセルが、敵ではないのなら。
それだけを納得して、するりとセルの腕から逃れる。
背後で静かに横たわったままのキグナスの隣に、ひざまずいた。
のろのろと、力ない手を取ると、先ほどより僅かに体温が落ちた気がした。まだ動かしても違和感のない腕は、重く感じた。
「キグナス」
名前を呼んでみる声が、掠れている。ぽたりとキグナスの頬に滴が落ちて、そしてようやく気がついた。
自分が、ずっと泣いていたことに。
絶え間なくこぼれる涙が、次々とその顔を濡らす。
顔も、残念ながら傷だらけだ。乾き始めているこびりついた血、痣や、腫れ。
痛かっただろう。お前、何も知らなかったのに。
ロッドもなくて、抵抗なんか、全然出来なかっただろ……。
（これ、現実か……？）
本当は、オチがあるのかもしれない。
重態だけど、生きてるとかさ。
少しずつ体温が落ちていくように感じるのは、俺の錯覚だろ？
「なあ……嘘だろぉ……？」
キグナスは、答えない。鼓動や呼気を、確かめる気にはなれなかった。確かめるのは、怖かった。
少しずつ温もりが失われていくのだろうその手に俺の体温を分けたいと願って無言のまま握り続ける俺に、セルもしばらくは無言だった。
やがて、躊躇いがちに、動く気配がした。
「カズ……」
俺の名を呼ぶ声が、途切れる。不意に慌ただしい足音が近づいてきて、頭上……この建物より遙か頭上から、轟音が響いた。
「セルッ！！」

「アレンッ。どうした！？」
アレン……。
聞いたことのある名前だ、とは思ったが、振り返る気になれなかった。
背中を向けたままの俺の後ろで、セルとアレンの慌ただしい会話が聞こえる。何を言っているのかは、わからない。
頭上から……獣の咆哮……。
（氷竜……）
ぼんやりと、心の片隅で認識する。
「近いのか」
「まだ僕は見てはいない。上空だろう」
突然会話がヴァルス語に切り替わった。言葉がわからない俺に不安感を与えないようにと言うセルの配慮だなどとは、俺には気づく余裕さえなかった。
「ドラゴンクローラは出ている。アーノルトとリジーが指揮に当たっているようだよ」
２人の会話は、耳に届きはするけれど、まるで上滑りのように心から抜け落ちて行った。
ユリアやシサーのことさえ浮かばずに、ただの役立たずとしてそこに座り込んでいる。
「カズキ」
沈黙を挟んで、セルがアレンに何かを言う。アレンが出て行く足音がすると、セルが俺を呼んだ。
無言のまま答えない俺に、構わずセルがもう一度呼びかける。
「カズキ。ツェンカーに、手を貸してくれねぇか」
頭上では、空一面に反響しているかのような不気味な音が絶え間なく続いている。
「カズキ。俺たちを怒っているのはわかる。だけど……トラファルガーを放っておけば、関係のない人たちだって命を落とすんだ」
「……」

「なあ。頼むよ。この通りだ。……ツェンカーに、手を貸してくれ」
相変わらず答えない俺に、セルもかける言葉を探し倦ねているかのように黙った。
ぼんやりとしたまま、セルの言葉を頭の中で繰り返す。
……手を貸す？
俺が手を貸したって、何も変わらないだろう？
ああ……レーヴァテインか。必要なのは、俺の手じゃなくてレーヴァテイン。
その辺に転がってるだろ。持って行けば良い。
それより、キグナスのそばにいてやらなきゃ。
ひとりにしたら、寂しいじゃないか。
「カズ……」
「カズキッ！！」
セルが俺へ呼びかける声に、新たな声が重なる。その声は良く知っていた。俺は、ようやく背後を振り返った。
「シサー……」
「カズキ」
シサーが部屋に足を踏み入れ、セルがどくように身を引いた。部屋の様子を見て取ったシサーは、ドアからすぐのヴァルトの残骸に一瞬動きを止め、それから改めて俺に向き直った。その背中から、見知らぬ男が顔を出す。アレンだろう。足元に兎はいなかった。
（俺の剣……）
「カズキ」
俺に近づきながら、シサーが再び呼ぶ。
ようやく、声が、出た。
「キグナスが……」
「聞いた」
すとん、とシサーが俺の隣に膝をついた。
キグナスの頬に手を伸ばし、目を伏せる。
「つらかったろうな」

「……うん」
「ちゃんと、ヴァルスに連れて帰ってやるからな」
何の反応も示さないキグナスの、血のこびり付いた髪を撫でながら、シサーが言った。
「連れて……帰れるの？」
痛ましい表情のまま、シサーの目が俺を見る。
「アレンに約束させた。俺たちと一緒にってわけにはいかねぇが、然るべき手段でヴァルスに送らせる」
「ほん……と……？」
「ああ。……シェインに会わせてやらないわけには、いかねえだろう……」
シェイン……そうか……。
「そう、だね……」
それきりまた黙りこくって動かない俺の肩を、シサーが無言で叩いた。
それから、立ち上がった。
「カズキ。キグナスの死を無駄にしたくなかったら、手を貸してくれ」
ごぅん、と低い音が、上の方から響き渡った。
黙って見上げる俺の目を、シサーも静かに見返す。
「トラファルガーの襲撃を受けている。戦うぞ」
戦う……。
ここを、離れなきゃならないと言うことだけが、わかった。
ここを、離れる？
キグナスを置いて？
「……嫌だ」
ぽつんと答える声に、シサーが一瞬黙った。
それから、ため息混じりに言葉を続ける。
「気持ちはわかる。俺だって悲しいさ。だから悼むなとは言わない。でも、ツェンカーを放っておくわけにはいかねぇだろう？」

「レーヴァテインなら、そこにある。持って行けば良い。元々、俺のものじゃない」
淡々と告げる俺に、シサーが片手を額に押しつけた。
「カズキ……」
「鍵もいらない。俺の耳からちぎり取れば……」

第3部第1章第28話　氷竜来襲（2）

「カズキッ！！」
投げやりな俺の言葉を遮るように、強い衝撃を受けた。怒鳴りながら俺の胸ぐらを掴み上げたシサーが、そのまま俺を壁に叩きつける。
「本気で言ってるのか？」
「……本気だよ」
「目を覚ませッ！！　ここでうずくまっていて何になるッ！？」
「じゃあキグナスを放置してけって言うのかッ！？」
今まで茫洋としていた俺が突然怒鳴り返したせいか、シサーは一度飲み込むように言葉を切った。
それから改めて、強い視線で俺を睨んだ。
「そうじゃねえだろう。魔物に人が襲われてる。罪もない人たちが、餌になってんだよ！！　食われてんだッ！！　それを、お前にしか出来ねえことがあるのに、やらないで黙ってるつもりなのか！？」
「……」
「何の為にツェンカーに来たんだよ！？　これで全滅しちまったら、本当にキグナスは無駄死にだってわかってるのか！？」
（カズキィ……）
シサーの言葉尻に被せるように、声が聞こえた。――気がした。
（行って来いよ）
「キグナス……」
「え？」
思わず振り返るが、期待に反してキグナスは変わらず横たわったまま身動ぎをしない。
また、声が、聞こえた。
（ごめんな。力、足りなくて）
（ごめんな。もう何も手ぇ貸してやれなくて――）

目を見開いたままシサーを見上げると、シサーも凍り付いたように俺を見ていた。
声だけ……幻聴？
（行けよ）
まるで、微笑んでいるような朗らかな声だった。
（行って――）
馬鹿野郎……。
涙が、止まらなくなるじゃないか……。
これで行ったら、きっと最後……戻って来たらきっとお前の声さえもう聞こえず、残る温もりさえ消えてるんだろう？
（――行って、ヴァルスの平和に、繋げてくれ）
シサーが、無言で俺の肩を軽く叩いた。
「……ごめん」
「行こう」
「――うん」
行ってくるよ。

キグナス――――――――――――……さよなら。

◆◇◆

「ちッ……何だこれッ……」
床に放り出してあったレーヴァテインをひっつかみ、シサーらと共に階段を駆け上がる。
石造りの階段をいくつか通り過ぎて外へ辿り着いてみると、外は、猛吹雪だった。

「カズキ。アレンと一緒に行け」
目の前を真っ白に染めて舞い暴れる氷雪に目を細めながら、シサーが言う。
その言葉に、シサーでもセルでもない……もうひとりの人物を見上げた。
さらさらの短い銀髪に深緑色の瞳をした、どこか人の良さそうな青年だ。ひょろりと高い位置から俺を見下ろして、曖昧に笑う。
「あなたが、アレン？」
ぼそりと尋ねると、彼は小さく頷いた。
「アレンについて行ってくれ。わけは後で話す。……やれるな？」
俺が頷くのをシサーが見届けると、アレンが俺を促した。
「あちらから抜けましょう。一度、ドラゴンクローラがどう動いているのか確認したい」
ちらりとシサーを見上げ、それからアレンに続いて駆け出す。外に出て少し先には再び建物があり、そこへ続く渡り廊下があった。屋根がついている。
（やっぱり、ダンテラス要塞のどこかなのか……）
敷地は広く、宴のあった建物がどこなのかまでは良くわからない。加えて言えば、俺は、あれからどのくらいの時間が経過したのかさえ明確にわからないことに今更気がついた。
俺自身がどのくらい意識不明だったのかわからないけれど、俺とキグナスが拉致されたのにはさほど時間差はなかったのだろうから……。
（……）
きつく唇を噛んで、意図的にトラファルガーへと頭を切り替える。
今は、考えるな。
でないと、目の前のアレンさえ疑わしいのだから。
シサーが俺に『彼について行け』と言ったのだから、不安を覚える必要はない。だったら、考えるべきはそれじゃない。
だけど……。

前を駆けるアレンが帯剣しているのは、少なくともその鞘や柄を見る限りはかつて俺が持っていたものと酷似していた。

そして背には、変わった形の弓を装備している。クロスボウと言う奴だろうか。片手回しのハンドルのようなものがついている、強力そうな奴だった。そう言えば彼はアーチャーだ。多分。

「アレン」

渡り廊下から、建物の中へ入る。無愛想に真っ直ぐ伸びる通路に人の気配はなく、時折どこからか伝わる振動が空気を震わせ建物を鳴らす。

「あなたは、アルディアの息子？」

アレンが、微かに顔だけで振り返った。

「そう」

「あなたは、『地上の星』だよね」

「……」

無言で駆けていたアレンの背中が、足を止めた。

「なぜそうだと？　……こちらだ。地下道を使って向かう」

「あなたの持っている剣は、『地上の星』へと流れるルートへ乗った俺の剣だ」

俺を促しながら、通路の途中にある扉を開けて現れた階段に足を向けたアレンは、俺の言葉に目を見開いて振り返った。それから自分の腰に視線を下ろし、小さく微笑む。

「そうか……そういうこともあるものか」

普通の剣なら多分、わからなかっただろう。だけど俺がシャインカルクから貰った剣は、頼りない俺へのせめてもの心積もりか物が良く、それがゆえに闇組織が見逃すはずもなかったし、辿り着いた先では身分の高い人間の手に渡ることになったんだろう。

偶然、だけど必然のような気もする。

「そう。確かに僕も『地上の星』であることになる、んだろうな」

「アルディアは、違うと聞いた。あなたは、お父さんを裏切ってるの」

「それは否、と答えよう」
短い階段はすぐに終わり、天井の低い通路がある。幅も狭く、閉塞感のあるその通路を足早に急ぎながら、アレンが付け加えた。
「父は、『地上の星』ではないよ。それは僕が保証する。そして僕は『地上の星』だと言えるかもしれないけれど、父を裏切っているわけじゃない。セルもまた、同じ」
「どういうこと？」
「『地上の星』に同調しているのではなく、実態を知る為に潜入していたから」
「潜入……？」
「そう。……己の名を翳して結成された水面下の反乱因子を、父は認めていない。だから、僕が、代わりに」
「でもそれは、汚名を着せられることにもなりかねない」
「僕自身なら、構わないけれどね。だけど、父も知っている。ルーベルト殿の同意も得ている。僕が潜り込むのは、とても容易いことだったよ。そして同様にルーベルト殿が送り込んだのが、セルだ」
「え？」
「セルは、ルーベルト殿の秘書官のひとり。彼は、二重スパイと見せかけた、民事会サイドからの潜入官だ。ルーベルトの情報を『地上の星』に流す役割として、とても重宝されていた。もちろん、そのことをルーベルト殿はご存知だ」
そうだったのか……。
考えてみれば、ヴァルトのような要塞幹部さえ含む闇組織を国家中枢が放っておくはずもない。対策は、していたんだ……。
アレンが『政治ごとの役に立たない』なんて、とんでもない誤解じゃないか。
「セルが君らの通訳としてついたのは、君らをガードする為だったんだ。けれど、ヴァルト副将軍の動きに気を取られて目を離したことを、セルはひどく後悔している。僕からも謝罪しよう。力が及ばなくて、済まなかった。……ここを上がると、すぐ外に出る。ドラ

ゴンクローラの一部と指揮官がいるはずだ」
セルの言葉の意味、そして、セルがヴァルトを連れて行ってから間もなく俺に助けが来たことのわけが、今更ながらわかった気がした。もしかすると、セルは部屋の扉を閉める振りをして閉めなかったのかもしれない。ヴァルトを連れ出したのは、俺が逃げる時間稼ぎの為だったんだろう。
だとすると、現れた少年もセルの差し金だと考えられる。もしかすると、ヴァルトの屋敷の前で彼に一度遭遇していたのさえ偶然ではなかったんだろう。
不明点はまだあるものの、概要が見えてきて、俺はそっと唇を噛んだ。
敵だと思っていた人の中に、味方がいたのに。
その救いの手さえ、キグナスには間に合わなかったんだ。
「シサーたちは、どこに……？」
短い階段を上がりながら、尋ねる。この通路に入った時と同様、階段を上りきったところにある扉にアレンが手を掛けた。
「この騒乱の中でも、押さえておかなければいけないところはあるんだ。少ない人手でね。シサーは腕の立つ人物だと聞いた。だから手を借りている。……君は、今はトラファルガーを片付けることを考えてくれ」
扉を開けると、扉のない出入り口がそこにあった。その外は、真っ白だ。寒さに竦む体を圧して、外へ出る。
だが、予想に反して、そこには誰の姿もなかった。もちろん、ドラゴンクローラもいない。アレンが微かに舌打ちを漏らした。
「出払ったか……。仕方ない、カズキ、行こう」
「う、うん」
「とりあえず、フリュージュの外郭にある砦に行く」
真っ白に煙る曇天を、獰猛な雄叫びが覆い尽くした。
駆け出すアレンの背中を追って、俺も雪の中を走り出す。
要塞を出てフリュージュの街へ繋がっている連絡路を辿りながら

見上げる上空には、フレザイルで見たのと全く同じ姿をした氷竜が浮かんでいるのが氷雪の合間に見えた。ここから見ても、生々しいほどくっきりとわかる巨体。緩く羽を動かし、顔が裂けているような口から轟音と雪礫を吐き出している。

その周囲に、ドラゴンクローラが何騎か舞っているのが見て取れた。近付こうとしては、攻めあぐねているように距離をとる。トラファルガーの咆哮に混じる雄叫びは、ドラゴンクローラの威嚇の声だろうか。

「さっさと片付けないと、まずいな」

「何で」

「ドラゴンクローラの攻撃性は、長くは持たない」

そう言えば、元々は温厚で臆病な生き物だった。

「どうやって戦闘に使うの」

「ドラゴンクローラが、ある時期に好んで食べる岩石がある。子供を持った時だ」

足を動かしたままで、剣ではなく、背に負った弓を抜き出したアレンが上空を睨みながら答えた。

「その時期には、ドラゴンクローラの攻撃性が異様なまでに上がる。その岩石が、上げるんだ。ドラゴンクローラは本能的にそれを知っていて、子供を守る時期にだけ好んで食べるらしい」

「じゃあ、それを食べさせると……」

「そう。戦闘に使えるようになる。だけど、所詮は食料のもたらす作用だから長くは続かない。持って半日かな」

街の外郭に辿り着き、街へと階段を下りる。思いがけず街には多くの人が残っていたのか、氷竜に恐慌を来たして逃げる人々の姿が目に飛び込んできた。大きな通りは、ごった返している。アレンが、険しい表情を見せた。

「固まらないでッ！！　建物に籠もってじっとしてッ！！」

けれど、怒鳴る声など誰も聞く耳を持たない。怒号や悲鳴、激しい物音が重なり、アレンが俺を脇道へと引っ張った。

「固まるほど攻撃を受けやすくなることがわからないのかッ……。道は使えない、ちょっと足場が悪いところを抜ける。ともかく、外郭の砦まで……」

アレンの言葉が途切れた。耳に神経を集中しているような硬い表情に、俺もつられて動きを止める。

空気を裂くような重い音、堰の壊れた水流のように猛スピードで迫り来る破砕音、そして人々の悲鳴はほとんど絶叫のように高まった。

「カズキッ、走れッ！！」

トラファルガーだ。

アレンの言葉を合図に、目で確認もせずに俺は走った。

建物で遮られていて姿は見えなかった、けれどアレンの言った通り大通りを固まって逃げる人たちの姿に、トラファルガーが襲い掛かったんだろう。

細い路地を人とは逆方向へと逸れていく俺たちの後方で、トラファルガーが人間の体に与える苦痛塗れの嫌な音と悲鳴、そして建物が瓦礫へ変わる音が畳み掛けるように上がっている。

駆けながらちらりと振り返ると、僅かに見える大通りはガラス細工のように綺麗に氷結し、食われる人の姿が赤い塗装を撒き散らしていた。

「アレンッ、待ってッ」

今なら、近い。

それに気づいて、足を止める。アレンが振り返っただろう時には、俺はレーヴァテインを握って今来た道を駆け戻り始めていた。

「カズキ！！」

レーヴァテインが、熱を持つ。

トラファルガーの捕食から無我夢中で流れて来る人に巻き込まれそうになり、俺は手近な建物に飛び込んだ。取るものも取りあえずに逃げたらしい室内は乱雑で、脇目も振らずに階段を駆け上がる。

上り切って飛び込んだ手近な部屋は、寝室だ。窓の向こうにバル

コニーを見つけて、俺はそこへと走り出た。

第3部第1章第28話　氷竜来襲（3）

倒せなくても、トラファルガーを追い返すくらいは出来るかもしれない。

発熱する剣を構える。燃え上がったレーヴァテインは、俺の意志を正確に読み取って炎を放った。同時に、俺の中から剣に何かが流れ込んでいるような感触が内側を駆け巡る。

一筋の太い炎の流れが、氷竜を目掛ける。距離があるか……気を逸らすくらいには……。

「カズキッ」

アレンが俺に追いついて、部屋に駆け込んできた。バルコニーに転がり出て身を乗り出すように手摺りに張り付くのと、トラファルガーが己を目指す炎流に威嚇の声を上げるのとは、ほぼ同時だった。

「攻撃を食らうよッ。中に入ってッ」

アレンに引きずり込まれ、死角となった外から激しい爆音のようなものが聞こえる。息を喉の奥深く吸い込むような音が響き、次の瞬間、今し方俺たちがいたバルコニーが、猛烈な氷雪の波に飲まれて吹き飛んだ。

「うわッ……」

建物が大きく振動し、バランスを崩してよろめく。大きな地震のように揺らめく足元が収まると、アレンが俺の腕を掴んだ。

「軍と合流しよう。君は、ドラゴンクローラの手を借りた方が良い」

促されて再び外に出る。

通りは人の姿が多く、顔を上げるとトラファルガーが風を巻き起こしながら舞い上がるところだった。とりあえず、奴に危険を感じさせる程度のことは出来たようだ。

「こっちッ」

アレンとはぐれないようにしながら、人の間を抜ける。指示され

た地下道に入ると人の姿はなく、そこを抜けて今度は整備されていない荒地や田畑を通り、砦に近付くほどに人気は減った。通りへ戻ると、完全に氷結してしまった街の一角や、破壊されてただの瓦礫と化した建物などが目に付いた。

大通りから離れたトラファルガーは、砦付近の上空で停止している。そこに敵が集結しているのを知っているかのようだ。

巨大なトカゲに似た頭部を真っ二つに裂いたような口から、鋭利な刃物めいた白い牙が覗く。噴霧のように吐き出す凍気に、直接その間近にいない俺の周囲まで気温が下がる。

空気を裂く重低音が響き、それを受けてトラファルガーが吼えた。同時に、何かの衝撃を受けたようにその体が空中で跳ねるように一瞬大きく揺れた。

「砲弾だね」

アレンが、俺に説明するように言う。その向こう側で炎の柱が上がるのを見て、魔術師の存在の少なさに気が付いた。

「アレン。魔術師兵とか、いないの」

見る限り、上がる魔法攻撃がかなり少ない。多分。

俺の言葉に、アレンが硬い表情で頷く。

「ツェンカーでは、魔術師兵は組織していない。魔術師自体が、アルトガーデンよりも希少だろうね」

「どうして」

「ローレシアの北部は精霊の力が強くて、魔術師よりは精霊使いの方が多い。そして、精霊使いは争いを好まない」

精霊使い……ニーナやレイアのような、亜人型と言うことだろうか。

「彼らは人間と組織立って徒党を組むこと自体を忌避するし、余り人前に姿も見せ……」

後半は、独り言のようにトラファルガーを睨み据えながら呟きかける言葉尻を覆うように、トラファルガーが一際大きく体を跳ね上げた。そして、その巨大な尾を、建物を浚うように叩き込む。上が

る悲鳴を、轟音が上から塗り潰した。
砦に到着すると、街の姿が見えて愕然とした。
トラファルガーがその上空にいる辺りは、瓦礫の山にしか見えない。その全てが氷結していて、それはまさしくカーマインの有様を思い出させた。
あそこに、人はいるんだろうか。残念ながら、それはここからではわからない。
砦の前面には組織された兵士たちが、投石器や砲台を押し立てているのが見える。回廊の一角には弓箭兵が並び、トラファルガー目掛けて構えている。けれど、距離があるせいか躊躇しているのだろうか。矢が放たれる気配はない。
俺が見ていない間の戦闘の傷痕だろう。良く見ればトラファルガーの体にいくつか矢が突き立ち、砲撃の痕のような怪我が見られる。けれど、それでも竜は、大きなダメージを負っているとは言えなさそうだった。
羽を広げ、緩く上下すると息を深く吸い込むように上体を持ち上げ、低い不気味な唸りが大気に響き渡る。トラファルガーの背後に、巨大な冷気の塊が幾つも浮かび上がるのが見えた。仇敵の攻撃を感知したかのように、俺の手の中でレーヴァテインが、熱を発した。その望みを感じ、回廊の前面へと駆け出す。
「ここから攻撃を加えられるのか!?」
「さあッ!?」
俺の後を追うアレンの言葉に答えながら、剣を構えると同時に炎が迸った。反動で放り出されるようなことは、なかった。
俺の何かをレーヴァテインがまた、吸い上げていくのを感じる。剣を介して、氷竜目掛けて空を疾る炎は、軌跡を描きながら獣の姿を生み出した。氷竜の瞳がその姿を捉え、威嚇の声を上げる。
「駄目かッ……!?」
その場にいる人間全員が、恐らくその激突に釘付けだっただろう。けれど、魔剣が放った炎の魔法は、その飛距離ゆえに威力が落ちた

のか、トラファルガーが放った冷気の塊の前に、火花を散らすようにして消滅した。
「カズキッ」
何とかして、あいつを引き摺り下ろさなきゃなんないのか……！？
トラファルガーを睨んだままの俺の頭上から、不意に声が降って来る。驚いて顔を上げると、一頭のドラゴンクローラが舞い降りてくるところだった。
「ラーヴル！！」
吹き降ろす冷たい風が、バサリと言う重い音を運んで来る。衝撃と共に間近に降りると、騎手ラーヴルが俺に手を差し出した。
「乗れと言ってる」
アレンが伝えてくれる。ラーヴルを再び見上げると、彼は急かすように自分の後ろを示した。涎をだらだらと垂らしながら、血走った目でぎょろぎょろと辺りを見回すドラゴンクローラに、周囲の兵士が慄いたように身を引く。味方とは言え、魔物は魔物、やはり怖いようだ。
「乗って良いの？」
アレンが伝える前に、ラーヴルが頷く。空気で俺の尋ねたことを察したんだろう。それを受けて、俺はラーヴルの手を取った。促されるままに鞍に足を掛け、途端、ドラゴンクローラが唸りを上げる。多分、ラーヴル以外を乗せるのが、ちょっと嫌なんだろう。
けれど、もたもたしているわけにはいかない。悪いんだが、ラビにはちょっと我慢して戴こう。
トラファルガーの方から、また轟音が上がった。風を切る低い音と合わせて、建物を総なめにしたような盛大な破砕音だ。
「進路に希望があったら、肩を叩けと」
何かを言ったラーヴルの言葉を、アレンが俺に伝える。それに頷いて、ラーヴルの指示通りに鞍のベルトで体を固定した。鐙（あぶみ）に足を掛ける。
途端、ふわりとドラゴンクローラが浮いた。俺の左右より少し前

で、大きな羽が音を立てて上下する。
「うわ」
何とも言えない妙な感覚に、一瞬バランスが崩れる。浮遊する時に、胃が浮くような気持ちの悪さがあった。後傾になりかけた俺の体を、腰のベルトが引き戻す。
構わずに上空へと舞い上がったラビの背から見える景色に、思わず体が竦みそうだった。これはもう、条件反射みたいなものだろう。振り返れば、砦の兵士たちの姿がみるみる小さくなっていく。
ラーヴルが、何かを言った。俺に言葉が通じないのはわかっているだろうし、半ば独り言のようだ。見据える目線は前のまま、それを辿ればその先には、氷竜の姿があった。
レーヴァテインを握る手に、汗が滲む。氷竜を制する魔剣と言ったって、操り方を間違えればおしまいだろう。
制し切れなかった時にはうるさかった魔剣は、今は俺の手足のように静かだった。けれど、標的の存在に武者震いするかのように、赤い石が緩く明滅している。
空中には、何騎ものドラゴンクローラの姿が見えた。咆哮を上げては尾を振って街を叩き壊し、身を擡げては口を開いて人々の中に突っ込むトラファルガーを、牽制するかのように……あるいは、近付きかねているように、定まらない動きを見せている。
実際これは、どう近付いたものなのか。
ラーヴルも、他の騎手と同様、近付こうと滑空しては攻撃対象となるのを避けるように旋回する。
……ともかくも、さっきよりはかなり近付いたんだ。
やってみなけりゃ、しょうがないだろう！！
旋回する間に少しだけ騎乗に慣れた俺は、剣を強く握って微かに体を浮かした。これでラビに予想外の動きをされたら、落ちるかもしれない。
左手を、体を支えるようにラビの背に付く。俺の動きを察したラーヴルが、微かに振り返って片手でトラファルガーを示した。――

近付く、と言う意思表示だろう。
応えて頷くと、ラーヴルの操縦に合わせてラビの体が更に上昇した。トラファルガーを下に見るように上がり、一度そこで動きを止める。次いで、突っ込んで行くかのように斜め下へと急降下し始めた。
（うッ……）
体を支える左手に力を込め、突き刺さる冷たい空気に片目を眇めながら剣を握る手に力を込める。切っ先は真っ直ぐ、トラファルガーへ。
こちらの意図を察してか、別のドラゴンクローラがトラファルガーの目先を滑空する。氷竜の意識がそちらに向き、頭上は完全ながら空きだ。
音を立てて、レーヴァテインが燃え上がった気がした。刀身を炎に包み、ラビが炎を受けないように気遣いながら、雄叫びを上げる竜を見据える。
「行けぇぇぇぇッ！！」
ヴァルトに叩き込んだのと同様の火の弾が、トラファルガー目掛けて放たれる。眼前で牽制を試みていたドラゴンクローラに鋭い鉤爪を叩き込んだトラファルガーは、迫り来る炎を察知したように顔を上げた。その向こうで、攻撃を受けたドラゴンクローラがまるで紙切れのように落下していく。
「クァァァァァッ！！」
怒り狂ったように叫ぶが、既に炎は避けきれない速さで間近まで迫っていた。口角を吊り上げ、氷礫を吐き出すトラファルガーに炎が幾発も命中した。
けれど、一概に喜んでばかりもいられない。こちらから向かう炎の合間をすり抜けて飛来する氷礫に、ラビが悲痛な声を上げる。避けるために大きく上昇し、それとほぼ同時に地上から放たれた砲弾で氷礫が止んだ。
「埒があかないな……」

少しずつダメージを与えていくしかないんだろうか。けれど、破壊力を考えればこちらよりあちらの方が圧倒的に上だ。地味な攻撃を繰り返していれば、氷竜が倒れる頃にはこちらに被害は甚大なものになってるだろう。いや、既に甚大だ。何せ街が半壊している。

と、下の方で、立て続けに地響きのような音が聞こえた。見下ろせば、砦の砲台から立て続けに砲弾が放たれているようだ。今まで恐る恐ると言った様子だったものが、やけくそになったようにも見える。氷竜が、更なる怒りの声を上げた。急降下する。

「やばい、砦がやられるッ……！！」

砦には、多くの兵士がいる。街を守るために身を挺して残っている人々が全て、砦とその周囲の街区に布陣しているんだ。

これが壊滅すれば、それは街の壊滅を意味することになるだろう。ラーヴルが再び、ラビを下降させた。馬のような鼻息を漏らして滑空するラビに、俺は再び崩れかけたバランスを何とか持ち直しながら炎を放った。もうこれはほとんど、剣と言うより火炎放射器だ。

三筋の炎を奔らせながら、氷竜へと近付く。砦に突っ込んでいくようなトラファルガーに、回廊の兵士たちは蜘蛛の子を散らすように我先にと逃げ出し、望楼が音を立てて瓦礫と化した。

――氷竜ノ目ト目ノ間ヲ狙ウガ良イ……

滑空するラビの背でトラファルガーの後背に近付きながら、火炎放射器もといレーヴァテインが言った。

「目と目の間！？」

そんなピンポイント、無茶……。

炎を振り払うように、トラファルガーが上体をくねらせて大きく尾を振る。瓦礫が跳ね上がり、その向こうで旋回するドラゴンクローラから、火矢が放たれた。

「アレンッ！！」

ドラゴンクローラの騎手の背に、クロスボウを番えるアレンの姿を見つける。立て続けに数本火矢を放つと、アレンを乗せたドラゴンクローラがこちらの方向へ大きく飛翔した。

砦からの攻撃がやみ、生き残った兵士たちが姿を消すと、トラファルガーが顔を擡げた。口を開いて冷気の塊を吐き出す初動動作を見せる。その眼前を、勇敢ながらも無謀なドラゴンクローラが一頭遮った。

「カズキ」

「レーヴァテインに、『目と目の間を狙え』って言われた」

トラファルガーの前脚が、旋回するドラゴンクローラに叩き付けられる。悲痛な悲鳴が響いた。

けれど、トラファルガーは羽をバサリバサリと動かしながらも、飛び立つ様子を見せない。……もしかして、度重なる攻撃で飛翔能力が低下してるのか？

ゴォォォォォッ……と言う不気味な声が、氷竜から上がる。

「目と目の間！？」

ピンポイントとは言え、標的は決して小さくはない。狙って狙えないことはないとは思う。顔のでかさもさることながら、要するに鼻梁を狙えってんだろう。馬のように長いのだから、顔に攻撃を加えられればかなりの確率でヒットする。

だけど、その目に留まれば当然避けられるわけで、やるなら、奴の目線が前に向いている時に真上から突き立てるしかない。

「俺が失敗したら、アレン、引き継いでよ」

成功したって、トラファルガーに振り払われてお陀仏かもな。

防御魔法で守ってくれたり、回復させてくれるキグナスは、もういないわけだから。

「レーヴァテインの鍵は、このピアスだ。俺の耳から取って、レーヴァテインを操れる人に託して」

言いながら、腰のベルトを外す。ラビに騎乗したままでは、不可能だろう。あいつに飛び移るつもりでやるしかない。気分は、特攻だ。

「僕が、トラファルガーの目線を引きつける」

無言で俺を見詰めたアレンが、硬い表情で口を開いた。

「え」
「頭上から狙うんだろう。目線をこっちに向けさせておく」
「だって……」
先ほどから、何頭のドラゴンクローラが叩き落されただろう。
目を見開く俺に、アレンは緊張を漂わせた顔で、笑ってみせた。
「どっちにしたって、このままじゃあ壊滅だ。……僕も、これでも弓矢の腕はそれなりだよ。飛び道具での攻撃は、得意なんだ」
それから目線をトラファルガーに向けた。トラファルガーは同じ場所に留まったまま、周囲を旋回しているドラゴンクローラに威嚇の声を上げている。
「奴の目線を引きつけて、正面から攻撃をする。その間に、必ず頭上から攻撃を仕掛けてくれ」
「……わかった」
「失敗、しないでくれよ」
ラーヴルに意図を伝え、そう言って小さく微笑んでみせたアレンを乗せたドラゴンクローラは、勢いをつけるように軽く上昇してから急降下した。他に気を取られているトラファルガーの視線を一度避けるように旋回して降りていく。続くこちらも、距離を近づけてトラファルガーの頭上付近へと降りていく。
氷竜へと近付いたアレンは、今度はその目線を誘うようにドラゴンクローラを旋回させた。狙い通りトラファルガーが、咆哮を上げながら目線を動かす。向き合うように対峙した瞬間に、アレンから火矢が放たれた。
そのタイミングで、ラーヴルがラビを猛スピードで落下させた。
耳元で風を切る音、痛いほどの冷気と下から振りつける雪礫。
レーヴァテイン。剣らしい使い方をしてやるよ。
俺の動きに、逆らうなよな。
失敗したら……キグナスのそばに行くだけだ。
浮かぶ小島のようなトラファルガーの頭部がみるみる近付き、アレンに気を取られていたトラファルガーがもう間近と言うところで

ラビを蹴る。
真っ直ぐ下降してくれたおかげか、勢いをつけて重力に引き落とされる俺の体は、真下にトラファルガーの頭部を控えていた。
両手でレーヴァテインを握り締め、力を込めて炎に包まれた切っ先を真っ直ぐ下へ。
気づいたトラファルガーが振り仰ごうとするところまでが、見えた。
もう、遅い。
避けるのは、手遅れだ。
トラファルガーから長い咆哮が上がった。威嚇なのか、悲鳴なのか、区別がつかなかった。
俺の全身に、腹の底へ響くような重たい衝撃がかかる。
視界の全てが、烈火の炎に埋め尽くされた。

◆

◆◇◆

「カズキ。食事はもう、済んだ？」
あれから、１週間。
うとうととベッドに横たわっていた俺は、扉を開けるユリアの声で意識を引き戻された。
「いや……まだ」
「じゃあ、持って来るわね。今日は、食欲ある？」
「う……ん……」
「口をこじ開けてねじ込んでやりゃあいいのよ、ユリア様」
曖昧な返事をする俺に、ユリアの肩に座り込んだレイアが猛烈に歪んだことを言った。
「レーイーア。駄目じゃないの。そんなこと言ったら」
レイアを軽く叱ると、ユリアは再び俺に顔を戻した。それから近付いて来て、横たわったままの俺の額に手を当てる。
「熱、引かないわね……」
「平気。……うん。食べるよ」
「そう？　じゃあ、ちょっと待っててね」
気遣うような笑みを残してユリアが出て行くと、再びひとり残された部屋で、俺は窓から空を見上げた。
トラファルガーの鼻梁にレーヴァテインを突き立てた手応えまでは、覚えている。
轟音と言っても過言ではない咆哮とレーヴァテインが発する豪火、そして衝撃――聞いた話では、あの瞬間まるで燃え移るようにトラファルガーの全身が炎に次々と包まれていき、燃え盛る消えない炎の中で断末魔の雄叫びを上げ続ける黒い影は、地獄絵図のようだったと言う。

そんな最中、トラファルガーから跳ね飛ばされた俺は、旋回して待ち構えていたラビに受け止められたものの、間髪入れずに燃え盛る氷竜の尾の一撃をくらってラーヴル共々地面に叩き落されたらしい。

ラビはその一撃で死んでしまったそうだが、ラビの存在が緩衝材となって俺とラーヴルは一命だけは取り留めた、とのことだった。

生きてはいるものの、骨折、全身打撲、内臓の損傷など幾多もの深い怪我を負い、しばらくは絶対安静を言い渡されている重傷だ。

意識不明のまま生死の境も彷徨っていたらしく、一時は本当にそのままお亡くなりになるところだったとか。

とは言っても、昨日目覚めた時には当然峠は越していたわけで、俺自身は聞いた話でしかないんだが。

窓から見える空は、澄んだ青をしている。どことなく白みがかって高く、恐らく外は今日も寒いんだろう。

トラファルガー襲撃の傷痕はフリュージュの街に大きく残り、数え切れないほどの街人が死傷したらしいが、さすが首都の防衛力とでも言うかカーマインほどの被害にはならなかったそうだ。

氷竜排撃完了の報は散り散りに逃げ出していた人たちの元へ瞬く間に届き、最近になって少しずつ、ツェンカーには人が戻り始めているらしい。

「カズキ。入るぞ」

外からは、明るさを取り戻したような人の声と、街の修繕の為に上がる様々な音が聞こえてくる。

ぼんやりと目覚めてから聞いたことを思い返していると、形だけのノックが聞こえ、扉が再び開いた。

「痛むか？」

「ん……？　うん……いや、平気……」

入ってきたシサーが、ベッドの傍らに近付いて来て椅子を引き寄せた。続いて入ってきたセルも、その脇に並んで立つ。腰を下ろして俺を覗き込みながら尋ねるシサーに、俺は短く答えた。

戦闘に参加した少ない魔術師たちもかなりの被害を受け、治療にも手が回らないのだそうだ。神殿からの聖職者の派遣をどうとかって聞きはしたけれど、負傷者が多過ぎて、あらゆる意味で手が回っていないんだろう。

兵士たちも、多くが命を落とし、多くの意識が戻らないと言う。動ける者も、覇竜に襲われた恐怖から精神に異常を来たしたりしていると。

ナヴィラスは、戦死したと聞いた。アレンやラーヴルもまた例外なく、意識不明の重態らしい。

「シサー」

声を出すと全身が痛み、必然的に儚い声になった。

「アレンは、目が覚めた……？」

いろんなことがあり過ぎたせいか、以降ぷっつりと意識がなかったせいか、全てがどこか夢の中の出来事のようにも思える。

だけど、俺の怪我がこうして治っておらず、いつも真っ先に俺を覗き込んでいたキグナスの姿が未だ見えないことが、現実だったんだと教えている気がする。

「ああ。昨夜、意識が戻ったそうだ」

「そう……」

あの要塞でシサーとセルが別行動を取った理由は、昨日、教えてもらった。

民事会サイドのルーベルト、アルディアのそれぞれから『地上の星』への潜入官として送り込まれていたセルとアレンは、ルーベルトとユリアの会合が無事成功したことを受けて、あの宴の場を利用し、制圧するつもりだったのだと言う。

『地上の星』の各幹部を抑え、それと同時に宴の終盤でルーベルトとアルディア、そしてユリアが駆けつけたのだそうだ。

あの場にいた来訪者は、それぞれ政治的もしくは軍事的にそれなりの地位を持つ人間ばかりだから、正式な通達として誤解を招かない最善の方法と判断したのだろう。

まずはルーベルトの口から、ヴァルスがレーヴァテインを携えてトラファルガーの排除に協力する旨を伝えた。そしてユリアが、ヴァルスが求めているのは援軍であり、それ以上でも以下でもないことを公言し、膝を折った。

公式の場で宣言してしまえば、問題視されるほどの誤解には繋がらない。加えて、各権力者に向かって言明してしまえば、ヴァルスは意趣変えなど出来る余地は微塵もなくなる。

ヴァルス王女が直々に、ツェンカー代表そして『地上の星』が掲げるアルディアと共に公衆に約束することは、説得力があっただろう。

トラファルガーの片がついたら、ツェンカーは状況が整い次第ヴァルスへ援軍を出してくれると約束した。

そして、それが実現された暁には、ヴァルスはレーヴァテインをツェンカーに差し出すことをまた、約束したのだと言う。

今しばらくは氷竜の脅威に曝されることはないだろうけれど、いずれまた、その時が来るだろうことは明らかなのだから。

「目が覚めて最初、アレン、何て言ったと思う？」

セルが、くすくす笑いながら俺に尋ねた。ぼんやりと首を傾げる俺に、セルが間もなく答えを口にする。

「『フリーツェルはどうした？』だからな」

「ふりーつぇる……？」

「あいつの兎さん」

「……ああ」

そう言えば、宴の場で兎を連れてたっけ。あれは何なんだろう。別に個人の趣味をとやかく言うつもりはないが。

そう思って、アレンがキグナスに声をかけていた場面を思い出した。

セルが、姿の見えなくなったヴァルトを探して俺たちのそばを離れた代わりに、アレンが『レーヴァテインを持つ俺』を探していたのだそうだ。

だけどアレンは俺の容姿を知らず、どう考えてもあの場で浮いていたキグナスに、俺と間違えて声をかけたらしい。

それを俺が見て、また彼らを追いかけたと言うのも皮肉な話だが、まさしくその裏でセルの懸念の通り、ヴァルトは俺とキグナスを狙って動いていたわけだ。

幹部を抑える準備が整う前に拉致された俺とキグナスを探すセルの元に、彼の手先としてヴァルトの屋敷に出入りしていた少年からの報告が入って、俺たちの居場所を知ったセルは緊急避難としてヴァルトにでたらめの報告を持ちかけた。

そうしてあの場を引き離した隙に、あの少年が俺を助けてくれた。

「そう言えば、アレンがさ……」

セルが何かを言いかけるが、その前に扉がまた開く。食事の乗ったトレイを手にしたユリアが顔を覗かせ、シサーとセルの姿を見て唇を尖らせた。

「もう。安静なんだから、ちょっかいかけたら駄目じゃない」

「ちょっかいかけてるわけじゃねぇよ。暇だろうから、遊んでやろうってだけじゃねえか」

お母さんのようなユリアの言葉に、シサーが反論する。

「シサー、そこのサイドテーブルを出して」

「へいへい」

追い立てられるように椅子から立ち上がるシサーを眺め、それから、枕元に立てかけられているレーヴァテインに視線を移した。

「セル」

「あ？」

何となく微笑ましい顔をしてユリアとシサーを眺めていたセルが、細い俺の声に顔を向けた。

「アレンが、何？」

「ん？　ああ、いや、あいつが『地上の星』から受け取った剣は、元々お前のものだったんだそうだな」

「ああ……」

「自分はアーチャーだから、必要ない。だから返すって言ってるぜ。動けるようになったら、だけどな」
「……そう。わかった」
本来ならばあのまま、『地上の星』幹部は拘束し、それで解決するはずだった。
けれど予想外にトラファルガーの突然の襲撃に曝され、しかし、混乱に任せて『地上の星』幹部を逃してしまうわけにもまたいかなかった。
だから、アレンに俺とトラファルガーの方を任せて、シサーとセルがルーベルト麾下の何人かと共に『地上の星』の壊滅の方を受け持った。つまり俺がトラファルガーと戦闘を繰り広げている間に、シサーたちはアカンサへと流れ出た『地上の星』の主要陣との戦闘を強いられていたと言うことだ。
ジークを介してウィーリッツと連絡を取ったシサーは、彼らと共に宴の会場へと戻り、セルやアレンと状況を確認しあっての協力だったと言う。
もちろんウィーリッツは、セルやアレンのことを知っていたのだから。
「カズキ。流動食なの。食べられる？」
「ん？　ああ、うん……ありがとう」
ユリアがトレイを片手に、俺を覗き込んだ。それから、身動きが取れない俺と手元の食事を見比べて、戸惑ったような表情を見せる。
「あ、あ、あの……食べさせてあげた方が、良い、わよ、ね……」
「いーなあ。俺もやって欲しいっすねえー」
セルがにやにやと冷やかす。一国の王女と知りながらこの態度を考えるに、何と言うかこの人はこういう人なんだろう。
何せ高額の報酬を目の前にぶら下げられて、『地上の星』への潜入と言う危険な役回りを受け入れたと言うのだから。
「し、仕方ないじゃないのッ」
慌てるユリアを眺めてから、俺はまた上空を流れる雲に目を向け

た。

……気になっていることがある。
キグナスの言葉が引き金で思い出した、ファリマ・ドビトークで見た夢。
——それより……どんな相手も必ず敵の最も弱いところを狙ってくる。あんたたちのメンバーで言えば、カズキかキグナスだ。
なあ、ナタ。
あんたは、ここへ続く未来を、知ってたのか？
——命を失った後ではあたしにも何もしてあげられないんだ……。
俺たちの歩いている道が、この場所へ続いていることを、知っていたんじゃないのか？
だとしたら。
だとしたら————————……。

（ナタ……）

——————————……俺は、あんたを、許さない。

戦禍

QUEST　第3部　ローレシアの

第1章　氷竜トラファルガー

第3部　ローレシアの戦禍　第2章　そして、王家の塔

第3部　ローレシアの戦禍
第2章　そして王家の塔

雲ひとつない澄んだ青空に、何羽もの海鳥が旋回するのが見える。
目を細めてそれを無感動に眺めていると、遠くから男に呼ばれた。
「おーい、坊主ー！　もうじき船が出るぞー！」
その言葉に無言のまま片手を挙げて応えると、踵を返して男の方へと歩き出す。
男の立つすぐそばにはそれなりに大きな商船が停泊していた。積荷を運ぶ屈強な男たちが慌しく行き交っている。
「荷物は？」
親切に声をかけてくれる男に無言で顔を横に振った。荷物など肩に負ったこの荷袋ひとつだけだ。
「そうかい？　しかし運が良かったな。ヴァルスは戦争中だから、真っ直ぐヴァルスまで行く船が今は少ないんだよ」
船への渡し板を渡る背中を、男の声が追いかけてきた。足を止めて振り返る。初めて微かな笑みを浮かべた。
「知ってる」
「巻き込まれんように気をつけるんだな」
「……。忠告はもらっとくよ」
それを最後に甲板へ上がると、彼――ゲイトは舳先に寄りかかった。
ヴァルスにある大きな港としてギャヴァンとフォルムスが挙げられる。他にも港は幾つかあるが、他大陸との窓口に使われるのは主にこのニ港だ。
しかしながら、ギャヴァンは沖に魔物が出没し、フォルムスはナタリアとの海戦が展開され、双方とも寄港出来る状況になかった。

ナタリアとの決着がつき、再びフォルムスが動くようになったのはここ一週間ほどのことらしい。ヴァルスはナタリアの撃退に成功した。

まだ戦の爪痕があちこちに残る為にフル稼働とはもちろんいかないようだが、少なくとも危険ではなくなったし、貿易による物資の出入りも期待しているのだろう。

トートコースト大陸の西北にある港にゲイトが辿り着いた時にはまだ出港を見合わせている状況だったが、ようやく船を出すことにしたようだ。ゲイトがヴァルスからこちらへ来る時には、ラグフォレスト大陸へ知人に無理を言って運んでもらうと言う手間を挟んだものだが、帰りは一本で帰れるのは助かる。

戦禍に巻き込まれないように、か。

先ほどの男の言葉を胸の内で繰り返し、ゲイトは鋭い目線を波間に投げ掛けた。

それは無理だ。自分は戦禍のただ中へ帰るつもりなのだから。

（グレンフォード）

――お前を消す為に。

第3部第2章第1話　布石（1）

リトリア王国クリスファニア――文人の多い美しく高級な街である。

著名な思想家や文豪が住んでおり、セルジュークに住む貴族たちも数多く別宅を所有していた。森や湖があり、盆地である王都より夏冬共に過ごしやすい街でもある。

太陽が灼熱を放つ季節ながら、クリスファニアはそれほどの暑さは感じない。澄んだ青空から眩しい光が降り注ぎ、屋根や窓に反射をしている。

街の中心部からやや離れた場所にある邸宅の一室で、ソフィアは窓から眺められる街並みにひとり視線を向けていた。

エディとシェインは、あれからどうしただろうか。

エブロインに無理矢理拉致をされてから、既に一月が経過した。

彼らの腕では、襲撃者たちを片づけることは出来ないであろうことはわかっている。だが、ソフィアを捕獲したことで人数は減ったはずだし、うまく逃れられていれば良いのだけれど。

彼らを巻き込んでしまったことを、ソフィアはひどく気にしていた。正確に事情も何も話していない。漠然としたところだけ話して、そしてあの時に万が一命を落としでもしていたら、一体どれほど悔やむかわからない。

エディにしてもシェインにしても正体は不透明だが、少なくともこの騒動に巻き込まれる筋合いではないことは、わかりきっているのだから。

（父上……）

それからソフィアは、父親のことを思い浮かべた。

育ててくれたシガーラントの父フリッツァーではない。血の繋がった、けれど、父子として未だ対面をしたことはない実の父親のことだ。

クラスフェルド・ルイード・ヴェ・ラ・ロード・ヴェルフェン―国王としてリトリア王国に君臨しながら、未だ独身を貫いているその人である。

遠目にしか見たことのない、けれど娘として会える日を楽しみにしながら敬愛を忘れることなく想って来たその人と、今自分は相対する場所へ立とうとしている。……ソフィアの、与り知らぬところで。

ソフィアには、クラスフェルドと敵対しようと言う意志など微塵もない。父を王位から蹴落として、自分が簒奪しようなどと考えたこともない。

なのに、状況だけが動いていくのだ。自分が、自分だけが王位継承権を持っているから。

それも、誰もが知っていることではない。一部の人間しか知らぬこの事実は、それを利用しようと言う人間にとってはひどく魅力的なのだ。

自分の存在が、父を脅かす。

窓の外の平和で穏やかな街並みが、裏腹にソフィアの心を焦らせた。何とか逃げ出したい。自分がここにいること、そのことが既に反逆への荷担となる。

ソフィアこそが、クラスフェルドに対して掲げられている征旗なのだから。

けれど、反乱軍はソフィアにとってこの計画が非常に不本意であることを知っている。警戒は厳しく、とても抜け出すことなど出来たものではなかった。

「ソフィア様。お茶でもいかがですか」

宮宰アルノルト・クレーフェの別邸の一室において、ソフィアの待遇は悪くはない。次期国王に据えようと思っているのだから、尚のことだ。与えられた部屋は広く、調度の類も贅沢なものだ。衣類、食事、環境の全てが整えられている。

来客用の館をまるまるひとつ使用することが許されていて、館の

中は自由に動くことが出来るし、使用人もいる。書室や遊戯室なども取り揃えられている。

ただ、外と通じそうな場所全てに衛兵が配置され、強固な鍵がかけられていることを除けば行き届いた待遇と言えた。

「ヴェリッサ……」

ドアの外からの声にソフィアが答えると、部屋に入って来たのは身の回りの世話を任されているヴェリッサだった。

年の頃はソフィアと変わらない。ファルネーゼ家においてソフィアの身の回りの世話をしていた人物なので、気心も知れている。ソフィアの心をほぐす為に、ファルネーゼ家からこちらへ送り込まれたらしい。

「今日は、美味しいバラジャムが手に入ったんです。ソフィア様のお好きなバラジャムティをお入れしようかと思っ……」

「ヴェリッサ」

ティセットを乗せたカートを押し入れて扉を閉めるヴェリッサに、ソフィアは切羽詰った声を上げた。

クラスフェルドは既にセルジュークを発ったと聞いている。反乱が起こるのは、時間の問題だ。

王を救わなければ――なのにソフィアは、ここから出ることが出来ない。

「わたしの剣はどこにあるの」

ヴェリッサが凍りついた目線をソフィアに向ける。ソフィアは尚も続けた。

「わたしをここから出して。ヴェリッサならわかるでしょう？　わたしには、加担することなど出来ない」

「……わざわざブルスワントから取り寄せたんですよ。もう少し時間がかかるかと……」

「ヴェリッサ！」

声を荒げるソフィアに、ヴェリッサが苦しい顔で押し黙った。俯いて黙るヴェリッサにソフィアが無言で視線を向けていると、やが

てヴェリッサがちらりと視線を上げ、再び背ける。
「わたしには、どうして差し上げることも出来ません」
「このまま黙って見過ごしていろと？」
「わたしに何が出来ると言うのです！」
テーブルを叩くソフィアに、ヴェリッサが感情的に怒鳴り返した。
その顔を見て、思わず口を噤む。
「わたしは一介の使用人に過ぎません。衛兵の固める館で、何が出来ると言うのです」
「……」
「わたしには、ソフィア様に美味しいお茶を入れて差し上げて、心和ませて差し上げることしか出来ないのです」
心など和むはずもない。だが、ヴェリッサの言う通り、彼女に当たっていても仕方のないことだ。彼女は出来る限りの心配りをしてくれているのだから。
「ごめんなさい。ヴェリッサ」
唇を噛んで俯きながら謝罪をする。ヴェリッサがほっとしたように微笑んだ。
「おわかり戴ければ結構です。ソフィア様が焦る気持ちもわかりますが、ソフィア様を戦場にお連れになるようなことはないと思いますよ」
そんなことを危惧しているのではない。しかしこれ以上ヴェリッサに言い返したところで無意味だろう。ソフィアは無理矢理の笑顔を浮かべて、頷いてみせた。
「そうだね」
味方はいない。手を貸してくれる者の存在など、この屋敷の中にいはしない。
頼りになるのは自分だけだ。
（ならば……）
ならば、自力で脱出出来ないかやってみよう。

深夜になり、館の中が静寂に支配される。

一度ベッドに潜り込んでいたソフィアは、耳を澄ませながらそっとベッドから抜け出した。

夜も警戒は厳しいことぐらいわかっている。だが、光射す昼間より、夜の闇の方がよほど脱け出しやすいはずだ。

一月の間、さりげなく屋敷の中を入念に見て回った。監視つきではあるが、時折庭に出ることも許された。配置は頭に叩き込んである。

この屋敷に幽閉されてから与えられる高価な衣類は、動きを制限する。ソフィアは身動きしにくい夜着を脱ぎ捨て、元々自分が身につけていた衣服に着替えた。そのまま馬に乗れるくらい身軽なパンツスタイルである。

着替えを終えると、ソフィアは静かに窓際に立った。ソフィアが見た限り、衛兵の目の届かない扉はない。脱け出すとしたら窓しかない。

音を立てないように静かに窓を開ける。繁華街のざわめきを微かに乗せた風が、ソフィアの山吹色の髪を揺らした。下を望んで、小さく息を飲む。

今いる部屋は三階だ。窓から外へ出るには高い。しかし他の部屋に移動をすれば、衛兵に見咎められる可能性が上がる。

事前に用意したドレスを切り裂いて紐状に繋ぎ合わせた物を手にし、狭いバルコニーの手摺りにそれを縛り付けた。何度か引っ張ってみて安全性を確認する。

それから深呼吸をして、気持ちを落ち着かせた。ここから出られなければ、きっと脱け出せない。もう悠長にしてはいられない。まだクラスフェルド率いる国王軍がクリスファニアに到着したと言う話は聞いていないが、さほどの時間は残されていないだろう。

手製の綱を頼りに、ソフィアは恐る恐るバルコニーの柵を乗り越えた。全身が竦む。一歩間違えれば転落だ。大怪我じゃ済まないかもしれない。

綱が千切れると言う最悪の事態を考えずにはいられず、高鳴る鼓動を圧してソフィアは綱にぶら下がった。壁に足を掛けながら、ゆっくりと綱を降りていく。

今までの経験からすれば、庭に衛兵が巡回に来るのは一時間に一度程度だ。先ほど衛兵が通り過ぎた後だから、今ならば遭遇することはあるまい。そう思いながらも気が急く。急いで降りてしまいたいところだが、それによって綱に余計な負担がかかって千切れてしまっては元も子もない。

何とか綱はソフィアが庭に降り立つまで、無事支えきってくれた。そのことに感謝を覚えながら、確かな大地の感触に深い息をつく。

（良かった……）

とりあえずはこんなところで転落死などと言う間抜けな事態にならずには済んだ。問題は、庭から街へどう抜けるかだ。辺りは高い塀で囲まれており、正面はもちろん衛兵が守っている。

ともかくも屋敷から離れよう。

今ソフィアがいる中庭は、綺麗に刈り込まれた芝生が敷き詰められ、どこまでも見通しが良い。いつ見つかってもおかしくない状況である。中庭を取り囲む木々の陰に向かって小走りに移動をし、一応人目は避けられそうだと判断したソフィアは、一際黒い影を落とす大きな木の根本に身を潜めた。そのままじっと身動きせずに周囲の様子に気を配る。

出口はどちらだろう。

最低限、アルノルトが在留している館に近付いてはなるまい。

庭園に設置されているカンテラの仄かな灯を頼りに闇の中へ目を凝らし、人気がないことを確かめるとソフィアは音も立てずに立ち上がった。

アルノルトの館は、ソフィアが使用していた賓客用の館より西北にある豪奢な建物だろう。とすれば正門はそれを越えて更に向こうと言うことになる。無論、正門になど向かったところで脱け出せるはずもない。別の出入り口を探さなければならない。

出来るだけ木陰を使って、息を詰めて移動する。貴族の館は広いゆえに門は一つではないだろう。但し、その全てに衛兵がいるはずである。並々ならぬ緊張感の中、小柄な体を活かして闇を駆け抜ける。時折、緊張のせいか背後に人の気配を感じたような気がして振り返るが、どうやら杞憂に終わる。

（どこか……外へ抜け出せるところ……！）

壁を乗り越えるでも何でも良いのだ。ただ、この敷地の中から脱け出すことが出来るのならば。街に出てしまいさえすれば、追っ手はかかるだろうが、目を晦ますことは出来るかもしれない。

辺りを見回したソフィアは、ふと目を見開いた。庭の片隅に井戸がある。塀との距離もさほどはなく、上手く使えれば壁に取り付いてよじ登れるかもしれない。

期待感に胸を躍らせ、ソフィアは身を屈めて井戸に近付いた。そのすぐそばにしゃがみ込み、壁との距離を目視で測る。井戸のへりによじ登って、それを足台に何とか出来ないだろうか。

屋敷から庭を覗き見る人物がいれば見咎められるかもしれない。そう迷いながらも、いつまでも迷っていたところで事態は変わるまい。

意を決して井戸によじ登り、そのへりに立ち上がる。もちろん助走など出来るはずもないが、脚力のみに頼って塀に取り付けるだろうか。

（やってみよう）

無謀を承知で、ソフィアは壁を見据えた。踏切が肝心だ。小さく息を飲み、ソフィアは腕で勢いをつけると井戸のへりから踏み切った。

「いッ……」

塀の上方に辛うじて手が引っ掛かる。しかしながら足場がない。このまま懸垂のように己の体を引き上げられれば良いものを、十七歳の女性の細腕ではなかなかそれも間々ならない。引っ掛かった指は、重力に引っ張られる己の体重の重みに耐えかねて千切れそうに

痛む。しかしここで離してしまうと、再挑戦した時には一瞬で自分の体をずり落としてしまいそうだ。

「くぅッ……」

小さな呻き声を上げながら体を引き摺り上げようともがくが、少し上がっては力尽きてぶら下がると言う状態から一向に脱け出すことが出来ない。唇をきつく噛んで、痙攣するように震える腕を叱咤するが、状況は先に進まない。

今を逃したら、もう脱出することなど出来ないのではないかと気は焦るばかりだ。

するとそこへ、ソフィアを更に絶望させる物音が響いた。びくりともがくのをやめて、何とか首を捻る。後方から物音が響いた。

「ソフィア様」

その声に、心臓が鷲掴みにされたような気がする。それと同時に、耐え切れなくなった両手がソフィアの体を地面に叩き落した。

「いたッ……」

したたかに腰を地面に叩き付けられ、苦痛の声が漏れる。顰め面で顔を上げると、案の定、そこに姿を現したのはアルノルトの腰巾着エブロインだった。ソフィアをこんなところに連れて来た張本人である。

「このような時間にこんなところで懸垂とは精が出ますな」

一瞬殴りたい衝動に駆られる。誰が好き好んで壁相手に懸垂などしたいものか。

「体力作りは感心ですが、このような深夜にとあれば些かご乱心を疑われても致し方ございませんが」

「乱心などしていないッ」

「では、お部屋に戻ってお休みになられてはいかがでしょう」

にやにやと嫌らしい笑みを浮かべてソフィアを見下ろすエブロインに、ソフィアは唇を噛んだ。

「わたしをこの屋敷から出しなさい」

「ご要望は出来るだけ承るように言われてはおりますが。さしもの

私もそのようなお言葉はお受けするわけにも参りませぬゆえ」
「出しなさい！」
エブロインはそれ以上の会話を打ち切るように、後方に向けて片手を挙げた。背後から数人の衛兵が姿を現す。
「どうやらソフィア様は興奮されてお休みになれないご様子。お前たちが手をお貸しして、お部屋にお連れなさるよう」
「やめて！」
ソフィアの哀願など露ほども受け入れる姿勢を見せず、衛兵がエブロインの指示通りにソフィアを取り囲んだ。
「この先、些か慌しくなることもございましょう。お休み戴ける時に、ぜひ体力を温存されておくことをお勧め致します」
「放せッ！」
「それではソフィア様。良い夢を」
優雅に言い残してエブロインが皮肉な笑みと共に背を向けると、ソフィアは衛兵に抑えられたまま絶望的にその背中を睨みつけた。
（父上ッ……）
やはり自分一人で脱出するなど無理な話だ。
血が出そうなほど唇をきつく噛み、深く項垂れたソフィアは胸の内で祈りを捧げた。
勝手な願いとわかっている。しかしながら、祈らずにはいられなかった。
（エディ……シェイン……）
わたしはここにいるのに。
お願い、ここからわたしを助け出して。
父上を……助けて。

◆◇◆

「全く、何だって僕までクリスファニアくんだりまで来なきゃなんないのさ」

「把握地域が増えてめでたいことだな。俺に感謝し、且つ喜べ」
「クリスファニアは既に押さえてるよッ」
もう数日もすれば雨の月に入るという頃、シェインたちはクリスファニアの地に足を踏み入れていた。気候は穏やかになりつつある。リトリアは今が最も過ごしやすい。
ラウバルからの使いにラミアを引き渡し、再び身軽になったシェインとエディは一度セルジュークに引き返した。そして食糧の補充や着衣などの準備を整えると『書簡屋』シーレィをさらってクリスファニアへと向かった。
一週間ほど前のことである。
なぜシーレィに同行を要請したかと言えば、彼の便利さを必要と感じたからだ。最初は嫌がったシーレィだが、金銭で雇う交渉をした結果、渋々ながらも同意した。
本日、無事に到着したクリスファニアは美しい街並みだ。
通りに敷き詰めてある石も色とりどりで、並ぶ建物も上品で瀟洒（しょうしゃ）なものが多い。さすがは貴族が多く別宅を持つと言う街である。
だが、流れる空気はどことなく奇妙なものだった。ぴりぴりしているとでも言おうか。
「さて。陛下とソフィアはどこにいるのやら」
冗談めいて呟くシェインの髪の色は、貧民を装って染めた時のまま朽葉色だ。エディもまた然りである。服装の方はごく普通の旅人と言うレベルまで戻ってはいる。
「宿を決めよう」
「どこもかしこも高そうだな」
高級官僚らしからぬせちがらいセリフを吐いてみせるシェインに、シーレィが白い歯を覗かせた。
「せっかく金持ちと同行してんだ。僕、白いふかふかのベッドに天蓋がついてる個室がいーな」
「ほう。気前が良いな」
「……ごめん。何？」

「俺たちと同行している金持ちとはセルジュークで臨時収入のあったおぬしのことだろう？」
「ふざけんないッ。子供にたかるかッ？」
「ご長命のくせに何を仰るやら」
今ひとつ緊張感に欠ける二人である。
「シェイン」
やりとりを嘆息して眺めていたエディに呼ばれ、シェインは振り返った。
「何……あれは何の騒ぎだ？」
エディに問いかけて、その視線の先の喧噪に気づいた。メインストリートの先にある広場だ。何やら人だかりが出来ているようだった。時折「おお」と言うどよめきが上がる。
「行ってみようよ！」
シーレィが小柄な体で精一杯背伸びをしながら意気揚々と叫ぶ。
野次馬根性丸だしである。
近づいてみると、どうやら見せ物でもしているのだろうか。手近な男に尋ねると、男は快く答えた。
「剣技を競ってるんだ」
「え？」
確かに歓声の合間から剣がぶつかり合う金属音が聞こえる。

第3部第2章第1話　布石（2）

「何の祭りなんだ？」
「祭りってほどじゃねえけどさ。今優勢に立ってるコルテオがたまにやりたがるんだ。競技だからさ、丸く削った刃を使うんだけどさ」
「コルテオと言うのは何者なんだ？」
「アレマン家の私兵隊副隊長さ。腕は良い」
アレマン家……わかりはしないが、当然のように家名で呼ばれることに意味は見出せる。相応に著名な貴族と言うことだ。
使えるだろうか。国王軍、反乱軍どちらに属す貴族かで話がややこしくなるかもしれない。いや、情報を仕入れるだけならばボーダーラインだろうか。
一際大きな歓声が上がる。覗き込んでみると、ちょうど1．8エレほどの巨漢が勝利の声を上げるところだった。
「彼がコルテオか」
「そうだ」
「ちなみに商品なんかはあるのか」
シェインの言葉に参戦の意志を嗅ぎ取った男が小さく口笛を吹いた。
「公式じゃないから大したものじゃないけどな。コルテオを押さえたら良い剣がもらえるって話だぜ」
コルテオの方から「次の挑戦者はいないのか」と声が上がる。
「俺がやる」
「シェインッ？　よせ」
「やめとけって、見栄っ張り」
シェインの言葉に、エディとシーレィの制止の声が上がった。殊にシーレィの言葉にかちんと来てその頭をどつく。
「誰が見栄っ張りだ、阿呆」
ごちゃごちゃ言っている間に人だかりが左右に割れ、コルテオの

いる場所とシェインを繋ぐ道が出来た。
コルテオは、萌葱色の短髪に精悍で彫刻のような彫りの深い顔立ちの男だった。浅黒い肌に、にっと笑う白い歯が健康的である。
「見た目によらず腕に覚えがあるか」
言いながらコルテオは、敗者の使っていた剣を投げてよこした。受け止めながら苦笑がこぼれる。軍人に勝てる見込みなど僅かにもない。
「いや、ないな」
先ほどの男が言っていた通り、刃はヤスリがかけられていて丸かった。打ち身程度なら十分あるだろうが、切りつけられたり突かれたりと言う心配はなさそうだ。
ただシェインには少し重い。何とか一瞬で勝敗が決まるような事態だけは避けたいものである。
「ないのに挑もうとは見上げた勝負精神だな。それとも私が舐められているのかな」
「まさか。ただの野次馬根性だ。この辺で右に出る者のない剣豪だろう。やり合って負けても死なないなら、やられてみるのもまた一興だ」
言いながら、軽く片手で剣を振る。
相手に興味を持ってもらいたい。せいぜい善戦するしかないだろう。
「ではお望み通りにしてやろう。来い」
からかうようなコルテオの言葉で、シェインは剣を構えた。

「痛むか」
「もちろんだ」
剣技を競っていた場所からほど近い居酒屋で、コルテオがしかめ面のシェインに苦笑をした。
どんでん返しなど起こりようもなく、勝敗は大方の予想通りに落ち着いた。シェインの完敗である。

とは言え、『貴族風優男』にしては良く抵抗を試みたと言えるだろう。コルテオに一太刀も浴びせられなかったが、細やかな動きで思いがけず善戦するシェインに観客は喜んだ。コルテオもシェインの身軽な動きを評価し、せっかくだから軽く一杯やっていこうではないかと言う流れである。

「剣筋は悪くはない。ただノーマル過ぎるな。速さはあるが力と切れがない。……エール酒をくれ」

先ほどのシェインの剣技をそう評して、コルテオは空のジョッキを持ち上げた。店の親父が応える声が聞こえる。

「シェインと言ったな。どこで習った？　基礎はきちんと学んでいるだろう」

微かに身を乗り出して、コルテオが興味深げにシェインに問う。言葉を幾つか交わした感じでは、気持ちの良い人物だと思われた。

テーブルにはシェインとコルテオが向かい合う形でついており、コルテオの隣にはエディが、シェインの隣にはシーレィがそれぞれついている。

「習いはしたがな。誰と言うほどではない」

「お待ちッ！」

追加のジョッキが運ばれてくる。それに豪快に口をつけると、コルテオは鶏もも肉にかぶりついた。その様子を眺めながら、この状況をどう好機とするか考える。

フリッツァーの言葉を信じるならば、ソフィアはこの街のどこかにいる。望まぬままに叛旗の象徴として飾られようとしているのだ。ことが起こってしまえば、ソフィアに荷担の意志があろうがなかろうがクラスフェルドはソフィアを厳罰に処すしかなくなる。

そうなる前にソフィアを見つけ出せる手だてはあるだろうか。

「たびたび、こういったことをやっているのか？」

少しでもコルテオから話を引き出したい。

ジョッキを傾けながらのシェインの言葉に、コルテオはにかっと笑った。

「暇つぶしさ。と言って、ただの暇つぶしでもない」
「ほう？」
「腕のある人間を見つけるには確実で早いだろう？　更に民も良い見せ物として喜ぶ」
　馬鹿ではないらしい。民を喜ばせる術を心得ている人間は民の心を掴む。なるほど、こういった見せ物を彼らが喜ぶと知った上での催しか。
「ところでお前たちは？」
　鶏肉を咀嚼しながらコルテオがこちらに話を振った。興味津々なのはお互い様だろうか。コルテオの場合は立場上もあるのかもしれない。
「しがない駆け出しの冒険者と言って信じてもらえるかな」
「信じて欲しければ信じてやっても良いがな。俺以外に信じて欲しければ冒険者ギルドの登録証なり傭兵隊の所属書なりを取ることをお勧めしよう」
　ヴァルスの宮廷魔術師にそんなものを発行してくれる機関は恐らくあるまい。偽造する以外には入手のしようがない。
　苦笑いを浮かべながら、シェインはコルテオから話を引き出す取っかかりを探した。
「そう言うおぬしはアレマン家の私兵隊をまとめていると聞いた」
　今度はコルテオが苦笑をする番だった。
「一応はな。副隊長だ」
「こんなところで油を売っていて大丈夫なのか？　ご主人様がお怒りではなかろうな」
「平気さ。それに今私がまとめているのは傭兵隊だ」
「傭兵隊……」
　通常傭兵隊を常備する貴族はほとんどいない。金がかかるからだ。必要性もないから、子飼いの私兵隊だけを手元に置くのが普通である。
　だが、コルテオは現在傭兵隊をまとめていると言う。戦時中だか

らわからなくはないが、リトリアのお家騒動に備えてとも考えられなくはない。
「戦争への徴兵か？」
エディが口を開く。その問いにコルテオは、僅かに笑っただけだった。
「街の空気が慌ただしいよね」
一人ミネラルウォーターを口にしているシーレィが、何気なく言う。
「僕が前に来た時はもっと上品な静けさがあったけど」
「戦の準備があるしな。何せ今は国王陛下も滞在している」
「ああ。その噂は耳にしたな」
伏せる必要はあるまい。シェインの言葉にコルテオもさしたる疑問はないようだった。頷く。
「そのせいもあるだろう。名誉なことだ」
「陛下は余り来られないのか」
せっかくだから、可能な限りクラスフェルドの情報も引き出したいところだ。しかしながら相手が無責任な街人であればともかくも、れっきとした軍人とくれば些か難しいだろうか。
探るような気分で問うてみると、コルテオは意外にもあっさりと頷いた。
「文官が多い街だからな。陛下は武官を重んじる傾向におられる。まあ、近寄りにくい街だろうよ」
「武王と言うくらいだ。致し方あるまい」
「それで済む者と済まない者もいると言うことさ」
「……ほう」
思いがけず深い話に流れそうである。
そのことに好機を感じながらも反面警戒心を抱かざるを得ない。
「派閥と言う奴だな」
「その通りさ。尤も、文官だからと言ってその全てが陛下に不服かと言うと無論そんなはずもない。信義を貫く者は貫くものだ」

「例えば？　などと聞いても良いものかな」
コルテオがふっと口元に笑いを刻んだ。
「構わぬよ。叛臣を挙げよと言われれば口を噤むがな」
たやすすぎる。
シェインは胸の内で警戒心を高めた。
「ベッケルやシャミナードなどは代表的な忠臣と言えるだろうな。もちろん我が主にしてクリスファニア伯であるジョエル・アレマン候は言うに及ばない」
「アレマン卿はクリスファニア伯だったか」
「その通り。陛下の信頼も実に篤い」
果たしてコルテオの言をどこまで信ずるべきだろうか。彼の言葉通りに受け取れば、現在シェインらが接触しているのは国王サイドの人間と言うことになる。ソフィアの情報は持ってはいまい。
だがもちろん良からぬことを企てていたとて、通りすがりの縁に過ぎないシェインらに「我々は現国王に叛旗を翻すつもりだ」などと言えるはずもない。つまり可能性は現時点で変わらずフィフティ・フィフティのままと言うことだ。
余り性急に話を煽るのはまずいと判断し、しばらくは剣についてやこの街のことなど世間話に終始する。シーレィが実に調子の良い合いの手を挟み、コルテオは気分良さそうに話を展開していた。
世間話の中にも、役に立たない話題ばかりではない。街の特徴や市民の気質など、知っておくに越したことはない話題はいくらでも紛れ込んでいる。
「そろそろ良い時間だな」
やがて、調子良く話していたコルテオが懐中時計を取り出して呟いた。
このままでは、せっかく美味しい立場の人間を掴まえたのに大きな収穫もなく終わってしまう。だが、話を垂れ流すほどにはコルテオに酔いは回っていない。ここは無理せず逃して違うチャンスを探すか。

一瞬でめまぐるしく計算したシェインだが、コルテオが思いがけないことを口にした。
「どうだ。もう少し付き合わないか」
「何？」
「楽しい時間を提供してくれた礼だ。どうせ旅人だろう？　宿を提供してやる」
まさかの誘いに驚愕である。
「私と共にアレマン家に来い」

◆◇◆

「話が上手すぎる」
コルテオに伴われてアレマン家に到着し、更に小一時間ほど酒を飲み交わしてから与えられた部屋へ入ると、シェインは開口一番にそう言った。
コルテオはアレマン家の主人ではないから、借りた部屋は私兵たちが寝起きする離れに繋がった客室である。来客と言うほどの人間ではない者に仮に与える部屋だ。だがそれなりに整えられており、三人一部屋であっても窮屈さは感じない。
「確かにな」
エディが短く同調した。シーレィだけが、きょとんと首を傾げている。
「何がさ」
「少しは考えろ。仮にも有力貴族の部下、それも幹部と言って差し支えのない立場の人間が、いくら話が弾んだからと言って正体の知れない人間を屋敷に招くなど普通ではない」
「よっぽど気に入られたんだね」
「……」
そんな馬鹿な、である。
言葉をなくして頭を軽く小突くシェインに、シーレィが唇を尖ら

せた。上目遣いに睨み上げる。
「じゃあ何なのさあ」
「それを気にしているのだろうが。エディ、何だと思う」
「考えられるのは……」
思慮深げに目を伏せて、エディが静かに答えた。
「我々がここに来た目的を知っているか」
「仮にそうだとして、俺たちを抑えておくことに何の意味がある？」
「私たちに恩を売ってから泳がせて、ソフィアの居所を掴む駒に使うと言うのはどうだ」
「つまりコルテオ……いや、アレマンがソフィアの居所を掴みたい人間だと言うことだな。後は何が考えられる？」
「後は……」
エディが語尾を濁らせるのと同時に、シェインも無言でエディを見返した。浮かんだ考えは恐らく同じだろう。
「シェインの素性を知ったか」
「もしくはエディかもしれないな」
黙って互いの顔を見つめ合う。ヴァルスの宮廷魔術師、モナの公王――どちらにしても動きが気になっておかしくはない。
「ふむ。私もありうるか」
まだ己の立場を知らないエディが考え深げに呟いた。
もしもその場合、なぜ知り得ることが出来たのかという疑問が浮上する。
エディとすれば、顔を見知っている誰かがいたと言うのが最も考えられるだろう。リトリアとモナとは隣国、そしてここは文官の多い街だ。何らかの折りにモナ公王の顔を拝む機会があった者がいないとは言えない。
一方でシェインの方はと言えば、それは考えにくい。シェインはヴァルスの宮廷魔術師としてリトリア貴族に相見える機会はなかった。考えられるのは。
（フリッツァー……）

エルレ・デルファルだ。
「シーレィ」
黙りこくったまま考えに沈み込むシェインとエディに退屈したように、シーレィはベッドの一つに寝転がって足をぱたぱたさせている。
シェインの呼びかけに、シーレィが顔を向けた。
「精霊魔法はそれなりに使えるな」
「馬鹿にすんなよ？　これでもエルフだぞ」
「攻撃魔法ももちろん使いこなせるな」
「風の王を呼び出せとか言わないんならね」
「やれるならやってくれと言いたいが、まあ無茶はやめておこう。ならば頼みがある」
これは腹を括らねばならないかもしれない。
いずれにしても、この先ずっとエディ自身に己の素性を知らせぬまま連れて歩くわけにはいかないのだ。
モナにほど近い文官の街クリスファニアを、モナ公王その人がうろうろしているにも限界はある。実際のところ、この街でエディをふらふらと連れて歩くのは危険だ。
エディをヴァルスに引き寄せて、モナ公王に返り咲いてもらう時期に来ているのかもしれない。
リトリア国境にいるヴァルス・モナ軍をエディが統率してこちらの動きと連動してくれれば、手駒となる軍隊が手に入る。
「エディとシーレィはソヴェウレイユに行け」
ソヴェウレイユは、リトリアとモナの国境沿いの地域である。現在は、モナはフラウ地方から南へ降りたレスヴァーレィ地方のハンノ要塞逗留軍とリトリアはソヴェウレイユ地方のアルビヌス要塞逗留軍が睨みあっている状態のはずだ。険しい荒地であることを考慮しても、単身で馬を飛ばせば三日程度の距離だろう。
エディもシーレィもぽかんとした顔でシェインを見返した。それに応えて、シェインは言葉を選びながら口を開いた。

「今の段階では、クラスフェルドがどう動くつもりなのかがわからないが……内乱軍はクラスフェルド王がクリスファニアにいる間に攻撃を仕掛ける可能性が高い」
「だろうな」
「その際に、ソヴェウレイユのリトリア軍がどう動くか皆目検討がつかないが、こちらも手勢を用意しておく必要を感じる。ソフィアの奪回は、内乱が開始してからになる可能性が高い」
その前に見つけだし、侵入して奪取出来ればそれに越したことはないが、ソフィアの居場所は今のところ全く見当が付かない。何かが動き始めた混乱の最中であればまだ何とかしようもあるかもしれないが。
しかしながら、フリッツァーがどう動いているのかも掴めていない今、動かせる手勢は自身で用意をする必要がある危険性を感じる。
「リトリアとモナの国境には、ヴァルスとモナの混成軍が布陣している。こちらの状況や動きを把握して上手く立ち回ってくれる人間が指揮に立つことが必要だ」
「指揮に立つったって……」
シーレィが驚いたようにシェインを凝視した。エディもまた同様である。
「エディ。その前に一つ確かめておきたいことがある」

第3部第2章第1話　布石（3）

ここまでの道のりで、シェインはエディと言う人物を実直な人間と受け止めている。有体に言えば信用をしている。但し、時に立場は人情より優先されるべき時がある。公王と言う重い責務を負っていれば尚更だ。エディはシェインらとの信頼関係よりも、モナの存続について優先的に考えなければならない。つまり、エディがそのように考えた場合、ヴァルスを裏切るより味方につけた方が得策であると判断させるだけの材料を用意しなければならない。

エディが無言でシェインの言葉を待つ。

「以前、酒の肴にシミュレーションをしたことを覚えているか」

「ああ、もちろん」

「少しあの話の続きをしようじゃないか」

一見悠長なシェインの言葉に、エディが微かに眉根を寄せた。しかし黙って言葉の続きを待つ。

「条件を変えよう。エディ、おぬしが現在モナ公王としての立場に据え置かれたとき、一体どう行動するかを教えて欲しい」

「構わないが……」

「条件の変更は、次だ。現在おぬし……いや、フレデリクがいるのはリトリア王国内であると言うこと。つまりロドリスとは用意に連絡を取れない」

「ああ」

「そしてリトリア軍はモナとの国境に迫り、いつ戦端が開かれてもおかしくないと言う状況」

「現実だな」

「そうさ。そしてそれに対峙するはモナ軍のみならず、ヴァルスが寄越した援軍も協力の姿勢を見せている」

「ああ」

「最後に、終結の暁にはヴァルスがモナの海上権拡大を認め、検疫

料の減額を飲む」
　エディが黙ったまま目を見開いた。小さく息を飲むのが聞こえる。
シーレィは口を挟まずに二人の顔を見比べていた。
「それは本当か」
「本当だとして話を進めてくれ。ちなみにこれはどういう状況かを念の為に説明すると、あの時おぬしが出した結論……人知れずロドリスの懐に潜ってヴァルスの援助でモナを復興させた後にヴァルスの撤退を要求することは不可能だと言うことだ」
「なぜ？」
「フレデリクがロドリスの袖の下に潜った時点でそれはヴァルスに筒抜けとなり、ヴァルス軍は速やかに撤退する。モナの復興に手を貸すことはあり得ず、独力で国力を回復せねばならなくなる。そしてロドリスが動き出す前にその隙を突いてリトリア軍が攻撃を開始した場合、モナ軍は単独でリトリア軍を相手取らねばならず、恐らくは敗北を余儀なくされる。もちろん、ソフィアの奪回どころではなくなるだろう。下手をすればフレデリク自身が絞首刑だ」
「……」
「さて、この状況で、おぬしならどうする」
　すっと目を細めたシェインに、エディはしばらく無言だった。対するシェインも解を待って言葉を噤む。
　沈黙を破ったのは、エディだった。
「その前に確認を取っておきたい」
「何なりと」
「今の例題は、私をフレデリクと想定していると考えて間違いないな」
　エディの瞳に緊張と困惑が同居している。シェインはその問いに正面から答えることに決めた。
「間違いない」
　シーレィが小さく息を飲んだ。
「まさか……！」

「俺は元々フレデリクの顔は知らぬのでな。状況判断による結論としか言えぬが、ほぼ間違いないだろう。おぬしが持っていたカフスについているは、バーシェルダー家の紋章。エディが発見された地域であの時期にその紋章を身につけることが許されていた者は唯一人。バーシェルダー家の正統な後継者だ」

そこまで言って、シェインはようやく明言した。

「エディはフレデリクだ。おぬしならリトリア国境のモナ軍を動かせる」

「……」

「おぬしの言葉ならば、モナ全軍は抵抗なく従う」

探るようなエディの目線に、シェインも真剣な眼差しで答えた。

動かせる手勢が欲しい。それには、国境付近にいると言うヴァルス・モナ混成軍を頼るしかない。そしてそれを動かせるエディの手腕と考えに係っている。

「俺はヴァルスの宮廷魔術師だ。モナへの配慮は、帰国後にヴァルス議会を俺が黙らせる。無論、事前に宰相に通達だけはせねばならぬがな。シェイン・アルバート・フォン・クライスラーの名にかけて、約束を違えることはない。先にあげた二点は、必ず俺の力でもぎ取ってみせる」

「……」

「信用してはくれまいか。ヴァルス・モナ軍の指揮に当たり、こちらとの動きに連動して欲しい」

しばらくエディは無言だった。困惑していると言うのが正直なところだろう。今まで自分の身元を知らずに来たのだ。突然モナ公王だなどと言われて「はいそうですか」と理解が行くはずもない。

シェインもじっと沈黙をして、エディが頭の整理をする時間を与えた。いずれにしても言えることは、コルテオの目的がわからないままエディをここに置いておくわけにはいかないと言うことだ。どのような形になるにしろ、エディにはシーレィをつけて脱出を図ってもらう必要がある。

「今ひとつ、理解できていないと言うのが本音なのだが」
やがて前髪をかきあげながらエディが困惑を孕んだままで呟いた。
「だろうな。突然の話で申し訳ないとは思う。ただ、おぬしに話すタイミングを迷っていた。俺が気が付いたのは、タフタルだ」
「そんなに前からか？」
「悪いな。俺もヴァルス高官として考えねばならぬ立場にいるゆえ、おいそれと告げて良い内容とは思いにくかった。ヴァルス高位官として正式に交渉したい。ヴァルスとの協力体勢を期待する」
「……」
「そして正体不明のままおぬしをリトリア国内でふらふら連れて歩くには、正直そろそろ限界だろう」
エディの頭の中では、現在目まぐるしくいろいろな考えが渦巻いているに違いない。厳しい表情で視線を定めたまま考えを巡らせる横顔を見せ、そしてふと顔を上げた。シェインを真っ直ぐに見据える。
「そなたの言うことを真実としよう。私に、どのような動きを期待している」
低く潜めた声で、エディが問うた。
「先も言ったが、反乱軍の動きが読めない。そしてソヴェウレイユに控えているリトリア軍の意図も。考えられる動きは二つ。国境リトリア軍が国王軍の味方である場合。その場合は、クリスファニアで反乱が起これば国王軍支援の為にこちらへ駆けつけてくるか、もしくは独軍でモナとの対峙を図る」
「だろうな」
「もう一点が、国境リトリア軍が反乱軍だった場合だ」
「その場合は……やはり取って返して」
「そう。国王軍の背後を突くだろう。……いずれにしても、クリスファニアの外からの増援で状況は混乱を極める」
「つまり、国境リトリア軍がどちらに与する勢力かを見極めつつ、足止めを図れと」

「ついでに、俺の手勢となるヴァルス兵を数十人程度送り込んでもらえるとありがたいがな」
エディの表情が一層険しいものとなる。
非常に複雑な事態だとしか思えない。
モナとしては、いくらヴァルスが協力をしているとは言えリトリアとことを構えたくないのは動かし難い事実である。撤退するならば、ぜひそのままお見送りをしたいところだろう。リトリア軍を国境に引き付けておくために戦端を切り開くなどもってのほかである。
「もし国境軍が国王軍である場合、内乱と同時に撤退を始めたら放って置ても良い」
シェインとしても駆け引きである。慎重に考えながら言葉を紡ぎ出す。
「内乱を鎮圧させる方向に事態は働くだろうからな。だが、国境軍が反乱軍である場合、足止めをしてもらった方が良いな」
「それによるモナのメリットはどこにある？」
「リトリア勢力の弱体化。ヴァルスが背後についているモナにとっては、今やリトリアは帝国継承戦争においても敵国と言って良かろう。加えて、リトリア国境軍が反乱軍である場合、モナとの戦端が開かれたとて国王からの援軍は望めない。つまり現在布陣している一万五千が最大だ。モナにはヴァルス軍がついている。負ける戦とはならない。援軍の望めない今リトリアを叩いておくことは、決してモナにとってもマイナスではない」
言い募るシェインに、エディが考え深げな沈黙に陥った。
「見極めはどこでする」
「俺がここに残る意味はそこにある」
「どういうことだ」
「コルテオから……上手くすれば、アレマンから情報を引き出し、シーレィを経由して届けさせる」
「出来るのか」
直球の質問に、シェインは苦虫を噛み潰したような表情になった。

コルテオの意図が読めぬ今、確かとは言えない。しかし、力を尽くす必要は感じる。

難しい顔のままで、シェインは深く頷いた。

「やってみせるさ」

◆◇◆

リトリアの内陸は総じて気候も穏やかで厳しい自然に晒されるような環境は少ない。大地も肥沃で、人に優しい住み良い国である。だが広大な領土を有するがゆえに、一概に快適な土地ばかりとは言えない。

リトリア西部のモナとの国境付近になってくると、大地は次第に荒れてくる。

岩ばかりの険しい山岳地帯を越えながら、グレンはリトリアの現状について頭を巡らせていた。

リトリア宮廷が現在激震していることは良くわかった。そしてクラスフェルドがその現状を把握していることも。

王とはかくも孤独なものだろうか。

（まあ、クラスフェルド王は軍隊を掌握してますしね……）

帝王学の一つに軍部を掌握している君主は多くの困難を軽減するとある。味方となる忠実な武力を持たぬ君主は破滅するのである。その点について言えば、クラスフェルドは実に良く軍隊を掌握し、忠実たらんとする武人に恵まれていると言えるのだろう。

しかしながら、文官の全てが謀臣でないのと同様に、軍部の全てがクラスフェルドに心酔しているわけでもない。――グレンを含んだ一部が切り分けられて、こうして国境へ向かっているゆえんである。

クラスフェルドは、国境付近に布陣しているリトリア軍を内乱の手の者と判断していた。

表向きは、国王軍の到着を待って動くとされているリトリア国境

軍であるが、実状はクリスファニアとの切り離しだ。ただし、クリスファニアにて内乱が生じた場合、　直ちにとって返して国王軍の後背を突く恐れがある。グレンたちが派兵されているのは、つまりそれをくい止める為である。

「何をしているんでしょうねえ、私は……」

返す返すもため息である。ロドリスを離れ、何ゆえにリトリア軍対リトリア軍の争いに巻き込まれているのか。こんな最中にいては、帝国継承戦争の動向さえ掴めない。

将軍ストラトス率いるリトリア軍一万五千は、現在リトリアとモナの間に横たわるマウヌ川を前に布陣していると聞いている。

河を越えれば、そこはもうモナだ。

リトリアに近接するモナのレスヴァーレィ地方には、リトリアを警戒するハンノ要塞が設置されていた。ストラトスはクラスフェルドに先行して国王軍が辿り着く前に、要塞を陥落して逗留地を確保するよう指示を受けている。

しかしながら、ストラトスは進軍の動きを見せてはいなかった。

モナ軍は対岸で布陣して、リトリア軍の渡河のタイミングを待っている。睨み合った状態が続くばかりである。

なぜか。

グレンには、クリスファニアで火の手が上がるのを待っているからとしか思えなかった。

敵を前に退陣するのは、常識で考えれば愚かなことである。だが、今回に限って言えば、非常にありうる話だと思えた。

なぜならモナは、可能ならばリトリア軍との戦闘を回避したいはずだからである。

リトリア軍が急遽撤退してクリスファニアへ戻っていったところで、モナがこれ幸いと渡河を開始してリトリアへ侵攻してくることは考えにくい。恐らくは黙って見送ることだろう。ストラトスは多分、そこまで読んでいる。だからこそ、ぐずぐずとモナへの攻撃を開始しないで向き合っているのである。戦闘が開始されてしまって

は、さすがにクリスファニアで内乱の動きがあったとて、引き返すことは出来まい。
「さて。どうなさるおつもりですか？」
別動隊を率いるは、無口で重厚なリディアファーン将軍である。目的地まであと少しと言うところで野営を張り、グレンはその夜将軍の思惑を確認する為に将軍のテントを訪れた。
「どうとは」
いかめつらしい表情で重々しく尋ねられ、グレンは吐息をついた。
「国境軍の動向を見守るのか、名乗りを上げて合流するのか、些か気になりまして」
「合流するに決まっているだろう。合流して全軍の動きを私が掌握する」
「私としては、一つご提案があるのですが」
ちらり、とリディアファーンが細い目を上げた。強い光が宿っている。怯むことなくグレンは言葉を続けた。
「このまま別に行動し、モナへ攻撃を仕掛けてしまえば良いのではと思うのですが」
「理由を聞こう」
「国境軍は、国王に相対する人物が率いる部隊と伺っておりますですね。と言うことはですよ、切り離されてここへ派遣されてしまったのは彼らにとって予定外ながら、クリスファニアに取って返すに無理のある距離でもないわけですから、火の手が上がれば彼らはここでの任務を放棄する可能性が大きい」
「わかりきっている。だからこそ我々がこうして……」
「であれば、引き返せない状況に追い込んでしまうのがベストではないですか？」
「……」
「船頭の多い船は迷走して沈みます。増して国境軍を率いるストラトス将軍と、この部隊を率いているリディアファーン将軍では思惑が既に違います。指揮は右へ左へと迷走し、内側でぶつかるばかり

ではリトリアにとってマイナスでしかない」
　リディアファーンは答えない。無言を肯定的に受け止め、グレンは言葉を続けた。
「ならば、選択肢などなくしてしまえば良い。巻き込んでしまうんですよ。こちらが裏からモナに攻撃を仕掛けてしまえば、こちらの分裂など知らないモナ軍は一纏めにリトリアを敵として攻撃を開始してくることでしょう。ならばストラトス将軍もそれに応戦しないわけには行きません。クリスファニアで内乱が起こったとしてもです。彼らは戦陣を放棄するわけにはいかず、反乱軍の援助に駆けつけることは出来なくなる。モナに勝利を収めれば、我々は反乱軍へ援助の手が伸びるのを食い止めるだけではなく、モナを押さえ込むことにも成功する。いえね、余計なお節介かなあと思わなくもないわけですが、一応道中、リトリアの御為に何が良いものかを考えた結果でございますけど」
「その場合、我々はどうすべきと考えている」
「決まっています」
　グレンはすっと目を細めた。
「待機ですよ。万が一にもこの場を逃げ出してクリスファニアに向かうことが出来ぬよう、伏兵を潜ませて国境軍にはモナとの戦闘に従事して頂く」
　グレンとしては、そこにもう一つ意図が含まれている。リトリアに、モナは押さえさせない。
　現在、モナ軍の背後には一部とは言えヴァルス軍が控えている。モナ単独ならばともかく、リトリア軍とて容易い相手ではないはずだ。こちらの軍と国境リトリア軍が合流すればともかくも、国境リトリア軍一万五千のみで簡単に服従させられる相手ではないだろう。
　モナへの侵略行為はクラスフェルド王の意思でもあるから、問題はリディアファーン将軍に対して『合流してモナを叩き潰させないだけの理由』を用意する必要がある。
　それが、国境軍のクリスファニア撤退を防ぐ為の伏兵だ。

リトリアの二軍を合流させず、ヴァルス・モナ軍の相手は国境軍のみに任せ、我々はあくまで反乱軍への増援を阻止するに留めさせ、モナとの戦闘を長引かせる。これによって、リトリアがモナ領土へ拡張されると言うセラフィの危惧も杞憂と終わり、ヴァルス・モナ軍の疲弊にも繋がるだろう。リトリア内部も混乱状態に陥り戦争終結時にリトリアの国力のみが跳ね上がることはない。反乱軍の増援も見込めなくなる為、クラスフェルドの身も安全をある程度確保出来るはずだ。

万が一国境リトリア軍がヴァルス・モナ軍に圧されるようなことがあれば、こちらはそれから増援してやれば良い。

優先課題はモナの攻略ではなく、反乱軍にクリスファニアへの増援をさせないことだと思わせてやればリディアファーン将軍も頷くだろう。

「いいだろう」

グレンの真意まで汲み取れなかったらしいリディアファーンが、やがて重厚な響きを伴う声で頷いた。

「モナの動向を偵察しておく必要がある。我がリトリア軍の動きもな。一度こちらの到着は伏せて、偵察隊を出そう。マンフレードを連れて来い。彼に指揮を執らせる。お前はその補佐をしろ。妙な真似をすればただで済むと思うなよ」

リディアファーンにとって、グレンはあくまでロドリス人であるようだ。クラスフェルドの気に入っている客将として粗雑な扱いは出来ぬが、信用するにも足りないと言うところだろう。まあそんなことはグレンにとってどちらでも良いことである。

「わかりました。では私はマンフレード将軍の指揮下、モナの偵察に回らせて頂きましょうか。詳しい指示は、マンフレード将軍の方によしなにお願い致しますね」

「無論のことだ」

一礼してリディアファーンの元から立ち去りながら、グレンは冷めた瞳で酷薄な笑みを浮かべた。

ヴァルス・モナ軍、反乱因子のリトリア軍、そして国王の息のかかった援軍に見せかけたリトリア軍。誰が誰の味方なのか、わかりはしない。

彼らがどう入り乱れ、どのように戦陣を展開していくのか見ものだ。

ただし、国王軍だけは瓦解させてしまうわけにはいかない。クラスフェルドにはリトリア国王として君臨してもらわなければ困る。

最終的にこの僻地における争いは、国王軍を勝利に導かなければ。

（いっそのこと……）

反乱軍を壊滅させてしまうのも一つの手かも知れない。

第3部第2章第2話　突破口（1）

「ったく……気楽に言ってくれるなよなぁ」
夜気に、密やかなシーレィのぼやきが微かに響く。
シェインの頼みでレオノーラのラウバル、そしてモナにいるカールへの書簡を携えた雲啼（クロム）を放った後、急遽国境へ向かわなければならなくなったエディとシーレィは、アレマン邸で与えられた部屋を抜け出した。とりあえずのところ、庭園内に身を潜めて周囲の様子を窺う。
庭園内は静かだ。木々のざわめく微かな音と、巡回や見張りの衛兵が立てる金属音だけが聞こえる。
綺麗に整備された庭園内は、季節の花をつける木々や茂みが多く、隠れる場所には事欠かない。だが同時に見張りも堅く、そうやすやすと脱出は出来ない。一口に「闇に紛れて脱出をしろ」と言われても、そう容易いことではない。
シーレィの言葉にエディは特に答えず、黙って木陰から外の様子を窺っていた。来客がこんなところで発見されれば、ただでは済むまい。
「何で無関係の僕がこんな目に合わなきゃなんないのさぁ」
「成功の暁には、モナとヴァルスから相応の報酬が出るだろう」
短いエディの一言で、ぶつくさ言っていたシーレィがぐっと黙った。多分頭の中で、まだ見ぬ報酬と命を量りにかけながら勝敗を計算しているのだろう。
「あんたらさ」
やがて、シーレィが暗闇の中、エディの横顔をじっと見つめた。妖精族のシーレィは夜目が利くので、彼の目にはエディの表情が細部まで見えていることだろう。
「何者なんだ？」
「シェインの説明では不足か」

茂みの隙間からまだ遠い門のそばの衛兵に視線を定めたままで、エディは低く答えた。シーレィがため息を漏らす。
「それは聞いてたよ、確かに。それによればシェインはヴァルスの宮廷魔術師。エディに至ってはモナの公王ってことになるね。……それを、そのまま鵜呑みにしろと？」
「してもらう以外にないな。証明のしようがない」
それからエディは、ゆっくりとシーレィに視線を向けた。感情の色の揺れない静かな目線は、向けられる者に威圧感を感じさせた。
「そなたに、関係のあることか？」
「……」
「我々の素性が何であれ、そなたはシェインに金で雇われたはずだ。下らぬ追及をせずに、その分の働きをするのが筋だろう。それが嫌ならば、金を返してどこへなりと行けば良い」
シーレィがぎゅっと両目を瞑る。そして深いため息と共に、顔を横に振った。
「僕だって命は惜しい」
「ならば返金して逃げることだ」
にべもないエディの返答に、シーレィはたっぷりと沈黙をしてから両手を挙げた。
「わかったよ。確かに僕は金で雇われたんだ。それも法外な金額だったことも認める。エルフのプライドに賭けて、金だけ持って裏切るような真似もしないよう努めるよ。だけど、一つ言っておくよ」
その声に真剣な響きを感じて、エディはちらりと視線を向けた。シーレィも視線を逸らさず、真っ直ぐに見つめ返した。
「やばい状況に追い込まれたら、僕は僕だけで逃げる。命あってナンボだ。死んじゃあ話にならない。いいよね」
「……良いだろう」
金で雇った通りすがりのエルフに忠誠を尽くせと言うのは無理な話だ。こちらも最初から期待をしてはいない。頷くエディに、シーレィはようやく腹を決めたようだ。闇を見据える。

「攻撃しちゃっても良いのかな？」
攻撃する対象は、この場合衛兵のことだろう。
「下手な騒ぎはまずいな」
「だって、このまんまじゃあ庭内から出られないよ」
「焦るな」
シーレィを諫めながら闇に目を凝らし、同時に己の胸の内に問いかける。
――どうするつもりだ？
今この状況を、ではない。シェインの口から聞かされた驚くべき情報について、己がどう対処するべきかである。
先ほど自身がシーレィに告げた言葉を脳裏に蘇らせる。シェインの説明によれば、エディはモナの公王フレデリク――誰がそんなことを想像しただろう。考えもしなかった。
だが、考えもしなかった癖に、突然降りかかって来た一国を操る権利に、さしたる戸惑いや畏れは不思議なほどない。そうかと思ってみればこれほどしっくり来るのはなぜだろう。
むしろ何かが符合する。既に事態を正式なものとして受け止めている自分を感じる。
いずれモナ国内に足を踏み入れた時、確かなことはわかるだろうが。
「サンドマン、とか言ったか？」
「は？」
唐突に呟くエディに、シーレィが目を瞬いた。それから頷く。
「ああ。眠りの精霊だね。そうだよ」
「それで行こう。ぎりぎりまで身を隠して門まで近付き、眠りの精霊を呼び出せ」
「いいけど……眠りの魔法は、必ず効くとは限らないよ」
「必ず効かせろ」
「無茶言うなよな」
感情の滲まないエディの冷淡な声に、シーレィが小さな吐息をつ

く。
「必ず効くとは限らないと言うのは、なぜだ？」
「補助魔法と言われる、人の精神に影響を及ぼすような魔法は、受ける人間側の持つ耐性に左右されるからさ」
「……では逆に、耐性を上げれば魔法の影響を受ける確率は低くなると言うことだな」
「まあ、そうかな。それがどうしたのさ」
「いや。ほんの好奇心だ。行こう」
今にして思えば、こうしてあちこちに常にアンテナを伸ばしているのは、モナ公王としての癖なのかもしれない。知らないことに興味を持ち、少しでも己の知識として繋げることは今後どこで活きるかわからないのだから。
「あちらの方が手薄そうだな。移動しよう」
木陰から木陰、茂みから茂みへ移動する。庭園の隅の方まで移動してくると、ひとまず手近に見える門の様子を窺うことにした。
「一人になるタイミングを待とう」
衛兵は二人一組となっている。少し様子を見て、どちらかが見回りに出る瞬間を待った方が良い。
「しばらく待ってもチャンスがなかったらどうする？」
「その時は片方を私が黙らせる」
剣の腕に自信があるわけではないので、出来れば避けたいのが本音だ。だが、手持ちの札が何もないこの状況下で対策には限りがある。
「その際には、沈黙の魔法でもかけてもらおうかな。確か精霊魔法にも該当する魔法があったはずだ」
「まあね……でもさっきも言った通り、それも眠りの魔法と同じく補助魔法だから必ず効くとは限らないよ。まあ、眠りの魔法よりは少し成功率が高いけど」
「その違いは何だ？」
「精神への働きかけじゃなく、肉体への働きかけになるからさ」

極めて小声で言葉を交わしながら、エディの頭は自分がすべきことに考えを巡らせていた。

自分は、この状況にどう対処すべきなのか。

シェインはエディに望みを託して解き放った。だが、シェインはヴァルスの宮廷魔術師だ。ヴァルスの国益を常に念頭に置いている。しかしながら、エディが考えるべきはヴァルスの国益ではない。

シェインがエディに与えた情報が正しいと仮定すれば、現在モナは国境に控えるリトリア軍の脅威に曝されている。

（帝国継承戦争の事実上の開戦は、フレデリクの仕掛けたギャヴァン上陸と言っていたな）

フレデリクの意向は、確かにモナの地位向上だっただろう。具体的には権利獲得だ。

ならば、エディも最終的に権利獲得することに目標を定める必要がある。

だがそれは、とりあえずシェインの発言で補われたと思っても良いだろう。まだ口約束に過ぎず、確かなこととして鵜呑みにするのは危険だが、シェインの性格を考えるにある程度信憑性がありそうだ。

これ以上の権利獲得を望むのであれば、それはまた交渉次第と考えられる。宮廷魔術師と言う窓口を確保したと言えるだろう。

現在、モナ独力ではどうにも身動きが取れないと前提すれば、エディが採れる選択肢は二つに限られる。ヴァルスにつくか、ロドリスにつくか。

戦闘なしにリトリアを追い払うのであれば、リトリアと手を組んでいるロドリスにつくのが最も早い。今モナが状況によって立場がふらふらしているのは、恐らくフレデリクが状況によっての変節を目論んだ為に正式な調印というのをしていないからだろう。ロドリスと今正式に調印すれば、リトリアは撤退を余儀なくされる。

だが、ロドリスは遠い。

シェインが先に言った通り、モナは単独でリトリアを相手取るこ

とは出来ない。そして遠いロドリスに辿り着く前に、エディが国境へ到着しないことを知られれば、シェインは何らかの手段でヴァルス軍を撤退させるだろう。先ほどシェインがモナへ向けて放った書簡の中身は知らないが、もしかするとそれによってある程度手は打っているのかもしれない。――例えば、いつまでにエディが到着しなければヴァルス軍をモナから撤退させろと。

ヴァルス軍が撤退すれば、モナはリトリア軍に対してひとたまりもない。ロドリスが動く前に敗北することは、十分に考えられる。時間がない。

少なくとも、ロドリスに走るのはシェインの言う通り、得策とは言いにくくなった。

（やはり、ヴァルスについているのが一番か）

シェインがエディに権利交渉を約束しているのだから、この状況でわざわざヴァルスを裏切ることにメリットは考えにくかった。

ならば、それはそれで良いとしよう。

では、リトリアに対してどう出るべきだ？

シェインは、ソフィアを救い出すと言うこと以外にはリトリアに干渉をしたくないと考えているのはわかる。

つまりは、現在リトリアの国内で起こっている様々な動きについて出来る限り関知しない方向だ。

……これほどの好機なのに？

「あ。一人、見回りに出そうだよ」

クラスフェルドには消えて欲しい。ソフィアが戴冠するならば、願ったりだ。

モナにとって、野心の強いクラスフェルドは危険人物である。ソフィアならば、モナ公王としては気を抜けるというものだ。少なくとも交渉の余地は幾らでもある。

クラスフェルドには、これを機にこの世から消えて頂きたい。

「そのようだな。効いたのを確認し次第、抜けよう」

「りょおかい」

――――シェイン、悪いな。
私の思惑は、そなたと食い違うかもしれない。

◆　◇　◆

懐中時計は、夜の十刻を示している。
エディとシーレィのいなくなった部屋に一人残されたシェインは、しばし中空を見据えると腹を決めて部屋を出た。
二人がいなくなったことは、明朝にはどちらにしてもコルテオに知れる。行動するならば早いうちが良い。
衛兵に取り次ぎを頼み、やがて通された部屋でコルテオは機嫌良さそうに笑った。
「どうした。もう迎え酒か」
「あなたと二人で話をしたいと思ったので、不躾とは思ったが訪ねさせてもらった。休むところなら出直すが」
「構わんぞ」
コルテオの招きに応じて、部屋の中へ足を踏み入れる。どうやら私室らしい。先ほどは応接室のような部屋だったから、彼の私室に入るのは初めてだった。
さほどの広さはない。だが調度や装飾は僅かしかなく、そのせいか広く感じられる。天井は高く、毛足の長い円形の絨毯がテーブルとソファの下に敷かれていた。奥の壁には洒落たサイドボードが設えられている。
その前に立ったコルテオは、ガラス扉の中からワインの瓶を取り出した。
「飲むか」
「先ほどたっぷり戴いた。今はやめておこう」
「何だ。控えめだな。では茶でも出そう。他の二方はどうしている」
「……旅の疲れでな」
曖昧に濁し、シェインは手ずから茶の準備をするコルテオを眺め

た。
まだ話の切り口に迷っている。
上手く掴めば、コルテオが状況の突破口になるだろう。
反面、しくじれば全てが水泡に帰した上で、命はないかもしれない。
果たしてコルテオは――ひいては、ここの主であるアレマンは、敵なのか。それとも味方なのか。
「話とは何だ」
ソーサーを使わずにカップだけを掴んで持ってきたコルテオは、シェインに一つを差し出しながらそう問うた。
「我々をここへ招いた目的さ」
どこまで引き出せるだろう。
軍人であるコルテオだが、武力を頼みに思考回路までが筋肉質であるとは思いにくい。
「宿なしに宿の提供だろう？」
にやっと笑ってシェインの正面に掛けたコルテオは、ずずっとカップのお茶を啜った。
「そうほいほいと馬のホネを拾って敷地内に引きずり込むような筋肉馬鹿では、副隊長など務まるまい」
「筋肉馬鹿か。口さがないな」
「少なくとも俺ならば、要職を与えることはなかろうよ」
シェインの言葉に、コルテオは喉の奥で噛み殺すような笑いを上げた。日に焼けた顔に浮かべた笑みが皺を刻む。
「支配階級の言葉だな」
「支配階級さ。れっきとしたな」
その言葉に微かな自嘲を滲ませながら、シェインも小さく笑う。
コルテオの目線が、真っ直ぐシェインを見据えた。
「そうだったな」
「……」
どういう意味だろう。

第3部第2章第2話　突破口（2）

まるでシェインの素性を知っているような言葉である。
（やはりか……）
胸の内で、その言葉の意味を考えた。答えは一つしかない。
「しがない駆け出しの冒険者と言うのを信じてくれたのではなかったのか？」
コルテオは、ソフィアの義父であるシガーラント候フリッツァーと繋がっている。そうでなければ、初対面のシェインの身柄を押さえることに意味があるとは思えない。コルテオが街で行っていた競技にシェインが飛び入り参加をしたのは、恐らくコルテオにとって幸運な偶然だっただろう。フリッツァーの見張りを撒ききれていなかったかと思うと、少々悔しい。
だが、ならばこれは朗報だろうか。フリッツァーと繋がっていることが判明した時点で、コルテオは敵ではないはずだ。
疑問なのは、一体コルテオが……フリッツァーが、どこまでシェインの素性を理解しているのかである。
通常であればエルレ・デルファルは一個人の情報を開示するようなことはないはずだが、フリッツァーが例の事務局長とやらにゴリ押ししたのかもしれない。もしくは、シェイン自身がフリッツァーに告げた「貴族階級である」と言う情報のみかもしれない。先ほどの言葉では、それもまた考え得る。
「俺以外に信じて欲しくば、証明書を用意するよう勧めた」
「つまり『俺以外』が信じてくれぬのだな」
「どうかな」
「俺の行動を押さえておけと。相違あるか？」
「相違ない」
深くソファに体を沈め、コルテオは目を伏せた。カップをテーブルに置いてその顔を眺めながら、コルテオが何を知っているのかを

どう引き出すか考える。
だが、その前にコルテオの方から問いを発した。
「どこの国の貴族だ」
にやっと笑うコルテオの顔を見て、知っているのではないかと言う気もした。いや、知っているが言い過ぎなら、感づいているでも良い。何かを握っていながら尋ねている……そんな印象を受ける。杞憂だろうか。言葉面だけを捉えれば、コルテオは「シェインがどこかの貴族階級である」――フリッツァーに告げたものと同程度しか知らないとも見える。
「ヴァルスだ」
内心に躊躇いを残しながら、それを感じさせないようにシェインはあっさりと答えてみせた。
国名、身分、名前、そして容姿――これだけ情報が揃えば、何も知らずともシェインの身元を調べることは可能だ。それを思えば危険ではあるが、コルテオに対して伏せることは却って状況を悪くすると判断した。仮に調べられたとしたって、その回答はすぐに戻って来るわけではない。シェインが自らの口から家名を告げなければ、しばらく時間はかかる。
「ヴァルスの貴族が、リトリアで何をしたい？」
「『ヴァスル貴族』と言う認識は置いておいてもらいたいのが俺の希望だ。ヴァルス貴族ってだけで捕らえられかねないご時世だからな」
「それを承知で素直に口を割るとはな」
「ある御仁にはしらばっくれて通したぞ」
一瞬虚を突かれたような表情を見せたコルテオは、やがて薄く笑った。
「捕らえられたらどうするつもりだ？」
「捕らえられる前にとんずらするつもりだったさ」
言いながらシェインは、す……っと片手を自分の顔の横まで持ち上げた。口の中で小さく紡ぎ出した呪文に、天へ向けた手のひらに

ふわりと炎の玉が浮かび上がる。
一つ、二つと増えていく火の玉は、シェインの手のひらの上で円を描くように飛び回り、やがてその中心部に一際大きな炎の塊が現れた。室内の温度が急激に上がる。コルテオの額に汗が微かに滲んだ。
「……魔術には、それなりに自信がある」
くいっと握りつぶすように指を動かすと、火炎が全て消失した。息を詰めて表情を硬くしていたコルテオが、目を見開いたままふっと笑う。
「この戦力が欲しくはないか」
「我々の為に使うと？」
「『我々の為』ではない。『俺の探し人の為』だ」
低いシェインの言葉に、コルテオが再び笑った。
「あとの二人は何者だ？」
手の中のカップを弄びながら、コルテオが窺うようにこちらを見た。とりあえずエディの素性が知られていない様子にほっとする。シェイン以上に、エディの素性は危険だ。シーレィについては、シェインも『出稼ぎのエルフ』だと言うことしか知らない。
「さあな」
短く答えて、シェインは肩を軽く竦めて見せた。
「俺にもわからん」
「部下ではないのか？　エディもどこかの貴族だと聞いたが？」
「期待を裏切って悪いが、部下ではない」
コルテオが疑うように目を細めた。そんな視線を向けられたところで、痛くも何ともない。事実である。
「拾ったのさ」
「拾った？」
「いや、逆か。拾われたのさ」
少なくともフリッツァーに聞かせた話と齟齬だけは出てはならない。フリッツァーと繋がっていると言うことは、彼からシェインた

ちの話した事情が筒抜けになっていると言うことである。
「ヴァルス貴族だと前提してもらえばわかるだろうが、俺は、ロンバルトにおける対ロドリス戦で単身拐かされた」
「……ほう。捕虜と言うことか」
「そう思ってくれても構わない。そうして何とか脱出をするにはしたが、まさか飛んで帰るわけにもいかないのでな。俺自身がどこにいるのかもわかっていなかったゆえ、ロドリスを彷徨う羽目になった。よって、母国からの味方と言える人間は周囲に一人もいない。連絡手段も持っていない。言わば俺は孤立無援の状態だと言える」
　シェインがソフィアを助け出す為に行動するのを黙認させるには、ともかくもヴァルスと言う一国家がシェインの背後にいないことを納得してもらわなければならない。
　シェインの背後にヴァルスの姿を見るようでは、コルテオはシェインを信用しない。
「戦争の最中に単身でロドリスに放り込まれた俺は、全身に深い傷を負った。死にかけの状態で倒れていた俺を助けたのがエディと、そして俺の探し人だったと言うわけさ。つまり元々は、他人だ」
「それで？」
「それだけだな。俺もエディが何者であるかは知らない」
　ともかくも、彼らがいなくなったことを知った時に、怪しまれない口実だけは必要だ。元々結束のあるメンツではないと認識してもらうしかない。
「ほう？　二人ともか？」
「ああ。もしかすると罪人なのかもしれない。あるいは二人とも、実は身元確かな人間なのかもしれない。要するに、通りすがりの即席パーティさ。いついなくなっても不思議はないし、不都合もない。俺の所持品さえ盗まれなければな。どうせ互いの素性も事情も知りはしないのだから」
　肩を竦めるシェインに、コルテオはさしたる疑問は抱かなかったらしい。恐らくはフリッツァーの方からもエディの正体がまるで掴

めなかったことなどの通達が入っているのだろう。フリッツァーは数日シェインらの周辺を嗅ぎ回った結果のはずだし、シーレィに至ってはシガーラントでは同行さえしていなかったのだから、説得力は多少なりあったかもしれない。「ふむ」と呟きながら、深くソファに体を沈ませた。

「なぜ、ヴァルスに帰らない？」

「聞いているのだろう？　俺を押さえるよう指示した人物から」

逆に尋ねると、コルテオは苦笑いを浮かべた。素直に肯定する。

「まあな」

「ならば改めて聞くほどのことではない。聞いた通りさ」

「そうかもしれんが、お前の口から今一度説明をしてもらおう。……なぜヴァルスに帰らない？」

あくまでシェインの方に口を開かせるつもりのようだ。答えなければ話は進みそうにない。

「一点はセルジュークを訪問する必要があったこと」

「それはもう、片がついたはずだな」

「ついた。もう一点は、人を探していることだ」

「探している人物は？」

「さあな。俺の口からは言えぬ。おぬしが誰の指示を受けて動いているのかわからぬのでな」

この後に及んで嘯（うそぶ）くと、コルテオが渋面を見せた。

「見当はついているのだろうが」

「見当が正しいとは限らぬからな。間違っていたら迷惑がかかるかもしれん」

黙りこむコルテオに、シェインは続けて口を開いた。次の問いが出る前にこちらから情報源を確定してしまおう。

「俺の身柄を押さえて置けと言うのは、某辺境伯と認識しているが間違いないか」

コルテオが、唇を歪めるように笑った。

「身柄を押さえると言う言い方は、ちょっと人聞きが悪い。フリッ

ツァー卿より協力して人を探すと窺っている」
「……」
「間違いないだろう？」
「……ああ。間違いない」
頷きながら、シェインは内心微かに眉根を寄せた。今のコルテオの言葉に、なぜだか正体不明の違和感を覚えた。
何だろう。この違和感は。
（フリッツァーは、手放しに俺たちとの協力を諾とするほど、認めてくれていたのか？）
身元不確かな彼らを、訝しんでいたのではなかったのだろうか。だが、事実フリッツァーとの連携がなければ見も知らぬコルテオがシェインらに接触を取る理由はない。フリッツァーと繋がっているのは確かなのだろうが……。
「おぬしの情報源がフリッツァー卿なら、おぬしも彼女を探し出して助けることに異存はないはずだ」
完全に信用することなど出来るはずがない。それは、こちらもそうだし、あちらもそのはずだ。しかしながら、目的が同じであれば一時的にでも相互協力は出来てもおかしくはない。希少な魔術師の手を借りられるのは、彼らにとっても十分メリットであるはずだ。文官を中心とする勢力には、リトリア王国の宮廷魔術師が入っているかもしれない。それに対抗する当て馬としては一般人より妥当だろう。
そう考えることにして、シェインはともかく話を進めることにした。
どんな意図があるのであれ、ここでコルテオに弾かれては話にならない。
「俺は戦力として十分な働きをする自信はある。……加えて、俺の顔など誰も知らぬだろう」
警戒されているのは、シェイン自身がクラスフェルドを脅かす存在となりうる可能性だろうか。ヴァルス権力を引っ提げてリトリア

国内に侵食してくる可能性だ。
だが、これはシェインをどう動かすかによって避けられることでもある。そして国内の片がついたら消してしまえば良い。連合軍に対する良い手土産にもなろう。
少なくとも現状、シェインが身一つでいるのは確かなことなのだから。
「捨て駒だと思えば良い。……繰り返す。俺は、戦力になる」
コルテオの胸中をそう推測し、シェインは真摯に繰り返した。コルテオを押さえれば、自由度も情報量も必ず上がる。シェインとしても逃すわけにいかない頼みの綱だった。
「……良いだろう。信用したわけではないが、使ってみるとしよう。ただし、お前の素性は明かすな。余計な混乱を招く」
「願ったりだ。信用は、過程の中で自力で勝ち取ってみせるさ」

◆◇◆

翌朝を迎えても、騒ぎらしい騒ぎは起きなかった。どうやらエディとシーレィは無事に屋敷の外へと脱出することに成功したらしい。
「ソフィア・カテリーナ・ヴァン・デ・ファルネーゼ――フリッツァーの元にいたのは何年間だ」
朝食を終えた後、シェインは当面の部屋をコルテオが預かる小館へと移された。シェインの持ち金と共に二人の姿が消えたと告げると、コルテオはそれ以上追及をしなかった。
シェインの身柄を押さえたことで、ひとまずは満足をしたのだろうか。伏線が功を奏したのか、あるいは処分する手間が省けたと思っているのかは定かではない。いずれにしても、重要視していなかったことはわかる。――なぜだろう。
「さあな。俺は、ほぼ十年と聞いているが」
シェインの進めた駒の配置に、コルテオは難しい顔で盤を睨みながら唸った。チェスに似たテーブルゲームである。

ソフィアがファルネーゼ家に養子に出されたのが七年前。現在十七歳だから、生まれて間もなくフリッツァーに引き取られたことになる。

ソフィアの母は誰なのだろう。どんな経緯でフリッツァーの元で預かることになったのだろうか。母親は今どこでどうしているのだろう。

一瞬フリッツァーの娘かとも考えたが、すぐにそれはないだろうと言う気がした。元帥の娘ならば、王妃となるに不足はないはずだ。クラスフェルドが現在独身であり、ソフィアがフリッツァーに預けられていることを考えても、王妃となることが出来ない人物でフリッツァーに縁のある女性と言うところだろうが。

いずれにしても、今回の表舞台に引っ張り出されてくることはなさそうか。

「おぬしは、フリッツァーとどういう繋がりだ？」

コルテオが手を伸ばす。硬い音を立てて置かれた駒に、シェインはそっと眉を顰めた。

「フリッツァー卿がセルジュークで元帥の地位におられた頃、その配下だったのさ。卿が罷免され、俺はアレマン卿の下へと移った。……チェックメイトだな」

ソフィアを救出したいと言うシェインの願いをとりあえずは聞き届ける姿勢を見せたコルテオだが、状況が劇的に進んだと言うわけでは、無論なかった。

シェインの行動は全てコルテオの掌握の下――監視つきでは、エディと連絡を取るのも間々ならない。何とか国境に控えるリトリア軍がどちらサイドなのかを引き出して届けたいのだが。

「フリッツァーはいつ到着する」

「数日の内だろう。もう一勝負するか」

「望むところだ」

悔しさを隠そうともせず鼻の頭に皺を寄せるシェインに、コルテオは小気味良さそうに笑った。それぞれの駒を手元に引き寄せなが

ら、シェインは重ねて尋ねた。
「アレマン卿は、このことは」
「無論ご存知だ。間もなく会わせてやる。慌てるな」
「おぬしは、ソフィアに会ったことはあるのか」
「ないな。……彼女を探して、お前はどうするつもりだ?」
「どうもこうもあるか。彼女の意に染まぬ状況から助け出してやりたい、それだけだ」
「本当か?」
「本当さ」

第3部第2章第2話　突破口（3）

手の中で駒を弄びながら、コルテオは目を細めて親指を顎に軽く押し付けた。

「知っているか？　ヴァルスとリトリアは現在、剣を交えて相対する立場に立っていることを」

「無論」

「それを承知の上で、それだけの為にリトリアを彷徨うと？　命がけと知りながらか？」

コルテオが口にした通り、全くの私情でヴァルスへ戻らずリトリア国内をふらふらしていると言うのは、理由として非常に弱いことはわかる。

「俺を、クラスフェルドに近づけねば良い」

危惧しているのはクラスフェルドの身の安全と機密情報の漏洩か。ならばその危惧を取り除いてやれば、信用度は少しは上がるはずである。

「俺がヴァルス貴族であると言うことが不安要素ならば、クラスフェルドに近付けぬことだ。おぬしが常に俺を見張っていて、不審に思えたらいつでも殺すが良かろう」

「言うな」

「そうでも言わねば身動きが出来そうにないからな。俺の目的は、人探しだ。それ以外には何もない。ゆえに、それ以外に関わるような行動を取ることはない」

それは本心のつもりだ。

もちろん得た情報をヴァルスに帰った時にラウバルに報告しないわけにはいかない。偽らざる本心をと言えば、ヴァルス官僚の立場を忘れたことはない。その立場から気掛かりであるのが半分、真にソフィアを案じるのが半分――状況によっては、ヴァルスへ有利な状況に導ければと考えているのももちろんだ。

ことは帝国継承戦争の行方に関わる。それはヴァルスの運命をも左右する。状況を掌握しておきたいのは事実だ。

だが、シェインはクラスフェルドに近付くつもりはない。近付きたいとも思わない。リトリアの騒動に、自身が深く加担をしたくはない。ソフィアの身柄を助け出したら、彼女の信じる誰かに預けて手を引きたい。

それきり無言で盤を睨むシェインに、コルテオもしばし目を逸らさぬまま黙った。小さな音を立てて駒が置かれる。

やがて、コルテオが片目を軽く細めて口を開いた。

「彼女に、何らの感情を抱いているわけではないのだな？」

一瞬、言われている意味を理解出来なかった。

素で目を瞬き、しばしの脳内凍結を経てから、ゆるゆると合点がいく。そして次の瞬間、吹き出しそうになった。

ソフィアはまだ若い利発な女性だ。なるほど……シェインがソフィアに対して恋情を抱いているとの邪推がそこにあるらしい。

（その手もあるか）

一国の主でさえ、女性が原因となって戦を巻き起こすことも史上に存在する。時にそれほど人を狂わせ、熱に浮かす強い感情である。たかだか一貴族の若僧に過ぎない自分が振り回されたとて、ありえない話ではなかろう。

ならば、それに乗ってみるのも一つの手段か。

（ではこの際俺には、我が立場を忘れるほどソフィアに焦がれる一途な青年になってもらっても良いな）

自分で考えて寒い。

だが、吹き出している場合ではない。コルテオの真剣な眼差しがそこにある。

否定も肯定もせず無言のシェインに、コルテオはやがて深い吐息を落とした。

「そうなのだな」

「……」

「彼の人の立場を知っているのか」
コルテオの問いに、シェインは視線を戻した。微かに目を伏せる。
「リトリア貴族の娘だろう。知っている。それが、どうした」
「お前が知っているのはそれだけではないはずだ」
フリッツァーとの話で既に、ソフィアがリトリア国王の庶子であることを推察した旨は知られている。フリッツァーから話を聞いているのであれば、コルテオもまた、そのことを知っているだろう。
「そうだな。だが、それとこれとは関係ない」
「本気か」
「言っている意味がわからぬが、俺は自分を救ってくれた人を目の前で攫われて放ってはおけない。それだけだ。……ヴァルスもリトリアも関係ない」
苦い表情で視線を逸らすシェインに、コルテオは再び無言に陥った。この沈黙は何だろう。シェインも口を閉ざしたままで、コルテオの胸中を図る。
彼の中では『リトリアの王位継承者に片恋を寄せるヴァルス貴族の青年』と言う図式が出来上がったのだろう。クラスフェルドを戴き、反乱を鎮圧する立場に立っているとすれば、この事態をどう解釈するだろうか。
コルテオの心中に頭を巡らせながら、シェインは盤に手を伸ばした。今度こそ勝ってやる。負けず嫌いが頭を擡げる。
「アレマンは、何者だ?」
「クリスファニア伯さ。王城で執事長を務めておられた」
「国王擁護派か」
質問でも確認でもない。ただの独り言である。コルテオが笑った。
「気に障るか?」
「まさか。リトリアの内情に口出しする気はないさ。ただ、文官が反感を持つ中で忠心を保つにはそれなりの理由があるのだろうと思ってな」
「そうだな」

つまりアレマンにはクラスフェルドに忠誠を尽くす理由があると言うことだ。何だろう。

「アレマン卿とフリッツァー卿はどのような知り合いだ？」

「無論、共に陛下にお仕えする仲だ」

シェインの駒の配置に唸り声を上げながら、コルテオはわかりきっている返答をしてみせた。その顔を眺めながら、シェインは微かに眉根を寄せた。

フリッツァーとアレマンは、それなりに親しいはずだ。でなければ、誰が味方かわからず娘の身柄がかかっている状況下で頼るはずがない。もちろん共にラナンシー城で仕えた間柄ではあろうが、それだけでは頼るに足りないだろう。

コルテオから視線を逸らして盤を睨みながら考え込むシェインの耳に、不意にノックの音が飛び込んで来た。コルテオが答えると、衛兵ではなく侍従らしき人物が姿を現した。

「アレマン卿がお呼びです」

来た。

シェインの心が僅かに緊張する。

「わかった」

頷いて立ち上がりながら、コルテオがシェインににやっと笑いかけた。

「勝負は預けよう。アレマン卿に会わせてやる」

連れて行かれたのは、与えられた部屋のある塔から通路で繋がっている隣の建物だった。こちらが本邸だろう。

更に階段を上り、奥へと向かう。応接室へ通されると予想していたシェインだが、案内されたのは小さな部屋だった。来客に適しているとは言えない古びた部屋は薄暗く、書籍などが積まれて埃っぽい。少ない窓からの光を助けるように、カンテラの橙色の灯が部屋に赤味を帯びた光を投げ掛けている。

どうやら、アレマンの書斎のようだ。奥には樫のどっしりとした

デスクが置かれ、アレマンはそこにいた。
「お前か。フリッツァーの娘を探していると言うのは」
頭のてっぺんだけが見事に禿げあがった白髪の小柄な老人は、威圧感のあるしわがれた低い声言った。
「ああ」
「良いだろう。使ってやる」
緊張感のある老人だ。部屋中の空気がピリピリしているように思える。今し方までシェインと軽い口調で会話を交わしながらテーブルゲームをしていたはずのコルテオまで、自身のボスを前に神妙な面持ちをしていた。
アレマンが歪んだ笑いを浮かべる。
「コルテオが認めたからな。使ってやる。ただし」
言いながらアレマンはデスクの内側からこちらへ出て来た。片手にはショートソードを握っている。シェインは身動きせずにその動きを見つめた。まさかいきなり戦闘にはなるまいが、何かあったらこちらも応戦せねばならない。だが、早まってもならない。
「私は裏切りを許さない」
身動きしないシェインの首筋に、アレマンが抜いた白刃がひんやりとした鋭利な感触と共に押し当てられる。
「良いな。裏切りは許さん。ヴァルスは忘れろ。不審な真似をしたら、その場で殺す」
「ああ」
「使えないと判断しても、その場で殺す」
「……わかった」
本気だろう。
文官とは思えない鋭い目に、本物の殺意を嗅ぎ取る。
「必ずコルテオのそばにいよ。単独行動は許されん。コルテオ、この男の顔が知られていないことを上手く使え」
「わかりました」

◆◇◆

帝国内で三大勢力と言えるリトリアとの国境は、最も弱小国であるモナにとって最大の脅威である。
特に政権がクラスフェルドの手に渡ってからは、気を抜くことが許されない。
ゆえに、その侵入を恐れて外郭が築かれており、常日頃から聳(そび)える要塞が警戒をしている。
「ロンバルトの宮廷魔術師は、レドリック殿下とアンジェリカ公妃について何か吐いたか？」
「はい。アンジェリカ様については、まだご存命にあらせられたとのこと」
モナ王都シドから到着したばかりの足で、カサドール公カールはハンノ要塞の指揮官執務室へ足早に向かっていた。
先日、リトリアのモナ進軍を受けてのヴァルス援軍が、シドに到着した。
率いて来た諸侯にシドを任せ、カールはモナ防衛に努めるべく……そしてシェインの力になるべく、国境へとやって来たのである。
「そうか。シェイン様も喜ばれることだろう」
しかしながら、そのシェインはこちらに合流することを拒んだらしい。「別件がある」と言う謎のセリフで別行動を望んだと聞いている。使いの者と共に要塞へ来てもらえるかと思ったが……全く我が道を行く人物である。
（こちらに合流して戴きたかったがな……）
本人の立場や性格上、合流をすれば指揮権を握ってくれたことだろうに。戦力としても大きな励みになるのは言うまでもない。
だが、いないものは仕方がない。
はっきりとは聞かされていないが、リトリア情勢に大きく関与してしまう恐れがある、とだけ伝え聞いている。シェインにはシェインの考えが何らあるのだろう。いずれにしてもヴァルスの不利益に

なることはないだろうが。
「エドアード殿は」
執務室に入り、ドアが確かにしまったことを確認してから、カールは伴ってきた将軍に密かな声で尋ねた。
「いえ。まだ先の連絡以外、何も」
「そうか。シェイン様から連絡があったら、最優先にして届けてくれ」
「はい」
彼を下がらせて一人になると、カールはその場に立ったまま考え込んだ。
（フレデリク公か……）
エンまでロンバルト宮廷魔術師を迎えにやった使者からの情報を脳裏に蘇らせる。
極秘にカールのみに伝えるようシェインから指令を受けた使者は、強ばった顔でその情報をカールに告げた。
シェインが現在同行している青年エドワード――彼は近々、フレデリクとして返り咲く為にモナに戻るかもしれない、と。
どのような思惑を持ってであるとか、その場合カール率いるヴァルス軍はどのような心構えで対応を望まれているのかは、現状闇の中である。
もちろんシェインがそう言うのならば無計画にと言うことはないだろうし、この状況下で再びヴァルスに叛旗を翻すほど、フレデリクも愚かではないだろうが。
何にしても、シェインからの指示待ちであることは確かだった。
国境に布陣しているリトリア軍にも、今のところ目立った動きはない。
それから数日の内は、警備と巡回を強化しながら、リトリアの攻撃に備えて戦略会議を行う緊迫した日々が大過なく過ぎた。
ようやくシェインから連絡が入ったのは、カールがハンノ要塞に入って一週間が経過してからだ。

「これが雲啼（クロム）か」
事前に、シェインの元へ送った使者からセルジュークの精霊使いの話は聞いている。
使えるかどうかわからないと聞いていたが、無事使うことが出来る環境下にいるようだ。
ともかくもシェインが無事でいることと、シェインから情報が来たことにひとまず安堵を覚えながら、カールは折り畳まれた小さな書簡を広げた。
記されていたのは、古語と呼ばれているものだ。簡易暗号である。今はもう使われていない古いヴァルス語で、綴りが覚えにくく、文法が複雑な為に広く普及しなかった。帝国成立前のものだ。
それゆえに国外はもちろん、ヴァルス人であってもわざわざ学んだ一部の人間しか読むことが出来ない。手紙を送る相手が古語を踏まえていると言うことを知っていれば、解読されるか否かの危惧を抱く必要もない。ただし、無関係の人間に読まれる可能性はないでもないので、使用する場合は限られる。
恐らくは、複雑な暗号を作っているような時間がなかったのだろう。
そう判断して視線を落としたカールは、読み進めながら自分が緊張して行くのを感じた。
――エルフだけを連れて、記憶喪失の『エドアード』がそちらへ向けて発った。リトリアの事情はここに記すわけにはいかないから、彼から聞いて欲しい。
モナ軍の指揮権は、エドアードに渡せ。彼からの正式な要請があれば、モナ主導で指揮に従って構わない。
ただし――。
「カール殿ッ」
不意に遠くで怒声と喧噪が聞こえ、同時に部下が飛び込んで来た。
「どうした」
「リトリアが、攻撃を開始しましたッ！　現在マウヌ川上流にて巡

回の騎兵隊が応戦中。迂回してモナ国内に侵入を図った模様ですッ」
「敵の数は」
「はっきりとはわかりませんが、恐らく偵察隊の二、三千かと」
「わかった。すぐ行こう。ヴァルス騎兵二千を先行させ、ヴァルス・モナ両国からあわせて三千の歩兵に陣型を整えさせろ」
部下が忙しく答えて出て行くと、カールはシェインの書簡に火をつけた。憂慮の元は隠滅してしまうのが一番だ。
そのまま暖炉の中に放り込み、足早に部屋を出て行く。
――ただし、ヴァルス軍はあくまで補佐だ。
――エディの意向に注意を払え。
暖炉の中で、書簡が静かに燃え崩れていった。

第3部第2章第3話　リトリアの征旗（1）

久々にフォグリア郊外の自宅に足を踏み入れると、窓から差し込む陽に微かに埃が舞った。遠くから、子供たちの笑い声が風に乗って届く。

廊下に揺れる光の中、ゴーレムのラルが静かに佇んでセラフィを迎え入れた。

守る人のいなくなったウッドゴーレムは、張り合いをなくして茫洋としているように思える。

そんなはずはない、とセラフィは自分に苦笑した。心豊かなマーリアに影響でもされたのだろうか。木偶（でく）に心などないと知っている。

「留守をありがとう。ラル」

そうは言っても、自身が作り出したゴーレムに愛着がないわけではない。少なくとも人間たちに比べれば、遥かに愛着を持てると言うものだ。労いの言葉をかけて、セラフィは通路を奥へ進んだ。

人のいない家は荒れる。ラルに掃除を命じても、考えることのない彼に出来ることは限られる。時にはこうして訪れて様子を見なければならない。

しばし、ラルを伴って屋敷の状態の回復に努めると、セラフィは屋敷へ戻った目的を果たす為に書斎へ足を向けた。

書棚の奥から、鍵のかかった箱を取り出す。箱にかかっている鍵はもちろん、セラフィの魔法だ。

手近なデスクに箱を乗せ、小さく口の中で解錠の呪文を唱えると、かちりと音がして箱が開いた。蓋を開けると、中には古びた書類の束や小物が押し込まれている。

マーリアの母親が残したものだ。

彼らが貧しい暮らしを送っていたヴァインの家で、セラフィはそれらを手に入れた。

箱の中へと手を伸ばす。指先が触れたのは手紙の束だ。マーリア

出生の際に各地から寄せられた祝いの言葉。
それらを見ると、自分でも驚くほどの底黒い感情が湧き上がる。
その生命がこの世に誕生したことをこれほど賛辞し、讃え、そして突き放す。――人間と言う名の不条理。
それで良い。であればこそ自分は、躊躇いなく憎悪を燃やすことが出来る。
マーリアに不条理を押しつけた人間は、償わなければならない。
同じく不条理を押しつけられると言う措置をもって。
ヴァルスは不当な理由により、他国の侵略を受け、排斥され、処理される。そして頭上には、かつて自らが追い立てた少女を戴くのだ。
瞑い悦びを胸に感じながら箱を閉じようとしたセラフィは、箱の隅に小さな紙片を見つけて何気なく手を止めた。
押し花で作ったしおりだ。親愛なるマーリアへ、と拙い文字が記されている。誰が作ったのだろう。マーリアの母親は、気が狂っていた。残された書類からも、それは端々に感じ取れる。彼女がマーリアの為に作ったとは到底考えにくい。
そう思いながら裏返し、セラフィはすっと目を細めた。
――ユリア・クリスティーナ・シェ・フォン・ヴァルス。
次期女王陛下が直々に賜ったと言うわけか。
冷笑が口元に浮かぶ。
セラフィは今度こそ箱を閉じると、それを抱えたまま部屋を出た。
マーリアの出生を裏付ける重要な書類だ。セキュリティは整えてあるとは言え、無人の家に置いておくのは少々心許なく、ハーディン王城へ持ち帰るつもりだった。
「おっと、そろそろ時間かな」
陛下と謁見の時間が迫ってきている。
セラフィは再び屋敷をラルに預けると、ハーディンへ引き返すべく屋敷を後にした。

「ロンバルトの軍がようやく動き出したそうではないか」
セラフィが謁見の間へ到着すると、カルランスは機嫌が良さそうに口を開いた。
そのすぐ背後には、相も変わらず美しく着飾ったアンドラーシが控えている。セラフィの姿を視界に納めるや否や、薔薇の蕾のような唇に艶やかな笑みを浮かべた。それを黙殺して視線を逸らしながら、セラフィはカルランスのしまりない老いた顔を眺めた。
セラフィが到着する前に、ユンカーから簡単な報告を受けているのだろう。戦況の報告は、実際問題としてセラフィの任務ではない。
「は」
にこやかに、しかし口数少なく、セラフィは頭を垂れた。
「我らが連合軍はこれで五ヶ国。対するヴァルスは一ヶ国だな。もはや我々の敵ではない。のう、セラフィ」
「さようでございます」
多くを話せば頭痛の種が増えるだけと知っている。カルランスは、とにかく機嫌良くいてもらえればそれで良いのである。
にこにこと笑顔だけを振り撒いたまま口を噤んでいるセラフィに、ユンカーが代わって口を開いた。
「ロンバルトは現在、二万の兵を編成させました。リトリア軍を支援して、ハンネス盆地へ向かっております」
リミニ要塞を援護する為にハンネス盆地へ布陣したヴァルス軍へ、南下してきたリトリア軍が攻撃を仕掛けた。主力のいないラルド要塞を陥落させたナタリア・バート軍は、休む間もなくリミニ要塞方面へと取って返している。ヴァルス軍の後背に現れる算段だ。ロンバルト軍は側面から現れる形になる。ほぼ四面楚歌に近い。加えて、ロンバルト軍が連合軍に下ったとの衝撃は大きいだろう。ヴァルス軍は瓦解する。
一方でリミニ要塞の方は少々陥落に手こずっている様子ではある

が、ハンネス盆地のヴァルス軍を叩いてしまえば、リトリア軍をロドリス軍の加勢に回せる。時間の問題だ。

「今後の方針としては」

ユンカーが報告を終えると、セラフィは静かに後を引き取った。

「ハンネス盆地での会戦の後、ナタリア・バート軍には西回りで南下してもらいます。カサドールを叩き、山越えをしてゲーリッツを陥とし、ザウクラウド要塞へ。リミニ要塞方面、つまり東側からリトリア、ロンバルト、そしてロドリス軍はレハールを目指します」

ヴァルスの国力を削ぐ為には、主要都市は支配下においておく必要がある。フォルムスの陥落に失敗したとあっては、他の主要都市を外すわけにはいかなかった。

「レハールを越えて、リトリアは中央都市ラシーヌへ。ロドリスとロンバルトは城塞都市アンソールへ」

カルランスが言葉もなく聞き入っているのを確かめて、セラフィは瞳に強い光を浮かべた。

「そして一挙に、レオノーラを叩きます」

「ほうほう。良いではないか」

果たしてわかっているのかいないのか。

いや、仮にも君主である以上、いくら何でも各地理は頭に入っているだろう。であれば、今の説明で連合軍がレオノーラを東西、そして北から包み込むように攻め上る姿は想像出来るはずだ。

そう己を納得させ、セラフィは言葉を続けた。

「そしてもう一点、重要な点がございます」

「申してみよ」

「ヴァルスを再び、海から攻めます」

ナタリア海軍の対フォルムス戦では、痛手を蒙った。だがセラフィは、他方で別の海路を取るナタリア軍を編成させていたのである。

ヴァルスの目を掻い潜るため、北経由だ。

つまり、ローレシア大陸を北からぐるりと回って遥か西海経由でヴァルスへを向かう。

一度モナの撃退に成功したギャヴァンは、警戒が緩くなっているだろう。フォルムスにおける攻防戦でキール島付近の造船などは手薄だし、艦隊もまた相当数撃破されている。

そこへ、無傷のナタリア軍をギャヴァンに投入する。

これで東西南北包囲の完成だ。

「必ず、ヴァルスを陥落させてご覧にいれます」

ところが、その作戦を揺るがす報告が上がってきたのは、まさしく謁見直後のことだった。

「ユンカー様。ナタリアからの使者殿がお着きでいらっしゃいます」

今後について煮詰める為、ユンカーと共に執務室へ戻る。地図を広げて、報告書を元に連合軍の現勢力を弾き出していると、やがてアークフィールが訪れた。

「ナタリアからの使者？」

ユンカーの瞳が、きょときょとと不安そうに揺れる。セラフィも無言でアークフィールを見返した。

「何だろうな」

「応接の間に通してありますので、ご準備が済み次第ご対応戴けますでしょうか」

アークフィールが出て行くと、セラフィとユンカーは再び黙って顔を見合わせた。何事かが起きたのだろうか。戦時中につき、不測の事態はいくらでも起こり得る。

ともかくも、ユンカーはアークフィールが急ぎの報告書として纏めておいた書類に慌しく目を通し、ナタリアの使者に対面すべく執務室を出て行った。戻って来てから打ち合わせを再開する為に、セラフィは一人留まる。

ソファに黙って腰を下ろして報告書に視線を落としていると、アークフィールがティセットを片手に執務室へ戻って来た。セラフィ

の前にカップを一脚差し出す。
「宜しければ」
「ありがとう。今日は邸宅に戻って、少し掃除をして来たよ」
いつかの会話を思い出してそう笑いかけると、緊張を漂わせていたアークフィールも表情を緩めた。
「言って下されば、私がいつでも馳せ参じますものを」
「宰相の秘書官をそんなふうに扱うわけにはいかない。僕の部下にだってそんなことをさせたことはないよ」
そもそもセラフィは、自身の秘書官や部下に頼みごとをすることさえ余りない。むしろグレンの方が遥かに多い。
己の領域に立ち入って欲しくないと言う心理は、自宅のみならず仕事場でも顕著に表れていた。
アークフィールが、やれやれと顔を横に振る。
「一声上げれば、いくらでも手伝いたがる手は集まりましょうものを」
「言ったろう。人の手を借りるのに慣れていない。……ナタリアの使者は、どんな用件なのかな」
「私にはわかりかねます。でも」
再び表情に硬さを戻しながら、アークフィールの瞳がセラフィを真っ直ぐ見つめた。カップに伸ばしかけていた手を止めて、その瞳を見返す。
「何か良くないお話のように感じました。あくまで、使者殿の雰囲気から察するに、ですが」
その言葉に、セラフィは伸ばしかけた手を引っ込めて、すとんとソファに背中を預けた。万事順調とはやはりいかないか。それもまた致し方ないことではあるが、そう吐息をついていられるのもその内容による。
いずれにしても、ユンカーが戻れば明らかになるはずだ。
「レドリック殿は、頑張っておられますか」
考えてもわかりようのない話題から転換を図ったのか、アークフ

ィールがそう尋ねた。その名前に、セラフィも小さく苦笑を刻んだ。
「どうかな。一応、お目付け役が尻を叩いてやっているようだが。まあ、これでロンバルトも正式にヴァルスの敵だ」
そこまで言って、セラフィはすっと冷笑を浮かべた。レガードの生死は未だ不透明なままだが、もしも生きていたとして、彼はヴァルスに牙を剥いた母国をどうするのだろうか。祖国を迎え撃つ為にヴァルス軍の陣頭に立つのか？
皮肉な思いで胸中に問い掛けていると、アークフィールが浮かない声で口を開いた。目線を窓の外へと向けて細める。
「しかし、これまで親ヴァルスと言う立場を貫いて来ているロンバルトの士気は、決してあがらないでしょう。戦力になるのですか」
「ロンバルトは、督戦隊（とくせんたい）を編成したそうだ」
セラフィの回答に、アークフィールは目を見開いて口を噤んだ。それから強ばった表情で乾いた声を押し出す。
「督戦隊……？」
「ああ。味方を殺す味方――レドリック殿下も追いつめられたものだね」
対ヴァルス戦で怖じ気付いたり、良心の呵責を感じたりして逃亡を図ろうものならば、督戦隊が彼らを切り捨てる。味方からの攻撃を避けようと思うならば、ロンバルト兵はヴァルス軍に立ち向かわなければならない。前にも後ろにも退路のない彼らは、戦わなければ生き延びる術はないのだ。文字通りの死兵である。
息を呑むように、アークフィールの喉が微かに上下した。
「だけど、お陰でロンバルト軍が使い物になるかもしれないよ？死に物狂いで活路を見出そうとするだろうから」
薄く笑うセラフィにアークフィールが口を開きかけたところで、前触れなく部屋のドアが開いた。ユンカーが死床の病人のような顔色で立っている。
「ユンカー様」
「ユンカー殿。ナタリアの使者殿は」

「まだお待ち頂いています」
言いながら入ってきたユンカーは、扉を閉めてからセラフィを硬い眼差しで見つめた。
そしておもむろに口を開いた。
「ナタリアは、離脱します」
空気が凍り付く。さすがにセラフィも硬い表情でユンカーの顔を見返した。
危惧は確かにあった。
だが、杞憂に終わることを祈っていた。
現実はそう甘くはなかったらしい。
「離脱ですか」
「ええ」
「……氷竜ですね」
無言でユンカーが首肯する。セラフィは微かな舌打ちを漏らして、考え込むように視線を俯けた。
このタイミングでか。今ナタリアに抜けられるのは、やはり痛い。ハンネス盆地で予定をしている会戦は、後背を突くのがバート軍だけでは少々心許ない。ギャヴァンへ再戦を挑むはずの海軍に至っては何をか言わんや、である。そもそも成立しない。
「仕方がない……」
口の中で呟いて、セラフィは顔を上げた。
「ナタリアの離脱を阻止するわけにもいかないでしょう。ただし、徹底してヴァルスには伏せさせる。撤退するにしても情報の漏れが決してないよう、隠密裏に行動するよう言い含める必要があるでしょうね」
「では」
「ヴァルス軍の後背はバート軍単独で攻めさせる。相手に、勢力を見誤ってもらいましょう」

◆◇◆

「あれが、悪名高いアルノルト・クレーフェの館だ」
クリスファニアの街の中心部には、馬車や騎乗の人間が通ることが出来る幅広い道が、十字に交差するように広がっている。
その大通りに佇んで、コルテオがシェインに示した。立ち並ぶ家々の合間に雄壮な塔が見える。中心部からは些か距離があるが、それでもその豪奢な造りは見て取れた。
「悪名高い、か」
その言い種に笑ったシェインは、真顔に戻って建物を見据えた。
「間近でじろじろ見るのはお勧め出来ない。あっと言う間に衛兵が寄って来て、良からぬ謀を目論でいると締め付けられる。良からぬことを企む輩は、猜疑心と警戒心が強いというのが相場だな」
「ご明察、と褒めて差し上げるか」
「やめてくれ。余計なところで睨まれるのは、ごめんだ」
しかめ面をしてみせるコルテオに、シェインは軽く肩を竦めてみせた。それ以上は何も言わずに歩き出す。コルテオがそれに続いた。
「まあ、お前の探し人がいるだろう可能性が最も高いのは、あそこだろうな」
「……なるほど」
先日、セルジュークのファルネーゼ家より、ソフィア付きの侍女がクリスファニアへ送り込まれたと言う。
その理由はソフィアを世話させる為としか思えず、そして侍女の受け入れ先はクレーフェ家の別邸だ。
「午後にはアレマン卿がシュケルナー街区にある官邸で会議に出られる。お前もついて来ると良い」
「それまでの時間はどう過ごす？」
シェインはクリスファニアに不案内である。
それを解消すべく、コルテオに市街の主要箇所へと連れて回らせたが、こんなところで必要な地理は手に入れただろうか。
不足がないかどうかを脳内で確認するシェインに、コルテオがに

やりと笑う。
「俺が直々にお前を鍛えてやろう。お前は俺配下の将官と言うことになる。剣もろくに振れぬようでは話にならん」
立ち居並ぶ花車やパン売りに視線を向けながら、シェインは渋い顔を見せた。
「魔術師に剣の凄腕を求めるな」
「魔術師と言う職業は伏せておいてもらおう」
さらっと言われて、シェインは口を噤んだ。見返すと、コルテオは眉をしかめて疑問に答えた。
「俺の将校に魔術師は不似合いだ。お前はロッドがなくとも、いざとなれば魔術を使うことが出来るだろう。ロッドの代わりに剣を持て。使うような場面は、そうはないさ」
「……当たり前だ」
憮然と答えるシェインの肩を、コルテオは豪快に叩いた。
「恋しい人の救出の為に、多少の不自由は我慢するのだな」
シェインが肩を落としたのは言うまでもない。

第3部第2章第3話　リトリアの征旗（2）

シュケルナー街区は、国王が滞在するグウレイグ離宮を挟んで、クレーフェ邸のあるコークマルト街区と反対側に位置する。

一度アレマン邸に戻ったシェインとコルテオは、昼を挟んで午後、アレマンに同伴して邸を出た。シェインは、アレマンの警護としてコルテオが率いる警護隊に組み込まれている。全く何だってリトリア貴族の護衛をしているのだろう。本来魔術師であるシェインを慮っての軽装備とは言え、防具類を身に付けるのは慣れていない。体が重い。

アレマンが議場のあるクリスファニア官邸に入ると、私兵隊は一旦任務から解放される。官邸警備がいるからである。

本日の会議は、国王不在時の国政について検討すべく、文官のみが召集をかけられたと聞いた。内々の小規模な会議となるはずだった。

だが、官邸の出入り口付近が俄かに騒がしいと感じられたのは、アレマンが議場に入って間もなくのことだった。

「どうした？　何か予定外のことでもあったのかな」

会議に出席する各々が引き連れてきた配下の者は、会議が終わるまで控えの間にて待機である。簡単な飲み物が用意され、配下の人間同士のささやかな交流の時間と休憩の場となる。

コルテオの既知の人間に、新しく配下に加えた者だと紹介されていたシェインは、窓の外に視線を向けて問うでもなく呟いた。周囲の人間も異変を感じて、それぞれ顔を見合わせている。

やがて、様子を見に行っていたらしい男が、飛び込んできて報告をもたらした。

「陛下がいらっしゃったご様子ですっ」

「何？」

その場が急に慌しくなる。今日の会議にはクラスフェルド出席の

予定はなかったのだ。それが突如お出ましとなったので、官邸の方が慌てているのだろう。

間もなく官邸の人間が正式に陛下来訪の意を告げると、控えの間にいた人間は次々と廊下へ出て行った。国王来訪の際には、通路に並んで出迎え、敬礼をもって通過を待つ。ヴァルス宮廷も大差ない。

だが、これでクラスフェルドの顔を見ることが出来る。騒ぎの渦中にある人物を拝んでおくのも悪くはない。

コルテオに従って廊下へ歩み出ながら、シェインも周囲に倣った。宮廷魔術師たる身としては、今しばらくこのような儀礼的慣習を行うことが少ない。見習いの頃以来の感覚である。

（しかし、なぜ急に？）

そもそも今日の会議が何なのか、なぜ国王が急に来る気になったのか、シェインにはわからない。眉を顰めながら状況の変化に首を傾げていると、やがて廊下の先が騒がしくなってきた。ご到着のようだ。通路の奥に小さな人だかりが姿を現した。

（あれがクラスフェルド……）

胸の内で確認をしながら、周囲に倣って姿勢を正す。付け慣れない防具が音を立てた。

「言うまでもないが、中央が陛下だ」

装備に身を固めた威風堂々とした男を、コルテオが小声で示す。伸びた髪と無精髭は精悍で日に焼けた屈強な肢体と相まって、国王と言うよりは将軍である。口元に浮かんだ笑みを見て、皮肉屋なのだろうと言う気がした。

「そのすぐ後ろに続いているのが、宰相のフラクトル殿だ」

続く紹介に、シェインは目線だけで確認する。ひょろりと背が高く、どことなく人好きのする顔立ちの男だ。国王より二十近くは年上だろうか。

「陛下の信頼も篤い、腹心と言ったところか」

コルテオは、クラスフェルドが引き連れて来た何人かを続けてシェインに紹介した。顔と名前を頭にたたき込みながら、クラスフェ

ルドが近づくのを待つ。
クラスフェルドが、目の前を通過した。その瞬間、シェインの胸の内を言いようのない衝動が駆け上がった。
――ここが、戦場であったなら。
迷うことなく戦いを挑んだことだろうに。
ヴァルス貴族としての強い義心に駆られ、そんな己に少なからず驚いた。無論、暗殺者でもあるまいし、こんなところで不意打ちを食らわせたいとは思わないのだが。
刹那、クラスフェルドがふっと顔をこちらへ向けた。目と目が合う。何かに気づくはずもないが、どきりとする眼差しだった。
やがて国王一行が通過して議場へ入って行くと、各貴族が連れてきた配下の人間は再び控えの間へ移動をした。これから会議が終わるまで、シェインも含めた彼らはすることがない。
「なぜ宰相がいる？　まさか出征に伴っているわけではあるまい？」
「それは知らんよ。呼び出されたんだろうさ。これが終わったら、セルジュークへ戻るんじゃないか」
窓際に立つと、綺麗に整備された街並みが眺められた。晴れやかに澄んだ空には霞むように白い雲がかかっている。目を細めてそれを眺めやりながら問うシェインに、コルテオが並んだ。
「陛下の来意は何だと考える？」
突然訪れた緊張から解放されて、場の空気が緩む。ささやかな談話を交わし始めた配下の人間たちに視線を戻しながら問うと、コルテオはどことなく険しさを秘めた横顔で「さあな」と呟いた。
「俺にわかるはずもない」
「出陣はいつなのか決定してはいるのか」
「してはいるのだろうが、俺にわかることではない。……そう言えば、陛下はソヴェウレイユに先行部隊を派遣したらしいぞ」
「先行部隊？」
この期に及んで？
クリスファニアからモナ国境までは、もう目と鼻の先だ。先行部

隊とは一体何事だろう。自らが迅速にクリスファニアを発てない理由でもあるのだろうか。……それは、反乱の危険性を感じていると言うことなのか？

モナ国境には、既にリトリア軍が布陣している。それは確かなことだ。そこへ更に国王より先に先行する部隊がある。その必要性がどこにある？

状況が読めずに眉根を寄せたシェインは、手持ちの情報を増やそうと更に問いを投げかけた。

「フリッツァーはどうしている？」

あれきり、フリッツァーの動きもまた闇の中のままだ。だが、その問いに思ったほどの成果は得ることが出来なかった。シェインに対する回答は、またも曖昧なものだった。

「さあな」

「連絡は取っているのだろう？」

「俺はたかだか傭兵隊長だからな。アレマン卿は連絡を取っているのかもしれないが」

それきり口を閉ざすコルテオに、シェインは正体不明の違和感を覚えた。この感覚には覚えがある。あれは、そう……アレマン邸に初めて連れて来られた日の夜のことだ。

――フリッツァーは、手放しに協力を受け入れるほど俺たちを信頼していたのか？

あの時、そんな違和感を覚えた。

だが、その正体が掴めない。クラスフェルドは何をしようとしている？　黙ったまま考えを巡らせるものの、自らの中に解を見つけられずに不安定な苛立ちだけが募った。コルテオも何を思っているのか、些か険しい表情で窓の外に視線を定めている。

やがて、控えの間の外に人のざわめきと気配を感じた。どうやら会議が終わったようだ。気づけば時計の針は一時間以上の経過を告げていた。控えの間の扉が開放され、配下の人間は各々が仕える文官を見つけて後に従っていく。

どことなく荒々しい態度で出て行く彼らの姿に一層眉根を寄せていると、アレマンが姿を現した。恭しく一礼をして付き従うコルテオに、アレマンが低く告げるのが微かに聞こえた。
「ことが起こるぞ。構えておけ」

◆◇◆

リトリア国内を、二つの影が静かに移動していく。一つの馬に同乗する二つの影の内、一つは子供のように小さい。
「本当にこっちで合ってるのかあ？」
クリスファニアを脱出し、その北にある商業都市アバックにて馬を手に入れると、エディとシーレィはようやく西北へと進路を取った。
直接ハンノ要塞へ向かうのは、当然のことながら危険である。回り道とわかっていても、一度北上して軍隊の徘徊するだろう範囲を避けなければならない。
「合ってる」
短いエディの返答にシーレィが嘆息するのが聞こえるが、意に介さずにエディは黙々と馬を進めた。
……そう。やはりハンノ要塞へ直接向かうことは、どう考えても得策ではない。キルギスを僅かに挟んでモナへ北から入り、王都シドへ向かうのが最も妥当だ。
もしもエディが真実フレデリクであるのならば、尚更である。シドとハンノ要塞ならばさほど距離もないのだから、王権を確かに握ってから公王として要塞へ赴く方がスムーズだ。
その判断の元、エディとシーレィは一旦キルギスへの国境越えを目指している。馬も入手したことだし、順調に行けばクリスファニアからおよそ十日といったところか。
モナへの入国はさほど困難とはならないはずである。シェインからモナ駐留ヴァルス軍の責任者に何らかの通達が行っているのだし、

手の打ちようはある。
　それよりも問題なのはリトリアからの出国だった。見咎められない為には人目につかない進路を取るよりない。
　慎重に道筋を選び、川を挟んで陣を構えると言う軍を避ける為に山間の道を進む。リトリア、キルギス、モナが裾野へ広がるその山岳地帯を移動中、ふと景色に視線を向けたエディは、そのまま馬を止めた。
「どうしたの？」
　エディの後ろでシーレィが、もぞもぞと身動きをする。エディは小さく顎をしゃくった。
「ん？　何……軍隊？」
　エディの視線を辿ったシーレィが小さく呟いた。距離は遠く離れている為、低位にいる向こうは気づく由もないだろうが、高みにいるこちらからは良く見える。
　軍隊らしき一団が、森林の中を移動している様子だ。
「そなたは私より目が良いだろう。国旗が見えるか」
「見えるよ。リトリアだね。それが？」
　尋ねるシーレィには答えず、エディは静かに視線を注いでいた。なぜだろう。気にかかる。
　国境に布陣していると言うリトリア軍にしては、些か規模が小さい。それとも木陰に隠れて見えないだけなのだろうか。あるいは、本隊から離れて行動している伏兵か。
「シーレィ。ここで野営をしよう」
「えっ？　まだ日は高いよ。もう少し進める……」
「進むより先に、見ておきたいものがある」
　幸いにしてここは見晴らしが良い。この先も、同じように観察に適した場所に出会えるとは限らない。
　両軍が衝突する前に辿り着きたいのはやまやまではあるが、今あしてリトリア軍が動いていることを考えれば、開戦する前にハンノ要塞に到着することは、どう急いだところで不可能だろう。

であれば、情報を少しでも拾い集めてから駆けつけるのも一つの手ではあるはずだ。情報をいかに握っているかで勝敗を分ける戦も少なくないのだから。

エディとシーレィがその場に落ち着くことを決め、数時間が経過する。日が沈む頃、森林の合間に見え隠れするリトリア軍はどうやらモナとの国境を越えたようだ。エディが見守る中、まるで蟻の群れのような黒い塊が遠く平原を過ぎていく。

どこへ行く？

一つの予感を胸に抱いて、エディは微かに目を細めながら監視を続けた。飽きてしまったシーレィは、木の枝によじ登ってとっくに眠っている。

彼らの姿が丘の影に隠れて見えなくなっても、エディはその方角に視線を定めていた。

そしてそれを捉えた時、エディは奥歯をきつく噛み締めながら険しい表情を滲ませた。

「あれは……？」

木の上から、寝ていたはずのシーレィの掠れた声が聞こえる。振り向きもせずに、エディは低く答えた。

「小さな集落だ。レニエと言う、数百世帯しかないようなな。そこが、襲撃を受けている」

「えっ」

「くそ……どういうつもりだ……」

腹のうちに湧き上がる憤怒の感情は、やはり自分がモナに根ざす人間であることを証明しているのだろうか。心の片隅でそんなことを考えながら、エディは考えを巡らせた。

やはりリトリア本隊から切り離された部隊か。レニエを焼き討ちにして、モナ軍との戦端を開く。

（……？）

そう考えて、何かがしっくり来ないことに気がついた。

違和感の正体は何だ。

レニエに残虐の暴風が吹き抜けていることを証明する黒煙を睨みつけながら、やがてエディははっと目を見開いた。

布陣しているリトリア軍は、国王軍であろうが反乱軍であろうが、いずれにしてもクリスファニアの出方を待っているはずだ。

戦端がモナからの先制によって開かれたのならば致し方ないが、仕掛けているのは明らかにリトリア軍である。少なくともわかる範囲でモナ軍からの動きには思えない。

であれば、今まで沈黙を保っていたリトリア軍が仕掛けた理由は何だ？　彼らは国王軍で、やはりクラスフェルドから進撃の命令を受けたのだろうか。

――何か、エディには見えない意味があるに違いない。

そう嗅ぎ取ったエディは、険しい表情を崩さぬまま踵を返した。これ以上ここに留まり続けることに意味はない。見えるものなど限られている。

「シーレィ。行くぞ」

「えっ？　はっ？」

野営をするつもりですっかり腰を落ち着けていたシーレィが、仰天したような声を上げた。

「行くってっ！」

「シェインに催促の書簡を出せ。至急、クリスファニアの情報を寄越せとな」

日暮れの村に、細い黒煙がいくつも立ち上っている。

それを見上げて目を細めながら、リトリア将軍マンフレードは厳しい表情を浮かべた。これが、モナ軍を招く狼煙となるだろう。

周囲に溢れる濃い血の匂いは、既に鼻腔が麻痺して感じ取れない。立ち並ぶ家屋の影から若い女性の泣き叫ぶ悲鳴が聞こえる。兵士への意に染まぬ慰めを提供した後、彼女は死を持って苦痛と屈辱から

解放されることだろう。
マンフレードは、まだ三十代半ばを過ぎたばかりである。クリスファニアから派遣されたリトリア軍八千を率いるリディアファーン将軍より、偵察と陽動を兼ねた部隊を任された。
総勢二千五百を率いてモナ軍の動向を確認すると、リディアファーンへの使者を飛ばし、ハンノ要塞北東に位置する小さな集落への襲撃を開始した。
リトリア国境軍と連動した動きではない。
彼らは恐らく「何かが起こった」ことは理解するだろうが、それが何なのかわからぬまま、この後に控えるだろうモナ軍の攻撃への応戦で手一杯になる。そうしてマウヌ川の戦いは火蓋を切って落とされる。
もうすぐだ。もうすぐ、モナ軍が起こった出来事を確かめようと押し寄せてくる。
「マンフレード将軍っ！」
村の略奪を粗方完了した頃、周囲の警戒に充てていた兵の一部が報告を携えて帰還した。
「モナ軍の巡察隊と遭遇、応戦中ですっ。増援願いますっ！」
「わかった。先導を頼む。敵勢力と状況は」
「恐らく千には満たないかと。現状、こちらの方が優勢です」
報告を受けて、一部を村の略奪に残したまま至急軍を整える。誘われるままマウヌ川上流の木々に囲まれた狭い平地で、リトリア兵とモナ兵が刃を交えている現場へと駆け付けた。
マンフレードは、そこで思わず息を呑んだ。
（何だ、あいつは……）
刃鳴りと馬の嘶き、怒号の飛び交う中、その男だけは異質に見えた。
ロドリスの客将だ。
村はお任せします、といち早く偵察部隊へ志願した彼に、クラスフェルドを立てる意味もあってこの部隊を任せたのはマンフレード

である。この場で戦っていることに異議はない。
しかし、何だ。あの魔性めいた殺気は。
グレンの周囲には、既に死体の山が築かれている。彼を仕留めたいモナ兵が、何人も躊躇するようにしている姿が見えた。
ゆらりとグレンが顔を上げる。この距離で見えるはずもないが、眼鏡の奥で琥珀色の瞳が無感情に細められたような気がした。次の瞬間、グレンの姿が一瞬ぶれた。そう思った時には素早い動きで、数人のモナ兵が血飛沫を噴き上げていた。
「何だ、あいつは……」
今度は口に出して呟いていた。マンフレードの視界の中で、グレンは掛かってこようとしないモナ兵に自ら突っ込んで行く。モナ兵の刃はロドリスの客将を傷つけることはなく、そして二本の刃が閃く度に赤い霧がその周囲に舞うのが見えた。
口元に微かな笑みが滲んでいるように見えて、僅かにぞっとする。黒い陽炎を纏っているような錯覚を覚えた。
「将軍っ！」
肌が粟立つ思いで硬直しているマンフレードに、将校が声を上げる。モナ軍……いや、ヴァルス軍の到着のようだ。地に響く馬蹄の音に、マンフレードは強張っていた表情を拭い去った。
「ヴァルス騎兵か」
手強いだろう。前哨戦と侮っては泣きを見る。
総力戦のつもりで勝利を掴み、モナ軍を本物の総力戦へと導かなければ。

第3部第2章第3話　リトリアの征旗（3）

◆◇◆

その夜、エディからの書簡を携えた雲啼（クロム）に返信を託して放ったシェインが、現在与えられた部屋で物思いに沈んでいると、どこからざわめきが響いたような気がした。

ふと顔を上げて、辺りを伺う。

しかし、宵闇はすぐに静寂を取り戻した。気のせいと片付けかけたところで、再びざわめきを耳にする。

「何だ？」

立ち上がり、先ほど閉じたばかりの窓に手を掛ける。そこへノックの音が響いた。答える前に、コルテオの声が聞こえる。

「入るぞ」

「何かあったのか」

「わからん。が……」

扉を開けたコルテオは、やや険しい表情で窓の外へ視線を向けた。

「起こった、かもしれんな」

クラスフェルドへの叛旗だ。すっと背筋が冷えるような思いが走り、シェインはコルテオを押しのけて扉の外へ向かいかけた。

「俺が様子を見てくる」

逸るシェインを、コルテオが苦笑して押し留める。

「落ち着け。お前は自由裁量を与えられているわけではない」

そうだった。コルテオが余りにもゆったりと寛容に構えているものだから半ば忘れていたが、コルテオがシェインのそばにいるのは監視の意味も含むのだった。

「ソフィアに何かあったらどうする」

苛々と室内を歩き回るシェインに、コルテオは苦笑いを浮かべてドアに肩をもたせかけた。

「今、見に遣らせている。少し待て。お前が歩き回ったって絨毯が汚れるだけで、状況が好転するわけではない」
返す言葉もなく憮然とソファに腰を下ろしてみせると、コルテオは満足したように頷いて部屋の中へ足を踏み入れた。
「ソフィア様の身に大事が起こることはなかろう。国王に背く身からすれば、彼女の存在がシンボルだ。彼女無くしては、掲げるべき旗がない」
「だからこそ国王手の内にとっては不要ではないのか」
コルテオを真っ直ぐ睨み据えながら問う。仮にも王の庶子とあらば一応大切に扱うだろうが、ことが国王の命との天秤と差し迫れば、いっそ消してしまおうとする輩もいかねまい。幸いにして、ソフィアはクラスフェルドが後継を指名しているわけではないのだ。
コルテオが困ったように片手を挙げた。
「とにかく落ち着け。事情を確かめぬことには、ここで何を話したところで架空の話だ。装備だけ整えておくんだな」
コルテオの言葉は尤もで、シェインは唸りながらも黙りこくった。立ち上がって不慣れな手つきで装備を整える。それを終えると、することがなくなった。じりじりと、ただ報告が戻るのを待つ。
やがてもたらされた報告は、やはり暴動を告げるものだった。最初に動いたのはアルノルトだ。アルノルトが兵を動かして、グウレイグ離宮を襲撃するように仕向けた。
しかしながら、思いがけず国王が素早い反撃に出たらしい。アルノルトの軍がグウレイグ離宮の間近に迫った頃には、驚くべき速さで兵がクレーフェ邸を取り囲んだと言う。
つまり火の手が上がっているのは、二カ所だ。
「先日の会議が原因か」
兵を采配すべく兵舎へ向かうコルテオに倣って慌しく移動しながら、短く吐き出す。コルテオが応じて頷いた。
「だろうな」
五日前に行われた会議で、クラスフェルドがモナを制圧する意志

を強く明言した。つまりは国境地帯のみで満足するつもりは決してないと言うことだ。更に南方における戦線へ向けても兵役を徴収するとの言に会議は紛糾、アルノルトは即刻の蜂起を決意したと言うわけだ。

「クレーフェ邸に行って来る。許可をくれ」

リトリア国王の臣下たるアレマン、ひいてはコルテオらは、国王の命を守る義務がある。グウレイグ離宮が急襲されているとすれば、援護に駆けつける必要があるだろう。

だがシェインは違う。シェインにとって気がかりなのは、クラスフェルドの安否ではない。ソフィアの安否だ。

「行ってどうするつもりだ」

「混乱に乗じてソフィアの身柄を引き受けてくる。どうやるかは、行ってみなけりゃわからんな」

だが、この機を逸すれば、チャンスはもう巡ってこないだろう。コルテオはしばし黙ってシェインを見つめていたが、やがて目を伏せて頷いた。大きな手が、肩を叩く。

「わかった。だが、彼女を見つけたら必ず俺のところへ戻って来いよ。決して悪いようにはならないゆえな」

シェインとしても、フリッツァーがどうしているのかわからない以上、他に預ける先がない。

「ああ」

硬い表情で頷くシェインに、コルテオは屈託なく笑って見せた。

シェインが馬で駆けつけた頃、クレーフェ邸は既に火の手が上がっていた。取り囲む兵の数は、二千……いや、三千か？

その様を見て、血の気が引く。もしも中に本当にソフィアがいるのだとすれば、共に捕らえられるに決まっていた。待ち受けるのは叛逆の主犯としての処刑だ。

血臭に満ちた喧騒の中、この中に入ることは適うのだろうか。攻める鎮圧軍と守るクレーフェの私兵が怒号と刃鳴りを上げる。きつく唇を噛んで、ともかくも近付こうと馬を翻したシェインは、喧騒の中から己を呼ぶ声に気がついた。

「シェイン殿っ！」

「……フリッツァー卿」

振り返って目を見張る。フル装備に身を固めた熟練の将軍と言った風情の男は、間違いなくシガーラントのフリッツァーだった。

「いつ、ここへ……っ」

驚愕を隠し切れないまま、馬を寄せる。フリッツァーの招きに応じていることを見て取って、周囲が道を開けた。

「六日前にクリスファニアに到着をした。街中に兵を入れることは適わなかったので、市外に陣営を張っていた」

では、アレマンはフリッツァーの動きを知っていたことになる。コルテオは知らなかったのだろうか。それともシェインに伏せていただけなのだろうか。

胸の内に渦巻く疑問を飲み込みながら、しかしながらそのような場合ではないと、とにかく決然と顔を上げる。

「中に入りたい。ソフィアの無事を確認したい」

「今、全力で捜索をさせているが、何せ抵抗が激しい」

邸を見上げる苦い表情の中に、ソフィアを真に案ずる親愛を見て取って、シェインも視線を邸に向けた。石造りの壁の向こうには、広い庭園が見える。丁寧に手入れされていただろう広葉樹の向こうに、舐めるような赤い炎がちらちらと見えた。

「剣は使えるか」

目を奪われていると、フリッツァーが真っ直ぐにこちらを見ていた。その目を、力を込めて見返す。

「使える」

「お前は、魔術が使えるのだったな」

「ああ」

「……ソフィア様に恩義を感じていると言う言葉を、私は信じる」
低く落ち着いた声に、信じられない思いが過ぎった。唖然と見つめるシェインに、フリッツァーが鷹揚に笑みを覗かせた。
「己の立場を知っていれば、馬鹿な真似は出来まい」
シェインの背筋に衝撃が走った。――どういう意味だ？
だが、問い返している時間はない。場合でもない。フリッツァーも深くは語らずに意志だけを告げた。
「アレマンがそなたを使うと決めた。ならば私は、異論はない」
ともかくも、フリッツァーとアレマンには相応の信頼関係があると見て間違いないのだろう。アレマンは、コルテオの後押しによってシェインを使うと決めた。ならば感謝すべきはコルテオか。
不明瞭ながらも、胸の内でコルテオに感謝を捧げる。シェインは気負った表情で真っ直ぐフリッツァーに明言した。
「俺はソフィアを裏切らない」
「信じよう」
フリッツァーの言葉を受けて、シェインは崩れた塀へと馬を翻した。口の中で呪文を完成させながら、戦闘の最中へ突っ込んでいく。
半ば馬で体当たりをするように押し込んでいくと同時に、シェインの周囲を風の壁が取り巻いた。殺到しかけたクレーフェ家の兵士が、慌てて身を引いていく。それに構わず、シェインは庭園へと駆け込んだ。
この機を逃せば後がない。
ソフィア――どこにいる……！

◆　◇　◆

全身に、地が響くような低く重い衝撃を感じたのは、まだ夜明け前のことだった。
眠りについていたソフィアは、ベッドの中で意識を引き上げられ、すっと血の気が引くのを感じた。すかさずベッドから跳ね起きる。

（何があった……？）

状況を確かめようと耳を澄ませる。どこかで激しい物音が響き、再び重い衝撃が地面を揺らした。

「まさか」

時が来たのだ。

蒼白になる思いで窓辺に駆け寄ったと同時に、ドアの外から物音が聞こえた。

「ソフィア様っ！」

「ヴェリッサ！」

侍女のヴェリッサだ。引きつった声に、弾かれるようにドアへ取り付く。扉を開けると、強張った表情のヴェリッサが立ち竦んでいた。

「何が起きた？」

「襲撃ですっ」

「襲撃？」

眉を顰める。ヴェリッサが青い表情のままでソフィアを見上げた。

「アルノルト卿の思惑に気がついた陛下が、ことが起こる前に鎮圧軍を差し向けたのです」

そこまで一気に言うと、ヴェリッサは何かを押し切るように低い声で続けた。

「今なら、脱出出来るやもしれません」

「何……」

「このままでは、ソフィア様も反乱軍として捕らえられてしまいます。身の潔白を証明することは出来ません。ヴェリッサは存じております。陛下に逆らうことは、ソフィア様の意ではないと」

言葉を継げずに見つめるソフィアを、ヴェリッサは硬い表情のままで見返した。

「混乱の最中であれば、脱出も可能かもしれません。今を逃せば、もう機は失われます。どうか、鎮圧軍の目をすり抜けてお逃げ下さいっ！」

しかし、どこへ逃げると言うのか。鎮圧軍が夜襲をかけてきたと言うのであれば、屋敷の周囲は取り囲まれている。逃げられるとは思えない。しかしこのままここにいれば、ソフィアの弁明など無意味でしかないだろう。ヴェリッサの言葉には一理ある。

「アルノルトは」

部屋へ取って返し、身動きしやすいように着衣を整えながら尋ねる。ドアのところに佇んだまま周囲を伺うヴェリッサは、潜めた声で口早に答えた。

「わかりません。しかし、ソフィア様の身柄を押さえようとすることは確かでしょう。あなたを盾にとって逃げ出せば、あなたに逃げ道はありません」

何が何やら状況の把握は出来ないが、ともかくもクレーフェ家をこうして襲撃しているのがクラスフェルド手の内の者であることはわかった。事実、そうでなければ夜襲などされる言われはない。

「ソフィア様。これを」

ヴェリッサが差し出した物を見て、ソフィアは驚きを隠せなかった。剣だ。

「どこからこんなものを」

「こちらへ向かう途中、衛兵の詰め所に寄って参りました。咄嗟のことで出払っておりましたから」

「……ありがとう」

受け取って手早く帯剣しながら、ヴェリッサに問う。

「ヴェリッサはどうする」

「わたくしは、ここに」

「なぜっ……」

「足手纏いになります。わたくしならば大丈夫ですよ」

そうやんわりと微笑んだヴェリッサは、そっと片手をソフィアの頬に当てた。

「たかだか侍女ですもの。恩赦を取り計らって戴けることでしょう。だからお気になさらず、お行きになって下さい」

「でもっ！」
「これほどの状況にならなければお力添えを出来なかったわたくしを、お許し下さいませ。……さあ、行ってっ！」
建物の外からは慌しい足音が聞こえてくる。同時に、この建物の階下から人の声が聞こえた。複数の足音が向かってくるのを感じ、ソフィアはやむなく踵を返した。
逃げ出せるだろうか。わからない。鎮圧軍に見咎められれば犯罪人として取り押さえられ、邸内の人間に見つかれば盾とされ反乱軍に引きずり込まれる。逃れねばならぬ手が、余りにも多過ぎた。
絶望的な思いを胸に抱きながら、ともかくも邸内で物音の響かない方へと走る。防戦に手一杯なのか、まだそれほどこちらに人手が割かれていないのがありがたかった。
出口へ向かう途中、人の気配がすると物陰に飛び込む。まだソフィアが部屋にいると思っているのか、慌しい足音は隠れるソフィアのそばを真っ直ぐ通過していく。
何とか建物の外へ抜け出してみると、視界の隅で橙色の炎が空へ伸びているのが見えた。炎だ。アルノルトの滞在していた本邸に、炎が上がっている。ならばあちらは、混乱の只中だ。そしてこちら側にはまだ、人手が回っていない。
庭を突っ切って、茂みの陰に身を潜める。途端、建物の方からいくつかの足音が飛び出してきた。ソフィアが部屋にいないことを知られたらしい。
緊迫に、鼓動が速まる。背筋を冷たい汗が伝った。乾いて張り付くような喉に唾液を飲み下し、息を潜める。
いつまでもここに隠れてはいられない。どこへ向かう？　手薄な外は、どちらだ。
「何としてもソフィア様を見つけ出せっ！」
聞こえる怒号は、エブロインのものだった。アルノルトはどうしたのだろう。応戦しているのか、それとも……。
声と足音が間近に散らばる。ソフィアは気配を消したまま、茂み

の陰を移動した。だが、移動出来る距離は限度がある。そっと伺うと、裏庭を幾つかの陰が行き来するのが見えた。これでは移動が出来ない。

鞘に収めたままの剣の柄を握り締める。汗が手のひらに滲んだ。腕が震える。抜け出せると思えない。いっそ、ここで自害してしまえば父上に迷惑にならないだろうか。

もう一度チャンスを探して、今抜け出してきた建物の方へ目線を向ける。

そちらの一角が内側から吹き飛んだのは、その刹那のことだった。

（なっ……？）

ソフィアのみならず、庭に散らばった衛兵らも動きを止めてぎょっとしたようにそちらを注視している。身動き出来ずに唖然としたまま、ソフィアの脳裏に一つの言葉が浮かび上がった。

（魔術……）

裏付けるように、次の瞬間、天から稲光が地を打った。自然には起こり得ない、人為的な現象。

しかし、ソフィアの知る限り邸内には魔術を操る人間はいない。いなかったはずだ。だが、魔術以外にどう説明をしたら良いのだろう。

では、誰が。

――……ああ。まあ、一応はその端くれだな。

（シェイン？）

記憶の中の言葉が、ソフィアの胸に一抹の希望を投げかけた。

シェインは魔術師ではなかったか。封じられた魔力を取り戻したのかもしれない。そしてその力を手に、ソフィアの元へと駆けつけてくれたのでは。

息を飲んで建物を見つめるソフィアの視界で、炎が上がった。明らかに火矢などではない、自在にのたうつ炎の波。

それを背に受けながら、男が黒い影のように衛兵たちの前へ姿を現した。

「ソフィアを返してもらおうか」
低い声が耳朶を打つ。
不敵な眼差しを煌かせて佇んでいるのは、確かにシェインだった。

第3部第2章第4話　楔（1）

フリッツァーの兵が取り囲むクレーフェ邸へ駆けつけたシェインは、総攻撃の的となっているクレーフェ本邸には目もくれずに庭園を駆け抜けた。ソフィアを幽閉するならばそれなりの設備、そして目につきにくい居館をまるごと与えるだろうと推察をつけたがゆえである。

エディは一体どうしているのか、いずれにしても国境からシェインの手勢となる部隊は期待出来そうになかった。どうせこの後に及んでいる。ここまで来たら、独力で何とか片をつけるしかない。

館でエブロインに追われている侍女と遭遇し、彼女を引き連れて出た裏庭には、先回りしてきた兵士たちと遭遇した。

「とりあえずは片づけよう。そこに隠れていてくれ」

言うが早いか、表へ飛び出したシェインに衛兵が声を上げた。ひとつ、派手にやるかと腹を決める。集まる衛兵の数など知れたものだ。ならば目立った方がソフィアも見つけやすかろう。

大きな魔術ほど、ロッドを介さなければ極端に精神力を消耗する。そうわかってはいるが、威力を見せつけることで小粒な魔法を連発するより効率が良いこともある。

天空を稲妻が走った。夜空に閃光の亀裂が浮かび上がり、次の瞬間、野太い一本の光の束となって地上に突き刺さった。

豪快かつ圧倒的な力の前に、衛兵たちが身を竦める。それを見て取ると、シェインは殊更芝居めかして低く笑った。

「ソフィアを返してもらおうか」

襲いかかる勇気を持てないらしい衛兵に、更に威嚇するように炎を生み出すに至っては、数人が武器を捨てて逃げ出した。

「シェインっ！」

残った数人が迷うようにたたらを踏む。その後方で、茂みが急に音を立てた。同時に上がった切実な声に、シェインは目を見開いた。

「ソフィアっ」
咄嗟に叫んで、しまったと思う。衛兵が一人、ソフィアの方へ素早く身を翻した。舌打ちする間もあらばこそ、シェインは呪文を紡ぎながら剣を構えて地を蹴った。ソフィアが剣で巧みに衛兵を牽制する。そこへ呪文が完成した。
「横へ跳べっ！」
ソフィアが横っ飛びに跳ぶや否や、元いた辺りを風の刃が衛兵ごと駆け抜けた。切り刻まれながら吹き飛ぶ衛兵に目もくれず、ソフィアが剣を片手に走り出す。
「どうしてここへっ」
「どうもこうもあるか。積もる話は安全を確保してからにしよう」
先ほど疾った稲妻が、まだ時折地から放電するように衛兵を足止めする。絡め取られるのを恐れて動くのを躊躇う衛兵たちの前で、土煙が噴き上がった。一瞬にしてシェインらと彼らの間に障壁が出来、すかさずソフィアを促す。
「行くぞ」
「行くぞって……」
「外に出れば何とかなる。壁は……吹き飛ばすしかないか」
落ち着き払っての過激発言に、ソフィアが焦りを浮かべた。問い返そうとするのを遮るように、シェインは片手を建物の方へ軽く挙げた。先ほどの侍女を手招きする。
「彼女はおぬしの侍女だな？」
「ヴェリッサっ！」
「口髭に追われていた。行くぞ」
土煙が視界を隠している間に、庭園の隅へ足を向ける。手の空いている衛兵も、恐らくはこちらへ向かっているだろう。
駆け出すシェインに、ともかくもソフィアとヴェリッサが続いた。
「だって表には」
「心配するな。屋敷を囲んでいるのは、フリッツァーだ。おぬしに害を加えることはなかろうよ」

「どういう……」
「説明している時間はない」
口早に言うが早いか、矢継ぎ早に呪文を唱える。壁がある辺りの地面が地響きと共に隆起し、壁を持ち上げた。次の瞬間、その中央部に鋭い突起が生じ、根本から壁を粉砕する。
ソフィアが目を見開いて息を飲んだ。
「シェイン……」
唖然とした声に振り返ると、ソフィアが恐怖も緊迫も忘れ去った顔で、ぽかんと壁を見据えていた。
「あなた、こんなことが出来るの……？」
「見直してくれても良いぞ。後でゆっくりな」
口だけは言い返しながら、険しい表情で素早く辺りを見回す。土煙が晴れてみれば、物言わぬ死体以外に衛兵の姿はなかった。手の施しようがないと判断して逃げ出したらしい。だが、新たな手勢が来るのも間もなくだろう。今が逃れるチャンスである。
崩れた瓦礫から外へ抜け出すと、轟音を聞きつけたらしいフリッツァー麾下の兵士が駆けつけてくるところだった。シェインに続くソフィアに目を留めて、ぎょっとしたように馬を止める。
「ソフィア様っ」
どうやらソフィアを見知っている兵士がいたらしい。弾かれたように顔を上げたソフィアは、そちらへ視線を定めながらシェインに口早に言った。
「シェイン。ヴェリッサをよろしく」
「何？」
「わたしは、行かなければいけないところがある。……馬を貸して！」
言われている意味を理解しかねて思考停止したシェインを顧みず、ソフィアが駆け出した。指示された兵士は、こちらもまたぽかんとしながら慌しく馬を下りる。
「すまない。借りるぞ」

「ちょ、待て！　どこへ行くつもりだっ？」
　せっかく苦労して助け出したのに、即座に逃げられては堪らない。
焦り声を上げるシェインに、鐙（あぶみ）に足を掛けたソフィアが返答した。
「陛下の元だ」
「なっ……」
「わたしは陛下に何としてでも伝えなければならないことがある。陛下は、自らの敵を全てご存知のわけではないはずだ」
「馬鹿を言えっ。グウレイグ離宮は包囲の最中だっ！」
「だからだっ！」
　馬に跨ったソフィアは、負けじと怒鳴り返した。ともかくも取り押さえようと駆け出すシェインをかわすように、馬を鞭で打つ。
「ヴェリッサを安全なところへっ！」
　言うが早いか、ソフィアはあっという間に馬を走らせた。「この跳ねっ返りがっ！」と天に怒鳴りたい気持ちを飲み下し、シェインは手近な騎兵に走り寄った。
「貸せっ！」
「しかしっ！」
「フリッツァーからソフィアの身の安全を指示されているだろうがっ！」
　戸惑う兵士を気迫で一喝して引き摺り下ろすと、シェインは誰にともなく怒鳴った。
「そこの貴婦人を安全なところへお連れしろっ。ソフィアの侍女殿だ。くれぐれも手荒な真似をするなよっ」
　言い捨てて、馬を走らせる。ソフィアの姿は既にどこにもなく、シェインはグウレイグ離宮までの道筋を脳裏に描きながら、騒動の及んでいない通りを選択しつつ疾走する羽目になった。
　胸の内で、今し方自分が救い出したはずのご令嬢に罵倒を浴びせる。
　――どこまで苦労をかければ気が済むんだっ！　このじゃじゃ馬がっ！

何とか戦闘に巻き込まれることなくグウレイグ離宮近くまで辿り着く。こちらはクレーフェ邸とは比較にならない規模での争いが起こっているようだった。

広大な敷地を囲む壁の中から外から、激しい戦闘音が風に乗って流れてくる。

アルノルト・クレーフェを中心とする叛乱勢力は、侵入を阻止しようとする宮殿からの迎撃と、国王の大事に駆けつけた追撃に挟まれて戦闘をしている状況のようだ。

一体ここのどこから中へ入れるものなのか、ソフィアがどこからの侵入を目論んでいるのか、わかるはずもない。

（くっそっ……！）

どこから手をつけたものかわからぬのに気ばかりが焦り、路地裏から移動をしては接近を諦める。この建物自体が把握出来ていないのだから、いかんとも攻めにくい。

ソフィアを呪いながら幾度目かの移動を試みていると、不意に壁際の戦闘の最中から馬が数騎こちらへ向かってきた。その先頭に立つ一騎に良く知る人物が跨っている。

「シェイン」

「コルテオっ」

「ソフィア様はどうしたっ。なぜここにいる」

戦闘を指揮しながら、目敏くシェインの存在に気が付いたらしい。シェインの表情がこの上なく忌々しげになったのは仕方のないことだろう。

「逃亡を図られた」

「……何？」

コルテオが目を瞬く。

「俺に自分の侍女の保護を命じて、自分はクラスフェルドのところ

へ向かうと姿を晦ました。あの跳ねっ返りがっ……」
そこにソフィアがいるとでも言うように炎の上がるグウレイグ離宮を睨みつけるシェインに、コルテオはしばし目を瞬いてから眉根を寄せた。
「では、ソフィア様は」
「こっちへ向かったはずだ。だが今どの辺りにいるかまでは見当がつかん。誰かに引っ捕らえられたらどうするつもりだ、あの阿呆」
「既に敷地内にいる可能性もあるのだな」
「あるだろうな。俺にはさっぱりわからん。……ともかく」
渋い顔でシェインは堅固な城壁を見遣った。
「どちらの兵も有限だからな。手薄な場所を探して潜り込んでみるが……」
果たして、こんな広大な場所でソフィアを見つけられるものかどうか。クラスフェルドの元へ向かうと言ったソフィアの言葉を手がかりにするしかない。
「何人か外側を見に遣らせる。もし見つかったら、こちらで保護しておこう」
「そうしてくれ」
コルテオの言葉を受けて、数騎が散る。もしコルテオらが保護した場合シェインにそれを知る術はなく、無駄骨を折ることになる。だが、シェインの無駄骨で済むならば、それに越したことはないと言うものだ。
「お供します」
コルテオの元を離れて宮殿へ侵入出来る場所を探そうと馬を翻したシェインに、コルテオのそばに控えた一騎が声を上げた。
「こちらで見つけ次第、コルテオ様のところへ伝達致しますゆえ」
「そうだな。そうしてもらおうか」
コルテオがすんなり頷くと言うことは、コルテオの掌握する傭兵部隊の兵士だろう。シェインも特に異存はなく、フル装備に身を固めた兵士を見た。頭部はサレットと言う鼻まで覆う兜に包まれてい

るが、声や口元から察するにまだ若い。
「俺はシェイン。名は何と言う」
「ガイと呼ばれています」
「では、ガイ。借りていくぞ」
いくぞと言っても、果たしてどこから行ったものか。
その場を離れながら人手の届いていない場所を探して馬を走らせたシェインは、その路地まで来て馬を止めた。正面の喧乱からはかなり遠のいている。それもそのはず、どうやらこちらは宮殿の裏手に当たり、壁と尖塔が一体化していた。どう考えても侵入出来る高度ではなかった。
（やはりどこかを壊すしかないのか……）
破壊して通過出来るような部分は、ざっと見た限り概ね騒ぎの渦である。この辺りは静かなものだが、生憎と容易く越えられそうにはない。相当の破壊を施すしかなく、ともすればシェインが国王に危害を加える者と捉えられかねない。
「ガイ。おぬしは侵入経路に心当たりはあるか」
「すいません。俺も、この辺りは不案内なんです。リトリアに来てコルテオ様の配下にしてもらってから一ヶ月程度しか経ってませんし」
「そうか」
傭兵とあらば致し方あるまい。
「今、この周囲は危険ですよ」
尖塔を睨みつけながら考え込んでいると、路地の奥からどこか飄々とした声が投げられた。顔をそちらに向けると、一見してただの兵卒とは見えない男が現れた。
ひょろりと背が高く両腰に帯剣してはいるが、装備を身に付けていない。騎乗もしておらず、悠長な足取りで暗がりから姿を現す。
ガイが、微かに身動ぎをした。
「それとも、国王陛下に『おいた』をお考えですか？」
からかうような口調に、シェインは目を眇めた。リトリア人では

なさそうだ。傭兵か。誰配下の者なのだろう。
「いえ……そうではなさそうですね。叛乱軍の目印がなさそうですが」
シェインたちから数エレほどの距離を置いて足を止めると、男はシェインとガイを交互に見つめた。叛乱軍は、同士討ちを避ける為に、目印としてリトリア国旗を模した布を二の腕に巻きつけている。もちろんシェインたちは、それを持たない。
「そう言うおぬしもな」
「どこの隊に所属かお伺いして宜しいですか？」
「……クリスファニア伯アレマン家第二旅団護衛連隊第三班」
一応のところ、コルテオにあてがわれたシェインの所属部隊である。コルテオが掌握している第二旅団の、更にコルテオ身辺に近付くことが許される部隊だ。
答えながら、馬を下りてコルテオから預かっている剣の紋章を翳して見せると、男は琥珀色の瞳を細めた。見慣れぬ瞳の色が記憶の中に引っかかったような気がしたが、深くは受け止めずに男が頷くのを眺めた。
「クリスファニア伯。お名前は伺っております。会ったことはありませんが。陛下のところへ行かれるところですか」
「惜しいが違う。陛下の近親者の護衛をしたくてな。おぬしは何者だ」
クラスフェルドの近親者に心当たりがないのだろうか。男は微かに眉根を寄せたが、深くは追及せずに口を開いた。
「私は陛下のお客さんですよ。一応ね。所用があって出掛けていたのですが、クリスファニアが大騒ぎと聞いて陛下のおそばへ戻って来た次第です」
いずれにしても、アレマンの名が疑心を払拭してくれたらしい。紋章入りの剣や、ガイが身に付けている装備も有効だったのだろう。男は、シェインとガイを促すように軽く片手を挙げた。そのままこちらへ背を向けると、壁に向かい合う。

何をするのかと見つめる視線に、男は小さく微笑んで振り返った。
「隠し扉ですよ。お出かけ前に、陛下よりここから入れと伺っておりまして」
壁の窪みに手を突っ込んだ男が何事かをすると、壁の一部が内側へと静かに倒れた。それを眺めやりながら、シェインはそっと眉を顰めた。
隠された通路など、どこの宮廷にも存在する。隠し扉があったことよりも、男の言葉の方が気にかかる。
――『お出かけ前に伺っておりまして』？
では。
「陛下は、この流れを読んでいたと言うことか」
「さて」
男に促されて続くと、すぐに暗い通路になっていた。外から見える尖塔に続いているのだろう。背後で扉が閉まり完全な暗闇が訪れたと思ったら、ぽっと前方で仄かな灯りが灯った。男がカンテラの火をつけたらしい。壁際で、炎がちらちらと揺れる。
「私はこの建物に詳しくありません。陛下がどこにおられるかは、はっきりとはわかりかねるのですが……」
通路は狭く、天井も低い。シェインより長身である男には些か窮屈そうだ。微かに首を屈めるようにして歩く男に黙ってついて歩く。
ソフィアはどこにいるだろう。彼女は抜け道の存在を知っていてもおかしくはない。もしかするとそういう手段を用いて、宮殿の敷地に入り込んだ可能性はある。
コルテオの方で見つけ出してくれていれば良いのだが。
抜け道を通って尖塔内部に入り込み、そのまま外へ出る。どうやら直接宮殿に繋がってはいないらしい。
グウレイグ離宮において僻地と言える尖塔の周囲には、ほとんど兵士の姿は見当たらなかった。庭内を巡る壁や生垣の遠くから怒号が響いてくる。東の空が明るいのは、先ほど燃えていた箇所だろう。
広々とした庭園と、幾館にも渡る広大な建物のどこを探せば良い

のか。シェインはそこはかとなく途方にくれた。
盛大な歓声が聞こえたのは、今いる場所からいくらも離れていない距離からだった。
「何だ？」
同時に、豪快な破砕音が響く。どうやら庭内の壁越しに、すぐ向こうにある外壁が崩された音が聞こえたらしい。
「まずいですね。破壊されたらしい」
男が、目に見えぬ壁の向こうへと視線を飛ばした。その間も歓声と荒々しい物音は続いている。一際大きな地響きが足元に伝わるに至って、男はシェインを振り返った。
「すみませんが、私はあちらの防戦に参加してきます」
「ああ。助かった」
シェインは防戦に参加する義理はない。あっさり告げると、駆け出す男の背中と別れる。黙ってシェインの背後に従っていたガイが、一瞬小刻みに体を揺らした。
「行かなくていいんですか」
「俺はソフィアの方が最優先なのでな。さて……」
騒動から離れる方向へ足を向けながら、シェインは再び嘆息した。ともかくも、手当たり次第駆けずり回る以外にない。

◆◇◆

エディとシーレィがモナ公国王都シドに到着を果たしたのは、それより少し遡る。クリスファニアを経ってからは、およそ十日と一日を数えての到着だった。ほぼ予定通りの行程だったと言える。
無骨な石造りの街は、整備されてはいるものの、どことなく物寂しい風情が漂っていた。戦へ人手が借り出されているせいだろうか。
ウォーター・シェリー城は、シドのほぼ中央に位置する。マントで深く顔を覆っているエディは、馬を傍らに引きながら躊躇いなく城門へ足を向けた。やはり耳がすっぽり隠れるような帽子を深く被

っているシーレィが、縁をずりあげながら慌てて後を追う。
「エディ。どうやって城に入るのさ」
「どうもこうも歩いていくしかあるまい」

第3部第2章第4話　楔（2）

ここまで来て、最早小細工は不要だろう。エディがフレデリクであれば、何もせずとも城門は開く。違うのであれば、何をしたところで入ることは適うまい。いや、入れたところで何になろう。

「何か用か」

城への架け橋から続く、どっしりと重そうな門は閉じられている。両脇に控える衛兵が、それぞれエディの前を塞ぐように近付いてきた。無言で足を止める。

「現在城は忙しい。旅人を相手する時間は……」

「この顔を見知っているか？」

取り立てて声を張り上げるでもなく、しかしながら遮るように言う。訝しげな表情を浮かべて、衛兵が沈黙をした。

「何……」

「お、おい」

ばさりとマントを外すと、エディは静かに裁きの時を待った。衛兵の一人が、何かを思い出したように目を見開く。

声変わり前かと思うようなやや高い男の声が頭上から響いたのは、その直後のことだった。

「兄上っ！」

「……陛下っ！」

途端、衛兵たちが慌しくひれ伏した。それには目もくれずに振り仰ぐと、城壁の望楼からこちらを見下ろす人影が見えた。十代と思しき少年と、その後ろに壮年の男性が控えている。どちらにも見覚えはないが、その呼び方からして少年はエディの――いや、フレデリクの弟らしい。

シェインは何と言っていたのだったか……。

（王弟がいるが、継承はしていないと言っていたな）

現在国政を取り仕切っているのは暫定政権と言っていたはずだ。

弟の名前は記憶にない。シェインもそこまでは知らなかったのか、あるいは言う必要がないと判断したのか、口にしていなかったように思う。

「心配をかけて、すまなかったな」

数少ない記憶を掘り返しながら、ともかくもエディはそちらに向かって穏やかな微笑を浮かべて見せた。

「……本当にあんた、フレデリク王だったんだな」

エディがウォーター・シェリー城に入城を果たしたその夜、少し一人にさせてくれと言い置いてテラスへ足を向けたエディに、ついてきたシーレィがそうぼやいた。

心地良い夜風に髪を揺らされながら、エディは無言でシーレィを振り返った。

城門の前に立ってから以降は、慌しく騒々しいとしか表現しようのない多事多端の時を過ごした。

王城に詰めている大臣らはもちろんのこと、参内していなかった諸侯連中まで駆けつけて来たのだ。

彼らにとっては、心から生還を待ち望んでいた主の無事な姿に、致し方ないと言うものだろう。だが、エディにしてみれば公王時代の記憶もなく、緊張と疲労の折り重なった長旅の後である。

弟ハインリヒとその世話人ディールスとの対面後、主治医に全身を隈なく診察され、大臣に囲まれて慰労の言葉を投げかけられ、次から次へと詰め掛ける人の波に溺れて息が詰まってしまいそうだ。

だが、一方でこの空気が肌に馴染む自分もいる。

「私は、こういう世界で息をしていたのだな」

「変な感じ？」

「そういうわけではないが。……いや、不可思議と言えばそうなのかな。意識が戻ってからこれまでの生活が、幻のように思えてくる」

当てもなく放浪していた身の上が、城に来た途端に一国の主に祭り上げられた気分だ。拍子抜けするほどである。

だが、それはエディに記憶が欠落しているが為だけであろう。

よくよく考えてみれば、公王が遠征から城に戻って公王として扱われるのは何もおかしなことではない。あくまでもエディ自身の気持ちの問題でしかない。

「兄上」

カタン、カタン、と硬質の音を響かせながら、エディを呼ぶ声が聞こえた。振り返ると、車輪付きの手押し座椅子に掛けたハインリヒと、影のように従うディールスがテラスへと姿を現したところだった。

ハインリヒは、下半身に不随を患っている。片手にも軽い麻痺症状があり、幼少の頃の高熱が原因なのだと先ほど聞いた。

それがゆえに本人の希望で公位継承権を完全に放棄し、ハインリヒは敬愛する兄を影からサポートすることを望んでいた。兄より穏やかな気質の彼は、表出せずとも暫定政権を内側から静かに支えた。兄の生還を誰よりも信じ、貫いたのは彼であると思っても良さそうだった。

「本日は、完全に人払いをさせました。明日からしばらくは忙しくなるかと思います。今夜は、ゆっくりお休み下さい」

エディは、記憶がないことは告げていない。どのような政治勢力があり、どこからどう付け込まれるかわからぬ現状、こちらから弱みを曝してやる筋合いではない。

だが、告げなければ不可解な言動も多いであろうことを考慮すれば、多くの記憶が混濁している旨だけは最低限の人間に告げねばならなかった。

ハインリヒ、ディールス、そしてハインリヒの言う数人と主治医がそれに含まれる。

「本当に心配を掛けて済まなかった」

エディを真実案じる気持ちがひしひしと伝わるはにかんだ笑顔に、

エディは改めて謝罪の言葉を口にした。ハインリヒが目を伏せる。
「僕は、こうしてお会い出来ただけでも僥倖だと思っています。兄上がご不在の間のあらゆる情報は、ヴィンクラーかディールスにお聞きすれば良いでしょう。もちろん僕も、知る限りの情報をお話します」
ヴィンクラーと言うのはモナ宮廷の宰相だ。先ほど会ったその顔を頭に蘇らせながら、エディは頭を切り替えることを己に強いた。
何をどう考えたとしても、こうしてウォーター・シェリーに戻って来た時点で、公位に復権したのだ。
これから考えるべきは、モナの公王として、どう利権を確保し、国を守っていくかである。
その為には、対リトリアのみではなく各国の状況、そして国内の状況を正確に頭に詰め込まなければならない。
翌日からエディは、精力的に活動を開始した。まずはハインリヒの言う通り、不在時の情報収集である。
暫定政権の元にもたらされた報告書の数々、立て続けに送られて来ていたヴァルスからの通達、ロドリスからの書簡、リトリアの打診、そして現在リトリアと相対しているハンノ要塞に関する指令書。
頭痛を堪えながら膨大な書類に目を通し、ディールスやハインリヒ、幹部連の生身の言葉を吸収する。
ギャヴァン戦及びロンバルト沖海戦における被害状況、モナ国内の復興事業の進捗状況。ロドリスを中心とするナタリア、バートの反ヴァルス勢力にリトリア、ロンバルトを加えた五カ国が、ヴァルス国内への侵攻を開始して苦境に陥っていること。ロンバルトは敗退して公王が死去し、後継者たるレドリックが城主として君臨していること。ヴァルスは辛うじてギャヴァン、フォルムスと言う二大貿易港を死守することが出来たものの、国境にある大きな要塞が陥落の危機に晒されていること……。
各国の状況を把握するに従い、自分がなすべきことを頭の中で組み立てていく。地道な作業を繰り返しながら、エディは次第に、自

分の脳が一国の支配者として切り替わっていくのを感じていた。
「シドにいるありったけの兵士を集めろ。それからハンノ要塞に伝令だ。兵を引いて要塞に籠もれ。そうすればリトリアは手出しして来ない」
「ハンノにはヴァルスの指揮官がいたな。ヴァルス騎兵を率いらせて伏兵をおけ」
「クリスファニアへ偵察を放て。それから、リトリア軍にいる故買商を買収しろ」
「リトリア兵の装備を一式手に入れて来い。人選をし、馬を与えて書簡を持たせろ。出来ればリトリア人が良い」
「剣を交えていたリトリア軍の将軍に使者を出せ」
「焼き討ちにあったレニエの状況を確認しろ。あわせて、志願兵を募れ」
「ヴァルスに書簡を送れ。フレデリクが公位に復権したと通達をする。ヴァルスとは正式に協調の姿勢を見せておけ」
果たしていくつの命令が功を奏するだろうか。
幾度かやり取りを交わしたシェインの書簡を見る限りでは、もう時間がなかった。リトリアの内紛はもう間もなくだ。それに乗じなければ、全てが意味がない。
そう考えながら、ディールスや大臣連を通して指示を通達していたエディは、書類の山に埋もれていた一束の書簡にふと目を留めた。紐解いて目を通し、眉根を寄せながらハインリヒとディールスを呼び寄せる。
「この書簡に目は通したか？」
問われたハインリヒは、書簡を受け取って目を落とすと、静かに頷いた。
「はい」
「これが届いたのは、私が出陣してからのことだな」
日付を眺めやりながら、口頭で確認する。再びハインリヒが頷いた。

「兄上が出征してから数日後のことだったかと思います。報告はお耳に届いていたかと思いますが、書簡を手にされるのは恐らく初めてのことでしょう」
「ふん……これがヴァルスに味方しなかった理由か……」
一人ごちて小さく呟くと、エディはディールスに視線を向けた。
「ヴィンクラーに言って法的根拠を確認しろ。原本の写しを持って来い」
「かしこまりました。すぐに」
ディールスが指示を受けて出て行くと、手押し座椅子に掛けたままのハインリヒが硬い視線を向けた。
「兄上。シドの兵をかき集めた理由をお伺いしても宜しいですか」
「私が率いていく」
改めて手元の書簡を読み返して頭の中で各国の勢力図を描きながら短く返すと、ハインリヒが小さく息を呑んだ。
「ハンノ要塞に任せておけば、兄上が直々に行かれずとも何とかなりましょう。それに、シドを空けてしまっては……」
「リトリアは、シドには攻め込んでは来ない。少なくとも、今のところはな」
ばさりと書簡をテーブルに投げ出し、エディは椅子の背もたれに深く体を預けた。ハインリヒは身動ぎもせずにエディを見つめている。エディと同じ淡い金髪の下に光るスカイブルーの美しい瞳を見返しながら、エディは続きを口にした。
「リトリアにはリトリアの事情がある。奴らの内部分裂を利用しない手はない」
「内部分裂？」
「マウヌ川に布陣しているリトリア軍は、二派に分かれている。国王擁護派と、そして国王を覆さんとする奴らだ」
ハインリヒが目を見開いた。エディに良く似た、しかしそれより優しい面立ちの顔に緊張が走る。
「内乱ですか」

「ああ。……最初からマウヌ川に布陣していたは、恐らく叛乱軍。そして、後から国王軍がクリスファニアより送り込まれている」

エディとて裏を確認したわけではないが、シェインからの書簡を読んでそう判断した。

リトリア軍は一向に戦端を開こうとはせず、そしてまだ戦いが始まってもいなかったにも関わらず、なぜか国王が後から援軍を送っている。

かと思えば、規模の小さい部隊が、モナの集落を焼き討ちにして不可解な戦端の開き方をした。

今ひとつ腑に落ちないこの状況も、当初からいた軍が叛乱軍で、増援部隊が国王配下の軍と仮定すればすっきりと収まるのだ。

クリスファニアの出方を待っていた叛乱軍は、モナとの戦闘に突入するわけにはいかなかった。その最中には、引き返すことが出来ないからだ。

だが、増援された国王軍は、逆に叛乱軍を足止めしたかった。だから、こそこそとモナへの攻撃を仕掛けたのだろう。

モナとしては、リトリアには国境から手を引き、自国の分裂に熱中して頂きたい。モナを禿げ鷹のように狙うクラスフェルドの命を奪おうと言うのなら、ぜひ実現して欲しいものだ。

分裂したリトリア軍は、双方モナどころではないはずだ。そこを効果的に利用すれば良い。

エディは、見慣れぬ弟にモスグリーンの瞳を定め、薄く笑った。

「せっかくリトリアが勝手に分裂しているのだからな。国王を片付けたいのなら、応援してやろうじゃないか」

カールがハンノ要塞からヴァルス騎兵を率いての出陣を拒絶したことを受けて、エディはシドから動かせる兵を全て組み込んだ部隊を編成した。当面、シドをがら空きにしたところで、攻撃を受ける

恐れはない。画策すべき相手はリトリアに限られ、そのリトリアさえも手段を講じれば引いていく。シドの兵力を、対国境戦に向けても不都合は生じない。

カールは単独出兵を拒否はしたものの、リトリア軍との戦闘から手を引いて要塞に立て籠もれと言う要求には従った。

速やかに撤退するモナ軍に、戦闘を全面に引き受ける羽目になったリトリア国境軍――ストラトス将軍率いるリトリア叛乱軍は困惑する。国境戦線は、一時、停滞状況に入った。

一方で、火蓋だけを切って落とし、後は高見の見物と決め込んでいたリトリア国王軍の元へ、見過ごすことの出来ない情報が届けられていた。

叛乱軍の将軍が、モナと手を結んでクリスファニアの国王を亡き者にしようと画策していると言う噂話を耳にしたと言う。

叛乱軍に従軍していた故買商から、国王軍に従軍している故買商に流された情報に、将軍リディアファーンは真実を確かめようとする。故買商を呼び出し、密談場所の情報を得ると、すぐさま偵察軍を放った。

何も知らぬ叛乱軍ストラトス将軍の元へは、和解を携えたモナの使者が訪れる。

普通に考えればこのタイミングで和解を持ちかけるなど、モナの立場をすればありえない。だが、指示を下したエディはリトリアの状況を知っている。叛乱の増援に加わりたいストラトス将軍の胸の内を読んでの提案だ。ストラトス将軍にしてみれば願ったりである。後方の危険を考えずに、撤退することが可能となる。

そこへ、追い討ちを掛けるかのように、クリスファニアへ引き返すよう早馬が駆けつけた。クラスフェルドが参加した会議が紛糾し、間もなく火の渦に包まれるだろうと言う援助要請だ。

クリスファニアの情報を集めてエディが用意した使者だとは、ストラトス将軍は知らない。ただ、天の采配としか思えぬタイミングだった。モナとの和解を諾とすれば、モナに追撃されることはあり

えまい。リトリアの歴史を変える一幕に、今なら駆けつけられるはずだった。

すぐさまモナとの和解に応じたストラトス将軍は、成立するや否や、全軍を引き連れてクリスファニアへの進撃を開始する。

本来ならばそれを阻止すべく派遣されていたリディアファーン将軍率いる国王軍は、エディが故意に流した誤った情報に足止めをされていた。捏造された会合場所に注意を払い、嵌められたと気が付いた時にはストラトス将軍率いる軍は、クリスファニアへと旅立った後だった。

歯噛みし、ともかくも行軍を阻むべく移動を開始する国王軍の前に、エディ率いるモナ・ヴァルス混合軍が立ちはだかり、否応なく両者は激突することとなる。

クリスファニアでリトリアの国運が揺れ動く、その日の早朝のことである。

◆◇◆

クラスフェルドが指揮を執るグウレイグ離宮の防戦は、国王を支持する諸侯の増援もあり、一時は鎮圧の気配を見せた。

しかしながら夕刻過ぎには再び叛乱軍が勢いを吹き返し、離宮内部も決して静かとはいかなかった。

モナ公王に復権したフレデリク――エディの画策による賜物だとは、クリスファニアで知る者はまだいない。

ソフィアの姿を探して離宮内を駆けずり回るシェインらも無縁とはいかず、押しては引く争いの波に飲まれたのも一度や二度ではない。

ソフィアはどこに潜んでいるのか見つけ出すことが出来ず、地下から侵入してきたらしい一団との乱戦に片が付いた頃、月は天上に差し掛かろうとしていた。全体の戦況など、シェインが知る由もない。

コルテオやフリッツァーらはどうしているだろう。そう考えながら、凭れ掛かっていた石壁から体を起こす。二階の渡し廊下に続く踊り場からは、ほんの少しだけ月が大きく見えた。

「歩けるか」

「はい」

何やら脱力感に包まれて問うシェインに、荒い呼吸で床に座り込んでいたガイも体を起こした。自分が一体何をしているのか、何もかもがどうでも良いような気がし始めている。

戦闘音はどこからともなく絶えず響いており、重い体を引きずるように歩き出しながら、改めて途方に暮れた。一度、コルテオらと連絡を取る方が無難かもしれない。

思いながら石畳の渡り廊下を通過しかけたシェインは、黒く揺れ動く木々の向こうで上がった炎に目を奪われた。

「クラスフェルド……！」

二ブロックほど先の中庭で攻防が繰り広げられている。遠目ではあるが、その片方を率いているのは、先日目にしたクラスフェルドに間違いない。暗闇に可視を与える炎に目を凝らし、それを確かめたシェインは駆け出した。

行ってどうするつもりがあるではないが、ソフィアの目的がクラスフェルドである以上、いずれその付近に現れることは間違いないはずだ。その前に捕らえられてさえいなければ。

シェインの後を、ガイが静かに追う。身に付けた装備が音を立てこそするものの、伸びやかでしなやかな身のこなしはまるで盗賊のようだ、とふと思った。

建物の壁にぐるりと設置されているテラスを繋ぐ渡り廊下を駆けながら、油断なく周囲に目を配る。その姿を視界の隅に捉えた時、シェインの足が思わず止まった。

シェインとは違う空中廊下をクラスフェルドらの方向へ駆け抜ける小柄な姿――。

「ソフィアっ！」

残念ながら戦闘音にかき消されて声は届かない。ソフィアは片手に剣を握り締めているようだった。まさかクラスフェルドを守る為に参戦するつもりか。

阻む為に咄嗟に紡いだ炎の魔法が、暗闇を裂いて駆け抜ける。疾った一筋の炎が、クラスフェルドらが争う部隊の只中へと突っ込んでいった。

「くそ……」

非常に本意ではない。クラスフェルドなどどうなろうと知ったことではないのだ。救う義理ではない。

シェインの放った炎は、ただ敵方に莫大な被害を与えただけで、ソフィアの足止めには至らなかった。下へ続く階段を見つけ、舌打ちと共に走り出す。何かを見つけたような表情を浮かべたガイが方向転換をしたことには気が付かず、階段を一気に駆け下りた。戦闘は一度シェインの視界から外れ、ソフィアもまた視界から外れた。

ちょうど争いが鎮圧されたところのようだ。クラスフェルドが悠然と佇むのを見つけ、国王側が勝利を収めたとわかった。そして、剣を払う一団の中に見知った顔を見つけ、驚愕する。

「コルテオ……」

「シェインっ」

どういう経緯か、外壁の守りにあたっていたはずのコルテオらだった。クラスフェルドの率いる一団として共に剣を交える光栄に浴したらしい。

馬を駆ってこちらへ降り立ったコルテオは、険しい表情のままシェインに言った。

「何とか片が付きそうだ。国境にあてていたはずの軍が叛乱に加わる為に引き返してきた時は、さすがに危うかった」

それを聞いて、内心で唸る。エディが上手く立ち回れなかったのか、あるいはエディの思惑がそうであったのか。

いずれにしても、モナ軍は援軍の足止めとはならなかったようだ。

「宮廷魔術師のヴェルンケル殿が魔術師兵を引き連れて援軍に回っ

てくれたのでな。辛うじて取り返したと言うところか」
文官とは言え、どうやら宮廷魔術師はこの一件で敵方に回ってはいなかったらしい。
そう確認して息をついていると、コルテオが表情を改めてこちらを見下ろした。
「ソフィア様はどうだ」
「今し方こちらへ向かう姿を見たはずなのだが……」
答えながら、クラスフェルドの方へ視線を向ける。些か兵士とは思いにくい人物がそのそばへ駆け寄ろうとしているのを見て、シェインは記憶を探した。確かクラスフェルドの腹心で、フラクトルとか言うのだったか。

第3部第2章第4話　楔（3）

その刹那、鋭い声が闇に突き刺さった。
「陛下っ！　お逃げ下さいっ！」
知った声に顔を振り上げる。空中廊下からこちらへ続く階段に、ソフィアの姿が見えた。
「ソフィアっ」
「フラクトルはっ……！」
ソフィアは真っ直ぐクラスフェルドの方へ視線を向けている。彼女の声にクラスフェルドが振り仰いだ瞬間だった。
フラクトルの手元で、白刃が閃いた。
「陛下、お赦しをっ……！」
「父上っ！」
まさしく一瞬の出来事だった。
「フラ、ク、トル」
フラクトルが突き立てた短剣が、クラスフェルドの喉を正確に貫く。
噴き出した自らの血糊を浴びながら、クラスフェルドが目を見開いたような気がした。
驚愕を浮かべて、間近なフラクトルを見据える瞳には信じられない色が、次いで深い絶望が色濃く浮かんだ。
咄嗟にその場を動くことが出来た人間は存在せず、為す術もないままクラスフェルドの体が崩れ落ちる。
その場にいた誰もが、自分の目を疑ったに違いない。
武王と名高いリトリア国王が、兵士にすら非ず非力な宰相にその首を獲られたのだ。――それも、クラスフェルドが心許す腹心と言えたはずの、味方に。
起こっていることを理解しきれない空白の時間を、我に返った兵士の怒声が打ち破った。

「き、貴様っ！」
その声で、間近にいた兵士が剣を翳して殺到する。身を翻そうとしたフラクトルは、あっけなくその剣に捕らえられて力尽きた。剣山のように制裁の刃を幾つも体に受け、仰け反るようにして地面へ叩きつけられる。
階段を駆け下りるソフィアの絶叫のような声が、響き渡った。
「父上ぇぇぇぇっ！」
コルテオがクラスフェルドの方へ駆け出す。一瞬遅れて、シェインも駆け出した。その胸中に迷いがある。治癒の魔法をかければ、もしかすると間に合うのか。しかしそれをする必要がどこにある。俺は、ヴァルスの宮廷魔術師だ……。
「シェインっ！」
国王に駆け寄る人間とフラクトルに集る人間とが寄せる中、ソフィアがシェインを見つけ出した。懇願するように、その口が続ける。栗色の大きな瞳が、息苦しいほどの悲しみに染まり、涙を溢れさせていた。
「父上を救って！　お願い、あなたなら出来るはずだ！」
感情と理性がせめぎ合い顔を顰めたシェインは、クラスフェルドに視線を落として微かに息を呑んだ。
まさかの展開に、まだその重みが理解出来ていないまま、重く吐き出す。
「……すまないが、俺に出来ることは何もない」
「シェインっ！」
「もう、手遅れだ」
ソフィアが目を見開いた。人を呼ぶ為の怒号が飛び交う慌しい喧騒の中、ソフィアがかくりと膝をつく。頭部を覆っていた麻布がほどけ、山吹色の髪が舞った。力なく剣が落ちる。
「嘘……」
「残念ながら魔術では、蘇生はさせられない」
己の主であれば、フラクトルの動きを見た瞬間にでも呪文を発し

ただろう。脳と体に刻まれている条件反射だ。
だが、シェインにクラスフェルドを救う義務などなかった。いや、心のどこかで消えてくれることを祈る気持ちも、なかったと言えば嘘になるのだろう。
クラスフェルドがいなくなれば、リトリアはヴァルスの敵ではなくなる。
微かな自責とやましい気持ちに駆られ、シェインはソフィアから目を逸らした。
「もう少し……もう少し早く父上の元に駆けつけられていたら……！」
では、ソフィアがクラスフェルドに伝えたかったことと言うのは、腹心であるフラクトルの裏切りか。
そう理解しながら、ソフィアへ視線を戻す。
「この騒ぎの中、フラクトルが父上の背後を狙いに来るとわかっていたのに……！」
遠くではまだ戦闘音が続いていたが、これを理由の一つとして全てが沈静へと向かうだろう。この後、どう処理されていくのかは関知するところではなく、どう出来るでもなかった。
その時、深くその死を悼んでいたようにうな垂れたコルテオが、ゆらりと立ち上がった。
「油断した背後を狙うのが最も早いのは、確かなことだな」
低い声が耳朶を打ったと思った瞬間、シェインの胸部を、白刃が突き抜けた。
「コル……」
瞬間、五感の全てが麻痺したように断ち切られる。小さな呟きは、口から吐き出された血で覆われた。
「シェインっ！」
ソフィアの悲鳴が耳を貫き、シェインの体を支える力ががくりと抜ける。
「猟犬としては少し、力不足だったな。……初めまして、ソフィア

様。もう少し早く、あなたに辿り着きたかった」
そのまま全身が崩れ落ちるのをどこかで知覚しながら、コルテオの冷酷な声を聞いた。
「あなたの存在を持って、この騒動に決着をつけましょう」

◆◇◆

「父上ぇぇぇぇっ！」
女性の悲鳴のようなものが聞こえた。
ふとそれに気をとられたグレンは、濃い血の臭いの中、顔を上げた。その視界の隅を、今し方グレンに飛ばされた兵士の首が掠め飛んでいく。
クラスフェルドより制圧するよう言い渡された離宮正面西側にある礼拝堂付近は、赤い塗装に塗れていた。動く者は、グレンしかいない。任務完了である。
月に照らされた中庭で、返り血を浴びて重い衣服に軽く顔を顰める。そして、悲鳴の方向へと足を向けた。
クラスフェルドより、モナ国境戦線から直々に呼び戻しを受けたのは二日前のことだ。そうして、共にクリスファニアを発ったリディアファーン将軍より一足先に戻って来たグレンが辿り着いた時には、グウレイグ離宮は戦火の只中にあった。
帰城してからは、クラスフェルドを守るべく常に傍に身を置くつもりだったのだ。だが、命令を受けて、今はこうして単独防戦に努めていた。その間の乱戦に次ぐ乱戦で、気づけばその所在さえ不確かである。
とは言え、名高い武王の腕は噂に違うこともなく、聞きしに勝る剛勇を見せ付けてくれていたクラスフェルドに何かがあろうとも思いにくいのだが……。
悲鳴の方角を頼りに、グレンは駆けた。駆けながら胸の内で考える。

もしも。

――もしもクラスフェルドに万が一のことが起こっていた場合。

（リトリアは継承戦争から手を引くでしょうね……）

考えながら、それもまた諾としかけている自分を感じる。

先日クラスフェルドと交わした会話の中で生まれた、一抹の疑問。

果たして自分が為すべきことは、何だったのか。

握りつぶしたはずの迷いが、そんな考えを引き出しているのだ。

ロドリスがヴァルスに勝利を収める可能性は、五分五分。ともすると、世界は再びヴァルスの前に跪くのだろう。

グレンにとっては、どちらの勝利でも構いはしない。元々ローレシア大陸の人間ではないグレンに、愛国心など微塵もない。関心があるのは、その全てがセラフィにとって何をもたらすかだ。

ロドリスが勝利を収めようが、ヴァルスが勝利を収めようが、セラフィにもたらされるものは何もない。セラフィの望むものなど、本当はどちらにもない。

所詮、壮大な茶番に過ぎないのだ。虚像を追うセラフィにとって、ロドリスの勝利など何の慰めにもならない。……いや、マーリアを手元から失う分、心の均衡をより危うくするのでは。

クラスフェルドの安否を思う気持ちが引きずり出した迷いは、自動的に胸の内へと広がっていく。

遮るもののない庭園を縦断しながら、グレンは再び迷いを禁じた。そんなことを考えてどうする。自分のすべきは、セラフィに従うことだ。その幸福について考えることではない。今は、目の前の事象を確認し、片付けることに専念すべきだ。

……だが、自分が考えてやらねば、誰が考えてやるのだろう？

「――っ！」

考えに気をとられ、一瞬反応が遅れた。

何かが背後から肉迫する空気を読み、咄嗟に地を横に蹴るグレンの髪を、飛来した何かが切断した。

地に足を着き、セイバーを構えて振り返る。グレンと対峙するよ

うに、十数エレの距離を置いて男が立っていた。
グレンの背後から再び頬を掠めるように飛来したそれを、無造作に片手で受け止める。見遣って、グレンは眉根を微かに寄せた。チャクラムだ。
やや小柄な体に纏った装備は、叛乱軍のものではなさそうだった。そう考えて、そのシルエットに見覚えがあるような気がする。
「……お礼を言われこそすれ、襲われる理由はないように思いますが」
先刻、隠し扉から招じ入れてやった二人の男の内の一人ではないだろうか。確か、アレマン家の部隊の人間だと言っていたが……。
グレンの言葉に、向かい合った兵士は無言で頭に手を掛けた。そのまま頭部を覆うサレットを外し、静かに投げ捨てる。
思いの外、若そうなことに少し驚いた。
年の頃はまだ十代、ブライトグリーンの短い髪の下、鋭い目がこちらを真っ直ぐ見つめていた。見覚えはない。……いや、ない、はず、だが。
「思い出せねぇか」
男が微かに笑う。笑ったと言うよりは、口を歪めたと言う方が正しいような笑い方だった。
「まあ、それもしょうがねぇよな。暗かったから、俺の顔なんか一瞬しか見えてなかっただろうしな」
「暗かった？」
恨みか、復讐か。
男の眼差しに意味合いを見出して、己に呟く。そういう意味では、今度は心当たりが多過ぎた。断ち切ってきた人生など、背負いきれないほどなのだから。
だが、その声に聞き覚えがあるような気がして、グレンは記憶を探った。何かが引っかかり、心の中からそれを手繰り寄せる。
「……『人魚の神殿』ですか」
思い出した。

「ほう？　思い出してくれたみたいだな。身に覚えがあり過ぎて、埋没してるかと思ってたよ」

ラグフォレスト大陸にある『人魚の神殿』――あの時、暗闇の中に聞いた声だ。

合点がいき、グレンはうっすらと微笑んだ。

「お仲間の復讐戦と言うわけですか。泣けてきますね」

「あいつは『放っておけ』って言うだろうけどな。俺の筋として、そうはいかねえんだよ」

「どうやってここまで」

「情報収集は慣れたものなんでね。あんたはカズ……レガードを追う為にヴァルス国内で足跡を残してたからな。そう難儀なことじゃなかったさ。まさかリトリア国王の周囲をちょろちょろしてるとは思わなかったが」

言いながら、ガイ――ゲイトは、手にしたチャクラムを弄ぶように指先で回した。

リトリア内部の分裂に乗じて、傭兵へと志願したらしい。盗賊ならば腕は最低限確かだから、傭兵となるのは難しいことではなかろう。

「あんたがさっき声をかけてきた時は、鳥肌さえ立ったものだ。……再会出来るのを、楽しみにしてたよ」

言うが早いか、ゲイトの手からチャクラムが放たれる。そう思った瞬間には、ゲイトの足が地を蹴った。さすがは仮にも盗賊、と言おうか。動きの素早さは賞賛に値する。

身を伏せて片手を床に押し当て、チャクラムをやり過ごす。追って、ゲイトの短剣が迫った。ほの白い輝きを見て、寸でのところで顔を逸らす。鼻先を鋭い先端が掠めた。

「あの時は魔術付与道具など持ってらっしゃらなかったようですが」

「手に入れたのさ。高かったぜ」

短く舌打ちをしながら地に降り立ったゲイトは、間髪入れずに再び短剣を旋回させた。後方へステップを踏むようにしてそれを交わ

し、驚異的な筋力で着地と同時にセイバーを閃かせてゲイトに迫る。辛うじて避けたゲイトの頬に赤い筋が走った。

「高い買い物でも、使いこなせなければ無意味でしょうね」

グレンからすれば、ゲイトの戦闘能力は恐れるに足りない。まだ余力をたっぷり残したままとは言えグレンのセイバーを避け続ける瞬発力は大したものだが、避けているだけではこちらにダメージは加えられない。そして、ゲイトには反撃をするだけの余裕はなかった。繰り出すセイバーが、ゲイトに傷を与えていく。

僅かな間隙を縫って、ゲイトの片手から何かが放たれる。咄嗟にそれを避けるが、どうやらそれはただの投げナイフだ。そう判断した直後に、続けてチャクラムが放たれた。グレンの二の腕が深く抉られる。だがそれを顧みずに、グレンは強く足を踏み込んだ。二本のセイバーが交差し、身を引いたゲイトの太ももに深い傷を刻み込む。

呻き声が上がり、ゲイトの体が折れ曲がる。その隙を逃さずに剣を突き出すが、ぎりぎりのところでゲイトが踵で地を蹴りつけた。射程距離から微かに外れ、切っ先が空を掻く。

距離を開いて束の間対峙するが、既に勝負は決まったようなものだった。深い傷を負い、ゲイトの額には脂汗が滲んでいる。呼気も荒く、装備に守られていない顔や腕なども自身の血で染まり始めていた。

「すぐに楽にしてさしあげますよ」

ゲイトは無言だ。鋭い目が細められ、逆手に短剣を構える。それとは逆の手で投げナイフを数本放つと、同時に右前方へと跳んだ。正面を避けて背後を取るつもりか。そう判断したグレンは、低く身を屈めてナイフをかわし、同時に足払いを試みる。太ももに深い傷を負っているゲイトが、避けきれずにバランスを崩した。その隙を見逃さず、グレンのセイバーが空を裂いた。

強い手応えが手のひらに返る。胸当ての繋ぎ目を正確に縫って突き刺されたセイバーが、その背中から切っ先を突き出しているのが

見えた。赤い噴霧が舞い散る。手にしていた短剣が、するりと抜けて落ちた。
だが。
「何っ……」
それに構わず、ゲイトの腕が動いた。まるで正面からグレンを抱き締めるかのように震える腕を背に回し、そこを力点に片手が強く腹に叩き込まれた。素手だ。しかし、瞬間、言葉にならぬ衝撃がグレンの全身に突き抜ける。
「……何を、したんですか」
神経を直接襲うような痺れに似た痛みが巡ったのは一瞬のことだ。それで力尽きたかのように、ゲイトの体がずるりと地面に崩れ落ちた。グレンのセイバーが貫いた胸部から溢れる血が、染みのように広がりだす。うつ伏せに倒れたまま、ゲイトの口が微かに動いた。
「さ、て、な」
何が起こったのだ。
己に何の変化もないことを確かめ、足元に倒れ臥しているゲイトを見下ろす。その刹那、先ほどゲイトの指先が触れた腹部から、強い衝撃と共に何かが噴き出した。
「な……」
同時に、口から黒い液体が溢れ出す。自分のものとは思えない不快な音が、喉から零れた。視線を下へ下げると、赤黒い枝葉のようなものがグレンの腹から突き出していた。
「調べさせてもらったよ……あんたを、さ……」
よろけて数歩後退するグレンに、血溜りの中でゲイトが囁くように言った。
「なあ、知ってるか？　毒を作る時は、同時に解毒剤を作るんだぜ……」
メキメキと嫌な音を立て、グレンの内側から植物めいたものが這い出そうとしてくる。同時に、内側に根を張ろうとするようなおぞましい感触。

「あんたの親父さんは、ちゃんと、用意してたんだよ……」
もう限界を迎えるのだろう。ゲイトの声は、聞き取れなくなりそうなほどに儚い。身動ぎひとつしないまま、ただそこに倒れている。
「『解毒剤』って奴を、さ」
なるほど……どうやら彼は、あれからグレンの素性を探っていたようだ。恐らくはトートコーストまで行ったのだろう。グレンはかの国を脱出する時に追われる身であったし、育ての父は名のある神官だったのだから探れないこともあるまい。
そこで、魔物を飼うグレンを封じる手段とやらを見つけたのだろうが。
「『解毒剤』ね……」
ふっと笑う。それきりぴくりとも動かなくなったゲイトを見下ろし、グレンは微かによろけた。
内へ外へと向かう激痛は現実のものであり、額に噴き出す脂汗は止めようがない。痛みが引き起こす痙攣と痺れを堪え、片手を持ち上げる。無理矢理グレンの体から這い出てこようとする枝を、ぐいっと掴んだ。
「まだ、根は浅いようですよ」
もはや聞こえないだろうゲイトに報告をする。そして、力任せに一気にそれを引きずり出した。
臓腑を全て千切りとられたような痛みが脳天へ駆け上がる。赤黒い枝葉は、グレンの黒い体液を纏わり付かせ、粘液質な音を立てた。
「命を懸けたのに、残念でしたね……」
べちょっと言う音と共に、引きずり出された枝が投げ出される。グレンの体を土壌として育とうとしていた魔生の植物は、根を落ち着かせる前に生を断ち切られた。
しかしながら、さすがにダメージが大きい。
それ以上体を支えていられずに、頭上を走る空中廊下の支柱に背中を預ける。そのまま、ずるずると床に崩れ落ちた。少し休めば、内に根ざす魔物の息吹が体を回復させるだろう。だが、それまでは

今しばらく動けそうにない。
琥珀色の瞳に、裂けた腹部から溢れ出す禍々しい体液が映る。人間ではない証拠――神から見放された己を突きつけられる。
尽きてしまった方が、良かったのかもしれない。友人の敵討ちに挑んだその刃にかかって命を落とすのならば、いっそ美しいではないか。
そう思えば、微かに自嘲がこみ上げた。
自身を呪い、それでもなぜ醜くも生き延びようとする？
（セラフィさんの……）
そこに存在意義があるのならば。
所在無く漂うような心許ない己を、この世に繋ぎとめている唯一の存在なのだと、改めて思った。

第3部第2章第5話　ｅｍｉｓｓａｒｉｕｓ（1）

「ラウバル殿」
ラウバルが大神殿へ足を向けると、入り口のところでちょうどガウナと遭遇した。
「レガード様のご様子見でいらっしゃいますか」
相変わらず人心を見通すような深い眼差しに笑顔を湛えている。
ラウバルも足を止め、微かに笑んだ。
「半分は。残り半分は、ガウナ殿にご相談を。……いえ、どちらかと言えば、ご報告か」
「私にですか。怖いですね。何でしょうか」
苦笑して、促すガウナについて行く。
日は少しずつ傾き、大神殿の美しく壮大な建物の向こうから、橙色の光を投げかけていた。風の運ぶ波の音に耳を傾け、ガウナの落とす長い影を見ながら口を開く。
「シェインが、いくつか面倒事を引き連れて戻るかもしれませんね」
今度はガウナが苦笑した。足を止めて振り返る。
「シェイン殿らしい。内容は？　既にラウバル殿のお耳にお入りでしょう」
「モナ。そして、リトリア」
ガウナが笑いを収める。モナとリトリアは、現在ヴァルスが最も関心の強い二国と言える。
再び足を動かしてガウナの脇をゆっくりすり抜けながら、ラウバルは生真面目な口調で続けた。
「モナの公王をシェインが発見したことは、先日お話した通りです。シェインは、ロドリス、そしてリトリアでフレデリクと道中を共にしていました」
「ええ」
「フレデリクは、モナへ帰したそうです」

足を止めてガウナを振り返る。ガウナも、表情を変えずにラウバルを見返していた。
「大丈夫なのでしょうか？」
「さて。私にはわからないとしか答えられませんが、シェインは大丈夫だろうと判断したのでしょう。その判断を信じるしかありません。ただ、ヴァルスとの協力体制を正式に要請したと聞きました」
そこでラウバルは、苦笑いを浮かべた。
「『俺の権限で正式にヴァルスの国意としたから承諾しろ』と。全く、事後報告では承諾するしかない」
手のかかる子供のわがままにつき合っている父親のような言い種に、ガウナも微かに片眉を持ち上げた。笑う。ことがことなだけに荒唐無稽な内容では笑っては済まないが、少なくともシェインが非現実的なことを口走るとは考えにくい。
「条件として、何を提示したのですか」
「課税の減額と海域の拡大です。改めて、フレデリク本人からも通達の書簡が届くでしょう」
「ではモナは、ギャヴァンと海戦で打撃を被ったとは言え、出兵当初の目的は果たせたことになりますね」
「恐らくは」
一度頷いてから、ラウバルは僅かに顔を横に振った。
「しかしあの時とは状況が異なります。仮面の下に要求を隠してさぐり合っていた時期は過ぎ、今はフレデリクとシェインが直の交流を図ることが出来るでしょう。彼らがどのような人間関係を築いたかは定かではありませんが、シェインはそれが出来るはずだと考えています。……ああ見えて、それなりに人情家だ。逆にフレデリクは、シェインを窓口として利益交渉を進めようとするでしょうが」
「それで言いなりになる御仁でもありますまい」
「確かに」
シェインのふてぶてしい顔つきを思い出して、ひとしきり笑う。
それからラウバルは笑いを収め、ガウナに再び口を開いた。

「シェインが帰国し次第、会議を持つことになりましょう。採めますよ」

シェインが重鎮たちとの間に軋轢を持つことは、無論ガウナも承知である。嘆息して頷いた。

「ラウバル殿は、シェイン殿の提示をどのようにお考えですか」

「先にガウナ様のご意見を聞かせて頂ければと。シェインは、フレデリクをモナに帰還させる際に、先の二点を約束してヴァルスとの協力体制を要請しました。具体的には、現在騒動の巻き起こっているリトリアにおいて、シェインの望む行動をモナに帰って取り図れと言うことのようです。無論、のみならず今後の戦況における協力をも含んでいます」

「それぞれ、どの程度の範囲で減額、及び拡大を図るかに寄りますが、それもまたモナの今後の姿勢如何と言うことになりましょう。条件を飲むこと事態に不服はありませんよ。実際、何らかの譲歩を図らなければモナ……いえ、フレデリクに関しては跪かせることは出来ますまい」

「私も、そう考えています。シェインが取るべき手段と提示すべき条件は、他にはありえなかったでしょう。多少の犠牲はやむをえまい。今後拡大していこうとするだろうフレデリクは、シェインに責任を持って阻止してもらうとしましょう」

「リトリアは」

シェイン帰国後の会議を思って再び嘆息をするラウバルに、ガウナが話を促した。

「リトリアがどうなっているか、それは私も深くは存じ上げません。ただ、シェインらと道中を共にしていた女性が……」

一度そこで言葉を切ると、ラウバルはガウナを真っ直ぐ見返しながら声を潜めた。

「リトリア国王の庶子であると」

「何、です？」

ガウナが息を呑む。リトリア国王クラスフェルドの独身は有名で、

女性にだらしない人物との風評はない。壮年で頑健な人物であることから、正式な後継者が設定されていないだろうことにも大きな不安の声はなかった。

しかしそこに庶子がいるとなれば、話は少し違う。その女性が、唯一クラスフェルドの血を受け継ぐと言うのであれば、第一位の後継者は彼女を置いて他にいない。

「それは、事実なのですか」

「まだ今の段階では、そういう情報があるとしか申し上げられません。ただ、リトリアの動向によっては我々にも大きな影響があることかと。そして、同じく見過ごせない情報がシェインの放っていた間諜から」

ガウナがそっと辺りを伺う。周囲に人気はなく、ただ遠くから祈りを捧げる神官たちの声と波音が微かに響くのみだ。誰もいないことを確かめて、ガウナが視線を戻した。

「見過ごせない情報？」

「ええ。それから、ギャヴァンのギルドからシサーらに当てた書簡が届いています。それについても合わせてご報告したい。……どこか、空いている部屋はありますか」

「では、私の部屋へ参りましょう。ご案内します」

止めていた足を改めて神殿の方へと動かしながら、ガウナの視線がレガードを預かる建物の方へと向けられた。つられて、ラウバルも目線を上げる。

「尊師は、中に？」

「ええ。おいでになっておられるようです。回復の兆しを見せられているご様子だと、ちらりとお伺い致しました」

「では、意識が？」

「いえ」

思わず急いた口調になるラウバルに、ガウナがやんわりと否定をする。

「もし明確な兆しが見えたならば、もちろんご報告は上げさせて頂

きます。身体的には変化は見られません。ただ、彼を包む空気に、生気が戻り始めていると」

「そうですか……」

残念ながらラウバルには、そういったものを視る力はない。ただ、ガウナもまたそう言うのであれば、目覚めも近いのだろうか。

僅かずつでも、確かに、状況は変化を見せている。絶望的に思われたヴァルスの立場も、恐らくは少しずつ変わり始めている。

（早く戻って来い、シェイン）

その頃にはまた、何かが大きく変わっているかもしれない。

ユリアが戻り、シェインが戻り、そしてレガードが戻る――その時が、全ての事態に幕が引かれる時なのだろう。

◆◇◆

――……イン

――……シェイン？

声が聞こえる。フルートを奏でているように柔らかく美しい、だが芯の通った幼い少女の声だ。

まだ、眠い。起こさないでくれ。もう少し……。

――シェイン。こんなところでうたた寝をしていたの？

柔らかい黄金色の髪を波打たせ、少女が覗き込む。走って来たのか、陶器のように滑らかな頬には微かな赤味が差していた。

『もう。木登りの仕方を教えてくれるって言ったのに』

ああ、そうだったっけ……それは悪いことをした。

『レガードも待ってるわ。早く早く』

幼いユリアが目の前を駆ける。時折振り返っては、悠長な足取りで歩くシェインに唇を尖らせる。

この光景は見覚えがあった。あれは確か、そう、シェインが十八歳の時だったか。

『ユリア』

シャインカルク城の庭園に綺麗に植え込まれている木々が、つけた花を優しく揺らすのが見えた。
シェインの声に、ユリアが振り返る。軽やかな長い髪が、その動きに合わせてふわりと広がる。
『ユリアは、ヴァルスが好きか』
あの時、自分はどういう意図を持ってその問いを口にしたのだったか。
今となってはもう覚えていないが、自身が迷いを持っていたのかもしれない。国家を担う未来を定められた己の運命への、不安定な葛藤。
『好きよ』
ユリアは弾むような足取りで迷いなく答えた。
『ヴァルスを愛してるわ。だから……』
翡翠色の瞳が、真っ直ぐにシェインを捉えている。身動き出来ずに、シェインはただ黙ってきらきらと輝く宝石のような瞳を見つめていた。
『だから、わたしと共にヴァルスを支え続けてね』
その瞬間に、シェインの居場所は確かにヴァルスと定められたのかもしれない。
不意の風が、ユリアの髪をさらう。木々から舞い落ちる葉が、庭園から舞い上がる花びらが、シェインの視界を遮る。
『ユリア』
『シェイン。ヴァルスに……』

――――――ヴァルスに、戻らなければ。

（ヴァルスへ……早く……）

ゆっくりと浮上する意識と共に、視界に光が射す。

シャインカルクの庭園は白い靄に覆い隠され、差し込んだ光が少しずつ強さを緩めていく。

（ここは……）

薄く開いた視界に代わりに現れたのは、淡い藤色の天井だった。

ひどく高いその天井には、艶(あで)やかな花々が意匠されている。

状況を把握出来ないまま、シェインはゆっくりと視線を動かした。

それなりの広さを持つ部屋だ。壁にはいくつも張り出し窓があり、その全てが黒く塗りつぶされている。どうやら外は暗いらしい。

その窓の一つに、少女が佇んでいる。窓の外へと向き直った彼女の背中には、黄金色の長い髪が下ろされていた。どこかぼんやりとしたまま、シェインは名前を口にした。

「……リア」

喉がはりつき、掠れた声が出る。だが、彼女を振り向かせるには十分だった。

「目が覚めたの」

振り返ったソフィアに、夢から現実へと引き戻される。

彼の愛する主君はいない。ここは――リトリアだ。

「ソフィア……」

掠れたままの声で、改めて正しい名前を呼ぶ。体を起こして片手を額に押し当てると、微かに頭痛がした。

十分な広さと上質さを備えたベッドに、離宮の一室かと想像する。そばまで寄ってきたソフィアは、複雑な表情を浮かべてシェインを覗き込んだ。

いつかもこうして、彼女は傷ついたシェインを覗き込んでいた。

あの時既に、運命はこの道へと続いていたのだろう。

「痛くはない？」

「ああ。誰が処置をしてくれた？」

コルテオに胸を貫かれたはずだ。自分で治癒を施すことなど出来

る間もなかった。普通であれば死んでいる。
今こうして生きている不思議を、シェインはソフィアに解を求めた。ソフィアが傍らの椅子を引き、腰を下ろす。
「ヴェルンケルが。……リトリアの宮廷魔術師が駆けつけてくれた。即死ではなかった自分の悪運に感謝すると良いよ。そうでなければ、陛下と同じ運命を辿るところだった」
コルテオの刃は、急所を外していたと言うことか。身に付けていた防具のせいで、正確に急所を突くことに失敗したのかもしれない。
傷があっただろう辺りに、右手を押し付ける。命を失っていたかもしれないと思えば背筋が寒く、今こうして生きている幸運をファーラに感謝した。
「ただ、強い失血のショックで意識を失っているから、意識を取り戻すのに時間がかかるかもしれないと心配してた。良かった。思いがけず早くて」
「あれからどのくらい経った？」
「丸一昼夜、ってところかな」
一昼夜……そんなに無為な時間を過ごしたかと思えば吐息が漏れ、二度と目覚めなかったかもしれなかったことを思えば別の吐息が漏れる。
「そうか。可能ならば、後で宮廷魔術師殿に礼を述べよう。叛乱は、無事鎮圧されたのか」
「うん。主だった者たちで生き残った者たちは、拘束している。逃れた者たちも追撃をさせている。時間の問題だろう」
意図的にだろうか。ソフィアの表情は硬く、感情が滲まない。胸中に渦巻く複雑な思いを押し殺した精一杯と言うところだろうか。
起こした体でベッドの端に座り直し、シェインは乱れた前髪をかきあげて目を伏せた。
「……コルテオは、どうした」
微かに心が痛む。
シェインとて心許していたとは言わないが、クリスファニアに来

てから頼みの綱としていた相手に命を狙われたとなれば、多少なりと気は塞ぐ。

ソフィアは、答える代わりに顔を横に振った。それを答えと受け止めて、シェインもそれ以上は追及しなかった。駆け付けたと言う宮廷魔術師か、もしくはフリッツァーらが救いの手を差し伸べたのか。

いずれにしても、シェインがこうして命を繋ぎ止め、ソフィアが無事にここにいる。

コルテオの狙いはソフィアだったのだろうか。だとすれば、刃を向けたコルテオが無事で済んでいるはずはなかった。

だが、なぜソフィアを……。

胸の内に渦巻く疑問を見つめ黙しているシェインを、一度口を閉ざしたソフィアが物問いたげに見つめる。

「シェイン」

「何だ」

「ヴァルスへ帰るの」

まだ気だるさの中を漂っている頭を軽く抑え、瞳を閉じていたシェインは、その言葉で目を見開いた。

ゆっくりと視線を戻すと、ソフィアの真っ直ぐな視線とぶつかる。

「……帰るよね」

第3部第2章第5話　ｅｍｉｓｓａｒｉｕｓ（2）

吐息と共に視線が背けられる。シェインの視線を横顔に受けたまま、ソフィアは物憂げな眼差しで続けた。
「あなたは、ヴァルスに必要な人だもの」
「ソフィア」
「ヴァルスの宮廷魔術師なんでしょう」
ソフィアの問いは、思った通りのものだった。やはり知れていたか。フリッツァーだろうか。
予想したほどの動揺は湧き上がらず、ただ、何を言葉にすれば良いか迷った。こちらも敢えて表情を動かさずに吐息をつく。
「悪かった」
「あなたが身元を偽った気持ちがわからないわけじゃない。でも」
言葉を切ったソフィアは、硬い表情のまま続ける。
「リトリアを陥れようとしたわけではないと、それだけは信じさせて欲しい」
「俺がクラスフェルドを手にかけたわけではない。もちろん叛乱を起こしたわけでもない。……俺は、個人として行動したつもりだが」
「……そう」
皮肉な言い方だが、ソフィアは素直に受け入れた。ようやく白い歯を覗かせる。ソフィア自身も、シェインのことを信じたいと思っているのだろう。
しばし沈黙の時間を漂ったが、やがてソフィアの言葉が会話を引き戻した。
「それで、その」
サイドテーブルの上からポットを取り、カップに水を注ぐと一脚こちらへ差し出す。それを受け取ってシェインが口に運ぶのを見つめながら、ソフィアは躊躇いがちに、歯切れ悪く口を開いた。
「エディは……？」

掠れた細い声に目を上げる。カップを下ろし両手で支えながら、不安定な心情が滲み出しているソフィアに、シェインは眉根を寄せた。

「エディは……」

その原因に思いを馳せつつ、口を開く。ソフィアは、エディに何らかの思慕を寄せているのだろうか。

そう気づけば不憫であり、複雑だった。

ソフィアはリトリアを継承するだろう。となればモナ公王に思慕を寄せるなど、気楽な話では済まないに決まっていた。結論としてはどうにもならないと言うことは知れている。

「自国を治める為に、帰国した」

努めて感情が滲まぬように伝える。理解が出来なかったらしいソフィアは、長い睫毛を瞬いてシェインを凝視した。

「え？」

「エディは、モナ公王としての責務を果たすべく、自国へ帰った。いや、俺が帰したと言うのが正しいかな。クリスファニアまでは俺と共におぬしの行方を追っていた。リトリアの状況を知るに連れて、そしてエディがモナ公王であることを踏まえるに、クリスファニアに置いてはおけないと言う俺の判断だ」

一気に言い切る。ソフィアはまだ飲み込めないと言うように表情を凍り付かせていた。

「フリッツァーがどう動くかも読めなかったゆえ、ソフィアを救い出す為に手勢が必要と考えてのことでもあった。どうやら、思うほど連携は取れなかったようだが」

結果としては、フリッツァーと言う同じ意志を持つ人間が手勢を従えてクレーフェ邸を襲撃していたので事なきを得ることが出来た。たが、もしもフリッツァーがいなければ、手勢のいないシェインにはどうにも出来なかっただろう。

結果オーライとして見過ごすわけにもいかない。それについては改めてエディと話す必要がある。ヴァルス官僚として、モナ公王フ

レデリクと。
ここから先は、共に旅した友人ではいられまい。――外交だ。
そう考えて微かな苦味を覚える。ソフィアはソフィアで、別の苦味を覚えたのだろう。困惑を纏わせたまま、顔を歪めて目を伏せた。
「モナ、公王……？」
「ああ」
「嘘でしょう……？」
形ばかりの問答であると言うことは、シェインの雰囲気で既に察知しているのだろう。だが、確かめずにはいられないと言う表情でソフィアが問いを発する。
「事実だ」
それきりソフィアは、またしばらくの間、黙った。その胸中は推し量ることが出来ず、シェインも視線を逸らす。
「そうか」
やがて、重さを孕んだ沈黙の中、ソフィアがぽつりと呟きを落とした。その声に顔を上げるが、ソフィアの表情には何の感情も読み取ることが出来なかった。
それを見て、ユリアを思う。
国という一大事の前に押し潰されていく個人の感情。だが、それを乗り越える強さを育てなければ、人々の生活を支えることなど出来ないのかもしれない。
彼女たちは、普通の女性としての幸福を犠牲にして国を率いていくという重荷を背負っている。
しかし、自身が幸福を得ずして、人々の幸福を支えることなど出来るだろうか？
取り留めのないことを考えながら、シェインは口を開いた。
「ソフィア」
もう自分がリトリアですべきことはないだろう。
後はヴァルスへ戻り、一刻も早く己の職責を果たすことだ。
「これまでは一個人だった。ここからはヴァルス官僚として尋ねた

い。答えたくなければ答えなくて構わない」
「何」
「ソフィアは、リトリアを継承するのか」
シェインを見返す栗色の大きな瞳が、微かに動揺を浮かべる。だが、大きく息を吸い込んだソフィアは、動揺の色を消し去って強く頷いた。
「リトリアは、わたしが継承する」
「では、結果として叛乱軍の思い通りの展開になったわけか」
クラスフェルドを片付け、代わりに年若い女性であるソフィアを戴いて権力を握る――叛乱軍が目論んだのは、結局のところそこなのだろうから。
だが、ソフィアは唇を噛んで強い怒りを瞳に浮かべた。その怒りが向けられているのは、シェインではないだろう。恐らくは叛乱に加担した者たち、父王の命を奪った輩、そして救えなかった自分。
「思い通りの展開になどなるものか。王を弑逆して事態の転換を図ろうなど、思い上がりも甚だしい。わたしを押し上げて権力を自ら握るつもりだったのだろうが、そうはさせない。残念なことに、わたしは思い通りになるほど大人しい性格はしていないんだ。父に背いた罪は償ってもらう」
「見込み違いだったってところだな」
苦笑をするシェインに、ソフィアは鼻の頭へ皺を寄せた。
ソフィアの性格は、アルノルトらも掌握済みだっただろう。だが恐らく彼らの計算違いは……。
「そうすんなりといくのか」
「どういうことだ？」
「多くはことの事態を知らぬ者ばかりだろう。おぬしが簒奪を企てた首謀者だと言う者も出てくるだろうし、身元不確かだと罵る者も出るのではないか」
「義父が……フリッツァー卿が、わたしの後ろ盾についてくれる。クリスファニア伯もだ。フリッツァー卿は、生前の父から直筆の遺

言書も預かっていた。それが、何よりもわたしの後ろ盾となってくれるでしょう。父は、わたしを後継者として天に定めた」

彼らの計算違いは、恐らくそこだ。フリッツァーがシガーラントから駆けつけること、そしてクリスファニア伯が手を貸しているということ。

フリッツァー卿はかつて元帥でもあったほどの有力貴族だ。そしてクリスファニア伯アレマンは言わずもがなである。宮廷魔術師もこちら側についているようだから、恐らくは上手く立ち回ってくれることだろう。

そう信じられて、シェインはほっと安堵の息をついた。それを見て微かに笑いを漏らしたソフィアは、やがて表情を引き締めなおして口を開いた。

「シェイン」

「何だ」

「良かったら、義父に会って欲しいのだけれど」

「ああ……？　それはもちろん構わないが」

「そう。良かった。義父が話したいことがあるそうだ。……行こう。別室であなたを待ってる」

◆◇◆

ソフィアについて部屋を出る。

改めて確認すると、体に不具合はなく、損傷した衣服も新しいものに取り替えられていた。

被害が及ばなかった建物なのだろう。見る限り荒れた様子のない整えられた通路を歩く。外からは、未だ怪我人の救助や後始末に追われる喧騒が響いていた。

窓の外に広がる暗い夜空に、中天を過ぎた月が見える。もうじき朝が来るのだろうか。

「シェイン」

「ああ」
「義父は、あなたを信じた、と言っていたよ」
前を歩きながら、ソフィアが微かに顔を振り返る。それを見て、シェインは苦笑を浮かべた。
「疑問だ」
「疑問？」
「なぜ信用してくれたのか、俺にはわからない」
正直に言って顔を横に振ると、ソフィアが僅かに目を細めた。それから顔を前に向き直る。背中で揺れる長い髪を眺めながら、シェインは回答を待った。
「一つには、義父が信用しているクリスファニア伯が、あなたを使うと決めたからだと聞いている」
「アレマンか」
「そう。クリスファニア伯は、絶対的に国王――クラスフェルド陛下を敬愛していたコルテオが、あなたを使いたいと言ったからだと」
「……ほう」
コルテオの推奨がアレマンの意志に繋がり、それがフリッツァーの信用へと導いている。それは間違ってはいないようだ。
「他の理由としては？」
ソフィアが『一つには』と言ったことが気にかかり、シェインは更に促した。ソフィアが小さなため息を落とす。
「あなたが、ヴァルスの宮廷魔術師であるとわかったこと」
「……エルレ・デルファルかな」
「そう。ごめんなさい。義父が無理を言ったみたい」
「それについては、エルレ・デルファルに俺の情報があると思わせてしまった俺の落ち度だろう。だが、それが俺の信用に繋がった理由がわからんな」
ヴァルスを動かす黒幕の一人と知れれば、リトリアとしては警戒するのではないだろうか。そう思ったことが身分を伏せてきた理由である。

「まず、ヴァルスと言う国の高位官を務めていると言うことで、野蛮な人間ではないと言う判断がある」
「それは買い被り過ぎと言うものだろう。下劣な人間だって、身分があって上手く立ち回れば高位につくさ。ヴァルスにだってその程度の人間は山ほどいる」
「あなたはそうは見えない。それに、宮廷魔術師である人間が、もしも身分を伏せて卑劣な行為をしたとすれば、後で露見した場合にヴァルスと言う国の品位を落とす。義父は、あなたはそのことを知っていると判断した。……知っていると思うけど、リトリアには元々、反ヴァルス感情を持つ人間は反ロドリス感情を持つ人間より多くはないんだ」
失笑するシェインに、ソフィアは柔らかく、しかしながら真っ直ぐに応じた。
「では、そもそもコルテオが俺を受け入れた理由は何なんだ？　アレマン卿とフリッツァー卿にはどのような関係がある？」
一つの扉の前でソフィアが足を止めた。シェインの問い掛けに、緩やかに顔を横に振る。振り返りながら、ソフィアはドアノブに手を伸ばした。
「それは、義父から聞いて。……ソフィアです。入ります」
ノックに続いた中からの返事に、ソフィアが扉を開けた。
胸の内に残る疑問は幾つかある。コルテオは何を思ってシェインを登用し、そして片付けようとしたのか。フリッツァーとアレマンはどのような関係なのか。ソフィアが継承した後、彼女はリトリアをどうするつもりなのか。エディがモナ公王であった事実を、ソフィアはどう受け止めたのか。――ヴァルス官僚として自分は、ソフィアやフリッツァーに何を言えるのか。
ソフィアに続いて中に入ると、部屋の広さはシェインが寝かされていた部屋と同程度だった。中央のテーブルセットはゆったりと置かれ、壁沿いにチェストや多少の装飾品が置かれている。
「怪我の具合はどうだ」

ソファの一つに掛けたフリッツァーが、シェインに微笑みかけた。ブレストメイルを除いて、武装解除されている。
「掛けなさい」
促されるままに、向かい合う形でソファに腰を下ろす。ソフィアは窓際の壁にすとんと寄り掛かり、顔を傾けるようにして外を見遣った。
「ソフィア様も」
「いえ。わたしはこちらで。話を聞いています。お気になさらず」
静かに顔を横に振るソフィアに、フリッツァーもそれ以上無理強いはしなかった。小さく頷いて、日に焼けた精悍な顔をシェインに向ける。
「体の調子は良さそうだ」
慎重に口を開き、シェインは先ほどの問いに答えた。
「聞けば宮廷魔術師殿のご助力があったとのこと。差し支えなければ、後ほど礼を述べたい」
「わかった。後で呼ぼう」
「あなたが俺を呼んでいると伺ったが」
シェインの言葉を受けて、フリッツァーが深く頷いた。
「まずは、私から礼を述べたい。ソフィア様の安全を守る為に力を尽くしてくれたこと、感謝しよう」
「礼を言われるほどの役には立ってないな。何せ……」
ちらりとソフィアを見ると、ソフィアが目を瞬いてこちらを見返してきた。その顔を見て苦笑が零れる。
「逃げられている」
「あっ」
ソフィアの顔色が赤くなった。大声を上げてしまった自分に、広げた手のひらで慌てて口を押さえる。これまでの重々しい表情が瞬時に掻き消え、それを見たシェインはようやく少しリラックスした気持ちになった。
「加えて、肝心の時には俺が瀕死の重傷だ。結果として何をしてや

れたわけではない」
「ごめんなさい。逃げたのは、その、本当に悪かったと思っている。だけどもわたしは……」
「わかっている。別に責めているわけじゃない。今はな。さっきは責めるを通り越して、胸の内で罵ったものだが」
「ちょ……」
「クラスフェルド陛下は、防衛の指揮を務めていたのだな」
フリッツァーに顔を戻しながら確認をする。無言で頷くのを見て、思わず深い吐息をついた。
クラスフェルドが、部下に全てを任せて自身は後宮の奥に引っ込んでいる人物であったら、もしかすると生き延びたかもしれない。ソフィアがクラスフェルドに進言出来なかったのは、恐らくクラスフェルド自身が最前線で戦っていたせいだろう。一段落がついたあのタイミングで上手く遭遇出来たものの、僅かな差でフラクトルの方が早かった。
フラクトルが、あれほど切羽詰った状況まで待っていた理由は何だろう。本人が死してしまっている為に確認のしようがないが、もしかすると迷いがあったのだろうか。信義を貫くか、裏切るかの葛藤。クラスフェルドが心許す腹心――それだけの信頼を勝ち得るには、相応の関係を築いている必要がある。フラクトルの方でも、クラスフェルドに対する深い敬愛があったのは間違いないのだろうから。
「コルテオの狙いは、ソフィア様だった」
無言で考えていると、フリッツァーがぽつりと口を開いた。意味を図りかねて、シェインは眉根を寄せた。
「コルテオは、国王を敬愛していたのだろう」
「そうだ。敬愛していたのはクラスフェルド陛下――しかしながら、ソフィア様の継承は受け入れていなかったと言うことだ」
「……何？」
思ってもいなかったことを言われ、フリッツァーを凝視する。フ

リッツァーは表情を変えず、意図的にか淡々と語った。
「恐らくは、クラスフェルド陛下のお命が狙われるというこの事態も、ソフィア様の存在如何と考えていた節がある」
そこまで聞いて、思わず声を上げそうになった。自身がコルテオに向かって口にした言葉が蘇る。
――だからこそ国王手の内にとっては不要ではないのか。

第3部第2章第5話　ｅｍｉｓｓａｒｉｕｓ（3）

コルテオこそが、まさしく『国王の命との天秤と差し迫れば、いっそ消してしまおうとする輩』であったと言うことか。ソフィアの身柄を確保して事態を収める為に、想いを寄せているらしい外国貴族を猟犬に仕立て上げたと考えれば納得がいく。クラスフェルドが息を引き取って尚、シェインを片付け、ソフィアを狙おうとしたのは、全ての事態を引き起こしたその怨嗟と言うところか。シェインのことは、要するにソフィアを片付けるに際して邪魔となると判断したのだろう。

胸の内で組み立てて合点をいかせながら、シェインはソフィアを振り向いた。栗色の大きな瞳が、悲しげな色を漂わせて微かに笑う。

「無理に仕立て上げようとしたり……逆に存在を消してしまおうとしたり……全く、忙しいな」

「それが、国の中心部だ。悲観するな。敵ばかりでもなかろう」

さりげなく言いながら、フリッツァーに真っ直ぐな眼差しを向ける。

「ここにおられるフリッツァー殿筆頭にな」

「無論」

「アレマン卿も、ソフィアの味方だろう？」

「ああ」

「あなたにとって、無条件に信用出来る相手だったか」

視線を逸らさぬまま、探るように問い掛けると、フリッツァーは目を伏せるようにして口元に笑みを刻んだ。

「アレマンは、ソフィアの母親の、父親だ」

想像していなかった関係性に、シェインは一瞬腰を浮かしかけた。母親の父親……では、ソフィアにとって祖父にあたる人物ではないか。

「アレマンが若かりし頃、傍仕えの侍女に生ませた子がソフィアの

母親だった。残念ながら彼女は産褥の床で死に至ったが、ソフィアの母親は元気に生まれた。だが、正妻から疎まれてな。私の元で侍女として引き取った」

「では、ソフィアの母親は……」

「アレマンの娘で、私の傍仕えの侍女だ」

元帥であったフリッツァーの屋敷で、クラスフェルドはソフィアの母と出会ったのだろう。そうして身分違いの恋で身籠った娘を、クラスフェルドは信じられる部下に預けた。

陰謀が目論まれた時、フリッツァーにシガーラントを与えたのは、彼の身を慮ってのことだったのかもしれなかった。

少なくとも、クラスフェルドにとっては追放ではなかったのだろう。恐らくはフリッツァーもそう理解していたのではないだろうか。

「この先、リトリアはどうするつもりだ。……ソフィア」

深く息をついて背もたれに深く体を預けると、シェインは顔をソフィアの方へ振り向けた。壁に寄り掛かったまま、ソフィアが静かにこちらを見返す。

「わたしがリトリアを立て直す」

「俺をここへ呼んだ理由は？」

今求められているのは、一個人としてのシェインではない。ヴァルス宮廷に権力を持つ存在としてのシェインだ。

ソフィアは、身動ぎせずにシェインを見返したまま、口を開いた。

「ヴァルスには、我々リトリアへの不干渉を要求する」

「それは、継承戦争からリトリアは手を引くと言う意志と受け取って良いのかな」

「そう。わたしたちリトリアは、戦争への関わりを望んでいない。少なくとも今のところは。わたしたちは、わたしたちの国内をきちんと整えなければならない。リトリアは継承戦争から手を引く。それに対して、ヴァルスはリトリアへの干渉を一切しないで欲しい」

リトリアとしては、中枢部が混乱を極めた状態である。シェインがそれを知っていると言うことは、ヴァルスがそれを知ると言うこ

とでもある。弱っているところをヴァルス軍に攻められれば、ソフィアとしては立て直すどころではない。その憂いを絶っておきたいと、そういうことだ。

「つまり、モナにもリトリアから手を引かせろと言うことだな」

淡々とした口調で確認するシェインに、ソフィアが硬い表情で頷いた。フリッツァーが後を引き取る。

「まだ未確認の情報ではあるが、国境において陛下が送り込んだ一団がモナとの戦闘を展開しているらしい。聞いた話ではヴァルスの援軍、そしてリトリア軍の暴虐を受けた集落から生き残った人間を集めて戦いを挑んでいると聞いている」

襲撃を直に経験している人間は、その復讐心を煽ってやれば果敢な戦士となる。目の前で妻や子供を陵辱されたり殺されたりした男たちの怒りは、計り知れない。兵力の不足を、エディは怒りと言う燃料で補ったと言うわけだ。

「決着はまだか」

「恐らくは。その軍を、我々は呼び戻す。モナにもリトリアから撤退してもらいたい。ヴァルスからは、それを強制出来るだろう」

「それはどうかな……」

シェインは微かに顔を顰めた。フリッツァーの耳にはまだ入っていないのかもしれないが、モナには公王が戻っている。もちろんヴァルスとモナの力関係がそう簡単に変わるではないが、エディが君臨した以上は今までの暫定政権のようにヴァルスの完全なる言いなりにはならないだろう。

「大体、ロドリスがそれを許すのか」

「ロドリスとの交換条件を撤回し、中立を約して交渉にあたる。……繰り返す。我々は継承戦争から全面撤退する。ゆえに、ヴァルスも今後戦争が終結するまでリトリアには不干渉を貫き、モナにも撤退を要求する」

「いいだろう。俺が交渉窓口として、リトリアの意志はヴァルス宮廷に持ち帰る」

またラウバルに奏上しなければならない事象が増えた。だがまあ、それも仕方あるまい。ヴァルスとしては、リトリアが撤退を明言するのは望むところなのだから。

頷くシェインにソフィアがほっとしたように相好を崩した。

「後ほど、書面は纏めさせる。わたしは、ヴァルスとの良好な国交を望んでいる」

「それはありがたいな。今後もその方針を貫いてくれることを祈っておこう」

「離宮の外に安全が戻ったら、アレマン卿の館に案内させるよ。準備が整うまで、そちらでの滞在を願う。少し、先ほどの部屋で待ってもらうことになるけれど」

「わかった。……フリッツァー卿」

話すべきことは終えたと感じ、ソファから立ち上がる。共に腰を上げたフリッツァーに、シェインは片手を差し出した。フリッツァーがそれを受ける。

「ソフィアを、支えてやって欲しい」

「言われずとも」

「シェイン」

背を向けかけたシェインに、ソフィアが追うように口を開いた。

「ヴァルス王女……いえ、女王？　彼女は、わたしと同年代と聞いた」

「ああ。そうだな」

「父王が身罷られてのこの騒動、わたしは深く共感し、そして同情する。今は手を貸して上げられる状況ではないけれど、共に女性同士――いつか、協力体制を築くことが出来たらと思う。……そう、伝えて」

女性ならではの柔らかく温かな言葉に、シェインはふっと口元に笑みを刻んだ。

激震する帝国に君臨する女性同士、確かにわかりあえるかもしれなかった。

国と国との関係の第一歩は、人と人だ。
「必ず伝えよう」
ドアの前まで来て、歩みを止める。
「シェイン。……ありがとう」
ソフィアとフリッツァーに一礼して部屋を出ると、シェインは表情を引き締めなおした。
クラスフェルドの崩御と有力貴族らの叛乱で崩壊したリトリアは、フリッツァーとアレマンを後ろ盾とするソフィアの即位で次の時代に向けて動き出す。
ヴァルスへ帰ろう。
己の立場に立ち返り、後は全ての事態に決着をつけるだけだ。

◆◇◆

ヴァルス王国ハンネス盆地は、底の平らな碗型をしている。
なだらかに隆起している東側の丘に布陣したヴァルス軍を統括するのは、王都レオノーラより派遣された貴族クルシュマンだった。
五十代に手が届こうと言う壮年の将軍は、これまでも幾多の戦陣に参加して指揮を経験している。
それを補佐するのは、ラルド要塞の将軍ガーフィールである。
ロンバルトにおいて宮廷魔術師シェインを失い、連合軍とヴァルス軍の戦いに合流することも適わず、自らが掌握していた要塞をも失った。彼自身としても、ここは何としても勝利を収めたいところである。
見下ろす盆地には、リトリア軍の陣営が見える。
小競り合いは繰り返しているものの、未だ大きな決定打はない。
高度に布陣しているこちらに対し、攻めあぐねていると言うのが実情だろう。
だが、いつまでもこうしてぐずぐずしてはいられないとわかっている。

ヴァルス陣営の遥か後背には深い森が広がっており、そちらの方角――西側からはナタリア・バート軍がこちらへ向かって進軍しているとの情報があった。まだいつ頃到着を予定しているのかは定かではないが、目の前のリトリア軍と連動しているだろうことはわかっている。

届いた情報によれば、ナタリア・バート軍の総勢は、およそ三万弱と聞いている。リトリア軍と合わせれば、その勢力は五万の大軍ともなる。

援軍が到着する前に、リトリアに決戦を挑んで活路を見出すか――そう決意しかけていた時だった。レオノーラより、ラウバルからの情報が届いたのは。

「何……？」

ハンネス盆地で行われた戦いの報告を携えた使者は、セラフィとユンカーの視線を受けて身を縮こまらせた。

それから、滝のような冷や汗と共に、再び言葉を押し出す。

「で、ですから、その、ハンネス盆地の会戦では、リトリアとバートの同士討ちとなり、更に糧食に火を放ったヴァルス軍は、ロンバルト軍の迫る方面を避けてどこかへ移動してしまった模様で……」

刺すような険しいセラフィの視線に耐えかねると言うように、使者は深く頭ごと視線を落とした。その様子を見遣りながら、さすがに怒りを隠すことが出来ない。

報告の概要は、こうだ。

リトリア軍、そしてナタリア軍の離脱したバート軍は、ヴァルス軍を間に挟んでそれぞれ東と西に位置していた。ナタリアの離脱を悟らせぬよう、バート軍にはナタリア軍の国旗も携えさせ、連行している捕虜にはナタリア軍の装備を身に付けさせた。圧倒的勢力による挟み撃ちで、ヴァルス軍の士気を地に落とす目的がある。とも

すれば、逃亡兵を誘致することも出来うる。
だが、日の光の下ではこけ脅しの勢力と見破られかねない。
そこで、リトリア軍と連動してバート軍に夜襲をかけさせたのだ。
偵察に出ていたらしいヴァルス軍の一部と遭遇したバート軍は、それを好機と捉え、即刻攻撃を開始した。僅かな兵力しかその場にいなかったヴァルス軍はすぐさま撤退し、自軍へと引き返した。もちろん逃すまいと、闇の中、後を追ったバート軍はヴァルス軍と遭遇し、そのまま乱戦にもつれこんだ――はずだった。
だが、気がついてみれば、バート軍と戦っていたのはリトリア軍だったと言う。
途中で異常が発覚して双方剣を引いたものの、両軍被害は決して少なくはなかった。特にバート軍は、莫大な被害を蒙ったと言う。
「それは一体どういう……」
「バート軍と遭遇したヴァルス軍とやらが、要するに陽動だったんでしょうね」
使者を下がらせ、困惑顔のユンカーの問いに答える。
「バート軍が夜襲を仕掛けてくる前にヴァルス軍本隊は移動を開始し、それを悟らせない為にバート軍と遭遇するよう遊撃部隊を派遣した。もぬけの空の元ヴァルス陣営にリトリア軍が辿り着いた頃、バート軍を引き連れたヴァルス遊撃部隊が戻ってくる。リトリアはそれとは知らないから、ヴァルス軍の襲撃と勘違いして戦闘態勢に入る。そうして引き連れて来たバート軍との乱戦状態に持ち込んでから糧食に火を放ち、当のヴァルス軍は闇に紛れて行方を晦ます」
説明しながら、セラフィは次第に目を細めた。ユンカーが深いため息を落とし、椅子にどすんと背中を預ける。
「何てことだ。向かった方角としては、南でしょうか。ロンバルト軍と遭遇していないと言うことは……」
「ロンバルト軍の南下を知っていて、避けたのだとすればどうします？」
セラフィにしては珍しく、険しい表情を崩さぬままに問い掛ける。

ユンカーが背もたれから僅かに体を浮かした。セラフィをぽかんと見つめる。
「え？」
「整理しましょうか。ヴァルス軍は、リトリア軍とバート軍に夜襲という形で挟撃されるのを避ける為に一芝居打った。それが、バート軍と遭遇した遊撃部隊であり、リトリア軍との乱戦に持ち込んだ役者です」
「ええ」
「当の本隊は、現在位置不明。北からはロンバルト軍二万が南下して来ているのだから、ヴァルス本隊が北上したのであればどこかで遭遇するはず。だが、まだその報告はない。南下した可能性がありますね」
「はい」
「しかし、ヴァルス軍は本来リミニ要塞を防衛する為に布陣していたはずです。ならば方角的には北上すべきであり……もしも南下したのだとすれば、理に適わない。背に腹は変えられないと、一時撤退を図ったと考えられます。無難でしょうね。北上すれば、ロンバルト軍と遭遇して戦闘にもつれこんでいるところを、罠に嵌めたリトリア・バート軍の追撃にさらされかねない。全滅です。リミニ要塞の援護どころではない」
説明しながら、ある可能性に確信が増し、険しさが増していくのを止められなかった。セラフィの言葉を聞いたユンカーも、次第にその意味に気がつき始めたらしい。見開いた目に、緊迫の色が浮かび始める。
「セラフィ殿。お待ち下さい」
「……何ですか」
「なぜ、ヴァルス軍はそれほど正確にたった一つの抜け道を掴むことが出来たんです？」
――そう。問題は、それだ。
もちろんヴァルス軍だって周囲の情報を掴む為に、陽動ではない

本物の偵察隊も飛ばしているだろう。
だが、戦地で掴める情報には限りがある。しかしながらこの動きは、連合軍の動きや状況を正確に掴んでいなければ出来ることではない。ロンバルト軍が現在南下していることを知らなければ、ヴァルス軍は北上するのが適切だ。
それが意味するものは、何か。
「情報を流している者がいる」
ヴァルス軍は、事前に連合軍の動きを知り得たのだ。だからこそ、罠に嵌めて自らは行方を晦ますなどと言う芸当が出来たに違いない。
だが、誰が？　ヴァルスに情報を横流ししている人間は、どこにいる？
ハーディン城の人間か。それとも現地か。あるいはリトリア、ナタリア、バート、ロンバルト……いずれの国かもしれない。最も在り得るのはロンバルト……。
（……何だ？）
考えを巡らせながら、同時にこれまでの出来事を脳裏に蘇らせていく。浮かんでは消える情報や言葉を次々に送り、不意にセラフィは表情を凍らせた。
蘇った一つの光景に、深く覚えた違和感。
あの時は気がつかなかった。いや、一瞬の違和感は感じたのかもしれないが、気に留めることもなく受け流した。なぜならば、その時は違うことに気を取られていたからだ。
ロンバルトの宮廷魔術師が捕らえた、ヴァルスの宮廷魔術師の身柄をどう扱うかについて考えることで手一杯だった。
だが。
記憶の中の声が耳に鮮明に響いた時、セラフィは戦慄を覚えて立ち上がった。
――……今はまだ、ご無事なのですね。
その言葉は一体、誰に対して敬意を表していたのだ？　誰を案じての言葉だった？　ほっと息をついた安堵の横顔は、何の為だ？

時として言葉は、真実の心を吐露することがある。
（そうか……お前か……）
爪が手のひらに食い込むほどきつく握り締めた両手を、テーブルに押し付ける。
ユンカーが唖然としたようにセラフィを見つめた。
「セラフィ殿？」
「心当たりを見つけましたよ。情報を流している人間に」
セラフィは、きつく唇を噛み締めて空を睨み据えた。
あらゆる情報を知ることの出来る立場にいる。王城にいるのだから使者に困ることもない。
まだ可能性の一つ……だが、見過ごすことの出来ない可能性だ。
（――アークフィール……っ！）

第3部第2章第6話　神の指先（1）

整備されていない荒い道を走る馬車は、ひどく揺れる。
荷物と一緒に詰め込まれた狭い荷台の隅で、俺はまるで影のように静かに座っていた。
少し離れた位置に座っているシサーもジークフリートも、顔に疲れを浮かべて沈黙している。
氷竜にやられた傷が回復するまでには、実に二ヶ月の時間がかかった。しばらくの間、魔術師や聖職者の手を借りられなかったことが理由の一つだ。おかげで、俺の背中や胸、腕、そして額には消えない傷跡が残った。……シサーの頬傷のように。
一度傷跡として体に刻み込まれると、もう魔術で消すことは出来ないらしい。幸いなのは、俺の場合、全て髪や服で隠れる場所だったことだ。
荷台を覆う幌の隙間から微かに覗く外を、ぼんやりと見遣る。初めて見るナタリアの村は、まだ氷竜を恐れているかのように、ひっそりと静かだった。
一際がくんと大きく車体が揺れ、馬車が停まる。眠っているようだったシサーが、目を開けて顔を上げた。
「ついたか？」
「あーっ。やっと動けますねえー」
思い切り伸びをするジークの言葉を裏付けるように、幌の隙間から女性が顔を覗かせた。パララーザのシリーだ。
「お疲れさん。今日から数日は、ここでキャンプだ。さ、降りて手伝っとくれ」
車内を見回すシリーの視線を受けて、俺も立ち上がった。

氷竜に襲われたツェンカーは、しばらくの間、修復作業に追われていた。街の修復はもちろん、人々も心身共に大きな傷を負っている。

人手はいくらあっても足りることはなく、俺も動けるようになってからは、リハビリも兼ねて作業を手伝ったりもした。

ユリアやニーナ、そしてレイアは、一足先にヴァルスへ向けて旅立っている。

ツェンカーが手を貸してくれると言う話がまとまった以上、ヴァルスの国主を俺が回復するまでつき合わせているわけにはいかないからだ。

ユリアは俺をひどく心配してくれて、治るまではそばにいると言ってくれたが、シサーが説得してくれた。

シサーが代わりに俺のそばに残ってくれて、ユリアの護衛を兼ねたセルやアレン率いる数名の部隊と共に彼女たちがヴァルスへ向けて経ったのが、二ヶ月半ほど前だ。

ようやく剣も持てるかと言うところまで身体能力が回復して、シサーそしてジークの三人でツェンカーを経ったのが二週間ほど前。

今回はユリアがいるわけではないから、必要以上に安全性を求めることもない。戦争の状況を少しでも知ることが出来たら、と言う意味もあり、ナタリア経路での南下を行路としている。

その道中で偶然遭遇したパララーザと、せっかくだから同道していると言うのが今の状況だ。つくづくシサーは、パララーザと縁があるらしい。

「ここは、何て町なのかな」

荷台を降りて、誰に問うでもなく小さく呟く。聞こえたらしいシサーが、俺を振り返った。

「ナタリアのパレスだ。町って言う規模じゃねえな。どっちかってぇと、村だ」

俺たちが降りたのは村の広場のような場所だ。今まで俺が行った国のように、ここも例に漏れず許諾された馬しか騎乗が許されない

が、キャラバンは大目に見てくれることが多い。
シリーにハッパをかけられながら、積み荷を降ろしていく。ここに至るまでに立ち寄った町や村で数回手伝っているから、大分手慣れてきた。こうして仕事を手伝うことで、少しは借りを返せているだろうか。
キャンプを設営し、人々に商品を売る『店』にあたる部分、商品を置いておいたり仕分けたりする『倉庫』の部分、そしてパララーザの人が休憩したり寝泊まりする『宿』の部分を組み立てていく。その間にも、女性たちが呼び込みの声を上げ、広場はにわかに活気づいていった。
「カズキ」
裏で仕分けた商品を、表の方へ運んでいると、シリーが通りからこちらへ向かって来た。両手で木箱を抱えたまま、足を止めて待つ。
「あんた、今日は裏を手伝ってやってよ」
「わかった」
とりあえずこれだけ運んでしまおうと、短い返事の後、再び歩き出す。その背中を、シリーのぼやきが追いかけてきた。
「すっかり愛想なしになっちまったね。せっかくの佳いオトコが台無しだよ」
無言のまま振り返ると、シリーは呆れたような何とも言えない表情で俺を見ていた。
「そんな冷たい目つきをしてたら、お客がびびって逃げちまう。ここにいる間くらい、にこやかにしとくれよ」
「……裏方なら、愛想は必要ないだろ」
それだけ答えると、俺はさっさと背を向けた。背後からシリーのため息が聞こえた。
表へ木箱を運び、再び裏へ足を向ける。商品の仕分けをしているテントを覗くと、俺と同世代の少年が一人いた。
「一人だけ？」
尋ねながら足を踏み入れる。少年は、衣類の中に埋もれるように

して、俺を見上げた。そばかすの浮いた、人の良さそうな顔に笑みを浮かべる。
「はい。後はみんな、この裏で食材の仕分けの方をやってると思います」
「ふうん」
「僕はまだ入ったばかりで、食材の見分けは難しいからって」
だったら、俺もこちらを手伝った方が良いだろう。
そう判断して、俺は少年に近づいた。見覚えはあるが、名前までは知らない。
「じゃあ俺もこっちを手伝う。何をすれば良い？」
「この袋の中の衣類を分けて下さい。そっちの木箱が男性、隣が女性。一番手前が子供です。それから、そっちの麻袋が、粗悪品。売るか売らないは僕には判断出来ないので、後でまとめてラグさんに見てもらいます」
指示を受けて、俺は手近な袋を引き寄せた。なかなか大きな袋で、中身が詰まっている状態だと一抱えはある。
開けると、微かにすえたような臭いがした。あちこちから集めている衣類のほとんどは中古品だ。だが、中流・上流階級の中古品は、下層民にとって新品より贅沢な布地が使用されている。
テントの外に、売り買いを行う賑やかな声を聞きながら、黙々と作業を進める。気候はまだ寒いが、こうして衣類に囲まれて手を動かしていると、気になるほどでもない。
「カズキさん」
機械のように作業を続ける俺に、少年が呼びかける。名乗った覚えはないが、俺の名前を知っているらしい。顔を上げると、少年は少しはにかんだように笑った。
「僕は、ハヴィです。カズキさんって、僕と同年代くらいですよね」
遅ればせながら気がついたように自己紹介をすると、ハヴィは手元の布に視線を落としながら微笑んだ。
「だけど、落ち着いてますよね」

「……」
「魔物に遭遇しても、頼りになるし。僕なんて、剣の使い方もまるでわからないから頼りなくて」
パララーザと合流をしたのは、ツェンカーとナタリアの国境を越えた辺りだ。そこからここに辿り着くまでに、幾度か魔物に襲われている。氷竜がいなくなって、身を潜めていた魔物たちが、最近になって少しずつ活動を始めたと言うことらしい。
抑圧されていた反動からか、北部は魔物が少ないと聞いていた割には、なかなかの遭遇率だった。
「僕と同じ年頃なのに……僕も、そんなふうに落ち着いて魔物と戦ったり出来たらいいんですけど」
そう言ってハヴィが微笑んだ時、テントの入り口から女の子が顔を覗かせた。赤毛の長い髪をポニーテールにした、明るい雰囲気の子だ。彼女も俺らと同世代だろう。
「ハヴィったら、こんなとこでサボってる」
「サボってないよ。ちゃんと仕事してるじゃないか」
ハヴィが唇を尖らせた。ふてくされたように、手近な布を引き寄せる。
「カズキさん、使えなかったらビシビシ怒ってあげて下さいねっ」
彼女も俺のことを知っているようだ。無言で見つめる俺に、何だか少しあたふたしたように視線を泳がせる。ハヴィが少し意地の悪い口調で言った。
「僕にかこつけて、カズキさんに話しかけに来たのかよ」
「ちち違うわよっ。失礼ねっ。余計なこと言わないでっ。馬鹿っ」
ハヴィにそう怒鳴りつけると、彼女は慌てたように俺に頭を下げ、身を翻す。見咎めるように、ハヴィが不満の声を上げた。
「何だ。手伝っていってくれないの」
「あたしは今から孤児保護施設に品物を届けに行くんだもんっ」
「孤児保護施設？」
「うん。村の東側の外れに教会があるの。そのそばにあるんだって。

売り物にはならないけど使える商品、寄付しに行くのよ」
どうやら村に孤児院のようなものがあるらしい。
笑いながらハヴィにべえっと舌を出して見せて少女が出て行くと、舌を出し返していたハヴィが俺の方に向かって苦笑を浮かべた。
「すみません。びっくりしたでしょ」
構わずに作業を続けている俺に、ハヴィはため息混じりに続けた。
「あいつ、サナって言うんです。あいつが、カズキさんみたいに頼りになる人になれって。余計なお世話だって感じですけどね。僕の幼なじみなんです。……って言っても、小さな町でしたからね。子供たちはみんな幼なじみみたいなものでしたけど」
話が過去形なのは、その町を出て来たせいだろうか。
俺の疑問を読んだように、ハヴィは少し悲しげに微笑んだ。
「僕らの町、氷竜に襲撃を受けて、壊滅したんです」
いつだかシサーからそんな話を聞いたような気がする。ナタリアの北部の町が壊滅したと。確かリンガーとか言っただろうか。
「僕の家族も、サナの両親も……みんな、いなくなっちゃいました。二人でツェンカーの方まで逃れてさまよっているうちに、パララーザに拾われたんです」
「氷竜から逃れて、ツェンカーの方に？」
「はは。今思えば、滅茶苦茶ですね。だけど逃げる時は必死で、どこへ向かっているのかも、向かうべきなのかも、わからなくて」
記憶を蘇らせるかのような目つきをしたハヴィは、ふうっと深い息をついて顔を横に振った。
「カズキさん」
「カズキ。ハヴィ」
それから何かを言い掛けたところで、被せるようにテントが開く。顔を覗かせたのは、年輩の男性隊員だった。
「手ぇ空いてないか？」
「空いてます。何かありますか？」
ハヴィが素早く言って立ち上がる。男は日焼けした顔に皺を刻ん

で笑った。
「すまないが、ちょっと頼まれてくんねえかな。『ホイロの水』を汲んできてほしいんだ」
「『ホイロの水』？」
「ああ。ちょっとこっち来な」
手招きされて立ち上がると、男についてテントを出る。通りに立つと、男は村の外に見える丘を指差した。ここから見ている分には、小高いと言う程度のふっくらとした稜線だ。
「あの丘の天辺に行く途中に、良質の湧き水が汲める泉があるんだ。この辺りでは有名な良水でな。貴族なんかにも結構良い値で売れる。だから、ここに立ち寄った時は、必ず汲みに行くんだよ」
「へえーっ。知らなかった」
ハヴィの声に、男は苦笑いを浮かべた。
「すぐに売り切れちまうからな。なかなか一般の市民の手に渡ることはないかもしれないな。この近辺の人間は、自分で汲みに行くこともあるみてぇだが」
「ってことは、道中の危険性は低い？」
「はずだ。俺も何度か行ったことがあるが、この時間帯なら魔物に襲われる心配もまずないだろう」
そう言って、男のでかい手が俺の肩をばしっと叩く。
「ま、遭遇したとしても、お前が居れば何とかなんだろ？」
「それは、どうでしょうね」
幾度かの魔物との戦闘で、どうやら誤解が生じている。相変わらず、俺は別段凄腕と言うわけじゃない。
レーヴァテインの魔力を借りれば概ね何とかなるのかもしれないが、俺は出来る限り魔力の使用を自らに封じている。キグナスの最期が脳裏に焼きついているせいだ。
とは言え、背に腹は変えられないとなれば使わざるを得ないだろうが。
「道筋は、複雑なものじゃない。村の北門から外へ出て、ひたすら

真っ直ぐだ。丘を目指して真っ直ぐ歩き、丘に入ってからも真っ直ぐ歩く。すると、ホイロの泉に辿り着く」

それから男は、俺とハヴィを裏に連れて行った。荷車に幾つかの樽が乗せられている。これを持って行き、中に水を詰め込んで戻ってくるらしい。

「水を汲んだら、樽の中にこの葉を一枚ずつ入れておいてくれ。水の鮮度を保つんだ」

防腐剤のようなものらしい。麻の袋に入った葉の束を受け取ると、男は俺とハヴィの肩を軽く叩いた。

「二人とも若いんだから、しっかり頼んだぞ」

◆◇◆

「サナはね、ああ見えて人の面倒を良く見る子なんですよ」

ハヴィと二人でお使いに出され、丘を上って行く。ここへ来るまでの平坦な道は、周囲に畑で農作業をする人の姿なんかもあり、至って平和なものだった。

丘自体も、遠目から見たそのままで、さして高度もなければ鬱蒼としてもいない。昼も間近なこの時間、のどかとしか言いようのない道中だ。

「まあ、ちょっと気が強い嫌いはあるんですけどね。僕に対してそうなだけで、他の人には当たりも優しいし……」

空の樽を乗せた荷車を引きながら、ハヴィが延々としゃべり続けている。荷車は二人で引くようなシロモノではないので、行きはハヴィ、帰りは俺と分担することにした。

ハヴィの話は、概ね先ほどのサナのことばかりだ。恐らくは彼女に好意を寄せているんだろう。

「昔ね、近所の子供が井戸に物を落としちゃったことがあるんですけど……」

彼の言葉に対して俺が全く無反応であるにも拘らず、ハヴィは実

に根気良く話を続けた。いつしか話題は思い出話に遡っている。
　緩やかとは言え、一応上り道である以上、少しずつ高度が上がっているようだ。道の左右には木々も生えているものの、パラパラと疎らに生えているので見晴らしは悪くない。振り返るように景色を見ると、俺たちが先ほど出て来たパレスの村が見える。
　パララーザについて、ナタリアを抜け……リトリアに入る。パララーザはしばらくリトリアで商売をするつもりだと聞いているから、俺たちはそこで進路を逸れ、バートへ向かい、そこで船を手に入れてヴァルスへ渡る。
　ハヴィの話を聞き流しながら、今後の進路について考えていると、ハヴィが何度も俺の名前を呼んでいることに気がついた。ようやくそちらに顔を向ける。意識がハヴィに向いたことに気づいて、彼はにこりと微笑んだ。
「カズキさんって、氷竜を倒したんでしょ？」
　彼の話がどういう経緯を辿ったのかは全くわかっていないが、いつの間にそんな話になったのだろう。彼らがナタリアを脱出したとか言う話辺りだろうか。
「俺が倒したわけじゃない」
　短く答えると、ハヴィはきょとんと首を傾げて顔を前に戻した。
「そんな、謙遜することないのに」
「謙遜じゃない。俺が一人でどうにか出来るような相手じゃない」
「でも、伝説の魔剣はあなたを選んだ」
「……別に、選ばれたわけでもない」
　レーヴァテインが追従するのは、あくまでも鍵だ。俺自身じゃない。適性だ何だという要素は多少あるにせよ、俺でなければならないと言うものでもない。
　そこまで語る気になれずに黙っていると、ハヴィが嫌に深いため息をついた。ちらりと視線をそちらに向けると、空を仰いで小さく呟くところだった。
「僕も、サナをちゃんと守れるようになれればなあ……」

ホイロの泉と言うのは、あの男が言う通り、すぐに見つかった。泉の水を樽に汲むのはなかなかの労働ではあったが、難しいことなど何もない単純作業だ。

相変わらず一人で話し続けているハヴィに、相槌さえ打たないで黙々と作業をする。全ての樽に水を汲み入れ終えたのは、時間にしておよそ二時間ほどしてからだった。

荷車を引く係りをバトンタッチして、俺が引き始める。行きよりも遥かに重量が嵩み、しかも下り坂とくればなかなか体力的に負担がかかる。とは言え、ハヴィよりは俺の方が体力も力もましだと思えたので、妥当だろう。

時間は、正午を一時間ほど回っている。空腹を覚え始めながら村への道を辿っていると、見える景色に違和感を覚えて俺は足を止めた。

村の方から、煙が昇っているようだ。一つではなく、いくつも。

「あれ？　何だろう？」

俺の視線に気づいたハヴィが、同じように村の方を見遣って首を傾げた。

「お昼の炊き出しの煙、かな？」

「……違う」

その言葉をぼそりと否定する。

俺の記憶にある限りでは、食事の炊き出しで上がる煙はあんなに黒くない。それに、あれほど目立つ煙も上がらない。

火事でも起きているのかと思うような野太い黒煙が、村のあちこちから立ち上っているように見えた。火事……そうか、火事か。

自分の考えに背中を押されたように納得すると、俺は荷車から手を離した。こんなものを持っていては、村に戻るのに時間がかかる。しょせんただの水だ。後で取りに来れば良いし、なくなって死ぬも

のでもないだろう。
「カズキさんっ？」
何の説明もなく突然走り出した俺に、ハヴィが慌てふためいたような声が聞こえる。俺の背中を追いかけながら、ハヴィが焦ったように尋ねた。
「ど、どうしたんですっ？」
「何か起こってる」
「えっ？」
「あんな黒煙、いくつも立ち上るものじゃない。村のあちこちで火が上がってる証拠だ」
そうなる原因は、限られると思う。
何者かの襲撃だ。

第3部第2章第6話　神の指先（2）

「どういうことですっ？」

いつかの『銀狼の牙』みたいに粗野な盗賊団などによる襲撃か…？

…でも、そういう集団は旅人を襲うようなことはあっても村を直接襲撃するとは考えにくい。ロドリス以南が戦地になっている現状では戦火が及んだとも思えない。一番可能性が高いのは。

「魔物だろうな」

トラファルガーに抑えつけられていた魔物の活動が活発になっている。それまでのストレス発散か、もしくはそれによって食糧が手に入りにくくなったなどの生活的困難があったのか、それはわからない。

ただ、ここに辿り着くまでの魔物との遭遇率や凶暴化を思い出すに、考えられない話ではない。

事態がようやく飲み込めたらしいハヴィも、口を噤んで俺の後を追った。元より俺は、ハヴィの追走など意に介していない。

パレスの村の間近に迫り、それが異常事態であることが確かになった。

黒煙のみならず、火の手は確かに上がっているようだ。そして、悲鳴や怒号が風に乗って流れて来る。

シサーたちはどうしているのだろうか。村にはシサーとジークが残っている。パララーザにはメディレスと言う魔術師も残っていることだし、彼らの身を案じる必要はないだろうが……。

「サナはっ……！」

ハヴィが切羽詰った声を上げる。それを聞いて、その他のパララーザ団員たちは無事かどうかは定かじゃないな、と思った。知る限り、彼らは全員が戦闘能力に長けているわけじゃない。いや、もちろん長けている人間だって何人もいるが、そうじゃない人間だって大勢いる。サナなんかは、見るからに魔物を倒せそうにはない。

「慌てるな」
村へ駆け込んでいきそうなハヴィを引きとめ、村の入り口で中を伺う。悲鳴はあちこちから絶えず上がっており、非常事態であることは疑いようがなかった。
この周囲は安全そうであることを確認して、村の内部へ足を進める。それから手近な物陰に身を潜め、辺りの様子を注意深く伺った。
大きな通りの方から、何か聞くからに嫌らしい音がする。魔物が喉を鳴らす音。近くの建物のすぐ角からは、何やらがつっがつっと言うような音と粘液質な音が混ざり合って聞こえていた。誰か食われてるのかもしれない。
「ま、魔物……？」
俺の背後で身を縮こまらせているハヴィが、極度の緊張からか抑揚のない掠れた声で呟く。それに答えずに通りの方へ目線を向けていると、やがて魔物が通り過ぎるのが見えた。片手に何かを引き摺っている。遠目ではっきりとは見えないが、多分人間なんだろう。
その魔物を認識して、俺はひとまず気が楽になった。ホブゴブリンだ。幾度も対峙したことがある相手と言うのは、戦い方を熟知している。
そう思った矢先、バサリと羽の音が聞こえた。軽く舌打ちをしながら一瞬視線を走らせると、予想通り馴染みのワイバーンが現れた。
「走れっ！」
叫びながら、ハヴィを強く後方へ押し遣って俺自身は剣を抜く。ワイバーンの高度が下がって射程距離に入ったのを見定めると、剣を強く振りながら横へ跳んだ。刃がその足に深い傷を刻み、ワイバーンが再び上昇する。その隙に、腰を抜かしているハヴィを引っ掴んですぐそばの路地へ飛び込んだ。途端、物音を聞きつけたらしいゴブリンに遭遇する。既に誰かを襲ってきた後らしく、全身の至る所に血がこびり付いていた。
「ひ、ひぃっ……！」
ハヴィが悲鳴を上げる。構わず俺はハヴィを再び突き飛ばして地

面に転がした。俺が前面にいる以上、これが一番被害を受けずに済む。

ゴブリンが剣を振り被った。俺に向けて叩き込むのを寸でのところで避ける。ゴブリン程度の攻撃なら、俺でもすっかり避けられるようにはなった。再び剣を持ち上げる前に、脇合いから深く腹を貫く。

「行くぞっ」

どうやら団体様に襲撃されているようだ。下手に一匹と対峙している間に、次々と現れかねない。止めを刺すことを諦めて、俺はゴブリンが苦悶の唸りを上げてのたうっている間にハヴィを引っ張った。無理矢理立ち上がらせるその頭上で、先ほどのワイバーンが吼えるのが聞こえる。

見つかる前に手近な建物の陰に飛び込むと、すかさず壁に張り付いて外の様子を伺った。ハヴィは、俺に引き摺られて床に放り出されたまま、半ば放心状態だ。

あいつらは鼻が良いからな……。人間の襲撃者と違うのはそこだ。人間相手の場合は、相手に見つかったか否かはこちらもある程度判断が出来るが、壁一つ挟んだ向こう側で匂いを嗅ぎ付けられた日には、こちらは気がつかないかもしれない。

「ともかく、キャンプまで戻ろう」

そこで何かわかることがあるかもしれない。シサーたちがいるかもしれないし。合流出来れば心強い。

そう考えながら外の様子を伺っていると、ハヴィが俺の背後でぽつんと何か呟いた。聞き逃したので振り返ると、ハヴィは放心した様子のままでもう一度呟いた。

「サナ……」

どうやら、愛すべきサナの身を案じているらしい。だが、生憎と俺には関心がない。

「パララーザに合流する方が先だ。その方が安全率が上がる」

そっけなく答える俺に、ハヴィががばっと顔を上げた。

「お願いですっ。サナを探して下さいっ」
「この状態で明確に場所もわからないものを探すのは危険だ」
「サナは、孤児保護施設に行くって言ってました。この短時間で帰ってると思えませんっ」
ハヴィが食い下がる。
「お願いですっ。サナを守りたいんですっ。僕一人じゃきっと助けられない。村の外れにあると言う施設に……」
「時間の無駄だ。一人で行けるわけじゃないんなら、黙っててくれ」
「あなたはっ……」
さっさとシサーたちとの合流を果たしたい俺が短く答えると、座り込んでいたハヴィが立ち上がった。俺の腕をぐいっと掴む。振り返ると、険しい目付きで俺を睨み上げながら、ハヴィは涙を溢れさせていた。
「あなたは、誰かを守りたいと思ったことがないんですかっ……？」
「今はそんな話をしている状況じゃない」
「だったら僕一人で行くっ……」
言うが早いか、ハヴィが建物を飛び出す。放っておいては、多分すぐに魔物の餌食になるんだろう。
嘆息して、俺は仕方なく後を追った。一応、世話になっているシリーの手前、彼女の部下を目の前で放り出すわけにもいかないだろう。
「うわあっ……」
形振り構わず通りに駆け出るハヴィを、魔物が見逃すはずもない。横合いから鋭い唸り声と共に飛び出してきたのは、見覚えありまくりのウォーウルフだった。間に合わない。
（ちっ……）
駆ける俺の手元から――レーヴァテインから炎が上がる。使いたくはなかったが仕方ない。すっかり俺の意志を正確に読み取るようになったレーヴァテインが、ウォーウルフ目掛けて火炎を吐き出した。

ウォーウルフがハヴィを地面に押し倒して圧し掛かった瞬間、火炎弾に似た炎を食らってウォーウルフの体が吹っ飛ぶ。そのまま硬い毛に火が移ったウォーウルフは、火達磨になってハヴィの向こうで七転八倒した。

剣を下ろして、無言でハヴィに近付く。強引に引き立たせると、ハヴィはすぐにかくんと座り込んだ。腰が抜けたようだ。

「座り込んでる場合じゃない」

すぐに移動しないと、また物音を聞きつけて魔物が来る。ハヴィを引き摺るようにして路地に引っ張り込むと、ガタガタと大きく震えているハヴィが恐怖に目を見開いたままで俺を見つめた。

「そんなんでサナのいるところまで辿り着くつもりだったのか」

「……あ、あなた、とは」

かくかくと全身を大きく揺らしながら、ハヴィはそれでも震える声を押し出した。残念ながら、本人が意図しているだろうほどの力強さは全くない。

「あなたとは、違う」

「そんなことは知ってる」

言いながら、俺は再び通りに目を向けた。路端に、血溜りと人の残骸が見える。魔物はどのくらいの規模の集団なのだろう。今の状態では、ちょっと判断がつかない。

どうすべきか逡巡し、俺は仕方なく東側へ向かうことにした。サナは確か、東の外れにある教会のそばだと言っていた。ともかくもそちら方面に向かえば、何かわかるかもしれない。放っておいて、また無節操な行動をされても困る。

「行くなら、さっさと立てよ」

「一緒に、来て、くれるん、です、か」

まだ震える声のままで、ハヴィが俺を見つめた。進行方向を伺っていた俺は、ちらりと目線だけそちらに向けると、再び前を向きながら答えた。

「そうするしかないだろ。だけど、自分の体ぐらいは自分で動かし

てくれ。勘違いしてるみたいだから言っておくけど、俺だってさほど戦闘が得意なわけじゃない。魔物と君との両方を一挙に面倒見られるわけがない」

「わ、わかりまし、た」

「今なら、抜けられそうかな。走れるか」

周囲に魔物の気配はなさそうだ。とにかく、村の東端まで駆け抜けよう。

頷くハヴィを見届けると、俺は彼を促して走り出した。村の人はどこにいったんだろう。死体以外余り姿を見かけないと言うことは、ひとしきりパニック状態が過ぎ去った後と言うことだろうか。殺られる人は殺られ、逃れた人は建物の中に篭っているのかもしれない。それが一番賢い選択だ。ゴブリンなんかの亜人型はともかくとして、少なくともウォーウルフやワイバーンなどの獣型の魔物は、わざわざドアを開けて入ってくるようなことはない。尤も、窓なんかをぶち壊して侵入されたら逆に逃げ場はないかもしれないが。

そう考えながら、俺とハヴィは路地から路地へ、ただ東へ向けて駆けた。途中、束になっているゴブリンに遭遇しそうになったりして幾度か道筋を急変したりもしたが、単独で遭遇した魔物に関してはレーヴァテインが物をいった。基本的には止めを刺す刺さないではなく、『逃げる』ことを最優先させる。

俺たちがいたのが東よりのブロックだったことも幸いし、何とか二人とも無事に、どうやら東側の果てを告げる竹柵らしきものが見えた。小さな村なのでささやかな区切りではあったが、それでも村と外との境界線だ。

さて、続いてはこの辺りでどの建物がその施設とやらに該当するかだけど……まずは教会か。その近辺にあるはず……。

「カズキさん」

納屋のような小屋の陰に身を潜める俺の背後で、ハヴィが小さく俺を呼ぶ。その理由は俺にもわかっていた。ゴブリンなんかとは違う、少し重い足音がする。ぐぶぅ、と言うような汚らしい唸り声が、

少し先の路地を通り過ぎていった。その野太い腕には、誰かの足が握られている。

あれは……。

「オーガーだ」

眩暈がした。あんなものまでいたのか。かつてダンジョンで対峙したことが二度ほどあるが、いずれも俺一人で戦ったわけじゃない。レーヴァテインの魔力なしでは、俺一人ではまだ片付けられない。

「出来るだけ息を殺して、気配を消して」

見つからないことを祈るしかない。こんな、逃げ回ってるだけで物陰から何が飛び出してくるかわからない状況で、俺に戦える相手じゃない。あいつを相手取っている間に嗅ぎ付けた魔物が寄ってきたら、そこでアウトだ。

ずしずしと軽い衝撃を地面伝いに感じながら、俺とハヴィは緊張して通り過ぎていくのを待った。どれだけ鍛えたところで、臭いだけは消すことが出来ないのが難点だ。

ひたすら幸運を祈るしかない俺の耳に、突然オーガーが一際大きな唸り声を上げるのが聞こえた。気づかれたのかと背筋を硬くして、剣を握る手に力を込める。咄嗟に振り返って陰から顔を覗かせると、どうやらそうではなさそうなことがわかった。

「シサー」

目を見開いて立ち上がる俺の視線の先で、白光を放つグラムドリングが一閃される。オーガーがもんどり打って倒れると、ずしんと強い衝撃が地面を揺らした。そこへ、カタカタカタ……と変な音が聞こえ、小さな矢が倒れたオーガーにいくつも降り注ぐ。そして次の瞬間、「ボンッ」と小さな爆発音が聞こえた。

「お前さんなあ……どうして毎度毎度壊れる物ばかり作るんだ？」

「壊れる予定ではないはずなんですけど……」

どうやらジークのガラクタが、途中で壊れたらしい。

「シサー！」

物陰から飛び出て、小声で叫びながら駆け寄る。ハヴィの気配が、

俺の後からついてきた。シサーとジークが、俺の声に弾かれたようにこっちを向いた。
「カズキっ」
「無事だったんですねっ」
とりあえずはこれで、一安心だろう。シサーとジークの顔がほころぶのを見ながら、俺は倒れ臥したままのオーガーを見下ろした。
「俺たちは村の外に出てたから、大丈夫。それより、何があったの」
「わからん。昼過ぎた辺りで、突然魔物が大挙して村に雪崩れ込んできやがったんだ」
「何で……」
「さあな。魔物が村を襲うことはそうそうある話じゃねえが、ないわけでもない。たまたまそれに遭遇したっちゃあ、それまでの話だ」
周囲に目を配りながら、シサーがそう答えた。それからハヴィに気遣うような笑みを見せた後、俺の肩をぽんと叩く。
「ともかく、一旦キャンプの方へ戻ろうか。シリーたちも心配してた」
「シリーたちは大丈夫なの」
「メディレスがついてるし、パララーザの護衛部隊は舐めたものじゃないぜ。ただ、倒しても倒しても次々と湧いて出てきやがるから……」
「あのっ……」
言いながら俺たちが今来た方向へ戻ろうとするシサーを、ハヴィの声が呼び止める。血色のない蒼い唇を震わせながら、ハヴィは言葉を押し出すように言った。
「僕の、幼馴染がまだこの辺りにいるかもしれないんですっ……」
「え？」
シサーとジークが目を瞬いて振り返る。俺が手短にここまで来た経緯を説明すると、シサーは顔を顰めた。
「そりゃ放っておくわけにもいかんな。孤児施設か……無事に済んでりゃいーが」

先ほどの俺の対応を思い出して、シサーにも同様の対応を受けるかもしれないと恐れていたらしいハヴィは、目に見えて安堵の表情を浮かべた。涙混じりに「ありがとうございます」と呟く。
「ともかく探してみるか。無事かもしんねーし」
「建物の中にいれば、わざわざ魔物は侵入して来ない確率も高いですからね」
安心させるような笑みを浮かべて、シサーがハヴィの肩を軽く叩く。同調するジークの言葉に頷いたハヴィは、もう俺の方なんて見ようとはしなかった。
「泣くな泣くな。大丈夫だ大丈夫。ほら、行こう。カズキ、ハヴィの背後についてやれ。背後から襲われるかもしれん」
「わかった」
「ジーク。壊れねぇ武器用意しとけよ。さっきから俺ばっかり働き通しじゃねえか」
「失礼な。僕だって少しは役に立ってるでしょ？」
軽口を叩き合いながら歩き出す二人に従って、まずは教会を探し歩く。
「この辺りの魔物は、ある程度一掃したつもりなんだがな」
前を見据えて歩いたまま、シサーが言った。多分俺に言ったんだろう。なるほど。キャンプを境に東と西に分かれて村に侵入した魔物の排除に努めていたってところだろうか。これでもここまで辿り着く間に魔物に遭遇したと思うが、シサーたちのおかげで少なくなっていたのかもしれない。
そのまま少し、四人で辺りを彷徨う。時折、建物の内側から外をそっと覗いている人の姿が見えたりもした。
「外は、大丈夫なのかい……？」
俺たちの姿を見てそっとドアを開けた老人が問う。それにシサーが短く答える。
「まだ安全じゃない。ドアを閉めて閂をかけ、物音を極力立てないでくれ」

シサーの言葉に、老人は慌ててドアを閉めた。再び辺りには人気がなくなる。

「俺たちが遭遇したのは、ゴブリンとホブゴブリン、ワイバーン、ウォーウルフ、そしてオーガーだったけど、他には何がいるの」

「俺たちが遭遇したのもそんなものだ。特にゴブリンが多いな。だから、建物に篭ったところで安全とは言い切れんのだが……」

そこまで言って失言に気がついたのか、シサーがハヴィを振り返った。

「とは言え、その辺をふらついているよりは、遥かに生存率が上がる。施設ならただの住居よりは多少逃げ場もあるだろうし、間近に教会があるなら、そこに逃げ込んでれば魔物は入れ……」

「あれじゃないですか？」

フォローするような言葉を重ねるシサーを遮るように、ジークが足を止めた。視線の先には、ニ階建てほどの建物があった。都心にある貴族の住居のように豪勢なものじゃない。いかにも風雨を凌ぐ為に造られたと言うような、木製の危なっかしい建造物だ。

とは言え、この規模の村の住居が通常平屋であることを考えれば大きなものであり、そしてその斜め向かいには、やはり頼りないながらも教会らしき建物があった。

そしてそこは、ひどい有様だった。

「サナっ……」

そこが目的の施設だと思い込んだらしいハヴィが、血相を変えて駆け出そうとする。それを察したシサーが、素早く手を伸ばしてその腕を掴んだ。

「落ち着け。一人で飛び出して行って、万が一魔物に横合いから襲われたら話になんねぇだろ。一緒に行くから、落ち着いてついて来い」

「は、はい」

いつでも対応出来るよう剣を握り締めたまま、俺は教会の周辺を見回した。教会の周辺に転がる幾つも肉片。土がむき出しのままの

未舗装の道には、赤黒い染みが乾き切れずに濃く浮かんでいる。まるでここにある全てに染み付いているような濃い異臭。

「どうしてこんなことに……」

ジークが呻いた。

「大方、助かろうと思って教会へ殺到した人間が襲われたんだろうよ」

シサーの硬い声が返ってきた。

……なるほど。教会の中には魔物は立ち入れない。離れたところから遥々教会に避難するには、そこに辿り着くまでの道のりで魔物に遭遇してしまう為に諦めざるを得ないだろうが、この近辺の人や外にいた人なんかは一縷の望みにかけたのかもしれない。そうして、聖域である教会を目前にして、魔物に襲われたわけか。一見する限り多数の人間を受け入れられる規模の教会には見えないし、人々が殺到することによって魔物も殺到することになったんだろう。

だとすると……。

俺の考えが裏付けられるのは、間もなくのことだった。

施設の敷地を覆うように巡らされている頼りない木塀の内側は、凄惨だった。

ちょうど子供たちが外で遊んでいたところだったんだろうか。

魔物の襲撃に逃げ惑い、教会へ向かおうとしたり施設の中へ逃げようとしたりもしたんだろう。

だけど、教会に殺到する人々につられてこの周辺に集まった魔物たちの数は多分多く、この辺りにいた人たちは逃げ切れなかったと言うのが妥当なセンかもしれない。

庭のあちこちに、食い散らかされた人間の遺体が転がる。俺の前を歩くハヴィから、奇妙な呻き声が聞こえた。次の瞬間、ハヴィが蹲って胃の中のものをぶちまけた。

「カズキ。まだその辺に魔物が残ってるかもしれねえから、油断すんなよ」

そう言うシサーの剣は、今のところ警告光を発してはいない。当

面のところは大丈夫だろうけれど。

第3部第2章第6話　神の指先（3）

「うん」

大して広いとは言えない庭を抜け、建物に近付く。ずたずたに破壊された扉を見るに、どうやら中も期待は出来なさそうだった。

建物の内側には人間がいて、扉を開ければ中に入れるということを知っている魔物――ゴブリンが襲撃者の中にいたんだろう。

「ハヴィ。動けるか。今なら安全に教会まで行けるだろうから、そっちで待っててても良いんだぜ」

「いえ……僕も、行きます……」

ひとしきり吐瀉をし終えて口元を拭いながら、涙目で顔を上げる。シサーはそれに「そうか」と頷くと、建物に足を向けた。

中は、血の臭いが一層濃い。窓から差し込む日の光だけが頼りの、薄暗い空間だった。

「うっ……」

入った途端、俺の前を歩いていたハヴィがずざっと後退した。俺にぶつかってくるので受け止めつつ、その視線の先に人間の腕が転がっているのが見えた。それだけではなく……食い散らかされた残骸とでも言うのだろうか。陰になって良くは見えないが、黒く床の上に隆起している物がある。良く見たいとも思わないので、陰になっていてくれて構わない。

「誰か、生きてる奴はいるか？」

歩きながら、シサーが声を上げる。魔物をおびき寄せる可能性もあるが、何とか出来ると考えているんだろう。それよりも生きているのに瀕死であるとか、俺たちの物音を魔物と間違えて怯えている人が救出されない可能性を危惧しているんだろうと思う。

しかしながら、建物の中は静寂だった。ギシギシと音を立てる木張りの廊下の左右には、小さな部屋が幾つかある。何人かで食事が取れるような部屋や、遊戯室と思しき空間、施設を面倒見ている人

たちの詰め所らしき部屋。そのどれもが、物言わぬ死体しかなく、一見して隠れられそうな場所もあるとは言い難かった。

正直、絶望的だと思う。加えて言えば、この『残骸』となってしまった彼らの中から、サナを識別することが可能なんだろうか。

そう考えながら、進んでいくシサーに続いて階段を上がる。

途端、ぐるるっと音がして、階段間近の部屋から何かが飛び出してきた。短剣を構えたゴブリンだった。

「まだいやがったか」

短い感想を漏らして、シサーの剣が横薙ぎに一閃される。危機感を覚える間もないほどの早業に、ハヴィが唖然と足を止めた。

「凄い……」

血を噴き上げて廊下へ崩れたゴブリンは、夥しい人間の赤い血を帯びている。

階段を上りきって通路に立つと、それほど長くない通路の途中に最早ただの肉片としか表現できない塊が血溜りの中に沈んでいるのが見えた。余り詳細を言い表したいと思えない状態の、人間だったモノだ。

「カズキ。そっちの部屋見てくれ」

「わかった」

「こいつを見る限りは、もういねえと思うけど。一応注意はしろよ」

「うん」

剣の警告光は収まっている。少なくともこの付近にはいないだろう。

そう思いながら、俺はシサーとジークとは反対側の方へ足を向けた。階段を上って右手だ。通路の真ん中に肉片が落ちている方。

ハヴィは、階段を上りきったところで足が竦んだように動かない。吐き気を堪えているのか、痙攣でも起こしそうな顔をして口元を必死に押さえている。

二階は、寝室に当たるんだろうか。大した広さのない部屋に、ベッドが幾つも押し込まれていた。開けっ放しのドアから入ってすぐ

に、子供の上半身が倒れている。ざっと見て、魔物はいないようだ。
そう思って部屋を出て行きかけ、何かを見たような気がして足を止めた。今自分が見ていた方へ視線を戻す。何……ああ、手だ。
部屋の奥にあるクローゼットの扉が僅かに開いていて、そこから指先だけが見えていた。指先から滴り落ちる血が、クローゼットの前にも血溜りを作っている。中に人間がいるのかもしれないが、この様子では生きていないように思う。
とは言え、万が一にも生きているかもしれない。重傷で身動きが取れなくても、まだ息だけはあると言うことも考え得る。そうだとしたって魔術を使える人間は今ここにはいないから、手持ちの治癒薬を投与するくらいしか出来ることはないが、場合によってはそれで回復の兆しを見せるかもしれない。
俺は再び部屋の中に戻って行った。奥のクローゼットの扉に手を掛ける。開けると、それでバランスでも崩れたのか、どさっと言う鈍い音と共に中の人間が崩れ落ちてきた。そのまま自分の血溜りに転げ落ち、力なく床に転がる。脇腹の辺りが考えられないほど抉り取られ、どうやら夥しい出血はそこからなのだと判断出来た。クローゼットの中も、もちろん血の海だ。生きてるとは思えない……けど。
「ハヴィ。サナだ」
声を上げると、一瞬全ての物音が途絶えた。そして、あとの三人が一斉に駆けつけて来る足音が聞こえる。
「いたかっ？」
「サナっ！　サナっ！」
「死んでる」
ハヴィが半狂乱のような声を上げて駆け込んでくる。
「サ、ナ……」
俺を突き飛ばすようにしてサナに駆け寄ったハヴィが、血溜りに膝をつきながら掠れた声で呟いた。その背中に続いたシサーとジークが、痛ましい顔で二人を見下ろす。

「やられちまってたか」
やられてはいるが、かなり綺麗な方だろう。魔物の攻撃を受けて、命からがら逃げ出したところで、その魔物の気を逸らす別の何かが割り込み、おかげでクローゼットにまで逃げ込めたが力尽きてしまった、ってところだろうか。彼女が無残な状態にならずに済んだのは、通路の途中にあった肉片……あっちに魔物の関心が移ったからかもしれない。
ハヴィは呆然としたような状態のまま動かない。
「村にはどのくらい魔物が残っているんだろう」
サナを見つけ出して当面の目的を果たした俺は、彼らに興味を殺がれて窓の外へ視線を向けた。外は静かなものだ。一通り暴れまわって気が済んだ魔物たちが撤収したんだろうか。それとも、パラライザの護衛部隊や、村の有志らで片付けることに成功したんだろうか。
ともかく、サナが死体になっているのを見つけてしまったので、これ以上ここですることもない。「外にいる」と短く告げて踵を返しかけた俺の足を、ハヴィががしっと掴んだ。
「……あなたは」
無言で振り返って見下ろす俺に、ハヴィが激しい怒りを宿したような眼差しを叩きつけてきた。
「あなたは、それでも人ですか……っ！」
「……どういう意味？」
「僅かでも言葉を交わした相手が、こんなことになってるんだ！サナは、僕にあなたにようになれって……っ……あなたに憧れてたのに……っ」
「それが？」
俺は、彼女と言葉を交わした覚えはない。先刻、ばたばたと現れてばたばたと去って行った、それだけだ。
短く問い返す俺の足を掴むハヴィの手に、まるで握り潰そうとでも言うかのように力が篭った。

「彼女を殺したのは、別に俺じゃない。俺に憤りをぶつけるのは筋違いだと思う」
端的に答えて、俺はハヴィの手を振り払った。ここにこれ以上いても、俺が出来ることは何もない。それなら、建物の出入り口で魔物が更に侵入して来ないよう見張りでもしている方がよほど有意義だ。
「あなたには、人の心がないのか……っ？」
歩き出す俺に、ハヴィが搾り出すような声を投げつけてきた。足を止めて振り返る。
「……そうかもね。何せ魔剣は」
答えて俺は、右手に握った剣を微かに示した。
「『人の心を食らう』そうだから」

◆◇◆

どうやら魔物は、概ね片がついたようだ。
村を周ってみて俺はそんな感想を抱いたが、村人たちはまだ恐怖と戦っているらしく、襲撃の跡は放置されたままで夜を迎えた。
パララーザの面々は大半が無事で、逆に言えば被害は孤児保護施設の方へ出向いていた十数名に限られた。
そうは言っても恐怖の席巻した村の至るところで陰惨を極めた光景を目にしたせいか、誰もが食が細く、ささやかな食事を終えると皆そそくさと自分の宛がわれたテントへと消えて行った。
魔物の活動時間帯は、どちらかと言えば昼よりも夜だ。昼間の恐怖が抜けきれず、恐らくは誰もが魔物の襲撃に怯えているんだろう。警戒する為に、村のあちこちでは火が起こされている。でも、余りの恐怖を味わったせいか、巡回などの対策は取られていないらしい。引き受ける人間がいないのかもしれない。
食事の後、暇を持て余した俺は、キャンプを抜け出して静寂に包まれた村を歩いていた。頭上に揺れる丸い月が落とす白い光が、俺

の行く先を照らす。遠く、村の出入り口付近では松明の赤い炎が宵闇を染めている。

凄惨な襲撃の痕が至るところに残る村は、ロドリスで見た村の凄惨な記憶と重なった。

――暗い闇の中に忽然と閃いたセイバーの青白い光。

必然的に、それはラグフォレストの『人魚の神殿』での記憶をも蘇らせる。

突然現れたそいつは、顔に深い陰影を落としながらも、遥か上空の天窓から差し込む微かな月明かりに琥珀色の瞳を煌めかせていた。

シンを殺したのはあの男……グレンフォードだった。

続いて、まだ新しい光景がグレンフォードの姿に重なる。

血を吸ってぐっしょりと重くなったローブを身に纏ったまま、ただそこに横たわっていた姿。暴行を受けた痕跡を全身の至るところに残した無残な肉体。

キグナスを殺したのは、ツェンカーの副将軍だった。

俺から友人を奪ったのは、魔物じゃない。

それらはことごとく、人間の手で奪われた。

魔物が脅威となるこの世界で、人が人を奪う現実。人間はあくまでも争いあう生き物らしい。絶対的な脅威の前に曝されても尚。ヴァルトはトラファルガーの咆哮が響く街で、キグナスを俺の傍から奪い去った。

足の下で、小枝を踏み折ったらしいパキンと言う細い音が聞こえる。それ以外は、まるで何の音も聞こえない静寂だ。

魔物の襲撃と言う悲劇、だけどそれは、どこか正しい姿でもあるような気がする。

昼間にも来た村の東側――教会の辺りまで辿り着いて、俺はぼんやりと孤児施設を見遣った。それから、すぐそこにありながら救いの手を差し伸べなかった教会に目を向ける。

この世界を統べる神ファーラは、覇竜と言う魔物と人を戦わせる為に魔剣を賜った。

その魔剣は心を食らい、覇竜を滅ぼす。
そうして強大な力を手に入れた人間が心をなくしていけば、争い続けるのは道理とも思え、それは畢竟、ファーラが人間を争う生き物たらしめているのではないかとさえ思う。
ならばそれは、ナタの言う『摂理』とやらの一環なのか？
ファーラの指先は、人を争いへ誘っているように思える。
異種への敵対心は、自らの種の結束と生存本能を強化する。だけど同種との争いは破滅へ続くしかない。
……いっそのこと、何もかも消えてしまえば良い。
続く戦争と魔物の襲撃に曝されて、何もかもなくなってしまえば良い。――俺も。
だけどそれは憎悪と言うほどの感情でもなく、ただ漫然とそう思う。
何の感慨もなくそう考える俺は、どこか狂っているのかもしれない。
「カズキ」
何の変化もない静かな村をぐるりと歩いて、いつの間にか俺はパララーザのキャンプまで戻って来ていた。大きな村ではないから、俺がキャンプを出てから大した時間は経っていない。
けれど、テントのそばで木箱に腰を下ろしていたシサーは、俺を心配そうな眼差しで見つめていた。
「どこ行ってた？」
「別に。暇だから散歩をして来ただけ」
答えながら、シサーのそばに足を進める。隣の木箱にすとんと腰を下ろすと、シサーが小さく息をついた。
「ならいーが。変わったことはなかったか」
「何もなかったよ。魔物が夜襲をかけて来る様子も別にない」
それからしばらく、俺とシサーは無言のままそこに座っていた。
魔物の襲撃を受けた村は、虫の音さえ聞こえない。ただ、風が吹き抜けて起こす微かな物音だけが時折聞こえる。

「ナタは、パララーザにいないんだね」
ふと思い出してぽつりと言うと、シサーが無言のままこちらを見る気配がした。それから顔を夜空に戻して「そうみたいだな」と答える。
「元々、ずっといるわけじゃねえんだろう？」
「うん。メディレスに聞いたら、しばらく見かけていないって言ってた」
今となっては、ナタに会いたいのかどうかさえ、俺にはわからない。
キグナスがナタを少し気にかけていたから、微かに心の中で引っ掛かっているだけ。それが重要なことなのか、それとも些細なことなのか、それも今となってはもう知る術がない。
それきり、また二人で並んだまま沈黙していると、小さな物音がテントの陰から聞こえた。風が立てるような音じゃない。人の足音だ。
そう気づいて顔を向けると、物陰からそっとハヴィが顔を覗かせた。俺とシサーに気づくと、小さく目を見開いて、それから何も言わずに顔を背ける。
ハヴィは、あれから一度たりとも俺の顔を見ない。昼間、フルオートマシンガンのように話しかけ続けて来ていたのが嘘のようだった。すっかり心象を損ねてしまったんだろう。
「ハヴィ……」
呼びかけたシサーの声を振り払うようにテントのすぐ横へと姿を消し、それを見たシサーが小さな吐息をついた。
「眠れねぇんだろうな」
それから前髪をくしゃっとかきあげて、俺を横目で見る。
「おめえがつれなくすっから、ああいう頑なな態度になったんだろう？」
「つれなくしたつもりはないけど」
そっけなく答えると、シサーは、今度ははあっとわざとらしい大

きなため息をついた。
「もうちっと考えた言動をしてやれ。わかるはずだろうが、お前なら。自分にとって大切な人を失う痛みや衝撃ってもんをさ」
「……どうかな。もう忘れてしまった」
俺の心の中には、今、何もない。
レーヴァテインが以前言っていたように、魔剣が心を食らうものだからなのか、それとも別の理由なのか、それは俺には判断がつかない。
ただ、俺の心の中には何もない。
これまで起きた数々の出来事は、記憶として残っていて、もちろん思い出すことも出来る。だけど、それだけだ。それらの出来事は、俺の心に何も引き起こさない。投げ掛けない。
どうしたいのかも。
どうすべきなのかも。
俺の中には何も見えていない。
「お前、今、何かやりたいこととかあるか？」
唐突に思えるシサーの言葉に、俺は目を瞬いて顔をそちらに向けた。俺の視線に、シサーの方が少し当惑したような顔で俺を見返す。
「少しゆっくりしたいとか、どこかに行きたいとか」
「ないけど」
「レガードの件は、一旦離れてもいーんだぜ」
言われている意味が全くわからずに黙ってシサーを見ていると、シサーは片足を持ち上げて、座っている木箱の縁に踵をかけた。そのまま片膝を抱えるようにして、夜空を仰ぐ。
「シャインカルク城に飛んで帰んなくてもいーぜって言ってんだよ」
「……」
「レガードは見つかって、今はレオノーラにいるんだ。あれからどうしてるかは知らねえが、お前が当初請け負った約束は、果たされたはずだろう？　お役目御免になっても文句ねえだろう」
「うん」

「だったら、慌てて帰らなくても良い。戻ったって、俺たちに出来ることなんて大してありゃしねえし」
どうやら俺を気遣ってくれているらしい。
だけど生憎と、気遣われるほどの何も俺は感じていなかった。
「どうでもいい。シサーの好きにしていいよ」
何の指針も示さない俺の返答に、シサーが無言で息を吐き出す。
それから何かを考えるように中空を見つめ、やがてため息混じりに口を開いた。
「なら、当初の予定通り、レオノーラを目指そう。それでいいんだな」
「いいよ」
「あちこちの国の状況を知りてぇから、最短距離は取らねえが、それもいいな」
「うん」
「わかった。……さてと。お前も早めに休んどけよ」
そう言って立ち上がるシサーに頷いてみせると、俺に背中を向けてテントに戻りかけたシサーがふと足を止めて振り返った。
「ユリアの為に、レオノーラにすぐ戻るとは……言わねえんだな」
「俺に出来ることがあるとは、俺にも思えないから」
「……おやすみ、カズキ」
シサーを見送った俺の脳裏に、ハヴィが俺に投げつけた言葉が過ぎる。
――あなたは、誰かを守りたいと思ったことが、ないんですか……っ！
どうだったかな。
そんなふうに思ったこともあったような気がするけど。
もう、良く覚えていない。

第3部第2章第7話　存在の理由（1）

「はっはーん。パレスが魔物に襲われたわけが、わかったぜ」
翌朝、パレスの村は昨日の後片付けに村全体が追われていた。一晩寝て襲撃がなかったことで、人々も少しは落ち着いたようだ。
とは言え恐怖心が消えるものでもなく、村人に頼み込まれてパラーザの護衛部隊ら、魔物の排除に助力した人間が手分けして周囲の巡回にあたっている。
馬を借りて村の外を回っていると、崖の淵に立って遠くを見晴らしていたシサーが小さく呟いた。
「わけ？」
「ナタリア軍だ」
乗せてもらっていたジークの馬を下りて、シサーのそばに立つ。見晴らしは思いの外良く、パレスの村自体が意外と高度にあることがわかった。眼下に平地が広く続き、森や集落が見える。陸地が途切れた先には、海が広がっていた。真冬の冷たい風が下から吹き上げてくる。
「本当だ」
俺の隣で、馬上からジークが呟く。広々と伸びた平地には、蟻の行列のような黒く太い線が見える。ナタリアの国旗を掲げているのは、言われなくても視認出来た。
「軍隊が北上して来てるから、トラファルガーに押さえつけられていた魔物たちが右往左往してんだろう。その皺寄せを食ったってとこかな」
「どこに向かってんですかねえ」
「どこだと思う？」
のんびりと問うでもなく呟くジークに、シサーが試すような口調で尋ねた。
「どこって……」

「王都」
ナタリアの地図を頭に描いて短く答える。ナタリアの王都エフタルは、確か領土の北東にある。戦域から撤退してくれば、北上してパレス付近を経由して……撤退？
顔を上げると、シサーもそれを受けて頷いた。視線をナタリア軍の上へと戻す。
「理由はわからねえが、とりあえずは撤退だな。トラファルガーの活動を知っての全面撤退か、はたまたヴァルスとツェンカーの同盟を知っての当て馬か。どっちかはわからねえが」
そこでシサーが渋面を浮かべてみせた。ジークが眉根を寄せる。
「ナタリアが撤退……もしそれが戦線離脱を意味するなら、ツェンカーは動けなくなるんじゃ？」
「ナタリア軍が自国に滞留している状態で、ナタリアを素通りして南下してくるわけにゃいかねえよな。とは言え、敵国が減るのは望ましくもある。ツェンカーとの同盟が成立した今となっては、ヴァルスにとっては痛し痒しと言ったところか」
俺たちが見守る中、ナタリア軍は着々と進んで行く。
ナタリア軍が帰国する理由が何にせよ、ツェンカーは身動きが出来なくなるか……。戦地で交える相手が減るのは良いが、こちらとしても援軍を当てに出来なくなる。
とすれば差し引きで、ヴァルスと対するのは残り四国。――ロドリス、バート、リトリア、そしてロンバルト。
「リトリアはどうなったんだろう」
マカロフからツェンカーに向かう途中で、リトリアも内乱がどうこうと聞いた気がする。
小さく呟いたのを聞き咎めたように、ジークが俺を見下ろした。
「リトリアに入って、何かわかることがあると良いんですがね。パララーザはしばらくラシーヌに留まって、アジャーニ方面に向かうんでしょ？　我々はどうしますか？」
「王都に寄ってみるか」

シサーが嘆息した。
「バートへの窓口は、東部シガーラントにある。リトリア北東の街ラシーヌからシガーラントへ向かうには、セルジュークの付近を通る羽目になる。少し迂回したところで、大きなロスにはならんだろう。様子を見ておく価値はあるかもしれん。……さてと。村に戻るか。カズキ、こっち乗れ」
シサーに促されて、その後ろに引き上げてもらうと、村へ戻る道を辿り始めた。
周囲に魔物の気配がなさそうなことを確かめつつ進んで行く。
村の近くにある墓地には、急遽合葬場所が用意され、正体もわからないような遺体に関してはまとめて埋葬されることになった。
今日の午前中から村の男性が駆り出されているが、作業はまだ終わっていないらしい。人々の姿が見える。
「ハヴィ」
その中にハヴィの背中を見つけて、シサーが声をかけた。振り返ったハヴィが元気なく微笑む。
「シサーさん。ジークさん」
どうやら俺は勘定に入っていないようだ。
「魔物はどうですか？」
「今んとこ、おかしな様子はこれと言ってねえみたいだな」
「俺、先に村に戻ってるね」
ハヴィにとって俺は余分らしいと判断して、馬を下りる。シサーが短く「おう」と答えるのを聞いて、俺は歩き出した。歩いたって大した距離じゃない。
村に戻ると、至るところで死体を集めたり、清掃をしたりなどの修復作業が行われている。
パララーザに一度戻ると、することもないので俺は清掃道具を片手に広場へ出た。石畳に残る血の染みを、モップで擦る。
しばらくそうして黙々と清掃に励んでいると、遠くの方から「カズキちゃん」と呼ぶ声が聞こえた。今のところ、俺をちゃん付けで

呼ぶ人間には一人しか心当たりがない。
「メディレス」
振り返ると、案の定、パララーザのお抱え魔術師メディレスが、巨体を揺らしてこちらへ来るところだった。手を止めてそれを待つ。
「カズキちゃんたら。良いのよ。あなたは巡回を受け持ったんだから。あと一時間もしたら、また巡回に出るでしょう？　少しは休んでいた方がいいわ」
「別に疲れてない」
短く答えて、清掃を再開する。
石畳についている血痕はまだ良いが、問題は木の塀なんかについた血痕だった。こっちは石と違って、染み込んでしまって完全にとることが出来ない。
「そんな。体を壊しちゃうわよ。それとも、疲労回復の魔法でもかけましょうか？」
メディレスは、昨日から聖職者と一緒に怪我人の治癒に忙しかったと思う。今日も、昨日治癒しきれなかった人々や、あるいは怯えきっている人心を宥める為に魔術を使いっ放しのはずだった。疲れているのは俺よりあんただろうと思う。
「必要ない」
端的に答える俺に、メディレスが嘆息する。
それから、黙々と作業を続ける俺の背中に、躊躇いがちな言葉をかけた。
「カズキちゃん。……今まで何があったのか、聞いても良い？」
その問いは、余りに漠然とし過ぎている。
最初にメディレスに会った時――ヘイズの村からここまでと言う話だったら、長過ぎて話す気になれない。答える気にもなれない俺をどう受け止めたのか、メディレスが慌てたように付け足した。
「あ、うん。いろんなことがあったのよね。それはわかるの。うん、それはそうよね」
背中を向けてモップで擦っている地面しか見ていない俺は、メデ

ィレスが今どんな表情をしているのかはわからない。ただ、まるで腫れ物に触るかのような遠慮の仕方をしている雰囲気だけは漂ってくる。

「それはそうなんだけど……あのね、カズキちゃんが悩んでいるんじゃないかと思って」

「俺が？　俺は何も悩んでない」

「そう？　そうね、私とそれほど親しいわけでもないし、まだ信用が出来なくて打ち明けられないと言うのもわかるけれども」

何を勘違いしたのか、メディレスが言い募る。それを受けて、俺は手を止めると振り返った。

「そうじゃない。本当に悩んでいることなんて何もないんだ。……ただ、そうだな」

メディレスが、俺の言葉を待つように真っ直ぐ見つめる。禿げ上がった頭部に刻まれた深い傷やがっしりした躯体に似合わない、俺の機嫌を伺うような素振りだ。

「信用って話で言えば、信用はしていない」

「そ、そうよね……」

「別に、メディレスを信用出来ないと言っているわけじゃない」

多くを語らない俺の言葉に、メディレスは強ばった表情で俺を見た。

「……誰も、信用出来ないと言っているの？」

「……」

「シサーも？」

俺は黙って顔を横に振った。

否定ではない。もちろん肯定でもない。――答えたくない。

「……そう」

どう受け止めたかはわからないが、メディレスは沈鬱な色を浮かべて目を伏せた。

「カズ……」

「メディレスさん！」

続けて何かを口にしかけたメディレスを遮るように、キャンプの方から声がした。揃ってそちらに視線を向けると、ハヴィがこちらを見ていた。歩いてくる。

「今、シリーさんに聞いたら、こっちだって」

言い訳がましく言いながら近づいてきたハヴィは、殊更俺から視線を背けたままでメディレスに元気なく微笑みかけた。

「僕、ここに残ることにしました」

「え？　パララーザを抜けると言うこと？」

「はい」

どうやら俺とメディレスの会話はハヴィに遮られる形で終わったようなので、俺は清掃作業を再開することにした。背後では二人の会話が続いている。

「シリーさんには今、伝えました。メディレスさんにも直接お伝えしようと思って。お世話になったから。ありがとうございました」

そろそろこの辺りの血痕もだいぶ落ちてきた。水を替えて、別の場所の掃除に行った方が良いだろう。

「パララーザに拾ってもらえなかったら、こうして今生きていなかったかもしれません。……サナは、もういないですけど」

「サナがここにいるから、残ることにしたの？」

「はい。ここを離れたら、きっとサナが寂しがる。だから僕は、サナと一緒にここにいようと決めました。短い間だけど、お世話になりました」

バケツの水を撒いて最後にもう一度モップで水と血痕を擦ると、俺はモップを引き摺って歩き始めた。井戸のある方へ向かうには、一度キャンプの方角へ戻らなければいけない。

「僕は」

方角的にハヴィのいる方向へ足を向ける俺に、一際声を高くハヴィが口を開いた。まるで俺に聞かせるような声に顔を上げると、案の定、ハヴィは俺の方を真っ直ぐに睨み付けていた。

「僕は、あなたにようにはなりたくない。……ならない」

「そう」
攻撃的な眼差しを意に介さず、短い返答を残して歩き去ろうとする俺に、ハヴィは尚も声を張り上げた。
「あなたのそういう態度は、ここ最近のことだと聞きました。……親友を失ったのだと」
全く、余計なことを話したのはシサーかジークか。どちらでも別に構わないが。
足を止める。冷たい視線を向ける俺に一瞬怯んだような顔をしたハヴィは、踏ん張るように拳を握り締めて言葉を続けた。
「だけど、あなたのそれは、ただ逃げているだけだ」
返答もなく再び足を動かす俺を足止めしようと言うように、ハヴィが怒鳴った。
「そんなの、卑怯なだけだっ……」
「ハヴィちゃん」
「僕は、逃げない。あなたのようにはならない。……覚えておいた方が良い。あなたは、ただの、卑怯者だ」
どう思われても構わない。
ハヴィの横を通り過ぎる時、俺は短くその言葉に答えた。
「覚えておこう」

◆◇◆

パレスが魔物の襲撃に晒されてから二日後、パララーザはハヴィと死者を残してパレスを発った。そこからリトリアまでは、山道を越えて五日ほど南下する。
魔物との遭遇は度々だったが、先日ハヴィを助けた時以来、レーヴァテインの魔力を使う事態になるようなことはなかった。
リトリアに入って最初にたどり着いたのは、ラシーヌと言う大きな街だ。
パララーザはここから進路を西にとり、俺たちは南へ取る。彼ら

とは、ここでお別れになる。
「カズキちゃん」
数日ここで商売をする彼らのキャンプの準備を手伝って、別れを告げた俺たちに、メディレスが悲しい目を向けた。
「あの……この前、ハヴィちゃんが言ってたこと、その、気にしないでね」
シサーとジークが俺とメディレスを見比べる。俺は軽く目を瞬いた。
「気になんてしていない」
本当に俺はハヴィの言葉を全く意に介していなかった。
「そう？　ハヴィちゃんも、大事な人を失ったばかりだったから殺気立っていたのだと思うの」
「そもそもは俺の態度が気に入らなかったみたいだから、俺のせいだよ。だからと言って別にどうってこともない」
しきりと気にするメディレスにそうそっけなく告げると、メディレスの方が責められているように目を伏せた。それからシサーの方に顔を向ける。
「頼んだわよ」
「ああ。いろいろと助かったよ。またどっかで会うだろうが、その時まで元気でな」
「その時までにあのエルフ女と別れててておくれよ」
メディレスの隣に立って別れを惜しんでくれていたシリーが、シサーの腕に腕を絡めた。今回は彼女にとって邪魔でしかないニーナがいなかったので、終始シリーの機嫌が良かった。
「それはねえように気をつけるよ」
シリーの腕から腕を抜き取り、苦笑いをしたシサーが一歩下がる。その少し後方で、パララーザから餞別にもらった馬を傍らに引いたジークがこちらを見ていた。
シリーやメディレス、その他別れを惜しんでくれる面々と別れ、俺とシサーも彼らに背を向けた。ジークが、俺たちを待って歩き始

める。
「女性にああも迫られるとは羨ましい話ですねえ」
「じゃあ代わってやるよ」
「いやいや、シリーさんの方が僕じゃあ納得しないでしょう」
馬の手綱を引きながらからかってみせるジークに、シサーが渋面を浮かべる。
もらった馬は一頭だから、当然三人で騎乗するわけにはいかない。何でくれたのかと言えば、荷物の運搬用だ。ジークは、長旅と言うことと久々に故郷に帰ると言うことで無駄に荷物が多かったし、俺は大してあるわけじゃないがアレンに返してもらった余剰の剣がある。背中にくくりつけていれば良いと言えばそうなんだが、なきゃない方が身軽に決まっている。
「ニーナさんの目も届かないことだし、ちょっとぐらいシリーさんに優しくしても文句は出ないんじゃないですか。結構佳い女の部類に入るでしょ」
「入るだろうけどな。ああ見えて俺より十五も年上だよ」
「ええ？　何て意外な。ニーナと言い、シリーと言い、シサーは年上キラーなんだなあ」
「……それ、ニーナの前で言うなよ。八つ裂きにされるぞ」
「本当にされそう」
「本当にされるよ」
南に向かっているとは言え、まだまだ冬は続く。旅道具を揃える為にとりあえず道具屋へ向かうことにして、シサーが思い切り伸びをした。
「さーて。せめて今日中に次の町に辿り着いておきてえもんだがなあ」
「行けるものですか？」
「ここから一番近いのは南西のジャスティか。別段、間に難所があるわけじゃねえし、頑張れば日没後くらいには到着出来んじゃねえかな。ジャスティで、ちっとリトリアの様子を探っておこう」

シサーの言葉通り、日没して間もなくジャスティと言う町に到着する。近くにラシーヌと言う大きな街があるせいか、こちらは賑やかな繁華街と言うより住宅街のように見えた。ベッドタウンと言うやつだろうか。地図上で見ると王都セルジュークまでもさほど離れてはいない。

こちらの世界では珍しく、集団住宅が多いように見える。その為、建物の一つ一つが大きいものだった。闇が舞い降りた町に、あちこちで窓から漏れる暖かな光が見える。

シサーが向かったのは、集団住宅ではなかった。中央の広場から外れ、裏道の方へ足を向ける。そちらの方には、小さいながらも石造りの戸建がいくつか集まっているようだった。

「マカロフとの戦争の時に知り合った傭兵が住んでる。戦争ごとにはそれなりに情報を持ってるんじゃねえかな」

第3部第2章第7話　存在の理由（2）

ジャスティの傭兵シャルロは、俺たちを快く受け入れてくれた。年齢はシサーやジークと同年代ってところだろうか。今まで会ったシサーの傭兵仲間は総じておじさんばかりだったので、少しばかり意外に思う。

「久しぶりだね。相変わらず今もニーナと一緒に暮らしているのかい」

背が低く、どことなくちんちくりんな感じの男性だ。ドワーフを想起させられながら、招き入れられた家で椅子に腰を落ち着ける。

「狭いところだけど、泊まっていくかい？」

シャルロの言葉は決して謙遜ではなく、本当に家は狭かった。突然三人も押しかけては、寝場所などないのではないだろうか。

そう思ったのはシサーも同じらしく、苦笑を浮かべて否定する。

「いや、まさか突然連絡もなしに押しかけて、そこまでしてもらうわけにはいかねえよ。宿を探す。気にしなくて良い」

「そうかい」

「ああ。それより、お前さんを尋ねてきたのは、ちょっとリトリアの状況について教えちゃもらえねえかと思ったからなんだ」

「リトリアの状況？」

お茶を手ずから運んでくれたシャルロが、俺たちにカップを差し出しながら首を傾げる。

「帝国継承戦争だよ。俺がヴァルスに居座ってるのは知ってるだろう」

「ギャヴァンと言ったっけ？　港街だったな。訪ねて行くと言ったきり、まだ訪問出来ていないが」

「それはいつでも良い。ただし、運良く俺がいればの話だがな。……そう。ギャヴァンだ。今は諸用があってこうして出ているが、一応はこれでもヴァルスに籍を置いている。今ヴァルスがどんな状況

に陥っているのか知っておきたいってのはあるんでな。敵対してたはずのリトリアがどうしているのか知っておきたいってところさ」

シャルロが椅子のひとつに腰を下ろす。それを見て取って、シサーはカップに手を伸ばした。

「お前が家にいるってことは、傭兵の召集はかかっていないのか」

「いや、俺は傭兵稼業をやめようかと思ってるところなんだ」

「ほう？　そりゃまた何で」

少しアテが外れたようだ。傭兵をやめるつもりなのなら、戦争の情報も新鮮なものは入っていないかもしれない。

そう考える俺の前で、シャルロはゆっくりと顔を横に振った。

「嫌気が差した、それだけだよ。深い意味などない。この町が気に入ってもいるから、何か商売でも始めてゆっくり暮らそうかと思っているだけさ」

「隠居には早えなあ」

「違いない」

苦笑するように顔に皺を浮かべてみせたシャルロは、それから背もたれに深く体を預けた。

「だから、小耳に挟んだ程度のことしか知らないけれどね。リトリアはどうも継承戦争から手を引くことになりそうだ」

「……何？」

シサーが身を乗り出す。シャルロは重々しく頷くと、深い吐息をついた。

「先日、ヴァルスとロドリスに書簡を携えた使者を送ったらしいと聞いたよ」

「何でまた。あれか？　クラスフェルド国王が、連合軍に与したものの単独行動を図っているとか何とかってのが関係あるのか」

「いや、違う。……世代交代だ」

「世代交代っ？」

シサーが目を見張る。その横でジークも小さく息を呑んだ。

「何があった」

「何があったのか、確かなことは俺たちのような一般市民にはわからないさ。ただ確かなことは、クラスフェルド陛下が亡くなったこと、後を継いだのは女王であること。この二つだけだ」
「女王？　クラスフェルドには娘がいたのか」
「それも、初めて知ったことだ。だが、娘なのだと聞いている。女王が戦争を忌避したがっているんだろう。だからリトリアは新政権の成立と共に撤退を決めた」
　願ったりだ。
　だけどクラスフェルド王は、なぜ死んだんだろう。俺はリトリアについての知識は余りないが、壮年の国王だったんじゃなかったろうか。突然死ぬような年齢でもなかったような気がする。そして、まだ独身だったように思った。
　二人の会話を聞きながら、俺はかつてキグナスやレイアに教えてもらった特徴を思い返していた。リトリアは確か文化国。文系の国だ。芸術とか文学を愛する伝統に重きを置く国だと。にも拘らず、クラスフェルドは少し異質で、根っからの戦争好きだった。だからこそヴァルスは、リトリアとロドリスを共に敵に回すことを恐れていたんじゃなかっただろうか。
　そこから導き出されるイメージから考えると、クラスフェルドが突然死んだと言うのは今ひとつ結びつかなかった。シサーなんかは、俺より一層結びつかなかったようだ。納得がいかないように眉根をぎゅっと寄せている。
「何か変な感じだな」
「変な感じは、陛下が存命だった頃にもあったんだよ」
「え？」
　深く椅子に掛けたまま、シャルロは顎鬚を撫でた。日に焼けた丸顔に、ちょぼちょぼと生えた顎鬚は今ひとつ様になっていないようだ。
「戦争が始まり、傭兵隊に召集がかかった。しかしそれは、どうも各諸侯が、各々単独で傭兵を集めているってふうだったんだ」

「それは別に不審じゃねえだろう。各諸侯が自分らで傭兵を徴収し、取り纏め、それを率いて陛下の下へ集い国軍の下に組み込まれる。どこでもやってること……」

「そう。その通りならね。だけども、召集された傭兵を纏めた諸侯は、国王の下へ馳せ参じる様子がない、と言うのがあちこちで見られたらしいよ。しばらく前の話だけれども」

「馳せ参じる様子がない？」

シサーが眉を顰める。シャルロのその言葉通りなのなら、諸侯は兵力を蓄えはするものの、それを国に投じる様子がなかったと言うことになる。

「もちろん全ての諸侯がそうだってわけじゃない。国王の為、引いてはリトリアの為に率いていった諸侯もいくらでもいる。けれども、馳せ参じなかった諸侯は手元に集めた兵をどうしたんだろう、どうするつもりなんだろう。――そういう、不審な匂いが」

「……反乱の準備がなされていたってことか」

「そういう噂がなかったとは言わない。だが、俺も風の便りで聞いた噂でしかない。さっきも言ったけれど、それもしばらく前の話になるし、市民に下りてくる国の状況というのはリアルな話ではないんだ。タイムラグがある。大きな話があったとしても、それは少し遅れて耳に届く。だから何かあったとしても、俺たちの耳に届くのはもう少し先になるのかもしれない。今も傭兵隊に所属していれば別かもしれないが、それも二月ほど前に脱退してしまったし、血生臭い話は流れて来なくなった」

そこまで言ってカップに口をつけると、シャルロは少し思案するように窓の外を見遣った。彼の言うようにリトリアにおいて辺境地であるこの町の夜は、静かだった。

「明日は二十日か……ちょうど良いな」

口の中で小さく呟いたシャルロは、改めて顔を上げるとシサーに提案をした。

「セルジュークに行ってみたらどうかな」

「ああ。それほど回り道にはならねえから、寄ってみるつもりだったが。それが？」
「俺の知り合いに少し話を聞いてみよう。明日の朝に発てば、夜には到着出来る。急げば夕刻前に辿り着くことも出来るだろう。有益な話を聞けるかもしれない」
　リトリアがヴァルスに使者を送っているのであれば、俺たちが知ろうとしている話は既にラウバルやユリアの元には届いている可能性がある。手土産にはならないかもしれないが、俺たち自身が状況を把握すると言う意味では無意味じゃない。
「二十日の夜には、ミサがあるんだ」
「ミサ？」
「そう。我々セムの集いがある」
　知っているのが当たり前と言うように答えてくれるが、生憎と俺には何のことだかわからない。眉根を寄せていると、シサーが補足するように口を開いた。
「セムと言う民族がいるんだよ。ヴァルス人だとかリトリア人だとか言うだろう？　正確に言えばヴァルスもロドリスも、そしてリトリアも、主に分布しているのは、同じヴェルキア民族と言うがな。アルトガーデンのほとんどの国は、ヴェルキア民族の国家なんだ。キルギスはキルギス民族の国家だし、ナタリアの北部やツェンカーなんかは、イリアス民族で構成されてる。そういうのと同様に、セムと言う民族がいる。ただ違うのは、セム人種は国を持たないということだ」
「ああ、彼はセムが何かわからないのか」
　民族の定義ってのが良くわからないが、ゲルマン人だとかアングロ・サクソン人とかって言う、あれだろうか。俺的にニュアンスが近いのは。
　シサーが俺に説明するのを聞いて、シャルロが顎鬚を撫でる。それに首肯してみせると、シャルロはシサーの後を引き取って口を開いた。

「セム人は、独自の神を持つ。この大陸で唯一、ファーラを頭上に頂かない人種だ」

そんな人たちもいるのか。ローレシアのみならず、ラグフォレストもファーラ教が浸透しているふうだったから、俺はほとんどこの世界に唯一絶対の神のような認識を抱いていた。

けれど、良く考えればトートコーストも確かファーラを頂かない……多神教か何かだっただろうか。と言うことは、冷静に考えれば唯一無二の絶対神と言うわけではなかったんだ。

「それを理由に、かつて侵略戦争が起きた。まだアルトガーデンさえもない遠い昔の話だよ。けれども、それによって国を失い、居場所をなくした我々は、生存する為にファーラを祀る国に拠らなければならなくなった。そうして散り散りになったセム人たちは、今は各国にいる。それらを、セム系リトリア人だとか、セム系ヴァルス人だとかと言うね」

ふうん。ユダヤ人みたいだな。

キリスト教からの迫害を受け、国を追われ、他人の国に居場所を見つけられずに苦しみぬいた民族。

「セム人が他人の国にいられる理由は、他の民族に比べて数学的能力が極めて秀でているからだ。リトリア人には出来ない金勘定が我々には出来る。それが理由で金融関係の仕事をする者も多い。金の管理は、どこでも必要なものだ。どこの貴族も財政管理人を持っている。その財政管理人にセム人は多い」

ああ、なるほど。

と言うことはつまり、有力貴族の保護下に置かれているセム人が多いと言うことだ。

「我々は国がないゆえに、民族としての同胞意識が種族を支える唯一の頼みでもある。そのせいか、ひどく同胞の繋がりが濃いんだ。とても大切にする。そこには身分や今住んでいる国も関係がない」

そしてそれはそのまま、彼らが有力者に強い人脈を持っていることも意味するわけだ。

財政管理人には直接何の権力もないかもしれない。けれどもその財政管理人たちは、有力貴族に繋がっている。複雑に入り組んだ強い人脈を各国に持っているとも言い換えられる。

「二十日の夜には、セムの集いがある。セムの誰かの店で、ミサを行うんだ。その後に親交を深める為に食事をする。そういうことは頻繁に行われてはいるけれど、二十日の夜には必ずみんなが参加する。セムは同胞にとても親切だ。その友人である君らも、その恩恵を受けることが出来るだろう」

理屈を超えた結託と信頼がそこにあると言うことは話を聞いていてわかったが、疑問がわいたので俺は口を開いた。

「シャルロは、二十日にはいつもセルジュークまで行くんですか」

「いや、違うよ。普通は自分の住居の最も近いところで行われるミサに行く。俺も普段はそうだ。けれども、セルジュークのミサの方が多くの情報を知ることが出来る。力のある貴族は、王都に住んでいるものだから」

つまり俺たちの為にわざわざセルジュークまで足を運んでくれると言うことらしい。

話を聞きながら、何となく排他的な印象を覚えなくもなかった。セムと言うだけで無条件に受け入れ信頼すると言うのならば、逆にセムではないことが拒絶の理由にもなったりすることもあるんだろう。内に優しいと言うことは、外に冷たいと言うことと表裏一体のような気もする。

でも……そうか。もしも海外に移住して、近くに日本人の集う場所があれば、俺は足を運ぶのかもしれないな。いや、今この国に日本人のやる店でもあるのなら、俺はやっぱり足を向けたりするんだろう。どれほど馴染んで来たとは言っても、この世界の住人に日本人の匂いを求めるのは無理なんだから。

これは、故郷を懐かしんでいると言うことなんだろうか。

セム人と言うのはきっと、そういうことなんだろう。

「ミサと言うことは、司祭のような方がいるんですか？」

シサーとジークは、俺と違ってセム人とやらについての知識はある。とは言え、やっぱり絶対数の少ない人種のこと、別次元の出来事でリアルにはわかっていないらしい。ジークが質問を挟む。

シャルロがジークの方に顔を向けて、緩やかに横に振った。

「我々は、順位を決めない。神がいて、その次に司祭が来て、と言うようなことはない。神の次は、我々全てが同等だ。だから取り仕切る人間はいない。皆で同じように神に祈りを捧げて、歌を歌い、互いの存在と出会いを喜び合い、そして親しむ」

それを聞いて、なるほど少数派になるわけだ、と言う気がした。数が増えれば、どうしたって人は順位を決めたがるだろう。皆平等だと言う教えの元であってもきっと。

多くを学んだ者が偉くなっていき、人に教えを説いて上に立つ。どんな団体にもそれは必ず存在する。それが組織の在り方だから。そうでなければきっと存続は出来ないだろう。いずれ……すぐではなくても、セム人の教えと言うのはこの先淘汰されていってしまうに違いなかった。

「では、明日の朝、一緒に出発をしよう。君たちはミサに参加は出来ないけれど、どこかで待っていてくれたら俺が仲間を連れて合流する。それでどうだい？」

「そうしよう。手間をかけるが、宜しく頼む」

締め括るように言ったシャルロにシサーが礼を述べると、シャルロは優しげな笑みを浮かべて頷いた。

「セムではなくても、シサーは大事な友人の一人だからね」

継承戦争は、そもそもモナのギャヴァン襲撃で開始された。

シャルロと別れて帰った宿のベッドで、寝返りを打ちながら思い返す。

ギャヴァンにおける防衛戦、そしてロンバルト海上での海戦。そ

の二つが、最初の戦いだ。
　そうしてモナの公王が行方不明になると同時にモナはヴァルス占領下に下り、一方でロドリスにおいてシェインとロドリスの宮廷魔術師セラフィとの戦いが起こった。ロドリスを宣戦布告に追いやったのは、きっとそれが原因だろう。そして対するヴァルスとしても王女を拐かされたと言う……更に言えば後継者レガードを行方不明に追いやった要因を作ったと言う憤りをもって対抗の構えを見せた。
　しかしながら、そんなヴァルスに賛同したのは、元々ヴァルスを後ろ盾としていたロンバルトのみ。ロドリスは着々と同盟を結び、まずはナタリアそしてバートを味方につけた。更にリトリアの参戦。そしてロンバルトの敗戦により、ヴァルスはただ一つの味方を失い、ロドリスは友軍を増やした。
　苦肉の策としてヴァルスが乗り出した対応策が二つ――モナの徴兵と、ツェンカーとの同盟。
　これは、共に成功の兆しがあると言っても良いんだろう。
　少なくともツェンカーは協力を諾としてくれたし、モナにはカサドール公カールが軍隊を連れて滞在している。彼は無能には思えなかった。
　俺が確かなこととして知るのは、ここまでだ。
　ここからは現状、憶測に過ぎない。
　まずはナタリアの離脱。トラファルガーの影響だろうか。それともヴァルスとツェンカーの同盟？　残念ながらこれは、確かめることが出来なかった。
　いずれにしても、ナタリアの離脱が真実なら敵国はマイナス一。けれども、プラス一になったはずの友軍も同じくマイナス一。ツェンカーとナタリアは相殺になると見た方が良い。
　次いでリトリア。不審な点はあるにせよ、クラスフェルドが倒れ、新女王が即位したのは確からしい。そしてその女王は、戦争からの離脱を望んでいる。
　つまり、リトリアは敵国としては消えたと見なして良いだろう。

残るはロドリス、バート、ロンバルト。
モナがもう少し国力を回復出来れば、あるいは、そう……キルギスが今からでもヴァルス陣営に加わってくれれば。
「キルギスは……」
口の中で小さく呟く。
キルギスは確か、使者の戻りがないと言っていたと思う。つまり、イエスとは言っていないかもしれないが、ノーとも言っていないということだ。
このままそ知らぬふりを決め込むのかもしれないが、あちらに転がる可能性もないではない。逆にこちらに転がる可能性も。
何を待ってるんだ？　キルギスは。いや、そういうことじゃないんだろうか。
俺の小さな呟きに答える声はない。シサーもジークも、同じ部屋の狭いベッドで眠りに落ちている。
キルギスは確か騎馬民族だ。名馬の産地であるヴァルスのウィレムスタト地方を凌ぐと言う。つまりはヴァルス騎兵を越える存在だ。こちらに引き込めれば、ロドリス陣営と戦える。いや、こちらの方が恐らく優勢になる。
キルギスが参戦しなかった理由はなんだろう？　興味がなかったと言ってしまえばそれまでだが……。
（リトリアの存在か）
それもあったのかもしれない。
そもそも隣国であるモナも反ヴァルスとして進軍していたわけだし、加えてすぐそこにある大国リトリアもロドリスに与して参戦している。これでキルギスがヴァルスについたところで、両軍から攻められれば堪らないだろう。参戦するには少しリスクが大きい。
だけどモナ、リトリアの両国がロドリス陣営と言えなくなった今、状況は少し違うんじゃないんだろうか。
だとすれば、もう一度交渉に当たってみる価値はあるように思うんだが。

眠気が襲ってきて小さく欠伸をすると、俺は目を閉じた。霞んでいく意識の中で、ぼんやりと考える。

（キルギスは、モナの隣国か……）

モナを使って、キルギスを動かすことは出来ないだろうか。

第3部第2章第7話　存在の理由（3）

◆　◇　◆

リトリアの王都セルジュークは、伝統のある文化国の中心部としてふさわしい荘厳で華やかな雰囲気に溢れた街だった。
年代を感じる石造りの建物は重々しく聳え立ち、見る者を圧倒するような美しさと威圧感を放っている。
宿を取って早々にシャルロと別れると、俺は部屋の窓辺に立って少し街並みを眺めていた。
（そう言えば、ここって……）
エルレ・デルファルってのは、この街にあるんじゃなかっただろうか。
そう思うと、少し不思議な感覚だ。
かつてこの街で、シェインが……そしてその数年後にはキグナスが、暮らしていたんだろう。俺にとっては何もかもが真新しく未知の街だけれど、彼らがもしもこの地を踏むことがあれば、きっと懐かしいと映るんだろうか。……シェインはともかく、キグナスはもうそんなふうに思うこともないけれど。
ふと思い立って、ベッドの上に投げ出した自分の荷物を漁る。その中から一冊の薄い冊子を取り出して、ぱらりと捲る。
いつだか、レオノーラでキグナスが俺にくれたものだ。シェインに勉強を教わっていた時に使っていたと言う本。
端々には子供の落書きが残されていて、その落書きをしたのは幼いキグナスだ。
「ねえ。俺、ちょっと街を歩いてきても良い？」
それを閉じて、荷袋にしまいながらベッドに転がっているシサーを振り返る。あくびをするシサーの横では、ジークが自分の荷物からガラクタを引っ張り出していた。

「いいけど、気をつけろよ。どこで何があるか、わかんねえんだから」
「うん」
「ついでに道具屋も覗いてみてくれ。何か良いもんでもあったら頼むわ」
「わかった」
「あ、道具屋に行きますか？」
出て行こうとドアに足を向けた俺に、ジークが顔を跳ね上げる。
「じゃあ僕も一緒に出ます」
一眠りすると言う怠惰なシサーだけを残して、俺とジークは外に出た。昼と言うには遅く、夕方と言うにはほんの少しだけ早いと言う中途半端な時間だ。
「外国に出た時はね、いろいろなお店を覗いてみるに限るんです」
宿を出て街を歩き出しながら、ジークが機嫌良さそうに笑う。
「物の流通は、どうしたってアルトガーデン内の大国、それも中心部の方が良い。ツェンカーなんて、片田舎ですからね。こういう機会にいろいろと仕入れておくと、物を作る時に便利なものも多いでしょう？」
俺がろくに返事もしないのに一人でしゃべるジークは、まるでいつかのハヴィのようだ。
「ここは、言葉が通じるのかな」
行き来する人の言葉は、俺には理解出来ない発音をしている。これが多分リトリア語なんだろう。
そう思って呟くと、今試作中の通信機についてしきりと語っていたジークが口を噤んだ。それから微笑む。
「リトリアは、ヴァルス語を理解する人が少なくありません。特にここは王都ですから。田舎町とは違うでしょう」
「なら良いんだけど」
ジークと一緒に道具屋を探す。見つけた道具屋は大きく、品物も豊富だったが、特に必要だと思われるものはなさそうだった。薬類

や携帯食も、前回ラシーヌで買ったものがまだ十分ある。追加する必要もない。

けれどジークにとっては魅力たっぷりだったらしく、彼が物色をし終えるのは時間がかかりそうだった。待つ必要もなければ面倒でもあるので、ジークを置いて、俺は一人でセルジュークの見物に出ることにした。

人々は皆、華やかだ。レオノーラとも、ロドリスの王都フォグリアとも違う、どことなくクラシカルな空気感がある。服装なんかも華やかではあるが慎ましくもあり、総じてシックな印象だ。

大通りに立ち並ぶ店も、何となく上品な空気があった。色合いなどの使い方が、軽薄な印象を与えないからかもしれない。

いくつかの店を覗き、しばらく街中を歩いた俺は、日暮れも間近に迫ったところで大きな公園を見つけた。露店で買った飲み物のカップを片手に、中に入り込む。

氷の月も三週目に入った今、俺の意識で換算すれば年も明けて二月中旬頃に該当する。

地方によってはまだまだ寒い季節も続くだろうけれど、大陸の中部に位置するリトリアに入っては、ほんの僅か寒さが軽減されたような気がした。少なくとも極寒のツェンカーとは比べ物にならない。

ベンチを見つけて腰を下ろす。大きな木々にぐるりと囲まれた広場の中央には、噴水があった。立派な彫像がそれを取り囲むようにしながら、澄んだ水に濡れている。

噴水を越えた向こうの側には遊歩道らしき道が続いていた。俺の背後の方も、木々を越えて池でもあるみたいだし、かなり広い公園らしい。

周囲には、夕刻間近でも結構人の姿がある。小さな子供と過ごす母親たちや、談笑し合うカップル、学校帰りらしき制服姿の子供たちなんかの姿も見えた。のどか過ぎる光景だった。

こちらの世界にも制服なんてものがあるんだな。ブルーグレーを基調にした上品なデザインの制服だ。

何も考えずにひたすらぼんやりと水音に耳を傾けていると、視界の隅で誰かが近付いてきた。顔を上げると、年配の男性だ。老人と言っても差し支えない年齢だろう。けれども背筋は真っ直ぐに伸び、ゆったりとした上品な衣類を身に付けているから、『おじいさま』と言った風情だ。

その彼に何か話しかけられて、俺は目を瞬いた。リトリア語のようだ。俺には全くわからない。

「すみません。リトリア語は、わからない」

顔を横に振って見せると、老人は小さな目を丸くして、それから皺だらけの顔に柔和な笑みを浮かべた。

「こちらは、あいてますか？」

「あ、はい」

ヴァルス語で言い直してくれて、ようやく意志の疎通が成り立った。頷く俺に彼も頷き返し、それからベンチの端に腰を下ろす。散歩中の休憩ってところだろうか。

それきり言葉を交わすでもなく、俺はぼんやりと噴水を眺めていた。老人も同様だ。そしてそんな老人に、時折制服姿の子供が頭を下げる。

もしかすると先生か何かなのかもしれないな。

だからと言って何の関係があるわけでもないのだが、暇に任せてそんなふうに思っていると、ふと老人がこちらを向いた。

「あなたも、彼らと同じくらいの年齢かな」

「え？」

老人の言う『彼ら』と思しき制服姿の男女に目を向ける。年の頃は十七、八だろうか。

「そうですね……多分」

短く答えると、老人は穏やかな顔で頷いた。それから、暇なんだろう、続けて口を開く。

「若い者は良いですね。見ていて元気になります。あなたは旅人ですか？」

「はい」
俺の身なりを見て、そう尋ねたんだろう。俺の知る限り帯剣をしているのは、街から街へ流離う旅人か兵士、そして貴族階級くらいのものだ。
それきり沈黙する老人に、俺はふと質問が口をついて出た。
「あの」
「はい？」
「エルレ・デルファルって、この辺りですか」
老人が目を瞬く。
深い意味があったわけではないが、せっかくここまで来ているのだから、その建物を見てみようかと言う思い付きに過ぎない。
「すぐそこですよ。ほら、木々の隙間に細い尖塔が見えるだろう？」
老人が、節くれだった指を上げて、オレンジ色の空の方向を指す。歩いてすぐに行けそうな距離に見えた。この公園に戻って来られれば宿にも戻れるだろう。
「なぜ、エルレ・デルファルに行くのです？」
礼を言いかけた俺より早く、老人が問い返す。自分でも良くわからないので、俺は小さく首を傾げた。
「見てみようと言う気がしたので」
「中には入れませんよ」
「外からで構いません」
「なら大丈夫でしょう。どれ、案内してやろうか」
老人の言葉は予想外過ぎて、俺は思わず見返した。そうしている間に、老人は「よいしょ」と呟いてベンチから立ち上がる。
「いえ、一人で大丈夫……」
「どうせそろそろ向かおうと思っていたところです。気にしなくて良い」
向かおうと思っていた……じゃあ、先ほどから見かける制服姿は、エルレ・デルファルの学生だったと言うことだろうか。
「今から出勤ですか」

「私は、現役の教師ではないからね。引退して、教師を指導する真似事をしております」
断りきれずに、歩き出した老人の背中について行くと、老人が俺を振り返った。
「私と一緒に中に入れてやることは出来ないけれども」
「いえ」
短く答える俺に頷くと、老人は空を見上げてゆっくりと歩き始めた。
「セルジュークに来ると、エルレ・デルファルを一目見ていこうと言う方が時折おられるようです」
一応世界で有名な場所のようだから、観光名所みたいなもんなんだろう。
頷く俺に、老人はまるでガイドさんのように説明を続けた。
「名の知れた魔術学園ではありますからね。けれども、エルレ・デルファルに入学が許されるのは、一年に千人ほどです」
それが多いのか少ないのか良くわからない。
黙って横に並んだ俺を見上げ、老人は言葉を続けた。
「ローレシア大陸の全土から、千人。割合で言えば、平均一つの村や町に一人いるかどうかと言うところでしょうね」
「そうですか」
「そして卒業するのは、その三分の一ほど。卒業してから、実際に魔術師として活動を続けられるのは、更にその五分の一ほど」
大陸全域で、卒業するのは三百人前後、そして実際に魔術師になれるのが六十人程度……。
稀少なわけだ。
単純計算で、一つの国につき、新しい魔術師は一年に五人くらいしか排出されないと言うことになる。もちろん実際は年や国によってバラつきが出るんだろうし、エルレ・デルファルが全てと言うわけでもないんだろうが。
「卒業して魔術師になっても、多くの者が命を落とす」

キグナスが脳裏に蘇る。

「魔術師は、本来の姿は学者なんですけれどね。どうしても危険な場所に借り出されることが多い。冒険、戦場、そして宮廷」

公園を抜けて細い路地へと足を向けながら、老人は俺を見上げた。

「学生たちの姿を見ると、一体この中の何人が不幸な出来事に巻き込まれてしまうのだろうと考えてしまいます。ここで魔術を学ばせ送り出していく行為は、死地へ送り出すのに等しいのではないかとね。この年になっても、未だ答えは見つからずに迷ってしまうものだ……。若い君には、まだ実感がない話ですね」

「いえ」

エルレ・デルファルは、本当にそこからすぐだったようだ。

路地をいくつか折れ曲がって、並木道のような広く綺麗な歩道に出ると、それは真っ直ぐにその建物へと続いていた。まだ数十メートルほど先にあるその建物を見つめ、老人が足を止める。

俺もつられて足を止めた。

「人は、生まれた瞬間から死への道のりを歩いてる。それが来るのがいつだったとしても、同じのような気がする」

シンにも、キグナスにも、唐突に訪れた死。

それをもって彼らは何を思うだろう？　何も思わないのに違いない。死を迎えた瞬間に彼らは彼らではなくなって、既に考えると言う概念さえ存在しない。

だったら、それが訪れるのがいつだろうが同じだ。死は死でしかない。それを越えてしまえば、その先は何もない。後悔のしようも、苦しみようもない。

そしてそれはいつ自分を絡め取るかもわからない。明日かもしれない。明後日かもしれない。あるいは、自分の傍を掠めていくかもしれない。シサーの上に、ジークの上に。

なぜなら、この世界は人に死を与えようとするあらゆるものに満ちているから。

老人が、苦く笑った。

「あなたは、若いのに厭世的ですね」
「そういうつもりはないですけど」
再びゆっくり歩き始めた老人に従って俺も歩き出しながら、小さく言って顔を横に振る。会ったばかりの老人に何を言ってるんだか、と思う反面、会ったばかりの老人だからこそのような気もする。
俺の言葉を受けてか、老人は独り言のように小さく呟いた。
「生きると言うことには、畢竟、意味などないのかもしれません」
エルレ・デルファルの門が近付いてくる。中は広そうで、まるで何かのテーマパークのようにも見えた。高い塀と今は閉じた鉄門の内側に、点在する大きな建物が見える。
「生存する為に、生存するのでしょう」
「生存する為に、生存……」
繰り返す俺に、老人は微笑んで頷いた。
「生存の為の生存と言う殺伐とした事象に過ぎないのでしょう。そういう意味では、訪れるのがいつであっても同じことでしょうね。けれども、人はその意味を考える。全ての物事は多角的に構成されています。ある側面から見れば無意味に思える物事が、別の角度から見れば重要な意味を持つかもしれない。あるいは意味を持たせるのは自分自身かもしれませんね。……死と隣り合わせのこの世の中、思いがけないところで奪われていく命は、悲しいことに多いものです。それがあなたの屈託なのかもしれない。それは私にはわかりません」
「……」
「ただ言えるのは、そこに自分なりの意味を見出した時、やはりそれは『いつでも同じ』とはいきませんね。生存の為の生存に過ぎない殺伐とした事象に意味を付加する、と言うこと――そしてそれこそが、人の人たる所以なのでしょう」
無言で視線を向ける俺を、老人は微笑を絶やさないままで見返した。
「あなたの旅路が、何かの意味を見出せるものであるよう、祈って

います」

老人と別れてエルレ・デルファルの周りをぐるりと歩いてみた俺が宿に戻ったのは、すっかり日が暮れてからのことだった。

シサーと合流して、シャルロと待ち合わせた店に向かう。

老人の言葉は、俺の心に乾いた反響を投げかけていた。意味のないものに意味を見出すのは、不可能だ。存在しない意味について考えることなど無駄でしかない。

キグナスがあそこで失われることは、予め定められたことだったんだろうか。

運命と言うものがもしあるのならば、そのレールの上を俺たちはひたすら走っていただけなんだろうか。

だとしたら、そのレールを下りることは出来なかったのか。どうして？　どうしてその上を走り続けなければいけなかったのか。

答えは簡単だ。そのレールの行き先を知らなかったから。

なら、知っていたら変えることが出来たのか。変えることが出来たんじゃないのか？　俺に、何か出来たことが――――……。

どうして。どうして。どうして。

……そう考えるのは、生きることに意味を見出そうとしているからだろう。

俺は、そういう混沌とした迷路から、自分の中で既に抜け出したはずだ。

生きることに意味などなく、運命など存在せず、起きた全ての出来事はただの事象・現象に過ぎず、生も事象に過ぎないのなら死も事象に過ぎない。

生存の為の生存に過ぎないと言うのなら、意味など付加する価値がない。それで良い。……そうでなければ、ならない。

「バートで首尾良く船を手に入れられりゃあ良いんだがなあ」

ジークは、道具屋で何やら収穫があったようで、宿に篭ったきり動く気がないようだった。シサーに聞くと、全てを忘れたような熱中振りでガラクタにかじりついていると言う。
「何か心当たりはあるの？」
「残念ながら、今回は何もない」
空腹を満たし、シャルロが来るのをただ待つ。シサーは手持ち無沙汰のように、ブドウのような果実を摘んでは口に放り込んでいた。
「この時期に渡し舟は期待出来ねえからな。船を持ってる奴を捕まえて小銭掴ますしかねえだろうが」
つらつらと話していると、ドアの開く音と共に夜風が吹き込んできた。夜ともなるとさすがに風は冷たく、ドアから僅かの場所に座っている俺とシサーは、揃って身を縮めた。
「お待たせ」
入ってきたのは、お待ちかねのシャルロだ。その後ろに、すらっとした品の良い男性が控えている。年寄りと呼ぶには、まだ若々しさを残す笑顔だった。
「ジークは」
「宿に篭ってる。気にしなくて良い。趣味に没頭してるだけだ」
「そう。……モシェル。こちらだ」
モシェルと呼ばれた男は、立ち上がった俺たちに温和な笑みを浮かべて会釈をした。
「こちらがシサー。そしてカズキ」
俺たちを紹介した後、今度はモシェルを俺たちに紹介した。
「こちらは、モシェル。ヴォルディノ辺境伯シガーラント公フリッツァー・ウィルディン卿の財政管理人だ」

第3部第2章第8話　再来（1）

「ヴォルディノ地方ってのは、要するにシガーラントを含めたバートとの国境地帯一体を指す」
モシェルとシャルロが腰を落ち着け、それぞれにオーダーした飲み物が行き渡ると、シサーが俺に説明をした。
「国境地帯一体……じゃあ、かなりの広範囲？」
「そういうことになるな。そもそも辺境伯ってのは、国境を守る重要地域だから、国の中心から離れているとは言え重要な人物を据える傾向にある」
じゃあ、シガーラント公何とかと言うのは、リトリアにとって重要な人物なわけだ。
シャルロが説明の後を引き受けた。
「シガーラント公は、元々クラスフェルド陛下の寵を受けておられた、元帥だった人物だよ。今はシガーラント公として居を構えていらっしゃるが、現在セルジュークに滞在しておられるとのことだ。モシェルも普段はシガーラントにいるが、公がこちらにおられる関係でセルジュークにいたと言うことだね」
「何で、セルジュークに？」
シサーが尋ねているのは、親玉の方が王都へ来ている理由だろう。
モシェルは、顎鬚を撫でながら苦笑をした。セムの男性は顎鬚を生やす習慣でもあるのだろうかなどとつまらないことが気にかかる。
「話せることは余り多くはありませんが、構いませんか」
「構わんよ。別に調査をしているってわけじゃない」
シサーの返答にモシェルが頷く。そして、口を開いた。
「リトリアは、過日、女王が即位なされました。各国が戦争を行っている最中のこと、大々的にとは参りませんでしたが、事実上即位式を終えています」
「新女王と言うのは、先王の娘と言うことで良いのか？」

「ええ。ソフィア様は、誰に恥じることのないクラスフェルド先王陛下のご長女でいらっしゃいます。ご生誕の諸事情につき王女として育てられてはおりませんでしたが、先王陛下直筆の書面にて、後継を名指しされておられます。確かなことです」

何だか不審な出自ではないことをむきになって言い募っているようにも見えるが、考え過ぎだろう。それとも幹部連中の中でいちゃもんでも生じているのかもしれない。

「フリッツァー様は、新女王陛下をお気遣いになられて、こちらへ滞在なさっておられます。恐らくは近々こちらに居を構えることにもなりましょう」

「先王の死因ってのは、聞いたら教えてもらえるのか？」

言いながら、シサーがまた果実を口に放り込む。モシェルは黙って顔を横に振った。シサーが尚も突っ込む。

「病死するには、ちと妙だもんな。考えられるのは、何かの中毒とか、あとは怪我、それか」

「……」

「暗殺ってのもあるか」

「滅多なことは」

モシェルが、シサーを宥めるように軽く片手を挙げた。

確かリトリアは、クラスフェルド王に対する内乱がどうとかこうとかって、マカロフで会ったシアが言っていたような気がする。とすればその内乱によって命を落としたと考えるのが妥当に思うが、モシェルは語る気はないようだ。

「いずれどこかから伝わることなのだとしても、私が外部の方にお話出来ることではありません。ご容赦下さい。ただ確かなことは、クラスフェルド先王陛下は急死され、ソフィア女王陛下が即位なされたと言うことです。そして、陛下は戦争からの離脱をお考えでいらっしゃる。これは既に、ロドリスとヴァルスにその旨を申し伝える書簡をお届けになりました。戦地に送り込んでいた軍にも、撤退命令が発されたところです」

「じゃあ実際に撤退するのはもう間もなくってところか。なるほどな。……他には何か目新しい情報はないか？」

「リトリアの状況について話せることは、さほど多くはありません。言えることは、女王陛下の関心は国内に向いています。国内の体制を整えようと躍起になっているのです。元々我々もさほど参戦に乗り気だったわけではありませんから、撤退への異議は、国内でもほとんど上がっていません。特に、今回はロドリスに与しての参戦でしたからね」

モシェルは、苦笑するように言ってカップに手を伸ばした。口に運ぶその仕草を眺めながら、シサーが尋ねた。

「どういう意味だ？」

「ご存じないとは思えませんが、我々リトリアは、そもそもロドリスと親しい隣人と言うわけではありません。有り体に言えば不仲と言えるでしょう。ヴァルスについた方がよっぽど溜飲も下がると言うものですよ」

「ならばなぜ最初からヴァルス側につかなかった？」

モシェルは黙って顔を横に振った。わからない、の意だろう。戦争が始まった頃は、彼の主はシガーラントにいた。その使用人に過ぎないモシェルが詳しい経緯を知らなくても無理はない。

「当初はヴァルスに傾いてはいたようですよ。恐らくは意見を翻すような何かがあったのでしょうね。いえ、それすらも憶測に過ぎませんが。ただの、先王陛下の気紛れと言うことも十分に考えられます」

意趣替えをするような何かか。それが何なのかは、この顔ぶれではわからないだろう。そして多分わからなくても今更困らない。

「先王陛下は、どうやらロドリスの客将をお気に召しておられたようですから」

「ロドリスの客将？」

シサーがオウム返しに問う。モシェルはおどけるように眉をひょこんと持ち上げて、笑った。

「詳しいことは存じ上げません」
ロドリスの客将、か。確か『青の魔術師』の腹心で国外交渉に当たっていた人物がいたよな。そもそも近衛警備隊だか何だかなのだし、客将として迎え入れられるに足る腕前は持っていたはずだ。
目を細めて考える俺の横で、シサーも同じ考えを持ったようだった。
「容貌は知らないか。話せなきゃ構わんが」
「そのくらいは話しても構わないでしょう。リトリアでも多くの兵士が目撃しておりますから。眼鏡をかけた、ひょろりと背の高い男でしたよ。先日までは、宮廷の方におりました。もうお帰りになったようですがね」
「宮廷にいた？」
シサーが眉根を寄せた。
もしもクラスフェルドが翻意した理由がその男――グレンフォードにあるのなら、何らかの手段を講じて新女王の戦線離脱をも阻止するんじゃないかと考えたんだろう。そんなことにまで気が回らないモシェルが、目を瞬きながら頷く。
「それは何の為に？」
「さて。それは」
さすがに話してくれる気はないようだ。
シサーが渋面を作って背もたれに体を投げ出した。攻める方向性を変える。
「リトリアが戦線を離脱すると言うのは、確かなことだと思っても良いんだな」
「結構です。これはもう動かぬ事実として、各国にも通達をしております。リトリアは、戦線を離脱します」
はっきりと明言したモシェルの言葉は、信用しても良さそうだと思えた。シサーが「わかった」と頷くと、モシェルも背中を押すかのように深く頷いてみせる。
「既にモナとは単独講和が成立しました」

シサーが小さく息を呑むのが聞こえた。黙って話を聞いていたシェルロが口を挟む。
「成立したのですか」
「ええ。モナの公王と陛下は知己でおられる。ご友誼をもって、モナの公王は講和に快く応じて下さいました」
「モナの公王は、確か」
「行方不明でした。現在は復権されておられます」
目を見開いて身を乗り出すように尋ねるシサーに、モシェルはどことなく誇らしげにそう断言した。復権……いつの間に。
「それは、俺たちに話して問題ないことなんだろうな？」
「ご心配なく。フレデリク公はヴァルスにもロドリスにも、いえ、各国に復権した旨の書簡を放たれておられます。諸国が承知していること、一般の民に漏れたところで問題が生じるはずもございません」
「モナとリトリアの単独講和は」
モシェルがふっと微かに鼻で笑った。
「公開しているわけではありませんが、知られたところで何困ることがありましょう。仮にヴァルスならば、恐らく望むところでしょう。ロドリスにしてみても、阻止しようはずがありません。したところで無意味でしょうから。誰に知られたところで恐れることではないはずです」
「ならいーが」
それきり、シサーは一度口を噤んだ。モシェルからこれ以上引き出せる情報は何かを考えているんだろう。
リトリアの内情については、恐らくモシェルはさほど有意義なことを口にはしないだろう。
だとすればあとは、リトリアではない他国の情報くらいだろうか。
「モナがリトリアとの講和に応じたと言うことは、つまりモナはそもそもヴァルス側として姿勢を固めていたと考えて良いんですか。その、公王が復権した後でも」

ぼそりと口を開くと、今まで俺が視界に入っていなかったらしいモシェルが少々驚いたような顔で俺を見た。それから深く頷く。
「そうです。モナはヴァルスに敗北したあと、ヴァルスの占領を受けていました。暫定政権の元です。ですがフレデリク公が復権しても、その方針を翻すことはなかった。いえ、むしろ明確に指針を打ち出したと言っても良いでしょう。ヴァルスとは協調姿勢を見せています。何せ、フレデリク公指揮下でリトリアと一戦交えておりますから」
「何？　どこで」
「モナとリトリアの国境ですよ。新王が立ってリトリアが兵を引いた為に勝敗はついておりませんが、残念なことにモナの方が優勢だったと聞いています」
意外だな。モナの公王にどんな心境の変化があったのかは定かじゃないが、いずれにしてもモナはヴァルス配下に下ったと見なしても良さそうに思えた。
「ちなみに、知っていたら教えてもらいたいんだが」
すとんと背もたれに体を預け、体の前で腕を組みながらシサーが口調を僅かに改める。
「キルギスってのは、どういう姿勢でいるか、聞いたことはあるか？」
その問いに、モシェルは黙って顔を横に振った。残念ながら新しい情報はもらえそうにない。
その顔を見てそう判断した俺だったが、モシェルの表情がふと何かを思い出したように動いた。
「そう言えば。これは不確かな噂に過ぎないので、まともに受け止めないで頂きたいのですが」
「わかった。何だ？」
「現公王のフレデリクは、即位直後にキルギスと頻繁に密使のやり取りをしていたとの噂があります」
「フレデリクが？」

「ええ。そのやり取りの内容は定かではありません。いえ、やり取りそのものが本当に行われていたのかさえ、確かめた者がいるわけではありません。ですが、もしもそれが事実なのだと仮定して、こういう者もおります」

言いながらモシェルは、やや体を乗り出すようにテーブルで手を組んだ。

「モナは、キルギスと何らかの密約を結んだのではないか、と」

「密約？」

モシェルが声もなく頷いた。それから改めて言葉を続ける。

「それがどのようなものかはわかりません。いえ、繰り返しますが、そもそもそういう事実があったかどうかもわかりません」

「もしもそれが事実であったと仮定しよう。であればモナとキルギスは何らかの形で懇意にしている可能性がある。だが、キルギスはモナに同調して出兵するようなことはなかったな？」

「キルギスの民族性を考えれば自ずと答えは導き出されます」

キルギスの民族性……いつだか誰かが「キルギスの民は潔癖だ」と言っていたことを思い出す。

「キルギスは、ヴァルスに対するモナの裏切りが許せなかったのではないでしょうか」

もしも本当にモナとキルギスが水面下で懇意にしていたとするならば、モナを使ってキルギスを動かすことが可能になるかもしれない。ヴァルスに対するモナの変節と受け止めて憤っていたのだとしたら、今は状況が違う。逆に、再度の変節によって修復不能な亀裂が生じているのかもしれないが。

何にしても、それは確かめる価値がある。根も葉もない噂に過ぎないかもしれないが、何らかの根拠のある噂かもしれない。であれば、今からキルギスを動かすことも不可能じゃない。

思わず顔を見合わせた俺とシサーが顔を見合わせると、モシェルが朗らかに笑った。

「有意義でしたでしょうか」

「ああ。参考にさせてもらえそうだ」
「では、私の方からも一つ、お伺いして宜しいでしょうか」
俺たちがひとまず満足して黙ったことを見て取ると、モシェルがさりげなく口を開いた。快く話をしてくれると思ったら、どうやらモシェルの方も欲している情報があるようだ。
「俺たちで答えられることならば」
「答えられなければ、それはそれで構いません。……ヴァルスの宮廷魔術師は、どのような方ですか」
「……どうしてそんなことが知りたい？」
眉を顰め、怪訝な顔でシサーが問う。ヴァルスの宮廷魔術師――なぜここでシェインが出てくるのか、俺にもわからない。次期女王でもなく、宰相でもなく、宮廷魔術師に焦点を当てている理由が。
「ほんの好奇心ですよ」
俺たちの不審は感じ取っているだろうに、モシェルは曖昧な姿勢を崩さなかった。
「少し興味があったものですから。もちろん一般の方の耳に高位官の話はなかなか届かないことは存じております。ですから知る程度のことで構いません。ヴァルス国民は、自国の宮廷魔術師をどのような人物と受け止められておられるのですか」
届くも届かないも、俺の隣にいるのはその人の友人と言って過言ではないだろうが、もちろんそんなことは億尾にも出さない。
「知る程度ったってな。その魔力には定評があるってことくらいは知ってんだろ」
「無論」
「異例の若さで就任した宮廷魔術師だってことも知ってるよな。二十代で就任してる奴は、歴史を紐解いても数えられる」
そう考えると、ロドリスの宮廷魔術師も秀でてるってわけだ。
「私がお尋ねしているのは、そのような情報ではありません。人となりです」
「……人となり？」

困惑したようにシサーが問い返した。
政治力でも権力でも戦力でもなく、他国の宮廷魔術師の人格を知りたがる理由が全く思い浮かばなかった。
「ええ。誠実な方なのか、大風呂敷を広げる方なのか、粗野な方なのか、有言実行の方なのか。そう言った人となりですよ」
「……良くわからねえが」
シェインに及ぶ余波が読みきれないからだろう。シサーはどこか警戒を孕んだ慎重な口ぶりでモシェルに答える。
「少なくとも国民の評判は悪くないようだ。代々宮廷に仕える家系として不足のない実力を持ち、国主や宰相の信頼も篤い。少なくとも俺は、信頼に足る人物と評価している」
「なるほど。十分です」
シサーの言葉に微笑んで頷いたモシェルは、こちらの疑心を払拭するように笑顔で付け足した。
「警戒をなさらないで下さい。悪いようにはなりません。繰り返しますが、ただの私の好奇心と受け止めて頂いて結構な程度の些細な質問です」
「ならいーんだが」
「さて。このようなところでしょうか」
懐から懐中時計を取り出して視線を走らせると、モシェルはシャルロに顔を向けた。二人の目線が交わり、頷き合う。それから、改めて俺たちの顔を交互に見た。
「新女王に、貴族たちの期待は集まっています。まだまだ若いけれど、利発な女性です。リトリアは恐らく変わることでしょう。周囲の各国と協調し、親しい隣国として共に歩んで行きたいと望んでおられます」
「いくつなんだ？」
「もうじき十八歳になられます」
「そりゃまた……」
シサーが絶句するように言葉を途切れさせた。

まるで何かの符丁のようだ。それは、ヴァルスにも誕生するだろう新女王の姿を髣髴とさせる。モシェルも今度は言いたいことがわかったらしい。口元に優しい笑みを刻む。

「あくまで私個人の意見に過ぎませんが」

「ああ」

「我らが新女王陛下は、ヴァルスに厚情をお持ちでいらっしゃいます。ヴァルスの王女に深い同情を寄せられておられるのです。はっきりと口にはしませんが、それも恐らくは撤退の理由の一つでしょう。先王が亡くなられると同時に牙を剥いた諸国に憤りを感じておられる。それは、リトリアもまたそうではあるのですが」

苦いものを押し出すような顔で告げると、モシェルは改めて顔を上げた。

「今はまだリトリアも自由に動きが取れる状況ではありませんが、ヴァルスともモナとも足並みを揃えて協力体制を築き上げていきたいとお考えのようだ。そのことを是非、ヴァルスの民にもお忘れなきよう」

立ち上がりながらそう微笑むモシェルに、俺たちも立ち上がって頷いた。

「ああ。そうなる未来を、願ってるよ」

第3部第2章第8話　再来（2）

◆◇◆

セルジュークを出てシガーラントに向かった俺たちは、そこからバートを目指して国境を越える。

先までパララーザと一緒だったけれど、キャラバンと言うのがいかに優遇されているのかが良くわかった。

とてもじゃないが、戦時中の現在、ただの冒険者ごときでは国境を越えるのは一筋縄ではいかない。

警備の目を掠め、道なき道を踏破し、当初の目的地であるバートの東岸へ辿り着いた頃には、既に花の月に差し掛かっていた。

そうして苦労して辿り着いたバートだったが、ヴァルスへ船を渡すことは誰もが渋り、一向に海へ出られる気配もない。

このままでは埒があかないとの結論に達した俺たちは、急遽方針を転換し、陸路をロドリス王国へ向かう。

ロドリスからファリマ・ドビトークを越えて、エルファーラからヴァルスへ。俺たちに残されている帰国手段は、最早それしか浮かばなかった。

実に七ヶ月ぶりに踏む、ロドリスの地だった。

「ああ、ようやく過ごしやすい季節になってきたなあ」

ロドリスとバートの国境地帯には、アンフェンデスと言う大きな都市がある。

国内で俺の顔が余り目立ちたくないのは今でも同じで、俺たちはアンフェンデスからやや西に位置する小さな村トリルに宿を求めた。

ひっそりと静かな村には宿らしい宿はなく、旅人のある時だけ宿

をかねていると言う農家にお邪魔して一夜を過ごす。
ロドリス国内については、一刻も早く通り過ぎてしまいたいと言うのが本音だ。
のんびりする理由もなくさっさと旅立った俺たちは、既に遠くにファリマ・ドビトークの山陰を見つけていた。馬を傍らに引きながら、ジークが欠伸交じりにのんびりと呟く。
「ヴァルスを発ってから、どのくらいが経ちました？」
「カサドールを出発したのが炎の月だから、ええと……六ヶ月ってところか？」
そうか。カサドールを出てから半年になるのか。
キグナスとギャヴァンで話していた時のことを思い出す。あの時俺は、こちらの世界で残されている時間は、あと最低半年だと考えた。幸か不幸か、もうしばらく長引きそうだ。
「調子良くいきゃあ、あと半月も過ぎればレオノーラだ」
「しばらくは実家でごろごろしていたいですねえ」
「何すっとぼけたこと言ってんだよ。戦況を聞く限り、おちおちしてらんねえと思うぜ」
バートの国内では、残念ながら得られた情報はさしてなかった。
俺はもちろん、シサーにもジークにも頼れるような知人がいなかったせいもあるし、『ここは敵地』と言う意識が警戒心を高めていたせいもあるだろう。ナタリアの時のように、パララーザのような隠れ蓑があるわけでもない。目立つような行動は憚られた。
得られたのは、シガーラントでだ。セルジュークでモシェルに会った翌日、シェルロは今度シガーラントにまで付き添ってくれて、そこにあると言う傭兵隊から情報を入手してくれた。
それに寄れば、ヴァルス軍と連合軍はヴァルスの東西にある要塞を巡って戦闘をしてるとかしてないとか。次いで、やはりヴァルスの北東にある盆地にて戦闘があったらしいとは聞いている。いずれにしても聞こえた噂は、ヴァルスの形勢不利ばかりだった。
だからと言って、戦争だ軍隊だと言う状況に俺が役に立てるとも

思えない。
そんなことを考えていた時だった。遠くの空に、何か不吉なものが疾るのを見たのは。
「何だ……？」
それを感じたのは、何も俺だけではないらしい。思わず足を止めて三人とも西の空に視線を走らせる。春の始まりを告げる昼下がりの太陽が柔らかい光を注ぎ、冬の終わりを感じた植物たちが目を覚まし始めた穏やかな風景だ。遠くに見えるのは、以前お世話になったロナードの街だろう。
その街の空に、黒い稲妻が疾った。
迎え撃つように、地面から闇を伴ったような禍々しい気配が噴き上がる。
離れていても感じるその瘴気が肌を粟立たせる感覚は、かつて俺にも覚えがあった。
これは――。
「召喚かっ？」
硬い声でシサーが小さく叫ぶ。その横顔には険しさが滲み出ていた。並ぶジークも強張った面持ちをしている。
――かつて召喚に遭遇したのは二度。
一度目はロドリスのリシア地方にある魔術師の館で、そして寄り一層近しいのは、ファリマ・ドビトーク……ヘイリーに出会った、あの時だ。
「まさか」
シサーが飲み込んだ言葉の続きは予想がつく。俺も同じ人物が脳裏に浮かんでいるからだ。
黒竜の島ヘルザードに姿を消していたはずの黒衣の魔術師が、戻ってきたのだろうか。
シサーが、俺の意志を確かめるかのように振り返る。
「行ってみよう」
「うん」

駆けつけたロナードの街は、昼間にも拘らず暗雲が立ち込めて見えた。いや、実際に黒雲が覆っているわけでも、増して空気に色がついているわけでもないから、これは肌に感じる瘴気がそう思わせるのだろうが。

道行く街人たちも、不安げな面持ちで立ち止まっている。シサーが手近な男に近付いて声をかけた。

ロドリス語で口早に何事かを尋ねるシサーに、男が顔を横に振りながら何か答える。そして二人して、一際強く瘴気が上がっているように感じられる方角へ視線を向けた。

その刹那だった。視線を向けた方角の空から、黒い稲光が地上へ向けて疾る。

「カズキ、ジーク、行くぞっ」

シサーの声に頷いて、俺とジークは走り出した。剣を抜き出し、それを片手に持って走る。人々は呆然としたように、一様に稲光の方角を見ていた。

「何だってっ？」

「さあな。知らんとさ」

駆けながら、ジークが先ほどの男との会話を尋ねる。シサーも剣を片手に握り、ジークに短く答えた。

地響きがした。

「何っ……」

突然、前方の建物の隙間から、まるで土砂流が地面から噴き上げるような光景が視界に飛び込んでくる。思わず足を止めるその間に噴き上げた瘴気は煙のように霞んでいき、そして誰かの絶叫が聞こえた。

「ま、魔物だあああああっ！」

立ち尽くしていた人たちが、その声に弾かれるようにその場を逃

げ出した。
　街の一角に突如姿を現したのは、全長十メートルはあるだろう巨大な蛇だ。それもただの大蛇じゃない。うねうねと自在に動く首は九本……説明されなくてもわかる。ヒュドラと呼ばれる魔物だ。
「馬鹿なっ……」
　舌打ちと共に小さく呟いたシサーが、再び駆け出す。こんな奴が突然街中に湧き出るはずがないと言う意味だろう。
「ジークっ！　毒から身を守るようなもん、何かねえのかっ？」
「毒ですね。毒、毒……対毒……」
　ロナードに向かうにあたり、馬は草原に紐で繋いで置いてきている。魔物がいるのならば、逃げられてしまうことが確実だからだ。
　そしてジークは、最低限の荷物だけを纏めて背負い、無駄な荷物は馬に置いて来ている。
　駆けながら荷袋を漁っていたジークが、布を数本取り出した。
「このくらいですねえ」
「何だこりゃ」
「解毒作用のある薬草を織り交ぜて作ったマスクです。ないよりましって程度だと思って下さい」
　まるで大掃除でもするかのように、手渡されたそれを顔に巻き付け、後頭部で布の端を縛る。ヒュドラの首が一本、しゅるるるっと風を切るような音を立てて舌を覗かせた。
「毒息を吐いてくる。気をつけろ」
　シサーの声に応えて頷きかけた俺は、そちらに顔を向けてそのまま凍りついた。
　近付いたヒュドラは、既に建物に遮られることなくその全貌が見える。その足元……と言って良いかわからないが、足があれば足元にあたるだろう辺りに人影が見えた。黒一色のローブを頭から身にまとう小柄な姿――見間違うはずもない。バルザックだ。
「あんたら、冒険者かっ？」
　バルザックがそこにいたのは一瞬だった。ヒュドラに目を取られ

ている今、シサーやジークが気がついたかどうかわからない。口にしようとして、背後から怒鳴るようにかけられた声と複数の足音に遮られる。

「似たようなものだ」

短く答えるシサーに頷いたのは、フル装備に身を包んだ男たちだった。こちらこそ本物の冒険者だろうか。一人だけロッドを手にしている男性がいる。僥倖だ。魔術師だろう。

「俺たちもだ。たまたまこの街に居合わせたんだが……」

渋い顔で、鎌首を擡げているヒュドラに目を向ける。

「戦争に人がとられていて、戦えそうな人間が多くない」

「ここにいる人間で何とかするしかないな」

道の向こう側では、やはり装備を固めた男たちが何人か集まっている。シサーがそちらをちらっと見遣って「街に残ってる傭兵だろう」と言った。

「放っておくわけにゃいかんからな。やるしかねえだろう」

「そっちは魔術師か」

「ああ。リストだ。俺はジルダ」

リーダー格らしき男が名乗った。こちらもシサーだけが口早に名乗る。ヒュドラが首の一つを大きく振り被るのが見えた。

「頼んだぜっ」

「何だって街中にいきなりヒュドラなんかっ……」

口々に怒鳴りながら、男たちが駆け出した。対するこちらも展開するように逆方向へ駆け出す。ひとところに固まって敵を集中させる筋合いじゃない。分かれて気を散らし、首を一つずつ取っていくのが得策だろう。

豪快な破砕音と共に、建物が崩壊する。先ほど首を擡げていたヒュドラが体当たりをしたらしい。片腕で顔を庇いながら、俺はバルザックのことを考えていた。

どこに行ったんだろう。こいつを召喚したのはあいつに間違いない。

確かとは言えないが、ざっと見る限り魔法陣らしきものは見あたらなかった。と言うことはあのヒュドラは、バルザックが支配下に置いている魔物……なんだろうか。

いや、そんなことはとりあえず後回しだ。ヒュドラとバルザックの両方を相手取らなくて済んだのだから、らっきーだと思おう。消えた奴を気にしても仕方がない。

何にしても、まずは接近を試みなければ話にならなかった。擡げた首はおよそ十メートルほど、太さは三十センチかそこらだろう。剣さえ叩き込めれば、それなりの致命傷を与えられる可能性は高い。

首の一つが、こちらに向かって踊りかかってくる。避けようと方向転換しかけた俺に、別の方向から違う首が襲いかかるところだった。そこへシサーの剣が割り込んでくる。

「カズキっ。無理はするなよっ」

「わかってる」

深い傷を負った首が、悶えながらシサーの方目掛けてくわっと口を開いた。微かに緑がかった息を噴霧する。毒だ。後背からは、先ほどかわそうとした首が赤い舌を覗かせながら突っ込んでくる。避けようと咄嗟に体を反らすが、避け切れなかった。首が俺を薙ぎ倒すようにして掠め飛んでいく。そこへ、俺の後方から先端に鎌のついたチェーンが襲い掛かった。ジークの援護だ。

ヒュドラの本体を挟んだ向こうで、カッっと白い光が閃いた。先ほどの魔術師が使った魔法だろう。氷の礫が、ヒュドラの本体目掛けて幾つも降り注ぐのが見えた。何本かの首を相手取って剣を振るっている戦士たちの姿も見える。

しかしそんなことはお構いなしに、こちらの二本は俺たちを当面の敵と定めたらしい。血を垂れ流しながら体勢を整えた二本の首は、それぞれが威嚇するように口を開けてこちらを見下ろしている。

一本が、口を開けたままで滑空してきた。飛んでいるわけではないけれど、まさしく滑空と言う形容がぴったりの動きで顔が肉迫してくる。射程距離に入った瞬間、脇合いからシサーが地を蹴った。

剣をその首に叩き込む。正確な打ち込みで、粘液質な鮮血を放出しながら頭部が飛んだ。シサーが地に下りる。

そして次の瞬間、その体がぐらりと揺れた。

「シサーっ！」

俺の背後からジークが怒鳴る声が聞こえる。頭部を失った首がホースのように悶え暴れ、血液が塊となって降り注ぐ地面に蹲ったままシサーは動かない。見れば顔色を失い、蒼白だった。先ほどの毒だ、と思い至った時には、俺の体は突然宙に巻き上げられていた。

「うわ……っ」

もう一本の首だ。まるで髪の毛のようにうねりながら、俺の体を絡め取っている。されるがままに、俺は中空へと持ち上げられた。巻き付いている首が、ぎりぎりと締め付ける力を増していく。

「カズキっ！」

ジークが俺の名前も呼んだようだが、正直良くわからない。体中がみしみしと嫌な音を立てているように感じられた。無我夢中で剣だけは離すまいと握り締める。

「くぁっ……」

握り潰されようとしている痛みに顔を歪ませながら、俺は不自由な腕で剣を首に突き立てようとした。けれど手応えとしてはすかっすかっとしたもので、首にとっては痒いからやめてくれ程度のものだろう。ぬらぬらした顔が間近に迫り、裂けたような真っ赤な口が声を上げる。綺麗に並んだ真っ白い牙は鋭く、俺の指より太かった。これに噛まれたら穴だらけだ。

……使うしかない。

唇を噛み締めて痛みを堪えながら、思う。応えて、レーヴァテインが発熱するのがわかった。

「――――シャァァァァッ！」

俺の手に握られた剣から炎の塊が吐き出されるのと同時に、空気を裂くような音が間近で上がる。ヒュドラの咆哮らしい。巻き付ける力が緩んだ隙を逃さずに、俺は腕を抜き取った。間髪入れずに目

の前の首に剣を突き立てる。途端、支えを失った俺の体が、重力に従って落下した。そこへ、先ほど頭部を失って悶えていた首が俺を弾き飛ばした。

真っ逆様に地面に落下しようとしていた俺の体は、一転して横に弾き飛ばされる。そのまま建物の一つに叩き付けられた。その衝撃と、締め上げられた余韻を引きずったまま地面に落ちる。今、何がどうなっているのかなんて、認識しようもなかった。痛みに、その場をのた打ち回る。

「くそ……」

小さく口の中で呟き、俺はようやくうっすらと目を開けた。ぐったりした体に鞭を打ち、無理矢理起き上がる。痛みに顔を歪ませたまま剣を握っていることを確かめると、腕に激痛が走った。尋常じゃない痛みだった。一瞬息が止まる。

身動きを出来ずにいる俺の前に、誰かが立った。

「久しいな。『レガード』卿」

その声に、再び薄く目を開ける。黒い人影は、深く被ったフードの下から掠れた笑い声を上げた。

「……バルザック」

俺がレガードではないと知りながら、嫌味な奴だ。

「ほう。覚えていてくれたとは光栄だな。元気そうで何よりだ」

ヒュドラに締め上げられた挙句、地面に叩き付けられて痛みの余り声さえ出ない俺にご挨拶だ。

やっとのことで体を起こし、自分が叩き付けられた建物の壁に背中を凭せ掛けた。真っ直ぐにバルザックへ視線を向ける。

「何で、戻って来たんだ……？」

荒く呼吸をつきながら、絞り出すように問う。バルザックは笑ったようだった。答えて口を開きかける。

だが、その口からは何も語られなかった。代わりに、ごふっと言う妙な音が吐き出された。苦しそうに口元を歪め、口を押さえた手のひらにじっと視線を落とす。喉の奥から、ごろごろ言う不快な音

が聞こえる。
「何を言っている……」
ようやく出た声は、痰混じりのしゃがれ声だ。まるで呻いているようだった。
「ヘルザードにいたんじゃないのか」
「何のことか」
言葉を押し出しながら、俺はちらりとバルザックの向こうに視線を走らせた。いくつものた打つヒュドラの首は減っているんだろうか。ここから見た限りでは良くわからない。

第3部第2章第8話　再来（3）

いずれにしても、誰もこちらで起きていることには気がついていなさそうだった。自分で状況を打開するしかないようだ。

「なぜこんなところに魔物を召喚した」

「セレモニーだよ」

「セレモニー？」

からかうような響き。本当に儀式に必要だと言うわけではないだろう。恐らく、だが。

「強大な力を呼び出すには、生け贄が必要だろう？」

こいつ……。

「最後に勝つのはわしだ……」

勝つ？　誰に？

バルザックは、そこでまたひとしきりむせ込んだ。気づかれないよう、剣を持つ手に力を込める。気が遠くなりそうな激痛が走った。それを堪えると、まるで腕が痙攣しているように震えた。

空間移動の魔法を使うこいつは、対峙したとしてもなかなか倒せる機会は掴めそうにない。だけど今、俺が身動きが出来ないと思って油断しているように思える。呪文を唱える間がなければ戦えない魔術師は、敵との間に距離を置きたがる。にも関わらずこうして俺の間近まで来ているのは、油断をしているその証明のように思えた。隙をついて切りかかれば、もしかすると一太刀食らわせられるかもしれない。

「弱ってんだろう？」

召喚魔法は生命力を使う。それを消費しない為に言霊魔法を身につけたと言うバルザックは、引き伸ばしてきた生命の期限が尽き始めているはずだ。先ほどからむせこんでいるのは、その象徴なんだろう。隙を作る為に、俺は言葉を押し出した。

「生命を削ってまで、あんなものを召喚する必要があったのか？」

こちらを見たらしいバルザックに向かって、俺は後方のヒュドラを顎で示した。バルザックが、微かにそちらを傾けた瞬間、体を跳ね起こしてその足元目掛けてレーヴァテインを叩き込む。今持てる、渾身の力だった。

「貴様っ……」

くそ、甘かった。辛うじてと言う避け方ではあったが、それでもこの状況で避けられたダメージはでかい。片膝を地面についたままで剣を薙いだ俺は、それで決定的に態勢を崩した。加えて腕の激痛に剣を取り落とす。立て直す前に『風の刃』が俺に襲い掛かった。まともに食らうしかなく、切り刻まれながらすぐ背後の建物に再び叩き付けられる。

「今からでも遅くはなかろう。お前には死んでもらおう」

バルザックがしゃがれた声のまま低く言う。致命傷と言えそうな傷を幾つも体に刻まれた俺は、もはやただ呻くことしか出来ない。目を開くことさえ出来なかった。全ての音が遠く、ヒュドラと戦っている向こうの喧騒さえ靄の向こうの出来事のようだ。ただ、バルザックがすぐそこで呪文を紡ぐ声だけが聞こえる。

「ごほっ……」

その途中で、再び咳き込む音が混じった。もう少し体がまともに動くのであれば、隙など幾らでもありそうなものを。ここにいるのが俺じゃなくて、シサーだったら。だけどそのシサーも、先ほど毒の直撃を食らって倒れたまま、今どうしているのかさえ俺にはわからない。

「置き土産だ」

掠れた声でバルザックが告げるのと同時に、強い衝撃が俺の座り込む地面から噴き上がった。瞼の裏が赤く、上へ向かって噴出する水流の中に飲まれているような感触を全身に受ける。熱い。

そう思って目を開けた俺は、自分が置かれている状況を認識して、薄く笑った。

は……『炎の柱』だ。

外から見ればきっと、地面から噴き上がった一抱えもある炎の奔流の柱に飲み込まれているんだろう。俺は一瞬にして豪火に焼かれて消え失せているはずだった。バルザックもそう思っているに違いなかった。

「残念だったな」

口の中で小さく呟く。レーヴァテインの鍵によって守られている俺に、炎の魔法は通じない。

改めて、火系攻撃を受け付けないことのメリットに気付かされる。魔術師が好んで使う攻撃魔法には風と炎が多い。だけど炎の攻撃魔法を受け付けない俺は、致命傷を受ける確率が二分の一に近い。

先ほど落とした剣を拾い上げ、炎の柱の中、ゆらりと体を引き摺り起こす。ダメージは食らわなくとも、周囲で噴き上げる炎の感触に体が揺らぐ。その前の『風の刃』のダメージで、体を支えるのがやっとだ。背後の壁に体を凭せ掛け、荒い呼吸を繰り返した。

建物が石造りだったのは幸いだ。これが木造だったら、炎に飲まれて燃え落ちているだろう。炎で負傷はしなくても、燃え落ちてきた木材には負傷する。そうならなくて良かった。

バルザックはまだ、そこにいるだろうか。視界を遮られていて、俺からは見えない。そう思いながら、俺はレーヴァテインの魔力を発動させた。炎の塊を『炎の柱』に向かって――いや、その外に向かって打ち込んだ。外から見れば、噴き上げる炎の奔流の中から炎の塊が打ち出されているように見えているだろう。

（駄目だ……）

体が持たない。

噴出する火柱が止むのと同時に、体を支え切れずに地面に崩れ落ちる。体中に感じる鋭い痛みに、これ以上耐えられなかった。ぐっしょりと濡れて感じるのは、溢れ出す俺の血液だろう。

バルザックがそこにいるのかさえ、もう、確かめる気になれなかった。

◆◇◆

目を開けると、辺りは暗かった。薄暮に包まれた部屋の中、一つしかない窓から微かに暮れる空が見える。

横たわったままぼんやりと周囲を見回した俺は、自分が小さな部屋のベッドに寝かされていることに気がついた。少し離れた隣にもベッドがあり、そこにも誰か人影が横たわっている。陰になっていて、それが誰なのかはわからない。その向こうに見えるベッドは、無人だった。

見覚えがある。

そう考えて混沌とした記憶をゆっくりと探る。俺は前にもここに……ああ。そうだ。以前ロナードに来た時に泊まったんじゃないだろうか。ガルシアの家だ、多分。

どうしてこんなところに？

体を起こそうとして、俺はすぐにベッドに沈み直した。全身がきりきりと痛み、体を支えようとした腕に力が入らなかった。

仕方がないので、しばらくの間そこで横たわったまま、ぼんやりと思考を彷徨わせる。窓の外からは、いろいろな音が聞こえていた。トラファルガーに襲われた後のフリュージュに似ている。

階段を上がってくる音が聞こえ、誰かが近づいてくるのがわかった。足音が部屋の前で止まり、静かにドアが開く。

「シサー……」

喉が張り付いたみたいに、掠れた声しか出なかった。けれど、静かな部屋にはそれで十分だった。入ってきたシサーが、俺の声に目を瞬く。

「目が覚めたか」

「うん……」

「良かった」

そう呟くシサーは、まるで泣きそうな表情に見えた。口元に笑みの形を作り上げて、俺のそばへ近づいてくる。

「今度こそ死んじまうんじゃねえかと思ったぜ」
「何で」
「お前を見つけた時には血塗れで、ぴくりとも動かなかったからな」
隣で寝ている人影を気遣ってか、抑えた声でシサーが静かに笑った。その顔をぼんやりと見上げて、隣のベッドに視線を移す。
「あれは……？」
「ジークだよ。まだ、意識は戻らねえな」
「ジーク……」
ジークは身動ぎもせず、ただ小さく浅い呼吸を繰り返している。彼に何があったのかは、俺には全くわからない。
「シサー、毒は？」
俺がその前に見たシサーは毒を受けて地面に倒れたところだったことを思い出して尋ねる。
「ジークが持っていた毒消しと、リストの解毒魔法で何とかなった」
「リスト？」
「一緒にヒュドラと戦ってたパーティの魔術師だ」
ああ。そう言えばそんな人がいたように思う。
「だけど、最終的にヒュドラにやられちまってな。他に魔術師はいねえし、ロナードには神殿もないから聖職者もいない。他の奴らはフォグリアの神殿に連れて行くことも出来るが、俺たちはそういうわけにもいかねえからな。医者が診てくれたが、魔法みたいにはいかねえ。ちと痛むだろうが、頑張ってくれ」
申し訳なさそうに言われ、俺は黙って顔を横に振った。痛いのは痛いが、それは別にシサーのせいではない。
「じゃあ、ヒュドラは倒したんだ」
「ああ」
頷いたシサーは、それから深く吐息をついて、手近な椅子を引き寄せた。ベッドの脇に寄せて、腰を下ろす。
「カズキだけでも目が覚めてくれて助かった。もうじきフォグリアから衛兵が来る」

「フォグリアから？」
「ああ。ヒュドラが暴れ回ってる時には動かなかったくせにな。カタがついたと見て、ハーディンが差し向けたんだろう。状況も把握しとかなきゃなんねえし、聖職者の派遣もしなきゃなんねえ。聖職者だけなら黙ってカズキたちも治療してくれるだろうが、衛兵が一緒じゃそうはいかねえからな。むしろ、とっととここを出なきゃなんねえだろう」
どうしてフォグリアは自国の街が襲われているのを見過ごしたんだろう。
ようやくそのことに今更ながら疑問を覚えていると、シサーが吐き出すように俺の疑問に答える。
「王都の防衛を優先したんだろうよ」
「え？　どういうこと？」
「ただでさえ戦争に人手を取られている。フォグリアにほど近いロナードを襲っている魔物は、下手すりゃ気を変えてフォグリアを襲いに来るかもしれない。その時、ロナードへ兵を派遣した後だったら王都の戦力は低下していることになる。……だから、ロナードを見殺しにしたんだよ。魔物に差し出したんだ。この街を好きなだけ襲って、それで気を済ませて下さいってな」
なるほど。そう言うことか。だから片がついた今頃になって、兵と聖職者を派遣して体面を保とうとしているのか。
「ロドリスの国王は、腑抜けだ。そういう君主を戴いた国民は、哀れだな」
苦々しい表情でそこまで言うと、シサーは気を取り直すようにばさりと前髪をかきあげた。
「ま、そんなわけだ。下手なもめ事になる前に出ないと、助かるものも助からなくなる。特にお前はな」
まだ俺の首にどの程度の価値があるかはわからないが、確かにさっさと姿をくらます方が賢そうだ。
「何も今すぐにってわけじゃない。もう少し休んでて平気だろう。

出るまでに、何とか動けるようになってくれ」
お応えしたいのはやまやまなんだが。
そう思いながら「善処します」とため息をつくと、シサーは苦笑いを浮かべた。
「ここは、ガルシアの家？」
「ああ。元、だけどな。まだ誰かが住んでいるようじゃなかったから、ちと拝借させてもらった」
それからシサーは、しばらく窓の外に視線を向けて黙り込んだ。
何を思っているのかは、俺にはわからない。俺も少しの間、沈黙を保った。
静かに口を開く。
「バルザックだったよ」
シサーの視線がこちらを向くのを感じながら、俺は天井を見つめたまま言葉を続けた。
「俺を襲ったのは、バルザックだ」
「戻って来てやがったか」
苦く呟くシサーに頷き、俺は事の次第を話した。ヒュドラに弾き飛ばされたこと、そこへバルザックが現れたこと、奴の言葉、そして『炎の柱』。
「シサーはあいつの姿を見なかったの」
「ああ。見てねえな。俺がお前を見つけた時は、いなかった。お前一人だ」
じゃあ、レーヴァテインが発動した魔法は、全く無駄だったのかな。これぱっかりはバルザック本人に聞かなきゃわかんないが。
「どこに行きやがった」
シサーが聞くでもなく小さく呟いた。応えて小さく顔を横に振る。
「わからない」
「何とかして追えりゃあいいが、手掛かりになるもんはありゃしねえしな……。くそ。今とっ捕まえられりゃ……」
「捕まえることに、意味があるのかな」

「……どういうことだ？」
見返すシサーに、俺は殊更無表情に低く答えた。
「今更追うことにどの程度の意味があるのか、わからないんだ。……あいつを消さなきゃ、『王家の塔』の解放が出来ない。だけど、あいつは黒竜さえ呼び出せれば、『王家の塔』に、もう用はない。黒竜を呼び出せなくともジンを縛り付けているには限度がある。……いずれにしても、解放されるのは、間もなくのように俺には思える」
「カズキ」
シサーがため息混じりに渋面を作った。
「投げ出してるようにしか、聞こえねえよ」
「そういうわけじゃないけど」
「実際のとこ、追う手段や方策があるわけじゃねえからな。お前がどう考えたところで俺たちの行動を変えられるわけじゃねえさ。でもな、わかってるか？　お前が今言った二つの結果には、大きな違いがあるんだよ」
シサーの視線は、真っ直ぐ俺を射るかのようだった。その鋭い視線に微かな居心地の悪さを感じて、俺は顔を逸らす。
「わかんねえのか？」
「わからない」
「わからねえお前じゃねえと思うがな？　あいつの力が持たなくて解放される分には、平和なもんさ。誰も争わない。誰も傷つかない。あとは戦争だけ終結すりゃあそれで済む。だがな」
不意に、ぐいっと腕を掴まれた。強い力に俺は顔を顰めた。もし俺が怪我人でさえなければ、胸倉を掴まれていたかもしれないと思うような苛立ちをはらんだ声が続く。
「黒竜が蘇ったら、人が死ぬんだよ」
「……人なんて、今だって死んでる」
「それ以上だ」
低い声でシサーが短く宣言した。

「フリュージュを見たろう。たった一時間であのザマだ。ロドリスのリデルは覚えてるか？　集会場を染め上げてたのは人間の血だ。お前の体に流れてるそれと同じもんで、あの部屋は染め上げられてたんだよ。ああいうことがまた起こる。黒竜の召喚を黙認するってことは、ああいう事態をまた引き起こすってことを認めてるようなもんだ」

「わかってるよ。でも、だからと言って何が出来るとも思えない」

「出来るか出来ねえかは、やってみなきゃわかんねえだろうっ！」

ばんっとでかい音が聞こえた。苛立ちのやり場がないかのように、シサーが壁に平手を打ち込んだようだ。

「やってみもしなきゃ、永遠に出来るはずがねえだろうが！　やれることがわからねえんなら、やれることを考えるところから始めろ」

「……」

「――いい加減で、前を向け」

大声で喚くでもなく、腹の底にずっしりと響くような声で、シサーが腕を掴む手に力を込めた。

「お前は、自分が受ける傷を恐れて現実から目を背けてる。考えないようにすれば、それは自分を避けてくれるか？　そんなはずがねえだろう」

「……」

「生きてる人間を大切にしろ。これ以上の惨事を食い止められるんなら、食い止めることを考えろ」

「しようがない。バルザックの行方なんて、わからない」

「言ってんだろ？　『キモチのモンダイ』だってよ」

そう言ってシサーは、低く笑った。怒りの滲む笑いだった。

「やる気のねえ奴は、チャンスがあったって動かねえんだよ。止める気のねえ奴は、またあいつに遭遇したって止められねえよ」

投げ捨てるように俺を解放したシサーは、そのまま立ち上がった。唾棄するように、俺を睥睨する。

「頭を冷やせ。今のお前にはどんなチャンスもモノに出来ねえ。迷

惑だ」

シサーが部屋を出て行くと、暗い部屋に静寂が戻った。

まるで水の中を漂うような心許なさを覚え、ぎゅっと目を閉じる。

わからない。わからない。わかりたくない。

自分の胸中に寄る辺を見つけることさえ、今の俺には出来なかった。

第3部第2章第9話　混沌（1）

衛兵たちが来たのはその日の夕刻間近で、俺たちはシサーが回収してきた馬と共に街を抜け出した。

そうは言っても一朝一夕に俺の状態が良好になるはずもなく、増して重態のジークが目覚めるわけもない。

そんな俺たちを連れてシサーが移動するにも限界があり、必然的に俺たちは祭壇の力を頼りにした。初めてファリマ・ドビトークを訪れる時に、ガルシアが俺とキグナスに目印として教えたあの祭壇だ。あの時は辿り着けなかったけれど、今回はそれが目的なのだから無事辿り着き、俺たちはそこで一夜を過ごした。

残念ながら劇的に回復すると言うようなことはなかったけれど、祭壇の力か否か、少なくとも俺は自力で歩けるようにはなったし、ジークも意識を回復した。余り悠長にしてもいられないので、それで良しとすることにして俺たちはファリマ・ドビトークへ向かった。

次なる目標地点は、山の中にある祭壇――あの時、ナタが回復をしてくれたあの朽ち果てたような祭壇だ。

ろくすっぽ戦力にならない俺たちを連れて魔の山を移動するシサーの負担は生半可なものではなかっただろうけれど、回復の手立てがない俺たちには選択肢がなかった。

とにかく祭壇の力に頼って少しでも回復するしかない。少なくとも魔物の近付かない聖域は、回復するのにプラスではある。

それに――。

（もしかすると）

――またナタが現れてはくれないだろうか、と言う期待が俺の中にあったことも、否定はしない。

さわり、と空気が動いたような気がした。
静かに、音もなく、だけど確かに。
それを感じて俺は、「やっぱり……」と思った。瞳を閉じたままで、その気配を感じる。
(ナタ……ここに来れば、君に会える気がしてた)
姿は見えない。『ここ』がどこを指しているのかも、今の俺にはわからない。俺はきっと眠っているんだろう。だけど意識は覚醒しているという不可思議な状態。いや、それさえも本当は夢なのかもしれないけれど。
確かにそこにいる気配は感じるのに、姿は見えない。
そして返る声もなかった。
だけど俺はそれが確かにナタだと言う確信を持って、言葉を続けた。
(どうしてそういう気がしたのか、俺にもわからないけど。だけどあの時も、ここで助けてくれたから)
やはり答えはない。だけど、気配が消えることもなかった。
まるでカーテン一枚を隔てた向こうにナタがいるようだ。そして、無言ではあるが、俺の言葉を聞いている。
……俺は、彼女に言いたいことがあったはずだ。
ともすれば、憎悪にさえ変わりかねないほどの言いたいことが。
だけどその感情を、心のどこかにしまいこんでしまったように、見つけられない。
あるのは——ただの記憶……。
(俺、君に会ったら、責めるつもりだった)
ナタが、何かを知っていたんじゃないかと思った。
もしかすると不可避ではなかったんじゃないのか、もしかするとキグナスは今もここで笑っていたんじゃないか、俺に出来ることがあったんじゃ——。
(君は、知ってたのか?)
無言のままの意識の向こうへ、問いを続ける。

（未来が、ここへ続いていることを）
ここ――キグナスを失った未来。
考えは果てしなく同じところを巡り続ける。
何を知ったところで、何を思ったところで、キグナスが帰ってくるわけじゃない。今いるこの場所から過去へ戻るなんてことが出来るわけじゃない。だったら何を論じたところで無駄なはずだ。そうして精神を消耗して何になる。だから考えるのを放棄した。考える何もかもを封じてしまえば良い。だけどまた考えが巡る。俺に出来ることはなかったのか。変えられない未来だったのか。過去を仮定形で話すことに意味なんかない。知ってどうするんだ。
永遠のループ。
そこに捕らえられた感情が、他の全てを投げ出して留まり続ける。その他の何もかもを感じることを拒絶する。だけど怒りや憎悪を維持する苦しさにさえ耐えられず、箱に押し込めて鍵を掛けて見ない振りをしている。だからただ考え続けるだけ。同じことを。
人が、人を殺すんだ。
俺に出来ることなんて何もない。
途方もない無力感が、俺の中の全ての気力を奪っていく。
――カズキ……。
初めてぽつんと声が返った。
指一つ動かせず、ナタがいるだろう方向に顔さえ向けることが出来ないまま、俺は黙ってその声を聞いた。
――心が、悲鳴を上げているよ。
悲鳴……。
（聞こえない）
――聞こうとしないからだ。……考えるのではなく、感じることを思い出して。自分自身を取り戻すために。
それから、聞こえるか聞こえないか程度の小さな吐息。
――……いや、今のあんたには、それさえも危険なのかもしれない。

俺は眉を寄せた。どういうことだろう？
躊躇いがちに声が続ける。
――カズキ。あたしに会いにおいで。
（え？　どこに？）
――今あたしは、ここを離れられないんだ。意識だけ、この祭壇に飛ばしてる。だからあんたが、あたしに会いにおいで。
だからどこに。
俺の問いに答えるように、ナタは自分の居場所を口にした。
――エルファーラだよ。

薄く開いた瞳に朽ちかけた祭壇が飛び込んでくる。その向こうに広がる鈍色の空は、今しも大粒の雨を降り注ぐかに見えた。
ナタがいた、と思ったのはやはりただの夢ではなかったんだろう。あの時のように、毒素を浄化されて軽くなった体を起こす。
（ここは……）
ファリマ・ドビトークだ。

◆◇◆

ファリマ・ドビトークの魔物は、一層増えているようだった。ほとんど魔物の巣窟と言っても過言じゃない。今まで見たことのない魔物も少なくはなかった。
「休む暇がねーな、全く」
叩きつけるような激しい雨の中、さすがに辟易したようにシサーがぼやく。ジークが『マシンガン改』に拾った石礫を詰めながら深く息をついた。
「……何か来る」
激しい雨音に混じって、ずずず……と何かを引きずるような音が

聞こえた。もはや拭う意味さえないだろう額を伝う雨を拭い、木々の闇に視線をこらす。

雨に煙る視界の中、金色の瞳が光った。同時に喉の奥から威嚇するような響く咆哮。姿を現した魔物は、虎のような巨体だった。頭部も虎のように見える。だがその首から更に左右に二本、ヘビの首が生えていた。尻尾も大蛇の尾だ。それを引き摺るようにして木々の間から姿を現す。

「カズキ、馬を守れよ」

一応まだ辛うじて手元に留まっている馬の護衛を俺に任せると、シサーが剣を構えた。ジークの『マシンガン改』から石礫が噴き出す。

この『マシンガン改』は俺が勝手にそう呼んでいるだけだが、その名の通り、以前彼に見せてもらった『マシンガン』の改造版だ。前作は炎の種を装備して火炎を打ち出す仕組みだったが、今回のは改良を加えて石礫を装填するように変わっている。これなら木々の並ぶ森の中でもぶっ放せると言うわけだ。更に歯車やバネにも改良を加え、以前のものより速度が上がっていて、打ち出した石礫が木の幹にめり込む程度には威力がある。ただし、マガジンが脱着出来るわけじゃないので、弾倉が空になれば手動で集めた石礫を詰めなきゃならないと言うのが難点だ。

石礫を食らった魔物が再び咆哮を上げて仰け反る。シサーが剣を閃かせて地を蹴った。同時に魔物が地を蹴る。鮮血が舞った、と思いながら、竦んで動けずに嘶く馬を押さえていると、頭上からざざざっと言う大きな葉擦れの音が聞こえた。見上げると、ただでさえ悪い視界を更に暗くするように、魔物の黒い体が見えた。ゴリラに似た体で腕を左右に伸ばし、木々で支えている。エイプと言う肉食系の猿人だ。

「キィィエェェェッ！」

まるで怪鳥のような甲高い鳴き声が上がる。舌打ちしながら剣を構えると同時に、エイプが降りかかってきた。そこへシサーの剣が

襲い掛かった。見れば、先の魔物は倒したらしい。ジークが地味に石礫を『マシンガン改』に詰めている。
「先に進めやしねえなっ！　ったくよおっ」
着地叶わず地に叩き付けられたエイプにもう一閃剣を叩き込むと、絶命の咆哮が上がった。重ねるように森の奥から、新しい足音が聞こえた。
「走るぞっ」
「でも石礫がまだ……」
「走りながらやれっ！」

少し進んでは魔物に遭遇し、戦ってはほんの少し進む。
そんなことを繰り返し、ようやく俺たちがヴァインの跡地に辿り着いたのは、もう夜も半分過ぎたと言う頃だった。相変わらず雨は激しく、降り止む気配がない。
「ヘイリーの家まで頑張った方が良いんじゃない」
ともすれば雨音にかき消されそうな声を張り上げる。シサーが俺を振り返った。長い髪は水分を含みすぎて、額や首に纏わりついている。
「人間を忌避してるドワーフの爺さんのところに、そうそう何度もお邪魔しちゃ悪いだろう。ここの建物を拝借させてもらえりゃ随分違うはずだ」
シサーは、ロナードの街での話を忘れたかのように普通に接してくる。忘れるわけはないだろうから、尖った態度を引き摺らないようにしているんだろう。その辺、さすがシサーは大人だ。
だけど、俺の心にはあの時のシサーの言葉は少しだけ引っ掛かっている。自分は何か間違っているんだろうと思わせる程度に。
「とりあえず雨だけでも避けられりゃ、体力の回復は楽になるだろうさ」

雨で完全に変色した衣服も体に纏わり付き、雨を直接肌で感じるほどだ。滝のように顔を流れる雨は、まるで水面から突き出た岩をも流れる川の水流のようだった。

ヴァインの跡地は、相変わらず白骨が転がっているようだ。土煙で覆われていたものも綺麗に洗い流されてむき出しになっているから、増えたような気さえする。

シサーは村を横切るようにして奥へ足を向けた。俺とジークもそれに従う。ちなみに馬は、結局途中で魔物に襲われて置いて来る羽目になった。今頃はもう残骸ですらないだろう。

「ここが多分、一番頑丈な造りだな」

そう言ってシサーが入ったのは、例のシェリーナ妃がかつて住んでいただろう家屋だった。確かにここにある家屋の中では、最も風雨を凌げそうな体裁を保っていると言える。

扉のない戸口から、闇で真っ黒に塗り潰された家屋に入る。全身に感じていた雨音が叩く衝撃が止み、代わりに屋根を叩く激しい音だけが聞こえた。

中に入ると、床が軋みを上げる。戸口から離れると少し遠のいた雨音に混じって、ぽたんぽたんと言う音が響く。雨漏りでもしているんだろう。

「何かで戸口を塞ぐか」

「とりあえず火を起こしましょうよ。寒くてかなわない」

歯の音があわない、と言うように震えながら、ジークも奥へ入り込んできた。備え付けの小さな暖炉……いや、竈（かまど）なんだろうか。わからないが、そのそばへしゃがみ込む。

「カズキ。どっかその辺、塞げそうなもんがないか見てくれ」

「うん」

その言葉に応じて、ベニヤ板みたいなものがないか見て回る。でもこれと言ったものは特になく、諦めて戻ろうとした俺は、寝室に目を留めた。

以前、何かないかと探った部屋だ。

ここにも大したものはなかったはずだが……そう思いながら部屋に足を踏み入れる。そして、あの時漁った衣装箪笥が目に入った。

どうせ住人のいない廃屋だ。家具なんてあったって使い道がないだろう。加えて言えばそれらも朽ち掛けていて、恐らくここに新たな住人が来たところで使いたいとは思えない。

引き出しの底は適当な厚さのベニヤ板じゃないだろうか。分解すれば使えそうな気がして、俺は引き出しを開けてみた。申し訳ないが中の衣類は引っ張り出して、埃だらけの小さなベッドの上に投げ出す。空にして底を確かめてみると、扉にするには薄いものの、ないよりはましのようにも思えた。

「カズキ、何かありそうか？」

出入り口の方からシサーの声が届く。それからガタガタ言う音に続いて、木槌を使うような音が響き始めた。何か打ち付けられるようなものを見つけたんだろうか。

「うー……ん」

唸りながら首を傾げ、何気なく引き出しを引っ繰り返す。その裏側を深い意味もなく見て、俺は眉を顰めた。

何かがくっついている。

暗闇の中、顔を近づけてみる。それはどうやら小さな布袋のようで、大きさで言えばポケットティッシュ程度のものだ。それが、引き出しを裏返したその底に画鋲のようなもので留めてある。何だ、これ。

引き剥がして布に包まれていたものを引っ張り出すと、どうやらそれは折り畳まれた紙片だった。何かが書き付けてあるようだが、暗すぎて見えない。だけどこれがここの住人の物だとしたら、そして恐らく十中八九そうだろうから、シェリーナ妃がここにいた裏づけになるものなのかもしれない。

「シサー」

そう考えて、俺は布袋と紙片、そして引き出しを手に寝室を出た。ガンガンと打ち付けるような音は一層高く響き渡り、居間らしき出

入り口付近の部屋からは微かな灯りが見える。ジークが火を入れることに成功したらしい。シサーの手元にも、火を灯したカンテラが置いてある。

「あん？」

「この引き出しの底とか、使えるんじゃないかな」

「おう。良いじゃねえか。ま、綺麗にとはいかねえだろうが、少しはこれで戸口も塞がんだろ。いくつかあるか？」

「これと同じ物は四つあったよ」

「持って来てくれ」

「うん。それと」

ジークが持っていた工作道具の中から小さな鉈のようなものを借りて引き出しを分解にかかるシサーに、俺は先ほどの紙片を突き出した。シルバーの目が、きょとんと瞬く。

「何だ？　そりゃ」

「まだ中は見てない。その引き出しの底にくっついてた。……シェリーナ妃の残した何かなんじゃないかと思って」

シサーが目を見開く。それから中腰の姿勢から体を起こし、俺の前に立った。紙を受け取る。カンテラの灯りを翳すようにして、覗き込んだ。

「何だ？　こりゃ」

「何？　何が書いてあるの？」

紙片は裏表に何か書き付けてある。

とは言え、表はどちらかと言うと『元々何か書いてあったものを引きちぎって、裏にものを書き付けた』と言う雰囲気だ。

「こっちは……日記、かな。日付が書いてある。十年前の日記だな。内容は良くわからねえ。誰かへの恨み辛みって感じの陰気な文面に見えるな。いや、待てよ……」

シサーの顔が強張った。

「先帝……じゃねえ、先々帝ベリサリオスに対する呪言か」

第3部第2章第9話　混沌（2）

ユリアの爺さんだ。

そして、シェリーナ妃たちを追放した本人でもあったと思う。ならばそこに彼への恨みが書かれていても疑問はない。十年前の日付と言うと、ちょうど追放された頃の日記だってことだろうか。

「裏は？」

「裏は……」

俺の言葉に、シサーが紙を裏返した。そこへジークがひょこんと覗き込む。

「何してるんです？　二人して」

「ここの住人が残しただろう日記を見つけたんでな。ちょっと気になるから見てるところだよ」

ぞんざいな説明をしながら、シサーは紙片から目を上げなかった。

「手紙、だな。こりゃあ、シェリーナ妃が娘のマーリアに宛てた手紙だろう」

娘に宛てた手紙……それがどうして、引き出しの裏なんかに？

「内容は？」

尋ねる俺にシサーが語ってくれた内容は、彼らに起こった出来事を語るものだった。

ベリサリオス帝とアウグストの確執、夫の屈折した弟への憎悪、そんなアウグストの元を訪れた一人の男、それを境として変貌していくアウグストと、それに戦慄を覚えるシェリーナ妃の苦悩。

それらを滔々と語りながら、シェリーナ妃はこれらの事実をマーリアに告げるべきかどうか躊躇っているようだった。それはそうだろう。これはマーリアにとって、実の父親が追放された経緯を失望と共に告げられる内容に間違いない。

けれどシェリーナは、何も知らない幼いマーリアがヴァルス王族に名を連ねる者として何も知らずにいて良いのかと言う迷いを抱い

ているようだった。そしてそれと同時に彼女自身を悩ませていたのは、シェリーナ妃自身の変調だったようだ。

正常な意識が日に数時間もない――恐らく自分は、発狂している。

正常にない間の記憶はこの手紙を綴る彼女にはなく、そしてこれを見る限りは、正常な時の彼女は母親としてマーリアを想う気持ちは人並みにあったように見えた。そしてそれが、裏側に延々と書き連なっているベリサリオスへの呪言との落差を思わせる。

引き出しの裏に張っておいたのは、『正常でない時の自分』を信じることが出来なかったからだろうか。それともマーリアにこの手紙を渡す勇気がなかったのだろうか。もしかするとその両方なのかもしれない。

日記の裏に書いた理由は何だろう。切羽詰った状況で書いたので手近な紙が他になかった、とかだろうか。どうやらこの様子を見る限り、彼女は正常と異常の間を揺れ動いていたようだから、何とか正常でいられる間に書き終わろうと必死だったのかもしれない。

「とんでもねえことが書いてあんな……」

俺に内容を説明し終えたシサーが、一人ごちるように小さく呟く。

内容はまさしく、『とんでもないもの』と言っても間違いじゃないだろう。

（なるほどね……）

ラウバルが『王族の内情に触れるから』と言った黙秘の理由は、恐らくわかった。アウグストが追放されるわけだ……。

シェリーナ妃の躊躇いが結論を見ることが出来たのかどうかは今となってはわかりようもないが、確かなことは、受取人であるはずの娘マーリアは、この手紙を受け取っていない。

「エルファーラにいたんだな」

頭から読み返すように視線を動かしながらシサーが言う。手紙に寄れば、彼らは追放された後、エルファーラにある屋敷に幽閉されていたようだ。魔物が近付くことのない深い深い森――恐らくは、『聖なる森』。

「マーリアは、どうしているんだろうね」
「さあな。魔物に襲われた時に一緒に死んだってのが妥当だろうよ」
まあ、ね。
（だけど、そう言えば……）
この家の中に住人の身元を証するような書類は、一切残されていなかった。雰囲気からするとどうやら誰かが持ち出したんじゃないかって感じだったが、白骨の指輪や引き出しの裏のこの紙片は、持ち出した誰かが気がつかなかったんだろうと考えられる。
逆に言えば、気がついた部分は浚うように持ち出したってことじゃないだろうか。
そうまでして持ち出した理由は、何だろう？
ここに住んでいたシェリーナ妃とその娘マーリアは、本来ならばヴァルス王妃と王女として収まっていたはずの人間だ。クレメンスの兄アウグストが器ではなかったが為に現実はそうならなかったが、身分としてはそのはず。
そして彼女たちの身元を称するであろう全てを持ち出した何者か。
何の為に？
「まさか……」
ぽつんと呟く俺に、シサーとジークが視線を向けた。顔を上げて視線に応える。
「まさか、とは思うけど」
「何だ？」
「マーリアが生きていて、その身柄を押さえているのがロドリスだったら、どうなる？」
ヴァルス国王直系の、たった一人の娘。
その身柄をおさえているのがロドリスだったら、それは、ヴァルスを攻める理由に繋がっていったりするんじゃないのか？
なぜなら王位を継ぐべき本来の血縁は、マーリアをおいていないのだから。
それが、もしかすると。

「――『青の魔術師』」
「やっぱりお前たちか」
俺の呟きに重ねるように、雨音に声が割って入った。中途半端に打ち付けられかけた戸口の向こうで、雨合羽のようなものを身に纏ったビヤ樽が、深くフードを被っている。
シサーが驚きの声を上げた。
「ヘイリー」
「ここは魔物が徘徊するぞ。わしの小屋まで来ると良い」
好意の欠片もない声で、好意的なことを言われ、シサーがますます驚いたように尋ねた。
「良いのか？」
「構わんよ。知っての通り、何もしてやれんがな」
だけど、ここよりは遙かに居心地が良いだろうことも、俺たちは知っている。ヘイリーの家には少なくとも風雨と魔物を凌ぐだけの設備がある。
「もちろん、雨の中を移動するのが億劫だと言うのであれば、無理強いはせん。好きにするが良い」
「願ったりだよ」
あっさりと両手を挙げてヘイリーを歓迎して見せたシサーに、初対面のジークがこくこくと首を縦に忙しく振った。
「ならば、来い。魔物がここに集まってくる前に、速やかに移動した方が良かろう」
どうやら俺たちを待ってくれる様子なので、俺たちは慌てて放り出した荷物を纏めた。せっかく屋根の下に潜り込んだもの、再びこの豪雨の中に出るのはつらいが、もう少し我慢をすればヘイリーの暖かい小屋に入れるだろう。我慢の価値はある。
暗黙の了解で散らばした荷物を手早く纏め、戸口を塞ぎかけた板を引き剥がす。雨が全身を叩く感触を感じながら外に出ると、あわせるように歩き始めたヘイリーへ、シサーが問い掛けた。
「ブレスレットは完成したのか？」

そこでヘイリーは、微かに笑みを浮かべた。
「もちろんだ。お前たちにも、見せてやろう」

◆　◇　◆

辿り着いた小屋で、ヘイリーはすぐに火を起こしてくれた。そうでなくても、今し方までヘイリーがいたのだろうから、小屋の中は暖かさを残している。
体を拭くものを用意してくれて、俺たちは遠慮なくそれに甘えることにした。何せ俺たちが所持している物は全て雨を吸って濡れそぼっている。
濡れた衣服を脱いで暖炉の傍で乾かし、その間、着替えなどがあるはずもないから、俺たち三人は毛布に包まって暖炉の傍に張り付いている。雪山での遭難者のようだ。
「飲むが良い」
俺たちが無言でガタガタ震えていると、ヘイリーが温かいお茶を運んで来てくれた。ありがたく受け取って一口飲むと、全身に隈なく染み渡っていくかのようだった。
本当に、随分と態度が緩和したよな。最初に会った時は随分な扱いだったような気もするが。
「お前らも酔狂だな。こう頻繁に、この魔の山を訪れるとは」
「二度目に来たのは、あんたにブレスレットを届けに来たんだろう」
憮然と言い返すシサーに、ヘイリーがからからと笑う。
「そうだったな。今回はどうした」
「ちょっと北方に出かけてたんでな。ヴァルスに帰る途中だ。バートから船に乗れりゃあと思ったんだが、なかなかそう上手くはいかなくてね。仕方なくこのルートを使うしかなかったのさ」
「エルフ娘はどうした」
「別口だ。違うルートで、今頃はもうレオノーラについているだろうさ」

「ソーサラーの坊主は」
シサーが口を噤む。
何かを感じ取ったのか、ヘイリーはひょこんと眉を上げただけで、それ以上は何も尋ねなかった。それからジークに顔を向ける。
「そっちは新しい顔だな」
「ジークフリートと言います。ツェンカーで武器商をやっているんですが、元々ヴァルス国民でしてね。一緒に里帰りも悪くないかなと思って」
「ヘイリー。最近の魔の山の様子は、どうだ?」
暖炉の炎を見つめていたシサーが問う。ヘイリーがちらっと片目を上げた。
「どうとは?」
「あの魔術師が出没したりはしてないか?」
「このところ見かけてはいないが。ただ」
一度言葉を切ったヘイリーは、ぐるりと俺たちを見回した。
「魔物の増加が激しくなっているようだな。ヘルザードで行方を失いでもしたか?」
「いや。そもそも俺たちはヘルザードには行っていない。行けなかったと言うのが正しい。あんたにその話を聞いた頃、ギャヴァン沖でシー・サーペントが暴れまわっていたからな。船が出なかったんだよ」
「ああ、そうか。それは残念だったな」
「他にしなきゃなんねえことが出来ちまったから、それは別に構わないんだが。ただ、つい先日ロナードの街がバルザックに襲われてる。ここにも姿を現したんじゃないかと思ったんだが」
「ほう? 街が黒衣の魔術師に?」
ヘイリーが目を瞬く。それを受けて、シサーが苦い表情で頷いた。
「あいつの召喚したヒュドラに襲われた」
「なぜ奴の召喚だとわかった?」
「カズキが姿を見ている。あいつに襲われたと言った方が正しいか

な」
「坊主が襲われたか。良く生きている」
くっくっとヘイリーが笑った。笑いごとじゃない。親切になったとは言え、所詮は他人事のようだ。
「俺は、魔剣に守られてるんでね」
「魔剣……炎の剣か」
ヘイリーの視線が、俺の荷物に注がれた。そこには鞘に収められたレーヴァテインが転がっている。まだ何も説明していないのに、ヘイリーは何かを感じ取ったらしかった。応えて頷く。
「それで？」
「街を襲撃したのは、セレモニーだとか言ったそうだ。俺には、ここでやるだろう儀式に備えて血の穢れを高めているんだろうとしか思えねえんだよな。……本当に来ていないのか」
「少なくともわしは知らんな。だが」
一度そっけなく答えたヘイリーは、微かに声を低めて言葉を続けた。
「魔物が増えているのは確かだ。それも、転がるように」
「ああ。俺たちもそれはここに来るまでの道のりで感じた。やっぱり増えてるんだな」
「増えている」
そうきっぱりと頷いたが、しばしシサーと互いの目を見詰め合っていたヘイリーは、やがて小さな吐息を一つ落とした。視線を逸らし、奥の部屋へ足を向ける。
「だが、わしにわかることは何もない。力になれずに悪いが」
「そんなことはないさ」
本当にヘイリーが知ることはなさそうだと判断してか、シサーも視線を落として息をついた。
「こうして泊めてくれるだけでも本当に助かってる。……ありがとう」
「ところで、先ほど言っていたブレスレットと言うのは？」

シサーの礼の言葉にヘイリーが小さく頷いたところで、ジークが割って入った。何も答えずに奥の部屋へ入ったヘイリーが、やがて麻布に包まれた物を持って戻って来る。

黙ってその包みをテーブルに置いたヘイリーは、すぐに中身を取り出した。俺やシサーには見覚えのある金色の腕輪が二つ、テーブルに並べられた。ジークが小さく感嘆のため息をつく。

「見事ですね」

暖炉の前で毛布に包まったままそれを見ていた俺は、そこに嵌め込まれた石に目を留めてヘイリーを見た。

「この石は？」

「綺麗だろう。この腕輪に相応しい色だ」

「どうして、この色を？」

澄んだ紫色の石は、ヘイリーが細工したのか繊細な美しいカットが一つ一つ施されている。それを埋め込まれた腕輪は、土台の金と石の紫が見事に調和して高貴な気品を醸し出していた。

そして同時に、キグナスの言葉が脳裏に引っ掛かる。

――ヘイリーがナタのことを何か知っているんじゃないかと思って。

この腕輪に相応しいと言うことは、受け取るはずの人に相応しい色を選んだと言うことのように思う。

それともこれは、ただの偶然なのか？

「ヘイリーは、ナタを知っているの？」

俺の知る限り、この世界で唯一紫色の髪と瞳を持つ少女。

俺の問いに、ヘイリーの顔が一瞬だけ凝固した。問いの意味を確認するように、俺の顔をじっと見つめる。

それから薄く笑って、頷いた。

「ああ。知っているとも」

第3部第2章第9話　混沌（3）

以前泊めて貰った時と同じように、居間と言える部屋を借りて寝袋に包まる。

シサーもジークも既に寝入っているだろう夜明け間近……俺はまだ眠ることが出来ず、たった一つの小さな窓から空を見上げていた。

雨の音はまだ聞こえるが、先ほどより大分弱くなったようだ。代わりに風が強く、何物かの咆哮のような甲高い音が夜を駆け巡っている。木々を揺らす音も絶え間なく、巻き上げられた何かが墜落するような音まで時折響く。

どうして眠れないのかなんて、理由はない。

全身は泥のように疲れているのに、ただ神経だけが妙に尖っていて、にも関わらず考えたいことなんて特にあるわけじゃない。

結果として俺は、シェリーナやアウグストのこと、キグナスのこと、ナタのことを断片的に思い出しては意識が逸れると言う無駄な時間を費やしている。

マーリアは、『青の魔術師』のところにいるんだろうか。

だとすればそれは、以前俺が抱いた『グレンフォードに似た魔物の印象』にもぴたりと嵌まる。

詳しい事情までは推測がつかないが、『青の魔術師』と『魔性を飼うグレンフォード』を結びつけてハーディン王城へ向かわせたのは、ここ『魔の山』と『マーリア』なんだろうと考えられる。

アウグストの元を訪れた男ってのは、何なんだろうな？　誰なんだろう。『黒衣の魔術師』？　あいつだって長生きなもんな。おかしくないはずだ。

長生きと言えば、ナタ。

どう見たって子供の癖して、フラウ地方で起きた戦争の頃にはへ

イリーと知り合っていたと言うことになる。
ナタの詳しい素性についてヘイリーは何も語ってはくれなかったが、腕輪を贈りたい人物と言うのがナタだと言うことははっきりした。
正確にいつ起きた戦争だってのは聞いていないけれど、シサーが生まれるより前の話だ。ってことはナタは最低限、シサーより年上じゃなきゃおかしい。明らかに外見が年齢に逆らっている。
キグナスがナタとヘイリーを繋げたのは、やっぱり腕輪の石だろうか。もしかすると俺の知らない会話がヘイリーとキグナスの間で交わされていたのかもしれない。
確かにヘイリーは、ナタの素性を知っているんだろう。
完成させた腕輪を彼は『送り届ける』つもりなのだと言うのだから。
考えが横にずれて横にずれて、結局何の収穫にもならない時間を繰り返し、俺はため息をついた。寝袋から体を起こす。シサーとジークは、良く眠っているようだ。疲れているのだから当然だろう。
とは言っても、ジークはともかくシサーは下手な物音を起こすと起きてしまう。多分、神経が常に張っているんだろう。極力無音を努力して体を起こした俺は、窓際にそっと立ってみた。
――いい加減で、前を向け。
シサーの声が聞こえた気がした。
じゃあ俺は今、どこを向いているんだろう。どこも向いていない？　そうかもしれない。顔のない、のっぺらぼうだ。
意志がない。視界に何も映っていない。ただ、しなければならないことだけ認識しているから、その理解に忠実に体を動かしている。
でも今俺がすべきことは、何なんだろう。
――考えるのではなく、感じることを思い出して。
ナタの声が聞こえる。
だけどそれさえも今の俺には危険だと言うのは、どういう意味なんだろうか。と言うことは、今の俺の空虚な精神状態は、良くはな

いけれど結果として俺を助けていると言うことになるが、果たして一体何から助けていると言うんだろう。

「……何をしている」

キィ、と小さな音が聞こえた。同時に掛けられた声に振り返る。別室に引っ込んだはずのヘイリーが、薄く開いた扉から、こちらを見ていた。

「眠れぬか」

声もなく頷く。

それに頷き返したヘイリーは、俺を手招きした。招かれるまま、ヘイリーの部屋へ足を踏み入れる。

「何を考えている？」

「何も」

顔を横に振る俺に、ヘイリーが椅子を勧めた。カンテラに火が灯され、初めて入るヘイリーの部屋がぼんやりと照らされる。彼との縁を繋ぐきっかけになったタペストリーは、今も同じ場所に掛けられていた。

「ソーサラーは、死んだのか」

先ほどの俺たちの無言の返事の意味を確かめるように、ヘイリーが問う。

タペストリーに目を向けたまま、俺は抑揚なく答えた。

「死んだよ」

「そうか。人は死に行くものだ。形あるものは全て壊れる。永遠の摂理だな」

「ヘイリーは村を失った時、何を思った？」

荒々しい海へ乗り出すドワーフの背中からは、どんな感情も読み取れない。タペストリーから視線を逸らしてヘイリーへ向けると、ヘイリーは黙って顔を横に振った。それから短く答える。

「残念だと思ったよ」

「それだけ？」

「あの村はわしにとって居心地の良い場所だった。穏やかな日々を

そこで繰り返すことを愛しいと思えた。それを失うことが残念だと思った」

「人間を恨んだり憎んだりはしなかったの」

「しなかった、と言えば嘘になるかもしれんな」

くつくつと喉の奥を鳴らすように笑い、ヘイリーは小さなベッドに腰を下ろした。

「だが、人間のような愚かな生き物に憤りを感じても、何が変わるわけでもなかろう。それよりは関わらない方が利巧だ。わしはそれを選択した。この先を穏やかに暮らしていく為にな」

キグナスの言っていた『憎悪の連鎖反応』と言う言葉を思い出す。なるほど、これは確かに人間特有の感情なんだろうか。

少なくともドワーフには、いや、ヘイリーにはそういう概念はなさそうだった。もしもドワーフたちが人間たちに復讐の念を持って挑んだとしたら、人間とドワーフの全面戦争になっていたかもしれない。だが、それは起きていない。ヘイリー以外のドワーフも、同じようにひっそりと生きることを選んだのだろう。

「人間は、愚かだ」

ヘイリーが繰り返した。

そうだな……愚かなんだろう。俺も含めて。

タペストリーに視線を戻しながら、ヘイリーの言葉に耳を傾ける。

「恨んだり憎んだり、か。くくく……そんなことを考えるのは人間だけだ。虫も鳥も、我々ドワーフも、そしてきっとあのエルフ娘も、他の生き物はそんなことを考えることはない。憎しみを憎しみで上塗りしていくのは、人間だけだ。愚かだな」

なぜ人は考えるんだろう。

「生きてる意味とか……そういうことを考えたりする？」

「せんよ。生きているから生きるのだ。それ以上に何を考える必要がある。太陽が東から昇るのと同じ、そうあるべきものだからだ」

「俺は、考えてしまう……」

あっさりと答えるヘイリーの視線を横顔に受けたまま、俺は小さ

く呟いた。ドワーフにとっても人間は異種だから、俺の考えていることや言っていることは、多分異質なんだろう。

「キグナスを失って、その前にもあのドワーフのダンジョンでシンと言う仲間を失って、人が俺の傍から人を奪うんだと知った。キグナスは拷問の末の惨死だ。それも、彼が知るはずのない情報を引き出そうとしての。俺自身も人間だけど、俺は人間を憎んでしまいそうだったよ」

こう口にはするものの、実はあのキグナスが死んだ時のことを、俺は良く覚えていない。

はっきりと思い出せるのはヴァルト副将軍から逃れてキグナスを探し、扉の前へ行ったところまでだ。

その先の記憶は赤い炎に塗り潰され、断片的にしか思い出せない。ヴァルト副将軍、手の中のレーヴァテイン、セル、アレン、そしてシサー。

全てが曖昧模糊として、次の記憶はアレンと駆けたフリュージュの街に飛ぶ。

それなのに、血の海で蹲っていたキグナスの血の気のない顔だけは嫌にはっきりと脳裏に刻まれている。

「だった、と言うことは、今はそうではないと言うことか」

「どうかな。良くわからなくなったと言うのが正しいかも」

トラファルガーとの戦闘の後、俺は行き場のない憎悪をナタへ向けた。ヴァルト副将軍だけでは持て余した喪失感をどこへ向けて良いのかわからなかったからかもしれない。

何かを知っていたのなら、どうして教えてくれなかった。

だけど、フリュージュで街の修復を手伝っている間に、その気持ちは次第に霧散した。

なくなったわけじゃないのかもしれない。だけど、思い出せない。

「人間の存在価値がわからない、と思うようになったんだ」

俺が大切にしていても、無関係の誰かがそれを奪う。

だけど誰かを憎んだところで、それが返って来るわけじゃない。

そうして深い絶望の中にただ取り残されて、俺が生きている限り、大切なものを作る限り、これがこの先も続くんじゃないのか。奪われる為に与えられるのか。

こんな思いを繰り返すだけの生に何の意味があるんだろう。

人はなぜ存在し、奪うんだろう。

「存在価値などないさ」

おかしくて堪らないと言うように、ヘイリーが笑いを含んで口にした。

「生きたいから生きる。それだけだ」

「ただ生存の為の生存……それこそが本来の生命のありよう？　だったら人間は、そこから逸脱しているね」

「逸脱しているのは、安穏と暮らしている者だけだ」

ヘイリーは笑いが止まらないようだ。相当俺はおかしなことを言っているんだろう。

「生きる為に生きねば生きられない者は、そんな愚昧を突き詰めることはしない。意味があろうがなかろうが、生きるものだ。なぜならそれは、全ての生命に記された道標なのだからな。何かに甘え、助けられ、生きることに余裕がある者だけが、それを考える。……それは畢竟、お前が他者に寄りかかっている証明に過ぎない」

言われて俺は、かつて海底のダンジョンで一度考えたことを脳裏に蘇らせた。

こちらの世界に来てから俺は、常に誰かに守られている。筆頭はもちろんシサー、そしてキグナスやニーナ、ユリア、レイア。クラリスやナタだったこともあるし、今はジークもいる。

一人で戦ったこともある。だけどそれは僅かな出来事で、すぐに救いの手は差し伸べられた。

死に直面したことも何度かある。一番危なかったのは多分、トラファルガーとの戦闘だろう。

だけどそれはいつも唐突に俺に突きつけられたもので、たった一人、生死の淵を這いずり回って生き延びようとしたことがないのは

事実だ。

唐突に突きつけられるまでは、俺は常に誰かに守られてきた。

「必死に生きる為に生きたことがあるか。何も考えずに戦い続けなければ、明日が訪れることがない――そんな中で生きる意味を考えるか？　出来まい。意味があろうがなかろうが、そんなことは価値がない。肝心なのは、今生きている、それだけのことだ」

「そうまでして俺は、生きようとするかな」

「命を絶たれる危険を前に、生者は抗う。それが本能だからだ。死を受容することはない。死の恐怖から免れることはない。そして死を受容するほどの自分自身への激しい拒絶の中にも、必ず諦めが存在するものだ。そうでなければ必ず抵抗する。それが、言葉ではない、理屈ではない、生きたいと言う本能だ」

生存する為に生存すると言う殺伐とした事象に過ぎないものに意味を付加するのが、人間の人間たるゆえんなのだろうとリトリアの老人は言った。

「生きるのは義務だ。望もうが望まなかろうが、生きなければならず、自ら諦めることは罪だ。なぜなら、『生きたいと言う本能』がある以上、生命が生き続けることを望んでいるのだから。あらゆる生き物はそれに忠実に従う。人間だけが逆らおうとする。ならばそれに意味を探すのは、権利に過ぎないのだろうな」

意味があるから生きるのではなく、生きたいから意味を探す。

あの老人は、「意味を持たせるのは自分自身かもしれない」とも言っていた。

「生きる意味を見出せないのに、それでも生きなければならないのか？」

意味を持たせるのが自分自身なのなら、意味を付与出来ない俺は、ただ呼吸を繰り返すだけの死体とどんな違いがあるだろう。

だけどそれでも生きなければならない？

そうまでして誰がその義務とやらを押し付けるんだ？　ナタの言う摂理とやらか？　俺が見たことも会ったこともない摂理とやらに、

そんなご大層なものを押し付けられる筋合いじゃない。
「奪われるのに。失われるのに。だったら最初から与えられない方が親切だ」
「親切で与えられているわけではない。お前自身も、お前の周りに現れる誰かも。だから不親切に奪われもする」
ヘイリーが笑った。
「ならば逆に問おう。誰かが『こうだからそれが生きているその理由だ』と告げたとする。『お前の生命はこういう理由で存在し、こういう意味を与えられ、それを全うするのがお前の生命に課せられた義務なのだ』と。果たしてお前は、その何者かに押し付けられた存在理由を受け入れることが出来るのか？」
「……」
「自分で見出すのだろう。自分で付与するのだろう。そうでなければ納得が出来ないから、そうして考えるのだろう。だから言った。権利だとな。何を考えたとして、今お前がそこに存在しているのは厳然たる事実だ。それに意味が欲しければ与えられるのを待つのではない。それこそ甘えに過ぎない。自分で見つけるのだな」
そこに意味を付与出来れば、義務と権利が逆転するのだろうか。
意味を感じられないから生き続けることに疑問を覚えるのではなく、生きたいと思うから自身で意味を与えなければならないというように。
「お前は恐らく、生きていることに疑問を感じているわけではないのだろう。本当の迷いは、生きたいと思えないと思うことにあるのだろうな。それは失われる痛みか、積み重なった恐怖か悔恨か。いずれにせよ、この世界との不整合から逃げ出しているだけだ」
奇しくもナタの言葉とヘイリーの言葉が同じところを指し示す。
この世界との不整合が、俺を『生きたい』と言う摂理から引き剥がしていく。
「お前自身がどう考えたとしても、お前の生命は生きたいと願っていることだろうよ」

「俺……」

一人で戦い抜けば、何かが見えるんだろうか。

生きたい、と。

誰の助けを借りることなく、俺は俺自身を守りたいと思うだろうか。生きる為に生きてみることで、その義務を権利と感じることが出来るんだろうか。

そう感じることが出来れば、キグナスを失ったことで訪れた心の混沌――ただただ絶望の中へ俺を追いやるキグナスの喪失を、乗り越えることが出来るようになるのだろうか。

乗り越える為に、俺がしなければならないことは何だろう。

――カズキ。あたしに会いにおいで。……自分自身を取り戻すために。

「……『レオノーラで会おう』と、シサーたちに伝えてもらえますか」

気がついたら俺は、ほとんど無謀とも思える言葉を口にしようとしていた。

ヘイリーが黙って顔を上げる。

――頭を冷やせ。今のお前にはどんなチャンスもモノに出来ねえ。迷惑だ。

深くその衝動の意味を考える間もないまま、俺はヘイリーに告げた。

「必ず生きて辿り着くから、と。……日が昇ったら、ここを出ます。俺は、ナタに会いに行く」

◆◇◆

日の出と共に雨が上がり、冷たい澄んだ空気の中に朝靄が立ち込めている。

木々の隙間から白い朝日が零れるように差し込んで来る。

まだ眠りに包まれた静かな小屋を、俺は一人で抜け出した。

今どれほど晴れやかに見えるとしたって、ここは魔の山……魔物の巣窟だ。行程は残り半分もないとは言え、無謀極まりない行為だと言うこともわかっている。

だけどなぜか湧き上がったその衝動に、俺は抗うことが出来なかった。

何の意味もない行動なのかもしれない。もしかすると一層俺自身を追いやっていくのかもしれない。

けれど、生きる為に生きて、生き延びて、再び生きたいと思えるようになるだろうか。

ユリアの為とか、ヴァルスの不利になるとか、そういうことを一切取り払った今の俺の中で、ただ生きたいと思うが為に生き抜きたいと思うだろうか。

俺自身が、何の為に、何を求めてこんなことをしているのかわからないまま、森の中へ向けて足を踏み出す。

……それこそ、破壊されていく俺の自我を何とか取り戻したいと言う、俺自身の本能に近いものだったのかもしれない。

第3部第2章第10話　制裁（1）

「随分と、手が行き届いておられるのですね」
フォグリア郊外にあるセラフィの邸宅に足を踏み入れ、アークフィールはそう感想を漏らした。
宮廷魔術師と言う身分を考えれば恐ろしく質素ではあるが、綺麗に磨かれ、整理の行き届いた様子を見れば、セラフィがこの邸宅に愛情を持っていることがわかる。
「そうかい？　戦争が始まってから、なかなか帰る暇がなくてね。随分荒れてしまった気がするけれど」
先に立ってアークフィールを促すセラフィが笑った。ハーディンではなかなか見せない穏やかな表情に思える。
たまには息抜きに、郊外の邸宅へ遊びに来ないかとセラフィに誘われたのは、三日ほど前のことだ。
直属の上官でもないのに、国王の寵愛を受ける宮廷魔術師の自宅を訪問するなど畏れ多くはあったが、拒絶もまた致しにくい。結局のところこうして、唯々諾々と従っている。
ハーディンの人間と必要以上に親交を深めるのは良くないと自戒をするものの、反面、魅力的でもあった。
信頼こそ、新鮮な情報の最たる通り道なのだ。宮廷を牛耳る宮廷魔術師とくれば願ったりである。
そしてアークフィールは個人的に、この宮廷魔術師を決して嫌いではなかった。セラフィに相対する誰もが好意的であるのと同様に、アークフィールもまた例外ではない。積み重ねてきた親しみを覚えてもいる。
だが、警戒は必要だ。
宰相の秘書官と同時に担っている彼のもう一つの任務は、露見すれば叱責や免職では済まない。
「本当に使用人を置いていないのですね」

「ははっ。そう言ったろう？　人の手が入るのは嫌いなんだ。こっちだよ、アークフィール」

招かれた部屋は応接だった。暖かくなり始めた日差しが注ぎ、広いリビングを明るくしている。

「大して面白いことがあるわけじゃないが、ハーディンから離れるだけで気分転換になる。……お茶で良いかい」

セラフィの言葉に、アークフィールは立っていた窓辺から慌てて振り返った。

「あ、そんなことは私が……！」

「良いんだ。たまには奉仕するのも悪くない。元々僕は、そういう出自だしね。人に傅かれるのに慣れていない」

「……」

セラフィがカップをニ脚テーブルに置くのを眺め、それからアークフィールは顔を上げた。その顔を見て、セラフィが笑う。

「言っていなかったかな。言っていなかったかもしれないね。僕は、ヴァインで生まれ育ったんだよ」

ヴァイン……。

胸の内で愕然と繰り返す。行ったことがあるわけではないが、その名前は聞いたことがあった。人が近づかない魔の山ファリマ・ドビトークにかつてあったと言うはみ出し者の集落。

何らかの理由で他の者と暮らすことが出来ない人間が、貧しい暮らしをしている場所だ。

そこで生まれ育ったと言うのか？　セラフィが？

「まさか」

生まれ備わっているようなたおやかな気品に、思わずアークフィールは苦笑していた。とても信じることが出来なかった。

「まさか？　そうは見えない？」

「失礼ながら……正直に申し上げれば、信じにくいです」

笑いを浮かべたままのセラフィの目に笑いがないことを感じ、そのまま口を噤んだ。セラフィの繊細な指がカップに伸びる。

「そう？　まあ、陛下にも口にするなと言われているしね。僕自身は構わないのだけど。なぜそこにいたかまではわからない。多分、父が原因だろうと言うことくらいだ。そこで幼少期を過ごした僕は、後にバラデュール家の養子となり、知っての通り王城で働く身になった。だからね、慣れていないんだ。人に奉仕されるのは」

思いがけず上官のプライバシーに触れることになり、アークフィールは押し黙った。セラフィがからかうように笑顔を向ける。

「君は、国を憎んだことがあるか？」

咄嗟に言葉にならない。

国を憎む……そう、自分は国を憎んだからこそ、もう一つの任務を負うことにした。自分から志願したのだ。この国に報復を加える為に。

アークフィールは、ヴァルスの為に働くことを、自ら課した。

セラフィが軽やかに続ける。

「僕はある」

「えっ？　まさかセラフィ様が」

「信じてもらえないかもしれないね。だけどね、アークフィール。知ってるかい。ヴァインと言う集落は、この国に存在しないんだ」

「……？」

ヴァインが既に絶滅して事実上存在していないことは知っている。何を言いたいのかがわからず、アークフィールはそっと眉根を寄せた。セラフィを見つめたまま、慎重に口を開く。

「ええ、ヴァインが既にないことは存じておりますが」

「そうじゃない。ヴァインは初めから、ロドリスに存在していなかったんだ」

「……どういうことです？」

「あの集落は、ただロドリスの治める地域にあるだけの、どこの国にも所属していない集落だったと言うことになる。ロドリスはその存在を努めて黙殺してきた。徴税もなければ保護もない。そういう存在だったんだ。だから公式の記録のどこにも、ヴァインと言う村

を見つけることは出来ない」
　それは知らなかった。初めて聞く事実に、アークフィールは目を丸くした。セラフィが失笑する。
「それはそれで辻褄が合っている。だからこそ僕は法の裁きを受けずに済んでいるんだが」
「え？」
「いや……。あそこで何が起ころうと、ロドリスと言う国家は関知しない。何が起ころうが知ったことじゃない。ヴァインでの生活は、ひどいものだったよ」
「そう、なんですか」
「ああ。だけど、ヴァインを下りて一度エルファーラに入った僕は、その後ロドリスに戻ることになった。そこでの生活もまた、ひどいものだった」
　優美な仕草でカップに口をつけたセラフィを見つめ、まだ信じられない思いがある。
　この穏やかな笑顔の裏で、彼は何を感じ、何を見、彼の身に何が起きてきたのだろうか。
　初めて、そんなことを考えた。
「国の力が作用している空間で、国民としての義務を強いられる。けれど国は民の為に何をしてくれるだろう？　何かをしてくれるだろうか。答えは否だ。何もしてくれない」
「セラフィ様」
「ああ、僕が口にして良いことじゃないかな。けれど今は休暇中と言うことで多めに見てくれ。アークフィールの胸に閉まっておいてもらえれば、問題はない」
　くすくす笑うセラフィに合わせ、アークフィールも強張った笑みを浮かべた。
　宮廷魔術師の口から出て良い言葉ではない。けれど、セラフィ個人の思いとしては、納得がいかぬこともなかった。
　なぜなら、アークフィールもその気持ちは良くわかるからだ。

「国は、何もしてくれないんだ。義務を強要し、何の恩恵も施さない。搾取だけだ。僕が苦しんでいる時に救いの手を差し伸べなかった国は、僕に対して国の為に働けと言ってのけた。僕が自分の努力で得てきた力を、ただ差し出せと言ってきたんだ」

聞きながら、アークフィールはセラフィの経歴に思いを馳せた。

有名なエルレ・デルファルの出身ではない。私塾で魔術を学んでこの若さで宮廷魔術師になると言う異例の才覚の持ち主だ。見捨てられた集落ヴァインからここまで辿り着く道のりは、果てしないもののようにも思える。だが、セラフィはそれを成し遂げた。その裏には、どれほどの辛苦があったろう。

その過程で、国に対して憎悪を抱くような出来事があったとしても、おかしくはないと思えた。事実、この国は至るところに手が届かぬまま放置をしてきている。

「どうしてセラフィ様は、国の為に働こうと思えたのですか」

「国の為に働こうと思えたわけじゃないさ。僕自身の興味だ。自分自身の能力を活かす場所として、最も適しているだろうと思えた。それに」

セラフィの視線がアークフィールを捉える。薄く笑った口元には、どこか嘲笑めいた笑いが浮かんでいる。

「僕を虐げてきた国家が、僕の言いなりに動く。面白いじゃないか」

「……」

「認めさせてやろう、そう思ったよ」

なるほど、セラフィの憎悪は、アークフィールとは逆の方向に働いたらしい。

そう理解して、アークフィールは肩の力を抜いた。ふうっと深い吐息をつく。

今のセラフィを見ていれば、誰も彼もから愛され、才覚に恵まれ、何不自由なく生きてきたかのようにも思える。美貌、穏やかな気品、優雅な物腰、その全てが高貴な生まれ育ちを想像させ、まるで穢れなど何一つ知らずに温室で育ってきたかのような。

だが、その認識は間違いだったようだ。
そしてその間違いは、アークフィールに親近感を抱かせるのに十分なものだった。
「胸中、お察し致します」
もう少し深く聞き出してみたい気がした。
だが、上官に尽くすべき礼儀があり、保つべき節度がある。もどかしさを感じながら抑制するアークフィールに、セラフィが話を振った。
「君は、リシア地方の出身だったか」
「あ……」
仕草でソファを勧められ、腰を下ろしながら返す言葉に詰まった。
「はい、私は、その……」
嘘ではない。ハーディンに来る前はどこにいたかと言えば、リシア地方にあるブレヴァルと言う街だった。
だが、本当の出身地はそこではない。
セラフィに話させておいて黙っているのは、潔くないような気がした。だが安易に話すのはまだ躊躇われて、口ごもる。
「私は……」
いや、大丈夫だ。大丈夫のはずだ。出身地を口にしたところで、何がばれようはずがない。虚偽を告げるには、真実を混ぜるのが鉄則だ。真実に近づけた虚偽は、暴かれにくい。
「私は、元々はガレリア地方の出身でした」
「ほう？」
セラフィの瞳が、興味深そうに動く。アークフィールは殊更ゆったりと笑ってみせた。
「実の両親に死なれましてね。ですから私も、ドリュケール家の養子と言うことになります」
現在姓を名乗っている家名を上げると、セラフィが視線を伏せて吐息をついた。
「そうか。では、僕と似たような身の上と言うことになるな」

一層心を許したかのような笑顔に、アークフィールの良心がちくちくと痛んだ。嘘は言っていないが、真実を告げてもいない。

人との距離を一定に保つ手腕は、己の身を守る為に培ってきたはずだ。誰にも怪しまれずにヴァルスの諜報活動を行う手腕はある。人に踏み込ませない技術を持っているはずだし、全て柔らかくかわす術も身に付けている。

なのに、先ほど緩んだ心の壁が、脆くなっている。

アークフィールの密やかな心の葛藤に気づく様子もなく、セラフィが続けた。

「それがなぜ、リシア地方に」

「父の古い知り合いがいまして。両親が亡くなった後、その方を頼ってブレヴァルへ向かいました。身を立てようと働いていた店で、現在の義父に気に入られまして」

両親が亡くなった後のことは、大きく省いている。

直接ブレヴァルに向かったわけではない。その間に、大きな転機が訪れている。

だがそれは、口が裂けても言えない。

ようやくカップに手を伸ばし、口をつけかけたところで、セラフィが嘆息した。

「そう。苦労人だね、君も」

ソファに深く体を預け、セラフィは肘置きに頬杖をついた。涼やかな青い髪がさらりと額を滑り、アークフィールは思わず見惚れた。本当に美しい人だ。そして利発でもある。ロドリスの王城は、得がたい人材を得たのだろう。

純粋な心でこの人物についていけたら良かったのに。

そう思わずにいられず、アークフィールは目を伏せたまま答えた。

「そんなことは」

「そう……君はガレリア地方出身か。ガレリアのどこだい？　ルッセンか？」

ルッセンは、ガレリア地方で最も大きな街だ。辺境を治める辺境

伯が常駐する街でもある。
そしてそれは、アークフィールの生まれ育った故郷だった。
再び頭の中で警鐘が鳴る。
「いえ……なぜ、ルッセンと？」
「いや。大した思い付きじゃない。……こんな話を思い出したからさ」
得体の知れない不安が、アークフィールの表情を硬く強張らせる。無言で視線を上げるが、セラフィは穏やかさを消すことなく、何の思惑も読み取れなかった。
「ガレリア地方は、知っての通り、豊かな地域だ。ロドリスの収益の六分の一を賄っている。当然そこを治める諸侯の力は強く、決して侮れたものではない」
「そう、ですね」
「コンラッドと言う家がガレリア辺境伯だったのは、十七年ほど前になる。知っているかい？」
「……いえ。良く、覚えておりません」
何かを探られている……？
胸に芽生えた疑心が、声を掠れさせた。口の中がからからに乾く。喉がまるで張り付くようだ。
カップに手を伸ばすことさえ不審を招くのではと思うと、それさえも躊躇われた。
「そう？　コンラッドはね、アークフィール。リトリアと手を組もうとしたんだ」
「……まさか。動機がありません」
何を答えて良いものか、白紙の思考の中に必死に言葉を探す。だが、中身のない言葉ばかりが浮かび上がり、いつもの自分らしくない受け答えだとの自覚はあった。
「事実だよ。動機については推測するしかない。けれど、陛下と不仲であったことが動機の一つとして考えられる。コンラッドは、陛下に対して批判的だった」

「そうなのですか」
「ああ。尤も、僕もその頃はまだヴァインだ。リアルタイムに知っていたことではないけれどね。公的事実として残されている。アークフィールが知らないとは思えないけれど」
「そうでしたか？　申し訳ありません。記憶から抜け落ちているようで」
　知らぬはずがない。宰相の秘書官として、知らずに済む史実ではない。いかにも不自然とはわかっているものの、一度動揺した心が冷静さを欠いていた。
「だったら、覚えておくと良い。ハーディンとしては、寝耳に水の騒ぎだ。ガレリア辺境伯がリトリアと手を組めば、大事になる。何せガレリアはリトリアとの国境地帯、裕福な地域に君臨するコンラッドは、経済力も兵力もある。もちろん情報もだ。コンラッドを放っておくわけにはいかない。だが、コンラッドに呼応する勢力もリトリアとの進行状況もまるで掴むことが出来ずにいた。焦ったハーディンは、全く間抜けな真似をしたのさ」
「間抜け、ですか」
「ああ。焼き討ちだよ」
　セラフィの目が、すっと細められる。アークフィールの脳裏に、あの日の凄絶な光景が蘇った。
　父と母は、あの炎に飲まれて消えた。
　コンラッドの屋敷と共に。
「……誰が、その、決断を……」
　聞いてはいけない。今更聞いてどうする。調べようと思えばいくらでも調べられたものを、今日まで禁じてきたのは何の為だ。
　余計な憎悪は、自身を滅ぼす。そんなことより冷静さを取り戻せ。
　セラフィは、明らかに、自分を探っている。
「さてね」
　あっさりとセラフィは肩を竦めた。苦笑するように顔を横に振る。
「書類を漁れば明らかだろうが、生憎とそこまでは記憶していない。

だが、誰にでもわかることがある。提案したのが誰だろうが、認可したのは」

「……」

「陛下だ」

ロドリスの国王カルランスが王位についたのは、二十六年前のことだ。コンラッド家の焼き討ちが起きた時、ロドリス国王はもちろんカルランスだった。

拳を握り締めて穏やかな表情を作り上げたアークフィールは、セラフィの気遣うような視線にぶつかり、戸惑った。

（何だ？）

セラフィは、何を考えている……？

「あの焼き討ちは、兵を派遣して行われた。夜襲だ。屋敷から逃げ出そうとする者は、容赦なく斬り捨てられた。コンラッドが反撃出来る暇も与えず、もちろん逃げ出すことなど許さず、その全てを炎に封じたんだ。結果として、使用人を含めた全ての人間が殺されることになった。住み込み、通い、関係なく、その時屋敷にいた者全てだ」

「ええ……」

「けれどその時、一人の少年を逃したのだと言う」

胸に渦巻く黒い焦燥を表情に出すまいと、アークフィールは能面のような顔でセラフィを真っ直ぐ見返した。セラフィは気にする様子もなく、微かな笑みを消すことのないままで穏やかに続けた。

「少年の名は、恐らく……カエサル・クライトマン。屋敷住み込みではなく、近隣に住まう通いの造園技師の子息だ」

ここまで語られて、何を言いたいなどと愚問でしかない。カエサル・クライトマン――かつての自分の名前だ。

アークフィールの拳に力が入った。微かに震える。冷たい汗が背筋を伝った。

「なぜ、彼だとわかったのです？」

第3部第2章第10話　制裁（2）

精一杯の気力を振り絞って、声を押し出す。こちらの表情の変化に気づかぬはずもないのだが、セラフィは変わらぬ態度で肩を竦めた。

「確かではないみたいだけれどね。ハーディンは、関与していた可能性のある者を全て始末しようとした。使用人に目が留まるのは当然のことだ。そしてクライトマンの息子が行方不明となり、同年代と思しき少年が逃走するのを兵が見ている。いや、追っていると言うべきか。……なぜ、そこまでしてクライトマンの息子を追いかけたのだと思う？」

「さ、さあ……。私には、わかりません」

「クライトマンは、没落したリトリア貴族だからだ」

アークフィールは息を呑んで顔を上げた。セラフィの射るような視線にぶつかる。慄然とその冴えた瞳を見返しながら、渇いた口から言葉を搾り出した。

「まさか」

「どうして？　……いや、その追及は後にしようか？　残念ながら事実のようだよ。記録に残されている範囲しか僕には知りようがないけれど。すると、どういう憶測がなされるかは、言われなくてもわかるだろう？」

没落したリトリア貴族が、再起する為にロドリス貴族の使用人に身をやつしてガレリア辺境伯を扇動した――事実か否かはさておき、そういう推測が成り立つのは、想像に難くない。

違う……！　そんなはずはない……！

父が陰謀に加担していたなど、そんなはずはない。それでは、国の仕打ちは至極当然のことになってしまい、アークフィールはただの薄汚い裏切り者になる。

違う。そうじゃない。国は、良く調べもせずに無実の父母を殺害

したのだ。ただそこに勤めていたと言うだけで。何も知らぬ両親を殺し、幸福で穏やかな日々を奪い去り、アークフィールを逃亡者へと追い込んだ。そのはずだ。そうでなければならない。

きつく握り締めた拳が、手のひらに爪を食い込ませる。

「その息子を放っておくわけにはいかないのさ。今の君の立場だったらわかるはずだ。……しかしながら彼を捕らえることは出来なかった。カエサルが逃げ込んだ先はヴァルス――エルファーラとの国境に程近いアンソールと言う街だそうだ」

「……」

「ところで、ヴァルスの宮廷魔術師がどこの出身かは知っているかい？」

確かなことを口にはしていないが、ここまで知っていると言うことは、セラフィは間違いなくアークフィールの素性を知っている。

何を為したくてハーディン王城にいるのかも。

「……いえ」

「アンソールなんだ」

「……」

「そこでどんな友情ドラマがあったのかは、僕は知らない。興味もさほどあるわけじゃない。興味があるのは……」

そこで初めて、セラフィの声に冷気が含まれた。アークフィールは、ただカップの液体に視線を注ぐしか出来ずに凝固していた。

「カエサルがその後、どうしたのかだよ」

空気が冷えたように感じた。もう疑う余地はない。セラフィは、アークフィールをカエサルだと断じている。

「それは、私には……」

「僕はね、ロドリスへ逆恨みを抱いているんじゃないかと思っているんだ」

「逆恨みと言えるのでしょうか」

「逆恨みだよ。どう言ったところでね。けれど僕にはその気持ちもわかる」

「……」

「そうして逆恨みをしたカエサルがロドリスへ戻ったとすれば、どう行動するだろう。アークフィール、君なら」

深く切り込むように、耳を逸らせない声でセラフィが真っ直ぐ問うた。

「君ならどうする」

「さあ。私には想像致しにくい……」

「らしくないな。いつもの君なら、何らかの推測は立てるだろうけどね？　まあ良い。じゃあ僕の知っていることを話そうか。……カエサルは、ハーディンに入り込んでいる」

「ま、まさか」

握り締めた拳がかたかたと震えるのを押さえることが出来なかった。気づいているだろうに一言もそのことには触れず、セラフィが言い聞かせるように続ける。

「間違いない。カエサルはハーディンに侵入し、絶えず、ヴァルスへその情報を流し込んでいる。……どうやら彼は、間諜としては少々変わっているようでね」

「変わっている？」

「諜報活動をする人間に最も多いのが、金目当てだ。危険を伴う諜報活動は、多額の報酬と引き換えになる。受取人が支払った報酬を、情報の運び屋と間諜本人が分け合うことになるが、それでも莫大な金を手に入れることになる。けれどカエサルは、受取人……ヴァルスの宮廷魔術師だが、彼が支払った対価のほとんどを運び屋にくれてやっているようだ」

なぜ、そんなことまで……！

返す言葉を考えることさえ出来ず、アークフィールは愕然とした表情でセラフィを見つめるしかなかった。

「カエサルは、金目当てで諜報活動を行っているわけではない。多額の報酬をヴァルスから受け取っているのは、運び屋に裏切らせないようにだろう。相当の高額のはずだ。まるまるもらえるのであれ

ば、これ以上良い稼ぎ口はないからな。運び屋も裏切るには忍びなかっただろうが」

「……」

「残念なことだね。……カエサル」

予想していたとは言え、心臓が胸の内で跳ね上がった。手のひらに汗が滲み、膝が小刻みに震える。

まさか……なぜばれた？　いや、まだ確信はないのかもしれない。今ならまだ取り成せる可能性はなくはない。

震える声で、アークフィールは言葉を押し出した。ぎこちない笑みが浮かぶ。

「よして下さい。何のご冗談です？」

「言い逃れは必要ない。彼が全て話した。自分の身の安全と引き換えにね」

口を噤み、情報の運び屋として使っていた男の顔を思い浮かべた。ブレヴァルで知り合った同郷の男だ。ルッセンにいた頃のアークフィールのことを見覚えてもいた。信用出来る男だった。いや、はずだった。

だが、裏切った。

「私より、その胡散臭い男を信用するのですか」

「なぜ胡散臭いとわかる？」

「そんな……情報の運び屋だなんて、胡散臭いに決まっているじゃないですか。揚げ足はやめて下さい」

言い逃れることは恐らく出来ない。セラフィは、アークフィールをカエサルと言う間諜だと確信している。

セラフィの発する空気からそれを読み取りながら、それでも足掻かずにいられなかった。

「その運び屋とやらが話しただけで、証拠があるわけではありません。私を嵌めようとする策略です。まさかセラフィ様がそんなものに踊らされるとは思いたく……」

「男の発言に裏は取れている。流した情報も、一部だが判明した。

それらの情報を掴める人間は限られている」
「そんなことわからないでしょう。調べる気になれば調べる手段が絶対無いとは限らない」
「僕と、ユンカー殿と、そしてアークフィール……君しか知らなかった話があったとしても？　それともユンカー殿を疑うかい？」
「それでも知っている人間がいると言うことは、抜け道がどこかにあったからに違いないでしょう！」
わかっている、悪足掻きだ。ここまで言うと言うことは、運び屋に使っていた男からアークフィールがカエサルであると言うあらゆる証拠を吐き出させたのに違いない。セラフィが今こうしてアークフィールと話しているのは、確認の為ではない。儀式の一環だ。捕らえられて処刑されるアークフィールに心の準備をする期間を与えるという、せめてもの温情に過ぎまい。
（申し訳ありません、シェイン様……！）
心の中で、アークフィールが自身の本当の主と定めるヴァルスの宮廷魔術師を思い描く。
アークフィールは、彼が好きだった。ロドリスに追われて逃げ込んだヴァルスの街アンソールで出会った彼に、救われたと思った。
彼こそを自身の主と定め、彼の為にロドリスを裏切ると決めたのは、アークフィール自身だ。
だが、全ては終わった。もうシェインの為に働くことは出来ない。最後に別れた時の、まだ幼い少年だった主人の涙が胸に過ぎる。
ハーディンに侵入して諜報活動を行うと申し出たアークフィール――カエサルを、シェインは止めた。露見すれば非業の死が待っている、賛成は出来ないと。
力及ばず、その通りになってしまうようだ。
そう腹の内で覚悟して沈黙をしていると、セラフィが静かな声で呼びかけた。顔を上げる。
「アークフィール」
「はい」

「僕はね、君を惜しいと思っている」
「……」
「ハーディンではなく、ここに連れて来たのもそれが言いたかったからだ。念には念を入れて、誰にも聞かれない場所で君の意思を聞きたくてね」
「私の？」
「ああ。……君がヴァルスの諜報活動をしていたことは、まだ僕しか知らない。ユンカー殿にもお伝えはしていない。今ならまだ、償う機会は与えてあげられるんだよ」
驚きに目を見張って、アークフィールはセラフィを見つめた。安心させるようにセラフィが柔らかく微笑む。窓から差し込む日差しに髪が透け、それはまるで絵画の中の天使のようだった。
「君と言う人材は、得難いものだと思っている。職務としても、そして、僕の数少ない心許せる友人としても」
心の綻び目に、セラフィが優しく手を差し伸べる。
「ロドリスの為にじゃなくて良い。……僕の為に、情報操作に協力してくれないか？」
「情報操作？」
「そう。君がヴァルスの諜報活動をしていたと言うことは、君が流す情報はヴァルスにとって真実だと言うことになる。つまり」
セラフィの瞳がすっと細められる。アークフィールは、魅入られたようにその瞳から視線を逸らすことが出来なかった。
「君はただ今まで通りにヴァルスへ情報を流してくれれば良い。ただし、僕の指示する情報をね」
反間になれと言うことか……。
セラフィの意図を理解して、アークフィールは渇いた喉に唾を流し込んだ。自分は今、岐路に立っている。
生か死かを分け隔てる、大きな岐路だ。
「私は……」
そう理解しながら、アークフィールは震える声を押し出した。

◆◇◆

氷の月に入って三週目になるが、ナタリアの春は遅い。

見張りの当番が回ってきて、イェニーは白い息を吐きながら望楼に立った。

月の明るい夜だ。このところ曇り空が続いていたが、今日は薄い雲が時折夜空を過ぎる程度で、見晴らしが良かった。

ナタリアの王都エフタルは、国土の北東にある。遠い夜空の下には寒々しい海が広がって見え、その向こうに浮かぶ氷の大陸が影のように黒い。

（まだまだ寒いな……）

花の月を迎えたとしても、ナタリアは春とは到底呼べない。

暖かさを感じ始めるのは風の月に入ってからだ。それでもリトリアやロドリスなどに比べれば、ささやかな春だった。それほどに氷の大陸の冷気は強い。人々は短すぎる春を心待ちにしている。

「今日はまた冷えるな」

見回りをしてきたらしい同僚が、話しかけながら歩いてきた。寒さで強張った顔に笑みらしきものを作り上げながら、片手に握るハルバードを持ち直す。

「ああ。雲は晴れているのにな。空気が刺すようだ」

「軍はもうじき到着する見込みらしいぜ。しかし、いろいろな意味で無駄骨だな」

苦笑する同僚にイェニーも苦笑を返してから、皓々と輝く月を見上げた。

ナタリア軍は、トラファルガーの襲撃に備えて軍を引く決意をした。ロドリス王家に名を連ねる王妃は強行に反対したが、やはり氷竜の脅威には勝てない。

ナタリア北部の町リンガーが襲われるに至って正式にロドリスに通達し、ナタリア軍は撤退を図った。

しかしながら、彼らが戦を構えていたロンバルトは遠い。
ナタリア軍が自国に辿り着く前にトラファルガーが討伐されたとの報が駆け巡ったのは、霜の月の初旬だ。
ロドリスの意に沿って撤退を各国に表明していないのだから、ナタリアはいつでも戦線復帰が可能ではある。
だが、ヴァルスのフォルムスで海軍が壊滅してもいるし、ともかくも一度王都に兵を引いて今後を検討する方針のようだ。
「どうなることかな」
「どう思う？　俺は、戦場に出たいな」
「そうだな」
半ば適当に相槌を打つイェニーが再び空を見上げた時、その瞳に奇妙なものが映った。
夕暮れの空に連なる渡り鳥のような黒い影が、月の光を浴びて夜空に浮かび上がる。
「……マリク」
掠れた声で、同僚の名を呼ぶ。呼ばれた男は目を瞬いて、イェニーを見つめた。
「何だ？」
「あれは、何だ？」
「あれ？」
イェニーの言葉に、マリクも空へ顔を向けた。目を凝らす。
「どれだ？」
「夜空に、鳥のような影が見えるだろう。あれは、何だ？」
「鳥のような影？」
鳥のよう、しかし距離を考えるに、恐らく鳥などではない。そんなに可愛らしい大きさではないことだけ、はっきりとわかる。
その影が一つ、二つ……十。
「魔物か……？」
そう呟いた声を掻き消すように、夜に轟音が響き渡った。黒い世界にぱっと立ち上る鮮やかなオレンジ色――炎。

あちらの方角にあるのは……。
「しゅ、襲撃だああ！」
考える間もなく、咄嗟に警鐘へ手を伸ばしていた。同時に声を限りに叫ぶ。
あそこにあるのはナタリアの要塞、ことにツェンカーを警戒して聳える要塞だ。それが炎を噴き上げていた。
馬鹿な。どうして。
突如慌しい喧騒に包み込まれた街を全身に感じながら、イェニーは再び夜空に目を凝らしていた。
（あれは……）
夜空を飛び回る黒い影は、一体……？

「エディ……じゃないな、フレデリク陛下はどこにいる」
モナ公国シドにあるウォーター・シェリー城は、質素で堅実な体をしている。建物内を歩くたびに、城主の人柄を忍ばせる。
「兄上は、ヴィンクラーと打ち合わせをしておられます」
ヴィンクラーは、モナ公国の宰相だ。
公王の執務室を覗いたシェインは、中に王弟ハインリヒの姿を見て、そのまま中へと入り込んだ。影のようにディールスが控えている。
「ならば少々待たせてもらおう。構わないか」
「ええ。構いませんよ。ディールス、シェイン殿にお茶を」
「畏まりました」
部屋の中央にある応接に腰を下ろし、手にしてきた書類に視線を落とす。モナからヴァルスへの条件書だ。
リトリアの騒動に片がつき、シェインはその足でモナへと向かった。エディとの協議をする為だ。
リトリアからここまで来るのは、それなりの苦労があった。モナ

の人間はもちろん、ヴァルス兵でさえカサドールとなればシェインを見知っている者も少ないのである。

しかしながら、今となってはそれも過ぎた話だ。それよりも、これからヴァルスとモナの関係をどうしていくかの方が重要だ。

モナが作成した条件書に視線を落として赤を入れながら、シェインはエディの戻りを待った。各種権利獲得に力添えをすると言ったのはシェインだが、出来ることと出来ないことがある。互いの利害を調整して、ヴァルス重鎮たちを黙らせられるものにしておかなければならない。

小一時間ほど経って、ようやく部屋の主が戻って来た。シーレィを連れている。

「シェイン。どうした」

「どうしたもこうしたもあるか。条件書は作成し直しだ。その話し合いに来た」

シェインの言に、エディが軽く肩を竦めた。手にした書類を執務机に置き、ディールスを振り返る。

「ディールス、私にもお茶を頼む」

「畏まりました」

第3部第2章第10話　制裁（3）

「あ、僕にもー」
ばすっとシェインの隣に勢い良く腰を下ろしたシーレィが、ソファの背もたれ越しにディールスを振り返った。それからシェインの手元を覗き込む。
「へえ。意外と仕事してる風じゃん？」
「馬鹿を言え。仕事をしてるんだ」
「不思議なことにこうして見ると貴族に見えるものだね」
無言でシーレィの頭を叩きながら、ハインリヒと言葉を交わしているエディに視線を向ける。
全くだ。こうして見ていると、エディはやはり公王だ。一国の主として君臨するに恥じない気品と威風がある。
「おぬしはどう頑張っても王城の人間には見えぬな。この先もこうして居座るつもりか？」
どうやらシーレィは、すっかりモナの王城に腰を据えるつもりらしい。エディとしても使い勝手のある人材だから、黙認しているようだ。
「ならばもう少し、人間の礼儀と常識を身に付けることをお勧めする。……さて、エディ。打ち合わせといきたいのだが」
「シーレィ、席を外してくれ。シェイン、それが済んだらカール公を交えて話したいことがあるのだが、構わないか」
「カールを？　ああ、それはもちろん」
目下のところシェインは、ヴァルスの宮廷魔術師としてウォーター・シェリーに滞在している。
シーレィを使ってラウバルにはそう通達をしてあるし、カール率いるカサドール軍は、現在シェイン掌握の元にある。
これまで共にいた時とは違い、互いに一国を担う責任者として相対していた。

そうは言っても互いに流れる空気感はそう容易く消えるものでもなく、気安い空気は致し方ない。支障さえ生じなければ、歓迎すべきものでもある。

「権利の拡大範囲は、モナがヴァルスに対して行う貢献に見合うものでなければならない。先のリトリアの騒動でも俺の目論見を裏切ってくれたからな。これは些か都合が良すぎる」

ディールスからカップを貰い受けたシーレィが退室するなり、シェインは渋面で書類をテーブルの上へ放り出した。エディが向かいのソファへ腰を下ろす。

「リトリアとの戦については、前にも言ったろう。私はモナの国益を優先したに過ぎない。クラスフェルドには消えてもらうべきだった」

「それはそれとして構わんとも言ったろう。だが、こちらの要求にそちらが添えなかったのも事実。ならば条件はもう少し調整する必要がある」

口約束だったとは言え、互いの信頼関係にヒビが入るのは今後の為にも避けたい。だからこそラウバルの認可を取り付けているし、こうして尽力もするが、シェイン一人で出来ることにはもちろん限りがある。ヴァルスの官僚会議でモナの権利獲得の為に戦うのは、シェイン一人なのだ。余りモナに有利な真似は出来ない。

理性的で論理的でモナの地位向上に燃えているモナ公王はタチが悪く、喧々囂々と打ち合わせを進めていく。

三時間ほどシェインの主張を押し通し、エディがその意見を会議にかけて検討すると言うところで一先ずは落ち着くと、今度はカールを呼び寄せての軍事会議だ。全く、ようやく元の生活に戻ってしまったと痛感する。

「……ナタリアに？」

エディとヴィンクラーが先までしていた会議の内容を聞かされ、シェインとカールは同時に眉を顰めた。

「ああ。我々モナは、ナタリアへ向けて進軍することが決定した」

「なぜ、ナタリアなのです」
「なぜ、疑問を覚える？」
問いに問いで返され、カールが一瞬言葉に詰まる。代わりにシェインが口を開いた。
「ナタリアは、事実上、帝国継承戦争から手を引こうとしているのだろう？」
リトリア経由でエディが仕入れた情報だ。恐らく信用して良いだろう。
エディが、応えて頷いた。
「そう。ナタリアは、戦争から離脱したようなものだろう。……だが、しているわけではない」
その言葉にはカールも頷いた。ほっつき歩いていたシェインと違い、カールは最初から国家の指示でモナへ来ている。本国との連絡は密で、それによれば少なくともナタリアはヴァルスに対して離脱を表明しておらず、むしろ隠匿しようとしているとさえ見える。
恐らくは、ロドリスの指示だろうと推察は出来た。ナタリアの離脱行動が見られ始めたのは、ちょうどトラファルガーの出没と時期が重なる。自国の防衛の為に、割いていた兵力を呼び戻そうと言うのだろう。当たり前のことだ。
だが、ロドリスはそれを良しとしなかった。ヴァルスの心理的負担を軽くするからだ。ロドリス戦力が減少していくと思われるのは避けたいところだろう。立場の弱いナタリアは、それに従うよりない。
「一時撤退――だがトラファルガーの脅威がなくなった今、ロドリスはいつでもナタリアを呼び戻す可能性がある」
ヴァルスに対して降伏をしていない以上、何らかの形でロドリスを支援する恐れはあった。それが兵力の再投入になるか、物資の支援になるかは、現状わからない。
いずれにしても、ナタリアは変わらずヴァルスの敵であると言うことになる。

「ロドリス・バート・ロンバルトへ攻撃を仕掛けることも考えた。だが、知っての通り、モナには現在さしたる兵力は動かせない。少ない勢力で攻められるのは、油断しているナタリアか、主のいないバート本国だろう。リトリアは、軍の通過に関しては黙認すると言っている。こちらの意図を明確に知っている以上、敵対される恐れはない」

リトリアの君主を知っている功だ。ソフィアはエディを信頼している。疑心に駆られて攻撃を仕掛けるようなことはありえない。モナ軍がリトリアを通過することは、何の問題もないと思われた。

「カール殿には、シドの防衛に当たってもらいたいと考えている。率いていく軍は、モナの単軍でありたい。混成部隊は、指揮系統の混乱を招く」

リトリアが戦争から下りた今、シドを狙う国があるとは考えにくい。そうは言っても、動きの読めぬキルギスもあることだし、まさかがら空きにするわけにはいかない。だが、ヴァルス軍がそこにいるとなれば、大して得があるわけでもないのにシドを攻める愚か者はいないだろう。

エディからすれば、虎の威をここで借りずにいつ借りる、である。どうせヴァルス軍はモナに駐留しているのだから、守ってくれるなら全面的にお願いしたいものだ。

「直接的な支援とは言い難いが……」

シェインが唸った。

モナが現在動かせる精一杯と言えば、実際その通りだろう。それはシェインもカールも頷くことが出来た。出来る範囲で成功できる事案を検証するとなると、確かにナタリアもしくはバート本国を攻撃するのが無難かもしれない。

しかし、憂慮すべき点はある。

「ナタリアに対して不利になったとしても、ヴァルスは救援に駆けつけることは出来ないぞ」

現在の戦場に対して遠過ぎる。モナ軍のみで解決してもらうしか

ない。
エディは薄く笑って頷いた。
「見縊ってもらっては困る。必ずや、ナタリアを敗北せしめてみせよう」

◆◇◆

氷の月の三週目に全く唐突に開始されたツェンカーの攻撃に、ナタリアの要塞はあえなく陥落した。
トラファルガーの襲撃で首都が壊滅した国とは思えぬ回復力で兵力を整え、ナタリアとの国境を越えてきたツェンカーは、勝利の勢いそのままに王都エフタルに迫る。
帝国継承戦争から撤退してきたナタリア軍主力が王都に辿り着く前の、間隙を縫うような攻撃だった。
一方、その二週間後には、公王フレデリク率いるモナ軍がやはりナタリアへ向けて王都シドを発った。
行路にあたるリトリアは、ロドリスの求めに応じず、中立を前面に押し出してモナ軍の通過を黙認する。
王都への帰路を取っていたナタリア軍は混乱を極め、ツェンカーとモナ、いずれを優先して戦略を練るべきか結論が出ない。
追い詰められれば、誰もが弱さを露呈する。まさしく悲鳴を上げたナタリアは、今までも手を貸してくれたロドリスに何とか縋ろうとした。援軍を要請したのである。
しかしながら、ロドリスの返答は、冷たい拒絶だった。
自国での対応を余儀なくされたナタリアは、モナを国境の要塞軍に任せ、ともかくも主力を王都へとかき集める。

「ツェンカーがヴァルスについたと言うのは、本当なのか？」

ハーディン王城の謁見の間へ呼びつけられたセラフィを迎えたのは、顔面蒼白、心ここにあらずな我が主君だった。
「何のことでございましょう？」
「とぼけるのではない。ツェンカーはナタリアへ攻撃を仕掛けたと言うではないか。どうなっているのだ」
言わなくても良いことを誰が報告した。
ほとんど八つ当たりとも言える感想を胸の内だけで漏らす。
連合国の総大将であるカルランスが知らなくて良い道理はないが、実際のところ知っていたところで何のプラスになるわけでもない。セラフィさえ知っていれば良いのだ。
ともかくも今はこの臆病な主君を言い包めるべく、セラフィはお得意の笑顔を作り上げた。
「ツェンカーがナタリアに侵入したと言うのは、残念ながら事実のようでございます。しかしながら陛下、それがヴァルスに与したとの理由にはなりません」
「なぜだ？　申してみよ」
「なぜならば、ツェンカーは元々、国境を接しているナタリアとは常日頃から犬猿の仲。今更注目するほどの理由があろうはずもございません」
そんなはずはない。ツェンカーは恐らく、ヴァルスに味方した。
打診に送った使者は代表に会うことが叶わずに空しく帰り、周辺のマカロフやワインバーガにもヴァルスの手が回っていた。
マカロフやワインバーガを押さえ込んだ理由は一つだ。参戦するツェンカー領土の安全を図る為としか考えられまい。
だが、そんなことはカルランスに言う必要のないことだった。ともかくもこの情緒不安定常習患者に処方箋を施してやる必要がある。
「なぜ今なのだ。おかしいだろう」
「おかしいことは何もございません。帝国継承戦争が起こっていることは周知の事実。そちらに神経が向いているナタリアであれば叩きやすいとの安易な判断でございましょう。ヴァルスと連動してい

るとの確かな証拠はございません。こちらまで攻めてくることは考えられませんよ、陛下」

「しかしな、セラフィ。万が一そのようなことになった場合、我々はどうなるのだろうのう？　リトリアも離脱、ナタリアも戦線を離れ、モナはヴァルスに下った。いつの間にか我々は、三カ国に減少しておるではないか」

良いから黙れ。

そう言いたいのを堪え、笑顔のままカルランスを見据える。

「まだ三カ国いるのです。お忘れですか、陛下。元々我々は三カ国でヴァルスに叛旗を翻しました。ナタリアとロンバルトが入れ替わったとは言え、前線で戦う国はまだ三カ国いるのです。モナこそヴァルス配下に下りましたが、開戦前はモナはヴァルス陣営だろうとの判断がなされていたことを考えれば、そこへ戻っただけに過ぎません。離脱したリトリアは、ヴァルスに与さない中立の立場。ナタリアは自国へ兵を引いたとは言え、完全に離脱をしたわけではありません。声をかければ、いつでも馳せ参じましょう」

ナタリアの援軍は、もう期待出来ない。

ツェンカーとモナの攻撃に曝され、恐らくは息も絶え絶えだろう。援軍を拒絶したのは、セラフィの意志だった。手を貸している余裕はない。自分の面倒は自分で見てもらうしかない。

「そ、そうか？　そうかのう。言われてみれば、そのような気もするが……」

ようやく精神の均衡を少し取り戻したらしいカルランスにほっと息をついたセラフィだが、カルランスはまたすぐに青褪めた顔を向けた。

「だがな、セラフィ。そのう、もう、降伏をした方が良いのではないだろうか」

「陛下っ！」

思わず顔を取り繕うことも忘れて叫ぶ。冗談でもそんなことを言われては堪らない。ロドリスの主は、残念なことにカルランスなの

だ。セラフィではない。最終決定は常にカルランスの意向の元である。カルランスが弱気になれば、それはロドリスの弱気に他ならない。

「我々に賛同したナタリアやバートをお見捨てになると仰るのですか」

「いや、そう言うわけではないのだがな、そのう……」

「まだ、ヴァルスとの間に決定的な戦闘は起きておりません。いえ、むしろ我々の方が勝ち駒を進めているのです。何を弱気になる理由がおありですか？」

ハンネス盆地でヴァルス軍が行方を晦まし、連合軍はヴァルス北部にあるラルド要塞とリミニ要塞の二つを陥落せしめたのだ。その後、逃げたヴァルス軍と再びハンネス盆地にて会戦を交え、逃走に追い込んでいる。連合軍は一路レハールを目指し、包囲を開始した。ヴァルスの色は、次第に連合軍に塗り替えられているのだ。こんなところで弱気になられては適わない。

「だがな、セラフィ」

言い聞かせるように、カルランスが深い息をついた。まだ言うかこのぼんくら、と内心毒づきながら、言葉の続きを待つ。

「やはりヴァルスは、ファーラに守られておるのではなかろうかのう」

「……何を、仰いますか」

神に守られているだと？

一瞬、国王だと言うことも忘れて憤怒の感情が噴き上がった。慌ててそれを押さえ込みながら、胸のうちにふつふつと湧き上がる怒りは抑えきれない。

神など、セラフィのそばにいたことは一度たりともない。いるのかいないのか、それはセラフィの関知することではないが、いずれにしても恩恵など見たことも聞いたこともない。

為しえた幸福は全て己の積み上げてきた努力であり尽力だ。

神は恩恵をヴァルスに垂れ流しているとでも言うのか？

ならばそれはそれで良い。こちらは人智の力で対抗してみせよう。
文字通り、神に戦いを挑んでくれる。ヴァルスが跪いた瞬間、それは神が跪いたということだ。
（僕は、僕の力で、思い通りに生きてみせる……！）
「ならば神を越えてみせましょう」
取り繕うことを忘れて言ったセラフィの低く感情的な声に、カルランスがびくりとした。それから、セラフィを探るように口を開く。
「セラフィ……」
「何でしょうか、陛下」
「そなたは、わしを皇帝にすると申したな」
「は？　は……」
唐突に変わった話題に、セラフィは一瞬虚を衝かれ、それから慌てて叩頭した。
「申し上げました。今一度、お約束致します。私は敬愛する陛下に、このアルトガーデンを捧げたいが為に一身を尽くしておりますゆえ」
「それは、本当にわしの為なのだろうか」
いきなり何の話なのだ。
ほとんどセラフィの言いなりに等しいカルランスが、猜疑に満ちた眼差しをセラフィに向けていた。愕然と、その老いた冴えない顔を見返す。
「何を……」
「アンドラーシとそなたが恋仲だと口にする者もおる」
「はっ……？」
だから言わないことじゃない……！
先ほどの怒りを引き摺ったまま、セラフィは心の中で激昂した。硬く握り締めた拳を跪いた膝に押し付け、毅然と口を開く。
「そのような流言に踊らされては、悲しくございます」
「本当に流言に過ぎぬのか？」
「陛下」
「そなたは、我が寵姫アンドラーシに恋情を寄せ、アンドラーシの

為に一身を捧げているのではないのか？」

（だったら何だと言うんだ……！）

国王の狭量に眩暈がした。仮にそうだとして、それが何だと言うのだ。皇帝にしてやるとの言に嘘はないではないか。まさかカルランスを引き摺り下ろしてセラフィが君臨し、アンドラーシを娶るつもりだなどと言うつもりか？　そんなことが出来るはずもないことは、考えなくてもわかることだ。

（駄目だ、こいつは……！）

心の底から絶望した。

呑気もここまでくれば、有害だ。

「陛下。心無い者の流言に惑わされては、足元を掬われましょう」

押し殺した声で進言するセラフィに、カルランスが言葉を飲み込んだ。

「陛下の信用を得られなかったとすれば、それは私の落ち度。しかし陛下の心を惑わそうという輩を許すことは出来ません……！」

真っ直ぐに射抜くような視線を向けるセラフィに、カルランスはやや怯んだような顔をした。構わずに続ける。

「私は、陛下の御為とこの身を捧げて参りました。この先も陛下の御為とあらば、己の持てる全てを賭ける心積もりです。ですが、私の存在が陛下の不信を招くのであれば、私の処遇は陛下がお決めになって下さい。それは、私が決められることではございません」

そこまで言うと、セラフィは立ち上がった。これ以上、屈辱的なこの場にいられなかった。

慇懃に敬礼する。

「心当たりのない誹謗ゆえ、発言にご無礼がありましたらお許し下さい。……失礼致します」

半ば一方的に部屋を辞去すると、憤懣がセラフィの秀麗な顔を彩った。

ここまで好きにやらせてもらったことには、感謝をしよう。

だが、これ以上は足手纏いにしかなるまい。邪魔になる者は、消

すに限る。
（アークフィールを使うか？）
ともかくも執務室に戻るべく歩き出しながら、先日炙り出したばかりのヴァルスの間諜を浮かび上がらせた。
使えなくはない。まとめて片付けることが出来そうだ。
しかし、もっと上手い方法はないものか……。
（いや）
浮かんだ考えに、セラフィはぴたりと足を止めた。
もっと上手い方法があるではないか。
（それが良い）
邪魔な人間は、まとめて消してしまえば良い。

第3部第2章第11話　愛憎の行方　前編（1）

ドレッサーに向かって長い髪にブラシを通しながら、アンドラーシは鏡に映った自分の顔を見つめた。

長い睫毛、神秘的な黒い瞳、ふっくらと薔薇色の艶やかな頬、瑞々しい朱の唇、すっきりとした顎、絹のような長い髪。

このところ、自分でも美しさが増したように思える。そしてそれはきっと、この胸に宿る切ない恋のため息のせいだ。

彼は、今頃何をしているのだろう。

一度だけ重ねられた唇が、強引に抱き寄せられた腕の力強さが、アンドラーシの心を切なさで蝕む。思い出せば体の芯が熱く火照り、その続きに酔いしれたいと願わせる。あの口付けは、抱擁は、愛情の証ではないのだろうか。一体どういうつもりだったのだろう。

再び切ないため息を落とし、アンドラーシはブラシを置いた。

そろそろ眠りにつかなければ。寝不足は美貌に影を落とす。

今日は、カルランスの相手をしながら眠る役目は免れた。正妻の元か、他の愛人の元かは、知らないし興味もない。

ただ、このところ塞ぎこんでいる様子ではあったから、もしかすると一人で頭を抱えているのかもしれない。そうわかっていても、慰めたいとも思わない。

愛情を持てない男の腕に抱かれて眠る苦痛は、女でなければわかるまい。だが、これも仕事だ。国王に愛され、気高く美しく振舞い、国王の装飾品として有り続けること――それがアンドラーシの仕事なのだから、アンドラーシはとにかく美しくいなければならない。

カンテラの灯りを落とそうと立ち上がったアンドラーシは、部屋の奥へ足を運びかけて、小さな物音を耳にした。足を止める。

窓の方から、コツンと小さな音が響いたような気がした。

振り返って様子を窺っていると、再び、コツン……と微かな音がする。まるで窓に小石を投げるような、小さい、しかし確かな音だ。

（何？）

アンドラーシは整った眉を顰めた。気配を窺うようにじっと窓へ視線を注ぐ。

誰かが窓の外にいるのだろうか。衛兵に声をかけた方が良いだろうか。

至極当然な対応が脳裏を過ぎる。

だが、その思考を甘い期待が遮った。

身分違いの恋を思い煩う素敵な騎士が愛する姫君の窓をそっと叩くのは、深夜に人目を忍んでと決まっている。騎士物語の王道だ。

（まさか……？）

自分の身に起こることを夢見て何度も繰り返し読んだ物語のワンシーンが、アンドラーシを窓辺へ向かわせた。恐ろしいと言う気持ちは、恋する若い娘特有の想像力の前に押し潰された。

窓を覆うカーテンに細い手を掛ける。そっと覗くように開き、アンドラーシは動悸の余り一瞬眩暈を起こした。

夢でも見ているのだろうか。

疑いながら、アンドラーシは一気に窓を開いた。バルコンへ滑り出る。

「セラフィ……」

すぐ傍にある大きなホーレフの木に寄りかかるように、美しい宮廷魔術師が佇んでいた。月が投げかける淡い光の下、それだけでまるで幻想的な一枚の絵を眺めている心持ちだ。

窓をノックしたのは彼であると証明するように、片手に小石を弄んでいる。さらさらの青い髪の下で、同じ色の冴え冴えとした瞳が切ない色を滲ませてこちらを見上げていた。

「何を、しているの……」

用済みになった小石を、セラフィが放り出す。密やかな低い声が、風に乗ってアンドラーシに囁いた。

「あなたに会いに」

そう言うと、セラフィは鮮やかな身のこなしで、ホーレフの枝の

上へ体を引き上げた。華奢な体からは想像もつかないほどのしなやかな動きに、アンドラーシは一瞬惚れ惚れとした。同じ目線へと上がったセラフィが、バルコンの手すりに腕を伸ばす。

「非礼は承知の上です。だけど、どうしても抑え切れなかった」

これは夢なのだろうか。

自分は今、幻の世界に迷い込んでいるのだろうか。

すぐ目の前で澄んだ瞳を煌めかせるセラフィを見つめながら、アンドラーシは高鳴る鼓動を抑えきれなかった。

「嘘だわ……」

「なぜ？」

「だってあなたは、いつもつれなくしたわ」

甘えを含んだ拗ねる声に、セラフィが戸惑ったような表情を見せる。初めて見る表情に悦びを感じ、アンドラーシはますます拗ねてみせた。

「いつもわたしにそっけないわ。あなたはわたしに、興味なんてないのよ。だってあなたは、わたしの気持ちを知っていたはずだわ」

「あなたが好意を寄せてくれるのを知りながら拒絶しなければならなかった私の気持ちは、お察し下さらないのですか」

アンドラーシは目を瞬いた。セラフィが、責める声音とは裏腹の甘い眼差しで見据える。

「あなたは陛下の最も愛する人です。そして私は、陛下の臣。……どれほどあなたを想おうと、私はあなたへの気持ちを押し殺さなければいけなかった。あなたの立場を守る為、陛下への忠誠を貫く為、私はそうするしかありませんでした」

苛立ちを微かに孕ませたセラフィが、苦しげに視線を逸らす。その瞳に押し殺した切なさを見つけて、アンドラーシは切実に求められている悦びを噛み締めた。

愛する人を苦しませたくはない。けれど、その彼を苦しませているのが自分への想いなのだと理解することが、倒錯した快感を湧き上がらせる。

「本当に？」
「え？」
「本当に、それほどわたしを想ってくれていたの」
真っ直ぐ尋ねるアンドラーシに、セラフィは戸惑いと照れを表して顔を伏せた。それから小さく口を開く。
「……そちらへ行ってはいけませんか。ここでは、人目に触れる」
頷くアンドラーシに、セラフィは身軽にバルコンへ乗り移った。
それから、バツが悪そうに小さく呟く。
「これでは、まるで猿だ」
可愛らしく思え、アンドラーシは小さく吹き出した。
（ずるいわ……）
恋しい人にそんなあどけない表情を見せられれば、女心がくすぐられてしまう。わかっているのかいないのか。いないのだとしたら、罪だと思う。
「騎士物語の真似でもしてみれば少しは格好がつくかと思いましたが、実際やってみると間抜けなものだ」
半ば憮然と、どこか照れ臭そうなのが、おかしい。普段の取り澄ました姿が嘘のようで、愛しさを煽った。
「こうして忍んで女性の窓を叩くのが初めてみたいな仰りよう」
「初めてに決まってます。色事は得意じゃない」
遠回しにセラフィを探るアンドラーシの言葉の意味に気がつかないように、セラフィは抗議めいた声を上げた。その返答に、胸の内で歓喜する。セラフィの言葉は、言外に『あなただから』と告げている。
裏付けるように、セラフィが切なく目を細めた。
「こうして慣れないことをせずにいられないほど、抑えきれなかったと言えば……伝わりますか」
「セラフィ」
「抱いてはいけない気持ちとわかっています。わかっているのに」
苦く押し出す言葉に、胸を衝かれる。

セラフィもつらい想いを抱えて来たのだろうか。自分と同じように。叶わない想いに身を焦がして来たのだろうか。

そう考えることは、アンドラーシを恍惚とさせた。セラフィの心の中に自分がいると言う想像以上に甘美なものは存在しないとさえ思えた。

「セラフィ……」

たまらず、アンドラーシはふわりとセラフィに身を寄せた。背中に腕を回し、抱き締める。胸に頬を寄せ、このまま死んでも幸福のように思えた。

セラフィの腕が、アンドラーシを躊躇いがちに抱き締め返す。

「私は、陛下に顔向けの出来ないことをしています……」

「言わないで。わたしはこうなることを望んでいたのに」

「でも」

「言わないでったら」

セラフィの言葉を押し止めようと、アンドラーシは爪先立った。唇を唇で塞ぎ、セラフィが動揺したように微かに揺らぐ。

だがすぐに、アンドラーシを受け入れるように、口付けを返した。触れ合った唇から、想いが止められなくなっていくのを感じる。もっと愛情をねだりたくて、アンドラーシは繰り返し自分から求めた。セラフィも同じ想いでいるかのように、交わす口付けが次第に烈しくなっていく。お互いの想いを確かめ合うかのような甘美さに、アンドラーシはしばし我を忘れて陶酔した。

余りに突然叶った夢は、アンドラーシを唇から官能の淵へと誘っていく。このまま、走り出した想いのままに、熱く甘いひと時を心の底から渇望した。

「あなたを誰にも渡したくありません」

深い口付けを幾度も交わし、再び強く抱き合う。セラフィの腕も唇も、抑え切れない愛情を吐き出すように情熱的に感じられた。アンドラーシの長い髪に指を絡ませ、堪らないように胸にかき抱いて頬を寄せるセラフィの押し殺した声が囁く。

「あなたをこうして腕に抱くことをどれほど望んだかわかりません。叶わぬ想いと知りながら、どうしても諦めることが出来ないのです……」

囁きの合間に唇を重ね、重ねた唇の合間に愛を囁く。セラフィの声だけで、酔ってしまいそうだった。込み上げる想いに、アンドラーシの瞳が潤む。

「セラフィ、愛してるわ。ねえ、これは、夢？」

「夢ではない証拠を、あなたの体に教えて差し上げることも出来ます」

「どうやって？」

「それは、実際にしなければ教えられない」

唇が、開いた胸元へ動く。アンドラーシは小さな声を上げた。自分の全てをセラフィに愛して欲しいという強い欲望が心を支配する。

「教えて……」

甘い声で誘う。セラフィの胸から体を起こし、上擦った目付きでセラフィを部屋へ促した。待ちきれないように、セラフィの唇が首筋に触れる。絡まるように部屋へ入りかけ、だが、セラフィはそこで唐突に動きを止めた。

「セラフィ？」

焦れて、セラフィの腕を引く。しかしセラフィはやはりそこから歩き出そうとしない。

訝しくその顔を見つめたアンドラーシは、そこに自分自身を責める色を見つけて驚いた。

「セラフィ？　どうしたの？」

「……私は」

感情と理性がせめぎ合うような苦しげな眼差しを伏せ、セラフィが押し殺した声を絞り出す。

「私は……本当に……何て……」

「え？」

「……今、私があなたの部屋へ入るわけには参りません」

苦く押し殺した声で、呻くように呟く。片手で覆った表情には、胸中の葛藤が滲み出ているようだった。

だが、その苦悩の原因がわからずにアンドラーシはセラフィに顔を寄せた。

「どうして？　なぜ？」

「あなたも私も陛下を裏切ることになるのですよ。わかっておいでですか」

アンドラーシは目を見開いた。本音を言えば、考えもしなかったことだ。裏切るも裏切らないも、アンドラーシにとってカルランスは男の範疇に入っていなかったのだから。

だが、セラフィにとってはそうではない。自身の主人を裏切るということが、どれほどセラフィを苦しめるのかは、アンドラーシには想像するよりなかった。

「わかってるわ、そんなこと。でも」

「私は今夜、そんなつもりで来たわけではありません」

拗ねるように唇を尖らせるアンドラーシに、セラフィが優しく悲しい笑みで覗き込む。

「あなたにこうして一目会いたかった。抑えきれなくなった気持ちを伝えたかった。それだけです」

想いを遂げることを諦めているかのような儚い笑顔が、アンドラーシの胸に刺さる。口を開きかけたアンドラーシに、セラフィが静かに顔を横に振った。

「あなたは陛下の愛する人です。あなたに陛下を裏切らせるわけには参りません」

「嫌よ。わたしの気持ちはどうなるの……っ」

耐え切れず、押し殺したように想いを口にするアンドラーシに、セラフィは一瞬虚に衝かれたような表情を浮かべた。それから、愛しさと苦しさがない交ぜになったように目を細める。

「私の気持ちを受け入れて下さると仰るのですか」

「わたしは、ずっとセラフィのことが好きだったわ。ずっと想って

たわ。……陛下を裏切ることになっても、構わないのよっ……」
「アンドラーシ様」
セラフィが再びアンドラーシを胸に抱く。愛し合う二人の前に立ちはだかる身分と言う障壁に、アンドラーシは切なく酔いしれた。
そうだ。身分や立場と言うどうにもならない障壁が二人の愛を深めるのだ。物語の中ではいつでもそうではないか。
セラフィの為なら、カルランスなど何人でも裏切る。愛など露ほどにも感じたことはない。ようやく振り向いてくれたセラフィを離すわけにはいかなかった。
「では、こうしましょう」
アンドラーシが手の届くところにいることを確かめるような抱擁の後、セラフィが密やかに囁く。
「一晩、よく考えて下さい」
「え？」
「今はきっとあなたも冷静ではないでしょう。ですから今夜、一晩ゆっくりと考えて下さい。……私はあなたを愛しています。けれど、私の気持ちを受け入れて下さると言うことは、陛下のお気持ちを裏切ることと同義なのです」
「……」
「それを知りながら私に応えて下さると仰るのであれば……」
囁きながら、セラフィの唇が頬に触れた。愛しむような優しい口付けに、アンドラーシの恋が燃え上がる。
本当は今すぐにでもあなたのものにして欲しい。体中に愛の証を口付けて欲しい。
「二人で罪に落ちましょう」
セラフィの悲しげな眼差しは、どこか優しい。アンドラーシへの抑えきれない愛情が溢れているように思える。
「明日、同じ時間にもう一度この窓を叩きます。その時までにあなたの心を決めて下さい。もしもその答えが、私を受け入れて下さると言うのならば」

一度そこで言葉を切ったセラフィは、照れを隠すような悪戯めいた眼差しで覗き込んだ。
「その時は、あなたを眠らせない」
からかうように笑う表情が見慣れず、アンドラーシはくすぐったい気持ちになった。これからもきっと何度もこんな顔を見せてくれるのだろう。
「その前にゆっくりお考え下さい。その罪の重さを。……約束です」
「約束するわ」
「私はどんな答えでも受け入れます。けれど、あなたが受け入れて下さらなくとも、私はあなたを想っています。私のあなたへの気持ちは変わりません」
柔らかい微笑みを浮かべてアンドラーシを見遣ると、その言葉を最後にセラフィはバルコンをするりと乗り越えた。来た時と同じようにホーレフの木へ移る。

第3部第2章第11話　愛憎の行方　前編（2）

「誰かに見咎められる前に帰ります」
名残を惜しむようにバルコンから乗り出すアンドラーシに顔を近づけ、素早く唇を重ねると、セラフィは耳元で吐息と共に囁いた。
「あなたの夢を見ます。……愛してる。おやすみなさい」
そう言って、軽やかに木の茂みへと姿を消す。
夢見心地のまま、アンドラーシはその場に立ち尽くした。恋しい人の姿を隠した茂みに目を向け、そっと口元へ手をやる。余韻が消せない。
（今のは、現実なの……？）
あれほどつれなかったセラフィが。
彼に愛の言葉を囁かれることを、一体どれほど夢に見ただろう。
カルランスを裏切ってもセラフィの愛情を受け入れるかどうか――悩むまでもない。一秒で答えが弾き出される。
（愛して）
燃え上がった心を抑えきれず、今し方まで手の届く場所にいたセラフィの面影を探して呟いた。
「わたしを愛して……」
恋を許されなかったアンドラーシが生まれて初めて味わう、恋の陶酔だった。

◆◇◆

アンドラーシはセラフィを愛しているのだろうか。
一度考え始めると、そうとしか考えられなくなり、カルランスは苛々と一人執務室に篭っていた。
確かに自分はとうに男盛りを過ぎた年だ。そしてセラフィは、男から見てもその美しさは認めざるを得ない。年の頃も相応とくれば、

アンドラーシが目を惹かれても頷けなくはなく、そう思うことが国王としてのプライドをいたく傷つける。

自分は国王だ。この国に比類なき最高権力者だ。欲しいものは手に入れ、そしてその財と権力に女は魅せられる。アンドラーシも、自分なくしてはやっていけない。そしてあれほどの佳い女を手放すつもりは、カルランスにはない。

セラフィは、自身にとって代え難い腹心だ。カルランスでは考えられないことを考え、出来ないことをし、そして忠誠を尽くしてくれている。

そのセラフィが自分を裏切ることなどあるだろうか。いや、ないはずだ。であれば、セラフィの言う通り、『言われなき流言』に過ぎないのではないか。

セラフィに依存する心が、自分にとって一番ありがたい答えを自分に押し付けようとする。

二人の関係が何でもないのであれば、無駄な嫉妬心を抱く必要はなく、アンドラーシはこれまで通り自分のものだし、セラフィの才覚も自分の為に使うことが出来る。

そうだ。そうに違いない。

何とか己を納得させようとしたところで、扉が微かに音を立てた気がした。

顔を上げて視線を向けると、改めて小さなノックが響く。

「陛下。おられますか」

静かな声が聞こえ、カルランスはそれが誰のものなのかを一瞬考えた。それから答えを弾き出す。宰相の秘書官だ。名は何と言ったか……確か、そう、アークフィール。

「何だ」

「失礼致します」

柔らかい声で断りながら入室してきた男は、決して国王の覚えがめでたいほど目立つ人間ではなかったが、顔を見れば好感と共に何者かを認識する程度に印象はあった。

「どうした」
「このような夜分に恐れ入ります。少々気になることを耳に挟みましたもので……陛下のお耳に入れておいた方が」
「何だ」
妙に歯切れが悪い。
小さな目を瞬きながら見つめるカルランスの前で、アークフィールは言葉を選ぶように視線を彷徨わせた。それから意を決したように口を開く。
「恐れながら、アンドラーシ様のことでございまして」
「アンドラーシの？」
彼女とセラフィのことを考え続けていただけに、カルランスは嫌な予感を覚えた。口の中が乾くのを堪えながら、僅かに椅子から身を乗り出す。
「アンドラーシがどうした」
「その……宮廷魔術師セラフィ様とアンドラーシ様が恋仲ではとの噂が流れておりまして」
その話か。
顔を顰めたカルランスに、アークフィールは追い討ちを掛けるような言葉を続けた。
「それで、今夜セラフィ様がアンドラーシ様の邸宅を訪れるとの話が」
「何？」
カルランスは、今度こそ椅子から立ち上がった。
「どこからそのような話を」
「いえ。アンドラーシ様の邸宅の衛兵が、昨夜バルコンでかわされたお二人の会話をたまたま耳にしてしまったとのことで……どうしたものかと、私に相談して参ったのです」
躊躇うように俯きがちでしどろもどろに話していたアークフィールは、ここまで話すとようやく腹を決めたように顔を上げた。
「私とてお世話になっているセラフィ様の醜聞を陛下のお耳に密告

するような形は取りたくなかったのですが、今は我々の国も大切な時。国の要とも言えるセラフィ様の人々の評判が落ちれば結束も緩みます。増して、万が一にも真実であった場合、熱に浮かされておられては我々の今後にも支障が生じるのではと考えました結果、早々に陛下のお耳に入れて、芽を摘み取ってしまえば以降セラフィ様も自重なさるのではないかと考えた次第でございます」

「よく話してくれた」

答えた言葉は、まるで歯軋り混じりのようになった。

セラフィ……やはりわしを裏切っているのか？

「今夜か？」

「ええ。衛兵はそのように聞いたと話しております。時刻はもう間もなくだとか」

今夜は、アンドラーシを部屋に呼んだが拒否された。体調が思わしくないと言っていたが、セラフィとの約束があったとすれば納得がいく。

そのことで些か口論になったことを思い出しながら、悔しさを胸に押し殺してカルランスは扉へ向かった。

「確かめに行く」

「し、しかし陛下」

「そうした方が早いのだろう？　現場をわしが押さえてしまえば、二人も謹慎せざるを得まい」

「ですが」

慌てたようにカルランスの後を追うアークフィールに構わず、そのまま急ぎ足で部屋を出る。

もしもこの目で現場を押さえたならば、どうしてくれよう。セラフィにはしばらく自宅謹慎を言いつけねばなるまい。アンドラーシは邸宅ではなく、カルランスの住まう本城に一室を与えて、しばらくはそこにいさせるのが良いだろう。二人の逢瀬を許容するわけにはいかなかった。

険しい表情で足早に急ぐ国王を、衛兵が慌てたように敬礼しなが

ら見送る。
アークフィールがいつの間にか後を追ってきていないことに、カルランスは気がつかなかった。

想う人との愛情を確かめ合う口付けは、麻薬のような飢餓状態に陥らせる。
その夜、アンドラーシはじりじりと時間が過ぎるのを私室で待っていた。
セラフィが初めて窓を叩いた昨夜は、眠ることが出来なかった。
思えばそれなりに長い間セラフィを想い続けている。その想いがやっと叶うのだと思えば、それがまた一層セラフィへの想いを掻き立てる。
早くその腕に抱き締められたい。甘い口付けを交わしたい。体の隅々まで愛されたい。
逸る気持ちを抑えきれずに一日を過ごしたアンドラーシは、約束の時間が近付くと、いても立ってもいられなかった。
セラフィは本当にこの部屋へ訪れるだろうか。そわそわと一所に留まっていられずに、立ったり座ったりと忙しい。
早く抱き締めて。愛の言葉をもう一度聞かせて。もっと確かなことを口にして。あなたに愛されたい。
準備は万全だ。長い髪にも丁寧にブラッシングをし、装いも整えた。いつでも彼の来訪を迎え入れる態勢が整っている。
一度火がついた想いは、加速的に深さを増していた。
心配があるとすれば、セラフィの腕に抱かれてしまえば、もうカルランスの胸へは帰れないのではないかと言うことだ。
本当に愛する人に抱かれる悦びを覚えてしまえば、これまで以上に苦痛にしかなるまい。果たして今後、それに耐えていけるだろうか。

既に今夜、カルランスの呼び出しを拒絶してしまっている。もちろんセラフィと約束をした時間にカルランスの腕で眠っているわけにはいかなかったからだが、考えただけでぞっとしてしまったと言うのも否定は出来ない。セラフィに抱き締められただけで、意識が変わり始めている。こんなことでこの先、カルランスの寵姫として愛され続けることは可能なのだろうか……。

先の、カルランスとのささやかな言い争いを思い出しながら考える。

だがその不安は、セラフィの想いを受け入れる覚悟を揺るがすようなものではもちろんなかった。彼に愛されることが、アンドラーシの望みなのだ。セラフィへの想いだけが、今のアンドラーシにとって生きる糧と言っても過言ではない。彼の存在なくしては、この王城での日々も空疎で色のない日々だろう。

そう考えながら、アンドラーシの心は幸せな期待と一抹の不安を行ったり来たりしていた。

昨夜のことは、幸せな夢だったのではないだろうか。セラフィの姿を望む余りに見た夢。もしかすると自分は、こうして白々と朝を待つ羽目になるのではないだろうか。

幸せ過ぎて信じられないことは、往々にして起こる。

アンドラーシはまさしくそういう精神状態で時の訪れを待ち続けていた為、窓を打つ小さな小石の音が過敏になった鼓膜に甲高く響いて感じられた。

(夢じゃなかった……)

掛けていたベッドから跳ね上がるように立ち、小走りに窓辺へ向かう。

昨夜のようにそっとカーテンから覗き見ると、やはりそこには恋しい宮廷魔術師の姿があった。

「来てくれたのね」

窓を開けて小さく呟くと、昂ぶった感情に瞳が潤んだ。するりと枝に立ったセラフィが、アンドラーシを見てくすりと笑う。

「昨夜、申し上げました。お伺いしますと。……信じて下さらなかったのですか？」
「違うわ。そうじゃないわ。そうじゃないけど……信じられなかったの。夢だったんじゃないかと思ってしまって」
そう口にすると涙が零れた。本当に不安だったのだ。現実ではなかったのではないかと。幸せな夢を見た後では、セラフィのいない現実は辛く思えてならなかった。
「なぜお泣きになるのです？」
「あなたが来てくれたから」
ひょこんと眉を上げて困惑した表情を見せると、セラフィは涙の伝うアンドラーシの頬に唇を寄せた。軽く触れると、それからバルコンへ乗り移ってくる。
「こうして窓を開けて下さったと言うことは、私を部屋にお招き下さると理解してよろしいですか」
「もちろんそのつもりよ。あなたに愛されたいわ。愛して欲しいわ」
まだ止まらない涙を零しながら、アンドラーシは切ない胸中を訴えた。自分は本当にセラフィが好きなのだと理解して欲しかった。
セラフィが笑う。
「今すぐにでも」
「入って」
今夜は、セラフィも昨夜のように躊躇ったりしなかった。アンドラーシに招じ入れられるままに中に入る。アンドラーシが一晩考えた末の結論なのだろうと理解してくれたに違いない。アンドラーシも安心してセラフィの胸に顔を埋めた。
「愛してるわ、セラフィ。愛してる」
「私もですよ、アンドラーシ様」
窓を閉じ、その腕に強く抱き締められながら温もりに溺れたアンドラーシは、そのまま、一瞬何か違和感のある呟きを聞いたように思った。
セラフィが、口の中で小さく何かを呟く。

「何？」
聞き咎めて顔を上げたアンドラーシの意識が、不意に暗転した。
セラフィの腕に抱き寄せられたまま、突如深い眠りに落ちた体が脱力する。
「おやすみなさい、アンドラーシ様。良い夢を」
薄く微笑んだセラフィの囁きは、アンドラーシの耳には届かなかった。

ゆっくりと浮上してくる意識の中で、鈍い頭痛と微かな違和感を覚える。
アンドラーシは形にならない思考の中で、その違和感の理由をぼんやりと考えた。
違和感――何かの臭いがする。嗅ぎなれない臭い。けれど、その臭いが何か知ってはいる。まるで錆びた鉄のような……。
（血の臭い？）
急激に意識が覚醒した。
目を開いたアンドラーシは、辺りを見回してそこが見慣れた自分の部屋であることを確認する。窓から見える外は暗く、まだ夜半を過ぎた頃合なのだろうと言うことを月の位置が教えていた。
どこか朦朧としたまま、寝かされていたベッドから体を起こす。
鼻につく異臭は確かに存在しており、アンドラーシは背筋を粟立たせながら改めて部屋を見回した。
暗い部屋は良く見えない。けれど、ベッドの隅に凭れ掛かるようにしている黒い塊を見つけた時、喉から引き攣れたような悲鳴が駆け上がった。
「……っぃ……」
だが、張り付いたように乾いた喉からはよくわからない小さな呻きが零れただけで、悲鳴の形にはならなかった。凍り付いて身動き

できない体で、見開いたままの目が視線を逸らすことが出来ない。
人のようだった。
暗くてはっきりとはわからないが、うつ伏せで広いベッドの下方に倒れ込むようにしている。下半身は床に座っているようだった。その床下に黒々と広がるのは、ただの陰だろうか？
「誰……？」
細い声でようやく言葉を押し出す。だが答える声はなく、それを最初に見た時から浮かんでいた考えを裏付けていた。
「死んでるの……？」
血の臭いと蹲る人影が自動的に弾き出した答えだ。呟いてみると、恐怖に凍り付いていた体がカタカタと小刻みに震えた。
何が何だかわからない。一体何があったのだったか。なぜ自分の眠っている寝室に、死体がある？　一体誰なのだ？　いや、そもそも本当に死体なのかどうかさえわからないのだが。

第3部第2章第11話　愛憎の行方　前編（3）

全く状況を把握できない混乱した頭のまま、意を決してアンドラーシはベッドの上から降りた。どうしてもその陰に注意を払いながらになるのは仕方がない。動き出すとも思わないが、動き出さないとも限らないのだから。

顔をそちらに向けたまま、そろりそろりとベッドを降りると、アンドラーシは最も手近な壁に掛けられているカンテラに手を伸ばした。闇を探るようにしてカンテラのスイッチを押す。カチンと言う小さな音が響き、炎の種が引火した。オレンジ色に柔らかく照らされた室内に、アンドラーシは今度こそ絶叫した。

間違いない。人間の……男の死体だ。

アンドラーシが今し方まで眠っていたベッドの端にうつ伏せに縋るように座っている男の背中には、深々とダガーが突き立っていた。その背中は夥しい血に濡れており、男の座る床にも血溜りが染みを作っている。どうやらドアの方にも夥しい血痕があり、まるでそこから移動してきたかのようにベッドへ向けて血の染みが続いていた。そしてアンドラーシは、その男の顔に見覚えがあった。

「陛下っ……」

カルランスだ。

カッと見開かれた目に残されているのは驚きか恐怖か。わからないが、一層わからないのは、カルランスがこんなところで殺害されている理由だ。

「アンドラーシ様！　どうなされましたっ？」

アンドラーシの悲鳴を聞きつけて、衛兵が駆けつけたようだ。救われた思いで顔を上げたアンドラーシは、答えかけた声を飲み込んだ。

待て……今この状況を見た者は、何を思う？

浮かんだ考えに、背筋が戦慄する。

「アンドラーシ様っ？　中におられるのですかっ？」
アンドラーシが今夜早々に部屋へ篭ってしまったことは、ここの衛兵や使用人は知っている。当然その後に訪問者がいないことも。にも関わらずカルランスがこの部屋で死んでいる。それも他殺だ。明らかに病死や事故ではない。
「何かあったのですかっ？　開けますよ！」
誰もが、アンドラーシがカルランスを殺したと思うに違いなかった。
「違うっ……」
愕然として、口の中で小さく呟く。一体何だこれは。何がどうなっているのだ。
わけのわからない頭で、ただ耳に無理矢理ドアを開けようとする荒々しい物音だけが響く。
「違う、わたしじゃない……」
だが、信じてくれるだろうか。相手は国王だ。何が何でも殺害した犯人は見つけて処刑しなければならない。そして目下のところ一番疑わしいのは、アンドラーシ以外に誰がいる？
いや、仮にも国王の寵姫だ。みな、信じてくれるに違いない。だが、この状況をどう説明すれば良いのだろう？
ミシミシと音をする扉を見つめながら、アンドラーシは必死に考えた。
思い出せ。どうしてこうなったのか。
自分は眠りにつく前、何をしていた？
（セラフィ）
そうだ、セラフィがこの部屋を訪れたのだ。それともあれは夢？深い眠りに妨げられて、判然としない。だって現実にはセラフィの姿はどこにもない。
しかし現実だったはずだ。昨夜、セラフィが愛を囁いてくれたのだ。そして約束した。カルランスを裏切ってでも二人で愛を育むつもりがあるのか答えを聞く為に、今宵再びここを訪れると。そして

約束通りにセラフィは訪れた。部屋へ招き入れ、そして……。

（どうして？）

なぜそこから先の記憶がない？

「アンドラーシ様！」

ついにドアが破られた。為す術もなくただ部屋の隅に立ち尽くすアンドラーシは、衛兵が数人雪崩れ込んでくるのをただ見つめた。

飛び込んできた衛兵の一人と目が合う。彼はアンドラーシの無事を見て、ほっと相好を崩したようだった。

「無事で……」

だが次の瞬間、別の衛兵が鋭い声を上げ、場の空気が一変する。

「何だっ……？」

「誰……陛下！」

「わたしじゃない……」

ベッドの隅で死亡しているカルランスを確認した衛兵が、驚愕の声を上げる。同時にアンドラーシに向けられた猜疑の視線に、アンドラーシは気が抜けたように呟いていた。

「わたしじゃない。わたしじゃないわ。わたしじゃない」

もう何をどうすれば良いのかわからなかった。ただ繰り返すしか出来ないアンドラーシをよそに、衛兵が更に人を呼ぶ。衛兵を掻き分けるようにして入ってきた人物に、なぜ彼がそこにいるのかを考える余裕もなかった。

「アンドラーシ様」

宰相の秘書官だ。アークフィールが部屋へ入って来て、アンドラーシに近付いて来た。どこか能面のような顔で、覚えたセリフをただ口にするような抑揚のない声でアンドラーシに告げる。

「何があったのか、詳しくご説明下さいますか」

「わたしじゃない……わたしじゃないわ。目が覚めたらこうなっていたのよ」

「そのような説明では、申し訳ございませんが信じるわけにいきません。このような時間に不躾ではありますが、別室にて詳しくお話

を」
アークフィールが、感情のない声で告げた。
「今、一番疑わしいのはあなたなのですから」

今、何が起きているのだろう。
引っ立てられるように衛兵に左右を挟まれて本城へと連れて来られたアンドラーシは、半ば呆然とそう考えた。
一体、何がどうなっているのだろう。
「入ります」
先を立って歩くアークフィールが、一室の前で足を止める。ここはどこだっただろうと考えて、宰相の部屋だったと理解した。中で宰相の声が応じ、ドアが開かれる。
夢の中にいるような頼りない認識のまま中に足を運んだアンドラーシは、中に数人の衛兵や宰相と共に宮廷魔術師の姿を見つけ、我に返った。
セラフィだ。そうだ、いるに決まっている。セラフィなら自分を救ってくれるのではないか。
一縷の希望を見出して彼に視線を向けたアンドラーシは、だが、その冴え冴えと冷たい眼差しに心臓が冷えるような思いを味わった。
「何があった、アークフィール」
自分の存在を素通りし、セラフィがアークフィールに事務的に問う。アークフィールが硬い声で答えた。
「陛下が殺害されました」
「それは聞いた。確かなのか」
「確かです。アンドラーシ様の部屋で、背中をダガーで一突きにされて亡くなっておられました」
「違っ……」
それではまるで自分が殺害したようではないか。

咄嗟に否定しかけたアンドラーシだが、彼女を一瞥したアークフィールが冷たい声で続けるのを聞いた。
「アンドラーシ様の部屋で亡くなられていたのは、間違いようのない事実です」
「わかった」
「何てことだ……」
宰相のユンカーが絶望的な声を上げる。ユンカーを落ち着かせるように軽く肩を叩いてみせたセラフィは、数歩こちらに向かって足を踏み出した。真っ直ぐアンドラーシを見据える目線に、小さく息を呑む。
「アンドラーシ様。残念ながら、聞く限りではあなたが一番疑わしい状況のようですが。違うと仰るなら、こちらが納得いくようにお話頂けますか」
その顔を見て、アンドラーシは深い衝撃を受けていた。
昨夜、そして今宵見たと思っていた愛情の片鱗など露ほどにも感じられない完璧なほどの鉄面皮だ。むしろ氷点下のような凍てつく視線に、抱擁の名残を見出すことなど出来ようもなかった。昨夜の全ては夢だったのかと、改めて自分の頭を疑いたくなる。
そんなはずはない。昨夜の出来事は、確かな現実だったはずだ。
では、だとすればこれは何なのだ？
「違う……」
掠れた声で、アンドラーシはセラフィを見つめながらそう呟いた。
「それではわかりません」
「違う。わたしじゃないわ。わたしが目が覚めたら、あの状態だったのよ！　わたしじゃない。わたしは今夜、陛下と会ってなんていないわ！」
「ですが現実に陛下はあなたの部屋をご訪問なさっておられる」
「知らないわ！」
「あなたの邸宅の衛兵も、陛下がアンドラーシ様に会いにご訪問なされたのを確認しています。陛下は自らの足で歩いて、あなたの部

屋へ訪れたのです」
「知らないったら！」
本当に知らないのだから、そう叫ぶ以外になかった。なぜ。なぜセラフィは自分を救ってくれないのだろう。愛していると言ったのではなかったのか？　愛する相手をこんなふうに追い詰めることが出来るものなのか？
「その前に陛下の執務室でも諍いをしておられますね？」
アンドラーシがカルランスの誘いを断った時のことだろう。確かに小さな言い争いにはなった。それを誰かが耳にしたとしてもおかしくはなく、疑いのない事実ではあった。沈黙で答える。
「恐らく、陛下はその後も憤りが収まらなかったのでしょう。そうしてあなたの邸宅を訪れ、そこでもまた言い争いになったのではありませんか」
「違う！」
「あなたの邸宅を訪れた者は、陛下の他にはおりません」
その時、セラフィが薄く笑ったように見えた。
それを見て、アンドラーシは愕然と目を見開く。
「あなたの部屋に陛下以外の誰も訪れていないとなれば、陛下を殺害出来たのも、自ずとあなた以外にはいないと言うことになる」
「……うわ」
まさか。
「他にも、いたわ」
まさかセラフィは。
「何です？」
「他にもわたしの部屋を訪れた人は、いたわ……」
浮かんだ考えに、涙が溢れ出した。
自分とカルランス、そしてセラフィ以外に部屋を訪れた人間がいないのであれば、犯人は限られるではないか。アンドラーシだけがわかる真実だ。
セラフィは、この為に――自分に罪を擦り付ける為に、愛を囁い

たのか？
　アンドラーシの心を利用して、人目につかないよう疑いなく部屋へ招じ入れさせる為に。
　そこへカルランスを誘き寄せ、その部屋で殺害することでアンドラーシに罪を擦り付ける……全ては、その為に？
（嘘よ……）
「誰です？」
　しゃあしゃあと尋ねるセラフィに、アンドラーシは溢れる涙を止めることが出来なかった。
「あなたが」
「私、ですか？」
　くすりとセラフィが笑った。
「ご冗談を」
「冗談じゃないわ。あなたが、昨夜も今夜もわたしの部屋を訪ねたわ。わたしが陛下を殺害していないことは、あなたが一番良く知っているはずじゃないの！」
「言いがかりはおやめ下さい」
　セラフィが落ち着き払った態度で、アンドラーシを一笑に伏す。
「私は、昨夜も今夜も、ユンカー殿とアークフィールと、この部屋で会議をしておりました」
「嘘よっ……」
　そんな馬鹿なことがあるものか。
　だが、ユンカーがおろおろと口を挟むに至って、アンドラーシは言葉を失わずにいられなかった。
「アンドラーシ様、本当です。セラフィ殿は、私やアークフィールと一緒におられました」
「嘘！　嘘よ、だって！」
「……私情で私をお恨みかもしれませんが、それは逆恨みと言うものです」
　その言葉で、アンドラーシは自分の置かれている立場を瞬時に理

解した。
アンドラーシがセラフィに思慕を寄せていることは、誰もが感づいている。そしてセラフィがつれない態度を貫いてきたことも、知る人は知っているだろう。
アンドラーシは、自身の部屋を訪ねたカルランスを殺害し、それが露見した今、ヒステリックになって自分を粗末に扱ってきたセラフィへ罪を擦り付けようと悪足掻きをしているのだ。少なくとも今この場にいる人間には、そう見えていることだろう。
増して、ユンカーやセラフィ、そしてアークフィールと言う人望の篤い三人が口を揃えていれば、疑う者などいはしまい。着せられた濡れ衣を晴らすことは、絶望的に感じられた。
「……愛してると、言ったのに」
深く傷ついた心で、掠れた呟きが零れる。
国王殺害の罪を擦り付けられたこともさることながら、それよりもアンドラーシはセラフィの嘘に深く傷ついていた。
愛していると言う嘘に。
「あなたの夢の中で私が何を言おうと、私には責任が取れません」
冷笑するセラフィに心をずたずたに引き裂かれ、アンドラーシは抵抗する気力を根こそぎ奪われた。
（ひどい……）
もしもこの世に悪魔がいるのだとすれば、きっとこの顔をしているのに違いない。

第3部第2章第11話　愛憎の行方　前編（4）

◆◇◆

ハーディン本城の地下にある牢獄は、すえたような異臭が漂っている。

冷たく暗いその部屋に放り込まれ、鉄格子の扉に錠が下ろされるのを眺めながら、アンドラーシは茫洋としていた。

かくんと膝の力が抜ける。鉄の柵に縋るように手を伸ばし、その冷たさに戦慄した。座り込んだ床の硬さに寒気を感じる。

なぜ、こんなことに。

（セラフィが……）

涙が瞳に浮かび上がる。

（セラフィが、わたしを、騙したのよ……）

――愛していると言う嘘をついた。

一度乾いた涙が、再び双眸から溢れ出した。

胸で呟いた言葉の持つ残酷な響きが、アンドラーシの心を切り刻む。

恋を知らずにただ愛されて育った彼女を騙すことは、セラフィにとって容易いことだったに違いない。

昨夜のセラフィの声が、瞳が、アンドラーシを追い詰める。いっそ狂ってしまいたい。愛していないのだったら、あんなことを言わないで欲しかった。一度見た夢の後では、この地獄の深さは底知れない。

それなのに、まだこの現実を嘘だと否定したがる自分がいる。まだ彼に愛されたいと思っている自分を呪わずにはいられない。人の気持ちをこれほど踏み躙れる男だとわかりながら、それでもまだ愛されたい。

どこかに見落としている間違いがあるのではないだろうか。

セラフィは、何か誤解をしているのでは。
（酷い男……）
ユンカーとの打ち合わせを抜け出せずにいたセラフィは今夜アンドラーシの部屋を訪れてはおらず、あそこでカルランスが殺されていたのは押し入ってきた強盗のせい……やはり無理がある。
あれほど冷酷な眼差しを出来る男なのだ。
アンドラーシを騙し、カルランスを殺害し、そしてその罪を押し付けることに何の呵責も感じないのだろう。そう信じられるほどの冷徹な眼差しだった。
（嘘よ……）
止まらない涙が、新たな涙を引き連れて来る。
昨夜の全てが偽りだったのだろうか。
顔色一つ変えずに、昨夜愛を囁いた女を投獄出来るのだ。偽りに決まっている。いや、違う。そうじゃない、そんなはずはない、そう思いたくない。
何が真実で何が嘘なのかわからずに迷走する思考の中で、反面、アンドラーシは『信じたくない』と言う自分の思考が邪魔しているのだと言うことも理解していた。
間違いなくセラフィは、国王殺しの罪をアンドラーシに擦り付けたのだ。
（愛していると言ったのに）
それほどまでに、彼は自分が疎ましかったのだろうか。そう考えることは、アンドラーシを更なる絶望の淵へと突き落とす。
今にして思えば、セラフィを部屋に招きいれた後アンドラーシが意識を失ったのは、魔術のせいに違いない。あの時、確かに何かを呟くのを聞いた。恐らくは、眠りの魔法だったのだろう。
（そして部屋を訪れた陛下を殺害し、自分は姿を消した）
そこまで考えて、アンドラーシはふと眉根を寄せた。
……カルランスはなぜアンドラーシの部屋を訪ねたのだろう。
「アークフィール？」

口の中の小さな呟きは、見張りの衛兵の耳には届かなかったようだ。

そう言えばあの時、なぜかアークフィールがいた。宰相の秘書官があんな時間にあんなところにいる道理はなく、衛兵の声に応じたにしては早過ぎたようにも思う。

だが、偶然付近を通りがかっていたとも考えられるし、可能性としては皆無とは言えない。

ユンカーやセラフィと会議をしていたのではないのだろうか。どうなっているのだろう。たまたまアークフィールが席を外したタイミングだったのだろうか。

カルランスを殺したのは、間違いなくセラフィだ。アンドラーシの記憶が正しければ、それが出来たのはセラフィをおいて他にはいない。

なぜセラフィはカルランスを殺す必要があったのだろう。

カルランスは、ヴァルスとの戦争に及び腰だった。今ではすっかり怯えていると言っても過言ではなかった。それが気に入らなかったのだろうか。だとすればセラフィは、是が非でも戦争を押し進めたかったと言うことになる。しかし、なぜ？

カルランスの代わりにロドリスに君臨する？　まさか。幼いとは言え継承権はウィリアム王子にある。そんな強引な真似は、革命でも起こさない限り、いくらセラフィでも無理だ。

ではウィリアムを傀儡の王に据えて、アルトガーデンの覇権を握る？　なるほど、それならいかにもありそうではあるが……。

（そうかしら？）

余りにセラフィにはそぐわないように思う。

それはもちろん、偽りの愛の囁きを見抜けなかった自分にはわかるはずもないかもしれないが。

（……？）

こつん、と心のどこかで何かが引っかかったような気がした。

何か、とても大切なことを自分は忘れているような気がする。そ

れは一体何だっただろう。
思い出そうとするが、どうしても思い出せない。そして思い出せなくとも大した問題ではないと思えた。
当面の問題は、どうやって自分の潔白を証明するかだ。いや、証明出来ないのなら、どうやってここから逃げ出すかだ。このまま大人しくしていれば、アンドラーシは間違いなく処刑される。国王を殺害した罪ともなれば、死罪は間違いない。
鉄柵に縋り、アンドラーシは深く俯いて泣き濡れた。
愛情を裏切られ、心を傷つけられ、そしてこのままでは生命まで奪われる。
だが、自分に何が出来るのだろう。ここを脱出する為に、自分に出来ることは何だろうか。ただ着飾って美しくいることだけが能だったのだ。
（何も出来ない……）
出来るはずがない。
だが、このまま何も出来ず、死の訪れを待つ以外にないのだろうか。

◆◇◆

アンドラーシが引き立てられて出て行くと、セラフィは人知れず、薄く微笑んだ。
これで、鬱陶しいあの女を排除することが出来た。そもそもカルランスに疑念を抱かれたのは、あの女のせいなのだ。こちらの忠告を受け入れずに纏わりついたその責は負ってもらう。
それに、カルランスがいなくなった後でも、寵姫だったアンドラーシはそれなりに遇する必要がある。義理立てする人間がいなくなって、堂々と纏わりつかれては邪魔で仕方がない。カルランスを消すついでにアンドラーシを排除するのは、セラフィにとって必然だ。
少し甘い顔をしてやれば、アンドラーシは熱に浮かされる。言い

なりになる自信はあった。時間さえかければ、本当にアンドラーシに殺害させることも可能だったかもしれない。だが、生憎とそこまでの時間はかけていられず、自身で手を下すことにした。要はアンドラーシが罪だけを引き受けてくれれば良いのだ。

難なくアンドラーシの部屋に招じ入れられたセラフィは、眠りの魔法でアンドラーシを眠らせると、そのまま部屋でカルランスの訪れを待った。

アークフィールが、カルランスにアンドラーシの部屋を訪れるよう扇動している。セラフィは、ただじっと獲物が飛び込んでくるのを待つだけで良かった。

そして押し入ってきたカルランスを殺害するのは、実に容易いことだった。

こっそり中を伺う等の発想のないカルランスは、鼻息も荒くドアをノックした。それを内側から開いてカルランスが足を踏み入れた瞬間、閉めた扉を背にダガーを振り下ろすだけで十分だった。

アンドラーシはもちろんセラフィの罪を糾弾するだろう。だが、それにどれほどの効力がある？

セラフィがいなければ、現在のハーディンは立ち行かない。それがわかっている人間は、出来るだけセラフィを信じようとする。真っ黒ならばともかくも、「グレーに見えるかもしれない」と言う程度ならば、白だと思い込もうとする。恋と言う邪心が混じったアンドラーシの糾弾など、歯牙に掛ける余地もない。ささやかな細工でユンカーの口添えが得られれば、それで十分だ。

ユンカーは、眠りの魔法と時計に施した細工で、セラフィと過ごした時間を少し勘違いしている。そしてユンカーの意識がない時、あるいは「執務室に書類を取りに行く」と言って席を外した時、アークフィールが「一緒にいた」と口添えをすれば、それで十分ユンカーは信じ込む。その間、セラフィがアンドラーシの部屋を訪れ、アークフィールがカルランスを扇動していても、ユンカーが知る由もなく、アークフィールがセラフィに脅されているとは夢にも思わ

ない。
結果としてユンカーの中では、自分がセラフィの所在を確かに知るわけではない時間帯をも「仕事をしていた」と認識している。
そもそも、公的にはセラフィがカルランスを殺害する理由はないのだから。
後はアークフィールを使って最後の仕上げをするだけで、邪魔な人間は全て片付くはずだ。
「まさかこんなことが……」
ユンカーが青ざめて呟いた。
能面のような顔で人形のように立ち尽くしているアークフィールを下がらせると、セラフィはユンカーに向き直った。
「ともかくも急務は、ウィリアム殿下を戴冠させることです。長らくの国王不在は、あらゆる意味で不利益です。幸い犯人は簡単に見つかり、後を継ぐべき王子は存在している。陛下の血筋が絶えたわけではないことを強く主張し、連合軍の分裂を防がなくてはなりません」
「しかし」
ユンカーがおろおろと言い募った。
「それでも士気の低下は否めないでしょう。どうすれば……どうしてこんなことに……」
混乱から抜け出せないユンカーに、セラフィは薄く笑った。アークフィール、君の利用価値は、ここにある。
「ユンカー様。このようなことになるとは思わず、言いそびれておりましたが……確証が掴めてからと思い、独自で調査をしていた案件が一つございます」
「何ですか」
「気を確かにしてお聞き下さい。ヴァルスに情報を流している者がいる、と話していたことを覚えておいでですか」
「え、ええ。もちろん」
頷いてから、ユンカーが驚愕の眼差しを向けた。

「まさか、アンドラーシ様だとでも言うおつもりですか」
「それこそまさかです。彼女にそんな才覚はありません」
セラフィは低い声で明確に宣告した。
「アークフィールです」
ユンカーが凍り付く。
「ご冗談を」
「残念ながら、本日裏付けが取れました。後ほど証人にも会わせて差し上げます」
視線をユンカーに定めたまま告げるセラフィに、ユンカーはしばし言葉を失った。それから落ち着こうと言うように深い息をついて、顔を横に振る。
「それで」
「アンドラーシ様は、アークフィールに唆されて陛下を殺害されたのではないでしょうか」
静かに、さりげなくユンカーの意識を誤った方向へ誘導する。
「え？」
「ヴァルスの間諜にしてみれば、カルランス陛下は連合軍の総大将です。その首を獲れば、連合軍の結束が瓦解すると考えても不思議はありません。しかしアークフィール自身が手を下すには危険が大きい。だが寵姫ならば、痴情の縺れと世間も理解する」
そこでセラフィは、ふっとため息をついて目を伏せた。
「残念ながらアンドラーシ様の心は、陛下の元にはあられなかったようですし」
「それは……」
「そのことについては、私も責を感じずにはおれません。私が、アンドラーシ様にアークフィールの付け入る隙を与えていたのでしょう」
自身を責める苦渋を顔に滲ませて見せたセラフィは、やがて吹っ切るように顔を上げた。
「今宵の会議の最中、アークフィールは席を外しましたね」

「え、ええ」
「そして戻って来た時には、アンドラーシ様を伴っていた。今にして考えれば、確かに彼女が陛下を殺害したかどうかを見届ける為だったのではないかと思えてなりません」
アンドラーシの邸宅へ向かわせたのは、もちろんセラフィだ。カルランスの死体が間違いなくアンドラーシの部屋から発見されるよう、アークフィールを差し向けた。そしてアンドラーシの身柄を拘束するよう指示してあった。それでアークフィールに不審の目が向こうが、セラフィには痛くも痒くもない。
「しかしまさかそんな、アークフィールが。そんな馬鹿な」
「これはヴァルスの謀略ですよ、ユンカー殿」
混乱を極めるユンカーに、低く囁く。ユンカーが目を見張った。ヴァルスの間諜は、カルランスを失ったロドリスの士気をも高めてくれる重要な役回りだ。
「陛下は、ヴァルスに殺されたのですよ」
復讐戦だ。
人間の闘争心を強く掻き立てる最たるものは復讐心と言っても過言ではない。
『新王ウィリアム陛下の元、カルランス先王陛下の仇を討て』と叫べば、兵の士気を上げるのに十分だ。扇動する者がいれば、尚良い。卑怯な手段を使ったヴァルスへの怒りに火をつければ、ウィリアムの元で再結束は難しくない。
「私は、戦地へ赴きます」
セラフィの宣言に、ユンカーは本日何度目かの驚愕を顔に浮かべた。余りのことの多さに、頭がついていききれていないのかもしれなかった。
「何と……？」
「私は戦地へ赴きます。ここからは、敬愛する陛下の雪辱戦となることでしょう。陛下の恨みは我が恨み、ヴァルスへ怒りを覚えるのは私だって同じです」

戦地の幹部を煽り、幹部に兵の士気を煽らせる。連合軍は敵地へ足を踏み入れているのだ。最後の詰めまでもう少し――手を抜くことは許されない。

「ウィリアム殿下の戴冠については、ユンカー殿にお任せして宜しいでしょうか」

ユンカーにはウィリアムに専念して、アークフィールやアンドラーシのことについてはセラフィに一任してもらった方が良い。彼らの処遇は、セラフィが采配する必要がある。

アークフィールの捕縛によって、一度アンドラーシの上に固まった国王殺害の容疑がセラフィに向くことは考えられないが、アークフィールがセラフィの罪を糾弾することは免れられない。そうなればまた少し事情は変わる。人前で疑心を抱かせるようなことを口にさせてはならない。

アークフィールの捕縛は、人目につかぬように速やかに行うことだ。さっさと拷問部屋に放り込んでしまえば、後は拷問吏に向かって何を喚いたところで誰の耳にも届かない。その程度であれば、それはただの言い逃れとして片付けることも出来る。それだけの権力が自分にはある。

カルランスの殺害をアークフィールの――ヴァルスの謀略として人心を煽るのであれば、首謀者と実行犯を共に公開処刑にする必要があるだろう。間諜の定石としての拷問にかけた後、アークフィールとアンドラーシを纏めて公開処刑する。これで全てが葬られる。

「私が出陣した後、城のことを頼みます。ウィリアム殿下はユンカー殿を慕っておられる。あなたがそばにいれば、ウィリアム殿下も己の責務を理解していくことでしょう」

カルランス殺しの背景の真実を探り出そうなどと考えぬよう、セラフィはユンカーのすべきことをさりげなく誘導した。

「ウィリアム殿下をあなたにお任せ致します。アンドラーシとアークフィールの処遇についてはこちらで考えますので、ご心配なく」

第3部第2章第12話　愛憎の行方　後編（1）

牢に放り込まれたまま放置されたアンドラーシは、その数日間、疲れ果てた思考回路でひたすらこの窮地を脱する方法だけを考え続けた。

牢を抜け出す為に自分が出来ること……それは、本当に限られるのだ。

これまでの自分の人生を振り返って自分が出来ることはただ美貌を保つことだけ――逆に言えば、美貌に関してはアンドラーシは誰にも負けない自信があった。

最大の才能は、男を惑わすことだ。

考え続けた結果、アンドラーシは一つの作戦に辿り着いていた。

成功の可能性はどのくらいあるかわからない。しかし、他に方法が思いつかない。

（そうするしか、ないじゃない）

これから自分のしようとしていることは、考えるだけで悪寒が走る。だが、生命には変えられない。

自分を奮い立たせ、決意を固める。そして立ち上がると、アンドラーシはそっと鉄柵のそばへと立った。

無力な女に何をする力があるでもないと見縊っているのだろう。衛兵は常に一人、交代は数時間おきだ。

そっと覗くと、すぐそこの椅子で暇そうに見張りをしている衛兵の姿が見えた。二十代半ばと言った下品な男だ。女と見ると品定めしたがる顔つきに見える。丁度良い。そう確かめて一度陰へ戻ると、アンドラーシは自分の衣服を脱ぎ落とした。

男にとって自分の美貌と肉体がどれほどの価値があるのか、アンドラーシは知っている。

国王の愛妾……衛兵風情には、これまでは到底手の届かぬ女だろう。

これから起こることを想像すると屈辱で気が狂いそうだが、そう身震いする思考とは裏腹に、アンドラーシは着々と衣服を脱ぎ去った。

全てを脱ぎ落とし、それから一枚の薄布だけを手に取る。全裸よりも、僅かに隠されている方が本能を強く煽る。そう知って、アンドラーシはそれを腰に軽く纏った。剥き出しになった豊かな双丘を片腕で申し訳程度に覆い、鉄柵にしなやかな腕を伸ばす。

そして、深呼吸をした。

ここから出てみせる。生き延びてみせる。出てから先はどうするかわからないが、とにかく出ることだ。ここから出なければ、何も始まらない。

「ねえ」

微かに鼻にかかる艶っぽい声で、アンドラーシは見張りの衛兵に呼びかけた。

掠れた頼りない呼び声に、衛兵が顔を上げる。

途端、半裸のアンドラーシの姿を見つけ、さすがにぎょっとしたように身を引いた。掛けていた椅子が大きな音を立てる。

「なっ……」

「助けて」

細い声で囁く。大きな瞳から零れ落ちた涙は、自分でも演技なのかそうではないのか、わからなかった。

「な、何、馬鹿なこと……そこから出せってんですか？」

動揺を出すまいと居丈高に言うが、視線がアンドラーシの肉体から逸らせないらしい。アンドラーシは、殊更頼りない笑みを作り上げて男を見つめた。

「まさか。そんな権限、あなたにあるわけじゃないでしょう？」

「当たり前でしょう。そんなことは出来ませんよ」

「だから、そうじゃないわ。そうじゃないの……寂しいのよ……」

はらはらと涙を零しながら、アンドラーシは男が帯剣しているのをさりげなく確かめた。腰にバスタード・ソード。それから腰より

やや高い位置に、ダガー。
「こんなこと、今までなかったわ。こんなに一人で過ごす夜は初めてよ。心細いの。わかるでしょう?」
「そりゃあわかるが、それはあんた自身が招いたことでしょうや」
そう言う声が掠れている。男の中に芽生えた期待と理性がせめぎあっているのだろう。辺りをさっと伺う視線に、あわよくばの期待が見え隠れしている。
「知ってるわ。わたしがやったわけじゃないと言っても信じてもらえないこともわかっているわ。だから出してくれなんて言わない……。だけど」
これ見よがしに、薄布で覆われた艶かしい足を鉄柵の隙間から見せる。男の視線が釣られるように動く。
「慰めてくれるくらい、良いでしょう?」
突然自分から落ちてきた上等の餌に、男は返す言葉が浮かばなくなったようだ。アンドラーシは更に誘った。
「誰にもばれるわけがないわ。ばれたとしたって罪人のわたしに同情する人もいないわ。……ねえ。慰めて」
「慰め……」
「言っている意味、わかるでしょう? 何も持っていないわたしが、何か企めるはずもないじゃない……。寂しいのよ。寂しくて気が狂いそう。……お願い。こっちに、来て」
甘えた声に、男が立ち上がった。吸い寄せられるようにこちらへ歩いて来る。どうやら理性に欲望が勝ったようだ。視線がアンドラーシの体を舐め回す。
「体で慰めて」
「わかってるでしょうが、鍵はかけさせてもらいますぜ。逃げられたら大事だ」
「わかっているわ。人肌が欲しいの。おかしくなりそうなのよ」
落ちた。
大きな瞳から涙をはらはらと零しながら、アンドラーシは媚びる

視線を男に送った。男は、まだ警戒するように「離れてろ」と言うと、アンドラーシが扉から離れるのを確認して鍵を開ける。
中に入ると、後ろ手に鍵を掛けながら、ようやく男が安心したように下卑た笑いを浮かべた。
「本当に何も持ってねえのか、確かめてやるよ。両手を上げろ。腰の布も落とせ」
アンドラーシは素直にそれに従った。ふっくらと形の良い膨らみが露になり、アンドラーシは一糸纏わぬ姿を曝した。
反撃など出来るはずもない、そう思ったに違いない。甘え慣れているアンドラーシの頼りない姿も、先ほどの言葉が真実だと思わせるのに一役買っていただろう。
「慰めてやるよ」
その言葉に、アンドラーシは緊張が高まるのを感じた。
一歩間違えれば後がない。確実にことを運ばなければ。
「あなたの思う存分……慰めて」
男が最大に無防備になる瞬間――それがアンドラーシの生死の境目だ。

◆◇◆

どこかで金属的な物音が聞こえた。
そう認識することで、アークフィールはまだ自分が生きているのだと理解した。
だが、全身の痛みは既に飽和状態で、どんな状態でいるのかを考えることさえ億劫だ。両手首の戒めなどなくとも、動けるとは思えないものを。
（早く……死なせて……）
心の中で呟く。
ハーディンお抱えの拷問吏による仕事の成果で、片目は抉り出され、もう片目も瞼が腫れ上がってほとんど開かない。裸にされた背

中に押し付けられた焼きゴテの痕は未だ爛れる痛みを訴え、あらぬ方向に捻じ曲げられた指は悲鳴を上げ続ける。まだ続くだろうえげつない苦痛の時間を思えば、舌を噛み切ってでも死にたいと思うのに、もはやそんな力さえ入らない。

描ける未来を持たないアークフィールは、過去を脳裏に蘇らせるしかすることがなかった。朦朧とした頭で、過日のセラフィとの会話を思い起こす。

――君はただ今まで通りにヴァルスへ情報を流してくれれば良い。ただし、僕の指示する情報をね。

――私は……私には、出来ません。

セラフィの提案を拒絶することは、己の生死を決定するとわかっていた。だが、それでも言わずにいられなかった。自分の生命に変えても守りたいもの――アークフィールにとってそれは、自分の忠誠を貫くことだ。シェインを裏切ることは、自身が許さなかった。

それきり黙してセラフィの宣告を待つアークフィールに、やがてセラフィがふっと笑った。

驚いて顔を上げると、セラフィは無邪気にさえ見える表情でこう言ったのだった。

――残念だな。まあ、強要出来るでもないから仕方がないけれど。だったら、それはそれで良い。クライスラー卿を裏切れとは言わない。代わりに、少し役に立ってもらおうかな。……まだ、生きたいだろう？　ブレヴァルのご両親も大切だしね？

ブレヴァルの養父母を人質に取られて逃げ出すことさえ叶わなくなったアークフィールは、首輪を掛けられたまま曖昧に無罪放免された。そして、数日経ってからセラフィに呼び出されたのだ。

――ちょっと手伝って欲しいことが出来た。

――手伝う？

――モナ、ヴァルス、ツェンカー、ロンバルト、リトリア。……そろそろロドリスも政権交代のタイミングだ。

――政権交代……まさか。

――君に陛下を殺せとは言わないさ。安心して良い。言ったろう？　『手伝ってくれ』と。

セラフィがアークフィールにさせたのは、アンドラーシを犯人に仕立て上げる手伝いだ。

大したことをしたわけではない。カルランスをアンドラーシの邸宅へ向かわせるよう、セラフィに言われた通りのセリフを舌に乗せただけだ。

ロドリスへの裏切りと言う自身の罪を掲げられ、ブレヴァルにいる養父母を盾に取られて脅されれば、アークフィールに選択肢はなかった。従う以外にどうしろと言うのだろう。

けれど。

（俺は……アンドラーシ様を売ったんだ……）

己の養父母と引き換えに、無実の、宮廷魔術師を恋い慕うだけの女性を売ったのだ。どう言い繕っても償うことの出来ない罪と思われた。

そしてアークフィールは、結果として何一つ報われることなく、ヴァルスの間諜として捕らえられている。

数人の衛兵に突然身柄を抑えられ、加えられた暴行で意識を失ったまま、次に目が覚めた時はこの部屋にいた。それが二日前――アンドラーシが国王殺しで捕らえられた翌々日のことだった。

セラフィは、最初からそのつもりだったのだ。

従えば罪を追及せず養父母に手は出さないと持ちかけ、成立した瞬間に手のひらを返して全ての罪をアークフィールとアンドラーシに押し付ける。

セラフィにしてみれば、邪魔者の一掃と言うわけだ。これ以上都合の良いことなどあるだろうか。

裏切り者として拷問部屋に放り込まれてからセラフィの策略を糾弾したところで、耳を貸す人間などいるはずもなかった。自身の正体を暴いたセラフィへの私怨としか思われず、そもそも耳にする人間は拷問吏しかいない。セラフィに伴われてユンカーが一度訪れた

が、ユンカーは何よりアークフィールの裏切りが衝撃だったようで、やはり耳を貸す様子はなかった。
せめてもの贖罪にとアンドラーシの無実を叫んだが叶わず、アークフィールはこうして苦痛に彩られた死への道のりを歩いている。
（シェイン様……俺は……）
涙が零れ落ちた。
（俺は、何をしているのでしょうね……）
こんな無様な自分を、主は望んでいなかったに違いない。
知られたくない。その耳に届かないで欲しい。裏切りに裏切りを重ねて薄汚れた自分の姿は、自分でも目を背けたくなるほど汚らわしい。
――だからよせと言ったろう？
記憶の中の幼い主が、こまっしゃくれた声で叱咤した。
――おぬしには向いていなかったんだ。だから止めただろうが。
ここまで正体がばれなかっただけでも僥倖だ。
（裏切った人間は、こうして裏切られて報いを受けるのでしょうね）
赤い瞳と赤い髪の主が、アークフィールを見据える。ロドリスを裏切り続けてきた自分には、似合いの幕引きなのだろう。
取り留めのない慙愧の念と悲しみだけが形にならずに浮かんで消える。そのまま意識を失いそうになったアークフィールは、すぐそばで聞こえた物音に再び意識を引き戻された。
金属的な音が聞こえる。
精一杯の気力を振り絞って残った方の片目を微かに上げると、正面に見える鉄扉の覗き窓が目に入った。霞む視界で、その向こうに誰かが立っていることだけが薄っすらとわかる。
（誰……）
女性だ。――アンドラーシ。

第3部第2章第12話　愛憎の行方　後編（2）

なぜ彼女がそこにいるのかわからなかった。アンドラーシは自分より先にこの牢獄のどこかに監禁されていたはずだ。

尋問されるまでもなく国王殺しの罪を丸ごと押し付けられた彼女は、いずれ、死刑台に上るはずだった。こんなところにいるはずがない。

「アークフィール」

だが、その声は現実だった。小さな小さな声で、アンドラーシが彼の名を呼ぶ。

「アンドラーシ様……どうやって」

今出来る精一杯で声を押し出すが、届いたかどうかまではわからない。

「あなた、どうして」

アンドラーシの声を聞いて、アークフィールは微かに自嘲した。そうだ。彼女はアークフィールがヴァルスの諜報活動をしていたことを知らない。宰相の秘書官がこんなところで拷問を受ける理由が、全くわからないだろう。

そして彼女は、アークフィールの彼女に対する罪を知らない。

「逃げて……」

哀れみの視線を向けるアンドラーシに耐え切れず、アークフィールは贖罪を込めて呟いた。

「陛下をあなたの部屋へ誘ったのは、私です……」

アンドラーシが驚愕する気配だけを感じる。アークフィールの頬を、熱い涙が伝った。俺の人生は、どこでどう間違えてこんなことになったのだろう。こんなことなら、いっそ早く幕を引いて欲しい。

「許されると、思っては、いません……」

「アークフィール」

「だけど、私……俺は、知ってる。あなたは、陛下を、殺してない

……」

アンドラーシが微かに息を呑んだようだった。

「あなたは、なぜこんなところに」

「俺は、裏切り者です……ヴァルスに、ロドリスを、売り続けてきました……。その報いに過ぎません……」

「ヴァルス……」

「あなたを巻き込んでしまったこと……申し訳なく……」

これ以上言葉を紡ぐ力がなかった。体が持たず、意識が途切れる。

次に気がついた時、アンドラーシの姿はもうどこにもなかった。

それを知って、アークフィールは安堵した。

彼女を陥れた自分には、何もしてやれない。彼女一人でどこまで出来るかなどわかったものではないが、それでも祈らずにいられなかった。

（無事、逃げて……）

無事に逃げ延びてくれれば、ほんの僅かでも救われるような気がした。

◆◇◆

（はぁっ……はぁっ……）

慣れない運動と緊張の連続で、荒い呼吸はおさまる気配がない。

アンドラーシは冷たい壁に背中を預けながら、辺りの様子を窺った。

明るい月明かりの下、動く人影はなさそうだ。陰になる繁みへ移動して、再び深く息をつく。

全身に残る不快な感触は、まだ消えない。一刻も早く水に飛び込んで洗い清めたいところだが、そうもいかない。

死に至った瞬間の男の顔が網膜に張り付き、アンドラーシは堪えきれずに吐瀉した。

性行為の最中に、男が最も油断する瞬間が訪れる――そう確信を

して、男に自分の肉体を提供することを選んだのはアンドラーシ自身だ。

アンドラーシの豊かな肉体に男を溺れさせ、その間、アンドラーシは必死で男が脱ぎ捨てた装備に足を伸ばしていた。中に含まれているダガーをひたすら足で引き寄せていたのだ。

その音が男の意識を引かぬよう、わざと装備を何度も蹴り飛ばして音を上げ、装備の立てる金属音がＢＧＭに成り果てるよう苦心した。ようやく文字通り命綱となるダガーの柄に指先が届いた時、勝機を掴んだと思うのと同時に、これからしようとしていることに恐怖して震えた。

快楽の絶頂に達した瞬間、男の意識が完全に弛緩する。

それを感じ取ったアンドラーシは、全ての思考を停止し、首筋に回した手に握るダガーを全力で振り下ろすことに専念した。完全に無防備だった男は、何が起こったのか理解する間もなく絶命したことだろう。

生温かい血が降りかかり、ぐったりと力を失った男の体が圧し掛かってきた時、アンドラーシはさすがに耐え切れずに這い蹲って逃げた。新しい血を溢れさせて倒れ臥す男を見つめて震えながら、恐怖の涙が止まらなかった。

だが、いつまでもそうしているわけにはいかない。交代の衛兵が来る前に脱出しなければ、何の為にこんな真似をしたのかわからない。

不愉快な感触と匂いを押し殺して元着ていた衣服を身につけたアンドラーシは、男が脱ぎ捨てた中から鍵を見つけ出して外へ出た。

今まで来たことなどない地下牢は少しだけ迷ったが、何とか人に見つかることなく、地上へとたどり着くことが出来たのだ。

ハーディンから出ることさえ出来れば、助かる。

アンドラーシは、そう信じて疑わなかった。いや、信じるしかなかった。

街へ出るには、恐らく時間が勝負だ。まさかアンドラーシが脱出

したと思ってはいまい。今ならまだ、末端である見張り衛兵が寵姫アンドラーシの捕縛をまだ知らない可能性に縋ることも出来る。脱獄の通達が行けばそうもいかないだろうが、それにはまだ時間がかかるはずだ。だとすれば、門から堂々と出て行ける。

とにかく呼吸を落ち着かせ、アンドラーシはダガーを下着に挟み込んだ。不審に思われないよう衣服と髪を整え、小走りに本城を離れる。庭園を横切りながら、地下牢を抜け出す前に見たアークフィールの姿を思い出した。

彼も、セラフィに利用されたのだろうか。

――私は、裏切り者です……。

口を利くことさえ覚束ないようなアークフィールの痛切な声が耳に残る。ヴァルス、と言っていた。ヴァルスと密通していたと言うのか？　アークフィールが？　まさか。

だが、本人がそう言った。であれば、アンドラーシのように陥れられたとは考えられないが……それがゆえの拷問だとわかりはするのだが。

アンドラーシの知るアークフィールと言う人物像が、間諜の持つ裏切り者のイメージと重ならずに、しばし困惑に陥った。それとも、得てしてそういうものなのかもしれない。見るからに怪しい胡散臭い人間であれば、そもそも大した情報を集められはしまい。

アークフィールは恐らく逃れられないことだろう。謝罪する彼の言葉を思い返せば胸が痛まないでもないが、アンドラーシにだってどうしてやることも出来ない。こちらだってまだ、いつ何時どうなるか知れたものではないのだ。他人のことを案じてやる余裕があるわけではない。

出来る限り本城から離れたアンドラーシは、改めて着衣を整え直すと、毅然と背筋を伸ばして歩き始めた。外へ続く門は、もうそこだ。松明の灯りの下、衛兵が立っているのが見えた。

怪しまれてはならない。だが、もしももう知っていたらどうしよう。

不安に震える体を叱咤して衛兵に近付く。一瞬身構えた衛兵に心臓が跳ね上がったが、衛兵はすぐにアンドラーシと認めて姿勢を緩めた。

「こんばんは」

優雅に微笑んでみせる。衛兵が敬礼した。

「お務めご苦労さま。悪いのだけど、ちょっと通してくれない？」

「は……あの、この時間に、どこへ」

当然の疑問だ。既に夜半を回っているこの時間、逃亡の身とばれていなくとも不審に違いない。

アンドラーシは妖艶に微笑んで見せた。

「野暮だわ」

「え」

「誰にも内緒にして欲しいの。ちょっと人に会いたいのよ」

あばずれと思われようと構わない。命の方が優先だ。淫らな笑みを口元に浮かべてみせるアンドラーシに、衛兵たちは戸惑ったように顔を見合わせた。

「しかし」

「ほんの少しよ。すぐに戻ってくるわ。後でお礼を弾むわ。ダメ？」

甘えるように小首を傾げてみせると、衛兵は困ったと言うように頭をかいた。

「アンドラーシ様に何かあれば、我々がお叱りを受けます」

「何もないわ。すぐに帰ってくる。気をつけるから。お願い」

しばしの押し問答を繰り返し、やがて衛兵が諦めたように吐息をついた。

「本当に、気をつけて下さいよ」

「もちろんよ」

「すぐに戻ってきて下さいね」

「わかってるわ。ほんの少しよ」

相手が折れるのを見ると、アンドラーシは素早く爪先立った。二人の衛兵の頬にそれぞれ口付け、耳元で甘く「ありがと」と囁く。

静かにほんの僅かだけ開けられた門に、アンドラーシは素早く滑り出た。その瞬間、解放感に力が抜けそうだった。

だが、まだだ。まだ衛兵の目がある。密やかな逢瀬に出かける元国王の寵姫を演じ続けなければ。

小走りに夜陰に紛れたアンドラーシは、衛兵の目が届かぬところまで来ると全力で疾走を始めた。とにかくハーディンから少しでも遠くまで行かなければ、気が休まらない。

街の外れの方までやってくると、人のいない路地に潜り込み、アンドラーシはようやくそこで肩の力を抜いた。まだばくばくと早鳴る心臓を押さえ、地面に座り込んで深く息をつく。

（脱出、出来た……）

だが、まだ油断してはならない。ここはまだ王都フォグリアなのだ。何とかしてフォグリアを離れ、ロドリスを出なければ真実休まることなど出来ない。

とは言っても、故郷に帰るわけにもいくまい。アンドラーシの実家など、一番最初に押さえられるに決まっている。両親のことを思えば心が痛むが、戻ったところで事態が悪化するだけに違いない。

（――ヴァルス）

アークフィールの言葉が脳裏に蘇った。

その言葉を聞いて思い出したのは、母の実家がヴァルスにあると言うことだ。

元々ヴァルスの下級貴族だった母の実家には行ったことはないが、ヴァルスにまでロドリスの手は及ばない。仮にも身内なのだから、今後の生活をどうするか考えられるまで手を貸してくれるかもしれない。

（ヴァルスに、行こう）

そう決めながら、アンドラーシは身に付けていた衣服を裂いた。

王都とは言え、ハーディンを外れてくれれば治安も悪くなる。華美なドレスを身に纏っていれば人々の注意を引くし、強盗に狙われる恐れもあった。

ダガーで身動きしやすく切り刻むと、次に身に付けていたネックレスやブレスレットを外しにかかる。宝石は全て外し、切り裂いた衣服の布でくるんだ。これで当面の路銀には十分だろう。

そして躊躇いながら、最後に自分の長い髪を切り裂いた。

美しく伸ばしてきた髪が、バラバラと地に落ちる。それを眺めながら、ポタポタと涙が伝わり落ちた。顎の辺りまでの長さになった髪に、言葉にならない悲哀が押し寄せた。

（諦めちゃ、駄目……）

自分に言い聞かせ、唇を噛み締める。

まだ生きているのだ。あんな真似をしてまで牢を脱出したのだから、何としてでもここから逃れて生き延びてみせる。

街を出れば、魔物や賊に出会うかもしれない。戦えない自分なんかが生き延びられる確率はどの程度のものなのかわからないが、それしか術はないのだから、やってみるしかない。

ヴァルスへ行こう。

日が昇ったら身支度を整えて、まずはフォグリアの街門を抜ける策を練らなくては。

第3部第2章第12話　愛憎の行方　後編（3）

◆◇◆

セラフィが執務室で書類を眺めていると、ノックの音が響いた。
これまでの習慣で一瞬身構えて立ち上がりかけたセラフィだが、すぐに肩の力を抜く。
もうあの女に執務室へ入り込まれることを警戒しなくて良くなったのだ。
「空いてるよ」
そう小さく笑い、セラフィはノックに答えた。静かにドアが開かれ、久しぶりに見る顔にそのまま笑顔になる。
「グレン」
「戻りました」
らしくない硬い声に、どうやらリトリアの一件を気にしているのだろうと推測する。笑みをしまい込んでグレンを部屋へ促すと、セラフィは椅子に掛けたままで頬杖をついた。
「リトリアの件だったら、君が気にすることじゃない」
既に動き始めていた内乱をグレンの手で阻止しろなどと、無茶な話だ。もちろんクラスフェルドを守りきれなかったのは失点と言えるが、そもそもが国家規模のお家騒動だ。暗殺レベルとはわけが違う。一度阻止出来たとて、それで済む話でもなかったろう。グレン一人で出来ることには、無論限りがある。
「度重なる失点に、猛省に猛省を深めているところですよ」
「知ってるかい。後悔を引き摺って次に影響させるのは、愚か者のすることだ」
冷たく言い放つセラフィの言葉に、グレンが微かに笑った。
「存じておりますとも。失敗を顧みない人間は、次にその経験を活かすことが出来ないと言うこともね」

グレンの言葉にセラフィが笑う。これなら大丈夫だろう。頬杖をついたままで目元を柔らかく緩めると、セラフィは真っ直ぐグレンを見た。

「リトリアの新王は、どうだった」

「……クラスフェルド先王陛下とは、いろいろな意味で違う方だとお見受け致しました」

「へえ。女王だっけ？」

「ええ。まだお若い……ヴァルスの王女と近しい年の頃でした」

それを聞いて、セラフィは鼻を小さく鳴らした。気に入らない。

「ママゴト気分で国政か。良いご身分だな」

グレンが肩を竦める。

「クラスフェルド先王陛下と違い、どうやら嫌われてしまったようで。対リトリアにおいては、今後は別の人間をあてがう必要があることでしょうね。ソフィア女王陛下は、私のように腹の内が読めない人間はいけすかないようでして」

「人を見る目はあるようだな。それじゃあきっと、僕も駄目だろう」

「ともかくも、ヴァルスサイドに寝返らないよう重々予防線は張ったつもりです。尤も、ソフィア女王陛下も現在は参戦するつもりもなさそうでしたので、どれほど効果があったかはわかりかねますが。事後策として、それが私に出来る精一杯と言うところでした」

「わかった。ご苦労だったね」

ともかくもリトリアがヴァルスにつかなければ、当面はそれで良しとせねばなるまい。今となってはリトリアの政権交代は、ロドリスにとっても救われた面があるのかもしれない。カルランスが斃れ、幼年のウィリアムが即位すれば、リトリアにとっては攻め入る好機と捉えられかねないからだ。帝国継承戦争終結後、すわロドリス攻略だと仕掛けてきかねない御仁であったのは確かである。

尤も、クラスフェルドが逝去しなければリトリアの離脱はなかっただろうし、リトリアが離脱しなければカルランスもあれほど弱腰にならなかったかもしれないから、結果論でしかないのだが。

「個人的に、少々惜しいと思いますよ」
短い沈黙が訪れると、グレンが小さくそう感想を漏らした。目だけで応じるセラフィに、グレンが苦笑を浮かべる。
「クラスフェルド先王陛下を失ったのは、ロドリスとしても、そして私一個人としても……惜しい話です」
「そうかい。珍しいことを言う」
「そうですか？　……そうですね」
ふっと小さく息をついたグレンが何を思ったかまでは、セラフィにはわからない。沈黙したまま少し言葉を待ったが、グレンはそれ以上語るつもりはなさそうだった。
それを確認して、セラフィは改めて口を開いた。
「それはそうと、グレンにも伝えておかなきゃならないことがある」
「何でしょう？」
「君がいない間に、ロドリスは大きな転機を迎えた。……陛下急逝の報は、君の耳には届いていたかい」
グレンが息を呑んで目を見張る。驚きを孕んだ琥珀色の瞳を見つめ返し、セラフィは薄く笑った。
「何と……？」
「我らがロドリスでも世代交代の時期を迎えたと言うことだよ。カルランス陛下は、既に先王陛下となられた。新王はウィリアム殿下だ。近々戴冠式を大々的に執り行うことになるだろう」
「なぜ」
強張った表情は、しかしながら何かを察しているようでもあった。セラフィに関して、グレンは実に察しが良い。それが少々心地良くもある。
「殺害したのはアンドラーシ。裏で糸を引いていたのはアークフィールだ」
「まさか」
「既に二人とも捕捉されている。アークフィールは、ヴァルスの間諜だ」

凍りついた表情のままでソファから立ち上がるグレンに、セラフィはすっと瞳を細めて言葉を続けた。

「筋書きとしてはこうだよ、グレン。……アンドラーシは、国王の寵姫たる身ながら、自国の宮廷魔術師に哀れな幻想を抱いていた。恋情と言う幻想だ。それが周知の事実なら、当の本人もそう知っていた。しかし陛下への忠誠心を貫く為に、アンドラーシに靡く素振りを見せなかった。

そこに目をつけたのがアークフィールだ。ヴァルスの間諜としてクライスラー卿に送り込まれていたアークフィールは、ロドリスの国王を抹殺することを思いついた。戦争の中心はロドリスだからね。だが、自身が手を下してしまえば、以降の諜報活動に妨げになる可能性がある。そこで、アンドラーシを唆した。『あなたの想いを妨げているのは、陛下です。陛下がいなくなれば、あなたの想いは叶うはずだ』とね。

もちろんそうでったとしても、アンドラーシに何が出来るでもない。だが、陛下との些細な言い争いでの瞬間的な怒りで、魔が差したのさ。彼女は怒りに身を任せ、咄嗟に判断力を失って陛下を殺害してしまった。そんなことはすぐに露見し、寄りによって想う宮廷魔術師に問い質されたアンドラーシは、逆上して叫ぶ。『あなたが全部悪いんじゃないの！』。

……わかるかい？　冷たくされてきた腹いせに、彼女は罪を宮廷魔術師に擦り付けようとした。しかし、陛下が殺害されていたのは、アンドラーシ自身の部屋だ。そして宰相と宰相秘書官が、宮廷魔術師の潔白を証明する。アンドラーシは捕縛されるよりない。

そうして彼女は投獄され、アークフィールも自身の罪が露見して捕らえられる。彼らは後日、国王殺しの憎しみを国民から向けられ、処刑されるのさ。これはどういうことかと言うと、我らが陛下がヴァルスに謀殺されたことに他ならない。国民の全て――もちろん戦地の兵士たちや、連合各国の怒りもヴァルスへ向けられる。復讐戦の始まりさ」

「セラフィさん……」
グレンが掠れた声で遮りかける。だがセラフィは耳を貸さず、言葉を続けた。
「これから始まるのはね、グレン。カルランス先王陛下の弔い合戦なのさ」
「まさか、無実のアンドラーシ様とアークフィールを……？」
「言いがかりは止してくれ。アークフィールは、真実ヴァルスの諜報活動を行っていた。本人もそう自供しているよ」
「ですが」
「アンドラーシについては、そう……」
グレンの視線を受けて、セラフィは微かに目線を逸らした。良心の呵責があるわけでは、無論ない。適当な言葉を探しているだけだ。
「不幸だった、としか言いようがないね。……あらゆる意味でさ」
「なぜ、陛下を」
筋書きは筋書きでしかないと言うことは、グレンは読んでいる。そういうストーリーに則って、違う真実が裏で走っていたことを理解している。
「カルランス陛下は、ヴァルスとの戦争に怖気づいておられた」
低いセラフィの言葉で、グレンは全てに合点がいったようだった。微かに顔を歪めて視線を伏せ、額に大きな手のひらを押し付ける。
「なぜ、それほどに戦争の続行に拘っておいでです」
「君が聞くのか？」
「今更とわかっていますよ。わかっていますが、敢えて言います。マーリアさんが望んでいるのは、本当はそんなことじゃない……」
初めて、セラフィが口を噤んだ。
「マーリアさんの幸せは、ヴァルスなんかにありません。わかっておいでのはずです。ヴァルスなんか手に入れたって」
「グレン」
凍てつくような声音で、セラフィが静かに遮った。
「そう、そんなことは本当に今更だ。僕たちが考えるべきはそんな

ことじゃない。いかにヴァルスに勝利するか、そして勝利の暁にはどう迅速に処理をしていくかだ」

「……」

「僕は、ロドリスを勝利に導く為に、戦地へ行く」

「え？」

俯いていたグレンは、その言葉で弾かれるように顔を上げた。

その顔を真っ直ぐ見つめながら、セラフィは柔らかく微笑んでみせた。

「良かったら、君も一緒に来ると良い。神が屈する姿を、君にも見せてあげよう」

「神が屈する姿……？」

小さく口の中で問い返すグレンの言葉にセラフィが答えるより早く、慌しい足音が響いた。重ねて、ドアが忙しくノックされる。

「セラフィ様！」

何事かと顔を上げたセラフィは、視線を向けてノックに応じた。

「いるよ。開いてる」

「失礼致します！」

血相を変えて飛んできたのは、牢を管理する衛兵の隊長だった。

グレンの姿を見て敬礼すると、改まってセラフィに向かい合って早口に告げた。

「お話中、申し訳ありません！　アンドラーシ様……アンドラーシが、逃走致しました」

「……何？」

一瞬何を言われたのかがわからず、セラフィはぽかんとした。それから言葉の意味を理解して、眉を顰める。

「まさか」

「申し訳ありません」

口早に謝罪をすると、隊長は口早に状況を語った。

見張りの交代で衛兵が入っていくと、いるはずの見張りがいなかった。不審に思って牢の方へ足を向けると、どうしたことか見張り

の兵が牢の中で全裸のまま首を掻き切られて死亡していたと言う。
牢の扉は開いていて、アンドラーシの姿はどこにもなかった。
報告を聞き、セラフィはふっと笑った。
（自分の体を餌にして、反撃に出たか）
思いがけず見所がある。以前からそういう芯の強さ、逞しさが感じ取れていれば、もう少し面白かったものを。
「とりあえず行こう。現場を見せてくれるかい。それから街に捜索の手配を。見つけたら殺すな。処刑をする必要がある。だけど……」
立ち上がって、グレンに一緒に来るよう促して歩き出す。
非力な小娘一人、逃したところで大きな損失ではない。
国王殺害の罪はアンドラーシが背負っている以上、公開処刑が出来ないのは惜しいが、国民の怒りの的にはまだアークフィールが残っている。
「抵抗するようだったら、殺してしまっても構わない。……相手は、国王殺害の重罪人だからね」

第3部第2章第13話　それぞれの邂逅（1）

ヴァルス北東の城塞都市レハールの包囲は、三週間続いた。

ラルド要塞及びリミニ要塞を陥落した連合軍の三分の二はレハールの北に布陣し、一週間をかけて巨大な砲台を四台設置、一台の攻城塔を築き上げた。

同時に、街の外郭を囲うように掘られている堀の埋め立て作業がされる。

対するレハールも、それをただ眺めていたわけではない。外郭に樽を吊して砲撃に備えたり、土嚢を積んで守りを厚くしたりと連合軍の攻撃から持たせるべく奔走した。

砲撃を受けて崩れた外郭は、人員総出で補修をかける。だがそれで追いつくでもなく、二週間をかけてレハールの北西の外郭が崩落した。

レハール陥落の始まりを告げる音だった。

一方で、西進した三分の一とロドリスから送られた増援二万が合流する。目指すは西方の大都市カサドールである。

カサドールは山地を隔てて海側にある為、攻撃を予想していなかったヴァルスは、慌ててギャヴァン戦以降留め置かれていたザウクラウド要塞の兵力を送り出した。主力のいない現在、カサドールに攻め入らるのは、何としてでも阻止しなければならない。

二つの要塞が陥落し、ハンネス盆地で逃走に追い込まれたヴァルス軍が迅速に動かせる兵力は目下のところそれしかなく、ヴァルス王城は、堅固であるはずの城塞都市より、カサドールの防衛を優先させた。

それが、レハールの命運を分けたのである。

「くそっ……」

苦々しく呟く宰相に、報告を請け負った使者が低く叩頭した。冷静沈着な態度を崩さないラウバルが珍しく見せる険しい表情に、恐れ入るように、ただただ顔を伏せる。

三週間の包囲を経て、レハールは連合軍の手に落ちた。レハールの諸侯アッカーマンは最後まで果敢に戦い、熾烈な最期を遂げたと言う。

城内に残されたアッカーマンの家族らは連合軍の手に落ちることを厭い、尖塔から次々と投身した。街でも、至るところで最後の抵抗を行った者が自決をしたと言う、何とも後味の悪い戦闘となった。

使者を下がらせて執務室に一人になると、かつてないほどの焦燥を覚える。

果たして、ヴァルスを守りきることが出来るのだろうか。連合軍は着実に駒を進めている。

（せめて……）

険しい表情のまま、ラウバルは握り締めた拳を睨みつけた。

（せめて、戦場に出られれば……！）

召喚師である自分の力は何がしかの役に立つだろうに。

だが、ユリアやシャインカルクを放って自分までもいなくなってしまうわけにはいかない。待つにも忍耐の力が必要であると痛切に感じる。

ともかくも出来ることは、落ち着いて考えることだと自分に言い聞かせた。刻一刻と塗り替えられていく連合軍の色に歯噛みしていても始まらない。

感情を落ち着かせようと深い息をついた時、扉が静かに叩かれた。

「ラウバル」

ユリアだ。

応答に応じて開かれた扉から、ユリアが顔を覗かせた。小さく微笑む彼女に、ラウバルは心配を含んだ眼差しを向ける。

「まだお休みになっては。顔色が悪い」

「もう平気」
自ら大陸最北端まで出向いていた王女は、見事、援軍を勝ち取って無事に帰国した。
だが、戻ってからずっと、些か顔色が良くない。
ユリアに伴われて来国したツェンカーの使者二人によれば、カズキが重傷を負い、キグナスが死亡したとのことだから、そのことが原因だろうと踏んでいる。
ゆえに、心が今一つ落ち着くまで休むように言ってあったのだが……。
「何かしている方が良いの。……今の使者は？」
部屋へ入り込んだユリアは、憂いを帯びた視線をラウバルに向けた。煌めく翡翠色の瞳に凛と見据えられて、彼女が身につけ始めた威風に気圧される。
「良くない報せね？」
「……はい」
守らなければならない王女ではなく、国民を守ろうとする君主への成長を始めている彼女に、誤魔化す気にはなれなかった。ユリアが知らずにいて良い道理は、もうどこにもなかった。
「レハールが陥落しました」
ユリアが目を見張る。沈鬱な色を浮かべた瞳をぎゅっと閉じると、再び目を開くのを待って、ラウバルは陰惨な現実を告げた。
「レハール公アッカーマン並びにその縁者や有力者は自決及び処刑され、ことごとくいなくなりました。連合軍は現在レハールに拠点を置き、近隣の農村や町を荒らして回っている模様です」
「すぐに兵を差し向けて。やめさせなければ。レハールを奪還するのです」
「それは出来ません、ユリア様」
「なぜ？」
切羽詰まった風のユリアを落ち着かせるべく、ラウバルは低く落ち着いた声で説明した。

「兵が足りていません。連合軍は、レハールを攻めるのと同時にカサドールへも兵を差し向けています。カサドールの主軍は現在モナです。それを知ってか知らずかはわかりませんが、現実にカサドールは攻め込まれたらひとたまりもありません。今動かせる兵力をそちらへの応戦に向けなければ、それこそレハールほども持たずして二の舞です」

「ではどうすれば良いのっ？」

「今は、次に狙われるだろうアンソールを固めることが先決です」

「だってそれではレハールに救いがないわ！　放っておくと言うの？」

鬼気迫るユリアに、ラウバルは嘆息した。とにかく落ち着かせなければ会話にならない。

「ユリア様。お気持ちはわかりますが、出来ることには限りがあります。レハールを、好んで放っておくわけではありません。ですが、あれもこれもを片付けようとすれば、どれも結果を出せずに終わります。我々の割ける兵力に限界が……」

その時、慌ただしい足音が聞こえた。

咄嗟に口を噤んでユリアと顔を見合わせたその耳に、今度は街の方から激しい物音が届く。

「何？」

「確認して参り……」

「ラウバル様っ！」

ラウバルが足早に部屋を出るより先に、ドアが激しく打ち付けられた。

「入れ。何があった」

返答と同時にドアを開くと、そこへ立っていた衛兵はひきつった顔で直立した。

「街に魔物が。それも、あちこちに忽然と湧いているかのように出没しておりますっ」

「何？」

「まさか」
レオノーラは、ヴァルスでも最も守りの堅い街である。魔物が外部から侵入することはまず考えられず、内部に湧いて出るなど、もっと考えられない。
そもそも魔物が人里を襲うこと自体、希有なのだ。人間が己を脅かす存在であることを魔物は知っている。捕食の為か、もしくは自己防衛の為に僅かな旅人を襲うことはあっても、集団となっている人間を襲う愚は犯さない。魔物が軍隊を忌避する所以である。
稀に凶暴化したようなのが見境なく襲うようなこともないではないが、僅かな例外だ。
殊に、平地か村か区別がつかないような集落ならばともかく、外壁が張り巡らされ衛兵の警戒する大都市となると、ありえないとさえ言える。
「兵を派遣しろ。スペンサーやブレアに指揮させてくれ。私もすぐに追いかける」
衛兵が血相を変えたまま出て行くと、ラウバルはユリアを振り返った。
「城にいて下さい。恐らく怪我人も出ることでしょう。状況を確認して参りますが、ガウナ殿に手を貸して頂いて、怪我人の処置をしなければなりますまい。ユリア様。お任せしても宜しいですか」
「もちろん」
ユリアがヴァルスの為に何かしたいと必死であることをラウバルは知っている。何もさせぬより何かを頼んだ方が彼女の気が休まると知っての采配だった。城にいればユリアの身は安全だろうし、ガウナがついていれば上手く手配してくれる。
頷くユリアを見届けて、ラウバルは執務室を飛び出した。一つの予感があった。
通常考えられない、街中での魔物の出没――まさか。
旧友の顔を胸に抱いて通路を走りながら、ラウバルは召喚の能力を発動させた。

「イェルマイン、魔物を減らせ。ラザファム、奴がいないか見て来い」

走るラウバルに追従するように現れた微かな銀光が、指示を受けてそれぞれ散る。ラウバルの召喚獣の中でも最も利便性が高い二匹だった。

イェルマインと呼ばれた方は、マンティコアと言う魔物である。ライオンの体に鋭い牙と爪を持つ人面の凶暴な食人獣であり、知能は余り高くはないが、翼も持つ為にその攻撃性はひどく高い。

ラザファムの方は、レオパルドと言う豹を模した魔物である。豹より一回り大きく、吐息と鋭く尖った尾針に含まれる毒素は強力なものだ。

召喚獣と契約を交わす時、召喚師は魔物の名前を手に入れる。魂に刻まれた真名と呼ばれる名前である。その真名を支配下に置くことで魔物は召喚師の使役獣として、召喚師が死を迎えるまで束縛される。

但しその代償として召喚師は召喚の際に自身の生命力を魔物に与える為に、通常はそれほど長い期間の使役を強いられることはない。召喚師の寿命そのものが短いのだ。ラウバルのような例はそうあるはずもなく、そういう意味では不幸な使役獣と言えた。

召喚師は、魔法陣を使用することによって契約している使役獣でなくとも召喚することが可能だが、ラウバルはそれをまずしない。自身の使役獣を使うのみである。

危険と失敗を伴うと言うことも理由の一つではあるが、最大の理由は、魔法陣による召喚は穢れを呼ぶのである。

使役獣は、召喚師の気を取り込んで自身の一部となる。だがそうでない魔物は、呼び出されたただの魔物に過ぎない。魔物としての穢れを身に纏ったままの召喚獣となり、その穢れが召喚師にも伝播する。繰り返せば、召喚師自身が邪悪な穢れを身に纏うことになる。バルザックが神殿に近づけなくなった理由である。

そのバルザックが、レオノーラに魔物を呼び込んでいるのではな

いか。
ラウバルは、そう危惧していた。
『おりました』
間もなく、ラザファムの気配が戻った。使役獣となった魔物は、その支配下にある間にのみ限り、召喚師と意志の疎通が可能となる。召喚師の能力に応じて、不可視化も可能である。
『郊外の草地に』
やはりバルザックが現れた。
険しい顔でシャインカルクを飛び出すと、ラウバルは目を見開いて思わず足を止めた。濃い血の臭いが空気中を漂い、怒号と悲鳴が街のあちこちから流れて来る。
魔物はどうやら小物ばかりのようだ。だが、ホブゴブリンやオーガーを複数で送り込まれれば、一般の街人には逃げ惑う以外に術がない。
あちこちから上がる咆哮に、かなりの個体数を送り込まれたと理解する。
「怪我人は神殿へ向うよう指示しろ」
襲い掛かってきたホブゴブリンをバスタード・ソードで片付けながら手近な衛兵にそう怒鳴ると、ラウバルは郊外へ向かって駆けた。ラザファムの気配が不可視化のまま、ラウバルを先導する。
大通りを駆け抜ける途中でスペンサーが率いる部隊と遭遇したラウバルは、一時的に足を止めた。
「スペンサー！」
「ラウバル殿。どこへ行かれる」
「元凶を取り除きに行くところだ。死傷者は」
「多いな。わけがわかっていないうちにやられたのが大多数だ。魔物の出現が広まってからは、皆、建物に籠もるように言ってある。それで大分被害は減少しただろうが」
「わかった。王城と神殿でガウナ殿が救護の指揮を取っている。怪我人は運んでくれ」

早口でそれだけの言葉を交わすと、ラザファムの気配を追って、ラウバルは再び通りを駆け出した。

出来るだけバルザックの元へ急ぐことを優先するつもりだったが、路地から絶望的な悲鳴が聞こえてくれば素通りするわけにはいかなかった。舌打ちを飲み込んで方向転換する。

ラウバルが見たのは、白い糸にからめ取られた蚕のような男の姿だった。路地の奥には、その仕掛け人がでかい図体を蠢かせていた。化け物蜘蛛だ。全長ニエレは魔物としては小物だろうが、蜘蛛としては巨大であることに違いない。

「た、助けて……」

恐怖が声を押し潰しているようだ。儚い男の声に、ラウバルは頷いてみせた。食事を妨害されそうな気配を感じた蜘蛛が、目を赤く光らせる。

「待っていろ」

片手に握った抜き身のバスタード・ソードを構えるラウバルに、蜘蛛が威嚇の音を上げながら迫った。吐き出される糸を横に避け、振りかぶる脚を二本同時に薙払う。そのラウバルの横を、疾風のような気配が通り過ぎた。ラザファムだ。

地を跳躍する瞬間、ラザファムの伸びやかな肢体が現れる。攻撃に入る時は不可視を維持出来ない。

獣の本性を露わにしたレオパルドの獰猛な咆哮が響き渡り、迎え撃つ化け物蜘蛛も一層大きな威嚇音を上げた。始末をラザファムに任せることに決め、ラウバルは男を捕らえる糸に剣を振り下ろす。粘液質な糸が剣に絡み付き、しかしながら何とか裁つことに成功した。

「立てるか」

ラウバルの問いに、男は目を見開いたまま動こうとしない。仕方なく腕を引っ張り上げ、男の体にまとわりつく糸を払ってやる。

「ま、魔物が……」

浮かされたような言葉に頷き返してやる。

「わかっている。街には軍が出ているから、保護を求めろ。怪我は神殿で治してくれる。歩けるな？」

その時、一際高い咆哮が間近で上がった。同時にラザファムの気配が側へ舞い戻る。化け物蜘蛛の排除が完了したらしい。振り返って確認をする必要は感じなかった。

「行け」

促すように男の肩軽く叩いてやると、まだ全身に糸を絡ませたまま、男はふらふらと歩き出した。その後を追うように路地を出ながら、ラザファムを労う。

「ご苦労だった。……行くぞ」

大通りには、まだ逃げ惑う人々の姿があった。装備を固めた兵士たちが手近な建物へ篭るよう呼びかけるが、さほど容量があるわけでもないから、入りきれなかった人間は次の逃げ場を求めて右往左往している。そこへ魔物が横合いから襲い掛かり、衛兵らとの戦闘になるのだ。

混乱した街を駆け抜けるのは容易いことではなく、時折戦闘に巻き込まれながら目的地に達した時には、城を出てから三十分が経過していた。

人々の住居が疎らになり、街外の農地へ出る人々の農作業用具置き場が密集している地域である。

「バル……フレディ」

閑地に黒衣の魔術師の姿を見つけ、ラウバルは剣を握り締めたまま低く呼びかけた。

バルザックの顔が、こちらへ向けて僅かに動く。

「そう呼ばれるのは久々のことだな」

ファーストネームで呼んだ旧友に、バルザックは掠れた笑い声を立てた。そのすぐ前の地面に描かれた魔法陣から、黒煙のような瘴気が噴き出す。それが霧散したと思った時には、そこにはゼリー状の魔物が姿を現していた。禍々しく黒光りする体をうねらせては小汚い音を立てる。

「何の為にこんなことを……！」
「前祝だよ、ラウバル」
「前祝？」
「こいつで最後だ。わしの贈り物をレオノーラの人々が気に入ってくれれば良いのだが」
「ふざけたことをっ……！」
不可視を解いて姿を現したラザフィムが唸り声を上げる。だがバルザックは意に介した様子もなく、ラウバルの方へ顔を傾けた。
「そろそろおしまいにしようじゃないか」
無言でバルザックを見据えるラウバルの視線を受け止めて、黒いフードの口元が微かに笑みの形に歪んだ。
「わしは、最強の力を手に入れ、果てしない命を手に入れる。それをもって、貴様との因縁もしまいだ」
「都合の良いことを。そう上手くことが運ぶと思うか」
「ロドリスを相手に、随分と苦戦をしているようだな」
咄嗟に言葉を返せず、ラウバルは詰まった。ヴァルスがロドリス軍勢に押されているのは事実だ。
「ロドリスの魔術師が期待通りの成果を上げてくれれば、ロンバルトの第二王子の首くらいはプレゼントせねばならんな。……そうそう」
そこまで言うと、バルザックは何かを思い出したように口調を変えた。そして、ゆっくりと言い含めるように告げた。
「レガードの影武者がいたな」
「……」
「奴は、死んだぞ」
「なっ……？」
その言葉の意味を一瞬図りかねる。目を見開いたラウバルに、バルザックは喉の奥からさも嬉しそうな笑い声を響かせた。
「奴は死んだ。わしが、ロドリスの街で殺したのだ」
「戯言をっ！」

「次は祝いの宴で会おう、ラウバル。わしが最強の力を手に入れる、その宴の時にな」
「待てっ……！」
叫んだ時には、バルザックの姿は掻き消えてどこにもなかった。後に残された魔物が、召喚の束縛を解かれて大きくのた打つ。ラザフィムが喉を鳴らして飛び掛った。
「フレディ！」
空に向かって叫ぶが、返る言葉はない。
苦虫を噛み潰した顔で、ラウバルはバルザックの言葉を反芻した。
死んだ？　カズキが？　バルザックの手にかかって？
（まさか）
だが、もしも事実だとしたら――。
（……まさか）
悲嘆にくれるだろうユリアの胸中を思い、ラウバルは唇をきつく噛み締めた。

◆◇◆

（何かあったのかな）
ロドリス王国フォグリアの街門前に佇んで、シェインは辺りに視線を向けた。騒々しい。
「こりゃあいつもより厳重だなあ。何かあったんかねえ」
シェインが引く荷車を支えていた男が、街門の方へ視線を向けながら頭を掻いた。
エディがナタリアへ向けて出陣した後、シェインは今度こそ本当にヴァルスへ戻る為の旅路についた。カールは海路をカサドールへ向かうことを主張したが、断固として跳ね除けての一人の旅路である。
何としても、ロンバルトの状況を己の目で確かめておきたかった。ロドリスに寄ったのは、ほんのついでだ。

寄りによって王都フォグリアへ足を向けるとは、ラウバルやユリア辺りが知ったら卒倒しそうなほど挑発的であるが、そもそもシェインの顔を見知っている人間がさほどいるわけでもない。ロドリスの宮廷魔術師と遭遇でもすれば話は別だが、そうでなければ顔を見てわかる者もそうはいまい。瞳の色は如何ともしがたいが、髪の色は再び枯れ草色に染めてある。

第3部第2章第13話　それぞれの邂逅（2）

街門前で問い質される恐れはあったが、シェインはそれを近隣の農民に取り入ることで解決することにした。街の外へ日々出入りする農民の手伝いをし、その荷運びを申し出ることで衛兵の目を誤魔化すつもりだった。

だが、街門に近付くにつれ、衛兵の数が思いの外多いことに気がつく。

「戦時中だからと言うわけでもなさそうだな」

半ば独り言のように呟くと、農民の男が律儀に答えた。

「朝出る時はそんなこともなかったからなあ。罪人でも逃げたかな？」

その言葉に成る程と思う。こうして見ていると、入る人間より出て行く人間への取調べが強化されているようだった。入る時は良いが、出て行く時にが苦労をするかもしれない。

そう考えながら、帰宅する農民たちに混じって街門を抜ける。案の定、入り込むにはさほどの手間はかからなかった。逆に、出て行こうとしている人間の多くが足止めされ、厳しい取調べを受けているようだ。

（まあ、大して関係があるでもないか）

そう結論付けて農民らの片づけを最後まで手伝うと、シェインは何食わぬ顔をして市内に足を向けた。

芳しい花の香りが鼻につき、もう花の月も終わろうとしていることを思い出す。

息吹の月が終わる前にはレオノーラに戻れていれば良いのだが。

やはり街の中には衛兵の数が多いように思う。ぎょっとするほどではないが、首を傾げる程度に。いつも衛兵が一人立っているところに二人いる――そんなふうに思わせる程度の違和感。血眼になっているとは言わないが、何かを気にして気休め程度の増員をしてい

るという印象を受けた。
そして、それと同時に慌ただしさを感じる。具体的に何がどうと言うわけではないが、空気が浮き足立っているように思えた。
何があったのだろう。
考えてシェインは、フォグリアに入って最初に目に付いた道具屋へ入った。
「いらっしゃい」
丸顔の背の低い男が、人の良さそうな笑顔で迎える。
「携帯食が欲しいんだが」
「あるよ。今なら十個入りのセットもある。お買い得だ」
「じゃあそれでいい」
代金を支払って、男が品物を包むのを眺めながら、何気ない口調で尋ねる。
「何かあったのか？」
「何か？」
「騒々しい気がするのだが」
シェインの問いに、男が顔をしかめた。
「知らないのかい？　公開処刑があったのさ」
「公開処刑？」
「ああ。私はあんまりそう言うのは好かんのでね、詳しくは知らないが。物見高い連中は集まってたみたいだよ。午前中に処刑が終わって、午後からは晒し首にされるんだろうさ」
「場所は？」
品物を受け取りながら尋ねると、男は咎めるような目つきを見せた。
「広場だよ。街の中心にある広場だ。行くのかい」
「どうするかな。俺も物見高い方でね」
公開処刑ならば、犯したのは大罪だ。叛逆や要人の殺害あるいはその未遂、他国への情報漏洩などが該当する。何の罪を犯したのか調べて損はなさそうだった。

店を出て、男に聞いた広場の方へと足を向ける。途中、少し回り道をしてハーディン周辺へと向かった。

もちろん王城の周辺とあらばシェインを見知っている者に遭遇する可能性が上がる。慎重にしなければならないとわかっているが、見てはおきたい。

城の周囲に張り巡らされている城壁に沿って歩いていると、どうやら通用門らしきものにぶつかった。何気なく足を止める。ちょうど小部隊が出て行こうとしているところだった。

公開処刑が済んで、その後始末だろうか。それにしては少し物々しい印象を受けるのだが……。

訝しく思い佇むシェインの前で、女が通用門から出てきた。成りから察するにメイドのようだ。部隊の指揮官らしき人物に何か話しかけ、二言、三言、言葉を交わすと、見送るように深く頭を下げる。何か伝言でもあったのだろう。

しばしそちらの方を眺めていると、顔を上げたメイドがこちらに気がついた。目が合ったのをきっかけに、シェインはそちらへ歩き出した。

「ちょっと尋ねても良いか？」

女がシェインの方へ向き直る。目鼻立ちのはっきりした女だった。メイドではなく娼婦と言った雰囲気の女だ。

「何？」

「やたらと衛兵が多い気がするが、何かあったのか教えてもらえると嬉しい」

やや胡散臭そうな目つきでシェインを見ていた女は、軽く肩を竦めた。

「大したことじゃないわ。罪人が逃げたのよ」

「罪人が逃げた？　公開処刑があったんじゃないのか？」

あっさり口を割るところをみると、緘口令が敷かれているわけではなさそうだ。わざわざ市民に触れまわるわけではないだろうが、口止めするほどでもないと言うことだろう。

「公開処刑はあったわよ。それとは別口」
「別口？」
「と言うわけでもないかしらね。共犯だって聞いてるから」
「……何の罪を犯したんだ？」
女は、そこでやや声を潜めた。
「国王殺害」
「なっ……？」
一瞬意味を図りかねて、シェインは女を見返した。彼女もシェインを見返して、それから朱の唇に笑みを象る。
「あんた、結構いい男ね」
らしからぬ蓮っ葉な物言いに、シェインは違和感を覚えた。娼婦出身のメイドだろうか。高位官の誰かが入れ込んで、自分仕えのメイドに引っ張り込んだのだろう。呆れた話だが、ない話ではない。
「それは光栄」
「髪の色がもっと鮮やかだったら、もっと好みなのに」
「残念だな」
と言って、元の鮮やかな赤髪に戻すわけにはいかない。だが、彼女の好みだとは幸いだ。好みの男に娼婦は口が軽くなる。
彼女の言葉につきあって見せてから、シェインは話を戻した。
「君は結構重要なことをあっさりと口にしたが、問題はないのか」
「ないわよ。今朝公開されたことだから。あんた、知らないの？」
「ちょっと田畑を手伝ってたもんでね。知らなかった」
公開処刑をする際に、その罪状を公表したのだろう。国王殺害――ロドリスも世代交代か、と苦い想いで胸中に呟く。敵国と一概に喜ぶ気にもなれなかった。人間の悪意は聞いていて決して気持ちが良いものではない。
ともかくも、国王カルランス七世が殺害され、公開処刑されたのは犯人の一人もしくは一部となる。そして一方でその仲間が逃げたと言うことのようだ。衛兵の数が多いことに、ようやく合点がいった。

「何にしても、あなたが脱獄者に間違われたりするようなことはないから、安心すると良いわ」
深刻な顔で黙るシェインをどう受け止めたのか、女があっけらかんと笑う。
「なぜ言い切れる？」
「女だからよ」
「女？　逃げたのが？」
「そう」
頷いてからやや神妙な表情を浮かべてみせると、彼女はため息混じりに言葉を続けた。
「結構気に入ってたのに。わたし」
「犯人をか？」
「やったと信じてるわけじゃないわ。何かの間違いよ」
「誰なんだ？」
寵姫アンドラーシ様、と女は目線を伏せた。
記憶のどこかで聞いた気もするが、はっきりとは思い出せない。
シェインには特にコメントのしようがなかった。事実関係だけ聞いている分には、ないでもないとしか言えない。護りの堅い国王に近付いて暗殺するのは、寵姫には容易いことだからだ。自害するつもりもあるのであれば、陰部に毒を仕込んで交わることだって出来るのである。そういった例も、多くはないがないでもないし、男が美女に弱いのはいつの時代も同じことだった。
「ねえ。わたし、今日早番なの。夕刻には仕事を上がれるわ。食事でも行かない？　ゆっくり話してみたいわ」
「いいね。俺も夜は暇なんだ。ゆっくり話が聞きたいな。ところで公開処刑されたのは……」
彼女とシェインの目的はどうやらすれ違っているような気がするが、それはこの際目を瞑る。話を聞けて、ついでに温もりを分かち合えるのであれば、こちらとしても特に文句はない。美人のお誘いを断るのも気が引ける。

だが取り急ぎ尚も話を引き出そうと言葉を続けかけ、ふと口を噤んだ。女が目を瞬いてシェインを見上げる。それを感じてはいるものの、シェインの目線は彼女の背後に定められたままだった。

通用門の向こうにある通路を歩いている男――見覚えがある。

「あれは……」

「え？」

女がシェインの言葉に振り返った。「ああ」と面倒臭そうに頷く。

「知り合い？」

「いや、そういうわけじゃない。一介の庶民に過ぎない俺が、王城に知り合いなんかいるはずもないだろう？　見たことがあると思っただけさ」

「ああ、そうかもね。しょっちゅう街を出たり入ったりしてるから。グレンフォードって言ったかしら。近衛警備隊よ。でも名ばかりで、実際はセラフィ様の腰巾着ね」

「グレンフォード……」

その名は聞いたことがあった。

（『殺戮の天使』か……！）

今更ながらそのことに気づき、背筋がぞっとした。

グレンとはクリスファニアの離宮で遭遇している。内部に招じ入れてくれたのが彼だった。リトリア国王はロドリスの客将を気に入っているようだと聞いてはいたが、それが彼だったと言うことか。

つくづく、あの時、己の正体がバレずに済んで良かったと思う。もしバレていたら、あのどさくさに紛れて消されかねない。そして魔術師は、名立たる剣の使い手には勝ち目はなかった。呪文を紡ぐ時間を与えてくれないからだ。

愕然と見つめる視線に、グレンの方も気がついたようだ。ふと顔を上げ、そして僅かに目を見開いた。琥珀色の瞳がこちらを捉えるのに気づき、さっさと消えるべきだったと思った。だが、今更走って逃げるわけにもいかない。

「おや」

グレンが軽い口調で呟く。長い足を交互に突き出してこちらに近付いてくるのを見て、メイドの女が首を傾げた。
「やだ。やっぱり知り合いなんじゃないの」
「そういうわけじゃない。言ったろ。見たことがある。向こうもたまま覚えがあったんだろう」
視線をグレンに定めたまま、小さくそう答える。その間にもグレンは、すぐそばまで近付いてきていた。
「どこかでお会いしたような気がしますねえ」
「俺もそう思ったところさ」
「こんなところでナンパですか？」
「綺麗な女性には声をかけろと、爺さんの遺言でな」
今も生きている祖父が聞いたら怒り狂うに違いない。
その軽口を拾う愚は冒さず、グレンはシェインを穏やかな表情で眺めた。だが、その瞳に笑いはない。
「お会いしたのはリトリアですね」
「互いの記憶が確かならな」
「このようなところでお会いするとは奇遇極まりないですが、どのようなご用で？」
「言ったろ。ナンパだと」
シェインの素性に気づいているとは考えられない。グレンには、シェインの情報が少なすぎるはずだ。内乱が終結してからもシェインはしばしリトリアに留まっていたが、ソフィアやその周辺の人間が漏らすとも考えにくかった。
しかし警戒はしておくに越したことはない。
「リトリアから遥々ロドリスまで？」
面倒な空気を察知したらしいメイドの女が、微かに後退する。それを脇に見ながら、シェインは肩を竦めて見せた。
「あの時言わなかったかな。俺は単に雇われていた傭兵に過ぎない。内乱の片がついて、リトリアは戦線も離脱した。これ以上いたって仕事はないだろう。ゆえにリトリアを離れて、南下してきた。それ

だけのことさ」
「ほう……」
グレンが微かに目を細める。怪しんではいるだろうが、それ以上でも以下でもあるまい。いずれにしても、この場を離れたらさっさとフォグリアを出た方が良さそうだ。今夜は野宿になりそうだが、致し方ない。のうのうと宿屋に宿泊する気にはなれなかった。
「デートの約束にも水を差されたみたいだな。引き下がるとしよう」
女が訝しげにシェインとグレンを見比べるのをちらっと見てそう笑うと、数歩後退する。
その時、グレンが微かに顔をしかめた。
「どうした？」
痛みを堪えるような様子が気にかかり、シェインも眉根を寄せる。
「いえ。ちょっと古傷が疼いただけですよ。お気になさらず」
さらっと答えると、グレンは柔らかく微笑んだ。
「お気をつけて」
「そりゃどうも」
「……そうそう。知っておられますか？」
何かを思い出したような口ぶりに、踵を返しかけたシェインは動きと停止させた。振り返った姿勢のままでグレンの顔を見つめる。
グレンも真っ直ぐシェインの顔を見据えていた。
「本日、公開処刑があったんですよ」
「ああ。先ほど聞いた」
「彼の罪を聞きましたか？」
「……国王殺害、と」
何が言いたいのかわからず、シェインは事実のみを簡潔に述べた。
グレンが応えて頷く。
「そう。我らがロドリス王国の国王が殺害されました。遺憾すべきことです」
「そうだな」
「増してそれが、ヴァルスの差し金だったなどとわかった日には、

憤懣やる方ないと言うものでしょう？」

「ヴァルスの差し金？」

意味を掴みかねて、シェインは言うべき言葉を見失った。黙ってグレンの顔を見つめる。

琥珀色の瞳が、すっと細められた。

「ヴァルスの間諜だった男です」

一瞬、シェインの思考が停止する。グレンの言葉が形にならない短い瞬間を経て、シェインは臓腑を抉り出されるような深い衝撃を味わった。

今、何と言った？

「ヴァルスの間諜だった男……？」

不審に思われるとわかっていながら、手が小刻みに震えるのが止められなかった。完全な白紙となった頭で、見開いた目をただグレンに向ける。

「ええ。そうです」

（カイザー！）

その名が胸に浮かび、心臓がどくんと一際大きな音を立てた。グレンがシェインの顔色を読んで薄い笑いを刻む。

「おや？　顔色がお悪いようです。まるでそういうお知り合いでもおられるかのようですね」

構う気になれなかった。直感で感じる。グレンはシェインが何者であるか察しているのだ。

挑発は、裏付けを取る為だろうか。感情を曝すことは素性を露呈することであると理解しながら、シェインは己を押さえきれなかった。グレンはシェインに手を下すだろうか。否、と言う気がする。これは恐らく警告だ。これ以上ハーディンの周囲をうろつくなという。

グレンに答えず、シェインは踵を返した。先ほど聞いた広場へ向けて走る。道は次第に人で混み合っていき、何かの祭りかと錯覚するほどだった。いや、事実彼らにとっては祭りなのだ。

国王殺害？　そんな馬鹿な。シェインはそんな指示は下していないし、そんな先走ったことをするほどカイザーは愚かではない。では何だ？　答えは限られる。間諜であることがバレて、国王殺害の濡れ衣を着せられたのではないか？

何の為に。真犯人が自らの罪を隠匿する為か。ヴァルスへの敵愾心を煽る為か。いずれにしても、シェインは確信していた。カイザーは断じてそのような罪は犯していない！

唇をきつく噛みしめて、広場へ駆け込む。聞くに耐えぬ罵声が飛び交う人だかりの方へ向かうと、ちょうど兵士が曝し台を設置し終えたところだった。兵士に害の及ばないようまだ抑えられてはいるが、彼らが下がった途端に人々は投石を始めるだろう。裏切り者との罵声と共に。

そうだ、裏切り者だ。裏切られた者たちは、報復をする権利がある。いや、権利の有無ではなく、行う。

わかりきっていたことだ。

人々をかき分けて無理矢理最前にたどり着くと、曝された無惨な首に脳内が空白となった。

面相は暴行で変わり果て、識別するのは難しい。ましてシェインが最後にカイザーに会ったのは、十六年も前になる。

だが、その髪に見覚えを感じた。

血で汚れているが、さらさらだっただろう金緑の髪を見た瞬間、衝動的な吐き気と眩暈がこみ上げた。

「おい。後から来て割り込むな」

「首を見て具合が悪くなるようなら、後ろで見物してな、ご令嬢」

蒼白のシェインの顔色を見て、周囲の粗暴な声が野次る。小突かれるように弾き出されたシェインは、我知らず、頬を熱い滴が伝い落ちるのに気がついた。

わかっている。国王を殺された聴衆は――事実はさておき――怒りをそこへ向けるしかない。

だが、許すことが出来ない。カイザーに投石など、断じて許容出

来なかった。
「うわっ……何だっ？」
曝し台と人だかりから弾き出されたまま、背を向けて呆然と立ち尽くすシェインの背後からどよめきが上がる。
「火事だっ……逃げろ、危ないぞ！」
「火を消せ！」
押し寄せる熱を孕んだ空気に背を向けたまま、頼りない足取りで歩き出す。
何の作用によってか突然曝し台に噴き上がった火柱に人々は恐慌を来した。投石など行えるはずもなく、ただ、罪人の首が炎に浄化されていくのを見守るしかない。
自らが無意識に『炎の柱』を発動させたことに遅ればせながら気づき、シェインは一度足を止めて振り返った。
烈しく噴き上げる炎の中にカイザーを見つけることは、もう出来なかった。

第3部第2章第13話　それぞれの邂逅（3）

◆◇◆

ゴトゴトと揺れていた荷台が止まった時、アンドラーシはそっと藁の山から顔を覗かせた。

荷主はこちらへ来る気配がない。そう判断して、潜り込んでいた藁の山から這い出る。細かな屑が全身に入り込んでちくちくするが、文句を言えた立場ではなかった。

「うわ。何だお前っ」

鼻の頭に皺を寄せながら荷台を出ると、すぐ間近にいたらしい男がぎょっとした声を上げた。多分荷主なのだろう。明け方に勝手に、積んであった藁の山に潜り込んでしまったので知らないが。

「ここ、どこ？」

あどけない顔をして、小首を傾げてみせる。農民の男は、人の良さそうな顔に困惑を浮かべた。

「どこって……俺の田圃だよ。フォグリアからすぐの農地だ。あんた、俺の藁ん中になんて潜って、何してたんだ？　道理で思ったより重かったわけだよ」

「失礼ね。そんなに重くないはずよ」

「そういう話じゃない。藁しか積んでないはずが人間も一緒に積んでいたら重いに決まってるだろう」

可愛らしく拗ねて見せると、男は呆れたように髪をかきあげた。

「何でそんなところから出て来る」

「寒かったから、寝かせてもらっていたの。わたし、家がないんだもの。目が覚めてこんなところまで連れて来られたって知って、びっくりよ」

「あんたを連れて来たわけじゃない」

何もわからないふりをしてみせながら、アンドラーシは遠目にフ

ォグリアの街門の方角をちらりと盗み見た。ちょうど衛兵たちが増えてくるところで、間一髪だったと背筋が冷える。脱獄がバレたのだろう。これから街を出る人間は厳しく取り締まられるようになるのだろうか。もう僅か遅かったら、牢獄に逆戻りだったかもしれない。

「ま、いーわ。わたし、あんまり街の外って来たことがないから、ついでに散策して帰ろうっと」

「おい、あんた」

何気ない顔をして男に背を向けかけたアンドラーシだが、呼び止められて胃が縮む思いがした。一瞬で脳裏に「あんた怪しいな」「本当は街門を抜け出す為に俺を利用したんじゃないのか」と言ったセリフが浮かび上がる。

だが、振り返ったアンドラーシに、男は心配げな眼差しを向けているだけだった。

「街の外なんて散策するもんじゃない。危ないだろう？　魔物に遭ったらどうするんだ。世間知らずだな」

「世間知らずじゃないわ。だって、親もいなくて一人で生きてるのよ」

長かった髪をばっさりと切り落とし、身動きしやすい少年のような衣服を身に付けているアンドラーシは、今までより幾分幼く見えるようになったはずだ。無邪気な少女を装って胸を張って見せると、男がひらひらと呆れたように手を振った。

「わかったわかった。悪いことは言わないから、この辺の農地からはあんまり離れないようにすることだな。それからさっさと街へ戻ること」

「はいはい。それじゃね。お邪魔様」

にっこりと微笑んで見せると、アンドラーシは軽い足取りで歩き出した。内心はまだびくびくしていたが、散策に出かける呑気な少女を演じきらなければならない。

適当に小道に入り、自分の姿が林の影に入ったことを確認する。

それから、脱兎の如く走り出した。

ともかくもフォグリアから離れることだ。街の捜索が終わってアンドラーシが見つからないとなれば、街の外にまで捜索の手が及ぶかもしれない。その前に安全圏まで逃げ出しておかなければ。

（アークフィールは、どうしたかしら）

ヴァルスは南だ。

太陽で自分の行くべき方向を判断すると、後はひたすら走り続ける。走り続けながら、ふと宰相秘書官の姿が脳裏に過ぎった。

彼は確実に処刑されてしまうだろう。セラフィにはそれを実行する権利があるのだから、阻止される理由はなかった。ならば、早く楽にしてやって欲しいようにも思う。それともこれは、脱出出来た自分の優越感に過ぎないのだろうか。難しいことはわからないが、アークフィールが早く楽になることを純粋に祈る気持ちは本心だ。

フォグリアからひたすら南下をすると、やがて深く切り立った険しい崖に遭遇する。ロンバルトとの国境だ、とアンドラーシはほっと息をついた。

日もすっかり暮れ始めている。アンドラーシもこれ以上移動は出来ないと考え始めた頃合だったので、丁度良かった。

夜間の移動は、魔物との遭遇率が上がる。加えて、農民と一緒に早朝フォグリアを発ち、今の今まで移動し通しとくれば、身も心もくたくただった。

フォグリアからの追っ手は、特に見ていない。アンドラーシをそれほど熱心に追跡してはいないのかもしれない。

足を止めて、崖の淵に立ってみる。それから周囲を見渡し、アンドラーシは強い不安感に駆られた。

自分は、来るべき方向を間違えただろうか。ここが国境であるはずだが、どう考えてもロドリスから出ることは出来そうにない。吸い込まれそうな深い谷底からは、荒々しい水音が駆け上がってくる。飛び降りたって死ぬだけである。

周囲には橋らしきものもなく、アンドラーシのいる荒れ果てた岩

地から少し離れた場所には林が見えた。日が落ちて黒々とした闇と一体化している林は、アンドラーシの背筋を恐怖に震わせた。

魔物がいるのでは。

ごくんと息を呑み、アンドラーシは注意深く自分の周囲に注意を払った。見渡す限りは何の姿も見えず、気配も特に感じない。

（帰りたい……）

見晴らしの良い岩地で眠るのは心許ない。だが、林は恐ろしくて近付く気になれない。

風が運ぶ水音だけを聞きながら、アンドラーシは来た道を僅かに戻った。途中で、アンドラーシが寄りかかるくらいは出来そうな岩があった。そこの陰ならば、何となく気も休まるだろう。そう判断して歩き出す。

何事もなく岩まで辿りつくと、アンドラーシはその陰に腰を下ろした。この辺りにいるのは自分だけなのだと考えると、途方もない恐怖と孤独感が押し寄せた。

しばし瞳を閉じてぼんやりとする。未だ現実が信じきれない。今自分がフォグリアを離れたこんな場所で野宿をしようとしていることが、現実とは思えなかった。

それから、ゆっくりと自分の腰に括りつけた布を解く。その中には、朝が来る前に道具屋にを叩き起こして買い付けた品々が入っていた。

旅などしたことがないアンドラーシは、何が必要なのか良くわからない。とりあえず食糧が必要だということはわかったから、携帯食をいくつか購入した。ヴァルスへの道を確かめる為の地図、炎の種も入手している。それから薬。だが、実際の有用性は低いだろうと思っている。魔物に襲われたら、恐らくはこれで治せるような怪我では済むまい。

そして一つ、面白いものを手に入れていた。魔忌香呂と言う小さな筒だ。発炎筒のような雰囲気だが、発するのは煙ではなく香りなのだと道具屋に聞いた。炎の種を筒の口に放り込んで引火させると、

魔物が嫌う香りを発するのだそうだ。戦えないアンドラーシにとっては、心の拠り所と言っても過言ではないほどの心強さだった。

問題は、全ての魔物に効くわけではなく獣型の魔物に限るのだそうだが、それでも危険回避の可能性は随分と跳ね上がる。多大な期待を寄せずにいられない。

かなり高価だった為、アンドラーシは五本しか購入出来なかった。全財産をはたけばもっと購入出来はしたが、今後どれほど路銀が必要となるかはわからない。天秤にかけて勘定しての結論である。

自分の所持品を確認すると、携帯食をかじって、アンドラーシは早々に瞳を閉じた。眠っておかなければ体力が持たない。だが、こうして目を閉じている間に魔物が忍び寄っているのではないかと思うと、目を開けて確かめずにいられない。

気休めにダガーを両手で握り締めて眠ることにする。だが、意識が冴えてどうしようもなく、対する体は泥のように重かった。

（こんなことで、生き延びられるかしら……）

不安をあげればきりがない。食糧は足りるだろうか、魔物に襲われないだろうか、道はヴァルスへ続いているだろうか、体力が持つだろうか。

（考えても仕方ないでしょ）

ともすれば飲み込まれそうなほどの恐怖と戦いながら、朝日を迎える。

無事に夜が終わったことを感じて安堵したものの、一睡も出来なかった頭も体も重かった。

けれど、移動しなければ。

体を引き摺るように歩き出す。

魔物に遭遇する可能性の低い昼間に、出来るだけ移動距離を稼いでおかなければ、永遠にロドリスから出ることが出来ない。

どこか対岸に渡れる場所を探して崖沿いにずっと東へと向かった

アンドラーシは、やがて左手の遠くに街らしき集落が見え始めたことに気がついた。記憶の中の地図を辿る。

（ええと、確かロナードと言ったかしら……）

フォグリアの東にある街だ。それほど離れているわけでもなかったと思う。

実際に地図を取り出して確認してみると、やはりフォグリア近郊にあるロナードと言う街のようだった。

昨日は随分と移動したように思ったが、結果としてこの程度しか移動できていないのだと改めて知り、落胆する。この辺りならば、まだ捜索の範囲内ではないだろうか。

そう思う反面、街の存在にひどく心惹かれた。昨夜はほとんど眠れていない。今も疲労に塗れた体は引き摺ってしまいそうだ。けれどきっと今夜もろくに眠れないのに違いない。眠っている間に襲われたらと思うと、恐ろしくて眠るどころではない。切実に、温かい宿での休憩が恋しかった。

（宿代はあるもの……）

誘惑に負けそうになる。

ふらりとそちらへ足を向けかけたアンドラーシは、しかし足を止めた。

街は危険だ。人に会うのは、ロドリスに出てからにした方が良い。アンドラーシを追うのは、一国の宮廷魔術師なのだ。本気で追い詰めるつもりなら、各都市の衛兵に連絡が行っていると考えて間違いはないだろう。

（我慢、我慢）

ぎゅっと目を瞑って、顔を背ける。ロナードの街から視線を引き剥がすと、アンドラーシは再び東へ足を向けた。一瞬の迷いが全てを奪うのだ。常に気を引き締め、慎重過ぎるほどに慎重に考えて行動しても足りないくらいである。

日が暮れるまでたっぷり歩き、そろそろ休む場所を探さなければと考えながら、反面、長い長い夜の時間を思うと気が遠くなりそう

だった。このままではいずれ、一日を潰して昼間に睡眠を取る必要があるかもしれない。

神からの慈悲が視界に飛び込んできたのは、それから間もなくのことだった。

「あれは」

小さく呟く。

だだっ広く続く平野に、小さな建造物が見えた。いや、そんなご大層なものではない。祠だろうか。

近付いてみて、アンドラーシは全身の力が抜ける思いを味わった。祭壇だ。ファーラの神が守りの手をここに差し伸べてくれている。これで今夜一晩は何とか命を繋ぐことが出来そうだった。祭壇の周囲には魔物は近付かないと聞いたことがある。

気絶するように眠りにつき、休養を欲していた体は朝まで眠り続けた。目が覚めて、命があることに改めて感謝をして早々に食事を済ませると、昨日に引き続き東へ向かって移動を始める。

昨夜は祭壇のおかげでゆっくり眠り、気力も体力も十分回復することが出来た。だが、今夜のことを思うと暗澹とした気持ちになる。

他国へ向けて旅をする間、一度も魔物に遭遇しないなどと言う話は聞いたことがない。

つまり逆に言えば、必ず一度は遭遇するのだ。それがいつになるかという問題に過ぎず、今後ヴァルスへ行く道のりのどこかで、アンドラーシは必ず魔物に遭遇する。そして一度でも遭遇すれば、戦えない彼女はそこで終わりだ。

愚かなことをしたのかもしれない――初めてそう思った。

恐怖に曝されたまま疲労を抱えて逃亡して、最終的には魔物に食われるのだ。相手に慈悲などない。もしかすると、まだ生きたままで食われる痛みと恐怖を味わうことになるのかもしれない。

同じ短い人生なら、あのまま処刑された方が随分と楽だったのではないか。そんなふうに思えてさえくる。

道は知らず知らずのうちに、崖から少しずつ逸れて行った。緩や

かな登り道に代わり、辺りはまばらながら木が生え始める。
山道に入ってしまったのだろうか。アンドラーシはそう気付いて躊躇した。
山には魔物が多いのではないだろうか。だが、確かエルファーラやロンバルトとの国境には大きな山があるはずだ。と言うことはこの山を越えれば、そこは他国である。
方角的に、エルファーラへ行くには山を対角線上に突っ切らなければならないから危険だが、ロンバルトならば南へ直線だ。そう都合良く道が続いているかはわからないが、あの谷さえ越えられれば良いのだ。
そこまで考えて、アンドラーシはふと思い出した。
そう言えば、こんな話を聞いたことがある。山に魔物は多いが、一合目や二合目辺りまではほとんど出没しないのだと。魔物ではない大型動物もまた然りで、遭遇するのは小動物ばかりなのではなかったか。
であれば、出来るだけ山裾に近い一合目の辺りから離れないようにすれば、魔物を回避出来るのではないだろうか。
そうに違いない。
人は往々にして、自分の信じたい可能性を信じようとするものだ。この時のアンドラーシは、まさしくそうだった。
魔物に遭遇しては生き延びられない彼女は、遭遇する可能性ごと、意識の外へ排除した。

「はぁ……はぁ……」
山の中は、想像以上に過酷だった。
呼吸することさえ、魔物を呼び寄せてしまうような気がして密やかなものになる。
過酷だった理由は、まず道をそれたことにあるだろう。アンドラ

ーシが歩いていた道を歩き続けると、彼女の意志とは裏腹に山の奥へと続いているようだった。山裾から離れては、魔物との遭遇率が跳ね上がる気がしてならない。山の外の風景が木々の隙間から垣間見えるこの距離を維持しておきたかった。

だから、仕方なく道を逸れたのだ。

道を外れ、アンドラーシはゆっくりと木々の間に分け入って行った。

生い茂った草で足場は悪く、下手をすれば陥没していたりする可能性もあるので慎重にならざるを得ない。足腰に余計な負担がかかり、疲労が増す。

そうして道を外れてみれば、周囲の木々が一層密集して濃くなったように思った。

背後を振り返っても見通しは悪く、今にも草木の合間から何かが飛び出してくるのではないかと想像させる。進む前方も垂れ下がった木の枝や伸び放題の草が視界を遮り、魔物が蹲っているのではと考えてしまう。それが心労を引き起こし、気が遠くなるような思いがする。

早く安全なところに辿り着きたい。

恐怖に震える胸の内にそう呟いた時、アンドラーシは何か異質な音を聞いたように思った。

（何？）

足を止めて息を潜める。ずっと速く打ちっぱなしの鼓動は一層速くなり、痛いほどだ。息苦しく、胃の辺りに重苦しい威圧感を感じたように思う。

手にしたままのダガーを胸元でぎゅっと握り締め、辺りを窺う。何の姿も見えないのに、やはり確かに音が聞こえた。今まで耳にしてきた葉擦れなどの音とは違う、もっと生々しい……息遣いだ。

背筋を恐怖が駆け上がり、肌が粟立つ思いを味わった。確かに何かがいる。近づいてきている。だが、森に吸い込まれるようにどこからなのかがわからない。

咄嗟にアンドラーシは、叫びだしたくなった。全てを投げ出して、何もかもを放棄して、頭を抱え込んで叫びだしたかった。そう出来ればどんなに良いだろう。

（あれは、何？）

やがて、前方の左奥から黒い影がうっそりと近づいてくるのが見えた。

全身を黒い毛皮で覆われているようだ。巨大な口から、これまた巨大な牙が飛び出ているのが見えた。一見サーベルタイガーのようにも見えるが、それより一回りは大きいような気がした。

（わたしは、あれに、食べられる……）

正常な思考が完全に麻痺し、ただカタカタと震えながら近づいてくるそれを見つめる。魔物は、間違いなくアンドラーシを認識していて、真っ直ぐにこちらへ向かっていた。食われる以外の選択肢があるとは思えなかった。アンドラーシのダガーが魔物に襲いかかる前に、あの鎌のような巨大な牙がアンドラーシの柔らかい肉体を引き千切るだろう。それはどのくらい痛いのだろうか。

いっそ気を失ってしまいたかったが、なぜかそれも叶わなかった。そしてそれは、幸運なことだった。

諦めに似た境地で魔物が近づくのをただ待つアンドラーシの目の前で、魔物がぴたりと足を止める。

何かを察知したように顔を山側の奥へと向け、低い唸り声を発した。

次の瞬間、木々の合間から飛び出してきた何かが魔物に襲い掛かる。胸を鷲掴みにされるような恐ろしい咆哮が、二つ同時に上がった。飛び出してきた何かが魔物に絡みつき、魔物の方も応戦する構えで鋭い牙と爪を振り回し、もつれ合うように緩い斜面を転がる。

（え？）

何が起きたのか全くわからないまま目を瞬いたアンドラーシは、数エレ先で行われているその光景をぽかんと見詰め、そして理解した。

別の魔物が、さっきの魔物を襲っているのだ。
魔物の世界だって弱肉強食である。別に魔物は人間だけを食うわけではない。自分と別種の魔物であれば、魔物は遠慮なく襲う。後から来た魔物にしてみれば、先ほどのサーベルタイガーは餌の対象だったと言うことだ。
そしてこれは、神がアンドラーシに与えた逃げるチャンスだった。彼らは今、戦っている互いしか目に入っていない。気づかぬ間にこの場を離れてしまうべきだ。
息を飲み、アンドラーシは彼らをやや迂回するように右前方へ足を向けた。刺激しないよう、そろりそろりと足を踏み出す。草を踏み分ける音は如何ともしがたいが、それより彼ら自身が絡まり合って転がり回る音や咆哮の方が遥かに大きい。
（そうだ……香呂……）
息を詰めてその場から逃れながら、アンドラーシは自分が魔物の嫌がる香を放つ道具を持っていることを思い出した。足を動かしたまま、念の為に魔忌香呂を取り出して握り締めた。
何とか殺し合う二匹の魔物の傍から逃れると、アンドラーシはそれからしばし必死で走った。少しでも遠くに行きたい。だが、それが新たな魔物を引きつけていることを忘れていた。
ヒステリックな精神状態で闇雲に走り続けるアンドラーシの頭上で、ガサガサガサっと大きな音がした。同時に、ずしんと衝撃を受けた気がして足を止める。正確にはアンドラーシが衝撃を受けたのではなく、間近の大木が大きく揺れ、太く長い枝が大きくたわんだのだと気付いた時には、絶叫が迸った。
巨大な猿だ。歯ぐきをむき出しにして笑うその顔は、悪意ある人間そのものに見えた。
まるで枝で遊ぶかのように、バネ代わりに大きく跳ね上がると、隣の枝に片手でぶら下がる。折れて死ねばいいのにと思う精神的余裕もなかった。
猿が、金属のような音を上げる。鳴き声のようだ。アンドラーシ

は恐怖に駆られて震える両手を抑えつけながら、必死で炎の種に引火した。微かな手応えが手の中に返り、魔忌香呂から薄い煙が立ち上る。希望を抱いて猿を再び見たアンドラーシは、まるで効いていないようにゆらゆらと揺れている猿に、絶望した。

ぶんっと枝を振り、ドサリと猿が巨体を地面に落とす。四つん這いになるように低い姿勢でアンドラーシの前方を塞ぎ、再び歯ぐきを剥いて笑った。

「い、いやあああ！」

鳥肌などと言うレベルではない。完全な恐慌状態で、アンドラーシは手にした魔忌香呂を投げつける。だが猿は、煩わしそうにそれを片手で払い、ゆっくりと二本足で立ちあがった。

他になすすべもなく、アンドラーシは何も考えられない頭で腰の布袋を弄った。指先がぶつかった新たな魔忌香呂を引っ張り出す。効果がないとわかっても、他にどうして良いかわからずに、炎の種に引火する。また微かな煙が筒から上がった。

そこまでしてしまうと、もう後はただ餌食になるのを待つよりない気がした。

魔忌香呂をお守りのように胸に抱きしめ、痙攣する足で後退する。だがいくらも後退できないまま、アンドラーシは足がもつれてその場に座り込んだ。

恐怖に見開いた目で、座り込んだまま猿を見つめる。獲物が手中に落ちたと確信したような猿は、その長い腕をアンドラーシに伸ばしかけた。

閃光を見た、と思ったのはその時だった。

いや、実際はそんなものはなかったのだろう。だが、裏付けるように続けざまに猿の胴体から血が噴き出した。アンドラーシに浴びせかけるかのように、肩からわき腹まで袈裟懸けに大量の血があふれ出る。

立て続けに極度の恐怖を味わったアンドラーシは、何が起こったのかわからないまま、茫洋とそこに座り込んでいた。その目の前で、

断末魔の悲鳴さえ上げられなかった猿が、前のめりに崩れ落ちた。
その後ろに佇む少年の、振り下ろされたばかりの剣が血濡れているのを見て、ようやく一つだけ理解する。
彼が、アンドラーシを救ってくれたのだ。
言葉も出せないアンドラーシを、少年も無言で見返していた。
切れ長の鋭く無感情な目の上で揺れる一房の赤い前髪が、印象的だった。

第3部第2章第14話　生への闘争（1）

ゴォー、ゴォー、と言う風のような低い音が聞こえて来る。
俺は、二人並んでは歩けないだろう程度の幅の道に突っ立っていた。左側には切り立った高い岩壁が聳え、右には傾斜のきつい斜面に木々が連立している。
道の前方は、左側に曲がっているようだ。続く先は見ることが出来ず、しかしながら何かの音が耳に届き、俺はため息と共に足を止めた。
しばらく静かだと思ったのにな。幸運はそう続かないようだ。
岩壁に背中を押しつけて少し先の曲がり角からそっと先を窺った俺は、目に飛び込んできた予想通りのものに再びため息をつきたくなった。
細い道を塞ぐように、魔物がトグロを巻いて寝ている。
風のような音は奴のいびきだ。
どうする？
剣を片手に握ったままで、俺はその場に立ち尽くして考えた。
眠っている魔物を気付かれずに乗り越えることが出来るだろうか。いや、さすがに無理だろうな。もっと道幅があるならともかく、この狭さなら魔物を跨ぐなり踏むなりしなきゃならない。
出来れば戦闘になりたくなかった。理由は単純だ。痛いのは嫌だし、疲れる。ここまで来るにも戦い通しで、休憩もろくに取れていないから、肉体的に持たない。
崖を降りて迂回しようか。考えて、少し身を乗り出す。降りれないことはないだろうが、傾斜が結構急だからしんどそうだ。足でも滑らせたら道を失うし、滑らせる可能性は高いように思う。
まあ、既に半分迷っているような気もするけどな……。
ヘイリーの家からエルファーラへ抜ける道なら、何度か通っているから、一人でも迷いはしなかっただろう。

だけどそれではすぐにシサーたちに追いつかれてしまう可能性があり、一人でヘイリーの小屋を発った甲斐がない。

なので俺は、ヘイリーに道筋を聞いて、一度ロンバルトの方へ抜けてみることにしていた。

聞く限りでは、エルファーラへ抜けるのと距離はそう変わらない。顔を隠す必要はあるかもしれないが、ロンバルトがどういう状況なのかを確かめることも出来る。ファリマ・ドビトークの麓をロンバルトへ下りてから、エルファーラへの道のりも、さしたる距離もないようだ。

そう考えて、ヘイリーに言われた通りの道を辿って来ているはずなんだが。本当に合っているんだろうか。魔物に引っ掛かっている時間が長いから、距離を稼げていないのかもしれない。いずれにしても、想像より道のりは長そうだな。

一度ヘイリーの小屋に戻ってみようか？　なんて無駄過ぎる体力と時間の浪費。でも本当に迷っているとしたら、死ぬのは時間の問題だしな――そんなふうに、一向に山を抜ける気配がないことに不安を覚え始めていたところだった。これは道を戻れと言うことなのかもしれない。前方は魔物が道を塞いでいるわけだし。

迷いながら、剣を握ってもう一度顔を覗かせる。

その瞬間、悩んだ時間が無に返った。黄緑色の瞳と正面から視線がぶつかった。

竜のような爬虫類めいた頭部が、亀に似た巨大な胴体から生えている。だが甲羅らしきものには鋭利な突起物が密生し、剣山のようだった。何と言う魔物なのか俺にはわからない。

顔面が裂けてるかのような巨大な口をくわっと開き、四肢を踏ん張って尻を持ち上げる。背中の針がこちらめがけて噴射された。

「うわ」

あんなのを食らったら、一気に蜂の巣だ。慌てて顔を引っ込め、再び壁に背を張り付ける。視界の隅を無数の針が飛来するのが見えた。とてもじゃないが、通過するどころか戦えるとも思えない。火

系魔法を操るデメリットとして、木々が密集する山の中ではレーヴァテインの魔力に頼るわけにもいかなかった。魔術師の放つ魔法より延焼範囲がでかい分、山火事にしてしまう危険性も高い。

身動き出来ずに、とりあえず針が止むのを待つ。息を詰めて「針が止んだ」と気付いた次の瞬間、予想外のものが俺を目掛けて空を切った。細く長い鞭状のものだ。

それを咄嗟に避けようとして足がもつれる。体勢を立て直そうとした俺の体が角から向こうへ飛び出し、俺は再び魔物と正面から対峙する羽目になった。途端、道の端にかかった足が、がくんと揺れる。全身に重力がかかり、足の下の地面が崩れた。

「――っ！」

咄嗟に伸ばした指先が、辛うじて崩れ残った道縁に引っかかる。直角の崖ではないが、４５度はあるだろう急斜面に張り付いて、気分は半宙吊り。

幸い賢い魔物ではなかったらしく、俺を見失ったようだ。針が明後日の方向へ連射されるのが見える。が、このままここにぶら下がっているわけにはいかないし、這い上がっても元の木阿弥だ。

俺の遙か頭上をひも状のものが旋回している。先ほど俺を打ったのと同じものだろう。奴の尾らしい。どんだけ長いんだよ畜生。

「くっ……」

指先が千切れそうだ。このまま滑り落ちた方が得策だろうかと決める暇もなく、支えきれなくなった。あっけなく指先が道縁から離れ、俺の体がうつ伏せのまま急斜面を滑り落ちる。

「うわあああっ」

一体この山で何度転がり落ちれば気が済むんだ。

姿勢を転じて横滑りになりながら、両腕をクロスして顔を庇う。飛び出した枝をへし折り、幹に体をぶつけ、やっと止まった時には随分と滑り落ちてしまった。

まずいな。道を失う。こんなわけのわからない山で、迷子はまずい。いや、既に半ば以上迷子だけど。

呻き声を上げながら、落ちてきた道を見上げる。魔物は俺がいなくなったことを理解しているのかいないのか、まだ尾を振り回していた。あの辺りを迂回するようにして戻るよう、斜面を登ろうか……。

そんなことを考えていると、背中の方から音が聞こえた。いや、音じゃなく声だ。それも、よく聞き覚えのある。

嫌な予感に剣へ手を伸ばしながら振り返ると、案の定、木々の合間からゴブリンが見えた。一匹じゃない。三匹。

背筋が緊張する。レーヴァテインを使えないこの状況下で、勝てるだろうか……。

ゴブリンAが、奇怪な声を上げた。気合いの声、と言うやつだろうか。手にした剣が錆びているのは、血錆びを思わせる。

Aに続くように、両サイドのB、Cも声を上げた。それぞれの得物を片手にこちらめがけて走ってくる。一瞬回れ右しようかと考えたが、代わりに俺は身構えた。率先してきたゴブリンAが剣を振り被った瞬間、身を屈める。足払いが狙い通りヒットし、Aが転倒した。その煽りをくらったBと縺れるように斜面を転がり、その間に俺は剣を払った。巻き込まれずに襲ってきたCの足目掛けて叩きつける。

血飛沫が噴き上がり、悲鳴と転倒する音を聞きながら、俺は全力で走り出した。同時に三匹も真面目に相手をして勝てるはずがないんだから、逃げ出すしかない。

とにかくあの場から離れることだけを考えて必死に駆けていると、頭上から音が聞こえた。何だ？　咄嗟に見上げると、大木に大蛇が絡み付いていた。尻尾が垂れ下がっている。鎌首を擡げて、枝の上から俺を見下ろしていた。

同時に、前方からも音がした。ライオンのような体に、ヒヒに似た頭部がついている魔物が繁みの中から現れる。じりじりと後退した俺は、ヒヒを見据えながら片腕を伸ばした。ツタのように垂れ下がる大蛇の長い尾を掴み、思いっきりヒヒに向けて全力投球する。

当然大蛇が口を開けて俺に襲いかかろうとするが、一方でヒヒも怒りの声を上げた。ぶつけられた尾を掴み、俺に襲い掛かろうとしていた大蛇が方向転換する。その隙に、俺は俺で方向転換して走り始めた。傾斜を下る方向だ。

やばい。もはや元の道がどっちの方角だったかすらわからなくなりつつある。

そうわかってはいるものの、今は逃れることが最優先だった。逃げ切れなければ、道がわかっていたところでどうにもならない。逆に生きていれば、まだ挽回のしようもあるだろう。

ただ闇雲に走っては魔物を惹きつけるだけだともわかっているから、途中から速度より気配を消す方に意識を割いて、足を進める。

俺が歩いているのは、もはや道なんかじゃなかった。草木が生え放題で、歩きにくいことこの上ない。次第に息も上がり始めた。

くそ……休みたい。

二の腕には痺れるような痛みを感じている。どの戦闘だったか覚えてないが、いつの間にか怪我をしていたらしかった。いや、もしかすると逃げている間にかもしれないが。

背の高い草を踏み分けながら、慎重に歩く。が、何かに蹴躓いて転倒した。

「はあ」

見れば、何てことはない、ただの張り出した木の根だった。完全に足腰にきているようだ。もうこれ以上動かない方がマシのように思える。

荒く呼吸を繰り返しながら、魔物が間近にいなさそうであることだけを確認し、俺は近くの灌木の陰に潜り込んだ。薄いピンクの花が咲いているのを見つけたからだ。

ヘイリーは、俺を送り出す時に、一つアドバイスをくれた。花や、香りの強い幹や葉を持つ木陰が、最も休憩に適しているのだと。

動物の多くがそうであるように、魔物もまた視力が弱いものが多い。代わりに耳と鼻が敏感で、それによって獲物を察知する。だけ

ど、自然の芳香に寄り添えば、人間の体臭も紛れるのだそうだ。
もちろん隠れ蓑にする香りにも寄るし、異臭が混じっていることもわかるだろうが、大抵の魔物は異臭の源について深くは考えない。それほど賢いわけじゃないのだそうだ。
しばらくそこで息を殺したまま、じっとする。落ち着いてくると、体の端々に受けた傷が痛んだ。
周囲に魔物がいないと確信してから、ようやく荷袋を漁って治癒薬を取り出す。
「ってえ……」
体に受けた傷が痛みを訴えるのは、肉体が損なわれることを恐れる危険信号だ。
「熱も……出て来た、かな……」
火照る体を灌木のそばにある岩にもたせかけて呟いた。
発熱するのは、有害な何かを駆逐しようと肉体が抵抗しているからだ。
腹が減る。眠くなる。――わかってる。俺の肉体は、俺が何を考えようと、生きる為に足掻いている。
まだ乾いた心のままで、そんなことを思った。そしてそう思うことは、なぜか少し心地良い。
ヘイリーの言う通り、体はちゃんと生きようとしている。死体じゃない。生きてる。それを殺そうとしていたのが自分自身だと、少しだけ実感を伴って理解したような気がした。
「レーヴァテイン」
岩に寄りかかったまま、片手に握りっ放しの魔剣に呼びかける。レーヴァテインは、きぃぃぃんと小さな音を立てて小刻みに振動した。
「お前、ここの道なんかわかんないよな」
しゅぅぅ……と恐縮するように振動がやむ。ごめん、わかってる。
俺が悪かった。
「そりゃそうだよな……」
ずっと氷の大陸で眠っていたんだ。宿敵氷竜ならば察知すること

が出来るとしても、ただ道案内なんてそりゃ無茶だろう。言ってみただけ。

とりあえず、こんなところで迷子になってたら生還出来ない。最優先は進路を取り戻すことだ。多少の無茶は承知で、元の道に戻ろう。あの斜面を上れるかどうかは疑問だけど。

一応の方針を決めると、俺は更に深く岩にもたれた。背に負った余剰の剣を下ろし、レーヴァテインを抱え込むようにして目を閉じる。一人になって痛感したのが、休憩の取りにくさだった。少しでもこうしていられる時に、体力の回復を図ったほうが良い。

ヘイリーの小屋を出てから三日、ゆっくりと休むことの出来なかった体は疲労困憊で重かった。

少しで良い。眠りたい。休みたい。

心の片隅で、花の香りが守ってくれるよう祈りながら、俺は半ば気絶するように意識を失った。

◆◇◆

……生きてる。

灌木の影で岩に凭れ掛かった姿勢のまま、意識を取り戻して最初にそう思った。

まだ生きてる、俺。寝ている間に魔物に襲われるようなことはなかったようだ。

そっと体を起こすと、あちこちが痛んだ。魔物との戦闘や山道の移動で痛めたあちこちが、眠りを挟んだことで引き立ってしまったようだ。

ずっしりと体を重く感じさせるような疲労感は、生憎と消えてはくれなかった。

今から魔物を避けながら元の道へ戻るべく、まずはあの頭上に魔物がいた斜面を探し、次いでその斜面を登るのかと思うと、それだけでうんざりだ。

想像だけで気力を削ぎ落とされながら、荷袋に手を突っ込む。指先に、ヘイリーから預かった包みが触れた。

ヘイリーの想いが詰まったその――ブレスレット。

包みをそっと奥へしまい直し、代わりに俺は携帯食糧を取り出した。それからはっとする。

そうだ……水。

食糧はヘイリーが余分に持たせてくれたから、しばらくは何とかなる。だけど、水の方は少し厳しいものがあった。まさか樽を背負ってくるわけにはいかないから、重量のある水は持てる量に限度があるんだ。それにヘイリー曰く、ファリマ・ドビトークの中には飲める水の湧いた沢があちこちにあるのだそうだ。それを上手く見つけて水を補給しろと、そういうことらしい。

ともかく栄養補給をしようと、粉末にした乾燥野菜を練ったものを齧る。道具屋で売っている携帯食料の一つだが、想像通り味気ない。いや、まずい。だけど栄養の方は十分だと言うので、贅沢は言っていられない。

カレーとか食べたいな。

久しぶりに、そんなことを思った。

母親の作る何気ない食卓について、弟の拓人とくだらない会話をして、自分のベッドに潜り込む。

何だかそれが、ひどく魅力的なことに思えた。

帰りたい。

生きて、あの世界へ戻りたい。

……俺が、今更こんなことを思うなんて。

（それも、逃げか？）

そうかもしれないな。苦しいこと、辛いと感じたこと、それごとこの世界を置いて出て行くということなら、それもまた逃げなんだろう。

「水を、探そう」

小さく呟いて、ようやくの思いで立ち上がる。まだ少し、足元が

ふらついた。脇に置いてあったシャインカルクの剣を背に負い直して、レーヴァテインは片手に握ったまま、灌木の繁みを抜け出す。

夜ほど真っ暗ではないから日が昇ったのだとわかるが、それでも辺りは鬱蒼と暗い。魔物が潜む陰に事欠くことはなく、俺は改めて緊張感を取り戻しながら歩き始めた。幸いなのは、こうして辺りに目を配りながらゆっくり歩いていると、時折魔法石を拾うことが出来ることだった。さほど数は多くないが、それでも六個ほど見つけることが出来たのは、凄く心強いよな。

靴の裏に感じる地面は柔らかい。腐葉土だろうか。それとも泥濘に差し掛かっているのか。

衝撃を吸収するクッションのような感触を感じながら歩く俺の耳に、微かな水音が届いた。

「助かった」

一人ごちて、水音の方向へ速度を速める。間もなく水を湛えた小さな沢に行き当たり、俺はほっと胸を撫で下ろした。

それから、水辺や水底をじっくりと眺める。ヘイリーが言うことには、ファリマ・ドビトークの沢は概ね飲める水であるとは聞いているが、中には毒素を含む沢もないではないと言うことだった。その区別は、水辺や水底の植物や生物を観察することでつけるしかないと言われている。

植物や生き物がいるからと言って、一概に毒素がないとは言えないのだそうだ。と言うのも、毒を栄養素としている魔生の植物や生物もいるのだとのことで。

だから判断基準としては、俺が魔生でないと知っている植物なんかを頼りにするしかない。

沢の傍をゆっくり歩きながら、周囲に目を凝らす。しばらくそうして観察していると、やがて俺にも見覚えのある植物が目に留まった。タンポポだ。こちらの世界では何と言うのかまで知らないけど、草原などでも見かけたことがあるから、こちらでも決して魔生の植物ではないだろう。

早咲きのタンポポが、川風に体を揺らす。水辺と言うにはやや遠かったが、その地面が湿っているところを見ると、タンポポが得ている水分は川の水だと考えられる。

そう判断して水をようやく一口飲み、毒でないことを確かめると、俺は予備の水袋に掬い上げた。蓋をして、口を革紐で縛ると、荷袋へ戻す。それから俺は再びタンポポへ目をやった。少し、心が安らぐような気がする。

その時だった。

「……？」

今、悲鳴が聞こえなかったか？

足を止めたまま、俺は周囲を見回した。耳を澄ませてみるが、沢の水音や風の起こす葉擦れの音以外、何も聞こえない。

女の悲鳴がしたような気がするんだけど……気のせいだろうか。

まあ、魔物の声と言うこともあるかもしれないし。

そう思うものの、どうにも気になった俺は、ようやく沢の傍を離れた。声がしたと思った方向へ足を向けてみる。

足元がぬかるんでいるのは幸いと言えた。気をつければ、乾いた枝葉が敷き詰められているようなところよりも音が立たない。

とは言っても道なき草むらの移動、完全に音を立てないわけにはいかなかったが、それをかき消すような大きな音が聞こえてきた。木を揺さぶるような音だ。木々の間から先を窺うと、エイプのでかい背中が見えた。木にぶら下がって遊んでいるように見える。

何だ、あいつの声だったんだろうか。だとしたら、是非とも係わり合いにはなりたくない。

戻るか。余計なことをしている場合じゃないんだ。水も食糧も尽きる前に、元の道に戻って山を抜けなきゃならないんだから。

そう思って回れ道をしようとした瞬間、今度は確かに、聞き間違えようのない絶叫が聞こえてきた。

「いやあああ！」

第3部第2章第14話　生への闘争（2）

なっ……？

間違いない。悲鳴だ。

反射的に、俺はエイプを振り返った。影に隠れて見えなかったようだ。くそ、面倒だな。でも放って行くのは躊躇われる。……少し前の俺だったら、躊躇なく踵を返すだろうに。どうしたんだよ、俺。

自分に対する困惑を一度脇へ置いて、俺は気配を殺しながらエイプの背後に近付いた。エイプが目の前の獲物に集中している今なら、何とか片をつけられるかもしれない。だけど、勝負は一瞬だ。相手に反撃出来る余裕を与えたら、レーヴァテインの魔力を発動しない限りはアウトだろう。

エイプの背中に限界まで近付き、これ以上は気配を消したところで気づかれる、と言うところまで来ると、俺は丁度良い場所にせり出していた岩場に飛び乗った。ここからなら、一気に攻撃を仕掛けられるかもしれない……！

一か八かのような気分で、握った剣を構える。岩場を強く蹴って飛距離を稼ぐと同時に、剣を振り被った。

一瞬エイプの背中が動きを止める。気づかれた。だけどエイプが振り返るより、俺の剣がその肩を切り裂く方が速かった。

俺の全体重を引き受けた剣先がその肩に食い込み、そのまま袈裟懸けに肉へと沈み込んでいく。その裂かれた背中から血が噴き上げた。声もなくエイプの体が崩れ落ち、同時に俺も地面に足をついた。今の勝利は、限りなく幸運に近い。

剣を払って立ち上がる。そこで初めて、エイプの正面にへたりこんでいた人間の姿を見つけた。コレが多分悲鳴の主だろう。

子供……じゃないか。俺とそう年が変わらなさそうな女の子だ。粗末な服装をしているが、一見してかなりの美少女と言えるほどだった。こちらでは珍しいオリエンタルな雰囲気の美人だ。神秘的な

黒い瞳は、まだ恐怖の名残を漂わせて見開かれたままだった。
こんなところで、このコは一体何をしているんだ？
一抹の疑問が過ぎる。だけど、追及すると面倒なことになりそうだと理性が制止した。ついて来られるのは非常に迷惑だ。
怪我をしている様子もないし、当面出来ることはやったんだから、十分だろう。
助けてしまった瞬間から予想出来てしまう展開から極力目を背け、自分自身に言い聞かせる。
さっさとこの場を去るのが利巧だ。行け、俺。とっとと去れ。
剣の血を拭うと、俺は理性に忠実に踵を返しかけた。
「＊＊＊＊」
が、何か言われて振り返ってしまう。ヴァルス語ではないようだった。聞いたことがある言葉かもしれないが、どこと言えるほど知識がない。
一瞬困惑したが、定石通りなら足止めの類のセリフだろう。そう決めつけて口を開く。
「生憎ヴァルス語以外はわからない。血の臭いは魔物を寄せるから、あんたもさっさと離れた方が良い」
彼女がヴァルス語を理解しなければ無駄な忠告だが、俺にはヴァルス語か日本語しか話せない。どうにもしようがないし、する気もない。
「ヴァルス語ならわかるの？」
再び歩き始めた俺の背中に細い声が聞こえた。どうやら彼女はヴァルス語を理解出来る人だったようだ。
「それなりに」
「ねえ、待って。置いて行かないでよ」
答えながらも足を止めない俺に、彼女が慌ててついて来る。
「あんたと俺は何の関係もない他人だから、待つ理由がない」
「薄情じゃないっ。せっかく助けたって、こんなとこに置いてったらどうせ死ぬわよっ。助け損じゃないっ」

……。

何つー上からのご意見。

「ねえ。ヴァルス語ならそれなりにわかるって、どういうこと？　どこの国の人なの？」

「さあね」

がさがさと草を踏み分けてさっさと進む俺を勝手に追いかけてくる。その気配を感じながら、俺は俺で彼女の素性を推測する。

国から国へ移るにも、魔物には遭遇する。同行者がいないとすれば、彼女一人で切り抜けられるとは考えにくいし、であれば彼女はファリマ・ドビトークに密接した国の出身である可能性が高い。

先ほどヴァルス語ではない言葉が最初に出たことから、エルファーラでもロンバルトでもなく……ロドリス。

にも関わらずすんなりヴァルス語を操ることから、田舎町じゃない、大都市に住んでいたと考えられる。

ともすれば王侯貴族、もしくは商人などのサービス業。旅人も考えられるけど、彼女本人にはそういう能力を感じられないから除外だ。

俺の印象で一番近いのは……。

「ねえ。わたしも一緒に連れてって。良いでしょ？　あなたの言う通りにするわ、何でも」

「……」

「何でもしてあげるってば！」

一番近いのは、娼婦。

街で客引きしている女性たちに、一番良く似た雰囲気だった。何がそう思わせるのかまでは、俺にはよくわからないが。

「悪いんだけど、俺があんたを守ってやれると思ってるなら勘違いだよ」

あー、非常に面倒だな。こうなると予想が出来て助けた俺も俺だとわかってはいるんだが。

「俺だって自分を守るだけで手一杯なんだ。あんた、自分の身も守

れないだろ」
「アンドラーシ」
「は？」
「アンドラーシよ、わたしの名前」
「……」
聞いてない。
「魔物ってのは鼻が良いんだ。人間一人だって過敏に反応する。二人になればもっと寄って来るに決まってるのに、あんたが自分すら守れないって言うんなら、俺の負担が増すだけだ。ごめんだよ」
「じゃあ何で助けたのよ」
……。
「さあ」
「さあじゃないわ。無責任じゃない。責任取って」
見殺しにするべきだったんだろうか。
余りと言えば余りの言いように、そこはかとなく頭痛を覚える。
これ以上何かを言う気力もなく、俺は無言で足を動かした。
「名前は？」
「……」
「あなたのこと、何て呼べば良いの？」
「……」
「どこから来たの？」
「……」
「どこへ向かってるの？」
「……」
「どうしてこんなところに一人でいるの？」
そりゃあんただよ。
「いくつ？　わたしは十八」
無言を貫く俺にめげずにしきりと話しかける姿は、誰かを彷彿とさせた。最初に会った時のハヴィに似て見える。
そんなことを思った俺の脳裏に、ふと浮かんだ考えがあった。

待てよ。どう考えても彼女が一人でファリマ・ドビトークの奥深くまで入り込めるとは思えない。だったら同行者がいたか、もしくは。

「あんた、どこから来たの」

「え、ええ？」

突然足を止めて振り返った俺に、アンドラーシもつられたように足を止める。それから大きな目をぱちぱちと瞬いた。芝居がかった仕草で小首を傾げる。

「どこって、そのう……ロ、ロドリスの方から」

「ロドリスの方？　ロドリスから山に入ったんだな？」

「そ、そうよ？　それが何？　何か悪い？」

逆切れのように言われる。そんなに悪いことを聞いたんだろうか。何か後ろ暗いところでもありそうだ。興味はないけれど。

「ロドリスのどの辺りから山に入った？　どのくらい歩いて、どこへ向かってる？」

「ええと、ロナードの街の方からよ。ロドリスとロンバルトの境に深い峡谷があるの。それに沿って歩いて来て、左手の遠くにロナードが見えたわ。山に入ってからは、一日は経ってない。数時間ってところよ。太陽が南天に位置していたくらいに山道に入ったと思ったから」

何だよ。じゃあ、ロドリスの方向へ戻ってることじゃないか。三日かけて俺は、ヘイリーの小屋までの道筋さえ無駄にしてしまったと言うわけだ。

「わたし、魔物に遭遇したくなかったから、出来るだけ山裾を離れないように歩いて来たつもり。そのせいで道を外れちゃったけど。とりあえずはロンバルトに行きたいのよ。だからそっちの方へ向かってるつもりだったけど、間違ってた？」

と言うことは、俺は随分と下って来てはいるんだな。ロンバルトへ向かう道が山裾沿いに続いているかは疑問だが、ロドリスから入って間もない彼女がそう信じて歩いて来た方向であることは間違い

なさそうだった。
　考え込む俺を黙って見つめていたアンドラーシが、やがて再び口を開く。
「ねえ。あなたはどこへ向かってるの？」
「ロンバルト。当面は」
「当面は？　その先は？　わたしはね、本当はヴァルスに行きたいのよ。だけどこんなに怖い山に長くいたくないから、とにかくロンバルトに出たいってそれだけなの」
「……ヴァルスに？」
　初めて興味を示した俺に、アンドラーシが嬉しそうに笑顔を見せる。
「そうよ。ヴァルスに親戚がいるの。だから会いに行くのよ。ねえ、もし同じ方向なら一緒に連れてってよ。一人より二人の方が楽しいわよ」
　いや別に楽しいとは思えない。確実に面倒が増えるだけだ。
　だけど、漠然と自分の現在地が想像出来そうだという点は、収穫と言えた。彼女を助けたのも、全く無駄ではなかったようだ。
　ロドリスとロンバルトの国境の近くから山に入ったと言うことは、ファリマ・ドビトークの全貌から北西の辺りの道から入ったと言うことになる。今回俺たちが祭壇を経由して山に入ったのと同じ経路だと考えられた。
　道を外れたと言うことは、俺たちが辿った道をどこかで南に逸れ、南下して来ていると言うことだろう。だとすれば、この辺りを真っ直ぐ西に抜けられれば、そこはもうロンバルトと言う可能性もある。
　素直に地面が続いているかはわからないが、行ってみる価値はあるように思われた。山を下りられなくても、何か見ることは出来るかもしれない。
「助かったよ。ありがとう。正直言って、道がわからなくなってたんだ」
　礼を言うと、アンドラーシは誇らしげに口角を上げた。満面の笑

顔で俺を見上げる。
「だったらお礼に、一緒に連れてってよね」
「……」
強引な。
呆れて言葉に詰まっていた俺は、そこでふと彼女が持っているものを目に留めた。筒状のものをしっかりと握り締めている。筒の中で、小さな火が燃えているようにも見えた。
「それは？」
「え？」
俺の視線を追って、アンドラーシが自分の手元を見る。それから口を軽くへの字に曲げた。
「魔忌香呂って言うらしいわよ。道具屋で買ったんだけど」
「へえ？」
言われてみれば見たことがあるような気もするが、こんな筒状のモノ、大した特徴があるでもないから違う物かもしれない。少なくとも俺たちは買ったことも、買おうと思ったこともない物だ。
「魔物が嫌う臭いを出すって言うから、回避出来るかもと思って買ったのよ。めちゃくちゃ高かったんだから。だけど結局無意味だったみたい。さっきの魔物に投げつけたけど、軽く払われちゃったもの」
……。
「それは、投げつけるものじゃないんじゃないの」
「え？」
「臭いを放つんだろ。点火して、臭いが上がるのを待たなきゃいけないんじゃないの。それでお守りみたいに身に付けて魔物を払うって用途のような気がするんだけど」
「えええ？」
いや、普通に考えてそうとしか思えなくないか？　少なくとも投げようとは思わないんじゃないだろうか。
そう思ったものの、アンドラーシが真剣に驚いているので、口に

するのはやめた。追い討ちをかけることにしかならない。
「そ、そうなの？」
「知らないけど。俺は使ったことないし、ちゃんと見るのも多分初めてだし。でもそういう使い方をする物なんじゃないかって気がする」
試しに顔を近づけてみると、微かに何かの臭いがした。それほど不快な臭いではないが、魔物にとっては嫌な臭いなのかもしれない。お香の香りに似ているような気がする。
「とりあえず、せっかく火を点けてるんだし、持ってたら良いんじゃないの。それで魔物が忌避してくれるなら幸いだ」
「それはそうだけど。でもね、獣型の魔物にしか効かないって聞いたわ。それに魔物にもよるって」
「十分だと思う。ここは獣型の魔物の方が多いし」
俺の経験からすると、亜人型の魔物は雑魚レベルか、もしくはぐっとレベルが上がって俺なんかは太刀打ち出来ないような奴に分かれる。雑魚レベルと言うのはゴブリンなんかを指すが、あの程度なら頑張れば戦うなり逃げるなりは俺でも可能だ。ハイレベルな奴になると魔法を使ったり、考えられないほど屈強だったりしてとても戦えないが、代わりに遭遇率もかなり低い。
それよりも獣型の魔物の方がレベルの範囲も広く、そして遭遇率も高い上に回避率は下がる。獣型の魔物が近付いて来ないのであれば、極端に言って亜人型雑魚――ゴブリンレベルを相手にすれば済むと言うことになりそうだ。
「どのくらい持つ物なの。持っているのはその一本だけ？」
「ううん。他にあと三本。一本は、さっき投げつけて捨てちゃった。どのくらい持つものなのかは、ちょっとわからないんだけど」
「ふうん。まあ、ないよりはあった方が良いんだと思うよ。俺には関係ないけど」
それだけ言って再び歩き出す。アンドラーシがついて来る。
「じゃあ、わたしと一緒にいたら、香呂の力で魔物との遭遇率が下

がるわよ」
「ありがたいけど、大丈夫」
「わたしが大丈夫じゃないの。まあいいわ。勝手について行くから」
俺の態度に業を煮やしたらしいアンドラーシが、開き直ったように宣言した。
「で、あなたのことは何て呼べば良い？」
そして、何事もなかったようにさらっと尋ねた。

◆　◇　◆

とりあえずの目的をロンバルト……いや、ファリマ・ドビトークからの脱出に定め、勝手について来るアンドラーシを連れて移動をする。
昨日はアンドラーシを助けたのが既に夕刻だったせいもあって、大して移動距離を稼ぐことは出来なかった。
勝手について来るとは言っても、本当に知らないフリは出来ない。何と言っても、彼女が魔物に嗅ぎ付けられれば、それはイコール俺にも危険が及ぶと言うことになる。振り払って逃げるほど悪人でもないつもりだし、大体そんなことで無駄な体力を消費したくない。
とくると、必然的に日が落ちて早々に休憩を取らざるを得なくなった。夜間でも、俺一人ならばゆっくり休めそうな場所に巡り会えるまではとにかく移動するが、余剰荷物（アンドラーシ）を抱えていてはそうもいかない。夜間は魔物の活動が活性化する。
「あん、もう……歩き辛いったらもう」

第3部第2章第14話　生への闘争（3）

彼女は最初のうちこそ俺にいろいろと話し掛けてきていたが、余りにも俺が返事をしないので、いい加減飽きたようだ。今は大人しく独り言を呟くに留まっている。

今日中に山を抜けることは出来るだろうか。そもそも進んでいる方向がアンドラーシの言葉からの充て推量なので、怪しいと言えば怪しい。

いずれにしても、何らかの変化は欲しいところだけどな……。

「ねえ。香呂、もう一本つける？」

魔物にも遭遇しないのでしばらく黙々と歩いていたが、ふと思い出したようにアンドラーシが俺に尋ねた。

魔忌香呂の効果がどの程度あるものなのかわからないが、昨日アンドラーシと会ってから、魔物に一度も遭遇していない。ただしこれは、彼女の言う通り山裾に近い方向を歩いているせいもあるのかもしれない。

考えてみれば、ファリマ・ドビトークにしろキサド山脈にしろ、標高が上がるに連れて魔物は多くなったのは事実だ。

そうは言っても、道を外れれば迷うし、外れずにいれば道は奥入ってくしで、これまで選択肢になかったのもまた事実だけど。

「いや、起きてる間はいい」

短く答える。効果があることを期待すれば、魔物回避アイテムには夜間にこそ力を発揮して欲しかった。そうすれば安心して休憩を取ることが出来る。

「でも、怖いじゃない」

「どうせ使うなら夜間に使った方が良い。俺が起きて対応出来るなら良いけど、せっかくあんたがいるんだったら俺だって少しはゆっくり休みたい。その間、あんたに何とかしてくれったって無理だろ」

「無理よ」

「……だから。今ならある程度は俺が何とか対応出来る可能性がないでもない」
「……随分弱気な発言じゃないの。今なら俺が守ってやるくらい言ってよ」
「最初から言ってるだろ。守れるほどの腕もなければ、守ってやるつもりも大してない」
「ちょっとぉ」
ふてくされたような声が聞こえるが、生憎とご機嫌を取ってやるつもりもない。
「代わりに剣を貸してやっただろ」
「使えるわけがないじゃないのっ。重いだけよっ」
どうやら俺が貸してあげた余剰の剣は、いたく彼女のお気に召さないらしい。俺としても邪魔だから持っててくれると助かるという気分でしかないわけだが。
それきり、再び黙々と歩いていく。大体、木々が生い茂り、草も伸び放題とくれば、おしゃべりしながら歩く気分でもない。声一つで魔物を誘き寄せるかもしれないんだし、それこそ無駄な体力を使いたくもない。
時折木々の隙間から見える太陽の位置から考えるに、今は昼も間近と言う頃だろう。にも関わらず周囲は暗く、遠くからは奇怪な声が聞こえたりする。
やがてそれらの音に、微かな水音が混ざり始めた。
「水音……」
川が近いんだろうか。
ようやく訪れた変化に、俺は少しほっとした。少なくともこれまで川には出合っていないので、多少なり状況が変わったと言える。
が、次の瞬間、絶望する。
「……とても渡れないわよねえ」
木々を掻き分けて川音の方向へ向かった俺が足を止めて絶句すると、後ろから覗き込んだアンドラーシがため息混じりに現実を伝え

た。言われなくたってわかってる。
　断崖絶壁と言う奴だ。遥か下方に、ドウドウと音を立てて流れる急流が見えた。対岸も木々に覆われた山で、どうやら向こう側までファリマ・ドビトークは続いている。ロンバルトではない。
「これって、わたしが見た川と同じかしら」
「国境の川？」
「そう」
「さあね」
　その可能性は高そうだけど、だとしたって渡れなきゃ話にならない。次の方向性としては、可能な限りこの川を辿っていくってところだろうか。どこかで渡れる場所にめぐり合えるかもしれないし、向こう側に渡って川沿いに歩けば、ロンバルトの地に下りられることになる。
　そこから川に沿ってしばらく歩く。アンドラーシは、あろうことか、小さく鼻歌なんて歌い始めた。
　心細さと恐怖を紛らわせる為だなんてことには全く気がついてやることが出来ず、俺は真剣に神経を疑った。
　魔物巣食う森で迷って鼻歌を歌う女……シュール過ぎる。
「あ、またあった」
　鼻歌が途切れ、アンドラーシが小さく呟くのが聞こえた。ちらっと振り返ると、アンドラーシは脇に生えた木の根元に目を向けながら歩いて来るところだった。
「あったって、何が」
「石」
「……石なんて数えてたらきりがないと思うけど」
　そっけなく答える俺に、アンドラーシが「それはそうだけどっ」と唇を尖らせていそうな声で反論する。
「綺麗な石なんだもの。さっき見たのは、綺麗な青だったわ。今のは赤よ。こんなに鮮やかな色をしてるんだから、宝石みたいって思っちゃうわよね」

「え？」
青や赤の石……。
「魔法石だ」
足を止めてぽつっと呟いた俺に、アンドラーシがぶつかってきた。それから顰め面で俺を見上げる。
「何？　魔法石？」
「それ、どこにある……」
後方を振り返ったまま足を止めた俺の視界の隅で、不意に草むらが不自然に揺れた。魔物か？　咄嗟にそう判断して、俺はアンドラーシの腕を無理矢理引っ張った。自分と位置を入れ替えるように、強引に後方へ押しやる。
「きゃあっ。何すん……」
アンドラーシはまだ何も気づいていない。呑気に文句を言いかけるが、俺が剣を構えているのを見て言葉を飲み込んだ。途端、草むらから予想通り巨大な蛾が舞い上がった。グルームウィングという魔物だと以前聞いたことがある。
「アンドラーシ、息を止めてろっ」
「無茶言わないでよっ」
反論を受け流して俺自身も息を止めると、剣を一閃させた。図体は一メートルほどとでかいが、さして攻撃能力があるわけじゃない。そのぶよぶよした本体が切断され、緑色の体液が飛び散る。そして同時に、空中に光る粉が撒き散らされた。
こいつの場合、厄介なのはこの粉――燐粉だ。毒成分を含み、これを吸い込むとしばらくの間動けなくなる。麻痺状態に陥るというわけだ。そしてそれを嗅ぎつけるかのように、大物の魔物が現れるとシサーに忠告されたことがあった。
「粉を吸い込むな。行くぞ」
片腕で鼻と口を覆うようにしながら、アンドラーシの元へ戻る。そのまま腕を引っ掴んで、駆け足でその場を離れた。あの辺りに魔法石があったはずなのに惜しいが、探していて麻痺していては仕方

がない。
「ぷはっ、はあ、はあ。何あれ？　あれも襲ってくるの？」
「襲うと言うほどのことはしやしないが、あの粉が毒だ。動けなくなったところに、更に魔物がやってくる」
「ええっ？」
「だから吸い込むなって言っただろ。出来るだけ離れるぞ」
「はあいっ」
川沿いからは離れないよう気をつけながら足早に進み、ようやく俺はアンドラーシの腕を放した。
「でも、凄いわね」
「何が」
「だって、凄く速い対応だったもの。やっぱりあなた、強いんじゃない？」
「気がついたのが早かっただけ。それに、このくらいは誰でも出来る」
「……わたし、出来ないわよ」
「あんたはね」
この世界で未だに驚くのが、人々の魔物への免疫のなさだ。
こんな、魔物が当たり前のように跳梁跋扈するような世界であれば、誰もが魔物への対応をある程度心得ていてもおかしくないと思うのは、多分余所者なればこそだろう。
「一年半もこんな生活してれば、嫌でもあのくらい気がつくようになるさ」
半ば独り言のように呟くと、アンドラーシが拗ねたような声を出した。
「普通は、魔物は集落や農地を襲ったりしないのよ。わからない人が大半だと思うわ」
「そうみたいだな」
人は、基本的に自分の居住地から大きく離れて移動はしない。せいぜいが近隣の農地や林に出るくらいで、その程度ならば時間帯さ

え気をつけていれば魔物と遭遇せずに済む。そのせいか、魔物と戦ったことはおろか、遭遇したことさえない人間も多そうだ。行商人や冒険者、兵士などの特殊な職業の人間を除けば、俺の方が遥かに魔物と戦闘した経験は豊富なんだろう。

「ねえ。カズキはどうして一年半もこんな生活をしているの？」

「別にファリマ・ドビトークを彷徨い続けてるわけじゃないよ」

「わかってるわよそんなこと！　だけど、魔物と戦い続けるような生活をしてきたってことなんでしょう？」

「……ま、ね」

「どうして？」

「人にはそれぞれ事情がある」

説明をするつもりが毛頭ない俺の言葉に、しかしながらアンドラーシはあっさり頷いた。

「そうね。それは言えるわ。じゃあそれは今度ゆっくり聞かせてもらうとして」

いや、話すつもりは全くないんだが。

「さっき言ってた魔法石って言うのは何なの？」

「ああ、そうだ」

思い出した。そのことは言っておいた方が良いだろう。……って言うか、どうして知らないんだよ。この世界の住人じゃない俺でさえ知っているものを。

「青・赤・オレンジ・紫・白の五色の石だ。それぞれ、魔力がなくても魔法攻撃を発動する。大きさによって効果は違うが、どちらにしたってあると助かる。今度見つけたら拾ってくれ」

「へえ？　そんなものがあるなんて便利ねえ。高いんじゃないの？」

「だから落ちてると言ってる。そうそう拾えるものじゃないけど、こういう山の中なんかには落ちてることがちょくちょくあるんだ。忘れてた」

拾えるなら、それに越したことはないんだ。それならアンドラーシだって戦力になり得る。

そう思った俺は、自分が持っていた分を取り出してアンドラーシに手渡した。
「今俺が持っているのがこれだけ。渡しておく。今後拾ったら、あんたが持っていてくれたら良い。いつでも使えるように、手近なところにしまっておいてもらえると助かる」
「わかったわ！　任せておいて！」
それほど大変なことを頼んだつもりはないのだが、アンドラーシは重要任務を与えられたように、意気揚々と頷いた。

◆　◇　◆

しばらく歩いていると、やがて日が翳ってきた。
野営にちょうど良さそうな岩場を見つけたこともあって、今夜の行程はここまでと定める。だいぶ地肌が見えてきているところを見ると、もう少し先では林が途切れるのかもしれない。
巨大な岩石が幾つか組み合わさって出来たような岩場の陰で、今夜の休憩を取ることに決めた。
相変わらず緩い斜面の途中で、疎らになりつつあるとは言え、まだ木や草の生い茂る林の中だ。多少心許なくはあるが、それでもこの岩石の陰さえない剥き出しに比べれば、随分と気分的にマシだった。
「あんたは、岩のそっち側で休憩してくれ」
俺が岩の裏側を示すと、アンドラーシは仰天したように目を真ん丸くした。
「えっ？　カズキはどうするの？」
「俺はこっちにいる」
「嫌」
……。
「同じ側にいたら、こっち側に近付いてくる魔物しか気づけないじゃないか。せっかく二人いるんだから、それぞれが違う方向を見張

っていれば二方向カバー出来るだろ」
「そうね。でも嫌」
この女。
思わずぺしっと頭を叩くと、アンドラーシが「きゃっ」と小さな悲鳴を上げて、不満顔で俺を見上げた。
「信じられない。このわたしの頭を叩くなんて。撫でられたことしかないのよ」
「ああ、そう。それは貴重な経験が出来て良かったね。……だから、あんたはあっち側だって言ってるだろ」
「嫌だって言ってるじゃないの」
「じゃあ俺があっちに行く」
「じゃあわたしもそっちに行く」
「あのなあっ」
辟易して声を荒げるが、アンドラーシはこれっぽっちも堪えていないかのようだった。むしろ威張るように腰に手を当て、豊かな胸を反らす。
「岩を挟んで向こう側に一人なんて怖いじゃないの。嫌よ。絶対に嫌」
「本来は一人だったはずだろ？　だったらそのくらい出来なくてどうするんだよ」
「一人のはずだったかもしれないけど、一人じゃないもの」
ああ言えばこう言う……。
うんざりして、俺はそれ以上の説得を諦めた。やめた。これ以上無駄な問答を繰り返して、体力を必要以上に損ないたくない。
げっそりと腰を下ろして岩に寄りかかると、アンドラーシが満足したように隣に腰を下ろした。
「大丈夫よ。香呂があるんだから。見張ってなくたって魔物は来ないわ」
「そう思うんだったら、見張ってたって良いと思わないのか」
「思わないの。そう思ってたって一人は怖いんだもの」

「あ、そう。じゃあもう良いから、さっさと食って寝てくれ。自分の分くらい、食糧は持ってるんだろ」
「持ってるわ。分けてあげようか？」
「結構です。俺は自分で持ってる」
元々大して日が差さない山の中とは言え、夜になって日が落ちれば、周囲の闇は一層深くなる。
ごそごそと荷袋を漁っていたアンドラーシは、小さな声で尋ねた。
「ねえ。火は焚かないの？」
「焚かない」
「どうして？」
「亜人型の魔物は、火の傍に人間がいると知ってる。却って誘き寄せることになりかねない」
「そうなんだ……」
呟くように言って、アンドラーシはそれからしばらく食事に専念した。俺も静かに携帯食を口に運びながら、体の重さが取れないことをしみじみと感じる。
少なくともこの山を抜けなければ、この疲労が回復されることはないだろうな。
魔法石の中に回復魔法を発動するものでもあれば良いのに。生憎と攻撃に有利に働く力しか発動されないからな……。
「ねえ」

第3部第2章第14話　生への闘争（4）

黙々と携帯食を口に運んでいたアンドラーシが、やがてぽつっと口を開いた。月の明りも届かない闇の中、その表情まではよく見えない。

「カズキは、いろいろ詳しいわね」

「詳しくないよ。別に。さっきも言っただろ。こんな生活をしてれば、嫌でもわかる程度のことだよ」

「そう？　……カズキは、どうして一人でこんなところを彷徨ってるの？」

堅いパンを口に放り込みながら、岩に背中を預ける。ついでにゴツンと後頭部をぶつけて、空を仰いだ。

本当、何をしているんだろうな。俺は。

「……あんたは？」

「わたしは」

そこでアンドラーシは歯切れ悪く口篭ると、一旦押し黙った。昨日も思ったが、どうやら後ろ暗いところがあるようだ。

「わたしは……好き好んでこんなところにいるわけじゃないわ」

「それは俺だって同じだよ。……いや、半分嘘か」

「えっ？　好き好んでこんなとこを彷徨ってるのっ？」

そうじゃないけど。

「自分を少し、試してみたかった」

かわし続けるのが面倒で言ってみたものの、詳しく話す気にもなれない。その上、自分の気持ちも理解し切れていない俺は、上手い言葉を見つけられずにそれきり黙った。続きを待っていたらしいアンドラーシは、俺が無言なのを見て取って、改めて口を開いた。

「試すって？　腕試し？　度胸試し？」

「……生きたいのかどうか、知りたくて」

「はあ？」

それきり、しばしの沈黙が返る。ややしてからアンドラーシが、沈黙を破った。
「生きたいに決まってるじゃない。何言ってるの？　意味がわからない」
「わからなくて良いよ」
「それじゃあ会話にならないの。意味がわかるようにちゃんと話して」
「嫌だ」
「ちょっとっ。会話する気あるっ？」
あるように見えてたんだろうか。今更そんな疑問が出る辺りを疑問に思うんだが。
「それとも、死にたくなるような辛いことでもあったの？」
……。
「死にたいとは言ってない。積極的に死を望んでるわけでもなくて、でも別に死んでもいーかって思ってた」
「なーによ、それ。考えらんない」
アンドラーシには本当にわからないんだろう、多分。人を押しのけてでも生きようとしそうな気がして、微かにおかしいような気がする。生命力が強そうとでも言うんだろうか。自分で自分の身も守れないくせに、何だかこの人は死にそうにない。
「わたしは絶対嫌だわ、死ぬの。だからここにいるんだもの。何が何でも生きてやろうって思ってるわ。そりゃ、魔物に襲われた時は、さすがに諦めるしかないような気もしたけど」
「死ぬのが嫌だからここにいる？」
「……あなた、どこの人だっけ？」
「え？」
「国。……ロドリス、じゃないわよね。ロドリス語、わからないって言ってたものね」
「違う」
「信じるわ。……牢獄に捕らえられてたの」

想像外の打ち明け話に、思わず俺はアンドラーシを再び振り返った。

俺の視線を受け止める眼差しは真剣そのもので、嘘を言っているようには思えない。大体そんな嘘を必要とする理由もない。

「牢獄？」

「罪状については聞かないでよね。話したくないの」

「別に聞かないけど」

「あのままじっとしてたら、わたし、今頃処刑されてるわ。身に覚えもない罪で処刑されるなんて、真っ平御免よ。わたしは生きるの。生きて幸せになるの」

俗物ぶりを全開の言い方が、彼女の性格を現している。わかりやすい人だな。良くも悪くも素直なんだろう。

「ふうん。じゃあ脱獄して、ロドリスから逃げて来たってわけだ。それでロンバルトを目指してるのか」

「最終目的はヴァルスだってば。ロンバルトに行ったって、知り合いなんかいないもの。どう生きたら良いのかわかんないわ」

「あんた、娼婦とかじゃないの？」

俺の受けた印象を率直に尋ねてみると、アンドラーシは不満満載の顔で俺を睨みつけた。

「違うわよ。失礼ね。どこがそう見えるって言うの」

「わからないけど。何となく。……そうだな。自分の売り方を知っていそうな感じがするから、かな」

俺の回答がお気に召さなかったのか、アンドラーシはそれきり黙った。俺もそれ以上は何も言わずにいると、やがて吐息が聞こえる。

「……そうかもね」

その言葉は、何やら深い意味が込められていそうだった。少し興味を惹かれるが、俺が問うまでもなくアンドラーシがその意味を語る。

「自分の売り方を知ってると言えば、そうなのかも。だけど、逆に言えば他に何も知らない。……馬鹿なんだわ、わたしってきっと」

語るが、今ひとつよくわからない。追及するつもりもない俺が沈黙すると、アンドラーシは勝手に続きを喋った。
「ねえ。好きな人っている？」
いや、訂正。続きを語ったのではなく、話を転換した。
唐突過ぎる質問に面食らうながらも、脳裏にユリアの笑顔が蘇る。心が微かに疼き、心臓が僅かに音を立てた。
どうして突然思い出したんだろう。忘れていた、と言うより、葬られてしまった感情かのようだったと言うのに。
「わたしね、大好きな人がいるの」
俺の回答は期待していなかったらしい。俺も答えるつもりはなかったので、黙ってアンドラーシの言葉を聞く。
「初めて大好きになったのよ。かっこ良くて、上品で、頭も良くて、とても丁寧に扱ってくれて」
「ふうん」
「だけど、全部違ったみたい」
意味を掴みかねて、俺はそっと眉を顰めた。この闇では、俺の表情はアンドラーシに見えていないだろう。
「愛してるって言ってくれたわ。だけど嘘だったの。でもわたしはそんなこと気がつかなかったから、信じて、嬉しくて、騙されて……」
「……」
「……投獄されちゃった」
恋愛沙汰と投獄がどう結びつくのか、俺の想像力では今ひとつストーリーが組み立てられなかったが、ともかく彼女が好きになった男に騙されて、挙句にこんなことになっているのだろうと言うことだけはわかった。
「そりゃご愁傷様」
「ちょっと。女の子が傷ついてるのよ。他に言いようはないの？」
「俺にはこれ以上の言葉はかけられない」
俺の対応がご不満のように「もう」と呟くと、アンドラーシはふ

うっと吐息をついた。俺と同様、岩に深く凭れて空を仰ぐ気配がする。

「馬鹿だったんだなって今は思うわ。でも、もうしょうがないかって思ってるけど」

「ふうん。随分前向きだね」

「前を向くしかないのよ。だってわたし、幸せになるんだもの」

やけに自信満々に言い切られて、ちょっと聞いてみたくなる。

「あんたの『幸せになる』って、どういうことを言うの」

「んー？　そうねえ」

少し考えるように黙ったアンドラーシは、やがてぽつぽつと俺の質問に答えた。

「お金は必要よね。おいしいものをたくさん食べて、お洒落だって必要だからドレスや宝石もたくさん買って。使用人はたくさん欲しいわ。今は短くなっちゃったけど、また髪を長く伸ばして綺麗にするの。お芝居や演奏会にも行きたいし、ダンスパーティも大好きなのよ、わたし」

随分と贅沢なお姫様だ。

「それが幸せ？」

「そうよ。何不自由なく暮らしたいわ。楽しく過ごすにはお金と地位が必要だわ」

「俗物」

「何が悪いのよっ。それに、そう……そうね……」

勢い良く俺に怒鳴り返したアンドラーシは、それからややしおらしい声で呟いた。

「今度は、愛する人に、愛されたいわ」

「……」

「お金も家も、贅沢も必要よ。だけど、愛する人がそばにいることが、今は一番大事だわ」

「裏切られたのに？」

「裏切られたからよ」

少し意外な言葉だ。男に騙されたのなら、もう男なんて信じないかと思ったが。

俺の感想など知るはずもなく、アンドラーシは真摯な声で続けた。

「今でもわたし、その人のことを大好きなのよ。もしもわたしを愛してくれるなら、今だって幸せになれるわ」

「そんな男なのに？」

「しょうがないじゃない。わたしが好きなんだもの。でも、彼が駄目なの。わたしじゃ駄目なの。だから、それも仕方がないわ。だったら、いつか」

小さな、切なさ交じりの吐息が挟まった。

「いつか、わたしが愛するようになった誰かに、その時は愛されたいわ」

「……あんた、ホントに前向きだね」

さっきは少し揶揄するような響きがあったが、今度の言葉は素直な気持ちだった。

本当に前向きだよ。恨むでもなく、憎むでもなく、それでもまだ好きだと言えるのか。それでもまだ、次の恋愛に希望を抱けるのか。

「そう？」

「凄いよ。本当にそう思う」

俺には到底そんなふうには考えられそうにないな。

「じゃあ、カズキ……」

ずしん。

アンドラーシが、逆に俺に問い掛けた時、地面から振動が伝わった。

「何？」

一瞬言葉を飲み込んだアンドラーシが、声に緊張を孕ませて小さく問う。

ずしん。

その間も、もう一度、振動が伝わってきた。重ねるように、遠くからガサガサガサっと木々を大きく揺らすような音が聞こえる。

「魔物……？」
「だろうな」
岩から体を起こし、抜きっ放しのレーヴァテインを握り、辺りに視線を凝らした。
「アンドラーシ」
「はい」
「香呂を焚いておいてくれ。万が一にもそれで払えるなら助かる」
望みは薄いような予感がするけどな。
その呟きは胸の中にだけしまい、アンドラーシが素直に香呂を探す音が聞こえた。その間に俺は、出来るだけ音の出所を探るように闇を見据え、耳を澄ます。
「つ、つけたわ」
「それ、大事に持って離すなよ」
「うん」
「こっちだ」
正確な位置はわからないが、概ねあちらの方角だと見当をつけると、俺は逆方向へアンドラーシを促した。ずしんずしんと言う重い地響きは、少しずつこちらへ向かって移動してきている。
どんな魔物だ？　見えないから、正体が全く掴めない。ただ、その音から図体がでかそうだと言うことはわかるし、となると俺が勝てる自信はちょっとない。逃げ切れるものなら逃げ切りたいところ……。
出来るだけ物音を立てないように岩を離れ、再び林の中に踏み出す。
途端、物音が聞こえなくなった。思わず足を止めて振り返る。
「いなくなった……？」
アンドラーシが小さく呟いた。それには答えず、俺も黙って後方の闇に目を凝らしていた。
そこには、ただ静寂が広がっている。
本当にいなくなったんだろうか。だとすると、下手に動く方が却

って危ないようにも思うんだが……。
躊躇った瞬間だった。
「きゃああっ！」
俺たちが振り返っているほんの十数メートル先の草陰から、突然巨体が躍り上がった。先ほどとは比較にならない地響きが、足から伝わってくる。咆哮と共に姿を現したそれは、全長三メートルはありそうな巨大熊だった。……違う。アウルベアーだ。熊のような体躯をしているが、口元にフクロウのような巨大な嘴を持っている。
「走れっ！」
身を潜めて近付いてやがったとは、馬鹿じゃない。
反射的にアンドラーシを促し、先ほど向かおうとしていた方向へ走り始める。それに刺激されたように一際高い咆哮が上がり、次いで草木を薙ぎ倒すような音が追って来た。
「アンドラーシ！」
腕を引っ掴んで走るアンドラーシから返事はない。しているだけの余裕がないんだろう。俺だってその顔を見ている余裕もなく怒鳴る。
「俺が合図したら、左へ行け」
「え、えっ？」
木々の合間から、俺たちの進行方向の風景が垣間見える。
「前方の、左側に、岩壁が見えるだろうっ？」
先ほど俺が立てた予想は間違いではなかったらしく、林はもう間もなく終わりを見せようとしていた。途切れた先は、左手に巨大な岩壁が聳え立っていて、その横を幅広の道が続いているように見える。いや、すぐに行き止まりなのかもしれないが、それはここからではまだわからない。
背後からは、アウルベアーがみるみる肉迫してくる音が迫っていた。もうどのくらい距離があるのか、俺には判断がつかない。
「あの壁にぴったり張り付いて、手前の灌木の陰に身を隠せっ！」
「そんな！」

「魔物は動く物を追う。俺を追って、あんたの前は気づかずに通り過ぎるはずだ。動かずにじっとしてれば良い」
「カズキはどうなるのよ！　嫌よ！　助けられてばっかりなのにっ……」
「感謝してくれるなら、言う通りにしてくれ！」
もう少しで林が途切れる。
追ってくるアウルベアーが薙ぎ倒したらしい木の枝が、俺の背中を掠って倒れる感触があった。
「言ってるだろっ。俺にはあんたまで守ってやれる余裕がないんだ！　一人なら何とでもする！」
わかってくれたかくれなかったか、アンドラーシの返事を待たずして目の前が開けた。
アンドラーシの腕を放し、走る速度は緩めないまま、俺は力一杯怒鳴った。
「行けっ！」
林が途切れた。

第3部第2章第15話　prolusio（1）

アンドラーシがうまく隠れられたのかは、俺にはわからない。
あっちを追って行ってしまったらどうしようか――そんな心配もないわけじゃなかったが、アウルベアーの重い足音と荒い息遣いが、俺のすぐ背後に迫って来ていた。杞憂に終わったようだ。
（頼んだぞ……っ）
――レーヴァテイン！
空気を切る音がしたと感じた瞬間、俺は力一杯地面を蹴った。ほぼ同時に一瞬前まで俺がいた場所にアウルベアーが突っ込んで破砕される。辛うじて避けた俺は地に足を着くと同時に剣を身構えて振り返った。アウルベアーは丸太のような野太い腕を破砕して抉った地面に突っ込んだまま、獰猛な目付きで俺の方を向く。
咆哮が上がった刹那、剣先から炎の奔流が噴き出した。うねるようにのたうって、敵目掛けて一直線に迸る。岩場を目指して走ったのは、この為だった。燃え移るものがないここなら、遠慮なくレーヴァテインの魔力を放出することが出来るからだ。
アウルベアーの体を覆う毛に、炎が燃え移った。それを消そうと荒々しく両腕を振り回すアウルベアーに、更なる攻撃を浴びせるべく剣の魔力を重ねて発動させる。剣先から生み出された炎狼が、これまた咆哮を響かせて空を蹴った。
――――――どくん。
（……！？）
その瞬間、何か――何とも言いようのない感覚が俺を襲った。
衝撃、そうじゃない、実際に体感したわけじゃない。精神的なぶれ、違う、違和感？　内面的な衝撃というのが一番しっくり……。
いや、そんなことを考えてる場合じゃない！　今は目の前の敵を

片付けることが優先だ！

今何があったのか、何を感じたのかすらよくわからないが、俺は強引に意識を切り替えた。

炎狼は狙い通り放たれて、アウルベアーに襲いかかっている。何も問題はない。

俺が短い空白を漂っている間にも、アウルベアーと炎狼は激しくもみ合っていた。いくつもの唸りが重なり、アウルベアーの硬そうな毛は部分的に炎を噴き上げている。炎狼に裂かれただろう部分は、焼け爛れたような生々しい傷跡を見せていた。

だが、程なくして炎狼が振り払われた。岩壁に向けて跳ね飛ばされ、叩きつけられると同時に消滅する。

敵の消失を認識したらしいアウルベアーは、誇らしげな雄叫びをあげた。赤く怒りに燃えるような眼差しを俺に向ける。ぶるんと背中の毛を一震いすると、四肢を地面についた。鼻息荒く地を蹴る。

「クアアアッ！」

空気を低く震わせる咆哮と共に、俺へ向けて突進してきた。

横へ跳ね飛びざまに、剣で切りつける。が、さしたるダメージを与えられた様子もなく、アウルベアーが左前肢を振り上げた。俺の腹に直撃し、衝撃と同時に爪が肉を抉る鋭い痛みが走る。勢いそのままに吹っ飛んだ俺の体は地面に叩きつけられ、背中で荒い岩地を滑った。アウルベアーは、間髪入れずにこちらへ突っ込んでくる。

逃げなきゃ轢かれる。そうは思うが、体が思うようには動かない。上半身を起こし、間近に迫ったアウルベアーに視線を向けたところで、不意にその動きが停止した。自分の意志ではなく、無理矢理引っ張られて止まったような不自然な急停止だ。見れば、その足元から動きを封じるように触手が絡みついているのが見えた。――ノームの手！？　どうして。

（アンドラーシ！）

思うように動けないことへの怒りで哮る（たける）　アウルベアーの後方に、アンドラーシの姿が見えた。ピッチャーのように投石した姿勢のま

ま、荒く肩で息をしている。顔面はここから見ても蒼白だ。
アウルベアーの動きが封じられている間に片をつけるべく、俺は跳ね起きた。そこへ更にアンドラーシが魔法石を投じる。中空に出現した氷の矢がアウルベアーに襲いかかった。効果を理解して投げているとは思えないが、的確な攻撃だった。アウルベアーは、捉えられていない前肢を持ち上げて二本立ちになると、牙を剥き出しにしながら上体を捻る。
団扇のような手で襲い来る氷矢を薙ぎ払う背中に向かって、俺は走った。氷矢がいくつも突き刺さる。その肩を狙って剣を翳し、地を蹴った。突き刺さった瞬間、レーヴァテインが火柱をあげる。目の前が赤く染まり、アウルベアーが炎に包まれ――――

――――どくん。

視界がぶれた。
脳を直接襲ったかのような激しい衝撃を感じた。

目の前には一面の黄色い風景――累々と続く砂漠。
吹きすさぶ黄色い風に、黒いローブがはためく。腕に抱えるのはぐったりとしたユリア。
目の前で、首が、飛ぶ……――

「うわあああああっ！」
「カズキっ？　カズキ、どうしたのっ？」
アンドラーシの叫びと共に、今見た光景が消滅した。……な、何だっ？
「カズキ？」
俺が握るレーヴァテインの刃は、まだ燃え盛るアウルベアーの体に突き刺さったままだ。その巨躯は動く様子はなく、力尽きて地に伏していた。
目を見開いて呆然としたままそれらを見て取り、ひたすら呼吸を繰り返す。

今俺が見たものは何だったんだ？

「カズキ、火傷しちゃうわ」
「アンドラーシ……俺は今、ずっとここにいた……？」
「え？」
質問の内容がわからないと言うように、アンドラーシが目を瞬く。
炎を噴き上げる血濡れた剣を握ったまま、俺は虚空を見つめて茫洋と繰り返した。
「俺は今、ずっとここにいた……？」
「いたわよ？」
「じゃあ、何か違う景色が見えたりした？」
「してないわ？　何よ？　どういうこと？　幻覚でも見たの？」
「……いや……何でもない……」
幻覚……。違う。幻覚じゃない。俺は確かにあの光景を知っている。
だけどどうして突然、風の砂漠の記憶なんて。
まだ炎を上げる剣を抜いて拭うと、鞘に納める。アウルベアーは動く気配がなかった。氷竜を屠った剣の威力は伊達じゃない。
「アンドラーシ、怪我は」

まだどこかぼんやりとしたまま、俺はようやくアウルベアーの死体から離れた。凍りついたかのようだったアンドラーシが、呪縛を解かれたように駆け寄ってくる。

「わたしは怪我なんか一つもないわよっ！　わたしじゃない、あなたでしょうっ？」

「俺？」

言われてみれば、いや、思い返してみればずっと痛かったように思うが、改めて腹部に視線を落とすと、なかなかのスプラッタぶりだった。マントも上衣も切り裂かれ、そこが夥しい血に染まっている。

内臓に届くほど深く抉れていないのは自分でわかっているが、それでも傍から見てれば慌てるには違いない。

「止血するから、座って！」

その言葉に、俺は大人しく従った。早くここを離れたい気持ちもあるが、新たな魔物が駆けつけるまでは、多分まだ少し猶予があるだろう。それなりに強力な魔物であるアウルベアーがうろついていては、恐らくこの近辺に小物は近付いていなかっただろうから。

「もうっ……こ、こんなに血が出てたら、痛いじゃないのっ……」

なぜかアンドラーシは涙声だ。これほどの怪我を見るのが初めてなのかもしれない。

岩壁に背中を預けて深く息をつく俺の傍に座り込み、アンドラーシが荷袋を漁る。清潔そうなタオルと、それから薬草を引っ張り出した。

「ど、どうすれば良い？　やり方がよくわからないの」

「貸して」

衣服をはだけて、傷口を確認する。左の脇腹にほど近い腹部に、十センチほどの幅の傷が三本走っていた。深さは一センチくらいだろうか。あいつの爪が抉り取っていったんだろう。

タオルを受け取って、一度腹部を押さえて血を拭う。それから薬草を患部にあてて、その上から改めてタオルを押し当てた。

「お、押さえてれば良い？」
「自分で押さえられる」
「でもこれじゃあ動けないわ……包帯の代わりになるものがあれば良いかしら？」
「あれば助かるけど……あるの？」
「あるわ」
そう言ってアンドラーシが引っ張り出したのは、鮮やかな小花模様の散ったショールのようなものだった。見るからに上品な、仕立ての良いものだ。
「え？　ちょ、汚れる……」
「いいの。いらないわ」
そう言ってアンドラーシは、躊躇いなくショールを広げた。手早く適当なサイズに折り畳むと、俺を抱き締めるように正面から背中へ手を回した。タオルを抑えるように、包帯の要領でショールを巻き付ける。
「きつい？」
「平気。……いいの、本当に。って言っても、もう手遅れだけど」
俺の腹に巻きつけられたショールは、既に血で汚れている。アンドラーシは、ふっと寂しげに微笑んだ。
「いいのよ。もういらないわ。ロドリスがくれた物は。そりゃあ、必要なものなら持っとくけど。思い出や装飾という意味なら、もういらない」
「ありがとう。助かった」
真っ直ぐに礼を言うと、アンドラーシが目を丸くした。それから、やや慌て気味に顔を伏せる。
「当たり前じゃないの。人の命とショールじゃ、比較にならないわ」
「命ってほどじゃないけど」
「ひねくれたこと言わないのっ。……それに、助けてもらったのはわたしの方だわ」
「そう？」

そういうつもりがなかったとは言わないが、何にしても俺にはあするしか戦いようがなかった。
軽く肩を竦めて、岩に寄りかかったまま立ち上がろうと試みる。地面を滑った背中も無傷とはいかず、正直痛かったが、いつまでもここにはいられない。早くもう少し身を隠せるところに移動するべきだ。
「ねえ、火傷はしてないのね」
「してないよ」
無理矢理立ち上がる俺に、アンドラーシが慌てて手を差し伸べる。
「もう少し休んでからにしたら？」
「休める場所を見つけてから落ち着いて休む方がマシだと思う」
「でも」
「そのうち別の魔物が来るかもしれない」
俺の言葉に、アンドラーシは制止の言葉をようやく飲み込んだ。代わりに、俺の荷物を抱え込む。
「わかった。じゃあ、早く移動しちゃいましょう。その代わりに、わたしが荷物を持つからね」
「……いいよ、別に。持つよ、自分のくらい自分で」
「嫌。わたしが不愉快だから持たせてあげないわ」
……。
どうしてもと言うのなら、それは別に構わないんだが。
「じゃあ、頼むよ」
軽く肩を竦めると、アンドラーシの言葉に甘えることにする。この程度の怪我なら、今までにだって散々あったことだ。トラフアルガーやヒュドラの時に比べれば、我慢出来ない傷じゃない。
そうは言っても五体満足のようにはいかず、やや朧な足取りで歩き出す俺に、アンドラーシがついて来る。
「ねえ、どうして火傷をしなかったの？　あんな炎の中にいたのに」
「いろいろとね。炎のダメージは受けないんだ、俺」
「ええっ？　凄い、どうして」

「特殊体質」
「ホント？」
「嘘」
痛みを紛らわせるつもりで、軽口を叩く。アンドラーシが拗ねたように「ちょっとぉ」とぼやく。
……ああ。言い忘れていた礼がまだあったな。
「そうだ、もう一つ」
「何よ」
「魔法石、助かったよ。ありがとう」
「ど、どういたしまして……」
ぼそぼそと照れ臭そうなアンドラーシの返事を聞きながら、俺は、先ほどの幻覚のことを思い出していた。
俺の目にだけ見えた、風の砂漠の風景。
あれは一体、何だったんだろう……。

◆　◇　◆

アウルベアーとの遭遇から一日、俺たちはようやく国境の川を渡る橋を見つけることが出来た。
橋があると言うことは、先人がどこかへ向かう――あるいは、どこかから来たことを示している。進路に希望を持った俺たちは、そこから更に彷徨うこと二日で、とうとうファリマ・ドビトークから外へ続く道に辿り着いていた。
「ああ、ようやくロンバルトなのね」
ゆるゆると外へ続く下り坂も、次第に周囲の木々が途切れていく。まだ夕刻前で空は青さを残していて、久々に見る青空が爽快な気分にさせたのは確かだ。
「見て。集落よ。村かしら。町かしら」
俺たちの歩く道は、草原から田畑へと伸び、遠方には集落の影さえ見える。アンドラーシでなくとも、はしゃぎたくなると言うもの

だった。
「村じゃないか。防護壁もなさそうだし。あっちに見える街は、少し大きそうだな。防護壁がある。でもちょっと遠いな」
「そうね。でも、どっちに行ったって人がいるのよね。今日は宿に泊まれるんだわっ」
「人はいるんだろうけど。魔の山を抜けたからと言って、一概に安心は出来ないと思うよ」
「えっ？　どうしてっ？」
「草原にだって魔物はいるんだ。旅人だって襲われたりするだろ」
「そ、そうか。そうよね」
「ま、戦時中だし、ロンバルトは軍隊がいるだろうから、そうそう遭遇することもないだろうけど」
「わかってるなら先にそう言って！」
そう言っている間にも、下り坂は次第に平坦なものへと変わる。
周囲もいつの間にか木々が途切れ、どこまでも続く平原へと変わった。
ファリマ・ドビトークを脱出したと言えるだろう。そこまで来て、俺はようやく一息ついたような気分になった。
さて。この先だが……。
「アンドラーシ」
「ん？」
足を止めた俺に気がつかず、アンドラーシは弾むような足取りで数歩先へ進んだ。それから気づいて振り返る。
「こっから先は、好きにすれば良い」
「え？」
「あんたはヴァルスを目指すんだろ。どういう進路を取るのか知らないけど、あとは好きに行けば良い」
アンドラーシが裏切られたような顔で俺を見つめた。
「ヴァルスのどこを目指しているのかわからないけど、どう行くんだとしても、戦禍の過ぎたロンバルトなら魔物はそう襲っては来な

いと思う。町から町へ昼間に移動すれば、それほど危険じゃないだろう。頑張って」

「ま、待ってよ」

元々、予定にない同行者なんだ。あっさり言って方向転換しようとする俺を、アンドラーシが追いかけて来る。

「薄情モノね、相変わらず！」

「ひどい言われようだな。まあ、いーけど」

「カズキはどこに向かうって言うの？」

「俺は、エルファーラに向かう」

ファリマ・ドビトーク沿いに南下して行ければ、どこかでエルファーラに入れるはずだ。もしかするともう一度ファリマ・ドビトークの山裾くらいは入らなきゃいけなくなるかもしれないが、エルファーラなら国境越えもさしたる苦難じゃないだろう。

答えながらもすたすた歩く俺に、話しかけるアンドラーシもくっついて来てしまう。

「エルファーラに何をしに行くの？」

第3部第2章第15話　prolusio（2）

「人に会いに」
「人？」
「そう」
「わたしも、エルファーラ経由でヴァルスに行ったらいけないの？」
無言で見返す俺に、アンドラーシは『反論したって負けないもんね』とでも言いたげな、強気な視線を向けて来る。
「別に」
「じゃあ決まりよ。わたし、エルファーラ経由でヴァルスに行くの。文句ある？」
「……好きにすれば」
「偶然ね。カズキもエルファーラへ向かうの？　じゃあ方向が一緒だわね。協力し合うのがベストだと思うわ」
そりゃあ、好きにすれば良いとは言ったが。
まあ、こうなるんだろうと予想はしてたけどな。俺の最終的な目的地がヴァルスである以上、レオノーラに辿り着くまでアンドラーシにストーキングをされそうだ。
「もう一度聞くけど、ヴァルスのどこに向かってるの。あんたの進路は、それによって変わると思うよ、正直」
言いながらも歩く速度を一向に緩めずに進んでいく俺に食らいつきながら、アンドラーシは中空を睨むような目つきをした。
「ええとね、確か、そう……レ、レフ……」
「……レオノーラじゃないよな？」
「それって王都でしょ？　違うわ。近郊の大都市って聞いたと思うの」
「近郊の大都市？　レハール？」
「そう！　それよ、レハールだわ」
レハールか……。エルファーラとの国境間近だ。これは振り払え

そうにない。
「ああ、そう。それじゃあ、エルファーラ経由が最も安全だろうね……」
「そうでしょ？」
げっそりと呟く俺の言葉を聞いて、アンドラーシは誇らしげに胸を張った。
そして、意気揚々と俺を見上げた。
「それじゃあ、そろそろ今夜の宿について考えましょうか？」

◆◇◆

ファリマ・ドビトークを出た俺たちが最初に目指したのは、一見して頑強な防護壁があるとわかる大きめの街だった。
理由としては二つある。
まず、アウルベアーにやられた傷が回復しきっていないからだ。
大きな街なら、神殿の恩恵を期待出来る。
ついで、俺が期待する衣類を手に入れる為にも、品揃えの良い大きな街の方が良い。
ロンバルトの国内では、正直なところ余り顔を曝して人前に出たくない。
と言って、以前ロドリスでそうしたように女装するわけにもいかず、フード付きのマントを購入したいと思っているからだ。
使用していたマントもアウルベアーとの戦闘でずたずたになってしまったことだし、丁度良いと言えば良い。
辿り着いた辺境の街オアスンは、静かだった。
大きい街のように思えるが、通りには余り人の姿はない。と言って寂れている風でもなかった。小奇麗で穏やかな街並みだ。雰囲気としては、避暑地や保養地を髣髴とさせる静けさだった。そのわりに防護壁がいやに頑健な造りをしているのは、魔の山近隣の街たればこそだろうか。

「お年寄りが多いのかしらね」
「ああ、そうか」
静かなのは、だからなのかもしれない。
言われてみれば、道をゆったり通り過ぎる女性も、公園でまどろんでいるふうの男性も、みんな老人と言える域に差し掛かっている年配ばかりだった。
若いと言えるのは、警備の兵士だけのように見える。その兵士たちも、余り覇気は感じられなかった。少なくとも、俺をロンバルト王子と見間違えて誰何されるようなこともなかった。
街に辿り着いて真っ先に神殿で回復をしてもらうと、物資を購入する為に街をうろつく。
「今夜はここで宿を探す？　何だか凄く落ち着けそうだわ」
「いや」
うきうきした顔をするアンドラーシに水をさすようで悪いが、俺は早々に否定した。
「早いところこの街を出て、もっと南下する」
「ええっ？　何でよお」
「エルファーラとの国境付近に出来るだけ近付いておければ、明日には国境を越えられるだろうから。少しでも先に進みたい」
「南下して、町か村があるの？」
「知らない」
道具屋か衣料品屋はどこだろう。早く顔を隠せるものを買って、さっさと発ちたいんだが。
「知らないって、なかったらどうするのよ！」
「野宿すればいーだろ。宿がなくたって夜は明ける」
大体、懐事情というものもある。
聞くところによれば、アンドラーシはそれなりの路銀を持っているとのことだったが、俺はシャインカルクの金の大半をシサーに預けっ放しだ。俺も一部を預かってはいるが、こんな行動を予期していたわけではないから、裕福とは言い難い。節約出来る部分はした

いところだ。
　身も蓋もない言い方をする俺に、アンドラーシが半泣きのような表情になった。そんな顔をされても、申し訳ないが進行予定を変えるつもりはない。
　足を止めて、アンドラーシを振り返る。
「だから、好きにして良いって言っただろ？　悪いけど、あんまり俺はゆっくりするつもりはないんだ。今夜、宿に泊まりたいんだったらそうすれば良い。俺は別に止めないし、責めないし、あんただって困るわけじゃないだろ」
「困るわよっ」
　まるでむずかる子供のようだ。両手をぎゅっと握り締め、このままだと地団太でも踏み始めかねない。
「もう何日もゆっくり休んでないのよ。ロドリスを出る前から考えたら、十日くらいは地面で寝てるわ。やっと街についたのよ。お湯も浴びたいわ。ベッドで寝たいわ」
「だから、どうぞ」
「だけどそうしたら、カズキはわたしを置いて行くって言うんでしょう？」
「そう」
「薄情モノっ。わたしが後で困っても良いって言うのね」
「いや、だからここで俺と別れたって困らないだろって言ってる…」
「困るって言ってるでしょっ。まだ別れたくないのよっ」
　痴話喧嘩みたいな物言いはやめて欲しい。
　案の定、少ない人通りの中でも暇でも物見高い連中が、足を止めて遠巻きにこちらを眺めている。アンドラーシが泣きそうな顔で甲高い声を出すからだ。注目を集めないでもらいたいのだが。
「ともかく、叫ばないでくれ。行こう」
「行かないわよっ」
「マントを買いに行くんだってば」

「ああ、そうだったわね」
街を出て行こうとしているわけじゃないことを理解して、アンドラーシはあっさり頷いた。小走りに俺に従う。
「ねえ、本当にすぐ街を出るの？」
「出るよ」
「どうしてそんなに急いでるの？」
「……」
改めて問われると、急がなきゃならないほどの理由は何もない。ただ、早くナタに会って、レオノーラに戻り、シサーたちと合流したい。ユリアにも会いたい。こうして俺の所在のない世界で、俺の素性を知る人間が誰も周囲にいないことは、俺を不安にさせている理由の一つなのかもしれなかった。
それに――ほんの少しだけ、目的も出来た。
この世界に来たばかりの頃に抱いていたのと同じ目的が、再び目の前にちらつく。
元の世界に帰りたい。
「一人にしないでよ」
答えない俺を問い詰めるでもなく、アンドラーシが小さな声で呟く。
「もう一人になるのは怖いのよ。せめてヴァルスに入るまで、一緒にいてよ。お願い。生きていられる自信がないのよ」
「……わかったよ」
根負けするような形で、俺はため息混じりにアンドラーシに答えた。
「国境付近に町か村がないかどうか、確かめてからにしよう。あるようなら、そこを目指して移動する。なければ今夜はここで宿を取って、明日の早朝に出発する。それで良いか？」
「……ありがとうっ」
譲歩した俺の言葉に、アンドラーシはぱっと顔を輝かせた。全く現金だ。素直でわかりやすいと言えば、言えるんだが。

「あら？　あれ、仕立屋なんじゃない？」
元気を取り戻したらしいアンドラーシが、ふと少し先の店に目を留めた。なかなか大きめな店構えだ。
「ねえ。せっかくだから、ぴったりなのを仕立ててもらったら？」
「馬鹿言うなよ。そんなことをしてる金もなければ時間もない」
「何でー。ちゃんと整えれば見違えるのに。ちゃんとした格好も似合うわよ、きっと」
「見栄えを良くしたってしょうがないだろう。どうせまたすぐにボロボロになるんだ。既製品で十分」
「きっと素敵になるのにー。わたしだってどうせなら、素敵な人の隣を歩きたいわ」
先ほどまで一人にしないでくれと縋っていたのは、どの口だったろうか。
「素敵になんかならなくて良い。俺は俺の利便性を追求する」
全く相手にしない俺に、アンドラーシが更に何か言おうと口を開きかけた時、仕立屋のドアが開いた。いかにもこういう店に似合いそうな風体の年配の男が数人出てくる。店の前に停止していた、『金色の馬と盾の紋章』を刻んだ馬車の前で足を止めた。
そのうちの一人が、こちらを見た。
「……でんっ……」
……。
『でん』？
男の視線は、明らかに俺に向いている。だが、その言葉の意味がわからずに困惑していると、他の男も一斉にこちらを見た。
「何？　知り合い？」
アンドラーシが声を潜めて尋ねる。俺は黙って顔を横に振った。
俺の知り合いではないのは確かだ、が……。
（レガードか？）
レガード『殿下』のお知り合いかもしれないな。
やがて男がこちらへ近づいてくる。走って逃げたい気分だったが、

それでは不審過ぎる。仕方なく、その場に佇んで彼らを待った。
「レガード様。いつ、こちらへ」
貼り付けたようなぎこちない笑みを浮かべて、男の一人が俺に声をかける。予想通りの呼びかけに、俺は内心顔を顰めた。
これは、しらばっくれるしかない。
「ご連絡を頂ければお迎えに上がりましたものを。何か急ぎの御用でもおありでしたでしょうか」
「は？　何のこと？　あんたは誰だ？」
抑揚のない声で、殊更冷淡に尋ねる。ぞんざいな口調は意図的だ。本来のレガードならば絶対にしないだろう言葉遣いが、早々に人違いだと納得させるのに一役買ってくれないだろうかと期待してのことだ。
男の表情が強張る。
「失礼致しました。名乗りが遅れました無礼をお許し下さいませ。私どもはオアスン公ノルディック様の配下の者でして……」
全く聞いたことがない。誰だそれは。
本気で知らないので、あからさまに眉根を寄せてみせる。アンドラーシが俺の隣で、きょときょとと見比べているのが感じられた。
「何を言ってるか全くわからないんだが、人違いじゃないか」
「まさか。その特徴あるお髪を見間違えるはずもございません」
その言葉に、一瞬舌打ちをしたくなった。
そうだよな、ホンモノが見つかって俺はもう代役をしなくたって良いんだから、さっさとこの髪をやめるべきだった。顔だけでなく、この特殊な前髪で俺をレガードだと認識する輩も少なくなさそうだ。これが済んだら、さっさと黒髪に戻すことにしよう。
そう決めながら、前髪を弾いてみせ、俺は言葉を続けた。
「誰と間違えてるんだか知らないけど、俺はしがない旅人だよ、ただの。この髪は、まあ、あれだ……親父が変な迷信を信じててね。ファーラに愛されるとか何とかって言う。残念ながら地毛じゃない。染めてるだけ」

苦しいだろうか。だけど、こんな特殊な染め方をしている理由として、レガードを持ち出せないとなるとこうなるしかない。

俺の言葉に、男たちは一様に目を丸くした。そんな馬鹿なとでも言いたげだが、顔を寄せて何か言葉を交わすと、やがて俺に一礼した。

「さようでございましたか。それは重ね重ね、大変失礼を致しました」

「いや、別に」

「繰り返し確認させて頂きますが……レガード様ではないのですね？」

「違うよ。俺の名前は、カズキだ」

嘘は何一つ言っていない。

俺の言葉に、男が一歩下がる。

「知人にとてもよく似て見えたものですから。不躾をお忘れ下さい。失礼致しました」

……気のせいだろうか。

その表情が、どこかほっとして見えたのは。

男たちが謝罪の言葉を口にして、仕立て屋の前に止めてあった馬車に乗り込んでいくと、ずっと黙り込んでいたアンドラーシが彼らを見送りながら口を開いた。

「何だったの？」

「聞いてただろ。単なる人違いだ」

「そう？　わたし、カズキがあんなお上品な人たちに敬意を払われるような人なのかと思って喜んじゃった」

「何で喜ぶんだよ」

「ふかふかのベッドで眠らせてもらえそうじゃない」

あほは放置して、俺はさっさと歩き出した。向かった先は、男たちが出てきた仕立て屋だ。

オアスン公ノルディックとか言ってたな。誰なんだ？　貴族なのは間違いないだろうから、ロンバルト公国の王子サマを見知ってい

てもおかしくはないんだろうが。
「あれ？　カズキ、マントを仕立てることにしたの？」
「違うよ。ちょっと調べたいことが出来ただけ。黙っててくれ」
「はーい」
店に入ると、丸顔の親父がカウンターで何かを書き付けていた。
俺が入ると、顔を上げ、丸い眼鏡越しに俺を見た。
「いらっしゃい」
「すみません、ちょっと聞きたいことがあるんですが」
「はいはい？」
俺のなりを見て、客ではなさそうだと判断していたんだろう。すんなりと納得したようなおじさんに近付きながら、ドアを振り返る。
「今出て行った人たち、誰ですか」
「どうしてそんなことを？」
「以前、俺の祖母が助けて頂いたという名前もわからない方に、風体がちょっと似ていたものですから」
「助けてもらった？」
顧客の素性をおいそれと話してはくれないだろうから、店に入るまでに考えた口実を口にする。
「ええ。買い物に出た先で転倒してしまって、帰るのに難儀をしていたところ、親切な方が送って下さったのだと言うことです。お名前を聞いても照れてはぐらかされてしまったとのことで、お礼の一つも出来ずにいたものですから。今の方々の馬車に『馬と盾の紋章』が刻まれていましたが、もしや領主様のところの方々ですか」
俺の言葉に、おじさんは些か不審そうな目つきをした。
「あんた、この街に住んでるんだろう？　『馬と盾の紋章』を知らないのかい？」
「一人暮らしになった祖母を案じて先日越してきたばかりなのです。すみません」
「あれは、もちろんオアスン公ノルディック様の家紋さ。だけど、あんたのお婆さんを助けてくれたってのは人違いじゃないかと思う

けどね」
「え？　どういうことですか？」
「何せ愛想のない領主様だからね。そうそう市民と交流なんてしないだろうと思うよ」
「……ロンバルトの王侯の方々とご親交がおありの著名な方でいらっしゃいますよね？　親切な方ではないのですか」
ややこじつけで、あてずっぽうの問いかけをする。
だけど国境近くの街の貴族がレガードの顔を知っているのには、何か理由があるような気がした。王侯と親交がある人間なのかどうかを知りたい。
婆さんの恩人の話から些かずれた俺の質問に、おじさんは大して疑問を持った様子もなく肩を竦める。
「親切かどうかはともかく、王侯とは交流があって当然だ。ご長女が王太子様のご生母でいらっしゃるから」
王太子……レドリックの母親の生家ってことか……！
ぎょっとする俺に気づかず、おじさんは半ば愚痴のように滔々と続けた。
「公も、悪い人じゃないんだろうけど、まあ、一風変わってるさ。横暴なことはしやしないけどね。屋敷からはろくに出てきやしないし、家人もその気質によく合った者ばかりだよ。どれもこれも愛想のかけらもない偏屈ばかりさ。人助けなんて、間違ってもしやしないと思うよ。まあ、良いお客だから滅多なことは言わんがね」
十分言っていると思うんだが、まだその範疇に入らないようだ。
「そうですか」
考えながら視線を伏せた俺の表情をどう受け止めたのか、おじさんが眼鏡を押し上げながら俺を見上げた。
「あんたのお婆さんを助けたのが誰かはわからんけど、少なくともノルディック家の人間じゃあないんじゃないかと俺は思うよ」
一応元の話に戻って締め括ってくれたおじさんに、俺は少しがっかりしたふうを装って、笑みを向けた。

「残念です。……ありがとう」

第3部第2章第15話　prolusio（3）

◆◇◆

「戦禍の後って言うけど……結構平和なものなのね」

オアスンでは、辺境だということもあるのか、のどかなものだった。

そこから南下する道中も不穏な空気を感じることもなく、アンドラーシの言う通り平和なものだ。

ものはついでと、先ほどの仕立て屋のおじさんに尋ねてみたところ、エルファーラとの国境付近にアバックという関所を兼ねた大きな街があるとのことだった。そこへ行く途中にも、ブノワという小さな小さな農村があるらしい。日暮れまでには、どちらかには辿り着くことが出来るだろう。

アンドラーシを納得させ、安価なマントと食糧や薬品の補充だけ済ませると、俺たちはさっさとオアスンを後にした。

空がオレンジ色に暮れなずみ始め、草原の彼方には集落らしき影が見え始めている。

どうやら今日は、ブノワへ立ち寄るということになりそうだ。

もちろんアンドラーシは不満たっぷりのようだったが、それでも口には不満を出さずに俺について来ている。どうしても一人になるのが嫌なんだろう。

魔物に襲われることのない平和な道中で暇を持て余したらしいアンドラーシは、オアスンを出てからひたすら俺に話し掛けて来る。

「ねえ、さっきどうしてあんな探りを入れたりしたの？」

アンドラーシの質問には答えない。代わりに胸中だけで再び考える。

レドリックの母親の生家か……。そりゃあレガードのことを知ってたって不審じゃない。いや、知っていて当然だ。

どちらかと言うと腑に落ちないのは、俺を見て慌てた様子があったところだな。彼らの様子を見る限りでは、レガードの急な訪問を歓迎してはいなかったようだ。俺がレガードではないとわかって、ほっとしたような節がある。

まあ、元々仲の良い兄弟ではなかったようだし、レドリックサイドからすればレガードは煙たがられていたのだとすれば、さもありなんと言うところか……。

「わたし、カズキがどこかのご子息かと思ってわくわくしちゃったわ。ねえ、本当に違うの？　本当は身分を隠した王子様とか」

残念ながらこの世界においてどんな身分も持たない浮浪者だ。

「何でわくわくすんの」

「だってそうしたらわたし、カズキに一生ついていくわー」

「迷惑だ」

「何よー。わたしが奥方じゃあ不満だって言うのー？」

「ただの金目当てだろ、それじゃ」

「あらっ。それだけじゃないわよ、失礼ね」

はいはい。

呆れたまま、視線を近付いてくる集落に向ける。

アンドラーシは続けて何気なく、しかしながら、とんでもないことを口走った。

「わたし、カズキのこと好きよ。セラフィの次に。……あっ」

「……何？」

凍りついた。

「今、何て言った？」

アンドラーシが、焦ったように両手で口を押さえる。だけど、最後の名前はしっかりと俺の耳に届いた後だ。――セラフィ？

思わず目を見開いて振り返る俺に、アンドラーシがややバツが悪そうな上目遣いで応える。

「ええっと、突っ込みたいのはどこ？　次にってとこ？」

「違う。……セラフィ？」

「あー、うー」
「ロドリスの宮廷魔術師か？」
『青の魔術師』がアンドラーシの想い人……？　どういうことだ？
宮廷魔術師になんて、おいそれと近づけるものじゃないだろう。ただの憧れならともかくも、簡単に片想いを出来る相手ですらないはずだ。
アンドラーシは、何者だ？
「あんたの好きな人ってのは、ロドリスの宮廷魔術師なのか？」
アンドラーシはちらっと俺を見てから、微かに顔を顰めた。それから無言を貫く。思わず俺は真顔でアンドラーシの腕を掴んだ。
「ロドリスの宮廷魔術師とどういう関係だ？」
「い、痛いっ」
「青の魔術師に何か言われたのか」
「痛いってば！」
怒鳴り返して無理矢理腕を振り払うと、アンドラーシは俺が掴んでいた辺りを庇うようにして俺を睨んだ。
「何よ。何でそんなにムキになるの。何なのよ」
「セラフィに何か指示されてるんじゃないのか」
こちらも一歩も引かない姿勢で、真っ向から視線を受け止める。アンドラーシはたじたじした様子で、怯えたような目つきを見せた。
「指示って何？　意味がわからないわよ。言ったでしょ。片想いをして振られたんだってば」
「それだけか？」
「それ以外に何があるのよっ。振られたの！　騙されて利用されて捨てられたのよ！　そんなこと何度も言わせないで！　レハールに向かうのは親戚がいるからだって言ったでしょっ？　ロドリスにはいられなくなったから、ヴァルスに向かってるのよっ！」
だんだんヒステリックになってくる。口を真一文字に結んで、アンドラーシは中空をきっと見据えた。
嘘では、なさそうだろうか。

確かに、アンドラーシは最初に俺を見た時に何をわかっているふうでもなかったし、出会いは本当に偶然だ。用心するに越したことはないだろうが、アンドラーシがセラフィの意を含んで何かを企んでいるとは考え過ぎのような気もする。

「わかったよ。悪かった」

とりあえずはセラフィの手先でなさそうだと納得することにして、一旦矛先を収める。

俺についてくる理由に青の魔術師セラフィが絡んでないのであれば、それはそれで良い。

だけど、それはそれとして、アンドラーシがセラフィを知っているのであれば、聞きたいことはないでもない。

せめて、どんな関係なのかは知っておきたいところだが……拷問や尋問をするわけじゃなし、アンドラーシが話す気にならなければ、聞くことは出来そうにない種類のことだ。

そしてこの表情を見る限り、今問い詰めても意固地になるだけのようにも思う。

「あなたこそ、何なの？　セラフィのことを知っているの？」

「ロドリスの宮廷魔術師だろ」

「それだけじゃないでしょ？　何か隠してることがあるんじゃないの？」

「別に隠していることがあるわけじゃない」

話していないことがあるだけだ。

再び歩き出した俺に、アンドラーシも足を動かす。先ほどの件が尾を引いているのか、やや距離を取られたままだ。

「嘘よ。そんなにムキになるなんて、変だわ。セラフィに狙われる心当たりでもあるみたいじゃないの」

「あるわけないだろ、そんなもの」

何も今すぐに聞きだす必要があるわけじゃない。それほど聞きたいことが多くあるわけでもない。まだこの先に聞けるチャンスがあると期待しよう。

「驚かせるつもりがあるわけじゃなかった。誤解みたいだ。悪かったよ。俺はヴァルスの人間だから、ロドリスの宮廷魔術師と聞いて過剰に反応しただけだ」

自分でも苦しい言い訳とわかっているが、譲歩するつもりで謝罪する。

「ヴァルスの？　カズキはヴァルス人なの？」

「ヴァルス人ではないけどね」

俺の答えに、アンドラーシはしばらく黙った。そうしている間に、ブノワの集落が少しずつ近付いてくる。

アンドラーシがぽつっと口を開いた。

「わたし、嘘なんてついてないわよ。セラフィの指示なんて受けてない。脱獄して逃げてきたの。あの人に騙されて」

「……」

「あなたがセラフィとどういう関係なのかは知らないけど、別にわたしはあなたの敵じゃないし、ヴァルスの敵でもないわ」

アンドラーシの黒い瞳が真っ直ぐに俺を見詰める。

嘘をついているようには、思えなかった。

「わかった。ごめん」

俺が小さく頷くと、アンドラーシもほっとしたように頷き返した。

ブノワの村は、俺がこれまでに見た小さな農村の例に漏れず、村の外と内の境界がわかりにくかった。道や平原から何となく村になっていっているようだという感じだ。

ここも魔の山に非常に近い集落だが、オアスンと比べて悲哀を感じるほど防衛に力が入っていない。

窺ってみると、建付けの甘そうな平屋が秩序なく点在している。村の内部にも小さな畑や空き地が多そうだった。

どこかに一応出入り口は存在しているんだろうが、そんなものを

探す必要を感じない。
　歩いていた道を逸れて、村を遠巻きにするようにぐるりと草原を歩いてみる。そうして少しずつ村の方向へ足を進めると、次第に足元の草が薄くなり、やがて道らしき風体に見えてくる。そうしてその小道の先は民家や小さな畑があり、どうやらその辺りは村の内部と呼べそうだった。
「ここも、静かな村ね」
「静か過ぎるな」
　村の端だろうから人気も民家もかなり疎らだが、食事の準備すらしている気配がない。
　と言って、かつて見たリデルのように血の臭いがするでもなければ、人の気配が全くしないわけでもない。妙な感じだ。
　まるで『息を潜めている』かのように思えなくもないが……考え過ぎだろうか。
「レーヴァテイン。魔物の気配とか感じるか？」
　もしかすると何かが徘徊していたりするのかもしれない。
　一瞬そう考えて、俺より魔物に鋭いだろう魔剣に尋ねてみるが、レーヴァテインが微かな音をあげて応えた。
　――否。
　魔物が出没するというわけじゃなさそうだ。俺が警戒し過ぎなんだろうか。
「何、何？　誰に聞いたの？」
「剣」
「剣っ？　その剣、しゃべるのっ？　そう言えば、あの熊さんと戦ってる時、変な炎が出てたわね。もしかして噂の魔剣って言う奴？」
　熊さんというほど愛らしいイキモノじゃなかったけどな。
　口をへの字に曲げてアンドラーシの愚問を黙殺しながら、辺りの様子に気を配る。
　どんどん村中へ入っていっているが、人気もなければ、危険なものにも遭遇しない。何なんだ、この変な感じは。

「宿はどこにあるのかしらね」
まあ、変な物音が聞こえるとか、血の臭いがするとかいうわけじゃなく、静か過ぎるというだけなのだから……農村の夕刻はこんなものなのだろうか。辺境地だし、戦禍の後だし。
（ああ、そうか……）
もしかすると人間自体がそもそもいないのかもしれない。ロンバルトは最初から参戦しているし、挙句の果てにロドリスらに占領されているはずだ。徴兵やら何やらで、過疎っているのかもしれないな。
そんなことを思っていると、水を汲みに出て来たらしい老人の姿を見つけた。何だ、いるんじゃないか。
「宿の場所を聞いてみましょ」
「うん。あの、すみません」
何気なく声を上げる。
途端、老人は手にした木桶を取り落とした。ガランッという大きな音と、同時に水が飛び散る派手な音が響く。
けれど、俺たちが驚いたのはそれだけじゃなかった。
「ひっ……」
振り返った老人は、俺たちの姿を見るなり引きつった表情を見せた。搾り出すような悲鳴が掠れて届き、腰を抜かしたように地面にへたり込む。
……。
そんなに驚かせるつもりはなかったんだが。
「すみません。大丈夫ですか」
手を貸そうと足を踏み出す。だが、老人は地面を這いつくばるようにして逃げ出した。アンドラーシも、隣で唖然としたように「ええ？」と呟いている。
「お、おじいさん？　わたしたち、別に驚かせようってわけじゃ……あの、宿屋の場所を聞きたいだけなんですけどっ」
アンドラーシが大声を上げるが、老人は聞く耳を持たない。地面

に転がった木桶はそのままに、這うようにして開いたままだった扉から、粗末な小屋へ転がり込んでしまった。バタンっと盛大にドアを閉める音が響くと、後に残された俺たちは、ただぽかんとする以外にない。

「……何だ、今の」

「失礼だわ。何だかわたしたちが化け物か何かみたいじゃないの」

憤慨したように言うが、その言葉は全く正しい。老人の態度は、まさしく恐ろしいものに遭遇した時の姿そのものだった。

「しょうがない、自力で見つけよう」

と言っても、何だか変な感じだからな。宿が見つかっても泊めて貰えないんじゃないかという不安か浮かぶ。それならそれで野宿するんでも、俺は別に構わないんだが……。

「あなた方、旅の方ですか」

踵を返しかけたその時、後方からそっと静かな声が聞こえた。若い女の声に振り返ると、二十代後半くらいの女性が、近くの小屋からそっと顔を覗かせていた。

「ええ、まあ」

「どちらから？」

「ツェンカーです。エルファーラへ向かっているんですが」

「そう……」

俺がツェンカーから来たということを初めて耳にしたアンドラーシが、驚いたように顔を跳ね上げる。それは視界の隅で黙殺し、俺は女性の方に視線を向けていた。柔らかい雰囲気の女性だ。栗色の長い髪が背中まで垂れている。少し考え深げに視線を伏せた彼女は、それから俺たちを手招きした。

「こちらへ、どうぞ」

「え？　あ、はあ」

招かれる理由もよくわからないが、俺とアンドラーシは一瞬顔を見合わせて、それに従った。女性はきょろっと辺りを伺うようにすると、近付いた俺たちに声を潜めて囁いた。

「宿を探しているのね？」
「ええ。今夜国境を越えるのは無理そうなので、ここで宿に泊まれたらと思ったんですが……宿の場所を教えてもらえないですか」
「教えても、泊まれないと思うわ。とりあえず、中に入って」
「は？　はい」
引き摺りこまれるようにして俺たちが中に入ると、彼女は忙しく扉を閉めた。それからドアに背中を押し付けて、外を窺うような仕草をする。
「あの？　何かあったの？」
「いえ、ええ、ええと……」
アンドラーシが尋ねると、彼女がは口篭るようにして歯切れの悪い返事をした。
ドアに閂をかけると、どうぞと言うように奥へ促す。
粗末な外見にそぐった内部で、むき出しの床板は煤けていた。六畳ほどの狭いスペースに古びたテーブルと椅子が置いてある。奥には小さな竈と調理台や野菜籠などが見えた。それから扉だ。もう一つ別室があるらしい。
掃除は綺麗に行き届いているのか、埃っぽさなどはなかったが、いかんせん建付けが良くないようだ。石造りの壁から隙間風こそ吹いてこないが、窓枠はいびつな形をしているし、色あせたカーテンにはいくつも繕った跡がある。水桶のそばに置かれた野菜籠や小麦の袋は、いかにも中身が不足している感じを受けた。装飾品の類も一切ない。彼女自身が身に付けているのも、薄手の寒そうな衣類だ。
「驚いたでしょう」
二つしかない椅子を俺とアンドラーシに勧めながら、彼女は疲れたような笑みを見せた。
遠慮なく椅子に座るかと思いきや、アンドラーシが躊躇うように視線を泳がせる。若干驚いたような表情に見えるのは、先ほどの老人や彼女の素振りにだろうか。
「座らせてもらえば」

促すと、アンドラーシははっとしたように俺を見た。それからぎこちなく頷き、腰を下ろす。
「ごめんなさいね。悪気があるわけじゃないのよ。だけど、男の人は怖がられてしまうの」
怖がられたのは俺のようだ。まあ、そうだろう。アンドラーシのような非力そうな女の子を恐れる理由は多分ない。
「帯剣してるのがまずかったのかな」
「それだけじゃないけど……みんな、怯えていて」
「怯えている？」
椅子に座るのを辞退して、俺は壁に背中を預けた。狭い部屋だから、会話をするのに距離が邪魔になるようなことはない。俺が片手で促すと、彼女は軽く会釈をして椅子に腰を下ろした。アンドラーシと斜向かいになる形で、テーブルの上のポットに手を伸ばす。
「ええ。このところ、少しタチの悪い人たちが度々村を荒らすものだから」
「タチの悪い人たち？」
「そう。逃亡兵だって聞いているけど」
「逃亡兵？」
アンドラーシがひたすらオウム返しに質問する。彼女は気を悪くした様子もなく頷き、それからはっとしたように目を瞬いた。
「まだ名乗っていなかったわね。あたしはロアナ。あなたたちも、お名前を聞いて良い？」
「わたしはアンドラーシ。こっちはカズキよ」
アンドラーシの紹介を受けてロアナに小さく頷いていると、奥の扉の向こうから小さな物音が聞こえた。一瞬そちらを振り返ると、ロアナは俺たちに向かって微笑んだ。
「娘がいるんです。アニス。大丈夫よ。こちらへいらっしゃい」
その言葉を受けて、扉が開いた。アニスと呼ばれた少女が顔を覗かせる。ロアナとよく似た顔立ちの、栗色の髪の少女だ。年の頃はまだ十やそこらだろうか。

彼女も身に付けているのは粗末な衣類だった。皮製のような小さなブーツは、擦り切れて地肌が見えている。ほっそりとしたと言えば聞こえは良いが、貧相と形容するのが正しいような体つきだ。

「お客様よ。お行儀良くしていてね」

そばまできたアニスを膝に抱き上げると、ロアナが再びこちらを向く。それからポットのお茶をカップに注ぎ、俺とアンドラーシに差し出してくれた。立ったままでそれを受け取る。

第3部第2章第15話　prolusio（4）

「荒らすって、どんなふうに？　どうして逃亡兵が荒らしに来るの？」

「さあ。それはあたしも知らないけど。身の置き場所がないんじゃないかしらね。軍隊を逃げ出したは良いけど、どうしたら良いかわからなくて、流れて来てしまったみたい。あたしの知る限りでは五、六人くらいみたいで、どうもエルファーラの方にある古い農作業場の小屋を根城にしているみたいなんだけど、食べる物なんかがなくなると村に来て略奪していくのよ。その時に、気晴らしに老人に暴力を振るったり、女性を攫ったりするものだから」

「何よそれ！　放っておいて良いのっ？」

アンドラーシがかっとしたように声を荒げる。アニスがロアナにしがみついた。

「良くはないけれど……徴兵で、若い男性は村にいないのよ。いるのはお年寄りと女子供ばかりだから、手の打ちようがなくて、頭を悩ませているところ」

ふうん……。

息を潜めるようにしていたわけがわかった。

沈黙する俺たちに、ロアナが気分を変えるように明るい声を出す。

「だからね、あなたたちも明日になったら早くこの村を出た方が良いわ。余計なことに巻き込まれないうちにね。ここで良ければ今夜は泊まってらっしゃい。何もないけど、屋根だけはあるから」

「……ありがとう」

アンドラーシが、どこか切ない表情を浮かべて目を伏せる。ロアナは気づいた様子もなく、快活に微笑んだ。

「大したおもてなしは出来ないけれど、作りたての食事くらいなら出せるわ。遠慮せずに食べて行ってね」

「あの」

微かに顔を俯けていたアンドラーシが、その言葉に顔を上げる。
「どうしてわたしたちを放っておかなかったの？」
「これでも人を見る目はあるつもりなのよ。それに、あいつらは女性なんて連れていないし。こんな育ちの良さそうなお嬢さんが、あいつらの仲間のはずはないから。困っている人は放っておけないでしょ」
「育ちが良いなんて！　娼婦だと思われたこともあるくらいよ」
言いながら、アンドラーシが横目でじっとりと俺を睨む。今更そんな話題を引き摺られても困るんだが。
「立ち居振る舞いだけでもわかるわ。あたしらとは違うってね」
俺とアンドラーシのそらぞらしい雰囲気に気づいたのか気づかなかったのか、ロアナが軽快に笑った。
「気にしないでいいのよ。人は助け合って生きるものなんだから。一人で生きているわけじゃないんだものね」

◆◇◆

田舎の夜は早い。
だがこの村は、それを更に上回る早さだった。ロアナの家に泊めてもらったその夜、日が落ちて間もなく食事を済ませ、早々に横になる。
外も異様なまでに静かなものだから、まるで深夜のような錯覚に陥った。実際は多分、十九時やそこらだと思うんだが。
「ねえ」
寝静まった家で、アンドラーシが俺に小さく呼びかけた。
ロアナとアニスはドアの向こうにあるもう一室で眠っている。最初俺たちにベッドを譲ってくれると言ったが、急に押し掛けてそれはさすがに気が引けて遠慮した。
部屋の広さと、そしてロアナやアニスにとっては俺は見知らぬ男であることを慮って、こうして別室であるテーブルのある部屋の片

隅をお借りしている。
「何とかしてあげられないかしら」
「……何とかって、何だよ」
「だから、ロアナたちが安心して暮らせるようによ」
アンドラーシは、借りた毛布にくるまっている。俺は相変わらず寝袋だが、室内と言うだけで快適さは段違いだ。
「具体的には？」
「それは、ええっと、まだ考え中なんだけど」
いきなり何だ？　生半可に同情なんかするタチだったのか？
「ボランティア精神にでも目覚めたのかよ」
俺の不機嫌な声を感じ取ったのか、アンドラーシが口を噤む。が、すぐに体を起こす気配がした。
「わたしね……わたし、こんな生活があるなんて、今まで知らなかったの」
「こんな生活？」
「ロアナがわたしたちを招いてくれた時、わたしはここが人間の家だとは思わなかったのよ」
さりげなく凄い暴言だ。
「村に入って、少し歩いたでしょう？　わたし、農具置き場の集まっている場所なんだと思ったわ。ロアナも、あのおじいさんも、農具置き場で作業をしていたんだと思ったの。……あれは全部、住居だったのね」
「そうだろうね」
「びっくりしたわ。人間が住めるところとは思えなかったの」
その声に嘲る様子は見られず、アンドラーシが真剣に言っているのだと理解した俺は、改めてアンドラーシの身上に意識を馳せた。
ヴァルス語を不自由なく操る時点で相応の身分である可能性を考えたが、宮廷魔術師と繋がっていることもあわせて考慮すれば、裕福な身の上だったに違いない。住んでいたのは大都市、恐らくはフォグリアであることを考えれば、農村の生活を知らないことも合点

がいく。フォグリアには、郊外にさえこれほどの貧相な家屋は見当たらない。辺境に住む農民たちも、ここよりはずっと快適な住まいを持っている。少なくとも俺の知る限りは。

「ここはロンバルトで、わたしがいたロドリスではないけれど、きっとロドリスにもあったんだわ。こういう、生活をするだけで精一杯な村が。……知らなかった」

「ああ、そう」

「きっと自分たちが生活するだけで手一杯なのに。それでも、こうして親切にしてくれるのね、人って」

「……」

「落ち着いて生活出来るように、何かしてあげられないかしら」

それは多分、純粋な感動と無邪気な思いつきなんだろう。それはわかる。

わかるが……わかってない。

アンドラーシの言葉を受けて、俺はため息をつきながら体を起こした。薄暗闇の中、上半身を起こしたアンドラーシがこちらを見ている。

「やるなら一人でやってくれ。俺は、ごめんだ」

「そんな。わたし一人じゃどうにもならないじゃない」

「俺がいたってどうにもならないよ。じゃあ聞くが、俺たちに何が出来る？」

「それは」

「これは、この村の人間の問題だ。自分たちで解決すべき話で、俺たちが口出しすることじゃない」

「そんなことわからないじゃないの。何か出来るかもしれないわよ」

もう一度深くため息をついてみせて、俺はアンドラーシに顔だけ向けた。

「確かにロアナの言う通り助け合えるところは助け合うべきかもしれないが、何も出来やしないのにじたばたしたって意味がない。逃亡兵が村を荒らすと言ったって、村が自衛について話し合って協力

し合う問題で、流れ者の俺たちがどうこう出来る問題じゃないだろ」
「それは……そう、かも、しれないけど」
「村の自衛手段が甘いと言うなら、国や村が何かをするよう動くべきだ。そして動いてくれるよう働きかけをするのは、村の人間の役割だ。他国の通りすがりに何かしてやれる種類のことじゃないことくらい、考えればわかるだろ」
俺は、それ以上これについて問答をするつもりはなかった。中途半端に手を貸すべきじゃないと、俺は思っている。
アンドラーシからの返事はない。
「あんた、どういう生活をしてきたんだ？」
俺は、起こした上半身を捻ってアンドラーシを振り向いた。
「どういうって言われても……」
「あんたが好きなのは、ロドリスの宮廷魔術師だよな。騙す騙されるになるには、その前にそれなりの関係があるだろ。宮廷魔術師なんて、おいそれと近づける相手じゃないはずだ。恋愛沙汰を起こすには、あんたもそれなりの場所にいなきゃいけない」
「それなりの場所……って……」
「決まってるだろ。ハーディンだよ。違うのか」
強気に鎌を掛ける。
俺は青の魔術師の実際の人となりを知らないから、例えばシェインのような人物であれば王城の人間相手とは限らない。娼婦だの街人だのと節操なく関わり合っているとすれば、そうとも言い切れないのはわかっている。
だけど、こちらからそういう可能性を示唆してやる必要はない。
俺は黙って返事を待った。アンドラーシの方も無言だ。
やがて、「はあっ」とため息が聞こえる。
「どうしても気になるのね。やっぱりわたしが信用出来ない？」
アンドラーシは少しの間考えるように沈黙をしていたが、やがて窺うように口を開いた。
「ちゃんと話したら、もう置いてくとか言わないでくれる？」

「……約束は出来ないな」
「してよ。そうしたら話してあげても良いわ。何度も言ってるでしょう。一人になるのは怖いのよ。レハールに行きたいの。死ぬのは嫌なのよ。だけど一人で辿り着ける自信はないわ」
そう言うアンドラーシの言葉は、どこか必死なものだった。縋るような、頼りない切実さが滲み出ているように思える。信用しても良いような気がした。
「わかったよ……。あんたをレハールまで連れて行く。その代わり、ちゃんと話してくれ。あんたは、ハーディンの人間なんだな？　ロドリスの宮廷魔術師セラフィと近しい関係だったんだろ」
「そうよ。主従関係だったの」
主従関係？
アンドラーシはセラフィの部下だったと言うことだろうか。侍女か？
「主従関係？　侍女だったってことか？　それとも出入りしていた貴族の娘……」
「侍女じゃない。貴族の娘っていうのは間違いじゃないけど、それだけじゃないわ。国王の愛妾だったのよ」
「あっ……？」
『主＝アンドラーシ　従＝セラフィ』っ？
絶句。
思わず目を見開いたまま、唖然とアンドラーシを見遣る。アイシヨウ……ロドリス国王の愛人!?
アンドラーシの声は、微かに緊張していたようだ。彼女にしても、俺の素性がはっきりわからないのだから、賭けなのかもしれない。
「それ、本当か？」
「本当よ。国王の愛妾だったけど、わたしが好きなのはセラフィだったの。ずっとつれなくされてきたから、愛してると言ってくれた時には夢見心地だったわ。だけど、全部嘘だったとは言ったわよね」
「ああ、うん」

「わたしに罪を押し付けるつもりだったの」
「罪？」
問い返した俺に、アンドラーシは殊更抑えた声で「国王殺しの罪を」と言った。
……何？
「国王殺し？」
「大きな声で言わないで」
「じゃあ、ロドリス国王は」
「亡くなられたわ」
何だって？
思いがけない話に言葉を失っていると、アンドラーシは一人で淡々と言葉を続けた。
「もちろん陛下が急逝されたことは、もう各国の知るところではあるでしょうけれど……その罪を着ているのが、わたしなのよ。正確にはわたしともう一人だけれど」
「もう一人？」
「ヴァルスの間諜だったとされる男よ」
予想外に壮大な話になってしまった。
言葉に詰まっている俺には構わず、アンドラーシは低い声で訥々と続ける。
「だから最初に言ったはずよ。わたしは生きる為にここにいるって。国王殺しの罪を押し付けられて、投獄されたの。セラフィは、わたしが邪魔だったんだわ。わたしが彼のことを好きだったから。目障りだったのよ。……わかったでしょ。セラフィが、そんなわたしと手を組むなんてありえないわ」
「本当に国王を殺したのは」
「セラフィよ。それは間違いないわ」
恋愛沙汰で投獄って、そういうことか。詳しいことはわからないが、セラフィはアンドラーシの自分への恋心を利用して策略に嵌め、自分の罪を代わりに着せたということらしい。

「わたしなら確かに陛下を殺害するなんて容易いことだもの。犯人に仕立て上げるには丁度良かったのよ」
　ロドリスの宮廷魔術師は、自国の国王を殺害したってのか？　何の為に。
「表向きは、ヴァルスの間諜と手を組んだわたしが痴情の縺れで殺したことになってるわ。だけどわたしは殺してない。ヴァルスの間諜だって、知らなかった」
「じゃあ、帝国継承戦争は？」
「わたしの知る限りでは、多分続けられると思うわ」
「敵の首領がいないのに？」
「後継者である王子がおられるもの。それに……」
　そこで言葉を途切れさせたアンドラーシは、どこか切ない苦さを伴った声で続けた。
「セラフィが戦争の続行に拘ったからこそ、陛下は殺害されたんだと思うわ」
「え？　続行に拘ったからこそ？」
「そう。陛下が、戦争に怖気づいたからよ」
　ぞくぞくした。この戦争を裏で操っているのがセラフィだという裏づけが取れそうな予感だった。
「戦争を始めたのは、ロドリスだ。どうしてその国王が怖気づくんだ」
「元々陛下が自分のご意志で始めた戦争ではないからよ」
「……戦争を始めたのは、セラフィなんだな」
「そう。わたしはセラフィが陛下をその気にさせるよう煽っている場面を何度も見ているわ。陛下のお傍にいたから。だから、間違いないわよ」
「どうして。何をしたいんだ？　権力欲か？」
　俺の問いに、アンドラーシは困惑したように顔を横に振った。
「何をしたいのかまでは……。でも、権力欲とは少し違うと思う。そういう人じゃないもの」

「じゃあ何なんだ？」
「それはわからないけど……国土拡大とか、帝国を掌握するとか、そういう野心を燃やす人ではないと思うわ」
きっぱりとアンドラーシが断言する。
やっぱり、戦争を始めたのはセラフィだ。黒衣の魔術師バルザックと手を組んでレガードを襲撃したのもあいつ、グレンフォードを使って俺を襲ったのもあいつ……そうだ、グレンフォードは今どうしてる？
「グレンフォードがどうしているか、知ってるか」
「グレンフォード？」
「ロドリスの宮廷魔術師セラフィの腹心の男だ。いるだろ」
「……いるわ」
アンドラーシの声が掠れる。
「でも、どうしているかは知らない。しばらくは見かけてもいなかったわ。確かリトリアに行っていたと思うけど……詳しいことは、わたしにはわからない。何で？　カズキはどうしてグレンを知っているの？」
「前に狙われたことがあるからね」
アンドラーシから話を引き出すには、俺の情報も明かす必要がある。そう判断して、俺はあっさりと告げた。薄闇の中、アンドラーシが息を呑む。
「えっ？」
「セラフィに指示されたそいつに狙われたんだ。今こうして無事でいるけど、代わりに仲間が殺されてる」
「う、そ」
「俺自身も一度、青の魔術師には会ってる。あいつの魔術で、はっきり言って死に掛けたな。かなりの傷を負わされたよ」
「セラフィに？」
「ああ。背中を切り刻まれた」
「どうして」

それについては、話すつもりはない。
無言で顔を横に振ると、アンドラーシは再び沈黙した。俺も黙ったまま、セラフィの怜悧な顔を脳裏に蘇らせる。
何かアンドラーシに聞いておきたいことがあるはずだ。だがそれが何だったのかすぐに思い出すことが出来ず、俺はセラフィがロドリス国王を殺害した理由について考えた。
戦争に怖気づいたからか。怖気づいた理由はなんだろうか。戦況をリアルタイムに知らないのでわからないが、セラフィにとっては戦争を推し進める理由があるはず……。
「……何だ？」
「何？　今の」
考えを中断し、ふっと顔を上げる。同時にアンドラーシも強張った声を上げた。
今、何かが聞こえた。
耳を済ませて互いの顔をじっと見詰め合っていると、再び激しい物音が夜の村に響く。重なるように、悲鳴。
「何か、起きてる」
「逃亡兵？」
「かもな」
それは、明らかな暴力の音だ。
反射的に俺は、剣を握り締めて立ち上がった。

第3部第2章第16話　決壊（1）

「何……」
「今のは……」
アンドラーシが小さく呟き、奥の部屋からロアナが出てきた。怯えるように、アニスがまとわりついている。俺とアンドラーシが起きているのを見て、蒼白な顔で告げた。
「きっとあいつらがまた来たんだわ」
「先ほど言ってた逃亡兵ですか」
「それ以外に考えられないもの」
また大きな物音が上がった。建物を破壊するような荒々しい物音だ。そして不気味なのは、聞こえているはずなのに誰も出て来ていないようなことだった。
どうなってんだ、この村の人間は。
「見て来る」
「わたしも行く！」
「ここにいろ！」
俺とアンドラーシが問答している間に、表で悲鳴が聞こえた。すぐそばだ。立て続けに荒々しい物音、若い男の笑い声。
蒼白の顔で、アニスが微かに口を動かした。何か呟いたようだが、儚すぎて聞き取れない。
窓から外を窺うと、向かいの小屋が狙われたようだ。あの、水桶を落とした爺さんの小屋だと思い出す。
別に金があるふうではないから、単なる不運だろう。若そうな人影が、ドアの中へ消えて行く。
激しい物音がした。この世の終わりのような、絶望的な悲鳴。
そして、弾かれるようにアニスが駆け出した。完全に予想外の行動で、制止が間に合わず、小柄な体が外へ飛び出す。
「なっ……」

「アニスっ」
「俺が行く」
後を追おうとするロアナを乱暴に引き留めてアンドラーシに押しつけると、俺はアニスを追って飛び出した。
あれだけ悲鳴や物音がしたと言うのに、やはり外にはアニス以外誰もいない。みんな、窓を閉めて嵐が通り過ぎるのを待つってか。次の餌食は自分かもしれないってのにな。ご立派なことだ。
そう皮肉に考えながら、剣を抜く。アニスの小さなストライドでは、ハンデも大したことはない。小屋の前で俺はアニスの腕を掴むことに成功した。
「……っ」
「し……」
悲鳴を上げかけたアニスの口を押さえ、人差し指を立てる。恐怖にひきつった目を上げて俺の顔を確かめると、アニスは小さく頷いた。それを受けて手を離す。
「オルァッ！！　どっかに食いもんを隠してんだろがっ！」
「とっとと出せよ、じいさんよぉっ！」
こういう恫喝って、テレビドラマ以外で初めて聞いた。懐かしい記憶だな。
自分たちに抵抗する者がいないと知ってか、ドアは開け放されたままだった。中を覗くと軽装備の男の背中が二つ見える。吹っ飛ばされて壁に叩きつけられたのか、爺さんが床に崩れて片腕を押さえていた。苦しそうに呻いている。
アニスに戻るよう手振りしながら、俺は開いたままのドアを蹴飛ばした。男たちが振り返る。更なる殴打から逃れた老人が、尻をするように壁際へ引くのが見えた。
「何だお前。見ない奴だな」
「正義の味方参上ってか？」
揶揄するように言いながら、男の一人――もじゃもじゃのアフロみたいな頭の方が剣を抜いた。威嚇するように、あるいは腕を鳴ら

すように振る。
　それにつられたのか、もう一人――頭頂が見事なはげで、耳上から長髪を垂らした落ち武者風の男も武器を構えた。剣じゃない。縄の先に皮で包んだ重石がついている投擲武器だ。スラング・ショット。グローバーの仲間が船上で持っているのを見たことがあった。
　二人とも戦う姿勢だ。数を頼みに「とにかく敵を殺れ」と教えられる兵卒出身の彼らに、騎士道精神は存在しないらしい。だけどそれは、魔物相手に「とにかく生き残る」ことから戦闘を覚えた俺だって同じこと――。
　アフロの右足が床を蹴るのをサインに、出入り口付近にあった木桶を引っ掴み、落ち武者目掛けて投げつける。それからアフロを避けるべく、左側へ思い切り身を引いた。スラング・ショットに叩き壊されたらしい木桶の破砕音が夜に響く。構わず俺は、避けたアフロの剣を、勢いに任せて剣で受けた。アフロの手が滑ったらしく、硬い金属音と共に剣が弾け飛ぶ。返す刃でアフロの背中を貫いた。
　アフロが絶叫しながら、床にもんどりうって倒れ込む。が、同時に俺目掛けてスラング・ショットの重石が襲い掛かった。避けることなど全く出来ず、もろに右頭部に食らい、一瞬目の前に星が散った。気づいた時には、壁際のガラクタの中に埋もれていた。吹っ飛ばされるまま、俺がこの中に突っ込んだんだろう。
　脳震盪でも起こしているような鈍い眩暈の中、腹部に強い衝撃を食らった。見えていなかったが、多分落ち武者の追い討ちだろう。半ば無意識に右手を確かめるが、レーヴァテインは握っていなかった。落としたようだ。
「ぐうっ……」
　倒れこんだままの俺の腹を、落ち武者が目一杯踏みつける。胃液がせり上がり、吐瀉した。どこにあるかわからない剣を掴もうと、震える指先を動かすが、指先にはただ床が触れるだけだ。
「調子に乗りやがって、クソガキがぁっ！」
　男がスラング・ショットを振りかぶる。さっきの衝撃がまた襲う

と思うと、結構なダメージを覚悟しなきゃならないな……。
そう思った矢先、衝撃ではなく、男の呻きと物音、そして振動が続いた。目を開けると、落ち武者が目の前でうつ伏せにすっ転んでいた。その足元には、壁際で震えてたはずの爺さんが跪いている。
「何しやがんだ、この死に損ないっ……」
レーヴァテインがあった。
俺のやや左前方に転がっている剣を見つけ、俺は反射的に飛び起きた。落ち武者の蹴りを食らった爺さんが血反吐を吐きながら床に転がるのを視界の隅に見つつ、剣を掴む。間髪入れずに落ち武者の脇腹に、渾身の力で叩き込んだ。強い手応えと共に落ち武者が苦悶の声を上げ、俺は眩暈を堪えながら更に刃を突き立てた。落ち武者が、尚も俺に腕を伸ばす。が、手から力が抜け、スラング・ショットが床に落ちた。
「ありがとう……」
息を切らせながら、床で呻いている爺さんに礼を言う。爺さんが落ち武者を転ばせてくれなかったら、俺は再度スラング・ショットの餌食になるところだった。まだ眩暈を引き摺ったまま、爺さんの方に向かいかける。が、落ち武者が体を起こしかけたのを見て、咄嗟にその背中を踏みつけた。
「他の仲間はどうしたんだ」
「貴様……」
「来てるんだろ……他の場所で略奪か？」
尋ねながら、床に伸びる落ち武者の掌に剣を突き立てる。硬いものを貫こうとする嫌な手応えと共に、落ち武者が絶叫した。
「二度と、姿を現すな」
落ち武者が掌を縫い付けられたまま七転八倒するが、構わずに俺は要請した。視線を据えながら、突き立てられた剣が尚もずぶずぶと沈みこむ。
「うわあああ、ひ、は、あ、あああああ！」
「次は掌じゃ済まさない」

落ち武者は、俺の言葉に応える様子を見せない。答える余裕はなさそうだ。

脅したくらいで次も来ないとは信じられないが、一応これで一夜の義理は果たせただろうか。この先も用心棒してやるわけにはいかないから、後は村の人間で国に掛け合うなり何なりしてもらうしかないが……。

いずれにしても、俺で太刀打ち出来る相手で良かった。

尤も、戦場から離脱してきた逃亡兵である以上、それほど猛者であるはずもないんだが。

「きゃあああ！」

肩で息をしながらそう考えたところで、悲鳴が聞こえた。咄嗟に外の方へ顔を向ける。悲鳴は多分、アンドラーシの声だった。

「カズキぃぃぃぃ！　カズキーーーー！」

舌打ちして、乱暴に剣を抜く。落ち武者が空気を割るような絶叫を上げるが、そんなことに構っていられない。すぐに表に飛び出すと、アニスが凍りついたように家を振り向いたところだった。

「アニス！」

行かれても多分足手まといだ。そう判断して、俺はアニスの腕を掴んだ。

「爺さんの手当てをしてやれ！　俺が行くから！」

そう言い残してロアナの小屋へ駆け戻る。開け放されたままのドアからは、物音が続いていた。それと、複数の男の声。

「いや！　放して！」

「ロアナの手を放して！」

「こっちは随分上玉じゃねえの」

「今夜はラッキーだったな」

「きゃあっ……うっ……嫌！！」

複数の声が入り乱れて漏れる。ドアに駆け寄ると、一人の男にロアナが羽交い絞めにされ、アンドラーシの上に男が圧し掛かっているところだった。もう一人、それを見物するように立つ男がいる。

三人……キツいな。
「何だてめえ？」
ゆらりとドアのところに立った俺を見咎めて、ロアナを羽交い絞めにしていた男が険を含んだ眼差しを向けてきた。ロアナの顔が輝く。
「カズキさん！」
「あぁ？」
ロアナの家は、石造りだ……。
まだ脳震盪を残すようなふらつく頭で、それだけ思い出す。
テーブルや椅子は木……だけど、炎狼なら延焼せずに済むかもしれない。
無言のまま、握り締めた剣が炎に包まれる。ロアナを抑えている男、そして他の二人も俺を振り返り、表情が凍りつくのだけが見えた。
「カズキ」
アンドラーシが俺を呼ぶ。
レーヴァテインの剣先から、狼を象った炎が降り立った。
一声、咆哮が上がる。
そして――――――

――――――どくん。

視界がぶれた。
足元から突き上げられたような重い衝撃を全身に感じ、視界がぶれたと思った瞬間、目の前の出来事が消失した。
同時に、

俺の、
内側から、
噴き上げるような記憶、
記憶の渦、
封じていた、
奔流のような、
流れ込むように、
意識が、
俺の、
苦しい――……

風の砂漠。初めての感触。人の首が飛ぶ瞬間。殺した。俺が殺した。ギルザードの夜。敵討ちの盗賊。その首も、俺が仕留めた。俺じゃない。俺がやった。本当に俺が？　この手で？　襲い掛かってくる魔物。殺らなければ殺られる。殺られる前に殺らなきゃ。ユリアを守れない。死ぬのは嫌だ。サーティスの館。見捨てられた主。孤独に死んでいく姿。侘しかっただろう。ロドリスで聴こえた歌。あれは誰？　心の悲鳴。涙。クラリスが。そんなにつらいわけじゃない。嘘だ。もう嫌なんだ。だけど戻れない。一面に広がった血の海。死体で埋められた小さな村の集会場。濃い血の臭気。吐き気。痛いだろう。怖かっただろう。こんなひどいことを。誰が。何があった。グレンフォードは敵だ。顔色一つ変えずに。シサーを残して。魔術師の館。ユリア。ユリア。ユリア。街の人すら信用出来ない。追われる。ロドリスの宮廷魔術師。開戦。ガルシアはどうしただろう。まただ。また見捨てて逃げた。次々と魔物を屠り。掌は血で見えない。馴染んだ感触。生命を絶つ手応え。もう一つの村。殺戮に曝された。無残な。至るところに死の痕跡が。逃げることも出来ず。戦の傷跡。指をなくした親父さん。何人も命を落として。ギャヴァ

ン。集合墓地。街を守るために。ジフ。ヘイリーの腕輪。シンが。人魚の神殿。どうして。狙われたのは俺なのに。命を代償にして。そこまでして、どうして。ゲイトの心の傷。どうでも良い。どうでも良くない。人の心を。人の生命を。メイアンで襲われて。剣を。血が。カサドールでは、何人も殺した。俺は殺人者だ。俺は殺人鬼だ。生きなくて良い。そんなにしてまで生きたくない。死にたくない。生き延びたい。守りたい。もう嫌だ。人は裏切る。騙されるな。副将軍の狙い。セルは。アレンは。ヴァルトが近付いて。キグナスがいない。敵が狙うのは弱い部分。キグナス。キグナスが。キグナス。ハヴィも大切な人を失った。知ってる。その悲しみは知ってる。サナは。ごめん。助けられなかった。死んでた。血を大量に流して。俺は見捨てた。ハヴィの眼差し。卑怯者。俺は、逃げている。カタチアルモノハスベテコワレルノデス。あなたの旅路が、何かの意味を見出せるものであるよう、祈っています。見出せない。知っている。奪われるんだ。奪われるくらいなら。もう大切なものなんて。だってまた奪われた時に、こんな思いをするだろう？　それなら、それなら大切な誰かなんて欲しくない。いや、いっそ俺がいなくなってしまえばいい。何も感じないよう。傷つかないよう。だけどそれでも生き延びようと。帰りたい。帰らなくてもいい。手のひらから零れる何か。もう何も。何も失うのは。

気が

狂う

◆◇◆

（寒い……）

全身がひんやりと冷えているような感覚を覚え、俺はうっすらと目を開けた。

テーブルに突っ伏すようにして眠っていたらしく、肩や背中が痛い。

何、してたんだっけ……。

俺が突っ伏していたテーブルには、文字を書き散らした紙や、薄い子供向けの絵本が広げられている。

カンテラの柔らかく儚い灯りを頼りに傍らを見ると、同じようにテーブルに突っ伏しているキグナスの姿が見えた。

……キグナス？

第3部第2章第16話　決壊（2）

すっと意識がはっきりする。
辺りを見回して、どこにいるのだか思い出した。記憶にある光景だ。シャインカルク城内にある、ヴァレンティアナ館――シェインの居館。
テーブルの上の紙に手を伸ばす。そこには、単語を勉強していた跡が残っていた。キグナスの汚い字が、ミミズのようにのたくっている。
（夢、か……？）
それとも、これまでの記憶が夢だったのか？
曖昧な感覚に戸惑いながらキグナスを見ると、微かに顔を顰めたキグナスが、ぶるっと小さく体を震わせるところだった。瞼が開き、オレンジ色の瞳が虚ろに覗く。
「ん、あ、カズキ……」
「……おはよう」
他に何と言って良いかわからず、そんな言葉を口にする。キグナスは大して気に留める様子もなく、大あくびをしながら体を起こした。豪快に伸びをする。
「あー、俺、寝てた？」
「……そうみたいだね」
「悪ぃ、疲れてるみてえ」
「うん、いや」
何だ、これ。
意味もなく両手を開いて、俺はじっとそこに視線を落とした。確かな感覚があるように思う。だけど俺は以前にも、夢とわからないほどの明確な夢を見たことがあった。サキュバスの魔力で。
これが夢じゃないと、どうして言えるだろう。
だって、俺の知る限りでは、キグナスは死んだんだ。

いるはずがないんだ。
「あ？　あーに、ボケっとした顔してんだよ」
「え？　あ、いや、別に」
夢だとしたら、俺は一体この直前まで何をしてたんだ？　何があってこんな夢を見ているんだ？
うまく機能しない脳味噌で、ぼんやりとキグナスを見返す。鈍い頭には何の回答も浮かばず、ただ目の前のキグナスのきょとんとした目だけが認識できた。
「俺が寝てる間に、覚えたかあ？」
「……そんな簡単に、覚えられるわけないだろ」
「何だよー。自習が足りねえ、自習が！」
「いや、足りてないのは時間じゃ……」
「なあ」
俺の細々とした反論を鮮やかにスルーして、キグナスが立ち上がった。
「体、痛ぇ。散歩しようぜ、ちょっと」
「え？　あ、ああ、うん」
確か俺はこの直前、散歩をしてたような気がするんだけど。
思って、ユリアの眼差しが蘇る。そう、確か俺はこの時、ユリアと些細な諍いをした。
「なあ」
衛兵が屹立する脇を通り抜け、キグナスと並んで中庭の方へ向かう。心地良い夜風に髪を揺らし、キグナスが月を見上げた。
「ツェンカーに行ってさ」
「うん」
そうか、これからツェンカーに行くのか。
そうだよな、この時点から俺たちは、ギャヴァンへ向かい、メイアンやカサドールを経てモナへ渡る。
「みんな、無事に帰って来られるかな」
その質問に、俺は表情を凍り付かせた。

みんな無事には帰って来られない。
俺は重傷、そしてキグナスは。
「危ねえこと、今までにもいっぱいあったろ？」
「……うん」
「んでも、何とか切り抜けてさあ、パーティがみんな無事ってのは、凄いよな」
俺の硬い雰囲気に気づいているのかいないのか、そこまで言ったキグナスは「あ」と呟いて顔を伏せた。
「そりゃ、シンは、巻き添えを食ってるけどさ」
「そうだね」
「でも、シャインカルクから発った顔触れは、みんな無事だ。多分そういうの、稀だと思う」
「……」
海底のダンジョンで、俺も思った。
多分そういうのは、本当に幸運なんだろう。
何が起きたっておかしくないこと、やってんだから。
そして——起きた。
それだけのことだ。それだけのことのはずなんだ。
この世界の中で……いや、俺が気がついていなかっただけで、元の世界でも多分似たような悲劇は当たり前に起きている。
当たり前の悲劇。
「だから、全部カタがつくまでみんな無事で、元気でいられりゃいいなあって思うけどな」
呼吸が苦しくなる。
俺は、この言葉にどう答えれば良い？
それとも、今何かを伝えれば変わるのか？　やり直しがきくのか？　これは、そういうことなのか？
……まさか。
何だよ、この茶番は。
「……じゃない」

「え？」
「……みんな、無事では、済まないんだ」
気づけば、ユリアと諍いを起こした中空庭園のそばまで来ていた。
いや、戻っていたと言うべきか。
明るい月が、キグナスの顔に階段の影を落とす。目を瞬いていたが、不思議とその顔に疑問の色は感じられなかった。
「そうか？」
「そう」
それ以上のことを結局言えずに口を閉ざすと、やや間をおいてキグナスが頷いた。
「そうだな」
……え？
「最後まで、誰も彼も無事でいられるなんて、思ってねえよ」
「……」
「俺が死んだら、おめえ、どーする？」
洒落にならない例え話に、返す言葉がない。と言うか、どうするって……。
「どう、って」
「ロクでもねえ例え話、だけどない話じゃねえだろ。俺はー……俺はなあ、おめーが死んだら、そうだなあ……」
中空庭園に続く階段に足をかけて、キグナスが俺を振り返った。
「泣くな」
「う、うん」
拍子抜けするほど普通の答えで、俺は間抜けに頷いた。キグナスが眉を上げる。
「当たり前のことだろ」
「そう、だね。まあ」
「落ち込むしな。恨むし、怒るし、嫌んなるかも」
「恨むし怒る？」
「その原因になった何かを」

「ああ。嫌になるは？」
「もしかすると、何もかも」
そう言って再び背を向けたキグナスが、階段を上っていく。俺も無言でそれに従った。
階段を上りきると、急に視界が開けたように感じる。幅広い橋のような石畳が続き、橋の左手は奥行きを感じる庭園になっている。右手は、森のようなシャインカルクの庭園や小道が見晴らせた。
ダークグレーの空を薄い雲が過ぎっていく。
「お前、誰が死んでも、何があっても、腑抜けにはなんなよな」
出し抜けに、キグナスが言った。
「今キグナスは、俺が死んだらって話をしてたような気がするんだけど」
「んぁ？　そうだっけか。まー、俺、あんまり想像力ねえから、それでどう思うとかってのは、ありてえのことしか思い浮かばねー。だから終わり」
「てきとーだな……」
「でも、お前はどーなってくかが、見える気がする」
「安易な奴みたいに言わないでくれ」
「だって俺、見てるもん。前のお前を。……変化してってるお前の姿を」
こちらに背中を向けたまま、中空庭園の柵に体を寄りかからせたキグナスの表情はわからない。
「生きる以上、全部背負うしかねえんだからな」
これは……。
何なんだ……。
「お前が殺して来た奴のことも。その手ごたえも。重みも。心に伝わったはずの痛みも。でも、投げ出すなよな」
「キグナス、お前……」
「起きたことは、何を考えたところで、何もなかったことには出来ない。だけど、無駄になることは、何もない。プラスにするかマイ

ナスにするかは、お前次第だろ？　人も別に捨てたもんじゃない。いろんな奴がいるから、いろんなことが起きるってだけの話。厭世的になるには早計じゃねえかあ？」

言いながらキグナスは、こちらに背を向けたままで暗い空を仰いだ。ふわふわの白金髪が、夜風に煽られて柔らかく揺れている。

「ご大層な意味なんてなくて良いよ。誰かの役に立ちたい。馬鹿だし、落ち零れだけど、生きていることに意味があると思いてぇもん」

前後の脈絡をちょっと無視した言葉、だけど……その言葉は知ってる。

「難しいこと言われると良くわかんねぇけどさ。何があったとしても、俺は、お前に会えて良かった。お前も、そう思ってくれてると信じてる」

キグナスが振り返った。澄んだオレンジ色の瞳で、俺を見つめている。

「それじゃ、駄目か？」

「え？」

「難しいこと、考えなきゃ、駄目か？　何もなかったことには出来ない以上、その上で今後をどうしていくか考えるしかねーじゃん？　お前は自分の意に染まらないことをきっと確かにやってきたんだ。信じていた何かに裏切られたのかもしれない。失えないものを失ったのかもしれない。でもそれで、お前自身を潰してどうすんだ？」

すとん、と肩の力が抜ける感覚を味わった。

なかったことにしてはいけない重責を背負ってる。それは事実で確かだけど。

「その経験があるからこそ出来る何かもあるだろう？」

考え過ぎて押し潰されることと、受け止めて受け入れることは全然違う。

「失ったものの代わりに得てる何かもあるだろう？　今のお前だから出来ることがあるんだ」

その全てを含んで、それが今ここに立っている俺自身を作り上げ

てる。
「亡霊みたいなおめえ、見てらんねえ。俺だけで十分だ」
『あの時の』キグナスじゃない。
起きたことを、全て知ってる。
じゃなきゃ、こんなこと言うもんか……。
どうせ失うのなら手に入れなかった方が良かったと思うな、と言ってる……。
失うことで、得ている何かがあると。
「……洒落になってないよ」
傷を、克服しろ、と。
俺の弱さを。
「なってねえなあー」
そう言ってキグナスはケタケタと笑った。
「俺は……！」
その屈託のない笑顔に何かが込み上げ、俺は咄嗟に口を開いていた。言い返す言葉なんて何も用意していなかったのに、勝手に口から言葉が出てくる。
「俺は、もうこんな思いをするのは嫌だっ……！」
俺の言葉も、さっきのキグナスのように理屈も何もすっ飛ばした、駄々をこねる子供みたいだった。
だけどきっと多分、シンプルで的確だ。
そして、こんなふうに感情的になること自体が久しぶりのことだった。
キグナスの存在が——失ったはずのキグナスの存在が、俺の心を脆くする。
他の誰にも……いや、以前ならキグナスの前でも露呈することのなかった弱音だ。なのになぜか今は、キグナスの存在が俺を脆くする。
「責任なんて負えない、重すぎる。冷たくなろうとしているお前に触れた時の衝撃がわかるか？　夢なら良いとどんなに思ったかわか

るか？　だけど現実には、今お前が目の前にいるこれがきっと夢なんだ。ユリアも？　シサーも？　奪われないとは言えない。こんな思いをするのは一度で十分だ。大切なものなんて、もう何も欲しくない」

吐き出すように、一気にまくし立てる。キグナスは黙って俺の言葉を聞いていた。

「わかってるよ。俺だけじゃない。こういう思いをしている人は、他にもきっとたくさんいるんだ。だけど、だからって俺が耐えられる理由にはならない。あらゆることが俺の許容範囲を超えてるんだよ。何も感じたくないんだ。何も欲しくないんだ。その為に俺は……」

「うん」

「……」

その為に、俺は……。

――覚えておいた方が良い。あなたは、ただの、卑怯者だ。

自分を守る為に、人の心を傷つけることを、人を見捨てることを、諾とした。

ハヴィの責める眼差しを思い出して口を噤む俺を、キグナスは少しの間黙って見つめた。それから、ふっと笑う。

「でももう、お前が閉じ篭っていた鎧にヒビが入ってんな」

「何だよそれ……」

「お前がそんなふうに感情的になるのは、久々に見る」

「……お前が」

図星を突かれて、俺は少し俯いた。視線をそらしながら、掠れた言葉を押し出す。

「俺に止めを刺したお前が、またこうして俺の前に現れるからだろ」

キグナスの死でこれ以上ないほど追い詰められた俺の心が、キグナスの言葉で、仮初でもその存在で、弱さを露呈し始めている。

第3部第2章第16話　決壊（3）

ヒビ割れた鎧を必死で繋ぎ止めようとするかのように冷静を装うが、言葉尻が微かに震えた。

（いや……）

もしかすると、それだけじゃない？

レーヴァテインの魔力を放とうとした瞬間に割り込んだ砂漠の光景が脳裏によぎる。

呆然と目を見開いて、俺の中で何かが起きているということを理解しながら、俺は微かに顔を横に振った。

いずれにしても、何も感じていないフリが、出来なくなっている。

冷静を装うことすら出来ず、唇を軽く噛んで俯いたままの俺を、キグナスは少しの間黙って見ていた。

やがて、静かに口を開く。

「カズキ」

顔を上げると、キグナスが俺をまっすぐ見ていた。

今まで見たことがないほど、大人びた、俺を案じてくれる優しさの滲み出た眼差し。

「乗り越えろ。生きてる奴は、前に進め」

――――――投げ出すな。

◆◇◆

「カズキ……目が、覚めた……」

目を開けると、アンドラーシの声が聞こえた。

焦点を結ばなかった視界が次第に輪郭を取り戻し、やがて間近に

覗き込んでいる顔を捉える。アニスだ。
「良かった……」
その後ろに立って両手を組み合わせていたアンドラーシが、涙声で呟く。
それを聞きながら、俺は記憶を探った。
ええと、何だっけ……。
国境近くの村に泊めてもらって、アニスはその家の子で、深夜に……。
「……！　あいつらは……」
意識を失う前の出来事を思い出して跳ね起きると、アンドラーシが顔を横に振った。
「死んだわ。さっき、近所の人たちが死体を運んでいった」
「死んだ!?　アンドラーシ……強いな……」
「違うわよ！」
あ、違うの？　じゃあロアナが？
「ロアナは？」
「今、一時的なショックで寝ているけど……怪我はないわ。休めば良くなると思うわよ」
あれ？　んじゃあ違う。
きょとんとアンドラーシを見返す俺に、アンドラーシが眉を顰めた。
「カズキ、覚えてないの？」
「何を？」
「あなたが、剣の魔法を使ったんでしょ？」
「剣の？」
ああ……炎狼のことだっけ。確かに最後に放った。だけど、それを境に意識が……。
（キグナス）
……そう。キグナスとのシャインカルクの庭園へ。
「あれは、何だったんだろう……」

口元に手をやりながら、小さく呟く。アンドラーシが小首を傾げながら、「お水をもらってくるわね」と部屋を出て行くと、俺は記憶を探った。

レーヴァテインの魔法は、俺の予想以上に活躍してくれたようだ。おかげで俺が意識を失ってからも、放たれた炎狼は自分の為すべきことを果たしてくれて、アンドラーシもロアナも無事だったらしい。

でも、そもそも俺はどうしてあの時、意識を失ったんだ？　いや、失ったって言うんだろうか。シャインカルクの庭園は？　夢？　夢に決まってる。だって俺はロンバルトにいるんだから。

キグナスは、いないんだから。

だけど……。

……馬鹿だよなあ、もう。死んだのは、一番辛い思いをしたのは、お前だと言うのに。

死んでまで俺のこと心配してどーすんだよ。

どうして無駄になることなんかないなんて言えるんだ。

お前自身が死んだことをプラスに変えろなんて、言うなよな……。

でも、意識を切り替えなきゃ、俺が前に進めないのも事実だ。

夢かもしれない。ただの、俺の意識の具現。

だけど、夢じゃない。

俺はきっと、確かに、キグナスに会ったんだ。

……ばぁか。

せっかく積み上げてきた心の鎧を、そう簡単にぶち壊すなよ。そうして逃げることで自分自身を守ってきたってのに……。

人の心が、沁みちゃうじゃないか……。

「おにいちゃん」

眩暈のように揺らぐ頭の中、完全に自分の世界に没頭していた俺の意識を、その声が引き戻す。はっと顔を上げると、ベッドにしがみ付くようにしていたアニスが俺を見上げていた。

初めて聞いたアニスの言葉だ。

「アニス」
「ありがとう」
ロアナによく似た目で俺をじっと見上げ、アニスが何かを差し出す。
小さな小さな野草の花束。
「助けてくれて、ありがとう」
細く貧弱なただの草花を寄せ集めただけの、小さな花束だ。
だけどこれがきっと、アニスの精一杯の感謝の気持ち。
彼女なりの最大限の誠意。
俺が目覚めるまでずっと握り締めていたのか、少し萎れかけたその花に、なぜか視界がぼやけた。俺の中で、何かが激しく揺れ動いた。
素朴で質素だからこそ、澄んだ真っ直ぐで純粋な謝意を感じ、その萎れかけた花に託された幼い少女の澄んだ気持ちが胸に迫る。
「おにいちゃんがいてくれたから、アニスも、ママも、おじいちゃんも無事だったよ」
人も別に捨てたもんじゃない。
わかってる。
人間を信じないと思うことで、生きようとすることから背を向けることで、俺はひたすら自分の中に抑圧されてきたいろいろな想いと向き合うのを避けてきたんだ。
初めて人を手にかけた時から、少しずつ全てを押し殺してきた。
見ないフリ、感じないフリ、だけどその時々で昇華して来なかった感情の全てが、俺の心の奥底で軋轢を起こして軋みをあげていた。
ハヴィは、俺を卑怯だと言った。
知ってる……俺は自分を守るために、誰かの気持ちを斟酌（しんしゃく）することを放棄してきたんだよ……。
――ご大層な意味なんてなくて良いよ。

だけど俺は、俺がどう考えたところで、生きるのを放棄したいと思ったところで、俺が生きようとすることを知ってしまった。
俺は生きたいんだ。きっと。死にたくない。生きていきたい。
だったら……。

――乗り越えろ。生きてる奴は、前に進め。

「おにいちゃん、泣いてるの？　痛いの？」
「……ありがとう。アニス」
犯した罪は、背負わなきゃならない。
その重責に耐え切れるかわからない。
だけど、真っ赤に染まった俺のこの手のひらでも、アニスは感謝をしてくれる。
……血に染まった手だったからこそ、きっと。
以前の俺では、誰も助けてやれなかった。
今の俺だから、出来ることが。
肉体を失ってまで俺を案じてくれるキグナスの優しさが、失っていた心の均衡を支えてくれたのを感じた。
素直で純粋だからこそ、嘘偽りのないまっさらな優しさ。俺を、とても大切に思ってくれる気持ち。

――無駄になることは、何もない。プラスにするかマイナスにするかは、お前次第だろ？

ご大層な意味なんかなくて良い……。
澄み切ったありがとうの言葉が、俺が今ここにいる意味を教えてくれている。
今更になって、人に感謝をされることがこんなに嬉しいなんて。
心に負った傷、その中には人から受けたものもある。
だけど、それを癒してくれるのはやっぱり……。

（キグナス）

人の優しさなのか……。

◆　◇　◆

慌しい一夜が明け、東の空には今日を照らす太陽が姿を現す。

ロアナとアニスに見送られて村を後にし、俺とアンドラーシはエルファーラを目指して歩き始めた。

「ね。良かったわね」

「何が？」

二人の姿が見えなくなった頃、アンドラーシが朗らかな声で笑顔を見せた。

「だって、何だかんだ言って、結局問題の逃亡兵たちを綺麗に片付けちゃったもの」

一人だけ生き残っているが、レーヴァテインによって重傷を負っていた彼は村人たちに捕らえられた。その後どうなったかは、俺たちは知らない。多分、これまでの行動の責を負わされているんだろう。

「根本的解決にはなってないけどね。このままなら、またこういうことがあった時には同じことが起きるよ」

「だから、ロアナさんたちが国に働きかけをするって言ってたじゃない」

「まあ、ね」

半ば無意識に微笑んで空を見上げる。彼女たちの為に俺がしてやれたことは大してないけど、それでもここに俺たちが立ち寄った意味は少しでもあっただろうか。

また、俺の背負う罪は増えたけど。

でも、それと引き換えに守れた人は確かにいる。

澄んだ高い空の向こうに稜線を描くファリマ・ドビトークを眺めてそんなことを思っていると、横顔に視線を感じた。顔を向けると、アンドラーシが俺をじっと見ている。
「……何」
「ううん。何か、少し晴れやかな顔をしてるみたい」
「俺？」
「そう」
「そうかな」
そうかもしれない。
何かが少し、自分の中で変わった気がする。
今までとは違う方向に。これまでとは違って、多分、良い方向に。
頑なに閉じようとしていた心の扉が、ほんの少し、開こうとしているような。
これ以上キグナスに心配させても悪いしさ……。
「アンドラーシ」
「うん？」
「レハールに向かう前に、俺はエルファーラで立ち寄りたいところがあるんだ」
「うん。わかってるわ」
「二箇所」
「二箇所？」
「うん」
これからのことを考えよう。
今の俺が出来ること。
エルファーラに向かい、気にかかることを片付けて、アンドラーシをレハールへ送り届ける。
そして、その後は。
（その後は……）
生きて、元の世界へ帰ろう。
レオノーラへ戻って、俺に出来ることを全てし終えたら、俺は、

元の世界へ帰ろう。
「行こう」

決めた。
もう、迷わない。
……俺は、必ず、生きて帰る。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8445d/

QUEST

2010年10月9日18時40分発行